2019年度（令和元年度）

教育・研究業績書

2019年度(令和元年度) 教育・研究業績書 目次

【人間教育学部】

教授

■ 青山　雅哉・・・・・ 1~10
■ 大西　雅博・・・・・ 11~21
■ 金山　憲正・・・・・ 22~39
■ 桑原　祐子・・・・・ 40~52
■ 善野　八千子・・・・ 53~88
■ 高岡　昌子・・・・・ 89~96
■ 竹田　治美　　※
■ 中島　栄之介・・・・ 97~103
■ 根岸　章・・・・・・104~112
■ 松井　典夫・・・・・113~153
■ 松田　智子　　※
■ 森　一弘・・・・・・154~161
■ 矢野　正・・・・・・162~194
■ 山本　美紀　　※
■ 吉田　明史・・・・・195~199

准教授

■ 阿尾　あすか　※
■ 安東　雅訓・・・・・200~203
■ 岩本　健一・・・・・204~213
■ 岡野　聡子・・・・・214~254
■ 岡野　由美子・・・・255~274
■ 岡村　季光・・・・・275~303
■ 瀧明　知惠子　※
■ 林　悠子・・・・・・304~312
■ 原口　忠之・・・・・313~327
■ 山田　均・・・・・・328~337

講師

■ 太田　雄久・・・・・338~367
■ 大淵　裕美　　※
■ 岡本　恵太・・・・・368~379
■ 荻布　優子・・・・・380~387
■ オチャンテ 村井 カルロス マヌエル
・・・・・388~395
■ 高橋　千香子・・・・396~408
■ 西江　なお子・・・・409~430
■ 正木　友則・・・・・431~452
■ 山田　明広・・・・・453~476

特任講師

■ 加奥　満紀子・・・・477~482

(※ 退職の為記載なし)

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　青山　雅哉

研　究　分　野	研究内容のキーワード
芸術学，芸術一般，器楽（ピアノ）	ピアノ奏法,音楽表現,演奏解釈

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 1)「音楽の基礎」におけるグレード表への取り組み	平成 22 年 4 月～平成 29 年 3 月	奈良文化女子短期大学での幼児教育へのピアノ音楽指導においてより効果的な指導法としてグレード表を考案していった。このことにより、学生の日常からの練習を促すこと、目標を明確にして達成度を高めていくことにもなり、効果的な取り組みとなった。 毎年更新してより良いものを学生に提示して学修を促すことにもなっている。
2) フェスティバルにおける合奏の取り組み	平成 22 年 4 月～平成 29 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「合奏」の授業でそれまでの成果の発表として大学のイベントであるファスティバルへの出演をさせている。学生の授業の取り組みが単に各楽器の演奏スキルの学修に止まることなく舞台での準備、練習プラン、リハーサル等の方法がこの舞台での発表をすることにより得ることのできる様々な要素が学生の実際の就職先現場に生かすことのできる学びの機会となるよう指導を行ってきた。
3)「音楽の基礎」科目でのピアノ実技授業としてその練習の継続性と学修に向けての工夫	平成 24 年 4 月～平成 29 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「音楽の基礎」科目での実践。授業での指導を基に実際の幼児への工夫した音楽的環境を作っていく力の向上を図り、クラス全員でグループを作りちびっ子広場（0 歳～5 歳の母子が近隣から集う本学の広場）で幼児への音楽あそびを設定し体験させていった。設定内容の練習を重ね、実際の音楽あそびの現場体験をとおし、ピアノ実技のスキル向上への必要性を認め、学生のピアノ練習への意欲を高める効果があった。
4)「音楽の基礎Ⅱ」科目でのピアノ実技授業としてその練習の継続性と学修に向けての工夫	平成 24 年 4 月～平成 29 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「音楽の基礎Ⅱ」科目での実践。授業での指導を基に実際の幼児への工夫した音楽的環境を作っていく力の向上を図り、クラスの中でグループを作りつどいの広場（0 歳～5 歳の母子が近隣から集う本学の広場）で幼児への音楽あそびや学びを設定し実践させていった。設定内容の練習を重ね、実際の音楽あそびの現場体験をとおし、ピアノ実技のスキルや音楽表現力向上への必要性を認め、学生のその後の学修への意欲を高める効果があった。
5)「子ども学ゼミ」科目での子どもの歌への学修によるその効果と成果について	平成 25 年 4 月～平成 26 年 2 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「子ども学ゼミ」科目での実践。このゼミでは、子どもたちの音楽環境を観察し、新たな子どもの歌の収集と分類を行い、知見を拡げ実際の現場で効果的な曲のレパートリーを備えていくことを目的とした。さらに、子どもための曲作りを試行し、詩のありかた、曲のありかたを検討する中で様々な発見があり、学生は子どもの歌に対する捉え方を新たにする良い機会ともなった。
6)「子ども学ゼミ」科目での楽器演奏と創作活動への学修によるその効果と成果について	平成 26 年 4 月～平成 27 年 2 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「子ども学ゼミ」科目での実践。ゼミ学生の特技とする琴、吹奏楽器（サックス、ホルン、ユーフォニウム）とのコラボレーションを行う。作曲、演奏と共に音源を用いてＤＭ（デスクトップミュージック）の基本操作を学び音楽を作っていく方法を指導した。幼児教育現場においての音楽表現の一つとして指導し、そのスキルアップに学生は興味深く学修を行っていた。つどいの広場にて学習の成果として音楽発表を行い、好評を得ることができた。

7)「子ども学ゼミ」科目での子どもの歌への学修によるその効果と成果について	平成 27 年 4 月～平成 28 年 2 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での「子ども学ゼミ」科目での実践。ゼミ学生の特技とする琴、吹奏楽器（サックス、ホルン、ユーフォニウム）とのコラボレーションを行う。作曲、演奏と共に音源を用いてＤＭ（デスクトップミュージック）の基本操作を学び音楽を作っていく方法を指導した。幼児教育現場においての音楽表現の一つとして指導し、そのスキルアップに学生は興味深く学修を行っていた。つどいの広場にて学習の成果として音楽発表を行い、好評を得ることができた。
8)器楽演習Ⅰによるグレードの導入	平成 29 年 4 月～平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部教育学科「器楽演習Ⅰ」における授業への取り組みに新たに学生の学修し身につけるべき曲集をグレード表として一覧できるようにして取り入れた。そのことで、学生は達成度の確認、計画的な練習、到達点までの目標設定が可能となり、学生の練習意欲向上に資することとなった。
9)器楽演習Ⅰでの唱歌課題の導入	平成 29 年 4 月～平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部教育学科「器楽演習Ⅰ」を指導。「器楽演習Ⅰ」にこれまで学修範囲とされなかった小学校音楽の唱歌を導入した。原譜のままではレベル不足で弾くことは困難となるため、アレンジを行ってそのレベルにふさわしい課題となるよう工夫し、小学校１年から6年までの文科省指定の唱歌を学修できるよう準備を行い、指導をしている。
10)音楽表現Ⅰにおける音楽基礎力向上への試み	平成 29 年 4 月～平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部教育学科「器楽演習Ⅰ」の指導において、大学生のピアノ初心者としてのスタートとして適合した練習方法を「指の運動へのストレッチ」として譜面で示し、スムーズに練習成果への効果を生むことにつながってきている。筋肉が成長し指の柔軟な動きが困難な段階からのスタートによる最適な練習方法として示し学生自身で動きを観察し、客観性をもって練習していくことを求めている。
11)基礎ゼミによる音楽演奏への取り組み	平成 29 年 6 月～平成 29 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部教育学科音楽専修学生への「基礎ゼミⅠ」においてモーツァルト作曲「きらきら星」の演奏と映像制作を計画し、きらきら星をピアノ連弾、サックス二重奏とピアノ伴奏、合唱としてそれぞれアレンジしてその録音を行って完成度を高めていった。学生自身で繰り返し演奏録音をチェックすることで効果的なスキルの向上への意欲とその成果を見ることができた。
２　作成した教科書，教材		
1)音楽理論「よくわかる音楽の仕組み」	平成 22 年 4 月～平成 25 年 3 月	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽教育全般（音楽の基礎Ⅰ、Ⅱ、器楽合奏、合唱等）において使用。楽譜テキストと共に利用して基本的な音楽理論への理解や楽譜の理解に効果的に活用することができた。
2)ピアノ初心者のための導入用テキスト（和音伴奏による童謡集）	平成 22 年 4 月～平成 25 年 3 月	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽教育全般（音楽の基礎Ⅰ、Ⅱ、器楽合奏、合唱等）において使用。音楽理論テキストと共に利用して基本的なピアノ奏法への理解や簡易な伴奏譜による童謡の学修に効果的に活用することができた。
3)音楽ワークシート	平成 22 年 4 月～平成 28 年 3 月	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽の基礎Ⅰ、Ⅱにおいて使用。ピアノ練習への目標や学修へのポイントを指導後に明記して練習への参考なるものとした。学生自身も自身で練習内容を振り返り記入していくことで、考えて練習をしていくきっかけとなった。
4)音楽の基礎テキストⅠ	平成 22 年 4 月～平成 28 年 3 月	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽の基礎Ⅰ、Ⅱにおいて使用。従来までの音楽ワークシートを改良したものであり、童謡を弾くための和音練習に重きを置き、メロディーへの和声付けを和音や和音記号としてアレンジし、現場に対応できる曲集を編成してテキストとした。

5)音楽の基礎テキストⅡ	平成 22 年 4 月～	奈良文化女子短期大学幼児教育学科への音楽の基礎Ⅰ、Ⅱにおいて使用。音楽の基礎テキストⅠの続編としてよりレベルアップした内容と曲集を編成。また、四季や行事等の項目毎に分けた曲集として学修やレパートリー獲得への利便性を図った。
6)ミュージック・ワークブック　奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行	平成 26 年 3 月	音楽初心者にとって音楽の基本となる必要な知識と基礎的テクニックをできるだけ早く身につけていくことが必要であり、その目的にかなう教材として検討を重ね形にしたものである。ピアノ演奏力向上に導くため、譜面の基礎となる音符の理解や指の運動練習を工夫した課題に解説や図面で示して提示している。これを学習することで、音楽への理解と基礎演奏への効果的な教材となっている。
7)ミュージック・ワークシート　奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行	平成 26 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部の「音楽の基礎」「音楽の基礎Ⅱ」科目の授業において使用。音楽初心者への演奏を身につける段階で、このワークでの課題学習を積み重ね知識を身につけていく教材としている。問題を答えていく形式で自習により身につけることが可能なものである。
8)グレード表による童謡、唱歌	平成 28 年 4 月～	奈良学園大学人間教育学部教育学科「器楽演習Ⅰ」「音楽表現」において、学生のレベルにふさわしい編曲を行い教材として使用している。学生はグレード表に示されたその童謡や唱歌をピアノ課題として身につけレベルの向上をめざしている。
9)ピアノテクニックへの基礎	平成 29 年 4 月～	奈良学園大学人間教育学部教育学科「器楽演習Ⅰ」「音楽表現」において、ピアノテクニックの基礎となる指の運動のためのストレッチとして、ピアノ練習の最初に行う指の感度を高めるためのテキストを作成し活用している。
10)ソルフェージュ～音楽のしくみの実践	平成 29 年 4 月～	奈良学園大学人間教育学部教育学科音楽専修「ソルフェージュⅠ」へのテキストとなるもので、音楽の仕組みについて解説や課題問題集として作成し、学生の理解度と音への実践に対してより深く身につけていきそれぞれのレベル向上に資するものとなっている。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1)平成 23 年度から平成 27 年度にまでの授業アンケートについて	平成 23 年 4 月 ～　平成 27 年 3 月	奈良文化女子短期大学において、授業アンケートが各授業において実施され､14 項目のアンケート内容により項目毎の平均値、並びに総合平均値が各授業担当者に示されている。また、学科の全授業を総合した各項目、総合平均値も示されている。 平成 27 年度の担当する科目（音楽の基礎Ⅰ、Ⅱ）の授業評価は学科全体平均値 3.47 を上回り 3.86 となっている（4 段階評価)。 また、これまで行ってきた 5 年間アンケートによる平均値も全体平均値を上回ることとなっている。担当する授業の指導には個別対応が主となり、個人個人の問題に熱心に取り組んでいることが数値となっているものと思われる。
2)奈良学園大学奈良文化女子短期大学図書館長（奈良学園大学図書館登美ヶ丘分館長兼務）への学長評価による就任	平成 26 年 4 月～ 現在に至る	授業指導への取り組み、学生の音楽的スキル向上や学生アンケートからの評価、また ALO,自己点検評価委員長、規程委員長等での教育上の改善によるこれまでの活動が、学長の評価により図書館長に推され就任することになった。

3)ALO、自己点検・評価委員長としての本学自己点検・評価活動	成 22 年 9 月～ 平成 28 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における ALO として大学の教育活動の全面で点検と改善への提言を行ってきていた。教育活動での学習成果のあり方について、学外・学内での研修を行い教職職員間での理解と必要性を高めていった。その活動は自己点検・評価委員長としての活動と併行して平成 22 年度の本学認証評価も適格を獲得することができ、その後もそのままその任に就き自己点検による改善計画が機能していくよう取り組み、学習成果のエビデンスを目的とした全学的な取り組みを実現させ、それを具体化することに努力した。短期大学基準協会による第三者認証評価の評価員として、平成 24 年には宮崎学園短期大学、平成 27 年には頌栄短期大学の評価を担当している。平成 28 年には短期大学認証評価のために、自己点検評価の活動に努め、学習成果の検証として PROG の導入をするなど、より客観性のあるエビデンスをめざした自己点検評価表を作成することにより、奈良文化女子短期大学は平成 28 年度認証評価の適格を獲得することができた。
4)サタデー・オン・ステージへのプロデュース	平成 22 年 4 月～ 平成 28 年 3 月	奈良文化女子短期大学の地域貢献としての主に音楽の演奏会を毎年企画して年に９～１０回程度のイベントを開催してきた。当初から終了までの企画や実施におけるスタッフとして活動してきた。 平成 28 年度終了時には８３回目となる開催となった。それまで奈良県下、京都府下の高校の吹奏楽や合唱のクラブ、プロの音楽家、本学出身者、その他多岐にわたる出演者のステージを開催することで、奈良県下の高校生や地域への知名度向上へも貢献することにもなった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 （ピアノ演奏活動）		
1) 奈良文化女子短期大学公開講座	平成 22 年 4 月 奈良文化女子短期大学	ドビュッシー：夢、映像、口笛演奏をもくまさあき、樋上敦氏とのピアノ伴奏で共演
2)チャリティーコンサート	平成 22 年 5 月 大阪岸和田市浪切ホール	ベートーヴェン：ピアノソナタ 21 番　でのソロ演奏、ジョージ・マッケラス氏　武田美子氏との共演
3)青山雅哉ピアノ・リサイタル	平成 22 年 11 月 大阪イシハラホール	シューマン：ダビッド同盟舞曲、幻想曲　での独奏
4)ピアノサロンコンサート	平成 22 年 12 月 開成館	ブラームス：ラプソディー、7 つの幻想曲、シューマン：ダビッド同盟舞曲、での独奏
5)NHK ラジオ出演	平成 22 年 12 月 NHK 大阪放送局	関西ほっとタイムでの演奏とインタビュー
6)大東サーティーホールコンサート	平成 22 年 12 月 大東サーティーホール	ショパン：幻想曲　他　作本千賀子、もくまさあき　共演
7)トゥティ・ピアノコンサート	平成 23 年 1 月 大阪八尾市文化会館プリズムホール	ショパン：幻想曲、ポロネーズ 5 番でのソロ演奏、渡辺良樹氏との共演

8)奈良文化女子短期大学公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 23 年 2 月 奈良文化女子短期大学	シューマン： 幻想小曲集、子どもの情景、モーツアルト:ピアノ連弾のためのソナタ　小川純子氏との共演、
9)エンターテイナー・コンサート	平成 23 年 11 月 守口文化センターホール	カプースチン：ピアノ曲集、共演：小山陽子、秋田武、他
10)奈良文化女子短期大学公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 24 年 2 月 奈良文化女子短期大学	ピアノ連弾での演奏会　　フォーレ:ドリー　ドビュッシー：小舟にて、小川純子氏との共演
11)NHK ラジオ出演	平成 24 年 8 月 NHK 大阪放送局	関西ほっとタイムでの演奏とインタビュー
12)奈良文化女子短期大学公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 24 年 9 月 奈良文化女子短期大学	ブラームス:ワルツ集､ハンガリー舞曲集　　小川純子、若槻たえ氏との共演
13)奈良文化女子短期大学サタデーオンステージ	平成 24 年 10 月 奈良文化女子短期大学	吉松　隆：プレイアデス舞曲、ラフマニノフ：二台のピアノのためのソナタ　上野稲子氏との共演
14)ピアノ・コンサート	平成 24 年 12 月 奈良市秋篠音楽堂	ラヴェル：ソナチネ、 モーツァルト：幻想曲　ピアノ発表会でのゲスト出演　共演
15)トゥティ・ピアノコンサート	平成 25 年 9 月 大阪八尾市文化会館プリズムホール	吉松　隆:プレイアデス舞曲,シューマン： 幻想小曲集、でのソロ演奏　　日下義人、中春淳子氏との共演
16)奈良文化女子短期大学公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 25 年 10 月 奈良文化女子短期大学	ラヴェル：マメールロワ、ドボルザーク：スラブ舞曲、小川純子、上野稲子氏との共演
17)「初めてのクラシック」音楽会	平成 25 年 11 月 奈良市秋篠音楽堂	音楽に親しんで、クラシック初心者への公演。案内役と演奏。バッハ：ガボット、モーツァルト:トルコ行進曲、ベートーヴェン：エリーゼのために等
18)三重県「障害者支援チャリティー音楽祭」	平成 26 年 1 月 三重県総合文化センター　中ホール	カプースチン：練習曲、前奏曲　ゲスト出演でのピアノ演奏
19)福井県　エスペランサコンサート	平成 26 年 5 月 美浜生涯学習センターなびあすホール	エスペランサ（フルート、ベースのグループ）との共演、

20)奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 26 年 10 月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	ドビュッシー：小組曲　ピアノ連弾、アンサンブル・クラブ学生、小川純子氏との共演
21) 青山&雑賀デュオコンサート	平成 27 年 4 月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	吉松　隆：プレイアデス舞曲集より、ショパン：ワルツ、の演奏、雑賀美佳氏とのイタリア歌曲、ミュージカルメドレーでの共演
22)東日本大震災復興支援チャリティコンサート in 西日本	平成 27 年 5 月 大阪南港 ATC 海辺の野外ステージ	「震災を風化させず支援を続けて行くことを関西から発信する」ことをテーマにボランティア演奏として音楽イベントに参加
23)奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 27 年 10 月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	ブラームス：ハンガリー舞曲から　小川純子氏とのピアノ連弾による共演、
24)ピアノ・コンサート	平成 27 年 12 月 大阪守口市文化センター	カバレフスキー：ソナチネ、モーツァルト：幻想曲　子どもの情景、ブラームス：ワルツ集
25)エンターテイナー・コンサート	平成 27 年 12 月 大阪守口市文化センター	ガーシュイン：ポギーとベスより、アイ・ゲット・リズムでのピアノソロと儀間太久実氏との共演
26)奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 28 年 11 月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	ラヴェル：マ・メール・ロワ　ピアノ連弾、アンサンブル学生、小川純子氏との共演
27) 奈良文化女子短期大学同窓会 50 年記念コンサート	平成 28 年 11 月 奈良ホテル	ショパン：ワルツ集、ブラームス：ワルツ集、 吉松　隆：プレイアデス舞曲集
28)更紗コンサート	平成 28 年 12 月 ムラマツリサイタルホール	8 名によるピアノ・コンサートのゲスト出演 シャミナード：変奏曲、吉松　隆：プレイアデス舞曲より
29) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公開講座「親子のためのミュージックコンサート」	平成 29 年 10 月 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	親子のための講座で様々な楽器の紹介、音の不思議についての話と小川純子氏との共演

(教育実践等) 1)シルバー人材子育て支援講習	平成 22 年 10 月	奈良県シルバー人材センター「子育て支援講習」により、奈良文化女子短期大学で童謡の世界をテーマに世界の童謡や日本の童謡の歴史など、また古いものから新しい童謡の紹介や歌い方などを平松陽子氏と共演し講演を行った。
2)音楽講師のための公開セミナー	平成 23 年 3 月	ヤマハ北九州音楽教室ピアノ講師への音楽レッスンや講演。子どもへのピアノ指導の方法についてウィーンでの状況を中心に話を行う。
3)シルバー人材センター子育て支援講習	平成 23 年 12 月	奈良文化女子短期大学で童謡・唱歌の世界をテーマに昨年に引き続いたテーマで主に日本の童謡、唱歌での違いや傾向、リズムや調性への違いも示し演奏して講演した。
4)シルバー人材センター子育て支援講習	平成 24 年 2 月	奈良文化女子短期大学で親子のための音楽会をテーマに子供への音楽の影響や感性や発達について説明。楽器の発達とともに音楽の変貌についても話す。
5) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 4 月	幼児への音の不思議や音環境を体験させるための準備をして、その反応から感性の発達を観察し研究する活動を 1 年に渡り計画し実行した。年少 20 人の 2 クラスを第 1 回目として「この音は何かな」をテーマに様々な音を聴かせてその反応を観察した。
6) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 5 月	年少 20 人 2 クラスを第 2 回目として「どんな音がするかな」をテーマにし様々な打楽器を準備して形状からの音を想像していく実験を試みその反応を観察した。
7) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 5 月	年少クラス 20 人 2 クラスを対象に第 3 回目として「弦楽器はどんな楽器かな」をテーマにして、バイオリン、コントラバスを準備して音が出る仕組みについてその音の出てくる不思議さを感じその反応を観察した。
8) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 6 月	年少クラス 20 人 2 クラスを対象に第 4 回目として「どんな音がするのかな」をテーマにトランペット、トロンボーン、クラリネット等の金管、木管楽器を準備して口から吹くことで音の出る仕組みや、音色、音量の違いを体験しその反応を観察した。
9) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 6 月	年少クラス 20 人 2 クラスを対象に第 5 回目として「ピアノはどんな楽器かな」をテーマにピアノを分解してハンマーが弦を叩くことで音の鳴る仕組みを説明しその反応を観察した。
10) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 10 月	年中 25 人 2 クラスを対象に第 6 回目として「ピアノで聴いてみよう」をテーマにピアノでなじみのある曲をアレンジ演奏などをして聴くことに集中、その後一緒に歌って興味の反応を観察した。
11) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 11 月	年中 25 人 2 クラスを対象に第 7 回目として「ピアノでリズム遊びをしてみよう」をテーマになじみのある童謡からリズムを拾い出しピアノ演奏で誘導して速さのちがいや変化を体験させその様子を観察した。
12) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 24 年 12 月	年中 25 人 2 クラスを対象に第 8 回目として「打楽器でリズム遊びしてみよう」をテーマにメロディーのないリズム楽器だけでの童謡からのリズムをとりだしクイズ形式で答えを求めリズムへの集中して聴く力を観察した。
13) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 25 年 1 月	年中 25 人 2 クラスを対象に第 9 回目として「和太鼓で演奏してみよう」をテーマに幼児が発表会で練習している様子や速さについての説明を行い反応を観察した。

14) 幼稚園（奈良文化幼稚園）での音楽活動	平成 25 年 2 月	園の音楽発表会での中で、幼児の保護者にこれまでの活動の紹介とその反応や観察におけるそれまでの研究の成果を発表。さらに音や音楽への関心や幼児の感性についてその大切さを講演した。
15)音楽講師のための公開セミナー	平成 25 年 2 月	ヤマハ奈良音楽教室ピアノ講師への音楽レッスンや公演。子どもへのピアノ指導の方法についてウィーンでの状況を中心に話を行う。
16)音楽講師のための公開セミナー	平成 26 年 3 月	奈良 YMCA ピアノ教師・合唱教師への公開レッスン 子どもへのピアノ指導の方法や子どもの音への感性について講演。
17)音の不思議、音から音楽へ	平成 27 年 12 月	大阪守口市文化センターにおいて、音の性質、音から音楽へと成立していく行方、さらに音楽の表現についてピアノを通して講演した。
５　その他 1)　日本口笛音楽コンクール審査委員長	平成 17 年～現在に至る	日本において、これまで平成 17 年より約 2 年毎に開催され、当初からその審査委員長として全８回の審査をこれまで担当してきている。日本に留まらず世界中からの参加者があり口笛音楽界での主要なコンクールとなってこの優勝者からはプロとして活躍する者も生まれている。そして、主催する日本口笛音楽協会への音楽的アドバイザーも務めている。また、日本で活躍するプロ奏者の方々への音楽的表現についてのアドバイスも行っている。
2)中国口哨協会（政府公認）と日本口笛協会との交流会	平成 22 年 12 月 平成 23 年 4 月	日本において、これまで開催してきた口笛コンクールへの総合的な行程や活動等の内容について中国の口笛演奏への主たる団体である中国口哨協会からの依頼により交流と講話を行っている。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 なし		
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 なし		
その他 第三者認証評価活動	平成 25 年 10 月 平成 27 年 10 月	 一般財団法人短期大学基準協会による第三者認証評価での評価員として宮崎学園女子短期大学への評価を行った。 一般財団法人短期大学基準協会による第三者認証評価での評価員として頌栄短期大学への評価を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1)ミュージック・ワークブック「Music　Workbook」	共	平成 26 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行 （63 頁）	音楽初心者にとって音楽の基本となる必要な知識と基礎的テクニックをできるだけ早く身につけていくことが必要であり、その目的にかなう教材として検討を重ね形にしたものである。ピアノ演奏力向上に導くため、譜面の基礎となる音符の理解や指の運動練習を工夫した課題に解説や図面で示して提示している。これを学習することで、音楽への理解と基礎演奏へのスムーズなスタートとなる教材となっている。 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子 担当部分：pp. 1～16, pp. 32～34, pp. 45～63 音の高さについて、図で表し理解しやすく解説、そしてそのワークとなる問題集を担当。さらに筆頭著者として企画・総括のすべてを担当。
2) ミュージック・ワークブック「Music　Sheet」	共	平成 26 年 4 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行 （47 頁）	音楽初心者にとって音楽の基本となる必要な知識と基礎的テクニックをできるだけ早く身につけていくことが必要であり、自己学習での確認となる音楽理論への練習問題集。そして、自己学習でのピアノ練習へと導くための練習曲集となっている。 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子 担当部分：pp. 1～16, pp、pp. 32～47, pp
（学術論文） 1) ピアノ教則本の特徴Ⅱ	単	平成 23 年 11 月	紀要第 42 号 (奈良文化女子短期大学発刊) （10 頁）	ピアノ音楽教育の初心者のための取り組みとして、様々な教則本があるが、その中のツェルニー練習曲は重要なものとなっている。この練習曲が教則本として、何故そうした位置を確立しているのかを作曲家ツェルニーの生い立ち、作曲・演奏活動から彼の作曲技法、その時代の音楽環境をとおして調査を行った。さらに、教則本として重要な位置を占めるいわゆる「ツェルニー30 番」を取り上げ、作曲家ツェルニーのピアノ曲として詳しく分析を行い、その作品にこめた意図や練習の効果について考察したものである。
2) 幼児の音楽的な発達をうながす音楽活動プログラムの開発Ⅰ	共	平成 24 年 11 月	紀要第 43 号 (奈良文化女子短期大学) （10 頁）	奈良文化女子短期大学付属幼稚園での年少、年中の幼児を対象に半年間６回にわたる様々な音楽的感性の成長を促す活動を行い、音楽表現指導内容の有効性や向上を図るための研究を行った。その多様な音楽的活動内容の実施状況とそれによる幼児の様々な気づきや反応に対する観察をとおして子どもの感性の豊かさへの分析を行っている。 担当部分：pp. 1～4, pp. 9～10 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子
3) 音楽教材「Music Workbook」におけるその制作の過程と実施経過の報告	共	平成 26 年 11 月	紀要第 45 号 (奈良学園大学奈良文化女子短期大学部) （10 頁）	音楽教材「ミュージック・ワークブック」の制作するにあたり、音楽初心者への教材として適切な指導内容となるよう検討した。そうした検討過程とそれに対する意図についての報告をしている。さらにこの教材を利用し学修している学生達の状況やこれまでの効果について学生や指導教員へのアンケートも含めて状況の内容を検証し、その報告をしている。そして、この教材への使用法や指導法の工夫した利用について研究したものである。 担当部分：pp. 1～3, pp. 6, pp. 8～9 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
4）学生の「つどいの広場」におけるその活動と実施調査の報告	共	平成 27 年 11 月	紀要第 46 号 （奈良学園大学奈良文化女子短期大学部） （11 頁）	幼児たちの活動の場において、学生達が音楽を用い、より良い環境の場を設定することのできる力をどのように展開し獲得しようとしたか。そうした、「環境の場の設定」の立案力の分析や、今後の授業に反映させていくことも大きな目的でもあったため、この活動の観察や学生のアンケート等による調査をとおして、音楽指導における「環境の場の設定」する力を養うため音楽授業内容の成果をどのように音楽表現へと展開し活用していくか、さらにそのための授業内容や指導方法への改善を検討した内容となっている。 担当部分：pp. 1～2, pp. 7～9 著者：青山雅哉、小川純子、上野稲子
5）ピアノ授業におけるその指導法と内容	共	平成 28 年 11 月	紀要第 47 号 （奈良学園大学奈良文化女子短期大学部） （11 頁）	学生達のピアノ練習の実状を観察し、身体的運動や楽譜理解、楽譜分析に対する反応を脳や筋肉、骨格などのメカニズムとして研究し、これまでのピアノ指導の様々な方法に照らし分析した。これらの様々な観点による効果を検証して、新たな身体の使い方や音楽理解、音楽表現方法の獲得について考察していく。さらに、そのための効果的な練習方法や指導方法を提示したものである。 担当部分：pp. 1～4, pp. 9～11 著者：青山雅哉、小川純子、島田稲子
6）「つどいの広場」への参加による学生の教育的効果	共	平成 29 年 11 月	紀要第 48 号 （奈良学園大学奈良文化女子短期大学部） （11 頁）	奈良市地域子育て支援拠点事業としての「つどいの広場」は、主に０歳～就園までの親子が気軽に集える場として地域に広く周知されるようになり、親と子どもの成長を支えることと共に、本学が保育者養成校であるという性質上、子育て支援と学生教育の接続を図ることを目的として実施している。とりわけ、将来保育者を目指す学生が子どもたちと触れ合い実際を学ぶ場としての広場の役割は大きく、早期に広場体験を行うことが学生の実践的学びとなっていることが立証されてきた。本研究では、本学の教学改革計画の中での「⑦実践力向上のために、子育て支援活動と教育との接続を充実させる」に基づいて実施し、授業での参加に注目して参加の在り方の検討とともに、学生の意識の変容を探り、教育的効果を検証し報告するものである。 担当部分：pp. 1～4, pp. 9～10 著者：青山雅哉、小川純子、中田章子

教　育　研　究　業　績　書

令和２年　３月　31　日

氏名　大　西　　雅　博

研　　究　　分　　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
器楽合奏・器楽演習（打楽器）・マーチング	マーチング、器楽合奏、打楽器、アンサンブル

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　教育方法の実践例 ・新しい形のステージマーチングへの取り組み Vol.2「ステージにおける初心者対策と効果」	平成 22 年 4 月～ 平成 23 年 3 月	名古屋芸術大学音楽学部演奏学科の非常勤講師とし て、「器楽特殊研究」(1～4 年生　72 人)において、ステージマーチングについて研究する。昨年度の演奏会でのマーチングについて高い評価を頂き、今年度はフィラルモニクアヴァンのメンバー全員でステージマーチングを演習することになる。しかし、そのほとんどがマーチング初心者であるため、週一回の授業で完成させるのは困難を極めた。そこで、比較的ゆったりと動けるラベルのボレロを選曲し、ステージ上でほとんど動かない 32 名(初心者)と動き回る 32 名(経験者を核に)をコラボさせて show を構成した。昨年の少人数とは変わって本来の吹奏楽サウンドを生かせたステージマーチングとなった。
・新しい形のステージマーチングへの取り組み Vol.3「ムーブメントとサウンドの調和」	平成 23 年 4 月～平成 24 年 3 月	名古屋芸術大学音楽学部演奏学科の非常勤講師とし て、「器楽特殊研究」(1 年生　32 人)において、ステージマーチングについて研究する。本年度はステージと客席の一体化をテーマに、2 年生以上は全て客席の最上階での演奏となる。このステージングにより 360 度全方向から音楽が聴こえてくるサラウンド効果をもたらす。しかしステージと客席の距離が演奏のタイムラグとなり、観客にズレて聴こえないよう、指揮者を会場の中心に据え、そのポイントで音楽をまとめた。この曲の作曲者である鈴木英史も絶賛のメリーウィドーに仕上がった。
・新しい形のステージマーチングへの取り組み Vol.4「パフォーマンスの追求」	平成 24 年 4 月～ 平成 25 年 3 月	名古屋芸術大学音楽学部演奏学科の非常勤講師とし て、「器楽特殊研究」(1 年生　32 人)において、ステージマーチングについて研究する。本年度は、打楽器アンサンブルとマーチングパフォーマンスのコラボレーションについて演習し、ムーブメントについての研究を深めた。打楽器六重奏「ジャグラー」の演奏に合わせ、管楽器のメンバーは終始楽器を持たず、パフォーマンスに徹して動く。こちらのドリルデザインと学生が創るデザインを約半分ずつにし、自ら創り出す喜びも味わえるよう配慮した。また楽器を持たないことにより、手を自由に活用することが出来るため、

		通常ステージマーチングでは不可能なパフォーマンスも可能になる。その結果、既成概念にとらわれない柔軟な発想で Show を構成することが出来た。
・器楽演習（パーカッション）	平成 26 年 4 月～平成 29 年 3 月	奈良学園大学において、マーチングバンド部の監督を務める傍ら、非常勤講師として「器楽演習（パーカッション)」の授業を行う。アンサンブルを中心に打楽器の技術を習得し、幼稚園の演奏会、オープンキャンパス等で演奏を披露した。
2　作成した教科書、教材		
・「ドラムトレーニング Vol.1～4」作曲		名古屋芸術大学音楽学部演奏学科の非常勤講師として、「器楽特殊研究」(1～4 年生　21 人)において、自作の「ドラムトレーニング Vol.1～4」を使用。
・ドラムライン in NUA 作曲		ドラムラインのオリジナル楽曲を作曲。
・アルメニアンダンス NUA オリジナルマーチングコンテ制作		名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第 11 回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。
・ボレロ NUA オリジナルマーチングコンテ制作		名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第 12 回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。
・メリーウィドゥ NUA オリジナルマーチングコンテ制作		名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第 13 回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。
・ジャグラーNUA オリジナルマーチングコンテ制作		名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァン第 14 回定期演奏会ステージマーチングのために、オリジナルのドリルデザインを作成。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
・名古屋芸術大学における授業評価	平成 22 年 4 月 ～平成 29 年 3 月	当初 3 年間のシラバス、及び学生の反応が評価され、4 年目より選択授業にも関わらず、演奏学科弦管打コースの新入生は全員履修する運びとなった。そしてその後毎年、名古屋芸術大学アンサンブルフィラルモニク・ア・ヴァンの定期演奏会において、オープニングステージを任されることとなる。
・奈良学園大学における授業評価	平成 30 年 4 月～	人間教育学部教授に就任。 「器楽演習」「器楽合奏」「合奏指揮法」「基礎ゼミナール」「人間教育学ゼミナール」等の授業とともに、マーチングバンド部顧問を務める。

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
・愛媛県吹奏楽連盟マーチング講習会講師	平成 19 年～平成 24 年	平成 19 年 9 月より毎年 1 回、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会が開催される。中学校・高等学校を中心に 2 校から 3 校が選択され受講の対象となる。基本動作からフォーメーションまで、各団体の希望に応じた指導を行う。
・願栄寺花祭りコンサート	平成 22 年 4 月 4 日	願栄寺境内において、子供のための花祭りコンサートにゲスト出演する。
・兵庫県保育協会研修会（神戸支部）講師	平成 23 年 1 月 21 日	神戸市内の保育士約 50 名を対象に、間違いだらけの打楽器奏法や、既成概念にとらわれない器楽合奏法について講演を行う。
・兵庫県保育協会研修会（美方支部）講師	平成 23 年 8 月 20 日	兵庫県美方郡の保育士約 40 名を対象に、楽しい打楽器の活用法についての講演を行った。保育士は楽器を持って参加。合奏後、楽譜について即興で編曲し、楽譜作りの重要性についての講義を行う。
・姫路市立神南中学校芸術鑑賞会出演	平成 23 年 11 月 4 日	姫路市立神南中学校で開催された芸術鑑賞会において、大西ファミリーバンドが演奏会を行う。
・赤穂市立赤穂小学校研修会講師	平成 24 年 11 月 7 日	赤穂小学校の全教諭を対象に器楽合奏指導法について講義を行った。実際に合奏をしながら、楽器の数・音量のバランスの重要性を体感し、より音楽的な指導法について考察を深める講義を行う。
5　その他		なし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許		
・中学校教諭一級普通免許（音楽）	昭和 57 年 3 月 31 日	昭五六中一普第 4678 号（愛知県教育委員会）
・高等学校教諭二級普通免許（音楽）	昭和 57 年 3 月 31 日	昭五六高二普第 5413 号（愛知県教育委員会）
2　特許等		なし

3　実務の経験を有する者について特記事項 （演奏活動）		
・願栄寺花祭りコンサート	平成22年4月4日	大西ファミリーバンドの演奏する『窓の外には』の話を、住職が小学校の先生から聞き、是非花祭りの行事の日に演奏して欲しいと依頼があった。また「花祭り行進曲」「子供の花まつり」の 2 曲については、ファミリーバンド風にアレンジし、小中学生と一般約 40 名を対象に一時間のコンサートを行った。
・姫路市立神南中学校芸術鑑賞会出演	平成23年11月4日	姫路市立神南中学校で開催された芸術鑑賞会に大西ファミリーバンドが出演する。今年度より家島中学校から学校長が転勤になり赴任した。以前に２回家島中学校に招待されたのも、その前の姫路市非行防止大会での演奏を評価していただいた結果だと伺う。本校ではトラブルが絶えないということで、『窓の外には』の話をじっくり聞かせて欲しいと依頼される。
「指導実績」		
・ＩＰＵ環太平洋大学マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ部アドバイザー	平成 22 年 12 月 19 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会 第 38 回全国大会小編成の部第 6 位。
・ＩＰＵ環太平洋大学マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ部アドバイザー	平成 23 年 12 月 18 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会 第 39 回全国大会小編成の部第 5 位。
・ＩＰＵ環太平洋大学マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ部アドバイザー	平成 23 年 2 月 26 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会 ステージマーチング全国大会において、 審査員特別賞受賞。
・愛媛県立丹原高等学校マーチング講師	平成 23 年 2 月 26 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会 ステージマーチング全国大会優において、 優秀賞受賞。
・愛媛県立丹原高等学校マーチング講師	平成 24 年 2 月 19 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会 ステージマーチング全国大会において、 優秀賞受賞
・愛媛県立丹原高等学校マーチング講師	平成 23 年 8 月 21 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会 第 2 回マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ国際大会に出場。
・愛媛県立丹原高等学校マーチング講師	平成 24 年 8 月 26 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会 第 3 回マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ国際大会において、 金賞受賞。
・愛媛県立松山中央高等学校打楽器講師	平成 24 年 11 月 1 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 60 回全日本吹奏楽コンクールにおいて、 銅賞受賞。
・松山市立津田中学校マーチング講師	平成 24 年 11 月 18 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 25 回全日本マーチングコンテストにおい

		て、銀賞受賞。
・三重県立相可高等学校マーチング講師	平成 24 年 11 月 18 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 25 回全日本マーチングコンテストにおいて、銀賞受賞。
・ＩＰＵ環太平洋大学マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ部アドバイザー	平成 24 年 12 月 16 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会第 40 回全国大会において、大編成の部金賞受賞。
・淳心学院中学校打楽器講師	平成 25 年 2 月 11 日	関西吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 40 回関西アンサンブルコンテストにおいて、金賞受賞。
・大阪市立菫中学校マーチング講師	平成 25 年 11 月 24 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 26 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。
・ＩＰＵ環太平洋大学マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ部アドバイザー	平成 25 年 12 月 14 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会第 41 回全国大会において、大編成の部金賞受賞。
・大阪市立菫中学校マーチング講師	平成 26 年 11 月 23 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 27 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 27 年 2 月 14 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会第 14 回マーチングステージ全国大会優秀賞受賞。
・大阪市立菫中学校マーチング講師	平成 27 年 11 月 22 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 28 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 28 年 2 月 21 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会第 15 回マーチングステージ全国大会講評者特別賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 28 年 12 月 18 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会第 44 回全国大会において、大編成の部銀賞受賞。
・大阪市立菫中学校マーチング講師	平成 29 年 11 月 19 日	全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、 第 30 回全日本マーチングコンテストにおいて、金賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部監督	平成 29 年 12 月 17 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会第 45 回全国大会において、大編成の部銀賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部顧問	平成 30 年 12 月 16 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会第 46 回全国大会において、大編成の部銀賞受賞。
・奈良学園大学マーチングバンド部顧問	令和元年 12 月 15 日	日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会第 47 回全国大会において、大編成の部銀賞受賞。

4　その他		
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 24 年 9 月 17 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県動くコンサート特別アドバイザー	平成 25 年 2 月 9 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県動くコンサートの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD に講評を録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 25 年 8 月 10 日	愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 25 年 8 月 18 日	愛知県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 25 年 9 月 16 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・島根県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 25 年 10 月 20 日	島根県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 26 年 9 月 20 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 26 年 9 月 28 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・兵庫県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 26 年 11 月 8 日	武庫川樹脂大学において、兵庫県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 27 年 8 月 19 日	愛知県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会において、講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 27 年 9 月 21 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 28 年 8 月 29 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 28 年 9 月 19 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 28 年 9 月 24 日	西条市体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主催のマーチング講習会の講師を務める。
・日本マーチングバンド協会関西支部 ３D 講習会講師	平成 29 年 3 月 5 日	兵庫県立総合体育館において、マーチング協会関西支部主催３D 講習会の講師を務める。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 29 年 8 月 24～25 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 29 年 8 月 27 日	愛西市立佐織体育館において、マーチング講習会の講師を務める。

・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 29 年 9 月 18 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・日本マーチングバンド協会関西支部 ３D 講習会講師	平成 29 年 11 月 4 日	奈良学園大学体育館において、マーチング協会関西支部主催３D 講習会の講師を務める。
・平成 30 年度全国高等学校総合体育大会「東海総体」開会式のマーチングステージを演出する。	平成 30 年 7 月 30 日	三重県営サンアリーナで開催された、全国高校総体開会式のマーチングステージにおいて、メインステージの演出を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 30 年 8 月 19 日	愛西市立佐織体育館において、マーチング講習会の講師を務める。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	平成 30 年 9 月 1 日	川之江体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	平成 30 年 9 月 24 日	日本ガイシホールにおいて、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・愛媛県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	令和元年 7 月 13 日	松前町体育館において、愛媛県吹奏楽連盟主のマーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 マーチング講習会講師	令和元年 8 月 18 日	愛西市立佐織体育館において、マーチング講習会の講師を務める。
・愛知県吹奏楽連盟 愛知県マーチングコンテスト特別アドバイザー	令和元年 9 月 22,22 日	春日井市体育館において、愛知県マーチングコンテストの特別アドバイザーを務め、全団体の DVD にアドバイスを録音する。
・兵庫県高等学校文化連盟 高等学校総合文化祭の講評	令和元年 11 月 16 日	ベイコム総合体育館において、高校総文祭マーチングバンド部門の講評を務める。
「各大会の審査員」		
・マーチング in 高砂の審査員	平成 22 年 9 月 4 日	高砂市総合体育館において、高砂青松ロータリークラブ主催マーチング in 高砂の審査員を務める。
・マーチング in 高砂の審査員	平成 23 年 9 月 3 日	高砂市総合体育館において、高砂青松ロータリークラブ主催マーチング in 高砂の審査員を務める。
・九州吹奏楽連盟 九州マーチングコンテスト審査員	平成 22 年 10 月 9、10 日	別府国際コンベンションセンターにおいて、九州マーチングコンテストの審査員を務める。
・九州吹奏楽連盟 九州マーチングコンテスト審査員	平成 23 年 10 月 8、9 日	鹿児島アリーナにおいて、九州マーチングコンテストの審査員を務める。
・岐阜県吹奏楽連盟 飛騨地区アンサンブルコンテスト審査員	平成 23 年 12 月 23 日	飛騨・世界生活文化センターにおいて、アンサンブルコンテスト飛騨地区大会の審査員を務める。
・佐賀県吹奏楽連盟 佐賀県マーチングコンテスト審査員	平成 24 年 9 月 8 日	佐賀県総合体育館において、佐賀県マーチングコンテストの審査員を務める。
・岐阜県吹奏楽連盟 飛騨地区アンサンブルコンテスト審査員	平成 24 年 12 月 23 日	飛騨・世界生活文化センターにおいて、アンサンブルコンテスト飛騨地区大会の審査員を務める。

・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 25 年 1 月 14 日	姫路パルナソスホールにおいて、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 25 年 9 月 22 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 26 年 1 月 12 日	姫路パルナソスホールにおいて、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・福岡県吹奏楽連盟 福岡県マーチングコンテスト審査員	平成 26 年 6 月 15 日	サンパレス福岡において、福岡県マーチングコンテストの審査員を務める。
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 26 年 9 月 15 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 27 年 1 月 12 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・福岡県吹奏楽連盟 福岡県マーチングコンテスト審査員	平成 27 年 6 月 14 日	サンパレス福岡において、福岡県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	]平成 27 年 1 月 10 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・福岡県吹奏楽連盟 福岡県マーチングコンテスト審査員	平成 28 年 6 月 12 日	サンパレス福岡において、福岡県マーチングコンテストの審査員を務める。
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 28 年 9 月 10 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 28 年 1 月 8 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・沖縄県吹奏楽連盟 沖縄県マーチングコンテスト審査員	平成 29 年 9 月 9 日	沖縄コンベンションセンターにおいて、沖縄県マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員 ・四国吹奏楽連盟 四国マーチングコンテスト審査員	平成 30 年 1 月 7 平成 30 年 10 月 8 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。 西条市体育館において、四国マーチングコンテストの審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	平成 31 年 1 月 13 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。
・日本マーチングバンド協会北陸支部 マーチングバンド北陸大会審査員	令和元年 11 月 4 日	福井県民体育館において、マーチングバンド北陸大会の審査員を務める。
・姫路市高等学校吹奏楽連盟 アンサンブルコンサート審査員	令和 2 年 1 月 12 日	たつの市総合文化会館において、アンサンブルコンサートの審査と講評を務める。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) 1　どうなる？今後の部活動	単著	平成26年10月21日	教育PRO	自らの経験を基に、今後の部活動のあり方について考察する。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1　日本におけるマーチングの未来像	共著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要 2012 年度 vol.2 (第 7 号)	日本独自のマーチングにつて、今後の方向性を考察し、提言する。
2　新しい打楽器練習法	単著	平成 26 年 12 月 1 日	人間教育学研究第 2 号	教育現場における打楽器の技術を、より短時間に能率よく習得する方法を提言する。
3　新しいマーチング指導法	単著	平成 27 年 12 月 1 日	人間教育学研究第 3 号	日本におけるマーチングの現状を検証し、悪しき既成概念を排除するための指導法を考察する。
4　マーチングにおける基本動作の効率的練習法	単著	平成28年3月 19 日	奈良学園大学紀要第４集	従来の概念にとらわれず、教育現場における効率的な指導法について、検証し提言する。
5　スクールバンドにおける指揮法への一考察	単著	平成 28 年 12 月 1 日	人間教育学研究第 4 号	木管楽器・金管楽器・打楽器の短時間練習法と、合奏指導における効果的な指揮法を考察する。
6　演奏の妨げとなる過緊張（上がり）の軽減について	共著	平成31年3月 10 日	奈良学園大学紀要第 10 集	俗に言う「あがり症」について検証し、音楽の授業を通して、過緊張を軽減する方法を提言する。
7　意欲的に取り組むための音楽科指導法の一考察	共著	平成31年3月	奈良学園大学オンラインジャーナル第２巻第２号	音楽の授業における歌唱指導・合唱指導の難しさを検証し、生徒の自主性を高めるための指導法を考察する。
8　新しい時代に向かう鑑賞教育	共著	令和元年 9 月	奈良学園大学紀要第 11 集	鑑賞教育の実態について、問題提起と共に、今後の方向性について考察する。
9　音楽教科における実践的合奏指導法	共著	令和２年 3 月	奈良学園大学紀要第 12 集	基本練習を核とした、効率的な器楽指導のあり方について考察する。
（研究ノート） 1　部活動の経営に関する研究	単著	平成29年3月 10 日	奈良学園大学紀要第 6 集	中学校における部活動経営と、大学生の社会性を高めるための組織づくりを比較し、その関連性を研究する。
2　音楽科における合唱のための発声練習法	共著	令和元年 9 月	奈良学園大学オンラインジャーナル人間教育　第２巻第８号	短期間で効果的な指導法について、実践結果をもとに提言する。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（編曲） 1.　愛媛県立丹原高等学校打楽器	単著	平成24年6月	愛媛県立丹原高等学校音楽部	元禄時代をテーマにマーチングを構成。パーカッションピットの編曲を行う。日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会主催第3回マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ国際大会において、金賞受賞。
（オリジナルマーチングコンテ制作） 1.　愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	単著	平成22年8月	愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	吹奏楽曲「元禄」をテーマにマーチングを構成・演出。21名を対象にオリジナルのステージマーチングコンテを制作。日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会ステージマーチング全国大会優において、秀賞受賞。
2.　愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	単著	平成23年4月	愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	吹奏楽曲「元禄」をテーマにマーチングを構成・演出。28名を対象にオリジナルのマーチングコンテを制作。日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会第2回マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ国際大会に出場。
3.　愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	単著	平成24年4月	愛媛県立丹原高等学校吹奏楽部	吹奏楽曲「紅炎の鳥」をテーマにマーチングを構成・演出。25名を対象にオリジナルのマーチングコンテを制作。日本マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ・バトントワリング協会第3回マーチングﾊﾞﾝﾄﾞ国際大会において、金賞受賞。
4.　松山市立津田中学校吹奏楽部	単著	平成24年6月	松山市立津田中学校吹奏楽部	アメリカングラフィティーをテーマにマーチングを構成・演出。37名を対象にオリジナルのマーチングコンテを制作。全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、第25回全日本マーチングコンテストにおいて、銀賞受賞。
5.　三重県立相可高等学校吹奏楽部	単著	平成24年7月	三重県立相可高等学校吹奏楽部	アフリカをテーマにマーチングを構成・演出。45名を対象にオリジナルのマーチングコンテを制作。三重県吹奏楽連盟発足以来、初の全国大会出場を果たす。全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、第25回全日本マーチングコンテストにおいて、銀賞受賞。
6.　大阪市立葦中学校吹奏楽部	単著	平成25年～29年	大阪市立葦中学校吹奏楽部	ジャズをテーマにマーチングを構成・演出。 全日本吹奏楽連盟・朝日新聞社主催、全日本マーチングコンテストに4回出場し、優秀な成績を収める。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.　平成30年度全国高等学校総合体育大会「東海総体」開会式	単著	平成30年7月	三重県高等学校合同バンド	平成30年度全国高等学校総合体育大会「東海総体」のメイン開会式において、マーチングコンテを作成し、ステージの演出を務める。

教　育　研　究　業　績　書

令和　2　年　3　月　31　日

氏名　　金山　憲正

研　究　分　野	研究内容のキーワード
算数科教育法	算数科における指導内容に関する研究 問題解決学習の指導過程に関する研究 指導方法に関する研究

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1．マルチメディアを使った問題解決場面における見通しを持たせるための適切な助言のあり方と問題解決型の授業の実践方法	平成19年4月 ～ 平成26年3月	近畿大学附属小学校と幼稚園の全教員に対して、VIDEOとPowerPointでの吹き出しの動画を主としたマルチメディアを活用して吹き出しの形で提示する方法で、毎月の研修会において「問題解決型の授業を取り入れるねらい」「基本的な学習段階」「課題の吟味と提示の仕方」「見通しの持たせ方」「よりよい解決に向けての集団での話し合いの場の持たせ方」などを教員の習熟度に合わせて解説を積み上げていった。また、同時に行われる公開授業を具体事例として、望ましい授業展開をするための教師の役割についての指導を行った。全教員がパワーポイントでのアニメーションを作成し、指導で効果的に活用できるようになった。 （近畿大学附属小学校での副校長としての実績）
2．ICTを活用して数や図形についてイメージを抱かせ、その基本概念の理解を深めて小学校算数指導のための教材分析が的確に行えるようにすることを狙った実践	平成26年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科1年次生の学生約120名に対し、算数・数学教育の教材研究の基盤を育成することをねらった「数の理解」の講義において、ICTを活用した指導を行った。特に、内包量の概念や図形概念、測量や統計などイメージすることが難しい内容や処理が煩雑になる内容についての指導の際には重点的にICTを活用した講義を行った。グループ活動ではあるが数量や図形の概念形成の指導において効果的なICTの活用方法を工夫し、模擬実践が行えるようにまでなった。 （奈良学園大学「数の理解」の実践）
3．アクティブラーニングの形態で学生相互が課題に対して協働学習のもと多様なアプローチで問題解決型の授業のあり方を追求していくことをねらった実践	平成27年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科2年次生の学生約120名に対し、子供が主体的に問題解決活動を推進していくための授業構成とその指導方法について、学生自身が問題意識を持って取り組み理解することをねらっての「算数科指導法」の授業を実践した。授業の環境整備として「算数科指導法」の特設ホームページを設けそこに事前課題や学生からの質問事項を記載する欄も設けリアルタイムで互いの情報が共有できるようにして授業の充実をめざした。重点教材についての授業を想定し、指導案を作成しての模擬授業の実施とそれに対する評価を行い改善案について学生間で話し合えるようになった。 （奈良学園大学「算数科指導法」の実践）
2　作成した教科書、教材 1．「思考力アップのための算数的活動」 【再掲】	平成26年4月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において1年次生120名を対象にした「数の理解」、2年次生110名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。算数的活動が重視される背景を学習指導要領とピアジェの心的活動説とを踏まえてどのように指導にあたるべきかを解説し、その具現に際してのポイントを具体的な事例をあげてまとめたものである。 特に、「算数科指導法」授業においては具体的事例の中から数事例ずつについて取り上げアクティブラーニング方式で操作的活動についての理解を深める

		ねらいで効果的に使用し、そのねらいを達成できている。
2．「活用を重視した算数科の授業」 【再掲】	平成 26 年 4 月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において 1 年次生 120 名を対象にした「数の理解」の授業で使用。ここでは自己効力感、成功感を味わわせる反省的思考活動を工夫改善するためにポイントとなる単元間の関連性と発展性を理解させるとともに教材分析の重要性とそれを的確に行うことができる資質を養うことを意図してざして作成したものであり、授業のねらいと対応させ随所で使用した。知識・技能などは活用を通して定着し、定着した知識・技能などから活用できそうなものを見つける学習活動の重要性に気づかせるために効果が上がっている。
3．「学力調査結果を授業改善に生かす取り組み」 【再掲】	平成 27 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において ２年次生 120 名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。指導と評価は一体のものであり、児童の学力向上を確実とするためには的確に児童の実態を把握することが大前提になり、そのための学力調査をいかにおこなえば良いかについてまとめたものである。授業では主に「問題作成の心構え」「観点評価項目の設定」など問題作成に関する留意事項と結果処理の流れや活用法に関する留意事項を理解させる際に使用し、授業のねらい達成に向けて効果に活用できている。
4．「算数嫌いをつくらない授業」 【再掲】	平成 27 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において ２年次生 120 名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。算数の学習につての児童アンケート結果における「好き」と「嫌い」の理由を分析することから、授業法の問題点を探りより望ましい授業展開を考えさせる授業場面で使用した。また、「好き」「嫌い」を左右する心情面を重視した授業作りとともに、協働学習の土俵となる学級作りやコミュニティ作りの重要性についての理解を図る授業においても使用した。授業を通してコミュニケーション能力を高めていくための環境作りや展開の工夫などに着目して指導案を作成できるようになってきた。
5．思考力・判断力・表現力を育成する算数授業 【再掲】	平成 27 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において ２年次生 120 名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の創造に向けて、その推進力となる学習意欲に着目して主体的な活動が保障される授業展開のあり方をまとめたものである。授業では指導内容の系統性を踏まえるとともに発達心理学面も考慮に入れた「～らしさ」の活動の様相を想定した授業展開を心がけることが主体的な解決活動を展開していくことになることに気づかせ、それを意識した模擬授業の指導案作成の際に使用して参考にさせた。本教材を使用することにより、指導内容面と発達心理学的な面との両面から授業を創造していこうとする姿勢が見られるようになっている。
6．思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の参考指導案集 （算数科ホームページ） 奈良学園大学人間教育学部発行	平成 27 年 4 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において ２年次生 120 名を対象にした「算数科指導法」の授業で使用。思考力・判断力・表現力を育成する授業の創造に向けて、様々な授業展開のあり方をまとめたものである。主体的な解決活動の展開を意識した授業指導案作成の際の参考にさせた。 このように指導を受けて作成された指導案は「算数科」専用ホームページに掲載され、いつでもどこからでも参考資料として使用することができ、特に教育実習中の学生に好評だった。

3　教育上の能力に関する大学等の評価 1．近畿大学学長による評価	平成23年3月14日	近畿大学附属小学校副校長として独自の附属小学校の授業観及び授業スタイルの見直し、基礎・基本の学力を育成するための指導をめざした教育改革を行った。また、習熟度別学習指導、チームティーチングによる指導、個に応じた指導のあり方などについての現職教育を行った。その結果、全国学力実態調査においても子どもの学力が著しく伸びたことから他の教育関係者や保護者からも高い評価を得るとともに、人事評価においても「A」評価を受けた。
2．奈良学園大学採用時の学長評価	平成25年8月	12年間の公立学校校長、6年間の近畿大学附属小学校副校長としての学校経営の経験と実績、さらには大阪市教育委員会主任指導主事、大阪市小学校教育研究会算数部部長、11年間にわたる大阪教育大学教育学部で非常勤講師として算数教育の指導に貢献した経験と実績に対して高い評価を受けた。また、教育に対する熱意と向上心に関しても高い評価と信頼を得た。
3．奈良学園大学人間教育学部平成２９年度後期学生による授業評価	平成29年2月	1年次生120名の学生が対象の「数の理解」の講義に対する授業評価アンケートでは、ICTを活用した講義の進め方に対して、「説明が分かりやすかった」92%、「先生の授業に対する熱意や意欲が感じられた」94%、「総合的に見て満足のいくものであった」94%などいずれも90%以上の回答結果で、学生が高い満足度を感じる授業が行われていたと判断できる集計結果を得ている。
4．奈良学園大学人間教育学部平成２９年度後期学生による授業評価	平成29年7月	２年次生に対する前期の「算数科指導法」の講義について実施した学生の授業評価アンケートの結果、ホームページを活用して事前に課題を提示し、それについてアクティブラーニング形式で進めた講義に対して、「この授業に対する受講意欲は高かった」94%、「説明が分かりやすかった」95%、「先生の授業に対する熱意や意欲が感じられた」94%、「総合的に見て満足のいくものであった」93%など90%以上の回答結果となっており、充実感があった授業と判断できる評価を得ている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1．近畿大学附属小学校副校長としての実績 ・西日本私学小学校連盟主催の研究大会の会場校として発表 （平成23年5月　参加者1100名）	平成19年4月 ～ 平成25年3月	近畿大学附属小学校副校長として、また、学力向上と教員の資質向上の責任者として、毎週行われる教員研修会において、教師主導の学習指導から児童主体の学習指導への転換を目指した授業創造のため解説を行った。授業作りの土台となる学級作りについて作成したテキストを使用して講話をし、グループディスカッションを取り入れ教員の資質の向上を図った。また、同キャンパスの附属幼稚園に対し、小学校を見据えた幼児期における数的な概念についても指導した。
2．２０１０近畿大学公開講座　における講師 「算数で育てたい力と学校教育」 （対象：保護者及び地域住民　参加者120名）	平成22年8月28日	「問題解決型の学習の果たす役割」や「子ども自身が算数を創り出していく学習」について具体例を通して紹介した。今、日本の算数教育が目指す方向と学習指導要領改訂の背景について、そのねらいについて講演した。その中で、基礎的・基本的な知識・技能の習得と思考力・判断力の育成の関連にも触れそれぞれの重要性について解説した。
3．新算数教育研究会主催・第34回セミナー講師 「新学習指導要領における実践上の課題」 （対象：全国の算数担当教員400名）	平成22年12月25日	教育基本法、学校教育法の改正に伴う学習指導要領の改訂の趣旨を算数科に焦点を当てて講演を行った。その中で、思考力・判断力・表現力の育成を目指した新学習指導要領の趣旨を踏まえた授業を具現する際に重要となる、「見通しを持たせるための指導順序と単元構成の工夫」「表現力を育てるためのノート指導のあり方」について具体的な事例を挙げて解説を加えた。

４．近畿大学附属幼稚園教員対象指導講座の講師 学期に１回、年３回実施 （対象：幼稚園教員及び保護者）	平成22年４月 ～ 平成25年３月	同じキャンパスにある近畿大学附属幼稚園の教員に対して小学校を見据えた幼児期の子どもに数概念や図形概念を育てる算数の基礎的指導のあり方について指導助言を継続的に行った。ゲームや遊びを通して楽しみながら数概念の素地を養ったり図形の構成要素を意識させたりする指導について具体的な例を通した演習形式で研修を行った。また、幼小接続を意識した幼稚園教育の取り組みへの理解と協力を得ることをねらって保護者へも参加を呼びかけた。
５．　２０１１近畿大学公開講座　講師 「算数科で育てなければならない力」 （対象：保護者及び地域住民　参加者120名）	平成22年９月10日	主な対象者が地域の一般市民のため、算数科で育てる力と、そのため学校ではどのように具体的な授業が行われているかを、教科書の内容を系統的に取り上げて講演した。また、幼小接続の観点から、幼稚園で学んでおくと小学校入学時の算数の学習に効果がある数概念や図形概念形成のための事例についても紹介した。
６．西日本私学連盟主催平成23年度研修会 講師 「ゆるみ教育からの決別－算数科の指導を例に－」 （於：近畿大学附属小学校、参加者約1100名）	平成23年５月23日	全体会において講演した。主に、新学習指導要領で目指す学力の育成するためには、教え込みの解説型の授業から脱却し問題解決型の授業へ転換する必要があることを強調した。同時に、問題解決型の授業成立には教師の深い教材研究が必要であるため、使命感を持ち教育活動に取り組む必要性も併せて強調した。
７．奈良学園大学人間教育学部人間教育学科での講義	平成26年４月 ～ 現在に至る	「数の理解」の授業では、数量や図形などの基本的な概念や基礎的な知識に対する理解を深めるとともに、算数のよさを知り、数学的思考力や判断力、表現力を養う授業づくりのための教材研究の手がかりが得られるように、ICTの活用や具体的な事例を交えて授業を進めている。特に、数学的思考力を涵養する力量と算数科の教材を開発する力量を育成することに重点を置いた講義内容である。 「基礎ゼミナールⅠ」の授業では、学生の自己表現力の育成に加えリメディアル教育を分担し、学生個々の習熟度に応じたテキスト作りと、その解説を作成している。 「算数科指導法」では、アクティブラーニングの形態で、学生相互が課題に対して協働学習のもと多様なアプローチで問題解決型の授業のあり方を追求していく授業となっている。学習指導案作成の基本や模擬授業を通して問題提示や発問・助言のあり方についての理解を深めることをねらいとしている。
５　その他		
１．奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の学生に対する課外における算数・数学指導	平成26年４月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の学生に対して、リメディアル的な取り組みが必要な学生に対しては基礎的な数学の理解をねらい課外での指導を行っている。また、希望者には採用試験対策の数学の指導も行っている。
２．大阪市立放出小学校の算数教育充実に向けての実践研究に年間を通しての指導	平成26年４月 ～ 平成28年３月	校内研究会での算数指導のねらいと望ましい指導のあり方の解説と各学年の実践授業についての指導を行っている。
３．八尾市立永畑小学校の算数教育充実に向けての実践研究に年間を通しての指導	平成27年４月 ～ 平成29年３月	校内研究会での算数指導のねらいと望ましい指導のあり方の解説と各学年の実践授業についての指導を行っている。
４．奈良学園小学校の算数教育充実に向けての指導と助言	平成27年９月 ～ 現在に至る	奈良学園小学校が現在「メタ認知」に着目した実践研究に対して、望ましい授業の構成の仕方や展開の工夫及び評価の生かし方などについて指導と助言を行い充実した教育活動の創造をめざしている。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 1）小学校教諭一級普通免許 2）中学校教諭一級普通免許（数学） 3）高等学校教諭二級普通免許（数学）	 昭和46年4月 昭和46年4月 昭和46年4月	 昭和46小一普第１６０号（大阪府教育委員会） 昭和46中一普第１２２８号（大阪府教育委員会） 昭和46高二普第３２８号（大阪府教育委員会）
4）司書教諭	昭和46年1月	昭和46年12月1日　第４９９５６号（文部省）
2　特許等 な　　し		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）　近畿大学附属小学校 副校長	 平成19年4月 ～ 平成25年3月	 近畿大学附属小学校には、「児童の算数の学力向上を達成させること」と「教員の資質を向上させること」が主たる使命での赴任であった。まず、教員研修の充実と共に研究・教員組織の改革を提起し、大改革を実施した。 具体的な改革の内容は、「高学年への教科担任制の導入」「第3学年から第6学年までの算数科はチームティーチングでの指導体制の導入」「教員全員が自分の専門教科を定めその教科の研修を深める研究体制の導入」などである。 特に、教え込み教育から脱却し、問題解決型の授業へと質の転換を図ってきた。結果、全国学力状況調査では、国語・算数のＡ・Ｂ問題とも全国平均を10ポイント以上上まわった。 教職経験８年未満の教員に対しては、別に「若手研修」と名付けて、「学級経営のあり方」「保護者との対応のあり方」「事故の対処の方法」「学級内で起きたトラブルへの対応法」など、具体的な事例を想定して考えさせるなどの研修を行った。
4　その他 1）奈良学園大学　ＦＤ委員会　委員長	 平成26年4月 ～ 平成28年3月	 ＦＤ委員長としてこれまで実施されてきた事業を見直し本学のＦＤに対する取り組みの改善を図った。特に、これまで前期・後期と年２回実施の「学生の授業評価アンケート」事業において、「調査用紙の作成・集計・分析」の外部業者への委託を止め、内部処理をする方針に変更した。その道筋をつくるため、「マークシート用紙の作成」「マークシートの読み取り」「読み取り結果を集計・分析するためのプログラム作成」「集計・分析結果をまとめて図表に表すためのプログラム作成」「各授業担当者への集計結果の通知と自己評価の記入依頼」「全ての集計結果をPDF形式にまとめてホームページにアップ」の一連の作業を委員長として全て一人で作成・処理している。評価対象は約130講義でアンケート用紙枚数は約3000枚になるが、実施から集計・まとめまでに要する時間は業者委託に比べ半分の期間で処理できているため、本学のホームページへのアップもタイムリーに行っている。 また、教員が互いの授業参観を通して指導力を高めるための「公開授業」事業では、他学部の授業参観も可として学部間における閉鎖性の払拭をめざしている。あと「授業改善シート」「FD講演会」事業についても改善・充実の方向で実施している。
2）奈良学園大学　教職センター委員	平成26年4月 ～ 平成29年3月	2年次生が対象となる「介護等体験」に関する取り組みの企画・立案を行っている。また、来年度から始まる「教育実習」関連では、2年次生を対象に実習受け入れの依頼の手続きについて全体への指導とあわせて個別への指導も行っている。 教員採用に向けて基礎的学力の定着を保障するために設けられている「教師塾」について、その効果的な運用方法について企画・立案と運営に関わっている。

3）奈良学園大学　入試委員会　委員長	平成 28 年 4 月 ～ 現在に至る	本学園の AO 入試・公募制推薦入試・一般入試・大学入試センター試験利用入試の各入試に関する入試業務が厳正に執り行われる為の体制の整備と準備に 計画的に取り組んでいる。開学からの入試データを分析し今後の望ましい入試業務についての改善案を作成している。また、大学入試センター試験会場としての準備、実施等の運営管理にも取り組んでいる。
4）奈良学園大学　副学長	平成 29 年 4 月 ～ 現在に至る	本学園副学長として教職員個々の業務内容を把握・調整し学園運営が円滑にそして効率よく推進できるよう努めている。特に、共通教育委員会・入学試験委員会・広報委員会・ＦＤ委員会・教務委員会に関しては各委員会担当副学長としての任務に携わっている。 また、両学部の定員確保に向けての各方面への広報活動やそのあり方について検討を加え、目標の達成に向けて支障が起きないよう点検と整備に取り組んでいる。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.活用力を育てる！算数授業プラン&ワークシート	共著	平成 22 年 4 月	明治図書	低・中・高学年編の３冊で構成され、４つの活用力を育てるワークシートと授業を実践する際に参考となる展開例を提案。 Ｂ５版　全１３６頁（３冊） 編者：金本良道 共著者：一ノ瀬喜子、吉田博、岩崎浩、笠置道宏、赤沢マキ、金山憲正、松岡克典、岸田初美、森洋子、中井美貴子、森本明、野津吉宏、植村徳治、谷口孝臣他３０名 本人担当部分：低学年編では第１学年「大きい数」（P42～P45）のうち「この授業で育てたい活用力」の項を単著。 中学年編では第 3 学年「重さ」第４学年「分数」（P84～P87）の事例について、また、高学年編では第６学年「立体の体積」（P108～P111）の事例について「この授業で育てたい活用力」の項を単著。 「大きい数」では、具体物を数えた個数を「何十といくつ」と表したことから類推させて、数の仕組みと表現のよさに気づかせる指導を提案。「重さ」では、長さ、体積、重さの単位のそれぞれに共通する関係や類似性を見いだし、見いだした関係や類似性から新たな単位を予想する活動を取り入れた指導について提案。「分数」では、和が１より大きくなる同分母分数の加法の計算の仕方を図や数直線を用いたり、単位の考えを基にしたりして考える活動を取り入れた「見通しを持ち筋道立てて考える力」を育てる指導について提案。「立体の体積」では図形の面積の求め方で学習した等積変形や倍積変形の考え方を活用して、角柱や円柱の体積を求めたり、ICT を用いて説明したりする活動を取り入れた指導について提案している。
2.「小学算数」 （教師用指導書研究編）	共著	平成 23 年 4 月	日本文教出版	全学年を通した体系に重点を置いて、各領域別の系統的な解説とその数学的背景を明らかにするとともに、新しい指導方法、数学的考え方とその指導、ICT の活用など現在の算数教育における主要な問題点について示す。 Ａ４判　全２８６頁 編者：日本文教出版社編集部 共著者：小山正孝、中原忠男、金山憲正、重松敬一、﨑谷真也、狭間節子 本人担当部分：「総論」（P2～P12）を単著 「確かな学力の向上を目指した算数科の学習指導」の章では、算数の学習指導の基本的な考え方として、ブルームの教授理論に基づいて「基礎的・基本的　な知識・技能の習得と活用」「思考力・表現力の育成」について解説している。また、「確かな学力が身につく算数の学習指導」の章も前章同様に「問題解決型学習の意義」「算数の学び方の指導」「表現力の育成」「学習意欲の向上」など新学習指導要領のめざしている学力と育成のための留意点を述べている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				また、幼児期に経験した概念形成の過程を踏まえて指導に当たることが不可欠な小学校低学年の指導について、幼小の連携を図ることの必要性を強調し、ピアジェの認知発達理論を参考にした幼児期の児童の発達段階に即した指導形態についても解説している。
3.教育フォーラム 50 「やる気」を引き出す・「やる気」を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房	教師が子どもの「やる気」を引き出し、育てるための方策を、国語・算数・体育・総合的な学習の時間などとの教科の関わり、教材・校内研究の取り組みなどを考察、提案する。大前提となる教師自身の「やる気」についても論じる。 Ａ５判　全１７９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、松田智子、善野八千子、金山憲正、勝見健史、久田孝、錦織彰、住本克彦、野田健司、中田正浩、前田洋一、中村哲、瀧明知惠子、浅田匡 本人担当部分：「子どもの〈やる気〉が出る算数授業のために」（P47～P57）を単著 知識及び技能の定着を確かなものにしたり思考力・判断力などの能力を育成したりする際の大前提となる主体的な学習活動は子どもの「やる気」が推進力となって推進されるものである。ブルーム理論で強調される認知領域の目標に情意領域の目標と指導方法の工夫を加え、「やる気」を引き出しそれが推進力となって展開する指導についての理論と方策を具体的な実践事例を通して紹介している。また、幼稚園児の数概念を育てる上での着眼点や留意点について解説を加えている。さらに、「やる気」を育てる上で重要な役割を果たす個が認められる集団づくりのポイントについても紹介している。
4.思考力アップのための算数的活動	単著	平成 25 年 1 月	株式会社ＥＲＰ	算数的活動を重視した学習展開が強調されている背景を学校教育法及び学習指導要領の改訂のねらいとピアジェの心的活動説を踏まえて解説するとともに、算数的活動をどう理解して指導にあたるべきかを明らかにした。主にmanipulationに近いものを指す具体的操作活動をはじめ、マッハが提唱している思考実験にも相当する「内的な活動」の効果的な取り入れ方、さらにはModel-making の過程の踏ませ方について具体的な教材を取り上げて紹介している。 Ａ５版　全６８頁
5.教育フォーラム 54 各教科の学習を支える言語活動－言葉の力をどう用いるか	共著	平成 26 年 8 月	金子書房	新しい学習指導要領で強調されている「知的な力」、「確かな学力」を育てていく土台となる「言葉の力」をどう捉え、どう活用することが各教科の学習の充実につながるのかを考察し、その指導のあり方を提案している。 Ａ５判　全１７９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、加藤明、松田智子、善野八千子、金山憲正、金澤孝夫、阿部秀高、桜本明美、大畑健実、川俣徹、蔵あすか、 本人担当部分：「算数の授業に言語活動を生かす」（P47～P57）を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				思考は、言語を媒介とする自己内の対話によって成立し、他者に向けて表現したり他者の表現内容を受け入れたりする活動を通して整理され、洗練されたり深められたりする。したがって考える力は表現する力を抜きにしては考えられない。数学的な表現様式については、ブルーナの EIS 理論が基盤となって「現実的表現」「操作的表現」「図的表現」「言語的表現」「記号的表現」の五つに分類されることがある。算数科の指導においては「言葉の力」を「言語的表現」のみに限定せず、「現実的表現」から「記号的表現」にいたる全てを「算数のことば」ととらえて指導にあたることの必要性を強調した内容である。
6.人間教育を視点にした教職入門 第 6 章 教員の仕事 第 9 章 教育実習の意義と心得	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	激動する社会、急変する教育界の中で、次世代の社会を担い、自律して問題解決能力を持つ子どもを育てることのできる資質・能力を身につけ、地球的視野から持続可能な社会の発展と構築に貢献する教師の心構え、あり方などについて、人間教育を視点にして述べている。 Ａ５判　全２８０頁 編者：中田正浩 共著者：中田正浩、鎌田首次郎、松田智子、中田律子、金山憲正、瀧明知恵子、長井勘治、太田雄久、 本人担当部分：「小学校教員の仕事」（P110～P120）を単著 「生きる力」を育てることを目指して各学校が掲げている教育目標達成に向けて教師が努力していかなければならないことを、「教科等の指導に関わる仕事」「生活指導の関わる仕事」「校務分掌として位置づけられた仕事」のそれぞれについて解説している。 本人担当部分：「教育実習の意義と心得」（P235～P253）を単著 教育実習は、教師として教壇に立っときの心構えや必要となる指導技術などについて事例を挙げて解説している。また、教育実習での経験は、将来の教師として自己のあり方を厳しく問い、教職に向けての真剣な学びを始める契機となるため、教育実習への参加には、日常の講義に出席する際の心構えとは全く異なる性質の決意が求められることの理解を図ることをねらって説いている。
7．教育フォーラム 57 PISA 型学力を育てる	共著	平成 27 年 2 月	金子書房	近年のような社会環境の変化の激しい時代にあっては、子どもたちは全く新しい事態や問題に次々に直面する。それらを解決する力をどう育てられるか、原理的な面、大学入試に関わる面、各教科の授業改革の面から論じ具体的実践的な提案をしている。 Ａ５判　全１５８頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、立田首治郎慶裕、西辻正副、鎌田首治朗、清水静海、角屋重樹、岩田一彦、渡部久美子、鵜飼洋子、金山憲正、佐藤雄一、松田智子、高木悠哉、井上信子 本人担当部分：「算数Ｂ問題が解ける力を育てる」（P95～P105）を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				活用力が問われるＢ問題を解く力を育てるためには、旧態依然とした指導者中心の教え込み指導から脱却し、子どもが主体的に学習活動に取り組む授業を通して、活用で使う道具となる知識・技能を身につけさせることの重要性について論じている。つまり、どれだけ身についていること以上にどのようにして身についたのかに力点を置いた授業づくりをめざす必要がある。そのための授業法として、ポリアの提唱した問題解決の 4 段階の重要なステップを基本とし、各段階における指導の充実を図ることが思考力、判断力、表現力の育成につながることを算数科の指導を例に挙げて述べている。
８．教育フォーラム 59 対話的な学び アクティブラーニングの一つのキーポイント 対話的な学びを組み込んだ算数教育のために	共著	平成 29 年 2 月	金子書房	「主体的な学習」と密接な関係にある「対話」を教育活動に取り入れることは、教師にとって今後の大きな課題のひとつである。積極的に「対話」を用いることで「深い学び」を得るためにはどうしたらよいか。どのようなことに注意し、どのように授業を展開していけばよいのか。多面的な視点から、具体的かつ実践的な提案をしている。 Ａ５判　全１６９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、伊崎一夫、金山憲正、菅井啓之、後藤沙貴、北俊夫、赤堀博行、善野八千子、牧田秀昭、五百住満、中村豊、石森広美、オチャンテ村井、、井上信子 本人担当部分：「対話的学びを組み込んだ算数学習のために」（P47～P57）を単著 「対話的な学び」の「対話」が、指示されたから始めるという受け身的な「対話」ではなく、興味や知的な好奇心などの心情面に支えられた問題意識の醸成につながる「対話」やじこの考えを確かめたり深めたりする必要を感じて始める「対話」でなければ、目的としている主体的能動的な学習を重質させることは難しい。そこで求められる指導者の自動理解と教材研究の重要性とその方法を具体的な例を通して説いている。
９．教育フォーラム 60 深い学びのために アクティブラーニングの目指すもの 算数科における深い学びとは	共著	平成 29 年 8 月	金子書房	学習指導要領の総則について議論が展開されている「深い学び」については未だに焦点が拡散している現状である。その「深い学び」は単に「授業の型」や「学習方式」といった一定の教授・学習活動のパターンに関わるものではない。どのようにすれば「深い学び」になり、それを実現できるのかについて、具体的かつ実践的な事例を通して、基本的なポイントを明確に提案している。 Ａ５判　全１４４頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、古川治、伊崎一夫、金山憲正、大畑健美、菅井啓之、後藤紗貴、石森広美、善野八千子、岡村季光、松井典夫、瀧明知恵子 本人担当部分：「算数科における〈深い学び〉とは」（P79～P88）を単著 ここでは、「主体的な学び」「対話的な学び」

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「深い学び」を個々に分析的にとらえるのではなく「深い学び」が授業改善の究極の目標であるととらえ、「深い学び」を達成させるためには「主体的・対話的な学び」があってはじめて実現するものであるという立場で算数指導について提案している。その際の着眼点として「学習意識」というものに焦点をあてることにより解決活動がより主体的に展開できることを具体的事例で紹介している。
10. 教育フォーラム 61 各学習領域における基本的な見方・考え方 アクティブラーニングで鍛えられるもの 算数科における基本的な見方考え方	共著	平成 30 年 2 月	金子書房	新しい学習指導要領に入れられた「見方・考え方」は、高次な学習の土台として期待される大切な視点の 1 つである。この「見方・考え方」には各教科等における基本かつ重要といえる固有の展開があるはずだが、実際にはどのようにクローズアップし、授業の組み立てに生かすべきかが課題となっている。各教科等の特質を踏まえた教育のあり方を具体的に論じ、「見方・考え方」を生かす授業実践のヒントを提案している。 Ａ５判　全１４８頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、金山憲正、角屋重樹、中村哲、越智貢、大畑昌己、善野八千子、高木悠哉、杉浦健 本人担当部分：「算数科における〈基本的な見方・考え方〉」（P38～P48）を単著 数学的に考える資質・能力の育成をめざす算数科の学習指導の基本的な考え方として「数学的な見方・考え方」が深い学びにつながる授業を創造していく上で重要な役割を果たすという立場で論を進めている。「数学的な見方・考え方」を働かせながら知識及び技能を習得したり、習得した知識及び技能を活用して課題を探求したりすることにより充実した授業の展開となること示した実践事例を挙げて提案している。
11. 教育フォーラム 62 人生や社会をよりよく生きる力の涵養を －新学習指導要領が最終的に目指すもの－ 算数教育を通じて人生や社会をよりよく生きる力の涵養を	共著	平成 30 年 8 月	金子書房	大きく動きつつある現代社会において、子どもたちは社会生活や職業生活の在り方に対応する力を身につけなければならない。しかし、「人間」そのものが見失われ、「社会的に役立つ駒」を育成する教育となってしまってはならず、その土台となる「人生」の充実の大切さを新しい学習指導要領では示している。具体的にどのような授業展開をすればよいのか、よりよく生きる力を育むための工夫と実践を紹介している。 Ａ５判　全１５８頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、金山憲正、菅井啓之、西村紗貴、中村哲、飯田真人、 寺尾正、中村浩也、八木成和、今西幸蔵、井上信子、二瓶弘行 本人担当部分：「算数教育を通じて人生や社会をよりよく生きる力の涵養を」（P37～P46）を単著 問題解決の過程は疑似社会であるともとら

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				えられるため、それを主体的な取り組みにより体験することが充実した人生を過ごすための生きて働く数学的な考え方を育てることになると期待できる。その主体的な活動の推進力となるのが子どもの学習意識であることと、その学習意識を軸にした授業づくりについて具体的な実践事例をあげて児童の実態把握の仕方、教材研究のあり方について提案している。
12. 教育フォーラム 63 人間性の涵養 新学習指導要領の究極的な目標は 算数教養と人間性の涵養	共著	平成 31 年 2 月	金子書房	新しい学習指導要領に加わった「人間性の涵養」。これこそが教育で実現すべき最終の成果である。しかし、この実現は大きな課題であり具体的な方法は各々の教育人が試行錯誤しながら地道に築き上げていく必要がある。学校生活全体の指導を通して、教師にできる「人間性の涵養」の取り組みについて、実践的な種々の提言を紹介している。 Ａ５判　全１９９頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、金山憲正、金澤孝夫、菅井啓之、西村紗貴、岡本祐佳、中村哲、飯田真人、山口聖代、高橋美由紀、中村浩也、阿部秀高、井上信子、杉浦健、古川治、栗岡住子、宮坂政宏 本人担当部分：「算数教育と人間性の涵養」（P48～P57）を単著 学習指導要領算数科においても、教科の目標はもちろんのこと、新たに各学年の目標においても「～しようとする態度を養う」との表記があり、学習意欲に支えられて主体的な問題解決活動を進めていく原動力となる子どもの内面を重視した指導をめざしていることがうかがえる。ここでは、「学びに向かう力、人間性等」の柱ではどのような心の動きを想定しているのかをとらえ、その心の動きに焦点を当てて人間性の涵養をめざした算数指導について具体的な事例を取り上げて提案している。
13. 教育フォーラム 64 学びに向かう力 学習活動を支える情意的基盤を 算数の授業を通して学びに向かう力を育てる	共著	平成 31 年 8 月	金子書房	主体的・対話的で深い学びも、生涯にわたって持続されていくべき学習も、「学びに向かう力」が十分育成されてこそ、その土台が形成される。変化の激しい時代でも、自分なりに考え、学び、行動することを諦めない自己教育の力を、子どもに育てる学校の取り組みを考える。各教科・領域の授業等を通じて「学びに向かう力」を育成する種々の実践的な取り組みの紹介をする。 Ａ５判　全１９０頁 編者：梶田叡一 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、仁瓶弘行、金山憲正、間處耕吉、今西幸蔵、飯田真人、小餅谷哲男、杉浦健、松久眞実、古川治、八木成和、蔵あすか、井上信子 本人担当部分：「算数の授業を通して学びに向かう力を育てる」（P48～P58）を単著 算数の授業を通じて学びに向かう力を育てるには、子供が算数の学習に対して魅力を感じるような展開に設計されていることが求められる。それに応えるためには子どもの学びへの興味と努力し続ける知的好奇心の喚起、及

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				び学びの量とともに質や深まりに着目し、子供がどのように学ぶかという学び方を重視した学習展開について提言をしている。
(学術論文) 1.活用を重視した算数科の授業	単著	平成23年5月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.18 P12～P15	DeSeCoによれば、PISA学力調査の「読解力リテラシー」「数学的リテラシー」は、社会・文化的、技術的ツールを相互作用的に活用する能力」カテゴリーのうち、「言葉、シンボル、テクストを相互作用的に活用する力」に関わると言っている。算数科の学習で習得する知識・技能は、これに関わるキー能力である。この能力を育成するため、自己効力感、成功感を味わわせる反省的思考活動を工夫改善し、「習得教育」「活用教育」「探求教育」を統合的にとらえ、習得と探求を活用でつなぐ算数教育のあり方を提案した論文である。
2．ゆるみ教育からの決別	単著	平成24年2月	日本私立小学校連合会 平成23年度 研究集録	改訂された学習指導要領をもとに、学校教育現場が目指さなければならない指導のあり方を算数科に焦点をあてて提言している。学習指導要領の総則及び内容を分析し、総則で各教科の指導に当たり問題解決的な学習の重視が述べられ、特に算数科では算数的活動が内容に明示されていることから、これまでの指導の取り組みが十分でなかった点を指摘すると共に、改善策について論じている。指導内容に算数的活動という指導方法に関することが記述されたのは教師としてその力量が問われているとの危機感を持つ必要があることを訴えている。学習指導要領のねらいを達成するための授業づくりの観点を例示し教材研究への取り組む重要性を述べた論文である。
3.思考力アップのための算数的活動	単著	平成25年4月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.9 P22～P25	本論文は、まず算数的活動の概念規定を行い、学習指導要領に置いて重視されることとなった背景とねらいをこれまでの算数教育の取り組みの歴史から分析している。さらに、子供をある思考状態に自由に引き入れ、狙った陶冶部分を鍛錬する状況を作り上げる際に重要な働きをする「気づく」「気づかせる」に着目したゲシュタルト心理学の考え方も念頭に算数的活動を分析し、各単元における効果的な算数的活動の位置づけを明らかにした。
4.思考力アップのための算数的活動(2)	単著	平成25年5月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.10 P12～P15	学習指導要領において算数的活動は作業的・体験的な活動など身体や具体物を用いる活動に限らないとされている。本論文では、算数的活動のなかでも内的な活動について焦点を当て、マッハ氏や篠原助市氏の「教授原論」で提唱されている思考実験の論を参考に、現在の算数教育において思考実験が重視される背景と意義を分析し、思考実験を伴う学習指導の改善に向けて指導のねらいと留意事項について具体的実践を通して明らかにした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.算数嫌いをつくらない授業	単著	平成 25 年 11 月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　No.26 P9～P13	学習についての児童アンケートで算数の授業が「きらい」と答えた児童の理由の分析結果で、授業の進め方に起因していると考えられるものがかなりの割合を占めていた。つまり授業において充実感や達成感を十分に味わえないため「きらい」となる実態が明らかになった。「すき」と「きらい」のそれぞれの割合が多い調査校における授業の実態を対比し、解説型から問題解決型の授業スタイルへの転換を図り、満足度の高い授業を創造する必要性を明らかにした論文である。
6.思考力・判断力・表現力を育成する算数授業	単著	平成 26 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第１集 ｐ37～ｐ46	思考力・判断力・表現力を育成する算数授業の創造に向けて、その推進力となる情意面に着目し、主体的な活動が保障される授業展開を追究した。ポリア提唱の問題解決型の授業展開を基本にしながら発達心理学面から低・中・高学年らしい活動の様相を想定し、その発達の段階にふさわしい活動を呼び起こす学習意欲が連続・発展するような単元構成及び１時間の学習活動の構成について具体的な実践事例を通して検証したものである。
7.思考力を養う操作活動	単著	平成 26 年 10 月	日本教育総合研究所 教育ＰＲＯ　特集号 P34～P37	操作を生かした学習活動は、ペスタロッチ、デューイ、ブルーナなどによって古くから重視されている。また、操作をピアジェは一貫した構造的体系をもった心的活動として述べている。本論文では、これらの学説の対比及び算数科の指導内容を分析し、算数指導における操作活動をどう捉えるのかを明らかにした。さらに、具体的な指導場面でどのような操作活動を取り入れることが思考力を育成することになるのかまた、その指導に際しての留意点について具体的な実践を通して検証したものである。
8.生きる力を育てる算数指導 （査読付き）	単著	平成 27 年 4 月	人間教育研究協議会紀要「人間教育学研究」第 2 号 ｐ71～ｐ80	生きる力を育成するために算数教育が担う役割は何かを明確にするとともに、算数教育のねらいで重視されている「思考力・判断力・表現力」を分析し、どのような授業を創造していくことがそれらの力を育てることになるのかの検討を加えた。本論文では、「思考」と「表現」は互恵的な関係であるととらえ、それらが相乗的に作用し合ってよりよいものを作り上げていく授業づくりをめざして、ポリアの提唱している問題解決型の指導過程を取り入れた効果的な指導のあり方について実践事例を通して考察したものである。
9．エクセル関数でのプログラミングとICT	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第３集 ｐ59～ｐ72	2013 年度実施の国際教員指導環境調査（TALIS）結果において、ICT を用いた指導実践を頻繁に行う教員の割合が全参加国の中で最下位である現状に注目し、本論文では ICT を活用した教育を推進することの必要性と教育効果のあるソフト開発、及びその使用の有用性について述べている。特に、基礎・基本の定着を図る際、習熟度や個別学習で活用することにより大きな効果を発揮するソフトのプログラム作成の手順とその効果的な使用方法を明らかにしている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０.生きる力の育成と主体的な問題解決活動 （査読付き）	単著	平成 27 年 12 月	日本人間教育学会 紀要「人間教育学研究」第３号 p 25～35	数学教育現代化の失敗以降、算数数学教育の潮流は大きく問題解決に切り替えられたが、それが形式や表面的な学習指導に留まっていたのは、底流するプラトン的あるいは絶対主義的な数学観の論理的帰結として、コミュニケーション活動の本質が看過されていたからに他ならない。本論文では、コミュニケーションを含め表現力の充実が叫ばれるようになっている背景を分析し、数学的コミュニケーションの育成という視点から授業構成のあり方を提言した。
１１.算数科の基礎学力が育つ道筋と授業づくり	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第５集 p 53～ p 66	算数科で育てるべき学力の中核となるものは数学的な考え方に他ならない。ここでは数学的な考え方を基礎学力と位置づけ、それを育てる授業のあり方を人間性の育成という視点も加えて追求している。基礎学力は子どもの活動の姿として学習の中に現れてはじめて育ったと言えるので基礎学力が育ち、それを活用できるような単元構成や指導者の役割についての提案をしている。さらに、低・中・高学年の発達の段階における子どもの特性を生かした活動の場づくり、および授業づくりのポイントについても提案している。
(その他) １．新任教員のためのハンドブック	単著	平成 24 年度	近畿大学	教員の研修課題テキストとして使用するため、学級経営に関する事項、いろいろなケースでの子どもに接する際の留意事項、家庭訪問の留意事項、事故が起こった場合の対処の仕方などをＱ＆Ａ形式でＡ４版７４頁にまとめて全教員に配付し、それを学校の基本方針として共通理解を図り日々の教育実践の充実に向けて取り組む体制作りをした。
「依頼原稿」 1.授業中における事態に対応するには （算数）【シリーズ】	単著	平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月	日本文教出版	教育情報誌「ROOT」第１巻～第４巻　P19 教育現場で算数の授業中に遭遇する事態にどのように対処すればよいのか、その対処法を具体例で提示。「見通しが持てない子どもにはどのようすればよいか」「早く解決できて時間があまっている子どもにはどうすればよいか」などの内容。特に、経験の浅い教師がこの原稿を参考にして適切に対応することにより一人ひとりの児童が充実した学習活動に取り組んでいけることを願っての提案。 また、話し合い活動を通して各自が考えた解決方法をよりよいものに練り上げていくための学習集団をどのように育てていけば良いのかについても提案。 さらに、幼児期における学習および生活経験が十分でないことが原因と考えられる第１学年の数概念や図形概念の理解に関する学習内容におけるつまずきに対する予防と補充指導についても例示。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「教材作成」 1.等積変形の説明教具	単独	平成 22 年 12 月	新算数教育研究会	第５学年の単元「図形の面積」の指導において、三角形は底辺と高さが同じであればどのような形の三角形であっても面積も同じであることを理解させるための教具である。子どもにとって高さにあたる頂点が底辺の外に出ている三角形の面積についての理解に抵抗が見られる傾向にある。そのため、少しずつ長さが短くなっていく細い線を何本も積み重ねて三角形を作り、アニメーションでその１本ずつを移動させ底辺も高さも同じ三角形に変形していくことにより、底辺と高さが同じであれば面積も同じであることを理解させるとう情報機器を活用した教具となっている。
2.円の面積の求め方の説明教具	単独	平成 23 年 5 月	西日本地区私学連盟研究大会	第６学年「円の面積」の単元で使用する教具である。円の中心を通る直線で等分し、それを等積変形して平行四辺形や三角形にすることを実際に紙にかいたものを用いて操作させたり示したりすることは困難なことである。そこで、グラフィックソフトを用いて円を 32 等分したり 64 等分したりして作成したおうぎ形をアニメーションで平行四辺形や三角形に等積変形して示すことにより、円の求積公式 である半径×半径×円周率の理解を確かなものにすることをねらって作成した
3.計算の習熟を図るプリント作成ソフト	単独	平成 23 年 5 月	西日本地区私学連盟研究大会	第 1 学年から第６学年までの計算領域で扱われる全ての計算について任意に入力した数値を用いて計算問題の式が作成できるソフトである。数範囲は整数・小数・分数の全て、また、演算も単純な四則はもちろんあまりのあるわり算や商を四捨五入で処理する問題や解答も数値の入力で自動作成されるようにしてある。作成にあたってはエクセルの関数を用いているので一般的に何処ででも活用することが可能な自作ソフトである。
4.「活用力」育成のためのデジタル教材	共同	平成 25 年 6 月	株式会社 ｅ教育研究社	第1学年～第６学年の算数の全単元について、学習指導要領に示された「活用力」育成のための指導用メディアミックス型デジタル教材を作成。授業プリントとデジタル教材コンテンツを合わせて利用することによりPISA型学力を育てることをねらいとした教材である。 教授資料はＢ５判全２６７頁 編者：梶田叡一 共著者：加藤明、金山憲正、中島繁雄、松浦武人 本人担当部分：第５学年・第６学年の「活用問題」「実践問題」「発展問題」（P118～p267）の 95 教材を単著。各単元に対応したデジタルコンテンツを作成。 活用問題では「読解力」を重視した内容を扱い、ヒントや解き方はオンマウスでポップアップするようにしてあるため、ICT 教育でも活用が図れるよう工夫してある。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表」 1.新学習指導要領（算数）における実践上の課題	―	平成23年1月	新算数教育研究会 第35回セミナー （於：箱根・ ホテル小涌園）	教育基本法、学校教育法の改正に伴う学習指導要領の改訂の趣旨を踏まえた算数科学習指導の要点を提案。活用を重視する指導では指導内容の関連を明らかにし、既習のどの内容が発展するのかを捉えて単元構成をすることの重要性を各学年の主要教材を取り上げた事例で発表。また、表現力を育成するための「ノート指導」のあり方について実践例を映像機器で示しながら紹介。これらを通し思考力・判断力・表現力の育成を目指した新学習指導要領の趣旨を踏まえた望ましい指導のあり方を発表。
2.算数科における問題解決学習の充実	―	平成23年5月	第54回西日本地区 私学連盟研究大会 （近畿大学附属小学校）	新学習指導要領で育てたいと目指している学力は、教え込みの解説型の授業から脱却しポリアの提唱した問題解決型の授業を基本として展開することによって効果的に育成されることを主張すると共に、問題解決型の授業をするためには児童の実態を的確に把握することと、教師の綿密な教材研究とが大前提になることを強調。 また、幼小連携の観点から小学校における算数学習の充実のために幼児期にどのように数概念や図形概念の理解に関する指導を行えば良いかについても解説。
3.時代のニーズに応えた学校運営	―	平成24年4月	平成24年度近畿大学 附属関係校研究大会 （近畿大学）	組織面については、小学校高学年における 教科担任制、一年担任制、習熟度別学習態勢の導入、及び、各教員への研究教科の割り振りなど、基礎・基本の確実な定着を目指ための学校の取り組むべき方向と方策を提案。 また、小学校教育と幼稚園教育の関連を図り、より充実した小学校教育の創造を目指す幼・小連携の需要性と必要性を強調。 教育内容面では、日々の教育実践において、「問題解決学習の進め方」「学級経営のあり方」「机間指導・ノート指導のあり方」「子どもが主体的に学習へ取り組む授業の創造」など、思考力・判断力・表現力を育てるための教育をどう実践していくべきかを提案。
4．算数的活動を取り入れた指導	―	平成25年10月	「人間教育研究協議会」 平成25年度定例会	思考力を高めるための授業作りに欠かすことのできない算数的活動について、重視される理由・取り入れるために必要となる教材研究・展開の方法などを具体的な実践例と結びつけての発表内容である。 作業的活動・体験的活動・思考的活動の各活動について具体的な教材を例に、活動をさせる目的、効果的に取り入れる方法についての解説に加え、言語活動にあたる「説明する活動」「表現し伝え合う活動」についても同様の解説を加えて発表した。
5．教材研究をする際に知っておかなければならない「算数のことば・用語」	―	平成25年12月	教師力向上研究会 （第4回総会）	算数指導に当たって指導者が「算数のことば・用語」をしっかりと理解しておかなければ十分な教材研究をすることができないということを伝えることをねらいに発表。 センテンス型とフレーズ型の式の区別を意識させておく必要性や等分除と包含除のいずれの問題場面で導入することが適切であるのかなど、教材研究と算数の用語の理解は切り離して考えることができないことを強調。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6．算数的活動を取り入れた指導のポイント	－	平成 26 年 2 月	「人間教育研究協議会」フォーラム in 大阪	学習指導要領で算数的活動が重視されている背景とねらいを分析し、算数的活動を取り入れた授業の充実を図る際のポイントについて発表。特に、算数的活動というものが単に作業的活動や体験的活動を意味しているのではなく、思考活動が伴わなければ価値がないことをピアジェの心的活動の論とを関連づけて強調した。また、算数的活動を取り入れると学習効果が発揮される指導場面とその留意事項についても具体的な例を通して発表した。
7．算数の授業で言語活動を充実させる	－	平成 26 年 6 月	教師力向上研究会例会	言語活動を充実させるための目的を明確に捉えた上で実践に取り組まなければ十分な成果が期待できないため、まず教科の目標を実現する手立てとして言語活動を充実させるのであることが大前提になることを強調した。 特に、算数の言葉と言われている式に焦点を当て、「式に表す活動」「式をよむ活動」の具体例を取り上げ、言語活動を充実させるポイントとなる抽象化の過程や一般化の過程の構成について重点を置いた提言と、それを具現するための指導のあり方について発表した。
8．思考力・判断力・表現力を育てる算数指導	－	平成 26 年 8 月	教師力向上研究会 サマーセミナー	思考力・判断力・表現力を育てるには問題解決型での指導が望ましい。問題解決型の指導では既習の学習内容と関連づけることが求められる。一方、関連づける既習の学習内容が本時の解決に結びつく内容でない場合は、逆に子どもを混乱させることになる。既習内容どう想起させるのか、また、そのために必要となる手立てを内容の系統性・関連性を明確にする視点から解説した。特に、教材分析の重要性と指導内容の関連を明確にすることの重要性を強調。
9．意識を軸にして展開する算数指導	－	平成 27 年 10 月	日本人間教育学会 第 1 回総会	ブルーナの操作を生かした学習活動に関する論とピアジェの心的活動の論を基に、即物的対象のイメージ、経験的記憶再生のイメージ、想像のイメージがより抽象的・概念的なイメージへと高まる過程と問題解決の過程との関係を明らかにし、学習者の意志によって主体的な学習活動が展開される授業作りの要点を提言。イメージが連続発展するような単元構成及び授業構成を試みるに際しては、能力心理学で分析されている認識能力と欲望能力の観点から発達段階を考慮した活動の様相を想定しておくことが必要となることも強調。

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　　桑原　祐子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
言語学	日本語学　日本文学　正倉院文書

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 1）日本語の文法研究の成果を生かした実践的授業	平成７年度～平成 22 年度	摂南大学国際言語文化学部国際言語文化学科非常勤講師として担当した留学生の「日本語」及び「日本語上級作文Ⅰ」の授業。中国語圏の留学生にとって習得の難しい助詞の機能について、文法研究における構文論の研究成果を取り入れ、日本語文の構造には様々な層があることを解説し、身近な文を分析しながら実践的教育を行った。また、日本語の歴史的変化を具体的に示しながら、現代の日本語の実態を分析することも試みた。その結果、日本語の作文能力の向上が見られた。
2）実地見学を取り入れた授業	平成 22 年 11 月	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した「詩歌の発生と展開」の授業に於いて、万葉集・正倉院を中心に授業を行った。そこで、東大寺の奈良時代の遺構の実地見学及び正倉院外構の見学を行った。写真では実感できない構造物の大きさや、機構の規模などが実感でき、概ね良好な反応が得られた。
3）所見カードによる問題意識の啓発	平成 22 年度～24 年度	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した「奈良の文学と風土」(平成 22 年～24 年)、「日本の文学」（平成 24 年）では、毎回の授業で２～３の問を提示し、これに答える形で講義をすすめている。授業の最後の 10 分間で、所見カードに、この問に対する答えを記入させ、疑問や質問も主体的に記入させている。これによって、受講生の理解の度合いが認識でき、また受講生理解向上が図れ、問題意識の啓発に資することができた、と認識される。記入された質問・疑問については、翌週の講義で取り上げて解説を加えている。
２　作成した教科書，教材 1）講義用教材「奈良の文学と風土」	平成 22 年度～24 年度	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した一般教養科目「奈良の文学と風土」において、授業時間内に使用する文学作品・文字資料などを毎回授業で配布している。できる限り、当時の文字の姿や文章の書き方が視覚的に捉えられるように、原本・写本の写真を掲載するように努めている。また、パワーポイントを使用して、古代の文物をできるだけ閲覧できるようにしている。
2）講義用補助教材「日本語コミュニケーション」	平成 23 年度～24 年度	奈良産業大学情報学部情報学科准教授として担当した全学共通の導入基礎科目「日本語コミュニケーション」において、毎授業の開始直後に、日本語の知識全般にわたる小テストを行い、日本語の基礎知識の定着を計っている。これによって、毎時間予習をするようになり、一定の教育効果が確認されている。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1）奈良産業大学学生による授業評価アンケートにおける評価	平成 24 年度	奈良産業大学では、毎年学生による授業アンケートを実施している。平成 24 年度のアンケート結果によると、受講生の満足度に関して、「かなり満足」「やや満足」と答えた学生は、「日本語コミュニケーション」は 68%・「日本の文学」は 89%、「日本語（上級作文）は 93%であり、比較的高い評価を得たものと認識している。

4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）朝日カルチャーセンター芦屋教室公開講座「東アジアと萬葉集」講師 「正倉院と正倉院文書」	平成 22 年 9 月	朝日カルチャーセンター芦屋教室公開講座「東アジアと万葉集」の第 4 回目の講座の講師として講義を行った。奈良正倉院と正倉院文書の紹介を行い、正倉院文書の分析を通して古代の下級官人の勤務の実態について講義を行った。
2）奈良産業大学公開講座・王寺町りーべるカレッジ講師　「正倉院文書の世界―古代官人の世界―」	平成 23 年 11 月	正倉院に残された古代官人たちの書いた文書の分析を通して、役所で彼らがどのような仕事をしていたのか、給料はどのくらいだったのか、出勤状況はどのようにして把握されていたのか、ということを解説した。また、借金の証文から役人たちの住居の場所が明らかになることや、下級官人たちの書いた文書がなぜ正倉院に残ったのかということについて解説を行った。
3）帝塚山大学公開講座「奈良学への招待」講師 「正倉院文書と古代日本語」	平成 23 年 11 月	奈良の正倉院には華麗な宝物とともに一万数千点の文書が残されている。これらは、8 世紀の日本語を知るための極めて重要な言語資料である。『万葉集』や『古事記』とは異なった、古代の生の言語生活を知ることができる。古代の官人たちが書いた休暇届や欠勤届を分析しながら、病気の治療・回復をどのように表現していたのかということを講義した。また、彼らが母語である和語と外国語である漢語をどのように意識して使い分けていたのかということも、具体的に紹介した。
4）奈良県大学連合主催「なら講座」講師 「正倉院と正倉院文書」	平成 24 年 12 月	古都奈良の秋に開催される正倉院展には、1250 年の時を越えて伝えられた聖武天皇遺愛の宝物や東大寺ゆかりの品々が展示される。これらの特色を解説すると共に、それなの中にあって、思いがけない情報を我々に語ってくれる一大文書群、正倉院文書を紹介し、当時の役人が、どのような場合にどのような言葉を生み出していったかということを、解説した。
5)三郷町文化振興財団主催『カルチャーサロンさんごう』文学・歴史・経済セミナー講師 「正倉院文書と木簡の世界」	平成 25 年 11 月	正倉院正倉（奈良市、国宝）が南倉、中倉、北倉と三室に分かれていること、「東大寺献物帳」（目録）が添えられていたため北倉の品々は、史料的価値が高いことなど、正倉院に関する基礎知識を説明し、東大寺写経所が残した正倉院文書（給料の請求書、欠勤届他）や平城宮跡出土木簡などに書かれた漢文を現代語訳しながら、当時の役人や写経生の仕事内容や仕事ぶりを解説。また、漢字の「怠（おこたる）」を取り上げて当時の人々の生きた言語生活を紹介した。
6）奈良産業大学公開講座・王寺町りーべるカレッジ講師　「正倉院文書・木簡からわかる古代日本語」	平成 26 年 10 月	正倉院の宝物と正倉院文書について 1 千年以上も保管された要因とその文化財的価値について説明した。また、正倉院文書は造東大寺司の下に置かれた写経所の残した文書群であることを説明し、そこで仕事をしていた写経生たちの提出した休暇願・欠勤届や同時代の木簡を読み解きながら、古代の人々の言語生活の一端を明らかにし、平仮名がまだなかった時代に、漢字や漢語の用法を借りながら、古代の人々がどのようにして言葉の世界を拓いていったのかということを解説した。
7）第 5 回奈良学園公開文化講座講師・志賀直哉旧居 「正倉院文書と古代の役人」	平成 28 年 10 月 18 日	第 68 回正倉院展に合わせ、出展が予想される正倉院古文書・正集五 第 1 紙～8 紙を取り上げ、その内容を読み解いた。 天平宝字 5 年（761）頃の近江・石山寺の増築をめぐって、造石山寺所や管轄する造東大寺所とのやりとりを解説し、役人が現場の窮状を訴え、米や銭の支給を取り付ける過程を分析した。 また写経所の経師が、3 日に 1 度の飲酒や月に 5 日の休暇などを求める内容を記した待遇改善の草稿も紹介し、その背景の解説を行った。

8)三宅町歴史学習推進講座　第１回「正倉院宝物と正倉院文書」	平成 29 年 6 月 20 日	正倉院宝物の成り立ちとその国際的背景について、具体的な宝物を通して解説を行った。更に、正倉院文書を残した東大寺写経所での、写経生達の勤務実態について、具体的な資料を取りあげて説明を行い、彼らが提出した欠勤届や休暇願から、当時の病の治療の一端を紹介した。
9)三宅町歴史学習推進講座　第２回「第 69 回正倉院展から」	平成 29 年 9 月 19 日	第 69 回正倉院展に出陳される宝物 10 点について、その特徴や来歴、東大寺献物帳との照合に関する研究について解説を行った。また正倉院文書と聖語蔵経巻との関係及び写経所文書の最新の研究についても、解説を行った。
10)三宅町歴史学習推進講座　第３回「正倉院文書と木簡」	平成 29 年 12 月 19 日	第１回、第２回で取りあげた正倉院文書と同時代資料である木簡の様々な用途について紹介した。更に、平城宮の大極殿が、遷都の 710 年にはできあがっていなかった事が木簡の発見によって明らかになった事について解説を行った。
11)三宅町歴史学習推進講座　第４回「古代官人の仕事ぶり」	平成 29 年 2 月 20 日	正倉院文書の中に残されている古代造営史料のうち、近江石山寺の造営史料の中から、実務を担当した下級官人である下道主の書いた書類と手紙を取りあげてこれを読み解いた。そして、どのようにして下道主が上位機関を動かしたかということを分析した。
12）奈良学園秋季公開文化講座講師・志賀直哉旧居「正倉院文書を読み解く」	平成 30 年 11 月 17 日	２０１８年度の正倉院展に出陳された「月借銭解」を読み解き、そこから分かる奈良時代の下級官人達の人間関係や住まいの実態を紹介した。また、新羅との交易の様子が具体的に分かる正倉院宝物やそれにまつわる文書を読み解き、八世紀の平城が如何に国際的な都市であったのかということを考察した。また、極めて貴重な八世紀の新羅の文書が正倉院に残されている事実についても紹介した。
５　その他 1）学位（博士）論文指導実績	平成 24 年 10 月～12 月	愛知県立大学大学院国際文化研究科日本文化専攻に所属する大学院生の博士論文について 3 人の審査員のうちの副査として審査を担当。指導テーマは「古代東アジアにおける漢字文化の研究」である。その内容は、中国・韓国日本の第一次資料を用いて、古代東アジア諸国の異体字研究を通して、漢字がどのように受容・定着したかということを明らかにする研究である。
2）京都光華女子大学における教育実績	平成 4 年 4 月～平成 24 年 3 月	京都光華女子大学生活学科の非常勤講師（平成 4 年 4 月から平成 24 年 3 月まで）として以下の科目を担当した。 「国語表現」（平成 4 年～平成 17 年度） 「言葉の理解」（平成 18 年～平成 22 年度） 「言葉と表現」（平成 18 年～平成 23 年度） いずれも 1 回生対象の一般教養科目（半期 2 単位）である。「国語表現」は、平成 18 度から名称変更によって、「言葉の理解」（前期 2 単位）・「言葉と表現」（後期 2 単位）となった。

		「言葉の理解」（平成 18 年～平成 22 年度） 日本語の特徴を学び、日本語話者の文化的背景を学ぶと共に、実践的な日本語の運用能力を養うことを目指し、基本的な語彙の習得をさせた。更に、正しい敬語表現を身につけるための実践練習を行った。これらの実践練習によって、社会人として適切な日本語の運用能力を習得させることができた。 「言葉と表現」（平成 18 年～平成 23 年度） 日本語の表現のうち、書き言葉の表現技術の向上を目指して実践練習を行った。様々な文章を書く練習を行い、大学におけるレポート作成・小論文作成の能力を身につけることができた。 「文学と人生」（平成 13 年～平成 14 年度） 『万葉集』の中から、特に古代史を彩った様々な人物の歌を取り上げ、歌の背後にある古代史の出来事を解説し、古代の人々の人生を考える授業を行った。言語芸術である文学作品から何が読み取れるのかということを考えさせた。本講義によって、文学を鑑賞する力をつけることができた。
3）奈良産業大学（現奈良学園大学）における教育実績	平成 22 年 4 月～現在に至る	奈良産業大学情報学部情報学科及び奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の専任教員(平成 22 年から現在に至るまで）として以下の科目を担当した。 「日本語コミュニケーションⅠ」（平成 22 年～24 年度） 「日本語コミュニケーションⅡ」（平成 22 年～24 年度） １年次配当の共通教育基礎科目（半期 2 単位）である。「日本語コミュニケーション」Ⅰでは、話し言葉を中心に実践的な日本語の運用能力を習得させることができた。時に敬語の背景にある日本語話者の文化的背景についても理解を深めることができた。「日本語コミュニケーション」Ⅱでは、書き言葉を中心に学習し、レポート作成・小論文作成のための実践的能力を養うことができた。 「奈良の文学と風土」（平成 22 年から 24 年） 共通教育科目（半期 2 単位）である。万葉集の歌と正倉院文書から明らかになる古代の人々の生きた姿を講義形式で紹介した。できるかぎり現存する文書の写真や木簡の写真を使って、古代言語生活を具体的に学んだ。加えて正倉院に伝世した宝物を通して東西文化の交流を学んだ。本講義を通して、奈良という地域の特性を正しく具体的に理解することができた。 「詩歌の発生と展開」（平成 22 年～23 年度） 共通教育科目（半期 2 単位）である。日本文学の中で重要な位置を占める詩歌について、万葉集・記紀歌謡・古今和歌集の歌を講義形式で解説した。特に、万葉集では漢字だけで以下に日本語を表現する工夫をしたのかということも学んだ。本講義を通して、平仮名の発生や詩歌に対する知識を養うことができた。 「日本の文学」（平成 24 年～25 年度） 共通教育科目（半期 2 単位）である。古事記・万葉集の韻文を中心に講義形式で行った。古事記を題材として、神話に語られた自然現象、韻文の始まりを語った物語などを紹介し、また、万葉集の歌を通して、人間の心のあり方を、喜びや悲しみをいかにして表現したのかということを学んだ。本講義を通して文学先品を鑑賞する能力を養うことができた。

		「日本語　上級作文Ⅰ」（平成 22 年～平成 26 年度） 「日本語　上級作文Ⅱ」（平成 22 年～平成 26 年度） 平成 22 年度は「日本語　文章表現」の名称での講義であったが、23 年度から「日本語　上級作文」に名称変更された。留学生の 2 年次生を対象にした共通教育科目（半期 2 単位）である。「日本語上級作文Ⅰ」では、基礎段階として、単文の作成を中心に実践的授業を行い、基本的な日本語文の作成能力を習得することができた。「日本語　上級作文Ⅱ」では、応用のレベルとして専門的な内容を含む長文の読解を行い、加えてテーマを設定してレポート作成を行った。この実践的授業を通して、レポート作成の知識と技術を身につけることができた。 「奈良学」（平成 25 年～現在） 共通教育科目（半期 2 単位）である。奈良は古代都市が生まれ歴史の中心舞台となった地域である。国際色豊かな文化芸術が発展し、仏教の興隆によって多くの文化財が創出された。それらを凝縮したものを長く守り伝えたのが正倉院「正倉」である。また、その正倉院に伝わる宝物や文字資料は、歴史書とは異なる生きた歴史資料である。これらを通じて国際都市としての奈良とそこに開花した文化を学ぶ。本講義を通して、歴史に学ぶという能力を涵養することができた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1)　中学校教諭一種免許状	昭和 54 年 3 月	中学校教諭一種免許　国語 昭和 53 中一種第 880 号（奈良県教育委員会）
2）高等学校教諭専修免許状	昭和 56 年 3 月	高等学校教諭専修免許　国語 昭和 55 高専修 56 号（奈良県教育委員会）
3）文学修士	昭和 56 年 3 月	奈良女子大学 204 号 論文題目「正倉院文書に於ける上代特殊仮名遣」
4）博士（文学）	平成 16 年 12 月	奈良女子大学第 124 号 論文題目「正倉院文書の国語学的研究」
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）科研基盤研究（ｃ）「正倉院文書訓読による古代言語生活の解明」（研究課題番号 1920396）の報告書 3 冊を刊行。	平成 22 年 3 月 30 日	3 冊は以下の通り。報告書Ⅰ『正倉院文書の訓読と注釈―造石山所寺解移牒符案（一）―』（研究代表者桑原祐子執筆）・報告書Ⅱ『正倉院文書の訓読と注釈―啓・書状―』（研究分担者黒田洋子執筆）・報告書Ⅲ『正倉院文書からたどる言葉の世界（一）』（連携研究者中川ゆかり執筆）。以上の報告書の企画・編集を行い、報告書Ⅰの執筆を行った。
2）学術振興会　科学研究費補助金（基盤研究（ｃ））を申請。課題は「正倉院文書訓読における日本語表記成立過程の研究」。	平成 22 年 4 月	平成 22 年 4 月に採択された（研究課題番号 22520467）。研究代表者。本研究の目的は、正倉院文書に代表される実用の言語生活の中に、後世の日本語表記システム(漢字仮名交じり文)が成立していく契機があることを、具体的な事例に基づいて実証的に解明することである。そのため、正倉院文書の中に散見する下級官人や在野の技術者・非官人に光を当て、彼らの言語生活を明らかにすることである。

3)「科研費申請」 　韓国研究財団　土台基礎研究「日本正倉院文書と韓国文字資料の物品名の研究―物品の用度、単位、書体のＤＢ構築」（共同）	平成 23 年 8 月	釜山大学日本研究所の研究チームが中心になって申請した研究プログラムである。日本の正倉院文書と韓国古代文字資料に見える物品名の用例を分析し、物品の用度・単位・書体をＤＢに構築し、古代日韓両国の文字文化と言語生活及び生活様式を再解釈できる基礎をつくり、後続研究の土台の提供を目的とする。日本側の一般協同研究員として参加した。
［研究分担］ 4）科学研究費助成事業（基盤研究Ｃ） 「正倉院文書の読解を通した上代文学の表現の生成に関する研究」研究分担 課題番号：26370220　代表：中川ゆかり	平成 26 年 4 月～28 年 3 月	奈良時代の下級官人達が書き表した膨大な文書の集積である正倉院文書を読み解くことによって、当時の官人達の書く文章の実態・人間関係のあり方・信仰の様相を明らかにした。又、『古事記』や『日本書紀』・『風土記』には見えない言葉を発掘し、上代語の知見を広め、さらに、正倉院文書の文章とそれらを比較することによって、それぞれの作品の文章の性格を浮き彫りにし得た。以上の研究に分担者として参加した。
5）科学研究費助成事業（基盤研究Ｂ） 「海外敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の解明」研究分担 課題番号：15H05151　代表：西一夫	平成 27 年 4 月～令和元年 3 月	本研究課題は、現在日本・中国・台湾・イギリス・フランス・ロシア等に散在する敦煌文献、なかでも書儀・尺牘断片を中心に据えた実見調査を通して新たな資料を発掘し、日本への受容や伝搬の実態を把握し、マクロ的に統合することを第１の目的とする。その上で正倉院蔵『杜家立成雑書要略』に焦点を絞り、当該書の注釈作業を通して、わが国における敦煌書儀・六朝尺牘の受容をミクロ的にも研究することで、表記・語法・歴史環境分野のさらなる研究推進をはかるものである。この研究に分担者として参加している
6）科学研究費助成事業（基盤研究Ｃ） 「敦煌書儀による書記言語生活解明のための基礎的研究」研究分担 課題番号：16Ｋ02587　代表：楊莉	平成 28 年～令和 2 年 3 月	本研究の目的は、敦煌文献資料の一つである敦煌書儀について、各々の書儀に注釈を加え、実用生活における書記言語資料としての位置づけを行うことである。そのため、具体的な作業として、日本語による「敦煌書儀注釈」を作成し、研究成果として、それを刊行することを目指している。この研究に研究分担者として参加している。
7）科学研究費助成事業（基盤研究Ｂ） 「海外敦煌書儀・六朝尺牘文献の古代日本への受容実態の展開」研究分担 課題番号：19H01230　代表：西一夫	令和元年 4 月～現在に至る	現在日本・中国・台湾等の東アジアに散在する敦煌文献、なかでも書儀・尺牘を中心に据えた実見調査を通して新たな資料の発掘・紹介を行い、日本への受容や伝搬の実態を解明し、その上で正倉院蔵『杜家立成雑書要略』に焦点を絞り、当該書の注釈作業を通して、わが国における敦煌書儀・六朝尺牘の受容をミクロ的にも研究・解明することで、表現・表記・語法・歴史環境分野のさらなる研究推進をはかる。
［共同研究］ 8）人間文化研究機構国立歴史民俗博物館共同研究員産学連携研究「清潔と洗浄をめぐる総合的歴史文化研究」研究代表：関沢まゆみ	平成 29 年～現在に至る	日本列島における「清潔」と「洗浄」について、通史的に概観するとともに、歴史資料から、詳細にその実態を問い直すための端緒を拓くことを目的とする。「清潔」をめぐる文化や政策を概観する研究は 2000 年前後までさかんに行われてきたが、それ以降、全体像を大きく見ることを目指しての事例は少ない。本共同研究は、この状況から新たな一歩を進めるため、論点整理を行う。長期的に「清潔」という文化全体を見ることを目指し、その最初の共同研究として、とくに「清潔（感覚）」と「洗浄（行為）」の歴史に注目する。特に、共同研究者として日本古代の「清潔」「洗浄」に関する国語学的分析を行う。この研究に研究分担者として参加している。

4　その他 1）大阪市立大学日本史学会『市大日本史』第 14 号「栄原ゼミと私」執筆「再掲」	平成 23 年 5 月	日本古代史学界の中で正倉院文書研究を牽引してきた栄原永遠男先生の退任を記念して特集が組まれた。その中の一編として、最新の正倉院文書研究の場である「栄原ゼミ」の存在意義について国語学の立場から述べたものである。栄原ゼミで 10 年間研究をしてきた経験に基づき、ゼミが有意義な存在であることを述べた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1）『上代写経識語注釈』	共著	平成 27 年 2 月	勉誠出版	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究である。上代文献を読む会において、平成 18 年 10 月から約 6 年を費やして輪読を行い、編集委員会を設け、さらなる検討を重ね、現存する写経識語の訓読・現代語訳・注釈を施した。さらに写経識語に関する論考４本と索引を加えた。本書は、平成２７年度日本学術振興会科学研究費補助金「研究成果公開促進費」の交付を受けた。 全 684 頁
2）『正倉院文書の歴史学・国語学的研究―解移牒符案を読み解く―』	共著	平成 28 年 6 月	和泉書院	古代の一次資料である正倉院文書を歴史学と・国語国文学のそれぞれの立場から精緻に読み込み、分析検討を行う輪読会を９間に亘って続けてきた。この輪読会に参加した１０名の研究者による研究論集である。その研究内容は、帳簿論、写経論、上代の日本語の語法・語彙の研究、文字表記の研究など、多岐に亘る。特に国語国文学の分野における正倉院文書研究の指針となる論集である。 全 370 頁、pp.111～156
3）『犬飼隆編『古代の文字文化』（『古代文学と隣接諸学』④）	共著	平成 29 年 7 月	竹林舎	Ⅱ正倉院文書が語る 8 世紀の文字世界の章において「日本語史料としての正倉院文書―「運漕」の場合―」を執筆した。8 世紀の下級官人が仕事を遂行するために書き記した一次資料である正倉院文書を資料として、8 世紀の日本における実務官人の漢字の独自用法について考察を行った。一見して具体的な意義が了解できる視覚情報としての漢字の特性を自由闊達に使用し、「船舶による輸送」を表す漢語「運漕」を、状況に応じて「水陸両方を含む輸送」をも表す言葉としてもしている実態を明らかにした。その用法の背景とその用法がもたらす効用にも言及した。さらに、この独特の用法が 10 世紀の「延喜式」にも見られることも指摘した。 全 557 頁、pp.221～257

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1）上代写経識語注釈（その一）大般若経（長屋王願経・和銅経） （査読付）	単著	平成 22 年 4 月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第 385 号 P. 26～P. 44	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究である。特に本稿で取り上げた識語は現存する識語の中で、奈良時代のごく初期の写経経典でありながら、各地に点在する、極めて貴重なものである。
2）写経生の書状―正倉院文書にみる古代官人の実態―	単著	平成 22 年 11 月	奈良産業大学情報学部「情報学フォーラム紀要」 P. 1～P. 8	いつ何のために何を書いたか不明であった写経生の書状について、その紙背文書の分析から書かれた年代を特定し、その時の写経所の状況、写経生等の勤務状況を明らかにし、仕事を依頼するための書状であったことを指摘した。そこには、漢字漢文では表現できない日本語特有の敬意を含んだ言葉が表出することをも合わせて指摘した。
3）正倉院文書の「笶」と「筴」	単著	平成 23 年 6 月	釜山大学校日本研究所 「日本研究」12 輯 P. 7～P. 31	正倉院文書の造営資料や木簡等の一次資料、律令公文・延喜式などの歴史史料、万葉集などの文学資料、及び古辞書に見える「笶」と「筴」の使用実態を調査し、「笶」を、ヤダケを意味する和語「の」とよませる漢字用法は、漢字本来の意義から逸脱する日本的用法（国訓）であることを明らかにし、日本的漢字用法が、どのような人々によってどのような理由で生じるのか、その要因をさぐった。
4）上代写経識語注釈（その九）十輪経（五月一日経） （査読付）	単著	平成 23 年 8 月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第 394 号 P. 33～P. 44	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究シリーズの第 9 である。特に本稿で取り上げた五月一日経（一切経）は、その写経の過程を知る文書・帳簿が正倉院文書に多量に残存し、経典そのものも大量に残存する世界的にも希有な資料群である。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5）上代写経識語注釈（その十）千手千眼陀羅尼経（玄昉願経） （査読付）	単著	平成 23 年 8 月	続日本紀研究会誌 「続日本紀研究」 第 393 号 P. 36～P. 49	日本には、飛鳥・奈良時代（７世紀～８世紀）に書き写された経典が現存している。これらの経典には経典を写した人物・年月日・写経に込めた願いを書き込んだ写経識語がある。この制作動機などを記している識語を手がかりにして、当時の人々の思考や社会背景、仏教語の受容の実態、仏教思想や仏教語の文学に与えた影響などを目指す研究シリーズの第 10 である。本稿で取り上げた玄昉願経は、正倉院文書によってその写経の過程を知ることのできる写経経典の一つであり、この識語の分析によって、東大寺創建・国分寺建立にも深く関わる内容であることを指摘した。
6）正倉院文書の「堪」と「勘」―古代下級官人 爪工家麻呂の学習― （査読付）	単著	平成 24 年 9 月	萬葉語文研究会 『萬葉語文研究』第８集 和泉書院 p. 121～p. 147	8 世紀の原本が残る正倉院文書の分析を通じて、当時の下級官人の言語生活を記述した研究である。同一人物の作成した文書・帳簿を写経事業毎に選別し、特定の人物の置かれた状況・仕事内容を明らかにして上で、役人としての基本的な語彙をどのようにして習得したのかということを明らかにした。つまり、外国語である漢字・漢文を、日本語を母語とする人々がいかにして習得したかということを明らかにすることは、異文化を享受しながら独自の文字システムを構築してきた日本語のあり方を知ることに繋がる。
7)正倉院文書の「早速」―和製漢語のうまれる場面―　（査読付）	単著	平成 25 年 3 月	奈良女子大学文学部国文学会誌「叙説」第 40 号　　p. 33～p. 57	漢籍に例を見ない「早速」が和製漢語であることを正倉院文書・木簡の悉皆調査によって明らかにした。類義の副詞「早・速・急・火急」と比較対照させることによって、奈良時代の人々が、どのような場面で、誰に対して、どのような事情がある時に「早速」を使用するのかということを分析した。合わせて文学資料における使用実態も調査し、和製漢語がどのような場面で生まれるのかという、言葉の発生のプロセスを明らかにした。『史学雑誌』（東京大学　史学会）の回顧と展望において取り上げられた。
8）道豊足の人事―あいまいな表現の背景―（査読付）	単著	平成 25 年 10 月	正倉院文書研究会会誌『正倉院文書研究』13	石山寺造営関係資料の中には、人員の派遣に関する様々な文書や、勤務実態を明らかにする文書・帳簿が多く残存している。本稿では、道豊足の派遣を要請する文書の日付や要請理由、派遣を許諾した文書のあいまいな表現に注目し、文書間の整合性を保つために周到な準備をしていたことを確認した。さらに、道豊足の勤務実態と要請理由との間に生じた矛盾が、許諾文書のあいまいな表現の要因になったということを明らかにした。『史学雑誌』（東京大学　史学会）の回顧と展望において取り上げられた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9)「正倉院文書注釈―造石山寺所解移牒符案（三の１）―」（査読付）	単著	平成 28 年 3 月	奈良女子大学古代学学術研究センター『古代学』第８号 p.42～p.59 頁	二冊の科研報告書『正倉院文書の訓読と注釈―造石山寺所解移牒符案（一）― 』『同（二）』の発展的続編である。日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文・現代語訳と注釈を施した。一部補注も加え、注目すべき語法について考察を行った。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。
10)「写経生・実務担当者の選択――「啓」という書式を選ぶ時―」	単著	平成 29 年 3 月	奈良女子大学古代学学術研究センター『漢字文化の受容―東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式―』報告集、pp66～83	造石山寺解移牒符案の中にある一通の「啓」について、「解」でなく書状の「啓」で発信された要因を、文書の内容と返信文書の分析から特定した。加えて、「解」で発信されることが定められていた休暇・欠勤の申請を「啓」や書状形式で発信している 8 通について、発信された時の状況と発信後の文書の処理過程を解明し、「啓」や書状形式で発信した要因をも明らかにした。これらの検討によって、古代の律令文書行政の世界での「啓・書状」の位置づけの一端を示した。
［報告書］ 1)「正倉院文書訓読による日本語表記成立過程の解明」	共著	平成 26 年 3 月	平成 22 年度～25 年度科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号 22520467）研究成果報告書 研究代表：桑原祐子	平成 22 年～25 年度科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号 22520467）の 4 カ年の研究報告書である。以下の２冊からなる。 Ⅰ　正倉院文書の訓読と注釈―造石山寺所解移牒符案（二）― 注釈篇は、日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真・釈文を提示し、訓読文・現代語訳と注釈を施した。一部補注も加え、注目すべき語法について考察を行った。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。論考篇には、これらの資料に関わる４編の論考を収録した。 （執筆　桑原祐子）A4 版 179 頁 Ⅱ　正倉院文書からたどる言葉の世界（二） 正倉院文書の中から、5 通の文書を取りあげ、写真・釈文・訓読文・現代語訳を施し、その文書の背景を解説し、国語国文学研究の観点から注目すべき語の考察を行った。更に、正倉院文書と日本古代の文献や漢籍との比較研究に関わる論考 2 編を収録した。 （執筆　中川ゆかり）A4 版 142 頁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2）「正倉院文書の読解を通した上代文学の表現の生成に関する研究」	共著	平成 29 年 3 月	平成 26 年度～28 年度科学研究費補助金基盤研究（C）（課題番号：26370220、代表者：中川ゆかり）研究報告書	『正倉院文書注釈―造石山寺所解移牒符案（三）――』 日本最古の寺院造営資料のうち、造石山寺所と他機関との文書のやり取りを記録した解移牒符案の写真･釈文を提示し、訓読文と注釈を施した。一部補説も加えた。正倉院文書を国語国文研究の研究資料として用いるときの基礎的研究となるものである。 （執筆　桑原祐子）A4 版 82 頁
3）「杜友晋『吉凶書儀（伯 3442）の注釈と研究	共著	令和 2 年 3 月	平成 28 年度～令和元年度科学研究費補助金基盤研究（ｃ）（課題番号：16ｋ02587、研究代表：楊莉）研究報告書	本研究の目的は、敦煌文献資料の一つである敦煌書儀について、各々の書儀に注釈を加え、実用生活における書記言語資料としての位置づけを行うことである。そのため、具体的な研究成果として、日本語による「敦煌書儀注釈」を作成し、刊行した。分担者として、日本上代文献に関する調査及び補注を担当した。
〔その他〕 栄原ゼミと私	単著	平成 23 年 5 月	大阪市立大学日本史学会　『市大日本史』第 14 号	日本古代史学界の中で正倉院文書研究を牽引してきた栄原永遠男先生の退任を記念して特集が組まれた。その中の一編として、最新の正倉院文書研究の場である「栄原ゼミ」の存在意義について国語学の立場から述べたものである。栄原ゼミで 10 年間研究をしてきた経験に基づき、ゼミが有意義な存在であることを述べた。
〔学会発表〕 1）道豊足の人事―「正倉院文書の訓読と注釈」の作業から	―	平成 22 年 10 月	正倉院文書研究会第 29 会大会（大阪市立大学）	近江石山寺造営資料における文書・帳簿の分析を通して、古代の下級官人の人事システムと人事の実態のずれを明らかにし、その背景には、律令文書主義の中で文書の整合性を保つための様々な調整が行われたことをも、文書の訂正状況や表現の差異から分析検討を行った。
2）正倉院文書の「早速」―和製漢語の生まれる場面―	―	平成 23 年 12 月	国語語彙史研究会第 99 回大会（大阪大学）	漢籍に例を見ない「早速」が和製漢語であることを正倉院文書・木簡の悉皆調査によって明らかにした。類義の副詞「早・速・急・火急」と比較対象させることによって、奈良時代の人々が、どのような場面で、誰に対して、どのような事情がある時に「早速」を使用するのかということを分析した。合わせて文学資料における使用実態も調査し、和製漢語がどのような場面で生まれるのかという、言葉の発生のプロセスを明らかにした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3）正倉院文書の「運」と「漕」	―	平成 26 年 11 月	奈良女子大学古代学学術研究センター研究会 「正倉院文書研究の新たな試み」	文字を書くことが仕事であった古代の下級官人たちは、本来の漢語用法から逸脱しながらも、実務の現場にふさわしい漢字の使い方をしている。しかし、それは、彼らが漢語本来の用法を認識していなかった結果ではない。漢字の持つ機能を充分に理解したうえでの様々な工夫がそこにはあったと考えられる。そのような実態の一端を「運」と「漕」という言葉を通して明らかにし、日本的な漢字用法が生み出される背景を考えた。現代では「漕」は「コグ」とよまれるが、古代では水運による移動「ハコブ」を表していた。そこで、正倉院文書中の「運」と「漕」に着目し、その運用実態を調査し、加えて、漢字熟語「運漕」について、正倉院文書や延喜式には独自の用法があることを明らかにした。
4)「写経生・実務担当者の選択――「啓」という書式を選ぶ時―」	―	平成 28 年 8 月 22 日	第 12 回若手研究者支援プログラム「漢字文化の受容―東アジア文化圏からみる手紙の表現と形式―」	造石山寺解移牒符案の中にある一通の「啓」について、「解」でなく書状の「啓」で発信された要因を、文書の内容と返信文書の分析から特定した。加えて、「解」で発信されることが定められていた休暇・欠勤の申請を「啓」や書状形式で発信している 8 通について、発信された時の状況と発信後の文書の処理過程を解明し、「啓」や書状形式で発信した要因をも明らかにした。これらの検討によって、古代の律令文書行政の世界での「啓・書状」の位置づけの一端を示した。
5）帙了（筆）暇の実態と表現	―	平成 30 年 3 月 11 日	第 2 回正倉院文書の研究会（大阪市立大学）	東大寺写経所（官営写経所）の教師が提出した 240 通余の請暇解・不参解の中から、仕事の切れ目である「帙了暇」の実態について分析を行った。上帙が提出されたタイミングで提出された請暇解を取りあげ、その実態と表現の分析を行い、彼らが認識していた休暇の許容範囲を明らかにした。加えて、定型からはずれた表現の背後にある表現者の意図を読み解いた。
6）清潔と洗浄――日本古代資料「正倉院文書」の事例――	単独	平成 31 年 1 月 23 日	国立歴史民俗博物館産学共同研究「清潔と洗浄をめぐる総合的歴史文化研究」 第 4 回研究会	「清潔と洗浄をめぐる総合的歴史文化研究」の 1 部門として、日本古代における清潔と洗浄に関する分析検討を行うのが、歴博共同研究員として課せられた課題である。その分析検討の一つとして、古代の一次資料である正倉院文書に見られる清潔・清浄及び洗浄に関する具体的な行為とその背景にある写経所のシステムについての考察を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
〔招待講演〕 1）古代言語資料としての正倉院文書	単独	平成 23 年 3 月	釜山大学日本研究所主催 （於釜山大学）	漢籍に例を見ない漢字熟語が正倉院文書の中には、しばしば見られる。このような漢字熟語について、誰がどのような場面で、誰に向かって使用したかということを分析していくと、使用者の心情や心理が明らかになり、和製漢語が生じる背景を考察することが可能になるということについて報告を行った。
2）正倉院文書の休暇願にみる下級官人の言語生活	単独	令和元年 11 月 30 日（土）	佛教大学　2019 年度国語国文学会	正倉院文書に残る写経生の「待遇改善要求」の草案の内容が、実現されたのかどうかということを、245 通の休暇願・欠勤届の内容・表現・言葉遣いなどから解明し、写経生（下級官人）等の言語生活の実態を明らかにした。

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月31日

氏名　善野　八千子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学	学校間接続、生活科、教員の力量形成

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事　項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 ・リフレクションカードを活用した学習の定着及びグループディスカッションの実施	平成20年４月 ～現在に至る	奈良教育大学兼任講師として担当の「初等教科教育法（生活）」(3回生)（教職科目、３年次配当、半期、必修２単位)、奈良学園大学　教授として担当の「人間教育開発力実践演習ⅠⅡ」(１～2回生)（専門科目、１～2年次配当、通年、選択１単位)、において、実践した。 学習定着を目的として、毎時限の最後にリフレクションカードによるフィードバックを実施。毎回、学生が記述したリフレクションカードに、コメント評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用。１枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなり、学生自身が毎回の自己の学修成果と課題を明確にできた。 グループディスカッションについては、初回は、ペアワークとし、徐々に5～6人グループで行った。テーマに応じた協同的な学びの姿が見られ、話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果からも「自分と違う意見や考えによって理解が深まった」等の学生の満足度がきわめて高かった。 上記と同様に、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」(2回生)（教職科目、２年次後期配当、半期、必修２単位)、「生活の理解」１年次後期配当、半期、必修２単位)、「人間教育実践力開発演習Ⅳ」(Ⅳ回生)（専門科目、４年次配当、通年、選択１単位)、において実践した。
	平成22年４月 ～平成26年３月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育学概論」(1回生)（専門科目、１年次配当、半期、必修２単位)、「教育制度論」（専門科目、１年次配当、半期、必修２単位)、「教職実践演習」（専門科目、２年次配当、半期、必修１単位）において、実践した。 毎時限の最後に、学習の定着のためにリフレクションカードによるフィードバックを実施した。毎回、学生が記述して提出したリフレクションカードに、コメント及びA評価を記載。次回に返却し、導入時に前回の復習として活用した。承認や賞賛の体験が乏しい学生にとって意欲の高まりが顕著に見られた。１枚のカードで当該科目のシラバス全体の振り返りとなることから、学生自身が自己の学習成果と課題を明確にすることができた。グループディスカッションについては、少人数から徐々に5～6人グループで行った。話し合い後に発表することから、プレゼンテーション力が高まった。授業アンケート結果から「授業満足度は、全クラス97%以上であった。

・毎回の復習テストを活用した学習の定着の工夫	平成22年4月 ～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の専門科目、「教育制度論」（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、学習の定着を図るために、毎回の講義導入において復習ミニテストを実施したところ、履修者の相当数において、当該科目の履修の前後を比較すると、復習の習慣化と学習の定着度が向上した。
・予習レポートの活用と授業設計	平成23年4月 ～現在に至る	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の専門科目、「教育学概論」（1回生）（専門科目、1年次配当、半期、必修2単位）において、予習習慣の定着のために毎回の予習レポート「子ども情報カード」を実施した。学生は、シラバスに関連した子どもに関するニュース及び自己の考えを記述してくる。毎回の講義の冒頭で発表させることで、学生同士の関心意欲が喚起できる。また、教員は学生の実態を把握し、配慮した授業設計を行うことができる。履修者の相当数において、予習の習慣化と学習課題に対する関心意欲の向上が見られた。 上記と同様に、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」（2回生）（教職科目、２年次後期配当、半期、必修2単位）、「生活の理解」1年次後期配当、半期、必修2単位）において、科目ごとの目標に対応した予習課題を設定して実践した。
2　作成した教科書、教材		
・「学校評価を活かした学校改善の秘策」（再掲）	平成17年4月 ～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育原理（平成20年3月まで）、教育学概論（平成20年4月から科目名変更）」（専門科目、1年次配当、半期、必修２単位）、において使用。 教員の資質向上のための学校改善の方策について、評価の運用及び実践事例の内容を示した。学生は、毎回の講義で10分間読解し、本時の目標に関わる章について、気づき及び疑問を発表し、教育の現状及びこれからの教育課題について意欲的な対話が可能になった。
・学校力・教師力を高める学校評価（再掲）	平成22年4月 ～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教育制度論」（専門科目、2年次配当、半期、必修２単位）において、使用した。教育制度における全容から、とりわけ学校評価の目的及び信頼構築の有様と実践事例の内容を教育制度の視点から示した。学生は、理解の困難な制度についても、公教育における制度のや現代的課題に関心を深めた。また、具体的な学校現場の事例を通して理解した。
・小学校教科用図書「あたらしいせいかつ」	平成23年4月 ～現在に至る	平成23年度用、平成27年度用小学校生活科　教科用図書　採択された市町村立小学校及び私立小学校の第1学年・第2学年に於いて、使用されている。 また、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」（教職科目、２年次配当、後期、必修２単位）において、使用した。学生は毎時間の模擬授業の際に活用し、学校現場での実践力強化として指導案作成のプロセスと低学年における児童理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、指導法の課題が明確になった。

・キャリア教育読本「コドモタチへの想い」（再掲）	平成23年4月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「キャリアデザイン演習」（専門科目、1年次配当、半期、選択１単位）において、使用した。就業力向上のために、仕事内容ややりがい等の具体的事例について示した。学生は、保育・教育の今を知り、教育現場の実際や課題を検討することが可能となった。
・幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発（再掲）	平成23年4月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「教職実践演習」（専門科目、２年次配当、半期、必修１単位）において、使用した。幼児期から児童期に関わる教員の資質向上のために特に就学前後の課題や生活科の具体的事例について示した。学生は、これからの保育・教育の課題を検討し実践力向上につなげた。
・子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成―（再掲）	平成24年9月～平成26年3月まで	奈良文化女子短期大学幼児教育学科教授として担当の「キャリアデザイン演習Ⅱ」（専門科目、１年次配当、半期、選択１単位）において、使用した。保育者・教員の資質向上のための幼小接続カリキュラム開発及び実践例について示した。学生は、幼児期のカリキュラムと生活科に位置付いたカリキュラム作成のプロセスの理解が深まった。また、教育保育現場の実際を知り、就業力向上へもつなげた。
・子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成―（再掲）	平成27年9月～現在まで	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活科指導法」（教職科目、２年次配当、後期、必修２単位）において、使用した。保育者・教員の資質向上のための幼小接続カリキュラム開発及び実践例について示した。学生は、幼児期のカリキュラムと生活科に位置付いたカリキュラム作成のプロセスの理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、指導法の課題が明確になった。
・教科力　生活	平成28年9月～現在まで	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科教授として担当の「生活の理解」（教職科目、１年次配当、後期、必修２単位）において、使用。保育者・教員の資質向上のための小学校生活の理論をもとに、歴史や評価の実践例についても提示。学生は、生活科の科目の特性に位置付いたカリキュラム作成と指導理論のプロセスの理解が深まった。また、予習学修の定着と共に、子ども理解の課題が明確になった。
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
ERP　大阪フォーラム（於：大阪国際交流センター）	平成22年5月2日	「ゆとり教育からの脱却」をテーマにしたフォーラムにおいてコーディネータをした。
西播磨地区小学校校長会研修会（於：相生市総合福祉会館）	平成22年5月7日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
富士市立富士中学校区三校合同PTA講演会（於：富士市交流プラザ）	平成22年5月8日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三重県公立小中学校女性校長教頭会研修会(於三重県総合文化センター：)	平成22年5月25日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
高知県所長・園長研修会(於：高知県教育センター)	平成22年6月11日	学校評価を活かした学校改善について講演した。
奈良市30人学級指導法検討委員会(於:奈良市庁舎)	平成22年6月14日	30人学級を活かした指導の改善

和歌山県幼稚園保育所合同研修「初任者園長研修会(於：和歌山ビッグ愛)	平成22年6月15日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
大和郡山市幼稚園・小学校連携研修会(於：矢田コミニティ会館)	平成22年8月4日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
幼稚園・保育所と小学校連携促進事業夏季研修会(於：田原本青垣生涯学習センター)	平成22年8月5日	幼小連携～幼稚園と小学校のなめらかな接続について講演した。
天理市幼稚園教員研修会(於：天理市役所)	平成22年8月10日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
桜井市幼小中学校教職員研修会(於：桜井市中央公民館)	平成22年8月17日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
倉敷市公立幼稚園教職員研修会(於：くらしき健康福祉プラザ)	平成22年8月20日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
奈良市30人学級指導者研修会(於：奈良市庁舎)	平成22年8月23日	30人学級を活かした指導の改善について講演した。
滋賀県守山市幼小中学校教職員研修会(於：守山市民ホール)	平成22年8月27日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
豊野地区幼稚園長・指導主事研修会(於：池田市合同庁舎)	平成22年8月30日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
平成22年度PDCA研修Ⅱ(於：秋田県庁舎)	平成22年9月4日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県園長等運営管理協議会(於：ピュアリティまきび)	平成22年9月27日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
教育セミナー山陰2010　課題講演(於：鳥取県社会福祉人材研修センター)	平成22年10月2日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
葛城市立新庄北小学校附属幼稚園　幼小連携研修会(於：新庄北小学校附属幼稚園：)	平成22年10月25日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三田市第2回幼・小・中学校教頭研修会(於：三田市総合文化センター)	平成22年10月26日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
学校経営品質向上研究会(於：関西生産性本部)	平成22年11月8日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
奈良市30人学級指導法検討委員会(於:奈良市庁舎)	平成22年11月9日	30人学級を活かした指導の改善について講演した。
平成22年度　岡山県国公立幼稚園長研修会(於：ピュアリティまきび)	平成22年11月26日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
平成22年度岡山県ブロック公立小中学校副校長・教頭研修会(於：ロマン高原かよう総合会館)	平成22年11月30日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
三次市主幹・教頭研修会(於：三次市)	平成22年12月14日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。
明日香村人権教育研究会「子どもの学力保障」(於：明日香村立明日香幼稚園)	平成23年1月24日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
平成22年度　学力の把握に関する研究指定校事業研究協議会(於：文部科学省)	平成23年1月26日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
磯城郡小学校教育研究会(於：田原本青垣生涯学習センター)	平成23年2月16日	元気の出る学校園づくり～学校評価を活かして～について講演した。

第３回奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年２月 17 日	30 人学級を活かした指導の改善について講演した。
海田町新教育課程研修会(於：広島県安芸郡海田町ひまわりプラザ)	平成 23 年２月 18 日	新学習指導要領実施に向けて～学力向上～について講演した。
姫路市異校種連携研修会(於：姫路市立勤労市民会館)	平成 23 年５月 13 日	よりよい保幼小連携の進め方～子どもの育ちと学びをつなぐ～について講演した。
平成 23 年度第１回　奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年６月 2 日	「30 人学級」を活かした指導の改善について講演した。
兵庫県私立小学校学級経営研究会(於：甲南小学校)	平成 23 年６月 3 日	子どもと保護者と教師が育ち合う学級経営について講演した。
第 19 回岐阜授業実践フォーラム(於：岐阜羽島文化会館	平成 23 年６月 4 日	学校づくり部会指導助言
奈良市解放保育研究会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年７月 12 日	元気な保育園づくりのために ～これからの保育者に求められる資質～について講演した。
平成 23 年度第２回奈良市 30 人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成 23 年７月 26 日	「30 人学級」を活かした指導の改善について講演した。
岡山県国公立幼稚園教育研究会　備前支部研修会(於：岡山県加賀郡吉備中央町農業振興センター)	平成 23 年７月 29 日	元気の出る学校評価 ～マネジメントツールを生かして～について講演した。
福井県鯖江市小中学校学級経営研修講座(於：鯖江市文化の館)	平成 23 年８月 2 日	子どもと保護者と教師が育ち合う学級づくりについて講演した。
八尾市幼保小合同研修会(於：中河内府民センター)	平成 23 年８月 5 日	子どもの育ちと学びをつなぐ ～幼保小連携による教育･保育を通して～について講演した。
兵庫県公立学校女性管理職研修会(於：ウェスティンホテル淡路)	平成 23 年８月 8 日	兵庫県公立学校女性管理職を対象に、「学校力・教師力を高める学校づくり」について講演した。
芦屋フォーラム学校づくり部会(於：兵庫県芦屋市立宮川小学校)	平成 23 年８月 12 日	育ちと学びをつなぐ学校づくり ～　知・徳・体を育てる　～について講演した。
第３回　滋賀県 10 年経験者研修会(於：滋賀県総合教育センター)	平成 23 年８月 23 日	「園における望ましい連携の在り方」 ～子どもの育ちと学びをつなぐために～について講演した。
愛知県豊川市　授業力向上研修会(於：愛知県豊川市　音羽文化ホール)	平成 23 年８月 25 日	これからの教師に求められる資質 ～授業力向上をめざして～について講演した。
兵庫県篠山市　主幹教諭研修会(於：兵庫県篠山市市役所庁舎)	平成 23 年８月 29 日	元気な学校づくり～学校評価を活かして～について講演した。
岡山県園長等運営管理協議会(於：ピュアリティまきび)	平成 23 年９月 30 日	幼稚園における学校評価～マネジメントツール、コミュニケーションツールとしての活用～について講演した。
西宮市幼年教育研修(於：西宮市子育て総合センター)	平成 23 年 10 月 25 日	幼・保・小連携～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造～について講演した。
敦賀フォーラム(於：プラザ萬象　大ホール)	平成 23 年 11 月 3 日	「学校・家庭・地域でつなぐ教育・共育・協育 ～敦賀の誇りと教育力を高める」～として、敦賀市教育委員会主催討論会登壇した。
奈良学園幼稚園園内研修会(於：奈良学園幼稚園)	平成 23 年 11 月 8 日	幼児期と小学校以降の教育 ～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造～について講演した。

平成23年度第４回　奈良市30人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成23年11月14日	「30人学級」を活かした指導の改善
幼稚園経営研修講座(於：奈良県立教育研究所)	平成23年11月29日	教育課程編成の工夫と教職員の共通理解 ～育ちと学びをつなぐ園づくりのために～について講演した。
広島県三次市小中学校　校長研修会(於：みよしまちづくりセンター)	平成23年12月6日	育ちと学びをつなぐ学校づくり～マネジメントツールとしての学校評価を活かして～について講演した。
伊賀市教頭会研修(於：伊賀市教育研究センター)	平成23年12月9日	元気の出る学校づくり ～学校評価を活かして～について講演した。
大阪府私立幼稚園連盟　免許更新講習(於：大阪府私学教育文化会館)	平成23年12月21日	幼稚園をめぐる最新事情「幼稚園の信頼構築と改善に生かす学校評価と幼小連携」について講演した。
西宮市幼小連携研修・実践報告会(於：西宮市子育て総合センター)	平成24年1月13日	保幼小連携～実践への提言・助言～について講演した。
奈良文化女子短期大学付属幼稚園教員研修会(於：奈良文化女子短期大学付属幼稚園)	平成24年1月17日	幼稚園の信頼構築と改善に生かす 学校評価について講演した。
八尾市研究指定事業研修会(於：八尾市立東山本幼稚園)	平成24年1月31日	八尾市研究指定校園の教諭・指導主事等を対象に「つたえあい・ひびきあい・まなびあう　～幼小がつながって～」について講演した。
泉北３市１町幼稚園管理職研修(於：忠岡町シビックセンター（忠岡町役場)	平成24年2月7日	泉北３市１町（和泉市・泉大津市・高石市・忠岡町）幼稚園管理職を対象に「元気の出る幼稚園づくり」～幼稚園管理職のマネジメント力と年度末の検証～について講演した。
平成23年度第５回　奈良市30人学級指導法検討委員会(於：奈良市庁舎)	平成24年2月13日	奈良市内幼稚園・小学校教諭等を対象に「30人学級」を活かした指導の改善について講演した。
猪名川町教頭・副主幹合同研修会(於：兵庫県猪名川町教育委員会室)	平成24年2月16日	猪名川町教頭・副主幹を対象に「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」について講演
久米田看護専門学校における特別講義(於：久米田看護専門学校)	平成24年3月1日	看護学生（１・２・３年生）を対象に、「評価を活かして自分を変える～活き活きスキルアップ、シェイプアップ、メイクアップ～」について講演
門真市私立幼稚園・保育園合同研修会(於：門真市仙亭会議室)	平成24年3月1日	門真市私立幼稚園・保育園の理事長・園長等を対象に、幼小連携～育ちと学びをつなぐ学校園づくり～について講演
北葛城郡広陵町幼稚園教員の資質向上にかかる講演の講師(於：北葛城郡広陵町総合福祉会館「さわやかホール」)	平成24年5月2日	北葛城郡幼稚園教育研究会会員を対象に「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐカリキュラムの創造」について講演
敦賀っ子教育審議会にかかる「学び育み委員会」「子どもサポート委員会」合同開催　委員として講話(於：敦賀市立図書館　研修室)	平成24年5月15日	敦賀っ子教育審議会にかかる「子どもサポート委員会」委員を対象に「学びの基礎力」をもとに今後の方向性を提案
桜井市「第２回　子育てセミナー」講師(於：桜井市立中央公民館)	平成24年5月25日	桜井市就学前の幼児とその保護者対象に「第２回子育てセミナー」　において「遊びから学びへ～幼児教育と小学校教育の接続」について講演
平成24年度　西日本私立小学校教員研修会　講師(於：追手門学院小学校)	平成24年5月25日	西日本私立小学校教員を対象として「学級経営分科会」において、「子どもと保護者と教師が育つ学級経営」について講演
兵庫県私立小学校連合会研修会講師 モラル教育の公開授業　指導講演(於：甲南小学校)	平成24年6月1日	兵庫県私立小学校学級経営部会教員を対象として「モラル・マナー・ルールを通して、公開授業指導講演

第20回授業実践フォーラム　教育課題講座の講師(於：岐阜県羽島市文化センター)	平成24年6月2日	初任者から経験者まで全国から参加の学級担任及び管理職等を対象に「学級づくりの諸課題～子どもと保護者と教師が育つ学級経営～」について講演
三田市教育委員会主催 三田市立保幼小・中・連携推進にかかる研修会　講師(於：有馬富士自然学習センター)	平成24年6月19日	三田市内の小・中校長または教頭、保育所長・私立幼稚園長又は教諭　50名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小・中・連携」について講演
第1回宝塚市立小・中・特別支援学校　校長研修会講師(於：宝塚市立教育総合センター)	平成24年6月22日	宝塚市立小・中・特別支援学校　校長等30人を対象に、「人材育成へのマネジメント～　学校改善へのリーダーシップ　～」について講演
天理市教育委員会主催　天理市内保・幼・小・中の連携推進にかかる研修会　講師(於：天理市教育総合センター)	平成24年6月29日	天理市内保・幼・小・中の校園所長２５名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保・幼・小連携」について講演
特例社団法人日本精神看護技術協会主催　教育方法研修会　講師（於：京都研修センター）	平成24年7月3日	看護実習指導者を目指している者(80名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の形態」について講義
特例社団法人日本精神看護技術協会主催　教育方法研修会　講師（於：京都研修センター）	平成24年7月4日	看護実習指導者を目指している者(80名)を対象に、効果的な実習指導ができるよう、また、学生の特性を理解し、教育的配慮ができるように必要な知識・技術を修得させることを目的として「授業の方法」について講義
全国幼児教育研究協会 主催　中国地区岡山支部研修会　講師（於：岡山衛生会館　三木記念ホール）	平成24年7月7日	中国地区岡山県の幼稚園長・教諭・保育所長・保育士・大学関係者など300名を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かして～」の講演
鳴門教育大学大学院　特別講義(於：鳴門教育大学)	平成24年7月13日	鳴門教育大学大学院授業科目「学習指導と学習評価」及び学部授業科目「教育評価論」における特別講義
平成24年度奈良市「30人学級」指導者研修会　講師　（於：奈良市庁舎　中央棟６階　正庁）	平成24年7月24日	奈良市立幼稚園・小学校教員を対象に『奈良市小･中学校学力･学習調査の結果から見えてくる「30人学級」での効果的指導法』について講演
福井県丹生郡学校教育研究会主催　丹生郡教育講演会　講師（於：越前陶芸村文化交流会館）	平成24年7月26日	福井県丹生郡内小中学校教職員150名を対象に「育ちと学びをつなぐ学校づくり　授業づくり」について講演した。
第3回門真市一貫教育課程研修会　講師（於：門真市教育センター）	平成24年7月27日	門真市立幼小中学校教員を対象に、「就学前と義務教育の連携を深めるために」について講演した。
敦賀市教育委員会主催　敦賀市ミドルリーダー研修会講師（於：敦賀市立図書館）	平成24年8月7日	敦賀市ミドルリーダー40名を対象に、「教員の質の向上～信頼構築のためのスキルアップ、ブラッシュアップ、メイクアップ～」と題して講演
伊賀市教育センター主催　平成24年度伊賀市教育センター研修講座（於：伊賀市教育センター）	平成24年8月10日	伊賀市小中学校及び幼稚園教員４０名を対象として、「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」と題して講演
和歌山県福祉保健部主催　平成24年度幼稚園・保育所関係職員合同研修会　講師　（於：和歌山北コミュニティセンター）	平成24年8月20日	公・私立幼稚園の園長及び教員、公・私立保育所の所長及び保育士、認定子ども園の園長及び職員、公・私立小学校の校長及び教員、各市町村教育委員会指導主事、各市町村保育行政担当者240人対象に「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐために～」講演

社団法人　大阪府私立幼稚園連盟主催　免許更新更新講習講師　（於：大阪私学教育文化会館）	平成24年8月22日	大阪府私立幼稚園教員120名を対象に、免許更新更新【必修】講習を担当。「チーム保育に学校評価を取り入れ、小学校につないでいくために」について講義
名古屋市教育委員会指定校事業において、名古屋市立大高南小学校研修会　講師	平成24年8月27日	名古屋市立大高南小学校教員を対象に、「ポジティブプロパガンダを創り出す学校評価」について講演・演習
岡山県教育委員会主催の園長等運営管理協議会講師（於：ピュアリティまきび）	平成24年9月24日	国公立私立幼稚園長を対象に、「幼稚園における学校評価」について講演
奈良市教育委員会主催の30人学級指導法検討委員会において、指導助言（於：奈良市庁舎）	平成24年10月2日	奈良市幼小教員を対象に、「第2回30人学級指導法検討委員会」に委員長として指導助言
三田市教育委員会主催の校園長会及び教育委員等研修会　講師（於：三田市消防本部会議室）	平成24年10月3日	三田市立幼小中校園長、教育委員、指導主事希望する市内私立幼稚園長または公私立保育所長等50名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼・小・中連携」について、講演
大阪私立幼稚園連盟青年振興部主催の研修会　講師（於：大阪私学教育文化会館）	平成24年10月9日	大阪私立幼稚園青年振興部教職員を対象に「学校評価と幼小連携」について講演
長岡京市教育委員会主催の保幼・小・中連携会議研修会　講師（於：長岡京市立図書館大会議室）	平成24年10月26日	長岡京市内保育園・保育所・幼稚園・小学校の教職員等70名を対象に、「発達と学びの連続性を踏まえた幼児期と児童期の接続カリキュラムづくりについて」、講演
岡山県保育協議会主催　保育研究会　講師（於：JA岡山7階ホール）	平成24年10月30日	県内保育所関係者・職員等240名を対象に、「元気の出る保育園づくり～保育の質を高める自己評価を活かして～」について講演
八尾市教育委員会主催の研究指定園　園内研修会講師（於：八尾市立東山本幼稚園(研究指定園)	平成24年11月5日	八尾市幼稚園園長・教諭及び小学校校長・教員並びに指導主事を対象に、「園内保育」について指導助言
福井市教育委員会主催の平成24年度福井市公立幼稚園保育研究会　講師（於：福井東郷公民館）	平成24年11月10日	福井市内公立幼稚園40名小学校教職員及び保育士を対象に、「幼児教育と小学校教育の連携・接続に向けて」について講演
第7回全国高等学校保育教育研究大会　講師（於：千里阪急ホテル）	平成24年11月16日	全国高等学校保育コース担当者等150名を対象に、「生きる力を培う保育者の育成～育ちと学びをつなぐために～」と題して基調講演
生駒市立教育委員会研究発表会　講師（於：生駒市立壱分幼稚園）	平成24年11月20日	幼稚園教諭参加者82名、保育園3名、小学校教諭5名（壱分小1年担任）中学校教諭,高等学校教諭を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～小学校、中学校、高等学校との交流から～」について記念講演。
日本保育協会主催の大阪支部女性部研修会講師（於：薬業年金会館）	平成24年11月26日	日本保育協会大阪支部の保育士90名を対象に、「幼児期と小学校以降の教育～育ちと学びをつなぐ～」について講演
大阪保育部会北大阪ブロック会主催の年末研修会講師。　（於：ホテル・アゴーラ大阪守口　）	平成24年12月3日	会員園の管理職80名を対象に「育ちと学びをつなぐ保小連携」について講演
有田市教育委員会主催の「実効性の高い学校評価・情報提供の充実・改善に向けた取組」にかかる研修会　講師。　（於：有田市橘家）	平成24年12月4日	有田市立小中学校教員等80名を対象に「学校改善につながる学校評価にするために」について講演
紀の川市教育委員会主催の「豊かな学びと育ちをつなぐ保幼小合同研修会」講師。（於：紀の川市立安楽川保育所）	平成25年1月22日	紀の川市立保育所、私立幼稚園、紀の川市立小学校　園長・校長・教頭・教職員等　約70名を対象に、「遊びから学びへ　育ちをつなぐ生活科」について講演

宝塚市教育委員会主催の「宝塚市立学校教頭研修会」講師（於：宝塚市立教育総合センター）	平成25年1月29日	宝塚市立学校教頭24名をを対象に、「学校力改善の秘策～元気の出る学校づくりのために」について講話と演習
奈良市教育委員会主催の平成24年度奈良市30人学級指導法検討委員会に委員長として出席。（於：奈良市庁舎）	平成25年2月8日	奈良市30人学級指導法検討委員を対象に最終報告及び「30人学級」での期待できる効果についての集計結果検討などについて指導助言をした。
奈良文化女子短期大学幼小接続フォーラムの企画及び総括講演（於：奈良文化女子短期大学）	平成25年2月24日	幼小接続フォーラムの参加者（保育士・幼稚園教諭、小学校教諭及び管理職、教育委員会、教育関連企業等139名を対象に「幼児教育と小学校以降の育ちと学びをつなぐ」について講演
敦賀市研究指定学校　敦賀南小学校校内研修会の講師。（於：敦賀南小学校）	平成25年2月26日	敦賀市研究指定学校　敦賀南小学校教職員25名を対象に、「元気の出る学校づくり～家庭・学校・地域をつないで～」について講演
阪南市教頭会主催の小中学校教頭会の講師（於：阪南市商工会館）	平成25年2月28日	阪南市立小中学校の教頭等16名を対象に、「元気の出る学校づくり～学校評価を活かして～」について講演
社会福祉法人成光苑主催の７ヶ園合同研修会の講師（於：ホテル阪急エキスポパーク）	平成25年3月26日	社会福祉法人成光苑の理事、園長、保育者等120名を対象に「幼保小の連携」について講演
大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習会【必修】の講師（於：エル・おおさか（大阪府立労働センター)）	平成25年8月6日	大阪府私立幼稚園免許状更新講習者を対象に免許更新講習【必修】を担当。
京都府教育委員会主催の平成25年度「保育技術専門講座Ⅰ」及び「新規採用者研修『幼稚園教諭２』講座」の講師（於：京都府教育センター）	平成25年8月8日	教諭（幼稚園及び特別支援学校の幼稚部　国立・私立を含む）90名を対象に「幼児期の教育と小学校教育の円滑な接続」について、講演及び演習。
奈良市教育委員会主催の平成25年度第1回「30人学級」指導者実践交流会の講師（於：奈良市教育センター）	平成25年8月12日	奈良市内幼稚園教諭及び小学校教員等を対象に指導助言及び講演。
安堵町教育委員会主催の夏季職員研修の講師（於：安堵町立中学校会議室）	平成25年8月13日	安堵町中学校小学校教職員を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい連携・接続のあり方～」について講演。
丹波市教育委員会主催の丹波市小学校長会研修会の講師（於：丹波市山南住民センター）	平成25年8月27日	丹波市小学校校長25名を対象に「元気の出る学校づくり」について講演。
第2回高校と大学の連携フォーラム in 大阪のパネルディスカッション、コーディネータ　（於：内田洋行セミナールール）	平成25年8月31日	大阪府及び奈良県内高等学校関係者、教育関係者120名を対象に「日本の教師を育てる～教育三都物語～」について、パネルディスカッションにおいて、コーディネータ
愛知県教職員組合主催の第63次教育研究愛知研修会記念講演の講師。（於：愛知県産業労働センター（ウインクあいち)）	平成25年10月19日	市町村教育長・愛知県小中学校長役員・PTA代表・教員代表等450名を対象に「子どもたちの健やかな成長をめざして～力と夢を育てる地域ぐるみの学校づくり～」をテーマに記念講演。
鳥取県中部委員会主催の平成25年度鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士等の合同研修会の講師（於：倉吉未来中心センター）	平成25年10月30日	鳥取県中部地区幼稚園教員・保育士名を対象に、「元気の出る園づくり～園評価を活かして」をテーマに記念講演。
愛知県知多郡武豊町教育委員会主催の教育講演会の講師（於：武豊町立武豊中学校体育館）	平成25年11月22日	武豊町６小中学校教職員を対象に「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演
大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成25年11月29日	大阪市私立幼稚園連合会、幼稚園教諭を対象に「幼小連携」をテーマに講演
久米田看護専門学校主催の講師会の講師（於：社会医療法人　生長会　府中病院　セミナーホール）	平成25年11月30日	実習指導者、専任教員、非常勤講師他60名を対象として、「学生・教員・学校が輝く教育評価」をテーマに講演

尾張地区女性役職会主催の研修会の講師（於：名古屋国際会議場）	平成 25 年 12 月 15 日	尾張地区女性役職会研修会参加者 450 名を対象として、「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演
日本初等理科教育研究会堺大会発表校　堺市立浜寺石津小学校研修会の講師（於：堺市立浜寺石津小学校）	平成 26 年 2 月 7 日	日本初等理科教育研究会堺大会発表校　堺市立浜寺石津小学校教職員を対象に、第三者評価をふまえた総括会として、「未来を切り拓く子どもを育てる－日本初等理科教育研究会堺大会での成果と課題－」と題して講演
東海市立教員研修センターTEC21 主催の東海市立教員研修の講師（於：東海市立文化センター）	平成 26 年 2 月 7 日	東海市立小中学校教員 60 名を対象として、「元気の出る学校づくり」をテーマに講演。
奈良文化女子短期大学第 2 回幼小接続フォーラムの総括講演（於：奈良文化女子短期大学）	平成 26 年 3 月 2 日	保幼小教職員・教育関係者等 120 名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに総括講演。
鳥取県東部地区幼稚園等の教員及び保育士の合同研修会 講師（於：鳥取県立福祉人材研修センター）	平成 26 年 5 月 14 日	保幼小教職員・教育関係者等 200 名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。
大阪府立高等学校第 7 ブロックＰＴＡ連絡協議会の講師（於：大阪府立大塚高等学校）	平成 26 年 6 月 14 日	大阪府立高等学校第 7 ブロックＰＴＡ連絡協議会主催のＰＴＡ総会講演会において、保護者・校長・教頭・教員 150 名を対象に「高校生活をどう過ごさせるか」をテーマに講演
人間教育学会「学校間接続分科会」の講師（於：奈良学園大学）	平成 26 年 8 月 4 日	人間教育学会「学校間接続分科会」において、講演
三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会の講師（於：愛知県岡崎市民会館　甲山会館）	平成 26 年 8 月 5 日	三河教育研究会主催の総合的な学習部会夏季研修会において、小中教員 250 名を対象に「力と夢を育てる学校づくり・授業づくり～総合的な学習を通して」をテーマに講演。
阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会の講師（於：阿久比町勤労福祉センター・エスペランス丸山)）	平成 26 年 8 月 6 日	阿久比町小中学校主催の教職員夏季研修会「教育講演会」において、小中教職員 200 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演。
日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会の講師（於：ホテルモントレ　ラ・スール）	平成 26 年 8 月 21 日	日本私立小学校連合会主催の全国教員夏季研修会において、小学校教員 80 名を対象に「元気の出る学級づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して」をテーマに講演。
豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会の講師（於：アクア文化ホール）	平成 26 年 8 月 28 日	豊中市教育委員会主催の幼保小連絡協議会夏期研修会において、公私立小学校、幼稚園、公立・民間保育園、児童発達支援センター、認定こども園、所属長及び教職員 180 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～よりよい幼保小連携・接続のあり方～」をテーマに講演。
和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会の講師（於：和泉市立北池田小学校）	平成 26 年 8 月 29 日	和泉市立北池田小学校主催の夏季研修会において、教職員 30 名を対象に「元気な学校づくり～子どもと保護者と教師の育ち合いを通して～」をテーマに講演
寝屋川市教育委員会主催の研修会の講師（於：寝屋川市立北幼稚園）	平成 26 年 9 月 17 日	寝屋川市教育委員会主催の研修会において、小学校教員、公私立幼稚園教諭・保育士 100 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前後の接続を中心に～」をテーマに講演。
日本精神看護協会主催の看護実習指導者の資格取得の講師（於：日精看　京都研修センター）	平成 26 年 10 月 21・22 日	看護実習指導者の資格取得を目指すもの 80 名を対象に、教育方法研修会における講師

神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成 26 年 11 月 10 日	神戸市立幼稚園長会・私立幼稚園連盟主催の教育連絡会研修会において、公私立幼稚園教諭 150 名を対象に「元気の出る園づくり～子どもの育ちと学びをつなぐ～」をテーマに講演。
沖縄県庁主催の平成 26 年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会の講師（於：神戸市総合教育センター）	平成 26 年 11 月 17 日	沖縄県庁主催の平成 26 年度宮古地区幼稚園教育課程研究協議会において、公立、公私立幼稚園長、教諭・市村教育委員会指導主事、宮古島市教育研究所指導主事を対象に「元気の出る幼稚園づくり～学校評価を活かした保育改善を通して～」をテーマに講演。
大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成 26 年 12 月 3 日	大阪市私立幼稚園連盟主催の研修会において、私立幼稚園教諭 80 名を対象に「元気の出る園づくり～どもの育ちと学びをつな～」をテーマに講演。
大東市主催の保幼小研修会の講師（於：大東市民会館）	平成 27 年 1 月 27 日	大東市主催の保幼小研修会において保育士、幼稚園教諭、小学校教諭、園長、行政等 300 名対象として、「育ちと学びをつなぐ保幼小連携」をテーマに講演。
第 58 回大阪府私立幼稚園教育研究大会（免許更新講習）の講師（於：大阪国際会議場（グランキューブ大阪）	平成 27 年 3 月 26 日	大阪府私立幼稚園連盟主催の免許更新講習において、大阪府私立幼稚園・園長・教職員，近畿地区私立幼稚園教諭 100 名を対象に「幼稚園の信頼構築と改善～学校評価と幼小接続・連携をもとに～」について、講義を担当。
大阪市私立幼稚園連合会研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成 27 年 5 月 13 日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭 40 名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
羽衣学園中学・高等学校の父母教育懇談会の講師（於：羽衣学園中学・高等学校）	平成 27 年 5 月 16 日	羽衣学園中学・高等学校の父母教育懇談会において、保護者及び教職員 200 名を対象に「親として、中・高時代をどう過ごさせるか」をテーマに講演。
近畿ブロック都市福祉事務所長連絡協議会主催の第 9 回通常総会における講師（於：大和高田市さざんかホール）	平成 27 年 5 月 22 日	近畿ブロック都市福祉事務所長連絡協議会主催の第 9 回通常総会において、福祉事務所長 80 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ町づくり・人づくり～子ども・子育て新制度をふまえて」をテーマに講演。
神戸市総合教育センター主催の職務研修講座における講師（於：神戸市総合教育センター）	平成 27 年 6 月 12 日	神戸市総合教育センター主催の職務研修講座において、公立幼稚園主任 30 名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
日本私学教育研究所主催の平成 27 年度私立学校初任者研修小学校（西日本地区）の講師（於：大阪ガーデンパレス）	平成 27 年 7 月 30 日	日本私学教育研究所主催の平成 27 年度私立学校初任者研修小学校（西日本地区）において、小学校教員 40 名を対象に「子どもに力をつける教員の力量形成～教師力を学校力につなげる～」をテーマに講演。
古座川町保小中一貫教育研修会の講師（於：古座川町中央公民館）	平成 27 年 8 月 2 日	古座川町保小中一貫教育研修会において、保小中教職員・保護者 60 名を対象に「保幼接続・小中一貫」をテーマに講演。
姫路市教育委員会主催の園長研修の講師（於：姫路市立総合教育センター）	平成 27 年 8 月 4 日	姫路市教育委員会主催の園長研修において、幼稚園長 30 名を対象に「幼小接続」をテーマに講演。
宝塚市保幼小中特別支援学校合同研修会の講師（於：宝塚市立安倉小学校ランチルーム）	平成 27 年 8 月 6 日	宝塚市保幼小中特別支援学校合同研修会において、市立保育所長・園長・小中学校教職員・学校長 60 名を対象に、「子どもたちの育ちや学びをつなぐ保幼小連携の在り方」をテーマに講演。
教育セミナー関西 2015 の講師（於：京都ノートルダム女子大学）	平成 27 年 8 月 8 日	教育セミナー関西 2015 において、参加者 20 名を対象に「ワークショップ－子どもたちの育ちや学びをつなぐ」をテーマに講演。

堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年8月12日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム①」をテーマに講演
中丹地域保育所(園)・幼稚園・小学校連携推進研修会の講師（於：綾部市保健福祉センター）	平成27年8月17日	中丹地域保育所(園)・幼稚園・小学校連携推進研修会の講師
教員免許更新講習の講師（於：奈良学園大学幼小接続室）	平成27年8月19日	教員免許更新講習として、幼稚園教諭・小学校教諭30名を対象に「これからの生活科～子どもの育ちと学びの連続をふまえて～」をテーマに講師として全6時間の講習を担当。
岡山市教職員研修の講師（於：岡山ふれあいセンター）	平成27年8月24日	岡山市教職員研修こども園・保育園・幼稚園（年長担任もしくは連携担当者）、小学校（1年生担任もしくは生活科担当者）250名を対象に「子どもの「育ち」と「学び」をつなぐ保育，授業づくり～保幼小接続におけるこれからの言語活動～」をテーマに講演。
あま市小中学校教職員会研修会における講師（於：あま市美和文化会館）	平成27年8月25日	あま市小中学校教職員会研修会において、あま市小中学校教職員３５０名を対象に「力と夢を育てる学校づくり～学校間接続と学校評価を活かして」をテーマに講演。
第10回教師力向上研究会における講師（於：箕面自由学園小学校）	平成27年8月29日	第10回教師力向上研究会において、参加者30名を対象に「子どもの「育ち」と「学び」をつなぐ授業づくり」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年9月8日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム②」をテーマに講演
鳥取県教育委員会事務局鳥取県教育センター主催の【研修名】【幼児教育④】の講師（於：鳥取県教育センター）	平成27年9月15日	鳥取県教育委員会事務局　鳥取県教育センター主催の【研修名】【幼児教育④】信頼される魅力ある園づくり～園評価を活かして～」において、 鳥取県内の幼稚園長・保育所（園）長・認定こども園長の21名を対象として、「信頼される魅力ある園づくりをめざしテーマに講義・演習を担当。受講者園長20名及び聴講(教育委員会幼児教育担当6名)
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年10月21日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム③」をテーマに講演
平成27年度和歌山県那賀地方PTA指導者研修会講演会の講師（於：岩出市民俗資料館	平成27年11月14日	平成27年度和歌山県那賀地方PTA指導者研修会において、保護者及び教員65名を対象として、「親として、中学時代をどう過ごさせるか～これからのコミュニケーションと学びの力～」をテーマに講演。
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年11月25日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム④」をテーマに講演
堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修の講師（於：堺市産業振興センター）	平成27年12月9日	堺市教育委員会委託のさかい保育教諭・保育士研修において、認定こども園・保育士・民間保育園（所）50名を対象に、中級講座「幼児期から学童期へ接続カリキュラム⑤」をテーマに講演

看護実習指導者を目指すものを対象とした「教育方法研修会」①の講師（於：京都研修センター）	平成 27 年 12 月 16 日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者 38 名を対象に「授業の形態」をテーマとして、講義・演習
看護実習指導者を目指すものを対象とした「教育方法研修会」②の講師（於：京都研修センター）	平成 27 年 12 月 18 日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者 38 名を対象に「授業の方法」をテーマとして、講義・演習
宝塚市子ども未来部主催の所内研修会の講師（於：宝塚市立安倉中保育所ホール）	平成 28 年 1 月 13 日	宝塚市子ども未来部主催の所内研修会において、所長・職員・保育教諭 20 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小接続・連携」をテーマとして、講演。
大阪市私立幼稚園連合会研修会の講師（於：もと大阪市幼児教育センター）	平成 28 年 5 月 24 日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭 40 名を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。
三宅町幼児園園外研修会（於：奈良学園大学幼小接続室）	平成 28 年 6 月 1 日	三宅町主催の研修会において、27 名（町長・健康子ども部部長・職員５名、保護者 18 名、評議員１名、その他１名）を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。
愛知県一宮市西成東小学校 PTA 講演会（於：一宮市西成東小学校講堂）	平成 28 年 6 月 12 日	愛知県一宮市西成東小学校主催の PTA 講演会において、管理職及び保護者 50 名を対象として、「親として、小学時代をどう過ごさせるか～これからのコミュニケーションと学びの力～」をテーマに講演。
ゆめナビ講義ライブ（於：インテックス大阪）	平成 28 年 6 月 18 日	ゆめナビライブにおいて、高校生 80 名を対象として、「保育士も教師も！～育ちと学びをつなぐ教育のスペシャリストになる～」をテーマに講義。全国の大学 250 講義の中で 1 万人参加の高校生アンケートにより「もう一度聴きたい講義」の第一位に選出された。
鳥取県中部教育局園経営研修（於：伯耆しあわせの郷）	平成 28 年 6 月 28 日	鳥取県中部教育局主催の【幼児教育④】園経営研修において、鳥取県内の幼稚園長・保育所（園）長・認定こども園長、園経営にかかわる副園（所）長、部長等の５０名を対象として、「園を活性化するための組織マネジメントのあり方 ～信頼される特色ある園づくりをめざして～ 」をテーマに講義・演習。
精神科認定看護資格取得研修会（於：京都研修センター）	平成 28 年 7 月 22 日	日本精神看護協会主催の精神科認定看護資格取得を目指すもの 86 名対象とした「組織内における活動、教育論Ⅰ」において、「教育に必要な理論・教育プログラムの展開に必要な教育技法」をテーマに講義。
西宮市幼保小第 2 回「つながり」研修（於：西宮市立子育て総合センター）	平成 28 年 7 月 26 日	西宮市立子育て総合センター主催の第 2 回「つながり」研修（幼保小）において、保育所保育士、幼稚園・小学校・特別支援学校教員等 110 名を対象に「生活科を窓口としたッスタートカリキュラムとアプローチカリキュラム」と題して講演。
岸和田市「平成 28 年度　管理職（校長）研修（於：波切りホール）	平成 28 年 8 月 1 日	岸和田市教育委員会主催の「平成 28 年度　管理職（校長）研修」において、市内幼小中学校校長 40 名を対象に「力と夢を育てる元気な学校づくり～学校評価を活かして～」をテーマに講演。

きのくに共育コミュニティ研修会（於：和歌山ビッグ愛）	平成28年8月3日	和歌山県教育庁主催のきのくに共育コミュニティ研修会において、参加者１１００名（学校関係者８０名、社会教育関係者（行政・公民館関係者・コーディネ ーター等３０名）を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～学校・家庭・地域がつながる共育～」をテーマに講演。
福井県平28年度組織づくり研修講座（於：嶺南教育事務所）	平成28年9月7日	福井県教育庁主催の平成28年度組織づくり研修講座において、福井県嶺南地区小中学校・高等学校教職員20名を対象に、「力と夢を育てる学校づくり」をテーマに講演。
三郷町立幼稚園　新規採用教員研修及び園内研修会（於：三郷町立南畑幼稚園）	平成28年10月14日	三郷町教育委員会主催の「幼稚園新規採用教員研修」及び園内研修において、町教委職員及び園長並びに職員を対象に講演。
大阪府立高等学校第3ブロックＰＴＡ協議会研修会（於：大阪府立市岡高等学校）	平成28年11月8日	大阪府立高等学校第3ブロックＰＴＡ協議会研修会において、保護者、校長、教員等55名を対象に「親子のコミュニケーション」をテーマに、講演。
柏原市「市教研研修会」（於：柏原市立玉手幼稚園）	平成28年11月11日	柏原市教育委員会主催の「柏原市教育研究会幼稚園部会」において、公立私立幼稚園及び小学校教職員50名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼小接続カリキュラムのあり方～」について、講演。
日本精神看護協会「教育方法研修会」（於：京都研修センター）	平成28年12月21日	日本精神看護協会　京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者36名を対象に「授業の形態・方法」をテーマとして、講義・演習。
和歌山県社会教育関係職員等研修会（第２回）・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム（於：紀南文化会館小ホール）	平成29年1月16日	和歌山県生涯教育局主催の「平成28年度和歌山県社会教育関係職員等研修会（第2回）・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム」において、社会教育関係職員・家庭教育関係職員・福祉関係職員・学校関係教職員、子育て中の保護者、子育て支援活動をしている方、家庭教育支援チーム員等100名を対象としたパネルディスカッション「つながろう！家庭・学校・地域・行政・福祉切れ目のない支援のために」をテーマにコーディネータとして担当。
西宮市幼保小第３回「つながり」研修（於：西宮市立子育て総合センター）	平成29年1月20日	西宮市立子育て総合センター主催の第3回「つながり」研修（幼保小）において、保育所保育士、幼稚園・小学校・特別支援学校教員等88名を対象に『幼保小接続を考える「とまどいマトリクス」を通して』と題して講演及びワークショップを実施した。
鳥取県「幼保小連携推進研修会」（於：鳥取県福祉人材研修センター）	平成29年2月27日	鳥取県教育委員会主催の「幼保小連携推進研修会」において、幼保・認定子ども園棟等の管理職及び教諭、保育士、保育教諭、小学校、特別支援学校の管理職及び連携担当者、1年生の担任、市町村教育委員会担当者などの200名を対象に幼保小の円滑な接続をめざして ～幼児教育と小学校をつなぐ～をテーマに講演・演習、指導講評を担当
岡山市保育協議会研修（於：岡山市役所 保健福祉局勤労者福祉センター）	平成29年6月5日	岡山市保育協議会主催の研修会において、保育園・こども園の園長・保育士135名を対象として、子どもの育ちと学びをつなぐ ～就学前までに育てたい力、つけたい力～ 」をテーマに講演。
大阪市私立幼稚園連合会講演（於：）	平成29年6月20日	大阪市私立幼稚園連合会主催の研修会において、幼稚園教諭50 名を対象に「子どもの育ちや学びをつなぐ ～幼児教育と小学校以降の教育の連携・接続～」をテーマとして、講演。合わせて、事務局を通じて、本学の案内と共に、学生の実習の際の受入等についてもお願いした。

奈良県就学前教育振興プログラム策定会議（於：）	平成29年6月28日	奈良県教委が京都大学に委嘱した事業「就学前教育プログラム策定」委員として出席し、2017年度取り組みを検討した。とりわけ、保育・教育現場への評価規準や指標の示し方の提示など、新たな知見が情報交換された。
大和高田市まち・ひと・しごと創生会議（於：大和高田市役所）	平成29年7月4日	大和高田市主催の大和高田市まち・ひと・しごと創生会議において議長として、協議会を進行。議案の２「地方創生加速化交付金に係る事業の実施結果」及び議案の３「地方創生推進交付金に係る事業の実施状況」について検証。
平成29年度第1回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成29年7月18日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。
平成29年度第2回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成29年7月19日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。
西宮市教育委員会主催「つながり研修②」（於：西宮市職員会館）	平成29年7月24日	西宮市教育委員会主催の「つながり研修」において、幼稚園・保育所・小学校、特別支援教育の教職員100名を対象として、『育った力を学びの力につなぐⅠ「とまどいマトリクス」の活用を通して』①をテーマに講演。
大和高田市人権研究会　市人教　課題別研修会	平成29年7月29日	大和高田市人権教育研究会主催の平成２９年度大和高田市人権教育研究会　課題別研修会において、市人教会員（保幼こ小中高の教職員）120人を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ ～幼児期と小学校教育の連携・接続～ 」をテーマに講演。
平成29年度第3回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成29年7月31日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。
平成29年度保育士の専門性を高める連続研修会（於：TKP心斎橋駅前カンファレンスセンター）	平成29年8月1日	大阪府社会福祉協議会主催の平成29年度保育士の専門性を高める連続研修会において、府内の民間保育園・認定こども園に所属する施設長、リーダー、主任保育士に準ずる者200名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前までに育てたい力～ 」をテーマに講演。今後の実習のお願いもした。
平成29年度和歌山県訪問型家庭教育支援事業第１回協議会（於：和歌山県庁）	平成29年8月2日	議長として、協議会を進行した。平成29年度の方向性として、以下の２点に特化して協議した。①事業の成果や効果を図るための成果指標の効果的な活用について　②円滑な支援に向けたシステムの構築について。①について、成果目標のもと、経年比較を行い事業評価報告で指標を示し、成果の客観性を図るよう指示した。
教員免許更新講習（於：奈良学園大学）	平成29年8月9日	奈良教育大学委嘱の教員免許更新講習を担当した。奈良学園大学「幼小接続室」を会場として、現職教員小学校及び幼稚園教諭38名に対して、生活科及び幼小接続カリキュラムについての理解を深め、認定評価した。
平成29年度第4回大阪府教育行政評価審議会（於：大阪府庁）	平成29年8月30日	副会長として出席し、前年度教育行政について、府の点検及び評価結果の妥当性について審議した。後日、大阪府ＨＰにて公開。

平成 29 年度海南市公民館大会（於：海南市民会館）	平成 29 年 9 月 3 日	海南市教育委員会主催の「海南市公民館大会」において、海南市公民館館長教育関係 200 名を対象に「未来を拓く学びをつなぐ公民館～ 学校・家庭・地域がつながるためにできること～ 」をテーマに講演。和歌山県における本学の周知活動と共にお礼と次年度以降の実習等のお願いもした。
鳥取県倉吉市「幼保小連携推進研修会」（於：鳥取県立倉吉体育文化会館）	平成 29 年 9 月 5 日	倉吉市教育委員会主催の幼保合同研修会において、倉吉市内保育園・認定こども園の教職員、小学校教職員 50 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続～」をテーマに講演。鳥取県における本学の周知活動と共に、実習先の校長及び教員の参加もあり、お礼と次年度以降のお願いもした。
沖縄県宮古地区園長等運営管理協議会（於：宮古教育事務所）	平成 29 年 9 月 11 日	沖縄県宮古教育事務所主催の宮古地区園長等運営管理協議会において、宮古管内幼保教職員、小学校教職員・校長 120 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続～」をテーマに講演。沖縄県における本学の周知活動と共に、お礼と次年度以降の実習等のお願いもした。
奈良県就学前教育振興プログラム策定会議 実地訪問指導（於：田原本町立南幼稚園）	平成 29 年 9 月 19 日	H29 奈良県就学前教育調査研究事業に係る、訪問調査へ委員として出席。奈良県教育委員会企画部及び教育委員会幼小担当指導主事、京都大学大学院生、田原本南幼稚園園長、教員に評価について指導助言及び今後の評価シート作成に当たってのインタビューを進めた。
奈良県就学前教育振興プログラム策定会議（於：奈良県立教育研究所）	平成 29 年 9 月 29 日	第 2 回奈良県就学前教育振興研究会へ委員として出席。訪問指導の報告と他の実践に対する分析を行った。
和歌山県訪問型家庭支援事業第 2 回協議会（於：和歌山県庁）	平成 29 年 10 月 16 日	議長として、協議会を進行した。平成 29 年度の方向性として、以下の２点に特化して協議した。 ①事業の成果や効果を図るための成果指標の効果的な活用について　②円滑な支援に向けたシステムの構築について。①について、成果目標のもと、経年比較を行い事業評価報告で指標から、成果の客観性を確認した。
宇陀市平成 29 年度宇陀市教育センター研修「幼小連携・接続講座」（於：宇陀市役所）	平成 29 年 11 月 20 日	宇陀市教育委員会主催の「平成 29 年度宇陀市教育センター研修」幼小連携・接続の講座において、幼稚園・保育所・こども園小学校の教職員 40 名を対象に、「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児期と小学校の連携・接続」をテーマに講演。本学の周知活動と共に、実習のお礼と次年度以降のお願いもした。
和歌山県訪問型家庭支援事業第 3 回協議会（於：和歌山県庁）	平成 29 年 12 月 4 日	議長として、協議会を進行した。平成２９年度各市町の取組成果とシンポジウムの方向性の２点について協議した。 ①事業の成果や効果を図るための成果指標の確認 ②シンポジウムの企画と進行の原案検討
日本精神看護協会主催「教育方法研修会」（於：京都研修所）	平成 29 年 12 月 13 日	日本精神看護協会京都研修センター主催の「教育方法研修会」において、看護実習指導者の資格取得を目指す者 46 名を対象に「授業の形態・方法」をテーマとして、講義・演習を担当した。
大阪府私立学校審議会（於：大阪府庁）	平成 29 年 12 月 21 日	「大阪府私立学校審議会」の委員による平成 29 年度 12 月定例会に出席。議事は、8 号議案の申請概要を審議した。また、報告事項 2 点に基づいて意見交換された。

奈良市教職員研修講座（於：奈良市教育センター）	平成 29 年 12 月 26 日	奈良市教育センター主催の平成 29 年度教職員指導力向上研修講座において、受講者 103 名（小学校 43 各担当者、市立こども園 12、幼稚園 23 保育園 12、幼児教育アドバイザー等）を対象に「幼児教育と小学校教育の育ちと学び連続性」について、講演。また、教育実習及び学校園支援ボランティアのお礼と今後のご指導のお願いの場とした。
大阪府教育庁主催「第 3 回地域教育コーディネータ研修」（於：大阪府庁）	平成 30 年 1 月 24 日	大阪府教育庁主催の「第 3 回地域教育コーディネータ研修」において、「家庭教育支援員」「親学習リーダー」を含む地域教育コーディネータ・学校教職員・行政関係者 200 名を対象に「つながろう！家庭・学校・地域・行政・福祉～切れ目のない支援のために～」をテーマに講演した。また、教育実習及び学校園支援ボランティアのお礼と今後のご指導のお願いの場とした。
和歌山県訪問型家庭教育支援事業シンポジウム講演及び第 4 回協議会（於：紀南文化会館）	平成 30 年 1 月 29 日	和歌山県生涯教育局主催の「平成 29 年度和歌山県社会教育関係職員研究会・訪問型家庭教育支援事業シンポジウム」において、「家庭教育支援員」「親学習リーダー」を含む地域教育コーディネータ・学校教職員・行政関係者９０名を対象に「つながろう！家庭・福祉・教育!!ひろげよう！家庭教育支援!!切れ目のない支援に向けて～」をテーマに講演した。また、教育実習のお礼と今後のご指導のお願いの場とした。さらに、「第 4 回協議会」で座長として、議事進行と総括をした。
西宮市教育委員会主催「つながり研修②」（於：西宮市立芦之湯会館）	平成 30 年 2 月 1 日	西宮市教育委員会主催の「つながり研修②」において、・小学校 27 名、特別支援教育 5 名、幼稚園 32 名・保育所 46 名の教職員 105 名を対象として、『育った力を学びの力につなぐ「とまどいマトリクス」の活用を通して』Ⅱをテーマに講演及びワークショップを実施した。 実習校の教員の参加もあり、お礼と次年度のお願いもした。
奈良県教育委員会主催奈良県就学前教育センター「明日の保育をつくる人材育成フォーラム」（於：奈良県社会福祉総合センター大ホール）	平成 30 年 2 月 19 日	奈良県教育委員会主催の奈良県就学前教育センター「明日の保育をつくる人材育成フォーラム」において、公私立幼児教育関係教職員及び行政関係者 120 名を対象として、「奈良県就学前教育プログラムで育む子どもの姿」のパネルディスカッションにおけるコーディネーターを務めた。続いて「子どもの育ちと学びをつなぐ～幼児教育と小学校の連携・接続～」をテーマに講演した。 実習校の教員の参加もあり、お礼と次年度のお願いもした。
大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府庁）	平成 30 年 2 月 28 日	第 32 回大阪府人権施策推進審議会に委員として出席。会長代理に任命された。審議内容は、以下の 4 点であった。 (1) 会長及び会長代理の選任について、(２) 平成 28 (2016) 年度人権施策の状況について、(３) 性的マイノリティの人権問題についての理解増進に向けた取組について、(４) その他について審議した。
大阪府私立学校審議会（於：大阪府庁）	平成 30 年 3 月 19 日	「大阪府私立学校審議会」平成 30 年度 3 月定例会を開催し、委員として出席。議事は、21 議案の申請概要を審議し、報告事項 2 点に基づいて意見交換がなされた。

阪急学園教職員研修会（於：阪急学園）	平成30年3月26日	阪急学園教職員研修会において、幼稚園教諭、保育園保育士計８０名を対象として、「子どもの育ちと学びをつなぐ」をテーマに講演を実施した。8園の法人は、理事長を中心に強固な研修体制を推進されており、学内の幼保コースへの就職情報としても提供したい。
和歌山県訪問型家庭支援事業第1回協議会（於：和歌山県民文化会館）	平成30年6月26日	訪問型家庭支援事業第1回協議会に会長として出席。昨年度の課題整理をふまえて今年度の方向性を協議。年度内計画を策定した。
大和高田市まち・ひと・しごと創生会議（於：大和高田市役所）	平成30年7月3日	大和高田市長依頼の「大和高田市まち・ひと・しごと創生会議」において、会長として選出され、進行した。大和高田市まち・ひと・しごと創生戦略における実施状況報告と地方創生関連交付金にかかる実施状況の報告と意見交換をした。
日本精神看護協会「教育方法研修会」（於：京都研修センター）	平成30年7月4日	日本精神看護協会主催の研修会において、精神科認定看護師資格取得を目指す看護師60名を対象に「組織内における活動　教育論１」をテーマに講義演習を実施した。
岡山市保育協議会研修（於：岡山市役所 保健福祉局勤労者福祉センター）	平成30年7月10日	岡山市保育協議会主催の「保幼小連携研修会」において、岡山市公私立認可保育園・認定こども園保育士130姪を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ～就学前までに育てたい力、つけたい力～」をテーマに講演。
西宮市教育委員会主催「つながり研修」（於：青空幼稚園）	平成30年7月24日	西宮市教育委員会主催の「つながり」研修において、保育所保育士、幼稚園等・小学校・特別支援学校教員等100名を対象に『幼保小連携・接続のためになすべきこと、できること ～「とまどいマトリクス」の活用を通して～』をテーマに講演。
奈良市教頭講座②（於：奈良市教育センター）	平成30年7月25日	奈良市教育センター主催の「教頭研修講座②」において、小学校、中学校、高等学校の教頭68名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ校種間連携の在り方」をテーマに講演。
島本町夏季セミナー（於：島本町立第二小学校）	平成30年7月31日	大阪府島本町教育委員会主催の夏季セミナー健康教育分科会において、教職員50名を対象（２中学校、４小学校、２幼稚園、保）に保幼小連携推進協議会の活動報告とグループ討議の後に「保育所・幼稚園から小学校へ～よりよい接続のために～」について指導助言。
湯浅町PTA講演会（於：湯浅町立湯浅小学校）	平成30年9月28日	和歌山県湯浅町教育長及び学校長と共に、全学級を授業参観後、湯浅小学校において、教職員40名及び保護者85名をを対象に「PTA子育て講演会」講師を担当。近隣の県立耐久高等学校からの入学者もある本学の紹介も含めて「2030年に生きる力を輝かせる～育ちと学びの連続をふまえて～」をテーマに講演。
王寺町子育て「どんぐり」in奈良学園大学（於：奈良学園大学）	平成30年11月24日	王寺町子育て「どんぐり」in奈良学園大学において、保護者30名を対象に「変わる子育て、変わらない子育て-2030年の社会と子どもの未来を見すえて」をテーマに講演。
「就学前教育振興プログラム」研修会（於：天理市立嘉幡保育所）	平成30年12月10日	奈良県教育振興課主催の「就学前教育振興プログラム」研修会において、県内市町村指導主事、教育研究所長期研究員、保育所長・保育士等16名を対象に「幼小接続期における育ちと学びの連続 『ハイスコープ就学前教育プログラム』の活用と言葉の力」をテーマに参観後の講演。

大阪府人権教育審議会（於：國民会館）	平成 30 年 12 月 19 日	第 33 回大阪府人権施策推進審議会に副会長として出席。(1) 大阪府人権推進計画の点検について、（２）行政文書における性別記載の点検・見直しについて審議した。
訪問型家庭支援事業シンポジウム（於：和歌山県勤労福祉会館プラザホール）	平成 31 年 1 月 21 日	和歌山県教育長主催の「訪問型家庭支援事業シンポジウム」において、家庭教育支援関係者・社会教育関係職員・学校関係職員・福祉関係職員・子育てサークル関係者・SSW/SSC/等の参加者 160 名を対象にコーディネーター及び講師として「つながろう家庭・福祉・教育！ひろげよう 家庭教育支援！！切れ目のない支援に向けて～地域で家庭をささえるために～」をテーマに講演。
訪問型家庭支援事業第 3 回協議会（於：和歌山県勤労福祉会館プラザホール）	平成 31 年 1 月 21 日	訪問型家庭支援事業第 1 回協議会に会長として出席。課題整理をふまえて実施項目及びシンポジウム評価を策定した。
西宮市教育委員会主催「つながり研修②」（於：西宮市職員会館）	平成 31 年 1 月 28 日	西宮市教育委員会主催の第２回「つながり」研修において、市内小学校教諭・幼稚園教諭等 110 名を対象に「子どもの育ちと学びをつなぐ言葉の力を育むために ～2030 年の社会と子どもの未来を見すえて～」をテーマに講演。
第 34 回 大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府男女共同参画センター）	平成 31 年 2 月 15 日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第 34 回大阪府人権施策推進審議会」に副会長として出席。(1) ヘイトスピーチの解消及び性的マイノリティに対する差別の解消に向けた条例整備について（諮問）審議した。
第 35 回 大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府男女共同参画センター）	平成 31 年 3 月 22 日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第 35 回大阪府人権施策推進審議会」に副会長として出席。(1)大阪府人権尊重の社会づくり条例における府民及び事業者の責務について（論点整理）(2)人種又は民族を理由とする不当な差別的言動の解消に向けた規定について（論点整理）(3)性的マイノリティに関する当事者及び有識者の主な意見について(4)その他報告事項。審議した。
第 36 回 大阪府人権施策推進審議会（於：大阪府男女共同参画センター）	平成 31 年 4 月 26 日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第 36 回大阪府人権施策推進審議会」に副会長として出席。(1)大阪府人権尊重の社会づくり条例における府民及び事業者の責務について（論点整理）(2)人種又は民族を理由とする不当な差別的言動の解消に向けた規定について（論点整理）(3)性的マイノリティに関する当事者及び有識者の主な意見について(4)その他報告事項を審議した。
第 37 回 大阪府人権施策推進審議会（於：プリムローズ大阪）	令和元年 5 月 24 日	大阪府府民文化部人権局長より通知のあった「第 37 回大阪府人権施策推進審議会」に副会長として出席。審議内容は、次の 3 点であった。 (1) ヘイトスピーチの解消に向けた規定について (2)答申のとりまとめについて(3)その他報告事項。
西宮市第１回　専門課題研修（於：西宮市総合教育センター）	令和元年 5 月 28 日	西宮市教育委員会主催の「西宮市第１回　専門課題研修」において、保育所・幼稚園・認定こども園・小学校・特別支援学校教職員 約 60 名を対象に、「幼小接続期における「主体的・対話的で深い学び」のために～「さんぽ」から「町探検」を事例に～」をテーマに講演した。

奈良県立西の京高校模擬授業（於：奈良県立西の京高等学校）	令和元年 6 月 10 日	「2030 年のあなたが保育・教育に関わる仕事で輝くために～自ら意欲スイッチを押す魔法のしかけとは？～」をテーマに、高校 2 年生 40 名を対象に講義。あと 10 年で「消える職業」「なくなる仕事」（「雇用の未来」オックスフォード大学マイケル・A・オズボーン博士）の論文をもとに、これからの時代を生きるために「学ぶ意欲のしくみ」を知り、意欲スイッチを押す魔法のしかけについて考え、自らの意欲向上と共に、「保育や教育」のスペシャリストになるストーリーについて、論議させた。
奈良県王寺町立王寺幼稚園園内研修会（於：王寺町立王寺幼稚園）	令和元年 6 月 18 日	王寺町立王寺幼稚園園内研修会において、園長及び幼稚園教諭 10 名を対象に、午前の公開保育を通した指導助言及び「小学校を見通した幼児期の学びの在り方と『幼児期の終わりまでに育ってほしい姿』について」をテーマに講演した。
奈良市小中学校校長研修会（於：奈良市保健所・教育総合センター）	令和元年 6 月 24 日	奈良市教育センター主催の奈良市教職員兼推移講座「校長のリーダーシップ研修」において、奈良市立学校校長 62 名を対象に「校種間連携の今後のあり方～子どもの育ちと学びの連続をふまえて～」をテーマに講演。
鳥取県東部教育局主催「子育て・家庭教育支援講座」（於：鳥取県東部庁舎）	令和元年 7 月 1 日	鳥取県東部教育局主催の「子育て・家庭支援講座（第２回）」において、小学校・幼保職員・社会教育関係者 40 名を対象に「教育と福祉の連携・協働体制構築に向けて ～切れ目のない支援を地域で家庭を支えるために～ 」をテーマに講演。
奈良県国公立幼稚園・子ども園研究協議会（於：平和地区公民館）	令和元年 8 月 5 日	奈良県国公立幼稚園・子ども園研究協議会主催の研修会において、園長 121 名を対象に「園長のリーダーシップの在り方 ～就学前後をつなぐマネジメントを通して～」をテーマに講演。
和歌山県湯浅町保幼小研修会（於：湯浅町役場）	令和元年 8 月 21 日	湯浅町教育委員会主催の保幼小研修会において、保育所長、小学校関係職員、教育委員会職員を対象に「湯浅町の未来を創る～こどもの育ちと学びをつなぐために～ 」をテーマに講演。
橋本市訪問型家庭支援員研修会（於：橋本市教育文化会館）	令和元年 9 月 4 日	和歌山県橋本市教育委員会主催の家庭教育支援員研修会において、ヘスティアチーム 30 名を対象に「就学時健診の際に保護者対象のグループワークの在り方について」をテーマに講演
令和元年度和歌山県訪問型家庭支援事業第１回協議会（於：和歌山県民文化会館）	令和元年 9 月 30 日	和歌山県生涯学習局主催の内閣府指定「訪問型家庭支援事業」第一回協議会に座長として出席した。和歌山県内４市町の取組の成果と課題をふまえ、県内の実施拡大と質向上に効果のある今年度シンポジウムの在り方について協議を深めた。
京都府立南陽高校模擬授業（於：京都府立南陽高校）	令和元年 10 月 24 日	「2030 年のあなたが保育・教育に関わる仕事で輝くために～自ら意欲スイッチを押す魔法のしかけとは？～」をテーマに、高校 2 年生 40 名を対象に講義。あと 10 年で「消える職業」「なくなる仕事」（「雇用の未来」オックスフォード大学マイケル・A・オズボーン博士）の論文をもとに、これからの時代を生きるために「学ぶ意欲のしくみ」を知り、意欲スイッチを押す魔法のしかけについて考え、自らの意欲向上と共に、「保育や教育」のスペシャリストになるストーリーについて、論議させた。

令和元年度和歌山県訪問型家庭支援事業第２回協議会(於：和歌山県民文化会館)	令和元年 11 月 25 日	和歌山県生涯学習局主催の内閣府指定「訪問型家庭支援事業」第二回協議会に座長として出席した。和歌山県内４市町の取組の成果と課題をふまえ、成果指標の検討及び県内の実施拡大と質向上に効果のある今年度シンポジウムの在り方について、コンテンツや役割等もふまえ協議を深めた。
大和高田市第一回こども・子育て会議（於：大和高田市役所)	令和元年 12 月 26 日	大和高田市こども・子育て会議の会長として選出され、KPI に基づいて議論を進めた。
第3回和歌山県訪問型家庭支援事業シンポジウム及び協議会（於：紀南文化ホール)	令和２年１月 27 日	和歌山県障害教育局主催の訪問型家庭支援事業シンポジウムにおいて、参加者約 70 名（家庭教育支援関係者、園・学校教育関係職員、ＰＴＡ、福祉関係職員、社会教育関係職員、ＳＳＷ）を対象にコーディネーターを努めた。また、第３回協議会において、座長を務め進行し、今年度の総括をした。
横浜市　桐蔭学園幼稚部・キッズフォーレ保育所	令和２年２月 17 日・18 日	登園から視察の上、指導助言。できているところ、問題点を指摘。今後の研修改善に生かすためのハイスコープ評価及び園評価について資料提供した。
第２回大和高田市こども・子育て会議（於：大和高田市総合福祉会館（ゆうゆうセンター))	令和２年３月 3 日	第２回大和高田市子ども子育て会議の議長として、第二期子ども・子育て支援事業計画（素案）について、委員の意見を取りまとめた。
５　その他		
・国立教育政策研究所教育課程研究センター関係指定校事業企画委員	平成21年5月～平成22年7月まで	総合的学習と生活科の関連を中心に、指定校に対して、指導助言をした。
・大阪府私立学校審議会委員	平成22年7月～平成 29 年３月まで	大阪府内私立学校にかかる審議事項を検討した。
・大阪府子ども施策審議会委員	平成25年6月～平成28年3月まで	大阪府子ども施策にかかる審議事項を会長代理として検討した。
・大阪府教育行政評価審議委員	平成26年6月～平成28年3月まで	大阪府教育施策にかかる審議事項を委員として検討した。
・大和高田市ひとまちしごと創生会議委員長	平成27年6月～令和元年 9 月まで	大和高田市地方創世にかかる意見交換会において委員長として検討した。
・三郷町産官学連携常任委員	平成28年6月～現在に至る	三郷町産官学連携会議において常任委員として検討した。
・三宅町評議員	平成28年6月～平成29年3月まで	三宅町評議員として検討した。
・和歌山県訪問型家庭教育支援事業委員長	平成28年6月～現在に至る	文部科学省指定事業「和歌山県家庭教育支援事業」委員として検討した。
・奈良県就学前教育プログラム策定委員	平成28年6月～平成30年3月まで	奈良県就学前教育プログラム策定委員として、検討した。
・大和高田市子ども・子育て会議委員長	平成29年7月～令和元年９月	第１期大和高田市子ども・子育てにかかる意見交換会において委員長として検討した。
・大阪府人権施策推進審議会委員	平成 29 年 10 月～令和４年１月まで	大阪府人権施策推進審議会会長代理として、検討した。
・大和高田市子ども・子育て会議委員長	令和元年 10 月～現在に至る	第２期大和高田市子ども・子育てにかかる意見交換会において委員長として検討した。

職務上の実績に関する事項		
事　項	年月日	概　　要
1　資格、免許 (1)　小学校教諭２級普通免許状	昭和50年3月	大阪府教育委員会　昭４９小２普第１６０１号
(2)　小学校教諭１級普通免許状	平成3年11月	大阪府教育委員会　平３小１普第５０７号
(3)　修士（学術）	平成16年3月	大阪教育大学大学院　第３５０６号 論文題目「学校教育自己診断」を活かした学校改善の研究
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)　堺市立南八下小学校　教頭	平成９年４月～平成12年3月	教頭として、校内研究推進及び学校の活性化並びに地域との連携に取り組んだ。教頭会研修委員として「学校のリスクマネジメント」にかかる研究を堺市教頭研修会において発表した。
(2) 堺市立美木多小学校　教頭	平成12年4月～平成13年3月	教頭として、生活科・「総合的な学習の時間」にかかる堺市教育委員会指定事業を推進させた。 堺市立美木多中学校区の「公立・私立、保育園・幼稚園・小学校連絡協議会」において、保幼小の研究推進に取り組んだ。上記２点の取組を「地域と学校の特色を生かした実践とその評価」(2001文溪堂) P.18～P.30 で論じた。また、教員の実践例 P.39～P.46、P.63～P.70、P.79～P.86 について、監修指導した。（再掲）
(3)大阪府教育センター　学校経営研究室主任指導主事、企画室主任指導主事	平成13年4月～平成17年1月	主任指導主事として、４年間、全国教育研究所連盟、近畿地区教育研究所連盟、大阪府教育研究所連盟、近畿所長会の事務局長として、研究会の企画及び研究推進に努めた。また、大阪府内の新任校長研修会・新任教頭研修会、指導主事研修会等の企画運営及び講師の任にあたった。「大阪府教育センターフォーラム」の企画及び分科会の講師・コーディネータを担当した。大阪教育大学との連携において、スクールリーダーフォーラムの講師、シンポジスト等を担当した。 研究主担として、３年間、「大阪府学校教育自己診断」の調査研究を推進し、「学校改善への道筋」をまとめた。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １．キャリア教育読本「コドモタチへの想い」	共著	平成22年11月	奈良学園キャリア開発センター	就業力向上のために、仕事内容ややりがい等の具体的事例について示した。学生は、保育・教育の今を知り、教育現場の実際や課題を検討することが可能となった。幼児教育学を活かせる保育士・幼稚園教諭以外の分野（主にビジネス）について一定の認知・理解を示した。 A5版　全119頁 編者：奈良文化女子短期大学キャリア教育センター

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共著者：石田秀朗、善野八千子、益田美保、島野恭子、田平友子、河井佐紀、杉井涼香、遠山健、李初子、加藤優里、松村友紀、廣岡由香里、福田寿美代、羽野麻里子、福本千春 本人担当部分：第1章保育者を目指すあなたへ～「子どもの笑顔をつくるスペシャリストになる」とは？　6～9頁を単著。 保育者を目指すための要件について2点について整理した。子どもを理解するための日常的な生活から子どもへの関心を持つ方策、子どもに関連する番組、ニュース、書籍や絵本をとした方法及び実際に、子どもに関わる施設でボランティア活動を通して、観察・体験について述べた。また、笑顔でいるための自己コントロールについて、時間の管理、健康管理、経済管理から説いた。少子化の進行、育児サービスの多様化に伴って生じている幼稚園と保育所の抱える問題、幼稚園と保育所の一元化の動き、「保幼小連携」への取り組みにも言及した。
２.子どもの育ちと学びをつなぐ～保幼小連携WGの取組を通して～	共著	平成23年3月	奈良学園キャリア開発センター	奈良文化女子短期大学が組織する幼小連携WGの合同研究会の取組について、代表としてまとめた。組織開発の経緯、参加者の振り返りを通して、汎用性のある接続カリキュラム着手の意義及び活用のあり方を示した。 A5版　全185頁 共著者：　善野八千子、前田洋一、荒井恵子、梅田真寿美、南尚美、阪本さゆり、中田章子、熊井祥子、前田嘉余子、大山夏生 本人担当部分：第1章pp. 5-18, 第3章pp. 33-37, 第6章pp. 80-85, 第7章pp. 86-90, 第8章pp. 92-101, 第9章pp. 102-116, 第11章pp. 156-162, 第13章pp. 167-175を単著。 幼小連携の必要性及び進まない理由について言及し、現状について整理した。また、その解決策としての本学のシンクタンクとしての役割として本研究会を設置した経緯について発信した。育ちと学びをつなぐためには、幼児教育と小学校以降の教育に関わる専門家として互恵性と継続性、発展性の重要性について論じた。幼小接続カリキュラムを作成するための手順とその実際について示した。入学前の3週間試案については、３つのカテゴリーと5領域を整理して、小学校教員にも理解が進むように示した。さらに、生活科の適応指導及びスタートカリキュラムを視点とした入学後の4週間の日案を検討した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３.幼児期と児童期の接続カリキュラムの開発～子どもの育ちと学びをつなぐ～	共著	平成 23 年 4 月	MJ-Book	幼児期と児童期の接続カリキュラムについて、その課題を明らかにした。、特に、就学後の生活科を中心とした汎用性のあるカリキュラムを開発。 子どもの育ちと学びの「連続性・一貫性」のためには、どのような組織開発が必要とされ、実現可能か、またいつまでにだれが何をどのようにしていくことが重要化について解説。 A5 版　全 136 頁 共著者：善野八千子、前田洋一 本人担当部分：第 1 章必要なことは、「連続性・一貫性」5～17 頁、第 3 章接続カリキュラム作成のための組織開発 31～34 頁、第 5 章～10 章入学後接続カリキュラムの実践 61～128 頁を単著。 現職の教員と保育者をつなぎ、資質向上にも寄与する研究成果をまとめた。具体的なカリキュラム作成の手順として、生活科を中心とした小学校入学後の目標設定や活動内容について汎用性の実際のカリキュラム作成のプロセスについてもフォーマットを提案した。適応指導を中心に入学前の３週間 18 日分の日案を提示し、入学後はじめての７つの課題を検討した。学習自立・生活自立・精神自立の 3 つの自立に分類し、生活科のの自立の基礎をはぐくむ方法と内容に整理した。さらに学校園として接続カリキュラムに取り組むための組織開発についても示した。
４．教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望 教育フォーラム 48 国際教育の課題と展望	共著	平成 23 年 8 月	金子書房	日本の学校教育の喫緊の課題である国際教育・グローバル教育は。子どもたちの生活自体は国際色豊かなものとなり、学校や地域でも積極的な取り組みが行われている。しかし、具体的に教育においてどのように国際性をとらえ、育てていけばよいのかは理解が深まっていないのが実情に言及した。 A5 版　全 176 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、見上一幸、松田智子、松田公平、鎌田首治朗、前田洋一、川﨑由花、古川治、善野八千子、筒井愛知、山本美紀、加藤明、河上隆一、湯峯裕、汐海治美、渡部久美子 本人担当部分：第９章「幼小接続期における国際教育」81～90 頁をを単著。 幼小接続期における国際教育について、自らの国の伝統・文化に根ざした自己の確立のためには何が必要であるかを論じた。学習指導要領改訂では「幼稚園教育要領、小・中学校学習指導要領等の改訂のポイント」の教育内容の主な改善事項の一つとして「伝統や文化に関する教育の充実」が掲げられたことから、新しい学習指導要領のめざすものの具体例を示した。また、幼小接続期における国際教育の必要性とその体験を経験化する方法を示した。 教育的な願いとねらいをはっきりと持ち、それを実現する活動を準備し、子ども一人ひとりの国際体験・異文化体験を教育的な意味で経験化するために様々な視点から考察、問題提起した。

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概　　要
５.学校管理職の経営課題５　学校をエンパワーメントする評価	共著	平成 23 年 10 月	ぎょうせい	学校評価を経営改善に生かす視点を探った。学校経営のビジョン、カリキュラム経営、組織マネジメントから学校評価に至るまで、学校経営に必要な重要トピックスを詳解。 A5 版　全頁数 194 頁 編者：天笠茂、大脇康弘 共著者大脇康弘、加藤崇英、相澤良明、善野八千子、小島宏、八尾坂修、根津朋美、白井達夫、猪股亮文、京都市教育委員会 本人担当部分：第４章「マネジメントのツールとしての学校評価」56～76 頁を単著。 学校評価のこれまでの経緯を解説し、課題と改善のためのシステムを示した。第三者評価とは何か、また第三者評価を活かして学校のポジティブプロパガンダをいかに創るかをフロチャートで提示した。学校をエンパワーする評価のあり方、マネジメントツールとしての学校評価のうち、自己評価の手法、学校関係者評価、第三者評価を中心に整理した。加えて、学力を育てる学習評価と授業評価及び教師力を育てる教員評価、カリキュラム・アセスメントについて論考した。
６.子どもの育ちと学びをつなぐⅡ～幼小連携WGの取組を通して～	共著	平成 24 年 3 月	奈良学園キャリア開発センター	奈良文化女子短期大学幼小連携WG合同研究会の平成 23 年度の取組をまとめた。幼小接続カリキュラム（就学前）を開発を試みるとともに、入学前の 3 週間を再検討した。 全頁数 185 頁 共著者：善野八千子、前田洋一、筒井通子、阪本さゆり、南尚美、前田嘉余子、大山夏生、定豊子、田村豊、荒井恵子、角田道代、 本人担当部分：第 1 章「幼小連携 WG 合同研究会の取り組みと意義」6-11 頁、第 4 章「とまどい」を解決する幼小接続カリキュラム 52-82 頁、を単著。 幼小連携 WG 合同研究会の取り組みと意義について、これまで生活科移行期において、カリキュラム作成の経験からの方法論と組織開発につながる発展性を価値づけた。また、指導者が困っている入学直後の状況からでなく、学習者の側からみた就学後の子どものとまどい要因 6 点を提示した。 学びの基礎力とのマトリクス作成により、ワークショップで活用し、幼児教育と小学校教育者による合同の教育課程の理解及び検討の方策についての具体的な道筋を示した。
７．教育フォーラム 50 ＜やる気＞を引き出す･＜やる気＞を育てる	共著	平成 24 年 8 月	金子書房	教師が子どもの＜やる気＞を引き出し、育てるための方策を、教科のかかわり、教材・校内研究、学習塾の取り組みなども参考に考察、提案した。 A5 版　全頁数 179 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤　明、松田智子、金山憲正、善野八千子、勝見健史、久田　孝、錦織　彰、住本克彦、野田健司、中田正浩、前田洋一、中村　哲、瀧明知惠子、浅田　匡 本人担当部分：第 9 章「子どもの＜やる気＞をつなぐ幼小接続」34～46 頁を単著。 子どもの＜やる気＞をつなぐこと、育ちと学びをつなぐことの共通の問題から論述した。意欲・モチベーション、＜やる気＞に関するデータ及び諸説を考察・整理した。幼小接続に必要な３要素及び脳が＜やる気＞を出してくれる４つの条件などの知見を示した。幼少期の子どもの意欲については、その正体と環境について、幼小接続期における＜やる気＞を引き出す実践事例について、考察した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８.子どもの育ちと学びをつなぐー幼小連携のあり方と接続カリキュラムの作成ー	共著	平成 24 年 9 月	MJ-Book	幼児期と児童期の接続カリキュラムについて、生活科移行期から取り組んできた経緯を考察した。就学前後を接続する汎用性のあるカリキュラムを改善する視点を明確にした。 A5 版　全 131 頁 共著者：善野八千子、前田洋一、定豊子、阪本さゆり、南尚美、大山夏生、前田嘉余子、田村豊 本人担当部分：第 1 章幼小接続のためになすべきこと、できること 8-17 頁、第 4 章「とまどい」を解決する幼小接続カリキュラム 58-87 頁、第 5 章育った力を学ぶ力へ 88-99 頁を単著。 教員の資質向上にも寄与する実践研究について、考察した。「とまどいマトリクス」を開発し、研修で活用できるように試みた。ワークショップ研修の方法や活用についても示した。また、「一日体験入学の」活動事例について、紹介し今後の発展課題を明示した。
９.夢と力を育てる新しい学校づくり	共著	平成 25 年 4 月	教育出版	未来に向かう力をつけることのできる学校経営の在り方の提案として、新たな知見と実例をふまえ、未来志向型の学校づくりの提案。 A5 版　全 136 頁 共著者：善野八千子、前田洋一 本人担当部分：第 1 章忙しい木こりの物語(1-4 頁)、第 2 章こんな学校が日本の教育を変える(5－14 頁)、第 7 章「一石五鳥プラン」と「仕事のＡＢＣ」（84－106 頁)、第 8 章幼稚園における学校評価(107－116 頁)、第 9 章さらなる外部評価アンケートの改善（117－136 頁)を単著。 教員の資質向上が子どもの学校文化を創る力になることを論考した。学校訪問記や評価を改善に生かした事例等のフィールドリサーチや分析から考察。学校づくりの発信転換の必要性を説き、学校教育関係者、学生等と共に熟考し、行動変容を可能にする知見を示した。
１０．教育フォーラム 54『各教科等の学習を支える言語活動』	共著	平成 26 年 8 月	金子書房	言葉の力を育てるため単元目標構造図や年間指導計画の活用などを考えながら、各教科特有の言語活動について、教師がどのような点に留意した指導を行えばよいのか、具体的な実践を踏まえて考察した。 A5 版　全頁数 140 頁 編者：人間教育研究協議会 共著者：梶田叡一、加藤　明、金澤孝夫、櫻本明美、金山憲正、中田正浩、川俣徹、松田智子、善野八千子、蔵あすか、オチャンテ村井ロサメルセデス 本人担当部分：第 10 章「幼小接続におけるこれからの言語活動」98～109 頁を単著。 幼小接続期の対話と姿勢について、育ちと学びをつなぐ課題から論述した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１１．教科力　生活	共著	平成 28 年 2 月	玉川大学出版	学習指導要領平成 20 年に対応。教員の力量形成において重要な生活科の内容構成の理解を目的として、生活科のための実践力の自学自習テキスト。 A5 版　全頁数 182 頁 編者：寺本潔 共著者：寺本潔、綿貫健治、森山賢一、神永典郎、善野八千子、 本人担当部分：第 11 章「スタートカリキュラムの重要性と指導内容」114～124 頁、第 12 章「交流を通した人間関係作りの指導内容」125～135 頁、第 14 章「自己成長に気付かせる内容」146～156 頁、おわりに「生活科創設の内容や最新の教育界の動向」176～182 頁を単著。
１２．教育フォーラム 59『対話的な学び-アクティブ・ラーニングの１つのキーポイント-』	共著	平成 29 年 2 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版　全頁数 176 頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、湯峯裕、鎌田首治朗、伊崎一夫、金山憲正、菅井啓之、北俊夫、赤堀博之、善野八千子、牧田秀昭、五百住満、中村豊、石森広美、オチャンテ村井ロサメルセデス、井上信子 本人担当部分：「幼小接続期の対話的学びの力」91～101 頁を単著。 幼児期から小学校接続の対話的学びの力として、一次的ことばと二次的ことばの接点に立つ教師の役割から考察した。
１３．教育フォーラム 60『深い学びのために-アクティブ・ラーニングの目指すもの-』	共著	平成 29 年 8 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版　全頁数 176 頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、古川治、鎌田首治朗、伊崎一夫、湯峰裕、大畑健美、菅井啓之、金山憲正、石森広美、善野八千子、瀧明智恵子、岡村季光、松井典夫 本人担当部分：「幼小接続期の深い学びー地域と未来につなぐ生活科の事例からー」103～113 頁を単著。 幼児期から小学校接続の「深い学びの力」について論考し、生活科事例から考察した。
１４．教育フォーラム 61『各学習領域における基本的な見方・考え方ーアクティブ・ラーニングで鍛えられるもの-』	共著	平成 30 年 2 月	金子書房	主体的・対話的な深い学び、すなわちアクティブ・ラーニングを実現するには実際の指導場面で役立つ工夫、具体的な提案をした。 A5 版　全頁数 147 頁 編者：日本人間教育学会 共著者：梶田叡一、鎌田首治朗、湯峰裕、金山憲正、角屋重樹、中村哲、越智貢、大畑昌己、善野八千子、高木悠哉、杉浦健、渡邉規矩郎 本人担当部分：「小学校低学年における＜基本的な見方・考え方＞」91～101 頁を単著。 低学年における見方考え方について、生活科を基軸に授業改善に散り組むための考察をした。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） １.幼小接続期におけるカリキュラムの開発	単著	平成22年12月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第41号p.49- p.67	幼稚園と小学校両者による教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、両者の教職員の連携活動を推進する組織開発のあり方を探った。そして、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラムの作成」を通して、構成要素と作成の手だてについて明らかにしつつ、教育課程の理解を入り口として、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、幼小連携を推進するために必要な組織のあり方や方向性等の知見を示した。
２.幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅱ	共著	平成23年11月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第42号p.49～p.67	幼児教育と小学校以降の教育に関わる双方による教育課程の理解を中心にした「育ちと学びの連続性」及び子どもの成長保障と学力保障の両全を目的として、幼小両者の教職員の連携活動を推進するカリキュラム開発及び組織開発のあり方を探った継続研究をまとめた。今回は、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラム作成」の中で、とりわけ就学後の就学直後の課題を探り、就学前のカリキュラム改善のためのフォーマットを作成し、活用方法を提示した。 本人担当部分：就学直後の課題を探り、就学前のカリキュラム改善のためのフォーマットを作成した。このことにより、幼小連携を一層推進し、生活科の授業改善につなげる方策を示した。 共著者：善野八千子、前田洋一
３.幼稚園の学校評価における外部アンケート項目作成の試み （査読付）	共著	平成24年7月	日本学校教育学会「学校教育研究」 NO.27p.93～p.105	幼稚園における保護者の満足度に関する研究を3カ年にわたり継続し、幼稚園の経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。質問項目の作成を目的とする調査A、質問項目の精選を目的とする調査Bから、信頼の決定要因を究明した。また、幼稚園の経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。10園を現地訪問調査し、改善事例から分析し、その活用の有効性について検討した。作成された簡便な質問紙は経営状況を弁別しうることを検証した。 本人担当部分：質問項目の作成を目的とする調査A、質問項目の精選を目的とする調査Bを実施し、信頼の決定要因を検討した。また、対象幼稚園全園を訪問指導し、経営実態から適切に把握できる評価項目を策定した。10園を現地訪問調査し、改善事例から分析し、その活用の有効性について検討した。 共著者：前田洋一、善野八千子

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４.幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅲ～入学後の子どもの戸惑いに着目して～	単著	平成 24 年 11 月	奈良文化女子短期大学研究紀要 第 43 号 p. 49～p. 67	「育ちと学びの連続性」及び子どもの成長保障と学力保障の両全を目的として、幼小両者の教職員の連携活動を推進するカリキュラム開発及び組織開発のあり方を探った継続研究である。指導者が困っている状況からではなく、学習者である子どもが「入学後に戸惑っている状況」に着目し、とりわけ就学直後の課題を「とまどい」の視点から調査した。それらを解決する「生活科」カリキュラム開発または改善の手がかりとなるツールを提示した。とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成及び改善の手立てとして、研修会でも活用できることを示唆した。
５．「人間教育」の典型 ― 幼小連携・接続教育の価値 ― （査読付）	単著	平成 26 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol. 1 p. 67～p. 78	教育の連携性と教育の一貫性をふまえ、幼小連携・接続,の価値について述べた。また、これまでの研究の知見から幼小接続期におけるカリキュラム開発の方法について提示した。さらに、幼児期の教育と小学校における,生活科との連続性について論述した生活科成長単元において,学習者の自己成長への気づきを促す過程を分析し,活動の活性化及び指導者の関わり方の必然性について,考察を行った。
６．人間教育に資する「これからの幼小接続教育」の展開(1) －自己成長への気づきを促す生活科の実現に向けて－（査読付）	単著	平成 27 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol. 2 p. 93～p. 105	「これからの幼小接続の基軸となる生活科教育」の工夫改善となる３つの要件を導出した。さらに,これら３つの要件。生活科成長単元において,学習者の自己成長への気づきを促す過程を分析し,活動の活性化及び指導者の関わり方の必然性について,考察を行った。これら３つの要件を充足する実践事例「生活科成長単元第２学年自分たんけん」の分析による検証を行い,その有効性について解明した。
７．人間教育に資する「幼小接続期カリキュラム」のあり方－「とまどいマトリクス」を活用した接続カリキュラムの改善－（査読付）	単著	平成 28 年 3 月	日本人間教育学会 学会誌 Vol. 3 p. 39～p. 50	就学前後の子どものとまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成できることを示唆した。また、それらを活かした「一日体験学習」の実践幼稚園の訪問調査結果から４段階の変容を分析した。 とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」改善の手立てとして、活用できることを幼児教育の実践事例を分析し検証した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８．人間教育に資する「幼小接続期カリキュラム」のあり方（２）－カリキュラム･マネジメントから考察する｢とまどいマトリクス｣の活用－（査読付）	単著	平成 29 年 3 月	日本人間教育学会学会誌 Vol.4 p.43～p.56	就学前後の「子どもの育ちと学びをつなぐ」ためにスタートカリキュラムを作成するために必要なこと、またそのカリキュラム・マネジメントのあり方についてを示唆した。３つの実践小学校に関わった管理職の聴き取り調査結果から４段階の変容を分析した。 とまどいマトリクス活用によって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」改善の手立てとして、活用できることを小学校入門期の教育実践事例を分析し検証した。
９．生き抜く力を育む人間教育−小学校における教科指導と現代的課題に着目して−(査読付)	共著	平成 29 年 12 月	人間教育学研究第 1 号 p.39～p.54	生き抜く力を育む人間教育をめざして、「特別の教科道徳」における「夢や希望を育む」指導と「算数科」を軸にした「学力不振による不登校の未然防止」の指導を検討した。指導案例を提示することで、改善の方向性を示した。特別の教科道徳の中で、自己の生き方を考える時間の保障をすることや算数科指導の中に、生徒指導の３機能を生かした指導の改善などの視点を明確にした。 共著者：善野八千子・金山昴資重安勝星・内藤翔一・早坂虹穂・松田彩加
１０．「生き抜く力を育む人間教育(2)− 小学校における学習指導と非認知能力に関する現代的課題に着目して」（査読付）	共著	平成 31 年３月	人間教育学研究第　2 号 p.25～p.46	未来を築く子供たちに生き抜く力を育む人間教育をめざして、「生活科」及び「特別活動」における「幼小接続期の給食指導」と「家庭と生活」を軸にした指導法ついて検討した。具体的に指導案例を提示することで、改善の方向性を示した。また、それらの学校教育の取組について、社会に開かれた教育課程の一役を担う学校ＨＰについても検討した。 共著者：善野八千子・中菜摘・中西貴大・織谷百江・村田一輝
１１.教育行政における幼小接続期への政策形成についての考察	単著	令和元年９月	奈良学園大学紀要第 11 集 p.99～p.112	教育行政における幼児教育と小学校教育の接続期の政策動向について、1989 年の生活科の創設以降から今日に至る幼小接続に関するカリキュラム（以下、幼小接続カリキュラム）をめぐる教育政策の概要を時系列に沿って整理した。第１に「生きる力」における「学習の基盤」をめざす段階、第２に「小１プロブレム」の予防・解消をめざす段階、第３に安全で安心な学校生活をスタートさせる段階、第４に学びに向かう子どもを育てる段階に分類して検討した。
１２．生き抜く力を育む人間教育(4) −小学校における教科等横断的指導に着目して−（査読付）	共著	令和２年３月	人間教育学研究第　3 号 p.43～p.56	生き抜く力を育む人間教育における「資質・能力を育む」ため、小学校の学習を教科等横断的な視点で成立させる課題解決をめざした。特別の教科道徳と国語科、生活科、社会科、総合的な学習の時間の教科等横断的指導について考察した。具体的に既存の指導案例を検討して改善の方向性を示した。 共著者：善野八千子・関本和也・谷野萌・森本大貴

著書,学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概　　要
（その他） 「研究報告書」 １.奈良県就学前教育研究調査事業最終報告書	共著	平成 29 年 3 月	京都大学地域連携教育研究推進ユニット	奈良県委嘱研究（奈良県就学前教育研究調査事業）A４版　全 175 頁研究代表　高見茂 本人担当部分：1.小学校との連携と親関与「就学前教育振興のために−小学校との連携推進及び家庭教育の支援を促進する取り組みに焦点を当てて−」2〜21 頁を単著。
２.奈良県就学前教育研究調査事業最終報告書	共著	平成 29 年 12 月	京都大学地域連携教育研究推進ユニット	奈良県委嘱研究（奈良県就学前教育研究調査事業）A４版　全 159 頁研究代表　高見茂 本人担当部分：3.プログラム実践状況の分析「就学前教育振興のために−参観訪問園及び他１園の実施の現状を踏まえた分析と評価・総体について−」104〜116 頁を単著。
「収録集」 １．平成 25 年度研究・研修収録第 44 号	単著	平成 26 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 25 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携「子供の育ちと学びをつなぐ」69〜72 頁を単著。
２．平成 26 年度研究・研修収録第 45 号	単著	平成 27 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 26 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携(2)「子供の育ちと学びをつなぐこれからの言語活動」85〜89 頁を単著。
３．平成 27 年度研究・研修収録第 46 号	単著	平成 28 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 27 年度研究・研修収録「専門教養研修」として、執筆。 本人担当部分：幼小連携「幼小接続カリキュラムの作成と改善＜とまどいマトリクス＞を活用して」78〜80 頁を単著。
４．平成 28 年度研究・研修収録第 47 号	単著	平成 29 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 28 年度研究・研修収録「テーマ研修」として、執筆。 本人担当部分：子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期の対話的学びの力 35〜38 頁を単著。
５・平成 29 年度研究・研修収録第 48 号	単著	平成 30 年 3 月	大阪市私立幼稚園連合会	平成 29 年度研究・研修収録「テーマ研修」として、執筆。 本人担当部分：子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期の「深い学び」21〜25 頁を単著。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「事典」 1.改訂　実践教育評価事典	共著	平成 22 年 8 月	文溪堂	新学習指導要領と新指導要録を基本据えた教育評価の基礎知識的な用語を解説。 A4 版　全 264 頁 共著者：梶田叡一、加藤明、長谷浩也、吉村希至、土田圭子、石井雅幸、上之園公子、尾崎友美、松田智子、鎌田首治朗、勝見建史、金沢緑、有本昌弘、木下博義、古川治、猿田祐嗣、小倉康、立田慶裕、土田圭子、二瓶弘行、田中博史、松浦拓也、寺本貴啓、善野八千子、角谷重樹、米田豊、北川達夫、小楠徹、内田和寿、林義樹、菅千索、森敏昭、川崎弘 本人担当部分：「学校評価」188－189 頁を単著。 学校評価について、学校評価のガイドラインの改訂から進め方まで解説。
「依頼原稿」 1.子どもの育ちと学びをつなぐ保幼小連携Ｉ接続カリキュラム作成のポイント	単著	平成 22 年 11 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 40 巻第 43 号	幼稚園教育と小学校「生活科」教育についてを、「遊びから学び」へという視点から検討を加えた。１点目に、発達に即した「育てたい姿」と「内容」を設定すること。２点目に、子どもにとっての環境の変化や違いを知ること。３点目には、子どもにとっての新しい環境の変化や違いを「時間・空間・仲間」で整理することを読み解いた。特に、就学前５歳児２月末から、入学後１年生４月・５月第１週までの「接続期７週間モデル案」のうちの、小学校入学後第１週の生活科スタートカリキュラムの一例から、その重要性を示した。本人担当部分：36～ 38 頁を単著。
2.子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム①	単著	平成 24 年 5 月	日本教育綜合研究所週刊教育 PRO 第 42 巻第 11 号	異校種の保育・教育現場をつなぎながら、子どもの育ちをつなぐ研究と実践の往還を実現していく装置としての組織開発について、示唆した。これまで、2009 年から着手した継続研究を整理し、課題と展望を示した。 また、幼児教育と小学校教育をつなぐ「幼小接続カリキュラム（就学前）（就学後）」のカリキュラムを作成するプロセスを示唆。 本人担当部分：32～37 頁を単著。
3.子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム④	単著	平成 24 年 7 月	日本教育綜合研究所週刊教育 PRO 第 42 巻第 15 号	新幼稚園教育要領の基本理念である、「生きる力」の基礎をはぐくむことから、幼児教育終了段階で身に付けたい「知・徳・体」、学びの基礎力の基本事項を解説。幼小接続カリキュラム（就学前）の作成にあたり、目標を示した。さらに、生活科につながるカリキュラム作成のための視点を「時間、空間、人間、もの、技能、心情」の 6 項目であると示し、縦軸に、「知・徳・体」、横軸に、「時間、空間、人間、もの、技能、心情」のマトリクスを考案。また、「学校ごっこ」と就学後の子どもの体験と遊びの重要性についてまとめた。 本人担当部分：33～37 頁を単著。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４.子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム⑤	単著	平成 24 年 7 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 42 巻第 16 号	入学前の「一日体験入学から、学校ごっこへ」について、幼児教育と生活科の接続について、考察した。入学前後のとまどい要因は、6 点あることを示した。時間・空間・人間・もののちがいについて、小学校入学時点との相違点について、解説。「より意義のある一日体験入学」の活動について、幼児教育のねらいと小学校生活科のねらいを併記して、目標に対応した活動としての評価を検討した。活動名「もうすぐいちねんせい」、単元名「あたらしい１年生をしょうたいしよう」に関連して提示した。 本人担当部分：34～37 頁を単著。
5. 子どもの育ちと学びをつなぐ～明日からできる幼小接続カリキュラム⑥	単著	平成 24 年 8 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 42 巻第 17 号	筆者の提案を元に「幼小接続カリキュラム」を実施した八尾市立東山本幼稚園からの聞き取りと記録を通して、実践例を示し考察した。また、学校園の組織として連携を継続するために幼小接続は、管理職の問題意識や役割が非常に大きいことから、保育所から小学校に連携を申し出る手続きは、子どもの入学先や可能な相手校を選択して、主体的に働き掛けていくことの必要性を提言した。公私立の園と小学校の交流限定などの制約実態や子どもの交流の前に、まず教職員の交流から始める方策を示した。 本人担当部分：34～37 頁を単著。
6.「にこやかなハイタッチでつなぐ」	単著	平成 25 年 3 月	全国公立小・中学校女性校長会本部だより	第 63 回全国公立小・中学校女性校長会全国研究協議大会（奈良県開催）における女性管理職のマネジメントのあり方を検討し、内閣府が行った『男女共同参画社会に関する世論調査』（平成 24 年）等のデータなどを根拠として、ロールモデルとしての人材育成のあり方を提示した。 本人担当部分：１頁（表紙）を担当。
7. 生活科における「深い学び」を実現するための理論と授業づくりのポイント	単著	平成 30 年 1 月	学校教育 NO.1205 広島大学付属小学校　学校教育研究会	新学習指導要領の改訂（平成 29 年 3 月告示）の特徴である、「学びの質に着目した授業改善の取組の活性化を目指した構造の変更」から論じた。「深い学び」を実現するための生活科の課題と深い学びのための連続発展する４観点(1)幼児教育とつなぐ(2)次の活動につなぐ(3)家庭・地域とつなぐ(4)中学年の各教科へつなぐをふまえて、実践事例を元に論考した。 本人担当部分：14～21 頁を担当。
8. 未来を創る子どもに染み込む「価値」	単著	平成 30 年 8 月	阪急学園教育広報誌８月号	未来を創る子どもに染み込む「価値」について、1 点目は全国弁論大会の体験から、2 点目は、体験的学習の価値「親子でクッキング」の中で、「料理は科学」「料理は美学」「料理は五感力」「料理は段取り力」という講話の例から、3 点目は本学の学生育成の核について論じた。 本人担当部分：１頁（表紙）を担当。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.学びをつなぐ①「育ちのバトン貯金箱」をスケルトンで創る	単著	平成 31 年 3 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 49 巻第 7 号	本人担当部分：「育ちのバトン貯金箱」をスケルトンで創る 35 頁を担当。
10.学びをつなぐ②だれもが「ふるさと大使」になるために	単著	令和元年 5 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 49 巻第 11 号	本人担当部分：だれもが「ふるさと大使」になるために 35 頁を担当。
11.学びをつなぐ③「人生 100 年時代の国際人を育てるために」	単著	令和元年 7 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 49 巻第 15 号	本人担当部分：「人生 100 年時代の国際人を育てるために」35 頁を担当。
12.学びをつなぐ④「自立し生活を豊かにする資質・能力を育てる」	単著	令和元年 10 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 49 巻第 22 号	本人担当部分：「自立し生活を豊かにする資質・能力を育てる」35 頁を担当。
13.学びをつなぐ⑤「ボールをつなぐラグビーと学びをつなぐ非認知能力」	単著	令和元年 12 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 49 巻第 27 号	本人担当部分：「ボールをつなぐラグビーと学びをつなぐ非認知能力」35 頁を担当。
14.学びをつなぐ⑥「評価のカベをとる」～幼小接続期の非認知能力～	単著	令和 2 年 2 月	日本教育綜合研究所 週刊教育 PRO 第 50 巻第 3 号	本人担当部分：「評価のカベをとる」～幼小接続期の非認知能力～21 頁を担当。
「学会発表」 1.幼稚園における学校評価項目作成の試み	共同	平成 22 年 6 月	日本教育経営学会 第 50 回大会 （於:静岡大学）	幼稚園における学校評価項目作成を目的とし、現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保育士養成校学生に対して調査した。項目を分類し、さらに、望ましい 88 の評価項目を提示した。幼稚園満足度と評価項目カテゴリーとの関係を因子分析し、検証した。評価項目作成のアンケート調査研究及び考察した。 本人担当部分：幼稚園における学校評価項目作成を目的とした現職小学校・幼稚園教諭及び教員・保育士養成校学生に対して実施した調査方法について、受益者側から項目を作成する知見を述べ、評価項目作成のアンケート調査結果を考察から得た結果について、詳述した。 共同発表者：善野八千子、前田洋一

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２.子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発	個人	平成 22 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 19 回大会 (於:立命館小学校)	幼小による教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラムの作成」を試みた。ポスターセッション型実践交流を推進した取り組みの問題点を整理した結果、校区の特性によって異なる取り組みを解決するためのカリキュラム作成の必要性を説いた。その構成要素と作成の手だてについて明らかにし、教職員の理解と子ども理解を同時にすすめながら、幼小連携を推進するための組織開発を提案した。
３.グローバル社会時代の学校づくり～学校評価を基軸とした教育情報の可視化とアーカイブ化～	個人	平成 22 年 9 月	日本グローバル教育学会第 18 回大会 (於:鳴門教育大学)	シンポジウムにおいて、グローバル社会時代の学校づくり～学校評価を基軸とした教育情報の可視化とアーカイブ化～と題して、１．グローバル社会時代の子どもに育成する資質能力　２．経験知をふまえた理論や具体的提案　３．学校づくりの基軸となる学校評価～教育情報の可視化とアーカイブ化～　４．グローバル社会に時代に対応した学校づくりと教師の力量形成について、提案し示唆した。とりわけ、教師の力量形成における知見として、学校評価の参画者として学校への愛着と誇りを持った教員の育成について提案した。
４.子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発～「幼小接続７週間モデル案（第２次)」作成を通して～	個人	平成 23 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 20 回大会（於:岐阜聖徳大学)	幼小連携にかかる子ども観・評価観の違いを整理した。また、教育課程の理解を中心に推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的とするとして、「汎用性のある幼小接続期のカリキュラム幼小接続７週間モデル案（第２次)」作成した。作成の手順及びこれまでのカリキュラム改善の視点について知見を述べた。具体的には、就学後の 18 日案、第 1 週～5 週までの生活科を基軸とした実践事例を提示した。適応指導のみの考えでない幼児教育の育ちをつなぐための新たなスタートカリキュラムの考えを提案した。
５.子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続期におけるカリキュラムの開発Ⅲ～「入学後の子どものとまどい」に着目して～	個人	平成 24 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 21 回大会（於:徳島大学)	子どもの育ちと学びの連続保証を目的として、「幼小接続カリキュラム（就学前)」を作成。指導者が困っている状況からではなく、学習者である子どもが「入学後に戸惑っている状況」に着目し、「とまどい」マトリクスを提示した。とまどい要因を幼児教育と小学校教育の双方で解決することによって、「子どもの育ちと学びをつなぐカリキュラム」を作成及び改善手立てとして、幼児教育と小学校教育に関わる教員の混合グループワークショップにおいて、研修会でも活用できることを示唆した。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6．子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続カリキュラムの開発（Ⅳ）～「入学後の子どもの戸惑い」を見通した一日体験入学～	個人	平成 25 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 22 回大会（於：神戸大学附属小学校・附属明石小学校）	継続研究の４年目において、「とまどいマトリクス」を活用した「幼小接続カリキュラム」の作成プロセス及びその一例として「一日体験入学」の活動案を提示した。とりわけ、「とまどいマトリクス」活用の有効性を実践検証した。
７．「子どもの育ちと学びをつなぐ―幼小中の接続－」	個人	平成 26 年 8 月	日本人間教育学会「学校間接続分科会」（於:奈良学園大学）	幼・小・中学校にかかる子ども観・評価観の違いを整理した。また、教育課程の理解を中心に接続を推進することの意義及び子どもの育ちと学びの連続保証を目的に考察し、「汎用性」のある接続期のカリキュラムモデル作成の手順及びこれまでのカリキュラム改善の視点について、新たな知見を述べた。
8．子どもの育ちと学びをつなぐ幼小接続カリキュラムの開発（Ⅴ）～「とまどいマトリクス」を活用した「一日体験入学」の改善	共同	平成 28 年 6 月	日本生活科・総合的学習教育学会第 24 回大会（於:宮城学院女子大学）	継続研究の５年目において、「とまどいマトリクス」を活用した「幼小接続カリキュラム」を活用した合同研修事例を提示し「一日体験入学」の改善案を考察した。とりわけ、岐阜県山県市立小学校における「とまどいマトリクス」活用の有効性を実践検証した。
９.幼小接続期における育ちと学びの連続「ハイスコープ就学前教育プログラム」を手がかりに	共同	平成 30 年 12 月	日本人間教育学会第 4 回大会（於:桃山学院教育大学）	幼小接続期の非認知能力の向上のため「ハイスコープ就学前教育プログラム」を導入し発達レベルの評価基準や幼児の能力を高める指導戦略に生かした。また、教育視点の可視化と共に、幼児教育における基準や評価について教員の保育観の交流を進めた。評価スケール作成により、取組の成果と課題のエビデンスをもって卒園児の保護者及び小学校に伝える契機となった。

教　育　研　究　業　績　書

令和　2　年　3　月　31　日

氏名　　高岡　昌子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
保育心理学　発達心理学　教育心理学 幼児教育・保育	幼児教育・保育　心理　発達　支援　環境

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
（1）相愛大学において小学校教諭養成課程と保育者養成課程の教員としての実践（模擬保育・教育実践訓練・グループディスカッション、視覚教材の活用とフィードバック、小テストの実施など）	平成 20 年 4 月～平成 26 年 3 月	相愛大学で約 8 年間にわたり（「教育実習（幼稚園）」「教育実習の指導（幼稚園）」「保育原理」「保育内容 C（人間関係）」「インターンシップ実習 A」「子ども学基礎演習」「卒業研究」など）で指導した。特に「教育実習（幼稚園）」では、実習準備段階から幼稚園採用試験にかかわる指導まで行ってきた。授業の中では、指導案の指導から、模擬保育の指導も行った。学生の模擬保育をビデオに撮ってフィードバックし、アクティブラーニングする中で、学生自身が省察し自ら気づくことができるように指導した。
（2）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部において保育者養成課程の教員としての実践（模擬保育・教育実践訓練・グループディスカッション、視覚教材の活用、小テストの実施、学内・学外での実践体験、独自のリフレクションシートの活用など）	平成 26 年 4 月～平成 31 年 3 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部で約 5 年間にわたり「保育原理」「保育内容演習（人間関係）」「保育の心理Ⅰ」「乳幼児心理学」「子ども学ゼミ」などで、保育者養成課程の教員としての実践教育（模擬保育、学内・学外での実践体験、独自のリフレクションシートの活用等々）を行い、学生の意欲向上と望ましい保育者養成をめざして指導することで、ほぼ全員の就職が決まり、多くの卒業生を保育者として送りだしてきた。また実習担当として、「実習の手引き～保育所・幼稚園・施設～」を作成し、円滑な実習指導が実現するように工夫した。
（3）奈良学園大学において保育者養成課程の教員としての実践（模擬保育・学内・学外での実践体験、独自のリフレクションシートの活用など）	平成 31 年 4 月～現在	奈良学園大学で「保育原理」「保育の心理学」「子どもと人間関係」「保育実践演習」「教職実践演習」「教育実習事前事後指導（幼）」「保育所実習指導Ⅰ」「人間教育学ゼミナール」などで、保育者養成課程の教員として実践教育を行っている。
2　作成した教科書，教材 「子育ち・子育て支援学　ー保護者支援と子育て支援の理論と実際ー」保育出版社	平成23年4月	「子育て支援とは何か」について説明して、保育者による支援の在り方等について解説した本である。B5 判 174 頁［編著者］寺見陽子［著者］高岡昌子・他 47 名（担当：第 6 章　第 1 節　「子どもの発達障害の理解」（pp:80～81）子どもの発達障害や適切な関わり方について説明している。）
保育の心理学Ⅰ」一藝社	平成24年4月	保育者になるために必要な心理学の基礎的な内容について解説した学問書である。A5 判 216 頁［監修］林邦雄・谷田貝公昭［編著者］西方毅・谷口明子［著者］高岡昌子・他 13 名（担当：第 15 章 地域の中での子ども支援（pp:193～207）　地域の中での子ども支援について述べた。）

「実習の手引き～保育所・幼稚園・施設～」奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行	平成 27 年 3 月	B5 判 254 頁［本人単独担当部分］第 3 章「幼稚園実習」（P. 128～186）
「教育心理学―保育・学校現場をよりよくするために―」嵯峨野書院	平成 28 年 4 月	A5 判 137 頁［本人単独担当部分］第 7 章 適応支援と心理アセスメント　1．適応のしくみ　2．心理アセスメント　3．不適応支援と心理療法（P. 60～68）
「子どもと保育者でつくる人間関係　―「わたし」から「わたしたち」へ―」保育出版社	平成 29 年 4 月	B5 判 180 頁［本人単独担当部分］第 11 章 1 節「協力して「わたしたち」でやりとげようとする 6 歳児」（P. 133～136）第 12 章 3 節　「小学校への円滑な接続とは？」（P. 152～155）
「コンパクト版_保育内容シリーズ『保育の心理学Ⅰ』」一藝社	平成 30 年 3 月	A5 判 145 頁［本人単独担当部分］　第 15 章 地域社会における子ども支援（P. 121～P. 128）　1．家庭・地域との連携　2．子育て支援　3．これからの子ども支援
「コンパクト版_保育内容シリーズ『保育の心理学Ⅱ』」一藝社	平成 30 年 3 月	A5 判 145 頁［本人単独担当部分］第８章 遊びの中における学び（P. 65～P. 72）　1．自発的な遊びに基づいた保育 2．遊びと発達 3．現代の子どもの遊びをめぐる問題
「生活事例からはじめる―保育内容-人間関係」青踏社	平成 30 年 3 月	B5 判 214 頁［本人単独担当部分］第６章「やさしさを育てる保育」（P. 77～84）
「保育の心理学」一藝社	令和 2 年 3 月	A5 判［本人単独担当部分］第 14 章「乳幼児期の学びの過程と特性」
「子ども家庭支援の心理学」一藝社	令和 2 年 3 月	A5 判［本人単独担当部分］　第 6 章 子育てを取り巻く社会的状況
「子どもの理解と援助」一藝社	令和 2 年 3 月	A5 判［本人単独担当部分］第８章 気になる子ども理解と援助
3　教育上の能力に関する大学等の評価 （1）相愛大学における授業評価	平成 20 年4月～平成 26 年3月	授業評価結果は、毎年すべての授業評価を行った授業において常に学内平均以上であった。「2013 年度《学生による授業評価アンケート》結果報告書」においても、「この授業に満足している」という項目で、ほぼ 100 パーセントの学生が満足していた。
（2）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における授業評価	平成26 年4月～現在に至る	授業評価結果は、毎年すべての授業評価を行った授業において常に学内平均以上であった。平成 28 年度後期の授業評価においては、4 点満点中、2C クラスで 3.81、2D クラスで 3.91 と全体的に高く、レベル評価は、「知識・理解」、「技能・表現」、「思考・判断」、「関心・意欲・態度」のすべてにおいて目標値のレベル２以上の達成ができたとする学生は 100％であった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		

5　その他		
（1）相愛中学校新入生フォローアップ講演	平成24年3月	来年度中学一年生の保護者80名程を対象にして新入生フォローアップ講演『思春期のこどもと向き合う』を相愛中学校講堂にて行った。
（2）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部公開講座	平成26年9月	地域の幼児と親を対象にして『英語で遊ぼう』と題して、公開講座を行った。
（3）幼稚園、小学校、特別支援学校（幼稚部・小学部）の教職員対象の奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育講座	平成27年 9月	地域の幼稚園、小学校、特別支援学校（幼稚部・小学部）の教職員を対象にして、『保育者・教育者のネガティブな言動について考えよう！～子どもの各発達の時期によって～』という題目で公開講座を行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）　小学校教諭1種免許	平成4年3月	平三小一め第238号(京都府教育委員会)
2）　中学校教諭1種免許（国語）	平成4年3月	平三中一め第569号（京都府教育委員会）
3）　修士（文学）	平成7年3月	神戸大学大学院文学研究科社会学（心理学）専攻（修士課程）修了（修士（文学）修第467号「印象形成過程の分析」）
4）　博士（学術）	平成13年3月	奈良女子大学大学院人間文化研究科比較文化学専攻（博士課程）修了（博士（学術）博課第135号「人物情報の記憶における認知的要因の研究」）
5）　学校心理士	平成16年1月	第72362号（日本学校心理士会　学校心理士認定運営機構）
6）　臨床発達心理士	平成16年4月	第00865号（日本臨床発達心理士会　臨床発達心理士認定運営機構）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 なし		

４　その他		
１）研究費 平成 15 年度文部科学省私立大学教育研究高度化推進特別補助学術研究推進特別経費	平成15年4月～平成16年3月	「地域の子育て環境づくりに向けての保育者養成における可能性と将来展望に関する学際的基礎研究」（前迫ゆり・智原江美・高岡昌子・石田慎二・中田奈月・福田公教）
２）研究費 平成 20 年度科学研究費助成事業特別推進研究基盤研究（Ｂ）20330149	平成20年4月～平成23年3月	「運動視に関する大脳視覚野の構造と機能の研究」（蘆田宏・上崎麻衣子・北岡明佳・村上郁也・久方瑠美・栗木一郎・ANDREW T, Smith・MATT, Wall・ANGELIKA, Lingnau・KRISH, Singh（助成金額合計 17,160,000 円））の連携研究者 高岡昌子
３）研究費 平成 24 年度科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）挑戦的萌芽研究	平成24年4月～平成28年3月	「子どもにおける３次元映像視聴に関する研究」（総額 2,990,000 円）
４）研究費 平成 24 年度相愛大学学内研究申請個人割研究費	平成24年4月～平成24年3月	「子どもの発達を支える研究について」（230,000 円）
５）研究費 平成 29 年度奈良学園大学奈良文化女子短期大学部学内共同研究申請共同研究費	平成29年4月～平成30年3月	「高等教育機関における女性のキャリア継続に必要な課題―保育者養成校としての短期大学の役割―」（600,000 円）（高岡昌子・林悠子・高橋千香子・岩本健一）
５）研究費 平成 30 年度奈良学園大学奈良文化女子短期大学部学内共同研究申請共同研究費	平成30年4月～平成31年3月	「高等教育機関における保育者としてのキャリア継続に関わる課題―保育者養成校としての役割―」(200,000 円）（高岡昌子・林悠子・高橋千香子・岩本健一）
６）相愛大学における学内業務	平成18年4月～平成25年3月	実習担当，ホームページ委員，人権委員，教務委員，全学教務委員，人事委員，美化委員顧問，クラス担任業務
７）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における学内業務	平成26年4月～平成31年3月	入試広報委員(～平成 28 年度)，募集強化学内対策委員（オープンキャンパス委員）(～平成 28 年度)，学生就職委員会(平成 29 年度～)カリキュラム委員，研究推進委員，紀要編集委員，IR 委員，実習担当，クラス AGH 担任

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1)「新・保育原理 －すばらしき保育の世界へ－」［第2版］	共著	平成24年4月	株式会社みらい	第2版：B5判239頁 ［本人単独担当部分］第10章　保育者に求められる子育て家庭支援（P.171～183）
2)「新・保育原理 －すばらしき保育の世界へ－」［第3版］	共著	平成28年4月	株式会社みらい	第3版：B5判245頁 ［本人単独担当部分］第10章　保育者に求められる子育て家庭支援（P.166～P.178）
3)「新・保育原理 －すばらしき保育の世界へ－」［第4版］	共著	平成30年4月	株式会社みらい	第4版：B5判239頁 ［本人単独担当部分］第9章　保育者に求められる子育て支援（P.178～P.193）
4)「子育ち・子育て支援学 －保護者支援と子育て支援の理論と実際－」	共著	平成23年4月	保育出版社	B5判174頁［本人単独担当部分］　第6章　第1節　子どもの発達障害の理解（P.80～P.81）
5)「保育の心理学Ⅰ」	共著	平成24年4月	一藝社	A5判216頁［本人単独担当部分］　第15章 地域の中での子ども支援（P.193～P.207）　1.家庭･地域との連携　　2.子育て支援　　3．これからの子ども支援
6)「保育の心理学Ⅱ」	共著	平成24年4月	一藝社	A5判208頁［本人単独担当部分］第9章 子どもの遊びと学び、現代社会の子どもの遊び、その特性と問題　（P.113～P.124）　1．子どもの遊びと、保育的意義 2．現代社会特有の子どもの遊び 3．現代の子どもの遊びとその問題、保育における対応
7)「実習の手引き～保育所・幼稚園・施設～」	共著	平成27年3月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行	B5判254頁［本人単独担当部分］第3章「幼稚園実習」（P.128～186）
8)「実習の手引き～保育所・幼稚園・施設～」	共著	平成27年3月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部発行	B5判254頁［本人単独担当部分］第3章「幼稚園実習」（P.128～186）
9)「教育心理学　―保育・学校現場をよりよくするために―」	共著	平成28年4月	嵯峨野書院	A5判137頁［本人単独担当部分］第7章適応支援と心理アセスメント　1．適応のしくみ　2．心理アセスメント　3．不適応支援と心理療法（P.60～68）
10)「子どもと保育者でつくる人間関係　―「わたし」から「わたしたち」へ―」	共著	平成29年4月	保育出版社	B5判180頁［本人単独担当部分］第11章1節「協力して「わたしたち」でやりとげようとする6歳児」（P.133～136） 第12章3節　「小学校への円滑な接続とは？」（P.152～155）
11)「生活事例からはじめる―保育内容-人間関係」	共著	平成30年3月	青鞜社	B5判214頁［本人単独担当部分］第6章「やさしさを育てる保育」（P.77～84）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12)「コンパクト版_保育内容シリーズ『保育の心理学Ⅰ』」	共著	平成 30 年 3 月	一藝社	A5 判 145 頁［本人単独担当部分］　第 15 章 地域社会における子ども支援（P.121～P.128）　1. 家庭・地域との連携　　2. 子育て支援　　3. これからの子ども支援
13)「コンパクト版_保育内容シリーズ『保育の心理学Ⅱ』」	共著	平成 30 年 3 月	一藝社	A5 判 145 頁［本人単独担当部分］第８章 遊びの中における学び（P.65～P.72） 1. 自発的な遊びに基づいた保育 2. 遊びと発達 3. 現代の子どもの遊びをめぐる問題
14)「保育の心理学」	共著	令和 2 年 3 月	一藝社	A5 判［本人単独担当部分］第 14 章「乳幼児期の学びの過程と特性」
15)「子ども家庭支援の心理学」	共著	令和 2 年 3 月	一藝社	A5 判［本人単独担当部分］　第 6 章 子育てを取り巻く社会的状況
16)「子どもの理解と援助」	共著	令和 2 年 3 月	一藝社	A5 判［本人単独担当部分］第８章 気になる子ども理解と援助
（学術論文） 1)実習指導の効果を高める教育方法の研究（その３） ―幼稚園、保育所での実習における学生の自己評価と現場評価の比較検討から―	共著	平成 24 年 3 月	相愛大学研究論集 第 28 巻	P.167～P.180［共著者名］中西利恵、大森雅人、曲田映世、高岡昌子、山口美智子
2)研究報告 変化の時代における保育者養成教育のあり方－特に学外実習のおける効果的な教育方法の検討－　［査読付き］	共著	平成 25 年 3 月	相愛大学研究論集 第 29 巻	p.73～p.79　［共著者名］中西利恵、曲田映世、藤本麻子、山口美智子、岩口摂子、木村久男、細川速見、山本和明、渡部美穂子、川中美津子、高岡昌子
携帯型ゲーム機のグラスレス３D 映像視聴による影響　［査読付き］	単著	平成 26 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学　紀要　第 45 巻	P.63～P.70（本研究は JSPS 科研費 24653187 の助成を受けた研究である。）
幼少期におけるゲーム経験とゲーム体験による疲労感との関係 ［査読付き］	単著	平成 27 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第 46 巻	P.27～P.32（本研究は JSPS 科研費 24653187 の助成を受けた研究である。）
各発達の時期における「先生」のネガティブな言動について	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第 47 巻	P.31～P.40 ［共著者名］高岡昌子、高橋千香子、林悠子、岩本健一
保育者養成に求められる保育者の資質について（２）―就職先へのアンケート調査の前回調査との比較から―［査読付き］	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第 47 巻	P.71～P.80［共著者名］林悠子、高橋千香子、高岡昌子、岩本健一
保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について［査読付き］	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第 47 巻	P.41～P.48［共著者名］高橋千香子 、高岡昌子 、 林悠子 、 岩本健一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
新人保育者に必要な資質について―新人保育者に対する総合的な評価につながる具体的な資質―［査読付き］	共著	平成29年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第48巻	P.41～P.49［共著者名］高岡昌子、林悠子、高橋千香子、岩本健一
施設実習における学生の不安を軽減する事前学習についての研究　［査読付き］	共著	平成29年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第48巻	P.31～P.40［共著者名］岩本健一　、　高岡昌子　、　高橋千香子　、　林悠子
新人保育者に対する評価　～前年度との比較を通して～［査読付き］	共著	平成30年11月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第49号	P.49～P.59［共著者名］高岡昌子、飯田惠美子、岩本健一、小川純子、高橋千香子、林悠子
教学報告	共著	平成31年3月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部	磯辺ゆう、恒岡宗司、中田章子、高岡昌子、飯田惠美子、岩本健一、小川純子、高橋千香子、林悠子、吉田明史
「教育課程」と「全体的な計画」についての一考察―幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領から―	共著	令和元年10月	人間教育　第2巻　第9号	P.221～P.229［共著者名］中田章子、高岡昌子、矢野正、加奥満紀子
新人保育者に対する評価～前々年度と前年度との比較を通して～	共著	令和2年3月	奈良学園大学紀要第12巻	P.51～P.60［共著者名］高岡 昌子、岩本 健一、高橋 千香子、林 悠子
（その他） 【国際学会発表】 Assessment of Glassless 3D Viewing on a Portable Game Machine	共同	平成24年9月	－	ECVP2012 European Conference on Visual Perception (Alghero, Sardinia, Italy) Perception 2012 41, P.72（本研究はJSPS科研費 24653187の助成を受けた研究である。）
The effect of video game experience in earlier childhood on fatigue with a portable 3D game machine.	共同	平成26年8月	－	ECVP2014 European Conference on Visual Perception (Belgrade, Serbia) Perception 2014 43, P.160 （本研究はJSPS科研費 24653187の助成を受けた研究である。）
How does Video Game Experience in Early Childhood Affect Attitude and Fatigue Related to Portable 3D Game Machines?	共同	平成28年7月	－	International Congress of Psychology 2016 (ICP2016), (PACIFICO Yokohama in Yokohama, Japan)（本研究はJSPS科研費 24653187の助成を受けた研究である。）

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
Possible mislocalisation of a moving ickering target.	共同	平成 29 年 8 月	－	ECVP2017 European Conference on Visual Perception (Berlin,Germany) Perception 2017 P.243
【国内学会発表】 変化の時代における保育者養成教育のあり方（１）―特に学外実習指導において「協働」をキーワードに教育方法の工夫―	共同	平成 24 年 9 月	－	真宗保育学会 第 19 回大会（大阪府・相愛大学）
変化の時代における保育者養成教育のあり方（２）―保育実習における効果的な個別事後指導実施の検討―	共同	平成 24 年 9 月	－	真宗保育学会 第 19 回大会（大阪府・相愛大学）
携帯型ゲーム機のグラスレス３Ｄ映像視聴による影響	共同	平成 25 年 7 月	－	日本視覚学会 2013 年夏季大会(北海道・札幌市立大学)　学会誌『VISION』25 巻 3 号，P.149-P.150
幼少期におけるゲーム経験とゲーム体験による疲労感との関係	単独	平成 26 年 3 月	－	日本発達心理学会 第 25 回大会
幼稚園児の保護者に対する児童虐待についての意識調査	共同	令和 2 年 3 月	－	日本保育者養成教育学会第４回研究大会

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月３１日

氏名　　中島　栄之介

研　究　分　野	研究内容のキーワード
特別支援教育	合理的配慮、病弱教育、重症心身障害教育、知的障害教育、肢体不自由教育、発達障害、ICT 教育

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 教育課程の特色ある編成 (1)特別支援学校（知的障害）での教育課程の編成	平成 22 年 4 月～平成 31 年 3 月	知的障害教育（普通科）における、合わせた指導、自立活動中心の課程、訪問教育の教育課程及び併せ有する肢体不自由、重度・重複障害の教育課程の編成。知的障害教育（高等部職業科）における教科中心の教育課程、専門学科の教育課程の編成。 （兵庫県立阪神昆陽特別支援学校、芦屋特別支援学校での実践）
２　作成した教科書，教材 (1)教育実習 ・教育実習の手引き（単著） 発行：兵庫県立芦屋特別支援学校	平成 23 年 7 月	特別支援学校教育実習生の手引き。実習の日程と内容、障害、教育課程、授業研究、特別支援教育の歴史、特別支援教育と人権についてなど教育実習全般についてまとめ平成 30 年まで使用した。
・教育実習の心得（単著） 発行：兵庫県立阪神昆陽特別支援学校	平成 24 年 5 月	特別支援教育実習生の手引き。実習の日程と内容、交流及び共同学習、専門学科（職業科）の教育課程の特色、授業研究について教育実習全般についてまとめ平成 30 年まで実習生対象に使用。
(2)介護等体験 ・介護等体験の手引き（単著） ・介護等体験講話資料（単著）	平成 20 年 4 月～25 年 4 月	兵庫県立上野ヶ原特別支援学校、兵庫県立芦屋特別支援学校、兵庫県立阪神昆陽特別支援学校で作成し、平成 30 年まで実習生対象に使用中。
(3)医療関係者体験実習 ・特別支援教育とは（単著）	平成 25 年 4 月～平成 31 年 3 月	宝塚大学看護学部、神戸大学医学部、兵庫医科大学医学部の学生に対して、障害児と人権、特別支援学校の教育課程、合理的配慮と基礎的環境整備、ICF と ICIDH、発達障害の臨床所見等、医師看護師になった際に必要な知識の指導冊子。
(4)研修会等の資料冊子 ・新任特別支援学級担当教員等研修病弱学級担当（単著）	平成 21 年 8 月～22 年 8 月(連続 3 回)	病弱特別支援学級を初めて担当する教員対象の県教育委員会主催「病弱学級新任担当」講座の資料冊子。病弱教育の教育課程、病弱教育の変遷、病院との連携、病弱教育の指導と特色、病弱児の心理等をまとめた。
(5)特別支援教育総論（共著） 【再掲】	平成 31 年	入門者に対して特別支援教育の概要について、特別支援教育の理念、制度、歴史に加えて視覚、聴覚、知的、肢体不自由、病弱、発達障害、学習障害等について心理と生理、病理、教育課程と指導法等全般について記述した。また、特別支援教育について（理念と制度、歴史、自立活動と個別の教育支援計画及び個別の指導計画）、指導の実際（特別支援学校と特別支援学級等）、理解と指導（発達障害、学習障害、自閉症スペクトラム等）、課題と展望（センター的機能とコーディネーター、授業のユニバーサルデザイン化、ITC の活用、交流及び共同学習、インクルーシブ教育、障害の多様化と重度・重複化、医療的ケア、危機管理、地域や関連機関との連携、キャリア教育）など、現場に即した内容とした。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)奈良教育大学ゲスト講師　学生アンケート評価	平成 23 年 12 月	病弱教育について教育課程、歴史と現状、病弱児の心理、病弱教育の指導論、病弱教育の変遷、病弱教育の特色を講義し 3.5 と好評（4 点満点）。

(2)奈良学園大学人間教育学部の学生アンケート	平成 30 年 6 月	「人間教育学」の講義で特別支援教育概論、知的障害特別支援学校の実際、知的障害特別支援学校の教育課程、知的障害特別支援学校の指導の実際を話した。満足度は 4 点満点で 3.7 であった。
(3)奈良学園大学人間教育学部の学生アンケート	平成 31 年 6 月	「現代教育課題 B(特別支援)」において、講義内容に関するアンケートを行った。受講者 13 人全員より回答があり、講義内容については概ね理解できるなど、高評価であった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		研修講師として教員への指導、教育実習等大学生への指導、教育委員会関係者・大学関係者への視察での教育課程等の説明等を行ってきた。
(1)特別支援教育における情報教育（ICT）の構築	平成 6 年 4 月～現在に至る	兵庫県阪神地区学校で特別支援教育情報教育担当者を務める。平成 17 年～18 年は兵庫県教育委員会情報教育専門推進員。令和元年度は兵庫県立芦屋特別支援学校と共同でマイクロソフト社の支援を得て特別支援学校におけるプログラミング教育の在り方について検討してきた。
(2)障害別の教育課程の編成	平成 19 年 4 月～平成 31 年 3 月	特別支援教育における準じた指導、合わせた指導、自立活動中心の指導、訪問教育など教育課程の編成を行ってきた（知的障害、肢体不自由、病弱、重度・重複）
(3)特別支援学校における教育実習生の指導	平成 19 年 4 月～平成 31 年 3 月	毎年実習生を受け入れた。実習の日程と内容、障害、教育課程、授業研究、特別支援教育の歴史など教育実習全般について指導。
(4)特別支援学校における介護等体験の指導	平成 19 年 4 月～平成 31 年 3 月	介護等体験の学生を毎年約 30 大学より 250 名程度受け入れた。特別支援教育の意味について実践的に指導を行った。
(5)新任特別支援病弱学級担当教員等研修講師（兵庫県教育委員会主催）	平成 24 年 4 月～28 年 3 月	阪神昆陽特別支援学校（新設校で高等学校との交流及び共同学習、職業科という特色を持つ）の視察者を対象教育課程の特色、交流及び共同学習について講話を行った。海外、大学（大学生大学院生含む）関係、教育委員会関係など 16 団体に対応。他に特別支援学校関係、研修関係などを加えると述べ約 150 件に実施。
(7)医療関係者体験実習等講師	平成 19 年 4 月～平成 31 年 3 月	宝塚大学看護学部、神戸大学医学部、兵庫医科大学医学部の 3 大学延べ 60 人の学生に対して、障害児と人権、特別支援教育概論、発達障害の臨床所見等について指導
(8)兵庫県立芦屋特別支援学校主催、阪神間特別支援学校研修会講師	令和元年 8 月	兵庫県立芦屋特別支援学校職員を対象として、高等部での共同研究の様子を紹介しながら、特別支援学校におけるプログラミング教育の進め方について講演した。次年度より開始されるプログラミング教育の進め方について、参考になったと好評であった。
(9)奈良県次世代教員養成塾第 2 回講座　講師	令和元年 11 月	奈良県下の小学校教員を目指す高校 2 年生約 40 人に授業を行った。道徳を中心に、伝えることの難しさをコミュニケーションについてグループで討議したり、障害のある子どもたちについて考えたりしながら行った。奈良県教育委員会のメールマガジンなどにも取り上げられるなど非常に好評であった。
(10)兵庫県言語聴覚士会小児委員会　学習会講師	令和元年 12 月	障害のある子どもたちの就学先について、兵庫県下の小児を対象としている言語聴覚士に対して講演した。卒業後の生活等も含めた講演を行い好評であった。

(11)兵庫県立こやの里特別支援学校校内研修会講師	令和元年 12 月	プログラミング教育の推進に関する取組について～芦屋特別支援学校職業班の取組～と題して、特別支援学校におけるプログラミング教育の進め方について講演した。他校での共同研究の事例など具体的な内容を入れたので非常に分かりやすかったと言う評価を受けた。
(12)兵庫県特別支援教育諸学校長会　研修会講師	令和 2 年 1 月	特別支援学校における ICT 教育−プログラミング教育を始める決意−と題して兵庫県下の特別支援学校の校長先生方に講演を行った。次年度以降小学部で始まるプログラミング教育について背景となる考え方、取り組みの進め方などを講演した。講演後も質問が続くなど高評価であった。
5　その他		
(1)兵庫県立芦屋特別支援学校　学校評議員	令和元年6月～現在に至る	兵庫県立芦屋特別支援学校の学校評議員として、評議員会に出席し、意見を述べた。
(2)兵庫県言語聴覚士会小児委員会　委員	平成 29 年度 6 月～現在に至る	兵庫県言語聴覚士会小児委員会委員として、県内小児領域担当の言語聴覚士の研修を計画、運営している

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
(1)養護学校教諭 1 級普通免許状	昭和 59 年 3 月	免許状番号：昭５８養学１普第８０号（大阪府教育委員会）
(2)小学校教諭 1 級普通免許状	昭和 59 年 3 月	免許状番号：昭５８小１普第１４８０号（大阪府教育委
(3)幼稚園教諭 2 級普通免許状	昭和 59 年 3 月	免許状番号：昭５８幼２普第４５３１号（大阪府教育委
(4)修士（学校教育学）	平成 8 年 3 月	兵庫教育大学大学院 論題「重症心身障害児・者のコミュニケーション手段の獲得についての研究－シンプルテクノロジーとパーソナルコンピューターを用いて－」
(5)養護学校教諭専修免許状	平成 8 年 3 月	免許状番号：平８養学専第１号（兵庫県教育委員会）
(6)小学校教諭専修免許状	平成 8 年 3 月	免許状番号：平８小専第２１号（兵庫県教育委員会）
(7)言語聴覚士	平成 16 年 3 月	登録番号第５５４９号
2　特許等 ・特になし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		県立特別支援学校で病弱、知的障害、肢体不自由、重度重複障害の児童生徒の指導に当たる
(1)兵庫県立上野ヶ原特別支援学校教諭として	平成 21 年 4 月～22 年 3 月	病弱教育学級（肢体不自由・知的障害との重複クラス）担任をする。教務部副部長として、すべての教育課程編成を担当した。教科学習グループ長、病棟訪問（重症心身障害グループ）を担当。
(2)兵庫県立芦屋特別支援学校教諭として	平成 22 年 4 月～23 年 12 月	知的障害学級担任、情報図書部長、教務部長　教育課程委員長を務め、教育課程の点検を行った。特別支援教育における準じた指導、合わせた指導、自立活動中心の指導、訪問教育など教育課程の編成を実践。
(3)兵庫県立阪神昆陽特別支援学校教諭として	平成 24 年 1 月～26 年 3 月	総務部長、教育課程編成の担当・入学選考を担当した。ただし平成 24 年 1 月新設校開講のため 1～3 月は開校準備室を兼務した。
(4)兵庫県立阪神昆陽高等学校教諭兼務として	平成 29 年 4 月～28 年 3 月	多部制単位制高等学校の兵庫県立阪神昆陽高等学校教諭を兼務し、特別支援学校との連絡調整を行った。

(5)兵庫県立阪神昆陽特別支援学校主幹教諭として	平成 26 年 4 月～28 年 3 月	総務部長、教育課程の編成、入学選考業務、高等学校との連絡調整、情報教育、人権教育、PTA の設立、初任者研修等行った。
(6)兵庫県立こやの里特別支援学校主幹教諭として	平成 28 年 4 月～29 年 3 月	教務部長、教育課程の編成、入学選考業務、人権教育、情報教育、初任者研修、教育実習等を担当
(7)兵庫県立芦屋特別支援学校教頭として	平成 29 年 4 月～平成 31 年 3 月	県立特別支援学校管理職としての業務（高等部、総務部、生徒指導部他）兵庫県立特別支援学校教頭会役員を務める。
(8)地域公開講座講師	平成 30 年 7 月	教諭 30 人を対象に、特別支援教育における ICT の活用「教育課程と発達段階と ICT の関係を再考する」をテーマに講話。
4　その他 兵庫県言語聴覚士会小児委員会委員	平成 30 年 4 月～現在に至る	兵庫県言語聴覚士会小児委員会が主催する年4回の主として小児領域の言語聴覚士を対象とした研修会の開催。学校と言語聴覚士の情報交換の連絡担当。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　特別支援教育総論	共著	平成 31 年 3 月	ERP 出版	入門者に対して特別支援教育の概要について、特別支援教育の理念、制度、歴史に加えて視覚、聴覚、知的、肢体不自由、病弱、発達障害、学習障害等について心理と生理、病理、教育課程と指導法等全般について記述した。また、特別支援教育について（理念と制度、歴史、自立活動と個別の教育支援計画及び個別の指導計画）、指導の実際（特別支援学校と特別支援学級等）、理解と指導（発達障害、学習障害、自閉症スペクトラム等）、課題と展望（センター的機能とコーディネーター、授業のユニバーサルデザイン化、ITC の活用、交流及び共同学習、インクルーシブ教育、障害の多様化と重度・重複化、医療的ケア、危機管理、地域や関連機関との連携、キャリア教育）など、現場に即した内容とした。
（学術論文） 1. ．特別支援教育における人権教育 －障害者差別を題材とするまで－	単著	平成 30 年 9 月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」第 1 巻第 7 号 pp 211 - 219	兵庫県立Ａ特別支援学校での実践例を検討。特別支援学校では在籍生徒が差別を受けると同時に差別をする側にもなるという人権教育の特徴がある。生徒にとり障害者差別を認識することは過去に受けた差別と向き合うことであり、自身の障害と向き合うこと、さらに今後の差別、そして、自らの持つ差別性と向き合うことでもあると論じた。
2. 特別支援教育の視点を生かした授業改善（1） 発達障害の視点から見たユニバーサルデザイン化による授業の改善	単著	平成 30 年 9 月	教育 PRO pp. 14-15	特別支援教育の視点を生かした授業改善について述べた。障害特性（とくに発達障害）について、介護等体験に実習に来た学生への説明をもとに支援の方向性の確認を行った。障害特性に配慮した授業を行うことや教室環境などに支援などの手立てを行うことはそのまま誰にとってもわかりやすいユニバーサルデザイン化の授業となり授業改善につながることに言及した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3．特別支援教育におけるインクルーシブ教育システム構築について －インクルーシブ教育システム構築と合理的配慮の実際－	単著	平成 30 年 10 月	奈良学園大学研究紀要 9 集 pp. 111～118	特別支援教育において、インクルーシブ教育システムの構築や交流及び共同学習の推進、合理的配慮の提供は次期学習指導要領でも中心の課題である。兵庫県内に平成 24 年に同一敷地内に開校した高等部単独設置の特別支援学校と多部制単位制の高等学校は、設立準備段階より交流及び共同学習を念頭に置いて計画されており、次期学習指導要領の内容を先進的に取り組んできたといえる。今回、両校の開校当初に行われた発達障害の特性に着目した工夫を重ねることで授業改善や生徒理解につながってきた実践を検討し提案した。
4．特別支援教育の視点を生かした授業改善（２） 合理的配慮と基礎的環境整備の方向と授業の改善	単著	平成 30 年 10 月	教育 PRO pp. 14-15	特別支援学校における合理的配慮と基礎的環境整備の方向性と具体例について述べた。障害特性（時間、音声言語、ルール・場の空気）をもとにしての対応事例（授業で使うスライド、卒業式で使うスライド、教室環境の整備）より子どもたちは何に困りどのように配慮すればよいかを検討した。障害特性を踏まえることですべての子どもにとって学びやすい授業や環境となることに言及した。
5. 特別支援学校における感染性胃腸炎の集団発生の要因とその拡大予防に関する検討	共著	平成 30 年 10 月	奈良学園大学研究紀要　第9集　PP119 - 126	特別支援学校において感染性胃腸炎の集団発生から終息までの欠席・学級閉鎖の状況、対応策等の記録を分析し、感染ルート、感染拡大の原因、対応策等について検討した。感染経路の特定できない広がりもあり、学校医の助言を受け消毒等を行った。一般的対応だけでは著効なく、全クラスが時期をずらして学級閉鎖となるほど感染拡大、保護者への感染があった。拡大の背景として、感染力の強さに加え、施設設備、児童生徒数の増大による過密化、種々の集団の形成など特別支援学校特有の要因が示唆された。また、保護者への情報提供は感染拡大にも有効であったと考えられた。 共著者：中島 栄之介、　森 一弘 担当部分：全文執筆
6．肢体不自由者教育における対象の変遷と教育的対応上の課題（1）　－脳性麻痺に着目して－	共著	平成 31 年 1 月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」第 2 巻第 1 号 pp11-16	肢体不自由児への記載の変遷と肢体不自由の一因となる脳性麻痺について整理することを目的とした。近年の学習指導要領の改訂によって，脳性疾患に起因すると考えられる認知・行動上の特徴の考慮の必要性が強調されるに至った。今日の障害の重度重複化といった要因により，個々人の状態像や教育上のニーズの把握は簡単ではなくなっている。それが個のニーズに応じた指導計画作成の障壁となっている。 共著者：　松﨑泰・中島栄之介・荻布優子・川﨑聡大 担当部分：肢体不自由教育について学校現場の教育課程と指導の部分　、重度・重複障害の部分
7. 肢体不自由者教育における対象の変遷と教育的対応上の課題(2) －重度・重複障害に着目して－	共著	平成31年1月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」第 2 巻第 1 号 PP. 17-27	肢体不自由者教育における対象の変遷と教育的対応上の課題を「重度・重複障害」という言葉に着目して定義とその変遷、学習指導要領上の位置づけを中心に教育課程や指導法を検討した。いわゆる「重度・重複障害」を有する子どもたちの教育は、戦後すでに問題になっており制度改革や学習指導要領の改訂にごとに課題なった。また、新学習指導要領の開始以降では「発達障害」が「重度・重複障害」を考える上でポイントになる。 共著者：　中島栄之介・松﨑泰 担当部分：全文執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8．特別支援教育と不登校について －「学業」「居場所」に対する特別支援教育の視点からの検討－	単著	平成 31 年 3 月	奈良学園大学研究紀要第 10 集 PP109－112	特別支援教育の視点から不登校について分析し、不登校の要因として考えられる発達障害、学習障害を視点に考察した。発達障害に関しては子どもたちの帰属する集団の少なさ、学習障害については学力の問題につながると考えられた。特別支援の視点を入れた、集団作り、学習への合理的配慮が必要とされた。
9. 肢体不自由者及び重度・重複障害者教育における教育課程と指導 －発達段階と ICT 機器の活用に着目して－	単著	平成31年3月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」第2巻第2号 PP.61－65	肢体不自由者教育及び重度・重複障害者教育における教育課程と指導について発達段階と ICT 機器の活用に着目して学習指導要領、ICT 機器の発展及び発達段階を中心に検討した。肢体不自由者教育での電動タイプライターや専用のコミュニケーション機器などに始まった ICT の導入は、近年のタブレット端末や視線入力などの ICT 機器の発達により重度・重複障害を有する子どもたちにも積極的に活用されるようになってきた。そこで、ICT 機器の導入について学習指導要領、子どもたちの発達の段階や障害の程度と教育課程と機器の活用について着目して考察した。その結果、ICT 機器以外にもシンプルテクノロジーと言われる方法を取り入れるほかコミュニケーションや自尊感情などとの関連性を検討することが肢体不自由者及び重度・重複障害者教育における教育課程と指導についてポイントになると考えられた。
10. 病弱教育における教育課程と指導 －対象疾患の変遷と病弱教育特別支援学校及び病弱教育特別支援学級に着目して－	単著	平成31年3月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」第2巻第2号 PP.67－74	病弱者教育における教育課程と指導について、対象疾患の変遷による病弱教育特別支援学校及び病弱虚弱特別支援学級における教育課程と指導の在り方の変化について検討した。病弱教育では医療の進歩等により①対象疾患が変化したことによる入院期間の多様化と②高等部卒業後も続くフォローアップという変化が現れた。このため、病弱教育特別支援学校に在籍する生徒の減少、病弱教育特別支援学級の増加、さらに病弱教育特別支援学校では複数障害種の受け入れなど学校の在り方にまで変化が見られた。しかし、このような変化は病弱教育を行う学校現場に教員の専門性の確保や教育課程の在り方をはじめとする新たな課題をもたらしていることが示唆された。共著者：中島栄之介、松田智子 担当部分：全文執筆
（その他） 1(教育実践記録等) 1．ＩＣＴを活用した授業実践例（Web 版）	単著	平成 22 年 8 月	兵庫県教育委員会教育企画課 Web 版（A4 版 5 枚）	平成22年度に兵庫県教育委員会より ICT 活用した特別支援学校の授業実践例について記載。現在も公開中。芦屋特別支援学校の事例を提供した。特別支援学校での卒業式における ICT の活用事例（視覚支援、スケジュールの提示、式辞等のシンボル利用等）部分を単著。
2．IT 機器を活用した授業づくり－タブレット端末の活用－	単著	平成 27 年 8 月	兵庫県立芦屋特別支援学校 A4 版 20 ページ	「専門性向上指導者講習会」指導冊子。初心者向けに障害基礎論、発達障害と学習障害の特性、AAC と AT、アプリケーションソフトの導入と実習、実践例の紹介をした。アプリの使用だけではなく、障害の特性、考え方、支援の方向性を研修し単なる機器やアプリの紹介でなく活用ができる冊子とした。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
3. 新任病弱学級担任研修冊子	単著	平成 20 年 21 年、22 年 8 月（３年使用）	兵庫県教育委員会 A4 判 10 頁	兵庫県教育委員会が主催する「新任特別支援学級担当教員等研修病弱学級担当」講座の 3 年間の冊子。病弱教育の教育課程、病弱教育の変遷、病弱教育の指導法、病院との連携、病弱教育の指導と特色、病弱児の心理等をまとめた。
2(研究ノート) 1.教員養成における肢体不自由教育の心理・生理・病理について−自立活動との関係に着目して−	単著	令和元年 9 月	奈良学園大学紀要第 11 集 PP.193−198	教員養成における肢体不自由教育の心理・生理・病理について自立活動との関係に着目して教員養成におけるあり方を考察した。肢体不自由教育における自立活動は体の動きの改善、合理的配慮による効果的な（学習）活動、交流や進路などへの参加が中心となる。そのため、医療機関などからの情報を自立活動等の教育課程の編成に生かす必要がある。近年、遺伝子検査の発展などによる診断技術の進歩等によって診断名や情報は多様化複雑化するなどの実態がある。しかし、検査を中心とした心理、体の動きの改善や予後を考えた教育課程の編成のために生理・病理の基本的な知識を生かすという基本的なことを生かすことがあらためて必要であると考えられた。
2.特別支援学校におけるプログラミング教育の開始に当たって ー学習指導要領の位置づけと条件整備を中心にー	単著	令和 2 年 3 月	奈良学園大学紀要第 12 集 PP.151−157	来年度より、小学校でプログラミング教育が始まる。特別支援学校小学部でも同様である。そこで、小学校学習指導要領と特別支援学校学習指導要領におけるプログラミング教育及び情報機器の取扱いについて整理した。特別支援学校学習指導要領では、支援技術の観点よりコンピュータ等の情報機器の取扱いについて積極的に使用することが示されている。しかし、知的障害者である児童生徒に対する教育を行う特別支援学校の教育課程においては、プログラミング教育を行う教科等の具体的な例示がないため積極的にプログラミング教育を行うカリキュラムマネジメントによらなければいけないことが示唆された。また、プログラミング成立のための情報機器や通信ネットワークなどの環境、情報機器の基本的操作の習得など課題は大きいと考えらえた。

教　育　研　究　業　績　書

令和　２年　３月　３１日

氏名　　根岸　章

研　究　分　野	研究内容のキーワード
数学、情報学、経済学	作用素論、量子ウォーク、グラフ理論、垂直軸風車、ジニ係数

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
（1）数学用ソフトウェアを用いた数学教育	平成 19 年 9 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良産業大学(現奈良学園大学)情報学部の専門科目「情報数学Ⅱ」において、KNOPPIX/Math の CD を配布し、フリーの数式処理ソフトウェア Maxima を用いた数学の学習活動を行った。これによって、関数のグラフをパラメータを使って動的に動かしたりが容易になり、関数の係数の意味を把握した理が容易になるなどの教育効果があった。 平成 22 年度からは、学内のパソコンが CD から起動できなくなり、Windows 版の wxMaxima を利用するように変更した。 平成 25 年度からは新規科目「ゲーム数理」においても、3 次元曲線のパラメータ表示などの視覚化に役立て、平成 26 年度からは、新課程科目「情報数学Ⅱ」でも、他変数関数の微積分の学習で活用するようになった。
（2）能力別クラス編成の実践	平成 22 年 4 月 ～ 平成 23 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部１年次生に対し４月当初に数学についてのプレースメントテストを行い、日本人学生に関しては、多喜正城教授とクラス分けをして専門科目「情報数学Ⅰ」を行った。それによって、学生の状況に応じた授業がしやすくなり、学生のやる気を高める教育効果があった。
（3）「基礎数学」の科目設置	平成 23 年 4 月 ～ 平成 28 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）の全学共通の導入基礎科目「基礎数学Ⅰ」「基礎数学Ⅱ」を設置し、4 月入学時に全学的に数学についてのプレースメントテストを行い「基礎数学Ⅰ」から履修、「基礎数学Ⅱ」から履修、「履修免除」にわけ、それぞれの科目を各学部で複数クラス開講して少人数教育にした。それによって、大部分の学生は数学力の向上が見られるなど教育効果があった。
（4）講義科目「情報数学 I」と演習科目「情報数学演習 I」の同時受講	平成 24 年 4 月 ～ 平成 28 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の平成 23 年度のカリキュラム改革で、主要科目において講義科目と演習科目を併設して同時受講させるようにした。平成 24 年度から 2 年次配当科目として「情報数学Ⅰ」と「情報数学演習Ⅱ」を同時受講させ、両科目を連携させることによって数学的内容の理解とともに計算力をつけさせるように工夫した。
（5）講義科目「解析学基礎」における問題作成演習	平成 30 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学基礎」において、中学・高等学校数学を範囲とした問題作成を行わせた。問題作成と同時に対象学年や難易度、解答と解説も行わせ、将来中学校や高等学校の数学教員になる際に必要とされる知識や考え方を学ばせた。
（6）「数学道場」における学び合いの実践	平成 30 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部中等（数学・音楽）専攻数学専修の学生に対し、相互の学び合いを基本とする学習の場「数学道場」を開き、学生同士の学び合いを推進している。

2　作成した教科書，教材		
（1）「統計学入門」	平成 19 年 4 月 ～ 平成 24 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）ビジネス学部で兼坦した「統計学入門」（学部共通基礎科目、１年次配当、半期２単位）で使用したテキスト。 記述統計について平均や分散、相関係数などまでを扱う。平成 20 年度からは留学生対応としてルビをふるようにした。なるべく数式を使わずに統計学の概念の理解をさせるように工夫し、それによって、数学が苦手な学生でも統計の基礎的な概念が理解できる教育効果があった。A４全 29 ページである。
（2）「経済統計入門」	平成 19 年 4 月 ～ 平成 24 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）ビジネス学部で兼坦した「経済統計入門」（学部共通基礎科目、１年次配当、半期２単位）で使用したテキスト。 インターネットで入手できる経済統計のデータについて、マクロ経済学の諸概念との関連を強調しながら入手方法や意味を扱う。実際のデータを入手したり、それを加工さるような課題を課すことによって、経済データの分析手法を学ばせる教育効果があった。経済統計のデータの更新や統計調査の名称変更などはプリントで補った。A4 全 28 ページである。
（3）「情報数学Ⅰ」	平成 24 年 4 月 ～ 平成 24 年 9 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「情報数学Ⅰ」（専門科目、２年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。平成 23 年度のカリキュラム改革で設置された「基礎数学Ⅱ」を修得した学生を対象とした科目内容に改めた。授業中のプレゼンテーションではカラー化したものを用意し、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全 95 シートである。
（4）「情報数学Ⅱ」	平成 25 年 4 月 ～ 平成 29 年 9 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「情報数学Ⅱ」（専門科目、３年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。2 変数関数の微積分を中心として、変数変換や近似計算も扱っている。Maxima の利用により、微積分の具体的な計算よりその意味を考えることに集中でき、また、2 変数関数のグラフなどが視覚化されわかりやすくなるなどの教育効果があった。A4 判全 28 頁。
（5）「ゲーム数理」	平成 25 年 10 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「ゲーム数理」（専門科目、３年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。平成 23 年度のカリキュラム改革で設置されたゲーム制作で現れる数学のうち､CG の変換の基礎となる数学事項に特化した内容を扱っている。授業中のプレゼンテーションではカラー化したものを用意し、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全 111 シートである。
（6）「数学の世界」	平成 27 年 4 月 ～ 平成 30 年 9 月	奈良学園大学において平成 26 年度から設置された「数学の世界」（共通教育科目、1 年次配当、半期、２単位）で配布したプリント。幾何、代数、解析の 3 分野を中心に、「数の世界」、「量の世界」、「形の世界」、「計算の世界」、「変化の世界」と題して数学の諸分野の内容を紹介する。整数の集合など簡単な材料を用いることによって、高校までの数学ではでてこない比較的新しい数学の概念や考え方を、興味をもって学習できるように工夫した。全 99 シート。

（７）「日常に数学を－文理をつなぐ数学教室から－」	平成 27 年 4 月～平成 30 年 9 月	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）で使用していた教科書。日常生活に近い場面での数学の活用例を中心に、関数、数列、行列の基礎知識と学びながら応用方法も学んでいく。 物体の動きと微分や、金利と数列、人数の変化と行列などを結び付け、学習者の興味を引き出しながら学んでいけるように工夫している。大田靖氏（岡山理科大学総合情報学部准教授）との共著でＡ５全 169 ページで学術図書出版より発行された（ISBN978-4-7806-0464-1）。根岸の担当分は第 2 部 101 ページである。
（８）「情報数学演習Ⅱ」	平成 27 年 9 月～平成 28 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部の専任教員として、平成 23 年度から改革されたカリキュラムの「情報数学演習Ⅱ」（専門科目、３年次配当、半期、１単位）で配布したプリント。平成 23 年度のカリキュラム改革で設置された情報系で必要とされる数学内容のうち、グラフ理論を扱っている。演習中心に展開しつつ、グラフ理論の基礎用語の説明や、さまざまな定理の証明を実例を交えつつ行い、より興味をひきやすいようにするとともに、配布プリントはモノ黒を基調として読みやすい物にしている。全 84 シートである。
（９）「解析学基礎」	平成 30 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の講義科目「解析学基礎」で配布したプリント。集合論の基礎から微分のロピタルの定理までをほぼすべてに詳しい証明をつけて述べた。高校数学では単なる計算で終わりがちな微分を、実数の基礎から確認していくことを目的としている。A4 で 38 ページである。
(10)「数学入門 第３版」	平成 31 年 3 月	同志社大学文化情報学部の非常勤嘱託として担当の「数学入門」（専門科目、１年次配当、半期、２単位）で使用中の教科書。数の集合の拡張とそれぞれの関係から始め、初等的な方程式の解法や１変数関数の初歩的事項から、微積分、テーラー展開や数値積分までを扱っている。第２版では集合や命題と論理を付録として追加した。第３版では、数値積分を削り、複素数の扱いと数列を追加した。 自然数から有理数を導出する考え方と、指数が自然数のベキから小数のベキへの導出を対比させるなどして、いろいろな事項をなるべく関連させながら学習していくように工夫し、それによって、学生に１変数の解析を学習しやすくする教育効果があった。 Ａ５全 153 ページで学術図書出版より発行された。（ISBN978-4-7806-0003-2）
３　教育上の能力に関する大学等の評価 （１）学生の授業評価アンケートの結果	平成 27 年度前期	最高点 4.00 で、「数学の世界」の総合的満足度は 2.85 であり、全体平均の 3.29 よりだいぶ低い値となっていた。講義内容・方法についての項目の科目平均は 2.31～3.92 となり、全体平均と比べ低い項目も高い項目もあった。低かったのは、授業時間外の指導等で、高かったのは、授業中の私語対策などであった。その他の担当科目については受講生が 10 名未満だったため、アンケートの対象外だった。
	平成 27 年度後期	「生活の中の数学」の総合的満足度は 3.33 であり、全体平均の 3.24 より若干高い値となっていた。講義内容・方法についての項目の科目平均も 3.33～3.56 となり、どの項目も全体平均より高い値となっていた。その他の担当科目については受講生が 10 名未満だったため、アンケートの対象外だった。

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
（1）「情報処理学とは」	平成 22 年 4 月	私立奈良文化高校で行われた「奈良文化高校分野別ガイダンス」において標記のテーマで講師を務めた。情報処理学という学問分野の概説を行い、合わせて、奈良産業大学情報学部の特徴を述べた。 （聴講者は奈良文化高校の生徒 2 名）
（2）「社会生活の中の数学」	平成 22 年 7 月	奈良県王寺町りーべる王寺において、王寺町と奈良産業大学の主催で行われた「王寺町り～べるカレッジ」において標記のテーマで講師を務めた。社会生活に数学が使われている例として、2 つの具体例を取り上げて解説した。１つは、産業連関分析で、数学的には逆行列の応用となっていること、もう一つはデジカメで使われるパッシブ方式のオートフォーカスの原理で、差分の考え方の応用となっていることを述べた。 （聴講者は地域の高齢者の方を中心に 30 名程度）
（3）「Excel VBA の活用」	平成 22 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2010」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、マクロの利用方法と VBA の使い方を講演した。マクロの利用方法としては、一つ一つの点の記号が異なる散布図の作り方を扱い、VBA の使い方としてはまた、出席簿をカテゴリー別の表に帰るユーザー定義関数の例やFORループを利用したプログラミングについてを講演した。 （受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名程度）
（4）「Excel VBA の活用」	平成 22 年 12 月	奈良産業大学で行われた「2010 年度冬季 教職員のための公開講座」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、マクロの利用方法と VBA の使い方を講演した。マクロの利用方法としては、一つ一つの点の記号が異なる散布図の作り方を扱い、VBA の使い方としてはまた、出席簿をカテゴリー別の表に帰るユーザー定義関数の例やFORループを利用したプログラミングについてを講演した。 （受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名弱）
（5）「Excel VBA の活用」	平成 23 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2011」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、マクロの利用方法と VBA の使い方を講演した。マクロの利用方法としては、一つ一つの点の記号が異なる散布図の作り方を扱い、VBA の使い方としてはまた、出席簿をカテゴリー別の表に帰るユーザー定義関数の例やFORループを利用したプログラミングやセルの内容を基にしたセルごとの操作についてを講演した。 （受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名程度）
（6）「情報の数理」	平成 24 年 6 月	奈良県立大和中央高等学校で行われた「進路相談会」で標記のテーマで模擬講義の講師を務めた。情報量とは何かを主題に、対数の定義やその性質を述べ、そこから情報量の定義を与えた。また、ファイルの可逆圧縮と非可逆圧縮の違いを、情報量の観点から述べ、実演を行った。 （受講者は大和中央高校の生徒 15 名）
（7）「Excel 関数自由自在」	平成 24 年 8 月	奈良産業大学で行われた「奈良産業大学教職員のための公開講座 2012」において標記のテーマで講師を務めた。MS-Excel の使い方の実例として、条件によって変化する関数を主題に講演した。IF 関連関数や他の関数との組み合わせ利用、配列数式の利用法補などを扱い、それぞれの違いを講演した。 （受講者は大阪、奈良の中高の先生を中心に 20 名程度）

（８）「Word と Excel をリンクした文書作成」	平成 24 年 8 月	三郷町立三郷北小学校で行われた「教員研修会」において標記のテーマで講師を務めた。Word と Excel をリンクした文書作成を主題に、Word のグラフ作成において、Excel とリンクさせない場合とさせた場合の違いや、差し込み印刷の使い方などを講演した。 （参加者は三郷北小の教員 20 名程度）
（９）「こども ICT 講座」	平成 29 年 2 月	三郷町文化振興財団と奈良学園大学が共催した三郷町の小学生を対象にしたカルチャーサロン「こども ICT 講座」において、プログラミング言語「スクラッチ」を用いたプログラミングの教室の講師を務めた。 （参加者は三郷町の小学 4 年生から 6 年生 16 名）
(10) 「子ども ICT 講座」	平成 30 年 2 月	三郷町文化振興財団と奈良学園大学が共催した三郷町の小学生を対象にしたカルチャーサロン「子ども ICT 講座」において、プログラミング言語「スクラッチ」を用いたプログラミングの教室の講師を務めた。 （参加者は三郷町の小学 1 年生から 5 年生 14 名）
(11) 「たつたクラブ」	平成 30 年 3 月 ～ 現在に至る	三郷町において、3 月より月 1 回行われている小中学生向けのプログラミング教室にサポーターとして参加している。8 月から 12 月までは月 2 回のロボットプログラミング教室、および平成 31 年 1 月に行われた、競技会に主催者の一員として参加した。以降は、月 1 回のプログラミング教室を中心に活動し、令和 2 年 2 月には、第 2 回の競技会を開催した。
(12) 「AI と囲碁」	平成 30 年 6 月	奈良県王寺町りーべる王寺において、王寺町と奈良学園大学の主催で行われた「第 27 回大学と地域をつなぐ公開講座『り～べるカレッジ』」において標記のテーマで講師を務めた。AI とその発展史を概観し、近年のキーワードとしてディープラーニングを取り上げた。合わせて、囲碁 AI の開発史を概観し、モンテカルロ法とディープラーニングにより、急速に強さが増していったことを見た。その後、Excel 上で簡単なニューラルネットワークモデルを作成し、ソルバー機能を用いて最適化を行うディープラーニングの実例を取り上げた。 （聴衆は地域の高齢者の方を中心に 15 名程度）
(13) 「数式処理ソフトの使い方」	平成 30 年 10 月	奈良県立高取国際等学校で行われた進路相談会の模擬講義において、標記のテーマで講師を務めた。導入として AI の発達による各種の職業の将来性について、野村総合研究所の発表をもとに解説した。その後、高校 1、2 年の数学の内容を数式処理ソフト Maxima を使いながら概観し、数式処理ソフトを使った授業法について述べた。 （受講者は高取国際高校の 2 年生 8 名）
(14) 2019 年春期　奈良学園公開文化講座 「第 31 回　《小学生と学ぶロボットプログラミング》」	令和元年 6 月	志賀直哉旧居（奈良学園セミナーハウス）で行われている奈良学園公開文化講座の一環として行った講座。 2020 年度の小学校の「プログラミング」必修化に向け、その経緯と在り方やプログラミングとは何かを概説し、ビジュアルプログラミング言語である Scratch の使い方や、ロボットプログラミングを説明し、参加者とともにロボットの作成、プログラミングを行った。 （受講者は地域の小学生やその保護者を中心に 17 名）
５　その他 特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 高等学校教諭第一種免許（数学）	平成 2 年 3 月 31 日	平成高一め第四三六三号（京都府教育委員会）
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）インターンシップ科目検討ワーキンググループ	平成 23 年 8 月 ～ 平成 27 年 2 月	インターンシップ実習の単位化にあたり、科目の内容、実施方法の検討を行った。その後、平成 25 年度は 2 年次生配当科目「インターンシップⅠ」を、平成 26 年度は 3 年次生配当科目「インターンシップⅡ」を担当した。
（2）情報学部評議員	平成 24 年 4 月 ～ 平成 26 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部情報学科の評議員を務めた。
（3）情報学部長	平成 27 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良産業大学（現奈良学園大学）情報学部情報学科の学部長を務めた。
（4）情報センター長	平成 29 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	奈良学園大学情報センター長を務めた。
（5）人間教育学部評議員	平成 30 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の評議員を務めた。
（6）自己点検・評価委員会委員長	平成 30 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学自己点検・評価委員会の委員長を務めた。
（7）三郷町文化振興財団理事	平成 30 年 6 月 ～ 現在に至る	三郷町文化振興財団の理事を務めた。
（8）三郷町 ICT 学び推進協議会委員	平成 30 年 7 月 ～ 現在に至る	三郷町 ICT 学び推進協議会の委員を務めた。
4　その他 特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 日常に数学を－文理をつなぐ数学教室から－	共著	平成 27 年 3 月	学術図書出版社	（再掲のため略）
2 数学入門（第 3 版）	単著	平成 31 年 3 月	学術図書出版社	（再掲のため略）
（学術論文） 1 ジニ係数の数理的性質と実証研究例	単著	平成 23 年 12 月	奈良産業大学紀要第 27 集 pp. 79-94	複数の集団のそれぞれのジニ係数と、それを合わせた全体の集団のジニ係数の関係を考察した。ジニ係数の定義を拡張し、新たな定義に対し必要となる性質を定理として得た。この結果、元の 2 集団の要素数の比率と全体の集団のジニ係数は無関係であることを一般的に示した。また、「国民生活基礎調査」の公開データをもとに、日本の高齢化がジニ係数の増加に与える要因分析を行った。
2 有限グラフ上の量子ウォークについてⅠ：定義と条件	単著	平成 25 年 2 月	奈良産業大学情報学フォーラム紀要第 8 集 pp. 99-108	有限グラフ上の量子ウォークについて、まず、グラフに無関係な一般のヒルベルト空間上のユニタリ写像を置き、その中で、グラフと結びつけるうえでのいくつかの仮定の下、グラフの頂点と関係する部分空間の次元を導出した。
3 有限グラフ上の量子ウォークについて II:例と性質	単著	平成 25 年 12 月	奈良産業大学紀要第 30 集 pp. 57-63	有限グラフ上の量子ウォークについて、2 部グラフでの解析において、半分の次数の行列を用いれば十分であることを示した。
4 有限グラフ上の量子ウォークについて III：Propagator Set の次元	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要第 7 集 pp. 91-96	有限グラフ上の量子ウォークについて、量子ウォークの Propagator Set の定義を与え、実パラメータの自由度を次元として Propagator Set の次元を与える定理を示した。また、瀬川、鈴木両氏の ″Generator of an abstract quantum walk.″における定義と根岸の定義の違いについて考察した。
（その他） 1 奈良産業大学（現奈良学園大学）インターンシップ第 2 期実施報告 :研究ノート	共著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要第 3 集 pp. 209-227	平成 24 年度から奈良産業大学で実施された単位化された科目としてのインターンシップについて、その導入の経緯から実習後の教育効果までを記述した研究ノート。山本英司氏（現金沢星稜大学経済学部教授）との共著で、根岸は主にデータの解析とその分析結果の記述を担当した。
2 奈良産業大学「基礎数学」の報告と分析 :研究ノート	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要第 5 集 pp. 197-211	奈良産業大学（現奈良学園大学）で平成 23 年度から平成 27 年度にかけて実施した数学の導入教育について、科目の到達目標の設定段階の状況報告から実施後の学生の成績に基づく分析までをまとめた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 解析学における高大連携の私論（その１） :論考	単著	平成 27 年 11 月	教育 PRO 第 45 巻 25 号 p. 16-17	数学の高大連携において、解析学に重点を置くことの意味を示し、いくつかの数学用語についての高校と大学での違いを述べた。
4 解析学における高大連携の私論（その２） :論考	単著	平成 27 年 12 月	教育 PRO 第 45 巻 27 号 p. 16-17	数学の高大連携において、微分と積分において、高校段階で注意すべき点をいくつか示し、それらが大学でどのような意味を持つかを述べた。
5 有限グラフ上の量子ウォークについて :口頭発表	―	平成 22 年 9 月	2010 年夏の作用素論シンポジウム　於：松本市中央公民館	有限グラフ上での量子ウォークの一般的な定義を与え、いくつかの簡単な例について、漸近挙動の分布の様子の数値計算例を紹介した。
6 辺から見た量子ウォーク :口頭発表	―	平成 23 年 9 月	2011 年夏の作用素論シンポジウム　於：熊本市国際交流会館	有限グラフ上での量子ウォークを双対グラフ上で考察することによって設定を単純化できることを示した。
7 Some examples of quantum walk on finite graphs. （有限グラフ上の量子ウォークのいくつかの例） :口頭発表	―	平成 24 年 9 月	2012 年夏の作用素論シンポジウム　於：新潟大学駅南キャンパス　ときめいと	量子ウォークの漸近挙動について、グラフが星形グラフ、直線、サイクルの場合について考察した。
8 有限グラフ上の量子ウォークについて :口頭発表	―	平成 25 年 9 月	2013 年夏の作用素論シンポジウム　於：広島大学東千田キャンパス	有限グラフ上での量子ウォークについて、ユニタリ性の見地からのより一般的な定義を与えた。また、この考えの応用例として、二部グラフにおける量子ウォークの固有関数についての定理を与えた。
9 トルク差を利用した垂直軸風車について :口頭発表	―	平成 26 年 9 月	2014 年夏の作用素論シンポジウム　於：セミナー・カルチャーセンター臨湖	垂直軸風車において、羽の両面の形状の違いによるトルク差を利用するアイデアを提唱し、その数値計算例を与えた。
10 垂直軸風車の周速比の計算例 :口頭発表	―	平成 27 年 9 月	2015 年夏の作用素論シンポジウム　於：福井県フェニックスプラザ	トルク差を利用した垂直軸風車について、周速比の計算例を与えた。
11 量子ウォークの時間発展の次元について :口頭発表	―	平成 28 年 9 月	2016 年夏の作用素論シンポジウム　於：米子コンベンションセンター BiG SHiP	U(2n)に属するユニタリ行列の中で、辺数 n の有限グラフ上の量子ウォークの時間発展となりうる行列の集合の幾何学的次元とその条件を与えた。
12 量子ウォークの Propagator Set の次元について :口頭発表	―	平成 29 年 7 月	2017 年夏の作用素論シンポジウム 於：伊勢市観光文化会館	量子ウォークの Propagator Set の定義を与え、U(2n)に属するユニタリ行列の中で、辺数 n の有限グラフ上の量子ウォークの Propagator Set の幾何学的次元に関する定理を示した。
13 羽根と質点の衝突から導出される方程式 :口頭発表	―	平成 30 年 9 月	2018 年夏の作用素論シンポジウム 於：徳島市シビックセンター	空気分子が風車の羽根に与える角運動量とエネルギーの保存則から風車の羽根の形状の運動方程式を導出した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
14 Introduction to Open Quantum Walks :口頭発表	－	令和元年9月	2019 年夏の作用素論シンポジウム 於：和歌山ビッグ愛	2000 年代初期からの Unitary Quantum Walks の様々な定義を紹介し、その後 Open Quantum Walks の定義を述べ UQW との違いを述べた。

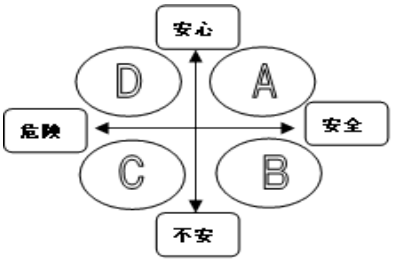
教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月３１日

氏名　松井　典夫

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学	教師教育・教科教育（図画工作科）・学校安全（安全・防災教育）

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 ・「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会誌　第３巻１号 p62-66　松井）を用いた安全教育	平成２１年度～現在に至る	 安全教育で目指すべきところは、「安全で安心」であるＡのカテゴリーである。しかし、このカテゴリーに児童の状態がいれば、安全教育の役割が達成されたかと言えばそうではない。知識や技能が備わっていない状態であるなら、真の安全・安心とは言えないだろう。たとえば、防犯ブザーの例で言うと、防犯ブザーの学習をする前なら、Ａの位置（「防犯ブザーは持っていれば安全で安心だ」）にいた児童も多数いるだろう。「防犯ブザーはいざという時に、不審者を撃退することができる。それを持っていれば安心だ」と感じている状態である。しかし、学習を進めるうちに、実は持っているだけでは安全とは言えないことに気付き始める。児童は「安全を守るものだけど、それだけではだめだ。自分にはいざという時に使うことができない」というＢの状態や、あるいは、「まったく安全とは言えない。頼るのはこわい」というＣの状態へと移行し始める。このように、これまで何の疑問を持たずに「安全」だと過信し、「安心」しきっていた状態のＡの位置では、児童の生涯にわたる「安全」「安心」とは言えない。まずは「真実」を知ることが、安全教育の大きな役割のひとつと言えるだろう。しかし、この学習をした時点で、児童はＢやＣの位置にとどまらず、ベクトルは再び、真の意味でのＡに向かい始めているのである。児童の中では、「この学習をしたから自分の考え方が変わった」あるいは、「防犯ブザーの使い方をしっかり学んだから、いざというときに自分がどのような心理状態になるかわかった」というように、「安全・安心」を真に見つめることができるようになるのである。その状態や児童の変容を客観的に測るマトリクスとして、「安全安心様相図」を考案した。
・「児童の安全意識尺度（Safety Awareness Scale of Children　“ＳＡＳＣ”）」の開発	平成２７年８月～現在に至る	前掲の「安全安心様相図」を用いて安全教育に関する授業を行うことによる、一定の効果を実証することができたのは確かである。しかしながら、安全安心様相図のポイントを数値化することができず、客観性に足りない。そこで、容易に数値化することができ、なおかつ児童自身にポイントさせることができ、授業の事前、事後調査が可能な「尺度」に着目し、作成したものが「児童の安全意識尺度（Safety

		Awareness Scale of Children “ＳＡＳＣ”)」である。ＳＡＳＣを、協力校に事前に送付し、安全授業を実施する１週間前に、事前調査を実施してもらう。調査にあたっては、授業を実施する低・中・高学年のそれぞれのクラスで実施した。また、性別とイニシャルを記入してもらい、事前、事後調査で個別にその変容を見て取ることができるようにした。
・「図工科指導法」の講義における模擬授業過程の可視化	平成２６年４月～現在に至る	大学における「図工科指導法」の授業において、指導案を作成し、模擬授業を行う際、学生同士が児童役となって行う場合が多い。その際に、児童役の学生個々が児童役に没頭し、授業全体の流れや発問内容を把握、吟味することが困難である。また、授業者が自分自身の表情、発問のタイミングなどを即時評価することができるという意味でも、iPad で授業を撮影し、模擬授業後の協議会で動画を用いながら振り返り、自己、他者評価に活用している。
・図画工作科における小学校時代の実態調査	平成２６年４月～現在に至る	担当する「美術の理解」（１回生必修）及び「図工科指導法」（２回生必修）においては、第１回目の授業時に、１．図画工作科の授偉業は好きだったか。２．図画工作科の授業は楽しかったか。３．小学校時の図画工作科の授業でもっとも印象に残っている授業は。という項目でアンケート調査を行い、授業改善に役立てている。
・地震災害被災地の小学校における教育実践演習	平成２９年１０月	平成２９年４月に発生した熊本地震では、多くの学校も被災し、また避難所となった。避難所となった学校に訪問し、登校時の安全指導ボランティアや、授業補助の演習を行うことを目的として、奈良学園大学の教職志望の学生１０名を引率し、熊本県益城町立広安西小学校を訪れ、実践的演習を行った。
２　作成した教科書、教材		
・「美術の理解」授業プレゼンテーション及びワークシート	平成２６年４月～現在に至る	理解」においては、芸術分野の内容理解、美術教育の概観の内容理解を行うために、テキストを使用するのではなく、その理論に伴った実際の児童の姿や授業の内容について、具体的に想起しながら学ぶことができるように、プレゼンテーションを作成して授業を行っている。また、その内容を復習しながら習熟していくことができるように、ワークシートに記入させ、１５回の講義後にワークシートを綴じ、テキストとして使用することができるようにしている。
・教職表現力演習ノート	平成２７年４月	奈良学園大学人間教育学部の必修科目である教職表現力演習の教材として、授業担当者で通年使用可能な教材を作成した。ワークシートとしても即時に記入しながら利用することができる構成になっている。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 ・大阪教育大学附属池田小学校　学校教育診断	平成１７年度～平成２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年４回にわたって、児童対象と保護者対象に分けて、学校教育診断を実施している。およそ３０項目の質問事項に対して、マークシート式で回答し、その他の要望等を記述式で回答する。結果はホームページにおいて公開され、授業参観時に全保護者が閲覧できるように冊子化もされる。その結果において、児童、保護者ともに、毎年度高い評価を得ている。
・大阪教育大学附属池田小学校　個人評価	平成１７年度～平成２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年度４月に個人目標を設定し、3月に管理職面談を経て個人評価を受ける。この結果は給与に反映される。 この個人評価において、毎年度高得点を得て、高い評価を得ている。

・奈良学園大学における学生の授業評価	平成２７年度	人間教育実践力開発演習では、教師として求められる、教育現場の現代的課題への対応力として、学校安全マップの意義や授業構成に関する授業を行ったことで、教員としての将来への展望と、教員の資質能力に関して具体的に学ぶことができたと高評価を得て、以後毎年、学校安全マップの授業に取り組んでいる。
・奈良学園大学における学生の授業評価	平成２８年度	教育実習事前事後指導では、学校運営、学級経営、教室掲示とうについての講義を担当した。そこでは求められる教師の姿や学校の組織としての姿、組織力に関して具体的に学ぶことができたと、高評価を得た。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 ・大阪教育大学教育実習生指導	平成１７年度～平成２５年度	大阪教育大学附属池田小学校においては、毎年度９月に基本実習生およそ５０名、１１月に併修実習生およそ５０名を受け入れ、指導に当たっている。 平成１７年度から２０年度においては図画工作科主任として、特に美術科の学生を受け入れ、授業実践、指導案作成、生活指導等の指導に当たった。また、平成２２年度、２３年度においては学校安全主任として、全教育実習生を対象とした安全講話を行うとともに、将来、教師になったときのための経験として、不審者対応訓練の見学、参加を指導した。 また、平成２５年度においては、教生指導部長として、全教育実習生の指導、相談に当たってきた。
・京都府教育委員会：安全指導者研修会南部大会講師	平成２２年８月	京都府教育委員会主催の、安全指導者研修会で、「学校安全と安全教育」というタイトルで、学校安全管理と、安全教育に関する講演を行った。ここでは主に、教職員の安全意識を向上させることが、学校安全につながるという内容で話した。京都府下南部の教員約１００名が参加した。
・京都府教育委員会：安全指導者研修会北部大会講師	平成２２年８月	上記、南部大会の３日後に、北部大会において、同様の講演を行った。京都府下北部の教職員役１００名が参加した。
・守口市教育委員会：守口市安全指導者研修会講師	平成２２年８月	「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、守口市の安全指導者研修を対象に、講演を行った。守口市教育委員会の依頼で、前年度に引き続き開催された研修会である。前年度の内容に加え、大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件の概要を伝え、そこから教訓として取り入れる内容、特に ID カードの役割について強調する内容とした。
・豊中市立南桜塚小学校区：夏期研修会講師	平成２２年８月	豊中市立南桜塚小学校区の教員夏期研修会において、「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、講演を行った。前年度は当校のみの教員研修会だったが、前年の講演内容から、中学校区の小学校と中学校も参加することとなり、三小学校・一中学校の教員を対象に行った。小中学校の教員が混在することもあり、特に東日本大震災における「釜石の奇跡」を資料として取り上げ、小中学校の連携の重要性を紹介した。
・羽曳野市立古市南小学校：夏期研修講師	平成２２年８月	「学校安全に必要なもの　～安全管理と安全教育～」というタイトルで、羽曳野市立古市南小学校夏期研修会において、講演を行った。安全管理においては、教職員の安全意識の向上と、ID カードの大切さや意味について話し、安全教育については、大阪教育大学附属池田小学校で実践している授業について紹介した。

・日本損保協会：防災ダック座談会パネリスト	平成２２年１０月	日本損保協会主催の防災ダック座談会において、神戸市消防局安全担当者、京都大学教授とともにパネリストを務め、安全管理と安全教育に関する座談会を行った。発表では安全教育の授業内容、特に安全マップの授業について紹介した。聴衆は、現職教師、警察、消防関係、一般市民であった。
・大阪教育大学附属池田中学校：安全研修講師	平成２２年１２月	同じキャンパス内にありながら、附属池田中学校では、教職員対象の不審者対応訓練が行われていなかった。そのことを憂慮した当時の教務主任に相談を受け、講師として赴いた。不審者対応訓練の意義と方法を提案し、実際に訓練を行い、事後講評を行った。
・宮崎県教育庁：宮崎県学校安全研修会講師	平成２３年５月	「学校安全と安全教育」というタイトルで、９０分の講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校で行っている、教職員対象不審者対応訓練の映像を資料として使用し、訓練による二次的な効果としての、教職員の安全意識の向上について話した。本研修には、宮崎県下の安全担当教職員役２００名が参加した。また、本講演には関西テレビが同行取材を行い、後日、一部が放映された。
・豊中市立第５中学校：安全研修講師	平成２３年８月	豊中市立第５中学校において、不審者対応訓練のコーディネート、及び講演「学校安全に必要なもの～学校安全と安全教育～」を行った。中学校における訓練については、小学校とは違った意味、方法を持つ。また、教職員の意識も違う。まずはチームとして学校安全に取り組む必要性について述べた。
・守口市立梶中学校区：安全研修講師	平成２３年８月	夏期休業中に行われた教職員の研修会で、守口市立梶中学校区の梶中学校、梶小学校、藤田小学校、３校の教職員全員が参加した研修会で、講師を務め、９０分の講演を行った。「学校安全に必要なもの～学校安全と安全教育～」というタイトルで行い、附属池田小学校事件や阪神・淡路大震災を題材に、教訓から学ぶことの必要性を説いた。
・竜王町教育委員会：教職員夏期研修会講師	平成２３年８月	滋賀県の竜王町教育委員会が主催する、教職員夏期研修会において、安全研修の講師を務めた。竜王町の教職員、約５０名が集まった。「学校安全と安全教育」というタイトルで講演を行い、火災・地震災害・交通安全・水難災害・防犯の各カテゴリーにおける安全教育の実践例を紹介し、安全教育が及ぼす児童への影響について話した。
・守口市教育委員会：安全指導者講習会講師	平成２３年８月	守口市教育委員会主催の安全指導者研修会の講師は、平成２１年度から続く、３年目になる。年度ごとに各校の安全担当者が変わっており、毎年研修会を開くことの必要性を実感した研修会でもあった。本研修会では、例年、大阪教育大学附属池田小学校の教職員対象不審者対応訓練のビデオを題材として使用し、訓練の必要性と２次的な効果（教職員の安全意識の向上）について述べるようにしている。
・竜王町教育委員会：竜王町校長教頭会講師	平成２３年８月	本研修会は、竜王町の校長、教頭会であるため、学校安全にかかわる際の管理職の役割について内容を構成した。「学校安全のリーダー性について～管理職の役割～」というタイトルで講演を行った。従って、これまで講演した内容を管理職向けに再構成し、不審者対応時の管理職の役割や、ID カードを徹底することの必要性、教職員の安全意識を向上させていくことの必要性と方法について提案した。

・豊中市立桜塚小学校区：３校合同研修会講師	平成２３年８月	例年、豊中市立南桜塚小学校で開催している夏期研修会を拡大し、同校区の豊中市立第３中学校、桜塚小学校、南桜塚小学校の３校合同で開かれた研修会で、およそ１００名が参加した。「子供たちの命を守るために必要なこと～学校安全設備と安全教育～」と題し、お金がかからないで、見落としている学校安全についてと、安全教育に関しては、東日本大震災を題材に話し、マンネリ化しない避難訓練について話した。
・大阪教育大学附属池田中学校：校内研修会講師	平成２３年１２月	平成２２年度に引き続き、２年目の研修会である。初年度は初めての不審者対応訓練であり、戸惑いがちな様子がみられたが、２度目とあって、教職員の安全意識が飛躍的に向上し、積極的に研修会に参加している様子が伺えた。訓練後、訓練の振り返りを指導助言した。当校はまた、今回の訓練の様子をビデオ撮影し、後に校内研修で振り返りを行った。
・大阪教育大学メンタルサポートセンター：講演	平成２４年２月	大阪教育大学附属池田小学校事件後に、児童のメンタルケアを目的として設置された、大阪教育大学メンタルサポートセンターが開催した学校安全フォーラムにおいて、大阪教育大学附属池田小学校の「安全科」に関する紹介と、安全教育の実践内容の紹介、学校安全に関する講演を行った。全国から約２００名の参加者があった。
・豊中市教育委員会：管理職研修会講師	平成２４年２月	豊中市教育委員会が主催する管理職研修会で、平成２４年度においては学校安全に関する研修会を計画され、実施されたものである。管理職が対象ということで、これまでの講演内容を管理職対象のものに再構成した。また、主催者側の要望もあり、ワークショップも取り入れた。ワークショップでは、不審者対応時にどのように教職員を動かすか、どのようなリーダーシップを発揮いするかという内容で行った。
・岬町立岬中学校：夏期研修会講師	平成２４年５月	岬中学校における本研修会は、強く記憶に残るものであった。まず教職員の安全意識が非常に高く、それは安全担当者の熱心な姿勢からくるものであると推察された。当日実際に行われた不審者対応訓練では、防火扉を有効に使い、教職員同士で声を掛け合いながら不審者の居場所を限定していくという、大変工夫されたものであった。一人の教員の熱意やリーダーシップがうまく作用している様子が伺えた。
・宮崎県教育庁：宮崎県学校安全研修会講師	平成２４年５月	平成２３年度に引き続き、２年目の宮崎県での講演となった。前年度は、内容については講演者に一任されたが、当年度の講演は、地震災害についてのもという要請があった。東日本大震災をうけてのものと思われる。「釜石の奇跡に学ぶ～避難訓練についての再考～」と題し、休み時間に避難訓練をすることなどの重要性について話した。
・大阪教育大学：「学校安全の日」事業講師	平成２４年６月	大阪教育大学柏原キャンパスにおいて、学部生、及び大学院生、２００名を対象に、「安全な学校を作る教師になるために」というタイトルで講演を行った。将来、教師になったときの、子供たちを守る方法と意味について話した。この講演は、朝日、読売、毎日新聞の取材を受け、後日各紙に掲載された。

・守口市教育委員会：幼稚園長研修会講師	平成２４年７月	守口市の幼稚園長を対象に、「子どもたちの命を守るために」というタイトルで９０分の講演を行った。ここでは、交通安全を題材として取り上げ、幼稚園から小学校に上がった時の交通事故の増加に関する資料を示し、幼稚園児に対する安全教育の必要性と方法について話した。
・守口市立八雲中学校：安全教育授業・講演会	平成２４年１２月	守口市立八雲中学校において、５校時に中学校１年生から３年生を対象に、体育館で命の大切さを実感する授業として、東日本大震災を教材とする授業を行った。またその後、教職員を対象に、「子どもたちの命を守るということ」と題し、９０分の講演を行った。ここでは、授業の振り返りも含めて、「釜石の奇跡」について紹介し、教訓から学ぶべき内容について話した。
・岡山県備前市立三石小学校：ＰＴＡ人権教育小中合同研修会講師	平成２５年６月	備前市立三石小学校において、午前の人権教育参観で第４学年において、「溺れかけた兄妹」という、作家の自伝的作品を題材にした安全教育（水難災害）の授業を行い、午後からＰＴＡ人権教育小中合同研修会で、「命を大切にする教育」と題し、安全教育と学校安全に関して、教員・保護者を対象に９０分の講演を行った。
・豊中市立南桜塚小学校：安全研修会講師	平成２５年８月	当校での安全研修講師は、５年続けてのものである。豊中市立南桜塚小学校の安全研修会において、当校の不審者対応訓練のコーディネート、及び指導助言を行うとともに、「子どもたちの命を守るために」と題し、教職員に対して９０分の講演を行った。当校では、３年間の安全研修で教職員の安全意識も向上し、全員が ID カードを着けるようになったという、校長先生からのお話があった。
・茨木市立穂積小学校：安全研修会講師	平成２５年８月	茨木市立穂積小学校の安全研修会において、「子どもたちの命を守るために」と題し、教職員に対して９０分の講演を行った。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校における不審者対応訓練の紹介と、「安全科」の授業実践を紹介し、具体的な安全対策について述べた。
・守口市立八雲中学校：安全教育授業・講演会	平成２５年１２月	守口市立八雲中学校において、前年度に引き続き、５校時に中学校１年生から３年生を対象に、体育館で命の大切さを実感する授業を行った。当日は、全校生徒による地震災害の避難訓練も行われ、見学をした。授業内容は、「Ｓｍｉｌｅ　Ｓｃｈｏｏｌ～いじめと命について考えよう～」であり、いじめを題材とした授業を行った。授業後、教職員を対象に、いじめに関する講演を９０分行った。
・守口市教育研究会　生活・総合部会：指導助言	平成２５年１２月	守口市教育研究会生活・総合部会において、当研究会の担当者による地震災害の安全教育の授業を参観し、その指導助言を行うとともに、「これからの学校安全と安全教育」と題し、６０分の講演を行った。ここでは、担当者の授業実践の内容を絡め、教科教育と安全教育の類似点と相違点について話し，児童にとって有効な安全教育の必要性について話した。
・寝屋川市立堀溝小学校：安全研修講師	平成２６年６月	寝屋川市立堀溝小学校において、５，６年生を対象に、「Ｓｍｉｌｅ　Ｓｃｈｏｏｌ～いじめと命について考えよう～」と題して安全教育に関する授業を行い、児童下校後に、教職員対象に、『「有効な」安全教育とは　～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」を例に～』と題し、９０分の講演を行った。ここでは、本当に児童にとって「安全で安心な学校」とは何かについて話し、いじめについての取り組みの必要性と方法について話した。

・岬町立淡輪小学校：安全研修講師	平成２６年８月	本研修会は、平成２４年５月に行われた、岬町立岬中学校の研修会に参加していた、淡輪小学校の安全担当者の依頼によるものであった。「これからの学校安全と安全教育」というタイトルで、１２０分の講演を行った。特に大阪教育大学附属池田小学校事件の詳細を話し、そこから教訓として学ぶべき事柄を話した。
・豊中市立南桜塚小学校：安全研修講師	平成２６年８月	平成２１年度から続く、南桜塚小学校の６年目の研修会講師である。「これからの学校安全と安全教育」というタイトルで９０分の講演を行った。特に、学級崩壊やいじめといった、教育の現代的課題について話した。当校では、学校安全については過去５年間話していたため、安全に対する意識は向上し、取り組みを強化している様子であった。そこで一度立ち止まって考えたとき、子供たちにとっての「安全で安心な学校」とは、まずいじめなどがない学校であることを考えていくことを進めた。
・寝屋川市立第７中学校区「いのちの教育」研修会：講師	平成２６年８月	寝屋川市の第７中学校校区である、第７中学校、南小学校、堀溝小学校の３校合同で開催された、「いのちの教育」研修会で、１２０分の講演を行った。「いのちの教育としての安全教育～“Smile School“の提案～」と題し、大阪教育大学附属池田小学校において実践した研究授業「Smile School～『いじめと命』未来に向けて考えよう～」の実践内容と、授業実践時の児童の反応を中心として、いじめについて子供たちが向き合う方法について話した。
・三郷町ひまわりセミナー：講師	平成２６年１１月	現在勤務する奈良学園大学人間教育学部がある、奈良県生駒郡三郷町における、一般向けのセミナーで９０分の講演を行った。当日は、三郷町の町長、教育長、地域の小学校校長、市民ボランティア団体、一般の町民等、様々な人が参加した。「子供たちの命を守る「安全・安心」～町と大人の役割～」と題し、事件や事故、災害の実例を挙げながら、どのようにして子供たちの命を守るのかという、地域の大人の役割について話した。
・豊中市立豊南小学校：初任者研修指導助言	平成２６年１１月	豊中市立豊南小学校の初任者教員の、校内研究授業（国語・算数）の研究授業を参観し、授業後に指導助言を行った。当該教員は２年生を担任しており、特に、発達的課題を持った児童がいる学級における、一斉授業のあり方、方法について指導助言を行った。
・豊中市立豊南小学校校内安全研修：講師	平成２６年１２月	当校ではこれまで、校内の安全研修を行ったことがなく、研修のあり方、不審者対応訓練について、教職員の安全意識の向上についての講演依頼によって行った。当校教員約３０名に９０分の講演を行った。大阪教育大学附属池田小学校事件の教訓を例に挙げ、児童の安全を守るために学校、教職員が取り組んでいくべき内容について話した。
・豊中市立豊南小学校　安全教育授業	平成２７年５月	当校において、安全教育の模範授業を実施し、研究調査を合わせて行った。授業内容は、「知らない人とであったら」というタイトルで、防犯に関する授業を低、中、高学年で行った。「いかのおすし」という安全標語について、考える授業を行った。

・王寺町リーベルカレッジ：講演	平成２７年８月	奈良学園大学社会連携センターと王寺町の共同による取り組み、王寺町リーベルカレッジにおいて、地域住民や子を持つ保護者を対象に、「子どもの安全を考える　～大人と地域の役割～」と題した講演を行った。神戸市小１女児の連れ去り事件などを例に挙げ、地域の大人の目の大切さについて話した。
・全国地域安全運動　泉大津・忠岡安全大会：講演	平成２７年１０月	忠岡町シビックセンターにおいて、泉大津・忠岡町の合同安全研修会で講演を行った。地域住民が２００名ほど集まり、「子どもの安全を考える　～大人と地域の役割～」として、2004 年の奈良小１女児殺害事件や、この年の夏に発生した奈良県香芝市の小６女児監禁事件を例に挙げ、「３つの死角」（場・地域住民・学校教育）について提案した
・２０１５　なら講座：講演	平成２７年１２月	例年開催されているなら講座での講演。奈良県立医科大学で行われ、地域住民を対象に、「地域防犯の視点から」と題して講演を行った。地域の登下校見守り隊などのボランティア活動は高齢者頼みになっている実態を提示し、行政と地域が協同し、見守りなどの活動を活性化する必要性を提案した。
・大阪市立堀江小学校　卒業記念講演	平成２８年２月	大阪市立堀江小学校の６年生１００名を対象に、「命の学び　～中学校へ！新たな希望～」と題し、９０分の授業講演を行った。３つの題目を設定し、「連れ去りについて」「いじめと命について」「避難訓練について」話した。
・豊中市立豊南小学校教員安全研修会：講師	平成２８年５月	毎年行っている、豊中市立豊南小学校の安全研修の講師に赴いた。今回は教員が実際に不審者対応訓練を行い、それを見学して指導講評を行うというものだった。その中でも、教師という職業的性格から、責任感を強く持って有事に対応しようとするが、教師の命も大切な命であるということを強調した。
・授業力&学級づくり研究会：発表	平成２８年６月	平成２８年４月に、主に大阪府の小学校教員を中心とした「授業力&学級づくり研究会」を立ち上げた。会の運営に携わっているが、ここでは「ネームプレートを用いた非言語コミュニケーションの価値」と題して、授業の中で使うネームプレートの活用方法とその効果について発表した。５０名の参加者で行った。
・奈良学園小学校：安全教育授業	平成２８年６月	奈良学園小学校の全児童を対象に、安全教育の授業を２日間に分けて行った。小学校１．２年生を対象に行った「あんしんしてとうげこう」では、集団で登校することによる防犯上の利点について理解できる授業を行った。３，４年生を対象に行った「ここは安全？危険？」では、安全マップの前段階ともいえる、防犯の視点形成の授業を行った。５，６年生を対象に行った「命の学び」では、国立教育政策研究所の「いじめ実態調査」の資料をもとに、いじめに関する授業を行った。
・奈良学園登美ヶ丘（幼・小・中・高）：教職員安全研修　講演	平成２８年６月	奈良学園登美ヶ丘キャンパスの幼稚園から高等学校までの全教員対象の研修会で、９０分間の講演を行った。タイトルは「学校安全の意識」とし、前職であった大阪教育大学附属池田小学校における事件の教訓をもとに、教職員の不審者対応訓練の方法や意義、また、安全教育などについて話した。

・教職員自主研修事業　大学・専修学校等オープン講座　講演	平成２８年７月	「事件・事故・災害の教訓から考えるこれからの学校安全と安全教育」と題し、９０分間の講演を行った。とくに連れ去り事件に焦点を置き、安全教育を実践する際の視点の置き方について話した。また、年代別防犯の方法について、幼・小学校低学年、小学校中学年、そして小学校高学年・中学生と、年代別にわけて提案した。
・免許更新講習　講師	平成２８年８月	保・幼稚園教諭を対象とする免許更新講習で、90分の講義を担当した。「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実を考える」というテーマで行い、「表現領域（美術）」を担当した。図画工作科教室において、保育内容を充実させる授業内容をグループで考案し、ポスターセッションを行って実践例を共有する活動を行った。
・三郷町立小学校２校合同研修会　講師	平成２８年８月	三郷町立三郷小学校と三郷北小学校が合同で行う、合同不審者侵入対策訓練において、訓練実施後の講評と講演を行った。講演では、事件の教訓に基づいた学校安全対策について、校門のセキュリティーやIDカードの意味について、具体的に必要な学校安全対策について話した。
・日野町立西大路小学校　安全研修会講師	平成２８年８月	日野町立西大路小学校における不審者対応訓練の指導講評をおこない、その後講演を行った。訓練は地元警察官が不審者役となり、臨場感あふれる訓練だった。講演では「事件の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」と題し、教員が意識すべき３つの「死角」（場の死角、地元住民の死角、学校教育の死角）について話した。
・大阪府立枚方高等学校　模擬授業	平成２８年１０月	高校２年生の、教職に関心をもつ学生およそ３０名に、「子どものいのちと教師の役割」と題して５０分間の模擬授業を行った。事件を教訓にして学校安全を考えていくことの大切さや、学校の安全を守ろうと奮闘してきた教師の姿について話し、安全教育の実践事例について、高校生も自らが考え、意見を交流することができる方法で模擬授業を行った。
・甲賀市立大原小学校安全研修講師	平成２９年１月	甲賀市立大原小学校の教員安全研修会において、「防災教育をどうすすめるか」のタイトルで講演をおこなった。これまでの安全教育の想定やセオリーを見直し、児童生徒や地域の実態に応じた防災教育の必要性について話した。とくに避難訓練のありかたと有効性について話題にした。
・奈良県立大宇陀高等学校　模擬授業	平成２９年２月	高校２年生の、教職に関心をもつ学生を対象に、「子どものいのちと教師の役割」と題して５０分間の模擬授業を行った。事件を教訓にして学校安全を考えていくことの大切さや、学校の安全を守ろうと奮闘してきた教師の姿について話し、安全教育の実践事例について、高校生も自らが考え、意見を交流することができる方法で模擬授業を行った。
・熊本県益城町立広安西小学校　PTA対象　講演	平成２９年４月	熊本地震が発生した平成28年4月14日（前震）の前日である4月13日の放課後に、甚大な被害を被った益城町の小学校ＰＴＡを対象に、「子どもの命を守る大人の役割」と題した講演を行った。

・熊本県益城町立広安西小学校　防災教育授業	平成２９年４月	平成 28 年 4 月 14 日（前震）に発生した熊本地震からちょうど 1 年のこの日（平成 29 年 4 月 14 日）、甚大な被害を被った益城町の小学校で、児童対象に防犯・防災教育の授業実践を行った。低学年対象では、自分たちを守ってくれているものや人について改めて認識し、安心感を生む授業を行った。中学年には東日本大震災における「釜石の奇跡」を題材に、避難訓練の有用性に関する授業を行った。高学年避難訓練の有用性に関する授業を行った。高学年対象としては、阪神淡路大震災における被災者の数から、命の尊さに結びつけて考える授業を行った。
・奈良県立西の京高等学校　キャリア教育　講師	平成２９年５月	教職を志す高校生約 30 名を対象に、「子どもの命と教師の役割」と題して講義を行った。過去に発生した略取・誘拐事件を題材に、アクティブ・ラーニングの授業スタイルで、個人の思考から対話の中での思考の深化、表出を意識した授業を行った。
・奈良学園小学校：安全教育　講師	平成２９年６月	奈良学園小学校の全児童を対象に、安全教育の授業を２日間に分けて行った。小学校１年生を対象に行った「あんしんしてとうげこう」では、集団で登校することによる防犯上の利点について理解できる授業を行った。３年生を対象に行った「こんなときどうする？」では、安全マップの前段階ともいえる、防犯の視点形成の授業を行った。５年生を対象に行った「いのちを守る判断」では、国立教育政策研究所の「いじめ実態調査」の資料をもとに、いじめに関する授業を行った。
・高槻市立郡家小学校：学校安全研修　講師	平成２９年７月	「事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」として、当小学校の教職員夏期研修会で話した。 学校で発生した児童が被害に遭う事件を教訓に、学校安全の方法について話し、またそれらを教材にした安全教育の授業題材や授業方法、教授法について話した。
・大阪市　資質向上研究会　講師	平成２９年７月	「事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」として、大阪市の教員、管理職で構成される資質向上研究会で 3 時間の講演を行った。 学校で発生した児童が被害に遭う事件を教訓に、学校安全の方法、管理職の役割について話し、またそれらを教材にした安全教育の授業題材や授業方法、教授法について話した。
・教員免許更新講習　講師	平成２９年８月	「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実を考える　－幼児期における造形表現活動の意義と役割―」 保育、幼稚園教諭の教員免許更新講習の講師として、40名を対象に講義を行った。保育内容の5領域と「表現」領域の関連性について講義を行い、その後、アクティブ・ラーニングとして、グループで造形活動実践の計画、ポスター作成、ポスターセッションを行った。
・三郷町立小学校 2 校合同研修会　講師	平成２９年８月	本年度は三郷北小学校において、合同不審者対応訓練が行われ、その指導助言に赴いた。 訓練は、安全担当者により周到に準備されたものだった。訓練後、学校安全における「教師の役割」について話した。

・生駒地区小中学校管理職・事務職員研修会　講師	平成２９年９月	「学校での事故・災害など、緊急事態に対する対応と予防」について、生駒地区の小中学校の管理職と事務職員に講演した。これまでの学校での事故や災害を例に挙げ、発生いたとき、あるいは予防方法について、教師の役割、管理職の役割について話した
・第 67 次兵庫県教育研究集会（ひょうご教育フェスティバル）　指導助言	平成２９年１１月	西宮市で開催された本研究会で、「生きる力を育む教育」分科会の指導助言に行った。当分科会では、主に震災に関連した発表が多くあり、震災関連教育については、今後、児童生徒の生きる力としての「レジリエンス」の重要性について話した。
・北海道の子育て、教育を支援する会　講演	平成３０年７月	北海道の子育て、教育を支援する会が主催する講演会、ワークショップにおいて、講師を務めた。午前の部は講座１として、「どうすれば子どもたちの命は守れるのか」と題し、９０分の講演を行った。そこでは、過去における事件、事故、災害を教訓として、学校安全、安全教育の生かす必要性と、その実践方法について講演した。午後は講座２として、実際に安全教育のプログラムをグループで考案し、ポスターセッションで交流した。
・大阪市中堅教員研修　講師	平成３０年７，８月	大阪市の中堅教員研修の講師として、3回（延べ６００人）を対象に学校安全、安全教育に関する講演を行った。「事件、事故、災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」について、実際の事件や災害の実例を紹介しながら、どうすれば防げたのか、学校ではどのような対応が必要だったか、という、中堅教員がこれから出会うであろう課題を想定して講演した。
〔招待講演〕 ・カンボジア王国　王立プノンペン大学　講演	平成３０年９月	カンボジアの日本人会による企画において招へいを受け、王立プノンペン大学において９０分の講演を行った。「日本における学校の安全と安全教育」と題し、およそ３０名のプノンペン大学生および教員に、日本の学校安全について話した。講演の中では質疑応答が活発に行われ、カンボジアと日本の文化、災害事情の相違などによる対策の方法の違いなどが確認され、双方において新たな知見が共有された。
・奈良市「子ども安全の日の集い」講演	平成３０年１１月	２００４年１１月に、奈良市内で発生した小１女児殺害事件に関して、奈良市が毎年開催している「子ども安全の日の集い」において、およそ３００人の教員、PTA、地域住民を対象に講演した。「子どもたちを守るために～危険個所を見える化するための一つの方策～」と出し、文部科学省の「登下校防犯プラン」に基づいて、集団下校の方法や見守り隊の役割について話した。
・大阪市幼稚園主任者研修　講師	平成３０年１２月	大阪市の幼稚園主任者研修において、およそ４０名の幼稚園主任教諭を対象に、「子どもの安全のために必要なもの」と題して９０分の講演を行った。とくに、近年の略取誘拐事件の実態について、統計を例に挙げて話し、大人（教員）は事前にどのような対策をとればよいのかについて提案した。
・奈良学園小学校　保護者対象講演会　講演	令和１年６月	奈良学園小学校の保護者を対象に、とくに入学後低学年段階における防犯意識の重要性と、家庭、学校における防犯教育の内容、方法について講演した。

・奈良市教育委員会　少年指導員委嘱式　講演	令和１年 6 月	奈良市では､2004年11月に発生した小１女児連れ去り事件以後、教員、地域ボランティア、保護者を対象に毎年300人程度の「指導員」を委嘱し、児童生徒の安全対策を依頼している。その委嘱式において、300人を対象に学校安全について講演した。
・大阪市教育委員会　中堅教員研修　講演	令和１年 7 月	大阪市の中堅教員研修の講師として、３回（延べ６００人）を対象に学校安全、安全教育に関する講演を行った。「事件、事故、災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育」について、実際の事件や災害の実例を紹介しながら、どうすれば防げたのか、学校ではどのような対応が必要だったか、という、中堅教員がこれから出会うであろう課題を想定して講演した。
・宝塚市教育委員会　現職教員研修会　講演	令和１年 8 月	宝塚市の現職教員研修回において、学校安全と安全教育について講演した。参加者が幼稚園教諭、小学校教諭、及び管理職と多岐に渡ったため、それぞれの発達段階に合わせた内容で講演した。
・令和元年度教員免許更新講習（保育士・幼稚園教員対象）講師	令和１年 8 月	「子どもの育ちを踏まえた保育内容の充実を考える　－幼児期における造形表現活動の意義と役割―」 保育、幼稚園教諭の教員免許更新講習の講師として、40名を対象に講義を行った。保育内容の5領域と「表現」領域の関連性について講義を行い、その後、アクティブ・ラーニングとして、グループで造形活動実践の計画、ポスター作成、ポスターセッションを行った。
・吹田市教育委員会　校長会研修　講師	令和１年 10 月	吹田市の校長会の研修で講演を行った。校長ということもあり、学校安全における学校長としてのリーダーシップと役割について、熊本地震における実践例などを取り上げて講演した。
・奈良市教育委員会　「子ども安全の日の集い」講演	令和１年 11 月	２００４年１１月に、奈良市内で発生した小１女児殺害事件に関して、奈良市が毎年開催している「子ども安全の日の集い」において、およそ３００人の教員、PTA、地域住民を対象に講演した。「子どもたちを守るために～危険個所を見える化するための一つの方策～」と出し、文部科学省の「登下校防犯プラン」に基づいて、集団下校の方法や見守り隊の役割について話した。
・奈良市教育委員会　「ストップいじめ　なら子どもサミット」講師	令和２年 2 月	奈良市が取り組んでいる「ストップいじめ　なら子どもサミット」において、２１校の中学校の代表生徒が3回集まり、デスカッションを行う上でコーディネーターを務め、2月のサミットで最終公演を行った。
５　その他 特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 （1）小学校教諭一種免許状 　　平８小一第２３７８号	平成９年３月	大阪府教育委員会
2　特許等 　特記事項なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 大阪教育大学附属池田小学校教諭 ・図画工作科主任 ・第６学年主任 ・第４学年主任 ・第２学年主任 ・学校安全主任 ・学校安全主任 ・図画工作科主任	 平成１７年度 ～平成２１年 度 平成２１年度 平成２２年度 平成２３年度 平成２２年度 平成２３年度 平成２５年度	 大阪教育大学附属池田小学校における、主たる校務分掌を記した。着任後すぐに、５年間図画工作科主任になり、教科論を記した。また、その後４年間学年主任の業務においては、新任指導も含め、円滑な学年経営に努め、成果を残してきた。学校安全主任は、当該校の要とも言える。その任に就き、学校安全の推進、保持、発信、また、安全教育の推進と、責務を果たしてきた。
4　その他 「研究助成」 1．下中科学研究助成（研究代表者） 『安全教育の実効性とその客観的効果の測定に関する研究』 2．科学研究費補助金　奨励研究（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『児童の発達段階に応じた安全教育プログラムの開発に関する実証的研究』 （研究課題番号２２９０８００５） 3．日本教育弘済会教育論文　奨励賞受賞 『安全教育のレリバンスに関する研究』 4．科学研究費補助金　奨励研究（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『安全教育のレリバンスに関する実証的研究』 （研究課題番号２６９０８０４０）	平成２２年４月１日～平成２３年３月３１日 平成２５年４月１日～平成２６年３月３１日 平成２５年３月 平成２６年４月１日～平成２７年３月３１日	安全意識調査を行ったとき、安全学習を実施したクラスの児童と実施していないクラスの児童では、回答結果に差異が生じる様相が見られた。この差異は、感覚的には感じてはいても、実証的に研究された事例はない。本研究においては、１年生から６年生までの児童の安全学習履歴と安全意識、けがや事故の状況を調査することにより、その差異を明らかにすることによって、安全教育の必要性と価値に実証性を持たせることを目的とした研究。 安全教育における、発達段階についての研究はまだ未開発である。しかし、発達段階を考慮しなければ、真に効果的な安全教育はなされない。本研究では、公立小学校の協力校等で授業実践を行い、そのデータをもとに、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムを作成することを目的とする。 大阪教育弘済会の教育論文に応募したところ、個人部門で上部団体の主催する日本教育弘済会の教育賞に推薦され、奨励賞を受賞した。 １つの授業を低、中、高学年で実施し、安全教育と児童の発達段階の妥当性を検証した論文である。 これまでの安全教育の現状と課題として、小学校６か年というスパンにおける、児童の学齢の差異を考慮した安全教育プログラムの開発がされてこず、避難訓練や「いかのおすし」に代表される標語的用語などによる安全指導内容が見直されてこなかった。また、日常の山積する課題対応に追われる多くの公立学校において、年間で実施可能で、かつ有効な安全教育プログラムの開発がされてこなかった。ことが考えられる。これらのことから、安全教育内容の有効性の検証と開発・児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証・年間で実施する安全教育プログラムの開発が、緊急の課題と言える。これらを、『安全教育のレリバンス(妥当性)』と総称し、授業実践から実証的研究を進め、有効な安全教育の発展と頒布に寄与しようとするものである。

５．ＪＲ西日本あんしん財団研究助成（研究代表者） 「児童の発達段階を考慮した『有効な』安全教育プログラムの構築に関する実証的研究」	平成２７年４月１日～平成２８年３月３１日	これまでの研究として、「安全教育の有効性とレリバンスに関する実証的研究～大阪教育大学附属池田小学校『安全科』の実践から～」として、防犯概念・防犯スキル・自然災害・交通安全の各カテゴリにおける、児童の学齢と安全教育内容のレリバンス(妥当性)について研究を進めてきた。その中で、申請者が考案した「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会誌（第３巻第１号）P62-66 2010　松井)を用いて実践、検証した結果、学年に応じた有効な安全教育内容が明らかになってきた。しかし、その研究の中で新たな課題が見えてきた。そこで本研究においては、安全教育内容の有効性の検証と開発・複数小学校を対象にした児童の学齢による安全教育内容の有効性の検証・児童、教職員、学校に応じた安全教育プログラムの開発を行う。これらを授業実践から実証的研究を進め、有効な安全教育カリキュラムの開発と頒布に寄与しようとするものである
６．科学研究費補助金　基盤研究Ｃ（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『小学生の学年に応じた安全教育プログラムの開発』 （研究課題番号１６ｋ０４７９１の研究代表者として、研究分担者１名体制で研究を率いた）	平成２８年度～平成３０年度	本研究は、小学校６ヵ年というスパンにおける小学生の学年を考慮し、低・中・高学年それぞれにおいて、その学年に妥当で有効な安全教育プログラムを開発することを目的とするものである。これまでの安全教育は、全学年同時に行う避難訓練や、「いかのおすし」に代表される標語的用語が中心であり、果たしてその安全教育内容が、小学生の、その学年に妥当であり有効なものなのかという検証はされてこなかった。そこで本研究では、これまでの事件や災害で失われた幼い命が残した教訓を生かした教材開発を行い、その妥当性と有効性を調査、検証し、全国の学校において実施可能な、有効で汎用性の高い安全教育プログラムを開発する。本研究は、安全で安心な社会の構築の一助となることはもとより、児童の命を守るための研究である。
７．科学研究費補助金　基盤研究Ｃ（研究代表者） 独立行政法人日本学術振興会 『「有効性」と「持続性」を持つ包括的な学校安全プログラムの開発』 （研究課題番号 19K02694 の研究代表者として、研究分担者１名体制で研究を率いている）	令和１年度～	本研究は、学校や児童生徒の安全において「有効性」を持ち、「持続性」を持って取り組まれる、「包括的な学校安全プログラム」を開発す ることを目的とする。これまでの学校安全に関する取組や研究は、事件や事故、災害が発生し、社会的な要求が高まった時期に進められてきた 。内容に関しても、社会的な関心や要求に呼応して取組まれ、南海トラフ地震への強い関心から防災教育への傾倒が見られる。そして防犯や交 通安全への取組や研究は、変わらず重要な役割を担うにも関わらず、包括的な学校安全に関して継続的に取組まれていないという課題がある。 要因として、これまでの学校安全に関する取組や研究が、学校や児童生徒の安全にとって「有効性」を持っていたのかという検証がされてこず 、成果の曖昧さから「持続性」を持って取組まれてこなかった。本研究は、それら課題を追究し、安全で安心な学校・社会の構築と、児童生徒 の命につながる研究にしていく。
「海外視察」		
・台湾：台中教育大学教育国際シンポジウム	平成２４年１１月	台中教育大学において開催された教育国際シンポジウムに参加し、台中教育大学、及び屏東教育大学を視察した。
・カンボジア：メコン大学	平成２６年２月	奈良学園大学人間教育学部生および看護医療学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。
・カンボジア：メコン大学	平成２７年３月	平成２６年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。

・カンボジア：メコン大学	平成２８年３月	平成２７年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。
・ベトナム　ダナン市	平成２８年８月	ベトナムにおける洪水災害に関して、ダナン市教育訓練局、ダナン市立小学校、ダナン師範大学、防災リスク管理局を訪問、視察した。
・カンボジア：メコン大学	平成２９年２月	平成２８年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。
・カンボジア：メコン大学	平成３０年２月	平成２８年に引き続き、奈良学園大学人間教育学部生を引率し、メコン大学との交流を行った。
「教員採用試験対策」 ｎａｒａｇａｋｕ　ＧＴの結成と代表	平成２８年２月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の取り組みとして、２０１８年度の教員採用試験対策グループを構成し、日々、試験対策、面接対策に取り組んでいる。また、採用試験対策のみならず、息の長い教員を育てるという目的を持って取り組んでいる。 平成 30 年度教員採用試験においては、奈良学園大学 1 期生において、21 名の最終合格者を出した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) １．学校安全　３６のナラティブ	共著	平成２６年３月	教育出版	子供たちの命を守り、安全で安心できる生活のために、学校は何ができ、また、何をすべきかという命題のもとに、学校安全に関わる著者陣が原稿を寄せてできた本。この安全・安心に関する問いかけに対しては、すでに多くの解説書や教材集、マニュアル本等が刊行されている。しかしそれらは、ともすれば上からの押し付けのような論が多い。そこで本書では、各著者が「私はこう考えている」「私はこんな体験をした」という、お話風の「語り（ナラティブ)」として編集された。 Ｂ５版　全１５７頁 編者：長尾彰夫 共著者：小林忠三・浜條信彦・松井典夫・若狭孝太郎・神田英幸・前馬晋策・丸山涼子・植木美佳・砂田信夫・中井尚人・佃繁・松田智子・伊原正俊・藤田大輔・諏訪清二・村川雅弘・立田慶裕 本人担当部分 「スリッパとＩＤカード」(pp14-15）を単著 概要 校内に配備された多数の防犯ブザー，赤外線システム，玄関の二重扉，可視性を重視した透明度の高い校舎。それらはお金がかかるものである。しかし,「お金がかからない学校安全」は，見落としていることがたくさんある。そこで本項では、スリッパや ID カードの重要性、他にも，職員室の机上（可視性・校内安全に対する雰囲気)，教室の机の物かけ（いざという時の弊害),教室の窓側のロッカーの上(可視性･安全性),放送の使用方法(緊急時の連絡が可能か),安全マニュアルの見直し（実現可能性・教職員の安全意識)，教職員の訓練の実施（子どもたちの安全・教職員の安全意識）などを紹介し、見落としがちな学校安全の重要性について書いた。 「安全な公園は危険な公園？」(pp18-19）を単著 概要 危険予知力と危険回避力は，矛盾することもあるということについて、入り口が一つの公園と、入り口が二つある公園の安全性比較から書いた。「危ないな」と感じると同時に，子どもは自分の身を守る方法も考える。例えば，路上駐車の車があり，まわりに人がいないとき,「車の陰から人が出てきたら」や「車に連れ込まれたら」と考えるのが危険予知であり，その車から離れて歩いたり，とっさに道を変えるのが危険回避である。ここに矛盾はないが、公園の例の場合,「逃げる」という

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				意識(危険回避)が優先してしまうのである。 「わるい人とはどんな人？」(pp25－27) を単著 概要 　こんな人が悪い人だという答えは，どこにもなく。こんな人を見たら，すぐに逃げましょうと教えることも，するべきではない。既成の概念を崩し，正解がないことを知り，それでも行動しなければならないことを知り，今，教室で頭を振り絞って考えておくことが大切なのである。その思考と体験の蓄積が，「最も適切な行動」を生み出す礎になると考える。「知らない人にはついていかないようにしましょう」と，指導することは，果たして子どもたちの安全を保障する教えなのだろうか。「この行動が安全だ」と教えるだけでは，逆に不安全な結果を招く可能性もある。ただ対処する方法を教えるだけでは，安全を生み出す力に結びつかないばかりか，その方法は，果たして正解だと，断言できるものではない。既成の概念や教えを正しいと思い込むことの怖さを書いた。 「いかのおすしとおはしも」(pp48－49) を単著 概要 「いかのおすし」や「おはしも」に代表される、安全標語は、どれも大切なことだが，その一方で、どれも子どもたちは，当たり前に「知っていること」である。そして、「いかのおすしを指導したから安全だ」「いかのおすしを思い出せば安全だ」「いざというときには，いかのおすしが役に立つ」という考えを持つ。しかし大切なのは，「ついていかない」という指導ではなく，「知らない人ってどんな人」かを学習し，思考し，判断材料を蓄積することである。「大声を出す」と指導するのではなく，大声を出すことの難しさを体験，実感させることである。「何かあったらすぐ知らせる」と言葉を覚えさせるのではなく，どのタイミングで，どこに，どんな方法で知らせるのか，考え，体験することである。安易に「言葉」だけで指導するのは，逆に「不安全」を生み出す可能性があるということについて書いた。 「休み時間に地震が起きたらどうしよう」(pp54－57) を単著 概要 多くの学校園での避難訓練は，「2 時間目の授業中」という想定で行われる。実施時期にしても同様で，1 月に避難訓練をしていると，「今年は 7 月にやってみよう」とはなかなかならない学校現場の現状がある。そこでここでは，休み時間に地震が起こることを想定した学習と，実際の休み時間の避難訓練の取り

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				組みについて紹介した。児童に予め、休み時間に遊ぶ場所と、もしもそこで地震が発生したら、どのように避難するかを想定させ、避難訓練で検証する授業を紹介した。児童はその時、予め想定した行動とは違う行動をした児童がいた。それが正解かどうかは結果しか物語らないが、とっさに判断をする体験の積み重ねの重要性を書いた。 「いろいろな不審者対応訓練」(pp62－65) を単著 概要 これまで，いろいろな学校で不審者対応訓練の講師を務めてきたが、その中で,「この学校は素晴らしい！」と思えたのは，数少ない。それだけに，校内で行う不審者対応訓練は難しく，また，その難しさに気づいていない学校が多いように感じられる。本項では、小中４校での訓練の様子と実態を紹介し、そこから、不審者対応訓練の困難性と必要性について述べた。 「火災現場に戻らない､は正解か」(pp74－77) を単著 概要 　火災現場に「戻らない」というのは，命を守る上で大切なことである。しかし，絶対に戻ってはいけないのだろうか。本人の判断で戻り，大切な命を救った人もいる。ここでは，災害現場での葛藤と判断を体験する授業について書いた。安全指導は，セオリーを教え込みがちである。そのセオリーが現場で，いざという時に大いに知識として役立つことだろう。しかし安全学習は，その時，その場に応じて知識や体験を活用し,「最も適切な判断をすることができる力」を育むことである。その力は，単なる知識ではなく，様々な場面で臨機応変に対応することができ，子どもたちの，生涯にわたる安全・安心を保障していくものであるということを、火災現場での葛藤を考えさせる授業を例にして書いた。 「命のバイスタンダーの授業から」（pp82－87）を単著 概要 「命は大切」なことは，誰もが言い，誰もがわかっていることである。しかし，実体のない命に対して、それは本当に実感できるものではなく、子供たちにとってはなおさらである。そこで子どもたちに，命に触れることの怖さ，命に対する畏れを感じさせることによって,「命の大切さ」の実感を育むことを目的とした,『命のバイスタンダー』の授業を考案し，実践した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「溺れかけた兄妹を教材にして」（pp108－111）を単著 概要 有島武郎の自伝的短編『溺れかけた兄妹』を題材にした、水難災害の授業を紹介することから、助けたいという「道徳的心情」と，二次災害の恐れとの狭間に生じた葛藤、そこから学ぶものについて述べた。児童の授業の中での言葉に、「その時になってみないとわからない。」という言葉があった。この言葉は，授業の中で判断し，自分の立場を明らかにすることができず，その場しのぎの言葉のように聞こえる。しかし，波の高さ，周りの状況，大切な人を助けたいという，その場の切迫した状況。それらが相互作用し，判断するのだという臨場感を子どもたちが感じていたからこその言葉であったように感じられ、子どもたちは，安全な行動と，命を守りたいという心情の間の葛藤を「実体験」したのであり、そこに安全教育で大切な、実体験からくる学びの大切さについて書いた。
２．教育フォーラム５６ 「アクティブ・ラーニングとは何か」	共著	平成２７年８月	金子書房	本書は、アクティブ・ラーニングのために必要な、課題意識の喚起のさせ方、多様な発想・アプローチへの目の開かせ方、粘り強い課題取り組みへの支援、課題解決の結論の検討や再吟味の促しといった、さまざまな働きかけ、指導の実際を具体的に提示したものである。 Ａ５判　全１６９ページ 共著者（執筆順）：溝上慎一、加藤明、伊崎一夫、鎌田首治朗、前田洋一、岸周吾、芝池宗克、米川雅士、武谷嘉之、松井典夫、瀧明知恵子、井上信子、梶田叡一 本人担当部分：「児童にとって『有効な』安全教育プログラムに関する一考察」（pp.１０５－１１４）を単著 概要 安全教育の課題として、何よりも児童の発達段階を考慮した、体系的な安全教育がされてこなかった。発達段階を考慮し、最も「有効」な安全教育カリキュラムを構築することが、これからの安全教育にとって必要不可欠である。そこで本稿においては、児童の安全に対するレリバンス Relevance（知識・技能・行動・情緒面における妥当性）を検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築する研究成果について記述した。
３．どうすれば子どもたちのいのちは守れるのか －事件・災害の教訓に学ぶ学校安全と安全教育	単著	平成２９年２月	ミネルヴァ書房	本書は，著者が、大阪教育大学附属池田小学校において、同僚とともに実践してきた不審者対応訓練や ID カード等による学校安全対策，様々な「いのちの教育」の授業の事例などを通じて，これまで当たり前とされてきた「安全」についての考え方や方法を根本的に見直し，これからの学校安全と安全教育のあり方をさぐることを目的とした書である。そ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				の中で、学校の安全を担う教師の役割、職責、使命感、資質能力について記述した。 Ａ５判　全２１６ページ
４．教育フォーラム　６０ 「深い学びのために－アクティブ・ラーニングの目指すもの」	共著	平成２９年８月	金子書房	アクティブ･ラーニングの中で提唱される「深い学び」については、一定の教授・学習活動のパターンに関わるものではない。本書では、どのようにすれば「深い学び」になり、実現できるのかを、具体的、かつ実践的な提案で記している。 Ａ５判　全１４５ページ 共著者（執筆順）：梶田叡一、古川治、鎌田首治朗、伊崎一夫、湯峯裕、大畑健美、菅井啓之、後藤紗貴、金山憲正、石森広美、善野八千子、瀧明知恵子、岡村季光、松井典夫 本人担当部分：「震災における教師の役割を考える」（pp.１２５－１３４）を共著（岡村季光、松井典夫） 本稿は、近年における地震活動の活発化から、避難所としての学校の役割に注目した。また、その中で教員の活動について、教員における多忙感、内的統制感と諸変数の関係について実証的に論及した。また、そこから、学校が平時から地域とのコミュニティーを強固にしておくことの有効について述べた。
５．教師のための教育法規・教育行政入門	共著	平成３０年３月	ミネルヴァ書房	本書は教職入門、教職概論、教職行政論、教員採用試験対策のテキストを目的として著述された。初学者にむけて学校教育のしくみを法的に理解できるよう、事例などをまじえ具体的に解説している。また、巻末に「主な教育法規」を収録した。 Ａ５判　全２１０ページ 共著者：古川治、五百住満、八木眞由美、今西幸蔵、松井典夫、藤本裕人、藤田敏和、冨江英俊、中村豊、岡邑衛 本人担当部分：「教育職員免許法」（pp.１４－１５）を単著 概要 学校の教員になり、学校で授業を行うには、教員免許状が必要である。教員免許状を取得するには、教職課程のある大学等で、必要な科目及び単位を修得し、各都道府県教育委員会に教員免許状の授与申請を行うことが必要である。本稿では、教員免許状の種別と効力、教員免許制度における原則や欠格事由について述べた。 本人担当部分：「校務分掌」（pp.３８－３９） 概要 学校はひとつの組織体である。校務とは、その組織体としての学校が、教育目標を達成するために、学校全体で行うべき業務全体のことであり、組織的、効率的、かつ調和的に行われなければならないものである。本稿では、校務と教員の勤務実態について、OECD 国際教

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				員指導環境調査（TALIS2013）に基づいて記述するとともに、校長の責任と権限について記述した。 本人担当部分：「校長と教諭の職務」（pp.４０－４１）を単著 概要 一般的に「教員」「教職員」「教師」と様々な呼称があるが、「教師」という用語だけは法令用語ではない。そして、「教職員」と呼称する場合は教員と事務職員、学校医等も含めている。また、本稿で取り扱う「教諭」とは、教職員の中の「職種」あるいは職階の呼称である。本稿では、教職員の職種とその職務内容の概略、それらを示す根拠となる条文を挙げるとともに、校長と教諭の職務について、過去の判例を挙げながら記述した。 本人担当部分：「司書教諭の職務」（pp.４２－４３）を単著 概要 平成 9 年の学校図書館法の一部改正により、「学校図書館の専門的職務を掌らせるため」（学校図書館法第 5 条の１）、12 学級以上の学校には司書教諭を置くことが義務付けられた。本稿では、学校司書と司書教諭の役割や職務について記述し、また、これからの学校図書館の果たす役割について、アクティブ・ラーニングと関連付けて記述した。 本人担当部分：「教員免許の更新制」（pp.１０８－１０９）を単著 概要 これまでは、教員免許状に効力の期限はなく、いったん免許を得れば恒久的にそれを保持することができた。しかし、平成 19 年の改正教育職員免許法の成立により、平成 21 年 4 月 1 日から、教員免許更新制が導入され、教員は免許更新講習を受講しなければ、教員免許を保持することはできないこととなった。本稿では、教員免許更新制度の意義と、その講習について述べた。 本人担当部分：「学校保健・安全と法規」（pp.１５２－１５３）を単著 概要 本稿は第 6 章「学校保健・安全と法規」の扉文となる稿である。まず近年の学校教育を取り巻く学校保健・安全に関する諸問題について概観し、学校保健・安全に関する学校教育の方向性について、世界保健機関（ＷＨＯ）のオタワ憲章や、過去の事件や交通事故を例に挙げて述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：「学校保健安全法」（pp. １５４－１５５）を単著 概要 学校保健安全法（以下、同法）は、学校保健法が改正され、平成 21 年 4 月 1 日から施行された。本稿では、改正された点について、「学校保健」と「学校安全」について分類して解説し、学校保健については「学校保健計画の策定」と、「学校環境衛生基準」について、また学校安全については「学校安全計画」について解説した。 本人担当部分：「安全点検と安全教育」（pp. １５６－１５７）を単著 概要 本稿ではまず、学校安全における現状と課題として、学校でのけが、登下校中の交通事故と略取・誘拐事件、そして災害については南海トラフ地震等への備えについて解説した。そして安全点検の方法について述べ、安全教育による児童生徒の危険予知や危機回避力の育成について解説した。 本人担当部分：「災害安全・防災教育」（pp. １５８－１５９）を単著 概要 本稿では、まず近年の災害に関する現状について、阪神淡路大震災（平成 7 年）、新潟中越（平成 16 年）、中越沖地震（平成 19 年）と甚大な被害をもたらした震災を例に挙げ、平成 23 年に発生した東日本大震災については、津波や福島第 1 原子力発電所事故など、様々な災害をもたらし、また、学校管理下において発生した地震であることから、改めて多くの課題を認識することとなった経緯について解説した。その対策として、文部科学省の資料「学校防災マニュアル（地震・津波災害）作成の手引き」に基づいて、防災マニュアルの作成について解説した。 本人担当部分：「養護教諭の職務」（pp. １６０－１６１）を単著 概要 近年、様々に移り変わる社会状況等の変化に伴い、児童生徒等の健康に関する諸問題について、様々な課題が生じている。学校保健については、ストレスによる心身の不調などメンタルヘルスに関する課題や、アレルギー疾患を抱える子どもへの対応に当たって、学校において子どもの状況を日々把握し、的確な対応を図ることが求められている。その上で重要な役割を担う養護教諭の職務への期待や具体的な内容について解説した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：「学校事故と国家賠償法」（pp.１６２－１６３）を単著 概要 一般的に学校事故とは、「学校の管理下における児童生徒等の災害」（独立行政法人日本スポーツ振興センター法第15号第1項第七号）のことを指す。学校事故は、基本的には安全管理を徹底し、安全教育を実践していくことによって、未然に防止されることが望まれるが、それでも学校現場においては、不測の事態が発生し、事故が起こる場合が考えられる。本稿では、学校事故と損害賠償について、民法と国家賠償法の両面から解説した。 本人担当部分：「食育基本法」（pp.１６４－１６５）を単著 概要 食育基本法は、平成17年7月に施行された。本法の成立背景には、我が国における飽食の時代ともいえる時代背景から、「食」を大切にする心情や態度の欠如が危ぶまれていること、また、偏食や不規則な食生活、肥満や生活習慣病（がん、糖尿病、脳卒中など）の増加などがあげられる。本稿では、本法の体系を整理して解説し、また、食育推進基本計画についても解説した。 本人担当部分：「学校給食法」（pp.１６６－１６７）を単著 概要 学校給食とは、同法第3条第1項、第2項において、義務教育諸学校（小学校、中学校、義務教育学校、中等教育学校の前期日程、特別支援学校の小、中学部）において、その児童生徒に対し実施される給食をいうと規定されている。本稿では、学校給食の意義と役割について解説した。
６．３年目教師　勝負の図工授業づくり	編著	令和１年7月	明治図書	本書は図工科指導法のテキストを目的として、また、新任から3年目の教師をターゲットに、図工における有効な実践と、教師力向上を目的として著述された。改訂学習指導要領とも対応させ、カリキュラムマネジメント、ICT の活用、チームとしての学校等を関連させて授業実践ができるように構成した。 Ａ５判　全127ページ 編著者：松井典夫 共著者：松井典夫、森治健太
７．2019 年改訂　新学習指導要領　記入文例集」	共著	令和２年2月	文溪堂	監修：梶田叡一、編著：古川治、南山晃生、共著者：今宮信吾、盛田恭平、長野純子、松井典夫、椿井大輔、五十川昌宏、龍神美和、西江なお子、瀧本哲弘　全159頁 担当部分： 低学年　各教科の学習に関する所見　図画工作、18頁－19頁を単著 中学年　各教科の学習に関する所見　図画工作、60頁－61頁を単著 高学年　各教科の学習に関する所見　図画工作、112頁－113頁を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
１.「安全科とInternational Safe School」	単著	平成２２年１２月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」ｐｐ１２－１７	大阪教育大学附属池田小学校研究誌「とごころ」の発刊にあたって、巻頭言を書いたものである。文部科学省教育課程特例校としての「安全科」の発足経緯と、教科としての安全科の意味、また、日本で初めてだったＷＨＯ International Safe School の認証の経緯とその意味を記述した。
２.『命の避難訓練』	単著	平成２３年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究協議会紀要ｐｐ３５－３６	本稿では、「命の重さ、尊さに対する実感を伴った避難訓練こそ、児童にとって必要な避難訓練である。命の避難訓練は、訓練事前の、災害に対する学習の深まりがあってこそ成立する」諏旨を書いた。実態調査では、児童の中で「火災」と「避難訓練」が結びついていないという結果を示し、そこから、スモークマシンによる煙体験による指導方法を提案した。
３．命の大切さの実感を育む「安全科」の授業『命の避難訓練』	単著	平成２３年６月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」pp24−27	本稿は、マンネリ化しがちな避難訓練について、本当に「命を守る避難訓練」になっているかを再考・提案する授業実践についての報告である。授業後の協議会で、児童が火災の中でも大切な命を助けに戻りたいと発言したことについて、「安全指導としては、戻ってはいけないと教えるべきだ」という意見が出されたことを例に、「安全指導」と「安全学習」の相違について述べた。
４.「自己変容の認識と非言語コミュニケーションツールとしてのネームプレートの活用」	単著	平成２３年１２月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」ｐｐ４８－４９	安全科の授業において、その客観的効果を測定するために、「安全安心様相図」（H22 松井）を考案した。授業の中で、安全安心様相図にネームプレートを置かせ、その変容を読み取り、安全教育の効果について測定することが目的だったが、ネームプレートを置く行為そのものが、児童の自己変容を認識させる有効な手立てだということがわかってきた。
５.『釜石の奇跡に学ぶ』	単著	平成２４年２月	大阪教育大学附属池田地区合同研究協議会研究紀要ｐｐ３５－３６	平成２３年度研究協議会で行った、公開授業指導案。小中高合同研究会で、安全科の授業を中学生に行うことにより、小中高連携をはかる目的で行った。実際に釜石市を訪れて教材研究を行い、「釜石の奇跡」を題材とした。日頃の避難訓練が自分たちの命を救ったというインタビューをもとに、「有効な避難訓練とは何か」を考えさせる授業を行った。
６.「安全指導と『安全を学ぶ』ということ」	単著	平成２５年９月	日本文教出版「教育情報」２０１３．No.３．巻末	本リーフレットは、日本文教出版が教育資料として発刊しているものであり、全８ページからなるものである。最終ページの「クローズアップ！　教育の現場」のコーナーの原稿を担当し、「安全指導」と「安全学習」の違いについて述べた。大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で実践した「命の避難訓練」の授業から、「おはしも」（押さない・走らない・しゃべらない・もどらない）という、これまで疑いも持たれず避難訓練時のセオリーとして通ってきた言葉を題材にし、想定にとらわれ、慣習にとらわれることの危険性について述べたものである。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７.『美術における「鑑賞教育」のあり方　～小学校図画工作に焦点を当てて～』	単著	平成２５年２月	週刊「教育ＰＲＯ」№１７１６　平成２５年２月５日号 ｐｐ６－１０	「美術鑑賞」という言葉から、どのような様子を想像するだろう。「鑑賞教育」とは何か。多くの学校の美術教室には、世界の有名絵画がポストカードになった、鑑賞カードがある。カードを鑑賞し、著名な芸術家の名前と作品を一致させることが鑑賞教育ではない。本稿では、小学校図画工作科における鑑賞教育のあり方について再考し、提案した。児童が新たな課題や素材に出会った時、そこから何を生み出そうとしているかという、「個の認識」の萌芽が見られる。それはまだ、イメージが具象化していない段階であり、自由闊達なものである。そして造形表現活動を始めた時、そのイメージは次第に具象化し、題材の具現化が始まる。この時、「個の認識」はいったん完結したように感じられるが、それは自己中心的なものであり、高次の自己認識とは言い難い。そこで鑑賞活動を取り入れる。例えば、個々の作品をグループで鑑賞し、意見を交流し合う。その時、思いの他、自らのイメージが伝わらない、あるいは具象化されていないことに気付く。鑑賞活動による他者評価は、妥協したり、曖昧だった認識を強化したり、高めたりするのである。
８．人間教育と美術の力－美術体験と学校教育－ Human education and The dynamic of Art －Art experience and education at schools－　　（査読論文）	単著	平成２６年４月	人間教育学会誌「人間教育学研究」創刊号ｐｐ８９－９５	図画工作・美術教育において、学習指導要領などに随所に現れる「自由」「創造的」「個性的」「喜び」という用語から教科としての特性と課題が見える。それらの用語は，図画工作・美術の他教科にはない特性を表すと同時に，捉えようによると教科としての「ゆるみ」に繋がりかねない。そこで本稿では、図画工作・美術教育の課題を歴史的背景から紐解くと同時に、図画工作・美術科が持つ教科としての特性を、鑑賞教育を中心とした特徴的な実践から論じた。
９．小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅰ ～ＩＣＴを活用した絵画教育の可能性～ Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education -Possibility of Painting Education Using ICT-	単著	平成２６年９月	奈良学園大学研究紀要第１集 ｐｐ１０９－１１５	戦後の美術教育史の中で、絵画教育が敬遠され、衰退してきた感は否めない。その理由として、絵画教育は、「上手」「下手」と２局的に、即時的に、そして結果的に評価されるため、授業者にとっても児童にとっても、それぞれの理由で積極的に取り組む関心・意欲・態度を逸してきたのだと考えられる。 そこで本稿では、新たな絵画教育の方法として、ＩＣＴ機器を活用した動画による鑑賞活動を取り入れた授業実践を紹介し、その授業の方法から、新たな絵画教育の方法や、美術教育の価値について論じた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０．小学校美術教育の方法と技術に関する実践研究Ⅱ ―　小中連携教育の意義と課題　― Practical Research of Methods and Techniques of Elementary School Art Education ― Significance and Problems of elementary and junior high education cooperation ― （査読論文）	単著	平成２６年１２月	人間教育学会誌 「人間教育学研究」 第２号 ｐｐ１２１－１２９	小学校と中学校の義務教育期における教育の役割は、人間教育の観点での土台を築くものである。その重要性から、学校教育活動は小学校と中学校の連携を念頭に置き、共に理解し、共に手を携えた教育を実践する試みが多くなされている。 本稿においては、大阪教育大学附属池田地区合同研究会における具体的な取り組みから、小中連携の課題と意義について考察した。 小中連携の意義とは、その実践を行った小学生の、中学校以降の学力、生活の様子、いじめの実態などの経年観察が必要であり、また、小中連携を行った学年とそうでない学年の比較研究、そして小中連携教育の方法面での効果の実証研究が必要であり、多岐にわたる。今後においては、協力校との連携を進め、小中連携教育の研究をさらに進めなければならない。
１１．学校安全・安全教育	単著	平成２７年１月	平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金（基盤研究(Ｂ)課題番号 24330254「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」研究成果報告書 「いのちの教育 カリキュラムモデルの開発と実践」 ＰＰ７７－９５	本稿は、平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書「いのちの教育－カリキュラムモデルの開発と実践－」の中の、第４章　学校安全・防災部会の報告、第１節学校安全（PP77-81）と第２節安全教育（PP82-95）の部分を単著したものである。主に大阪教育大学附属池田小学校における学校安全の取り組みや、「安全科」において取り組んだ安全教育の方法と実践内容について述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１２．児童の発達段階を考慮した安全教育プログラムの開発に関する研究　－「児童の安全意識尺度（SASC)」の開発に関する基礎的研究－ A study on the development of safety education program in consideration of the developmental stage of the children -Basic research on the development of “Safety Awareness Scale of Children (SASC)”-（査読論文）	単著	平成２７年１２月	人間教育学会 「人間教育学研究」 第３号 ｐｐ９７－１０６	本研究においては、より汎用性の高い安全教育プログラムの開発を念頭に、児童の発達段階を考慮した安全教育プログラムの開発に関する研究における、「児童の安全意識尺度（SASC)」の開発に関する基礎的研究を行うことを目的とした。そこで、「児童の安全意識尺度(SASC)」の開発に関する基礎的研究として、公立小学校の協力校に赴き、SACS を用いた事前調査、安全教育の授業、事後調査という流れで調査を進めた。安全教育の授業においては、低・中・高学年、それぞれで同一授業を行った。調査結果を質問内容に着目した考察と、授業時の児童の様子に着目した考察を行った。その結果、本研究で取り上げた実践例である「知らない人にはついていってはいけません」という教えを題材とした安全教育内容は、低学年が最もその妥当性が高いと見なすことが可能となった。
１３．学校安全の課題と展望に関する一論考～教訓と教材と教師について～	単著	平成２８年２月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要・雑誌「とごころ」 ｐｐ５６－６０	平成２７年７月に、奈良県香芝市で小学校６年の女児が誘拐された事件は世間を震撼させた。幸いにも女児の命は無事だったが、同じように突然の魔物に連れ去られ、無事ではなかった命を私たちは思い出す。2004 年の奈良小１女児殺害事件や 2014 年に発生した神戸女児遺体遺棄事件、2015 年の和歌山小５殺害事件など、これらの連れ去り事件では、未来のある小学生の児童が命を失うという、最悪の結末を迎えている。この、幼い大切な命を救うことはできなかったのか。防犯に関して、具体的な事件を想起しながら、教訓と教材と教師、という３つの視点で記述した。
１４．想像力と創造性を結合する美術教育の可能性 Possibility of education to combine the creativity and imagination （査読論文）	単著	平成２８年１２月	日本人間教育学会 「人間教育学研究」 第４号 ｐｐ５７－６３	国際競争を展開する教育政策は、科学技術と国民道徳の教育に傾斜していく中で、さらに学校教育費は恒常的な削減を繰り返し、芸術教科の授業時数は大幅に削減されていく。次の学習指導要領の改訂に関する答申では、特別の教科としての道徳の設置、英語教育の充実のための授業時数の増加、プログラミング学習の推進などが盛り込まれ、ますます芸術領域の存在場所が狭まっていく感は否めない。本稿では、その現実の中、アートの教育的意義を再発見、再確認することの急務を感じつつ、近現代のアート教育の実践を検証しながら美術教育が喚起する教育の可能性に接近することを目的とした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１５.「事件の教訓から学ぶ教師と学校安全　－池田小学校事件からの発信を視点として－」	単著	平成２９年１０月	特別課題研究「震災・学校危機と教師教育」研究報告集 「震災・学校危機の教訓から学ぶ　－希望ある未来のための理論化にむけて－」 日本教師教育学会 pp.１２７－１３４	児童が生命を脅かされ、あるいは失う事件、事故、事案は後を絶たない。そこで、過去の事件や災害の教訓は生かされているのかという問いが生じる。またそこに付随して、教訓とは何か、教訓を生かす方法とは何か、教訓を生かすのはだれかという問いについて議論を重ね、体系的に整理し、児童の命に結びつき生かされる教訓にしていくことが急がれる。そこで本稿では、今一度、池田小学校事件に立ち戻り、事件が残した教訓と、その後、附池小が発信した学校安全の取り組みを視点として、とくに教師が、それら教訓をどのように学校安全に生かしていくのかについて論考した。
１６.事件 ・事故・災害時における学校対応と児童の安全・安心に関する研究 A Study of school`s response to incidents ,accidents , disasters , and safety and security of children. （査読論文）	共著	平成２９年１２月	奈良学園大学人間教育学研究会 「人間教育研究」 第１号（創刊号） PP.55－71	これまで、児童生徒が被害に遭った事件・事故・災害において、その犯罪機会や動機、あるいは自己の発生原因や災害による被災状況については多く語られ、研究されてきた。本研究では、それら事件・事故・災害において、学校はどのように対応し、その対応は適切だったのかについて、過去の事例研究をもとに論考した。 著者／松井典夫・古田浩大・竹中遙一郎・中本将馬・池上紗耶・森高千晶・戸川理夏 本人(松井)は、本研究の企画、構成、授業実践、論文執筆を担当した。
１７.被災地小学校での絵画によるケアの実践 －熊本地震復興アートプロジェクトの児童と教師たち－ Practice of care by painting at elementary school in disaster area －Kumamoto earthquake reconstruction art project and children and teachers -	単著	平成３０年３月	奈良学園大学紀要 第８集 PP.87-95	本研究は、災害時における学校、教師、児童生徒に関連して２つの課題を見出した。一つは、災害時における「教師」を主体として見たとき、その多忙感を超えた使命感で避難所を運営する教師の姿は当たり前なのではなく、教師は学校教育の推進に関わる者であり、それは被災者や避難所のものではなく、教師は学校、そして子どもたちのものであるという認識の必要性である。もう１点は、防災教育のありかたとして、それは次に来たる災害への準備、対応のための教育という意義は認められるものの、その視点を災害後の心のケアに着目した教育に置き、その方法を構築していく必要性があるということである。 これら課題の着眼から、本研究では熊本地震において、学校再開直後に実践された復興アートプロジェクトに注目した。そして、「心の復興」を目的とする教育活動の有効性を、児童、教師、教材の３つの視点から検証することを目的とした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１８．教師教育の視座における国際理解教育の必要性への考察　－教職志望学生の開発途上国研修におけるテキストマイニングから－ A study on the necessity of international understanding education in the viewpoint of teacher education. -From text mining in developing country training for teacher aspiring students-	単著	平成３０年９月	奈良学園大学紀要 第９集 PP.137-146	近年我が国において、日系人を含む外国人の滞日が増加している。それに伴い、ニューカマーの児童生徒への教育や対応、社会的問題として、経済的危機（貧困）、学校不適応、母国への郷愁、それらが複合的に混在した結果によるいじめ等など、多くの問題が指摘されている。本研究では、それらニューカマーへの教育をはじめ、国際理解は教師にとって重要な資質能力であるにもかかわらず、教師教育の視座において、その認識や対応が進んでいないことを課題とした。そこで、大学における教員養成課程での教職志望学生の海外研修をターゲットとして、研修参加学生の事後自由記述の作文をテキストマイニングによって分析した。そこから、ターゲットとした開発途上国研修は、教職志望学生の国際理解を進め、有効であることは明確となったが、グローバルパースペクティブや教員の資質能力向上に関しては、さらなる研究が必要であることが示唆された。
１９．災害時における教師の職業的役割　－「使命感」と「多忙感」に着目して－ Occupational role of teacher in case of disaster -Focusing on “sense of mission” and “busy feeling”- （査読論文）	共著	平成３０年９月	日本教師学学会誌 「教師学研究」 第 21 巻　第 2 号 PP.13－21	本研究では，災害時において，その教師の「職業的使命感」は統制の効かない状況における「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そして，熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし，非災害地域の教員の「使命感」「多忙感」との比較調査を行うことによって，災害時における教師の職業的使命感の実態を明らかにすることを目的とした。そこで本研究では，熊本地震において被災した学校に勤務する教員 26 名，非災害地域として，民間主催の研究会に参加した小学校教員 31 名，及び関西圏の小学校教員 16 名との比較アンケート調査と熊本群の小学校教師６名に非構造化インタビューを実施した。その結果，使命感に関しては，被災の有無にかかわらず高い使命感を有している反面，被災を経験した教員において，多忙感や内的統制感の高さが，自らの存在価値や意欲の高まりにつながっていない実態が明らかになった。 著者／松井典夫・岡村季光 　本人(松井)は、本研究の企画、構成、調査、論文執筆を担当した。 論文については、１．本研究の背景　４．まとめと考察を担当した。
２０．教職志望学生が危機管理意識の国際的な相違を認識することの有効性に関する考察 －「学校安全」における留学生と日本人学生の学びの比較から－ A study on the effectiveness of recognizing international differences of crisis management consciousness by students who wish to be teachers. - From a comparison of the studies of	単著	平成３１年３月	奈良学園大学紀要 第１０集 pp.113－122	本研究では、北海道地震における訪日外国人が直面した課題がこれからの時代において看過できない課題であり、また、昨今の学校教育における外国籍児童生徒の増加に伴い、これから教職を志す学生が「何を学ぶのか」という視点に立ったとき、諸外国の危機管理意識やその方法について学ぶことの必要性について考察した。そこで本研究では、教職志望学生が日本以外の国の危機管理について知ることは、教員の重要な資質能力の一面を形成すると仮定した上で、「学校安全」の授業における中国人留学生と日本人学生の学びについて比較検討した。そこで、学生の発表の際に記述した自由記述感想文をテキストデータとして使用し、テキストマイニングによって分析を行った。 両者の学修を比較したとき、危機管理において「命」というものに最大の重きを置き、「人の命も大切であり、できれば救いたい」という感覚においても中国人留学生と日本人学生は同様の質を示すことが示唆された。しかし、授業の中でもよく見られたこととして、

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
international students and Japanese students in “school safety” -				中国人留学生の思考としては、道徳的な感情だけで「命」や危機管理について語る事はなく、そこには知識や技能などの基盤が重要であるという発想があった。そのような中国人留学生の発言、発想は日本人学生にとって、大きな刺激となることが示唆された。
２１．教員による「語り継ぎ」のジレンマに関する研究－事件・事故・災害の未体験教員と「環状島」をモデルとして－	単著	令和１年9月	奈良学園大学紀要 第１１集 pp. 135－142	本研究では、被災体験のない、あるいは学校教育現場に関連した事件について、「事件を知らない」教員が「語り継ぎ」の責務を負った時、そのジレンマについて明らかにすることを目的としてきた。その中で、「語り継ぎ」のジレンマは、環状島（宮地, 2007）のポイントとインタビューによって明らかになった。また、それぞれのモデルがそのジレンマを乗り越えるきっかけとして、立場の変化や他者からの評価が強く働いたことがわかった。
２２．教職志望学生の「学校安全」に関する体験的学修の有効性	単著	令和２年1月	全国私立大学教職課程協会　「教師教育研究」 第３２号 pp. 63－74	本研究では、教員の資質能力としての学校安全の必要性の認識と実行力は、教員になる前の段階、教職志望学生の学修の中で育まれることが有効なのではないかという仮説を立てた。そのような中、2017 年、教職課程コアカリキュラムにおいて、「学校安全への対応」が必修項目とされた。これまでの課題の経緯を踏まえ、教職志望学生がいかに「学校安全」を学び、それが教職への資質能力へとどのように結びつけることができるのか、計画と実践、評価と検証が必要になってくる。 本研究においては、教職志望学生が学校安全を学ぶひとつのモデルとして、体験的学修が、教員の資質能力としての学校安全への意識にどのように結びつくのか、実践と学生の反応から検証した。
（その他） 「教材の作成」				
１．教職表現力演習ノート	共著	平成２７年４月	奈良学園大学	西辻正副・山本美紀編 岡村季光・岡野聡子・高木悠哉・松井典夫著 奈良学園大学人間教育学部の必修科目である教職表現力演習の教材として、授業担当者で通年使用可能な教材を作成した。
「学会発表(抄録)」				
1.『安全教育カリキュラムの構築に関する研究 ～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～』	－	平成２２年９月	日本安全教育学会第 11 回宮城大会 (於　宮城教育大学)	平成 13 年児童殺傷事件を契機として始めた安全教育は、防犯のカテゴリーに特化した安全教育だった。しかし、子どもたちの目の前にある危険を考えたとき、安全教育を交通安全や災害安全教育を抜きにして語ることはできない。そこで防犯、生活安全、交通安全、災害安全、命の大切さを実感する授業、の 5 カテゴリーを安全科において実践している。しかし、カリキュラムの構築を考えたとき、児童の安全に対する適時性（知識・技能・行動・情緒面において）を抜きにしては語れない。そこで、本研究においては、本校「安全科」の実践例をもとに児童の安全に対する適時性を検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築について発表した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２．安全科の授業における児童の安全意識の変容に関する研究	－	平成２２年１０月	日本教育大学協会研究集会（於　島根県サンラポーむらくも）	本発表は、日本教育大学協会が主催したものであり、第３分科会「附属学校の改革と実践の動向」で「安全科の授業における児童の安全意識の変容に関する研究」として発表したものである。特に、安全教育の有効性について、「安全安心様相図」を用いた授業実践と、児童の変容について発表し、安全教育の有効性の実証について発表した。交通安全学習については、学習前は「安全安心様相図」では、多くの児童が図の中心付近に多くポイントしていたが、授業後は「不安・危険」のカテゴリーに多くポイントした。このことにより、授業による児童の変容が明らかになったという内容を発表した。他に、水難災害、命を実感する授業の実践についても、授業前と後の、児童の変容を視覚的に見ることができる内容で発表した。
３．児童の発達段階における安全教育の有効性に関する実証的研究	－	平成２３年１１月	日本セーフティープロモーション学会　第５回学術大会（於　大阪教育大学）	本研究においては、一つの実践を低・中・高学年で行い、その相違を明らかにし、発達段階ごとの安全教育カリキュラムの作成につなげることを目的としたものである。防犯ブザーの使用方法に関する授業を題材とした。防犯ブザーは、すべての児童が通学リュックに装着している。しかし、防犯ブザーに対する意識、使用に対する構えなど、低・中・高学年では大きな相違が見られると予想される。そこで、「安全安心様相図」を用いて実態を調査するとともに、同授業を３学年で行い、児童の授業時における記述などをもとに調査を行った。考察として、学年が上がるにつれて、リスクマネジメントに対する自我が発育する。しかし、それは実態を伴わない場合が多い。低学年では自尊感情を育み、中学年では実践的な、そして高学年では自己意識の再構築をねらいとする授業構成が肝要であると述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．安全教育のレリバンスに関する研究～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～	－	平成２４年７月	日本カリキュラム学会第２３回大会（於　中部大学）	本研究では、「安全安心様相図」（日本セーフティプロモーション学会 2011 松井）を用いて、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の授業実践による児童の変容を客観的に実証することにより、安全教育内容と児童の発達段階の妥当性を検証しようとしたものである。これまで安全教育においては、児童の発達段階を考慮した学習内容が検討され、研究されてこなかった。したがって、避難訓練をはじめ、交通安全学習など、どの学年に適しており、どの学年で行うのが妥当であるという検討がされてこなかったため、「有効な」安全教育であったかという疑問が生じる。本研究で、安全教育と児童の発達段階の妥当性を実証することにより、有効な安全教育プログラムを作成していくことを目標とした。
５．安全教育のレリバンスに関する研究	－	平成２４年１０月	日本安全教育学会第１３回大阪大会（於　大阪教育大学）	中央教育審議会学校安全部会において、「防災科」あるいは「安全科」として、安全教育を教科化する方針が打ち出された。これまではひとつの「視点」であった安全教育を、体系的に学ぶことができるようにという発想であり、東日本大震災による災害から、教育が一歩前に進もうとする顕れといえる。しかし、安全教育で最も大切なのは、「重要性の認識」もさることながら、「効果的な学習をすること」にあると考える。これまでの安全教育は、安全だと信じ、考えてきたことを疑ってこなかった。例えば児童に当たり前のごとく「安全指導」として教えてきた、「揺れたら机の下に身を隠す」ことや、「いかのおすし」「おはしも」をはじめとする言葉などにおいても、一層吟味し、指導方法、内容を考え直さなければならない。そこで本研究においては、「効果的な安全教育」であるために、安全教育のレリバンスに着目した。今後、教科化するにおいても、また、安全教育を推進していく上でも、そのカリキュラムの構築において、児童の安全に対するレリバンス Relevance（知識・技能・行動・情緒面において）を考慮することが肝要である。そこで、本研究においては、実践例をもとに児童の安全に対するレリバンスを検証した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
６．安全教育カリキュラムのレリバンスに関する研究～大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践から～	－	平成２４年１１月	第６回アジア地域セーフコミュニティ会議	大阪教育大学附属池田小学校では、平成21 年度より、文部科学省の教育課程特例校に認定され、「安全科」を設置した。安全教育のカリキュラムの構築を考えたとき、児童の安全に対するレリバンス Relevance（知識・技能・行動・情緒面において）を考慮することが肝要である。そこで、本研究においては、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」の実践例をもとに児童の安全に対するレリバンスを検証し、発達段階を考慮した安全教育カリキュラムの構築の礎とすることを目的とした。「安全安心様相図」を用いた調査から、低高学年に比して、中学年が著しく違う様相を示した。このことは、発達段階的には防犯ブザーに依存（信頼）する段階でありながら、ブザーが実際には鳴らなかったり、鳴らすタイミングに迷う自分と改めて向き合ったことによる一時的なショックがあると考えられる。また、低高学年においては類似した様相を示したが、記述内容を見ると、高学年における防犯ブザーに対する依存心（信頼度）の低さが伺えた。これらのことから、同授業を年代別で実施した結果、年代による相違が明らかとなった。
７．学校安全と防災教育といのちの教育	－	平成２７年１月	いのちの教育実践交流会　第６回シンポジウムｉｎ兵庫	本研究発表は、平成２４年度～平成２６年度科学研究費補助金「いのちの教育カリキュラムモデルの開発的研究」の研究成果報告書「いのちの教育－カリキュラムモデルの開発と実践－」の中の、第４章　学校安全・防災部会の報告、第１節学校安全（PP77-81）と第２節安全教育（PP82-95）の部分を単著したものに基づいて発表したものである。主に大阪教育大学附属池田小学校における学校安全の取り組みや、「安全科」において取り組んだ安全教育の方法と実践内容について、実践結果を交えながら発表した。
８．災害時における教員の職業的役割 ～「使命感」と「多忙感」に着目して～	－	平成２９年３月	日本教師学学会第１８回大会（於、早稲田大学所沢キャンパス）	本研究では、特殊な状況下、とくに災害時においては、その「使命感」は「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そこで、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし、非災害地域の教員との比較調査を通して検証し、教員固有の職業的役割を明確にすることを目的とした。調査の結果、他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し、熊本群の教員にそれらがみられないことから、一連の熊本地震に対する対応の疲労感が高まっていることが背景因子として懸念され、早急の対応が求められることがわかった。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９.「事件の教訓から学ぶ教師と学校安全　－池田小学校事件からの発信を視点として－」	－	平成２９年９月	日本教師教育学会 第２７回奈良大会 （於、奈良教育大学）	児童が生命を脅かされ、あるいは失う事件、事故、事案は後を絶たない。そこで、過去の事件や災害の教訓は生かされているのかという問いが生じる。またそこに付随して、教訓とは何か、教訓を生かす方法とは何か、教訓を生かすのはだれかという問いについて議論を重ね、体系的に整理し、児童の命に結びつき生かされる教訓にしていくことが急がれる。そこで本稿では、今一度、池田小学校事件に立ち戻り、事件が残した教訓と、その後、附池小が発信した学校安全の取り組みを視点として、とくに教師が、それら教訓をどのように学校安全に生かしていくのかについて発表した。
１０．災害時における教員の職業的役割	－	平成２９年9月	日本安全教育学会 第18回岡山大会（於、岡山大学津島キャンパス）	教員の「多忙化」が指摘される中、災害という統制できない状況のとき、その「多忙」の多寡にかかわらず、教員が避難所運営に主体的に、あるいはリーダーシップを発揮して携わるなどの例がある。 本研究では、教員の「使命感」と「多忙感」に着目し、その関連性について、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして、教員への意識調査をもとに検討した。
１１．被災地におけるアートプロジェクトが児童・教師に及ぼした影響について On the Influences of Art Projects in Disaster Areas on Children and Teachers		平成３０年３月	日本教師学学会 第１９回大会 （於、甲南大学平生記念セミナーハウス）	1995年に発生した阪神・淡路大震災以降、被災者の心のケアの重要性が広く認識されるようになった。学校教育においては被災した児童生徒のためのストレス対処法や、災害後の心の傷を予防するためのストレスマネジメント教育の必要性が指摘されており、新たな防災教育が求められている。本研究は、熊本地震において被災し、避難所となった小学校において実践されたアートプロジェクトの報告から、防災教育の新たな方向性を見出そうとすることを目的とした。
１２.教職志望学生の「学校安全」に関する体験的学修の有効性		平成３０年９月	日本安全教育学会 第１９回横浜大会 （於、國學院大學）	教員免許法が改正され、教職課程の授業の改善や、教職課程全体についてのデザインのさらなる検討が、各大学に求められるようになった。教職課程コアカリキュラムにおいては「学校安全」への対応が求められる。そこで本研究では、教職志望学生が「学校安全」を体験的に学修することによる教職への意識の変容、あるいは資質能力の形成における有効性について検討した。
１３.教職志望学生の「学校安全」に関する学修の有効性 Effectiveness of study on “School Safety” of students who wish to become teachers		平成３１年３月	日本教師学学会 第２０回大会 （於、上智大学）	教職課程コアカリキュラムにおいて、「学校安全への対応」が必修項目とされた。これまでの課題の経緯を踏まえ、教職志望学生がいかに「学校安全」を学び、それが教職への資質能力へとどのように結びつけることができるのか、計画と実践、評価と検証が必要になってくる。本研究においては、教職志望学生が学校安全を学ぶひとつのモデルとして、体験的学修が教職への意識、資質能力にどのように結びつくのか、実践と学生の反応から検証した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１４．教員による「語り継ぎ」のジレンマと有効性		令和１年9月	日本安全教育学会第 20 回山形大会（於、山形大学）	本研究では、被災体験のない、あるいは学校教育現場に関連した事件について、「事件を知らない」教員が「語り継ぎ」の責務を負った時、そのジレンマについて明らかにすることを目的とする。また、教員がそのジレンマを乗り越えて行う「語り継ぎ」は、その対象（児童や他の教員）にどのような有効性を持つのかを明らかにすることを目的とした。 そしてある教員は、聞き取りの中で「語り継ぎ」のジレンマを乗り越えたきっかけとして、他者からの「理解」と「評価」を挙げた。しかし、事件を対象としたインフォーマントの語りや環状島のポイントの様相は、熊本地震のモデルの様相とは違う結果が生じていることが示唆された。
１５．事件・災害の未体験教員による「語り継ぎ」の研究		令和２年3月	日本教師学学会第21回大会（於、関西医科大学）	阪神・淡路大震災から 25 年が経つ。その年月は、災害等の「未体験」教員が語り継いでいくことを意味する。本研究では、被災体験のない、あるいは学校教育現場に関連した事件について、「事件を知らない」教員が「語り継ぎ」の責務を負った時、そのジレンマについて明らかにすることを目的とした。本研究のモデルとなった教員は、そのインタビューの中で一様に、ジレンマを乗り越える「使命感」を表出した。
「教育誌等」 １．『安全教育と防犯①学校安全の現状と課題「災害はひとごと」という意識を超えて』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」 №１１８０　平成２３年１０月１０日号 ｐｐ１８－１９ 日本教育新聞社	「学校は安全な場所ですか」 この問いに対して、学校関係者はどのような答えを出すだろう。さらに「あなたの学校は安全ですか」という問いに対してならどうだろう。８人の子どもの命を失った大阪教育大学附属池田小学校の、悔恨と痛恨から生み出されてきた学校安全の取り組みについて、安全で安心な学校生活と、人を傷つけない、傷つけられない子どもたちが育つための安全教育の方法について記述した。
２．『安全教育と防犯②学校安全管理と教職員の安全意識』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」 №１１８１　平成２３年１０月１７日号 ｐｐ２４－２５ 日本教育新聞社	お金がかからない安全管理は多くある。それらの安全管理は、学校に「見えない防壁」を作る。しかし、一般的に、多くの学校園には見えない壁はなく、侵入は容易であり、事を起こし、逃げることも容易である。「壁」とは、校門のガードであり、校舎の周囲であり、教職員集団の意識であり、管理職のリーダーシップである。教職員の安全意識の持ち方や、学校で取り組むことができる安全対策について記述した。
３．『安全教育と防犯③不審者対応訓練について～「訓練」の失敗から次の課題を見出す～』	単著	平成２３年１０月	週刊「教育資料」 №１１８２　平成２３年１０月２４日号 ｐｐ１８－１９ 日本教育新聞社	大阪教育大学附属池田小学校では、年間５回の教職員対象不審者対応訓練を行っている。 平成２２年度の当校の安全研修会で、「公開不審者対応訓練」を実施した。その訓練では、見学した教育関係者の多くが、これまで学校園で取り組んできた訓練との違いを実感している様子だった。そして、それぞれが各地の学校に帰り、公開訓練のことを伝え、取り組んでいくことの大切さについて記述した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４.『有効な安全教育とは何か？　～体験と実感で子ども自身の判断を育む～』	単著	平成２３年１１月	週刊「教育資料」№.１１８３　平成２３年１１月７日号 ｐｐ２４－ｐ２５ 日本教育新聞社	命の大切さという意識は潜在的なものであり、命にはその実体がないだけに、実感することは容易ではない。その大切さに対する実感は，大人はもちろん、ましてや児童が容易に持ち得るものではない。したがって、実体のない命に対する実感は、家庭はもちろんのこと、教育活動の中で育んでいくべきものである。ここでは、大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で取り組まれてきた安全教育カリキュラムを、その実践例を通して紹介した。
５.『安全教育と防犯⑤これからの学校安全に向けて　～安全に「絶対」はなく不断の努力が必要～』	単著	平成２３年１１月	週刊「教育資料」№.１１８４　平成２３年１１月１４日号 ｐｐ１８－１９ 日本教育新聞社	「安全管理マニュアル」は、各学校園で作成し、校内に置くことが義務付けられている。大切なことは、「改訂を続けること」である。改訂し、より実践的、現実的なマニュアルにしていくことが必要である。学校安全の既存する考えや概念を問い続け、研究し続け、前に進み続けなければならないということである。安全指導上、「良し」とされてきたことが、実際の場面で本当に児童の生命を守る術となっているのかということについて、改めて見直し、改訂していくことが学校安全において必要であるということを記述した。
６.「これからの学校安全について考える」～第 1 回　事件の教訓から学校安全の実態を見る～	単著	平成２７年８月	『教育プロ』第45巻 第17 号 通巻 1786 号、ERP、pp.26-27	警察庁のまとめによると、子供の連れ去り（略取・誘拐）事件のうち、発生時間帯として最も多かったのが、午後４時から午後６時の時間帯とされている。この時間帯は、言わば下校時間帯にあたる。奈良小１女児殺害事件以降、この時間帯は「魔の時間帯」とされ、子供たちの安全を守ろうと、地域住民による見守り隊など、児童の下校を見守る大人の姿が多く見られるようになった。しかし、13 歳未満が被害に遭った略取・誘拐事件に関して、2004 年の奈良の事件以降の 10 年間を見ると、2004 年の 141 件以降減少し、2008 年には 63 件まで減少した。しかし、2014 年は 100 件を超す発生件数を数えている。地域住民が努力しても、なぜ犯罪は減らないのか。事件の教訓を視点に学校安全の実態について述べた。
７.「これからの学校安全について考える」～第２回　子どもの命を守る『有効な』安全教育とは～	単著	平成２７年８月	『教育プロ』第 45 巻第 18 号　通巻 1787 号、ERP、pp.26-27	児童が何者かに連れ去られそうになったとき、大声を出した（いかの「お」すし）結果、その大声を最悪の方法で犯人が止めようとする場面を想像する。だが、「大声を出す」と教えたのは、現在の学校での安全教育の王道なのである。その教えを頑なに守ろうとした結果、不安全を招く可能性があることを認識しなければならない。ここでは、岡山県での安全教育実践を例に挙げ、安全標語に頼らない、「有効な」安全教育について述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８.「これからの学校安全について考える」～第３回　学校安全と教訓～	単著	平成２７年９月	『教育プロ』第45巻 第20 号 通巻 1789 号、ERP、pp. 26-27	2001 年 6 月に発生し、世間を震撼させた大阪教育大学附属池田小学校児童殺傷事件では、「学校安全神話の崩壊」と言われた。しかし、学校がなぜ安全だと思い込まれていたのだろう。その思い込みが、８名の児童の大切な命を失う結果となったのである。今もなお、学校安全に対する思い込みはないだろうか。その思い込みが、今目の前にいる大切な子供の命を失うことにはならないだろうか。本連載では、「これまでの」学校安全に対する思い込みを検証し、考え直し、認識を改めていく必要性を述べてきた。最終回となる本稿では、学校安全を支える教訓について述べた。
９.「教育実習の課題と展望」第１回　教育実習の意義～その必要性と質～	単著	平成２７年１２月	『教育プロ』第 45 巻第 28 号　通巻 1797 号、ERP、pp. 14-15	学校における現代的課題として「いじめ」「学級崩壊」「不登校」「家庭との連携」「学力保障」「子どもの安全」など、教育現場はそれらの問題と常に向き合い、対処、対応し、解決していかなければならない。学習面・メンタル面・人間関係面などで特別のケアや支援を必要とする子どもの増加や、増大する保護者の要望・クレームへの対応など、学校・教職員が対応すべき問題や課題は多様化し増大している。したがって、教員の資質・能力はより高いものが要求されていると言える。大切なことは、「では、この流れゆく社会の中で求められる教師像に対応する資質・能力を、教員養成系大学や学校現場で、どのように育むのか」という現実的に必要な視点である。本稿ではその中でも特に、教員になる上で必修である教育実習について、そのあり方や価値、抱える課題について論考し、教育実習のこれからの展望を捉えていくことを目的として記述した。
１０.「教育実習の課題と展望」第２回　教育実習の実態～実施する大学と受け入れる学校～	単著	平成２８年１月	『教育プロ』第 46 巻第１号　通巻 1798 号、ERP、pp. 26-27	公立諸学校の教育実習生の受け入れについては、様々な点で課題がある。まず公立学校は、そもそも教育実習を受け入れる前提での体制が整えられていない。また、いわゆる母校実習については、“大学側の対応や評価の客観性の確保等の点で課題も指摘されることから、できるだけ避ける方向で、見直しを行うことが適当である”とあるように、公立学校にとっては、いつ何時、どのような、どこの学生を受け入れるのかという点において、不確定なのである。本稿では、受け入れる学校側の実態について記述した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１１.「教育実習の課題と展望」第３回　教育実習の役割～教職の道標～	単著	平成２８年１月	『教育プロ』第 46 巻第 2 号　通巻 1799 号、ERP、pp. 24-25	教育実習の前、大学における 3 回生になるまでのカリキュラムの中で、介護等体験や、大学のカリキュラムによっては学校支援ボランティアなど、教育という社会の一部に経験はあっても、そこにある「子どもたちに対する責任」の荷重はさほど大きくはない。しかし、教育実習ではおよそ１ヵ月の期間、教師たちとほぼ同じ時間、子どもたちと接している。けんかをしている子どもたちの対応に迫られる場面もあれば、学級全体を指導する場面にも出会う。その中で、おのずと「子どもたちに対する責任」の荷重は大きくなる。教育実習生は「学生」でありながら「先生」であるという、重層的立場（Student Teacher）を持つことになる。本連載の第 3 回目にあたる本稿では、教育実習生そのものに焦点をあて、教育実習現場での実際の学びと、その学びの有用性や効果について論考した。
１２.「教育実習の課題と展望」第４回　これからの教育実習～質と夢の保証～	単著	平成２８年２月	『教育プロ』第 46 巻第 4 号　通巻 1801 号、ERP、pp. 16-17	平成２７年１月に文部科学省から発信された「高大接続改革実行プラン」は、センター試験の廃止や記述式試験の導入などがセンセーショナルにクローズアップされた。したがって一般的に私たちは、大学入試改革に意識が向きがちだが、高大接続改革とは、高等学校教育、大学教育、大学入学者選抜の三者一体的改革であるという捉え方をするべきである。それは、高校での「学力の 3 要素」の育成と、それを受けた大学教育の質的変換、そして、高大の接続を担う大学入試制度が三位一体となった改革である。そこには、「新しい時代にふさわしい」学力や人材を育成するというビジョンが土台となっている。この構造を、教員養成に関わる一連の過程の中に求めるという視点で記述した。
１３.「これからの教員養成における質的転換」第１回　教師の資質能力の変化と転換	単著	平成２８年８月	『教育プロ』第46巻 第18 号　通巻 1815 号、ERP ｐｐ１２－１３	社会の進歩や変化にともない教育の世界にその時流は確かに訪れてはいる。しかし、その一方で、教育そのものを担う教師の存在（意義）や資質能力、また、それらの礎となる教員養成の変化と進歩に大きな胎動は見られない。そこで本稿では、社会の変化や進歩に対応する教員養成の質的転換について、教師の資質能力、教育実習、教員としての進路選択をキーワードにして論考した。
１４.「これからの教員養成における質的転換」第２回　教員の「多忙感」と教職の実像	単著	平成２８年９月	『教育プロ』第46巻 第20 号　通巻 1817 号、ERP ｐｐ１４－１５	次期学習指導要領案の特色と学校教育の役割について論じた。小学校の英語教育の強化、授業時数の増加、またプログラミング教育の導入など、その改定は急速に進む。一方で、今後の教員採用者数は、少子化と退職者数の頭打ちから、減少する傾向は否めない。このことから推測されるのは教員の「多忙感」の増大である。教員の「多忙感」に注目し、今後求められる教員の資質や「学校行事精選と授業時数確保」についても論考した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１５.「これからの教員養成における質的転換」 第３回　揺るぎない「教職の体幹」とは	単著	平成２８年９月	『教育プロ』第46巻 第21 号　通巻 1818 号、ERP ｐｐ１６－１７	文部科学省の答申における「教員の資質能力」は時代や社会の要請に応じて、その資質能力や教師像が変容しつつ、揺れ動いている。本稿では日本の歴史的な学校制度の変換や教員養成の歴史的変換に視点を当て、教員の資質能力や今後の教職キャリアについて整理した。さらに時代のニーズは変化しても、教師に求められる「教職の体幹」＝「児童や生徒に好かれる資質」についても論じた。
１６.「これからの教員養成における質的転換」 第４回　「教職の体幹」を育成するカリキュラムデザイン	単著	平成２８年１０月	『教育プロ』第46巻 第22 号　通巻 1819 号、ERP ｐｐ１６－１７	教員の資質能力について言及し、揺るぎない「教職の体幹」＝「児童や生徒に好かれる資質」について論じた。教育への使命感や子どもへの情熱など、その教師は何を身に着け、それをどのように学んだかという点が大切である。それは先天的なものや外見ではなく、後天的に養成されたものである。「児童や生徒に好かれる資質」を後天的に養成するカリキュラムデザインについて論考した。
１７．いのちの教育 －教師の視点をいかにもつか－ 第１回「研究会の成立過程とこれまでの歩み」	単著	平成２８年１０月	『教育プロ』第46巻 第23 号　通巻 1820 号、ERP ｐｐ１６－１７	1995 年に発生した阪神・淡路大震災、神戸連続児童殺傷事件（1997 年）、2004 年には、長崎県で小 6 女子児童による同級生殺害事件が発生するなど、子どもたちのいのちへの感覚、あるいは死生観というものに対する、当たり前で疑いようもなかったものへのある種の懐疑と、それに伴う教育の再構成の必要性が高まるなか、このような背景から、2009 年、「いのちの教育実践研究会」が発足した。本稿では、研究会の成立過程と「いのちの教育」の必要性について述べた。
１８.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第１回　震災をめぐる教師の「使命感」と「多忙感」への着目	単著	平成２９年６月	『教育 PRO』第 47 巻第 14 号　通巻 1839 号、ERP、pp. ２８－２９	災害時はまさしく、自己のコントロール（統制）が効かない特殊な状況下といえる。本研究では、災害時において、教師の「職業的使命感」は統制の効かない状況における「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そして、熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし、災害時における教師の“ノブレス・オブリージュ”の実態を明らかにすることを目的とした。
１９..『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第２回　「災害支援者」としての教師の役割	単著	平成２９年７月	『教育 PRO』第 47 巻第 15 号　通巻 1840 号、ERP、pp. ６－７	「災害対策基本法」は、東日本大震災後、2 回の改正を繰り返した。2013 年 6 月の改正における「被災者保護対策の改善」で、「緊急避難場所」と「避難所」が明確に区別されることとなった。避難所となった学校において、教師たちは「役割分担が決められていない」状況の中、「災害時に救援する職業」として、目の前の災害に救援する役割を担うことになる。災害時の救援対策訓練を受けた「職業的災害救援者」ではなく、教師としての「使命感」で救援に従事する教師の実態について述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２０.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第３回　災害時における教師の職業的有能性	単著	平成２９年７月	『教育 PRO』第 47 巻第 16 号　通巻 1841 号、ERP、pp. １０－１１	本稿は、熊本地震で主体的に避難所を運営した一人の教師をモデルに、教師の災害時における職能について論考した。教師の使命感からくる災害時の職業的有能性を、明確な災害支援対策として位置づけ、分担し、だからこそ教師は災害支援者なのであるという認識を明確にしていくことは、今後における災害時の有効な避難所運営の模索においても、あるいは教師の、災害時における職業的役割の明確化においても、必要となる。
２１.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第５回　避難訓練に対する被災地からのメッセージ	単著	平成２９年８月	『教育 PRO』第 47 巻第 18 号　通巻 1843 号、ERP、pp. １０－１１	熊本市内の南部に位置する熊本市立小学校で、管理職に取材を行った結果、被災地における子どもの様子や学校運営上の実情から、避難訓練の在り方に対する重要な示唆を得ることができた。避難訓練の在りようについて再考し、再確認することの必要性を示唆する、まさしく被災地からの大切なメッセージについて論述した。
２２.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第６回　福島県の「今」が伝える、地域における学校の価値	単著	平成２９年９月	『教育 PRO』第 47 巻第 20 号　通巻 1845 号、ERP、pp. ８－９	2011 年 3 月 11 日に発生した東日本大震災では、地震による津波災害という、2 次的な災害によって大きな被害を被った。その中、地震動と津波による 3 次的災害が発生した。それが福島第一原子力発電所事故である。本稿では、原発事故から 6 年半経った福島県において、避難指示が解除されて再開した学校に着目し、学校が地域に果たす役割について記述した。
２３.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第７回　子どもたちのいのちを守るのは「だれ」なのか	単著	平成２９年９月	『教育 PRO』第 47 巻第 21 号　通巻 1846 号、ERP、pp. １２－１３	災害に関して、その被災地域を世界に目を向けたとき、被災者数などその被害の大きさに関心が向けられるが、それらはどのように教訓とされ、発信されてきたのか。そこから見えてくるものの価値は大きい。本稿では、ベトナム社会主義共和国において、災害や事件などに対して、子どもを「保護」する親の姿勢を、日本の近年の実態と比較した。
２４.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第９回　教訓を生かした避難所開設・運営に	単著	平成２９年１０月	『教育 PRO』第 47 巻第 23 号　通巻 1848 号、ERP、pp. ８－９	災害時における避難所を運営する主体に目を向けたとき、「避難所運営ガイドライン」には、教員、あるいは教職員が割当てられている役割は見当たらない。現実には、学校が避難所となる場合、そこを開錠して避難所を開設し、初動段階で被災者を受け入れ、運営を進めるのは教師であることが予想される。本稿では、避難所開設、運営時における教師の役割について述べた。
２５.『災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ　～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第１０回　災害に関する教師へのインタビューから見えてきた課題	単著	平成２９年１１月	『教育 PRO』第 47 巻第 24 号　通巻 1849 号、ERP、pp. ８－９	本研究では各小中学校の管理職を対象としてインタビューを行ってきた。それらは非構造化インタビューであり、明確な問いに対して明確な回答を求めてきたのではなく、筆者らが震災のことを、そしてそこに関わる教師たちの内面的なものを知りたかったというのが率直なところである。本稿では、その後に実施した半構造化インタビューの結果を考察し、災害に関連して、教員にかかっている過重なストレスについて検討した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「年鑑」 1.『安全教育の実効性とその客観的効果の測定に関する研究-第６学年「命のバイスタンダー」の実践から-』	単著	平成２２年７月	財団法人下中記念財団2010年報　pp14-17	平成１９年度、２１年度における下中科学研究助成金の取得により、その研究成果を下中科学記念財団年報に寄稿したもの。 安全教育の効果や実効性は、これまでは授業者の実感による主観的なものでしかなかった。それを『安全安心様相図』を用いて客観的に児童の変容を測定し、分析した結果を発表した。
「リーフレット」 1.「安全指導と『安全を学ぶ』ということ」	単著	平成２５年９月	日本文教出版「教育情報」巻末	本リーフレットは、日本文教出版が教育資料として発刊しているものであり、全８ページからなるものである。最終ページの「クローズアップ！　教育の現場」のコーナーの原稿を担当し、「安全指導」と「安全学習」の違いについて述べた。大阪教育大学附属池田小学校「安全科」で実践した「命の避難訓練」の授業から、「おはしも」（押さない・走らない・しゃべらない・もどらない）という、これまで疑いも持たれず避難訓練時のセオリーとして通ってきた言葉を題材にし、想定にとらわれ、慣習にとらわれることの危険性について述べたものである。

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月 31 日

氏名　　森　一弘

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
体育科教育の実践に関する実務 総合的な学習の指導法に関する実務	体育科指導法・自主的な学び・総合的な学習

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　教育方法の実践例 ○アクションリサーチを活用した授業の改善 ・単元における課題の持たせ方 ・子どもの聞き合う場づくり ・子どもと子どもの関係性 ・子どもと教師の関係性 ・子どもの理解度と授業の有効性	平成 16 年 4 月～ 平成 24 年 7 月	○授業をビデオで撮影し，子どもの実態をもとに授業改善の方策を探る。教師の授業における出場として，発問・切り返し・課題の再設定などに対して，子どもたちが実際にどのような姿をしめしたのか分析するとともに個と個の関係，個と教材との関係，個と集団との関係，個と教師の関係，集団と教師の関係など協働的な学びをもとに，授業の改善を明らかにしてきた。 （神戸大学附属住吉小学校）
○社会性を育む体育の授業づくり ・チームプレイが重要だという認識の持たせ方 ・チームが勝つための自分の役割に気付かす	平成 16 年 4 月～平成 24 年 7 月	○フラッグフットボールを教材にして，子どもたちの社会性を育む授業デザインを行う。「わかる・できる」を一体的に扱い，ゲームに勝つための，自分の役割を意識し，作戦を進めていくことを通して，相手への思いやり，ゲーム進行でのルールの順守，マナーの向上が見られた。(神戸大学附属住吉小学校)
○フラッグフットボールの教育的価値について授業実践からの検討	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	○フラッグフットボールの授業においてイーブンナンバーゲームを用いて授業展開しても、戦術的な学習課題へ焦点化でき、プレーにおいて子どもたちの役割の明確化とともに積極的なプレーへの参加を促す可能性があることを明らかにした。(奈良学園小学校)
２　作成した教科書、教材 総合学習「普天間問題を考える」	平成 22 年 5 月	○普天間基地を考えるための沖縄の歴史をまとめた冊子 15 ページ（教材） 沖縄が本土によって，とられた政策を知ることで，沖縄の人々の思いを感じ，戦後になってもアメリカ軍の多くの施設が沖縄に駐留する現実を知らせる資料を作成した。 （神戸大学附属住吉小学校の総合的な学習の時間に参考資料として使用）
フラッグフットボール指導テキスト（再掲）	平成 22 年 7 月	○日本フラッグフットボール協会から出版した指導者のためのテキスト 36 ページ（教科書） 高橋建夫先生が監修した，学校体育で活用できるフラッグフットボール練習方法などを示した。 オフェンス時の作戦づくりをしていくために，2 対 1，4 対 3，5 対 3，（オフェンスチームの人数を多くする）でパスコース・ランコースを考えていくモデルとなる動きを示した。また，オフェンス時にも相手チームをブロックする動きを示し，フラッグフットボールのオフェンス時の作戦をスモールステップで学べるように工夫した。(神戸大学附属住吉小学校の体育の指導参考資料として使用)

3　教育上の能力に関する大学等の評価 勤務評定 ・神戸大学附属住吉小学校の校長からの評価	平成 16 年度から平成 25 年度	副教頭として校務全般を取り仕切り，学校のかなめとして，各教員らの信頼も厚く，また，PTA との関係を密にして保護者からの信頼も厚いものがある。なくてはならない人材として高い評価を得ている。
・芦屋市立山手小学校の校長からの評価	平成 26 年度から現在に至る	研究主任・６年学年主任として学校全体の教育課程の編成、授業実践、若手教員の指導などの業務に精通し学校運営の一翼を担っていたという評価を得ている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 ○教育実習生に対する指導	平成４年４月から現在まで	○これまで毎年教育実習生を受け入れて、担任や管理職の立場で行った講話内容 ・学校運営，児童理解，生徒指導と学習指導 ・単元の作り方と１時間の授業の作り方 ・学習評価の考え方の実際の評価の仕方 ・体育の授業の作り方 ・担任と養護教諭・カンセラーの連携 ・特別活動　等
○ＮＫＨ　教育テレビ 「スポーツ教室」 フラッグフットボール　基礎編・発展編の構成及び指導出演	平成 21 年度 平成 22 年度	○ＮＨＫ教育テレビ「スポーツ教室」の番組で，フラッグボールを取り上げ，その番組の構成・演出及び指導者として出演した。ここでは，フラッグフットボールの楽しみ方に力点を置き，実際の小学校体育授業で活かしていける内容構成にした。どの子どもも楽しめるための動きや作戦を中心に番組を構成した。
5　その他		なし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 教員免許	昭和 57 年 3 月 31 日 昭和 57 年 3 月 31 日	小学校教諭1級普通免許状 昭56小普第5892号　（埼玉県教育委員会） 中学校教諭 2 級普通免許状（社会） 昭 56 中普第 5629 号　　（埼玉県教育委員会）
2　特許等 特になし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 ○授業づくりセミナー講師	平成 21 年 8 月	○神戸大学附属住吉小学校が主催した「授業づくりセミナー」において授業を公開し，その後のセミナーにて講演を行った。具体的には，小学校 2 年生を対象にした鬼遊びの授業を公開した。この中では，指導要領の改定時期と重なっていたため，改定の趣旨について解説し，改定後の内容に沿った授業づくりのポイントを示した。 ・既習内容や体験を基に，課題を明らかにさせる。 ・新しい内容を知り，これまでにしたことがない動きや作戦の考え方などを見つける。 ・子どもが運営するゲーム大会を開催する。

○全国附属学校養護教諭部会でのメンタルヘルスについての発表	平成 21 年 8 月	○絆を大切にする子どもの育成を目指して子どものケア体制の充実～という題目で，日々の学校で起こる子どもたちの抱える諸問題を解決するために，「心のケア委員会」を立ち上げた。この委員会が機能するために，教育相談担当者・カウンセラー・メンタルフレンド・養護教諭・管理職の連絡体制，相談体制，指示体制などを具体的な事例をもとに発表した。
4　その他 「社会貢献」 全国大学体育連合主催 大学体育指導者全国研修会講師	平成 24 年 8 月	大学体育連合会の研修会にて大学教員へ「フラッグフットボール」の実技講習を行った。大学での体育授業に取り入れるための研修会として初心者への指導の具体を示した。この研修では、基本的な動きからゲーム（戦術）まで網羅的に体験することができました。研修を通して、フラッグフットボールの魅力を体感し、その特性を生かした授業について、実践的な知見を学ぶことができるプログラムを紹介した。
「指導助言関係」 ・芦屋市立朝日ヶ丘小学校講師	平成 16 年度～22 年度	校内授業研究会での指導助言 及び研究発表会時の指導助言
・三田市立武庫小学校講師	平成 21. 22 年度	校内授業研究会での指導助言 及び研究発表会講師
・三田市教育委員会主催研修会講師	平成 21. 22 年度	研究主任対象の「学校研究の進め方」講師 校内授業研究会での指導助言
・川西市市立久代小学校指導助言	平成 23．24 年度	校内授業研究会での指導助言
・芦屋市教育文化センター講師	平成 27 年 5 月	若手教員が今やるべきこと「授業実践を通して」講演
・芦屋市山手小学校研究会講師	平成 27 年 8 月	授業研究の進め方「学び合いのある活動について」講演
・西日本私学連盟体育部会実技研修講師	平成 28 年 5 月	「フラッグフットボール授業の進め方」実技研修において、小学校高学年におけるゴール型ボールゲームの考え方及びフラッグフットボールの授業展開の仕方　講師
・奈良県三宅町立三宅小学校運動能力向上のための指導講師	平成 28 年 5 月	小学生 1 年生から 6 年生を対象に、投動作の指導を実施しボール投げの技能向上を目指した指導を行った
・奈良県三宅町立三宅小学校ボール運動授業実技講習指導	平成 28 年 8 月	フラッグフットボールを中心にボールゲームの授業構想について 2 日間に渡り実践指導を行った。
・尼崎市立大島小学校講師	平成 28 年 8 月	学級づくりのポイントを示し、子供が主人公の学校づくりの必要性を指導した。
・芦屋市教育文化センター講師	平成 28 年 8 月	2 年次から 5 年次までの若手教員を対象に、学級づくり・授業づくりを指導した。
・奈良県三宅町健康づくり推進協議会座長	平成 29 年 3 月	三宅町における健康増進計画・食育推進計画を審議し、計画書を作成した。

・奈良県三宅町教育委員会授業評価委員	平成 29 年 2 月～令和 2 年 3 月	三宅町教育委員会の企画事業を第三者の立場で評価した。
・芦屋市授業改善部会講師	平成 29 年～令和元年度	新学習指導要領による授業改善の具体を指導する。３つの柱にした授業の具体とその評価について講話等を行なった。
・芦屋市新任教員研修講師	平成 30 年 8 月	芦屋市新規採用者を対象に、授業のつくりかたを中心に、新任として必要な教師の脂質と能力を講話した。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文）				
1 グローバル社会に生きるひびき合う学びを創造する子ども ～確かな理解を生む相互作用の場をデザインする～	共著	平成 23 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2010 P6～P16	授業の中で，友だちとの関係性を核にして互いに納得し，新しい知識や技能を身につけていくことを提案した紀要である。 この紀要の基礎編に対して，研究内容の論の進め方，その具体，成果と課題が整合しているかを読み取り，研究部へ伝達した。伝達内容は，授業において他者との交流による活動を内容面の違い，同意，視点の違いなどから授業を構想する必要性を明らかにすることである。 ～確かな理解を生む相互作用の場をデザインする～ 相互作用の質の向上のためには，教科等の知をどのような活動を通して子どもに出合わせるのか，その場面や支援の具体について教材研究をしておく必要がある。一つは，多様な見方や考え方を表出する場において，何が他者と違うのか明確に言語化させることが必要である。二つ目は，新たな知を創出する場において，自己の変容を言語化して自覚化を図る必要性があることを明らかにした。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義，福原雅生，神山真一，森一弘（他 19 名）
2「共創」を実現していく子ども ～相互作用の質に着目して～	共著	平成 24 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2011	授業の中で，友だちとの関係性を核にしその関係性をつないでいくための方策を提案した紀要である。 この紀要の研究基礎編に対して，研究内容の論の進め方，その具体，成果と課題が整合しているかを読み取り，研究部へ伝達した。伝達内容は，授業化の視点を具体として授業の中に位置づける時，課題の認識では，比較や資料からの読み取りなど諸能力の必要性を指摘し，修正していかせた。 ～相互作用の質に着目して～ 互いの思いや考え尊重しながら影響を与えあう相互作用を生むために，「援助の授受」に着目し，相互作用の質を規定する要素として位置づけた。授業において「援助の授受」を伴う相互作用を通して新たな価値を生むために，問題解決の過程に二つの「授業化の視点」を設定し，その有効性を明らかにした。 授業化の視点１：葛藤を顕在化し，共通の課題を認識させる。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				授業化の視点 2：各自の理解深度のプロセスや理解の結果をもとに思考を深化させる。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義，福原雅生，佐古賢一，森一弘，（その他 16 名）
3「協働社会」を実現していく子ども ～つながりが生まれる場をデザインする～	共著	平成 25 年 2 月	神戸大学附属住吉小学校研究紀要 2012 掲載　p6～p18	「協働社会」を実現していくために，協働的な学びの中で，互いの観方や考え方を調整しながら，よりよい問題解決の道筋を探り解決を図る子どもとおいた。具体的に授業を構想する手立を示した。その内容は「聴きたくなる状況を生む」「相互了解を生む」「自分の考えの見つめ直しを生む」という 3 つの瀬点を設け授業構想を考え，実践をし結果から検証していくようにというものである。 ～つながりが生まれる場をデザインする～ 3 つの視点を持って実践した結果，次のようなことが明らかになった。 対象に対する自分の考えを明確にし，他者と考えとの共通点や相違点に気付かせ，解決を図る手立てが必要である。 互いが納得できる見方や考え方について表現させる手立てが必要である。 自分見方や考え方の変容の過程をふりかえり，学習内容に対する理解を深めたり，意味づけを豊かにしたりする手立てが必要である。 このような 3 つのことが明らかになった。 本人担当場所：研究の基礎編部分を担当 共著者：柳田泰義，福原雅生，小河内直樹，森一弘，（その他 13 名）
4 新しい体育授業の創造をめざして ～ライフスキルの育成を視野に入れた体育学習～	単著	平成 25 年 3 月	教育 PRO　3 月号 株式会社 ERP 掲載　p6～p9	「成就性」「承認性」「親和性」の三つの要素をおき、体育授業を実践していくことは、子どもが運動好きになることでもある。「精一杯動いた楽しさ」「できるようになった喜び」「仲間と協力できたよさの実感」「新しい発見」がある授業である。この結果として、身体的エフィカシーが高まり，セルフエスティームの獲得がみられるという主張を行った。
5 人間教育を支えるもの～自尊感情に焦点を当てる体育科の授業構想～	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究 第 2 号「人間教育学」の可能性-理論の展開と実践- p89～p100	体育科の授業構想において次の 3 点がポイントとなることを明らかにした。①この多様性を授業に関わる全員が受け入れる。②仲間との関わりで生成される思考や技能を表現する。③仲間との関わりの中で差異を明らかにし認め合う。 このポイントを授業に位置付けることで、体育科の特性としての資質も高めることができる可能性がある。○自由に操れる体・身体的エフィカシー、○精神的・肉体的な粘り強さ、ストレス対処スキル、○批判的思考、社会性、コミュニケーション、自律心などの資質を高めることができ、この資質が生涯スポーツへつながっていく大事な要素であることを示した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6 共に学びを創り会う子どもをめざして ～言葉を生かし知識や技能を更新する～	単著	平成 27 年 2 月	芦屋市立山手小学校 研究紀要 2014 掲載　p33～p39 掲載 p120～p126	授業研究基礎編 授業研究において最も大事にしたことは，各研究同人の主体的な取り組みである。研究同人である教師一人ひとりは，授業の質を高めることを目指し，授業研究に取り組んできた。授業の質について秋田は，『一人ひとりの子どもが授業中どれだけ「安心・安定（well-being）しているか」という居場所感と，学びの対象に対してどれだけ深くまたより長く「没頭・夢中(involvement)関わり考えることができるか」』という集中の 2 点を挙げている。この 2 点を踏まえ，子どもたちが教師との信頼関係，仲間に受け入れられているという受容感，よくわからない，迷ったり，困ったりしていることを自己開示できる安心感，自分の考えや言葉に共感しそれを豊かにすることから生まれる一体感を授業の中でみていくという主張を行った。 授業実践編 生き物の 3 つの特徴である、 ◇「外の世界とつながり」事例 1 ◇「一つの個体としてつながり」事例 2 ◇「長い時間の中で過去の生き物たちとつながり」事例 3 をなぜ筆者は、この順で示し、特徴として挙げたのかということを考える時間である。 （批判的思考の活用）この特徴をこの順で示した理由は、目に見える身近なつながりから目には見えないつながりを挙げ、つながりがだんだんと長くなっていき、事例 3 のつながりは永遠につながっていくという時間的空間の深まりを意味している。このような筆者の工夫を共同的な学びで発見させ、読みの楽しさを実感させることを明らかにした。 共著者：中村整七、西尾節子、森一弘 （その他 32 名）
7 フラッグフットボールにおける戦術アプローチによる簡易化されたゲームの有効性と課題	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要 掲載 p135～p141	フラッグフットボールは、アメリカンフットボールを簡易化したゲームである。簡易化された要素は、タックルの危険性を回避するために腰につけたフラッグをとることで、身体接触を禁止した。また、人数は５人対５人とした。用具であるボールは、小さく柔らかいものとしている。指導要領に示されている簡易化する要素を取り入れながら、授業を展開している。この中で、戦術アプローチの考えを持ち込み、アントナンバーのゲームであったり、パスに限定した動きをさせたりするが、これらの学習では、子どもたちの作戦をつくりだすという思考・判断させる活動が弱化させていることを指摘し、イーブンナンバーでのゲーム、ボールをゴールに運び込む手立てを提案した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8 新聞を活用した総合的な学習の時間−アクティブ・ラーニングを意識した授業−	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究 第 3 号「人間教育学」の視座−新しい「教育改革」への提言− p107〜p114	新聞を活用し、子供たちが自らの興味関心にもとづき、課題を設定し、課題を解決するために情報を集め、課題解決のための方策を考え、まとめていく授業実践を提言した。この中で、新聞活用のポイントとして、「琴線に触れる言葉を探させる」「これからの自分の生き方について示唆している記事を探させる」という２点が重要であることを明らかにした。
9 経験による「教師の成長」について考察する	単著	平成 28 年 3 月	大阪教育大学実践学校教育講座　実践教育学論集 2015 −現代の教育問題を考える 20− p58〜p61	「教える」という営みは、子どもたちの活動と結果として起こる事柄の詳細な関連を見いだし、反省していく熟慮的な「経験」だととらえることができないだろうか。ここでいう「経験」は、常に他者や自分自身の未来に開かれ、また新しいものを絶えず受け入れていこうとする。このような「経験」の繰り返しが、教師の成長を確かなものにし「教える」プロとして変容をもたらせてくれる。日々の授業の中で一人ひとりの子どもや個々の教材と向き合い熟慮する。また、日々、教師は自分の行動をふりかえり、反省的に教材内容の本質や子どもの思いに気づいていくことを、教員志望の学生に指導する必要性を提言した。
10 修士論文 小学校体育におけるフラッグフットボールゲームの授業実践研究−イーブンナンバーゲームの有効性−	単著	平成 29 年 1 月	大阪教育大学大学院教育研究科	本研究の目的は、フラッグフットボールゲームを公式ルールである 5 人対 5 人（クラスの人数によっては、4 人対 4 人）のイーブンナンバーゲームで実施しても戦術学習が成り立つことを明らかにすることであった。結果として、ゲームパフォーマンスが向上する。以上のことから、フラッグフットボールの授業においてイーブンナンバーゲームを用いて授業展開しても、戦術的な学習課題へ焦点化でき、プレーにおいて子どもたちの役割の明確化とともに積極的なプレーへの参加を促す可能性があることを明らかにした。
11 新しい視点から見た教職入門	単著	平成 30 年 3 月	大学教育出版 第 4 章　教員のメンタルヘルス p89〜p105 第 5 章　教育実習・教育実習事前事後指導・教職実践演習 p251〜p265	教員のメンタルエルスに関する現状と課題を明らかにし、予防的取り組みについて述べた。教育実習の意義及び実習に関わる組織の役割、実習のための具体を示した。また、有意義な実習になるための必要な条件について述べた。 共著者：中田正浩、住本克彦、森一弘、長井勘治、その他 6 名
12　特別支援学校における感染性胃腸炎ンポ集団発生の要因とその拡大予防に関する検討	共著	平成 30 年 10 月	奈良学園大学研究紀要第 9 集	特別支援学校において感染性胃腸炎の集団発生から終息までの欠席。学級閉鎖の状況対応策の記録を分析し、感染ルート、感染拡大の原因、対応策について検討した。病原菌の感染力に強さに加え、児童生徒の過密、授業等における集団の形成が感染の原因である可能性が示唆された。共著者：中島栄之介、森一弘

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 1 芦屋市立朝日ヶ丘小学校指導助言時の冊子	単著	平成 16 年度～22 年度	神戸大学附属住吉小学校 森 4 ページ	＊全員の先生方の授業を参加しての感想および助言を文章にまとめ配布した。 ・教室の空間：たおやかな空間を 静かな空間を 整理整頓された空間を 教師が最大の言語環境である ・活動亜ありきで内容なしの授業にはしない工夫 ・子どもとの関係づくり： つなぐ，もどす，きく 子どもを体に入れる 子どもと面を作る ・同僚性の発揮 ・私のいい授業の創造 ・指示命令のない学校づくり ・縦割り集団の意義
2 三田市教育委員会主催研修会講演時の冊子	単著	平成 21. 22 年度	神戸大学附属住吉小学校　森 2 ページ 2 ページ	研究の進め方 ＊研究の進め方～研究テーマの設定の仕方～ ・児童の実態，教育界の課題，教師の思いを織り交ぜてテーマを設定 ・学級を開くという意味 ・授業化の視点を創り出す ・同僚性の発揮が必要 ＊学習評価の在り方 ・絶対評価と相対評価の違い ・評価規準と評価基準 ・単元目標と本時目標の関係と自己評価の指導
3 フラッグフットボール指導テキスト	共著	平成 22 年 7 月	日本フラッグフットボール協会	指導者テキストづくりへの助言 日本フラッグフットボール協会から出版した指導者のためのテキスト 36 ページ（教科書）高橋建夫先生が監修した，学校体育で活用できる練習方法などを示した。オフェンス時の作戦づくりをしていくために，2 対 1，4 対 3，5 対 3，（オフェンスチームの人数を多くする）でパスコース・ランコースを考えていくモデルとなる動きを示した。また，オフェンス時にも相手チームをブロックする動きを示し，フラッグフットボールのオフェンス時の作戦をスモールステップで学べるように工夫した。 共著者名：高橋建夫，森一弘，（その他 5 名）
4 川西市市立久代小学校指導助言時の冊子	単著	平成 23．24 年度	神戸大学附属住吉小学校　森 2 ページ	体育授業の進め方　サッカーゲームの単元構想 ・ドリルゲーム，タスクゲームの位置づけ方 ・スペースの利用 ・課題の持たせ方⇔振り返りの活用 ・思考力の育成をめざして
6 全国大学体育連合主催 大学体育指導者全国研修会「大学体育 100 号」	単著	平成 24 年 12 月	全国大学体育連合 掲載　p55～p57	大学での体育授業に取り入れるための研修会として初心者への指導の具体を示した。 フラッグフットボールの研修では、基本的な動きからゲーム（戦術）まで網羅的に体験することができました。研修を通して、フラッグフットボールの魅力を体感し、その特性を生かした授業について、実践的な知見を学ぶことができるプログラムを紹介した。

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月３１日

氏名　　矢野　正

研究分野	研究内容のキーワード
教育学・保育学・心理学	保育実践・臨海学校・いじめ・特別支援

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概要
１　教育方法の実践例		
教員採用試験小論文対策	平成29年4月	生徒指導を中心として，新学習指導要領のキーワードに関する勉強を行いながら，公務員・教員採用試験の小論文対策講座を全15回行った．教育時事のトピックにそって解説をし，ポイントを整理し教員志望学生の学習を促した．
２　作成した教科書，教材		
生徒指導論（再掲）	平成25年3月	生徒指導・生活指導・進路指導の在り方について執筆したテキストである．その中で，新しい教育の在り方として，教育と福祉が手をつなぐことを論じた．さらに，特別支援教育とSSWの両輪が機能することで学校という柱が機能することを理論化し述べている．また，SCやSSWの意義及び役割やその未来についても考察した．具体的な進路指導やキャリア教育ついて考えるテキストである．
教育心理学（再掲）	平成28年5月	教育心理学の初心者でも扱えるテキストとして執筆した．子どもの発育や発達および教育に関する最新のデータを交えて紹介している．よりよい現場づくりのための理論的背景として教育心理学の知見をはめ込むことを試みた．保育者・教員を目指す学生や現場で勤務する人，様々な現場で子どもとかかわっている多くの方々の必要とされる課題に対する問題解決のヒントとなる一冊である．
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
学会による評価	平成26年11月	日本教育実践学会より，研究論文・研究発表の功績により，優秀教員賞を受賞した．
学生による評価	平成30年9月	「道徳・特別活動論」では，子どもの実態についてよくわかると，概ね学生の満足度が高かった．小学生への指導に関して，また現代教育の諸課題についてわかりやすく解説されていると高く評価された．教員採用試験対策にもつながる優れた授業であると評価された．
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
高校出前授業	平成30年2月	誉高校高大連携大学講義「参加型の楽しい授業づくりについて―ユニバーサルデザイン入門―」を担当した．
保育士等キャリアアップ	平成31年2月	現任保育士を対象としたキャリアアップ等の講師（幼児教育）を担当した．
５　その他		
教員の自己形成およびキャリア形成支援モデルの開発に関する研究（研究分担者）	平成24年4月	科学研究費補助金基盤研究C(課題番号24530842)
社会の形成者としての資質を涵養する特別活動の積極的な生徒指導機能の実証的研究（研究分担者）	平成30年4月	科学研究費補助金基盤研究C(課題番号18K02548)

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
小学校教諭専修免許状	平成17年3月	大阪府教委平16小専第2036号「学校心理学付記」
中学校教諭専修免許状（社会）	平成17年3月	大阪府教委平16中専第2294号「学校心理学付記」
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
スクールサポーターとしての実務	3年間	大阪市立東桃谷小学校放課後児童健全育成指導員
小学校教員の実務経験	11年間	帝塚山学院初等部・城星学園初等部専任教諭
4　その他		
研修会講師	平成30年6月	三郷町立西部保育園主催の園内研修会の研修講師を務めた．「特別支援教育の考え方」について指導助言した．
研修会講師	平成31年2月	大阪府の保育士等キャリアアップ研修会の研修講師を務めた．「幼児教育」について講習した．

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1）保育と環境	編著	平成23年4月	嵯峨野書院	専門職としての保育者，保育士や幼稚園教諭を目指し，子どもの教育や健康について学ぶ学生を対象とした，保育内容「環境」領域の教科書として作成した．第12章　小学校教育との連携(pp.98-106)について，第14章　実践事例(pp.122-125)について執筆した．幼稚園課程の環境の指導法でも用いている．共編者：矢野正，小川圭子(B5，総150頁)共著者：石上浩美・藤井奈津子・梅野和人・樋野本順子・横島三和子・上月康代・井筒紫乃・島内武・原田健次・多田琴子・原口富美子・藤岡宏樹・山本淳子・加藤英子・宮前桂子・酒井幸子・原寛
2）教師力を高める学級経営	共著	平成23年4月	久美出版	主に保育初任者や，若手・中堅の小学校教員向けの学級経営バイブル的書として企画し，執筆した．第1章「学級経営の基本と考え方」，第2章「学級づくりの技術と方法」を執筆(pp.1-96まで執筆)．学級経営で大切になること，その基本的技術と応用方法，SCやSSWの導入と活用，さらに崩壊からの復帰法などを，事例に即して執筆した．その中で，崩壊から脱却するためのチェック表を作成した．第3章は総合的な学習の時間についての事例を掲載し，第4章は学級崩壊からの復帰法を述べている．第5章では実践事例をふんだんに織り込んだ(pp.180～227)．学習指導要領上位置付けられてこなかった学級経営を考える書．(A5，総231頁）共著者：矢野正，宮前桂子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
3）保育と人間関係	編著	平成 24 年 4 月	嵯峨野書院	専門職としての保育者，保育士や幼稚園教諭を目指し，子どもの教育や健康について学ぶ学生を対象とした，保育内容「人間関係」領域の教科書．として作成した．第 11 章　気になる子どもとのかかわり(pp. 80～89)，第 14 章　実践事例について執筆した．　共編者：矢野正，柏まり(B5,総 134 頁)
4）水辺の野外教育	共著	平成 24 年 4 月	杏林書院	野外教育入門シリーズの第 3 巻．第 9 章　伝統的な水辺の体験活動プログラム(pp. 80～88)について，臨海学校，海水浴，遠泳，海洋少年団，漁師体験についてそれぞれ執筆した．(A5,総 202 頁)監修：星野敏男・金子和正
5）社会福祉の相談援助	共著	平成 24 年 7 月	久美出版	保育士養成教育課程科目「相談援助」のテキスト．福祉・医療・保育・教育におけるソーシャルワークをわかりやすく解説している．第 1 章　相談援助の理論について(pp. 7～24)を執筆した．SSW の重要性について解説している．編著者：相澤譲治・井村圭壮(A5,総 183 頁)
6）障害児保育	共著	平成 24 年 8 月	一藝社	保育者養成シリーズの第 9 巻である．「第 2 章　障害児保育の理念と形態」について(pp. 21～34)，1 章分を執筆した．障害児保育の理念，分離保育と統合保育，インクルージョンについて解説している．(A5,総 204 頁)［監修］林邦雄・谷田貝公昭［編著］青木豊
7）現代地域福祉論	共著	平成 24 年 9 月	保育出版社	現代地域福祉に関するテキストである．第 1 章 2 節　地域福祉の理念についての解説を，発達人間学や社会福祉学の観点から執筆した（pp. 16～19）．(B5,総 182 頁)監修：髙内正子，編著：髙井由起子
8）社会福祉	共著	平成 25 年 3 月	一藝社	保育者養成シリーズの教科書である．第 12 章　「社会福祉と障害者」の章について社会福祉（SW）の入門書をわかりやすく執筆した(pp. 161～172)．(A5,総 223 頁)［監修］林邦雄・谷田貝公昭［編著］山﨑順子・和田上貴昭
9）子どもの食と栄養	共著	平成 25 年 3 月	一藝社	保育者養成シリーズのテキストである．子どもの健康と食についてわかりやすく執筆した．担当は第 6 章の「成長と発達」(pp.77～90)，第 9 章の「学童期・思春期の成長と発達」(pp.117～130)である．(A5,総 216 頁)[監修]林邦雄・谷田貝公昭[編著]林俊郎

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
１０）生徒指導論	単著	平成 25 年 3 月	ふくろう出版	生徒指導・進路指導の諸問題について，いじめ，虐待，学級崩壊，授業崩壊，非行など，近年の生徒指導・生活指導・キャリア教育の研究の授業で活用できる実践的研究テーマに基づいて，そのテキストを作成した．また，SC や SSW の意義とその役割についても論究し，論考を展開している．（A4，総 124 頁）
１１）保育と言葉	共著	平成 25 年 4 月	嵯峨野書院	専門職としての保育者，保育士や幼稚園教諭を目指し，子どもの教育や健康について学ぶ学生を対象とした，保育内容「言葉」領域の教科書として作成した．「第 10 章　小学校における「言語活動の充実」実践」（pp. 86～96）と，「第 11 章　これからの幼児教育の課題と保育内容「言葉」」（pp. 97～104）について執筆した．共編者：石上浩美・矢野正(B5, 総 112 頁)
１２）改訂版　保育と健康	共著	平成 25 年 4 月	嵯峨野書院	専門職としての保育者，保育士や幼稚園教諭を目指し，子どもの教育や健康について学ぶ学生を対象とした，保育内容「健康」領域の教科書である．（担当部分概要）第 4 章「幼児のこころの発達(pp. 23～29)」について，精神的発達，知的能力の発達，社会性の発達について最近のデータをもとに紹介し，わかりやすくまとめて執筆した． 編者：三村寛一，安部恵子，分担執筆：原寛，三上聡子，矢野正，岸本みさ子，生田香明，内山明子，髙木信良，岸本恵一，藤岡宏樹，西川泰行，大西英子，白紙友里子，原田健次，野中耕次，上田優人，浦光良，鉄口宗弘，喜多宣彦，上田真也，臼井達矢，三村達也(B5, 総 124 頁)
１３）保育実践に生かす保育内容「環境」	共著	平成 26 年 4 月	保育出版社	領域「環境」の指導法の教科書である．第 2 章 5 節の「応答的環境とは」(pp. 36～37）について執筆し，保育者養成校教員としてのエールを記載した．（B5, 総 183 頁）監修：髙内正子，編著：上中修　共著者：矢野正ほか　38 名
１４）保育実践にいかす障がい児の理解と支援	共著	平成 26 年 4 月	嵯峨野書院	保育士養成講座の 1 つ「障がい児保育」の教科書である．最近増えつつある「気になる子ども」について解説している．第 10 章「気になる子どもの理解と援助」（pp. 81～90）について執筆した． 編者：小川圭子・矢野正(B5, 総 150 頁)
１５）子どものいまとみらいを考える教育課程・保育課程論	共著	平成 26 年 7 月	（株）みらい	専門職としての保育者，保育士や幼稚園教諭，小学校，中学校教諭などを目指し，子どもの教育課程・保育課程について学ぶ学生を対象とした教科書．第 15 章「教育課程の評価」（pp. 201～216）について執筆した．編者：田中保胤・三宅茂夫（B5，総 288 頁）共著：矢野正ほか 14 名

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
１６）子育て支援のいまとこれから	共著	平成 27 年 3 月	ふくろう出版	大阪府下の保育所・幼稚園・認定こども園の実態調査に基づく「子育て支援論」や「保育者論」の総合保育双書シリーズの No. 1 である. 第 3 章の「調査の方法と結果」を担当(pp. 11～58)と，巻末資料(pp. 72～88)も作成した．監修：渡辺俊太郎　共著者：馬場住子・藤田朋己・佐伯知子・要要子・矢野正・石森弥生・木村美根子・坂上節子・大槻雅俊・小林陽之助・小西由紀子・小林芳郎
１７）保育と表現	共著	平成 27 年 4 月	嵯峨野書院	保育内容「表現」の指導法についての教科書である．第 2 章「子どもの発達と表現」について代表執筆した．編著者：石上浩美(B5，総 112 頁)共著者：矢野正・吉井英博・小松正史・長尾牧子・藤井真理・手良村昭子・澤田真弓・渕田陽子・宮前桂子・福山恵美子・池永真義
１８）教育心理学：保育・学校現場をよりよくするために	共著	平成 28 年 4 月	嵯峨野書院	教育心理学に関する学術専門書である．よりよい現場づくりのための理論的背景として教育心理学の知見をはめ込むことを試みた．保育者・教員を目指す学生や現場で勤務する人，様々な現場で子どもとかかわっている多くの方々の必要とされる課題に対する問題解決のヒントとなる一冊．第 2 章「児童期の発達(pp. 11～19)」と第 6 章「人格の形成(pp. 52～59)」について解説した．編著者：石上浩美・矢野正(B5，総 139 頁)共著者：竹中美香・池田幸恭・芳田茂樹・水野正朗・高岡昌子・山口真希・室谷雅美・宮前桂子・竹内和雄・阿部海渡・鶴田利郎・高橋登
１９）新版　社会福祉	共著	平成 29 年 1 月	一藝社	保育者養成シリーズのテキストの続編である. 第 12 章の「社会福祉と障害者」の章について社会福祉（SW）の入門書をわかりやすく解説及び執筆した（pp. 160～174）. (A5, 総 219 頁)[監修]林邦雄・谷田貝公昭［編著］山﨑順子・和田上貴昭[共著]伊藤陽一・稲葉光彦・今井慶宗・上岡義典・佐久間美智雄・田中卓也・隣谷正範・松井圭三・三ツ石行宏・宮沢和志・村上満・矢野正・山田昇・山田亮一・吉田仁美
２０）保育福祉小六法 2017 年版	共著	平成 29 年 4 月	（株）みらい	保育に関する福祉法令全般の法律・法規の解説書を分担執筆した．主な収載法令は，日本国憲法，社会福祉法，児童福祉法，母子保健法，学校教育法，障害者基本法，障害者総合支援法，障害者虐待防止法などである．年に一回の改訂に即して意見を具申している．(B6，総 860 頁)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２１）改訂版　保育実践にいかす障がい児の理解と支援	共著	平成 29 年 8 月	嵯峨野書院	保育士養成講座の 1 つ「障がい児保育」の教科書である．最近増えつつある発達障害がうたがわれるような「気になる子ども」について解説している．第 10 章「気になる子どもの理解と援助」（pp. 85～94）について執筆した．編者：小川圭子・矢野正(B5, 総 157 頁)［共著］和田薫・三木美香・池内昌美・石上浩美・杉田律子・小崎恭弘・松村朋子・葉山貴美子・鎮朋子・後藤浩子・伊藤博美・松尾寛子・西木貴美子・小林洋司
２２)保育と言葉［第 2 版］	共著	平成 29 年 10 月	嵯峨野書院	専門職としての保育者，保育士や幼稚園教諭を目指し，子どもの教育や健康について学ぶ学生を対象とした，保育内容「言葉」領域の教科書として作成した．「はじめに（p. 1)」と，「第 10 章　小学校における「言語能力の確実な育成」の実践」(pp. 88～98）と，「第 11 章　これからの幼児教育の課題と保育内容「言葉」」(pp. 99～108）について，それぞれ執筆した．編者：石上浩美・矢野正(B5, 総 112 頁)
２３）医療福祉学総論	共著	平成 29 年 12 月	金芳堂	医療技術職（看護・技師・栄養士）などを対象とした医療福祉関連の学術専門書である．「第 6 章　子ども家庭と医療福祉」について代表して執筆した(pp. 50～62)．(B5, 総 108 頁)［監修］日野原重明・間野忠明［編者］星野政明・岩瀬敏・土田耕司［共著者］内田冨美江・葛西久志・柏倉秀克・河原宣子・近藤清彦・杉山克己・高内克彦・種市寛子・野島敬祐・堀尾拓之・森田城次・柳澤理子・矢野正・吉岡利忠
２４）新版障害児保育(コンパクト版保育者養成シリーズ)	共著	平成 30 年 3 月	一藝社	コンパクト版保育者養成シリーズである．「第 1 章　『障害』の理解」について(pp. 9～16)，1 章分を執筆した．(A5, 総 147 頁）［監修］谷田貝公昭・石橋哲成［編著者］青木豊・藤田久美［共著者］矢野正・近藤万里子・原子はるみ・土澤薫・堀江まゆみ・東俊一・橘川佳奈・嶌田貞子・関谷眞澄・加藤勝弘・遠藤清香・寺島明子・有村玲香・山本佳代子
２５）現代保育論(現代保育内容研究シリーズ 1)	共著	平成 30 年 3 月	一藝社	専門職としての保育者，保育士や幼稚園教諭を目指し，子どもの教育や保育について学ぶ学生を対象とした専門的学術書である．「第 3 章　保育者論」（pp. 28～39）について執筆した．編者：保育内容研究会(A5, 総 130 頁)共著者：前川知恵子・杉山喜美恵・矢野正・大倉眞壽美・小尾麻希子・佐久間美智雄・谷川友美・小山貴博・長谷秀揮・加藤達雄

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２６）教育原理：保育・学校現場をよりよくするために	共著	平成 30 年 3 月	嵯峨野書院	専門職としての保育者，保育士や幼稚園教諭を目指し，子どもの教育や理論，歴史および思想について学ぶ学生を対象とした，教育原理の教科書として作成した．「第 11 章　学習指導要領の変遷」（pp. 95～112）について執筆した．また巻末資料として，教職の科目改訂の指針を記載した(p.)．[編著者]石上浩美(B5,総 135 頁）[共著者] 矢野正・渡辺英之・作野友美・藤井奈津子・森岡伸枝・範衍麗・池内正史・住友剛・稲田達也・小野田正利
２７）保育実践に生かす保育内容「環境」[第 2 版]	共著	平成 30 年 3 月	教育情報出版	2017 年告示の幼稚園教育要領等に対応．保育内容「環境」において必要な基礎・基本的な内容だけでなく，現場の先生方の実践研究にも応えられるよう工夫・構成している．また，章ごとに事例問題や演習問題などを盛り込んでいる．具体的内容には，「第 2 章第 5 節　応答的環境とは」（pp. 40～41）について解説及び執筆している．(B5,総 190 頁)[監修]髙内正子[編著]上中修，共著者：矢野正ほか 38 名
２８）保育福祉小六法 2018 年版	共著	平成 30 年 3 月	（株）みらい	保育に関する福祉法令全般の法律・法規の解説書を分担執筆した．主な収載法令は，日本国憲法，社会福祉法，児童福祉法，母子保健法，学校教育法，障害者基本法，障害者総合支援法，障害者虐待防止法などである．年に一回の改訂にあわせて意見を具申している．(B6，総 888 頁)
２９）コンパス保育内容健康	共著	平成 30 年 4 月	建帛社	保育内容健康の教科書として執筆した．「第 3 章　子どものからだの発達と運動能力（pp. 41～48)」について解説している．身長と体重，体の比率，骨の形成，脊柱の湾曲，下肢の発達，生理的機能の発達について論述した．また演習課題を３問作成した．(p. 50)[編者]前橋明[共著者]泉秀生・佐野裕子・廣中栄雄・山梨みほ・矢野正・吉村眞由美・岡みゆき・金賢植・小石浩一・高橋功祐・森田陽子・松坂仁美・住本純・須田あゆみ・照屋真紀・永井伸人・松原敬子・浅川和美・森田清美・戸川俊・丸山絢華・宮本雄司・原田健次(B5,総 207 頁)
３０）生徒指導・進路指導論	単著	平成 30 年 12 月	ふくろう出版	生徒指導・進路指導の諸問題について，いじめ，虐待，学級崩壊，授業崩壊，非行など，近年の生徒指導・生活指導・キャリア教育の研究の授業で活用できる実践的研究テーマに基づいて，そのテキストを執筆および作成した．また，SC や SSW，スクールロイヤー(SL)の意義とその役割についても論究し，論考を展開している．(B5，総 143 頁)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
３１）保育福祉小六法 2019 年版	共著	平成 31 年 4 月	（株）みらい	保育に関する福祉法令全般の法律・法規の解説書を分担執筆した．主な収載法令は，日本国憲法，社会福祉法，児童福祉法，母子保健法，学校教育法，障害者基本法，障害者総合支援法，障害者虐待防止法などである．年に一回の改訂にあわせて意見を具申している．(B6，総 900 頁)
３２）福祉小六法　2019 年版	共著	平成 31 年 4 月	（株）みらい	福祉・介護・保育法令全般の解説書を分担執筆した.主な収載法令は，日本国憲法，社会福祉法，社会福祉士及び介護福祉士法，児童福祉法，母子及び父子並びに寡婦福祉法，障害者基本法，障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律，老人福祉法，高齢者の医療の確保に関する法律，介護保険法，生活保護法などのほか，医療等社会保障の関連法律など.(B6，総 902 頁)
３３）新・保育と環境	共著	平成 31 年 4 月	嵯峨野書院	専門職としての保育者，保育士や幼稚園教諭を目指し，子どもの教育や環境のデザインについて学ぶ学生を対象とした，保育内容「環境」領域の教科書として作成した．「第 12 章小学校教育との連携・接続」についてについて，まとめと演習課題まで執筆した（pp. 121-133）. 幼稚園専修課程生の環境の指導法でも用いている．共編者: 小川圭子，矢野正(B5，総 168 頁)
３４）新・保育と表現	共著	平成 31 年 5 月	嵯峨野書院	保育内容「表現」の指導法についての教科書である．第 7 章「身体・体育教育と「表現」」の 3 節と保育指導案，章末のまとめについて，執筆した（pp. 75-80）．編著者：石上浩美(B5，総 160 頁)共著者：藤崎亜由子・小松正史・吉永早苗・池永真義・矢野正・吉井英博・手良村昭子・長尾牧子・澤田真弓・渕田陽子・宮前桂子・城村奈都子・安永早絵子・田邉織恵・畑儀文・秋山直義・井本英子
３５）保育福祉小六法 2020 年版	共著	令和 2 年 3 月	（株）みらい	保育に関する福祉法令全般の法律・法規の解説書を分担執筆した．主な収載法令は，日本国憲法，社会福祉法，児童福祉法，母子保健法，学校教育法，障害者基本法，障害者総合支援法，障害者虐待防止法などである．年に一回の改訂にあわせて意見を具申している．(B6，総 900 頁)
３６）福祉小六法　2020 年版	共著	令和 2 年 3 月	（株）みらい	福祉・介護・保育法令全般の解説書を分担執筆した.主な収載法令は，日本国憲法，社会福祉法，社会福祉士及び介護福祉士法，児童福祉法，母子及び父子並びに寡婦福祉法，障害者基本法，障害者の日常生活及び社会生活を総合的に支援するための法律，老人福祉法，高齢者の医療の確保に関する法律，介護保険法，生活保護法などのほか，医療等社会保障の関連法律など.(B6，総 902 頁)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） １）児童の健康な生活に関する研究	単著	平成 22 年 8 月	幼児体育学研究　第 3 号 1 巻	児童の生活状況を調査し，学校適応や家庭生活，自立との関わりにおいて小学校 1 年生の生活実態を分析し，健康な生活への留意事項を検討した．保育内容「健康」や幼児期の終わりまでに育ってほしい姿の「健康な心と体」につながる生活習慣を調査した基礎的研究である．（pp. 93～99）
２）2 歳児における身体活動数と睡眠・覚醒に関する研究	単著	平成 24 年 3 月	大阪体育学研究　第 49 号	2 歳幼児を対象に，身体活動量と睡眠および覚醒時間を 3 週間にわたり，アクティグラフで非侵襲的に調査研究を行った．その結果，大人により近い生活リズムを獲得していく過程やプロセスというものが見出され，多くの研究に役だつ知見を得た．（pp. 73～80）
３）中学生の地域福祉に関する研究	単著	平成 24 年 8 月	幼児体育学研究　第 4 巻第 1 号	中学生の地域福祉に関するアンケート調査を，関西圏の中核都市において大規模に実施したものである．その結果，ボランティア活動等，地域福祉に関する中学生の傾向と実態を読み取ることができた．5 年の福祉制度改正をめどに研究調査を継続していくことになっている．（pp. 61～66）
４）共生社会を目指したインクルーシブ保育・教育制度構築に関する一考察	単著	平成 25 年 6 月	社会福祉科学研究　第 2 号	博士論文のための基礎論文として執筆した．日本における共生社会を目指したインクルーシブ教育システムの現状と課題について明らかにし，その後，博士論文としてまとめた．障害児教育や特別支援教育の歴史と思想について論究している．（pp. 12～18）
５）Problem and prospect for construction of inclusive instructional system	単著	平成 26 年 2 月	アジア幼児体育学研究 第 3 巻第 1 号	日本におけるインクルーシブ保育・教育システムの現状と課題について論考した国際学術論文である．近年の日本をめぐる障害児・者の教育と福祉について，教育の理念と，歴史及び思想について改めてその中で論じている．（pp. 9～20）
６）養護教諭と中学保健免許の同時取得の有用性：生涯にわたる健康生活を目指す保健教育の推進のために	単著	平成 26 年 3 月	養成の歩み 第 14 巻第 1 号　全国私立大学･短期大学（部）養護教諭養成課程研究会誌	養護教諭免許状取得学生が，副免許状としての中学校（保健）の免許状を取得する意義について論究した論文である．中学保健のみ教えることができる免許状であっても，その学習の意義と必要性が，養護教諭免許状取得者には認められることを論じた．生涯にわたって健康生活を支援・指導する養護教諭の学びにとっても有用であることが示唆される．（pp. 9～14）
７）臨海学校における遠泳教育の意義	単著	平成 26 年 4 月	海洋人間学雑誌　第 2 巻	日本における臨海学校の研究の代表者として，遠泳教育の果たす役割について，論究した招待論文である．近年，あまり行われなくなった臨海学校という学校行事の含有する教育的意義を，ここに再確認することができる．今後広く行われるように期待するものである．（pp. 34～36）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８）幼児期のこだわり行動に関する自我発達心理学的研究（２）：障害児認定をめぐる経緯から	単著	平成 26 年 6 月	社会福祉科学研究　第 3 号	博士論文のための基礎論文として執筆した．保育における人間関係について，幼児期の発達障害児のこだわり行動を，自我発達心理学的に検討した．研究の観察記録の途中に，障害児認定があり，その記録をたどり，その事例を詳細に分析した．(pp. 119～126)
９）共存・共生の社会を目指して	単著	平成 26 年 9 月	地域福祉サイエンス　創刊号	日本の共生社会の在り方の是非を問う挑戦的論文である．厚生労働省からは「我が事・まるごと」の発送が展開されている．この時期に，教育の理念並びに教育に関する歴史及び思想に焦点を絞り，真の共存・共生社会を目指して，健常者も障害者も共にいきる道を模索し，その展望を論考した．(pp. 189～191)
１０）インクルーシブ保育・教育システムの構築に向けた今後の課題：自我発達観点からみた「こだわり行動」の意味	単著	平成 26 年 9 月	地域福祉サイエンス　創刊号	インクルーシブ保育・教育システムの構築に関する，日本における教育課題について論究した．博士論文の基礎研究として，幼児期の人間関係の中で明らかとなった「こだわり行動」からみえてくる自我発達的な教育的な意義についても考察している．(pp. 165～176)
１１）こだわり行動の自我発達的意義と教育的支援の在り方に関する研究	単著	平成 27 年 3 月	大阪総合保育大学大学院	発達障害児や自閉症児のこだわり行動を通して，その自我発達心理学的意義を考究するとともに，新しい特別支援教育制度の中での教育的支援の在り方を考察した博士論文．障害児のこだわりこそ自我の本質であり，能力発達に加えて，自我発達の重要性が示唆された．特別支援教育が開始され 7 年が経過し，インクルーシブ教育システムの構築の途上である．そこで問われ始めた主要な問題が，特別支援教育の背景をなす教育風土の問題と特別支援教育を実践していく上での合理的配慮の問題である．特別支援教育では，こだわり行動をこれまでのような能力主義における負のイメージで捉えるのではなく，自我発達の観点から捉え直し，正のポジティブなエネルギーとして捉え，支援の方略を考えていくことが重要である．(A4，総 166 頁)
１２）A study on quantity of physical activity and sleep / awakening of three-year-old child	単著	平成 27 年 4 月	アジア幼児体育学研究第 4 巻第 1 号	3 歳幼児の身体活動量及び睡眠・覚醒に関する実証的研究である．3 歳児の身体活動量は，幼稚園での生活の間に高低が認められ，睡眠および覚醒は徐々に大人に近づいていることが明らかとなった．本研究は，幼児期の運動・覚醒・睡眠などに関する基礎的研究である．(pp. 29～35)
１３）創造的で革新的な学校風土の構築に関する研究	単著	平成 27 年 7 月	社会福祉科学研究　第 4 号	教育の歴史及び思想に関する研究論文である．教育風土・学級風土・学校風土の問題を取り上げ，SSW の役割や校長のリーダーシップの重要性，チーム保育・学校という組織の中でできることを見出し，全員参加型の保育・教育とリーダーとなる人材の育成を考究した．(pp. 187～191)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１４）日本におけるインクルーシブ教育システム構築における今後の課題	単著	平成 27 年 10 月	地域福祉サイエンス　第 2 号	インクルーシブ教育システム(Inclusive education system)とは「包容する教育制度」をさす言葉であり，障害者と健常者が共に生きる社会的基盤が現在広がりつつあることを物語っている言葉である．現代はまさに，共生社会が目指されているのである．障害のある子どもを取り巻く環境は，2007 年度より「特別支援教育」の実施に伴い，大きな転機を迎えている．そこで，今後の課題を展望した．(pp. 281～286)
１５）小学校における自己評価および教育改善に関する研究	単著	平成 28 年 2 月	発達人間学研究　第 16 巻第 1 号	本研究では，いわゆる「パイロット」型の学校ではない，私立の小学校に在籍する子どもたちの保護者を対象とした質問紙調査をもとに，自律的な学校運営づくりと開かれた学校づくりを各学校が行っていく上で必要とされる事項について検討した．分析は，有名名門小学校の保護者に対して実施された質問紙調査をもとに，保護者の意見や要望をまとめたものである．調査対象者はＰＴＡ役員 4 名とＰＴＡ学級委員 36 名という，サンプルの偏りには留意が必要であるが，自由記述回答を中心に，多岐にわたる様々な要望や意見が学校に寄せられていることが分かった．こうしたデータは，保護者と学校の関係性・連携を知る上でも貴重なものであり，チーム学校が叫ばれる現場では，今後の学校改善に活かされるに違いない．(pp. 1～8)
１６）教職課程科目「特別活動の研究」における教育実践：レクリエーションに焦点を当てて	単著	平成 28 年 3 月	Leisure & recreation(自由時間研究)第 41 号	本研究では，教員養成系大学での「特別活動の研究」の講義内容を紹介し，その在り方や問題点を考察し，アンケート調査の記述をもとに，今後の講義の運営に資することを目的に実施した．その結果，特別活動の範疇にとどまらない多くの意見が集約され，本授業の効果が十二分に示唆された．特に縦割りや複数学年による取り組みなど，学級集団にとらわれない全学年や全校での活動などの意識も多く認められた．(pp. 8～13)
１７）Assessment of childcare environment in Japan	単著	平成 28 年 11 月	アジア幼児体育学研究第 5 巻第 1 号	日本は現在，大きな保育・教育の制度改革の途上にある．日本で「幼児体育」の研究が積み重ねられて，おおよそ 10 年になる．これまでの教育・保育の歴史を顧みている．アジアでの国際研究交流も盛んになってきた．日本における保育の質や環境評価を確実に行いながら，今後ますますの幼児体育の発展を期待したい．(pp. 11～14)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１８）臨海学校における教師・指導者のリーダーシップに関する研究	共著	平成 29 年 2 月	実践学校教育研究　第 19 号	本研究は，大阪府私立 T 小学校で行われた臨海学校に初めて参加した 4 年生児童 110 名を対象とし，指導する教師のリーダーシップが児童の達成感や泳力にもたらす教育効果を明らかにすることを目的とした．調査項目は，教師のリーダーシップを三隅の PM 理論を参考に，今回新たに設問項目を作成した．結果として，泳力の向上について，臨海学舎実施前と臨海学舎実施後では，児童 110 名のうち 76%にあたる 84 名の泳力が顕著な向上が認められた．そして泳力の向上が最も顕著だった学級担任の Performance 値および Maintenance 値が，共に高い値を示していた．逆に，M 値が低かった学級担任のクラスは泳力の伸び率が低かった．本研究の結果，T 小学校の臨海学舎において，児童の泳力向上や達成感に指導する教師のリーダーシップがもたらす効果は相当に大きいことが認められ，特に集団を維持する機能が重要であることが示唆された．(担当部分概要)考察部分担当　共著者：矢野正，吉井英博(pp. 87～92)
１９）レクリエーション科目における教育実践の研究：大学生のレクリエーション」に関する意識調査	単著	平成 29 年 3 月	Leisure & recreation(自由時間研究)第 42 号	レクリエーションでの学生の意識を構成する指標について明らかにするため，計 79 の記述から収集した情報データをテキスト分析により検討したところ，概ね以下の知見を得た．1.「大人数での遊び」や「コミュニケーション活動」というクラスターに加えて，「ゲーム」という言葉が「レクリエーション」として分類された．2. 学生はレクリエーションを少人数ではなく大人数で楽しく遊ぶことをイメージしていることが確認された．3. レクリエーションはコミュニケーションを活性化させるものであると認識していることが示唆された．4. 学生にとってのレクリエーションは，氷おにやフルーツバスケットなどの身近なゲームであることが確認された．(pp. 39～42)
２０）夏の行事・臨海学校における安全教育・危機管理	単著	平成 29 年 6 月	教育と医学　第 65 巻第 7 号　通巻第 769 号(慶應義塾大学出版会)	夏季というのは，子どもの事故が増える時期である．本論文では，地域をはじめ学校や家庭で知っておいてほしい特別活動・学校行事の救急対応について特に，遠泳と臨海学校を取り上げ考察した．臨海学校の現状と課題や臨海学校中の健康管理・安全管理について，危機対応・危機管理の在り方についてわかりやすく論考し，解説を行った．近年の教育現場の改革やライフセービングの技術の導入及び安全教育の現場での活用法についても，論文の中で詳細に紹介している．(pp. 640～649)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２１）友達の良さを見つけ伝え合いながら共に成長する子どもの育成：小学３年生体育科「忍者屋敷でクルリンパ！」の実践を通して	共著	平成 30 年 2 月	実践学校教育研究　第 20 号	本研究では，「関わり合い，伝え合い，学び合う」ことで子どもたちの中に何が生まれ，何が育っていくのかを探り，「学び合い」を通して子どもたちに生きていくための 21 世紀型スキルを身につけさせたいと考えた．本研究の結果，3 年生では体育科の「学び合う」学習の中で，「その技ができないのは，自分だけではない」と安心して取り組んだり，「みんながこの技をできるようにするにはどうしたらいいのか」と問題を自分たちで見つけたりするなど，能動的・主体的で対話的な深い学びとして解決していこうとしたことが確認できた．本研究は，アクティブ・ラーニングの先駆的取り組みとしてその実践が評価されたものである．(担当部分概要)研究の目的・考察を主に担当　共著者：矢野正，佐伯優斗（pp. 55～62）
２２）今後の特別支援教育の充実に向けた方策に関する検討：幼児期から成人期までのきれめのないサポート体制の構築に向けて	単著	平成 30 年 8 月	社会福祉科学研究　第 7 巻	教育は，充実した教育内容・方法・環境だけでなく，豊饒で健全な教育風土を必要としている．また，これまでの教育では教育内容・方法・環境の充実がもっぱら優先されてきたが，これからの教育では教育風土の健全化を図っていく必要がある．特別支援教育は，その教育にふさわしい教育風土を醸成していかなければならないと述べ，また同時に「特別支援教育の使命は，共生社会の実現を目指して，インクルーシブ教育システムにより障害のある子どもたちの生きる力を育んでいくと同時に，基盤となる教育風土を『競争一辺倒の教育風土』から『競争<共生の教育風土』に修正していくことにある.」今後の特別支援教育への新たなる視座を提供した．発達人間学・人間教育学というものが今後の教育を明るく照らす世の中が来るのではないかと期待し，日本のインクルーシブ教育システムの到来を予想している(pp. 179-188)
２３）初等教育における構造と教育内容に関する考察：教育の質の向上に向けて	共著	平成 30 年 10 月	地域福祉サイエンス　第 5 巻	本論では，幼児教育や保育における構造と内容について，幼稚園教育要領・保育所保育指針・幼保連携型認定こども園教育・保育要領の改訂からキーワードをピックアップし，概観し論考してきた．初等教育を，幼小接続の意味から改めて問い直している．園児や子どもたちの最善の利益のために，保育者の果たすべき役割は極めて大きいものがあると考える．また，幼児教育や保育の意味および価値をその構造と特質から改めて，複雑な社会の到来を迎えている今，もう一度問い直したいと考えている．そこでは，大人の側の保育や幼児教育への心意気が本気で試されていると考える．(担当部分概要)全文担当.共著者：矢野正，大谷雄太 (pp. 225-234)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
２４）初等教育の能力・資質と小学校入学までに育てたい姿を子どもの育ちや成長の過程として捉えるためにすべきこと	共著	平成 30 年 12 月	草の根福祉　48 号	本研究では，質の高い保育・初等教育の形態から幼児期の終わりまでに育ってほしい 10 の姿の視点を振り返りに生かすことの重要性を説いている．子どもの主体性を大切に生活し，どのように評価し，改善していくのかという保育者・教育実践者たちの思考のレベルが問われている．日本の幼児教育や保育の水準が高まってきている．保育士資格も短大であれば 2 種，四大を出れば 1 種というように幼稚園教諭免許状のような処遇改善が必要になろう．(担当部分概要)全文担当. 共著者 : 矢野正，大谷雄太，吉井英博(pp. 96～105)
２５）小学校教員志望学生の発達障害理解に関する基礎的研究 :「特別支援教育」科目の必修化をふまえて	単著	令和元年 12 月	草の根福祉　49 号	本研究は，特別支援教育科目の必修化を踏まえて，発達障害等についての理解度を評価する調査を，大学生を対象に行った. その結果，理解度が高い一方で，そういった児童への対応方法や支援方法については軒並み得点が低かった．新たに必修となる「特別支援教育」の授業での確かな理解と学習が不可欠である．(pp. 49～57)
２６）関西私立小学校の道徳・特別活動の教育内容 : 大阪府と兵庫県の私立小学校連合会の WEB 紹介から	単著	令和 2 年 1 月	実践学級経営研究　第 3 号	特別の教科「道徳」と特別活動のカリキュラム開発に関する事例研究である．関西の有名な私立小学校の実践事例を取り上げ，それぞれ考察を行い整理を行った．(pp. 31～46)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（その他：紀要等）				
1）「幼児体育」模擬保育授業が学生の気分変容に及ぼす影響	共著	平成 22 年 7 月	西山学苑研究紀要　第 5 号	本研究では，「幼児体育」における模擬保育授業前後の学生の気分変容 6 尺度を包括的に捉え，調査及び検討を行った．その結果，「幼児体育」模擬保育の授業に参加した学生は，授業後に否定的な感情が解消されることが示された．（担当部分概要）全文担当　著者：矢野正，原田健次（pp. 17～32）
2）小学校における安全な臨海学舎の実践研究(Ⅵ)：臨海学校参加児童の学びを構成する指標	共著	平成 22 年 9 月	大阪教育大学紀要第Ⅴ部門教科教育 59 巻 1 号	臨海学校中の子どもの学びの意味と目的について，テキストマイニングを用いて探索的に分析した．その結果，クラスターによる長期の臨海学校に関する教育的効果が確認され，学びの構成要素がそれぞれに見出された．（担当部分概要）全文担当　著者：矢野正，三村寛一（pp. 41～50）
3）小学校における安全な臨海学舎の実践研究(Ⅶ)：保健室利用状況と保健室の役割	共著	平成 23 年 9 月	大阪教育大学紀要第Ⅴ部門教科教育 59 巻 2 号	特別活動である臨海学校の保健状況・管理調査の結果，10 年間にわたっての発熱・怪我などの発生状況を研究および分析した．長期の臨海学校における保健管理の報告結果からは，初日から前半に集中することが見出された．今後の学校運営に生かすことができる特記すべき知見を得た．（担当部分概要）全文担当　著者：矢野正，三村寛一（pp. 41～51）
4）通常学級における「気になる子ども」の心理的特徴：学校での生活意欲と学級満足度の学級経営的分析	単著	平成 24 年 3 月	湊川短期大学紀要　第 47 号	通常学級の担任教諭から人間関係の中で「気になる子ども」を抽出してもらい，他の児童との学級満足度調査を用い比較および検討を行った．学級担任や T2 の評価からの Q～U テストの結果，「気になる子ども」というのは学級に満足していない傾向が明らかとなった．フォロー体制を確立していくことで，今後の学級経営に活かしていきたい．（pp. 7～10）
5）小学校における安全な臨海学舎の実践研究(Ⅷ)：臨海学校中の児童の体温変動	共著	平成 24 年 3 月	大阪教育大学紀要第Ⅴ部門教科教育 60 巻 1 号	小学校における長期の臨海学校における参加児童約 350 名の体温変動を追跡コホート調査し，健康把握及び管理を行った．その結果，臨海学校中に，発熱する児童もみられたものの，事前調査から正常に推移するといった傾向を示していた．（pp. 51～56）（担当部分概要）全文担当　共著者：矢野正，三村寛一
6）幼児の睡眠・覚醒リズムと身体活動量(Ⅱ)	共著	平成 24 年 3 月	大阪教育大学紀要第Ⅳ部門教育科学 60 巻 1 号	1 歳から 3 歳の乳幼児の睡眠・覚醒リズムについて，非侵襲型のアクティグラフを用いることによって調査を行った研究である．加齢に伴う発達・成長によって，睡眠から覚醒へのリズムが大人へと定着していくことを見出した．（pp. 215～220）（担当部分概要）全文担当　共著者：矢野正，三村寛一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7）個人体験から読み解く理想の教師像	単著	平成 24 年 3 月	湊川短期大学紀要　第 48 号	個人の教師との体験・経験レポートから，理想の教師像を探索した研究論文である．それぞれの教育実習などの個人体験や記録が，その後の教師像に与える影響の大きさについて追究した論文である．新しい教師論・保育者論・教職論に関する論考である．(pp. 21～25)
8）教育相談実践研究センターにおける活動：過去 3 年間の実践の評価と今後の活動について	共著	平成 24 年 3 月	湊川短期大学紀要　第 48 号	湊川短期大学における「教育相談実践研究センター」の活動の年間報告を行った．その中で実際に，保育者を対象に研修会の講師として登壇した．(担当部分概要) 研修の主担当として研修を指導，合わせて報告の概要を作成した．共著者：河野淳子，藤井保男，若嶋清人，矢野正，辻良子(pp. 57～62)
9）保育所における保育士の身体活動量と睡眠・覚醒リズム：Actigraph からみた平日と休日の比較	共著	平成 24 年 8 月	大阪教育大学紀要第Ⅳ部門教育科学 60 巻 2 号	保育所で働く保育士を対象に，睡眠・覚醒時間及び身体活動量などをアクティグラフを用いて定量的に測定し，休日と平日で比較及び検討した．その結果，平日の方が，活動数が減少する傾向が認められた．意外と動きが少ないといった保育者の姿が浮き彫りとなった．(担当部分概要) 全文担当．(pp. 121～126)　共著者：矢野正，三村寛一
１０）本学学生の体力と生活習慣に関する研究	単著	平成 25 年 3 月	白鳳女子短期大学紀要第 7 号	体育科指導法の受講学生の体力及び運動能力を，新体力テストを主に用いて評価し，同時に文部科学省から出ている生活習慣などの質問項目との関連性を検討し，論考した．体育受講学生の理解に資する目的で調査を実施し，その結果を学生に往還した．(pp. 23～32)
１１）本学学生の福祉施設実習の評価と課題	単著	平成 25 年 3 月	湊川短期大学紀要　第 49 号	児童福祉施設実習の主担当として，保育実習（施設）を担当し，授業及び事後の学生のアンケートや成績などの相関から，児童福祉施設での実習や活動を総括した研究論文である．事後指導からは学生の総合的な学びのあり方が明らかとなった．本研究の結果は，今後の施設実習の充実に役立てることができる．(pp. 23～26)
１２）小学 1 年生の清掃活動における情動知能の評価	単著	平成 25 年 3 月	大阪女子短期大学紀要第 37 号	小学校 1 年生の掃除活動や特別活動において，情動知能がどのように高まるかを解明した研究論文である．担任，副担任による複数による情動的百度の客観的データについて，1 年間の縦断的研究により，児童の情動知能（こころの知性）を評価及び測定を行った．(pp. 61～68)
１３）子どもにミクロな問いを持たせる体験的活動：小学校 3 年社会科「パン工場の見学」を通して	単著	平成 25 年 8 月	西山学苑研究紀要　第 7 号	小学校の社会科見学による「体験的な学び」に関する実践的研究である．具体的には，３年生社会科の地域・パン工場の見学を通して，ミクロな問いを持つことができるかどうかを検討し，論考した．総合的な学習の時間にもつながる体験的な学びが，小学生に有効であることが示唆された．(pp. 51～66)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１４）障害児保育特論：発達人間学から考える	共著	平成 26 年 3 月	湊川短期大学紀要　第 50 号	障害児保育特論の授業の内容をまとめた論文である．障害児保育においてテーマを，発達人間学から考えるとし，それぞれが持ち寄ったレジュメを研究論文としてまとめた．（担当部分概要）授業担当者として，はじめとおわりにを担当し，総括のまとめを完成させた．共著者：矢野正，笠井康平，若松裕太（pp. 51～56）
１５）小学校における安全な臨海学校の実践的研究:大阪府 S 市における臨海学習の指導実践とマニュアル	単著	平成 26 年 3 月	大阪女子短期大学紀要第 38 号	小学校における安全な臨海学校に関する実証的研究である．大阪府の S 市の臨海学習マニュアルを具体的に紹介し，安全な学校行事の計画と運営に資することを目的とし報告した．安全な臨海学校の運営には安全マニュアルは必携であり，危機管理上も重要な学校経営では必要な書類である．（pp. 87～93）
１６）幼児期のこだわり行動に関する自我発達心理学的研究（１）発達障害の 3 歳児についての事例研究	単著	平成 26 年 3 月	大阪総合保育大学紀要第 8 号	博士論文のための基礎論文として発達・行動のこだわりについて執筆した．幼児期の発達障害児のこだわり行動を，自我発達心理学的に検討した．研究の事例の観察は主に 3 歳から 5 歳児にかけてであり，その記録を詳細に分析し，論考した．（pp. 193～208）
１７）幼稚園教育実習に関する学生の意欲と現状に関する研究	単著	平成 26 年 3 月	西山学苑研究紀要　第 9 号	幼稚園教育実習の前後において，学生に学びの意欲と現状のアンケート調査を実施した．その結果，事前・事後指導及び実習における学生の課題や戸惑いが浮き彫りとなった．今後の幼稚園における教育実習の運営及び実施に生かすことのできる知見を得た．（pp. 1～8）
１８）聖ヨハネ・ボスコと予防教育法：ドン・ボスコの教育を知る	単著	平成 28 年 2 月	人文科学論集(名古屋経済大学)　第 95 号	今年，2015 年は教育者ドン・ボスコの生誕 200 周年のお祝いの年である．各地でその功績に対して祝いの集いが開催されている．本論で扱うドン・ボスコの教育手法は，「予防教育法」に集約される．筆者は，カトリック・ミッション・スクールで初等教育をしていたことがあり，この予防教育法に携わった経験がある．教育の理念や歴史及び思想について論考し，子どもを正しく教え導く教育方法は現在では，世界各地で広められており，本研究は相当に注目に値するものである．(pp. 51～56)
１９）聖ヨハネ・ボスコと予防教育法（Ⅱ）：ドン・ボスコの心で教育を	単著	平成 29 年 3 月	人文科学論集(名古屋経済大学)　第 96 号	日本の教育課程の中にドン・ボスコの教育実践がいかに位置づけられるのか，教育原理および教育方法からの課題の抽出を行った．具体的には，2014 年度の A 小学校の学校全体の教育目標の反省材料・資料を基に結果を記述し，その上で考察を加えた．近年の学校現場の問題，特に学校教育の諸課題，研究授業，生活指導等について検討を行ったものである．論文の中でその教育の原理を追究している．（pp. 63～69）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２０）小学校における発達障害が疑われる児童に対する行動論的アプローチ：トークン・エコノミー法を用いた連絡帳の試み	単著	平成 29 年 3 月	教育保育研究紀要(名古屋経済大学)　第 3 号	本研究は，通常の学級に在籍し，学習不適応状態を呈する小学校３年生男子１名に対して，トークン・エコノミー法による特別な連絡帳を使用し，その学習および適応における効果を検討した．その結果，男児は２学期から３学期にかけて目標の達成をみせ，徐々に自信をもつようになり，当該学級への学習などの適応も可能となった．したがって，トークン・エコノミー法を用いた連絡帳による行動変容・改善を企図した児童に対する支援の本研究の目的は，相当程度に到達できたものと推察される．人間関係の構築に有効な支援を行ったものであると示唆された．(pp. 43～50)
２１）今後の教員養成とキャリア教育に関する考察：進路指導の歴史と現状をふまえて	単著	平成 30 年 1 月	教職支援室報(名古屋経済大学) 第 1 巻第 1 号	近年，時代の要請にあわせて教員養成の在り方が大きく変化している．高齢のベテラン教員が退職していく一方で，新規の大量採用時代を迎えて，若手教員の育成が現場では急務である．これは，教育現場だけではなく保育や幼児教育においても同様である．本研究は，今後の教員養成についての動向をまとめたものである．また，新たに教職課程のある大学では，キャリア教育や進路指導の観点からの学校教育の質的転換もまさに図られようとしている．本論では，主に進路指導の歴史と現状，今後の展開について考察した．よって新学習指導要領や教職課程コアカリキュラムなどに沿った新たな教員養成というものが求められよう．(pp. 13～24)
２２）社会見学を軸とした体感する社会科・総合的な学習の時間の考究：商店街の社会見学と教育実践を振り返って	単著	平成 30 年 1 月	教職支援室報(名古屋経済大学) 第 1 巻第 1 号	本研究の目的は，社会見学を中心とした学習展開により，児童の興味や関心を高め，体感できる社会科・総合的な学習の時間の在り方を考究することである．本研究では，子どもの興味・関心を高める教材研究を進める中で，方法として単元にできるだけ体験学習や主体的な学びの活動を取り入れることを目指し，「社会見学」を学習の中心に位置づけ，常に体感できる課題設定を進め，主体的・対話的で深い学びや学習に取り組んだ．その結果，「1. 事前学習」「2. 当日の見学」「3. 事後学習」という今回の学習展開を用いた，社会見学を中心とした体感する社会科・総合的な探究の学習の時間は，子どもたちの学習に有効であることが示唆される．(pp. 73～82)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
２３）小学校における BLS 教育の有効性に関する検討:道徳的アプローチによる教育実践	共著	平成 30 年 1 月	教職支援室報(名古屋経済大学) 第 1 巻第 1 号	本研究の目的は，小学生を対象に BLS 教育を短時間かつ効果的に行う授業方法の展開の実践をすることである. BLS 教育を受けた児童にどのような教育的効果があるのか，またどう思考が変化したのかを調査および検討することで，改めて学校現場における BLS 教育の必要性を示し，普及拡大の一助とした．本研究は，2016 年 3 月に山梨県内の A 小学校で実施した．当日のプログラムは，小学 6 年生の児童 56 名に 90 分の授業を行った．まず，1 週間前に事前アンケート調査を行い，また授業後にアンケート調査をし，授業実践を終えた．その結果，道徳的なアプローチや指導の実践によって子どもたちの命の重要性や救急救命に対する意識の向上が認められた．したがって，小学生を対象とした BLS 教育を保健体育の授業によっては十分指導可能であることが確認された．(担当部分概要) 研究のデザイン及び考察を担当した． (pp. 37～44)共著者：吉井英博，矢野正
２４）総合的な学習の時間と英語活動の教育実践に関する研究：総合的な学習の時間と英語活動の連携	共著	平成 30 年 1 月	教職支援室報(名古屋経済大学) 第 1 巻第 1 号	平成 29 年に告示の小学校学習指導要領において小学校中学年に外国語活動が，小学校高学年には外国語科が導入された．移行期には小学校高学年の英語活動の時数が 15 時間増加し，教育現場ではその増えた時数をどのように生み出すのかが喫緊の課題である．学習指導要領の移行措置により，総合的な学習の時間を 15 時間削減して，外国語活動に充てることが認められると多くの小学校で総合学習を 15 時間削減して英語活動にあてる動きが起きた．大阪府 S 市に於いても総合的な学習の時間を削減し，増加した英語活動に充てることが決定された. 懸念されるのは，授業時間を削減される総合的な学習の時間の質の低下である．英語活動と連携することで，総合も英語活動も充実することが大切であると考え，英語と総合学習のカリキュラム及び指導案を作成することにし，S 市立 A 小学校の事例を紹介した．(担当部分概要) 研究のデザイン及び考察部分を担当した． (pp. 83～94)共著者：宮前桂子，矢野正

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２５）聖ヨハネ・ボスコと予防教育法（Ⅲ）：1 年間の教育実践の振り返りから	単著	平成 30 年 3 月	人文科学論集(名古屋経済大学)　第 97 号	ドン・ボスコの予防教育法は，世界中に浸透してはいるものの，あまり研究の蓄積が多いとは言えないという側面が認められる．そこに本研究の意義と必要性がある．したがって，本研究では，1 年間の聖ヨハネ・ボスコの学校の小学校 2 年生の学級経営案の考察と反省における教育実践を，振り返って整理し，まとめなおすことで，その教育法の教育の方法を具体的に評価および検討してみることにした．本実践は，2014 年度に関西圏の私立 A 小学校で実施したものであり，ドン・ボスコの予防教育法をすすめる学校の教育原理や学級運営・経営の理念を具現化したものである．(pp. 41～51)
２６）福祉施設実習の事前事後指導に関する一考察：学生による学びの記述内容からの検討	単著	平成 30 年 11 月	人間教育（奈良学園大学）第 1 巻第 9 号	保育実習指導Ⅰの施設実習の事前・事後指導の在り方を考究した実践記録論文および資料である。保育士養成課程学生の事前課題・レポートや児童福祉施設実習後の考察から、今後の指導につながる示唆を得た。具体的な今後の保育実習指導に役立つ資料となった。また今後を見据えた保育士資格（保育所・施設）の在り方にも鋭く言及、提言を行っている。(pp. 289～297)
２７）子どもロコモの予防に関する教育実践研究（Ⅰ）：小学 5 年生 1 年間の実践を振り返って	共著	令和元年 9 月	奈良学園大学紀要　第 11 集	本研究の目標は，ロコモ予防体操を通して，けがをしにくい体をつくる．けが予防についての関心をもち，けがが減少したと感じ，ロコモ予防体操に進んで取り組もうとする．身体を動かす楽しさ，気持ちよさを知り，自ら運動に親しもうとする．結果としてけがの発生頻度は減少し，健康な体づくりに貢献することができた．共著者：鈴木伸也・矢野正(pp. 85～98)
２８）「教育課程」と「全体的な計画」についての一考察：幼稚園教育要領，保育所保育指針，幼保連携型認定こども園教育・保育要領から	共著	令和元年 9 月	人間教育（奈良学園大学）第 2 巻第 9 号	2017（平成 29）年の改定では，保育所保育指針において，「保育の計画」という文言はそのままで，「保育課程」という文言はなくなり，「保育課程」は「全体的な計画」と改められた．それと同時に，幼稚園教育要領の「教育課程」のところに「全体的な計画」という文言が新たに付け加わることとなった．そして保育所保育指針，幼稚園教育要領，幼保連携型認定こども園教育・保育要領のいずれにおいても「全体的な計画」という共通した文言が存在することになったのである．５歳児修了時までに育ってほしい姿がすべてに明記され，アプローチカリキュラムが必要とされている昨今，せめて年長児のクラスにおける就学前の 1 年間は，保育所と幼稚園が共に「教育課程」を検討して行くことが必要となってくるのではないだろうか．　共著者：中田章子，高岡昌子，矢野正，加奥満紀子 (pp. 221～229)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２９）保育者の役割と責務に関する一考察	共著	令和元年12月	人間教育（奈良学園大学）第2巻第11号	保育士養成課程における「保育者論」の内容を網羅し，保育者の役割と責務についてまとめた研究論文である．子どもに関するプロフェッショナルである保育士の専門性について，具体的に「解説した．子どもを健やかに育てることと，子育てをしている保護者を支援することが重要である．保育士倫理綱領についても言及した.（担当部分概要）全文担当　共著者：前田綾子・矢野正（pp.269～276）
３０）先導的な乳幼児教育の実践に関する一考察：先駆的な幼稚園や保育所の視察を通して	共著	令和元年12月	人間教育（奈良学園大学）第2巻第11号	保育界の先導を行く園を訪問し，よりよい保育の在り方を考究した論文である．2017年に幼保の3法令の改訂を受けても，保育の指導法は何ら変わりがないことを追究した．子どもの遊びや生活という2本柱で指導法を検討していくことが必要であることが示唆された.（担当部分概要）全文担当　共著者：矢野正・前田綾子（pp.285～290）
３１）発達に遅れがみられる1歳児クラスA児の事例研究：母子の愛着関係に着目して	共著	令和元年12月	人間教育（奈良学園大学）第2巻第11号	1歳4か月で入所してきたA児について，発達支援の観点から検討を行ったものである．保育者との愛着関係作りから始め，運動発達を促す関わり，保護者支援，関係機関との連携などをスモールステップで計画し保育を行った．愛情のある用語が子どもの発達に強い影響を及ぼすことが示唆された事例である．（担当部分概要）考察担当　共著者：前田綾子・矢野正（pp.291～296）
３２）「気になる子ども」の言葉と人間関係の指導法：特別支援保育の充実に向けて	単著	令和元年12月	人間教育（奈良学園大学）第2巻第11号	京都市八幡市教育委員会幼稚園部会での講演をまとめた講演録である．領域人間関係と言葉の指導法について現場の先生方に講演を行った．（pp.297～301）
３３）小学校における学校行事「臨海学校」の指導に関する研究：生徒指導と特別活動の関連から	単著	令和2年2月	教職課程年報(同志社女子大学）第3号	臨海学校や遠泳といった教育活動がこれからも活発になされるように研究を行った．近年敬遠されつつある学校行事について再考したものである.臨海学校と生徒指導との関連の整理を試みたものである．（pp.69～77）
３４）聖ヨハネ・ボスコと予防教育法(Ⅳ)：学級担任としての1年間の学級経営の反省から	単著	令和2年2月	教職課程年報(同志社女子大学）第3号	本研究は，教育の原理を追究するため，A小学校での1年間の学級経営を反省と変遷をまとめたものである．研究の方法として，①学級集団の経営と工夫，②学級環境の経営と工夫，③司牧指導，④学習指導，⑤生活指導・生徒指導，⑥家庭との連携をそれぞれ分析した．その結果，学級経営及び児童の生活指導が1年間にわたって良好に推移したことが窺われ，カトリック・ミッション・スクールの特色がよく認められた.（pp.89～103）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３５）子どもロコモの予防に関する教育実践研究（Ⅱ）：４年間のコホート研究と昨年度との比較から	共著	令和２年３月	奈良学園大学紀要　第 12 集	今回は，引き続き研究を継続・報告した．A 県 B 市の公立 C 小学校第４学年 33 名（男子 19 名，女子 14 名）に対し，１年間にわたり，「朝の会」と「体育の授業時」にロコモ予防体操を実践した．また，この学年は１年生時から毎日宿題として，家庭でもロコモ予防体操を実践している．2015 年４月～2019 年３月（４年間の短期縦断コーホート研究）に行った教育実践では，クラス別けが人数は他クラスと比べると圧倒的に少ないことが明らかとなった．これにより，毎日家庭で行っているロコモ体操に加え，学校での実践を組み合わせることによって，けがの発生頻度がより減ったものと推察される．(担当部分概要）考察と校正を担当　共著者：鈴木伸也・矢野正(pp. 39-50)
（その他：学会発表等） １）小学校における臨海学校の保健管理	単著	平成 22 年６月	日本野外教育学会第 13 回大会	本研究では，小学校における臨海学校の保健室の役割について考察整理し直し，長期にわたって宿泊を伴う体験的な活動や臨海学校などの運営及び保健管理に役立つ基礎的資料を得ることを目的とした．臨海学校では保健室が保健管理の中心として位置づけられるとともに，児童主体の保健教育に繋がる可能性がある．５泊６日の臨海学校では，けがは日を追って増える傾向を示し，発熱では多い３日目(中盤)に重点をおいた保健管理が重要である．(pp. 46～47)
２）小学校における臨海学校の健康管理：高学年児童の体温変動に着目して	共著	平成 22 年８月	教育医学　第 56 巻第１号	本研究では，臨海学校中の起床時と夕方の児童の体温測定および毎日の生活調査を実施した．その結果，児童全体の実習中の平均体温は平常に比べて上昇を示した．また体温変動には差があり体温上昇した児童が最も多かったが，変化の見られなかった児童や体温が低下した児童も認められた．また日内リズムが消失した事例，低体温が上昇し改善した事例も見られ，先行研究同様に臨海学校は児童の心身に強く影響を及ぼすことが示唆された．(担当部分概要）全文担当　共著者：矢野正，三村寛一(pp. 89)
３）小学校低学年における平仮名書字能力の習得時期の検討	単著	平成 22 年９月	日本教育心理学会第 52 回大会総会発表論文集	本研究では，２年間のコーホート研究をデザインし，平仮名の「単語聴写課題」を小学１年生時に実施し，同じ児童を対象に２年生でも実施し，その書字能力(聴写)習得における比較調査を行った．その結果，男児よりも女児の得点が高く，特殊音節の習得でその傾向が顕著であった．また１年生から２年生にかけて書字能力の多くが習得され，特に清音･濁音･半濁音･撥音･長音は１年生で概ね習得可能な音節である．拗音･拗長音･促音･拗促音の特殊音節は２年生の間に習得ができるものと推察された．(p. 289)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4）教員は学校現場でどのように働き，何を学んでいるのか	単著	平成22年9月	日本教育心理学会第52回大会総会発表論文集	教員は，日々の実践の場や状況の中でどのように働きながら何を学び，教員として発達しようとしているのか．また，SCやSSWなどの学校内外の社会的リソースをどのように活用しながら，教員として熟達しようとしているのか．本シンポジウム企画では，現職教員と大学教員の立場からの話題提供を基に，教育現場の歴史～文化的状況の中で日々格闘する教員の学びと教員アイデンティティの発達について，教員養成の歴史性・時間性を含めた議論を行った．企画者・話題提供者：矢野正／司会者・企画者　：石上浩美／話題提供者：宮前桂子，森田英嗣，荊木まき子／指定討論者：米山光儀，高橋登(pp.194～195)
5）幼児の基礎的動作に関する研究：25m	共著	平成22年9月	日本幼児体育学会第6回大会研究発表抄録集	幼児の25m走を身体の発達的観点から，基礎的動作に絞って論じた．25m走を定点ビデオ撮影を行い，幼児の走力の判定を行った．その結果，身体発達の段階のモデル開発を行った．(担当部分概要）共同研究により，測定の実施及び評価と分析を担当．共著者：喜多宣彦，矢野正，藤岡宏樹，三村寛一(p.26)
6）通常学級における「気になる子ども」の評価と支援：学級アセスメントにおけるクラスでの視座	単著	平成22年9月	日本LD学会19回大会発表論文集	通常の学級において担任からみて「気になる子ども」を評価し，Q～Uテストでの評価と比較した．その結果，学級不満足群に有意に位置していることを見出した．人間関係から教育・保育を見つめ直す良い機会となった．(pp.266～267)
7）Quantity of physical activity and sleep / awakening of 3-year-old child	単著	平成22年12月	The Asian Society of Physical Education of Young Children ／ The 6th.A-PEC 2010 in Korea ／Chung-Ang University, Seoul	幼児の中でも，特に3歳児の身体活動量と睡眠・覚醒について研究した論文である．アジア幼児体育学会で発表および報告を行った．3歳児の身体活動量をアクティグラフを用いて詳細に測定・実験した挑戦的萌芽研究である．(pp.49～56)
8）A Report of “Practical Seminar for the Teaching Profession”	単著	平成23年4月	The Asian Society of Physical Education of Young Children ／ The 7th.A-PEC 2011 in 台湾／National Physical Education University, Taipei	幼稚園教諭取得のための教職実践演習における園児との実践型交流授業の取り組みについて，アジア幼児体育学会で発表した．小職の最終段階での授業として，教職実践演習で園児を招いての交流事業を，企画運営を学生主導で行ったものである．(pp.101～105)
9）園児との実践型交流授業に関する研究	共著	平成23年8月	日本幼児体育学会第7回大会研究発表抄録集	幼稚園教諭取得のための教職実践演習（保育）での取り組みを実践し報告した．特に，園児との実践型交流授業の取り組み事例を発表および報告した．（担当部分概要）共同研究であり，実践型交流授業の企画運営及び実施までのすべてを担当した．(p.29)共著者：矢野正，原田健次，原寛，三村寛一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０）2 歳から 9 歳における疾走能力に関する研究：25m	共著	平成 23 年 8 月	日本幼児体育学会第 7 回大会研究発表抄録集	2 歳児から 9 歳児までの疾走能力の発達の経年的変化を，定点ビデオ録画によるデータ解析した研究である．(担当部分概要) 共同研究により，測定の実施及び評価と分析の考察を行なった．(p.59)共著者：谷口恵理・三村寛一，喜多宣彦，矢野正，北野裕大
１１）「気になる子ども」の理解と援助のあり方：他児とのかかわりにみるケーススタディ	単著	平成 23 年 8 月	2011 年度日本学校心理士会大会プログラム･発表論文集	近年取り上げられることの多い「気になる子ども」といわれる発達障害児 3 名をターゲットに，特に他児とのかかわりや人間関係の評価を捉えて，事例的分析を行なった．気になる子どもに関しては注目されつつあり，最新のデータとして利用できる研究の知見を得た．(pp.84～85)
１２）保育者とのかかわりに見る「気になる子ども」への支援方法：保育場面の観察を通して	単著	平成 23 年 9 月	日本LD学会20回大会発表論文集	「気になる子ども」といわれる発達障害児 3 名をターゲットに，特に保育者，先生，SC とのかかわりについての評価を捉えて，事例的分析を行なった．保育における人間関係の評価と改善に役立つ研究となった．(pp.476～477)
１３）児童・生徒の実態と特別活動で付けたい力に関する研究	単著	平成 24 年 7 月	日本野外教育学会第 15 回大会研究発表抄録集	小中学校における児童生徒の実態と，特別活動で身につけたい力を調査した実証的研究である．学校行事における教育の実態と身につけたい力がかい離していることを問題として提起した．特別活動で身に付けたい資質・能力を明確化したものである．(p.120)
１４）心理学的にみた発達障害児像および幼児像	単著	平成 24 年 8 月	2012 年度日本学校心理士大会プログラム･発表論文集	幼児及び発達障害児に関する心理学的なイメージについて大規模なアンケート調査を大学生に実施した．幼児及び発達障害についての人間関係を考察した障害イメージに関する心理学的研究である．(pp.92～93)
１５）Study on Japanese childhood from a psychological viewpoint	単著	平成 24 年 8 月	The Asian Society of Physical Education of Young Children ／ The 8th.A-PEC 2012 in 北京／Capital University of PE and Sports(Beijing China)	心理学的にみた日本の幼少期のイメージに関する研究について，アジア幼児体育学会で発表した．子どもに対する心理学的イメージを質問紙調査により，測定し考察した．その結果，日本の幼児期の特徴が見出された．(pp.158～159)
１６）幼児期のイメージに関する自我発達心理学的研究	単著	平成 24 年 9 月	日本幼児体育学会第 8 回大会研究発表抄録集	幼児期のイメージについて大規模なアンケート調査を実施し，自我発達心理学的研究として発表および報告した．その中で，幼児期における特性がいくつか見出された．(p.29)
１７）臨海学校における生きる力の向上に関する研究	単著	平成 24 年 9 月	日本海洋人間学会第 1 回大会プログラム抄録集	小学校における臨海学校の教育実践についてを，「生きる力」の向上への影響から論じた．結果として，児童の生きる力は総じて向上を示し，その教育的意義を見出した．その中では，教育の原理と方法を追究している．(p.24)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１８）発達障害児のイメージに関する心理学的研究	単著	平成 24 年 10 月	日本LD学会21回大会発表論文集	発達障害児のイメージについて大規模なアンケート調査を実施し，自我発達心理学的研究として発表および報告した．発達障害についての差別をなくし，インクルーシブな共生社会のための基礎的な研究である．(pp.570～571)
１９）福祉施設実習における評価と課題	単著	平成 24 年 11 月	日本教育実践学会第 15 回大会総会発表論文集	保育士養成課程の児童福祉施設における実習の評価とその課題について研究発表を行った．本研究の報告者は，保育実習・施設実習指導の主担当者である．施設での学生の学びは大変深いものであったことが推察されている．(pp.68～69)
２０）インクルーシブ教育システム構築のための特別支援教育の推進：共生社会の形成に向けて	単著	平成 25 年 8 月	2013 年度日本学校心理士会大会総会発表論文集	日本におけるインクルーシブ教育システムの構築に関する基礎的研究である．教育の原理を求め，共生社会の形成に向けて，特別支援教育のあり方を歴史及び思想から改めて問い直した研究である．(pp.42～43)
２１）教員は学校現場で何を学んでいるのか：養成・採用・研修を通した教職キャリア形成支援のあり方について考える	共著	平成 25 年 8 月	日本教育心理学会第 54 回大会総会発表論文集	「教員は学校現場で何を学んでいるのか」と題してシンポジウムを企画した．養成・採用・研修を通した教職キャリア形成支援のあり方についてフロアの意見を交えて考えてみた．企画者(矢野正)／企画者・司会者(石上浩美)／話題提供者(古屋喜美代，島善信，菱田準子)／指定討論者(高橋登・杉江修治)(pp.864～865)
２２）Physical fitness test of infants in Japan	単著	平成 25 年 8 月	The Asian Society of Physical Education of Young Children ／ The 9th.A-PEC 2013 in Osaka ／ Osaka Seikei University (Osaka,Japan)	日本の幼児期における体力・運動能力テストの評価について発表を行った．日本の幼児期の運動指針に基づき，その特徴についての発表・報告が主であったが，他国との比較が今後の課題である．(p.59)
２３）A Study on exercise principle of infants in Japan	単著	平成 25 年 8 月	The Asian Society of Physical Education of Young Children ／ The 9th.A-PEC 2013 in Osaka ／ Osaka Seikei University (Osaka,Japan)	日本における幼児期の運動指針について，文科省の最近の政策・動向も踏まえて，発表および報告を行った．アジアでの幼児体育の発展に寄与する日本からのレポート研究である．(p.68)
２４）Present situation and problem of health and physical education of junior high school in Japan：For improvement of health and physical education class	単著	平成 25 年 8 月	第 15 回日・韓健康教育シンポジウム／第 61 回日本教育医学会／大韓民国，済州大学校	日本における中学校・保健教育の方法と内容について考究した報告である．中学校教員免許課程生の保健体育科の指導法の新たな方略や方法について提起し，発表を行ったものである．(pp.67～68)
２５）小学校体育低学年（運動領域）の現状と課題	単著	平成 25 年 9 月	日本幼児体育学会第 9 回大会研究発表抄録集	小学校の低学年での体育科指導の在り方について，特に運動領域の紹介を行った．幼児期の運動あそびとの幼小接続を考える良い機会となった．小学校体育と幼児体育の異同を考究した．(pp.70～71)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２６）臨海学校における教師のリーダーシップに関する研究	共著	平成 25 年 9 月	日本海洋人間学会第 2 回大会プログラム抄録集･海洋人間学雑誌第 2 巻第 2 号	臨海学校における教師のリーダーシップが児童の学習に及ぼす効果を測定し，発表を行った．(担当部分概要) 共同研究により，研究のデザインと報告の執筆を担当した．共著者：吉井英博，矢野正(p. 46)
２７）臨海学校における遠泳教育の意義	単著	平成 25 年 9 月	日本海洋人間学会第 2 回大会プログラム抄録集･海洋人間学雑誌第 2 巻第 2 号	学会企画「マリンスポーツと教育」シンポジストとして，臨海学校における遠泳教育の意義について発表し，フロアとの意見交換を行った．(p. 36)
２８）PM 理論からみた臨海学校の教育実践	共著	平成 25 年 11 月	日本教育実践学会第 16 回大会研究発表抄録集	PM 理論をもとに，小学校における長期の臨海学校の教育実践を評価し，研究のデザイン発表を行った．(担当部分概要) 共同研究により，研究のデザインと報告の執筆を主に担当した．共著者：矢野正，吉井英博(pp. 164～165)
２９）臨海学校における教師のリーダーシップに関する研究(２)	単著	平成 26 年 3 月	大阪体育学研究　第 52 号(Supplement)	臨海学校における教師のリーダーシップが児童に及ぼす影響について大規模に調査を行った．P 値と M 値の導き出す値から，教師の適切な関わりが子どもの力を発揮させるために必要な力動であることを見出した．(p. 22)
３０）日本における幼児期の体力測定（２）：２年間にわたるコーホート調査	単著	平成 26 年 8 月	日本幼児体育学会第 10 回大会研究発表抄録集	日本の幼児の運動能力・体力の測定と評価を縦断的研究によって行ったものである．本研究は，2 年間のコホート研究によってデザインされ，子どもたちの「走・投・跳」について測定及び評価を得たものである．(p. 64)
３１）こだわり行動の自我発達的意義と教育的支援の在り方に関する一考察	単著	平成 26 年 8 月	日本教育医学会第 62 回大会抄録集	発達障害児の「こだわり」行動に焦点を当てた，自我発達心理学的研究である．これらは，博士論文の中間的な発表および報告として行った．特別支援教育における教育的支援のあたらなる視座を展開した．(pp. 122～123)
３２）こだわり行動の自我発達的意義と教育的支援の在り方に関する研究（２）	単著	平成 26 年 11 月	日本教育心理学会 56 回大会総会発表論文集	発達障害児のこだわり行動に焦点を当てた，自我発達心理学的研究であり，博士論文の中核的な発表および報告を行った．障害児保育の中でも子どもたちの人間関係やその指導法に焦点を絞った，事例的研究である．(p. 780)
３３）保育士・教員養成の現状と課題：教育実習生を受け入れる園・学校からの声	単著	平成 26 年 11 月	日本教育心理学会 56 回大会総会発表論文集	保育士・教員養成の現状と課題と題して，教育心理学会において継続的な自主シンポジウムを開催した．教育実習生を受け入れる園・学校からの声をそれぞれの立場から発表し意見討議を行った．企画者(矢野正)／企画者・司会者(石上浩美)／話題提供者(宮前桂子･山本淳子･澤田真弓)(pp. 148～149)
３４）保育者志望学生の身体特性	単著	平成 26 年 11 月	日本教育実践学会第 17 回大会研究発表抄録集	本研究は，保育者を目指す女子学生を対象に，形態，体力・運動能力の測定と評価，生活習慣の調査を行うことにより，幼児教育に携わる者の身体特性及び生活習慣について調査を行った．保育者志望学生の体力の現状の把握を行うことで，保育者の今後の課題を見出した．(pp. 116～117)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３５）第２学年算数科学習指導案「かくれた数はいくつ」	単著	平成 27 年 3 月	城星学園小学校平成 26 年度研究集録	本時は，数量の関係を絵図に表したり，テープ図にしたりすることによって，減る前の数を求める逆思考の問題を解くことができる．単元の目標は，テープ図の良さに気づき，問題解決の際に進んで用いようとする．逆思考を必要とする問題について，数量の関係をテープ図をもとに考えることができる．数量の関係をテープ図に表すことができる．加法や減法の用いられる場について理解する．(B5，4p)
３６）日本における幼児期の体力測定（３）：２年間にわたるコーホート調査より	共著	平成 27 年 8 月	日本幼児体育学会第 11 回大会研究発表抄録集	幼児期の体力・運動能力調査のコーホート研究の第Ⅲ報である．幼児の「走・跳・投」の 3 項目の測定結果からそれぞれの相関関係を見出した．(担当部分概要) 研究の計画から測定，分析・解析までの全工程・全文を担当した．共著者：矢野正，三村寛一(p.83)
３７）特別活動論の挑戦的な授業実践：野外教育学からの考察	単著	平成 27 年 8 月	日本特別活動学会第 24 回大会研究発表要旨集録	特別活動の研究における授業開発に関する研究．野外教育学の立場から 15 回を組み立て教授し，その結果，学生の学びにどうつながったのかを検討した．野外教育に特化せず，いろいろな視点から特別活動に取り組んできた学生の姿が改めて浮き彫りとなった．今後の日本における野外教育の進展を期待したい．(p.44)
３８）Significance of infants’ repetitive behaviors from the perspective of self development and appropriate educational support	共著	平成 27 年 8 月	第 16 回日・韓健康シンポジウム兼日本教育医学会第 63 回大会	2015 年 3 月にまとめた博士論文の一端を，国際学会で紹介した．子どもの自我発達においてこだわり行動のもつ意味について研究及び発表した．博士(教育学) の学位を国際的にも認知するよい機会となった．(担当部分概要) 全文担当　共著者：矢野正，三村寛一，守屋國光(pp.61～62)
３９）生きる力をはぐくむ特別活動・臨海学校	単著	平成 28 年 6 月	教科・領域内容研究学会第 6 回大会研究発表要旨集録	小学校における生きる力の育成に着目した臨海学校の実証的研究の報告．小学校において臨海学校前後で生きる力の変容を測った．その結果，3 つの指標全てで向上が認められ，徳育的な能力よりも身体的能力や心理的社会的能力の向上が大きいことを見出すことに成功した．本研究では，児童の生きる力の向上に及ぼす臨海学校の影響が顕著であった．(Web 公開，A4　4 枚)
４０）Significance of perseverative behaviors from the perspective of self development and educational support	単著	平成 28 年 7 月	The International Congress of Psychology 2016(ICP2016) ／ The 31th. ICP 2016 in Yokohama, Japan	2015 年 3 月にまとめあげた博士論文の一端を，ICP2016 国際心理学会で紹介および研究発表した．幼児期の子どもの自我発達や成長の過程において，こだわり行動のもつ意味について会議で発表し，特別支援教育の歩みから今日までの我が国の展開まで，教育的支援の在り方を追究した心理学的実践研究である．(p.146)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
４１）良いところを見つけ，伝え合う学習の有効性:マット運動の指導を通して	共著	平成 28 年 8 月	日本教育医学会第 64 回大会抄録集	本研究では小学校の児童に対して,「良いところを見つけ，伝え合う学習」を取り入れることで，子どもはどのように変わっていくのかを調査し，研究することとした．また，苦手意識を持っている子どもが多い「マット運動」にその活動を取り入れることで，マット運動に対しての苦手意識が減り，得意の割合が増えるのかを分析すること，そして，普段の生活にも何らかの形で伝え合ったり，助け合ったりするのかどうかを分析することを主な目的とした．(担当部分概要）共同研究により，研究のデザインと報告書の添削を担当した．共著者：佐伯優斗，矢野正，星野政明(pp. 71～72)
４２）かけっこ指導における協調学習の有効性	共著	平成 28 年 8 月	日本幼児体育学会第 12 回大会研究発表抄録集	本研究では小学校の低学年児童に対して「速く走る指導」について，知識構成型ジグソー法によって学習し，どのように記録が変わるのかを研究した．また，どのような指導方法が子どもたちにとって分かりやすく,いわゆる「コツ」を掴むことに有効なのかを分析することを目的とした．今回の結果からはジグソー法を用いることで，子どもたちが持つ「走り」の知識や認識をお互いに学び合うことで記録を向上させることができることを示唆された．次期改訂の小学校学習指導要領では，このような協調学習や探究型学習，アクティブ・ラーニングに代表される能動的な学習が盛り込まれよう.(担当部分概要）研究のデザインと報告の執筆を担当した．共著者：吉井英博，矢野正(pp. 82～83)
４３）小学校低学年・マット運動の指導法：良いところを見つけ，伝えあう学習の有効性	共著	平成 28 年 8 月	日本幼児体育学会第 12 回大会研究発表抄録集	本研究では小学校の児童に対して,「良いところを見つけ，伝え合う話し合い学習」をふんだんに取り入れることで，子どもはどのように変わっていくのかを調査し，研究した．また，苦手意識を持っている子どもが多い器械運動「マット」に主体的な学びの活動を取り入れることで，マット運動に対しての苦手意識が減り，得意の割合が増えるのかを分析すること，さらに普段の生活にも何らかの形で伝え合ったり，助け合ったりするのかどうかを分析することを主な目的とした.(担当部分概要）研究のデザインと報告の執筆を担当した．共著者：佐伯優斗，矢野正，吉井英博(pp. 80～81)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
４４）学生の作成した教職実践演習（保育）・幼児体育指導案の検討	共著	平成 29 年 3 月	日本保育者養成教育学会第 1 回大会研究発表抄録集	本研究では，教職実践演習につながる幼児体育分野の保育指導計画（保育指導案）の題材であるねらいと内容及び主な活動を，その指導形態について分類し，検討することを目的とした．保育者志望の学生が作成した模擬指導案は計 82 案であった．学生の指導観や保育観といった指導理念は，学生の作成する保育指導計画の題材における活動内容だけでなく，そのねらいや幼児に対する関わり方に少なからず反映されているものと考えられる．(担当部分概要）研究のデザインと報告の全文を担当した．共著者：矢野正，吉井英博 (p. 87)
４５）Fatigue change and health care of the children in summer seaside camp	単著	平成 29 年 7 月	2017 International Symposium on Teaching, Education, and Learning (ISTEL2017)／Hiroshima, Japan July 4-6, 2017	特別活動である長期の臨海学校中の児童の健康管理について，教育と医学の立場から，特に疲労感や気分の変容を，国際学会で報告した．毎日の睡眠時間の長い児童は疲労感が少なく，逆に睡眠時間の短い児童というのは疲労感が高まることが示唆された．特別活動期間中の疲労感の変動を測定し，合わせて児童の活動前後の気分プロフィールの変動を測定し，ISTEL2017 国際学会で報告した．(p. 226)
４６）ネイチャーゲームによる学習意欲づけと人間関係づくり	単著	平成 29 年 8 月	日本教育医学会第 65 回大会抄録集	本研究では，保育者養成校の「専門基礎」科目においてネイチャーゲームを導入した事例を報告した．保育者養成校の専門基礎の授業において，熱意を呼び起こすアクティビティを体験することにより，向社会的な意欲が向上するかどうか，受講学生の人間関係の構築や学習への動機づけに有効かどうかを検討とした．その結果，受講学生の向社会的目標得点が向上し，8 項目中 6 項目では有意な向上が認められ，その影響が強く示唆された．受講学生の授業評価からは，自己評定では学習意欲の高さが窺われ，授業や教師に関する項目でも，ネイチャーゲームを取り入れた授業への満足度は大変高く人間関係力の向上に役立った．(pp. 73～74)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
４７）小学校における臨海学校の教師・指導者のリーダーシップに関する研究	共著	平成 29 年 9 月	日本海洋人間学会第 6 回総会論文集	本研究の結果，児童の泳力向上は，臨海学校実施前と実施後では，児童 110 名のうち 76%にあたる 84 名の泳力に顕著な向上が認められた． そして，泳力の向上が最も顕著だった学級担任についての Performance 値および Maintenance 値が，共に高い値を示していた．その一方で，M 値が低かった学級担任のクラスでは，泳力の伸び率は低いという結果であった．したがって，本研究の結果，小学校の臨海学校において，児童の泳力向上や達成感に，指導する教師のリーダーシップがもたらす効果が相当に大きいことが確認され，特に集団を維持する機能（M 値）が重要であることが示唆された． （担当部分概要）共同研究により，研究のデザインと報告書の主要な執筆を担当した．共著者：矢野正，吉井英博(p.45)
４８）小学校における BLS 教育の有効性に関する検討：道徳的アプローチによる実践	共著	平成 29 年 10 月	日本教育心理学会第 59 回総会論文集	本実践では，学校において誰でも短時間に行える授業を目指した．それは，BLS 教育が普及しない要因が，指導者不足，指導時間の確保，教材教具の準備等にあるからである．児童の事前アンケートにもあるように，指導する側にも「失敗したらどうしよう」，「うまく指導できるか」等の消極的な思いが現場での実践を阻害しているのではないか．今後，学校教育で重要になってくるのは，答えのないことに教師と児童が関わり模索し，自分たちなりの答えを導き出すことだと考える．また，90 分の授業全般で人の命の尊さ，勇気をもつこと，思いやりで何かできる事を考えることなど，道徳的なアプローチや声かけを多くしたことで，子どもたちが技能ありきの授業ではないということを感じた．(担当部分概要) 研究のデザインと報告の執筆を担当した．共著者：矢野正，吉井英博(p.307)
４９）LET'S STUDY レク塾第 7 回　特別活動とレクリエーション	単著	平成 30 年 4 月	公益財団法人日本リクリエーション協会 Recrew(レクルー)第 682 巻　2018 年 4 月号	小学校における特別活動の現状とレクリエーション活用における課題について問題提起した論文．小学校の特別活動とレクリエーションの活動内容の現状と課題，かつ今後の展望を考究した．その中で，学校現場でのレクリエーションの活用方法の提案などを行っている．また，特別活動における先駆的な学校教育実践やモデルケースを 3 つ紹介した．(pp.34～35)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
５０）「子育ての支援」と「子育て支援」	単著	平成30年6月	日本幼児体育学会ニュースレター　第12巻第2号	幼稚園で行われるいわゆる「子育ての支援」と保育所保育指針で扱われる「子育て支援」の違いについて解説した。子育ての支援は教育課程に位置づいていないものであるのに対し，子育て支援は保育課程に位置付けられたものであることを明確に述べた.「の」が入るか入らないかで微妙に違うことを論考した．(pp.6～7)
５１）小学校における食育実践に関する研究：管理栄養士・栄養教諭による３年保健「健康な生活」の単元開発	単著	平成30年7月	日本子ども食育学会第２回学術総会論文集	小学校3年の単元「健康な生活」を見つめることをテーマに，食べ物の栄養についての授業実践を行った．担任及び栄養教諭（管理栄養士）による共同実践であった．報告者は学級担任である．給食に使われているさまざまな食べ物を「あか」(体を作るもとになる)，「きいろ」(体を動かすエネルギーになる)，「みどり」(体の調子を整える）の3色に仲間分けし，それぞれの働きを学ぶことを主な目的とした．(p.13)
５２）Practical study of educational effect by elementary school elementary school ″assistance″ elementary school	単著	平成30年8月	International School Psychology Association(ISPA2018) July 26-28, 2018 Tokyo Seitoku University ,Tokyo,Japan	本研究はお手伝いをし，子どもが自立した家庭生活を送ることを目的に実践した.「お手伝いがんばりカード」を書かせ毎日行わせた．201X年10月から開始し12月まで実施した.対象は私立小学校の2年生42名，児童には「おてつだいアンケート」を，保護者には12月の懇談会時に「お手伝いに関するアンケート」を書かせた．その結果，お手伝いがんばりカードを導入することで，児童がお手伝いを率先して行い，保護者も肯定的に受け止めていることが明らかとなった．お手伝いをすることは児童の生活の自立にとって有効である．(p.47)
５３）A Study on Educational Practice by Locomo Exercise in Elementary School	共著	平成30年8月	The Asian Society of Physical Education of Young Children ／ The 14th.A-PEC 2018 in Japan ／ Waseda University (Saitama,Japan)	本研究では，小学生のロコモティブシンドロームの予防につながる保健体育分野の題材であるねらいと内容及び主な活動を，その実践および指導形態について分類し，検討することを目的とした．小学生1年から5年生が対象であった.（担当部分概要）共同研究により，研究のデザインと発表及び報告の全文を担当した．共著者：矢野正，鈴木伸也(pp.76-77)
５４）小学校2年生生活科「お手伝い」挑戦による教育効果の検討	単著	平成30年8月	日本学校心理学会第20回学術総会論文集	本研究はお手伝いをし，子どもが自立した家庭生活を送ることを目的に実践した.「お手伝いがんばりカード」を書かせ毎日行わせた．対象は私立小学校の2年生42名，児童には「おてつだいアンケート」を，保護者には12月の懇談会時に「お手伝いに関するアンケート」を書かせた．その結果，お手伝いがんばりカードを導入することで，児童がお手伝いを率先して行い，保護者も肯定的に受け止めていることが明らかとなった．お手伝いをすることは児童の生活の自立にとって有効であると結論付けられる．(p.47)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
５５）学級活動「話合い活動」の動画視聴を通した教師の気づきについての研究:小学校教師と教職課程履修学生の観点の違いに注目して	共著	平成 30 年 8 月	日本特別活動学会第 26 回大会研究発表要旨集録	本研究では，先駆的な学級会（2 年生）の取り組みを，教師としての気づきの違いについて分析した．小学校教師の視点と教職志望学生へのインタビューからそれぞれ考察を行った．（担当部分概要）共同研究により，研究のデザインと報告の全文を担当した．共著者：天野幸輔・山田真紀・清水克博・村瀬悟・玉木博章・矢野正(p. 65)
５６）小学校におけるロコモ体操による教育実践	共著	平成 30 年 8 月	日本幼児体育学会第 14 回総会論文集	本研究では，ロコモティブシンドロームの予防につながる健康分野の題材であるねらいと内容及び主な活動を，その指導形態について分類し，検討することを目的とした．主に小学生 5 年生 1 クラスが対象であった．（担当部分概要）共同研究により，研究のデザインと報告の全文を担当した．共著者：矢野正，鈴木伸也(p. 76)
５７）小学校 2 年生生活科「お手伝い大作戦」による教育効果の実践	単著	平成 30 年 8 月	日本教育心理学会第 60 回総会論文集	本実践のように，お手伝いがんばりカードを導入し実践することで，児童がお手伝いを率先して行い，保護者も肯定的に子どもの行動を受け止めていることが明らかとなった．お手伝いをすることは，児童の生活の自立にとって有効であるものと考えられる．本単元は，保護者との協働の取り組みができたが，他の単元に汎化できるかどうかは，今後との研究課題である．新学習指導要領も告示されたので，小学校生活科の目的に沿った取り組みの見直しが求められよう．また，統計的なデータの補足も必要である．(p. 660)
５８）小学校における子どもロコモ予防の有効性に関する研究	共著	平成 30 年 12 月	日本教育実践学会研究大会論文集 21	本研究では，小学生のロコモティブシンドロームの予防につながる健康分野の題材であるねらいと内容及び主な活動を，その指導形態について分類し，検討することを目的とした．小学生 1 年から 5 年生が対象のコーホート研究であった．（担当部分概要）共同研究により，研究のデザインと報告の全文を担当した．共著者：矢野正，鈴木伸也，吉井英博(pp. 144-145)
５９）学級活動「話合い活動」の動画視聴を通した教師の気づきについての研究：「話合い活動」熟達者と初心者を比較するプロトコル分析から	共著	令和元年 9 月	日本特別活動学会第 28 回研究大会論文集	本研究では，小学校での話合い活動を指導する際に，教師の熟達化を図る上で大切になる要素を明らかにすることを目的に実施した．学級活動の動画視聴の中でのつぶやき内容をカテゴリー化し，その分析とともに考察から見えてきた話合い活動の研修方法及び視聴の観点の「ルーブリック」を提案した．共著者：天野幸輔，山田真紀，矢野正ほか(p. 45)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
６０）グループ活動を取り入れた教員養成	共著	令和元年10月	日本教育心理学会第61回総会論文集	教員養成でのグループ活動の授業の展開例を紹介した自主シンポジウム．初年次教育やキャリア教育での展開例を紹介. 企画・話題提供・指定討論／鈴木由美・矢野正・原田敬文・稲田達也，企画・司会・話題提供／室谷雅美，企画／原田増廣，企画・話題提供／大塚貴之 (pp. 118-119)

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月３１日

氏名　吉　田　　明　史

研　究　分　野	研究内容のキーワード
数学教育	中高におけるわかる授業，高大接続，評価，保育者の数学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材 平成 27 年度検定中学校数学教科書著者（啓林館）	H27.12	奈良女子大学理学部数物科学科の教職認定科目「中等教科教育法数学Ⅱ、B」の講義において活用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 授業アンケートにおいて学生から高評価を得た。	H25	「情報リテラシーⅠ」「同Ⅱ」において，約 80%の学から説明がわかりやすいとの評価を得た。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1)　文部科学省初等中等教育局視学委員	H23.3	主に高等学校の学力向上についての研究指定校,指定地域の決定の審査を担当する（2 年間）。
2)　研究会講演講師	H23.10	北海道数学教育研究会（旭川大会）にて高等学校部会講師を務めた。
3)　研究授業の指導助言	H23.11	奈良県天理市教育委員会主催「学習意欲を高める言語活動の充実」をテーマにしている教員の授業について指導助言した（天理市立南中学校）
4)　文部科学省 SSH 企画評価委員	H24.4	SSH の運営企画に関わり，現状と課題，今後の方向性についての議論に関わる（継続中）
5)　近畿数学教育研究発表奈良大会実行委員長	H24.4	本県で行われる研究発表大会の実行委員長を務め,大会の準備運営を担当した（1 年 9 ヶ月）。
6)　研修会講師	H24.6	奈良県数学教育会「高等学校数学科における評価」と題して高等学校教員に対して講演した。
7)　研修会講師	H25.10	青森県教育委員会主催「高等学校の学習指導と学習評価の工夫」と題して，高等学校教員に対して講演と演習を行った。
8)　研修会講師	H27.2	奈良県宇陀市教育委員会主催の研修会にて,市内の幼稚園教員 30 名程度に対して，幼稚園教育の現状と課題を踏まえ，保育者に必要な数学力について講義を行った。
9)　教育実践演習講師	H27.9	龍谷大学学生（3，4 回生）に対して，「期待される教師像」と題して，講義を行った。
10)　研修会講師	H28.8	日本数学教育学会主催の講習会（岐阜県）にて「中学校との接続を意識した指導と評価」について講義を行った。
11) 研修会講師	H28.8	奈良県教育委員会主催 10 年経験者研修にて，「特色ある学校づくりとリーダーの役割について」の講義を行った。
12)　研修会講師	H31.6	東大阪市教育センター主催中学校数学研修講座講師 「思考力・判断力・表現力を育む算数・数学の授業づくり①
13)　研修会講師	H32.1.	東大阪市教育センター主催中学校数学研修講座講師 「思考力・判断力・表現力を育む算数・数学の授業づくり②
14)　近畿数学教育研究発表奈良大会実行委員長	R2.4	次年度奈良県で行われる大会の責任者（継続中）。

5　その他		
1)　奈良文化女子短期大学　副学長	H25.4	副学長として学長を補佐した（1年間）。
2)　奈良学園大学　副学長	H26.4	学長を補佐し，登美ヶ丘キャンパスを統括した（4年間）
3)　奈良学園大学奈良文化女子短期大学部　学長	H26.4	短期大学部の学長として教育経営に関わった（5年間）
4)　学校法人奈良学園　常勤理事	H26.4	法人全体の経営に関わった（4年間）。
5)　学校法人高野山学園　監事	H27.4	法人全体の業務を監査している（継続中）。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1)　中学校教諭　一級普通免許状	S50.3	昭49中一普第975号（広島県教育委員会）
2)　高等学校教諭　二級普通免許状	S50.3	昭49高二普第1318号（広島県教育委員会）
3)　高等学校教諭　専修免許状	H2.7	平2高専修第21号（奈良県教育委員会）
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)　学習指導要領改訂作業、学習指導要領普及に関わる。	H8.4	文部科学省初等中等教育局中学校課･高等学校課教科調査官（H13.3まで）。
2)　高等学校教育課程実施状況調査問題作成協力者	H13.4	文部科学省が実施する教育課程実施状況調査（数学Ⅰ）の問題作成協力者（H15.3まで）。
3)　評価規準、評価方法等の研究開発に関する検討委員		国立教育政策研究所が実施する研究開発の検討委員として中学校及び高等学校数学科の評価規準作成等に関わる（H15.3まで）。
4)　科学研究費補助金審査部会専門委員	H16.4	文科省科研費の審査委員として、理数系教育の審査にあたる（H17.3まで）。
5)　教育課程実施状況調査分析協力者	H17.10	国立教育政策所が実施する「教育課程実施状況調査」の結果分析を行った（H18.3まで）。
6)　高等学校教育課程実施状況調査結果分析委員	H18.4	文部科学省が実施する高等学校教育課程実施状況調査（数学Ⅰ）の結果を分析した（H19.3まで）。
7)　学会誌編集委員	H20.4	日本数学教育学会の編集委員として投稿論文を査読した（H21.3まで）。
8)　学会誌査読委員	H20.4	全国数学教育学会の査読委員として投稿論文を査読した（H21.3まで）
9)　SSH運営指導委員	H20.4	奈良女子大附属中等教育学校及び県立奈良高等学校のSSHの運営に対して指導助言した（H22.3まで）。
10)　学会のシンポジスト	H20.10	日本教育方法学会において，シンポジストとして、教職大学院の学校実践について連携協力校における取組を紹介した。
11)　文科省中央教育審議会委員		中央教育審議会ワーキンググループ委員として，生徒指導要録改善にかかる審議に加わった。
12)　研究会指導助言及びシンポジスト	H22.8	日本数学教育学会主催研究発表大会（新潟）にて，研究発表の指導助言を行うとともに，「評価」に関するシンポジウムのシンポジストを務めた。
13)　大学の公開シンポジウムのシンポジスト	H22.10	国立大学法人　香川大学が主催するシンポジウムにシンポジストとして評価に関わる提言を行った。
14)　学会講師及びシンポジスト	H23.8	日本数学教育学会主催，第7回　算数･数学教育を考える会にて，「指導と評価のあり方」について高等学校部会で講演するとともに，「新教育課程における指導と評価のあり方」をテーマにしたシンポジウムでシンポジストを務めた。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.新しい指導要録とこれからの評価	共著	平成 22 年 6 月	ぎょうせい	高等学校の生徒指導要録の改訂に当たって,数学教育における評価の観点の改善やその趣旨について解説し、指導と評価の一体化について論述。 編者：無藤隆，著者：安彦忠彦，天笠茂，大杉昭英，河野庸介，根本博，吉田明史ほか 45 名 担当部分：P. 32-P. 37, P. 48-P. 51 従来の 4 観点の趣旨との違い，とりわけ思考力・判断力・表現力を一体のものと捉えることから，数学的な表現が数学的な思考と数学的な処理に分かれていることを解説した。 A5 判全 221 頁
2.高等学校新学習指導要領の展開（数学科編）	共著	平成 22 年 6 月	明治図書	新学習指導要領数学科の趣旨を具体的に解説。 編者：吉田明史 共著者：石倉敏雄、塚原久美子、逸見由紀子、西村圭一、熊倉啓之、今岡光範、一楽重雄、岡部恒治、真島秀行、佐藤言、山口武志、黒木哲徳、佐伯昭彦、根上生也、浪川幸彦、横弥直浩 担当部分：数学科改訂の要点等 P. 9～P. 31、数学科の実践課題と授業設計 P. 166～P. 175、A5 判全 222 頁
3.「わかる」授業をつくる中学校数学科教材研究＆授業デザイン	共著	平成 22 年 10 月	明治図書	中学校数学における「わかる授業」の創造について，具体的な事例をもとに論述した。題材は中学校数学であるが，わかる授業の創造に関しては高等学校数学にも活用できる内容となっている。この著書は，科研費基盤研究 A（平成 19 年～平成 21 年；研究代表者吉田明史）の成果を「わかる授業」に焦点化して編集したもの。 編者・監修：吉田明史 共著者：國宗進、熊倉啓之、重松敬一、 担当部分：全 35 ページ、 わかる授業とよい授業との違いを説明した後，わかる授業にするための因子を明確にし，具体的な指導の在り方について論述した。A5 判 160 頁
4.中学校数学教科書執筆	共著	平成 23 年 2 月 （検定時）	啓林館	平成 24 年版中学校数学教科書「未来へ広がる数学１」「未来へ広がる数学２」、「未来へ広がる数学３」の著者として執筆及び編集に関わった。 共著者：岡本和夫、小関熙純、森杉馨、佐々木武、吉田明史ほか 37 名 担当部分：数学２第 6 章確率 P. 136～P. 151、B5 判全 205 頁、数学３第 8 章標本調査 P. 178～P. 190、B5 判全 269 頁
5.フィンランドの算数・数学教育	共著	平成 25 年 9 月	明石書店	フィンランドの算数・数学教育に関して，カリキュラム，教科書，授業，教員養成の各視点から論述した。共著者：熊倉啓之、國宗進、近藤裕、柏元新一郎、吉田明史 担当部分：4 章 1 節 p. 110～p. 114、p. 118～p. 122、小学校の算数の現状について、授業観察記録を本に分析・論述した。A5 判 219 頁

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
6.中学校数学科指導書執筆	共著	平成 26 年 9 月	啓林館	平成 28 年度版中学校数学指導書通論、著者：岡本和夫，森杉馨，佐々木武，根本博，吉田明史他 13 名，担当頁；第Ⅱ章－４　「数学の有用性の実感（４頁)」、第Ⅲ章－２「課題学習（４頁)」、中学校数学において数学学習が有用であることをどのように実感させるのかについて論述した。さらに，数学的な見方や考え方を育成するための課題学習の在り方について論述した。B5 判
7.主体的能動的な学習	共著	平成 28 年 8 月	金子書房	主体的能動的な学習について、数学教育の観点から論述。共著者梶田叡一、鎌田首治朗、伊崎一夫、角屋重樹、原田智仁、直山木綿子、担当部分：P34～p44、A5 判 143 頁
8.保育者が身につけておきたい数学―「数・量・形の感覚を養う保育」と「事務」に生かすために	共著	平成 29 年 6 月	萌文書林	保育者が身に付けておきたい数学について、具体的な事例を用いて解説した。編集担当吉田明史、田宮縁、共著者
9.アクティブ・ラーニングを位置付けた高校数学の授業プラン	共著	平成 29 年 8 月	明治図書	高校数学におけるアクティブ・ラーニングについて、数学的活動との関連から整理し、その評価の在り方について言及した。編集担当吉田明史、共著者酒井淳平、熊倉啓之ほか 13 名、担当部分：P1～12、p92～97、p124～p132、A4 判 132 頁
10.平成30年版　学習指導要領改訂のポイント　高等学校　数学	共著	平成 31 年 3 月	明治図書	新学習指導要領改訂のポイントを、具体的な教材とその展開例を示して解説した。編集担当吉田明史、共著者
（学術論文） 1.わかる数学の授業を構築するための基礎研究(2)（査読付）	単著	平成 23 年 3 月	奈良教育大学教職大学院研究紀要「学校実践研究」(3)、P.11～P.20	「わかる」数学の授業を構築するための３つのストラテジーを示し、他教科における「わかる授業」の展開のための一資料を提供した。
2.フィンランドの算数教育：フィンランドの教育制度	共著	平成 23 年 8 月	日本数学教育学会会誌 93(8)、P.20～P.23	共著者：熊倉啓之、國宗進、吉田明史、相馬一彦、松元新一郎、松島充 共同編集のため担当部分抽出不可。
3.フィンランドの算数教育：フィンランドの算数授業	共著	平成 23 年 10 月	日本数学教育学会会誌 93(10)、P.18～P.23	共著者：熊倉啓之、國宗進、吉田明史、相馬一彦、松元新一郎、松島充 共同編集のため担当部分抽出不可。
4. フィンランドの算数教育：フィンランドの教員養成	共著	平成 23 年 12 月	日本数学教育学会会誌 93(12)、P.19～P.21	共著者：熊倉啓之、國宗進、吉田明史、相馬一彦、松元新一郎、松島充 共同編集のため担当部分抽出不可。
5. 高等学校における評価の改善と工夫（数学科）	単著	平成 25 年 5 月	学事出版	中等教育資料 6 月号 N0.925　p.48～p.53　中等教育資料（文部科学省編集)、高等学校数学科における評価の在り方について、評価の意味の一つに指導改善があること、４つの観点の意味、数学的な表現・処理が数学的な技能に変わったことの意味、事前評価、事中評価、事後評価の意味などを解説するとともに、評価を通して指導を見直すことを具体的な事例で論述。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6．保育者に必要な数学力についての基礎的研究(1)（査読付）	単著	平成 25 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 44 号 p. 121～p. 136	全国の保育者養成短期大学への調査を通して、学生が身につけなければならない数学力について論説した。
7．保育者に必要な数学力についての基礎的研究 (2)	単著	平成 27 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要第 46 号 p129～p149	保育者が身に付けてほしい「数学力」について文献調査やアンケートを通して考察し、「数学の基礎知識」と「環境を構成する力」がその柱であるとした。科研費補助金課題番号 263812299 による研究
8．幼児の活動を数学的に豊かにする方略（査読付）	単著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要第 47 号 p81～p93	幼稚園の活動を観察した 6 つの事例から、幼児の活動を数学的に豊かにする方略として「教材開発能力」と「実践上の能力」の観点から整理した。
9．保育者に必要な「数学力」 ―「数学の基礎知識」と「環境を構成する力（査読付）	単著	平成 28 年 10 月	日本数学教育学会．第 49 回秋期研究大会発表収録（口頭発表）pp. 513～516.	保育者に必要な数学力を、二つの柱で規定し、その身について論じた。
10．保育者に必要な「数学力」とその養成（査読付）	単著	平成 29 年 6 月	日本数学教育学会第 5 回春期研究大会論文集「創成型課題研究の部」	保育者が身に付けてほしい数学力を 3 つの柱に整理し、それぞれの具体的な内容について説明した。
11．幼児の活動を数学的な活動にする環境構成（査読付）	単著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要第 48 号､p97～109	保育の中に見られる幼児の活動が、保育者の「環境を構成する力」により数学的に深まっていく状況をエピソード事例として整理し、保育者が数学的な観点を意図して保育計画を立てることの重要性を示唆した。
12．保育者の養成段階における数学力の育成（査読付）	共著	平成 30 年 2 月	静岡大学教育実践総合センター紀要第 28 巻, p11～ 18	保育者に必要な数学力を身につけさせるために行った授業（白銀比，黄金比等）について考察するとともに，数学力育成の課題について論述した．著者：吉田明史，田宮縁，國宗進，共同編集のため担当部分抽出不可。
13．保育者に必要な「数学力」とその育成に関する研究	共著	平成 30 年 5 月	日本保育学会（仙台）においてポスター発表	保育者に必要な数学力についての研究の目的，方法，内容について報告するとともに，保育者養成のテキストについて紹介した．
14．就学前算数教育実現のための保育者の養成・研修と専門的職能成長に関する考察	共著	平成 30 年 6 月	日本数学教育学会第 6 回春期研究大会にて発表	千葉大学松尾七重をオーガナイザーとして 5 名が発表のうち、「保育者養成における「数学力」の指導の現状」について口頭発表、論文集 6 頁執筆
（その他） 1.学習評価の改善･見直しの方向	単著	平成 22 年 6 月	教育開発研究所	月刊誌「教職研修」38(10)、P. 7～P. 9 中学校及び高等学校に　おける目標準拠評価について、評価資料の収集、評価の重み付け、評価の総括等、その具体を記述。 教職研修：教職 1006 巻頭言、巻頭論文、P. 7～9
2.観点別学習状況の評価から評定へ	単著	平成 22 年 7 月	教育調査研究所	月刊誌「教育展望」56(7)、P. 17～P. 21。 月刊誌「教職研修」「教育展望」 特集のテーマ「新しい学習評価の視点とその役割について」に、中学校及び高等学校の観点別評価の趣旨とその具体について記述。

教　育　研　究　業　績　書

令和　2年　3月　31日

氏名　安東　雅訓

研　究　分　野	研究内容のキーワード
表現論周辺の組合せ論	整数の分割，ヤング図形，母関数

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 (1)　学習支援システム上への演習問題の公開	平成24年4月～平成30年3	稚内北星学園大学において，講義で扱った演習問題を学習支援システム上に上げている．在学生の他にも高校で教員をしている卒業生もたびたび確認しており，授業の参考や自学に活用している．
(2)　就職試験対策講座における，数的推理・判断推理分野の推理による解法の実践	平成25年6月～平成29年8月	数的推理・判断推理分野の問題は初等的な数学を用い時間をかけて丁寧に解けば答えの出せるものが殆どだが，その方法で正解率・回答速度を上げようとすれば慣れるより他なく，それなりの時間を要す．そこでこの分野は「数学」ではなく「推理」であるとしての，ベイズ確率等のテクニックにより選択肢を推理する方法を紹介している．実際に公務員試験等で使い，有効だったとの評価を得ている．
2　作成した教科書，教材 (1)　数学科目演習問題	平成24年4月～平成30年3月	稚内北星学園大学において，担当数学科目(数学基礎 I，II，線形代数学 I，II 演習，代数学 I，II，幾何学 II，集合論入門）で扱った演習問題を LMS（ラーニングマネジメントシステム）上にアップしたもの．教科書の演習問題としてはあまり見ない類の問題も多く載せている．
(2)　就職試験対策講座における演習問題	平成25年6月～平成29年8月	稚内北星学園大学における就職試験対策講座において，教材として使用したもの．定着のために扱う問題の種類を絞り類似の問題を多くそろえており，それらの問題を不得意とする学生には好評であった．
(3) 数理パズル集	平成26年12月	稚内北星学園大学まちなかメディアラボのプレオープンにおいて特集した数理パズル集．小学校低学年レベルの問題から高校生レベルまでを揃えている．
3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)　稚内北星学園大学採用時の学部長の評価	平成24年2月	数学についての深い知識だけでなく，教育に対しての情熱と使命感を備えており，数学教育だけでなく教員養成にもその力を発揮すると期待する．
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)　北海道教育大学大学院生への指導	平成26年9月	北海道教育大学の大学院生2名に対し，大学数学と高校数学の関連，教員採用試験過去問の解説，中高生向けの数学トピック紹介等の指導を行った．
	平成27年10月	北海道教育大学の大学院生 2 名に対し，Latex のインストールと使用方法，教員採用試験過去問の解説，大学入試問題の指導方法等の指導を行った．
5　その他 特記事項無し		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
（学術論文） （査読有） 1 Combinatorics for graded Cartan matrices of the Iwahori-Hecke algebra of type A.	共著	2013	Annals of Combinatorics，17(3)427-442.	熊本大学山田裕史教授，岡山大学鈴木武史准教授との共同研究である．オイラーの奇・相違分割等式の証明に用いられるグレイシャー対応の各ステップにウエイトを付け，そのウエイトを用いてA型岩堀-ヘッケ環の次数付きカルタン行列の行列式を記述している． 共著：山田裕史，鈴木武史，安東雅訓
2 A combinatorial proof of an identity for the divisor function.	単著	2013	Electronic Journal of Combinatorics, 20(2)12pp.	内村型q-恒等式と呼ばれる，約数関数と関連したq級数の等式について，組合せ論による翻訳と，写像を用いての全単射証明を与えている．
3 Products of parts in class regular partitions	共著	2017	Hiroshima Mathematical Journal, 47(1)15-18.	熊本大学山田裕史教授との共同研究である．r-類正則分割から定まる盤上に2種のウエイトを定義し，それらの積が階数を定める毎に一致することを示している．0階以降の積は岩堀-ヘッケ環の次数付きカルタン行列の行列式に一致する．著者：山田裕史，安東雅訓
（査読無し） 4 グレイシャー対応とヘッケ環の次数付きカルタン行列	共著	2011	京都大学数理解析研究所，1738，83-91.	整数の分割の各成分の個数について，p-進法での桁数を考えるという式と，その背景にあるA型次数付きカルタン行列の行列式を説明している．この結果は宇野-山田のカルタン行列に関する結果の次数付き版となっている． 著者：山田裕史，鈴木武史，安東雅訓
5 次数付きカルタン行列に関する組合せ論	共著	2011	代数群と量子群の表現論研究集会報告集 12-20.	オイラーの奇・相違分割の等式の全単射証明法の１つにグレイシャー対応と呼ばれるものがある．このグレイシャー対応の各ステップにウエイトを付けたものを複数考え，これらの積が次数付きカルタン行列の行列式に一致することを示している． 著者：山田裕史，鈴木武史，安東雅訓
6 約数関数に関するq-方程式	単著	2013	北海道大学数学講究録，157，209-212.	約数関数に関係する内村型q-恒等式と呼ばれる式について，組合せ論的な意味づけと精密化を行っている．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7 内村型 q-恒等式の組合せ論的理解と一般化	単著	2013	室蘭工業大学数理科学談話会報告集，Web 掲載	内村型 q-恒等式と呼ばれる q 級数の等式について，式変形・超幾何関数の特殊化と色々な証明が知られているが，組合せ論の話として証明している．
8　制限分割の数え上げ	単著	2017	数学セミナー2 月号	雑誌「数学セミナー」の整数の分割特集において，制限分割の数え上げについての記事を担当した．
（その他） 講演・学会発表				
1 ヤング図形のフック長の積		2010 年 3 月	日本数学会年会	
2 グレイシャー対応と次数付きカルタン行列		2010 年 9 月	日本数学会秋季総合分科会	
3 グレイシャーウエイトと次数付きカルタン行列		2010 年 10 月	RIMS 研究集会組合せ論的表現論とその応用	
4 次数付きカルタン行列における組合せ論		2011 年 6 月	代数群と量子群の表現論研究集会	
5 相異分割のヤング図形と約数関数		2012 年 3 月	日本数学会年会	
6 内村型 q-恒等式の組合せ論的理解と一般化		2013 年 2 月	室蘭工業大学数理科学談話会	
7 約数関数に関する q-方程式		2013 年 2 月	RIMS 研究集会組合せ論的表現論の展望	
8 内村型 q-恒等式の組合せ論的理解と一般化		2013 年 10 月	東海大学数学科談話会	
9 内村型 q-恒等式とヤング図形		2013 年 10 月	RIMS 研究集会組合せ論的表現論の展望	
10 4-正則分割について		2014 年 1 月	岡山大学理学部数学科談話会 CORE	
11 分割のフック長の積に関する公式		2014 年 3 月	第 1 回岡山-広島代数学シンポジウム	
12 分割と相異分割の母関数における相似性の理解とその応用		2014 年 9 月	日本数学会秋季総合分科会	
13 約数関数と相異分割		2014 年 11 月	東京無限可積分セミナー	
14 奇数と台形数		2015 年 3 月	日本数学会年会	
15 奇数と台形数		2015 年 3 月	第 2 回岡山-広島代数学シンポジウム	
16 ヤング図形のフックの超対称性について		2015 年 11 月	室蘭工業大学数理科学談話会	
17 長方形型と階段型のヤング図形		2016 年 3 月	第 3 回岡山-広島代数学シンポジウム	
18 劣正則分割とグレイシャー対応		2016 年 8 月	稚内表現論小研究集会	
19 ヤング図形におけるフックの超対称性についての組合せ論的証明		2017 年 8 月	弘前表現論小研究集会	
20 整数の分割と母関数		2018 年 8 月	岡山大学オープンキャンパス	

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
21 カタラン数の表示についての 3 つの証明		2018 年 8 月	福井表現論小研究集会	
22 劣正則分割とグレイシャー対応		2018 年 9 月	岡山大学理学部数学科研究集会 CORE	
22 劣正則分割とグレイシャー対応		2018 年 9 月	日本数学会秋季総合分科会	
23 周期性を持つ r-正則分割		2019 年 9 月	岡山大学理学部数学科研究集会 CORE	
24 原田の予想についての対称群における証明		2019 年 10 月	第 1 回奈良学園大学数学セミナー	
ネット記事				
25 ボードゲーム「カタン」がスマホ AR になって数学者の僕が考えたこと		2019 年 11 月	現代ビジネス	

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名　岩 本 健 一

研　究　分　野	研究内容のキーワード
社会福祉学	社会的養護・児童自立支援施設・施設保育士養成

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 ①体験学習と知識の習得を関連付けた指導の開発	平成 22 年 4 月 ～平成 31 年 3 月	美作大学短期大学部幼児教育学科「総合演習」鳥取短期大学幼児教育保育学科「特別研究」奈良学園大学奈良文化女子短期大学幼児教育学科「子ども学ゼミ」 ゼミ形式で行う専門性を探求する授業において、小中学生に指導することを前提に、自然遊びや伝承遊びを学生に体験させた。コマの手乗せ、もみぎり式火起こし、川魚すくい、アケビや木の実採集、陶芸のコップ作り、竹トンボ作り、たき火でパン作り、などを行う。これらのことから、保育学生が乳幼児に興味の対象が向きがちであるにもかかわらず、小中学生を対象とした遊びに興味を持ち、社会的養護への関心が高めていることが成果である。
②施設実習指導における事前・事後指導の連携による学生の実習に対する動機付けを確保する指導の開発	平成 22 年 4 月 ～現在に至る	美作大学短期大学部幼児教育学科「相談援助」鳥取短期大学幼児教育保育学科「保育実習指導Ⅲ」奈良学園大学人間教育学部「施設実習指導」 1年生の「保育実習指導Ⅰ（施設）」の授業において書き出した実習に対する不安を、すでに施設実習を経験している2年生がその「不安」をグルーピングし、解決方法を提示し、1年生に発表する。具体的な実習状況やこぼれ話に基づいてまとめることによって、1年生が施設実習に対するイメージを具体化させ、不安を軽減できることが成果である。
③社会的養護をテーマにしたシナリオの作成と発表を用いた授業の開発	平成 22 年 4 月 ～現在に至る	美作大学短期大学部幼児教育学科「相談援助」鳥取短期大学幼児教育保育学科「保育実習指導Ⅲ」奈良学園大学奈良文化女子短期大学幼児教育学科「相談援助」奈良学園大学人間教育学部「相談援助」 4コマ分を1クールとして、社会的養護の関わるテーマについて4～5名を1グループとし、グループごとに話し合ってオリジナルなシナリオを作成する。それに基づいて、配役を決め、発表する。そのストーリーをもとに、他グループのメンバーが相談援助の方法を考えるという授業を展開した。このような、ロールプレイを行うことによって、ストーリー作成のために積極的に調査を行い、それをもとに自分たちの意見をまとめることが出来ることが成果である。また、役割を演じることの楽しさを味わうことが出来、人前での緊張を達成感に変えることができるのも成果である。
④NIE（新聞教材活用）による授業展開の開発	平成 22 年 4 月 ～現在に至る	美作大学短期大学部幼児教育学科「社会福祉」「児童家庭福祉」「社会的養護」鳥取短期大学幼児教育保育学科「社会福祉」「児童家庭福祉」「社会的養護」奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科「社会的養護」奈良学園大学人間教育学部「社会福祉」「児童家庭福祉」「社会的養護」 児童を取り巻く現状を理解する一助として、新聞記事を活用している。児童家庭福祉の分野では、法律や制度の改正が毎年のように行われ、教科書だけでは現状に対応することが出来ない。そこで「社会福祉」では、国際的な児童問題や社会保障について、「児童家庭福祉」

		では里親や法・制度の改正について、「社会的養護」では児童虐待の記事を中心に提供し、学生は記事に対する意見をレポートにまとめている。学生が、新聞記事からタイムリーな話題を得て、子どもを取り巻く状況を身近なものとして捉えることができるという成果を得ている。
⑤児童福祉事業の訪問調査による授業展開の開発	平成 22 年 9 月 ～平成 25 年 3 月	美作大学短期大学部幼児教育学科「1年次セミナー」鳥取短期大学幼児教育保育学科「特別研究」 学生のグループを「地域子育て支援センター」「ファミリーサポートセンター」「児童館」「放課後児童クラブ」について事前学習させたうえで訪問させ、聴取した話を中心にまとめ、発表させる。学生の主体性と、保育所以外の施設への興味の涵養を目的としている。このことから、学生の施設実習への興味の増大と不安の減少という成果を得た。
⑥パワーポイントとリフレクションシートを用いた授業展開の開発	平成 22 年 4 月 ～現在に至る	美作大学短期大学部幼児教育学科「社会福祉」「児童家庭福祉」「社会的養護」鳥取短期大学幼児教育保育学科「社会福祉」「児童家庭福祉」「社会的養護」奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科「社会福祉」「社会的養護」奈良学園大学人間教育学部「社会福祉」「児童家庭福祉」「社会的養護」 パワーポイントとリフレクションシートを用いて、アクティブな学びを得るよう授業を行っている。スライドと配布する資料は、いわゆる「虫食い」状態に空欄を設けて、必要事項の書き込みにより理解を図る。さらに、写真やイラストを多用して、具体的なイメージを得るようにしている。また、ニュース動画など短い動画を適宜放映し、時事問題の解説を図っている。授業の最後には、当回の学びに応じた振り返りのリフレクションシートを課している。そのことから、理解が定着し、施設養護への興味が増加しているのが成果である。
⑦保育実習（施設）における実習施設の開拓	平成 31 年 4 月 ～現在に至る	現任校は人間教育学部として教職課程を設置したのが4年前であり、保育士養成課程を設置したのは2年前からである。そのため、施設実習を行う児童養護施設等の児童福祉施設が少なく、今後の保育士養成課程の定員増大に合わせて、実習施設を確保する必要があった。そのため、奔走し、45名分の実習施設を確保した。とりわけ、奈良県立の施設である、登美学園と児童相談所一時保護所を新しく実習施設として加えられたことは大きな成果である。
2　作成した教科書，教材 (1)『社会的養護の理念と実践』 (株) みらい　編者　中野菜穂子・水田和江 (著書欄に再掲)	平成 24 年 5 月	編者　中野菜穂子・水田和江 分担執筆　岩本健一・大迫秀樹・河野淳子・川原富紀枝・倉光晃子・近藤鉄浩・重橋史朗・高橋稔・中典子・中山智哉・東俊一 保育士課程における「社会的養護」と「社会的養護内容」の教科書として編纂された。 担当部分「第 2 部第 1 章 6 項　非行行為のある子どもと支援の実際」134～143 頁。 A 君の事例から、児童自立支援施設に入所するまでの経緯と施設での生活を説明している。対象となる「不良行為をなす」児童を具体的な人物像として描き、施設での支援を通じて変容する様子を分かりやすく伝えている。自立支援計画の策定にあたって職員が心掛けている、支援に対する考え方が理解できるように解説している。中学校卒業後の進路選択について疑問を投げかけ、読者に検討を求める形となっている。学生にイメージしにくい児童自立支援施設であるが、実際の事例をアレンジした構成になっている本文は読みやすく、援助の問題点も明確に出来ると学生に好評である。

		（株）みらいの担当者は、「本来の原稿はさらに分かりやすく読みやすい文章であったのに、他の著者との整合性で文章を手直ししたことが申し訳ない」と言っている。全 183 頁。
(2) 『社会的養護の理念と実践』第 2 版 （株）みらい （著書欄に再掲）	平成 29 年 4 月	編者　中野菜穂子・東俊一・大迫秀樹 分担執筆　岩本健一・占部尊士・河野淳子・川原富紀枝・倉光晃子・重橋史朗・菅田理一・友川礼・中典子・中山智哉・平尾太亮・槙尾真佐枝・松田真正・水田和江・村田恵子 保育士課程における「社会的養護」と「社会的養護内容」の教科書として編纂された第 1 版の改訂版。 担当部分「第 2 部第 2 章 2－6 項　非行行為のある子どもと支援の実際」152～159 頁。 A 君の事例から、児童自立支援施設に入所するまでの経緯と施設での生活を説明している。施設の支援を解説するように改めた。全 215 頁。
3) 『社会福祉』青鞜社 （著書欄に再掲）	令和 2 年 3 月	編者　新川泰弘・宮野安治 分担執筆　中村紀之・花岡貴史・室谷雅美・岩本健一・本田和隆・古川督・藪一裕・榎本祐子・松木宏史・潮谷光人・山本展明・原悦子・関谷みのぶ 保育士養成課程における「社会福祉」の教科書として編纂された。担当部分「第 6 章　社会福祉の実施機関と施設 47～54 頁」 要保護児童を発見した場合の通告先をテーマに順に機関と施設を紹介している。 編者の新川先生には、「文章を全く手直しする必要がなく大変ありがたい。また、他社の教科書を作成する予定があるので、ぜひ著者に加わってほしい」と依頼されている。全 124 頁。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 美作大学短期大学部採用時の学長の評価	平成 22 年 4 月	前任者の定年退職の後任として採用される。前任者が、障害者福祉の現場出身者であったため、学生の社会的養護への理解が弱かったとの反省から、当職の児童相談所や児童自立支援施設での勤務経験を重視され採用された。さらに、著書「児童自立支援施設の実践理論」が読み応えのある内容であり、現場実践を理論にまで昇華させたことが評価された。また、関西学院大学と同志社大学と、関西の社会福祉分野で実績のある大学の出身であることも評価された。
(2) (学)美作学園　美作大学短期大学部 幼児教育学科における学生による授業評価アンケート	平成 25 年 10 月	幼児教育学科「社会福祉」授業アンケート結果　学生による授業評価において高い評価を得た。「授業内容は良かったと思うか」という問いに対して、「そう思う」「まあそう思う」と回答した学生が 93.2%を占めた。学年平均は 77.8%であった。
(3) 鳥取短期大学採用時の学長の評価	平成 26 年 3 月	前任の授業担当者は山田修平学長である。学長業務に専念するため、授業担当を退くことになった。当職の選任の理由は、現場経験が豊富であり、措置側の児童相談所と、被措置側の施設ともに経験していること。児童自立支援施設で困難な児童の支援に携わっていたことから、本学での学生支援に期待できること。著書などから、現場経験を体系的に理論化する能力があること、などが評価された。さらに、鳥取県出身の滋賀県で活躍した糸賀一雄について、滋賀県職だった立場から研究を進めてほしいとのことだった。

(4) (学)藤田学院　鳥取短期大学 　幼児教育保育学科、食物栄養学科　における学生による授業評価アンケート	平成 27 年 12 月	前期「社会的養護」（講義科目）の授業では、回答者は全部で 48 名。意欲については「意欲的でない」と答えた学生が 0 名、「かなり意欲的」が 29 名（60%）、「ある程度意欲的」が 19 名（40%）と、100%の学生が意欲的に取り組んでいる。難易度については 45 名(94%)の学生が「適切」と答えたものの 3 名(6%)の学生が「難しい」と答えている。分量については、「適切」と答えた学生が 43 名(90%)であるが「多い」と答えた学生が 5 名(10%)いた。また、パワーポイントや資料について「読みやすい」と答えた学生が 40 名(83%)、「読み取れる」が 8 名(17%)であった。 このことから、パワーポイントを使った授業方法が、多くの学生に適切と認識されていることが分かった。
(5) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部　幼児教育学科	平成 30 年 12 月	「相談援助」（演習科目）の授業では、グループワークを、毎回メンバーをくじで決め、発表者を事前に決めずメンバー全員で発表原稿を作成するという形で行った。学生のアンケートには、「自分で考えてまとめてそれをグループで話し合い活動することが多くグループでの取り組み方やクラスの様々な人と話せてよかった。他の人の意見も取り入れながら自分で考える大切さを学んだ気がする。」などの評価を受けた。
(6) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科	令和元 年 11 月	「社会的養護内容」（演習科目）の授業改善シートにおける学生のコメントでは、「学生との信頼関係ができており、安定したかかわりができていると思う。」「実践的な授業内容なので、意欲を持って参加できる。」などの評価を得ている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 講演 津山市主任児童委員連絡協議会 「施設退所児童の自立支援」 津山市総合福祉センター	平成 22 年 6 月	被虐待児の早期発見と施設退所児童のアフターケアの重要性について話し、主任児童委員の協力を求めた。
(2) 公開講座 教職員のための夏の公開講座・第 49 回幼児教育講座　「社会的養護をつかむ」 奈良学園大学奈良文化女子短期大学	平成 28 年 8 月	奈良県内の幼稚園・学校教員を対象とした講座。家庭に恵まれない子どもたちが暮らす施設の現状とこれからについて解説した。
5　その他		なし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 (1) 小学校教諭二種免許状	平成 4 年 3 月	(平三小二め第 10185 号)京都府教育委員会
(2) 社会福祉士	平成 21 年 4 月	(第 115618 号)　　厚生労働大臣
(3) 社会福祉士実習・演習担当教員講習会修了	平成 24 年 9 月	(社) 日本社会福祉士養成校協会
2　特許等		なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)神戸市児童相談所 児童指導員	昭和 58 年 4 月 ～ 平成 2 年 3 月	一時保護所において、一時保護児童のケアと行動観察を行い、処遇会議において措置方針の検討を行った。施設入所以前の荒れた状態の子どもたちを、ソーシャルワークの技術を駆使して落ち着かせ、施設へ措置した。当時 30 名以上の全国有数の入所児童数を誇った。また、保育実習生の指導を行った。

（2）神戸市立もとやま園 児童指導員　（障害者支援施設）	平成 2 年 4 月 ～ 平成 4 年 6 月	異動になった知的障害者授産施設（当時）では、民間ではケアできない重度の障害者とともに、箱折りや空き缶つぶしの授産活動に携わりながら、利用者と保護者の支援を行った。意思疎通が難しい障害者が作業を習得するためのケア技術の向上を図ったことと、保護者との対話を率先して行い円満な信頼関係を構築した。
（3）滋賀県立淡海学園　児童自立支援専門員（児童自立支援施設）	平成 4 年 7 月 ～ 平成 20 年 3 月	当該施設の施設長より招聘を受け、割愛された。妻とともに、小舎夫婦制の寮舎に住み込み、非行少年と一つ屋根の下で暮らした。子どもが落ち着かず荒れた施設を、無断外出がほぼない落ち着いた施設に立て直した。乳牛飼育を行っていたが（平成 10 年廃止）、搾乳や出産を子どもたちに経験させ情緒の安定に結びつけた。平成 10 年以降は、施設内に陶芸の穴窯を自ら（岩本と子どもたちで）築窯し、薪作りから作品の焼成までを行い、ダイナミックな活動を情緒の安定に寄与させた。 保護者支援と家庭復帰のための家族関係の調整が、支援の大きな柱であり、ソーシャルワークの技術を用いて保護者を変革に導いた。退所後も、保護者の受け入れ態勢が整ったことから、スムーズな生活を送ることが出来る子どもが増加した。また、家庭復帰できない子どもについては、住み込み就労を可とする職場を開拓し、職親との関係の強化を図った。カツオ漁船など、集団生活を基盤とする職場において子どもたちが重宝されるという成果をもたらした。
4　その他		なし

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1『社会的養護の理念と実践』 （再掲）	共著	平成 24 年 5 月	（株）みらい	編者　中野菜穂子・水田和江 分担執筆　岩本健一・大迫秀樹・河野淳子・川原富紀枝・倉光晃子・近藤鉄浩・重橋史朗・高橋稔・中典子・中山智哉・東俊一 保育士課程における「社会的養護」と「社会的養護内容」の教科書として編纂された。 担当部分「第 2 部第 1 章 6 項　非行行為のある子どもと支援の実際」134～143 頁。 A 君の事例から、児童自立支援施設に入所するまでの経緯と施設での生活を説明している。対象となる「不良行為をなす」児童を具体的な人物像として描き、施設での支援を通じて変容する様子を分かりやすく伝えている。自立支援計画の策定にあたって職員が心掛けている、支援に対する考え方が理解できるように解説している。中学校卒業後の進路選択について疑問を投げかけ、読者に検討を求める形となっている。学生にイメージしにくい児童自立支援施設であるが、実際の事例をアレンジした構成になっている本文は読みやすく、援助の問題点も明確に出来ると学生に好評である。 （株）みらいの担当者は、「本来の原稿はさらに分かりやすく読みやすい文章であったのに、他の著者との整合性で文章を手直ししたことが申し訳ない」と言っている。全 183 頁。
2『社会的養護の理念と実践』第 2 版 （再掲）	共著	平成 29 年 4 月	（株）みらい	編者　中野菜穂子・東俊一・大迫秀樹 分担執筆　岩本健一・占部尊士・河野淳子・川原富紀枝・倉光晃子・重橋史朗・菅田理一・友川礼・中典子・中山智哉・平尾太亮・槙尾真佐枝・松田真正・水田和江・村田恵子 保育士課程における「社会的養護」と「社会的養護内容」の教科書として編纂された第 1 版の改訂版。 担当部分「第 2 部第 2 章 2－6 項　非行行為のある子どもと支援の実際」152～159 頁。 A 君の事例から、児童自立支援施設に入所するまでの経緯と施設での生活を説明している。施設の支援を解説するように改めた。全 215 頁。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3『社会福祉』 （再掲）	共著	令和 2 年 3 月	青鞜社	編者　新川泰弘・宮野安治 分担執筆　中村紀之・花岡貴史・室谷雅美・岩本健一・本田和隆・古川督・藪一裕・榎本祐子・松木宏史・潮谷光人・山本展明・原悦子・関谷みのぶ 保育士養成課程における「社会福祉」の教科書として編纂された。担当部分「第6章　社会福祉の実施機関と施設 47～54 頁」 要保護児童を発見した場合の通告先をテーマに順に機関と施設を紹介している。 編者の新川先生には、「文章を全く手直しする必要がなく大変ありがたい。また、他社の教科書を作成する予定があるので、ぜひ著者に加わってほしい」と依頼されている。全 124 頁。
（学術論文） 1「遊びの分類および遊び環境と遊び方法の関係についての研究」 （査読あり）	共著	平成 26 年 3 月	沖縄大学人文学部紀要第 16 号	○岩本健一、久保隆志 遊びの「おもしろさ」を明らかにするため、遊びを「行為の動詞」に変換した。分析から、遊びは「探す」「感じる」「作る」「競う」の 4 つのカテゴリの「おもしろさを求める行為」に分類できた。遊びの分類はカイヨワが試みた分類が有名であるが、カイヨワの分類はすべてを網羅できた分類とはいいがたい。本論文で示すことができた分類はすべての遊びを網羅することのできる画期的な分類であるといえる。分類をもとに、遊び環境と遊び方法の関係について分析した。遊び方法は遊び環境に影響を受ける。したがって、子どもが「おもしろさ」を満足するためには、自然物を取り入れた遊び環境と、寄り添う大人が必要であると主張している。 共著者：久保隆志（前沖縄大学人文学部助教）本論文は、岩本が単独で著作したものを、学内での研究ではないとのことで鳥取短期大学紀要への掲載を拒否されたため、沖縄大学紀要への掲載を久保氏に依頼したところ、執筆者欄に久保氏の名前が筆頭に記載されてしまったといういきさつを持つ論文である。
2「施設実習における実習日誌の指導コメントの数量的分析と考察」 （査読あり）	単著	平成 27 年 3 月	保育士養成研究第 32 号　1～10 頁	本論文は、施設実習において実習日誌に回答された指導職員のコメントに対し数量的な分析を行ったものである。学生 60 名の 10 日分の実習日誌を分析した結果、指導職員のコメントは、内容の特質から 3 つのカテゴリに分類することができた。行為を伝える「方法」カテゴリで使用されたすべての動詞を分類し、指導職員が学生に求める行為を系統立てた「気づきマップ」を作成した。研究の結果、指導職員のコメントは、学生の行為を変容する「リフレクション」をもたらすことが明らかになった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3「保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について」（査読あり）	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第 47 号 41～48 頁。	○高橋千香子、高岡昌子、林悠子、岩本健一 下記、全国保育士養成協議会第 55 回研究大会　研究発表を論文としてまとめたものである。 160 名の学生に行った YG 性格検査では、B 型（不安定積極型）が 30%、E 型（不安定消極型）が 24%、D 型（安定積極型）19%、A 型（平均型）18%、C 型（安定消極型）9%の結果となった。進路状況で保育職に就いた者の割合は、A 型と C 型が高く、D 型が低かった。D 型は保育以外の職業に適性を見出しやすい性格特性と考えられる。非正規及び就職しなかった者は E 型が最も多かった。なかなか進路を決めきれない結果としての進路選択は日ごろの様子からも頷けるものである。
4「保育者養成に求められる保育者の資質について―就職先へのアンケート調査より―」（査読あり）	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第 47 号　71～80 頁。	○林悠子、高岡昌子、高橋千香子、岩本健一 下記、全国保育士養成協議会第 55 回研究大会　研究発表を論文としてまとめたものである。 卒業生の就職先の保育所・幼稚園・施設へのアンケート調査の回答 76 名分から、求められる資質を抽出した。結果、即戦力に役立つ実践力とともに、社会人基礎力とされる、チームで働くうえで重要視されるさまざまな能力がもとられていることが分かった。
5「各発達の時期における『先生』のネガティブな言動について」（査読あり）	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第 47 号 31～40 頁	○高岡昌子、高橋千香子、林悠子、岩本健一 保育所や学校における「先生」のネガティブな言動について調査研究を行った結果、「先生」の言動でネガティブと捉えられる言動は、それらを受け止める子どもの発達の時期によって量的にも質的にも異なっていることが分かった。
6「施設実習における学生の不安を軽減する事前学習についての研究」（査読あり）	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第 48 号 31～40 頁。	○岩本健一、高岡昌子、高橋千香子、 林悠子 施設実習に行く前の学生のほとんどは不安と否定的な気持ちを持っている。しかし、実習が終わると良いイメージに変化する。良いイメージへの変換は子どもとのコミュニケーションを通して行われることが分かった。度のためには、子どもに対して自ら働きかけることのできる、気持ちの持ち方を含めた事前学習が必要である。そこで、実習を終了した学生が実習において不足していたと考える要素を分析し、6 つのカテゴリからなるチェック表を作成した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7「新人保育者に必要な資質について―新人保育者に対する総合的な評価につながる具体的な資質－」（査読あり）	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第 48 号 41～49 頁。	○高岡昌子、林悠子、高橋千香子、岩本健一 本学の卒業生が就職先において新人保育者としてどのような評価をされているのかについて調べ、各評価項目と総合的な評価との関係について検討した。そこから、新人保育士にとっては高い技術よりも、まずは立場をわきまえて、礼儀正しく、日々の行身に意欲的に取り組み、前向きに学ばせていただくという姿勢が必要であることが分かった。
8「施設実習におけるコミュニケーション力の必要性について」（査読あり）	共著	平成 30 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第 49 号 41～50 頁。	施設実習を終えた学生にアンケートをとったところ、学生が施設で働くことに好意的かそうでないかの回答には、実習で子どもと関わることができるか否かに関係していた。「はい」と答えた学生は苦労しながらも一生懸命子どもと関わり生き生きと実習をしていた。「いいえ」と答えた学生は、子どもとの関係が築けないことを原因として消極的な実習態度をとることが多かった。そのことと関連して、共起ネットワーク分析から「はい」の場合は能動的な行動語群がネットワークとなり、「いいえ」の場合は客観的な考察語群がチェーンとなっていることを読み取ることができた。このことから、学生のコミュニケーション力の向上を図るための事前指導が必要であることが分かった。
9「新人保育者に対する評価～前年度との比較を通して～」（査読あり）	共著	平成 30 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部紀要　第 49 号 49～60 頁。	○高岡昌子、飯田惠美子、岩本健一、 小川純子、高橋千香子、林悠子 本研究では、平成 28 年度の本学の短期大学卒業生が就職先において新人保育者としてどのような評価をされているのかについて調べ、各評価項目と総合的な評価（現況での満足度や将来性があると感じること）との関係について検討したものである。
10「実習指導内容と評価２施設実習」（査読なし）	単著	平成 30 年 12 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部教学報告　134～138 頁。	当該短大が閉学するにあたり、教学の内容をまとめたものである。その中で、施設実習についての概要を記した。実習施設が、成人施設に頼らず、児童施設だけで行っていることの希少性を他短大との比較から解説している。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） （学会発表）				
1 保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について	発表者 ○高橋千香子 高岡昌子 林悠子 岩本健二	平成 28 年 8 月	全国保育士養成協議会第 55 回研究大会研究発表	160 名の学生に行った YG 性格検査では、B 型（不安定積極型）が 30%、E 型（不安定消極型）が 24%、D 型（安定積極型）19%、A 型（平均型）18%、C 型（安定消極型）9%の結果となった。進路状況で保育職に就いた者の割合は、A 型と C 型が高く、D 型が低かった。D 型は保育以外の職業に適性を見出しやすい性格特性と考えられる。非正規及び就職しなかった者は E 型が最も多かった。なかなか進路を決めきれない結果としての進路選択は日ごろの様子からも頷けるものである。
2 保育者養成に求められる保育者の資質について―就職先へのアンケート調査より―	発表者 ○林悠子 高岡昌子 高橋千香子 岩本健二	平成 28 年 8 月	全国保育士養成協議会第 55 回研究大会研究発表	卒業生の就職先の保育所・幼稚園・施設へのアンケート調査の回答 76 名分から、求められる資質を抽出した。結果、即戦力に役立つ実践力とともに、社会人基礎力とされる、チームで働くうえで重要視されるさまざまな能力がもとられていることが分かった。
3 幼稚園児の保護者に対する児童虐待についての意識調査	発表者 ○岩本健一 高岡昌子 林悠子 高橋千香子	令和 2 年 3 月 1 日	日本保育者養成教育学会第 4 回研究大会研究発表	児童虐待防止法の制定以降、虐待の範囲が拡大している。2004 年には「同居人の暴力の黙認」がネグレクトに、2013 年には「虐待の被害児童のきょうだい」が心理的虐待に含まれることになった。最近では、受験のため子どもを過度に追い詰めてしまう保護者の様子などをメディアは「教育虐待」と呼称している。このように、今後、想定しうる何らかの行為が児童虐待に含まれる可能性があるかどうかを、当事者である幼稚園児の保護者に意識調査をした。その結果、保護者の属性により、何を児童虐待と捉えるかという意識が変容することが分かった。

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月31日

氏名　　岡野　聡子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
幼児教育、キャリア教育、地域福祉	子どもと環境、キャリア教育、子育て支援、地域福祉

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　教育方法の実践例 (1)メールアドレスの使用による学生相談	平成20年４月～ 平成23年３月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科にて、保育学生のキャリア支援を担当した。学生のキャリア発達を促すためには、自分の話を親身に聞いてくれる人が必要となる。そのため研究室のメールアドレスを学生に周知し、いつでも質問に応じられる体制を整備した。学生の疑問に対して即時対応が可能であり、そのことによって学生は指導者を身近に感じるだけでなく、研究室に来訪する回数も増え、進路決定に対する意欲が高まった。
(2)学内掲示板を利用した学生の質問への回答	平成20年６月～ 平成23年３月	京都光華女子大学短期大学部こども保育学科にて、キャリア支援の一環として、１年生の４月から２年生の３月まで合計５回の進路希望調査を実施した。その中に自由記述欄を設け、進路相談を含め、日常生活の中での悩みや疑問を匿名式で書かせた。回を重ねるごとに自由記述への書き込みが増え、それらの質問に対する回答を３日以内に学内の掲示板に貼り出した。掲示板での回答方式により、学生同士の情報共有化を推進しただけでなく、自分の抱えている悩みが他の人も抱えている悩みであったということを知るきっかけとなり、学生内の安堵感を作り出すことができた。
(3)視聴覚教材の活用	平成24年４月～ 平成24年７月	環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科の講師として、「子どもと環境」を担当した。保育を専攻する学生は、子どもと接する経験が豊富であるとはいえず、また教科書の記述や講義だけでは、学生は子どもに対するイメージがわきにくいため、ビデオ教材を適宜使用した。映像を通して子どもの実像を実感し、理解を深めるように工夫している。また、ビデオ教材は学生が受身的に観て終わりということになりやすいので、ビデオ視聴前に課題を与え、問題意識を持ってビデオ教材を視聴させるようにしている。なお、その課題に対する解答へは、採点をして返却をしている。それらの過程により、学生の子どもに対するイメージが豊富になり、教育効果が上がっているといえる。
(4)体験学習を取り入れた授業	平成24年４月～ 平成24年７月	環太平洋大学次世代教育学部こども発達学科の講師として、「子どもと環境」を担当した。授業内において幼稚園や保育所にて実際に活用できる教材研究を体験的に行わせる工夫をした。その結果、学生アンケートにおいても就職後にすぐに使用できるものであると好評を得た。
(5)LINEアプリを活用したキャリア支援の実施	平成28年６月～ 現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の講師として、キャリア形成科目（キャリアデザインⅠ・Ⅱ、キャリアディベロップメントⅠ・Ⅱ、キャリアスキルアップⅠ・Ⅱ、インターンシップ）を担当した。奈良学園大学のキャリア教育は、1～3 年まで実施し、就職活動が本格化する 4 年次は、学生と教員の実質的支援がなくなる。そのため、これまでのキャリア教育で培った力が発揮されるよう、LINE アプリを用いてキャリア支援を実施した。任意登録としたが、2017 年 5 月現在で全学生 100 名中、52 名が参加をし、一般企業志望者である 38 名は全て加入している。なお、LINEアプリを通して、教

		員と情報交換をすることで、5 月 22 日時点における一般企業就職内定者は、64.1%という成果を上げることができた。
(6)授業に関するホームページの立ち上げ・運営	平成 30 年 4 月～現在に至る	「子どもと環境」および「キャリアスキルアップⅠ」にて活用する授業補助教材を提示したホームページを立ち上げた。学生のレポートを添削し、その結果をホームページ上で公開しており、サイトを見た学生が他者の優れたレポートを閲覧することができるため、具体的にどのように文章構成をすればよいかがわかったとの声を学生から多くもらった。また、教育実習中の学生も授業内容を知ることができるため、授業についていけなかったらどうしようといった不安が軽減されたとの声もあった。
(7)キャリア形成科目におけるＰＢＬ（課題解決型授業）を取り入れた授業実践	平成 31 年 4 月～現在に至る	1～3 年生のキャリア形成科目において、ＰＢＬ課題解決型授業を取り組んだ。㈱マイナビが運営する MyFutureCampus の教材を取り入れ、「ＡＩをもちいて社会課題を解決する（グーグル合同会社）」や「千葉県長南町の廃校を活用した地域創生案を提案せよ(㈱マイナビ)」といったテーマを学生に与え、4 人 1 チームで実施した。ＰＢＬの教育効果について、キャリア教育ラボからの取材も受けた。 https://career-ed-lab.mycampus.jp/interview/1578/
2　作成した教科書、教材 (1)平成 23 年度キャリアデザイン「一般企業就職希望者へのキャリア支援教材」（教材）	平成 24 年 5 月	平成 23 年 9 月 26 日～平成 24 年 1 月 31 日までに講義をした内容を「一般企業就職を目指す学生のための支援教材」としてまとめ、作成した。一般企業就職希望者（3 年生 106 名）を対象として、企業研究の方法やエントリーシート・ＳＰＩ試験対策などの教育課程外にあたるキャリア支援の提供も手厚く行った。キャリア教育の本来的目的である就労意欲の向上を実現するために外部講師の充実も図った。 （作成者）岡野聡子 （発行元）環太平洋大学キャリアセンター （総頁数）186 ページ （所属）環太平洋大学キャリアセンター、 （使用した科目名）キャリアデザイン
(2)仏教保育行事「まことの保育」～学校法人安居院 あぐい幼稚園の実践事例から～(教材)	平成 24 年 6 月	私立園は、園独自の保育方針や保育カリキュラムを持っている。その中で、保育に仏教思想を取り入れている園は数多くみられる。特に仏教保育を展開している私立園に就職を希望している学生のために、仏教保育とは何か、生活の中での仏教保育の取り入れ方、仏教三大行事（降誕会・成道会・涅槃会）、行事で使用する楽譜集等も含め、一つの冊子としてまとめた。仏教系私立保育園を目指す学生に貸出をし、好評を得ている。 （作成者）岡野聡子 （発行元）環太平洋大学こども発達学科 （総頁数）37 ページ （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達　学科 （使用した科目名）子どもと環境
(3)「キャリアデザイン　サブノート」（教材）	平成 24 年 9 月	本学の後期に開講される「キャリアデザイン」は、4 つの分室（教職支援室、幼保施設分室、公務員支援室、企業等就職支援室）に分かれて指導を行っている。前年度まで、各分室で行ってきた授業内容は会議で共有されるものの、教育の効果や評価に対する議論が不足していた。 そのため、学生の学びを可視化し、適切な評価をそれぞれの教員ができるようにサブノートの作成を行った。 （作成者）小野憲一、岡野聡子、大野光二、 三木澄代、久田孝 （発行元）環太平洋大学 （出版社）ふくろう出版 （総頁数）64 ページ （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達　学科 （使用した科目名）キャリアデザイン

(4)『子どもと環境～身近な環境とのかかわりを深めるために～』（教科書）（再掲）	平成 25 年 2 月	乳幼児期は、学校の一斉授業のように知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる土台を作る時期である。この時期は、子ども自身が生活の中から、好奇心や探究心をもって環境にかかわることで遊びを展開し、充実感や満足感を味わうことが大切である。子どもが自発的に環境とかかわり、さまざまな体験から生きる喜びや充実感が味わうためには、子どもの遊びの質を高められるような保育者の意図的なかかわりが必要となる。本書では、子どもと自然環境、物的環境、社会環境のかかわりについて実践事例を用いて解説した。 （単著・共著）単著 （判型）A5 判 （総頁数）71 ページ （出版社）ＥＲＰブックレット （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達　学科 （使用した科目名）子どもと環境
(5)『子どもの生活理解と環境づくり～幼児教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』（教科書）（再掲）	平成 25 年 3 月	2005 年の中央教育審議会答申では、幼児期教育の意義と役割を「学校教育の始まりとして幼児教育をとらえれば、幼児教育は、知識や技能に加え、思考力・判断力・表現力の基礎を育成する役割を担っている」とした。そのことによって、幼児教育のあり方が、学校教育をより意識したものに変化してきていることがわかる。本書では、幼稚園や保育所で行われる幼児教育と小学校教育の連携をいかに図っていくかについて、幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」を を軸として、自然環境・物的環境・社会環境の３つの視点を用いて事例を取り上げながら解説を行った。 （単著・共著）共著 （判型）A5 判 （総頁数）166 ページ （出版社）ふくろう出版 （担当頁）pp. 1–12、pp. 134–137、pp. 140–142、pp. 137–140（翻訳担当） （担当部分）第1章第1節、第5章第3節1、2-2・3 第5章第3節2-1の翻訳 （編著者）岡野聡子・筒井愛知 （分担執筆者）松田智子・吉村啓子・辻野孝・大野鈴子・金光文代・平松茂・馬場浩一郎・中道美鶴・岡田美紀・土谷長子・アンソニー・ウォルシュ （所属）環太平洋大学次世代教育学部こども発達　学科 （使用した科目名）子どもと環境
(6)「キャリアデザインサブノート～改訂版～」（教材）	平成 25 年 4 月	前年度に作成したキャリアデザインサブノートに、自己理解や業界研究、社会の理解の開設、就職活動の資料を新たに加えて作成した。前年度まで、各分室で行ってきた授業内容は会議で共有されるものの、教育の効果や評価に対する議論が不足していた。そのため、学生の学びを可視化し、適切な評価をそれぞれの教員ができるようにサブノートの作成を行った。 （編集・著者）岡野聡子 （共著者）小野憲一、石渡嶺司、三木澄代、大野光二 （発行元）環太平洋大学 （出版社）ふくろう出版 （総頁数）90 ページ （担当頁）pp. 2-9、pp. 34–45、pp. 51–86 （所属）環太平洋大学次世代教育学部教育経営学科 （使用した科目名）キャリアデザイン
(7)「教職表現力演習ノート」（教材）	平成 27 年 4 月	前年度に実施した教職表現力演習の授業内容を精査し、教材を作成した。授業目的は、新聞記事や評論文を用いて、他者に物事をわかりやすく説明する力の育成を図り、アカデミックスキルの基礎を涵養することにあ

		る。作成した教材の構成は、①読んでまとめる、②言葉を学ぶ、③聴いてまとめるから成り立ち、それぞれの項目を段階的に学べるようにしている。 （編集・著者）西辻正副、山本美紀 （共著者）岡村季光、岡野聡子、高木悠哉、松井典夫 （発行元）奈良学園大学 （出版社）株式会社廣済堂 （総頁数）152 ページ （担当頁）pp.114-115 （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）教職表現力演習Ⅰ
(8)「キャリアデザインⅡ ～職業研究ワークブック～」（教材）	平成 27 年 9 月	キャリアデザインⅡでは、職業研究「働くこととは」をテーマとして、さまざまな業界から各分野において活躍している・してきた外部講師を招聘し、仕事に対する考え方や進め方を研究することを授業目的としている。本ワークブックでは、聞いたことをメモにまとめる要約力と、まとめた情報を簡潔に示す構造力を身に付けられるように構成した。 （作成者）岡野聡子 （発行元）奈良学園大学 （総頁数）30 ページ （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）キャリアデザインⅡ
(9)「キャリアディベロップメントⅡ ～職業研究 2 ワークブック～」（教材）	平成 27 年 9 月	キャリアディベロップメントⅡでは、①自己理解の深化、②職業への理解を深める、③インターンシップの 3 部構成としており、1 年次で学んだことを活かす内容となる。本ワークブックのねらいは、課業分析等を通して、仕事内容への理解を深めると同時に、多様な職種の情報を収集し、学生自身が具体的な職業像を獲得できることである。 （作成者）岡野聡子 （発行元）奈良学園大学 （総頁数）30 ページ （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）キャリアディベロップメントⅡ
(10)「2016 年度版 教職表現力演習ノート」 （教材）	平成 28 年 4 月	前年度に活用した「教職表現力演習ノート」を精査し、改訂版として教材を作成した。授業目的は、新聞記事や評論文を用いて、他者に物事をわかりやすく説明する力の育成を図り、アカデミックスキルの基礎を涵養することにある。作成した教材の構成は、①読んでまとめる、②言葉を学ぶ、③聴いてまとめるから成り立ち、それぞれの項目を段階的に学べるようにしている。 （編集）西辻正副、岡村季光 （共著者）岡村季光、岡野聡子、桑原祐子、高木悠哉、山本美紀 （発行元）奈良学園大学 （出版社）株式会社廣済堂 （総頁数）109 ページ （担当頁）pp.52-53 （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）教職表現力演習Ⅰ
(11)「キャリアスキルアップⅠ ～就活準備ワークブック①」（教材）	平成 29 年 4 月	キャリアスキルアップⅠでは、3 年生全員が履修をする科目である。1 年後に控えた教員採用試験や一般企業就職活動、公務員採用試験の準備をするにあたり、①就職活動の流れ、②インターンシップの概要、③履歴書の書き方、④ＳＰＩ試験の概要、個人・集団面接、グループディスカッション、集団討議の概要をまとめたものである。学びの積み重ねが可視化できるようにしたワークブックである。 （作成者）岡野聡子 （総頁数）48 ページ （所属）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科 （使用した科目名）キャリアスキルアップⅠ
(12) 『子どもの生活理解と環境づくり[改訂版] ～就学前教育領域「環境」と小学校教育「生活	平成 31 年 3 月	2017 年に学習指導要領が改訂され、資質・能力の三つの柱と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 の

科」から考える～』（教科書）（再掲）		姿）が明示された他、保幼小連携の強化が取り上げられた。本書では、学習指導要領改訂にともない、領域「環境」にて設置された新項目も含め、就学前教育と小学校教育の教育内容の接続に言及し、自然環境・物的環境・社会環境の３つの視点を用いて事例を取り上げながら解説を行った。 （単著・共著）共著 （判型）A5判 （総頁数）206ページ （出版社）ふくろう出版 （担当頁）pp.1-20、pp.81-83、pp.103-104、pp.106-108、pp.146-147 （担当部分）第1章第1節、第3章第2節1-2、1-3、第4章 第1節1、1-2、第5章第1節1-3 （編著者）岡野聡子 （分担執筆者）松田智子・大野鈴子・吉村啓子・筒井愛知・村田眞理子・藪田弘美・辻野孝・伊崎一夫・中道美鶴・岡田美紀・田中卓也・前川豊子・平野知児 （所属）奈良学園大学人間教育学部 （使用した科目名）子どもと環境、保育内容Ⅱ「環境」
３　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)京都光華女子大学短期大学部こども保育学科学科長による評価	平成20年3月～平成23年3月	こども保育学科共同研究室実習・就職支援室にて、実習・就職支援室の主担当として、保育職を志す学生の実習支援と就職支援を行った。こうした学生支援だけにとどまらず、研究助手として幼稚園や保育所への実施調査に携わったことや幼稚園現場の実情を講義内で講演したこと、全国保育士養成協議会等にて研究発表を行っていたことで、幼児教育における教育的・研究的な能力を有していると毎年評価をされた。
(2)環太平洋大学学長補佐/キャリアセンター長/教育経営学科長による教員評価	平成24年7月	5年間の幼稚園教諭の経験を活かして、理論と実践を結びつけ「子どもと環境」の科目を担当していることを評価された。内容としては、授業にて理論と体験的な活動を取り入れて保育指導方法を示す工夫をしていることや、毎回のレポートや課題を学生に課し、それに対する学生へのフィードバック等、実務経験や授業改善への姿勢が、科目を担当するための教育的な能力を有していると評価された。
(3)平成24年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境 大学名：環太平洋大学	平成24年7月	「子どもと環境」の授業評価に関するアンケート調査を実施した。5点尺度（不必要である（1点）から必要である（5点）まで）にて回答を求めた。回答結果は、①教科書の用語の確認:4.028（SD=0.839）、②授業内の本読み:3.676(SD=0.868)、③授業内の配布資料:4.408(SD=0.761)、④映像学習:4.535(SD=0.646)⑤体験活動:4.676(SD=0.708)、⑥室外授業4.338(SD=0.918)、⑦グループワーク:4.436(SD=0.8)、⑧授業後の発展学習:3.859(SD=0.997)、⑨提出課題のフィードバック:3.944(SD=0.918)であった。体験活動に対する評価が最も高く、また、96%の学生が本講義を受けて自分のためになったと答えた。
(4) 平成25年度授業評価アンケートの実施 科目名：生活の理解 大学名：環太平洋大学	平成25年7月	FD活動の一環として、「生活の理解」学生による授業評価アンケートを実施した。履修者数は209名、回答者数は172名（有効回答率：82.2%）であった。質問紙は15項目から成り立ち、①学生自身の取り組みについて、②担当教員や指導方法等について4点尺度で実施した。評価結果の平均評定は 3.419 であり、総合的満足度は3.445であった。また、教材研究の授業内容を多く取り入れたこともあり、「授業への参加意欲が促されるような工夫がされていましたか」について3.47の評価をもらうことができた。
(5) 平成26年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザインⅠ 科目名：キャリアデザインⅡ 科目名：生活の理解 大学名：奈良学園大学	平成26年4月～平成27年3月	平成26年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4点尺度で実施した。 ・キャリアデザインⅠ：3.37 ・キャリアデザインⅡ：3.43

		・生活の理解：3.65 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(6)平成27年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境（前期） 科目名：生活の理解（後期） 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名:キャリアディベロップメントⅠ(前期) 科目名:キャリアディベロップメントⅡ(後期) 大学名：奈良学園大学	平成27年4月～ 平成28年3月	平成27年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4点尺度で実施した。 ・子どもと環境：3.68 ・生活の理解：3.06 ・キャリアデザインⅠ：3.51 ・キャリアデザインⅡ：3.44 ・キャリアディベロップメントⅠ：3.4 ・キャリアディベロップメントⅡ：3.37 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(7)平成28年度授業評価アンケートの実施 科目名：子どもと環境（前期） 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期） 科目名:キャリアディベロップメントⅠ(前期) 科目名:キャリアディベロップメントⅡ(後期) 科目名：キャリアスキルアップⅠ（前期） 科目名：キャリアスキルアップⅡ（後期） 大学名：奈良学園大学	平成28年4月～ 平成29年3月	平成28年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4点尺度で実施した。 ・子どもと環境：3.45 ・キャリアデザインⅠ：3.55 ・キャリアデザインⅡ：3.59 ・キャリアディベロップメントⅠ：3.46 ・キャリアディベロップメントⅡ：3.09 ・キャリアスキルアップⅠ：3.55 ・キャリアスキルアップⅡ：2.95 いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(8)平成28年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成28年10月～ 平成29年3月	平成28年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4点尺度であり、回収率は90.9%（履修者数：55人、解答者数：50人）である。 ・学習効果を上げるための工夫・準備：3.36 （全体平均：3.28） ・担当教員の話し方が明瞭かどうか：3.66 （全体平均：3.31） ・学生の理解や反応を見ながら授業していたか： 3.38（全体平均：3.29） ・授業の満足度：3.30（全体平均：3.32） ・新しい知識・考え方・教育実践力が得られたか： 3.44（全体平均：3.36） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：3.20 （全体平均：3.27）
(9)平成29年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成29年10月～ 平成30年3月	平成29年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4点尺度であり、回収率は88.9%（履修者数：54人、解答者数：48人）である。 ・学習効果を上げるための工夫・準備：3.35 （全体平均：3.33） ・担当教員は学生が主体的かつ意欲的に学べるような授業づくりを行っていたか：3.38 （全体平均：3.31） ・新しい知識・考え方が得られたか：3.48 （全体平均：3.49） ・教育実践力やそれにつながる力を得られたか： 3.23（全体平均：3.33） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：2.96 （全体平均：3.21） ・授業の満足度：3.27（全体平均：3.38）
(10)平成29年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザインⅠ（前期） 科目名：キャリアデザインⅡ（後期）	平成29年4月～ 平成30年3月	平成29年度の学生による授業評価アンケートの総合的満足度の結果は、以下の通りである。総合的満足度は、4点尺度で実施した。

科目名:キャリアディベロップメントⅠ(前期) 科目名:キャリアディベロップメントⅡ(後期) 科目名：キャリアスキルアップⅠ（前期） 科目名：キャリアスキルアップⅡ（後期） 大学名：奈良学園大学		・キャリアデザインⅠ：3.05（全体：3.38） ・キャリアデザインⅡ：3.44（全体：3.41） ・キャリアディベロップメントⅠ：3.54（全体：3.38） ・キャリアディベロップメントⅡ：3.52（全体：3.41） ・キャリアスキルアップⅠ：3.35（全体：3.38） ・キャリアスキルアップⅡ：3.47（全体：3.41） いずれの授業においても、学生の質問に回答する時間を必ず取り入れ、授業終了後には振り返りシートを書かせて授業の理解度を確認した。そのことが、学生による授業の高評価へとつながった。
(11)平成30年度授業評価アンケートの実施 科目名：キャリアデザイン 大学名：奈良教育大学	平成30年10月～ 平成31年3月	平成30年度の学生による授業評価アンケートの結果は、以下の通りである。アンケートは、4点尺度であり、回収率は67.3%（履修者数：98人、解答者数：66人）である。 ・学習効果を上げるための準備・工夫：3.62 （全体平均：3.33） ・担当教員は学生が主体的かつ意欲的に学べるような授業づくりを行っていたか：3.67 （全体平均：3.32） ・新しい知識・考え方が得られたか：3.65 （全体平均：3.47） ・教育実践力やそれにつながる力を得られたか： 3.47（全体平均：3.33） ・到達目標がどの程度、身に付いたか：3.30 （全体平均：3.22） ・授業の満足度：3.68（全体平均：3.38）
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)兵庫県芦屋市立西山幼稚園・園内研究会講師	平成24年1月	兵庫県芦屋市立西山幼稚園にて園内研究会の指導助言として携わる。研究テーマは、「幼児同士の育ち合い学び合いを育む」である。年長2クラス・年少2クラスの公開保育（劇遊び）を参観した。日常生活の中で取り上げた絵本への興味関心を深めるために、絵本を題材とした劇遊びを保育に取り入れた。幼児の発達に合わせたふさわしい活動を展開するためには、教員がどのような環境構成をする必要があるかについて,教員8人を対象に指導助言を行った。
(2)兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園・園内研究会講師	平成24年5月	兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園にて園内研究会の指導助言として携わる。研究テーマは、「新学期の保育の指導計画や教師の援助の在り方について学び、教師の資質向上を図る」である。年長1クラス・年中2クラスの保育を参観した。異年齢児の活動において、遊びを工夫して創りだすことや他の幼児の考えにふれ、新しい考えを生み出す喜びや楽しさを味わえるような援助について、教員6人を対象に指導助言を行った。
(3)亀岡市議会「緑風会」会派視察における講師	平成24年10月	特定非営利団体岡山市子どもセンターは、岡山市内にある岡山国際児童年記念公園こどもの森の敷地を 2008年から借りて、「冒険遊び場：おかやまプレーパーク」という子どものための遊びの広場の運営をしている。「おかやまプレーパーク」の運営および取り組みについて、①子どもの遊び場を確保する必要性、②ＮＰＯの取り組みと現状（ボランティアマネジメント）という２つの視点を用いて講演をした。おかやまプレーパークの運営は、市民ボランティアが中心となって活動を行っており、ボランティアマネジメントの重要性を言及した。
(4)兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園・園内研究会講師	平成24年11月	兵庫県芦屋市立朝日ケ丘幼稚園にて園内研究会の助言指導として携わる。研究テーマは、「2 学期の幼児の発達に合った援助のあり方について学び、教師の資質向上を図る」である。年長1クラス・年中2クラスの保育を参観した。運動会を終え、クラスとしての集団のまとまりがより一層感じられた。日常の保育における集団遊びについて、体験をより確かなものにするために振り返りの時間を設けること、集団遊びをイベントのように取り扱うのではなく、継続的・組織的に行い、積み上げていくことの重要性について、教員6人を対象に指導助言を行った。

(5)岡山市子どもセンター・研究協力者	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	岡山市子どもセンターは、平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月まで、岡山市庭園都市推進課主催のＥＳＤプロジェクトから助成金（年間 200 万円）を獲得し、都市公園での遊び空間の創造をテーマとして、子どもの遊びの広場を展開した。筆者は、研究協力者として、公園を活用してできる遊びを提案したり、保護者アンケートを通して満足度を測定し、報告書にまとめる役割をになった。平成 24 年度は、5 ヶ所でプロジェクトを実施し、平成 25 年度は、6 ヶ所で行った。
(6)岡山市中央中学校・出張講義講師	平成 25 年 3 月	岡山市立岡山中央中学校の１年生に対して総合的な学習の時間を用いて、出長講義の講師として携わる。講演テーマは、「将来を考える３つのポイント」である。中学１年生は、普通学級 88 名、特別支援学級 10 名を対象として行った。何のために働くのかについて考察した後、20 問表や価値観シートを用いて自己理解を深めた。また、生徒による職業調べから、それらの職業に就くには、具体的にどのような学習をする必要があるかを解説した。最後に、学校卒業後の職業生活におけるライフイベント（結婚、出産、年収、転職等）の平均値をもとに解説した。
(7)一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会・出張講義講師	平成 26 年 8 月	gid.jp 関西交流会において、「就職に関する「ストレス」を考える～ストレスチェックを通して、自分のストレス耐性を知ろう～」をテーマとし、90 分間の講義を行った。講義では、ストレス耐性チェックを通して、自分が持つストレスを客観視し、ストレス解消法ではなくストレスと上手に付き合う方法の提案をした。また、性同一性障害の方が持つ就職活動・職場の人間関係での悩みについて事例を取り上げ、自己開示を含めたグループワークも実施した。実施場所は、大淀コミュニティセンター（大阪）で行い、受講生は 18 名であった。
(8)特定非営利活動法人男女共同参画ネット尼崎（尼崎市女性・勤労婦人センター）・出張講義講師	平成 27 年 3 月	2015 あまがさき女性フェスティバル記念講演会において、「カナダのコミュニティハウスに学ぶ　支えあいのまちづくり」をテーマとし、90 分間の講演を行った。多文化共生の国カナダには、子どもから高齢者まで、さまざまな人々が利用するコミュニティハウスがある。そのコミュニティハウスの成り立ちとそこで実施されているサービスとプログラムについて紹介した。また、カナダのコミュニティハウスから学べることとして、コミュニティオーガニゼーションの概念を「人、もの、こと、ところ」、そして「時間の共有」という具体的内容に置き換えて述べた。社会保障の制度化が進む中で、福祉行政の専門分化が起こる過程についても解説した。実施場所は、尼崎市女性センター・トレピエで行い、受講者は 40 名であった。受講者満足度は 100%であった。2014 年度尼崎市立女性・勤労婦人センター事業報告書：p.26
(9)一般社団法人 gid.jp 日本性同一性障害と共に生きる人々の会・出張講義講師	平成 27 年 6 月	gid.jp 関西交流会において、「自分自身について知る～自己概念の揺らぎを体験しよう～」をテーマとし、90 分間の講義を行った。講義では Twenty statements test=T.S.T/Who am I 法の心理検査も用いて、自己概念とは何かを解説した。また、「私の価値観を知ろう」をテーマとし、価値観の書かれた 15 枚のカードを、自分が大切にしたいと思う順番に並べてもらい、ペアワークを実施した。価値観カードのワークから、自己概念（自己が持つ自分のイメージ）がいかに揺らぎやすいか体験をしてもらった。実施場所はパシフィックマークス西梅田 14Ｆガクトホール（大阪）で行い、受講生は 20 名であった。
(10)2015 年度奈良学園大学公開講座「王寺町り～べるカレッジ」・出張講義講師	平成 27 年 7 月	奈良学園大学公開講座において、「子どもに求められる職業教育とは―キャリア教育の視点から―」をテーマとし、90 分間の講演を行った。講演では、キャリア教育が生まれた背景を解説し、キャリア教育が開発すべき社会生活を営む上で必要となる能力や態度について述べた。また、小学校から高等学校までのキャリア教育の取り組み事例を紹介し、能力開発を行う上で、最も重視すべき事項として、自己肯定感を育む必要性についても述べた。質疑応答の時間も 20 分程度取り、対話形式で講

		演を行い、大変好評であった。受講生は 18 名であった。
(11)平成 27 年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	平成 28 年 1 月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（32 名）と保護者（33 名）65 名を対象として、科学遊び・学びの広場プロジェクト「ピンホールカメラ作り～小さな穴から見える不思議な世界～」を実施した。ピンホールカメラ作りを通して、光の仕組みについて解説をした。低学年児童には解説は難しかったが、ピンホールカメラを覗くと、映し出される映像が逆転しているということに対し、不思議さと驚きを感じ、その仕組みがどのようになっているのか関心が高まった。実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は 100%であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。
(12) 登美ヶ丘北中学校区地域教育協議会第 3 回 スクールコーディネーター研修・出張講義講師	平成 28 年 9 月	「海外の地域コミュニティにおける活動～カナダ・バンクーバー市ネイバーフッドハウスの事例～～」をテーマとして、2015～2016 年度の科学技術研究費（若手研究Ｂ）の成果報告を兼ねて実施した。参加者は 7 名であり、現在、地域活性化事業を行っている者を対象として行った。カナダにおける移民支援組織の成り立ちやセツルメント運動における生活を包括的に支援する仕組み、ボランティアコーディネートの手法、コミュニティディベロップメントの概念についての解説を行った。多数の質問を受け、日本とカナダの文化的背景の差異はあるものの、地域における福祉活動の統合化には聴講者が共感し、高評価をいただいた。
(13)平成 28 年度三郷町立西部保育園第 3 回新任保育士研修会・出張講義講師	平成 28 年 12 月	三郷町立西部保育園にて新任保育士研修の講師として携わる。「環境を通した教育・保育のあり方を学ぶ～保育の「質」を考える～」をテーマとし、①保育の質、質の高い保育とは、②保育環境評価スケールの使用方法の解説および実践を実施した。昨今、教育経済学の視点から、幼児教育の経済学や学力の経済学という書籍が発刊され、就学前教育の充実が強力な公共投資となりうることに注目が集まっている。幼児教育がもたらす効果（自己統制力、向社会的行動、等）について、海外の調査研究の結果を事例として取り上げ、解説した。また、保育環境評価スケールを実践し、保育環境の見直しや保育活動の振り返りを行った。受講生は 3 名であった。
(14) 平成 28 年度三郷町子ども人権学習支援事業・ 指導者	平成 29 年 1 月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（28 名）と保護者（30 名）58 名を対象として、科学遊び・学びの広場プロジェクト「色が変わる、まほうの水で描く世界」を実施した。レモン水（酸性）、せっけん水（弱アルカリ性）、石灰水（アルカリ性）を用意し、紫キャベツで染めた紙（リトマス紙）に模様を描き、化学反応によって紙の色が変わる様子を、酸性・アルカリ性の解説をした。学生主導で実施を行い、実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は 100%であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。また、こうしたプロジェクトの実施により、学生の事業運営能力・スキルも格段に上がったと言える。
(15)平成 28 年度三郷町立西部保育園第 4 回新任保育士研修会・出張講義講師	平成 29 年 3 月	三郷町立西部保育園にて新任保育士研修の講師として携わる。「保育環境評価スケールの活用を振り返って」をテーマとし、3、4、5 歳児のクラス担任に保育環境評価スケールの結果を提示しながら、担任（保育経験 10 年以上）と副担任（保育経験 1 年）の結果を共有した。結果の共有では、保育経験 10 年以上の保育者は、自身の保育活動について個別具体的に思い出しながら、保育内容の質に関する発言が多くみられた。一方で、保育経験 1 年の新任保育者は、クラス全体を考えると概ね環境が整っていると回答し、全体的に高い評価をつけることがわかった。これらの結果を話し合うことで、10 年以上の保育経験を有する保育者は、新任保育者の視点を学ぶことができ、今後の指導に役立てることができると述べていた。新任保育者は、10 年以上の保育経験を有する保育者の発言を通して、保育の質について、より深く考えることができたと発言をした。園長からは、評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケ

		ーションを図ることで、保育の質の向上につながると述べていた。受講生は6名であった。
(16)第 14 回「産学連携のための経営者セミナー」・　出張講義講師	平成 29 年 3 月	奈良県大学連合が主催する産学連携のための経営者セミナーにおいて、「学生の主体性を育むキャリア教育の在り方とは」をテーマとして講演を行った。大学生活で身に付けておきたい能力（学士力、社会人基礎力、ジェネリックスキル、21 世紀型スキル）の解説をした後、本学のキャリア教育・キャリア支援を紹介した。また、2 名の学生から、インターンシップ成果報告会の発表もしてもらい、場内からは、学生が堂々と発表する姿勢を大変評価していただいた。受講生は 23 名であった。
(17)広陵町幼稚園保育園職員研修会・出張講義講師	平成 29 年 3 月	広陵町幼稚園・保育園職員研修会の講師として、「保育の質を考える～保育環境評価スケールの活用を通して～」をテーマとして講演を行った。保育の質の定義を考えると共に、保育環境評価スケールを用いて、客観的に自身の保育活動を振り返る必要性について述べた。聴講者の中で、保育環境評価スケールの活用をしたことがある者は 1 名（大学時代に実施した）であり、初めて活用した者ばかりであった。新任保育者よりも保育経験が 10 年を超える者は、他園見学や研修の機会を積んできていることもあり、他園と自園を比較して評価を付けることから、自己評価が厳しくなる傾向があると伝えると、納得できると聴講生からの感想があった。また、適宜、客観的な評価指標を用いて保育活動を点検する機会を設けることには意義があるとの感想をいただいた。受講生は、45 名であった。
(18)　平成 29 年度北葛城郡内幼稚園教育研究会（総会）・出張講義講師	平成 29 年 4 月	北葛城郡幼稚園教育研究会の講師として、「保育の質を考える」をテーマとして講演を行った。保育の質を考えるために、幼児期における教育活動が、向社会行動や非認知能力の向上に影響を及ぼすという諸外国の研究結果を事例として取り上げた。 また、幼稚園内の保育・教育環境を評価するためのツールとして、保育環境評価スケールを紹介し、先生方に保育・教育環境のチェックおよび振り返りをしていただいた。聴講生からは、「幼児教育の重要性を改めて認識することができ、仕事へのやりがいを更に感じることができた」や「客観的指標を用いて自身の保育・教育を確認したことがなかったので、良い機会となった」と感想をいただいた。受講者は、90 名であった。
(19)　平成 29 年度第 1 回北葛城郡幼稚園教育研究会・園内研究会講師	平成 29 年 5 月	第 1 回北葛城郡幼稚園教育研究会の園内研究会講師として、①幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について、②特別な支援を必要とする幼児の状態等に応じた計画的、組織的な指導の在り方についてをテーマとし、指導助言を行った。まず、各園の取り組みについて、実践報告をしていただいた。次に、講話者から、カリキュラム・マネジメントの概念について整理し、特別な支援を要する幼児の実態を把握するためのチェックリスト解説を行った。出席者は、12 名であった。（11 園の参加）
(20)　第 1 回吉野青年会議所事業合同会議・講師	平成 29 年 5 月	第 1 回吉野青年会議所事業合同会議の講師として、「学生を主体とした事業運営方法について～他者理解を深める技法とは～」をテーマとし、講義を行った。吉野青年会議所事業は、吉野広域に住む小学生を対象とした課外活動を実施し、青少年健全育成に取り組んでいる。大学生が主体となって事業を実施するため、事業目的を共有し、事業立案方法を提示した。また、参加者がコミュニケーションを円滑に行えるようにするために、他者理解を深める 2 つのワークショップを開催した。今回は、奈良学園大学の学生 17 名、奈良女子大学の学生 2 名、吉野青年会議所から 5 名が参加をした。

(21)　平成 29 年度三郷町立西部保育園第 1 回新任保育士研修会・出張講義講師	平成 29 年 5 月	三郷町立西部保育園第 1 回新任保育士研修会の講師として、「社会人に求められるコミュニケーションスキルとは」をテーマとして、講義を行った。研修では、第一印象の重要性、気持ちの良い挨拶の方法、身だしなみ、言葉遣いの 4 点を重点指導項目として、実施した。また、3 月まで学生であった新任保育士の方々に、学生と社会人の違いについて考えてもらい、社会人としての自覚を再認識していただいた。受講生からは、「姿勢等、指摘されるまで意識していなかった」や「保護者様の対応に役立てます」といった声をいただいた。受講生は、5 名であった。
(22)　平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 5 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9 : 00-11 : 30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13 : 00-16 : 30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。ＫＪ法を用い、①子どもの様子、②環境構成、③教師の援助の 3 つの観点から、各クラスの担当教員に本日の保育活動を振り返っていただいた。結果として、自然環境に関する項目の出現が見られなかったため、自然環境における環境構成の再点検と栽培活動に関わる子どもの様子を取り上げる必要性が明らかとなった。また、本園に関する重点項目として、①異年齢児交流、②遊び空間の改善・集中できる遊び作りの工夫、③遊び内容の充実、④教材の確認が取り上げられた。教員からは、「自然環境の項目がないことに対し、当たり前のことで、見過ごしていたと思う」や遊び空間の改善に関する意見があった。今回は、教員 9 名の参加であった。
(23)　平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 9 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9 : 00-11 : 30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13 : 00-16 : 30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(24)　平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 10 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9 : 00-11 : 30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13 : 00-16 : 30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(25)　平成 29 年度第 2 回北葛城郡幼稚園教育研究会・園内研究会講師	平成 29 年 10 月	北葛城郡幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9 : 00-11 : 30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13 : 00-16 : 30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。

(26)　平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 11 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(27)　平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園内研修会講師	平成 29 年 11 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、指導助言を行った。9：00-11：30 まで指導計画に則った保育活動を見せていただき、13：00-16：30 まで、指導を行った。本園では、今年度の研究テーマとして、「幼稚園教育要領の理念を実現するための、各幼稚園における教育課程の編成、実現、評価、改善の一連のカリキュラム・マネジメントの適切な実施について」を掲げており、そのことを念頭におきながら、指導をした。今回は、平成 29 年度幼稚園教育要領における資質・能力の 3 本柱に基づいた教師の援助について、指導計画書の書き方を指導した。教員 9 名の参加であった。
(28)　平成 29 年度広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園園内研修会・園長研修会講師	平成 30 年 1 月	広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園にて、広陵町の幼稚園 5 ヶ園の園長先生を対象とし、幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの進め方について指導助言を行った。また、園内目標の立て方についてワークショップを実施した。園長 5 名、教員 5 名の参加であった。
(29)　平成 29 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 2 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの捉え方」をテーマとし、広陵町立真美ヶ丘第一小学校附属幼稚園で実施した 1 年間のカリキュラム・マネジメントの実践を交えながら、講義をした。講義後、西部保育園のＰＤＣＡサイクルの構築について、参加保育士と園長先生を交え、話し合った。保育士 8 名の参加であった。
(30)　平成 29 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 3 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育環境評価スケールの活用を振り返って」をテーマに指導助言を行った。12 月に実施した保育環境評価スケールの結果をもとに、3~5 歳のクラスの担任と副担任に示し、評価結果の差について、話し合った。評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケーションを図ることで、保育の質の向上につながる。保育士 6 名の参加であった。
(31)　平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 5 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育士として求められるコミュニケーションスキルとは」をテーマに講演を行った。新任保育士を対象としており、社会人としてのマナーや保育園ならではのトラブル事例などをもとに相手に伝わるコミュニケーションの取り方について講義をした。計 10 名の参加であった。
(32)　平成 30 年度広陵町立真美ケ丘第一小学校附属幼稚園・園内研修会	平成 30 年 6 月	広陵町立真美ケ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、「保育指導助言および特別支援教育について」をテーマに、指導助言を行った。特別支援については、加配職員向けに具体的事例を取り上げながら、指導方法について助言を行った。教員 8 名の参加であった。
(33)　平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 7 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「チームビルディング研修」をテーマに講演を行った。全教職員 20 名を対象とし、ＮＡＳＡゲームを用いて、合意形成の手法を講義した。また、話し合いが有益であることを数値化して示したことにより、参加者の納得感を得られた。
(34)　平成 30 年度広陵町立真美ケ丘第一小学校附属幼稚園・園内研修会	平成 30 年 10 月	広陵町立真美ケ丘第一小学校附属幼稚園の園内研修会講師として、「保育指導助言および特別支援教育について」をテーマに、指導助言を行った。指導案の書き方について指導をした他、特別支援については、加配職員

		向けに具体的事例を取り上げながら、指導方法について助言を行った。教員 8 名の参加であった。
(35) 平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 30 年 12 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育のプロセスの質評価スケールの活用について」をテーマに指導助言を行った。0~5 歳のクラスの担任と副担任を対象とし、評価スケールを用いて、各保育士に自身の日々の保育活動を振り返ってもらった。保育士 15 名の参加であった。
(36) 平成 30 年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	平成 31 年 3 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育のプロセスの質評価スケールの結果を振り返って」をテーマに指導助言を行った。12 月に実施した保育環境評価スケールの結果をもとに、3~5 歳のクラスの担任と副担任に示し、評価結果の差について、話し合った。評価スケールを用いながら、具体的に保育者同士がコミュニケーションを図ることで、保育の質の向上につながる。保育士 15 名の参加であった。
(37) 令和元年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	令和元年 5 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「保育記録の種類と書き方～記録を書くための視点とは～」をテーマに指導助言を行った。週案をもとにした記録やエピソード記録、個人票記録、子どものつぶやき、ヒヤリハット記録等の記録の種類と目的を提示した他、記録を書くための 5 つの視点について講義をした。実際に今日の午前中の保育活動におけるエピソード記録を保育士に書いてもらい、指導をした。保育士 7 名の参加であった。
(38) 令和元年度三郷町立西部保育園・保育士園内研修会講師	令和元年 11 月	三郷町立西部保育園の保育士研修会講師として、「ビデオカンファレンス①子どもの遊びの意味を考える」をテーマに指導助言を行った。午前中に子どもの遊ぶ様子や保育活動を撮影し、午後から映像をもとに、保育活動や環境構成の改善について考察した。保育士 7 名の参加であった。
(39) 令和元年度三郷町子ども人権学習支援事業・指導者	令和 2 年 2 月	三郷町子ども人権学習支援事業において、三郷北小学校「つながり学級」の小学生（28 名）と保護者（21 名）49 名を対象として、科学遊び・学びの広場プロジェクト「地層のふしぎを探ってみよう-たからさがし」を実施した。京都大学大学院理学研究科地球惑星科学専攻地質学鉱物学教室技術職員の高屋真樹先生を招聘し、鉱物標本等の解説をしていただいた。実施後の保護者向けアンケートでは、満足度は 100%であり、次回も参加をしたいとの高評価を受けた。また、プロジェクトの継続実施により、学生の事業運営能力・スキルも格段に上がったと言える。
5 その他 (1)NPO 法人ウエルス会報誌 2012 年 夏号 「園庭の芝生化事業の推進と幼少期における身体機能の形成について」	平成 24 年 6 月	教育現場における園庭・校庭の芝生化事業は、1970 年頃から始まり、現在では、研究機関や自治体、ＮＰＯ法人等による芝生化の実践や調査がされている。本会報誌では、調査研究の概要や園庭や校庭の芝生化が子ども達にもたらす 4 つの教育効果（外遊びの増加、情操の安定、芝生の弾力性がスポーツ活動に安全性と多様性をもたらすこと、環境教育の生きた教材として活用できること）を言及した。 （科目担当実績）子どもと環境

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概　　要
1　資格、免許 (1)幼稚園教諭二種免許状取得	平成 11 年 3 月	免許状番号　平 10 幼二め　第 804 号（京都府教育委員会）
(2)プロジェクトワイルドエデュケーター資格取得	平成 18 年 7 月	財団法人公園緑地管理財団：資格番号なし
(3)保育：子育てアドバイザー（初級）	平成 21 年 4 月	特定非営利法人保育：子育てアドバイザー協会： 認定番号　第 10001024 号
(4)修士（都市政策）	平成 23 年 3 月	大阪市立大学大学院創造都市研究科都市政策専攻（都市政策修士 第 730 号）「修士論文題名：現代的ヒツルメント「ネイバーフッドハウス」の社会的意義～ゴードンネイバーフッドハウスの取り組みを めぐって～」
(5)小学校教諭二種免許状取得	平成 23 年 7 月	免許状番号　平二三小二第六号（京都府教育委員会）
(6)生涯学習コーディネーター資格取得	平成 23 年 10 月	財団法人社会通信教育協会：第 31110009 号
(7)生涯学習 1 級インストラクター資格取得	平成 23 年 10 月	財団法人社会通信教育協会：第 11110009 号
(8)メンタルケアカウンセラー資格取得	平成 25 年 7 月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学術学会：資格第 134014563 号
(9)キャリアカウンセラー資格取得	平成 25 年 9 月	日本キャリア教育学会：認定登録第 214 号
(10)メンタルケア心理士資格取得	平成 25 年 10 月	財団法人生涯学習開発財団/メンタルケア学術学会：資格第 134014563 号
(11)准ケアストレスカウンセラー資格取得	平成 25 年 11 月	財団法人職業技能振興会：ＪＣ-080018
(12)ガイダンスカウンセラー資格取得	平成 26 年 12 月	スクールカウンセリング推進協議会 認定番号：第 14030010 号
(13)修士（学校教育学）	平成 28 年 3 月	兵庫教育大学大学院学校教育研究科人間発達教育専攻（学校教育学修士 第 8401 号）「修士論文題目：多世代交流としての子育て支援に関する研究―カナダ・ネイバーフッドハウスの事例から―」
(14)プロジェクトワイルドシニアエデュケーター資格取得	令和 2 年 1 月	一般財団法人公園財団：資格番号なし
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)京都光華女子大学短期大学部こども保育学科こども保育学科共同研究室内実習・就職支援室担当	平成 18 年 3 月～ 平成 23 年 3 月 （5 年間）	実習・就職支援室の主担当として、保育職を志す学生の実習支援と就職支援に携わる。実習支援では、教育実習事前事後指導の教員補助として園内における環境構成の指導や指導案の指導の他、実習園との連携協力を構築して実習後の学生へのフィードバック体制を確立した。就職支援では、京都市内の園を中心として毎年 2 月に 30～40 園を訪問し、保育現場が求める人物像の聞き取り調査を実施した。その調査結果を活かして、就職支援プログラムの構築に役立てた。
(2)特定非営利法人岡山市子どもセンター おかやまプレーパーク運営委員	平成 24 年 3 月～ 現在に至る	特定非営利法人岡山市子どもセンター（岡山市北区久米 348）の事業の一つである「おかやまプレーパーク」の運営委員に着任し、月に 2 度、岡山国際児童年記念公園こどもの森へ出向いて活動を行なっている。『自分の責任で自由に遊ぶ』ということをモットーとし、子どもがのびのびと思いっきり遊べるように敷地内の禁止事項（例えば、木登り禁止等）をなくし、やりたい遊びを実現できる遊び場の確保に力を注いでいる。年間事業計画の見直しや助成金の申請、行政と交渉をする際の助言役を務めている。

(3)特定非営利活動法人ウエルス　理事	平成 24 年 5 月～ 平成 27 年 3 月	特定非営利法人ウエルス（京都府亀岡市）の顧問に着任し、幼稚園や保育所における自然環境としての園庭の芝生緑地化推進活動の助言を行っている。園庭の芝生化により、子ども達の遊び方の変化や外遊びの増加、それに伴う健全な肉体形成等、芝生化によってどのような教育的効果があるか、共同研究 を行った。（住所：法人事務所:〒621-0805　京都府亀岡市安町大池 11　日進ビル 101）
(4)陶芸ギャラリー吾子　代表	平成 25 年 10 月～ 現在に至る	京都市東山区泉涌寺地区は、陶芸職人の町として知られているが、職人の高齢化が深刻な問題となっており、その地に根付いた文化が途絶えようとしている。そのため、地域振興の一環として、平成 25 年 10 月よりギャラリーの開催している。展示作品は、陶器に関わらず絵画なども展示している。地域のお祭りがある際には、無料で開放し、音楽会なども行っている。（京都市東山区泉涌寺東林町 17-29）
(5)広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会・ひと部門　部会長	平成 27 年 7 月～ 平成 28 年 3 月	本審議会は、まち・ひと・しごと創生法に基づく国の長期ビジョン及び総合戦略を勘案し、内閣府地方創生推進室が示す「地方人口ビジョン策定のための手引き」及び「地方版総合戦略策定の手引き」に基づき実施した。また、国の総合戦略が定める 4 つの政策分野（①地方における安定した雇用を創出する、②地方への新しい人の流れをつくる、③若い世代の結婚、出産、子育ての希望をかなえる、④時代に合った地域を創り、安心なくらしを守るとともに、地域と地域を連携する）に則り、まち部門、ひと部門、しごと部門の作業チームに分け、筆者はひと部門の部会長の任命を受け、総合戦略策定に向けた審議を実施した。
(6)広陵町幼保一体化推進会議　副会長	平成 27 年 8 月～ 平成 28 年 7 月	本会議では、「町立幼稚園・保育園における幼児教育・保育のあり方等について」を主題とし、5 回にわたって審議を行った。審議事項は、①幼稚園・保育園におけるより良い教育・保育の提供、②現在策定中の幼保一体化総合計画に基づいた町立幼稚園・保育園の施設整備の促進、③就学前の子どもたちへの子育て支援の充実であり、それらを答申としてまとめ、報告した。
(7)広陵北幼保連携型認定こども園設計業務公募型プロポーザル選定委員会　委員	平成 28 年 3 月～ 平成 28 年 6 月	本プロポーザルは、広陵町における幼保の一体化を進めるため、広陵北幼稚園と広陵北保育園を統合し、広陵町で初めての幼保連携型認定こども園の設計業務の委託先を選定するものである。9 社から応募があり、一次審査において 5 社を選定、2 次審査において業務委託先を決定した。平成 30 年 4 月 1 日に開園予定であり、災害時の乳幼児を対象とした福祉避難所としての機能も有する施設となる。
(8)広陵町総合戦略等検証委員会　委員	平成 28 年 7 月～ 平成 29 年 3 月	平成 27 年 7 月～平成 28 年 3 月までに実施した広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会において策定した事業のうち、先行で実施している 8 事業に対して、その実施状況および事業の有効性に関する審議を行った。
(9)出会いウィーク2017実行委員会　委員	平成 28 年 10 月～ 平成 29 年 3 月	本事業は、奈良ＮＰＯセンターが主体となり、奈良県下にて活動を実施するＮＰＯおよびボランティア団体の広報活動の一環として実施したものである。奈良学園大学ボランティアサークルも参加をし、「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」のＰＲを行った。実施日は、平成29年2月18日（土）～19日（日）であり、当日の参加団体は36団体であった。2日間の参加者総数は、800名程度であった。
(10)広陵町総合戦略等検証委員会　委員	平成 29 年 8 月～ 現在に至る	平成 27 年 7 月～平成 28 年 3 月までに実施した広陵町まち・ひと・しごと創生総合戦略審議会において策定した事業の実施状況および事業の有効性に関する審議を行っている。（平成 33 年 3 月 31 日まで）
(11)広陵町教育委員会　教育委員	令和元年 10 月～ 現在に至る	広陵町教育委員会にて教育委員に任命された。定例教育委員会への参加の他、幼稚園から中学校まで学校教育の運営に関わる各種審議を行っている。

(12)西校区認定こども園整備基本計画事業手法等検討業務委託指名型プロポーザル審査委員会 委員	令和元年 10 月～現在に至る	本プロポーザルは、広陵町における西校区認定こども園設置のための設計業務の委託先を選定するものである。業者は 1 社のみであり、選定作業を行った。
4　その他 (1)環太平洋大学キャリアセンター運営委員会 委員	平成 24 年 4 月～平成 26 年 3 月	環太平洋大学キャリアセンターは 4 つの分室（教職支援室・幼保施設分室・公務員就職支援室・企業等就職支援室）に分かれて進路支援をしている。月に 1 度キャリアセンター運営委員会を開催し、各分室との連携を図っている。また、環太平洋大学の場合、体育会に力を入れている学生も多く、4 年生の前期が終わるまで進路決定を引き延ばす学生の姿が見られ、そうした学生に対して、ゼミ担当教員も含めて支援を実施した。
(2)環太平洋大学教職課程委員会　委員	平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月	学生の介護等体験実習が円滑に運営できるように、実習の事前事後指導およびオリエンテーション、個別指導に携わる。集団指導では、介護等体験実習を終えた学生を招いてパネルディスカッションを行うと共に、実習簿やお礼状の書き方の指導を担当した。個別指導では、特別支援施設での実習生 8 名、社会福祉法人での実習生 10 名を担当した。
(3)環太平洋大学幼児教育言語力育成研究会 代表	平成 24 年 4 月～現在に至る	2008 年に改訂された学習指導要領では、「言語活動の充実」が育成すべき重要項目の第一として取り上げられた。そのことを受け、現場における言語活動の充実を特に幼児を対象として調査することを目的として岡山市立大野幼稚園や岡山市立江西幼稚園の園長先生とともに研究会を立ち上げた。幼稚園の教育現場と大学組織が協同して、幼児期における言語活動の充実に関する調査を実施している。
(4)環太平洋大学ハラスメント委員会　委員	平成 25 年 4 月～平成 26 年 3 月	本学では、アカデミック・ハラスメントやジェンダー・ハラスメント、パワーハラスメント等を総合的に取り扱う部としてハラスメント委員を設置している。今年度は、ハラスメントのない教育研究環境づくりの一環として、オープンスペースを利用して学生相談を行うことや、学生が研究室内にいる場合は、ドアを開けておくなど、誤解やトラブルを未然に防ぐ対策をとった。
(5)奈良学園大学キャリアセンター運営委員会 委員	平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良産業大学から名称変更された奈良学園大学は、2 学部 2 学科（人間教育学部・保健医療学部）が新設された。それに伴い、大学組織も改変され、平成 26 年 4 月に就職支援課からキャリアセンターへと名称変更および業務内容の変更や統合がなされた。新体制のもと、学生のキャリア形成支援体制の確立にむけた会議を重ねているところである。また、人間教育学部では、教員採用試験支援室として教職センターを設置し、運営を行っている。平成 30 年 4 月から、キャリアセンター内に教職支援室、企業・公務員支援室と分室をつくり、キャリア支援体制の強化を図った。平成 30 年 4 月から、キャリアセンター副センター長に任命され、現在に至る。
(6)奈良学園大学ボランティアサークル　顧問	平成 26 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学において、ボランティアサークルの顧問となり、学生指導をしている。平成 27・28 年度に吉野青年会議所とボランティアサークルに所属する大学生と協働で吉野広域において「小学生を対象としたキャンプ事業」を実施した。平成 27 年度から現在に至るまで、三郷町内の小学生を対象とした「科学遊び・学びの広場プロジェクト」を実施している。年間 100～150 名が参加し、三郷町からも高く評価していただいた。（平成 27 年度には、奈良県庁主催の財団法人奈良県青少年会館からの寄付金を活用した「青少年の健全育成事業」に奈良学園大学ボランティアサークルで応募し、20 万円の採択を受けた。）その他、第 14 回大和川七夕まつり（平成 29 年度）において燈花会事業を実施し、参加した学生が大和郡山市ロータリークラブから感謝状を授与された。
(7)奈良学園大学サッカー部　顧問	平成 29 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学において、サッカー部の顧問となり、学生支援をしている。平成 29 年 4 月から現在に至る。
(8)奈良学園大学評議会　評議員	平成 30 年 4 月～現在に至る	奈良学園大学評議会にて評議員として任命された。キャリアセンター報告を中心として、取り纏めをしている。平成 30 年 4 月から、現在に至る。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1『次世代の教育原理』	共著	平成24年10月	大学教育出版	2011 年から小学校・中学校・高等学校と順次完全実施される新学習指導要領の意図を汲み取りながら、教職を目指す学生に教育の基礎・基本的な知識と教養を身に付けさせるための入門書である。 A5 判　全 159 ページ 編著者：中田正浩・松田智子 共著者：中田浩司・鎌田首治朗・住本克彦・岡野聡子・久田孝 本人担当部分：第 7 章「キャリア教育とは」(pp. 102-117)を単著 本人担当部分の概要： キャリアの語源やキャリア教育が導入された背景などを概観しながら、キャリア教育で育成すべき能力を取り上げ、小学校・中学校・高等学校で取り組むべきキャリア教育の目標と内容について解説した。キャリア教育とは特別な教育活動ではなく、日常の教育活動を通して、子ども達の学ぶ態度や意欲を育てながら、児童・生徒が社会とのつながりを見出していくための教育であることを学生にわかりやすく解説している。
2『子どもと環境～身近な環境とのかかわりを深めるために～』	単著	平成25年2月	ERP ブックレット	乳幼児期は、学校の一斉授業のように知識や技能を一方的に教えられて身に付けていく時期ではなく、自分の興味や欲求に基づいた直接的・具体的な体験を通して、人格形成の基礎となる土台を作る時期である。この時期は、子ども自身が生活の中から、好奇心や探究心をもって環境にかかわることで遊びを展開し、充実感や満足感を味わうことが大切である。子どもが自発的に環境とかかわり、さまざまな体験から生きる喜びや充実感が味わうためには、子どもの遊びの質を高められるような保育者の意図的なかかわりが必要となる。本書では、子どもと自然環境、物的環境、社会環境のかかわりについて実践事例を用いて解説した。 A5 判　全 71 ページ
3『子どもの生活理解と環境づくり～幼児教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』	共著	平成25年3月	ふくろう出版	幼稚園や保育所で行われる幼児教育と小学校教育の連携をいかに図っていくかについて、幼稚園教育要領や保育所保育指針の領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」を軸として、自然環境・物的環境・社会環境の３つの視点を用いて事例を取り上げながら解説した。 A5 判　全 166 ページ 編著者：岡野聡子・筒井愛知 共著者：松田智子・吉村啓子・辻野孝・大野鈴子・金光文代・平松茂・馬場浩一郎・中道美鶴・岡田美紀・土谷長子・アンソニー・ウォルシュ 本人担当部分： 第 1 章「幼児教育から小学校教育へ」第 1 節「幼児教育と領域「環境」」(pp. 1-12) を単著、第 5 章「社会環境とのかかわり」第 3 節「異文化を理解することとは」「1. 異文化理解と異文化交流」(pp. 135-137)、「2-2) 文化の獲得」(pp. 140-141)、「2-3 持続発展教育の考え方」(pp. 141-143) を翻訳。 本人担当部分の概要： 第１章第１節では、幼児教育とは何かを解説

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				した上で、領域「環境」と小学校教育課程の「生活科」にて取り上げられるねらいと内容の中身について解説した。第5章部分は、翻訳を担当した。
4『保育者・小学校教師のための道しるべ』	共著	平成29年10月	学文社	本書は、保育士、幼稚園教諭、小学校教諭をめざす短大生、大学生、専門学校生に向けて、就職する前に身に付けてほしい保育者・教師に求められる基礎知識、専門知識、技術をまとめたものである。 B5判　全140ページ 編著者：田中卓也・松村齋・小島千恵子・志濃原亜美・木本有香 共著者：黒田政広・秀真一郎・五十嵐淳子・中田尚美・岡野聡子・岩治まとか・雲津英子・谷原舞・橋爪けい子・光井恵子・今村民子・佐々木由美子 本人担当部分： 第8章「保育実習・幼稚園教育実習・小学校教育実習で実力を発揮しよう」(1) 保育実習とはどのような実習なのか（pp.58-60)、(2) 幼稚園教育実習とはどのような実習なのか(pp.60-62)、(6) 実習日誌、指導案とはどのようなものなのか(pp.68-72)を単著。カフェタイム(コラム)②ちょっと知っておきたい保育室の飾り付け（p.23）を単著。 本人担当部分の概要： 保育所実習と幼稚園実習について、観察実習、見学実習、部分実習、一日実習をまとめ、それぞれに修得すべき事柄を解説した。また、実習日誌や指導案では、実際に活用されている書類を事例として取り上げ、書き方のポイントを解説した。カフェタイムでは、保育室内の飾りの意味について取り上げた。
5『MINERUVA はじめて学ぶ保育12 子育て支援』	共著	平成30年3月	ミネルヴァ書房	本書は、子ども・子育て支援新制度、保育教諭など最新の動向を盛り込みつつ、保育の基本を解説したものである。 B5判　全220ページ 監修：大方美香・名須川知子 編著者：伊藤篤（12巻担当） 共著者：岡野聡子・大方美香・大西晶子・寺村ゆかの・植木信一・山岡テイ・高畑芳美・吉岡洋子 本人担当部分： 第1章 子育て支援の必要性と制度(レッスン1 子育て支援が求められる社会背景①子育てをめぐる社会環境の変化、②少子化という社会現象、③子育てをめぐる諸課題（pp.2-15)、レッスン 2 子育て支援に関する制度・施策の展開①わが国における子育て支援の制度・施策の歩み、②少子化の進行と子育て支援(pp.16-29))、第4章 海外に学ぶ子育て支援（レッスン13 北米における子育て支援①多文化主義国家であるカナダ、②カナダにおける子育て家庭支援の展開、③カナダにおける子育ての現状、④子育て家庭支援の取り組みーファミリーリソースセンター、⑤子育て家庭支援の取り組みーネイバーフッドハウス、⑥子育て家庭支援の取り組みーノーバディズパーフェクトプログラム(pp.156-171)）を単著。 本人担当部分の概要： 第1章では、子育て支援が求められる社会的

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				背景について、我が国における子育てをめぐる社会環境の変化や少子化についてデータを提示し、子育てをめぐる諸課題について解説した。また、我が国におけるこれまでの子育て支援に関する制度や施策の歩みを表にしてまとめ、その成果についても言及した。第4章では、カナダにおける子育て支援について、ファミリーリソースセンター、ネイバーフッドハウスの取り組みを紹介した。子育て家庭支援の取り組みでは、ノーバディズパーフェクトプログラムについて解説した。
6『子どもの生活理解と環境づくり（改訂版）～就学前教育領域「環境」と小学校教育「生活科」から考える～』	共著	平成31年3月	ふくろう出版	2017 年に学習指導要領が改訂され、資質・能力の三つの柱と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 の姿）が明示された他、保幼小連携の強化が取り上げられた。本書では、学習指導要領改訂にともない、領域「環境」にて設置された新項目も含め、就学前教育と小学校教育の教育内容の接続に言及し、自然環境・物的環境・社会環境の３つの視点を用いて事例を取り上げながら解説を行った。 A5 判　全 206 ページ 編著者：岡野聡子 共著者：松田智子・大野鈴子・吉村啓子・筒井愛知・村田眞理子・薮田弘美・辻野孝・伊崎一夫・中道美鶴・岡田美紀・田中卓也・前川豊子・平野知見 本人担当部分： 第１章「就学前教育から小学校教育へ」第１節「就学全教育と領域「環境」」（pp.1-20）、第３章「自然環境とのかかわり」第２節 1-2）栽培植物の選定条件とは、1-3）自然環境マップづくり（pp.81-83）、第４章「物的環境とのかかわり」第１節 1.ものの性質や仕組みを知る（pp.103-104）、1-2）ものの仕組みを理解する（pp.106-108）、第 5 章「社会環境とのかかわり」第１節 1-3）生活科における「行事」のとらえ方（pp.146-147） 本人担当部分の概要： 第１章では、就学全教育と領域「環境」の概要を述べ、2017 年度の学習指導要領改訂にて取り入れられた資質・能力の三つの柱と幼児期の終わりまでに育ってほしい姿（10 の姿）、これから求められる幼児教育の在り方について解説した。また、保幼小連携の重要性から、領域「環境」と「生活科」の教育内容の接続について解説した。第３章では、自然環境のかかわりにて、園内にある栽培植物の選定条件を解説し、自然佳境マップづくりを紹介した。第４章では、物的環境とのかかわりにて、子どもがものの性質や仕組みを理解する過程について解説した。第５章では、社会環境とのかかわりにて、2017 年度の要領改訂において領域「環境」に示された行事の役割が、小学校教育「生活科」にどのように教育内容が接続されているか解説した。
7『基礎から学べる保育内容（人間関係）ワークブック』	共著	令和2年2月	あいり出版	本書は、幼稚園教諭・保育士を目指す者を対象とし、保育内容（人間関係）の基礎を解説したものである。 A4 判　全 86 ページ 編著者：田中卓也・宮内洋・藤井伊津子・中澤幸子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				共著者:伊藤恵里子・秀真一郎・木本有香・小久保圭一郎・川村高弘・橘場早苗・佐藤寛子・岡野聡子・佐々木由美子・増田吹子・内田祥子・郷家史芸・香曽我部琢・五十嵐淳子・浅見優哉 本人担当部分： 第5章「人間関係を通して育む「道徳性・規範意識の芽生え」とは」(1.乳幼児期における「道徳性・規範意識の芽生え」、2.道徳性の芽生えとは、3.規範意識の芽生えとは) (pp.33-41) 本人担当部分の概要： 現在の日本社会における子どもの育ちに関する問題点や問題が生じた社会的背景について言及するとともに、2017年に改訂された幼稚園教育要領・保育所保育指針の「道徳性・規範意識の芽生え」に関する項目のねらいと内容、内容の取扱いについて解説した。学生の理解が深まるように、道徳性や規範意識の芽生えについて、具体的事例を提示しながら解説した。また、学生がテキストに書き込めるワーク欄も作り、活用できるテキスト作りに勤めた。
8『保育者になる人のための実習ガイドブック A to Z ―実践できる！ 保育所・施設・幼稚園・認定こども園実習テキスト―』	共著	令和2年3月	萌文書林	保育所や施設、幼稚園、認定こども園での保育実習・教育実習について、実習の事前・事後で学ぶべき内容を15章に整理し、まとめている。コラムでは、実習の期間中だけでなく、現場の保育者になってからも役立つ内容としている。巻末付録には、実習の持ち物チェックリストと保育実習・教育実習で学び、現場で実際に働いている若手の保育者からのメッセージも収録した。 A4判　全178ページ 監修：名須川知子 編著者：田中卓也・松村齋・小島千恵子・岡野聡子・中澤幸子 共著者:佐藤寛子・関容子・増田吹子・山本美紀・植田恵理子・赤塚めぐみ・日隈美代子・橋爪けい子・田中路・鈴木和正・中島眞吾・橘場早苗・島田直哉・山梨有子・安氏洋子・里見達也・加藤緑・八幡眞由美 本人担当部分： 第8章「幼稚園教育実習とは」(1.幼稚園教育実習の目的と心構え、2.幼稚園における園生活の流れと実習の実際、3.年齢別のクラスの特徴と実習のポイント) (pp.80-93) 本人担当部分の概要： 幼稚園教育実習の目的や実習に出向く際の心構えについて解説した。また、幼稚園の園生活の流れを例示し、実習のポイントについて述べた他、3～5歳児の年齢別の実習のポイントを解説した。
「学術論文」 1　現代的セツルメント「ネイバーフッドハウス」の社会的意義～ゴードンネイバーフッドハウスの取り組みをめぐって～（修士論文）	単著	平成23年3月	大阪市立大学大学院	ブリティッシュ・コロンビア州にあるネイバーフッドハウス協会は、「人々の交流」を目的とし、そこで取り組まれるサービスやプログラムは、個人と個人を結びつける「ハブ」のような役割を担っている。イギリスを発祥とするセツルメント文化を受け継ぐ現在のネイバーフッドハウスの取り組みや、１つの施設において人間のライフサイクルを見越した複合的なサービス展開をしている場作りに着目し、日本の行政サービスとの違いを論じた。A4判　全48ページ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　保育士養成校における就職活動の特徴と課題～就職支援の実践から見えるもの～	共著	平成23年12月	京都光華女子大学短期大学部研究紀要 第49集(pp. 1-6)	保育者を目指して本学に来た者は、目的意識をはっきりと持って入学してくる者が多く、保育職内定率も100%である。しかし、授業や実習指導を受ける中で、保育職への不安が学生の間で広まるため、1年生の4月からキャリア支援プログラムを実践した。その実践から、卒業後の支援（特に早期離職者への対応）にも言及した。 代表者：吉村啓子 共著者：岡野聡子 本人担当部分： 1年生の4月から実施したキャリア支援プログラムの企画および実施、評価を担当した。
3　非営利団体における社会サービスの提供に関する一考察～カナダのバンクーバー市におけるゴードンネイバーフッドハウスの取り組み～	単著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要 第5号(pp. 31-39)	社会事業の専門分化が進むにつれ、需要と供給をスムーズに行うために子ども・高齢者・障害者といった分野ごとの支援体制が確立されてきた。 本稿で取り上げたカナダのバンクーバーにおけるゴードンネイバーフッドハウスは、専門的な福祉ニーズの提供を事業の主軸にするのではなく、地域に住む人々を結びつける基盤（コミュニティ・ベースド）としての「交流の場」から醸成される相互扶助関係の構築に注目をした事業を展開している。その在り様をミッションステイメント・サービスとプログラム内容・運営資金・ボランティアスタッフの４つの観点から考察した。
4　環太平洋大学におけるキャリア支援体制の確立にむけて（Ⅰ）	共著	平成24年3月	環太平洋大学研究紀要 第5号（pp. 61-68）	大学のキャリア教育をめぐる昨今の動向をみると、就職に至るまでの支援過程の議論が活発であり、「キャリア形成支援」という言葉で表現されている。今後の課題は、キャリアセンターでの支援において、学生一人ひとりのキャリア形成を図ることを意識して支援を行う必要があることが明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共著者：杉田郁代 本人担当部分： 本学キャリアセンターのキャリア支援プログラムの企画および実施を行い、評価をした。
5　幼児期における「言語活動の充実」に関する研究～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	共著	平成24年12月	環太平洋大学研究紀要 第6号（pp. 1-8）	言語活動の充実に関する研究は、小学校教育における事例研究が多く、幼児期における研究は管見するあたり少ない。本研究では、幼児期における言語活動とは何かを概観し、幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され保育実践として取り組まれているか、岡山市公立幼稚園教諭を対象としてアンケート調査から考察を試みた。調査結果（有効回収率：38.7%）から、伝達力や思考力を意識した保育を行っていると回答した者の割合は6割を超えた。伝達力、思考力を意識した保育実践では、伝達力よりも思考力を意識した保育実践のあり方に戸惑いが見られた。言葉にかかわるカリキュラムを園内で作成しているケースは 32.5%、小学校「国語科」との連携を図っている園が 43.2%であった。第4章では、言語活動の充実をめぐる保育現場の戸惑い等の課題も含めて評価を行った。 代表者：岡野聡子 共著者：大野鈴子 本人担当部分： 質問紙作成、結果の分析と考察を行った。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6　幼児期における科学的思考を育む環境づくりに関する一考察	共著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第7号（pp. 97-105）	本研究は、5 歳児を対象として、池田・戸北（2004）の科学の基礎的発言の分析手続を用いて、日常生活では出会わないゾウリムシを観察させることによって、幼児期における科学的萌芽および知的好奇心を育む教育環境の整備について検討した。 第 1 章では、科学的思考の萌芽に関する先行研究を取り上げ、この研究が小学校教育課程の生活科や理科教育の分野で実施されてきたことを述べ、幼児を対象とした科学的思考の萌芽に関する研究の少なさについて言及した。第 2 章では、池田・戸北（2004）や加藤（2007. 2008. 2009）の科学的思考の萌芽の分析手法を概観し、本稿で扱う分析手法を解説した。第 4 章では、実践の分析結果を考察し、科学の基礎的な発言へと移行する可能性がある一時的な表現の発言や対象物を身体で表現しようとする姿が目立ったことや、対象者の 1 名のみが科学の基礎的な発言をしたことに対し、対象物が身近でなかったこと、そうした物事に触れる体験が少なかったことに起因するのではないかと考えられた。今後の課題として、幼児の「知的な気付き」の発言を促す環境づくりについて、教師の態度に着目をして検討を要することが明らかとなった。 代表者：筒井愛知 共著者：岡野聡子、平松茂 本人担当部分：分析手法の検討を行った。
7　体験活動と授業後の発展学習を重視した保育内容「環境」の授業展開―大学 2 年生前期授業における実践事例から―	単著	平成25年3月	環太平洋大学研究紀要第7号（pp. 29-36）	領域「環境」における授業展開では、「身近な環境とかかわる力の育成」を学生に具体的に理解させるため、講義形式の授業だけではなく、体験活動を取り入れている事例も多く見られる。本稿では、体験活動の他に授業後の発展学習課題を学生に与えることによって、領域「環境」への理解や幼児教育に関する学習意欲の向上が見られるかについて、授業評価アンケートや授業後の感想文から分析を行った。アンケート結果からは、本授業が「役立った」と回答した者は、95. 8%であった。体験活動では、実際に自然や素材と触れ合うことで、具体的に授業の趣旨を理解することができたという感想が多くみられた。発展学習では、提出された課題をまとめて授業中に配布をするなど、他者の考えに触れることができるフィードバックについて高く評価していた。授業後の感想からは、「子どもの様子やどのような遊びを取り入れるべきか自分で考えることができた」とあり、子どもの理解に対して一定の学習効果が見られた。学生自身の体験を通して、子どもが主体的に環境にかかわりたくなるような環境構成の工夫や仕組み作りのあり方を学べた点が大きかったといえる。その一方で、授業後の発展学習の交流（フィードバック）の方法が今後の課題であると思われた。
8　幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価に向けて―「聞く力」を量的に捉える試み―	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第8号（pp. 115-122）	子どもの育ちを可視化し、教育実践が効果的に行われたかを教員が振り返るためには、教育効果の測定と評価が必要である。しかし、幼児教育は、小学校以降の教科の学習と異なり、遊びを通して総合的に学習されるため、「見えない教育」と言われ、その教育効果を量的に測定したものは管見するあたり数が少ない。本調査では、京大ＮＸ5-8 を用いて、内容の理解度といった観点から、幼児の「聞く力」の測定を試みた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				調査対象者は、言葉の教育に特に力を入れているＡ園と言葉の教育以外に力を入れているＢ園の園児を対象とした。結果は、課題ごとに素点を出し、換算表に従って偏差値に変換した。言語性という項目を設け、2 要因分散分析を行った結果、Ａ園とＢ園には違いがなく、課題の主効果（F(3, 42)=4. 481, p<. 01）のみ有意であった。本調査の取組から、園の取組の違いを結果に反映しにくいなど、測定の難しさが浮き彫りになった。また今後は、聞く力だけでなく、話す力、伝え合う力の測定について考える必要がある。 代表者：岡野聡子 共著者：吉村啓子、大野鈴子 本人担当部分：第 1、2、3、5 章部分 第 1 章では、言語活動における教育効果の測定の評価の必要性と測定方法における先行研究を提示した。第 2 章では、調査対象園の概要をまとめ、第 3 章では、調査概要および研究手法、研究分析手法について提示した。第 5 章では、検査結果の提示および今後の課題として、聞く力だけでなく、話す力、伝え合う力の量的測定に対して言及した。
９　NIE を取り入れた教育実践研究―大学 2 年生を対象とした時事教養Ⅰの授業実践を通して―	共著	平成26年3月	環太平洋大学研究紀要第 8 号(pp. 147-154)	学生の基礎学力の向上は、本学にとっても大きな課題であり、この課題解決の一つとして、新聞の利用による教育の導入を平成 25 年 4 月からはじめた。授業は学部単位で行い、420 名が履修をした。授業内容は、山陽新聞社による講義と現在注目されている新聞記事を題材（出生前診断やユニクロ世界同一賃金、アベノミクス等）を使用した講義を実施した。また、講義内に 3 回の試験を行い、講義後には学生アンケートを実施した。試験は、難易度が同程度の試験問題を使用しが。試験結果を分析すると、分散値にそれぞれ有意差は出ていないが、1 回目と 2 回目、2 回目と 3 回目、3 回目と 1 回目の平均点の間に有意差が見られ、点数が上昇していることから、基礎学力（ここでは言語力）と教養が身に付いたということが言えると思われる。また、学生アンケートからは、これまで新聞を読まなかった学生も新聞に関心を持てるようになったことが明らかとなった。 代表者：渡邉規矩郎 共著者：仲田輝康、木戸和彦、三木澄代、 岡野聡子、正木友則 本人担当部分：第 2 章部分 第 2 章では、日本における NIE の導入の変遷にふれ、どのように大学教育において実践がされてきたか、先行研究を提示した。
１０　都市公園における子どもの遊び場環境づくりの可能性―ＮＰＯと行政の協働による「緑の遊び場(ESD)プロジェクト」を通して―	単著	平成26年10月	奈良学園大学研究紀要第 1 号(pp. 11-23)	本研究は、子どもの遊び場環境の変化にふれながら、おかやまプレーパークの積み上げてきた実践と今回のプロジェクトの事業評価・考察を行うことを目的としている。筆者は、2013 年 3 月から NPO 法人岡山市子どもセンターのプレーパーク運営委員となり、都市公園における子どもの遊び場環境作りに携わってきた。2012 年 4 月から NPO 法人岡山市子どもセンターは、岡山市庭園都市推進課と協働して「緑の遊び場 (ESD) プロジェクト」を実施する運びとなり、筆者は、プロジェクトに参加をし、2 年間に渡って記録を取りまとめてきた。実践記録を用いて、「遊び場

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				の設定と専門性の有無のマトリクス」を作成し、遊び場の設定と遊びの種類がどのような人員配置によって運営がされていたかを分析した。今回の分析結果として、緑の遊び場（ESD）プロジェクトの目的である「子どもが岡山市における中心市街地の公園の魅力を、遊びを通して発見し、原風景として子どもの記憶にとどめてもらいたいという願い」には来場者アンケートの回答も含め、十分応えられているものの、「公園内との緑とのかかわりを深めるための遊び場づくりを目的とした」では、合計53種類の遊びのうち 8 種類の設定であり、15%の実施率であったことが浮き彫りとなった。今後の改善点として取り上げるべき項目が明らかとなった。
１１　キャリア教育とキャリア支援の相互展開による実践と課題について―キャリア教育・キャリア支援における教職員連携の取り組みから―（査読有）	単著	平成26年12月	人間教育学研究第 2 号（pp. 131-138）	大学におけるキャリア教育やキャリア支援は、1997 年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。 キャリア教育は、社会的及び職業的自立を図るために必要な能力の育成を目指して、教員主導のもとにカリキュラムの構成・授業の実施がされてきた。一方のキャリア支援は、従来の就職課で実施してきた就職活動に直結する学生支援を職員が担っている。昨今では、こうしたキャリア教育とキャリア支援を全学的・体系的に見直す動きがある。すなわち、教職員が職務分掌の枠を超えて連携するということである。本稿では、Ｋ大学を事例とし、キャリア教育とキャリア支援の連携について、その実態と課題を明らかにすることを目的としている。 まず、Ｋ大学が育成する人物像について述べた後、キャリア教育とキャリア支援の全体図を提示し、その実態を俯瞰した。次に、キャリア形成科目において、キャリア支援にあたっている職員のヒアリングで得た情報等をもとに、キャリア形成科目のカリキュラムの見直しおよび改善結果を提示した。そのことで、キャリア教育内で把握できなかった個々の学生のニーズを把握することができ、キャリア支援につなぐ体制を整備することが可能となった。今後の課題は、就職活動準備は 3 年生の後期から本格的にはじまるのだが、学習意欲の低下が見られる 1,2 年生に対し、早期のポジティブ・アクションが3年生以降の進路を決める上で重要となると思われる。
１２　子育て支援の多様化に関する一考察―子育て支援施策の揺らぎを越え、「チルドレン・ファースト」の舞台へ―	共著	平成27年3月	幼年児童教育研究第 27 号兵庫教育大学幼年教育コース（pp. 115-126）	本研究は、子育て支援の変遷について国の施策を概観しつつ、その中で、子育て支援の対象者や実施運営主体が多様化していく様子を整理し、子育て支援の今後の課題について検討することを目的としている。「子育て支援」という言葉が行政の諸文書に登場してから 25 年目を迎えるが、その間、子育て支援の実施主体の多様化から、子育て支援が誰によって、どのように実施されているのかが見えにくい状況が生じているという課題があり、本稿において子育て支援の類型化を試みた。類型化では、横軸に支援の実施主体として公的主体、民間主体を取り上げ、縦軸に支援のニーズとして個別的ニーズ、社会的ニーズを取り上げて分類した。その分類に従って、子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				育て支援の具体的事例を取り上げ、今ある子育て支援の現場が持つ課題について論じた。子育て支援の変遷や事例の考察から、子育て支援は多様な実施主体の活動によって量的拡大をしてきたが、今後は子育て支援の質的保障の検討や点の支援を面の支援へとつなげ、子育て支援のネットワーク体制を確立することが求められると同時に、子どもの最善の利益を考えた「子どもの育ち」における議論の深まりの必要性が明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共著者：佐伯岳春、吉富裕子、馬場陽子 本人担当部分：第1、2、3-（1）、4章 第1章では、多様化した子育て支援を類型化し、その事例を提示することによって、今後の子育て支援の課題について考察する必要性について提示し、第2章では、日本における子育て支援の変遷を公文書や先行研究を用いて論じた。第3章（1）において、子育て支援の類型化を試みた。第 4 章では、子育て支援の量的拡大から質的保障への転換へといかにつなげるべきかを論じた。
１３　カナダ・ネイバーフッドハウスにおける世代間交流の研究 ： フロッグホロウネイバーフッドハウスにおける世代間交流プロジェクトの事例から	単著	平成27年9月	奈良学園大学研究紀要第3号(pp.9-27)	本研究は、カナダのフロッグホロウネイバーフッドハウスで 2011 年 4 月から 2014 年 3 月までに取り組まれた世代間交流プロジェクトの実態を明らかにすることを目的としている。 ネイバーフッドハウスには、日常生活に必要なサービスやプログラムが多岐に渡って展開され、多世代が集う場が形成されている。本プロジェクトは、若者と高齢者の交流の質に目を向け、異世代間の相互理解を深めるプログラムを 3 年間に渡って実施したことに意義がある。研究方法は、まず、フロッグホロウネイバーフッドハウスが発行している世代間交流プロジェクトの報告書“Generation Citizenship Seniors + Youth Toolkit”とフロッグホロウネイバーフッドハウスのホームページに掲載されている情報を手掛かりとして、世代間交流プロジェクトの概要を把握した後、ユースサービスコーディネーターA 氏と運営責任者である B 氏、参加者である高齢者の C 氏、若者の D 氏に対してインタビュー調査を実施した。 プロジェクトの主要メンバーは、18 名の若者（30 歳以下）と 6 名の高齢者（50 歳以上）の計 24 名であった。2011 年～2012 年度は、主要メンバーを対象として、①コミュニケーションスキルの獲得、②エイジズムへの理解を深める、 ③アセットマップの作成、④メンターリーダーシップ研修を実施し、2013 年度に 9 つの世代間交流プロジェクトが実施された。主要メンバーをフォーカスグループとして 2 年間という時間をかけて育成していることは、他の世代間交流プログラムには見られないことである。また、補助金終了後も 9 つのプロジェクトのうち 6 つが現在も継続して実施されている。インタビュー結果からは、若者が高齢者との関わりの中で、他者理解を深め、高齢者の持つ生活体験の知に尊敬の念を抱く様子があり、高齢者は、若者と関わりにおいて目の前にいる若者だけとの関係性を構築しようとするのではなく、常に全体に対して配慮や気配りをする姿勢が見られた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１４　カナダ・ネイバーフッドハウス研究Ⅰ―利用者とボランティアスタッフの双方向的関係性に着目して―　（査読有）	単著	平成27年12月	日本人間教育学研究第3号（pp.181-197）	本研究は、セツルメント運動を源流とするカナダ・ネイバーフッドハウスを研究対象とし、地域コミュニティにおける住民参画型の施設運営の在り方を考察することを目的としている。研究方法は、参与観察および聞き取り調査である。調査対象施設は、ゴードンネイバーフッドハウスであり、調査日時は、2010年3月1日～3月15日、2010年8月13日～9月11日、調査日時協力者は23名である。調査結果から、23名中、サービス・プログラムを利用し、ボランティア経験を有する者は11名（47.80%）であり、そのうちカナダ出身以外の者は10名（90.9%）であった。利用者からボランティアスタッフへ、ボランティアスタッフから利用者へとなる様子を、事例を通して検討した結果、利用者からボランティアスタッフとして活動を行う過程には、彼らにとって明確な活動動機があったわけではなく、そこでの活動が日常生活の一部として行われていることであり、「手助け」として捉えられていた。そして、ボランティアスタッフから利用者になる過程には、自己のニーズ充足だけでなく、利用者とのかかわりを通して、ボランティアスタッフとしての役割意識から解放される様子があることが示された。ネイバーフッドハウスには、数字として出てこない「手助け」が数多く存在し、また、それが期待されているのであり、活動を支える大きな柱となっているといえる。
１５　多世代交流としての子育て支援に関する研究―カナダ・ネイバーフッドハウスの事例から―（修士論文）	単著	平成28年3月	兵庫教育大学大学院	本研究は、カナダ・ネイバーフッドハウスを事例として、地域コミュニティを基盤とした日常生活を包括的に支援する体制や、多様な世代が集い合う場に着目し、子育て世代にとって、ネイバーフッドハウスがどのような意義と役割を果たしているかインタビュー調査から検討することを目的としている。調査結果からは、親世代における異世代との関わりは基本的にないと示されたが、親の視点から見た子ども世代における異世代との関わりにおける利点が取り上げられた。また、親世代の利用者が参画者として子育て支援の活動に携わる様子があり、支援を受けているという感覚ではなく、主体的に子育てに関わるという姿勢が見られる。日本の子育て支援の現場においても、利用者自身が子育て支援の活動に参画できるような場や枠組みを作り、利用者―ボランティア―子育て支援員の皆が水平目線でつながり合えるパートナーとしての立ち位置を手に入れることが重要なのではないかと考えられた。
１６　大学におけるキャリア教育の構造と展―本学におけるキャリア形成科目を事例として―（査読有）	単著	平成29年12月	人間教育研究誌創刊号（pp.17-38）	本稿は、キャリア教育の変遷および大学におけるキャリア教育の構造を概観し、奈良学園大学人間教育学部におけるキャリア形成科目（共通教育科目群）の展開および培う能力について論じることを目的としている。本学の場合、学生の実態から、「基礎的・汎用的能力」の育成を重視し、キャリア形成科目の構造および培う能力指標の提示をした。また、今後の方向性として、専門科目群との連携におけるキャリア教育の授業展開の可能性について論じた。
１７　アサーションスキル獲得のための教材開発―学生が作成した事例を	単著	平成30年1月	人間教育ジャーナル第1号（1）（pp.25-44）	本教材は、平成29年度奈良学園大学人間教育学部4年次後期開講科目「教職実践演習」（必修・2単位）にて活用したものである。本教材を作成

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
通して―（研究ノート）				した理由は、2点ある。1点目は、新規学卒者の就職率は年々上昇しているが、大卒者の離職率は5年続けて30%を推移しており、若年者の離職理由の上位には「人間関係がよくなかった」が挙げられていることに着目したこと、2点目は、筆者自身が学生とのかかわりを通して、学生が、自分の気持ちを口頭にて表現することに抵抗を感じていると思うことがある点である。 アサーションスキルの講義を 2 回に分けて実践したが、自分達が考えた事例を読んだ学生から、「私も、アルバイトにて、店長からシフトに入ってと何度も言われ、困った経験がある」等、各々の葛藤する場面に対し、共感する態度が見られた。葛藤場面に対し、どう対応するかを学生達が改めて問うたことにより、①自分の感情への気付きと表現方法、②他者の発言や行動の背景への気付きについて、考えるきっかけになったと思われる。
１８　幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの実践研究 1－A公立幼稚園における園内研修を手掛かりとして－（研究ノート）	単著	平成30年3月	奈良学園大学研究紀要第8号(pp. 127-141)	本稿は、筆者が平成29年4月から平成30年1月まで、「幼児期におけるカリキュラム・マネジメントの適切な運営に向けて」をテーマとし、K町立A幼稚園にて行った園内研修での取り組みの内容とその成果を提示することを目的としている。取り組み内容は、①園の教育目標の明確化、②指導計画書の検討・改善、③保育・教育実践の記録の検討・改善である。全10回の園内研修の実践から、幼児期におけるカリキュラム・マネジメントを実施する際、何から着手するか、どの項目から進めるかに戸惑いがあるという担任教諭からの意見が多数存在した。そのため、現時点において、カリキュラム・マネジメントに必要となる項目の抽出を試みた。項目数は、12 項目である。また、A 園における PDCA サイクルの思考を確立することは、次年度以降の課題となったが、カリキュラム・マネジメントに取り組むことにより、現場教員の保育実践に対する意欲が高まったという意見があった。
１９　大学における教学支援体制の運営に関する一考察―キャリア教育とキャリア支援の連携に着目してー	共著	平成30年7月	人間教育ジャーナル第1号（5）（pp. 123-141）	本稿は、大学における教学支援体制の運営について、特にキャリア教育とキャリア支援の教学支援の連携がどのように行われているかに着目し、3大学（学習院大学、文教大学、昭和女子大学）の視察を手掛かりとして考察することを目的としている。結果として、学習院大学では、教学部門と支援部門の連携体制の確立はされていなかったが、大学の教育理念や方針を取り入れたキャリアセンター事業計画があり、また、就職活動に関し、OB・OG による在学生支援体制が確立されていることが特徴であった。文教大学では、中期経営計画を立て、教学部門と経営部門がビジョンを共有し、計画→実行→評価→改善の PDCA サイクルの確立が行われていた。昭和女子大学ではキャリアデザイン委員会を設置し、全学横断型組織を確立し、教学部門と支援部門の有機的連携が確立されていた。 代表者：岡野聡子 共著者：岡村季光・ｵﾁｬﾝﾃ村井ﾛｻﾒﾙｾﾃﾞｽ 本人担当部分：第1章、第2章、第3章（3）、第4章 第 1 章では、教学支援体制の先行研究を取り上げ、第 2 章では 3 校の視察先の概要をまとめた。第3章（3）では、昭和女子大学の視察報告

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				を行った。第4章では、3校の視察から、大学運営の一環として育成したい学生像のマネジメントが行われており、組織として運営されていることが、教学支援が成功している要因であると言及した。
２０　育成したい「学生像」の明確化、能力指標構築の試みー奈良学園大学人間教育学部を事例としてー	共著	平成30年9月	人間教育ジャーナル第1号（7）（pp.185-198）	本研究は、我が国における「これから求められる力」に関する能力概念の整理をした上で、奈良学園大学人間教育学部を事例として、「育成したい学生像」の能力指標を提示することを目的としている。新学習指導要領の完全実施や大学入学共通テストの導入などにより、2020 年に向けた教育改革が粛々と進行する中、大学教育にも大きな影響があると予想される。本稿では、第1に、社会から求められる能力概念の整理と学部特性を整理し、第2に AP、CP、DP から育成したい学生像の能力項目の抽出を行い、第3に能力指標を提示した。能力指標作成にあたっては、①測定される側の発達水準を考慮すること、②人間教育のあり方や目指す方向性を能力指標に反映させること、③能力の「芽生え」（ショプラー；2007）に注目するという観点を提示した。 代表者：岡野聡子 共著者：岡村季光・伊崎一夫 本人担当部分：第1章、第4章、第5章 第1章では、諸外国の教育改革における資質・能力目標をまとめたほか、人間教育学の価値について言及した。第4章では、奈良学園大学人間教育学部を事例とし、アドミッションポリシー、カキュラムポリシー、ディプロマポリシーの3つのポリシーから、育成したい学生像の能力指標案を作成した。第5章では、能力指標の運営について言及した。
２１　ゼミナール活動における地域をテーマとした学習モデルの作成－三郷町・龍田古道を事例としてー	単著	令和元年9月	奈良学園大学研究紀要第11号(pp.1-15)	本研究は、筆者が 2016 年 10 月からはじめた地域をテーマとしたゼミナール活動を報告し、その教育実践の学習モデルの作成を目的としている。本稿では、2016～2017 年度のゼミナール活動を事例として取り上げ、学生の学びの成果に言及し、本実践から学生が身に付けられると期待する資質・能力（技術）を提示した。学生のアンケート調査および教育実践を整理した結果、身に付けると期待する資質・能力（技術）としてあげられたものは、地域理解、主体性の涵養、働きかけ力、課題発見力、傾聴力、情報収集力、情報編集力、情報発信力、研究手法の獲得であった。また、教員の教育力向上にも言及した。
２２　まちを映像保存化する意義と価値－三郷町・龍田古道を事例としてー	共著	令和2年3月	人間教育研究第3号	本研究は、映像保存のデジタル化の歩みをふまえ、三郷町にある龍田古道を事例とし、デジタルでまちを映像保存化することの意義と価値を問うことを目的としている。データ化の意義と価値は、データが劣化しないこと、一定の情報を多くの人に配付でき、広く流通できるという利点がある。今回、龍田古道のマップをもとにし、撮影から編集までの作業を学生が行った。取得したデジタルデータを VR 編集し、解説インタビューや祭りの風景などの静止画を挿入した。 代表者：富樫泰芽 共著者：田中咲希・藤田勝利・斎藤光明・ 桝井陽康・岡野聡子 本人担当部分：第3章 龍田古道の概要と事前調査および準備についてまとめた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「学会発表」 1　カナダにおけるネイバーフッドハウスの調査から学ぶもの　～日本における「子育て支援」の特徴を通して～	－	平成22年7月	大阪市立大学大学院創造都市研究科教員・院生共同研究シンポジウム（大阪市立大学大学院梅田サテライトキャンパス）	ブリティッシュ・コロンビア州バンクーバー市で行われている地域の子育て支援のフィールド調査結果も含め、日本における子育て支援の現状と課題を述べた。ネイバーフッドハウスにおける子育て支援が親の支援をより強化した内容になっており、専門の労働相談員の常駐や雇用プログラムの開催、誰もが共用で利用できるコミュニティキッチンなどの物的サービスの環境がホリスティック（包摂的）に整えられている特徴について言及した。
2　現場が求める人材像～聞き取り調査をふまえて～	－	平成22年9月	全国保育士養成協議会第 49 回研究大会,研究発表論文集（pp.174-175）（甲府冨士屋ホテル）	社会に通用する人材を育成するには、学生の就職先が求めている人材像を正確に把握し、それを踏まえた教育内容を構築することが必要である。そのため、保育現場への聞き取り調査および学生アンケート調査を実施した。保育現場が求める人物像の結果では、主体性やコミュニケーション能力を重視するといった語彙が上位に並び、ピアノや絵画制作等の保育技術に関する項目よりも多かった。学生アンケートの結果からは、ピアノや絵画制作といった保育技術の習得に重きを置いていることが確認された。今後もキャリア支援の一貫として、社会人基礎力 に示されている「人間性の育成を重視した教育」をより一層行う必要が明らかとなった。 代表者：吉村啓子 共同者：梅岡さと江、辻野孝、松井祐子、土谷長子、智原江美、高橋孝輔、下口美帆、岡野聡子 本人担当部分： 聞き取り調査の実施および分析を担当した。
3　学生の進路決定を支援する～実習・就職支援室の活動報告～	－	平成22年9月	全国保育士養成協議会第 49 回研究大会,研究発表論文集（pp.176-177）（甲府冨士屋ホテル）	幼稚園・保育士養成施設として、早期のキャリア支援の重要性について言及した。具体的には、保育現場が求める人物像の調査や保育技術の指導、年 3 回の進路調査を踏まえた個人指導などである。2 年間という短い学生生活の中で、就職活動に費やす時間を有効活用するためにも、早期のキャリア支援プログラムの構築は必要であることが確認された。 代表者：岡野聡子 共同者：吉村啓子 本人担当部分： キャリア支援プログラムの構築を担当した。
4　幼児期における言語力育成と保育者の役割	－	平成24年3月	日本教師学学会第13回研究大会,発表要旨集(pp.24-25)（早稲田大学早稲田キャンパス 8号館）	幼児教育において人的環境としての保育者の役割について提案した。環境に働きかける体験を，保育者がどのように捉え，幼児に言葉がけとして返していくかは保育の中では重要である。特に絵本や遊びを繰り返す中で幼児は多くに力を獲得していく。細切れの知識ではなくそれぞれの繋がりの中で，体験の繋がりや意味に気付いていく。この経験の積み重なりが，幼児自身の自信となり，自分を取り巻く環境政界に対しての信頼となる。そのためには，幼稚園としてどのようなカリキュラムが必要かについて，4 歳児と 5 歳児の具体てきな教育課程を示しながら提案した。備考：日本教育新聞社の平成 24 年 4 月 16 日付第 12 面にて取り挙げられた。
5　領域「環境」における授業研究～体験活動と授業後の発展学習を重視した授業の展開～	－	平成24年9月	全国保育士養成協議会第 51 回研究大会,研究発表論文集（pp.268-269）（京都文教大学・京都文教短期大学）	領域「環境」の授業では、身近な環境とかかわる力の育成を学生自身に具体的に理解させるため、講義形式の授業と体験活動を取り入れている事例が多くみられる。本講義では、体験活動を取り入れつつ、授業内で取り扱った内容への

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				理解を深めるための発展課題を授業後に学生に与えた。授業アンケートから、学生自身が体験を通して子どもが主体的に環境にかかわりたくなるような環境構成の工夫や仕組み作りを学べた点は大きかったと言える一方で、授業後の発展学習の交流の在り方の工夫が今後の課題である。 代表者：岡野聡子 共同者：松田智子 本人担当部分： 授業実践を評価し、発展課題を考察した。
6　大学生のキャリア意識とキャリア支援体制の確立に関する研究-環太平洋大学 3 年生を対象としたアンケート調査を踏まえて-	ー	平成24年10月	日本キャリア教育学会第 34 回研究大会,研究発表論文集（pp.86-87）（滋賀大学大津キャンパス）	大学時代は、学生から職業社会への移行期にあたり、自分の将来や人生を考え計画できる力を身につけることがキャリア教育の目的となる。本学では、教育課程内外に捕らわれず、教職員が一丸となってキャリア支援体制を確立しようとしている。そこで、学生のキャリア意識に関する実態を把握するとともにキャリア教育の効果測定も含め、「大学生の職業観に関するアンケート調査」を 3 年生のキャリアデザイン履修者 346 名（回収数 264 名、回収率 78.6%）に実施した。調査結果では、職業・仕事に関する情報源において、学校での授業が 84.1%と最も多く、次に先生との会話が 81.5%を占めるなど、就職先の情報源としての役割を教職員が十分に果たしていることがわかった。しかしながら、大学卒業後の進路では就職希望者が 84.5%であるにもかかわらず、将来就きたい職業の具体名の記述を求めると、未回答が 43.2%との結果であった。このことから、大学は就職を考えるための情報は与えているが、各職業の具体的なイメージ形成という点では学生に対して十分な手助けができていないのではないかと考察できる。今後は、各職業の具体像を提示することが重要であることが明らかとなった。 代表者：岡野聡子 共同者：小野憲一 本人担当部分： 調査結果の分析および考察を担当した。
7　幼児期における言語活動の充実とは～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	ー	平成25年3月	日本教師学学会第14回大会発表要旨集（pp.60-61）（秋田大学手形キャンパス）	幼稚園の教育現場において言語活動の充実がどの程度意識され、また保育実践としてどのように取り組まれているのか、伝達力や思考力の育成に関する具体的な実践事例にも着目をしながら岡山市内の公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査を通して考察することを目的としている。岡山市内にある公立幼稚園合計 68 ヶ園の 459 名の教諭（常勤・非常勤問わず）を対象、調査時期は、2012 年 9 月 11 日～9 月 22 日の 12 日間である。質問紙の有効回答数は 178 票、有効回収率は 38.7%であった。 「言葉」にかかわるカリキュムを年間指導計画・月案・週案に含めて作成をしている園や、言葉のカリキュラムを園独自で作成している園もあるなど、幼児期における言語活動の充実は着実に進んでいるともいえる。今後は、幼児教育が学校教育のはじまりとして意識される中で、小学校の教育内容との連携・接続を考えた保育実践のあり方をより一層模索する必要があるだろう。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8　生活科への興味関心を深めるための授業研究（Ⅰ）～大学2年生時の開講科目「生活の理解」のアンケート調査から～	－	平成25年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第22回全国大会兵庫大会～生活・総合の新たなる枠組みの提案　ふるさと子午線の地から世界標準を～（p.262）（兵庫県立明石高等学校）	本学では、生活科を学ぶにあたって、教材への理解や生活科の内容を学ぶために「生活の理解」を 2 年生の前期に開講し、生活科の指導法については、3年生の後期に開講をしている「生活科教育法」を受講することになる。生活科を学び始めたばかりの学生にとって、生活科に対するイメージがどのようなものであり、また、授業を受講する中で、生活科への理解がどの程度深まるかについて、量的・質的調査の両面から明らかにすることを目的としている。 第一回目のアンケート調査では、「生活科」という科目を聞いたことがあるかという問いにて、58%が「ある」と答え、42%が「ない」と答えた。また、小学校時代に「生活科」を学んだことがありますかという問いでは、61%が「ある」と答え、12%が「ない」、27%が「忘れた」と回答した。「生活の理解」に対するイメージを自由記述にて回答を求めたところ、「生活の中における必要なこと（知識・技能）を学ぶ」と 43%の学生が回答しており、生活科のキーワードともいえる「気付き」や「体験活動」といった言葉は現段階において見られなかった。また、学生の中には「生活」という言葉を聞いて、衣食住をイメージする者も多く、「家庭科との違いは？」と質問をする学生もいた。今後も調査を続け、全 15 回の授業終了後に学生の生活科に対するイメージがどのように変容したか明らかにしたい。
9　キャリア形成科目における授業改善と評価―「キャリアデザイン」における新たな取り組みの授業実践報告―	－	平成25年10月	日本キャリア教育学会第35回研究大会，研究発表論文集（pp. 64-65 ）（名古屋大学東山キャンパス）	本学の 3 年次に開講している「キャリアデザイン」（2 単位・卒業必修科目）では、進路選択に必要な知識を身に付けるためだけでなく、自己理解を深める中で自己表現力を高めることを目的としている。本発表では、平成 24 年度の授業内容本学学生を対象としたキャリア意識調査からキャリア教育における授業の在り方を再検討し、平成 25 年度の授業実践に活かしたことの事例発表を行った。
10　幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価を考える（Ⅰ）―幼児期の「聞く力」を量的に捉える試み―	－	平成26年3月	日本教師学学会第15回大会発表要旨集（pp. 80-81）（環太平洋大学）	幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価について、京大ＮＸ5-8 を用いて内容の理解度といった観点から、幼児の「聞く力」の内的要素を量的に捉える試みを発表した。今回の調査結果からは、各課題において、言葉の教育に特に力を入れているＡ園と言葉以外の教育に特に力を入れているＢ園に有意な差を見ることができなかった。今後は、言語活動の充実において、「聞く力」の測定だけでなく、「話す力」、「伝え合う力」の測定方法および評価方法についても検討する必要があると考えている。 代表者：岡野聡子 共同者：吉村啓子 本人担当部分： 調査実施、結果の考察を担当した。
11　幼児期における「言語活動の充実」に関する研究Ⅱ～岡山型一貫教育の中における岡山市立大野幼稚園の取り組み～	－	平成26年5月	日本保育学会第 67 回（近畿ブロック）発表要旨集（p.542）（大阪総合保育大学）	岡山市における言語活動の充実を軸とした幼小中連携教育の実践を取り上げ、その中における岡山市公立幼稚園の言語活動の充実あるいは言葉の教育の保育実践の取り組みにおける考察を発表した。岡山市は、平成 14 年から岡山市地域協働学校施策を始め、その中で家庭・学校園・地域社会の三者協働による教育システムの構築や幼小連携および小中一貫教育を推進してきた。また、岡山型一貫教育と名付けた教育活動は、幼児期からの学びの連続性に着目し、幼小中

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				連携教育の実践を行ってきたことが特徴であると言える。岡山市立大野幼稚園は、平成 23～25 年度まで、『園生活を楽しむための力の育成』を主題とし、副題に大野幼稚園の指導の重点である「言葉のキャッチボール（話す・聞く・伝え合う）を楽しむ幼児をめざして」を掲げ、実践研究に取り組んできた。指導上の工夫では、指導案に「話す・聞く・伝え合う」の項目を設け、教師が日々の教育・保育活動で意識できるよう配慮した。設定保育の工夫として、降園前の一日の振り返りにおいて、話し方の指導および聞き方の指導、特に話し手の内容を理解して聞いているかを確認しながら聞く力の育成を行っている。また、全教員が研究協議会に参加し、情報共有化に努めている。教師は、日々の教育・保育実践を行う中で、日々の活動が子どもの育ちにどのようにつながっていくかといった「見通しのもてる教育活動」は、教師の教育活動へのやる気や意欲を向上させる意義を含んでいる。「見通しのもてる教育活動」を実践するには、幼小中の教師が集うことのできる研究協議会等を整備することが重要である。
１２　プレーパークと行政の協働による「緑の遊び場(ESD)プロジェクト」の実践報告～岡山市街地の公園を利用した子どもの遊び場づくり～	－	平成26年9月	こども環境学会合同セミナー研究発表・活動報告梗概集第 3 号（pp. 46-47）（名古屋工業大学）	本発表は、ＮＰＯ法人岡山市子どもセンターと岡山市庭園都市推進課が協働で実施した「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012、2013」の活動内容および事業評価について振り返り、都市公園を利用した子どもの遊び場環境づくりの実践報告を行った。2012 年度は 5 箇所の公園にて子どもの遊び場を設定し、2013 年度は 7 箇所に増設した。「子どもが遊ぶ」という視点から見た各公園が持つ課題を提示し、その課題をどのように解決したか本プロジェクトの実施写真を用いて解説した。本プロジェクトの参加者は、年間 2000 名に上っており、保護者アンケートからは、「今後も是非参加したい・参加したい」と 95.2%が回答している。
１３　多世代間交流を可能とする場作り～カナダにおけるゴードンネイバーフッドハウスの事例を通して～	－	平成26年10月	日本世代間交流学会第５回全国大会要旨集（p. 72）（姫路商工会議所）	本発表は、自主企画シンポジウム 1-Aにおける「子育て支援をめぐる世代間交流―高齢者の参加を中心に―」の話題提供者として登壇した。カナダ・バンクーバー市ウエストエンド地区に位置するゴードンネイバーフッドハウスの取り組みを紹介し、多世代間交流を可能とする場作りについて考察した。ゴードンネイバーフッドハウスでは、子育て支援や高齢者支援、雇用支援等、約 30 種類のサービスやプログラムの大半を一時滞在者の留学生から現地の大学生、そしてウエストエンド地区に住むゴードンネイバーフッドハウスの利用者がボランティアスタッフとなって提供している。一つの施設内に多様なサービス提供の場を配し、ここを訪れる全ての人が「与え与えられる」といった互恵性を醸成する場の可能性について述べた。
１４　奈良学園大学におけるキャリア教育の取り組み（Ⅰ）―大学１年生を対象とした「キャリアデザインⅠ」を通して―	－	平成26年11月	日本キャリア教育学会第 36 回研究大会・研究発表論文集（pp. 73-74）（琉球大学）	奈良学園大学は、奈良産業大学から名称変更をし、従来の学部学科を一新する形で人間教育学部と保健医療学部を設置した新設大学である。筆者は、人間教育学部に属し、キャリア形成科目を中心に担当をしている。本発表では、人間教育学部における 1 年次のキャリア教育の授業実践を報告することを目的とした。人間教育学部は「教育の三つのポリシー」を掲げると同時

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				に、人間教育学部が目指す教育者像である「社会の中で一人の人間として生き抜く力となる豊かな「人間力」を基盤とする、柔軟な「教育力」と高度な「実践力」を備えた教育者」である。これらのポリシーに適う人材育成をするために、１年次では、①自己を知る、②社会を知る、③人生設計の 3 つのユニットに分けて実施した。履修者は 110 人いるため、学部教員に協力をしてもらい、10 グループに分けて活動を行った。グループ学習での学びの成果は、スピーチコンテストという形で確認をした。 １年次の学びでは、各ユニットを通して、まず自己を振り返る活動と他者を知る活動であったと言える。また、5 月に進路希望調査を実施したところ、教師のみを志望している者が 53 名（51.5%）であり、なんとなく教職を志望した学生像が浮き彫りになる結果が見えた。
１５　大学のキャリア教育における NIE 活用の展望～大学２年生を対象とした「時事教養Ⅰ・Ⅱ」の授業実践～	－	平成26年12月	日本NIE学会第11回仙台大会・発表要集録（p.40）（東北福祉大学）	大学におけるキャリア教育は、1997 年以降から本格的に推進されたインターンシップを皮切りとして、職業意識の形成を企図したキャリア関連科目の設置や学生のキャリア発達を促すためのプログラムの開発など、個々の大学の特色を活かして進められてきた。環太平洋大学では、1 年次から「社会人基礎力の育成」をテーマとしてキャリア教育に取り組んでいる。「時事教養Ⅰ・Ⅱ」は、キャリア教育の充実を目的とし、授業において試験的にＮＩＥを導入することとした。本発表では、その実践内容と成果について報告することを目的としている。ＮＩＥにて取り扱うテーマ設定および内容を構築するに際し、職業観や勤労観にふれられる内容を盛り込んだ。実践の成果では、①新聞活用を通して社会情勢に関心を持て、読書量が増えたこと（学生アンケートから）、②基礎学力の向上（内容確認テストの有意差から）、③意見の質の向上（振り返りシートから）が見られた。 代表者：岡野聡子 共同者：仲田輝康 本人担当部分： 授業実践および実践結果の考察を担当した。 備考：本発表内容は、平成 26 年 12 月 24 日の山陽新聞に掲載された。
１６　大学のキャリア教育におけるＮＩＥ活用～事例紹介～	－	平成26年12月	第１回大学ＮＩＥ研究会（キャンパスプラザ京都 6F 第 2 講習室・京都文教大学サテライト教室）	今回の発表では、基礎学力向上の課題を解決すること、キャリア教育を充実させることを目的として設置された時事教養Ⅰ・Ⅱの科目をめぐって、ＮＩＥ活用の在り方や教材の作成方法について述べた。授業実践では、実際に授業で使用した「第８回若者の離職を考える」を取り上げ、教材作成方法や受講生の感想、実施後の教員側の感想について述べた。授業実践を振り返る中で、学生に教材を与え、無理やり読ませ、考えさせ、書かせ、対話することにこだわるよりも、ある程度一方的に知識として教える場面を増やし、考える力の土台作りをするというのも一つの選択肢であると提案した。
１７　カナダ・フロッグホロウネイバーフッドハウスにおける世代間交流プロジェクトの取り組み～Generating Citizenship Seniors+Youth の実践から	－	平成27年10月	日本世代間交流学会第６回全国大会（p.51）（追手門大学大阪城スクエア）	現在では、国内外問わず、世代間交流プログラムの開発が多様な形で展開されている。本研究では、カナダのイーストバンクーバー地区に位置するフロッグホロウネイバーフッドハウスで実施された世代間交流プロジェクト（2011.4～2014.3）を対象として、その概要や取り組みを

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				明らかにすることを目的としている。本世代間交流プロジェクトの目的は、①世代間のつながりを創ること、②世代間のつながりを創るためのスキルを向上させること、③コミュニティが抱えるニーズを確認するスキルを養うこと、④コミュニティに変化を与えるプログラムを開発することの 4 点である。ネイバーフッドハウスには、日常生活に必要なサービスやプログラムが多岐に渡って提供され、日々、さまざまな人、さまざまな世代が施設を訪問する。その中で、多様な世代がそこで出会い、雑談を交わし合う光景を見かけることができるのだが、今回、施設側が世代間交流プロジェクトを実施するにあたって、「交流の質」に着目した点は大変意義深いものであったと思われる。プロジェクト参加者からは、「私たちは何年間かお互いのことを知っていたけれども、互いの人生について知ることはなかった」との意見もあり、他者理解を深めることができた結果も得られた。
１８　大学のキャリア教育における NIE 活用の展望（2）～大学 2 年生を対象とした「キャリアディベロップメントⅠ」の授業実践～	－	平成27年12月	日本NIE学会第12回奈良大会（p.37）（奈良教育大学）	本発表は、平成 25 年度から実施しているキャリア教育における NIE 活用の授業実践を報告することを目的としている。受講生は奈良学園大学人間教育学部 2 年生（100 名）を対象としている。本授業は、NIE 実践を通して、社会人としての幅広い教養を身に付け、伝達力、思考力を磨くことを目的として実施した。授業内容は、①メディアリテラシーへの理解、②課題発見（NIE 実践）、③私から発信する現代的課題の３つのユニットから成り立っている。受講前後のアンケート結果では、新聞を読むことによって、どのような能力が高まると思うかでは、受講後は、「課題発見力」が身に付くとの回答が上位に出現した。新聞を読むことを通して、論点を整理することの必要性を学生が感じたという結果を得ることができた。
１９　保育内容「環境」の教授内容におけるシラバス分析の試み～SPSS Text Analytics for Surveys を活用して～	－	平成29年3月	日本教師学学会第18回大会（pp.54-55）（早稲田大学所沢キャンパス 101 号館）	保育士および幼稚園教諭を養成する大学教育機関を対象として、保育内容「環境」の教授内容の現状を、各大学のシラバスから分析・考察することを目的としている。授業概要やシラバスの内容の問題点や課題を探ることで、現代社会の諸課題に対応した保育者となる者が学ぶべき事項を研究することには意義があると考えられる。まず、7 大学のシラバスを web 上から取得し、その傾向を分析した後、近畿圏内の 47 大学のシラバス分析を SPSS Text Analytics for Surveys を活用して試みた。授業計画の分析結果からは、自然環境に関する項目の頻度が 45%と最も多く、社会環境に関する項目の頻度が 8%と最も少なく出現した。SPSS Text Analytics for Survey を活用したシラバス分析は、これまでの研究において見られず、初めての試みであった。本研究において、活用の有用性についても示すことができたと思われる。
２０　領域「環境」における授業内容の検討―大学における領域「環境」のシラバス分析を通して―	－	平成29年5月	日本保育学会第70回大会（川崎医療福祉大学）	本発表では、大学における領域「環境」の授業内容を検討することを目的としている。平成 30 年度の幼稚園教育要領改訂に向けた文部科学省中央教育審議会幼児教育部会が取りまとめた「現行幼稚園教育要領等の成果と課題」を見ると、「(2) 幼児教育において育みたい資質・能力の整理と、小学校の各教科等との接続の在り方」の中で 10 項目（①健康な心と体、②自立心、

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				③協同性、④道徳性・規範意識の芽生え、⑤社会生活との関わり、⑥思考力の芽生え、⑦自然との関わり・生命尊重、⑧数量・図形、文字等への関心・感覚、⑨言葉による伝え合い、⑩豊かな感性と表現）の指導内容が取り上げられている。その中で、領域「環境」と深く関連がある項目は、4項目（下線部⑤⑥⑦⑧）に及ぶ。この審議内容は、今後の教授内容の在り方を左右するものであると考えられ、領域「環境」の授業内容の一層の充実が求められていると言える。本学の場合、環境構成の視点から園内を見学するという授業では、学生の関心を高めることができ、大きな成果が見られた。改善点としては、栽培・飼育活動を継続的に行う工夫および社会生活との関わりに関する内容の充実が求められると言える。
２１　カナダにおける住民参加型地域福祉の推進のための方策とその工夫～”Everything Present in the Seed の資料分析から～	－	平成29年6月	日本地域福祉学会第 31 回大会（p.168）（松山大学）	本発表は、地域福祉活動に従事するスタッフやボランティアスタッフを対象としたリーダーシップトレーニングの指南書として、カナダ・キャピラノ大学が 2013 年に発刊した（1）Everything Present in the Seed Community leadership Training と（2）Facilitator’s GUIDE を概観し、どのような要素や内容が取り上げられているか、考察することを目的としている。研究の手法は、資料分析である。まず、(1)の資料は、13 項目から成り立っており、121 頁である。1～4 章までが地域福祉活動の概要とその必要性、所属している組織がある者はその活動の紹介、インターネットの有効活用について書かれており、5～13 章までは、リーダーシップとは何かやコミュニケーションスキルの獲得、プロジェクトの立案方法やファシリテーション、企画書の書き方といった実践的な内容になっている。(2) の資料は、(1) の資料を活用する者のための副読本となっており、67 頁である。本資料の特徴は、①本資料の読み手・扱い手を「スタッフ」として想定しているだけでなく、英語があまり得意でない移民者が読むことができ、扱える内容になっている点である。リーダーシップトレーニングが幅広い対象者に拓かれ、実践されることは、ボランティア主導で地域福祉活動を実施する上で重要なことだと言える。また、本資料は、各章が 7～9 ページの構成となっており、解説部分が 2～3 ページ、残りが実践的な内容となっているため、必要な場面に応じて必要な部分を提示できる工夫がある。今後は、本資料の利用者の意見を集め、どのような利点・難点があるのか考察したい。
２２　多世代交流の子育て支援をめぐる取り組み～カナダ・ネイバーフッドハウスを事例として～	－	平成29年10月	日本世代間交流学会合 8 回大会（p.33）（熊本学園大学）	本研究は、セツルメント運動を源流とするカナダＢＣ州バンクーバー市のネイバーフッドハウスを事例として、多世代交流の子育て支援の在り方を考察すると共に、実現に向けた方策について検討することを目的としている。本研究では、Frog Hollow Neighourhood House、Kitslano Neighbourhood House、Gordon Neighbourhood House の 3 団体を調査した。多世代が集える工夫として、Frog Hollow Neighourhood House では、高齢者向けサービス（ヨガや太極拳等の健康増進）や中・高・大学生のボランティアリーダー研修を受講している者を子育て広場（Family Drop in Program）の手伝い・ワークショップ講師として参加をさせなが

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				ら、子ども・親・若者・高齢者が集う場作りをしていた。Kitslano Neighbourhood House では、定期的に学齢期の子ども・親と高齢者が食事会を持つ場作りがなされていた。Gordon Neighbourhood House では、高齢者向けのランチ提供サービスにて、親子ランチ提供サービスを実施していたのだが、高齢者と子どもの食事のペースや食後に子ども達が走り回る等のことがあり、現在では多世代としての交流活動がなされていなかった。2 団体が多世代交流の子育て支援を現在も実施できている背景には、①それぞれの発達段階に応じた居場所があること、②スタッフの介入があることが示唆された。
２３　吉野青年会議所と大学生の協働による小学生を対象としたキャンプ事業の実践報告～地域福祉活動への示唆～	－	平成29年12月	近畿地域福祉学会平成29年度大会（こうべ市民福祉交流センター）	本発表は、一社）吉野青年会議所よしのびと創造委員会と奈良県下の大学生（ボランティアとして参加）が協働し、小学生を対象としたキャンプ事業の実践活動報告をすることを目的としている。一社）吉野青年会議所と大学生は、事業当日までに計 6 回の合同会議を行い、事業目的の共有化や企画案の話し合い・発表を行った。事業実施後の振り返りでは、①社会人と大学生が協働によって得られたメリットや課題、②小学生にとっての本体験活動の意義、③小学生、大学生、社会人の異世代交流がもたらす価値、④地域資源の発掘と活用方法等が取り上げられ、社会人と大学生による事業は、多面的価値を生み出せる可能性が具体的に示唆された。
２４　社会的経済における新たな資金の動き「カナダ・ネイバーフッドハウスの取り組み」	－	平成30年12月	第33回研究大会国際公共経済学会（兵庫大学）	カナダ・ネイバーフッドハウスを事例とし、ネイバーフッドハウスの組織運営体制やサービス・プログラムの概要を取り上げ、ボランティアが行うファンドレイジングの取り組みや資金調達の仕組みについて言及した。ネイバーフッドハウスには、人々の日常生活を支える 30 種類のサービス・プログラムが存在しており、住民から寄付された食器や衣類、家具等をリサイクルストアとして販売し、得られた資金をシングルマザーの支援のために使用されていることなど、施設内の資金作りの手法について紹介した。
「研究報告書」 １　幼児期における「言語活動の充実」とは～岡山市公立幼稚園教諭を対象としたアンケート調査から～	共著	平成25年2月	発行：環太平洋大学	幼稚園教育要領改訂（2008）にて取り上げられた「言語活動の充実」が、実際の保育現場においてどのように実施されているのか岡山市内の公立幼稚園に勤務をしている教諭を対象としてアンケート調査を実施した。本報告書では、特に伝達力・思考力を育成するための保育実践について、自由記述からの考察を行った。自由記述では、伝達力を意識した保育実践を意識して行っていると回答した者は 68.4%、思考力を意識した保育実践を意識して行っていると回答した者が 60%であった。また、自由記述による伝達力を意識した保育実践に関する具体的な取り組みへの回答が 146、思考力では 137 であった。その内容からは、思考力への取り組みに対する保育者の戸惑いがみられるものが多くあるという結果であった。 A4 判　全 37 ページ 代表者：岡野聡子 共同者：大野鈴子 本人担当部分：アンケート質問紙票の作成および分析、考察を担当した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012～岡山市における中心市街地の公園の利活用について～	共著	平成25年3月	岡山市庭園都市推進課「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2012」	私たちを取り巻く社会環境は、都市化や情報化の進行によって急激な変化を遂げてきた。そうした社会環境の変化は、子どもの育ちにも影響を与えていると言われている。緑の遊び場プロジェクトでは、子どもを中心とした公園の利活用を目的とし、子どものための移動式の遊び場の提供を行った。５つの公園を会場として、約2000 人が利用した。プロジェクトでは、自然物（木の実や葉っぱ）を用いたコラージュ製作や木工作、公園内に生えている樹木の名前などを当てるクイズや探検マップの製作など、遊びながら公園に親しみをもてる仕組みを提案・実践をした。本プロジェクトは、岡山市庭園都市推進課からＮＰＯ法人岡山子どもセンターが 200 万円の助成金を受け取り、実施した。 A4 判　全 55 ページ 発行者：特定非営利法人岡山市子どもセンター 発行責任者：美咲美佐子 編著・執筆者：岡野聡子・道仙八代己 実行委員：美咲美佐子、藤本富多美、絹川利恵子、窪田昌子、道仙八代己、松田秀太郎、筒井愛知、岡野聡子 運営実施者：松田秀太郎（プレーリーダー）、特定非営利法人岡山市子どもセンター
3　言葉の保育カリキュラム～幼児期における「言語活動の充実」の工夫～	単著	平成25年7月	公益財団法人福武教育文化振興財団（学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成）平成 24 年度教育研究助成成果報告書	幼稚園と大学が連携をして、幼児期における言語活動の充実を図るため、岡山市にある大野幼稚園と江西幼稚園と環太平洋大学が連携をして、言語活動の充実に関するアンケート調査を実施した。そのアンケート結果をもとに、伝達力・思考力の育成に着目をして、言語活動における指導方法や環境構成等のあり方について報告書としてまとめた。 A4 判　全 2 ページ 本人担当部分：pp. 10-11
4　緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2013～子どもの自由な遊び場を目指して～	共著	平成26年3月	岡山市庭園都市推進課「緑の遊び場（ESD）プロジェクト 2013」	2013 年度は、5 つの公園から 7 つの公園に規模を拡大して「緑の遊び場（ESD）プロジェクト」を実施した。また、前年度の活動に加え、大人が集える場作りの工夫も施した。たとえば、七輪カフェを設けたり、机やベンチを設けて、保護者の方や地域の高齢者の方など、多世代が集える場作りである。子どもを中心としたプロジェクトを通して、多様な立場の人々が出会える空間としての都市公園の利活用方法についても報告書の中で紹介をしている。なお、本報告書を用いて、こども環境学会第 3 回合同セミナー(2014.9)にて活動の発表を行い、奈良学園大学研究紀要（2014.10）では、事業の総合評価も行った。 A4 判　全 51 ページ 発行者：特定非営利法人岡山市子どもセンター 発行責任者：美咲美佐子 編著・執筆者：岡野聡子・道仙八代己 実行委員：美咲美佐子、藤本富多美、絹川利恵子、窪田昌子、道仙八代己、松田秀太郎、筒井愛知、岡野聡子 運営実施者：松田秀太郎（プレーリーダー）、特定非営利法人岡山市子どもセンター

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5　伝達力・思考力を育む言葉の保育カリキュラムの開発～幼児期における「言語活動の充実」の測定と評価にむけて～	単著	平成26年7月	公益財団法人福武教育文化振興財団（学校・地域における学力向上等の研究や実践活動への助成）平成25年度教育研究助成成果報告書	本研究は、平成24年度の本助成金を利用して得たアンケート調査結果をもとに、幼稚園と大学が連携を取って幼児期の教育現場における言葉の保育カリキュラムの作成の検討および開発をすることをねらいとしている。当初の計画では、言葉の保育カリキュラムの作成まで行う予定であったが、現場での多様な実践の一つ一つが幼児の教育効果を高めているのかについて量的に捉える必要があるため、今回の研究では、伝達力・思考力を育む上でも重要となる「聞く力」についての教育効果測定を試みた。結果として、園の取り組みの違いを結果に反映しにくいことなどから、測定の難しさが浮き彫りになったことを報告書としてまとめた。 A4判　全2ページ 本人担当部分：pp. 8-9
6　2015年度吉野青年会議所事業報告書「大学生と遊ぼう！学ぼう！吉野体験ツアー」	共著	平成28年1月	発行：奈良学園大学	吉野広域（3町5村）の高齢化率は35%に達している中で、次世代を担う子ども達が吉野に愛着を感じ、また大人になってからも吉野で働き、生活したいと思えるような環境作りをすることが喫緊の課題となっている。今回、吉野青年会議所と本学ボランティアサークルの学生10名が連携し、吉野広域の小学3年生～6年生を対象としたキャンプイベント実施した。実施日は、平成27年10月31日～11月1日である。小学生の参加者総数は、16 名であった。大学生企画では、①アイスブレイク、②吉野スタンプラリービンゴゲーム、③ものづくり、④自由創作の 4 つを立案・運営した。主に学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。 A4判　全84ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、 奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子
7　2015年度　ふしぎ☆いっぱい！小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成28年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、財団法人奈良県青少年会館からの寄付金を活用した「青少年の健全育成事業」の助成金（20 万円）を取得し、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。全3回の事業を行い、それらを報告書としてまとめた。 第1回：しゃぼん玉づくり名人になろう 実施日：平成27年11月21日（土） 参加者数：58名（子ども38名） 第2回：くるくるアニメーションづくり 実施日：平成27年12月19日（土） 参加者数：27名（子ども12名） 第3回：ピンホールカメラを作ろう 実施日：平成28年1月23日（土） 参加者数：65名（子ども33名） A4判　全35ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子
8　2016年度吉野青年会議所事業報告書「大学生と天川村でキャンプ！はじめましてから広がる吉野の“わ”」	共著	平成28年9月	発行：奈良学園大学	昨年度に引き続き、吉野青年会議所と共に奈良学園大学ボランティアサークルと協働で小学生を対象としたキャンプ事業を実施した。今年度は、奈良教育大学、畿央大学の学生と共に、大学生企画として①アイスブレイク、②フィールドビンゴゲーム、③天体観測、④ものづくりの企画立案・運営を行った。奈良学園大学ボランティ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				アサークルの学生は 19 名が参加し、小学生の参加者総数は 23 名であった。実施日は、平成 28 年 8 月 20 日～21 日である。学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。今年度は、「大学生と社会人とのより良い協働関係を結ぶために」をテーマとして、事業実施後にアンケート調査を実施し、その内容も報告書に含めた。 A4 判　全 90 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、 奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子
9　2016 年度　見えないものを見る力　小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成29年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（26 万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。全 3 回の事業を行い、それらを報告書としてまとめた。 第 1 回：小さな宇宙 ～万華鏡の世界を探検しよう～ 実施日：平成 28 年 11 月 26 日（土） 参加者数：42 名（子ども 25 名） 第 2 回：空気砲を作ろう～目で見る空気の力～ 実施日：平成 28 年 12 月 17 日（土） 参加者数：62 名（子ども 38 名） 第 3 回：色が変わる、まほうの水で描く世界 実施日：平成 29 年 1 月 21 日（土） 参加者数：58 名（子ども 28 名） A4 判　全 35 ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子
１０　2017 年度吉野青年会議所事業報告書「ドキドキワクワク川上村で大冒険！～大学生といっしょに自然を学び・あそびつくそう！～」	共著	平成29年11月	発行：奈良学園大学	吉野広域（3 町 5 村）の高齢化率は 35%に達している中で、次世代を担う子ども達が吉野に愛着を感じ、また大人になってからも吉野で働き、生活したいと思えるような環境作りをすることが喫緊の課題となっている。今回、吉野青年会議所と本学ボランティアサークルの学生 22 名、他大学生が連携し、吉野広域の小学 3 年生～6 年生を対象としたキャンプイベント実施した。実施日は、平成 27 年 10 月 14 日である。小学生の参加者総数は、30 名であった。大学生企画では、①アイスブレイク午前の部、②自然体験活動（魚つかみ、魚釣り）、③昼食づくり、④アイスブレイク午後の部、⑤ものづくりの 4 つを立案・運営した。主に学生による企画立案から運営実施までの過程を報告書としてまとめている。 A4 判　全 80 ページ 報告書監修・編集：岡野聡子 事業実施者：一般社団法人吉野青年会議所、 奈良学園大学ボランティアサークル 大学生企画指導：岡野聡子
１１　2017 年度　見えないものを見る力　小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成30年2月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（8 万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。2017 年度は、1 回の事業を行い、報告書としてまとめた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				第1回：声コプターをつくろう ～音のふしぎを目で見て体験してみよう～ 実施日：平成30年1月20日（土） 参加者数：49名（子ども28名） A4判　全20ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子
１２　三郷町の原風景	共著	平成30年2月	発行：奈良学園大学	平成28年度から「三郷町まちづくり講座」に参加をし、本学学生、行政職員、町民の方々と共に三郷町の地域資源について学びを深めた。①龍田古道プロジェクト事業、②信貴山における竹プロジェクト事業、③三郷町民へのインタビュー調査を実施し、その内容を報告書としてまとめた。 A4判　全102ページ 報告書監修・編集：岡野聡子
１３　2018年度　見えないものを見る力　小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	平成31年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（20万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。2018年度は、3回の事業を行い、報告書としてまとめた。 第1回：「ひかり」のひみつをさぐってみよう！ 実施日：平成30年11月3日（土） 参加者数：27名（子ども11名） 第2回：「おと」のひみつをさぐってみよう！ 実施日：平成30年12月15日（土） 参加者数：21名（子ども14名） 第3回：「ひかり」と「おと」コレはホンモノ？ 実施日：平成31年2月2日（土） 参加者数：48名（子ども27名） A4判　全41ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子
１４　2018年度　見えないものを見る力　小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクト報告書	共著	令和2年3月	発行：奈良学園大学	奈良学園大学ボランティアサークルは、前年度の「科学遊び・学びの広場プロジェクト事業」の活動実績から、本プロジェクトが学長指定プロジェクトに採択（30万円）され、三郷町の小学生を対象とした科学遊び・学びの広場プロジェクトを実施した。2019年度は、3回の事業を行い、報告書としてまとめた。 第1回：天気のふしぎを探ってみよう！ 実施日：令和元年11月9日（土） 参加者数：83名（子ども43名） 第2回：夜空から宇宙を学んでみよう！ 実施日：令和元年12月7日（土） 参加者数：54名（子ども29名） 第3回：地層の不思議を探ってみよう！ 実施日：令和2年2月8日（土） 参加者数：49名（子ども28名） A4判　全43ページ 監修・編集：岡野聡子 事業実施者：奈良学園大学ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱｻｰｸﾙ 運営指導：岡野聡子

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「その他」 1　生活科への興味関心を深めるための授業研究（Ⅱ）～大学 2 年生前期開講科目「生活の理解」受講後アンケート調査から～	－	平成26年6月	日本生活科・総合的学習教育学会第23回全国大会埼玉大会～生活・総合の新たなる枠組みの提案　ふるさと子午線の地から世界標準を～（p. 216）（埼玉大学教育学部附属小学校）	平成 25 年度の 4 月 10 日の第1回「生活の理解」を開講した際、本科目で何を学ぶのかイメージを問うたところ、43%の学生が「生活の中における必要なこと（知識・技能）を学ぶ」と答え、家庭科のイメージが強いと回答する学生もいた。全 15 回の受講を通して、生活の理解に対する学生のイメージがどのように変容し、また前期で得た学びが、どの程度定着しているのかを明らかにするため、質問紙法を用いて追跡調査を実施した。受講半年後の平成 26 年 1 月 21 日の調査結果（有効回答率：65.9%）から、授業で一番印象に残っている内容として、身近なものへの興味関心を高める活動が 47%、自然体験活動に関するものが 39%、その他が 4%、無回答は 14%であった。最も多かった活動内容に関する記述は、グミづくりであり、その印象に残っている理由とて、「美味しくなかった」や「（普段食べているグミに）砂糖がどれだけ入っているのか知った」とあり、自身にとっての予想外や発見が、半年経過した後も記憶に残っていることが示された。また、他科目との関連性では、科目名を取り上げた者が 57%おり、無回答は 37%であった。最も多かった記述は、「子どもと環境」であった。（※学会発表予定であったが、体調不良のため辞退し、発表内容は要旨集に掲載されている）

教　育　研　究　業　績　書

令和　2年 3月 31日

氏名　　岡野　由美子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
特別支援教育	発達障害の教育課程と指導法に関する研究 通級による指導の効果的な指導方法に関する研究 知的障害、肢体不自由教育における指導法に関する研究

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 ・児童の行動の背景を理解し、支援につなげる工夫	平成 19年4月～27年3月	特別支援教育コーディネーターとして、各学級の観察や情報共有、校内研修を通して、児童の行動理解を図り、教職員の特別支援教育についての理解を深め、資質の向上に努める工夫 （兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校での実践）
・児童の行動の背景を理解し、支援につなげる工夫	平成 19年4月～27年3月	特別支援教育コーディネーターとして、各学級の観察や情報共有、校内研修を通して、児童の行動理解を図り、教職員の特別支援教育についての理解を深め、資質の向上に努める工夫 （兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校での実践）
・知的障害または肢体不自由障害のある児童の認知の特性を生かした生活単元学習の単元構成の工夫	平成 22年4月～23年3月	知的障害または肢体不自由障害のある児童が、自立を目指し、生活の中で得意を生かし、自己決定、自己選択をできる場面を取り入れた生活単元学習における工夫 （兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校での実践）
・小学校における特別支援学級新設にかかる理解啓発の工夫	平成 23年4月～25年3月	特別支援学級について、全校の児童が通常の学級と同様にその存在を知り、認め、ともに生きることを理解するための、啓発や理解についての工夫 （兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校での実践）
・読み書きにつまずきのある児童への配慮の工夫	平成 26年4月～27年3月	通常の学級に在籍する学習障害のある児童への配慮事項について、保護者との合理的配慮の提供にかかる合意形成の図り方、通常の学級の他の児童への理解啓発の授業実践の工夫 （兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校での実践）
・社会で出会う、発達障害のある人についての理解と適切な関わりのあり方についての実践方法	平成31年4月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科4年次生の学生に対し、発達障害のある人について、その基本的な障害特性の理解や合理的配慮の提供について、また適切なかかわり方について、事例を下に考え、理解を図るための工夫について指導を行った。擬似体験や話し合いを行い、障害についての理解を図り、卒業後の実践的な力となるような内容とし、より良いかかわり方や多様性を認める社会のあり方など、基本的な理解が出来るようになった。 （奈良学園大学人間教育学部での実践）
2　作成した教科書，教材 (1)特別支援教育概論（共著） 発行：ERP出版 【再掲】	平成 31年3月	小中学校の特別支援の各障害についての特徴の説明。障害の応じた教育課程編成とその指導法について記した。人間教育学ゼミナールⅠにおいて使用し、障害特性の理解の資料として使用した。
(2)特別支援教育校内研修資料（単著） 発行：兵庫県佐用郡佐用町立小学校 【再掲】	平成 23年7月	知的障害、肢体不自由障害、自閉症のある児童の基本的な状態の理解と実態把握の方法、指導・支援の工夫について自閉症の３つ組の障害と言われる特性の理解と具体的支援の例について、校内での支援のあり方について兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校の校内研修資料として使用した。特別支援学級在籍の児童が、交流学級で過ごすときの支援の方法や、関わり方の基礎的な内容について、具体的に理解できたと感想を得た。

(3)教育実習の手引き（単著） 【再掲】 発行：佐用町立上月小学校	平成 23 年 8 月	教育実習生が特別支援学級で何日か実習する。その実習生を対象に、「特別支援教育とは何か」「発達障害とは何か」「知的障害とは何か」「肢体不自由障害とは何か」について指導する教材として作成した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 なし	平成 20 年 1 月	奈良学園大学人間教育学部で特別支援の必要な児童生徒の教育課程と学校行事への参加の指導方法について特別講義をした。児童生徒の個別の対応の重要性を理解したという意見が多かった。4 点満点で 4 の評価だった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 校内適正就学指導研修会助言者 「一人一人の教育的ニーズに応じた指導・支援についての検討」	平成 19 年 4 月～平成 27 年 3 月 合計 23 回実施	兵庫県内の様々な学校において校内の各学級の担任から、気になる児童についての情報を集め、その状態から考えられる要因と指導・支援について、個別検討を行った。
(2)特別支援教育についての教育実習生の指導	平　成 23・24 年 10 月	2 年間にわたり、上月小学校の教育実習生数名に対し特別支援教育についての講義、研修を行った。指導した内容は、特別支援教育について、各障害の特性と指導方法、発達障害とは何か、将来教員となり、通常の学級を担任する可能性がある実習生に、必ず知っておいて欲しい内容を講義指導した。
(3)兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校研修講師 「特別支援学級設置にあたる配慮」 対象：上月小学校教員等 13 名 場所：上月小学校	平成 23 月 4 月	自閉症・情緒障害特別支援学級の新設にあたり、全職員の共通理解と、全児童に対する理解、啓発の方法について、具体的に事例を提示しながら示した。
(4)兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校研修講師「子どもの行動を理解するために」 対象：上月小学校教員等 13 名 場所：上月小学校	平成 23 年 8 月	各学級に在籍する、学習や生活につまずきのある児童についての基本的な理解の仕方や、より良い行動への導き方について、応用行動分析の方法を用いた指導方法の講義を行った。
(5)兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校研修講師 「ASD（自閉症スペクトラム障害）について」 A 児の特性の理解と適切な関わり方について 対象：上月小学校教員等 14 名 場所：上月小学校	平成 23 年 9 月	自閉症・情緒障害学級に在籍する A 児、B 児について、一学期の指導と二学期以降の指導目標についての共通理解を図り、交流学級や学校行事などで関わる全職員が一貫した指導体制が取れるよう講義を行った。
(6)兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校研修講師 「見る」力を通して理解する児童の行動、学習について 対象：上月小学校教員等 13 名 場所：上月小学校	平成 24 年 3 月	児童の「見る」力のアセスメントについての基本的な内容を踏まえ、実際の絵やノートなどの成果物から、児童の実態を把握し、支援方法を探った 1 年間の状況を振り返り、次年度への引き継ぎたい事項の整理を行った。
(7)兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校研修講師 「自閉症スペクトラム障害」の障害の特性について」 対象：上月小学校教員等 14 名 場所：上月小学校	平成 25 年 5 月	自閉症スペクトラム障害のある児童の感覚の特異性について、事例をもとに研修を行った。大きな声や破裂音が苦手でありながら、当該児童が大声を出したり声を荒げている行動の要因を考えられる感覚の特異性について、教職員の理解を深め、適切な関わり方について、検討を行った。
(8)長崎県南島原市社会福祉法人コスモス 児童発達支援センター　研修会　講師 「行動の理由をもとに」 対象：たすかる早崎利用者、職員　20 名 場所：たすかる早崎　たすかるサロン	平成 24 年 8 月	自閉症・情緒障害特別支援学級における、自閉症スペクトラムの児童の自立活動などの事例をもとに、障害特性に応じた支援のポイントやアセスメントについて資料を用意して講義を行った。
(9)兵庫県加古川市　親の会　ひだまりの会 公開研修会　講師 「教室で、家でできるビジョントレーニング」 対象：加古川市広汎性発達障がい児親の会 会員、一般参加者　50 名 場所・加古川市総合福祉会館	平成 25 年 1 月	校内支援体制のあり方、校内における理解啓発と実際に学校で取り組んだビジョントレーニングとその効果についてと、放課後を利用した児童支援について資料を作成して講義を行った。

(10)兵庫県加古川市　親の会「ひだまりの会」 公開研修会　講師 「通常の学級における発達障害のある 児童への支援の実際」 対象：加古川市広汎性発達障がい児親の会 会員、一般参加者　60 名 場所：加古川市総合福祉会館	平成 25 年１月	通常学級における発達に躓きのある児童の、読み書きの向上を図るために取り組んだ、アセスメントとビジョントレーニング、支援の方法などの事例を紹介し、読み書きにつまずく児童への支援のあり方について、資料を作成して講義を行った。
(11)兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校研修講師 「子どもの行動には理由があります」 対象：上月小学校教員等 14 名 場所：上月小学校	平成 26 年４月	知的特別支援学級が新設されるにあたり、知的障害の基礎的な理解と、自閉症を併せ有する児童の実態から、教職員の関わり方や全児童への理解や啓発の方法について、講義を行った。
(12)奈良県大和郡山市特別支援教育研修会講師 「特別な支援を要する児童生徒の理解と支援について」 対象：奈良県教諭 30 名 場所：大和郡山市役所	平成 26 年７月	通常の学級に在籍する発達障害のある児童生徒の基本的理解とその具体的な指導・支援の方法について 読み書きの躓きの要因について、事例をもとにした指導とその効果について資料を準備し講演した。
(13)兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校研修講師 「ディスレクシア（発達性読み書き障害）についてーC 児の特性の理解と配慮事項についてー」 対象：上月小学校教員等 14 名 場所：上月小学校	平成 26 年８月	通常学級に在籍し、LD（学習障害）の診断のある C 児について、その障害特性についてと、ルビふりや教科書の拡大コピーなど、授業における配慮事項について、全職員の共通理解を図った。
(14)佐用町特別支援教育コーディネーター研修会 「特別支援教育にかかる教員長期研修派遣報告」 対象：佐用町立小中学校管理職及び特別支援教育コーディネーター20 名 場所：佐用町立久崎小学校	平成 26 年８月	平成 25 年度､1 年間大阪教育大学特別支援教育特別専攻科において、取り組んだ研究、研修についての報告会。佐用町から、本事業に参加した教員はこれまでにはいなかったため、この事業の概要の説明と、学んだ授業の具体的なシラバスや、研究内容について報告を行った。
(15)沖縄県那覇市　一般社団法人ゆうありてぃ研修会　講師 「「見る」アセスメントから支援を考える」 対象：一般社団法人ゆうありてぃ職員、利用者、保護者等　　60 名 場所：沖縄県総合福祉センター	平成 26 年８月	発達につまずきのある児童の「見る」力に焦点を絞り、そのアセスメントの意味と方法、解釈についてと、指導事例について、資料を作成し、講義を行った。
(16)播磨発達支援研究会　講師 「発達障害のある児童の「見る」アセスメントから支援を考える」 対象：播磨発達支援研究会会員　12 名 場所：相生市生きがい交流センター	平成 27 年６月	「見る」ことから「読む」ことへの一連の情報処理過程のメカニズムとそのつまずきについて、アセスメントの方法や解釈についてと、実際の指導例を提示し、資料を元に講義を行った。
(17)佐用町特別支援教育研修会講師 「特別な支援を要する児童生徒の指導」～自立活動のあり方～」 対象：兵庫県管理職及び教諭 20 名 場所：佐用町南光文化会館	平成 27 年７月	特別支援学級の教育課程の法的根拠と、教育課程の組み方、知的障害のある児童生徒の教育課程の構造についてと、自立活動の区分、項目の詳細の説明と具体的な指導内容の事例を挙げて、資料準備して助言を行った。
(18)天理市立井戸堂小学校校内研修会講師 「発達障害のある子どもの理解と支援～子どもの「見る」力のアセスメント～ 対象：天理市管理職及び教諭 12 名 場所：天理市立井戸堂小学校	平成 27 年８月	読み書きに躓きのある児童生徒の指導・支援について「読む」ために必要な視知覚、認知能力、情報処理過程の理解と、「見る」力のアセスメントの方法について、また、その具体的な支援についての理解について資料を用意して論じた。
(19)姫路市通級担当者研修会講師 「視知覚関連のアセスメントについて ～WAVES の結果の解釈～」 対象：兵庫県立特別支援学校教諭及び特別支援担当教諭 14 名 場所：姫路市総合教育センター	平成 28 年６月	「見る」力や「読み書き」につまずきのある児童生徒の実態を把握するためのアセスメント「WAVES」 の内容と、基本的な解釈についての講義を行った。また、その結果についての評価、解釈と事例検討も資料を準備し行った。
(20)臨時的任用教員研修会特別支援教育講師 「合理的配慮の提供とユニバーサルデザインによる授業について」 対象：兵庫県臨時講師 60 名 場所：兵庫県姫路総合庁舎	平成 27 年７月	通常の学級に在籍する学習や生活につまずきのある児童生徒の理解と、その指導・支援についてユニバーサルデザインの考え方に基づく学級づくり、学習指導の方法の工夫と、個別に配慮の必要な児童生徒の行動、学習面の困難さの理解を深めるために資料を準備して指導した。

(21)たつの市特別支援教育研修会講師 「特別な支援を要する児童生徒の自立活動のあり方」 対象：たつの市立小中学校特別支援学級担任 30 名 場所：たつの市教育委員会	平成 28 年８月	特別支援学級の教育課程の法的根拠と、教育課程の組み方、知的障害及び肢体不自由のある児童生徒の教育課程の構造について「合わせた指導」の具体的内容について「自立活動」の区分、項目の詳細の説明と具体的な指導内容の事例を挙げて、資料を準備し講演した。
(22)神河町全教職員研修会講師 「発達障害のある児童生徒の理解と学級づくり」 対象：神河町小中学校全教職員、教育委員、教育委員会担当者約８０名 場所：神河町立神河中学校	平成 28 年８月	通常の学級の担任に必要な特別支援児童生徒理解のあり方やアセスメントについて　児童生徒の問題行動の背景にある原因についての理解と、その上にたった指導・支援のあり方について資料を基に講話した。
(23)西播磨地区学校生活支援教員等研修会講師 「通級指導のあり方～教育課程と自立活動のあり方～」第１回 対象：西播磨地区小中学校生活支援教員及び特別支援学校教員 場所：兵庫県立西はりま特別支援学校	平成 28 年９月	通級による指導について、その目的、対象となる児童生徒、指導時間等の法的根拠に基づいた制度の理解、目標と評価について指導した。さらに対象となる児童生徒の実態把握の方法と、自立活動の具体的な内容について指導例を準備して講演した。
(24)揖龍地区特別支援コーディネーター研修会講師 「通級指導教室と通常学級の連携の意義とその方法について」 対象：特別支援教育コーディネーター４０名 場所：たつの市立小宅小学校	平成 29 年１月	特別支援に係る児童生徒の自立と社会参加のための連携の必要性について　通級指導の開始と終了、目標の設定と評価などの意味や意義について、学校内の理解啓発の方法について、資料を準備し講演した。
(25)教職経験者（２年次）研修全体研修講師 「保護者との連携」 対象：兵庫県特別支援学校教員２年次研修対象者 70 名 場所：兵庫県立特別支援教育センター	平成 29 年５月	障害のある子どもの保護者の心理的側面の理解と、よりよい協働のあり方について、事例検討を取り入れた資料を作成し、講義を行った。
(26)兵庫県立但馬農業高等学校講師 「授業のユニバーサルデザイン化とは」 対象：兵庫県立但馬農業高等学校教職員 40 名 会場：兵庫県立但馬農業高等学校	平成 29 年６月	発達障害のある生徒の基本的理解と、どの生徒にもわかりやすい授業という視点での授業改善の工夫について、ユニバーサルデザインの考え方の理解について資料を準備し講演した。
(27)通級指導担当教員研修講座講師 「教育課程と自立活動」 対象：兵庫県小中学校通級担当教員　73 名 会場：兵庫県福祉センター	平成 29 年６月	通級による指導の制度、目標、指導内容について学び、自立活動について、区分、項目ごとの具体的指導内容について、資料を作成し講義を行った。
(28)猪名川町スクールアシスタント研修講師 「特別な支援を要する児童・生徒の理解と支援～スクールアシスタントとしての支援 Vol.1～」 対象：猪名川町　スクールアシスタント 15 名 会場：猪名川町役場	平成 29 年８月	通常学級に在籍する発達障害のある児童生徒についての理解・支援のあり方についてと、学級担任との連携のあり方や大切さについて、資料を作成して講義を行った。
(29)猪名川町初任者研修講師 「特別な支援を要する児童・生徒の指導、支援」 対象：猪名川町小中学校初任者 11 名 会場：猪名川町役場	平成 29 年８月	LD 等の心理的疑似体験を通して、書けない、読めないなどの困難さのある児童生徒の心理状態を理解するとともに、児童生徒の行動からその原因を探る方法について、演習を行った。
(30)教職経験者（２年次）研修全体研修講師 「特別支援学校の学級経営と児童生徒理解」 対象：兵庫県特別支援学校教員２年次研修対象者 70 名 場所：兵庫県立特別支援教育センター	平成 29 年８月	特別支援学校の学級担任として、個別の指導、支援のあり方と学級集団の指導について、また、児童生徒の理解のあり方について、資料を作成し、講義を行った。
(31)兵庫県播磨西地区サポートネット会議研修会講師 「兵庫県の通級指導の現状と課題」 対象：播磨西地区サポートネット会議会員 60 名 会場：姫路総合庁舎	平成 29 年８月	通級による指導に関する現状と、通級による指導が児童生徒の自立と社会参加に対してどのような役割を担っているのか、ということを、学習指導要領や文部科学省の調査結果等を用いて資料を作成し、講義を行った。
(32)兵庫県播磨西地区学級経営（特別支援教育）研修会講師 「新学習指導要領と個別の指導計画」 対象：播磨西地区小中学校特別支援学級担任および通級指導教室担当者　約 170 名 会場：あいめっせホール	平成 29 年８月	特別支援学級の教育課程の編成のポイントや、自立活動の区分と項目の整理、特に知的障害のある児童生徒の教育課程の構造について、資料を作成し、講義を行った。

(33)姫路市通級担当者研修会講師 「視知覚関連のアセスメントについて～WAVEWS の結果の解釈」 対象：兵庫県立特別支援学校コーディネーター及び姫路市通級指導教室担当者 18 名	平成 29 年９月	「見る」力と「読み書き」に躓きのある児童生徒の実態を把握するためのアセスメント「WAVES」の内容と基本的な解釈についての講義を行った。 また、その結果についての評価、解釈と事例検討について、資料を作成し、講義を行った。
(34)佐用町コーディネーター研修会講師 「特別な支援を要する児童生徒の指導・支援について」 対象：佐用町特別支援教育ネットワーク会議会員 35 名 会場：佐用町教育委員会	平成 29 年９月	学習指導要領の改訂のポイントについてと、コーディネーターとしての校内支援のあり方、関係機関との連携のあり方等について、資料を作成し、講義を行った。
(35)篠山市・丹波市通級指導教員研修会講師 「通級による指導に期待されること～自立活動の具体的指導方法～」 対象：丹波市、篠山市通級指導教室担当者 教育委員会指導主事、特別支援学校教諭 25 名 場所：柏原住民センター	平成 29 年 12 月	通級による指導における、現場や高等学校における通級による指導の兵庫県における動向についてと、児童生徒の実態把握を元にした自立活動の選定や指導について、資料を作成し、講義を行った。
(36)特別支援教育士長崎支部会員研修会講師 「やってみよう事例検討　～アセスメントから指導計画へ～」 対象：特別支援教育士(S.E.N.S)長崎支部会員 70 名 会場：長崎大学	平成 29 年 12 月	学習や生活に困難を示す児童生徒のアセスメントから、指導計画を作り出すための、ケース検討をした。 WISC-Ⅳ、DTVP2 などのフォーマルアセスメントと、児童生徒や担任、保護者等からの聞き取り、観察を総合的にアセスメントし、通級指導教室、通常学級、保護者それぞれについて、指導目標を考える方法等について資料を準備し講演した。
(37)猪名川町スクールアシスタント研修講師 「特別な支援を要する児童・生徒の理解と支援～スクールアシスタントとしての支援～Vol.2」 対象：猪名川町　スクールアシスタント 15 名 会場：猪名川町役場	平成 29 年 12 月	LD 等の心理的疑似体験を通して、書けない、読めない困難さのある児童生徒の心理状態を理解するとともに、２学期を終えた時点での振り返りと３学期に向けての目標の設定について考えた。また、行動の理由を見るポイントについて、資料を作成し、講義を行った。
(38)兵庫県淡路教育事務所特別支援学級教育課程研修会講師 「特別支援学級の教育課程の編成や年間計画について」 対象：淡路地区小学校、中学校特別支援学級担任、特別支援教育コーディネーター50 名 会場：淡路市役所	平成 30 年１月	特別支援学級の教育課程の構造についてと、自立活動の目標と内容、指導について、学習指導要領の海底のポイントについて、資料を作成して講義を行った。
(39)上郡町立山野里小学校校内研修講師 「特別な支援を要する児童の、特別の教科道徳の指導について」 対象：上郡町立山野里小学校教職員 24 名 会場：上郡町立山野里小学校	平成 30 年２月	特別支援学級在籍児童の、交流学級における特別の教科道徳について、特別支援学級担任の支援についてや、交流学級担任との連携のあり方などについて、資料を作成し、講義を行った。
(40)通級指導担当教員研修講座講師 「教育課程と自立活動」 対象：兵庫県小中学校通級担当教員　73 名 会場：兵庫県福祉センター	平成 30 年６月	通級による指導の制度、目標、指導内容について学び、自立活動について、区分、項目ごとの具体的指導内容について、資料を作成し講義を行った。
(41)新任特別支援学級担当教員研修講座講師 「障害に応じた教育課程の編成と自立活動の指導」 対象：兵庫県小中学校特別支援学級担当教員 500 名 会場：兵庫県福祉センター 神戸市勤労市民センター	平成 30 年６月	初めて特別支援学級の担当をする教員対象に、特別支援学級の教育課程の編成について、障害特性の理解と、実態把握、自立活動の指導について、資料を作成し、講義を行った。
(42)兵庫県立東播工業高等学校カウンセリングマインド研修講師 「障害特性の理解と支援のあり方について」 対象：県立東播工業高等学校教職員 24 名 会場：県立東播工場高等学校	平成 30 年６月	発達障害の基礎的な理解と疑似体験を通じて生徒の心理状態を理解するとともに、効果的な指導、支援のあり方について、資料を作成し講義を行った。
(43)兵庫県播磨西地区学級経営（特別支援教育）研修会講師 「新学習指導要領移行期のポイントと個別の指導計画」 対象：播磨西地区小中学校特別支援学級担任及び通級指導教室担当者 170 名 場所：姫路市民会館大ホール	平成 30 年７月	特別支援教育に関する、学習指導要領改訂のポイントと、自立活動における個別の指導計画の作成について、資料を作成し講演した。

(44)赤穂市立赤穂中学校校内研修講師 「特別支援生徒の進路についての合理的配慮とは」 対象：赤穂中学校教員及び管理職 30 名 場所：赤穂市立赤穂中学校	平成 30 年 8 月	中学校の通常学級に在籍する発達障害のある生徒についての理解・啓発を他の生徒に行う方法、進学に向けての合理的配慮の提供に関する考え方について、資料をもとに講演した。
(45)佐用町教育研究所研修会講師 「特別支援教育の具体的な進め方」 対象：佐用町教育研究所所員、小学校・中学校教職員　30 名 場所：佐用町教育委員会	平成 30 年 8 月	学習指導要領の海底のポイントと、各教科等の指導における配慮事項などの工夫や、指導・支援の工夫について、疑似体験や、スリットの作成など、事例や実技などを取り入れながら理解を深めるように資料を作成して講義を行った。
(46)高等学校における通級による指導実践研究事業校内研修会講師 「発達障害のある子を理解するには」 対象：兵庫県立西脇北高等学校教員　40 名 場所：兵庫県立西脇北高等学校	令和元年 6 月	高等学校における通級による指導が開始され、二年目となる。発達障害のある生徒の他にも、自傷行為、非行行為等様々な課題のある生徒指導面での対応とともに、発達障害を理解し、その指導について理解できるよう、疑似体験を取り入れるなどして講義を行った。
(47)相生市特別支援教育研修講座 「通常の学級における指導・支援～通級による指導との効果的な連携～」 対象：相生市学校園教職員 45 名 場所：相生市文化会館　なぎさホール	令和元年 7 月	通常の学級に在籍する児童生徒の行動面のつまずきについて、応用行動分析の考え方をもとに、行動の原因やその結果についての観察の方法や行動変容につながる指導について、資料をもとに講義を行った。通級による指導についても、位置付けや通常学級との連携について理解を図った。
(48)姫路市立中学校特別支援教育コーディネーター研修会 「特別支援教育コーディネーターの役割」 対象：姫路市内中学校教員、特別支援学校教員　70 名 場所：姫路市立書写養護学校	令和元年 7 月	特別支援教育コーディネーターは学内人事であり、担当者が固定されているわけでは無い。そのため、その業務の引き継ぎが十分でない、仕事が円滑に進められないなど様々な課題があり、それが校内の特別支援教育の推進において弊害となっているケースもある。どのように円滑に業務を進めていけるか、実習を入れ、講義を行った。
(49)明石市特別支援研修講座 「WISC-Ⅳ等発達検査について詳しく知ろう」 対象：あかし市教育研修所特別支援教育希望者　12 名 場所：明石市立明石養護学校	令和元年 8 月	特別な支援を要する児童生徒が、その発達の凹凸やつまずきの要因を探るために医療機関等で実施される各種の検査結果の報告について、どのように読み取り支援に生かすかということについて、資料をもとに講義を行った。支援に生かす方法について理解を深めることができた。
(50)神崎郡小中学校特別支援教育研修会 「LD、ADHD の児童生徒に対する支援等について」 対象：神崎郡小中学校特別支援教育担当者等　４０名 場所：神河町大河内保健福祉センター	令和元年 8 月	発達障害のある児童生徒の指導、支援の具体的なあり方について、資料をもとに講義を行った。 障害特性の理解と、ユニバーサルデザインの授業の基本的な考え方等について理解啓発を図った。
(51)佐用町教育研修所特別支援教育研修講座 「特別な支援を要する子どもたちを「理解する」とは・・」 対象：佐用町小中学校教員　１７名 場所：佐用町役場	令和元年 8 月	特別な支援を要する児童生徒の発達検査等の所見をもとに、その困難さの理解と具体的な支援方法について、講義を行った。障害理解を考えるために疑似体験等を取り入れ、正しく理解することの大切さについて資料をもとに講義をした。
(52)太子町教職員研修 「すべての教職員のための特別支援教育をふまえた授業作り」 対象：太子町立幼小中学校教職員　240 名 場所：太子町文化会館	令和元年 8 月	通常の学級に在籍する学習や生活に困難を示す児童生徒について、どのように観察し、つまずきの原因を探るかということや、通常学級の授業作りについて、事例をもとに実践的な内容として、資料をもとに講義を行った。
(53)高等学校における通級による指導実践研究事業校内研修会 「高等学校における通級指導について」 対象：兵庫県立宝塚西高等学校教職員、保護者　40 名 場所：兵庫県立宝塚西高等学校	令和元年 8 月	高等学校における通級による指導が始まり、対象校でも二年目を迎えているが、その指導のあり方について校内で共通理解を深めるため、概要について講義を行った。自立活動や個別の指導計画に基づいた指導のあり方について、資料を作成し、講義した。

(54)あかし教育センター「特別支援教育研修講座」 「WISC-Ⅳ等、発達検査の結果から具体的支援につなげるために」 対象：明石市小中学校教職員　５０名 場所：あかし教育研修センター	令和元年10月	発達検査の所見は、特別な支援を要する児童生徒の保護者から情報提供として受け取り、見ることが多くなった現在の学校現場であるが、それを読み解き、支援につなげることができなければ活用できたとは言い難い。本講義において、その基本的な解釈の仕方や、その支援方法について事例をもとに講義を行った。
(55)但馬地域特別支援連携協議会　指導助言 「早期からの教育相談・支援体制の充実に向けて」 対象：但馬地域特別支援連携協議会　委員26名 場所：兵庫県豊岡総合庁舎	令和元年11月	早期からの教育相談や支援体制について、各関係機関から委嘱された委員により、情報共有がなされた。就学前の段階で、どれくらい保護者に情報を発信し、より適切な支援を受けられる関係機関と連携をとるかという課題について大切さについて特別支援学校との連携などリソースの活用について等、助言を行った。
(56)特別支援教育士資格認定協会第１３回S.E.N.S養成セミナー指導実習 対象：特別支援教育士養成セミナー参加者　70名 場所：スペースアルファ神戸	令和元年12月	特別支援教育士資格取得のための、２泊３日の研修講座の担当講師として運営、講義等を行った。 グループ内でのアセスメント解釈や個別の指導計画作成に関し、適宜助言を行った。また、最終試験に向けての個々の課題についての助言等を行った。
(57)西播磨地区高等学校における通級による指導合同研究会 「発達段階に応じた通級の指導」 対象：兵庫県西播磨地区小中高等学校教職員、福祉関係担当者等　　７８名 場所：兵庫県立太子高等学校	令和2年1月	各学校種別ごとに、通級による指導が行われている。それぞれの発達段階を理解し、今在籍している学校の先にどんな教育が展開されるのか、将来の社会参加に向けてどんな力が必要となるのかなどについて、資料をもとに講義を行った。
(58)兵庫県高等学校生徒指導協議会阪神支部協議会 「特別な支援が必要な生徒への対応について」 対象：阪神地区生徒指導担当教員　60名 場所：兵庫県立宝塚西高等学校	令和2年2月	問題行動等、生徒指導上課題となる生徒の行動の原因となっていることがある発達障害について、どのように理解し、対応すればよいかといことについて、資料をもとに講義を行った。
(59)高等学校における通級による指導校内研修会 「インクルーシブ教育と合理的配慮」 対象：兵庫県立西脇北高等学校教職員 40名 場所：兵庫県立西脇北高等学校	令和元年2月	年度内の校内研修の2回目である。通級による指導の対象となる生徒の理解について、応用行動分析の考え方をもとに、事象に対して注意や叱責をするのではない関わり方について資料をもとに講義を行った。
(60)神崎郡中学校特別支援教育研修会 「通級指導教室と通常学級の効果的な連携について」 対象：神崎郡中学校通級指導担当者等　20名 場所：兵庫県福崎町立福崎西中学校	令和2年2月	中学校における通級による指導のあり方について、また、通常学級との連携についてその意義や具体的指導について、資料をもとに講義を行った。
(61)第4回特別支援教育西播磨地域連携研修会指導助言 対象：兵庫県西播磨地域通級指導担当教員、特別支援学校教員　30名 場所：兵庫県立西はりま特別支援学校	令和2年2月	通級による指導の実践報告が小学校、中学校の担当教員からなされた。将来の自立に向けた視点を持つことの重要性、通級指導が通級指導だけで実施するのではなく、通常学級との連携が不可欠となることなどについて、助言を行った。
５　その他		特になし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格、免許 小学校教諭１種免許状	平成5年3月	平４小一第１５３７号（大阪府教育委員会）
幼稚園教諭２種免許状	平成5年3月	平４幼二第４７５１号（大阪府教育委員会）
特別支援学校１種免許状（知・肢・病）	平成26年3月	平２５特支第１８３号（大阪府教育委員会）
特別支援教育士スーパーバイザー	平成30年4月	SV１８－０１０（一般財団法人　特別支援教育士資格認定協会）
２　特許等		なし

3　実務の経験を有する者について特記事項 (1) 兵庫県教育委員会　特別支援教育特別コーディネーターとしての業務	平成 19 年 4 月～27 年 3 月	特別支援教育特別コーディネーターとして講演会の講師を毎年年間３回務めた。また保育園、中学校訪問、療育機関訪問など、各関係機関との連携を図ったり、PTA 研修会の立案、実施なども行った。特別支援学級の新設にあたり、書類の作成、保護者との面談、保育所との協議、学級の備品等の購入申請等の業務を担当した。 年間３回、定期的に校内適正就学指導委員会を開催し、校内の特別な支援を要する児童についての共通理解と特別支援教育についての啓発を行った。また、事案によっては、随時開催し、当面の対処についてや関係機関との連絡調整、校内の体制の整備などを行った。
(2) 特別支援学級の担任としての業務	平成 23 年 4 月～平成 26 年３月	自閉症・情緒障害特別支援学級が新設にあたり、新１年生入学前から準備をし、担任となった。教育実習生を受け入れ、特別支援の基礎の講義を行った。就学前から保護者や該当児と面談をし、特別支援学級とはどんな学級なのかを全児童に理解・啓発するための全職員の共通理解を図るなど、担任として円滑に学級運営ができるよう、工夫した。 担任となってからは、在籍児童についての接し方や指導・支援についての職員研修を実施し、交流及び共同学習を積極的に行い、数年後の目標を見据えた学級運営を行った。また、教育実習生を受け入れ、特別支援の基礎的事項を指導した。
(3) 特別支援教育にかかる教員長期研修派遣事業における長期派遣研修参加	平成 25 年 4 月～26 年 3 月	兵庫県教育委員会から大阪教育大学特別支援教育特別専攻科に派遣される。特別支援学校教諭１種免許状（知・肢・病）を取得した。特別支援教育概論、知的障害教育、肢体不自由教育、病弱教育、視覚障害教育、聴覚障害教育、言語障害教育をはじめ、読み書きに関する視覚機能についての研究、また、実地研修として、特別支援学校での教育実習、大阪府内の特別支援学校訪問、通級指導教室訪問、大阪医科大学 LD センター研究協力として読みに関するアセスメント、心理検査の実施などを行った。
(4) 兵庫県教育委員会事務局播磨西教育事務所教育振興課主任指導主事特別支援教育担当としての業務	平成 27 年 4 月～29 年 3 月	◎特別支援教育担当 ・兵庫県県内各地の特別支援教育に関する指導研修講座の講師を務める ・西播磨教育事務所管内の特別支援教育に関する研修講座講師開催及び運営 ・特別支援学級編成及び教育課程編成に係る指導と事務 ・特別支援学級編成の実態調査及び聞き取り ・特別支援学級設置校、学校生活教員配置校訪問調査と指導 ・特別支援教育体制整備状況調査の実施と指導 ・播磨西地区（学級経営）研究会の実施と指導 ◎初任者研修担当 ・地区別初任者研修、一般研修の実施 ・初任者研修にかかる非常勤嘱託員の委嘱事務、派遣 ◎小中一貫教育（義務教育学校）担当 ・小中一貫教育地区別研修会の開催 ◎小学校外国語教育担当 ・英語教育地区別研修会の実施 ◎幼児教育担当（特別支援教育の幼児を含） ・幼児教育研修会の実施 ・幼児教育研究事業にかかる実践研究 ・幼児教育理解推進研修会の実施 ・幼稚園教諭初任者研修の実施

(5) 兵庫県立特別支援教育センター 主任指導主事としての業務	平成 29 年 4 月 ～ 平成 31 年 3 月	◎特別支援教育に関する研修に係る業務 ・特別支援学校２年次研修会講師 ・新任特別支援学級担当教員等研修講師 ・通級指導教室担当教員等研修講師 ・講師派遣研修講師 ◎特別支援教育に関する教育相談 ・ＬＤ，ＡＤＨＤ等発達につまずきのある幼児・児童・生徒の保護者、本人の教育相談 ◎特別支援教育に関する委託研究員 「通常学級の教員に対する、障害のある子どもの教育的支援についての理解・啓発」に関する研究 （独立行政法人国立特別支援教育研究所地域実践研究） ◎小中学校の先生のための特別支援教育ハンドブック作成
(6)ひょうご学習障害相談室専門相談員	平成 31 年 4 月～現在に至る	兵庫県の LD、ADHD 等に関する専門的な知識や技能を有する相談員が、本人、保護者、教育関係者に相談支援を行い、LD、ADHD 等に関する適切な情報を提供する。室長１名、専門相談員９名で構成されている。幼児児童生徒に関する相談業務を個別に行っている。場合によって、継続的に相談にあたることがある。
(7)但馬地域特別支援教育連携協議会委員	令和元年 10 月～現在に至る	兵庫県但馬地域の特別支援教育連携協議会の学識経験者、委員長を務める。委員は、地域内の各市町教育委員会、学校関係者、福祉関係者、県民局関係者、関係機関担当者、事務局で構成され、テーマに基づいて協議が行われる。関係機関と学校との円滑な連携や情報の共有の貴重な機会であり、課題のある事柄について、適宜助言を行った。
4　その他		なし

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　自前イラストでちょこっとSST	共著	平成25年6月	明治図書出版　第１５４号 「特別支援教育の実践情報6-7月号」	特別支援教育についての実践を掲載した著書 Ｂ5判　全73頁 共著者：太田篤志、高山恵子、安藤隆男、岡野由美子、 他３３名 担当部分：（ｐ４０～ｐ４１）視覚障害児支援を行いながら、SST に取り組んだ実践である。自閉症のある児童が、通常の学級における交流学習や休み時間を過ごす中でいろいろなトラブルや困難に出会う経験を積むことが多いが、様々な場面を想定したソーシャルスキルトレーニングを行った具体的な支援を述べた。
2　間違い探しイラストをつかって～たのしくおはなしコミュニケーション～	共著	平成27年7月	明治図書出版　第１６８号 「特別支援教育の実践情報10-11月号」	特別支援教育についての具体的指導方法実践を掲載した著書 B5版　全72頁 共著者：大塚　晃、樋口一宗、河村　久　、岡野由美子 他３１名 ・担当部分：（p４７）人とのかかわりについて、順序性のあるイラストを使って会話やコミュニケーションを高める実践について4枚のイラストを用いて、その順序を考える中で、自閉症スペクトラムのある児童が、物事の事象の前後を考えることや、並べ方について説明をするなどの会話と通して、コミュニケーションの向上を目指した実践について述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　小中学校の先生のための特別支援教育ハンドブック	共著	平成30年12月	兵庫県立特別支援教育センター	小中学校の先生のための、特別支援教育に関する基本的な内容をまとめた教師向きの著書である。特別支援教育に関する国の動向や法的な事項、特別支援学級担任のための、種別ごとの障害特性とその指導・支援、教科書選定、教育課程の組み方、通級による指導の制度、教育課程の編成と指導方法、自立活動のあり方、個別の教育支援計画、個別の指導計画の立て方などを指導主事としてまとめた。 A４判　全 96 頁 共著者：沖汐守彦、松本武、堀井美佐、藤原しをり、浅野　尚佳、岡野由美子 担当部分：P11 ～ 26, P45 ～ 50, P73 ～ 78, P83～88, P90～91 について共著、抽出不可
4　特別支援教育総論	共著	平成31年3月	ERP 出版株式会社 全 70 頁	小中学校の特別支援の各障害についての特徴の説明。障害の応じた教育課程編成とその指導法について論じた。 A6 判　全　　頁 共著者：中島栄之介 担当部分：　　抽出不可
（学術論文） 1．読み書きにつまずきのある児童への多感覚活用の視点からの支援～触覚教材を用いて～	単著	平成25年3月	大阪教育大学特別支援教育特別専攻科修了論文集 A4判26頁	読み書きにつまずきのある児童の視覚認知を助けるために、触覚を生かした文字指導について、考察した。通常の読み教材と、読みのまとまりごとに区切りのある下線をつけたものと、その下線にふくらみをもたせたものの3種類を用意し、それぞれの読み速度を計測し、触覚教材の有効性について検討した。
2．発達障害の可能性のある児童への読み書きのつまずきに対する 多感覚活用の視点からの支援に関する一考察	単著	平成30年8月	人間教育第１巻第７号 （P199～210）	通常学級に在籍する発達障害の可能性のある児童の、読み書きのつまずきに対する支援方法について考察した。視覚入力を補助する手段として、触覚教材を用いて読みの困難さを軽減することができ、触覚教材は、読みの速度を遅くする傾向があるが、読みやすさを感じさせる傾向もあり、注意を持続しながら読むことで読み誤りが減り、学習効率に影響を及ぼす可能性が示唆された。
3．知的障害のある児童生徒の教育課程と指導法について ― 新学習指導要領の改訂に視点を当てて ―	単著	平成30年9月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」 第1巻第8号 （p249～260）	教育課程の編成について、特別支援教育を巡る学習指導要領の動向を、確認し、教育課程編成の基本的な理念、編成の手順について具体的に論じる。本稿は特別支援の知的障害についての教育課程について、具体的な指導方法における配慮事項にも言及する。その中でも、自立活動の支援と評価について、具体的な事例を挙げて、筆者が多くの学校を参観し、教育課程と指導法を表裏一体として指導をしてきた、新たな視点を加味し論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 学習障害や注意欠陥多動性障害の可能性のある児童の読み支援への一考察～注意、集中力へのアプローチに視点をあてて～	単著	平成30年10月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」第1巻第9号（p281～287）	読みに躓きのある児童の中には、注意欠陥・多動性障害などの注意・集中に課題のある場合がある。触覚教材によって、読み教材に集中をしながら読むことで、内容の理解が進む可能性があることを実験により考察した。
5. 特別支援教育の視点から見た学習指導要領の改訂のポイント① ～インクルーシブ教育システム構築のために～	共著	平成30年10月	ERP 出版株式会社 p 14～p15	改訂が行われた小学校・中学校学習指導要領における、特別支援教育に関する内容について整理し、その上で今後取り組むべき課題と重要事項について論じた。
6. 特別支援教育の視点から見た小中学校学習指導要領の改訂のポイント② ～教育課程と自立活動～	共著	平成30年11月	ERP 出版株式会社 P14～15	新学習指導要領における、特別支援学級、通級による指導の中で、必要に応じて指導することとなっている「自立活動」について、具体的な改訂内容を指導・支援に生かすための効果的なな考え方や指導方法について論じた。
7. アセスメントに基づいた特別の教育課程設定についての一考察～特別支援学級における、個別の指導計画を生かす日々の教育活動～	単著	平成30年11月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」第１巻第１０号(p299～308)	新学習指導要領においては、特別支援学級の教育課程の編成について、その手順や指導すべき内容などが規定された。その実態把握、個別の指導計画、そして特別の教育課程を密接に関連させた事例を提示し、そのあり方について論じた。
8. 特別支援学級担任への研修体制に関する一考察 ～特別支援教育センター研修講座の充実について～	単著	平成30年12月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」第2巻第1号(p1～10)	特別支援学級の担任特別支援学級担当教員等研修講座の充実に向けた取り組みの現状と今後の課題について考察した。新任特別支援学級担当教員に対する研修内容を充実するために、教職員のニーズについてアンケートを実施し、講座の内容を充実に反映した実践例や研修のあり方についても論じた。
9. 知的障害のある児童生徒の教科等を合わせた指導に関する一考察―障害特性の強みを生かした指導の在り方―	単著	平成31年1月	奈良学園大学研究紀要第１０集	知的障害のある児童生徒に対する、効果的な教科等を合わせた指導のあり方について、具体的な指導内容や、効果的な指導のあり方とはどのようなものか、具体的指導事例を挙げ、論じた。
10. 障害特性に応じた指導方法の工夫～自閉スペクトラム症のある児童生徒の自立活動について～	共著	平成31年1月	奈良学園大学研究紀要第１０集	障害特性に応じた指導方法の工夫として、自閉スペクトラム症のある児童生徒への自立活動について、具体的指導事例を挙げ、特別支援学級および通級による指導における、実態把握や目標の設定、自立活動の指導内容の選定について論じた。 共著者：松田智子
11. 通常の学級における日常活動としてのビジョントレーニング～「見る」力の高まりから、読み書き能力の向上へ～	共著	平成30年12月	日本LD学会第2回研究集会抄録p 3～4	通常学級におけるビジョントレーニングの取り組みの効果について、様々なアセスメントから検証した。学級集団としての取り組みが学級全体に及ぼす効果と、個の変容について、データから分析を行い、考察したことについて発表した。 共著者：奥村智人　増本利信

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12. 特別支援教育におけるICT活用に関する一考察 ～障害のある児童生徒の支援ツールとしてのICT～	単著	平成31年6月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」第2巻第5号(p135～143)	特別支援教育におけるICT活用の有効性があることから、法改正や学習指導要領の改訂においてどのように転換が行われているか、また、効果的なICT活用について実践例をあげて論じた。
13. 通常の学級における、障害理解教育に関する授業実践～発達障害のある児童生徒理解を図る授業実践事例を通して～	単著	令和元年7月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」第2巻第6号（p145～153）	通常の学級において、発達障害のある児童生徒についての障害者理解教育の実践を行った事例を挙げ、その実践方法や成果、課題、発達障害についての障害理解教育の重要性について論じた。
14. 知的発達がグレーゾーンに位置し、自閉スペクトラム症も示唆される、入室渋り児童に対する、般性強化刺激を活用した支援の実践	共著	令和元年8月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル「人間教育」第2巻第7号（p165～173）	在籍教室への入室渋りを見せる4年生男児に、通級指導教室において教室復帰のための支援を行い、目標を設定し、トークンエコノミーシステムを実施し、行動改善が図れた事例について、検討を行った。 共著者：増本利信
15. 特別支援学級におけるキャリア教育に関する一考察～地域の特色を生かした日々の教育活動から～	単著	令和元年7月	奈良学園大学研究紀要第11集	小学校の特別支援学級に在籍する知的障害のある児童のキャリア教育の実践について、実際の生活単元学習、自立活動の指導事例をもとにその推進方法について論じた。
16. 通級による指導担当教員の研修体制に関する一考察～特別支援教育センターの研修講座の実践から～	単著	令和2年3月	奈良学園大学研究紀要第12集	通級による指導の担当教員のスキル向上を担う担当教員悉皆研修の実践について、受講者のアンケートをもとにそのニーズや課題について検討し、講座の内容に反映した研修のあり方について論じた。
（その他） 「教材作成」 1　特別支援教育校内研修資料	単著	平成23年7月	兵庫県佐用郡佐用町立上月小学校 A4判10頁	知的障害、肢体不自由、自閉症のある児童の基本的な状態の理解と実態把握の方法、指導・支援の工夫について指導した。自閉症の３つ組の障害と言われる特性の理解と具体的支援の例について、校内での支援のあり方について指導した。特別支援学級在籍の児童が、交流学級で過ごすときの支援の方法や、関わり方の基礎的な内容について論じた。
2　教育実習の手引き	単著	平成23年8月	兵庫県立佐用郡上月小学校特別支援教育部会 A4判10頁	教育実習生が特別支援学級で何日か実習する。その実習生を対象に、「特別支援教育とは何か」「知的障害の教育課程と指導法」「肢体不自由児の教育課程と指導法」「発達障害とは何か」について指導した教材資料。
「指導助言・講話資料」 1　行動の理由をもとに	単著	平成24年8月	長崎県南島原市社会福祉法人コスモス A4判15頁	長崎県の児童発達支援センター職員と保護者を対象に、自閉症スペクトラムなどの障害のある子どもたちの支援のポイントやアセスメントについて、解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　教室で、家でできるビジョントレーニング	単著	平成25年1月	加古川市広汎性発達障がい親の会 A4判16頁	校内における、ビジョントレーニングの方法とその効果について、放課後の支援事例について子どもの姿で解説した。
3　通常学級における発達障害のある児童への支援の実態	単著	平成25年8月	加古川市広汎性発達障がい親の会 A4判9頁	通常学級における、発達に躓きのある児童の、読み書きの向上を図るために取り組んだ、アセスメントとビジョントレーニング、支援の方法について指導と評価を関連付けて論じた。
4 特別な支援を要する児童生徒の理解と支援について	単著	平成26年7月	大和郡山市教育委員会 A4判10頁	奈良県の教諭 30 名を対象に、通常の学級に在籍する発達障害のある児童生徒の基本的理解とその具体的な指導・支援の方法について読み書きの躓きの要因について、事例をもとにした指導とその効果について分析し方向性を提示した。
5　「見る」アセスメントから支援を考える	単著	平成26年8月	一般社団法人ゆうありてい A4判15頁	発達につまずきのある児童の「見る」力についてのアセスメントの意味と方法、解釈について具体例を示してまとめた。
6　発達障害のある児童の「見る」アセスメントから支援を考える。	単著	平成27年6月	播磨発達支援研究会 A4判12頁	「見る」ことから「読む」ことへの一連のメカニズムとそのつまずきについて、アセスメントの方法とその支援についてなど、具体的な例を示し、工夫してまとめた。
7 特別な支援を要する児童生徒の指導」～自立活動のあり方～」	単著	平成 27 年 7 月	兵庫県佐用町特別支援教育研修会 A4判8頁	兵庫県管理職及び教諭 20 名を対象に特別支援学級の教育課程の法的根拠と、教育課程の編成理念、知的障害及び肢体不自由のある児童生徒の教育課程の構造と指導方法について述べた。自立活動の区分、項目の詳細の説明と具体的な指導内容の事例を挙げて、資料準備して助言を行った。
8　発達障害のある子どもの理解と支援～子どもの「見る」力のアセスメント～	単著	平成27年8月	天理市教育委員会 A4判10頁	天理市立井戸堂小学校管理職及び教諭 12 名を対象に、「見る」力や「読み書き」につまずきのある学習障害の児童生徒の実態を把握するためのアセスメント「WAVES」の内容と、基本的な解釈の方法をまとめた。
9　視知覚関連のアセスメントについて～WAVES の結果の解釈～	単著	平成27年6月	姫路市教育委員会 A4判10頁	兵庫県立特別支援学校教諭及び特別支援担当教諭 14 名を対象に、読み書きに躓きのある児童生徒の指導・支援について「読む」ために必要な視知覚、認知能力、情報処理過程の理解と、「見る」力のアセスメントの方法について、また、その具体的な支援について、まとめた。
10 合理的配慮の提供とユニバーサルデザインによる授業について	単著	平成 27 年 7 月	兵庫県教育委員会 特別支援課 A4判10頁	兵庫県臨時的任用教員 60 名を対象に、通常の学級に在籍する学習や生活につまずきのある児童生徒の理解と、その指導・支援方法についてユニバーサルデザインの考え方に基づく学級づくり、学習指導の方法の工夫と、個別に配慮の必要な児童生徒の行動、学習面の困難さの理解を深めるために資料を準備して指導した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11 特別な支援を要する児童生徒の自立活動のあり方	単著	平成28年8月	兵庫県たつの市教育委員会 A4判16頁	兵庫県たつの市立小中学校特別支援学級担任 30 名を対象に特別支援学級の教育課程の法的根拠と、教育課程の組み方、知的障害及び肢体不自由のある児童生徒の教育課程の構造と指導法について述べた。「合わせた指導」の具体的内容について「自立活動」の区分、項目の詳細の説明と具体的な指導内容の事例を挙げてまとめた。
12 発達障害のある児童生徒の理解と学級づくり	単著	平成28年8月	兵庫県神河町教育委員会 A4判23頁	神河町小中学校全教職員、教育委員、教育委員会担当者約８０名を対象に、通常の学級の担任に必要な特別支援児童生徒理解のあり方やアセスメントについて論じた。児童生徒の問題行動の背景にある原因についての理解と、その上にたった指導法・支援のあり方についてまとめた。
13 通級指導のあり方～教育課程と自立活動のあり方～	単著	平成 28 年 9 月	兵庫県西播磨地区教育事務所 A4判23頁	兵庫県西播磨地区小中学校生活支援教員及び特別支援学校教員を対象に、通級による指導について、その目的、対象となる児童生徒、指導時間等の法的根拠に基づいた制度の理解、目標と評価について指導した。さらに対象となる児童生徒の実態把握の方法と、自立活動の具体的な内容について指導例を準備して講演した。
14 通級指導教室と通常学級の連携の意義とその方法について	単著	平成29年1月	兵庫県揖龍地区教育委員会 A4判17頁	特別支援教育コーディネーター40 名を対象に 通級による指導について、その目的、対象となる児童生徒、指導時間等の法的根拠に基づいた制度の理解、目標と評価について指導した。さらに対象となる児童生徒の実態把握の方法と、自立活動の具体的な内容について指導例をあげてまとめた。
15 保護者との連携	単著	平成29年6月	兵庫県立特別支援教育センター パワーポイント 15 枚	特別支援学校教職経験２年目の教員 70 名を対象に、障害のある子どもの保護者の心理的側面の理解と、よりよい協働のあり方について、事例をあげ、保護者との連携が教育に及ぼす役割を論じた。
16 授業のユニバーサルデザイン化	単著	平成29年6月	兵庫県立但馬農業高等学校 A4判8頁	兵庫県立但馬農業高等学校の教員等約 40 名を対象に、発達障害のある生徒の基本的理解と、どの生徒にもわかりやすい授業という視点での授業改善の工夫について、ユニバーサルデザインの考え方について具体的に論じた。
17 教育課程と自立活動	単著	平成 29 年 6 月	兵庫県立特別支援教育センター A4 判 11 頁	通級による指導の制度、目標、指導内容について学び、自立活動について、区分、項目ごとの具体的指導内容について、資料を作成し講義を行った。
18 特別な支援を要する児童・生徒の理解と支援～スクールアシスタントとしての支援 Vol.1～	単著	平成 29 年８月	猪名川町教育委員会 A4 判 12 頁	猪名川町スクールアシスタント 15 名を対象に、通常学級に在籍する発達障害のある児童生徒についての理解・支援のあり方についてと、学級担任との連携のあり方や大切さについて、資料にまとめた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19 特別な支援を要する児童・生徒の指導、支援	単著	平成 29 年８月	猪名川町教育委員会 A4 判 13 頁	猪名川町小中学校初任教員を対象に、LD 等の心理的疑似体験を通して、書けない、読めないなどの困難さのある児童生徒の心理状態を理解するとともに、児童生徒の行動からその原因を探る方法について、演習を行った。
20 特別支援学校の学級経営と児童生徒理解	単著	平成 29 年８月	兵庫県立特別支援教育センター A4 判 11 頁	特別支援学校教職経験２年目の教員 70 名を対象に、特別支援学校の学級担任として、個別の指導、支援のあり方と学級集団の指導について、また、児童生徒の理解のあり方について、資料を作成した。
21 兵庫県の通級指導の現状と課題	単著	平成 29 年８月	播磨西地区サポートネット会議 A4 判 15 頁	播磨西地区の特別支援学校、高等学校、小中学校の管理職、特別支援教育コーディネーター等サポートネット会議の会員を対象に通級による指導に関する現状と、通級による指導が児童生徒の自立と社会参加に対してどのような役割を担っているのか、ということを、学習指導要領や文部科学省の調査結果等を示した。
22 新学習指導要領と個別の指導計画	単著	平成 29 年８月	兵庫県教育委員会播磨西教育事務所 A4 判 15 頁	播磨西地区の特別支援学級担当教員、通級指導教室担当教員 170 名を対象に、特別支援学級の教育課程の編成のポイントや、自立活動の区分と項目の整理、特に知的障害のある児童生徒の教育課程の構造について、資料を作成した。
23 視知覚関連のアセスメントについて ～WAVEWS の結果の解釈	単著	平成 29 年９月	姫路市教育委員会 A4 判 24 頁	兵庫県立特別支援学校のコーディネーター、姫路市立の小中学校の通級担当者 18 名を対象に、「見る」力と「読み書き」に躓きのある児童生徒の実態を把握するためのアセスメント「WAVES」の内容と基本的な解釈についての講義を行った。また、その結果についての評価、解釈と事例検討について、資料を作成し、講義を行った。
24 特別な支援を要する児童生徒の指導・支援について	単著	平成 29 年９月	佐用町教育委員会 A4 判 17 頁	兵庫県佐用町の小中学校特別支援教育コーディネーター、教育委員会、福祉関係等各関係機関の 35 名を対象に、学習指導要領の改訂のポイントについてと、コーディネーターとしての校内支援のあり方、関係機関との連携のあり方等について、資料にまとめた。
25 通級による指導に期待されること～自立活動の具体的指導方法～	単著	平成 29 年 12 月	丹波市教育委員会・篠山市教育委員会 A4 判 21 頁	篠山市、丹波市の通級指導教室担当者、教育委員会指導主事、特別支援学校コーディネーター25 名を対象に、通級による指導における、現場や高等学校における通級による指導の兵庫県における動向についてと、児童生徒の実態把握を元にした自立活動の選定や指導について、資料を作成した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
26 やってみよう事例検討～アセスメントから指導計画へ～	単著	平成 29 年 12 月	特別支援教育士長崎支部会 A4 判 11 頁	特別支援教育士長崎支部会員 70 名を対象に、学習や生活に困難を示す児童生徒のアセスメントから、指導計画を作り出すための、ケース検討、 WISC-Ⅳ、DTVP2 などのフォーマルアセスメントと、児童生徒や担任、保護者等からの聞き取り、観察を総合的にアセスメントし、通級指導教室、通常学級、保護者それぞれについて、指導目標を考える方法等について資料を作成した。
27 特別な支援を要する児童・生徒の理解と支援～スクールアシスタントとしての支援～Vol.2	単著	平成 29 年 12 月	猪名川町教育委員会 A4 判 10 頁	猪名川町スクールアシスタント 15 名を対象に、LD 等の心理的疑似体験を通して、書けない、読めない困難さのある児童生徒の心理状態を理解するとともに、２学期を終えた時点での振り返りと３学期に向けての目標の設定について考えた。また、行動の理由を見るポイントについて、資料を作成した。
28 特別支援学級の教育課程の編成や年間計画について	単著	平成 30 年１月	兵庫県教育委員会事務局淡路教育事務所 A4 判 15 頁	淡路地区小中学校特別支援学級担任、特別支援教育コーディネーター50 名を対象に、特別支援学級の教育課程の構造についてと、自立活動の目標と内容、指導について、学習指導要領の海底のポイントについて、資料を作成した。
29 特別な支援を要する児童の、特別の教科　道徳の指導について	単著	平成 30 年２月	兵庫県赤穂郡上郡町立山野里小学校 A4 判 11 頁	上郡町立山野里小学校の教職員 24 名を対象に、特別支援学級在籍児童の、交流学級における「特別の教科　道徳」について、特別支援学級担任の支援についてや、交流学級担任との連携のあり方などについて、資料にまとめた。
30 教育課程と自立活動	単著	平成 30 年６月	兵庫県立特別支援教育センター A4 判 11 頁	兵庫県内の小中学校通級指導教室担当教員 73 名を対象に、通級による指導の制度、目標、指導内容について学び、自立活動について、区分、項目ごとの具体的指導内容について、資料を作成した。
31 障害に応じた教育課程の編成と自立活動の指導	単著	平成 30 年６月	兵庫県立特別支援教育センター A4 判 15 頁	兵庫県内の小中学校で、初めて特別支援学級の担当をする教員 500 名を対象に、特別支援学級の教育課程の編成について、障害特性の理解と、実態把握、自立活動の指導について、資料を作成し教育課程への理解を深めた。
32 障害特性の理解と支援のあり方について	単著	平成 30 年６月	兵庫県立東播工業高等学校 A4 判 15 頁	兵庫県立東播工業高等学校の教職員 24 名を対象に、発達障害の基礎的な理解と疑似体験を通じて生徒の心理状態を理解するとともに、効果的な指導、支援のあり方について、資料を作成し演習も交えた講義を行った。
33 学習指導要領移行期のポイントと個別の指導計画	単著	平成30年7月	兵庫県教育委員会播磨西教育事務所 パワーポイント 20 枚 A4 判 10 頁	兵庫県西播磨地区小中学校特別支援学級担任及び通級指導教室担当者 170 名を対象に特別支援教育に関する、学習指導要領改訂に沿った教育課程編成のポイントと、自立活動における個別の指導計画の作成について、資料を作成し実際の教育課程を比較分析し講演した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
34 進路についての合理的配慮	単著	平成30年8月	赤穂市立赤穂中学校 A4 判 10 頁	赤穂中学校教員及び管理職 30 名を対象に、中学校の通常学級に在籍する発達障害のある生徒についての理解・啓発を他の生徒に行う方法、進学に向けての合理的配慮の提供に関する適切な考え方についてまとめた。
35 特別支援教育の具体的な進め方	単著	平成 30 年 8 月	佐用町教育委員会 A4 判 16 頁	佐用町教育研究所所員、小学校・中学校教職員　30 名を対象に、学習指導要領の改訂のポイントと、各教科等の指導における配慮事項などの工夫や、指導・支援の工夫について、疑似体験や、スリットの作成など、事例や実技などを取り入れながら理解を深めるように資料を作成して講義を行った。
36 高等学校における発達障害のある子の理解	単著	令和元年６月	兵庫県立西脇北高等学校 A4 判 19 頁	兵庫県立西脇北高等学校教員約 40 名を対象に兵庫県教育委員会事業の一貫である「高等学校における通級による指導実践研究事業」の校内研修会で資料を基に、発達障害のある生徒の他、自傷行為、非行行為等様々な課題のある生徒指導面での対応とともに、発達障害を理解し、その指導について理解できるよう、疑似体験を取り入れるなどして講義を行った。
37 通常の学級における指導・支援について～通級による指導との効果的な連携～	単著	令和元年 7 月	相生市特別支援教育研修講座(相生市民会館) A4 判 24 頁	相生市学校園教職員 45 名を対象に、通常の学級に在籍する児童生徒の行動面のつまずきについて、応用行動分析の考え方をもとに行動の原因やその結果についての観察の方法、行動変容につながる指導について、資料をもとに講義を行った。通級による指導についても、位置付けや通常学級との連携について理解を図った。
38 特別支援教育コーディネーターの役割とは	単著	令和元年 7 月	姫路市立中学校特別支援教育コーディネーター研修会 A4 判 19 頁	姫路市内中学校教員、特別支援学校教員 70 名に、資料を配布して特別支援教育コーディネーターの業務の引き継ぎが十分でない、仕事が円滑に進められないなど様々な課題について論じた。校内の特別支援教育の推進においては、その引き継ぎの不十分さが弊害となっているケースもある。どのように円滑に業務を進めていけば良いか、実習を入れ、講義を行った。
39 WISC-Ⅳ等発達検査について詳しく知ろう	単著	令和元年 8 月	明石市特別支援研修講座 A4 判 19 頁	あかし市教育研修所特別支援教育受講者 12 名に、特別な支援を要する児童生徒が、その発達の凹凸やつまずきの要因を探るために医療機関等で実施される各種の検査結果の報告について、どのように読み取り支援に生かすかということについて、資料をもとに講義を行った。支援に生かす方法について理解を深めることができた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
40　LD、ADHD の児童生徒に対する支援等について	単著	令和元年 8 月	神崎郡小中学校特別支援教育研修会 A4 判 25 頁	神崎郡小中学校特別支援教育担当者等 40 名を対象に、発達障害のある児童生徒の指導、支援の具体的なあり方について、資料をもとに講義を行った。 障害特性の理解と、ユニバーサルデザインの授業の基本的な考え方等について理解啓発を図った。
41 特別な支援を要する子どもたちを「理解する」とは	単著	令和元年 8 月	佐用町教育研修所特別支援教育研修講座 A4 判 20 頁	佐用町小中学校教員 17 名に対し、特別な支援を要する児童生徒の発達検査等の所見をもとに、その困難さの理解と具体的な支援方法について、資料を作成し、講義を行った。障害理解を考えるために疑似体験等を取り入れ、正しく理解することの大切さについて資料をもとに講義をした。
42 すべての教職員のための特別支援教育をふまえた授業作り	単著	令和元年 8 月	太子町教職員研修 A4 判 19 頁	太子町立幼小中学校教職員 240 名を対象に、通常の学級に在籍する学習や生活に困難を示す児童生徒について、どのように観察し、つまずきの原因を探るかということや、通常学級の授業作りについて、事例をもとに実践的な内容として、資料をもとに論じた。
43 高等学校における通級指導について	単著	令和元年 8 月	高等学校における通級による指導実践研究事業校内研修会 （兵庫県立宝塚西高等学校） A4 判 19 頁	兵庫県立宝塚西高等学校教職員、保護者 40 名に、2 年目を迎えた高等学校における通級による指導の、その指導のあり方について校内で共通理解を深めるため、概要について講義を行った。自立活動や個別の指導計画に基づいた指導のあり方について、資料を作成し説明した。高等学校の特色により、課題は異なるものの、どこでも同様に発達障害のある生徒の存在や対応の重要性があることについて指摘した。
44 WISC-Ⅳ等、発達検査の結果から具体的支援につなげるために	単著	令和元年 10 月	あかし教育センター特別支援教育研修講座 A4 判 18 頁	明石市小中学校教職員約 50 名を対象に、発達検査の理解についての講義を行った。検査の所見は、特別な支援を要する児童生徒の保護者から情報提供として受け取り、目にする機会が多くなった現在の学校現場であるが、それを読み解き、支援につなげることができなければ活用できたとは言い難い。その基本的な解釈の仕方や、その支援方法について事例をもとに説明した。
45 早期からの教育相談・支援体制の充実に向けて	単著	令和元年 11 月	但馬地域特別支援連携協議会　指導助言 A4 判 2 頁	但馬地域特別支援連携協議会委員 26 名で、早期からの教育相談や支援体制について、各関係機関から委嘱された委員により、情報共有がなされた。就学前の段階で、どれくらい保護者に情報を発信し、より適切な支援を受けられる関係機関と連携をとるかという課題と、連携先として、特別支援学校などのリソースの活用について等、助言を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
46 発達段階に応じた通級の指導	単著	令和2年1月	西播磨地区高等学校における通級による指導合同研究会（兵庫県立太子高等学校） A4判19頁	兵庫県西播磨地区小中高等学校教職員、福祉関係担当者等78名に対し、発達段階に応じた通級指導のあり方について説明した。各学校種別ごとに、通級による指導が行われている。それぞれの発達段階を理解し、今在籍している学校の先にどんな教育が展開されるのか、将来の社会参加に向けてどんな力が必要となるのかなどについて、資料を作成して論じた。
47 特別な支援が必要な生徒への対応について	単著	令和2年2月	兵庫県高等学校生徒指導協議会阪神支部協議会（兵庫県立宝塚西高等学校） A4判19頁	阪神地区生徒指導担当教員60名を対象に、問題行動等、生徒指導上課題となる生徒の行動の原因となっていることがある発達障害について、どのように理解し、対応すればよいかということについて、資料をもとに論じた。
48 インクルーシブ教育と合理的配慮	単著	令和元年2月	高等学校における通級による指導実践事業　校内研修会（兵庫県立西脇北高等学校） A4判13頁	兵庫県立西脇北高等学校教職員40名に、年度内の校内研修の2回目を実施した。通級による指導の対象となる生徒の理解について、応用行動分析の考え方をもとに、事象に対して注意や叱責をするのではない関わり方について資料をもとに講義を行った。
49 通級指導教室と通常学級の効果的な連携について	単著	令和2年2月	神崎郡中学校特別支援教育研修会 A4判15頁	神崎郡中学校通級指導担当者等約20名を対象に、中学校における通級による指導のあり方について講義を行った。また、通常学級との連携についてその意義や具体的指導について、自立活動の考え方や将来の自立と社会参加でのつなぎ、高等学校における通級による指導の説明などを資料をもとに行った。
「学会発表等」				
1「通常学級で取り組んだ児童の「見る力」へのアプローチ～日常活動として取り組んだビジョン・トレーニングとアセスメント～」	―	平成23年10月	日本LD学会第20回大会 跡見学園女子大学 ポスター発表 抄録p268-269	毎朝約５分間のビジョントレーニングを数ヶ月行った通常学級の児童の眼球運動の向上の有無を検証約２ヶ月間、ビジョントレーニングを行ったトレーニング実施群と、トレーニング非実施群について、眼球運動に関わるアセスメントをトレーニングの前後で行い、その効果について提案した。
2「通常学級で取り組んだ児童の「見る力」へのアプローチ２～日常活動として取り組んだビジョン・トレーニングとアセスメント～」	―	平成24年10月	日本LD学会第21回大会 （宮城教育大学） ポスター発表 抄録p432-433	前年度の児童の眼球運動の向上の有無を検証研究結果を基に、さらに細かいアセスメントを行い、ビジョントレーニングの効果について検証を行った。５年生と６年生において、実施群と非実施群において、約５ヶ月のビジョントレーニングを行い、その効果と仮説について新たな提案をした。
3「通常学級で取り組んだ児童の「見る力」へのアプローチ３～日常活動として取り組んだビジョン・トレーニングとアセスメント～」	―	平成25年11月	日本LD学会第22回大会（パシフィコ横浜） ポスター発表 抄録 p474-475	前年度から継続して約１年間、児童の眼球運動の向上の有無を検証トレーニングをした結果の分析と検証した。取り組みの結果、遠見視写検査について、有意差が認められ、トレーニングの有用性が見られたことを提案した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4「読み書きにつまずきのある児童のアセスメントと指導～オプトメトリスト、通級、通常学級３者の立場から～	—	平成 28 年 11 月	日本 LD 学会第 25 回大会 （パシフィコ横浜） 自主シンポジウム JE１ WEB 論文集のため冊子資料なし	読み書きに躓きのある児童生徒のアセスメントと指導について、通常の学級の教員の立場から発表した。毎朝のビジョントレーニングの結果と、通常の学級でできる指導について、通級による指導との連携について、提言を行った。 シンポジスト： 岩永竜一郎、奥村智人、増本利信、岡野由美子
５　「特別支援教育における読解力向上の試み～読み書き困難から視覚障害、聴覚障害に至るまで～	—	平成 30 年 10 月	日本特殊教育学会 56 回大会自主シンポジウム （グランキューブ大阪） 冊子資料ｐ44	読み書きに躓きのある児童へのアセスメントと指導について、実践発表。発達段階を踏まえた、個々の児童への指導・支援のあり方についてまとめた。 シンポジスト：川崎聡大、加藤哲則、奥村智人、安藤明伸、深谷圭助、樋口一宗、荻布優子、松崎泰
６「通級指導教室のこれまでとこれから」 ～小学校、中学校、高等学校の LD 通級担当者による、現場からの提言～	—	平成 30 年 11 月	日本 LD 学会第 27 回大会自主シンポジウム （新潟コンベンションセンター） 冊子資料ｐ59－60	高等学校における通級による指導が、平成 30 年度から始まったことを踏まえ、通級による指導の担う役割と効果的な指導についての提言。ある程度軌道に乗った小中学校の通級による指導、モデル校として数年取り組んだ高等学校の通級指導教室担当者から、現場における実情や課題を提案し、総括する。 シンポジスト：上野一彦、増本利信、高橋範充、桂志保、岡野由美子
７「通級指導教室のこれまでとこれから第２弾」～小学校、中学校、高等学校の LD 通級担当者による、現場からの提言～	－	平成 31 年 11 月	日本 LD 学会第 28 回大会自主シンポジウム （パシフィコ横浜） 冊子資料 p67-68	通級による指導の制度が小学校から高等学校まで整った。これにより、発達段階を踏まえた通級による指導の重要性が増している。それぞれの通級指導教室担当者から、現在の課題や今後の在り方について提言をし、総括する。 シンポジスト：岩永竜一郎、増本利信、高橋範充、荒木弘行、岡野由美子

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　　岡 村　季 光

研　　究　　分　　野	研究内容のキーワード
心理学	青年心理学，教育心理学，居場所，対人関係，自己

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　教育方法の実践例 1.キャリア教育の実践	平成 16 年 ４ 月 ～ 平成 26 年 3 月	奈良保育学院にて進路指導を継続的に行うため，常勤教員全員がオムニバスに担当する「課題研究」を開講した。授業では，学生の基礎能力向上のため履歴書作成（含．自己ＰＲ，志望動機），業者添削による小論文指導，漢字の学習を主に担当した。１回生後期～２回生前期に至る開講を行い，学生の進路への意識づけを喚起することができた。
2.障がいへの理解及びＩＴ技能向上への実践	平成 23 年 ４ 月 ～ 平成 26 年 3 月	奈良保育学院の学生を対象に障がいへの理解及びＩＴ技能向上を目的として「情報処理法」担当教員と連携し，「精神保健」並びに「保育・教職実践演習」授業内で継続的にＰＣ並びに Word，Web メール，PowerPoint を使用させた。具体的には課題として発達障がいに関する書籍を自らで探して少なくとも３冊以上読み，その内容及びコメントを所定様式の Word で入力し，ファイルを Web メールにて添付し送付するように求めた。さらに同種の書籍を読んだ者同士ペアを組ませ，PowerPoint を作成・発表を求めた。知的障がい児・者施設実習の前後に当該実践を行った結果，学生の障がいに対する理解が進み，さらにＰＣを用いたレポート及びメールの作成スキル，プレゼンテーションスキルが向上した。
3.ピアヘルパー対策講座の担当	平成 23 年 10 月 ～ 平成 26 年 3 月	奈良保育学院にて平成 23 年度後期より３年間ピアヘルパー資格取得志望者の募集並びに対策講座の担当を行い，カウンセリング概論・カウンセリングスキル・青年期の課題とピアヘルパーの留意点について授業を行った。その結果，３年間で志願者 83 名中 66 名の合格者，合格率約 80%の実績を出した。
4.初歩の心理統計学を用いたデータ分析処理の実践	平成 28 年 ４ 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学にて平成 28 年度より開講した「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」において，高校の数学Ⅰの知識を利用した初歩の心理統計学を用い，調査や実験を通して取得したデータを分析することで，心理学研究法を学んだ。その結果，心理学研究論文に記載されているデータの意味を理解し，卒業研究に必要な文献購読の初歩的スキルが向上した。
5.調査及び統計解析に基づく卒業論文の指導	平成 29 年 ４ 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学にて平成 29 年度より開講した「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」「卒業研究」において，文献による先行研究の概観，仮説に基づく調査や実験の実施，統計解析における実証的検討及び考察を通して卒業論文の執筆指導を行った。その結果，平成 29 年度は 4 名，平成 30 年度は 3 名，平成 31（令和元）年度は 1 名の学生が卒業論文を完成し，いずれの学生もデータに基づき現象の把握及び考察を行うアカデミックスキルの育成を行うことができた。

２　作成した教科書，教材 1.教育心理学テキスト共同執筆 『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』（再掲）	平成 21 年 10 月～平成 28 年９月	『改訂版 教育心理学入門－心理学による教育方法の充実－』を共同執筆した。帝塚山大学で担当する「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）にて当該教科書を使用した。
2.発達心理学テキスト共同執筆 『やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－』（再掲）	平成 23 年 10 月～平成 26 年３月	『やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－』を共同執筆した。奈良保育学院で担当する「保育の心理学Ⅰ」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）にて当該教科書を使用した。
3.教育心理学テキスト共同執筆 『よくわかる！教職エクササイズ　教育心理学』（再掲）	平成 30 年４月	『よくわかる！教職エクササイズ　教育心理学』を共同執筆した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 1.奈良学園大学における授業満足度アンケート結果	平成 29 年度	前期は講義内容・方法に関して全体平均 3.25 に比し当該教員の平均は 3.38～3.41 であり，満足度に関して全体平均 3.38 に比し 3.39～3.55 であった。 前期は講義内容・方法に関して全体平均 3.30 に比し当該教員の平均は 3.35～3.58 であり，満足度に関して全体平均 3.41 に比し 3.38～3.80 であった。
2.帝塚山大学における授業満足度アンケート結果	平成 31（令和元）年度	教員の授業運営についての項目（７項目，４件法）は，前期において教員全体の平均 3.29 に比し当該教員の平均は 3.34 であり，10 項目全てが教員全体の平均より 0.01～0.22 ポイント上回った。 後期において教員全体の平均 3.33 に比し当該教員の平均は 3.63 であり，10 項目全てが教員全体の平均より 0.19～0.43 ポイント上回った。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 1.奈良保育学院における教育相談業務	平成 13 年４月～平成 26 年３月	奈良保育学院にて学業成績不振者本人及び保護者を呼び出し，学校心理学の見地に基づく学業指導を行った。また，学校不適応を訴える学生の相談業務を随時行い，同時に予防的教育相談業務として遅刻・欠席が目立つ学生等，いわゆる“気になる”学生の把握及び対応を常勤教職員同士で連携を図りながら行っている。
2.奈良女子高等学校への出講	平成 21 年４月～平成 26 年３月	学校法人白藤学園の系列である奈良女子高等学校保育コースにて「保育演習」の授業を各学年に週に１時間担当することを拝命した。１・２年生には発達心理学及び教育心理学の基礎的内容を教授し，３年生には教育実習及び福祉を専門とする教員と連携し，各自の専門性に応じた授業の展開を企画・実践している。
3.奈良学園大学における学生支援センターのケース会議に参加	平成 26 年４月～平成 31 年３月	奈良学園大学で、高校からの環境の激変や発達障害等による学生問題行動事象に対して、医療機関と連携して、学生のカウンセリングを継続的定期的に担当した。また該当学生にかかわる教員全員に対し「学生指導上の配慮の手紙」を発行するなどして、カウンセリング効果を組織的に実効あるものにするよう指導的役割を果たした。また、関係者が集まり該当学生につき論議するケース会議を月に１回の割合で定期的に主催した。

5　その他 1.奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科における教育実績	平成 12 年 4 月～平成 26 年 3 月	奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科にて（平成 12 年４月～非常勤講師，平成 13 年４月～平成 26 年３月教育職員として），以下の科目を担当した。 「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（平成 12 年４月～平成 26 年３月。平成 23 年 10 月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「発達心理学（現．保育の心理学Ⅰ）」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）において人間の様々な諸側面の生涯発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に人間のライフサイクルや発達段階及び発達課題について理解させる教育効果があった。 「教育心理学」（平成 12 年 10 月～平成 26 年３月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「教育心理学」（専門科目，１年次配当，半期，必修２単位）において教育・保育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育・保育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（平成 13 年４月～平成 26 年３月。平成 23 年４月～科目名変更） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅰ（現．保育の心理学Ⅱ）」（専門科目，１年次配当，半期，必修１単位）において幼児の心的理解の方法に関する内容の授業を行い，それによって，学生に子どもの発達や知的能力，性格に関するアセスメント及び保育への貢献について理解させる教育効果があった。 「精神保健」（平成 13 年４月～平成 23 年９月） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「精神保健」（専門科目，２年次配当，半期，必修２単位）において子どものメンタルヘルスに関する授業を行い，それによって，学生に発達障がいについて理解させる教育効果があった。 「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）」（平成 13 年 10 月～平成 26 年３月。平成 24 年 10 月～科目名変更予定） 奈良保育学院 教育保育専門課程 保育科の「保育臨床心理学Ⅱ（現．カウンセリング概論）（専門科目，２年次配当，半期，必修１単位）においてカウンセリングの理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生にカウンセリング・マインドを育成する教育効果があった。
2.帝塚山大学経営情報学部経営情報学科における教育実績	平成 17 年 10 月～平成 24 年 3 月まで	帝塚山大学 経営情報学部経営情報学科の非常勤講師として，以下の科目を担当した。 「教育心理学」（平成 17 年 10 月～平成 24 年３月まで） 帝塚山大学 経営情報学部の「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）において教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。

帝塚山大学経営情報学部経営情報学科における教育実績（続き）		「生徒・進路指導論」（旧．教育心理学Ⅱ）（平成 18 年４月～平成 23 年９月まで） 帝塚山大学 経営情報学部の「生徒・進路指導論」（旧．教育心理学Ⅱ）（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育現場における生徒・進路指導の理論と実際の現場の様子を紹介する授業を行い，それによって，学生に教育における生徒・進路指導のあり方について理解させる教育効果があった。 「教育相談」（平成 18 年 10 月～平成 24 年３月まで） 帝塚山大学 経営情報学部経営情報学科の「教育相談」（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリング・マインドの必要性について理解させる教育効果があった。
3. 帝塚山大学現代生活学部居住空間デザイン学科における教育実績	平成 22 年 4 月～現在に至る	「教育心理学」（平成 22 年４月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部居住空間デザイン学科の「教育心理学」（教職科目，２年次配当，半期，必修２単位）において教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「教育相談」（平成 22 年 10 月～現在に至る） 帝塚山大学 現代生活学部居住空間デザイン学科の「教育相談」（教職科目，３年次配当，半期，必修２単位）において教育相談に関する理論及び実践に関する内容の授業を行い，それによって，学生に教育相談の意義とカウンセリング・マインドの必要性について理解させる教育効果があった。
4. 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績	平成 26 年 4 月～現在に至る	「教職表現力演習Ⅰ」（平成 26 年４月～平成 29 年３月まで） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教職表現力演習Ⅰ」（専門科目，１年次配当，通年，必修２単位）において，新聞記事や評論文等を参照する，あるいは講話を聴き文章を作成する授業を展開した。それによって，学生に言語活動の聴く・読む・話す・書く能力のうち特に「書く力」である「文章表現力」の基礎を身につける教育効果があった。 「教職表現力演習Ⅱ」（平成 27 年４月～平成 29 年３月まで） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教職表現力演習Ⅱ」（専門科目，２年次配当，通年，必修２単位）において，アカデミックな文章を読み，書くためのトレーニングを行った。具体的には，文章の論理性の理解，データの読み方，書籍輪読，内容発表およびディスカッションである。それらの取り組みによって，学生に言語活動の聴く・読む・話す・書く能力が養われ，特に「書く力」である「文章表現力」を身につける教育効果があった。

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績（続き）		「教育心理学Ａ（初等）」（平成 27 年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育心理学Ａ（初等）」（専門科目，２年次配当，半期，必修２単位）において，就学前・初等教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に就学前・初等教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「教育心理学Ｂ（中等）」（平成 27 年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育心理学Ｂ（中等）」（専門科目，２年次配当，半期，選択２単位）において，中等教育現場で起こる出来事を心理学の視点から解説・捉え直しをする基礎的な内容の授業を行い，それによって，学生に中等教育における心理学の位置づけについて理解させる教育効果があった。 「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（平成 28 年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（専門科目，３年次配当，通年，選択４単位）において，ライフステージにおいて特に重要視されている青年期を中心とした発達の理論を学習するとともに，青年期の諸側面について心理学の視点から理解を深めるた。また，卒業論文を視野に入れ，パソコン操作技能及び統計の基礎的知識習得にも取り組んだ。その結果，心理学研究論文に記載されているデータの意味を理解し，卒業研究に必要な文献購読の初歩的スキルが向上した。 「教育相談の理論と方法Ａ（初等）」（平成 28 年 10 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育相談の理論と方法Ａ（初等）」（専門科目，３年次配当，半期，必修２単位）において，初等教育現場における教育相談の活動並びにカウンセリングに関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に初等教育における教育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「教育相談の理論と方法Ｂ（中等）」（平成 28 年 10 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「教育相談の理論と方法Ｂ（中等）」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，中等教育現場における教育相談の活動並びにカウンセリング及び心理教育に関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に中等教育における教育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。 「保育相談支援」（平成 28 年 10 月～平成 31 年３月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育相談支援」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，幼児教育現場における保育相談の活動並びにカウンセリングに関する基礎的な知識を学んだ。それによって，学生に初等教育における保育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績（続き）		「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（平成 29 年４月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（専門科目，４年次配当，通年，選択４単位）において，卒業論文執筆に向けた先行研究の渉猟及び文献の読解に取り組んだ。その結果，卒業論文執筆に必要な序論構成を組み立てる力を養う教育効果があった。 「卒業研究」（平成 29 年 10 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（専門科目，４年次配当，通年，選択４単位）において，仮説に基づく調査や実験の実施，統計解析における実証的検討及び考察を通して卒業論文の執筆指導を行った。平成 29 年度は４名，平成 30 年度は３名，平成 31（令和元）年度は１名の学生が卒業論文を完成し，いずれの学生もデータに基づき現象の把握及び考察を行うアカデミックスキルの育成を行うことができた。 「基礎ゼミナールⅠ」「基礎ゼミナールⅡ」（平成 29 年４月～平成 31 年３月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「基礎ゼミナールⅠ」「基礎ゼミナールⅡ」（いずれも専門科目，１～２年次配当，通年，必修２単位）において，大学生として、高度な専門知識と確かな学士力を身につけるためのアカデミックスキルを身につけることを目指し，上述のスキルの基礎となる文献研究の方法やレポート作成法などを教授し，スキル育成の教育効果があった。 「人間教育実践力開発演習Ⅰ」(平成 30 年４月～平成 31 年３月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育実践力開発演習Ⅰ」（専門科目，１年次配当，通年，選択２単位）において，教育・保育実践力を高めるために，地域園・学校へのボランティアに参加するための事前学習や行事参加を通して，幼児教育・保育における今日的課題について理解を深め，ボランティアに参加するまでの課題を各自が明確にすることができた。 「人間教育実践力開発演習Ⅱ」(平成 30 年４月～平成 31 年３月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「人間教育実践力開発演習Ⅱ」（専門科目，２年次配当，通年，選択１単位）において，教育・保育実践力を高めるために，地域園・学校へのボランティアに週１回継続的に参加することで，幼児教育・保育における今日的課題について理解を深め，教育・保育実習に向けた課題を各自が明確にすることができた。 「保育の心理学Ⅰ」（平成 30 年４月～平成 30 年９月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育の心理学Ⅰ」（専門科目，３年次配当，半期，保育士資格必修２単位）において人間の様々な諸側面の生涯発達に関する内容の授業を行い，それによって，学生に人間のライフサイクルや発達段階及び発達課題について理解させる教育効果があった。

奈良学園大学人間教育学部人間教育学科における教育実績（続き）		「保育の心理学Ⅱ」（平成 30 年 10 月～平成 31 年３月） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育の心理学Ⅱ」（専門科目，３年次配当，半期，保育士資格必修１単位）において幼児の心的理解の方法に関する内容の授業を行い，それによって，学生に子どもの発達や知的能力，性格に関するアセスメント及び保育への貢献について理解させる教育効果があった。 「保育相談」（令和元年 10 月～現在に至る） 奈良学園大学 人間教育学部人間教育学科の「保育相談」（専門科目，４年次配当，後期，選択１単位）において，現場における保育相談の活動並びに子育て支援に関する基礎的な知識及び実践を学んだ。それによって，学生に保育相談の理論と方法について理解させる教育効果があった。
5. 平成 26 年度奈良学園大学公開講座の登壇	平成 26 年７月 12 日	平成 26 年度奈良学園大学公開講座に登壇し，講演を行った。 本講演の内容は，1)様々な学際領域から「居場所」をどのように捉えられているのか，2)実証的研究から見えてくる「居場所」とは何なのか，3)「居場所」づくりにはどのような視点が重要なのか，の３点であった。
6. 奈良女子大学文学部人間科学科における教育実績	平成 27 年 10 月～平成 28 年３月	「青年心理学特殊研究」（平成 27 年 10 月～平成 28 年３月） 奈良女子大学文学部の「青年心理学特殊研究」（専門科目，２年次配当，半期，選択２単位）において，生涯発達に関する理論を理解し，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について授業を行い，それによって，学生に自らのライフを振り返り展望しながら論理的に思考する教育効果があった。
7. 大和高田市立看護専門学校看護学科における教育実績	平成 28 年４月～現在に至る	「人間の心・精神」（平成 28 年４月～現在に至る） 大和高田市立看護専門学校看護学科の「人間の心・精神」（１年次配当，半期，１単位）において，多岐にわたる心理学の領域，研究及び歴史についての基礎的知識を学んだ。本講義によって，心の働きやシステムについて理解を深め，心理学の歴史や研究における知識を得られる教育効果があった。
8. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成 28 年 10 月３日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として，「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には，「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し，大人が子どもにどのようにかかわるのが適切な方法か，ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって，子どもへの適切なかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
9. 一般社団法人日本精神科看護協会品川研修センターにて教育理論研修会（講義内容：「教育心理－青年心理－」）の講師	平成 28 年 11 月 15 日	一般社団法人日本精神科看護協会品川研修センターにて教育理論研修会「教育心理－青年心理－」の講師を務めた。内容は，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について理解を深めた。本講義によって，青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。

10. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」の講師	平成 29 年 9 月 5 日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は，青年期を中心とした生涯発達理論，認知発達過程，学習理論，学習意欲と動機づけ，カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
11. 一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会（講義内容：「教育心理－青年心理－」）の講師	平成 29 年 9 月 25 日	一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会「教育心理－青年心理－」の講師を務めた。内容は，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について理解を深めた。本講義によって，青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
12. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成 29 年 10 月 3 日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として，「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には，「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し，大人が子どもにどのようにかかわるのが適切な方法か，ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって，子どもへの適切なかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
13. 教員免許更新講習（選択領域）講師	平成 30 年 8 月 16 日	奈良学園大学にて幼稚園教諭対象の教員免許更新講習において，「環境を踏まえた子どもの育ちと保育内容の充実」の小テーマとして，幼稚園の終わりまでに育ってほしい「10 の姿」と児童期以降のつながりについて，発達心理学の観点から講義を行った。園児に現在どのような力が育ち，今後伸びていくのかを「10 の姿」から考えるワークを行い，乳幼児期の学びが児童期以降の発達につながることを理解するという教育効果がみられた。
14. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」の講師	平成 30 年 9 月 3 日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は，青年期を中心とした生涯発達理論，認知発達過程，学習理論，学習意欲と動機づけ，カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
15. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	平成 30 年 10 月 4 日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として，「子ども理解を深める」という演題で講義を行った。具体的には，「神戸少年の街版 コモンセンス・ペアレンティング」を紹介し，大人が子どもにどのようにかかわるのが適切な方法か，ロールプレーも交えた実践的な演習課題に取り組んだ。本講義によって，子どもへの適切なかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
16. 教員免許更新講習（選択領域）講師	令和元年 8 月 16 日	奈良学園大学にて幼稚園教諭対象の教員免許更新講習において，「環境を踏まえた子どもの育ちと保育内容の充実」の小テーマとして，幼稚園の終わりまでに育ってほしい「10 の姿」と児童期以降のつながりについて，発達心理学の観点から講義を行った。園児に現在どのような力が育ち，今後伸びていくのかを「10 の姿」から考えるワークを行い，乳幼児期の学びが児童期以降の発達につながることを理解するという教育効果がみられた。
17. 奈良県看護協会実習指導者講習会「教育心理」の講師	令和元年 9 月 2 日	奈良県看護協会にて実習指導者講習会「教育心理」の講師を務めた。内容は，青年期を中心とした生涯発達理論，認知発達過程，学習理論，学習意欲と動機づけ，カウンセリング概論及び演習であった。本講義によって，指導対象となる看護学生の年代である青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。

18. 一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会（講義内容：「教育心理－青年心理－」）の講師	令和元年9月30日	一般社団法人日本精神科看護協会京都研修センターにて教育理論研修会「教育心理－青年心理－」の講師を務めた。内容は，青年期のライフスタイルならびにアイデンティティの発達に重きをおいた諸側面について理解を深めた。本講義によって，青年期の諸側面について深い知識を得られる教育効果があった。
19. 三郷町立西部保育園の新任研修講師	令和元年10月3日	三郷町立西部保育園の新任研修講師として，「特別支援における保護者対応について」という演題で講義を行った。具体的には，「(発達) 障害の理解」「発達障害の対応」「保護者を「支える」ということ」という流れに沿って講義を行った。本講義によって，特別支援における子どもへの見方，適切なかかわり方の方法論を獲得する教育効果がみられた。
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
修士（教育学）	平成13年3月	奈良教育大学　第817号 「修士論文題名：自己及び他者との関係における『居場所』の個人差」
教員免許	平成13年3月	中学校教諭専修免許状（社会）取得（学校心理学付記） （平12中専修第20号，奈良県教育委員会）
学校心理士	平成16年11月	第82689号 （令和元年12月更新，令和6年12月まで有効）
2　特許等		（な　し）
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1.教務全般の企画・運営	平成13年4月～平成26年3月	奈良保育学院にて教務係としてカリキュラム・時間割・年間行事の編成，成績管理，入試業務，奨学金業務，紀要編集委員その他関連する事務処理を主任の立場で活動した。
2.学年担当（担任）	平成13年4月～平成26年3月，平成29年4月～現在に至る	奈良保育学院（平成13年4月～平成26年3月）及び奈良学園大学（平成29年4月～現在に至る）において学年担当（担任または副担任）を受け持ち，学生の日常における生活指導，学校心理学の見地に基づく成績不振者への学業指導及び学校不適応を訴える学生及びその保護者の相談等を受け持った。
3.学生自治会顧問	平成14年4月～平成26年3月	奈良保育学院学生自治会の顧問として学生主催の新入生歓迎会，学院祭（体育祭・文化祭），送別会等の企画運営を監督した。
4.進路指導	平成16年4月～平成26年3月	奈良保育学院の進路担当教員と連携して進路指導の科目（「課題研究」）を立ち上げ，１回生から２回生にかけて継続的に進路活動を行う体制を築いた。
5.広報・募集活動	平成20年4月～平成26年3月	奈良保育学院の募集活動の一環として業者と連携してパンフレット・ポスター・ホームページ作成にかかわり，他教員と分担して近隣の高等学校へ訪問し広報活動を行った。

6. 広報委員会における活動	平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月	奈良学園大学にて広報委員会に所属し，委員として大学案内の内容，オープンキャンパスの内容企画，今後の広報活動及び戦略について検討を行った。
7. 教務委員会における活動	平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月，平成 31 年 4 月～令和 2 年 3 月	奈良学園大学にて教務委員会に所属し，委員としてＧＰＡ基準，試験要領の検討，追・再試験に関する取り扱い，入学前他大学等既修得単位の認定，保育士資格取得に関する整備，卒業論文にかかる諸規定の整備について体制を築いた。
8. 教職・保育課程委員会における活動	平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月	奈良学園大学にて教職・保育課程委員会に所属し，委員として介護等体験の指導，教育実習の訪問指導を行った。
４　その他		
1. 平成 24 年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第 51 回研究大会活動	平成 23 年 6 月～平成 24 年 9 月まで	平成 24 年度全国保育士養成セミナー及び全国保育士養成協議会第 51 回研究大会委員に任命され，シンポジウム分科会の運営補助に携わった。
2. 関西心理学会事務局及び常任委員会活動	平成 25 年 4 月～現在に至る	関西心理学会事務局及び常任委員に任命され，平成 29 年３月まで学会事務局及び常任委員会の運営に携わった。また，平成 27 年４月より幹事に就任し，平成 29 年３月まで事務局の取りまとめを行った。また，平成 29 年４月より監事に就任し，会計監査に携わっている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.やさしく学ぶ発達心理学－出逢いと別れの心理学－	共著	平成 23 年３月	ナカニシヤ出版	胎児期から老年期まで生涯発達の段階ごとに，各章で発達のとらえかた，発達心理学の基礎的な内容を解説し，人生の節目に出逢いと別れを繰り返しながら対人関係が成長していく過程が紹介されている。 Ａ５判　全 237 頁 編　者：浜崎隆司・田村隆宏 共著者：荒木美代子・岡村季光・岡本かおり・加藤孝士・澤田友希・田村隆宏・朴　信永・浜崎隆司・丸山（山本）愛子・森田泰介・森野美央・八島美菜子・湯澤美紀（50 音順） 本人担当部分：「第３章第２節　拡がる子どもの世界」（pp. 67-79.）の部分を単著。 第１にことばの発達において，ことばを話し始める前に乳児が他者に意思疎通を図ろうとする具体例，初語が出てからの発語量とことばの理解度の関係，２語文の習得を始めとした文法の習得，文字の読み書きを習得しことばを楽しむ幼児の様子を紹介した。第２に遊びの発達において，乳幼児における遊びの重要性，乳児自身の体を用いた遊び，表象機能の発達に伴う見立て・ふり遊びとその具体例，ひとり遊びから集団遊びへの移行と特徴を紹介した。
2.教育フォーラム第 55 号「実践的思考力・課題解決力を鍛える：PISA 型学力をどう育てるか」	共著	平成 27 年２月	金子書房	実践的な諸課題に向けての解決をどう図っていくのか，そのために必要となる思考力や問題解決力をどのような形で鍛えていくか，実りある着実な学習活動の展開を具体的に提案している。 Ａ５判　全 160 頁 編　者：梶田叡一 共著者：伊﨑一夫・井上信子・大内善一・岡村季光・梶田叡一・加藤　明・金澤孝夫・鎌田首治朗・蔵あすか・萩原憲二・藤井幸一・藤田英治・宮岸　洋（50 音順） 本人担当部分：「一人ひとりの「居場所」をどうつくるか」（pp. 111-121）の部分を単著。 これまでの先行研究から居場所を「個人性－社会性」「主観性－客観性」の軸で捉えることが可能であることを示した。また，実証的研究の知見から「居場所がない」と感じる者に精神的な安定・安心を感じるような経験を提供すること，居場所感を毎日感じられる経験を積み重ねること，大人や仲間の支えにより成長・自立を図ることが重要であることを示唆した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
3.教育フォーラム第60号「深い学びのために：アクティブ・ラーニングの目指すもの」	共著	平成29年8月	金子書房	学習指導要領にある「深い学び」は、いまだ焦点が拡散している印象がある。実践的な指導を提案しながら、基本ポイントを押さえ明確にしている。 Ａ５判　全148頁 編　者：梶田叡一 共著者：伊﨑一夫・石森広美・大畑健実・岡村季光・梶田叡一・鎌田首治朗・金山憲正・後藤紗貴・菅井啓之・善野八千子・瀧明知惠子・古川　治・松井典夫・湯峯　裕（50音順） 本人担当部分：「震災における教員の役割を考える」（pp. 125-134）の部分を執筆。 本稿では避難所と学校の関係，避難所に携わる教員に焦点をあて，考察を行った。具体的には，震災時における避難所で教員は責任感や使命感をもって活動している一方，自らを省みず活動することによる教員自身の心身不調の問題を指摘した。また，熊本地震において被災した学校に勤務する教員と非災害地域の教員を比較した調査を実施した。その結果，熊本の教員が一連の熊本地震に対する長期のストレス状況にあり，エネルギーの枯渇に伴う意欲低下，自らの存在価値を見出せない教員が少なからずいることを指摘した。最後に，提言として，1)学校が平時より地域と連携することの重要性，2)避難所における教員のリーダーシップの発揮と自治組織への移譲，3)教員のメンタルヘルスへの支援を挙げた。
4.よくわかる！教職エクササイズ　教育心理学	共著	平成30年4月	ミネルヴァ書房	簡潔な解説で，教育心理学の基礎理論からその教育実践への応用まで学べる。授業で使いやすいよう，ディスカッション課題やワークなどの演習課題，資料図版を豊富に掲載。ノートページには書き込みの課題を提示しており，学生が自ら考え，つくりあげることができる。各講の最後は教員採用試験を掲載している。 Ｂ５判　全216頁 編　者：田爪宏二 共著者：今林俊一・梅本貴豊・岡村季光・下木戸隆司・滝口圭子・立元 真・原口 恵・増田優子・森田健宏（50音順） 本人担当部分：「第４講 心身の発達③青年期以降」（pp. 50-60.）部分を単著。青年期における身体発達，対人関係の発達，発達主題（アイデンティティの統合）についてそれぞれ説明を行った後，成人期以降の発達について紹介した。また，「青年期」の誕生についても，歴史的背景を中心に説明を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1. 青年期における『居場所』の射程	単著	平成 22 年 12 月	奈良保育学院研究紀要第 14 号 pp. 29-38.	本論文では居場所における字義的定義から一般的に居場所がどう捉えられているのかを概観し，「居場所がない」という表現と関連が深いとされる不登校の問題を考察した。さらに居場所研究における実証的研究から，今後居場所を理解するための枠組みと可能性について展望した。具体的には近年注目されている「ひとりで過ごす居場所」や愛着（アタッチメント）との関連が考えられる。
2. 保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―鑑賞者の反応に関する検討―	共著	平成 22 年 12 月	奈良保育学院研究紀要第 14 号 pp. 7-14.	身体表現作品を発表した後に学生にふりかえりを行う中で，鑑賞者の反応に関する検討を３か年度にわたり行った。その結果，1)おおよそ７割の学生が子どもの反応を見ていた，2)反応は想定内の反応と想定外の反応があったが，いずれも積極的な意味で捉えていた，3)幼稚園・保育園児は素直な反応を出しているのに対し，中学生は自意識を感じ素直な反応が乏しいなど，年齢により反応の出し方に差異があることを感じていたが，学生側は発達段階による反応の差異を受け入れていることが伺えた。 共著者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
3. 平成 19 年度熊本市内の保・幼・小・中学校保護者を対象とした児童虐待防止における意識に関する調査研究　―就労有無との関係―	共著	平成 22 年 12 月	奈良保育学院研究紀要第 14 号 pp. 15-22.	第１筆者が平成 19 年度に熊本市内の保・幼・小・中学校保護者を対象とした児童虐待に関する保護者の意識調査を実施。第２筆者が保護者の意識傾向について分析した。その結果，1)育児疲れ・孤独感・相談相手の有無と子どもへの虐待懸念の間に関連がみられた。2)就労有無と子どもへの虐待懸念の間に関連がみられた。上述の結果から，社会とのつながりが希薄になっている保護者へのサポートの必要性が示唆された。 共著者：谷口　卓・岡村季光 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当
4. 中学校の職場体験が現在の進路決定に及ぼす影響　―保育学生と一般学生の比較から―	単著	平成 24 年 12 月	奈良保育学院研究紀要第 15 号 pp. 65-69.	中学校時のキャリア形成を探索的に研究するため，近年さかんに行われている中学校時における職場体験の有無・内容が現在の進路決定に及ぼした影響を保育を専攻する学生（保育学生）と他を専攻する学生（一般学生）で比較検討した。その結果，現在の専攻を考えた時期は一般学生より保育学生の方が早い傾向にあり，保育学生の方が一般学生と比して，現在考えている進路内容に中学校時の職場体験の影響があると自覚する者が多いことを見いだした。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
5.保育士養成校における身体表現作品に関する一研究　―学年間における相互評価に関する検討―	共著	平成24年12月	奈良保育学院研究紀要第15号 pp. 51-55.	２回生が授業で創作した身体表現作品（以下，作品）を発表した後に下級学年・当該学年の各学生が作品をどのように捉えているのか比較検討した。その結果，両回生共通して「動き」が印象に残る項目の上位に位置づけられていた。また，２回生の方が経験を積み重ねている分，作品に対する客観的な視点が養われていることがうかがえた。 共著者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
6.「居場所」（安心できる人）とひとりで過ごす感情・評価の関係	単著	平成26年９月	奈良学園大学研究紀要第１号 pp. 191-197.	安心できる人の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，“自分ひとり”の安心感を高く評定するものは，ひとりで過ごすことに肯定的な捉え方をしていることが示唆され，ひとりで過ごす感情・評価との関係が明らかになった。これはひとりで過ごすことに必ずしもネガティブな感情を抱いていないことを示唆するものであった。
7.保育学生におけるコラージュ作品の形式分析及び作品印象に関する基礎的研究	共著	平成26年12月	奈良保育学院研究紀要第16号 pp. 103-110.	本研究の目的は，コラージュ作品の表現特徴を多方面にわたり分析し，さらに作品印象に関してテキストマイニングを用いて定量的に検討することであった。保育専門学校に所属していた１回生 367 名を対象に検討した結果，先行研究とほぼ合致する結果が得られ，コラージュ療法における表現特徴が，心理臨床のアセスメントに有益な指標をもたらすであろうことが示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
8.コラージュ作品と性格特性の関係：表現特徴とエゴグラムパターンの検討 （査読付）	共著	平成26年12月	人間教育学研究第２号 pp. 157-162.	本研究の目的は，性格特性とコラージュ作品の関連を検討することであり，387 名の専門学校生にエゴグラム（TEGII）及びコラージュ作品制作を実施した。その結果，エゴグラムパターンにより切片数，余白，作品の満足度に違いがみられることが明らかになった。すなわち，1)切片数が多い者は心的エネルギーが高い性格特徴である可能性が，2)余白が多い者は心的エネルギーが低く，依存的で気分・感情の不安定さを伴う性格特徴である可能性が，3)満足度が低い者は自己否定の構えを持っている可能性が，それぞれ示唆された。 共著者：岡村季光・吉野さやか 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
9.青年期後期における新旧の同性友人への安心感と学校適応感の関連	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学研究紀要第３号 pp. 229-233.	本研究の目的は友人関係機能の「安定化機能」に着目し，一緒にいて「安心できる」という本人の主観的感情を手がかりにして友人を想起させ，新旧の同性友人の選択有無と現在の学校適応感との関連を検討することであった。新旧の同性友人の選択有無により群分けを行い，学校適応感との関連を検討した結果，新友人を選択した者が，旧友人のみを選択した者あるいはいずれも選択しなかった者に比して，現在の学校適応感は高かった。本研究結果は新旧友人関係が学校適応感に影響を及ぼす可能性を示唆するもので，今後の学校適応を考える上で意義のあるものと考えられた。
10.「居場所」（安心できる人）を規定する要因　―成人愛着スタイルによる検討― （査読付）	共著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究第３号 pp. 175-180.	本研究は対人関係の表象として挙げられる愛着スタイルに着目し，安心できる人の程度の評定に与える影響を検討した結果，男子において安定型とアンビバレント型が，女子においてアンビバレント型と回避型が予測変数として有意であることが明らかとなった。本研究の結果は，居場所によって愛着スタイルが安心できる程度に及ぼす効果が異なることを示している。それ故，安心できる程度を適応の指標とした場合には，愛着スタイルが適応に及ぼす効果に対して，居場所が調整変数として機能したことが示唆された。 共著者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
11.「居場所」（安心できる人）を規定する要因　　―ひとりで過ごす感情・評価及び成人愛着スタイルによる検討―	共著	平成 28 年 11 月	奈良教育大学紀要第 65 巻１号（人文・社会） pp. 27-34.	本研究は，対人関係の表象として挙げられるアタッチメントのパターンである愛着スタイルに着目し，「居場所」における安心できる程度の評定値，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果，安心できる人を規定する要因として，男女ともに“自分ひとり”は“孤独・不安”，“母親”は“見捨てられ不安”がそれぞれ予測変数として有意であった。また，“現学校以降の友人”は男子が“親密性の回避”，女子は“見捨てられ不安” がそれぞれ予測変数として有意であった。 共著者：岡村季光・豊田弘司 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
12. 保育者の子育てに関する一考察　―わが子の子育ての悩みに注目して―	共著	平成 29 年３月	奈良学園大学研究紀要第６号 pp. 115-124.	本研究では，第１に，現代の保育者がどのような子育ての悩みがあるのかを明らかにすること，第２に，保育者の子育てに関する悩みと，保育者としてのアイデンティティ形成，パーソナリティ，職務についての認識，職業観との要因との関連について検討した。その結果，各変数は年齢及び保育者歴による影響が考えられたため，両者の要因を統制した偏相関係数を子の有無別で算出し検討した。子のいない者は，子育ての経験のなさが自信のなさにつながっている可能性がある一方，保育者として誇りを持っている者は，他者から認められることが支えになっていることが考えられた。また，子のいる者は，子育て経験が自らの子育て経験が保育者としての誇り等とつながっていることが考えられる一方，保育者であることに迷いや戸惑いを感じている者は，アイデンティティの揺らぎを感じていることがうかがえた。 共著者：岡村季光・間井谷容代・谷本一榮 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当
13. 対人関係が「居場所」（安心できる人）に及ぼす影響　―友人関係及び家族関係による検討―	共著	平成 29 年３月	奈良教育大学次世代教員養成センター紀要第３号 pp. 83-87.	家族並びに友人への親和欲求が，居場所（安心できる人）評定に及ぼす影響を検討した。その結果，1)男女ともに，“父親”，“母親”及び“きょうだい”と家族との親密性は中程度の正の相関であった。2)男子において，“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”と家族との親密性，“父親”“きょうだい”及び“現学校以前の友人”と友人との親密性はいずれも中程度の正の相関であった。一方，友人との親密性において，男子は“現学校以前の友人”と中程度の正の相関であったのに対し，女子は“現学校以降の友人”と中程度の正の相関であった。3)“父親”，“母親”及び“きょうだい”は男女ともに，家族との親密性が予測変数として有意であった。友人においては，“現学校以前の友人”において，男女ともに友人との親密性が予測変数として有意であった。一方，“現学校以降の友人”においては，女子のみ有意であった。 共著者：岡村季光・豊田弘司・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14.英語スピーキングに対する不安尺度作成－小学校英語の教科化に向けて－	共著	平成 29 年９月	奈良学園大学研究紀要第７号 pp. 67-74.	大学生を対象とした英語スピーキング不安の尺度作成を行った。教職課程生の英語力でも特に必要とされているのがスピーキング力だと考えられるからである。Horwitzetal(1986)の FLCAS（the Foreign Language Classroom Anxiety Scale）からスピーキング不安に関係する項目を抜粋し、情動的反応などの日本人の特性を踏まえた項目を筆者らが付け加えた。結果として、現在のスピーキング不安では 13 項目が、将来の小学校教員としてのスピーキング不安では 15 項目が、信頼性と妥当性を得た尺度として残された。また、英語スピーキング不安尺度の妥当性を検討する段階において、英語学習者が英語スピーキング時の「情動的反応性」を克服し、英語スピーキングに対する「自信」をつける英語授業の必要性が示唆された。 共著者：熊田岐子・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
15.学生の外的要因と内的要因に着目する「外国語の理解」「外国語指導法」に関する一考察	共著	平成 30 年３月	奈良学園大学研究紀要第８号 pp. 115-124.	本研究は、小学校に「外国語活動」・「外国語」が導入されることを見据え、学生の外的要因（英語運用力・授業力）だけでなく、内的要因（自尊感情の低さ・他者理解の必要性・情動的反応性の克服）にも着目した研究である。本稿では、熊田・岡村（2017）において示唆された英語スピーキング不安と自尊感情の関連について検討を行った。結果として、対人不安傾向尺度の下位尺度である「情動的反応性」が現在の英語スピーキング不安に有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。また、将来の英語スピーキング不安得点については「情動的反応性」に加え、「自尊感情」も有意に影響を及ぼしていることが明らかになった。さらに、「自尊感情」と将来の英語スピーキング不安には「情動的反応性」が媒介する間接効果も見出された。上述の事象を克服するために、近藤（2010）の「基本的自尊感情を育む共有体験」に着目すること、大学カリキュラムマネジメントにより他教科と連携することを提案した。 共著者：熊田岐子・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
16.「居場所」（安心できる人）を規定する媒介要因の検討－”自分ひとり”ですごす居場所に注目して－	単著	平成 30 年３月	奈良学園大学研究紀要第８号 pp. 115-124.	本研究の目的は、居場所（安心できる人）の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価を測定し、安心できる人を規定する要因に媒介要因が介在している可能性を検討することであった。大学生 260 名に調査を行った結果、自分ひとりの居場所を志向する要因は、ひとりで過ごすことによる充実感や満足感によって規定されており、さらに両者の関係にはひとりで過ごすことへの孤独感や不安感のなさが媒介していることが明らかになった。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
17.大学における教学支援体制の運営に関する一考察―キャリア教育とキャリア支援の連携に着目して―	共著	平成 30 年 7 月	人間教育第 1 巻第 5 号 pp.123-141.	本稿では、大学における教学支援体制の運営について、特にキャリア教育とキャリア支援の教学支援の連携がどのように行われているかに着目し、3 大学（学習院大学、文教大学、昭和女子大学）の視察を手掛かりとして考察することを目的としている。結果として、学習院大学では、教学部門と支援部門の連携体制の確立はされていなかったが、大学の教育理念や方針を取り入れたキャリアセンター事業計画があり、また、就職活動に関し、OB・OG による在学生支援体制が確立されていることが特徴であった。文教大学では、中期経営計画を立て、教学部門と経営部門がビジョンを共有し、計画→実行→評価→改善の PDCA サイクルの確立が行われていた。昭和女子大学ではキャリアデザイン委員会を設置し、全学横断型組織を確立し、教学部門と支援部門の有機的連携が確立されていた。 共著者：岡野聡子・岡村季光・オチャンテ 村井 ロサ メルセデス 本人担当部分：上述の内，文教大学に関する部分（pp.127-132）を担当
18.育成したい「学生像」の明確化、能力指標構築の試み―奈良学園大学人間教育学部を事例として―	共著	平成 30 年 9 月	人間教育第 1 巻第 7 号 pp.185-198.	本稿では、我が国における「これから求められる力」に関する能力概念の整理をした上で、奈良学園大学人間教育学部を事例として、「育成したい学生像」の能力指標を提示することを目的としている。新学習指導要領の完全実施や大学入学共通テストの導入などにより、2020 年に向けた教育改革が粛々と進行する中、大学教育にも大きな影響があると予想される。本稿では、第１に、社会から求められる能力概念の整理と学部特性を整理し、第２に AP、CP、DP から育成したい学生像の能力項目の抽出を行い、第３に能力指標を提示した。能力指標作成にあたっては、①測定される側の発達水準を考慮すること、②人間教育のあり方や目指す方向性を能力指標に反映させること、③能力の「芽生え」（ショプラー；2007）に注目するという観点を提示した。 共著者：岡野聡子・岡村季光・伊﨑一夫 本人担当部分：上述の内「奈良学園大学人間教育学部における「育成したい学生像」の能力指標の構築」に関する部分（pp.192-196）を担当

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
19. 災害時における教師の職業的役割―「使命感」と「多忙感」に着目して― （査読付）	共著	平成 30 年 9 月	教師学研究第 21 巻第 2 号 pp. 13-21.	本研究では，災害時において，その教師の「職業的使命感」は統制の効かない状況における「多忙感」を凌駕するのではないかという仮説を立てた。そして，熊本地震において教員が果たした役割をモデルとし，非災害地域の教員の「使命感」「多忙感」との比較調査を行うことによって，災害時における教師の職業的使命感の実態を明らかにすることを目的とした。そこで本研究では，熊本地震において被災した学校に勤務する教員 26 名と，非災害地域として，関西圏の小学校教員 47 名の計 73 名との比較アンケート調査を実施した。その結果，使命感に関しては，被災の有無にかかわらず高い使命感を有している反面，被災を経験した教員において，多忙感や内的統制感の高さが，自らの存在価値や意欲の高まりにつながっていない実態が明らかになった。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
20. ドリンク剤パッケージにおける色イメージに関する探索的研究―健康不安及び体調の差異による検討―	共著	平成 31 年 3 月	人間教育第 2 巻第 2 号 pp. 45-50.	本研究では，健康不安及び体調の差異によるドリンク剤パッケージの色イメージについて検討を行うことを目的であった。大学生及び登録販売者を対象に調査を行った結果，以下の点が明らかになった。すなわち，1)健康不安に関する調査では，大学生と登録販売者間に回答の差異は見いだせなかったが，直近 1 か月の体調に関する調査では，総じて大学生の方が登録販売者と比して体調不良を示す得点が高かった。2)ドリンク剤色イメージ評定において，目を引く色は青色，滋養強壮は金色，美容及び食物繊維は黄色において有意な差を見いだし，いずれも健康不安のない群がある群と比して選択率が高かった。3)直近 1 か月の体調を独立変数，各項目における色選択を従属変数とする判別分析を行った結果，大学生において，眠気覚ましは体調不安，体調の悩み，ストレス，疲れの変数が黒色の選択に，登録販売者において，美容は体調不安，体調の悩み，ストレス，疲れの変数が青色の選択に，それぞれ有意な影響を及ぼしていた。 共著者：岡村季光・多根井重晴・増田善昭 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
21.英会話授業における「自尊感情を高める共有体験」に関する調査－学生の内的要因に着目して－	共著	平成 31 年３月	奈良学園大学研究紀要第 10 号 pp. 55-61.	本稿では、熊田・岡村（2018）で着目した「基本的自尊感情を育む共有体験」（近藤、2010）を応用し、英語スピーキングの共有体験に関する調査を行った。「自尊感情を育む共有体験」として、英語スピーキングを場面と定め、他者とのコミュニケーションにおける英語スピーキング不安を検証した。具体的には、ペアワーク、グループワーク、クラス発表を場面として設定した。考案した項目を因子分析した結果、ペアワーク、グループワークにおいては「肯定承認」、「安心」、「忌避」、クラス発表においては「肯定承認」、「不得意」の構造を見いだした。さらに、英語スピーキング不安、対人不安傾向、自尊感情、自己受容、他者受容との関連を検討し、他者からのフィードバックが得られるグループワークが有効である可能性が示唆された。今後の展望として、他者からのフィードバックとして、信頼する人、すなわち教師がすべきフィードバックについて検討することが課題として残された。 共著者：熊田岐子・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
22.居場所（安心できる人）の評定と自己－他者認識：協同作業認識との関連	単著	平成 31 年３月	奈良学園大学研究紀要第 10 号 pp. 55-61.	居場所（安心できる人）の評定とひとりで過ごす感情・評価、友人との関係の取り方及び協同作業認識との関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって自分群、全体高群、全体低群の３群に分け、安心できる人の評定による群ごとに、ひとりで過ごすことに関する感情・評価尺度、友人関係尺度と協同作業認識尺度の各尺度得点の相関係数を算出し検討を行った。その結果、１）安心できる人の評定が全体的に低い者は、協同作業への肯定的な認識が低く、他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は、協同作業の必要性を低く感じている傾向にあった。２）相関係数の同等性の検定において、友人関係尺度における“傷つけることの回避”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”及び“互恵懸念因子”に有意差がみられた。Ryan 法による多重比較の結果、“協同効用因子”において全体高群と比して全体低群の方が“傷つけることの回避”との正の相関が強く、“互恵懸念因子”において全体高群と比して全体低群及び自分群の方が負の相関が強かった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
23.居場所（安心できる人）の評定と貢献感の関連	単著	令和元年９月	奈良学園大学研究紀要第11号 pp.29-34.	本研究の目的は，居場所（安心できる人）の評定と自身の存在が他者のウェル・ビーイングに役に立っている（貢献している）感覚との関連を検討することであった。安心できる程度の評定に男女差がみられたことから，評定を男女別にZ得点に変換後，クラスター分析によって全体高群，全体低群，平均群の３群に分けた。安心できる人の評定による群ごとに，貢献感との関連を検討した結果，全体低群が他の群と比して貢献感得点が低かった。最後に，「貢献感」をめぐる言説について，Adler（1932）のそれとの異同について，議論を行った。
24. 特集「職業としての心理学」	共著	平成31年３月	追手門学院大学心理学論集第27号 pp.35-64.	「心理学総合科目－職業としての心理学」は，追手門学院大学卒業生による「職業人講話」を中心に展開される「心理学総合科目」であり，心理学部の特色ある教育の一つとして位置づけられてきた科目である。本稿では，12名の卒業生によって提供される12の「職業人講話」が展開された。 共著者：三川俊樹・天野宏美・東 摩耶・藤田裕一・萩原マリコ・橋本尚子・板橋裕子・木村泰子・好田史尚・森迫宏幸・長井裕司・西川晶・岡村季光 本人担当部分：上述の内「大学教員になるまでに出会った“人との縁”」の項目（pp.62-64）を担当
25. 居場所(安心できる人)の評定と貢献感の関連	単著	令和元年９月	奈良学園大学研究紀要第11号 pp.29-34.	本研究の目的は，居場所（安心できる人）の評定と自身の存在が他者のウェル・ビーイングに役に立っている（貢献している）感覚との関連を検討することであった。安心できる程度の評定に男女差がみられたことから，評定を男女別にZ得点に変換後，クラスター分析によって全体高群，全体低群，平均群の３群に分けた。安心できる人の評定による群ごとに，貢献感との関連を検討した結果，全体低群が他の群と比して貢献感得点が低かった。最後に，「貢献感」をめぐる言説について，Adler（1932）のそれとの異同について，議論を行った。
26. 青年期後期のSNSアカウント保有数と自己隠蔽傾向の関連	共著	令和２年３月	奈良学園大学研究紀要第12号 pp.23-28.	本研究は、各SNSにおけるアカウント保有数に着目し、自己隠蔽傾向との関連を検討することを目的とした。SNSにおけるアカウント保有数について、Twitterは約40%の者が複数アカウントを保有していることが明らかとなった。各SNSアカウント保有数と自己隠蔽傾向の関連を検討した結果、Twitterと自己隠蔽は有意傾向の正の相関、Facebookとは有意の正の相関が認められた。青年期のSNSの利用において、アカウントを複数所持する者ほど、アカウントを使い分けながら、本当の自分は見せないようにふるまっている可能性が示唆された。 共著者：岡村季光・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「学会抄録」 1.「居場所」（安心できる人）の評定と対人態度の検討　―ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルとの関連から―	単著	平成 24 年３月	日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集 p. 655. （名古屋国際会議場）	「居場所」における安心できる程度の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果“自分ひとり”の評定と各尺度間に関連が見いだされた。
2. 本学院における表現活動発表会への取り組み（２）－オペレッタ（身体表現作品創作）に注目して－	共著	平成 24 年９月	全国保育士養成協議会第 51 回研究大会研究発表論文集 pp. 494-495. （京都文教大学，京都文教短期大学）	２回生が授業で創作した身体表現作品（以下，作品）を発表した後に下級学年・当該学年の各学生が作品をどのように捉えているのか比較検討した。その結果，両回生共通して「動き」が印象に残る項目の上位に位置づけられていた。また，２回生の方が経験を積み重ねている分，作品に対する客観的な視点が養われていることがうかがえた。 共同発表者：岡村季光・増原喜代 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
3. 青年期後期における危機的場面の対人志向 ―成人愛着スタイルとの関連―	単著	平成 24 年 11 月	日本教育心理学会第 54 回総会発表論文集 p. 610. （琉球大学千原キャンパス）	危機的場面における対人志向評定及び成人愛着スタイルの関連を検討した。その結果，危機的場面において男女とも“自分ひとり”の評定が低くなったことを見いだし，状況により「安心できる人」が変わる可能性が示唆された。また，“自分ひとり”の評定と「親密性の回避」は弱い正の相関，他者への対人志向評定と「親密性の回避」はいずれも弱い負の相関であった。
4. 青年期女子における「居場所」（安心できる人）の評定－抑うつに耐える力との関連－	単著	平成 26 年 11 月	日本教育心理学会第 56 回総会発表論文集 p. 486. （神戸国際会議場）	「居場所」（安心できる人）における危機的場面の安心できる程度の評定と抑うつに耐える力の関連を検討した。その結果，“自分ひとり”の評定を高くつけた者は“孤独に耐える力”が高く，“現学校以前の友人”“現学校以降の友人”の評定を高くつけた者は“不安に向き合う力”が高かった。ひとりの時間を志向しつつ，友人に安心感を持つことで自身の問題を直視し不安に向き合うことが示唆された。
5. 中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の基礎的研究―ひとりで過ごす感情・評価の関係から―	単著	平成 27 年３月	日本発達心理学会第 26 回大会発表論文集 P5-045. （東京大学）	中年期・老年期における「居場所」（安心できる人）の評定とひとりで過ごすことに関する感情・評価の関係を検討した。その結果，平常時において“自分ひとり”，“子ども”，“孫”といる場面において評定を高くつけた者は，“孤独・不安”において，得点が高かった。また，危機的状況においては“自分ひとり”でいる場面で評定を高くつけた者のみ“孤独・不安”得点が高かった。特に中年期以降においては，“自分ひとり”のみならず，“子ども”“孫”の存在が「居場所」に影響を及ぼす可能性が示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.「自分ひとりの居場所」の志向に関する検討　―「安心できる人」評定，ひとりで過ごす感情・評価及び協同作業認識尺度の関係から―	単著	平成 27 年８月	日本教育心理学会第 57 回総会発表論文集 p.683. （朱鷺メッセ（新潟コンベンションセンター））	居場所（安心できる人）の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び協同作業認識との関連を検討した。その結果，ひとり感情・評価尺度の“孤絶願望”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”に弱い負の相関関係がみられた。また，安心できる人の評定が全体的に低い者は他者との協同作業への肯定的な認識が低く，他者と一緒にいることに苦痛を感じ回避する者は協同作業の必要性を低く感じている傾向にあることを見いだした。
7.Relationship between Ibasho “Person who eases your mind” and sense of contribution in late adolescence （青年期後期における居場所（「安心できる人」）と貢献感の関係）	単著	平成 28 年７月	Poster presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan （パシフィコ横浜）	大学生に「安心できる人」の評定をクラスター分析により検討した結果，安心できる評定の高低により４群に分類できることを見いだした。さらに，安心できる人の評定が低い群は所属している集団への貢献感が他の群と比べて有意に低かった。
8.The effects of power and grit on satisfaction and apathy in academic settings （影響力，grit 及びアパシーが大学生活に与える影響）	共著	平成 28 年７月	Poster presented at 31st International Congress of Psychology, Yokohama, Japan （パシフィコ横浜）	本研究は，影響力，grit 及びアパシーが大学生活にどのような影響を与えているのかを検討した。将来展望を明確に持っているか否かで群分けを行い，重回帰分析を行った結果，将来展望を明確に持っている者において影響力，grit 及びアパシーが大学生活に影響を与えていることが明らかとなった。 共同発表者：高木悠哉・赤間健一・岡村季光 本人担当部分：データ分析結果・考察部分を担当
9.「居場所」（安心できる人）を規定する媒介要因の検討―“自分ひとり”の居場所に注目して―	単著	平成 28 年 10 月	日本教育心理学会第 58 回総会発表論文集 p.451. （サンポートホール高松・かがわ国際会議場）	本研究は，安心できる人を規定する要因に媒介要因が介在している可能性を検討することを目的とした。自分ひとりの居場所を志向する要因は，ひとりで過ごすことによる充実感や満足感によって規定されており，さらに両者の関係にはひとりで過ごすことへの孤独感や不安感のなさが媒介していることを明らかにした。
10.居場所（安心できる人）の評定と貢献感の関連	単著	平成 30 年３月	日本発達心理学会第 29 回大会発表論文集 p.655. （東北大学川内北キャンパス）	大学生に「安心できる人」の評定をクラスター分析により検討した結果，安心できる評定の高低により３群に分類できることを見いだした。さらに，安心できる人の評定が低い群は所属している集団への貢献感が他の群と比べて有意に低かった。本研究における「安心できる人」分類において，特に家族に関するクラスター得点差は他と比して顕著であったことから，家族に対する安心できる感覚の差が貢献感の得点差に影響を及ぼしている可能性が考えられた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.保育者の子育てに関する探索的研究	共著	平成 30 年５月	日本保育学会第第 71 回大会発表要旨集 p.659. （宮城学院女子大学）	本研究では，保育者の子育てについて自由記述により探索的に検討することを目的とした。子育てをしながら仕事をすることについて，「大変」「ポジティブ」「時間」「協力」の出現頻度が高く，保育者と子育ての両立が大変である一方，ポジティブに受けとめていることがうかがえた。また，他者の協力により，子育てと仕事の両立が維持されていることが推察された。子の担任やママ友に自身が保育者である旨を積極的に告知することはないという回答が多く，条件付で告知をする姿勢がうかがえた。 共同発表者：岡村季光・間井谷容代 本人担当部分：データ分析・結果・考察部分を担当
12.居場所と「個」及び「関係性」の観点にもとづくアイデンティティの関連	単著	平成 31 年３月	日本発達心理学会第 30 回大会発表論文集 p.305. （早稲田大学戸山キャンパス）	本研究では，居場所と「個」及び「関係性」の観点にもとづくアイデンティティとの関連を検討することを目的とした。その結果，全般的には「個」のアイデンティティよりも「関係性」のそれの方が居場所尺度との関連は強い傾向であった。また，男女間で相関係数の差の検定を行った結果，社会的居場所のうち，誰かから承認されている感覚が，「関係性」のアイデンティティ形成につながることが示唆されたが，その傾向は特に男子において顕著であった。
13. 青年期後期の SNS アカウント保有数と自己隠蔽傾向の関連	共著	令和元年９月	日本心理学会第 62 回総会発表論文集 p.3D-007. （立命館大学大阪いばらきキャンパス（OIC））	本研究は，各 SNS におけるアカウント保有数に着目し，自己隠蔽傾向に着目し検討することを目的とした。その結果，複数のアカウントを所有している者が多かった Twitter と自己隠蔽傾向には弱い正の相関がみられ，アカウントを複数保有する者は，アカウントを使い分けることで本来の自分を隠蔽するように振る舞っていることがうかがえた。また，各 SNS のアカウント保有率，複数アカウント保有率，重要度に統計的に有意な差異を見いだし，1)世代による影響，2)複数アカ保有諾否という仕様上の問題,3)インフラとしてのSNSニーズ有無，などがあることが推察された。 共同発表者：岡村季光・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
14. 座席位置とエゴグラム及び情動知能の関係	共著	令和元年９月	日本教育心理学会第 62 回総会発表論文集 p.637. （日本大学文理学部３号館）	本研究では，同じ仮想場面における座席選択とエゴグラム及び情動知能の関係を検討することを目的とした，その結果，エゴグラム AC において，仮想場面で座席数が多い方を選択した者の座席数が少ない方を選択した者のそれよりも得点が高かった。リーダーシップに関する研究（Hare & Bales, 1963）より，リーダーとフォロアーの関係が順応的自我状態に反映していると解釈された。なお，情動知能尺度（J-WLEIS）と座席選択との関連は見いだせなかった。 共同発表者：多根井重晴・岡村季光・豊田弘司・陳 福士・安西和紀 本人担当部分：データ収集・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
15.居場所（安心できる人）と貢献感，特性的自己効力感及び生活満足感の関係	共著	令和２年３月	日本発達心理学会第 31 回大会発表論文集 p.291. （大阪国際会議場（グランキューブ大阪））	本研究では，居場所（安心できる人）と貢献感，特性的自己効力感及び生活満足感の関係を検討することを目的とした。その結果，特に女子の方が各尺度間得点に中程度の正の相関があった。また，安心できる人評定群のうち，いずれも他者低群が全体高群，他者高群，全体低群と比して貢献感，特性的自己効力感及び生活満足感の得点が低かった。他者への安心感の低さが，貢献感，対人関係における満足感の低さにつながっていることが明らかとなった。 共同発表者：岡村季光・多根井重晴 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
「学会発表」 1.居場所と適応に関する研究と教育への貢献：居場所と愛着の関係（会員企画 ラウンドテーブル RT5-1　話題提供）	－	平成 24 年３月	日本発達心理学会第 23 回大会発表論文集 p.63. （名古屋国際会議場）	本ラウンドテーブルでは，居場所の研究者が個々の課題を出し合い，定義や方法論について練り合うとともに，教育への貢献できる研究への方向性を探る意図で企画された。第３話題提供者は“安心できる人”の選択または評定と心理的距離及び成人アタッチメントスタイルとの関連に関する研究報告を行った。その後，居場所感の要因検討並びに居場所感を感じられる教育のあり方について討議が行われた。 企画：豊田弘司 話題提供者：豊田弘司・石本雄真・岡村季光・則定百合子
2.青年期女子における「居場所」（安心できる人）の評定―ひとりで過ごす感情・評価及び関係的自己の可変性との関係から―	－	平成 25 年 11 月	関西心理学会第 125 回大会発表論文集 p.82. （和歌山大学）	「居場所」における安心できる程度の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び関係的自己の可変性との関係を検討した。その結果，友人への安心感評定が低いと自己が変化することに対して怖い，嫌だ，うまくできないという思いがやや高まる傾向を見いだした。また，自分への安心感評定が高いと自己が変化することに必要性を感じる等，変化に対して肯定的に捉えていた。
3.「自分ひとりの居場所」を志向する要因の検討―「安心できる人」の評定とひとりで過ごす感情・評価及び満たされない自己との関係から―	－	平成 26 年 11 月	関西心理学会第 126 回大会発表論文集 p.36. （大阪市立大学）	「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって３群に分け，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び満たされない自己との関係を検討した。その結果，“自分ひとり”に安心できる評定を高くつけた者の中にも，他者への評定を比較的低くつけている者は対人関係に苦痛を感じ，対人交渉の逃避をしていることが示唆された。また，自分だけ，または一部の者のみに安心感の評定を高くつけた者は自他共に安心感の評定が高い者と比して日常生活においての目標に喪失感や停滞感を感じていた。 共同発表者：岡村季光・高木悠哉 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
4.心理学を学び，研究し，実践する－ライフステージとキャリアパス－ （シンポジウム話題提供）	－	平成27年11月	関西心理学会第 127 回大会発表論文集 p.9. （関西学院大学）	本シンポジウムでは，心理学関連の大学教員として勤めている話題提供者が，これまでにどのようなキャリアパスを経てきたのか，また，自らのライフステージにおいて，どのような歩みがあったのかをそれぞれ発表した。その後，心理学のキャリアパスとライフステージとの兼ね合いについて率直な意見が交わされた。 話題提供者：大竹恵子・岡村季光・杉若弘子・土肥伊都子 指定討論：小椋たみ子・荘厳舜哉
5.「居場所（安心できる人）の評定と他者認識 ―友人との関係の取り方と共同作業認識の関連から―	－	平成27年11月	関西心理学会第 127 回大会発表論文集 p.42. （関西学院大学）	居場所（安心できる人）の評定，友人との関係の取り方及び協同作業認識との関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって自分群，全体高群，全体低群の３群に分け，安心できる人の評定による群ごとに，友人関係尺度と協同作業認識尺度の各尺度得点の相関係数を算出した。相関係数の同等性の検定を行った結果，友人関係尺度における“傷つけることの回避”と協同作業認識尺度の“協同効用因子”及び“互恵懸念因子”に有意差がみられた。Ryan 法による多重比較の結果，“協同効用因子”において全体高群よりも全体低群の方が“傷つけることの回避”との正の相関が強く，“互恵懸念因子”において全体高群よりも全体低群及び自分群の方が負の相関が強かった。
6.「自分ひとりの居場所」の志向に関する検討　―「安心できる人」評定，ひとりで過ごす感情・評価及び孤独感との関連―	－	平成28年11月	関西心理学会第 128 回大会発表論文集 p.35. （京都大学）	本研究では，居場所（安心できる人）の評定，ひとりで過ごすことに関する感情・評価及び他者とのつながりが感じられているか否かを測定するために孤独感を測定し，三者の関連を検討した。「居場所」における安心できる程度の評定をクラスター分析によって全体高群，親群，恋人群，他者低群の４群に分け，さらに，ひとり感情・評価尺度の“孤独・不安”得点をもとに，得点の中央値を上回った群を高群，中央値以下を低群に分類した。孤独感尺度得点について，４（居場所）×２（ひとり感情・評価尺度“孤独・不安”得点高群・低群）の分散分析を行った結果，ひとり感情・評価尺度の“孤独・不安”得点低群において，“他者低群”が他の群に比して孤独感得点が高かった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.災害時における教員の職業的役割　―「使命感」と「多忙感」」に着目して―	―	平成 29 年３月	日本教師学学会第 18 回大会発表要旨集 pp. 30-31. （早稲田大学所沢キャンパス）	現代の学校教育に関連する諸課題に対する教育現場への期待や責任の増大に伴い，教員の「多忙化」が指摘されている。その一方で，地震災害時に教師は，「多忙感」の一要因である残業の多寡に関わらず，避難所運営に携わるなどの例がある。そこで本研究では，教員の「使命感」と「多忙感」の相関性について，熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして，教員への意識調査をもとに検討した。その結果，他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し，熊本自身で被災した教員群にそれらがみられないことから，一連の熊本地震に対する対応の疲労感が高まっていることが背景因子として懸念された。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：データ収集・分析・結果・考察部分を担当
8.居場所（安心できる人）の評定と社会不安及び生活満足感の関連	―	平成 29 年 11 月	関西心理学会第 129 回大会発表論文集 p. 52. （京都橘大学）	本研究では，居場所（安心できる人）の評定，他者からの否定的な評価による不安及び生活満足感を測定し，三者の関連を検討することを目的とした。各場面における「安心できる人」評定得点を用いて，クラスター分析を行った結果，各評定の高低により４群に分類することができた。さらに，FNE 短縮版得点（社会的不安得点）をもとに，平均値を上回った群を高群，平均値以下を低群に分類し，4（居場所）×2（社会的不安得点高・低）の分散分析を行った結果，社会的不安得点低群において“全体高群”及び“家族高群”が他群に比して全般的生活満足感得点が高かった。特に，家族への安心感と他者への否定的評価への不安のなさが全般的生活満足感の高さにつながったと言え，アタッチメントの影響が示唆された。
9.ありのままの自分を求めて：グローバル社会と「居場所」（日本心理学会第 82 回公募シンポジウム SS-082）	―	平成 30 年９月	日本心理学会第 82 回大会発表論文集 p. 220. （仙台国際センター）	「居場所（Ibasho）」は日本固有の概念であるが、さまざまな心理学的概念と密接に関係していると考えられる。たとえば、アイデンティティ（Erikson, 1950）は「居場所」との関係性が示唆される。多様な人々が生活する複雑な現代社会において、ありのままの自分を表現でき、ありのままの自分でいられる「居場所」を我々はどのように見つけ出していけるのだろうか。また、アイデンティティと「居場所」はどのような関係にあるのだろうか。本シンポジウムでは、多文化環境のなかで生育・生活する人々を中心に、ありのままでいられる「居場所」をめぐって、（文化的）アイデンティティや「居場所」について議論を行った。 話題提供者：鈴木一代・岡村季光・植松晃子・石橋道子 指定討論：佐野秀樹

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
10. 新旧友人関係及び学校への認知が現在の居場所感に及ぼす影響―コミュニティ・アイデンティティ及びトポフィリアの視点から―	―	平成 30 年 10 月	関西心理学会第 130 回大会発表論文集 p. 59. （甲南大学）	本研究の目的として，新旧友人関係及び学校への認知が現在の居場所感に及ぼす影響について検討を行った。特に，学校への認知はコミュニティ・アイデンティティ（CI）（野波・加藤，2009）及びトポフィリア（TP）（Tuan, 1974）に着目して検討を行った。その結果，高等学校までの友人が“親友”として認知されやすい傾向にあり，過去に所属していた CI 及び TP を重視する傾向がみられた。特に現在の“承認的居場所”の感覚は，新旧友人及び過去・現在 CI が規定因として認められ，過去とのつながりが居場所を感じる要因として重要であることが考えられた。
11. 自己－他者関係及び特性的自己効力感が現在の居場所感に及ぼす影響―自分ひとり，新旧友人関係への安心感を手がかりに―	―	令和元年 11 月	関西心理学会第 131 回大会発表論文集 p. 35. （大阪教育大学天王寺キャンパス）	本研究の目的は，自分ひとり，あるいは新旧友人と過ごす安心感及び特性的自己効力感が現在の居場所感に及ぼす影響について検討することであった。社会的居場所及び個人的居場所を目的変数，自分ひとり・新旧友人への各安心感評定，特性的自己効力感を予測変数とする重回帰分析を男女別に行った結果，男女とも特性的自己効力感が社会的居場所・個人的居場所，新友人の安心感が社会的居場所を予測することが認められた。
「その他」 1. 災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第４回　実証的研究からみえる教師の災害時における「使命感」と「多忙感」の関連	―	平成 29 年８月	教育 PRO 第 47 巻第 17 号 通巻 1842 号 pp. 8-9.	教員の「使命感」と「多忙感」の相関性について，熊本地震において教員が果たした役割をモデルとして，教員への意識調査をもとに検討した。その結果，他群の教員は多忙感や内的統制感が高まることで自らの存在価値や意欲の高まりがみられるのに対し，熊本自身で被災した教員群にそれらがみられないことから，一連の熊本地震への対応の長期のストレス状況にあることが推察された。一方，教員からの聞き取り調査では，教員は自らよりも児童生徒を優先して心のケアに努める利他行動が認められた。
2. 災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第８回　ベトナムにおける「保護」の根底にあるもの	―	平成 29 年 10 月	教育 PRO 第 47 巻第 22 号 通巻 1847 号 pp. 8-9.	ベトナムは様々な天災に見舞われているものの，災害の大きさに比して，被害が思いのほか小さい。そこには，災害等非常時における「保護」の主体が関連しているという示唆を得られた。本稿では，その「保護」意識の根底について考察した。その結果，ベトナムにおいては，近年の経済成長における都市化現象が核家族化を進展させたものの，家族を重要視するという観点も根強く残っている一方，知らない人への警戒心は非常に強いことが伺えた。上述の「警戒心の強さ」は「保護」意識の規定因である可能性が示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
3.災害時における教師たちのノブレス・オブリージュ～そこにある「使命感」と「多忙感」～ 第12回　取り戻す日常と薄れゆく震災の記憶 ～防災教育が持つ価値の提言～	ー	平成29年12月	教育PRO 第47巻第27号 通巻1852号 pp. 6-7.	本稿では，日常を取り戻そうとする「復興のベクトル」と，震災の記憶のうち「想起のベクトル」が減少していくという相反する状況の中で，防災教育が果たす役割について考察を行った。古来から「津波てんでんこ」などの教訓として後世に伝えられてきた事象を検討した結果，防災教育の根幹は，残された「教訓」の活性であることを見出した。 共著者：松井典夫・岡村季光 本人担当部分：先行研究収集・考察部分を担当

教　育　研　究　業　績　書

令和２年　３月　３１日

氏名　　林　悠子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
健康・スポーツ科学、スポーツ心理学、身体表現学	スポーツ心理、体育、運動イメージ、発育発達、表現

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 発達段階に応じた子ども向けダンスのグループ制作、保育者と園児役とに分かれて行う表現遊びの指導実践、サーキット遊びやボール遊びの創作と指導実践を行う。	平成21年～現在に至る	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部「体育の基礎Ⅰ・Ⅱ」「身体表現」、奈良学園大学人間教育学部「健康・運動の理解」において、乳幼児から小学生の発達段階を理解し、音楽リズムダンスの振り付けやリズム遊びの実践、「子どもに身につけさせたい基礎的な動き」を取り入れたサーキット遊びやボール遊びの創作を行わせた。
2　作成した教科書，教材 ダンスの振付用紙や運動あそび・音楽に合わせた身体表現遊びの指導案の作成とオペレッタのオリジナル台本の作成。	平成21年～平成30年	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部「体育の基礎Ⅰ・Ⅱ」「身体表現」において、実習現場等で利用できるようにダンスの振付用紙や音楽にあわせたリズム遊び・身体表現遊びの指導案を作成した。「子ども学ゼミ」においては音楽科目担当者と共同でセリフ・BGM・舞台装置の動き等も含んだオペレッタの製作をしている。これまでに、「不思議の国のアリス」「ピーターパン」など計 10 本のオリジナル台本を作成した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部授業科目に対する学生評価 「体育の基礎」（Ⅰ回生前期講義)、「体育の基礎Ⅱ」（Ⅰ回生後期講義)、「保育表現技術（身体表現)」（Ⅱ回生前後期講義）		奈良学園大学奈良文化女子短期大学部での授業科目に対する学生評価では、ほぼ全体平均を上回ってきた。(平成 27 年度 3.49ﾎﾟｲﾝﾄ、平成 28 年度 3.43ﾎﾟｲﾝﾄ) 「体育の基礎」: 平成 27 年度未実施、平成 28 年度 3.37ﾎﾟｲﾝﾄ。「体育の基礎Ⅱ」: 平成 27 年度未実施、平成 28 年度 : 3.62ﾎﾟｲﾝﾄ。「保育表現技術（身体表現)」: 平成 27 年度 : 3.53ﾎﾟｲﾝﾄ、平成 28 年度 : 3.66ﾎﾟｲﾝﾄ
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 奈良文化高等学校「社会人のための『ウォーキング』講座」　講師 (2) 奈良学園大学奈良文化女子短期大学部主催講座講師 ①（社）奈良県シルバー人材センター協議会委託子育て支援講習 ②子育て支援事業「ちびっこ広場」 ③公開講座「親子で楽しむシリーズ」	(1) 平成22年 (2)① 平成23年2月 ②平成23年～平成30年 ③平成23年～平成29年	(1)奈良文化高等学校で3年生を対象に行われた特別講座「社会人のための『ウォーキング』講座」において講師を担当した。 (2)①（社）奈良県シルバー人材センター協議会の委託を受けて行われた子育て支援講習において、「子どもと楽しむ運動遊び」として、表現遊びや発育発達についての講義と演習を行った。 ②地域の子育て支援事業「ちびっこ広場」内において、保護者に向けて青年期の発達を見据えた、子どもとの音楽リズム遊びの実践を行った。 ③公開講座では、親子向けの保育表現や音楽表現「親子シリーズ」のうち、運動遊びやリズム遊びやダンスを行う身体表現の講師を担当した。
5　その他		特記事項なし

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許		特記事項なし
2　特許等		特記事項なし
3　実務の経験を有する者についての特記事項 磯城郡保育士研修会講師		磯城郡保育士会より依頼を受け、研修会の講師を務めた。「乳幼児期における運動の重要性について」として現職の保育士らに向けた講演を行った。

4　その他		特記事項なし

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文） 1.高齢者における一過性運動の心理的効果	単著	平成 22 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 41 号:77-86	本研究は、子育て支援講習の運動遊びプログラム「子どもと楽しむ運動遊び」に参加した高齢者における一過性運動による心理的効果と、参加者らの日常の運動実態を明らかにするために行った。その結果、運動によって疲労感と積極的な安寧感情が増加し、日頃運動を行っている参加者とそうでない参加者とではその変化に顕著な差があることが認められた。また参加者の約 7 割は日頃から何らかの運動を行っており、運動に関する関心の高さが明らかとなった。
2.保育実習における身体活動と学生の気づきについて	単著	平成 23 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要 42 号：97-106	本研究では、２回生地元保育所実習において、保育所内でどのような身体活動（体育・運動遊び・リズム遊びなど）が行われていたのか、またそれらの活動を観察する中で学生自身がどのような気づきをしたのかについて、実習後のアンケートにより調査を行った。その結果、学生らは月齢による運動発達の違いや社会的発達の違いなどに気づき、また体育・表現の分野での実習中に必要な課題について明らかにすることができた。
3.保育者養成校に求められる学生の資質について－保育現場へのアンケート調査より－	単著	平成 24 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 43 巻：127-134	本研究では、過去 6 年間の卒業生の勤務実態についてのアンケート調査の自由記述から、園長・施設長らが保育者養成校に望むこと、また就職した本学卒業生が評価されていることを分析した。その結果、保育現場ではまず保育者としての「技術や知識」、「資質」が、そして社会人としての力や保育者として働く意識が求められること、卒業生らは個々の資質や人柄、働く姿勢は評価されているが「保育技術」に対する評価は十分ではないことが明らかとなった。
4.子育て支援広場に参加している乳幼児の運動状況について 〔査読有り〕	単著	平成 25 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 44 巻：91-99	本研究では、親子が集えるスペースに参加している未就園児親子を対象に、子どもの発育発達状況や日々の遊びなどの活動状況、また母親の運動歴や運動実施状況等についてアンケート調査を行った。その結果、子どもたちはおおむね活発に運動を行っており、遊びは室内遊びが多く、保護者（母親）の運動実施が少ないことなどが明らかとなった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.新人保育者の早期離職に関する実態調査 〔査読有り〕	共著	平成 25 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 44 巻：101-109	本研究では、保育者の早期離職問題に着目し、現場へのアンケート調査と早期離職者へのインタビュー調査を実施した。その結果、保育者は女性のライフサイクルの影響が強い職種であること、早期離職者の退職理由は、「進路変更」や「体調不良」が多いが、その根本的な原因は、職場での人間関係にあることが明らかになった。
6.保育者養成校に求められる学生の保育実践能力と資質について 〔査読有り〕	単著	平成 26 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 45 巻：123-130	本研究では、本学における保育者養成の在り方についての示唆を得ることを目的に、近畿一円の幼稚園、保育所（園）の管理職者または新人教育担当者に対してアンケート調査を実施した。「現場で求められている能力と新入職者の能力とのギャップ」に焦点を絞り、教育課程による差を探求したところ、保育者として求められる資質については教職課程に差がないものの、4 年制大学と短期大学卒業生では保育実践能力において差があることが明らかになった。
7.保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識について 〔査読有り〕	単著	平成 27 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 46 巻：121-128	本研究では、本学学生が保育者としての資質や能力についてどのように考え、どの程度それらの力を身につけていると考えているのかを明らかにした。保育者としての専門能力も資質も、それを重視するかという自身の考えについてはほとんどの項目で 1 回生の方が高く、いま自分がどれくらい実践できるか（身につけているか）という自己評価について、保育者としての実践的専門能力は 1 回生の方が高く、保育者の資質は 2・3 回生の方が高かった。
8.保育者養成に求められる保育者の資質について（2）－就職先へのアンケート調査の前回調査との比較から－ 〔査読有り〕	単著	平成 28 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 47 巻：71-80	本研究では、平成 23 年度から平成 26 年度の本学卒業生の就職先に対して行った勤務実態についてのアンケート調査のうち、自由記述から園長らが保育者養成校に望むこと、また就職した本学卒業生が評価されていることを分析した。前回調査と比較した結果、保育現場では即戦力として役立つ保育の実践力は当然ながら、保育者の資質や社会人としての態度や覚悟、特に「社会人基礎力」とされる、チームで働く上で重要視される様々な能力が求められていることが示唆された。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9.各発達の時期における「先生」のネガティブな言動について〔査読有り〕	共著	平成 28 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 47 巻：31-40	本研究では、養成課程の学生が子どもの立場を理解し不適切でネガティブな言動をしないため、教師のネガティブな言動とは何かについて整理を行うため調査を行った。その結果、幼児期においては教員のネガティブな言動は少ないが、小学校高学年から中学生の時期においては、教員の言動でネガティブとして捉えられた言動が多くなっており、高校生になると減っていた。この変化は思春期と関係していると考えられ、教員の言動でネガティブと捉えられる言動は、それらを受け止める子どもの発達の時期によって量的にも質的にも異なっていた。
10.保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について〔査読有り〕	共著	平成 28 年 11 月	奈良文化女子短期大学紀要第 47 巻：41-48	本研究では、保育者養成短期大学生 160 名のＹＧ性格検査の判定結果をもとに、その性格特性の傾向について明らかにするとともに、卒業時の進路状況（進路選択）との関連について調べることを目的とした。学生の半数近くにみられた性格特性は「情緒の不安定さ」であった。進路状況との関連では、職種に関わらず非正規として就職あるいは就職をしない選択をした学生と、性格因子尺度の「劣等感」「非協調性」が高い傾向にある学生とのあいだに関連があることが示唆された。
11.女子大学生における運動能力の現状について-運動適正テストと運動不振尺度から－〔査読有り〕	単著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 48 巻：87-96	本研究では、運動適正テストの実施と運動不振尺度の調査から、女子大学生の運動能力の実態について検討を行った。その結果、学生の半数以上で運動能力水準が低いこと、運動不振には技能的な側面とともに体力面での不振が関与することが示唆された。
12.施設実習における学生の不安を軽減する事前学習についての研究〔査読有り〕	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 48 巻：31-40	本研究では、施設実習に参加した学生に対して行った実習事後指導における振り返りレポートを分析し、実習に参加する前の実習に対するイメージや不安感や疑問などを分類することで、実習に臨む学生にとっての必要な事前学習とは何かを明らかにした。また、実習において自身の不足していた点について分析を行ったことで、実習の取り組み点検チェック表を作成することができた。
13.新人保育者に必要な資質について－新人保育者に対する総合的な評価につながる具体的な資質－〔査読有り〕	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 48 巻：41-49	本研究では、本学卒業生の勤務実態についてのアンケート調査から、どのような新人保育者が評価されるのかについて分析した。その結果、高い技術や知識よりもまずは新人という立場をわきまえながら礼儀正しく責任を持って一つ一つのことに意欲的に取り組む姿勢が必要であることが明らかになった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14.身体表現科目における表現遊びの指導実践内容と学生の気づき〔査読有り〕	単著	平成 30 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 49 巻：105-115	本研究では、身体表現遊びの指導実践の内容と有用性について分析した。その結果、指導内容は 5 歳児を対象とした遊びが半数を占め、運動遊び要素の強い遊び、既知の遊びを展開する傾向が伺われ、発達段階の広い理解と遊びのレパートリーを増やす努力が必要であると考えられた。
15.新人保育者に対する評価～前年度との比較を通して～〔査読有り〕	共著	平成 30 年 11 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学紀要第 49 巻：49-59	本研究では、短期大学卒業生の勤務実態についてのアンケート調査から、どのような新人保育者が評価されるのかについて、前年度と比較分析した。その結果、満足度や将来性への期待が向上している傾向が伺われた。
16. 新人保育者に求められる資質，新人保育者としての評価，保育者養成校における課題，GPA・各教科の成績と職場での評価との関係	共著	令和 2 年 3 月	奈良学園大学紀要第 12 巻：51-60	本研究では、短期大学卒業生の就職先における評価についての研究の継続である。その結果、平成 27 年度からの 3 か年で全体的に保育現場での卒業生の評価は明らかに上がっていた。一方、卒業後における新人保育者としての総合的な評価得点・各項目における評価得点と在学中の累積 GPA の値との相関はみられなかった。
17. 女子大学生における運動不振の現状について－運動不振尺度を用いて－	単著	令和 2 年 3 月	奈良学園大学紀要第 12 巻：103-108	本研究では、幼児教育学科に在籍する女子大学生の運動不振の実態について、大学生版運動不振尺度を用いて検討を行った。調査の結果、およそ 3 割の学生で身体操作力とボール操作力の何らかの運動不振があること、小中学校時よりも大学生である今現在において運動不振の状況が進んでいること、ボール操作力に比べて身体操作力の方が不振であることが明らかになった。
（その他） 1.　連載　遊びの世界 27「大和地方のうた遊び」	単著	平成 27 年 10 月	子ども発育発達.13-3：195-198	学会誌連載「遊びの世界」において、「大和地方のうた遊び」と題し、奈良県にちなんだ伝承遊びについて執筆した。
（学会発表） 1. 安静体験イメージによる精神生理学的変化について	－	平成 24 年 6 月	日本バイオフィードバック学会第 40 回大会発表（立命館大学）大会予稿集 P30.	くつろいだ姿勢を取った「安静体験」と、その体験の再現イメージを行った場合の生理的変化について、①安静時の自分の筋感覚②自分の生理反応③自分の周りの様子、の 3 つのイメージを課題とし脳波・心拍数・呼吸数を指標として比較検討を行った。その結果、生理反応的イメージ課題ではβ波含有率の減少がみられたことから、課題により安静状態が促されたと推測された。
2.子育て支援広場に参加する乳幼児の発育発達状況について	－	平成 24 年 8 月	日本体育学会第 63 回大会発表（東海大学）	本研究では、短期大学における地域貢献・子育て支援事業である親子が集えるスペースに参加している未就園児親子を対象に、子どもの発育発達状況や日々の遊びなどの活動状況、また母親の運動歴や運動実施状況などについてアンケート調査を行った。その結果、子どもの遊びは室内遊びが多く、保護者（母親）の運動実施が少ないことなどが明らかとなった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.保育士養成校に求められる学生の資質について	―	平成 24 年 9 月	全国保育士養成協議会第 51 回研究大会発表（京都文教大学・京都文教短期大学） 大会予稿集 p530-531.	本研究では、卒業生の就職先に対する卒業生の勤務実態についてのアンケート調査から、現場で保育者養成校に望むこと、また本学卒業生がどのように評価されているか分析した。その結果、第一に保育者としての「技術や知識」、「資質」が求められ、次に社会人としての力や保育者として働く意識が求められること、卒業生らは個々の資質や人柄、働く姿勢は評価されているが、「保育技術」に対する評価は十分ではないことが明らかとなった。
4.安静体験イメージによる精神生理学的変化について	―	平成 25 年 6 月	日本バイオフィードバック学会第 41 回大会発表（鎌倉女子大学） 大会予稿集 P29.	くつろいだ姿勢を取った「安静体験」と、その体験の再現イメージを行った場合の精神生理学的変化について、①安静時の自分の筋感覚②自分の生理反応③自分の周りの様子、の 3 つのイメージを課題とし、脳波とイメージ想起に対する自己評価の高低との関連について比較検討を行った。その結果、自己評価の高い群は低い群に比べてイメージ時の大脳活動がより活発であったことが示された。
5.幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（1）	―	平成 25 年 8 月	日本体育学会第 64 回大会発表（立命館大学） 大会予稿集 P138.	本研究では、和歌山県私立 W 幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体格における発育発達の特徴について検討を行った。H11 年・H16 年・H21 年の園児の、身長・体重・胸囲・座高の 4 つの身体測定データを分析対象とした。
6.幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（2） －和歌山県私立 W 幼稚園における体力・運動能力測定データから－	―	平成 25 年 8 月	日本体育学会第 64 回大会発表（立命館大学） 大会予稿集 P138.	本研究では、和歌山県私立 W 幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行った。H11 年・H16 年・H21 年の 25m 走、立ち幅跳び、ボール投げ、両足連続跳び越しの 4 つの運動能力測定データを分析対象とした。その結果、性差は年中児の跳び越しくぐりにのみみられ、「ボール投げ」や「立ち幅跳び」ではあまり年代の差が見られなかったのに対し、「25m 走」「跳び越しくぐり」では年代による差が見られた。
7. 保育現場が保育士養成に望むこと	―	平成 25 年 9 月	全国保育士養成協議会第 52 回研究大会発表（高松） 大会予稿集 p332-333.	本研究では、本学における保育者養成の在り方についての示唆を得ることを目的に、近畿一円の幼稚園、保育所（園）の管理職者または新人教育担当者に対し、保育現場で働く新入職者の現状と保育者養成に望むことについてアンケート調査を実施した。その結果、4 年制大学化や保育士の国家資格化を望む声は少ないが、資質や基礎学力においては 4 年制大学卒が優れているという指摘もあり、養成校における保育者資質の向上が望まれることが明らかとなった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8. 幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（3） －和歌山県私立Ｗ幼稚園における体力・運動能力測定データから－	－	平成 26 年 3 月	日本発育発達学会第 12 回大会発表（大阪成蹊大学） 大会予稿集 P83.	本研究では、和歌山県私立Ｗ幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行った。3～5 歳の園児の H11 年・H16 年・H21 年の 25m走、立ち幅跳び、ボール投げ、両足連続跳び越しの 4 つの運動能力測定データおよび身長・体重・胸囲の体格データを分析対象とした。その結果、「25m 走」「跳び越しくぐり」では年代による差が見られ、ボール投げでは体格との正の相関がみられた。
9. Psychophysiological changes in the movement imagery -Preliminary study- 身体動作イメージにおける精神生理学的変化につ	－	平成 26 年 8 月	7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress,Tokyo 大会予稿集 P33.	本研究では内的な身体動作イメージと外的な身体動作イメージにおける脳波含有率の変化を分析した。その結果、α1 波含有率は内的イメージ時には頭頂・中心領域での減少、外的イメージ時には後頭領域での減少がみられた。
10.Team Building Intervention for High School Volleyball Team 高校バレーボールチームに対するチームビルディングの介入効果について	－	平成 26 年 8 月	7th Asian-South Pacific Association of Sport Psychology International Congress,Tokyo 大会予稿集 P32.	本研究では、高校バレーボールチームに対して、チャンピオンシップの最終出場資格を失った後にチームの結合を回復するため、その精神的な準備に対してスポーツ心理学がどのような働きを持ったかについて調査を行った。
11. 幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（4） －和歌山県私立Ｗ幼稚園における体力・運動能力測定データから－	－	平成 26 年 8 月	日本体育学会第 65 回大会発表（岩手大学） 大会予稿集 P129.	これまで和歌山県私立Ｗ幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行ってきたが、本研究では運動能力測定データを分析対象とし、きょうだい構成の違いによる幼児の運動能力ならびに体格の発達特徴について検討を行った。　H11 年・H16 年・H21 年の 25m走、立ち幅跳び、ボール投げ、両足連続跳び越しの 4 つの運動能力測定データを分析対象とした。いずれの運動能力においても、ほぼすべての年代・年齢において第１子に比べて第２子以降の運動能力が高く、特に「跳び越しくぐり」において顕著であった。
12.幼児の体格と体力・運動能力の発達特徴について（5） －和歌山県私立Ｗ幼稚園における体力・運動能力測定データから－	－	平成 26 年 8 月	日本体育学会第 65 回大会発表（岩手大学） 大会予稿集 P116.	これまで和歌山県私立Ｗ幼稚園における体格・体力測定データから、幼児の体力における発育発達の特徴について検討を行ってきたが、本研究では H11 年・H16 年・H21 年の身長・体重・胸囲の 3 つの身体測定データを分析対象とし、きょうだい構成の違いによる幼児の体格の発達的特徴について、運動能力との関連について分析した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. 現場が求める保育実践能力と卒業時に獲得している能力の教育課程別比較	―	平成 26 年 9 月	全国保育士養成協議会第 53 回研究大会発表（博多） 大会予稿集 P36.	本研究では、本学における保育者養成の在り方についての示唆を得ることを目的に、近畿一円の幼稚園、保育所（園）の管理職者または新人教育担当者に対してアンケート調査を実施した。「現場で求められている能力と新入職者の能力とのギャップ」に焦点を絞り、教育課程による差を探求したところ、保育者として求められる資質については教職課程に差がないものの、4 年制大学と短期大学卒業生では保育実践能力において差があることが明らかになった。
14. 視点の異なる運動イメージに対する精神生理学的反応について	―	平成 27 年 7 月	日本バイオフィードバック学会第 43 回大会発表（筑波大学） 大会予稿集 P32.	本研究では、内的視点からなる体験イメージ（internal imagery）と外的視点からなる観察イメージ（external imagery）による単純な身体動作を課題とし、それらを想起した際の大脳活動の違いを比較することによって身体運動イメージの精神生理学的特徴を明らかにした。イメージ課題は 3 つの身体動作（脚を屈曲する・前屈する・腕を上げる）とし、体験イメージと観察イメージを行った。
15. 脳波からみた運動学習における運動イメージの効果について	―	平成 27 年 8 月	日本体育学会第 66 回大会発表（国士舘大学） 大会予稿集 P132.	本研究では、提示された他者の動きに対して、内的または外的視点から想起した自己像を意識しながら、動作の模倣を行うことを課題とし、脳波を用いて運動学習における運動イメージの効果を検討した。動作は、両手を置いた状態から手首を屈曲させて右手または左手を上げる単純動作であった。課題中は、頭皮上の 13 部位から脳波の記録を行った。反応時間、正答率および脳波に関して、経時変化の検討および内的視点－外的視点イメージ間の比較を行った。
16. 保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識について	―	平成 27 年 9 月	全国保育士養成協議会第 54 回研究大会発表（札幌） 大会予稿集 P35.	本研究では、本学における保育者養成の在り方についての示唆を得ることを目的に、「保育者としての保育実践能力」と「保育者としての資質」についてどの程度重視し、どの程度自分の身についていると思うか、本学学生に対してアンケート調査を実施した。その結果、1 回生と 2・3 回生とでは重視する能力や自己評価について差が見られた。
17. 本学における子育て支援事業の 5 年間の取り組みと評価	―	平成 27 年 9 月	全国保育士養成協議会第 54 回研究大会発表（札幌） 大会予稿集 P179.	本学における子育て支援事業「ちびっこ広場」「つどいの広場」について、これまでの利用者アンケートや利用者数データなどから、5 年間の取り組み内容とその評価をまとめた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18. Effects of motor imagery perspectives on motor learning based on EEG EEG をベースとした運動学習におけるイメージの視点の効果につい	—	平成 28 年 6 月	2016 NASPSPA Conference (Montreal)大会プログラム P22.	本研究では、提示された他者の動きに対して、内的または外的視点から想起した自己像を意識しながら単純動作の模倣を行う運動学習課題における運動イメージの効果を検討した。その結果、他者の動作を模倣する際には、刺激と反応が一致する条件で反応が速かった。反応の速さと運動イメージの達成度・鮮明度・コントロール度とも対応関係が見られた。すなわち、運動学習において運動イメージの視点の違いが脳波に反映され、パフォーマンスとも関連することが示唆された。
19.女子大学生の運動イメージ想起能力について	—	平成 28 年 8 月	日本体育学会第 67 回大会発表（大阪体育大学) 大会予稿集.	本研究では、運動部に所属する健康な女子大学生 56 名を対象に、運動イメージ質問紙 JMIQ-R を用いて、イメージ想起の際の体験イメージ（すなわち内的視点イメージ）と観察イメージ（すなわち外的視点イメージ）のタイプを調査した。総合得点はバスケットボール部とソフトボール部で所属部間に差は見られなかったが、さらに、モーズレイ性格検査（MPI）による個人の性格特性やこれまでの運動経験等から、運動イメージ想起能力としてのイメージの視点について特徴を分析した。
20. 保育者養成に求められる保育者の資質について―就職先へのアンケート調査より―	—	平成 28 年 8 月	全国保育士養成協議会第 55 回研究大会発表（盛岡） 大会予稿集 P57.	本研究では、平成 23 年度から平成 26 年度の本学卒業生の就職先に対して行った勤務実態についてのアンケート調査のうち、自由記述から園長らが保育者養成校に望むこと、また就職した本学卒業生が評価されていることを分析した。前回調査と比較した結果、保育現場では即戦力として役立つ保育の実践力は当然ながら、保育者の資質や社会人としての態度や覚悟、特に「社会人基礎力」とされる、チームで働く上で重要視される様々な能力が求められていることが示唆された。
21.運動イメージタイプと性格特性からみた女子大学生の運動イメージ想起能力について	—	平成 28 年 11 月	日本スポーツ心理学会第 43 回大会発表(北星学園大学）大会予稿集 pp154-155.	本研究では，バスケットボール部とソフトボール部に所属する女子大学生を対象に、イメージ能力に関係するとされる性格特性との関わりや個人特性を分析することで，運動イメージ想起能力としてのイメージの視点についての特徴を明らかにした．それぞれの部においてポジションごとの比較をしたところ，ソフトボール部においては差がみられなかったが，バスケットボール部においてフォワードに比べてセンターの内的得点が高い傾向がみられるなど、所属部とポジションすなわち運動特性と役割におけるイメージ能力の違いが示唆された．

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　　原口　忠之

研　究　分　野	研究内容のキーワード
Algebraic Topology, Diffeology	Diffeological space, Homotopy theory, smooth CW complex

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例		
1. E-Learningを用いた数学の基礎学力の定着と管理運営を実施した。	平成24年4月～平成25年３月	環太平洋大学の学生支援係に所属しており、大学１年生に、国語、数学、英語の基礎学力の定着を促すため、E-Learningを導入し、主に数学を担当した。また、導入した年度であったため、管理運営も担当し、1年生の全学生に対して、国語、数学、英語のノルマを達成させ、最後の確認試験では、全員が合格点を取得した。
2. 大志会の夜の勉強会	平成24年4月～平成25年３月	環太平洋大学の教員採用試験合格を目標にしている学生が集まる大志会という組織に所属し、毎週１回から２回、採用試験に向けた数学の授業を17時～21時まで実施し、学生の採用試験合格に貢献した。
3. 数学道場	平成30年4月～現在に至る	教員採用試験合格を目指し、数学検定準１級合格を目指し、週に３回実施している。その他にも学生のレベルに合わせた補修計画をたてている。
２　作成した教科書，教材		
1. 環太平洋大学通信教育課程中等教育数学専攻設置において、単位認定のレポート作成	平成24年６月	数学基礎Ⅰ，数学基礎Ⅱ，集合・位相Ⅰ，集合・位相Ⅱ，幾何学Ⅰ，幾何学Ⅱ，幾何学Ⅲの設置審査にむけて､各教科に対してレポートを２部作成し、全ての教科において審査を通過した。
2. 環太平洋大学通信教育課程中等教育数学専攻単位認定試験の作成	平成25年１月	数学基礎Ⅰ，数学基礎Ⅱ，集合・位相Ⅰ，集合・位相Ⅱ，幾何学Ⅰ，幾何学Ⅱ，幾何学Ⅲ の試験問題を各教科につき複数部作成した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価 「採用時における評価」		
1.　環太平洋大学次世代教育学部助教の採用にあたっての学長評価	平成24年３月	高等学校の現場での教育経験を生かして、環太平洋大学のリメディアル教育，および通信教育課程の立ち上げへの期待があり採用された。
2.　大分工業高等専門学校一般科理系講師の採用にあたっての校長評価	平成26年３月	私立大学・高等学校での教育経験を生かして、高専における数学教育を期待され採用された。とくに面接時の模擬授業は、過去最高の内容と評価された。
3.　奈良学園大学人間教育学部講師の採用にあたっての学長評価	平成30年３月	私立大学・高専・高等学校での様々な数学教育の経験があり、また環太平洋大学所属時に通信教育課程の数学を管理運営した経験を期待され採用された。
「授業評価アンケート」		
1. 環太平洋大学教務課による学生授業評価アンケート	平成25年２月	平成24年度の授業評価アンケートの平均が４段階中で3.29であった。

2. 大分工業高等専門学校教務主事室による学生授業評価アンケート（通年科目）	平成 27 年 2 月	大分高専において平成 26 年度は授業を 4 クラス担当し、5 段階で平均が 4.23 であった。また、情報工学科 1 年の基礎数学 I では 4.44、電気電子工学科 2 年の線形代数では 4.21 であり、それぞれのクラスの全ての授業の中で、一番よい成績であった。 ※通年科目のみ担当
3. 大分工業高等専門学校教務主事室による学生授業評価アンケート（通年科目）	平成 28 年 2 月	大分高専において平成 27 年度は授業を 4 クラス担当し、5 段階で平均が 4.29 であった。機会工学科 1 年の基礎数学 I では 4.65、情報工学科 2 年の微分積分 I では 4.02、都市環境工学科 3 年の微分積分 II では 3.98、電気電子工学科 3 年の微分方程式は 4.51 であった。 ※通年科目のみ担当
4. 大分工業高等専門学校教務主事室による学生授業評価アンケート（通年科目）	平成 29 年 2 月	大分高専において平成 28 年度は授業を 4 クラス担当し、5 段階で平均が 4.35 であった。情報工学科 1 年の基礎数学 I は 4.4、機会工学科 2 年の微分積分 I は 4.24、情報工学科 3 年の微分積分 II は 4.53、電気電子工学科 3 年の微分方程式は 4.23 であった。 ※通年科目のみ担当
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 公開授業（岡山県立岡山朝日高等学校）	平成 22 年 10 月	岡山県立朝日高等学校にて、県内の中学校・高等学校を対象に公開授業を実施した。
2. 公開授業（岡山県立岡山朝日高等学校）	平成 23 年 10 月	岡山県立朝日高等学校にて、県内の中学校・高等学校を対象に公開授業を実施した。
3. 特別公開授業（環太平洋大学）	平成 24 年 11 月	岡山県内の高等学校をはじめ、環太平洋大学の教員を対象とした「数の理解」の研究授業を発表し、検討会を実施した。
4. 科研費獲得へ向けた講演の世話人	平成 25 年 9 月	環太平洋大学において、科研費獲得に向けた講演を文科省を通じて依頼し、当日に向けた準備、講演会での司会を担当した。
5. 岡山大学オープンキャンパス体験講義の特別講師	平成 28 年 8 月	岡山大学のオープンキャンパスの理学部数学科において，特別講師として，「オイラー標数の幾何学」というタイトルで体験授業を実施した。
6. 奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義	平成 30 年 6 月	「代数方程式～3 次方程式の解の公式」というタイトルでミニ講義を実施した。
7. 奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義	平成 30 年 8 月	「オイラー標数～正多面体の個数」というタイトルでミニ講義を実施した。
8. 奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義	令和 1 年 6 月	「ピタゴラス数の性質」というタイトルで見講義を実施した。
5　その他 1.　該当なし		

		職務上の実績に関す
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1. 高等学校教諭一種免許状（数学）取得	平成 19 年 3 月 23 日	岡山県教育委員会，平 18 高一第 965 号
2. 高等学校教諭専修免許状（数学）取得	平成 21 年 3 月 23 日	岡山県教育委員会，平 20 高専第 67 号
2　特許等 1. 該当なし		

3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 環太平洋大学大志会	平成24年4月～平成26年3月	環太平洋大学の教員を目指す学生に対して、教員採用試験用の数学の指導だけでなく、夜の勉強会の監督や、学生の相談に対応した。
2. 環太平洋大学学習支援室	平成24年4月～平成26年3月	環太平洋大学で主に低学年の基礎学力の定着を図る組織として学習支援室があり、E-Learningの管理運営だけでなく、新入生300人に対するオリエンテーションの企画、段取り等の運営に積極的に取り組んだ。また､就活生に対して､SPIの指導も実施した。
3. 環太平洋大学次世代教育学部クラス担任	平成24年4月～平成25年3月	学生30名のクラス担任を担当した。
4. 環太平洋大学次世代教育学部クラス担任	平成25年4月～平成26年3月	学生30名のクラス担任を担当した。
5. 環太平洋大学FD委員	平成25年4月～平成26年3月	環太平洋大学の教員の授業力向上や学生指導方法のワークショップの企画・運営を行った。
6. 環太平洋大学紀要編集委員	平成25年4月～平成26年3月	環太平洋大学研究紀要に掲載するにあたり研究内容が論文、研究ノート等に適切かどうかを判断し編集、とりまとめを行った。
7. 大分高専図書館運営委員	平成26年4月～平成28年3月	明野通信の作成、学生の図書館の利用の管理を行った。
8. 大分高専弓道部	平成26年4月～平成28年3月	2年間担当し、管理運営をした。
9. 大分高専囲碁将棋部顧問	平成26年4月～平成30年3月	10年ほど趣味にしている将棋の経験を生かして､4年間担当した｡､平成26年度は大分県高校選手権大会で団体戦・個人戦で準優勝する実績をあげ、個人戦は全国高校将棋選手権大会に出場した。また、平成27年度は全国高専大会でベスト4に入賞した。
10. 大分高専奨学資金等委員	平成27年4月～平成28年3月	学生の奨学金の申請を審議する。
11. 大分高専学生部委員会	平成27年4月～平成28年3月	学生の処分に関することを協議・決議する。
12. 大分高専オープンキャンパス副委員長	平成27年4月～平成28年3月	大分高専のオープンキャンパス副委員長として、段取りの精査や当日の司会進行等を務めた。
13. 大分高専広報委員会	平成27年4月～平成29年3月	大分高専のＨＰの掲示内容、広報活動について計画する。
14. 大分高専学生主事補	平成27年4月～平成29年3月	平成27年度は､学生の車両通学に関する指導が主な業務であり、本年度は特に学生の車両に関する管理を担当し、大分自動車学校における安全講習会の段取り、大分中央警察署と連携をとり安全講習の講演会を企画した。 平成28年度は､新入生オリエンテーション、高専祭等のイベントを運営し、学生会の予算案の作成を担当する等、学生会の運営管理を主な仕事とした。

15. 大分高専教務部委員	平成28年4月～平成30年3月	教員の授業カリキュラムの構成、年間行事を管理するだけでなく、中学校訪問を企画、実施する。また、Web シラバスを大分高専に導入する際に、学科を代表して取りまとめる業務を担当した。
16. 大分高専ソフトテニス部顧問	平成28年4月～平成30年3月	ソフトテニスの経験が10年ほどあったことを生かして、強化に努めた。とくに九州・沖縄地区高専大会では36年ぶりに個人戦優勝、全国高専大会では開学以来、初めてとなる団体戦・個人戦ともにベスト４の実績をあげた。また、高校総体でも新人戦で大分県ベスト８に入るなど九州大会の出場権を得た。
17. 大分高専機械工学科1年クラス担任	平成29年4月～平成30年3月	43名のクラスの担任を1年間務めた。学力が低いため11月からは、時間の都合がつく限り放課後に数学の補修を実施するなどして、基礎学力の向上に貢献した。
18. 人間教育学部人間教育学科数学専修コース 1 年②のクラス担任（17名）	平成30年4月～平成31年3月	学生の出席状況の確認・面談等を適宜行う。また、数学の学力の向上を図るため、補修等を実施している。
19. 人間教育学部人間教育学科企業公務員①のクラス担任（24名）	平成30年4月～平成31年3月	学生の出席状況の確認・面談等を適宜行いながら、クラス運営を実施している。
20. 人間教育学部人間教育学科広報委員	平成30年4月～平成31年3月	奈良学園大学オープンキャンパスにおいて、学生のプレゼン指導等をはじめ運営に携わっている。
21. 奈良学園大学人間教育学研究会運営委員	平成30年4月～平成31年3月	「卒業生から聞こう、教わろう」、「学生シンポジウム」、「卒業研究発表」の運営 会報・研究会誌の審査等をし、発行の準備をする。
22. 人間教育学部人間教育学科数学専修コース 1 年のクラス担任（20名）	令和1年4月～令和2年3月	学生の出席状況の確認・面談等を適宜行いながら、クラス運営を実施している。
23. 人間教育学部人間教育学科数学専修コース 2 年のクラス担任（15人）	令和1年4月～令和2年3月	学生の出席状況の確認・面談等を適宜行いながら、クラス運営を実施している。
24. 奈良学園大学人間教育学研究会運営委員	令和1年4月～令和2年3月	会報・研究会誌の審査等をし、発行の準備をする。
25. 人間教育学部人間教育学科広報委員	令和1年4月～令和2年3月	奈良学園大学オープンキャンパスにおいて、学生のプレゼン指導等をはじめ運営に携わっている。
25. 人間教育学部人間教育学科数学専修コース 2 年のクラス担任（19名）と2年のとりまとめ	令和2年4月～現在に至る	コロナウイルスの影響でリモート授業の中で、クラス運営と学年の運営を実施している。
26. 人間教育学部人間教育学科広報委員	令和2年4月～現在に至る	奈良学園大学オープンキャンパスにおいて、学生のプレゼン指導等をはじめ運営に携わっている。また、大学パンフレット作成等、人間教育学部の広報委員会の運営に貢献している。
27. 人権教育研究推進委員会	令和2年4月～現在に至る	人権に関する委員会の一員である。
4　その他 1. 該当なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　該当なし				
（学術論文） 1　位相空間と微分空間のホモトピー群について（査読無）	単著	平成 24 年 10 月	環太平洋大学研究紀要第 6 号，pp.77-80	位相空間 X に対して、ユークリッド空間の開集合から X への連続写像をプロットとすることで自然に微分空間 DX を誘導する。圏 Top と圏 Diff とするとき関手 D：Top→Diff を定義することができる。このとき関手 D：Top→Diff はホモトピーを保つことを証明している。つまり、位相空間 X から誘導される n 次元ホモトピー群と微分空間から誘導される n 次元ホモトピー群は同型であることを証明した。この結果はホモトピー論を展開する上で重要な結果となる。(4 項)
2　A hommotopy theory of diffeological and numerical generated spaces（学位論文，査読なし）	単著	平成 25 年 3 月	岡山大学学術成果リポジトリ	位相空間の圏を Top で表すとき、圏 Top は有限生成モデル構造をもつことが知られている。本論文では微分空間の圏を Diff で表すとき、圏 Diff は有限生成モデル構造を持つことを証明する。さらに数値的生成空間からなる圏 Top の充満部分圏を NG で表すとき、圏 NG は有限生成モデル構造をもつことを証明し、圏 Top と圏 NG は Quillen 同値であることを証明し、圏 Diff から圏 Top、圏 NG への Quillen 随伴関手が存在することを証明し、これらの結果をまとめた。(54 項)
3　A model structure on the category of diffeological spaces（査読無）	共著	平成 25 年 11 月	arXiv:1311.5668	位相空間の圏 Top には有限生成モデル構造を持つことが知られている。この導入方法をもとに、微分空間の圏 Diff に有限生成モデル構造を導入することに成功した。関手 T：Diff→Top と D：Top→Diff が存在し、T は D の左随伴関手である。これらの関手を用いて、圏 Diff と圏 Top の性質を比較することができる。とくに、(T,D):Diff→Top は Quillen 同値を誘導することが証明できた。この結果により圏 Diff と圏 Top で展開されるホモトピー論は一致することが分かった。(30 項) （担当部分） 第 2 章「Diffeological spaces」～第 5 章「Model category of diffeological spaces」P.2～P.20 〔共著者〕 島川和久

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　Long Exact Sequences for De Rham Cohomology of Diffeological Spaces（査読付）	単著	平成 26 年 9 月	Kyushu Journal of Mathematics. Vol. 68(2014) No. 2, pp.333-345.	微分空間にコンパクトサポートが備わった微分形式を定義し、この微分形式を用いてコンパクトサポートが備わったド・ラム・コホモロジーを定義した。また、ド・ラム・コホモロジーの完全系列が存在する微分空間についての条件を言及し、具体的な例として、１の分割が存在するdiffeological subcartesian space を定義した。これにより、既存のド・ラム・コホモロジー理論の拡張に繋がるだけでなくホモトピー論とコホモロジー理論の融合に繋がる結果を得た。（13 項）
5　On model structure for coreflective subcategories of a model category（査読付）	単著	平成 27 年 1 月	Mathematical Journal of Okayama University, 57 (2015), pp.79-84.	有限生成モデル圏の部分圏に有限生成モデル構造を導入する手法を構成し、条件を制約することによりもとの圏のモデル構造とQuillen同値になることを証明した。この定理の具体的な例として、数値的生成空間からなる位相空間の圏Top の充満部分圏 NG、コンパクト生成空間からなる圏 Top の充満部分圏 CG に対して圏 Top の有限生成モデル構造を圏 NG、圏 CG にそれぞれ導入し、さらに、圏 Top、圏 NG、圏 CG のモデル圏構造は Quillen 同値であることを証明した。(6 項)
6　オイラー標数を用いた初等幾何へのアプローチについて（査読無）	単著	平成 30 年 7 月	人間教育第 1 巻第 5 号, pp.157-161	初等幾何の代表的な問題として知られる``正多面体が 5 つしかない"という性質を、大学で学ぶ抽象的な概念の１つのオイラー標数を利用して、中学生が理解できるように指導方法をまとめた。この手法を用いることにより、中学生でも大学で学ぶような抽象的な数学的概念に触れることができ、数学への興味関心を深めることが期待できる。(5 項)
7　Homology and cohomology via enriched bifunctors（査読付）	共著	平成 30 年 8 月	Kyushu Journal of Mathematics. Vol. 72(2018) No. 2, pp.239-252	圏 Diff の圏 Top の間にある関手 T : Diff→Top と D:Top→Diff において T は D の左随伴関手である。TDX と X が同相になるような位相空間を数値的生成空間とよぶ。数値的生成空間からなる圏 Top の充満部分圏を NG とするとき、圏 NG は極限、余極限に関して閉じており、デカルト閉圏であることを証明した。さらに、スマッシュ積に関してモノイドであることを示した。とくに原口は圏 NG がデカルト閉圏となることを証明することを担当した。(14 項) （担当部分） 第２章「Nmerically generated spaces」～第 3 章「Exponentials in NG」P.2～P.6 〔共著者〕 島川和久、吉田耕平

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8　微分空間 I（査読無）	単著	平成 30 年 10 月	人間教育第 1 巻第 8 号，pp.261-266	Zemmour の著書``Diffeology"を参考にして、diffeological space（微分空間）の解説を試みた論文である。微分空間の公理を導入し、例としてユークリッド空間の具体的な微分構造を紹介した。また、微分空間の間の射（滑らかな写像）を定めた。この性質を利用して、微分構造を写像によって引き戻すことで、集合に微分構造を導入する inductive 性を紹介した。この性質を利用することで，微分空間の部分集合に自然に微分構造を導入することができることも紹介している。(6 項)
9　微分空間 II（査読無）	単著	平成 30 年 10 月	人間教育第 1 巻第 8 号，pp.267-272	Zemmour の著書``Diffeology"を参考にして、diffeological space（微分空間）の基本的な性質について、微分空間 I の継続として解説を試みた論文である。本稿では、微分空間の微分構造を、写像を利用して，押し出すことによって、集合に微分構造を与えることを紹介した。この性質を利用して、微分空間の直和空間・直積空間・商空間を定義する。これらのことから、微分空間の圏は極限・余極限に関して閉じていることを紹介した。(6 項)
10　Homotopy structures of smooth CW complexes（査読無）	単著	平成 30 年 11 月	arXiv:1811.06175	微分空間の圏 Diff 上において、滑らかな CW 複体を構成し、その性質を調べた。Tame 性の概念を導入することでホモトピー拡張性質を滑らかな CW 複体上で利用することができる。この条件をりようすることで、胞体近似定理、ホモトピー同値に関する Whitehead の定理を証明することができた。また、2 つの滑らかな CW 複体の直積は CW 複体であり、位相空間の圏 Top 上の CW 複体よりも扱いやすい面もあることを発見した。(19 項)
11 On homotopy types of diffeological cell complexes	共著	令和 1 年 12 月	arXiv:1912.05359	微分空間の圏 Diff 上の滑らかな CW 複体の性質を調べた論文で、特に、これらの複体の間の連続写像は、微分空間の意味で滑らかな写像とホモトピックになることを証明している。また、これらの複体は 1 の分割をもつことも紹介している。連続写像と滑らかな写像の間の複雑さをホモトピーという概念で近似できることに成功した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「報告書」				
1　微分空間と位相空間	単著	平成 24 年 3 月	日本数学会 2012 年度年会総合分科会総合分科会トポロジー分科会アブストラクト	可微分多様体を一般化した概念として知られる diffeological space が導入された。近年、この空間が注目され始めた。この diffeological space の基本的な性質を紹介している。とくに微分構造をもつ写像であるにも関わらず、直和や商空間の概念を導入することができ、極限・余極限に関して閉じている。また写像空間の概念も導入でき、これがデカルト閉圏であることも紹介している。(2 項)
2　Model structure of numerically generated spaces	単著	平成 24 年 9 月	日本数学会 2012 年度秋季総合分科会総合分科会トポロジー分科会アブストラクト	位相空間の特殊な空間として数値的生成空間の性質を紹介する。数値的生成空間は、任意のユークリッド空間の開集合から集合 X への写像が連続な写像になるような最も弱い位相が導入されている。この数値的生成空間の圏は極限・余極限に閉じており、デカルト閉圏である。さらに、モデル構造を導入でき、位相空間の圏 Top のモデル構造と Quillen 同値であることを紹介している。(2 項)
3　Long exact sequences for de Rham cohomology of diffeological spaces	単著	平成 25 年 3 月	日本数学会 2013 年度年会総合分科会トポロジー分科会アブストラクト	任意の微分空間には de Rham コホモロジー群を定義できることが知られている。このコホモロジー群を計算するための有用な道具として完全系列を利用できる条件を紹介している。(2 項)
4　微分空間の性質とその応用について	単著	平成 26 年 3 月	第 10 回数学総合若手研究集会～多分野間の交流による発展・発見を目指して～北海道大学数学講究録，pp.181-184	任意の微分空間 X は X のプロットを用いることで微分形式を定義することが可能であり、この微分形式を用いてド・ラム・コホモロジーを構成できることが可能であり、ホモトピー不変であることが知られている。この理論の発展として、コンパクトサポートが備わった微分形式を構成し、これを用いてコンパクトサポートが備わったド・ラム・コホモロジーを構成することに成功した。これらの理論を整備するにあたり微分空間から誘導される位相空間の性質について調べた。(4 項)
5　数値的生成空間の圏へのモデル構造の導入とその一般化について	単著	平成 26 年 3 月	日本数学会 2014 年度年会総合分科会トポロジー分科会アブストラクト	圏 D を圏 C の充満部分圏とする。圏 C が有限生成モデル構造をもち、圏 D から圏 C への包含関手 i:D→C がある条件を満たすときに圏 C のモデル構造を圏 D に導入することができる。その具体的な例として、次のことを紹介している。位相空間の圏 Top は有限生成モデル構造をもつ。数値的生成空間からなる圏 Top の充満部分圏を NG とする。このとき、包含関手 i:NG→Top によって圏 Top のモデル構造を圏 NG に導入することができる。また、これらのモデル構造は Quillen 同値であることも紹介している。(2 項)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6　微分空間のホモトピー論とその周辺について	単著	平成 26 年 7 月	第 61 回トポロジーシンポジウム講演集 pp.37-46	微分空間における n 次元球体、n 次元球面の微分構造を境界上では微分係数が常に 0 になるような微分構造を入れなおすことで、滑らかな道の端点を無限回微分可能でつなぐことを可能にした。この条件を使うことで、位相空間で展開されるホモトピー論と同じような理論を構成できることに成功した。これらの概念を用いて、ファイブレーション、胞体複体、ホモトピー群を構成し、これらを利用することで圏 Diff に有限生成モデル構造を導入することに成功した。(10 項)
7 微分空間のモデル構造について	単著	平成 28 年 9 月	日本数学会 2016 年度秋季総合分科会	微分空間の圏 Diff 上にモデル構造を導入する手法の一つを紹介している。とくに、ファイブレーション、コファイブレーション、弱同値の定義に触れる。また位相空間の圏 Top との間には関手 T : Diff→Top、D : Top→Diff が存在し、随伴関係である。この性質を利用して圏 Diff の圏 Top のモデル構造が Quillen 同値であることを紹介する。(2 項)
8　滑らかな CW 複体のホモトピー構造	単著	平成 30 年 9 月	日本数学会 2018 年度秋季総合分科会トポロジー分科会アブストラクト pp.75-76	滑らかな CW 複体を構成する上で必要となる概念を紹介した。とくに微分空間の公理、微分空間の間の滑らかな写像を紹介した。また、可微分構造を用いてホモトピー論を展開する上で重要となる性質の tame 性を与えている。この性質を利用することで基本的なホモトピー拡張性質が成り立つことを紹介している。(2 項)
「学会発表等」 1　微分空間のモデル圏構造について	単独発表	平成 24 年 1 月	福岡ホモトピー論セミナー，福岡大学セミナーハウス セミナー室Ａ	微分空間は可微分多様体を一般化した空間として知られており、微分空間の間の写像は滑らかな構造を保つように定義される。微分空間の圏 Diff は極限・余極限に関して閉じており、デカルト閉圏であることが知られており、都合のよい圏である。しかし、圏 Diff はモデル構造をもつかどうかは知られていれていない。本講演では、圏 Top に導入されているモデル構造の手法をベースに圏 Diff にモデル構造を導入する方法について紹介する。
2　Diffeological space and Topological space	単独発表	平成 24 年 1 月	平成 23 年度日本数学会中国・四国支部例会，岡山大学環境理工学部 104 教室	位相空間の圏 Top の射は連続写像で定義され、微分空間の圏 Diff の射は滑らかな構造を保つ写像で定義される。とくに微分空間は可微分多様体を一般化した空間として知られていることからも、圏 Top と圏 Diff の間には深い関係性がある。本講演では圏 Top と圏 Diff の性質を確認すると同時に異なる点に焦点をあてる。具体的には微分空間においてもホモトピー群を定義できる。関手 D : Top→Diff はホモトピーを保つが関手 T : Diff→Top は保たない等の紹介をする。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　微分空間と位相空間	単独発表	平成 24 年 3 月	日本数学会 2012 年度年会，東京理科大神楽坂キャンパス	微分空間の圏を Diff、位相空間の圏を Top とするときこれらの圏の間には関手 T：Diff→Top と D：Top→Diff が存在し、T は D の左随伴関手であることを証明しており、微分空間と位相空間の間には深い関係性があることが分かる。とくに本講演では、この２つの関手を用いて、微分空間と位相空間の性質の違いを比較すると同時に、これらの関手 T と D が保存する性質について紹介する。とくに T は商空間、直和空間を保ち、D は直積空間、部分空間を保つことについて触れる。
4　Model structure of numerically generated spaces	単独発表	平成 24 年 9 月	日本数学会 2012 年度秋季総合分科会，九州大学伊都キャンパス	ある特殊な条件を満たす位相空間を構成し、これを数値的生成空間とよぶ。数値的生成空間からなる位相空間の圏 Top の充満部分圏を NG で表す。本講演では、この圏 NG に有限生成モデル構造を導入する方法として、圏 Top から圏 NG に自然に存在する関手 F：Top→NG を用いて、圏 Top の有限生成モデル構造を写す方法で証明できることを紹介する。さらに、包含関手 i：NG→Top は Quillen 同値を誘導することを証明した。これにより、圏論上でホモトピー論を一般化することが可能となった。
5　Long exact sequences for de Rham cohomology of diffeological spaces	単独発表	平成 25 年 3 月	日本数学会 2013 年度年会，京都大学吉田キャンパス	任意の微分空間に対して、微分形式が定義できド・ラム・コホモロジーが存在して、ホモトピー不変であることが Zemmour によって証明されている。本講演ではこのド・ラム・コホモロジーに対して、マイヤー・ビエトリス完全系列が存在する条件について言及する。とくに１の分割が存在する微分空間に関しては存在することが分かった。具体的な例の空間として１の分割が存在する diffeological subcartesian space を構成した。これにより、コホモロジー理論のさらなる応用が期待できる。
6　de Rham cohomology of diffeological spaces	単独発表	平成 25 年 5 月	トポロジー金曜セミナー，九州大学伊都キャンパス伊都図書館 3F 中セミナー室 1	任意の微分空間には微分形式が定義可能であり、ド・ラム・コホモロジーを構成することが可能であり、ホモトピー不変であることが知られている。本講演ではこの理論の拡張として、コンパクト・サポートが備わった微分形式を定義し、この概念を用いてコンパクト・サポートが備わったド・ラム・コホモロジーを構成することに成功したことを紹介した。さらに、ホモトピー不変であることも証明し、コホモロジー理論の発展に貢献した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　微分空間におけるコンパクト性とド・ラム・コホモロジーについて	単独発表	平成 25 年 6 月	信州トポロジーセミナー，信州大学数理攻究室（理学部 A 棟 427）	1の分割が存在するような空間で可微分多様体よりも弱い条件で subcartesian space が知られている。本講演では微分空間における diffeological subcartesian space を紹介し、この空間を用いることで、多様体よりも多くの空間を de Rham cohomology の概念を用いて代数的な計算が可能であり、既存の理論の拡張に繋がることを紹介した。また D-Topology において、コンパクト性・局所コンパクト・パラコンパクト、ハウスドルフ性を構成し、コンパクト・サポートが備わった de Rham cohomology を構成できることを紹介した。
8　De Rham cohomology with compact support in respect to diffeological spaces	単独発表	平成 25 年 11 月	2013 年度ホモトピー論シンポジウム，岡山大学創立五十周年記念館 2 階大会議室・小会議室	微分空間から誘導される位相に対して、分離公理、コンパクト性を構成することに成功した。さらに、これらの概念を用いて、1の分割が存在する diffeological subcartesian space を定義した。この空間は多様体よりも条件が弱い空間である。また 1 の分割が存在するような微分空間に対してはド・ラム・コホモロジーにおいて、マイヤー・ビエトリス完全系列が存在することについて言及した。これらの結果から多様体より条件の弱い空間においても計算可能となり理論の拡張に成功した。
9　微分空間における微分形式とその周辺について	単独発表	平成 25 年 12 月	Diffeology in Karatsu，唐津市民交流プラザ	微分空間から誘導される位相は特殊であり、この位相を用いて、分離公理やコンパクト性を定義することに成功した。この性質を用いることで、任意の微分空間に対して、コンパクト・サポートが備わった微分形式を定義することに成功した。またこの概念を用いてハウスドルフをもつ微分空間に対して、コンパクト・サポートが備わったド・ラム・コホモロジーを構成することができた。さらにマイヤービエトリス完全系列の存在性について言及した。
10　モデル構造を持つ圏の部分圏へのモデル構造の導入方法と，その例について	単独発表	平成 26 年 1 月	平成 25 年度日本数学会中国・四国支部例会，島根大学総合理工学部 1 号館 2 階 21 教室	有限生成モデル構造を持つ圏 D の部分圏 C に対して、包含関手 i : C→D とある関手 G : D→C が存在し i は G の左随伴関手であるとき、ある条件を満たすとき D の有限生成モデル構造を関手 G で写すことで部分圏 C に有限生成モデル構造を導入することができる。さらに、条件に制約を加えると圏 D と圏 C のモデル構造は Quillen 同値になることを紹介した。また、この具体的な例として数値的生成空間の圏 NG とコンパクト生成空間の圏 CG を紹介した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
11　微分空間の性質とその応用について	単独発表	平成 26 年 3 月	第 10 回数学総合若手研究集会～多分野間の交流による発展・発見を目指して～，北海道大学学術交流会館	任意の微分空間 X は X のプロットを用いることで微分形式を定義することが可能であり、この微分形式を用いてド・ラム・コホモロジーを構成できることが可能であり、ホモトピー不変であることが知られている。この理論の発展として、コンパクトサポートが備わった微分形式を構成し、これを用いてコンパクトサポートが備わったド・ラム・コホモロジーを構成することに成功した。これらの理論を整備するにあたり微分空間から誘導される位相空間の性質について調べた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12　数値的生成空間の圏へのモデル構造の導入とその一般化について（研究発表）	単独発表	平成 26 年 3 月	日本数学会 2014 年度年会，学習院大学	圏 Diff と圏 Top の間には関手 T:Diff→Top と D:Top→Diff が存在して、T は D の左随伴関手になることが知られている。TDX と X が同相になる位相空間 X を数値的生成空間とよぶ。また数値的生成空間からなる圏 Top の充満部分圏を NG とするとき、圏 NG は CW 複体を含み、極限・余極限に関して閉じており、さらに有限生成モデル構造を導入可能であり、圏 Top のモデル構造と Quillen 同値であることを紹介した。さらに、これらの理論を圏論上で一般化可能であることを示した。
13　微分空間のホモトピー論とその周辺について	単独発表	平成 26 年 7 月	第 61 回トポロジーシンポジウム，東北大学片平キャンパスさくらホール	微分空間における n 次元球体、n 次元球面の微分構造を境界上では微分係数が常に 0 になるような微分構造を入れなおすことで、滑らかな道の端点を無限回微分可能でつなぐことを可能にした。この条件を使うことで、位相空間で展開されるホモトピー論と同じような理論を構成できることに成功した。これらの概念を用いて、ファイブレーション、胞体複体、ホモトピー群を構成し、これらを利用することで圏 Diff に有限生成モデル構造を導入することに成功した。
14　微分空間のホモトピー論について	単独発表	平成 27 年 11 月	ホモトピー論シンポジウム姫路・西はりま地場産業センター（じばさんびる）6 階 601 会議室	微分空間の圏 Diff にモデル構造を導入する上で、新たな手法を発見した。とくに tame-写像の概念を導入し、この概念を用いて胞体複体、コファイブレーション、ファイブレーションを構成する。これらの 3 つの条件を使って、有限生成モデル構造とは異なるが似た性質をもつモデル構造を導入することに成功した。圏 Top は有限生成モデル構造をもつことが知られている。このとき、圏 Diff と圏 Top のモデル構造は Quillen 同値であることを証明した。
15　微分空間のモデル構造について	単独発表	平成 28 年 9 月	日本数学会 2016 年度秋季総合分科会，関西大学千里山キャンパス第 4 学舎 3 号館 4 階 3401	微分空間の圏において，ホモトピー論を展開するために，ファイブレーション，コファイブレーション，ホモトピーグンを導入し，これらが相互に関係する性質を調べた．この結果を利用して，微分空間の圏 Diff にモデル構造を導入する事に成功した。また、位相空間の圏 Top のモデル構造とを比較する方法を発見した。この手法を用いて、圏 Diff と圏 Top のモデル構造は Quillen 同値になることを示した。これらの結果から、位相空間と微分空間において、ホモトピー論を同様に展開する事が可能となった。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16　微分空間のモデル構造とその周辺について	単独発表	平成 28 年 10 月	第 135 回日本数学会九州支部例会，長崎大学工学部１号館５番教室（文教キャンパス）	微分空間の圏 Diff にホモトピー論を展開する上で必要となる胞体複体の性質について調べた。とくに微分空間におけるＣＷ複体は、微分空間、位相空間においてそれぞれで定義されるホモトピー群が同型になることを証明することに成功した。これは、可微分多様体でしられる「Whitney Aproximation property」の一般化と捉えることができる。そのため、微分構造をもつ空間においても連続的な扱いをすることが可能となる。
17　微分空間のホモトピー論に関すること	単独発表	平成 28 年 12 月	群作用と位相，城崎健康福祉センター	位相空間と微分空間のホモトピー論を比較するための方法を構成した。とくに、n 次単位区間 I^n からＣＷ複体への連続写像は、ある滑らかな写像とホモトピックになるという性質を証明した。この結果を利用する事で微分空間と位相空間で展開されるホモトピー論は一致することがわかる。また、微分空間の圏 Diff においてモデル構造を導入する手法に改良を加え議論をスムーズに構成する事に成功した。
18　微分空間の CW 複体の構成とその性質について	単独発表	平成 29 年 3 月	小研究集会「安定ホモトピー論とその周辺」，岡山大学理学部 2 号館 3 階「数学合同演習室」	微分空間における CW 複体の構成方法を紹介した。とくに、構成するにあたり、weak diffeology の概念を導入し、直積空間と相性が良いことを示した。これは、位相空間の CW 複体よりも扱いやすい性質をもっている。また、Whitney approximation property が成り立つことを紹介した。
19 Whitney approximation property on smooth cell complexes of diffeological spaces	単独発表	平成 29 年 10 月	第 15 回北九州数理科学セミナー，北九州工業高等専門学校１号館 3 階大講義室	可微分多様体の間の任意の連続写像は、ある無限回微分可能写像とホモトピックの関係で近似できることが、Whitney の近似定理として知られる．可微分多様体を一般化した概念の微分空間にこの性質を導入する。その１つの例として、滑らかな CW 複体上では、Whitney の近似定理が成り立つことを証明し、この定理を CW 複体上に拡張することに成功した。
20　微分空間上における滑らかな CW 複体上のホモトピー構造について	単独発表	平成 30 年 9 月	日本数学会 2018 年度秋季総合分科会，岡山大学津島キャンパス	微分空間の対象のクラスとして、滑らかな CW 複体を構成する。そして、この CW 複体上で基本的なホモトピー論を展開する。その重要な性質として、ホモトピー拡張性質、胞体近似定理、ホワイトヘッドの定理等を紹介する。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21　Homotopy properties of smooth cubical cell complexes	単独発表	平成 30 年 11 月	京都大学代数トポロジーセミナー，京都大学理学部 6 号館 609	微分空間の圏上で、滑らかな CW 複体を定義する。そして、この滑らかな CW 複体上でホモトピー論を展開するために必要となる性質を紹介し、具体的な方法について紹介した。とくにホモトピー拡張性質の導入方法について触れ、N 連結や N 同値についての性質を紹介した。
22　A homotopy theory of diffeological spaces	単独発表	令和 1 年 9 月	ホモトピー沖縄 2019，てんぶす那覇	微分空間の圏上で、滑らかな CW 複体を紹介し、ホモトピー論で基本的な性質を説明するとともに、簡単な証明を与えた。とくに連続写像と滑らかなな写像の間にはホモトピックで近似できることを紹介した。
「国際学会等の講演」 1　A homotopy structure of diffeological spaces	単独発表	平成 31 年 3 月	Building-up Differential Homotopy Theory，D-413 IMI Auditorium West 1 Bld.，Kyushu University	微分空間の圏上でホモトピー論を展開する際に必要と考えられる``tame″性という概念を導入し、この性質を利用したホモトピー論を紹介した。また、この tame 性と相性の良い対象として、滑らかなＣＷ複体を紹介し、ホモトピー構造を調べた。最後にこれらの性質を利用して、微分空間の圏上のモデル構造を導入する方法を紹介し、証明のアウトラインを解説した。
「世話人を務めた研究集 1　小研究集会「安定ホモトピー論とその周辺」	共同	平成 29 年 3 月	岡山大学理学部 2 号館 3 階「数学合同演習室」	本研究集会を世話人として、講演者を募集し当日の運営を行った。 「その他の世話人」 鳥居猛、奥山慎吾、吉田耕平

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　山　田　　均

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学	社会科教育法・教科社会・地域と学校との連携

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 (1) 目標と指導と評価を一体化する授業づくりの実践	平成 24 年 4 月～平成 29 年 3 月	学校評価において、授業づくりについての評価を特に力を入れて実践した。各教員の授業を参観しその後面談指導し、再度授業について検討会を行うなど校内授業研究を活化させた。 （王寺南小学校現職教育の取組としての実践） 学校評価において、授業づくりについての評価を特に力を入れて実践した。各教員の授業を参観しその後面談指導し、再度授業について検討会を行うなど校内授業研究を活性化させた。 （王寺南小学校現職教育の取組としての実践）
(2) 見方・考え方を働かせる教材の在り方について実践	平成 30 年 12 月	児童が社会的な見方・考え方を働かせて学修を進める上で、教材の果たす役割を検証するため、王寺南小学校の 6 年生を対象に、教材研究、学習指導案作成、授業実践を行った。 （「児童の学習を深める教材研究」の実証研究を行うための実践　）
２　作成した教科書，教材 (1)「学校を地域に開く　情報発信と施設開放」 （奈良県小・中学校長会）	平成 24 年 3 月	地域に向けた情報発信や学校施設の開放、学校支援ボランティアの導入など開かれた学校づくりが進んでいるが継続する条件を述べた。奈良学園大学人間教育学部の「特別活動の指導法」のゲストティチャーとしての授業で活用した。
(2)「小学社会 6 年上」文部科学省検定済教科書小学社会科用（日本文教出版）	平成 26 年 4 月	平成 27 年度版小学社会科教科用図書　著作者 池野範男、的場正美、安野功　他 32 名 Ｂ５版　全８冊
３　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)奈良学園大学人間教育学部でゲストティチャーとして「特別活動の指導法」指導の際の学生の授業アンケート	平成 28 年 7 月	特別活動（初等）で学校行事に焦点をあて、目標と内容と指導する際の留意点等を話した。学校の行事 1 年間を視覚的に提示した。学生の満足度は 85%。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)教育実習生指導と学校ボランティアの大学生指導	昭和 59 年 6 月～平成 29 年 3 月	奈良県黒滝村立黒滝東小学校・奈良県吉野郡大淀町立大淀北野小学校・奈良県北葛城郡王寺町立王寺南小学校・奈良県磯城郡田原本町立田原本小学校で毎年教育実習生を指導した。特に社会科の指導を例にとり指導案や児童理解の視点等を指導した。その後は、管理職としての立場から統括的に指導を行った。

(2) 奈良県小学校社会科研究大会 3年生分科会指導助言 テーマ 「社会的な見方･考え方を深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」 大会会場：奈良県田原本町立田原本小学校	平成 25 年 11 月	「古くから続く地域の祭り」を題材に、祭りに込められている人々の願いや祭りを保存する人々の思いの理解を重視し、児童自身の祭りへの参加について考えさせる実践報告について、人々の営みや願いについて、具体的な事実認識をした上で、共感的に理解することは地域の一員としての意識を育てることにつながるということなどについて助言した。
(3)全国小学校社会科研究協議会研究大会 5年生分科会指導助言 テーマ 「社会的な見方･考え方を深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」 第3会場：沖縄県南風原町立翔南小学校	平成 27 年 2 月	「工業の発達と私たちのくらし」を題材に、教材の在り方「ねりあい（児童一人一人の見方･考え方を交流し合う場面での話し合い）」を重視した実践について、社会的な事象について確かな根拠に基づき自分なりの考えを持つことが、社会参画の基礎となる力であることなどについて助言した。
(4)近畿小学校長協議会研究大会滋賀大会 分科会指導助言 テーマ 「新しい時代を主体的に生きる子どもを育む教育環境・教育条件」 会場：大津プリンスホテル	平成 27 年 11 月	第６分科会「教育環境・教育条件」指導助言 学校支援ボランティアの活用を図りながら、校舎の修繕や掃除などを通じ児童が安心して勉学に励める教育環境の実現を図ったという発表について、学校と地域がウイン･ウインの関係になるように校長が心がけることの重要性や地域に開かれた学校にするために情報発信、施設開放、地域の人材活用の三点がポイントなること等について助言した。
(5)近畿小学校社会科教育研究協議会大阪大会 ３学年課題研究分科会指導助言 テーマ 「社会に参画する力の形成を図る」 大会会場：大阪市立聖和小学校	平成 27 年 11 月	「昔のくらし」を題材に、道具のうつりかわりの背景には、よりよい暮らしの実現を願う人々の思いあり、そして、人々の願いが現在の暮らしに結びついているということを理解することを重視した実践発表であった。社会参画の基礎として、小学校では、社会的事象についての知識の習得、世の中全体で考えなければならないことの存在に気付くこと、そして、学習した社会的事象について関心を持ち続けることが重要であることを助言した。
(6) 奈良県小学校社会科研究大会 3年生分科会指導助言 テーマ 「自らの学びを深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習」	平成 28 年 11 月	「くらしの変化」を題材に、道具のうつりかわりの背景には、よりよい暮らしの実現を願う人々の思いあり、そして、人々の願いが現在の暮らしに結びついているということを理解することを重視した実践発表であった。社会参画の基礎として、小学校では、社会的事象についての知識の習得、学習したことを基に自分自身の考えをもつことその考えを話し合い、より深め合う重要性を助言した。
(7) 大和郡山市立片桐小学校授業研究会 校内研修指導助言 テーマ 「生き生きと自ら学ぶ子どもの育成　～自分の思いを表現し，伝え合い，ひろげる力をつける～」	平成 29 年 7 月	「発表する」場面となると苦手意識から十分に話し合い活動に参加できないという児童の実態をふまえ「生き生きと自ら学ぶ子どもの育成～自分の思いを表現し，伝え合い，ひろげる力をつける～」という研究主題の下「国語科を要としつつ各教科等の特質に応じて，児童の言語活動を充実すること。」という共通認識で授業実践に取り組んでいる学校に対して、次期学習指導要領の趣旨をふまえ、「主体的・対話的で深い学び」「何ができるようになるか」の明確化等の視点から助言した。
(8) 奈良市富雄第三小中学校第 55 回全国小学校社会科研究協議会研究大会会場校としての授業公開並びに授業研究会提案 授業構想、指導案作成、研究発表等に関する指導 テーマ 「豊かな心をもち、生き生きと学び合う児童･生徒の育成　－聴き合い　つながり合い　学び合う授業の創造－」	平成 29 年 7 月、8 月	学校の研究主題である「豊かな心をもち、生き生きと学び合う児童･生徒の育成　　－聴き合い　つながり合い　学び合う授業の創造－」の実現に向けて、指導案の立案、授業構想の検討、研究紀要の作成、研究発表等にかかわり指導、助言を行った。

(9)第 55 回全国小学校社会科研究協議会研究大会 学年別授業研究会(3 年生部会)並びに課題別研究会 (3 年生部会)指導助言 テーマ 「自らの学びを深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習　ー人の営みに学び、ねり合う学習を通してー」	平成 29 年 10 月	「自らの学びを深め、よりよい社会の形成に参画する力を育てる社会科学習　ー人の営みに学び、ねり合う学習を通してー」の大会の研究テーマに基づき、社会の形成に参画する力を養うために必要なこととして、社会を支えている人との出会い、そしてその人の営みに対しての共感的な理解が重要であることとその営みが自分自身の生活と大きなかかわりがあることへの気付きを生み出すための学習、とりわけ、対話的な学びにもつながる字十つに依拠した考えを基に話し合いを深めるねり合いの重要性について指導した。
(10)王寺町立王寺北小学校授業研究会 校内研修指導助言 テーマ 「アクティブラーニング」	平成 29 年 11 月	次期学習指導要領でも提案されている「主体的、対話的で深い学び」いわゆるアクティブラーニングについて学習指導要領に示されている改訂のポイントや内容を中心に、アクティブラーニングについて一定の学習方法を取り入れることが実現の十分条件ではないということについて理解を図るよう指導した。特に、主体的な学習、対話的な学習は児童主体の学習が前提であり、これまで以上に教材研究や児童理解を深めることが必要であることを説明した。
(11)生駒市家庭教育講座講師 テーマ 「子ども成長と環境　ー想像してみよう　子どもたちが大人になるころの世の中ー」	平成 29 年 11 月	少子高齢化の急速な進展や人生 100 年時代の到来、ＡＩの進歩などにより、子どもたちが迎えるであろう未来は私たち大人が経験したこともない、想像を遥かに超える社会になっていると未来予測を研究している学者たちが提唱している。そのような未来予測を踏まえ、いったいどのような力を子どもたちに身に付けさせればよいのか。次期学習指導要領では未来予測を視野に入れた改訂がなされている。そのような予想される未来社会や文部科学省が考える子どもたちへの教育の方向性、そしてそれらを踏まえた家庭での教育について様々な数値を元に考えていこうという提起を行った。
(12)奈良県小学校校長会役員研修会講師	平成 30 年 8 月	「これからの教育について考える」というテーマの下、新学習指導要領の目指しているもの、学校や教員を取り巻く状況、働き方改革、Ｓociety5.0 などを切り口に、学校を経営するという視点からの提起を行った。
(13)奈良市家庭教育講座講師	平成 30 年 11 月	少子高齢化の急速な進展や人生 100 年時代の到来、ＡＩの進歩などにより、未来は想像を遥かに超える社会になっていると未来予測を研究している学者たちが提唱している。そのような未来予測を踏まえ、いったいどのような力を子どもたちに身に付けさせればよいのか。未来を生きる子どもたちの幸せを考え、家庭でどのような子育てを行って行けばよいのか、データを基に参加者と主に考える講演会を行った。
(14)生駒郡校長会研修会講師	平成 30 年 12 月	「新学習指導要領を見据えた学習指導と評価の在り方」のテーマの下、新学習指導要領のポイントである社会に開かれた教育課程、カリキュラム・マネジメント、資質能力の 3 つの柱、教科等で育成される見方・考え方、主体的・対話的で深い学びの具現化について、学校経営の視点から提起を行った。
(15)奈良県青少年健全育成協議会講演会講師	平成 30 年 12 月	「イマドキの子ども事情について考える」という演題を設定し、青少年の健全育成に携わっている奈良県内の各団体の代表者に、子どもを取り巻く環境、とりわけ SNS などの状況、いじめや不登校の状況、子ども成長スピードの加速化などの切り口から現在の子どもたちの状況について理解を深める講演を行った。

(16)第2回り～べるカレッジ講師	令和元年6月	少子高齢化の急速な進展や人生100年時代の到来、ＡＩの進歩などにより、未来は想像を遥かに超える社会になっていると未来予測を研究している学者たちが提唱している。そのような未来予測を踏まえ、いったいどのような力を子どもたちに身に付けさせればよいのか。未来を生きる子どもたちの幸せを考え、家庭でどのような子育てを行って行けばよいのか、データを基に参加者と主に考える講演会を行った。
(17)生駒郡校長会研修講師	令和元年7月	「カリキュラムマネジメントの実際」新学習指導要領の実施に備え、校長として校内におけるカリキュラムマネジメントどのように推進していけばよいかということについて、先行して実施している事例を紹介しながら、参考にすべきポイント、留意点等について解説し、具体的な取り組みについて助言した。
(18)磯城郡教頭会研修講師	令和元年7月	「学校に必要な教頭の役割」というテーマの下、多忙を極める教頭の日々の職務を改めて整理し、教頭としてやらなければならない業務、他の教職員に指導を行いながら水耕してもらうべき業務等々、業務の見直しを行うことの重要性と学校が取り組まなければならない「働き方改革」を実現するための教頭の働き方の在り方についてディスカッションしながら助言した。
(19) 奈良県小学校教科等研究会社会科部会夏期研修会講師	令和元年8月	令和元年度に予定されている近畿大会、全国大会の発表について、本件の研究主題、新学習指導要領で示されている「社会的な見方・考え方を働かせる社会科教育」の視点から、発表内容を分析的に評価し、これからの小学校社会科教育において重視していきたい方向性について指導した。
(20) 第57回全国小学校社会科研究協議会研究大会学年別課題研究会3年生部会指導助言	令和元年11月	奈良県の発表である「私たちの奈良市の移り変わり」について、新学習指導要領により、大きく内容が変わった単元であり、どのように授業実践をしていけばよいかについて質問が集中したため、単元のポイントや留意点等について助言した。また、奈良県が研究主題に示している「社会参画」という視点から、未来を生きる児童がこの単元の学習により、これからの奈良市について、自分の問題意識で抗争していくことの重要性について助言を行った。
(21) 王寺町連合ＰＴＡ研修会講師	令和元年11月	少子高齢化の急速な進展や人生100年時代の到来、ＡＩの進歩などにより、未来は想像を遥かに超える社会になっていると未来予測を研究している学者たちが提唱している。そのような未来予測を踏まえ、いったいどのような力を子どもたちに身に付けさせればよいのか。未来を生きる子どもたちの幸せを考え、家庭でどのような子育てを行って行けばよいのか、データを基に参加者と主に考える講演会を行った。
(22) 田原本小学校子育て講演会講師	令和2年2月	「思春期・反抗期の子どもとの付き合い方」というというテーマの下、子どもの発達課題という視点から反抗期に見せる子どもの言動の特徴やそのことを親としてどう受け止めればよいのかということを中心に、参加者と体験談を出し合いながら考えていくといように研修を進めた。
５　その他 特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 ・中学校教諭一級普通免許(社会) ・高等学校教諭二級普通免許(社会) ・学芸員資格 ・小学校教諭二級普通免許 ・小学校教諭一種免許	 昭和 55 年 3 月 昭和 55 年 3 月 昭和 55 年 3 月 昭和 56 年 3 月 平成 6 年 6 月	 昭 54 中 1 普め第 4405 号　京都府教育委員会 昭 54 高 2 普め第 4519 号　京都府教育委員会 同博第 94 号　同志社大学 昭 55 小 2 普第 397 号　奈良県教育委員会 平 6 小 1 種第 47 号　奈良県教育委員会
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 奈良県小学校教科等研究会社会科部会 昭和 62 年度　専門委員 平成 5 年度～11 年度　3 年生部会部長 平成 23 年度～28 年度　理事・指導部	昭和 62 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	昭和 23 年 6 月に設置された「奈良県作業単元基底設定委員会」を母体とし、昭和 30 年に「奈良県社会科教育研究協議会」を設立した。その後、奈良県では各教科等の研究団体を一つに統合して運営することとしたため、「奈良県小学校教科等研究会社会科部会」となり、奈良県の小学校社会科指導の牽引車としての役割を担った。
(2) 公益社団法人日本教育会会員 平成 25、26 年度　奈良県支部評議員 平成 27 年度　　奈良県支部理事	昭和 62 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	日本の文化と伝統を重んじ、かつ、時代の要請に応ずる教育の確立を目指し、教育関係団体並びに広く教育に関心をもつ者の協力の下に教育の調査研究活動及びその普及活動等を行卯ことを通して、我が国の教育の正常にして健全な発展に寄与することを目的とした公益社団法人。
(3) 奈良県北方領土問題教育者会議副委員長	平成 23 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	これからの我が国を担う児童生徒が、我が国の領土について正しく理解することが重要であるという観点に立ち、北方領土教育の充実・強化を図るため独立行政法人北方領土問題対策協会内に平成 15 年から設置された組織。
(4) 奈良県王寺町子ども・子育て会議委員	平成 25 年 3 月 ～ 平成 27 年 3 月	王寺町が安心して子どもを産み育てることができる町づくりを進めるために策定する「王寺町子ども・子育て支援事業計画」に対する諮問を受け、その目的や内容等について検討、答申を行うことを目的(座長　小西藤司白鳳短期大学教授)
(5) 公益法人奈良県学校給食会評議員	平成 26 年 4 月 ～ 平成 28 年 6 月	学校給食に対し、学校給食用物資の安定供給及び学校給食の普及充実に関する事業並びに学校給食を通じた食育の支援を行うことを目的した公益法人。
(6) 奈良県王寺町教育ビジョン策定懇話会委員	平成 26 年 9 月 ～ 平成 27 年 12 月	今後 10 年間にわたる王寺町の教育振興計画策定するための機関（座長　吉田明史奈良学園大学奈良文化女子短期大学部学長）
(7) 奈良県子どもの貧困対策会議委員	平成 27 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	貧困状態にある子どもの支援の在り方についての検討行うために設置された会議（座長　神原文子神戸学院大学教授）

(8) 奈良県人権教育研究会副会長	平成 27 年 5 月 ～ 平成 28 年 5 月	部落問題をわが国の人権問題の重要な課題として捉え、その解決を図る取組を通して、人権尊重の精神を涵養する教育研究推進を目的とした研究団体
(9) 奈良県放課後児童対策推進委員会委員長職務代理者	平成 27 年 10 月 ～ 平成 29 年 3 月	放課後児童クラブと放課後子ども教室の一体的な運営について検討し、放課後の児童対策の推進を図ることを目的として設置された委員会（委員長　岡田龍樹天理大学教授）
(10) 奈良県いじめ防止基本方針検討協議会委員	平成 28 年 2 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良県いじめ防止基本方針策定のための委員会（座長森田洋司大阪市立大学名誉教授）
(11) 奈良県社会教育委員	平成 28 年 4 月 ～ 平成 29 年 3 月	社会教育法に基づいて設置され、県教育委員会の諮問に応じ、社会教育に関して意見を述べる社会教育委員会議の委員
(12) 奈良県ＮＩＥ推進協議会副会長	平成 28 年 6 月 ～ 平成 29 年 6 月	奈良県内の新聞界と教育界が協力し、新聞を活用する社会科を中心とした各教科の学習を普及させることにより、児童･生徒の学習意欲を高め、情報活用能力を啓発することなどを目的とした協議会(会長　小柳和喜雄奈良教育大学教職大学院教授)
(13) 奈良県ユニセフ協会評議員	平成 28 年 5 月 ～ 平成 29 年 5 月	子どもたちの命と健康を守るために活動しているユニセフの日本ユニセフ協会と協力協定を締結し奈良県におけるユニセフ活動の推進を図ることを目的とした協会（会長　甘利治夫奈良新聞社代表取締役）
(14) 次世代教員養成プログラム策定委員会委員	平成 28 年 10 月 ～ 平成 29 年 3 月	奈良県の教員を志望する学生・生徒に、奈良県教育を担う資質・能力を育成することを目的として、次世代教員養成プログラムの内容について協議することを目的とした委員会。会長等は置かず、奈良教育大学（副学長、事務局長等）奈良県教育委員会事務局（教育次長、政策推進室課長補佐等）奈良県小学校長会会長をメンバーとしている
(15) 奈良県公立小学校長会本部委員 平成 25，26 年度会計 平成 27 年度　副会長 平成 28 年度　会長	平成 25 年 5 月 ～ 平成 29 年 5 月	小学校教育の充実と発展を目的に、奈良県公立小学校長により組織された団体。研究大会や定例の役員会な度を通じて小学校経営についての資質の向上を図り、県教育委員会との協議を通し手今日的な教育課題の強雨を図るなど野活動を行っている。また、近畿各府県の校長会とは近畿小学校長会協議会で，全国の校長会とは全国連合小学校長会に加盟し連携を図っている。
(16) 王寺町いじめ対策調査委員会委員	平成 29 年 4 月 ～ 現在に至る	いじめ防止対策推進法に規定に基づき、いじめの防止等のための対策に関する調査研究、いじめ防止対策事業の実効性の検証、重大事態にかかる事実関係を明確にするための調査及び未然防止のために必要な措置についての提言等を行う委員会。
(17) 奈良県教育振興会理事	平成 29 年 4 月 ～ 現在に至る	青少年問題に対する県民の関心と理解を深め、青少年健全育成のための正しい世論の形成につとめることや人間形成における家庭の役割を再認識し、家庭教育のいっそうの改善・充実・振興をはかること、青少年教育に関する保護者並びに教職員の研修活動に協力し、その援助につとめることなどを目的に 1980 年(昭和５５年)４月に設立された教育団体。事務局を奈良県総合庁舎内に置く。

（18）公益財団法人日本教育公務員弘済会奈良支部監査	平成 29 年 4 月～現在に至る	将来社会に貢献し得る有為の人材を育成するため、奈良県在住の子のうち、優秀な学徒に対し奨学金を貸与、教育一般、特に有益な研究に対する助成及び教育関係者の福祉向上をはかり、もって奈良県における人材の養成並びに社会教育文化の向上発展に寄与することを目的とする公益財団法人
（19）王寺町義務教育学校推進委員会　副委員長	平成 29 年 5 月～現在に至る	平成 34 年度開校予定の町立義務教育学校の教育課程、校舎建築、その他学校運営全般について、町、町教育委員会からの諮問を受け，それに対して協議し、検討を加えて、提言等を行う委員会。
（20）三郷町産官学地域活性化連絡協議会常任委員	平成 30 年 5 月～現在に至る	三郷町の行政、商工会、大学等の学校が連携し、それぞれの持ち味を生かしながら地域の活性化について協議し、取り組みを進める委員会。
(21)第 2 期王寺町子ども・子育て会議　副委員長	令和元年 7 月～現在に至る	子ども・子育て支援法に基づき設置された会議で、国の動向や地域の情勢を踏まえ、子どもの健やかな育ちと保護者の子育てを支援することなどにより子どもを安心して産み育てていける環境作りを進めるための「王寺町子ども・子育て支援事業計画」の審議を行う会議。
4　その他		
特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文） 1「学校を地域に開く　情報発信と施設開放」	単著	平成 28 年 9 月	平成 23 年度奈良県小・中学校長会研究紀要	作成・編集：奈良県小学校校長会・中学校校長会 地域に向けた情報発信や学校施設の開放、学校支援ボランティアの導入など開かれた学校づくりが進んでいるが継続するには、学校と地域の双方にとってウィン・ウィンの関係が必要である。子どもの成長を願って協力し、地域に信頼され愛される学校を目指し以下のことを提案した。 （担当 p46～p48）
2 生活科と社会科の連携への一考察 －防災教育を視点に－	共著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学研究紀要　第 5 集	日本の国土は災害大国でるというリスクを述べるとともに、反面、居住する人々の危機意識は低いことを内閣府の調査を基に論じた。特に防災教育の目的と義務教育の防災教育に果たす役割について述べた。生活科から社会科への学習指導要領の連続性と「自助・共助・公助」の考えを位置づけ、現在の教科書を分析した。生活科の学習は「自助」中心に「共助」を学ぶことであり、社会科では、「共助+公助」の公民的資質として災害についての知識獲得意欲を中心に据えている。また、命を守る一時避難に有効な空間的認知の獲得に社会科は貢献していることを論じた。 共著者：松田智子、山田均 担当：論文後半の社会科と防災教育との関連の部分 （p146～p150）単著

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 社会科指導における地域の教材化	単著	平成 28 年 12 月	日本人間教育学会	社会科は戦後の民主主義教育の中核をなすものとして設立された。その目的は青少年に社会生活を理解させ、青少年がより良い社会を創造する能力と意欲を持つことである。この目的を達成するためには、地域を学ぶことを大切にしなければならない。現在、次期学習指導要領の検討において「主体的・対話的で深い学び（アクティブ・ラーニング）」が重視されている。それは未来の創り手となるために必要な資質・能力の育成ということが重視されているからである。そこで小学校社会科教育において社会的事象を自分ごととして捉え、具体的に観察・調査を行うことが可能であり、背後の人の営みや願いが見える地域教材を活用することが極めて重要であると考える。そして、改めて子供たちに未来の創り手となるための資質・能力を育てる上で、地域を取り上げることの有効性について考察した。（p75～p83）
4 生活者としての基礎的な能力の育成をめざす生活科	共著	平成 29 年 11 月	日本人間教育学会大会第3回　研究発表要旨集	1989 年（平成元年）に生活科が誕生して間もなく 30 年を迎える。生活科設置は、小学校教育において、低学年児童がより主体的に学習に取り組み、その活動の過程で友達や地域の人々、自然の事物などと対話し、自分の生活について考えるとともに、生活上必要な習慣や技能を身に付け、自立への基礎を養っていくことにその意義がある。これはまさに、今次の学習指導要領改訂の趣旨である「主体的・対話的で深い学び」が位置付いていると言える。そこで、「主体的・対話的で深い学び」を成立させる要因として教師の支援に着目し、「学習内容を構造的にとらえる力」と「教材を開発する力」に視点を当てて具体的な実践を基に考察した。　共著者：中道奈都美、山田均（p14～p15）
5「方向と現状の共通理解が学校を強くする」	単著	平成 29 年 3 月	別冊教職研修　教育開発研究所	いじめ・不登校などの課題や特別支援教育の充実への対応、貧困問題への対応など、学校の抱える課題が複雑化・多様化し、学校に求められる役割が拡大している。また、中教審からは「校長のリーダーシップの下、カリキュラム、日々の教育活動、学校の資源が一体的にマネジメントされ、教職員や学校内の多様な人材が、それぞれの専門性を生かして能力を発揮し、子供たちに必要な資質・能力を確実に身に付けさせることができる学校」いわゆる「チーム学校」の推進が答申されている。これまでから「鍋蓋型」と言われる学校組織のありようを改善し、校長のリーダーシップと情報等の教職員間の双方向的な共有し、組織文化としての同僚性等を重視する協働化による学校組織マネジメント図るため、学校通信の活用を通した取組について報告した。(p60～p61)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6 社会科教育における見方・考え方とは　ー見方・考え方を育てる社会科から見方・考え方を働かせる社会科へー	単著	平成 30 年 2 月	奈良学園大学紀要 第 8 集	平成 29 年 3 月告示の学習指導要領に示された「見方・考え方」の捉えの変容が社会科教育に関係する者に与えたインパクトは大きいものがある。平成 29 年 10 月に開催された全国社会科教育学会第 66 回研究大会では『『見方・考え方』論で社会科は変わるのか？」というシンポジウムが開催され、社会的な見方・考え方は社会科の教科としてのあり方を見直すものとなり得るのか議論している。そこで、社会科教育は「見方・考え方」の捉えとともに変容していくのか、考察した。（p109～p117）
7「これからの社会科教育～資質・能力を全面に～」	単著	平成 30 年 3 月	やまと　（奈良県教育振興会）	平成 29 年 3 月に告示された次期小学校学習指導要領の社会科について、「主体的・対話的で深い学び」の実現を図る上でポイントなる点や改訂された主な内容について考察した。（p8～p11）
8　社会的な見方・考え方とは-小学校社会科における社会的事象の見方・考え方の一考察-	単著	平成 30 年 8 月	オンラインジャーナル「人間教育」第 1 巻	次期学習指導要領では、各教科等の目標や内容を資質・能力の三つの柱である「知識、技能」、「思考力、判断力、表現力等」「学びに向かう力、人間性等」に基づいて再整理され、資質・能力が明確になった。小学校社会科においては「社会的事象の見方・考え方」を働かせて、公民としての資質・能力の基礎を養うこととされている。 そこで、実際の社会科の実践を通して、児童がどのように「社会的事象の見方・考え方」を働かせ、社会的事象の特色や相互の関連、意味を多角的に考察し、社会に見られる課題や社会への関わり方を選択・判断することができるのか考察する。
8　義務教育学校についての一考察-王寺町が目指す義務教育学校の取組を通して-	単著	平成 30 年 9 月	オンラインジャーナル「人間教育」第 1 巻	2015 年に学校教育法が改正され、新たに小中一貫教育を行う義務教育学校が加えられた。このことは、戦後の教育改革によって設けられた「６・３制」の小学校、中学校という義務教育制度の見直しにつながるものである。現在、奈良県王寺町では義務教育学校設置への取組を進めている。筆者はその推進委員の一人として参画している。そこで、「６・３制」に見直しが図られてきた経緯や義務教育学校創設の背景について考察するとともに、王寺町の義務教育学校設置への取組の状況等について検証する。
9　生活者としての基礎的な能力の育成をめざす -社会とのかかわりへの気付きを生かした学習をめざして-	共著	平成 30 年 9 月	奈良学園大学紀要 第 9 集	本稿では「児童が『学習の主人公』になり得る教育機会」が保障されるべき生活科の学習において、教師がどのように支援することで、教科の特性を生かしつつ、その目標、特に「生活上必要な習慣や技能を身に付けさせ、自立への基礎を養う」2）ことを達成することにつながるのかということを王寺町立王寺南小学校中道教諭の実践をもとに考察していくこととする。　共著者：中道奈都美、山田均

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10　児童の学習を深める教材研究　−児童の見方・考え方を育てる教材とは−	単著	平成 31 年 2 月	奈良学園大学紀要 第 10 集	本稿では、有田和正の提唱した「ネタ」開発の考え方をもとに、児童が主体的に学習に取り組み、その考えを深める教材の在り方を実証的な検証を進めるため、筆者が教材研究を行い、指導計画を立て、王寺町立王寺南小学校の 6 年生の学習指導を通して、教材の重要性について検証を行った。
11　社会的な見方・考え方を働かせる学びは社会認識を育む	共著	令和元年 9 月	奈良学園大学紀要 第 11 集	本稿では、「社会的な見方・考え方を働かせ」て、社会科学習を展開していくことは、「事実認識」を基に「価値認識」を行うという「社会認識」の形成プロセスと重なるものであり、これまでから社会科教育が目指してきた公民としての資質・能力の基礎を養う教育の在り方そのものであるということを、奈良市立佐保小学校田中教諭の実践をもとに検証を行った。 共著者田中雅代、山田均
12　シビックプライドを醸成することの可能性について	単著	令和 2 年 3 月	奈良学園大学紀要 第 12 集	社会科教育で取り組んでいる地域社会に見られる課題を把握して、その解決に向けて社会の関わり方を選択・判断し、より良い社会を考え、主体的に問題解決しようとする態度を養うことを通して、地域社会に対する誇りと愛情や地域社会の一員としての自覚を養うことを目指した学習を展開している。目標としている。本稿では、と呼ばれる地域の問題に対して当事者意識をもち、主体的に活動する「シビックプライド」との関連について、これまで社会科教育で取り組んできている社会参画を目指して取り組まれた事例をもとにその関係性について考察し、検証を行った。
（その他） 特記事項なし				

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月３１日

氏名　太田　雄久

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学	教育方法(理科)・教科教育（理科)・学級経営

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 （１)小学校理科レポート作成による科学的な思考力・表現力の育成	平成22年4月～平成26年3月	小学校理科の学習指導要領改訂の改善の具体的事項で示されている「児童の科学的な見方や考え方が一層深まるように，観察・実験の結果を整理し考察し表現する学習活動」の充実として，子どもに各単元の終末でのレポート作成に取り組ませた。その結果，観察・実験の結果をグラフに整理したり，予想や仮説と関連づけて考察したりしたことを言語活動として表現する必要性を子どもに理解させることができるとともに，日々の授業での言語活動も充実することができ，相互に影響を与えつつ科学的な思考力や表現力を育成することができた。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）
（２）「Ａエネルギー・粒子」領域における見えないものを見えるようにする理科の教材開発	平成25年4月～平成26年3月	「Ａエネルギー・粒子」領域における見えないものをする可視化する教材開発を３年生理科の単元で行った。具体的には，「磁石の性質」の単元において，見えない磁石の力の働き方を可視化するために，棒磁石を同極同士長く連結したものと異極同士を長く連結したものを作った。それらにつく鉄でできた物のつき方の違いから，子どもは同極同士および異極同士近づけたときの磁石の力の働き方の違いをとらえることができた。また，「同極同士を近づけると退け合い，異極同士を近づけると引き合う」という現象について，子どもは見えない磁石の力の働き方に触れながら，自分なりの表現で説明することができるようになった。これらの姿は，３年生の「エネルギー」についての見方や考え方が育っていると評価できるものである。また，小学校３年生での「エネルギー」についての評価規準として，提案性のあるものとなった。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）
（３）汎用測定装置「ＳＰＡＲＫ」を用いた小学校理科の授業開発	平成23年4月～平成24年3月	大阪教育大学のイノベーション人材育成に向けたカリキュラムや教材・教授方法の開発とその実証を先導的に教育研究に取り組む「科学教育プロジェクト（通称)」において，小学校理科の目標の重点として挙げられている「児童が観察，実験などの結果を整理し，考察，表現する活動を行い，学びを生活とのかかわりの中で見直し，自然の事物・現象についての実感を伴った理解を図る活動」を具体化した授業開発として，５年生「電磁石のはたらき」の単元で，汎用測定装置を使った授業開発を行った。その結果，電流の強さやコイルの巻き数の変化などによる電磁石のもつ磁力の変化を定量的に認識し，電磁石の磁

		力の強さを変化させる条件を理解させた。 （大阪教育大学付属天王寺小学校での実践）
（4）子どもの感性を働かせ科学的な見方や考え方を育む理科の授業指導方法開発	平成25年4月～平成26年3月	理科の目標にある「科学的な見方や考え方」を育むために，３年生理科の授業で，子どもの感性を働かせるような授業開発を，年間を通じて行った。例えば，３年生はじめの「植物の体のつくり」の単元では，子どもの観察の視点（視線の向き，数，色，変化など）の意味付け，価値付けを指導者が行うことで，自然の事物・現象を見る際の視点を増やした。その結果，子どもの植物の観察の視点が増え，観察の質が向上した。また，以降の単元においても，初期事象の出会いや観察・実験の際に多様な気付きが生まれるようになり，子どもが主体的な問題解決を通して，科学的な見方や考え方を身に付けることができた。 （大阪教育大学附属天王寺小学校での実践）
２　作成した教科書，教材 （1）育実習生パンフレット 大阪教育大学附属小学校理科部	平成24年4月	教育実習生の理科の授業づくりと指導の能力の向上を目的として作成した。具体的な内容は，理科室および理科準備室の環境整備，安全と危機管理，教材開発の仕方，板書の方法，教材や実験器具の特性，理科の目標，子どもの学習活動と指導者の支援，学習指導案の書き方などを述べた。さらに理科の授業づくり指導に関わる内容について，具体例や写真を多用し，教育実習生にとってわかりやすく理解できるように述べた。 Ａ４版　８ページ （平成 24 年度，25 年度大阪教育大学附属天王寺小学校の実習生指導で使用）
３　教育上の能力に関する大学等の評価 （1）大阪教育大学非常勤講師としての学生による授業評価アンケート結果	平成24年9月	大阪教育大学非常勤講師として学生による授業アンケートによると，本人が担当の「初等理科授業研究」は，総合評価で３．８点（４点満点中）高い評価を得ている。特に具体的な話で分かりやすい点で，学生の満足度が高い。また，授業の準備や工夫した教材の提示なども学生から好評であった。
	平成25年9月	前年度に引き続き大阪教育大学非常勤講師としての学生アンケート評価は総合評価で３．９点（４点満点中）であり，学生の出席率の高さ，教員の例示の分かりやすさ，学生の内容の理解度の３つの項目で特に高い評価を得た。
（2）大阪教育大学附属天王寺小学校の副校長からの評価	平成26年2月	理科部では，科学教育プロジェクトの中心として大阪教育大学との連携を密にし，プロジェクト推進に寄与した。また，理科教育部の中心として新学習指導要領に基づいた研究を進めることにも貢献した。さらに，理科主任として，研究会議の場でも積極的に提案し，意欲的に新たな教材を開発し，研究推進に貢献した。学校および学年運営では，第３学年主任を務め，ミドルリーダーの役割を果たした。学年担任団をまとめ，児童への指導や保護者との連携を充実させ，学校を組織として機能させた。教育実習部では，教育実習主任を補佐し，教育基本実習，第２部４回生実習，１日教育実習，教育実習オリエンテーションなどの実習関連業務を滞りなく運営した。

(3)科研費獲得のための研究補助	平成26年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校教諭として，平成25年度科研費（奨励研究）に応募した。(研究協力者は，大阪教育大学科学教育センター特任准教授　仲矢史雄氏である。）テーマは「現場教員による一貫指導と授業収録システムによる教育実習生指導方法の開発」である。科研費としては不採用であったが，大阪教育大学の学内選考会より，科研費獲得に向けて継続的に研究を進める価値があるテーマであるとの評価を受けた。科研費獲得の研究補助（平成２６年度）として１０万円の研究補助費を獲得した。
(4)奈良学園大学人間教育学部採用に当たっての学長からの評価	平成26年7月	大阪教育大学附属天王寺小学校で理科教育を８年間担当し教育方法技術も豊かである。また大阪府下の小学校教員への指導歴も多く，理科が苦手な教員へ実験等の指導にも優れている。また，附属小学校で多くの教育実習生の指導経験もあり，本大学の教育実習指導にも力を発揮できると期待する。さらに，非常勤講師として大阪教育大学で理科教育において学生指導を担当した経験もあり，すでに非常勤であるが大学教員としての授業の経験がある。附属では担任や学年主任の経験もあり，学生指導においてもその経験を発揮できると考える。奈良学園大学の今後を支える若手研究者として期待できる。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)大阪教育大学の教育実習生指導担当	平成22年4月～平成26年3月 毎年9月 （昼間部）	毎年，大阪教育大学附属天王寺小学校に勤務した８年間，大阪教育大学教育学部の昼間部の学生を９月の１ヶ月間を指導した。教育実習部としては，当該年度の全ての実習生を指導した。大阪教育大学附属天王寺小学校は毎年度１００名程度の教育実習生を受け入れている。指導の内容は以下の通りである。 ・理科の授業づくりおよび指導案作成の指導（理科専科時） ・音楽科，図画工作科を除く，小学校全科および領域の授業づくりおよび指導案作成の指導，実習記録の仕方などの実習事務に関わる指導，学級経営などの学級担任としての心構えについての指導（学級担任時） ・教育実習生としての心構え，子どもとの関わり方，災害時などの教員の役割，守秘義務等学校教員としての規律などについての指導 （教育実習部担当時）

	平成22年4月 ～平成26年3月 毎年11月 （夜間部）	大阪教育大学附属天王寺小学校に勤務した８年間，毎年，大阪教育大学教育学部の夜間部の学生約 40 名を 11 月に２週間指導した。教育実習部としては，当該年度の全ての実習生を指導した。指導の内容は以下の通りである。夜間部の学生はすでに小学校 2 種や他校種等の免許を取得している学生が多いので，一定の教職に対する知識を備えている。そのため特に以下の点について指導した。 ・指導案作成における観点別評価の規準の設定と実際の評価の方法について（理科専科時） ・学級づくりにおいて，特別に支援を要する児童への関わり方や，そのために組織として対応する必要性について（学級担任時） ・保護者や地域と連携し，児童を育てるための，教師としての心得や，保護者の苦情などを学級や学校づくりに生かす方法について （教育実習部担当時）
（２）大阪府下の小学校教員の指導力向上のための研修の指導助言	平成22年8月 【2回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として，昨年度に引き続き実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「はじめての理科指導！安心安全理科実験基礎講座（初級編）」「理科実験基礎講座（中級編）」の指導を行った。理科教育の苦手な教員が多い中，安全面に視点を置いた研修は歓迎された。観察・実験における留意点や基本的な実験器具の使い方，理科室および理科準備室の環境整備，教科書に載っていない効果的な実験方法，科学クラブで楽しめるネタなど，観察・実験の充実を目的としている。 （対象者：大阪府下小学校教諭２０名）
	平成23年8月 【3回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として，連続講座3回目を実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「初心者向け　観察・実験基礎講座」「子どもの科学的な見方や考え方を深める授業づくり」の指導を行った。「初心者向け　観察・実験基礎講座」は，安全面に視点を置いた研修である。具体的には，観察・実験における留意点や基本的な実験器具の使い方，理科室および理科準備室の環境整備，教科書に載っていない効果的な実験方法を指導し，参加教員の理科授業での観察・実験の充実を目的としている。「子どもの科学的な見方や考え方を深める授業づくり」は，子どもの目の付け所に着目した理科の授業づくりの研修である。具体的には，理科の内容で，子どもがつい注目するところを分析すること及び教材の特質を分析することの重要性を，授業実践を例にしながら指導した。研修参加者にとって，明日からの授業にとって有意義な研修となった。 （対象者：大阪府下小学校教諭２０名）
	平成24年8月 【4回目】	大阪教育大学の学長特別プロジェクト事業（地域貢献部門）の一環として，連続講座4回目を実施した。目的は，大阪府下の教員の指導力向上である。 「科学的な見方や考え方を深める授業づくり」をテーマに研究を行った。子どもの自然の事物・現象に対する見方や考え方を科学的なものに変容させるための授業づくりの考え方や授業実践例を紹介することで，理科の授業力向上を目的としている。「子どもが主体的な問題解決を行う理科の授業づくりには，児童分析と教材分析が必要不可欠であることを実感したこと」「単元および本時の授業後の子どもの姿を

		設定したうえで授業づくりを行うことの重要性」を論じた。結果，深い教材分析と的確な児童理解の重要性を受講生は理解することができた。 （対象者：大阪府下小学校教員約２０名）
（3）大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」実地講師としての授業を担当	平成23年4月～平成24年3月 【1年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「高学年の理科指導」をテーマとして，授業づくり，児童分析，教材分析についての講義，授業実践の紹介，模擬授業を行った。具体的には，６年生の「水溶液の性質」の授業実践例を，子どもの具体のノート記録を例に挙げながら，具体的な教材分析の仕方やノートの評価の仕方についても触れながら紹介した。６年生「もののもえ方」の単元で，見えない空気の流れに子どもが注目する導入時のアイデアを紹介した。具体例を多く取り入れたため，理科の授業に対する見方が変わった学生が多かった （受講者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成24年4月～平成25年3月 【2年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「高学年の理科指導」をテーマとして指導した。まず高学年児童の発達段階と学習の特徴を説明した。さらに，授業づくり，児童分析，教材分析，及び目標と評価の観点についての講義を行った。授業実践の紹介とともに，模範授業も行った。具体的には，６年生の「もののもえ方」の授業実践例について，子どもの具体のノート記録を例に挙げながら，教材分析の仕方やノートを評価する方法や視点について紹介した。５年生「メダカのたんじょう」の単元では，子どもが「メダカを観察したい。」という願いをもつ導入時の授業を紹介した。授業実践例や模範授業を多く取り入れ，子どものノート記録も多数紹介したため，教育実習前の学生にとり，小学校現場での理科の授業や子どもの反応やその評価についてのイメージを持つことができ，有益な講義となった。 （受講者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成25年4月～平成26年3月 【3年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「高学年の理科指導」をテーマとして，授業づくり，児童分析，教材分析及び評価の観点とその手立てについての講義を行った。高学年児童の発達と学習傾向について説明した。さらに授業実践の紹介，模擬授業（単元はメダカ，豆電球）を行った。「知っているのにメダカが描けない」，「リード線付きソケットがなくなっただけで，豆電球に明かりをつけることができない」この事実に気付かせたりする事例を紹介した。学生からは，「従来のメダカの見方が変わった。」「教材として豆電球の教育的な価値が分かった。」といった声が聞かれた。これにより深く幅の広い教材分析や事前の予備実験の重要性を十分に理解した学生が多数であった。 （対象者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）

	平成26年4月 ～平成27年3月 【4年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，リード線付きソケットを使わずに豆電球に明かりを付けることから，「見えない部分も含めて一続きの回路になっている」ことを理解させること，実践事例の紹介では，子どもの目線を動かすような課題設定や支援によって子どもの学びは深まることを指導した。学生からは，「目線が変わるだけで，ものの見方が変わることがわかった。」「自分たちが活動することで，学びがこれほど違うのかと驚きました。」などといった感想を得た。これらから，児童理解と教材分析をもとにした授業づくりの重要性を理解した学生が多数であったと言える。 （対象者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成27年4月 ～平成28年3月 【5年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，何も見ずにメダカを描かせることから，「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では，ゴムの働きの学習における子どもの目線の変化を根拠に，児童分析と評価の方法について言及した。学生からは，「教師の教材研究や児童理解がどれほど重要かを再確認できた。」「子どもに新しい視点を，教師がいかに与えるかが大切だと思った。」などの感想を得た。これらから，児童分析，教材分析，評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者：大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
	平成28年4月 ～平成29年3月 【6年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，何も見ずにメダカを描かせることから，「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では，子どもに観察をさせる時の指導内容を紹介し，その後子どもがかいた観察記録を紹介した。また，数名の子どもの観察記録の変容から，観察時に必要な指導方法について言及した。学生からは，「子どもの記録の何を評価するかで，子どもの記録のかきぶりがこれほど変わるのかと驚いた。」「つい，何も指導をせずに観察記録をかきなさいと伝えてしまいがちになるが，教師の指導によって子どもの学びがこれほど深まるのかと感心した。」などの感想を得た。これらから，児童分析，教材分析，評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）

	平成29年4月～平成30年3月 【7年目】	大阪教育大学教育学部（第二部）「理科教育法」において，「小学校理科授業の実際」をテーマとして，模擬授業や実践事例の紹介を通して，児童分析，教材分析，評価の観点とその方法について講義を行った。模擬授業では，何も見ずにメダカを描かせることから，「知っているつもりを自覚させることが主体的な問題解決につながる」ことを理解させた。実践事例の紹介では，子どもに観察をさせる時の指導内容を紹介し，その後子どもがかいた観察記録を紹介した。また，数名の子どもの観察記録の変容から，観察時に必要な指導方法について言及した。学生からは，「体験授業を通して自分の記録の書きぶりが変わったことから，子どもの記録のかきぶりも変わることに納得した。」「どの単元でも指導者の綿密な指導計画や準備があるからこそ，子どもの学びにつながることを理解した。」などの感想を得た。これらから，児童分析，教材分析，評価についての理解を深めた学生が多数であったと言える。 （対象者　大阪教育大学３回生および４回生を中心に約６０名）
(4)伊丹市立有岡小学校での指導講師	平成24年4月～平成25年3月 【1年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～問題解決学習における言語活動の系統性を考える～」という研究テーマのもとで，理科，生活科の教科研究および提案授業についての指導を行った。計画的継続的に年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。当時の有岡小学校の教員は「言語活動＝話し合い活動もしくはワークシートへの記録」と言語活動を間違って認識している傾向が強かったが，「体験活動の充実がなければ言語活動の充実はあり得ないこと」「言語活動は単元や本時の授業の目標ではなく，思考のツールである」ことを指導した。体験活動と言語活動の双方向的な学習効果について指導し，授業での言語活動が，価値ある体験活動に裏付けられたもの変わっていった。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成25年4月～平成26年3月 【2年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～体験活動を通した問題解決学習における言語活動の系統性を考える～」理科，生活科の教科研究および提案授業についての指導を行った。年間７回（提案授業の指導講評３回，年度初めの研究の方向性についての指導１回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，伊丹市教育委員会指定の研究発表会での指導講評１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。指導の内容としては，子どもの思考が働くきっかけである体験活動の充実の必要性，授業後の具体の子どもの姿（発言，ノート記録など）を具体化してからその姿に変容させるための手立てを考えることの２点である。指導の結果として，「子どもの思考を働かせるきっかけとなる体験活動の充実を意識した授業提案が大幅に増えたこと」「形式的な言語活動が授業場面で減少したこと」「単元や本時の授業の目標を具体化して授業案を立てられる教員が増えたこと」が挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）

	平成26年4月 ～平成27年3月 【3年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～自分の考えを持つための問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。今年度の指導の内容は，「子ども一人一人の生活経験や学習経験によって，子どもの自然の事物・現象を見る目は決まっていること」「その決まっている目線をずらすことで，子どもの問題意識は生まれること」「思考の多様な表現方法の意味付けや価値付けを指導者が的確に行うことで，子どもの学習に対する意欲はさらに高まり，子どもが主体的な問題解決に取り組むことができるようになること」の３点である。指導の結果として，「児童の実態を詳細に記録した学習指導案が多くなったこと」「授業時の子どもの姿やノート記録をもとにした討議を行うことが定着したこと」「子どもの意見や疑問をもとに授業を進める場面が研究授業において多く見られるようになったこと」が挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成27年4月 ～平成28年3月 【4年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究の成果と課題についての指導講評１回）の指導を行った。今年度の指導の内容は「子どもに伝え合い深め合わせるためには，『ホンネの問題意識』を持たせる必要があること」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」の２点である。指導の結果として，「『ホンネの問題意識』を持たせるような事象の出会わせ方の工夫が多数見られたこと」「その工夫により子どもが自然と自らの伝え合うことができるようになったこと」が挙げられる。 （対象者：丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成28年4月 ～平成29年3月 【5年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評３回，夏期研修会での研究の内容および２学期以降の授業指導案の指導１回，年度末の研究発表会での指導講評１回）の指導を行った。今年度の指導は，「子どもに伝え合い深め合わせるためには，『ホンネの問題意識』を持たせる必要があること」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」「その意味付けや価値付けを板書などでどのように可視化するかということ」「伝え合い深め合えるツールの活用法」の４点である。指導の成果として，年度末の研究発表会で，板書やホワイトボードを思考の可視化のためのツールとして活用した生活科の授業，「ホンネの問題意識」を誘発する理科の授業，各グループの実験データを根拠に深め合う理科の授業を公開することができたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）

	平成29年4月～平成30年3月【6年目】	「自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間５回（提案授業の指導講評５回）の指導を行った。今年度の指導は,「子どもが主体的に伝え合い深め合えるような環境構成の仕方」「子どもの意見や考えを授業のゴールに向かうように，指導者が意味付けたり価値付けたりする必要があること」の２点である。指導の成果として，内容の系統性をふまえた「学習マップ」を作成できたことや，発達段階や学習内容に応じたグループ学習を実践できたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成30年4月～平成31年3月【7年目】	自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間６回（提案授業の指導講評６回）の指導を行った。今年度の指導は,「子どもが主体的に問題解決や課題解決を行うことができる授業デザインのあり方」「子どもが自ら問題解決や課題解決に向かえる教師の形成的評価のあり方」の２点である。指導の成果としては，昨年度の成果として挙げられた学習マップを子どもの学びの自覚化を促進させるものに改編できたこと，子どもの気付きや考えをつなぐ教師の発言のあり方について教職員全員で学び合えたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
	平成31年4月～令和２年３月【8年目】	自ら考え意欲的に学ぶ子をめざして～伝え合い，深め合う問題解決学習のあり方を考える～」という研究テーマのもとで指導を行った。年間７回（提案授業の指導講評６回，夏季研修会での講演１回）の指導を行った。今年度の指導は,「有岡小学校での過去の理科・生活科での研究成果を活かした授業デザイン」である。指導の成果としては，これまでの研究の成果と課題を分析することで，有岡小学校が目指す「主体的・対話的で深い学びによる授業改善」の視点を教職員全員で共通理解できたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教員約４０名）
（５）大阪府下の小学校教員の自由研究指導力向上のための研修の指導助言	平成25年6月【1年目】	大阪府教育センター主催の「自由研究指導力向上研修」で講話を行った。講話の内容は「自由研究の指導につながる理科の授業づくり」である。講話の目的は，日々の理科と自由研究を別物と考えるのではなく，日々の理科の授業を充実させることで，子どもが質の高い自由研究を行うことができるようにすることである。研修の結果として,「日々の授業で問題解決の道筋を子どもにたどらせることを繰り返すことが自由研究の質の向上につながることを参会者が実感したこと」が挙げられる。 （対象者：大阪府下小学校教員約３０名）
	平成26年6月【2年目】	大阪府教育センター主催の「自由研究指導力向上研修」で講話を行った。講話の内容は「自由研究の指導につながる理科の授業づくり」である。講話の目的は，日々の理科の授業内容を充実させることで，子どもが質の高い自由研究を行うことを論じた。研修後「子どもの素朴な見方や考え方の分析の重要性」「日々の授業で問題解決の道筋を子どもにたどらせることを繰り返すことが自由研究の質の向上につながること」の２つを参会者が実感した。 （対象者：大阪府下小学校教員約３０名）

（6）大阪教育大学ＣＳＴ養成プログラム 実地講師	平成25年8月 【1回目】	大阪教育大学科学教育センターが主催するＣＳＴ（コアサイエンスティーチャー）養成プログラムの学生プログラムである「理科教育法Ⅱ」で講義を行った。「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業」をテーマとし，中学年の授業づくり，児童分析，教材分析についての講義，授業実践の紹介，模擬授業を行った。結果，理科に関わる知識だけでなく，具体の子どもの姿をイメージできるようになったと好評であった。 （対象者：ＣＳＴ養成プログラム受講学生約１０名）
	平成26年3月 【2回目】	大阪教育大学科学教育センターが主催するＣＳＴ（コアサイエンスティーチャー）養成プログラムの学生プログラムである「理科教育法Ⅱ」で講義を行った。「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業」をテーマとし，高学年の授業づくり，児童分析，教材分析についての講義，授業実践の紹介，模擬授業を行った。結果，理科内容に対する深い理解のみならず，学習者の姿をイメージし教え込みではない理科の授業の魅力を感じることができたりした学生が大勢であった。 （対象者：ＣＳＴ養成プログラム受講学生約１０名）
（7）大阪教育大学教育学部「教職入門」実地講師	平成26年7月	大阪教育大学教育学部「教職入門」において，「理科を教える教師としての資質」をテーマとして，理科教師として学ぶこと，教育実習生を指導して感じたことを話した。さらに理科の目標内容とそのための授業づくりおよび実践事例についての講義を行った。特に，授業づくりおよび実践例では，小学校理科で取り扱う教材を学生一人一人に使用させ模擬授業を体験させた。その体験をもとに，実際の授業での子どもの様子を写真で紹介したり，ノート記録をもとに評価基準や評価方法を紹介したりした。指導の結果，「現場経験のある先生の授業は参考になる」「もっと実際の授業を受けて学びたい」「子どもの思考を姿やノート記録から教師が的確に見取り評価することがどれだけ重要かを実感した」などの声が多数挙がった。 （受講者：大阪教育大学１回生約６０名）
（8）教育課題研修指導者海外派遣プログラム 事前研修	平成26年8月	和泉市立国府小学校教諭として，独立行政法人教員研修センター主催の平成２６年度教育課題研修指導者海外派遣プログラム事前研修に参加した。研修派遣先は，フィンランドである。派遣団の研究テーマは「ＰＩＳＡ型学力の育成について」である。その中でも「科学的リテラシーを育成するための理科授業のデザイン」の研修を進める班に所属することとなった。本事前研修では，フィンランドの教育システムや現在の課題のみならず，日本の教育システムと比較しつつ視察するべき理科教育の項目をまとめた。さらに，研修報告書のまとめ方などの講義を受けた。

（9）教育課題研修指導者海外派遣プログラム 海外研修参加 （独立行政法人教員研修センター主催）	平成 26 年 10 月	平成２６年１０月１４～２５日の間，和泉市立国府小学校教諭として，「ＰＩＳＡ型学力の育成について」をテーマに，フィンランドでの海外研修に参加した。現地での主な研修先は，国家教育局，ユバスキュラ大学附属学校園，ヘルシンキ大学附属学校園および教員養成実習校など，計１２カ所の機関および学校園である。研修先では，主に理科の授業見学と授業担当教員へのインタビューを行った。本研修で明らかになったことは，日本の学習指導要領は世界でも誇れるすばらしい物であること，フィンランドでのＩＣＴ活用の授業のレベルが高いこと，ＩＣＴに頼りすぎて本来授業で大切にすべき教材分析や板書，支援が十分に行われていないことなどが明らかになった。
（10）伊丹市立有岡小学校初任者研修講師	平成27年9月	伊丹市立有岡小学校において,「理科室の環境整備と授業づくりの基本」というテーマで，平成 27 年度に採用された初任者に対して，理科室の環境整備，安全面の指導，授業づくりについて指導した。特に，安全面の指導では，中村重太の「自作 hazards drawing による児童・生徒の加熱実験操作に関する安全意識調査」で使用された図を用いて，安全指導が必要な部分を指摘させた。また，授業づくりの基本では，リード線付きのソケットを使用せずに豆電球に明かりを付ける活動から，絶縁体の価値，リード線付きソケットの構造と豆電球の構造の関連性について講義した。結果,「指導者として見えていないものへの安全意識も持つことが大切であることがわかった」「指導者が教材について深く理解することが子どもを引きつける授業に繋がることがわかった」などの感想を得られた。 （対象者：伊丹市立有岡小学校新任教員４名）
（11）「保幼小接続期モデルカリキュラム（第２期）」検証のための幼稚園公開保育の指導講師	平成28年2月	伊丹市立こうのいけ幼稚園において行われた「保幼小接続期モデルカリキュラム（第２期）」アプローチカリキュラムに基づいた公開保育及び研究討議における指導講話を行った。指導の内容としては,「子どもの多様な気付きを誘発したり，思いや願いに向けて子どもがすぐに働きかけたりすることができる環境構成の重要性」「子どもの行動や発言他者とつなげる支援の重要性」の２点である。これらを公開保育で見られた具体的な事例を根拠として述べた。指導の結果として,「生活科の学びは保育園や幼稚園のそれと繋がっており，保育から学んでいかなければならないと実感した小学校教員が増えたこと」「小学校での学びを見据えた保育が必要であると考えた保育園や幼稚園の教員が多数見られた」ことが挙げられる。 （対象者：伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員　約７０名）

(12) 八尾市立八尾小学校での指導講師	平成28年4月～平成29年3月【1年目】	「アクティブ・ラーニングの実現に向けて」というテーマをもとに指導を行った。年間５回（夏季研修での指導講話１回，研究授業の事前指導及び事後指導を３回，年度末の研究の成果と課題についての指導講話１回）の指導を，理科と算数科を中心に行った。指導の内容としては，子どもの思考が働くきっかけである課題設定の重要性，課題設定のための教師の教材分析と内容の系統性の分析の２点である。指導の結果として,「教材の特性や内容の系統性を踏まえた課題設定を授業のきっかけとして提示する授業が増加したこと」「展開部分での子どもへの形成的評価の必要性に気付く教員が出てきたこと」が挙げられる。 （対象者：八尾市立八尾小学校教員約４０名）
	平成29年4月～平成30年3月【2年目】	「アクティブ・ラーニングの実現に向けて」というテーマをもとに指導を行った。年間７回（年度初めの指導講話１回,各学年の研究授業の指導講話６回）の指導を，理科と算数科を中心に行った。指導の内容としては，子どもの思考をつなぎ拡げる指導者の役割，子どもの思考が表出するノートやワークシートの活用法の２点である。指導の結果として,「内容ではなく学び方を教える重要性」や「ノート記録の形成的評価やそれを考察部分で活用することの重要性」に気付く教員が出てきたことが挙げられる。 （対象者：八尾市立八尾小学校教員約４０名）
	平成30年4月～平成31年3月【3年目】	「子どもたちの考えをつなぎ・深める授業のあり方～自己の学びを見通し，振りかえることを大切にして～」というテーマをもとに指導を行った。年間６回（各学年の研究授業の指導講話６回）の指導を行った。指導の内容としては，子どもの主体的な学びを保証する授業デザインについて，子どもの思考をつなげる形成的評価のあり方の２つである。指導の結果として，本時レベルだけでなく単元レベルでの授業分析が授業等議会で多く発言されたこと，教師のつなぐ発言や子どもに繰り返し発言を求める教師の姿が授業内で多く見られたことが挙げられる。 （対象者：八尾市立八尾小学校教員約４０名）
(13) 第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会分科会指導講師	平成 28 年 11 月	堺市立浜寺石津小学校で行われた，第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会の代４学年分科会において，研究授業３本と実践報告２本の指導講評を行った。指導の内容としては，季節による動植物のくらしでは，季節ごとの気温や日照時間の変化と動植物のくらしを関連付ける指導の在り方について述べた。また，空気や温度変化など目に見えないものを扱う単元では，それらをイメージ図等で可視化しながら学習を進めていくことの重要性について述べた。参会者からは，グラフ化やサーモグラフィ画像など，可視化することの効果を感じられる実践発表や指導であったので，大変勉強になった。」「地域ごとによる夏の気温の上がり方の違いもあり，大阪府内と他の地域での学習のさせ方の違いを知ることができ，今後の指導の参考になった。」などという意見が多数挙がった。 （対象者　第４９回全国小学校理科研究大会大阪大会 第４学年分科会 参会者 約４０名）

（14）公私立幼稚園・こども園・保育所（園）共同研究会講師	平成29年1月 【1年目】	伊丹市立中央公民館で行われた第４回公私立幼稚園・こども園・保育所（園）共同研究会において，「次期学習指導要領に向けた就学前教育と小学校教育の滑らかな接続について」という演題で講演を行った。講演の内容として，伊丹市立有岡小学校で行われた生活科の授業をビデオで流し，対象授業を根拠として，子どもの学びの環境構成のあり方について講義をした。また，参会者にもグループ討議を行ってもらい，所属する校園の違いによる環境構成の考え方の違いから，保幼小の３校園の接続を念頭に置いた環境構成のあり方について考えてもらった。講演の成果として,「幼稚園や保育園の保育の実態を踏まえた生活科の授業づくりの重要性を実感した。」「小学校への接続や生活科と保育の系統性について改めて考えるいい機会となった。」という保育士や幼小教員の振り返りから，保幼小の接続期において，それぞれの校園での連携の重要性について気付いた保育士や教員が多数いたことが挙げられる。 （対象者：伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員　約７０名）
	平成30年2月 【2年目】	伊丹市立中央公民館で行われた第５回公私立幼稚園・こども園・保育所（園）共同研究会において，「就学前教育と小学校教育の滑らかな接続について～幼児期の終わりまでに育ってほしい姿～」という演題で講演を行った。講演の内容として，伊丹市立有岡小学校で行われた理科や生活科の授業実践から小学校教育での環境構成の有効性を論じると共に，保幼小の教育を滑らかに接続するために必要な条件や取り組みについて講義をした。また，参会者にもグループ討議を行ってもらい，所属する校園の違いによる環境構成の考え方の違いから，保幼小の３校園の接続を念頭に置いた環境構成のあり方について考えてもらった。「時間の無い中でも幼保の保育について学んで行かねばならないと感じた。」「幼稚園で行っている環境構成が小学校でも効果的であることを知って，さらに充実した実践を行っていこうと思うことができた。」という保育士や幼小教員の振り返りから，参会した保育士や教員によって学びのある会になったことが伺える。 （対象者：伊丹市内の小学校教員，公立および私立幼稚園教職員，保育所職員，こども園職員　約７０名）
（15）伊丹市立有岡小学校研究発表会講演講師	平成29年2月	伊丹市教育委員会指定 平成 28 年度伊丹市立有岡小学校研究発表会において,「次期学習指導要領で求められる小学校理科・生活科の授業～有岡小学校の授業研究と「アクティブ・ラーニング」の視点から～」という演題で講演を行った。講演の内容として，平成 28 年 12 月の中央教育審議会「幼稚園，小学校，中学校，高等学校及び特別支援学校の学習指導要領等の改善及び必要な方策等について（答申）」の内容と登壇者の過去の授業実践を根拠に，次期学習指導要領で求められる小学校理科・生活科の授業像，およびその授業に必要な教師の指導の在り方について言及した。参会者のアンケートから「次期学習指導要領で求められる授業の具体が分かった。」「新学習指導要領が実施する前から授業の改善に取り組む必要性を十分に感じた。」といったアンケートの内容から，参会者の次期学習指導要領改訂に向けての学びが充実していたことが明らかとなった。 （対象者：伊丹市立有岡小学校教職員，伊丹市内の学校教職員，伊丹市外の学校教職員，約２００名）

(16) 伊丹市立ありおか幼稚園園内研究会指導講師	平成29年3月	「育ちと学びをなめらかにつなげる幼小接続～自然科学の分野に視点をあてて，遊びの中で学びを深めていくための環境構成を探る～」という研究テーマのもとで指導を行った。指導の内容としては，「保育の学びと生活科・理科の学びの関連」「生活科・理科の環境構成から見る保育の環境構成の意義」の２点である。指導の結果として，「保育と小学校教育の関連に気付いた教員が出てきたこと」「教員が現在行っている保育実践の意味や価値に気付けたこと」が挙げられる。 （対象者：伊丹市立ありおか幼稚園教員６名）
（１７）八尾市立亀井小学校での指導講師	平成 30 年 11 月	八尾市立亀井小学校において，理科の研究指導を行った。研究授業の指導講評の他，子どもの「ホンネの問題意識を生み出す授業デザイン」をテーマとして講演を行った。 （対象者：八尾市立亀井小学校教職員約 40 名）
（１８）第 27 回大阪府小学校生活科・総合的な学習教育研究協議会研究大会中河内大会の事前の研究指導講師	平成30年9月～（継続中）	平成31年10月31日に八尾市立高安小学校で実施される第27回大阪府小学校生活科・総合的な学習教育研究協議大会中河内大会の総論，および授業研究の指導を行っている。平成30年度は「主体的・対話的で深い学びを目指す授業づくり」についての講演を2回，総論の内容指導を2回，研究授業の指導講評を1回行った。平成31年度も継続的に指導を行う予定である。
５　その他 （１）大阪教育大学教育学部における非常勤講師としての教育実績 「初等理科授業研究」担当	平成24年4月～平成25年3月	大阪教育大学教育学部の非常勤講師として担当の「初等理科授業研究」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，小学校学習指導要領解説理科編の目標および内容についての講義，学習指導案の書き方についての講義，理科の教材研究と授業づくりの講義および実践事例の紹介，学生による模擬授業の指導案検討および授業討議会の実施とその指導を行い，それによって，教育実習を控えた学生に学習指導案の書き方，理科の授業づくり（児童分析，教材分析も含む）および授業分析の仕方を理解させる教育効果があった。
	平成25年4月～平成26年3月	大阪教育大学教育学部の非常勤講師として担当の「初等理科授業研究」（専門科目，３年次配当，半期，選択２単位）において，理科の教材研究と授業づくりの講義および実習，学生による模擬授業の実施及び授業討議会での指導を行った。具体的には，授業で使用する教材を実際に作り，それを使った模擬授業をさせることで，教材の課題，板書や発問，支援などの課題を討議によって明らかにさせた。このような講義を通して，学生は教材分析の重要性や子どもに合った支援を行うことの重要性を理解することができた。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 （1）小学校教諭１種免許状 （2）中学校教諭１種免許状家庭 （3）高等学校教諭１種免許状家庭 （4）小学校教諭専修免許状	 平成14年3月 平成14年3月 平成14年3月 平成29年3月	 平１３小１第２３６７号（大阪府教育委員会） 平１３中１第２４７４号（大阪府教育委員会） 平１３高１第２６３３号（大阪府教育委員会） 平２８小専第１３号（大阪府教育委員会）
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 （1）大阪教育大学　科学教育プロジェクト実施委員	平成23年4月～平成24年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校のプロジェクト実施委員として，理科室および理科準備室の実験器具の充実や環境整備，二次元バーコードによる理科のノートデータの集積等に携わった。具体的には，理科室および理科準備室の充実や環境整備として，授業収録システムの導入，超音波洗浄機，大型乾燥機（実験器具用）の導入に携わった。また，子ども一人一人の二次元バーコードを作成し，それを専用スキャナーで読み取ることで，子ども全員の全てのノートデータを専用サーバーに蓄積することができた。
	平成24年4月～平成25年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校のプロジェクト実施委員として，理科室および理科準備室の実験器具の充実や環境整備に携わった。実験器具の充実では，高さ１．５ｍのアクリルパイプを１０本用意し，食塩の結晶１粒がどのように水に溶けるかを観察できるようにしたり，重い石と軽い砂の沈み具合の違いや地層のでき方を観察できるようにしたりした。環境整備としては，理科室への書画カメラ，スマートボードの導入およびその管理，子ども用いすの新調などに携わった。
（2）大阪教育大学附属天王寺小学校　理科主任	平成24年4月～平成25年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校の理科主任として，理科教材の開発を行った。また授業でイメージを使った思考の場を取り入れて子どもの思考の可視化を図り，それをもとにした教師の支援や形成的評価を充実させることで，子どもの科学的な見方や考え方を育む授業研究および実践に取り組んだ。その結果，理科部全体で，単元の学習を通して育みたい子どもの見方や考え方を設定した上での授業計画や実践を行うことができるようになり，授業時の板書や支援が子どもの実態に即したものが増えた。子どもの理科学習に対する興味・関心を高めたり，科学的な思考・表現を深めたりすることができた。理科主任として低学年生活科の気づきと３年生からの理科の科学的思考や知識理解の接続についてまとめることに貢献した。
	平成25年4月～平成26年3月	大阪教育大学附属天王寺小学校の理科主任として，理科部の若手教員の育成に取り組んだ。具体的には，週１回の教科論に関わる文献の輪読会の開催，月１回の若手教員が行う授業見学とその事後指導を，年間を通じて行った。その結果，若手教員の文献を読む力がつくとともに，主任と部員が同じ方向性を持って日々の授業研究および実践を行うことができるようになった。学年の異なる理科担当者同士で学習指導要領を学び，目標や内容の系統性を確認し合った。さらには，本年度の研究発表会では，「いい提案授業であった。」「こんな理科の授業を見せてもらえるなら来年もぜひ来たい。」といった高い評価を受けた。

（3）大阪教育大学附属天王寺小学校 第３学年主任	平成25年４月 ～平成26年３月	学年の主任として，学年全員に「規律」「素直」「努力」の３つのキーワードを示して，学年全体経営，授業改善および生活指導にも取り組んだ。定期的に学年教材研究日を設ける等，教師としての資質を高める指導を行った。その結果，学年全体の子どもは落ち着いて授業を受けられるようになるとともに，保護者からの学校および学年教員団への信頼も大きくなった。
４　その他 特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） １．天王寺教育ノート 第１３３号	共著	平成22年６月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２２年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践の分析集である Ｂ５判　全８４頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，山手隆文，石川隆之，片山雅夫，森保，太田雄久，鈴木武司，清水大，多田和彦，小林佐知子，森元貴子，髙井大輔，吉門妙子，風間寛，他８名 本人担当部分 ５年理科「電磁石のはたらき」（p４４－ｐ４７）を単著 「電磁石のはたらき」の授業についての実践の振り返りとして分析と考察を行った。本授業で明らかになったことは，問題解決でのきっかけにあたる，自然の事物・現象への働きかけから仮説設定までのイメージ思考の充実が重要であること。観察・実験を通して行われる考察時に，イメージの価値付けや意味付けにつながるということである。
２．天王寺教育ノート 第１３５号	共著	平成23年２月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科の特性をふまえつつ，子どもの発想や教材の本質にせまるための「板書・ノート指導」をまとめたもの。 Ｂ５判　全６６頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，石川隆之，森保，太田雄久，清水大，小林佐知子，森元貴子，吉門妙子，川上康之，髙井大輔，三浦聡子，山本岳大，那賀典仁，榊井大輔 本人担当部分 「科学的な見方や考え方を養う授業～６年『てこの規則性』より～」（p３６－ｐ４１）を単著 本研究の目的は，「科学的」の根拠である「実証生」「再現 性」「客観性」を子どもが意識するような授業を実践することで，子どもの科学的な見方や考え方を育む効果的な指導手立てを明らかにすることである。明らかになったことは，手ごたえという個人差の大きい感覚をあらわすために，重さという客観的な数値を用いることの有効性を子どもに感じさせることである。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．天王寺教育ノート第１３６号	共著	平成 23 年 7 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２３年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践分析集である。 Ｂ５判　全８７頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：岩﨑由紀夫，八木義仁，山手隆文，藤倉憲一，稲葉正治，森保，太田雄久，鈴木武司，多田和彦，小林佐知子，髙井大輔，森元貴子，康貴利，吉門妙子，他８名 本人担当部分 ６年「発電と電気の利用」（ｐ３２－ｐ３５）の部分単著 平成２３年２月に行われた大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての実践報告および分析，考察を行った。本授業で明らかになったことは，子どもが主体的な問題解決に取り組むためには，子どもが「何とかして知りたい。」「絶対にこの課題の答えを知りたい。」というような気持ちをもつために，導入時の指導者の課題設定や発問が重要であると言うことである。
４．天王寺教育ノート第１３７号	共著	平成 23 年 10 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	学習指導要領完全実施による，子どもの変容とどのように変えようとしているのかを各教科等で述べた。 Ｂ５判　全８１頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：早草寛，山田良則，服部敬一，三島公徳，八木義仁，山手隆文，森保，太田雄久，鈴木武司，多田和彦，康貴利，森元貴子，風間寛，竹上由希子，粟生義紀，他 13 名 本人担当部分 「子どもが変わる，子どもを変える『科学的な表現力に着目して』」（ｐ１４－ｐ１５）の部分を単著 新学習指導要領で，理科で子どもをどのように変えるのか，また子どもの変容の過程を，授業実践を通して分析および考察を行った。評価の観点である「表現」が「科学的思考・表現」になったことで，子どもの思考を表現活動によって可視化することが授業で多く取り入れられるようになったこと，また子どもが思考の可視化によって，自分と他者の考えの比較を容易に行えるようになったことを述べた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５．天王寺教育ノート第１３９号	共著	平成 24 年 7 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２４年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践の分析集である。 Ｂ５判　全７８頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：上東章，前田三男，八木義仁，大仲政憲，石川聡子，森保，太田雄久，鈴木武司，小林佐知子，多田和彦，松山雅子，髙井大輔，森元貴子，手取義宏，吉門妙子，柳本朋子，竹上由希子，石川聡子，小島律子，他１８名 本人担当部分 「創造性を育成する理科の授業　５年『ものの とけ方』の部分（ｐ２６，p３１－ｐ３２）を単著 大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての理科教科論と授業実践報告および分析，考察を行った。明らかになったことは，授業で子どもにイメージ図をかかせる活動を取り入れることで，子どもの感性の働きを指導者が適切に見取ることができるようになったことである。イメージ図の教育的効果を明らかにした。
６．天王寺教育ノート第１４０号	共著	平成 24 年 10 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科・領域の視点から，言語活動の充実について述べた。 Ｂ５判　全８１頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：八木義仁，山手隆文，森保，太田雄久，鈴木武司，小林佐知子，吉門妙子，森元貴子，川上康之，栗生義紀，松浦宏，木下清司，竹上由希子，三浦聡子，他 11 名 本人担当部分 「言語活動の充実『体験活動の充実が言語活動の充実につながる』」（p１０－ｐ１１）の部分を単著 理科で行われている言語活動のとらえ方とその充実の指導方法にいて，授業実践をもとに述べた，具体的には，言語活動とは子どもの思考が可視化されたものであること，言語活動は子どもの思考が働いてこそ行われること，子どもの思考を働かせるためには体験活動の充実が必須であることを述べた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
７．天王寺教育ノート第１４１号	共著	平成 25 年 2 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	各教科・領域の視点から，言語活動の充実について述べた。 Ｂ５判　全６８頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：八木義仁，安井義和，山手隆文，森保，太田雄久，鈴木武司，牧郁子，小林佐知子，吉門妙子，森元貴子，川上康之，栫井大輔，髙井大輔，栗生義紀，三浦聡子，竹上由希子，他９名 本人担当部分 「教材・教具の話『豆電球』」（ｐ２６−ｐ２７）の部分を単著 ３年生等で取り扱う豆電球についての教材分析および授業実践例を紹介した。具体的には，なぜ３年生の電気の学習では豆電球を取り扱うのかということを，小学校理科の内容の系統性を具体的に示して述べた。そして豆電球の内側の導線のつながりを理解させることは小学校理科で電気の学習を進める導入段階としては重要であることを論じた。
８．天王寺教育ノート第１４２号	共著	平成 25 年 7 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	平成２４年２月実施の大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会の授業実践分析集である。 Ｂ５判　全７６頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：萩原武士，大仲政憲，石川聡子，田中建司，山手隆文，森保，太田雄久，吉門妙子，髙井大輔，栗生義紀，松山雅子，手取義宏，柳本朋子，竹上由希子，三浦聡子，小島律子，佐藤賢司，入口豊，金光靖樹，山本岳大，他９名 本人担当部分 「子どもの科学的な見方や考え方を育む授業３年『ものと重さ』」（ｐ１８－ｐ２０）部分を単著 大阪教育大学附属天王寺小学校研究発表会での授業についての理科教科論と授業実践報告および分析，考察を行った。明らかになったことは，体験活動を充実させることで子どもが言語活動の必要性を感じることである。子どもの素朴概念と授業の目標をもとに体験活動も言語活動も「何を」「どのように」の２つの視点を明らかにして設定することが大切であると述べた。体験に支えられた言語活動の重要性を論じた。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
９．天王寺教育ノート第１４３号	共著	平成 25 年 12 月	大阪教育大学附属天王寺小学校教育後援会	思考力・表現力判断力の育成には，何を大切にし，どのように取り組むかを，各教科・領域の視点で述べた。 Ｂ５判　全６７頁 編者：大阪教育大学附属天王寺小学校 共著者：矢谷健一，山手隆文，太田雄久，吉門妙子，髙井大輔，竹上由希子，井上由香里，田村真由子，山本岳大，吉森久展，栂井大輔，浜田美和，武智康文，角田浩太郎，清水貴之，他７名 本人担当部分 「思考力・表現力・判断力の育成とその評価『観察での思考力・表現力の育成とその評価』」（p８－ｐ９）の部分を単著 理科での思考力・表現力の育成について，観察という授業場面に焦点をあてて考察した。明らかになったことは，体験活動の充実と言語活動での指導者の目標に合わせた適切な意味付け，価値付けが思考力・表現力の育成につながるとことを論じた。
１０.科学的な見方や考え方を育む理科授業	単著	平成 26 年 12 月	株式会社ＥＲＰ	小学校理科の目標である「科学的な見方や考え方を育む」ための理科授業づくりについて述べた。具体的な授業づくりの視点として，「児童理解」「教材分析」「単元目標の具体化」の３つをキーワードとして取り上げた。「児童理解」については，子どもの先行経験と内容の系統性をもとに，子どもが「知っていること」「知っているつもりになっていること」「全く知らないこと」の分析を行う「診断的評価」の重要性を述べた。「教材分析」は，教材がもつ単元目標に迫ることのできることのできる特質や価値を分析する目を養うことを述べた。さらに指導計画のなかに「形成的評価」をいかし，児童のつまずきを発見しそれを指導の改善に活かすことを主張した。「目標の具体化」については，「統合的な評価」を行うために目標達成に至った子どもの発言やノート記録を具体化することを述べた。３つのキーワードをもとにした小学校３年生「電気の通り道」，５年生「天気の変化」など６年生までの授業実践例を述べた。 Ａ５判　全５５頁
１１.人間教育を視点にした教職入門	共著	平成 26 年 12 月	大学教育出版	人間教育に視点を当てて，教師を目指す学生に教育学の第一歩として，教育の目的や内容や学校組織について論じたものである。 Ｂ５判　２８０頁 編者：中田正浩 共著者：中田正浩，鎌田首治朗，松田智子，中田律子，金山憲正，瀧明知恵子，長居勘治， 本人担当部分（１０頁） 第６章第２節「小学校の学級経営」（p.１７２～p.１８０）の部分を単著 小学校は６歳から１２歳までと，担当する児童の成長及び発達の幅が広い。その発達に応じた特徴を把握し，段階に応じた学級指導について，１年から６年まで具体的に述べた。また，小学校学級担任の一日の仕事とその経営ポイントについて具体的に述べた。さらに，学校教育目標から学級教育目標を立てる手立

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				てについて説明し，そのモデルとし６年生の例を示した。最後にPDCAサイクルで実践する学級経営の評価の重要性を論じた 本人担当部分（１０頁） 第７章第１節「小学校の生徒指導」（ｐ．２１２～ｐ．２２２）部分を単著 小学校という児童の発達年齢上，生徒指導は保護者及び地域の人々との連携なくしては，達成できない。また思春期の早期発達により，小学校高学年への対応は思春期初期の独特のプライドや自尊感情を傷つけないようにしつつも，毅然とした対応する必要性を述べた。小学校低学年・中学年・高学年の生徒指導のポイントを述べた。生徒指導の体罰・不登校・いじめなどが小学校でどのように解決するか方策を示唆した。また小１プロブレムや中１ギャップへ等への対応には接続する幼稚園・中学校との連携が，重要であることも述べた。
１２.シリーズ新時代の学びを創る５ 理科　指導の理論と実践	共著	平成29年8月	あいり出版	新学習指導要領で求められる理科の指導や授業の在り方について，大学生や現役教員に向けて，理論と実践から論じたものである。 Ａ５判　２９８頁 編者：石川聡子 共著者：石川聡子，秋吉博之，畦浩二，平田豊城，太田雄久，仲矢史雄，川上雅之他１４名 本人担当部分（１０頁） 第９章「小学校の実践事例」第２節「３年生『ゴムの働き』」（ｐ．１６４～ｐ．１７２）の部分を単著 ３年生「ゴムの働き」の実践事例をもとに，新学習指導要領で求められる理科の授業づくりの在り方について言及した。具体的には，これまでの小学校理科教育で求められる不易の部分にあたる児童理解，教材研究などは，これまで通り大切にすべきであることを述べた。それと同時に，子どもが学ぶ内容以上に，学習に使うツールや環境構成など，子どもの学び方をどのように構造化するかという流行にあたる部分についても事例を通して述べた。
(学術論文)				
１.創造性を育成する理科の授業	単著	平成24年2月	大阪教育大学附属天王寺小学校『研究紀要第３３巻』 ｐ８１～ｐ８４	子どもの素朴な見方や考え方を「創造性が育成された姿」に変容させるために，イメージ図などを使って自分の考えを表現する場，新しい科学概念を転用する場を設定する授業を提案した。「診断的評価」により児童の分析を行い，教師の教材分析その２つのズレをもと予想や仮説を立て，問題解決毎に子ども自身に結果を省察させた。そして，問題解決で明らかになったことが，生活化社会化され，別の現象を解釈する際にも有効であることに気付かせ子どもの見方や考え方を妥当性の高いものに変容することを明らかにした。本論を通して，子どもがイメージ図を使って自分の思考を可視化する言語活動を設定することで，指導者が的確な形成的評価が行えることを論じた。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２.子どもの科学的な見方や考え方を育む授業	単著	平成 25 年 2 月	大阪教育大学附属天王寺小学校『研究紀要第３４巻』 ｐ７１～ｐ７６	授業において，子どもの経験が再構成されたり，子どもの感性が働いたりするような，挑戦的もしくは発見的な課題の設定について述べた。さらにそのために必要な体験活動と言語活動の充実という手立てを論じた。具体的には子ども自身に自分の立てた予想や仮説と結果を考察させ比べさせ，問題解決についての省察を行わせるとともに，他の児童の考え方にも触れさせることで，新たな気付きに導くことができる実践を述べた。適切な児童分析と教材分析をもとに行った挑戦的もしくは発見的な課題の設定により，子どもの問題意識は生まれること，それにより子どもの感性は問題解決に向けて適切に働くようになることを明らかにした。また適切な感性が働くことで，子どもが体験活動をもとに進んで考察や省察に取り組むようになることも述べた。
３.多面的に観察させることで,子どもの科学的な見方や考え方を育む	単著	平成 26 年 10 月	株式会社ＥＲＰ ｐ２４～ｐ２７	理科学習においては，子どものこれまでの先行経験によって，子どもの自然の事物・現象についての見方は一面的になる傾向が強い。そのためには単元導入前に「診断的評価」を行う必要がある。この子どもの見方は無意識的なものであるため，一面的な見方を変容するには，指導者の指導および支援が必要になる。また，その変容や指導の成果を確認するために，指導の全体計画に「形成的評価」を適宜設定しなければいけない。３年生の「植物の体のつくり」「昆虫の体のつくり」での子どもの観察記録の変容を例に挙げ，このような変容に至った指導者の指導や支援及び目標と評価について述べた。さらには，観察記録の変容を指導者が的確に価値付けたり意味付けたりすることで子どもにフィールドバックするなど,「指導と評価の一体化」を図ることにより，子どもの観察する視点を多面的・科学的なものに変容させることができることを述べた。さらに，評価を教師の指導改善に役立てる重要性についても論じた。
４.理科教育と人間教育－自然の事物･現象についての視点を変えることを通して－	単著	平成 26 年 12 月	人間教育学研究第２号（人間教育学会） ｐ８１～ｐ８８	人間教育とは，子ども一人ひとりが個性的で主体的な存在として成長していくことを援助する教育である。この教育のための授業づくりの視点として，子どもの内面世界に注目し，授業実践を行うことである。理科教育で求められることは①主体的な問題解決を重視することである。特に小学校では子どもの発達段階を考慮して身近な自然現象を対象とし子どもが自ら問題を発見し，見通しをもった観察・実験などを通して心を動かしながら問題解決の能力を育てることである。②言語力を重視することである。観察やレポートを作成する際に，視点を明確にして事象の差異や共通点を捉えて報告することは，人間としての基本的思考力育成となる。さらに比較や分類あるいは関連付けて思考すると言った「生きる力」の基本となる考え方を理科教育は育てる。③自然体験・科学体験の充実である。子どものこれらの体験不足が，人間としての成長に少なからず影響を与えている。体験を通し科学的知識の定着を図るだけでなく，学習

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				を基に自己の日常生活を振り返り，生活に活用することができれば学習の意義は深まる。上記の視点で，理科という教科を学ぶ意義と人間教育について，具体的な単元をあげながら目標や内容，そして評価について実践事例をもとにして論じた。具体的には，６年生「水溶液の性質」で「粒子の結合の変化」をとらえさせるために，単元を通して自分の考えを図化して学習を進めさせた。考察の際に，図と比べさせ考察させることで，目には見えない「粒子の結合の変化」とらえることができるようにした。３年生「ゴムの働き」では，ゴムの伸びによって変化するゴムが持つエネルギーをとらえさせるため，決められた場所に車を止めるゲームを設定し，ゴムの伸びと車の進む距離の関係をドットシールでグラフ用紙に記録させた。完成した１次関数のグラフから「ゴムの伸びと車の進む距離にはきまりがある」ことに気付かせた。
５.子どもの目の付けどころをもとにした小学校理科の授業づくりに関する一考察	単著	平成 27 年 9 月	奈良学園大学紀要 第３集 ｐ１６９～ｐ１７６	見る人が自然の事物・現象の何を見るかによって，その捉え方は変わる。また，同じ部分を異なる向きから見るかによっても，そのとらえ方は変わる。小学校理科の学習において，子どもの目の付け所を変えるような手立てを行うことは，自然の事物・現象を理解させたり見方を深めたりすることに非常に有効であると考えられる。このような想定の下で，小学３年生の「植物育ちとつくり」の実践事例をもとにして小学校理科の授業において子どもの目の付け所を変える手立てを行った。その手立てが子どもの自然の事物・現象の理解の深まりや見方の変容に効果的であったかを，子どものノート記録を根拠として論じた。授業実践を通して，指導者が観察の仕方を綿密に根気強く指導し続ける必要があると同時に，子どもの観察記録をもとに，その目の付け所を的確に意味付けたり価値付けたりする必要があることが明らかになった。また，このような指導を継続的に行うことで，子どもは自身の学び方のよさに気付くとともに，達成感を感じ，理科の学習に対しての自信を持つようになることが明らかになった。
６．小学校理科教材「メダカ」の価値とその学習で獲得させたい「生命」についての見方や概念	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学研究第３号 （人間教育学会） ｐ１１５～ｐ１２１	前の指導要領の改訂によって，小学校理科の内容のうち，「動物の誕生」が選択から必修に変更された。その前の改訂時に選択になったのにもかかわらず，すぐに必修に戻されたことは，本内容には子どもに「生命」についての見方や考え方を養うための価値があると考えられる。このような考えのもとで，過去の教科書と現行の教科書の記述を分析することによって，「動物の誕生」の内容が持つ教育的な価値について論じた。教科書の分析から，子どもに獲得させたい「生命」についての見方や考え方は，メダカの雌雄によるひれの形の違いの持つ意味を理解し，受精卵の育ちを観察し，さらにはメダカを継続的に何世代にもわたって飼育するという体験を通して獲得される「生命の連続性」とであることが明らかとなった。また，「動物の誕生」の内容が持

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				つ価値は，雌雄のひれの形の違いや受精卵の育ちという内容そのものが「生命の連続性」を意味していることであることが明らかとなった。
７. 子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果―小学校第５学年「電流の働き」の学習より―	単著	平成 29 年 3 月	平成 28 年度大阪教育大学大学院教育学研究科実践学校教育専攻 修士論文　全３３頁	これまでの日本の理科教育では，子どもが自然に働きかけたり自然から感じ取ったりすることは重要視されてきた。その根拠として，日置（2005）が論じている，我が国の理科教育のねらいは「子どもが素朴に自然を見つめて，自然に働きかけて，そこから得られた情報と自らの経験をもとにして，自分の考えをつくっていくこと」であること，「子ども独自の素朴な考え方をとりわけ重視しているので，理科の基盤には，子どもが自分で感じたことや考えたことが存在している」ことの２点を挙げることができる。また，平成 28 年 12 月の次期学習指導要領の改訂にむけての答申においても，育てたい子どもの姿として，子どもが豊かな感性を働かせながら新たな価値を創り出すことが明記されている。これらのことから，小学校理科で子どもの感性を育む授業を構想，実践することで，その効果を検証した。子どもの感性を育む授業を構想する前に，授業実践を行う子どものこれまでの自然体験と遊びの経験について，質問紙による調査を行った。その結果，授業実践を行う単元「電流の働き」の内容に関わる「乾電池を使ったおもちゃで遊んだことがある」「じ石を使ったおもちゃで遊んだことがある」の項目では，50%以上の子どもが「わりと経験がある」「かなり経験がある」ということが明らかとなった。一方で，「全く経験が無い」「あまり経験がない」子どもが，それぞれ 3.2%，9.7%いることも明らかとなった。質問紙調査の結果を受け，これまでの遊びの経験の差を埋めるために，導入部分で全員が電磁石で鉄を引きつけるという場を設定した。そして，その後の一連の問題解決において，森本（2013）による「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」により，指導者が子どもの表出させた感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うという授業を構想し，実践した。授業プロトコルの分析から，指導者が子どもの感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことで，子どもは問題解決への見通しを持つことができるようになったり，実感を伴った理解へ至ることができるようになったりすることが明らかとなった。 この結果から，指導者が子どもの感性を意味付けたり価値付けたりすることで，子どもが「実感を伴った理解」に至るとととともに，このような指導を繰り返し行うことで子どもの感性を育むことができるという知見が得られた。

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８．理科の見方・考え方を働かせる小学校理科の授業づくりの一考察	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要 第 7 集 ｐ１５～ｐ２２	平成 29 年 3 月に，新しい『小学校学習指導要領』が，同年 6 月に新しい『小学校学習指導要領解説理科編』が文部科学省より公示された。今回の改訂により，理科の目標が大きく変化した。これまで養う対象であった「見方や考え方」が，働かせる対象である「見方・考え方」となり，実際の授業実践に少なからず影響を与えるものと思われる。そこで，本稿では，現行の指導要領下で実践された授業を，新しい指導要領の考え方で分析し直し，新しい指導要領下での小学校理科の授業づくりについて分析を行った。その結果，これまでの実践の全てを変える必要はなく，子どもが「理科の見方・考え方」を働かせられるような教材や状況を，どのように作るかが重要であることが示唆された。
９.子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果の検証－小学校第５学年「電流の働き」の実践より－	共著	平成 30 年 7 月	理科教育学研究第 59 号 1 巻（日本理科教育学会）ｐ１～ｐ１０	研究の目的は，児童の感性を育てる小学校理科の授業を構想・実践し，その効果を検証することである。研究の方法として，これまでの児童の実態を把握し，授業実践を行った。質問紙調査から，児童の自然体験と遊びの経験が明らかとなった。特に，本研究の授業実践の対象である「電流の働き」の内容に関わる「乾電池を使ったおもちゃで遊んだことがある」「じ石を使ったおもちゃで遊んだことがある」の項目では，50%以上の児童が「わりと経験がある」「かなり経験がある」と回答した。その一方で，「全く経験が無い」「あまり経験がない」と回答した児童は，それぞれ 3.2%，9.7%であった。この児童の実態を踏まえて，児童の感性を育てる理科授業を構想した。その特徴として，次の２点が挙げられる。１つ目は，これまでの遊びの経験の差を埋めるために，導入部分で全員が電磁石で鉄を引きつけるという場を設定することである。2 つ目は，その後の問題解決の過程において，指導者が児童の感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことである。実践した授業のプロトコルの分析から，指導者が児童の感性を意味付けたり価値付けたりする支援を繰り返し行うことで，児童は問題解決への見通しを持つことができたり，「実感を伴った理解」へ至ったりすることが明らかとなった。本授業実践を通して，指導者の児童の感性に対する意味付けや価値付けを繰り返し行うことで，児童の感性を育てることができるという知見が得られた。 ※平成 28 年度大阪教育大学大学院教育学研究科実践学校教育専攻修士論文を『理科教育学研究』への投稿用に一部を改編した。 共著者：太田雄久，粟生義紀，秋吉博之

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１０.子どもの感性を育てる小学校理科授業の提案	共著	平成 31 年 2 月	理科の教育 2019 年 2 月号（東洋館出版社）	『理科教育学研究』第 59 号 1 巻に掲載された「子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果の検証－小学校第５学年「電流の働き」の実践より－」で取り上げた「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」（森本，2013）が子どもの感性を育てる効果があることを具体の実践事例を根拠に論じた。また，このような実践事例が新学習指導要領で求められている主体的・対話的で深い学びの授業提案であることも合わせて論じた。 共著者：太田雄久，粟生義紀，秋吉博之
１１.理科の見方を働かせる小学校理科授業の提案－時間的な視点で捉える状況を作る－	単著	平成 31 年 3 月	奈良学園大学紀要 第 10 集 ｐ１～ｐ８	本論文の目的は,「時間的な視点で捉える」という「理科の見方」を子どもが働かせる状況を指導者が作り出す授業を構想，実践し，その授業で表出した子どものノート記録を分析することで，実践した授業において子どもが「時間的な視点で捉える」という「理科の見方」を働かせることができたかを検証することである。指導の手立てとして「4 コマ漫画の枠」を使った授業を実践し子どものノート記録を分析した結果,「4 コマ漫画の枠」を使うことで,「時間的な視点で捉える」という「理科の見方」を働かせる状況を作ることができることが明らかとなった。その一方で，自然の事物・現象についてより細かな時間枠で捉えるミクロ的な視点を働かせる必要性や効果的に「4 コマ漫画の枠」を使った学習ができる単元が他にもあるのかを検証する必要があることも示唆された。
１２.小学校教育で求められる授業実践についての一考察－生活科と幼稚園教育の比較から－	単著	令和 2 年 3 月	奈良学園大学紀要 第 12 集 ｐ１４５～ｐ１５０	本論文の目的は，小学校での生活科の授業実践を取り上げ，その実践と幼稚園の教育との共通点を示すことで，新学習指導要領で求められる小学校教育での学校段階等間の接続を踏まえた授業実践のポイントを考察することである。小学校生活科の授業実践 1 つと幼稚園での保育実践 1 つの比較から，①掲示物を活用して，子ども自身が学びを自覚化できるようにするとともに，子ども同士の学びの共有化を図ること，②掲示物は，子ども全員の目に入るところに効果的に配置すること，③教師は教えるのではなく，子ども自らが学びを創ったり進めたりすることができるように形成的評価を繰り返し行うことの 3 点が，小学校の教師と幼稚園の教師の共通の行為であることが明らかとなった。また，これらの行為は，新しい小学校学習指導要領で求められる授業実践におけるポイントになることも示唆された。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学会発表） １.創造性を育成する理科の授業	－	平成 23 年 3 月	第１回村山理科教育セミナー （アウィーナ大阪）	文部科学省初等中等教育局教科調査官村山哲哉氏を指導者とし，大阪市，堺市，大阪教育大学附属小学校教員を中心にした理科教育研究会である。「創造性を育成する理科の授業」をテーマに，授業づくりの考え方およびそれに基づいた実践発表を行った。内容は，課題解決の過程において，よりよく科学的な思考力を発揮させることで，子どもの素朴概念をより妥当性の高い科学概念へと変容させることである。それを６年生の「水溶液の性質」の単元で行った実践をもとに述べた。発表では，子どもの感性を働かせる場の設定の工夫，仮説設定時や考察時でのイメージ図などを使って自分の考えを表現させる場の設定の２つの手立てについて，実践をもとに述べた。 Ａ４，５ページ分の資料添付。
２.附属学校における科学教育研究実践の効果とその評価	－	平成 23 年 8 月	日本理科教育学会第６１回全国大会 （於：島根大学）	ＰＩＳＡ２００６調査に採択されたアンケートをもとに，小学校４年生から高等学校２年生までの，科学に対する認識や興味関心を分析するとともに，附属学校の科学教育の取り組みがどのような影響をおよぼしているかを明らかにすることを目的とした研究である。明らかになったことは，学年が進むにつれて科学に対する認識や興味関心は低下すること，高等学校のＳＳＨカリキュラムによって高校生の科学への関心が高い傾向にあることである。 本人担当部分：小学校でのアンケート実施と分析補助 共同発表者：仲矢史雄，炭谷優穂，太田雄久，粟生義紀，小髙大輔，片桐昌直，畦浩二 発表抄録：ｐ.４４１
3. 子どもの感性を働かせる理科の授業	－	平成 24 年 6 月	「ＮＥＷ　ＥＤＵＣＡＴＩＯＮ　ＥＸＰＯ」 （大阪マーチャンダイズマート）	新しい理科教育の考え方と独自の授業実践事例」をテーマに開催された。子どもが主体的な問題解決の中で，感性を適切に働かせることで，子どもの科学的な見方や考え方を育むための授業実践を発表した。 実践は，３年生の「風やゴムのはたらき」と６年生の「ものの燃え方」の単元を取り上げた。発表での重点は，見えない風やゴムの持つエネルギー，燃えたときの空気の成分の変化に子どもの目が向くような事象との出会わせ方，見えないものについての子どもの思考の可視化の方法，その思考の意味付けや価値付けの３つである。 担当部分：具体的な指導事例の提示 共同発表者　村山哲哉

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４. 汎用測定装置を用いた小学校理科の授業開発	－	平成 24 年 8 月	日本理科教育学会第６２回全国大会 （於：鹿児島大学）	汎用測定装置を取り入れた小学校理科の授業が，科学的リテラシーの高い人材育成と実感を伴った理解につながるかを明らかにすることを目的とした。明らかになったことは，汎用測定装置は子どもの目には見えないエネルギーの働き 方を数値の変化という視点で理解させることには有効であること，一方で，汎用測定装置を強調しすぎると小学校理科で大切な目の前の現象を観察したり関わったりすることに対して希薄になることである。 発表抄録：p. ２９６
5. 子どもの目のつけどころを意識した理科の授業	－	平成 25 年 6 月	「ＮＥＷ　ＥＤＵＣＡＴＩＯＮ　ＥＸＰＯ」 （大阪マーチャンダイズマート）	「小学校の理科教育に求められること」をテーマに開催された。個々の生活経験や学習経験によって，子どもの自然の事物・現象を見る目は決まっており，その目線をずらすことで，問題意識は生まれることについて授業実践をもとに述べた。実践例は，３年生「植物の体のつくり」である。発表では，チューリップの絵を描かせたときに，ほとんどの子どもは横向きに書くことを例に挙げ，観察する子どもの視線の向きを植物の上から，葉の裏側から，土の中へと変える手立てが，植物の体のつくりやその工夫についての実感を伴って理解につながることを述べた。 担当部分：具体的な指導事例の提示 共同発表者　村山哲哉
６. 子どもの思考力を育成する理科の授業～子どもの目のつけ所を意識して～	－	平成 25 年 8 月	第３回村山理科教育セミナー （大阪市立苗代小学校）	文部科学省初等中等教育局教科調査官村山哲哉氏を指導者とし，大阪市，堺市，大阪教育大学附属小学校教員を中心にした理科教育の研究会である。発表内容は子どもの生活経験や学習経験の違いによって，子ども一人一人の自然の事物・現象への見方や感じ方が異なること。仮設設定や考察時に，この違いを指導者が適切に意味づけたり価値づけたりしながら対話的に授業を進めることで，科学的な思考力を育成するという考え方のもとで実践した具体例を述べた。
７. 理科教育と命の教育	－	平成 26 年 8 月	第１回人間教育学会 （奈良学園大学）	理科の「Ｂ生命」の内容を学習することを通して，小学校道徳の目標の解説にある「自他の生命の尊さ」を自覚できるきっかけを作ることを目的として実践した。実践した単元は，５年生「植物の発芽と成長」ある。明らかになったことは，理科の授業を通して「自然を愛する心情を育てる」こと，「実感を伴った理解を図る」ことができれば，「自他の生命の尊さ」を自覚できるきっかけを作ることができ，理科と道徳教育連携を図る授業の一案としての提案である。

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
８．理科教育と和文化	－	平成 26 年 11 月	第 11 回　和文化教育学会 （東京都武蔵村山市）	天気の言い伝えである観天望気を，５年生「天気の変化」の単元で詳しく学習することを通して，天気を決定づける要因について実感を伴って理解させることを目的として実践した内容を発表した。具体的な内容としては，単元の終末に，教科書で紹介されている観天望気を調べる活動を設定し，観天望気を成立させる要因を探る活動，さらには，オリジナル観天望気を作り，その信頼性を調べる活動を設定した。そして，その活動を設定することで，子どもの天気の変化についての見方や考え方を科学的なものにしようとした授業実践の一案として提案した。
９.子どもの視点の分析をもとにした小学校理科の授業開発とその実践	－	平成 28 年 3 月	日本教師学学会第 17 回大会 （奈良学園大学）	小学校理科授業において，この視点を動かすことで，子どもは「ホンネの問題意識」を持つことができ，主体的に問題解決の活動に取り組むようになると考え，授業実践を行った。実践の分析から，子どもの視点を動かす手立てを行うことは，子どもが実感を伴って理解すること，科学的な見方や考え方に変容することにつながることが明らかとなった。
１０.子どもの感性を育む支援のあり方～子どもの自然体験や遊びの経験をふまえて～	－	平成 28 年 8 月	日本理科教育学会第 66 回全国大会 （信州大学）	子どもの自然体験や遊びの経験の違いにより，子どもの自然に対する感じ方や目の付け所に違いが出るという前提のもと，子ども一人一人の感じ方や目の付け所を効果的に価値付けたり意味付けたりして，子どもの感性を育もうとする授業を実践して，その効果を検証した。授業実践を通した検証から，ども一人一人の感じ方や目の付け所を効果的に価値付けたり意味付けたりすることで，子どもの感性が育むことにつながるという知見が得られた。 担当部分：研究代表者として発表を行う。 共同発表者　秋吉博之，栗生義紀 発表抄録：p. ２５６
１１.子どもの感性を活用した小学校理科授業の実践とその効果～小学校第５学年「電流の働き」の学習より～	－	平成 28 年 11 月	平成 28 年度日本理科教育学会近畿支部大会大阪大会 （大阪教育大学）	文部科学省（2011）は，感性に関する指導を行う際に「豊かな表現，より論理的で的確な表現を通して互いに交流する」ことに留意することを示している。そこで，対話的な学びの場で指導者が子どもの感性を指導に活用する授業を構想，実践し，その効果を検証した。授業実践による検証から，指導者が子どもの感性を活用することで，子どもは「実感を伴った理解」へ至ることが明らかとなった。 担当部分：研究代表者として発表を行う。 共同発表者　秋吉博之，栗生義紀 発表抄録：p. ３７

著書,学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所,発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１２.子どもの感性を育てる小学校理科授業の実践とその効果～小学校第５学年「電流の働き」の学習より～	－	平成 29 年 8 月	日本理科教育学会第 67 回全国大会 （福岡教育大学）	これまでの日本の理科教育では，子どもが自然に働きかけたり自然から感じ取ったりすることは重要視されてきた。その根拠として，日置（2005）が論じている，我が国の理科教育のねらいは「子どもが素朴に自然を見つめて，自然に働きかけて，そこから得られた情報と自らの経験をもとにして，自分の考えをつくっていくこと」であること，「子ども独自の素朴な考え方をとりわけ重視しているので，理科の基盤には，子どもが自分で感じたことや考えたことが存在している」ことの２点を挙げることができる。また，平成 28 年 12 月の次期学習指導要領の改訂にむけての答申においても，育てたい子どもの姿として，子どもが豊かな感性を働かせながら新たな価値を創り出すことが明記されている。これらのことから，小学校理科で子どもの感性を育む授業を構想，実践することで，その効果を検証した。授業実践の検証から，森本（2013）による「対話的な授業を進めるための教師が取っている行動」により，指導者が子どもの表出させた感性を意味付けたり価値付けたりすることを繰り返し行うことで，子どもの感性を育てることができるという知見が得られた。 担当部分：研究代表者として発表を行う。 共同発表者　秋吉博之，栗生義紀 発表抄録：p.３８５

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31日

氏名　　岡　本　恵　太

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教育学、教科教育学	国語科教育、教育実践学、言語活動、論理的思考力、言葉とコミュニケーション

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 (1)「つけたい力を明らかにして思考力を育てる授業～見通しと振り返りを位置づけて」	平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月	三田市教育委員会の委嘱を受けた「三田市教育研究グループ」として、教師と学習者がともに、学習を通して「つけたい力」を明確にして思考力を高める授業の筋道を研究した。また、研究の成果を「三田市教育研究グループ研究集録」の国語部会の章（各年度４頁分，本人担当分 27 年度４ｐ分）として発表するとともに、国語部会として独自に『実践事例集』(平成 26 年度は総頁数 48p 本人担当 8p 分・平成 27 年度は総頁数 54p 本人担当分 10p･平成 28 年度は総頁数 48p 本人担当分８ｐ)を編集、発行し若い教員が日々の実践に取り組む際の手がかりとなるようにした。 研究における「言語活動」については、「学習者の願いや目的を言語を用いて具現化するプロセス」としてとらえている。ここにおける「願い」には達成したい活動の成果物とともに、学習者自身が「つけたい力」も含まれる。こうした「言語活動」を「学習者の願いや目的」に向けて導く資質・能力となる「論理的思考力」を育てるための言語活動の工夫改善に関する研究を継続している。 「論理的思考力」を育てるための、授業における具体的な手立てとしては、第一に「めあて」と「ふりかえり」を位置づけることである。第二に、思考の過程をワークシートなどを通して具現化することが有効である。第三に、児童が自らの「PDCA サイクル」を意識して学習に取り組むことである。これは、児童がプランをたて、実行し、その過程を評価して、計画を修正する一連のプロセスを指す。この際、教師は学習資料・ワークシート・教室掲示などを通して「言語活動のゴール」「言語活動を通してつけたい力」「言語活動の方法」を目に見える形で提示する。児童は、こうした支援を手がかりに、主体的・協働的に自分の言語活動をよりよくしていくことができる。具体的な言語活動としては「ランキングノート」「フイッシュボーンシート」など思考ツールを活用した授業実践の提案を継続して行っている。
(2)「ともに学び合い高め合う子に～伝え合う場の設定～」	平成 27 年 4 月～平成 30 年 3 月	現任校において、国語科における思考力や伝え合う力を育てるために全校で取り組んでいる実践研究である。学習者一人ひとりが主体的に課題を持って探求し、協同でその課題に挑戦しながら高め合っていく資質・能力を身につけた児童を育成することを主題に掲げている。各年度２月に公開研究発表会を実施するとともに、研究紀要を発行している。研

		究授業として、平成27年度は「世界で一番美しいぼくの村（東京書籍）・４年生」、平成28年度は「町の幸福論−コミュニティデザインを考える−（東京書籍）・６年生」、平成29年度は「木龍うるし（東京書籍）・４年生」を公開し、その成果については、研究紀要にまとめている。 「言語活動の充実」を中心とした実践研究においては、様々な言語活動に含まれる言語能力を抽出し、分類整理を行った。さらに、経験年数の浅い教員も実施することができる「共に学び合い高め合う」ことを具現化するための言語活動に関するモデルプランを提案し続けている。成果として「ランキングノート」が挙げられる。これは学習者が「自分の読み取りたい項目」について柱をたて、ランキング形式で特徴的な叙述を取り出し、自分の解釈を書く活動である。「ランキング」という形式をとることで、学習者の選択・判断・吟味という思考がはたらくとともに、「自分の読み取りたいこと」を簡潔に表すことができるようになっている。この活動は、主に中学年で取り組まれている。また、従来から取り組まれてきた「人物紹介」を書くことを通して人物像と特徴的な叙述を結びつけた実践も、低学年から中学年で実施されるようになってきた。
２　作成した教科書・教材 (1)　『ひとり学びへの手引き』	平成29年４月	三田市教育委員会が市内の高学年児童に向けて発行している「ひとり学びへの手引き」の国語科に関する章のうち「パネル討論をしよう」「新聞記事を書こう」の項目を分担執筆した。 「ひとり学びへの手引き」は市内の児童が自分自身で問題を持ち、解決する力を育てることを目指した学習資料である。国語・社会・理科・算数・情報のそれぞれの分野ごとに、家庭学習の手法や児童が自ら調べ方・表現の仕方を解説している。 「パネル討論をしよう」では〈論点をどのように探すか〉〈どのような視点で議論を組み立てればいいか〉について児童が一人で学習が進められるよう記述した。これは、〈述べようとする事柄〉について「メリット」「デメリット」および「デメリットの解決方法」の三点から情報の整理や意味づけを行うことである。具体的な手法として「メリット」「デメリット」「デメリットの解決方法」を表にまとめることを提案した。 「新聞記事を書こう」では、まず新聞記事の特徴が「情報を客観的にとらえるための文章」であることを説明し、さらにその書き方について解説した。例えば、委員会の活動について「新聞記事」としてまとめるにあたっては、客観的な「記者の目」で書く必要がある。そのためには、正確な日付や数量表現、主語や文末などの文体上の工夫が必要になる。具体的な文例を提示しながら、高学年児童が学校行事などを題材にして、一人で新聞記事を書くことができるように記述した。 （総頁数９２頁、本人担当分４頁）

3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 兵庫教育大学大学院「小学校英語活動プログラム(小学校英語活動指導者ユニット)」履修	平成 26 年 3 月	兵庫教育大学大学院において小学校英語活動の指導者育成を目的としたプログラムを履修した。プログラムの一環として現任校（当時：志手原小学校）における研究授業「オリジナルカレンダーを作ろう」を実施した。ここで目指したことは、「動きを通して〈考える〉英語活動」である。これは、英語活動で取り組まれるアクティビティの中に、選択・判断・吟味といった思考の要素を導入しようとするものである。「動きを通して〈考える〉英語活動」を具現化するために、即興演劇の手法を活用した「プレゼントゲーム」や、友だちに英語でインタビューする時の手順を絵（ピクトグラム）で目に見える形にしたワークシートを開発した。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 なし		
5　その他 特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1．免許・資格 (1)小学校教諭１級普通免許 (2)中学校教諭１級普通免許（社会） (3)高等学校教諭２級普通免許（社会） (4)小学校教諭専修免許 (5)中学校教諭専修免許（社会）	 昭和 61 年 3 月 昭和 61 年 3 月 昭和 61 年 3 月 平成 26 年 4 月 平成 26 年 4 月	 昭 60 小 1 普第 1028 号（大阪府教育委員会） 昭 60 中 1 普第 4361 号（大阪府教育委員会） 昭 60 高 2 普第 5063 号（大阪府教育委員会） 平二六小専修第 11 号（兵庫県教育委員会） 平二六中専修第 10 号（兵庫県教育委員会）
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1) 三田市教育研究グループ研究員（国語）	・平成 16 年～平成 23 年 3 月 ・平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月	三田市教育委員会の委嘱を受けて、国語科における思考力の育成を軸に実践研究を行った。各年度の 3 月、各教科・領域の研究グループ交流会でその成果を発表するとともに、『活動報告』の冊子をまとめている。また、三田市の児童に自分自身の力で学ぶ力を育成することを目指して『一人学びへの手引き』（平成 29 年 4 月発行）の国語の項目の執筆も分担した。 本グループが一貫して研究主題に掲げているのは「つけたい力を明らかにして思考力を育てる授業-見通しと振り返りを位置づけて-」である。ここでいう「つけたい力」には、「教師にとっての子どもにつけさせたい力」という側面と「子どもにとっての、自ら身につけたい力」の二つがある。両者を授業の中で統合していくことが研究主題を具現化するために必要である。そのためには、言語活動に取り組むにあたって、学習者自身が「活動のゴール（何を実現したいか)」「活動の意味（何ができるようになるか)」「活動の方法(どうすればいいか)」の三つを具体的にとらえる必要がある。

		グループ員で、実践を集積し、整理した結果、現在次のような手立ての有効性が立証されつつある。まず第一に、学校行事や他教科と連携し、学習者にとって「必要性」「やりがい」が実感できる場の設定である。第二に、これまでの学習をもとに「目のつけどころ」や「方法」を取り出し、次に生かすようにすることである。第三に、思考の筋道を目に見える形にすることである。例えば思考ツールの活用や操作活動の導入が考えられる。第四に、自己評価や相互評価、あるいは地域に人や保護者など具体的な他者の評価を生かすことである。また、こうした手立てが有効に働くためには、年間計画に位置づけた指導が必要である。
(2)『柿の実詩集』編集委員	平成 27 年度	『柿の実詩集』は、三田市教育委員会が毎年発行している児童詩集である。市内の各校から作品を募り、代表作をまとめて刊行している。(平成 27 年は 3 に月発行) 編集委員として原稿の集約・審査、および編集作業に従事した。
(3) 三田市人権を考える会理事	平成 28 年 4 月～ 平成 30 年 3 月	三田市人権を考える会は、地域における人権啓発を推進する組織である。三田市人権を考える会理事として、主に三輪地区において、人権研集会の企画・運営に従事している。研集会の内容は講演、DVD 視聴と話し合い、児童の人権兵庫の発表である。
4　その他 特記事項なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書､学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所､発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.『「見方・考え方」を鍛える小学校国語科の「思考スキル」』	共著	平成 30 年 2 月 3 日	東洋館出版社	平成 29 年に告示された学習指導要領の柱の一つである「思考力・判断力・表現力等」について「思考スキル」の観点から解説した共著。 具体的な実践事例をもとに､「思考スキル」の分類と、その育成の筋道について解説している。 編著者：伊崎一夫 共著者：岡本恵太　遠藤陽子　小玉直人　中島朱美　羽渕みな子　濱村憲二　細見博友　峯山　淳　山口　映 本人担当分：第Ⅱ章「思考スキル」の分類（pp23-42） 「思考スキル」について、比較・順序・理由・要約・定義・類別・課題解決・推論・評価の九つに分類し、それぞれについて、基本的な考え方と、育成に向けての筋道を解説した。 「問題解決のあらすじを書くためには」(pp.80-83) 物語「はりねずみと金貨(東書 3 年)」について、あらすじを整理し、人物の気持ちの変化についてまとめるための実践を提案した。 「知識を本物にするには」 (pp.96-99) 説明文「夢のロボットを作る（東書 4 年)」について、思考ツールを活用して読み取る実践を提案した。
2.『ケースから学ぶ言葉による見方･考え方を育てる授業づくり』	単著	平成 29 年 9 月	株式会社 ERP ERP ブックレット	新学習指導要領の鍵概念である「言葉による見方・考え方」について基本的なとらえ方について小中 9 年間を見通して述べるとともに、その育成のための手立てを具体的な事例をもとに解説した単著。教師が、国語科の授業において、実際に出会うことが想定される場面を「ケース」として設定し、その背景にある〈言葉による見方・考え方〉について解説するとともに具体的な手立てを示している。新学習指導要領の方向性をふまえ、「読むこと」「書くこと」「話すこと・聞くこと」のそれぞれの領域に共通して働く「言葉による見方・考え方」について〈効果〉〈正しさ〉〈整合性〉の三つの項目に整理した。 最終章では､「言葉による見方・考え方」を育成するための手立てが､〈ゴールの明確化〉〈方法・筋道の可視化〉〈他者との伝え合いによる言語活動の吟味〉にあることを指摘した上で､「主体的・対話的で深い学び」を具体化することの重要性とその視座を総括的に提示している。 A５判　全 60 頁

著書､学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所､発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1.『「ゆる」概念からさぐる地域コミュニティ再構築への取り組み―加東市の事例をもとに―』	共著	平成 25 年 9 月	兵庫教育大学研究紀要第 43 巻 p.1～p.8	兵庫県加東市の事例をもとに、児童を中心とする新たな地域コミュニティづくりの過程について研究した論文。 共著者：宮元博章・中間玲子・有吉美咲・岡本恵太 全９頁 本人担当部分：「１.問題意識」（pp.１-2）「２.総合考察」（pp.6－8） 内容：「１.問題意識」では「平成の大合併」以後のコミュニティ作りの問題点について論述した。「２.総合考察」では「地域で子どもを育てる」ことがこれからのコミュニティづくりの柱となることを論じた。 「ゆるキャラ」事業は、その未完成さゆえに地域住民の自由な参加を促すものである。地域コミュニティ作りにおいては「わかもの」「よそもの」が参加することの重要性が認められている。つまり、同事業は多様な住民の多様な参加を可能にしたため効果的だったのである。地域における「子ども」という存在も、その未完成さゆえに、多様な参加を引き出しうることを指摘した。 コミュニティの中における学校の位置づけを考える事は、新学習指導要領の鍵概念である「社会に開かれた教育課程」とも重なり合うものである。
2.『授業がゆらぐ時,何が起こり,何が生み出されているか―「カーニバル化」と「危機」の観点から―』（修士論文）	単著	平成 26 年 3 月	兵庫教育大学	本研究は、教室談話を分析することを通して、思考力の育成に促進的に働く談話構造を探求することを目指したものである。主題としたのは、授業において、教師の意図から外れつつも一定の秩序が成立している状態である。本研究では、こうした「教師の意図から外れた場面」を授業の「ゆらぎ」として規定した。一見、こうした意図からの逸脱は、教育にとって阻害要因である。一方、こうした「ゆらぎ」をも包み込む安定した構造が、思考力の育成にとって促進的だという考え方もある。本研究は、ミハイル・バフチンの「カーニバル」概念やヴィゴツキーの「危機」概念を手がかりに、授業の「ゆらぎ」における「体験の論理」の解明を目指した。兵庫県の公立小学校において、地域における指導的な役割を担う教員の授業を分析した結果、たしかに「ゆらぎ」のある場面においても、児童の思考が活性化していることが明らかになった。ここでは、児童自身が確かに〈問題意識〉を持って授業に参加していたのである。また、教師がこれまでに提示してきた定型的な発言形式も、授業はなく、新たな秩序が発生していた。

著書､学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				例えば、１年生の「ひらがな学習」で子供たちは教師の意図とは違う転にこだわっていた。一方、この場面では、入学後１月の児童が、教師の指示を待たずに、順番に黒板の前に出て、友だちに考えを述べるという行動をしていたのである。教師は「ゆらぎ」の場面であっても、今後につながるような児童の行動や発言を促進していた。教師による吟味と支援は、たとえ自らの意図しない場面においても働き続けていたと言える。 本研究では、思考力の育成にあたって、常に長期的な「ねらい」を意識しつつ、短期的には児童の動きに柔軟に対応する教師の働きかけが必要だということを明らかにした。
３.「学校における児童の新たな行動様式はどのように成立するか―教師の意図から外れた場面の談話分析－」	単著	平成 27 年 11 月	日本教育社会学会編『教育社会学研究第 97 集』p. 67～86	「言葉による見方・考え方」の育成を促進する談話の構造を「新たな行動様式を生み出す『共演』の場」としてとらえた論考。 本研究では、小学校１年生の入学後一ヶ月後に実施された「ひらがな学習」における教室談話の分析を行っている。この「ひらがな学習」の授業において、児童は教師の書いた「ひらがな」の「まちがい」を指摘し、授業のねらいとははずれた部分にこだわっている事例に着目し、児童が新たな行動様式による学習行為を創出する過程とその価値について論じた。 教室談話を分析してみると、この教室では、教師にとって予想外の出来事をも包み込む談話構造が見られた。すなわち、教師の意図から外れているような場面において､教師と児童の間の「共演」といえる関係が成立していたのである。すなわち､児童たちが教師の「まちがい」を指摘しようとしたのは「先生の模倣」であり、教師もまたこうした「模倣」を促進する働きかけをしていた。こうした「共演」の中で、児童たちは一定の「ルール」を創り出していったのである。 これは、ヴィゴツキーが「遊び」についての研究で明らかにした、演じることによる「ルール」の成立と重なる事態である。国語教室に強制に依らない秩序を生み出すものは、教師と児童がその時々の状況を共に演じることだと言える。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４.「新学習指導要領における『言葉による見方・考え方』の三側面-小中９年間を見通す学習指導の方向性-」	共著	平成 29 年 9 月	『奈良学園大学紀要』 p. 1 ～p. 13	「言葉による見方・考え方」の育成を促進する談話構造の形成は、小中９年間はもちろん高等学校においても必要であること、さらなる事例の収集と談話の分析を通して明らかにすべき課題について指摘した。 平成 29 年に出された学習指導要領の鍵概念である「言葉による見方・考え方」の要素と構成およびその育成の筋道について述べた論文。 全 13 頁Ⅵ章構成(Ⅳ、Ⅴ、Ⅵ章を分担執筆) 共著者：伊﨑一夫・岡本恵太 本研究では「言葉による見方・考え方」を三つの側面に分類している。すなわち〈言葉と主体〉の関係に着目する「語用論的側面」、〈言葉と世界〉の関係に着目する「意味論的側面」、および〈言葉と言葉〉の関係に着目する「統辞論的側面」である。こうした三側面に基づいて新学習指導要領の指導事項を整理し、小中９年間を貫く系統性を明らかにした。 また「言葉による見方・考え方」の育成に当たっては言葉の〈効果・適切さ〉に関わる「語用論的側面」を中心に位置づけることが重要であることについて、小学校での実践をもとに考察している。 「ことわざ」(４年生)、「自分の『提言』を考えながら読もう」(６年生)等の実践事例をもとに、具体的な「めあて」や「意図」の設定が、「場面」や「語用論的側面」の認識を強め、「言葉による見方・考え方」の活用を促すことを明らかにした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.「小学校国語科における「わざ言語」を活用した思考力の育成―談話分析からのアプローチー」	単著	平成 31 年 3 月 10 日	『奈良学園大学紀要』第 10 集 p.39～p.48	本研究は「わざ言語」の観点から、思考力育成の道筋を明らかにしようとするものである。 「わざ言語」とは、子どもたちの具体的な言葉として表れた、思考力や「言葉による見方・考え方である。 事例として、物語「ゆうすげ村の小さな旅館（東書３年）の授業を取り上げた。談話の分析により、「見出し先行型発言」という特徴的な発言形式を抽出するとともに、この形式が感想の提示、問題の提示、問題の解決、教師への提案という機能を持つ「わざ言語」であることを示した。 本研究では「わざ言語」を活用した思考力育成の段階を次のようにとらえた。初期の段階では一定の話型を導入する。中期では、話型を用いつつ、目的に応じて、授業における発言形式を再構成する。そして、最終的には「わざ言語」を意識し、体系的に使う段階に至るのである。
（その他） 1.平成 22 年度　三田市立志手原小学校研究紀要	共著	平成 23 年 2 月	三田市立志手原小学校 全 76 頁	学校で取り組んできた食育の取り組みを生かして、児童の表現力・発進力を高めようとする取り組みをまとめた。B5 判 本人担当分 10p 分担「食育を通して表現力を育てる」（p.3～p.12） 内容：食育で取り組む栽培・調理などの体験を「ことば化」することで、児童の「問い」はより明確になり、調べたり表現したりする活動も活性化する。さらに表現力を高めるためには、地域の方々や保護者による評価が有効である。学校をあげて、児童が表現する場を位置づけることの大切さについて考察した。 具体的な取り組みとしては、6 年生の「これからの食生活をシナリオで提案しよう」がある。これは、自分たちの目指す食生活が実現された「くらし」をシナリオで描く活動である。児童は「栄養バランス」「伝統を生かす」などのテーマに基づいて、シナリオを書き、互いに評価し合った。シナリオを書くにあたっては、食生活に関する情報を調べ、整理する必要もある。この実践を通して児童は、食に関する正しい情報の求め方・生かし方を学ぶことの重要性を強調している。

著書､学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２．子どもの心の動きによりそうことで	単著	平成 25 年 7 月	三田市広報『伸びゆく三田』 No.147	志手原小学校における「人権の木」の実践を紹介。子どもたちの日々のつぶやきから、大人も学ぶべき「人権の芽」を探ることの重要性を指摘している。(執筆 2 ページ、総ページ 14 ページ)
３．平成 26 年度　三田市立志手原小学校研究紀要	共著	平成 26 年 11 月	三田市立志手原小学校 全 72 頁	「歯の健康教育」についての取り組みをまとめた研究冊子。 B5 判 本人担当分 6p 分担:「授業作りの基本的な考え方と筋道」(p.5～p.10) 内容：歯の健康教育における「ヘルスリテラシー」の概念について論述するとともに、この資質を高める学習のあり方を提案した。 健康教育においては、単に知識を学ぶだけでなく、具体的な行動につながる学びが重要であることや、知識と行動を結びつける資質・能力を「ヘルスリテラシー」としてとらえることの有効性を指摘している。「ヘルスリテラシー」の育成にあたっては、言語活動の導入が効果的であることを、２年生の「歯磨き日記」の継続が半ば無意識に行われてきた日々の歯磨きの新たな価値への気づきと､「これからも丈夫な歯でいたい」という意欲の高まりを保障することを検証している。
４．平成 26 年度三田市教育研究グループ　実践事例集	共著	平成 27 年 3 月	三田市教育研究グループ国語部会(三田市教育委員会委嘱) 全 48 頁	思考力を高める授業事例を市内の若い教員に向けて提案した。 A4 判 本人担当分 8p 分担:「思考力を育てる筋道」(pp.3-10) 内容：PDCA サイクルを子ども自身が意識することが「批判的思考」や「論理的思考」を育てるために有効であることを論述した。 本研究グループでは、言語活動を目的に向けて導くための資質･能力を「思考力」としてとらえている。この思考力を育てるためには、活動をとおして常に「目的に適しているか・もっといいやり方はないか」を問う必要がある。そのために、ゴールの可視化や相互評価の充実が必要である。また、単元を年間計画に位置づけ、「見通し・見取り・見直す」ことを繰り返していくことが大切になる。考えの筋道が「目に見える形になる」ワークシートの工夫や、カード操作などの具体的な活動の導入により､「見通し･見取り・見直す」学習が具現化することを強調した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
５．三田市教育研究グループ研究集録	共著	平成 27 年 3 月	三田市教育研究グループ（三田市教育委員会委嘱） 全 256 頁	三田市教育研究グループの各部会の取り組みをまとめた研究冊子。 A4 判 本人担当分４p 分担：「国語部会の取り組み」(pp.5-8) 内容：本年度の国語部会における「思考力を高める授業づくり」の取り組みおよび成果と課題について整理した。 本グループで以前から取り組んでいる、子ども自身が「PDCA サイクル」を意識する授業の具体化について、単元（授業）のはじめにしっかりとした「めあて」を見通し、さらに「めあて」に基づいた振り返りを行うことの重要性について解説した。
６．平成 27 年度三田市教育研究グループ　実践事例集	共著	平成 28 年 3 月	三田市教育研究グループ国語部会（三田市教育委員会委嘱） 全 54 頁	国語科の授業で、思考力を高める筋道について授業事例を市もとに内の若い教員に向けて提案した研究冊子。 A4 判 本人担当分 10p 分担：「授業研究入門」(pp.43-52) 内容：子どもの見取りから教材解釈のあり方、授業構想までの筋道を若い教員に向けて解説した。 まず、言語活動を「言葉を用いてその子の願いや思いを実現する過程」としてとらえ、一人ひとりがゴールを具体的にとらえることの必要性を述べた。次に子ども自らが、プランを立て、実行し、評価し、修正する過程、つまり自らの「PDCA サイクル」を意識することについて解説した。そのための手立てとして「学習内容を自分のものにする（自分化）」「思考を見える形にする（可視化）」「学びの仕組みを確立する（仕組み化）」を具体的な事例をもとに論じている。
７．平成 28 度三田市教育研究グループ　実践事例集	共著	平成 29 年 3 月	三田市教育研究グループ国語部会（三田市教育委員会委嘱） 全 48 頁	若い教師に向けて、思考力を育てる国語か授業の具体的な筋道を提案した事例集 A4 判 本人担当分 8p 分担：「思考力を育てるために」（pp35-42） 内容：コンピテンシーベイスの考え方にもとづいた、これからの国語授業を提案した。思考力の育成にあたっては、学習者自らが「つけたい力」を意識する必要がある。そのためには「活動のゴール（何が実現したいか）」「活動の意味（何ができるようになるか）」「活動の方法（どのようにすればよいか）」を学習者にとって明確にする働きかけが必要である。そのための具体的な手立てとして、他者からの評価を生かすことや、これまでの学習から「目のつけ所・やり方」を取り出し、活用することが有効である。また思考の過程について、ワークシートなどを通して目に見える形にすることも必要である。 以上の観点からグループ員の実践の意味づけを行った。

著書､学術論文等の名称	単著･共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表等」 1.教育実践の記述に表れた教師の自己認識について	―	平成 24 年 11 月	日本教育心理学会第 54 回総会ポスター発表	共同研究者：宮元博章・岡本恵太・藤原由香里 若い教師向けの教育書の記述に含まれる授業場面の談話分析を行い、教師と児童の関係性および教師の自己了解が記述に含まれることを明らかにした。
2. 偶発的･即興的に生起する学びの探究ー明日の 教育をパフォームする実験的発表ー	―	平成 26 年 11 月	日本教育心理学会第 56 回総会自主企画シンポジウム	共同研究者：藤原由香里・今井裕之・宮元博章･三野宮春子･長谷川和代･ 岡本恵太・大島秀子 内容：はじめから教育内容を固定してしまうのではなく、即興的対話的に展開する授業の可能性について研究発表した。アメリカの心理学者ルイス・ホルツマンの研究をもとに、教育における偶発性や即興生をどう生かすかについて、英語教育、心理学、国語教育の立場から検討した。 国語教育の視点から即興的対話的に展開する授業の可能性に関する提案発表を担当した。１年生の「ひらがな学習」において、教師の意図から外れた場面で、児童の新たな行動様式が生じた事例から､「ルールの生成」について述べた。１年生の児童は、学校における行動様式を獲得するにあたって、教師の模倣を積極的に行っている。こうした模倣に対して教師が」「共演」することによって児童の創造性が引き出されることを提案した。

教　育　研　究　業　績　書

令和　2年　3月　31日

氏名　荻布　優子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
発達障害、障害児心理学	発達性読み書き障害の背景要因・指導、読み書き能力と語彙や学力の関係、社会性および言語発達の関係

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 ・被支援者の立場にたつ演習形式の授業実践	平成31年4月～令和1年8月	・宮城教育大学教育学部の非常勤講師として担当した小児保健において、保育士や幼稚園教諭を目指す学生に対して心理検査を受ける立場を経験させ保護者や幼児の立場について具体的に想像させるための演習形式の授業を行った。 ・仙台医健・こども＆スポーツ専門学校こどもの保育学科の非常勤講師として担当した教育課程論において、
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価	平成30年5月	・東北大学教育ネットワークセンターコンサルテーション事業における学習障害児支援事業において、発達障害児へ知能検査(WISC-4)を実施する大学院生に対し、検査場面に同席し検査の実施方法の指導演習を行った。同時に検査場面での行動観察の視点についても指導した。具体的な指導に満足度が高かった。
4　実務の経験を有する者についての特記 特記事項なし		
5　その他		
・仙台医健・スポーツ＆こども専門学校における教育実績	平成31年4月～令和1年8月	・教育課程論を非常勤講師として担当。 こども保育学科1年次を対象に、幼児教育の教育課程や子どものアセスメント、障害児の保育についての講義を行った。
・東北文化学園大学における教育実績	平成31年4月～令和1年8月	・神経心理学を非常勤講師として担当（オムニバス）。 医療福祉学部保健福祉学科3年次を対象に、発達障害に関わる神経心理学の概論について講義を行った。
・宮城教育大学における教育実績	平成31年4月～令和1年8月	・障害児保育を非常勤講師として担当（オムニバス）。 教育学部初等教育教員養成課程幼児教育コース2年次を対象に、各種障害についての概説およびその保育について講義をした。 ・小児保健を非常勤講師として担当（オムニバス）。 教育学部初等教育教員養成課程幼児教育コース2年次を対象に、各自治体で実施される乳幼児検診や精密検診で行われる心理検査についての講義を行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許 博士（教育学）	令和2年3月	東北大学　教博第212号 題目：児童期における漢字書字正確性に関する神経心理学的検討―学力や視覚情報処理能力との関係性の観点から―
教員免許	平成24年3月 平成24年3月 平成24年3月	小学校教諭一種免許状（平二三小一第十四号） 幼稚園教諭一種免許状（平二三幼一第六号） 特別支援学校教諭一種免許状（平二三特支一第六号）

公認心理師	平成 31 年 2 月	第 19263 号
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 ・横浜市西部地域療育センターにおいて	平成 26 年 4 月～平成 31 年 3 月 平成 27 年 9 月 平成 27 年 12 月，平成 28 年 3 月，平成 28 年 10 月，平成 29 年 6 月，平成 30 年 9 月 平成 28 年 7 月(2 回)，平成 29 年 5 月(2 回)． 平成 28 年 6 月 平成 27 年 11 月	・心理士として幼児及び学齢児の心理評価およびフィードバックを年間 200 件程度行い、同時に保護者に対して心理教育に従事。幼稚園、保育園、小学校とのコンサルテーションを実施した。 ・保護者向け講座講師。 ダウン症や脳性まひなどの病理型の知的障害を伴う児の保護者を対象に、障害種別の心理発達の特徴と心理評価について講義を行った。 発達障害児の保護者向けに、幼児期の発達段階および自閉スペクトラム症や注意欠如多動症の認知特性をテーマにした講義を行った。 知的障害児の保護者を対象に、知的発達と心理検査（心理査定方法）のについて講義を行った。 ・心理士対象講座講師 幼児期の認知発達・心理評価方法（田中ビネー知能検査及び新版 K 式発達検査 2001）について講義を行った。 新版 K 式発達検査 2001 の歴史・検査の構成と実施方法、評価される能力・近年の研究動向についての講義を行った。
4　その他 第 46 回コミュニケーション障害学会学術講演会準備委員	平成 31 年 2 月～現在に至る	・令和 2 年 5 月 30-31 日に開催（於東北大学）予定の第 46 回コミュニケーション障害学会学術講演会の準備委員を務める。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1. CEAKS 研究叢書「交響するアジア」③社会的弱者との真の共生を目指して―医療・福祉・教育の連携と提言―	共	平成 25 年 3 月	富山大学『東アジア「共生」学創成の学際的融合研究』	資料編にて「誤信念課題の通過に関与する言語機能およびその領域に関する研究」を執筆。自閉スペクトラム症（ASD）の障害特性から通過が遅れるとされている心の理論課題（TOM）は時折 ASD のアセスメントの一つとして用いられているが、TOM 通過と言語機能との関係を検討し TOM 通過には統語機能の獲得には共通の要因が存在することを示唆した。 著者：荻布優子、川﨑聡大
（学術論文） 1. 学習到達度に影響を及ぼす学習モダリティーや言語ドメインの検討：学力を目的変数とし学習モダリティーを説明変数として行った重回帰分析の結果から	共	平成24年5月	とやま発達福祉学年報3，p21-24	小学生243名を対象に、学力に対して書字力・語彙力・視写力・注意・非言語性知能が及ぼす影響について検討した。発達障害のうち特にLD児に多い書くことの苦手さや、黒板を写し書きすることとの苦手さが学力を低下させる危険性が高いことが示された。 著者：川崎聡大、奥村智人、荻布優子，北村満

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.流暢性の向上を目指した発達性 dyslexia 児一例のひらがな書字指導経過（査読あり）	共	平成 24 年 11 月	言語聴覚研究 9（3），p150-158	ひらがな書字の正確性に比して流暢性の低下を呈した LD 児に対し、認知神経心理学評価を行い、書字困難の背景を考慮した書字指導を実施した。その結果、ひらがな書字の流暢性は改善した。 著者：水野奈緒美、川崎聡大、後藤多可志、荻布優子、他
3.学齢期における遠見視写力の発達過程および語彙力・書字正確性への関与（査読あり）	共	平成 26 年 4 月	コミュニケーション障害学 31(1)，p1-7	LD 児が苦手とする「黒板を写す力＝遠見視写力」の定量的な評価方法を開発し、基礎的なデータを収集した。視写力は経年的に発達することが明らかとなった。また一般小学生では視写力の低下により、書字正確性と語彙力の低下が引き起こされる。知的障害児や肢体不自由児の学習場面においても、板書量の調整が必要であることが示唆された。 著者：北村満、川崎聡大、荻布優子
4. 基礎的学習スキルと学力の関連―学力に影響を及ぼす因子の検討：第一報―（査読あり）	共	平成 29 年 3 月	教育情報研究 32(3)，p41-46	学習障害の支援を構築するため、既存の評価ツール読み書きの困難さの検出力を明らかにし、学力との関係を検討した。漢字の書字正確性の低下よりも、ひらがな音読流暢性の低下が学力低下のリスク因子となりうることが明らかとなった。 著者：荻布優子、川﨑聡大
5. 発達障害の病理的背景―限局性学習症の診断評価の観点から―	共	平成 30 年 9 月	奈良学園大学紀要 9,p23-29	教育界で定義される LD の大部分をしめる限局性学習症（SLD）の医学的な診断基準の変遷と、その生理・病理的背景について概説した。いわゆる「LD」と総括されていた症候が DSM-5 において SLD として概念が整理された。SLD の障害背景にある音韻情報処理・視覚情報処理・音韻の自動化能力と本邦で用いられているそれぞれの評価方法について論じた。 著者：荻布優子、川崎聡大
6. 自閉症スペクトラム障害における感覚過敏の生理・病理学的背景-聴覚情報処理に着目して-	共	平成 30 年 9 月	奈良学園大学紀要 9,p59-63	DSM-5 定義の改定とともに自閉スペクトラム症の診断基準に明記された感覚過敏について、特に最も頻度の高い聴覚過敏をとりあげてレビューした。またその機序を生理学・病理学的観点から検討をしたところ、症候の程度や予後は知的障害の程度の影響を受けることを示唆した。聴覚過敏の機所は一様ではなく、複数の要因に起因し、環境要因をはじめ、多くの要因がその後の経過に交絡している。過敏に対する効果的な対処方法を検討する際には背景要因を見極め、機序に応じた対処が必要となる。 著者：川﨑聡大、荻布優子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.特に漢字読み書きに困難さを示したボーダーラインの知的発達の児に対する漢字読み指導―漢字の音読力と語彙力の関係に注目して―	共	平成 30 年 12 月	東北大学大学院教育学研究科研究年報 67(1),p135-143	知的発達がボーダーラインで読み書き困難を呈した児に対して漢字の読み指導を行った。認知神経心理学的アセスメントをもとに限局性学習症とも共通する障害機序を想定し、教育アセスメントにより語彙力に配慮した目標設定を行った。その結果、漢字の音読が可能となり、合わせて語彙力が向上した。対象児の知的発達水準と、障害機序に応じた指導目標の設定により、効率的に指導効果が得られたと推測される。 著者：荻布優子、川﨑聡大
8.　肢体不自由児における対象の変遷と教育対応上の課題（１）―脳性麻痺に注目して―	共	平成 31 年 1 月	奈良学園大学ジャーナル「人間教育」2(1),p11-15	学習指導要領において肢体不自由児への記載の変遷と肢体不自由の一因となる脳性麻痺について整理した。脳性麻痺の原因として多く指摘される脳室周辺白質軟化症をはじめ，認知上の問題が指摘されて久しい。しかし個々人の状態像や教育上のニーズの把握は簡単ではなく、個のニーズに応じた教育のための障壁となっていることが示唆された。 著者：松崎泰、中島栄之助、荻布優子、川崎聡大
9.　発達初期の運動機能の障害が認知の発達に及ぼす影響	単	平成 31 年 1 月	奈良学園大学紀要 10,p49-54	肢体不自由教育の対象になる障害及び疾病の歴史的変遷を概説した。現在は、脳性麻痺だけではなく筋ジストロフィーや医学の進歩により低出生体重児や医療的ケア児が増加し、状態象が多岐にわたる。肢体不自由児は、運動発達に伴って認知発達にも遅れが生じたり、乖離が生じることがある。また情緒面や親子関係、コミュニケーションの発達も特有の経過をたどる。これらの多角的な視点から、肢体不自由児の心理アセスメント及び支援は計画的に行われる必要があることを述べた。
10.　根拠に基づいたディスレクシアの実態理解：言語障害臨床の到達点と課題	共	令和 1 年 6 月	東北大学大学院教育学研究科研究年報 67(2),p63-75	ディスレクシアの実態と課題について①疫学②障害機序③評価方法について論じると共に，発達心理学的観点からディスレクシアの評価について再考し，診断評価の中核である神経心理学的検査の課題と言語障害臨床の領域で看過されてきた第一種ならびに第二種の過誤，支援や介入のための教育評価の現状と課題についても論じた。 著者：川﨑聡大、松崎泰、荻布優子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.児童期における Rey-Osterrieth Complex Figure Test の発達経過とその尺度構成の検討．バイオメディカル・ファジィ・システム学会和文誌（査読あり）	共	令和１年５月	バイオメディカル・ファジィ・システム学会和文誌 21(1)，69-77 頁	神経心理学的検査の一つであり近年、発達障害への臨床応用が進む Ray-Osterrieth Complex Figure Test（ROCFT）の妥当性検証と児童期の特徴や発達経過を明らかにした。横断的ではあるがいずれの条件においても ROCFT 得点は学齢に相応して上昇する傾向を認めた。ただし単純な線形回帰ではなく 1〜3、5〜6 年にかけての得点上昇が顕著であることが明らかとなり、また 5〜6 年生では 3 分後再生に比して 30 分後再生の得点が有意に高くレミニセンス効果を認めたことから、4〜5 年の変化は特に重要であると考えられた。主成分分析の結果、採用された項目での ROCFT 得点の一次元構造が確認され、特に 3 分後再生と 30 分後再生で採用された項目は全く同一であった。改善を加えた上での ROCFT 総得点は児童期の視覚情報処理過程の総合指標としての妥当性を有していると判断した。 著者：荻布優子、川崎聡大、奥村智人、中西誠
12. 児童期における Rey-Osterrieth Complex Figure Test 成績と書字正確性の関係に関する探索的研究	共	令和１年９月	奈良学園大学紀要 11,p33-47	児童期における Rey-Osterrieth Complex Figure Test（ROCFT）と書字正確性との関係を探索的に広く検討した。視覚情報処理過程と書字正確性の間には一定の関与が示唆された。ROCFT 成績から書字正確性を十分に予測することは難しかったが、3 年生および 5 年生では ROCFT の低下の有無が書字正確性の低下に関与することが明らかとなった。本研究の結果は、発達性読み書き障害の指導や背景要因を探る事例報告による知見を支持するものである。ただし ROCFT の低下は書字低下の絶対条件ではなく、同様に書字正確性の低下した児童が必ずしも ROCFT にも低下を認めるとも限らない。書字正確性の指標の信頼性および妥当性の検証が必要であり、そのうえでの発達心理学的観点から書字正確性と視覚情報処理過程の検討が必要であると考えらえた。 著者：荻布優子，川崎聡大

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. 児童を対象とした漢字読み書き正確性に関する新たな評価指標作成の試み	共	令和 1 年 12 月	東北大学大学院教育学研究科研究年報 68(1),p205-217	児童の読み書き正確性に関する課題を新規作成すること，及び新規課題と学力との関係を検討することの 2 点を目的とした。学年配当を統制した 30 単語で構成された課題を読み書きそれぞれで作成し 1 ～ 6 年生 1869 名を対象に実施した。2 ～ 6 年生 137 名については新規課題と学力（NRT 国語 ・ 算数）の関係を検討した。1869 名に対する課題成績の主成分分析の結果，読み課題は学年により 1 ～ 3 成分に収束し，学年ごとに読み正確性の評価の観点は異なる可能性が示された。書き課題は 1 成分に収束し，今回作成した課題を書き正確性の指標として用いることは妥当と考えられた。学力との関係について NRT 各課題を従属変数とした場合，低学年では読み課題・書き課題の双方が独立変数として有効であり，高学年では書き課題が独立変数として有効であった。学力に対する読み書き能力の影響は，学年進行に伴って変化する可能性が示唆された。 著者；荻布優子、川崎聡大、松﨑泰、奥村智人
（その他） 報告書 1 コミュニケーションスキルに及ぼす統語指導の意義　統語機能が TOM や質問応答関係検査結果に及ぼす影響	共	平成 23 年 12 月	コミュニケーション障害学 28(3)，p216	的障害を伴う自閉症児を対象に統語指導を行った。その結果、心の理論課題や質問応答関係検査の成績が改善し、コミュニケーションスキルが向上した。 著者：川崎聡大、荻布優子、菓子井佐江子、北村満、後藤多可士
2 学習障害検出におけるひらがな読み流暢性課題の意義　正確性に依存した読み書き困難検出の検証	共	平成 24 年 12 月	コミュニケーション障害学 29(3)，p224	出版されおり誰でも用いることが可能で、LD 児の検出に用いられている読み流暢性と書き正確性の検査を小学生 322 名に実施した。LD 児は書字正確を用いて検出することがすることが主流であるが、読み流暢検査が学習障害の傾向を検出するうえで最も有効である。従来「書き障害」とされた字の 40%にも読み流暢性の低下を認めた。しかし読み流暢性の発達は環境因子の影響を反映する可能性が高く、現行の基準値は再検討が必要と考えられた。 著者：川崎聡大、奥村智人、荻布優子、石野絵美子、若宮英司
3 遠見視写力が学習到達度に及ぼす影響　学齢期における縦断研究	共	平成 25 年 12 月	コミュニケーション障害学 30(3)，204	視写行為は LD の評価の指標の一つである。新たに幾何図形を用いた集団式簡易視写検査を作成し、小学生 243 名に実施した。学齢期を通じた遠見視写の発達経過を明らかにした。遠見視写＝黒板を写す力と学力は密接に関係することが示唆された。著者：北村満、川崎聡大、荻布優子、奥村智人

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4 漢字単語音読指導経過と相応して語彙力に伸びを認めた発達性読み書き障害児 1 例	共	平成 25 年 12 月	コミュニケーション障害学 30(3)，p188	認知神経心理学的アセスメントをもとに、LD 児に対して漢字の読み指導を行った。その結果、漢字の音読が可能となり、合わせて語彙力の向上を認めた。 著者：荻布優子、川崎聡大、北村満
5 読み書きの正確性、流暢性、視覚性能力や音韻処理能力が学習到達度に及ぼす影響	共	平成 25 年 12 月	コミュニケーション障害学 30(3)，p204	要素的な認知機能・語彙力・書字正確性・音読流暢性といった学習スキルが①その年度の学力②１年後の学力にどのように影響を与えているのかを定量的に検討した。その結果、読み流暢性がその年の学力を、書字正確性がその年と一年後の学力双方を説明した。また、学校現場での「見て、書いて、覚える」という学習スタイルに必要な認知能力が学力に反映されていた。つまり「見て、書いて、覚える」学習スタイルが苦手な LD 児は学力低下を引き起こす可能性が示された。 著者：川崎聡大、奥村智人、荻布優子、北村満、若宮英司
6 児童の Rey 複雑図形テストの尺度構成の検討と書字との関連　主成分分析結果に基づいた新たな採点法の検討	共	平成 26 年 12 月	コミュニケーション障害学 31(3)，p193	LD 児の読み書きの苦手さの背景要因として、視覚情報処理過程の障害が想定されている。視覚情報処理能力を簡便に評価することが可能であり、広く臨床応用されている Rey 複雑図形テストの内容的妥当性と書字正確性との関係を検討した。また主成分分析を行い、Rey 複雑図形テストのより簡便に実施可能な採点方法を提案した 著者：荻布優子、川崎聡大
7 社会的判断が求められるコミュニケーション場面において言語機能の果たす役割：心の理論課題を用いて	共	平成 27 年 12 月	コミュニケーション障害学 32(3)，p253	自閉症児で通過が遅れるとされる心の理論課題（TOM）について、小学生を対象とした場合の TOM 通過に対する言語機能が関与するモデルを作成し、共分散分析を行った。その結果モデルが成立し、非 ASD においても TOM 通過に一定以上の言語能力が必要であることが明らかになった。また複数存在する TOM 課題ごとによっても、関与する言語機能に違いがあることが明らかとなった。 著者：荻布優子、川崎聡大
8 全ての児童生徒にとって自己実現に役立ち主体的に楽しむ「読み書き」や「学習」とは　―学習困難への関りを再考する―	共	平成 28 年 2 月	特殊教育学研究 53(5)，p451	キャリア教育の観点に立ち本人が実感できる「幸せ」を目標とした場合に個別支援がどのように寄与できるか、検討した。特性に応じた学習指導や合理的配慮は欠かすことはできない。また障害種を問わず小学生の読み能力と学力の向上は、子供たちの将来の選択肢を広げるための一つの重要な課題であることが改めて示唆された。 著者：川崎聡大、加藤哲則、荻布優子、奥村智人、中島栄之介，樋口一宗

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9 全ての児童生徒にとって自己実現に役立ち主体的に楽しむ「読み書き」や「学習」とは②　「学習不振」を引き起こす様々な要因から	共	平成 29 年 2 月	特殊教育学研究 54(5)，p410	教育や療育の枠組みの中での学習障害の支援、合理的配慮の在り方を検討した。支援方針は、発達心理学の観点にたち未来への人生設計をもとにしてトップダウンで考えられる必要がある。また個別の支援方法の決定や困難さの掘り下げは集団を形成する個・個を取り巻く環境に対する評価が同じ重みづけのなかで行われることが望ましいと考えられる。 著者：川崎聡大、加藤哲則、荻布優子、奥村智人、中島栄之介、多田智絵、樋口一宗
10 全ての児童生徒にとって自己実現に役立ち主体的に楽しむ「読み書き」や「学習」とは③　―読み書き困難と評価・学習意欲やストレスの関係―	共	平成 30 年 2 月	特殊教育学研究 55（5），p330-331	学齢期だけではなく大人に至るまでの人生の様々なステージの中で、生活や学習を直接良い方向に変えることができる読み書き支援の方法とは何かを検討した。とくに学習レベルが高い高校生や大学生は、読み書き困難があってもそれを何らかの方略で自分で乗り越えてきていると考えられる。青年期においては、読み書きそれ自体の能力と、読み書きに関わる不安傾向・苦手意識を指標とした評価の可能性が示された。また汎用性のある対応のために心理学的な知見をさらに積み重ねることの重要性が示唆された。 著者：川崎聡大、加藤哲則、荻布優子、松崎泰、鈴木真人、高橋知音、樋口一宗

教　育　研　究　業　績　書

令和　2 年 3 月　31 日

氏名　　オチャンテ・カルロス

研　究　分　野	研究内容のキーワード
人文社会学，外国語教育	外国語教育，第二言語習得，バイリンガル教育，異文化教育

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
(1) ICT を生かした「英会話、英語Ⅰ、英語 II、時事英語」の実践	平成 23 年 4 月～29 年 3	主に TPR 指導法や ICT 教育（電子黒板、タブレット）を生かして英語への関心を高めた。留学生と日本人の共通科目のため混在クラスで、多国籍の特性を生かす活動を実践した。(環太平洋大学・英会話、英語Ⅰ 英語 II、時事英語)
(2) 問題・課題解決型授業の展開「Introduction to Digital Media (英語), 時事英語、異文化コミュニケーション論」	平成 23 年 4 月～29 年 3 月	英語をツール用いて与えられた課題（プロジェクト、議論）学生同士で取り組む授業の展開。学生同士で積極的に英語を使って、プレゼンテーション能力や議論（ディスカッション）能力を身に着く授業を目指した。
(3) 振り返りを伴った小テストの実施「英会話、英語Ⅰ、英語Ⅱ、」	平成 23 年 4 月～29 年 3 月	学習強化を目指すため、「ウォーミングアップ」活動として小テストを用いた。語学においての習得したボキャブラリーや文法の確認を行い、教科のこまめな評価、学生の成績はもとより、振り返りで意欲の向上につながった。
(4) e ラーニングを活かした授業の展開（時事英語）	平成 25 年 4 月～29 年 3 月	・「※Google for Education」を用いて授業内の教材の配布、課題の作成、出題や回収を行った。グーグルアプリケーションの連帯性を活用し学生と教材やデータを共有した。 ・「※Socrative」というアプリケーションを使い、授業でオンラインクイズやオンラインアンケートを取った。学生が自分のスマートフォンを使用し授業のまとめをオンラインで共有し参加型学習が実践され、よりインタラクティブな学習環境が可能になった。 （環太平洋大学・時事英語、異文化コミュニケーション論 ） ※Google for Education https://edu.google.com/intl/ja/?modal_active=none ※Socrative　https://www.socrative.com/
(5) 4 技能を活かした小学校英語強化クラス編成	平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月まで	奈良学園大学人間教育学部の小学校教職課程対象学生へ英語 4 技能を活かしたエクステンションクラス担当。次期学習指導要領で必要とされる主体的な学びや会話中心活動をもとに小学校英語科指導授業を展開。
(6) 小学校外国語指導の主体的・対話的授業づくり	令和元年 4 月～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部の小学校教職課程対象学生へ英語運用力としてクラスルームイングリッシュやフォニックスなどを扱い,「聞くこと・話すこと〈やり取り・発表〉・読むこと・書くこと」に関する知識を指導し，理論的，実践的なアウトプットができるように配慮した主体的・対話的な授業を展開。
(7)　小学校外国語活動の指導法における授業導入の工夫	令和元年 9 月～現在に至る	小学校英語科の役割と意義、学習指導要領で求められている内容・発音・リズム・クラスルームイングリッシュなどの英語力を向上させ、指導案作成，授業の導入部分で意欲付をするアイデアを身につける。
(8) 小学校外国語活動の指導法における授業導入の工夫	令和元年 9 月～現在に至る	小学校英語科の役割と意義、学習指導要領で求められている内容・発音・リズム・クラスルームイングリッシュなどの英語力を向上させ、指導案作成，授業の導入部分で意欲付をするアイデアを身につける。

2　作成した教科書・教材 （1）Google Apps for Education での教材作成	平成 26 年 4 月～29 年 3 月	「Google for education」を用いて、インターネットでクラスマネジメント（課題配布・提出や評価など）を行った。授業のオンラインアンケートを行い授業のフィードバックを図った。 ・教材や宿題の文書作成に「Google Docs」用いた。 ・授業で扱った映像などのデータを「Google Classroom」で共有することによって復習や欠席者の学習に役立った。 ・授業内容のリフレクションペーパーなどのレポートやアンケート作成に「Google Forms」を用いた。 ・授業の内容を「Google Slides」で表示し、データを「Google Classroom」で共有した。 （環太平洋大学次世代教育学部国際教育学科「時事英語」、「異文化コミュニケーション論」、「国際教育基礎」、で使用）
3　教育上の能力に関する大学等の評価 （1）環太平洋大学学生授業評価アンケート「英会話Ⅰ．Ⅱ」	平成 28 年 7 月	「総合的に授業は満足でき、受講を後輩に進めたい」の項目では 90%以上の肯定的な評価を得た。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1「伊賀の方言講座」第 1 回講	平成 24 年 10 月	「様々な人々が暮らす国際都市伊賀市」のテーマで講演した。ニューカマーの言語教育（英語と日本語）と異文化教育を話した。
2「多文化共生推進セミナー」研修会講師	平成 26 年 3 月	日本在住外国人の実態にふれ、英語及び日本語獲得の現状を含め、多文化共生においての課題をまとめて話した。（伊賀市主催）
3「岡山市立香和中学校人権教育研修」講演	平成 27 年 9 月 25 日	テーマは「日本人とは何かを問いかけ自己文化と海外の文化を見つめなおす」
4「マイノリティとキャリア」講演	平成 28 年 12 月 22 日	日本における在日外国人の進学問題や就職・進路選択の課題についての講演。 （京都外国語大学・ピカ☆イチ Project 採択団体主催）
5「そうなん？！世界のいろんな物語」言語活動講師	平成 29 年 8 月 27 日	小学生３０名を対象に日本語・英語でペルー民族に関連した物語の絵本の読み聞かせを行いました。
6「SIFA Multi-cultural Festival」講師	平成 30 年 6 月 24 日	小学生を対象に日本語・英語によるペルー民族紹介を担当。 主催：（公益財団法人吹田市国際交流協会（sifa）
7「地球村ぷらすペルー」講師	平成 30 年 7 月 8 日	国際理解の一環として吹田市国際交流協会にて、ペルーの文化と日系の歴史について講演を実施。 主催：（公益財団法人吹田市国際交流協会（sifa））
8　「日本で働く南米の人々の思い」講師	平成 30 年 7 月 26 日	日本における外国人労働者の実態と子どもの教育についての講演。奈良県第５７回県外教学習会。
9　「SIFA 子ども国際理解プログラム」	平成 30 年 12 月 23 日	小学校生を対象に外国語活動を使った国際理解活動の実施。公益財団法人吹田市国際交流協会（SIFA）。
10　「外国人児童生徒教育講座」講師	平成 30 年 12 月 25 日	外国にルーツのある子どもの教育と言語習得の実態についての講演。三重県伊賀市教育研究センター。
11　「外国人児童母語継承支援活動」講師	平成 31 年 1 月 26 日	外国にルーツのある児童の母語継承を支援する言語活動の講師。（公財）箕面市国際交流協会（MAFGA）
5　その他 なし		

職務上の実績に関する事項		
事項	年　月	概要
1　資格，免許 (1) 中学校教諭一種免許状 (2) 高等学校教諭一種免許状 (3) 中学校教諭一種免許状 (4) 高等学校教諭一種免許状	 平成 18 年 3 月 平成 18 年 3 月 平成 20 年 3 月 平成 20 年 3 月	 外国語（イスパニア語）京都府教育委員会（平 17 中一第 1275 号） 外国語（イスパニア語）京都府教育委員会（平 17 高一第 1987 号） 外国語（英語）三重県教育委員会（平 19 中一第 323 号） 外国語（英語）三重県教育委員会（平 19 高一第 583 号）
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) 大学オープンキャンパスの英語公開授業	平成 25 年～27 年	環太平洋大学のオープンキャンパスにて、「英語コミュニケーション」についての公開授業を行った。
(2) 環太平洋大学開催の外国語活動イベント「イングリッシュ・キッズ」の講師	平成 26 年～29 年(年 2 回)	幼児・小学校生対象の英語を用いた体を動かすゲームや歌の講師。楽しく活動しつつ、英語に親しみ発音や単語や語順に慣れ親しむゲームを紹介した。
(3) 留学生による初等・中等学校支援事業への参加：支援モデルの構築（学術研究助成金事業、挑戦的萌芽研究）	平成 26 年～29 年 3 月	公立小中学校における言語支援活動（英語）を担当。環太平洋大学に留学中のアジア諸国の学生を地域（岡山県の岡山市、赤岩市、瀬戸内市）の公立学校で英語を使った言語支援の活動や国際理解支援の活動を行った。研究代表者：江原智子、共同研究者 井上聡、アンソニー・ウォルシュ、長野真澄、小嶋隆宏、オチャンテ・カルロス
(4) 環太平洋大学開催の英語村（イングリッシュ・キャンプ）イベントの指導	平成 26 年～29 年(年 2 回)	児童・生徒を対象に英語活動（ゲームやワークショップ）の講師を務めた。学生スタッフの研修企画及び英語活動の指導を担当。
(5) キャンパス内のイングリッシュ・ゾンの設営及び運営	平成 26 年 4 月～29 年 3 月	オール・イングリッシュで学生同士をスタッフが交流できる、英語を活かせる空間・場の設営、運営を担当。(環太平洋大学)
(6) 環太平洋大学 ICT 研修会	平成 28 年 7 月	学内における英語教育指導方法と Google apps for education を活用する研修を担当。(語学講師対象)
4　その他 (1) 国際交流センター員	平成 23 年～4 月～29 年 3 月	学内の国際交流イベント企画、海外研修、留学学生の事前研修担当。TOEIC テスト監督。
(2) 英語スピーチコンテスト審査員	平成 24 年 2 月	大学で、高校生対象の英語スピーチコンテストを行い、その審査員を担当して、受賞者を決定し助言を行った。
(3) 教職課程委員会員	平成 24 年 4 月～26 年 3 月	英語免許取得学生の介護等体験や教育実習への事前説明担当、教育実習事前事後指導や実習学校訪問の企画を行う。
(4) 学術研究支援委員会における英語チェック修正	平成 25 年 4 月～29 年 3 月	大学紀要における論文の英語タイトル、概要の英語チェックを担当し、修正を指導した。
(5) FD 委員会員	平成 27 年 4 月～28 年 3 月	学内の FD では特に英語科指導授業を公開して研修を行った。
(6) 大学 HP の英語版の校正。	平成 27 年 9 月	大学の英語版ホームページのチェックと校正 (http://www.ipu-japan.ac.jp/global/spanish/index.html)

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行年 月	出版社又は発行雑誌 等の名称	概　要
1 岡山県におけるニューカマーの子どもの教育実態－総社市の調査を元に－	単著	平成 24 年 3 月	環太平洋大学紀要 2013 年第 7 号 pp.205-211	岡山県のニューカマー数が著しい総社市を調査の対象にし、小学校と中学校に通う日系のブラジル人やペルー人の教育実態を調べた。調査では日本語の習得問題が存在し、日本語力が十分に身についていない子供が少なくないことが分かった。
2 外国語活動による小学生のコミュニケーションに対する動機づけの変化	共著	平成 24 年 3 月	環太平洋大学紀要第 6 号（pp183–190）	小学生を対象に異文化活動を通した外国語活動を実施した内容。コミュニケーションに対する動機づけを高める英語活動の内容と指導方法について論じた。 共著者：川崎由花、オチャンテ・カルロス 担当部分：実践的な異文化体験は小学校外国語活動においてどのような役割を果たすのかを量的調査を得て、分析し、執筆　pp185－188
3 外国人高校生を応援する仕組みづくりへの挑戦	共著	平成 25 年 2 月	ボランティア学研究 Vol.14 （12 頁 （pp:45～56）	本論は外国にルーツをもつ若者が設立した NPO の活動実践 から後輩を応援することの意義を考察しながら、同じ境遇で育った先輩が後輩を応援する仕組みづくりのあり方を提案した。未だ外国人が置かれた教育環境が改善されず進学や進路で悩む外国人高校生が多い現状において、後輩との対話の場や難を乗り越える数々のヒントを先輩として提供した。 著者：渡辺 マルセロ、オチャンテ 村井 ロサメルセデス、オチャンテ 村井 カルロス、小島 祥美 2014
4 英語課外クラスにおける活動事例報告 ― EFL 環境において英語学習への気づきを高める試み ―	共著	平成 26 年 3 月	環太平洋大学研究紀要　第　8　号（pp.203-210）	TOEIC の英語内容を分析し、効果的な対策指導法を論じた。英語多読教材や ICT を用いて効率化と向上を図った実践的な研究を提案。英語科の課外活動において効果があり、ICT 活用と英語科の内容と ICT 活用を関連付けて論じた。 共著者：オチャンテ・カルロス、小嶋隆宏、江原智子、 担当部分：英語指導内容に、ICT 教育を活かした事例を考察し、どのような学習内容が成果として出現したかを論じ執筆。pp208－210
5 ESL クラスにおける T.A.プログラム導入の必要性―環太平洋大学の調査を基に―	共著	平成 26 年 3 月	環太平洋大学紀要第 8 号（pp：193-200）	ESL（第二言語としての英語）科目で T.A.を活用し、会話中心の英語内容の効率化及び英語力向上との関連を調査。量的調査において T.A.の役割が授業内容の円滑な理解につながることが見られた。 共著者：オチャンテ・カルロス、アンソニー・ウォルシュ 担当部分：第二言語としての英語指導にティーチャー補助者（T.A.）が英語学習者にどのような支援が可能であり、学習者からの内容的アプローチについても論じ執筆。pp194－198

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行年 月	出版社又は発行雑誌 等の名称	概　要
6 ESL クラスにおける E-ラーニングの取り組みに関する報告書 ― 環太平洋大学でウェブ 2.0 導入の取り組み―を基に ―	共著	平成 27 年 3 月	環太平洋大学研究紀要　第　9　号（pp.207-213）	ICT・メディアリテラシーの導入実践例を分析。「Google for Education」を活用しメディアリテラシーの向上と英語実践内容として文書作成や課題発表をデジタルな方法で行った。英語をツールとして情報リテラシー指導を行うとクロスカリキュラムな効果が見られた。 共著者：オチャンテ・カルロス、グジョン・ルック 担当部分：第二言語としての英語においてメディアリテラシーを扱った英語活動の実践例をあげ、どのような学習効果が得られるかについて執筆。pp207－209
7 言語学習におけるラーニング･スペースの重要性 －日本と香港の事例を基に－	共著	平成 27 年 3 月	環太平洋大学紀要第 9 号（pp.135-140）	英語の 4 領域すべてにおける効果的な学修への ICT・メディアリテラシーの導入実践例を日本とアジアで比較分析した。「Google for Education」を活用した英語学習において主体的な学びが実践できるラーニング・スペースの重要性を考察した。 共著者：オチャンテ・カルロス、グジョン・ルック 担当部分：英語における主体的な学びにおけるラーニングスペースの役割について、具体例を挙げながら指導と効果について執筆。pp135－137
8 留学生による学校支援ボランティアの取り組み ― 小学校における国際交流と言語少数派児童に対する学習支援 ―	共著	平成 30 年 3 月	環太平洋大紀要第 12 号（301 - 306）	留学生に学校支援ボランティアへの参加を促し，留学生が地域社会と関わる機会の拡大を図っている。その主な活動内容は，小学校における国際交流活動と，言語少数派児童に対する学習支援であり，活動目的は，（1）留学生が自らの持つ知識や能力を活かして地域社会に貢献すること，（2）留学生自身の成長の機会とすること，の 2 点である。活動においては，大学が窓口となって，地域の教育委員会及び各学校と，留学生を繋ぐ役割を果たすとともに，留学生が円滑に活動できるように後方からの支援を行った。 共著者：長野 真澄、江原 智子、ウォルシュ アンソニー 担当部分：小学校における国際交流活動について考察を執筆。pp302-303
9 公立学校における英語活動と異文化交流の取り組み	共著	平成 30 年 6 月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル第 1 巻 第 4 号（pp.105-112）	中学校の教科英語に大学の留学生が言語支援活動を行い、動機づけの変化を調べた研究。英語力が高いアジアの留学生は、自国の文化を生かした活動を取り入れることで、中学生に英語を通した異文化理解が実現させた。 共著者：オチャンテ・カルロス、アンソニー・ウォルシュ 担当部分： 言語支援の公立中学校の対象英語クラスに指導法と評価についてのアンケート調査を行い、その英語レベル情報の回収、分析と考察を執筆。pp108-pp111

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行年月	出版社又は発行雑誌等の名称	概　要
10 実践的な英語を扱うカリキュラムへの取り組み　－大学生のためのデジタル・メデイア入門－	共著	平成 28 年 3 月	環太平洋大学紀要第 10 集（pp.151-157）	メディアリテラシーとプロジェクト学習を扱った英語教育の成果をまとめた。メディアを発信する方法としてブログの作成やポッドキャスト作成などのプロジェクト型学習法を論じた。 共著者：オチャンテ・カルロス、グジョン・ルック 担当部分：情報リテラシーと英語教育を取り組んだクロスカリキュラム的で教科横断的な指導法の成果の質的調査によって考察し執筆。pp151－155
11 留学経験者クラスの運営に関する考察　－学生および教職員に対する調査結果－	共著	平成 29 年 3 月	環太平洋大学紀要第 11 号（pp.133-137）	海外への語学留学で獲得した英語能力を維持するための英語指導法をまとめた。英語の 4 技能を活かした英語活動を通して、小学校高学年の学習発達段階に応じた適切な指導法を考察した。 共著者：村上一三、オチャンテ・カルロス、グジョン・ルック、ウォルシュ・アンソニー 担当部分：留学帰国者の語学能力維持のための小学校英語指導実践例とクラスのレベル分けのマネジメントについて執筆。pp135－136
12「カトリック教会における多言語・多文化環境の実態－三重県伊賀市の事例－」	共著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要第 7 集 pp.167-177	日本のカトリック教会にニューカマーがやってきてからどのように変化したのかを論じる。ニューカマーの増加によって多民族化した教会ではミサなどの行事が多言語で行われるなど様々な対応と支援が行われている。本論文で対象にした伊賀市カトリック教会はこれまで多文化共生を課題に発展したケースであり、成功例でもある。 著者：　オチャンテ　村井　ロサメルセデス
13 アンケートと授業見学を基にした小学校の英語教科化に向けた現状―大学での指導法の授業のために―	共著	平成 30 年 7 月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル第 1 巻 第 5 号（pp.141-146）	小学校 3・4 年生の「外国語活動」、5・6 年生の「外国語」の移行期間の実態を踏まえ、次期学習指導要領までに、学校で準備する課題が何であるかを論じた。 共著者：オチャンテ・カルロス、熊田岐子 担当部分：小学校「外国語活動」の実態を調査実施。また公立中学校において英語に対する意識調査を実施。アンケートの回収、分析及び考察した。pp143-146

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行年 月	出版社又は発行雑誌 等の名称	概　要
14 小学校英語教科における問題解決的な学習法	単著	平成 30 年 9 月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル第 1 巻 第 7 号（pp.239-245）	大学英語学習で行った問題解決型の授業「Project Based Learning」を紹介し、小学校の英語指導法に応用を試みた。５・６年生が扱う英語の学習に問題解決と ICT 教育の活用により「主体的な学び」が実現できると仮定した授業指導案とその評価方法について提案した。
15 小学校英語教科におけるＩＣＴを活かした指導法	共著	平成 30 年 9 月	奈良学園大学紀要第 9 集（pp.193-199）	小学校英語科指導法の充実化を図るための方策を具体的に提案した。まず指導と評価の一体化を図る指導案の在り方ついて論じた。また新学習指導要領で育てる資質能力について論じた。さらに小学校の ICT の実情把握視察を行い、教員のメディアリテラシー能力によって英語指導における ICT 運用が異なることが分かった。 共著者：オチャンテ・カルロス、グジョン・ルック 担当部分：新学習指導要領で求められる資質能力について、公立小学校の外国語活動においての ICT 運用の実態と成果について執筆。 pp193－196
16 小学校英語教科指導法における絵本の読み聞かせの有効性	単著	平成 30 年 12 月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル第 2 巻第 1 号（pp.27-33）	小学校英語科における児童文学と絵本の読み聞かせの有効性を調べ、大学の英語エクステンションクラスで模擬授業の指導を行った。対象学生に質的な調査を行った結果、児童文学教材と教科書の連帯を用いた授業作りが有効的な英語活動につながることが分かった。リーディング指導及び指導案作成のプロセスは本稿で考察した。pp.27-33
17 小学校における外国語指導法の取り組みⅠ	単著	平成 31 年 2 月	奈良学園大学人間教育学部ジャーナル第 2 巻第 2 号（pp.75-82）	英語専科教員と外国語指導助手（ALT）の協力を得て著者とともに指導や授業作りなどの提案に関わった。本稿ではその取り組みを述べ、専科教員と外国語指導助手の役割を挙げ、将来的に英語指導にあたる学級担任の移行期間においての英語準備も述べる。本稿では、小学校英語授業の具体的な実際を分析し、その目標と指導と評価を一体として捉え、その振り返りである評価に視点を当てて、小学校での英語科指導法の充実化を図ることを目的とする。
18 英会話授業における「自尊感情を高める共有体験」に関する調査	共著	平成 31 年 3 月	奈良学園大学紀要第 10 集（pp.1-7）	本稿では、英語スピーキングと定め、他者とのコミュニケーションにおける英語スピーキング不安を検証した。考案した項目を因子分析した結果、ペアワーク、グループワークにおいては「肯定承認」、「安心」、「忌避クラス発表においては「肯定承認」，「不得意」の構造を見いだした。さらに，英語スピーキング不安，対人不安傾向，自尊感情，自己受容，他者受容との関連を検討し，他者からのフィードバックが得られるグループワークが有効である可能性が示唆された。 著者：熊田岐子，岡村季光，オチャンテ・カルロス

著書、学術論文等の名称	単著 共著 の別	発行年 月	出版社又は発行雑誌 等の名称	概　要
（その他） 教員免許更新講座講師２コマ担当 英語指導法資料	単独	平成 24 年～29 年毎年実施	環太平洋大学 A4 判 10 頁	英語科指導法に異文化理解や ICT 教育の導入を扱ったテーマを中心に講座を実施した。毎年 40 人が受講した。

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　高橋　千香子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
心理学	臨床心理学、精神分析学、教育心理学、社会福祉学（児童福祉）

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 １）各単元終了時に小テストの実施	平成 26 年４月～平成 31 年３月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科における「保育の心理学」「保育の心理学Ⅱ」「教育心理学」において、主として子どもの心理発達に関する知識を定着させるため、各単元が終了する毎に小テストを実施している。
２）毎回の授業の振り返りを活用した授業実践	平成 26 年４月～令和２年３月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科における「心理学」「保育の心理学」「保育の心理学Ⅱ」「保育相談支援」「教育心理学」、奈良学園大学人間教育学部における「保育相談支援」「保育の心理学Ⅱ」の授業において、毎回授業の最後に振り返りを記入させ、コメントを入れて次の授業時に返却している。内容が良かったものについては次の授業の開始時に紹介することで、前回の振り返りと学習内容への理解を深められるよう工夫している。
３）事例をもとにしたグループディスカッションおよび発表の実践	平成 26 年４月～令和２年３月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科および奈良学園大学人間教育学部における「保育の心理学Ⅱ」「保育相談支援」の授業において、「保育の心理学Ⅱ」では子どもの生活や対人関係の場面、「保育相談支援」では保護者や親子関係への対応場面についての具体的な事例を多用している。1 人で考える時間を設けた後、隣同士あるいは小グループに分かれてディスカッションさせ、発表させることで、思考力や対応力を養うことを目的としている。
４）ロールプレイの実践	平成 26 年４月～令和２年３月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科および奈良学園大学人間教育学部の「保育相談支援」の授業において、基本となるカウンセリングの基礎知識を学ぶため、カウンセリング演習の手法を用いたロールプレイを導入している。具体的には２人一組になり、話す役と聞く役に分かれて「聴く姿勢、聴かない姿勢」を相互に体験させたり、「傾聴の基本」を学んだ後、それぞれの技術をロールプレイさせている。実施後、それぞれの役割を演じて具体的に振り返り、さらにディスカッションさせることで、メタ認知を賦活させ、理解を深めさせている。
２　作成した教科書，教材 １）コンパクト版保育者養成シリーズ　新版　保育の心理学Ⅱ	平成 30 年３月	保育士養成の必須科目である「保育の心理学Ⅱ」に対応したテキストであり、平成 29 年告示の要領および指針の改訂を反映した内容になっている。 監修者：谷田貝公昭、石橋哲成　編著者：福田真奈、西方毅　A5 版、145 頁 共著者：伊藤亮、小原倫子、川口めぐみ、小池はるか、佐々木真吾、高岡昌子、高橋千香子、谷真弓、西方毅、長谷川直子、菱田博之、福田真奈、山口昌澄 本人担当部分：第４章　子ども集団と保育者の援助（P33～40）子ども集団の特性、集団生活への発達援助、集団に入れない子どもの支援についてまとめている。特に集団生活において培われる協同性や道徳性、規範意識に対する保育者の望ましい援助のあり方について重点的に述べた。

2）シリーズ知のゆりかご　保育の心理学	平成 31 年 4 月	保育士養成課程「保育の心理学」、幼稚園教諭養成課程「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」に対応したテキストである。 編著者：青木紀久代　B5 版、192 頁 共著者：青木紀久代、石井正子、大國ゆきの、片山伸子、加藤邦子、金子恵美子、金丸智美、高橋千香子、富田貴代子、中村涼、平沼晶子、細野美幸、三好力、矢野由佳子 本人担当部分：第 11 章　乳幼児の学びを支える保育（P172～185）　第 1 節で「養護と教育が一体的に展開する保育」について説明し、第 2 節で学びの芽生えを支える保育について事例を用いながら説明した。最後の第 3 節では保護者への支援について述べ、保護者との連携や協力の必要性について論じた。
3）シリーズ知のゆりかご　子ども家庭支援の心理学	令和元年 8 月	保育士養成課程の新しい必修科目「子ども家庭支援の心理学」に対応したテキストである。 編著者：青木紀久代　B5 版、192 頁 共著者：青木紀久代、石井正子、大國ゆきの、小嶋玲子、片山伸子、加藤邦子、金子恵美子、古志めぐみ、菅野幸恵、高橋千香子、武田（六角）洋子、細野美幸、三好力、矢野由佳子 本人担当部分：コラム②「保育所は貧困問題の最前線」（P113）　日本の子どもの貧困率の高さについて説明し、保育所が担う役割について述べた。
4）子ども家庭福祉専門職のための子育て支援入門	令和元年 5 月	保育士養成課程の新しい必修科目「子育て支援」「子ども家庭支援論」「子ども家庭福祉」に対応したテキストである。 編著者：才村純、芝野松次郎、新川泰弘、宮野安治　B5 版、176 頁 共著者：大倉得史、山本智也、関谷みのぶ、才村純、本田和隆、室谷雅美、宮野安治、新川泰弘、安田誠人、小山顕、渡邊慶一、山本由紀子、吉弘淳一、藤井裕子、寺田恭子、磯部美良、高橋千香子、川口めぐみ、久保木亮子、西井典子、芝野松次郎、塚本利幸、大谷由紀子、榎本祐子、飯島仁美、別所崇、山本展明、栗山直子 本人担当部分：第 17 章　個人面談、懇談会における子育て支援（P133～138）　保育士の行う個人面談の種類、基本事項、留意点について、事例を引用しつつ解説した。
5)保育士を育てる③子どもの理解と援助	令和 2 年 3 月	保育士養成課程の新しい必修科目「子どもの理解と援助」に対応したテキストである。 編著者：大沢裕、藤田久美　A5 版、148 頁 共著者：綾野鈴子、伊藤亮、大賀恵子、大沢裕、加納史章、熊谷賢、佐藤牧子、高岡昌子、高橋千香子、谷真弓、當銘美菜、根津知佳子、野末晃秀、藤田久美、古橋真紀子、村山久美、山本陽子 本人担当部分：第 11 章　子育て支援・家庭支援と子ども理解（P89～96）　近年の子育て家庭への支援の重要性の高まりと、子育て家庭支援にける子ども理解と援助のあり方について、事例を引用しつつ解説した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）奈良文化女子短期大学に採用される際の学長評価	平成 25 年 3 月	学長より、18 年という長きにわたり児童心理相談の実践経験を積んでいることは、「保育の心理学」「保育相談支援」などの科目において、現場の求める保育者を育成するのにふさわしい人材であること、短期大学部の地域貢献事業の一つである子育て支援事業への貢献も期待できること、臨床心理士資格を有し、他大学の学生相談室カウンセラーの経験も有することから、短期大学部の学生支援においても貢献が期待できると評価された。

2）学生による授業評価の結果	平成 26 年 4 月～平成 31 年 3 月	奈良文化女子短期大学部の学生による授業評価アンケートの結果、平成 30 年度の学生による授業評価（満点 4.0）は、「保育の心理学Ⅱ」3.79、「教育心理学」3.56 であった。自由記述には「保育の心理学Ⅱ」では「子どもの成長には心の状態が大きく関係していることを知った」、「教育心理学」では「自分を振り返り、人と関わる上で必要なことをたくさん学べた」などの記述があり、どちらも「とても分かりやすかった」「ためになる話が多かった」等の評価を得ることができた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における幼児教育講座の講師	平成 26 年 8 月 7 日	奈良文化女子短期大学部主催の幼稚園、保育所、こども園、小学校教諭、特別支援担当教員らを対象とした幼児教育講座において、平成 25 年度は「気になる子」、平成 26 年度は「気になる子②－子どもの心と親子関係－」というテーマで講師を担当した。
2）関西女子短期大学教員免許更新講習における講師	平成 26 年 8 月 8 日 平成 27 年 8 月 11 日 平成 28 年 8 月 10 日 平成 30 年 8 月 24 日	関西女子短期大学にて開催された教員免許更新講習において、同短期大学保育学科の津田尚子准教授と協同し、4 年間、「子どもを守り育てる家庭支援」と題した講座を担当した。その年に起こった児童虐待死事件にも触れつつ、現場の保育者が日々直面するであろう問題について、考える視点を提供した。
3）葛城市保育士研修会における講師	平成 26 年 11 月 29 日	葛城市保育士会からの依頼により、同市内の公立・民間保育園に勤務する保育士対象に、「保護者理解と関係づくり」というテーマで研修を行った。
4）寝屋川市保育所・幼稚園職員研修会における講師	平成 27 年 2 月 27 日	寝屋川市保健福祉部からの依頼により、同市内の保育士、幼稚園教諭、児童福祉関係者等を対象に「保護者への伝え方、子どもへの関わり方」というテーマで研修を行った。
5）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部内のつどいの広場「ぶんタン」ミニ講座講師	平成 26 年 11 月 7 日 平成 27 年 9 月 30 日 平成 28 年 10 月 28 日 平成 29 年 11 月 6 日 平成 30 年 10 月 26 日	奈良文化女子短期大学部におけるつどいの広場「ぶんタン」において、「発達について」、「臨床心理士さんに聞いてみよう」「育児ストレスについて話そう」等のテーマでミニ講座を担当した。

6）奈良いのちの電話協会講座講師	平成 27 年 10 月 31 日 平成 27 年 11 月 7 日	第 39 期電話相談員養成講座の中の「カウンセリング演習講座」において、4 回シリーズのうちの後半 2 回を担当した。
7）寝屋川市家庭教育講座講師	平成 29 年 1 月 14 日	寝屋川市立点野小学校において保護者や教育関係者を対象として「思春期の心理について」というテーマで講演を行った。
8）登美ヶ丘公民館「子育て講座」講師	平成 29 年 9 月 29 日 平成 30 年 10 月 5 日	登美ヶ丘公民館における子育て講座において、奈良文化女子短期大学部の中田章子講師と共同で、29 年度は「頑張りすぎない私らしい育児」、30 年度は「みんなどうしてる？子どもへの関わり方」というテーマで講座を担当した。
9）奈良県臨床心理士会第 77 回相互研修会シンポジスト	平成 31 年 2 月 17 日	奈良県に在住もしくは勤務している臨床心理士の相互研修会において、「私の臨床を語る」をテーマに 3 名のシンポジストの内の 1 名として講演およびシンポジストを務めた。
5　その他 無		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）中学校教諭一種免許（社会）	平成 4 年 3 月	平三　中一種　第 2287 号　　京都府教育委員会発行
2）高等学校教諭一種免許（社会）	平成 4 年 3 月	平三　高一種　第 2541 号　　京都府教育委員会発行
3）小学校教諭二種免許	平成 4 年 3 月	平三　小二種　第 10119 号　　京都府教育委員会発行
4）財団法人日本臨床心理士資格認定協会認定　臨床心理士	平成 9 年 4 月	登録番号　6651
5）公認心理師	平成 31 年 2 月	登録番号　13797
2　特許等 無		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）大阪府寝屋川市保健福祉部こども室家庭児童相談室において家庭相談員として勤務	平成 7 年 4 月～平成 25 年 3 月	0 歳から 18 歳までの子どもに関する育児、発達、生活、学校生活（不登校等）、その他の精神的問題、家族関係の問題等について、子どもへのカウンセリング、遊戯療法、心理発達検査、親カウンセリング、地域援助（家庭訪問、他機関との連携）等の心理相談支援を中心に行ってきた。その他、育児不安を抱える母親のためのグループの実施や、平成 18 年度の児童虐待防止法の改正にともなう要保護児童対策地域協議会の立ち上げ、運営等に携わり、年々増加する児童虐待ケースに対して係と連携して取り組んだ。

2）大阪国際大学守口キャンパス学生相談室においてカウンセラーとして勤務	平成 12 年 4 月～平成 26 年 3 月	入職当初は学生相談室の体制、枠組みづくりに関与し、その後は相談を希望する学生に対するカウンセリング・心理検査等の実施、教職員へのコンサルテーションを行った。また、学内の担当教員と協力し、新入生へのメンタルヘルスチェックの実施、啓発活動、連絡会議への参加等を通じて、学内全体のメンタルヘルスの向上を視野に入れて活動した。
3）財団法人関西カウンセリングセンターにおける実習室スーパーバイザー、連続実習講師、資格審査委員の経験	平成 18 年 4 月～平成 25 年 3 月	財団法人関西カウンセリングセンターにおいて、実習室に在籍する約 12 名を担当し、月に 2 回のグループスーパービジョン、希望者への個人スーパービジョン（月平均 20 件）、適任証審査論文の指導を行った（～平成 20 年 3 月）。その後、カリキュラム改編に伴い、「グループによるカウンセリング連続実習」の講師として、半期 10 時間、年 20 時間、ロールプレイを中心としたカウンセリングの基本的態度を学ぶ講座を担当した。希望者には引き続き、個人スーパービジョンを行った（～平成 25 年 3 月）。また毎年実施されるカウンセラー適任証その他の資格審査にも携わった。
4）奈良県臨床心理士会子育て支援部会長	平成 24 年 6 月～平成 26 年 5 月（任期 2 年）	奈良県臨床心理士会内に設置されている 7 部会のひとつである子育て支援部会の長として、部会内の連絡および、月 1 回開催している子育て支援部会研修の企画・運営を行った。
5）寝屋川市立保育所民営化に係る事業者選定委員会に選定委員として参加	平成 25 年 10 月～平成 26 年 2 月	寝屋川市立ひなぎく保育所の民営化に係る事業者選定委員会に委員として参加した。
6）奈良文化幼稚園における発達の気になる子の行動観察および助言指導	平成 26 年 6 月～（現在に至る）	奈良文化幼稚園に年に 3 回（学期に 1 回）訪問し、各クラス担任からあらかじめ依頼された発達の気になる子どもの行動観察を行い、その後、子どもの見立てや今後の支援のあり方についてのカンファレンスを行っている。
7）奈良県臨床心理士会研修委員長	平成 26 年 6 月～平成 28 年 5 月（任期 2 年）	奈良県臨床心理士会の研修委員会の長として、年に 3 回実施される相互研修会の企画・運営を担当した。委員会の招集、連絡調整、講師との交渉、事前準備、当日の進行など、他の委員と協働して行い、無事に任期を終えることができた。
8）社会福祉法人宝山寺福祉事業団児童養護施設愛染寮にて心理相談員（パート）として勤務	平成 29 年 4 月～現在に至る	本学学生の施設実習や就職等でつながりのある児童養護施設愛染寮において、入所児童の心理的ケア（プレイセラピー）を担当する臨床心理士として、週 1 日 5 時間勤務している。
4　その他 1）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における子育て支援事業、奈良学園大学社会・国際連携センター事業「親と子の相談室ひまわり」の担当カウンセラー	平成 26 年 4 月～現在に至る	短期大学部の地域貢献事業のひとつとして一般の市民向けに開設された相談室であり、火曜日の午後に行ってきた。子どもへのカウンセリングや遊戯療法、発達検査、保護者へのカウンセリングなどを行っている。令和 2 年度からは奈良学園大学社会・国際連携センターの事業として、毎週水曜日の午後に実施している。
2）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における人権教育推進・セクシャルハラスメント相談委員会の委員長	平成 27 年 4 月～平成 31 年 3 月	平成 25 年度より委員として活動し、平成 27 年 4 月からは委員長として、定期的に委員会を開催し、学生を対象とした人権アンケートの実施と分析、人権講演会の企画と開催、大人協研修への参加などを行った。

3）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部における学生相談の主担当	平成 26 年 4 月～平成 31 年 3 月	学科の学生相談員として、学生からのさまざまな相談に応じたり、心理的問題を抱える学生への対応について、他の教職員のサポートを行った。平成 27 年度から主担当となり、同年より本学に配置されている非常勤カウンセラーとも連携し、学内の学生相談体制の整備を目指した。
4）奈良学園大学登美ヶ丘キャンパスにおける学生相談室担当カウンセラー	平成 31 年 4 月～現在に至る	登美ヶ丘キャンパスの保健医療学部の学生を対象とした学生相談室カウンセラーとして、毎週水曜日の午後、相談室に勤務している。三郷キャンパスの学生相談担当の岡野由美子准教授と情報交換や共有をしながら対応している。令和 2 年度からは学生支援センターの構成委員となり、同キャンパスを担当している
5）奈良学園大学入試委員会の委員	平成 31 年 4 月～現在に至る	人間教育学部の入試委員会の委員として委員会に出席し、入試日程や入試科目、選考方法等について検討している。入試日には本部要員としての努めを担っている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1）学び、考え、実践力をつける家庭支援論(第 3 版)	共著	平成 26 年 3 月（第 1 版） 平成 28 年 7 月（第 2 版） 平成 30 年 9 月（第 3 版）	保育出版社（P91、142～143）	保育士養成課程における必修科目である「家庭支援論」に対応し、基礎理論および具体的な実践事例を含み、読者自身が専門知識を習得した上で実践力をつけられる内容構成となっている。 編者：木村志保、津田尚子編著、B5 判、190 頁。 共著者：飯塚恭一郎、木村敦、太田顕子、大石美佳、長尾和美、佐伯知子、高橋美枝、菊地真理、吉田祐一郎、前嶋元、井土睦雄、原子純、松井圭三、森合真一、田中卓也、田中謙、平本譲、戸田竜也、高橋千香子、加藤博仁、津田尚子、池田幸代、阪木啓二、植木是、矢野裕子、矢幡眞由美、伊尻正一、隣谷正範、児玉龍治、緒倉珠巳、木村志保 本人担当部分：①第 8 章「どうやって子育て家庭を支援すればいいの？－子育て家庭支援の方法・やり方」の「現場の声」欄（P91）：章の導入部分であり、子育て家庭の多様化がすすむ中、不適切な養育が行われている家庭の支援では、子どもの命と安全を守るために園の役割が大変重要になっている現状について説明した。　②第 12 章「支援の実際を考えてみよう－子育て家庭支援の事例学習」の第 1 節「子育てに悩む親」①事例「孤独感から子育てへの不安が高まっている母」②「問題を考えるポイント」③「解説・留意点」④ステップアップ問題（P142～143）：事例学習の章であり、冒頭に事例を示した後、事例を考えるポイントをいくつか記し、学ぶ人が自ら考え記入できるスペースを設けている。その後に、事例の解説および留意点について述べ、最後にステップアップ問題を記載している。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
2）コンパクト版保育者養成シリーズ　新版　保育の心理学Ⅱ	共著	平成 30 年 3 月	一藝社（P33～40）	保育士養成の必須科目である「保育の心理学Ⅱ」に対応したテキストであり、平成 29 年告示の要領および指針の改訂を反映した内容になっている。 監修者：谷田貝公昭、石橋哲成　編著者：福田真奈、西方毅　A5 版、145 頁 共著者：伊藤亮、小原倫子、川口めぐみ、小池はるか、佐々木真吾、高岡昌子、高橋千香子、谷真弓、西方毅、長谷川直子、菱田博之、福田真奈、山口昌澄 本人担当部分：第４章　子ども集団と保育者の援助（P33～40）子ども集団の特性、集団生活への発達援助、集団に入れない子どもの支援についてまとめている。特に集団生活において培われる協同性や道徳性、規範意識に対する保育者の望ましい援助のあり方について重点的に述べた。
3）シリーズ知のゆりかご保育の心理学	共著	平成 31 年 4 月	みらい（P172～185）	保育士養成課程「保育の心理学」、幼稚園教諭養成課程「幼児、児童及び生徒の心身の発達及び学習の過程」に対応したテキストである。 編著者：青木紀久代　B5 版、192 頁 共著者：青木紀久代、石井正子、大國ゆきの、片山伸子、加藤邦子、金子恵美子、金丸智美、高橋千香子、富田貴代子、中村涼、平沼晶子、細野美幸、三好力、矢野由佳子 本人担当部分：第 11 章　乳幼児の学びを支える保育（P172～185）　第 1 節で「養護と教育が一体的に展開する保育」について説明し、第 2 節で学びの芽生えを支える保育について事例を用いながら説明した。最後の第 3 節では保護者への支援について述べ、保護者との連携や協力の必要性について論じた。
4）シリーズ知のゆりかご子ども家庭支援の心理学	共著	令和元年 8 月	みらい（P113）	保育士養成課程の新しい必修科目「子ども家庭支援の心理学」に対応したテキストである。 編著者：青木紀久代　B5 版、192 頁 共著者：青木紀久代、石井正子、大國ゆきの、小嶋玲子、片山伸子、加藤邦子、金子恵美子、古志めぐみ、菅野幸恵、高橋千香子、武田（六角）洋子、細野美幸、三好力、矢野由佳子 本人担当部分：コラム②「保育所は貧困問題の最前線」（P113）　日本の子どもの貧困率の高さについて説明し、保育所が担う役割について述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
５）子ども家庭福祉専門職のための子育て支援入門	共著	令和元年５月	ミネルヴァ書房（P133～138）	保育士養成課程の新しい必修科目「子育て支援」「子ども家庭支援論」「子ども家庭福祉」に対応したテキストである。 編著者：才村純、芝野松次郎、新川泰弘、宮野安治　B5 版、176 頁 共著者：大倉得史、山本智也、関谷みのぶ、才村純、本田和隆、室谷雅美、宮野安治、新川泰弘、安田誠人、小山顕、渡邊慶一、山本由紀子、吉弘淳一、藤井裕子、寺田恭子、磯部美良、高橋千香子、川口めぐみ、久保木亮子、西井典子、芝野松次郎、塚本利幸、大谷由紀子、榎本祐子、飯島仁美、別所崇、山本展明、栗山直子 本人担当部分：第 17 章　個人面談、懇談会における子育て支援（P133～138） 保育士の行う個人面談の種類、基本事項、留意点について、事例を引用しつつ解説した。
６)保育士を育てる③子どもの理解と援助	共著	令和２年３月	一藝社（P89～96）	保育士養成課程の新しい必修科目「子どもの理解と援助」に対応したテキストである。 編著者：大沢裕、藤田久美　A5 版、148 頁 共著者：綾野鈴子、伊藤亮、大賀恵子、大沢裕、加納史章、熊谷賢、佐藤牧子、高岡昌子、高橋千香子、谷真弓、當銘美菜、根津知佳子、野末晃秀、藤田久美、古橋真紀子、村山久美、山本陽子 本人担当部分：第 11 章　子育て支援・家庭支援と子ども理解（P89～96）　近年の子育て家庭への支援の重要性の高まりと、子育て家庭支援にける子ども理解と援助のあり方について、事例を引用しつつ解説した。
（学術論文） 1）ことばの表出が遅れていた５才男児の遊戯療法過程	単著	平成 25 年 11 月	奈良文化女子短期大学研究紀要第４４号（P45～56）	遊戯療法とは子どもを対象としたカウンセリング技法のひとつである。本論ではことばの遅れを主訴に相談室を訪れた５才児が、筆者との遊戯療法を通じて引きこもっていた心的状態から脱し、内的世界を豊かに表現して葛藤状況を乗り越えていった過程を３期に分けて報告し、その展開のありようについて考察を加えた。最後に遊戯療法についての筆者の若干の考えを述べた。
２）生活困窮家庭における不登校生徒への訪問による心理面接	単著	平成 26 年 11 月	奈良学園大学文化女子短期大学部研究紀要第４５号（P71～82）	近年、日本の子どもの貧困問題が浮き彫りになり、その対策が急がれている。本論では、生活困窮家庭の不登校生徒に対して実施した約２年間の心理訪問面接について報告し、当該生徒の心理的背景と課題、訪問面接の経過について検討するとともに、訪問面接の有用性と留意点について考察した。そして最後に、生活困窮家庭の子どもへの心理的支援の意義について、若干の考察を加えた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3）保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識について	共著	平成 27 年 11 月	奈良学園大学文化女子短期大学部研究紀要第４６号（P91～99）	前研究より、保育現場ではまず保育者としての資質が重要視され、現場が必要とする実践能力として文章・言語現力が強く必要であることが分かった。そこで本研究では、本学学生にアンケート調査を行い、現場で必要とされる保育者としての専門的実践能力や資質についてどのように考え、自身がどれくらい身につけていると感じているのかを明らかにした。 本人担当部分は、学生へのアンケートの実施、および分析と考察を共同で行った。 共著者：林悠子、森本美佐、東村知子
4）本学の子育て支援活動と学生教育との接続	共著	平成 27 年 11 月	奈良学園大学文化女子短期大学部研究紀要第４６号（P121～128）	最近の学生の傾向として、コミュケーション能力の低さや親子世代の触れ合う経験の不足が挙げられる。このような学生たちを保育者として養成していくにあたり、いくつかの授業内において、本学で実施している子育て広場に早期に参加させる取り組みを始めている。その効果と課題を明らかにすることを目的として、学生へのアンケート調査およびレポート結果を考察し、分析を加えた。 本人担当部分は、子育て支援との連絡調整、学生へのアンケートの実施を担当し、アンケートの分析および考察について共同で行った。 共著者：森本美佐、小川純子
5）各発達の時期における「先生」のネガティブな言動について	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学文化女子短期大学部研究紀要第４７号（P31～40）	保育者養成課程の学生を対象にして、保育所・幼稚園・小学校低学年・小学校高学年・中学校・高等学校の各時期の「先生」の不快な言動で特に記憶に残っている内容について調査研究を行い結果を報告し論じた。幼児期に受けた保育者の不快な言動を記憶している者は非常に少なく、むしろ良かった言動を覚えている場合が多いことが分かった。保育者になる者は、自身の言動が子どもに及ぼす影響を十分に理解することが大切であると結論づけた。 共著者：高岡昌子、林悠子、岩本健一
6）保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学文化女子短期大学部研究紀要第４７号（P41～48）	本学学生（卒業生を含む）160 名のＹＧ性格検査の判定結果をもとに、保育者養成校の学生の性格傾向および卒業時の進路状況（進路選択）との関連について調べた。その結果、学生の半数近くで「情緒の不安定さ」がみられ、保育者の資質とも関連の深い特性であると考えられた。進路状況との関連では、保育職選択と性格特性には関連は見出されなかったが非正規あるいは非就職を選択した学生は、「劣等感」「非協調性」が高い傾向にある学生の割合が高いことが分かった。 共著者：高岡昌子、林悠子、岩本健一

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
7）保育者養成に求められる保育者の資質について（2）―就職先へのアンケート調査の前回調査との比較から―	共著	平成 28 年 11 月	奈良学園大学文化女子短期大学部研究紀要第４７号（P71～80）	平成 23 年度から 26 年度の本学学生の就職先に対して行ってきた勤務実態アンケート調査の自由記述のうち、園長らが保育者養成に望むこと、また就職した卒業生が評価されていることについての分析を行った。その結果、就職先の園長らは即戦力よりも社会人としての態度や覚悟、チームで働く上で必要な能力の養成を求めていることが明らかになった。保育士不足や早期離職が問題化する中、この点をふまえた保育者教育を行っていくことが急務であると結論づけた。 共著者：林悠子、高岡昌子、岩本健一
8）ある不登校の少女の精神分析的遊戯療法過程	単著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学文化女子短期大学部研究紀要第４８号（P71～81）	不登校状態にあった小学生女児の精神分析的アプローチによる遊戯療法過程について報告し、考察した。女児の不登校の背景には両親が離婚するかもしれない不安が強くあったが、さらに遡り、幼少期から母親との情緒的葛藤を抱えていたことが遊戯療法を通じて明らかになった。精神分析的遊戯療法では言語によるやりとりも重要な役割を果たすが、その経過についても詳述した。
9）施設実習における学生の不安を軽減する事前学習についての研究	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学文化女子短期大学部研究紀要第４８号（P31～40）	施設実習に行く前後で学生の実習へのイメージが大きく変化することに着目し、その要因について調査した。変化につながるきっかけは子どもとのコミュニケーションにあることが分かり、学生が自ら子どもに働きかけられる力を事前指導においていかに習得させるかがポイントであることが明らかになった。また、学生が自ら実習前に不足していたと考えた要素を分析し、６つのカテゴリからなるチェック表を作成した。 共著者：岩本健一、高岡昌子、林悠子
10）新人保育者に必要な資質について―新人保育者に対する総合的な評価につながる具体的な資質―	共著	平成 29 年 11 月	奈良学園大学文化女子短期大学部研究紀要第４８号（P41～49）	本学の卒業生が就職先において新人保育者としてどのような評価を受けているのかを調べ、各評価項目と総合的な評価との関係について検討した。その結果、新人保育者は、高い技術や知識よりも、立場をわきまえた礼儀正しさ、業務に意欲的に取り組む前向きな姿勢が、総合評価の高さにつながっていることが明らかになった。これらと在学中の GPA とは相関はないことも明らかになった。 共著者：高岡昌子、林悠子、岩本健一
11）地域子育て支援における心理相談室の役割―「親と子の相談室ひまわり」の報告から―	単著	平成 30 年 11 月	奈良学園大学文化女子短期大学部研究紀要第４９号（P61～68）	本学において平成 21 年度から開設している「親と子の相談室ひまわり」の報告を通して、地域子育て支援における心理相談室の意義および役割について考察した。また筆者が５年間に担当した相談事例の統計報告をもとに、最近の親子の置かれている状況についても考察し、今後の相談室のあり方について検討した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12）新人保育者に対する評価～前年度との比較を通して～	共著	平成 30 年 11 月	奈良学園大学文化女子短期大学部研究紀要第４９号（P49～59）	昨年度に引き続いて、本学の卒業生が就職先において新人保育者としてどのような評価を受けているのかを調べ、各評価項目と総合的な評価との関係について検討した。就職先の学生に対する満足度は昨年度に比べて上昇していたが、将来性への評価はほぼ同じであった。また在学中の GPA と就職先の総合的評価得点との間にも相関は見られなかった。 共著者：高岡昌子、飯田恵美子、岩本健一、小川純子、高橋千香子、林悠子
13）新人保育者に対する評価～前々年度と前年度との比較を通して～	共著	令和 2 年 3 月	奈良学園大学紀要第 12 集（P51～60）	短期大学部の最後の卒業生（平成 29 年度卒）が就職先において新人保育者としてどのような評価を受けているのかを調べ、各評価項目と総合的な評価との関係について検討した。平成 27 年度から平成 29 年度の 3 か年では、保育現場における評価、満足度、将来性について明らかに上がっていた。一方、在学中の GPA と就職先の総合的評価得点との間には、今回も相関は見られなかったが、各教科の成績との関連をみると、「子ども学ゼミ」だけにおいて職場からの満足度との相関（r=0.6）が見られた。 共著者：高岡昌子、岩本健一、高橋千香子、林悠子
（その他）「学会等発表」 １）みどり精神分析研究会における事例発表	－	平成 16 年 5 月～現在に至る	みどり精神分析研究会（大阪市）	臨床心理技術の維持・向上のため、定期的に研究会に参加している。みどり精神分析研究会は、日本精神分析学会の認定グループのひとつであり、年 10 回開催されている。本研究会において、自験例の事例発表を、毎年 1～2 回行っている。
２）奈良県臨床心理士会子育て支援部会研修会における事例発表	－	平成 23 年 7 月 2 日	奈良県臨床心理士会子育て支援部会研修会（奈良市西部公民館）	子育て支援部会研修における事例検討会において、「「子どもを連れて死にたい」と訴える母親の支援」の事例を報告した。要保護児童ケースとして長年にわたってケースワーク的に関わっている事例であり、同じ福祉の現場で活動している臨床心理士より貴重なコメントを受けた。また、他機関とのネットワークの重要性や、その構築の方法についても議論された。
３）本学における子育て支援事業の５年間の取り組みと評価	－	平成 27 年 9 月	全国保育士養成協議会第 54 回研究大会(札幌市）ポスター発表（論文集 P179）	地域における子育て支援の充実が求められるようになり、現在、保育所・幼稚園だけでなく様々な場において取り組みが行われている。本研究では、本学における過去５年間の子育て支援事業である「つどいの広場」「ちびっこ広場」の取り組みの経過と内容を振り返り、利用者アンケートの結果をもとに総括および今後の課題についてまとめた。 共同発表者：森本美佐、林悠子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4）保育者としての資質と保育実践能力に対する学生の意識について	―	平成 27 年 9 月	全国保育士養成協議会第 54 回研究大会(札幌市）ポスター発表（論文集 P35）	前研究より、保育現場ではまず保育者としての資質が重要視され、現場が必要とする実践能力として文章・言語現力が強く必要であることが分かった。そこで本研究では、本学学生にアンケート調査を行い、現場で必要とされる保育者としての専門的実践能力や資質についてどのように考え、自身がどれくらい身につけていると感じているのかを明らかにした。 共同発表者：林悠子、東村知子、森本美佐、高橋千香子
5）保育者養成校の学生の性格特性および進路状況との関連について	―	平成 28 年 8 月	全国保育士養成協議会第 55 回研究大会(盛岡市）ポスター発表（論文集 P42）	本学学生（卒業生を含む）160 名のＹＧ性格検査の判定結果をもとに、保育者養成校の学生の性格傾向および卒業時の進路状況（進路選択）との関連について調べた。その結果、学生の半数近くで「情緒の不安定さ」がみられ、保育者の資質とも関連の深い特性であると考えられた。進路状況との関連では、保育職選択と性格特性には関連は見出されなかったが非正規あるいは非就職を選択した学生は、「劣等感」「非協調性」が高い傾向にある学生の割合が高いことが分かった。 共同発表者：高岡昌子、林悠子、岩本健一
6）保育者養成に求められる保育者の資質について―就職先へのアンケート調査より―	―	平成 28 年 8 月	全国保育士養成協議会第 55 回研究大会(盛岡市）ポスター発表（論文集 P57）	平成 23 年度から 26 年度の本学学生の就職先に対して行ってきた勤務実態アンケート調査の自由記述のうち、園長らが保育者養成に望むこと、また就職した卒業生が評価されていることについての分析を行った。その結果、就職先の園長らは即戦力よりも社会人としての態度や覚悟、チームで働く上で必要な能力の養成を求めていることが明らかになった。保育士不足や早期離職が問題化する中、この点をふまえた保育者教育を行っていくことが急務であると結論づけた。 共同発表者：林悠子、高岡昌子、岩本健一
7）幼稚園児の保護者に対する児童虐待についての意識調査	―	令和 2 年 3 月	日本保育者養成教育学会第 4 回研究大会（福山市）口頭発表（抄録集 P49）	ある幼稚園に通園する児童 147 名の保護者を対象に、①児童虐待問題への関心度 ②自身が虐待をしてしまうかもしれない可能性　③７つの行為について虐待と思うか否か　以上の３つについて質問紙法によるアンケート調査を実施した。その結果、③については、保護者の年代やこどもの数によって、虐待と捉える行為が変化する可能性があることが示唆された。 共同研究者：岩本健一、高岡昌子、林悠子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（その他）「報告書」 １）2013 子どもの育ちと学びをつなぐⅣ～奈良文化女子短期大学　幼小接続ＷＧ合同研究会の取り組みを通して～	共著	平成 26 年 3 月	奈良文化女子短期大学幼小接続ＷＧ編（P43～48）	奈良文化女子短期大学にて平成 20 年度から開催されている「幼小接続 WG 合同研究会」における、平成 25 年度の講演資料や概要、参加者の感想等をまとめた冊子である。 本人担当部分：第１部第１章＜１月例会＞　講演テーマ「幼小接続に関わる保護者の不安～就学前後の相談から～」の内容をもとに、幼小接続期に保護者が抱く不安と、それらを安心に変えるための取り組みの例についてまとめた。 執筆者：秋田喜代美、前田洋一、善野八千子、恒岡宗司、石田秀朗 A5 版　全 129 頁
２）奈良学園大学奈良文化女子短期大学部　教学報告	共著	平成 30 年 12 月	奈良学園大学奈良文化女子短期大学部幼児教育学科	奈良文化女子短期大学部の閉校にあたり、過去数年間において、特に教職員一丸となって行った教学上の特色のある取り組みや成果をまとめた記録である。 本人担当部分：7.3 本学における学生支援（P78～83）、8.8 心理学領域の科目における授業の工夫について-グループ活動を中心に(P121～122) 執筆者：青山雅哉、飯田惠美子、礒辺ゆう、岩本健一、小川純子、高岡昌子、高橋千香子、筒井道子、恒岡宗司、中田章子、林悠子、森本美佐、吉田明史

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月31日

氏名　西江なお子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
教育学	家庭科教育、食育、授業づくりの方法技術

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 (1)高光源特殊ライトを用いた快適な住まいの指導法の実践	平成23年２月	特別活動と総合的な学習の授業として、日常の清掃活動への取り組みの問題点を振り返らせ、清掃の意義を実感させるための手段として、「見える化」をはかって授業を行った。一見汚れがないと思われる場所を、高光源特殊ライトを用いて照らし、拭いきれていないごみや汚れを見せ、自分たちの清掃態度を根底から考えさせる実践研究である。この活動により、清掃の必要性を実感した児童はその後の清掃活動への取り組みが大きく変容すると同時に、家庭での実践へとつながった。 （大阪教育大学附属池田小学校の実践）
(2)節電の効果とその意義を、実感を伴った理解へと導く「見える化」を図る実践	平成25年２月	家庭科と総合的な学習の実践である。東日本大震災後、節電という言葉を聞くが、継続するのは難しい。節電の意義を理解し実践する児童を育てることは重要である。そこで、課題を見出し、節電の方策を考え、自分にできることをする力を養う授業を行った。労力と電気の関係を実感するため、自転車発電機で実際に発電させる。また待機電力を測定し、その電力を年間に換算してどれほどの節電に繋がるのかをデータ化する。こうした実際に体を動かしたり数値化したりするなど様々な「見える化」のアプローチを経て、節電を実感させた。児童は校内の無駄な電気の消灯などに積極的になった。 （大阪教育大学附属池田小学校の実践）
(3)住環境の汚れに対し、意識下から意識化へと児童を変容させる指導法の実践	平成26年２月	家庭科の実践である。ドアノブや電気スイッチなど不特定多数の人が触れる場所や、一見きれいに見える壁や机まわりなどにも、拭いきれていない汚れが付着していることを光線の特殊なブラックライトを用いて照射し「見える化」する。そしてそれが人体に与える影響を考え、「きれいなはず」という意識を覆しどうすれば見えない汚れを取り除き、気持ちの良い環境づくりが実現するかを考えさせた。実際に自分の身近な物を雑巾等で拭い汚れを実感させることで、その後の清掃態度が激変すると同時に家庭でも同じような報告を保護者から受け、家庭での実践に繋がった。 （大阪教育大学附属池田小学校の実践）

(4)生活実践力向上を目指した小学校家庭科指導法の実践	平成 26 年 5 月～平成 27 年 3 月	小学校第５、６学年生を対象に、児童・教員の最も関心の低い分野である清掃学習において、本授業モデルによる実践を通して生活実践力がいかに高まるかを検証・考察した。その際、授業モデルの有効性を検証する目的で診断的評価・総括的評価を行い、児童の意識、態度の変容を調査した。また、家庭科の教科目標に対する評価も行った。教科の目標に対する評価においては４観点全てにおいて４段階評価の上位４、３が 85%以上を占め、概ね達成している結果となった。授業のまとめとして授業対象学年以外の児童に清掃の必要性のプレゼンを 5・6 年生が行い、学校全体で清掃の取り組みが活発となり活動が定着し成果を得ることができた。 （池田市立石橋南小学校の実践）
(5)大学生の衣食住の知識・技能の向上を目指した講義の実践	平成 28 年 4 月現在に至る	大学生を対象に、衣食住の知識・技能のレディネステストを行い、実態を把握した。結果、個人差が大きく小学生からの家庭科の学びが定着していない学生が多く見られた。この実態を受け、毎時に知識・技能の小テストを行い、課題解決に向けての具体的な対策を考えさせた。学びの定着と実践の日常化を図るために、家庭科新聞の作成及び家庭での取り組みシートを継続的に書かせることで、学生自身に知識・技能の定着の成果を実感させることが出来、結果として成績が上昇する学生が増加し、ある一定の成果を得ることが出来た。 （奈良学園人間教育学部「衣食住の理解」での実践）
(6)大学における学生主体とした指導法の実践発表	平成 29 年 7 月	大学における学生主体の講義の在り方についての実践発表を、本学教員行った。使用教材・教具の選定、グループ活動方法、学修ノートの記録の取らせ方、また 90 分の時間配分や課題の出し方など、学生が積極的に講義に参加し、学修するための様々な手立てを具体的に発表した。学生たちを能動的に講義に参加させる方法であり、取り入れてみたいという教員の声を聞くことが出来、ある一定の成果を得ることが出来た。 （奈良学園大学人間教育学部「衣食住の理解」「家庭科指導法」での実践）
(7) 家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」の実践	平成 30 年 10 月～平成 31 年 3 月	家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」を、動物愛護の視点を取り入れることによる有効性の実証に向けて実践した。児童の身近な存在としてペット（特に犬・猫）のいのちに注目し、「犬に名前を付ける日」の映画監督である山田あかね氏、動物保護に携わる NPO 法人「犬猫みなしご救援隊」代表中谷百合氏を招き、児童、保護者、地域住民を対象とした「いのちの教育」を実施した。朝日新聞社及び大阪北摂地域のマスメディアの取材を受け、いのちの教育の取り組みを広く発信することが出来た。本実践研究により、いのちについて大人と子どもが語り合うと共に、児童のいのちにたいする意識が大きく変容し、教育効果があった。 （池田市立石橋南小学校の実践）

(8) 家庭科における「防災教育」の実践	平成 30 年 4 月～平成 31 年 3 月	家庭科を基盤とした教科横断的な「防災教育」の可能性を探り、その有効性の実証に向けて実践した。児童の防災意識と行動の不整合の検証を通して、防災意識の向上に加え具体的な防災の在り方についての知識・技能の習得の必要性を明らかにした。そこで、地域住民に対し、防災の取り組みや避難時等に抱く不安について聞き取り調査を実施し、小学生が地域の防災リーダーとして実践可能な事項について検討した。加えて、学習発表会においては、「釜石の奇蹟」を題材に演じ、震災時の様子を調べ、災害を自分事として捉え、下級生はじめ地域住民など多くの人に防災の必要性について発信した。これら一連の取り組みにより、実践前と比較した際、児童の防災意識はもとより、各家庭での防災の取り組みの質・量ともに向上し、本実践の有効性が示された。 （池田市立石橋南小学校の実践）
2　作成した教科書・教材 (1)教育実習生指導のてびき （大阪教育大学附属池田小学校発行） 【再掲】	平成 22 年 4 月	大阪教育大学の学生向けに教育実習時に必要な教員としての資質能力や授業づくりのポイント、指導案の書き方などを家庭科の視点から具体的に示した。特に家庭科の指導案作成の際に注意すべき点として、家庭科で求められている児童に育ませたい力とは何かを具体的事象を交えて提示するとともに、児童の実態把握の仕方や体験活動の効果的な取り入れ方、児童の興味・関心の向上を図り学習意欲を喚起する手立ての在り方を解説した。大阪教育大学の学生からは、指導案の書き方は元より実習への心構えとして把握しておくべき重要点が網羅されており、活用しやすいと好評を得ている。
(2)小学生夏休みの家庭学習用教材編集（文溪堂） 【再掲】	平成 22 年 4 月	事前に児童の実態調査を行い、長期休暇に行うべき学習課題を明確化し、各教科ごとの重要項目を簡潔にまとめ、児童のつまずきやすい内容を吟味し、問題作成し教材会社文渓堂に提示した。小学校 1 年～6 年までの全学年の学習用教材の企画と編集に関わった。全国の小学校で、使用されて使いやすいと好評を得ている。 A4 判　26 頁
(3)消費者教育のてびき （大阪教育大学附属池田小学校家庭科部会発行）	平成 22 年 5 月	消費者教育の授業を、生活科・社会科・家庭科の視点から分析し、それぞれの特徴と学校現場で実際に行われている学習内容を記載した。各教科間で学習内容が重複する部分や児童につけたい力を整理することにより、発達段階に応じた消費者教育の在り方を具体的に示した。大阪教育大学から受け入れた実習生を対象に家庭科における消費者教育について指導する際に使用し、具体的であると好評であった。 A4 判　8 頁
(4)家庭科で行う清掃のてびき （大阪教育大学附属池田小学校家庭科部会発行）	平成 23 年 6 月	家庭科の清掃の授業において、児童自らが清掃の意義や具体的な清掃方法について学び考え、意見交流を行った概要をまとめた。大阪教育大学から受け入れた実習生を対象に家庭科で行う清掃学習の意義を指導する際に使用し、具体的であると好評であった。 A4 判　2 頁

(5)家庭科指導法における指導案作成の手引き （奈良学園大学　人間教育学部発行）	平成 28 年 11 月	家庭科指導法の受講生を対象に、家庭科指導案作成における重要点を明確に提示した。題材設定の理由や指導上の留意点の書き方などを、実際の指導案を示し具体性を重視した。学生からは、指導案の書き方が明確になり、重要点が示されているため書き漏れや書き損じを防ぐことができ好評であった。 A4 判　2 頁
(6)衣食住の理解における技能向上のための手引き	平成 29 年 6 月	衣食住の理解の受講生を対象に、技能向上を目的としてその重要点を明確に提示した。ミシンの操作方法、安全な扱い方、児童への適切な指導法といった小学校教員として必要な技能を、基礎から応用までを詳細に記し、安心して児童に指導できるようにまとめた。児童への指導ポイントが分かりやすいと好評であった。 A4 判　2 頁
3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)奈良学園大学学長からの「家庭科教育法」「衣食住の理解」を担当する非常勤講師として採用時の評価	平成 25 年 4 月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科において、非常勤講師として採用時の評価は以下の通りである。 『該当教員は、大阪教育大学池田附属小学校に家庭科主任として 4 年間勤務し、毎年全国発表会を行い具体的な教材開発や指導方法などを熟知している。また、毎年多くの家庭科教師を志望する大学生を実習生として受け入れ、大学生に対しての指導の経験も豊かである。実践だけでなく研究紀要や、現職教員対象の「教員免許更新」の教科書を作成するなど、研究に対する意欲も高い。学会での活動も開始し、豊かな実践だけでなく、理論面でも大学教員としての資格を備えていると判断する。
(2)奈良学園大学「衣食住の理解」授業終了時における学生アンケートによる評価	平成 27 年 8 月	授業改善のために設定した 5 項目と自由記述による学生アンケートを行った。授業内容を実生活に活用できる項目の満足度は 4 点満点中 3.8 と高評価であり、多くの割合の学生が満足のいく授業となった。
(3)奈良学園大学「家庭科指導法」授業終了時における学生アンケートによる評価	平成 29 年 3 月	授業改善のために設定した 5 項目と自由記述による学生アンケートを行った。第１回目の講義においては家庭科に対する興味関心が低い傾向が事前調査で分かったが、学生が能動的に講義に参加し学びが深まるよう、アクティブラーニングを取り入れ、小学校現場で即活用できる力を身に付けさせた。講義の満足度は 4 点満点中 3.8 という高評価であり、学生に深い学びを保証することが出来た。
(4) 奈良学園大学「衣食住の理解」授業終了時における学生アンケートによる評価	平成 30 年 3 月	全15回授業終了時におけるアンケートによる授業評価は、「授業時間の有効な使い方」は4点満点中 3.83、「授業に対する熱意や意欲」は 3.78、「説明のわかりやすさ」は 3.7 といずれも高評価であった。授業において、小学校家庭科教育の目標及び内容について実感を伴って理解できるよう、アクティブラーニングを取り入れ、リフレクションを図りながら学生の理解を確認し、適宜フィードバックして授業を進めることを心掛けた。その結果、学生の深い学びを保証し、満足度の高い授業とあり、先の評価を得ることが出来た。

4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)大阪教育大学附属池田小学校における学年主任としての学年教員指導と調整	平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月	5 年間学年主任として、管理職や他学年との連絡調整を綿密に行い、児童の教育に尽力した。年間学習カリキュラムを作成し、学年の目標到達に向けて各教員と話し合いを密に行い、児童の教育にあたった。また、各学級の児童の実態把握に努め、個別対応を要する児童についての会議を定期的に行い、学年全体で情報を共有し児童の指導を行い、安定した学年経営が実現し、保護者からの高い評価も得た。
(2)大阪教育大学附属池田小学校における家庭科主任として教育実習生の指導	平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月	平成 21 年から家庭科の主任を 5 年間担当し、毎年教育実習生を、年 2 回受け入れ、家庭科教員希望者を複数名実習指導した。実習指導の内容は、家庭科の学習指導要領に基づく教材内容の解釈、年間指導計画の立案、学習指導案の作成、効果的な実技指導の方法、安全な実習のための留意点、高学年児童の理解等におよんだ。さらに実際の授業をさせて、課題を指摘して、再挑戦させることで、実践力をつけさせ、学生からは課題が明確となる的確な指導であるとの評価を得た。
(3)近畿附属小学校連合会家庭科支部役員としての教育研究	平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月	役員として家庭科教育に関しての成果と課題を毎年分析し、他の附属校との意見交流を図る中で、PDCA サイクルを積極的に行い、研究会の成功に尽力した。
(4)大阪府家庭科教育研究会家庭科部会役員としての教育研究	平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月	平成 21 年から家庭科部会役員として、毎年実施される研究会の開催に向けて会長の指示のもと連絡調整を綿密に行い、教員の希望アンケートを集約し講師の選出など研究会の成功へと尽力した。
(5)大阪府家庭科研究会役員	平成 21 年 4 月～平成 26 年 3 月	役員として研究会開催に向けて関係機関と研究目的について検討し、会の成功に尽力した。また、日ごろの家庭科学習の取り組みを他市と情報交換する会を行い、池田市の家庭科教育の発展に尽力している。
(6)池田市家庭科教科書採択委員	平成 26 年度	池田市教育委員会からの委嘱により、平成 27 年度からの使用となる家庭科教科書採択委員として、教科書の採択を行った。各社の教科書の特徴を分析し、特に児童の実態を鑑みて採択することができた。
(7)池田市家庭科研究協議会指導助言者	平成 28 年度～29 年度	池田市家庭科研究協議会指導助言者として、池田市の家庭科教育担当者に授業づくりのポイントや教材について助言した。特に 27 年 10 月に大阪府家庭科教育研究会において池田市から授業代表者を選出し授業提案した際は、消費者教育の授業の在り方について助言し、池田市の家庭科教育の発展に尽力した。研究会所属教員並びに授業代表者所属長から、的確な指導により提案性のある授業が出来たとの評価を得た。
(8) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「基礎ゼミナールⅠ」におけるアドバイザーとして学生支援	平成 28 年度	1 回生のアドバイザーとして、年 3 回の面談および適宜個別指導を実施し、大学生活に順応できるよう支援し、学生の主体的な学びの実現に向けて尽力した。

(9) 「奈良学GT担当者」として、1期生教職志望学生の学生支援	平成 28～29 年度	1 期生教職志望学生を対象とした「奈良学GT」担当者として、担当者間で連携を図りながら学習会の計画・運営、面談等を実施し、学生支援を行ってきた。各学生の実態把握と適切な指導を心掛けるとともに、各自治体の動向を分析し、個々に応じた教採対策計画の相談に応じるなど、全体と個別指導を適宜行ってきた。
(10)奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「基礎ゼミナールⅡ」におけるアドバイザーとして学生支援	平成 29 年度	2 回生のアドバイザーとして、年 3 回の面談および適宜個別指導を実施し、単位履修や学修計画、生活指導など、大学生活全般に関わる指導を行い、学生の主体的な学びの実現に向けて尽力した。
(11)奈良学園大学人間教育学部人間教育学科中国人留学生指導	平成 29 年度	平成 29 年度入学の中国人留学生指導担当として、日本と中国の食に関する比較から、地理的、文化的背景による食の相違点を見出し、分析・考察し、論文作成までの指導を行った。論文発表会において会場からは、食について多角的に研究を進めているとの評価を得ることが出来た。当該学生は、本研究を通して中国と日本の食に対する知見を深めることが出来たとともに、更なる研究を目指して今後中国での大学院進学を視野に入れており、研究への意欲喚起を図ることが出来た。
(12)「人間教育力開発演習Ⅲ」において教職志望学生を対象に指導	平成 29 年度～現在に至る	教職志望者を対象に教員に必要な資質・能力の育成を図ることを目的に、教育課題や教育指針等法規に基づいた取り組みの現状などを提示するとともに、学生個々が設定した課題の解決に向けて講義を進めた。学生からは、本講義受講により、教職志望の意思が確固たるものとなったことに加え、教員に必要な資質・能力を深く理解することができたとの評価を得ることが出来た。
(13) 兵庫教育文化研究所協力研究所員	平成 29 年度～現在に至る	兵庫教育文化研究所協力研究所員として、家庭科・技術家庭科部会における、家庭科教育の授業構築に関するアドバイザー業務に従事した。
(14)「奈良学GT主担当者」として、3期生教職志望学生の学生支援	平成 29 年度～現在に至る	3 期生教職志望学生を対象とした「奈良学GT」主担当者として、キャリアセンターと連携を図りながら学習会の計画・運営、面談、業者との打ち合わせ等を実施し、学生支援を行ってきた。各学生の実態把握と適切な指導を心掛けるとともに、個々に応じた教採対策計画の相談に応じるなど、全体と個別指導を適宜行ってきた。このことから、学生の学修意欲向上を図ることができ、模試等において成果が表れており、学生自身が課題に向き合い、取り組む力を育てる教育効果を上げることが出来た。
(15) 奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「基礎ゼミナールⅡ」におけるアドバイザーとして学生支援	平成 30 年度	2 回生のアドバイザーとして、年 3 回の面談および適宜個別指導を実施し、単位履修や学修計画、生活指導など、大学生活全般に関わる指導を行い、学生の主体的な学びの実現に向けて尽力した。

(16)三宅町フードフェスティバル実行委員	平成 30 年度～現在に至る	三宅町主催のフードフェスティバルの実行委員として、会の企画・運営について助言を行いアドバイザー業務に従事した。
(17)関西大学文学部における教育実績	平成 30 年度～現在に至る	関西大学文学部における家庭科教育法として、小学校における主体的・対話的で深い学びを実現するための家庭科指導の在り方について授業を行った。家庭科教育における指導計画の作成及び内容の取扱いについて、学習指導要領に則り学生の理解度を随時把握しながら進めることを心掛けた。また、毎時リフレクションシートに体得した学びと課題、疑問点等を記入させ、全学生が指導者としての知識・技能を身に付けられるようにし、自身の授業評価と改善を行った。その結果、学生からは、小学校家庭科教育の目的と教育方法が明確となったと高評価を得ることが出来た。
5　その他 特記事項なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1．免許・資格 (1)小学校教諭一種免許 (2)幼稚園教諭一種免許 (3)食育インストラクター2 級 (4)応急手当普及員 (5)小学校教諭専修免許	 平成 7 年 3 月 平成 7 年 3 月 平成 22 年 9 月 平成 22 年 8 月 平成 28 年 3 月	 平 6 小一第 794 号（兵庫県教育委員会） 平 6 幼一第 368 号（兵庫県教育委員会） DP-0900856 第　F4056006 平 28 小専第 16 号（大阪府教育委員会）
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者について特記事項 (1)「食育研修会及び公開授業」研修会の指導助言 会場：池田市立石橋南小学校 対象：池田市栄養士・調理師・教職員 15 人	平成 20 年 8 月	平成 18 年度に作成した食育カリキュラムに基づき栄養士と担任が共同で、公開授業を行った。授業内容は栄養の 3 要素を具体的な給食の献立の中で、確認するものだった。何気なく食べている給食を、食育の観点で意識化させる必要性を助言した。
(2)協同出版教員採用試験対策講座講師【1 回目】 会場：大阪府社会福祉会館 対象：平成 22 年度採用試験受験者 50 人	平成 21 年 8 月	小学校教員採用試験に臨む受講生を対象に、教員採用試験合格を目的に対策講座の講師として講義した。特に教育基本法に述べられている、教職の意義や、それにふさわしい教員の姿について、実際の面接場面を想定して指導を行った。具体的な指導だと好評だった。
(3)「今求められている食育」 ＰＴＡ主宰における保護者対象教育講演会講師 会場：大阪教育大学附属池田小学校 対象；保護者、教職員 150 人	平成 22 年 6 月	大阪教育大学附属池田小学校の児童の食の実態調査結果をもとに、今求められている食育についての概要を全校保護者に向け講演を行った。レジメを用意し話した。講演会後のアンケートでは、児童の好き嫌いが減ったと感想が出て、児童の食生活の改善を図ることが出来た。

(4)協同出版教員採用試験対策講座講師 会場：大阪府社会福祉会館 対象：平成 22 年度採用試験受験者 50 人	平成 22 年 8 月	小学校教員採用試験に臨む受講生を対象に、教員採用試験合格を目的に対策講座の講師として講義した。模擬授業やロールプレーに対応できるように、学校現場で起きている実際の事例や、模擬授業における授業規律の必要性なども指導した。模擬授業の指導は、具体的だと好評だった。
(5)大阪府池田市教育委員会主催 ふくまる教志塾　講師 会場：池田市教育センター 対象：教員採用試験受験希望者	平成 24 年 7 月	池田市教育委員会主催の平成25年度教員採用試験突破を目指す大学生等を対象の講習講師を行った。採用試験に向けての学習法はじめ、家庭科など各教科授業づくりのポイント、保護者・児童への対応の仕方などを講義した。講習後のアンケートには、実際の小学校教員の生の声の影響は大きく、教職に対しての職務遂行能力の理解を促した。
(6)家庭科教育学会関西支部役員としての貢献	平成 24 年 8 月	日本家庭科教育学会第43回近畿地区会　大会を役員として成功させた。さらに西江本人も、実践・研究発表デザートのプレゼンを通して、望ましい消費者生活を提示した。
(7)大阪府豊能地区家庭科新任教員研修講師 会場：池田市立石橋南小学校 対象：平成 24 年度豊能地区新規採用教員	平成 24 年 8 月	平成 24 年度新規採用教員が対象の家庭科教育についての研修講師を行った。レジメを用い、家庭科の目的や、生涯学習での位置づけなどの学習指導要領の説明をした。また、45 分の授業の組み立て方を例示し、師範授業も行った。発問・板書・ノート指導・教材選定などを例示した。研修後のアンケートでは、教師の目線はじめ、言葉かけ、授業の組み立て方など参考にする要素が多いと評価を得た。
(8)「食卓を囲むことから始まる食育」 ＰＴＡ主宰における保護者対象教育講演会講師 会場：池田市立石橋南小学校 対象：池田市立石橋南小学校保護者 20 人	平成 26 年 10 月	孤食が取りざたされている現状を踏まえ、各家庭で会話をしながら食事をすることの意義と、身近にできる台所菜園についての講演を全校保護者向けにレジメを用意し行った。そして、今求められている食育についての概要を伝え、食を通しての人間形成について話をした。講演会後のアンケートでは、家族と食卓を囲むことの重要さに気付いたと感想が出て、保護者の食への関心を高めることができ一定の成果を生むことができた。
(9)池田市家庭科研究会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 5 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、小学生対象の消費者教育をどのように進めていく必要があるのかを講師として指導助言を行った。具体的な指導だと好評だった。
(10)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 6 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成及び発問や板書計画について具体的な指導を行った。消費者教育についての資料なども多種用意し、具体的な指導だと好評だった。

(11)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 7 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成及び発問や板書計画について具体的な指導を行った。
(12)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：池田市立五月丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 8 月	池田市家庭科教育研究会において、10 月に開催される大阪府家庭科研究会大会にむけての授業検討会の指導助言として、指導案の作成の最終調整を行うと共に、7 月に行われた授業のビデオ視聴による授業検討を行った。
(13)奈良学園大学オープンキャンパス模擬授業 会場：奈良学園大学 対象：オープンキャンパス参加高校生・保護者 30 名	平成 28 年 8 月 21 日	大学の講義を体験するオープンキャンパスにおいて、高校生・保護者を対象に節電を考える家庭科教育を行った。実感を伴った理解を図るため体験活動を取り入れた講義は、大学の講義に興味・関心を持つ一助となったとの感想が聞かれた。
(14)池田市家庭科研究協議会指導助言 会場：豊中市立東丘小学校 対象：池田市立小学校家庭科部会会員 20 名	平成 28 年 10 月	大阪府家庭科研究会大会において、5 月から行われてきた授業検討をもとに、小学校家庭科における消費者教育の授業実践を行った教員の指導助言を行った。
(15)食育講座 会場：三宅町立三宅小学校 対象：三宅町立三宅小学校保護者・教員 25 名 ・三宅町食育指導	平成 28 年 12 月	「小学生の体力向上に向けた食事のあり方」と題して、小学生に必要な栄養素を中心に、その適切な摂取方法や調理例を挙げ、保護者が家庭で行える食事のあり方について指導助言を行った。調理例や好き嫌いのある児童への対処の仕方など、無理なく行える食育として参会者に好評であった。
4　その他 特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書､学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1．「とごころ」創刊号	共著	平成 23 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5 判　全89 頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：松井典夫、岩井陽介、能川正人、原田朋哉、垣内幸太、西村恭美、土師尚美、西江なお子、坂下剛　他 7 名 本人担当部分:「実感を伴った理解へとつないでいくための手立て」(p58～62)を単著 小学校理科教育を例に挙げ、実感を伴った理解へと児童を導く授業法の研究をまとめた。 １．自然に親しませる。 ２．言語活動を充実させる。 ３．実験観察の仕方を工夫する。 ４．機器を活用する。 以上、児童に真の学びの場を用意し、実感を伴った理解へと導くための授業の在り方を研究実践として提案した。
2．「とごころ」第 3 号	共著	平成 24 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5 版　63 頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：佐々木靖、岩井陽介、垣内幸太、坂下剛、小林秀訓、升村誠志、井上伸一、樋口万太郎、荒川真一、西江なお子、　他 9 名 本人担当部分:「家庭科における言語活動」の実践（p44～45）を単著 家庭科における体験的な活動を通して言語活動を充実させる授業法の研究をまとめた。 １．児童の実態把握。 ２．グループワークでの学習。 ３．異学年交流。 ４．振り返り活動。 以上、体験的な活動を学習に効果的に組み込むことを通して、言語活動の充実が図れていくことを教育実践として提案した。
3.「とごころ」第 4 号	共著	平成 24 年 10 月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5 判　全 63 頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：松井典夫、岩井陽介、佐々木靖、加藤いつき、西江なお子、平野憲、津田一司、西田まなみ、孕石泰孝、井上伸一　他 7 名

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分:『「家でもやってみたい」と思える授業づくりを目指して』(ｐ50～53) を単著 家庭科での学びがその場だけではなく、家庭での実践へとつながるための授業法の研究をまとめた。 １．学ぶ楽しさを感じる授業展開の工夫。 ２．児童の実態に適した教材選択の必要性。 ３．意識化するためのアプローチとしての「見える化」の提案。 ４．客観的思考での課題に迫る授業のアプローチ法。 ５．データ分析による事実把握。 ６．学びを家庭実践へと生かす方法。 以上、学びが児童の意識に根を強くおろし、家庭での実践へと継続していく研究実践として提案した。また、家庭科教育が児童の自立の過程における役割についても論じた。
４.「教師も子どもも“楽しい”と思える授業づくり教職実践演習テキスト」	共著	平成 25 年 3 月	大阪教育大学	大阪教育大学における家庭科教育法の授業における教職実践演習に使用するテキストとして、執筆されたものである。 Ａ5 判　全 52 頁 編者：大本久美子 共著者：瀧野聡平、川口綾、昉那啓子、西江なお子 本人担当部分： １.「授業づくり・子どもとのかかわりのヒント」高学年児童との関わり方はじめ、家庭科授業の組み立て方の工夫や板書計画、教材研究方法、教室環境整備のポイントなど、教師を目指す学生の指針となるよう項目だてし、理論と実践をまとめた。 ２.「魅力的な家庭科の授業例」実際の教材を２つ提示して、学校で家庭科の授業で使いやすいようにポイントを述べた。 ①「かしこい消費者になろう　～家族の一員として、わたしにできること～」と題し、買い手と売り手の双方を経験しながら消費者としてのあるべき姿を学ぶ授業展開を述べた。 ②「快適な住まい方　～今の私にできること～」と題し、自分のまわりの環境に興味・関心を持ち、そこから課題を見つけ、快適という概念を自分なりに模索しよりよい環境を作り出すにはどうすればよいか考え、実行するという住環境を考える住環境について学ぶ授業展開を論じた。(ｐ18～24、ｐ40～45) を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.「家庭科におけるアクティブ・ラーニングへの試み」	単著	平成 27 年 12 月	株式会社 EPR 教育プロ 第 45 巻　第 27 号 通巻 1796 号	最新の教育情報や斬新な実践等をまとめ、教育関係者並びに児童・生徒の保護者を対象に広く告知するために執筆されたものである。 本人担当部分:「家庭科におけるアクティブ・ラーニング」（p 18～19）を単著 ①清掃意識の実態把握。 ②見える化の体験による概念砕き。 ③言語活動による意識化と共有化。 ④メタ認知を行う。 ⑤学びを深化する。 以上、小学校家庭科教育において住まいの授業をアクティブ・ラーニングの方法で行うことにより、児童が自分の課題と向き合い、家族の一員としての自覚を持って生活し、主体的に生活する力が育成されると仮説を立て、研究実践として提案した。
6．3 年目教師　勝負の学級づくり　－マンネリの毎日を脱却する極め付きの指導技術 56－	共著	平成 29 年 9 月	明治図書　授業力＆学級づくり研究会	小学校 3 年目までの教員を対象に、学級経営や授業づくりの基礎・基本を明確に解説した。 A5 判　全 126 頁 共著者：垣内幸太、樋口万太郎、日野英之、小林秀訓、西江なお子、他 20 名 本人担当部分： 1．「給食準備・後片付け」と題し、低学年でも安全で早く準備ができるよそい方や、おかわりの仕方について明確な数値で児童に指導することの重要性を解説した。 2．「給食指導の裏にある 3 つのねらい」では、安全・衛生面、社会性の構築、食文化への関心向上の 3 点の重要事項について解説した。 給食を単に昼食として捉えるのではなく、食育という指導の一つとしての位置づけについて述べ、教員の食への意識向上について論じた。（p 20～23）を単著
7.「とごころ」第 9 号	単著	平成 30 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校	大阪教育大学附属小学校の保護者や市民を対象にして、学校の方針を説明するために発行されたものである。 B5 判　全 62 頁 編者：大阪教育大学池田附属小学校教育研究部 共著者：樋口綾香、佐野洋平、吉田崇之、渡辺貴裕、西江なお子　他 13 名 本人担当部分:『「生活実践力」育成を目指した家庭科授業デザイン』（p 56～59）を単著

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「主体的・対話的で深い学びを」の実現に向けて、家庭科における授業デザインについて「生活実践力」育成に着目し授業法を述べた。次期学習指導要領解説家庭科編によると、家庭科教育の課題の一つは、家庭での実践に繋がっていないことであると挙げられている。そこで清掃学習における体験活動・交流活動・評価活動の往還により課題解決を図る生活実践力育成をめざした授業デザインを構築した。この学習を通して、実践前後における児童の取り組みと意識に変容が見られた。このことから、生活実践力育成における一つの取り組みとして体験・交流・評価活動の往還は有効であることが明らかとなった。
8.新指導要領準拠　小学校家庭科教育の基礎基本	単著	平成 30 年 9 月	株式会社 ERP	平成 31 年度実施の新学習指導要領に準拠し、小学校家庭科教育の変遷並びに指導計画の作成及び内容の取扱い、また、授業づくりについて、小学校教員を目指す学生や家庭科を初めて指導する教員を対象に作成したブックレットである。授業づくりの項目においては、児童を取り巻く状況を具体のデータを提示、分析し、必要な支援の在り方や授業構成について詳細に述べている。加えて、授業実践も適宜掲載し、授業づくりの在り方を解説した。本著は、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科「家庭科指導法」、関西大学文学部「家庭科教育法」において使用しているが、学生からは小学校家庭科の課題や児童の実態、及び指導案の書き方などが明確に分かると高評価を得ている。
9.指導要録記入文例集	共著	令和 2 年 1 月	株式会社文渓堂	学習指導要領改訂に伴い、通知表作成にも使用可能な学習指導要録の記入文例集として発行されたものである A4 判　全 160 頁 編者：株式会社文渓堂 共著者：今宮信吾、盛田恭平、長野順子、西江なお子　他 8 名 本人担当部分：「児童の特徴・特技、学校内外に関する諸事項等(低学年)」(p 42～45) を単著、「児童の特徴・特技、学校内外に関する諸事項等 (中学年)」(p 95～98) を単著、「家庭　第 5・6 学年」(p 114～115) を単著、「児童の特徴・特技、学校内外に関する諸事項等 (高学年)」(p 150～153) を単著 2017 年、学習指導要領が改訂され、育成すべき資質・能力の 3 つの柱が「知識及び技能」、「思考力、判断力、表現力」、「学びに向かう力、人間性等」とされ、それに伴い指導要録もこの資質・能力の達成状況を看取る観点として、「知識・技能」「思考・判断・表現」、

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				「主体的に学習に取り組む態度」の3巻点に整理された。これを受け、通知表にも活用できるよう「家庭」での記入例を具体的に示した。
10. 家庭科授業の理論と実践 持続可能な生活をつくる	共著	令和2年2月	あいり出版	学習指導要領改訂に伴い、「主体的・対話的で深い学び」の実現に向けた家庭科の授業の理論と実践をまとめ、授業に活用できるよう発行されたものである A5判　全286頁 編者：株式会社あいり出版 共著者：大本久美子、野田文子、鈴木真由子、加賀恵子、森田晋太朗、西江なお子　他7名 本人担当部分：「家庭での実践につなげる授業の工夫 -数値化、視覚化して実感を伴わせる-」（p160～166）を単著、「『特別の教科道徳』との教科横断的な『いのちの教育」～家庭科の可能性を探る～」（p242～249）を単著、 家庭科の課題の一つとして、家庭での実践に繋がらないという点が挙げられる。そこで、実感を伴った理解を促し実践へと結び付けるための手立てとして、電力を視覚化し節電行動につなげる教材を開発、授業提案を記した。また、特別の教科道徳との教科横断的な学習として動物のいのちに着目し、家庭科におけるいのちの教育の教材開発、授業提案を記した。
（学術論文等） 1.消費者教育における効果的な授業方法に関する研究	単著	平成22年8月	大阪教育大学附属池田小学校教育振興会　第16号 p83～86	食の安全が問われる現状を踏まえ、食品表示を見て商品を購入することの意義と必要性を考え、実践力へとつなげていく教材研究と授業法の検証の研究のまとめである。教材は、広告を考え、売り手側の心理に迫り、宣伝広告と食品表示の違いを知ることから、商品の本質を知ることの意義を考えさせる。そして、家族の一員として自分に出来ることを考え、実践へとつないでいく。成果として、売り手の立場で商品を見ることにより、商品をより深く観察することが出来ると同時に、今までの自身の商品選択の視点に気付き、これからの自分を意識することが出来るようになったことである。本研究を通して、児童が家庭で家族の安心・安全を守るために食材選定のポイントを提案したり、実際に買い物場面で学びを生かした発言をしたりしたという保護者の報告を受け、一定の成果を得ることが出来た。この実践を本著により、消費者教育における効果的な授業方法に関する研究として発信した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
２．快適な住まい方 ～今の私にできること～	単著	平成 24 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校 研究紀要 p101,102	まわりを取り巻く環境に興味・関心を抱き、課題点を見出し、改善するための方策を考え、自分に出来ることをみつけ実践する力を養うことをねらいとした授業実践と理論の記録である。授業では「快適」の定義を児童個々にイメージさせ定義づけし、めざす快適像を確立させる。そしてそれにむかうためにどのようなアプローチを踏めば実現可能となるのかを検証させ、実践へとつないだ。この学びを生かして冬場の教室内における空気の循環を効率よく行うよう窓の開け方を工夫したり、臭いや色彩といったものに着目したりしてより快適な環境づくりに励み、家庭でも実践したことを保護者から報告を受けた。住生活における「快適」の定義を理解し、その環境を創造するための研究である。
３.私は我が家の節電大臣 ～今の私にできること～	単著	平成 24 年 11 月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 p50～53	節電という言葉をメディア等で目にするものの、何をどれだけ行えばよいかが分からないままでは、継続した節電は難しい。しかし、節電は現在の日本の重要課題と言っても過言ではなく、その意義を知り意識して取り組むことが出来る児童を育てることが必要である。そこで、節電の今ある課題を見出し、節電に繋がる様々な方策を考え、自分にできることを見つけ、実践する力を養うことをねらいとして授業を実践したまとめである。 労力と電気の関係を実感するため、自転車発電機で実際に発電させる。また待機電力を測定し、その電力を年間に換算してどれほどの節電に繋がるのかをデータ化する。こうした実際に体を動かしたり数値化したりするなど様々な「見える化」のアプローチを経て、節電を実感させた。この学びから児童は校内の待機電力を省き、無駄な電気の消灯などに積極的に取り組むとともに、家庭でも実践を続け、一定の成果を得ることができた。
４.私は我が家のコーディネーター　～「見える化」をめざした家庭科の授業～	単著	平成 25 年 2 月	大阪教育大学附属池田小学校研究紀要 p50～51	「汚れが見えていない＝清潔」という既成概念を覆し、清掃の在り方を見直し、清掃の意義を考え実践につないでいく授業の理論と実践のまとめである。ドアノブや電気スイッチなど不特定多数の人が触れる場所や、一見きれいに見える壁や机まわりなどにも、拭いきれていない汚れが付着していることを光線の特殊なブラックライトを用いて照射し「見える化」する。それが人体に与える影響を考え、「きれいなはず」という意識を覆し、見えない汚れを取り除き、気持ちの良い環境づくりが実現する方策を考えさえる授業記録である。実際に自分の身近な物を雑巾等で拭い汚れを実感させることで、そ

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				の後の清掃態度が激変すると同時に家庭でも掃除機での掃除のみならず、拭き掃除も取り入れたという報告を保護者から受け、学びが家庭での実践に繋がり一定の成果を得ることができた。 住環境の汚れに対し、意識下から意識化へと児童を変容させる適切な指導法の研究を発信した。
５.ビブリオバトル～読んで聞いて話して～	単著	平成 27 年 2 月	池田市立石橋南小学校研究紀要 p19～20	国語科でビブリオバトルというゲームの要素を持つ書評を行い、読む力・話す力・聞く力を身につけさせる指導法の在り方を研究した。初めは本の概要を説明する際、下書きをして読む練習を重ねていた児童も、回を重ねるうちに原稿を読むことなく与えられた時間内で、要点をつかみ聞き手に分かりやすく話すことができるようになった。また、聞く側も何を質問すればよいのか視点を絞りながらメモを取ることができるまでの力をつけることができた。この活動を通して聞く力と話す力、読む力を育てることができ、他の様々な場面でもその力を活用することができるようになり、成果を得ることができた。
６．内面に働きかける小学校家庭科教育 ―意味ある体験活動を通して― 【査読付き】	単著	平成 27 年 12 月	人間教育学会 人間教育学研究第３号 p123～132	体験活動を積極的に取り入れることにより、児童が自分の課題と向き合い、家族の一員としての自覚を持って生活し、主体的に生活する力が育成されると仮説を立てて、家庭科教育の授業実践を行ったまとめである。 実践１：品質表示に注目する意義を体験活動を通して児童に意味づけし、家庭生活で実践することにより主体的な生活者の育成を目的として行った。 実践２：身近な活動であるにも関わらず、児童の興味・関心が低く積極的な取り組みが継続されにくい清掃活動の学習において、快適な環境とはどのようなものかを実感させ、家庭での実践へとつないでいくことを目的として行った。見える化の活動や、消費者と売り手の両者の視点を経験させ、実感を伴った理解へと導く活動など、いずれも体験活動を通して児童の概念砕きを行った結果、児童の学習意欲の喚起につながり、自ら調査・分析したり、新たな課題を見つけそれを解決する方法を模索したりするなど、まさに学びの過程である「感覚→思考→実践」を一連の学習の中で行い、学びを深化させていくことができる、適切な指導法の研究を発信した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.他社との出会いによる自己変成	単著	平成 28 年 3 月	大阪教育大学実践学校教育講座　実践教育学論集 2015　―現代の教育問題を考える 20― 特集：◇私を変容に導いた受的「経験」 p42～45	自分自身を変容へと導いた受苦的経験を高橋橋勝の理論に基づいてメタモルフォーゼする過程とその要因について分析した。本分析をもとに、教員の在り方について考察した。
8.生活実践力の育成を目指した小学校家庭科モデル開発に関する研究　―実感を伴った理解へと導く体験活動を通して―	単著	平成 28 年 12 月	奈良学園大学研究紀要 第 4 号 p133～139	小学校家庭科教育における課題の一つとして、学習した知識や技術などが実生活で十分に活かされていないことが挙げられる。そこで、学びを生活の中で継続して実行し、生活をよりよくしようとする態度や技能を「生活実践力」と定義づけ、授業での学びを生活実践力に結び付けていくモデル開発を行い、体験活動による動機づけの教育的な効果について論じた。
9.「生活実践力の育成による人間教育　―家庭科授業モデルの構築―」 【査読付き】	単著	平成 28 年 12 月	人間教育学会 人間教育学研究 第 4 号 p107～114	小学校家庭科において、生活実践力を図るうえで重要な要素である体験、交流、評価についてそれぞれ検証し、その意義をまとめると共に、それら三つの往還による生活実践力向上を図る授業モデルを開発し、その有効性を検証した。
10.「生活実践力を高める小学校家庭科のプログラム開発　―「体験・交流・評価」の往還を手がかりにして―」 （修士論文）	単著	平成 29 年 2 月	大阪教育大学大学院　実践教学校教育専攻 修士論文	「実践力を高める小学校家庭科教育のモデル開発　～家庭での実習を組み込んだ『ふり返り活動』の実践を手掛かりにして～」という研究テーマに沿って、家庭科教育の課題の一つである「実践力」を育成するための手立てを実践研究したまとめである。清掃学習に振り返り活動と家庭での学習を移動計画に組み込むことにより、継続した実践が行われた結果を分析し、実践力を高める授業モデルを開発、提案する。 A4 判　142 頁
11.「家庭科における可視化を通した実践力育成に関する一考察」	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第 6 号 p 83～89	小学校家庭科において、可視化を授業に取り入れることにより実践力向上を図ることができるという仮説を立て、実践研究を行い、その成果と課題をまとめた。サーモグラフィーで体内の熱分布を、ルームランナーで電気を可視化し、節電の意義と必然性を実感を伴って理解させ、節電について考えさせた。本実践を通して節電が児童の生活で日常化する成果が見られ、可視化の有効性を検証することが出来た。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１２.「家庭科における見えない汚れを可視化する掃除学習の有効性」	単著	平成 30 年 6 月	奈良学園大学学術雑誌論文 1 巻第 4 号 P113~121	家庭科の目標の一つは実践力を身に付けることであるが、掃除学習は定着に困難が見られる。そこで、定着を図ることを目的に、見えない汚れの可視化を図ることにより、日常の住まい方への関心を高め、住まい方に関する基礎的・基本的な知識及び技能を身に付け、快適な住まい方を考え工夫する能力を育成することができるという仮説を立て、授業モデルを作成し、その有効性を検証した。その結果、実践後一定期間経過後も緩やかな現象はあるものの、家庭において継続して掃除を実施する児童が確認できた。以上より、掃除学習に可視化を取り入れることは、児童の実践力向上に有効であることが明らかとなった。
１３.「動物介在・愛護を通して考える「いのちの教育」に関する文献研究」	単著	平成 30 年 9 月	奈良学園大学研究紀要 第 9 号 P127～136	家庭科におけるいのちの教育の研究及び実践事例を調査すると共に、学校現場や学校現場外における動物介在教育や動物愛護教育についての研究及び実践事例を概観することを目的とした。関連する文献を検索したところ 20 件が抽出され、内容を整理した。家庭科におけるいのちの教育は保育領域や食と関連付けているものが多いことが明らかとなった。また、動物介在教育は学校において実践する際には、十分な知見や教員間の共通理解と共に、専門家の助言を取り入れる必要があること、また動物愛護教育の実践事例及び研究は数少なく、行政が中心となって取り組んでいることが明らかとなった。
１４.「家庭科を基盤とした教科横断的な防災教育の検討―家庭科における防災教育に関する文献研究を通して―」【査読付き】	単著	平成 32 年 3 月	日本人間教育学会 人間教育学研究第6号	本研究は、小・中・高等学校の家庭科における防災教育の取り組みの実態を文献調査した。すると、小学校では「食分野」での防災食が見られた他は見当たらず、中学校では「食分野」に加え「住分野」が、高等学校では環境教育と関連付けた実践が見られた。以上から、家庭科における防災教育内容には偏りがあることが明らかとなった。しかし、防災・減災は衣食住に直結しており、家庭科教育を基盤として防災教育の目標である「日常生活の様々な場面で発生する災害の危険を理解し、安全な行動ができるようにするとともに、他の人々の安全にも気配りできる児童の育成を目指す」ことが出来ると仮説を立て授業モデルを立案することが、今後の課題とした。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
１５.「家庭科を基盤とした教科横断的な防災教育の研究児童の防災意識調査」	単著	平成 32 年 4 月	奈良学園大学研究紀要オンラインジャーナル人間教育　第 2 巻第 2 号 P83～92	防災への意識向上を図るには、教育が大きな使命を担っており、特に地域のコミュニティーとしての役割が強い小学校において防災教育を実施することは、地域内連携促進において有効であると仮説を立てた。その際、防災教育の目的を考慮すると、家族と家庭生活が学習の対象であり衣食住や消費、環境を学習内容とする家庭科に防災教育を取り入れる意義は大きいと考えた。そこで、児童を対象に防災に関する意識調査を行った結果、「正しく恐れて正しく備える」ことの必要性を児童に気付かせることが防災教育の課題の一つであり、そのためには地域住民との連携や教科横断的学習、防災科学技術のコンテンツの有効活用等を防災教育に位置づけ、児童の防災意識向上を図る必要があることが明らかとなった。
１６.「小学校における教科横断的な「いのちの教育」－　動物のいのちを軸に据えた教材の開発　－」【査読付き】	単著	令和 2 年 3 月	日本家庭科教育学会近畿地区 50 周年記念誌	総合的な学習の時間、家庭科の教科横断的な授業を開発し、「いのちの教育」が、1）児童のいのちに対する意識にどのよう影響を与えるか、2）自分自身を大切に思う意識や、誰かの役に立っているという意識を児童に育ませることができるか、の 2 点を検証した。授業では、児童の身近な動物のいのちについて学び、様々な体験活動を積み重ねることによっていのちを実感し、いのちを自分事として捉えさせた。その結果、家族とのいのちについての会話の増加、いのちが唯一無二であることの理解、自分を大切な存在だと思う意識の向上、いのちに関して自分にできることを考え実行する実践力の育成、の 4 点が成果として得られた。
（その他） 「依頼原稿等」 １.小学生夏休みの家庭学習用教材編集	単著	平成 22 年 4 月～平成 24 年 4 月	（株）文溪堂	事前に児童の実態調査を行い、長期休暇に行うべき学習課題を明確化し、各教科ごとの重要項目を簡潔にまとめ、児童のつまづきやすい内容を吟味し、問題作成し教材作成会社文溪堂に提示した。小学校 1 年～6 年までの全学年の学習用教材の企画と編集に関わった。執筆者は池田附属小学校の各教科の教師である。西江は教材全体の構成と、各教科等のバランスを調整校正を担当した。 Ａ4 判　p14～18

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.保護者対象教育講演会資料冊子 「今求められている食育」	単著	平成 22 年 6 月	大阪教育大学池田附属小学校 PTA 主催	大阪教育大学池田附属小学校 PTA を対象に、孤食が取りざたされている現状を踏まえ、各家庭で会話をしながら食事をすることの意義と、身近にできる台所菜園についての講演を全校保護者向け行った際の資料であり、今求められている食育についてアンケート結果を盛り込みながらまとめた。 A4 判　6 頁
3.大阪府豊能地区新規採用家庭科教員研修会 資料冊子	単著	平成 24 年 8 月	豊能地区教育委員会 大阪教育大学附属池田小学校家庭科教育部会	平成 24 年度新規採用教員が対象の家庭科教育についての研修講師を行った。その際、家庭科教育の目的や生涯学習での位置づけなどの学習指導要領の説明を行う際の小冊子を作成し、それをもとに講義を行った。また、45 分の授業の組み立て方を例示し、師範授業も行い、発問・板書・ノート指導・教材選定の仕方などを例示した。 A4 判　6 頁
4.「第八回シンポジウム『アクティブラーニングを通して考える道徳をどうすすめるか』」	単著	平成 29 年 2 月	株式会社 EPR 教育プロ 第 47 巻　第 4 号 通巻 1829 号	平成 29 年 1 月 22 日開催の「いのちの教育研究会　第 8 回シンポジウム」におけるリポートを執筆した。アクティブラーニングを通して考える道徳をどうすすめるかをテーマに、基調提案・講演が行われ、それを受けて「子どもが命の大切さを実感するには」をテーマとして、グループ討議を行われたが、そこでの参会者の声やアンケート結果をもとに、いのちの教育についてまとめた。P8～9
「学会発表等」 1．デザートのプレゼンを通して、望ましい消費者生活を考えた　授業実践	―	平成 24 年 8 月	平成 24 年度日本家庭科教育学会第 43 回近畿地区会　実践・研究発表抄録（p 4） (大阪府、兵庫教育大学大学院連合学校教育学研究科大阪サテライト)	類似品が数多く並ぶ中、商品に記載されている多種多様な情報を見極め、必要とする商品を購入する力は、食品の安全がとりざたされている昨今、児童にとっても必要不可欠な力である。食品表示は食品の重要な情報であり、これを見て購入する習慣をつけることは、自分や家族の健康を守る上で大切なことである。本題材は、意識的に商品を見る姿勢を児童に芽生えさせ情報を取捨選択する力をつけさせることを目的として行い、この実践と支える理論を学会で発表した。 A4 判　p 4
2.生活実践力の向上を図る小学校家庭科教育のプログラム	―	平成 29 年 3 月	日本教師学学会第 18 回大会 実践研究発表	小学校家庭科教育の課題として、学習内容が定着しておらず実生活で活かされていないことが挙げられる。そこで、実践力を体験活動・評価活動・交流活動の往還によって育成することが出来るという仮説を立て、実践モデルを開発し、その成果と課題を発表した。 A4 判　p8

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.小学校家庭科における生活実践力育成の授業モデル構想	―	平成 29 年 8 月	日本家庭科教育学会近畿地区会研究発表	小学校家庭科における課題の一つとして学習した知識や技術などが実生活で十分生かされていないことを文部科学省は指摘している。この現状を受け、児童の生活実践力の育成を図る授業モデルを構想し、研究実践を行い成果と課題を発表した。 A4 判　p9
（取材） 1．家庭科における「いのちの教育」の取り組みについて	―	平成 30 年 11 月	朝日新聞社（北摂 13 版）	家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」の可能性を探り、その有効性の実証に向けの実践が、朝日新聞社に取材を受け発信された。本研究により、動物のいのちについて考えることにより、児童のいのちに対する意識が大きく変容することが明らかとなった。また、保護者、地域住民、児童が一堂に会し、いのちについて考え、語ることの意義も見出すことができ、その有効性を新聞により広く告知された。（池田市立石橋南小学校）
2．家庭科における「いのちの教育」の取り組みについて	―	平成 30 年 11 月	ケーブルテレビ（大阪北摂版）	家庭科を基盤とした教科横断的な「いのちの教育」の可能性を探り、その有効性の実証に向けの実践が、ケーブルテレビ（大阪北摂版）に取材を受け発信された。会場には地域住民、保護者、児童計約 200 名が集まり、映画「犬に名前をつける日」を鑑賞、その後、NPO 法人「犬猫みなしご救援隊」代表中谷百合氏、映画監督山田あかね氏の講演を聞き、いのちについて考えた。授業後、本研究の趣旨並びに授業についての取材を受け、いのちの教育についての取り組み、児童の変容を語った。以上から、いのちの教育への関心の高さと必要性を実感するとともに、本研究の有効性を検証することが出来た。 （池田市立石橋南小学校）
3．保護者と歩む情報誌 Partner	―	平成 30 年 12 月	ブンブンどりむ	家庭における「お手伝い」の意義と、児童の「お手伝い」への意識改革について取材を受けた。小学校における今までの実践事例をもとに、主体的・能動的な活動へと導く工夫として、汚れの視覚化やゲーム性の導入、フィードバックと称賛など、家庭で実践可能な取り組みを多く紹介した。加えて、小学校教員志望学生への、家庭科指導法における「家庭の仕事」の分野の授業法についても触れ、家庭と学校の連携の必要性も述べた。以上より、情報誌作成者からは、具体的で明確な事例であり、実践可能であると高評価を得ることが出来た。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
４．「いのちの教育」の取り組みについて	―	令和元年８月 15 日	朝日新聞社（北摂 14 版）	犬や猫の殺処分問題を取り上げ、いのちについて学ぶ教育について研究している。その一環として、募金活動を課外活動に位置付け、その様子について取材を受けた。募金活動の趣旨や児童の取り組み等について触れるとともに、いのちについて児童が真摯に向き合い学ぶ姿勢について述べ、「いのちの教育」の重要性を伝えた。（池田市立石橋南小学校）

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名　正木　友則

研　究　分　野	研究内容のキーワード
教育学、教科教育学	国語科教育法、学習方法、発達

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 教育・学習活動支援センター窓口における学習相談（創価大学）	平成 24 年 4 月～平成 25 年 3 月	相談窓口において、学習と部活や通学、アルバイト等との両立や「学習・読書の方法」「ノートの取り方」といった学習方法についてのコーチングを中心とした支援を行った。とりわけ初年次の学生は高校とのギャップに戸惑うことが多く、初年次の早い段階で解消することが重要であるため、「学習方法」「生活」「ライティング」に関するセミナーを昼休みと授業後の時間帯に開講した。「大学での学び」が充実するように願い、学生支援に携わった。（創価大学教育・学習活動支援センター(CETL)においての実践）
2　作成した教科書，教材 (1)『物語の「脇役」から迫る全員が考えたくなるしかける発問 36』(平成 28 年、東洋館出版社)（再掲）	平成 28 年度 平成 29 年度	帝京平成大学「児童文学」で使用 創価大学「国語科教育」で使用 従来とは異なり「脇役」に焦点を当て、心情を直接問わない「しかける」発問により、文学教材の新たな学習指導の可能性を示した。
(2)『「判断のしかけ」を取り入れた小学校国語科の学習課題 48』（平成 28 年、明治図書）（再掲）	平成 29 年度	創価大学「国語科教育」で使用 判断で仕掛ける学習課題によって、主体的・対話的で深い学びを促す方法や考え方を、文学・説明文教材を用い、具体的に提示した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1) 環太平洋大学採用時の学部長評価	平成 25 年度	創価大学教育・学習活動支援センターにて初年次教育に携わっていることと教科教育法（国語）の業績を有していることを評価され採用。
(2) 学生による授業評価アンケート （環太平洋大学：平成 25 年度）	平成 25 年度	環太平洋大学における授業評価 「日本語表現Ⅱ」×3 クラス 学生満足度平均評定（3.7／4 段階評価） 「言葉の理解」×2 クラス 学生満足度平均評定（3.6／4 段階評価）
(3) 帝京平成大学採用時の学科長及び学部長評価	平成 27 年度	創価大学教育・学習活動支援センターにて初年次教育に携わったこと、環太平洋大学にて教員採用試験対策に携わっていること、教科教育法（国語）と幼稚園教育要領（言葉）に関する科目を担当できる業績を有していることの三点を特に評価され採用。
(4) 学生による授業評価アンケート （創価大学：平成 27 年度）	平成 27 年度	創価大学文学部（非常勤講師）における授業評価 「国語科教育法Ⅰ」 学生による学習能動性平均評定（4.92／5 段階評価）
(5) 奈良学園大学採用時の学部長評価	平成 30 年度	学校現場に立脚した実践および理論研究の業績を有していること、教科教育法（国語）を担当する能力を有することの二点を特に評価され採用。

(6) 奈良学園大学における教育実績	平成 30 年度	「国語科教育法Ⅰ～Ⅳ」「教育実習Ⅰ」「教育実習事前事後指導」「教職実践演習」「教育方法・技術論（初等）」「教育方法・技術論（中等）」「ことばとコミュニケーション」の担当については、平成 31 年 3 月に教職課程認定審査に合格。「子どもと言葉」の担当については、平成 31 年 3 月に指定保育士養成施設教員審査に合格。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 (1) ライティング支援（創価大学）	平成 24 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	学生の大半は、文章を書くことが苦手である。そのため、学生が自主的に補習できるよう、「レポートの書き方」に関するセミナーを昼休みと授業後に開講し、さらに、「レポート診断」と呼ばれるサービスを行った。 教員が添削するのではなく、学生が「なぜそこを修正すべきか」を考える機会を提供した。さらに、初年次の学生の「書く力」の実態を見極めるテストを開発し、結果分析することで、新たな支援の戦略を練った。
5　その他 (1) 教職課程認定大学実地調査 （文科省による授業見学）	平成 25 年 7 月	教職課程認定大学実地調査において、「国語科教育法」の第 15 回目の授業の見学指定を受けた。
(2) 東京国語教育探究の会 第 6 回国語教育実践研究大会 ワークショップ（説明文）講師	平成 25 年 8 月 1 日	「説明文教材を意欲的に読む学習の実際―『筆者を読む』学習の具体を通して―」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
(3) 国語教育探究の会・中国支部 第 19 回国語教育実践研究大会 ワークショップ（説明文）講師	平成 26 年 8 月 3 日	「説明文学習が好きになる！―主体的に思考・表現する『自然のかくし絵』（東書 3 年）の授業―」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
(3) 名古屋国語教育探究の会発起人会 講師	平成 27 年 6 月 20 日	「説明文教材で、学習者に「判断」をうながす「しかけ」のバリエーション―『どうぶつ園のじゅうい』（M 社 2 年）を通して―」を主題として、発問のバリエーションについて提案を行った。
(4) 九州国語教育探究の会 第 6 回国語教育実践研究大会	平成 27 年 8 月 19 日	「『思考をゆさぶる』三つの『ゆさぶり』！―説明文教材『千年の釘にいどむ』を例に―」を主題に説明的文章のゆさぶり発問の意義についてワークショップを行った。
(5) 第 1 回文学・説明文のチャレンジセミナー ワークショップ（説明文）講師	平成 27 年 8 月 23 日	「『ゆさぶり』で仕掛ける説明文の学習指導―小学 3 年『こまを楽しむ』の実践を通して―」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
(6) 第 2 回文学・説明文のチャレンジセミナー ワークショップ（説明文）講師	平成 27 年 12 月 23 日	「『シンプル』に扱い、思考を『深める』説明的文章の学習」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
(7) 東京国語教育探究の会 第 9 回国語教育実践研究大会 ワークショップ（説明文）講師	平成 27 年 12 月 27 日	「説明文の学びをぐっと深める発問づくり」を主題に、発問づくりについて体験的な学びをめざし、ワークショップを行った。
(8) 第 3 回文学・説明文のチャレンジセミナー	平成 28 年 3 月 16 日	「３つの『力』を意識する説明文学習の具体―『宇宙時代を生きる』を通して―」を主題に、特に説明的文章の授業で育成したい力についての捉え直しを試み、ワークショップを行った。

(9) 小学校における校内研修指導助言（東京都八王子市立松枝小学校）	平成 29 年 4 月 27 日	「読み取る力をつける『説明文の指導』アクティブラーニングの指導―3 年教材「すがたをかえる大豆」等を通して―」と題し、校内研究を進めるための理論についてワークショップ形式で提案した。
(10) 小学校における校内授業研究指導助言（埼玉県鶴ヶ島市立藤小学校）	平成 29 年 6 月 8 日	主体的・対話的で深い学びを実現する学習指導の具体―『お手紙』を例に―」と題し、校内研究を進めるための理論についてワークショップ形式で提案した。
(11) 中国・国語教育探究の会 第 22 回国語教育実践研究大会 説明文分科会指導助言	平成 29 年 7 月 29 日	説明的文章教材「こまを楽しむ」の分科会提案において指導助言者を務めた。
(12) 名古屋・国語教育探究の会 第 2 回国語教育実践研究大会 ワークショップ（説明文）講師	平成 29 年 8 月 9 日	「主体的・対話的で深い学びを実現する説明文学習―小学校低学年教材の場合―」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
(13) 八王子市パワーアップ研修講師（東京都八王子市立松枝小学校）	平成 29 年 8 月 28 日	読み取る力をつける「説明文の指導」アクティブラーニングの指導―2 年教材「ビーバーの大工事」を例に―
(14) 小学校における校内研修講師（神奈川県小田原市立下曽我小学校）	平成 29 年 8 月 30 日	実践にいかせる指導法～学び合い、高め合うために～文学教材「お手紙」を例に
(15) 小学校における校内授業研究指導助言（東京都八王子市立上川口小学校）	平成 29 年 10 月 5 日	文学的文章教材「くじらぐも」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(16) 小学校における校内授業研究指導助言（埼玉県鶴ヶ島市立藤小学校）	平成 29 年 11 月 16 日	文学的文章教材「ごんぎつね」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(17) 小学校における校内授業研究指導助言（埼玉県鶴ヶ島市立藤小学校）	平成 29 年 12 月 7 日	説明的文章教材「しかけカードの作り方」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(18) 東京・国語教育探究の会 第 10 回国語教育実践研究大会 説明文分科会指導助言	平成 29 年 12 月 27 日	説明的文章教材「おにごっこ」の分科会提案において指導助言者を務めた。
(19) 小学校における校内授業研究指導助言（東京都八王子市立松枝小学校）	平成 30 年 1 月 18 日	文学的文章教材「海の命」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(20) 国語科授業上達セミナー ワークショップ（説明文）講師	平成 30 年 3 月 3 日	「言語生活に開く、説明的文章の授業づくり」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
(21) 小学校における校内授業研究指導助言（東京都八王子市立松枝小学校）	平成 30 年 6 月 27 日	説明的文章教材「時計の時間と心の時間」の授業研究において、指導助言者を務めた。
(22) 生駒郡教育研究会 国語部会（中学校の部）講師	平成 30 年 7 月 30 日	「主体的・対話的で深い学びをめざす授業づくりのポイント―中学校・文学教材『走れメロス』を例に―」を主題に、中学校の文学的文章教材の授業づくりについてワークショップを行った。
(23) 大阪・国語教育探究の会 第 25 回国語教育実践研究大会 説明文分科会指導助言	平成 30 年 8 月 8 日	説明的文章教材「時計の時間と心の時間」の分科会提案において指導助言者を務めた。

（24）九州・国語教育探究の会 第 9 回国語教育実践研究大会 実践提案指導助言	平成 30 年 8 月 10 日	中学校における実践提案「深い学びの実現をめざした国語科の授業～『読むこと』の実践を中心に～」の指導助言者を務めた。
（25）小学校における校内研修講師（神奈川県小田原市立下曽我小学校）	平成 30 年 8 月 23 日	「『みんなで学ぶ・みんなで創る』深い学びをめざす授業づくり―小学２年『ビーバーの大工事』を例に―」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
（26）八王子市パワーアップ研修講師（東京都八王子市立松枝小学校）	平成 30 年 8 月 24 日	「『物語』の本質に迫る！深い学びをめざす授業づくり―小学 4 年『ごんぎつね』を例に―」を主題として、文学的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
（27）小学校における校内授業研究指導助言（東京都八王子市立松枝小学校）	平成 30 年 9 月 13 日	説明的文章教材「うみのかくれんぼ」の授業研究において、指導助言者を務めた。
（28）小学校における校内授業研究指導助言（東京都八王子市立松枝小学校）	平成 30 年 10 月 26 日	文学的文章教材「ごんぎつね」の授業研究において、指導助言者を務めた。
（29）小学校における校内授業研究指導助言（奈良県大和郡山市立矢田小学校）	平成 30 年 11 月 14 日	「グラフや表を引用して書こう」の授業研究において、指導助言者を務めた。
（30）平成 29・30 年度八王子市研究指定校研究発表会 講演講師	平成 31 年 1 月 25 日	「深い学びを促すゆさぶり発問の工夫」を演題として、これからめざすべき「深い学び」を促すために、ゆさぶり発問の開発が重要であることを、ワークショップ形式で提案した。
（31）小学校における校内授業研究指導助言（奈良県大和郡山市立矢田小学校）	平成 31 年 1 月 30 日	「クラブ活動リーフレットを作ろう」の授業研究において、指導助言者を務めた。
（32）小学校における校内研修講師（奈良県大和郡山市立矢田小学校）	平成 31 年 3 月 6 日	「確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ子どもの育成～言語力の向上を図り、表現する楽しさを味わえる指導の在り方～」という研究主題に基づき、説明的文章における「読み」と「書き」の接続について、ワークショップ形式で提案した。
（33）小学校における校内授業研究指導助言（東京都町田市立鶴間小学校）	令和元年 5 月 29 日	説明的文章教材「笑うから楽しい」の授業研究において、指導助言者を務め、説明的文章教材の読むことの授業づくりにおいて求められることについて提案した。
（34）小学校における校内研修講師（奈良県大和郡山市立矢田小学校）	令和元年 6 月 26 日	「確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ子どもの育成～言語力の向上を図り、表現する楽しさを味わえる指導の在り方～」という研究主題に基づき、文学的文章教材「お手紙」における「読み」と「書き」の接続について提案した。
（35）小学校における校内研修講師（奈良県大和郡山市立矢田小学校）	令和元年 7 月 10 日	「確かな学力を身に付け、主体的に学ぶ子どもの育成～言語力の向上を図り、表現する楽しさを味わえる指導の在り方～」という研究主題に基づき、文学的文章教材「ごんぎつね」における「読み」と「書き」の接続について提案した。
（36）中国・国語教育探究の会 第 24 回国語教育実践研究大会 実践提案指導助言	令和元年 7 月 27 日	小学校における実践提案「子どもの主体を生み出す、必要感と思考ツールの活用」の指導助言者を務めた。
（37）名古屋・国語教育探究の会 第 4 回国語教育実践研究大会 ワークショップ（説明文）講師	令和元年 8 月 2 日	「説明文の探究的読みへ―読みの反応とゆさぶり発問―」を題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。

（38）大阪・国語教育探究の会 第 26 回国語教育実践研究大会 説明文分科会指導助言およびワークショップ（文学）講師	令和元年 8 月 5 日	説明的文章教材「あなのやくわり」の分科会提案についての指導助言を行った。また、「読解から探究的な学びへ―ゆさぶりを核として―」を題として、文学的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
（39）九州・国語教育探究の会 第 10 回国語教育実践研究大会 分科会指導助言	令和元年 8 月 9 日	中学校における実践提案「生徒が動き、生徒同士で思考する授業づくり」の指導助言者を務めた。
（40）小学校における校内研修講師（神奈川県小田原市立下府中小学校）	令和元年 8 月 28 日	「主体的に学ぶ子の育成～ともに学び合う国語科の授業を通して～」を主題として、説明的文章の授業づくりについてワークショップを行った。
（41）小学校における校内授業研究指導助言（東京都町田市立鶴間小学校）	令和元年 9 月 27 日	説明的文章教材「どうぶつ園のじゅうい」の授業研究において、指導助言者を務め、説明的文章教材の読むことの授業力形成のための研修を行った。
（42）国語教育探究の会 合同研究合宿 講演（広島県広島市 神田山荘）	令和元年 10 月 6 日	博士論文の概要と、その知見から導かれた「探究的な学び」への展開の手がかりになる「遊び」と「学び」の連携についての理論的な検討を行った。
（43）小学校における校内授業研究指導助言（東京都町田市立鶴間小学校）	令和元年 10 月 24 日	説明的文章教材「ウナギのなぞを追って」の授業研究において、指導助言者を務め、説明的文章教材の読むことの授業力形成のための研修を行った。
（44）大和郡山市指定研究発表会記念講演	令和元年 11 月 8 日	「学びを深めるためのゆさぶり発問と探究」を演題として、これからめざすべき「深い学び」すなわち「探究的な学び」を促すために、ゆさぶり発問の開発が重要であることを中心に講演した。
（45）小学校における校内授業研究指導助言（東京都町田市立鶴間小学校）	令和元年 11 月 15 日	説明的文章教材「天気を予想する」の授業研究において、指導助言者を務め、説明的文章教材の読むことの授業力形成のための研修を行った。
（46）東京・国語教育探究の会 第 12 回国語教育実践研究大会 説明文分科会 指導助言	令和元年 12 月 27 日	説明的文章教材「はたらくじどう車」の分科会提案についての指導助言を行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 （1）小学校教諭一種免許状	平成 22 年 3 月	東京都教育委員会平二一小一第一七〇〇号
（2）修士（教育学）	平成 24 年 3 月	「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―筆者概念の萌芽期を中心に―」（創価大学 修第二〇二号）
（3）博士（教育学）	平成 31 年 3 月	「『筆者』概念に着目した説明的文章の学習指導に関する研究」（広島大学 第 7816 号）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 （1）教職センターの運営業務 （帝京平成大学）	平成 28 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	「教職センター」において、実習先への依頼・実習中での巡回指導・実習後の謝礼手続きといった実習事務や、保育士・幼稚園教諭志望者への公務員試験対策講座（小論文）、大学内外に向けて発信する「教職センターニュース」（年 2 回発刊）の編集責任者としての取材・編集活動を行った。 また、大学内における教職課程委員会の委員、また、文部科学省から設置要請のある「教職センター」のあり方ワーキング・グループ委員を務めた。

(2) 教員採用試験対策講座の運営 (環太平洋大学)	平成 25 年 4 月 ～ 平成 27 年 3 月	2 年生以上で選抜試験を通過した学生は、教員採用試験突破を目的にした「大志会」と呼ばれる組織で、特に一般・教職教養を中心とした学習に取り組む。その学習支援を行った。また、東京都教育委員会主催の説明会に参加する「東京都バスツアー」の企画・運営も行った。 さらに、教員採用試験の模擬授業対策を見据えた「青年教師塾」と呼ばれる 2 年生以上の選抜組織で、国語科の教材研究・授業構想・指導技術力の育成のため、企画・運営に携わった。
(3) 初年次教育部の運営 (環太平洋大学)	平成 26 年 4 月 ～ 平成 27 年 3 月	初年次学生が抱える基礎学力の問題を解決する初年次教育部という組織において、きめ細やかな学習支援を行った。国語担当として、学力の把握、問題集の作成、毎週 2 コマ開かれる学習会の運営に携わった。 また、スポーツ推薦や AO 入試で合格した受験生に対し、入学前に学生同士の親睦を深めること、大学の教育指針を理解すること、現在の自分の学力状況を理解することを目的とした「入学前研修会」(1 泊 2 日) の企画・準備・運営を行った。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) (1) 「さけが大きくなるまで」(教育出版・小学 2 年・説明文教材)	共著	平成 24 年 4 月	長崎伸仁・石丸憲一・大石正廣編著『思考力・判断力・表現力を育てる文学・説明文の授業展開 低学年編』学事出版 pp. 126-127	「思考力・判断力・表現力」を育てるための、説明文教材「さけが大きくなるまで」(小学 2 年) の授業展開例の提案である。 授業の要点は、「さけが『大変だな』『すごいな』と思うところはどのようなところか」という問いを軸に、学習者が「さけ」と同化し、さけの一生 (産卵→誕生→成長→産卵…) をイメージ豊かに捉えるため、学習者が「さけ」と「インタビュアー」と分かれての対話活動を構想した。豊かな表現活動が期待される。松本佳子・正木友則 (p. 126 の単元構想を担当)
(2)「黄色いバケツ」(光村図書・小学 2 年・文学教材)	共著	平成 24 年 4 月	長崎伸仁・石丸憲一・大石正廣編著『思考力・判断力・表現力を育てる文学・説明文の授業展開 低学年版』学事出版 pp. 80-81	小学 2 年文学教材「黄色いバケツ」の授業展開である。キツネの期待感と不安感は、学習者が同化して読むことに適している。そこで、登場人物 (キツネ) の心情を直接問わず、自分の言葉で「思い」や「考え」を表現することで学習活動―他者の音読をどう聴いたかを交流する「読み声交流」とキツネの「絵日記」を書く―を設定した。キツネの行動に表れる心情への同化を促し「思考力・判断力・表現力」を楽しく育むことを目指している。吉岡奈緒・正木友則 (p. 80 の単元構想を担当)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(3)「ないた赤おに」（教育出版・小学2年・文学教材）	共著	平成24年4月	長崎伸仁・石丸憲一・大石正廣編著『思考力・判断力・表現力を育てる文学・説明文の授業展開 低学年版』学事出版 pp. 104-105	小学2年文学教材「ないた赤おに」の授業展開である。教材を横断的に捉える工夫として、「願いがかなったのに赤鬼はどうして泣いたのか」と問う。 そして、その「願いがかなったのに」という点をクローズアップさせるために、赤鬼の「願い」に寄り添う形で、「この先、物語がどうなってほしいか」という学習者自身の「願い」にも似た「考え」を持ち、先を予想しながら読むことで、「思考力・判断力・表現力」の育成を意図している。吉岡奈緒・正木友則（p. 104の単元構想を担当）
(4)「こわれた千の楽器」（東京書籍・小学4年・文学教材）	共著	平成24年4月	長崎伸仁・石丸憲一・大石正廣編著『思考力・判断力・表現力を育てる文学・説明文の授業展開 中学年版』学事出版 pp. 78-79	小学4年文学教材「こわれた千の楽器」の授業展開である。登場人物や会話文が多い特性から「他者の音読を自分はどのように聴くか」という「読み声交流」を行う。物語の行間や空白を補うための「挿話」を作る学習活動―①物語が始まる前の空白部分を考えて書くこと、②楽器たちが練習し、音楽を奏でるまでの空白を考えて書くことである。他者との交流や物語に「ひたる」ことを通して「思考力・判断力・表現力」の育成が期待される。鯨井文代・正木友則（p. 78の単元構想を担当）
(5)「説明的文章指導で『読解』と『表現』をつなぐ手立て―『筆者を読む』学習を中心に―」	単著	平成25年3月	長崎伸仁・吉川芳則・石丸憲一編著『読解と表現をつなぐ文学・説明文の授業』学事出版 pp. 98-101	小・中学校・高校段階までの説明的文章指導を視野に入れ、「読解」と「表現」をつなぐ手立てとして、「筆者を読む」学習活動に着目し、歴史的考察を加えた上で、「筆者を読む」学習指導を三つに類型化し、「読解」と「表現」がうまく連動するための諸要素を三点（ア：「『表現力』の育成までを見据える」イ：「筆者に対する「自分の考え」を持つ過程を設定する」、ウ：「『読解』過程の中で『表現』する場を設定する」）提起した。
(6)「『新たな学び』を支える『授業研究』のあり方を考える」	共著	平成25年5月	中洌正堯監修、吉川芳則・長崎伸仁・尾川佳己編著『新たな学びを支える国語の授業 下巻―思考力・判断力・表現力の育成を目ざして―』三省堂 pp. 122-127	授業研究において「『何を』『いかに』教えるか」「どう学んだか」の三者が機能するため、「教育方法・技術論」という視点から「学習指導論」「授業力（教材研究力・指導技術・板書・ノート指導・人間性等）」「学習方法論（学習内容・学習方法）」「単元の目標・本時の目標（学習指導案作成）」「学習者研究」と、授業研究の要素を構造化し、教員養成で「授業を『つくる』こと」と「授業を『ふりかえる』こと」の重要性を示した。 長崎伸仁・正木友則（pp. 123-125の第2節を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(7)「『鳥獣戯画』を読む」（光村図書 6 年）	共著	平成 28 年 6 月	長崎伸仁監修、石丸憲一・神部秀一・鯨井文代編著『アクティブ・ラーニングを取り入れた国語授業』東洋館出版社 pp. 114-121	「アクティブ・ラーニング」を説明的文章教材で実践化した記録である。教材「『鳥獣戯画』を読む」の特性を、筆者である高畑勲の述べ方や主張に見出し、いかに学習者が筆者に対して、意欲的・主体的に自分の考えを表現できることを重視した。絵に対する学習者の解釈を作った上で、筆者の解釈を学習者に出合わせ、学習者の解釈と筆者の解釈とを比較させるという学習活動を設定することで意欲的・主体的に学習を進めることができた。 高橋達哉・正木友則（pp. 114-115 の教材解釈とアクティブ・ラーニングへのポイントを担当）
(8)「おおきなかぶ」	共著	平成 28 年 8 月	長崎伸仁編著、長崎ゼミナール著『物語の「脇役」から迫る全員が考えたくなるしかける発問３６』東洋館出版社 pp. 42-49	「おおきなかぶ」では、「なぜまごは、犬を呼びに行ったのでしょうか？」と直接問うのではなく、「『ねことねずみ』はこのお話をどうおもしろくしたのでしょう？」と問う、また「引っ張る人は、どういう順番で変わっていったのでしょうか？」と直接問うのではなく、「もしねずみの時でもかぶが抜けなかったら、ねずみは誰を呼んできたと思いますか？」という、絵本の読み聞かせや学習指導における問いかけおよび発問の開発を試みた。 下村柚・宮西紀子・正木友則（pp. 43-44 の教材解釈部分を担当）
(9)『「判断のしかけ」を取り入れた小学校国語科の学習課題４８』	共編著	平成 28 年 12 月	明治図書	次期、学習指導要領の柱となる「アクティブラーニング」を機能させ、深い学びを実現するのか、という問いに対して、「良質な学習課題」をもって答えようとするのが本書の主眼である。小学校 1 年生から 6 年生まで、文学・説明文教材を網羅し、「判断」の仕掛けを取り入れた学習課題と、単元計画および授業内の教師と学習者のやりとりを示しながら、アクティブラーニング型授業を成功させるための具体的方法を理論とともに提案した。
(10)「説明文教材の学習課題とアクティブ・ラーニング」	単著	平成 28 年 12 月	中洌正堯監修、長崎伸仁・三津村正和・正木友則編著『「判断のしかけ」を取り入れた小学校国語科の学習課題４８』明治図書 pp. 72-77	松下佳代（2015）が「『外化のない内化』がうまく機能しないのと同じように、『内化のない外化』もうまく機能しない」（p. 9）と指摘することから、教科の領域（とりわけ説明文の学習指導）固有の「内化」や「外化」のあり方が検討される必要がある。 そこで、説明文の学習指導における「筆者」概念と「判断の仕掛け」を視座として「主体的・対話的で深い学び」を実現するための学習課題の要件と類型を示し、実践事例について検討した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(11)「読むことの授業過程における二つの『ゆさぶり発問』―『広げる』ゆさぶり発問と『深める』ゆさぶり発問―」	共著	平成 30 年 10 月	桂聖編著・N5 国語授業力研究会著『「めあて」と「まとめ」の授業が変わる 「Which 型課題」の国語授業』東洋館出版社 pp.112-120	近年では、「ゆさぶり発問」の「ゆさぶり性」ないし「否定性」を踏まえつつも、授業者が学習者の読み・解釈や認識・思考を「否定」する「ゆさぶり発問」のタイプではなく、新たなタイプの「ゆさぶり発問」が開発されるようになった。本稿では、新たな「ゆさぶり発問」のタイプに着目し、具体的な読むことの授業過程において、学習者の読みや思考を広げて、深めるための二つの「ゆさぶり発問」についての考え方を示した。
(学術論文) (1)「あまん作品の教材・学習材としての価値に迫る」	単著	平成 22 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 23 号 pp. 80-83	あまんきみこ氏の作品（「ちいちゃんのかげおくり」「おにたのぼうし」「白いぼうし」）の教材・学習材としての価値を、あまん氏の生い立ちや原体験を基にしながら「作家論」的に考察した。 あまん作品の教材・学習材としての価値は、①「読者に言葉のイメージや広がりを実感させる」②「多様な読みを保障し、他者との交流を促進する」要素が豊かなところにある。学習指導では言葉から広がる解釈やイメージを促すことが求められる。
(2)「表現力育成を見据えた説明的文章の教材研究試論―『筆者を読む』から表現活動へ―」	単著	平成 23 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 24 号 pp. 58-65	中学校・高校の説明文指導を見据え、表現力を育成するためには、「教材の特性」を生かしつつ、①表現する場を設定する、②表現する「内容」として学習者が「自分の考えをもつ」過程が必要になる。ここでは、中学校教材「モアイは語る―地球の未来」への接続を意識し「イースター島にはなぜ森林がないのか」（小 6）を例に、「筆者を読む」学習を仕掛けとして、表現活動へ連動するための教材研究の視点と学習活動の類型を提示した。
(3)「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―児童言語研究会・小松善之助の場合―」	共著	平成 24 年 3 月	創価大学教育学部『教育学論集』第 63 号 pp. 77-97	小松は、説明的文章指導研究が本格的に始まったとされる 1960 年代から、説明的文章が持つとされている客観性を否定し、説明的文章は「筆者の認識過程」という主観性が入るものとした。小松の論は、小学校から高校段階までの批判的読みの学習指導理論の礎となるものである。 1960 年代に、「筆者概念」に着目して「批判的読み」を提唱した点は評価できるが、批判の範囲を「筆者の認識」に拡大すると恣意的な想定になることに課題があった。長崎伸仁・正木友則（pp. 77-94 までの主な考察を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(4)「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―秋田喜三郎の場合―」	単著	平成 24 年 3 月	創価大学教育学会『創大教育研究』第 21 号 pp. 1-27	説明的文章指導における「筆者を読む」学習の淵源は、大正期の秋田喜三郎が提唱した「創作的読方教授」にあることを示した。 小・中学校、高校段階の国語の教材文の作者は、学習者に近い生活環境、背景を持つ人間であるという意識を学習者にもたせ、その教材文を「書き手」の立場から吟味させることで、読方と綴方との関連指導を意図している。読解と表現の接続のために「作者」という概念が大正期に出ていることを示すものである。
(5)「教育学研究と教科教育学研究の接点―国語科教育学と構成主義に立つ学習論を視座として―」	単著	平成 24 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 25 号 pp. 76-83	教育学と教科教育学との接点はどうあるべきかについて教育原論的に考察し教育方法やその指導技術について述べた。教育学では、構成主義的なアプローチから、学習者や学習の捉え直しが始まり、教科教育学においても、教育学の流れを汲み取り、構成主義に立つ学習論を導入しようという動きも見られる。教科教育学は「善くなろうとする学習者」という観点から、「授業」を中心に学問領域が相互に往還し合う関係が望ましいことを指摘した。
(6)「『教えること』と『学ぶこと』に関する検討―村井実の教育学を視座として―」	単著	平成 24 年 12 月	創価大学大学院紀要編集委員会『創価大学大学院紀要』 第 34 集 pp. 223-242	教育という営みを、「善くなろうとする人間をより善くしようとすること」と捉え、二項対立的に用いられる「教えること」や「学ぶこと（教えることの否定）」の統合の可能性を探るため、「教えて考えさせる授業」を提案する市川伸一と「学びの共同体」を提案する佐藤学の論考を比較、考察した。 結果、教育方法・技術論といった「授業」を構成する要素は、あくまでも「授業」という場を介して、教育学の各領域が統合される必要性を提案した。
(7)「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―『筆者想定法』論に見られる筆者概念を中心に―」	共著	平成 25 年 3 月	創価大学教育学部『教育学論集』 第 64 号 pp. 31-52	1970 年代に倉澤栄吉を中心に実践研究を進めた青国研と香国研が提唱した「筆者想定法」論に見られる「筆者概念」を考察した。「筆者想定法」は、主に中学校から高校段階での評論文や随想的文章で主に扱われ、学習効果が見出される実践理論といえる。 倉澤栄吉が提示した理論と青国研のメンバーによる実践との関係や、青国研と香国研の「筆者想定法」論やその具体の関係、また「筆者想定法」論が提起した有効性と問題点について論じた。 長崎伸仁・正木友則（pp. 31-48 の主な考察を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(8)「森田信義の『評価読み』に見られる筆者概念の検討」	単著	平成 25 年 3 月	創価大学教育学会『創大教育研究』第 22 号 pp. 15-33	説明的文章指導研究において、森田信義は、1980 年代から「筆者概念」に着目し、説明的文章の「内容」や「形式」に偏るのではなく、また、文章の内容を確認する読みだけでなく、「筆者の工夫を『評価』する「評価読み」を提唱した。批判的読みが重視される小学校から高校までの説明的文章指導研究では避けては通れないものとなっている「評価読み」に見られる「筆者概念」の変容（1984 年から 2011 年まで）とその意義について考察を行った。
(9)「説明的文章指導における『筆者を読む』学習指導論の検討―1990 年以降の論考を中心に―」	単著	平成 25 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 26 号 pp. 50-57	小・中学校、高校段階における説明的文章の「筆者を読む」学習指導の端緒は、主に 1980 年代とすることができ、その後 1990 年代から実に多様な実践が展開され、「筆者概念」に関する議論も多く行われるようになった。その 1990 年以降に提起された実践理論に関する論述―森田信義、長崎伸仁、河野順子、阿部昇、吉川芳則の五氏―を中心に、「筆者を読む」学習指導論という視点から、それぞれの立場や目標、考え方を四点から整理・考察し、教材研究や具体的な学習方法として類型化した。
(10)「NIE を取り入れた教育実践研究―大学 2 年生を対象にした時事教養 I の授業実践を通して―」	共著	平成 26 年 3 月	『平成 25 年度環太平洋大学研究紀要』第 8 号 pp. 147-154	NIE を大学教育の場で行った教育方法・技術の実践報告である。「本実践の研究的な位置づけ」を担当し、愛知教育大、実践女子大などでの実践を踏まえ、NIE 実践の仮説的な類型―「教材／学習材」セクション―①時事問題②新聞記事③新聞社との連携・協働―を縦軸に、NIE が行われる校種セクション―①小・中・高②大学教育（教職、一般教養、その他）③現職教育―を提示しつつ、一般教養から教育実践方法へと移行すべきであると論じた。渡邉規矩郎・仲田輝康・三木澄代・木戸和彦・岡野聡子・正木友則（pp. 151-152 の第 3 章第 2 節を担当した）
(11)「説明的文章の学習指導の『系統性』と『教材の特性』との結節点―中学校説明的文章教材を例に―」	単著	平成 26 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 27 号 pp. 26-33	国語科教育の課題として、教科内容の系統性を見出しにくい点をあげることができる。そこで、教科内容に関して、系統化することの意義と危険性を踏まえつつ、「教えたいことのリスト化」につながりやすい「結果としての系統」ではなく、教師によって付加・修正・更新可能な「過程像としての系統」を提案した。その上で、中学校段階の説明的文章教材を例にして、「教材の特性」が、どのように系統化できるのか、その試案を提起した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(12)「説明的文章の教材研究に関する原理的考察―『教材の特性』に着目して―」	単著	平成 27 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 28 号 pp. 42-49	1990 年代に提起された説明的文章の批判的読みを支える「教材研究」論を原理的に解明するために「教材の特性」という概念に着目した。「教材の特性」という概念は、小学校から高校段階における批判的読みを実現するための教材研究の基礎として位置づけることができる。長崎（1997）、吉川（2002、2013）、香月（2006）らを踏まえ、「教材の特性」の概念を明らかにしつつ、「教材の特性」を捉え、学習指導に生かすための要件と観点をまとめた。
(13)「説明的文章における学習指導の類型化―学習者による価値判断を中心に―」	単著	平成 27 年 12 月	創価大学大学院紀要編集委員会『創価大学大学院紀要』第 37 集 pp. 111-128	学習者に「認知的コンフリクト」を起こすための発問研究や、「限定・比較・否定」といった形の「ゆさぶり発問」研究は、教授学においても長く議論されてきたことを踏まえ、学習者の思考の契機とされる「発問」の具体として「選択式発問」と「ゆさぶり発問」に着目した。「ゆさぶり発問」の機能を発展的に、説明的文章指導の文脈で、「学習者による価値判断」と捉え直し、学習者の「価値判断」を軸とした学習指導の類型化を試みた。
(14)「説明的文章における『筆者』概念に関する考察―『筆者』概念を捉えるための仮説的枠組みの提示を通して―」	単著	平成 28 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 29 号 pp. 34-41	説明的文章の学習指導論における「筆者」概念論の課題は、「『筆者』概念の定義の曖昧さ」「読者論的議論との接続性の薄さ」「学習指導理論や実践における『筆者』概念の位置づけの不明確さ」の三点にある。 これら三点の課題を解決するため、また、「筆者」概念の理論的枠組みの構築の端緒とするため、まず、「『筆者』概念」という術語の意味範囲を規定する「仮設的枠組み」をエーコに見られる文学理論の知見を援用し、構築した。
(15)「説明的文章の批判的読促す授業構想の工夫―『「鳥獣戯画」を読む』（小学６年）の実践を通して―」	共著	平成 28 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 29 号 pp. 58-67	「『鳥獣戯画』を読む」の実践を、説明的文章の批判的読みの学習指導論や「筆者」概念論の理論的枠組みから考察した。批判的読みにおいては、筆者と学習者では知識や経験の量にギャップが見られる。このギャップを考慮しないで批判的読みを実現しようとしても、学習者の方が立場は弱く、「批判」が単なる揚げ足取りに陥ることがある。そこで、学習活動の順序の工夫や、「筆者」概念の導入の仕方について検討した。高橋達哉・正木友則（pp. 58-60 の第 1 節・2 節を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(16)「絵本の教材性に関する一考察―アーノルド・ローベル『おてがみ』を中心に―」	単著	平成 29 年 3 月	『帝京平成大学児童学科研究論集 第 7 号別冊』pp. 61-68	近年、重要視されている読解力は義務教育段階だけでなく、就学以前の家庭や幼児教育の「問いかけ」から始まるものである。 本稿では、小学校就学以前における読解力育成の基盤づくりとして、絵本の読み聞かせに着目し、幼稚園から小学校における連携を視野に入れ、絵本として刊行され、かつ、教科書教材に採録されているアーノルド・ローベル［著］三木卓［訳］「おてがみ」（『ふたりはともだち』所収）の教材性について考察した。
(17)「説明的文章の学習指導における『筆者』概念の検討―『想定のパラドクス』を中心に―」 〔査読付〕	単著	平成 29 年 6 月	解釈学会『解釈』第 63 巻 5・6 月号 pp. 2-10	「筆者」という存在は、特に、中学校から高校段階において重点的に学習指導に取り入れられることになる。「筆者」概念に関する議論には、学習者による「筆者」の「想定」を開放的に認めれば、学習者の「想定」は、恣意的で拡散的になる一方、学習者による「想定」の正しさを閉鎖的に「筆者」に求めれば、「筆者」からの意味の受容へと逆戻りする―学習者の主体性を保障しない―「想定のパラドクス」という問題を見出し、検討した。
(18)「特別支援学級において物語を意欲的に読むための学習指導の工夫」	共著	平成 29 年 8 月	国語教育探究の会『国語教育探究』第 30 号 pp. 112-119	特別支援学級における知的障害を抱える学習者にとって、読みを深めることができ、楽しく意欲的に学ぶことはどう可能となるのかという問題意識を基にして、「ごんぎつね」の実践研究を行った。障害の特性上、他者との交流や登場人物の変容を文章全体から捉えることが難しい。そこで、具体的場面を描き出し、ごんや兵十の表情を描き出す活動を丁寧に進めることで、登場人物への同化を促し、イメージ豊かな読みの形成が可能となった。 正木翔子・正木友則（p112. の問題設定、p. 119 の考察部分を担当）
(19)「国語科・教授=学習過程における『ゆさぶり発問』の検討―説明的文章の学習指導への展開を見据えて―」 〔査読付〕	単著	平成 29 年 9 月	全国大学国語教育学会『国語科教育』第 82 集 pp. 33-41	多様化・高次化した国語科学力や学習指導内容を学習者に獲得させるため、教育方法学にて歴史的にも研究されてきた「ゆさぶり発問」に着目し、説明的文章の学習指導の場における展開について検討した。特に、説明的文章の批判的読みでは、教材(文章)を介した「学習者(読者)」と「筆者」との相互作用を機能させるため、主要発問や授業内における即時的応答といった授業者の教授行為(指導＝「ゆさぶり発問」)の重要性を示した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（20）「『探究』としての古典教材の学習指導に関する一考察―書き手との対話に着目して―」	共著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学編『奈良学園大学紀要』第 8 集 pp.79-85	本稿は、言語生活力の向上を見据えた「探究」を観点に、古典教材の学習指導についての考察を目的とする。「探究」活動へと有機的に連関させる授業論を構築する上で、村井実や中洌正堯の論を踏まえつつ、古典教材の特質・特性として、竹村信治による言述論で示される「書き手」や〈発話主体〉の問題領域に対する「対話」という発想について、また、古典教材を「探究」することに開いた具体的実践について考察した。 正木友則・渡邉規矩郎（問題設定と考察の全般を担当）
（その他）学会発表 （1）「説明的文章指導における筆者概念の検討―秋田喜三郎の場合―」	単独	平成 22 年 10 月 31 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 119 回鳴門大会研究発表要旨集』 pp. 160-163	説明的文章指導における「筆者を読む」学習の源流を、大正期、秋田喜三郎が提唱した「創作的読方教授」に見出した。秋田は、「作者想定法」と「表現法・構想の吟味」という二つの学習活動を基に、「仮想の作者」を想定し、文章をイメージ豊かに読むことを目指した。特に「作者想定法」は、1970 年代に倉澤栄吉が提唱した「筆者想定法」の源流でもあり、読解指導の中で、「作者」をいかに扱うのかという問題を提示した点で評価できる。
（2）「説明的文章指導における筆者概念の検討―小松善之助の場合―」	単独	平成 23 年 5 月 29 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 120 回京都大会研究発表要旨集』 pp. 227-230	児童言語研究会の小松善之助の論考に見られる「筆者」概念を考察した。小松の「筆者」概念には時期ごとに少しずつ変化が見られるために、その論を四期に分け整理した。中でも、Ⅱ期にあたる 1969 年の「データ吟味の読み」の提唱は、「評価読み」を提唱した森田信義をはじめ、小・中学校、高校段階の説明的文章の批判的読みを構想する上で多く引用されるなど、その後の教材研究や指導方法の研究に大きな影響を与えた実践理論といえる。
（3）「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―倉澤栄吉の場合―」	単独	平成 23 年 10 月 29 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 121 回高知大会研究発表要旨集』pp. 33-36	倉澤栄吉が提唱した実践理論「筆者想定法」に見られる「筆者概念」を考察した。倉澤の用いる「筆者」という用語法には、実際に文章を書いた①「現実の筆者」と、読み手が想定した（読み手の数だけ存在する）②「想定される筆者」が混在している。 中学校において自伝的随想を用いた実際の授業記録からは、「現実の筆者」から学ぶ姿勢が強く、理論と実践との乖離がみられる。倉澤の論考から提示される「筆者概念」の課題を指摘した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(4)「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―筆者概念の萌芽期を中心に―」	単独	平成 24 年 5 月 26 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究 第 122 回筑波大会研究発表要旨集』pp. 67-70	説明的文章指導において、1980 年代から「筆者」に着目されるようになった背景を、①「指導の画一化・硬直化」②「学習者の尊重」と捉えた。また、 1970 年までの「筆者」に関わる論考を時期的に、「筆者概念の萌芽期」に提出されたものと位置づけ、成果と課題を示した。 萌芽期の成果は、①「筆者観の転換」が起こった点、②「筆者の位相」が分けられた点である。一方、①「筆者の位相」の曖昧さや②「想定する筆者」の範囲に課題がある。
(5)「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―1980 年代を中心に―」	単独	平成 24 年 10 月 27 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究 第 123 回富山大会発表要旨集』pp. 85-88	「筆者概念」論に関わる多くの論考が提起された 1980 年代を中心に取り上げ、筆者概念の輪郭を描き、歴史的に価値づけを行った。1980 年代は、説明的文章指導の転換を推進した実践理論が提出された時期であり、「筆者概念」論は、その転換を支えた要素であることを示した。小・中学校、高校段階の説明的文章指導を見据えた際に「筆者概念」を用いる課題は、「表現活動へ連動しない」「自分の考えを持つ過程がない」ことにあると指摘した。
(6)「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―学習過程の類型化を中心に―」	単独	平成 25 年 5 月 18 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究 第 124 回弘前大会発表要旨集』pp. 45-48	大正期から 1990 年代までの「筆者概念」論をおさえ、「筆者」の位相として、①「現実に文章を書いた筆者」、②「読み手が文章から想定・推論・推察する筆者」、③「学習活動の『仕掛け』としての筆者」という三つを提起した。 特に、③「「学習活動の『仕掛け』としての筆者」は、「筆者を読む」学習過程に大きく関わる。1990 年代の実践記録から「仕掛け」となる「筆者の役割」を抽出し、実践理論に関する論述とあわせて類型化を行った。
(7)「説明的文章指導における筆者概念の整理と検討―学習過程での連動性に着目して―」	単独	平成 25 年 10 月 26 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究 第 125 回広島大会発表要旨集』pp. 145-148	小・中学校、高校段階の説明的文章指導（特に、批判的読み）における学習過程に関わる「筆者概念」について、学習方法論を観点に、次の二点について示した。第一は「筆者の位相」を議論する場を、テクスト論上の議論と教授学上との議論に分けて整理した点である。第二は、「学習過程内での連動性」について、「学習者の反応」にある「筆者の位相」の種類と「批判的読み」の際に対象となる「筆者」の範囲について考察した点である。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(9)「説明的文章の教材研究に関する検討―『教材の特性』を『生かす』という観点から―」	単独	平成 26 年 5 月 18 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 126 回名古屋大会発表要旨集』pp. 221-224	教職課程在籍の学生が授業づくりで悩むことの多くは、説明的文章の教材研究で、どの観点で読めばよいのか分からず、学習指導要領記載の指導事項（順序、段落、要旨等）を観点に授業づくりを行った結果、画一的で硬直化した指導になりやすいことである。この課題を解決するために、「教材の特性」を「生かす」ことの原理的考察を行った。その上で、具体的教材を用いて、「教材の特性」を捉えるための観点を「問い」の形で提示した。
(10)「説明的文章の教材研究に関する検討―教材の特性と学習指導の諸要素との関わりから―」	単独	平成 26 年 11 月 8 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 127 回筑波大会研究発表要旨集』pp. 65-68	教育実習の事前・事中・事後での教材研究や指導案作成に関する学生のつまずきは、「どの観点で教材研究を行えば、発問や学習活動、指導案を作ることができるかよく分からない」あるいは、教材の特性を捉えることの重要性は理解しつつも、「『教材の特性を捉え、生かすこと』と『目標やつけたい力など』とのつながりが見えにくい」といったことである。そこで本発表では、教材の特性と学習指導の諸要素との関わりについて検討した。
(11)「説明文教材で、学習者に『判断』をうながす『仕掛け』のバリエーション」	共同	平成 27 年 5 月 30 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 128 回兵庫大会研究発表要旨集』pp. 75-78	思考力・判断力・表現力を育成する学習指導の具体を提示するため、授業づくりにおいて重要な要素となる「発問（学習課題）」について検討した。 方法論として「判断」で仕掛けることと「発問」との関係を明らかにした上で、「『判断』で仕掛ける」という切り口から、「教材の特性を生かす」ための教材研究のあり方を示した。また、具体的な説明文教材を用いて、系統性を踏まえつつ、学習者に「判断」を促す仕掛けの類型を提示した。長崎伸仁・正木友則（p. 75 の問題設定部分を担当）
(12)「説明的文章指導における『ゆさぶり』発問の整理と検討」	単独	平成 27 年 10 月 24 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 129 回西東京大会研究発表要旨集』pp. 23-26	特に「ゆさぶり発問」は、「授業の理論と実践にとって重要なもの」とされ、教授学研究や教科教育学研究における必須のテーマとされる。しかし、深澤（2014）は「教材解釈」「発問（発問研究）」「ゆさぶり」といった「これらの『用語』が後退している」と捉え、問題提起した。この提起を受け、本発表では、これまで歴史的に蓄積されてきた「ゆさぶり発問」に関する議論の整理・検討から、深澤発言に対する仮説的回答の提出を試みた。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(13)「解決志向アプローチ（SFA）を取り入れた説明文の発問研究」	共同	平成 28 年 10 月 16 日	全国大学国語教育学会『国語科教育研究第 131 回東京大会研究発表要旨集』pp. 301-304	国語科教育の読むことの分野において、考えさせたい内容は研究者によって提案され、確立されつつあり、学習者の実態を捉え「どのような発問をするか」という研究も進んでいる。しかし、「考えさせたい内容」と「問い」との関係性の研究はあまり進んでいるとは言えない。本発表では、双方の関係性に迫るため、森俊夫が実践した解決志向アプローチ(Solution Focused Approach:SFA)という心理療法を援用し、説明文指導での発問研究に新たな地平を開こうとした。（p. 301 の問題設定部分を担当） 増田英夫・長崎伸仁・正木友則
（その他）雑誌論文 (1)「登場人物を書く―基本の指導と応用ワザ―」	単著	平成 26 年 9 月	『教育科学国語教育第 777 号』9 月号明治図書 p. 24	一般的に、「登場人物を書く」活動は、文学教材における登場人物の心情のみに焦点が当たりやすい。そこで、文学教材の場合は、登場人物の心情、心情の変化、人物像の三種類があり、教材「やまなし」を用いて、心情の変化を文章全体から考えることの重要性を示した。また、教育方法論を見据えた応用として、説明的文章教材「千年の釘にいどむ」を用い、登場人物の「白鷹さん」の台詞に込められた思いを表現する学習活動を提案した。
(2)「説明文指導に必要な『学習用語』と活用のポイント」	単著	平成 27 年 2 月	『教育科学国語教育第 783 号』3 月号明治図書 pp. 28-29	「学習用語」の獲得は、「学習用語」をただ覚えさせるのではなく、その「学習用語」が意味する概念を具体的な説明文教材の学習と関係づけ、実感的に理解させることによって可能となる。そのポイントは、学習者が文章全体を視野に入れ、「思考・判断・表現する場」をいかに設定するかにある。そこで説明文学習における「題名」「問い―答え」「事例」「段落」「要旨・要約」といった 16 の学習用語を具体的な実践事例として提示した。
(3)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（4 月・小 6）」	共著	平成 29 年 3 月	『教育科学国語教育第 808 号』4 月号明治図書 pp. 102-103	「『ぼく』は子どもか、大人か？」という刺激的な課題は、白黒つけ難い「思春期」がキーとなる。そのため、そのまま問うと学習者の思考が滞りかねない。そこで、問い方を工夫し、五段階のスケーリングを用いることで、学習者に「どちらかと言えば…」や「○○寄りで…」といった判断を促す。スケーリングは「①と②」や「④と⑤」といった微妙な違いまで可視化できる。学びを深める学習課題かどうかが、問い方で変わる事例である。 髙橋達哉・正木友則（p. 103 の「AL のポイント」欄を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(4)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（5月・小6）」	共著	平成29年4月	『教育科学国語教育第809号』5月号明治図書 pp.102-103	従来の説明文学習は内容や形式への偏重が多く見られた。学習者の「情」を切り口にすることで、内容・形式の偏重を避け、主体的・意欲的に学習できる特長をもつ。 深い学びは☆印で表す主張への納得度や共感する事例について、学習者の「実感」に根ざした「判断」を「根拠」「理由づけ」と共に交流することで実現する。学習者の「実感」と「事例と主張の関係」とをつなぐ「判断を促す問い」と学習者の判断の「可視化」が重要である。 髙橋達哉・正木友則（p.103の「ALのポイント」欄を担当）
(5)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（6月・小6）」	共著	平成29年5月	『教育科学国語教育第810号』6月号明治図書 pp.102-103	「初めて知ったことのランキング」づけは、学習者に「読者としての実感」の自覚化や集団としての合意形成を促す。「自分の考え」を交流し、「集団の考え」へと高めた上で、筆者による「題名と内容」との論理的整合性を中心に評価へと移る。学習者の「読者としての実感」を「筆者への評価」に生かすための工夫といえる。教材を基にしながら、「読者と筆者」相互の視点からの交流を通して、ダイナミックで深い評価活動が期待できる。 髙橋達哉・正木友則（p.103の「ALのポイント」欄を担当）
(6)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（7月・小6）」	共著	平成29年6月	『教育科学国語教育第811号』7月号明治図書 pp.102-103	「ゆさぶり」は教師が「本当にそういえるか？」と問うことや学習者の思考に対立・葛藤を促す「AかBか」という学習課題にも見出せる。他者との交流を通して、読みは多様であることを学習者が実感し、描写と心情との関わりに着目した読み方を獲得できる。そのためには「A・B」複数の読みの成立が必要となり、叙述の空白や描写・心情の関わりに着目し、学習者が思わず考えたくなる学習課題へつなげる教材研究の鋭さが重要となる。 髙橋達哉・正木友則（p.103の「ALのポイント」欄を担当）
(7)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（8月・小6）」	共著	平成29年7月	『教育科学国語教育第812号』8月号明治図書 pp.102-103	「せんねん　まんねん」という題目から意外と思われる「みじかい」をあえて空白にすることで、学習者は詩全体を視野に入れ、文脈を読むことになる。ここで、一年という時間を、授業時間（四十五分）何時間分に相当するか計算する活動を入れることで、学習者は「せんねんまんねん」の「ながさ」について、より実感的に理解できるだろう。作者の表現を問う場面では「長い」と「永い」の違いなど、国語辞典を用いる学びへと展開できる。 髙橋達哉・正木友則（p.103の「ALのポイント」欄を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(8)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（9月・小6）」	共著	平成29年8月	『教育科学国語教育第813号』9月号明治図書 pp. 102-103	教材の特性を生かし、「ぼく」の「語り」に着目する。物語世界における場面や登場人物の心情に関する学習課題とは異なり、「ぼく」という視点から「よい思い出か・嫌な思い出か・その他」という判断を促すことで、「ぼく」の心情や行為に関する解釈に加え、「きつねの窓」という物語を「『ぼく』の語りによる物語」と捉え直すことができる。 「語り」に着目する読み方を、学習者に獲得させ、他の物語に応用することが重要といえる。 髙橋達哉・正木友則（p. 103の「ALのポイント」欄を担当）
(9)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（10月・小6）」	共著	平成29年9月	『教育科学国語教育第814号』10月号明治図書 pp. 102-103	学習者は「五月」と「十二月」との「比較」と、続きの物語があるとの「仮定」を通して、作品構造全体を視野に入れることができる。作品構造や叙述の言葉から「クラムボンの自分なりの解釈」「疑問や不思議」といった「ひとりの読者」としての考えの形成を経て、作品世界に浸ることで「自分の主題」を自分の言葉で紡ぎ出すことにつながる。「かにの兄弟には何が見える・聞こえる？」といった暗黙知を援用した手立てにも注目である。 髙橋達哉・正木友則（p. 103の「ALのポイント」欄を担当）
(10)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（11月・小6）」	共著	平成29年10月	『教育科学国語教育第815号』11月号明治図書 pp. 102-103	一般的に、アニメは「見る」もので、マンガは「読む」ものといえる。筆者は鳥獣戯画を「アニメの祖」と捉えることから、「鳥獣戯画を『見る』」と言えないか、という題名読みによって教材・筆者に対する吟味・評価が始まる。本実践での順序は後者である。筆者が著名なアニメ作家という特性に応じた工夫であり、そのことで単元全体を通して自分の考えを形成し、表現・交流する過程の保障が実現できている。 髙橋達哉・正木友則（p. 103の「ALのポイント」欄を担当）
(11)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（12月・小6）」	共著	平成29年11月	『教育科学国語教育第816号』12月号明治図書 pp. 102-103	中学校段階を見据えて配列される小学校高学年の論説文教材で、学習者が要旨や筆者の主張を捉えることは容易ではない。そこで、高橋実践では「筆者の言いたいことは何か」という内容を選択肢形式で問い、学習者がそれぞれの選択肢を「比較・否定」することで、より深い思考を促す。筆者への共感度や「それなりに」の割合といった具体化・可視化する学習活動も工夫されている。いかに学習者の頭の中をスッキリできるかが鍵といえる。 髙橋達哉・正木友則（p. 103の「ALのポイント」欄を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(12)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（1月・小3）」	共著	平成29年12月	『教育科学国語教育第817号』1月号明治図書 pp.96-97	「分かったつもり」を打破する実践である。実は、教材にある「おしりのところから、とくべつのえきを出すこと」と、そのえきは「においのある、じょうはつしやすい」ものと明らかになっただけでは、「ありの行列のできるわけ」がわかったとは言い切れない。小学生の読者には分かりにくい箇所であるため、筆者による説明が付加されている。土居実践の中核は「論の進め方」と「結論」のあり方の吟味にある点が特長といえる。 土居正博・正木友則（p.97の「ALのポイント」欄を担当）
(13)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（1月・小4）」	共著	平成29年12月	『教育科学国語教育第817号』1月号明治図書 pp.98-99	第一次の「新聞記事」を用いた活動は、説明的文章教材に書かれている世界と、実際に私たちが生活する世界とをリンクさせようとする意図がある。読者の立場から「一番すごい考え（推理）はどれか」という判断を促している。実際の「新聞記事」を用いた活動や読者の立場からの判断は、後に行う新聞記者と筆者になりきってのインタビュー活動や新聞にまとめる活動へと展開される。第一次から第三次まで、活動が見事に接続している事例といえる。 土方大輔・正木友則（p.99の「ALのポイント」欄を担当）
(14)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（1月・小6）」	共著	平成29年12月	『教育科学国語教育第817号』1月号明治図書 pp.102-103	説明的文章の学習指導研究では、「分かりやすさ」や「納得度」など、学習者の内面にある価値基準をもとに評価する学習が提唱されるようになった。高橋実践では、「理解できたかどうか」と「賛同できるかどうか」という二段階の評価活動である。筆者の意見が理解できなければ、評価は難しい。抽象的になりやすい評価活動を、ポジショニングマップを用いて可視化している。「評価」という学習用語の獲得を促すところにも注目である。 髙橋達哉・正木友則（p.103の「ALのポイント」欄を担当）
(15)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（2月・小3）」	共著	平成30年1月	『教育科学国語教育第818号』2月号明治図書 pp.96-97	まず教師の発表を聴き「なるほど」という実感を含んだ「よさ」を学習者からあげさせるところから学習指導がスタートする。教師が最初から話し方を提示しないところにポイントがある。その上で、相手が「面白そうだな」「なるほど」と思うことを話す内容とするよさに気づかせる。「話し方」や「話す内容」のどちらかに傾斜せず、話し手が相手意識を持ち、話す「内容」と「タイミング」を学習内容とするところも特長である。 土居正博・正木友則（p.97の「ALのポイント」欄を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（16）「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（2月・小4）」	共著	平成30年1月	『教育科学国語教育第817号』1月号明治図書 pp. 98-99	学習者の生活経験や既有知識を学習指導に活用することは重要である。それは、生活と説明的文章の世界とを結びつけながら「読む」ためだけでなく、生活の見方や考え方といった世界観を更新することにもつながるためである。「便利」であることは「「誰にとって良いのか」という筆者の問いを学習者が実感的に認識することが重要である。そこで授業者は「ゆさぶり」をかけることで、新たな（筆者の）見方・考え方の実感を促す。「AかBか」という対立型の学習課題から、新たな「C・D…」といった考えや気づきを促し、学びを深めたい。 神野佳子・正木友則（p. 99の「ALのポイント」欄を担当）
（17）「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（2月・小6）」	共著	平成30年1月	『教育科学国語教育第818号』2月号明治図書 pp. 102-103	読者（学習者）の立場や登場人物（太一）の立場から、登場人物の心情や人物像、関係性、また全体の作品構造を考える学習活動のバリエーションに富む単元である。心情を「直接問う」ことを避け、これまで学習指導で正面から扱われることのなかった「脇役」にまで焦点に当てることで、読者による作品の解釈を豊かにしようとする意図が見られる。授業者がもつ学習指導論や教材研究、そこから構想される学習課題が、学習者が参加でき、他者の考えに刺激を受け、交流する中で学びを深める目的のためにすべて連動していることがわかる。 髙橋達哉・正木友則（p. 103の「ALのポイント」欄を担当）
（18）「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（3月・小3）」	共著	平成30年2月	『教育科学国語教育第819号』3月号明治図書 pp. 96-97	読者は「おくびょう」でない豆太を目の当たりにするものの、「弱虫でもやさしけりゃ」という小見出しと最後の三行によって、「おくびょうのままか」「豆太は変わったのか」という問いが生まれる。「必要か・必要でないか」という学習課題は、説明的文章教材において「段落相互の関係性」を考える際に活用されることもあるが、本実践では、読者が生活経験やこれまでの学習で獲得した知識を基に「自分の考え」を表現するために用いられる。 土居正博・正木友則（p. 97の「ALのポイント」欄を担当）
（19）「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（3月・小4）」	共著	平成30年2月	『教育科学国語教育第819号』3月号明治図書 pp. 98-99	学習指導要領記載の「思考力・判断力・表現力等」の「等」には、イメージ豊かに読むための「想像力」も含まれるであろう。物語の授業において、叙述から離れ、空想の読みを避けることと、イメージを広げる可能性を捨てることは同じではない。「がんばれ、がんばれ」という台詞について、正答の存在を前提とする学習課題ではなく、「誰の、どのような声で音読したいか」という、「読者として」の思いや願いを重視する点に特徴がある。 土方大輔・正木友則（p. 99の「ALのポイント」欄を担当）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(20)「アクティブ・ラーニングを支える今月の学習課題と授業づくり（3月・小6）」	共著	平成30年2月	『教育科学国語教育第819号』3月号明治図書 pp.102-103	学習者の主体的な学びを促すために、学習者自らが「問い（学習課題）」をつくることは、青木幹勇氏「問題を持ちながら読む」実践理論が代表的である。高橋氏の意図は、これまでに積み上げてきた学習者自身の学びを「振り返る」ところにある。「確認」にあたる学習課題が多くなりがちであるため、いかに、これまで獲得した知識を想起させ、「何が、どのように」の「確認」から「評価」まで、学習者が意識化できるかが重要である。 髙橋達哉・正木友則（p.103の「ALのポイント」欄を担当）
(21)「『ゆさぶり発問』を意識的に」	単著	平成30年6月	「教師のチカラ」編集委員会編『子どもを「育てる」教師のチカラ』季刊34号日本標準 p.44	発問には、「『何』について『どう』考え、表現し、『何のため』に『どこに』もっていくか」が含まれる。学習者は「『何』について『どう』考え、表現するのか」を教師の言葉によって応答を試み、教師は、授業の目的に沿い、学習者の発言を整理し、方向づける。こうした発問の連鎖的な構造をおさえた上で、文学教材における具体例を交えながら、思考をゆさぶることで、心情を直接問う時とは異なる発言を引き出す方法を示した。
(22)「説明的文章の学習指導におけるゆさぶり発問―集団思考の深化・拡充を図る現代的展開―」	単著	平成30年6月	日本授業UD学会編集委員会編『授業UD研究』第5号 pp.16-19	近年、授業者ではなく、学習者による「否定」を促す実践や具体案が提出されるようになった。そこで、説明的文章教材の「事例の順序性」に焦点を当てた実践記録を基に、「ゆさぶり発問」の現代的展開について検討した。佐藤実践では、学習者が授業者の提案を「否定」する方法が採られたが、髙橋実践では、小学校3年生という学習者の発達段階を踏まえて、「筆者」が「授業者」の提案を「否定」するという仮想的な学習活動を設定したと結論付けた。
(23)「『深い学び』を導く説明的文章の教材研究と発問づくり―読解から探究を核とした学びの転換を―」	単著	令和元年8月	『教育科学国語教育第836号』8月号明治図書 pp.8-11	主体的・対話的で、かつ「深い学び」を視野に入れた時、読解指導の枠内に留まるのではなく、探究を核とした深い学びへと転換する必要がある。そこで、「探究」を、読解後に行われる補助的な調べ学習や、まとめとしての表現活動とは異なり、言語生活の向上を見据えた学びの過程として、説明的文章教材を用いて、学習者が問い、葛藤し、他者と交流し、様々な他者との関わりのなかで問い続け、新たな世界を開くための具体例を示した。

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月31日
氏名　山田　明広

研　究　分　野	研究内容のキーワード
哲学、文学、文化人類学	漢文学、中国哲学、中国文学、文化人類学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 （１）問題解決能力を養わせるための授業の実践	平成22年4月1日～平成24年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成22年4月～平成24年3月に担当した「中国学演習」（専門教育科目、３年次配当、通年、必修２単位）において、先に基礎的な知識を講義し、その上で大まかなテーマを与えて受講生に順番に発表させ、そして、全体で討論させることにより、受講生に自ら問題を発見して考え、調査し、解決するという能力を養わせた。
（２）画像・映像資料を活用した分かりやすい授業の実践	平成20年4月1日～平成24年3月31日・平成26年4月1日～平成30年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成20年4月～平成23年9月に担当した「東洋比較文化論」（専門教育科目、１年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成22年4月～平成24年3月に担当した「中国学演習」（専門教育科目、３年次配当、通年、必修２単位）、平成26年4月～平成28年3月に担当した「現代アジアと日本1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成28年4月～平成30年3月にかけて担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成28年4月～平成28年9月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、本人が現地で撮影した写真および映像を用いて中国・台湾の宗教事象を中心とする諸文化を解説することにより、学生が授業内容について理解しやすくなっているとともに、興味を持つようになった。
（３）リアクションペーパー使用による授業改善の工夫	平成26年4月1日～平成30年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成26年4月～平成28年3月に担当した「現代アジアと日本1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成28年4月～平成30年3月にかけて担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成26年4月～平成30年3月にかけて担当した「中国文学史Ⅰ」（講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「中国文学史Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成28年4月～平成28年9月に担当した「アジア文化

		論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、適宜リアクションペーパーを使用して受講生から授業に対する感想・要望・質問を聞き、授業改善に生かした。また、寄せられた質問については、後の授業にて可能な限り回答するなど、学生との意思疎通を図った。
（４）効果的な漢文教育法の実践	平成26年4月1日～現在に至る	花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成26年4月～平成30年3月20日にかけて担当した「漢文学Ⅰ」（講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「漢文学Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、奈良学園大学人間教育学部人間教育学科非常勤講師として平成28年4月～平成28年8月にかけて、また、同大学同学部同学科の特任講師として平成29年4月～平成29年9月にかけて、さらに同大学同学部同学科の専任講師として平成30年4月～令和元年9月にかけて担当した「漢文学入門」（専門科目、２年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）、および同大学同学部同学科の特任講師として平成28年9月～平成30年3月にかけて、また、同大学同学部同学科の専任講師として平成31年9月～令和2年3月にかけて担当した「漢文学Ⅰ」（専門科目、２年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、漢文法および漢文句法を受講生に一通り網羅的に解説し演習問題を解かせて理解・定着させた上で漢文の文章読解を行わせることにより、受講生が比較的正確で安定的に漢文を読解することが可能となった。
（５）パワーポイントの効果的活用による分かりやすい授業の実践	平成26年11月27日・平成27年11月30日・平成28年4月～平成30年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）のうち「台湾の道教式死者救済儀礼」についての講義において、平成 28 年 9 月～現在にかけて担当している「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）の全講義において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）の全講義において、パワーポイントで作成したスライドを全面的に活用することにより、学生にとって視覚的に見やすくまた理解しやすい授業を実践している。その結果、奈良県立医科大学の講義において実施したリアクションペーパーにおいては、見やすく分かりやすいといった類の意見が多数寄せられた。
（６）フィールドワークを取り入れた効果的な授業の実践	平成30年4月1日～現在に至る	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科専任講師として平成 30 年 4 月～現在にかけて担当している「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（専門科目、３年次配当、通年、必修４単位）のうち、「中華圏の祭祀文化」に関する授業において、先に中華圏の廟と祭神およびそこで行われる祭りに関して講義を行い、その後、神戸および横浜の関帝廟の訪問や横浜中華街の関帝誕という祭りの見学を行うなど現地調査を行い、実際に中華圏の廟や祭りの様子を目にすることで、学生の授業内容に対する理解度が大幅に高まった。

2　作成した教科書，教材 （1）オリジナルプリント教材の作成	平成20年4月1日 ～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として平成 20 年 4 月～平成 23 年 9 月に担当した「東洋比較文化論」（専門教育科目、１年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成 20 年 4 月～平成 22 年 3 月にかけて担当した「中国学講義 a」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「中国学講義 b」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成 22 年 4 月～平成 23 年 3 月に担当した「アジア文化研究 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジア文化研究 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 23 年 4 月～現在にかけて担当している「中国思想文化論 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「中国思想文化論 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 24 年 4 月～平成 25 年 9 月に担当した「漢字・漢文論１」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）、平成 26 年 4 月～平成 28 年 3 月に担当した「現代アジアと日本 1」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「現代アジアと日本 2」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）、平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「アジアの伝統文化と現代Ⅰ」（専門教育科目、２年次以降配当、春学期、選択２単位）および「アジアの伝統文化と現代Ⅱ」（専門教育科目、２年次以降配当、秋学期、選択２単位）において、花園大学文学部文学部日本文学科の非常勤講師として平成 26 年 4 月～平成 30 年 3 月にかけて担当した「中国文学史Ⅰ」（講義科目、１年次以降配当、前期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）および「中国文学史Ⅱ」（講義科目、１年次以降配当、後期、選択２単位、中高１種国語科教員免許取得のための科目）において、また、奈良県立医科大学医学部教養教育部門の非常勤講師として平成 28 年 4 月～平成 28 年 9 月に担当した「アジア文化論」（講義科目、１年次配当、前期、必修１単位）において、毎時間、事前に要点をまとめたオリジナルのプリントを作成し、そのプリントを使用して講義することで、学生の理解に資している。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 （1）近畿大学経済学部国際経済学科平成24年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 25 年 3 月	「中国語コミュニケーション 2」および「基礎中国語Ⅱ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目においても「授業内容に満足」ないし「ほぼ満足」と答えた学生が８割以上を占めていたほか、学生から「説明が丁寧で分かりやすい」などといったコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
（2）関西大学文学部総合人文学科平成26年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 26 年 9 月	「中国思想文化論 1」および「現代アジアと日本 1」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目もほとんどの項目において評価平均が 4.0（満点 5.0）以上であった。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、「中国思想文化論 1」では評価平均が 4.1 に、「現代アジアと日本 2」では評価平均が 4.1 となり、いずれも全学の平均である 4.0 を超えることができた。

（3）関西大学文学部総合人文学科平成26年度秋学期における学生による授業評価アンケート	平成 27 年 3 月	「中国思想文化論 2」および「現代アジアと日本 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目についての評価平均が「中国思想文化論 2」では 4.1 に、「現代アジアと日本 2」では 4.2 となり、いずれの科目においても全学の平均 4.0 を超えることができた。
（4）関西大学文学部総合人文学科平成27年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 27 年 9 月	「中国思想文化論 1」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、多くの項目においてその評価平均が全学平均および文学部平均を超えた。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、評価平均が 4.2 となり、全学平均 4.0 および文学部平均 4.1 を超えることができた。
（5）関西大学文学部総合人文学科平成27年度秋学期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国思想文化論 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目においてその評価平均が全学平均および文学部平均を超えた。特に、「総合的に判断してこの授業は意義のあるものであった」という項目については、評価平均が 4.2 となり、全学平均 4.0 および文学部平均 4.1 を超えることができた。
（6）近畿大学法学部平成27年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国語総合 2」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「この教員の授業を 10 点法で評価して下さい」という項目についての平均値が 8.6 となり、全科目平均の 8.3 を超えることができた。また、「とても分かりやすかった」や「説明が丁寧であった」といった類のコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
（7）花園大学文学部日本文学科平成27年度後期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「漢文学Ⅱ」および「中国文学史Ⅱ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、いずれの科目もほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。特に、「先生の授業に対する取り組みに熱意や情熱を感じられますか」という項目については、前者が 4.0（満点 5.0）、後者が 4.28 といずれも比較的高い評価が得られた。
（8）奈良県立医科大学医学部看護学科平成27年度における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 3 月	「中国語」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、「総合的に満足できる授業であった」という項目についての平均値が 4.57（満点 5.0）となり、全体平均 4.1 を大きく超えるなど、高い評価が得られた。
（9）奈良教育大学平成28年度前期における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 9 月	「中国語」および「漢文学特論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、両科目ともほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。また「わかりやすい授業であった」といった類のコメントが多数寄せられるなど、高い評価が得られた。
（10）奈良県立医科大学医学部看護学科平成28年度における学生による授業評価アンケート	平成 28 年 9 月	「アジア文化論」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目において学生による評価の平均値が全学平均を超えることができた。特に、「授業を受けることでテーマについてより興味・関心を持てた」および「総合的に満足できる授業であった」という項目の平均値がともに 4.0 近くなるなど比較的高い評価が得られた。

(11) 奈良学園大学平成29年度における学生による授業評価アンケート	平成 29 年 9 月	「漢文学入門」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目において当該科目の平均値が全体の平均値を超えることができた。特に、「授業に対する熱意や意欲」および「有効な時間の使い方」の項目について、4 段階中 3.6 という高い評価が得られ、全体平均を大きく上回った。そして、その結果、総合評価でも 4 段階中 3.5 という全体平均を大きく上回る高評価が得られた。
(12) 関西学院大学社会学部平成 29 年度春学期における学生による授業評価アンケート	平成 29 年 9 月	「中国語Ⅰ」および「中国語Ⅲ」について受講学生による授業評価アンケートを実施し、ほとんどの項目においてその評価平均が全学平均および学部平均を超えていた。特に、「あなたは、全体としてこの授業に満足していますか」という項目については、前者が 4.6、後者が 4.9（いずれも満点 5.0）といずれもかなり高い評価が得られた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 〔社会人対象の講演〕		
（1）台湾の道教の現状と道教儀礼について	平成27年9月11日	大阪日中友好協会の支援の下で設立された「くらしの智恵：道教に親しむ会」の第3回会合において、当会の要請により一般向けに行った講演。まず、中国道教の歴史について触れることで道教とはいかなる宗教か紹介した後、台湾では現在いかなる道教信仰が行われているか儀礼を中心に説明した。
（2）奈良学園大学公開講座「王寺町りーべるカレッジ」2019年度第3回における講演	令和元年 6 月 29 日	奈良学園大学が王寺町と提携して毎年行っている公開講座「王寺町りーべるカレッジ」の 2019 年度第 3 回において講師を務め、「台湾の疫病払いの祭り 」というテーマにて主として台湾南部で疫病を払うために行われる王醮という祭りについての講演を行った。まず、祭りが行われる廟について説明し、廟で行われ種々の活動について説明した後、王醮とはいかなる祭りであり、その中心となる王爺という神はどのような神で、どのような道教および民間信仰の儀礼や活動が行われるのか、写真や映像を用いて解説した。
〔展覧会の解説の翻訳〕 （1）「道教信仰文化特展」の解説の日本語訳	平成28年11月5日～平成29年2月19日	台南市文化局主催により台湾台南市鄭成功文物館にて「道法萬象―道教信仰文化特展」が行われ、そこで使用された李豊楙教授による中国語の解説文をすべて日本語に翻訳し、その結果、日本語による解説文として使用された。
〔海外研修の企画〕 （1）「台湾研修」プログラムの提案企画	令和元年5月29日～現在に至る	奈良学園大学の学生向けの「台湾研修」を同大学学長に提案したところ、学長の支持を得、目下、学長支援の下、松井典夫教授と共同でプログラム案を企画している。本研修は、語学（中国語）習得に重きを置くのではなく、教師として必要な資質を身に着けるという点に重きを置いており、従来の海外研修とは内容が大きくことなるものにする予定である。すでに受け入れ先候補であり、同大学の提携校である屏東科技大学を訪問してこの点について伝えており、了承を得ておいる。現在、同大学の支援も得ながら、プログラムを企画している。

〔ＦＤ研修会における報告〕 （1）奈良学園大学人間教育学部ＦＤ研修会における報告	平成30年8月3日	奈良学園大学人間教育学部平成３０年度第２回ＦＤ研修会において、完全講義型の授業とアクティブラーニング型の授業とでは学生の授業内容理解にどのような相違が見られるかについて、松井典夫および岡村季光と共同で報告を行った。岡村季光が両タイプの授業を実際に実施し、各授業の最後に行った授業内容を問う小テストの結果を比較するという方法で調査し、その結果を報告した。調査の結果、完全講義型の授業とアクティブラーニング型の授業とでは学生の理解度に大差は見られないという結論に達するとともに、アクティブラーニングを効果的に行うには、ある程度の知識の習得が必要であると提言した。
〔留学生の指導〕 （1）奈良学園大学人間教育学部人間教育学科特別聴講生の課題研究指導	平成29年6月 ～平成31年2月	平成29年度は蘇州科技大学から来た特別聴講生１名の「日本怪談文化について―『夢十夜』を中心に―」というテーマの課題研究の作成、および東方技術学院から来た特別聴講生１名の「京極夏彦作品から中日両国のミステリー小説の発展を窺い見る」というテーマの課題研究の作成を指導した。また、平成30年度には、蘇州科技大学から来た特別聴講生１名の「中日禅宗寺院の比較」というテーマの課題研究の作成を指導した。
5　その他 〔科目担当実績〕 （1）関西大学における中国思想史に関する講義	平成20年4月1日 ～現在に至る	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成20年4月～平成22年3月に「中国学講義a, b」を、平成22年4月～平成23年3月に「アジア文化研究1, 2」を、平成23年4月～現在にかけて「中国思想文化論1, 2」を担当し、中国思想史に関する講義を行っている。いずれの科目においても、先秦から明代までの中国思想・宗教について儒教・仏教・道教の三教を基軸に通史的に講義しているが、思想・宗教のみならずその背景にある社会的文化的事象についても説明するなどして、受講生が理解しやすくなるよう工夫している。
（2）関西大学における現代の東アジアの宗教文化に関する講義	平成20年4月1日 ～平成23年9月20日・平成26年4月1日～平成30年3月20日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成20年4月～平成23年9月に「東洋比較文化論」（春学期のみ開講科目）を、平成26年4月～平成28年3月に「現代アジアと日本1, 2」を、平成28年4月～平成30年3月に「アジアの伝統文化と現代Ⅰ, Ⅱ」を担当し、主として現代の東アジアの宗教文化に関する講義を行った。本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料を用いたり講義のテーマに関わる映画を見せたりして、受講生の興味を喚起できるよう工夫した。授業において行うリアクションペーパーには、画像・映像資料が用いられていて分かりやすいとの反響が多数見られた。

（3）近畿大学における初級中国語に関する講義	平成21年4月1日～平成28年9月15日	近畿大学経済学部国際経済学科の非常勤講師として専門科目「基礎中国語Ⅰ,Ⅱ」（平成21年4月～平成）を、経営学部・法学部・理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として外国語科目「中国語総合1,2」（経営学部：平成22年4月～平成23年3月、法学部：平成24年4月～現在、理工学部：平成28年4月～現在）を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。
（4）関西大学における中国学専修3年次生に対する演習科目	平成22年4月1日～平成24年9月20日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成22年4月～平成24年3月に「中国学演習」（通年）を、平成24年4月～平成24年9月に「中国学専修ゼミ3」（春学期のみ担当）を担当し、中国学専修3年次の学生に対して卒論執筆に必要な情報・知識を教えるとともに、必要な能力を養わせた。文献検索の仕方、辞書の引き方、中国思想・宗教に関する基礎知識を講義して卒論執筆に必要な知識を身に付けさせ、その後、漢文読解を行って卒論執筆に必要な文献読解力を養わせ、最後に論文の書き方について講義してから受講生の関心あるテーマについて発表させ、全体で討論させることで問題意識を喚起させた。
（5）近畿大学における中級中国語に関する講義	平成22年4月1日～平成28年3月31日	近畿大学生物理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として平成22年4月～平成23年3月に「中国語応用Ⅰ,Ⅱ」を、理工学部教養・基礎教育部門非常勤講師として平成23年4月～平成24年3月に「中国語総合3,4」を、文芸学部基礎教育部門非常勤講師として平成23年4月～平成28年3月に「中国語総合C,D」を担当し、2年次以上の学生に対して中級中国語を講義した。生物理工学部には中国語会話に関する授業がないため、「中国語応用Ⅰ,Ⅱ」では聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするといった授業を行ったが、他の学部には別に「中国語コミュニケーション」という中国語会話に関する授業が存在するため、「中国語総合3,4」および「中国語総合C,D」では、読む・書くといった能力の向上に焦点を絞り、教科書と演習問題を中心とした授業を行った。
（6）近畿大学における中国語会話に関する講義	平成23年4月1日～平成28年9月15日	近畿大学経済学部国際経済学科の非常勤講師として外国語科目「中国語コミュニケーション1,2」を担当し、中国語会話に関する講義を行った。中国語の基本文法の確認を行ってから、その文法事項を会話の上でどのように用いるか講義するなど、種々の表現が可能となるような授業を行っている。また、教科書のみならずリスニング教材を用いるなど、「話す」だけでなく「聞く」という方面の能力も身に付くよう工夫した。

（７）関西大学における漢字論・漢文講読に関する講義	平成24年4月1日～平成26年3月31日	関西大学文学部総合人文学科の非常勤講師として、平成24年4月～平成26年3月に「漢字・漢文論1,2」を担当した。本科目では、最初に、漢文を構成する漢字の歴史や変遷について講義して後、漢文の作品の講読を行った。訓点付きの漢文の読解から始めて次第に訓点のない漢文の読解へと移行するなど、無理なく高度な漢文の読解ができるよう工夫した。
（８）奈良県立医科大学における初級中国語の講義	平成24年4月1日～平成28年3月31日	奈良県立医科大学医学部看護学科非常勤講師として「中国語」を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。
（９）奈良教育大学における初級中国語の講義	平成24年4月1日～平成28年9月30日	奈良教育大学教育学部教育学科非常勤講師として「中国語」を担当し、大学1年次生に対して初級中国語を講義した。聞く・話す・読む・書くといった能力をバランスよく身に付けられるよう、教科書のみならずリスニング教材を用いたり、対話をさせたりするなど授業の進め方を工夫した。
（１０）花園大学における漢文学に関する講義	平成26年4月1日～平成30年3月20日	花園大学文学部日本文学科非常勤講師として、平成26年4月～現在にかけて「漢文学Ⅰ,Ⅱ」を、平成26年9月～平成27年3月に「漢文学基礎」（後期のみ開講科目）を担当し、漢文読解に関する講義を行った。前者においては､漢文法･語法を網羅的に解説して後、訓点付きの漢文の作品の講読を行った。後者においては、訓点付きの漢文の作品の読解から開始し、次第に訓点のない漢文の作品の読解へと移っていくなど、読解中心の授業を行った。
（１１）花園大学における中国文学史に関する講義	平成26年4月1日～平成30年3月20日	花園大学文学部日本文学科非常勤講師として「中国文学史Ⅰ,Ⅱ」を担当し、中国文学史に関する講義を行った。先秦から明代までの中国文学の歴史について、毎回テーマを定めできる限り作品にも触れつつ通史的に概観した。毎回、ただテーマについて説明を行うだけではなく、その背後にある歴史的・社会的・文化的事象についても触れ、その作品や事象が起こった原因と結果についても考えていくよう工夫した。
（１２）奈良学園大学における漢文学に関する講義	平成28年4月1日～現在に至る	平成28年4月～8月までは奈良学園大学人間教育学部人間教育学科非常勤講師として、平成28年9月～平成30年3月にかけては奈良学園大学人間教育学部人間教育学科特任講師として、また、平成30年度4月～現在は奈良学園大学人間教育学部人間教育学科専任講師として、前期に「漢文学入門」、「漢文学Ⅱ」および「漢文学特論」を、後期には「漢文学Ⅰ」および「語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）」を担当している。前期の「漢文学入門」においては、訓点付きの漢文を独力で読むための基礎学力を養生することを目標として、漢文の基礎事項･文法を講義し、「漢文学Ⅱ」においては、「漢文学Ⅰ」から一歩進めて抽象的・思想的内容を含んだ文章でも主体的に読み進めることができることを目標に、難易度の高い散文作品をその背景なども説明しつつ読解し、ま

		た、「漢文学特論」においては、教員採用試験に向けて、分量が多く難解な文章を送り仮名なしで読解することに挑戦している。後期の「漢文学Ⅰ」においては、比較的平易な訓点付きの漢文の作品の講読し、「語学・文学総合演習Ⅲ（漢文学）」においては、「漢文学Ⅱ」よりもさらに進めて、返り点のない文章の読解を試みている。いずれの科目も教員免許取得のための科目であるため、いかに漢文を教えるべきかといった漢文教育という視点からの講義も行った。
（１３）奈良県立医科大学におけるアジアの文化に関する講義	平成28年4月1日～平成28年9月20日	奈良県立医科大学医学部教養教育部門非常勤講師として「アジア文化論」（リレー講義、前期のみ開講）を担当し、本人は中華文化圏の諸文化について講義している。中華文化圏の地理と言語・飲食・年中行事・祭祀・喪葬のそれぞれをテーマとする５回に渡る授業を３クラスにおいて講義している。本人が現地調査を行って収集した画像・映像資料を用いるなど受講生が少しでも興味を持てるよう工夫した。
（１４）奈良教育大学における中国文学史に関する講義	平成28年4月1日～平成28年9月30日・平成30年10月1日～平成31年3月31日	奈良教育大学教育学部教育学科非常勤講師として「漢文学特講」（集中講義）を担当し、中国文学史に関する講義を行った。先秦から現代までの中国文学および芸能の歴史について、可能な限り作品にも触れつつ通史的に概観したが、特に中国の芸能の歴史については、画像・映像資料を用いるなどして、受講生にとって分かりやすく興味を持ちやすい授業となるよう工夫した。
（１５）奈良学園大学における教職者として必要な表現力に関する講義	平成２８年９月２０日～現在に至る	平成28年9月～平成30年3月にかけて奈良学園大学人間教育学部人間教育学科特任講師として、平成30年度4月～現在は奈良学園大学人間教育学部人間教育学科専任講師として、「教職表現力演習Ⅰ」および「教職表現力演習Ⅱ」を担当している。「教職表現力演習Ⅰ」は主として1年生を対象とした、「教職表現力演習Ⅱ」は主として2年生を対象とした科目で、いずれも、教職者としてふさわしい「文章表現力」を身につけることに主眼をおく。テキストのみならず、毎回小テストを行うなど、現代日本語の知識と運用能力の向上を目指すべく工夫した授業を行っている。
（１６）関西学院大学における初級中国語に関する講義	平成29年4月1日～現在に至る	関西学院大学社会学部の非常勤講師として外国語科目「中国語Ⅰ，Ⅱ」を担当し、主に中国語未習の大学1年生に対して初歩的な中国語を講義している。中国語を母語とする教員とペアで１つのクラス授業を担当し、1週間に各１コマずつ、合計２コマ授業を行っている。申請者は、主として、教科書各課における新出の文法・語法について説明するということを担当しており、日本人が中国語を学ぶ上では何が問題となるのかというポイントを捕らえた、日本人だからこそできる授業を展開している。

（１７）関西学院大学における中級中国語に関する講義	平成29年4月1日～現在に至る	関西学院大学社会学部の非常勤講師として外国語科目「中国語Ⅲ,Ⅳ」を担当し、すでに1年間中国語を学んだことのある２年次以上の学生に対して、中級中国語を講義している。中国語を母語とする教員とペアで１つのクラス授業を担当し、1週間に各１コマずつ、合計２コマ授業を行っている。申請者は、主として、教科書各課における新出の文法・語法について説明するということを担当しており、日本人が中国語を学ぶ上では何が問題となるのかというポイントを捕らえた、日本人だからこそできる授業を展開している。
（１８）奈良学園大学におけるゼミナール形式の演習科目	**平成30年4月1日～現在に至る**	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科専任講師として、「基礎ゼミナールⅠ」（平成30年4月～平成31年3月）、「基礎ゼミナールⅡ」（平成31年4月～現在）、「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」（平成30年4月～現在）、「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」（平成31年4月～現在）を担当している。「基礎ゼミナールⅠ」では、１年次生に対してアカデミックスキル習得を目指した内容の授業を行い、「基礎ゼミナールⅡ」では、翌年以降の「人間教育学ゼミナール」や卒業研究、卒業論文につながるようにすべく、より高度なアカデミックスキルの活用と向上を目指した内容の授業を行っている。「人間教育学ゼミナールⅠ（基礎）」では、「国際理解に向けての中華文化研究」というテーマの下、３年次生に対して、前期は知識を得るべく中華圏の文化についての講義を行い、後期は学生個人が個別にテーマを設定して調べ、まとめて、発表するということを行っている。また、「人間教育学ゼミナールⅡ（応用）」では、学生個人が個別に設定したテーマについて引き続き調べさせ発表させるとともに、就職試験や面接に関する指導も行っている。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 （1）博士（文学）	平成 20 年 3 月 31 日	関西大学文博第110号、論文題目「道教斎儀の研究」
2　特許等 なし。		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 〔共同研究実績〕 （1）文部科学省科学研究費補助金・基盤研究 (A)「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」に参加	平成21年4月～ 平成25年3月	関西大学・吾妻重二教授を研究代表者として平成 21 年 4 月～平成 25 年 3 月にかけて行われた文部科学省科学研究費補助金・基盤研究（A）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」に研究協力書として参加し、主として『朱子語類』巻 89・礼六・喪の訳注の作成に従事するとともに、定期的に開催された研究会に参加し、各メンバーが作成した訳注の検討を行った。本研究課題に関わる研究業績として、研究報告書 3 冊（いずれも共著）がある。
（2）関西大学東西学術研究所「日本仏教研究班」に参加	平成22年4月～ 平成23年3月	関西大学・原田正俊教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「日本仏教研究班」に非常勤研究員として参加し、主として台湾の道教儀礼についての調査・研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行った。本研究班参加に関わる研究業績として、共著 1 冊、論文 1 本がある。
（3）慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容－『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」に参加	平成23年4月～ 平成26年3月	慶應義塾大学東アジア研究所において慶應義塾大学・野村伸一教授を研究代表者として進められた高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容－『東方地中海』をめぐる基層文化の比較研究」に研究協力者として参画し、主として中国および台湾の道教・民間信仰の調査・研究に従事するとともに、不定期的に開催された研究会に参加し、日本・中国・韓国の基層文化に関する研究報告を聞き、討論した。本研究課題に関わる研究業績として、共著 1 冊がある。
（4）関西大学東西学術研究所「東アジアにおける規範と学芸研究班」に参加	平成23年4月～ 平成25年3月	関西大学・二階堂善弘教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジアにおける規範と学芸研究班」に非常勤研究員として参加し、主として中華文化圏と日本の喪葬儀礼の比較研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行った。本研究班参加に関わる研究業績として、論文 1 本がある。
（5）関西大学東西学術研究所「東アジア宗教儀礼研究班」に参加	平成25年4月～ 平成28年8月・平成29年4月～平成31年3月	関西大学・原田正俊教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジア宗教儀礼研究班」に平成 25 年 4 月～平成 28 年 8 月にかけては非常勤研究員として、平成 29 年 4 月～は客員研究員として参加し、主として中華文化圏の道教の死者救済儀礼についての調査・研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行っている。本研究班参加に関わる研究業績として、論文 1 本がある。

（6）慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「慰霊供養と神格化から見る台湾人の歴史認識―民衆史学の構築をめざして」に参加	平成30年4月～令和2年3月	慶應義塾大学東アジア研究所において慶應義塾大学・三尾裕子教授を研究代表者として進められている高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「慰霊供養と神格化から見る台湾人の歴史認識―民衆史学の構築をめざして」に慶應義塾大学東アジア研究所研究員（非常勤）として参画し、主として台湾で祀られている日本人神に対する道教式の儀礼について、中華系の神に対する道教式の儀礼との相違という観点から調査・研究に従事した。
（5）関西大学東西学術研究所「東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班」に参加	平成31年４月～現在に至る	関西大学・中谷伸生教授を主幹とする関西大学東西学術研究所「東アジアの思想と芸術の文化交渉研究班」に客員研究員として参加し、主として中華圏の道教の死者救済儀礼についての調査・研究に従事するとともに、研究例会に参加して報告・討論を行っている。
〔競争的資金の獲得状況〕 （1）大畠記念宗教史学研究助成基金 「台湾南部道教の祈安醮に見られる地域的差異の研究」	平成24年4月 ～平成25年3月	研究代表者 助成金額：300,000 円
（2）文部科学省科学研究費補助金　若手研究（B）「台湾中部地域の烏頭道士の道教儀礼の調査・研究」（課題番号 25870933）	平成23年度 ～平成25年度	研究代表者 助成金額：2,600,000 円
（3）文部科学省科学研究費補助金　研究成果公開促進費（学術図書） 「台湾道教における斎儀―その源流と展開―」 （課題番号 265009）	平成26年度	研究代表者 助成金額：1,100,000 円
（4）文部科学省科学研究費補助金　基盤研究（C） 「台湾北部地域の烏頭道士の道教儀礼の調査・研究」 （課題番号 17K02210 ）	平成29年度 ～令和元年度	研究代表者 助成金額：3,510,000 円
（5）高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト 「慰霊供養と神格化から見る台湾人の歴史認識―民衆史学の構築をめざして」	平成30年度 ～令和元年度	研究分担者 獲得金額：個人 700,000 円、全体 3,000,000 円 研究代表者：三尾裕子（慶應義塾大学文学部教授）
4　その他 〔論文の引用実績〕 （1）「南臺灣靈寶道派放赦科儀之研究」が「道教斎儀の研究」を引用。	平成22年6月	**姜守誠**「南臺灣靈寶道派放赦科儀之研究」（南華大學宗教學研究所『世界宗教學刊』第15期、2010年）、172頁において、「**参考**文**獻**」の一つとして博士論文「道教斎儀の研究」が引用されている。
（2）「淡水靈寶道壇的功德儀式：以混玄壇為核心的探討」が「道教斎儀の研究」を引用。	平成23年年9月	蕭進銘「淡水靈寶道壇的功德儀式：以混玄壇為核心的探討」（財團法人施合鄭民俗文化基金會『民俗曲藝』173号、2011年）、239頁～240頁の本文および注16において、博士論文「道教斎儀の研究」が引用され、本人の台湾南部霊宝派抜度儀式に関する研究について、日本の数名の先学の研究を引き継いでいるが、功徳儀礼中の専門的テーマについてより深く検討していると評されている。

（3）「練形與鍊度：六朝道教經典當中的死後修練與亡者救度」が「道教斎儀の研究」を引用。	平成24年12月	謝世維「練形與鍊度：六朝道教經典當中的死後修練與亡者救度」（中央研究院歷史語言研究所『中央研究院歷史語言研究所集刊』第83本第４期、2012年）、741頁の本文において、本人の現代の道教式功徳儀礼に関する研究は台南地域と高雄・屏東地域の儀礼の次第を比較することで異なる道壇による功徳儀礼の相違を考察したものであると紹介され、同注12で博士論文「道教斎儀の研究」が引用されている。
（4）「塗炭齋之後：道教民俗中首過儀式的扮犯表演」が「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および「道教斎における自虐的行為の効能およびその衰退について――塗炭斎を中心として」を引用。	平成25年5月	李豊楙「塗炭齋之後：道教民俗中首過儀式的扮犯表演」（李豊楙、廖肇亨編『沉淪、懺悔與救度：中國文化的懺悔書寫論集』、中央研究院文哲所、2013年）、81頁の本文において、塗炭斎が次第に衰退した原因はすべてその自虐的行為に帰せられていると述べられており、同頁注16において、そのことを明確に述べた文献として、学術論文「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および「道教斎における自虐的行為の効能およびその衰退について――塗炭斎を中心として」が引用されている。
（5）『臺南傳統道壇研究』が「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および「道教斎儀の研究」を引用。	平成25年12月	洪瑩発、林長正『臺南傳統道壇研究』（臺南市政府文化局、2013年）、16頁の注10において、南朝劉宋の道士・陸修静が整備した斎儀礼が現在の台南地域の功徳儀礼にもある程度の影響を与えていることを述べた文献として、学術論文「塗炭齋考―陸修靜の三元塗炭齋を軸として―」および博士論文「道教斎儀の研究」が引用されている。また、19頁において、博士論文「道教斎儀の研究」、8頁掲載の表「台湾道教各教派の淵源および台湾における分布」が引用されている。
（6）「援法入道：南宋靈寶傳度科儀研究」が「臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討」を引用。	平成26年12月	張超然「援法入道：南宋靈寶傳度科儀研究」（謝世維主編『經典道教與地方宗教』、政大出版社、2014年）、132頁の注１において、台湾の道教儀礼に関する研究の中でも異なる時代の文献を比較することで儀礼の変遷をたどった研究の一つとして、**学術論文「臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討」が**引用されている。
（7）「産難の予防、禳除と抜度：台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として」が「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」および「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」を引用。	平成 27 年 3 月	謝聡輝著、山田明広訳「産難の予防、禳除と抜度：台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として」（野村伸一編著『東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―』、風響社、2015 年）、355 頁注 28 において、台湾道教の異常死者救済に関する参考文献として、学術論文「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」および「台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―」が引用されている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.日本古代中世の仏教と東アジア	共著	2014年 平成26年3月	関西大学出版部 全345頁	関西大学東西学術研究所の日本仏教研究班の研究成果報告論文集。東アジアにおける仏教史の総合的な様相を提示する書。 （A5 判・全 345 頁） 編者　原田正俊 共著者　原田正俊・西本昌弘・長谷洋一・山田明広・上川通夫・ほか 6 名 本人担当部分　第二部第四章「現代台湾の鬼月における無縁死者救済儀礼について―道教の普度法会と仏教の盂蘭盆会の比較―」（207 頁～240 頁） 台湾の鬼月において無縁仏救済のために行われる「普度法会」および「盂蘭盆会」という祭祀・儀礼について、まず、現地調査により得た事例を用いてその現状を紹介し、その上で、仏教儀礼および道教儀礼関連の漢文資料を読解することを通じて、「中元」、「盂蘭盆」、「施餓鬼」（放焔口）という関連する事項の原義を示し、さらに、これらの事項の歴史的変遷を追うことで、「普度法会」および「盂蘭盆会」の成立と展開を明らかにした。
2.台湾道教における斎儀―その源流と展開―	単著	2015年 平成27年2月	大河書房	漢文文献の読解と現地調査を有機的に組み合わせた研究方法を用いて、過去の道教儀礼と現在の台湾の道教儀礼の両方について分析することにより、道教の斎儀が現在に至るまでにいかに変容したのか、また反対に今なお古い斎儀の伝統がどれほど保存されているのか示そうとした書。三部七章より成る。本書を著すことにより、現在台湾で見られる道教儀礼の中には、歴史的意味での斎儀と現在的意味での斎儀の両方が並存しているということを明らかにした。 （A5 判・全 260 頁） 平成 26 年度科学研究費補助金研究成果公開促進費助成図書（交付額 1,100,000 円）

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―	共著	2015年 平成27年3月	風響社	慶應義塾大学東アジア研究所の研究プロジェクト「日本・中国・韓国からみた海域文化の生成と変容」(2011年度～2012年度）の研究報告論文集。 （A5判・全750頁） 編者　野村伸一 共著者　野村伸一・葉明生・謝聡輝・山田明広・鈴木正崇・ほか7名 本人担当部分　第二部第四章「福建泉州地域の寺廟・宗祠調査報告：王爺および観音信仰を中心に」(359頁～393頁）を藤野陽平と共著 2011年12月27日～2012年1月2日に福建泉州地域の寺廟や宗祠などを現地調査し見聞したものについて報告するとともに現地で見られた 王爺信仰と観音信仰の特徴について考察したもの。福建泉州地域のいくつかの村落では観音信仰と王爺信仰が結合しているかと思われる祭祀が行われていること、および台湾では今なお行われている送王船の伝統が多くの廟において断絶してしまっていることを指摘した。本人は報告部分のおよそ7割（担当部分抽出不可能）および考察部分の全般（384頁～390頁）を担当した。 本人担当部分　第二部第五章第六節6「鹿港天后宮における普度法会次第」（435頁～445頁） 2013年8月21日（旧暦7月15日）に台湾彰化県の鹿港天后宮において施宣熹道長率いる保真壇により実施された道教の普度法会（無縁死者救済儀礼）の調査報告。本人が行った現地調査およびこれまでの先行研究に依拠しつつ主に法会の次第について解説した。また、本法会が一方で死者救済儀礼であるとともに、一方で生者救済儀礼でもあるということを示した。
（学術論文） 1.臺灣道教合符童子科儀之形成的初步探討 （査読付）	単著	2010年 平成22年12月	成大歷史學報（台湾・国立成功大学歴史学系）第39号、177頁～207頁	現在の台湾道教の功徳儀礼を構成する科儀の一つである「合符童子科儀」に関して、まず、その内容と構造および使用される儀礼文書について検討し、続いて、道教儀礼関連の漢文文献の中から関連のある儀礼を抽出し、その内容と構造および使用される儀礼文書について分析し、最後に、中でも特にこの科儀との関連性が高いと判明した南宋『王氏大法』所載の「童子合牒」を取り上げ、その内容を現在の合符童子科儀で使用される「童子符」の内容と相互に比較し考察を加えることで、台湾の合符童子科儀がいかにして成立したのか示した。
2.台湾道教の縊死者に関する儀礼とその地域的差異―高雄・屏東地域と台南地域の比較を中心に―	単著	2011年 平成23年4月	東西学術研究所紀要（関西大学東西学術研究所）第44輯、109頁～119頁	現在、台湾の高雄・屏東地域と台南地域において見られる道教の縊死者に関する儀礼、すなわち抽楹放索科儀と絞台放索科儀の台湾における地域的差異について考察した論文。本人がそれぞれの地域において現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料を用いてそれぞれの儀礼の儀礼構造や内容、目的、意義などを詳細に描写し、さらに、両者を相互に比較して、両者の間にはいかなる相違性や共通性が見られ、それらはいかなる意味を有するのか検討した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.台湾道教の水死者救済儀礼とその文書	単著	2012 年 平成24年4月	東西学術研究所紀要（関西大学東西学術研究所）第 45 輯、253 頁～277 頁	台湾道教の水死者救済儀礼である転水藏科儀について、まず、本人が台南地域と高雄・屏東地域で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料を用いて各地域の転水藏科儀の構造や内容、目的、意義を解明してから両者を比較し、さらに、使用される文書についても、いかなるものが存在し、いかなる効能を有するか、地域ごとに考察してから相互に比較することで、転水藏科儀とその文書はいかなるものであり、それらにはいかなる地域差が見られるか考察した。
4.道教血湖儀礼の初歩的考察―台湾南部地区を例として― （査読付）	単著	2014 年 平成26年3月	関西大学中国文学会紀要（関西大学中国文学会）第 35 号、113 頁～137 頁	道教において女性が難産死した場合に行われる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、まず、その淵源および歴史的変遷を道教儀礼関連の漢文文献を読解することによって検討し、その後、台湾で現地調査を行って収集した台湾南部地域の道教血湖儀礼に関する画像・映像資料および漢文体による文字資料を用いて、その儀礼構成や内容など具体的様相を明らかにするとともに、さらに、地域的差異、通常死の場合に行われる功徳儀礼との間の差異、歴史的位置づけなどを考察した論文。
5.台湾道教の異常死者救済儀礼	単著	2015 年 平成27年8月	アジア遊学（勉誠出版）第 187 号「怪異を媒介するもの」、249 頁～258 頁	台湾道教で、縊死、溺死、難産死などの異常と認められる死因により人が亡くなった場合に行われる「抽楹放索」、「転水藏」、「血湖」などといった特殊な儀礼について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した論文。最初に、通常死の場合に行われる死者救済儀礼はいかなるものか検討した後、異常死者救済儀礼のうち「抽楹放索」、「転水藏」を取り上げ、その実施法を具体的に描写することで、その意義や効能について考察した。
6.台湾鹿港地域の道教式功徳儀礼について （査読付）	単著	2016 年 平成28年3月	関西大学中国文学会紀要（関西大学中国文学会）第 37 号、297 頁～317 頁	本人が 2013 年 9 月 6 日に台湾彰化県鹿港鎮にて道教式功徳儀礼を調査したその報告論文。まず、調査した功徳儀礼の基本データおよび儀礼のプログラムを提示し、その後、提示したプログラムの順に従って功徳儀礼を構成する各科儀についてその実施方法や効果、意義、使用された文書などを叙述し、最後に、ここまでの考察および本人のこれまでの経験を踏まえて台湾中部地域の道教式功徳儀礼の特徴であると言えそうなことを提示した。
7.道教実践者としての李白―李白の詩を通しての考察―	単著	2016年 平成28年3月	**奈良教育大学 国文 研究と教育（奈良教育大学国文学会）第** 39 **号、**19 **頁～**31 **頁**	盛唐の詩の大家・李白が道教信者としていかなる道教的実践を行い、それは彼の漢詩の中ではどのように表現されているのか、李白の漢詩を分析することにより考察した論文。まず、李白の事績について述べ、それから、李白の漢詩の分析を通じて李白が授籙、煉丹服餌、存思といった道教的実践を行っていたことを提示し、最後に、これまでの考察を踏まえて、李白が天宝三年に長安の宮廷から放逐されたという挫折経験は、彼の道教信仰の上で、また詩作および人生の上で、大きなターニングポイントとなる出来事であったと結論付けた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8. 学での漢文教育における問題点（１）―学生側の問題点：何が学生の漢文読解の妨げになっているか―	単著	2016年 平成28年5月	教育ＰＲＯ（株式会社ＥＲＰ）第46巻10号、14頁～15頁	大学の授業で学生が漢文学を学習するに当たって、何が学生の理解の妨げになっているか、本人のこれまでの大学における漢文教育経験を踏まえて述べた論文。考察の対象を訓点付きの漢文を読解する場合のみに絞り、その場合、書き下し文から現代語へと翻訳するのが学生にとって最も困難であるとし、その上で、その原因は①漢文の読みと字義に対する知識の不足、②漢文の文法に対する理解の不足、③日本語の古典文法に対する理解の不足の三点にあるとして、各点について詳細に論じた。
9. 学での漢文教育における問題点（２）―教員側の問題点：いかにして学生に漢文読解力を身に付けさせるべきか―	単著	2016年 平成28年5月	教育ＰＲＯ（株式会社ＥＲＰ）第46巻11号、14頁～15頁	学生が漢文学を学習するに当たって困難を覚える原因として①漢文の読みと字義に対する知識の不足、②漢文の文法に対する理解の不足、③日本語の古典文法に対する理解の不足の三要素が考えられるとした上で、教員はこれらの問題を解決して学生に漢文読解力を身に付けさせるために授業ではどのように取り組むべきか、また、学生に漢文に興味を持たせ継続的に学習させるにはどうすべきか、本人のこれまでの大学における漢文教育経験を踏まえて述べた論文。
10. 台湾道教打城科儀についての初歩的考察	単著	2017年 平成29年9月	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）、第7集、97～109頁	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した論文。台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について考察を加え、さらに台南地域のものと高雄・屏東地域のものとを相互に比較することで地域的差異という点についても検討を加えた。
11. 台湾道教的救**済**异常死者的**仪**式――以台南地区的**对缢**死者及溺水死者等的**仪**式**为**主 （査読付き）	単著	2018年 平成30年6月	**『道教学刊』**（社会科学文献出版社）第2**期**、274-291**頁**	台湾道教の異常死者救済儀礼について、縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例として考察した論文。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている漢文により書かれた科儀書および漢文体の筆記小説の読解などによって検討した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 〔国際会議等発表〕 1. 玄天上帝在臺灣道教儀式中的特徵	―	2010 年 平成 22 年 4 月	An International Symposium: Divinity and Society: The Cult of Zhenwu in Imperial and Mordern China （中國歷史社會中的真武崇祀國際學述研討會） （於アメリカ・ラトガース大学）	道教の中でも高位の神に位置づけられ、台湾道教においては北極四聖の代表として特に尊崇されている玄天上帝が、台湾の道教儀礼中のいかなる場面においていかなる形で登場するか、主として儀礼空間および科儀といった二つの側面から教派ごとに分類して検討し、その結果を用いて台湾の道教儀礼に見られる玄天上帝の特徴について考察した中国語による研究発表。発表持ち時間約 20 分。討論約 30 分。
2.臺灣道教血湖儀式之初步探討	―	2011 年 平成 23 年 6 月	第 7 届国際道教学術研討会 （於中国・湖南省衡山神龍寿岳国際大酒店）	道教において女性が難産死した場合に行われるとされる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、現在の台湾ではそれがいかなる条件のもとで行われ、具体的にいかなるものであるのか、本人が台湾で行ってきた現地調査の経験にもとづいて述べ、さらに、通常死の場合に行われる功徳儀礼と比べるといかなる差異が見られるのか、また、歴史的にはどのように位置づけられるか考察した研究発表。発表時間 10 分。討論なし。
3.台湾道教の難産死者救済儀礼とその地域的差異―台湾道教の伝承系統考察の手がかりとして―	―	2011 年 平成 23 年 9 月	渋沢栄一記念財団寄付・次世代国際フォーラム「世界の中の東アジア―多元文化交渉の諸相」 （於関西大学）	台湾において行われる道教の異常死者救済儀礼のうち、難産死の場合に行われる「血湖」と呼ばれる功徳について、それがいかなる条件のもとで行われ、具体的にいかなるものであるのか、台南地域と高雄・屏東地域との間の地域的差異という観点から検討し、さらに、なぜこのような異常死者救済儀礼を特別に行わなければならないのか考察した研究発表。発表時間 15 分、討論時間 10 分。
4.道教血湖儀礼の現状について―台湾南部地域の血湖の功徳を例として―	―	2013 年 平成 24 年 5 月	東アジア文化交渉学会第 5 回年次大会「描かれる新しい世界：東アジアの歴史・文化と未来」 （於香港城市大学）	道教において女性が難産死した場合に行われるとされる「血湖」と呼ばれる特殊な死者救済儀礼について、まず、その淵源について道教儀礼関連の漢文文献を用いて検討した後、本人が台湾で行ってきた現地調査の経験にもとづき、台湾南部地域の道教血湖儀礼を例として、その具体的様相、地域的差異、通常死の場合に行われる儀礼との間の差異などについて考察した研究発表。発表時間 15 分、討論時間 10 分。
5.道教血湖科儀的初步探討―以臺灣南部地區爲例―	―	2013 年 平成 24 年 7 月	經典道教與地方宗教國際研討會 （於台湾・国立政治大学）	台湾道教において主として女性が難産死した場合に行われる血湖功徳について考察した中国語による研究発表。まず、道教儀礼関連の漢文文献を用いて難産死者が堕ちるとされる血湖地獄とはいかなるものか確認し、その後、現在の台湾で行われている「血湖功徳」について、本人が台湾南部地域で現地調査を行い得た漢文体のよる文字資料および画像・映像資料にもとづきつつその実施方法や一般の功徳儀礼との差異、使用される文書などについて検討した。発表時間 20 分、討論時間 30 分

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.台灣道教的救濟異常死者的儀式——以台南地區的對縊死者及溺水死者的儀式為主	—	2016年 平成28年7月	中国人民大学-羅格斯大学首届国際道教文化前沿論壇 （於中国・湖南省陽光大酒店）	台湾道教の異常死者救済儀礼について、縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例として考察した中国語による研究発表。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている科儀書、筆記小説などによって検討した。発表時間20分、討論時間10分。
7.福建晉江地區的王爺信仰之初步探討	—	2017年 平成29年10月	2017臺灣王爺信仰文化國際學術研討會 （於台湾文化部文化資**産**局文化資産保存研究中心）	2011年12月27日～2012年1月2日に福建泉州地域の寺廟や宗祠などについて現地調査を行ったが、その際に調査したもののうち王爺廟および王爺信仰に関するものを抽出し考察を加えることで、当該地域の王爺信仰の特徴を描き出そうとした中国語による研究発表。福建泉州地域のいくつかの村落では観音信仰と王爺信仰が結合しているかと思われる祭祀が行われていること、および台湾では今なお行われている送王船の伝統が多くの廟において断絶してしまっていることを指摘した。発表時間20分、討論時間20分。
8.臺灣道教打城科儀之地方性差異--以臺南地區與高雄·屏東地區為例	—	2018年 平成30年10月	道教与**地方文化**国際**学術研討会** （於中国・浙江大学）	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した中国語による研究発表。台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について考察を加え、さらに台南地域のものと高雄・屏東地域のものとを相互に比較することで地域的差異という点についても検討を加えた。発表時間20分、討論時間30分。
9.“Are There Any Differences in the Rites due to the Difference of the Spirits Origins of temples?: Comparison of the Rituals between Temples of Japanese Spirits and Temples of Chinese Spirits in Taiwan”	—	2019年 令和元年7月	The 2nd Annual Conference of the EASSSR（East Asian Society for the Scientific Study of Religion：東アジア宗教社会学会） （於北海道大学）	台湾の日本人神を祀る廟で行われる道教儀礼と中華系の神を祀る廟で行われる道教儀礼との間に見られる差異について、本人がこれまで行ってきたフィールドワークにもとづきつつ考察した英語による研究発表。日本人神を祀る廟で行われる道教儀礼の事例として2018年8月に屏東県枋寮東龍宮にて調査した普度法会の事例を取り上げ、これと一般的な普度法会を比較することで、道教儀礼は日本人神を祀る廟で行われようと、中華系の神を祀る廟で行われようと、いずれにおいても変わらないが、東龍宮は宮主が道士であるなど特殊であるため、いくらか相違が生じたという結論に達した。慶應義塾大学東アジア研究所における高橋産業経済研究財団支援学術プロジェクト「慰霊供養と神格化から見る台湾人の歴史認識―民衆史学の構築をめざして」による研究成果の一部であり、本プロジェクトの中間報告と位置付け得るものである。発表時間20分、討論時間30分

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10. 臺灣南部道教打城科儀之初步探討─以臺南地區與高雄·屏東地區為例	―	2019 年 令和元年 9 月	老子道文化学術研討会 （於中国・安徽省渦陽県）	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した中国語による研究発表。まず、「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城といった基礎的事項について検討し、次に、台南地域と高雄・屏東地域それぞれの地域の打城科儀の内容および構成を分析し、最後に両者を相互に比較することで、打城科儀の地域的差異について考察した。発表時間 20 分、討論時間 30 分。
〔国内学会発表〕 1. 台湾道教の異常死者救済儀礼で使用される文書について	―	2011 年 平成 23 年 3 月	日本中国学会第1回若手シンポジウム「中国学の新局面」 （於東京大学）	台湾道教の中でも功徳儀礼が比較的盛んに行われている台湾南部地域の道教を主たる考察の対象として、まず、当該地域において異常死が発生した場合に行われる功徳儀礼や科目にはいかなるものが存在するか列挙し、その上でその際に使用される特殊な儀礼文書にはいかなるものがあり、その内容はいかなるものであるのか、台南地域と高雄・屏東地域の地域差にも留意しつつ考察した研究発表。事前審査あり。発表時間 20 分。討論時間 10 分。
2. 道教では縊死者をいかにして救済するのか―台湾南部地域を例として―	―	2014 年 平成 26 年 3 月	東アジア恠異学会第90回例会 （於園田学園女子大学）	台湾道教の異常死者救済儀礼のうち、人が縊死した場合に行われる特殊な儀礼について考察した研究発表。台南地域の縊死者救済儀礼である「抽楹放索」と高雄・屏東地域の縊死者救済儀礼である「絞台放索」を取り上げ、両者を相互に比較して両者の間に見られる相違について検討することで、「絞台放索」には死者を地獄から救済するという効能があるが、「抽楹放索」にはそのような効能はなくむしろ、縊死の原因である悪煞を祓うことに重点が置かれているという見解を示した。発表時間 60 分、討論時間 60 分。
3. 伝統や文化に関する教育から国際理解へ―漢字・漢文教育を例として―	―	2017 年 平成29年2月	日本人間教育学会第2回大会 （於奈良学園大学）	教育によって、日本人の中華文化圏の人々に対する理解を増進させるべきことを主張した研究発表。まず、伝統や文化に関する教育と国際理解教育の現状および相互の関係性について振り返り、その上で、中華文化圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏の人々に対する理解が足りないため、彼らに対する対応に不適切な点があるといった問題点を指摘した。そして、旧字体や漢文といった伝統や文化に関する教育に力を入れることで、中華文化圏の人々に対する理解増大につながるのではないかと提言した。発表時間 20 分、討論時間 10 分。
4. 台湾道教打城科儀についての初步的考察	―	2017年 平成29年7月	関西大学東西学術研究所第８回研究例会 （於関西大学）	台湾道教の死者救済儀礼を構成する儀式の一つで、亡魂を地獄より直接的に救い出すことを目的として行われる「打城」という儀式について、本人が台湾で現地調査を行い入手した漢文体による文字資料と画像・映像資料にもとづき考察した研究発表。台湾道教の「打城科儀」の実施される条件や使用される糊紙製の地獄の城、科儀の内容、構成といった基礎的事項について考察を加え、さらに台南地域のものと高雄・屏東地域のものとを相互に比較することで地域的差異という点についても検討を加えた。発表時間 20 分、討論時間 10 分。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. 伝統や文化に関する教育から中華圏に対する理解へ―国語科・社会科を中心に―	―	2017年 平成29年9月	第25回日本グローバル教育学会全国研究大会 （於国際医療福祉大学・小田原キャンパス）	学校教育の場で中華圏に対する理解を促進させる教育を行うべきことを主張した研究発表。まず、中華圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏に対する理解が足りないため、対応に不適切な点があるといった問題点を指摘し、その上で、伝統や文化に関する教育の一環として旧字体や台湾人・香港人アイデンティティーの問題について国語科や社会科の時間に教え、中華圏に対する正しい理解へとつなげるべきことを主張した。発表時間20分、討論10分。
6. 道教の血湖地獄とその救済儀礼		2017年 平成29年 12月	東アジア恠異学会第114回定例研究会 （於園田学園女子大学）	道教の数ある地獄の中でも、主としてお産により亡くなった女性の亡魂が囚禁されると考えられている「血湖」とその救済儀礼について考察した研究発表。まず、道教の血湖地獄がいかなるものであるのか、仏教の血盆地獄と比較しつつ概観し、その後、主として現在の台湾で行われているものを例として、そこから救済するための儀礼はいかなるものであり、通常死の場合の儀礼とはいかなる違いが見られるのか、また地域によりいかなる違いが見られるのかといったことについて考察した。
〔翻訳〕 1. 中国北方農村における民間宗教の復興とその策略	単訳	2010年 平成22年9月	東アジアの思想と宗教（丸善出版）、293頁～318頁	原著者　范**丽**珠 原題　「中国北方**乡**村民**间**宗教的复**兴**及其策略」 復旦大学教授・范麗珠氏が、関西大学の渋沢栄一記念財団寄付講座「日中関係と東アジア」の一環として2009年11月26日に講演を行うために著した中国語による論文「中国北方**乡**村民**间**宗教的复**兴**及其策略」を日本語に翻訳したもの。共産党政権の下、迷信・俗信が禁止されている中国において、近年、民間宗教がどのような方法を用いて復興しつつあるのか社会学的視点から論じられている。
2. 書院―近世中国における教育の中心	共訳	2011年 平成23年 10月	泊園記念会創立50周年　記念論文集（関西大学出版部）、53頁～71頁	原著者　李弘祺 原題　「書院：近世中國教育的中心」 台湾国立交通大学教授・李弘祺氏が2010年10 月23日に行われた平成二十二年度（第50回）泊園記念講座国際シンポジウム「東アジアの伝統教育と泊園書院」において基調報告を行うために著した中国語による論文「書院：近世中國教育的中心」を日本語に翻訳したもの。 共著者　山田明広・吾妻重二 本人担当部分　全文の下訳を分担したため抽出不可能
3. 異議の意義―東アジアの反理学思潮を論ず―	単訳	2012年 平成24年3月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、236頁～288頁	原著者　楊儒賓 原題　「異議的意義――論東亞的反理學思潮」 台湾国立精華大学教授・楊儒賓氏が2010年9月10日に行われた朱子生誕880年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」において基調報告を行うために著した中国語の論文「異議的意義――論東亞的反理學思潮」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。荻生徂徠・丁若鏞・阮元などといった東アジアの反理学を主張する儒者の観点およびその理念について考察されている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.朝鮮・丁若鏞と日本古学派	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、379 頁～414 頁	原著者　蔡振豐 原題　「朝鮮丁若鏞與日本古學派」 国立台湾大学教授・蔡振豊氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」において報告を行うために著した中国語の論文「朝鮮丁若鏞與日本古學派」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。朝鮮実学の集大成者・丁若鏞の著作を通じて、朝鮮の学者が日本との長年に渡る儒学交流の後、日本古学に対していかなる評価を下したのか考察されている。
5.佐久間象山と張之洞	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、415 頁～446 頁	原著者　張崑將 原題　「佐久間象山與張之洞」 国立台湾師範大学教授・張崑將氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」において報告を行うために著した中国語の論文「佐久間象山與張之洞」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。日本幕末の朱子学者・佐久間象山の思想と中国清末の政治家・張之洞の思想を比較することにより、中国と日本との間の西洋の学問を受け入れるに当たっての認知の差異について考察されている。
6.朱熹『白鹿洞書院掲示』の日本における流伝およびその影響	単訳	2012 年 平成 24 年 3 月	朱子学と近世・近代の東アジア（臺大出版中心）、518 頁～536 頁	原著者　張品端 原題　「朱熹《白鹿洞书院揭示》在日本的流传及其影响」 国福建省武夷学院・中国社会科学院哲学研究所宋明理学研究センター秘書長・張品端氏が 2010 年 9 月 10 日に行われた朱子生誕 880 年記念国際シンポジウム「朱子学と近世・近代の東アジア―テキストをふまえたアプローチ―」においてポスターセッションを行うために著した中国語の論文「朱熹《白鹿洞书院揭示》在日本的流传及其影响」を日本語に翻訳し、漢文文献からの引用文については書き下し文に改めたもの。朱子が再建し経営した白鹿洞書院の精神を記した『白鹿洞書院掲示』がいかに日本に流伝し、そして影響したかといったことが考察されている。
7.産難の予防、禳除と抜度―台湾南部と泉州地区に見られる道教科法を主として―	単訳	2015 年 平成 27 年 3 月	東アジア海域文化の生成と展開―〈東方地中海〉としての理解―（風響社）、299 頁～357 頁	**原著者　謝聰輝** **原題　「産難的預防、禳除與拔度：以南臺灣與泉州地區所見道教科法為主」** **台湾師範大学教授・謝聰輝氏が著した中国語の論文を日本語に翻訳し、漢文文献や漢文体による儀礼書からの引用文については書き下し文に改めたもの。中国や台湾に伝わる女性の難産予防に関わる種々の儀礼やまじない、宗教医療について、主として文献を用いて詳細に分析するとともに、併せて、現今なお実施されている「血湖」と呼ばれる難産関連の道教儀礼について、台湾南部と泉州地区における現地調査を踏まえて仔細に論じている。**

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8.現代上海道教の宮観および道士についての簡単な紹介	単訳	2015年 平成27年6月	東方宗教（日本道教学会）第125号、127頁～132頁	原著者　姚树良 原題　「当代上海道教宫观、道士现状简介」 2014年11月8日に開催された日本道教学会第65回大会において、上海市道教教会副会長・姚樹良氏により行われた中国語による講演の原稿を日本語に翻訳したもの。最初に文化大革命以降の中国道教の状況について紹介するとともに、中国道教の教派について説明し、その上で、上海の道教の現況について、宮観、儀礼、道士の養成方法、宮観と民衆とのかかわり、布教などといった側面から紹介されている。
〔研究報告〕 1.『朱子語類』礼関係部分訳注２	共著	2013年 平成25年5月	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究代表者・吾妻重二）	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究課題番号21242001）の平成21年度の研究成果報告書。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者　『朱子語類』研究会 共著者　吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか4名 本人担当部分　巻89・礼六・喪、第7条（96頁～100頁）
2.『朱子語類』礼関係部分訳注３	共著	2011年 平成23年1月	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」研究代表者・吾妻重二	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究課題番号21242001）の平成22年度の研究成果報告書。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。 編者　『朱子語類』研究会 共著者　吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか6名 本人担当部分　巻89・礼六・喪、第8条～第9条（89頁～92頁）
3.『朱子語類』礼関係部分訳注４	共著	2012年 平成24年1月	科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」研究代表者・吾妻重二	**科学研究費基盤研究（A）（一般）「東アジアにおける伝統教養の形成と展開に関する学際的研究：書院・私塾教育を中心に」（研究課題番号21242001）の平成23年度の研究成果報告書。『朱子語類』（南宋・黎靖徳編、王星賢点校標点本、理学叢書、北京・中華書局、1986年）を底本とし、その他テキストと校訂した上で、古典中国語による本文を現代語訳し、さらに詳細な訳者注を付けている。** **編者　『朱子語類』研究会** **共著者　吾妻重二・井澤耕一・白井順・山田明広・ほか6名** **本人担当部分　巻89・礼六・喪、第10条～第19条（77頁～85頁）**

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. 台湾道教の縊死者および溺死者救済儀礼に関する二、三の考察―台南地域を例として―	単著	2016 年 平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）第 5 集、213 頁～219 頁	台湾道教の異常死者救済儀礼について、縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼を例として考察した研究報告。まず、何が異常死に当たるか定義づけした後、筆者が台南地域で調査した縊死者救済儀礼と溺水死者救済儀礼の事例を用いて、それぞれの儀礼の実施方法や特徴などを確認し、その後、なぜこれらの儀礼は各死者が生じた現場で行わなければならないのかということについて、儀礼を行った道士たちに対する聞き取りや彼らが持っている科儀書、筆記小説などによって検討した。
5. 伝統や文化に関する教育から中華圏に対する理解へ―国語科・社会科を中心に―	単著	2018 年 平成 30 年 3 月	奈良学園大学紀要（奈良学園大学）第 8 集、149 頁～154 頁	学校教育の場で中華圏に対する理解を促進させる教育を行うべきことを主張した研究報告。まず、中華圏から非常に多くの観光客が日本へと来ているにも関わらず、日本人の中華文化圏に対する理解が足りないため、対応に不適切な点があるといった問題点を指摘し、その上で、伝統や文化に関する教育の一環として旧字体や台湾人・香港人アイデンティティーの問題について国語科や社会科の時間に教え、中華圏に対する正しい理解へとつなげるべきことを主張した。
〔書評〕 1. 志賀市子著『〈神〉と〈鬼〉の間―中國東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』	単著	2013 年 平成 25 年 5 月	東方宗教（日本道教学会） 第 121 号、93 頁～99 頁	茨城キリスト教大学教授・志賀市子氏の著書『〈神〉と〈鬼〉の間―中國東南部における無縁死者の埋葬と祭祀』（風響社、2012 年）に対する書評。中国東南部、特に広東省東部沿海の潮汕および海陸豊地域における無縁死者の埋葬と祭祀を主な研究対象とし、その諸相および歴史的変遷を明らかすることを目的として書した本書について、その内容を簡単に紹介した上で、その研究方法および内容について評し、さらに問題点を指摘した。
〔辞書〕 1. 岩波世界人名事典	共著	2013 年 平成 25 年 12 月	岩波書店 全 3586 頁	全世界の国・地域について、神話・伝説上の人物から現存者までを網羅した総合的な人名辞典。 編者　岩波書店辞典編集部 共著者　山田明広・吾妻重二・二階堂善弘・酒井規史・三浦國雄他 550 名 本人担当部分　中国の道教および民間信仰の神・神仙に関する項目のうち以下の 11 項目。安期生（145 頁）、王爺（484 頁）、玉皇大帝（734 頁）、元始天尊（924 頁）、黄初平（950 頁）、三茅真君（1126 頁）、東華帝君（1839 頁）、保生大帝（2641 頁）、媽祖（2743 頁）
〔解説・総説・雑記等〕 1. 屏東の林徳勝道長との出会いと交流―台湾道教のあり方を学ぶ―	共著	2014 年 平成 26 年 9 月	日本台湾学会ニューズレター（日本台湾学会）第 26 号、13 頁～14 頁	日本台湾学会のニューズレターにおける特集「記憶の中の台湾―思い出の場所、思い出の人―」に寄せた文章。本人が台湾留学中に知り合い、道教儀礼を調査させていただいたほか多くの資料を提供していただくなど非常にお世話になった台湾屏東県在住の道士・林徳勝道長との出会いとこれまでの交流、および林道長の道教儀礼や信仰に対する態度についてエッセー形式で紹介するという内容のもの。

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　　加奥　満紀子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
幼児教育	幼児理解・保育者論・保育内容総論

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 ・学校評価を生かした保育内容の改善	平成元年４月～現在に至る	毎年年度末に、教育評価を保護者や教員で行い、保育課程や具体的な保育内容が適正であったかを評価した。評価に基づいて、次年度の保育課程と保育内容を見直して、改善を重ねて行った。（大和郡山市立郡山西・片桐西・郡山北・矢田南幼稚園での実践）
・子ども理解から始まるスタートカリキュラムの編成	平成 10 年４月～現在に至る	スタートカリキュラムの編成には地域の小学校や就学前組織の実態の違いや子どもの実態を理解し可能な方法で編成する必要がある。制度や子ども理解の違いを理解し、無理なく実践していった。（大和郡山市立郡山西・矢田南・郡山北幼稚園での実践）
２　作成した教科書，教材		
・教育実習の手引き 大和郡山市立郡山西幼稚園発行 （共著）　【再掲】	平成 26 年４月	毎年大学と短期大学から教育実習生を 5 名以上受け入れ、実習の手引き冊子を準備し実習生に幼稚園教育の目標と幼稚園教育要領に基づいた保育内容の具体的な姿と、幼児を理解する視点について指導した。さらに週案や保育案の作成の方法や、保育後に振り返り幼児の実態に合わせて保育改善する意味も指導した。（大和郡山市立矢田南幼稚園教育実習生指導に使
・教育実習の手引き 大和郡山市立郡山西幼稚園発行 （共著）　【再掲】	平成 26 年４月	大学と短期大学から教育実習生を 5 名以上受け入れ、冊子を作成し実習生に幼稚園教育の意義と幼稚園教育要領に基づいた保育内容の 5 領域について具体的に指導した。さらに週案や保育案の作成の方法も狙いを明確にして指導した。幼児の状況を把握する視点を指導するとともに。幼児の実態に合わせて保育案を作成する意味についても指導をした。（大和郡山市立郡山西幼稚園教育実習生の指導に
３　教育上の能力に関する大学等の評価 ・奈良学園大学学生による授業評価 アンケートにおける評価	平成 30 年１月	奈良学園大学人間教育学部人間教育学科の専門ゼミナールで、幼稚園に就職する学生に対し、幼稚園教員に求められる資質と能力について講話した。幼稚園に就職する学生は、実際の課題等について満足度が高く、4 点満点 3.8 で非常に高い評価であった。
４　実務の経験を有する者についての特記事項 ・幼稚園での教頭経験 大和郡山市立郡山北幼稚園 大和郡山市立矢田南幼稚園	平成 17 年４月～25 年３月	8 年間公立幼稚園の教頭を務めた。園長を補佐し、教育実習生の毎年約 10 人受け入れ、その実習の企画運営を行った。保育の各期の意味月案、週案、当日案などの作成園内研修を年 3 回実施した。
・幼稚園の園長経験 大和郡山市立矢田南幼稚園 大和郡山市立郡山西幼稚園	平成 25 年４月～現在にいたる	3 年間園長を務め、幼稚園教育要領等の改訂を受け、スタートカリキュラムの本格実施に尽力した。教育実習生を毎年数人受け入れ、保育課程と保育内容の関連、児童理解、教育公務員の法的遵守について講話と指導を行った。

5　その他 ・奈良県健康教育研究会安全部会幼稚園部会における指導助言 対象：幼小中教諭、養護教諭 約 50 名	平成 28 年 12 月（奈良県立教育研究所）	幼稚園の雨の日の登降園の方法や、安全に行動しようとする防犯訓練や避難訓練の際の教師の役割にについて指導助言をした。さらに固定遊具の使い方を園児が話しあい安全に使用する支援について幼児理解の視点で指導助言した。
・奈良県幼稚園等新規採用研修講座及び公立幼保連携型認定こども園新規採用保育教諭研修講座 講師 対象：新規採用保育教諭約８０名	平成 29 年 5 月（奈良県立教育研究所）	幼稚園教育の目標から始まり、幼稚園教育要領の 5 領域と、その具体的な保育内容の様子と関連付けて子どもの写真等を通して具体的に語った。さらに幼稚園教員として子どもを理解する上で大切にしたい子ども理解の視点や、幼稚園で働く上で求められる資質や能力について 5 点を話した。
・大和郡山市立郡山南幼稚園園内研究会の講師	平成 30 年 10 月 24 日	研究主題「主体性を育む」－子どもの「したい」「やってみたい」をみつめて－のもと、三歳児の研究保育を参観し、三歳児の遊びにおける主体性について協議し、研修を深めた。
・大和郡山市立郡山西幼稚園園内研究会の講師	平成 30 年 11 月 6 日	研究主題「心弾ませ主体的に生活する子どもをめざして～心と体をほぐしながら～」の研究主題のもと、5 歳児の研究保育を参観し、表現活動において主体的に活動している姿について協議し、研修を深めた。
・大和郡山市立矢田南幼稚園教育講演会講師及び保育カンファレンス	平成 31 年 1 月 30 日	保護者対象に演題「子育てで大切なこと」について講演した。子どもを取り巻く社会の変化の中での子どもの様子から、親として何が大切かについて約 30 人の保護者の方に提案した。午後より、各クラスの生活発表会に向けての保育で大切にしたいことを提案し、研修を深めた。
・三郷町立西部保育園園内研修の講師	平成 31 年 2 月 6 日	各クラスの保育を参観し、「教育的環境」について子どもの実態から話し合い、研修を深めた。
・大和郡山市立郡山南幼稚園園内研究会の講師	令和元年 6 月 11 日	研究主題「主体性を育む」－子どもの「したい」「やってみたい」をみつめて－のもと、五歳児の研究保育を参観し、五歳児の粘土遊びにおける保育者の援助等について協議し、研修を深めた。
・三郷町立西部保育園園内研修の講師	令和元年 8 月 9 日	各クラスの保育を参観し、運動遊びに必要な「教育的環境」について子どもの実態から話し合い、研修を深めた。
・令和元年度幼稚園中堅教諭等資質向上：研修講座保育専門研修の講師 対象：中堅教諭等約 30 名	令和元年 8 月 23 日（奈良県立教育研究所	中核的な役割を果たすために必要とされる資質の向上のために、「保育における学校評価」「マネジメント力の向上」についてパワーポイントを通して講和し、研究協議で学びを深めた。
・大和郡山市立矢田南幼稚園園内研究会の講師	令和元年 11 月 5 日	研究主題「いきいきと遊ぶ子どもをめざして～子どもの“やってみよう”を高めるために」のもと、三歳児の研究保育を参観し、三歳児の表現遊びについて協議し、研修を深めた。

・大和郡山市立郡山西幼稚園園内研究会の講師	令和元年 11 月 12 日	研究主題「主体的に生活する子どもをめざして～子どもの内面をよみとる～」の研究主題のもと、３歳児の研究保育を参観し、秋の保育の表現活動において主体的に活動している姿について協議し、研修を深めた。
・令和元年度　奈良市家庭教育講座の講師 対象：奈良市内幼稚園・こども園・保育園及び小学校に在籍する幼児児童の保護者	令和元年 12 月 6 日（奈良市生涯学習センター）	日々の子育てやこれからの子どもの教育に不安を感じておられる保護者は少なくない。その不安を和らげ、自信をもって日々の子育てを楽しんでいただけるように、「楽しく子育て」～心と心を通わせて～演題で講和する。
・三郷町立西部保育園園内研修の講師	令和元年 12 月 13 日	３歳児の保育を参観し、「運動遊び」について子どもの実態から話し合い、研修を深めた。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 ・幼稚園１種普通免許状	昭和 55 年 3 月	大阪府教育委員会（昭 54 幼一普第 296 号）
・小学校１種普通免許状	昭和 55 年 3 月	大阪府教育委員会（昭 54 小一普第 335 号）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 ・奈良県公国立幼稚園・こども園園長会副会長	平成 28 年 4 月～29 年 3 月	副会長として会長を補佐し、新たな幼稚園教育要領の保育内容についての追加事項の徹底に努めた。新規採用教員の研修会の見直しを行い時代に対応した児童理解の方法を提案した。
・奈良県公国立幼稚園・こども園園長会会長	平成 29 年 4 月～現在に至る	会長として就学前 3 施設が入学までに求められる 10 の力を反映し、小学校に送付する指導抄録の在り方を提案した。
4　その他 ・全国幼児教育研究大会奈良大会を副委員長として運営	平成 28 年 7 月（なら 100 年会館）	「幼児教育の新と真－夢中になって遊ぶ力を引き出す保育力－」のテーマで全国から 1356 人の参加者で開催した。未来をたくましく生きる子どもを育てるために絆が深められた。
・関西幼稚園・こども園連合会研究大会奈良大会を実行委員長として企画実行	平成 29 年 11 月（やまと郡山城ホール）	「未来に向かって育ちをつなぐ幼児教育」のテーマで関西２府４県から 622 人の参加を得て開催した。平成 30 年度全面実施に向けての幼稚園教育要領等について、更に研修を深めた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
（学術論文） １．大和郡山市教育委員会指定研究会紀要 テーマ 「幼児期に言葉の力を育む援助の在 り方」	共	平成 22 年 10 月	大和郡山市立矢田南幼稚園発行 A４ （全８頁）	聴く、語る、伝え合う内容を保育全体の中にどう位置づけるかを、５領域の幼児の姿で明確にした。レディネス調査を行い、幼児の発達理解に基づいて取り組んだ。発達に応じた指導の在り方も系統的に示した。幼児観察の方法、個と集団の関係の捉え方、保護者との連携の重要性も論じた。 共著者：蔵田準子、加奥満紀子、植田ゆかり、田平知子、他５名 担当部分：共同研究につき抽出不可、研究の全体構成、幼児の発達によるレディネス調査の分析、研究を振り返ってのまとめと成果部分を執筆
２．大和郡山市教育委員会指定研究園研究紀要 テーマ「「コミュニケーションの力を育む」	共	平成 26 年 11 月	大和郡山市立西幼稚園発行 A４版 (全 50 頁)	平成 25、26 年の 2 年間に及ぶ保育内容と幼児の変容の実践記録。コミュニケーションは、園での生活＝遊び総体の中で育成すること、そのため感情体験の２面性を捉えた保育者の視点が重要であること、教員の事例分析視点を、幼児の発達に応じて養う必要があることを論じた。 共著者：加奥満紀子、内野和寿乃、安井典子、上田良美、他７名 担当部分：ｐ１－p6 研究主題の意味と方法、p9－10「3 歳児・幼稚園大好き・先生大好き・友達大好き」p21－p22「4 歳児、自分を思い出して友達や先生と一緒に」p35 - 36「5 歳児、自信をもって」すべての頁で幼児の活動体験とその意味付け、発達を踏まえつつ解説した。
３．奈良県健康教育研究会研究紀要	共	平成 29 年 3 月	奈良県健康教育研究会編集発行 （全 70 頁）	学校保健、学校安全、学校給食の関係者が一堂に会した健康増進の研究会紀要。 編集者：奈良県健康教育研究会 共著者：門口和興、三好智子、境美穂 加奥満紀子、他８名 本人担当部分（p38－p39 の安全部会の幼稚園の研究協議の指導助言記録「一人一人が安全な生活

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4．保育内容の意義及び今後の課題と展望 ―奈良県の幼稚園の実践を通して―	共	平成 30 年 2 月	奈良学園大学人間教育学部 「人間教育」第1巻2号 (p65～76)	保育課程の歴史と保育内容の意味と保育内容の歴史を述べた。その後、具体的な5領域の狙いと内容とともに。その全体構造が保育内容にどのように反映しているか、幼児の具体的姿と理論を連携させて論じた。幼稚園や保育園の保育内容は環境を通して5領域を横断的・総合的に扱い、一人一人の良さや過程を評価することを指導の留意点と共に示した。さらに、就学前までに育成したい 10 の力と小学校教育とのつながりを提案した。更に、指導案の中で、5 領域のどの力を育んでいるか教師自身が意識的に構想することの重要性を論じた。 共著者：加奥満紀子、土谷長子 担当部分：p 70～76 奈良県の実践部分分析と各年齢児の発達と保育内容と保育内容の今後の課題と展望部分を単著
5．幼児理解に基づく教師の関わりについて	共	平成 30 年 2 月	奈良学園大学人間教育学部「人間教育」第1巻2号 (p53～65)	幼児教育3施設が明確に位置づき、それらの教育・保育の基本が就学前教育として一致したことを踏まえ、幼児理解を深め、環境を通して行う教育であることを確認した。奈良県の幼稚園の実践事例を取り上げ、幼児理解に基づく、教師の関わりと幼児の主体的な活動について具体的に例示した。日常の幼稚園生活での取組が行事を中心に、幼児主体の活動が展開されていることを確認した。その上で、幼児期に育みたい資質・能力と、5歳後半までに育ってほしい姿について、幼児理解に基づいた評価と連動させて考察を加えた。 著者：加奥満紀子、土谷長子 担当部分：pp54～60 奈良県の幼稚園の実践と幼児理解を深めるエピソードとそれについての省察部分を単著
6．子育て支援について	単	令和元年 7 月	奈良県教育振興会編集発行 （p 2－5）	自分自身の３８年間の幼稚園教師生活を経験し、現場から離れ、幼児期にこそ感性を豊かに働かせることの必要性を改めて考え、そのためには家庭教育・幼児教育の役割を痛感した。そこで、「子育てで大切にしたいこと」－幼稚園での３８年を通して考える―を題目に生活を経験することの大切さ、子どもの力を伸ばすためにどうすればよいかを論じた。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） １．教育実習の手引き	共	平成 26 年 4 月	大和郡山市立郡山西幼稚園発行 （全 10 頁）	求められる幼稚園教員、幼稚園教育の意義と幼稚園教育要領に基づいた保育内容の 5 領域について示した。さらに週案や日案の作成方法も狙いを明確にして指導した。幼児理解の視点を指導し、幼児の実態に合わせて保育案を作成する意味も指導をし、さらに評価方法とその活用も示した。 共著者：加奥満紀子、内野加寿乃、安井典子、上田良美、他３名
２．たのしい幼稚園－子どもが初めて出会う学校それは幼稚園－	単	平成 29 年 5 月	奈良県幼稚園長会研究部作成 A4 版 15 頁	奈良県幼稚園等新規採用研修講座及び公立幼保 連携型認定こども園新規採用保育教諭研修講座 の指導資料として冊子。幼稚園教育の目標と、幼 稚園教育要領の説明を 5 領域ごとにその意義と 総合的に指導する必要性を論じた。さらに育む資 質・能力の 3 つの柱を、5 領域と関連付けて論じ 就学前までに育てたい 10 の力について説明した。そのために教員の子ども理解力と評価力と保育内容の改善の必要があることを論じた。
３．これからの幼稚園教員に求められる資質・能力とは	単	平成 30 年 1 月	奈良学園大学教育学部 A4 版 8 頁	幼稚園教員志望者 20 人に講話した資料冊子。環境を通して教育する意味、教師は最大で意味ある環境であること、幼児理解の能力を付けるための方策、それに基づいて保育内容を改善する評価力などを論じた。

【保健医療学部】

《看護学科》

教授

■ 川野　雅資・・・・・1～59
■ 嶋田　理博・・・・・60～63
■ 中馬　成子　※
■ 服部　律子・・・・・64～78
■ 堀内　美由紀
■ 三浦　康代・・・・・79～89
■ 守本　とも子・・・・90～127
■ 吉村　雅世・・・・・128～155

特任教授

■ 山口　求　※

特別客員教授

■ 梶間　敦子・・・・・156～160
■ 播金　ヤスミ・・・・161～163

准教授

■ 芝田　ゆかり・・・・164～170
■ 西本　美和　※
■ 松浦　純平・・・・・171～212
■ 美甘　祥子・・・・・213～222

講師

■ 井上　葉子・・・・・223～245
■ 北島　洋子　※
■ 小林　由里・・・・・246～253
■ 佐藤　郁代
■ 高田　勝子・・・・・254～256
■ 本庄　美香・・・・・257～261
■ 吉水　清　※

助教

■ 齋藤　英夫
■ 高橋　寿奈・・・・・262～266
■ 田場　真理・・・・・267～272
■ 西出　順子・・・・・273～299
■ 林　文子・・・・・300～307
■ 野口　寿美子・・・・308～313
■ 松居　典子・・・・・314～315

助手

■ 井上　昌子・・・・・316～318
■ 溝口　みちる・・・・319～323
■ 山崎　陸世・・・・・324～328

（※ 退職の為記載なし）

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　川野　雅資

研　究　分　野	研究内容のキーワード
精神看護学	看護カウンセリングの会話分析

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 ロールプレイングを用いた授業の実践	平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	東京慈恵会医科大学医学部看護学科で精神看護学教育にロールプレイングをもちいたコミュニケーション技術教育を行った。後に、模擬患者をライフプラニングセンターに依頼し、模擬患者によるコミュニケーション技術教育に発展させた。
２　作成した教科書，教材 精神看護学Ⅰ　　精神保健学　第５版	平成 22 年２月	「精神保健」を現在の視点でとらえ，今の社会状況に即した内容に変更した。「看護師のメンタルヘルス」，「地域精神保健活動」，「リエゾン精神看護」の内容を充実させ，新しく「倫理」の章を設けた。精神保健の基本的な考え方と，その具体的な活用を解説し，さらに臨床・社会の場での各々のメンタルヘルスを事例を入れて解説。看護師国家試験出題基準の項目を網羅している。全 300 頁 編集：吉松和哉、小泉典章、川野雅資 共著者：揚野裕紀子、天谷真奈美、雨宮洋子、荒木田美香子、宇佐美しおり、奥山則子、勝山せつよ、川野雅資、小泉典章、近藤浩子、立花良之、田中隆志、橋本佳美、早川圭子、堀川直史、前田日登美、松本功、武藤隆、山本麻美、山元直樹、吉川領一、吉松和哉 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 156-137　心理・社会的反応
精神看護学Ⅱ　精神臨床看護学　第５版	平成 22 年２月	精神医療の実際を目に見える様に表現し、最新の内容を網羅し、国家試験の出題基準に対応できるように企画した。第Ⅱ章でし、精神を病む人の理解と対応として入院から退院までの患者と家族の状態と看護を詳説した。全 446 頁。 編集：川野雅資 共著者：アリマ美乃里、石川幸代、石川純子、一ノ山隆

		司、宇都宮智、大谷恵、岡崎祐士、小口万里、小熊朝子、小澤浩、河岸光子、川野雅資、岸珠江、葛岡千郁子、国生拓子、鈴木啓子、関井愛紀子、田島治、中島香澄、滑川さやか、長谷川麻紀子、八田勘司、古谷圭吾、堀川直史、牧岡あずさ、明神一浩、森千鶴、藪下祐一郎、山根美智子 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 3-11　精神臨床看護の考え方 pp. 13-48　精神を病む人の理解と対応　共著:宇都宮智、川岸光子、岸珠江、滑川さやか、古谷圭吾、藪下祐一郎 pp. 65-70 人間関係論 pp. 86-95　日常生活援助 pp. 103-107 ロールプレイング pp. 108-111　面接 pp. 112-115 カウンセリング pp. 137-156　精神看護の看護過程　共著　石川幸代、石川純子 pp. 278285　症状アセスメントとケアプラン　幻覚、妄想の患者と看護 pp286-288　せん妄の患者の看護 pp401-403　〈事例〉幻覚・妄想の急性期 pp. 406-407　〈事例〉興奮状態の急性期 pp. 421-425　精神看護学の今後の展望
精神看護学Ⅰ　　精神保健学　第6版	平成 27 年 3 月	精神看護学の考え方を明確にし、新たにメンタルウェルネスを重要な視点に置いて、心が病むことから生きる力が湧くことを重視して企画した。更に、精神保健医療福祉の法制度に関して内容を豊かにした。全 332 頁編集：吉松和哉、小泉典章、川野雅資：秋山剛、揚野裕紀子、荒木田美香子、安藤満代、大澤栄実、大塚耕太郎、大野美香、景山隆之、梶井文子、上別府圭子、川野雅資、久保恭子、栗原佳代子、小泉典章、後藤雅博、近藤浩子、清水徹男、鈴木幸子、曽谷貴子、竹島正浩、中筋美子、野中英雄、橋本理恵子、服部希恵、半場有希子、藤田潔、前野有佳里、松本功、武藤隆、吉松和哉本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。pp. 1-3　序精神看護学の考え方 pp70-75　第 2 章　リエゾン精神看護　2. 病気と心理社会的反応 pp. 126-130 看護職員の精神の健康

精神看護学Ⅱ　精神臨床保健学 第6版	平成 27 年3月	国家試験の動向を配慮し、看護過程の内容を縮小して、最新のリカバリ志向を重視した書籍に企画した。全 378 頁 編集：川野雅資 共著者：石川幸代、一ノ山隆司、伊藤桂子、宇都宮智、大西恵、岡崎祐士、小熊朝子、河岸光子、川野雅資、岸珠江、木田ゆかり、近藤浩子、下里誠二、鈴木啓子、関井愛紀子、夛喜多恵子、田島治、土屋朋子、富田元、鳥山美鈴、永井翔、中島香澄、中島篤正、滑川さやか、萩典子、藤沢希美、古谷圭吾、堀川直史、松枝美智子、森千鶴、柳田崇姉、藪下祐一郎 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp1-8　序章　精神臨床看護の考え方 pp. 9-19　第 1 章　精神看護援助の基本と技術　患者―看護師関係 pp. 31-43　セルフケアの援助 pp. 44-53　精神看護の看護過程 pp. 54-60　生きる強さと力 pp. 106-108 第 2 章　精神疾患の理解と治療、精神科作業療法 pp. 171-183　第4章　入院から社会生活の継続までの看護 pp. 203-222　急性期から回復期、慢性期の看護 pp. 224-232 第 5 章　症状アセスメントとケアプラン幻覚、妄想の患者と看護 pp232-235　せん妄の患者の看護 pp251-257　引きこもり状態の患者の看護 pp. 258-267　操作をする患者の看護 pp. 353-358　精神看護学の今後の展望
3　教育上の能力に関する大学等の評価 東京慈恵会医科大学大学院	平成 20 年8月	大学設置・学校法人審議会教員資格審査にて東京慈恵会医科大学大学院医学研究科看護学専攻（修士課程）の教授として判定可 担当科目：「コンサルテーション論」「国際医療論」「地域連携保健学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」「地域連携保健学演習Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」M可判定 「看護学特別研究Ⅰ・Ⅱ」M○合判定

山陽学園大学	平成 24 年 9 月	大学設置・学校法人審議会教員資格審査にて山陽学園大学大学院看護学研究科精神看護学CNSコースの教授として判定可 担当科目：「看護理論」「コンサルテーション論」「国際医療論」「精神看護学特論Ⅰ」「精神看護学特論Ⅱ」「精神看護学特論Ⅲ」「精神看護学特論Ⅳ」「精神看護学特論Ⅴ」「精神看護学特論Ⅵ」「精神看護学演習Ⅰ」「精神看護学演習Ⅱ」「精神看護学演習Ⅲ」「精神看護学演習Ⅳ」「精神看護学実習」M可判定 「課題研究」M○合判定
奈良学園大学	平成 29 年 2 月	大学設置・学校法人審議会教員資格審査にて奈良学園大学保健医療学部看護学科の教授として判定可 担当科目：「精神看護学概論」「精神看護学援助論」「卒業研究Ⅱ」「精神看護学実習」「統合看護学実習」
奈良学園大学大学院（平成 30 年 4 月開設）	平成 29 年 4-5 月	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査において奈良学園大学大学院看護学研究科看護学専攻（修士課程）専任教授 「国際医療特論」「看護倫理特論」「精神看護学特論Ⅰ（歴史・法制度）」「精神看護学特論Ⅱ（精神・身体状態の評価）」「精神看護学特論Ⅲ（精神科治療技法）」「精神看護学演習Ⅰ（精神科治療技法）」「精神看護学実習 アセスメント」「看護研究特論」「コンサルテーション論」「看護理論特論」「精神看護学特論Ⅳ（精神看護理論、援助技法）」「地域移行支援精神看護学特論」「急性期精神看護学特論」「精神看護学演習Ⅱ（精神看護理論、援助技法）」「精神看護専門看護師役割実習」「直接ケア実習」「上級直接ケア実習」は M 可,「課題研究」「特別研究」は M○合の資格有りと判定
4 実務の経験を有する者についての特記事項		
1)独立行政法人国立病院機構 久里浜医療センター 看護研究 指導	平成 18 年 6 月から現在	臨床看護師の看護研究指導、看護研究発表会参加。年間 6 回
2)東京都立大塚病院 看護部 看護科 基礎コースレベルⅡ「コミュニケーション」4 時間 講師	平成 22 年から現在	臨床看護師の対人関係技術をロールプレイングで学習する。年間 2 回、3 時間
3)一般社団法人 上尾中央医科グループ協議会キャリアサポートセンター 認定看護管理者(ファーストレベル) 講師	平成23年 7 月から現在	人材育成論、15 時間、科目レポート責任者

4)東京都福祉保健財団公益財団法人　認定看護管理者(ファーストレベル) 運営委員会　委員長、　講師	平成24年6月から現在	運営委員長として、議事の運営にあたる。講義は、看護サービス提供論9時間とディベート演習6時間、科目レポート責任者
5)独立行政法人　国立病院機構　神奈川病院　看護研究　指導	平成 24年 6 月から現在	臨床看護師の看護研究指導、看護研究発表会参加。年間4回
6)東京女子医科大学　女性医療人キャリア形成センター　認定看護管理者(ファーストレベル)教育委員会　委員長、講師	平成 27年 5 月から現在	教育委員会委員長として、議事の運営にあたる。講義、看護サービス提供論　9時間、ディベート演習　6時間
5　その他 1)東京慈恵会医科大学大学院　修士論文指導	平成 23年3月 平成24年3月 平成25年3月 平成25年3月 平成26年3月	指導論文題目『思春期青年期精神障碍者の隊員支援における看護師の判断―地域連携の視点から―』 指導論文題目『子どもを児童思春期精神科病院に入院させた母の体験』 指導論文題目『精神疾患を有する性同一性障害患者の精神科病棟入院体験の語り』 指導論文題目『ひきこもり支援者が語る地域連携の現状』 指導論文題目『精神科デイケア利用者におけるデイケアの意味』

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）看護師	昭和 51年 5 月12日	厚生省　2090号
2）日本欧州共通サイコセラピー資格認定	平成 17年12月1日	日本サイコセラピー学会　066号
2　特許等 該当なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 看護学実践 -Science of Nursing- 在宅看護論	共著	平成 20 年 4 月	PILAR PRESS	カリキュラム改正に伴い在宅看護論という新たな領域を地域看護学とは別の視点で作成することを意図し、在宅看護論の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全 347 頁 監修：川野雅資 編集：伊藤千代子 共著者：明石悦子、伊藤千代子、黒田淳子、小林文子、山口直美 本人担当部分：本書の企画、編集者への助言、最終的な文章の校正を行った。
地域連携精神看護学研究実践　英・米・日　3 カ国の地域精神看護	共著	平成 20 年 12 月	第 1 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	英国・米国ならびに日本における関係者の考え方、手法の事例発表の中から、この分野に携わる関係者の質の向上に資する実践例を紹介し、地域が精神障害者と共に成長しあう社会を形成する方法を明する。 編　著：川野雅資 共著者：川野雅資、長岡和、一ノ山隆司、村上満、舟崎起代子、上野栄一、Michael Galbrraith, Joann Hopkins, Mindy reynolds, Ramona Chinn, Michael coffey, Ben Hannigan, 前川早苗、岩佐貴史、栗田弘二、中村友喜、濱幸伸、原田雅典、薬師寺正美、明神一浩、吉田通子、青柳繁子、宍倉正子、町田正信、萩典子、高村光幸、横山和仁、牧岡あずさ、揚野裕紀子、日下知子、曽谷貴子、清塚厚子、久保田文雄、古澤圭、関井愛紀子、石川幸代 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。下記を単独で執筆した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
エビデンスに基づく精神看護看護ケア関連図 『	共著	平成 20 年 12 月	中央法規出版	pp. 2-3　序文 pp. 6-8　実践からみた地域連携精神看護学 pp. 17-26　地域連携精神看護学の実際 pp. 97-103　精神科病院における長期入院患者対する退院支援の取り組み 精神科看護の臨床で出会う代表的な 15 の症状と 9 の疾患のケア、4 の治療についてエビデンスに基づいて関連図を作成した。定義と具体的な症状、成り立ち、心理社会的反応、診断・検査、治療、看護の観察ポイント、治療段階に基づいた看護ケアを詳解する。全 243 頁 編集：川野雅資 共著者：浅沼瞳、石川幸代、石川康博、一ノ山隆司、伊藤圭子、猪俣健一、上野栄一、宇都宮智、大迫哲也、大迫允江、川野雅資、北野進、小西奈美、下里誠二、高岡裕美、高橋寛光、高間さとみ、瀧口宗宏、田中留伊、土谷朋子、福山なおみ、藤森里実、舟崎起代子、松本賢哉、明神一浩、村上満、森千鶴、山田洋 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 2-3 はじめに pp. 10-15　妄想 pp. 16-25　幻覚 pp. 42-49　強迫 pp. 162-167　パニック障害 pp. 115　自傷行為 pp. 115　自我防衛機制 pp. 119　機能の全体的評価尺度 pp. 235　退院支援 pp. 236　地域連携・継続ケア

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
現代看護の探求者たち一人の思想ー	共著	平成 21 年 10 月	日本看護協会出版会	ジーン・ワトソン博士から直接学んだこと、コロラド大学看護学部を訪問してその資料から学んだこと、これまでの翻訳とワトソン先生の講演の通訳を通して学んだことをライフヒストリーと学問の視点からまとめた。全 296 頁共著者：小林冨美栄、樋口康子、小玉香津子、高橋絹子、荒井蝶子、兼松百合子、千野静香、稲田八重子、池田明子、藤枝知子、小野寺杜紀、舟島なをみ、松木光子、井上智子、川野雅資本人担当部分：pp.251-281 ジーン・ワトソン Jean Watson-21 世紀の看護論-
地域連携精神看護学研究実践　英・米・日　3 カ国の地域精神看護	共著	平成 21 年 12 月	世論時報社	英国・米国ならびに日本における関係者の考え方、手法の事例発表の中から、この分野携わる関係者の質の向上に資する実践例を紹介し、地域が精神障害者と共に成長しあう社会を形成する方法を明する。全 159 頁 編　著：川野雅資 共著者：川野雅資、長岡和、一ノ山隆司、村上満、舟崎起代子、上野栄一、Michael Galbrraith, Joann Hoppkins, Mindy reynolds, Ramona Chinn, Michael coffey, Ben Hannigan, 前川早苗、岩佐貴史、栗田弘二、中村友喜、濱幸伸、原田雅典、薬師寺正美、明神一浩、吉田通子、青柳繁子、宍倉正子、町田正信、萩典子、高村光幸、横山和仁、牧岡あずさ、揚野裕紀子、日下知子、曽谷貴子、清塚厚子、久保田文雄、古澤圭、関井愛紀子、石川幸代 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp.2-3　序文 pp.6-8　実践からみた地域連携精神看護学 pp.17-26　地域連携精神看護学の実際 pp.97-103　精神科病院における長期入院患者対する退院支援の取り組み

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
精神看護学Ⅰ　精神保健学第5版	共著	平成 22 年 2 月	ヌーヴェルヒロカワ	「精神保健」を現在の視点でとらえ，今の社会状況に即した内容に変更した。「看護師のメンタルヘルス」,「地域精神保健活動」,「リエゾン精神看護」の内容を充実させ，新しく「倫理」の章を設けた。精神保健の基本的な考え方と，その具体的な活用を解説し，さらに臨床・社会の場での各々のメンタルヘルスを事例を入れて解説。看護師国家試験出題基準の項目を網羅している。全 300 頁 編集：吉松和哉、小泉典章、川野雅資 共著者：揚野裕紀子、天谷真奈美、雨宮洋子、荒木田美香子、宇佐美しおり、奥山則子、勝山せつよ、川野雅資、小泉典章、近藤浩子、立花良之、田中隆志、橋本佳美、早川圭子、堀川直史、前田日登美、松本功、武藤隆、山本麻美、山元直樹、吉川領一、吉松和哉 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 156-137　心理・社会的反応
精神看護学Ⅱ　精神臨床看護学　第5版	共著	平成 22 年 2 月	ヌーヴェルヒロカワ	第5版の改訂に伴い、精神医療の変遷に伴う看護の実際を目に見えるように表現し、最新の内容を網羅すること、国家試験の出題基準を意識し、試験で出題された問題の解答が役立つように項目の再編と内容の刷新をはかった。全 446 頁 編集：川野雅資 共著者：アリマ美乃里、石川幸代、石川純子、一ノ山隆司、宇都宮智、大谷恵、岡崎祐士、小口万里、小熊朝子、小澤浩、河岸光子、川野雅資、岸珠江、葛岡千都子、国生拓子、鈴木啓子、関井愛紀子、田島治、中島香澄、滑川さやか、八田勘司、藤田由美、古谷圭吾、堀川直史、牧岡あずさ、明神一浩、森千鶴、藪下祐一郎、山根美智子 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
新看護観察のキーポイントシリーズ精神科Ⅰ	共著	平成 23 年 4 月	中央法規出版	pp3-12　精神臨床看護学　精神看護の考え方 pp. 13-48　精神を病む人の理解と対応 pp. 65-70　精神看護に用いる理論、人間関係論 pp. 85-95　日常生活援助 pp. 103-115　活用する技法 pp. 137-156　精神看護の看護過程 pp. 278-285　幻覚、妄想の患者と看護 pp. 286-289　せん妄の患者の看護 pp. 401-404　事例　幻覚・妄想の急性期 pp. 421-426　精神看護学の今後の展望 観察のための具体的な方法、観察したことが何を意味するのか、どの程度の危険を予測できるか、そしてどう対応すべきかといったナースにとっての実践上の問題解決方法を掲載した。初学者がイメージつきやすいように、実際の場面の写真とイラストを多用した。全 347 頁 編集：川野雅資 共著者：相原則章、朝倉真奈美、阿部貴子、一ノ山隆司、猪野美晴、今中和恵、岩崎三津子、浦川加代子、大須賀美紀、大谷恵、大場信子、小笠原寿枝、鬼塚愛彦、蔭山正子、川野雅資、岸珠江、北島謙吾、倉田みゆき、小瀬古隆、櫻井尚子、鈴木啓子、鈴木利枝、田口敦子、土田幸子、徳永勲、中川志穂、中村富美、中山千代子、西川恵子、平井元子、藤野ヤヨイ、前川早苗、真玉珠美、村上有加利、村松仁、望月由香、藪下祐一郎、山田巧、 下記内容を記述した。pp. ⅱ－ⅲ　編集者序文、pp. 35-42　精神面、pp. 140-148　拒食、pp. 149-155　拒薬、pp. 296-306　訪問看護

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
新看護観察のキーポイントシリーズ精神科Ⅱ	共著	平成 23 年 4 月	中央法規出版	上記と同様の編集方針基づき、看護観察に重点を置き、最新の知見から構成を改変した新版。全 277 頁 編　集：川野雅資 共著者：朝倉真奈美、内野博子、浦川加代子、大迫哲也、大沢美幸、大谷恵、鬼塚愛彦、川野雅資、楠本重信、小瀬古隆、斎藤百合枝、鈴木和代、関井愛紀子、関根理絵、立花睦子、玉城久江、辻脇邦彦、土谷朋子、塘祐樹、豊田美穂子、東和弘、人見加津子、福田浩美、堀切晶子、前川早苗、松枝美智子、松本文彦、森千鶴、若浦さおり 本人担当部分 pp. ⅱ－ⅲ　編集者序文 pp. 7-13　急性期 pp. 75-85　摂食障害 pp. 264-268　インフォームド・コンセント
看護実践研究・学会発表ポイントＱ＆Ａ　上巻　研究テーマの選択から学会発表へ	共著	平成 24 年 5 月	日本看護協会出版会	看護研究を始めて行い始めて学会発表をする看護職者が理解しやすいように執筆した。全 72 頁 編集：日本看護協会 著者：洪愛子、荒木暁子、根岸准子、梶井文子、佐藤みつ子、川野雅資、渋谷美香、眞弓浩子、向田明子、橋目智子、小川有貴、佐藤智恵 序章　利益相反について Q10　利益相反とはなんですか?(pp. 24-25) 第 2 章　演題の採択が決まるまで Q21 査読者はどんなところを見ているのですか?(pp. 41-43)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
看護実践研究・学会発表ポイントQ＆A　下巻　研究テーマの選択から学会発表へ	共著	平成 24 年 5 月	日本看護協会出版会	始めて発表した看護研究を論文に記述する看護職者が理解しやすいように執筆した。全 68 頁 編集：日本看護協会 著者：洪愛子、荒木暁子、根岸准子、河野あゆみ、国府浩子、小寺栄子、中村美鈴、水戸優子、渋谷美香、梶井文子、佐藤みつ子、川野雅資、渋谷美香、眞弓浩子、向田明子、橘目智子、佐藤智恵 序章　論文を書き始める前に Q1 自分の書いた論文は、他の人の看護実践に役立つのでしょうか?(pp. 2-3) Q2 査読者はどんなところをみているのですか?(pp. 4-5) Q3 過去の優秀論文はどこがよかったのですか?(pp. 6-8)
『精神症状のアセスメントとケアプラン―32 の症状とエビデンス集』	共著	平成 24 年 11 月	メヂカルフレンド社	エビデンスに基づく精神看護のケアが重要視されている。本書は、「精神障害者のクリニカルケア　症状の特徴とケアプラン」の著書をエビデンスを元に看護が展開できるように企画して新たに作成した。全 366 頁 編　集：川野雅資 共著者：川野雅資、横井志保、杉原正美、佐々木章倫、高橋寛光、山本祐子、島崎みゆき、児野愛未、大柄昭子、樋田香織、熊地美枝、佐々木愛、斎藤香菜香、北野進、大嶺靖子、畑由美子、緑川綾、篠木由美、煤賀隆宏、塩月玲奈、荒川好美、新澤安江、竹花令子、柳田崇姉、石川博康、西田多美子、馬場華奈巳、岩切真砂子、高木明子、安田妙子、片山典子、拓殖三昌、佐藤雅美、一ノ山隆司、安永薫梨、松枝美智子、鈴木啓子、吉野淳一、曽谷貴子、揚野裕紀子、宮野香里、伊礼優、浅井初、平上久美子、坂田志保路 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 ［序論］(pp. 1-5)

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
コンサルテーションを学ぶ	単著	平成 25 年 1 月	クオリティケア	「幻覚」(pp. 6-13) 「うつ」(pp. 58-66) 「身体化」(pp. 165-171) 本書は、コンサルテーションの大切な機能は、コンサルティの人間的な潜在能力を促進し、一人ひとりのコンサルティ個々の中に自己回復の能力を醸成することであることに主眼を置き、その内容を 9 章に構成して、コンサルテーションの開拓者であるカプランとリピットとリピットの原著を読み込み、又、筆者の実線体験をもとに執筆した。全 50 頁
精神看護学 I　　精神保健学 第 6 版	共著	平成 27 年 3 月	ヌーヴェルヒロカワ	精神看護学の考え方を明確にし、新たにメンタルウェルネスを重要な視点に置いて、心が病むことから生きる力が湧くことを重視して企画した。更に、精神保健医療福祉の法制度に関して内容を豊かにした。全 332 頁 編集：吉松和哉、小泉典章、川野雅資 共著者：秋山剛、揚野裕紀子、荒木田美香子、安藤満代、大澤栄実、大塚耕太郎、大野美香、景山隆之、梶井文子、上別府圭子、川野雅資、久保恭子、栗原佳代子、小泉典章、後藤雅博、近藤浩子、清水徹男、鈴木幸子、曽谷貴子、竹島正浩、中筋美子、野中英雄、橋本理恵子、服部希恵、半場有希子、藤田潔、前野有佳里、松本功、武藤隆、吉松和哉 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp. 1-3　序　精神看護学の考え方 pp70-75　第 2 章　リエゾン精神看護 2. 病気と心理社会的反応 pp. 126-130 看護職員の精神の健康

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
精神看護学Ⅱ　精神臨床看護学　第6版	共著	平成 27 年 3 月	ヌーヴェルヒロカワ	国家試験の動向を配慮し、看護過程の内容を縮小して、最新のリカバリ志向を重視した書籍に企画した。全 378 頁 編集：川野雅資 共著者：石川幸代、一ノ山隆司、伊藤桂子、宇都宮智、大西恵、岡崎祐士、小熊朝子、河岸光子、川野雅資、岸珠江、木田ゆかり、近藤浩子、下里誠二、鈴木啓子、関井愛紀子、夛喜多恵子、田島治、土屋朋子、富田元、鳥山美鈴、永井翔、中島香澄、中島篤正、滑川さやか、萩典子、藤沢希美、古谷圭吾、堀川直史、松枝美智子、森千鶴、柳田崇姉、藪下祐一郎 本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 pp1-8　序章　精神臨床看護の考え方 pp. 9-19　第 1 章　精神看護援助の基本と技術　患者―看護師関係 pp. 31-43　セルフケアの援助 pp. 44-53　精神看護の看護過程 pp. 54-60　生きる強さと力 pp. 106-108 第 2 章　精神疾患の理解と治療、精神科作業療法 pp. 171-183　第 4 章　入院から社会生活の継続までの看護 pp. 203-222　急性期から回復期、慢性期の看護 pp. 224-232 第 5 章　症状アセスメントとケアプラン　幻覚、妄想の患者と看護 pp232-235　せん妄の患者の看護 pp251-257　引きこもり状態の患者の看護 pp. 258-267　操作をする患者の看護 pp. 353-358　精神看護学の今後の展望

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
看護学実践-Science of Nursing-看護研究	共著	平成 27 年 3 月	PILAR PRESS	全 102 頁 監修：川野雅資 共著者：安藤満代、一ノ山隆司、伊藤桂子、辻川真弓 看護学生のように看護研究の初学者からある程度看護研究に精通した看護師が参考になるように企画した。本人担当部分：本書の企画、すべての文章の校正を行った。 P8-10　看護研究の開始 pp. 34-36　フォーカスグループインタビュー pp. 38-40　会話分析 pp. 40-44　介入研究 pp. 50-55　調査の実施 pp. 97-98　研究の倫理的配慮　利益相反
知る・活かす看護管理学	共著	平成 27 年 5 月	PILAR PRESS	看護管理学の基本が学習できる教科書を企画した。全 181 頁 監修：川野雅資、網野寛子 編集：黒田美喜子 共著者：賀沢弥貴、菊池睦、小坂智恵子、高澤喜代美、田代麻里江、吉田愛子、細野百合子、前田久代、山佐瞳、山田聡子 本人担当部分：本書の企画、文章の校正を行った

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
看護学実践 -Science of Nursing- 精神看護学	共著	平成 28 年 2 月	PILAR PRESS	本シリーズは、元来コンパクトな教科書を意図していたが、網羅すべき内容が多くなり、充分な内容を記述することに企画方針を変更した。精神看護学の内容は、DSM-5 を元に技術することにした。 全 259 頁 監修・編集：川野雅資 共著者：間雅子、揚野裕紀子、宇都宮智、川野雅資、岸清次、北野進、坂田志保路、高橋寛光、高間さとみ、多喜田恵子、塘祐樹、萩典子、佐々木郁子、服部朝代、平松悦子、本間寿博、前川早苗、松枝美智子、松下年子、宮崎初、宮野香理、緑川綾、安永薫梨 担当部分：本書の企画、文章の校正を行った。下記を単独で執筆した。 pp.10-32　これからの精神看護学 pp.45-47　ヒューマニスティックナーシング pp.48-50　ヒューマンケアリング pp.50-59　看護過程 pp.63-67　看護カウンセリング pp.118-120 退院を困難にしている要因
コンサルテーションを学ぶ　改訂版	単著	平成 29 年 2 月	クオリティケア	本書は、平成 25 年の初版を改訂したものである。初版のコンサルテーションの大切な機能は、コンサルティの人間的な潜在能力を促進し、一人ひとりのコンサルティ個々の中に自己回復の能力を醸成することであることに主眼を置き、その内容を 9 章に構成して、コンサルテーションの開拓者であるカプランとリピットとリピットの原著を読み込み、又、筆者の実線体験をもとに執筆した。と言う視点に、この 4 年間に実施したコンサルテーションの内容を追記し、初版の表現不足を補った。全 50 頁

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
精神看護キーワード	共著	平成 29 年 5 月	日本看護協会出版会	精神看護領域で称する用語を多職種専門家が正確に理解し、共通言語となるために頻出用語の解説をエビデンスに基づいて記述することを企画した。用語の抽出を行い、編者の選出・依頼をした。すべての文章の校正を行った。又、「女性管理職のメンタルヘルス」を除き下記を単独で執筆した。全 239 頁 pp. 14-15 EE(感情表出)，pp. 32-33 カウンセリング，pp. 48-49 共感，pp. 84-85 コンサルテーション，pp. 96-97 自殺，pp. 112-113 女性管理職のメンタルヘルス，pp. 116-116 身体表現性障害，pp. 122-123 スーパービジョン，pp. 144-145 性同一性障害，pp. 148-149 せん妄，pp. 158-159 地域移行機能強化病棟，pp. 178-179 トラウマインフォームドケア，pp. 182-183 人間関係論(日本看護協会出版会) 総編集：川野雅資 編　集：安藤満代、下里誠二、萩典子、森千鶴 共著者：安藤愛、安藤満代、池田智、石川博康、伊藤桂子、大熊恵子、大平肇子、、川野雅資、木戸芳史、熊本勝治、下里誠二、菅原裕美、瀬戸屋希、高橋寛光、高橋理沙、多喜田恵子、田中留伊、谷多江子、中村裕美、萩典子、八谷美絵、益子友恵、松枝美智子、松本敦子、水野正延、宮崎初、森千鶴、山本智之

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） うつ病患者への職場復帰へのサイコセラピー（査読付）	共著	平成 20 年 12 月	日本サイコセラピー学会 雑誌 9 巻 1 号 pp. 103-106	共著者：川野雅資、片山典子 30 代半ばのメランコリー親和型うつ病男性に、精神科医の薬物療法に併用して、サイコセラピーを実施した。本人担当分：サイコセラピーの実施、資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
幻聴のある患者に対する心理教育的アプローチの方法（査読付）	共著	平成 21 年 3 月	富山大学看護学会誌 8 巻 2 号 pp. 33-40	共著者：明神 一浩、一ノ山 隆司、上野栄一 、舟崎 起代子、川野 雅資 本研究は、幻聴のある患者に対して、心理教育的アプローチの介入が幻聴に苛む患者の自己対処能力の獲得によって、幻聴の軽減にどのように影響したかについて、その効果を検証する目的で研究を行った。本人担当分：データの分析・考察・文章の校閲を行った。
幻聴に苛む患者の自己対処行動を支えるための心理教育的アプローチ（査読付）	共著	平成 21 年 3 月	共創福祉 4(1)1－10.	一ノ山隆司、村上満、舟崎起代子、牧野かおる、明神一浩、上野栄一、川野雅資 本人担当分：ダータの分析・考察・文章の校閲を行った。本研究は、統合失調の患者が幻聴で苦しんでいることを心理教育の手法を用いて対処行動を獲得した経過を分析した。
地域で生活する精神障がい者を支える家族の思い（査読付）	共著	平成 22 年 1 月	日本看護学会論文集 精神看護 40 号 pp. 143-145	共著者：一ノ山 隆司、村上 満、舟崎 起代子、川野雅資 地域で生活する精神障害者の家族 273 名にアンケートを行い、「日頃から気になっていること」について自由記載してもらい、その内容を質的帰納的に分析した。本人担当分：データの分析・考察・文章の校閲を行った。
精神臨床看護師が捉える急性期看護における患者の暴力行為の予見要因（査読付）	共著	平成 22 年 7 月	日本看護研究学会 雑誌 33 巻 3 号, pp. 146	明神一浩、 一ノ山隆司、 村上満、 舟崎起代子、 上野栄一、 川野雅資　本人担当分：資料の分析・考察・文章の校閲を行った。精神科の臨床看護師が患者の暴力行為を予期する時の視点を調査から明らかにした。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
うつ病からの回復に当事者の力を発揮するサイコセラピーの考察（査読付）	共著	平成 23 年 12 月	日本サイコセラピー学会 雑誌 12(1)， pp. 69-76	共著者：川野雅資、 片山典子、 石川純子　本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。サイコセラピーを受けているうつ病の患者がサイコセラピーの影響と共に自己の力を発揮して回復していくプロセスを分析した。
精神障害者が農村地域で暮らす生活に関する語りの分析（査読付）	共著	平成 23 年 9 月	山陽看護学研究会 山陽看護学研究会誌 Vol．2　No.1　2012 （pp. 13）	揚野裕紀子、川野雅資、曽谷貴子、福川京子、中田涼子　本人担当分：研究の企画、資料の分析・考察・文章の執筆を行った。0 県の農村地域に暮らす精神障害者にインタビューを行い、生活する上で感じていることを明らかにし、かごの役割を明確にした。
会長講演　「精神科早期介入と連携の実際と課題」（査読付）	単著	平成 24 年 2 月	日本地域連携 精神看護学研究会 会誌 第 3 巻 pp. 1-2	事例に基づいた地域の立場からみた早期治療における連携の実際の報告、課題の明確化と今後の方策提案。
タイ王国の地域連携精神看護－タイにおける精神保健福祉と農村部の現状報告（査読付）	共著	平成 24 年 2 月	日本地域連携 精神看護学研究会 会誌 第 3 巻 pp. 39-46	共著者：揚野裕紀子、中田涼子、片山典子、川野雅資、櫻井尚子、塩月玲奈、朝倉真奈美　　退院後の患者は全員が働いていると言うタイにおける、精神科病院、医療機関、医療従事者、精神障がい者の生活を支える制度、法律、予算、農村部に暮らす精神障がい者の生活から、地域精神医療の実際を学ぶことを目的に視察を実施。精神保健福祉と農村部の現状を報告した。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメント退院準備用紙の作成から活用まで（査読付）	共著	平成 24 年 2 月	日本地域連携 精神看護学研究会 会誌 第 3 巻 pp. 47－53	共著者：寺田祐治、一ノ山隆司、舟崎起代子、上野栄一、川野雅資 患者と看護師が共同で作成した退院準備用紙を活用し、統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメントの維持・促進を支える援助過程で、患者の自己および自己を取り巻く現実に関する認識が改善されたかを明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題（査読付）	共著	平成 24 年 2 月	日本地域連携精神看護学研究会会誌 第3巻 pp.82－87	共著者：松浦純平、一ノ山隆司、上野栄一、京谷和哉、植木健康、川野雅資 自記式無記名質問紙調査を用いて、A 県内に本拠地があるがん患者会員が考えるサロンに対する認識および現状を明らかにした。本人担当部分:データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
長期入院患者の退院支援に関する看護師の意識調査－看護師へのインタビュー分析からの課題－（査読付）	共著	平成 24 年 2 月	日本地域連携精神看護学研究会会誌 第3巻 pp.94－100	明神一浩、前川哲弥、森下憂一、一ノ山隆司、上野栄一、川野雅資 精神科看護歴が 10 年以上ある看護師にインタービューを実施し、質的帰納的記述研究を行い、長期入院患者の退院支援において看護師が抱える課題を明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
会長講演「グローバルに学んで、グローカルに展開する」（査読付）	単著	平成 24 年 7 月	日本地域連携精神看護学研究会会誌 第2巻 pp.1-4	地域連携を推進するには、海外の状況も見ながらグローバルな視点を持つのと同様にその地域の特性を把握するグローカルな視点が重要であることを解説する。
神奈川県における児童、青年精神医療の連携で看護師の役割を考える（査読付）	共著	平成 24 年 7 月	日本地域連携精神看護学研究会会誌 第2巻 pp.71-77	編　者：川野雅資　編集協力者：片山典子 著　者：佐々木郁子、川野雅資、山根美智子、久保恭子、アリマ美乃里、佐藤和子、鈴木実、田崎千恵子、土谷朋子、寺島和子、萩典子、一ノ山隆司、村上満 神奈川県における児童、青年期精神医療の実態と、連携形成に関する調査を行い、現状を明確にした。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
ストレングスモデルに基づく職業訓練を受けた精神障害者の心理面と必要とされる支援（査読付）	共著	平成 24 年 9 月	聖マリア学院大学紀要 3, pp.55-62	著者：安藤満代、川野雅資　本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。職業訓練を受けた精神障害者の心理的側面でリジリエンスに影響する支援者の役割を調査から明らかにした。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
看護が研究する意味	単著	平成 24 年 12 月	山陽看護学研究会誌 2(1), pp. 4-9	看護において、感謝が研究することの意味を真理の探索以上のものがあることを概説した。
カウンセリングの治療的意味に関する研究　統合失調症患者のカウンセリングにおける治療関係と認知の変容への働きかけ（査読付）	共著	平成 25 年 2 月	精神看護における ディスコース分析 研究会誌 第 1 巻 pp. 22-31	伊藤佳子、川野雅資 カウンセリングの場面を録音・録画し、クライアントの非合理的信念の変容は、セラピストのどのような介入によって促進されているのかを明らかにし、継続するカウンセリングの中でセラピストとクライアントの間にはどのような相互作用があるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失聴症患者の会話分析－妄想に対する治療的かかわりに焦点を当てて－第 1 報　会話レベルによる分析（査読付）	共著	平成 25 年 2 月	精神看護における ディスコース分析 研究会誌 第 1 巻 pp. 32-39	揚野裕紀子、曽谷貴子、日下知子、川野雅資 研究は、専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、「会話レベル」を用いて分析を行い、精神障がいをもつ患者にとって、どのようなカウンセリング技法が有効であるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者の会話分析－妄想に対応する治療的かかわりに焦点を当てて－第 2 報　対人間圧力とフレーム対応による分析（査読付）	共著	平成 25 年 2 月	精神看護における ディスコース分析 研究会誌 第 1 巻 pp. 40-45	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、ジェームズ・F・T・ブーゲンダール：「サイコセラピストの意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』と問題の焦点化を目指す『フレーム（構図）の対応』を用いて分析・解釈を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
統合失調症患者との看護面接の場面の分析 ースピリチュアリティに焦点をあててー（査読付）	共著	平成 25 年 2 月	精神看護における ディスコース分析 研究会誌 第1巻 pp.46-56	安藤満代、川野雅資 精神看護の専門教育を受けた看護師が行っている看護面接において、どのようなスピリチュアリティ向上に関する内容があるのかを明らかにするために、村田のスピリチュアル・カウンセリングシートを用いて分析・考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術（査読付）	共著	平成 25 年 2 月	精神看護における ディスコース分析 研究会誌 第1巻 pp.57-68	片山典子、一ノ山隆司、川野雅資 専門教育を受けた看護師と慢性統合失調症のクライアントの間におこる会話場面を、環境要因も含めて分析を行い、看護師が用いているカウンセリング技術を明らかにした。　本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
精神障害者が地域で生活するためのソーシャルキャピタルと支援（査読付）	共著	平成 25 年 4 月	インターナショナル Nursing Care Research	著者：安藤満代、川野雅資、廣瀬真也 統合失調症の患者が地域で生活していくための阻害要因と促進要因が何かを探索するために5名の患者にインタビュー調査を行った結果をまとめた。本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。
精神看護学実習を通した精神障害者に対する対人違和感とイメージの肯定的変化（査読付）	共著	平成 25 年 4 月	インターナショナル Nursing Care Research, 12, pp.115-124.	安藤満代、川野雅資 学生のスティグマが患者と触れることで減少することが予想された。その結果、患者への対人違和感が肯定的に変化していた。本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。
職業訓練を受けた精神障害者の自己効力感、自尊感情と首尾一貫性（査読付）	共著	平成 25 年 4 月	インターナショナル Nursing Care Research 12 pp.75-83	著者：安藤満代、川野雅資 精神障害者でありながら職業訓練校で訓練を受けている方の自己効力感、自尊感情と SOC の関連について調べ、正の相関があることを示した。本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
アルコール依存症の回復を促進するために設立したグループ「酒害者回復クラブ」の取り組みから見た今後のアルコール依存症者地域支援の検討（査読付）	共著	平成 25 年 10 月	アディクション看護 10(1) pp. 73-74	伊藤佳子、川野雅資 、大谷一義 本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
『うつ病を体験した人のサイコセラピー―心理社会的な職場復帰プロセスの視点から―』（査読付）	共著	平成 25 年 12 月	日本サイコセラピー学会 学会誌第 14 巻 1 号 pp. 107 - 113	片山典子、川野雅資 本研究では、「職場復帰リハビリテーション」を受けた事例を通し、心理社会的な職場復帰のプロセスを記述することを目的とした。分析の結果、うつ病により長期休業した労働者 A 氏の心理社会的な職場復帰プロセスとして、【違和感を気づきながらも社会人として頑張る】【休職の焦りと安堵に浸る】【治療の苦痛と期待】【職場復帰に向けて模索する】【現実と直面する】【病気体験の意味づけをする】【現実の中で再適応する】という 7 つのカテゴリと、27 のサブカテゴリが抽出された。 本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
身体表現性障害のクライアントに対する初回サイコセラピーの手法に関する検討（査読付）	共著	平成 25 年 12 月	日本サイコセラピー学会 学会誌第 14 巻 1 号 pp. 114 - 120	川野雅資、緑川綾、佐々木章倫 本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
講会長演 ディスコース研究から見えてくるもの	単著	平成 26 年 1 月	精神看護における ディスコース分析 研究会誌 第 2 巻 pp. 1-3	妄想に支配されているクライアントへのサイコセラピー、気分障害（うつ病）のクライアントが徐々に仕事復帰する段階のカウンセリングについて RIAS を用いて、セラピストのカウンセリング技術の考察を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
うつ病および統合失調症患者と看護師の会話のRIASによる分析（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析 研究会誌 第2巻 pp. 25-32	野呂幾久子　川野雅資 3 つの実際のカウンセリング場面の会話を RIAS で分析し、その結果からコミュニケーションの特徴について考察することを試みた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
テキストマイニングによるカンセラーとクライエントの会話の特徴（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析 研究会誌 第2巻 pp. 33-49	上野栄一、川野雅資 カウンセリングの場面についてカウンセラーとクライアントの会話内容をテキストマイニングを用いて分析し、会話の特徴を明らかにするとともに、クライアントとカウンセラーの会話をテキストマイニングで分析することの妥当性の検証を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
カウンセリングにおけるコミュニケーション技術の構造と手法　　気分障害患者の認知バイアスへの介入場面の分析（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析 研究会誌 第2巻 pp. 50-59	伊藤桂子、川野雅資 看護師と気分障害をもつクライアントとの会話を分析し、看護師が用いるコミュニケーション技術の構造と手法の考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のあるクライエントとの看護面接場面の会話分析 ―『対人間圧力』の典型的反応レベル 32 スキルを用いた分析―（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第2巻 pp. 60-67	曽谷貴子、日下知子　揚野裕紀子、 川野雅資 専門教育を受けた看護師が、妄想のあるクライアントとの面接場面において、意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』の典型的な反応レベル 32 スキルを、どのように用いて会話を行っているのか、会話分析を行い『対人間圧力』として影響の度合いと会話パターンを明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリングにおけるスピリチュアルケア（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 68-73	安藤満代、川野雅資 統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリング場面をスクリプト表記し、村田のスピリチュアリティ・カンファレンス・サマリーシートを部分的に利用し分析を行い、看護カウンセリングにおけるスピリチュアルアケについて検討を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のある慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術―ジェファンソンの記号システムによる検証―（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 74-84	片山典子、川野雅資 地域で生活している妄想のある統合失調症者と看護師の対話場面を、ジェファンソンの記号システムに基づきデータとし、会話分析から統合失調症者の妄想に対して看護師が用いているカウンセリング技術を抽出した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
ひきこもり青年との看護面接場面の分析―行動療法的アプローチに焦点を当てて―（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 85-93	柳田崇姉、川野雅資 ひきこもりの青年と専門教育を受けた看護師の看護面接場面の会話分析を行い、看護師がどのような行動療法的アプローチ技術を用いているのかを明らかにし、自尊感情の回復援助に効果的なケアについて考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析―ユーマニスティック看護論を用いて―（査読付）	共著	平成 26 年 1 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 2 巻 pp. 94-101	佐々木郁子、川野雅資 ヒューマニスティック看護論の概念図化し、著書より「人間」「看護」「看護師」キーワードとして、センテンスを抜き出し、カテゴリに分類し、統合失調症患者との看護面接場面でクライアントが看護師に自分の否定的な気持ちを率直に伝えていた場面を抜き出し、分析・考察を行った。本人担当部分：研究の企画、

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
米国コロラド州デンバーにおける精神看護学の研修報告 ： ジーン・ワトソン博士の特別セミナー(査読付)	共著	平成 26 年 3 月	山陽看護学研究会誌 4(1) pp. 24-29	川野雅資、揚野裕紀子、井田裕子、緑川綾、植木健康、佐々木章倫 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
農村地域で暮らす統合失調症患者への支援の検討 ： 地域生活継続の促進要因と阻害要因の視点から（査読付）	共著	平成 27 年 10 月	新潟大学保健学雑誌 12(1) pp. 1-9, 20	関井愛紀子、飯田亘、五十嵐正徳、川野雅資 本人担当部分：研究の企画、データ分析・考察・文章の執筆の校閲を行った。 N 県の農村地域に暮らす精神障害者にインタビューを行い、生活を継続していく要因と困難になる要因に分けて分析した。
会長講演 妄想状態にある統合失調症患者に対する熟練看護師の対話技法の一考察	単著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 1-4	熟練看護師と妄想のある統合失調症患者との面接 6 場面の会話内容を、ボランニーの記述から全体を量的に整理するとともに、ある特定の妄想場面について、話題、発話の回数、話題の始まり方、コミュニケーションのレベルについて分析を行った。
精神看護面接における看護師の発話機能、技法、意図の関係ー統合失調症患者の面接を対象としたパイロット研究ー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 13-26	野呂幾久子、川野雅資、伊藤桂子、片山典子、佐々木郁子 熟練した精神看護師と統合失調症患者との面接場面を、RIAS を用いて、看護師の会話の意図、技法、発話機能の関係について考察を行い、効果的な精神看護面接の会話構造を明らかにした。 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリングの手法と構造（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 27-38	伊藤佳子、川野雅資 カウンセラーと気分障害患者との会話を分析し、気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリング技法の手法と構造を明確化した。 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のある慢性期統合失調症患者への看護カウンセリング技術ー「言いかえ」における自己修復・他者修復の関連ー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 39-46	片山典子、川野雅資 地域で生活している妄想のある慢性統合失調症者と専門教育を受けた看護師の対話場面をデータとして会話分析を行い、看護師が用いるカウンセリング技術を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析ヒューマニスティックナーシングを用いてー看護師と患者の「間」についての一考察ー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 47-56	佐々木郁子、川野雅資 看護面接場面における「間」の存在について、人間的看護論を用いて会話分析し、人間的看護論の実践について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者とうつ病患者の看護面における会話分析の比較ー看護師の対人間圧力 32 スキルの活用比較ー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 57-66	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 妄想のある統合失調症患者とうつ病の回復期にある患者との看護面接における会話を比較し、対人間圧力 32 スキルの活用状況の特徴を明らかにした。　本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
うつ病患者の看護面接場面の会話分析ークライアントの反応からみたセラピストの技法の活用ー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 67-76	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 看護カウンセリングにおけるクライアントの会話パターンの特徴を把握し、セラピストのコミュニケーション技法の活用について考察を行った。
気分障害をもつ患者と看護師との会話分析ーロイ適応看護モデルを用いてー（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 77-86	安藤満代、川野雅資、日高艶子 気分障害（うつ病）をもったクライアントとの看護カウンセリングの中で、ロイ適応看護モデルに基づいてどのようなケアが行われているのか分析・考察を行った。本人担当部分：データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニグを用いたセラピストとクライアントの会話分析（査読付）	共著	平成 27 年 12 月	精神看護におけるディスース分析研究会誌 第 3 巻 pp. 87-94	松浦純平、川野雅資 統合失調症患者のクライアントとカウンセリング時のセラピストの発語内容についてテキストマイニグを用いて分析し、高度実践看護技術の構造化につなげる基礎研究の一助として、カウンセリング時の特徴を明らかにすることに主眼に置いた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
わが国の地域在住統合失調症者における自己管理の概念構造に関する文献学的研究（査読付）	共著	平成 28 年 3 月	梅花女子大学看護保健学部紀要	山元恵子、藪脇健司、川野雅資 統合失調症者が地域で生活することを可能とする自己管理の概念構造を明確にした結果，6 つの要素「病名告知を受け，症状悪化の兆候を自分で察知し，治療に参加する」，「治療と疾病・服薬・心理教育を受け，主体的に服薬を継続する」，「これからの生き方を明らかにするために自分らしさを保持する」，「自分らしい生活をするために，自らを統制し，周囲の環境に適応する 」，「互恵的な関

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				係を保つために，ストレス・悲観的な感情に対処する」，「生活の枠組みを作り，自信をもって生活することで自分の価値を実感する」が抽出できた。本人担当部分：研究の企画の助言、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
70 Response and results to ethical problems by psychiatric nurses in Japan(日本の精神科看護の倫理的葛藤に対する反応と結果)（査読付）	共著	平成 28 年 4 月	Archives of Psychiatric Nursing(30)2016 527-530	Michiyo Ando, Masashi Kawano （130 名の日本人の精神看護師に自由回答の調査を行い、質的研究方法で分析した。その結果「行動しないし変化しない」「誤りを指摘して傷つく」などの 7 つのカテゴリが抽出された。） 本人担当部分:研究計画の共同作成、調査対象の抽出、依頼、論文の校正。
会長講演 「会話のもとになるもの」	単著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 1-2	
うつ病患者のカウンセリング一回復期と増悪期の比較一（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 13-20	野呂幾久子、川野雅資 うつ病患者のカウンセリング 2 場面の RIAS を分析を行った。看護師のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「患者教育」が多いこと。患者のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「社会情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「接続語」が多いこと、「社会的会話」および「信頼関係の発話」が少ないことが明らかになった。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
ロイ看護適応モデルを用いた自殺念慮を呈する患者と看護師との会話分析（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 21-28	安藤満代、川野雅資 本人担当部分：うつ病の増悪気にあるクライアントが自殺を考えている場面でのカウンセラーの会話をシスター・カリスタ・ロイの帝王理論で分析した。研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
自殺に傾いたクライアントへの支援－クライアントとセラピストの相互関係の中で行われる自殺予防の関わり－（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 29-42	伊藤桂子、川野雅資 カウンセラーと自殺に傾いたクライアントとの会話を分析し、カウンセリングの相互作用の中で行われる自殺予防の手法について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
うつ状態の悪化期にある患者との看護面接場面の会話分析ーうつ状態の回復期と悪化期の対人間圧力 32 スキルの活用比較ー（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 43-50	曽谷貴子、日下知子、川野雅資 うつ状態の悪化時にある患者との看護面接場面を会話分析することにより、症状の悪化時にどのようにコミュニケーション技術を活用し、看護面接を行っているのかを分析・考察した。また、先行研究のうつ病の回復期の看護面接での対人間圧力 32 スキルとの比較を行い病状に違いによるコミュニケーション技術の特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングによるうつ病の患者とカウンセラーとの会話分析（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 51-66	上野栄一、川野雅資 うつ病患者とカウンセラーの両者の会話の特徴を明らかにすることを目的とし、会話の中で出現する沈黙に注目し、カウンセラーとクライアントのコミュニケーションの特徴をテキストマイニングソフト Studio®を用いて、単語頻度解釈、係り受け頻度解釈、共起分析し、考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング時の会話分析（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 67-74	松浦純平、川野雅資 カウンセリングを定期的に受けているうつ病患者と看護師との会話内容から逐語録を作成し、計量テキスト分析ソフト KH Coder を用いて、記述統計、階層的クラスター解析、共起関係ネットワーク分類、多次元尺度法を実施。熟練セラピストとうつ病患者とのカウンセリング場面の会話分析から、セラピストのカウンセリングにおける特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
看護学生の精神科患者への関わりに関する研究ー模擬患者を用いたシュミレーションのディスコース分析（査読付）	共著	平成 28 年 5 月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第 4 巻 pp. 75-89	山元恵子、伊藤桂子、村上茂、川野雅資 看護学生と統合失調症模擬患者との対話場面で、両者間で何が起こっているのかを文脈の中で分析し、学生の内面的な変化を促すための効果的な学生指導のあり方を検証した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
Relationships among moral distress, sense of coherence, and job satisfaction of Japanese psychiatric nurses.（日本における精神看護師の倫理的葛藤と職業満足度の関連）（査読付）	共著	平成 28 年 8 月	Nursing Ethics ページなし	Michiyo Ando ,Masashi Kawano 精神科勤務の看護師を対象として、倫理的悩み、首尾一貫感覚、職業満足度との関連について調べ、職業満足度には倫理的悩みと首尾一貫感覚の下位尺度が強く影響していることが示された。 本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
Association between moral Distress and job satisfaction of Japanese psychiatric nurses(日本の精神科看護師の倫理的葛藤と職業満足度の関連)（査読付）	共著	平成 28 年	Asian/Pacific Island Nursing Journal Volume 1, Issue 2 (2016) 55-60	Michiyo Ando ,Masashi Kawano 上記の論文の 2 次的分析として、倫理的悩みと職業満足度の下位尺度との関連について相関分析によって明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
会長講演 臨床精神看護学研究会	単著	平成 29 年 11 月	第 2 回臨床精神看護学研究会誌	p.1 Evidence Based Practice と Practice Based Evisence を比較しながら、臨床の知を実践のモデルにする意義を述べた。
長期入院患者のアパートへの退院支援	単著	平成 29 年 11 月	第 2 回臨床精神看護学研究会誌	p.29-30 アパートを建築し、大家さんと病院との橋渡しをして長期入院患者 4 名の退院を支援した実践を報告した。そこで必要なのは、丁寧なアセスメントと患者の状態に合わせた入院中からの支援であった。
長期入院患者の退院後の食事会を通した支援	共著	平成 29 年 11 月	第 2 回臨床精神看護学研究会誌	p.31-33 共同研究者:柳田崇姉、川野雅資、伊藤桂子 長期入院患者 4 名が退院した後に毎月 1 回大家さんと病院スタッフ、ボランティアが集まって食事会をすることで支援を続けた。次第に温泉旅行、クルージング、ホテルのレストランでの食事会などを取り入れて支援した実践を報告した。支えることとささえられることが成り立つ関係が重要であることが分かった。本人担当部分:研究計画の立案、プログラムの実施、評価、文章の校閲
A2 病棟における心理教育の工夫と効果会長講演 臨床精神看護学研究会	共著	平成 29 年 11 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	p.60-64 共同研究者:知念史子、大西恵、川野雅資、谷村美夏、濱岡景子、山本賢一、前田綾奈 入院中の長期入院患者に対して心理教育を実践した。これまでの体験から、プログラムを隔週で行い、スタッフの力量を高めることを隔週で取り入れる、という工夫を行い、その効果を検討した。本人担当部分:研究計画の立案、プログラムの実施、評価、文章の校閲

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
TIC 研修における看護師等への意識調査ー看護実践の土台となるものー(査読付)	共著	平成 29 年 11 月	第 2 回臨床精神看護学研究会誌	p.85-95 共同研究者:山元恵子、徳永薫、山之内優子、川野雅資 TIC の研修に参加した対象者に任意でアンケートを配布し、その結果を質的統合法で分析した。その結果、全人的かかわり、わかる説明、神対応、患者視点のケア、強制しないケア、TIC 理念の浸透という 6 要素が抽出れた。この事を報告した。本人担当部分:研究計画の助言、データ収集、文章の校閲
集中治療室におけるケアリングエレメントの探求-	共著	平成 21 年 1 月	臨床看護 35(7) pp.1097-1108	患者・看護師の捉える「ケア」「こころ」からケアリングをみつけるという視点から執筆を行った。田中綾子、川野雅資
精神臨床看護検討レポート（case11）	共著	平成 21 年 2 月	臨床看護 36 巻 3 号 pp.370-373	共著者：掛川葉子、佐々木喜代、伊藤英明、川野雅資 精神科訪問看護の現状と課題を、精神科訪問看護を利用する患者と家族を対象に実施したアンケート調査から検討した。本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
児童・思春期精神医療を支える地域ネットワークを考える	共著	平成 21 年 6 月	小児看護 32(9) pp.1239-1242	特集 児童・思春期精神看護の臨床実践・荻典子、佐々木郁子、川野雅資 本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
精神臨床看護検討レポート(case 4)	共著	平成 22 年 3 月	臨床看護 35 巻 5 号 pp.811-815	共著者：一ノ山隆司、舟崎起代子、川野雅資患者の安寧は看護師の言葉だけではない」ことの経験知--自己の癒し体験をケアに生かすケアリングを検討した。本人担当分：資の分析・考察・文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
精神臨床看護検討レポート(case 6)	共著	平成 22 年 4 月	臨床看護 35 巻 9 号 pp. 1394-1399	共著者：千英樹、一ノ山隆司、川野雅資 統合失調症患者の誰にも表現することのできない心の叫びに対する援助;大声で叫べる空間を提供することの検討をした。本人担当分：資の分析・考察・文章の執筆を行った。
イギリスにおける地域精神医療の最新動向	共著	平成 22 年 5 月	インターナショナルナーシング・レビュー 日本看護協会出版会 34(5) pp. 102-107	共著者：川野雅資、片山典子　本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。英国における地域精神医療の実際を見聞して、様々な対象と状態に応じたチームの活動の実際を紹介する。
精神臨床看護検討レポート(case 15)	共著	平成 22 年 8 月	臨床看護 36 巻 10 号 pp. 1350-1355	共著者：渡辺富美子、一ノ山隆司、川野雅資著しい視力・聴力低下をともなった高齢のアルコール精神病患者への看護の検討。　本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
地域精神保健のための教育と訓練（特集 地域精神科医療に取り組む)	単著	平成 22 年 9 月	精神科 17(3) pp. 291-294	地域精神保健を推進するために必要な連携を狩る看護師の教育と訓練の手法を解説する。
世界へ飛ぶ精神科看護師 イギリスの「地域精神科看護師」とは	共著	平成 23 年 5 月	精神看護 14(6), pp. 55-58,	共著者：川野雅資、片山典子　本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。英国研修で学んだ地域精神看護師の教育内容と、活動の実際を紹介する。
ハワイ州における地域精神看護	共著	平成 23 年 11 月	月刊ナーシング 32(10), pp. 101-103,	共著者：川野雅資、緑川綾　本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。ハワイ州の精神科病院・病棟であるクイーンズメディカルセンター、カヒモハラの精神看護の実際を報告する。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
ロールプレイングを用いたコミュニケーション教育（特集 コミュニケーション力を育む ： 実習前に教員としてできること）	共著	平成 24 年 9 月	看護教育 53(10), pp.844-849	共著者：川野雅資、石川純子　本人担当分：教育方法の開発、実施を行い、データの分析・考察・文章の執筆を行った。学生のコミュニケーション技術向上のためにロールプレイングを用いた教育を行った結果をまとめた。教室内学習として演習で身に付けられる技術に関して検討を加えた。
書評　『看護学生のためのクリティカルシンキングと書き方－基本的な考え方と活用』	単著	平成 24 年 10 月	看護実践の科学 39(5)pp.84	監訳者の神郡博先生の依頼を受け、看護師の職業的 3 つの技能「クリティカルシンキング、振り返ること、書くことを高める充実した内容の書籍とした。
欧米での精神看護研修(01)ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 1)Mr. Charles St. Louis	単著	平成 26 年 5 月	看護実践の科学 39(11) pp.74-77	ハワイ州の精神看護の領域で CNS および APRN(上級実践看護師)として活躍している、 Charles St. Louis （チャールズ･セントルイスさん)の看護実践と The Queen's Medical Center の児童・思春期病棟の看護を報告した。
欧米での精神看護研修(02)ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 2)Ms. Connie Mitchell	単著	平成 26 年 10 月	看護実践の科学 39(12) pp.70-74	ハワイ州のホームレスの人のシェルターThe Institute for Family Enrichment (TIFFE)で施設長をしている精神科専門看護師、Ms.Connie Mitchell（コニー・ミッチェルさん）の看護実践と TIFFE の取り組み、コニーさんが行っているホームレスの人の診断と治療計画アセスメント（ASAM PPC Dimensions:American Society of Addiction Medicine, Patient Placement Criteria を紹介した。
欧米での精神看護研修(03)ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 3)Joseph Giovannoni	単著	平成 26 年 11 月	看護実践の科学 39(13) pp.56-59	開業看護師として性犯罪者の治療を行いながら、ジーンワトソン博士と共に世界中のヒューマン・ケアリングの講演に取り組んでいる Joseph Giovannoni （ジョセフ・ジオバノーさん）博士の看護実践を紹介した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
精神科臨床評価マニュアル[2016 年版]	単著	平成 26 年 12 月	アークメディア 全 631 頁	依頼されて「ケアとアウトカム」（pp.585-596）について記述した。著者：「臨床精神医学」編集委員会　医療の質を評価する必要性と意義について論説し、有効な評価尺度して、筆者が翻訳した Perception of Care を紹介し、併せて、HCI と PSI を紹介した。これらの評価尺度の使用方法と限界を解説した。
欧米での精神看護研修(04)ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 4)Mr. Wailua Brandman	単著	平成 27 年 1 月	看護実践の科学 40(1) pp.56-60	ハワイ州の精神看護の領域でナースプラクティショナーとして活躍している Mr. Wailua Brandman （ワイルワ・ブランドマンさん）が、実践以外にどのようなことを行っているのか、精神科でどのような実践を行っているのか、実践していることの治療的背景、技法、信念にはどのようなものがあるのかについて紹介した。
欧米での精神看護研修(05)ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 5)Mr. Michael Palazzo	単著	平成 27 年 1 月	看護実践の科学 40(2) pp.68-72	ハワイ州の精神看護の領域で CNS および APRN(上級実践看護師)として活躍している、Mr. Michael Palazzo（マイケル・パラゾさん）の開業看護師としての実践、米国の保険支払い制度、今後の精神看護についての考えを報告した。
欧米での精神看護研修(06)ハワイ州の精神看護の領域で活躍する CNS および APRN(上級実践看護師)(その 6)Ms. Christine	単著	平成 27 年 2 月	看護実践の科学 40(3) pp.66-71	非営利団体の精神科病院　Kahi Mohara Behavioral Healh で取り組まれている治療プログラム（急性期児童プログラム・レジデンス型児童治療プログラム・急性期成人治療プログラム・思春期部分入院プログラム・摂食障害サービス・ECT サービス・Ropes プログラム)、同病院で CNS および APRN として人材開発コーデネーターとして活躍している、Ms. Christine Mathuura（クリスティーン・マツウラさん）の人材開発教育実践について報告した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
欧米での精神看護研修(07)ハワイ州の精神看護の領域で活躍するCNSおよびAPRN(上級 実践看護師)(その 7)Mary Jane Amundson	単著	平成 27 年 3 月	看護実践の科学 40(4) pp.44-47	子ども、家族、地域に対して訓練、教育、相談、治療を行い、個人、家族、地域の質の向上及び専門家の育成に力を注いでいる「The Institute for Family Enrichment (TIFFE)」のプログラム、同施設の設立、運営に携わってきたハワイ大学看護学部・精神看護学教授 Mary Jane Amundson（メアリー・ジェーン・アマンソン）博士看護実践について報告した。
欧米での精神看護研修(08)英国の精神看護 : 実践と研究 Mr. Michael Coffey	単著	平成 27 年 4 月	看護実践の科学 40(5)pp.44-48	ウェールズの精神看護について、臨床の場と教育に焦点を当てて報告した。Swansea University 准教授 Michael Coffey 博士が共同責任者として携わる大学院終了後の認定プログラム Approved Mental Health Professional（AMHP）の教育内容、非合意入院の判断方法の変化と AMHP 導入の背景、精神科医およびGP(家庭医)とAMHPとの連携についてまとめた。
寄り添う看護 : 看護師の対話力	単著	平成 27 年 5 月	看護実践の科学 40(5)pp62-74	寄り添う看護とは、患者様と家族の気持ちに寄り添い、さらに必要なケアを実践することである。寄り添う看護と添えていない看護の違いについて、入院患者様が体験した具体例の幾つかを紹介した。
欧米での精神看護研修(09)英国の精神看護 : 実践と研究(その 2)DPP (DProf) Program	単著	平成 27 年 5 月	看護実践の科学 40(6) pp.54-59	英国 Swansea University の Doctor of Professional Practice(DPP,専門実践者博士；通称Dprof)課程の内容とMichael Coffey（マイケル・コフィ）博士が受け持つ博士課程の大学院生について紹介した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
欧米での精神看護研修(10)英国の精神看護 ：Michael Coffey博士を招聘して(その1)	単著	平成 27 年 6 月	看護実践の科学 40(8) pp.70-74	2015 年に日本に招聘した Michael Coffey（マイケル・コフィ）博士の3つの特別講演（有馬高原病院・東京女子医科大学看護職キャリア支援センター・第4回日本地域連携精神看護研究会）の要点を紹介した。（英国の精神看護，英国の地域精神看護師，ケアコーデネーション，研究からみた地域精神保健チーム活動，研究からみた認定精神保健専門職）
欧米での精神看護研修(11)英国の精神看護 ：Michael Coffey博士を招聘して(その2)	単著	平成 27 年 7 月	看護実践の科学 40(9) pp.56-60	前号に引き続き、2015年に日本に招聘した Michael Coffey（マイケル・コフィ）博士の特別講演（有馬高原病院）の要点を紹介した。
43　修(12)コロラド州での精神看護 Michael E. Galbraith博士	単著	平成 27 年 8 月	看護実践の科学 40(10) pp.40-44	筆者が 10 年以上交流を続けている、コロラド大学の Michael E. Galbraith 博士から伺った、コロラド州の精神看護について紹介した。（コロラド州の精神医療に係る人材，対人関係と現代の精神看護，ホームレス，地域でのフォローアップ）
欧米での精神看護研修(13)ヒューマンケアリング：Dr. Jean Watson	単著	平成 27 年 9 月	看護実践の科学 40(11)pp.58-61	コロラド大学 Jean Watson（ジーン・ワトソン）博士に伺った、精神看護とヒューマンケアリングのお話をワトソン博士が話された言葉で紹介した。（ヒューマンケリング，個人的体験とヒューマンケアリング，エクササイズ）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
欧米での精神看護研修(14)高齢者サービスを提供するカハラ・ヌイを訪ねて	単著	平成 27 年 10 月	看護実践の科学 40(12)pp.36-40	ハワイの Kahala（カハラ）にある、Hi'olani Care Center in Kahala Nui（ヒオラニアケアセンター；通称、カハラヌイ）で提供されている 3 つのサービス（Assisting Living ；手助け付住居，Memory Support; 認知の支援，Comprehensive Nursing;包括的看護）について報告した。
Understanding the Mind of Mentally Handicapped Persons about Returning from Hospital to the Community （精神障がい者が病院から地域へ移行する思いの理解）	共著	平成 27 年 11 月	インターナショナル nursing care research 14(1) pp.81-88	共著者:安藤満代、川野雅資、谷多江子 本人担当部分:研究の計画、研究方法の検討、論文の記述と監修を行った。研究内容は、精神障がい者が病院から地域へ移行することを看護師が支援するために、1）患者が大切にしていること、2）地域への移行が意味すること、3）今後の希望、について明らかにすることであった。13 名の精神障がい者が質問に対して回答した。「大切なこと」は，【病気のコントロールと健康維持】，【人間関係を良好に保つこと】，【自分を認めてくれる人の存在】，【生活を上手くしていくための技術】，【人生を楽しむこと】，【自己の成長】であった。「病院から地域に移行することの意味」として【仕事をすること】，【自宅に戻って生活をすること】，【病院生活の継続】，【地域への移行の障害】，【居住地に関係なし】であった。さらに「今後の希望」は、【病気の治癒と健康維持】，【社会参加と就労】，【他者の負担の軽減】，【人生を楽しむこと】，【他者からの評価】であった。地域への移行を促進するためには、看護師が、患者が大切にしていること、移行への思い、今後の希望を理解し、患者のもっている強さを支援することが有効な一つの方法と考えられる。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
欧米での精神看護研修(15)カヒ・モハラで行なう軍人のPTSD治療のCPT	単著	平成27年12月	看護実践の科学 40(13) pp.46-52	ハワイの精神科病院　Kahi Mohara Behavioral Healthで取り組まれている治療方法の1つであるCPT（認知処理方法）について紹介した。
欧米での精神看護研修(16)Trauma Informed Care(トラウマ・インフォームド・ケア)	単著	平成28年1月	看護実践の科学 41(1)pp.52-59	Sutter Health Kahi Moharaで取り組まれている rauma Informed Care(トラウマ・インフォームド・ケア）について報告した。
イギリスの入院精神看護を訪ねて	共著	平成28年1月	看護 67（1）pp99-103	川野雅資、佐々木愛、川野良子　地域精神看護の「先駆的地域」と言われるイギリスでの精神看護研修・視察を、入院精神看護に焦点を当て、精神看護において重要なファクターとなる「喫煙」の事情を加え報告した。本人担当分：資料の分析・考察・文章の執筆を行った。
欧米での精神看護研修(最終回)欧米の精神看護研修での学び	単著	平成28年2月	看護実践の科学 41(2)pp.71-76	海外研修での学びの最終回として、海外から学ぶことの利点について総説した。ポイントは、分かりやすい、気づきやすい、臨床に応用できる、自分の研究のヒントになる、模倣したくなる、取り入れたくなる、ことをまとめた。何回同じことを聴いても、その都度理解できることが異なるので、新鮮であった、という気づきを報告した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
カウンセラーの視点	単著	平成 28 年 2 月	看護実践の科学 41(4) pp. 6-12	精神保健上の課題や困難を抱える児童思春期の子どもたち（クライアント）が、どのようなことを体験しているのか、何を感じているのか、どのように考え、知覚しているのかについて、看護カウンセリングの経験から紹介し、成長発達の視点から検討した。また、現在わが国にある児童思春期のサービス提供に係る機能と活動についてふれた。
トラウマインフォームドケアとは何か?	単著	平成 29 年 2 月	精神科看護 44 通巻 293 号 2,2017 pp.004-016	トラウマインフォームドケアの定義、海外の文献、トラウマインフォームドケアが生じた背景、トラウマインフォームドケアと非トラウマインフォームドケアの対比を、これまでの研修、講演、文献検索から理解した事をまとめた。
トラウマインフォームドケア	単著	平成 29 年 6 月	精神科看護 44 通巻 297 号 6.2017 pp025-032	トラウマインフォームドケアの定義、3 つの E、4 つの R、6 つの原理について、例示して詳説した。
トラウマインフォームドケア	単著	平成 29 年 7 月	精神科看護 44 通巻 298 号 7.2017 pp041-050	トラウマインフォームドケアの 10 のガイダンスについて記述し、海外のトラウマインフォームドケアに係る研究報告を紹介した。
トラウマインフォームドケア	単著	平成 29 年 8 月	精神科看護 44 通巻 299 号 8.2017 pp048-051	トラウマ体験をすることで、被る侵入症状、陰性気分、解離症状、回避症状、覚醒症状、そして社会面の影響について詳述した。
トラウマインフォームドケア	単著	平成 29 年 9 月	精神科看護 44 通巻 300 号 9.2017 pp042-047	トラウマインフォームドケアとトラウマインフォームドでないケア(Non-TIC)の具体例を提示し、トラウマインフォームドケアに必要な感性を醸成する区題的な方法とその反応を記述した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（その他②）－研究報告書 精神看護における癒しとケアリング効果の有効性に関する研究	―	平成 20 年 11 月	第 28 回日本看護科学学会学術集会講演集 （福岡）	明神一浩、一ノ山隆司、上野栄一、 川野雅資 本人担当分：ケアリングの定義を提示し、癒しとの関係性に関する考察・文章の執筆を行った。
Japanese Concept ofAmae 日本の概念「甘え」	―	平成 21 年 8 月	The First East West Nursing Conference, Honolulu	甘え理論の看護婦－患者関係への応用。
精神障がい者を支える家族の負担	―	平成 21 年 11 月	第 29 回日本看護科学学会学術集会講演集 （福岡）	一ノ山隆司、舟崎起代子、明神一浩、 上野栄一、川野雅資.pp.501 本人担当分：共同研究者として家族が抱える負担感の分析・考察・文章の執筆を行った。
会長講演「グローバルに学んで、グローカルに展開する」	―	平成 21 年 11 月	第 2 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	会長として、地域連携に重要なグローバルな視点と同時に地域の特性を把握したグローカルな視点の重要性を論じた。
神奈川県における児童、青年精神医療の連携で看護師の役割を考える	―	平成 21 年 12 月	第 2 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	編　者：川野雅資　編集協力者：片山典子 著　者：佐々木郁子、川野雅資、山根美智子、久保恭子、アリマ美乃里、佐藤和子、鈴木実、田崎千恵子、土谷朋子、寺島和子、萩典子、一ノ山隆司、村上満 神奈川県における児童、青年期精神医療の実態と、連携形成に関する調査を行い、現状を明確にした。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
就労支援としての職業能力開発校での訓練を受けた精神障がい者の心理面と必要とされる支援	―	平成 21 年 12 月	第 30 回日本看護科学学会学術集会講演集 （東京）	安藤満代、長尾秀美、川野雅資. pp. 280、能力開発校を利用する精神障がい者に調査をして、必要とされる支援を明らかにした。本人担当分：共同研究者としてデータ分析結果の検討、考察・文章の検討を行った。
精神科看護師のケアリング実践に関する研究(第 2 報)　個人の内的過程に焦点をあ	―	平成 22 年 12 月	第 30 回日本看護科学学会学術集会講演集 （東京）	石川純子、川野雅資、pp. 549、東京. 本人担当分：精神科で働く看護師にインタビューを行い、その看護師の生育過程の中から、現在どのようなケアリングの要素が生まれたのかについて分析した。共同研究者としてデータの分析・考察・文章の検討を行った。
会長講演　「精神科早期介入と連携の実際と課題」	―	平成 22 年 12 月	第 3 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	事例に基づいた地域の立場からみた早期治療における連携の実際の報告、課題の明確化と今後の方策提案。
タイ王国の地域連携精神看護－タイにおける精神保健福祉と農村部の現状報告	―	平成 22 年 12 月	第 3 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	共著者：揚野裕紀子、中田涼子、片山典子、川野雅資、櫻井尚子、塩月玲奈、朝倉真奈美　　退院後の患者は全員が働いていると言うタイにおける、精神科病院、医療機関、医療従事者、精神障がい者の生活を支える制度、法律、予算、農村部に暮らす精神障がい者の生活から、地域精神医療の実際を学ぶことを目的に視察を実施。精神保健福祉と農村部の現状を報告した。本人担当部分：研究の企画、調査用紙の作成、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメント退院準備用紙の作成から活用まで	―	平成 22 年 12 月	第 3 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	共著者：寺田祐治、一ノ山隆司、舟崎起代子、上野栄一、川野雅資 患者と看護師が共同で作成した退院準備用紙を活用し、統合失調症患者の退院準備期におけるセルフマネジメントの維持・促進を支える援助過程で、患者の自己および自己を取り巻く現実に関する認識が改善されたかを明らかにした。本人担当部分:データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題	―	平成 22 年 12 月	第 3 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	共著者：松浦純平、一ノ山隆司、上野栄一、京谷和哉、植木健康、川野雅資 自記式無記名質問紙調査を用いて、A 県内に本拠地があるがん患者会員が考えるサロンに対する認識および現状を明らかにした。本人担当部分:データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
長期入院患者の退院支援に関する看護師の意識調査－看護師へのインタビュー分析からの課題－	―	平成 22 年 12 月	第 3 回日本地域連携精神看護学研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	明神一浩、前川哲弥、森下憂一、一ノ山隆司、上野栄一、川野雅資 精神科看護歴が 10 年以上ある看護師にインタービューを実施し、質的帰納的記述研究を行い、長期入院患者の退院支援において看護師が抱える課題を明らかにした。本人担当部分：データ収集、データ分析、考察、文章の校閲を行った。
カウンセリングの治療的意味に関する研究　統合失調症患者のカウンセリングにおける治療関係と認知の変容への働きかけ	―	平成 22 年 12 月	第 1 回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	伊藤佳子、川野雅資 カウンセリングの場面を録音・録画し、クライアントの非合理的信念の変容は、セラピストのどのような介入によって促進されているのかを明らかにし、継続するカウンセリングの中でセラピストとクライアントの間にはどのような相互作用があるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
統合失聴症患者の会話分析－妄想に対する治療的かかわりに焦点を当てて－第1報　会話レベルによる分析	―	平成 24 年 3 月	第 1 回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	揚野裕紀子、曽谷貴子、日下知子、川野雅資 研究は、専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、「会話レベル」を用いて分析を行い、精神障がいをもつ患者にとって、どのようなカウンセリング技法が有効であるのか考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者の会話分析－妄想に対応する治療的かかわりに焦点を当てて－第2報　対人間圧力とフレーム対応による分析	―	平成 24 年 3 月	第 1 回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 専門教育を受けた看護師が行っている妄想に対する看護場面面接を、ジェームズ・F・T・ブーゲンダール：「サイコセラピストの意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』と問題の焦点化を目指す『フレーム（構図）の対応』を用いて分析・解釈を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接の場面の分析 －スピリチュアリティに焦点をあてて－	―	平成 24 年 3 月	第 1 回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	安藤満代、川野雅資 精神看護の専門教育を受けた看護師が行っている看護面接において、どのようなスピリチュアリティ向上に関する内容があるのかを明らかにするために、村田のスピリチュアル・カウンセリングシートを用いて分析・考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術	―	平成 24 年 3 月	第 1 回精神看護ディスコース研究会 東京慈恵会医科大学 （東京）	片山典子、一ノ山隆司、川野雅資 専門教育を受けた看護師と慢性統合失調症のクライアントの間におこる会話場面を、環境要因も含めて分析を行い、看護師が用いているカウンセリング技術を明らかにした。　本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
看護の視点から見た性同一性障害の文献検討	―	平成 24 年 3 月	第 38 回日本看護研究学会学術集会 （宜野湾）	佐々木愛、川野雅資　性同一性障害の人が入院時に体験する様々な感情に関する文献を調査した。本人担当分：研究計画の助言、データ分析、考察の助言、文章の校閲を行った。
夫婦の語りからみたうつ病による休職から職場復帰までの支えとなった事柄	―	平成 24 年 7 月	第 44 回日本看護学会 精神看護学術集会 （群馬）	塩月玲奈、川野雅資　うつ病患者の夫婦療法を実践した記録か、発症から社会復帰までの経過を分析した。本人担当分：研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の校閲を行った。
講会長演 ディスコース研究から見えてくるもの	―	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	妄想に支配されているクライアントへのサイコセラピー、気分障害（うつ病）のクライアントが徐々に仕事復帰する段階のセラピストのカウンセリング技術の考察を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
うつ病および統合失調症患者と看護師の会話のRIASによる分析	―	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	野呂幾久子、川野雅資 3 つの実際のカウンセリング場面の会話を RIAS で分析し、その結果からコミュニケーションの特徴について考察することを試みた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
テキストマイニングによるカンセラーとクライエントの会話の特徴	―	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	上野栄一、川野雅資 カウンセリングの場面についてカウンセラーとクライアントの会話内容をテキストマイニングを用いて分析し、会話の特徴を明らかにするとともに、クライアントとカウンセラーの会話をテキストマイニングで分析することの妥当性の検証を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
カウンセリングにおけるコミュニケーション技術の構造と手法　　気分障害患者の認知バイアスへの介入場面の分析	―	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	伊藤桂子、川野雅資 看護師と気分障害をもつクライアントとの会話を分析し、看護師が用いるコミュニケーション技術の構造と手法の考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のあるクライエントとの看護面接場面の会話分析 ―『対人間圧力』の典型的反応レベル 32 スキルを用いた分析―	―	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	クライアントとの面接場面において、意識的対話の影響を示す『対人間の圧力』の典型的な反応レベル 32 スキルを、どのように用いて会話を行っているのか、会話分析を行い『対人間圧力』として影響の度合いと会話パターンを明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリングにおけるスピリチュアルケア	―	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	安藤満代、川野雅資 統合失調症をもつ患者に対する看護カウンセリング場面をスクリプト表記し、村田のスピリチュアリティ・カンファレンス・サマリーシートを部分的に利用し分析を行い、看護カウンセリングにおけるスピリチュアルアケについて検討を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のある慢性期統合失調症者の地域生活を支える看護カウンセリング技術―ジェファンソンの記号システムによる検証―	―	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	片山典子、川野雅資 地域で生活している妄想のある統合失調症者と看護師の対話場面を、ジェファンソンの記号システムに基づきデータとし、会話分析から統合失調症者の妄想に対して看護師が用いているカウンセリング技術を抽出した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
ひきこもり青年との看護面接場面の分析―行動療法的アプローチに焦点を当てて―	―	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	柳田崇姉、川野雅資 ひきこもりの青年と専門教育を受けた看護師の看護面接場面の会話分析を行い、看護師がどのような行動療法的アプローチ技術を用いているのかを明らかにし、自尊感情の回復援助に効果的なケアについて考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析―ユーマニスティック看護論を用いて―	―	平成 25 年 9 月	第 2 回精神看護ディスコース研究会 山陽学園大学 （岡山）	佐々木郁子、川野雅資 ヒューマニスティック看護論の概念図化し、著書より「人間」「看護」「看護師」キーワードとして、センテンスを抜き出し、カテゴリに分類し、統合失調症患者との看護面接場面でクライアントが看護師に自分の否定的な気持ちを率直に伝えていた場面を抜き出し、分析・考察

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
ひきこもり支援者が語る地域連携の現状に関する研究	―	平成 25 年 9 月	第 33 回日本看護科学学会学術集会 （大阪）	柳田崇姉、川野雅資　pp. 645　ひきこもりの若者を支援する人々へのインタビュー調査を行った。本人担当分：研究計画の助言、データ分析、考察の助言、文章の校閲を行った。
ロイ看護適応モデルに基づいたがん患者のスピリチュアリティのアセスメント	―	平成 25 年 12 月	第 40 回日本看護研究学会 （奈良）	安藤満代、川野雅資、日高艶子　本人担当部分：データ分析、考察、文章の校閲を行った。がん患者が体験するスピリチュアリティについて、シスター・カリスタ・ロイの適応モデルを用いて分析した結果、どのように適応していくのかを明らかにした。
会長講演　妄想状態にある統合失調症患者に対する熟練看護師の対話技法の一考察	―	平成 26 年 8 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会福井大学 （福井）	熟練看護師と妄想のある統合失調症患者との面接 6 場面の会話内容を、ボランニーの記述から全体を量的に整理するとともに、ある特定の妄想場面について、話題、発話の回数、話題の始まり方、コミュニケーションのレベルについて分析を行った。
精神看護面接における看護師の発話機能、技法、意図の関係ー統合失調症患者の面接を対象としたパイロット研究ー	―	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	野呂幾久子、川野雅資、伊藤桂子、片山典子、佐々木郁子 熟練した精神看護師と統合失調症患者との面接場面を、RIAS を用いて、看護師の会話の意図、技法、発話機能の関係について考察を行い、効果的な精神看護面接の会話構造を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリングの手法と構造	―	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 （福井） 福井大学	伊藤佳子、川野雅資 カウンセラーと気分障害患者との会話を分析し、気分障害患者の自殺念慮への介入におけるカウンセリング技法の手法と構造を明確化した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
妄想のある慢性期統合失調症患者への看護カウンセリング技術ー「言いかえ」における自己修復・他者修復の関連ー	―	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	片山典子、川野雅資 地域で生活している妄想のある慢性統合失調症者と専門教育を受けた看護師の対話場面をデータとして会話分析を行い、看護師が用いるカウンセリング技術を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者との看護面接場面の分析ヒューマニスティックナーシングを用いてー看護師と患者の「間」についての一考察ー	―	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	佐々木郁子、川野雅資 看護面接場面における「間」の存在について、人間的看護論を用いて会話分析し、人間的看護論の実践について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
統合失調症患者とうつ病患者の看護面における会話分析の比較ー看護師の対人間圧力 32 スキルの活用比較ー	―	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 妄想のある統合失調症患者とうつ病の回復期にある患者との看護面接における会話を比較し、対人間圧力 32 スキルの活用状況の特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
うつ病患者の看護面接場面の会話分析ークライアントの反応からみたセラピストの技法の活用ー	―	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	曽谷貴子、日下知子、揚野裕紀子、川野雅資 看護カウンセリングにおけるクライアントの会話パターンの特徴を把握し、セラピストのコミュニケーション技法の活用について考察を行った。
気分障害をもつ患者と看護師との会話分析ーロイ適応看護モデルを用いてー	―	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	安藤満代、川野雅資、日高艶子 気分障害（うつ病）をもったクライアントとの看護カウンセリングの中で、ロイ適応看護モデルに基づいてどのようなケアが行われているのか分析・考察を行った。本人担当部分：データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニグを用いたセラピストとクライアントの会話分析	―	平成 26 年 12 月	第 3 回精神看護ディスコース研究会 福井大学 （福井）	松浦純平、川野雅資 統合失調症患者のクライアントとカウンセリング時のセラピストの発語内容についてテキストマイニグを用いて分析し、高度実践看護技術の構造化につなげる基礎研究の一助として、カウンセリング時の特徴を明らかにすることに主眼に置いた。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
精神看護学における会話分析の手法と活用	―	平成 26 年 12 月	第 25 回日本精神保健看護学会学術集会 （つくば）	伊藤桂子、片山典子、川野雅資、野呂幾久子、上野栄一　精神看護学領域における会話分析に関するこれまでの知見をまとめた。本人担当分：研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の執筆を行った。
精神科看護師の倫理的悩みと職業満足度、SOC および精神健康度との関連	―	平成 27 年 6 月	第 35 回日本看護科学学会学術集会 広島国際会議場	安藤満代、川野雅資 精神科看護師の倫理的悩みと職業満足度、SOC および精神健康度との関連を調査した。本人担当分：共同研究者として研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の執筆を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
会　長　講　演 「会話のもとになるもの」	―	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	会話を形成しているのは、その会話をするときの意図であり、意図を実現化するコミュニケーション技術である。更に、意図のもとになる人間性が肝要であることを論じる。
うつ病患者のカウンセリングー回復期と増悪期の比較ー	―	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	野呂幾久子、川野雅資 うつ病患者のカウンセリング 2 場面の RIAS を分析を行った。看護師のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「患者教育」が多いこと。患者のコミュニケーションの特徴として、増悪期の方が「社会情緒的会話」が少なく、「業務的会話」「接続語」が多いこと、「社会的会話」および「信頼関係の発話」が少ないことが明らかになった。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆を行った。
ロイ看護適応モデルを用いた自殺念慮を呈する患者と看護師との会話分析	―	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	安藤満代、川野雅資　本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。うつ病の増悪期にある患者へのカウンセリングをロイの適応モデルで分析した。
自殺に傾いたクライアントへの支援ークライアントとセラピストの相互関係の中で行われる自殺予防の関わりー	―	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	伊藤桂子、川野雅資 カウンセラーと自殺に傾いたクライアントとの会話を分析し、カウンセリングの相互作用の中で行われる自殺予防の手法について考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
うつ状態の悪化期にある患者との看護面接場面の会話分析ーうつ状態の回復期と悪化期の対人間圧力32スキルの活用比較ー	―	平成27年12月	第4回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	曽谷貴子、日下知子、川野雅資 うつ状態の悪化時にある患者との看護面接場面を会話分析することにより、症状の悪化時にどのようにコミュニケーション技術を活用し、看護面接を行っているのかを分析・考察した。また、先行研究のうつ病の回復期の看護面接での対人間圧力32スキルとの比較を行い病状に違いによるコミュニケーション技術の特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングによるうつ病の患者とカウンセラーとの会話分析	―	平成27年12月	第4回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	上野栄一、川野雅資 うつ病患者とカウンセラーの両者の会話の特徴を明らかにすることを目的とし、会話の中で出現する沈黙に注目し、カウンセラーとクライアントのコミュニケーションの特徴をテキストマイニングソフトStudio®を用いて、単語頻度解釈、係り受け頻度解釈、共起分析し、考察を行った。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング時の会話分析	―	平成27年12月	第4回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	松浦純平、川野雅資 カウンセリングを定期的に受けているうつ病患者と看護師との会話内容から逐語録を作成し、計量テキスト分析ソフトKH Coderを用いて、記述統計、階層的クラスター解析、共起関係ネットワーク分類、多次元尺度法を実施。熟練セラピストとうつ病患者とのカウンセリング場面の会話分析から、セラピストのカウンセリングにおける特徴を明らかにした。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
看護学生の精神科患者への関わりに関する研究ー模擬患者を用いたシュミレーションのディスコース分析	―	平成 27 年 12 月	第 4 回精神看護ディスコース研究会 東京女子医科大学 （東京）	山元恵子、伊藤桂子、村上茂、川野雅資 看護学生と統合失調症模擬患者との対話場面で、両者間で何が起こっているのかを文脈の中で分析し、学生の内面的な変化を促すための効果的な学生指導のあり方を検証した。本人担当部分：研究の企画、データ収集、データ分析、考察、文章の執筆の校閲を行った。
How psychiatric nurses behave when they confronted ethical problems （精神科看護師が倫理的問題に直面したときの対処)	―	平成 27 年 12 月	International Behavioral Health Conference (Hong Kong)	Michiyo Ando ,Masashi Kawano 精神科看護師が倫理的な問題に直面したときに、どのように自分自身をコントロールするかを調査研究で明らかにした。本人担当分：共同研究者として研究計画の立案、データ分析、考察を行い、文章の執筆を行った。
蘇った記憶（妄想）のあるクライアントへの支援	―	平成 28 年 1 月	第 8 回日本「性とこころ」関連問題学会学術集会 （東京）	伊藤桂子、川野雅資 統合失調症患者がカウンセリング場面で語る性に係る発言を分析した。本人担当分：研究を計画し、データ収集を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
認知症を知ろう	―	平成 28 年 5 月	第 1 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	北島文子、藤井ショーン、小宮智子、高浜佑、長島愛、彦坂予友子、川野雅資　有馬高原病院で取り組まれている認知症の家族教室の活動内容を認知症の家族の心理を用いて考察した。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
いかに歩くか　-精神科作業療法での治療としての“歩く習慣”定着への取り組み-	―	平成 28 年 5 月	第 1 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	長島愛、山口裕子、越智健義、川野雅資 先行研究で推奨された歩行「歩行の健康増進には 1 日 8000 歩以上、中等度強度以上の歩行を 20 分以上」の精神科臨床応用についての臨床感、経過、定着のための工夫について考察した。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
心理教育リーダー・コリーダーを体験して気づいたこと	―	平成 28 年 5 月	第 1 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	濱岡景子、山本賢一、谷村美夏、鳥羽法子、川野雅資、大西恵　心理教育に係るスタッフの問題点・課題克服を目的としたリーダー・コリーダー体験の結果の分析・考察を行った。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
不本意な入院をした患者の移送に関する体験と思い-A氏の語りから-	―	平成 28 年 5 月	第 4 回日本地域連携精神看護学研究会 横浜市大 （横浜市）	佐々木愛、石川純子、川野雅資 不本意な入院をした患者にインタビューで体験を語って頂き、その体験を質的に分析し、今後の課題を検討した。本人担当部分：研究を計画し、データ収を主に行った。 共同研究者としてデータ分析、考察、文章の校閲を行った。
討論会「拡大する地域連携」	―	平成 27 年 5 月	第 4 回日本地域連携精神看護学研究会 横浜市大 （横浜市）	報告者が取り組んだ地域移行支援プログラムと多職種連携について考察し、地域定着に不可欠な第三者（回復者とともに生活を分かち合うボランティア・慈悲団体）の必要性を明らかにした。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
青年期統合失調症患者の臨界期における訪問ケア実践	―	平成 27 年 12 月	第 36 回日本看護科学学会学術集会(東京国際フォーラム、東京)	片山典子、荒木田美香子、川野雅資 訪問看護を実施した体験がある看護職者に、臨界期にある統合失調症の青年期の対象に実施した看護とその根拠を調査した。その中から、訪問看護師が必要とする看護技術の要素を抽出した。本人担当部分：研究モデルの検討、調査協力者の推薦、結果の分析、考察。
会長講演 臨床精神看護学研究会	―	平成 28 年 6 月	第 1 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	「暗黙知と形式知」「知の三分類」「フロネシス（実践的知恵）を継承する場」についての会長講演をまとめた。
Examination of Self-management construct validity of Structure for Community-dwelling People with Schizophrenia in Japan 日本における待機で暮らす精神障害者の自己管理能力	―	平成 29 年 3 月	Asian American Pacific Islander Nurses Association's th Annual Conferece (Honolulu)	Keiko Yamamoto, Masashi Kawano 我が国のディケアを利用している地域で暮らす 163 名の統合失調症患者に調査した結果、治療、治療継続がもとにあり、そのうえで自己の質、環境があり、そしてしこ調整力が生まれて信頼感が増すことが明らかになった。本人担当部分：調査協力のディケアの開拓。データの考察。
A pilot study of developing of spirituality scale for mentally handicapped persons in community dwelling 精神障害者のスピリチュアリティを測定する尺度の開発に関するパイロット研究	―	平成 29 年 3 月	The 3rd Internationa Society of Caring and Peace Conference in Kurume(Fukuoka,Japan)	P.128. Michiyo Ando, Masashi, Kawano, Eiichi Ueno 24 項目の精神障害者のスピリチュアリティを測定する尺度を開発し、ディケア利用者を対象として 80 名の調査を行い、因子分析を行った。本人担当部分:研究計画の立案、調査対象者の依頼、調査の実施、データ分析の考察。論文の校閲を行った。
会長講演 臨床精神看護学研究会	―	平成 29 年 5 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	Evidence Based Practice と Practice Based Evisence を比較しながら、臨床の知を実践のモデルにする意義を述べた。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
長期入院患者のアパートへの退院支援	―	平成 29 年 5 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	アパートを建築し、大家さんと病院との橋渡しをして長期入院患者4名の退院を支援した実践を報告した。そこで必要なのは、丁寧なアセスメントと患者の状態に合わせた入院中からの支援であった。
長期入院患者の退院後の食事会を通した支援	―	平成 29 年 5 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	共同研究者:柳田崇姉、川野雅資、伊藤桂子　長期入院患者4名が退院した後に毎月1回大家さんと病院スタッフ、ボランティアが集まって食事会をすることで支援を続けた。次第に温泉旅行、クルージング、ホテルのレストランでの食事会などを取り入れて支援した実践を報告した。支えることとささえられることが成り立つ関係が重要であることが分かった。
A2 病棟における心理教育の工夫と効果会長講演 臨床精神看護学研究会	―	平成 29 年 5 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	共同研究者:藤原史子、大西恵、川野雅資、谷村美夏、濱岡景子、山本賢一、前田綾奈　入院中の長期入院患者に対して心理教育を実践した。これまでの体験から、プログラムを隔週で行い、スタッフの力量を高めることを隔週で取り入れる、という工夫を行い、その効果を検討した。
TIC 研修における看護師等への意識調査ー看護実践の土台となるものー	―	平成 29 年 5 月	第 2 回臨床精神看護学研究会（兵庫）	共同研究者:山元恵子、徳永薫、山之内優子、川野雅資　TIC の研修に参加した対象者に任意でアンケートを配布し、その結果を質的統合法で分析した。その結果、全人的かかわり、わかる説明、神対応、患者視点のケア、強制しないケア、TIC理念の浸透という6要素が抽出れた。この事を報告した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（その他⑤）-編及び監修 慢性期看護 ： 緩和・ターミナルケア ： 成人看護学	共著	平成 20 年 4 月	日本放射線技師会出版会	緩和・ターミナルケアに焦点を当てた成人看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全 382 頁 監修：川野雅資 編集：伊藤まゆみ　共著者：伊藤まゆみ、入江慎治、井原緑、秋月百合、高橋正子、高宮有介、下條奈己、黒子幸一、中村英子、村瀬麻樹子、近藤ふさえ、小竹久実子、塚本友栄、佐藤満、佐田浩行、吉田正子、平野真澄、縄田修一、荒添美紀、山室八潮、岩崎和代、鳥原真紀子、菊池麻由美 本人担当部分：本書の企画、文章の校正を行った。
看護学実践 -Science of Nursing- 看護管理学	共著	平成 20 年 8 月	PILAR PRESS	看護看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全 180 頁 監修：川野雅資 編集：平井さよ子 共著者：平井さよ子、賀沢弥貴、飯島佐知子、山田聡子 本人担当部分：本書を新たな視点で企画し、編者に依頼し最終的な文章の校正を行った。
看護学実践 -Science of Nursing- 小児看護学	共著	平成 22 年 8 月	PILAR PRESS	小児看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全 336 頁 監修：川野雅資 編集：中村伸枝 共著者：荒木暁子、出野慶子、遠藤数江、小川純子、金丸友、白畑範子、中村伸枝 本人担当部分：本書の企画、編集者への助言、最終的な文章の校正を行った。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
家族看護学（看護学実践 -Science of Nursing-）	共著	平成 22 年 11 月	PILAR PRESS	家族看護学という新しい学問領域に添うように、そして家族看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全 280 頁 監修：川野雅資 編集：櫻井しのぶ 共著者：安藤直美、大石ふみ子、大倉美佳、加藤欣子、金岡緑、間裕美子、間文彦、櫻井しのぶ、佐藤敏子、庄村雅子、杉浦絹子、近森栄子、茅野裕美、中西唯公、乗松貞子、旗持智恵子、三村博美、森田惠子、丸山明美、薬師神裕子、横尾京子、横内光子、吉田和枝 本人担当部分：本書の企画、編集者への助言、最終的な文章の校正を行った。
老年看護学（看護学実践 -Science of Nursing-）	共著	平成 22 年 12 月	PILAR PRESS	老年看護学の最新の知識と技術が学べるコンパクトな教科書を企画した。全 284 頁 監修：川野雅資 編集：守本とも子 本人担当部分：本書の企画、編集者への助言、最終的な文章の校正を行った。
看護学実践 -Science of Nursing- 地域看護学	共著	平成 24 年 4 月	PILAR PRESS	地域看護学の最新の知見をもとに編集するよう、編者に依頼し、最終原稿の監修を行った。全 251 頁 監修：川野雅資 編集：豊島泰子 著者：豊島泰子、石井栄子、彌永和美、山下智香、山崎律子、後藤由紀、畑中純子、山村江美子、今村桃子、新堂愉香子、佐藤博美、福本美津子、多田羅紀子、西地令子、鈴木みちえ、伊藤薫、井上清美、鷲尾昌一、寺文文恵、小川正子

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月３１日

氏名　嶋田理博

研　究　分　野	研究内容のキーワード
天文学、科学教育	光学赤外線天文学、恒星物理学 自然科学教育（理科、地学、情報）

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許 学士（理学） 修士（理学）	 平成元年３月 平成３年３月	 論文題目「Monte Carlo 法による Be 星輝線プロファイルの計算」 論文題目「B型主系列星の線輻射圧と質量放出現象」
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他 けいはんな科学コミュニケーション推進ネットワーク　サイエンス・サポーター けいはんな科学共育デザインラボ　会員 奈良県産業廃棄物排出抑制等事業費補助金審査委員会委員	 平成 26 年 9 月～現在 平成 29 年 4 月～現在 平成 30 年 4 月～現在	 けいはんな学研都市で実施する科学イベントや科学体験プログラムについて企画・参加・支援している。（宇宙分野担当） けいはんな地域の子どもたちの科学に対する興味・関心・意欲を高め、科学的探究心の育成に重点をおいた教育プログラムの開発・運営及び科学イベントの企画・運営を行っている。（宇宙分野担当） 産業廃棄物の排出抑制、リサイクル等の推進のため、奈良県産業廃棄物排出抑制等事業費補助金に係る事業についての審査を行なっている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 1 2 3 ：				

（学術論文） 1)The Anisotropy of Cosmic Ray Pursued with Chaos Analysis	共著	平成23年8月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing, 2011, Vol.1, 70.	エアシャワーサイズ時系列のカオス解析において、カオス性に寄与する宇宙線を選別し、その到来方向の分布を求めた。その結果、Crab, Mrk421, Cyg-Xなど、特定の活動銀河が高エネルギーガンマ線宇宙線源である可能性を示すことができた。
2)Searching for cosmic ray nuclei above the KNEE energies through the Gerasimova-Zatsepin effect with the LAAS experiments	共著	平成23年8月	Proceeding of International Cosmic Ray Conference, Beijing, 2011, Vol.1, 170.	Gerasimova-Zatsepin効果による原子核宇宙線の崩壊過程を考慮して、大広域エアシャワーデータを解析し、Knee領域以上の宇宙線について考察した。
3)情報学部プロジェクト演習における「フィジカルコンピューティング」教育の実践	単著	平成25年2月	奈良産業大学 情報学フォーラム紀要, 8, 131-140.	2009年度から2012年度の４年間､情報学部「ラジコン製作プロジェクト」において、「フィジカルコンピューティング」教育を実践した。教材としてSun SPOTまたはArduinoを主に用い､合計７つのシステムを製作し、各年度の学園祭に出展した。自らハードウェアとソフトウェアの設計を行い、部品の選定・購入から始めてシステムを完成させる体験は、学生にとって有意義な学修であったと考える。
4)太陽系外惑星発見と情報学	単著	平成25年2月	奈良産業大学 情報学フォーラム紀要, 8, 159-164.	1995年に初めて発見されて以降、700個以上発見されている太陽系外の惑星について、それらを発見する観測手段や、見つかった惑星の特徴、地球に似た星が存在する可能性について論じた。これらの成果には、ＣＣＤなどの受光素子の技術革新による性能向上や、コンピュータによる自動観測、画像の自動解析など、情報技術の進展による寄与が大きい。
5)奈良県 公共図書館・大学図書館横断検索システムの構築	共著	平成25年3月	奈良産業大学紀要, 29, 69-75.	平成20年度、奈良県図書館協会大学・専門図書館部会の依頼を受け、奈良県内の公共図書館および大学・研究所図書館の蔵書を検索できるシステムを開発し、インターネット上に公開した。従来の検索システムと異なり、地図上で図書館の位置が確認できることと、専門図書館を含めた大学図書館と公共図書館を一括して検索できるのが特徴である。
6)地域における地学教育の実践と課題	共著	平成25年3月	奈良産業大学紀要, 29, 185-191.	現在、地域に根差した理科教育として、サイエンスカフェや実験教室が各地で実施されている。本学でも地元住民向けの公開講座や小学生を対象とした科学教室を実施し、学外においても積極的に理科教育の振興に取り組んできた。こうした取り組みへの参加者は常に一定数を見込むことができるが、その多くはもともと科学に興味・関心を抱いていたリピーターであり、理科に関心をもたない住民の目を向けさせる工夫が必要である。

7)少年宇宙教室　−宇宙を調べるモノづくり−	共著	平成 26 年 9 月	奈良学園大学紀要, 1, 173-179.	平成 25 年度に奈良産業大学（現・奈良学園大学）情報学部が主催した公開講座「少年宇宙教室 〜宇宙を調べるモノづくり〜」の報告である。宇宙を探査・観測する機器・装置をテーマに、計３回の講座を開催し、参加者数は小学生児童とその保護者を中心に 153 名を数えた。参加者の感想はおおむね好評で、地域における科学コミュニケーション活動に一定の役割を果たせたと考える。
8)グループ方式によるアンケート分析演習の実践と課題	共著	平成 27 年 12 月	神戸山手短期大学紀要, 58, 41-56	神戸山手短期大学で2015年度から開講した「アンケート演習」はアンケート分析を主目的とした必修科目である。開講初年度を終えて、本科目の教育方法や成果を検討すると同時に、本科目で採用されたグループ方式によるアンケートの計画・実施・分析・発表の利点と問題点を考察した。
9) 学生向けポータルサイトにおける個人認証システムの構築	単著	平成 30 年 10 月	奈良学園大学紀要, 9, 93-97.	奈良学園大学保健医療学部ポータルサイト上で、学生個人ごとのコンテンツやサービスを提供するため、個人認証システムを構築した。構築したシステムは、パスワードの平文を扱わずに認証を行えるダイジェスト認証と、パスワードのオンライン自動発行機能から構成されている。システムは約２年間稼働しており、その間にのべ約 400 名のユーザが利用し、約 1,000 個のパスワードを発行した。
（その他） 「学会発表」 1)小学生向け体験型天文教室「少年宇宙教室」の報告２：「宇宙を調べる」	共同	平成 22 年 9 月	日本天文学会 2010 年秋季年会	2009 年度には科学技術振興機構の支援を得て開催した体験型講座「少年宇宙教室」について報告した。「宇宙を調べる」をテーマとした全４回の講座は、望遠鏡の製作とそれを使っての月・木星の観測を行い、観測の楽しさや宇宙に対する興味を感じてもらえるなど、参加者の満足度の高いものだったと考える。
2)小学生向け科学教室「少年宇宙教室」の活動	共同	平成 22 年 11 月	第 54 回 宇宙科学技術連合講演会	2008 年度から地域の小学生を対象として開催している科学教室「少年宇宙教室」について報告した。子ども達が楽しみながら学べるよう、講義ではなく、工作や実験などの体験を中心とした内容は、科学や宇宙に関心のある参加者に対してはもちろん、初参加の子供や、関心のなかった保護者に対しても興味を引き出すことに成功していると言える。
3)The Anisotropy of Cosmic Ray Pursued with Chaos Analysis	共同	平成 23 年 8 月	32nd International Cosmic Ray Conference	宇宙線時系列データについて、観測粒子密度分布より一次宇宙線エネルギーを算出し、エネルギー時系列データ約５万イベントのカオス解析を行った。エネルギー範囲に対応するカオスの出現頻度の解析から、5.0×10^15〜7.5×10^15eV の範囲のエネルギーをもった一次宇宙線が､300 イベント連続する時系列データのカオス性の出現にもっとも寄与していることが見出された。

4)看護教育 IT 化の一考察：教える側教わる側の思いとサービスデザイン	共同	平成 27 年 7 月	情報処理学会　第 47 回ユビキタスコンピューティングシステム・第 2 回高齢社会デザイン合同研究発表会	看護教育における教材の電子化においては、単純に教科書を電子書籍や補助教材で置き換えるのではなく、教える側と教わる側の双方の要望に応える形で教材とサービスをデザインすることが重要である。筆者らは看護知識と技術を教育するためのタブレット型ツールを新設の看護学科に導入し、設立準備期間を含めて約 2 年間運用してきた。本発表では、その過程で得られた知見を報告した。
5)奈良産業大学／奈良学園大学での子ども向け天文普及活動の 10 年	単独	平成 30 年 6 月	天文教育普及研究会 平成 29 年度近畿支部会	2008 年から、奈良産業大学／奈良学園大学において、子ども向けの天文普及活動に取り組んでおり、活動期間はちょうど 10 年となる。10 年間の天文教室開催回数は 34 回、のべ参加者数は約 1,600 名である。我々の取り組んできた子ども向けの体験型天文教室「少年宇宙教室」および「けいはんな子ども天文クラブ」の活動について報告した。
6)ペーパークラフト展開図作成アプリによる惑星儀、天球儀の製作	単独	平成 31 年 11 月	天文教育普及研究会 平成 31 年度近畿支部会	ペーパークラフト展開図作成アプリ「PazuCraft」を用いると、任意の全球画像または全天画像を用いてペーパークラフト展開図を作成し、教材とすることができる。「PazuCraft」を用いた、地球儀、月球儀、惑星儀、天球儀の製作について紹介した。

教　育　研　究　業　績　書

令和　2　年　3　月　31日

氏名　服部　律子

研　究　分　野	研究内容のキーワード

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 (1) 産後の母子の看護過程学習におけるアクティブラーニングの導入	平成25年4月～平成28年3月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性)」（3年次配当、半期、必修科目、1単位）において、産後の母子の看護過程の授業でアクティブラーニングを導入している。臨床場面で経験する状況に沿って事例を提示し、看護過程の段階ごとにグループワークと発表、解説等を相互に繰り返しながら展開している。このことにより、学生たちからは実践的思考と看護過程の展開の流れが理解できるようになったと評価が得られている。
(2)　周産期の看護過程学習におけるロールプレイ形式での演習の導入	平成26年4月～平成27年7月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性)」（3年次配当、半期、必修科目、1単位）において、実践的な技術の習得を目的に、ロールプレイ形式での実践的な技術の演習を導入している。 設定に基づいて教員が妊婦・褥婦を演じ、学生は看護師として臨床場面に即した観察を行う。このことにより、学生はコミュニケーション技術とフィジカルアセスメント技術を統合させ、看護行為としての観察技術が学習できるようになったと評価を得ている。
(3)　クリッカーの活用	平成26年4月～平成28年2月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護学概論」（2年次配当、半期、必修科目、2単位）において、授業内でクリッカーを活用し、学生の意見をきいたり、授業への導入の小テストを行った。
(4)　母性看護技術演習における反転授業の導入	平成27年4月～平成27年7月	椙山女学園大学看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性)」（3年次配当、半期、必修科目、1単位）において、母性看護技術部分を反転授業で実施した。事前にＶＴＲで事前学習した技術を、授業では“声掛け”やその時に観察すべきこと、留意点などと統合して「看護行為」として組み立てることができ、学生は、実習場面でも一連の行為としてスムーズに実施できるようになった。
(5)　観察に基づく理論の学習の試み	平成27年9月～令和元年7月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（2年次配当、半期、必修科目、2単位）において、母性看護学の基本となる理論の理解を促すため、日常生活場面で母子の観察結果をグループで理論に基づいて分析しながら理論の理解と看護場面への理論の活用方法の理解を促す取り組みを行った。実際に自分が観察してきた具体的な場面と理論が結びつくことにより理解が深まっていた。

(6)　ジグソー法やペアワーク、グループワークの導入	平成 29 年 9 月～令和元年 7 月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）の各回の授業において、学生たちの能動的な学習を促し、学習内容の理解を深めたり、多様な考えに触れ多角的な理解を促すことを目的として、ジグソー法やシンク・ペア・シェア、ペアワークやグループワーク等アクティブラーニングの手法を取り入れた。 学生たちは次第にいろいろな学生ともワークに取り組みディスカッションできるようになり、私語もほとんどなく積極的に学習に取り組むようになっていった。
(7)　課題評価へのルーブリックの導入	平成 29 年 9 月～令和２年 3 月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）の課題評価にルーブリックを導入した。作成したルーブリックを課題提示時から学生と共有することにより、学生自身が取り組むべき課題を具体的に理解すると共に、求められている水準も理解できたことで低い評価のレポートが減少した。 「母性看護学実習」（３年次配当、半期、必修科目、２単位）の評価にルーブリックを導入した。複数の教員で評価するため、ルーブリックでより評価基準を具体化することで教員間での評価の違いが少なくなり、調整が容易になった。
(8)配布シラバスの活用	平成 30 年 9 月～令和２年 7 月	奈良学園大学保健医療学部「母性看護学概論」（２年次配当、半期、必修科目、２単位）で 15 回の授業計画、各授業の事前・事後課題、評価方法、レポート課題の詳細と採点基準（ルーブリック）、受講生へのメッセージなどを記載した配布用シラバスを導入した。学生たちからは全体像を示されたことで計画的に準備ができたなどの反応があり、主体的に取り組めるようになっていた。
２　作成した教科書，教材 (1)　母性看護技術のＶＴＲ	平成 27 年 4 月～平成 27 年 7 月	反転授業用に、授業内容に沿った技術のＶＴＲを作成した。要点はキャプチャーを入れるなど、授業と連動する内容とした。学生からは「眠くならない」「実習前の復習にも使え思い出しやすい」などの評価を得た。

3　教育上の能力に関する大学等の評価 (1)　学生による授業評価	平成 25 年 7 月 平成 27 年 7 月	平成 25 年度に椙山女学園大学で実施された授業アンケートでは、看護学部「母子支援看護論演習Ⅱ（母性）」ABCD クラス、EFGH クラスにおいて、総合的にみて満足であった学生は、「その通りである」が 86.5～77.1%「どちらかと言えばそのとおりである」20.8～13.5%という結果であった。授業の理解のしやすさは「その通り」が 73.1～77.1%、「どちらかといえばその通り」が 22.9～26.9%となっていた。平成 27 年の授業評価でもほぼ同様の結果で、満足度の高い授業と評価された。
(2)　授業の教員の相互評価	平成 27 年 12 月	椙山女学園大学での教員の授業相互評価において授業デザインの明確さとグループワークのファシリテートで学生の主体的取り組みと学びが整理されていると評価された。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 特記すべき事項なし		
5　その他 (1)　修士論文指導	平成 30 年 4 月～令和 2 年 3 月	奈良学園大学大学院看護学研究科修士課程において、主指導教員として修士論文の指導を行った。 [修士論文] 「肯定的な出産体験を構成する要因の解明」

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 (1)　看護師免許	昭和 63 年 6 月 15 日	登録番号第 642045 号（添付 1）
(2)　助産師免許	平成元年 4 月	登録番号第 91302 号　（添付 2）
2　特許等 該当なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)　思春期の健康教育講師等	平成 15 年 4 月～現在に至る	愛知県立小坂井高等学校（3 年間）、ノートルダム女学院中学校（13 年間）、北名古屋市立師勝中学校（2 年間）、奈良県葛城市立北新庄小学校などにおいて、男女のからだのしくみや妊娠・出産のしくみ、性行動と性感染症など、性と生殖に関する内容を中心に、思春期の健康教育の講師を務めている。
(2)思春期ピアカウンセラーの養成と活動	平成 22 年 7 月～平成 29 年 2 月	平成 22 年度より、栃木県における思春期ピアカウンセラー養成に携わっている。平成 25 年度からは椙山女学園大学において、主になって思春期ピアカウンセラー養成と活動支援を行っている
(3)病院での看護研究指導	平成 12 年 1 月～現在に至る	愛知県厚生連海南病院（平成 27 年まで）及び稲沢厚生病院(継続中)において、院内看護研修の一環として行われている看護研究の研修会（クリニカルラダー・レベル 2 並びに 3）の講師を務めクリニカルラダー看護研究指導を行うと共に、院内で実施されている看護研究の指導を行っている。

(4)女性やセクシュアリティへの健康支援活動	平成 24 年 4 月～現在に至る	平成 24 年度から週末に愛知県助産師会女性の健康なんでも相談、思春期電話相談の相談員としての活動を行っている。平成 28 年 1 月からは SANE（性暴力被害者支援看護師）の認定を取得し、名古屋第二赤十字病院性暴力救援センターで被害者支援の臨床活動に携わっている。
4　その他 (1)県看護協会における理事・委員会活動	平成 24 年 4 月～ 平成 30 年 6 月	平成 24 年度から愛知県看護協会において教育委員、平成 26 年度からは教育委員長、平成 28 年 6 月から教育委員長・理事として、主に県内の看護職を対象とした教育計画の立案、研修会の企画・運営を行った。 理事としては県看護協会の運営に参画し、主に、クリニカルラダーに沿った卒後教育の整備に携わった。
(2) 奈良県看護学教育協議会（仮称）設立準備	令和元年 4 月～現在に至る	平成 30 年 4 月から会長を務める奈良県看護師等学校教務主任協議会(大学、短期大学、専門学校の全ての学校種が加盟)において看護教育機関と行政機関や看護関連団体が連携して看護教育を行うための「奈良県看護学教育協議会（仮称)」の設立準備に携わっている。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 周産期ナーシング改訂第 2 版	共著	平成 23 年 3 月	ヌーヴェルヒロカワ	「ハイリスク妊娠」の章を担当し、妊娠中に起こりやすい異常の病態と看護の基本を解説し、事例を示して看護につい説明した。B5 版全 428 頁本人担当部分：総頁数 428 頁中 32 頁を担当(パートⅢ－Ⅳ章)村本淳子,高橋真理編集,石原昌,今田葉子,大関信子,大森智美,上澤悦子,岸田佐智,崎山貴代,塩野悦子,島袋香子,清水清美,常磐洋子,鳥越郁代,服部律子,永山くに子,野澤美江子,春名めぐみ,福井トシ子,古田祐子,村本淳子, 和智志げみ

2 主体的な生き方を支えるピア・カウンセリング実践マニュアル改訂新版	共著	平成 27 年 4 月	小学館	「ピア活動の有効性」の章を担当し、先行研究と筆者らの研究結果を踏まえて、中高生とピアカウンセラー自身へのピア活動の有効性について解説した。 B5 版全 143 頁 本人担当部分:総頁数 143 頁中 19 頁を担当(4-1, 4-2) 高村寿子編集, 高村寿子, 江角伸吾, 堀内成子, 前田ひとみ, 渡辺純一, 安達久美子, 沼尾歩, 小川正美, 岩間薫, 遠藤明希, 高田昌代, 川崎由紀子, 井戸修一, 堀井千華子, 渡辺恵美子, 船橋悠希, 渡邉至, 篠澤倪子, 佐々木明子, 池田悦子, 服部律子
3 セクシュアリティがわかる本	共著	平成 27 年 7 月	一般社団法人日本家族計画協会	避妊法、性感染症、ネゴシエーション、トピックス(月経痛、マスターベーション、性的犯罪、レイプ、リベンジポルノ、カレシ・カノジョより友達?)を担当し、解説した。 B5 版全 57 頁 本人担当部分:総頁数 57 頁中 26 頁を担当(5 章～7 章) 高村寿子編著、安達久美子、服部律子
4.看護教育実践シリーズ 3　授業方法の基礎	共著	平成 29 年 7 月	医学書院	看護学教育において、1 回の授業をどう組み立てるかやアクティブラーニングを導入した授業の方法などについて解説した本である。第 11 章「授業時間外の学習を促す」を共著し、授業時間外の学習の重要性や課題の出し方などについて解説した。 A5 版全 184 頁 本人担当部分:総頁数 143 頁中 12 頁 (11 章) を共著者と共に担当 中井俊樹・小林忠資編、中井俊樹、小林忠資、清水栄子、内藤佐知子、根岸千悠、根本淳子、服部律子、森千鶴

5.看護教育実践シリーズ ２授業設計と教育評価 :	共著	平成 30 年 3 月	医学書院	看護教育における授業設計から、評価、授業の改善方法までを解説した本である。全体に編者として関わり、10 章「評価基準を可視化する」を担当して執筆した。担当部分では、評価基準を可視化し学生と共有することの必要性やルーブリックなどの評価指標の作成について解説した。A5 版全 184 頁本人担当部分:編集・総ページ数 184 頁中 13 頁（10 章）中井俊樹・服部律子編、中井俊樹、服部律子、岡田聡志、加地真弥、小林忠資、嶋﨑和代、高植幸子、中島英博、肥田武
（学術論文） 1 愛知県助産師会による電話相談事業 10 年間のまとめ （査読付き論文）	共著	平成 23 年 12 月	愛知母性衛生学会誌 第 29 号	愛知県助産師会が実施している女性の健康に関する電話相談事業について、過去 10 年間の相談内容と相談者の傾向とその推移について分析した。電話相談では精神的問題や思春期の悩みの相談が多く、次いで妊娠中の各種症状、母乳、育児、月経に関することとなっていた。妊娠や育児に関する相談では出産年齢の高齢化に伴い相談者の年齢も高くなっていた。また、少数ではあるが虐待に関する相談も認められ、他機関とどのように連携するかが今後の課題であることが明らかとなった。 論文掲載：pp37～44

2 小規模病院、有床診療所に勤務する助産師の学習ニーズ （査読付き論文	共著	平成 25 年 1 月	愛知母性衛生学会誌 第 30 号	わが国の出産の約半数を担う小規模病院および有床診療所で勤務する助産師の学習ニーズの特徴を明らかにするため、愛知県内の分娩を取り扱っている小規模病院および有床診療所で勤務する助産師を対象に自己記入式質問紙調査を実施し、記述内容を質的に分析した。その結果、これらの施設で勤務する助産師の約 7 割が学習希望を有しており、助産実践の中で困ったり不安を感じた経験のある助産師のほうがその割合が有意に高かった。学習ニーズはステップアップへの欲求から生じており、スキルアップと知識のブラッシュアップのニーズがあることが明らかとなった。 論文掲載：pp72～77 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，石川真奈美，若山正代，鈴木明日香
3 分娩を取り扱う小規模病院、有床診療所に勤務する看護師の学習ニーズ （査読付き論文）	共著	平成 26 年 1 月	愛知母性衛生学会誌 第 31 号	分娩を取り扱う小規模病院や有床診療所では助産師よりも看護師の勤務者数のほうが多く、看護師が周産期の様々なケアに携わっている現状を踏まえ、これらの施設に勤務する看護師を対象に自己記入式質問紙調査を実施し、記述内容を質的に分析した。その結果、調査対象者の約半数が学習希望を有しており、仕事の中で困難感や不安感を抱いた経験のある者のほうが希望する割合が多かった。これは､「仕事上不足している知識の補充」や、「知識や技術の発展」「自己実現への欲求」からくるものであることが明らかとなった。 論文掲載：pp52～60 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって行った。 共同執筆者：服部律子，中嶋文子，奥川ゆかり，水信真美子，石川真奈美，鈴木明日香，若山正代

4 青年期女子のライフデザインと親準備性	共著	平成 27 年 3 月	椙山女学園大学看護学研究 7 巻	女性を対象としたライフデザイン教育のあり方を検討するための基礎資料を得ることを目的に、A大学１年生 510 人を対象に青年期女子のライフデザインや親準備性について明らかにした。結果、約６割の学生は将来の職業を決めて１年次から準備をしており、約８割の者が将来結婚を、約７割の者が出産を考えており、その予定平均年齢はそれぞれ、26.3 歳、27.7 歳であった。また離職のタイミングとしては第２子出産時が最多であった。 論文掲載：pp41～49 本人担当部分：研究計画の立案から分析とまとめまでを主になって 行った。 共同執筆者：服部律子，後藤宗理
5 高校生の対人関係への認識と性に関連する悩み（査読付き論文）	共著	平成 30 年 9 月	日本性感染症学会誌 29 巻 1 号	高校生の日常生活での対人関係への認識と性に関連する悩み、及び性交経験者と未経験者の認識の違いを明らかにし、思春期の母性保健の向上に効果的な保健指導・性教育のありかたを検討することを目的に、無記名式自記式質問紙調査を実施し、7,739 名を分析対象とした。その結果、約 7 割が「友達の数は多い」「今幸せ」と認識し、9 割が「今の家族の中で育って良かった」と認識していた。性交経験者は 5.3%であり、未経験者に比べて「今幸せ」「今の家族の中で育って良かった」と回答した者が有意に多い一方で、「一人ぼっちと感じる」と回答した者も有意に多かった。思春期は自立し社会に巣立つ準備期であり、自己肯定感を高めつつ、他人との関係性・コミュニケーション能力を高める教育が必要である。 論文掲載：pp43-52 本人担当部分：研究計画立案、調査票作成、調査の実施、結果の考察を担当した。

5 Estimation of Pregnant Women Possibly Left Behind Tsunami Predicted Areas of Nagoya City A Simulation for Rescue Planning （査読付論文） ：	共著	令和２年３月	Disaster Medicine and Public Health Preparedness (online, 16, Mar, 2020)	機械学習と GIS(Graphic information system)を用いて愛知県名古屋市における東南海地震発生時の津波浸水域の妊婦数を算出し、河川情報なども含めて避難可能な方向性から避難した妊婦の集中する地域を推定し、医療体制整備を提案した。 論文掲載：https://doi.org/10.1017/dmp.2019.164 本人担当部分：機械学習のための分析モデルの検討、考察、論文執筆 共同執筆者：服部律子,宮川祥子,服部兼敏
（その他） -報告書- 1 より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究	共著	平成 28 年 3 月	公益社団法人日本助産師会 平成 27 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書	厚生労働省の補助金を得て産後ケアの実態について調査し、今後のあり方について提言した。 論文掲載：pp59～90 本人担当部分：「有床助産所ならびに病院・診療所で行っている産後ケアならびに産後ケア事業に係わる実地調査」を分担研究し、その結果を主になってまとめた。 共著者:島田真理恵,佐藤香,安達久美子,稲田千晴,服部律子,葛西圭子,相良有紀,市川香織,國分真佐代
2 本学看護学部におけるクリッカー導入の評価	共著	平成 28 年 3 月	椙山女学園大学看護学研究 8 巻	アクティブラーニングの一貫として新たに導入したクリッカーの効果について、学生の質問紙調査とグループインタビューの結果から分析した。その結果クリッカーの使用による「ライブ感」が学生の授業への積極的参加を促している、他学生との類似点や相違点を見出したことが学習への動機づけとなっているという効果が明らかとなった。 論文掲載：pp47～55 本人担当部分：評価の計画、データ収集、分析、まとめの全般を主になって実施した。共著者：服部律子,和田貴子,佐原弘子,竹井留美,又吉忍,後藤宗理

3 健やか親子 21(第 2 次)を推進するための思春期の母性保健の向上を目的とした効果的な保健指導のあり方についての調査研究	共著	平成 29 年 3 月	厚生労働省平成 28 年度子ども・子育て支援推進調査研究事業報告書	厚生労働省の補助金を得て、思春期の母性保健の向上を目的とした効果的な保健指導のあり方について提言し、研究結果に基づき保健指導媒体として「Asolescence わからないことがここにある」を作成した。 本人担当部分：研究計画、調査用紙の作成、４校におけるデータ収集、考察を共に担当し、「性の自己受容(多様性)・gender identiyu に対する保健指導」について文献レビューを行った(pp127-129 に掲載)。保健指導媒体では、「からだの性､こころの性　～これって変？～(p18)を執筆した。 共著者：永光信一郎、安達久美子、石井隆大、内山有子、岡明、岡永真由美、葛西圭子、片岡弥恵子、川名敬、熊谷智子、小林順子、小柳憲司、齋藤伸治、鴇田夏子、永山美千子、二宮啓子、野々山未希子、服部律子、松岡美智子、松嵜くみ子、三牧正和、村上佳津美
-講演-				
1.母と子のメンタルヘルスのために助産師ができること、助産師がすべきこと		平成 28 年 5 月	第 2 回母と子のメンタルヘルスフォーラム(於名古屋市)	青年期の親準備性形成に関する研究成果と、前年度に取り組んだ「より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究」の結果から、そして現代の若者の特徴などから、親となる人々の特性を理解し、妊娠中から子育て期までを包括したケアのあり方にについて概観し発表した。
2.母と子のメンタルヘルスのために助産師ができること、助産師がすべきこと		平成 28 年 10 月	第 57 回日本母性衛生学会総会・学術集会教育講演 （於東京）	平成 27 年度子ども･子育て支援推進調査研究事業「より効果的な妊娠出産包括支援事業としての産後ケアのあり方に関する研究」成果を基に、産後の母親の特徴を解説するとともに、親準備性研究の成果に基づいて妊娠前から子育て期までの継続的で包括した支援の必要性について講演した。

3.子育て支援と社会資源の活用		平成 28 年 11 月	平成 28 年度奈良県アウトリーチ型子育て支援モデル事業子育て支援者研修会	親準備性研究や産後ケアのあり方に関する研究での結果を踏まえ、子育て支援の対象の特性について解説し、子育て支援者に求められる姿勢などについて講演した。
4.妊娠期からの包括支援に向けて～対象を理解する～		平成 30 年 2 月	平成 29 年度葛城地区保健衛生担当課長会保健師部会全体研修会	子ども虐待防止に向け、妊娠期からのリスクの早期発見や予防のための寄り添いや支援のあり方について講演した。
5.子どもたちの生きる力を支える性教育		令和元年 10 月	京都府私立中学高等学校教育研究大会	厚生労働省平成 28 年度子ども･子育て支援推進調査研究事業の調査で明らかになった結果、近年の若者の特性などを踏まえ、エンパワーメントやライフスキル教育の視点から中高生への性教育のあり方について講演した。
―学会発表― 1 青年期の親準備性とその関連要因		平成 22 年 11 月	第 51 回日本母性衛生学会学術集会(於金沢市)	青年期の親準備性とそれに関連する要因を明らかにすることを目的に青年期の男女 867 名を対象に質問紙調査を実施し、519 名から回答を得た。その結果、青年期の親準備性には、基本的信頼や自律性などアイデンティティ確立の基礎となる部分と、親との信頼感、家庭への満足度、子どもへの関心や好感情、子どもと接した経験が影響していることが明らかとなった。 本人担当部分：研究全体に関わり、中心になって研究を実施した。共同発表者：服部律子，後藤宗理，石川真奈美，西富代

2 思春期ピアカウンセラー養成の現状と課題		平成 25 年 8 月	第 32 回日本思春期学会学術集会 （於和歌山市）	日本ピアカウンセリング・ピアエデュケーション研究会認定プログラムを用いた過去 6 年間の思春期ピアカウンセラー養成数の推移や受講者の受講後の感想等から実態を分析した。その結果、若者気質の変化により友人に相談できなくなっていることなどから思春期ピアカウンセラーへのニーズは高まっているものの、同じ若者気質の変化により自らが思春期ピアカウンセラーになろうという若者は減少しているという課題が存在していることが明らかとなった。本人担当部分：研究全体に関わり、特にデータの分析とまとめを主になって行った。 共同発表者：服部律子，高村寿子，石田登喜子，渡辺純一
3 助産所・病院・診療所で行われている産後ケアの実態		平成 28 年 10 月	第 75 回日本公衆衛生学会総会 （於大阪市）	わが国における産後ケアのあり方を検討するための基礎資料として、助産所、病院、診療所計 9 施設において、インタビュー調査を行った。結果、母親が育児技術を獲得し、自信をもって家庭生活へのスタートが切れるよう支援することが求められていた。また、産後ケア施設を提供するためには経済面、感染対策と癒しの空間の確保など施設面での課題があることが明らかとなった。 共同発表者：市川香織，服部律子，國分真佐代，稲田千晴，相良有紀，島田真理恵

4 Baseline survey with the purpose of developing adolescent peer activities related to reconstruction support in the wake of the Great East Japan Earthquake: For developing peer activities designed to support the ability to lead active lives in affected areas		平成29年8月	The 21st International Epidemiological Association（大宮市）	南相馬市における中学生へのピアサポートの実施に向けた中学生対象のベースライン調査の結果を報告した。将来の夢をもっていない群はもっている群に比べて自尊感情が低く、自分自身の心身への関心が低いことが明らかとなり、自尊感情を高める取り組みであるピアサポート活動の必要性が示唆された。 共同研究者：Hattori R, Takamura H, Nakamura
5 Prevalence and prediction of suicide ideation in Japanese adolescents: result from a population-based questionnaire survey		平成29年1月	American Academy of Child and Adolescent Psychiatry (Washington DC, USA)	全国の各地方に在住する中高生を対象に心身の健康状態について調査した結果から、希死念慮を抱く割合と自殺率を中心に精神健康状態に焦点をあてて報告した。 共同研究者:Nagamitsu S, Mimaki M, Koyanagi K, Tokita N, Kobayashi Y, Hattori R, Yamashita Y, Yamagata Z, Igarashi T
5 健やか親子21（第2次）：思春期の保健課題の克服―中高生２万人のアンケート調査から -その他-		平成29年8月	日本思春期学会第36回学術集会	全国の各地方に在住する中高生を対象に健やか親子21(第2次)に盛り込まれている思春期の保健課題を中心に調査した結果の概要を報告した。 共同研究者：永光信一郎、三牧正和、服部律子、小柳憲司、鴇田夏子、小林順子、五十嵐隆

1 外来通院糖尿病患者の治療行動に影響を及ぼす要因	共著	平成 25 年 11 月	へるす出版 月刊「臨床看護」	外来で通院治療を受けている、研究への協力に同意の得られた糖尿病患者 19 人に対して半構造化面接を実施し、保健行動理論に基づいて質的に分析した。結果、治療行動には病気の悪化への危機感や治療行動による効果の自覚、知識が影響していることが明らかとなった。また、糖尿病患者は治療行動の必要性の認識と同時に逃避欲求も抱いて逃避するための理由を探していることが明らかとなった。今後は、自己効力感にも着目し、今回明らかとなった要因との関連性を明らかにする必要がある。
2 新・青年心理学ハンドブック	共著	平成 26 年 1 月	福村出版	青年心理学に関する事項を広く解説したハンドブックである。この中で、トピック「青年期の親準備性」を担当した。 B5 変形(27cm)版全 714 頁 本人担当部分：総頁数 714 頁中 1 頁(Topic32)を担当。 後藤宗理,二宮克美,高木秀明,大野久,白井利明,平石賢二,佐藤有耕,若松養亮編著,ほか 114 名著。Topic32 服部律子。
3 周産期のメンタルヘルスの動向と助産師に求められるかかわり	単著	平成 29 年 4 月	医学書院 「助産雑誌」	周産期のメンタルヘルスケアについて、施策の動向、筆者が取り組んできた今までの研究から明らかとなった親になる人々の特性、若者研究の成果などを踏まえて、対象の理解を中心に助産師に求められる関わりについて概説した。 論文掲載：pp262～267（特集　「周産期のメンタルヘルスのために助産師ができること、すべきこと」の中の１編）

文部科学省科学研究費およびその他の研究助成 1 青年期女子の親準備性とキャリアデザイン、ライフデザインの関連性		平成 25 年 6 月	椙山女学園大学学園研究費助成(B)	妊娠に伴い身体的変化を来す女性を対象とした、妊孕性や家庭形性、妊娠・出産・子育てと仕事の両立なども含めた女性ならではのライフデザイン、キャリアデザインへの支援のあり方を検討するため、青年期女子に対する女子大学生 510 人を対象に、親準備性と現在描いているライフデザインについて実態について研究した。

［注］

1 最近１０年間の教育活動、研究活動について作成すること。

2「教育活動」については各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については就任年月日順に記入すること。

3「研究活動」については、下記の点に留意すること。

① 著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。

② 著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。

③ 共著（論文）の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。

④ 最近１０年間に著書･論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。

⑤ 芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

教育研究業績書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名　　三浦　康代

研究分野	研究内容のキーワード
看護学、健康・スポーツ科学	地域看護学、公衆衛生看護学、在宅看護、健康教育

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1. 学内演習で男子学生に妊婦体験指導	平成22年7月	男子学生に半日間、腹部におもりをいれた妊婦体験をさせ、妊娠中の心身の状況を理解させることができた。
3. 丹波マンガン記念館の見学	平成26年10月	故日吉町保健婦吉田氏が結核のマッピングをしたことから鉱山で働く人のじん肺をみつけるまでの実話を聴き、マンガン鉱山の坑道を見学することを通して、労働や生活から地域の人々の健康問題や産業保健の課題について考えることができた。
4. 乳幼児健診の演習で実際の乳幼児の身体計測、発達検査を実施	平成28年5月	乳幼児健診の演習で実際の 4 か月児、1 歳 6 か月児、3 歳児の母子に協力していただき、65 名を 3 つのグループに分けて身体計測、発達検査の演習を実施し、3 人を比較しやすく、育児の悩み等も聞くことができ、発達には個人差が大きいことを学ぶこともできた。
2　作成した教科書，教材 1. 乳児健診、「小児保健」「健康教育論」「地域看護活動論」「公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）」の授業で 4 人分の本物の乳歯を貼ったポスターを展示	平成3年1月～令和1年10月	自分の子ども 4 人分の本物の乳歯合計 80 本を貼ったポスターを作成展示することで、保護者や学生に齲蝕予防について強いインパクトで啓発することができた。
2.「小児保健」でパネルシアター用のパネル「うんちの話」	平成23年1月	食物が消化器の中で便に変化する状態を立体的に作成
3.「子どもの保健」「公衆衛生看護活動論」「疫学」「公衆衛生看護学概論」で穴埋め式の配付資料を作成し、毎講義ごとに前回講義内容についての確認テストを実施	平成23年4月～平成27年11月	穴埋めをするためには教科書に目を通したり、毎回の講義をきちんと聴く必要がある。また、穴埋め部は重要ポイントということが学生にわかる。
4.「公衆衛生看護活動論」で地区把握の資料作成時における情報収集項目についてパワポで画面を示しながらスマートフォンで検索体験	平成26年4月～平成27年8月	地区把握の情報収集の際に、インターネットを使用した場合の検索先を具体的にパワポで示し、スマートフォンで検索させた結果、情報を把握しやすくなった。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1. 授業アンケート		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1. 奈良県健康生きがいづくりアドバイザー協議会主催「いきいき塾」で講演「おいしい話」「減塩食のメニューづくり」	平成26年8月～平成27年8月	長続きする減塩のコツについて具体的に指導
2. 橿原市みみなし地域学級にて講義「健康づくりの話」「栄養の話」	平成24年3月～平成27年3月	中高齢者に「そのまんま料理カード」を使用してグループで 1 日のメニューづくりをし、総カロリーと塩分量を算出し、減塩への動機づけを行った。
3、高校の校内進路ガイダンスにて血圧測定の体験と減塩のメニューづくりの授業	平成27年3月	高校生に「そのまんま料理カード」を利用した減塩食メニューづくりを実施し、若年から薄味に慣れるよう促し、ふだんの食事の塩分量に興味をもってもらった。

4.大学オープンキャンパスにおいて参加者（高校生や保護者、高校の進路指導担当者）にリラクセーション体験講座実施	平成24年8月 ～ 平成26年8月	参加者にリラクセーション体験をしていただいたところ、眠ってしまう方もおられ、リラックスできた様子
5.奈良県健康生きがい協議会主催認知症予防講座にて年2回講演「認知症予防のための食生活」	平成26年8月 ～ 平成28年8月	認知症予防のための食生活についての最新情報の提供と、楽しく継続できる方法について考えていただいた。
6.明治国際医療大学看護学部リカレント学習講座　看護研究の基礎において講演「文献検索の実際」	平成 25 年～現在	現場の看護師を対象とした研修において、医中誌等の文献検索をしながら、研究の枠組みについても考えていただいた。
7.南丹市地域連携事業として「ロコモティブシンドロームの予防と対策」のうち「食生活」について出前講座年5回	平成27年8月	日吉、美山地区に出向き、地域の高齢者を対象にロコモティブシンドロームの予防と対策について指導。
8.広陵町、奈良市、下北山村等の各自治会にて講演「認知症予防のための食生活」	平成27年8月	認知症予防のための食生活について、奈良県下の各地域に出向いて認知症予防ゲームもまじえて講演
9.奈良県共済組合主催「認知症予防講座」にて講演「認知症予防のための食生活」	平成28年3月	奈良県職員とその家族を対象に認知症予防のための楽しく継続できる食生活について提案した。
10.一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会主催「健康生きがいづくりアドバイザー養成講座」にて講義「健康づくりのための食生活」	平成28年3月	アドバイザーになる予定者を対象に、高齢社会の課題の動向から、自分の健康は食生活の改善からという動機づけをした。
11.NPO法人認知症サポートネット主催「頭の体操」にて講演（於尼崎市立福祉センター和楽園）	平成28年8月	地域の高齢者20名を対象になつかしい虫食いソングを15曲準備し、グループごとに歌詞の穴埋めがおわったら黒板に記入し、みんなでキーボードの生演奏で歌う。
12.奈良県共済組合主催「認知症予防講座」にて講演「認知症予防のための食生活」（於橿原公苑）	平成28年8月	前回好評だったため、南部でも開催。奈良県職員とその家族を対象に認知症予防のための楽しく継続できる食生活について提案した。
13.一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会主催「健康生きがいづくりアドバイザー養成講座」にて講義「中高年と健康（食生活）」（於奈良女子大）	平成29年7月	アドバイザーになる予定者を対象に、認知症予防やロコモティブシンドローム、サルコペニア予防のための食生活のポイントについて動機づけをした。
14.一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会主催「健康生きがいづくりアドバイザー養成講座」にて講義「中高年と健康（健康寿命と生活習慣病）」	平成29年7月	アドバイザーになる予定者を対象に、生活習慣病の基礎知識と健康寿命の延伸のための生活習慣の見直しについての動機づけをした。
15. 一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会主催「百歳塾」（於大和高田市民交流センター）	平成29年9月 12月 平成30年9月12月	大和高田市民を対象に、健康寿命の延伸を目的として百歳塾を開始し、「脳トレゲー」「いきいき百歳体操（徳島版）」「マイノートを書いてみよう」「誰でもできるラフターヨガ」を指導した。
16. 一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会主催「笑って学ぶ頭と体のほっこり講座」（於河合町まほろばホール内コミュニティーカフェつどい）	平成29年10月	河合町民を対象に、認知症予防を目的としてコグニサイズと虫食いソングを指導した。
17.一般社団法人奈良県健康生きがいづくり協議会主催「百歳塾」	平成30年7月 ～平成31年12月	大和高田市市民交流センターにて、一般市民を対象に3回月に 1 回の百歳塾開催した。（百歳体操、ラフターヨガ、認知症予防等）
5　その他		
1.全国保健師教育機関協議会主催秋季教員研修第2分科会において情報提供 「看護師教育課程における地域看護学教育の取り組み」	平成28年10月	天理医療大学での看護師教育課程における地域看護学教育の取り組みは、保健・医療・福祉の包括的視点で看護実践できることを目標においており、画期的な科目立てとなっている。
職務上の実績に関する事項		

事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1.看護師	昭和49年4月	免許証番号 251658 号取得
2.保健師	平成2年6月	免許証番号 66248 号取得
3.産業保健指導者	平成2年11月	中央労働災害防止協会認定
4.第1種衛生管理者	平成2年12月	奈良労働基準局免許証番号第 29000022271 号取得
5.健康生きがいづくりアドバイザー	平成5年9月	一般財団法人健康生きがい開発財団認定
6.心理相談員	平成5年3月	中央労働災害防止協会認定 S293－0318 号
7.いのちの電話相談員	平成7年5月	社会福祉法人奈良いのちの電話協会任用書第 668 号
8.介護支援専門員	平成12年3月	奈良県第 1497 号取得
9.学士（教養）の学位	平成14年3月	放送大学学位記　第 19941 号取得
10.地球温暖化防止活動推進員	平成15年4月	奈良県生活環境部認定　奈良県知事委嘱
11.学士（看護学）の学位	平成18年2月	独立行政法人大学評価・学位授与機構第 17551 号取得
12.健康運動実践指導者	平成18年9月	財団法人健康・体力づくり事業財団台帳登録番号第 40662014 号取得
13.保育士	平成22年1月	保育士証登録番号　奈良県-014151 取得
14.修士（学術）の学位	平成25年3月	放送大学大学院学位記　第 003590 号取得
15.リラクセーション看護講座修了認定	平成26年3月	リラクセーション看護講座（レベル 1,2,3）認定証第 034 号取得
16.ラフターヨガリーダー	平成30年9月	ラフターヨガ養成講座
17.ラフターヨガアンバサダー	令和元年7月	ラフターヨガインターナショナルユニバーシティー
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1.大和高田市地域新エネルギー・省エネルギービジョン策定委員会委員	平成20年7月 ~平成23年6月	大和高田市内の事業所等における省エネ対策について検討し、太陽光発電の推進状況について調査
2.大和高田市男女共同参画審議会委員	平成22年4月 ~現在	大和高田市の行政や事業所を中心とした男女共同参画の進捗状況を審議、進言している。
3.東日本大震災支援活動	平成23年3月 ~平成23年4月	東日本大震災後、岩手県県央保健所の要請を受け保健師のボランティアとして県央保健所スタッフとともに山田町の避難所や家庭を巡回
4.橿原市情報公開・個人情報保護制度運営審議会委員	平成28年7月 ~現在	橿原市の情報公開・個人情報保護について審議し、中立公平なパブリックコメントを進言している。
4　その他 奈良県看護功労者知事表彰受賞	令和2年5月	

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				

1.「認知症予防に役立つ脳エクササイズのしおり」 社会福祉法人社会福祉研究開発基金の「認知症予防のための脳エクササイズ実施事業」助成金による	共著	平成27年10月	ＮＰＯ法人認知症サポートネット	福田章　三浦康代　上田綾子　上田桂子　黒崎輝美　小池玲子　小西忠勝　田中旬子　土林由美子　寺田郁子　東田昌子　平田和美　松原緋紗子　村上誠二　森山宣子　山本真由美　竹村健一 地域でいつでのどこでもだれでもが認知症予防のための音楽や体操やゲームに取り組めるように編集。第1章：脳はつらつゲーム　第2章：身体を使って脳を元気に　第3章：手指体操で脳はイキイキ　第4章：音楽で脳が若返る（1）1字抜き歌（2）早口言葉（3）棒と三角体操（4）交互唱・同時唱（5）虫喰いソング（6）音の聴き分けゲーム（7）リズムウォーキング（8）リズムパーカッション　第5章：懐かしい思い出で脳が元気に～回想法～　第6章：お口の体操　第7章：何でもアートのうち、第4章担当
2.八幡校区敬老会(尚齒會)「100 回の歩みと人々の暮らし」	監修 共著	平成30年7月	八幡地区連合自治会（姫路市地域資源保存継承助成事業による）	三浦康代　伊賀﨑香木　八幡校区敬老会100回記念誌編集委員会
3.2019年小児看護学・健康支援と社会福祉制度　問題集	共著	令和2年3月	株式会社ピラールプレス	守本とも子　山口求　三浦康代　芝田ゆかり　吉水清　佐藤郁代　斎藤英夫　松井典子　井上昌子 最新の国家試験問題を取り入れて解説している国家試験対策用問題集
（学術論文）				
1.「看護学生が描く卒業前のキャリアデザイン」（査読付）	単著	平成24年3月	白鳳女子短期大学紀要第6巻25－34	卒業前の看護系女子短大生を対象にキャリアマップの記載を含む質問紙調査を実施したところ、対象者は多様なキャリアデザインを描いていた。就職しない者は皆無で、7割強が仕事継続型、2割が中断再開型を予定し、全体の75%の者が最″終の退職予定年齢を60歳以上としていた。看護職が仕事を継続するために必要としている支援として育児支援や再雇用教育の充実、将来展望を計画的に描くというキャリアデザイン教育の充実が求められている。
2.「薬害HIV感染被害者の二次感染の予防状況と性生活満足度およびそれらの関連要因の検討」～「2010年HIV・HCV重複感染血友病患者の長期療養に関する患者参加型研究」による「生活実態と新たな問題に関する調査」データの分析を通じて～（査読付）（修士論文）	単著	平成25年3月	放送大学大学院修士論文集	2010年にはばたき福祉事業団が薬害HIV感染被害者を対象に実施した質問紙調査の二次分析を行った結果、薬害HIV感染被害者では、「セーファーセックス群」は、「アンセーファーセックス群」や「性交渉なし群」より、有意に性生活満足度が高く、精神的状況を良好に保っていた。HIV感染症であるために今も性生活を抑えている者や、挙児に関する情報を希望する者が多いことより、性生活や挙児についての情報提供をはじめとするセクシュアル支援のアプローチが必要であると考えられた。
3.「子育て支援ボランティア活動の実態と世代間交流について」（査読付）	共著	平成26年7月	日本健康医学会雑誌23巻2号136－141(ISSN 1343-0025)	小石真子　佐藤裕見子　三浦康代 子育てボランティアは支援を提供するだけでなく、自分のためのサポート提供があった。また、地域で子ども世代・親世代・祖母世代の人々をつなぐ活動であった。

4.「釜ヶ崎における高齢者特別清掃事業就労者及びシェルター利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査の報告」原著（査読付）	共著	平成27年1月	社会医学研究32巻1号 39-47(ISSN 0910-9919)	三浦康代　井戸 武實　田中義則　上田裕子　山本　繁　高鳥毛敏雄 原著である。釜ヶ崎の結核罹患率を効率よく減少させる手立てとして、シェルター利用者への結核健診受診の義務化、特掃登録更新時における結核健診の強化、HEPAフィルター付循環式の空調設備完備のシェルターの建設、地域の人が集まる施設内における禁煙・分煙も含めた換気の重要性についての啓発が求められた。
5.「高齢者に対するロコモティブシンドローム予防のための取り組みー介護予防・生きがい支援通所事業における健康教育を実施してー」（査読付）	共著	平成28年6月	第46回（平成27年度）日本看護学会論文集 ヘルスプロモーション 2016年　136－139 (ISSN 1347-8184)	小石真子　佐藤裕見子　三浦康代　村上久惠　高田美子　河原照子 地域の高齢者にロコモティブシンドロームの予防のための運動や栄養の講義や実践をしたところ、理解できた方が多かった。今後、生きがい活動支援通所事業の中での継続をすることにより、ロコモの予防につながるだろう。
6.「女子大学生のアイメイクの実態～アイメイクの使用状況と症状出現状況について～」（査読付）	共著	平成29年3月	明治国際医療大学誌第 第16号 27-37	三浦康代　片岡美穂　揚本裕貴 アイメイクは、女子大学生に心理的にポジティブな影響を与えていることが多く、女子大学生にとって日常的に欠かせないものとなっていた。アイメイクを続けていくには、正しいアイメイク法を見直し、症状が現れた時には早期の眼科受診をして悪化を防止することや、安全な化粧品・化粧方法を選択するという認識を持つことが必要であるといえる。
7.「認知症予防地域ボランティアが関わった認知症予防講座受講者の運動と食生活習慣についての行動変容」（査読付）	共著	平成29年5月	日本認知症予防学会誌 Vol.6 No.1, 2017 39-44(ISSN 2187-3798)	三浦康代　福田章　上田裕子 認知症予防地域ボランティアが関わった認知症予防講座受講後の運動習慣と食生活習慣についての行動変容は，「変化なし」が最もおおかった．ついで，食生活習慣については，「改善」が「悪化」より多く，運動習慣については「悪化」が「改善」より多かった．受講後に新たな生活習慣に取りくもうとしていた者の割合は、食生活習慣については2割，運動習慣においては1割であった．今後，地域において，認知症予防地域ボランティアが活動の中心となって，特に運動習慣に関する継続した取り組みが望ましいと考えられた．
8.「過疎地域における生きがい支援通所事業についての一考察」（査読付）	共著	平成29年6月	大阪青山大学看護学ジャーナル2017,Vol.1, 55-58	小石真子　佐藤裕見子　三浦康代　村上久惠　河原照子　松岡みどり　高田美子 過疎地域の生きがい支援通所事業に従事する援助員に対して活動実態と互助実態を把握した結果、過疎地域では。地域の課題・地域福祉について住民に認識させ、主体的に行動させることや、地域に拠点をつくり民生委員やボランティアおよび近隣とのつながりを綿密につくることが必要であり、専門的な研修やきめ細かい支援体制が求められていることが示唆された。

9.「中高年者における身長短縮と肥満度の関連についての検討」（査読付）	共著	平成30年1月	社会医学研究35巻1号 129-135 (ISSN 0910-9919)	三浦康代　志野泰子 身長短縮は呼吸機能や消化器機能の低下および，腰痛等の諸症状を起こし，QOL の低下につながることに着目し、50 歳以上の健常な男女972 名を対象に，身長短縮割合と肥満度との関係を検討した結果，女性では肥満群が正常群より有意に身長短縮割合が大きいことが明らかになり，肥満は身長短縮の重要な因子となることが示唆された。身長短縮を予防改善し，予測するための最も簡便にできる方法として，肥満度測定は意義があると考えられた。
10.A Report on 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference 2019 （Ⅰ）～Association among the factors in conjunction with Height Loss of females by the literature review～ 2019 第 22 回東アジア看護学研究者フォーラムの報告（Ⅰ）～文献検討による女性の身長短縮に関連する因子および因子間の関連～ （査読付）	共著	令和元年 9 月	奈良学園大学紀要第 11 集　211－215 （ISSN　2188 - 918X）	三浦康代　芝田ゆかり　吉水清　井上葉子 2019 第 22 回東アジア看護学研究者フォーラムの報告として、女性の加齢による身長短縮に関する因子、及び因子間の関連について検討し、加齢による身長短縮を予防するための基礎資料とするために、文献レビューの結果、女性の加齢による身長短縮は「脊柱変形（椎体骨折含む）」「低骨密度」「筋量減少」「肥満」の 4 因子と関連することが明らかになった。これらの要因を予防することは、加齢による身長短縮を予防するための基礎資料となり得ることが示唆された。今後は、同一人物についての骨密度・筋量・肥満度・体脂肪率・運動状況・身長短縮状況について検討する必要があることを述べた。
11. A Report on 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference 2019 （Ⅱ）―Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease― 2019 第 22 回東アジア看護学研究者フォーラムの報告（Ⅱ）―炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する文献検討― （査読付）	共著	令和元年 9 月	奈良学園大学紀要第 11 集　207－210 （ISSN　2188 - 918X）	井上葉子　芝田ゆかり　吉水清　三浦康代 2019 第 22 回東アジア看護学研究者フォーラムの報告として、炎症性腸炎疾患患者の食生活に焦点を当てたライフスキルの研究動向をコンテンツ分析を通じて分類することで、ライフスキルに関連する食習慣の難しさと問題を明らかにし、サポートの方法を検討する基本データを提案したことを述べた。
12.「健診項目に身長短縮の追加を」	単著	令和 2 年 3 月	大阪公衆衛生第 91 号 20－22	身長短縮割合を算出し、認識することは、より早期に骨密度や筋量、標準体重の維持のための運動や食生活習慣の見直しにつながり、特に女性の健康寿命の延伸につながる。そのため、特定健診の問診項目に「以前の最高の身長」を追加することを提案する。
（その他）				
報告書				

1.「はーとふる」 日本学術振興会科学研究費補助金研究事業（課題番号22614010）「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究」平成22年度研究報告書	共著	平成23年3月	研究代表者　逢坂隆子	逢坂隆子　高鳥毛敏雄　嵯峨嘉子　中田信昭　福原宏幸　黒田研二　加美嘉文　鍛冶葉子　小椋芳子　山本繁　井戸武實　大宮陽子　三浦康代　北尾千沙 （P63～P67,P78～P83） あいりん地域で野宿者や高齢要介護者を支援する16民間支援団体に対する聞き取り調査を実施。うち野宿者ネットワークと陽だまりⅡについて担当。① 活動の理念　②活動の対象　③活動の内容　④活動従事者　⑤その支援が健康づくりや命や健康を守ることにつながる可能性　⑥活動が仲間づくりにつながる可能性　⑦活動の成功事例と失敗事例についてまとめた。
2.「はーとふるⅡ」 日本学術振興会科学研究費補助金研究事業（課題番号22614010）「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究」平成22・23・24年度研究報告書	共著	平成25年3月	研究代表者　逢坂隆子	逢坂隆子　高鳥毛敏雄　嵯峨嘉子　中田信昭　黒田研二　加美嘉文　福原宏幸　鍛冶葉子　三浦康代　小椋芳子　山本繁　井戸武實　大宮陽子　小林由美子　難波邦子　高田佐土子　梅田道子 （P34～P49） 第1部：あいりん地域で野宿者や高齢要介護者を支援する民間支援団体やボランティア計6団体に対する聞き取り調査の結果をまとめたものである。うち、こどもの里と西成市民館についてインタビューを担当しまとめた。支援団体が支援した成功例からの聞き取りをもとにして、都市貧困高齢者に対する住居と生活、生きがいの支援に関する検討を行った報告である。
学会発表				
1.「卒業後の将来展望－看護短大生の場合－」	共著	平成22年11月	第2回日本看護学生キャリア教育学会抄録集 於神戸	竹元惠子　三浦康代　坂上由美　秦るみ子 卒業後の将来展望につて、短大看護科の学生と4年制大学一般学生を比較したところ、短大看護科の学生のほうが4年制大学一般学生より有意に子育て後の再就職を予定する者が多かった。このことより、看護学生は看護職免許を生かした将来展望をもっていると考えられる。
2.「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究（その1）ー釜ヶ崎における支援団体の聞き取り調査から」	共著	平成23年1月	第52回日本社会医学会講演集　社会医学研究特別号 102 - 103(ISSN 0910-9919) 於富山	北尾千沙　逢坂隆子　高鳥毛敏雄　黒田研二　鍛冶葉子　井戸武實　三浦康代 日雇い労働者の街・釜ヶ崎では、野宿を余儀なくされる者や生活保護受給者が急増している。このような状況下で活動している16の民間支援団体に聞き取りを行ない、その活動内容から、釜ヶ崎における労働者や生活保護受給者の課題について考察した。「健康、安全対策」は人間の基本的欲求であり、支援を通じてその他支援団体、ボランティアとの相互のやりとりにつながる。このつながりを維持するのが重要である。
3.「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究（その2）ー釜ヶ崎における19支援団体の聞き取り調査から」	共著	平成23年7月	第52回日本社会医学会講演集　社会医学研究特別号 104 - 105(ISSN 0910-9919) 於富山	大宮陽子　松田光恵　山本繁　井戸武實　逢坂隆子　高鳥毛敏雄　黒田研二　鍛冶葉子　嵯峨嘉子　村岡茉莉子　北尾千沙　清水多實子　三浦康代 1960年代は日雇い労働者の労働問題、1970年代は失業問題が大きくなり暴動が起こり、一方

				で野宿者への襲撃など新たな問題への対応が必要になった。1990 年代は高齢者問題と不況による就労者支援問題が混在し高齢者特別清掃事業などの制度ができた。そして釜ヶ崎のまちづくりの視点が入り、2000 年からは健康、子ども、文化も視点に入れた、全人的支援と人間性回復の取り組みが大きくなり、釜ヶ崎が大きく変貌しようとしている姿が見える。
4.「釜ヶ崎における支援団体の聞き取り調査」	共著	平成 23 年 10 月	日本公衆衛生雑誌　第 70 回日本公衆衛生学会総会抄録 58 巻 10 号 P349（ISSN 0546-1766）於秋田	北尾千沙　逢坂隆子　高鳥毛敏雄　黒田研二　鍛冶葉子　井戸武實　三浦康代 釜ヶ崎で聞き取り調査を行った３つのサポーティブハウスの主たる支援内容は日常生活支援、健康支援、福祉支援、地域生活支援であった。サポーティブハウスでは、生活支援を通してスタッフとの信頼関係を構築し、行動の範囲を広げ地域で落ち着いて安心した生活を維持するための支援を提供していた。
5.「釜ケ崎の支援団体から紹介された元野宿者への聞き取り調査 ～社会的包摂の支援とは～」 日本学術振興会科研事業「ホームレス者の健康支援を通じた社会的包摂の推進に関する研究」（課題番号 22624010・研究代表者・逢坂隆子）の一部として実施	共著	平成 24 年 12 月	日本公衆衛生雑誌　第 71 回日本公衆衛生学会総会抄録 59 巻 10 号 P410（ISSN 0546-1766）於山口	三浦康代　逢坂隆子　高鳥毛敏雄　黒田研二　鍛冶葉子　井戸武實 釜ヶ崎で活動している 7 民間支援団体より「うまくいった事例」として紹介された 13 名の元野宿者に聞き取り調査を実施した。現在の安全で安心できる生活に至った要因として、「定住と金銭管理」3 名、「生きがいと居場所づくり」7 名「心を動かす言動」3 名で、釜ヶ崎で安心・安全に生活している被支援者は、支援団体との信頼関係のもとに、そのセルフケア力に応じた、多様で日常的、包摂的な支援を受け、人間性を取り戻していた。
6.「ピアエジュケーションとしての看護学生の HIV 予防行動への意識変容」	共著	平成 25 年 11 月	日本公衆衛生雑誌　第 72 回日本公衆衛生学会総会抄録 60 巻 10 号 P553（ISSN 0546-1766）於三重	佐藤裕見子　三浦康代　小石真子　細野幸代 HIV/エイズ普及啓発活動においてピアエジュケーションを体験した学生と体験しなかった学生の 2 群間で、HIV 予防行動への意識変化を比較した結果、知識・行動ともに介入群のほうが有意に改善していたという結果を得、ピアエジュケーションは有効であると考えられた。
7.「釜ヶ崎における高齢者特別清掃事業就労者及びシェルター利用者を対象とした結核に関する聞き取り調査の報告」	共著	平成 26 年 7 月	社会医学研究第 55 回日本社会医学会総会講演集 171 - 172（ISSN 0910-9919） 於名古屋	三浦康代　井戸 武實　田中義則　上田裕子　山本　繁　高鳥毛敏雄 釜ヶ崎の結核罹患率を効率よく減少させる手立てとして、シェルター利用者への結核健診受診の義務化、特掃登録更新時における結核健診の強化、HEPA フィルター付循環式の空調設備完備のシェルターの建設、地域の人が集まる施設内における禁煙・分煙も含めた換気の重要性についての啓発が求められた。
8.「認知症予防啓発劇の効果の分析」	共著	平成 26 年 9 月	第 4 回日本認知症予防学会学術集会プログラム抄録　127 - 128（ISSN 2187-3798） 於東京	三浦康代　福田章 素人の劇団が 2 府県 7 会場で公演した 45 分間の劇「ぼけたらあかん」の観劇者を対象に、質問紙調査を行った結果、回収数 228 で、認知症予防啓発劇は観劇者の認知症予防行動の動機づけと、また認知症を地域で支援するという意識の向上に有効であった。

9.「認知症予防啓発劇の効果の分析～観劇者と演劇者の比較～」	単著	平成 26 年 11 月	日本公衆衛生雑誌　第 73 回日本公衆衛生学会総会抄録集 61 巻 10 号 P453（ISSN 0546-1766）於宇都宮	三浦康代 素人の劇団が 2 府県 7 会場で公演した 45 分間の劇「ぼけたらあかん」の観劇者 228 名と演劇者 7 名を対象に、質問紙調査を行った結果、演劇者は観劇者より、認知症についてよく知っており、「人との交流」を希望していた。認知症予防啓発劇の演劇と観劇はともに地域での認知症予防や認知症支援に有効であった。
10.「釜ヶ崎で暮らす現野宿者および元野宿者の現在歯数の状況」	単著	平成 27 年 7 月	社会医学研究第 56 回日本社会医学会総会講演集 P119（ISSN 0910-9919） 於久留米大学	三浦康代 釜ヶ崎の現野宿者および元野宿者計 38 名の平均現在歯数は 40 歳代 26.0 本、50 歳代 16.6 本、60 歳代 8.4 本、70～80 歳 4.8 本であり、全国男性平均より 50 歳代で全国の 6 割、60 歳代で 4 割、70 歳代で 3 割の本数しかなく、入れ歯を装着している者も皆無であったことより、対象者の口腔機能の低下が著しいと推測された。今後、専門家による口腔指導の必要性が示唆された。
11.「『認知症予防に熱心な町づくり』をめざした『認知症予防地域ボランティア養成講座』受講後のボランティア認定状況」	共著	平成 27 年 9 月	第 5 回日本認知症予防学会学術集会プログラム抄録集 P149（ISSN 2187-3798） 於神戸国際会議場	三浦康代　福田章 認知症予防に熱心な街づくりをめざした大阪市住吉区における「認知症予防地域ボランティア養成講座」受講後のボランティア希望や認定状況を分析した結果、受講後にボランティアを希望した群は地元住民であり、「認知症予防ボランティア/認知症や認知症予防に関心がある」「頼まれた」というきっかけが多かった。地域で目的を共有できる人材を育成するには、広報段階から区民の主体性を活かし、参加の輪を広げることが有効である。
12.「高齢者に対するロコモティブシンドローム予防のための取り組みー介護予防・生きがい支援通所事業における健康教育を実施してー」	共著	平成 27 年 11 月	第 46 回日本看護学会―ヘルスプロモーション―学術集会　抄録集 (2015)P274 (ISSN 1347-8184) 於富山	小石真子　佐藤裕見子　三浦康代　村上久惠　高田美子　河原照子 地域の高齢者にロコモティブシンドロームの予防のための運動や栄養の講義や実践をしたところ、理解できた方が多かった。今後、生きがい活動支援通所事業の中での継続をすることにより、ロコモの予防につながるだろう。
13.「認知症予防地域ボランティアが関わった認知症予防講座受講者の受講後の行動変容」	共著	平成 28 年 9 月	第 6 回日本認知症予防学会学術集会プログラム抄録集　P131（ISSN 2187-3798） 於東北大学	三浦康代　福田章　上田裕子 NPO 法人と住吉区社協の協働により新たにグループとして活動することになった認知症予防地域ボランティアがお手伝いした「認知症予防講座」の受講者の受講前後における各種生活習慣の行動変容について検討した結果、運動習慣を変容させることは困難であるが、食生活習慣・趣味や生きがいづくり・地域での活動・ストレス等については、受講がきっかけとなって改善する余地があった。今後、地域においてボランティアが活動の中心となって、参加体験型の、特に運動習慣に関する継続した取り組みが望ましいと考えられた。

14. 「地域住民の睡眠障害と生活リズム健康法の関連」	共著	平成 28 年 10 月	日本公衆衛生雑誌　第 75 回日本公衆衛生学会総会抄録集 63 巻 10 号 P384（ISSN 0546-1766）於大阪グランフロント	佐藤裕見子　三浦康代　小石真子　村上久恵 特定健診受診者から睡眠障害の疑いのある者をスクリーニングして快眠講座を実施し、基礎講座受講者とリラクセーション受講者を講座前後において質問紙調査とアクティブグラフを実施した結果、睡眠障害の改善には、生活リズム健康法と組み合わせたリラクセーションは有効であることが示唆された。
15. 「防災に対する住民の意識と地域づくり～総合防災訓練の参加者の調査結果～」	共著	平成 28 年 10 月	日本公衆衛生雑誌　第 75 回日本公衆衛生学会総会抄録集 63 巻 10 号 P572（ISSN 0546-1766）於大阪グランフロント	小石真子　佐藤裕見子　三浦康代　村上久恵 防災訓練参加者の防災意識や家庭での防災対策の実態を把握した結果、災害時の備えは意識しているが、実行に移していないことがわかった。そのため適宜確認をしながら行動につながる支援が必要である。
「看護師教育課程における地域看護学教育の取り組み」	共著	平成 28 年 10 月	平成 28 年度第 5 回全国保健師教育協議会秋季研修会 P83－P90（於大阪大学中之島センター）	三浦康代　志野泰子 保健師コースの設置されていないＴ大学での看護師教育課程における地域看護学教育の取り組みは、保健・医療・福祉の包括的視点で看護実践できることを目標においており、画期的な科目立てとなっていたことについて情報提供を行った。″
16.「身長短縮を予防するための中高年における運動方法についての考察」	共著	平成 30 年 7 月	社会医学研究第 59 回日本社会医学会総会講演 P94(ISSN 0910-9919) 於獨協医科大学	三浦康代　志野泰子 文献レビューの結果、身長の短縮を予防するためには、姿勢を保つ骨格筋量と骨量の双方の維持、及び関節の変形を防ぐための肥満の予防が必要と考えられ、中高年の運動方法としては、低強度の筋力トレーニングを含む有酸素運動の継続が重要であることが示唆された。
17. Association among the factors in conjunction with Height Loss of females by the literature review.	First author	2019.1	22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference. (Furama-Riverfront Hotel in Singapore)	Yasuyo Miura , Yukari Shibata , Kiyoshi Yoshimizu, Yohko Inouye As a result of the literature review, it was revealed that the ″Height Loss″ was related to the four factors of ″Spinal deformation (including vertebral fracture)″, ″Bone density loss″, ″Muscle Mass loss″, and ″obesity″. It was suggested that prevention of factors in these categories could be used as a basic material to prevent height loss by aging. In the future, it is necessary to examine the bone density, muscle mass, body mass index, body fat percentage, exercise situation, and degree of height loss of the same person
18. Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease	Research collaborator	2019.1	22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference. (Furama-Riverfront Hotel in Singapore)	Yohko Inouye , Yukari Shibata , Kiyoshi Yoshimizu, Yasuyo Miura The difficulty in eating habits related to life skills and the problems were clarified on classifying the research trends on life skills focusing on the eating habits of the IBD patients through content analysis and basic data reviewing ways of support were suggested.

19. 姫路市八幡校区敬老会（尚歯會）100 回の歩みと今後の課題	共著	令和元年 5 月	第58回近畿公衆衛生学会口演･示説要旨集P33 於堺市産業振興センター	三浦康代　伊賀﨑香木 敬老会100回の歩みを尚歯會(現敬老会)記録等より分析し、今後の敬老会開催の課題をさぐることを目的として、該当年齢、該当者数、参加者数、世話人、財源、収支報告、弁当等については、尚歯會(しょうしかい)（現敬老会）記録より、校区高齢化率、婦人会役員からの聞き取り調査の結果、人生の先輩を敬う気持ちを受け継ぎながら敬老会を今後も継続されるには、地元住民の熱意だけでは支えられなくなってきている現状があり、設備や制度面での改善が求められると考えられた。
19. 「健康で長生きするための実践講座」受講者の食生活と運動状況	共著	令和元年 10 月	第 9 回日本認知症予防学会学術集会プログラム抄録集 P221（ISSN 2187-3798）	三浦康代　福田章　相馬妹子　松原緋紗子　平田和美 NPO が養成した健康寿命を延ばすボランティアが関わった「健康で長生きするための実践講座」受講者の生活状況を把握し、地域で生活する高齢者の健康寿命を延ばすための課題をさぐるために、2017～2018 年度に独立行政法人福祉医療機構より助成を受けた地域連携活動支援事業の講座（西宮市内 18 か所 58 回）の受講者延べ 725 名を対象に食生活や運動状況について記名式質問紙調査と握力測定を実施した。60 歳以上の 305 名（男 54・女 251）について、分析した結果、野菜の摂取状況は、3 割の者が 1 日小鉢 2 皿以下で、1 日 350g（小鉢約 5 皿）以上の野菜の摂取とはかけ離れた結果であり、また、80 歳以上の男性で歩行時間の減少や握力評価の低下、体力の不安、口腔保健の認識の低さが明らかとなったため、地域でのボランティアの取り組みが求められた。
20.「おむつなし育児アドバイザーの意識調査結果」	共著	令和 2 年 5 月	第59回近畿公衆衛生学会口演・示説要旨集 於京都（中止となり紙面発表）	三浦康代　和田智代　西山由紀 おつなし育児をした自身の子の昼間のおむつが外れた時期は平均 1 歳 10 か月であったことより、おむつなし育児は、排泄コントロール能力が自然に育つと考えられた。また、育児者が児の様子に注目することによって、排泄のみならず、児の心身の状態がよくわかるようになり、そのことが、乳幼児期に重要な、育児者と児とのコミュニケーションや信頼関係形成にもつながっていることが示唆された。

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　　守本　とも子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
看護学	在宅脳卒中患者，在宅酸素療法患者，介護者，QOL

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 視聴覚教材のための資料作成	平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	関西学院大学人間福祉学部人間福祉研究科の非常勤講師として視聴覚教材のための資料を作成した。具体的には人体解剖・人体機能，疾病や加齢について，難解な用語の解説や重要事項のまとめなどを資料として作成し，各授業ごとに資料の配布を行った。
２　作成した教科書，教材 ―教科書―		
介護の基本・コミュニケーション技術 （再掲）	平成 22 年 9 月 黎明書房 全 202 頁	本書は介護の考え方について理解するとともに，介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ，介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的とする。 編者：守本とも子，星野政明
生活支援技術・介護過程（再掲）	平成 22 年 6 月 黎明書房 全 219 頁	第 10 章「終末期の介護」P.159-P.168 終末期における介護の意義と目的，対象者のアセスメント，医療との連携，ブリーフケアについて述べ，終末期にある高齢者の最も安楽で威厳に満ちた死を可能にする方法を探る。 単著 編者：守本とも子，星野政明（編著）

老年看護学 Geriatric Nursing （再掲）	平成 22 年 12 月 PILAR PRESS 全 288 頁	第 2 章　2. 高齢者の理解　「加齢と老化」P. 2, P. 57-P. 65 を単著。 高齢者の生理的機能の変化，疾患の特徴，感覚機能の変化（視覚，聴覚，味覚，嗅覚，触覚，痛覚）また，その他の諸機能として，加齢による心臓，血管，血液，外皮系について述べた。そして，加齢がもたらす精神的変化と社会的変化についても述べた。 単著 編著：守本とも子
医療福祉学の道標（再掲）	平成 23 年 1 月 金芳堂 全 200 頁	第 2 章 C 生活の変化と保健･医療･福祉の統合 P. 23-P. 26 を単著。 　生活の変化として家計の動向，家族形態の変化，介護問題について解説したうえで生活を支える保健・医療・福祉の統合の意義について述べた。 第 13 章 A 少子高齢社会での医療福祉　P. 163-P. 165 を単著。 　今日抱える医療福祉の課題として少子高齢化社会での医療福祉のあり方について述べた。特に高齢者の一人暮らしに焦点をあて，現状と対策について考察した。 C 介護福祉から医療介護福祉へ　P. 170-P. 172 を単著。 　介護福祉から医療介護福祉へのパラダイムシフトの必要性について述べた。特に介護の専門性について再度考察し，今後の介護福祉士のあり方と課題について考察した。 G 情報化社会における医療福祉　P. 184-P. 185 を単著。 　情報化社会における医療福祉について，特に医療福祉と IT（Information Technology）との関連で述べた。今後，医療福祉のどの分野において IT がどのように活用されていくのか，その意義について考察した。
子ども家庭のウェルビーイング（再掲）	平成 23 年 3 月 金芳堂 全 128 頁	第 1 章 A「少子化の進行と家庭・地域の変容」P. 1-P. 5 第 3 章 B「子ども家庭福祉の実施体制」P. 39-P. 41 　現代社会における子どものウェルビーイングを追及するため，子供を取り巻く社会福祉的問題や今日的課題を明らかにするとともに，子ども家庭福祉のあり方と支援策について解説する。 単著

系統看護学講座　専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第 15 版第 8 刷 （再掲）	平成 24 年 2 月 医学書院 全 495 頁	第 2 部 第 1 章 B「病床環境の調整」P. 22-P. 32 本章では外部環境を病床環境に限定し，「病床環境の調整」と「ベットメーキング」「リネン交換」についての技術を習得する。病床環境の調整には，病床の温度と湿度。光と音，病室の色彩，空気の清浄性とにおい，人的環境の調整のほか，ベットのマットレスやまくらなどの寝具も含まれる。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第 2 部 第 5 章 C「病床での衣生活の援助」P. 185-P. 192 本章では本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義，社会的意義，心理的意義があることを理解する。また，対象に応じた衣生活をアセスメントし，適切な援助ができるための方法を習得する。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
介護実習入門（再掲）	平成 24 年 3 月 黎明書房 全 128 頁	本書において対象者への実際的な福祉的援助の方法を学び，専門職としての基盤を構築することが可能であると考える。 編集：守本とも子，星野政明
系統看護学講座　専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第 16 版 （再掲）	平成 25 年 2 月 医学書院 全 508 頁	第 1 章　A「環境調整技術」P. 9-P. 21 本章では療養生活の環境を構成する要素を理解し，病室・病床のアセスメントと調整について学ぶ。また，ベット周囲と病床の環境整備，ベットネーキング，リネン交換の実際について学ぶ。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第 6 章　B「清潔・衣生活援助」P. 192-P. 200 衣類を用いることの生理的・社会的・心理的意義を理解する。また，衣生活に関するニーズのアセスメントや援助の実際について学ぶ。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世

高齢者のせん妄 　安心をとどけるケアと介護の心得（再掲）	平成 26 年 10 月 すぴか書房 全 140 頁	第 3 章「せん妄を起こしやすい状況-こわれやすい心へのおもいやり」P45-72 本章では，せん妄を起こしやすい状況を紹介している。高齢者の心は壊れやすく，とても脆くなってきている。高齢者に対しては身体的な援助とともに心のケアが重要な課題となる。高齢者ケアにかかわる人にとって，せん妄の知識は必須だと言える。 単著 第 4 章「せん妄が起きてしまったら」P73-86 せん妄の症状は特定の病気のあらわれではなく，さまざまな要因によって引き起こされた異常な状態である。意識障害であることを理解し，症状への適切な対応を学ぶ。 単著 編者：守本とも子
これからの国際看護学 　国境を越えた看護実践のために（再掲）	平成 26 年 11 月 ピラールプレス 全 163	第 3 節「国際協力機関の取り組み」P22-28 国際協力のいくつかの方法について知り，世界中のすべての人々がより良く生きられる未来を目指す。 単著 監著：守本とも子
看護職をめざす人の社会保障と社会福祉（再掲）	平成 27 年 4 月 みらい 全 211 頁	本書は看護職（看護師・保健師・助産師）をめざす読者が社会保障・社会福祉について学ぶテキストである。また，すでに医療現場で看護職やコメディカルとして活躍している方々の学びのふりかえり等にも十分対応できる内容である。 編者：守本とも子

シリーズ　看護・介護・福祉のための「教育学」 教育心理をふまえた患者教育指導実践の手引き 1 看護のための『教育学』(再掲)	平成 27 年 12 月 あいり出版 全 151 頁	第 2 章　3「教授理論」P22-25 第 2 章　4「現代の教授理論」P25-28 教授理論とは教授者が学習者に知識・技能をさずけるために有用な理論である。具体的な教授理論を学ぶ前に，教授（指導）するためのよりどころとする原理について述べたのち（第 2 章 3)，主要な教授理論について説明する（第 2 章 4)。 単著 第 2 章　5「人格」P28-P29 教育はたんに知識や技術を習得させるためのものではなく，全人的形成が目標となる。したがって教育は人格形成過程の一環として行われなければならない。 単著 第 2 章　6「教育心理学と患者指導」P29 本章で学んだ内容が患者指導に生かされることを目的に構成しているが，教育心理学がどのように患者指導に有用か，例をあげて考える。 単著 編者：守本とも子
系統看護学講座　専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」第 17 版 (再掲)	平成 29 年 1 月 医学書院 全 520 頁	第 2 部 第 1 章 B「病床環境の調整」P. 10-P. 24 本章では外部環境を病床環境に限定し，「病床環境の調整」と「ベットメーキング」「リネン交換」についての技術を習得する。病床環境の調整には，病床の温度と湿度。光と音，病室の色彩，空気の清浄性とにおい，人的環境の調整のほか，ベットのマットレスやまくらなどの寝具も含まれる。 共著者：守本とも子，吉村雅世 第 2 部 第 5 章 C「病床での衣生活の援助」P. 153-P. 211 本章では本章では人間生活の基盤となる三大要素の一つである衣生活への援助について述べる。衣生活には生理的意義，社会的意義，心理的意義があることを理解する。また，対象に応じた衣生活をアセスメントし，適切な援助ができるための方法を習得する。 共著者：守本とも子，吉村雅世

痛みのケア 第1版 （再掲）	平成29年3月 ピラールプレス 全180頁	第9章 「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」 P.36－P.49 慢性的な高齢者の痛みについて，痛みと動作について説明し，痛みに関する観察の力を養う。そして高齢者の痛みの主訴の特徴を述べ，痛みの原因となる疾患または治療について述べる。また，痛みのアセスメントツールを紹介し看護者が利用できる一般的な痛みのアセスメントスケールを学ぶ。代表的な痛みのツールはVisual Analogue Scales (VAS)である。さらに本書では痛みの有無に焦点をしぼるpain VASを紹介し，看護ケアの実践として痛みの治療とケアプランについて述べる。 単著 編者：守本とも子
―事典― 介護福祉学事典（再掲）	平成26年10月 ミネルヴァ書房 全829頁	「障害児に対する介護福祉」 障害児の定義・概念・考え方について述べ，障害児に関する介護，福祉の実践や制度の現状を明らかにした。また，障害児に対する介護について，近現代史から，ノーマライゼーションの浸透までの背景や経過を説明し，障害のある子どもも社会の中で他の人々と同じように生活でき，活動することができるための展望と課題について考察した。 P546-547 分担執筆
3　教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
―講演―		
日本保健医療行動科学会　講師	平成24年6月	日本保健医療行動科学会主催の講習会において，「医療系大学におけるチーム医療教育の実際―医療のパラダイムシフトに向けて―」についての講義を行った。 会場：じゅうろくプラザ（岐阜県岐阜市）

奈良学園大学　公開講座 講師	平成 26 年 6 月 28 日	奈良学園大学　公開講座で講師を務め，「高齢者のうつ」と題した講演を 90 分行った。 対象：地域住民 60 名 会場：りーべる王寺西友（奈良県北葛城郡王寺町）
日本サーモロジー学会　第 33 回大会　講師	平成 28 年 5 月	日本サーモロジー学会　第 33 回大会で講師を務め，「がん看護と体温」について招待講演を行った。 対象：200 名 会場:奈良学園大学登美ヶ丘キャンパス（奈良県奈良市）
―講習会―		
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成 22 年 9 月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6 時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成 23 年 9 月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護論」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6 時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成 24 年 6 月 13 日 ～7 月 11 日	社団法人岐阜県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護理論」の講義および演習指導を行った。 専任教員養成講習会受講生：30 人 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい会館第 1 棟 5 階（岐阜県岐阜市） 時間：15 時間（講義），15 時間（演習指導）
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成 24 年 9 月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6 時間
社団法人奈良県看護協会 実習指導者講習会　講師	平成 25 年 8 月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6 時間

社団法人奈良県看護協会 　実習指導者講習会　講師	平成 26 年 8 月	社団法人奈良県看護協会主催の実習指導者講習会において，「看護師教育課程」の講義を行った。 会場：奈良県看護研修センター(奈良県橿原市) 時間：6 時間
―教員養成講座講師― 大阪府看護協会 　大阪府看護教員養成講習会　講師	平成 22 年 4 月～平成 22 年 7 月	大阪府看護協会主催の大阪府看護教員養成講習会において，「看護論演習」の講義を行った。 受講生：79 人 時間：30 時間 大阪府看護協会桃谷センター（大阪市天王寺区）
社団法人岐阜県看護協会 　岐阜県看護教員養成講習会　講師	平成 23 年 6 月 13 日～7 月 27 日	社団法人岐阜県看護協会主催の岐阜県看護教員養成講習会において，「看護論」「看護論演習」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：30 人 時間：15 時間（講義），15 時間（演習指導） 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい会館第 1 棟 5 階（岐阜県岐阜市）
社団法人岐阜県看護協会 　岐阜県専任教員養成講習会　講師	平成 25 年 5 月 20 日～6 月 4 日	社団法人岐阜県看護協会主催の岐阜県専任教員養成講習会において，「専門領域別看護論演習・老年看護学」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：19 人 時間：18 時間 会場：社団法人岐阜県看護協会特別研修室，岐阜県県民ふれあい福寿会館第 1 棟 5 階（岐阜県岐阜市）
社団法人奈良県看護協会 　奈良県専任教員養成講習会　講師	平成 25 年 7 月 29 日平成 25 年 12 月 4 日～12 月 12 日	社団法人奈良県看護協会主催の奈良県専任教員養成講習会において，「専門領域別看護論演習・老年看護学」の講義を行った。 専任教員養成講習会受講生：30 人 時間：14 時間 会場：奈良県看護研修センター，奈良県看護協会ホームナーシングセンター（奈良県橿原市）
5　その他 ―担当教科―		

「介護概論」の担当	平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「介護概論」を担当した。「介護概論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，介護の主たる対象となる高齢者を理解しながら，介護の目的，方法，専門職としての役割を学ぶ，また，それらを基に実践と自己研鑽を積むことのできる専門性を育てることを目的とする。
「介護技術」の担当	平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「介護技術」を担当した。「介護技術」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，障害や疾病あるいは加齢により，他の人の支援を必要とする対象者の QOL を高める介護上の援助技術について，その考え方および身体的状況に応じたよりよい介護技術を学ぶ。授業は講義と演習であり，全体の 1/2 は体験的学習で構成する。
「からだのしくみと生活」の担当	平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「からだのしくみと生活」を担当した。「からだのしくみと生活」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，対象の自立支援にむけて必要なこころとからだの基礎的な知識を学び，適切な介護の実践ができる能力を養うことを目的とする。
「加齢と障害の理解」の担当	平成 20 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	関西学院大学人間福祉学部の学生を対象に「加齢と障害の理解」を担当した。「加齢と障害の理解」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，人間の成長と発達における心理や身体機能の変化を学び，それらが日常生活に与える影響について理解することを目的とする。
「看護学原論」の担当	平成 22 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護学原論」を担当した。「看護学原論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，看護学における主要概念を理解し，看護の本質と専門職としての役割を学ぶ。そのために，看護の対象である人間を全人的にとらえる知識と感性を養う。また，自己の看護観を形成し，発展させる能力を養うことを目的とする。

「国際看護論」の担当	平成 22 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，国際社会の動向を知り，グローバルな視点で活動できる教養を養うことを目標とする。それぞれの国の分化，資源，環境など，多角的な視点について考え，異文化を持つ人々への看護の在り方に対する理解を深めていく。
「ターミナル看護」の担当	平成 22 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「ターミナル看護」を担当した。「ターミナル看護」はは必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，ターミナルケアの意味を理解し，看護者自身の生死観が確立できる基礎を養う。また，ターミナルケアを実践するうえでの知識と技術を学ぶ。
「看護理論」の担当	平成 22 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護理論」を担当した。「看護理論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，看護の見方・考え方の基礎として，様々な看護理論が現れてきた社会背景を知り，看護理論を学ぶ。代表的な理論家の理論が看護実践の根拠になることや，その活用方法を知る。さらに，理論を研究に活用するための方法について理解する。
「チーム医療論」の担当	平成 22 年 4 月 ～ 平成 25 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「チーム医療論」を担当した。「チーム医療論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義は 3 学科の教員で行う。チーム医療における協調性，責任感，コミュニケーション能力の向上は必須である。また専門分野以外の学習も「学際性」を伸ばすために必要である。3 学科共通の科目を持ち学科の壁を越えて本科目を履修することにより医療現場において必要とされる資質を習得することを目的とする。
「看護学概論」の担当	平成 25 年 4 月 ～ 平成 25 年 9 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「看護学概論」を担当した。「看護学概論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，看護学における主要概念を理解し，看護の本質と専門職としての役割を学ぶ。そのために，看護の対象である人間を全人的にとらえる知識と感性を養う。また，自己の看護観を形成し，発展させる能力を養うことを目的とする。

「保健医療学概論」の担当	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「保健医療学概論」を担当した。「保健医療学概論」は必修科目で 1 単位 15 時間の半期科目である。講義内容は， 全人的ケアに主眼をおいた保健医療学について，その背景や基本的な考え方，諸外国及び日本における現状と実践例，クオリティ・オブ･ライフ（QOL）の視点を含む医療と看護の原点などについて幅広く学び，その後の主体的な学習の礎とする。
	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「看護理論」を担当した。「看護理論」は必修科目で 1 単位 15 時間の半期科目である。講義内容は，代表的な理論家の理論がどのような医療環境や社会背景のもとに構築されてきたかを知る。また，それらの理論が看護実践の根拠となることを理解し，看護過程の展開に有効に活用する方法を学ぶ。
「チーム医療論」の担当	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「チーム医療論」を担当した。「チーム医療論」は必修科目で 1 単位 15 時間の半期科目である。講義内容は，チーム医療の重要性，看護領域におけるチーム医療の変遷について学ぶ。そして現在のチーム医療のなかでの看護師の位置づけおよび看護師が果たす役割について理解する。また，チーム医療における看護の在り方および今後の課題について考察する。
「成人看護学概論」の担当	平成 26 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の学生を対象に「成人看護学概論」を担当した。「成人看護学概論」は必修科目で 2 単位 30 時間の半期科目である。講義内容は，人間の成長発達課題における成人期の特質について，身体的・精神的・社会的側面から理解する。また，成人期にある人々の様々な健康障害の原因や要因を学び，健康の回復，あるいは健康の保持増進に向けての看護援助の方法について学ぶ。
「社会福祉」の担当	平成 26 年 6 月 ～ 平成 26 年 9 月	大和高田市立看護専門学校の学生を対象に「社会福祉」を担当した。「社会福祉」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，社会保障・社会福祉の理念や原理及び障害者・高齢者の生活問題の現状を把握し，それに対する社会福祉制度と最近の政策動向について学ぶ。

「ターミナルケア論」の担当	平成 26 年 10 月 ～ 平成 27 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「ターミナルケア論」を担当した。「ターミナルケア論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，ターミナルケアの意味を理解し，看護者自身の生死観が確立できる基礎を養う。また，ターミナルケアを実践するうえでの知識と技術を学ぶ。
「国際看護論」の担当	平成 26 年 10 月 ～ 平成 27 年 3 月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科の学生を対象に「国際看護論」を担当した。「国際看護論」は必修科目で 1 単位（2 時間×15 回）の半期科目である。講義内容は，国際社会の動向を知り，グローバルな視点で活動できる教養を養うことを目標とする。それぞれの国の分化，資源，環境など，多角的な視点について考え，異文化を持つ人々への看護の在り方に対する理解を深めていく。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）幼稚園教諭 2 級普通免許	昭和 53 年 3 月 31 日	昭 52 幼 2 普第 3230 号
2）保母資格	昭和 53 年 3 月 21 日	第保 755
3）看護婦免許	昭和 61 年 5 月 14 日	第 568532 号
4）養護学校教諭 1 級普通免許	昭和 63 年 9 月 25 日	昭 63 養学 1 普め第 10 号
5）看護教員資格	平成 3 年 11 月 29 日	第 946 号 平成 3 年度厚生省認定による看護教員養成講習会
6）修士（学術）	平成 9 年 3 月 25 日	大阪教育大学第 2090 号

7）博士（社会福祉学）	平成 15 年 10 月 15 日	関西学院大学（甲社第十四号）
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他 岐阜医療科学大学 研究倫理審査委員長 奈良学園大学 国際交流センター長	平成 22 年 4 月 ～ 平成 24 年 9 月 平成 29 年 3 月 ～ 平成 30 年 3 月	 岐阜医療科学大学保健科学部看護護学科，放射線技術学科，臨床検査技師学科合同の研究倫理審査委員会において研究倫理審査委員長を務めた。 大学の委員会組織において、国際交流センター長に就任し、友好協定締結校から特別聴講留学生を受け入れるため、協定校との交流を行った。また短期留学生の海外研修に取り組んだ。看護学生のマハサラカム大学への研修に向けての調整に取り組んだ。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
介護の基本・コミュニケーション技術	共著	平成 22 年 9 月	黎明書房	本書は介護の考え方について理解するとともに，介護を必要とする対象者を生活の視点からとらえ，介護を適切に行う能力と態度を養うことを目的とした。 A5 判，全 202 頁 編著：守本とも子，星野政明 共著者：三浦辰哉，原田理恵，溝上五十鈴，土田耕司，羽柴香恵，河野喬，新谷奈苗，吉村雅世，西薗貞子，西元康世，甲田宗嗣，上本野唱子，石﨑利恵，川合百合子 本人担当部分：編集

生活支援技術・介護過程	共著	平成 22 年 6 月	黎明書房	専門職としての基盤を構築することを目的とした。心身の状況に応じた介護を実践するための生活支援の方法とそれらを展開していくための一連の過程として「介護過程の展開」について具体的な内容を盛り込んだ。 A5 判，全 219 頁 編著：守本とも子，星野政明 本人担当部分: 第 10 章「終末期の介護」P. 159-P. 168 を単著。 終末期における介護の意義と目的，対象者のアセスメント，医療との連携，ブリーフケアについて述べ，終末期にある高齢者の最も安楽で威厳に満ちた死を可能にする方法を探った。

老年看護学 Geriatric Nursing	共著	平成 22 年 12 月	ピラールプレス	本書は高齢者の身体的・心理的特徴を十分把握したうえで高齢者の QOL の向上を目指した看護実践を意識的に取り上げた「老年看護学」（監修:川野雅資，編集：守本とも子,2007 年）の改訂版である。国家試験対策のテキストとしても活用されてきた旧版の内容をさらに掘り下げ，高齢者の疾病構造の変容，健康に関連した高齢者のニーズの多様性などを考慮して，老年看護の実践に向けて，看護学生の必携のテキストとなっている。 A5 版　全 285 頁 監修：川野雅資 編者：守本とも子 共著者：今村美幸，上平悦子，岡崎大資，岡本啓子，奥百合子，川口ちづる，甲田宗嗣，新川泰弘，新谷奈苗，土田耕司，富永尭史，舩瀬孝子，三宅美恵子，溝上五十鈴，守本とも子，山形力生，吉村雅世 本人担当部分：編著 第 2 章　2. 高齢者の理解　「加齢と老化」P.2，P.57-P.65 を単著。 高齢者の生理的機能の変化，疾患の特徴，感覚機能の変化（視覚，聴覚，味覚，嗅覚，触覚，痛覚）また，その他の諸機能として，加齢による心臓，血管，血液，外皮系について述べた。そして，加齢がもたらす精神的変化と社会的変化についても述べた。

医療福祉学の道標	共著	平成 23 年 1 月	金芳堂	本書は社会福祉学の視点から現代医療の課題を探求，解決していこうとすると同時に医療というフィールドにおける社会福祉的視点の意義への接近を試みた。医療の分野における社会福祉的なものとは何か，という課題に迫ろうとしている。①クライエントの心身の健康，②クライエントの住む時代と社会の状況，③クライエント個人（家族）の生活実態と生活背景と地域の状況，④医療と福祉の援助専門職の理論と技術，⑤医療と福祉の援助専門職の価値観，⑥援助専門職の連携について，の道標を明示することを目的としている。 B5 判，全 200 頁 監修：日野原重明，西三郎，前原澄子，秋山智久 編集：星野政明，高内克彦，土田 耕司 共著者：守本とも子，天野博之，安藤詳子，石村由利子，伊藤健次，伊藤孝治，井上眞人，石﨑利彦，牛津信忠，大山朝子（他 32 名） 本人担当部分: 第 2 章 C 生活の変化と保健･医療･福祉の統合 P.23-P.26 を単著。 生活の変化として家計の動向，家族形態の変化，介護問題について解説したうえで生活を支える保健・医療・福祉の統合の意義について述べた。 第 13 章 A 少子高齢社会での医療福祉 P.163-P.165 を単著。 今日抱える医療福祉の課題として少子高齢化社会での医療福祉のあり方について述べた。特に高齢者の一人暮らしに焦点をあて，現状と対策について考察した。 C 介護福祉から医療介護福祉へ P.170-P.172 を単著。 介護福祉から医療介護福祉へのパラ

子ども家庭のウェルビーイング	共著	平成 23 年 3 月	金芳堂	近年，子どもの成長，発達を阻害する社会的因子や子どもへの虐待問題など，多くの課題が明らかになっている。子どものウェルビーイングを目ざした子ども家庭福祉のあり方と支援策について解説している。 B5 判，全 128 頁 編集代表：星野政明 編集：真鍋顕久，三友雅夫 共著者：守本とも子，荒木照子，伊藤博美，大熊信成，大谷恵，大塚弘子，河合由嘉，川添公仁，木村由美，嶋田芳男（他 19 名） 本人担当部分: 第 1 章 A 少子化の進行と家庭・地域の変容 P.1-P.5 を単著。 少子化の現状と家庭・地域の変容について概説した。また，現代社会における家庭・地域で生活する子どもの生活課題と対策について考察した。 第 3 章 B 子ども家庭福祉の実施体制 P.39-P.41 を単著。 子ども家庭福祉について，どのような目的でどのような施策が実施されているのか，その現状について述べるとともに，今後の課題についても考察した。

系統看護学講座　専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第 15 版第 8 刷	共著	平成 24 年 2 月	医学書院	本書は「第 1 部　看護技術総論」「第 2 部　16 領域の看護技術」の 2 部構成としている。第 1 部では看護技術の 4 つの基本原則とその優先順位について説明を行い，第 2 部では看護技術を 16 の領域に分けて説明している。改定にあたっては，それぞれの技術についてできるだけ，最新の方法を紹介し，その根拠を示すように心がけている。 B5 判，全 495 頁 本人担当部分： 第 2 部　第 1 章 B「病床環境の調整」P. 22-P. 32 を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第 2 部　第 5 章 C「病床での衣生活の援助」P. 185-P. 192 を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世
介護実習入門	共著	平成 24 年 1 月	黎明書房	本書は介護の現状について述べ，介護の倫理，介護の原則についてわかりやすく説明している。また，介護施設の概要と入所者の特徴について述べている。次にそれらの知識を踏まえ，介護実習前の基礎知識として，まず，介護実習の意義と目的について述べ，介護を専門職とする人のための姿勢，そしてコミュニケーションの基本とコミュニケーションの実際について知識と技術が同時に学ぶことができるように工夫されている。最後に介護過程について事例をもとにわかりやすく解説し，介護に必要な援助

系統看護学講座　専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第 16 版	共著	平成 25 年 1 月	医学書院	本書は，多くの写真やイラストによって看護技術の手順をわかりやすく解説した。また，主な看護技術の手順については，動画で見られるように工夫し，動画の活用によって技術習得が容易となり，より効率的・効果的に技術レベルが向上することが期待される。 B5 判，全 528 頁 共著者：有田清子，有田秀子，井川順子，岡本啓子，尾崎章子，小林優子，坂下貴子，茂野香おる，立野淳子，田中靖代，田村富美子，内藤知佐子，任和子，林静子，比田井理恵，平松八重子，三富陽子，守本とも子，屋宜譜美子，山勢博彰，吉村雅世 本人担当部分： 第 1 章 A 「環境調整技術」P.9-P.21 を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，岡本啓子，吉村雅世 第 6 章 B 「清潔・衣生活援助」 P.192-P.200 を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選

高齢者のせん妄 安心をとどけるケアと介護の心得	共著	平成 26 年 10 月	すぴか書房	本書のテーマは「高齢者の」せん妄である。治療者の視点ではなく生活援助者の視点で,「安心をとどける」ためにどうすべきかを述べた。 A5 判　全 140 頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，野中浩幸，酒井千知，奥百合子，川口ちづる，大谷須美子，川田美和，鎗内希美子，大西恵，横嶋清美，山田ゆきこ，亀山紀代美 本人担当部分： 第 3 章「せん妄を起こしやすい状況-こわれやすい心へのおもいやり」P45-72 を単著。 本章では，せん妄を起こしやすい状況を紹介している。高齢者の心は壊れやすく，とても脆くなってきている。高齢者に対しては身体的な援助とともに心のケアが重要な課題となる。高齢者ケアにかかわる人にとって，せん妄の知識は必須だと言える。 第 4 章「せん妄が起きてしまったら」P73-86 を単著。 せん妄の症状は特定の病気のあらわれではなく，さまざまな要因によって引き起こされた異常な状態である。意識障害であることを理解し，症状への適切な対応を学ぶ。

これからの国際看護学 国境を越えた看護実践のために	共著	平成 26 年 11 月	ピラールプレス	本書では，発展途上国の現状，リプロダクティブヘルスと母子保健のほか，我が国に滞在する外国人への看護についても取り上げている。また，学生が将来勤務地として希望するであろう発展途上国，および先進国への就業のほか，欧米諸国への就職についても紹介している。 B4 判　全 163 頁 監著：守本とも子 編著：田中和奈 共著者：城戸口友香，高嶋愛里，高橋里沙，田中和奈，長谷川恵介，溝尾朗，守本とも子，龍現寺素子 本人担当部分： 第 3 節「国際協力機関の取り組み」P22-28 を単著。 国際協力のいくつかの方法について知り，世界中のすべての人々がより良く生きられる未来を目指す。
看護職をめざす人の社会保障と社会福祉	共著	平成 27 年 4 月	みらい	本書は看護職（看護師・保健師・助産師）をめざす読者が社会保障・社会福祉について学ぶテキストである。また，すでに医療現場で看護職やコメディカルとして活躍している方々の学びのふりかえり等にも十分対応できる内容である。 B4 判　全 211 頁 編者：守本とも子 共著者：虎杖真智子，井上深雪，小澤香，鍵本由起子，黒野伸子，新谷奈苗，鈴木久美子，高林新，玉井純子，土屋昭雄，富永堯史，松浦信，真鍋顕久，三宅美恵子，村山くみ，森田隆夫，守本幸次，山口佳子 本人担当部分：編集

シリーズ　看護・介護・福祉のための「教育学」 教育心理をふまえた患者教育指導実践の手引き 1 看護のための『教育学』	共著	平成 27 年 12 月	あいり出版	本書では看護専門職者が患者への健康面での教育指導を実践するにあたって，学ぶべき教育原理・教育心理学を踏まえた患者教育指導のノウハウを読者に伝え，日常の看護実践のスキルアップに繋げていきたい。 B4 判　全 151 頁 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，松田智子，虎杖真智子，鎌田首治朗，松浦純平，中尾友美，武富由美子，山口曜子，佐々木千恵，新谷奈苗，東中須恵子，岡本響子 第 2 章　3「教授理論」P22-25 を単著。 第 2 章　4「現代の教授理論」P25-28 を単著。 教授理論とは教授者が学習者に知識・技能をさずけるために有用な理論である。具体的な教授理論を学ぶ前に，教授（指導）するためのよりどころとする原理について述べたのち（第 2 章　3），主要な教授理論について説明する（第 2 章 4)。 第 2 章　5「人格」P28-P29 を単著。 教育はたんに知識や技術を習得させるためのものではなく，全人的形成が目標となる。したがって教育は人格形成過程の一環として行われなければならない。 第 2 章　6「教育心理学と患者指導」P29 を単著。 本章で学んだ内容が患者指導に生かされることを目的に構成しているが，教育心理学がどのように患者指導に有用か，例をあげて考える。

系統看護学講座　専門分野 1 「基礎看護技術Ⅱ基礎看護学[3]」 第 17 版	共著	平成 29 年 1 月	医学書院	本書は，多くの写真やイラストによって看護技術の手順をわかりやすく解説した。また，主な看護技術の手順については，動画で見られるように工夫し，動画の活用によって技術習得が容易となり，より効率的・効果的に技術レベルが向上することが期待される。 B5 判，全 520 頁 共著者：有田清子，有田秀子，井川順子，今井宏美，尾崎章子，後藤奈津美，小林優子，坂下貴子，茂野香おる，立野淳子，田中靖代，辻守栄，内藤知佐子，任和子，林静子，比田井理恵，平松八重子，三富陽子，守本とも子，屋宜譜美子，山勢博彰，吉村雅世 本人担当部分： 第 1 章 A 「環境調整技術」P.10-P.24 を共著。 主に療養生活の環境（病室，人的環境など）のアセスメントと調整及びベットメーキングについて述べた。 共著者：守本とも子，吉村雅世 第 6 章 B 「清潔・衣生活援助」 P.153-P.211 を共著。 主に衣類を用いることの意義，衣生活に関するニーズのアセスメント，病衣の選び方，病衣交換の方法について述べた。 共著者：守本とも子，吉村雅世
痛みのケア （学術論文）	共著	平成 29 年 3 月	ピラールプレス	本書は看護職が患者への最善の痛みケアを提供できるよう，第Ⅰ部で「痛みと人間」をテーマに「痛みと性」，「痛みの意味」，「痛みと倫理」「痛みと医療」について述べ，人間と痛みの関係を理解する。そして第Ⅱ部 5 章～８章で「痛み理論」を紹介し，痛みに関する理論をもとに痛みについての理解を深める・第Ⅲ部では「痛みと看護」をテーマに「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」，「検査

Effects of a Stuffed Animal Designed for Nursing Care （介護用“動物の縫いぐるみ”の効用） （査読付）	共著	平成22年9月	Proceedings of 6th International Conference of Health Behavioral Science 日本保健医療行動科学会 第6回国際会議論文集 P.260-P.262	本研究は高齢者の癒しとQOLの向上のための温かい介護用縫いぐるみを考案し，認知症高齢者が実際に縫いぐるみを使用した後，どのような変化が見られたかをコーエンマンスフィールド（CMAI）スケールを使用して検討した。縫いぐるみを使用する前後1週間の観察をもとに比較検討した。変化の見られた行動は，同じことを繰り返し質問する，机を何度も叩く，といった行動が有意に減少した。高齢者が温かい縫いぐるみを身近におくことは高齢者の癒しに効果をもたらすことが示唆された。 本人担当部分：データーの解析，研究の総括を行った。 共著者：Tomoko Morimoto, Nanae Shintani

Discussion of emergency notification device for elderly people （高齢者のための緊急通報機器の検討） （査読付）	共著	平成 22 年 11 月	Ergonomics for All：Celebrating PPCOE’S 20years of excellence － Lin & Chen(eds) P.495-P.501	高齢者の緊急時の不安を軽減し安心して暮らせる社会を実現すべく，各市町村では家庭用緊急通報機器の貸与による支援をおこなっており，これにより高齢者の不安解消と安全確保，QOL 向上を目指している。しかしながらますます需要の拡大が予測されているにも関わらず実際は低い普及率である。本研究では H 市に居住する在宅高齢者を対象に聞き取り調査をおこない，緊急通報機器の使用状況を明らかにし，高齢者にとって活用しやすい機器の開発や，運用方法の改善につなげることを目的とした。その結果，緊急通報機器の使い方の理解や緊急通報機器の形状について改善すべき点が明確になった。 本人担当部分：調査および結果の考察を行った。 共著者:Nanae Shintani, Hiroyasu Nagaoka, Kazuko Horiguchi, Tomoko Morimoto
A questionnaire to determine Nursing and Child care students` Understanding of welfare equipment （看護と保育を学ぶ学生の福祉用具の認識についての認識） （査読付）	共著	平成 22 年 11 月	Ergonomics for All：Celebrating PPCOE’S 20years of excellence － Lin & Chen(eds) P.529-P.532	子どもと大人の主要な福祉用具への認識について，看護と保育を学ぶ学生間の比較を目的に調査を行った。その結果，認識の違いはカリキュラム等の教育の内容によって影響を受けていることが考えられた。また，因子分析の結果により，双方とも「遊び」が重要なキーワードであることが考えられた。 本人担当部分：研究の企画および結果の考察をおこなった。 共著者:Tomoko Morimoto, Shoko Kamimotono, Nanae Shintani

Study of quality of life (QOL) in home oxygen therapy patients and related factors of actual life situation （在宅酸素療法患者の生活実態と QOL の関係） （査読付）	共著	平成 23 年 10 月	East Asian Ergonomics Federation Symposium 2011 (EAEFS 2011) Ergonomics In Asia:Development, Opportunities, and Challenges P.295-P.300	在宅酸素療法は種々の在宅医療の中で最も普及し，その効果は単に患者の生命予後を延長するばかりでなく，人間的な生活と Quality of Life (QOL) を保証するものとして高く評価されている。しかし反面，社会的・精神的・身体的煩わしさのため，社会活動が制限され，閉じこもりがちとなることで抑うつ症状となり，急性増悪を招くという報告もある。そこで生活実態と QOL との関係をより深め明らかにするため，患者の QOL に影響を及ぼす生活実態の関連要因を検討することを本研究の目的とした。結果，「患者活力」と「患者心の健康」が「肺理学療法理解度」に有意に関連していた。肺理学療法の理解度が高い者は，認知能力も高く自己管理ができており，これが自分の疾患を前向きに受けとめ，活力を維持することにつながっていると考えられ，自己管理能力を身につけるための患者教育を繰り返し行ない，普及させていくことの必要性が示唆された。 本人担当部分：研究の総括を行った。 共著者：Nanae Shintani, Tomoko
医療系大学におけるチーム医療の実際―医療のパラダイムシフトに向けて― （査読付） 単著	単著	平成 24 年 6 月	日本保健医療行動科学会雑誌 Vol.28 No.1 2013 P.2-P.6	チーム医療教育は岐阜医療科学大学の建学の精神である「人間性」「学際性」「国際性」の向上を目的とし，本学の特色を活かした独自のプログラムである。 チーム医療に最も必要とされる資質を担保し，現在の医療現場で通用する”医療人”となることを目標とした教育の充実について考察した。

Relationship between life satisfaction and sympathovagal balance in healthy elderly males at home at night （健常高齢男性の夜間における交感神経バランスと生活満足度との関連） （査読付）	共著	平成 24 年 10 月	Health Vol.4 No.11 2012 P.1068-P.1072	夜間自宅で起床中の健常高齢男性 39 名の心拍変動（RR 間隔）と身体加速度を計測した。 身体加速度の低い時間についてのみ，心拍変動データの高周波帯域パワーの規格値（値が高いほど副交感神経優位）を算出した。その値と質問紙より点数化した生活満足度との間に統計的有意な負の相関を確認した。この結果より，生活満足度の高い健常高齢男性ほど，夜間自宅で起床安静時に交感神経系優位にあることが示唆された。 本人担当部分：データー解析と論文の構成を担当した。 共著者：Kohzoh Yoshino，守本とも子，Takahiro Itagaki，shigetaka Iketani，Masami Nagata， Morihiro Thujishita
The Factors that Inhibit the Health Behaviors of Adulthood Women （成人女性の保健行動を抑制する因子について） （査読付）	共著	平成 27 年 3 月	医療福祉情報行動科学研究 第 3 号 2015 P.1-P.8	本研究では，初発の乳がん患者で，手術療法の後に化学療法の 2 回目を終了した以降の患者から，仕事を継続している患者を対象とし，「仕事を継続してく上での困難」について個別に半構造的インタビューを行った。 この結果，7 つのカテゴリー，「治療の副作用からくる身体的苦痛」「仕事に穴をあけることに対する申し訳なさ」「再発への不安から仕事をセーブする」「職場の配慮不足」「受診のしにくさ」「治療の副作用から仕事の能力が落ちているのではないかという不安」「病名告知に

身体拘束一時的中断に関する看護師のアセスメントの視点についての考察 （査読付）	共著	平成 27 年 3 月	医療福祉情報行動科学研究　第 3 号 2015　P. 13-P. 19	本研究の目的は，精神科病棟で身体拘束中患者のケアに携わる看護師が，日常生活援助場面において，拘束一時中断が可能かどうかのアセスメントをどのような視点で行っているかを明らかにすることである。 その結果，≪疎通が図れる≫≪約束が出来る≫≪興奮・大声がない≫≪暴力がない≫≪緊張がない≫≪穏やかである≫≪食事が食べられる≫≪夜間睡眠がとれる≫≪自傷がない（うつ状態の患者)≫の 9 つのカテゴリーが見出された。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。 共著者:上山千恵子，守本とも子
認知症高齢者を介護する娘介護者の体験 ―介護生活の中で体験する困難と，介護生活の支えとなるもの―	共著	平成 28 年 10 月	奈良学園大学紀要第 5 集 p. 67-79	在宅認知症高齢者の介護者（娘）が体験する困難と，介護者の介護生活での支えとなっている要因について明らかにした。調査対象は在宅娘介護者 15 名で半構成的面接調査をおこなった。その結果，介護者が体験する困難として「親の現状を受け止める難しさ」「役割の両立から生じる困難」　「自分がやらなければ」「介護協力者との間に生じるずれ」などの 7 カテゴリーが，生活の支えとなっているものとして「変わっていく親を共有できる存在」「介護を分担してくれる家族」「介護効果の実感」などの 4 つのカテゴリーが抽出された。このような娘介護者特有の状況を理解したうえでの支援が重要であることが示唆された。

Influence of Job Stressor on Coping Behavior （仕事ストレッサーが対処行動に与える影響） （査読付）	共著	平成 29 年 2 月	Journal of Information and Behavioral Science for Health and Welfare 医療福祉情報行動科学研究 Vol 4. 2017 p. 51-60.	食品製造業者に勤務する従業員 168 人を対象とし，仕事ストレッサー因子が対処行動にどのように結びついているかを検証した。重回帰分析の結果，計画的対処行動と要求度，裁量度，技能活用に有意な関連性があり，自己管理能力が高く，目標達成まで自分なりに計画を立て行動する傾向にある者が計画的対処を採用する傾向にあることがわかった。また，積極的協力依頼行動と，サポート・技能活との間に有意な関連性があり，周囲とコミュニケーションが良好でサポーティブな状況が背景にあり，また課題を整理し他者に伝えられる知識や技術のある者が，積極的協力依頼を採用する傾向にあることがわかった。計画的対処，積極的協力依頼といったポジティブな対処を実行するためには，本人の知識や技術を活用できる仕事に就かせることや，普段からのサポーティブな組織作りが大事であると考えられる。 本人担当部分：研究の総括をおこなった。。 共著者: Nanae Shintani, Hiroyasu Nagaoka, Tomoko Morimoto
（その他 ） ―事典―				

介護福祉学事典	共著	平成 26 年 10 月	ミネルヴァ書房	本書は「介護福祉学」の構築のためのエビデンスを確立することを主たる目的としている。隣接領域の学問を学びつつ介護福祉学特有の学問体系を構築することが重要である。 「介護福祉学事典」は介護の社会的ニーズに対して，専門的な知識を持って対応できる人材の育成とサービスの向上に寄与するため，教育の根拠となる「介護福祉学」に関する知識・技術の共通理解のツールとして活用できる内容とした。 B5 判　全 829 頁 共・編者：日本介護福祉学会事典編纂委員会 本人担当部分：P546-547 を単著。 「障害児に対する介護福祉」 障害児の定義・概念・考え方について述べ，障害児に関する介護，福祉の実践や制度の現状を明らかにした。また，障害児に対する介護について，近現代史から，ノーマライゼーションの浸透までの背景や経過を説明し，障害のある子どもも社会の中で他の人々と同じように生活でき，活動することができるための展望と課題について考察した。
―研究報告書―				

「乳がん患者のワーク・トリートメントバランスを支える患者支援プログラムの開発」	共著	平成 26 年 3 月	文部科学省学術振興会 文部科学省科学研究費助成金（基盤研究 C）研究成果報告書 （平成 23 年～平成 25 年） A4 判，全 27 頁	本研究では，乳がんを患い外来で化学療法を受けているものの就労を継続している者を対象として，対象者の抱えている苦悩や課題をインタビューにより明らかにした。またその結果をもとに，患者支援の関係機関が集まり，援助のあり方についての検討を行った。 本人担当部分：統計解析および研究の総括をおこなった。 共著者：新谷奈苗，守本とも子，立川茂樹，岩永誠，堀口和子，中村百合子，小池恵理子，永岡裕康，新谷昌也
―総説―				
地域で生きるデンマークの高齢者住居	単著	平成 22 年 5 月	大阪保険医雑誌 大阪府保険医協会 第 38 巻 522 号 P.30-P.35	北欧諸国のなかでも「高齢者住居」について独自な発展を遂げ，1987 年に施設建設を凍結するという政策転換に踏み切ったデンマークの高齢者住居と日本の画期的な高齢者共生住宅の事例を取り上げ，新しいステージに突入した日本の今後の高齢者住居の在り方を検討した。

終末期透析についての意識と実態調査報告書	共著	平成 28 年 3 月	ばんび NPO 法人奈良県腎友会 2016 年　春号　No.87 P.3-P.12	終末期医療についての関心の高まりとともに終末期腎不全医療のありかたについての議論も高まりをみせている。透析患者の終末期の意思決定を支える医療・ケアは転換期を迎え，今まさにその実現に向けて大きく動きはじめている。しかし，透析患者は生きるため，命を繋ぐために透析を選択しているのであって，終末期のことを主体的に考えることは，健康な人がそれについて考えるほど容易なものではない。 そこで，平成 27 年 8 月下旬～9 月下旬にかけて奈良県腎友会事務所の協力を得て，会員の皆様を対象に「終末期透析についての意識と実態調査」を実施し，その結果をまとめた。 本人担当部分:統計解析及び研究の総括をおこなった。 共著者:守本とも子，田場真理
地域で生活する高齢者の災害時非難状況に関する文献検討	共著	平成 29 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究 vol.4 P.19-P.25	世界各地で自然災害が増加している。高齢者人口の割合が世界で比較的高い国々での自然災害が増加しているという現状がある。このような状況にありながら近年,わが国の高齢化は加速しており,高齢者人口の割合は世界で最も高い。東日本大震災では死者うち 60 歳以
―国際会議発表― Effects of a Stuffed Animal Designed for Nursing Care （介護用ぬいぐるみの効果）	－	平成 22 年 9 月	6th International Conference of Health Befavioral Science Sustainable Health Promotion:Dialogue on Well-being & Human Security in Environmental Health (Kuala Lumpur, Malaysia)	本研究の目的は，施設入居高齢者の癒しと QOL の向上を考慮した「温かい介護用縫いぐるみ」の効用を検討することである。コーエンマンスフィールド(CMAI)調査票をもとに縫いぐるみ使用前・後の高齢者の行動の変化を比較した。結果として「同じことを繰り返し言う（質問する)」に有意な差がみられた。 担当部分：研究の総括を行った。(P.86) 共同発表者:守本とも子，新谷奈苗

Study about quality of life(QOL) of home oxygen therapy patient and related facters of actual life situation （在宅酸素療法患者のＱＯＬと生活実態との関連について）	－	平成 23 年 10 月	Proceeding of the 2nd East Asian Ergonomics Federration Symposium (EAEFS 2011)National Tsing Hua University, Hslnchu Taiwan, 4-8 October 2001 P.48	在宅酸素療法患者の生活実態と QOL の関連を明らかにするために，患者の QOL に関連する生活実態の要因を検討した。その結果，患者の活力や心の健康に肺理学療法の理解度が高いことが明らかになった。肺理学療法の理解度が高い患者は認知能力も高く，自己管理ができており，疾患があっても前向きな生活を送っていることが明らかになった。自己管理能力を身につけるためにも理学療法な
Difficulty in continuing job for breast cancer patients getting chemotherapy （化学療法後の乳がん患者が仕事を続ける上での困難）	－	平成 24 年 3 月	30th Congress of the International Commission on Occupational Health (ICOH 2012),Cancun center (Mexico)	乳がんの治療は化学療法を含むことから，副作用による身体的苦痛を伴う。しかし外来通院で治療を受けながら仕事をこなしている患者が多いことから，通院により化学療法を受けている乳がん患者の仕事と治療を継続していく上での困難を明らかにすることを研究の目的とする。 A 県内のがん拠点病院で乳がんと診断され，化学療法を受けている患者で仕事を継続している患者６名を対象とし，「仕事を継続していく上での困難」について半構造的インタビューを行った。結果から７つのカテゴリが抽出された。カテゴリは【治療の副作用からくる身体的苦痛】【仕事に穴をあけることに対する申し訳なさ】【再発への不安から仕事をセーブする】【職場の配慮不足】【病院のシステム上の不便】【治療の副作用から仕事の能力が落ちているのではないかという不安】【病名告知により同僚に気を遣われる辛さ】で構成されていた。 本人担当部分：研究の総括を行った。 共同発表者：Nanae Shintani, Tomoko Morimoto

Remote Fitness System Advantages with Exercise Classes for Community-dwelling Older People (地域在住高齢者の運動教室に遠隔フィットネスシステムを使用する利点)	—	平成 29 年 4 月	32nd International Conference of Alzheimer's Disease International, Kyoto, Japan	自宅で生活する地域在住高齢者を対象とした運動教室に遠隔フィットネスシステムを用いることの可能性を明らかにすることを本研究の目的とした. 奈良県内の特別養護老人ホーム 1 施設に遠隔フィットネスシステムを設置し，遠隔フィットネスシステムを使用した運動教室を週 1 回 30 分間自宅で生活する 65 歳以上の地域高齢者 10 名に対して 1 ヶ月間開催した．その結果，対象者の属性は女性 9 名，男性 1 名．平均年齢は 81.5 歳（SD=5.8）であった. 分析の結果，遠隔フィットネスシステムを使用した運動に参加して悪かったことについての訴えはなく，利点についての意見のみであった. 遠隔フィットネスシステムの利点として，32 コード，8 サブカテゴリー，4 カテゴリーが抽出された．地域高齢者は運動内容を覚えていることができないため，自宅にて一人で運動を行うのは難しいと感じていたが，遠隔フィットネスシステムを使用すれば運動指導者の動きを実際に見ることができ，指導者からの指示をその場で受けながら運動を行えるため，真剣に運動に取り組むことができ，効果的な運動の実施につながっていると感じていたことが明らかとなった．これらのことから，遠隔フィットネスシステムを使用すれば，認知症など記憶障害がある高齢者に対しても効果的な運動指導が行える可能性が示唆された. 本人担当部分：研究計画書の立案と調査結果の分析をおこなった. 共同研究者：田中和奈，吉村雅世，吉村昌子，東中須恵子，守本とも子
—国内学会発表—				

あらかじめの温熱刺激によるストレス防御効果について	－	平成 23 年 3 月	日本医療福祉情報行動科学会第 6 回大会抄録集 （岐阜市）	精神的ストレスの一種として，マウス個体に対する水浸拘束ストレスによる胃潰瘍発生モデルを用い，あらかじめの温熱刺激がその後のストレス暴露への防御効果を示すことを検討した。免疫染色法の解析結果で，あらかじめの温熱処理群では 8.2%のアポトーシスの減少がみられた。(P.11) 本人担当部分：結果の分析をおこなった。 共同発表者:山形力生，高橋昭久，守本とも子，大西武雄
地域における福祉講演「QOL を高める高齢者の生き方」（1）―「ストレスに関する学びの検討を中心に―	－	平成 23 年 6 月	日本保険医療行動科学会 第 26 回学術大会抄録集 （大阪府高槻市）	本研究の目的は QOL を高める高齢者の生き方をテーマとした地域住民のために企画した福祉講演への参加による地域住民の学びの成果を検討した。福祉講演での学びを今後の生活の中で具体的に活用していこうと考えているとともに，福祉講演会に参加したことが今後の生きる糧になっていたことが推測された。 本人担当部分：福祉講演会の講師であり，講演後のアンケートの分析を行った。 共同発表者：新川泰弘，守本とも子
在宅酸素療法患者の QOL に影響を与える介護者の支援方策の検討	－	平成 24 年 3 月	日本医療福祉情報行動科学会第 7 回大会抄録集 （大阪市　メルパルク大阪）	不可逆的に進行する肺病変がある慢性呼吸不全患者の在宅療養生活を維持するためには，気道感染の予防や日常生活活動の適切な制限といった患者自身の自己管理に加え，それを支える介護者の役割が重要である。本研究では，患者の QOL に影響を及ぼす介護者への支援方策を検討することを目的とした。(P.12)

看護師国家試験の出題基準に沿った講義内容の検討	－	平成 24 年 6 月	日本保健医療行動科学会 第 27 回　抄録集 （岐阜市）	本研究では，看護師国家試験出題基準に沿った小項目に対する講義の有無を明らかにし，教授内容の過不足や効果的な教授について検討することを目的とした。(P.78) 本人担当部分：研究の総括を行った。 共同発表者：渡邊美幸，奥百合子，小平由美子，箕浦文枝，守本とも子
高齢者を対象とする調査研究の評価について －介護老人福祉施設でアクティビティケアとして遠隔フィットネスシステムを用いる研究から－	－	平成 29 年 6 月	日本保健医療行動科学会雑誌　（千葉県鴨川市）	本研究の目的は特別養護老人ホームに入所する高齢者に対し遠隔地フィットネスシステムを用いた運動療法の実施から，要介護高齢者を対象とする調査研究の方法について示唆を得ることである．対象は介護老人福祉施設入所の高齢者 9 名(女性 1 名、男性 8 名)．調査期間は平成 28 年 5 月～6 月.平均年齢 86.6 歳，要介護度 1～4 (平均 2.4) であった。フィットネス運動は 1 回 30 分，週に 1 回火曜日の 13:00～13:30 の時間で計 4 回実施した．実施の初回と終了後、健康感と生活の満足感を VAS スケールで評価した．終了後グループフォーカスインタビューにより感想を聴取した．インタビュー内容の分析を行い，VAS スケールは統計的処理を行った．その結果、実施前後で健康感が数値的に低下していた。このことは「思うように動かない身体を実感する」ことになり健康感に影響するものであったと考えられる．高齢者の感想からは，ただ運動するだけでなく個別な対応を受けることを心地よく感じていると考えられた。介護に関わる職員の言動は効果があったと判断できるもので
―シンポジウム― 第 25 回　日本保健医療行動科学会学術大会	―	平成 22 年 6 月	主催：日本保健医療行動科学会 群馬県前橋市　前橋プラザ元気 21	一般演題発表　座長

第41回日本看護学会 老年看護　学術集会	―	平成22年9月	主催：日本看護学会 奈良県奈良市 なら100年会館　大ホール	演題：「高齢者のQOLを追及する―今果たすべき看護の役割」 コーディネーター
6th International Conference of Health Befavioral Science （第6回国際保健医療行動科学会議）	―	平成22年9月	主催：International Conference of Health Befavioral Science マレーシア クアラルンプール	演題:″Religious Hypnosis″ ファシリテーター
第26回　日本保健医療行動科学会　学術大会	―	平成23年6月	主催：日本保健医療行動科学会 大阪府高槻市 大阪医科大学看護学部	基調講演：「災害とリスクコミュニケーション」座長 ポスター発表　座長
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
第27回　日本保健医療行動科学会　学術大会	―	平成24年6月	主催：日本保健医療行動科学会 岐阜県岐阜市 じゅうろくプラザ	基調講演：「医療系大学におけるチーム医療教育の実際―医療のパラダイムシフトに向けて―」 講師
第9回　日本フットケア学会　岐阜セミナー	―	平成24年9月	主催：日本フットケア学会 岐阜県岐阜市 じゅうろくプラザ	一般講演：「フットケアのための足の解剖とケアそして歩行」 座長
日本サーモロジー学会 第33回大会	―	平成28年5月	主催：日本サーモロジー学会 奈良県奈良市 奈良学園大学登美ヶ丘キャンパス	招待講演：「がん看護と体温」 講師
文部省科学研究費およびその他の研究助成金				

文部科学省科学研究費補助金　基盤研究 C	―	平成 23 年～平成 25 年	文部科学省	研究題名：乳がん患者のワーク・トリートメントバランスを支える患者支援プログラムの開発 研究助成金：4,200 千円 研究代表者：新谷奈苗 分担者：守本とも子
文部科学省科学研究費補助金　基盤研究 C	―	平成 26 年～平成 28 年	文部科学省	研究題名：乳がん患者の就労を支える Job recovery path の開発 研究助成金：4,550 千円 研究代表者：新谷奈苗 分担者：守本とも子
奈良学園大学保健医療学部共同研究費	―	平成 28 年	奈良学園大学	研究題名：看護学生と進める健康づくり支援キャラバン隊ー奈良県内過疎地域を対象にー【2015 年度継続課題】 研究助成金：500 千円 研究代表者：東中須惠子 分担者：守本とも子
奈良学園大学保健医療学部共同研究費	―	平成 28 年	奈良学園大学	研究題名：照度アップ窓のブライトケアの可能性の研究ー認知症高齢者の睡眠支援ー 研究助成金：400 千円 研究代表者：吉村雅世 分担者：守本とも子

教　育　研　究　業　績　書

令和 2年 3月 31日

氏名　吉村　雅世

研究分野	研究内容のキーワード
看護学	高齢者、老年看護学、QOL、物語、人間行動科学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
―講義―		
1）奈良県立医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学Ⅱ」（援助論）		奈良県立医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学Ⅱ」（援助論）　（2年次生80名、通年2単位60時間）で講義内容と進行計画及び評価方法等を示すことで、学生に授業の概要を周知すると共に、予習・復習できる内容を示すことで学習効果を高めることを目的とした。
①シラバスの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	①授業概要、評価方法、教科書・参考図書を示した。学生の授業評価は、「シラバスに沿った授業である」、「資料の量は適当であった」という評価が高かった。
②プロジェクターを用いたスライドの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	②教科書の中で重要事項はパワーポイントを用いてスライドにして示した。スライドは資料として印刷し配付した。学生の授業評価は、「シラバスに沿った授業である」、「資料の量は適当であった」という評価が高かった。
③教科書以外に講義用資料を作成し活用	平成16年4月 ～平成17年3月	③最新の統計や教科書にない情報、最新の情報などはその都度、別資料を作成し配布して活用した。　学生の授業評価は、「シラバスに沿った授業である」、「資料の量は適当であった」という評価が高かった。
④「出席表」によるミニレポートの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	④学生の理解した内容・程度、授業の感想を知るために活用した。同時に、学生自身が記述することで自己の学びを確認・強化することを支援する方法として活用した。 毎回、出席表として、学び・感想、時にはテーマを示し、学生のコメントを書かせた。学生は熱心に記入していた。学生の記述から学習の程度や状況を確認できた。また、次の時間に一部を紹介したり、補足したり、質問に答えたりすることでフィードバックを行うことができた。その1つに、初講の時に高齢者のイメージを色にたとえて記述してもらい、次の講義で学生が何色を示しているか傾向を統計でフィードバックする方法を活用している。学生は次の出席表の感想で、自分たちが高齢者をどの色でイメージしているか、他の学生はどのようにイメージしているかを知ることができたと感想をのべている。この方法は、後述の「老年看護概論」「介護概論」と、援助の対象が高齢者となる科目を学ぶ学生達に活用している。学生の色イメージの傾向は、灰色、茶　深緑、オレンジをイメージする傾向にあった。この結果を学生に示すことで、自分たちが高齢者をどのように色イメージしているかに気づき、今後の授業を通して、これからの高齢者を心身社会的に理解することに役立つと考える。出席票のコメントから高齢者を肯定的に見ようとする姿勢が感じられた。

事項	年月日	概　　要
⑤事例による看護過程のペーパーシュミレーションの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑤疾患を抱える高齢者理解を深める、また、看護過程をリアリティに考える能力を高める学習方法として活用した。 高齢者に特徴的な疾患の事例を多用し、看護過程の展開を、1人で、又はグループでペーパーシュミレーションする演習に活用した。演習では、グループで立案した看護計画を実演・発表し、クラスでの共通理解を図った。事例は、脳梗塞、大腿骨頸部骨折、肺炎、パーキンソン病、認知症、COPDといった高齢者に特徴的な疾患を持つ事例とした。
⑥講義用教科書の作成と授業への活用 一部執筆（再掲）	平成16年4月 ～平成17年3月	⑥授業する内容を１冊のまとめた教科書を作成し活用した。 「老年看護学」の一部を執筆し講義用の教科書を作成した。著書の項目を参照。B5版で、国家試験の老年の領域に関する問題に対応している。疾患を抱える高齢患者看護の知識・事前学習として活用できるものである。特に、事例の演習や実習で活用できる図書であると確信している。
⑦グループワークと発表を活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑦自己の学びを表出する場、他者の意見を聞く場として活用した。 他者の考えや力を借りて自己の考えを発展させることを目的とした。毎回10分程度3～4人の学生同士で話し合い、発表する時間を作った。特に、学生が対話し意見を交換することで、人の話が聞ける、自己の思考を外在化する、他者の意見を取り入れる、自己の学びを発展させる、学びを共有する、といった学習効果をねらった。実施後のレポート・感想より学生は他の学生の意見が聞けた、自分と同じ意見の人がいることで自己を肯定できた、自分とは違う意見が参考になった、看護について考えを発展できたといった感想があり、短時間のグループワークは効果があると評価できた。
⑧課題レポートの活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑧学生が、自ら課題を持って高齢者理解に取り組むことの支援として活用した。また、45時間の学習時間を効果的に使う方法として活用した。 約3000字程度で、老年看護で特に学びを期待したい点をテーマにした。（例：貴方の高齢者イメージ、老年看護の特徴等）レポートから学生は個々に高齢者の特徴を掴んでいると判断でき、高齢者について記述する機会を作ることは教育的効果があると評価できた。

事項	年月日	概　　要
⑨高齢者体験の活用 市販の高齢者・障害者体験装具の活用 学生と共にOHPシートを用いて高齢者眼鏡を作成し、体験学習で活用する。	平成16年4月 ～平成17年3月	⑨学生が経験したことのない運動機能・視聴覚機能の低下した高齢者を理解することの支援として活用した。 高齢者体験装具、白内障眼鏡を活用し、学生にとって、加齢による視聴覚機能と運動機能の障害という未知の世界を体験することで、高齢者に対する看護の必要性を理解し、看護の方法を検討し実施する創意工夫と行動力が養われることをねらいとしている。 体験内容は視力、聴力、皮膚の触覚、四肢の関節拘縮等である。生活体験を取り入れることで、生活機能のアセスメントにも役立っている。体験レポートには看護学生として体験した加齢に対する驚きや看護の必要性が記述されていた。学生は体験を高齢者理解に役立て、老年看護の目的を理解することで実践に向けて創意工夫がなされると評価している。
⑩視聴覚教材の活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑩高齢者をイメージしにくい環境に暮らす学生に、よりアクチュアリティな高齢者理解を支援するため活用した。高齢者の実際や加齢による身体機能の低下を動画（ビデオ・DVD）で見せることで、より現実的な高齢者理解を図ろうとした。
⑪ビデオ・DVD映像の活字化 資料作成、活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑪DVD・ビデオの内容を活字にして印刷資料とて作成し、高齢者理解の学習支援として活用した。視聴中は映像に集中し、後で資料を確認することで学びを深めることを期待した。 授業評価で映像は効果的に使われていたと言う評価であった。また、出席表の感想でも映像の資料がよかったという記述があった。
⑫アクティビティケアの企画・実践を演習として実施する。	平成16年4月 ～平成17年3月	⑫レクリエーション実践方法・技術を獲得することで、アクティビティケアの能力を高めることを目的とした。グループでレクリエーションを企画し学生同士で実践・演習を行う。 演習では、企画書を作成し、目的・目標、方法、注意事項を明らかにしておく。実施後は目標の達成状況をまとめ次回の課題まで検討する。アクティビティケアは介護老人保健施設での実習で活用できる援助技術の能力を高める。また、企画書を用いた実践は、問題解決思考の訓練であり、看護過程の実践練習も意図している。学生には企画・アイデア・発想の力があり、アクティビティケアを企画し実践することを通して、看護の企画力・行動力の向上を図れると考えた。学生は自分たち学生が相手であるが、できるだけ高齢者をイメージしようと高齢者体験装具を活用するなど積極性と行動力が見られた。次年度の老年看護実習（特別養護老人ホーム、介護老人保健施設）で実際の入所者に対して実践するときその成果が発揮できていると自己評価している。 また、看護過程の展開を指導する歳、学生が教室で経験した出来事も実在性を持つ経験として学びを助けていると考え、学生の体験・経験の機会を作る工夫をしている。

事項	年月日	概　　要
⑬ナラティブアプローチの視点を取り入れたグループワーク	平成16年4月 ～平成17年3月	⑬前述の「⑦グループワーク」をより効果的に実施できる方法として、学生の姿勢を明確にするために「ナラティヴ」論を活用した。 テーマについて語り合い、語られたものを発表する機会を「ナラティヴ」の考え方で指導した。全体で10～15分のナラティヴ・アプローチといえるもので、「学生は発表しなければ」という気持ちから「自分の意見を語る」という気分の転換があると考えている。感想では、「グループ内での語り合いは、他の学生の意見や思いを知ることができ、考えを広げることができた」「全体での発表も様々な考えがあることがわかった」と好評であった。
⑭福祉パーク　体験見学の活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑭奈良県立福祉パークが保持する、介護具、自助具、住宅設備を活用し、学校で保持するものよりさらに多くの用具を用いて高齢者体験や生活体験を行い、高齢者理解を深めることを目的とした。奈良福祉パークは学校から車で15分の場所にある介護実習室を持つ施設である。 ここでは、高齢者体験装具を装着して、介護住宅体験、各種車椅子・トイレ・浴室・自助具の体験をおこなう。また、車椅子の自走・他走や視覚障害者として運動公園、模擬交差点などを散策・歩行体験をおこなう。実施後のレポートから、学内ではできない、より生活に近づいた体験ができたという感想があった。
⑮アセスメントツーツの冊子の作成・活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑮看護過程を展開する際、多様で個別的なの高齢者の情報収集とアセスメントを助けるツールとなることを目的に作成した冊子である。　領域責任者と共同で作成し活用した。（片面印刷32頁） 高齢者の「日常生活行動」、「感覚器」、「栄養」、「認知機能」をアセスメントすることを助けるもので、観察とアセスメントの視点を示し、実際に記述できるシートを綴った。改良長谷川式認知症簡易スケールや褥瘡のスケール、転倒スケール等も使用した。その後の、「老年看護学実習」で実際に活用し、高齢者理解を深め高齢者の多様性と個別性の理解に役立てることができていたと評価している。
⑯看護の実際をリアリティにシュミレーションするための事例の工夫・活用	平成16年4月 ～平成17年3月	⑯高齢者の健康レベルに応じた看護過程の展開を学習できる事を目的に事例を作成した。 事例は転倒・骨折の発症から、搬送、入院、治療、リハビリ、施設入所、在宅へと一連の経過を持つ事例を作成した。学生は各健康レベルに取り組み、看護過程の展開をペーパーシュミレーションしていった。⑦⑬のグループワーク・発表を併用した。

事項	年月日	概　　要
⑰「昭和を生きた高齢者」をテーマにグループワーク、スライドで成果発表の活用。		⑰自分たちとは違う世代の高齢者の理解を深めること、また、積極的な高齢者理解を行うことを目的に「昭和を生きた高齢者」というテーマで6～7名のグループワーク・発表を課題として計画した。 各グループで食事、生活、道具、音楽、娯楽、ファッション、流行、医療、戦争といったテーマを決め、グループワークをおこなった。グループワークの概要は初講時に示し、発表は終講時に行った。成果はパワーポイントでスライドを作成し発表した。発表内容は学生達が体験したことのない、今まで直接関わったことのない、高齢者（後期）の生きてきた社会についてであった。スライドは発表資料として冊子にした。学生に配布するとともに、実習施設へも学生のレディネスとして配布した。レポートでは高齢者の活きた時代に近づけたという感想があった。これらの活動・学びは、次の年の各論実習に生かされ、高齢者の視点で生活を考えることができていると自己評価している。学生の発表内容は一部学生達の同意を得て、オープンキャンパスで掲示している。参加している学生より付き添いの父母から「懐かしい」と好評である。
	平成17年4月 ～平成22年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学概論」（2年次生80名、前期30時間中、4～6時間）において左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫･活用した。
	平成22年4月 ～平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学概論」（2年次生80名、前期30時間）において左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫･活用した。
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「看護学概論」（2年次生100名、後期30単位）で左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫･活用している。
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」（3年次生100名、前期60単位）で左記①～⑰を工夫･活用している。
	平成23年4月 ～平成23年3月	岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科、臨床検査学科選択科目「看護概論」（3年次生100名、後期15単位）で左記①～④、⑥～⑪、⑬を工夫･活用している。
⑱デジタル教科書の活用	平成24年12月 ～平成23年3月	ナーシンググラフィカ全34冊の電子教科書を活用している。特に「高齢者の健康と障害」「高齢者看護の実践」を講義中では、図表や映像をスライドとして活用している。岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」「老年臨床看護実習」で活用している。

事項	年月日	概　　要
2）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学概論」(2年次　後期　80名) 「老年看護学援助論」(3年次　前期　80名)	 平成27年10月 ～現在に至る 平成28年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科「老年看護学概論」(2年次　後期　80名)「老年看護学援助論」(3年次　前期　80名)では授業計画を作成し、授業計画に沿って15回の講義を行っている。 前述の①～⑤、⑦～⑫、⑯～⑱は一部変更し継続した。②での　毎回スライドは16枚とし、ファイルしやすいように工夫した。④の毎回の小レポートでは、必要時フィードバックし共有している。学生が誤った理解している場合の対応、学生の質問に答える機会にもなっている。授業初日の小レポートには「高齢者のイメージを色で示すことを促す」。毎年ではあるが灰色、茶色、オレンジが多い。これは介護学生も、放射線科の学生も同じ傾向にある。 ⑥作成に関わった教科書は使用せず、ナーシンググラフィカシリーズ(メディカ出版）と看護学講座(医学書院）をデジタル版と伴に活用した。⑨高齢者体験装具は部分的装着型の「老いたろう」からスーツタイプに変更した。高齢者体験めがねの材料を透明クリアホルダと黄色セロファンに変更した。⑭福祉パーク見学は地域的に活用困難となり、その代わり学内演習に組み込み継続している。⑮アセスメントツールは規模を縮小して活用している。⑱では⑥と重複するが医学書院のデジタル版を併用し活用している。
⑲　動画の作成　ipadで活用 ・高齢者体験の方法 ・呼吸器検査の看護	平成27年10月 ～現在に至る	⑲動画　ipadで学生が視聴できる動画を作成した。訳10分　高齢者体験用装具の装着、歩行や階段昇降、見え方、巧緻作業の困難等を順を追って経験できるように工夫した。学生は個々にipadから実際の映像で予習をして、演習に望むことを期待している。
⑳認知症サポーター養成講座　1コマを使い認知症とケアの理解を深める。認知症サポーターとして認知症患者と関わる動機付けも期待している。	平成28年4月 ～現在に至る	⑳授業の中で大学の所在地の地域包括支援センターに依頼し、学生を対象に認知症サポーター口座を開催した。既習の認知症ケアの認知症サポーターではあるが認知症患者と関わる動機付けが期待した。学生はサポーターという役割に興味を持っていた。
―実習―		
3）奈良県医科大学看護短期大学部「成人看護学実習」（3年生次、4単位　180時間、1グループ8名5グループ計40名を担当し、以下の取組を行った。	平成9年4月 ～平成13年3月	実習調整、学生への実習指導を実施した。指導の内容は、実践の見守り、実習環境の整備・調整、相談、学習支援、看護モデル、安全確保、カンファレンス等である。臨地実習において学生が自己の実習目標を達成できる環境を作る為に、教材や方法に工夫した。実習は、血液・呼吸器内科病棟において、１人の成人期の患者を学生に受け持ち看護過程の展開を実施するもので、成人慢性期の実習であった。
①毎日、実習開始～終了時間を実習指導の時間とした。学生が必要とするときに必要な指導を行う。	平成9年4月 ～平成13年3月	①学生の実習中は共に病棟で過ごし、常時指導できる体制をとることを目的に行った。
②看護過程の展開を中心に看護を実践する	平成9年4月 ～平成13年3月	②看護過程を展開ができることを目的に、実習方法は１人の患者を受持つ方法を用いた。
③実習マニュアル（要項）の作成、活用	平成9年4月 ～平成13年3月	③学生が実習に望む際に可能な限り不安や心配を取り除き、実習目標を理解し、実習行動が取れることを意図して作成した。実習要項は、実習の目的、到達すべき目標、具体的な実習方法、注意事項を内容とし「要項を読めば口頭説明は~~は~~不要」というスタンスで作成した。

事項	年月日	概　　要
④実習記録用紙の作成、活用	平成9年4月 ～平成13年3月	④学生が実習目標を達成できる方法と手順として、項目を吟味して実習記録用紙を作成した。データーベースは単位認定者の助言を下に「科学的看護論」をベースして作成した。記録用紙の項目に沿って記述すれば実習目標が達成できることをねらい作成した。
⑤実習計画ワークシートの作成、活用	平成9年4月 ～平成13年3月	⑤学生の実習目標を達成できる環境を作ることを目的に実習計画ワークシートは作成した。指導教員、臨地指導者用の記録である。ワークシートにより担当する8名の学生の行動をは把握すると共に、実習指導者との連携や、他のスタッフとの調整に役立てた。
⑥実習において毎日カンファレンスをおこなう	平成9年4月 ～平成13年3月	⑥1日をまとめ、明日の計画を立案する機会を設ける環境として、毎日、カンファレンスを実施した。
⑦実習前にバイタルサインの測定についての技術チェックを行う	平成9年4月 ～平成13年3月	⑦実習に際しての技術確認、基本的看護技術の確認のためバイタルサイン測定の技術チェック、必要な観察事項の事前学習を行った。実習が始まるまでにチェックをして実習に望んだ。 受持患者はほとんどが肺がん、血液のがん患者であった。学生はがん患者との対話に悩みながら徐々に良い関係性を築き、ほとんどの学生が実習最終日までには受け入れられる存在となり、必要な情報が得られ、慢性期看護、がん看護の特徴を学んでいた。
4）奈良県医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学実習」		奈良県医科大学看護短期大学部看護学科「老年看護学実習」3年次生通年4単位180時間1グループ8名4週間の実習期間は「介護老人福祉施設実習1週間、介護老人保健施設実習1週間」、「病院実習2週間」で構成されていた。そのうち、「病院実習」、10グループ計80名を担当した。今までの成人慢性期の実習から、学生にとって患者、家族、実習指導者、病棟看護師との人間関係が学生の学びに少なからず障害になっていると感じた。そこで、指導では以下の2つ⑧⑨を追加し工夫活用した。前述の①～⑦に以下を加えた。
⑧実習施設における学生の出迎え	平成13月4月 ～平成17年3月	⑧実習初日は、学生が病棟で受け入れられる存在であることを感じることを期待して、病棟で学生を出迎えるようにした。 学生にとって、その実習場所で自分たちが尊重して受け入れられているか否かで実習成果に影響を及ぼすと考える。実習指導者と協力しながら、共に学生を待ち受ける姿勢を示す工夫をした。学生は病院実習、スタッフへの緊張感を和らげ、持てる力を発揮できたと評価している。

事項	年月日	概　　要
⑨実習指導に際し、ナラティヴ・アプローチを活用。	平成13月4月 ～平成17年3月	⑨実習指導の個別面接の方法としてナラティヴ・アプローチを活用した。 整形外科病棟での実習で、加齢による関節の変形により運動障害から生活障害を抱え手術治療を受ける高齢者が主な対象であった。寝たきりになる不安を抱える高齢者であるが、若い学生には実感が薄いと考えられた。特に工夫したのは、学生の語りをカンファレンスや面接から意図的に「聴く」機会を設け、語られた「実習の物語」から、学生が自己を振り返り看護の学びを深めていくことをねらい、実習記録を見ながらナラティヴアプローチによる指導（聴き取り）を実践した。学生の物語では、自分の看護の力たらず、知識の未熟さ、看護への思い、コミュニケーションの困難さ、自分の対応に対する患者の反応でうれしかったこと等が語られていた。また、自分の学習不足やどのように学んでいこうかという気持ちの表出もあり、学生のさまざまな思いを看護の指導に活かしていった。同時に、学生には受け持ち患者の「病の物語」を聞くことの効果や活用することの有効性を指導している。実際に体験することで「語ること」「聞くこと」の効果を実感する学生もいた。
5）公立学校法人奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学実習」	平成17年4月 ～平成23年3月	公立学校法人奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学実習」（3年生次後期、2単位90時間必修）１グループ8名　5グループ計80名担当1週間の介護老人福祉施設、1週間の介護老人保健施設の計2週間の実習を計画した。前述の①～⑨に以下の2つ⑩⑪を加えた。
⑩介護老人保健施設でアクティビティケアを実習項目とした。	平成17年4月 ～平成23年3月	⑩アクティビティケアは、高齢者の健康を守る、QOLを高める、認知症高齢者へのアプローチ、といった高齢者支援の方法を学習することを目的に実習方法に加えた。 方法は、学生は実習グループで受け持ち高齢者を含む入所者の集団にレクリエーションを実施することを企画し実践することとした。目的、目標、方法、注意点をまとめた企画書を作成する事から始め、準備し、施設のスタッフの協力を仰ぎながら実施した。看護過程の展開でも、アクティビティケアを積極的に取り入れ、高齢者とのコミュニケーションや人間関係の醸成につなげ、施設における高齢者看護の能力を修得していると評価できた。実施後の反省会で、目標とした利用者の活発な参加や、自発的行動、積極性や笑顔が見られた、できないと思っていた人があんなに体を動かせることがわかった、といった意見が上がり、実施したケアの効果を実感することで、学びにつながったと評価できる。
⑪高齢者のアセスメントツールの冊子制作と活用。	平成17年4月 ～平成23年3月	⑪アセスメントツールは、「―講義―」の項で述べたとおり領域責任者と共同開発した。学内の演習で使用し、実習では生活機能のアセスメントのための道具として用いた。 学生の実習に対する授業評価は全体で平均3.5（5点満点）であった。教員の自己評価としては、疾患と加齢による身体機能の低下の両方から生活機能をアセスメントすることに活用できていると評価している。

事項	年月日	概　　要
６）岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護学実習」3年生次後期4単位180時間1グループ5名　10グループ計50名担当、4週間の実習期間を「介護老人保健施設2週間」「病院2週間」と計4週間の実習を行っている。 前述の①～⑪に以下を加えた。 ⑫看護過程の展開で、データベースを身体の系統的分類（循環器、呼吸器等）から、ゴードンの11項目の分類を活用した。	平成23年4月 ～平成26年3月	⑫老年看護の学習の視点として生活機能のアセスメントに注目することがもとめられている。従来の系統的アセスメントでは学生に生活や心理面のアセスメントにとまどいが見られていた。そこで、ゴードンの11項目を用いて、身体・心理・社会の3側面から高齢者を捉える方法に変更した。学内演習で事例を用いて十分ペーパーシュミレーションを行い、実習で活用している。「病院実習」「施設施設」とも同じ方法で看護過程の展開を実践できるように工夫した。
７）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技実習Ⅱ」 2年次前期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	担当者の一人として実習計画を把握し、オリエンテーションに参加している。実習進行上の教員の相談にのる、あるいは、教員を支援して臨地で実習指導を行った。　平成28年度は学生4名を担当し、実習指導、実習環境調整、評価等を行った
８）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技実習Ⅰ」 1年次後期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	担当者の一人として実習計画を把握し、オリエンテーションに参加している。実習進行上の教員の相談にのる、あるいは、教員を支援して臨地で実習指導を行った。
９）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学概論」 2年次　前期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	基礎看護学技術演習の内、食事の援助、通常の食事の援助、経管栄養を受ける患者の援助、輸液を受ける患者の援助の講義を実施し演習を計画した。実際の演習を統括し、教員指導と学生の学習支援を行った。
１０）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技術演習」 2年次　後期　80名	平成27年4月 ～現在に至る	基礎看護学技術演習の内、排泄の援助を担当し、排泄の援助　導尿　浣腸　摘便の講義を実施し、演習を計画した。実際の演習を統括し、教員指導と学生の学習支援を行った。
１１）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学実習Ⅱ」病院実習 3年次　後期　80名	平成28年9月 ～現在に至る	医療機関における臨地実習を計画した。 全５施設で１クール４グループが実習を行う。 全体の統括　各教員の指導　実習調整、全学生の単位認定に関わる。前述の①～⑨⑫を実施、活用した。⑪⑫は規模を縮小し必要時活用した。
１２）奈良学園大学保健医療学部看護学科 「老年看護学実習Ⅰ」 介護老人保健視閲　デイケア等 3年次　後期　80名	平成28年9月 ～現在に至る	介護老人保健施設における臨地実習を計画した。 ６施設で１クール６～２グループが実習を行う。 全体の統括　各教員の指導　実習調整を主なぎゅむとするが、学生を担当し実習指導も行う。 28年度は2施設で計25名の学生を担当し実際に指導し評価単位認定に関わった。残りの学生も含む全体の単位認定に関わった。前述の①～⑨⑫を実施、活用した。⑪⑫は規模を縮小し必要時活用した。

事項	年月日	概　　要
—その他— 1）看護専門学校生の講義に関するもの		
・診療科に特徴的な診察用具、包帯材料を実際に扱う。	平成3年4月 ～平成5年3月	奈良県医師会看護専門学校看護学校進学コース「耳鼻咽喉科の疾患と看護」（2年持後期：2コマ）において、解剖学的な特徴（感覚器、粘膜、外界とつながっている）と病理学的な特徴（炎症、腫瘍）から、看護の特徴（必要性）・方法について講義した。診療科に特徴的な診察機具・材料（ピンセット　ガーゼ類）を提示し、触れることでリアリティのある学びを工夫した。自由記載の感想から「学びがあった」との記述がみられた。
・出席表による学びの確認 ・補助教材の準備　（文献、他の図書の資料等）	平成7年4月 ～平成8年3月	奈良県立医科大学附属看護専門学校（1年次6コマ）「基礎看護技術」（環境、衣服、清潔）において、教科書のみでは技術を実施する根拠が不足していると考え、複数の根拠を学生に提示できるよう補助教材を作成し使用した。学びの記述がみられた。自由記載の感想から「学びがあった」との記述がみられた。
2　作成した教科書・教材		
1）岐阜医療科学大学保健科学部看護学科実習要項（実習の手引き）編集総括	平成23年4月 ～平成26年3月	4年間のすべての実習における、実習マニュアルとして作成した。岐阜医療科学大学保健科学部看護学科実習委員会委員長として編集を行った。
2）事例教材	平成17年4月 ～平成23年3月	加齢に起因する疾患と看護、成人期から抱える慢性病と加齢が及ぼす生活機能の障害と看護等が学習できる事例を考案した。 ① 脳梗塞に罹患し介護老人保健施設に入所する高齢者 ② パーキンソン病を抱える高齢者の看護 ③ 慢性閉塞性呼吸器疾患を抱える高齢者の看護 ④ 生活者としての高齢女性の転倒・骨折救急搬送、周手術期、回復期、慢性期、在宅復帰までの健康障害のレベルを追った看護 奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護学援助論」で作成し、現在に至る。毎年見直しながら、学生の特性に応じて修正して使用している。
3）老年看護学アセスメント・ツールとしてのマニュアル教材（冊子）	平成17年4月 ～平成23年3月	高齢者の身体・精神機能を評価するツールとしてアセスメントマニュアルを共同で作成した。高齢者の感覚機能、栄養状態、認知状態、日常生活機能を評価する方法として、既存の尺度を用いた冊子である。奈良県立医科医学部看護学科「老年看護学援助論」で作成した。
	平成23年4月 ～平成26年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年臨床看護」において、高齢者を総合的に評価する視点から改正した。

事項	年月日	概　　要
4）授業毎に授業内容のポイントをまとめたスライドの教材を作成し授業に活用した。（パワーポイントを用いる）	平成16年4月 ～平成26年3月	担当する講義の要点をスライドにまとめ講義の教材とした。制度の変更や新しい視点、知見等、変更しながら作成し、活用している。 奈良県立医科大学医学部看護学科「老年看護概論」「老年看護学援助論」で作成し、活用した。 岐阜医療科学大学保健科学部看護学科「老年看護概論」「老年臨床看護」において、作成し活用した。 岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科・臨床検査学科「看護概論」において、作成し活用した。 関西学院大学社会学部社会福祉学科「介護概論」において活用した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」「介護技術」において作成し活用した。
5）「生活支援技術・介護過程」教科書、一部執筆（再掲）	平成24年4月 ～平成24年9月	介護福祉士養成を目的にした教科書であるが、老年看護では介護施設も看護の場である。老年看護として看護学生が学ぶ内容になるように工夫した。 「介護者の倫理」の執筆を担当した。高齢者ケアに携わる職種の倫理としてまとめたもので、看護職にもあてはまるものである。特に、個人情報、電子情報、実習学生の守秘義務など、近年の社会情勢を考慮した内容を工夫した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」「介護技術」で使用した。
6）「介護の基本　コミュニケーション技術」教科書　一部執筆（再掲）	平成24年4月 ～平成24年9月	「睡眠と援助」の執筆を担当した。看護学生も学ぶ内容になるように工夫した。 関西学院大学人間福祉学部「介護概論」で使用した。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 実習要綱の作成	平成26年5月 ～現在に至る	開学申請時に作成した実習要綱を再確認した。新たに追加が必要な内容を挿入した。 （例）気象警報発令時の対応区域、個人情報保護について
・奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技術演習Ⅱ」2年次　前期　80名 排泄の援助　演習計画書の作成 演習評価表の作成　模擬便の作成	平成27年4月 ～現在に至る	演習計画書は　便器・尿器の取り扱い方　寝たままでの便・尿器の介助、寝たままでのオムツ交換モデルを用いた導尿（男女）、モデル人形による浣腸・摘便、からなる。 よりリアリティな演習になるよう、模擬便を作成しオムツ交換の演習を計画した。絵具、洗濯用化学のり、ケイ砂によるスライムを模擬便として作成した。
・奈良学園大学保健医療学部看護学科 「基礎看護学技術演習Ⅱ」 2年次　前期　80名 食事の援助　演習計画書の作成　演習評価表の作成	平成27年4月 ～現在に至る	演習計画は　形態の違う食物の摂取と介助、食事摂取を支援する自助具・介助具の実際、モデル人形を用いた経管栄養法からなる。

事項	年月日	概　　要
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 ＤＶＤ学習資料の作成	平成27年9月 ～現在に至る	身体の加齢変化を説明するＤＶＤのナレーションを筆記し活字としてＡ４用紙にＤＶＤ資料を作成した。全６ページ。文章中、特に学んでほしい単語には白地で隠し、学生が映像を見ながら記入できるように工夫した。学生は全部埋めることが出いていないことがわかり、次回の授業初めに正解を口頭で説明した。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 呼吸機能の変化　体験	平成27年9月 ～現在に至る	スパイロメーターを用い、肺活量、１秒量から肺年齢を測定した。全員は体験できなかったが、一部の学生が実施できた。時間的制約で全員が体験できない現状から、後にＤＶＤ作成に至った。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義教材：高齢者の身体的加齢変化 見え方の変化体験グッズ作成	平成27年9月 ～現在に至る	透明でない曇りのあるクリアフォルダーを高齢者の眼球の水晶体に見立て、白内障の体験とした。クリアフォルダーに、黄色セロハンをはさみ、水晶体が変性した高齢者の見え方を体験できるようにした。クリアフォルダーは学生各１枚を配布した。黄色のセロファンは、10×3センチほどにカットしたものを学生に配布した。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 講義資料作成 １講義スライド16枚　A3用紙	平成27年9月 ～現在に至る	講義資料は1コマスライド16枚とし、Ａ３用紙に裏表で印刷するようにし、半分に折るとA4冊子としてファイルできるよう工夫した。高齢者の加齢変化では、スライド中の重要語句を白字で書くし、学生と一緒に回答しながら、進めた。国家試験の老年看護領域で問われやすい問題であることを印象付けたかった。　　中間期授業評価で、スライド、資料で見にくいという意見はなかった。「スライドに対応する教科書のページを入れてほしい」といった希望など、学習上必要と思われる希望には掻痒に努めた。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 演習用動画制作　高齢者体験	平成28年3月 ～現在に至る	学内演習用に、高齢者体験についての動画を制作し、授業に活用している。動画は奈良学園大学のipadを使った学習支援の一環のなかで、専用のアプリを用いて閲覧できる。シナリオ作成、撮影監督　編集に関わった。□村雅世、田中和奈
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 演習用動画制作 呼吸器検査の看護	平成28年3月 ～現在に至る	高齢者の呼吸器系のアセスメントとして、呼吸器検査を受ける高齢者の看護の動画を作成した。シナリオ作成、撮影監督　編集に関わった。□村雅世、田中和奈
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学実習Ⅰ 実習要項、記録用紙の作成	平成28年5月 ～現在に至る	老年看護学領域の他2名の教員と共に作成した。実習の目的、方法、注意事項等、「本冊子を読むことで、学生は実習の行動目標が立てられる」という目的を持って作成した。実習記録は、学生が容易にコピーできないようにあらかじめ必要な枚数を綴じた冊子を作成した
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学実習Ⅱ 実習要項、記録用紙の作成	平成28年5月 ～現在に至る	老年看護学領域の他2名の教員と共に作成した。実習の目的、方法、注意事項等、「本冊子を読むことで、学生は実習の行動目標が立てられる」という目的を持って作成した。実習記録は、学生が容易にコピーできないようにあらかじめ必要な枚数を綴じた冊子を作成した

事項	年月日	概　　要
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論　　授業教材 ①授業スライド ②ＤＶＤ資料 ③高齢者の視覚体験用具	平成28年10月 ～現在に至る	①授業資料のスライド資料　平成28年度版で、今年度発表の人口動態の統計をもとに作成した。②27年度のものに今年度の統計を補足した。③クリヤホルダーと黄色のセロファンを用い、授業の中で学生各自が水晶体の混濁と色覚の異常が体験できることを狙った。クリヤホルダーは3種類の透明度になるようにした。
・奈良学園大学　保健医療学部看護学科 老年看護学概論 授業教材　グループワーク資料	平成29年1月 ～現在に至る	グループワークの成果として学生が作成したスライドを発表用資料として冊子を作製した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）学生の授業評価アンケート結果	平成20年3月 ～平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科　「老年看護学援助論」「老年看護学実習」　で授業評価を行った。 平成20年の「結果は、援助論平均４．０(5段階評価）、実習は３．９であった。評価の高かった項目は「シラバスに沿った内容」「授業への取り組み」であり、低かった項目は「レポート課題が多い」という結果であった。
	平成24年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科　「老年看護学概論」「老年臨床看護」「老年看護学実習」学生評価を行った。
		「老年看護学概論」の評価は平均４．０であった。良かった点では教材がわかりやすかったといったコメントがあった。改善点ではマイクを使っているが聞き取りにくかったと言ったコメントがあった。
		「老年臨床看護」の評価は平均４０．１５であった。良かった点と改善点では資料が見やすかった。もっとパワーポインタを使ってほしいと言ったコメントがあった。
		老年看護学実習では平均４．２５であった。丁寧に教えてもらった、もう少し関わってほしかったといったコメントがあった。
		岐阜医療科学大学保健科学部放射線学科、臨床検査学科　「看護学概論」の学生評価を行った。平均４．７７であった。
大学業務評価	平成24年度	岐阜医療科学大学保健医療学科期末評価　前年度と比べ評価に変化はなかった。
大学業務評価	平成25年度	岐阜医療科学大学保健医療学科期末評価　前年度と比べ評価に変化はなかった。
・学生の授業評価アンケート結果	平成27年10月	奈良学園大学保健医療学部 「老年看護学概論」 授業4回目で中間評価を行った。大きな改善の必要な項目はなく平均と考えられた。学生には結果と改善するところを伝えた。改善の必要なところ スライドに対応する教科書のページを追加する

事項	年月日	概　　要
・学生の授業評価アンケート結果	平成28年2月	奈良学園大学保健医療学部 「老年看護学概論」 学生評価　授業終了時 資料、内容　シラバスとの整合性など　特に意見はなかった。
・学生の授業評価アンケート結果	平成28年10月	奈良学園大学保健医療学部 「老年看護学概論」 授業4回目で中間評価を行った。大きな改善の必要な項目はなく平均と考えられた。学生には次の授業で、評価の結果と改善するところを伝えた。 改善の必要な項目では、資料についてで、資料の内容に教科書の該当ページを追加した。

事項	年月日	概　　要
4．実務の経験を有する者についての特記事項		
1）高校生に対する講義「看護学」	平成26年10月	奈良文化女子高等学校学校見学におけるミニ講義 高齢者の身体的加齢について
	平成28年8月	オープンキャンパスミニ講義　2回　　高齢者の身体的加齢について
2）研修会講師	平成22年5月	平成22年度高取町地域法活支援センター研修会講師　「高齢者ケアとナラティヴアプローチ」
	平成24年3月	平成24年「養成期間と医療機関の連携」事業研修会　講師　「実習指導に望むこと」
	平成24年9月	平成24年中濃地区特別養護老人ホーム看護職能研修会　講師　「高齢者体験から理解する高齢者」
	平成25年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。
	平成26年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。
	平成27年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。
	平成28年9月	奈良県看護協会臨地実習指導者会講師 老年看護学実習　4時間 以下の目的目標で内容を計画し講義を行った。 ・老年看護学実習の展開について理解を深め、演習等を通してその実際を学ぶ。実習の目標、指導展開・計画方法を知る。実習の組み立てを知る。指導者の役割を知る。
3）会員企画シンポジウム　講師	平成25年8月	第10回日本質的心理学会　一般企画シンポジウム「今あらためて質を問う」にて、話題を提供した。テーマは「高齢者の語り場面の「質感」の記述　―看護場面の会話から到達する看護師の「聴く」ことー である。 コーディネーター：森岡正芳 質的データを量的データに変換し分析する傾向にある質的研究をについて、現場の質をもう一度考え直そうとするを趣旨で企画された。心理学、社会福祉学、教育学の立場から話題提供される中で、看護学の立場から現場を質感豊かに描き出すかていを紹介した。平成24年3月の博士論文（奈良女子大学）の一部を加筆修正した。

事項	年月日	概　　要
４）フェスタ出典 けいはんな体感フェア2016 「来て・見て・感じて学研都市のテクノロジー」 -光の不思議や生命の神秘・・・等　最先端の研究内容を体験してみよう！-	平成28年11月20日	フェスタに出展者として参加した。 テーマ：「年を取ると見え方聞こえ方動きはどうなるの」　高齢者体験をメインに体感イベントとした。約300名の一般の参加者（子供から成人まで）の入場があり、約50名ほどが高齢者体験に参加した。　　場所　グランフロント大阪北館ナレッジキャピタル
５）研究会　講師　　シーズ紹介講演 超高齢社会における生活支援にむけら地域産業創出を考える研究会	平成28年12月1日	超高齢社会における生活支援にむけら地域産業創出を考える研究会 テーマ：高齢者看護・介護とアクティビティケア -- 高齢者の気分転換活動の不足に対するケアや付き合い方-　高齢者ケアの現状と活性化の支援の必要性を老年看護学教育の中から経験したことを踏まえ講演とした。

事項	年月日	概　　要
5　その他		
1）公立学校法人奈良県立医科大学医学部後看護学科における教育実践	平成17年4月 ～平成23年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科講師として「老年看護学援助論」（専門科目、2年次配当通年、必修2単位）において、老年看護の実践論について授業を行った。これにより、学生は老年看護の方法について理解を深め、臨地実習に大いに活用して、老年看護の学びを得ていた。「老年看護学実習」（3年次配当通年　必修2単位）において実習指導を行った。「卒業研究」（4年通年配当）において研究計画書作成、論文作成の指導をおこなった、これにより、学生は実習で経験したを出来事を理論的に説明し、今後の可能性・課題を見出していた。「看護研究特論」（3年次前期）において、研究計画書作成につて指導した。
2）岐阜医療科学大学　保健科学部看護学科における教育実績	平成23年4月 ～平成26年3月	岐阜医療科学大学保健科学部看護学科教授として「老年看護学概論」（2年次後期、2単位　専門必修）、「老年臨床看護（演習）」（3年次前期、2単位　専門必修）、「老年看護学実習」（3年次後期、4単位専門必修）、「卒業研究」（4年次通年、2単位専門必修）、「アカデミック技法」（1年次前期2単位一般必修）において授業、演習、実習をおこなった。保健科学部放射線学科、臨床検査学科の「看護概論」（3年次後期、2単位　専門選択）において授業を行った。
3）岐阜医療科学大学　保健科学部看護学科実習調整の実績	平成23年4月 ～平成26年3月	実習部会長として、実習全体の統括を行った。医療機関との連携や実習調整を行っている。
4）関西学院大学人間福祉学部おける教育実績	平成24年4月 ～平成24年9月	関西学院大学人間福祉学部社会福祉学科非常勤講師として「介護概論」（1～4年次春期　選択2単位）、「介護技術」（1～4年次春期　選択2単位）において社会福祉士国家試験内容に基づき介護の目的論、対象論、実践論について授業を行った。文学部、法学部の学生も若干選択していた。学生それぞれが学ぶ目的を持ち、様々な感想を持って学習を深めていた。
5）奈良学園大学保健医療学部看護学科における実習調整の実績	平成26年4月 ～現在に至る	実習部会長として、実習全体の統括を行った。医療機関との連携や実習調整を行っている。
6）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成26年７月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「早期体験演習」（1年次、1単位　専門必修）複数の実習場所をラウンドし、実習の進行を支援した。時に指導の必要な学生の実習指導を行った。
7）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年2月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「基礎看護学実習Ⅰ（1年次、後期　　2単位　専門必修）複数の実習場所をラウンドし、学生や教員を支援した。時に指導の必要な学生の実習指導を担当した。
8）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年4月 ～平成27年7月（前期）	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の授業を行った。「基礎看護技術演習Ⅱ」（2年次、2単位専門必修）

事項	年月日	概　　要
９）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科教授として以下の科目の企画・実施に関わった。「基礎看護技術演習Ⅱ」「基礎看護技術演習Ⅲ」「基礎看護実習Ⅰ」「早期体験演習」
１０）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成27年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の授業を行った。「老年看護学概論」（2年次　後期　2単位　専門必修）「老年看護学援助論」年次、2単位専門必修）
１１）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の演習を行った。「老年看護学援助論」3年次、2単位　専門必修）3名の教員と共同した。
１２）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「基礎看護学実習Ⅱ（2年次、前期　　2単位　専門必修）　学生1グループを担当し、実習指導を行った。
１３）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成28年9月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部教授として以下の科目の実習を担当した。「老年看護学実習Ⅰ（施設）」（3年生　後期　2単位）　「老年看護学実習Ⅱ（病院）」3年生後期　2単位　専門必修）実習の企画、臨地調整、学生オリエンテーション、実習指導を行った。領域教員の実習指導能力の向上に関わった

職　　務　　上　　の　　実　　績　　に　　関　　す　　る　　事　　項

事項	年月日	概　　要
１　資格、免許		
1）看護師免許	昭和55年4月	第389473号
2）修士（看護学）	平成15年3月	国立学校法人香川医科大学大学院医学系研究科看護学専攻了 修士（看護学）（香修第十九号） 修士論文題目：ナラティブを看護ケアに導入した老年患者の語りの構造と変化の研究
3）博士（学術）	平成24年3月	国立学校法人奈良女子大学大学院人間文化研究科博士課程 社会生活環境学専攻　人間行動科学講座 博士（学術）（博課第501号） 博士論文題目：看護における「聴き取り」の生態ーナラティヴ・アプローチの可能性と限界
２　特許等		
なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
学会誌の編集 日本保健医療行動科学会　学会誌 拡大編集委員	平成24年6月 ～平成25年12月	日本保健医療行動科学会雑誌の拡大編集委員として、依頼論文の原稿の編集を行った。2013Vol28 №1～№2　　執筆者の意向を確認しながら、原稿に図表を配置し、雑誌用の原稿を作り上げた。

事項	年月日	概　　要
学会誌の査読 日本保健医療行動科学会　学会誌 拡大編集委員	平成25年11月 ～平成28年6月	日本保健医療行動科学会雑誌の拡大編集委員として、論文査読を行った。雑誌は年2回発行され1刊に2編ほど査読を行った。投稿論文を担当し、学会誌の質を保証できる研究論文になるように査読を行った。研究方法の整合性や論文としての論旨に疑問がある場合には掲載不可の判定もやむなしの場合もあった。通常の査読者は２名であり他の査読者と査読の判定が大きく異なることはなかった。2014～2017年前期まで年2冊　計7冊にの雑誌の査読を行った。
研究会への参加・運営 臨床看護実践ナラティヴ研究会	平成26年10月 ～現在に至る	臨床看護実践ナラティヴ研究会メンバーとして、臨床看護の場において、ナラティヴ・アプローチを実践することの意味、実際の実践について、研究・勉強会を行っている。自己の研究の報告、メンバーの研究についての意見交換、海外の研究者の論文についての意見交換を行っている。月1回の定期的な研究会である。輪番で話題を提供し討議する。ブルーナの意味論、ベイトソンの学習理論、リクールの物語と時間などを担当した。　成果の一部は　商業雑誌の特集に組み込まれた。「『病の語り』　会話の産物と現実　看護実践と社会構成主義」：N：ナラティヴとケア. 第7号. 看護実践におけるナラティヴ. 紙野雪香　野村直樹編. 参照
研究助成金の獲得	平成28年4月	平成28年度　奈良学園大学保健医療学部看護学科研究助成制度において以下のタイトルで助成金を獲得した「照度アップ窓のブライトケアの可能性の研究―認知症高齢者の睡眠支援―」
学会誌の査読編集 日本保健医療行動科学会　　理事 学会誌　編集委員　　査読と編集	平成28年７月 ～現在に至る	日本保健医療行動科学会　理事、編集委員に就任し、学会雑誌の編集を行っている。
４　その他		
―学内委員会活動―		
１）奈良県立医科大学医学部看護学科 実習部会委員	平成20年4月 ～平成23年3月	実習に関して関わった。各論実習の実習配置表の作成、学生のグループ分け、統合実習の計画、その他、メンバーで実習に関する問題対応の情報交換、協議していった。
２）岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 実習部会長	平成23年4月 ～平成27年3月	1年生から4年生までの実習を統括する。 実習施設からの相談の窓口となり対応する。
３）岐阜医療科学大学保健科学部看護学科 領域実習ワーキング長	平成23年4月 ～平成27年3月	各論実習の統括を行う。特に、実習病院・施設への実習依頼や計画配置の相談等、領域をとりまとめて実習施設との窓口となる。
４）岐阜医療科学大学保健科学部 研究・倫理委員会委員	平成23年4月 ～平成27年3月	学内教員の研究の倫理審査にあたる。
５）岐阜医療科学大学保健科学部 教育・研究委員会副委員長	平成23年4月 ～平成27年3月	学内教員の研究活動を支援する。学内で定める研究推進費について審査を行う。教員の学内研究発表や講演等を企画・運営する。

事項	年月日	概　　要
６）岐阜医療科学大学保健科学部 生涯教育委員会副委員長	平成23年4月 ～平成27年3月	委員会活動として、年6回ほど地域のイベントで地域住民に健康教育を実施している。 シンポジウムやセミナー等を同窓会と協力して企画・運営し卒業生を対象に研究発表の場を設ける活動をしている(25年度から)
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 実習部会長	平成26年4月 ～現在に至る	実習全体の統括 年間の実習計画の枠組み　企画　各実習施設への依頼　実習協議会の企画・開催　など　月１回定例会議を主催し、実習に関する協議を行う。基礎実習　領域実習　統合実習　課程選択実習に関する報告をまとめ調整する。実習場での感染症対策や事故などの危機管理等も行う。
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 領域実習ワーキング長	平成26年4月 ～現在に至る	3年生領域実習に関する、企画調整　　月１回定例会議を企画し討議を行う。成人　老年など各領域実習からの報告をまとめ、協議し実習部会に上申する。
奈良学園大学における教員組織活動 学生生活委員会メンバー	平成26年4月 ～現在に至る	奈良学園全体の、学生生活に関する協議を行っている。主に学生の奨学金　表彰等について協議した。
奈良学園大学における教員組織活動 学生支援センター委員会メンバー	平成26年4月 ～現在に至る	学生の健康診断、学校祭について協議した。
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 学生生活ワーキングメンバー	平成26年4月 ～平成27年3月	学生生活について協議した。学生の健康管理を担当した。
奈良学園大学保健医療学部新入生宿泊研修の企画担当	平静26年9月 ～平成27年3月	４月に行われる１年生宿泊研修を企画し実施した。
奈良学園大学保健医療学部新入生宿泊研修の企画責任者	平成27年4月 ～現在に至る	４月に行われる１年生宿泊研修を企画し実施した。企画実行の責任者として運営していった。
奈良学園大学保健医療学部における教員組織活動 教務ワーキングメンバー	平成27年4月～現在に至る	主に実習での単位修得や実習履修の要件について担当している。

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
1.　基礎看護技術Ⅱ基礎看護学〔3〕 系統看護学講座専門分野Ⅰ	共著	平成18年6年 第14版 平成21年2月 第15版 平成24年6月 第16版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 A4版　全490頁 編集：藤崎郁、任和子 執筆者：岡本啓子、守本とも子、□村雅世（執筆者全21名） 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術　第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P.22-P.32　第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助P.185-P.192 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方等、資料収集・イラストの作成をおこなった。病床での衣生活援助では点滴を行っている人の寝衣交換を、モデル人形を用いて写真撮影し文章を作成した。基本を前提にしながらも臨床での安全で安楽な寝衣交換の工夫を盛り込んだ。
2.　介護福祉士養成シリーズ2「生活支援技術・介護過程」	共著	平成22年6月	黎明書房	介護福祉士を目指す学生用教科書。 A5版　全219頁 編著:守本とも子、星野政明 執筆者：川口ちづる、山形力生、今村美幸、大崎大資、横井加津志、高畑進一、新谷奈苗、三毛美恵子、石崎利恵、山田多賀子、□村雅世、木村洋子、その他5名 本人担当部分：以下を担当した。 第9章　「高齢者の睡眠の援助」P.151-P.157 自立を促す睡眠の必要性、爽快な目覚めの援助、自立を促す睡眠の介助の実際、について執筆した。日常生活のリズムを整える基本的方法や不眠の際の援助の方法が理解できることを意図して具体的な方法を示した。看護の基礎技術「睡眠の援助」を基本にしている。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.　介護福祉士養成シリーズ1「介護の基本　コミュニケーション技術」	共著	平成22年9月	黎明書房	介護福祉士を目指す学生用教科書。 A5版　全202頁 編著：守本とも子、星野政明 執筆者：三浦辰哉、原田理恵、溝上五十鈴、土田耕司、羽柴香恵、河野蕎、新谷奈苗、□村雅世、その他7名 本人担当部分：以下の章を担当した。 第8章「介護従事者の倫理」P.118-P.124 国家資格を持つ者の責任と責務の視点から信用失墜行為の禁止、守秘義務、人権擁護の重要性、及び実践の内容を具体的に示していった。看護の概論となる看護師の倫理を基本としている。
4.系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ 基礎看護学３	共著	平成24年6月 第16版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 A4版　全490頁 編集：藤崎郁　任和子 執筆者：岡本啓子、守本とも子、□村雅世（執筆者全20名） 改定の為、内容の見直し文言の変更を行った。 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術 第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P.22-P.32 第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助P.185-P.192 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる看護技術の教科書となるように工夫した。（共同執筆の為分担の境界不明。共同で構想し、資料、写真、イラスト、文章を作成した。） 病床環境の調整では現在臨床で実際に行われている内容を伝えようとした。ベッド・床頭台といった病室環境の備品、ICUベッドや高齢者ベッド等、健康障害のレベルに応じたベッドや、その選び方
5.系統看護学講座 専門分野Ⅰ 基礎看護技術Ⅱ 基礎看護学３	共著	平成29年2月 第17版	医学書院	基礎看護技術の教科書。 大幅な改定が行われた。写真・図票の充実と動画の追加が大きな改定内容。 A4版　全505頁 編集：任和子 執筆者：守本とも子、□村雅世（執筆者全21名） 16版を改正した。内容の洗練化、イラストを写真に変更、動画を追加等の改正を行った。ページ数も増えた。 本人担当部分：以下の章を共同で執筆した。 第2部16領域の看護技術 第1章「環境調整技術B：病床環境の調節」P.22-P.32　第5章「清潔・衣生活援助技術C：病床での衣生活の援助P.185-P.192 今回の改定では、ページ数が増えたこと、今までのイラストを写真、あるいは動画として追加した。 看護の基礎教育を受ける学生が臨床で応用できる

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.　「2018年　看護師国家試験対策　要点がわかる　出題傾向が見える老年看護学」	共著	平成29年10月	PILAR　PRESS	過去4年間の看護師国家試験の内容で、老年看護学に関する問題について解説した。担当は国家試験出題基準の目標Ⅰと目標Ⅲについて担当した。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
1.　看護場面の4つの対話における「聴き取り」の特徴―「物語化」を実践する看護師― （査読付）	共著	平成22年6月	公立学校法人 奈良県立医科大学医学部看護学科紀要 Vol.7 P32-44	高齢者の看護において看護師が「物語化」を実践していることを明らかにすることを目的に、実際の看護の場における「聴き取り」の実際を聴取し、可視化した「聴き取り」の特徴を検討した。 76歳と78歳の高齢女性に対する看護場面で、患者と看護師がどのような思いで相手の言葉を受け取り会話をしていたかを、双方へのナラティヴ・インタビューから聴収し、高齢者と対話する看護師の「聴き取り」の特徴を明らかにした。その結果、「質問の意味を持つ言葉による対応」が聞き取りの特徴にあることを示唆した。看護師は経験年齢の異なる4名の看護師とした。 本人担当部分：研究計画、データまとめ、論文作成を担当した。 共著者：□村雅世、永野由美子、寺山美由紀、豊田真千子、叶祐子、齋籐和博
2.　看護における「聴き取り」の生態 ―ナラティヴ・アプローチの可能性と限界― （博士論文）	単著	平成23年3月	国立学校法人奈良女子大学大学院人間文化研究科社会生活環境学専攻行動科学講座	高齢者看護において、発語に特徴を持つ高齢者の話を聴き取る技能として「物語化」に注目した。従来から言われる「傾聴」の技能が看護の場では「物語化」であると考え、高齢者看護における「聴き取り技能」としてナラティヴ・アプローチの可能性を論じた。 76歳女性、78歳女性、67歳男性の3名の高齢者との看護において看護者がどのように患者の言葉を受けとめ、対話を行っているか、また、患者もどのように看護師の言葉を受けとめ対話を継続しているかを双方へのナラティヴ・インタビューから可視化した。患者の気持ちが表出されている場面では、看護師は語尾が途切れる、言葉を繰り返す、代名詞で省略するといった加齢が及ぼす発語の特徴に対し、相手の視点から意味を作り出し「物語化」を実践する傾向があった。この時の看護師は「相づち」や「うなずき」といった対応をしていた。しかし、高齢患者の思いを横に置き、健康回復をめざす看護師の視点から対応することもあった。このことは、看護師は「老いの物語」や「病の物語」を聴き取り、高齢者の多様性や個別性を理解しようとするが、対応は看護師の視点からされる傾向があると考えられた。経験年数の長いベテラン看護師にその傾向があった。高齢患者と対話する看護師の「聴き取り」は1つの「ナラティヴ・アプローチ」といえるが、必ずしも「傾聴」といえないことに、高齢者看護において「ナラティヴ・アプローチ」を活用することの限界があるとした。 A4判　全131頁
3.高齢者の語り場面の「質感」の記述　―看護場面の会話から到達する看護師の「聴く」こと （査読付）	単著	平成25年12月	質的心理学フォーラム，2013 Vol.5 P24-31	平成25年9月に開催された、第10回質的心理学会シンポジウム「今あらためて質を問う」の内容が加筆修正され特集として編集されたもの。前23の博士論文研究を一部、加筆した論文である。ここでは、「特集　現場の質感をどう記述するか」という大きなテーマのもと、言葉と思考が相互に絡み合い新しい物語が生成される会話の場面から、看護師の「聴く」ことを分析するために、会話場面を質感豊かに描き出す過程を紹介した。看護の質的研究でも、看護場面を質感豊かに記述し可視化し分析することの必要性を述べた。

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.病院実習における高齢者に対する個別アクティビティケアの効果に関する看護学生への調査	共著	平成25年3月	岐阜医療科学大学紀要　　第8号75-85	高齢者介護の場である施設で実施されることが多いアクティビティケアを、医療が行われている病院で看護師が実施することの可能性を明らかにしようとした。今回は、対象を看護学生とし、実習におけるケアをアクティビティの視点から調査研究した。講義科目講義、実習指導と実習後のデータ収集、論文作成を分担して行った。　藤吉恵美、和田裕子、□村雅世
5. 通所サービスを利用している要介護高齢者の健康づくりのための対処行動	共著	平成26年3月	岐阜医療科学大学紀要　　第9号33-39	通所サービスを受ける高齢者の健康観を調査した。介護を受ける高齢者であっても骨折や転倒予防が健康に対する認識であった。研究計画書の作成、データ収集を担当した。藤吉恵美、和田裕子、田中和奈良、□村雅世
6.「病の語り」会話の産物と現実　-看護実践と社会構成主義-　（査読付）	単著	平成28年1月	N：ナラティヴとケア第7号47-53	「看護実践におけるナラティヴ」というタイトルの特集の中の「進化、これからどうしていきたいか」をテーマにした章の中で看護実践と社会構成主義について論じたものである。実際の看護場面の患者との会話を例に挙げることで看護の場は社会構成主義の実践で場であることを論じた。
7.地域包括ケアにおける要介護高齢者とのコミュニケーション　-加齢変化から考える尊厳を守る会話のスキル-	単著	平成29年6月	日本保健医療行動学会雑誌　2017. Vol.32　№.1 p.1-6	「地域包括ケアと行動科学」という特集で執筆した。地域包括ケアの対象はほとんどが要介護高齢者であり、超高齢社会の現在、介護する家族も65歳以上の高齢者の域にある人たちである。視覚・聴覚・神経系の変化は、聞く、考える、言葉にすることに影響する。加齢変化がコミュニケーションに与える影響と、ケア提供者の会話のスキルについて、聴く、考える、語ることから述べ、地域包括ケアでの支援者のコミュニケーションの姿勢について述べた。
8. 地域在宅高齢者を対象とした運動教室の効果の検証　-遠隔フィットネスシステムを使用して-	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究　第5巻, P53-58	要介護高齢者及び生き生き高齢者を対象に遠隔フィットネスシステムを用いて、体操に参加してもらい、遠隔から運動アクティビティを実施することの可能性を検証した。施設との調整、調査の実施、データー分析、論文作成に参加した。田中和奈、吉村雅世、東中須恵子、守本とも子.

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
9.高齢者の「老人皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケアの効果の検証	共著	平成31年3月	アビサル・ジャパン 委託研究報告書	老人ホーム入所の高齢者を対象に，シュガースクラヴの効果を検証した。毎日の入浴と清拭の後にシュガースクラブを使用した群と，使用しない群とに分け，入浴・清拭後の唾液アミラーゼ値，油分，水分を測定した．その結果，シュガースクラヴを使用することで水分値が上昇することがわかった。 分担は：老年看護学領域の専門知識で調査責任者として施設での職員との対応，調査の進行調整，高齢者からの唾液採集，聞き取り等を行った。 山口求，守本とも子，吉村雅世，佐藤郁代，高橋寿奈，採用英夫，井上昌子，野口寿美子
その他				

著書、学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
その他 ―国内発表―				
1.　物語生成のプロセスから検討する「視点」の聴き取り技能としての可能性―高齢患者と看護者の対話の継起的分析から―	単著	平成22年4月	第5回保健医療福祉情報行動科学会大会	5名の高齢者患者に対するナラティヴ・アプローチにおいて、患者の心情が変化したと判断した場面における、聴き手の姿勢を聴き手の自己内対話から可視化し、分析した。話を発展させよう炉するリフレクシブクエスチョンの有効性を示唆した。
2.　高齢者の話を聴き取る技能の研究―物語生成の継起的分析から検討する聴き手の視点―	単著	平成23年3月	第6回保健医療福祉情報行動科学会大会	80歳の女性へのインタビューからインタビューアーの「聴き取り」について検討した。聞き手は高齢者の何度も繰り返される話の中から、「これ」「その」あの」といった代名詞をの意味を推測したり、「で・・・」といった止まった言葉の先を推測したり、聞き手の視点を移動させて聴きながら物語を共同生成している実態を明らかにした。
3.　認知症高齢者の思い出の語りを「聞くこと」の看護としての研究～事例から考える関係性を築くための質問～	共著	平成23年3月	第6回保健医療福祉情報行動科学会大会	グループホームで暮らすお年寄りに対して昔の思い出をテーマに、グループフォーカスによる「聴き取り」を実施した。語られた内容から、自己の対応を分析し、関係性を築く為の質問の有効性を考察した、学部生の卒業研究である。 本人担当部分：担当として指導した。 共同発表者：東仁美、□村雅世
4.　日常看護の会話の中で実践される「傾聴」の研究―経験と聴き取りの特徴―	―	平成23年6月	第26回保健医療行動科学会	看護の対象は高齢者が多く、高齢者と会話する機会が多く「傾聴」を必要とする機会も多くなっている。看護師は日常看護の会話の中でどのようには「傾聴」を行っているか、看護師経験の違いから検討した。博士論文研究の一部である。 経験年数の2年未満と4年以上の看護師各2名が、76歳と78歳の女性患者の看護を実践する中で「傾聴」していると判断できる部分を取り出し、そのときの思いを看護師・患者から聴取し「聴き取り」の特徴を明らかにした。その結果、経験年数の多い看護師ほど医療的な専門職としての視点で聴き取り、経験年数の浅い看護師ほど、医療的な視点でなく生活者の視点で聴き取る傾向があった。経験の少ない看護師のほうが、看護師としての力量は未熟であるが患者の気持ちに働きかける「傾聴」に近い聴き取りを実践していると考えた。 本人担当部分：研究計画書の段階からすべてに担当した。データ収集。分析を共同で行った。 共同発表者：□村雅世、永野由美子、寺山美由紀、豊田真千子、叶祐子、齋籐和博
5. 地域に住む高齢者の為のエクササイズ教室を使った遠隔フィットネスシステムの長所	―	平成29年4月	第32回国際アルツハイマー病協会国際会議	地域で生活する高齢者のエクササイズ教室で遠隔フィットネスシステムを使用し、その効果を検証し長所を検討した。東京と奈良をネット回線で繋ぎ、インストラクターは東京から映像を見ながら指導し、高齢者は奈良で運動し、その様子は相互いモニターで音声を入れ会話しながら奈良県で

著書、学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所、発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
6.高齢者を対象とする調査研究の評価について －介護老人福祉施設でアクティビティケアとして遠隔フィットネスシステムを用いる研究から－	―	平成29年6月	第32回日本保健医療行動科学会学術大会	高齢者に対するケアの有用性を調査する研究で、高齢者の反応を測定する方法を検討した。　高齢者の言葉による感想やVASスケールを用いて直接高齢者から評価を得る方法よりも、実際に介護するする施設職員からの情報のほうがより妥当な評価が得られると考えた。 本人担当部分：計画・立案・データ収集を分担して行った。 共同発表者：□村雅世、田中和奈、守本とも子、東中須恵子、吉村昌子

教　育　研　究　業　績　書

令和2年3月31日

氏名 梶間敦子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
助産学	地域・いのち・性・生

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
助産学科　助産学概論 助産の歴史の授業方法	2010～2014	学生と共に奈良県内外在住の助産師（70歳代、80歳代）にインタビューをし、今日の助産師に求められることは何かを考察する授業展開を行った
助産学科　地域母子保健 母親参加型の授業展開	2010～2014	子育て中の母親の協力を得て、ディスカッション、ワークショップをし、サービスを受ける側の女性と家族の理解に勤める。助産師としてのモチベーションを高める授業の工夫
助産学科　地域母子保健 国際看護の授業方法	2010～2014	在日外国人への助産ケアの配慮について、まず海外での出産経験者を招いて、体験談や出産・子育て用品の紹介等を通して、異文化における出産・育児について理解を深める授業を行った。徐々に在日外国人女性の協力も得ることができた。
助産診断・技術学 外国人研修生との交流授業	2010	ケニアからの研修生受け入れ、現在日本では使用しない教材を使用しての診断技術の指導、異文化における助産に必要な技・態度についてのディスカッションを日本人学生とともに実施した。
プリセプターシップを導入した、基礎実習の指導	2010～2014	助産基礎実習にプリセプターシップを導入。指導者、学生が共に学びながら、以降の実習でのコミュニケーションの向上にもつながった。
2　作成した教科書，教材		
手作り教材　性教育用教材の作成	2010～2014	性教育、マザークラス用教材、乳幼児用衣類、未熟児用衣類等の作成。学生だけでなく、地域の住民の協力を得ながら作成。子どもたちや受講者が興味を示し、手作りのぬくもりから、生命尊重の心を養う態度の育成にもつながっている。
助産学実習実習記録用紙の作成	2010～2014	従来の記録用紙を評価し改善を加える。効率よい実習ができるよう、授業内容を復習を兼ねた、スタンダードプランを示した。
性教育教材の作成	2016～2020	人形、パネルシアター、ペープサートなど、看護・助産学生、保育士、教員、地域の女性や子どもたちの発想を取り入れて共に作成、考案を重ねている。

3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
個人情報保護法に基づく「患者等個人情報記載用紙の取扱い方法」マニュアルの作成	2010～2014	個人情報保護法について研修会等で学習および情報収集、委員会で作成したガイダンスをもとに、実習で活用する「患者等個人情報記載用紙の取扱い方法」マニュアルを作成、使用。
実習中における学生の針刺し・血液暴露事故対処規定の素案作成	2009～2014	学生が実習中に針刺し事故および血液による暴露事故に遭遇した場合の対処法について、実習病院、校医に相談しマニュアルの素案作成、危機管理検討会で検討し活用.
5　その他（講演活動）		
平成29年度　天理市女性教育推進連絡協議会 「いのちをどう伝えるか」 （天理市）	2017.05.27	平成29年度天理市　男女共同参画プラザ事業、天理市女性教育推進連絡協議会総会、記念講演。
青少年の自立を支える奈良の会(奈良県教育委員会後援) こころと命をつなぐ 「助産師による『いのち』のおはなし」 （奈良市）	2017.09.18	青少年の自立を支える奈良の会、青少年の性に関するチャレンジ事業において、ワークと講座、体験的性教育の提案として、助産師による体験授業の紹介を行った。
平成30年度　近畿特別支援学校知的障害教育研究協議会健康安全部会研修会 「助産師による『いのち』のおはなし」 －体験授業が心を生かす - （大和郡山市）	2018.08.10	近畿特別支援学校知的障害教育の養護教諭を対象に、助産師が考えるいのち、性教育のあり方、教材活用の実際等について、演習を中心に講演を実施した。
平成30年度　奈良県看護協会保健師職能研修会 「其々の力を発揮できる子育てネットワークを考える」　～専門職それぞれの強み。弱みをふまえた支援の在り方～ （橿原市）	2018.09.29	妊娠期から子育て期の各ステージのニーズに応じた支援を行うために、出産や育児にかかわるそれぞれの専門職の持つ強みや弱みを共有し、その力を発揮することで、切れ目ない支援を目指すことを目標にした講演。
広陵町立真美ヶ丘中学校 「性といのちの講演会」 （広陵町）	2018.12.10	中学3年生173名対象に、「生命の神秘」「思春期の心とからだ」「出産・育児」「性被害から守る」などについて、ピアカウンセラーの協力を得て、VTRや模擬体験を交えながらの講演を実施した。
韓国日本文化学会総合国際学術大会 討論者 （韓国　全南大学校）	2018.12.22	日本文化における妊娠・出産・育児や出産習俗における女性と子どもの身体等の発表に続き、現代の日本の助産師としての見解を述べた。
私立天理中学校　教職員 「性といのちの勉強会」（天理市）	2019.11.13	中学生の性の発達、性教育の必要性、今日の問題、性と生の伝え方、教材の工夫
広陵町立真美ヶ丘中学校 「性といのちの講演会」 （広陵町）	2019.12.06	中学3年生157名対象に、「生命の神秘」「思春期の心とからだ」「出産・育児」「性被害から守る」などについて、ピアカウンセラーの協力を得て、VTRや模擬体験を交えながらの講演を実施した。
奈良県医師会看護専門学校 「今あなたにできる体づくり、心づくり」～生命の源ををを見つめて～　（橿原市）	2019.12.11	身体と心の神秘を見つめ直し、現代の生き方が自然とはほど遠い事例を紹介。発展途上国や、日本の昔の母子の生活をにおける心の豊かさ等の紹介、時代・文化的背景等の違いがあっても、身体の働きや出産の過程は同じである。そこから、今できる体づくり、心づくりの大切さを気づいて欲しい。

第908回日本民俗学会談話会・第321回京都民俗学会談話会　「思いがけないお産の民族」コメンテーター　助産師の立場から　（京都市）	2019.12.14	「思いがけないお産の民俗」の発表を受け、助産師歴40数年を振り返り、事例を紹介。「思いがけないお産」は、様々な様々な形で引き起こされる。それは、個人のできごとではなく、また、親子・家族、次世代にも繋がることである。
広陵町立真美ヶ丘中学校 「性といのちの講演会」 （広陵町）	2020.02.07	中学2年生144名対象、「生命の神秘」「体験授業」（胎児・誕生・妊婦）母親・胎児・赤ちゃんの気持ちに近づく。発展途上国の子どもたちの生活を紹介し、互いに尊重できる人間関係の在り方について、一緒に考える場とした。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許		
1)准看護師	昭和45年4月1日	第2025号（奈良県）
2)看護師	昭和51年5月19日	第296880号
3)助産師	昭和52年5月16日	第74567号
4)受胎調節実地指導員（大阪府認定）	昭和51年3月10日	第885号
5)保育音楽検定2級	昭和48年9月26日	音検証10696号
6)保育技能検定2級	昭和50年3月18日	保検証302345号
4　その他		

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年 月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書）				
出産の民俗学・文化人類学	共著	2014.5	勉誠出版	助産師として40年の雑感
（学術論文）				
先輩助産師から受け継ぐ、助産師の技・心～T市における支援～	共著	2008.7	第23回 奈良県母性衛生学会	戦後から、現在も活躍中の助産師からの聞き取りを通しての学び
看護学生の清潔に対する意識調査,第二報	共著	2008.11	平成20年度 奈良県看護研究学会	看護教育は、若者の清潔感に影響を与えているか
分娩介助技術教育のプロセスの検討	共著	2009.3	第23回 日本助産学会（東京）	助産学科開設後3年間の分娩介助教育のプロセスについて考察、報告
妻の妊娠・出産を経験した父親の思い －意識変化の要因－	共著	2009.5	第65回 日本助産師学会（奈良）	妻の妊娠・出産時の夫の姿勢が、父性にどの様な影響を与えているかの調査
先輩助産師と学ぶフリースタイル分娩	共著	2009.7	第24回 奈良県母性衛生学会（奈良）	先輩助産師と助産学生が共に学ぶことでの効果
助産基礎実習におけるプリセプターシップ導入の効果第1報	共著	2010.3	第24回日本助産学会（つくば）	実習指導にプリセプターシップを導入しての、学生・指導者の学び
出生後の父性意識形成における助産師のかかわり －父親自身のニーズの把握－	共著	2010.7.1	第25回　奈良県母性衛生学会 （奈良）	助産師のかかわりが、父性意識向上に、どのように影響するか
在日外国人母子への出産前後のサポート体制に関する一考察 -N県内外国人市民にむけての国際協力-	単著	2011.1	吉備国際大学大学院連合国際協力研究科	在日外国人14名（12か国）の女性より聞き取り調査をし、支援における課題の明確化
里帰り分娩を経験した母親の育児不安について－産後１ヶ月健診後－	共著	2011.7	第26回 奈良県母性衛生会 （奈良）	里帰りすることも、産後の生活にもたらす問題が多い。
ケニア共和国母子保健の現状報告第一報 -マタニティセンターを視察して-	共著	2012.5.1	第26回 日本助産学会学術集会 （札幌）	マタニティーセンターと、村での生活を視察し、ケニアの母子保健の現状把握
ケニア共和国母子保健の現状報告第二報 -出産準備教育のプレゼンテーションを実施して-	共著	2012.5.1	第26回 日本助産学会学術集会 （札幌）	ケニアの医療スタッフへ、出産準備教育の紹介
在日外国人母子への出産前後のサポート体制に関する一考察 -A県での聞き取り調査より-	単著	2012.7.14	第27回 奈良県母性衛生会 （奈良）	在日外国人の出産・育児の困難さとサポートの重要性

国際助産を身近に学ぶ授業の工夫 －海外で出産した日本人の体験談から学ぶ-	単著	2013.5.2	第27回 日本助産学会学術集会（石川）	国際看護を、身近かなことと捕える授業の工夫を紹介
助産師が行う性教育のあり方 ～思春期におけるピアエディケーションでの助産師の介入～	共著	2014.7	第29回 奈良県母性衛生学会（奈良）	ピアエデュケーション有効性について検討
出生前診断を受検する妊婦と家族へのケア　　－ 文献検索による研究－	共著	2014.7	第29回 奈良県母性衛生学会（奈良）	出生前診断を受ける妊婦と家族の意思決定について文献レビュー
外国人の日本での出産における問題点とその関わり	共著	2014.7	第29回 奈良県母性衛生学会（奈良）	日本で出産する外国人女性の不安や問題点を明確にし、今後の関わりに活かす
奈良県助産師活動の90年（中間報告）	共著	2015.7	第30回 奈良県母性衛生学会（奈良）	助産師会90年の歴史を聞き取り調査、先輩助産師の心と技を次代に伝えたい
（その他）				

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名　　播金　ヤスミ

研　究　分　野	研究内容のキーワード
基礎看護学、母性看護学	

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他 なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許		
看護師	昭和 53 年 5 月 23 日	第 344379 号
助産師	昭和 54 年 12 月 20 日	第 77915 号
日本周産期・新生児医学会 新生児蘇生法「専門コース」(A コース)　修了	平成 27 年 11 月 1 日	認定番号 A-15 42181
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1. 1看護系の大学及び専門学校で用いられている基礎看護学実習評価表の内容分析による構成概念の抽出とルーブリック形式の評価表の作成	単著	平成 25 年 3 月	畿央大学　修士論文	
2. 看護学生の載石位体験前後の産婦人科診察台に対するイメージと差恥心の変化	共著	平成 27 年	畿央大学紀要　第 12 巻、第 1 号、P15-30	仲居由美子、小笠原知枝、播金ヤスミ、他
3.基礎看護学実習評価項目の内容分析によるパフォーマンス評価のためのルーブリックの作成	共著	平成 30 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究　第 5 巻 2018 年 2 月	播金ヤスミ、小笠原知枝、中居由美子、河合まゆみ、、小林由里、對中百合、新井祐恵、大田容子、伊藤明子
４．新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性	共著	平成 31 年 3 月	医療福祉情報行動科学研究　第 6 巻 2019 年 3 月	小林由里、小笠原知枝、河合まゆみ、中居由美子、播金ヤスミ、他
（その他） （学会発表） 看護職員離職経験者の離職要因に関する実態調査―離職時の状況と現在の心境からみた働き続けるための職場環境―		平成 25 年	第 42 回日本看護学会論文集（看護管理）P187-190	飯尾美和、土井理久實、田岡眞由美、播金ヤスミ、他
Image of gynecological examination in young women.（若い女性の産婦人科診察台イメージ）		平成 25 年	WANS（世界看護科学学会）ポスター発表	YumikoNakai, Jong･SeongMoon, YasumiHarikane 他
学生カンファレンスの現状と今後の指導課題		平成 26 年	第 45 四日本看護学会（看護教育）学術集会、P37　ポスター発表	城使紀子、播金ヤスミ、丸野由美

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
基礎看護学実習評価項目の内容分析による実習評価の構成概念		平成 26 年	第 24 回日本看護学教育学会学術集会（口演）	播金ヤスミ、小林由里、中居由美子、他
新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性とその特徴		平成 26 年	第 24 回日本看護学教育学会学術集会（口演）	小林由里、河合まゆみ、播金ヤスミ、他
看護専門学校における高校新卒学生と社会人経験学生の学習意欲に関する要因		平成 27 年	第 25 回日本看護学教育学会学術集会（口演）	河合まゆみ、小笠原知枝、中居由美子、播金ヤスミ他

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名　芝田　ゆかり

研　究　分　野	研究内容のキーワード
公衆衛生看護学, 地域看護学	保健・医療・福祉の連携

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1)　看護学生のための初年次教育の教育方法作成	平成 24 年 12 月 ～26 年 4 月	飯田女子短期大学看護学科の教授就任前から看護学生のための初年次教育の教育方法を「キャリアデザイン」として新講義を作成した. 具体的には, 就任前本学科は留年する過年度生が多いため, 看護師になるための動機づけを先駆けて行い, 「聴く」「読む」「調べる」「書く」 ための教育方法を新たに作成・実施した.
2)　地域基盤型ボランティア教育方法の作成	平成 27 年 4 月 ～28 年 3 月	朝日大学保健医療学部看護学科准教授として, 地域基盤型ヘルスボランティア教育方法を作成した. 具体的には多世代交流を目的とした利他的行動の体験型学習であり, 岐阜県瑞穂市地域包括支援センター・介護予防サポーターと連携し, 地域基盤型のボランティア教育方法を考案・実施した.
3) リフレクション（振り返り）シートの活用	平成 22 年 4 月 ～現在に至る.	学生の理解について振り返りを促すため, 独自に作成したシートを活用する工夫を行っている. 学生自身が目標達成度は何%かを評価し, 100%になるために学生自身がどうしたらよいかを考えて記入したものを毎回回収して, 学生の理解度を確認している. 理解が乏しい内容は, 次回に補足説明を行っている.
2　作成した教科書, 教材 特記なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1) 文部科学省による大学設置審議会の教員組織審査において, 朝日大学保健医療学部看護学科専任准教授：適格と認定	平成 25 年 8 月	科目名:「公衆衛生看護学概論」「公衆衛生看護活動論Ⅰ」「公衆衛生看護活動論Ⅱ」「公衆衛生看護活動論Ⅲ」「公衆衛生看護学実習」「看護研究演習Ⅰ」「看護研究演習Ⅱ」「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」 担当可と判定
2) 学位授与機構・文部科学省「大学設置審議会教員審査」において, 飯田女子短期大学専攻科養護教育専攻 兼担教授：適格と認定	平成 25 年 12 月	科目名：「看護学特論」 担当可と認定
3) 文部科学省による AC 教員審査において, 奈良学園大学保健医療学部看護学科専任准教授：適格と認定	平成 29 年 2 月	科目名:「公衆衛生看護学概論」「公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）」「公衆衛生看護方法論Ⅰ」「公衆衛生看護方法論Ⅱ」「公衆衛生看護学実習」「看護研究Ⅱ」「公衆衛生看護診断演習」「在宅看護学実習」「基礎看護学実習Ⅰ」「基礎看護学実習Ⅱ」「統合実習」 担当可と判定

4) 文部科学省による大学院設置の教員組織審査において,奈良学園大学保健医療学部看護学科准教授:適格と認定	平成 29 年 8 月	科目名：「在宅看護学特論Ⅰ（在宅看護学）」担当可と判定
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)　NPO 法人大阪ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ教育研究所 理事	平成 17 年 1 月 ～現在に至る	NPO 法人大阪ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ教育研究所の前身である大阪ﾎﾞﾗﾝﾃｨｱ教育研究会の時より,障がい児教育に関わっており,地域住民を巻き込んだボランティア教育活動を行っている.
2)　東大阪大学　委員会（保健センター）業務担当	平成 21 年 4 月 ～22 年 3 月	養護教諭・看護師・保健師・健康運動実践指導者・精神保健福祉士業務を担当した.
3)　精神障害者ﾋﾟｱﾍﾙﾊﾟｰ等養成研修事業(在宅看護の基礎知識Ⅰ）講師	平成 22 年 12 月	精神障害者ﾋﾟｱﾍﾙﾊﾟｰ等養成研修事業受講者を対象に,在宅看護の基礎知識Ⅰの講義を担当した.
4)　加古川市国民健康保険運営協議会 委員	平成 23 年 2 月 ～24 年 3 月	加古川市より保健師教育に関わる教員として,加古川市国民健康保険運営協議会の委員を委嘱された.
5)　兵庫大学にて教務主任（保健師科目）としてカリキュラム作成	平成 23 年 4 月 ～24 年 3 月	平成 24 年度入学生より保健師選択制を兵庫大学で実施するにあたり,教務主任として保健師教育のカリキュラムと実習計画を作成した.
5)　飯田女子短期大学　公開講座	平成 25 年 9 月	「こころとからだの元気づくり」をテーマに,継続的に取り組むことが必要であることを理解することを目標に公開講座の講師を担当した.自分自身のからだのことを知り,生活機能を低下させない方法を実際に体験する機会とした.
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1) 外国語(ﾌﾗﾝｽ語)中学校教諭 1 級教諭普通免許	昭和 57 年 3 月	
2) 外国語{ﾌﾗﾝｽ語}高等学校教諭 2 級教諭普通免許	昭和 57 年 3 月	
3) 養護学校教諭 1 級普通免許	平成元年 3 月	
4) 国語科中学校教諭 1 種普通免許	平成 3 年 3 月	
5) 国語科高等学校教諭 1 種普通免許	平成 3 年 3 月	
6) 看護婦免許	平成 9 年 4 月	
7) 保健婦免許	平成 11 年 5 月	
8) 養護教諭 2 種免許	平成 11 年 10 月	
9) 第 1 種衛生管理者免許	平成 11 年 10 月	
10) 介護支援専門員	平成 12 年 2 月	
11) 精神保健福祉士免許	平成 15 年 6 月	
12) 健康運動実践指導者	平成 15 年 10 月	
2　特許等 特記なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1) 文部科学省による大学設置審議会の教員組織審査において,朝日大学保健医療学部看護学科専任准教授：適格と認定	平成 25 年 8 月	科目名:「公衆衛生看護学概論」「公衆衛生看護活動論Ⅰ」「公衆衛生看護活動論Ⅱ」「公衆衛生看護活動論Ⅲ」「公衆衛生看護学実習」「看護研究演習Ⅰ」「看護研究演習Ⅱ」「基礎ゼミナールⅠ・Ⅱ」担当可と判定

2) 学位授与機構・文部科学省「大学設置審議会教員審査」において,飯田女子短期大学専攻科養護教育専攻 兼担教授：適格と認定	平成 25 年 12 月	科目名：「看護学特論」担当可と認定
3) 文部科学省による AC 教員審査において,奈良学園大学保健医療学部看護学科専任准教授：適格と認定	平成 29 年 2 月	科目名：「公衆衛生看護学概論」「公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）」「公衆衛生看護方法論Ⅰ」「公衆衛生看護方法論Ⅱ」「公衆衛生看護学実習」「看護研究Ⅱ」「公衆衛生看護診断演習」「在宅看護学実習」「基礎看護学実習Ⅰ」「基礎看護学実習Ⅱ」「統合実
4) 文部科学省による大学院設置の教員組織審査において,奈良学園大学大学院看護学研究科看護学専攻准教授：適格と認定	平成 29 年 8 月	科目名：「在宅看護学特論Ⅰ（在宅看護学）」担当可と判定
4 その他 1)東大阪市まちづくり助成金	平成 21～22 年	東大阪大学,東大阪短期大学 研究共同分担
2)2015(平成 27)年度教育改革推進事業助成金	平成 27～28 年	朝日大学 2015 年度教育改革推進事業 研究代表者

研 究 業 績 等 に 関 す る 事 項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概 要
（著書） 1 2018 年要点がわかる出題傾向がみえる小児看護学（看護師国家試験対策）	共著	平成 29 年 11 月	PILAR PRESS	「看護師国家試験出題基準（平成 30 年版）」準拠. 中項目別にみた要点と過去問題集を作成した. 第 97 回～第 106 回看護師国家試験問題収録. 守本とも子（監修） 芝田ゆかり, 田場真理, 瀬山由美子（編著）
2 2019 年出題傾向がみえる健康支援と社会保障制度（看護師国家試験対策）	共著	平成 30 年 5 月	PILAR PRESS	「看護師国家試験出題基準（平成 30 年版）」準拠. 中項目別にみた要点と過去問題集を作成した. 第 91 回～第 107 回看護師国家試験問題収録. 守本とも子（監修） 新谷奈苗, 芝田ゆかり, 森山浩司他
3 2020 年解いて,わかる！覚えて合格！小児看護学/看護の統合と実践	共著	令和 2 年 3 月	PILAR PRESS	「看護師国家試験出題基準（平成 30 年版）」準拠. 看護の統合と実践, 中項目別の過去問題集を作成した. 第 87 回～第 108 回看護師国家試験問題収録. 守本とも子（監修）, 山口求（編著） 三浦康代, 芝田ゆかり, 吉水清, 佐藤郁代, 井上葉子, 斎藤英夫他
（学術論文） 1 市町村合併後の集団健康教育（運動）プログラムの評価―総合型地域スポーツクラブにアウトソーシングした事例の検討―	単著	平成 21 年 12 月	東大阪大学教育研究紀要第 7 号;25-30	市町村合併前後の集団健康教育（運動）プログラム評価への示唆を得ることを目的に,総合型地域スポーツクラブにアウトソーシングした事例を検討した. その結果,集団健康教育の実施において「運動の機会や時間がない者や参加者の性別・年齢に応じたアプローチとその評価システムが必要であることが示唆された.

2　総合型地域スポーツクラブを活用した運動啓発事業の評価	単著	平成 22 年 3 月	日本福祉大学大学院社会福祉学研究科「社会福祉学研究」，第 5 号，55－63	中高年者の運動不足といった課題から経年・長期的に継続した運動啓発事業を実施するために,総合型地域スポーツクラブを活用した事業の多面的な評価を検証した.その結果運動啓発事業の評価において,参加実人数を用いて評価を行うことで,実施回数が増えても,男性や運動を継続する実参加人数が増えるとは限らないことが明らかになった.
3「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達度」における学生の自己評価 ： 実習形態の違いによる到達度の比較	共著	平成 26 年 3 月	大阪市立大学看護学雑誌,（10）1-10	行政 3 週間実習(行政実習),行政 1 週間と産業 2 週間の計 3 週間実習(産業実習),行政 1 週間と学校 2 週間の計 3 週間実習(学校実習)という実習形態で学生の到達度に違いがあるか否かを検討した. 2012-2013 年度に地域看護学実習を履修した計 124 名に調査票を配布,104 名(回収率: 83.9%) から回答を得た.調査は「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」(厚生労働省,2010) の項目を用いた.実習という臨地の特性により経験しにくい項目については,実習運営のさらなる工夫が必要であることを考察した. 担当分:調査, 統計解析 著者：林知里,横山美江,藤村一美,村井智郁子,芝田ゆかり
4　看護基礎教育における保健師教育	単著	平成 27 年 3 月	朝日大学保健医療学部看護学科紀要,(1)44-52	看護基礎教育における保健師教育について,①学士課程（大学 4 年間）の看護基礎教育における保健師教育の変遷,②朝日大学保健医療学部看護学科の保健師教育の考え方,③今日の社会に求められる保健師の役割を概観した.
5　2015 年度教育改革推進事業：介護予防プロジェクト報告ー地域と大学が連携した地域基盤型のボランティア教育システムー	共著	平成 29 年 3 月	朝日大学保健医療学部看護学科紀要,(3)59-66 2015 年度教育改革推進事業助成金報告書	現在の日本における看護学教育において，介護予防における地域包括システムを目指した地域基盤型のボランティア教育の取り組みは少ない．そこで我々は，2015 年度教育改革推進事業：介護予防体操作成プロジェクトに取り組み，本事業の目的達成を目指した．地域連携協定を結ぶ A 市をはじめ，A 市社会福祉協議会・A 市地域包括支援センター・みずほ生き活きサポーター等関係機関の協力のもと，「介護予防体操作成プロジェクト：地域と大学が協働したボランティア教育システム」を実施した内容を報告した. 本人担当部分：研究代表者･統計解析,結果,考察,総括 著者：**芝田ゆかり**,高橋直美,名和めぐみ,北端惠子

2019 第 22 回東アジア看護学研究者フォーラムの報告（Ⅰ）～文献検討による女性の身長短縮に関連する因子および因子間の関連～	共著	令和元年 9 月	奈良学園大学紀要, (11) 211-215.2019.	A Report on 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference 2019 （Ⅰ）～Association among the factors in conjunction with Height Loss of females by the literature review～ Yasuyo MIURA, **Yukari SHIBATA** Kiyoshi YOSHIMIZU, Yohko INOUYE
2019 第 22 回東アジア看護学研究者フォーラムの報告（Ⅱ）－炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する文献検討－	共著	令和元年 9 月	奈良学園大学紀要, (11) 207-210.2019.	A Report on 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference 2019 Part 2－Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease－ Yohko INOUYE, **Yukari SHIBATA**, Kiyoshi YOSHIMIZU, Yasuyo MIURA
（学会発表） 1 学生による「保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度」の自己評価－行政保健実習・学校保健実習・産業保健実習による比較・検討－	共著	平成 25 年 1 月	第 1 回日本公衆衛生看護学会（首都大学東京）, 2013.1.14-15,第 1 回日本公衆衛生看護学会講演集, 第 1 号,75	2012 年度 4 年制大学の保健師課程学生への調査から,保健師に求められる実践能力と卒業時の到達目標と到達度を明らかにし,行政・学校・産業実習による自己評価の比較・検討を行った. 担当分:調査,統計解析, 結果 著者：藤村一美,**芝田ゆかり**,横山美江
2 Effect of Caregiver's Smile for Comfortable in Older Adult with Alzheiheimer's Disease	共同発表	平成 27 年 10 月	The 10th International Association of Gerontology and Geriatrics-Asia/Oceania 2015 Congress 19-22 October 2015 Chiang Mai,Thailand	In patients with advanced Alzheimer's disease, showing various expressions, such as ″surprise face″ photo ″smile″, ″crying″, see how it feels this person? ″ I heard. Then see the surprise face″so not recognize the″angry face″, ″smile″could recognize most people. Slow dementia, and the ability to feel from people's facial expressions. But smile, that capability to read or see someone happy, or happier not learned unabated to the end. This time, evaluate effects caregiver's smile in a saliva test for older Alzheiheimer diseases objective. 本人担当部分抽出不可能 共著：大塚静香,濱畑章子,**芝田ゆかり,**
3 児童・生徒等における う蝕有病状況の年齢特性比較―学校保健統計調査結果からの検証―	単著	平成 27 年 1 月	第 3 回日本公衆衛生看護学会(神戸)第 1 回日本公衆衛生看護学会講集,P205	学校保健統計調査結果を用いてう蝕有病状況について,経年的に年齢特性の傾向を明らかにした.

4　Collaboration between University and Community Volunteers in a Nursing-Care Prevention Exercise Project	共同発表	平成 28 年 6 月	The 3rd Korea-Japan Joint Conference on Community Health Nursing (KJJCCHN) July 1-3, 2016Busan, South Korea 2015 年度教育改革推進事業助成金	This study develops an education program with community participation as part of a new project that utilizes a regional partnership between the university and community volunteers through intergenerational exchange and allows volunteers to participate with residents and government officials. The subjects were nine students who applied to participate in the nursing-care prevention exercise project and were recruited from the 87 students in the university's two-year nursing program. The subjects were studied for six months (June-December 2015). In Workshop and two gatherings of elderly people who live in the community, it was content analysis of Reflection and impressions of the student. By content analysis, we were able to extract the concept of individual and collective. 本人担当部分：研究の総括, 統計解析, 結果, 考察 共著：**芝田ゆかり**, 北端惠子, 高橋直美
5　地域と大学が連携した地域基盤型のボランティア教育プログラムの展開ー2015 年度教育改革推進事業：介護予防体操作成プロジェクトー		平成 28 年 8 月	日本地域看護学会第 19 回学術集会(栃木)講演集, (19)111 2015 年度教育改革推進事業助成金	本研究の目的は, 住民や行政等関係者と共にボランティアとして参加する機会を利用した世代間交流を通して, 地域と大学との地域連携協定を活用した介護予防体操作成プロジェクトへ参加する地域基盤型のボランティア教育プログラムを展開することである. 学生は①高齢者やボランティア・関係機関の専門職とコミュニケーションを持ち, 世代間交流を図り, 他者を理解することの必要性を学び, ②介護予防体操を作成・披露することでの達成感や喜び等を得たことを報告した. また地域の人々からも今後の学生ボランティア活動の継続希望の声が聞かれ, 大学としての地域貢献への一歩となり, 地域基盤型のボランティア教育プログラムを展開することができた. 本人担当部分：研究の総括, 統計解析, 結果, 考察 共著：**芝田ゆかり**, 北端惠子, 名和めぐみ, 高橋直美

6　地域基盤型のヘルスボランティア教育プログラムに参加した学生のリフレクション・プロセス	単著	平成 29 年 1 月	第 5 回日本公衆衛生看護学会学術集会(仙台), 2017.	地域基盤型のヘルスボランティア教育プログラムに参加した学生のリフレクション・プロセスを質的研究で明らかにした.
7　介護予防体操作成ボランティアの活動が学生に与えたもの-高齢者との関わりで学んだ人権擁護について-	共同発表	平成 29 年 5 月	日本看護倫理学会第 10 回年次大会（大分）2017.	今回介護予防体操作成のボランティアの活動を 2 年生 9 名の学生と実施した. 学生は介護予防体操を行ううちに,高齢者にとって意味のある内容や,コミュニケーションの取り方を学び,体操作成自体の過程が学びになっていること等多くの学びを得ていた.高齢者の立場であればどうかと考えることや,人間としての共感に近づく大切さを考えさせられていた. 本人担当部分：統計解析, 結果,考察 共著：北端惠子,**芝田ゆかり**,高橋直美
8　国内におけるソーシャルサポート受領についてのベネフィット・ファインディングに関する文献研究	単著	平成 30 年 1 月	第 6 回日本公衆衛生看護学会（大阪）, 2018.	国内におけるソーシャルサポート受領についてのベネフィット・ファインディングに関する文献研究を行った.
9　Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease	共同発表	平成 31 年 1 月	22nd East Asian Forum of Nursing Scholars 2019EAFONS 東アジア看護学研究者フォーラム シンガポール大会,2019.	We will clarify the trend of research on life skills focusing on the diet of patients with IBD and use our results as the basic data to consider supporting methods. 本人担当部分：統計解析, 結果,考察 共著：井上葉子,**芝田ゆかり**他
10　Association among the factors in conjunction with Height Loss of females by the literature review	共同発表	平成 31 年 1 月	22nd East Asian Forum of Nursing Scholars 2019EAFONS 東アジア看護学研究者フォーラム シンガポール大会,2019.	We examined the several factors related to the height loss of female and relations among those factors to provide basic resources to prevent height loss. 本人担当部分：統計解析, 結果,考察 共著：三浦康代,芝田ゆかり他
不登校中学生の心身の健康状態への支援における文献検討-学校適応行動を採択するまでの過程-	単著	令和元年 9 月	日本地域看護学会学術集会講演集　(横浜) 22nd,P87,2019.	中学生が学校適応行動を採択するまでの過程を明らかにすることを目的に,従来の不登校中学生の心身の健康状態を支援した関連論文等を基礎に,文献検討を行った.その結果,TTM は行動変容段階である＜無関心期＞＜関心期＞＜準備期＞＜継続期＞に大別された.そして TTM により中学生が学校適応行動を採択するまでの過程が明らかになり,学校適応のためのプログラム開発に用いる理論・モデルの選定に役立つ可能性について展望できた.

教　育　研　究　業　績　書

令和2年3月31日

氏名　　松浦　純平

研究分野	研究内容のキーワード
成人看護学	急性期看護、周手術期看護、術後せん妄、テキストマイニング

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）ストーマ造設術を受ける患者の看護」講義・演習に模擬ストーマを装着させて患者体験を実施した。	平成21年5月 ～ 平成25年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」、近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」のストーマ造設術を受ける患者の看護の講義を担当した。講義後の学生アンケートでは、ストーマの写真を初めて見て非常に勉強になった。講義内容が分かりやすくて良かったなどの感想が書かれていた。講義後の演習にて、学生へ模擬ストーマを装着させて半日過ごすことでストーマ造設患者の体験をさせた。演習後の評価として、ほぼ全員の学生からストーマ造設患者の心理状況がよく理解できたとの感想が聞かれた。
2）卒業研究にて1名の学生の卒業研究を指導した。	平成23年4月 ～ 平成24年2月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生1名の卒業研究を指導した。研究テーマは「臨床看護師が考えるレジリエンスについて」であった。
3）卒業研究にて4名の学生の卒業研究を指導した。	平成25年4月 ～ 平成26年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生４名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後せん妄に関する文献検討」、「術後の足浴実施のリラクセーション効果について」、「術後せん妄発症の要因と対策に関する文献検討」、「乳がん患者の手術を受ける意思決定に関する文献検討」であった。
4）講義内容の知識の定着を確認する目的にて、担当講義中に講義内容に合った看護師国家試験の過去問題を提示し解答させた。解答後、解説をした。	平成25年5月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の毎講義の残り5～10分間で、講義内容に見合った過去に看護師国家試験に出題された問題を提示し、解答させた。解答後、解説を行った。学生からは、講義の内容をふまえて実際の国家試験問題を解答することができて良かったとの感想が聞かれた。
5）看護過程の展開を学習するために成人期の術後患者の事例を作成してグループ演習を行った。	平成25年5月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、胃がん患者と大腸がん患者の事例を作成して、グループワークにて紙上での看護過程の展開を行った。学生からは実習に向けて看護過程が良く理解できたとの感想が多く聞かれた。

6）生体シミュレーターモデル「シムマン」を使用して異常呼吸音および異常心音の聴取の演習を行った。	平成25年6月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、生体シュミレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。
7）心肺蘇生法練習用人形モデルとAEDを使用して一次救命処置（BLS）の実際の演習を行った。	平成25年6月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の救命処置の講義後の翌週に心肺蘇生法練習用人形とAEDを使用して一次救命処置を実際に行う演習を行った。学生からは救命処置の実際を経験できて学びが深まったとの感想が聞かれた。
8）術前呼吸訓練として「トリフロー」と「トライボール」を使用して体験する演習を行った。	平成25年10月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の中の術前呼吸訓練の講義後の演習として、トリフローとトライボールの2種類の器具を使用して演習を行った。学生からは術前呼吸訓練の実際を経験することができて勉強になったとの感想が聞かれた。
9）周手術期の講義中に、イメージがつきやすいように挿管時に使用する気管チューブ、喉頭鏡などの器具を実際に手に取り見せて説明した。	平成25年10月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の周手術期の講義の中で挿管時に使用する気管チューブ、スタイレット、喉頭鏡の実物を手に取り見せて説明した。学生からは実物を見ることができて挿管時のイメージが理解できたとの感想が聞かれた。
10）卒業研究にて6名の学生の卒業研究を指導した。	平成26年4月 ～ 平成27年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生６名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後せん妄予防のための音楽療法の効果について」、「せん妄の発症と予防に関する文献検討」、「術後患者に対する音楽療法の効果について」、「足浴実施によるリラクセーション効果の検証」、「術後せん妄発症の要因に関する文献検討過去５年間の文献より」、「乳がん患者の治療方法決定に関する自己決定に関する文献検討」であった。
11）卒業研究にて3名の学生の卒業研究を指導した。	平成27年4月 ～ 平成28年2月	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「看護研究」にて４年生３名の卒業研究を指導した。研究テーマは「術後の音楽療法の効果に関する文献検討」、「看護師の考える感情労働に関する現状と課題」、「看護系大学生の考える性教育に関する現状と課題」であった。
12）生体シミュレーターモデル「フィジコ」を使用して異常呼吸音および異常心音の聴取の演習を行った。	平成28年6月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「ヘルスアセスメント」の講義後の演習にて生体シュミレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。

13）術前呼吸訓練の講義後にインセンティブスパイロメトリーを使用した術前呼吸訓練の演習を実施した。	平成28年12月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の術前呼吸訓練の講義後にインセンティブスパイロメトリーを演習にて実際に使用して術前呼吸訓練を実施した。学生からは実際に実施したことで難しさがよく理解できたとの感想が数多く聞かれた。
14）一次救命処置の講義後に演習にて救命蘇生用トレーニング人形とAEDを使用して一次救命処置の練習を実施した。	平成28年12月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の一次救命処置の講義後に演習にて救命蘇生用トレーニング人形とAEDを使用して一次救命処置の練習を実施した。演習後、学生からは講義で学んだだけでは大変さが分からなかったが、実際に演習で実施することで胸骨圧迫の深さや難しさが理解できたとの声が多く聞かれた。
15）術後離床の講義後に演習にて点滴チューブ、ドレーン、尿道留置カテーテル等を付けて術後離床時の看護援助の演習を実施した。	平成28年12月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の術後離床の講義後に演習にて点滴チューブ、ドレーン、尿道留置カテーテル等を付けて術後離床時の看護援助の演習を実施した。実施後、学生からは術後の患者の具体的な状況や心理が分かったやまた看護師がいかに安全・安楽に離床を進める必要があるか理解が深まったとの意見が多く聞かれた。
2　作成した教科書，教材 1）成人看護学演習サブテキスト開発（ストーマサイトマーキング）	平成21年5月 ～ 平成25年3月	奈良県立医科大学医学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」、近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」の講義後の演習にてストーマサイトマーキングの部位が分かるような資料を作成した。演習後、学生からはストーマ造設時の位置決めが分かりやすかったとの意見が聞かれた。
2）成人看護学知識確認資料	平成25年5月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の毎講義の残り5～10分間で、講義内容に見合った過去に看護師国家試験に出題された問題を提示し、解答させた。解答後、解説を行った。学生からは、講義の内容をふまえて実際の国家試験問題を解答することができて良かったとの感想が聞かれた。
3）看護過程アセスメントサブマニュアル（ゴードンの枠組み）開発	平成25年5月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、胃がん患者と大腸がん患者の事例を作成して、グループワークにて紙上での看護過程の展開を行った。アセスメント実施時の分類のための資料を作成し活用した。学生からは実習に向けて看護過程が良く理解できたとの感想が多く聞かれた。

4）異常呼吸音および異常心音サブテキスト開発	平成25年6月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の演習の中で後期からの臨地実習に向けて、生体シュミレーターモデルを使用して、異常呼吸音と異常心音の聴取の演習に取り組んだ。学生からは、異常呼吸音と異常心音の聴き分けができるようになり、実習前の不安が軽減したとの感想が数多く聞かれた。
5）一次救命処置（BLS）サブマニュアル資料開発	平成25年6月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の救命処置の講義後の翌週に心肺蘇生法練習用人形とAEDを使用して一次救命処置を実際に行う演習を行った。演習時に胸骨圧迫の部位、速さ、深さなどを書いた資料を見ながら演習に取り組んだ学生からは救命処置の実際を経験できて学びが深まったとの感想が聞かれた。
6）術前呼吸訓練サブマニュアル開発	平成25年6月 ～ 現在に至る	近大姫路大学看護学部看護学科にて、科目名「治療看護技術論」、奈良学園大学保健医療学部看護学科にて、科目名「成人看護学援助論Ⅰ」の中の術前呼吸訓練の講義後の演習として、トリフローとトライボールの2種類の器具を使用して演習を行った。学生からは術前呼吸訓練の実際を経験することができて勉強になったとの感想が聞かれた。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）近大姫路大学看護学部学生授業評価	平成27年2月	私が担当した「症状マネジメント論」「看護援助論Ⅱ」講義後の学生からの感想として、「とても理解しやすかった。国試に出やすいと先生が言うと集中して覚えようとします。」、「分かりやすかったです。」などの感想が多く記載されていた。
2）大学設置・学校法人審議会教員組織審査	平成28年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科専任講師「早期体験演習」「ヘルスアセスメント」「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」「成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期・回復期・終末期）」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」可と判定。
3）大学設置・学校法人審議会教員組織審査	平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科准教授「早期体験演習」「ヘルスアセスメント」「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」「成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅰ（急性期・周手術期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期・回復期・終末期）」「統合看護学実習」「卒業研究Ⅱ」可と判定。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）三重大学医学部附属病院にてプリセプターとして１年目の看護師の教育指導した。	平成19年 4月1日 ～ 平成20年 3月31日	三重大学医学部附属病院耳鼻咽喉頭頸部外科病棟にて、1年間1年目の新卒看護師の教育指導をした。1年間指導することで新人看護師と共に私自身の成長にもつながった。

2）三重大学医学部附属病院にて院内BLS（一次救命）講習を受けBLSインストラクターとして指導に関わった。	平成19年 4月1日 ～ 平成21年 3月31日	院内の一次救命処置の講習を受講し、BLSインストラクターとして他の看護師の指導に関わった。院内の急変時にも冷静に対応することができた。
3）三重大学医学部附属病院にて院内看護研究の代表者として他3名の看護師と看護研究に取り組んだ。	平成20年 4月1日 ～ 平成21年 3月31日	院内看護研究として、喉頭がん患者の喉頭摘出手術を受ける意思決定の過程に関する研究に取り組み院内看護研究発表会で発表した。
4）奈良県立医科大学医学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成21年9月 ～ 平成25年2月	奈良県立医科大学医学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
5）国立病院機構敦賀医療センター主催「2012年度院内看護研究発表会」へ招聘	平成23年12月	院内看護研究発表会にて総評を述べた。
6）2013年度福井大学医学部看護学科公開セミナー「質的研究と量的研究のコラボレーション」招聘講演	平成24年8月	福井大学医学部看護学科公開セミナーにて「質的研究と量的研究のコラボレーション」をテーマとしてテキストマイニング手法に関する講演を行った。
7）第6回Project AKI全国集会「テキストマイニングの紹介」招聘講演	平成25年1月	Project AKI全国集会にて「テキストマイニングの紹介」に関する講演を行った。
8）近大姫路大学看護学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成25年9月 ～ 平成28年2月	近大姫路大学看護学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
9）奈良学園大学保健医療学部看護学科「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」実習指導	平成28年9月 ～ 平成29年2月	奈良学園大学保健医療学部看護学科3年生を対象に「成人看護学実習Ⅰ」、「成人看護学実習Ⅱ」臨地実習指導を担当した。
5　その他 1）奈良県立医科大学医学部看護学科助教として講義担当	平成21年4月 ～ 平成25年3月	「ヘルスアセスメント」「フィジカルアセスメント」「看護援助論Ⅰ」「看護援助論Ⅱ」「成人看護学実習Ⅰ（急性期）」「成人看護学実習Ⅱ（慢性期）」「看護研究特論」「看護研究」
2）近大姫路大学看護学部看護学科専任講師として講義担当	平成25年4月 ～ 平成28年3月	「看護対象論Ⅰ」「症状マネジメント論」「看護援助論Ⅱ」「治療看護技術論」「看護展開実習Ⅰ（急性期）」「看護展開実習Ⅱ（慢性期）」「統合看護学実習」「看護課題ゼミ」「補完代替療法と看護」

3）奈良学園大学保健医療学部看護学科専任講師として講義担当	平成28年4月 ～ 平成29年3月	「ヘルスアセスメント」「成人看護学援助論Ⅰ」「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」
4）奈良学園大学保健医療学部看護学科准教授として講義担当	平成29年4月 ～ 現在に至る	「基礎演習Ⅰ」「ヘルスアセスメント」「成人看護学援助論Ⅰ」「感染症看護論」「成人看護学実習Ⅰ」「成人看護学実習Ⅱ」「卒業研究Ⅱ」「統合看護学実習」
5）奈良学園大学大学院看護学研究科准教授として講義担当	平成30年4月 ～ 現在に至る	「看護研究特論」「病態生理学」「フィジカルアセスメント」「臨床薬理学」「在宅看護学特論Ⅰ（在宅看護学）」「在宅看護学特論Ⅱ（慢性期）」「在宅看護学特論演習」「特別研究」

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 1）看護師国家資格	平成16年4月	（第1272430号）
2）修士号（看護学） （四日市看護医療大学大学院第22号）	平成27年3月	四日市看護医療大学大学院看護学研究科看護学専攻修士課程を修了した。「修士論文題名：術後せん妄の発現を予測するスクリーニングツール開発のための基礎的研究」
3）BLS（一次救命処置）ヘルスケアプロバイダー免許（日本ACLS協会0392-5404-2329-2177）	平成30年6月	アメリカ心臓協会（AHA）主催のアメリカをはじめ世界各国で開催されている医療専門家・救命のプロフェッショナルのための世界最高水準の一次救命処置（BLS：Basic Life Support）教育訓練プログラムを修了。
3）ACLS（二次救命処置）プロバイダー免許（日本ACLS協会0392-5404-2329-2177）	平成30年8月	アメリカ心臓協会（AHA）主催のアメリカをはじめ世界各国で開催されている医療専門家・救命のプロフェッショナルのための世界最高水準の二次救命処置（ACLS：Advanced Cardiovascular Life Support）教育訓練プログラムを修了。
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）三重大学医学部附属病院にて感染予防リンクナースとして活動した。	平成16年 4月1日 ～ 平成20年	三重大学医学部附属病院耳鼻咽喉頭頸部外科病棟および第１外科病棟（肝胆膵外科）にて、感染予防リンクナースとして病棟内の感染予防対策に取り組んだ。
2）三重大学医学部附属病	平成3月31日 ～ 平成21年12月	三重大学医学部附属病院主催の就職希望者向けの病院説明会にて、男性看護師としての院内での業務および活動を紹介した。参加者から分かりやすく是非三重大学医学部附属病院で働きたいとの声が聞かれた。

4　その他 1）助成団体名：ダイワハウス工業株式会社病室環境研究助成	平成21年5月 ～ 平成22年3月	本研究は、がん患者サロンに関する認識と現在の利用状況を明らかにすることを目的として研究に取り組んだ。対象はA県がん患者会会員430名を対象とした。 研究方法は、質問紙調査法とした。回収率は158名、有効回答数は148名であった。本研究結果からサロンのニーズは非常に高いこと、立地場所としては公共交通機関から近いことサロン利用者は臨床心理士の配置を希望していることが明らかになった。 研究代表者氏名：松浦純平 研究題目：がん患者が求める『患者サロン』活用への支援の検討患者サロンに関する認識と活用の実際
2）助成団体名：日本学術振興会科学研究費助成事業（基盤研究C）	平成22年5月 ～ 平成25年3月	本研究の目的は看護学生の話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系に与える影響を明らかにすることを目的とした。研究方法は3つの看護系大学の看護学生710名を対象とし有効回答372名を分析対象とした。看護学生のコミュニケーション技報はポジティブな内容は副交換神経に優位に働き、ネガティブな内容は交感神経に優位に働いていたことが明らかになった。 研究代表者氏名：上野栄一 研究題目：話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系に与える影響
3）助成団体名：日本学術振興会科学研究費助成事業（若手研究B）	平成24年5月 ～ 平成27年3月	本研究の目的は術後せん妄アセスメントスケールを開発することである．本研究は，文献検討，面接調査，質問紙調査,質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した．全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした．相関分析，I-T相関分析，天井・床効果の検討，尖度と歪度の検証，因子分析を実施した．結果10因子40項目からなるアセスメントツールを開発した． 研究代表者：松浦純平 研究題目：我が国史上初の術後せん妄を早期発見するためのアセスメントスケールの開発
4）助成団体名：大阪ガスグループ福祉財団	平成25年5月 ～ 平成26年3月	本研究は、手術後の高齢者に高確率で発症する術後せん妄の発症前駆症状に関して、臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントツール開発につなげるための基盤とすることである。研究方法は質問紙調査とし、対象は全国20病院に勤務する臨床看護経験年数5年以上を有し外科病棟での臨床経験3年以上の看護師300名を対象とした。回収数は71通、有効回答数は66通であった。記述統計分析の結果、行動、混乱、陰性症状、睡眠、妄想、排泄の6つのカテゴリーが抽出された。 研究代表者：松浦純平 研究題目：高齢患者の術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケールの信頼性に関する予備的検討
5）近大姫路大学臨地実習委員会委員	平成25年 4月1日 ～ 平成26年 3月31日	臨地実習委員会メンバーとして、実習病院との日程および受け入れ可能人数等の調整、実習病院の新規開拓などに取り組んだ。

6）近大姫路大学入試委員会委員	平成25年 4月1日 ～ 平成27年 3月31日	入試委員会メンバーとして、本学および地方会場（高知・豊岡・岡山・大阪）の入学試験の準備および試験監督として入試業務に携わった。またオープンキャンパスの企画、運営に取り組んだ。
7）近大姫路大学地域貢献活動委員会委員	平成25年 4月1日 ～ 平成27年 3月31日	地域貢献活動員会メンバーとして、年2回大学周囲の清掃美化に取り組んだ。また9月にエイズ予防キャンペーンを学生と共に企画運営しJR姫路駅前にて開催した。
8）近大姫路大学倫理審査委員会委員	平成25年 4月1日 ～ 平成26年 3月31日	研究倫理審査員会のメンバーとして、毎月1回開催された研究倫理審査に携わった。
9）助成団体名：三重大学新研究プロジェクト	平成27年10月 ～ 平成28年10月	本研究の目的は、頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する因子は何かを明らかにすることである。マウスを使用した実験の結果,受傷早期にIgGを投与することにより嗅覚障害が改善される可能性が示唆された。 研究代表者：松浦純平. 研究題目：頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する研究
10）奈良学園大学倫理審査委員会委員	平成28年 4月1日 ～ 平成29年 3月31日	研究倫理審査員会のメンバーとして、毎月1回開催されている研究倫理審査に携わった。
11）奈良学園大学学生生活委員会委員	平成28年 4月1日 ～ 平成29年 3月31日	生活委員会メンバーとして、毎月1回開催されている会議にて保護者会、3者面談等の計画、運営に携わった。
12）奈良学園大学FD委員会委員	平成28年 4月1日 ～ 現在に至る	FD委員会メンバーとして、毎月1回開催されている会議に出席して、年2回開催のFD講演会の企画、運営等に携わっている。
13）奈良学園大学スポーツ振興委員会委員	平成28年 4月1日 ～ 平成29年 3月31日	スポーツ振興委員会メンバーとして、毎月1回開催されている委員会会議に出席して、スポーツ振興活動に関する協議に携わった。
14）奈良学園大学実習部会委員会委員	平成29年 4月1日 ～ 現在に至る	実習部会委員会メンバーとして、毎月1回開催されている委員会会議に出席して、実習に関する協議に携わっている。

15）助成団体名：岡三加藤文化振興財団	平成28年 4月1日 ～ 平成31年 3月31日	本研究の目的は、頭部外傷によるQOL低下をもたらす嗅覚障害に対する嗅覚神経再生に関する因子は何かを明らかにすることである。マウスを使用した実験の結果,受傷早期にIL-6を投与することにより嗅覚障害が改善される可能性が示唆された。 研究代表者：松浦純平 研究題目：外傷性嗅覚障害患者のQOL向上を目指した嗅神経の再生に関する基礎的研究
16）奈良学園大学学内広報委員会委員	平成30年 4月1日～ 同年9月2日	学内広報委員会メンバーとして、オープンキャンパス、高校出前講義、大学案内パンフレット、シンポジウム等の企画、準備、運営に携わっている。
17）奈良学園大学学内広報委員会副委員長	平成30年 9月3日～ 現在に至る	学内広報委員会副委員長として、オープンキャンパス、高校出前講義、大学案内パンフレット、シンポジウム等の企画、準備、運営に携わっている。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1.身体拘束の適切な考え方と看護記録	共著	平成23年2月	株式会社日総研出版（看護きろくと看護過程2・3月号）	ケアの根拠が見える記録を効率よく書けるようになることを目的とする。A4変型判　全104ページ編者：岸田良平共著者：一ノ山隆司，松浦純平，舟崎起代子，上野栄一，滝内香里，山本美千代，高野悦子．本人担当部門：p52-61を単著。認知症高齢者に対する適切な身体拘束、倫理に即した看護記録の記載方法について事例を通して検討した。身体拘束は必要な医療と患者の安全のためにやむを得ず行動制限を行う場合がある。その場合は倫理的配慮を行い家族の理解と協力を得て必要最低限に留めチームとして治療計画を再検討する必要性を解説した。
2.看護師が遭遇する倫理的ジレンマとは	共著	平成24年3月	株式会社日総研出版（主任＆中堅+こころサポート3・4月号）	管理・教育・業務の実践とスキルを強化することを目的とする。B5変型判　全120ページ編者：岸田良平,共著者：一ノ山隆司，舟崎起代子，松浦純平，上野栄一．本人担当部門：p48-52を単著。看護師が臨床で遭遇する倫理的ジレンマについて原因と対応について具体的な場面を想定して検討した。その結果、看護師が倫理問題に冷静に向き合う姿勢が大切であることを解説した。
3.看護のための『教育学』	共著	平成27年10月	株式会社あいり出版（看護・介護・福祉のための「教育学」第１巻）	患者教育指導において看護者に必要な視点を、心理学・教育学の成果を生かして主要な疾患についての概要と実際の事例を紹介した。B5判　全158ページ（看護・介護・福祉のための「教育学」第１巻）編者:守本とも子,共著者：松田智子,虎杖真智子,鎌田首治朗,松浦純平,中尾友美,武富由美子,山口曜子,佐々木千恵,新谷奈苗,東中須恵子,岡本響子．本人担当部門：第４章「糖尿病」p43-58を単著。生活習慣病（糖尿病）患者の主に薬物療法と運動療法を中心とした健康維持・増進・回復に向けた援助方法について解説した。具体的には、服薬自己管理に向けたアドヒアランス獲得を目的とした教育原理・教育心理を踏まえた患者の服薬指導実践の展開事例と在宅での薬物療法を継続できるように援助および薬物治療時の低血糖出現時や有害事象出現時の対処方法について、教育理論を用いて具体的な事例を2例提示して図・表を入れて解説した。
4.看護職・看護学生のための「痛みケア」	共著	平成29年3月	株式会社ピラールプレス	看護職と看護学生を対象に痛みについてのケアの概要と実際の事例を紹介した。B5判全175ページ編著:守本とも子,共著者：池辺寧,沖本克子,梶村郁子,片山康予,小池恵理子,澤田京子,篠原百合子,新谷奈苗,高垣麻衣,立川茂樹,田中登美,棚橋千弥子,辻下守弘,西上智彦,前田吉樹,松浦純平,室津史子,守本とも子,横山美菜.本人担当部門：第15章「慢性疼痛のある患者の看護」p134-148を共著。
5.2018年看護師国家試験対策要点がわかる出題傾向がみえる成人看護学 上	共著	平成29年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に成人看護学分野の要点編と過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントついて紹介した。B5判全139ページ 監修:守本とも子,編著：松浦純平,著：明神一浩.本人担当部門：p10-52,p104-127を単著。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. 2018年看護師国家試験対策要点がわかる出題傾向がみえる成人看護学 下	共著	平成29年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に成人看護学分野の要点編と過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントついて紹介した。B5判全146ページ 監修:守本とも子, 編著：松浦純平, 著:大山末美, 梶村郁子, 田場真理. 本人担当部門：p10-146を単編著。
7. 2018年看護師国家試験対策要点がわかる出題傾向がみえる精神看護学	共著	平成29年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に精神看護学分野の要点編と過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントついて紹介した。B5判全110ページ 監修:守本とも子, 編著：松浦純平, 明神一浩.
8. 出題基準平成30年版準拠 2019年出題傾向がみえる精神看護学	共著	平成30年5月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に精神看護学分野の要点編と解説付過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントついて紹介した。B5判全123ページ 監修:守本とも子, 編著：松浦純平, 明神一浩.
9. 出題基準平成30年版準拠 2019年出題傾向がみえる成人看護学 上	共著	平成30年7月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に成人看護学分野の要点編と解説付過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントついて紹介した。B5判全207ページ 監修:守本とも子, 編著：松浦純平, 著：明神一浩.
10. 出題基準平成30年版準拠 2019年出題傾向がみえる基礎看護学	共著	平成30年8月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に基礎看護学分野の要点編と解説付過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントついて紹介した。B5判全179ページ 監修:守本とも子, 編者：松浦純平, 著：北島洋子, 澤田京子, 瀬山由美子, 平野加代子, 中馬成子, 丸上輝剛.
11. 出題基準平成30年版準拠 2019年出題傾向がみえる成人看護学 下	共著	平成30年11月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に成人看護学分野の要点編と解説付過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントついて紹介した。B5判全189ページ 監修:守本とも子, 編著：松浦純平, 著：明神一浩.
12. 出題基準平成30年版準拠 2019年出題傾向がみえる必修問題	共著	平成30年12月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験対策として看護学生を対象に必修問題の要点編と解説付過去問編の2部構成で看護師国家試験勉強に必要なポイントついて紹介した。B5判全189ページ 監修:守本とも子, 編著：松浦純平, 著：井上昌子、斉藤英夫、溝口みちる、明神一浩.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1.わが国のせん妄に関する看護研究の動向と課題　―文献検討を通して― （査読付）	共著	平成22年4月	日本看護学会論文集看護管理第40号．p264-266．2010．	本研究の目的は、我が国における看護分野でのせん妄に関する研究について、文献検討により研究の動向と課題を明らかにし、患者のケアへの示唆を得ることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と看護とした。その結果、178編の文献の中から31編の文献を抽出し分析対象とした。結果、研究の動向としては2004年を除き年間20編程度の研究がなされていた。研究デザイン別では量的研究が91編、質的研究は14編、事例研究は15編であった。研究対象者は患者であるものが105編であった。筆頭研究者は臨床看護師が94件、看護系大学教員は17編、両者の共同研究が9編であった。フィールド別では整形外科17編、外科病棟12編、ICU5編、CCU4編、一般外科4編であった。せん妄発症要因について研究されたのは31編であった。せん妄評価尺度は日本語版ニーチャム混乱・錯乱状態スケールが11編であった。本研究結果から予防に関する研究が少なかったため、今後はせん妄発症予防ケアの充実を図るための研究が期待されることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上平悦子．
2.外科領域における術後せん妄発症予測要因 （査読付）	単著	平成23年11月	医学生物学155巻11号．P825-829．2011．	経験豊富な看護師が直観的に感じる術後せん妄発症の前駆症状は何かを明らかにする目的で，2病院外科病棟に勤務する看護師20名へ半構成的面接を実施した．逐語録を分析し，カテゴリ化した．せん妄予測項目の名詞78個を分類した結果，【時間感覚】，【置かれた環境】，【対象者】，【認識】，【情意】，【対象物】，【表情】，【コミュニケーション】，【患者の反応】など12カテゴリが生成された．経験豊富な看護師は，表情，失見当識，看護師の説明に対する認識，反応等から術後せん妄発症予測し，前駆症状として捉えていた．これらの観察視点は，経験の浅い新人看護師が気付きにくい観察項目である．今後，この重要観察項目の共通理解を深めることで術後せん妄の早期発見・早期対応につながることが示唆された．
3.がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題（査読付）	共著	平成24年2月	日本地域連携精神看護学研究誌第3巻p82-88．2012．	本研究の目的は、A県内のがん患者会会員が考えるサロンにおけるメンタルヘルスに関する認識および現状を明らかにすることである．研究対象はA県がん患者会会員400名．調査方法は，対象者に本研究の主旨と自記式無記名質問紙調査を同封し郵送した．調査項目は，基本的属性，サロンの認識，サロン立地条件，サロン利用者，サロンに必要と考える医療従事者，サロンへの期待の6項目．分析方法は，PASW Statistics18.0を用いて単純集計を行った．結果、以下の3点が明らかとなった．1．地域に暮らす患者にとってサロンのニーズ・期待度は，非常に高い．しかし，実際にサロンを利用している人は少ない．2．サロン設置場所として通いやすい立地条件であることを望んでいた．3．サロン内にメンタル面のフォローができる専門職の配置を望んでいた． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.テキストマイニングによる看護師の考える術後せん妄発症予測について　―経験豊富な看護師へのインタビューの分析― （査読付）	共著	平成24年3月	日本看護学会論文集成人Ⅰ第42号p62-65．2012.	研究の目的は外科病棟に勤務する看護師が考える術後せん妄発症予測につながる前駆症状を明らかにすることである．調査対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名である。研究方法は術後せん妄発症前の段階でアセスメントをどのような視点で実施しているかについて半構成的面接を実施した．分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトは，WinCha，KWIC Finderを使用した．結果、せん妄発症アセスメント項目は「行動」「コミュニケーション」「行動対象」「表情」「睡眠」「訴え」など9カテゴリが生成された． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，福田弘子，上野栄一，水野正延．
5.頭頸部外科領域における術後せん妄発症要因の検討　―内容分析，セブン・クロス（7×7）法の分析より―（査読付）	共著	平成24年3月	富山大学看護学会学会誌11巻1号p9-18．2012.	本研究の目的は，頭頸部外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症要因は何かを明らかにすることである．対象は，A病院頭頸部外科病棟に勤務する看護師5名．術後せん妄発症要因について半構成的面接を実施，結果はKrippendorffの内容分析手法およびセブン・クロス法にて分析した．内容分析の結果から【性格特性】，【理解力不足】，【長期安静】，【高齢】，【不眠】，【男性】，【独居】の7つのカテゴリーが生成された．セブン・クロス法の結果から優先順位が高い順に【不眠】，【性格特性】，【高齢】，【長時間手術】，【術中出血量】，【眠剤の影響】，【術前不安】の 7つのカテゴリーが生成された．内容分析とセブン・クロス法の両方に含まれていたのは【高齢】，【不眠】，【個人特性】の3カテゴリーであった． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，上野栄一．
6.異なる血圧測定技術教育方法による技術習得状況の違い （査読付）	共著	平成25年3月		本研究は血圧測定の教育方法として、測定手技の手順を教授する方法と主に測定手技の根拠を教授する方法のどちらが血圧測定技術の習得状況によい影響をもたらすのかを検討した。結果、測定手技の根拠を教授した方が患者役に対して測定に伴う苦痛を減少させることや正しく測定できることが明らかになった。 （調査実施、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：吉岡一実，一ノ山隆司，石井秀美，大川智恵子，菊地淳，有馬義貴，松浦純平，吉岡多美子．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7.患者情報から看護問題を抽出する際の脳活動に関する研究-近赤外分光法による看護学生の前頭葉賦活状況について- （査読付）	共著	平成25年4月	医学と生物学157巻4号 p450-454．2013.	本研究は、患者情報から看護問題を抽出する際の前頭葉の賦活状況を、学年のことなる看護学生計2名を対象に比較検討したものである。患者情報を5枚のスライドで提示したあとに、看護問題を抽出する課題を与えた。前頭葉の賦活状況は近赤外分光法を用いて測定し、22か所で酸素化ヘモグロビン濃度により評価した。測定終了後には、それぞれのスライド提示時にどのようなことを考えたのかを質問紙で調査した。その結果、前頭葉の賦活状況には被験者間で差がみられ、これが看護問題を抽出する際の思考の違いであると示唆された。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：吉岡一実，菊地淳，平野大輔，入江裕子，一ノ山隆司，石井秀美，大川智恵子，松浦純平，有馬義貴，吉岡多美子.
8.血圧測定時における前頭葉の賦活の様相―看護学生と看護師との比較検討―（査読付）	共著	平成25年5月	医学生物学157巻5号 p565-568．2013.	本研究は血圧測定時における測定者の前頭葉の賦活状況を、近赤外分光法を用いて看護学生と看護師とで比較検討した。その結果、前頭葉の21部分で賦活状況を比較したところ、両手技とも手技前に比べて看護学生は看護師の2倍の部位で有意に酸素化ヘモグロビン濃度が上昇していた。このことは血圧測定技術の習得度と前頭葉の賦活状況が反比例していることを示しており、初学者は前頭葉をより賦活化させて測定していることが明らかになった。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：吉岡一実，菊地淳，平野大輔，入江裕子，一ノ山隆司，松浦純平，有馬義貴，石井秀美，大川智恵子，吉岡多美子.
9.看護師が実践している術後せん妄発症予防について―テキストマイニングを利用した分析― （査読付）	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1372-1376．2013.	本研究は術後せん妄発症予防のために看護師が取り組んでいる看護実践を明らかにすることである。2施設の外科病棟に勤務する看護師20名を対象に半構成的面接調査を実施した。分析は形態素解析にて分析した。その結果，頻出名詞はせん妄，患者，説明などが多かった。説明に関するコロケーション解析の結果「見当識障害予防を意識した説明をすること」や「本人・家族へ術後はせん妄発症の可能性があることを説明する」などであった。「予防」に関する結果から「昼夜逆転予防を意識した早期離床の援助の実施。」などの文脈が抽出された。本研究結果から以下の4点が明らかになった。術前より患者本人へ術後の状況について説明を実施していた。術後はサーカディアンリズムを整えるために積極的な早期離床を行なっていた。見当識障害予防のため日時を伝えるなどを実施していた。術後疼痛緩和の援助を実施していた。 （本研究の代表者として研究に取り組んだ。）共著者：松浦純平，一ノ山隆司，吉岡一実
10.臨床看護師が実践している術後せん妄発症予防の取り組み （査読付）	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1377-1381．2013.	本研究は、臨床看護師の術後せん妄発症予防に対する取り組みを明らかにすることである。テキストマイニング手法の共起関係ネットワーク分類の結果から、次の4点が明らかになった。1点目は、術後の生活リズムの再構築を意識した積極的な早期離床を実施していること。2点目は、体位変換に生じる身体的苦痛の除去に努めていること。3点目は、手術前には具体的な説明を実施していること。4点目は、環境整備の実施や術後疼痛の緩和に対する援助に取り組んでいることであった。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：一ノ山隆司，松浦純平，吉岡一実

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.在宅で精神障がい者と生活する家族の負担に関する研究 （査読付）	共著	平成25年6月	医学と生物学157巻6号 p1382-1386. 2013.	本研究の目的は、在宅で精神障がい者と生活する家族の負担要因を明らかにし、今後の家族支援への示唆を得ることである。A県内の11の地域家族会に所属している精神障がい者と同居する家族236人の「日頃から気になること」への記述を分析データとした。データ分析は、内容分析の手法を参考に形態素解析、コロケーション解析を行った。結果、【病気に関する不安】、【家族自身の体調の心配】、【将来の生活に対する焦り】、【社会や周囲および身内からの理解不足に関する苛立ち】、【責任を持ってケアする重圧】、【同居することで生じる束縛感】、【地域の施設が整わないことへの不満感】の7つのカテゴリーを生成し、家族が精神障がい者のケアの担い手であっても、家族はケアの対象者である観点から地域連携の精神看護に反映させていく有効な知見が示唆された。 （データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：一ノ山隆司，松浦純平
12.精神科臨床経験3年未満の看護師が抱く陰性感情の特徴 （査読付）	共著	平成25年6月	医学生物学157巻6号 p1387-1392. 2013.	本研究は、精神科病棟に勤務する精神科臨床経験3年未満の看護師3人対象として、彼らが抱く陰性感情の特徴を把握することが目的である。半構成的面接法により陰性感情に関する調査を行った結果、陰性感情として8カテゴリー生成することができた。患者に対しては否定的な捉え方によって生じる【不安感】、患者から被害を受けるといった【恐怖心】、患者との対応における未熟さから生じる【困惑】、どこにもぶつけることができない感情から生じる【怒り】、患者に自分の思いが受け入れてもらえないことによる【苛立ち】、患者とのかかわりから生じていく落胆から引き起こされる【疲弊感】、患者の対応を他の看護師と比べることによって生じる【劣等感】、患者との関係性や対応を振り返ることから生じる【自責感】であった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，菊地淳，吉岡一実
13.FACTORS RELATED TO THE USE OF HOME CARE SERVICES BY STROKE PATIENTS UNDER JAPAN’S LONGTERM CARE INSURANCE SYSTEM （日本における長期間の介護保険システム下の脳卒中患者による在宅ケアサービス使用要因） （査読付）	共著	平成26年12月	International Journal of Medical Research & Health Sciences 4 (1) p103-109. 2014.	脳卒中患者は、在宅ケア看護サービスを利用者数の中では最も多い。本研究の目的は、日本の介護保険システムの下で在宅ケア・サービスの使用状況との利用者の関係を決定するために脳卒中患者の鍵となる要因と主な介護者の関係を明らかにすることである。研究方法は東海と近畿地域で14の主題と彼らの介護者を対象とした。質問紙調査票が主な介護者のために使用した、データ分析方法は、一変量分析により分析した。結果、バルテルIndex（BI）得点より高い脳機能障害が、長期の介護保険の使用率と関連があることが明らかになった。またBI得点低下と在宅ケア率は増加した。結論：脳卒中患者の2つの特徴が長期の介護保険の使用率に関連することが明らかになった。 （質問紙票作成、データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Kazuya Ikenishi,Jumpei Matsuura 2015年度インパクトファクター：0.18

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14.術後せん妄の発現を予測するスクリーニングツール開発のための基礎的研究（修士論文）	単著	平成27年3月	四日市看護医療大学大学院看護学専攻修士課程 p1-36.2015.A4版 総頁数36	本研究の目的は経験年数を問わず臨床看護師が簡便に使用できる術後せん妄スクリーニングツール開発に向けての予備的研究として術後せん妄発症前駆症状の構成因子を明らかにすることである．本研究は，調査Ⅰの文献検討，調査Ⅱの面接調査，調査Ⅲの質問紙調査,質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した．調査Ⅲは全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした．相関分析，I-T相関分析，天井・床効果の検討，尖度と歪度の検証，因子分析を実施した．PASW 18を使用した．因子分析の結果【妄想支配による精神的訴え】，【活動意欲の減退】，【意味のない行動】，【認識機能の低下】，【外見的興奮】，【理解力の違和感】，【恐怖・心配の訴え】，【失見当識】，【排尿に関する愁訴】，【睡眠覚醒サイクルの障害】10因子40項目を抽出した．本研究で明らかになった新しい知見は【外見的興奮】，【理解力の違和感】の2因子であった．
15.Early detection and treatment ： an examination of prodromal symtoms of post operative delirium in elderly patients （早期発見と処置：高齢患者の術後せん妄の前駆症状について） （査読付）	単著	平成27年4月	International Journal of Clinical and Biomedical Research. 1（2）p1-6.2015.	研究目的は，臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケール開発のための基盤とすることである。対象は看護師300名とした。結果，看護師が術後せん妄前駆症状として考えている症状は「看護師へ遠慮して何も言わない」「自分で寝返りを打たない」であった。術後せん妄前駆症状を症状別に類似するカテゴリー別に分類した。その結果「行動」「混乱」「陰性症状」「睡眠」など6カテゴリーに分類された。 2015年度インパクトファクター：3.3
16.Initial development of a screening tool for postoperative delirium prodrome （術後せん妄スクリーニングツールの開発） （査読付）	共著	平成27年6月	International Journal of Current Advanced Research.4(7)p165-167.2015.	本研究の目的は、術後せん妄発症を早期に発見するためのアセスメントツールを開発することである。全国の国立大学医学部附属病院の看護師725名を対象に質問紙調査を実施した。結果、10因子38項目からなる術後せん妄アセスメントツールを開発した。（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno 2015年度インパクトファクター：5.438
17.The needs of post-operative delirium assessment tool for clinical nuese （臨床看護師の考える術後せん妄スクリーニングツールの必要性に関する研究） （査読付）	共著	平成27年6月	RA Journal of Applied Research.1(6)p219-226.2015.	本研究の目的は、臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールについてのニーズを明らかにすることである。 対象は全国の大学病院19病院の外科系病棟に勤務する看護師725人である。 アセスメントツールの必要性について「必要である」、「やや必要である」と回答した対象者の割合は全体の85.5%であった。このことからアセスメントツールの必要性について、非常に受容があることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura, Eiichi Ueno 2015年度インパクトファクター：3.62

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18.The Relationship Between Work-Life Balance And Nwi-R Score Among Unmarried Nurses Working For Less Than Two Years In Hospital. (病院の勤務年数2年以下の未婚看護師におけるワークライフバランスとNwi-R得点との関連) （査読付）	共著	平成27年7月	International Journal Of Medical Science And Clinical Invention. 2(7)p1120-1125.2015.	近年、ワークライフバランスに関する研究が増加している。本研究の目的は経験年数が2年以下の看護師についてワークライフバランス（WLB）とNWI-R得点の関連を明らかにすることである。 調査対象者は東海地区と関東地区の病院に勤務する看護師とした。収集したデータは年齢、性別、経験年数、ワークライフバランス、NWI-Rとした。回答者は117人だった。経験年数が１年未満の看護師は61人、1年以上2年以下は56人だった。WLBでは、満足と回答したのは37人、不満足は36人、どちらとも言えないは44人だった。クラスカルウォリス検定の結果、この3群間ではNWI-R得点に有意差を認めた(p=0.0013)。結果、育児や家事以外の私生活に関する時間を有効に活用できるように職場の改善が必要なことが示唆された。 （質問紙票作成、データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Kazuya Ikenishi,Jumpei Matsuura 2015年度インパクトファクター：3.301
19.テキストマイニングを用いたセラピストとクライエントの会話分析 （査読付）	共著	平成27年12月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第3巻p87-94.2015.	本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面を会話分析にてカウンセラーの援助の特徴を明らかにして今後のうつ病患者へのカウンセリングに活用することである．カウンセラーが話した「思う」についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は10回中6回であった．ネガティブな発言内容は10回中1回であった．このカウンセラーのクライエントへの関わり方は意図的にクライエントの積極的な発語を引き出す重要な手法であるのではないかと推察する． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,川野雅資
20.テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング時の会話分析 （査読付）	共著	平成28年5月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌第4巻p67-74.2016.	本研究の目的はうつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からセラピストの援助の特徴を明らかにすることである。対象はうつ病患者へのカウンセリングを実施したセラピストとクライエントの発語とした。分析はセラピストとクライエント別に記述統計，階層的クラスター分析，多次元尺度法，共起ネットワーク分類を行った。セラピストの発語内容を多次元尺度法にて分析した結果，同調や促しの「うん」以外は，非常にバランスが取れた発語であったことが明らかになった。共起ネットワーク分類にて分析した結果，「調整」と「気分」と「楽観」の3つに関する話題に分類された。 クライエントの発語内容を多次元尺度法にて分析した結果，A氏、先生に関する発言が多いことが明らかになった。　共起ネットワーク分類にて分析した結果，「A氏と先生との会話」と「雇用に関する将来の不安」と「休職したことの自責の念」の3つに関する話題に分類された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,川野雅資

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21.スライディングシート導入後の現状と課題 －トラウマインフォームドケア（TIC）の観点より－（査読付）	共著	平成28年9月	第1回臨床精神看護学研究会誌2016年.p77-79.2016.	本研究の目的は，TICの観点に基づき対象者と医療スタッフのそれぞれの立場から移送用スライディングシートの導入後の現状と課題は何かを明らかにすることである。対象は，X病棟に入院中の対象者5名と同病棟にて勤務する医療スタッフ5名。データ収集方法は研究者がスライディングシートの導入前と導入後の使用後の感想をそれぞれに直接聞き取り調査を実施した。対象者の肯定的意見は，「抱えられるよりは全然怖くないね。」，「安心感があるよ。」などの意見が聞かれた。否定的意見は「ゆっくりとしないと勢いよくすると滑り過ぎる時があるね。」との意見が聞かれた。医療スタッフの肯定的意見は「腰への負担が少なくなった。」，「僅かな力でも簡単にシートがよく滑るから使いやすい。」などであった。ノーリフトの基本理念は，対象者を抱えずに滑らせて移動する方法である。TICの基本的な考え方は，対象者にいかにトラウマ体験をさせないかである。スライディングシート導入後，対象者と医療スタッフからは肯定的意見が多く聞かれた。このことからスライディングシート導入による患者へ恐怖心を与えない看護の提供が出来たことで看護の質の向上など一定の効果はあったのではないかと考える。 （データ収集、データ分析、結果、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：西木一美，香田美帆，松浦純平
（その他） 「研究費助成報告書」 1.がん患者が求める「患者サロン」活用への支援の　検討―「患者サロン」に関する認識と活用の実際―	共著	平成21年3月	平成21年度病室環境研究成果報告集奈良県立医科大学住居医学大和ハウス寄付講座．p17-23.2009.	本研究は、がん患者サロンに関する認識と現在の利用状況を明らかにすることを目的として研究に取り組んだ。対象はA県がん患者会会員430名を対象とした。 研究方法は、質問紙調査法とした。回収率は158名、有効回答数は148名であった。本研究結果からサロンのニーズは非常に高いこと、立地場所としては公共交通機関から近いことサロン利用者は臨床心理士の配置を希望していることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，瀬川睦子 全ページ104ページ
2.高齢患者の術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントスケールの信頼性に関する予備的検討	単著	平成25年5月	大阪ガスグループ福祉財団研究報告書26号.p111-116.2013.	本研究は、手術後の高齢者に高確率で発症する術後せん妄の発症前駆症状に関して、臨床経験豊富な看護師の経験知に基づく術後せん妄発症を早期に発見するための術後せん妄アセスメントツール開発につなげるための基盤とすることである。研究方法は質問紙調査とし、対象は全国20病院に勤務する臨床看護経験年数5年以上を有し外科病棟での臨床経験3年以上の看護師300名を対象とした。回収数は71通、有効回答数は66通であった。記述統計分析の結果、行動、混乱、陰性症状、睡眠、妄想、排泄の6つのカテゴリーが抽出された。 全146ページ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.我が国史上初の術後せん妄を早期発見するためのアセスメントスケールの開発	単著	平成26年8月	日本学術振興会科学研究費助成事業若手B研究報告書.2014.	本研究の目的は術後せん妄アセスメントスケールを開発することである．本研究は，文献検討，面接調査，質問紙調査,質問紙調査に基づく術後せん妄前駆症状の抽出の順に実施した．全国国立大学医学部附属病院19病院に勤務する外科経験年数3年以上看護師725名を対象とした．相関分析，I-T相関分析，天井・床効果の検討，尖度と歪度の検証，因子分析を実施した．結果10因子40項目からなるアセスメントツールを開発した． 全6ページ
「国際学会発表抄録」				
1.Examination of nurse's communication skills in role playing. （看護師のコミュニケーションスキル向上を目指したロールプレイングの効果の検証）	―	平成23年1月	The 3rd Korea-China-Japan Nursing Conference,p239.2011.	本研究は統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる示唆を得ることを目的とした。対象はα県内精神病院に勤務中の看護師5名である。面接内容は同意が得られた場合のみICレコーダーにて録音し，逐語録を作成した。分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトは，WinCha，KWIC Finderを使用した．結果、統合失調症患者との対話場面においての看護師が患者に対して話した発語項目の中から名詞のみを対象とした。その結果688個の構成要素を抽出した。コミュニケーション（120） 沈黙（114）相手（110）時間（74）などの6カテゴリが生成された．本研究から統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる要因として看護師の配慮がスキルアップにつながる可能性が示唆された。 （逐語録作成、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Ryuji Ichinoyama,Kiyoko Funasaki,Jumpei Matsuura
2.The characteristis of nursing literature on the family nursing during 15 years past. （過去15年間の世界における家族看護に関する研究の特徴）	―	平成23年6月	The 10th International Family Nursing Conference,p243.2011.	本研究の目的は，世界における家族看護に関する研究の特徴を明らかにすることである．文献検索は，PubMedを用い，キーワードは「characteristis」「Family」「 Care」「Nursing」で検索した．遡及期間は1995年～2010年の過去15年間とした．対象は抽出された文献126件を分析対象とした．方法は126件の文献に含まれるキーワードに注目して類似するキーワードからカテゴリ化を行い，記述統計を実施した．結果,6個のカテゴリと26個の項目を導き出した．カテゴリは，それぞれ家族，ケア，関係など6種類であった．項目では，家族，患者，父親，高齢者,老人，母など26個であった．対象は，家族が一番多い結果であった．傾向は，分野別では，在宅ケア，高齢者などが多い結果であった．システム理論を発展させ更に家族療法を組み合わせた考え方の家族システム看護の視点から分析するとコミュニケーションについて伝達内容だけでなく家族の関係性も重要であることが明らかになった。また家族成員の変化が発生した場合は家族メンバー間で認知変化を注意して観察していく必要があると考える． （データ収集、データ分析、考察の一部執筆を担当した。） 共著者：Eiichi Ueno, Jumpei Matsuura

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3.Trend and problem of research on family nursing in the world from the review of the literature for past 15 years. （世界における家族看護に関する研究の現状と課題　過去15年間の文献検討）	—	平成23年6月	The 10th International Family Nursing Conference,p251.2011.	本研究の目的は，世界における家族看護に関する研究の動向と課題を明らかにすることで今後の家族看護に対する研究の方向性の示唆を得ることである．文献検索は，文献検索オンラインデータベースPubMedを用い，キーワードは「Family」，「 Care」，「Nursing」で検索した．遡及期間は1995年～2010年の過去15年間とした．対象は抽出された文献106件を分析対象とした．方法は106件の文献に含まれるキーワードに注目して類似するキーワードからカテゴリ化を行い，記述統計を実施した．結果,8個のカテゴリと33個の項目を導き出した．カテゴリは，それぞれ対象，関係，分野など8種類であった．項目では，家族，患者，親族，年配，子供新生児，老人，母，看病など33個であった．対象は，家族が一番多い結果であった．傾向は，新生児・子供から高齢者まで多岐に渡り幅広かった．分野別では，集中，救命が多い結果であった．種類では，看護，医療，介護，研究，教育の順で幅広い結果であった．家族看護学には，看護とシステム理論と家族療法を組み合わせた考え方の家族システム看護という考え方がある．このことから，変化が起こった場合には，家族間での知覚の変化を注意して観察していくことが必要ではないかと考える． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura,Eiichi Ueno
4.The caring concerns of the reducing the incidence of postoperative deliria in the field of head and neck. （ケアリングの視点に基づく外科病棟における術後せん妄発症率を減らすための方略）	—	平成24年3月	International Hirosima Conference on caring and Peace, p196.2012.	本研究は，外科病棟における術後せん妄発症予防のために病棟看護師が実践しているケアリングについてを明らかにすること．対象者は病院外科病棟に勤務する看護師の看護師7名について半構成的面接を実施した.分析方法は逐語録を文脈内容から意味のある内容を単一記録として区切り帰納的分類を実施してカテゴリ化を実施した.10個項目と41個のカテゴリを導き出した．項目は時間，コミュニケーションなどであった．カテゴリは現在，時間などであった.分析結果から術後せん妄発症予防に関して，看護師は，術後患者に対して「認知」，「睡眠」に関するケアを特に注意して実施している事が明らかになった.ケアリングの概念の中の「関わり」「交流」をベースとして「支持的態度」「コミュニケーション」「情報提供」「患者へ安楽の提供」に当てはまると推察する． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura,Eiichi Ueno
5.The desired nursing students’ ability of communication from the caring standpoint. （ケアリングの見地から見た看護学生のコミュニケーション能力）	—	平成24年3月	International Hirosima Conference on caring and Peace, p263.2012.	本研究の目的はケアリングの視点から見た看護学生のコミュニケーション能力について明らかにすることである。対象A大学看護学部学生120名とした。段階別コミュニケーション能力評価尺度を用いて学年別に評価した実施した。ケアリングの視点としては相手への思いやりである。結果、相手が話すまで待つや相手が話すことを真剣に聞くなどが多項目よりも高い結果であった。これらの視点はケアリングの考えに基づくコミュニケーションであると推察する。今後はこの部分を更に伸ばすような指導を授業、演習、実習を通して行っていく必要性が示唆された。 （データ入力、データ分析、考察の論文執筆を担当した。） 共著者：Eiichi Ueno, Jumpei Matsuura

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. The present conditions and problem about professionalism and the stress on the nurse in the world （世界における看護師のプロフェッショナリズムとストレスに関する現状と課題）	―	平成28年7月	The 6th Asian Congress of Health Psychology2016	本研究の目的は、世界の看護師のプロフェッショナリズムとストレスに関する研究の現状と課題を明らかにすることである。PubMedを使用してキーワードは「professionalism」、「nursing」、「stress」とした。結果、抽出された17編の論文の中から内容を精査した結果15編の論文を対象にした。国別に分類した結果、USA 3編、Swedish 2編、Germany 2編、Australia 2編、Taiwan 2編、France1編、Canada1編、UK 1編、Spanish 1編であった。研究デザイン別は，質的研究6編、量的研究7編、報告1編、文献研究1編であった。研究目的別は、成人のがん病棟の患者と看護師間の相互作用のユーモアの使用について、プロ意識とチームワークの関係についてなどであった。研究対象者別分類は、臨床看護師10編と最多であった。研究フィールド別分類は、臨床8編で最多であった。日本では取り組みがなされていないかったため今後取り組む必要性が示唆された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：Jumpei Matsuura，Eiichi Ueno
7. The characteristicon the past paper concerns of mental health caused when a disaster strikes (災害発生時における精神衛生に関する文献研究)	―	平成28年7月	The 6th Asian Congress of Health Psychology2016	本研究の目的は、災害発生時の精神衛生に関する動向と課題を明らかにすることである。対象はPubMedを使用した1973年から2015年の894論文である。 分析方法は内容分析である。ソフトはKH Coderを使用した。結果、ハリケーンのような多くの災害地震と津波について研究されていた。災害は、個人とコミュニティにおいて精神衛生で最も重要であり優先度が高い問題である。今後はプログラム開発など多くの種類の災害への適切な支えとなる方法を提供する必要性がある。 （テキストマイニングソフトを使用しての分析、考察の執筆、スライドの一部作成を担当した。） 共著者：Eiichi Ueno，Nobuaki Maegawa，Jumpei Matsuura，Sanae Naruse
「国内学会発表抄録」 1.わが国のせん妄に関する看護研究の動向と課題　―文献検討を通して―	―	平成21年5月	第40回日本看護学会学術集会看護管理抄録集.p119.2009.	本研究の目的は我が国における看護分野でのせん妄に関する研究について、文献検討により研究の動向と課題を明らかにし、患者のケアへの示唆を得ることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と看護とした。結果、31編の文献を対象とした。研究デザイン別では量的研究が91編、質的研究は14編、事例研究は15編。研究対象者は患者105編。筆頭研究者は臨床看護師94編、看護系大学教員17編、共同研究9編。フィールド別では整形外科17編、外科病棟12編、ICU5編、CCU4編。せん妄発症要因については31編。せん妄評価尺度はニーチャム混乱・錯乱状態スケール11編。本研究結果から予防に関する研究が少なかったため、今後はせん妄発症予防ケアの充実を図るための研究が期待されることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上平悦子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.看護学生のコミュニケーション能力からみたカリキュラムの開発	―	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集. p49. 2010.	本研究の目的は看護学生の段階別コミュニケーション能力評価尺度を用いて、効果的な授業プログラムを開発することを目的とした。研究方法は3つの看護系大学の看護学生710名を対象とし有効回答372名を分析対象とした。看護学生の段階別コミュニケーション能力評価制度を用いた学生のコミュニケーション能力を測定した。結果、４学年が多くの項目で高得点を示したが2学年になるとコミュニケーション能力が低下する傾向であった。今後は看護学生のコミュニケーション能力を向上させるために各学年別に客観的指標を基に重点項目を教授することが大切である。そのためには各学年にコミュニケーションを教授する科目を効果的に配置するカリキュラムが必要である。 （データ入力、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一, 明神一浩, 松浦純平
3.術後せん妄発症要因と予防に関する文献検討　―過去5年間の国内文献より―	―	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集. p51. 2010.	本研究の目的は文献検討から国内におけるせん妄発症要因と予防について明らかにすることである。研究方法は医学中央雑誌を用いキーワードはせん妄と術後と要因と予防とした。その結果、202編の文献の中から31編の文献を抽出し分析対象とした。結果、要因に関する論文は18編、予防に関する論文は10編であった。要因としては認知症、65歳以上などが多い結果であった。予防目的の取り組みとしてはビデオメッセージ、リアルオリエンテーションなどがあった。本研究から以下の2点が明らかになった。1点目は発症要因としては「消化器外科病棟」、「認知症」「65歳以上」が多い結果であった。予防については「環境の変化」「睡眠障害」など誘発因子への介入が発症予防に効果があることが分かった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一
4.患者の暴力に対する看護師の予測マネージメントの研究	―	平成22年3月	第23回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集. p55. 2010.	本研究の目的は精神科病棟におけるベテラン看護師の危険予測について語りを振り返り臨床現場での実践に示唆を得ることを目的とした。研究方法はα県内の精神科病院に勤務する精神科臨床経験10年以上の看護師6名を対象とした。 研究方法は半構成的面接法より得られたデータを質的帰納的に分析した。結果、患者の暴力に対する予測過程を抽出した。結果、「患者の行動パターンの把握」、「過去に起こった場面の想起」、「患者の話す内容の整合性」の3つのカテゴリーが生成された。今後は精神病患者の暴力を予測するための客観的評価についても更に量的・質的に検証するため必要がある。 （逐語録作成、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩, 上野栄一, 松浦純平

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5.高齢男性介護者の介護に対する自己の構え	—	平成22年7月	日本看護研究学会学術集会プログラム・抄録集. p113. 2010.	本研究の目的は高齢男性介護者の介護に関わる介護者の構えについて明らかにすることである。対象は高齢男性介護者の介護に関わる介護者4名を対象とした。対象者へ半構成的面接を実施した。結果、「喜び」「孝行」「負担」「責任」の4カテゴリが抽出された。今後は男性介護者の気持ちを大事にして関わっていく必要性が示唆された。（逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上平悦子，松浦純平，船瀬孝子，明神一浩，上野栄一
6.看護師のコミュニケーションスキルをレベルアップするための方略	—	平成22年9月	第17回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集. p60. 2010.	本研究の目的は、看護師のコミュニケーションスキルをレベルアップする要因を明らかにすることである。看護系大学α大学の看護学生１学年～４学年まで各学年70名、合計280名を対象に調査を実施した。方法は「看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度」を中心にそれぞれの技法の場面設定の質問紙を作成し5段階評定で、それぞれのコミュニケーション場面で、その時の感情について評価した。分析は対応のあるt-test、一元配置分散分析を実施した。看護学生236名の回答があった学年別のコミュニケーション技法の平均値は2.88±0.28であった(p＜0.0001)。得点の高かったコミュニケーション技法は情報提供4.31 ±0.82、協同提言4.26±0.91であった。治療的技法の場面で非治療的技法の場面よりも快度は有意に高い結果であった。これらの結果を今後のコミュニケーションに活用していくことでスキルアップにつながることが示唆された。（データ入力、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩，上野栄一，松浦純平，一ノ山隆司
7.がん患者サロンに対する患者会会員の認識と課題	—	平成22年12月	第3回日本地域連携精神看護学研究学術集会会誌，p4. 2010.	本研究の目的は、A県内のがん患者会会員が考えるサロンにおけるメンタルヘルスに関する認識および現状を明らかにすることである．研究対象はA県がん患者会会員400名．調査方法は，対象者に本研究の主旨と自記式無記名質問紙調査を同封し郵送した．調査項目は，基本的属性，サロンの認識，サロン立地条件，サロン利用者，サロンに必要と考える医療従事者，サロンへの期待の6項目．分析方法は，PASW Statistics18.0を用いて単純集計を行った．結果、以下の3点が明らかとなった．1．地域に暮らす患者にとってサロンのニーズ・期待度は，非常に高い．しかし，実際にサロンを利用している人は少ない．2．サロン設置場所として通いやすい立地条件であることを望んでいた．3．サロン内にメンタル面のフォローができる専門職の配置を望んでいた． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8.福島第一原発事故に起因する食品と安全と消費行動に対する実態調査	—	平成23年1月	第70回日本公衆衛生学会総会抄録集,p418.2011.	本研究の目的は福島第一原発事故に起因する食品と安全と消費行動を明らかにすることである。対象はインターネットで研究参加に同意をした成人男女450名を対象とした。設問項目は食品産地を見て買うかどうか。福島第一原発事故の前後で食品産地を見てから購入するかどうか。結果、原発事故の前後では事故後が生産地を見てから買うようになった項目で有意差がみられた。このことは報道が消費行動に影響を与えている可能性が示唆された。 （データ入力、データ分析を担当した。） 共著者：御輿久美子，守田貴子，水野静枝，松浦純平，濱田美来，尾花尚弥，今村知明
9.看護師の就労継続をエンパワメントする因子についての研究	—	平成23年1月	第70回日本公衆衛生学会総会抄録集，p492.2011.	本研究の目的は、看護師の就労継続をエンパワメントする因子を明らかにすることである。調査対象はα・β県内の病院施設の看護師であり，研究参加への同意が得られた250名。記述データは自記式質問紙の自由記載項目とした。データ分析方法は文脈の意味内容を精読し，その内容の類似性に基づき分類し，カテゴリー化した。スーパーバイザーに指導を受けてカテゴリー化した。分析の結果【看護職としてのやりがい】【家族を支えるために必要な経済的資源】【看護職への誇り】【帰属意識の高さ】の4カテゴリリーが生成された。看護師不足である現状の中継続して就労している看護師が継続している要因は様々なであるが、患者家族からの感謝の気持ちの表明、家族の支援などが就労継続に影響している結果となった。今後、この結果を基に看護師の就労継続の可能性が示唆された。 （逐語録作成、分析を担当した。） 共著者：加藤礼識，伊藤雪絵，水野静枝，松浦純平，御輿久美子，今村知明
10.看護体制の違いによる職務満足の検討	—	平成23年1月	第42回日本看護学会精神看護抄録集,p49．2011.	本研究は統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップに向けて示唆を得ることを目的に取り組んだ。対象はα県内精神病院に勤務中の看護師5名。面接内容から逐語録を作成。分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトは，WinCha，KWIC Finderを使用した．結果、統合失調症患者との対話場面においての発語項目に該当する名詞に着目し，718個の構成要素を抽出した。コミュニケーション行動（130）］［行動（123）］[対象（120）][陰性症状（76）]などの8カテゴリが生成された．形態素解析で最頻度名詞の『気遣い』25個に着目しコロケーション解析した結果，「活動量増加（19）」「体動増加（12）」などであった．本研究から統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる要因としてなど看護師の配慮がスキルアップにつながる可能性が示唆された。 （逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩,上野栄一,松浦純平

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11.統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルに関する研究	—	平成23年1月	第42回日本看護学会精神看護抄録集,p49．2011.	本研究は統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップに向けて示唆を得ることを目的に取り組んだ。対象はα県内精神病院に勤務中の看護師5名。面接内容から逐語録を作成。分析方法はインタビューより得られた逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトは，WinCha，KWIC Finderを使用した．結果、統合失調症患者との対話場面においての発語項目に該当する名詞に着目し，718個の構成要素を抽出した。コミュニケーション行動（130）][行動（123）][対象（120）][陰性症状（76）]などの8カテゴリが生成された．形態素解析で最頻度名詞の『気遣い』25個に着目しコロケーション解析した結果，「活動量増加（19）」「体動増加（12）」などであった．本研究から統合失調症患者との対話場面におけるコミュニケーションスキルアップにつながる要因としてなど看護師の配慮がスキルアップにつながる可能性が示唆された。 （逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩,上野栄一,松浦純平
12.頭頸部外科領域における術後せん妄発症要因に関する看護師の視点について	—	平成23年3月	第10回富山大学看護学会学術集会会誌 10（1），p30.2011.	本研究の目的は，頭頸部外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症要因は何かを明らかにして，臨床での術後せん妄発症患者に対する看護実践への示唆を得ることである．対象は，A大学医学部附属病院頭頸部外科病棟に勤務する看護師5名．術後せん妄発症要因について半構成的面接を実施，結果内容分析手法およびセブンクロス法にて分析した．内容分析の結果から【性格特性】【理解力不足】【長期安静】【高齢】【不眠】【男性】【独居】の7つのカテゴリーが生成された．セブンクロス法の結果から，優先順位が高い順に【不眠】【性格特性】【高齢】【長時間手術】【術中出血量】【眠剤の影響】【術前不安】の 7つのカテゴリーが生成された．内容分析とセブン・クロス法の両方に含まれていたのは，【高齢】【不眠】【個人特性】の3つのカテゴリーであった． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，上野栄一+F59
13.一般外科領域における術後せん妄発症予測要因の検討―経験豊富な看護師へのインタビューより―	—	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集，p178.2011.	本研究の目的は一般外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が直観的に判断している術後せん妄の発症予測につながる患者の前駆症状を明らかにすることである．対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名とした．半構成的面接を実施した．逐語録を形態素解析分析し，抽出した名詞を類似性に基づき分類し，意味内容の共通性に基づきカテゴリ化した．類似性により分類した結果【表情】【認識】【患者の反応】【置かれた環境】【コミュニケーション】【時間感覚】【失見当識】【行動】，【対象者】【対象物】【情意】【直観】，【患者特性】【不安】【睡眠】の15のカテゴリが生成された．本研究結果から経験豊富な看護師の術後せん妄発症予測につながる前駆症状の観察視点としては，患者の眼に代表される表情，失見当識，看護師の説明に対する認識とその反応等から術後せん妄の発症を予測していた． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，福田弘子，上野栄一.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14.内容分析による最近の診療報酬の特徴	—	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集，p227.2011.	本研究では過去1年間の診療報酬に焦点を当ててその特徴を明らかにすることを目的とした。過去1年間の診療報酬の看護に関する記事を抽出してカテゴリー化した。結果、1236件の記事が検索された。記事内容を分類した結果、120種類のカテゴリーに分類された。最も多かったのは診療報酬（222）介護保健（192）DPC（68）などであった。これらのことから診療報酬についてDPC制度導入、診療報酬改正などを視野に入れて取り組みがなされていた。今後も診療報酬改定に注目して動向を注視していくことが重要であると考える。 （逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，松浦純平，上平悦子.
15.認知症高齢者および家族の地域生活を阻害する困難要因	—	平成23年8月	第37回日本看護研究学会学術集会抄録集，p339.2011.	本研究では介護保険適応施設の従事者が認知症高齢者およびその家族を地域で支えていく困難性をどのように捉えているのかを把握することを目的とした。対象は介護保険施設の従事者27人。記述データは自記式質問紙の自由記載項目。データ分析方法は内容の類似性に基づきカテゴリ化した。結果，【認知症に対する理解不足と偏見】【支えるために必要な経済的資源の欠如】【職種間の連携と情報不足】【行動心理症状の理解と対応困難】4カテゴリを抽出した。認知症高齢者に対して家族や地域住民，介護保険適応施設の従事者が，認知症の種類や中核症状・行動心理症状に関して理解不足が偏見を助長し，さらに理解不足が対応の困難性を高める原因になっており，職種間の連携にも影響を及ぼしていたことが明らかになった。 （逐語録作成、分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：京谷和哉，一ノ山隆司，舟崎起代子，松浦純平.
16.データマイニングによる看護師の考える術後せん妄発症予測について　―経験豊富な看護師へのインタビューの分析―	—	平成23年8月	第42回日本看護学会学術集会成人Ⅰ抄録集,p60.2011.	本研究目的は外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症予測につながる前駆症状を明らかにすることである．調査対象者は病院外科病棟に勤務する看護師20名。研究方法は術後せん妄発症前の段階でアセスメントをどのような視点で実施しているかについて半構成的面接を実施した．分析方法は逐語録について形態素解析，コロケーション解析を実施した．データ解析ソフトはWinCha，KWIC Finderを使用した．結果、718個の構成要素を抽出。［行動］[コミュニケーション][行動対象][表情][睡眠][訴え][時間][幻覚][認知]の9カテゴリが生成された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，喜田加奈子，福田弘子，上野栄一，水野正延.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17.看護理論にみるカウンセリング技法の特徴	—	平成23年9月	第18回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p48.2011.	本研究では、カウンセリング技術にはどのようなものがるかを明らかにし、さらにカウンセリング理論との関係について明らかにすることを目的とした。ナイチンゲールは、優れた看護師の能力として、患者にどのようなことを感じているか読み取れ、患者の顔に現れる変化についての意味を理解できると確信が持てる研究をすべきと明言している。ヘンダーソンは、完全で成熟した優れた看護師とは患者に同情を寄せ、かつ敏感に反応する能力、自分の情緒的な反応と技術的な対応を活用する機会をもつと述べている。 看護理論にはコミュニケーション技術、カウンセリング技術に関する独自の看護論が存在していた。それらは、治療的コミュニケーション技術をベースに傾聴、受容、共感的理解、自己決定へと看護過程を展開する中で展開していることが明らかとなった。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一,松浦純平，明神一浩.
18.看護学生のコミュニケーション技法と感情との関係	—	平成23年9月	第24回健康心理学会抄録集,p89.2011.	本研究の目的は看護学生の学年別コミュニケーションの技法がどのように感情に影響を与えているかについて明らかにする。対象は看護系大学α大学の看護学生１学年～４学年280名。方法は看護師における患者とのコミュニケーションスキル測定尺度を使用し技法の場面設定の質問紙を作成し５段階評定でコミュニケーション場面で、その時の感情（快―不快）について評価した。分析は、対応のあるt-test、一元配置分散分析を実施した。看護学生236名の回答があった１学年58名、２学年60名、３学年55名、４学年63であった。治療的技法の平均値は2.88±0.28、非治療的技法の平均値は2.5±9.43であった(p＜0.0001)。治療的技法で快得点の高かったコミュニケーション技法は情報提供4.31 ±0.82、協同の提言4.26±0.91であった。平均治療的技法の得点と非治療的得点の学年別にみた比較を一元配置分散分析した結果、平均治療的技法（F=4.35；p<0.05）では平均治療的技法得点は１学年2.95±0.28 ２学年2.92±0.28３学年2.83±0.27４学年2.80±0.25であり１学年と４学年（p<0.05） １学年と３学年（p<0.1） ２学年と４学年（p<0.1）との間に有意な差を認めた。 （データ収集・入力、データ分析を担当した。） 共著者：上野栄一,松浦純平.
19.医療政策の中での看護の動向	—	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p29.2011.	本研究では過去1年間の医療政策の中で、看護の政策に焦点を当ててその特徴を明らかにすることを目的とした。過去1年間の医療政策の中の看護に関する記事を抽出してカテゴリー化した。結果、2291件の記事が検索された。記事内容を分類した結果、225種類のカテゴリーに分類された。最も多かったのは診療報酬（302）介護保健（292）インフルエンザ（222）などであった。看護に注目すると「看護教育」「外国人看護師」「人材養成」「訪問看護」などのカテゴリーが抽出された。これらのことから看護政策においては看護教育、カリキュラム改正、特定看護師に関するものが多くまた外国人看護師への支援策も具現化されていた。多くの施策が提示される中、今後看護教育、看護サービスを充実させるために看護施策の情報をいかに取り入れ教育施設、各病院での取り組みを考えることが重要であると考える。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，松浦純平，上平悦子，八塚美樹.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
20.頭頸部外科領域における術後せん妄発症予測要因の検討　―経験豊富な看護師へのインタビューより―	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p34. 2011.	本研究の目的は、外科病棟に勤務する経験豊富な看護師が直観的に感じている術後せん妄発生予測につながる前駆症状は何かを明らかにすることである。調査対象者は外科病棟に勤務する看護師7名を対象とした。看護師へ、外科領域における認知症を併発していない術後せん妄患者への関わりを想起してもらい，外科領域における術後せん妄発症予測についてのアセスメントをどのような視点で実施しているかについて，半構成的面接を実施し，逐語録を作成した。術後せん妄発症予測アセスメント項目に該当する名詞に着目した結果718個の構成要素を抽出した。意味内容の類似性に基づき分類した結果，9カテゴリーが生成された。結果から得られた観察ポイントは，経験豊富な看護師の長年の経験に基づく熟練の技に該当する部分だと考える。経験の少ない新人看護師が気付きにくい観察項目であると考えるため，この部分に注目し，共通理解を深めることでせん妄の早期発見・早期介入が可能となるため重要なポイントだと推察した。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，福田弘子.
21.過去10年間の職務満足の研究タイトルの分析による研究動向の検討	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p48. 2011.	本研究の目的は看護師の職務満足度に関する研究について形態素解析を行うことにより職務満足に関する研究の動向を明らかにし今後の研究に示唆を得ることである。対象は医学中央雑誌で過去10年間に発表された研究タイトル895件を分析対象とした。解析方法は内容分析法を使用した。結果、新人看護師、中堅看護師、職員定着、キャリア、看護体制、自律性などが抽出された。看護体制が職務満足度にどのように影響をしているのかをみた研究が増加傾向である。新人看護師の離職予防について職場に愛着を持たせるような帰属意識も重要であることが本研究から示唆された。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩，前川哲弥，森下憂一，松浦純平，上平悦子，上野栄一.
22.わが国における術後せん妄発症予測に関する研究の動向　―過去27年間の文献検討より―	―	平成23年11月	日本看護研究学会第24回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集, p57. 2011.	研究目的は，看護分野におけるせん妄発症予測に関して患者ケアに示唆を得ることである．文献検索は，医学中央雑誌を用い，キーワードは「せん妄」，絞込み検索は「看護」，「原著論文」とした．遡及範囲：1983年～2010年の27年間とした．対象は12件の文献とした．分析方法はデータの示す傾向や性質を把握ため，12件の文献を各フィールド別，予測項目別に記述統計の手法で分析した．結果,予測項目のカテゴリ別分類では，「認知力障害」20件，「ルート類」19件，「環境の変化」15件，「患者属性」11件，「活動抑制」・「性格」・「薬剤」10件，「身体症状」・「周手術期」9件であった.看護師の術後せん妄発症予測項目には，同じことを何度も聞く，指示動作困難等，点滴刺入部，心電図電極を不必要に触る，緊急入院，個室への移動，70歳以上，身体拘束，几帳面な性格，麻薬・精神薬服用中，脱水，疼痛，5時間以上の手術等があり，術後せん妄発症予測を行っていることが明らかとなった．今後，上記の項目を重視して術後の患者のケアに活かしていく必要性が示唆された． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一，一ノ山隆司，明神一浩，福田弘子.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
23.臨床看護師が考える術後せん妄発症予防に関する看護実践について ―KH Coderを利用した分析―	―	平成23年12月	第11回富山大学看護学会学術集会抄録集 11（1），p38．2011.	本研究目的は，外科病棟に勤務する看護師が術後せん妄発症予防のために取り組んでいる看護実践は何かを明らかにすることである．対象は病院外科病棟に勤務する看護師20名．調査方法は半構成的面接法を実施した．分析は記述統計，対応分析，階層的クラスター分析，共起ネットワーク分類を実施した．術後せん妄発症予防についての取り組みは「説明」「術前」「自分」「家族」などであった．階層的クラスター分析結果から，疼痛除去，十分な睡眠の確保，積極的離床に基づく生活リズムの再構築等など8つのクラスターに分類された．抽出名詞の出現パターンの類似性を線で結んだ共起ネットワーク分類の結果から，看護師は術前に患者家族へ十分な説明の実施，術後における十分な睡眠確保などの看護実践に取り組んでいた．本研究結果から看護師は術前の段階より患者家族へ術後の環境および状況の変化について十分な説明を実施し理解を促す様に努めていたことが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一，一ノ山隆司，京谷和哉，上平悦子，梅林かおり．
24.経験豊富な看護師が考える術後せん妄発症予測要因の検討　―データマイニングを用いたインタビューの分析―	―	平成23年12月	第31回日本看護科学学会学術集会講演集,p393.2011.	本研究の目的は，外科病棟での臨床経験豊富な看護師が考える術後せん妄の発症予測につながる前駆症状とは何かを明らかにすることである．対象者は2病院の外科病棟に勤務する経験豊富な看護師21名である.調査者対象者へ認知症の併発がなく術後にせん妄を発症した患者を想起してもらい，術後せん妄発症予測に関するアセスメント内容について半構成的面接を実施し逐語録を作成した．分析方法は逐語録の言語すべてについて形態素解析分析を行い，記述統計および抽出した名詞について形態素間の共起関係を検証するため対応分析を実施した.術後せん妄発症前駆症状に関する発言を形態素解析した結果，総単語数33,447個より2,249個1,806種類±27.08（mean±SD）の名詞を抽出．結果，70歳以上の高齢であることを前提とした上で眼に代表される【表情】言語・非言語的コミュニケーションを含む【コミュニケーション】家族のことを気にする，家族への面会要求等の理由により【安静保持不能】尿意，術後創部痛があるが対処できていないことによる【不快感】ガーゼ・ルート・ドレーン類が気になる等の【術後処置に伴う影響】の5つのカテゴリが生成された. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，上野栄一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25.看護学生の授業における3e-Analyzer による学習効果	―	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p37.2012.	本研究の目的は新しい看護学生の授業における3eAnalyzerを用いての看護学生の授業における3eAnalyzerによる学習の効果を明らかにすることである。研究方法はα大学の授業で3eAnalyzerを用いて学生60名に調査を実施した。3eAnalyzerで答えることのできる質問を10項目設定した。分析方法はテキストマイニングによる単語解析、ことばのネットワーク分析、対応分析を実施した。結果、回収は49名、有効回答は44名であった。頻出単語は良い、楽しい、面白いなどの肯定的表現が上位を占めた。ことばのネットワークでは楽しい、良いという単語に参加できる、凄いといった単語と連動していた。対応分析では「楽しい、参加できる」と「良い、授業、刺激」が抽出された。3eAnalyzerの使用した授業の感想について自由記載を分析したところすべてが肯定的な回答であった。3eAnalyzerの特徴である教員と学生が双方向でリアルタイムで回答表示でき学生へのフィードバックが即時にできることが学生の学習意欲を上げて高い肯定的評価を得た。 （データ収集・入力、データ分析を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平，上平悦子.
26.テキストマイニングによる看護管理の研究の動向　－過去 10年間の文献より－	―	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p47.2012.	本研究の目的はテキストマイニングを用いて看護管に関する国内文献の研究タイトルの分析から看護管理に関する研究の動向と今後のの示唆を明らかにすることである.調査対象は検索結果から抽出した368文献の研究タイトルとした.分析方法は形態素解析，記述統計とコロケーション解析を行った.結果,368文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は4250語，2226種類であった．高頻度に出現した単語に着目した結果，管理（22）管理者（18）看護部（10）新人看護師（6）研修（5）などが抽出された.早期離職予防に関する研究が多い結果であった．管理の単語に注目し，管理の先行と後続文脈（前後文脈）を抽出するため，コロケーション解析した結果，新人看護師を対象にした研修の研究,離職予防に関する研究が実施されていた．研修の前後文脈からはラダー制度や能力別研修などの文脈が得られた．本研究結果から今後，新人看護師の早期離職予防のための研修内容の充実を図りその後の評価を検証していく必要性が示唆された. （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平，上平悦子，安東則子，八塚美樹，神保浩子.
27.過去10年間の医療機関における暴力に関する研究の動向	―	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p55.2012.	本研究の目的は過去10年間におよぶ暴力に関する文献の特徴を明らかにして今後の暴力に対する看護への示唆を得ることである。対象は医学中央雑誌で過去10年間に発表された研究タイトル1700件を分析対象とした。分析方法は内容分析法を使用した。結果、暴力に関する研究は1508タイトルであった。対象をクラスター解析結果から「暴力の実態」「暴力予防」「暴力場面」「暴力防止」「DV被害」「暴力認知」「暴力の危機介入」の7つのクラスターを抽出した。暴力の実態を明らかにした研究や事例を通じて暴力行為に至る過程やせん妄による暴力を認知できない患者による暴力が問題になっていることが明らかになった。 （文献収集、データ分析、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：明神一浩，上野栄一,松浦純平，上平悦子.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28.テキストマイニングを用いた術後せん妄に関する研究論文タイトルの分析	—	平成24年3月	日本看護研究学会　第25回近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,p57.2012.	本研究の目的は，我が国における術後せん妄に関する研究論文タイトルから研究の動向と課題を明らかにすることである。調査方法は医学中央雑誌を使用してキーワードは「術後せん妄」，絞り込みは看護と原著論文として，期間は1982年以前～2011年とした。調査対象は検索結果より抽出した129文献とした。分析方法は計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用した。記述統計，階層的クラスター解析，共起ネットワーク分類にて分析した。結果129本の論文タイトルを分析可能な意味をなす最小単位である形態素に解析した結果，総抽出語数は2,043語，420種類であった。そのうち抽出された名詞774個の中から高頻度に出現した名詞に着目した結果発症（44）要因（33）検討（30）予防（28）術前（16）分析（15）などであった。階層的クラスター解析の結果「関連分析」「リスク評価」，「実態調査」「予防効果の検討」の5個のクラスターに分類された。共起ネットワーク分類にて分析した結果，せん妄発症予防を重視した研究，患者の状態を日本語版NEECHAM混乱・錯乱スケールを用いて分析した研究に取り組んでいることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，梅林かおり，植木健康，安東則子，八塚美樹，上野栄一.
29.臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールに関する分析	—	平成24年8月	第38回日本看護研究学会学術集会抄録集, p127.2012.	本研究の目的は,術後せん妄アセスメントツールに関するニーズについて明らかにすることである。対象者は全国の19病院の外科病棟勤務の看護師725人。看護経験年数別に5群に分け,アセスメントツールの必要性,使用希望,項目数,所要時間を一元配置分散分析にて分析した。ツールが必要と回答した割合は85.5%,使用希望割合は82.5%,全体のアセスメントツール項目平均数は10.4項目,経験年数20年以上の群が平均21項目であった。経験年数別のアセスメントツール必要性,使用希望,所要時間に関する5群間の多重比較では有意差がなく,項目数の群間比較において,経験年数20年以上の群が他4群の全てと比較して有意な差が生じた。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，梅林かおり，石澤美保子，京谷和哉，一ノ山隆司，上野栄一.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
30.テキストマイニングを用いた周手術期における皮膚トラブルに関する 研究の動向と課題－過去29年間の論文タイトルの分析－	—	平成24年8月	第38回日本看護研究学会学術集会抄録集,p141.2012.	本研究の目的はテキストマイニング手法を用いて我が国における周手術期における皮膚トラブルに関する研究の動向と課題を論文タイトルから明らかにすることである。調査方法はWeb版医学中央雑誌を使用。検索キーワードは「手術室」「手術体位」とした。調査期間は1982年以前～2011年とした。調査対象は検索結果より抽出した93編。分析方法は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した。93編の論文タイトルについて形態素解析を実施し記述統計，階層的クラスラー解析，共起ネットワーク分類を行った。形態素解析より総抽出語数1465語253種類を抽出した。抽出された名詞575語の名詞に関して記述統計の結果頻度順に手術（36）使用（24）体位（20）検討（13）などが抽出された。階層的クラスター分析より「発赤予防のための物品の工夫」「仰臥位時の皮膚調査」「褥瘡発生予防」「術中体位の工夫」「術中体位固定についての効果の検討」の5カテゴリーに分類された。周手術期看護において，褥瘡発生に代表される皮膚障害が問題視されている。本研究の分析結果から，術中同一体位による褥瘡発生予防に関して，物品を用いて様々な工夫を行い研究に取り組んでいた。 （文献収集、データ分析、考察の一部、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：西山和成，松浦純平，上野栄一.
31.話し手の治療的コミュニケーション技法と非治療的コミュニケーション技法が聞き手の感情に与える影響―ＰＯＭＳを用いた調査から―	—	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p33.2012.	話し手のコミュニケーション技術が聞き手の感情にどのような影響を与えているかPOMSを用いて感情の変化を調べた。調査期間は平成23年10月。対象はα看護系大学学生20名に実施。方法は聞き手が治療的技法群と非治療的技法群に分けて実施した。質問は半構成的面接を用いた。治療的技法を用いた群は、非治療的技法を持ちいた群に比較して、D（抑うつ－落込み）、A-H（怒り－敵意）、F（疲労）、C（混乱）の得点は有意に下がり、V（活気）の得点は逆に有意に上昇した（$p<0.05$）。受容的態度をとる治療的コミュニケーション技術は、話し手の内容を聞き手が認めることを意味する。聞き手にとり自分の話す内容を話し手が受けとめてくれることは自分を理解してくれているという気も落ちが生じ心に快の状態を作り出すと考えられる。 （文献収集、データ分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
32.コミュニケーションにおける話し手と聞き手の発話量の比較	―	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p51.2012.	本研究では、コミュニケーションにおける話し手と聞き手の発話量の比較をし、特徴を明らかにすることを目的とした。調査期間は平成23年８月。対象は看護系大学の学生10名に実施した。方法は聞き手が治療的技法を用いる群と非治療的技法を用いる群に分けて実施した。2人の間の相互交渉内容を分析した。会話の内容について逐語禄を作成後、両者の文字数をカウントして会話量とし、両者の会話量をMann-Whitney U-testにて分析した。治療的技法で話を聞いた聞き手は、非治療的技法を用いた聞き手よりも有意に高い発語量の変化を示した。また、非治療的技法では、話し手の治療的技法を用いた発話量に比べて少ない発話量の変化であった。話し手が治療的技法を用いた場合は、聞き手は、受容的な接し方に共感的理解が深まり、自分から話すモチベーションが高まったと考えられる。逆に話し手が非治療的技法を用いた場合は、聞き手は自分の意見を拒否されるため不快な感情が生じ話す気にはなれない気持になったと推察する。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一.
33.EBNに基づいた会話分析とは何か	―	平成24年8月	第19回ヘルスカウンセリング学会学術大会・総会プログラムおよび講演抄録集,p52.2012.	本研究では、会話分析の方法について研究者らが用いている方法についてその特徴を明らかにすることを目的とした。会話分析の種類について、これまでの方法について、会話を分析するという視座にたち、その特徴を明らかにし、ＥＢＮに基づいた会話分析について示唆を得ることとした。テキストマイニングソフトを用いると、言葉とことばの関係性が一目瞭然にビジュアル化できる。たとえば「看護師はである」「看護師は優しい」といった会話例を分析すると次のようなスキ―マに表わすことができる。これは共起分析とも呼ばれ、言葉のネットワークとして図式化できるので会話を可視化することができるので会話の構造を調べるのに適していると考える。最近は、コンピュータを利用したテキストマイニングのソフトが開発されている。電子化テキストの最小構成単位としての 文字について、 文字連鎖の出現頻度、あるいは文字の次に生起する文字の確率が算出できる。 また、クラスター解析が可能となる。従来の質的研究と併用することにより信頼性のある精度の高い分析が可能になると期待される。 （文献収集、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
34.話し手としての看護学生のコミュニケーション技法が聞き手の自律神経系と感情に与える影響	—	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会講演集,p206.2012.	本研究の目的は、話し手のコミュニケーション技術が聞き手の感情にどのような影響を与えているか自律神経測定装置を用いて感情の変化を明らかにすることである。対象はα看護系大学学生20名に実施。方法は聞き手が治療的技法群と非治療的技法群に分けて実施した。質問票はPOMSで「気分の状態」を6尺度で測定治療的技法を用いた群は、非治療的技法を持ちいた群に比較して、D（抑うつ－落込み）、A-H（怒り－敵意）、F（疲労）、C（混乱）の得点は有意に下がり、V（活気）の得点は逆に有意に上昇した（p<0.05）。受容的態度をとる治療的コミュニケーション技術は、話し手の内容を聞き手が認めることを意味する。聞き手にとり自分の話す内容を話し手が受けとめてくれることは自分を理解してくれているという気も落ちが生じ心に快の状態を作り出すと考えられる。 （文献収集、データ入力、データ分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，松浦純平.
35.テキストマイニングによる術後せん妄アセスメントツールのニーズに関する自由記述の分析	—	平成24年11月	第32回日本看護科学学会学術集会講演集 p288.2012.	本研究の目的は、臨床看護師が考える術後せん妄アセスメントツールのニーズに関する自由記述内容をテキストマイニング手法から明らかにすることである。対象は全国の19病院の外科病棟に勤務する看護師725人。データ分析方法は記述内容を形態素解析，記述統計，コロケーション解析，クラスター分析，共起ネットワーク分類した。分析対象は、自由記述回答数51部。記述統計結果の頻出名詞は、せん妄、術後、アセスメントツール、使用、発見、対応、判断、必要、早期発見であった。アセスメントツールの前後文脈の意味内容を読み取る解析から「活用したい」「便利である」「リスク管理としても効果的」「術前から使用可能」などの文脈を得た。クラスター分析では「発症の早期発見」「予防」「臨床での活用」など5個のクラスターを抽出し共起ネットワーク分類から「予防効果」「リスクアセスメント」など7カテゴリーに分類された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，上野栄一.
36.テキストマイニング分析について	—	平成25年1月	第6回Project AKI全国集会p2.2013.	大阪府内に勤務する臨床看護師を対象にした研修会にて新しい研究手法であるテキストマイニング法について事例に基づき説明した。具体的には、日本看護研究学会で口演発表したスライドを使用し具体的なポイントを示しながら実施した。結果、参加者から具体的な質問が出て本研究手法の興味の高さが明らかになった。 （本研究の代表者として研究に取り組んだ。）著者：松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
37.スピリチュアルケアに関する研究の動向	—	平成25年1月	日本がん看護学会誌 27（1），p269.2013.	本研究の目的はテキストマイニングを用いてスピリチュアルケアに関する国内文献の研究タイトルの分析からスピリチュアルケアに関する研究の動向と今後の示唆を明らかにすることである.調査対象は検索結果から抽出した457文献の研究タイトルとした.分析方法は形態素解析，記述統計とコロケーション解析を行った.結果,457文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は4250語，2226種類であった．高頻度に出現した単語に着目した結果，スピリチュアルケア（42）看護（18）がん（10）ターミナル（6）看護（5）などが抽出された.スピリチュアルケアの精神面に関する研究が多い結果であった．スピリチュアルケアの単語に注目し，先行と後続文脈（前後文脈）を抽出するため，コロケーション解析した結果，スピリチュアルケアを対象にした研修の研究,スピリチュアルケアの実践に関する研究が実施されていた．本研究結果から今後，スピリチュアルケアのための研修内容の充実を図りその後の評価を検証していく必要性が示唆された. （逐語録作成、データ分析、考察の一部、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，長光代，松浦純平.
38.テキストマイニングを用いたせん妄とメラトニンに関する研究の分析	—	平成25年8月	第39回日本看護研究学会学術集会抄録集,p267.2013.	本研究目的はせん妄とメラトニンに関する英語文献の研究タイトルの分析から研究の動向と今後のせん妄看護への示唆を明らかにすることである.PubMedを使用しDelirium,Melatoninのキーワードとした.対象は検索結果から抽出した42文献の研究タイトルである.分析方法は研究タイトルをKH Coderを使用し形態素解析,記述統計,コロケーション解析を行った．結果,せん妄とメラトニンに関する研究は，1969年の1件から2004年の2件で増加傾向であった.42文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は870語，226種類であった．高頻度に出現した単語はDelirium（22）Melatonin（18）Postoperative（10）Patients（10）Sleep（6）など.Melatoninの単語に注目しMelatoninの先行，および後続文脈を抽出するためコロケーション解析した結果術前，術後におけるメラトニン分泌量の研究，サーカディアンリズムとメラトニン分泌量に関する研究が実施されていた周手術期におけるMelatoninの使用についてサーカディアンリズムとMelatonin分泌についての研究やMelatoninの分泌を促すことで患者を落ち着かせることができたなどの文脈が得られた. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，吉岡一実.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
39.NANDA-Ⅰ看護診断における「急性混乱」の変遷およびその特徴について	—	平成26年7月	第20回日本看護診断学会学術大会抄録集,p112-113.2014.	本研究の目的は、NANDA-Iの急性混乱の定義および診断指標・関連因子の各項目の記載内容を分析することでせん妄の早期発見につながる観察の視点やケアへの示唆を得ることである。対象はNANDA-Ⅰ看護診断名の急性混乱とした。対象期間は1997-1998から2012-2014までとし、年度区分別に定義・診断指標・関連因子の各項目についてまとめた。結果、急性混乱の定義の変遷は、1997-1998から2012-2014までの間に3回変更されていた。1回目は1997-1998の「障害のクラスターの突然の発生」から1999-2000には「障害がひとかたまりになった」へ変更された。2回目は2005-2006の「注意，認知，精神運動性活動，意識レベル，そして／または睡眠／覚醒周期の包括的で一過性の変化および障害がひとかたまりになった突然の発生」から2007-2008「短時間で発達する，意識・注意・認知および知覚の可逆的な混乱の突然の発生」へ変更された。3回目は2009-2011「短時間で発達する，意識・注意・認知および知覚の可逆的な混乱の突然の発生」から2012-2014「短時間に進行する，可逆的な障害が意識・注意・認知・知覚に突然発症した状態」へ変更された。本研究では、看護診断を使用する看護師が共通認識の元で使用しやすいように定期的に見直しされており年々完成度が高まっていることが明らかになった。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，上野栄一.
40.Text miningを用いたディスコース分析	—	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集,p118.2014.	テキストマイニング手法の紹介をした。本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである．研究対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語．方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した．分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した．具体的方法は記述統計，共起関係ネットワーク分類，コロケーション解析を実施した．結果はカウンセラーの発語総数は520種類，2,583語であった．カウンセリング中に高頻度に発語されていた単語に着目した結果，「うん」（50），「そう」（43），などが抽出された．関連の強い語同士を視覚的に表した共起関係ネットワーク分類の結果，会話中にカウンセラーは「うん」，「そう」，「ああ」という特徴的な相槌を多用していた．カウンセラーが話した「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」，「それだけでも十分だと思う」，「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった．ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった． （本研究の代表者として研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，川野雅資.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
41.テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析	—	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集,p302.2014.	本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである． 研究対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語．方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した．分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した．具体的方法は記述統計，共起関係ネットワーク分類，コロケーション解析を実施した．結果はカウンセラーの発語総数は520種類，2,583語であった．カウンセリング中に高頻度に発語されていた単語に着目した結果，「うん」（50），「そう」（43），などが抽出された．関連の強い語同士を視覚的に表した共起関係ネットワーク分類の結果，会話中にカウンセラーは「うん」，「そう」，「ああ」という特徴的な相槌を多用していた．カウンセラーが話した「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」，「それだけでも十分だと思う」，「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった．ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，川野雅資，上野栄一．
42.テキストマイニングによる休職した看護師の復職に対する支援の実際	—	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集,p303.2014.	メンタルヘルス不調によって休職した病院看護師の復職支援に関する実際を明らかにすることを目的とした．研究対象はA圏内の200床以上の総合病院102施設の看護管理とした．データ収集方法は質問紙調査票の自由記載項目である「看護師のメンタルヘルス不調者の復職において，どのような援助を行っているのか」に記述された内容である．データ分析方法は記述内容をKH Codeを使用して，形態素解析後，共起関係ネットワーク分析を実施した．記載内容を形態素解析した結果，総抽出語数は3,168語，675種類に分類された．共起関係ネットワーク分析の結果，[復職，本人，プログラム，支援，業務，職場]，[看護，勤務，調整]，[体制，サポート，休職，姿勢、相談，面談]，[専門，面接，必要，メンタル，不調]の語句の結びつきなどが明らかになった。そして，「職場復職支援プログラム」，「面談・相談」，「勤務調整」，「専門職によるフォロー」の4因子に分類された． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平，一ノ山隆司，大津聡美，遠藤加奈子．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
43. メンタルヘルス不調によって休職した看護師への復職支援	—	平成26年8月	第40回日本看護研究学会学術集会抄録集, p328. 2014.	本研究の目的はメンタルヘルス不調によって休職した看護師の復職に関して看護管理者がどのような援助を行なっているのかを明らかにすることである. 研究対象は某地方の精神科病院を除く200床以上の総合病院350病院とし，全体的に看護職員のことを把握している看護部長および管理職とした．データ収集方法は質問紙調査票の一部の自由記載文であり，「看護職のメンタルヘルス不調による休職後の復職に関してどのような援助を実施しているのか」についてである．データ分析方法は回答が得られた102件の記述内容をKH Codeにて分析した．記述内容を形態素解析した結果，総抽出語数は3,168語，675種類に分類された．高頻度に出現した単語に着目し記述統計を実施した結果，頻出順に「復職」(27)，「サポート体制」(25)，「本人」(23)，「休職」(19)，「プログラム」(16)，「メンタルヘルス」(16)等が抽出された．階層的クラスター分析では，5つのクラスターに分類され，看護管理者の復職支援に対する傾向が明らかになった。 （逐語録作成、データ分析、考察の一部、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：一ノ山隆司，松浦純平，大津聡美，遠藤加奈子.
44. テキストマイニングを用いたうつ病患者へのカウンセリング場面におけるカウンセラーの会話分析	—	平成26年12月	第3回ディスコース分析研究会抄録集, p28. 2014.	本研究の目的は，うつ病患者へのカウンセリング場面の会話分析からうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴を明らかにすることである．対象はカウンセリング対象であるうつ病患者へのカウンセリングを実施したカウンセラーの発語。方法はカウンセラーのカウンセリング時の会話内容を録音し録音内容から逐語録を作成した．分析は計量テキスト分析ソフト「KH Coder」を使用した．具体的方法は記述統計，共起関係ネットワーク分類，コロケーション解析を実施した．結果カウンセラーの発語総数は520種類，2,583語であった．「思う」という動詞についてコロケーション解析を実施した結果，ポジティブな発言内容は「心配ないと思う」，「それだけでも十分だと思う」，「そういう能力は落ちてないと思う」など10回中6回であった．ネガティブな発言内容は「いらないと思います」の10回中1回であった．本研究の結果よりうつ病患者へのカウンセラーの援助の特徴として以下の2点が明らかになった。1点目はカウンセラーのカウンセリング時のコミュニケーション技法としては効果的な相槌を打っていた．2点目は意図的にクライエントへポジティブな発言を投げ掛けることで承認をしていた． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平, 上野栄一, 川野雅資.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
45.看護政策に関わる研究の動向について	—	平成27年2月	第28回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,P21.2015.	本研究の目的は、過去の看護政策に関連する文献を分析し、その特徴を明らかにすることである。医学中央雑誌（Web版）にてキーワードとして看護政策も含む「医療政策」（1976～2014）（原著論文）とし検索した1030件の研究タイトルを対象とした。抽出された研究タイトル名を抽出し、テキストマイニングStudioにて、単語頻度分析、係り受け分析、共起分析、対応バブル分析をした。解析文章は、延べ単語数6593件であった。1)単語解析では、頻度順に、日本80、研究66、現状62、検討61と続いた。係り受け頻度解析では、頻度順に18年度-診療報酬改定12、診療報酬改定-影響7と続いた。共起分析では、影響と診療報酬、「介護政策」「医療」が「実証的検証」と連動していた。「医療政策」と「転機」、「日本」と「米国」、「日本食品標準成分表」などが連動していた。対応バブル分析では、「医療政策、診療報酬改定、食事栄養基準」と「取り組む」、「検討」、「展望」の４つに分類された。 （データ分析、考察、スライド作成の一部を担当した。） 共著者：上野栄一，成瀬早苗，増田安代，松浦純平，内田真紀，山本勝也.
46.テキストマイニングを用いた看護診断に関する研究の分析	—	平成27年7月	第21回日本看護診断学会学術大会抄録集，p102-103.2015.	本研究目的は，国内における看護診断に関する研究についてどのような視点で取り組まれているのかを明らかにすることである。検索データベース医学中央雑誌Web版Ver.5を使用し，遡及期間は1976年以前から2015年とした。対象は看護論文，原著論文のみとした。検索キーワードは「看護診断」とした。検索結果から抽出した1,022文献の研究タイトルを対象とした。分析方法は研究タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し，形態素解析，記述統計，出現パターンの類似性を解析する目的にて，階層的クラスター分析と共起関係ネットワーク分類を実施した。1,022文献の研究タイトルを形態素解析した結果，高頻度に出現した単語とし看護診断（792），看護（724），患者（280），などが抽出された。階層的クラスター分析の結果，「標準計画ケア」，「看護診断」，「実習における看護診断」，「アセスメントの診断パターン」，「実態調査」の5つのクラスターに分類された。 （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,上野栄一.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
47.テキストマイニングによる「先制医療」の視点からみたせん妄発症予防の実際	—	平成27年8月	第41回日本看護研究学会学術集会抄録集,p239.2015.	本研究目的は，先制医療に基づいたせん妄に関する国内文献の研究タイトルを分析することで研究の動向と今後のせん妄看護への示唆を明らかにすることである.調査方法医学中央雑誌Web版Ver.5を使用し，原著論文を対象にした．キーワードは「先制医療」，「せん妄」とした．調査対象は検索結果から抽出した196文献の研究タイトル．分析方法は研究タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し，形態素解析，記述統計，コロケーション解析，階層的クラスター分析，共起関係ネットワーク分類にて分析した．結果，196文献の研究タイトルを形態素解析した結果，総抽出語数は3682語，648種類であった．記述統計の結果，高頻度に出現した単語として，予防（90），看護（86），検討（32），要因（27）などが抽出された．「ケア」と「取り組み」の単語に注目してコロケーション解析を行った結果，「ケア」については24編中9編が予防ケアに特化した関わりであった．「取り組み」については18編中10編が予防に関する取り組みであった．階層的クラスター分析の結果，6つのグループに分類された． （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者:松浦純平,足日和美,中上昌代,上野栄一.
48.テキストマイニングによる日本国内における災害時の透析看護に関する研究の動向と課題	—	平成28年11月	第35回 日本看護科学学会学術集会講演集,p521.2015.	本研究の目的は，先制医療に基づいた災害時の日本における透析看護に関する研究の動向と課題を明らかにすることである．対象は75文献とした．75文献を計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し，形態素解析，記述統計，コロケーション解析，階層的クラスター分析，共起関係ネットワーク分類にて分析した．結果「透析患者の災害発生時の具体的対策」，「災害発生時の対策に関する意識調査」の2つのカテゴリーに分類された． （文献収集、テキストマイニングでの分析、考察およびスライド作成の一部を担当した。） 共著者：足日和美,松浦純平.
49.世界における嗅覚障害看護の現状と展望　ーテキストマイニングによる定量的分析ー	—	平成28年12月	第36回日本看護科学学会学術集会プログラム集,p91.2016.	世界における嗅覚障害に関する看護論文の分析より本研究の目的は,嗅覚障害看護の現状と展望を明らかにすることである.対象は検索データベースPubMed。を使用し,キーワード検索はNursing, Olfactory Dysfunctionとした.調査対象は看護分野以外の論文11編を除いた25編とした.領域別分類では，老年15編，小児4編，母性3編，精神2編，成人1編であった。研究者の国別では，U.S.A 6編，JAPAN 4編，ITALY 3編，FRANCE 2編，AUSTRALIA 2編，CANADA 2編であった.テキストマイニングにて形態素解析の結果，総抽出語数1,449語，404種類,平均出現回数1.76回，標準偏差3.54であった.高頻度出現した単語は，Disease〈7〉，Older〈6〉，Parkinson〈6〉，Factors〈4〉などであった．疾患別ではパーキンソン病が5編と最多であった．語の関係性を可視化する共起関係ネットワーク分類の結果，Disease, Older，Factorsがキーワードとして抽出された．抽出語を類似した語句に分類したクラスター解析の結果，4クラスターに分類された．看護の視点での介入についてはケアリングの観点に基づく看護に関する研究が1編であった.このことから今後は，有効的かつ具体的な看護援助に関する研究に取り組む必要性がある. （本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。） 共著者：松浦純平,上野栄一.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
50.テキストマイニングによる一次救命処置に関する看護の研究に関する動向と課題	—	平成31年3月	第32回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,P40.2019.	本研究の目的は国内における一次救命処置に関する研究の動向と課題を明らかにすること。検索データベースは医中誌Webを使用。検索キーワードは「一次救命処置」，「看護」とした。絞り込み条件は「看護文献」，「原著論文」とした。遡及期間は1983年から2018年の35年間とした。対象は結果から得られた一次救命処置に関する論文261編のタイトルとした。分析方法は論文タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderを使用し多変量解析を実施した。総抽出語数63,775であった。異なり語数4,814であった。品詞別出現頻度は，「看護」（出現数1,177），「看護師」（400），「教育」（389），「救急」（349），「心肺蘇生」（307），「BLS」（258），「救命処置」（152），「AED」（120）などの順番であった。クラスター分析の結果，「急変対応」，「BLS受講」，「学生演習」など6つのクラスターに分類された。共起関係ネットワーク分類の結果，知識と技術，対象と実施と結果，看護師と調査，調査と意識，心肺蘇生と教育と救急と質問および評価の関係性が強い結果となった。自己組織化マップ分類の結果，「患者・家族への急変対応」，「心肺蘇生の教育と評価」など8つのクラスターに分類された。一次救命処置に関する研究は，臨床看護師を対象とした研究と教育機関での教育として学生を対象とした研究に大別された。医療現場において救命処置が必要な場面に遭遇する確率は高い。救急処置の技術習得は，非常に重要である。アメリカ心臓協会は，医療従事者について一次救命処置の研修は2年に1回必ず受講するように提言している。技術習得は反復学習とシミュレーションとデブリーフィングが極めて重要であることが示唆された。共著者：松浦純平,守本とも子,上野栄一.（本研究の代表者として、中心となり研究に取り組んだ。）
51.テキストマイニングを用いた災害看護における教育に関する研究の動向と課題	—	平成31年3月	第32回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,P44.2019.	【目的】国内における災害看護教育に関する研究の動向と課題を明らかにすることである。 【方法】検索データベースは医中誌Webを使用した。検索キーワードは「災害看護」，「教育」とした。絞り込み条件は「看護文献」，「原著論文」とした。遡及期間は1983年から2018年までの35年間。対象は結果から得られた災害看護学に関する論文289編のタイトルとした。分析方法は論文タイトルを計量テキスト分析ソフトKH Coderにて解析した。倫理的配慮として，本研究で対象とした論文について，個人名等が全て匿名化されていることを確認して研究に取り組んだ。COIは該当なし。 【結果】総抽出語数18,848であった。異なり語数7,537であった。品詞別出現頻度は，「看護」（出現数648），「看護師」（400），「教育」（389），「救急」（349），「心肺蘇生」（307），「BLS」（258），「救命処置」（152），「AED」（120）などの順番であった。クラスター分析の結果，「比較研究」，「学生対象の防災訓練」，「災害の教育と調査」など4つのクラスターに分類された。共起関係ネットワーク分類の結果，知識と技術，対象と実施と結果，看護師と調査，調査と意識，心肺蘇生と教育と救急と質問および評価の関係性が強い結果となった。自己組織化マップ分類の結果，「患者・家族への急変対応」，「心肺蘇生の教育と評価」など8つのクラスターに分類された。一次救命処置に関する研究は，臨床看護師を対象とした研究と教育機関での教育として学生を対象とした研究に大別された。 【考察・結論】医療現場において救命処置が必要な場面に遭遇する確率は高い。救急処置の技術習得は，非常に重要である。アメリカ心臓協会は，医療従事者について一次救命処置の研修は2年に1回必ず受講するように提言している。技術習得は反復学習とシミュレーションとデブリーフィングが極めて重要であることが示唆された。 共著者：溝口みちる,松浦純平.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
52.トラウマに関する研究の特徴ーテキストマイニングの分析からー	―	平成31年3月	第32回日本看護研究学会近畿・北陸地方会学術集会プログラム・抄録集,P44.2019.	本研究の目的はトラウマに関する研究の特徴を明らかにすることである。医中誌Web版にて1998年～2018年の文献について「トラウマ」「ケア」をキーワードに検索した。テキストマイニングを用い過去の143文献の抄録について単語解析、共起ネットワークにて分析した。単語頻度解析の名詞ではケア110、精神108、被害104、症状102、対象102、トラウマ89、心理89、ストレス85、家族80、災害73、子ども71、患者70、職場51、目的50、外傷47尺度44、要因41、障害40、職員40、保健40、暴力39事故35、心身34、長期32、リスク31、遺族31、医療31、傾向31、状態31、地域31と続いた。 サ変名詞では、調査138、支援126、影響112、研究95、実施76、体験73、関係70、関連67、被災63、看護62、検討61、治療59、活動51、示唆47、行動46、報告46、経験45、生活44、援助42、養育42、介入38、質問36、経過35、自殺32、分析32、評価31と続いた。共起ネットワークについて、【実態調査と対象者への影響と健康への支援】［ケア、支援、調査を中心に、精神、対象、精神、健康、実施、必要、目的など］、【トラウマ体験とその症状】［ケアは、心理、トラウマ、PTSD、症状、結果、体験、外傷、症状、PTSDなど］、【子供の養育と虐待】［子ども、虐待、養育が結びついていた］、【地域保健活動】［地域、保健、活動］が結びついていた。本結果からは、トラウマに対する実態調査が進められ、その特徴としては、子供の虐待に関する研究、トラウマの影響としての症状、外傷、そして地域保健活動の取り組みが特徴となっており、トラウマとなっている対象者の理解と支援、また地域ぐるみの支援が必要であることが示唆された。 共著者：上野栄一,藤本ひとみ,松浦純平.

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　　美甘　祥子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
母性看護学	妊娠期の看護支援、出生前診断

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例		
1. 母性看護学援助論	2017 年～現在	産褥期・新生児期の対象について，最近の動向を踏まえながら，具体的な援助方法について解説を行った。国家試験対策も兼ねた小テストを行うことで知識の定着を促し，実習につながるような演習を行うことで補完した。
2. ウィメンズヘルス学	2017 年～現在	女性のライフサイクル各期の特徴，健康問題・課題，健康に影響を及ぼす要因を，健康を支援するための基礎となる理論を用いながら解説を行った。エビデンスとなるデータを用い，対象の理解が深まるように工夫した。一方的な講義とならないように，学生が発言する場面を設けたり，グループワークを行うことで参加型の講義とした。
3. 助産診断・技術学Ⅱ	2017 年～現在	産婦の分娩経過や胎児の状態が，正常であるか否かについて独自に判断するための基礎的知識に関しては，学生が理解しやすいように独自の資料を作成し授業を展開した。娩期の助産過程の展開では，産婦や家族にとって安全で満足度の高い分娩となるためには，どの様な助産ケアを行うと良いのかを考える機会を持つようにした。正常分娩の介助方法では，技術のエビデンスを具体的に説明するようにした。
4. 助産診断・技術学演習	2017 年～現在	分娩期の対象の事例展開と分娩介助技術習得のための技術演習を行った。実践にそくした具体的な事例を用い，エビデンスに基づいた助産診断展開能力を養うようにした。さらに，グループ討議を行い，知識の定着と問題解決能力の向上を目指すようにした。
5. 卒業研究Ⅱ	2017 年～現在	ゼミ形式で，学生同士が意見交換をし，知識や看護観が深まるようにしている。
6. 育成看護学特論Ⅱ	2018 年	教員３名でのオムニバス形式で２コマを担当した。今までの看護経験をもとに次世代育成のための看護実践を考えることができるように参加型の講義を行った。
２　作成した教科書，教材		
1. 生命倫理　教科書	2014 年	将来人間とかかわるコメディカル領域の職業や子供たちの教育にあたる教員職に就く学生とともに生命倫理につちえ考えるための教材として作成した。
2. 助産学実習要綱・要項・記録	2014 年	畿央大学助産学専攻科で既存の実習要綱・要項・記録を見直し，学生の特徴をふまえて，有効な学びができるように作成した。
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
1. 厚生労働省看護研修研究センター　看護教員養成課程　修了	2006 年	看護教育に必要な知識・技術・態度に関して研修を受けた。
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 大和高田市立看護専門学校　非常勤講師	2014 年～現在	母性看護方法Ⅰ　遺伝相談について１コマの講義を行った。
2. 看護教育課程研修会（京都）　非常勤講師	2012 年	母性看護教育計画　実習計画について２コマの講義を行った。
3. 学校法人古沢学園広島都市学園大学　看護学科　非常勤講師	2011 年～2013 年	発達看護学-リプロダクティブ・ヘルスと看護理論-において 15 コマの集中講義を行った。
５　その他		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1. アドバンス助産師　CloCMIP レベルⅢ　認証	2016 年	助産実践能力習熟段階（クリニカルラダー）レベルⅢの認証を受けた。
2. ALSO　認定	2016 年	周生期医療支援機構でプロバイダーコースを受講し認証を受けた。
3. 新生児蘇生法　A コース　認定	2015 年	日本周産期・新生児医学会の新生児蘇生法 A コースの修了認定を受けた。
4. 保健師免許		
5. 助産師免許		
6. 看護師免許		
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 科学研究費助成事業　基盤研究 C　研究分野：生涯発達看護学	2015 年～2018 年	出生前診断を希望する妊婦と夫への意識調査（2015 年 4 月～2018 年 3 月）
2. 科学研究費助成事業　若手（B）　研究分野：生涯発達看護学	2012 年～2015 年	母体血清マーカー検査で陰性と判定された妊婦の不安に関する研究（2012 年 4 月～2015 年 3 月）
4　その他		
1. 奈良県看護協会　助産師職能委員	2018 年～	助産師職能委員として委員会に参加し，研修の企画・運営を行った。
2. 第 32 回日本助産学会学術集会プレコングレス実行委員	2018 年	プレコングレス３「子育て世代包括ケアシステム時代に求められる助産の力－助産実践能力育成を考える－」の運営をサポートした。
3. 第 19 回日本母性看護学会学術集会　実行委員	2017 年	学術集会において学会運営をサポートした。
4. 第 40 回日本看護研究学会学術集会　拡大実行委員	2014 年	学術集会において学会運営をサポートした。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
1. 学生と考える生命倫理	共著	2014 年 4 月	ナカニシヤ出版	第 2 部各論　いのちに関する倫理　4 生殖に関する倫理を担当した。 ◎金子章道，金内雅夫，河野由美，美甘祥子(pp34-46)，他 11 名
（学術論文）				
1. 妊婦と夫への出生前診断の認知度に関する調査研究 （査読付き）	共著	2018 年 2 月	医療福祉情報行動科学，5，pp27-34.	妊娠 22 週以降の妊婦と夫 192 組を対象に，出生前診断の認知度と情報源を調査した。出生前診断に関する具体的な知識を持つ者は少なかった。夫は出産前診断に関する情報源を「パートナーから」と回答した割合が高かった多かった。妊婦も夫も情報源で医療者と回答した割合は 1 割以下であった。妊婦だけではなく，妊婦と夫の両方に，知識の程度を確認しながら出生前診断に関しての情報提供をする必要がある。 ◎美甘祥子，中塚幹也
2.（2017）：Non-invasive prenatal testing（NIPT）受検時の心理カウンセリングに対する妊婦の意識調査 （査読付き）	共著	2017 年 5 月	インターナショナル Nursing Care Research，16（2），pp1-9.	妊婦 557 人を対象に，NIPT を受検する際の心理カウンセリングの希望を調査した。NIPT を受験する際に，心理カウンセリングを 7 割が希望し，検査前や検査結果説明時だけではなく，全ての期間で心理カウンセリングを希望していた。助産師は，研修などにより遺伝に関する知識を高めるとともに，心理カウンセリングができることを妊婦に周知することも必要である。 ◎美甘祥子，中塚幹也

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3．フリースタイル分娩の分娩体位が産婦に与える影響と助産師の見解に関する文献検討	共著	2017 年 3 月	奈良県母性衛生学会雑誌，30，pp35-37	フリースタイル分娩に助産師が感じている困難感について 10 件の原著論文を検討した。病院に勤務する助産師は，フリースタイル分娩について，【教育】【設備・環境】【人的問題】に困難感を感じていた。病院でフリースタイル分娩を促進していくために，助産師の学ぶ意欲を高め，知識を向上させ，妊娠期から継続的な関わりが重要である。 ◎藤井智子，池田実璃，美甘祥子
4．A 県における小児訪問看護の受け入れの実態と課題 （査読付き）	共著	2017 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究 4，pp37-42	小児訪問看護を実施する 34 施設を対象に，小児訪問看護の実施状況と課題を明らかにすることを目的に調査を行った。小児訪問看護の依頼元で「家族」は 3 割であった。小児訪問看護を行う上で「家族のサポート」に最も困難さや大変さを感じていた。小児訪問看護を実践する看護師の育成とサポート体制の構築が必要である。 ◎美甘祥子，原朱美
5. A 県における小児訪問看護の受け入れ拡充に向けた検討 （査読付き）	共著	2017 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究 4，pp3-9	訪問看護ステーションの施設長 110 名を対象に，小児の訪問看護の受け入れが困難な施設の実態と課題を明らかにすることを目的に調査した。小児訪問看護を受け入れていない理由は，「小児看護の経験のある看護師がいない」が最も多かった。小児訪問看護の拡充に向けて必要な支援で「家族との対応」は訪問なし群に有意に高かった。家族との対応を含めた小児看護技術の習得とマンパワーの確保が課題である。 ◎原 朱美，美甘祥子
6．生後 4 か月までの児を持つ父親の育児・家事行動と育児ストレスに関する文献レビュー （査読付き）	単著	2016 年 11 月	インターナショナル nursing care research,15(3), pp143-151	生後 4 か月までの児を持つ父親の育児参加の促のための支援について 16 文献を検討した。父親の育児ストレスの要因に，【育児の大変さと疲労】【育児不安】【戸惑い・困惑】【父親責任】【夫婦関係】【経済的・社会的状況】が抽出された。父親の育児参加を促すためには，心身へのサポートが重要である。 ◎美甘祥子
7．日本人妊婦における障がいを持つ子どもへの意識と非侵襲的出生前遺伝学的検査（Non-invasive prenatal testing;NIPT）への意識との比較 （査読付き）	共著	2016 年 7 月	母性衛生,57(2), pp323-331	NIPT への意識と障がいを持つ子どもへの意識との関連を検討し，495 部を分析した。NIPT が陽性であった場合に「羊水検査を受けずに妊娠をあきらめる」と回答した率は，障がいを持つ方が「近親者にいる」群に高かった。障がいを持つ子どもへの意識は,NIPT 受検やその後の対応への意識に関連することを念頭にサポートを行う必要がある。 ◎美甘祥子，中塚幹也
8．母体血清マーカー検査の結果が陰性であった褥婦の胎児への不安や検査への認識 （査読付き）	共著	2016 年 5 月	インターナショナル nursing care research,15(2), pp23-32	母体血清マーカー検査で陰性と判定された褥婦が，どのような不安や認識を抱いていたのかを明らかにした。12 名に半構造的面接を行ったデータを自動言語解析した。「思う」と係り受けの関係にある単語は，「大丈夫」「マーカー検査」「不安」の順に多かった。予想する結果と異なる場合は心理的負担が大きいと推測され，サポートが必要である。 ◎美甘祥子,杉山智春,谷口光代

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. 助産師が妊婦健康診査で用いる超音波検査におけるケアの概念分析（査読付き）	共著	2015 年 10 月	インターナショナル nursing care research, 14(3), pp97-103	助産師が用いる超音波検査におけるケアについて Walker らの概念分析を用い 10 件の原著論文を分析した。「胎児や妊娠経過の診断」「保健指導」「胎児への愛着形成へのケア」「精神面へのケア」「コミュニケーションの手段」と再定義した。助産師は，母児の健康状態の診断と，検査結果をもとに保健指導を行っていた。 ◎美甘祥子,杉山智春,谷口光代
10. 母体血清マーカー検査の結果が陰性であった女性の思い（査読付き）	共著	2015 年 9 月	ヒューマンケア研究学会誌,7(1),pp45-5	母体血清マーカー検査受検時の思いを明らかにすることを目的に，女性 12 名に，半構造化面接法を行い，質的帰納的に分析した。【結果による安心感】【安易な動機】【家族と同じ価値観】の 3 つのカテゴリーと，それを構成する 8 つのサブカテゴリーが抽出された。女性と家族の価値観が異なる場合にも，十分なサポートが必要である。 ◎美甘祥子,井田歩美
11. Knowledge and attitude with regard to non-invasive prenatal testing among pregnant Japanese women（査読付き）	共著	2015 年 6 月	Acta Medica Okayama, 69(3), pp155-163	Non-Invasive Prenatal Test (NIPT) に関してどのような知識や意識を持っているかを明らかにすることを目的に，妊婦に無記名自記式質問紙調査を施行し，557 部を分析した。NIPT の導入に賛成の妊婦は高率であったが，知識は十分ではなかった。NIPT を受けてから，その結果の重大性に気づくことがないように情報提供を十分に行う必要がある。 ◎Mikamo S., Namatuka M.
12. 医療施設で働く助産師への業務拡大に関する意識調査（査読付き論文）	共著	2014 年 3 月	インターナショナル nursing care research,13(2),pp9-18	医療施設で働く助産師の医療処置に関連した業務拡大への意識を明らかにすることを目的に，助産師に，無記名自記式質問紙調査を施行し，331 部を分析した。会陰切開・縫合の施行に積極的ではなかった。助産師教育で助産に必要とされる医療処置に関して教授し，業務拡大のメリットが認識できるようにし意識改革を行う必要がある。 ◎杉山智春，谷口光代，内田みさと，美甘祥子，丸山幸三
13. 女子大学生の子宮頸がん予防に関する調査-性交経験と，知識，子宮頸がん予防行動との関連-（査読付き）	共著	2013 年 3 月	近代姫路大学紀要，5, pp75-84	女子大学生の性交経験の有無と，子宮頸がんに関する知識や，子宮頸がん検診受検，HPV ワクチン接種の関連を明らかにすることを目的に無記名自記式質問紙調査を実施し 217 人を分析した。HPV 感染リスクが高いことを自覚してもらい，性交経験がある者には子宮頸がん検診の受検を，性交経験がない者には HPV ワクチンの接種を勧める必要がある。 ◎美甘祥子，杉山智春

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
14. 妊娠前の 20～30 歳代就労女性の食習慣，やせに関する知識，価値観の実態　やせ体型群と普通体型群の比較 （査読付き）	共著	2013 年 1 月	母性衛生，53(4)， pp522-529	妊娠前の 20～30 歳代就労女性の食習慣と，やせに関する知識，食事及び健康に関する価値観の実態を明らかにすることを目的に，無記名自記式質問紙を用い調査し，448 部を分析した。やせの影響に関する知識の普及と，自身の健康と次世代の健康のために食習慣が大切であるという価値に働きかける健康教育が効果的であることが示唆された。 ◎美甘祥子，町浦美智子，佐保美奈子
15. 妊娠前の看護師のやせの影響や葉酸に関する知識と食習慣の実態妊娠前の一般職との比較 （査読付き）	共著	2012 年 2 月	日本看護学会論文集:母性看護，42 号 pp92-95	妊娠前の 20～30 代の看護師のやせの影響に関する知識と食生活の実態を把握することを目的に，一般病棟に勤務する 20～30 代の看護師 133 名を対象に質問紙調査を行い，同年代の就労女性 474 名と比較検討した。看護師も一般就労女性も全体の 2 割がやせ体型であり，栄養バランスを考えている者の割合は高かったが，食行動が必ずしも伴っていなかった。 ◎美甘祥子，町浦美智子
（その他） 1. 運動に関するソーシャルメディアへの書き込みの分析	共著	3019 年 3 月	第 33 回日本助産学会学術集会，福岡	運動に関する妊婦保健指導の実践に向けた妊婦の情報ニーズを明らかにすることを目的に，妊婦の発言内容 764 件を分析した。運動に関しての情報ニーズは妊娠 10 カ月以降に高まっていた。運動の効果や方法だけでなく，運動をしても良いかの身体的状態かの判断へのニーズがあることが明らかとなった。 ◎美甘祥子，井田歩美
2. 日本最大ウェブサイトにおける妊婦の情報発信の実態　レスポンスの多い話題の分析	共著	2019 年 3 月	第 33 回日本助産学会学術集会，福岡	ウェブサイトコミュニティでの発言 117,160 件でレスポンスの多い話題を分析し，妊婦の情報発信の実態を明らかにすることを目的とした。マタニティハラスメント事案やドメスティックハラスメント事案などがあった。妊婦同士の井戸端会議の場としての利用が専門職者による介入の必要性があるものより多いことが明らかとなった。 ◎井田歩美，美甘祥子，片岡久美恵，川崎千春
3. 妊婦と夫の出生前診断を受けるか否かの話し合いに関する実態調査	共著	2018 年 12 月	第 38 回日本看護科学学会学術集会，松山	出生前検査を受けるか否かの話し合いで話した内容明らかにすることを目的に妊娠 22 週以降の妊婦と夫 178 組を調査した。検査の詳細や検査後の対応について話し合った割合は低かった。医療職者は，検査の詳細や検査後の対応について十分に話し合う機会を設ける支援が必要である。 ◎美甘祥子，中塚幹也

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. ソーシャルメディアにおける予定帝王切開に関連した発言内容の分析	共著	2018 年 12 月	第 38 回日本看護科学学会学術集会，松山	ソーシャルメディア上の予定帝王切開術に関する 242 件の発言内容を分析し情報ニーズを概観した。前回帝切となった経産婦が今回の出産で予定帝切を選択したものの不安や疑問が生じ，それを軽減，解決を図るために情報提供を求めている実態が明らかとなった。予定帝切を受ける女性に特有の不安に寄り添い，個別性に応じた情報を提供する必要性が示唆された。 ◎井田歩美，美甘祥子，片岡久美恵，藤井弓加
5. 出生前診断を受けるか否かの話し合いに必要な知識の程度に関しての妊婦と夫の比較	共著	2018 年 10 月	第 59 回日本母性衛生学会学術集会，新潟	妊婦と夫の出生前診断を受けるか否かの話し合いで必要な知識を明らかにすることを目的とし，妊娠 22 週以降の妊婦と夫有効回答は 179 組に調査をした。出生前診断の受検経験がある 3 割の妊婦，半数の夫は話し合いをするための知識が不十分と思っていた。妊娠初期までに，妊婦と夫が正しい知識を持つことができる教育・情報提供のシステム作りが必要である。 ◎美甘祥子，中塚幹也
6. ソーシャルメディアにおける緊急帝王切開に関連した発言内容の分析	共著	2018 年 10 月	第 59 回日本母性衛生学会学術集会，新潟	妊婦・褥婦がソーシャルメディア上で発言した緊急帝王切開に関する内容 104 件を分析した。予定されている帝王切開術に対する不安を挙げて，同様の体験をした人からの体験談やアドバイスを求めていた。緊急帝王切開となった場合に，出産の肯定的受容促進への支援の必要性が示唆された。 ◎井田歩美，美甘祥子，片岡久美恵，川﨑　千春，藤井弓加
7. 妊婦と夫への出生前診断に関しての認知度と知識の実態調査	単著	2018 年 3 月	第 32 回日本助産学会学術集会，横浜	出生前診断の認知度と知識について明らかにすることを目的に，192 組の妊婦と夫に調査をした。妊婦と夫の出生前診断の認知度は高いが，具体的な知識を持っている者が少なく，医療者から情報を得ている割合が低かった。 ◎美甘祥子
8. 妊娠後期にある妊婦の情報ニーズに関する研究　日本最大ウェブサイトにおける発言の分析	共著	2018 年 3 月	第 32 回日本助産学会学術集会，横浜	ウェブサイト上で妊娠後期の妊婦が発言した内容 3,799 件を分析し情報ニーズの可視化を目的とした。妊婦は一定の情報では判断しきれないことに対して，自分以外の妊婦の意見を参考にして，疑問の解決や不安の軽減に努めていることが明らかとなった。医療者は，より具体的で個別性に配慮した情報提供を行うとともに，妊婦の不安に寄り添う姿勢の重要性が示唆された。 ◎井田歩美，美甘祥子，片岡久美恵
9. 妊婦の無痛分娩に関するソーシャルメディアへの書き込みの分析	共著	2017 年 12 月	第 37 回日本看護科学学会学術集会，仙台	無痛分娩に関する妊婦のソーシャルメディア上での発言 125 件を，情報ニーズを明らかにすることを目的に分析した。無痛分娩を選択するための情報だけではなく，無痛分娩時への不安の対処方法に関して情報を求めていた。無痛分娩の具体的な方法だけではなく，精神的な援助も必要であることが示唆された。 ◎美甘祥子，井田歩美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10. 妊娠中期にある妊婦のソーシャルメディアにおける発言内容から分析した不安の可視化	共著	2017 年 12 月	第 37 回日本看護科学学会学術集会，仙台	ソーシャルメディアで発言された妊娠中期にある妊婦の不安 284 件を分析し，可視化することを目的とした。妊娠中期の妊婦がソーシャルメディアの利用により解決したい不安は，切迫早産，妊娠糖尿病や感染症といった妊娠異常に関するものが多かった。妊婦健診では，健診結果について，妊婦が十分に理解，納得できているのかを確認する必要性が示唆された。 ◎井田歩美，美甘祥子
11. 妊娠中期にある妊婦の情報ニーズに関する研究　ソーシャルメディアにおける発言内容の分析	共著	2017 年 9 月	第 58 回日本母性衛生学会学術集会，神戸	妊娠 5～7 か月の妊婦がコミュニティサイト上で発言した内容 4,876 件の情報ニーズを可視化するために分析を行った。妊娠中期の妊婦の情報ニーズは腹部緊満や胎動に関して不安や疑問を感じていることが明らかとなった。具体的な情報提供とともに，妊婦の不安に寄り添う姿勢の重要性が示唆された。 ◎井田歩美，美甘祥子，片岡久美恵
12. Visualization of Child Care Information Needs of Mothers with Infants－Comments' Analysis on Japan's Largest Website－	共著	2017 年 6 月	31ST ICM Triennial Congress , Canada.	The purpose was to visualize the child care information needs of mothers with young children. It is important to increase the health literacy and enable mothers to assess the quality of child care information and select what they need as this allows for better development in child-rearing behavior. ◎Ida A., Mikamo S.
13. 高年妊婦における出生前診断に関する情報ニーズの明確化－初産婦と経産婦の比較－	共著	2017 年 6 月	第 19 回日本母性看護学会学術，西宮	高年妊婦がソーシャルメディア上で発言した出生前診断に関しての内容 182 件を分析し，初産婦と経産婦が求めている情報ニーズを明らかにすることを目的とした。初産婦と経産婦では検査方法によって発言頻度が異なっており，医療者は対象に応じた情報提供が必要であることが示唆された。 ◎美甘祥子，井田歩美
14.Qualitative analysis of material posted to social media on prenatal diagnosis by mid-life expectant mothers,	共著	2017 年 3 月	20th EAFONS, Hong Kong	母体血清マーカー検査で陰性と判定された 12 名の女性の不安や認識を明らかにすることを目的としてインタビューを行った。検査でわかる確率よりも，医療者の「大丈夫」という言葉を判断の基準にしていた。比較的年が若い女性に，結果が判明するまでに不安を抱く者もいたことから，年齢，背景に関係なく精神的なケアを行う必要がある。 ◎Mikamo S., Ida A.
15. 高年妊婦の出生前診断に関するソーシャルメディアへの書き込みの分析	共著	2017 年 3 月	第 31 回日本助産学会学術集会，徳島	高年妊婦が，ソーシャルメディアを利用して出生前診断に関して発言した内容 181 件を分析し，出生前診断に関する関心やその内容を明らかにすることを目的とした。「羊水検査」「胎児ドック」「NIPT」への関心が高かった。出生前診断を希望する妊婦の個々のニーズを十分に把握し，適切な情報を提供する必要がある。 ◎美甘祥子，井田歩美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16. 妊娠初期にある妊婦の情報ニーズに関する研究　日本最大ウェブサイトにおける発言の分析	共著	2017 年 3 月	第 31 回日本助産学会学術集会，徳島市	妊娠初期にある妊婦の情報ニーズを可視化することで，具体的な妊婦保健指導の実践に向けた基礎的資料とすることを目的に妊娠 4 か月までの妊婦の発言 2,837 件を分析した。妊娠初期における妊婦の情報ニーズは，病院選び，つわり，悪阻，切迫流産など不定愁訴や妊娠異常に関するものが多くみられた。 ◎井田歩美，美甘祥子，片岡久美恵
17. 高齢出産となる女性の情報ニーズ　-ソーシャルメディアにおける発言のテキストマイニングによる分析-	共著	2016 年 10 月	第 57 回日本母性衛生学会，東京	高齢妊婦の情報ニーズを明らかにすることを目的に，2013 年 1 月～2015 年 12 月の発言タイトル 1,242 件を Text Mining Studio を使用し分析した。単語の出現頻度は，「病院」が最も多く抽出された。医療職者は，高齢妊婦に，適切な時期に情報を提供する必要がある。 ◎美甘祥子，井田歩美
18. ソーシャルメディアによる意見交換が及ぼす乳児をもつ母親の育児への効果	共著	2016 年 10 月	第 57 回日本母性衛生学会，東京	ソーシャルメディアでの意見交換が母親の心理状況に及ぼす影響を明らかにする。2011 年 4 月～2012 年 3 月の発言 31,801 件を，Text Mining Studio5.2 で分析した。「良い」「参考」「頑張る」が多く抽出された。母親のコミュニティを有効な育児支援へと活用する必要がある。 ◎井田歩美，美甘祥子
19.Anxiety about the fetus and awareness of testing in puerperal women with negative results on the maternal serum screening	共著	2016 年 3 月	19th EAFONS，Chiba，Japan	マーカー検査で陰性と判定された褥婦の認識を明らかにすることを目的とした。12 名の半構造的面接を自動言語解析した。年齢が若く「大丈夫」と思い検査を受ける者もいた。結果判明までに「不安」を抱く者もおり，年齢や背景に関係なく精神的なケアを行う必要がある。 ◎Mikamo S.，Sugiyama C.，Taniguchi M.
15. Awareness survey of pregnant Japanese women towards psychological counselling during non-invasive prenatal testing (NIPT)	共著	2015 年 7 月	ICM，2015，Yokohana,Japan	妊婦が希望する心理カウンセリングの内容とその時期を明らかにすることを目的とし，妊婦 557 人を調査した。NIPT を受検する際に，心理カウンセリングを 69.8%が希望していた。助産師は NIPT に関する知識を深め，心理的なサポートを行っていくことが必要と考える。 ◎Mikamo S.，Nakathuka M.
16. Changes in the Image of Examination Table and Sense of Shame of Female University Students Before and After Expreiencing the Litthotomy position on Gynecogical Examination Tables	共著	2015 年 7 月	ICM，2015，Yokohana,Japan	看護学生 80 名が砕石位を体験し，診察台のイメージや羞恥心の変化を検討した。産婦人科診察台イメージは「情動イメージ」「体感イメージ」「緊張的イメージ」「見た目イメージ」の 4 因子が抽出された。産婦人科診察台に対してマイナスイメージが強い場合は，羞恥心が強くなる傾向にあり，配慮が必要である。 ◎Nakai Y.，Mikamo S.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17. 助産師の業務拡大に対する医療施設で働く助産師への意識調査（第2報）	共著	2014年11月	第34回日本看護科学学会，名古屋	医療施設で働く助産師が，会陰切開や縫合，等の医療処置等の業務の拡大に対して，肯定的に考えているのかを明らかにすることを目的に，無記名自記式質問紙調査を行い，701部を分析した。助産師教育で助産に必要とされる医療処置に関して教授し，業務拡大することのメリットが認識できるようにし意識改革を行う必要がある。 ◎杉山智春，内田みさと，美甘祥子
18. 無侵襲的出生前遺伝学的検査（NIPT）と羊水検査に対する妊婦の意識調査	共著	2014年9月	第55回日本母性衛生学会，幕張	NIPTで陽性と判定された場合に，羊水検査を受けるかどうかの意思決定に影響する要因を明らかにすることを目的に，妊婦に質問紙調査を行った。有効回答557人であった。NIPTの検査前の説明には，妊婦だけでなく夫にも同席してもらい，陽性と判定された場合に羊水検査で診断を行なう必要があることが明らかとなった。 ◎美甘祥子，中塚幹也
19. 女子大学生の産婦人科診察での載石位体験前後の羞恥心比較と対人恐怖との関連	共著	2014年3月	第28回日本助産学会，長崎	砕石位をとることで生じる羞恥心の程度と，羞恥心の要因の内である対人恐怖の関連を明らかにし，産婦人科診察台に関しての看護への示唆を得ることを目的とした。看護学生80人に準実験研究を行った。産婦人科診察台での砕石位体験前後の状態羞恥感情測定尺度の総数に変化はないこと，対人恐怖が強い場合は羞恥心も強いことが明らかとなった。 ◎中居由美子，美甘祥子，鷲尾弘江
20. 母体血を用いた新しい出生前遺伝学的検査に対する妊婦の意識調査	共著	2013年10月	第54回日本母性衛生学会，大宮	妊婦がNIPTに関してどのような知識や考えを持っているかを明らかにし，必要な援助の示唆を得ることを目的に，無記名自記式質問紙調査を行い，271名から有効回答を得た。妊婦のNIPTへの関心は高いが，検査内容や結果についての知識は十分とは言えず，正しい情報へアクセスできるように支援することが必要であることが明らかとなった。 ◎美甘祥子，片岡久美恵，中塚幹也
21. 招待講演　新型出生前検査：日本人妊婦の意識調査	単著	2013年7月	公開シンポジウム「生と死の倫理」，岡山	研究協力の同意が得られた施設において妊婦健診を受けている妊婦に無記名自記式質問紙調査を行った結果をも発表した。 ◎美甘祥子
22. 女子大学生の子宮頸がん予防に関する調査(第2報)　性交経験と知識および子宮頸がん予防行動との関連	共著	2012年11月	第53回日本母性衛生学会，福岡	女子大学生の子宮頸がん細胞診受検およびHPVワクチン接種の実態と，子宮頸がんに関する知識，性的自己意識・性的リスク対処意識を明らかにすることを目的に自記式質問紙調査を行い217人を分析した。8割の女性がHPVに感染するが，子宮頸がんは予防できる癌であるということを周知し，さらに，自身の性に関する意識を高める性教育を行うと効果的であることが示唆された。 ◎杉山智春，美甘祥子

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
23. 女子大学生の子宮頸がん予防に関する調査(第1報)　予防行動と知識および性的リスク対処意識との関連	共著	2012 年 11 月	第 53 回日本母性衛生学会，福岡	女子大学生の性交経験の有無と，子宮頸がんに関する知識や，子宮頸がん細胞診（細胞診）受検，HPV ワクチン接種の関連を明らかにすることを目的に自記式質問紙調査を行い 217 人を分析した。HPV ワクチンを初交前に接種することが有効であることを周知する必要がある。さらに，性交経験者には，細胞診の方法や費用の助成など具体的な内容を説明する必要があることが示唆された。 ◎美甘祥子，杉山智春
24. BMI やせの 20～30 歳代就労女性の食習慣，やせと葉酸に関する知識，価値観の実態	共著	2011 年 9 月	第 52 回日本母性衛生学会，京都	妊娠前 20～30 歳代就労女性の食習慣，やせと葉酸に関する知識，食事に対する価値観及び自身の健康や次世代の健康に関する価値観について質問紙調査を行った。BMI やせ 95 人と普通 339 人を比較した。食習慣を整えることは次世代の子どもの健康だけでなく，自身の健康にも影響するという価値に働きかける必要があることが示唆された。 ◎美甘祥子，町浦美智子
25. 妊娠前の看護師のやせの影響と葉酸に関する知識，価値観と食習慣との関連	共著	2012 年 8 月	第 42 回日本看護学会母性看護，東京	妊娠前の 20～30 歳代の看護師を対象とし，やせと葉酸に関する知識と食習慣の関連，食習慣に対する価値観と食習慣について質問紙調査を行った。看護師が妊娠前や妊娠中のやせや低栄養が次世代の健康に影響するという知識を持っている割合は低かった。知識を持つことで，実際に妊娠したときや，妊娠を希望したときに食習慣の改善の動機付けとなる可能性がある。 ◎美甘祥子，町浦美智子
26. 妊娠前の 20～30 歳代就労女性のやせと葉酸に関する知識，価値観と食習慣との関連	共著	2011 年 6 月	第 13 回日本母性看護学会学術集会，宇都宮	妊娠前の 20～30 歳代就労女性 474 人を対象に質紙調査を行った。20～30 歳代の就労女性は，食習慣に改善の余地があり，やせの影響や葉酸に関する知識を持っていた割合は低く，健康は大切という価値を持っている割合が高かった。食習慣を整えることは次世代の子どもの健康だけでなく，自身の健康にも影響するという価値に働きかける必要があると考えられた。 ◎美甘祥子，町浦美智子

教　育　研　究　業　績　書

令和　2年　3月　31日

氏名　　井上　葉子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
看護学	公衆衛生看護学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 基礎看護技術演習Ⅰ　関西学研医療福祉学院（専任教員） （専任教員）	平成23年4月～平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護技術演習Ⅰ」（1年次配当、1単位、40人クラス）において実践した。看護技術は人間関係の成立が第1要件であるといっても過言ではない。このことをふまえて、基礎看護技術演習Ⅰでは、簡単な事例を設定して、ロールプレイの演習を取り入れ、コミュニケーション技術および日常生活援助を中心とする看護技術の習得に努めた。
看護研究指導　関西学研医療福祉学院看護学科 （専任教員）	平成23年4月～平成24年8月	探求心をもって研究に取り組み自己研鑽に努めることは専門職業人として必要なことである。このことをふまえ、学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科3年生が取り組んだ、実習で担当した患者についてのケーススタディの指導を担当した。学生は研究目的・方法の設定、データの収集・分析の一連の過程を体験し、研究的態度および論理的思考についての学習を深めることができた。
基礎看護技術演習Ⅱ　関西学研医療福祉学院 （専任教員）	平成23年4月～平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護技術演習Ⅱ」（1年次配当、1単位、40人クラス）において実践した。看護技術は人間関係の成立が第1要件であるといっても過言ではない。このことをふまえて、基礎看護技術演習Ⅰでは、簡単な事例を設定して、ロールプレイの演習を取り入れ、コミュニケーション技術および診療の補助に関する援助を中心とする看護技術の習得に努めた。
基礎看護学実習Ⅰ　関西学研医療福祉学院 （専任教員）	平成23年4月～平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科での臨地実習「基礎看護学実習Ⅰ」（2年次配当）の科目責任者として実習の全てを担当した。
基礎看護学実習Ⅱ　関西学研医療福祉学院 （専任教員）	平成23年4月～平成24年8月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科での臨地実習「基礎看護学実習Ⅱ」（2年次配当）の科目責任者として全てを担当した。
在宅看護論実習　宝塚大学 （非常勤講師）	平成25年4月～平成26年3月	科目責任者である教授とともに実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、次年度の実習依頼を行った。
地域看護学Ⅴ　宝塚大学 （非常勤講師）	平成25年4月～平成26年3月	科目責任者である教授とともに、地域診断演習時の指導、地区踏査の指導を行った。
地域看護学実習　宝塚大学 （非常勤講師）	平成25年4月～平成26年3月	科目責任者である教授とともに実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。

在宅看護概論　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4 月～平成 27 年 3 月	科目責任者として全てを担当した。
在宅看護論　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4 月～平成 27 年 3 月	科目責任者として全てを担当した。
在宅看護論演習　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4 月～平成 27 年 3 月	科目責任者として全てを担当した。
家族看護論　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4 月～平成 27 年 3 月	科目責任者として全てを担当した。
基礎看護学実習Ⅰ　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4 月～平成 27 年 3 月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。
基礎看護学実習Ⅱ　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4 月～平成 27 年 3 月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。また看護過程については、苦手意識を克服できるよう個々の学習進度を理解した上で指導するように配慮した。

在宅看護論実習　白鳳女子短期大学 （常勤講師）	平成26年4 月～平成27 年3 月	科目責任者として実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、次年度の実習依頼を行った。実習においては、小児から高齢者を対象とする在宅看護を行う中で、対象の年齢や疾患、障害による身体の変化、対象をとりまく環境、社会資源の活用、他職種との連携における看護職の役割について同時に考えられるように指導を行った。対象の心に寄り添う看護が行えるよう、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、対象と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患児の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
公衆衛生看護学Ⅲ（産業保健）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年4 月～平成28 年9 月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は1 コマを担当し、職業性疾病の原因と予防・看護（アスベスト、振動障害、感音性難聴、VDT 症候群）について講義した。
公衆衛生看護学Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年4 月～平成28 年9 月	科目責任者である非常勤講師と教授と講師とともに講義を担当した。井上は1 コマを担当し、学校環境衛生について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年4 月～平成28 年9 月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は3 コマを担当し、母子保健施策と保健師の活動、乳幼児期の成長発達と保健指導、難病保健の動向について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅱ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年4 月～平成28 年9 月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は2 コマを担当し、家庭訪問における保健指導、新生児訪問についての講義と新生児訪問ロールプレイの演習を行った。
基礎看護学実習Ⅱ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年9 月～平成 28 年12 月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。

小児看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年 9 月～平 成 28 年 12 月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、重症心身障害児を対象とする看護を行う中で、障害による身体の変化と成長発達の順序性、他者との愛着形成、遊びの意義と必要性について同時に考えられるように指導を行った。また、障がい児をとりまく環境、他職種との連携における看護職の役割についても指導した。患児の心に寄り添う看護が行えるよう、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患児と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患児の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
老年看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成28年 9 月～平 成 28 年 12 月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、高齢者を対象とする看護を行う中で、加齢による身体の変化と家族関係と社会的な役割の変化、介護保険制度、福祉サービル利用について同時に考えられるように指導を行った。また、高齢者をとりまく環境、他職種との連携における看護職の役割についても指導した。また人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、高齢者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
成人看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年 1 月～平 成 29 年 2 月	単位認定者の講師とともに実習指導を行った。実習においては、成人の急性期、周手術期看護を行う中で、手術侵襲による身体の変化とや手術に対する不安、就労生活、家庭生活の中断による家族や生活状況の変化における看護の役割について同時に考えられるように指導を行った。また、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。

統合看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年4 月～平成 29 年6 月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。実習においては、急性期にある複数の患者に対して、援助の優先順位を考え、病棟のケア計画に則った援助計画を立案し、チームの一員として援助を行うよう留意して指導を行った。また、師長やチームリーダー、メンバーのシャドーイングを通して、リーダーシップ、メンバーシップと看護管理の実際を学ぶとともに専門外来の見学を通して他職種との連携の実際と医療チームにおける看護の役割を学ばせた。
卒業研究　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年4 月～平成 29 年10 月	担当学生の論文作成の全てにおいて担当した。2 名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。
成人看護学援助論Ⅰ（急性期・周手術期）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年10 月～平成 30 年3 月	科目責任者である准教授とともに、看護過程演習の指導を担当した。
成人看護学実習　奈良学園大学 （常勤助教）	平成29年4 月～平成 30 年3 月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告、来年度の実習調整を行った。実習においては、成人の急性期、周手術期看護を行う中で、手術侵襲による身体の変化とや手術に対する不安、就労生活、家庭生活の中断による家族や生活状況の変化における看護の役割について同時に考えられるように指導を行った。また、人の命を預かる責任の重い仕事であることを実感できるよう重点的に指導を行った。具体的には、患者と関わることから看護を考え、振り返る機会を多くした。学内では学生とともに患者の状態を考え必要な看護を考える機会を多く持つようにした。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4 月～平成 30 年9 月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は 4 コマを担当し、母子保健施策と保健師の活動、乳幼児期の成長発達と保健指導、難病保健の動向について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅱ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4 月～平成 30 年9 月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は 2 コマを担当し、家庭訪問における保健指導、新生児訪問についての講義と新生児訪問ロールプレイの演習を行った。

公衆衛生看護学実習Ⅰ（地域活動）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに保健所・市町村における実習を担当し、健康教育、家庭訪問、地区診断等の指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに学校（中学校・高等学校）における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅲ（産業保健）　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに事業所における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年10月～平成31年3月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに講義を進めた。井上は2コマを担当し、成人保健の動向、成人期の保健活動・保健師動の内容について教授した。
卒業研究　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年4月～平成30年11月	担当学生の論文作成の全てにおいて担当した。2名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。
基礎看護学実習Ⅱ　奈良学園大学 （常勤助教）	平成30年9月～平成30年12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成と施設への報告を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。
公衆衛生看護学方法論Ⅰ　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年4月～令和元年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は4コマを担当し、母子保健施策と保健師の活動、乳幼児期の成長発達と保健指導、難病保健の動向について講義した。
公衆衛生看護学方法論Ⅱ　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年4月～令和元年9月	科目責任者である教授と講師とともに講義を担当した。井上は2コマを担当し、家庭訪問における保健指導、新生児訪問についての講義と新生児訪問ロールプレイの演習を行った。
公衆衛生看護学診断演習　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年4月～令和元年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに講義を担当した。井上は2コマを担当し、保健師が行う家庭訪問について講義した。

公衆衛生看護学実習Ⅰ（地域活動）　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年4月～令和元年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに保健所・市町村における実習を担当し、健康教育、家庭訪問、地区診断等の指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅱ（学校保健）　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年4月～令和元年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに学校（中学校・高等学校）における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。
公衆衛生看護学実習Ⅲ（産業保健）　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年4月～令和元年9月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに事業所における実習を担当し、実習指導から評価までを行った。
基礎看護学実習Ⅰ　奈良学園大学 （常勤講師）	令和元年9月～令和元年12月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成を行った。実習においては、学生が看護師や患者とのコミュニケーションをスムーズに結ぶことができるように、また看護援助を根拠につなげることに留意しながら指導を行った。
公衆衛生看護学Ⅰ（地域活動）奈良学園大学 （常勤講師）	令和元年10月～令和2年3月	科目責任者である准教授と教授、講師とともに講義を進めた。井上は2コマを担当し、成人保健の動向、成人期の保健活動・保健師動の内容について教授した。
卒業研究　奈良学園大学 （常勤講師）	平成31年4月～令和元年11月	担当学生の論文作成の全てにおいて担当した。2名の学生の卒業研究を担当した。研究の手法は文献学的研究であった。学生が興味をもったテーマについて先行研究を分析し考察を行った。研究目的と分析、結果、考察がひとつの流れの中で論理的に流れ、書かれているかについて指導を強化した。
基礎看護学実習Ⅰ　奈良学園大学 （常勤講師）	令和元年12月～令和2年2月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、実習後の評価資料の作成を行った。既習の看護技術が患者の個別性を尊重し展開できるよう、事前に看護過程の復習、日常生活援助技術の練習を行い実習に臨ませた。実習においては、学生が患者との援助的人間関係をスムーズに結ぶことができるように、また看護援助は根拠をもって実践することに留意しながら指導を行った。
2　作成した教科書，教材 住まい学習のデジタル教材「おかあさん　お家の中でもご用心！！―赤ちゃんとの暮らしの中に潜む危険―」	平成23年1月	保健指導の教材の見本として、乳幼児の家庭内での窒息、転落、熱傷、誤飲などの事故防止を保護者に啓発するための教材として、絵本のデジタル教材を作成した。

平成 23 年度基礎看護学実習Ⅰ実習要項	平成23年5月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅰ」（２年次配当）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
平成 23 年度基礎看護学実習Ⅱ実習要項	平成23年10月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅱ」（２年次配当）で学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
平成 24 年度基礎看護学実習Ⅰ実習要項	平成24年5月	学校法人青丹学園関西学研医療福祉学院看護学科の専門科目「基礎看護学実習Ⅰ」（２年次配当）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、記録の書き方、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
在宅看護論実習の手引き	平成25年8月	宝塚大学看護学部の「在宅看護論実習」（３年次配当）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
在宅看護論実習の手引	平成26年4月	白鳳女子短期大学看護学専攻「在宅看護論実習」（3年次配当）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点、実習心得などについてまとめた冊子を作成した。
成人看護実習Ⅰ（急性期・周手術期）実習記録用紙ガイドライン	平成29年4月	成人看護学Ⅰ（急性期・周手術期）において、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習内容と方法、思考過程、記録をする際の留意点などについてまとめた冊子を作成した。
成人看護学のデジタル教材：「一次救命（病室編）」、「一次救命（廊下編）」、「段階的離床」	平成29年11月	成人看護学の学内演習・臨地実習時のイメージがつくように、心肺蘇生法、AED の使用方法、緊急時の協力要請、手術後の段階的離床についてのデジタル教材を作成した。
健康保育学演習（課程看護実習含む）ワークシート	令和 2 年3月 31 日	大阪教育大学で開講している健康保育学演習（家庭看護実習を含む）において、人間の健康の概念をふまえ子どもの成長発達と生活を理解し、家庭と集団保育の場で必要な知識と技術について具体的な学習内容についてまとめた冊子を共同で作成した。 著者名：関谷まり・井上葉子
３　教育上の能力に関する大学等の評価		

白鳳女子短期大学 FD 委員会	平成 26 年 4 月～平成 27 年 3 月	講義最終回において大学が作成した授業アンケートを実施したところ、話の分かりやすさ、授業の内容のわかりやすさ、板書や資料のみやすさ等すべてにおいてわかりやすかったという結果であった。単独での講義実施だったため、自信につながった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成 28 年度研修会	平成 28 年 9 月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による平成 28 年度研修会「乳幼児の運動発達の観察のポイントと支援」開催において委員として、研修の企画、運営を担当した。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成 28 年度交流会	平成 28 年 9 月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による平成 28 年度交流会「思春期保健対策～若年妊婦へのアプローチを考える～」開催において委員として、研修の企画、運営を担当した。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成 29 年度研修会	平成 29 年 9 月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による平成 29 年度研修会「妊産婦のメンタルケアの重要性～チームでの育児支援～」開催において委員として、研修の企画、運営を担当した。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成 29 年度交流会	平成 30 年 2 月	日本看護協会による平成 29 年度保健指導支援事業保健指導ミーティング開催にあたって、委員として、奈良県保健予防課、保健所、保健センターと協力し、企画、運営を担当した。
日本看護協会平成 29 年度保健指導支援事業　奈良県看護協会「保健指導ミーティング」事例検討会ファシリテーター	平成 30 年 2 月	日本看護協会による平成 29 年度保健指導支援事業保健指導ミーティングにおいて、事例検討会のファシリテーター役として、保健指導ミーティング（事例検討会）参加者の新人保健師の意見が活発にでるように雰囲気作りやきっかけ作りに努め、とても勉強になったとの参加者の感想が聞かれた。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成 30 年度研修会	平成 30 年 9 月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による平成 30 年度研修会「各々の力を発揮できる子育てネットワークを考える～専門職それぞれの強み・弱みをふまえた支援の在り方～」開催において委員として、研修内容の企画、講師との調整、運営を担当した。 参加者からは、看護職それぞれの支援の方向性や取り組みが聞けてよかった等の感想が聞かれた。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 平成 30 年度交流会	平成 30 年 11 月	日本看護協会による平成 30 年度保健指導支援事業保健指導ミーティング開催にあたって、委員として、奈良県保健予防課、保健所、保健センターと協力し、企画、運営を担当している。

奈良県看護協会　保健師職能委員会 令和元年度研修会	令和元年 9月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による令和元年度研修会「育てにくさを抱えた親子への包括的支援～ダウン症児の赤ちゃん体操を通して考える療育支援～」開催において委員として、研修内容の企画、講師との調整、運営を担当した。 参加者からは、親と子への支援の在り方や実際の取り組みが聞けてよかった等の感想が聞かれた。
奈良県健康推進課主催 令和元年度保健指導ミーティング	令和元年 11月	令和元年 11 月奈良県が現任保健師の研修として開催した保健指導ミーティングにおいてファシリテータ役を務め、保健師のアセスメント力向上に向けた関りを行った。
奈良県看護協会　保健師職能委員会 令和元年度交流会	令和元年 12月	奈良県看護協会　保健師職能委員会主催による令和元年度交流会「私の保健師ぢから～保健師の楽しさ再発見～」開催にあたって企画、講師依頼、運営を担当し、行政、産業等職域を越えたネットワークづくりを目指して活動した。
5　その他 なし		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許	平成 4 年 5月 13 日	
2）養護教諭一種免許	平成 6 年 3月 31 日	
3）保健師免許	平成 6 年 5月 19 日	
4）第一種衛生管理者免許	平成 6 年 8月 10 日	
5）受胎調節実地指導員免許	平成 8 年 2月 24 日	
6）Laughter Yoga Leader	平成 29 年 6月 11 日	
7）日本心理学会　認定心理士	平成 30 年 4月 21 日	
2　特許等 特記事項無し		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
奈良県立医科大学附属病院 常勤看護師	平成 4 年 4月～ 平成 5 年 3月	結核病棟に勤務。感染症看護を中心とする看護に従事した。旧結核予防法による入院患者に対し、確実な服薬管理の方法、食事・休養を中心とした生活習慣改善指導に携わった。また、継続看護の取り組みとして保

		健所保健師との連携を図ることに努めた。
斑鳩町役場保健センター 常勤保健師	平成 6 年 4 月～ 平成 7 年 6 月	奈良県内にある人口２万５千人程度の町の保健センター保健師として勤務。老人保健法に基づく機能訓練「リハビリ教室」では、企画・実施に携わり、病気をきっかけとして自宅に閉じこもりがちな高齢者が外出し、気分転換、他者との交流をはかることを目的とした活動を行った。また、「子宮がん検診」の主担当者として事業の企画・実施・評価といった一連の業務に従事するとともに、「胃がん検診」、「乳がん検診」、「肺がん・結核検診」についても主担当保健師と協力して実施を行った。また、母子保健法に基づく各種の健診、保健指導の業務に従事するとともに、特に妊婦を対象とした「母親教室」の主担当者として、妊娠・出産・育児の時期を安心して過ごせるよう、情報提供、啓発活動に取り組んだ。また必要に応じて担当地区の住民に対して家庭訪問を行い、個別対応での問題解決に努めた。さらに、住民が安全に安心して健やかに過ごせるような町づくりを目指し、食生活改善推進員養成講座の実施、観光課主催の町民マラソンへの救護員としての協力、社会福祉協議会と共催の「斑鳩町健康まつり」の企画・運営にも携わった。また、寝たきり状態で歯科受診できない住民に対して、「訪問歯科診療」事業の実施にも携わり、町歯科医師会と協働での訪問歯科診療を行った。
くさち耳鼻科 非常勤看護師	平成 8 年 2 月～ 平成 8 年 8 月	奈良県内にある耳鼻科の診療所の非常勤看護師として勤務。耳鼻科外来における診療の補助を中心とした看護活動を行った。
奈良県国民健康保険団体連合会生駒総合病院健康管理センター 常勤保健師	平成 8 年 8 月～ 平成14年 3 月	人間ドックや各種健康診断の業務の担当者として従事した。また、患者指導として「糖尿病教室」、「高脂血症教室」、「高尿酸血症教室」の企画・運営・評価に携わった。特に糖尿病教室では、教室受講者を中心とした糖尿病患者会「虹の会」を立ち上げ、医師、薬剤師、管理栄養士と協力しながら療養者の生活の質の向上に努めた。そのほか、小児科外来での予防接種業務や育児相談、総合案内所における健康相談にも携わった。

三宅町立三宅小学校 非常勤講師	平成16年5 月～平成17年2月	不登校・長期欠席児童が増加しつつある小学校において、教職員よりも身近な相談窓口となる「親と子の相談員」として、保護者および児童に対する相談業務に従事した。育児に悩む保護者の相談やコミュニケーションが困難な児童に対しては遊びを中心とした関わりを行い相談に応じた。
シリンクス株式会社 非常勤看護師	平成20年4 月～平成20年5月	国際電気通信基礎技術研究所において行われていた看護師の業務に関する調査研究のデータ収集・分析作業に研究補助員として従事した。
奈良県　医療政策部　保健予防課　母子・保健対策係　石綿ばく露健康リスク調査担当 非常勤保健師	平成24年10 月～平成25年6月	環境省からの委託で行っている奈良県内の住民に対する石綿ばく露健康リスク調査担当の非常勤保健師として従事し、問診から結果通知、データ管理などの一連の業務を担った。問診では生後から現在までの数十年におよぶ住環境、生活状況、石綿ばく露の状況を本人より聴き取る必要がある。そのため、年代ごとの写真やイラストを用いた媒体を作成し過去の状況を思い起こせるように工夫をし問診を行った。また石綿の製品、石綿ばく露の危険がある状況について写真やイラストを用いた媒体を作成し石綿ばく露健康リスク調査の意義や目的について住民の方に理解していただけるように努めた。
奈良県難病相談支援センター　難病専門相談員 （非常勤保健師）	平成27年4 月～平成28年3月	奈良県難病相談支援センターの難病相談専門員として、難病患者・家族等の療養生活上の相談業務に従事した。特に、難病患者の就労支援のための相談体制づくりとして、就労相談票の作成、相談内容のデータベースのフォーマット作成、ハローワークの難病患者就職サポーターとの定期的な打ち合わせを行った。また、難病専門医による医療相談の実施、難病患者患者会活動への支援、難病に関する講演会の企画や準備、難病相談支援センターの広報誌の作成にも関わった。さらに、全国難病センター研究会に出席し、奈良県難病相談センターの現状を伝えると共に、他府県の先進的な取り組みについて情報収集し、担当者同士のつながりを作ることに努めた。
奈良県職員研修	平成27年5 月	情報セキュリティ研修　受講
一般社団法人日本家族計画協会　研修会	平成27年12 月	第 17 回自己効力感（セルフエフィカシー）を高め主体的な行動変容を支える健康教育セミナー　受講
全国保健師教育機関協議会　研修会	平成28年8 月	第 31 回全国保健師教育機関協議会夏季教員研修会受講

全国保健師教育機関協議会　研修会	平成28年10月	第5回全国保健師教育機関協議会秋季教員研修会受講
全国保健師教育機関協議会　研修会	平成28年10月	平成全国保健師教育機関協議会東海・北陸・近畿ブロック研修会受講
奈良県保健師ネットワーク会議	平成28年11月	平成28年度第4回なんとかせんと保健師ぢから（保健師ネットワーク会議）：講演「地域ケアからみる保健師の役割」、パネルディスカッション「災害支援における保健師の役割～熊本地震の経験を通して～」参加
日本保健師連絡協議会　研修会	平成29年3月	平成28年度活動報告・集会：報告「母子保健における虐待予防の基軸～寄り添う支援としての健康診査～」への参加
全国保健師教育機関協議会　研修会	平成30年8月	第33回全国保健師教育機関協議会夏季教員研修会 -公衆衛生看護の躍進-　受講
全国保健師教育機関協議会　研修会	平成30年10月	平成30年度全国保健師教育機関協議会東海・近畿北ブロック、北陸・近畿南ブロック合同研修会受講
全国保健師教育機関協議会　研修会	令和元年12月	令和元年度全国保健師教育機関協議会第2回東海・近畿北ブロック、北陸・近畿南ブロック合同研修会受講
奈良県保健師ネットワーク会議	令和2年1月	令和元年度第7回なんとかせんと保健師ぢから（保健師ネットワーク会議）：講演「地域診断と保健事業への反映」、「データヘルス計画策定による地域診断と事業展開」の受講
4　その他 特記事項無し		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　健康保育学演習（課程看護実習含む)ワークシート	共著	令和2年3月	大阪青山大学 健康科学部	大阪教育大学で開講している健康保育学演習（家庭看護実習を含む）で使用するテキストを共同で作成した。人間の健康の概念をふまえ子どもの成長発達と生活を理解し、家庭と集団保育の場で必要な知識と技術について具体的な学習内容についてまとめた。 担当部分：子どもの歯の発達とケア p15-p18 関谷まり編著 著者：関谷まり・井上葉子

2　2018 年看護師国家試験対策要点がわかる出題傾向がみえる在宅看護論	共著	平成 29 年 12 月	株式会社ピラールプレス	看護師国家試験科目の「在宅看護論」について、看護師国家試験出題基準の中項目に基づいた要点編と過去問題編 の２部構成とし、過去問の要点の学びから知識を広げたり深めたりしながら、看護師国家試験合格のための学力向上の支援が図れるものとなっている。 担当部分：目標Ⅰ 在宅における安全と健康危機管理 p22-p24、目標Ⅱ4 在宅療養生活を支える看護（食事・栄養、排泄、清潔、移動）p35-p37、目標Ⅲ6 在宅療養において特徴的な疾病がある療養者への看護（小児、難病）p42,p45、7 在宅における医療管理を必要とする人と看護（膀胱留置カテーテル、褥瘡管理)p48,p51-p52 守本とも子監修、安藤邑惠編著、川口ちづる、井上葉子
（学術論文） １.生活経験からみた看護専門学校学生の看護技術力に関する研究	共著	平成 26 年 ３月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」	著者名：井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 ３年課程の看護専門学校４校の１年生 147 名に生活経験に関する質問紙調査を実施し、生活経験の自己評価結果と１年で学習する４つの基礎看護技術の実技調査結果との対応関係を検討した。第 51 巻，P. 33～P. 41
２.在宅看護論における生活経験の重要性を再認識するための授業実践―ワークショップを用いた教育プログラムの検討―（査読付）	単著	平成 27 年 ２月	白鳳女子短期大学研究紀要	短期大学看護学専攻学生２年生 122 名を対象に、生活経験を再認識するための講義とワークショップを組み合わせた授業実践を行い、学生の認識の変化と教育的効果について検討した。第９巻，.47～P. 54
３.避難生活体験とポスターセッションを取り入れた学内演習の実践と評価―生活環境を主体的に理解することを目指した在宅看護論の授業展開―	共著	平成 28 年 １月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」	著者名：関谷まり・井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 短期大学看護学専攻学生２年生 122 名を対象にした、在宅看護論の学内演習での避難生活環境の体験演習の学習効果と、体験演習の学習のまとめとしてポスターセッションを活用したことによる共

				同学習の効果と課題を検討した。第 53 巻，P.57～P.67
４.訪問看護ステーション実習での看護計画立案による学習効果について―実習目標の到達度の比較からの分析―（査読付）	共著	平成 28 年４月	第46回日本看護学会論文集 看護教育	著者名：西村和子・田村和子・井上葉子・松村あゆみ・北畠昭弥・北出千春３年課程の看護専門学校３年生 36 名を対象に、訪問看護ステーション実習において、看護計画立案の有無によって学習効果に違いがあるかどうかを質問紙調査の結果から比較検討した。P.23～P.26
５.在宅看護論における難病患者の就労支援に関する 授業の学習効果【第 1 報】 ―授業振り返りシートの分析から―（査読付）	共著	平成 30 年 2 月	第48回日本看護学会論文集 看護教育	在宅看護論において実践したモデル授業「難病患者の職業生活を支援する看護」について、授業振り返りシートの記載内容を分析し難病患者の就労支援の内容を看護基礎教育に組み入れたことによる学習の効果を検討した。論文集 P.3～P.6 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて関わった。 共著者：西村和子・井上葉子・松村あゆみ
６.在宅看護論における難病患者の就労支援に関する 授業の学習効果【第 2 報】―クローン病の事例を用いたワークシートの分析から― （査読付）	共著	平成 30 年 2 月	第48回日本看護学会論文集 看護教育	看護専門学校２年生の学生を対象に在宅看護論の授業で『職業生活を支援する看護』のモデル授業での難病患者のクローン病患者の事例ワークシートの分析から学生が難病患者の生活について就労を含めた視点で理解することについての学習効果について検討した。 論文集 P.7～P.10 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて関わった。 共著者：松村あゆみ・井上葉子・西村和子
７.臨地実習における看護学生のストレスと レジリエンスについての実態（査読付）	共著	平成 30 年 2 月	第48回日本看護学会論文集 看護教育	看護専門学校学生２年生を対象に時期の異なる 2 つの臨地実習前後で調査した、気分プロ フィール検査（POMS2）とストレス自己統制評定尺度（SSI）の 2 つの調査結果を基に、学生個別のストレス反応とレジリエンスの状態の変化を把握し、学生個々への適切な介入方法の必要性について検討した。研究の方

				法、分析、論文作成についての助言・指導を行った。 論文集　P.75～P.78 担当部分：分析、論文の作成、論文投稿指導に関わった。 共著者：山﨑陸世・平山亜矢子・井上葉子・丸田裕子・髙原 恵・ 後藤 恵・岡田和江・ 葦原佐衣・加納由紀子
８.在宅看護論における難病患者の就労支援に関する 授業の学習効果【第 3 報】―闘病記の感想文の分析から―	共著	平成 30 年 3 月	奈良学園大学紀要第８集	在宅看護論において実践したモデル授業「難病患者の職業生活を支援する看護」の課題としての、難病患者による就労についての闘病記を読んでの感想文の分析から教材として闘病記を用いたことによる学習の効果を検討した。 P.13～P.19 担当部分：研究計画、対象者の確保、分析、論文の作成に至るまで全てにおいて行った。 共著者：井上葉子・西村和子・松村あゆみ・奥西志穂・駒井由美子・大谷未来
９.ラフターヨガ（笑いヨガ)の実際と今後の可能性	共著	平成 30 年 12 月	日本保健医療行動科学会雑誌（33）№2	ラフターヨガの実践結果から身体面と精神面への効果について検討した。共著者：井上葉子・安藤和子 P.46-48
10.臨地実習における看護学生のレジリエンス育成に関する文献研究 （査読付）	共著	平成 31 年 2 月	第 49 回日本看護学会論文集 看護教育	臨地実習における学生のレジリエンス育成に関する文献検討を行い、個別支援のあり方について検討した。研究の方法、分析、論文作成についての助言・指導を行った。 論文集　P.75～P.78 担当部分：分析、論文の作成、論文投稿指導に関わった。 共著者：山﨑陸世・井上葉子・平山亜矢子・葦原佐衣・後藤 恵
11.2019 第 22 回東アジア看護学研究者フォーラムの報告（Ⅱ）－炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する文献検討－ A Report on 22nd East	共著	令和元年 9 月	奈良学園大学紀要第 11 集	炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する研究の動向を明らかにし,支援方法のあり方について検討した。炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する研究の動向を明らかにし,支援方法のあり方について検討した。

Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference 2019 Part 2 －Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease－				共著者：井上 葉子，芝田 ゆかり，吉水 清，三浦 康代 p.207-210
12.2019 第 22 回東アジア看護学研究者フォーラムの報告（Ⅰ）～文献検討による女性の身長短縮に関連する因子および因子間の関連～ A Report on 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS) Conference 2019（Ⅰ）～ Association among the factors in conjunction with Height Loss of females by the literature review～	共著	令和元年9月	奈良学園大学紀要第 11 集	身長短縮を予防するための身長短縮に関連する因子とその因子間の関連について検討した。身長短縮を予防するための身長短縮に関連する因子とその因子間の関連について検討した。 共著者：三浦 康代，芝田 ゆかり，吉水 清，井上 葉子 p.211-215
13.療養者の生活への視点をもった技術習得のための看護技術教育の実践と評価―ベッドメーキング技術に着目して―	共著	令和2年3月	大阪教育大学家政学研究会「生活文化研究」	著者名：関谷まり・井上葉子・碓田智子 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 A 大学看護学科 1 年生 91 名を対象にしたベッドメーキングの看護技術試験での評価に関してげ学生の自己評価と教員評価の比較から技術習得を左右する要因について検討した。第 57 巻,P.1～P.10
14.要介護者が暮らす住環境を理解することを目指した住居の見取り図作成による学習効果の検討 （査読付）	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究 vol.7	著者名：井上葉子・西村和子・松村あゆみ 担当の箇所については、共同研究につき抽出は不可能。 短期大学看護学専攻学生２年生 115 名を対象にした、在宅看護論の学内演習での要介護者が暮らす住居の見取り図の作成と見取り図を用いたポスターセッションを活用したことによる学習効果と課題を検討した。

				第7巻，P.11-16
（その他） 1.看護専門学校学生の生活経験からみた看護技術力に関する研究―療養上の世話に関する看護技術に着目して―（修士論文）	単著	平成25年1月	大阪教育大学大学院	３年課程の看護専門学校４校の１年生147名に生活経験に関する質問紙調査を実施しその傾向をまとめた。また、看護専門学校１校の１年生を対象に４つの基礎看護技術の習得状況と生活経験の程度についての関係性を検討した。さらに、３年課程の看護専門学校１年生を対象に、生活経験を補完するためのワークショップを用いた授業を試行し、その教育効果についても論じた。 A4判　全102貢
（その他） （学会発表） 1.地域看護学実習における学生の看護の視点の広がりに関する検討―在宅療養者の社会資源活用に関する学びを分析して―	－	平成19年8月	第38回日本看護学会―看護教育―（於　千葉県千葉市）	4年制の統合カリキュラムの専門学校の3年次に行われる在宅看護実習での学生29名の記録を分析することにより、看護の視点を地域レベルで捉えるという実習の教育効果を検討した。 抄録集　P.46
2.看護学生の生活経験と看護技術力の対応関係	－	平成24年9月	第43回日本看護学会―看護教育―（於　岩手県盛岡市）	３年課程の看護専門学校４校の１年生147名に生活経験に関する質問紙調査を実施し、１年で学習する４つの基礎看護技術の習得状況との関係性を検討した。 共同発表者：碓田智子・井上葉子 抄録集　P.36
3.基礎看護学実習におけるフィジカルアセスメント技術の活用の実態	－	平成24年9月	第43回日本看護学会―看護教育―（於　岩手県盛岡市）	３年課程の看護専門学校４校の学生196名を対象に基礎看護学実習でのフィジカルアセスメント技術に関する質問紙調査を実施し、講義と実習との連動を強化した教育プログラムのあり方について検討した。 共同発表者：山﨑陸世・中川利子・田畑典子・中嶌雅子・丸野由美・村川まゆみ・井上葉子 抄録集　P.85

４.看護学生による災害看護演習の評価に関する考察　―避難生活の看護活動を考える演習について―	－	平成 27 年 8 月	第 17 回日本災害看護学会（於　宮城県仙台市）	短期大学看護学専攻学生２年生 122 名を対象にした、在宅看護論における避難生活体験を題材とした演習の方法と学習効果についてを検討した。 共同発表者：関谷まり・井上葉子 抄録集　P. 160
５.ポスターセッションを活用した在宅看護論演習の学習展開―「避難生活支援演習」の実践事例―	－	平成 27 年 8 月	第 46 回日本看護学会―看　護　教　育　―（於　奈良県）	短期大学看護学専攻学生２年生 122 名を対象にした、在宅看護論の学内演習での避難生活環境の体験演習の学習効果と、体験演習の学習のまとめとしてポスターセッションを活用したことの効果と課題を検討した。 共同発表者：関谷まり・井上葉子 抄録集　P. 107
６.訪問看護ステーション実習での看護計画立案による学習効果について―実習目標の到達度の比較からの分析―	－	平成 27 年 8 月	第 47 回日本看護学会―看　護　教　育　―（於　奈良県）	３年課程の看護専門学校３年生 36 名を対象に、訪問看護ステーション実習において、看護計画立案の有無によって学習効果に違いがあるかどうかを質問紙調査の結果から比較検討した。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・田村和子・北畠昭弥・北出千春・井上葉子 抄録集　P. 85
７.看護基礎教育における難病患者の就労支援に関する教員の認識	－	平成 28 年 10 月	第 75 回日本公衆衛生学会　総　会（於　大阪府）	看護専門学校教員 129 名を対象にした質問紙調査から、難病患者の就労支援についての認識を明らかにし、難病患者の就労支援を教育に取り入れる上での課題について検討した。 共同発表者：西村和子　松村あゆみ　内田勇人 抄録集　P. 539
８.看護基礎教育における難病看護に関する教育の実態	－	平成 28 年 12 月	第 37 回奈良県公衆衛生学　会（於　奈良県）	看護専門学校教員 129 名を対象にした質問紙調査から、難病患者の就労支援についての教育の実情を明らかにし、難病患者の就労支援を教育に取り入れる上での課題について検討した。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・奥西志穂・早味妙・駒井由美子・井上葉子 抄録集　P. 7

9.在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業効果【第1報】―学生による授業振り返りシートの分析から―	－	平成29年8月	第48回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　香川県）	3年課程看護専門学校学生2年生 77名を対象に「難病患者の就労支援」を題材として行った授業実践の教育効果と課題について、授業後の学生による「授業振り返りシート」の内容から分析と検討をした。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・井上葉子 抄録集　P.148
10.在宅看護論における難病患者の就労支援に関する授業効果【第2報】―事例ワークシートからみた学習内容の分析―	－	平成29年8月	第48回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　香川県）	3年課程看護専門学校学生2年生 77名を対象に「難病患者の就労支援」を題材として行った授業実践の教育効果と課題について授業内で用いた教材「事例ワークシート」の内容から分析と検討をした。 共同発表者：西村和子・松村あゆみ・井上葉子 抄録集　P.149
11.臨地実習における看護学生のストレスとレジリエンスについての実態	－	平成29年8月	第48回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　香川県）	3年課程看護専門学校学生2年生 42名を対象に時期の異なる2つの臨地実習の実習前後で、学生のストレス反応とレジリエンスの状態を調査し、その結果からストレス反応とレジリエンスには個別性があり学生の特性を理解した支援の必要性を示した。 共同発表者：山﨑陸世・平山亜矢子・丸田裕子・高原恵・佐藤則子・定政美香・井上葉子 抄録集　P.114
12.要介護者が暮らす住環境を理解することを目指した在宅看護論の授業展開―住居の提案とポスターセッションを取り入れた演習の実践と評価―	－	平成30年8月	第49回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　広島県）	看護短大2年生122名を対象に、在宅看護論演習において要介護者が暮らす住居の見取り図の作成を行い、授業の学習効果について授業後の学生の学びと感想の内容から分析を行った。学生が積極的な関心を持ち、能動的に学習する上で一定の効果があることが明らかとなった。 共同発表者：井上葉子・西村和子・松村あゆみ・奥西志穂・大谷未来・駒井由美子 抄録集　P.86

13.看護学生のレジリエンスに関する文献研究	－	平成 30 年 8 月	第 49 回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　広島県）	看護基礎教育における臨地実習での学生のストレスへの対応を方法を検討するため、学生を対象としたレジリエンスの介入方法に関する研究の動向を検討した。 共同発表者：山﨑陸世・井上葉子・平山亜矢子・芦原佐衣・丸田裕子 抄録集　P.205
14.在宅看護論実習における事例を用いたグループワークによる学生の学びー使える社会資源を調べるグループワークを実施してー	－	平成 30 年 8 月	第 49 回日本看護学会―看護教育―学術集会（於　広島県）	３年課程看護専門学校学生 42 名を対象に在宅看護論実習の最終日に、事例の社会資源を調べる学習を行い、その学習効果を検討した。 共同発表者：西村和子・北出千春・井上葉子 抄録集　P.206
15.Study of literature on life skills that focus on eating habits of patients with inflammatory bowel disease		2019 年 2 月	the 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS). (in Singapore)	炎症性腸疾患患者の食生活に焦点をあてたライフスキルに関する研究の動向を明らかにし,支援方法のあり方について検討した。 共同研究者：Inouye Y,Shibata Y, Miura Y,Yoshimizu K Abstract No:ABS2427
16.Review of the literatures on factors related to height loss and relationship among the factors		2019 年 2 月	the 22nd East Asian Forum of Nursing Scholars (EAFONS). (in Singapore)	身長短縮を予防するための身長短縮に関連する因子とその因子間の関連について検討した。 共同研究者：Miura Y,Shibata Y, Yoshimizu K,Inouye Y Abstract No: ABS2253
17.テキストマイニングを用いた精神看護学実習における学生の学びの分析	－	平成 31 年 3 月	日本看護研究学会第 32 回近畿・北陸地方学術集会	３年課程看護専門学校学生 42 名を対象に精神看護学実習の最終日に提出したレポート「精神看護学実習を終えて」の内容分析を行い実習における学びの内容を検討した。 共同発表者：山﨑陸世・溝口みちる・井上葉子 抄録集　P.43
（学会等への貢献 ） 1.日本サーモロジー学会学術集会　第 33 回大会実行委員				平成 28 年 6 月　奈良市で行われた第 33 回学術集会の実行委員を担った。

2.第33回日本保健医療行動科学学会学術集会 実行委員				平成30年6月　沖縄県那覇市での第33回日本保健医療行動科学学会学術集会の実行委員として準備等の運営に携わった。
3.第33回日本保健医療行動科学学会学術集会 体験学習ワークショップ講師				平成30年6月　沖縄県那覇市での第33回日本保健医療行動科学学会学術集会での体験学習ワークショップの講師として「ラフターヨガ（笑いヨガ）」の講演と実施を担った。
4.日本看護研究学会第45回学術集会　実行委員				令和元年8月　大阪市で開催された日本看護研究学会第45回学術集会の実行委員として開催準備等に携わった。
5.日本看護研究学会第34回近畿北陸地方会　実行委員				令和3年3月　奈良市で開催される日本看護研究学会第34回近畿北陸地方会の実行委員として開催準備等に携わっている。
6.第27回日本看護診断学会学術大会　企画委員				令和3年7月　奈良市市で開催される第27回日本看護研究学会学術大会の企画委員として開催準備等に携わっている。
（公的貢献 ） 1.奈良県看護協会　ナースセンター事業推進委員		平成28年4月～平成29年3月		奈良県看護協会ナースセンター推進委員として看護職の復職支援、看護学校ガイダンス、看護職のPR活動に従事した。
2.奈良県看護協会　保健師職能委員会 委員		平成28年4月～現在に至る		奈良県看護協会保健師職能委員として研修会の企画、保健師職のネットワーク作りに活動している。
3.生駒市立生駒北小中学校育友会　副会長		平成29年4月～令和元年6月		生駒市内にある小中一貫校の小学部のPTA役員として、教育活動の充実、学校、地域、保護者との連携に向けて活動した。
4.生駒市PTA協議会 理事		平成29年4月～令和元年6月		理事として生駒市内の教育について他の理事や役員とともに話し合い、よりよい教育を目指し活動した。
5.生駒市立生駒北小中学校育友会　保護者交流会の講師		平成29年4月～令和元年6月		小中学校のPTA活動の一環として保護者を対象にした文化交流活動「ラフターヨガ教室」の講師役を担い、笑いと健康づくりの講話とラフターヨガの実践を行った。

6. 令和元年度保健指導ミーティング（奈良県）のファシリテーター				令和元年 11 月奈良県が現任保健師の研修として開催した保健指導ミーティングにおいてファシリテータ役を務め、保健師のアセスメント力向上に向けた関りを行った。

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　　小林　由里

研　究　分　野	研究内容のキーワード

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１ 教育方法の実践例 医療事故事例のシミュレーション体験を用いた授業方法	平成 15 年 12 月～平成 29 年 10 月	「医療安全」の講義において学生の自己モニタリングやリスクアセスメントを高め、事故防止行動がとれることを目的にシミュレーション教育を実施した。学生一人ずつ誤薬のシミュレーション体験とリフレクションを実施した。体験後レポートの記述から、学生はどのような状況で事故につながるのかや、自分の行動特性について理解できたという結果が得られた。また、実習においても事故防止の意識につながった。
多重課題を用いたリスクアセスメント力と判断力の育成演習	平成 28 年１月	統合分野「看護の統合と実践」の科目として、卒業前に多重課題を用いたリスクアセスメント力と判断力、対応力を育成することを目的に演習を実施した。病室に呼吸不全の患者、転倒リスクのある患者、嚥下困難のある患者などを設定し、学生は、グループでディスカッションして患者への援助計画を立案しておく。教員が患者役を演じ、ロールプレイを行い、患者の状況に対応しながら、リスクアセスメントや優先度の判断を行う体験学習とした。このメリットとして、学生は、臨場感のある患者の反応にどう対応しようかと思考し判断する機会となった。
看護管理の考え方を学ぶ事例を用いたグループ討議	平成 28 年４月～平成 29 年６月	統合分野「看護の統合と実践」の科目である、看護管理では、看護管理の定義やマネジメントプロセス、病院・看護部の組織体制などについて教授した。また、倫理的問題のある事例を用いて、自らがミドルマネージャーとしてどのように倫理的判断を行うかのディスカッションや、複数の様々な状況にある患者のケアが必要な事例に対し、チームでケアを実施する際のリーダーシップのあり方についてのディスカッションを取り入れた。
成人看護援助論Ⅱの講義・演習	平成 30 年４月～現在に至る	慢性疾患を持つ患者のセルフマネジメントを支援するための看護について、学生がイメージしながら学べるよう、事例を用いて、段階的に思考プロセスをたどっていけるような講義の組み立てを行った。セルフマネジメントの患者教育では、模擬患者（教員）に対してパンフレットを用いて学生が指導する課題とした。患者役の様々な反応に対して思考し、対応するという内容とした。学生は不足する知識や患者教育の技術など課題を明確にすることができた。
看護管理学特論の講義	平成 31 年９月～令和元年2月	大学院の看護管理学特論では、臨床で現在も勤務する学生であるため、生きた教材を活用するべく、各自の管理的疑問や問題を提起しあい、ディスカッションを行った。
２ 作成した教科書，教材		
３ 教育上の能力に関する大学等の評価		
４ 実務の経験を有する者についての特記事項		

神経内科病棟管理（2年間）、教育担当（5 年間）および臨床実習指導	平成 19 年 4 月～平成 24 年 3 月	神経内科病棟看護師長として病棟の看護管理を担当した。この間、年間を通して、国立病院機構大阪医療センター附属看護学校 3 年生、国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校 3 年生、白鳳短期大学の 1 年生、3 年生などの基礎看護学実習や、成人、老年看護学実習、小児看護学実習を受け入れた。受け入れに対して以下の点に留意した。 ・実習指導者を育成するために実習指導者会の内容を検討した。（例えば実習記録の学習会などの実施、実習指導案の作成など） ・実習受け入れ態勢を整えるため、実習期間中の実習指導者の勤務調整、看護計画や看護記録の充実を図る。 ・実習オリエンテーション内容を検討し、学生の実習への導入を助けるものとした。 ・担当教員との連携に留意し、受け持ち患者選定や実習指導の方向性を調整するようにした。 ・スタッフの実習指導の資質向上を目指し、研修会への参加を促し動機づけを行った。 ・実習指導者とともにカンファレンスに出席し、学生の実習目標到達度の評価および実習指導の評価を行い、次の指導に活かすようにした。
教育担当（5 年間）として看護師の看護実践力向上のための現任教育の企画・運営	平成 19 年 4 月～平成 24 年 3 月	院内看護職（看護師、療養介助員、看護助手）の育成を図るため、経年別、役割別研修の企画・運営を担当した。毎年、新人看護師は毎月 1 回、2 年目、3 年目、4,5 年目は 2 か月に 1 回程度、6 年目以上は半年に 1 回程度、実習指導に関すること、褥瘡予防、摂食嚥下などの専門分野の研修などを実施した。経年別研修は、OJT を重視し、それぞれの経験年数での課題を OJT により達成できるよう取り組み、集合研修ではその補填となるよう位置付けた。その結果、各部署で実践を通して、看護職員同士でお互いを育てあう意識ができた。新人看護職の研修テーマは主に看護技術や看護倫理に関すること、2 年目はケーススタディ、3 年目は組織におけるリーダーシップ・メンバーシップ、4 年目以上は業務改善など組織における管理とし、業務改善につなげた。
教育担当（5 年間）として看護師長・副看護師長の看護管理能力向上のた	平成 20 年 9 月	看護師長・副看護師長として病棟運営について管理的な視点の育成、病棟運営を円滑にしていくために、相互のコミュニケーションを図り連携を強化することや、各々の管理的能力の向上を目的に、研修を企画・運営した。 「私が管理を実践する上で大切にしていること」をテーマに看護師長による病棟管理の実際のプレゼンテーションや、各病棟での問題について管理的視点でディスカッションした結果、解決に向けての具体的行動を見出すことができた。
教員に対する指導・教育、教員の教育実践力向上のための研修の企画・運営	平成 25 年～平成 30 年 3 月	看護専門学校の教育主事として看護学校管理を担当した。近畿内国立病院機構附属看護学校の 1，2 年目教員を対象とし、教育実践力向上を目的とした研修や、中堅看護教員を対象とし、学校運営・管理の視点の育成を目的とした研修を実施した。
国立病院機構近畿グループ主催実習指導者講習会講師、施設内実習指導者	平成 26 年 6 月～平成 29 年 6 月	国立病院機構近畿グループ主催実習指導者講習会にて「基礎看護学」や「実習評価」について担当し講義を行った。また、国立病院機構舞鶴医療センター附属看護学校、京都医療センター附属看護助産学校、敦賀医療センターでの実習指導者研修において、教育課程、実習指導の意義、実習評価、実習指導案の作成などについて講義を実施した。

5 その他 国立病院機構舞鶴医療センター附属看護学校における教育実績	平成 25 年 4 月～平成 28 年 3 月	「看護学概論」「老年看護学概論」「医療安全」などの講義を担当した。また、「基礎看護学実習」「小児看護学実習」「成人看護学実習」「在宅看護論実習」の実習指導を行った。効果的な実習となるよう、実習施設への実習依頼や調整を行った。院外講師へは学生の講義評価結果をフィードバックし、講義依頼を行った。また、看護教員の指導、実習施設の実習指導者対象研修の講師などを行った。
国立病院機構京都医療センター附属京都看護助産学校 看護学科における教育実績	平成 28 年 4 月～平成 30 年 3 月	「看護管理」「医療安全」の講義を担当した。また、「基礎看護学実習」「小児看護学実習」などの実習指導を行った。効果的な実習となるよう、実習施設への実習依頼や調整を行った。院外講師へは学生の講義評価結果をフィードバックし、講義依頼を行った。また、看護教員の指導や実習施設の実習指導者対象研修の講師などを行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1 資格, 免許	平成元年 4 月 26 日	看護婦免許
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項 国立病院機構奈良医療センター看護師長	平成 19 年 4 月～平成 21 年 3 月	神経内科病棟看護師長として病棟管理を行った。神経・筋難病患者の薬物療法、リハビリテーション看護、レスパイト入院の受け入れを実施した。病床管理や医療事故防止対策、感染防止対策などの患者管理、職員に対する労務管理、目標管理、経営への参画などの管理業務を行った。また、難病看護を担う看護職の育成を目的に内外に向けた研修を企画・運営した。
国立病院機構奈良医療センター教育担当看護師長	平成 21 年 4 月～平成 24 年 3 月	教育担当として看護職の現任教育の企画・実施を行った。また、医療安全管理係長とともに全職員対象の研修を実施した。人材確保対策事業として、看護職募集活動、復職支援研修や中途採用者研修の企画・運営を実施した。また実習受け入れ態勢整備等の役割を果たした。看護師長会のワーキンググループの取り組みでは、勤務時間管理、固定チームナーシングなどのマニュアル作成、看護管理基準の作成においてリーダーシップをとり取り組んだ。
4 その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書, 学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所, 発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) 1 なし 2 3 :				
(学術論文)				

1.新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性とその特徴（修士論文）	単著	平成 25 年 3 月	畿央大学	新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性を明らかにすることを目的とした。看護師 712 名に質問紙調査を実施した。質問紙は属性，批判的思考態度尺度(常盤ら,2010)，情報活用の実践力尺度(高比良ら,1999)で構成した。分析方法は記述統計，Spearman の相関係数，重回帰分析を用いた。結果、クリティカルシンキング能力は，協同的態度が高く，看護師との比較では，探求心が高く，論理的思考への自信が低かった。情報活用能力では，収集力，発信・伝達力が高く，看護師との比較では表現力が高かった。新人看護師および看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性は、双方とも有意な正の相関が認められ(r= .449,p< 0.1)、両能力は有意に関連していることがわかった。両能力に影響を与える諸要因では、新人看護師は看護基礎教育課程がクリティカルシンキング能力に影響していた。クリティカルシンキング能力を高めるには情報活用能力の判断力，創造力，処理力を育成する必要性が示唆された。 A4判 全 64 頁
2.看護学生の砕石位体位前後の産婦人科診察台に対するイメージと羞恥心の変化（査読付）	共著	平成 27 年 6 月	畿央大学紀要 p19～P30	看護学生が産婦人科診察台で砕石位を体験することで、体験前後の診察台のイメージや羞恥心の変化を検討することを目的とした。先行分権やアンケートからキーワードを抽出し 15 項目の産婦人科診察台イメージ尺度を作成した。羞恥心は樋口の状態羞恥心感情測定尺度で砕石位体験前後に調査した。参加者は 80 名。産婦人科イメージは、因子分析の結果「情動イメージ」「体感イメージ」「緊張的イメージ」「見た目イメージ」の 4 因子が抽出された。体験前は 13 項目がマイナスイメージであったが、体験後 5 項目がプラスに有意に変化した。体験後の羞恥心尺度の高値群は、診察台イメージの「高く」「嫌な」の項目でマイナスに有意に変化した。以上から産婦人科診察台に対してマイナスイメージが強い場合、羞恥心が強くなることが示唆された。 本人担当部分:データの分析、結果の考察を行った。 共著者:◎中居由美子,小笠原知枝,播金ヤスミ,小林由里,河合まゆみ,文鐘聲,

3.基礎看護学実習評価項目の内容分析によるパフォーマンス評価のためのルーブリックの作成 （査読付）	共著	平成 30 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究第 5 巻 P43～P51	基礎看護学実習の評価に用いられた項目から、パフォーマンス評価のためのルーブリックを作成することを目的とした。10 校の基礎看護学実習評価表の評価項目を基礎データとし、Berelson の内容分析を参考にカテゴリー化した。445 記録単位数をコード化し、110 サブカテゴリー、25 カテゴリー、6 コアカテゴリーを抽出した。6 コアカテゴリーは、看護過程展開力、クライエント理解力、自己学習力、チーム医療における看護師役割の認識力、倫理的態度に基づく実践力、コミュニケーション力と命名し、基礎看護学実習の実践力とした。これに基づき、縦軸に 25 カテゴリーの評価規準、100 サブカテゴリーの評価基準から構成され、かつ 4 段階尺度で評価できる評価表を作成した。教員は客観的で効率的なパフォーマンス評価ができる、学生にとっては学生自身の自己評価を容易にし、基礎看護学実習の行動目標を立てる手段として活用が期待できる。 本人担当部分：データの分析、結果の考察を行った。 共著者：◎播金ヤスミ, 小笠原知枝,中居由美子,河合まゆみ,小林由里,對中百合,新井祐恵, 太田容子, 伊藤明子
4.新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性 （査読付）	共著	平成 31 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究第 6 巻 P3～P11	新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の特徴とその関連性を明らかにすることを目的とした。看護師 712 名に質問紙調査を実施した。質問紙は属性、批判的思考態度尺度(常盤ら、2010)、情報活用の実践力尺度(高比良ら、1999)で構成した。分析方法は記述統計、Spearman の相関係数、重回帰分析を用いた。結果、クリティカルシンキング能力は、協同的態度が高く、看護師との比較では、探求心が高く、論理的思考への自信が低かった。情報活用能力では、収集力、発信・伝達力が高く、看護師との比較では表現力が高かった。新人看護師および看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性は、双方とも有意な正の相関が認められたが、新人看護師は看護師より関連性が低かった。両能力に影響を与える諸要因では、新人看護師は看護基礎教育課程がクリティカルシンキング能力に影響していた。今回の調査結果から、クリティカルシンキングには、懐疑的態度、探求心、論理的思考への自信が重要であり、その能力と関連している情報活用能力の、処理力や創造力、判断力、発信・伝達力を高める教育が必要である。その教育方法として、文章の批判的読解、事例分析、映像視聴によるメディアの解読、レポートや論文などにより分析的思考や創造性を高めることができる教育についてさらに明らかにすることが課題である。 （修士論文をもとに作成） 本人担当部分：質問紙の作成と調査及び統計解析、研究の総括を行った。 共著者：◎小林由里、小笠原知枝、河合まゆみ、中居由美子、播金ヤスミ、

（その他） 1.アセスメント能力向上に向けての継続的関わりによる研修者の変化	―	平成 23 年 2 月	日本医療マネージメント学会奈良支部会	卒後 2 年目看護師 19 名を対象とし、アセスメント能力の向上に向けて継続的に関わったことにより、変化した研修者の意識と行動を明確にした。アセスメントの集合研修を実施し、1 か月後、3 か月後にアセスメントに関する症例カンファレンスを OJT で実施。6 か月後にアンケート調査した。調査表は鎌田ら1)の「看護過程の構造」を参考に、「Ⅰ.問題意識」「Ⅱ.情報収集」「Ⅲ.アセスメント」Ⅳ.自分の分析の確認」「Ⅴ.根拠にもとづく看護判断」の 5 項目について研修後の意識と行動の変化を問う 14 の小項目で構成し 4 段階で評価する独自の調査票を作成した。結果、患者の病態や実施されている治療に対して疑問を感じ、情報の解釈や分析、判断について自分で考え、先輩看護師に指導を受け理解していた。アセスメント研修は、事前課題の内容をグループで共有しあい、また、模擬患者が次々に提示する訴えやデータについてアセスメントできていた。6 か月間、意図的に継続的に関わったことにより卒後2年目看護師は、①問題意識を持ったアセスメントを意識するようになった②客観的な情報収集の必要性を感じ、五感を使って観察するようになった③自己のアセスメントや判断の不十分さを自覚し、信頼性を高めるために先輩に確認・相談するようになった。今後こうした確認の積み重ねにより、情報収集能力やアセスメント能力の向上が期待できると考える。
3. 長期療養型病院における中堅以上の看護師に必要な教育内容の検討	―	平成 23 年 6 月	日本医療マネージメント学会	長期療養型A病院における中堅以上の看護師の看護技術修得状況調査から、今後の教育内容を明らかにすることを目的とした。対象はＡ病院看護師126名（看護師長を除く）とし、国立病院機構看護職員能力開発プログラム「看護実践における技術的側面」の大項目8項目、小項目76項目について5段階評価の自記式質問紙により調査した。看護必要度、超重症児（者）・準超重症児（者）評価結果と対比し、教育内容を抽出した。結果、看護必要度評価では、「呼吸ケア」が必要な患者が全体の43%を占めている。技術修得状況調査結果では「根拠に基づき一人で実施」の修得度が低かったのは「救命救急処置技術」「創傷管理技術」であり、具体的には「人工呼吸器装着中患者の観察と管理」「ドレナージの管理」など「呼吸管理技術」に関するものが低く、中堅以上の看護師に必要な教育内容は「呼吸管理技術」「救命救急処置技術」である。

4.A Study of Young Women's Images of the Gynecological Examination	―	平成 25 年 10 月	International Nursing Conference & World Academy of Nursing Science	若い女性が婦人科診察台に対して、どのようなイメージをしているのか判明することを目的とした。婦人科診察台のイメージの 15 項目のスケールを作成した。80人の女子大学生に婦人科診察台で診察を受けるポーズをとってもらった。結果、診察ポーズ前の婦人科診察台のイメージは、「緊張する」67.0%、「恥ずかしい」58. 0%、「親しみにくい」50%「こわい」43.3%、「嫌い」32.7%であった。診察ポーズ後の婦人科診察台のイメージは,「高い」61.7%、「嫌い」45.3%、「緊張」42.7%,「こわい」28.0%,「恥ずかしい」27.7%に変化した。 診察ポーズ後 50 名の学生が婦人科診察台のイメージはマイナスイメージからプラスイメージに変化した。このことから若い女性は診察前は婦人科診察台に対してマイナスイメージをもっているが体験後プラスイメージに変化した。子宮がん検診率を上げるために、ヘルスケア・プロバイダーは、若い女性の婦人科診察台の否定的なイメージを減少させることが必要である。 本人担当部分:データの分析、結果の考察を行った。 共同発表者:Yumiko Nakai, Jong-Seong Moon, Yasumi Harikane, Yuri Kobayashi, Mayumi Kawai, Midori Takagi, Akiko Ito
5.新人看護師のクリティカルシンキング能力と情報活用能力の関連性とその特徴	―	平成 26 年 8 月	日本看護学教育学会第 24 回学術集会	看護師 1,075 名を対象に自記式質問紙法による調査を行った。質問紙は高比良ら(1999)による情報活用の実践力尺度、常盤ら(2010)による批判的思考態度尺度を使用。分析対象者は新人看護師 158 名、看護師 583 名。新人看護師と看護師のクリティカルシンキング能力および情報活用能力の平均値の比較では、「協同的態度」と「探究心」が新人看護師が高く、「懐疑的態度」と「論理的思考への自信」は低かった。情報活用能力では〈表現力〉のみが有意に高かった。3) 新人看護師および看護師の「クリティカルシンキング能力」と〈情報活用能力〉の関連性は、双方とも有意な正の相関が認められた。本研究から、新人看護師の両能力は関連していることが示唆された。クリティカルシンキング能力では「懐疑的態度」や「論理的思考への自信」、情報活用能力では〈判断力〉や〈処理力〉などの能力を高める教育が必要であると考える。 (修士論文の一部を発表) 小林由里, 河合まゆみ, 播金ヤスミ, 中居由美子, 伊藤明子, 小笠原知枝 本人担当部分:質問紙の作成と調査及び統計解析、研究の総括を行った。 共同発表者:小林由里, 河合まゆみ, 播金ヤスミ, 中居由美子, 伊藤明子

5.看護専門学校における高校新卒学生と社会人経験学生の学習意欲に関与する要因	–	平成 27 年 8 月	日本看護学教育学会第 25 回学術集会	専門学校における高校新卒学生と社会人経験学生の学習意欲に関与する要因を明らかにすることを目的とした。看護専門学校 3 年課程(4 校)の 1～3 年生 445 名を対象に、自記式質問紙調査を実施。質問紙は永嶋らの学習意欲尺度、斎藤らの志望動機尺度、菅原らの自意識尺度と学習活動で困った場面・学校生活での人間関係・相談の気兼ねなど 6 項目とした。結果は、社会人が学習意欲全体で有意に高く、学習意欲に関与する要因とした高校卒は「志望動機」のみであったが、社会人は「志望動機」「自意識」「学校生活の相談」が関与していることが示唆された。さらに高校卒は看護職への憧れと自分に適性があると感じているほど演習・実習に期待が大きいことが推察された。 本人担当部分:データの分析、結果の考察を行った。 共同発表者:河合まゆみ, 小笠原知枝,中居由美子, 小林由里, 播金ヤスミ

教　育　研　究　業　績　書

令和2年6月30日

氏名　　高田勝子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
看護学・医学	母子メンタルヘルス、脳神経メカニズ、グローバルヘルス

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
・母性看護学 1) 母性看護学Ⅰ概論 母性看護学Ⅱ各論 母性看護学Ⅲ（看護技術） 母性看護学Ⅳ（看護過程）	2014年4月～ 現在	グループワークや討論を取り入れ、学生同士の意見交換が効果的となるような配慮を実施した。母性看護学概論では、生きることの意味を考え、命と向き合っていく専門職であることを考える機会を作る工夫をおこなっている。授業の最後には振り返りを行い、各自の目標達成、課題を明確にしていく取り組みをしている。
2) 母性看護学演習	2014年4月～ 現在	講義で学んだ内容を技術演習を通して、行動実践できるようにした。さらに実習へとつなげていけるような工夫をしている。自主的に自己学習できるような教材を作成している。
・助産学 1) 助産診断技術学	2015年4月～ 現在	少人数グループワークを授業の中に取り組み、他者と学習することで1つの実践を生み出せるプロセスを取り入れている。また、知識を活用・応用できるように具体的な事例を取り上げ、分析し、実践できるような設定の工夫をしている。
2) 助産診断技術学演習	2015年4月～ 現在	シナリオを作成し、提示し、学生はそのなかから課題を見つけ、実践することをおこなっている。また、学生が調べたことをプレゼンテーションし、自らの学習成果を他の学生と共有し、新たな学習課題を見つけ出すという展開を取り入れている。
2　作成した教科書，教材		
1)分娩介助技術手順法	2015年2月	1)分娩直接介助と分娩間接介助の手順本を作成。
2)母性看護学実習指導要綱作成	2017年4月	2) 効果的な実習が出来るように、従来の指導要綱の全体見直しと記録の変更を実施。
3) 新生児沐浴と新生児フジィカルアセスメントのチェックリスト作成	2018年5月	3) 演習、自己学習で活用でき、実践できるレベルになるように手順書を作成した。

3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
アドバンス助産師 CLoCMiPレベルⅢ認証	2016年12月	
5　その他		

多言語プレゼンテーション国際コンテスト出場　2017年・2020年　入賞
国際シンポジウムのシンポジストとして招聘　2017年10月　早稲田大学大学院

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許		
看護師免許	1998年	
介護支援専門員	2003年	
助産師免許	2010年	
4　その他		
ベビーマッサージインストラクター資格	2007年	
ヘッドスパ・エステインストラクター資格	2008年	
リフレクソロジーインストラクター資格	2008年	
新生児蘇生法Jインストラクター資格	2015年	

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
(著書)				
運動は脳を介して食意欲・行動にどう影響を与えるか	共著	2016年	日本未病システム学会雑誌 Vol.22 No3	担当部分：「運動が食欲に与える影響 食・動・脳関連」 共著者：高田勝子、吉川貴仁
未来のノーベル賞はここにある！イチオシ研究発掘メディア	共著	2018年	Academist Journal	担当部分：「食べる意欲や我慢は無意識に働く脳活動と関係するか」 共著者：高田勝子、吉川貴仁
(学術論文)				
助産師を志す看護専攻３年生の進学意識と教員の関わり	単著	2015年	白鳳短期大学研究紀要 第10号　P49-58	助産師を志す学生の進学動機からの進学意識の詳細とモチベーションの高さ、それに関わる教員の関わりについての質的研究。
死産ケア教育のとりくみ	共著	2016年	白鳳短期大学研究紀要第11号 P169-178	死産ケア教育は学生にとって誕生と死の両方の命をケアしていくことの大切さに気付き、看護対象へのより細やかな配慮と判断、柔軟な対応が求められることを新たに認識した 共著者：高田勝子、吉川貴仁
The brain science of exercise-eating linkage for improvements of modern human health.	共著	2017年	Journal of Physical Fitness and Sports Medicine. 2017;6(5):295-300.	単回運動や継続的運動習慣が、食意欲・食行動を制御する脳神経の仕組みにどのように働きかけるのかを解説した。 共著者：吉川貴仁、上田真也、 石井聡、高田勝子
Neural activity induced by visual food stimuli presented out of awareness:a preliminary magnetoencephalography study	共著	2018年	Scientific Reports,Article number:3119	食刺激による神経活動に関連する無意識下の脳活動の役割を、脳磁図を使用して解明した。 共著者：高田勝子、吉川貴仁、 石井聡、松尾貴司、中村千華
Relationship between Stress Response and Stress Tolerance Characteristics for Midwife Students	単著	2019年	奈良学園大学紀要第10集p63-73	唾液コルチゾールとハーディネスとの関係を調べ助産師学生のストレス反応とストレス耐性特性との関係について調査分析し考察した。
Neural effects of hand-grip-activity induced fatigue sensation on appetite:a magnetoencephalography study	共著	2019年	Scientific Reports,Article number:9:11044	急性の運動負荷による疲労感が食欲に与える影響に関して脳活動の役割を、脳磁図を使用して解明した。 共著者：松尾貴司、石井聡、　　高田勝子、中村千華、吉川貴仁
Neural effects of acute stress on appetite:a magnetoencephalography study	共著	2020年	PLoS ONE 15(1):e0228039.	将来の出来事を予期することによって生じる心理的ストレスが食欲に与える影響に関する脳活動の役割を、脳磁図を使用して解明した。 共著者：中村千華、松尾貴司、石井聡高田勝子、吉川貴仁
(その他)				

［注］

1 最近10年間の教育活動、研究活動について作成すること。

2 「教育活動」については、各項目ごとに年月日順に、「学会等および社会活動」については、就任年月日順に記入すること。

3 「研究活動」については、下記の点に留意すること。

① 著書・論文及びその他の順に、発表年月日順に記入すること。

② 著者が複数にわたる場合で、筆頭著者が著書・論文等において明示されている場合には、その氏名に◎印を付すこと。

③ 共著(論文)の場合、「該当頁数」の記入にあたっては、本人の分担箇所を特定できる場合は、その頁数を記載すること。

④ 最近10年間に著書・論文等の発表のなかった者についても、教員名を挙げてその部分を空欄にしておくこと。

⑤ 芸術分野や体育実技等の分野を担当する教員については、著書・論文等以外の競技会、展覧会または演奏会等での発表のうち、特に顕著な業績と認められるものについても記載すること。このほか、専門分野の特性を 考慮し、顕著な業績と認められるものがある場合もこれに含めてもよい。

教　育　研　究　業　績　書

令和　2年　6月　19日

氏名　本庄　美香

研究分野	研究内容のキーワード
生涯発達看護学分野	産後うつ病，産褥精神病，Self-Regulationの発達

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
・小児看護援助論における一次救命処置（ＢＬＳ）演習	2011年4月 ～2013年3月	「小児看護学援助論」の学内演習において、子どもの一次救急処置演習を実施した。子どものＢＬＳは、大人と異なる点がいくつかある為、それら大人のＢＬＳの知識と子どものＢＬＳの知識を演習室で学び、その後、簡易型ＣＰＲトレーニング人形を用いて全員参加型で実施した。実施する際は、AEDトレーナーの指示に合わせ、救急車が到着するまでの平均時間を実際さながらに行った。実際に近い状況で行うことで、生命に関わる仕事への意識を高められた。
・保育士教育における保育所安全教育：保育所での健康障害発生時のシュミレーション教育	2013年9月 ～ 2014年3月	「子どもの保健Ⅱ」を担当し、実際の事例（発熱のある子・下痢のある子・腹痛のある子）を提示しアルゴリズムを用いて、子どもの急変時の対応など具体的な対処方法を教授した。また、同時に今の子ども達の健康問題をグループ毎に発表、デイスカッションを行った。また、子どもの一次救命救急処置はシュミレーション演習を行い、近年増加傾向にある、保育園での子どもの死亡事故へ対応できるよう実践で使える技術・知識を念頭に実施した。
・小児看護援助論における事例演習	2014年4月 ～2015年3月	３年次の専門課程科目である「小児看護援助論」は、健康障害のある子どもと家族への看護を中心に、実践的な演習を交えながら進めている。講師の実際の経験が、学生の未体験なことをイメージし易くなる事から、具体と抽象の繰り返しを行い、実際は、同じ現象の説明であっても聴く側には新しい事に感じさせるような方法を行っている。さらに、事例展開をグループワークで実施し、その後発表を行った。繰り返すことで、知識の定着が可能となり、グループワークにより協調性を養い、発表することでプレゼンテーション能力を身に着けることにより、直接的な看護力だけでなく、人間力全体を養うことに力を入れた。
・病床での遊びの工夫を実践するためのアクティブラーニング	2014年4月 ～2015年3月 2017年5月 ～2020年3月	入院中の子どもにとって遊びは、気晴らしだけでなく、健やかな成長発達を促し、闘病意欲の向上や症状改善の為に重要な役割がある。また、小児看護の実践者にとっては、入院中の子どもに適切な遊びを提供できることは、良質な看護を提供できていることに繋がる。そこで、事例を想定した手作りおもちゃを学生に作成させ、そのおもちゃにに対する意見を他者にもらい、課題を完成するというアクティブラーニングを実施した。小児看護概論で子どもの発達を学び、疾病論で子どもの疾病と治療を学び、小児看護学援助論でそれらを統合するという援助論の目的が達成しやすい演習となった。

・隣地実習及び国家試験に向けての事例演習	2019 年 4 月 ～2020 年 3 月	近年、急性期小児病棟の平均在院日数は約 3.5 日となっており、学生が情報を収集し患者把握を行い看護上の問題点を抽出する時間が短くなってきている。その一方で、国家試験問題は、状況設定問題など実習で看護展開していなくても理解できることを要求される。その差を埋めるため、すべての学生に 5 事例を事例展開を小児看護援助論で実施した。課題量は多くなるが、評価表を各事例毎に課すことにより、評価の質や平等性を確保し、事例演習 5 事例分の評価を科目の評価 25%とすることで、学生の学びの質の向上が得られた。
2　作成した教科書，教材 ・小児事例集（科目：小児看護学援助論）	～2020 年 3 月 2018 年 4 月	事例演習を行う際の事例集を自作した。各事例には、学修目標（事例把握のための道しるべ）、家族背景、入院までの経過、入院時の状況、入院から退院までの経過、検査データ等、多くの情報をまとめ、学生はそれらの情報のどの部分が必要な情報かを判断できるように導いた。さらに、自己の知識がどの時点で習得できていないかを認知できるよう、今後も事例の提示の仕方を工夫していく必要がある。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 ・学生による授業評価	2014 年 ～2016 年 3 月	高等教育研究センター（関西国際大学）における授業評価にて 5 ポイント満点中 4.6～4.8 ポイントを獲得する。さらに、学部内の教員順位は 2 位であった。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		大学病院（小児内科）総合病院（子ども病棟）、精神科女性慢性期病棟、病院母子センター（保健師）の実務経験がある。
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 保健師 看護師		
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記		
・小学生に対するＢＬＳ演習について	2011 年 4 月 ～2013 年 3 月	子どもへの「命の教育」を主目的に、小学生に対するＢＬＳ演習を実施した。演習時は、希望学生に補助を依頼し、実習病院の指導者にも参加して頂いた。演習は、簡易型ＣＰＲモデルを用い、救急車が到着するまでの 8 分間を、子どもに体験してもらった。また、聴診器を用いて自分の心拍の聴診や自分の身を守ることの大切さも伝えながら、BLS 演習を通じて命の大切さを伝える事が出来た。
・「まちの保健室」の出張事業としての地域への健康教育活動	2011 年 4 月 ～2013 年 3 月	大学近隣の高齢者が集まる施設やイベント等に出張し、身体測定・血圧測定などを行い、来訪者からの健康相談を行った。慢性疾患を抱えながら、大学周辺の地域で生活する高齢者とかかわることにより、地域貢献にもなり、大学運営の理解にもつながると考える。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
1　　高齢者と子どもの交流促進に向けての課題と方策に関する研究動向	共著	2011 年 12 月	医学と生物学 Vol115（12）、ｐ892-898	施設における高齢者と子どもの交流促進に向けての課題と方策に関する文献の研究の動向と内容を明らかにすることを目的とした。交流促進に向けて、1．高齢者や子どもの特徴に合わせたプログラムの構築、2．コーディネーター育成の充実が示唆された。担当部分：子どもの発達に関する分析、共同研究につき、本人担当部分抽出不可能。 共著者：林谷啓美、本庄美香
2　高齢者と子どもの日常交流に関する現状とあり方	共著	2012 年 12 月	園田学園女子大学論文集第 46 号、p69-87	高齢者と子どもの日常交流に関する文献を収集・分析し、高齢者と子どもの交流についての現状を明らかにした。結果、高齢者と子どもの日常交流を促進するための課題は、地域においては、交流プロ グラムへの配慮 、高齢者と子どもの交流における継続性 、及びサポート・ネットワークの 充実が必要と考える。施設においては、疾患・障害をもつ高齢者の理解、子どもの理解、高齢者と子どもへの配慮、職員の負担、及び職員の専門性を生かした連携と協働 が必要であると考える。高齢者と子供の日常交流がさ かんに行われるためには、施設間や他職種間の連携が必要不可欠となるため、コミュニケー ション能力や調整能力を兼ね備えたコーディネーター的な役割の職種が必要であることが明らかとなった。 担当部分：考察，2）子ども理解，ｐ895 共著者:林谷啓美、本庄美香
3　産後うつ病の効果的なスクリーニング及び支援方法についての文献的検討	共著	2014 年 10 月	大阪信愛女学院短期大学院紀要　48 号、p13-22	文献の検討を行うことにより，産後うつ病の効果的なスクリーニング方法および支援方法について検討した．産後うつ病は、厚生労働省の発表では，近年減少傾向にあるとされているが①うつ傾向を呈する時期が経過の中で異なる②エジンバラ産後うつ病質問票の使用方法の不統一によるバイアス，等のりゆうから，減少傾向にあるとは言えず、簡易なスクリーニング開発の必要性がある．乳児家庭全戸訪問事業など、看護専門職者の家庭訪問拒否の母親らに対する、母親が気持ちを表出し易い評価方法が必要である。担当部分：全体の構成、Ｐ13～16 までの「はじめに」「考察 6-1, 6-2, 6-3」 共著者：木村聡子、本庄美香

4　混合病棟で小児に関わる看護師のプレパレーションに対する認識と実践の状況	共著	2015年3月	日本看護倫理学会誌 Vol.7(1)、p11-16	混合病棟で小児にかかわる看護師のプレパレーションの認識と実施状況を明らかにすることを目的にとして調査した。結果、プレパレーションの意味、効果、必要性に関する認識が9割あるにも関わらず、実施状況は6割弱に過ぎなかった。プレパレーションを段階別にみると、“処置中のディストラクション（気晴らし）”の実施状況が8割を満たなかった。プレパレーションを実施するために「時間の確保」が必要と回答した看護師が7割以上、実施できない理由であった。共同研究の為、担当部分の抽出不可能。 共著者：宮内環、寺内弘、本庄美香
5　Self-Regulationの発達と子育て支援について	単著	2020年3月	奈良学園大学紀要第12集	「健やか健康21」で重点課題としている取り組んでいる「妊娠期からの児童虐待防止対策」、「育てにくさを感じる親に寄り添う支援」について Self-Regulationの発達と関連付けて概観し、最近の知見を分析、考察を加え、これからの子育て支援のあり方について述べている。子どものSelf-Regulationの発達は、reacive（反応的）な過程とeffortful（努力を要する）な過程の２つの側面をもつ発達課題である。reacive（反応的）な過程は、胎児期から乳児期にかけて獲得し、母親のストレスが大きく影響を及ぼすと考えられている。effortful（努力を要する）な過程は、幼児期に獲得し、親や周囲の大人の肯定的な子育てや首尾一貫性のある行動が、子どものソーシャルスキルとより高いeffortful controlが獲得される。
（その他）				
1　A survey of academic research on programs and challenges in the promotion of interaction between the elderly and childrenin institutional environments	共著	2012年3月	15th East Asian Forum of Nursing Scholars	This study sought to collect and analyze documentary sources concerning interaction between the elderly and children in institutional settings, and shed light on the substance and direction of research on challenges and initiatives for furthering such interaction. 共著者:Hiromihayashitani,Mika honjyo
2　BLS体験によって育まれる「いのち」の実感的理解～小学5年生への「いのちの授業」の実践報告～	共著	2013年9月	第60回小児保健協会学術集会　第72巻講演集　02-088	小学5年生が、蘇生人形を用いて、胸骨圧迫を体験するという「いのちの授業」を実施し、子どもたちが「いのち」をどのように理解しているかを明らかにした。結果、子どもたちは、「いのち」を実際に体験することで実感的に理解していることが明らかとなった。 共著者：本庄美香、藤澤盛樹、宮内環
3　民生委員児童委員がもつ子どもの虐待についての認識	共著	2013年12月	第32回　日本看護科学学会学術集会	民生委員が持つ子どもの虐待についての認識を明らかにして地域支援活動における民生委員児童委員と看護職の連携の在り方を検討した。結果、民生委員は虐待であると判断する際、迷いがある。専門家の存在が重要である事が明らかとなった。 共著者：林谷啓美、本庄美香、森本喜代美

4　睡眠に関する質問と産後うつ自己評価票（ＥＰＤＳ）との関連性の検証 第１報	共著	2014 年 9 月	第 55 回　日本母性衛生学会	産後の睡眠障害に関する質問と EPDS の抑うつ傾向との関連性を検証するする為に、Ａ県下の母乳相談室で協力の得られた母親 57 名を対象に，EPDS および自作の睡眠調査票を用い，無記名自記式調査を実施した．午睡困難と EPDS 高得点との間には関連性が認められた。 共著者：木村聡子、本庄美香
5　混合病棟で小児に関わる看護師のプレパレーションに対する認識と実施状況－第１報	共著	2015 年 6 月	第８回　日本看護倫理学会学術集会	混合病棟で勤務する看護者の認識と段階別実施状況との関連を比較した。 共著者：本庄美香、宮内環、寺内考弘
6　混合病棟で小児に関わる看護師のプレパレーションに対する認識と実施状況－第２報	共著	2015 年 6 月	第８回　日本看護倫理学会学術集会	プレパレーションの段階的実施状況を困難と思う医療行為で比較した。 共著者：本庄美香、宮内環、寺内考弘
7　混合病棟で小児に関わる看護師のプレパレーションに対する認識と実施状況－第３報	共著	2015 年 6 月	第８回　日本看護倫理学会学術集会	混合病棟の看護師の人員配置は、小児患者と成人患者が同じ単位で捉えられる。その為、小児に関わる看護師の認識と実施状況をプレパレーションの階的に検討した。 共著者：宮内環、本庄美香、寺内考弘
8　周産期における母親の午睡についての実態調査 - メンタルヘルスケアへの手がかり	共著	2019 年 10 月	日本看護学会（ヘルスプロモーション）学術集会	妊娠出産・育児は女性役割の変化，睡眠不足，様々な不安など，心理社会的ストレスが負荷され，精神的に不安定な状況に陥りやすい条件が揃っている．中でも，睡眠に着目した先行調査では，特に午睡と周産期の抑うつ傾向の関連が示唆された．しかし，母親の午睡の実態や認識に関する調査は見当たらなかった．本研究は、周産期における母親の午睡の実態・認識を明らかにする為に実施した。結果、周産期の母親に対して，日中の午睡の有無やその理由について確認することは，簡易な母親のメンタルヘルス支援への手がかりとなることが考えられる． 共著者：木村聡子，本庄美香

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名　　高橋寿奈

研　究　分　野	研究内容のキーワード
看護教育学　老年看護学	看護教育　健康高齢者　エイチズム　ブライトケア

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1）講義と演習授業　白鳳短期大学　非常勤講師 「基礎看護概論」 「基礎看護方法論Ⅰ」 「基礎看護方法論Ⅱ」 「基礎看護方法論Ⅳ」 「基礎看護方法論Ⅴ」 ①ＰＰＰを使用したデジタル教材の作成 ②演習時に患者の想定がしやすいように、 ボディイメージ資料作成使用 ③演習時の研究課題資料の作成使用	1～4）平成 26 年 5 月～平成 29 年 3 月	1）白鳳短期大学の非常勤講師として「基礎看護学概論」の授業の一部を担当した。主に看護の変遷として日本の看護や関係法規の歴史変遷、世界の看護の歴史についての授業とテスト作成をした。近代看護の基礎となる事柄や今後の看護の方向性などを写真や経験、ドラマを使って、親しみやすい内容にし、学生が習得しやすいように努めた。（1 年次配当、1 単位、学生 150 名） 「基礎看護方法論Ⅰ」の授業を担当した。活動と休息・感染予防・滅菌物品の無菌操作・食と排泄・移動と移乗・効率的な動きの講義を行い、人間が健康に向かうための看護援助の在り方について指導を行った。それぞれの授業で、実際に実技で学生に体験させることにより、よりイメージしやすいように、感染の仕方のモデルや重心変化の仕方の教具の作成を行い、学生に実施させ、わかりやすく習得できるように努めた。 「基礎看護学方法論Ⅱ、Ⅳ、Ⅴ」（1 年次配当各 1 単位）の演習授業全般について実施し、フィジカアセスメント・看護イグザミネーション技術・点滴・投薬・採血・排泄管理包帯法・ポジショニング・創傷管理・罨法の技術について、指導と実技テスト教官を行った。学生がイメージしやすいように研究課題を与え、その課題に沿って資料と実技を行った。 白鳳短期大学の基礎実習Ⅱでの実習指導教員として担当学生の学内研究発表の指導を行った. 主に、日常生活援助での関わり方による対象高齢者の言動の変化についての気付きについて自信をもって発表できるように指導した。
2）学内研究発表会指導　白鳳短期大学　非常勤講師 3）演習授業（学内）白鳳短期大学　非常勤講師 資料作成 実技・記録指導		2）学内での学生の研究発表会について、発表内容の原稿・抄録等の指導を毎年おこなった。 実習中の指導を下に、学生が振り返りとともに今後の自己の看護へのつながりが持てるように配慮し指導を行った。 3）白鳳短期大学で老年看護学の学内授業、演習授業のサポートを行っている。老年期の看護展開では、学生の個別指導も行い看護展開成果物の採点も行っている。
4）実習指導（非常勤講師） 「基礎看護実習学Ⅰ」「基礎看護学実習Ⅱ」 「成人看護学 1」「成人看護学Ⅱ」 「統合看護学」 「精神看護学」 「老年看護学」		4）白鳳短期大学非常勤講師としての実習指導を行った。 統合看護学実習では、要項説明と実習オリエンテーション、実習調整を行った。[基礎看護学」では、看護の仕事の実際や病院施設の概要について疑問点などを起こさないように指導した。また学生が達成感が持てるようにそれぞれの学生が苦手とするところの克服できるように配慮しながら行った。根拠をもって看護し、患者に寄り添い、生活者として視点も忘れず、看護の先にあるものについても意識して指導した。 「成人看護学」では急性期・慢性期での成人の療養上における問題について看護性について指導した。学生が、急性期の看護展開のスピードについていけるよう

		に、事前課題を確認し不足するところの指導を行った。周手術期の指導では、疾患の理解・術後侵襲・生活や社会人としての患者の役割・精神的な不安なども指導した。 「統合看護学実習」では、要項説明と事前の実習調整も行った。タイムスケジュールを学生が出来るように、学生同士でのカンファレンスを多く持ち、チームで看護を行うことを重視いた指導をした。病院の組織の在り方や他職種連携の重要性や実際についてより多くの経験が出来るように調整配慮した。
5）講義と演習授業　　奈良学園大学　専任教員 「老年看護学援助論」 「卒業研究Ⅱ」 「基礎演習Ⅱ」 「演習実技指導」 ①ＰＰＰを使用したデジタル教材作成 ②高齢者の介助時の注意点資料作成 ③演習時の研究課題作成と添削 ④各授業開始時に前回授業の課題総括と説明・資料作成	5～6） 平成30年4月～	5）「老年看護学援助論」の基本的な高齢者への援助、活動・休息・食事・排泄などの技術全般についての講義と演習を担当した。演習時には作成ボディイメージと看護をつなぐ資料を作成し、与えた研究課題の元授業を行った。その振り返りでは、学生自身でグループワークを行い、検討内容を板書説明することで内容の定着に努めた。臨地実習前には、学生を個別に基本的な技術指導を行った。 高齢者体験・オムツの容量の研究演習・片麻痺体験の演習では、学生に体験させることにより、高齢所イメージがしやすいようにし、看護に必要な内容を考えさせる機会とし、看護の視点の指導定着を図った。 「卒業研究Ⅱ」では、卒業延期性には個別にさらに時間を作り指導を行った。 「基礎演習Ⅱ」では、基本的な大学生活での学習方法や時間・単位制について指導した。グループワークで、基本的なレポートの書き方、グループワークについて指導し、レポートはその都度添削した。また図書の有効利用。インターネットを津科 tt 亜情報リテラシーの方法なども学生に理解の程度に合わせて具体的な指導を行い、学生が大学での学習方法について積極的に行えるように指導した。〃
6）老年看護学実習指導（奈良学園大学）専任教員		6）実習内容について、事前学習内容・実習目的目標及び内容・スケジュール・カンファレンス等について企画した。できる内容となるようにし、国家試験に対しても十分対応できる内容となるよう工夫した。 実習前の施設との調整では、全施設で実習説明内容のため事前に訪問調整し、学生の実習目的・目標・スケジュールなど詳しい説明を行い学びの差ができないように注意した。 実習開始からは、「老年看護学Ⅰ.Ⅱ」（3年次配当4単位）で、学生が老年看護の基本的な考え方に基づいて看護展開の方法の実際を個別に指導し、実技指導と評価指導を行った。また、緊張緩和に努め実習で対象者の個別性に合う実習内容になるように一緒に考えアドバイスし、指導した。すべて担当学生の実習に同行し、精神的配慮として個別の面談を交え学内では学習などの指導も行った。
2　作成した教科書，教材 1）老年看護学実習要項・記録用紙	1～4）平成30年4月～	1）奈良学園大学保健医療学部看護学科の専門科目「老年看護学Ⅰ.Ⅱ」（3年次配当　4単位）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習方法と内容、実習の進め方、実習の心得、健康管理の方法などについてまとめた冊子を作製した。

2）統合看護学実習要項（老年領域）・記録用紙		2）奈良学園大学保健医療学部看護学科の専門科目「統合実習」（4年次配当　1単位）で、学生が実習目的、実習目標に到達するための具体的な学習方法と内容、実習の進め方、実習の心得、健康管理の方法、領域実習で実習できなかった経験技術の実習の仕方についてまとめた冊子を作製した。
3）老年看護援助論授業資料　自己学習プリント		3）老年看護学授業で使用する自己学習や疾患の理解につながる資料は、患者への説明ができるレベルで実施できるように、言葉や内容を順を追って学習できる内容とした。またそれを使って実習で患者理解の際に使用できるものを意識した。
4）実習オリエンテーション資料		4）学生が実習内容を理解しやすいように PPT を使用して、目的目標に加えて、看護学生らしい態度などを事故で判断し行動できるように促した内容のものとした。
5）実習用施設概要の作成		5）実習全施設について、6病院8施設について施設内で学生が戸惑わないように資料として作成、配布し実習中に活用できるようにした。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許　第684127号	1）平成2年5月	1）第684127号
2）大阪府保健師助産師看護師実習指導者講習会修了	2）平成12年8月	2）大阪府保健師助産師看護師実習指導者資格
3）厚生労働省専任教員養成課程修了	3）平成27年3月	3）看護教員としての専任教育の方法について、教授・実習合わせて受講し修了。
4）次世代教育学　学士	4）平成27年3月	4）次世代教育学部3年次編入。初等教育一部単位取得
5）学術修士	5）平成29年3月	5）大阪教育大学　教育学研究科　健康科学専攻修了。
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.2018 年看護師国家試験対策　出題傾向が見える老年看護学	共著		ピラールプレス社 B5 判　109 頁	全 109 ページ　主に急性期看護、社会参加、セクシャリティについて執筆した。また合わせて国家試験問題より老年看護学分野についての問題抽出を行った。執筆は P25～33　高齢者の周手術期についての特徴、社会参加の動向、セクシャリティについての傾向について、を行った。 監修：守本とも子.吉村雅世 共著：吉村雅世.田中和奈◎高橋寿奈
2 3 ：				
（学術論文）				
1.高齢者の健康状態の多様性を理解するための看護教育に関する研究	単著	1.平成29年3月	1.大阪教育大学大学院教育学研究科 修士論文要旨集　第17号 平成 29 年 3 月	1.目的：老年看護学での教授による看護学生へのｴｲｼﾞｽﾞﾑの影響ついて調査した。学生の観察課題においてエイジズムが是正されるか実施調査した。 調査方法：A 短期大学 3 年生 110 人を対象とし、地域で活動している高齢者の観察を行った群と統制群で、実習開始前後にパルモアのクイズを使用しエイジズム調査し、群間比較した。結果：高齢者の特徴について学ぶうちにｴｲｼﾞｽﾞﾑが発生していた。それらを改善するため、戸外での高齢者観察課題を実施は効果的であったと言える。しかし、「大多数の高齢者は社会的に孤立している」，「ほとんどの医療専門家は高齢者を軽視する傾向にある」は理解できなかった。実習時に内容理解できるように改善していく必要があることを考察した。 全ｐ159　掲載Ｐ135
2.受け持ち患者とのコミュニケーションにおける看護学生の自己評価-老年看護学実習でのアンケート調査より-	共著	2.平成29年9月	2.奈良学園大学紀要 第 7 集 2017.9　P121～126	2.　目的：ゆとり世代の看護学生が老年看護学実習で受け持ち患者とのコミュニケーションについての自己評価を行い、実際の高齢者の感じるコミュニケーションとの乖離の状態を調査した。調査方法：A 市在住で地域のスポーツクラブや文化会で活動している 65 歳以上のアクティブな高齢者に対してのアンケート調査を行った。結果：看護学生は努力は 90%以上できたが、高齢者は看護学生のことを 66%以上は不快だと感じているとし、乖離している実態を明らかにした。 主担当として実施調査し論文執筆した。 共著：◎高橋寿奈・瀬山由美子
3.　「老人性皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケア効果の検証 （査読付）	共著	3.　平成 31 年 3 月	3.医療福祉情報行動科学研究会誌　第 6 巻 2019.3　ｐ65～72	3.目的：「老人性皮膚掻痒症」に対して、皮脂量の増加効果のあるシュガー・スクラブを使用したスキンケアによって改善が認められるか検証した。調査方法：老健施設でケア群と統制群で 1 日目と 5 日目でケア前後に皮膚の油分・水分、唾液中の IgA を採取しｔ検定で比較検討した。結果：油分値は初日から全ての計測時に有意に上昇を認めた。水分値は初日

				のケア後に増加したが他は変化見られなかった。これらより皮膚バリア機能の促進により水分保持能力が上昇し、スキンケアとして効果的であることが示唆された。 担当部分：執筆・文献検索・調査・データ収集・分析 執筆：◎高橋寿奈・山口求他７名
4. 「老人性皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケア効果の検証 アビサルジャパン委託研究報告書		4.平成31年4月	4.アビサルジャパン委託研究報告書冊子	4.老人保健施設における高齢者の「老人性皮膚掻痒症」に対して、皮脂量の増加効果のあるシュガー・スクラブを使用したスキンケアによって改善が認められるか検証した。結果皮脂量の増加と皮膚バリア機能の促進により水分保持能力が上昇し、スキンケアとして効果的であることが示唆された。 担当部分：執筆・調査実施・分析 執筆：山口求・◎高橋寿奈他７名
（学会発表） 1. 「アクティブシニアと看護師との言語的コミュニケーションでの不快体験について」	1.単著	1.平成30年6月	1.日本保健医療行動科学会第 34 回学術大会　ポスター発表	1.アクティブシニアがかかりつけ医で看護師とのコミュニケーション時に不快な体験を起こした内容と、その割合をアンケート調査した結果をプレゼンテーションした。
2. 高齢者入居施設の看護職を対象とした疼痛管理研修会の有効性検討	2.共著	2.令和1年11月	2.日本看護科学学会ポスター発表	2.高齢者施設での研修会のアンケート調査についてのポスター発表をした。 田中和奈,高橋晶,◎高橋寿奈他
3.Effects of skin care with Karada Kirei on senile cutaneous pruritus in older adults	3.共著	3. 令和2年1月	3.AFNS 2020 Chiang Mai,Thailand ポスター発表	3.「老人性皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケア効果の検証の内容のポスター発表を行った。 守本とも子,山口求,◎高橋寿奈,他
（その他）				
1.社会貢献		平成 28 年 9 月～現在	スポーツ大会救護 保健衛生担当	地域貢献として大阪市天王寺区のスポーツクラブでの定例会での救護担当を行う。また参加者のメディカルチェックとして事前に血圧測定を行い当日の事故防止と健康啓蒙活動に努めた。
2 3 ：				

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　　田場　真理

研　究　分　野	研究内容のキーワード
臨床看護学(透析看護)	血液透析　終末期　抑うつ　意思決定

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例		
２　作成した教科書，教材		
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
４　実務の経験を有する者についての特記事 1) 認定・日本重症心身障害看護師研修会 看護研究アシスタント講師	H29 年 7 月 ～ H30 年 9 月	近畿地区日本重症心身障害心身障害福祉協会の依頼により認定研修の看護研究アシスタント講師として研究指導を行った
５　その他 1)「基礎看護技術Ⅱ・Ⅲ」教育実績	H25 年 4 月 ～ H27 年 3 月	関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、基礎看護技術Ⅱ（栄養、排泄、活動・休息、創傷、BLS・ALS、エンゼルケア等）についての講義・演習を担当した。講義ではグループワーク、ロールプレイングを取り入れ、学生が主体的に学べる機会を作る一方で、定期的に小テストも行い、学生自ら基礎知識の確認ができるよう工夫した。演習では､DVD の視聴や教員自らデモンストレーションを行いながらも、日常生活援助技術に関しては、学生のこれまでの生活体験を活かしよりよい援助の方法を考え実施できるよう工夫した。
2)「小児看護学援助論」教育実績	H26 年 4 月 ～ H27 年 3 月	関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、小児看護学援助論についての講義（全 15 コマ 30 時間）・演習（全 7 コマ 14 時間）を担当した。講義・演習では、グループワークやロールプレイングをとりいれた。その際、子どもの発達段階の理解とともに、子どもの最善の利益を守る事の重要性を伝えつつ、子どもと家族に必要な看護について学生自ら考えられるよう指導を行った。
3)「基礎・成人・老年・小児看護学実習」教育実績	H25 年 4 月 ～ H27 年 3 月	関西学研医療福祉学院看護専任教員として、基礎・成人・老年・小児実習指導を行った。実習前には事前学習を課し実習での学びの準備を整えた。臨地では指導者と協力しながら、学生がより多くの気付き（学び）ができるよう関わった。

	事項	年月日	概　　要
	4) 「統合看護学実習」教育実績	H25 年 11 月 H26 年 11 月	関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、統合看護学実習指導を行った。実習前には事前学習を課し実習での学びの準備を整えた。統合実習では領域実習では体験できない管理実習や夜勤帯での実習も取り入れより深い学びが得られるようかかわった。
	5) 看護研究指導	H25 年 4 月 ～ H27 年 3 月	関西学研医療福祉学院（看護専任教員）にて、看護研究（ケーススタディ）指導にあたった。実習中の自身の看護をふりかえり
	5) 「小児看護学概論・小児看護学援助論」教育実践	H28 年 4 月 ～ H29 年 3 月	奈良学園大学（助手）にて、講義・演習の補助的指導を行った。
	6) 「小児看護学実習」教育実績	H28 年 9 月 ～ H29 年 3 月	奈良学園大学（助手）にて、小児看護学実習指導を行った。
	7) 「基礎看護技術Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ」教育実績	H29 年 4 月 ～ H30 年 3 月	奈良学園大学（助手）にて、主に看護技術演習の指導を行った。
	8) 「基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ」教育実績	H29 年 9 月 H30 年 3 月	奈良学園大学にて基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ実習指導を行った。
	9) 「成人看護学援助論Ⅱ」教育実績	H30 年 4 月 ～ H31 年 3 月	奈良学園大学にて、成人看護学援助論Ⅱ、全 15 コマのうち、循環器機能障害患者の看護と慢性腎臓病患者の看護の 2 コマを担当した。
	10) 「基礎演習Ⅰラーニングスキルズ」教育実績	H30 年 4 月 ～ H30 年 7 月	奈良学園大学にて､1 年次生配当の基礎演習Ⅰラーニングスキルズ、全 15 コマのうちのうち、11 コマを担当した。（4 回は統合実習のため交代）
	11) 「卒業研究」教育実績	H30 年 6 月 ～ H30 年 10 月	奈良学園大学にて卒業研究Ⅱの研究指導を行った。
	12) 「成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ」教育業績	H30 年 9 月 ～ H31 年 2 月	奈良学園大学にて、成人看護学実習（Ⅰ・Ⅱ）指導を行った。
	13) 「統合看護学実習（成人）」教育実績	H30 年 5 月 ～ H30 年 6 月	奈良学園大学にて、統合看護学実習指導を行った。
	14) 「基礎看護学実習Ⅱ」教育実績	H30 年 5 月 ～ H30 年 6 月	奈良学園大学にて、統合看護学実習指導を行った。
	職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
	事項	年月日	概　　要
	1　資格，免許		
	看護師免許（第 1396705 号）	H19 年 4 月	
	修士（学術）	H29 年 3 月	放送大学文化科学研究科生活健康プログラム 修士論文名：透析患者の抑うつにソーシャルサポートが与える影響と支援の在り方―医師、看護師、ピアサポートに関する考察―

	事項	年月日	概　　要
	2　特許等		
	3　実務の経験を有する者についての特記事 1)　国家試験対策 WG メンバーとしての活動	H27 年 4 月 ～ H29 年 3 月	奈良学園大学保健医療学部国試対策 WG メンバーとして確認試験の問題作成、模試の試験監督などを行った
	2)　FD 委員としての活動	H28 年 4 月 ～ H30 年 3 月 H31 年 4 月 ～ 現在	奈良学園大学保健医療学部 FD 委員として、定期的な研修の企画運営などを行った
	3) 学生生活部会メンバーとしての活動	H30 年 4 月 ～ H31 年 3 月	学生生活部会メンバー（3 年次生担任）として保護者懇談会、卒業式、新入生宿泊研修などに関する活動を行った。
	4) キャリア委員としての活動	H29 年 4 月 ～ H31 年 3 月	キャリア委員として、就職説明会、就職ガイダンス、卒業生に対するウェルカムデーなどの企画運営をおこなった。
	4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　2018 年看護師国家試験対策　要点がわかる出題傾向がみえる小児看護学	共著	H29 年 11 月	ピラールプレス	看護師国家試験科目の「小児看護学」について、過去問を読み解くための要点をまとめた。 共著者：守本とも子（監修）、芝田ゆかり、田場真理、瀬山由美子（編著） 本人担当部分：目標Ⅰ「子どもと家族を取り巻く環境」「子どもの成長・発達」「小児各期における健康増進のための子どもと家族への看護」の部分の執筆を担当した。
2　2018 年看護師国家試験対策　要点がわかる出題傾向がみえる成人看護学（下）	共著	H29 年 11 月	ピラールプレス	看護師国家試験科目の「成人看護学」について、過去問を読み解くための要点をまとめた。 共著者：守本とも子（監修）、松浦純平（編著）、大山末美、梶村郁子、田場真理（著） 本人担当部分：「内部環境調節機能障害のある患者の看護」「排尿機能障害のある患者の看護」の部分の執筆を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1　認知症高齢者を介護する娘介護者の体験ー介護生活の中で体験する困難と、介護生活の支えとなるものー	共著	H28 年 9 月	奈良学園大学紀要 5：67-79, 2016.	認知症高齢者である親の介護経験を有する娘介護者を対象に、介護の中で体験する困難と介護生活の支えとなっているものについて半構成的面接を行った。その結果、娘介護者が体験する困難として《親の現状を受け止める難しさ》など７つのカテゴリーが、介護生活を続ける中で支えになるものとして《変わってゆく親を共有できる存在》など４つのカテゴリーが見いだされた。 共著者：上山智恵子、田場真理、守本とも子 本人担当部分：半構成的面接によるデータ収集および、コーディング、カテゴリー化を行った。
2　外来透析患者の服薬コンプライアンス不良に至る因子の検討（査読付） 〃	単著	H29 年 3 月	日本医療福祉情報行動学研究 4:25-30, 2017.	外来透析患者の服薬コンプライアンス不良に至る因子について、薬物に関する知識や理解度のほか、視力障害や指先の動きなど身体的側面の影響、ストレスなど心理・精神的側面の影響、そして薬物管理に関する家族のサポート状況など社会的側面の影響など軽 11 項目について検討した。その結果、服薬コンプライアンス不良に至る因子としては、患者の服薬に対する意識の低さが最も影響することが明らかとなった。
3　透析患者の抑うつにソーシャルサポートが与える影響と支援の在り方―医師、看護師、ピアサポートに関する考察―（修士論文）	単著	H29 年 3 月	放送大学修士論文	透析患者の抑うつに対する効果的な援助について示唆を得るため、ソーシャルサポートとしての医師・看護師・（患者仲間）ピアの援助について検討した。その結果、透析患者の抑うつを軽減させるために効果がある援助とは、身体症状を改善させるための看護師からの保健情報の提供であることが明らかとなった。
4　看護師のサポートが透析患者の抑うつに与える影響（査読付）	共著	H30 年 8 月	日本腎不全学会誌 20（2），74-84, 2018.	看護師のサポートが透析患者の抑うつに与える影響について明らかにし、透析患者の抑うつに効果的な看護師のサポートについて検討した。結果は、透析患者が抑うつになる最大の原因は身体症状の悪さであり、それを自己管理により軽減させるための看護師の保健情報提供的サポートが、身体症状を改善させることで精神面である抑うつを軽減する効果があることが示唆された。 共著者：田場真理、井出訓 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
5　Support for Decision-making Regarding Continuing or Suspending Terminal-Stage Dialysis. （査読付）	共　著	H31年3月	Japan Information and Behavior Science for Health and Welfare, 6,13-19, 2019.	透析患者の終末期透析の意思決定支援について示唆を得るため終末期透析に対する透析患者の思いを質的量的に分析した。量的データからは、透析患者の多くは自らの死について考えたり、医療者や家族と話合いをしていないことが明らかとなった。また質的データからは、透析患者には生への希望がある一方で家族への遠慮により延命への諦めがあることが明らかとなった。しかしながら、尊厳死への願いは共通しており、最期まで自分がどのように生きたいかを医療者・家族としっかり話合いの場を持てるよう調整することが重要であることが示唆された。 共著者：田場真理、守本とも子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った
6　認知症高齢者と家族の生活支援への検討 ―認知症高齢者の気になる行動の分析より― （査読付）	共著	H31年3月	医療福祉情報行動科学研究 ,6,55-63, 2019.	認知症高齢者家族の支援を検討するため、認知症高齢者の気になる行動を中心に、認知症高齢者と家族の抱える問題をインタビューより明らかにし、KJ法により分類した。その結果、認知症高齢者と家族の抱える問題は「もの忘れ」「怒りっぽい」「排泄の問題」など8つの問題に分類された。これらの問題はいずれも生活問題としてそれなりに重要ではあるが、なかでも「弄弁」は家族が抱える最も困難な事象であることが明らかとなった。また、これらの問題はいずれも認知症という疾患に起因するものであることから、介護者の精神的負担を軽減するためには、認知症という疾患の理解を促すことが重要であることが示唆された。 共著者：守本とも子、田場真理、川口ちづる、新谷奈苗、永岡裕康
（学会発表） 1　透析室における患者満足度調査―患者の声から現状の問題点と課題について考える―		H24年2月	奈良県医師会透析部会（奈良県医師会透析部会誌 18:1,92.）	外来透析患者に対し、既存の透析患者用満足度尺度を用いて看護師に対する満足度を測定した。その結果、態度に関する満足度は高かったが、患者自身が疼痛を伴う穿刺技術に関する満足度は低いものであることが明らかとなった。共同発表者：田場真理、米澤麻理、森村美保 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・発表を行った

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　透析患者の抑うつに対する看護の実態	共著	H31 年 3 月	日本看護研究学会第 32 回近畿・北陸地方会学術集会（於　福井）	透析室で勤務する看護師が、日常的に患者の抑うつ症状についてどの程度観察を行っているか、その実態について明らかにした。結果は、経験豊富な看護師でさえも、ほとんど観察できていないことが明らかとなった。 発表者：田場真理、石垣恭子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成・発表を行った
（その他雑誌）				
1　終末期透析についての意識と実態調査報告書	共著	H28 年 3 月	NPO 法人奈良県腎友会発行雑誌ばんび春号. 3-12, 2016	外来透析患者とその家族を対象に、終末期透析についての意識と実態を調査した。その結果、意思決定能力のあるうちに、自身の終末期医療について書面で提示 しておきたいと考える患者が約半数、そうしてもらいたいと考える家族は半数いることがわかった。しかしながら、医療者とそういった話し合いの場は、ほとんどもたれていない現状が明らかとなった。 共著者：田場真理、守本とも子 本人担当部分：研究計画・実施・分析・論文作成、投稿を行った
（講演）				
1　奈良県腎友会女性部会での講演		H28 年 7 月		腎臓病患者会である NPO 法人奈良県腎友会より依頼があり、終末期の維持透析と事前指示書に関する講演を行った。（於 桃谷楼）
2　奈良県腎友会北和地域健腎会での講演		H30 年 2 月		NPO法人奈良県腎友会(北和地域腎友会)より依頼があり、「豊かな人生の総仕上げのために－自らの人生の先に思いを馳せて語り合おう－」のテーマで新年のつどいの講演を行った。（於 生駒市南コミュニティセンターせせらぎ）
3　奈良県腎友会北和地域健腎会での講演		H31 年 2 月		NPO法人奈良県腎友会(北和地域腎友会)より依頼があり、「寝たきりにならないための日常生活で気をつけること」のテーマで新年のつどいの講演を行った。（於 生駒市福祉センター）
（学会等への貢献）				
1　日本サーモロジー学会学術集会第 33 回大会		H28 年 6 月		奈良市（奈良学園大学）で開催された第 33 回日本サーモロジー学会学術集会の実行委員を担った。
2　奈良県腎不全看護研究会世話人		H30 年 4 月 ～ 現在		日本腎不全看護学会の下部組織である奈良県看護研究会の世話人として、研究会の管理運営（年 2 回の研究会）を行っている。

別記様式第４号（その２）

教　育　研　究　業　績　書

令和2年3月31日

氏名　西出　順子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
看護学、心理学	自己心理学、共感、 患者ー看護師関係、相互作用

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
1）通信制教育でのレポート添削における工夫	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神援助論」（専門分野Ⅱ、必修2単位）「精神看護学演習」（専門分野Ⅱ、必修１単位）において、通信制システムを通して、複数の課題項目に従ったレポートが送られてくる。学生の理解力に応じたコメントの工夫として、理論の簡略的な解説やレポートの書き方や考え方の筋道、具体例等、学生のレポートにワードの校閲機能を用い、学生の記述の文脈の中でコメントを返すように心がけた。学生からの感想として、「躓いているところ等のポイントでコメントをもらい、わかりやすかった」等の評価を得た。
2）課題・レポートの活用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野、１年次配当、半期、必修１単位）「精神看護特性論」（専門分野、２年次配当、半期、必修１単位）「精神援助論」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）において、次回の講義内容の予習として、他の科目で習得した内容が講義内容と関連する場合、レポートにまとめたうえで受講する形をとっている。例えば、講義内容が「向精神病薬の副作用に対する援助」であれば、解剖学・生理学等で既習した錐体外路や副交感神経の作用について、有害反応の根拠となる基本をレポートにまとめ、授業に挑むようにしている。「精神看護学概論」や「精神看護特性論」は、「精神援助論」につながる基本をおさえているので、既習した内容が「精神援助論」の授業内容に関連する場合、既習の知識をレポートとしてまとめた上での受講としている。定期試験において、レポートと関連させた内容のところは正答率がやや高い結果となっている。学生の意欲の差はあるが、既習得の授業内容とリンクさせ学生にまとめさせることによって、授業に向かう動機付け及び順序立てた理解につながると考えられる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学 保健科学部 看護学科において、1年次配当「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、予習としてポイント個所をまとめ授業前に発表する形をとっている。3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、授業後にポイントをノートにまとめ、授業最終日に提出するようにしている。これらにより、単位習得試験以外において、最低限、授業内容についてまとめ考える機会を設けることになっている。

	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所　CNSコースの精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ（専門科目、半期、各2単位）において、授業内容に応じたテーマで日頃の看護実践場面をまとめたものを持参してもらい、授業素材とし、実践に応じた助言を行っている。
3）演習・実習の効果的な活用	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程　専任講師の講師「精神看護学実習」（専門分野Ⅱ、必修１単位）において、帰納的学習法をとっている。2日間の見学実習の後、3日間のスクーリング授業を行う。見学した内容をスクーリングで援助の根拠づけを行い、さらに内容を深化させていく帰納的学習法を実施している。スクーリングでは講義やグループワーク、個別指導等の方法をとる。グループワークでは見学したことについて、対象理解や援助方法、治療的環境という観点で話し合い理解を深めていく。また、学んだことを統括するために、看護過程をイメージできる事例（発症から入院～退院後の経過を追った事例）を選択し、精神状態のアセスメントをしながら患者の内的体験のイメージを膨らませ、精神看護の基本的な姿勢を患者の自我を支えるという視点でおさえる。また、2日間の病院実習ではなかなか機会が得られない退院支援については、DVDや新聞の切抜きなどを活用し、そのつど学生に問いかけながら理解を求める。授業終了後のアンケートでは、レポート学習から見学したことまで、すべてがつながる内容だったと評価を得ている。
	平成21年4月～平成27年3月	兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科　非常勤講師「ヘルスカウンセリング」（2年生　45人クラス）において、行動の変容をはかるということとカウンセリングの関係性についての概説。心理学の視点から人の心について理解したうで、傾聴の基本姿勢、関係性から生じる厄介な問題（転移・逆転移）、医療現場でのコミュニケーションの流れについて説明する。授業開始前に臨地実習で実際の患者とのコミュニケーション場面のプロセスレコードを課題とし提出、その中からいくつかの場面を抜粋し、患者の話す言葉の意味や対応を考える。グループワークで事例検討を行い、対象理解とコミュニケーション方法について考え、ロールプレイを行う。授業後の感想で、学生の実際の実習場面でのプロセスレコードを教材として用いるため、学生の関心が高まったという内容が多く聞かれた。
	平成23年4月～平成27年3月	神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科の専門科目 「こころと歯科衛生ケアプロセス」（2年生　約90名それぞれABクラスに分けて行った）において、演習形式で行った。人を理解するための理論と、様々な対象者と関係を築くための基本的な知識を学習し、医療現場に適したコミュニケーションを実践できる能力を身につける。対象者の心を様々な角度から理解する意味について解説。演習として、話をきく基本姿勢について学生同士、意識をしてロールプレイをする。好ましい態度と好ましくない態度。歯科衛生士と患者の関係性の中で生じる厄介な問題について事例を用いて解説。人を理解するための心理学の理論や障害のある患者の概説。演習で歯周疾患患者（成人）と高齢者の患者の2事例で、対象理解とコミュニケーション方法についてグループワークをし、考える場を設けた。

	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神援助論」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）において、IBL(inquiry-based learning)方式のアクティブラーニングとロールプレイングを導入している。IBLは、①目的に沿った事例を作成 （統合失調症、うつ病性障害等）②事例から数行の情報が入ったパートを３から４作成。パートごとに＜事実＞＜仮説＞＜必要な情報＞＜調べる項目＞に分けて進行していく。＜調べる項目＞では学生が次回の授業までに分担して調べる。③②に続くグループワークでは、①で作成した事例を学生に提示し、病院実習で用いる記録用紙に情報を記入、治療薬について調べ、精神のアセスメント、セルフケア項目順に沿ってのアセスメント、全体図、看護計画を作成していく。④③で作成した看護計画をロールプレイングで実施する。また、ロールプレイングでは他に「かかわりを拒絶する患者」や「幻覚のある患者」等、病院実習でよく遭遇する場面を設定し行っている。IBL方式の少しずつの情報提供は、病院実習での情報のとり方を想定し、少しずつイメージを膨らませ、患者に問いかけられるようにと言う意図も含み行っている。学生からは、この方式に馴染めない者もいるが、情報から、考えを進めていく筋道がわかるとの評価ももらっている。ロールプレイングでは、患者像のイメージを掴むのが難しく、双方向のコミュニケーション効果までは望めないが、「このような場面に遭遇した時はどうすればいいのか」と意識することにはなっていると思われる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において3年次配当、「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）ペーパーペイシェントを用い、情報の収集の仕方、収集した情報の記録の仕方、アセスメント方法と看護援助の導き方について、順次一緒に記録用紙に書き込みながら解説し、そのうえで、別事例（ペーパーペイシェント）で情報の収集からアセスメント、援助の方向性までグループで検討しながら展開をはかる。自分で思考したうえでグループで検討しあうことは、思考過程を広げ深めていくことができると考える。
４）視聴覚教育技術その他教材の利用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野、１年次配当、半期、必修１単位）「精神看護特性論」（専門分野、２年次配当、半期、必修１単位）「精神援助論」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）において、精神障がい者の生きづらさや苦悩について、理解をはかるためにドキュメンタリーのDVDを活用している。「精神看護学概論」では、映画「精神」から統合失調症の女性のヒストリーを語る場面を視聴、後に解説をすることで、成育歴や生活環境が患者の精神状態や心理にいかに影響を及ぼすのかについて理解を図る。「精神看護特性論」では、自閉症の患者のDVDを用い、障害の特性や苦悩の理解を図る。「精神看護特性論」と「精神援助論」では、COMHBO地域精神保健福祉機構の作成するDVDを用い、SSTや訪問看護、心理教育など地域で暮らす障がい者の様々な治療やサポートについて患者の心理の描写とともに理解を図る。後の感想・評価からは、いずれも精神障がい者に対して、共感的にイメージ化が図れている一助となっていることがわかる。

	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）で、抗精神病薬の有害反応や、閉鎖病棟のイメージ化を図るためにドキュメンタリーの映像を活用している。また、妄想や幻覚などの病的体験のイメージを広げ共感的理解の促進を図ることを目的に、当事者グループが作成した妄想幻聴かるたを活用している。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所　精神看護学特論Ⅳ・精神看護学演習Ⅱ（専門科目、1年次配当、後期、各2単位）でSSTの実践について、流れやポイントを理解するためにDVDを活用している。
５）双方向授業の実践	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程　専任講師の講師「精神看護学実習」（専門分野Ⅱ、必修１単位）では、2日間の見学実習の後、3日間のスクーリング授業を実施する。スクーリングでは講義やグループワーク、個別指導等の方法をとる。グループワークでは見学したことについて、対象理解や援助方法、治療的環境という観点で話し合い、話し合ったことを発表する形ですすめている。グループワークに適度に入り、質問や助言を行うことや、その後の発表では各グループの発表直後に質問や助言をしている。その後のレポートから、その場その時のやりとりは、学生に理解の深まりや広がりにつながっていることが読み取れる。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、講義形式をとる場合、適宜発問をし、周囲の学生と２分ほど話し合い、意見を発言してもらう。これらを1回の授業で4回～5回設けることで、学生の注意を喚起し、居眠りが減る傾向にある。 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）では、8日間の病院実習と半日の学内実習を行っている。病院での実習と学内実習では、学生に付き添い、対象者の背景から読み取る理解やコミュニケーションを通しての理解、精神状態や心理状態の把握、コミュニケーションの取り方や実施した援助についてなど、その場その時に応じた質問や助言を行っている。実習学生から返ってくる内容や感想、提出物の内容の充実さから効果が認められる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において担当の1年次配当「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、ゼミ形式にて、常時問いかけと発言を繰り返し行っており、学生が自分の考えを発言する機会を多く持つようにしている。3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、講義形式の際は発問を取り入れ、演習の際には、巡回し、質問ができる環境を整えている。

	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所　精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ（専門科目、1年次配当、半期、各2単位）では、理論や知識の説明後、臨床経験を有する学生の現場での体験を話してもらいながら関連付けて授業を進めている。
7）ディスカッションの導入	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程　専任講師の講師「精神看護学実習」では、3日間のスクーリングは主にグループワークのディスカッションですすめられていく。学生の年齢層が20代後半から60歳代まで幅広く、人生経験も豊かなため、ディスカッションも活発である。ただし、個性も豊かで、他者の発言を聞き入れられなかったり、内容に偏りが見られることもあり、適宜介入が必要である。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」「精神援助論」において、隔離・拘束について“人権を守る”ということはどういうことなのかについてディスカッションをしている。ディスカッションをすることで精神障がい者の人権を守る意義について意識化を図る。また、精神状態やセルフケアのアセスメントをする際、まずグループで事例を用いて討議することからはじめ、個人作業に移行させている。グループによっては、討議までにはなかなか至れず、発言する者にグループが引っ張られる傾向も見られるが、学生同士が質問し教え合う場にはなっている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、少人数の中でさらにグループに分け、テーマに応じてディスカッションする時間を複数設けている。その時の約束事として、相手の意見を積極的に聞く・否定しない・話の腰を折らないなどを設け、自分の考えを発言し、他者に受け入れてもらえる体験を強化している。3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、幻聴妄想かるたをグループで行った後、患者の気持ちの推測や、似たような体験、どう関わると安心できるかについて討議し、理解を深める機会としている。また、ペーパーペイシェントの演習を通して、根拠を相手に伝えながら、グループで一つのものをまとめていくことを狙いとしている。自分の意見も主張しつつ、他者の考えも受け入れる態度を学習する機会としている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所　精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ・Ⅳ・精神看護学演習Ⅰ・Ⅱ（専門科目、1年次配当、半期、各2単位）では、社会で自立し仕事をしている者同士のディスカッションを通して、さらに建設的な学びになるように時には、教員はファシリエータの役割を担いながら、ディスカッションを促進する。

８）プレゼンテーションの導入	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」において、他の授業で既に授業を受けた発達課題についてグループでまとめ、発達段階ごとにプレゼンテーションを行う。また評価は、各グループの成員同士が互いのグループワークの参加度について５段階で評価し、平常点として加算することにしている。ほとんどの学生が４～５の評価をしており、グループワークの参加に対する意欲が高いと考える。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」において、実習の最終日に各実習病棟ごと（1クール：１０～１８名、１病棟３～６人、実習病棟は２～４病棟）に各病棟の紹介と実習で看護展開をした2事例を取り上げ、援助の流れと学び・感想を模造紙にまとめて発表している。プレゼンテーションを通して、他病棟での実習内容を共有することで学びの巾を広げている。実習最終日でもあり、様々な思いを抱く中、プレゼンテーションに対する内容の質疑・応答、感想などの発言も比較的活発であり、主体的な参加が認められる。
	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「課題別総合実習」（専門分野、４年次配当、半期、必修４単位）において、実習を終えた後、実習病院で全実習病棟の看護部長・師長・指導者・かかわりのあった看護師に向けて、パワーポイントを用い、実習の成果を発表し、評価を受ける。自己の成果について実習病院で発表し評価を得ることは、学生にとって緊張度も高いが、また達成感も大きく、その後の自信につながっていくと考えられる。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、グループで話し合った内容を模造紙やパワーポイントを活用して、プレゼンテーションを行っている。学生は、初めて体験するものも多いが、グループで要点をまとめ、分担しながら行っている。3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、グループワークの成果である看護過程の経過と援助の方向性について、決められたパワーポーンとの枚数内と制限時間内で発表をしている。制限のある中で、メンバーが協力し合い、おのおののマンパワーを生かしつつ成果を発表する場は、学生にとって達成感を得、自信を得る機会となっている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学大学院看護学研究所　精神看護学特論Ⅰ・Ⅱ・Ⅲ（専門科目、半期、各2単位）において、授業内容について、あらかじめ各自で調べプレゼンテーションを行うことで、主体的な授業参加、学習となっている。
８）小テストの活用	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、軸となる理論については、小テストを実施し、理解の定着を図っている。小テストの項目としては自我防衛機制、エリクソンの発達論、精神の症状、薬の有害反応、ペプロウとトラベルビーの関係性の進度等がある。これらの知識を臨地実習において活用していることから、繰り返しの学習効果によるものと考えられる。

	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、精神看護学の重要な内容の授業が続く、内容は多岐にわたり、その都度の予習復習が求められるが、この時期、他科目も同じように進行しているため、学生は学ぶことが多く、能力を超えるものも多い。小テストをこまめにすることで、要所要所でいやおうでも、振り返り学習機会を持つことで、ポイントは抑えられると考える。
2　作成した教科書，教材		
1）各授業、レジュメを作成し配布する。	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤短期大学神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野Ⅱ、必修１単位）「精神看護学実習」のスクーリングにおいて、講義の要点の理解と、復習に活用するために、授業のアウトライン及びポイントを1回ごとに作成し、そのプリントを毎回の授業で配布している。内容は、複数のテキストから一部抜粋しまとめたものや、また対象を理解するための理論については、精神分析関連（フロイト・コフート等）の本の一部をまとめたもの、傾聴や共感の意味などについては、教員の様々な経験を統合し、文章化したものを使用。実習スクーリングでは、社会福祉に関する文献や新聞の切り抜き等を活用し、実際の場面に近い形の内容になるように心がけた。授業後には、ポイントがわかりやすいなどの感想を得ている。

	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」「精神看護特性論」「精神援助論」において、講義の要点の理解と、復習に活用するために、授業のアウトライン及びポイントを1回ごとに作成し、そのプリントを毎回の授業で配布している。「精神看護特性論」「精神援助論」では、精神状態のアセスメントについては他の授業で馴染みがなくイメージしにくいことを受け、DVDで視聴した事例について、学生が考えた後に、教員が精神状態をアセスメントしたプリントを配布し、比較し考えるようにしている。
	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科において1年次配当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年時配当、半期、必修1単位）では、レポートの書き方、要約の仕方のところで、朝日新聞の天声人語を学生が興味を持ちやすいと思われるテーマを8つほど選び教材を作成した。その中からさらに、学生が選び、グループで内容の精読や要約を行っている。3年次配当「精神看護学援助論」（専門科目、3年次配当、半期、必修2単位）においては、毎回講義内容のポイントをまとめ配布している。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）神戸常盤大学学生による授業評価		神戸常盤大学において平成２７年度に実施された学生による授業評価によると、「精神看護学概論」では、授業内容 4.2，授業方法 4.3，学習成果 4.2，　総合評価 4.5 「精神看護特性論」では、授業内容 3.4，授業方法 3.4，学習成果 3.5，　総合評価 3.3 「精神援助論」では、授業内容 3.6，授業方法 3.5，学習成果 3.8，　総合評価 3.7であり、2年・3年次の授業においては満足度が高いとは言えない。
2）奈良学園大学保健医療学部看護学科における学生による授業評価		平成30年度は、授業最終日に評価表が間に合わず行えていない。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）なし		
5　その他 1）　神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程における教育実績	平成19年4月～平成27年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の専任教員（講師）として、以下のような科目を担当した。

	平成19年4月～平成27年3月	「精神看護学概論」（平成19年4月～平成27年3月）　神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野Ⅱ、必修１単位）において、精神の健康の基本的概念と精神看護の目的、精神の機能、パーソナリティの発達と阻害要因、精神障害の概説、援助の方法論、ストレスと対処行動、精神医療と看護の歴史的動向や精神看護の役割と課題についての概要の内容の授業を行った。対象理解のために精神力動的視点で心理を推察することや精神状態をアセスメントしていく方法と、精神援助として傾聴・共感がどうして重要になってくるのか等、ドキュメント映画「精神」のDVDを視聴し、関連付けながら解説することで、精神看護の概要を理解させる効果があった。
	平成19年4月～平成27年3月	「精神援助論」（平成19年4月～平成27年3月）神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神援助論」（専門分野Ⅱ、必修１単位）では、様々な精神障害の学習に加えて、精神障害を有する人の精神機能上の問題やセルフケアに及ぼす影響について理解し、患者の苦悩を理解したうえで、基本的な援助のありかたを理解することを目的とした。テキスト学習でおさえるべきポイントを“学習の要点”として提示、テキスト学習をしたうえでレポート課題に取り組む。レポートの設題は、統合失調症・感情障害（鬱）、施設症の患者の理解（疾患・治療・心理）と看護援助に関する内容を設定した。添削のポイントとして、テキストを丸写しにするのではなく、基本をおさえたうえで、障害の理解や解釈、看護上の問題、障害からひきおこる患者の心理状態等を推察したうえでの援助等、学生自身の考察等を含むことを求めた。添削と再提出を複数回繰り返すことによって、個人に合わせた進度で理解が図れた。
	平成19年4月～平成27年3月	「精神看護学演習」（平成19年4月～平成27年3月）　神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学演習」（専門分野Ⅱ、必修１単位）では、対象を総合的に理解し、効果的な看護実践ができることをねらいとし、レポート添削による指導をおこなった。＜統合失調症急性期＞＜感情障害（鬱）＞＜アルコール依存症＞の事例から設題を提示し、テキストや文献を活用し、対象理解をすすめ、状況に合わせた根拠のある援助を考えさせた。添削と再提出を複数回くりかえし、学生に応じた理解をはかった。
	平成19年4月～平成27年3月	「精神看護学実習」（平成19年4月～平成27年3月）　神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の講師として担当の「精神看護学実習」（専門分野Ⅱ、必修１単位）では、2日間の見学実習の後、3日間のスクーリング授業を行った。見学した内容を、スクーリングで援助の根拠づけを行い理解させていく帰納的学習法を実施した。講義やグループワーク、個別指導等の方法をとった。主にグループワークで見学したことについて、対象理解や援助方法、治療的環境という観点で話し合った。これらを通して、精神の病からひきおこる様々な生きづらさを抱える患者の理解と援助、精神科病棟の特殊性等、精神看護についての理解を深化させた。
２）神戸常盤大学保健科学部看護学科における教育実績		神戸常盤大学保健科学部看護学科の専任教員（講師）として、以下のような科目を担当している。

	平成27年4月～平成30年3月	「精神看護学概論」（平成27年4月～平成30年3月）　神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護学概論」（専門分野、１年次配当、半期、必修１単位）において、精神の機能と精神の健康・不健康に関する基本概念、および様々な成長・発達段階にある人の精神・心理状態を理解するための基礎的な理論の概要、精神看護実践に活用する理論の基礎的知識の内容の授業を行い、精神看護を支える基本的な知識の修得をはかっている。
	平成27年4月～平成30年3月	「精神看護特性論」（平成27年4月～平成30年3月）　神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神看護特性論」（専門分野、２年次配当、半期、必修１単位）においては、ライフサイクルにおける危機と心と精神の問題、精神障害を有する人の精神機能上の問題や苦悩、セルフケアに及ぼす影響、各種療法と看護援助に関する基礎的な知識、精神保健福祉施策の変遷や精神障がい者に向けられる偏見の問題等を理解する内容となっており、グループワークや演習等を行い、医療・福祉・看護における現状の理解と課題を意識化させている。
	平成27年4月～平成30年3月	「精神援助論」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「精神援助論」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）においては、精神ならびに身体の病をもつ人を総合的に理解し、適切な看護援助を組み立てる基礎的能力を培うことを狙いとした内容となっている。講義・グループワーク・IBL(inquiry-based learning)方式のアクティブラーニングとロールプレイング等の演習を通して、代表的な精神の病と生活への影響、精神の病をもつ人に対する看護展開の基礎、精神の病をもつ人と家族への看護援助の基礎、適切な社会資源の活用を理解させている。また、リエゾン精神看護の役割及び機能や精神看護における倫理についての理解も図っている。
	平成27年4月～平成30年3月	「健康支援実習Ⅲ（精神）」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「健康支援実習Ⅲ（精神）」（専門分野、３年次配当、半期、必修２単位）では、一学生につき8日間の精神科病院での実習と半日の学内実習を行っている。精神の病をもつ人を生物学的・心理的・社会的側面から総合的に理解するとともに、良好な治療的関係を構築し、セルフケアニードとストレングス視点に基づく看護実践能力の基礎を培うことを目的とした実習内容になっている。その場その時に応じた指導内容によって、精神看護の統合を図る効果がある。計14週/年の精神科病院（急性期・回復期・慢性期）において学生指導を行う。
	平成27年4月～平成30年3月	「課題別総合実習」（平成27年4月～平成30年3月）　神戸常盤大学の講師として担当の「課題別総合実習」（専門分野、４年次配当、半期、必修４単位）では、自己の課題を明らかにし、課題を達成するために精神科病院での実習を希望する学生が対象となる。学生自身が実習計画を立て実習を行うことで、総合的な実践能力を高め、自己の将来の看護展開能力へとつなげる実習となっている。13日間の病院実習と2日間の学内実習から成り、病院実習最終日に成果を発表することでさらなる学習効果を得ている。

	平成27年4月～平成30年3月	「看護研究」（平成27年4月～平成30年3月） 神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「看護研究」（専門分野、４年次配当、通年、必修２単位）では、研究方法の基礎力と研究的態度を身につけることを目標としている。精神看護学に関連する研究課題を選択した学生を対象に、一緒に研究過程をたどることを通して論文をまとめ上げ、目標を達成している。
	平成27年4月～平成30年3月	「看護活動基礎実習」（平成27年4月～平成30年3月）　神戸常盤大学保健科学部看護学科の講師として担当の「看護活動基礎実習」（専門分野、1年次配当、半期、必修1単位）では、看護専門職の実際の活動場面の見学実習を通して、看護の対象と機能・役割について学ぶ内容となっている。実習形態の学習に不慣れな学生のフォローと、実習場面でのポイントをその場その時におさえながら実習を進めることで成果を得ている。
３）神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科における教育実績	平成23年4月～平成26年9月	神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科の兼担講師として、以下の科目を担当した。
	平成23年4月～平成26年9月	「こころと歯科衛生ケアプロセス」（平成23年4月～平成26年9月） 神戸常盤大学短期大学部口腔保健学科の兼担講師として担当の「こころと歯科衛生ケアプロセス」（専門分野、2年次配当、半期、必修1単位）においては、人を理解するための理論と、様々な対象者と関係を築くための基本的な知識を学習し、医療現場に適したコミュニケーションを実践できる能力を身につける内容となっている。演習形式の授業を通して、心のメカニズムを理解し、歯科衛生ケアプロセスの場面に応じた対応能力を身につけ、それを基礎に対象者、あるいはその支援者への対応ができる基本が習得できた。
４）兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科における教育実績	平成18年4月～平成30年3月	兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として以下の科目を担当している。
	平成18年4月～平成18年9月	「カウンセリングの基礎」 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として担当の「カウンセリング論」（2年次、4時間）においては、歯科衛生士として対象者を理解するための基本的知識として、心を理解するための理論とコミュニケーション技術の基本知識についての内容となっている。ロールプレイなどを用いて対人援助技術の基本を習得した。
	平成19年4月～平成20年3月	「カウンセリング」 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として担当の「カウンセリング」（2年次、14時間）においては、医療現場でのコミュニケーションの流れ、心の理論、相互作用に関する理論、対人援助技術についての内容の授業を行い、ロールプレイや実習であらかじめとってきたプロセスレコードを活用し、対人援助技術の基本と応用を習得した。

	平成21年4月～平成28年3月	「ヘルスカウンセリング」 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として担当の「ヘルスカウンセリング」（2年次、14時間）においては、臨地実習前に行動変容とカウンセリング技術の関係性、心の理論、相互作用に関する理論、医療現場でのコミュニケーション技術についての内容の授業を行い、実習後に学生が実習でとってきたプロセスレコードを素材に、演習を行う。これらのことを通して、人の心の成り立ちと関係性についての理論的な観点をおさえた上で、実習で体験したケースから、関わり方の基本と応用を習得した。
	平成28年4月～平成30年3月	「健康心理学」 兵庫県立総合衛生学院歯科衛生学科の非常勤講師として担当の「健康心理学」（2年次、4時間）においては、オムニバスで演習部分を担当した。臨地実習後に学生が実習中にとってきたプロセスレコードを素材に、対象者の思いに寄り添ったコミュニケーションの理解を図った。
５）奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部看護学科の専任教員（助教）として、以下のような科目を担当している。
	平成30年4月～現在に至る	「基礎演習Ⅰ」（ラーニングスキルズ） 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「基礎演習Ⅰ」（共通教育科目、1年次前期配当、必修1単位）においては、1年生が大学の学習に慣れ、4年間の大学生活を有意義に送るための基礎を習得することを目的としている。講義ノートのとり方、文献資料の検索、学術的な文章の読み方、グループワークの進め方などについてゼミ形式の演習を通じて学習する。慣れたグループの中で、自分の意見を発言し他者に受け入れられる体験を通して、自己発信する基礎的な力を培っている。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学援助論」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護学援助論」（専門科目、3年次前期配当、必修2単位）においては、他教員と分担・協力して授業を展開している。様々な精神疾患や精神障がい者を理解し、精神看護学の基礎的知識と看護を学ぶことを目標としている。例えば、治療的な患者ー看護師関係を成立させる方法、精神障がい者の観察の方法と治療について、精神科医療現場における身体合併症の看護について、精神症状や問題行動とその援助について、精神科リハビリテーション及び地域におけるサポートシステムの現状・課題について習得する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学実習」 奈良学園大学保健医療学部看護学科の講師として担当の「精神看護学実習」（専門科目、3年次後期配当、必修2単位）においては、精神の健康上の問題を有する人とその家族について、身体的・精神的・社会的側面から総合的に理解するとともに、治療的な関係を築き、精神看護における看護実践能力の基礎を培うことを目的に精神科病院にて実習を行う。実習時間中は実習場にて、その場その時に応じて助言を行う。

	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅰ（歴史・法制度）」 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にノーラマイゼーションの概念と実際について担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅱ（精神・身体状態の評価）」 奈良学園大学大学院看護学研究科講師として主に心理機能評価・身体機能評価を担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅲ（精神科治療技法）」　奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主に治療技法（精神療法）について担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学特論Ⅳ（精神看護理論、援助技法）」　奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にSSTについて担当し、ゼミ形式で各々の経験や調べてきたことを交えながら建設的に話し合いをする中で進め、担当以外はメンバーとしてゼミに参加する。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学演習Ⅰ（精神科治療技法）」　奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にカウンセリングの基本技法について担当し、各々の実践による経験による検討や模擬演習をしならすすめる。
	平成30年4月～現在に至る	「精神看護学演習Ⅱ（精神看護理論、援助技術） 奈良学園大学大学院看護学研究科の講師として主にSSTについて担当し、計画立案と模擬演習を行う。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）看護師免許証	昭和60年5月9日	第532000号
2）修士（人間文化学）	平成15年3月	甲子園大学大学院人間文化学研究科人間文化学専攻　修了　人間文化学　修人第9号　論文題目「看護師の共感性に関する認識と特徴」
3）臨床心理士資格認定	平成16年3月20日	第11561号
4）公認心理師登録	平成31年2月5日	第14522号
2　特許等		
1）なし		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1）公立学校共済組合近畿中央病院看護師	昭和60年4月～平成4年3月	循環器・内科一般病棟に勤務。癌を告知された終末期の患者と家族に対し、カウンセリング手法を用い死の受容過程を意識した援助を行う。心疾患・腎疾患・肝硬変・糖尿病に罹患した患者とその家族に対し、ケアリングを行い、病とともに生活していくためにセルフコントロール力を強化するために心身のケアを行った。
	平成4年4月～平成9年3月	外科病棟に勤務。消化器・肺・乳腺等の癌患者・家族に対して病期（その時の心身の状態）に応じ、ケアリング理論を用いて関わった。患者・家族がそれぞれの不安をコントロールし、その人らしく生活が送れるように支援した。また、肝・胆・膵逆行造影検査後に状態が悪化した患者と家族に危機理論を活用し心理状態を把握しながら心身のケアを行った。
	平成7年4月～平成9年3月	外科病棟主任看護師として勤務。病棟の年間目標と月間目標を師長とともに立て、目標に向けての具体案を考え実施した。病棟看護スタッフの教育として学習会の計画と運営、他部門との連携、看護スタッフ間のチームワークの向上など意識して働きかけた。
2）伊丹市立養護学校に非常勤看護師として勤務	平成12年10月～平成16年3月	重症心身障碍児のケアにあたる家族や教員に対し、カウンセリング手法を用いて話を聴き、日々生じる不安や葛藤等の対処について必要に応じコンサルテーションを行った。

3）大阪市児童通所ルーム・パル指導員	平成13年4月～平成15年3月まで	不登校児童（中学生対象）の通う通所施設。不登校児童に対し精神分析的心理療法、箱庭療法などの個人心理療法を行った。関係性の中で抱える思いや感情を表出し、環境や自身に生じていることを認識したうえで、対処方法について一緒に考えた。また、集団療法としてSST（社会技能訓練）、レクリエーション療法、作業療法等を通し、児童が社会や他者との関係の中で生きぬいていくための支援を行った。児童の中には発達障害や境界性人格障害、のちに統合失調症を発症した者も含まれ、関係性の中で個人の状況に合わせつつ強みに焦点を当てた援助を行った。
4）甲子園大学大学院人間文化学研究科に在籍（修士～研究生）	平成13年4月～平成16年3月まで	大学の発達・心理臨床センターにおいて情緒障害児（幼児）を対象に1回1時間の枠組みで、プレイルームにおいて継続的にプレイセラピーを行った。守られた空間で、セラピストとの関係性の中で自由に表現し、相互作用の中で自己観を形成しつつ情動を調節する術や関係性のとり方を成熟させていった。また、生きづらさを抱えた成人を対象に1回1時間の枠組みで心理療法を行った。
5）大北耳鼻咽喉科　非常勤心理士	平成15年6月～平成16年3月まで	心身症（喉がつまる、めまい、耳鳴等）と医師が判断した患者でカウンセリングを希望する対象者に1回/ 1～2週間1時間の枠組みで精神分析的心理療法を行った。関係性の中で、感情の自覚と表出を促し、自己の抱える葛藤や問題についての対処を一緒に考え、振り返りを行った。
6）医療法人朗源会おおくまリハビリテーション病院（常勤3年間、非常勤5年間）	平成16年4月～平成25年3月	脳梗塞・脳出血発症後、ギランバレー症候群等の回復期で後遺症（四肢麻痺や失語等）から抑うつ状態、否認、強い悲嘆反応等の心理的問題を持つ患者と家族に対し、ベッドサイドやデイルームで対話やコラージュを用いた心理療法を行い、障害を受容していく過程に寄り添った。JR福知山線で電車事故に巻き込まれリハビリを要する患者の心的外傷に対して心理療法を行った。他には多系統萎縮症（難病指定）で極度の起立性低血圧や全身の筋力低下が著しく進行し悲嘆にくれる患者に対し、対話で心理療法を行い生きる意味を模索した。外科病棟で医師・看護師から依頼のある癌末期で抑うつ状態の患者に対して心理療法を行った。医療スタッフ（看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・医療ソーシャルワーカー・医師）に対し、心理的問題を持つ患者の精神・心理状態についての情報提供や関わり方のコンサルテーションを行った。職場に馴染めない新人スタッフや職場・家庭内で問題を抱えるスタッフに対しカウンセリングを行った。
1）科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究C（課題番号：24593282） 研究代表者　武ユカリ 研究題目「在宅看護における対応困難事例、暴言、暴力の現状と対策に関する研究」	平成24年度～平成27年度	在宅看護の臨床現場に特化した暴言、暴力に関する調査はまだ少なく、現状も明らかになっていない。本研究では在宅看護における暴言、暴力の発生状況、対応の現状と、それらの発生する背景や要因や対応困難事例について、明らかにした。困難事例、暴言・暴力についての訪問看護師への個別面接調査や訪問看護ステーションに対する郵送質問紙調査、グループ対話による困難事例の困難に関する検討を行った。在宅看護におけるリスクマネジメントや、療養者と家族に対する支援の在り方について検討した。

2）常盤大学テーマ別研究助成金 研究代表者　西出順子 研究題目「在宅で生活する精神障がい者と家族のストレングスに焦点を当てた支援方法の検討 ― 訪問看護師のストレングスへの着目点とケアの成果 ―」	平成28年5月～平成29年2月	訪問看護師が在宅で生活する精神障がい者と家族（以下、対象者とする）に対して行っているストレングス に着目した支援方法とその成果を明らかにした。対象者を訪問する看護師に半構造化面接を行い、得られた結果から意識化されず実施されているストレングスに着目した支援内容をカテゴリ化にて明らかにし、成果について検討した。
3）FD委員会　委員	平成19年4月～平成27年3月 平成28年4月～平成30年4月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程在籍中と神戸常盤大学保健科学部看護学科において、FD委員として活動を行っている。大学教職員の能力開発を目標とし、平成19年度から全教員に向けて年２回の研修を行っている。平成28年度は １．教育改革を進めようとする当大学の教職員の理解を進めるために最近の教育改革の動向を文科省の大学改革官から聞く機会を企画する。 ２．主体的かつ深く志向する学生を育成するための教育技能を学ぶためにディープアクティブラーニングのワークショップを開催する。 ３．学科内のFD活動を計画的に進める ４．公開授業を促進し、教員相互の教育技法を向上させるを目標に進めている。学科内FDでは、全体のディープアクティブラーニングのワークショップの前に、学科内で活発にアクティブラーニングを行っている教員に依頼し、模擬授業を実施、そのあとグループワークを行い、アクティブラーニングの効果的な方法について検討を行った。
4）国家試験対策委員会　委員	平成19年4月～平成26年3月 平成28年4月～平成30年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程在籍中と神戸常盤大学保健科学部看護学科において国家試験対策委員をしている。看護師国家試験対策として、学科教員の講座や業者の模擬試験や講座を組み入れたプログラム作り、模擬試験成績の振るわない学生へのフォロー、学生主体の学習会のサポート等を行っている。平成27年度生の看護師国家試験の合格率は95.1%であった。
5）第三者評価委員会　委員	平成24年4月～平成26年3月	神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制課程の自己点検・評価報告書の作成に携わった。
6）入試委員会　委員	平成26年4月～27年3月	兵庫県、京都府、滋賀県、関東地域等で入試広報を行った。また、受験生の書類審査、合否判定の資料作成等を行った。神戸常盤大学短期大学部看護学科通信制過程において、学習から遠ざかっていた学生が入学後すぐにテキスト学習にとりくめることを目的に入学前教育を行った。内容はテキストの活用の仕方、レポートの書き方、また、模擬のレポート設題を設け、テキストを活用しレポートをまとめていく過程について解説を行った。参加は任意であったが、地方からも参加があり、参加率は70%と学生の意欲の高さがうかがわれた。
7）入学試験の出題　看護学　委員	平成27年4月～平成30年3月	神戸常盤大学　保健科学部　看護学科　編入試験の精神看護学に関する問題を作成した。
8）公立学校共済組合近畿中央病院においてラダーⅢ研修の講師として「カウンセリング」の研修会を行った。	平成20年6月～12月	公立学校共済組合近畿中央病院の看護師教育ラダーⅢ研修において、対象理解のための理論と臨床においての対人援助技術の基本についての講義を行った。次に参加者に対応困難事例を用意してもらい、患者ー看護師関係の視点で事例検討し、スーパーバイズを行った。

９）朗源会大隈病院にて全職員対象の研修会の講師として「クレーム対応」についての研修会を行った。	平成24年1月	朗源会大隈病院にて全職員対象の院内研修会の講師として「クレーム対応」を行った。患者・家族の心理とクレーム対応の基本知識について講義を行い、あらかじめ外来対応で困った事例を準備していただき、患者と職員関係間で生じていることを解説し、望ましい対応について説明を行った。
１０）一般社団法人　日本精神分析的自己心理学協会の運営する精神分析的心理療法家養成のための訓練研究所による通年の研修を受講 「現代自己心理学Ⅰ」「現代自己心理学Ⅱ」 「フロイトの著作」	平成24年4月～26年3月	自己心理学はコフートが生み出した理論であり、自己愛に問題を抱え（自己観の問題を抱え）生活の中での生きづらさを体験する患者への精神分析的アプローチの一つ。「現代自己心理学Ⅰ・Ⅱ」では、自己心理学・間主観性理論・関係性理論の考え方と臨床の中で活用する方法を学んだ。クライエントとセラピストとの治療的な関係性の中で、その場その時に生じている事象を捉え、目指す方向性を定める指針となる理論について学ぶとともに各自の臨床事例を持ち寄り、グループスーパービジョンを受けた。この理論は患者―看護師関係においても、関係性の鍵概念・アセスメントと治療的なアプローチにおいて十分に活用できる理論である。 「フロイトの著作」では、神経症水準（不安障害・恐怖症等）の患者の捉え方、治療的な関りについて古典を理解し、自己心理学と比較しながら差異を理解する内容となっていた。フロイトは一者心理学であり、自己心理学は二者心理学といわれるが、その差異を理解することができた。
１１）イギリス研修旅行（トラウマ・インフォームドケア研修）に参加	平成28年9月18日～9月25日	医療法人寿栄会有馬高原病院主催の研修旅行に参加。イギリスを訪問し、認知症の方が利用する施設・病院の視察を行い、またスウォンジー大学で研修を受けた。認知症を患った方が利用する施設や病院を見学し、トラウマ・インフォームド・ケアの観点から日本との差異を認識し、よりよいケアのありかたについて考える機会を得た。患者―看護師関係は平等であり、患者の意思と尊厳が最大限に守られる理念のもと物理的・人的環境が作られていた。スウォンジー大学では当事者（てんかん）から治療による有害反応から生活障害を引き起こした体験や、治療の弊害を訴え発言する場を確保する活動について話を聴いた。また、研究者からはメンタルヘルスシステムが細分化されすぎ、ケアの評価が患者個人の思いや願いが重視されず、数値のみに頼る弊害を明らかにしたうえで見直すための研究や、患者目線からみたケアの評価の検討等の研究について聞く機会を得た。
１２）第2回　臨床精神看護学研究会　準備事務局員	平成29年1月～5月	平成29年5月20日　有馬高原病院で開催予定。発表会の運営と準備に関する役割を担う。
１３）FD委員会　委員	平成30年4月～平成31年3月	奈良学園大学において『教育力をあげるようなFD活動』をテーマに2回/年の研修会を企画運営に携わった。8月日頃の指導の中での困難さや課題を出し合い次回FDプログラム作成につなげるためのワーク、3月コーチング
１４）人権教育研究推進委員会	平成30年4月～現在に至る	奈良学園大学において、奈良県大学人権教育研究協議会の企画する研修会に参加するとともに、1回/年の研修会を企画運営する。30年度は「ハラスメントを防止するために」の企画運営に携わった。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書）				
１．コミュニケーション力UP！歯科衛生士のためのカウンセリング講座 （No.１ p.80～p.84） （No.２ p.90～p.95） （No.３ p.84～p.89） （No.５ p.84～p.89） （No.６ p.94～p.100）	共著	平成19年1月～6	雑誌 歯科衛生士　クインテッセンス出版 雑誌名 歯科衛生士 Volume31 （No.１ p.80～p.84） （No.２ p.90～p.95） （No.３ p.84～p.89） （No.５ p.84～p.89） （No.６ p.94～p.100）	6回連載のうちの5回執筆。 対象を理解するための精神分析の基本的な知識と対人関係にかかせないカウンセリングの基本技術の紹介をしたうえで、臨床で関係性に問題を抱えているケースについてスーパーバイズし、問題を解決していく過程を解説した。 A4変型　全30頁（図・絵込） 編者：溝部潤子 共著者：溝部潤子、西出順子、三村文子、荻野美砂穂、石村乃々美 本人担当部分：「Chapter1:コミュニケーションを図るうえで大事なもの」（p.80～84）を単著。 ＜１．　はじめに＞では、医療職に心のケアが必要な理由について説明。＜２．なぜカウンセリング手法が必要とされるのでしょう＞では、医療現場においてカウンセリング手法が求められる理由について＜３．医療現場でのコミュニケーション＞＜４．ラポールの形成がよい関係の鍵＞＜５．基本だけど難しい傾聴と共感＞＜６．第一印象はやっぱり大事＞の流れで傾聴共感とを中心としたコミュニケーション方法と関係性の構築についての概説を行った。 本人担当部分：「Chapter2: 理論を足掛かりにして人を理解する」（p.90～95）を単著。 ＜１．　はじめに＞では、対象を主観的感覚のみで捉えるのではなく、理論を活用する必要 性について説明。＜２．意識と無意識とは？～フロイトの局所論～＞＜３．エス・超自我・自我とは？～フロイトの構造論～＞＜４．自我の機能＞＜５．自我の防衛機能について＞＜６．不安はどこから湧いてくるのだろう？～自己心理学の視点から～＞の項目において、対象を理解するための精神分析の基本的な知識についてなるべく平易な言葉で解説した。 本人担当部分：「Chapter3: 共感のポイントを押さえて傾聴しよう」（p.84～89）を単著。 ＜１．　はじめに＞では、対象者の話を聴き自己に生じた感情を意識し、コントロールしながら対応をしていくことの必要性について説明。＜２．私たちも患者さんと同じ心の仕組みを持っている＞＜３．転移と逆転移について＞＜４．共感について＞ ＜５．共感性を分類しよう＞＜６．共感できないのは大切なこと＞＜７．話を聴くときの基本スキルとは＞＜８．おわりに＞の項目において、相互作用によって引きおこる心の現象について

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
				解説したうえで、自己の感情を意識化させながらコントロールする必要性と基本姿勢について解説した。 「Chapte5: カウンセリングを臨床で実践してみよう①」を共著。３人の歯科衛生士に 臨床で迷ったり悩んだりしている事例を挙げてもらい、問題解決を図ってく流れで構成した。今回は自己主張の強い患者さんのペースに巻き込まれて困っているという内容。 本人担当部分：患者と歯科衛生士間の相互作用についてアセスメントを行い解説した。＜４．患者さんと向き合う際の3つのポイント＞として、①ラポールの形成には時間がかかること②じっくり話を聴くことの意味③思う込みをなくす観点から解説。＜５．アドバイスをコミュニケーションという観点からみると＞では、①理解するということ②きくということの意味について実際と理論とを関連付けた解説を行った。＜６．おわりに＞では、ラポールの形成には時間がかかる場合もあり、「きく」には「受容」「傾聴」「共感理解」の意味があること、そして、コミュニケーションは共感的理解が鍵であり、お互いの誤解やズレを少しずつ調整していくことが重要であるとまとめた。（p.86～p.89の部分） 「Chapter6: カウンセリングを臨床で実践してみよう②」を共著。Chapter5と同じ流れで構成。今回は患者さんに受け入れられなくて困っているという内容についてすすめた。 本人担当部分：＜２．患者さんに受け入れられなくて困っています＞患者―歯科衛生士間で生じている現象について、歯科衛生士の言葉が患者さんの自尊心を脅かしているのではないかという観点から解説したうえで、カールロジャーズのカウンセリングの基本姿勢
２．会話でわかる看護師のコミュニケーション技術	共著	平成30年9月	中央法規	第6章 様々な分析からわかる看護師のコミュニケーション技術の中の「共感の視点を分析してわかるコミュニケーション技術」のテーマで自己心理学を用い共感に着目し会話を分析した。（p.98～107）

著書，学術論文等の名称 （学術論文）	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
１．看護師の共感性に関する認識と特徴 （修士論文）	単著	平成15年3月	甲子園大学大学院人間文化学研究科人間文化学専攻	看護師―患者関係で関係性がうまくいかない場面において、看護師の共感タイプによって、認知や行動の差が現れると考えた。平成14年7月～10月に病院で勤務する看護師361名に質問紙調査を行った。アンケートには、①角田の共感経験尺度改訂版②菊池・原田の看護婦の自律性尺度③神村・海老原・佐藤・戸ヶ崎・坂野の3次元モデルに基づく対処方略尺度を使用し、また、かかわるのがしんどいと思われる実例を挙げ、自由記述にて答えてもらった。結果は、経験と共感タイプの間に関連は見られなかった。共感タイプと看護師の自律性尺度では、下位項目の認知・実践・具体的・抽象的判断能力において、共感タイプの共有型と両向型が、不全型・両貧型に比べると高いということがわかり、自立性においては、共有型、両向型、不全型の順に高いという結果が見られた。共感タイプと3次元モデルに基づく対処方略尺度では、下位項目の放棄・諦めにおいて不全型が共有・両向型に比べ、ネガティブな捉え方をすることがわかり、情報収集では、両向・共有型が他に比べ、その傾向が高く、回避的思考においては、不全型が両貧型に比べて高い結果となった。また、肯定的解釈では、両向型が両貧型に比べて高く、計画立案においては、不全型に比べて両向・共有型に、責任転嫁については不全型に、それぞれ高い結果となった。患者とかかわるのがしんどいと思った場面を記述してもらったものに関しては、記述内容から患者に「寄り添う」「寄り添わない」という2つのパターンに分類し、共感タイプとの関連をみた。結果、すべての場面において不全型が他と比べて「寄り添わない」行動をとり、両向型が「寄り添う」傾向を示した。 「A4判　全３１頁」

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
２．入学前授業終了時調査からみる入学前の不安と年代別特性　資料（査読付）	共著	平成25年3月	神戸常盤大学・神戸常盤短期大学部紀要　第6号　p. 57～p. 66	看護学科2年課程（通信制）の入学予定者の特性から年代別の不安について調べ、効果的な教育支援の在り方を検討するため、平成24年度の入学前授業後に参加者124人に対し自記式質問紙調査を実施した。その結果から以下のことが明らかになった。30歳代は学習時間の確保とプライベートな時間の確保に関して不安が大きい傾向がある。40歳代は仕事や家庭の役割が大きいため学習時間の確保に関する不安が大きい傾向がある。50歳代は仕事に対する責任感が増し、学習能力や気力に対する自信の低さ等がうかがえた。以上のことから現在のサポート体制も含め、年齢的特性を考慮した支援内容を検討することの必要性が示唆された。 本人担当部分：入学前授業のプログラムの立案と実施、質問紙の作成と集計、結果分析、論文執筆を行った。 共著者：西出順子、金川治美、武ユカリ、小坂素子
３．２年課程（通信制）看護学科における入学前教育の実施と検討－ 授業終了時調査の自由記述からみた学生の特性－ （査読付）	共著	平成25年3月	日本看護学会論文集看護教育43巻（号） p. 90～p. 93	通信制課程の入学生対象にした入学前授業（プレカレッジ）終了後、質問紙調査を実施した。「気になること」や「授業後の感想」について自由記述欄を設け、内容について分析検討した。8つのカテゴリ【学習課題に関する懸念と不安】【レポート課題への認識変化】【レポート課題に対する苦手・不安】【学習への前向きな心理・姿勢】【成人期にある学生の役割に関わる不安と懸念】【授業の感想】【学習課題に関する理解促進】【学習への後ろ向きな心境】が形成され、学習することに多くの制約がある中で、学習に対する意欲の高さ、大学に対する期待を膨らませている様子、入学後の学習内容に高い関心が向いているなどの入学前の学生の特性が明らかになった。 本人担当部分：入学前授業のプログラムの立案と実施、質問紙の作成、集計と結果分析（文脈からのコード化とネーミング）、論文構成と内容の検討を行った。　担当部分：研究の構想、デザイン、データの取得、分析、解釈、論文作成に関与 共著者：金川治美、西出順子、武ユカリ、小坂素子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4．精神科病院におけるトラウマインフォームドケアの有用性について　資料（査読なし）	単著	平成28年3月	甲子園大学 発達・臨床心理センター紀要 10.11号合併号 p.30～33	トラウマインフォームドケアは、アメリカの精神科医療におけるコア戦略の中でも核となる概念の一つであり、トラウマインフォームドケアを導入することで入院中の再トラウマ体験を防止し、速やかに回復を図ることが狙いとされ、精神科病院においてこの考え方が浸透している。日本では、2015年に川野がアドバイザーとして所属する特定医療法人寿栄会有馬高原病院で病院をあげてトラウマインフォームドケアの理解を深め、臨床の中で実践を試みている。トラウマインフォームドケアについて、以下二点考察を行った。一つは自己心理学を用い個別的なケアの有用性について、もう一つは組織における管理的な側面からの取り組みの必要性について考察を行った。
5．看護のケアリング機能―共感の意味についての一考察―　研究報告（査読付）	単著	平成29年12月	日本サイコセラピー学会雑誌第18巻第1号 p.87～95	急性骨髄性白血病(AML)で化学療法を受けた50歳男性の看護援助の経過について報告し、看護師の患者に対する共感的理解と看護師のニードに焦点を当てて考察を行う。 生活のほとんどが受け身的にならざるを得ない患者にとって、過酷な入院生活で生じる感情こそが自己の存在を確認するものとなる。しかし、時には患者から発せられる感情は、看護師のニードに反することもある。看護師は共感を通して患者の気持ちに寄り添いながらも、時としてアンビバレントな感情を抱え、関係性の中でその瞬間に浮かび上がってくる言語・非言語の表現を返し、それを受けて患者は反応し看護師に投げかける。この絶え間ないやりとりがケアリングであり、危うくなる患者の自己存在感を支えることとなる。
6．訪問看護師にとっての対応困難事例の困難要素について：テキストマイニングソフトを用いた個別面接調査の分析より　原著（査読付）	共著	平成29年12月	日本在宅医学会雑誌第19巻第1号　p.11～18	困難事例について多職種連携チームでの対応を促進するため,訪問看護師の困難要素を明確にすることを目的とした.訪問看護師12名に対する半構造面接法による個別面接調査,横断研究で,テキストマイニングソフトを用い解析し,困難要素の分類を行った.【体制・マネジメント】【職務】【疾患・障害】【現状認識】【治療・ケアに対する反応】【利用者・家族の不服】【人間関係】【療養環境】の8カテゴリの困難要素を特定し,「利用者・家族の感情」「訪問看護師の職務意識」「地域体制の整備と訪問看護ステーションのチームマネジメント」ついて考察した.　分担部分：構想・デザイン・データの取得・分析・解釈に関与　共著者：武ユカリ、小坂素子、西出順子、安斎三枝子、金川治美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
7.20歳代女性のカウンセリング場面の分析～自己心理学の観点から治療的かかわりについて焦点を当てて（査読付）	単著	平成30年3月	精神看護におけるディスコース分析研究会誌 第5巻　p.25～32	カウンセリングの一場面を取り上げ、会話分析を行った。セラピストは６０代の男性。患者は２０歳代の女性であり、職場でのハラスメントをきっかけにパニックになり、認知行動療法をベースに定期的にカウンセリングを受けていた。定期的に行われている面接場面を患者の同意を得て録音・録画し、そのうちの１セッションの逐語録を作成した。本稿では、セラピストが患者のいつもと違う様子を察知し、手法を切り替えた１セッションを取り上げ、治療的関りについて自己心理学の主要概念である「自己対象ニード」「自己対象体験」「共感」「相互的調制」に焦点を当て分析を行った。セラピストとの安定した自己対象体験は、患者の傷ついた自己対象（男性像）を修復し、成果に通じる可能性を大きく持つと考える。
（その他）				
「実践報告」				
看護学科通信制課程初めてのプレカレッジ（入学前教育）	共著	平成23年10月	神戸常盤大学緑葉第7号　（p.5～p.16）	平成23年3月、初めての入学前教育を実施した。実施方法と内容の報告をおこなった。実施目標を「通信制課程での学習のプロセスがわかる」「レポート作成の学習ポイントがわかる」「CCN操作がスムーズに出来る」とした。授業タイトルは「学び直しの看護学」とし、Part1「学習を進める留意点」Part2「“トイレの神様”を題材に書くレポート」Part3「CCNの使い方」で構成した。入学予定者は准看護学生であった時期から10年以上を経ていることもあり、Part2では学生の馴染みやすい教材として、ヒット曲“トイレの神様”の歌詞をレポートの題材に選び、レポート設題からレポートを作成していく方法について解説を行った。 本人担当部分：入学前授業のプログラムの立案と実施、全体の流れを踏まえて執筆を行った。 共著者：西出順子、武ユカリ、小坂素子、安齋三枝子
患者を支えるための概念枠組みー自己心理学の臨床活用	単著	平成29年11月	第2回 臨床精神看護学研究会誌 2017年 p.2～5	筆者は看護師の経験を持ちながら大学・大学院で心理学を学習する機会を得た。多くの理論を学び、臨床心理士としてリハビリテーション病院に入職し、患者と自己の理解、関係性の把握に活用してきたが、精神分析系の理論を治療的な関りに用いようとすると、病院臨床では使うことが難しい現状に行き当たった。その理由として、治療の枠組みが厳密であること、患者自身が自己を分析し、把握していくためのモチベーションを必要とすること等が考えられた。模索する中で、患者の言動と筆者の心理がちょうどマッチした自己心理学に出会った。本稿では筆者の臨床での経験を通して、これら理論の活用の概要を紹介する。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
「学会発表」				
１．回復期リハビリテーション病院における臨床心理士のひとつの役割～葛藤に寄り添う	単著	平成18年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会　青森2006　抄録　p. 233	回復期リハビリテーション病院においての心理療法の有用性について報告した。対象者は脳血管障害による身体の機能不全から抑うつ状態、否認、強い悲嘆反応等の心理的問題を持つものが多く、ベッドサイドやデイルーム等で主に対話用いた心理療法を行い、障害を受容していく過程に寄り添った。臨床心理士は、専門的な立場で心の状態を把握し関わり続けていくが、その主な手段は、共感をベースに患者の語る物語に耳を傾けることである。患者は自己の過去と現在を語りながら様々な感情を発露し、気持ちの折り合いをつけ、新たな自己とまとめていく。このような関りの過程について紹介し、心理療法のもたらす効果について検討したことを報告した。
２．短期大学看護師2年課程（通信制）への入学動機と入学後の学習継続に影響を与える要因の分析	共著	平成21年9月	日本看護学教育学会第19回学術集会（北海道北見市）抄録 p. 121	通信制課程2009年3月に卒業した学生267名に対し、先行研究をもとに49の質問項目からなる質問紙調査を行った。データは因子分析で解析し、10因子を抽出した。入学の動機に関連する因子は「資格取得」「学位取得」の2因子、入学後の学習継続を支える因子は「成長の実感と自信」「教職員のサポート」「職場の評価」「看護実践力向上の実感」「学友・友人」の5因子、また、学習継続を困難にする因子は「時間的・経済的制約及び独習の苦しさ」「学習内容の難しさ」の2因子が示された。 本人担当部分：質問紙の作成、データ集計、因子分析解析とネーミング等の結果分析、発表内容と発表原稿・抄録内容の検討を行った。 共同発表者：高宮洋子、西出順子、山岡紀子、柳生敏子、小坂素子、中野順子
３．2年課程（通信制）看護学科における入学前教育の実施と検討（1）－授業終了時質問紙調査から－	共著	平成23年9月	第42回 日本看護学会看護総合学術集会（千葉）抄録 p. 121	本課程への入学者は准看護学生であった時期から10年以上を経ており、入学後も准看護師として働き、育児や介護などの役割を担いながら学ぶ背景がある。そのため学習を円滑に進めるには、入学前に通信制課程の学習システムを知り、学習計画や方法、レポート作成等についての理解を促す機会が必要であると考え、入学予定者（希望者）に対して入学前教育を実施た。終了時の調査から、今後の教育内容、方法、学習支援の在り方を検討した。 本人担当部分：入学前授業のプログラムの立案と実施、質問紙の作成、分担データの入力および結果分析、発表とポスターの内容検討を行った。 共同発表者：金川治美、安齋三枝子、西出順子、武ユカリ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
４．2年課程（通信制）看護学科における入学前教育の実施と検討 (2)　－授業終了時調査の自由記述からみた学生の特性－	－	平成24年9月	第43回日本看護学会 看護教育学術集会(岩手県盛岡市) 抄録 p. 24	通信制課程の入学生対象にした入学前授業（プレカレッジ）終了後、質問紙調査を実施し、不安に関する質問9項目と自由記述について分析検討した。8つのカテゴリ【学習課題に関する懸念と不安】【レポート課題への認識変化】【レポート課題に対する苦手・不安】【学習への前向きな心理・姿勢】【成人期にある学生の役割に関わる不安と懸念】【授業の感想】【学習課題に関する理解促進】【学習への後ろ向きな心境】が形成され、学習することに多くの制約がある中で、学習に対する意欲の高さ、大学に対する期待を膨らませている様子、入学後の学習内容に高い関心が向いているなどの入学前の学生の特性が明らかになった。 本人担当部分：入学前授業のプログラムの立案と実施、質問紙の作成、分担のデータ入力および結果分析（文脈からのコード化とネーミングの検討）、発表とスライドの内容検討を行った。 共同発表者：金川治美、西出順子、武ユカリ、小坂素子
５．在宅ケア領域における困難な事例に関する文献学的考察	－	平成25年3月	第17回日本在宅ケア学会（茨城県水戸市）	医中誌Webを用い2012年4月9日に実施した。検索キーワードは＃1（対応困難、困難事例等）と＃2（訪問看護、在宅看護等）で、＃3（退院困難等）を除いた。検索結果54件の28件を対象とし、マトリックス方式で整理した。学術分野は社会福祉14、看護10、社会福祉と看護混合4であった。困難な事例に関する文献数は多いとはいえず、困難事例について現状では社会的認知度が低い。また看護領域での報告が少なく、学術的には困難事例の検討はあまり行われてない現状があった。 本人担当部分：文献内容検討（分担した文献を読み、テーマにあった内容のものを選別）、選別した文献においてデータ表を作成、データ集計、結果分析、発表と発表原稿・抄録の内容検討を行った。 共同発表者：武ユカリ、金川治美、西出順子、小坂素子、安齋三枝子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
６．訪問看護の困難事例についての哲学的グループ対話を用いた検討	－	平成26年7月	第22回日本ホスピス・在宅ケア研究会全国大会（兵庫県神戸市）	2012年2月～2013年8月哲学的対話手法（Neo-Socratic Dialog:以下NSD）を用いて、異なる背景の参加者（訪問看護師、その他の医療介護職、一般人、倫理等専門家、メディア関係者等）による対話から困難事例の「困難」とは何かについて検討し、結果を報告した。第1回討論から「療養者の意思を尊重しながら、医療ニーズに応えるため、訪問看護師の判断をもとに、関係者（医師、療養者、介護者等）との高度な連携が求められること」、第2回討論から「療養者の生活の多様な価値観のなかで、看護職が重視する価値の実現のため専門的援助を行うこと」、第3回討論から「療養者の生活上の問題に直面しても、ときに訪問看護師1人では援助手段を見出し難いこと」が導かれた。 本人担当部分：NSDに参加、結果分析を行った。 共同発表者：會澤久仁子、武ユカリ、金川治美、西出順子、小坂素子、安齋三枝子
７．訪問看護師の対応困難事例における困難要素の検討－全国質問紙郵送調査の結果より－	－	平成28年7月	第18回日本在宅医学学会（東京）	8カテゴリ28分類に整理した個別面接調査の分析結果と文献検討、グループ対話で得らえた結果を含め、岩間の分類を参考に質問項目を作成した。回答数588（回収率29.4%）、うち505（有効回答25.3%）を分析対象とした。65項目について最終的に全40項目、4因子を抽出し、以下の通り命名した。 i「家族・利用者の抑制のバランスが保てていない態度」、ii「訪問看護師の能力レベルと組織の協力体制」、iii「利用者・家族の疾患と状態に起因する生活能力の低下」、iv「家族が円滑にケアすることを阻む状況」全体のクロンバックα係数は0.96であり、各因子のクロンバックα係数は0.89～0.92で内的整合性は高い結果が得られた。 本人担当部分：質問紙の作成（訪問看護師への個別面接調査と語りの内容からカテゴリーの作成とネーミング、文献やグループ対話で得られた結果から質問項目を考えた）、結果分析（因子分析過程においてのデータの絞り込みとネーミング）、発表内容の検討を行った. 共同発表者：武ユカリ、金川治美、小坂素子、西出順子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
８．訪問看護師が感じる困難要素の検討―インタビューによる質的分析と質問紙による量的分析の統合―	－	平成28年8月	第2回 日本混合研究法学会(東京)	訪問看護師は療養者と家族を対象に個別性の高い多様な援助ニーズに対応しなければならず、対応困難事例に遭遇することが多い。文献研究ではこれまで対応困難事例に関する訪問看護領域の研究は少なく、何が困難の要素となっているかについて検討されていなかった。また哲学的対話手法（ＮＳＤ）による調査では、訪問看護の対応困難事例には非常に複雑な困難要素があるが、それらにはいくつかの抽象的な枠組みがあることが示唆された。そこで本研究では対応策の検討につなげるため、訪問看護師の感じる困難要素の構造を明らかにすることとした。研究方法は、質的研究の結果から訪問看護における困難要素を抽出し、その結果得られた知見をもとに、仮説検証のための量的研究につなげ統合した探索的順次的デザインを用いた。混合研究法を用いることで、より実態に沿った調査を行い、困難要素の構造を明らかにした。　　本人担当部分：発表内容に関連する研究への関与と発表内容の構成と内容検討。　　共同発表者：武ユカリ、小坂素子、西出順子、會澤久仁子、金川治美
9．在宅で生活する精神障がい者の支援方法の検討～訪問看護師のストレングスに着目したケアの一考察～	―	平成30年7月	第49回日本看護学会ー在宅看護ー学術集会（佐賀）	【目的】訪問看護師が精神障害を有する療養者に対して、独自の方法で行っているストレングスに着目した支援方法を明らかにする【方法】[研究対象]A県下の訪問看護ステーション6施設、各施設管理者に推薦された看護師10名[研究期間]平成28年9月～平成29年2月[研究デザイン]質的記述的研究[分析方法]質的統合法（KJ法）【結果】元ラベル74枚から①困りごとは強みに通じるゲート②身体をいたわる③好きなことは現実感覚強化の糸口④自信は新たな希望のエネルギー源⑤望みや願いを第1に守るの５要素を抽出した。【結論】訪問看護師は日々の関りの中で自ずとストレングスに着目しながら支援をしている。時に、利用者の願いや望みが過剰に作用し体調を崩すことにもなるが、あきらめずに将来に希望を持ち共存していく手立てを一緒に探ることが、地域での生活を支えていく上で重要であることがわかった。 本人担当部分：研究計画、文献検討、インタビューガイドの作成とインタビュー、結果分析、考察、発表 発表者：西出順子、木村聡子、鵜飼知鶴、畑吉節未

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名 林　文子

研　究　分　野	研究内容のキーワード

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1)清恵会医療専門学院 ・小児看護学実習指導 ・基礎看護学実習指導 ・精神看護学実習指導 ・事例研究指導 ・クラス担任 ・オープンキャンパス担当 ・国家試験対策実施	2011 年 ～ 2012 年	1)　清恵会医療専門学院看護科 3 年生約 50 名に小児看護学実習を担当し指導にあたった。小児病棟および保育所にて 1 クール 3 週間の実習を 9 グループに分け指導した。小児病棟では川崎病、ネフローゼ、気管支喘息、肺炎などに罹患した各発達段階の小児とその家族の看護について指導した。保育所では健康な乳幼児の生活と発達に応じた保育方法を学ぶ学生の指導にあたった。「事例研究」では小児看護学領域の研究に臨む学生の指導を行った。クラス担任として 2 年生約 40 名を受け持ち、学校生活における学生の管理（成績管理、健康管理、必要時面談や指導など）を中心に担任業務を行った。また講義や行事などのスケジュールを組み、HR では、過去の国家試験問題から問題を抜粋し対策時間を設定しクラス会議、レクリエーションや課外活動などを実施し、クラス運営にあたった。講義担当者と終講試験の実施や採点などを行った。担任として基礎実習を中心に計画し、実習病院との打ち合わせ、要項の作成などを行った。学生にオリエンテーションを実施し、基礎看護学の習得に向けて、臨地での進行や指導にあたった。オープンキャンパスでは、入学希望者への学校案内および人形を用いてのバイタルサインズ測定のデモンストレーション実施などを担当し、進行に務めた。
2)宝塚大学看護学部 ・小児看護学Ⅳ（演習） ・小児看護学実習　　実習指導 ・基礎看護学実習Ⅰ.Ⅱ　実習指導 ・総合実習　　実習指導 ・看護の探求　　研究指導（補助） ・成人看護学実習（慢性期）実習指導 ・チューター　担当 ・国家試験対策 ・オープンキャンパス担当	2012 年 ～ 2017 年	2)　宝塚大学看護学部 3 年次生約 100~130 名の小児看護学Ⅳ（演習）を担当し、「バイタルサインズ測定」「離乳期の児の食事」「児の抱き方・着衣」についての技術演習にあたった。小児看護学実習では小児病棟および小児外来にて 1 クール 2 週間の実習を、10～13 グループに分け指導にあたった。小児病棟では、川崎病、ネフローゼ、気管支喘息などに罹患した各発達段階の小児とその家族の看護について指導した。実習最終日には各学生が、「看護上の問題」と「患者の全体像」を発表し、その講評や指導にあたった。総合実習では、小児看護学ゼミ受講学生の小児関連福祉施設や教育機関等での実習の指導にあたった。看護の探求では学生がこれまでの看護の学びから選択し設定したテーマに合わせ、看護研究の指導にあたった。基礎看護学実習Ⅰ.Ⅱの各期の実習にて、1 年次～2 年次生に対し指導にあたった。成人看護学実習では、1 クール 3 週間の実習を毎年 2 グループ担当し、慢性期疾患を持つ患者とその家族への看護について、指導にあたった。2 年次生のチューターを担当し、学生生活中の勉学や就職および健康面の相談など学生生活のサポートにあたった。また必要時　保護者を含めた面談を行うなど問題を抱えた学生に対してチューター主任や学生委員会と連携し指導や支援を行った。
3）大阪僑倖高等学校看護科・看護専攻科 ・基礎看護学実習Ⅱ実習指導 ・老年看護学実習	2016 年 ～2017 年	3）大阪僑倖高校の看護科および看護専攻科の学生約 30 名に、基礎看護学実習Ⅱ、老年看護学実習、成人看護学実習の各領域実習を担当し、担当する学生の臨地での指導と学内演習の実技指導にあたった。

・成人看護学実習 4）太成学院大学 ・小児看護学実践実習 5）奈良学園大学保健医療学部看護学科 ・基礎看護技術演習Ⅱ･Ⅲ ・基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ ・卒業研究Ⅱ	2017 年 4 月～ 2018 年 3 月 2018 年 4 月～	4）太成学院大学看護学部の学生に対して小児看護学実践実習の指導にあたった。 5)奈良学園大学保健医療学部看護学科 1 年次生約 90 名に対し基礎看護技術Ⅰ・Ⅱの講義・演習を行い、「活動と運動」「睡眠・休息」「食事と栄養」「総合演習」を担当した。また 2 年次生約 90 名に対しては基礎看護技術Ⅱの「食生活を支える技術」を担当した。
2　作成した教科書，教材 1)宝塚大学看護学部 ・小児看護学実習要項 ・実習オリエンテーション資料 ・講義資料（国家試験対策用問題） ・オープンキャンパス資料		1）宝塚大学看護学部小児看護学実習要項（平成 25 年度以降）の作成にあたり、実習目標の検討やスケジュールの設定および記録類を作成した。また、東大阪市立医療センター小児病棟実習の導入にあたり、臨床との打ち合わせや事前研修を行い、各種資料およびオリエンテーション資料を作成し、学生の指導に用いた。その他、市立池田病院、北野病院においても同様に資料を作成し、臨地での実習の進行および学生指導を行った。小児看護学の講義に使用する資料の一部として国家試験問題の作成を担当した。オープンキャンパスを担当し、「子どものバイタルサインズ測定」を参加者に体験してもらうための資料を作成した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
5　その他 1)宝塚大学看護学部 ・小児看護学実習施設の開拓	2014 年 9 月	1）宝塚大学看護学部小児看護学における臨地実習病院として、市立堺病院・大阪労災病院を実習病院として新たに開拓し、実習を行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 ・看護師資格取得	1995 年 4 月	看護師免許看護師免許取得（第８５７６６５号）
2　特許等		無し
3　実務の経験を有する者についての特記事項		

４　その他 宝塚大学看護学部 委員会活動 ・FD 委員会 ・キャリア委員 奈良学園大学保健医療学部 委員会活動 ・学生部会 ・自己点検・評価委員 地域貢献 ・大阪府小児救急電話相談（＃8000） ・NPO 法人小児救急サポートネットワーク認定員 ・大阪府小児救急電話相談マニュアル　改訂 ・病院における電話対応スキルアップ研修会 ファシリテーターを担当 ・お父さんに役立つ育児セミナー　講演 “子どもの病気やケガの対処―＃8000 での相談内容から”	2013 年 ～ 2016 年 2018 年 ～現在 に至る	日本私立看護系大学協会主催「大学新任教員のための研修会」にて、私立大学の現状と課題、大学教員としての役割について受講した。 キャリア委員会に所属し、卒業生にシャトル研修を開催し「若手看護師のためのキャリアアップ研修」を実施した。 大阪府小児救急電話相談の相談員として子どもに起きる病気やケガの対処方法を中心に若い世代の保護者の育児の悩みについての相談活動を行った。子どもの救急電話相談に携わる相談員の対応マニュアルの改訂について携わった。 「病院における電話対応スキルアップ研修会」にて、患者や家族への医療従事者の対応力向上のための講義をファシリテーターを務めた。 「お父さんに役立つ育児セミナー」にて、子どもに起きる病気や突発的なケガの対象方法、また＃8000 の活用法方法などを紹介した内容の講演を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 無し				

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1,小児救急電話相談（＃8000)における電話相談員の職務満足に関連する因子の探索 （修士論文）	共著	2017 年 3 月	和歌山県立医科大学	子どもの急病時などに家庭での対処を保護者に支援する、小児救急電話相談（＃8000）の相談員 370 名を対象に、相談対応の向上を図るために質問紙調査を行った。まず質問紙作成のため相談員に予備調査を行い、データから電話相談の職務満足概念を質的分析し抽出した。その内容から 54 問の質問項目を作成し、コミュニケーション・スキル尺度および自己肯定感尺度を使用し調査を行った。回収した質問紙よりデータの因子分析を行ったところ、電話相談員の職務満足は【肯定的感情】【労働環境】【自律性】からなる 23 項目の尺度で構成された。また【肯定的感情】には自己効力感やコミュニケーション・スキルおよび相談に必要な電話対応スキルなど電話相談の実践そのものと関連しており、電話相談対応の向上には職務満足が有用であることが明らかとなった。そのため相談員が従事する環境を調整することや、それに向けた支援の重要性が示唆された。 共同研究者：林　文子、内海みよ子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2,卒業して 8 か月目及び 2 年目の看護師に対するキャリアアップ支援の試みーアサーティブネス研修を実施してー	共著	2017 年，3 月	宝塚大学紀要 ARTES No30	A 大学卒業生のキャリアアップ支援として、組織人としての役割を考えることを目的に、卒業して 8 か月目及び 2 年目の卒業生を対象とした合同研修を行った。研修参加者のアンケートより、アサーティブネスという概念から、他者の権利を守りながら自分の権利を守り、自分の意見を伝えることの大切さを学んだ。卒後 8 か月目の参加者は、先輩と話をし、1 年後の姿を予測できた。卒後 2 年目の参加者は、1 年前の自分を振り返り、自分の成長を実感するとともに、職場の後輩への接し方を考えていた。それぞれの立場で重要と感じる点や考える視点は異なるが、お互いの考えを知ることで、職場におけるチームワークへの理解が深まった。研修の意義を実感し、今後も継続する必要があると考えられた。 共同研究者：美王真紀、岩下真由美、岡和美、江口秀子、合田友美、寺田准子、大和志麻、福島美幸、上田裕子、林文子、人見啓江、西絵里　担当部分：データ分析
3,健康な高齢者におけるケリーパッドを用いた安楽な洗髪姿勢時の股関節・膝関節の屈曲角度、及びそれら角度と基本属性の関連	共著	2019	日本健康医学会	ベッド上仰臥位でケリーパッドを用いて実施する洗髪援助は身体的負担の少ない援助方法として挙げら れるが、その援助方法における膝関節の屈曲の程度についてはどの程度屈曲することが対象者にとって安 楽であるのか明らかではない。 そこで、本研究の目的は、基礎的研究として、健康な高齢者において、ケリーパッドを用いた仰臥位での 洗髪援助時に、人が安楽だと感じる股関節及び膝関節の関節屈曲角度を明らかにし、それら角度と対象 者の基本属性との関連について検討することである。 対象者は 51 名の高齢者で、バイタルサイン、基本属性、関節角度に関するデータを収集した。分析では、 関節角度データは分布を確認し、基本属性データとの関係について pearson の積率相関係数を求め、さら に基本属性データの各

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				項目において高値群と低値群に分け対応のない t 検定を行った。 その結果、1）人が安楽だと感じる股関節の平均屈曲角度は 34.7±9.6 度、膝関節の平均屈曲角度は 73.2±20.1 度である、2）人が安楽だと感じる股関節と膝関節の屈曲角度のバランスは、股関節の屈曲角 度に対し膝関節の屈曲角度が平均 2.1±0.3 倍である、3）股関節・膝関節の屈曲角度は、性別や年齢、体 格（身長、体重、BMI、体脂肪率、大腿長、下腿長）を含む基本属性と相関関係を認めない、4）大腿長の 長さからみて高値群と低値群では股関節の屈曲角度に差があり、高値群のほうが低値群より有意に値が小 さい（p＜0.05）、ということが明らかとなった。 以上から、今後実際にケリーパッドを用いた仰臥位での洗髪援助時に股関節や膝関節の屈曲角度を決定する際には、本研究結果を活用されることが望まれる。木村静 1、澤田京子、上山直美、 葉山有香 、林文子、中馬成子 担当部分：データ分析
（その他） 学会発表 1，慢性疾患児との対応経験と担任の対応の分析（査読あり）	共著	2014 年 8 月 30 日	日本育療学会第 18 回学術集会（於新潟県）	慢性疾患児に関わる教育機関関係職種の役割を明確にし，連携を円滑に進めるために質問紙調査と面接調査を行った。慢性疾患児と身近に関わっている担任の対応を分析し，学内体制としての担任への支援の方法を検討したところ、各担任は児に対する配慮や対応策など情報共有の工夫をしていた。そのため、管理職の統率力により連絡調整の方法や連携プログラムが明確なことなどが学内体制の充実につながることが明らかになった。 共同研究者：河合洋子、中塚志麻、大見サキエ、横田雅史、津田聡子、林　文子、江村多加子 担当部分：データ分析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2．健康な女性高齢者における床上仰臥位での洗髪時の膝関節屈曲の有無が対象者の感覚に及ぼす影響の違い	共著	2018 年 12 月 15 日	日本看護科学学会第 38 回学術集会（於愛媛県）	健康な女性高齢者に対し仰臥位でケリーパッドを用いた洗髪援助における膝関節の屈曲の有無が対象者の感覚に及ぼす影響の違いについて調査した。対象者（12名）の年齢は70.5（±1.8）歳（平均値±SD）であった。感覚データでは大腿・下腿の筋の緊張感において伸展群は34.9（±10.5）点、屈曲群は5.1（±2.1）点で、屈曲群のほうが伸展群より筋の緊張感が低く、有意差を認めた。(p=0.021) 姿勢の安心感では、伸展群は58.7（±11.1）点、屈曲群は94.5（±1.9）点で、屈曲群のほうが伸展群より安心感が高く、有意差があった。(p=0.021) したがって仰臥位での洗髪時に膝を伸展するよる屈曲したほうが、足にかかる筋の緊張感が有意に少なく、安心感が得られることが科学的に明らかとなった。今後は対象者数を増やすことや身体的な影響も含めて総合的に検討すること、さらに実際にベッド上で洗髪援助を受けている高齢者を研究対象者として研究を進めていくことが課題として考えられる。 共同研究者：木村静、澤田京子、大江真人、上山直美、葉山有香、平野加代子、林文子 担当部分：データ分析

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
３．女性高齢者における仰臥位で洗髪援助を受けるときの股関節と膝関節の屈曲の有無が、血圧と脈拍に及ぼす影響についての検討	共著	2019年3月9日	日本看護研究学会第32回近畿・北陸地方会学術集会	健康な女性高齢者に対し仰臥位でケリーパッドを用いた洗髪援助における膝関節の屈曲の有無が対象者の血圧と脈拍に及ぼす影響について調査した。屈曲群→伸展群の順で実施した者が6名、伸展群→屈曲群で実施した者が6名であった。洗髪前後の比較は、血圧では有意差がなかったが、脈拍では屈曲群において前81.3（±11.6）回/分が、後69．1（±9.8）回/分に、伸展群において前82.0(±10.6)回/分が後71.0（±10.4）回/分、２群ともに洗髪前後で有意差があった（p=0.001、p=0.000）各側手項目の変化率における2群の比較では全て有意差は認めなかった。したがって女性高齢者では仰臥位で洗髪援助を受ける際、洗髪前より洗髪後に脈拍が有意に減少するが、膝関節の屈曲の有無によって脈拍の減少における有意な違いは認めないことが明らかとなった。今後は対象者数を増やすことや心理的な影響も含めて総合的に検討すること、さらに実際にベッド上で洗髪援助を受けている高齢者や療養患者を研究対象者として研究を進めていくことが課題として考えられる。 共同研究者：木村静、澤田京子、大江真人、上山直美、葉山有香、平野加代子、林文子 担当部分：データ分析

教　育　研　究　業　績　書

令和2年3月31日

氏名　　野口　寿美子　　印

研究分野	研究内容のキーワード
看護基礎教育	臨地実習教育　メタ認知　リフレクション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
(1) 成人看護学	平成24年4月 ～平成26年3月	白鳳女子短期大学成人看護学において「感染症」「脳神経」「免疫疾患・アレルギー」「看護過程」の単元を担当し、病態の理解と症状とその看護援助を理解できるよう画像資料や、授業資料を作成し授業を行った。成人看護学看護過程演習においては、20人の小グループにおける演習を担当し、共同学習によってグループ間での相互教授によって理解を図るように行った。
(2) 国家試験対策	平成24年4月 ～平成26年3月	白鳳女子短期大学において、７名の学生を担当し、毎月面談を行い学習進度を確認、個別の問題を作成し苦手科目対策を行い国家試験受験に向けてサポートし合格への支援を行った。（全員合格）
	令和２年１月	奈良学園大学４回生に対して国試直前対策講座の基礎看護学を２限担当した。基礎看護学領域の出題基準を網羅し、理解度をイマキクで確認しながら振り返りを行い学生からは、「不確かな知識を再確認できた」「弱点をもう一度確認することができてよかった。復習にもなった。」とのコメントを得た。
(3) 基礎看護学技術演習Ⅰ・Ⅱ	平成28年4月 ～平成30年3月	奈良学園大学基礎看護学において基礎看護学技術演習Ⅰ・Ⅱの補助を行った。学内演習では、座学で学んだことを理解できているかフィードバックし、学生自身が根拠を持って演習できるよう指導した。
	令和元年4月 ～令和2年3月	奈良学園大学基礎看護学の1年前期科目基礎看護技術演習Ⅰ「全身清拭」、1年後期科目基礎看護技術演習Ⅱ「一時的導尿」「総合演習」、セルフトレーニングを担当し、技術習得に向けての取り組みを支援した。
(4) 在宅看護学援助論	平成30年4月 ～平成30年8月	奈良学園大学在宅看護学援助論において、在宅における清潔援助として家庭用品で簡易洗髪器を作成し洗髪する演習を企画し担当した。学生が家庭にある物品を用いて創意工夫するよう促し、演習後のグループワークでの成果を発表する機会を設け、学びの共有を図った。次に、エンゼルケア演習において、亡くなった人のできなくなったセルフケアを代理として、家族のそれぞれの立場を演習を通して理解し考察する機会とした。実施後のグループワークの場面でリフレクションし、共同学習場面を通して学びを深められるように意図した。第15回目にゲストスピーカーとして在宅療養者を講師として招聘し、領域実習開始前の学生が在宅看護のイメージをより具体的に理解できるよう場の設定を行った。

(5) 在宅看護学概論	平成30年9月 ～平成31年3月	在宅看護学概論では、第8回在宅看護を支える医療福祉制度②医療保険制度の講義を教授の指導の下で担当し、公的医療保険制度の変遷から現在の在りようを理解するため、視聴覚教材を使用し理解を深めるよう促した。第12回在宅における安全管理についても教授の指導の下に担当した。
(6) 基礎演習Ⅰ（ラーニングスキルズ）	令和1年4月 ～令和1年7月	新入生7名を担当し、一年次生が大学の学習に慣れ、４年間の大学生活を有意義に送るための基礎習得を目的に講義ノートの取り方、文献資料の検索、学術的な文章の読み方、グループワークの進め方などについて、ゼミ形式の演習を通じて学習をサポートした。
(7) 卒業研究Ⅱ	令和1年4月 ～令和2年1月	基礎看護学領域をテーマにした学生2名を担当し、文献収集から論文執筆までをサポートした。
2 作成した教科書，教材 急性期看護学実習　実習前ワークブック	平成25年5月	白鳳女子短期大学において、成人看護学実習における実習前ワークブックを作成し導入した。特に周手術期の生体反応を捉えた実習前学習の資料として、周手術期の理解を深めて実習展開の早い急性期実習に活用した。
3 教育上の能力に関する大学等の評価	平成25年12月	白鳳女子短期大学において、授業アンケート調査における年間優秀教員評価として教務委員会から発表された。
4 実務の経験を有する者についての特記事項 （1）臨地実習指導	平成23年12月 ～平成24年1月	白鳳女子短期大学において、基礎看護学実習Ⅰ、老年看護学実習、成人看護学実習Ⅱにおいて実習指導を行った。基礎看護学実習は学生にとって初めての実習であるため、病院および療養環境、患者との適切なコミュニケーション、日常生活援助が行えるように指導した。老年看護学実習及び成人看護学実習Ⅱでは、再履修学生５名の実習を担当し、実習展開が円滑に運べるよう学生及び実習環境の調整を行い、病棟環境・患者背景・疾病理解・生活歴の理解を促し、老年期及び成人期の理解から情報収集・計画立案・実践・評価の看護過程を辿りながら看護実践できるように指導し、5名とも最後まで実習を完遂した。
	平成24年5月 ～平成25年12月	白鳳女子短期大学にて成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、精神看護学実習の指導を行った。慢性期実習では、慢性期特有の生活習慣や生活歴から個別性のある看護展開及び看護実践を指導。急性期実習では全身麻酔下の生体反応を捉えた看護実践及び退院を見据えた生活指導につながるよう学生カンファレンスでの共同学習の機会を意図的に設けた。精神看護学実習においては、病棟環境及び患者、患者を取り巻く社会、家族、看護実践の理解から患者との相互交流を深め、プロセスレコードを用いて自己の振り返りと自己の特性理解とつながるよう指導した。小児看護学実習では、小児の発達段階と成長発達を捉えて母子関係、遊びを通した看護実践を指導した。
	平成27年5月 ～平成27年12月	白鳳女子短期大学において、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、小児看護学実習、精神看護学実習指導を行った。
	平成28年1月 ～平成28年3月	宝塚大学において、老年看護学実習を担当した。回復期リハビリテーション病棟にて、脳神経疾患の生活リハビリテーション看護として高次脳機能障害への看護実践や日常生活支援を指導した。

	平成28年7月 ～平成30年2月	奈良学園大学において、早期体験演習、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱ、在宅看護学実習、基礎実習Ⅰ・Ⅱを担当した。入学間もない学生たちが早期に医療現場の実際を見学する機会から実際の看護を見学を通して学ぶ中で、看護学生として望ましい学ぶ姿勢、立ち振る舞いなど接遇面に始まり、具体的な看護師像のイメージを捉えられるよう働きかけを行った。成人看護学実習では、急性期・慢性期看護の看護過程展開の指導を行った。在宅看護実習では、2か所の訪問看護ステーションへの巡回指導を行った。
	平成30年9月 ～平成31年3月	基礎看護学実習Ⅰ・Ⅱ、在宅看護学実習、成人看護学実習Ⅰ・Ⅱの実習指導を行った。
	令和1年9月 ～令和2年2月	基礎看護学実習Ⅰは高の原中央病院の病院リーダー、基礎看護学実習Ⅱは市立東大阪医療センターの病院リーダーとして実習指導を行った。また、基礎看護学実習Ⅰの学生配置案を作成し、それぞれの実習病院との実習調整および要項説明を行った。
(2)奈良学園大学保健医療学部看護学科 教務部会　卒業研究WG	平成30年4月 ～平成31年3月	教務部会の卒業研究WGの委員として、業務に携わり書記を行った。
(3) 奈良学園大学保健医療学部看護学科 学生生活部会　学年担任	令和1年4月 ～令和2年3月	学生生活部会の委員として、1年生の学年担任および新入生宿泊研修のコアワーキングメンバーとして宿泊研修の企画に携わった 。
5　その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 看護師免許 介護支援専門員	 昭和59年6月 平成11年5月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1.病院から「家に帰りたい」という人のために 2 3	共著	平成20年11月	財団法人在宅医療助成勇美記念財団	手を結ぼうプロジェクトとして在宅看護支援のための小冊子を作成。（全23頁、湯沢八江、甲州優、中村祐子、町屋千鶴子、若林和枝、大澤紀子、佐藤正子、野口寿美子、村松静子）
（学術論文） 1.看護系大学の臨地実習カリキュラムのあり方の検討ー認知心理学の援用からの一考察ー（査読付）	単著	平成30年3月	星槎大学大学院教育学研究科	本研究は、見学実習にとどまってしまう臨地実習の現状とその教育内容を検討する重要性から、日本の看護学教育の変遷をまとめ、次に、実習教育の現状を整理し、米国のコンピテンシーに基づく看護教育を比較検討した。次に、同じ医学である医学教育についての先行研究からも、これまでの看護学研究の上に、科学的知見に基づいた心理学や教育学の学習理論に基づいた教育の重要性が明らかとなった。
2.看護学教育におけるコンピテンシー獲得に向けた教育方略検討の試みーメタ認知とリフレクションからの考察ー（査読付）	共著	平成31年3月	医療福祉情報行動科学研究Vol.6,March,2019	看護学教育におけるコンピテンシー成果修得のための教育方略をメタ認知とリフレクションに焦点を当て文献研究を行い、心理学や教育学で得られた有用な知見に基づいた教育内容を取り入れることの有用性が示唆された。 （全頁数10頁、野口寿美子、伊藤一美）本人担当部分：研究計画、研究遂行、論文執筆
3.「老人性皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケア効果の検証(査読付)	共著	平成31年3月	医療福祉情報行動科学研究Vol.6,March,2019	老人性皮膚掻痒症のスキンケアに皮脂量の増加に効果があるシュガー・スクラブを用いたケア群と清拭による統制群の前後の皮膚の水分と皮脂の比較から効果を検証し有用性が示唆された。全頁数8頁（本人担当部分：研究準備、論文整理、研究遂行。共著者：高橋寿奈、斉藤英夫、山口求、吉村雅代、佐藤郁代、野口寿美子、井上昌子、守本とも子）
	共著	平成31年3月	アビサル・ジャパン委託研究報告書	老人ホーム入所者を対象に皮脂量・水分量不足による老人性皮膚掻痒症に対してシュガー・スクラブの効果を検証した。清拭・入浴後の皮膚バリア機能（油分量・水分量）とストレス指標となる唾液のクロモグラニンAの検体を採取してデータを比較分析した結果、シュガー・スクラブ使用群は皮脂量・水分量に有意な差が見られた。全頁数10頁（本人担当部分：研究準備、論文整理、研究遂行。共著者：山口求、守本とも子、吉村雅代、佐藤郁代、斉藤英夫、高橋寿奈、井上昌子、野口寿美子）

5.重度心身障害児（者）の清潔援助としてスキンケアの提供によるストレスに関する研究	共著	令和2年3月	アビサル・ジャパンKK受託研究報告書	A病院に入院している重症心身障害児（者）でセルフケアが自身でできない重度心身障害児20名を対象に、清潔援助によるストレス軽減を検証するために、ケア前後の水分値、油分値、パルスオキシメーターによる心拍数の測定度と唾液アミラーゼの測定を行った。その結果をt検定で比較した。水分値は初日には双方変化は認められず、6日目にはケア群において38.8から57.0と有意に上昇した。油分値は統制群は12.4から8.9へと有意に低下を示し、6日目にも低下を示したが、ケア群においては変化が中なかった。心拍数は統制群、ケア群ともに有意差なく、6日目のケア群は82.7から78.0と有意に低下した。唾液アミラーゼは統制群450klu/l、ケア群452.2klu/lと正常値の50klu/lよりもいずれも高値を示し、6日目のアミラーゼは、統制群、ケア群ともに360klu/l以下であった。清拭前後の比較では水分・油分共に上昇しバリア効果を示唆できたと考えられた。本研究で使用したカラダキレイは天然アミノ酸を主体とした洗浄効果のスキンケアが期待されるものであるが皮膚の乾燥などからトラブルとなる痒みの予防やストレス軽減にはつながらない結果となったが、ストイレスの生理的指標である心拍数はケア群で低下傾向を示し、言語化による反応は得られなかったものの表情には「気持ちよさそう」という情動反応が得られている。全9頁（本人担当部分：研究準備、論文整理、研究遂行。共著者：山口求、佐藤郁代、斉藤英夫、野口寿美子、松居典子、守本とも子、木野田利枝、門脇志保、村井久美子、谷口奈美）
（学会発表） 1.大学における看護基礎教育課程の日米の比較	単独	平成30年9月	第54回日本教育方法学会（和歌山県立大学）	2017年最優秀大学看護学校ランキングで全米1位となった米国のデューク大学看護学部とオレゴン州看護教育コンソーシアムの共通カリキュラムと日本の看護学教育の比較検討を行った。看護学教育におけるカリキュラムは、講義・実習・演習を同時に進行させ、学生が複合的に学ぶことができるよう学習活動を促進することが重要であること、認知心理学や教育学などの理論を共有し、知識の理解よりもどこまでスキルが高くなったのかという教育方法や評価法の開発によって、自立的な主体性のある学習者の育成に向かうことが示唆された。
2.Preceptions Towords Diet and Exercise Among Type2 Diabetes Patients in Nara Prefecture（奈良県在住2型糖尿病患者の食生活と運動に関する認識）	ポスター発表（共同研究）	令和2年1月	2020　EAFONS（タイ・チェンマイ）	日本の糖尿病が強く疑われる者は約1,000 万人と推計され、平成9年以降増加している。糖尿病患者の食事と運動に関する認識を探ることを目的に奈良県在住の2型糖尿病患者20名を対象に、半構造的面接調査を行った。本研究によって、奈良県在住の2型糖尿病患者の健康行動に対する社会生態学的影響が明らかとなり、患者に対しては、健康管理の計画、実施、評価において個人と家族、職場の特性を考慮して糖尿病治療の介入を行う必要性が示唆された。 （Haruna Tanaka, Ikuyo Sato, Sumiko Noguchi, Namie Ueki, Jilian Inouye, Tomoko Morimoto）

3.A Verification of the Skincare Benefits of Sugar Scrubs for Elderly People with Senile Pruritus （老人性皮膚掻痒症のある高齢者のためのシュガースクラブのスキンケアの利点の検証） （その他） 1	ポスター発表（共同研究）	令和2年1月	2020　EAFONS （タイ・チェンマイ）	老人性掻痒症は主に皮脂欠乏によって引き起こされ、痛みを伴うかゆみを引き起こされ、弱い皮膚の引っかき傷、および感染症にかかるリスクが増加する。この研究は老人性掻痒のある高齢者のためのシュガースクラブのスキンケア効果を評価することを目的に、75歳の合計17人の高齢者施設に入試する高齢者を研究対象都市、シュガースクラブを用いたケア群と統制群にランダムに割り当て、ケア前後の水分とオイル値を測定した。その結果、ケア群では水分値は、大幅に増加し、皮脂の量も大幅に増加した。対照群では、水分値のみが有意に増加（その他は有意差は認められなかった。シュガースクラブを使用したスキンケアでは水分と皮脂を効果的に増加させ、それによりバリア機能を果たし、かゆみを緩和することが分かった。（T. Morimoto, M. Yamaguchi, H. Takahashi, H. Saito,I. Sato,S. Noguchi, M. Inoue, and M.Yoshimura）

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ６月 30 日

氏名　　松居　典子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
母親の育児不安，育児困難，多胎育児	育児不安要因，育児ストレス，産後うつ，育児支援

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 （1）妊娠期，分娩期，産褥期について演習講義 （2）産褥期の経過と看護について講義	 H28,3～ H29,1～	藍野大学短期大学部において「母性看護学方法論」の授業　妊娠期，分娩期，産褥期，新生児期の演習，産褥期の経過とアセスメント，看護について講義
（3）研究指導	H28,8～	「研究Ⅱ」の授業　研究指導
（4）実習指導	H27,8～	「ゼミナール」の授業　8～9 名でのグループ研究の指導　「母性看護学実習」　臨地実習の指導
		奈良学園大學において「助産診断技術学Ⅲ」の授業
		産褥期の助産診断、助産ケアについて講義
		「卒業研究Ⅱ」研究指導
		「母性看護学実習」「助産診断技術学実習」指導
２　作成した教科書，教材		
３　教育上の能力に関する大学等の評価	H29	学生による授業評価アンケートにおいて評価を得る
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
５　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　資格，免許 看護師免許取得 助産師免許取得	 H10,4,9 H11,4,27	
藍野大学看護学研究科　看護学修士	H31,3	
２　特許等		
３　実務の経験を有する者についての特記事項		
４　その他 滋賀県大津市新生児訪問	 H27～30	 新生児訪問を実施　計測，指導，相談など

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） （学術論文） 1.定頸までの双子の育児体験から生まれた母親の技	 単著	 平成 31 年	 藍野大学看護学研究科看護学専攻修士論文	 双子を育児中の母親８名へのインタビュを行い、定頸までの育児体験から生まれた、双子育児ならではの育児方法や、観察方法、児への関わり方などの育児の工
				夫を検討し、母親の創意工夫から生まれ
				た双子育児の方法を育児支援に役立て
				る。
２重症心身障害児（者）の	共著	令和２年２月	日本医療福祉情報行	入院中の重症心身障害児（者）をケア群
清潔援助としてスキンケ			動科学会	とコントロール群に分けケア群にはカ
アの提供によるストレス				ラダキレイとシュクレを用いて清潔ケ

に関する研究				アを行いストレスへの効果を検証した。
				（共著者：山口求，松居典子他 10 名）
3 重症心身障害児（者）の	共著	令和 2 年 3 月	アビサルジャパン委	入院中の重症心身障害児（者）をケア群
清潔援助としてスキンケ			託研究報告書	とコントロール群に分けケア群にはカ
アの提供によるストレス				ラダキレイとシュクレを用いて清潔ケ
に関する研究				アを行いストレスへの効果を検証した。
アビサルジャパン委託研				（共著者：山口求，松居典子他 10 名）
究報告書				
4ＮＩＣＵ退院後の母親が	共著	令和 2 年 3 月	日本小児保健協会	ＮＩＣＵに入院経験のある、第１子育児
求める入院中の育児支援		投稿中		中の母親８名へのインタビューを行い、
				入院中に求めていた育児指導や育児支
				援を検討し、NICU での母親への指導・
				援助を考案した。
				（共著者：寺本久美子，松居典子,今村
				美幸）
5 産後の育児不安とエジン	単著	令和 2 年 3 月	日本周産期メンタル	母親の育児不安に対して、地域や，施設
バラ質問紙票活用に関す		投稿中	ヘルス学会	でのエジンバラ質問紙票を活用した支
る文献検討				援の状況を文献検討し、育児不安への対
				応やエジンバラ質問紙票の活用方法の
				改善につなげる。
6 産後の育児不安に対する	単著	令和 2 年 3 月	日本母性衛生学会	産後に退院直後からの母親の育児不安
地域での育児支援につい		投稿中		とその支援の現状を明らかにすること
ての文献検討				を目的として文献検討を行った。
（その他）				

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月31日

氏名　井上　昌子

研究分野	研究内容のキーワード
在宅看護学	小児　在宅　重症心身障害児　レスパイト　きょうだい

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）老年看護学援助論授業補助を行った。	平成30年４月～８月	奈良学園大学保健医療学部の助手として、老年看護学援助論の授業・演習のサポートや出欠確認を行った。演習では学生のロールプレイ、看護過程の評価を行った。
2）統合看護学臨地実習指導を担当した。	平成30年５月	奈良学園大学保健医療学部の助手として、実習施設との調整、実習前オリエンテーションを行い、実習では学生自身の目標が達成できるようチーム医療の一員として看護師が果たす役割や、複数の受け持ちの中での優先順位を考え行動することを指導した。単位認定者の教授とともに実習後の評価を行った。
3）基礎・老年・成人・在宅看護実習において臨地実習指導を担当した。	平成30年９月～平成31年１月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、 実習に必要な日常生活援助技術の練習を行い、学生が実習に取り組めるようにした。実習では、情報収集、アセスメント、看護過程の展開を通して患者に何が必要な看護かを考えるよう指導した。また学生に自分の看護を振り返り、学びを深められるよう支援できた。単位認定者の教授とともに、実習後の評価を行った。
4）基礎看護実習Ⅱ臨地実習指導を担当した。た。	平成31２月	実習施設において、情報収集、コミュニケーション、アセスメントを通して必要な看護や患者の思いを考えられるよう指導した。
5）統合看護学実習臨地実習指導を担当した。た。	令和元年５月	奈良学園大学保健医療学部の助手として、実習施設との調整、実習前オリエンテーションを行い、実習では学生自身の目標が達成できるようチーム医療の一員として看護師が果たす役割や、複数の受け持ちの中での優先順位を考え行動することを指導した。単位認定者の教授とともに実習後の評価を行った。
6）老年看護学援助論、疾病治療論Ⅵ授業補助を行った。	令和元年４月～８月	奈良学園大学保健医療学部の助手として、老年看護学援助論の授業・演習の準備やサポート、出欠確認を行った。演習では、学生のロールプレイ・看護過程についての評価を行った。
7）老年看護学領域実習Ⅰ・Ⅱにおいて臨地実習指導を行う。	令和元年８月～１月	実習施設との調整、実習前オリエンテーション、 実習に必要な日常生活援助技術の練習を行い、学生が実習に取り組めるようにした。実習では、情報収集、アセスメント、看護過程の展開を通して患者に何が必要な看護かを考えるよう指導した。また学生に自分の看護を振り返り、学びを深められるよう支援できた。単位認定者の教授とともに、実習後の評価を行った。
8）基礎看護学実習Ⅱにおいて臨地実習指導を担当する。	令和２年２月	実習施設において、学生が情報収集やコミュニケーション、アセスメントを通して必要な看護や患者の思いを考えられるよう取り組んだ。

9）老年看護学統合実習をオンラインで指導した。	令和２年５月	事例を用いて、複数受け持ちにおける優先順位、多重課題、感染対策、看護管理についてディスカッションや看護過程の展開を通して指導した。
10）老年看護学援助論演習	令和２年５月	助教として授業を担当し、高齢者の身体的加齢変化、必アセスメントについてビデオを作成したり、ＤＶＤを使って視覚的に理解できるようにし、講義後は確認テストを行い、振り返りをさせた。高齢者疑似体験を学生が行い、にディスカッションやプレゼンテーションを通して、高齢者の生活のしづらさを体験することで必要な看護を導き出し、高齢者を理解することができた。
11）ヘルスアセスメント	令和２年５月～8 月	演習において学生のバイタルサイン測定について、フィジカルアセスメントモデル「フィジコ」を使用することで理解を深めることができた。
12）老年看護学概論、疾病治療論Ⅵ	令和２年５月～8 月	科目担当者の教授と共に授業に補助として入り、出欠確認や、課題回答作成を行った。
13）基礎演習Ⅰ	令和２年５月～8 月	科目担当者の教授とともに、８コマ担当した。 大学生としての基本的なラーニングスキルについて講義し、文献検索、ディスカッション、プレゼンテーション、レポート作成についての学びを深めた。
14）卒業研究Ⅱ	令和２年５月～8 月	2 名の学生を受け持ち、卒業研究テーマについての指導、文献レビュー、論文作成を指導した。学生の興味をもったテーマの文献検討を行い、論理的にまとめられているか指導した。
２　作成した教科書，教材		
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
５　その他 1）日本看護研究学会学術集会実行委員	令和元年８月	実行委員として学術集会の運営に携わった。
2）教務 WG、卒業研究 WG 委員	令和元年度	書記を担当し議事録作成した。
3）学生生活 WG 委員	令和２年度	1 年生の学年担当を受け持ち、書記を担当し議事録作成を担当した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
１　資格，免許 1）看護師免許	平成 27 年４月	
2）修士（看護学）	令和２年３月	奈良学園大学大学院看護学研究科在宅看護学分野 修士論文題目：レスパイトケアを継続利用する在宅重症心身障害児（者）の母親の心理プロセス
２　特許等		

3　実務の経験を有する者についての特記事項		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1. 2019 年出題傾向がみえる必修問題	共著	平成 30 年 12 月	株式会社ピラールプレス B5 判　全 189 項	2019 年の看護師国家試験対策問題集として、近年出題された問題と要点がまとめられている。 共著者：守本とも子（監修）、松浦純平（編著）、井上昌子、斎藤英夫、溝口みちる、明神一浩（著） 本人担当箇所は、要点編「健康に影響する要因」「人間のライフサイクル各期の特徴と生活」「主な看護活動の場と看護の機能」「人体の構造と機能」「疾患と徴候」「診療に伴う看護技術」の一部を担当した。
2. 解いて、わかる！覚えて合格必修問題問題集	共著	令和元年 10 月	株式会社ピラールプレス	2020 年の看護師国家試験対策として必必修問題の過去問と要点の解説している。過去問の解説を一部担当した。 共著者：守本とも子（監修）、松浦純平(編著) 本人担当箇所：P14～15、P24、P32～33
3. 解いて、わかる！覚え合格！小児看護学看護の統合と実践	共著	令和 2 年 3 月	株式会社ピラールプレス	2020 年の看護師国家試験対策として小児領域の過去問と解説している。 本人担当箇所は、看護師国家試験問題過去問編全般の解説を担当した。 共著者：守本とも子（監修）、山口求(編著)
4. 解いて、わかる！覚え合格！小児看護学問題集	共著	令和 2 年 5 月	株式会社ピラールプレス	2021 年の看護師国家試験対策として小児領域の過去問と解説している。 本人担当箇所は、看護師国家試験問題過去問編全般の解説を担当した。 共著者：守本とも子（監修）、井上昌子(編著)
（学術論文） 1.「老人性皮膚掻痒症」のシュガー・スクラブによるスキンケアの効果の検証	共著	令和元年 3 月	日本医療福祉情報行動科学会	シュガー・スクラブを用いたスキンケアの効果をケア群と統制群に分けて検証した。 共著者：高橋寿奈、斎藤英夫、山口求、吉村雅世、佐藤郁代、野口寿美子、井上昌子、守本とも子 本人担当部分：研究準備、研究遂行、データ入力を行った。
（その他） 1 2 3 ：				

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名　　溝口　みちる

研　究　分　野	研究内容のキーワード
看護学	臨床看護学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　教育方法の実践例 1）基礎看護学の講義・演習の工夫と技術試験の試み （社会医療法人　畿内会　岡波看護専門学校 1 年生）	平成 24 年 4 月～ 平成 29 年 1 月	「生活を支援する技術Ⅱ」（環境）、生活支援する技術Ⅳ」（食事・排泄）を担当し DVD も活用し、講義後にはすぐに練習できるよう、授業はすべて白衣を着用し、実習室った。また、グループワークでは、グルー協力して調べること、共有する利用し目的図書室も利用した。そうすることで、より―プ内の協調性が増し、演習でも自ら考えグループメンバーが全て体験できるよう時配分や意見交換も行えた。
2）能動的な授業を考えたジグソー学習の導入 （社会医療法人　畿内会　岡波看護専門学校 2 年生）	平成 27 年 4 月～ 平成 29 年 1 月	座学やグループワークのみにとどまらず、がいかに効果的・能動的に授業を行うことできるのかを考え、「診療行為を支援するⅠ」の注射の授業で実施した。「注射」はにとって一番興味を示す反面、医療事故に繋がるものと考えたためである。「皮下注「皮内注射」「筋肉注射」「静脈内注射」どれか一つを担当し、他のメンバーに伝え事前課題を提示し、授業当日に役割別の専チームに参加、グループ内で統一し他者にることができるまで学び合う。その後、学他のグループで教員役となり実施する。教それぞれの専門家チームのアドバイザー的在として指導する。ジグソー学習前には、による講義と実践を行い、根拠、留意点、ントを伝えている。30 項目の授業アンケー作成し、「責任感を感じた」「自分から進理解しないとこの授業は難しいと思った」達に伝えようという気持ちを持った」など項目において評価が高く、効果的であった考える。
3）統合看護学実習を意識した統合看護技術の実施 （社会医療法人　畿内会　岡波看護専門学校 3 年生）	平成 27 年 3 月～ 平成 29 年 1 月	ケーススタディ・シナリオを用いた演習をた。6 名の受け持ち患者を想定し、グループ患者の優先順位、行動計画の立案をさせた。の後、モデル人形を活用し、実際に状況設観察項目や看護技術などの演習を行った。する病院看護師および当該学生 1 年生の協のもと、統合看護技術試験を行った。時間優先順位を考え、ナースコールの対応やリ―・メンバーの役割等を確認した。またこ授業の中には、看護の統合知識確認として、合看護技術、医療安全の確認試験を行った。学生は実際にはできなかった場面が多く、師国家試験終了後より卒業まで、技術練習自主的に行うようになった。
2　作成した教科書，教材		

なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1)成人看護学実習Ⅰおよび成人看護学実習Ⅱ、統合看護学実習の指導 （奈良学園大学保健医療学部看護学科） 2）実習調整者 （社会医療法人　畿内会　岡波看護専門学校）	平成 30 年 9 月～ 現在 平成 28 年 4 月～ 平成 29 年 1 月	3 年生を対象とした成人看護学実習Ⅰおよ 成人看護学実習Ⅱ、4 年生を対象とした統合看護学実実習の実習指導を担当している。 臨地実習の調整、実習調整会議にて司会進を行った。
5　その他 1）学生の目標達成に向けたポートフォリオの作成	平成 25 年 4 月～ 平成 29 年 1 月	学生が自らテーマや目標を決め、学び続け学習法を取り入れることを考え、ポートフオを作成した。入学時に説明し、ビジョンゴールを記載させた。中間の面接時に、ゴに向かうためにはどうしていくのかを指導た。また 2～3 月に全体での発表会を設け、生全員に発表させた。学生自身がどのよう成長してきたのか、また自信をもって成長たと主張できるようになった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）看護師免許	平成 12 年 4 月	第 1075353
2）厚生労働省認定看護専任教員養成講習会終了	平成 24 年 1 月	厚生労働省認定三重県専任教員養成講習会
3）修士（看護学）	令和 2 年 3 月	奈良学園大学大学院　看護学研究科 修士課程
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）日本看護技術学会第 18 回学術集会　企画委員	平成 30 年 4 月～ 平成 31 年 3 月	「過去・現在から未来へ発信する看護のイーション」をテーマに、2019 年 9 月 7・8 学術集会での役割を遂行した。
2）日本看護研究学会第 45 回学術集会　実行委員	令和元年 8 月	「研究成果をためる　つかう　ひろげる ―社会に評価される看護力―」をテーマに、令和元年 8 月 20 日､21 日の学術集会での役を遂行した。
4　その他 1）入試対策委員 （社会医療法人　畿内会　岡波看護専門学校）	平成 27 年 4 月～ 平成 29 年 1 月	入学試験に関する筆記試験監督および面接試験監督を行った。判定会議に向けて、入状況をまとめた。
2）広報活動 （社会医療法人　畿内会　岡波看護専門学校）	平成 25 年 4 月～ 平成 29 年 1 月	三重県および奈良県内の高等学校を訪問学生募集の案内を行った。また、学校ホームページのニュース更新や広報業者との打ちわせに参加するなど、広報活動を行った。
3）学校における防災・災害に関する見直しを検討 （社会医療法人　畿内会　岡波看護専門学校）	平成 25 年 4 月～ 平成 29 年 1 月	「災害発生時に適切な判断・行動がとれるの養成－防災マニュアルの再構築－」としアクションカードを作成した。実際に、防

				訓練に活用し、「責任者（指示命令）」「第発見者（初期消火）」「応援者（避難・誘を行った。結果、焦らずスムーズに学生をでき、自らの役割も担うことができた。ま隣接する病院内での業務改善発表会で発表た。
研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1. 2019 年出題傾向がみえる必修問題	共著	平成 30 年 12 月	ピラールプレス	看護師国家試験出題基準の中項目に基づきづき、要点編と過去問題編からなる 2 部構構成となっている。 担当部分：健康の定義と理解、看護における倫理（看護師等の役割）、人間の特性、人間のライフサイクル各期の特徴と生活（成人期）、人体の構造と機能（人間の死）、疾患と特徴（吐血、喀血、チアノーゼ、呼吸困難、胸痛、不整脈、腹痛・腹部膨満、悪心・嘔吐、下痢、便秘、下血、乏尿、無尿、頻尿、多尿）、薬物の作用とその管理（薬物の管理）、看護における基本技術（フィジカルアセスメント）、患者の安全・安楽を守る看護技術、診療に伴う看護技術（救急救命処置） 著者：守本とも子，松浦純平，井上昌子，齋藤英夫．溝口みちる，明神一浩
（その他） ＜学会発表＞ 1) テキストマイニングを用いた災害看護における教育に関する研究の動向と課題	―	平成 31 年 3 月	第 32 回日本看護研究学会　近畿・北陸地方会	国内における災害看護の教育に関する研究の動向と課題を明らかにするために、ＫＨ Coder を用いて論文のタイトルを分析した。クラスター分析、共起関係ネットワーク分類の結果、臨床や教育現場で多角的な分類より、盛んに研究が取り組まれている現状が明らかとなった。 共著者：溝口みちる，松浦純平
2) テキストマイニングを用いた精神看護学実習における学生の学びの分析	―	平成 31 年 3 月	第 32 回日本看護研究学会　近畿・北陸地方会	看護学生が精神障害者に実際に関わり、対人関係のプロセスを通して、どのような「学び」があったのか、その特徴を明らかにすることで今後のより良い実習の提供や教育内容の示唆を得ることを目的とした。「考える」「感じる」「関わる」といった情意・精神・運動領域に関する記述が多くあり、学生は受け持ち患者の関わりを通して精神障害者の「生きにくさ」を理解していた。 共著者：山﨑陸世，溝口みちる，井上葉子
3) テキストマイニングを用いた看護過程に関する研究の特徴	―	令和元年 9 月	日本看護技術学会　第 18 回学術集会	看護のプロセスを考える看護過程が、学生は困難と感じている現状があり、看護過程に関する研究の特徴を明らかにすることを目的とした。看護過程の展開と演習との結びつきのある研究が示唆され、学生および臨地は、成人の実習において看護過程を展開するうえで困難を抱えていることが明らかとなった。共著者：溝口みちる，松浦純平

4) Trends and issues of research on disaster nursing education overseas using text mining	—	令和 2 年 2 月	第 6 回世界看護科学学会学術集会	海外における災害看護教育に関する研究の動向と課題を明らかにすることで、テキストマイニングを用いて分析を行った。海外では、あらゆる災害を想定した訓練を行っている。災害看護は多職種協働のもと、教育プログラムの開発を進めていくことが示唆された。共著者：溝口みちる，松浦純平
5) Analysis of nursing research on CPR in gender:a 10-year study in the world	—	令和 2 年 2 月	第 6 回世界看護科学学会学術集会	世界の CPR 実施時の性に関する研究の分析と課題を明らかにすることで、テキストマイニングを用いて分析を行った。階層的クラスターの結果から、学生の CPR 教育の中で差に囚われず、確実な CPR の実施、振り返り、実施後の報告会が重要であることが明らかとなった。共著者：松浦純平，溝口みちる，小林由里，田場真理，守本とも子
6) Analysis and problem of research on dialysis nursing at disaster time in the world	—	令和 2 年 2 月	第 6 回世界看護科学学会学術集会	世界の災害時における透析看護に関する研究の分析と課題をテキストマイニングで分析した。その結果、素早い対応ができるプログラムの開発と医療職種チームが連携することが重要である。また、病院の医療職チームが実際に行動（アクション）を起こすこと、透析患者の健康を優先的に考えることが重要である。地域により地震やハリケーンなどの多様な災害があるため、今後も多種多様な研究の増加が望まれる。共著者：松浦純平，田場真理，溝口みちる，小林由里，守本とも子
7) A systematic review of research on postoperative delirium onset prevention from the viewpoint of circadian rhythm in the world	—	令和 2 年 2 月	第 6 回世界看護科学学会学術集会	世界における先行研究よりサーカディアンリズムとせん妄発症の関連からせん妄発症予防について分析し、現状を明らかにすることである。メラトニン産生がサーカディアンリズムを調節し、術後せん妄発症予防の可能性が示された。今後は症例研究の無作為ランダム試験の研究が進むことが期待される。共著者：松浦純平，小林由里，田場真理，溝口みちる，守本とも子
8) 看護における AI（人工知能）に関する研究の現状－テキストマイニングを用いた分析－	—	令和 2 年 3 月	第 33 回日本看護研究学会　近畿・北陸地方会	医療分野の中でも看護における AI に関する研究の現状と展望を明らかにすることを目的に、「人工知能」「看護」で文献を検索し、テキストマイニングで分析した。結果、介護支援採用ロボットスーツ HAL や手術支援ロボット da Vinci などロボットに関する研究とその効果について取り組んでいた。看護実践への取り組み、効果の検証も必要である。共著者：松浦純平，溝口みちる，田場真理，上野栄一
9) 看護師の看護管理のコンピテンシーに関する研究の特徴－テキストマイニングによる分析から－	—	令和 2 年 3 月	第 33 回日本看護研究学会　近畿・北陸地方会	過去の看護師の看護管理のコンピテンシーに関する研究の特徴を明らかにすることを目的に、「看護師」「看護管理」「コンピテンシー」で文献を検索し、テキストマイニングで分析した。結果、看護師の看護管理のコンピテンシーに関する研究は人材育成、能力評価、支援・指導体制、キャリア開発、臨床実践能力など特徴があった。共

				著者：上野栄一，松浦純平，溝口みちる，田場真理，杉島優子

教　育　研　究　業　績　書

令和2年　3月　31日

氏名　　山﨑　陸世

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
看護学	精神看護学 ストレス レジリエンス　看護学生　臨地実習

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
1)看護研究（ケーススタディ）の指導 （毎年4～5名）	平成22年4月～ 平成29年3月	田北看護専門学校3年生が実習で担当した患者についてのケーススタディの指導を担当している。 学生は対象に実施した看護を振り返り、論文の一連の過程を通して、論理的思考を養うとともに、自分は看護するうえで何を大切にしているのか、看護とは何かを表現できていた。
2)基礎看護学「筋肉内注射」「点滴(静脈内注射)」「直腸内与薬」の看護技術演習にて教員作成のモデルの活用	平成22年4月～ 平成25年12月、 平成27年9月～ 平成29年3月	田北看護専門学校の専門分野Ⅰの科目「基礎看護学」の単元の「与薬」の技術演習で、静脈シュミレーターを使用し手技を学ばせるとともに、教員が作成したモデルを装着し、患者役も体験させた。 演習後のレポートに「針を刺す恐怖を感じたが、声かけで安心することを感じた」という感想があり、患者の心理状況が理解できていると考える。
3)基礎看護学「筋肉内注射」の看護技術演習にて協同学習（ジグソー学習法）の導入	平成27年9月～ 平成29年3月	田北看護専門学校にて技術演習にデモストは実施せず、協同学習法（ジグソー学習法）を導入している。「クラークの点」「ホッホシュテッターの部位」など選定方法に対して、教師役を担い自分が担当した学習課題をお互いに教え合う。正しい知識を伝授できるように、ひとり一人が責任をもって学び、教え合うことによって根拠がよく理解できたという感想が聞けた。
4)事例を通して考えさせる基礎看護技術 演習(「活動と休息」「清潔」「食事と排泄」「酸素吸入」「吸引」「与薬」「検査」)	平成22年4月～ 平成29年3月	田北看護専門学校の専門分野Ⅰの科目「基礎看護学」の単元の「活動と休息」の体位変換の演習で事例を設定し、その患者に合った安全で安楽な体位変換や移動を考えさせた。患者に触れることは単に作業的な援助を行うにとどまらず、安心やこころよさなど精神的な援助を行うことにつながった。単元「検査」では、検査時患者・看護師・医者などのロールプレイを実施させることで、患者の心理、看護師の役割を実感できたという感想があった。
5)精神看護学の講義に動画（視聴覚教材）の使用	平成26年4月～ 平成29年3月	田北看護専門学校の専門分野Ⅱ「精神看護学概論」の講義で学生より「精神看護ってよくわからない」「統合失調症の幻覚・妄想のイメージがわかない」などの意見があった。講義で精神看護のイメージをつかみ、そして実習でよりよい学びにつながるように映画や実際に精神障害者の出演しているテレビなどを授業のテーマに応じてこちらの学ぶ目的・意図を明確に説明し、視聴させた。視聴したあとグループワークをさせると、活発に意見交換ができ「実習に行ったらこんな看護がしたい」と具体的な感想を述べることができていた。
6)国家試験担当：他2名の教員とともに国家試験対策を実施している 過去問題の講義と解説授業（精神・基礎） 模擬試験の解説	平成27年4月～ 平成29年3月	田北看護専門学校にて他2名とともに国家試験担当をしている。3年間を通した対策を実施している。各学年の進度に合わせて3年間にわたって模擬試験のスケジュールを考え実施し、成績データの分析を行い、個別的に継続した学習支援を行っている。成績だけでなく精神面や学習環境面にも配慮して学生からは「学習方法が分かった」「成績が上がった」「不安が軽減した」などの感想が聞けた。

7)基礎看護技術演習：授業および演習の補助 「環境の調整」(ベッドメーキング)「活動と休息」「感染防止」(無菌操作)「清潔」「バイタルサイン」「呼吸」(酸素吸入・吸引)「食事」「排泄」(おむつ交換・陰部洗浄)(浣腸・便器)「採血」「注射法」など	平成29年4月～ 令和2年3月	奈良学園大学保健医療学部看護学科にて基礎看護学領域の授業・演習の補助として入っている。 セルフトレーニング（看護技術の動作確認チェック）では学生の技術の指導を実施している。学生からの意見の発表を促し、後期に入り学生間でも積極的な意見交換ができるようになってきている。 また動作確認する技術項目や到達度など教員間の会議で積極的に発言をしている。
2　作成した教科書，教材		
1)基礎看護技術モデル作成 「与薬」(点滴静脈内注射モデル)(直腸モデル)	平成22年4月～ 平成25年12月、 平成28年9月～ 平成29年3月	田北看護専門学校の専門分野Ⅰ基礎看護学「与薬」（1年次配当、1単位、40人クラス）において直腸モデルや筋肉内注射や静脈内注射のモデルを考案した。学生からは購入したデモ器は数に限りがあるが、作成したモデルも活用することでより多く技術を練習することができたという感想があった。 技術チェックは全員合格している。
2)「精神看護学実習要項」 実習評価「ルーブリック評価表」を作成	平成25年4月～ 平成29年3月	田北看護専門学校の専門分野Ⅱ「精神看護学実習」（３年次配当）において、実習目的、実習目標や具体的な学習内容、看護過程の記録方法などの要項を作成した。また実習の評価表には「ルーブリック評価」を作成し取り入れた。
3)国家試験担当	平成27年4月～ 平成29年3月	田北看護専門学校にて他2名とともに国家試験担当をしている。平成28年度は国家試験の傾向と対策資料を作成して学生に配布し指導をした。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
特記事項なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)基礎看護学の担当	平成22年4月～ 平成29年3月	田北看護専門学校で専門分野Ⅰの科目「基礎看護学」の単元「活動と休息」「清潔」「食事と排泄」「与薬」「検査」（1年次配当　40人）など3単位90時間もしくは2単位45時間を担当した。
2)基礎看護学「技術試験」の担当 技術項目の決定、事例、チェックリスト（評価表）作成	平成24年4月～ 平成25年9月	田北看護専門学校で専門分野Ⅰの科目「基礎看護学」単元の「技術試験」を担当した。技術試験の内容や評価表など担当した。
3)精神看護学の担当	平成25年4月～ 平成29年3月	田北看護専門学校で専門分野Ⅱの科目「精神看護学」の単元「精神看護学概論」「精神看護学方法論Ⅲ」（看護過程）（2年次配当　40人）2単位45時間を担当していた。 看護過程においても「ルーブリック評価」を作成し活用した。
4)臨地実習の担当	平成22年4月～ 平成29年3月 平成29年4月～ 令和2年3月	田北看護専門学校での臨地実習の精神看護学、看護統合分野（3年次配当）、基礎看護学、成人看護学Ⅰ実習（2年次配当）の実習指導を担当していた。 奈良学園大学では、基礎看護学実習Ⅰ、Ⅱ、成人看護学実習Ⅱ（慢性期）を担当している。
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
1)看護師免許 2)高等学校教諭一種免許（理科）	平成5年5月6日 ############	第792352号 平一一高一め第2925号
2　特許等		
該当なし		

3　実務の経験を有する者についての特記事項				

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） なし				
2.基礎看護学実習におけるフィジカルアセスメント技術の活用の実態		平成24年8月	第43回日本看護学会－看護教育－学術集会（於　岩手県盛岡市）	3年課程の看護専門学校4校の学生196名を対象に基礎看護学実習でのフィジカルアセスメント技術に関する質問紙を実施した。その結果、授業で学んだことを基に、臨地実習で体験を積み重ねることが重要であり、そのためには授業と臨地実習との連動性を強化した教育内容が必要であると示唆を得た。 共同研究者：山﨑陸世・中川利子・田畑典子・井上葉子他（本研究の発表者として中心となり研究に取り組んだ） 抄録集　P.85
3.視聴覚教材を用いたフィジカルアセスメントの教育効果および活用方法の検討		平成25年8月	第24回奈良県看護教員研究会	「基礎看護学実習におけフィジカルアセスメント技術の活用の実態を」の研究から学生が「看護師が何を観察し、どういう判断をしているか気づく視点が養われていないのではないか」と考え、看護場面を想定した視聴覚教材を作成し、その効果を検証した（呼吸器疾患の患者の設定で10分間の動画で8場面と学生が何を考えたのか整理するワークシートを作成)。 パイロットスタディとして看護専門学校２年生40名を対象とし、自記式質問紙および自由記述にて調査を行い、SPSSにて分析を行った。その結果、動画にて観察視点を絞ることで看護の視点を提供する一助となり学生のイメージ化につながったという結論に至った。 動画の場面設定・患者役や分析結果の考察等に関わった。 共同研究者：中川利子・田畑典子・山﨑陸世・立川訓代他 奈良県看護教員研究会会報
4.精神科における倫理についての授業方法についての検討		平成27年8月	第26回奈良県看護教員研究会	精神看護学実習で学生は倫理的な場面に遭遇することが少なくないと考えられ、そのため講義の中で倫理的感受性を高める必要があると考えた。本研究ではでは授業案を作成し、授業を実施をした後に学生のアンケート調査を行った。その結果より、患者の精神面を具体的に考えられるような事例の工夫の必要性の示唆を得た。 共同発表者：加納由紀子・丸田裕子・山﨑陸世他、 研究会会報　P.29～34
5.臨地実習における看護学生のストレスとレジリエンスについての実態		平成29年8月	第48回日本看護学会－看護教育－学術集会（於　香川県高松市）	臨地実習は学生にとってストレスが大きいことが指摘されている。学生のレジリエンスを発揮できれば、ストレスに対処できることが期待される。そこで本研究は、時期の異なる2つの実習の前後で、学生個々のストレス反応とレジリエンスの状態を調査した。その結果、ストレスがレジリエンスに及ぼす影響には個人差があり、個人の特性を理解した個別的な支援の重要性が示唆された。 共同研究者：山﨑陸世・平山亜矢子・井上葉子・丸田裕子他（本研究の発表者として中心となり研究に取り組み論文を書いた） 示説発表、そして論文が採択された 論文集　P.75-78

6.臨地実習における看護学生のレジリエンス育成に関する文献研究		平成30年8月	第49回日本看護学会－看護教育－学術集会（於　広島県）	臨地実習における学生のレジリエンスに関する研究論文を整理・分析することで、レジリエンス育成に向けた個別的な支援方法の示唆を得る目的で、医中誌Web、CiNii Articlesを使用し「看護学生」「レジリエンス」をキーワードに2010年から2017年に限定し、さらに「臨地実習」に関する記述が含まれている論文に絞り込み4件を対象文献とした。その結果、自尊心や情動面なども合わせた学生の感情を受容し、学生個々の適応過程を見極めた上でレジリエンス育成に向けた支援を行うことが重要であることがわかった。 共同研究者：山﨑陸世・井上葉子・平山亜矢子・葦原佐衣他(本研究の発表者として中心となり研究に取り組み論文を書いた) 示説発表、そして論文が採択された。 論文集p.59-62
7.テキストマイニングを用いた精神看護学実習における学生の学びの分析		平成30年10月	2018年度 NTT数理システム Text Mining Studio 研究奨励賞に応募	大学院生対象のソフト貸与版を借りて、 左記に応募した。 共同研究：山﨑陸世・溝口みちる・井上葉子(中心となり研究に取り組み論文を書いた)左記の「敢闘賞」を受賞した。
8.テキストマイニングを用いた精神看護学実習における学生の学びの分析		平成31年3月	第32回日本看護研究学会-第32回近畿・北陸地方会学術集会 （於　福井県立大学）	ブラッシュアップをして左記の学会に 投稿した。 平成29年度4月～11月に精神看護学実習を行った3年課程A看護専門学校3年生42名に対し、実習記録[精神看護学実習を終えて]を対象として、Text Mining studio 6.1を用いて分析を行い、精神看護学実習の目標との関連を検討した。その結果、受け持ち患者との関係性を築く中で患者の「生きにくさ」も感じることができ、社会復帰に及ぼす影響も理解できていたが、精神状態をアセスメントする技術も活用することを強化する必要性が得られた。 共同研究者：山﨑陸世・溝口みちる・井上葉子（本研究の発表者として中心となり研究に取り組んだ）示説発表。抄録集P.43 日本看護研究学会に論文投稿予定。
9.テキストマイニングを用いた精神看護学教育に関する研究の動向		令和元年8月	第30回奈良県看護教員研究会	本研究は看護基礎教育における精神看護学に関する研究論文の動向を明らかにする目的で、2019年6月に医中誌Web版を使用し、「精神看護学」「臨地実習」「看護基礎教育」をキーワード、期間を1997年から2019年とし検索を行った結果、268件の論文のタイトルを対象とした。 分析は計量テキスト分析ソフトKHCoderを用いて分析を行った。その結果、年代別の対応分析ではカリキュラム改正や精神医療の背景に伴う特徴が見られた。 共同研究：葦原佐衣・山﨑陸世 （発表者ではなかったが、中心となり研究に臨んだ。） 奈良県看護教員研究会で発表
10.テキストマイニングによる精神看護学に関すする研究の変遷と特徴	単著	令和元年10月	2019年度 NTT数理システム Text Mining Studio 研究奨励賞に応募 （結果は未）	上記で検索した268論文のタイトルについて分析ソフトText Mining studio 6.2使用して、1997年～2019年を3つの年代に分け分析を行った。その結果、学生の学びについては「学び－研究」から「学び－活用」「学び－評価」へと変化が見られ、カリキュラム変遷に伴い特徴的な語が認めれた。 大学院生対象にソフト貸与版を借りて、 左記に応募した。 この分析ソフトで分析を進めて、第33回 日本看護研究学会　近畿・北陸地方会 の示説発表に投稿予定である。 単著：山﨑陸世

11.テキストマイニングによる基礎看護学領域おける看護技術教育に関する研究の動向	単著	令和元年9月	日本看護技術学会 第18回学術集会	本研究は基礎看護学領域における看護技術教育に関する現状とその効果に関する研究の動向を明らかにすることを目的に 医中誌Web版を使用して、現行のカリキュラムが改正された2009年から10年間の期間とし、「看護基礎教育」「看護技術」「演習」「効果」をキーワードに検索した。 そのうち「基礎看護学」に関わらない論文を除いた70件の抄録を対象とした。 計量テキスト分析ソフトKHCoderを用いて分析した。その結果、看護技術教育で効果的な演習方法として、模擬患者の導入、講義と演習に共通の事例を用いること、学生自身による自己評価や自己教育力の向上が必要であるという示唆を得た。 単著：山﨑陸世 示説発表を行った。抄録集P.89
12.子育て世代を対象にしたラフターヨガ体験による心身の変化に関する研究		令和元年6月～現在に至る	令和元年度本学の学部共同研究費助成	左記の応募した結果、助成金をいただき研究を開始。 本研究は、子育て世代を対象にしたラフターヨガ体験による心身の変化を明らかにすることを目的に、対象者は30～40代の男女6名について、ラフターヨガをする群とコントロール群のクロスオーバースタディーによる研究を行った。生理学的指標としてユニオンツール株式会社ウエアラブル心拍センサ（心拍数、RRI、HF、LF LF/HFの値）、主観的指標として坂野らの「気分調査票」を用いて2019年8月に測定。現在結果を分析中である。 共同：山﨑陸世・井上葉子・三浦康代・大野寿美子・安藤和子・辻下守弘 本研究の中心となり、測定から分析にとり組んでいる。 次年度までに論文にして関連学会に投稿予定。
13.基礎看護学実習における困難さに向き合う看護学生のレジリエンスに関する研究	単著	平成30年～令和2年3月	奈良学園大学大学院 看護学研究科 精神看護学専攻 修士論文	近年、人間がストレスから立ち直るときに必要とされる自己回復力（レジリエンス）が注目されている。 基礎看護学実習に焦点を当て、学生の基礎看護学実習における困難さに向き合う看護学生のレジリエンスの発揮のプロセスを明らかにすることを目的に、3年課程看護専門学校の2年生を対象に半構造的面接法にて「臨地実習での困難な状況に対して学生はどのようにレジリエンスを発揮して乗り越えていくのか」インタビューを行った。現在13名のインタビューを実施し、修正版グラウンデッドセオリーアプローチ（M-GTA）を用いて分析を行った。その結果、【困難さに直面した自己と向き合う内的体験】でみられる《状況打破の転機となる自己の感情の変化》が、自分中心的な考えから患者に向き合う第一歩を踏み出す転機となり、【患者に向き合い看護を模索する行動】に至り、看護ケアの実施につながっていることがわかった。 単著：山﨑陸世 指導教官：西本美和

【保健医療学部】

《リハビリテーション学科》

教授

■ 飯塚　照史・・・・・1～28
■ 池田　耕二・・・・・29～72
■ 伊藤　健一・・・・・73～98
■ 大浦　智子・・・・・99～151
■ 柴田　政彦・・・・・152～182
■ 辻下　守弘・・・・・183～207
■ 西川　隆・・・・・・208～220
■ 橋本　雅至・・・・・221～308
■ 山形　力生・・・・・309～318

准教授

■ 阿波　邦彦・・・・・319～372
■ 藤田　信子・・・・・373～382

講師

■ 城野　靖朋・・・・・383～409
■ 滝本　幸治・・・・・410～441
■ 野中　紘士・・・・・442～487
■ 福原　啓太・・・・・488～519
■ 吉川　義之・・・・・520～547

助教

■ 笹野　弘美・・・・・548～556
■ 坪内　善仁・・・・・557～577
■ 中島　大貴・・・・・578～590
■ 野田　優希・・・・・591～601
■ 前田　吉樹・・・・・602～614

助手

■ 岩﨑　智子・・・・・615～619
■ 辻下　聡馬・・・・・620～621

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年　3月　31 日

氏名　飯 塚　照 史

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	リハビリテーション科学・福祉工学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）入学から卒業までの定期個人面談による学生の状況把握および助言	平成22年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の講師として平成22年度入学生および平成27年度入学生の担任を務めた．当該学生の入学から卒業まで，留年者も含めて総勢約80人に対し，毎年前後期併せて4回の定期面談に加え，成績低迷学生やその他問題のある学生に対して不定期面談を実施した．心理的問題を主とする学生については，学内に設置された学生相談室と連携し，対応を行った．問題ある場合には迅速な対応を行うい，学生の意識変容を促せた．その結果，退学者の減少に貢献できた．
2）リハビリテーション関連職種に対する総合的スプリント作製実習による装具療法の理解	平成22年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）および，理学療法学専攻の専門科目「義肢装具学実習」（3年次配当，1単位）において，スプリント作製を通じた装具治療の基本を教示した．具体的には，作業療法学専攻については8種類，理学療法学専攻については3種類の作製を通じて，原因組織別の拘縮矯正に対する評価技術やスプリント調整を行った．その結果，学生の理解度が向上した．
3）レポート課題の評価基準統一による学生へのフィードバック	平成22年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において，提出される課題レポートの評価基準をS，A1，A2，B1，B2などと8段階として統一し，それぞれの採点基準を設けた．これを学生にフィードバックすることで，実習に向けての自身の課題の明確化につながり，学生の動機が向上した．

事項	年月日	概　　要
4）コミュニケーション講座による実習への動機付け	平成25年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の講師として平成25年度3年次学生（40名），平成26年度3年次学生（30名），平成27年度3年次学生（35名）に対し，実習で必要とされるコミュニケーションについて，その学術的意義から理論，実践，倫理などを教示した．さらに，昨今の学外実習による学生の諸問題，特に精神的不調についても学問的知識を教示し，予防的意義を含めた．一連の取り組みについては，各回でアンケートを取った．その結果．学外実習に対して漠然とした不安が，「指導者との関係」などといった具体的な不安へとつながり，これを学生が認識することで予防的効果を見込めることが分かった．また，倫理的事項に対する全体討論を通じて，いわゆる接遇的コミュニケーションのみならず，医療倫理としてのコミュニケーションを理解することにつながった．一連の取り組みについては，大学教育に関する学会での発表を3回，1篇の論文を通じて周知に努めた．さらに，コミュニケーション教育について先駆的役割を果たされている桜美林大学リベラルアーツ群の教授や，リハビリテーション関連職種における養成教育での位置づけを強調される理学療法士などを招き，学内全体の取り組みとして周知に努めた．これの功績が認められ，平成28年度からの新カリキュラムにて授業化された．移行期間は，「身体障害作業療法学実習」およびホームルームなどで対応している．
5）チューター学生に対する定期面談	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学リハビリテーション学科のチューターとして，1期生，2期生に対し，定期面談を行い，生活状況，学習状況等を聞き，適宜指導を行った．とりわけ学習状況が芳しくない学生については，別途指導を追加し，その進捗を確認し動機付けに結びつけた．
2　作成した教科書，教材 1）小テストによる講義理解度の把握	平成22年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学Ⅰ」（2年次配当，1単位）において，小テストを作成し各回の講義終了後に実施し，講義理解度の把握に努めた．同時に講義に対する感想も求め，次回講義でこれに応えるという形式で展開した．これにより，学生の理解度は飛躍的に向上し，身体機能障害領域を志望する学生が増加した．
2）症例報告レポート作成を目的とした情報提供用資料	平成22年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において課題として提示する症例報告レポート用の症例情報提供資料を作成した．当該資料には，個人情報を保護したうえでの現病歴や既往歴，あるいは面接時の逐語録などを示した．これを基にしたレポート作成により学生は実践への理解度が向上した．

事項	年月日	概　　要
3）講義用補助教材	平成22年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門基礎科目「臨床運動学」（3年次配当，1単位）において，テキストに沿ったアウトラインについて資料を作成，配布している．さらに資料内には，関連事項として講師が経験した症例などを紹介する項目を設けて学生に興味を引き出すように工夫している．
4）体表解剖学における触診資料	平成28年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「臨床体表解剖学」（1年次配当，1単位）において，筋骨格の触診について再現性の高い資料を作成した．さらに，毎回触診した筋骨格に関する運動学的知識などを先取りで教示し，小テストを行った．これにより学生の解剖学への理解度が向上し，興味関心の高まりがある．さらに，ロードマップとして今後修得すべき知識を見せることで，勉学全般に対する動機づけにつながっている．
5）作業で語る事例報告（再掲）	平成27年4月 ～ 平成30年3月	星城大学リハビリテーション学部リハビリテーション学科作業療法学専攻の専門科目「身体障害作業療法学実習」（3年次配当，1単位）において，教科書として使用している．当該教科書では作業療法学の文脈上にある作業について網羅的に示され，さらに実践として豊富な事例報告が収められている．学生が率直に疑問に思う点について簡潔明瞭に述べられているため教科書として採用している．さらに，講義内では教科書を用いた症例検討の重要性を説き，学外実習において参考にするよう指導している．
6）Visual bodyを用いた人体構造の3次元的理解	令和元年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学の人体構造実習において，CGによる人体構造の理解を目的としたアプリVisual bodyを用いた資料作成あるいは講義展開により，筋や骨の3次元的理解を促した，さらに，これを用いた確認テストにより学生の理解状況の把握に努めた．
7）臨床実践動画を用いた疾病理解	令和2年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学の身体障害作業療法学および義肢装具学においては，対象者個人情報に留意し，自身の臨床実践場面を視聴させたうえで，当該疾患の理解を促した．学生は，身体機能のみならず，日常生活や社会的役割の制限に気づくことも可能となった．

事項	年月日	概　　要
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）星城大学再任評価	平成26年12月14日	学長，学部長による面接評価を受けた．入試広報委員会副部長としての活動による学内貢献，学生教育への尽力，研究領域としての科研費取得などが認められ，平成27年度から平成32年度までの再任が決定した．
2）星城大学学生による授業評価アンケート結果による評価	平成28年12月	星城大学において毎年実施している学生による授業評価アンケートによると，3年次学生に対する「義肢装具学」，および2年次学生に対する「身体障害作業療法学Ⅰ」，いずれについても，95%以上の学生から満足との高い評価をもらっている．
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催認定ハンドセラピスト養成カリキュラム「入門セミナー」，研修会講師	平成20年4月 ～ 現在に至る	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される入門セミナーにて，肘関節・前腕の機能解剖につき継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．
2）奈良県作業療法士会主催 現職者講習会「後輩育成・協業」，講師	平成22年4月 ～ 平成24年3月	現職者講習会として，有資格者を対象に後輩育成，協業について実践を通じた教示を行った．各年ともにおおむね50名程度の参加者がいた．
3）一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催認定ハンドセラピスト養成カリキュラム応用実践研修会「ハンドスプリントベーシックセミナー」，研修会講師	平成22年4月 ～ 現在に至る	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される応用実践セミナーにて，座学としてスプリントの力学，実践として作製実習につき継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．

事項	年月日	概　　要
4) 一般社団法人日本ハンドセラピィ学会主催 認定ハンドセラピスト養成講習会「機能解剖・触診セミナー」，研修会講師	平成23年4月 ～ 現在に至る	認定ハンドセラピスト養成カリキュラムの一環として毎年開催される基礎セミナーにて，手，手指の機能解剖と触診実習の講師として継続して講師を務めている．毎年，おおむね100名程度の参加者がいる．
5) 愛知県作業療法士会主催 現職者講習会「職業倫理」，研修会講師	平成24年4月 ～ 現在に至る	現職者講習会として，有資格者を対象に職業倫理について討論を通じた教示を継続して行っている．各年ともにおおむね100名程度の参加者がいる．
6) 星城大学元気創造研究センター助成研究 公開講座「リハビリテーション専門職養成課程におけるコミュニケーション教育」，報告「作業療法学生に対するコミュニケーション教育」	平成26年9月27日	本講座は星城大学元気創造センター助成研究として実施した学生のコミュニケーション教育についての研究成果を周知するために開催し，報告した．併せて講義も企画し，学生への教示も行った．
7) 星城大学FDセミナー 「科研費取得のポイント」，研修会講師	平成29年9月14日	これまで2度連続での科研費取得実績を評価され，学内FDセミナーでの講師を務めた．自身の経験を基に，成書で示される記載方法や研究の展開について教示した．
5　その他 1) 修士論文指導	平成27年4月 ～ 平成30年3月	星城大学大学院修士課程の学生1名に対して，研究指導補助教員として修士論文作成における研究計画策定から，データ分析，論文作成，発表資料作成に至るまでの一連を指導した．

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 作業療法士 修士（保健学） 博士（保健学）	 平成10年3月 平成12年3月 平成19年4月	 第20618号 広島大学　第16792号 広島大学　第4258号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1) 土谷総合病院リハビリテーション科 作業療法士	平成12年4月 ～ 平成14年3月	主に整形外科病棟に入院する患者および外来患者のリハビリテーション業務に従事した．外傷，先天性疾患に対して，筋力，関節可動域の改善，日常生活動作能力の向上を意図した作業療法を実施し，社会復帰へと導けるよう尽力した．併せて，在宅でリハビリテーションを行う訪問リハビリテーションも行い，施設から在宅へとシームレスな対応が出来るように他職種との連携も心がけた．

事項	年月日	概　　要
2）名古屋掖済会病院リハビリテーション科 作業療法士	平成14年4月 ～ 平成19年3月	整形外科の一専門分野である手外科領域のみを担当する作業療法士として，救急対応から医師と綿密な連携を取りながら，術前，術中，術後対応を行った．重度外傷にあっては，リハビリテーションが遅延することによって起こる障害が多いため，医師の手術の意図を踏まえた早期リハビリテーションを心がけた．
3）臨床実習における指導	平成14年4月 ～ 平成19年3月	名古屋掖済会病院にて常勤で在職中に大阪リハビリテーション専門学校延べ5人，星城大学リハビリテーション学部作業療法学科学生延べ2人に対し臨床評価実習，臨床治療実習を実施した．手の外科領域という特殊性があるものの，作業療法において共通である実践技術について指導した．また，作業療法だけでなく他職種の業務についても把握するために，手術見学や外来診察，病棟回診などにも同行してもらった．作業療法を実施する前に他職種が多くかかわっていること，作業療法士として評価，実践するべき事項があることを理解してもらうよう努めた．
4）有資格者に対する実践研修指導	平成14年4月 ～ 平成19年3月	名古屋掖済会病院にて在職中に，手外科リハビリテーションに対する実地研修の受け入れを行っており，三河地域より2名，豊田地域より2名，名古屋地域より3名の有資格者に対し，実技研修を指導した．具体的には症例の病態に対する評価，治療方針の立て方などを実践に即して指導，討論を通じて洗練化を図った．
5）一般社団法人日本海員掖済会名古屋掖済会 病院主催地域貢献事業エキサイ健康教室 「手と足と口の健康チェック」，研修会講師	平成29年7月18日	通年シリーズで行われる地域住民への啓発としての健康教室で講師を務めた．当該日においては，握力などの測定も行い，自身の健康に対する意識を高めてもらった．参加者および院内からの評価も高く，今後も継続して行うこととなっている．
4　その他 1）入試広報委員会としての活動	平成22年 ～ 平成30年3月	星城大学内における入試広報活動の要として，入学者増加対策やオープンキャンパスの企画，運営など入試広報活動全般にわたる対応を行っている．平成25年からの2年間は副委員長を務め，リハビリテーション学部における当該業務を一手に引き受けてきた．オープンキャンパスの運営については一部ルーティン化し効率化を図るとともに，教員帯同による高校訪問なども定着させた．
2）キャリア委員会としての活動	平成22年 ～ 平成30年3月	星城大学内における就職活動において要となるキャリア委員会にて一貫して対応してきた．リハビリテーション学部においては2年次からのキャリア教育を実施し，早期内定あるいは公的機関受験対応を軸として取り組んでいる．

事項	年月日	概　　要
3）広報委員としての広報活動	平成31年4月 ～ 令和2年3月	・入学実績のある高校を中心に6，7月の4日間に27校を訪問し，開学のご挨拶とともに作業療法学科に関する周知徹底を図った． ・高校教員対象説明会にて高校進路指導部および予備校担当者へ本学作業療法学科につき説明した． ・オープンキャンパスの企画，運営を行い，模擬講義および司会を担当した． ・高校内進学ガイダンスを延べ13校対応した． ・大規模進学相談会（夢ナビ，進路のミカタ）につき，講義を担当した．
4）研究倫理委員会としての活動	平成31年4月 ～ 令和2年3月	・研究倫理委員会委員として研究計画書の審査にあたった．
5）日本ハンドセラピィ学会理事としての活動	平成27年4月 ～ 現在に至る	会員数約700人の日本ハンドセラピィ学会において理事を務め2期目となる．2期目からは認定資格審査委員会事務局長の役を任ぜられ，認定ハンドセラピストの申請，更新，研修会運営に係る全体調整および報告のとりまとめ，など学会の根幹に関わる部分を担当している．
6）第29回日本ハンドセラピィ学会運営局長，学術局長としての活動	平成28年4月 ～ 平成29年4月	日本ハンドセラピィ学会の年次学術集会が名古屋で開催されるにあたり，名古屋大学手外科教室とともに，中日病院に所属する学会長とともに，実務的な作業を行った．当初は，学術局長として任命されたものの，運営局の業務遅延により中途から運営局長を兼任した．開催当日にあっては，過去最高の約800人の参加者を迎え大成功であり，これに貢献した．
5）第5回中部日本ハンドセラピィ研究会代表世話人としての活動	平成29年2月 ～ 平成29年2月	手外科専門医による一般社団法人日本手外科学会の下部組織となる中部手外科研究会においては，毎年研究会を開催している．この中部手外科研究会の医師の支持を受けて発足した中部日本ハンドセラピィ研究会においては，世話人会を組織し，中部手外科研究会と併催する形で4回の研究会を行ってきた．第5回にあっては，名古屋で行われることとなり，中部日本ハンドセラピィ研究会世話人会で指名され，中部手外科研究会で承認され，代表世話人となった．共催にあたり藤田保健衛生大学医学部整形外科の鈴木教授と折衝を重ね，新規的な研究会を企画しており，総勢400名程度の参加を見込んでいる．

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1. 作業で語る事例報告作業療法のレジメの書き方・考え方	共著	平成26年3月	株式会社　医学書院	作業療法における「作業」に着目し，その評価法と解釈について記したものである．本書はこれに基づき多数の事例が報告されている． A4判　全164項 編者：斎藤佑樹 共著者：友利幸之助，上江洲聖，澤田辰徳，飯塚照史 本人担当部分：第5章　生活に焦点を当てた事例報告の書き方　「生活の変化に向けて必要な作業を確認し目標設定を行った手外科事例」を単著． 伸筋腱断裂および手関節可動域制限を来した症例に対し，主観的な面接を中心として，機能的側面の評価とともに包括的に目標設定を行った．また，妻の逝去に伴う対象者の役割の変化を踏まえて，現実的かつ具体的な目標から，対象者とともにチームとして治療を進めた症例を報告した．機能的側面だけでなく，対象者の全人間的理解が重要であることを強調した．
2. リハビリテーション義肢装具学	共著	平成29年3月	メジカルビュー	リハビリテーション分野において重要な装具学の知識を教示した．本書の特養としては，豊富な事例を用いて具体的に示している点である． A4判　全461項 編者：清水順一，青木主税，飯塚照史 本人担当部分：Ⅱ装具　1章　上肢装具「肘装具」「手関節装具」，手部装具各論2「末梢神経障害」を単著． 肘，手関節について実践上で用いた独自性の高い装具を例示し，慣習的な装具との違い，利点，欠点，適用を述べたうえで，これを用いた症例の経過とともに最終成績を示した．
ハンドセラピィマニュアル（日本作業療法士協会編）	共著	令和2年2月	日本作業療法協会	日本作業療法士協会におけるマニュアルシリーズにて，評価に関して分担執筆した．当該マニュアルは日本における標準的なハンドセラピィ技術，知識の根拠となるものであり，その有用性は高い． 本人担当部分：Ⅱ評価　1 基本的評価 手外科疾患における基本的評価について注意点を踏まえて詳細に示した．

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文）				
1. 橈骨遠位端骨折に対するハドセラピィの実際	共著	平成20年3月	愛知作業療法，16号，p63-75	作業療法士あるいは理学療法士が臨床場面において処方され対応する機会の多い橈骨遠位端骨折におけるハンドセラピィについて述べた．特に，レントゲンなどの画像診断とともに観血的療法の成否を判断する重要性について強調した．具体的には，骨折部位とこれに対応するプレートとスクリューの位置関係と，骨接合後の固定性について述べ，その後の運動療法に必要な運動学的知識を教示した．併せて，骨折部以外の運動，特に手指の可動性を損なうことのないよう，早期対応が肝要であることも述べた． 本人担当部分：データ収集，解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，桂理，茶木正樹
2. 指骨骨折のハンドセラピィ	共著	平成21年3月	愛知作業療法，17号，p56-63	手の外科領域のおける作業療法において，指骨骨折は頻繁に関わることの多い外傷のひとつである．指骨骨折では，ハンドセラピィ導入の時期を間違えば拘縮となり，さらには隣接指にも影響する．物品の把持などの日常生活動作への影響も必至であることから，その対応について述べた．末節骨骨折では自験例から，DIP関節の屈曲拘縮の予防あるいはスワンネック変形への対応について，中節骨骨折では骨折部位により転位方向が異なることへの対応，基節骨骨折では，早期運動療法に関する基礎知識と対応について述べた． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文推敲 共著者：桂理，飯塚照史，茶木正樹
3. 手の腫れ評価法研究 －指周囲径を規定する因子について－ （査読付）	共著	平成21年9月	日本手外科学会雑誌，25巻5号，p724-726	客観的な手の腫れ評価法開発の前段階として，健常人の指周囲径を規定する因子を検討した．シルクブレードを用いて指の周囲径を測定し，年齢，性別，体重，利き手などの因子をステップワイズ法により選択し，規定因子を求めた．その結果，先天的，後天的因子の影響はなく，年齢と体重に関しては正の影響が，性別については女性の方が有意に指周囲径に影響していることを示した．同時に利き手の区別は影響しないことも示した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，茶木正樹，岡野昭夫，西川喜久子，平田仁，今枝敏彦
4. ZoneⅡ屈筋腱断裂における固定法とKleinert変法の経時的可動域の比較 （査読付）	共著	平成21年10月	日本手外科学会雑誌，25巻6号，p766－770	ZoneⅡ屈筋腱断裂における固定法とKleinert変法の可動域推移について後方視的に検討した．いずれの治療法においても，伸展可動域の獲得が成績に影響することを示した．さらに，術後6週時点で伸展可動域が－30度を超えるか否かが実践上の臨界点であることも示した．この点で，固定法に比べてKleinert変法が優れており，治療法としての利点として述べた． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，桂理，渡邉健太郎，村上恒二

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
5. 橈骨遠位端骨折術後ハンドセラピィパスの有効性について （査読付）	共著	平成22年7月	日本手外科学会雑誌，26巻4号，p225-229	橈骨遠位端骨折のハンドセラピィについては各施設で独自性の高い訓練を行っていることから標準化することが困難とされてきた．しかし，本研究ではそれまでの基礎的研究とともに，臨床成績との関連から一定時期の目標達成レベルを明確に示したうえでクリニカルパスを作成しその有用性を示した．同時にパス適用を見送るケースについての因子も明らかにした． 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲 共著者：桂 理，渡邉健太郎，飯塚 照史，今田晶博
6. Zone2屈筋腱断裂後のブロッキング訓練に関する筋電図学的検討 （査読付）	共著	平成22年11月	日本手外科学会雑誌，27巻2号，p20-23	ZoneⅡ屈筋腱断裂において多用されるブロッキング訓練について筋電図学的検討を行った．近位関節を固定することで筋収縮を減じられることが確認でき，縫合後の再断裂を防止するための方策として有効であることを客観的データによって示した．ブロッキング訓練については，当該損傷後のリハビリテーションにおいて非常に有効な方法であることが知られており，これを科学的に示した点で新規的であることも加えた． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，桂理，渡邉健太郎，村上恒二
7. 片側metacarpal hand2例の長期成績 （査読付）	共著	平成24年11月	日本ハンドセラピィ学会機関誌，5巻，p61-66	手指が欠損し，母指が損傷あるいは残存するものをMetacarpal Handと呼称する．本外傷では，リハビリテーション対応のみならず外科的対応も含めて治療の選択肢が複数あるため，目標設定に難渋することが多い．そこで，本研究ではリハビリテーション終了後10年程度が経過した患者を追跡し，機能評価およびアンケート聴取を行った．その結果，実施した治療に対しておおむね満足しているものの，特に感覚機能や巧緻動作に改善を求めているとのことであった．以上から，治療段階にあっては個々人が必要とする巧緻動作を主軸に置き，感覚機能の再建あるいはリハビリテーション的対応が肝要であることを述べた． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，桂理，池田聖，茶木正樹，渡邉健太郎
8. 高齢者の手の機能 （査読付）	単著	平成24年12月	シニアフィットネスリハビリテーション，5号，p22-23	高齢者に多い手の疾患とその対応を述べた．高齢者における手の疾患としては，変性疾患としてのヘバーデン結節や関節症などが挙げられることを述べ，実践としてスプリントを用いた治療についてその経過を紹介した．多くはスプリントにより緩解するものの，維持的療法にとどまることを限界として述べた．

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
9. 客観的臨床能力試験場面のビデオフィードバックによる臨床実習前教育の取り組み. （査読付）	共著	平成26年4月	作業療法，33巻2号，p181-190	学内で実習前に実施する客観的臨床能力試験に際し，ビデオフィードバックを用いた学習の効果について述べた．学生は，当該ビデオを用いた学習形態をとっており，有効であったと述べた者が8割を超えており，実習前の学習手段として有用である可能性を述べた． 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲 共著者：大浦智子，竹田徳則，藤田高史，古澤麻衣，木村大介，冨山直輝，林浩之，飯塚照史，坂井一也，今井あい子
10. 作業療法学生の臨床実習に対する意識の変容についての研究 （査読付）	共著	平成26年10月	星城大学紀要，14号，p43-56	作業療法専攻学生に対して，臨床実習前にストレスマネジメントを主眼とするコミュニケーション講座を開講し，その効果を学生アンケートからKJ法を用いて検討した．その結果，学生の不安は，当初漠然としたものであるが，後半には指導者や対象者との関係性構築に焦点化されており，その対策が必要であることを述べた 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲 共著者：綾野眞理，飯塚照史，今井あい子，竹田徳則
11. 滑車訓練における手関節主動筋の筋電位と握力の関係について （査読付）	共著	平成26年12月	日本ハンドセラピィ学会誌，7巻，p23-28	ハンドセラピィ領域で筋力増強目的に多用される滑車訓練について，実験的に検証した．手関節固定筋とともに，把持力を同期，解析した結果，10kg程度の負荷をかけてもその握力は最大握力の7割程度にとどまること，加えて手関節固定筋については最大握力発揮時の5割未満にとどまる事を報告した．以上から，握力増強には適さず，固定時における廃用性の筋力低下に対しての効果にとどまることを示した．さらに筋力増強効果としては，他の訓練法が有用である可能性を指摘したうえで，提案した． 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲 共著者：稲垣慶之，飯塚照史，桂理，服部順和，渡邉健太郎
12. 手指PIP関節周辺骨折におけるDIP・PIP関節可動域の推移 （査読付）	共著	平成27年5月	日本ハンドセラピィ学会誌，8巻，p16-21	手指PIP関節脱臼骨折のリハビリテーションにおける可動域推移につき検討し報告した．開始当初にDIP関節のみの運動を実施している群については，これと同期するようにPIP関節の可動性が改善するのに対し，当該運動を実施していない群については，その相関性が低くなっていた．解剖学的，運動学的構造から，非損傷関節であうDIP関節の運動が最終成績の向上に有用であることを述べた． 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲 共著者：茶木正樹，武藤光弘，木野義武，花村克己，飯塚照史，渡辺康太

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13. The optimal rehabilitation period for patients with distal radius fractures according to the MCID in DASH scores; a preliminary study (DASH MCIDを基準とした橈骨遠位端骨折に対する至適リハビリテーション期間に関する予備的検討) (査読付)	共著	平成28年4月	Journal of hand surgery-Asia-Pacific, vol.21(2), p1-6	手外科領域のおける患者立脚型評価としてのDASHについて，臨床的に意味のある差が17点であるとされており，これを用いて橈骨遠位端骨折の早期運動療法開始群と非早期運動療法開始群の効果を検討した．その結果，ベースラインからの得点変化が17点であっても，機能的な差が生じていないことが明らかとなった．そのため，手関節可動域や筋力の改善を指標としたリハビリテーションのアウトカムについては有用性が見出させない可能性があることを指摘した．また，検討結果から，現状のリハビリテーションの効果は長くとも受傷してから8週間程度であり，現状の12週間程度のリハビリテーションについては疑問が生じていることを述べた． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：Terufumi Iitsuka, Katsuyuki Iwatsuki, Hideyuki Ota, Hitoshi Hirata
14. Correlation of the Hand 20 with the International Classification of Functioning, Disability, and Health and comparison of the results with those of the Disability of the Arm, Shoulder and Hand (Hand 20とDASHのICFによる関連性について) (査読付)	共著	平成28年4月	Asian Journal of Occupational Therapy, vol.11, p27-33	著者も加わり名古屋大学手外科教室を主体として作成した，本邦における患者立脚型評価のHand20と世界的標準とされるDASHについて，その差異をICF概念へのリンクにて検討した．その結果，Hand20は手に限局する主観的困難感を聴取するのに対し，DASHは社会的不利について主軸を置いているものと捉えられた．以上とともに，2つの患者立脚型評価の得点を解釈するうえでは，対象者の測定範囲に配慮することが肝要であることを強調した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：Terufumi Iitsuka, Tomoko Ohura, Takashi Fujita
15. 作業療法学学生に対する臨床実習前コミュニケーション講座の試み (査読付)	共著	平成28年12月	日本作業療法教育研究，16巻1号，p23-29	作業療法学専攻3年次学生35名を対象として，臨床実習（以下，実習）に向けた対人コミュニケーション能力向上と心理的支援を目的とした講座を4回実施した．講座実施中の学生の実習に対する不安は，講座開始当初は指導者や対象者との「関係作り」であった．しかし，実習直前には「知識・技術不足」に対する不安が高まる傾向にあった．しかし，講座における指導者などとの対人関係を意図したロールプレイングやストレスマネジメントとしてのリラクゼーション方法の教示は，実習前不安の自己評価得点を軽減していた．一方，実習後のアンケートでは，コミュニケーション困難として対象者の疾患特性や沈黙，消極的態度といった状況に直面し，対人反応への戸惑いを感じていた．今後は作業療法実践におけるコミュニケーション特性を具体的に検討した上で，実習で想定される困難場面に対するロールプレイングや客観的評価に関する検討が必要であることを提案した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，今井あい子，竹田徳則，綾野眞理

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16. 橈骨遠位端骨折手術例におけるセラピィ終了時期に影響を及ぼす要因について （査読付）	共著	平成29年5月	日本ハンドセラピィ学会誌，9巻3号，p131－135	先行研究にて当研究グループではハンドセラピィパスを作成し，その有用性を述べてきた．しかし，パスに適用されない患者についての検討がなされていないため，実施した．その結果，骨折系と掌屈可動域，握力がその要因として挙げられ，これらに対する対策が良好な成績を安定して獲得するためのポイントであることを指摘した．また，握力増強に有用な訓練としてタオル絞りを提案した． 本人担当部分：データ収集，解析，論文推敲 共著者：稲垣慶之，桂理，飯塚照史，服部順和，渡邉健太郎
17. 臨床実習後作業療法学生におけるハンドセラピィに対する認識	共著	平成29年10月	日本ハンドセラピィ学会誌，10巻1号，p43－48	養成校作業療法学生の臨床実習後におけるハンドセラピィに対する認識を検討するために，作業療法特論（ハンドセラピィ）を選択した学生を対象として，提出レポートを用いた検討を行った．テキストマイニング手法により抽出された10コードを用いて主成分分析を行ったところ4つの成分に縮約された．また，主題分析による質的検討を踏まえると，学生はハンドセラピィを作業療法の一分野として認知はしているものの，その対象範囲は生活や作業と対極し，かつ作業療法士とは一線を画するものであるとの認識であることが示唆された．この要因として作業療法の定義と実践との乖離に対するジレンマの存在が推察され，卒前あるいは卒後教育にあってはハンドセラピィの定義と専門性，意義につき各分野との関連を念頭においた教示の必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，大浦智子
18. 脳血管疾患患者における回復期リハビリテーション病棟退院後の日常生活活動能力の変化および関連因子に関するアンケート調査	共著	平成30年6月	作業療法，38巻1号，p37-44	回復期リハビリテーション病棟退院後の脳血管疾患患者のADL能力は低下するとされ，退院前が最も高い能力を有するとされる．一方で慢性期脳血管疾患患者のADL能力と生活範囲，IADL能力やQOLは関連性があるとされるが，回復期病棟退院前を基準とした経時的変化との関連性の言及はない．本研究は脳血管疾患患者の退院前を基準とし在宅時とのFIM得点の比較，維持・改善と悪化に関わる因子探索を行った結果，移動項目に有意な低下を認め，FIM得点の維持・改善に関わる因子に生活範囲が関連していた．回復期の退院支援では，在宅時の活動範囲拡大を意図した指導でADL能力の維持・改善に寄与する可能性があった． 本人担当部分：研究計画策定，データ解析，論文推敲 共著者：久堀佐知，飯塚照史，児島範明，恵飛須俊彦

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
19．運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究―事前練習の有無および健常若年者と高齢者の比較―	共著	平成30年10月	日本ハンドセラピィ学会誌，11巻2号，p58－67	運動学習の過程における「認知段階」と「連合・自動段階」への対応は異なる．前者では新規的運動を認知するために言語的情報や生体信号をフィードバックするなどで強化，促進するのに対し，後者は反復する練習あるいは環境設定の異なる場面での運動が奏功する．したがって，ハンドセラピィにおける実践，とりわけ新規的運動獲得が主となる筋・腱移行術等を想定すると，当該段階を区別する必要性は高く，かつ客観的であることが望ましい．以上を基に本研究では，同時注意要求課題を与えた際の筋出力と筋電図振幅，ならびに前頭前野の活動領域から「認知段階」と「連合・自動段階」を区別する新規的指標を見出し，かつそれが若年者と高齢者に普遍的であるか否かを検証することを目的とした．結果，同時注意要求課題を与えた際の前頭前野活動領域は拡大し，かつ事前練習を行った者にあっては，運動習熟値（筋出力を筋電振幅で除した値）が増加する傾向にあった．本結果で認められた現象は，「認知段階」と「連合・自動段階」を区別できる客観的指標として応用できる可能性が示唆された．しかし，本研究における実験課題等については，再現性や客観性を担保するべく今後の検討が必要である． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集・解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，冨山直輝，稲垣慶之
20．外傷手の予後予測	共著	令和1年10月	日本ハンドセラピィ学会誌，12巻1号，p35-39	外傷手の予後予測について，戦略・戦術・アウトカムを基に，ハンドセラピィの対象疾患として頻度が高いと思われる代表的疾患に対しcritical pointとこれに関わるエビデンスについて述べた．手外科医との綿密な討論とチームワークで，外科的対応を含めた「戦略」および個々の局面での具体的な「戦術」を基に，ハンドセラピィでの「戦術」を立てる．並行してハンドセラピィ上の具体的な目標設定に沿って，これに反応するアウトカムについてICFを意識して認識することが重要である．加えて，最終成績を予想するための各時点のcritical pointによる中途結果の判断は，臨機応変な「戦術」の検討に資するものである． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集・解析，論文執筆 共著者：飯塚照史，稲垣慶之，渡邉健太郎，太田英之
（その他） 「招待講演」 1．橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィ	－	平成21年10月	長野県南信地区ハンドセラピィ勉強会 （飯田市立病院，長野）	ハンドセラピストにおいて基礎であり，処方される機会の多い橈骨遠位端骨折について，治療原理原則とともに押さえておくべきポイントについて教示した．
2．外傷手のハンドセラピィ	－	平成23年3月	久光製薬主催「大分外傷研究会」 （大分）	大分市を中心とした整形外科医師300名程度に対し，ハンドセラピストの立場から外傷手に対する手術，リハビリに至る一連のポイントを講演した．

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
3. 整形外科疾患における作業療法の考え方	－	平成23年7月	京都府士会（京都）	京都府士会主催にて，主に手外科領域における評価，治療法につき教示した.
4. リハビリテーションとスプリントについて	－	平成23年9月	イワツキ株式会社営業全体会議（東京都）	当該株式会社における営業部門に対し，セラピスト業界で対応しているスプリント療法について教示した.
5. レナサームスプリント研修会	－	平成24年9月	イワツキ株式会社主催研修会（東京都）	イワツキ株式会社の主催により，セラピストを対象とした研修会にて基礎知識から作製方法までを教示した.
6. 手外科領域の作業療法	－	平成26年3月	滋賀県作業療法士会主催学術部研修会 （滋賀県栗東市）	滋賀県士会主催にて，手外科領域における作業療法評価，解釈，治療法について実践例を用いて教示した.
7. 橈骨遠位端骨折	－	平成26年10月	滋賀県作業療法士会主催学術部研修会 （滋賀県栗東市）	滋賀県士会主催にて，橈骨遠位端骨折における対応のポイントについて教示した.
8. 臨床・教育・研究から捉えるハンドセラピィ	－	平成28年2月	九州ハンドセラピィ研究会第7回学術集会教育講演（福岡市）	現状における卒前教育の問題点から，今後の在り方を踏まえて，自身の研究との接点を述べ，ハンドセラピィの将来について教示した.
9. Hand therapy for distal radius fractures Current trends	－	平成30年11月	Asia pacific wrist conference 2019 （narita, Japan）	本邦の橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィについての研究結果，臨床実践，今後を教示した.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10. Therapy for hand trauma: The importance of cooperation between surgeons and therapists	-	平成31年3月	18th shanghai international plastic and aesthetic surgery conference (Shanghai, china)	本邦の外傷手に対するハンドセラピィについて，臨床実践上の取り組み，とりわけ医師との協働について具体的に説明した.
11. 外傷手の予後予測	-	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（北海道札幌市）	外傷手の予後予測について，治療戦略の立て方からアウトカムに至るまでを網羅的に伝えた.
12. 外傷手に対するハンドセラピィと効果判定について	-	令和元年5月	京都ハンドセラピィ研究会（京都）	外傷手のハンドセラピィにおけるアウトカムに着目し，その得点を解釈することの重要性について述べた．併せて，現在進行中の研究における中途報告も行った.
「シンポジウム」				
1. 患者立脚型評価の必要性	-	平成24年4月	日本ハンドセラピィ学会（横浜）	2000年代に入り急速のその重要性が叫ばれる患者立脚型評価について有用性を述べた.
2. DASH　MCIDを指標とした橈骨遠位端骨折術後リハビリテーションの至適期間の構築	-	平成26年2月	中部日本手外科研究会（下関）	橈骨遠位端骨折に対するリハビリテーションの至適期間について自身の研究データを基に述べた.
「成果報告書」				
1.学生のコミュニケーション技能向上に向けたプログラム開発と評価に関する研究	-	平成28年3月	星城大学元気創造研究センター助成研究	平成25年度から27年度までの助成研究についてその進捗および成果を報告した．年度ごとに対象となる学生が異なるにも関わらず，臨床実習前の学生の不安傾向が普遍的であることと，これに沿ったコミュニケーションプログラムが有効である可能性を指摘した.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2.「若手研究B」適切なリハビリテーション期間の決定に関わる因子の探索的研究	－	平成28年6月	科学研究費助成事業研究成果報告書	橈骨遠位端骨折に対するリハビリテーションはおおむね3か月で終了するが，その正当性は不明である．患者自己記入式の評価得点を指標としてデータを検討すると，術後3日程度から開始するリハビリテーションは支持されるが，その効果は8週間程度までであった．さらに，リハビリテーションの終了は医療者と患者の合意によって成り立っているため，双方のリハビリテーション継続に対する認識を加味した検討を行った．その結果，関節可動域や筋力などの客観的指標との関連は見当たらなかった．日常生活における手の使用を以て改善する部分が大半を占めている現状から，リハビリテーション期間は現状よりも短期間にするべきであることを指摘した．
3.運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究 － 健常若年者と高齢者の比較 －	－	平成29年2月	一般社団法人日本ハンドセラピィ学会 研究助成事業2016年度 学研究課題研究成果報告書	本研究では若年者および高齢者を対象に運動学習に相違があるか否かについて検討する事を目的とした．実験はrest（20秒）-task（30秒）を繰り返すブロックデザインとし，taskは3種類とした（A：n-back課題，B：最大つまみ力の3割を保持する課題，C：task Aとtask Bの混合課題）．データは近赤外線分光法（NIRS）による前頭前野の脳血流量（Oxy-Hb），および筋電図（第1背側骨間筋：FDI，橈側手根伸筋：ECR）とした．対象は，若年者4名（平均年齢21歳，女性），高齢者2名（67歳，80歳，女性）とし，ランダムに事前に一定のつまみ力発揮を十分に練習する群（事前練習群：若年者2名，高齢者1名）と，確認のみで練習をしない群（非事前練習群）に分けた．結果，task A，Bにおける脳血流量の差異はいずれの群にても認められなかった．一方で，task Cにおいては，脳血流量の差異はほとんど見られないにもかかわらず，事前練習群では特にECRの活動電位が漸減していた．未解析ではあるが，同様の傾向は高齢者にても認められた．今後，さらに解析を実施することで傾向を明らかにすることが出来るものと考えられる．本結果が共通となれば手外科領域における腱移行術などでの習熟度を示す方法論の検討に資するものと思われた．
4.「基盤C」健常人と腱移行術症例に対する前頭前野負荷と運動学習遅延に関する実証的研究	－	令和元年6月	科学研究費助成事業研究成果報告書	リハビリテーション分野での応用を視野に，運動学習の過程における「認知段階」および「連合・自動段階」の客観的区別を可能とする方法および指標の提案を研究目的とした．予備的検討結果に基づき，特定の課題について事前に十分練習をした者は，当該課題を遂行中に前頭葉活動を賦活するための課題を同時に与えても，効率性良く筋出力を発揮するものと仮定し検証した．事前に練習しない者と比較した結果，一部は仮説を支持する傾向が認められた．一方で，健常被験者において生来持ち合わせている運動経験の影響も考えられるため，患者群への応用は限定的であるものと考えられた．そのため，よりBalisticな運動としての指タッピング動作を課題としたところ，当該動作における筋収縮の効率性が，比較的明確な指標となる可能性が考えられた．今後は，臨床実践での応用が望まれる．

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表」 ＜国際学会＞ 1. Electromyographic Analysis of Flexor Digitorum Superficialis and Flexor Digitorum Profundus in Finger Blocking Exercises; Apreliminary Study with Two cases. （深指・浅指屈筋のブロッキング訓練における収縮様態について）	－	平成23年9月	The 5th Asia Pacofic Occupational therapy Congress（第5回アジア太平洋作業療法学会：タイ）	ブロッキング訓練時における深指屈筋と浅指屈筋の収縮状態と発揮出力との関係性を検討した．その結果，深指屈筋は発揮出力と比例関係にあるのに対し，浅指屈筋は一定の出力が発揮されないと収縮しない事を見出した．
2.A pilot study of influences of the thumb abduction limitations on the control of the rice-ball precision grip （母指外転制限による茶碗把持への影響に関する予備的検討）	－	平成26年6月	16th international congress of the world federation of occupational herapists（第16回世界作業療法士連盟大会：横浜）	模擬的に母指関節角度を制限し，茶碗保持への影響を筋電図および関節角度をパラメータとして比較検討した．直径11センチの茶碗保持においてMP関節可動域，母指球筋の筋積分値増加が認められた．実践にあっていずれかの関節に制限が認められた場合，当該関節および筋に対する配慮が必要であることがわかった． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：辻村雅美，飯塚照史，宮本定治
3. Occupational therapy approaches for bi-lateral metacarpal hands; A case report which have returned to work through proposing a treatment plan by patient’s desires （両側メタカルパルハンドに対する作業療法；患者の要望に合わせた治療方針提案により復職に至った一例）	－	平成26年6月	16th international congress of the world federation of occupational herapists（第16回世界作業療法士連盟大会：横浜）	両側の手指切断および母指の一部挫滅によるメタカルパルハンドの患者に対し，いくつかの治療方針を医師とともに提案しながら，本人の希望に沿った治療を行なった．結果的に足趾移植術を選択され，5年後の追跡調査においてもボタン操作や書字なども実施しており，有用であった． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，宮本定治，高見昌史
4. The effect of mixed tasks on pretraining for grasping tasks with a fixed gripping power: A preliminary study （つまみ力一定把持課題の事前練習に対する混合課題の影響：予備的検討）	－	平成29年11月	5th congress of the Asia Pacific Federation for Societies for Hand Therapy（第5回アジア太平洋ハンドセラピィ学会：フィリピン）	本研究では健常人を対象に，事前練習の有無が混合課題によって阻害されるか否かによってその客観的区別の可能性について予備的に検討した．結果，前頭前野における活動領域が大きいほど，一定のつまみ力に対する筋電図振幅が漸減していた．つまり，前頭前野の負荷をかけても末梢で学習が起きている状況であれば，運動学習が進行しているものと捉えられ，客観的指標の一つして提案した． Terufumi Iitsuka, Katsuyuki Iwatsuki,Hitoshi Hirata

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Preliminary study on the usability of a tri-axial accelerometer: Evaluation of how postoperative distal radius fracture patients use their hands in ADL （3次元加速度計の有用性に関する予備的検討：橈骨遠位端骨折後の患者の日常生活における評価）	共著	令和2年3月	APFSSH/APFSHT2020 （Melbourne, Australia） アジア太平洋手外科学会/ハンドセラピィ学会 （メルボルン，オーストラリア）	橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィでは，日常生活で不自由なく使用できる手の獲得を目標とする．これに対し，Lang CEらはウェアラブル加速度計での計測方法を開発し脳卒中患者に適用して上肢使用量の把握に有用であったことを報告している．本研究ではこの方法論を橈骨遠位端骨折患者に適用し，経時的推移および機能的結果との関連性について検討した．結果，受傷側手の使用時間は手関節角度，握力に，また，両手の使用時間と患者立脚型評価の間に正の相関関係が認められた．さらに，Total magnitude ratio（左右のvector magnitudeの比）が健常人の閾値以下の場合，機能的回復が劣る傾向にあった．以上から，ウェアラブル加
＜国内学会＞				
1. ZoneⅡ屈筋腱断裂に対する3週間固定法とKleinert変法の経時的可動域の比較	－	平成20年4月	第51回日本手の外科学会（筑波）	上記発表に加え，さらに詳細に検討し，DIP関節可動域の獲得には術後5週程度までに伸展角度―30度を獲得する事が良好な成績につながる事を示した．さらに，ブロッキング訓練の重要性についても示唆した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，発表 共同発表者：飯塚照史，村上恒二，桂理，渡邉健太郎
2. 手関節におけるjoint laxityと可動域の関連性について	－	平成20年4月	第20回日本ハンドセラピィ学会（筑波）	手関節におけるLaxityと可動域の関係を健常人にて検討した．結果，Laxityがあるほど，手関節可動域が多く，Laxityを導き出すような運動方法の必要性について示唆した． 本人担当部分：データ収集，解析，原稿推敲 共同発表者：清水亜衣，桂理，今田晶博，伊藤志乃，渡邉健太郎，飯塚照史
3. 手根骨の動きからみた橈骨遠位端骨折後の早期運動療法について	－	平成20年4月	第20回日本ハンドセラピィ学会（筑波）	手関節側面象から，RC関節とMidcarpal関節の可動性について患者群で評価した．結果，前者が良好に回復する群と後者が良好に回復する群に分けられ，前者に対してダーツスロー運動を利用した運動方法を提唱した． 本人担当部分：データ収集，解析，原稿推敲 共同発表者：伊藤志乃，清水亜衣，桂理，今田晶博，渡邉健太郎，飯塚照史
4. 手の腫れ評価研究第2報―指周囲径の左右差について―	－	平成20年4月	第20回日本ハンドセラピィ学会（筑波）	第1報を受け，健常人について300名対象に横断的調査を実施した．結果，指周囲径は年齢，性別，体重が影響していた．これらから，健常人の指周囲径を算出する相関式を示した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，発表 共同発表者：飯塚照史，茶木正樹，岡野昭夫，竹内佳子，恒川智帆，西川貴久子，平田　仁，今枝敏彦

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
5. 橈骨遠位端骨折術後ハンドセラピィパスの有効性について	－	平成20年4月	第20回日本ハンドセラピィ学会（筑波）	橈骨遠位端骨折に対するクリティカルパスの有用性について検討した．結果，パス群では不使用群より良好な成績を獲得していた． 本人担当部分：データ収集，解析，原稿推敲 共同発表者：桂理，今田晶博，清水亜衣，伊藤志乃，渡邉健太郎，飯塚照史
6. Metacarpal handに対するハンドセラピストの役割	－	平成20年5月	第2回奈良県作業療法学会（奈良）	初期治療後廃用手となっていた3症例を通して，セラピストとして考慮すべき点，あるいは医師との討論による補助手再建への実例を紹介した．パイロットスプリント等を通し，患者に具体的なイメージを持ってもらい，セラピストとしてすべきことを明確にした． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，発表 共同発表者：：飯塚照史，桂理，茶木正樹
7. 橈骨遠位端骨折術後ハンドセラピィパスの有効性について －第2報－	－	平成21年4月	第52回日本手の外科学会（東京）	第1報を受け，更に症例数を増やしバリアンスについても検討した．早期に目標可動域獲得できなかった症例についての因子についても示した．また，パス群では最大可動域に到達する日数が早い傾向である事も示した． 本人担当部分：データ収集，解析，原稿推敲 共同発表者：桂理，今田晶博，渡辺健太郎，飯塚照史
8. ブロッキング訓練に関する筋電図学的検討	－	平成21年4月	第52回日本手の外科学会（東京）	屈筋腱断裂後のハンドセラピィにて多用されるブロッキング訓練につきワイヤ電極による筋電図学的検討を加え発表した．近位関節のコントロールが重要であることを強調した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，発表 共著者：飯塚照史，桂理，渡邉健太郎，村上恒二

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
9. 橈骨遠位端骨折患者における　手関節laxityと掌背屈可動域の関連性について	－	平成21年4月	第21回日本ハンドセラピィ学会（東京）	患者例につき検討した．結果，健常人と同様にLaxityが手関節可動域に影響している可能性が示唆され，第1報にて示したLaxity運動の整合性が示された． 本人担当部分：データ収集，解析，原稿推敲 共同発表者：清水亜衣，桂理，今田晶博，池田聖，渡辺健太郎，飯塚照史
10. Metacarpal handに対するハンドセラピストの役割	－	平成21年6月	第43回日本作業療法学会（福島）	Metacarpal Handについて必要となる機能を4つ提案し，これに対するハンドセラピィ戦略が重要であることを示した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，発表 共著者：飯塚照史，桂理，池田聖，茶木正樹，渡邉健太郎
11. 動的回内外装具の適応について	－	平成21年7月	第3回奈良県作業療法学会（奈良）	動的回内外装具について，装具の紹介と適応につき検討した．骨性因子を除外し，軟部組織性拘縮を見極め，適切に導入することの重要性を示した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，発表 共同発表者：飯塚照史，茶木正樹，桂理

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
12. 滑車訓練における手関節主動筋の筋電位と握力の関係について	－	平成23年4月	第25回日本ハンドセラピィ学術集会（神戸）	ハンドセラピィ領域で筋力増強目的に多用される滑車訓練について，実験的に検証した．手関節固定筋とともに，把持力を同期，解析した結果，10㎏程度の負荷をかけてもその握力は最大握力の7割程度にとどまること，加えて手関節固定筋については最大握力発揮時の5割未満にとどまる事を報告した．以上から，握力増強には適さず，固定時における廃用性の筋力低下に対しての効果にとどまることを示した．さらに筋力増強効果としては，他の訓練法が有用である可能性を指摘したうえで，提案した． 本人担当部分：データ収集，解析，原稿推敲 共同発表者：稲垣慶之，飯塚照史，桂理，服部順和，渡邉健太郎
13. 加齢が知覚機能，運動機能，moberg pick up testに与える影響と関係性について	－	平成23年5月	第11回東海北陸作業療法学会（福井市）	年齢別の知覚機能につき調査し，加齢に伴い知覚が低下することを示した． 本人担当部分：データ収集，解析，原稿推敲 共同発表者：植田寛，飯塚照史，川崎慎二
14. 終末期患者に対してAid for Decision making Occupation Choiceを使用し主体的な作業選択と協働が可能であった一症例	－	平成23年6月	第33回近畿作業療法学会（兵庫）	患者の希望を焦点化するツールであるADOCを終末期患者の聴取に用いた．患者が主体的に実施したい作業が選択され，実施した結果，家族とともに充実した余生が過ごされたと思われた． 本人担当部分：研究計画策定，原稿推敲 共同発表者：児島範明，飯塚照史，澤田潤，宮本定治
15. 片側metacarpal hand2例の長期成績	－	平成23年7月	第23回日本ハンドセラピィ学会学術集会（青森市）	リハビリテーション終了後約10年が経過した症例に対し使用感，必要な機能について聴取した結果を示した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，発表 共同発表者：飯塚照史，渡邉健太郎，桂理，池田聖

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16. 臨床実習前後のコミュニケーション講座の効果に関する探索的研究	－	平成24年2月	第18回日本作業療法教育研究学術集会（東京）	作業療法学専攻3年次学生35名を対象として，臨床実習（以下，実習）に向けた対人コミュニケーション能力向上と心理的支援を目的とした講座を4回実施した．講座実施中の学生の実習に対する不安は，講座開始当初は指導者や対象者との「関係作り」であった．しかし，実習直前には「知識・技術不足」に対する不安が高まる傾向にあった．しかし，講座における指導者などとの対人関係を意図したロールプレイングやストレスマネジメントとしてのリラクゼーション方法の教示は，実習前不安の自己評価得点を軽減していた．一方，実習後のアンケートでは，コミュニケーション困難として対象者の疾患特性や沈黙，消極的態度といった状況に直面し，対人反応への戸惑いを感じていた．今後は作業療法実践におけるコミュニケーション特性を具体的に検討した上で，実習で想定される困難場面に対するロールプレイングや客観的評価に関する検討が必要であることを提案した． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，解析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，今井あい子，竹田徳則，綾野眞理
17. 新人教育の効果に影響を与える因子の検討	－	平成25年6月	第48回日本理学療法学術大会（名古屋）	新人理学療法士に対する教育の効果に影響する因子についてアンケート調査を説明変数として統計学的検討を行った．その結果，教育効果は認知領域の質とともに，自身の考えを発表する症例検討などの因子の影響が強かった．したがって，理学療法士の新人教育にあっては能動的に発表できる機会が重要であることが示唆された． 本人担当部分：統計学的解析，原稿推敲 共同発表者：山本浩基，榎七子，道弘裕之，飯塚照史
18. 手指・母指損傷後の患者を対象とした自己機能・能力障害評価表の開発	－	平成26年4月	第26回日本ハンドセラピィ学会（沖縄）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，母指・手指で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて24項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：原田康江，佐藤彰博，野中信宏，飯塚照史，桂理，安部幸一郎
19. 逆説性歩行を用いた課題志向型訓練に取り組み，歩行開始遅延・歩行中のすくみ足に変化が見られた一例	－	平成26年10月	第8回パーキンソン病・運動障害疾患コングレス（京都）	姿勢反射障害・筋強剛の症状によりすくみ足・動作緩慢が出現し，トイレ動作時または移動時に困難を感じている初期パーキンソン病患者に対し，先行研究で示されている外的手掛かりに加え，これに方向転換課題を組み込むことで，より生活動作内容に近い状況を設定した．その結果，自覚・他覚ともに歩行速度・動作緩慢は改善し、トイレまでの歩行動作質向上が得られた． 本人担当部分：研究計画策定，原稿推敲 共同発表者：金坂有紀，児島範明，宮本定治，飯塚照史，梅本安則

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
20. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発-肘部管症候群-	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，肘部管症候群で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて20項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：野中信宏，佐藤彰博，原田康江，飯塚照史，桂理，阿部幸一郎
21. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発-橈骨遠位端骨折	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第１期である本研究では，橈骨遠位端骨折で特異的に支障をきたすと考えられるADL項目を抽出し，因子分析にて26項目に絞った． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：桂理，佐藤彰博，野中信宏，原田康江，飯塚照史
22. 手指・母指損傷後の患者を対象とした自己機能・能力障害評価表の再現性と妥当性	-	平成27年4月	第27回日本ハンドセラピィ学会（東京）	ハンドセラピィ学会受託研究であり，疾患特異的QOL評価表の開発を開始した．第2期である本研究では，母指・手指損傷に関して第１期で試作した評価表の再現性と妥当性を検証した． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿推敲 共同発表者：原田康江，佐藤彰博，野中信宏，飯塚照史，桂理，阿部幸一郎
23. コミュニケーション講座受講学生の実習直前の不安要因と実習成績との関連に関する探索的検討	-	平成27年10月	第20回日本作業療法教育研究学術集会（奈良）	養成教育過程における臨床実習前に学生に対して職業倫理の涵養も踏まえたコミュニケーション講座を実施した．学生の実習前の不安は多種多様であり，さらにこれと実習における評価得点には関連性はなかった．しかし，実習に対する不安傾向の特徴から，今後の講座展開に資する示唆を得た． 本人担当部分：研究計画策定，データ分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，今井あい子，綾野眞理

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
24. 橈骨遠位端骨折手術例におけるセラピィ終了時期に影響を与える要因.	-	平成28年4月	第28回日本ハンドセラピィ学会（広島）	先行研究にて当研究グループではハンドセラピィパスを作成し，その有用性を述べてきた．しかし，パスに適用されない患者についての検討がなされていないため，実施した．その結果，骨折系と掌屈可動域，握力がその要因として挙げられ，これらに対する対策が良好な成績を安定して獲得するためのポイントであることを指摘した．また，握力増強に有用な訓練としてタオル絞りを提案した． 本人担当部分：データ収集，解析，原稿推敲 共同発表者：稲垣慶之，桂理，飯塚照史，服部順和，渡邉健太郎
25. 手指屈筋腱断裂の術後成績不良因子とセラピィのアウトカム評価について	-	平成28年7月	第16回東海北陸作業療法学会（金沢）	後方視的検討により手指屈筋腱断裂の成績を検討した．ROC解析の結果，術後６週時点におけるカットオフ値が見出され，臨床的な指標となる可能性が示唆された． 本人担当部分：データ収集，解析，原稿推敲 共同発表者：稲垣慶之，服部順和，飯塚照史，太田英之，渡邊健太郎
26. 橈骨遠位端骨折に対する掌側ロッキングプレート固定術後のリハビリテーションにおけるHand20のMinimal Clinically Important Difference	-	平成29年4月	第29回日本ハンドセラピィ学会（名古屋）	橈骨遠位端骨折後のハンドセラピィにおいて多用されるHand20の臨床的に意味のある差（MCID）を検討した．結果，術後４周をベースラインとした時に，12週時点で33点以上の変化がある場合に，患者も満足するという結果であった． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，岩月克之，西塚隆伸，平田　仁
27. 運動学習段階を捉える新規的指標の開発に関する基礎的研究；健常若年者と高齢者の比較	-	平成30年4月	第30回日本ハンドセラピィ学会（東京）	本研究では，同時注意要求課題を与えた際の筋出力と筋電図振幅，ならびに前頭前野の活動領域から運動学習段階を区別する新規的指標が若年者と高齢者に普遍的であるか否かを検証することを目的とした．結果，同時注意要求課題を与えた際の前頭前野活動領域は拡大し，かつ事前練習を行った者にあっては，運動習熟値（筋出力を筋電振幅で除した値）が増加する傾向にあり，若年者と高齢者で共通であった．しかし，本研究における実験課題等については，再現性や客観性を担保するべく今後の検討が必要である． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，冨山直輝，稲垣慶之

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
28. 患者および医療者側のハンドセラピィ継続要否を基とした橈骨遠位端骨折後のリハビリテーション至適期間策定に関する探索的研究	－	平成31年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	本研究では，「患者，セラピスト双方におけるハンドセラピィ効果の認識を通じて治療継続の要否を判断している」と仮説を立て，これに影響する因子の特定を目的とした．結果，ハンドセラピィ継続の要否におけるセラピストと患者間の齟齬は，術後8週以降で顕著であり，影響因子として，セラピスト側では機能的因子，患者側ではHand20が一貫して挙げられており，双方でハンドセラピィ効果を判断する指標は異なるものと推測された．一方で，共通因子としてのHand20があることから，これを主要評価項目としたハンドセラピィ至適期間の策定が望まれた． 本人担当部分：研究計画策定，データ収集，分析，原稿作成 共同発表者：飯塚照史，加藤宗一，岩月克之，平田仁
29. 手外科疾患における疾患特異的QOL評価表の開発　-橈骨遠位端骨折質問票試案の再現性・妥当性の検証-	共著	平成31年年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	橈骨遠位端骨折に対するハンドセラピィ効果を判定するための患者立脚型評価表について述べた，本発表ではその再現性と妥当性を検証し，他の評価表と比較しても遜色ないことを確認した．
30. 橈骨遠位端骨折術後の抑うつは満足感に関連するか　―多施設間研究―	共著	平成31年年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	抑うつとは，気分の落ち込みや興味・喜びの喪失などうつ症状が出現している状態のことであり，橈骨遠位端骨折の術後成績と関連があるとされている．抑うつが橈骨遠位端骨折の術後成績に影響するのであれば，患者の満足感にも影響する可能性があると考えられる．検討の結果，術後の抑うつと，手の機能の一部に関連があったが，患者が手の機能に満足する時期やリハビリテーション終了を希望する時期との関連はなかった．よって，橈骨遠位端骨折術後の抑うつは満足感に関連しないと考えられた．
31. 外傷手の予後予測	共著	平成31年年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	患者が必要とする手を念頭に置いた予後予測は，Goal settingに資するためハンドセラピィでの戦略面を計画するうえで必須となる．外傷手の初療時においては，損傷組織と修復組織が一致する場合と，廃物利用あるいは機能転換を併せて行うといったように一致しない場合があり，それぞれに考慮すべきポイントは異なる．前者においては，損傷状況を踏まえて治癒機転を予測したリスク管理が予後に影響する．後者においては，如何にusefulとするかを念頭に置き機能面のみならずperformanceを向上するといった観点が必要となる．いずれも主治医あるいは術者，患者との信頼関係の下に成り立つことは言を俟たない． 以上の背景を基に本レクチャーでは，ハンドセラピィにおいて比較的頻度の高い外傷として，屈筋腱損傷，伸筋腱損傷，骨折（主に橈骨遠位端骨折），末梢神経障害，手指再接着術後，手指切断に焦点を当て，その予後に影響する因子あるいは臨床上のcritical point（臨界点）とその対応方法等について概説した．

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
32.患者および医療者側のハンドセラピィ継続要否を基とした橈骨遠位端骨折後のリハビリテーション至適期間策定に関する探索的研究	共著	平成31年年4月	第31回日本ハンドセラピィ学会（札幌）	橈骨遠位端骨折後に最大限の機能的回復を得るには1年以上の期間を要する（Swart E, 2012）ため，短期的かつ費用対効果に優れるハンドセラピィ至適期間の策定が望まれ，Cochrane review（Handoll H, 2015）においても強調されている．一方で，口頭指導が定型的なハンドセラピィよりも機能的回復に優れることが報告されており（Souer JS, 2011），その効果を機能的因子のみで説明するには限界がある．本研究では，「患者，セラピスト双方におけるハンドセラピィ効果の認識を通じて治療継続の要否を判断している」と仮説を立て，これに影響する因子の特定を目的とした．その結果，ハンドセラピィ継続の要否におけるセラピストと患者間の齟齬は，術後8週以降で顕著であり，影響因子として，セラピスト側では機能的因子，患者側ではHand20が一貫して挙げられており，双方でハンドセラピィ効果を判断する指標は異なるものと推測された．一方で，共通因子としてのHand20があることから，これを主要評価項目としたハンドセラピィ至適期間の策定が望まれる．
33.外傷手に対するハンドセラピィ戦略と効果判定について	単著	令和1年5月	京都ハンドセラピィ研究会（京都）	外傷手の治療におけるアウトカムとハンドセラピィ技術につき詳細に解説した．
34.関節外骨折に対する手術例のセラピィ	共著	令和1年9月	第12回手関節外科ワークショップ（奈良）	橈骨遠位端部における関節外骨折はA0分類のA2およびA3に該当し，60歳以降で高頻度となることからosteoporosisの影響が示唆される．したがって，骨折の連鎖を予防し健康寿命の延伸に資するためには，日常生活において十分に使える手での早期社会復帰が望ましい．これに対する特異的なハンドセラピィ手技は存在しないものの，前述の背景を踏まえると，如何に早く回復させ，それをどのようなアウトカムで判断するのかが最大の関心事であると捉えられる．以上を基に，本シンポジウムではハンドセラピィパスの紹介，外科的対応も含めた早期回復への工夫，新規的アウトカムの提案の3点を通じ，関節外骨折に対するセラピィについて述べた．

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
＜研究会＞ 1. リハビリテーションが終末期がん患者の希望と成りえた一例	－	平成23年10月	第37回京滋緩和ケア研究会（京都）	終末期のがん患者に対し，患者の要望に沿って機能的改善を主眼とした作業療法を展開した．改善と増悪を繰り返す結果となったが，本人は訓練そのものに意義を見出していた． 本人担当部分：研究計画策定，原稿推敲 共同発表者：沢田潤，片岡豊，飯塚照史，垣見亮，梶山徹

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名　池田　耕二

研究分野	研究内容のキーワード
リハビリテーション科学、理学療法学、教育工学	理学療法学・理学療法教育、教育工学

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）図示化教材と臨床現場を体験できるスライド教材を用いたシュミレーション教育の実践	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当科目：理学療法治療学Ⅱ 授業は，暗記型の授業ではなくできるだけ理学療法とはどういったものか考えることができるような授業にした。そのために授業資料は図によって見やすくレイアウトしたものを用いたり，臨床現場のスライド等をみせつつ，学生自身に実際現場に立てばどういった態度や評価，実践を行うかを問いながら，シュミレーショを交え学生とともに検討するスタイルにした。また，ときには勉強の仕方や資料の調べ方など，実践現場で臨床を行いながらどのように勉強していくのか等を，経験を交えて教示した。 その結果，学生は理学療法実践するにあたって自分に何が足らないかを再認識し，自ら勉強しなければならないという姿勢を学ぶことができたと考える。
2）ペイパーペイシェントとインターネット活用による認知スキルトレーニングの実践	平成23年4月 ～ 平成26年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科　担当科目：理学療法技術実習2，総合技術特別実習3 授業は，理学療法の認知スキル，つまり技術の一つとしての理学療法臨床推論について講義した。ペーパーペイシェントを用いて問題を抽出し，それを基に仮説生成しながら理学療法プログラムを立案する作業を行った。また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した。その結果，問題を解決していこうとする姿勢や具体的な解決方法を学ぶことができた。
3）個々の学生の習熟度に合わせた学外実習指導	平成24年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：理学療法体験実習，評価実習，総合臨床実習 学外施設で行われる各臨床実習を，個々のレベルに合わせて円滑に行えるようにするため，実習前には各学生と個人面談を行い，知識の習熟度，コミュニケーション能力，その他，不安なことを確認し，それを学外施設の指導者と共有しながら実習を行った。必要に応じて実習前に実技練習を行ったり，また何度も学外施設に出かけたり，学生との面談を繰り返したりした。 これにより学生のレベルに合わせた実習が可能となり，個々の学生が成長できた。

事項	年月日	概　　要
4）チーム別体験学習による教育実践	平成26年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当科目：日常生活活動学演習 授業では，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価法を教授し実践させた。また，障がい別に日常生活活動や生活関連動作の評価や動作指導，介助方法等についても，疑似体験させ理解を深めさせた。チーム別にレポートをまとめさせることでチームアプローチの重要性を体験させ，実際の現場で口頭指導ができるような体験も取り入れた。これにより日常生活活動における評価や指導力がついた。 また，学年によっては理解を深めるために，班長には別に1コマ時間を作り，実践を教授し，それを伝えさせる練習も加えた。これにより学生の学習も進んだ。
5）高齢患者の動画教材を用いた教育実践	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当科目：老年学 大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：老年期疾病論，老年期障害理学療法 授業では，学生があまり触れることない高齢者の身体的特徴をはじめ，疾患，環境についての講義を行った。その際には実際の患者の動画やデータを基に臨場感をもたせ，本学問と理学療法との関わりについて講義した。これからの高齢者には，地域における転倒，認知症，腰痛，生活習慣病に対する予防理学療法が大切になってくることも教授し，理解を深めた。これにより高齢者理学療法の実態を理解し，興味をもって老年学を学習できるようになった。
6）ペイパーペイシェントとインタ-ネットを活用したチームアプローチ実践	平成26年9月 ～ 平成29年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 担当科目：チームリハビリテーション特論 授業は，理学療法におけるチームアプローチによる臨床推論について講義した。 ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，それを基に仮説を生成しながらチームアプローチによって理学療法プログラムを立案する作業を行った。また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した。これによりチームアプローチによる臨床推論と理学療法プログラムの立案能力が養われた。
7）終末期・がん患者リハビリテーションにおけるスライド教材の作成と教育実践	平成28年9月 ～ 令和2年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 担当科目：基礎医学特論Ⅰ 授業では，一般病院，地域におけるがんリハビリテーションについて教授し．生活の質を高めるための実際の工夫も加え，興味をひくように展開した。その際は，触れる機会の少ない終末期がん患者のリハビリテーションの風景のスライド教材を作成し，「生」や「死」，支援、ケアについて考えてもらうようにした。これによりがんリハビリテーションに対する知見を深めることができた。

事項	年月日	概　　要
8）予習，体験，復習シートを用いた訪問リハビリテーションにおける教育実践	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当科目：地域リハビリテーション 本授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた。また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した。さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした。 また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる。そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った。これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた。
9）運動学I（総論）ワークブックを用いた教育実践	令和元年9月 ～ 令和2年3月	奈良学園大学　保健医療学部 リハビリテーション学科 担当科目　運動学I（総論） 授業では、運動学の総論を講義した。しかし、その範囲は非常に広く、どれも重要事項であるため、学生がどこから手をつけて良いかわかりづらくなっている。そのため、学生の学習意欲が下がる危険性も大きい。そこで、学習の方向性を示したり、運動学の理解を促すワークブックを作成し、それを用いて講義を行なった。これにより、自己学習を促し、学習意欲の低下を防ぐことができた。
２　作成した教科書，教材		
1）図式化教材の作成	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校 担当科目：理学療法治療学Ⅱ 整形疾患に対する理学療法において，図で見る教材を作成し，視覚にうったえる教材を作成し，それに基づいて教育を行った。これにより教科書に苦手意識をもつ学生も興味をもって臨むようになり学習効果が向上した。
2）理学療法士のための物理療法臨床判断ガイドブック（再掲）	平成19年9月 ～ 平成23年12月	病院現場における臨床実習指導 物理療法における浮腫に関する個所を担当し，ディシジョンツリーによって，わかりやすく治療を判断できるようにした（出版）。

事項	年月日	概　　要
3）認知症後期高齢者に対する理学療法の実践知の構造化による教材作成	平成20年4月 ～ 平成23年12月	病院現場における臨床実習指導 学生にとって対応が難しいとされる認知症患者の理学療法を指導する際に，認知症後期高齢者に対する理学療法から実践知を構造化し，図示化したものを活用し，臨床実習指導を行った。これにより学生は，認知症後期高齢患者の理学療法における方向性や概要が把握しやすくなり，学習効果が進んだ。
4）臨床における動作分析についてのプレゼンテーション資料（教材）の作成	平成22年6月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 特別講義：動作分析 病院における患者の状態を観察し，１）病態を探る，２）その能力から何ができるかを考える，３)動作の意味を考える，といったように動作分析の重要性や活用方法をわかりやすくするプレゼンテーションを作成した。これにより動作分析学習における導入が容易となり学習効果が向上した。
5）臨床における高齢者の理学療法(運動療法)実践に向けたプレゼンテーション資料（教材）の作成	平成23年7月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部　理学療法学科 特別講義：臨床推論 高齢者の問題構造の把握や理学療法（運動療法）の設定方法を学ぶことを目的に，プレゼンテーションを作成した。これにより多角的な視点が必要となる高齢者理学療法の一端を体験することができるようになり学習効果が向上した。
6）高齢者理学療法における動画教材の作成	平成26年4月 ～ 平成31年3月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当科目：老年学 大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：老年期疾病論，老年期障害理学療法 授業では，高齢者の現場の実際の動画やデータを基に臨場感をもたせながら，本学問と理学療法との関わりを講義した。これにより高齢者の理学療法が実感できるようになり，学生は興味をもって学習できるようになった。
7）終末期理学療法の実践（再掲）	平成27年4月 ～ 平成30年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目　老年期障害理学療法学 終末期理学療法実践に関する教育方法を，熟達度に合わせて分かりやすく紹介した（出版）。

事項	年月日	概　　要
8）地域リハビリテーション学習における予習，体験，復習シートの作成	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当科目：地域リハビリテーション 本授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた。また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した。さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした。 また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる。そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った。これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた。
9）局所と全身からアプローチする運動器の運動療法（再掲）	平成29年8月	運動器の運動療法の理解を深めるために，運動療法における歴史をまとめて紹介した（出版）。
10）訪問リハビリテーション アドバイスブック（再掲）	平成30年3月	在宅での終末期にリハビリテーションにかかわるセラピストに求められる視点や、対象者と家族、周辺の人々とのかかわり方、セラピストの在り方について提言した。
11）運動学ワークブック	令和元年9月 ～ 令和2年3月	運動学（総論）における学習意欲の低下を防ぎ、自己学習を促すために、ワークブックを作成し、それを授業に活用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）　臨床実習施設における臨床実習生のアンケート調査	平成20年4月 ～ 平成23年3月	臨床実習施設において臨床実習生にアンケート調査を行い毎回臨床実習指導の評価を行った。その結果，評価としては「実習生に適した指導をしてもらえた」，「努力を継続することの必要性を学べた」，「親切丁寧に指導してもらえた」等があげられた。

事項	年月日	概　　要
2) 大阪行岡医療大学における授業評価アンケート調査	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大学授業評価の結果は，担当科目「日常生活活動」「日常生活活動演習」「老年期疾病論」「老年期障害理学療法」「地域リハビリテーション」「理学療法概論」において，「十分理解できた」，「理解できた」，「授業に情熱を感じた」等の評価を受けた。また，卒業研究ゼミにおいては，一番の人気ゼミとなっている。
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)　臨床実習指導	平成5年6月 ～ 平成23年3月	臨床における理学療法業務において，実習指導者として理学療法の理論・技術の教授，実技の援助を実習生に対して行った。合計9校から，計83名の実習生を指導した。 　臨床現場で症例を数例担当し，理学療法実践を学ぶだけでなく，それ以外にもどのような準備や実践，チームワークが必要かも学んでもらった。また医療や社会のどのようなルールに基づいて理学療法が行われているのかも教示し学習してもらった。また，実践の中でどのように課題に取り組み，研究を行っていくのかも少し触れてもらうことにした。その結果，学生は理学療法評価や実践だけではなく，現場の諸仕事を学習し理学療法士のあり方を学習するにいたった。
	平成22年4月 ～ 平成23年3月	臨床教育を有効に行うために構造構成主義を臨床教育に導入した構造構成的協同臨床教育法を開発し実践した。昨今の理学療法臨床実習では指導者，学生ともに問題を有していることから，臨床実習の運営や指導が上手くいかないこともある。そこで考え方を根本から見直し，信念対立を解消することができる構造構成主義を基盤に新たな教育法を開発し実践した。そのことによって効果的に理学療法やその他のことを教示・学習しやすくなり臨床実習効果が向上した。
2) 各施設の中堅理学療法士に対する教育，指導活動	平成25年4月 ～ 現在に至る	学生や新人理学療法士教育については，近年充実してきたが，中堅理学療法士が成長できる機会は，技術講習会や大学院を除いてほとんどない。そのため，業務管理や後輩指導，その他の技量アップや情報発信できる力を養うことを目的に，大学業務以外に，個別に，業務や学術指導を無料で行ってきた。現在も中堅理学療法士の指導は継続中であり，希望者があれば社会貢献目的で今後もそうした活動を継続する予定である。
3)介護付有料老人ホームのリハビリテーション業務における相談等	令和元年9月 ～ 現在に至る	介護付有料老人ホームのリハビリテーション室の立ち上げと業務等の指導・相談

事項	年月日	概　　要
4）講演，シンポジウム ・理学療法臨床実習をどのように実践していくか？	平成27年3月	三加茂田中病院（徳島）教育講師　講師 臨床実習指導について，知識や技術供与だけでなく，大切なことは学生が自然と伸びる場づくりであることを講演した。
・認知症を正しく知ろう	平成27年8月	大阪行岡医療大学健康教室　講師 地域住民の方に対して健康教室を開催し，認知症の疫学や予防方法，介護方法等について講演した。
・高齢者のリハビリテーション	平成27年12月	大阪行岡医療大学市民公開講座　講師 　高齢者に多い疾患や障害の紹介とともに，それに対する予防方法や生活管理，制度，リハビリテーション等について講演した。
・理学療法士を育む	平成28年3月	宝持会　池田病院（大阪）教育講演　講師 池田病院の管理者研修の一環として，人材育成に関する方法論を理学療法士教育を通して講演した。
・人間科学リハビリテーションにおけるエビデンスを考える	平成29年1月	第13回人間科学リハビリテーション研究会　講師 人間科学においては，客観的実証主義に代表される数値化だけでエビデンスは作れないこと示唆し，現象学，構造構成学，接面等の考え方を利用すれば，新たな視点からエビデンスが作れる可能性が高まることを講演した。
・リハビリテーションと生活管理－寝たきりにならないために－	平成30年3月	宝持会総合健康づくりセンターハリーえいわ　市民健康講座　講師 寝たきりにならないためには、リハビリテーションが終了したあとも大切であることを伝え，生活管理として生活習慣の見直す、あるいは自己管理していくことが重要であることを講演した。

事項	年月日	概　　要
5　その他 ・理学療法士養成校における教育実績 （非常勤講師）	平成18年4月 ～ 平成25年9月	大阪医療福祉専門学校　理学療法学科 担当科目：理学療法治療学Ⅱ　整形外科疾患（関節リウマチ，足部・足関節）　非常勤講師 授業は，暗記型の授業ではなくできるだけ理学療法とはどういったものか考えることができるような授業にした。そのために授業資料は図によって見やすくレイアウトしたものを用いたり，臨床現場のスライド等をみせつつ，学生自身に実際現場に立てばどういった態度や評価，実践を行うかを問いながら，シュミレーションを交え学生とともに検討するスタイルにした。また，ときには勉強の仕方や資料の調べ方など，実践現場で臨床を行いながらどのように勉強していくのか等を，経験を交えて教示した。 その結果，学生は理学療法実践するにあたって自分に何が足らないかを再認識し，自ら勉強しなければならないという姿勢を学ぶことができたと考える。
	平成23年4月 ～ 平成24年9月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部理学療法学科 担当科目：理学療法技術実習2　非常勤講師 授業は，理学療法の認知スキル，つまり技術の一つとしての理学療法臨床推論について講義した。ペーパーペイシェントを用いて問題を抽出し，それを基に仮説生成しながら理学療法プログラムを立案する作業を行った。また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した。その結果，問題を解決していこうとする姿勢や具体的な解決方法を学ぶことができた
	平成25年9月 ～ 平成26年3月	大阪電気通信大学　医療福祉工学部理学療法学科 担当科目：総合技術特別実習3　非常勤講師 授業は，認知スキルの一つとして理学療法における臨床推論について講義した。ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，国際生活機能分類に即しながら，それを基に仮説生成し理学療法プログラムを立案する作業を行った。また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した。その結果，国際生活機能分類に即しながら，問題を解決していこうとする姿勢が身に付き，具体的な解決方法を自ら発見し，学ぶことができた。
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	大阪医療福祉専門学校 理学療法学科 担当科目：老年学，非常勤講師 授業は，高齢者の身体的特徴をはじめ，疾患，環境についての講義を行った。また，その際には実際の患者の動画やデータを基に，本学問と理学療法との関わりについても講義した。 また，これからの高齢者においては，地域における転倒，認知症，腰痛，生活習慣病に対する予防理学療法が大切になってくることを教授し，理解を深めた。これにより高齢者理学療法の実態を理解し，興味をもって老年学を学習できるようになった。

事項	年月日	概　　要
	平成26年9月 ～ 平成29年3月	大阪電気通信大学医療福祉工学部 理学療法学科 担当科目：チームリハビリテーション特論　非常勤講師 授業は，理学療法におけるチームアプローチによる臨床推論について講義した。ペーパーペイシェントを用いて問題抽出し，それを基に仮説を生成しながらチームアプローチによって理学療法プログラムを立案する作業を行った。また，その際にはインターネット等を活用し，実践型の授業を展開した。これによりチームアプローチによる臨床推論と理学療法プログラムの立案能力が養われた。
	平成28年9月 ～ 令和元年3月	大阪電気通信大学 医療福祉工学部理学療法学科 担当科目：基礎医学特論Ⅰ　非常勤講師 授業では，一般病院，地域におけるがんリハビリテーションについて教授し．生活の質を高めるための実際の工夫も加え，興味をひくように展開した。これによりがんリハビリテーションに対する知見を深めることができた。
	令和元年12月	大阪行岡医療大学　特論 担当科目：理学療法特論　非常勤講師 授業では、がんリハビリテーション・ケアと終末期理学療法の実践を教授し、これらの実践力がこれからの地域リハビリテーションには必要になることを学習した。
・理学療法士養成校における教育実績 （専任教員）	平成24年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学 医療学部理学療法学科 担当科目：理学療法体験実習，評価実習，総合臨床実習 専任教員 学外施設で行われる各臨床実習を，個々のレベルに合わせて円滑に行えるようにするため，実習前には各学生と個人面談を行い，知識の習熟度，コミュニケーション能力，その他，不安なことを確認し，それを学外施設の指導者と共有しながら実習を行った。必要に応じて実習前に実技練習を行ったり，また何度も学外施設に出かけたり，学生との面談を繰り返したりした。 これにより学生のレベルに合わせた実習が可能となり，個々の学生が成長できた。

事項	年月日	概　　要
	平成26年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：日常生活活動学演習　専任教員 授業では，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価法を教授し実践させた。また，障がい別に日常生活活動や生活関連動作の評価や動作指導，介助方法等についても，疑似体験させ理解を深めさせた。チーム別にレポートをまとめさせることでチームアプローチの重要性を体験させ，実際の現場で口頭指導ができるような体験も取り入れた。これにより日常生活活動における評価や指導力がついた。 また，学年によっては理解を深めるために，班長には別に1コマ時間を作り，実践を教授し，それを伝えさせる練習も加えた。これにより学生の学習も進んだ。
	平成26年4月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学 医療学部　理学療法学科 担当科目：老年期疾病論（老年期障害学）専任教員 授業では，老年期を代表する疾患や高齢者問題等を教授した．また現在の医療保険制度や介護保険制度などの社会制度についても教授し，高齢者リハビリテーションには医療，看護，保険，社会福祉等の多様な知識が必要であることや，多職種のチームアプローチが必要であることを伝えた． これにより老年期疾病やそれに対する理学療法の理解が深まった。また，これから理学療法士が多く扱うであろう慢性疾患，とくに生活習慣病等についての対応も教授し，その役割の大きさを理解させた。
	平成26年9月 ～ 平成27年3月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：日常生活活動学　専任教員 授業では，国際障害分類，国際生活機能分類をはじめ，生活活動評価であるバーサルインデックスや機能的自立度評価表（ＦＩＭ）等を教授した。また，代表的な疾患を整理しながら，日常生活活動の評価と実践内容の概要を教授した。
	平成26年9月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当科目：老年期障害理学療法　専任教員 授業では，老年期の障害の評価に基づいて，老人の生活自立に向けた系統的な健康管理や地域参加を促進するために，医学的管理下において，機能訓練などの理学療法技術が展開できるように演習した。 これにより，老年期障害理学療法における考え方や捉え方が養われた。また，今後重要となってくる様々な内部障害や慢性疾患を想定し，運動や活動が体にどのような影響を及ぼすかも考えさせ，その奥深さを実感してもらった．また，がんをはじめ終末期の理学療法についても教授し，これから必要となる看取りまでの理学療法の可能性を示し，今後の課題を実感してもらった。

事項	年月日	概　　要
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当科目：卒業研究 専任教員 テーマは，平成28年度「終末期がん患者の在宅療養を支援するための理学療法の課題」，平成29年度「消化器系がんによる低栄養と運動療法」，「脊椎転移患者に対する理学療法」であった。 これから大きな役割を担うと思われる難病や終末期を対象とした患者の理学療法を学習し，今後に備えることにした。
	平成28年9月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当科目：地域リハビリテーション 専任教員 授業では，実際の現場の写真や動画を多用し，症例検討式にして実際の訪問リハが疑似体験できるように進めた。また，その際には，予習シート，体験シート，復習シートを作成し，現場に臨む姿勢，学ぶ姿勢，復習する姿勢を養うように工夫した。さらには，在宅における看取りまでの終末期理学療法をみてもらい，これからの訪問リハの有り方をともに考えることにした。また，地域リハビリテーションは，疾患だけでなく，地域特性や社会情勢からも大きく影響をうけたり，個々の価値観が大きく反映するため，書物を多く読んで考えることが大切となる。そこで,少し時間をかけて書物多く読んでもらい,レポート量も増やして熟考して貰う練習も行った。これにより,地域リハビリテーションの奥深さとかんがえることの大切さを学ばせた。
	平成28年9月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学　医療学部理学療法学科 担当科目：理学療法評価学 専任教員 授業では，理学療法評価学に関する知識を総論的に教授し，ICFに基づく理学療法プログラムの立案や臨床推論の方法を教授した。
	平成29年4月 ～ 平成30年9月	大阪行岡医療大学　医療学部　理学療法学科 担当科目：理学療法概論　（専任教員） 授業では，高齢者の理学療法の概論を担当し，高齢者の理学療法の役割や可能性，その展望について紹介した。
	平成31年4月 ～ 令和元年9月	奈良学園大学　保健医療学部　リハビリテーション学科 担当科目：早期体験実習（専任教員） 授業では，十分なオリエンテーションのうえ、一般病院等の医療施設を３つ学生に体験してもらった。帰校後は，さらに学習を深化させてもらうためにディスカッションを行い学習内容の発表を行なった。これにより医療施設における理学療法、その他の専門職種の役割が理解できた。

事項	年月日	概　　要
	令和元年10月 ～ 令和２年３月	奈良学園大学　保健医療学部 リハビリテーション学科 担当科目：基礎ゼミII（専任教員） 授業では，自己学習の進め方を学習するために、課題設定、文献検索の方法や読み方、プレゼンテーション方法を教授し、学習成果の発表を行なった。これにより学生は，大学内，学外実習，またはプロになってからの自己学習方法の一部が身についた。
	令和元年10月 ～ 令和2年3月	奈良学園大学　保健医療学部 リハビリテーション学科 担当科目：運動学I（総論）（専任教員） 授業では，運動学の総論を内容をすべて網羅できるように講義を行なった。なお、その際には運動学ワークブックを作成し、大切なところや自己学習の方向性がわかる
・日本理学療法士協会 専門理学療法士（教育・管理）取得	平成22年4月 ～ 現在に至る	日本理学療法士協会が制度化した専門理学療法士制度の専門理学療法士(教育・管理)を取得した。
・理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それもとに理学療法教育を行う必要性を指摘した。	平成25年5月	理学療法ジャーナル　47（5）423 題目「理学慮法士発達論に基づいた教育方法の開発に向けて」として，理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それもとに理学療法教育を行う必要性を指摘した。
・公益社団法人大阪府理学療法士会　臨床実習倫理規定策定特別委員会　委員	平成27年5月 ～ 平成28年3月	公益社団法人大阪府理学療法士会　臨床実習倫理規定策定特別委員会にて，理学療法臨床実習における倫理規定の策定を行った。
・保健医療学学会　理事	平成29年4月 ～ 現在に至る	保健医療学会の理事に就任し運営に携わった。
・保健医療学学会　第8回学術集会　大会準備委員長	平成29年4月 ～ 平成30年3月	保健医療学学会　第8回学術集会開催に向けて準備を行った。

事項	年月日	概　　要
・公益社団法人　大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修　講師	平成29年12月 ～ 平成30年12月	新人教育プログラム研修における「理学療法研究方法論」の講義を行った。
・第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）教育シンポジウムのシンポジスト	平成30年7月	これからの理学療法臨床実習の在り方を講演した。
・公益社団法人　大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修　講師	平成31年1月	新人教育プログラム研修における「クリニカルリーズニング」の講義を行った。
・第2回　臨床実習指導者講習会　修了 （第2018-2-046号）	平成31年3月	臨床実習指導者の資格、および指導者を育成できる資格を獲得した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
理学療法士免許	平成5年6月	（登録番号21836号）
ケアマネージャー	平成13年3月	（登録番号27995318号）
福祉住環境コーディーネーター　2級	平成15年6月	（証書番号10 - 2 - 04540）
修士（学術）	平成20年3月	放送大学大学院 文化科学研究科 教育開発プログラム （学位番号第1903号） 題目「理学療法臨床実習による臨床実習生の意識構造の変化」
専門理学療法士（教育・管理理学療法）取得	平成22年4月	日本理学療法士協会が制度化した専門理学療法士制度の専門理学療法士（教育・管理）を取得　登録番号（７－90）
博士（工学）	平成24年3月	大阪電気通信大学大学院 医療福祉工学研究科医療福祉工学専攻（学位番号博医甲第0028号） 題目「理学療法臨床実習における実習生の意識変化の解析に関する研究」

事項	年月日	概　　要
TOGU“FT-Physio”,”FT-coach Level1”	平成25年8月	TOGU社製のツールを活用したトレーニングやコンディショニングを実践するインストラクター（Instructor Number 002）
大阪府がんリハビリテーション研修　終了	平成28年2月	がんリハビリテーション料の算定可能
臨床実習指導者講習会　修了	平成31年3月	臨床実習指導者の資格、および指導者を育成できる資格を獲得した。（第2018-2-046号）
２　特許等 なし		
３　実務の経験を有する者についての特記事項 1）道仁病院　リハビリテーション科 職種　統括責任者　理学療法士	平成13年4月 ～ 平成23年12月	リハビリテーション科開設のための機器の見積もり，搬入等の準備・施設基準Ⅱの取得とシステムの構築，そして開設に従事した。その後，リハビリテーション科の運営を行った。 理学療法士としては，医療，介護のケアミックス病棟であったことから，整形外科疾患を中心に，長期寝たきり患者，がん患者，内部障害，虚弱高齢者等の理学療法に従事する。
2）池田病院　総合リハビリテーションセンター 職種　主任　理学療法士（現場最高責任者）	平成23年12月 ～ 平成25年3月	総合リハビリテーションセンターの現場最高責任者として，一般病棟，回復期リハビリテーション病棟，療養型病棟，訪問リハビリテーション，デイケア，デイサービス等のリハビリテーションセンターの運営に携わる。診療報酬の改定や患者へのサービス充実にあわせてシステムの再構築も行った。また，学術委員，医療安全委員，接遇委員等も担った。さらに理学療法士，作業療法士，言語療法士等の人事にも携わった。 理学療法士としては，主に急性期から維持期の脳血管，運動器，呼吸器，循環器，内部障害（がん，糖尿病による切断等）の理学療法に関わった。また積極的に終末期医療や高齢者医療にもたずさわり理学療法士の役割等を模索・実践してきた。また地域住民の方々に対して理学療法の啓蒙や健康維持を目的に，相談や公開講座も行った。 現場では複数の部下（理学療法士）に勉強会や講習を行い育成にも力を注いできた。

事項	年月日	概　　要
3）池田病院　総合リハビリテーションセンター 職種　リハビリテーションコーディネーター （教育・研究活動と実務の指導）	平成25年4月 ～ 令和元年9月	大学勤務の傍ら，総合リハビリテーションセンター施設，訪問リハビリテーション，訪問看護ステーション，デイケア，デイサービス（医療，介護）において，リハビリテーションコーディネーターとして研究，相談業務を行ってきた. その際は，実際に現場にでて臨床実践するだけでなく，中堅，新人理学療法士の管理教育や学術活動等をも支援してきた。また，医療，保健，介護の分野における横断的な相談も担い，リハビリテーションが円滑に行える環境作りや支援を必要に応じて行っている。 現在，総合リハビリテーション施設では，緩和ケア系のがんリハビリテーションの評価やプログラム開発，腎臓リハビリテーションの構築，これから重要度が増してくると在宅リハビリテーションの評価やプログラム開発，健康予防教室等を行っており，地域リハビリテーション発展に寄与するだけでなく、後進教育という役割も担っている。
4）サンシティ木津　リハビリテーション・ケアセンターうららか 職種　シニアーディレクター （教育・研究・実務相談業務）	令和元年9月 ～ 現在に至る	大学勤務の傍ら，介護付有料老人ホームサンシティ木津リハビリテーション・ケアセンターの立ち上げと、教育・研究・実務相談業務を行なってきた。 現在，要介護度が高い高齢入居者に対するリハビリテーションの評価・実践の評価やプログラム開発を検討しており、後進教育を担っている。
4　その他		
1）大阪府理学療法士会 北河内ブロック 新人症例発表会　座長	平成22年1月	大阪府理学療法士会が新人教育を目的として平成22年より開始した北河内ブロック新人症例発表会において座長を行った。
2）第22回大阪府理学療法学術大会　　座長	平成22年7月	第22回大阪府理学療法学術大会において座長を行った。
3）大阪府理学療法士会 北河内ブロック新人症例発表会　座長	平成23年1月	大阪府理学療法士会が新人教育を目的として平成22年より開始した北河内ブロック新人症例発表会において座長を行った。
4）第46回日本理学療法学術大会 査読	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った。

事項	年月日	概　　要
5）第47回日本理学療法学術大会 査読	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った。
6）大学内業務の経験	平成25年4月 ～ 現在に至る	大学開学から現在に至るまで，臨床実習教育を担う臨床実習委員，教務一般を担う教務委員，国家試験対策を担う国家試験委員に任命された。
7）第48回日本理学療法学術大会 査読	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った。
8）第25回大阪府理学療法学術大会 査読	平成25年7月	第25回大阪府理学療法学術大会の査読を行った。
9）第49回日本理学療法学術大会 査読	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った。
10）第26回大阪府理学療法学術大会 査読	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会の査読を行った。
11）第50回日本理学療法学術大会 査読	平成27年5月	第50回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った。
12）公益社団法人大阪府理学療法士会 臨床実習倫理規定策定特別委員会　委員	平成27年5月 ～ 平成28年3月	公益社団法人大阪府理学療法士会　臨床実習倫理規定策定特別委員会にて，理学療法臨床実習における倫理規定の策定を行った。
13）大阪行岡医療大学における市民公開講座 企画と運営	平成28年4月 ～ 平成29年3月	大阪行岡医療大学で行われる市民公開講座の企画運営を行った。
14）第51回日本理学療法学術大会 査読	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った。

事項	年月日	概　　要
15）第52回日本理学療法学術大会 査読	平成29年5月	第51回日本理学療法学術大会における教育・管理理学療法部門の学会報告の査読を行った。
16）保健医療学学会第8回学術集会 査読	平成29年11月	保健医療学学会第8回学術集会の査読を行った。
17）保健医療学雑誌　論文査読	平成30年6月	保健医療学学会「保健医療学雑誌」の論文査読を行った。
18）第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会） 査読	平成30年9月	第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究大会）の学会報告の査読を行った。
19）第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会） 座長	平成30年11月	20）第53回日本理学療法学術大会（第7回日本理学療法教育学会・第1回日本理学療法管理部門研究会）の座長を行った。
20）保健医療学学会第9回学術集会 査読	平成30年12月	保健医療学学会第9回学術集会の査読を行った。
21）保健医療学会第10回学術集会 座長	令和元年12月	保健医療学会第10回学術集会の座長を行なった。
22）保健医療学学会第10回学術集会 査読	令和元年12月	保健医療学会第10回学術集会の査読を行なった。
23）医療情報福祉行動学雑誌　論文査読	令和２年３月	医療情報福祉行動学雑誌の論文査読を行なった。

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1. 持続可能な社会をどう構想するか. （構造構成主義研究　第４巻）	共著	平成22年4月	北大路書房	本書は，「持続可能な社会をどう構想するか」についての有識者の鼎談と構造構成主義の論文集をまとめたものである。 A5判　全255頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「構造構成的協同臨床教育法の構築に向けて-理学療法臨床実習を通して-」pp100-126を単著。 　構造構成主義を基盤に，お互いの関心をすり合わせながら，お互いに教え合うことを可能にする教育方法，すなわち構造構成的協同臨床教育方法を開発し，これを理学療法臨床実習に活用し学習効果を上げたことを述べた。
2. よい教育とは何か. （構造構成主義研究　第５巻）	共著	平成23年4月	北大路書房	本書は，「よい教育とは何か」についての有識者の鼎談と構造構成主義研究の論文集をまとめたものである。 A5判　全328頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「理学療法臨床実習を通じた構造構成的協同臨床教育法の方法論的拡張」pp218-239を単著。 　筆者が開発した構造構成的協同臨床教育方法を方法論的に拡張し，臨床現場基礎力の少ない学生に対して
3. 思想が開く未来へのロードマップ. （構造構成主義研究　第6巻）	共著	平成26年4月	北大路書房	本書は，「思想がひらく未来へのロードマップ」についての鼎談と構造構成主義研究の論文集をまとめたものである。 A5判　全261頁 編者：西條剛央，京極真，池田清彦 著者：池田耕二 本人担当部分：「終末期理学療法教育における構造構成的協同臨床教育法の可能性」pp135-153を単著。 　理学療法士にとってスムーズに教育が進みにくい終末期理学療法教育に対して，構造構成的協同臨床教育方法を活用し，その効果と可能性を述べた。
4. 終末期理学療法の実践	共著	平成27年5月	文光堂	本書は，終末患者に対する理学療法の実践方法を，総論，具体的な介入方法，諸問題，チームケアの展開の４つ点からまとめたものである。 B5判　全208頁 編集者：日高正巳，桑山浩明 著者：池田耕二 本人担当部分：第2章　「終末期理学療法をどのように教えるか，そして学ぶか」pp7-13を単著。 　終末期理学療法における理学療法士教育の問題点を，理学療法士の発達段階ごとにあげ，それにあわせた学習や教育方法を紹介した。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
5.局所と全身からアプローチする運動器の運動療法	共著	平成29年8月	羊土社	本書は，運動器疾患に関する運動療法を，主に，総論，身体の部位別の運動療法，姿勢と運動連鎖でまとめた入門書である。関節リウマチ，悪性腫瘍に対する運動療法についても少し触れている。 B5判　全342頁 編集者：小柳磨毅，中江徳彦，井上悟 著者：池田耕二 本人担当部位：第Ⅰ部　総論，1.運動器の運動療法とは，運動療法の歴史 pp14-17を単著。 運動器に対する運動療法の歴史を，古代，近代，近
6.訪問リハビリテーション アドバイスブック	共著	平成30年3月	メジカルビュー社	本書は，訪問リハビリテーションにかかわるセラピストに対する様々なアドバイスをまとめた入門書である。 B5版　全324頁 監修：青山朋樹，高橋紀代 編集者：辰巳昌嵩 著者：池田耕二 本人担当部分：コラム⑨終末期/ターミナル患者と、その家族に対する訪問スタッフ（セラピスト）のありかた，pp254-257を単著。 在宅における終末期/ターミナル患者と、その家族に
（学術論文）				
1 構造構成的協同教育法の構築に向けて-理学療法臨床実習を通して-（査読付）	単著	平成22年4月	構造構成主義研究 4　100－126	本研究では,多くの諸問題を抱えている理学療法臨床実習教育において，それらを解消しつつ教育効果を高める方法として構造構成的協同臨床教育法を構築した。それはお互いの理解を促したり，広義の科学性を担保することができるとされている構造構成主義をメタ理論に導入した教育法であり，指導者と実習生が共に成長できる教育法である。その特徴としては従来の知識や技術だけでなく，暗黙知や主観的なもので構成される知識や技術についても教育しやすくなっている。
2 遷延性意識障害を有する脳血管障害高齢患者1症例の理学療法実践からみた他動的関節可動域運動の即時効果に関する一考察（査読付）	共著	平成22年4月	理学療法科学　25(2) 305－308	本研究は，遷延性意識障害を有する脳血管高齢患者を対象に，関節可動域運動が可動域維持以外にどのような効果を有しているかを検討したものである。その結果，関節可動域運動は，上肢の動きを即時的に促す効果があることが明らかとなった。 本人担当部分：理学療法実践，データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，山本秀美 ，中田加奈子）
3 3年目の理学療法士は終末期理学療法実践をどのように体験しているか？－「無力感や意欲低下」の生成過程について－（査読付）	共著	平成22年8月	理学療法科学 25(4) 523-528	本研究は，終末期理学療法を実践している3年目の理学療法士を対象に，「無力感や意欲低下」の生成過程を検討したものである。本研究の結果からは，3年目の理学療法士は，実践における葛藤や実践している環境の中から，無力感や意欲低下が生成されていくことが明らかとなった。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：中田加奈子，池田耕二，　山本秀美）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 理学療法臨床実習における実習生の意識構造の変化－質的内容分析と数量化Ⅲ類による探索的構造分析― （査読付）	共著	平成22年12月	理学療法科学 25（6）881-888	本研究は，臨床実習生の実習日誌を対象に知識・感情・意欲の視点から分析を行い，臨床実習生の意識変化には７つのパターンがあることを示唆した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，玉木彰，吉田正樹）
5 理学療法臨床実習を通じた構造構成的協同臨床教育法の方法論的拡張 －臨床現場基礎力の欠如問題を通して－（査読付）	単著	平成23年4月	構造構成主義研 5 218－239	本研究は，以前，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法を方法論的に拡張し，理学療法における臨床現場基礎力の欠如の構造を構成し，教育的介入方法を検討したものである。
6 理学療法臨床実習における実習生の内面因子の経時的変化（査読付）	共著	平成23年12月	教育工学会会誌 35 33-36	本研究は，理学療法臨床実習生の内面因子を明らかにし，それら因子の経時的変化を明らかにしたものである。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，吉田正樹）
7 理学療法臨床実習における実習生の意識変化の解析に関する研究 （博士論文）	単著	平成24年3月	大阪電気通信大学	本研究は，実習生の知識，感情，意欲の3因子に着目し，質的内容分析を用いて探索的に実習生の日誌を解析した。その結果，実習期間を通して，実習生は意識の中で理学療法実践を多く学びながら緊張や焦りを多く感じ，思考的な意欲を心がける傾向にあることを明らかにした。続いて，同じ3因子に着目し，質的（言語）データの因子分析とされる数量化Ⅲ類を用いて，実習生の日誌を探索的に解析し，実習生を「感情優位」，「知識優位」，「専門・統合優位」，「意欲優位」，「冷静優位」，「躍動優位」，「混合」の7タイプに分類できることを明らかにした。さらに従来は着目されなかった肯定的，否定的，高喚起，低喚起感情の４つの感情変化に着目し，実習生の日誌を解析した。その結果，実習生にはいくつかの感情変化パターンがあることを明らかにした。ここまでの解析方法は作業負担が大きく実用性にも欠けることから，簡便な調査方法が必要と考え調査票を作成し調査を行った。その結果，実習生には実習理想因子，実習負荷軽減因子，不安軽減因子の3つの内面因子があること，それら3因子と睡眠，自宅勉強時間，自己目標達成度の経時的変化からは，精神的ストレスは実習期間を通して軽減していくこと，精神的ストレスと自己目標達成度の間には因果関係があること，評価実習と総合実習では実習生の睡眠と自宅勉強時間の関係が逆転することを明らかにした。
8 終末期理学療法教育における構造構成的協同臨床教育法の可能性（査読付）	単著	平成26年3月	構造構成主義研究 6 135-153	本研究は，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法を終末期理学療法教育に応用した実践研究であり，それによる学習効果を明らかにした。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
9 理学療法臨床実習の認識構造からみた終末期理学療法の課題（査読付）	共著	平成26年6月	理学療法科学 29(3) 411-415	本研究では，理学療法臨床実習生の認識構造を構成し，それをもとに終末期理学療法実践と教育の課題を抽出した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二,山本秀美,中田加奈子,黒田未貴,廣瀬将士）
10 術後感染による両側TKA再置換術後１症例の理学療法からみた臨床的課題（査読付）	共著	平成27年3月	理学療法ジャーナル 49(3) 267-271	本研究では，術後感染による両側TKA再置換術後1症例の理学療法経験から臨床的な課題を抽出した. 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：宮﨑紗也佳，池田耕二，廣瀬将士，町井義和）
11 特発性器質化肺炎患者に対して積極的呼吸理学療法を実施した一症例（査読付）	共著	平成27年3月	理学療法科学 30(1) 135-139	本研究では，特発性器質化肺炎（COP）に対する呼吸理学療法の有効性を検討した．呼吸理学療法では，症例の運動耐容能，NRADLが改善し，病型分類に基づく呼吸理学療法の有効性を示唆した. 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，宮崎紗也佳，小田瑛梨，堀江淳，池田秀一）
12 回復期リハビリテーション病棟における終末期がん患者の在宅復帰を円滑にする条件 －悪性リンパ腫1症例の理学療法経験を通して－（査読付）	共著	平成27年7月	理学療法科学 30(3) 479-482	本研究では，回復期リハビリテーション病棟における終末期がん患者の在宅復帰を円滑にするための条件を明らかにした．その条件とは， 1）患者，家族の在宅復帰への意志が明確であったこと，2）関わるスタッフが終末期という視点に転換できたこと，3）関わるスタッフが情報を共有できたこと，4）かかりつけ医との相性の良さや急変時の受け入れ体制が明確であったことであり，これら4つの条件を満たすことで終末期がん患者の在宅復帰は円滑になることを示唆した. 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：黒田未貴，池田耕二，中田加奈子，井谷由香理，中川真優，朴聖章）
13 直腸がんによるストーマ造設と化膿性関節炎による大腿骨骨頭切除を施行したがんサバイバー１人の二つの体験（査読付）	共著	平成28年3月	理学療法科学31（1） 175-180	本研究では，がんサバイバー1人の二つの体験から理学療法ケア（心理的ケア，配慮，工夫など）構築のための有効な視点を提示した。 本人担当部分：理学療法実践，データ収取，分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，黒田未貴，河野茉梨絵）
14 理学療法時の意欲を向上させる声かけの言い回しに関する予備的研究（査読付）	共著	平成29年2月	理学療法科学 32(1) 35-38	本研究では，フレーミング効果を用いた言葉かけの言い回しが，リハビリテーション対象患者の意欲にどのような影響を与えるかを調査した。結果は，肯定的なフレーミングによる言い回しが有効であったことを示唆した 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
15 回復期リハビリテーション病棟における高齢患者に対する退院支援能力の向上に向けた事例研究 ―高齢患者本人，家族，ケアマネージャーに対するインタビュー調査より―（査読付）	共著	平成29年3月	大阪行岡医療大学紀要 4 19-24	本研究では，近年，リハビリテーション対象者として多い骨折や認知症を抱える70～90歳代の女性を対象に，退院支援後の生活を調査し，回復期リハビリテーション病棟における退院支援能力を向上させる知見を抽出した。 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，尾藤彩花，黒田未貴，阪本みさき，木村恵理，松井美夕貴，久貝亮太，池田秀一，清水貴恵）
16 慢性疼痛患者の生活管理-訪問リハビリテーションによる実践-	単著	平成29年5月	ペインクリニック 38 (5) 623-639	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆した．なお，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践で有効であった事例も紹介した。
17 肺サルコイドーシスを有した脛骨高原骨折術後1症例に対する全身持久力トレーニングの効果（査読付）	共著	平成29年6月	理学療法科学32 (3) 449-453	本研究では，肺サルコイドーシスを有する脛骨高原骨折術後1症例の全身持久力を，CPX（心肺運動負荷試験）を用いて検査し，問題点を明らかにするとともに運動処方を有効に行い，生活を向上させることができたことを報告した。 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，池田秀一）
18 在宅終末期がんサバイバーのリハビリテーションにおける多職種連携の有効性（査読付）	共著	平成29年８月	地域リハビリテーション 12(8)701-708	がんサバイバーは，がん罹患者（生存者）だけでなく家族（遺族）などを含む概念であり，周囲と共に人生を構築しようとする意味がある。そのため，がんサバイバーの訪問リハでは，本人に加え，周囲を取り込みながら実践していく必要がある。今回，在宅終末期がんサバイバー2事例のかかわりからは，地域における多職種連携の有効性を示唆することができたので報告する。事例1は，80歳代前立腺がんの男性である。多職種連携からは，情報共有アプリを利用したことで，座椅子に対する本人の想いや仏壇前でおむつを交換することへの妻の嫌悪感が理解できた。事例2は，60歳代右下顎歯肉がんの男性である。後日，本人の不安や葛藤の原因が間近に迫る次女の結婚式にあることが多職種連携でわかった。これらからは，従来の方法に加え，情報共有アプリなどを積極的に活用した多職種連携が地域でも有効に機能すれば，本人や家族の想いに応える実践が可能になると考えられた。 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：金谷親好,竹ノ内裕一,岩元香菜子,濵﨑恵,池田耕二,久松憲明）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
19 当院における家族支援の取り組み一事例からみたリハビリテーション科の支援の検討(査読付)	共著	平成29年10月	日本慢性期医療協会誌 25(113) 68-71	本稿では，脳卒中後遺症患者に対する緩和的理学療法実践の経過と合わせて，家族に対する支援について検討を加えた。 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：山口朋彦，池田耕二，山口美帆子，堀寿美代，沢田学）
20 訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の可能性 ―がん患者と非がん患者の事例を通して―（査読付）	共著	平成30年2月	医療福祉情報行動科学研究53-9	本稿では，訪問リハビリテーションにおける在宅緩和ケアとしての理学療法の実践から有効な実践知を抽出し，その可能性を提示した。 事例1の大腸がんを有する80歳代女性の実践からは，理学療法士の介入は限られているが，多職種連携により運動療法と環境調整が継続できれば，疼痛緩和の時間を多くし，生活全体を変化させることができることを示唆した。 事例２の多系統萎縮症を有する60歳代女性の実践からは，疼痛等により他者との関わりが減少していても，多職種連携によって小さな効果を積み重ねていくことができれば，最後まで希望のある充実した時間を提供できることを示唆した。 今回の訪問リハビリテーションにおける多職種連携による在宅緩和ケアの２実践は，がん患者と非がん患者に対する在宅緩和ケアとしての理学療法の可能性を広げたと考えられた。 本人担当部分：理学療法実践，データ収集，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，古家真優，中岡絵美，大島知子，竹内　章，辻下守弘，池田秀一）
21 【ペインリハビリテーションの新潮流・新戦略】慢性疼痛患者に対する地域・在宅リハビ	共著	平成30年4月	ペインクリニック 39特別号：246－252	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆し，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践事例も紹介した。 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 (共著者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子,竹内章)
22【ペインリハビリテーション：新視点からの理学療法】慢性疼痛患者に対する地域・在宅リハビリテーション：理学療法	共著	平成30年8月	ペインクリニック39(8) 1038-1044	本稿では，近年着目されている慢性痛患者を生活習慣病の一つと位置づけ，運動，睡眠，食事，排泄，ストレス，社会との関わり，生活史の視点から生活管理の必要性を示唆し，訪問リハビリテーションによる生活管理の実践事例も紹介した。 本人担当部分：理学療法実践，分析，考察，論文執筆 (共著者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子,竹内章)

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
23 腎臓リハビリテーションにおける高齢血液透析患者に 対する理学療法士の役割に関する一考察	共著	平成30年8月	理学療法科学33(4)725-729	本稿では，高齢血液透析患者2症例の腎臓リハビリテーションから，運動療法による身体機能の改善，行動変容に対する支援，身体活動量の管理，生活の再構築に向けたソーシャルワーク的実践という理学療法士の4つの役割を示唆した 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二，古家真優，高橋昇嗣,池田秀一）
24 理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けて ―経験学習研究における理論的枠組みと課題―	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要（6），23-33，2019	本稿では，理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向け，これまで多くの専門職の経験学習プロセスを明らかにしてきた松尾による経験学習研究の理論的枠組みを要約し紹介した. そして，それによって解明された看護師と保健師の経験学習プロセスを紹介し，理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けての研究的枠組みを整理し，課題を考察した. 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
25 ジャンプ着地後の姿勢安定化能力の信頼性と性差の検討	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要（6），5-9，2019	本稿では，前方ジャンプ着地後のDynamic stability index（DSI）の信頼性と、性差、体格との関連等を検討し、DPSIの信頼性は良好であり、性差の影響も把握できることを示唆した。また、女性はジャンプ着地後の姿勢安定化能力が低いことを示した。 本人担当部分：分析の一部、考察 （共著者：粕渕賢志，神里巌，久保峰鳴，幸田仁志，藤田浩之，福本貴彦，池田耕二）
26 理学療法想定場面におけるフレーミング効果を意識した声かけの言い回しの違いによる視覚的文字教示が患者の意欲に与える影響について ―肯定的と否定的な言い回しによる比較―	共著	令和元年6月	理学療法科34(4)353-357	本稿では,理学療法時の肯定的，否定的な声かけの言い回しの違いによる視覚的文字教示が，患者の意欲にどのような影響を与えるかを検証し，いくつかの場面で肯定的な言い回しの方が患者の意欲を向上させることを明らかにした. 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
27 理学療法を積極的に取り組んでいる障がいを有した働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を探求する－解釈学的現象学的分析による事例研究―	共著	令和元年10月	保健医療学部雑誌 10(2) 79-91	本研究の目的は，障がいを有した働き盛りの患者の理学療法への取り組みに対する意欲を向上させるための知見を得ることである．対象は，理学療法に積極的かつ意欲的に取り組んでいる40 歳代の男性入院患者である．方法は解釈学的現象学的分析とし，手順としては，本患者に半構造化面接を行い，理学療法を積極的かつ意欲的に取り組める理由について聞きとり，理学療法への取り組みに対する意欲を分析した．結果は，本患者の理学療法への取り組みに対する意欲を9 つのテーマから解釈することができた．テーマは，半年限定，家族や妻の存在，男のプライド，苦痛を意欲に変化させる力，関係性から構成される意欲等が示された．我々は，これらに着目した理学療法実践時の声かけや配慮，工夫が理学療法への取り組みに対する意欲の向上に大切になると結論づけた． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
28 高齢線維筋痛症2症例の3週間入院運動プログラムの効果について ―痛みと身体・注意機能，包括的QOLおよび背外側前頭前野の血流動態への影響―	共著	令和元年12月	理学療法科34(6)893-846	本研究の目的は，高齢線維筋痛症（FM）患者の入院運動プログラムが痛みと身体・注意機能，包括的quality of living（QOL），背外側前頭前野（DLPFC）の機能に与える影響を検討することであった。対象は，高齢FM女性2名とし、方法は3週間入院運動プログラムを行い，介入前後に痛み，身体・注意機能，包括的QOL，DLPFCの血流量と反応時間の評価を行った．結果は，両者とも痛みの認知・情動的側面，身体機能，包括的QOLに改善がみられたが，注意機能とDLPFCの機能については症例で異なる結果となった．高齢者FM患者に対する入院運動プログラムの介入は，痛みの認知・情動的側面や身体機能，包括的QOLの改善に有効であることを示唆した． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：藤田信子，池田 耕二，高井範子，金子基史，松野悟之，三木健司，仙波恵美子）
29 卒前教育における終末期理学療法講義の役割を再考する	共著	令和2年2月	理学療法科35(1)133-138	本研究の目的は，終末期理学療法（終末期PT）の講義を理学療法学科の学生がどのように受け止めているかを明らかにし，本講義の役割を再考することである．対象は理学療法学科の学生62名とし，方法は質的研究法である修正版グラウンデッド・セオリー・アプローチ（Modified Grounded Theory Approach：M-GTA）を用いて終末期PTの講義後（90分）の感想文のテクストデータからカテゴリー化によってモデル構築を行い分析した．結果，モデルは，死と向き合う機会，死と向き合うことで促された学び，終末期PTに対する実践意欲の向上の3つカテゴリーからなり，これらは階層性を成していた．モデルは終末期PT講義における学生の段階的な受け止め方（習熟度）と実践意欲を高める過程を示した．これを活用すれば学生の習熟度に合わせた実践意欲を高める講義が可能になると考えられた． 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：山口朋彦，池田 耕二，桝本展孝）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
30 デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論の実践	共著	令和2年3月	地域リハビリテーション 15(1) 54-59	高齢者の閉じこもりは，要支援・要介護，死亡リスクを高めるため，その予防や対策が重要視されている。高齢者の閉じこもり対策の一つに行動変容理論の実践がある。しかし，デイケア（通所リハ）における行動変容理論の具体的な実践方法や工夫などの知見は少ない。そこで今回，3つの実践事例に対する物語分析から有効な実践知を抽出した。その結果，3実践事例からは，個々に応じた靴の変更や横断歩道の横断開始のタイミングの指導，または痛みに対する自己管理の指導，時期に応じたケアマネジャーとの連携，デイケアにおける屋外歩行練習による成功体験の蓄積等の効果が重なることで，買い物行動の獲得に繋がる可能性があるという実践知が得られた。 本人担当部分：分析，考察，論文執筆 （共著者：山口朋彦，池田 耕二，桝本展孝）
31 在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求する ―グループインタビューによる事例研究―	共著	令和2年3月	大阪行岡医療大学紀要 7 11-17	本研究では，在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求し，在宅終末期リハビリテーションを有効に実践するためには患者や家族との関係性づくりや変化に気づく等の能力が必要であることを示唆した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共著者：池田耕二，根釜夢乃，岩永愛理奈，谷口茉恵，西本正樹）
32 地域リハビリテーションとしての温泉旅行の可能性を探る–事例研究–	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究 7 37 - 43	本研究の目的は，地域リハビリテーションのソフトインフラとして温泉旅行を整備するため，温泉旅行および温泉旅行の各活動場面が要介護高齢者に与える影響を明らかにすることである。方法は，日帰り温泉旅行に参加した要介護高齢者2名を対象に，半構造化インタビューを行った。インタビューでは温泉旅行にある各活動場面の楽しみの程度と対象者や家族等の変化を調査した。結果は，A氏は入浴を含めた温泉旅行の全活動場面を楽しんでいた。また，脳卒中後10年間行くことはなかった温泉旅行に再び行こうとしており，温泉旅行の参加に対する自信を回復していた。B氏は温泉旅行の入浴以外の準備，移動を楽しんでおり，温泉旅行で新たな人間関係を構築していた。本研究では，温泉旅行にある各活動場面や温泉旅行は個々の要介護高齢者に様々な影響を及ぼすことが示唆された。その影響としては，自信の回復や人間関係の再構築を促進させることが示唆された。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，論文執筆 （共著者：喜多一馬，池田耕二）
（その他） **「提言」** 1 終末期における理学療法の位置づけを再考する	共著	平成23年3月	理学療法ジャーナル 45(3) 240	本稿では，終末期理学療法の位置づけを筆者の経験をもとに再考し，終末期理学療法は生活の質の再構築と納得を目指すものとした。 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：池田耕二，山本秀美，中田加奈子）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
2 認知症患者1症例の理学療法経験から学んだ「工夫」や「視点」	共著	平成23年4月	理学療法ジャーナル 45（4） 332	本稿では，認知症患者の理学療法経験を通して，学んだ工夫や視点を述べた。 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
3 理学療法士発達論に基づいた教育方法の開発に向けて	単著	平成25年5月	理学療法ジャーナル 47（5）423	本稿では，理学療法士の内面の発達を理学療法士発達論とし，それもとに理学療法教育を行う必要性を指摘した。
4 これからの地域社会に求められる理学療法士像を考える	共著	平成27年11月	理学療法ジャーナル 49（11）：1058	本稿では，地域包括ケア等がはじまった地域社会から本当に求められる理学療法士像を考察した。 本人担当部分：考察，論文執筆 （共著者：大原佳孝，池田耕二）
「招待講演，シンポジスト」				
1 理学療法研究論	－	平成29年12月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会	理学療法における研究法やエビデンスに基づく理学療法実践についての講演を行った。
2 これからの魅力ある臨床実習，臨床教育に向けて	－	平成30年7月	第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）教育シンポジウム	これからの理学療法臨床実習の在り方を講演した。
3 理学研究方法論（EBPTを含む）	－	平成30年12月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会	理学療法における研究法やエビデンスに基づく理学療法実践についての講演を行った。
4 クリニカルリーズニング	－	平成31年1月	公益社団法人大阪府理学療法士会　新人教育プログラム研修会（三島ブロック）	理学療法におけるクリニカルリーズニングをわかりやすく解説する講演を行った。
5 リハビリテーションの視点から見た温泉旅行の可能性	－	令和元年11月	ユニバーサルツーリズム阿智村シンポジウム2019	長野阿智村において開催されたユニバーサルツーリズムのシンポジウムにおいて、リハビリテーションにおける温泉旅行の可能性を講演した。 （共同発表者：池田耕二，喜多一馬）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表」 **＜国際学会＞**				
1 Study on the Effects of Skin Stretching without Joint Movement on range of motion in Rats （ラットにおける関節可動域運動が無い状態での皮膚のストレッチ効果に関する研究）	－	平成28年10月	The Asian Confederation for Physical Therapy 2016（Kuala Lumpur）	本研究では，基礎研究としてラットにおいて関節運動を生じさせない状態での皮膚のストレッチが関節拘縮の予防に効果的かを検討した。その結果，皮膚のストレッチは関節拘縮の予防になる可能性を示唆した。 本人担当部分：考察 （共同発表者：Atsushi Tasaka，Takeya Ono，Hideki Ishikura，Kazuki Aihara，Yuta Sato，Koji Ikeda，Sadaaki Oki）
<国内学会>				
1 アルツハイマー型認知症を伴う大腿骨人工骨頭置換術後患者に対する理学療法経験 －関わりの中における工夫や視点－	－	平成22年7月	第22回大阪府理学療法学術大会（大阪）	アルツハイマー型認知症を伴う大腿骨人工骨頭置換術後患者1症例の理学療法経験から，関わりの中における工夫や視点について考察した。 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
2 脳出血後高齢血液透析患者１症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目した縦断研究・第２報	－	平成22年11月	第50回近畿理学療法学術大会（和歌山）	本研究では，脳出血後高齢血液透析患者1症例の10m介助歩行における往路と復路の能力差に着目し，それらの縦断研究を行い，能力差の不安定性と重錘負荷との関係を明らかにした。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者： 池田耕二，山本秀美，中田加奈子,玉木　彰）
3 終末期寝たきり高齢患者に対する理学療法評価思考ツールの開発に向けた事例研究	－	平成22年11月	第50回近畿理学療法学術大会（和歌山）	終末期寝たきり患者１症例の理学療法経験から，評価思考ツールの開発にむけた事例研究を行った。その結果，終末期寝たきり患者は全身状態と食事，コミュニケーションの関係から評価・思考できることが明らかとなった。 本人担当部分：理学療法実践，開発，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
4 理想の理学療法士モデルを視点にした理学療法臨床実習生の質的変化の検討 －評価実習と総合実習の比較－	－	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会（宮崎）	本研究では，理学療法臨床実習生が抱く理想の理学療法士モデルを視点に，質的変化の分析を行い，理学療法評価実習と総合実習における違いを明らかにした。 本人担当部分：データ収取集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，吉田正樹,山本秀美,中田加奈子）
5 感情変化に基づいた感性工学的臨床実習指導法の開発にむけて	－	平成23年9月	第13回日本感性工学会（東京）	本研究では，実習日誌から感情表現を抽出し，実習期間中における感情変化と成績との関係を明らかにした。それを基に指導方法を提起した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二,吉田正樹）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
6トイレ動作が自立できていない高齢患者の在宅復帰を促す要因（構造）の検討	－	平成23年11月	第51回近畿理学療法学術大会（滋賀）	本研究では，トイレ動作が自立できていない高齢患者を対象に，在宅復帰を促す構造を明らかにした。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣，池田耕二，梅木速水）
7 強い拒否がみられた認知症高齢患者2症例の理学療法経験から	－	平成23年11月	第52回近畿理学療法学術大会（滋賀）	本研究では，強い拒否がみられた認知症高齢患者における症例検討を行い，理学療法の有り方を提起した。 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
8 終末期リハビリテーションにおける理学療法評価思考ツールの開発に向けた暗黙知モデルの有用性について―理学療法士へのアンケート調査から―	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（兵庫）	本研究では，以前，筆者らが構造化した「終末期理学療法評価思考ツール」に対するアンケートを実施し，その有用性について検討を行った。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，山本秀美）
9 Critical illness polyneuropathyを来した1例に対して訪問リハビリテーション介入により復職可能となった経験	－	平成24年7月	第24回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，Critical illness polyneuropathy 1症例に対する訪問リハビリテーションの有用性を検討した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：廣瀬将士，池田耕二，大原佳孝，竹内章，橋本雅至）
10 退院後の転倒予防に向けた体力測定表の開発に向けて-運動器疾患を通して-	－	平成24年11月	第53回近畿理学療法学術大会（奈良）	本研究では，入院中の運動器疾患患者を対象に評価を行い，退院後の転倒予防に向けた体力測定表の開発経過を報告した。 本人担当部分：開発，データ収集，分析，執筆 （共同発表者：髙本晴輝，山本秀美，中田加奈子，中川真優，朴聖章，廣瀬将士，池田耕二）
11 理学療法臨床実習生の終末期理学療法に対する認識構造からみた終末期理学療法の課題	－	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会（愛知）	本研究では，理学療法臨床実習生の認識構造を構成し，それをもとに終末期理学療法実践と教育における課題を抽出した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，山本秀美，中田加奈子，黒田未貴，廣瀬将士）
12 回復期病棟における脳血管障害患者のFIMの経時的変化	－	平成25年7月	第24回大阪府理学療法学術大会 （大阪）	本研究では，回復期病棟における脳血管障害患者のＦＩＭの経時的変化を，退院先（在宅，非在宅）別に明らかにし分析した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：廣瀬 将士，池田耕二，河野茉梨絵，大原佳孝，水野瑛梨，粉川友太，朴聖章，阪本みさき）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
13 運動耐容能トレーニングが奏効した特発性間質性肺炎患者の一例　心肺運動負荷試験による運動処方	ー	平成25年7月	第24回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，特発性間質性肺炎患者に対して心肺運動負荷試験行い，それをもとに運動処方を行った。その結果，運動療法における有用性が明らかとなった。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，北川紗也佳，水野瑛梨，宇野陽子，堀江淳，池田秀一）
14 回復期病棟における終末期患者の在宅復帰をスムーズにするための条件とは?	ー	平成25年6月	第18回日本緩和医療学会学術大会（横浜）	本研究では，回復期病棟に入院し，在宅復帰が円滑に進んだ終末期がん患者1症例を対象に，そこから在宅復帰をスムーズにするための条件を抽出した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二，中田加奈子，中川真優，朴聖章，井谷友香理，北林直人，川岸美佐子，村中恵子，小川 敦子，池田 秀一）
15 理学療法士教育における演劇ワークショップを用いた対人技能向上の取り組み	ー	平成25年8月	第5回日本ヘルスコミュニケーション学会学術集会（岐阜）	本研究では，理学療法養成大学における学生に演劇ワークショップを取り入れ，好評であったこと，そして学生に質的な変化がみられたことを報告した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：山本貴啓，原田信子，池田耕二，田坂厚志，横井輝夫）
16 高齢入院患者の転倒予防に向けた取り組みー運動器疾患に着目してー	ー	平成25年11月	第53回近畿理学療法学術大会（京都）	本研究では，入院高齢患者に対して様々な評価を行い，運動器疾患によってそれからがどのように違ってくるかを検討した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆（共同発表者：中川真優，山本秀美，中田加奈子，朴聖章，杉本貴美子，池田耕二）
17 患者の行動様式を視点に多職種チームアプローチによって転倒予防対策に取り組んだ2症例	ー	平成25年11月	第53回近畿理学療法学術大会（京都）	本研究では，2症例の行動様式に着目し，チームアプローチによって転倒予防に取り組んだ経験を報告した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，黒田未貴，井谷友香理，中川真優，朴聖章，北林直人，川岸美佐子，小川敦子，福井孝子，池田秀一）
18 臨床実習にある新人・中堅臨床実習指導者の不安増幅プロセスとは？	ー	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（神奈川）	本研究では，質的研究を用いて，新人・中堅理学療法臨床実習指導者の不安増幅プロセスを構成した。それを視点に不安解消対策を提示した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：湯地英充，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
19 回復期リハビリテーション病棟における「家族が述べる在宅復帰のための条件」と在宅復帰に関する実態調査　―在宅復帰のための条件がトイレ動作の自立の場合―	―	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（神奈川）	本研究では，回復期病棟入院時に家族が述べる在宅復帰のための条件，特にそれをトイレ動作の自立とした家族と患者の在宅復帰に着目し，その実態を調査した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：勢登香織，池田耕二，岡村太嗣）
20 腰椎圧迫骨折を呈した1症例に対する課題指向型アプローチ～家屋調査から見えてきた課題を中心に～	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，腰椎圧迫骨折を呈した1症例に対して，早期に家屋調査を行い，課題遂行型アプローチを実践し，良好な結果を得た経験を報告した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：高橋昇嗣，池田耕二，黒田未貴，中川真優）
21 整形外科疾患患者における内部障害有病率に関する実態調査	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，整形外科疾患患者における内部障害の実態を調査した．その結果，内部障害の有病率は75%であることが分かった．これらからは，整形疾患患者といえども内部障害に着目した理学療法が必要であり，包括的な理学療法が必要であることが示唆された。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，吉富滋洋，徳永美由貴，池田耕二，池田秀一）
22 慢性期病院における終末期理学療法の1症例～脳幹出血後遺症の患者と家族を支えた16ヵ月間～	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，脳幹出血後遺症の患者と家族を支えた16ヵ月間の理学療法経験を報告し，支える医療における理学療法士の役割を提言した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：山口朋彦，木村美帆子，堀寿美代，黒田敦士，池田耕二，沢田学）
23 不整脈・慢性糸球体腎炎を有する大腿骨転子部骨折術後患者の運動療法～心電図モニタと医師との連携によるリスク管理～	―	平成26年7月	第26回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，不整脈・慢性糸球体腎炎を有する大腿骨転子部骨折術後患者の運動療法の経験を報告し，心電図モニタの活用や医師との連携の必要性を再提起した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：黒岡禎治，池田耕二，大原佳孝） 共同研究につき本人担当部分抽出不可能
24　構造構成的協同臨床教育法の視点導入に基づく新たな協働の有り方に関する研究－ケーススタディへの応用－	―	平成26年8月	第42回日本職業リハビリテーション学会（岩手）	本研究では，筆者が開発した構造構成的協同臨床教育法の視点を職業リハビリテーションのケーススタディーに応用し，新たな協働の在り方を提言した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：前原和明，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
25 終末期理学療法実践に対する評価法（考え方）の理論的構築と提案―実践の有効性をどのように評価するか？－	－	平成26年10月	第8回全国大学理学療法教育学会(兵庫)	本研究では，終末期理学療法実践に対する評価法（考え方）を，構造構成主義を活用することで理論的に構築し，理学療法教育に提案した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，貞末仁美）
26 肺サルコイドーシスを有する右脛骨高原骨折術後一症例の理学療法　－臨床現場における包括的理学療法の必要性－	－	平成26年11月	第54回近畿理学療法学術大会（大阪）	本研究では，肺サルコイドーシスを有する右脛骨高原骨折術後一症例の理学療法経験を報告し，包括的理学療法の必要性を示唆した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：高橋昇嗣，大原佳孝，池田耕二，宮崎紗也佳，猪子純一，池田秀一）
27 右重度片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスから得られたこと	－	平成27年1月	第1回日本地域理学療法学会（大阪）	本研究では，右重度片麻痺患者の退院時支援から，支援が奏功する3つの要因と，退院後にしか明らかにならなかった2つの課題を明らかにした。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中川真優，大原佳孝，池田耕二，北林直人，上田紀子，清水貴恵，川岸美佐子，池田秀一）
28 病院リハと訪問リハの連携によって終末期がん患者の在宅復帰を可能にした実践報告	－	平成27年1月	第1回日本地域理学療法学会（大阪）	本研究では，病院と訪問リハの連携によって終末期がん患者の在宅復帰を可能にした実践を報告した。病院,訪問リハスタッフの連携により在宅支援を進める意義は大きいと思われた。 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，大原佳孝，池田耕二，原田美江，中瀬美穂，池田秀一）
29 看取り近くまでの理学療法を実践した終末期がん患者１症例における入院と訪問の担当理学療法士の連携について	－	平成27年6月	第20回日本緩和医療学会（横浜）	本研究では，看取りに向けた終末期がん患者の在宅復帰に対して，病棟担当理学療法士と訪問理学療法士の連携について考察した。 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，山本秀美，黒田未貴，早田敏）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
30 終末期がん患者の理学療法実践の方向性を示す理学療法教育モデルの構築とその可能性 －2症例の経験から－	－	平成27年6月	第20回日本緩和医療学会（横浜）	本研究では，理解されにくい終末期がん患者の理学療法を，その有り方や目標がイメージしやすいモデルに構築しなおし，教育モデルとしの可能性を考察した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二，河野茉梨絵，赤田美和子，早田敏）
31 肺サルコイドーシスを有する両側人工膝関節置換術後一症例患者の運動耐容能および日常生活活動の経時的変化（第2報）	－	平成27年11月	第55回近畿理学療法士学会（神戸）	本研究では，肺サルコイドーシスを有する両側人工膝関節置換術1症例の運動耐容能をCPXにて測定し，運動耐容能と日常生活活動の経時的変化からその関係性について考察した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：髙橋昇嗣，池田耕二，大原佳孝，猪子純一，池田秀一）
32 当訪問リハビリテーション事業所・訪問看護ステーション利用者における基礎的調査―理学療法における支援課題抽出に向けて　―	－	平成27年12月	第2回日本地域理学療法学会（千葉）	本研究では，地域の特色が反映される訪問リハ事業所と訪問看護ステーションにおける利用者の基本的な特性を調査し，そこから支援課題を抽出した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，池田耕二，濱田絵美，古家真優，中瀬美穂，池田秀一）
33　透析患者に対する包括的腎臓リハビリテーションの役割―2症例の経験から　―	－	平成28年3月	日本腎臓リハビリテーション学会学術大会（岡山）	本研究では，透析患者に対するリハビリテーションの代表的な二つの役割を，事例研究を通して紹介した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，朴聖章，吉冨滋洋）
34 早期歩行獲得を目指した脊髄髄内上衣下腫摘出術後一症例に対する理学療法経験―感覚性運動失調に対するアプローチ―	－	平成28年5月	日本理学療法学術大会（札幌）	本研究では，胸髄髄内上衣下腫術後一症例に対して感覚性運動失調に着目した運動療法を行い，短期間に歩行が獲得できたのでその詳細を報告した。 本人担当部分：考察，執筆 （共著者：宮﨑紗也佳，池田耕二，井上良太，田中秀和，北村哲郎，竹島靖浩，堀川博誠）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
35 看取りまでの緩和ケアの開発を目的にした終末期がん患者の睡眠状態の把握	―	平成28年6月	第21回日本緩和医療学会（京都）	本研究では，終末期がん患者に対する看取りに向けた緩和ケアを開発する目的にて，終末期がん患者の睡眠状態を調査した。その結果，睡眠パターン等が崩れていく状態が明らかとなり緩和ケアとしては良質な睡眠の確保が重要になっていくことが示唆された。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，赤田美和子，早田敏）
36 がん患者に対するリハビリ・ケアの質的向上を目指したアセスメントシートの開発とその有効性	―	平成28年6月	第21回日本緩和医療学会（京都）	本研究では，がん患者のリハビリやケアの質を向上させるために，アセスメントシートを作成し，それを用いることで必要な配慮や工夫を抽出していこうとした。これによりがん患者個々に配慮したリハビリの展開が可能となった。 本人担当部分：アセスメント作成，データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：黒田未貴，池田耕二，河野茉梨絵，赤田美和子，早田敏）
37 在宅終末期がんサバイバーのリハビリテーションにおける多職種連携の有効性	―	平成28年7月	第18回日本在宅医学会大会（東京）	本研究では，スマートフォン等を活用することで地域における広域の多職種連携を可能にし，在宅ガンサバイバーに対する有効な実践を報告した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：金谷親好，濵﨑恵，竹ノ内裕一，池田耕二，久松憲明）
38 血液透析患者のフットケアにおける理学療法士の役割と可能性	―	平成29年2月	第7回腎臓リハビリテーション学会学術大会（茨城）	本研究では，これから需要が高まる透析患者のフットケア業務の構築とそれに関わる理学療法士の可能性を，実務面から検討し報告した。 本人担当部分：業務の構築，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，高橋昇嗣，吉冨滋洋，朴聖章，白川優子， 池田秀一）
39 理学療法想定場面におけるフレーミング効果を意識した声掛けが意欲に与える影響について	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	本研究では，理学療法における様々な場面において，フレーミングを意識した声がけが意欲の向上とどのような関係にあるかをRCTによって調査した。その結果，主に肯定的なフレーミングが意欲の向上に寄与していることが分かった。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
40 訪問リハビリテーション利用者の暮らしを守る生活見守りシートの開発と実践の紹介	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，我々が開発した訪問利用者の暮らしを守るための生活見守りシートと，それを用いた実践を紹介した。虚弱高齢者や終末期利用者に倒しても生活見守りシートは問題点や方向性が示唆できるようになってあり，実践だけでなく教育にも有効活用できる可能性が示唆された。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，中岡絵美，山本秀美，古家真優，大島知子，池田秀一）
41 終末期患者の緩和ケアにおける訪問リハビリテーションの可能性	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，終末期のがん患者，非がん患者に対する訪問リハビリテーションの実践事例から，その可能性を報告した。在宅において理学療法士が看取りまで実践する意義や可能性を示唆することができた。 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：山本秀美，池田耕二，中岡絵美，古家真優，大島知子，中瀬美穂，池田秀一）
42 訪問リハビリテーション利用者における外出頻度，地域活動への参加，時間の感覚，憂鬱に関する実態調査	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，ICFにおける活動や参加を促すことを目的に，訪問リハビリテーション利用者の活動，参加の実態を調査した。その結果，利用者の活動，参加が低下しているという実態があらためて示唆された。地域特性を考えながらこれらに対処していく必要性が示唆された。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，大島知子，池田秀一）
43 重症急性膵炎後に廃用症候群を呈した1症例に対する訪問リハビリテーションの長期介入効果に関する一考察	―	平成29年6月	第10回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（札幌）	本研究では，発症後，衰弱がひどく予後が不良な症例に対して，訪問リハビリテーションによる長期介入を行った。その結果，日常生活が自立し，活動範囲は広がり，自己管理能力が育まれたことを報告した。これにより，今後予想される在宅の虚弱高齢者に対する訪問リハビリテーションの可能性を広げることができた。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：大島知子，池田耕二，山本秀美，古家真優，中岡絵美，池田秀一）
44 訪問リハビリテーションにより認知症高齢者の地域生活の再建ができた事例報告	―	平成29年6月	第19回日本在宅医学会大会（名古屋）	本研究では，地域における認知高齢者の生活を，多職種，多部門連携と近隣住民との協力によって再建した事例を報告した。これにより認知症高齢者の地域生活再建の可能性を示唆することができた。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：金谷親好，池田耕二，久松憲明）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
45 不眠のある終末期がん患者1症例に対する緩和ケアにおける理学療法の可能性 - 睡眠計と理学療法ケアシートの活用－	－	平成29年6月	第22回日本緩和医療学会学術大会（横浜）	本研究では，終末期がん患者に対して，我々が開発してきた理学療法ケアシートと睡眠計を活用した理学療法の実践を通して，緩和ケアにおける理学療法の有効性や可能性を示唆した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴，赤田美和子，早田敏）
46 外出を契機に活動意欲を取り戻し自宅復帰可能となった虚弱高齢者1症例の理学療法経験	－	平成29年7月	第29回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，意欲低下を示したがんサバイバーの高齢者が，外出を契機に活動意欲を取り戻し自宅復帰が可能になった事例を報告した。ここでは，あらためて機能障害だけでなく，活動，参加に目を向けた実践や多職種連携の有効性や必要性を示唆した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：門内鈴香，池田耕二，中岡伶弥，黒田未貴）
47 線維筋痛症2症例に対する3週間入院運動療法プログラムの試み ～運動療法介入による脳血流の変化とQOLの改善について～	－	平成29年9月	第22回ペインリハビリテーション（神戸）	本研究では，線維筋痛症患者の3週間入院プログラムの効果を，脳血流の変化と生活の質（ＱＯＬ）の改善から示唆した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：藤田信子，池田耕二，高井範子，松野悟之，小泉優喜，平岡駿典，高橋紀代，三木健司，仙波恵美子）
48 線維筋痛症２症例に対する3週間入院運動療法プログラムの試み　－心理的側面からの検討	－	平成29年9月	第22回ペインリハビリテーション（神戸）	本研究では，線維筋痛症患者の3週間入院プログラムの効果を，心理的変化と生活の質（ＱＯＬ）の改善から示唆した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：高井範子，藤田信子，池田耕二，丸山伸廣，栗田樹，中原理，髙橋紀代，三木健司，仙波恵美子）
49 当院における入院高齢患者の「装い」に関するアンケート調査 -「装い」を支援する作業療法介入に向けて-	－	平成29年9月	第37回近畿作業療法学会（奈良）	本研究では，入院高齢患者の「装い」に対する関心度をアンケート調査した。多くの高齢者は「装い」，すなわち，おしゃれに対する関心が低くなっていた。作業療法では装いを支援していく必要があることを報告した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：松井美夕貴，池田耕二，木村恵理，阪本みさき，尾藤彩花，宮内克明，水本紀子，黒田未貴，老田弘子，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
50 繊維筋痛症患者に対する３週間入院プログラムの試み	－	平成29年10月	日本繊維筋痛症学会第９回学術集会（大阪）	本研究では，線維筋痛症患者に対する3週間入院プログラム（運動療法）の効果を示唆した。 本人担当部分：データ収集 （共同発表者：高橋紀代，小泉優喜，谷山ゆりえ，丸山信廣，中原理，池田耕二，高井範子，藤田信子，三木健司，仙波恵美子）
51 圧迫刺激が足関節背屈可動域および足関節底屈筋の筋出力に及ぼす影響について	－	平成29年12月	保健医療学学会第8回学術集会（大阪）	本研究では，圧迫刺激が足関節背屈可動域および足関節底屈筋の筋出力に及ぼす影響について調査した。結果，圧迫による足関節背屈可動域への影響は認められなかったが，筋出力においては介入後の腓腹筋に有意な低下が認められた。これは圧迫による腓腹筋の筋出力低下作用を示唆した。 本人担当部分：分析，執筆 （共同発表者：城野靖朋，岡村和典，池田耕二，粕渕賢志，神里巌，金井秀作）
52 理学療法を積極的に取り組んでいる腕神経叢引き抜き損傷を有する男性患者の意欲を探求する ―解釈学的現象学分析―	－	平成29年12月	保健医療学学会第8回学術集会（大阪）	本研究では，理学療法を積極的に取り組んでいる腕神経叢引き抜き損傷を有する男性の意欲を探求し，理学療法実施患者の意欲向上における知見を得た。本男性からは，【半年限定で意欲が維持できるという認識】【焦り，病状，苦痛を，身体を回復させるための意欲に変化させる力】【家族の存在によって強気な自分を維持できる】【妻の努力に依存しない自分，妻からエネルギーをもらう自分という二つの自分】【父親，主人，男としてのプライド】【努力を維持するために，自分をモニタリングし，追い込む力】【職場復帰への意欲と，復帰後への不安から生じる葛藤】【医療スタッフからの情報により，ゆらぐ思い】【セラピスト，病棟，友人との関係性から構成される意欲や思い】の9つのテーマが得られた。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）
53 当院における血液透析患者の足病変・足部変形のケアに向けた実態調査	－	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，透析患者における足病変・足部変形の実態調査を行った．その結果，①足病変は有26肢，無6肢，内訳は胼胝形成が58%，乾燥が12%，潰瘍形成が15%等（重複）であった．②足部変形は有26肢，無6肢，内訳は浮き足43%，外反母趾25%，内反小趾13%等（重複）であった．③ROM制限は有24肢，無8肢，横アーチは正常9肢，低下23肢であった．③潰瘍形成は，有4肢，無28肢であったことを報告し，足病変，足部変形のケアの必要性を報告した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大原佳孝，池田耕二，朴聖章，髙橋昇嗣，吉冨慈洋，前田純依，島津生江，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
54 高齢血液透析患者におけるFIMと自覚的困難感との関係性～緩和的な理学療法に向けた取り組み～	―	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，高齢血液透析患者の自覚的困難感を軽減する緩和的な理学療法の取り組みに向け，FIMと自覚的的困難感の関係性を検討した．その結果，高齢HD患者の困難感を軽減するためには，個々に合わせた継続的な運動や環境・介助調整等が大切になることを報告した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：朴聖章，池田耕二，大原佳孝，高橋昇嗣，吉冨滋洋，前田純依，島津生江，池田秀一）
55 末期腎不全(ESKD)を併存した恥骨骨折症例に対する理学療法経験	―	平成30年3月	第8回日本腎臓リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究では，末期腎不全（ESKD）を併存した恥骨骨折症例に対する理学療法の経験を報告した。 具体的には，本経験からは医師と連携し，理学療法士が運動中の呼吸循環応答等を評価し慎重に運動負荷を調整すれば，ESKD症例に対しても有効な理学療法が可能となり，ADL向上が図れることを示唆した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：前田純依，池田耕二，大原佳孝，髙橋昇嗣，吉冨慈洋，前田純依，池田秀一）
56 当院がんリハビリテーション実施患者の実態調査	―	平成30年6月	第23回日本緩和医療学学会（神戸）	本研究では，筆頭演者所属病院におけるがんリハビリテーションの実態を調査し，年齢80歳代，PSは重度，家族の関わり有は9割，独居は4割，症状は倦怠感，痛み，食欲低下が多く，ADL介助は清拭，移動，排泄が多く，退院先は自宅，死亡退院が4割を占めていたことを報告した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵，池田耕二，黒田未貴、中本直子、松井美夕貴、中川卓、赤田美和子、早田敏）
57 パーキンソン病独居高齢者に対する自助力を高める視点からの訪問リハビリテーションの実践	―	平成30年6月	第12回訪問リハビリテーション学会（北九州）	本研究では，転倒を繰り返し在宅生活が困難になりつつあったパーキンソン独居高齢者に対し，生活を見守る視点から訪問リハビリテーション（以下，訪問リハ）を実践し，良好な結果を得たので報告した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優、竹内章、大島知子、池田秀一）
58 これからの魅力ある臨床実習、臨床教育に向けて	―	平成30年7月	第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本シンポジウムでは，現在の学生や新人の現状を鑑み，大切になると考える3つの視点，①現場教育における「場」づくりという視点．②経験資本という視点．③感情労働という視点を紹介し，今後の臨床実習，新人教育，人材育成についての課題をなげかけた。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
59 閉じこもり傾向にあった高齢者に対して生活の再構築を可能にした理学療法実践～脱臼不安感，運動と食への関心に着目して～	－	平成30年7月	第30回大阪府理学療法学術大会（大阪）	本研究では，入院前より閉じこもり傾向にあった高齢者に対して，身体機能だけでなく，脱臼不安感や運動と食への関心，他者との交流に着目した理学療法を実践したことで，それらに対する認識が変化し，生活の再構築が可能となった事例を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，竹内章，大島知子，池田秀一）
60 線維筋痛症高齢女性2症例に対する3週間入院運動プログラムの試み：前頭前野の血流動態の変化と疼痛、抑うつ、QOLの改善について	－	平成30年9月	第23回日本ペインリハビリテーション学会（福岡）	本研究では，線維筋痛高齢女性に対して3週間入院運動プログラムを行い、疼痛、抑うつ、QOLの改善とNear Infrared spectroscopy (NIRS)による前頭前野(PFC)の血流動態の変化について報告した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：藤田信子，池田耕二，高井範子，松野悟之，金子基史，三木健司，行岡正雄，仙波恵美子）
61 線維筋痛症高齢女性２症例に対する３週間 入院運動プログラムの試み －患者の心身の変化と理学療法士の関わり方に	－	平成30年9月	第23回日本ペインリハビリテーション学会（福岡）	本研究では，線維筋痛症（FM）患者である高齢女性２症例について，３週間入院運動プログラムの介入を行い，その効果と理学療法士（PT）の関わり方を含めた心身の変化の検討を行った。 本人担当部分：データ収集，分析，考察 （共同発表者：高井範子，藤田信子，池田耕二，金子基史，三木健司，行岡正雄，仙波恵美子）
62 転倒を契機に横紋筋融解症を呈した超高齢患者一症例に対する理学療法経験 ―摂食嚥下機能と栄養状態に着目して―	－	平成30年10月	第5回日本予防理学療法学会（福岡）	本研究では，横紋筋融解症に褥瘡，摂食嚥下機能障害を合併していた症例に対して，栄養状態と摂食嚥下機能に着目した理学療法を行い，経口摂取を可能にし栄養状態や基本的動作等を改善した症例を報告した． 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中本直子，池田耕二，古家真優，大原佳孝）
63 卒前教育における終末期理学療法講義の役割を再考する	－	平成30年11月	第7回日本理学療法教育学会（神戸）	本研究では，卒前教育として実施している終末期理学療法の講義が，学生に死と向き合う機会を提供し，終末期PTに対する学習・実践意欲を高める機会になっていることを報告した． 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：山口朋彦，池田耕二，柳本展孝）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
64 理学療法士の経験学習プロセスの解明にむけた探索的研究ー成長を促す経験と教訓―	ー	平成30年11月	第7回日本理学療法教育学会（神戸）	本研究では，熟達理学療法士の経験学習プロセスにある成長を促す経験と教訓を明らかにした。これらを理学療法士の現場教育に活用できれば有効な人材育成が可能になることを示唆した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
65 在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求する	ー	平成30年12月	第9回保健医療学学会 2018年12月	本研究では，在宅終末期リハビリテーションを実践しているセラピストの体験を探求し，在宅終末期リハビリテーションを有効に実践するためには患者や家族との関係性づくりや変化に気づく等の能力が必要であることを示唆した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：根釜夢乃，岩永愛里奈，谷口茉恵，西本正樹，池田耕二）
66 当訪問リハビリテーション事業所における利用者のクラスター分析による類型化とその特徴	ー	平成30年12月	第5回日本地域理学療法学会（横浜）	本研究では，活動，栄養，排泄，睡眠の4つの視点からなる評価ツールを活用し，クラスター分析によって訪問リハ利用者の類型化を試みることである．その結果，訪問リハ利用者は，Ⅰ群：活動と睡眠に主な課題・介入箇所があり，特に運動機能が低い介護度4の高齢者，Ⅱ群：睡眠に主な課題・介入箇所がある介護度3の高齢者，Ⅲ群：栄養〈食事〉以外の7項目にわずかな課題・介入箇所がある介護度3の高齢者，Ⅳ群：睡眠〈量〉と排泄〈排便〉に主な課題・介入箇所がある介護度3の高齢者の4群に類型化できたことを報告した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，大島知子，山本秀美，中岡絵美，中川真優，竹内章，尾藤彩花，池田秀一）
67 質的研究で変形性膝関節症患者の痛みの心理社会的側 面を生成する要因と過程をひも解く：探索的事例研究	ー	令和元年10月	第7回日本運動器理学療法学会学術大会（岡山）	本研究では膝OA患者の一人の語り（主観的体験）から，痛みの心理社会的側面の要因と生成・対処過程をモデル構築し，探索した。その結果，＜膝の症状に対する過剰な執着＞をコアカテゴリーとするモデルが構築でき、痛みの心理社会的側面の一つである症状への執着は適切な対処によって軽減可能なことを示唆した。本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：瓜谷大輔，池田茜，城之木徹，松端賢太郎，六浦優斗，池田 耕二）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
68 熟達理学療法士の経験学習能力を支える 仕事に対する信念とは？	ー	令和元年11月	第54回日本理学療法学術大会・第8回日本理学療法教育学会・第2回理学療法士学会・管理部門研究会（名古屋）	本研究では，理学療法士の経験学習能力に大きく影響を与える仕事に対する信念を、熟達理学療法士から解明した。その結果，熟達PTの信念は人間関係の構築，PTのプライドや責任感，熱意と幅広い実践，治療成果による社会還元等から形成されていたことを報告した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田 耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子）
＜研究大会＞				
1 訪問リハビリを利用している主介護者の介護負担感と要介護者のＦＩＭとの関連性について	ー	平成23年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会くまもと2011（熊本）	本研究では，介護者の負担かんと要介護者のＦＩＭとの関連性を明らかにし，訪問リハビリにおける理学療法の方向性を提示した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣，池田耕二，岩森渉）
2 回復期リハビリ病棟における家族が述べる「在宅復帰のための条件」と在宅復帰について	ー	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では,回復期病棟入院時に家族が述べる在宅復帰のための条件と在宅復帰の関連性を検討した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：岡村太嗣,池田耕二,深田大介）
3 嚥下造影検査に嚥下障害の実態調査		平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では，嚥下造影検査と嚥下障害の関係を調査し，その実態を明らかにした。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：上田紀子，池田耕二，黒田未貴，廣瀬将士，清水貴恵，福井孝子，池田秀一）
4 在宅復帰に向けた家屋調査の実態とその傾向	ー	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究では，在宅復帰に向けた家屋調査の実態を調査し，玄関，トイレ，入浴に環境調整が多いことを明らかにした。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：北林直人,池田耕二,井谷友香里,坂本みさき,尾藤彩花,上田紀子,黒田未貴,廣瀬将士,清水貴恵,福井孝子,池田秀一）
5 がんの緩和リハに対する意識調査－看護とリハスタッフの比較－	ー	平成25年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2013（千葉）	本研究は，アンケートによって，がんの緩和リハに対する意識が看護師とリハビリスタッフでは違うことを明らかにした. 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：河野茉梨絵,池田耕二,黒田未貴,廣瀬将士,赤田美和子,池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6 転倒予防専用カンファレンスによる転倒予防の取り組み―転倒カンファ導入の効果検討	―	平成26年2月	回復期リハビリテーション協会　第23回研究大会（愛知）	本研究では，転倒予防専用のカンファレンスが病棟の転倒予防に有用であることを示唆した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中田加奈子，池田耕二，黒田未貴，井谷友香理，中川真優，朴聖章，川岸美佐子，小川敦子，福井孝子，池田秀一）
7 デイケアにおけるサービス向上に向けた実施調査	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，デイケアにおいて実態調査を行い，約8割の利用者がリハビリに満足していたことや，約6割に転倒不安があり，4割が外出を控えていたことを明らかにした。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：大庭由香莉，池田耕二，上田紀子，中田加奈子，大村昌和，小田瑛梨，勝久江，池田秀一）
8 重度右片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスからみえてきたもの	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，重度右片麻痺患者一症例の退院後カンファレンスから，オムツ交換の早期指導や転落時の対応指導，指導用パンフレットの有効性を明らかにした。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中川真優，池田耕二，黒田未貴,北林直人，上田紀子，福井孝子，川岸美佐子，池田秀一）
9 家屋調査と環境調整に関する追跡調査―インタビュー調査による質的検討―	―	平成26年11月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2014（長崎）	本研究では，退院後のインタビュー調査から，患者や家族の環境調整に対する理解不足，環境調整の追加の必要性や不安の存在を明らかにした。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：尾藤彩花，池田耕二，上田紀子，北林直人，阪本みさき，井谷友香理，久貝亮太，黒田未貴，廣瀬将士，清水貴恵，池田秀一）
10 慢性心不全患者1症例に対する生活管理という訪問リハビリの役割 - 入退院を繰り返さないために -	―	平成27年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会（神戸）	本研究では，慢性心不全患者の訪問リハビリを，生活管理の視点から見直し，その役割について考察した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：濵田絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，須々木星衣子，中瀬美穂，池田秀一）
11 高齢者の退院に向けた身体活動量把握の取り組み	―	平成27年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会（神戸）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟における高齢者に対して，退院にむけた活動量の調査を行った。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：杉本貴美子，池田耕二，古家真優，吉冨滋洋，池田秀一）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12 訪問リハビリテーション利用者の生活習慣とリズムに関する実態調査- 虚弱高齢者の暮らしを支える活・栄・排・睡の4つの視点 -	ー	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，訪問リハビリテーション対象患者の生活習慣とリズムを，主に活動，栄養，排泄，睡眠の4つの視点から調査した。その結果，訪問リハ利用者の活動低下，睡眠不足等の実態が明らかとなり，この4つの視点からの実践が今後は大切になることを示唆した。 本人担当部分：データ収集，分析，考察，執筆 （共同発表者：池田耕二，山本秀美，中岡絵美，古家真優，大島知子，池田秀一）
13 転倒により入退院を繰り返した一症例に対する病棟と訪問理学療法士における協同の振り返りーシームレスな療養支援の構築に向けて	ー	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，病棟と訪問の理学療法士が共同で同じ症例を振り返ることで，シームレスな支援の構築に重要な実践知を抽出した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：中岡絵美，池田耕二，山本秀美，古家真優，大島知子，池田秀一）
14 高次脳機能障害患者1例に対する道のりシートを用いた退院支援について ―退院までの道程を共有する道のりシートの作成と活用―	ー	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2016（茨城）	本研究では，リハビリテーションや退院支援が困難である高次脳機能障害患者に対して，退院の方向性や段階を示す道のりシートなるものを作成し，実践した。これにより患者の心理は安定し，リハビリテーションは可能となり，職員の連携も良好となり，有効な退院支援が可能となったことを報告した。 本人担当部分：考察，執筆 （共同発表者：尾藤彩花，池田耕二，木村恵理，阪本みさき，松井美夕貴，猪子純一，黒田未貴，大原佳孝，米沢仁美，清水貴恵，上地康子，池田秀一）
15 回復期リハビリテーション病棟における高齢患者の活動量について ー 測定部位（手首と腰部），FIM，うつ，転倒予防自己効力感に着目して ー	ー	平成29年2月	第29回復期リハビリテーション病棟協会研究大会（広島）	本研究では，回復期リハビリテーション患者の活動量を手と腰に装着し，それぞれの活動量を測定することで病棟の活動実態を明らかにした。手に装着した活動量では病棟生活の実態がより反映した。またFIM，うつ，転倒自己効力感との関係性についても報告した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：杉本貴美子，池田耕二，吉冨滋洋，中岡伶弥，古家真優，池田秀一）
16 質問項目から見た患者タイプ別のフレーミング効果を意識した肯定的・否定的な声かけの有効性に関する探索的研究	ー	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，ユニーク質問により患者をタイプ別に分類し，肯定的な声かけと否定的な声かけでフレーミング効果を検証してみた。その結果，肯定的な声かけでフレーミング効果がみられたが，タイプ別に明らかになることはなかった。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：喜多一馬，池田耕二）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
17 重複障害を有する独居高齢者の退院支援から見えてきたもの	―	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，重複障害を有する独居高齢者の退院支援を振り返り，退院支援能力を向上させる知見を抽出した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：阪本みさき，池田耕二，尾藤彩花，木村恵理，松井美夕貴，黒田未貴，老田弘子，池田秀一）
18 デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論を用いた実践―3事例の物語分析から得た知見―	―	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究では，デイケアにおいて閉じこもり傾向にあった高齢利用者に対する行動変容理論を用いた実践を，物語分析によって分析し，閉じこもりを予防できる知見を抽出した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：大山大将，池田耕二，黒岡禎治，廣瀬将士，吉冨滋洋，高本晴加，勝久江，池田秀一）
19 糖尿病による右下腿切断後，多職種連携による訪問リハビリテーションを実施し生活の再構築を図った 認知症患者1症例の実践報告	―	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究は，糖尿病による右下腿切断後の認知症高齢患者を，多職種連携と訪問リハビリテーションによって生活の再構築を実現させた実践報告である。 本人担当部分：理学療法実践，考察，執筆 （共同発表者：竹内章，池田耕二，山本秀美，中岡絵美，大島知子，池田秀一）
20 当院回復期リハビリテーション病棟におけるサルコペニア症例の特徴からみた今後の取り組み	―	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会2017（久留米）	本研究は，回復期リハビリテーション病棟におけサルコペニア症例を対象に，退院時にサルコペニアが改善した群と改善しなかった群を比較し，その特徴を明らかにし，今後の取り組みの方向性を示した。 本人担当部分：分析，考察，執筆 （共同発表者：中岡伶弥，池田耕二，杉本貴美子，尾藤彩花，大庭由香莉，加藤靖乃，門内鈴香，松井美夕貴，岡村大，田渕真由美，大原佳孝，老田弘子，池田秀一）

教　育　研　究　業　績　書

令和　2年　3月 31日

氏名　伊藤　健一

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	呼吸・心臓リハビリテーション，生活習慣病の運動習慣

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
1）講義の工夫	平成22年4月 ～ 平成28年9月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I・II・III 物理療法学I・II 講義では可能な限りイラストやビデオを多用し，分かりやすいように工夫した．また，様々な資料等で出てくる単語の統一にも気を配り，学生が混乱しないように努めた．さらに，教科書的な内容の教授の後に，実際の症例に重ね合わせることで机上での勉強と臨床でのギャップを少なくするように努めた．また，国家試験対策も盛り込んだ．
	平成26年10月 ～ 平成28年9月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I・II・III 物理療法学I・II 講義には active learning を促通する目的で反転授業を取り入れている．具体的には自主制作した e-learning 教材で自宅学習させ，講義時間は演習やディスカッションに活用した．
2）実験・実習の工夫	平成22年4月 ～ 平成28年9月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類 理学療法学専攻 内部障害理学療法学I 基礎技術の習得には可能な限り時間を掛け，その後，臨床で起こりうる難渋例を想定した実習を行った． 呼吸リハビリテーションにおける聴診の実習ではシュミレータを活用した．
2　作成した教科書，教材		
1）標準理学療法学・臨床実習とケーススタディ第２版（再掲）	平成23年3月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻，内部障害理学療法学I 伊藤健一 第１版を見直し，臨床実習で実際に作成された慢性閉塞性肺疾患（COPD）症例に対するケーススタディ（ケースレポート）をもとに，病態やPTプロセスの展開の方法，評価での注意点，評価結果の相互関係，問題点抽出，治療プログラムなどについて１つ１つに解説，補足を加えた．また，学生として知って置かなければならない基本事項について関連事項にまで派生させトレンドにあわせて整理した． 「慢性呼吸器疾患のケーススタディ」 （全313頁 P262-P269）

事項	年月日	概　　要
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1)大阪府立大学　平成25年度教員業績評価	平成26年12月	総合評価Ａ(S～Cの４段階評価)
2)大阪府立大学　平成26年度教員業績評価	平成27年12月	総合評価Ｓ(S～Cの４段階評価)
4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)講演，研究会について		
	平成22年2月	大阪府理学療法士会南河内ブロック研修会「症例発表の意義」講師
	平成23年 1月	星ヶ丘厚生年金病院星ヶ丘クリニカルカンファレンス心臓リハビリテーションにおけるCPXデータの活用方法について講師
	平成23年 7月	平成23年度第2回ホッと＆ハートの会「坂道での息切れコントロールと健康体操」講師
	平成23年 9月	第4回次世代医療システム産業化フォーラム2011 「慢性呼吸器疾患の動作時息切れを軽減するための呼吸運動支援装置の開発」講師
	平成23年 9月	平成23年度第3回ホッと＆ハートの会「呼吸筋ストレッチの実際」講師
	平成23年10月	平成23年度第4回ホッと＆ハートの会「呼吸筋ストレッチの実際」講師
	平成24年 2月	はびきの健康フォーラム「肺がん患者のリハビリテーション」講師
	平成24年 5月	平成24年度第1回ホッと＆ハートの会 「無理のない有酸素運動１」講師
	平成24年 7月	平成24年度第2回ホッと＆ハートの会 「無理のない有酸素運動２」講師
	平成24年 9月	平成24年度第3回ホッと＆ハートの会 「無理のない有酸素運動３」講師
	平成24年11月	平成24年度第5回ホッと＆ハートの会 「無理のない有酸素運動４」講師
	平成25年 9月	平成25年度第3回ホッと＆ハートの会 「呼吸体操」講師
	平成25年 9月	平成25年度佐賀県理学療法士会研修会 「心臓リハビリテーション：入門のためのミニマムエッセンス」講師
	平成25年 9月	平成26年度第2回ホッと＆ハートの会 「運動の新しい視点：自分の運動量を見直そう」 講師

事項	年月日	概　　要
	平成26年10月	はびきの市民大学「正しい運動で健康増進」講師
	平成27年10月	平成25年度第4回ホッと＆ハートの会 「骨密度と転倒予防運動について」講師
	平成30年12月	平成30年度　登美ヶ丘カレッジ 「慢性呼吸器疾患の息切れ対策：運動の意義と導入の工夫」講師
	平成31年2月	平成30年度ローレルスクエア登美ヶ丘　健康講座 「高齢者における運動の意義」講師
2)高大連携　講義について		
	平成23年10月	大阪府立富田林高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成24年 2月	大阪府立急性期・総合医療センターふれあい病院探検隊「理学療法とは」講師
	平成25年 1月	大阪府立急性期・総合医療センターふれあい病院探検隊「理学療法における評価」講師
	平成25年 7月	大阪府立今宮高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成26年 7月	大阪府立八尾高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成26年 9月	大阪府立寝屋川高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成27年 7月	大阪府立泉陽高等学校「リハビリテーションとは」講師
	平成28年 1月	大阪府立急性期・総合医療センターふれあい病院探検隊「理学療法を体験しよう」講師
	平成30年6月	大阪府立河南高等学校「人を支える「リハビリテーション」を知る：変わるニーズと進歩する技術　講師
	平成30年12月	奈良県立生駒高等学校「理学療法とは」講師
	平成31年1月	奈良県立高取国際高等学校「リハビリテーション学への招待」講師

事項	年月日	概　　要
5　その他		
1)大学院博士前期・後期課程指導実績 （大阪府立大学）		
	平成23年4月～	○博士前期課程：1名 呼息時低周波電気刺激の効果に関する研究：健常成人によるランダム化比較対照試験
	平成25年4月～	○博士前期課程：1名 エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響
	平成26年4月～	○博士前期課程：2名 透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングは血圧および運動機能の改善に寄与するか スタチン投与中の運動が骨格筋ミトコンドリアへ及ぼす影響 ○博士後期課程：2名 Predictors of improvements in exercise capacityduring cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery
	平成27年4月～	○博士前期課程：1名 食道がん切除再建術後患者の理学療法における認知行動療法の併用が退院後の身体活動量と健康関連QOLに与える影響
2)大学院博士前期・後期課程学位審査会実績 （大阪府立大学）		
	平成22年2月	○副査：1名 Modulation of corticospinal excitability induced by combination use of motor imagery and aftereffect of tendon vibration (博士前期課程)
	平成23年2月	○副査：3名 Postural threat increases corticospinal excitability in the trunk flexor muscle in standing（博士前期課程） Abnormalities of the first three steps of gait initiation in patients with Parkinson's disease with freezing of gait（博士後期課程）

事項	年月日	概　　要
		頸随損傷者の自動車運転自立の支援に関する研究：自動車への移乗動作における運動学的特徴の分析 （博士後期課程）
	平成24年2月	○主査：1名 呼息時低周波電気刺激の効果に関する研究：健常成人によるランダム化比較対照試験（博士前期課程）
		○副査：3名 リズミカルな足関節運動が対側ヒラメ筋H反射興奮性に及ぼす影響（博士前期課程）
		Dependency of preparatory inhibition of corticospinal excitability on the sequence of the to-be-signaled motor response （博士後期課程）
		Transcranial magnetic stimulation over the cerebellum induces long latency motor response during visually guided manual tracking task （博士後期課程）
	平成25年2月	○副査：2名 外乱予測が筋反応および反応前期の皮質脊髄路興奮性に与える影響（博士前期課程）
		離散運動と周期運動の運動制御の違いについて （博士前期課程）
	平成26年2月	○主査：1名 エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響 （博士前期課程）
		○副査：2名 Monaural auditory stimulus affects selection of the hand to reach（博士前期課程）
		Motor evoked potential of the hand muscles elicited by posterior-anterior current is suppressed during eye movement without vision （博士前期課程）
	平成27年2月	○主査：1名 透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングは血圧および運動機能の改善に寄与するか（博士前期課程）

事項	年月日	概　　要
		○副査：3名 Switching or cancelling leg movement suppresses anticipatory postural adjustment before gait initiation（博士前期課程） 腕運動に随伴する眼球運動の発生源に関する研究（博士前期課程） The effect of tonic contraction of one hand muscle on motor area of tonically contracting another hand muscle（博士後期課程） ○学外審査員：2名 Predictors of improvements in exercise capacity during cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction（博士後期課程） Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery（博士後期課程）
	平成30年2月	

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1)臨床実習指導者講習会	平成31年 3月3日	第2018-2-031号：厚生労働省
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)国家公務員共済組合連合会枚方公済病院理学療法士	平成28年 10月1日 ～ 平成30年 3月31日	臨床業務，教育業務，研究業務 リハビリテーション科主任（室長） 組織再編と新人教育システムの構築 呼吸器リハビリテーション外来の開設 看護師長および看護師教育 療法士教育プログラムの作成と運営
4　その他 1)国・地方公共団体における審議会・委員会等の参画	平成26年10月 ～ 平成28年9月	文部科学省大学教育再生加速プログラム（I・II複合型）大阪府立大学プロジェクト委員

事項	年月日	概　　要
2)大学委員会の活動		
	平成22年4月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部感染対策委員会委員（平成28年9月まで）
	平成22年4月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部入試広報委員会副委員長（平成28年9月まで）
	平成23年4月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部電子教科書プロジェクト委員（平成26年3月まで）
	平成23年4月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部選挙管理委員会委員
	平成23年4月	大阪府立大学大阪府立大学教育改革専門委員会学修成果可視化専門部会委員（平成28年9月まで）
	平成23年4月	大阪府立大学文部科学省大学教育再生加速プログラム委員（平成28年9月まで）
	平成30年4月	奈良学園大学共通教育委員会委員（平成31年3月まで） 奈良学園大学大学院入試小委員会委員（平成31年3月まで） 奈良学園大学保健医療学部研究倫理審査委員会委員（平成31年3月まで）
	平成30年7月	奈良学園大学入試広報委員会委員（平成31年3月まで）
	平成30年12月	奈良学園大学ハラスメント調査委員会委員長（平成31年3月まで）
	平成31年４月	奈良学園大学教務委員会委員（現在に至る） 奈良学園大学自己点検・評価委員会委員（現在に至る） 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科教務ワーキング委員（現在に至る）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1　臨床実習とケーススタディ 第2版 （標準理学療法学　専門分野）	共著	平成23年3月	医学書院	本書は理学療法士を目指す学生と学生を指導する臨床実習指導者を対象に，学生が臨床実習に向けて必要と思われる準備や臨床実習の意義をまとめるとともに，実際の学生が書いたケーススタディにコメントを加筆することで疾患ごとの理学療法のポイントや重要事項を示したテキストである. B5判 全313頁 編者：鶴見隆正，辻下守弘 共著者：鶴見隆正，辻下守弘，中川法一，宮本謙三，沖田一彦，石倉隆，藤沢しげ子，新井光男，橋元隆，菅原憲一，富樫誠二，橘内勇，田代千惠美，小林修二，小林量作，田中聡，神先秀人，工藤聡，畠中泰彦，加藤宗規，櫻井好美，高木峰子，畠中泰司，小柳磨毅，山田拓実，鳥居昭久，伊藤俊一，長倉裕二，甲田宗嗣，岡崎大資，伊藤健一，他5名 本人担当部分：慢性呼吸器疾患のケーススタディ（P262-P269）を単著. 第１版を見直し，臨床実習で実際に作成された慢性閉塞性肺疾患（COPD）症例に対するケーススタディ（ケースレポート）をもとに，病態やPTプロセスの展開の方法，評価での注意点，評価結果の相互関係，問題点抽出，治療プログラムなどについて１つ１つに解説，補足を加えた.また，学生として知っておく必要のある基本事項を関連事項にまで派生させ，トレンドにあわせて整理した.
2　PT卒後ハンドブック　１年目に習得したい基本スキル	共著	平成26年1月	三輪書店	本書は新人理学療法士に対してon the job trainingとoff the job trainingを職場の教育体制として整備するだけではなく，成人としての学習方法を身につけてもらうこと，そしてそうした自己研鑽が自らのエンプロイアビリティ学習に向けた動機付けを目的にしたテキストである. B5判 全190頁 編者：斉藤秀之，島村耕介，森本榮 共著者：斉藤秀之，森本榮，青山誠，大塚功，小泉幸毅，松原徹，豊田平介，島村耕介，後藤伸介，対馬栄輝，高橋哲也，伊藤直人，奥山夕子，村永信吾，伊能幸雄，中村崇，兼子昌幸，小林久文，川村博文，辻下守弘，西上智彦，川勝邦浩，大矢暢久，鶴見隆正，伊藤健一，他1名 本人担当部分：「症例報告から何を学ぶべきか！」（P175 - P181）を共著 分担執筆者：川村博文，辻下守弘，西上智彦，川勝邦浩，大矢暢久，鶴見正隆，伊藤健一 １年目のPTとして習得したい基本スキルとして「症例報告から何を学ぶべきか！」について，症例報告書の作成方法，症例報告の発表方法について具体例を提示した中で重要ポイントをまとめ，解説した.

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1　全身持久力評価としての漸増反復起立動作テストの活用可能性の検討 （査読付）	共著	平成22年12月	理学療法科学 ， 25：P843-P847	漸増反復起立動作テスト（IRST）で実測したPeak VO2が反復起立回数で予測できるのかを検討した．若年健常人45名に自転車エルゴメータによるCPX，IRSTを呼気ガス分析にて実施した．症候性限界最大負荷時のCPXの酸素摂取量(CPX Peak-VO2)とIRSTの酸素摂取量　(IRST Peak- VO2)では，前者が有意に高値であった．またCPX Peak-VO2=0.1×反復起立回数+14.5，IRST Peak-VO2=0.07×反復起立回数+18.1の有意な回帰式が得られた．IRSTによる反復起立回数でPeak- VO2を予測できる可能性が示唆された． （分担執筆者：堀江淳，伊藤健一，堀川悦夫） （担当部分：デザイン作成と解析）
2　The Relationship Between Skeletal Muscle Oxygenation and Systemic Oxygen Uptake During Exercise in Subjects With COPD: A Preliminary Study （査読付） （COPD患者における運動中の骨格筋酸素化能と酸素摂取量との関係：予備的研究）	共著	平成24年10月	RESPIRATORY CARE, 57: P1602-P1610	本研究の目的はCOPD患者における運動中のVO2に対する骨格筋酸素化能の影響を明らかにすることである．8名のCOPD患者に対しエルゴメータ運動を課し，運動中の換気とガス交換について評価した．VO2は血液中の酸素化レベルと心機能による影響と同様に，動作筋における酸素利用による影響を大きく受けていた． （分担執筆：Tabira,K.,Horie,J.,Fujii,H.,Aida,T.,Ito,K.,Fukumoto,T.,Imagita,H.,Ishihara,H.） （担当部分：データ収集）
3　Carbon Dioxide-rich Water Bathing Increases Myonuclear Number and Muscle Fiber Size in Regenerating Skeletal Muscles （査読付） （炭酸泉浴は再生骨格筋における筋細胞数と筋線維のサイズを増加させる）	共著	平成24年12月	Journal of Physical Therapy Science ， 24：P1295-P1298	本研究は炭酸泉浴が筋損傷後の再生を促進させるかどうかについて検討した．Wistar系雌ラットを非損傷群（NI），損傷群（IC），損傷＋温浴群（ITW），損傷＋炭酸泉群（ICO2）に分け，IC，ITW，ICO2群のラットの左前脛骨筋にブピバカイン塩酸塩により筋損傷を惹起した．損傷の翌日より，ITW，ICO2群のラットに温浴または炭酸泉（1,000 ppm）をそれぞれ，１日に１回，37度で30分間行った．損傷２週間後にラットの左前脛骨筋を摘出し，筋核数，筋線維横断面積を測定した．筋核数はICO2群でIC，ITW群に比べ高値を示し，筋横断面積はICO2群でIC群に比べ高値を示した．本研究より，炭酸泉は筋損傷後の再生を促進させる可能性があることが示唆された． （分担執筆担当：Nonaka,K.,Akiyama,J.,Tatsuta,N.,Une,S,Ito,K.,Kataoka,M.,Ogaya,S.,Iwata,A.,Okuda,K.） （担当部分：資料収集）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　The Usefulness of the Incremental Load Repeated Standup Test in the Assessment of the Exercise Capacity of Patients with Chronic Obstructive Pulmonary Disease （査読付） （慢性閉塞性肺疾患患者の運動能力評価における漸増反復起立動作テストの有用性）	共著	平成25年5月	Journal of Physical Therapy Science，25：P391-P395	椅座位からの漸増反復起立動作テスト(IRST)がCOPD患者の運動耐容能評価として活用できるかを検討した．男性COPD患者18例を対象に6分間歩行距離(6MWD)，漸増シャトルウォーキングテスト(ISWT)，心肺運動負荷テスト(CEST)，IRSTを測定した．Peak VO2の比較として，6MWTの予測値とISWTの予測値では，ISWTの方が有意に高値で，6MWTの予測値とIRSTではIRSTの方が有意に高値であったが，IRSTとISWT，IRST，CESTには有意差を認めなかった．また，CEST-Peak VO2=0.12×起立回数＋8.26，CEST-Peak VO2=0.02×6MWD＋3.48，CEST-Peak VO2=0.02×ISWT＋6.48との有意な回帰式が得られた．IRSTは，客観的な運動耐容能の把握，運動処方，効果検証が可能になり，COPD患者の運動耐容能の評価法として活用できる可能性が示唆された． （分担執筆者：Horie,J.，Ito,K.，Hayashi,S.，Fujii,H.,Ishihara,H.,Horikawa,E.） （担当部分：資料収集と考察）
5　Carbon Dioxide Water Bathing Enhances Myogenin but Not MyoD Protein Expression after Skeletal Muscle Injury （査読付） （炭酸泉浴は骨格筋損傷後のMyoDタンパク質を増加させないがMyogeninを増加させる）	共著	平成25年5月	Journal of Physical Therapy Science，25：P709-P711	これまでに我々は，人工炭酸泉浴が筋損傷の治癒回復を促進する可能性を見いだした．本研究はその治癒促進のメカニズムを探ることを目的に行った．筋損傷後に人工炭酸泉浴を行うと損傷筋の筋芽細胞増殖に関わるMyoDタンパクの発現に変化は見られないが，筋管形成に関わるmyogeninタンパクの発現が増加した．以上より，筋損傷後の人工炭酸泉浴は筋管形成を促進する可能性が示唆された． （分担執筆者:Nonaka,K.,Akiyama,J.,Tatsuta,N.,Une,S.,Ito,K.,Ogaya,S.,Kataoka,M.,Iwata,A.,Okuda,K.） （担当部分：資料収集）
6　Changes in antioxidant enzymes and lipid peroxidation in extensor digitorum longus muscles of streptozotocin-diabetic rats may contribute to muscle atrophy （査読付） （ストレプトゾトシン糖尿病ラット長指伸筋の抗酸化酵素と過酸化脂質の変化は筋萎縮と関連する）	共著	平成26年12月	Acta Physiologica Hungarica，101：P421-P428	糖尿病時の筋萎縮が酸化ストレスと関連があるかについて検証した．速筋線維優位である長指伸筋は萎縮し，抗酸化酵素(カタラーゼ，グルタチオンペルオキシダーゼ，スーパーオキサイドジスムターゼ)活性の上TBARSの増加が確認された．一方，赤筋線維優位であるヒラメ筋の萎縮は軽度で，カタラーゼ活性は上昇したが，それ以外の抗酸化酵素活性とTBARSに変化は認められなかった．以上より，糖尿病に伴う酸化ストレスが速筋線維の萎縮を惹起する可能性を示した． （分担執筆者:Nonaka,K.，Une,S.，Tatsuta,N.，Ito,K.，Akiyama,J.） （担当部分：資料収集）
7　Electrical stimulated ventilation feedback improve ventilation pattern in patients with COPD （筆頭著者） （査読付） （電気刺激による換気フィードバックはCOPD患者の換気パターンを改善する）	共著	平成27年2月	Journal of Physical Therapy Science，27：P325-P330	研究の目的は,COPD患者に対する呼息時電気刺激（PESE）を用いた換気フィードバックの有効性を明らかにすることである．24名のCOPD患者を，プラセボ群とPESEを行う群に割り付けた．これら対象者には5分間のエルゴメータ運動を2回行ってもらい，ベースライン（BL）と各介入による換気指標を中心としたデータの測定を行った．BLに対しプラセボ群では，安静時・運動時とも明らかな変化は認められなかったが，PESE群では安静時・運動時とも有意な換気効率の改善を認めた．この結果によりCOPD患者の換気効率改善にPESEが有効であることが明らかとなった． （分担執筆者:Ito,K.，Nozoe,T.，Okuda,M.，Nonaka，K.,Yamahara,J.，Horie,J.，Hayama,Y.，Kawamura,H.） （担当部分：研究の企画と考察，論文作成）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
8　虚弱高齢者を対象とした腹筋トレーニングを含む通所リハビリテーションの効果 （査読付）	共著	平成27年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究，5：P31-P36	本研究の目的は，虚弱高齢者に対する腹筋トレーニングを含んだ6ヵ月間の通所リハの効果を検証することである．対象者は通所リハ利用中の虚弱高齢者20名（80.5 ± 6.6歳）とした．対照群は既存のプログラムとし，介入群は既存プログラムに1日20回の腹筋トレーニングを含んだ．結果，片脚立脚時間と5 m最速歩行速度は介入群が有意に向上した．腹筋トレーニングを含んだ通所リハは虚弱高齢者のヘルスプロモーションとして有効である可能性が示唆された． （分担執筆者:阿波邦彦，北村智哉，堀江淳，伊藤健一） （担当部分：考察と論文作成指導）
9　Evaluation of a Physical Activity Promotion Program Using the "Exercise Guide 2006" Aimed at Preventing Life style-related Disease among Working People （査読付） （勤労者の生活習慣病予防を目的としたエクササイズガイド2006を用いた身体活動促進プログラムの評価）	共著	平成28年5月	Japanease Journal of Occupational Medicine and Traumatology，64：162-172	健康づくりのための運動指針2006に基づく身体活動促進プログラム(EPAR)の効果を一般的な運動指針(GEG)とともに明らかにした．対象は製造業に従事する勤労者で，これら対象者をEPAR群とGEG群，コントロール群に割り付け，それぞれの介入を行った．評価項目は生化学検査値，身体組成，膝進展筋力，運動に対する自己効力感，行動変容ステージである．結果より健康づくりのための運動指針2006に基づく身体活動促進プログラムは運動への自己効力感を増大させ，生活習慣病予防に寄与する可能性が示唆された． （分担執筆者：Asada,F.,Nomura,T.,Kubota,M.,Ohashi,M.,Ito,K.） （担当部分：研究の企画およびデザインと論文指導）
10　Surface electromyography activity of the rectus abdominis，internal oblique,and external oblique muscles during forced expiration inhealthy adults （筆頭著者） （査読付） （健常成人の努力性呼気時における腹直筋，内腹斜筋，外腹斜筋の表面筋電図の活動）	共著	平成28年6月	Journal of Electromyography and Kinesiology，28：76-81	呼吸リハビリテーションの基礎研究として呼気筋の筋活動パターンを筋電図を用いて呼気抵抗別に検討した．10%PEmax，20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （分担執筆者：Ito,K.，Nonaka,K.，Ogaya,S.，Oogi,A.，Matsunaka,C.，Horie,J.） （担当部分：研究の企画およびデザインと論文作成）
11　Electrical stimulation ventilatory feedback facilitates maintenance of a prolonged expiration pattern during exercise: A proof of concept study in healthy adults （査読付） （電気刺激呼吸フィードバックは運動中の呼気延長の維持を容易にする：健常成人における概念実証試験）	共著	平成28年7月	Physiotherapy Theory and Practice，32:P483-P488	本研究の目的は，運動中の呼息を促通させるために電気刺激を用いたフィードバック（ESVF）を行い，その効果と安全性を明らかにすることである．健常成人23名をESVF群と対照群に割り付けた．対象者は呼吸練習において，呼気延長の呼吸パターンを練習し，その呼吸法を運動中も維持するように指導された．運動中と運動後の呼気/吸気時間比において対照群と比較してESVF群が有意に高値を示した．また，ESVFによる副作用が認められなかったことからESVFは運動中の呼吸法を習得させるツールになり得ることが明らかとなった． （分担執筆者:Yamahara,J.,Ito,K.,Nonaka,K.） （担当部分：実験の計画立案と考察，論文作成指導）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
12 慢性呼吸器疾患における Physical Activity Scale for the Elderlyを用いた身体活動量評価の有用性に関する検証 （査読付）	共著	平成29年3月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌，26：P495-P501	本研究の目的は，慢性呼吸器患者における Physical Activity Scale for the Elderly(PASE)を用いた身体活動量評価の有用性を検証することである．対象である50名のCOPD患者はPASEの回答の後，活動量計を２週間装着した．PASE調査は初回回答から１週間後に再度行った．結果はPASEスコアと活動量計カロリーには相関が認められ，さらに初回PASEスコアと2回目PASEスコアにも高い相関が認められた．これらのことから慢性呼吸器患者に対してPASEが利用できることが明らかとなった． （分担執筆者:青田絵里，伊藤健一，奥田みゆき，濃添建男，堀江淳，石原英樹） （担当部分：実験の計画立案と考察，論文作成指
13　エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響 （査読付）	共著	平成29年4月	理学療法科学，32：P183-P188	本研究の目的は臥床時の呼吸機能に対するエアマットレスの悪影響の有無を明らかにすることである.対象は健常者群 19 名と胸郭コンプライアンス低下群 10名に対して，エアマットレスと標準マットレスの 2 つの条件下で臥位にて測定された呼吸機能を比較した．測定項目は一回換気量，分時換気量，死腔換気率，呼吸数，呼気時間， 吸気時間，全呼吸時間，呼気平均流量，吸気平均流量，吸気における腹部の隆起が開始するタイミングの 10 項目とした．結果は両群ともにすべての測定項目でエアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間に有意な差は認められなかった．以上よりエアマットレス導入は呼吸機能へ悪影響を与えないことが明らかになった． （分担執筆者:井上貴裕，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：実験の計画立案と考察，論文作成指
14　Comparison of the pain-relieving effects of transcutaneous electrical nerve stimulation applied at the same dermatome levels as the site of pain in the wrist joint （査読付） （手関節疼痛部位と同皮膚節レベルに実施する経皮的電気神経刺激の鎮痛効果の比較）	共著	平成29年11月	Journal of Physical Therapy Science，29：P1996-P1999	本研究の目的は手関節疼痛部位と同皮膚節レベルに実施する経皮的電気神経刺激（TENS）の鎮痛効果を比較検討することである．対象は成人女性で，熱刺激を手関節に与えて疼痛を出現させてコントロールを設定し，次に同熱刺激を与えつつ対側の同皮膚節レベルである手関節（CW）へのTENS実施，手関節背側の疼痛部位と同皮膚節レベルの頸部（N）へのTENS実施，CWとNの同時両部位（CWN）へのTENS実施である計3方法での介入を行い，痛みの程度及び脳血流測定を行った．3つの介入の痛みの程度は，コントロールに比べ有意に減少したが，3方法間における痛みの程度の比較では，いずれの組合せにおいても有意な差は認められなかった．効果的なTENSには皮膚節を有効に活用することも重要であるものと考えられた． （分担執筆者：Kawamura,H.,Nishigami,T., Yamamoto,A.,Tsujishita,M.,Ito,K., Ohya,N., Takagi,M.） （担当部分：資料収集と考察）
15　Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery （査読付） （胸腔鏡下手術を受けた肺がん患者では運動耐容能の変化とQOLは関係がない	共著	平成30年3月	Journal of Physical Therapy Science，30：P467-P473	本研究の目的は，胸腔鏡下手術（VATS）を受けた患者の運動耐容能の変化とQOLとの関係を明らかにすることである．VATS後3ヶ月間，肺癌患者36名を追跡調査し，QOLと身体機能を評価した．QOLの身体的および社会的側面は，術後有意に減少したが，第12週までに回復した．対照的に，身体機能は術後4週までに回復していた．QOLの変化率と身体機能に関する変化率との間には有意な相関は認められなかった．身体機能の回復とQOLの回復は相関しないことが明らかとなった． （分担執筆者：Anami,K., Horie,J., Hirayama,Y., Yamashita,N., Ito,K.） （担当部分：資料収集と考察）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16 Predictors of improvements in exercise capacity during cardiac rehabilitation in the recovery phase after coronary artery bypass graft surgery versus acute myocardial infarction （査読付） （回復期心臓リハビリテーションにおける運動耐容能改善予測因子の検討-冠状動脈バイパス術後患者と急性心筋梗塞患者の比較-）	共著	平成30年4月	Heart and Vessels, 33: P358-P366	心臓リハビリテーション(心リハ)における，冠状動脈バイパス術後(CABG)患者と急性心筋梗塞(AMI)患者の運動耐容能改善予測因子を検討した．CABG後患者(61例)では，等尺性膝伸展筋力の変化率(β=0.39,p<0.01)，ヘモグロビン値の変化値(β=0.23,p<0.05)，心リハ開始時の脳性ナトリウム利尿ペプチド値(β=-0.37，p<0.01)が運動耐容能改善予測因子であった．一方，AMI患者(91例)では心リハ開始時の運動耐容能(%予測値)(β=-0.43，p<0.01)が唯一の運動耐容能改善予測因子であった． （分担執筆者：Suzuki,Y.，Ito,K.，Yamamoto,K.，Fukui,N.，Yanagi,H.，Kitagaki,K.，Konishi,H.，Arakawa,T.，Nakanishi,M.，Goto,Y.） （担当部分：研究デザインと解析，考察）
17 Potential of muscles to accelerate the body during late-stance T forward progression in individuals with knee osteoarthritis （査読付） （変形性膝関節症患者における立脚後期の前進中に体幹を加速するための筋の潜在性）	共著	平成30年8月	Human Movement Science, 61:P109-116	本研究では，加速度の減少が上腕三頭筋による前方進行の筋電位の低下と関連しているかどうかを明らかにするために，前方への身体重心加速度および筋電位に対する個々の筋の寄与を分析した．対象は膝OA患者12人と健常者12人である．誘導加速度分析を使用して，各筋肉が70～100%の立脚期の間に前方への身体重心加速にどのように寄与したかを分析した．次に，前方への身体重心加速度の筋電位を算出した．膝OA患者は健常者と比較してヒラメ筋，腓腹筋，および腸腰筋で有意に低い前方への身体重心加速度を示した．これらの所見は，前進に対するヒラメ筋の寄与を改善することが後期立脚期の間に膝OA患者の歩行速度を高めるのに有効であることが明らかとなった． （分担執筆者：Ogaya,S.,Kubota,R.,Chujo,Y.,Hirooka,E.,Ito,K.,Kim,K.,Hase,K.） （担当部分：研究デザインと考察）
18 Endurance exercise increases the protein levels of PGC-1α and respiratory chain complexes in mouse skeletal muscle during atorvastatin administration （査読付） （アトルバスタチン投与中の持久力運動はマウス骨格筋のPGC-1αと呼吸鎖複合体タンパク質を増加させる）	共著	平成31年2月	The Journal of Physiological Sciences, 69: P327-333	アトルバスタチン（AS）の投与中に，マウスの持久力運動が骨格筋のミトコンドリア順応および筋肉損傷を誘発するか否かを調査した．雄のマウスを３つの群のうちの１つに割り当てた：対照（Con），スタチン（Sta），またはスタチンおよび運動(Sta＋Ex)．そしてASを投与し，トレッドミル上で8週間運動を行った．大腿四頭筋におけるミトコンドリア関連タンパク質PGC-1α，および呼吸鎖複合体（COX）I-V，および筋肉損傷マーカーである血清クレアチンキナーゼのレベルを計測した．PGC-1αおよびCOX I-VはStaおよびConの群と比較して，Sta＋Exの群で増大した．血清クレアチンキナーゼレベルは同様であった．これらのことからマウスにおける持久力運動はAS投与中に，筋肉損傷を引き起こさずに骨格筋におけるミトコンドリア順応を誘導することが明らかとなった． （分担執筆者：Nonaka，K.,Ozaki，Y.，Ito,K.,Sakita,M.,Une,S.,Akiyama,J.） （担当部分：研究デザインと考察）
「総説」 1　内部障害に対する運動療法における臨床推論と臨床判断	共著	平成25年2月	理学療法，30巻：P176-P180	「内部障害に対する運動療法における臨床推論と臨床判断」について解説した．具体的には臨床推論と臨床判断の意義・要点，臨床推論と臨床判断を的確に行うための基本的知識の整理と留意点について図を用いて解説した． （分担執筆者：伊藤健一） （担当部分：企画と論文作成）
2　他科で役立つこんな時のリハ処方 4.呼吸器内科・呼吸器外科-呼吸リハを中心に	共著	平成25年12月	Journal of Clinical Rehabilitation，22巻：P1211-P1217	呼吸リハビリテーションを処方するにあたり必須となる以下の点についてまとめた．１）リハの適応者と評価，対応，２）注意点，３）主治医のリハ依頼の目的や期待，４）リハ依頼の多い疾患の概略，５）症例とその効果 （分担執筆者：石田健司，野村卓生，伊藤健一） （担当部分：情報収集とデータ提供）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
3　他職種で作成したハイフローシステムマニュアル	共著	平成30年６月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌，27巻：P146-P152	呼吸不全の新しい治療法であるハイフロー療法で用いるハイフローシステムの設定や取り扱い方について，医師や看護師，理学療法士，薬剤師，臨床工学技士がそれぞれの視点からわかりやすくまとめた. （分担執筆者：奥田みゆき，田中順哉，福田康二，木戸悠人，清水学，上田耕平，辻是道，加治木幸，有満道子，前田里美，伊藤健一，大木敦司，高橋留佳，野原隆司） （担当部分：リハビリテーション部分の企画と校正）
「学会発表」 〈国際学会〉				
1　Effects of Phasic Electrical Stimulation during Expiration in Elderly Chronic Obstructive Pulmonary Disease: A Pilot Study （高齢COPD患者に対する呼息時電気刺激の効果）	－	平成24年12月	17th Congress of the Asian Pacific Society of Respirolory (Hong Kong)	24名の高齢COPD患者を対照群と呼息時低周波電気刺激群に割り付け，安静時および運動時の換気機能について，呼息時低周波電気刺激の効果を検証した．結果より呼息時低周波電気刺激は換気機能を有意に改善することが明らかとなった. （共同発表者：Ito,K.,Nozoe,T.,Okuda,M.,Nonaka,K.,Horie,J.,Kawamura,H.） （担当部分：研究企画と資料の収集，データ解析，学会発表）
2　Effects of phasic electrical stimulation during expiration in elderly patients with chronic obstructive pulmonary disease: A randomised control trial （高齢COPD患者における呼息時電気刺激の効果：ランダム化試験）	－	平成25年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2013 (Barcelona)	24名の高齢COPD患者を対照群と呼息時低周波電気刺激群に割り付け，安静時および運動時の換気機能について，呼息時低周波電気刺激の効果を検証した．結果より呼息時低周波電気刺激は換気機能を有意に改善することが明らかとなった. （共同発表者：Ito,K.,Nozoe,T.,Okuda,M.,Nonaka,K.,Horie,J.,Kawamura,H.） （担当部分：研究企画，資料の収集，データ解析，学会発表）
3　CORRELATING FACTORS OF EXERCISE CAPACITY IMPROVEMENT AFTER CARDIAC REHABILITATION IN POST-CORONARY ARTERY BYPASS GRAFT SURGERY PATIENTS （冠動脈バイパス術後患者における心臓リハビリテーション後の運動能力改善の関連因子）	－	平成27年5月	World Confederation for Physical Theraty Congress 2015 (Singapore)	心臓リハビリテーション(心リハ)に参加した冠動脈バイパス術(CABG)後患者の運動耐容能改善関連因子を検討した．対象は，CABG後に3か月間の心リハプログラムに参加した61例とした．対象には心リハ前後で，運動負荷試験，膝伸展筋力測定，体組成測定，血液データ測定が行われた．多変量解析の結果，膝伸展筋力の変化率(β＝0.51，P＜0.05)と換気効率(VE/VCO2 slope)の変化率(β＝−0.67，P＜0.01)が運動耐容能改善の独立した関連因子であることが明らかとなった. （共同発表者：Suzuki,Y.,Hieda,M.,Fujiwara,R.,Yamamoto,K.,Fukui,N.,Konishi,H.Arakawa,T.,Kumasaka,R.,Nakanishi,M.,Fukui,S.,Nakao,K.,Ohara,T.,Noguchi,T.,Yanase,M.,Ito,K.,Goto,Y.） （担当部分：計画と考察，研究指導）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
4 Electromyography Activity of the Rectus Abdominis, Internal Oblique, and External Oblique Muscles During Forced Expiration in Healthy Adults （健常成人における努力性呼気時の腹直筋，内腹斜筋と外腹斜筋の筋電活動）	－	平成27年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2015 (Amsterdam)	呼気筋の筋活動パターンを筋電図を用いて呼気抵抗別に検討した．10%PEmax，20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （共同発表者：Ito,K.,Nonaka,K.,Ogaya,S.,Horie,J.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）
5 Validity and Intra-class Reliability of Spirometry Using a Mask Instead of a Mouthpiece （マウスピースの代わりにマスクを用いたスパイロメータの信頼性と妥当性）	－	平成28年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2016 (London)	本研究の目的はマスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性を明らかにすることである．筒型マウスピースの代わりにマスクを用いて肺機能を測定した結果，妥当性と再現性が確認できた．このことから，スパイロメトリの際に筒型マウスピースの代わりにマスクを用いることが可能であると考えられた．但し，データの取り扱いに関しては一次回帰式で補正する必要がある．また，今回の結果は安静時計測の結果であり，背景に記した運動時評価における妥当性と再現性の検討は今後の課題である． （共同発表者：Ito,K., Nonaka,K., Takeda,S., Nishikawa, T.,Anami,K., Horie,J., Tsujishita,M., Kawamura,H.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）
6 Assessment of the mechanism underlying the improvement in ventilation efficiency induced by phasic electrical stimulation during expiration in patients with chronic obstructive pulmonary disease. （慢性閉塞性肺疾患患者に対する呼息時電気刺激がもたらす換気効率の改善機序）	－	平成29年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2017 (Milan)	本研究の目的はCOPD患者に対する呼息時電気刺激（PESE）が換気効率を改善する機序を明らかにすることである．対象は35名の外来COPD患者で電気刺激を行わない，電極を設置しただけの群（sham control）と呼息筋である腹直筋に対して電気刺激を行う群（R-PESE），呼息に関係の無い腕橈骨筋に対し電気刺激を行う群（B-PESE）の３群に無作為に割り付けた．各群とも安静時の換気機能指標の計測の後，各群の介入下に軽い運動を行い換気機能指標を計測した．本研究の結果よりPESEの効果は呼息筋に対する機能的電気刺激としての効果ではなく，呼息を促すbiofeedbackの効果であることが明らかとなった． （共同発表者：Ito,K., Nonaka,K., Nozoe,T., Shiranita,S.,Horie,J.,Shimizu,G.,Ogi,A., Okuda,M.,Watanabe,N.） （担当部分：データの解析，考察，学会発表）
〈国内学会〉				
1 重症慢性心不全における低強度レジスタンストレーニング併用の効果と安全性に関する検討	－	平成22年7月	第16回日本心臓リハビリテーション学会 （鹿児島）	重症慢性心不全患者において下肢の低強度レジスタンストレーニングを併用した運動療法の安全性と効果について，臨床所見および運動耐容能を比較対象試験により検討した.結果，低強度レジスタンストレーニングを併用したプログラムは重症慢性心不全患者において運動耐容能の改善を促進し，安全であることが明らかとなった． （共同発表者：安達裕一，福井教之，小西治美，伊藤健一，中西道郎，高濱博幸，簗瀬正伸，相原直彦，野口輝夫，後藤葉一） （担当部分：治療介入およびデータ収集）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
2　慢性呼吸器疾患患者に対するPhysical Activity Scale for Elderly日本版を用いた身体活動量評価の有用性に関する研究	－	平成22年10月	第20回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（鹿児島）	慢性呼吸器疾患患者50例を対象に，Physical Activity Scale for the Elderly日本版（以下PASE）の再現性および妥当性を検討した．妥当性検討の方法には，３次元加速度センサ搭載の活動量計を装着し活動消費カロリーを計測した． その結果，PASEスコア総点は104.7±71.1点，活動量計による活動消費カロリーは375.6±161.6 kcal/dayであった．妥当性を示すPASEスコアと活動消費カロリーの相関（r=0.51，p＜0.01）および，再現性を示す1回目と2回目のPASEスコアの相関（ICC=0.61，p＜0.01）は共に有意に高い相関関係が認められ，慢性呼吸器疾患においてPASEの使用が可能であることが明らかとなった． （共同発表者：青田絵里，伊藤健一，野村卓生，浅田史成，堀江淳，濃添建男，奥田みゆき，相良憲幸，石原英樹） （担当部分：データの解析，考察，研究指導）
3　慢性閉塞性肺疾患患者における骨格筋酸素動態と酸素摂取量への影響	－	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会（宮崎）	COPD患者を対象にNIRSを用いて運動中の下肢筋酸素動態を測定し，酸素摂取量との関連について検討した．対象はCOPD患者10名とし，ランプ負荷での呼気ガス分析と並行して外側広筋で組織酸素飽和度(StO2)，筋酸素抽出率(MOER)を測定した． VO2とStO2，SpO2は全例で有意な負の相関を示した．VO2とHR，MOERは全例で有意な性の相関を示した．COPD患者においても骨格筋酸素動態がHR，SpO2同様にVO2に影響することが示された．運動制限因子がMOERであるならば骨格筋トレーニングを主としたプログラムの構成が必要であることが示唆された． （共同発表者：田平一行，藤井宏匡，相田利雄，伊藤健一，堀江淳） （担当部分：分析，考察）
4　改良版座位有酸素運動プログラムの運動テンポ別にみた強度，ならびにエネルギー消費に関する研究	－	平成23年7月	第23回大阪府理学療法学術大会（大阪）	我々が開発した座位有酸素運動プログラムにおいて80bpmと160bpmの異なる２つの運動テンポを設定し，強度とエネルギー消費比較検討した．運動強度は両テンポとも有酸素運動の範囲であった．一方，総エネルギー消費量では160bpm，脂肪酸化比・脂肪酸化量では80bpmが有意に高い値を示した．我々が開発した座位有酸素運動プログラムにおいては目的に応じて運動テンポを設定する必要性が示唆された． （共同発表者：弓田真梨子，久川舞，真伏美和，浅田史成，青田絵里，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察，研究指導）
5　COPD患者の呼気に対する機能的電気刺激の効果－シングルケースによる検討－	－	平成23年11月	第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（松本）	COPD患者の呼気に対する機能的電気刺激（以下FES）の効果を一症例において検討した．80歳男性のCOPD患者に対し，運動のみを遂行した場合と，FESを行いながら運動を遂行した場合の換気機能等を比較し，その影響について検討した．安静時，運動時ともにFESの介入により一回換気量が増大し，呼吸数が減少した．本対象者においては，呼気に対するFESにより安静時および運動時の換気効率を改善することができた． （共同発表者：伊藤健一，濃添建男，平瀬智，奥田みゆき） （担当部分：研究計画と解析）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
6　我々が開発した座位有酸素運動プログラムの換気指標における特徴	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（神戸）	我々が開発した座位有酸素運動プログラムの中で設けられているセッション毎の換気指標や動作に応じた特徴を明らかにすることを目的に研究を行った．対象である健常女子大学生20名を運動スピード80bpm群と160bpm群の２群に割り付け，CPXと割り付けられたスピードでの運動を実施した．その際のV02とTV，Rを測定し比較検討した．結果より我々が開発した座位有酸素運動プログラムにおいては運動部位や体幹の使用量の違いがV02や換気量に影響を及ぼすことが明らかとなった． （共同発表者：弓田真梨子，山原純，久川舞，伊藤健一） （担当部分：データ収集とその解析，考察，研究指導）
7　我々が考案した座位有酸素運動プログラムにおける糖・脂肪代謝の検証　運動強度と身体使用部位に着目して	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（神戸）	我々が開発した座位有酸素運動プログラムの運動強度，身体使用部位の違いが糖・脂肪代謝に与える影響について検証した．健常成人20名は運動テンポ80 bpm群と160 bpm群に割付けられ，各々の運動プログラムを遂行した．今回用いたプログラムで脂肪を選択的に燃焼するには，低強度（80 bpm）の下肢を中心とした運動が最適であること，糖を選択的に燃焼するには身体使用部位に関わらず高強度（160 bpm）の運動を行うことが適切であることが明らかとなった． （共同発表者：山原純，弓田真梨子，伊藤健一） （担当部分：データ収集とその解析，考察，研究指導）
8　神経・筋機能制御を目的とした物理療法と運動療法の複合効果　呼吸理学療法における治療的電気刺激と運動	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（神戸）	「神経・筋機能制御を目的とした物理療法と運動療法の複合効果：呼吸理学療法における治療的電気刺激と運動」といった視点で，我々が開発してきた呼息時低周波電気刺激の効果や課題，将来展望などについて提示した． （伊藤健一） （担当部分：研究企画と資料の収集，データ解析，発表）
9　運動時換気および呼吸時間に対する呼息時低周波電気刺激の効果−健常仁による予備的検討−	－	平成24年11月	第22回日本呼吸器ケア・リハビリテーション学会学術集会（福井）	本研究の目的は，運動中の呼息を促通させるために電気刺激を用いたフィードバック（ESVF）を行い，その効果と安全性を明らかにすることである．健常成人23名をESVF群と対照群に割り付けた．対象者は呼吸練習において，呼気延長の呼吸パターンを練習し，その呼吸法を運動中も維持するように指導された．運動中と運動後の呼気/吸気時間比において対照群と比較してESVF群が有意に高値を示した．また，ESVFによる副作用が認められなかったことからESVFは運動中の呼吸法を習得させるツールになり得ることが明らかとなった． （共同発表者：山原純，野中紘士，藤川薫，小川和哉，伊藤健一） （担当部分：実験の計画立案と考察，論文作成指導）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
10　高齢COPD患者に対する呼息時低周波電気刺激の効果	－	平成24年11月	第22回日本呼吸器ケア・リハビリテーション学会学術集会（福井）	24名の高齢COPD患者を対照群と呼息時低周波電気刺激群に割り付け，安静時および運動時の換気機能の変化から，呼息時低周波電気刺激の効果を検証した．結果より呼息時低周波電気刺激は換気機能を有意に改善することが明らかとなった． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，濃添建男，奥田みゆき） （担当部分：研究企画と資料の収集，データ解析，学会発表）
11　高齢COPD患者に対する呼息時低周波電気刺激の効果	－	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （名古屋）	24名の高齢COPD患者に対して呼息時低周波電気刺激（PESE）を用い，その効果を，安静時および運動時の換気機能や酸素摂取量に着目し検討した．本研究の結果よりPESEが安静時および運動時の換気効率を改善することが明らかとなった．また，その際にはPESEが仕事量増大の指標になり得るVO2／Wの増大を誘発しないことが証明された． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，濃添建男，奥田みゆき，川村博文） （担当部分：研究企画と資料の収集，データ解析，学会発表）
12　胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いはあるか？	－	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	本研究の目的は，胸腔鏡下肺葉切除術（以下，VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いがあるか検証することである．対象はVATSが施行された23名，年齢70.5±7.3歳であった．3.1METs以上群（12名）と3METs以下群（11名）に分け術前身体機能を比較した結果，3METs以下群は有意に体重比膝伸展筋力が低値を認めたが，それ以外には有意差を認めなかった．結果より術後に安全かつ効率的な運動ができるためには下肢筋力が重要であることが明らかとなった． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，田中宇大，山下直己，伊藤健一） （担当部分：計画と考察，研究指導）
13　室内有酸素運動における映像の効果	－	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	トレッドミルを用いた屋内有酸素運動中の「映像視聴」が及ぼす身体への影響について検討した．24名の健常女子大学生を映像視聴「あり」群と「なし」群の２群に割り付けトレドミル歩行を行い，疲労指標や呼吸代謝指標，換気能力指標を測定した．身体的疲労感と精神的疲労感はともに2群間で有意な差は認められなかった．一方でVO2，METS，EEについては，いずれも「あり」群が「なし」群に比べ有意に高い値を示した．本研究結果から，運動中の映像視聴は映像「なし」での運動と変わらぬ疲労感で効率の良い運動が可能となることが示唆された． （共同発表者：小西隆幸，杉山友香，谷口結子，藤井愛美，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：計画と考察，研究指導）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
14　エアマットレスが臥床時の「換気」を制限するか：健常者による基礎的研究	－	平成26年10月	第24回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（奈良）	健常者を対象に，エアマットレスが臥床中の呼吸機能に与える影響を明らかにした．対象者にはエアマットレスと標準マットレス上にて臥位を取らせ，一回換気量，呼吸数などの呼吸機能を測定し比較した．エアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間で呼吸機能に有意差は認められなかった．胸郭のコンプライアンスの良い者についてはエアマットレスを使用しても，呼吸機能に変化を及ぼさないことが明らかになった． （共同発表者：井上貴裕，伊藤健一，野中紘士） （担当部分：計画とその解析，考察，研究指導）
15　胸腔鏡下肺葉切除術後患者における身体能力および健康関連QOLの縦断的変化の検証	－	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）	本研究は，VATS前後から術後1ヵ月にかけての身体能力および健康関連QOLの変化を前向きに検討した．対象は30名で年齢72.3±7.2歳であった．反復測定分散分析の結果，呼吸機能は低下したままだが，運動耐容能は術後1ヵ月で術前の値まで回復することが示唆された．しかしながら，健康関連QOLは1ヵ月では完全に回復しないことが明らかとなった．そのため退院前指導をはじめとした健康関連QOLを考慮した指導等の必要性が示唆された． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，山下直己，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，出見世真人，佃陽一 ，伊藤健一） （担当部分：計画とその解析，考察，研究指導）
16　強制呼気筋の強度別筋活動パターンの解明：無作為割付，シングルブラインドによる検討	－	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）	呼吸リハビリテーションにおける呼吸筋トレーニングを効率良く実施するために,強度別筋活動パターンを筋電図を用いて検討した．10%PEmax，20%PEmax,30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋,外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし,その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合,その負荷は弱すぎることが示唆された． （共同発表者：大木敦司，松中千明，野中紘士，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察，研究指導）
17　心不全を伴う透析関連低血圧患者の特徴（第1報）	－	平成27年7月	第21回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（福岡）	本研究の目的は透析関連低血圧患者の特徴を明らかにすることである．対象は当院外来透析患者のうち，研究の同意が得られた高齢心不全患者14名とし，透析中に収縮期血圧が20mmHg以上低下し，100mmHg未満となる血圧低下群7名と対照群7名の2群に分け，身体機能などを比較検討した．対照群と比較し，血圧低下群では蛋白異化率が有意に低値であったことから，透析関連低血圧患者の特徴として，蛋白摂取量が低い傾向であり栄養障害のあることが示唆された． （共同発表者：山下真由子，寺崎珠，中瀬理恵，杉本篤子，木下千春，神田豊子，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察，研究指導）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18　冠動脈疾患患者の心臓リハビリテーション後の体重増加は全て悪か？：筋力・体組成からの検討	－	平成27年7月	第21回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（福岡）	心臓リハビリテーション(心リハ)に参加した冠動脈疾患(CAD)患者の体重増加について検討した．心リハ後に体重が増加した50例のうち膝伸展筋力改善10%以上の18例を筋力増加群，10%未満の32例を増加不良群とした．両群ともに膝伸展筋力と骨格筋量 は心リハ後に有意に増加したが，各増加率は筋力増加群が不良群より有意に大きかった．さらに，筋力増加群では体脂肪量は不変で，運動耐容能が有意に改善したが，不良群では体脂肪量が有意に増加し，運動耐容能に有意な増加は見られなかった．下肢筋力増加を伴う体重増加は「良い体重増加」であることが明らかとなった． （共同発表者：鈴木裕二，山本壱弥，福井教之，柳英利，北垣和史，小西治美，稗田道成，藤原玲子，荒川鉄雄，熊坂礼音，福井重文，大原貴裕，簗瀬正伸，中尾一泰，中西道郎，伊藤健一，後藤葉一） （担当部分：計画と考察，研究指導）
19　透析低血圧患者における透析施行中の低負荷レジスタンストレーニングの効果	－	平成28年3月	第6回日本腎臓リハビリテーション学会（岡山）	透析低血圧患者の血圧や運動機能が３か月間低負荷レジスタンストレーニング（RT）により改善するかを検討した。血圧については，変化は認められなかった．歩行速度については，介入前後で対照群で有意な低下が認められたが，RT群では維持された．また，身体活動量については，介入前後で対照群では有意な変化は認められなかったが，RT群では有意な増加が認められた．運動に対する行動変容ステージについても，RT群では介入前後で有意に増加し，運動に対するアドヒアランスの有意な改善が認められた．結果より今回のRTが運動機能の維持や身体活動量，運動に対するアドヒアランスの改善において有用であることが明らかとなった． （共同発表者：山下真由子，木下千春，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察）
20　肺がん患者の健康関連QOLと身体能力の術後回復過程	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会（札幌）	本研究は，胸腔鏡下肺葉切除術を受ける肺がん患者に対し，術前から術後3ヵ月にかけて健康関連QOLおよび身体能力の変化を前向きに検証した．結果，肺がん患者の身体能力は術後1カ月足らずで回復することが確認できたが，健康関連QOL（SF-36 PCS）は術前の状況まで回復するのに3ヵ月以上を要することが明らかとなった．つまり，身体能力を維持・向上させるだけでは健康関連QOL対策としては不十分であることが示唆された． （共同発表者：阿波邦彦，平山善康，山下直己，堀江淳，太田垣あゆみ，松井萌恵，出見世真人，佃陽一，伊藤健一） （担当部分：データの解析，考察）
21　食道がん切除再建術後患者の生存期間に影響を及ぼす因子の検討―手術後におけるQOL，身体機能改善への後追試的研究―	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会（札幌）	食道がん切除再建術後患者の生存期間に関与する因子を対象の36名を生存群・死亡群に分け比較検討した．結果，術後1年でのAlbが死亡群で低値，術前のがん進行度が重症な者ほど生存期間が短かった．死亡群で生存期間が術後1年程の者も多く．術後におけるパラメータからは生存期間予測は困難であった．がん進行度が重症であれば，術後の生存期間が短い可能性があり，周術期から生存期間も考慮した理学療法を実施する必要性がある． （共同発表者：髙畑晴行，脇田正徳，伊藤健一，金光浩，長谷公隆）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22　減量に成功した肥満を有する冠動脈疾患患者の運動耐容能変化が筋力・体組成に及ぼす影響	－	平成28年7月	第22回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（東京）	心臓リハビリテーション参加後に減量したBMI25以上の肥満を有する冠動脈疾患患者50例を，運動耐容能(PVO2) 増加率が5%以上の33例(PVO2改善群)と，5%未満の17例(非改善群)に分け，体組成，筋力変化を比較した．PVO2改善群では，PVO2改善(改善率 +17%，p＜0.01)に伴い，下肢筋肉量(15.4→15.8kg，p＜0.01)と膝伸展筋力(41.4→44.4kg，p＜0.01)が有意に改善したのに対し，PVO2非改善群(PVO2改善率 -4%，NS)では下肢筋肉量，膝伸展筋力とも有意な増加を示さなかった． （共同発表者：鈴木裕二，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，伊藤健一，小西治美，稗田道成，藤原玲子，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，中西道郎，大原貴裕，高潮征爾，中尾一泰，福井重文，簗瀬正伸，後藤葉一） （担当部分：データの解析，考察）
23　食道がん患者における術前の運動習慣と 術後呼吸機能・健康関連QOLとの関連	－	平成28年10月	第26回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（横浜）	本研究の目的は食道がん患者における運動習慣が身体機能，QOLに与える影響を検討することである．食道がん切除術を受ける15名の患者に対し，手術前と退院時の行動変容ステージ，膝伸展筋力，6分間歩行距離，咳嗽時最大呼気流量（PCF），最大呼気流量（PEF），健康関連QOLを測定した．結果を運動実行群と非実行群の2群に分けて検討した．運動習慣と術後のQOLに関連性は認められなかったが，運動習慣のある者は術前PCF・PEF，術後PEFが有意に高かった．このことから，運動習慣は食道がん術後経過に良い影響を及ぼす可能性が示唆された． （共同発表者：髙畑晴行，濱田真一，金光浩，伊藤健一，長谷公隆） （担当部分：データの解析，考察）
24　マスクを用いたスパイロメトリの妥当性と信頼性	－	平成28年10月	第26回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（横浜）	本研究の目的はマスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性を級内相関やブランド・アルトマンプロットにより明らかにすることである．筒型マウスピースの代わりにマスクを用いて肺機能を測定した結果，妥当性と再現性が確認できた．このことから，スパイロメトリの際に筒型マウスピースの代わりにマスクを用いることが可能であると考えられた．但し，データの取り扱いに関しては一次回帰式で補正する必要がある．また，今回の結果は安静時計測の結果であり，背景に記した運動時評価における妥当性と再現性の検討は今後の課題である． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，武田匠平，西川剛史，奥田みゆき） （担当部分：データの解析，考察，発表）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25　筋骨格シミュレーション解析を用いた変形性膝関節症患者の歩行時膝伸展パターン分類	－	平成28年12月	第3回日本運動器理学療法学会学術集会（金沢）	本研究の目的は変形性膝関節症患者が歩行中にどの筋を使って膝を伸展させるのかを調べ，代償動作のパターンを分類することである．計測された歩行の運動学・運動力学データを元に多関節運動モデルを用いたシミュレーション解析を行った結果，１．大殿筋の活動増加，２．ヒラメ筋の活動増加，3．前脛骨筋の活動減少，の3つの膝伸展代償パターンに分類できることがわかった．また，大殿筋で膝伸展を代償するパターンは他2群よりも歩行速度が高いことがわかった．この結果より，大殿筋による大腿骨の後方回旋で膝を伸展させる作用が，変形膝関節症患者の歩行速度を維持するのに重要であることが明らかとなった． 本発表で学術大会賞を受賞している． （共同発表者：小栢進也，久保田良，中條雄太，金光浩，伊藤健一，長谷公隆） （担当部分：研究デザイン，考察）
26　運動メニューの順序変更が心臓リハビリテーションの円滑な進行に有効であった高度心機能低下DCMの一例	－	平成29年2月	日本心臓リハビリテーション学会第2回近畿地方会（大阪）	今回，高度心機能低下若年DCM症例の心臓リハビリテーション（心リハ）を経験した．症例は25歳女性，23歳時にDCMと診断され，今回心不全増悪にて入院となった．心リハ開始時の左室駆出率は25%，BNP980pg/mlであった．心リハ実施中に血圧低下，眩暈がしばしば出現し，心リハ進行が困難であった．そこで，運動メニューの順序として有酸素運動の実施前に低強度レジスタンストレーニングを先行させたところ，低血圧症状は軽減し，心リハ3ヶ月終了時にはPeakVO2が＋37.7%，等尺性膝伸展筋力が＋17.9%と良好に増加した． （共同発表者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，小西治美，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，三浦弘之，長谷川拓也，中尾一泰，福井重文，簗瀬正伸，中西道郎，後藤葉一） （担当部分：データの解析，考察，発表）
27　食道がん切除再建術患者における術前身体活動量が術後の身体機能と健康関連QOLに与える影響	－	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会（千葉）	本研究の目的は食道がん患者における手術前の身体活動量が，術後の身体機能,健康関連QOLに与える影響を検討することである．術前の活動量が1日3METs・時間以上の活動している群の方が，以下の群よりも手術前では等尺性膝伸展筋力，6分間歩行距離，身体的QOLサマリースコアが有意に高く，術後では等尺性膝伸展筋力のみ有意に高い結果となった．食道がん切除再建術は高侵襲を伴う手術であるため，身体機能のなかでも心肺機能と関連する運動耐容能の低下がQOLの低下に影響する可能性がある．今後は，術前，周術期，退院後において運動耐容能を高めるための理学療法介入の有効性について検討する必要がある． （共同発表者：髙畑晴行，濱田真一，清水遼子，脇田正徳，金光浩，伊藤健一） （担当部分：研究の計画立案と考察，指導）

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
28　CABG後患者の心臓リハビリでの運動耐容能改善規定因子はAMIと異なるか―重回帰分析による検討―	－	平成29年7月	第23回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（岐阜）	心臓リハビリテーション（心リハ）に参加した，冠状動脈バイパス術後（CABG）症例61例と急性心筋梗塞（AMI）症例91例の運動耐容能改善規定因子について検討した．CABG症例の運動耐容能改善規定因子は，心リハ開始前後の膝伸展筋力の変化率，血中ヘモグロビンの変化値，心リハ開始時の血中脳性ナトリウム利尿ペプチド（BNP）値であった．AMI症例の運動耐容能改善規定因子は，心リハ開始時の運動耐容能の%予測値であった． （共同発表者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，小西治美，渡慶次竜生，伊達歩，熊坂礼音，荒川鉄雄，三浦弘之，長谷川拓也，中尾一泰，福井重文，簗瀬正伸，中西道郎，後藤葉一） （担当部分：考察と指導）
29　体重200kgを超える肥満肺胞低換気症候群の症例を如何に運動療法に繋げるか	－	平成29年9月	第36回日本臨床運動療法学会（大阪）	体重が200kgを超える肥満肺胞低換気症候群患者に対し，理学療法の位置づけを考察しながら減量できた症例の経過について報告した．症例は30歳男性，体重は239kgでBMIは78であった．入院当初より低酸素血症と肺高血圧症，重度右心不全が認められた．動作レベルは寝返り，起き上がりが何とかできる程度であった．減量目的の介入が不可欠であったが，立ち上がりができなかったことからセザムベッドによる立ち上がり介助を行い，立位・歩行練習へと繋げていった．歩行距離も順調に延長することができ，170kgまで減量ができたため，自宅退院となった．一般的な肥満患者の理学療法プログラムでは減量目的の有酸素運動が主となるが，今回のような症例では基本動作から歩行までの手段を工夫し，担保する事が重要である． （共同研究者：大木敦司，伊藤健一，清水学，原智恵，林祐司，春名克純，奥田みゆき） （担当部分：治療介入と考察）
30　体重200kgを超える肥満肺胞低換気症候群の１例：理学療法の位置づけ	－	平成29年10月	第66回共済医学会学術集会（京都）	体重が200kgを超える肥満肺胞低換気症候群患者に対し，理学療法の位置づけを考察しながら減量できた症例の経過について報告した．症例は30歳男性，体重は239kgでBMIは78であった．入院当初より低酸素血症と肺高血圧症，重度右心不全が認められた．動作レベルは寝返り，起き上がりが何とかできる程度であった．減量目的の介入が不可欠であったが，立ち上がりができなかったことからセザムベッドによる立ち上がり介助を行い，立位・歩行練習へと繋げていった．歩行距離も順調に延長することができ，170kgまで減量ができたため，自宅退院となった．一般的な肥満患者の理学療法プログラムでは減量目的の有酸素運動が主となるが，今回のような症例では基本動作から歩行までの手段を工夫し，担保する事が重要である． （共同研究者：大木敦司，伊藤健一，清水学，原智恵，林祐司，春名克純，奥田みゆき）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
31　当院における「できるADL」と「しているADL」の検討	－	平成29年10月	第66回共済医学会学術集会（京都）	研究の目的は枚方公済病院における「屋内移動」と「トイレ」に関する「できる」「している」の乖離度合いを調査し，早期退院につなげる方策を検討することである．過去にリハビリテーションの依頼のあった310名の患者カルテから「屋内移動」と「トイレ」に関する「できる」・「している」について調査した．「できる」・「している」の乖離は7病棟中3病棟で存在していた．この3病棟は認知症患者を多く抱える病棟で，患者の転倒を避けるが故の乖離であることが推測できた．このことから認知症患者の病棟内移動手段の決定には病棟看護師と理学療法士の密なコミュニケーションと共通の基準を設ける必要性が示唆された． （共同発表者：木村拓磨，大木敦司，池島浩司，井上悟，吉本拓登，能勢亜友子，伊藤健一，奥田みゆき）
32　COPD患者の換気効率を改善する呼息時電気刺激はどこを刺激すべきか	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	本研究の目的はCOPD患者に対する呼息時電気刺激(PESE)の刺激部位を特定することである．対象者は35名のCOPD患者である．対象者は電極を設置しただけの群と呼息筋である腹部筋に対して刺激を行う群，呼吸運動に関係の無い前腕部に対し刺激を行う群の3群に割り付けられた．対象者にはエルゴメータ運動を課し，種々の換気指標を計測した．結果よりPESEの効果は呼息筋に対する機能的電気刺激としての効果ではなく，呼息を促すbiofeedbackの効果であることが示唆された． よって刺激部位は腹部でなく，露出しやすい前腕部でも良いことが明らかとなった． （共同発表者：伊藤健一，野中紘士，白仁田秀一，堀江淳，清水学，大木敦司，奥田みゆき） （担当部分：研究デザインと介入，考察，発表）
33　臥位での運動療法が生きることを支援した終末期間質性肺炎の一例	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	Platypnea-Orthodeoxia症候群（POS）を有する肝肺症候群の理学療法について報告した．症例は50代男性で診断名は間質性肺炎急性増悪，既往歴として肝硬変を有していた．呼吸苦により他院で上記診断．入院時血ガスは酸素4LでPCO2 33.6torr，PO2 55.2torrであり胸部CTでは両側下背野に網状影.を認めた．オキシマイザー+酸素6Lで臥位ではSpO2は97%を維持できたが，起坐位ではSpO2が70%台となるPOSを認めた．理学療法はPOSを許容した上で屋内短距離移動の獲得を目的に臥位での筋力トレーニングを行った．連続歩行は20mまでとし,退院後は訪問サービスで管理することで53病日オキシマイザー+酸素6LのHOTを使用し自宅退院となった． （共同発表者：大木敦司，伊藤健一，清水学，林祐司，木戸悠人，川田富美子，奥田みゆき） （担当部分：治療介入と考察）
34 肺がん術後に乳糜胸を合併した，認知機能障害がある高齢者に対する多職種での関わりが有効であった一例	－	平成29年11月	第27回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（仙台）	症例は80歳台女性で，肺炎加療中に左肺腫瘍が見つかり左上葉切除を施行した．術後に乳糜胸を認めた．乳糜胸の治療は安静による保存療法が一般的であるが，本症例は認知症を合併していたため，更なる機能低下を懸念し他職種間で綿密な情報交換を行いながら積極的なチームアプローチを行った．結果，スムーズに退院に繋げることができた． （中村佳菜子，松島裕美,糸賀詩織,能勢亜友子,田中順也,奥田みゆき,渡邊明,伊藤健一,上田 耕平,辻是道） （担当部分：理学療法の介入と考察）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
35　心不全入院時における身体的フレイル指標の推移	－	平成30年2月	日本心臓リハビリテーション学会第3回近畿地方会（神戸）	フレイルの基礎研究として心不全入院時の身体機能の実態を調査した．急性心不全あるいは慢性心不全急性増悪で入院してきた患者で，入院前に屋内歩行が可能でshort physical performance batteryを測定した患者212名が対象である．これら対象者を低機能群，中間機能群，高機能群の3群に分け，それぞれの群毎に退院時に機能改善の認められた割合を調査した．低機能群のうち機能回復を示した割合は60.3%，中間機能群では57.1%，高機能群では0%であった．入院時に身体的フレイルが認められた者のうち，低機能群・中間機能群においてはリハビリテーションの介入で50%以上の者に身体機能の改善が認められた．また，高機能群においては入院時の機能が維持できていたことが明らかとなり，フレイルに対するリハビリテーションの介入効果が明らかとなった． （共同発表者：池田力，岩津弘太郎，芦川博信，松村幸一，坂本真実，伊藤健一，中野南帆子，阪田智子，原谷こずえ，高林健介，藤田亮子，北口勝司，野原隆司） （担当部分：考察）
36 心臓サルコイドーシス患者における心臓リハビリテーションの有効性	－	平成30年7月	第24回日本心臓リハビリテーション学会学術集会（横浜）	心臓リハビリ3ヶ月プログラムとCPXを実施している21名の心臓サルコイドーシス患者に対する心臓リハビリテーション（心リハ）の有効性と安全性について検討した．検討した項目は最高酸素摂取量と等尺性膝伸展筋力，血液データである．結果より心臓サルコイドーシス患者では心リハ導入により運動耐容能は改善するが，開始時BNPの高値例では運動耐容能の改善は乏しいことが明らかとなった．また，有害事象も認められなかったことより心臓サルコイドーシス患者の心リハの有効性と安全性が示唆された． （共同研究者：鈴木裕二，伊藤健一，福井教之，山本壱弥，柳英利，北垣和史，島田幸洋，小西治美，荒川鉄雄，中尾一泰，長谷川拓也，福井重文，三浦弘之，中西道郎） （担当部分：考察）
37　COPD患者に対する呼息時電気刺激が動的肺過膨張に及ぼす影響：パイロットスタディ	－	平成30年11月	第28回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（幕張）	研究の目的はPESEの動的肺過膨張への影響を明らかにすることである．外来COPD患者６名に対して６分間歩行を呼息時電気刺激を行う「介入あり」と「介入なし」の２条件下に実施した．その際に最大吸気量(IC)と分時換気量(VE)，呼吸数(RR)，酸素飽和度(Sp02)，自覚的運動強度(Borg scale)を計測した．IC，VE，RR，Sp02，Borg scaleのいずれの評価項目においても有意な差は認められなかった．効果量についてはBorg scaleで効果量「大」であった．呼息時電気刺激は動的肺過膨張を抑制することはできなかったが，息切れの軽減に有用である可能性が示唆された． （共同研究者：伊藤健一，大木敦司，清水学，奥田みゆき） （担当部分：デザイン，考察，発表）
38　安定期呼吸器疾患の身体活動量及び生活空間の広がりと運動機能の関連	－	平成30年11月	第28回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（幕張）	外来リハビリテーションを実施している安定期呼吸器疾患患者70名を対象に，身体活動量及び生活空間の広がり（IPAC）と運動機能（膝伸展筋力，SPPB，6MD）の関連について調査検討した．結果より安定期呼吸器疾患患者の外出頻度にはバランス等のパフォーマンス能力が関与し，身体活動量には運動耐容能が関与することが明らかとなった． （共同研究者：大木敦司，清水学，伊藤健一，松本美希子，高橋留佳，池田力，奥田みゆき）

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
39　在宅酸素療法（HOT）使用者における酸素ボンベと液体酸素デバイス間の患者特性	－	令和元年11月	第29回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（名古屋）	研究の目的はHOT適応者において，酸素ボンベと液体酸素各々の使用者の特性を明らかにすることである．51名のHOT適応患者において年齢，肺機能，酸素流量，上下肢筋力，６分間歩行距離，身体活動量，ADL能力，認知機能について評価した．結果，液体酸素使用群において上下肢筋力，身体活動量，認知機能において有意に勝っていた．これらの結果は酸素デバイスを選択する際に役立つものと考えられた． （共同研究者：清水学，大木敦司，池田力，伊藤健一，森山久美子，高橋留佳，上田耕平，木戸悠人，福田康二，奥田みゆき） （担当部分：考察）
40　高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を規定する因子	－	令和元年11月	第29回呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（名古屋）	研究の目的は高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を規定する因子を明らかにすることである．外来呼吸リハを実施している92名の患者に対し，SPPB，NRADL，HADS，MMSE，LSAを評価し，LSAを目的変数として重回帰分析を行った．結果，SPPBとNRADLが身体活動量を示すLSAを規定する因子として抽出された．高齢安定期呼吸器疾患の身体活動量を向上させるには息切れのコントロールを含めたADL能力とパオーマンス能力の向上が重要であることが示唆された． （共同研究者：大木敦司，清水学，伊藤健一，森山久美子，高橋留佳，池田力，奥田みゆき） （担当部分：考察）
〈研究会〉 1　産業理学療法分野における運動指導効果の検討	－	平成22年5月	第5回生活習慣病認知行動療法研究会（京都）	理学療法士が行った講習会の効果を検証するために講習会前後のESE を比較検討した．対象は勤労男性396 名に運動の重要性と実践方法に関する講習会前後にESEを評価し，運動習慣の有無別，および青壮年群（20～39 歳），中高年群（40～59 歳）別に指導前後のESE を比較検討した．運動習慣者および習慣を有さない者の指導前後のESE は，運動習慣の有無に関わらず両群ともに指導後に有意な向上を認めた．運動習慣を有さない者の指導後のESE は，習慣者の指導前のESE よりも両群ともに有意に低かった． （共同発表者：浅田史成，野村卓生，佐藤友則，高野賢一郎，坂本和志，伊藤健一，野村誠，久保田昌詞，大橋誠） （担当部分：データ収集とその解析，考察，研究指導）
2　糖尿病患者に対するエクササイズガイド2006 を利用した運動指導はExercise Self-efficacy の上昇と維持に有効か？	－	平成22年5月	第5回生活習慣病認知行動療法研究会（京都）	糖尿病教育のために入院された2型糖尿病患者53名を対象にとした．身体活動量を指標として運動療法の指導を行った群（Ex群）と従来からの治療を目的とした糖尿病運動療法の指導を行った群（従来群）の2群に分けた．指導前後および退院後6カ月から1年時点における自己効力感（Exercise self-efficacy: ESE）を比較検討した．結果，両群共に指導後のESEは有意に増加したが，Ex群のみ指導前と比較して退院6カ月から1年後のESEが有意に高く，運動行動が継続されている結果が得られた．研究結果から従来群に比較してEx群の方がESEの維持と向上に有効である可能性を報告した． （共同発表者：野村卓生，浅田史成，伊藤健一，岡野理江子，良本佳代子，瀧秀樹，久保田昌詞，大橋誠，野村誠） （担当部分：データ収集とその解析）
〈研修会〉 1　心臓リハビリテーション：入門のためのミニマムエッセンス	－	平成25年9月	平成25年度　佐賀県理学療法士会研修会（佐賀）	新人理学療法士に向け，近年急速にニーズが高まってきた心臓リハビリテーションを実施するにあたり，最低限押さえておかなければならない基礎知識，リスク管理，評価，運動療法プログラムについて,そのエッセンスについて提示した． （伊藤健一） （担当部分：研究企画と資料の収集，データ解析，発表）

教　育　研　究　業　績　書

令和　2年　3月 31日

氏名　　大浦　智子

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
公衆衛生学，疫学，作業療法学	健康情報学，作業療法学，ヘルスコミュニケーション

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1) 演習・実習の効果的な活用とパワーポイントの効果的活用	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「基礎作業学」（2年次，専門科目）は，作業療法の基礎となる作業活動，理論，作業分析を理解するための科目である．補充資料に加えて体験型の演習および分析を伴う実習を取り入れ，アクティブラーニングを促進した．これにより，個々の学生の学習到達度を高めることができた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「地域作業療法学」（3年次，専門科目）は，地域生活者である対象者の理解と地域における作業療法実践の理解を深める科目である．講義に加えて適宜外部講師を招聘し，演習や事例検討を加え，地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスを理解するためのアクティブラーニングを促進した。これにより，個々の学生の学習到達度を高めることができた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「地域作業療法学演習」（3年次，専門科目）は，地域生活者の疾病・障害の予防や地域集団に対する予防教育に関する理解を深める科目である．健康行動理論や予防の考え方に関する講義のほか，介護者支援代表や行政で働く作業療法士を適宜招聘するとともに，行政と連携した地域住民対象の介護予防事業等を通して，地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスの理解を高めることができた．
2) 課題・レポートの調整と演習・実習の効果的な活用	平成22年4月 ～ 平成26年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学特論Ⅲ」（4年次，専門科目）は，作業療法の歴史，作業療法の理論・モデルを理解・活用を深める選択科目であるが，ほぼ全員が受講している．反転授業を取り入れるとともに，臨床実習担当事例の症例報告を活用した集団討議を通してアクティブラーニングを促進した．これにより，個々の学生の学習到達度を高めることができた．

事項	年月日	概　　要
	平成22年4月 ～ 平成27年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「身体障害作業療法学実習」（3年次，専門科目）は，身体障害領域の作業療法実践の実際を理解するための科目である．主にリスク管理に関する講義および観察・面接の演習とフィードバックを担当し，疾患に応じた評価・治療計画を立案し，症例レポート作成に至るアクティブラーニングを促進した．これにより，個々の学生の学習到達度を高めることができた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学研究法演習」（3年次，専門科目）は，講義および文献抄読等を通して，学生自ら卒業研究計画を立案する科目である．具体的な研究計画事例の提示とともに，実際の研究計画を立てる課題とフィードバックにより，研究計画手順の習得を図った．これにより，個々の学生が研究倫理を理解し，研究計画書を作成することができた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学研究法特論」（4年次，専門科目）は，学生自身が卒業研究の実施と論文を執筆する過程を習得するための科目である．学士能力として研究の実施・論文執筆・プレゼンテーション能力を修得できるよう支援した．これにより，個々の学生が研究を手順に沿って実施、分析、考察することで研究の手順に対するの理解を高めることができた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「臨床実習Ⅰ」（2年次，専門科目）は，病院や施設において1週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで作業療法の役割の理解を深め，作業療法の実際を見学する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，臨床実習指導者のもとでの病院や施設および作業療法の役割について理解を深められるよう支援した．これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「臨床実習Ⅱ」（3年次，専門科目）において，病院や施設において3週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで対象者の評価，目標設定，記録報告等を習得する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，疾患や障害，作業療法評価，作業療法の目標設定について理解を深められるよう支援した．これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた．

事項	年月日	概　　要
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「臨床実習Ⅲ-1」（4年次，専門科目）は，病院や施設において8週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，疾患や障害，作業療法評価，作業療法の目標設定，治療計画の立案および実施について理解を深められるよう支援した．これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「臨床実習Ⅲ-2」（4年次，専門科目）は，病院や施設において8週間を通じて臨床実習指導者である作業療法士のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得する科目である．臨床実習中および実習セミナーにおける指導により，疾患や障害，作業療法評価，作業療法の目標設定，治療計画の立案および実施について理解を深められるよう支援した．これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた．
	平成23年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学研究法」（3年次，専門科目）は，作業療法領域における研究の位置づけや手順を習得する科目である．講義にあわせた演習によって，研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めアクティブラーニングを促進した．これにより，学生の学習到達度を高めることができた．
	平成25年4月 ～ 平成26年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学特論Ⅰ」（3年次，専門科目）は，学内教員が兼ねている病院において1日体験実習を行う科目である．それに伴う事前・事後学習を設定し，課題用紙および評価表を作成し，事後に内省できるようにするための資料を用いて指導した．これにより，学生の実習における学習到達度を高めることができた．
	平成25年4月 ～ 平成28年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「情報処理演習Ⅱ」（1年次，教養科目）は，パワーポイントによるプレゼンテーション・スキルを習得するため科目である．課題の提示およびプレゼンテーション実践の場とした．これにより，学生の学習到達度を高めることができた．
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学特論Ⅳ」において，作業療法の歴史，作業療法の理論・モデルを理解・活用を深めるために，反転授業を取り入れるとともに，臨床実習担当事例の症例報告を活用した集団討議を通してアクティブラーニングを促進した．これにより，学生の学習到達度を高めることができた．

事項	年月日	概　　要
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学セミナー 」（4年次，専門科目）は，作業療法士国家試験にむけた科目である．このうち，作業療法理論・研究法・管理・地域領域の知識の確認と理解を高めるための課題の提供と演習機会を設けた．これにより，学生の学習到達度を高めることができた．
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「情報処理演習」（1年次，教養科目）は，Microsoft Office Word，Excel，PowerPointの操作とプレゼンテーションの修得を図る科目である．課題の段階的提示と発表機会を設けアクティブラーニングを促進した．これにより，学生の学習到達度を高めることができた．
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「地域リハビリテーション演習」（2年次，専門科目）は，地域リハビリテーションおよび集団を対象としたプログラムの立案を理解するための科目である．介護保険・総合支援事業関連施設におけるフィールドワークによって，実際場面での経験を通じた理解を高めることが出来た．
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の「基礎ゼミⅡ」（1年次，共通教育科目）は，大学での学び方を理解し，レポート作成・グループワークの実施・基本的なプレゼンテーションを身につける科目である．文献検索やレポートの作成，プレゼンテーションの実施によって，理解を高めることが出来た．
3）パワーポイントの効果的活用	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の　ほぼ全科目において，講義の進行をわかりやすくるるためのパワーポイントを作成した．特に，教科書を用いる場合においては教科書に沿って要点を示す，教科書以外の説明を加える場合には十分な時間をとって学生自身が記入しながら学習することが出来るように配慮して作成した．これにより，進行中の講義で示している箇所が明確となり，学生が配布資料に記載することも増え，理解を促進できた．
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の科目において，講義の進行をわかりやすくるるためのパワーポイントを作成した．特に，教科書を用いる場合においては教科書に沿って要点を示す，教科書以外の説明を加える場合には十分な時間をとって学生自身が記入しながら学習することが出来るように配慮して作成した．これにより，進行中の講義で示している箇所が明確となり，学生が配布資料に記載することも増え，理解を促進できた．

事項	年月日	概　　要
4）実例提示の活用	平成28年4月 ～ 平成29年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の　「作業療法学概論」（1年次，専門科目）は，作業療法の理解を図る導入の位置づけの科目である．なかでも，作業療法士が働く分野とその役割について解説し，例示することにより理解を促進した.これにより，学生の学習到達度を高めることができた.
5）（院）パワーポイントの効果的活用	平成24年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師および京都大学大学院医学研究科の非常勤講師として担当の　ほぼ全科目において，講義の進行をわかりやすくるるためのパワーポイントを作成した.学生自身が記入しながら学習することが出来るように配慮して作成した．これにより，進行中の講義でのディスカッション機会を設けながら学生が配布資料に記載することも増え，理解を促進できた.
6）（院）演習・実習の効果的な活用と遠隔講義への対応	平成23年4月 ～ 平成24年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師として担当の「生活行動科学特論Ⅱ」は，健康行動理論および作業療法理論の理解によって健康支援学をより深く探求する科目である．学びを深化させるための討議や発表機会により，学生の学習到達度を高めるための準備を進めたが，開講無だった.
	平成24年4月 ～ 平成26年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師として担当の「生活行動科学特論Ⅱ」は，健康行動理論および作業療法理論の理解によって健康支援学をより深く探求する科目である．学びを深化させるための討議や発表機会により，学生の学習到達度を高めることができた.
	平成26年4月 ～ 平成27年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師として担当の「生活環境学特論Ⅱ」は，社会の健康を支援する視点，制度的・文化的環境を含む健康支援の理解を深めるための科目である．課題準備を進めたが，開講無だった.
	平成26年4月 ～ 平成27年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師として担当の「生活環境学演習」は，ヘルスコミュニケーションおよび論文の批判的吟味への理解を深めるための科目である．課題準備を進めたが，開講無だった.
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師として担当の「健康支援学研究法」（必修）は，大学院生としての研究手順を理解するための科目である．主に研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）について担当した．適宜演習を加えながら進めることで，学生の学習到達度を高めることができた.
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師として担当の「生活行動支援学特論」（必修）は，社会の健康を支援する視点，ヘルスコミュニケーションを通じた健康支援の理解を深める科目である．学びを深化させるための議論の機会を設けることで，学生の学習到達度を高めることができた.

事項	年月日	概　　要
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師として担当の「日常生活環境学特論」は，社会の健康を支援する視点，制度的・文化的環境を含む健康支援の理解を深める科目である．学びを深化させるために議論の機会を設けることで，学生の学習到達度を高めることができた．
7)（院）　課題・レポートの調整・活用と 演習・実習の効果的な活用	平成28年4月 ～ 平成31年3月	京都大学大学院医学研究科の非常勤講師として担当の「クリティカルケア看護学特論Ⅰ」（修士課程）（平成28・29年度）および「生活習慣病看護学特論」（博士後期課程）（平成30年度）は，疫学研究のデザインの理解を深めるための講義と研究仮説の立て方に関する演習科目である．演習を通じて，研究計画の立案への理解を促進し，学生の学習到達度を高めることができた．
2　作成した教科書，教材		
1）講義用補助教材	平成29年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「地域リハビリテーション演習」（2年次，専門科目）において使用した．補助教材を用いて修得を図った．
	平成22年4月 ～ 平成27年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「身体障害作業療法学実習」（3年次，専門科目）において使用した．特に，リスク管理に関する講義および観察・面接技能の修得にあたり，独自の資料と課題教材を活用した．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「基礎作業学」（2年次，専門科目）において使用した．教科書に記載されていない内容を補充するためのも所教材を用いて，作業療法の基礎となる作業活動，理論，作業分析への理解を深めた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「地域作業療法学」（3年次，専門科目）において使用した．地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスへの理解を深めた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「地域作業療法学演習」（3年次，専門科目）において使用した．地域リハビリテーションや地域作業療法，在宅サービスを理解するために，スライドに加えてその元となった書籍等を提示し，理解を深めた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．

事項	年月日	概　　要
	平成23年4月 ～ 平成29年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学研究法」（3年次，専門科目）において使用した．研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めるための課題教材を活用して知識の定着につなげた．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成25年4月 ～ 平成28年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「情報処理演習Ⅱ」（1年次，教養科目）において使用した．パワーポイントによるプレゼンテーション・スキルを習得するための課題の設定により修得を図った．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「情報処理演習」（1年次，教養科目）において使用した．Microsoft Office Word，Excel，PowerPointの操作における課題教材の提示と演習により，スキルの修得を図った．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部の講師として担当の「基礎ゼミⅡ」（1年次）において使用した．文献検索やMicrosoft Office Word，Excel，PowerPointの操作における課題教材の提示と演習により，スキルの修得を図った．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
2）実習指導用マニュアル	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「臨床実習Ⅰ」（2年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで病院や施設の特性と作業療法の役割について理解を深められるよう用い，実習を円滑に進めた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「臨床実習Ⅱ」（3年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで対象者の評価，記録報告等を習得できるよう用い，実習を円滑に進めた．
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「臨床実習Ⅲ-1」（4年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得できるよう用い，実習を円滑に進めた．

事項	年月日	概　　要
	平成22年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「臨床実習Ⅲ-2」（4年次，専門科目）において使用した．臨床実習指導者のもとで対象者の評価，治療の立案，治療実施，記録報告等を習得できるよう用い，実習を円滑に進めた．
	平成25年4月 ～ 平成26年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学特論Ⅰ」（3年次，専門科目）において使用した．事前・事後学習のための教材および評価表を用いて知識・技術の修得につなげた．
	平成31年4月 ～現在に至る	奈良学園大学保健医療学部の教授として担当の「早期体験実習（作業療法）」（1年次，専門科目）において使用した．院や施設の特性と理学療法・作業療法の役割について理解を深められるよう用い，実習を円滑に進めた．
3）スライド	平成22年4月 ～ 平成26年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学特論Ⅲ」（4年次，専門科目）において使用した．作業療法の歴史，作業療法の理論・モデルの理解・活用を深めた．
4）課題教材	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学セミナー 」（4年次，専門科目）において使用した．作業療法士国家試験範囲のうち，作業療法理論・研究法・管理・地域領域の課題教材を用いた演習により知識の定着につなげた．
5）講義用教材（『作業療法研究法』（医歯薬出版株式会社）の発刊前校正刷）と講義用補助教材	平成29年4月 ～ 平成31年3月	星城大学リハビリテーション学部の講師として担当の「作業療法学研究法」において（3年次，専門科目）において使用した．研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めるための補助教材をあわせて使用し，修得につなげた．
6）（院）講義用教材とスライド	平成23年4月 ～ 平成26年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師として担当の「生活行動科学特論Ⅱ」において使用した．健康行動理論および作業療法理論の理解によって健康支援学をより深く探求するために，教材を活用した．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成26年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師として担当の「健康支援学研究法」（必修）において使用した．研究法（特に実験研究，研究デザイン，統計解析）の理解を深めるために，教材を活用した．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師として担当の「生活行動支援学特論」（必修）において使用した．社会の健康を支援する視点，ヘルスコミュニケーションを通じた健康支援の理解を深めるために教材を活用した．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．

事項	年月日	概　　要
	平成27年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科の講師として担当の「日常生活環境学特論」において使用した．社会の健康を支援する視点，制度的・文化的環境をふまえた健康支援の理解を深めるために，教材を活用した．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	京都大学大学院医学研究科の非常勤講師として担当の「クリティカルケア看護学特論Ⅰ」（修士課程）および「生活習慣病看護学特論」（博士後期課程）において使用した．独自教材に基づき，課題の設定を行い，演習によって効果的な学修機会となるよう配慮した．また，講義に応じたスライドにより，講義の理解を高めた．
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）授業評価（平成22年度，星城大学）	平成22年4月 ～ 平成23年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中2.69 授業アンケート科目②：作業療法学特論Ⅲ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.76
2）授業評価（平成23年度，星城大学）	平成23年4月 ～ 平成24年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.18 授業アンケート科目②：作業療法学特論Ⅲ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.28
3）授業評価（平成24年度，星城大学）	平成24年4月 ～ 平成25年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.36 授業アンケート科目②：作業療法学特論Ⅲ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.30
4）授業評価（平成25年度，星城大学）	平成25年4月 ～ 平成26年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.36 授業アンケート科目②：情報処理演習Ⅱ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.17 授業アンケート科目③：作業療法学特論Ⅲ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.50
5）授業評価（平成26年度，星城大学）	平成26年4月 ～ 平成27年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.56 授業アンケート科目②：情報処理演習Ⅱ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.26
6）授業評価（平成27年度，星城大学）	平成27年4月 ～ 平成28年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.25 授業アンケート科目②：情報処理演習Ⅱ 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.00
7）授業評価（平成28年度，星城大学）	平成28年4月 ～ 平成29年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.46 授業アンケート科目②：地域作業療法学演習 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.46

事項	年月日	概　　要
8）授業評価（平成29年度，星城大学）	平成29年4月 ～ 平成30年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.54 授業アンケート科目②：地域作業療法学演習 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.52
9）授業評価（平成30年度，星城大学）	平成30年4月 ～ 平成31年3月	授業アンケート科目①：地域作業療法学 総合満足度の平均スコアは4点満点中3.87 授業アンケート科目②：地域作業療法学演習 総合満足度の平均スコアは4点満点中4.00
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （講師・講演）		
1）愛知県作業療法士会現職者共通講習会	平成22年10月	「職業倫理」講師として，作業療法士を対象に倫理の原則とともに臨床における倫理の考え方，職業倫理について講義した.
2）シニアフィットネスリハビリテーション研究会ミニレクチャー	平成23年3月	「高齢者ケアにおけるクライエント中心のアプローチ」講師として，対象者中心の考え方とエビデンスに基づく臨床実践について講義した.
3）愛知県作業療法士会現職者共通講習会	平成23年10月	「職業倫理」講師として，作業療法士を対象に倫理の原則とともに臨床における倫理の考え方，職業倫理について講義した.
4）東高瀬川地域包括支援センター（京都市）研修会	平成24年8月	京都市伏見区竹田住吉学区地域包括支援センター管轄内の介護保険事業所の従事者対象の研修会「訪問リハビリテーションの活用」講師として，訪問リハビリテーションへの理解を高め，効果的な活用につなげるよう講義した.
5）星城大学公開講座	平成24年12月	「ヘルシー生活をエンジョイ：健康・医療の情報を活用-健康づくりのはじめの一歩-」講師として，一般市民を対象に健康情報の読み方と実生活への活用について講義した.
6）京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻健康情報学分野同門会	平成26年8月	「Shared Decision Making:　臨床実践者に求められるスキルとは？」講師として，対象者中心の考え方とエビデンスに基づく実践，その架け橋となる共有決定について講義した.
7）日本訪問リハビリテーション協会認定技術研修会	平成26年8月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した.

事項	年月日	概　　要
8) 八千代病院総合リハビリセンター　研修会	平成27年2月	「臨床実践者に求められるスキルとは？」講師として，対象者中心の考え方とエビデンスに基づく実践，リハビリテーション場面における実情について講義した.
9) 日本訪問リハビリテーション協会認定技術研修会	平成27年10月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した.
10) 日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in 大阪シンポジウム	平成27年5月	シンポジウム1「訪問リハビリテーションにおける教育のこれから～生命，生活，人生を共に歩む訪問療法士を育てる為には～」シンポジストとして，求められる訪問リハビリテーションのあり方，認定訪問療法士制度と教育について講演した.
11) 平成27年度厚生労働科学研究費補助金（地域医療基盤開発推進研究事業）〈指定課題〉『社会的責任に応える医療の基盤となる診療ガイドラインの課題と可能性の研究』公開シンポジウム「Shared decision making〈SDM〉の今・これから：診療ガイドラインの新たな可能性を考える」	平成28年2月	様々な医療の場におけるSDMの試み 「地域医療の立場から」シンポジストとして，地域におけるリハビリテーション場面における情報共有の実態報告と，望まれる共有決定のあり方について講演した.
12) 第3回臨床作業療法学会（東京）「教育と臨床のコラボ企画」	平成28年3月	「学校の特色紹介　学校と臨床現場をつなごう企画」において，星城大学における学内教育と臨床実践にむけた取り組みを紹介した.
13) 第31回愛知訪問リハネットワーク「訪問リハビリテーションの効果：主観的指標と客観的指標」	平成28年11月	「訪問リハビリテーションの効果：主観的指標と客観的指標」講師として，訪問リハビリテーションに従事する療法士を対象にリハビリテーションにおけるアウトカム，訪問リハビリテーションにおける効果測定の重要性について講義した．また，その後の症例報告会において全報告症例へのコメントの要望があり，フィードバックした.
14) 第10回 健康寿命延伸と介護予防を考える会～70代、80代を元気に乗り越える為に～（公益財団法人杉浦記念財団）	平成30年5月	「高齢者ケアとリハビリテーション ―その人らしい生活を支える作業療法―」について講演し，研究会参加者との活発な意見交換を行った.
15) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定基礎研修会	平成30年5月	「リスク管理」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスク管理の考え方，および訪問リハビリテーションにおけるリスク管理について講義した.
16) 日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	平成30年6月	「訪問リハビリテーションにおけるリスクマネジメント」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスクマネジメントについて講義・演習を行った.

事項	年月日	概　　要
17）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定基礎研修会	平成30年8月	「リスク管理」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスク管理の考え方，および訪問リハビリテーションにおけるリスク管理について講義した.
18）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	平成30年10月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した.
19）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	平成30年11月	「訪問リハビリテーションにおけるリスクマネジメント」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスクマネジメントについて講義・演習を行った.
20）日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in にいがた【教育講座1】	令和元年6月	【教育講座1】「症例報告の書き方と留意点」講師として，症例報告が果たす役割，書き方と留意点について講演した.
21）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	令和元年7月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した.
22）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定基礎研修会	令和元年7月	「リスク管理」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対してリスク管理の考え方，および訪問リハビリテーションにおけるリスク管理について講義した.
23）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士認定技術研修会	令和元年10月	「精神障害・認知症への対応」講師として，認定訪問療法士を目指す会員に対して精神障害と認知症の知識および訪問リハビリテーションにおける支援について講義した.
24）奈良学園大学公開講座第2回登美ヶ丘カレッジ	令和元年12月	「日常生活の工夫～健康情報の読み方から健康生活のススメ～」講師として，一般市民に向けた講演を行った.
（座長） 1）第20回愛知県作業療法学会	平成24年5月	「老年期障害/他」の座長として，身体障害領域の作業療法および調査報告等を扱うセッションを進行しコメントした.
2）第4回日本訪問リハビリテーション協会学術大会in熊本	平成26年6月	「人材育成・教育」の座長として，訪問リハビリテーションにおける人材育成およびリスク管理等を扱うセッションを進行しコメントした.

事項	年月日	概　　要
3) 第50回日本作業療法学会	平成28年9月	「理論・基礎6」の座長として，作業療法および関連領域における文献研究，動物研究，人を対象とした質的研究，量的研究等を扱うセッションを進行しコメントした.
4) 日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in 北九州 シンポジウム	平成30年6月	シンポジウム3「訪問リハビリテーションにおける人材教育について」の座長として，訪問リハビリテーションに携わる人材の育成に取り組むシンポジストの講演と質疑を進行した.
5) 第52回日本作業療法学会	平成30年9月	「ON-7 地域7」の座長として，地域作業療法を扱うセッションを進行しコメントした.
6) 第78回日本公衆衛生学会	令和元年10月	「第23分科会P-2301」（保健医療介護サービス研究）の座長として，保健医療介護サービス研究を扱うセッションを進行しコメントした.
（調査・研究協力・その他）		
1) 緩和ケアへの移行と実施の円滑化に向けた研究：診療ガイドラインとQOL評価の課題（科学研究補助金交付　基盤研究（B））（宮崎喜久子）	平成21年4月～平成24年3月	研究協力者としてQOL評価の臨床での活用にむけた最小重要差（MID）研究のシステマティック・レビュー等の研究協力，ガイドラインの内容分析等の研究協力を行った.
2) 精神障害と労災研究会（会代表：天笠崇）2010受託研究	平成22年9月～平成23年3月	精神障害と過労に関するシステマティック・レビュー等の研究協力を行った.
3) ソーシャル・キャピタルと健康に関する研究（科学研究費補助金（新学術領域）（竹田徳則）	平成23年4月～平成24年3月	ソーシャル・キャピタルと健康に関する調査と分析における協力を行った.
4) 東海市健康増進計画等の評価及び策定支援委託事業（星城大学契約/実務担当）	平成25年5月～平成26年3月	東海市委託事業において，各年代の健康に関するアンケートの集計および分析と報告書の作成を行った.
5) 旭化成ファーマ株式会社業務委託（個人契約）	平成25年8月～平成26年7月	脳卒中患者を対象としたセルフケア自立度測定尺度の信頼性検証のために，研究計画への助言などを含む研究調整を行った.
6) 東海市介護予防サロン運営展開方法調査（星城大学契約/分担）	平成26年5月～平成27年3月	東海市委託事業において、介護予防サロン運営に関する調査および分析と報告書の作成を行った.
7) 「健康チャレンジ」京大共同研究プロジェクト研究関連（株式会社電通）	平成30年9月～平成30年12月	健康に関するシステマティックレビュー等を通して研究に協力した.

事項	年月日	概　　要
5　その他 （修士論文作成支援及び指導実績） 1）星城大学大学院における健康支援学特別研究教育支援	平成25年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科生活健康支援学領域（修士課程）　講師（平成30年度准教授）として，竹田徳則教授が指導教員として指導する学生の教育支援（研究計画への助言，研究の相談等）を行った.
2）大学院生（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻　専門職学位課程）への研究支援（1名）	平成26年10月 ～ 平成27年3月	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻専門職学位課程における課題研究において，研究協力者として研究データの分析への助言および論文執筆にむけた支援を行った.
3）大学院生（京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻　専門職学位課程）への研究支援（1名）	平成27年9月 ～ 平成28年3月	京都大学大学院医学研究科社会健康医学系専攻専門職学位課程における課題研究において，研究協力者として研究データの分析への助言および論文執筆にむけた支援を行った.
4）星城大学大学院における健康支援学特別研究における研究指導補助（1名）	平成28年4月 ～ 平成31年3月	星城大学大学院健康支援学研究科生活健康支援学領域（修士課程）　講師（平成30年度准教授）として，竹田徳則教授が指導教員として指導する学生の研究指導補助教員の立場から「認知症カフェにおける作業療法士の役割と課題－インタビュー調査と生活行為向上マネジメントの実践を通して－」の研究計画の立案・実施・分析について支援した.
5）大学院生（星城大学大学院健康支援学研究科修士課程）への研究支援	平成31年4月 ～ 現在に至る	星城大学大学院健康支援学研究科生活健康支援学領域（修士課程）　における竹田徳則教授が指導教員として指導する学生の研究について，前年度に引き続いて指導を継続した.
（研修） 1）第10回厚生労働省主催在宅訪問リハビリテーション講習会修了	平成14年2月	厚生労働省が日本リハビリテーション医学会に委託し日本理学療法士協会及び日本作業療法士協会の協賛を得て開催した講習会で所定の課程を修了（第799号）
2）福祉用具プランナー講習会修了	平成15年8月	京都市介護実習・普及センター主催の福祉用具プランナー研修において財）テクノエイド協会が定めた課程を修了（第15-1209号）
3）第31回理学療法士・作業療法士養成施設等教員講習修了	平成16年12月	厚生労働省と財団法人医療研修推進財団が共催し社団法人リハビリテーション医学会，日本理学療法士協会，日本作業療法士協会及び全国理学療法士作業療法士学校養成施設連絡協議会の協賛を得て開催された研修課程を修了（第3408号）
4）第2回大学院生のための教育実践講座-大学でどう教えるか-修了	平成18年8月	京都大学高等教育研究開発推進センターが主催した左記講座の所定の課程を修了（第54号）
5）第35回Assessment of Motor and Process Skills (AMPS)講習修了	平成22年2月	AMPS講習会事務局主催の講習会を修了し，規定のデータを米国AMPS Project Internationalに提出し認定（Rater Number: 014924）

事項	年月日	概　　要
6) 第5回Assessment of Awareness Disability (AAD)講習修了	平成22年7月	日本AAD講習会事務局主催の講習会を修了し，規定のデータを提出し認定
7) 第11回RIASコーディング研修修了 (The Roter Methods of Interaction Process Analysis System)	平成27年8月	RIAS研究会日本部会主催の第11回RIASワークショップにおける研修を修了し，規定のデータを提出し認定（第145号）
8) 倫理審査委員会・治験審査委員会委員養成研修修了	平成29年12月	国立研究開発法人日本医療研究開発機構　医療技術実用化総合促進事業「平成29年度臨床研究・治験従事者等に対する研修」
（個人活動実績報告）		
1) 個人活動実績報告書（平成22年度，星城大学）	平成23年3月	教育活動，学生支援，研究活動，学外貢献，大学運営等について，総括した.
2) 個人活動実績報告書（平成23年度，星城大学）	平成24年3月	教育活動，学生支援，研究活動，学外貢献，大学運営等について，総括した.
3) 個人活動実績報告書（平成24年度，星城大学）	平成25年3月	教育活動，学生支援，研究活動，学外貢献，大学運営等について，総括した.
4) 個人活動実績報告書（平成25年度，星城大学）	平成26年3月	教育活動，学生支援，研究活動，学外貢献，大学運営等について，総括した.
5) 個人活動実績報告書（平成26年度，星城大学）	平成27年3月	教育活動，学生支援，研究活動，学外貢献，大学運営等について，総括した.
6) 個人活動実績報告書（平成27年度，星城大学）	平成28年3月	教育活動，学生支援，研究活動，学外貢献，大学運営等について，総括した.
7) 個人活動実績報告書（平成28年度，星城大学）	平成29年3月	教育活動，学生支援，研究活動，学外貢献，大学運営等について，総括した.
8) 個人活動実績報告書（平成29年度，星城大学）	平成30年3月	教育活動，学生支援，研究活動，学外貢献，大学運営等について，総括した.
（星城大学　FD研修会等）		
1) 第6回FD・教育改善検討会議	平成22年9月	星城大学における教育の改善に向けた検討を行った.
2) 授業観の改善に向けての授業研究会	平成23年2月	教育学の観点から，大学における高等教育のあり方に関する検討を行った.
3) 第1回大学の未来を考える研究会	平成23年8月	星城大学のプレゼンスを高めるための検討を行った.
4) 平成23年度第2回FD・教育改善会議	平成24年3月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.

事項	年月日	概　　要
5）平成24年度第1回FD研修会	平成24年9月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
6）平成24年度第2回FD研修会	平成25年3月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
7）平成25年度第1回FD研修会	平成26年9月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
8）平成25年度第2回FD研修会	平成26年3月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
9）平成26年度第1回FD研修会	平成26年9月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
10）平成26年度第2回FD研修会	平成27年3月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
11）平成27年度第1回FD研修会	平成27年9月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
12）平成27年度第2回FD研修会	平成28年3月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
13）平成28年度第1回FD研修会	平成28年9月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
14）平成28年度第2回FD研修会	平成29年3月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
15）平成29年度第1回FD研修会	平成29年9月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
16）平成30年度第1回FD研修会	平成30年9月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
17）平成30年度第2回FD研修会	平成31年3月	星城大学における高等教育上の課題の共有と改善に向けた検討を行った.
（星城大学大学院FD研修会等）		
1）第1回FD研修会	平成22年5月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
2）第2回FD研修会	平成22年8月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
3）第3回FD研修会	平成22年12月	星城大学大学院における研究について，共有した.

事項	年月日	概　　要
4）平成23年度第1回FD研修会	平成23年8月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
5）平成23年度第2回FD研修会	平成23年11月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
6）平成24年度第1回FD研修会	平成25年1月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
7）平成25年度第1回FD研修会	平成26年2月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
8）平成26年度第2回FD研修会	平成27年2月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
9）平成27年度第1回FDセミナー	平成27年9月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のためのセミナーを受けた.
10）平成28年度第1回FDセミナー	平成28年10月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のためのセミナーを受けた.
11）平成28年度第2回FD研修会	平成29年3月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
12）平成29年度第1回FD研修会	平成29年10月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
13）平成29年度第2回FD研修会	平成30年3月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
14）平成30年度第1回FD研修会	平成30年9月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
15）平成30年度第2回FD研修会	平成31年3月	星城大学大学院における研究力および研究教育力の向上のための研修を受けた.
（奈良学園大学　FD・SD研修会等） 1）令和元年度保健医療学部第1回FD研修会	平成31年8月	奈良学園大学における教育力の向上のための研修を受けた.
2）令和元年度保健医療学部授業参観	平成31年度	奈良学園大学における教育力の向上のために，前期と後期に開講されている科目の授業参観を行い，報告書を提出した.

事項	年月日	概　　要
(星城大学　学内委員等)	平成22年4月 ～ 平成23年3月	人権問題委員
	平成22年4月 ～ 平成23年3月	備品管理委員
	平成22年4月 ～ 平成24年3月	アドバイザーミーティング委員
	平成22年4月 ～ 平成25年3月	学生生活委員
	平成22年4月 ～ 平成27年3月	図書委員（後に，図書・情報委員）
	平成23年4月 ～ 平成27年3月	広報委員
	平成24年4月 ～ 平成27年3月	広報推進委員（大学院担当）
	平成25年4月 ～ 平成30年3月	研究倫理審査委員
	平成27年4月 ～ 現在に至る	入試広報委員
	平成27年8月 ～ 平成31年3月	高校生川柳審査員
	平成28年4月 ～ 平成30年3月	ハラスメント相談員
(奈良学園大学　学内委員等)	平成31年4月 ～ 現在に至る	FD・SD委員（全学）
	平成31年4月 ～ 現在に至る	FD・SD委員（学科）
	平成31年4月 ～ 現在に至る	教務ワーキンググループ委員（学科）
	平成31年4月 ～ 現在に至る	カリキュラム検討委員（学科）
	平成31年4月 ～ 現在に至る	学年担当（1年）（学科）
	平成31年4月 ～ 現在に至る	大学院設置ワーキンググループ委員

事項	年月日	概　　要
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）作業療法士	平成9年4月	作業療法士名簿登録番号　第18679号
2）福祉用具プランナー	平成15年8月	第15-1209号
3）京都大学　社会健康医学修士（専門職）	平成19年3月	社医修（専）　第63号 「脳卒中のリハビリテーション研究に用いられている評価指標の分類と動向：1996年から2005年の文献調査」
4）AMPS認定評価者	平成22年9月	Rater Number: 014924
5）AAD（現・A3）認定評価者	平成22年12月	―
6）日本公衆衛生学会認定専門家	平成23年4月	第681号 （平成28年4月　更新）
7）日本訪問リハビリテーション協会認定訪問療法士	平成26年2月	第5号
8）RIASコーダー （The Roter Methods of Interaction Process Analysis System）	平成27年8月	第145号
9）京都大学　博士（社会健康医学）	平成29年1月	社医博　第76号 「Studies of setting care goals and understanding subjective needs in aged care facilities: care providers' and residents' view（高齢者施設におけるケア目標の設定とニーズ把握の研究：ケア提供者と入所者本人の視点」
10）日本作業療法士協会認定作業療法士	平成31年2月	第2279号
11）日本作業療法士協会専門作業療法士（訪問）	令和2年2月	第006号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）医療法人社団淀さんせん会金井病院	平成24年4月 ～ 平成29年3月	非常勤作業療法士として作業療法士の指導，およびリハビリテーション科の管理・運営補助
2）東海市産学官連携協議会「健康関連事業への参画」ワーキンググループ	平成25年5月 ～ 平成27年3月	健康関連事業計画ワーキングメンバー
3）（株）旭化成ファーマ	平成25年8月 ～ 平成26年7月	研究調整員として研究計画立案への助言，および研究調整業務（業務委託）
4）東海市健康増進計画等策定ワーキング部会	平成26年2月	健康推進策定委員
5）株式会社電通	平成30年9月 ～ 平成30年12月	「健康チャレンジ」京大共同研究プロジェクト研究関連 にて，健康に関するシステマティックレビュー等の研究協力
6）奈良市登美ヶ丘地区地域包括支援センター	平成31年5月 ～ 現在に至る	自立支援型地域ケア会議の助言者（作業療法士）

事項	年月日	概　　要
4　その他 （職能団体における実績） 1）日本訪問リハビリテーション協会　教育研修部 認定審査委員	平成25年4月 ～ 令和2年3月	日本訪問リハビリテーション協会における認定訪問療法士の認定審査を担当した.
2）日本訪問リハビリテーション協会　教育研修部 認定審査委員会　委員長	平成28年4月 ～ 令和2年3月	日本訪問リハビリテーション協会における認定訪問療法士の認定審査を担当し，審査委員長として統括した.
3）日本訪問リハビリテーション協会　理事	平成29年6月 ～ 現在に至る	日本訪問リハビリテーション協会における認定訪問療法士の認定審査および認定研修の担当理事として教育研修の構築と運用を行った（令和2年4月より学術部）.
（受賞歴） 1）平成23年度岡本糸枝研究助成賞	平成23年8月	至誠会（東京女子医科大学）における岡本糸枝学術研究助成の受賞 「在宅要介護高齢者と家族のリハビリテーションおよび介護ニーズの把握と，ニーズに基づいたリハビリテーション啓発リーフレット作成の試み」
2）第53回近畿産業衛生学会若手奨励賞＜研究＞	平成25年11月	第53回近畿産業衛生学会における研究分野の若手奨励賞の受賞 「高齢者施設の常勤介護職員における離職とその関連要因の検討」
3）第6回日本訪問リハビリテーション協会学術 大会奨励賞	平成28年6月	第6回日本訪問リハビリテーション協会学術大会における奨励賞の受賞 「訪問リハビリテーション・チェックリストの開発：具体的な目標設定と明確な課題解決のプロセス」

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(著書) 1 褥瘡ガイドブック	共著	平成24年8月	照林社	褥瘡予防・管理ガイドライン第3版に準拠したガイドブックとして，一般に広くわかりやすく説明した. B5判　全256頁 編集：日本褥瘡学会学術教育委員会ガイドライン改訂委員会（坪井良治，田中マキ子，門野岳史，永井弥生，古田勝経，野田康弘，関根祐介，貝谷敏子，片岡ひとみ，中川ひろみ，岩本拓，栗田昌和，木下幹雄，倉繁祐太，仲上豪二朗，柿崎祥子，日髙正巳，廣瀬秀行，杉元雅晴，宮嶋正子，野口まどか，大桑麻由美，石澤美保子，木下幸子，祖父江正代，室岡陽子，松井優子，大浦智子，紺家千津子，市岡滋，須釜淳子，田中秀子，足立香代子，中山健夫，宮地良樹） 本人担当部分：委員会による作成のため抽出不可能　（ガイドラインについての説明と位置づけについて概説し，褥瘡予防・管理ガイドライン第3版作成にあたり，各分野の推奨度の根拠となる文献の研究デザインおよびエビデンスレベルを判断し，ガイドラインにおける推奨度決定を支援した.）
2 PT・OT・STのためのエビデンスの基礎知識と診療ガイドライン活用法	共著	平成29年5月	医歯薬出版株式会社	理学療法士・作業療法士・言語聴覚士が診療ガイドラインを活用するうえで必要な知識と活用方法について，具体的に示した. B5判　全180頁 監修：中山健夫 編集：日髙正巳・藤本修平 共著者：荒木浩二郎，有明陽佑，稲富宏之，大浦智子，大寺祥佑，尾川達也，紙谷司，小久保徹，小向佳奈子，今法子，酒井克也，佐々木祥，杉田翔，竹林崇，田中宏明，坪内優太，中村学，芳賀大輔，日髙正巳，福岡達之，福谷直人，藤本修平，廣江貴則，吉川義之 本人担当部分：「質的研究を解釈するうえで必要な知識」pp.55-60を単著. 質的研究の基本的な構成および考え方を概説し，リハビリテーション専門職が臨床場面で質的研究成果を活用するにあたり留意すべき点を解説した.
3 これから始める！シェアードデシジョンメイキング：新しい医療のコミュニケーション	共著	平成29年9月	日本医事新報社	医療におけるコミュニケーションや意思決定としてのシェアードデシジョンメイキングについて，国内における先駆者による解説と実践について示した. A5判　全172頁 編著：中山健夫 共著者：中山健夫，藤本修平，湯川慶子，中山和弘，大坂和可子，堀江重郎，森田明夫，大浦智子，今法子，浦尾充子，山口育子，射場典子 本人担当部分：「（コラム）臨床におけるSDM:リハビリテーション」pp.129-130を単著. 　地域医療のなかでも訪問リハビリテーションにおける患者と提供者間の情報共有とその実態について紹介し，今後のコミュニケーションのあり方について示した.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4 作業療法研究法	共著	平成29年10月	医歯薬出版株式会社	作業療法士が押さえておくべき研究倫理，研究の種類，研究のすすめ方，報告や発表について，作業療法士養成教育に活用するために構成・編集した. B5判　全164頁 編著：竹田徳則，大浦智子，藤本修平 第3部監修：廣江貴則 共著者：竹田徳則，大浦智子，木村大介，藤本修平 本人担当部分：「量的研究」pp.34-41を単著 量的研究における各種の研究デザインと特性について解説した.特に，観察研究と介入研究における各研究デザインの特徴と臨床場面における考え方を示した. 本人担当部分：「質的研究」pp.50-54を単著 質的研究における手順と方法，妥当性の担保などについて解説した. 本人担当部分：「混合法（mixed methods approach）」pp.55-56を単著 混合型の研究の種類や方法について，例を挙げながら解説した. 本人担当部分：「尺度開発」」pp.68-70を単著 作業療法場面を想定した例あげながら，効果を測定するための尺度の兼ね備えておくべき信頼性と妥当性について解説した. 本人担当部分：「文献研究」pp.71-72を単著 主にシステマティックレビューとメタアナリシスについて，解説した. 本人担当部分：「データベース研究」pp.73-74を単著 データベースの構築と研究への活用について，利点と留意点を中心に解説した. 本人担当部分：「根拠に基づく医療（Evidence-Based Medicine; EBM）」pp.140 根拠に基づく医療と根拠に基づく実践について，その考え方について解説した. 本人担当部分：「エビデンスの質と階層」」pp.141-143を単著 研究を実施する際だけでなく，既存研究を読み解釈する際に参考となるエビデンスレベルについて解説した. 本人担当部分：「診療ガイドラインの作成と活用」pp.144-146を単著 診療ガイドラインについて、作成の手順と活用方法について解説した. 本人担当部分：「研究対象者の選定」pp.23-26を共著 研究対象者の選択方法について，バイアスを防ぐ方法をふまえて解説した．（共著者とともに内容を調整し，最終原稿を主として作成した.） 共著者：大浦智子，木村大介 本人担当部分：「アウトカム」pp.27-28を共著 アウトカムの考え方について，尺度の種類に関する説明のほか，メイン・アウトカムの設定や対象者主体のアウトカムについて示した. （共著者とともに内容を調整し，最終原稿を主として作成した．） 共著者：大浦智子，木村大介

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				本人担当部分：「用語の説明」pp. 1-7を共著 作業療法士もしくは学生が研究法を効果的に学ぶために，本書内における主要な用語を説明した．（説明する用語の抽出および執筆担当者の振り分け，担当用語の執筆，全用語の内容の確認を行った．） 共著者：竹田徳則，大浦智子，木村大介 本人担当部分：「巻末課題」pp. 148を共著 作業療法士もしくは学生が研究法を効果的に学ぶために，巻末課題を示した．（学部学生を想定し，到達すべきであろう学習目標を設定して，共著者とともに課題を作成した．） 共著者：竹田徳則，大浦智子
5 訪問リハビリテーションアドバイスブック	共著	平成30年3月	メジカルビュー社	訪問リハビリテーションについて理解するために，多職種の立場から訪問リハビリテーション従事者が抑えておくべき事項を示した． 監修：青山朋樹，高橋紀代 編集：辰巳昌嵩 共著者：辰巳昌嵩，阿毛裕理，片桐辰徳，藤本修平，光武誠吾，高橋紀代，八木街子，宇野雄祐，杉田翔，三好早苗，山﨑真一，奥村圭子，川場康智，東田全央，今枝敬典，倉田昌幸，木村圭佑，羽田真博，岩田研二，青山朋樹，藤田美和子，嶋本尚恵，小口妃小江，杉浦徹，三木貴弘，朝倉健太郎，尾畑翔太，中川征士，大場やよい，上野多加子，森下元賀，小泉裕一，園山真弓，池田耕二，大浦智子，鳴尾彰人，樺元大輝，南條拓也，田代雄斗 本人担当部分：「筋力維持・増強」を単著 筋力維持・増強に関する基本的知識に加え，在宅訪問リハビリテーションにおける着眼点と留意点を解説した． 本人担当部分：「関節可動域の維持と改善」を単著 関節可動域に関する基本的知識に加え，在宅訪問リハビリテーションにおける着眼点と留意点を解説した． 本人担当部分：「転倒および転倒予防対策」を単著 在宅生活を送る対象者の生活機能の低下を脅かす転倒について，環境整備を含めて転倒予防対策について解説した．
6 セラピストのための臨床における治療選択を助けるエビデンスの活用法（仮）	共著	令和2年8月（予定）	医学書院	編著：藤本修平，竹林崇 共著者：藤本修平，竹林崇，小向佳奈子，杉田翔，大浦智子，福田芽森，穴田周吾，中口拓真，佐々木祥，村井歩志，他． 本人担当部分：「質的研究」を単著 質的研究論文報告のためのチェックリストを用いながら，臨床実践に役立てるための論文情報の読み方について解説した．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1 Reliability and validity tests of an evaluation tool based on the modified Barthel Index (Barthel Index改変版に基づく評価ツールの信頼性と妥当性の検証) （査読付）	共著	平成23年8月	International Journal of Therapy and Rehabilitation 18(8): 422 - 428, 2011.	遂行状況を評価するために，活動能力を測定するModified Barthel Indexをもとに作成した評価表の信頼性と妥当性を検証した．検査者間および検者内信頼性，内的整合性は良好だった．施設入所高齢者では階段昇降を実施している者がほとんどおらず，階段昇降を除いて実施した探索的因子分析の結果，1因子で説明可能だった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T, Ishizaki T, Higashi T, Konishi K, Ishiguro R, Nakanishi K, Shah S, Nakayama T
2 Internet use for health-related information via personal computers and cell phones in Japan: a cross-sectional population-based survey.（日本におけるパーソナルコンピューターと携帯電話による健康関連情報のインターネット使用：地域住民を対象とした横断研究） （査読付）	共著	平成23年12月	J Med Internet Res. 13(4):e110, 2011.	インターネットおよびeメールによる健康・医療情報の取得と利用者の属性を把握するために横断的研究を行った．インターネットによる健康・医療情報取得は高学歴・高収入の人に利用され，年齢が上がると利用されなくなること，携帯電話のインターネットおよびeメールによる健康・医療情報の活用がパーソナルコンピュータのそれに比べて低いことがわかった． 本人担当部分：調査に使用する質問項目の検討および質問文に関する助言と，得られた結果に対する考察について共著者らと検討した． 共著者：Takahashi Y, Ohura T, Ishizaki T, Okamoto S, Miki K, Naito M, Akamatsu R, Sugimori H, Yoshiike N, Miyaki K, Shimbo T, Nakayama T.
3 主観的QOL評価と生活観察をもとにした認知症高齢者へのアプローチ （査読付）	共著	平成24年9月	長野県作業療法士会学術誌30: 120-128, 2012.	意欲の低下と日常生活動作自立度低下で在宅介護が困難で長期入所となった認知症高齢者に対して，対人交流や活動意欲の向上を目的にかかわった症例を報告した．主観的QOL評価と生活観察で得た情報を活用しながら，集団の場の力やチームによるアプローチの結果，対人交流や活動意欲の向上につながった． 本人担当部分：得られた結果に対して作業療法学的見地から助言し，考察の検討と論文執筆に際して助言した． 共著者：中西康祐，吉島拓矢，三澤聡子，大浦智子
4 （調査報告）「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受：サロンは情報の授受の場になっているか？ （査読付）	共著	平成25年9月	保健師ジャーナル69: 712-719, 2013.	A町の介護予防事業であるサロンは，一般参加者にとって主要な健康関連情報の授受の場になっており，健康情報の伝達と情報的サポートの増加により介護予防への寄与が期待できることが示唆された． 本人担当部分：共著者らの助言を得て研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，竹田徳則，近藤克則，木村大介，今井あい子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5 介護支援専門員と訪問介護員における訪問リハビリテーション効果への期待：量的・質的検討（査読付）	共著	平成25年10月	作業療法32: 440-450, 2013.	介護支援専門員（care manager: CM）とヘルパーを対象に実施した「訪問リハリハビリテーション（訪問リハ）に期待している効果」に関する質問紙調査の結果，身体機能の回復，動きやすさやセルフケアの改善に偏っていた. 本人担当部分：共著者らと協力施設を調整し，研究計画の立案と実施，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，津山努，中西康祐
6 Care goal setting and associated factors: semi-structured interviews with multidisciplinary care providers in facilities for elderly people（介護目標の設定と関連要因：高齢者施設の多職種ケア提供者への半構造化面接）（査読付）	共著	平成26年3月	International Journal of GERONTOLOGY 8(1): 12-17, 2014.	要介護高齢者入所施設の職員が考える高齢者のケア目標とその関連要因を明らかにするために，7施設30人の職員を対象に半構造化面接を実施し，その内容を質的に分析した結果，4カテゴリが抽出された. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した. 共著者：Ohura T, Takada A, Nakayama T
7 訪問リハビリテーション利用者の主介護者における主観的介護負担感とその関連要因の検討（査読付）	共著	平成26年3月	愛知作業療法22:3-8, 2014.	在宅要介護者の主介護者が感じる主観的介護負担感とその関連要因を明らかにすることを目的に，訪問リハビリテーション利用者の主介護者（66名）を対象に質問紙調査を実施した結果，階段昇降要介助の場合は自立に比べて，主観的介護時間が多い場合は少ない場合に比べて，オッズ比が高かった. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり指導した（責任著者）. 共著者：船渡絵梨香，津山努，今井あい子，大浦智子
8 （短報）臨床実習後の作業療法学生が目標・理想とする作業療法士（査読付）	共著	平成26年3月	愛知作業療法22:55-58, 2014.	A大学作業療法学専攻4年生を対象に，目標・理想の作業療法士に関する自由記述式質問紙による調査を行い質的分析を行った．目標・理想とする作業療法士として，【技能】の＜コミュニケーションスキル＞と【総合的判断力】の＜論理＞に着眼していることが明らかとなった. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり助言した. 共著者：山崎竜弥，大浦智子
9 （実践報告）客観的臨床能力試験（OSCE）場面のビデオ・フィードバックによる臨床実習前教育の取り組み（査読付）	共著	平成26年4月	作業療法33(2): 181-190, 2014.	学生が取り組むOSCEの症例課題実施場面を撮影し，終了後のビデオ・フィードバックと学習のふり返り機会を提供した．臨床実習後の質問紙調査（37名）では，OSCEの復習をした者が8割以上で，その内容はビデオ・フィードバックを参考にしていた. 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，竹田徳則，藤田高史，古澤麻衣，木村大介，冨山直輝，林浩之，飯塚照史，坂井一也，今井あい子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10 学生における客観的臨床能力試験（OSCE）前後の学習と臨床実習後の自己評価：量的・質的分析による検討 （査読付）	共著	平成26年7月	作業療法教育研究14(1)：16-22，2014	評価主体の臨床実習（実習）開始約1カ月前に，検査・測定，症例課題からなる客観的臨床能力試験（OSCE）を実施し，実習後に質問紙調査を実施した．対象学生33名中32名がOSCEの事前準備をしたと自己評価していたが，実習前には知識や評価のみならず，相手に合わせる応用技術を視野に入れた準備が必要だと学生は感じていた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，竹田徳則，藤田高史
11 訪問リハビリテーション利用者のサービス利用のきっかけと生活目標 （査読付）	共著	平成26年12月	作業療法33(6)：517-525，2014	訪問リハビリテーション利用者の訪問リハ利用のきっかけと日々の生活目標を知るために，質問紙調査によって34 名の訪問リハ利用者の自由記述回答を質的に分析した．利用のきっかけは7個の二次テーマ，生活目標は 8 個の二次テーマが抽出された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，津山努
12 Assessment of the validity and internal consistency of a performance evaluation tool based on the modified Barthel Index Japanese nversion for elderly people living at home（在宅高齢者におけるBarthel Index改変日本語版に基づく遂行評価ツールの妥当性と内的整合性） （査読付）	共著	平成26年12月	J Phys Ther Sci 26(12)：1971-1974，2014	在宅要介護高齢者128名を対象に，Modified Barthel Indexに基づくセルフケア遂行評価日本語版の因子的妥当性と内的整合性を検証した．確認的因子分析の結果，モデル適合度は許容範囲内と判断された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T，Higashi T，Ishizaki T，Nakayama T
13 Testing validity and reliability of a newly developed instrument to assess the subjective needs of institutionalized elderly（入所高齢者の主観的ニーズを評価するために新たに開発したツールの妥当性と信頼性の検証） （査読付）	共著	平成27年1月	Clinical Gerontologist 38(1)：88-102，2015	入所高齢者のニーズを評価するための質問紙（4領域25項目）を開発し，妥当性と信頼性を検証した．再検査法による信頼性は，ニーズの領域・項目によって高低が認められた．確認的因子分析の結果，モデル適合度は許容範囲内と判断された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T，Ishizaki T，Higashi T，Nakayama T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14 初期認知症および軽度認知機能障害（MCI）における軽微な認知機能の変化を捉え得る神経心理学検査の検討 （査読付）	共著	平成27年3月	日本認知症予防学会誌 48(1)：22-24，2015	動作性 IQ や日常生活場面での記憶障害が，MCI や初期認知症の変化を把握できるかを確認することを目的に，神経内科受診者のうち 1 年後の再評価が実施できた 9 名のMini-Mental State Examination（MMSE），コース立方体組み合わせテスト，リバーミード行動記憶検査（RBMT）の初期評価と 2 回目評価結果を比較した．結果，RBMT が軽微な認知機能の変化を検出可能であった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施を行い，論文執筆に際して助言した． 共著者：木村大介，廣瀬秀一，大浦智子，中西康裕，大槻輝子
15 学生が地域で運営する健康サロンにおける学習と気づき （査読付）	共著	平成27年6月	作業療法 34：325-334，2015.	学生が地域高齢者を対象に健康サロンを運営することによって得られた学生自身の気づきを明らかにするために，運営開始11か月後に質問紙調査を行った．学びの場としての肯定的意見に対し，実務面での反省が挙げられていた． 本人担当部分：研究計画を立案し，共著者とともに実施，論文執筆にあたり助言をした． 共著者：古澤麻衣，竹田徳則，大浦智子
16 Differences between home-visit rehabilitation users and providers in their understanding of the content and subjective effects of rehabilitation practices（リハビリテーション内容の理解と主観的効果に関する訪問リハビリテーション利用者と提供者間の違い） （査読付）	共著	平成27年6月	J Phys Ther Sci 27：1705-1708，2015.	訪問リハビリテーション利用者と提供者34組を対象に，主観的効果と実施プログラムの認識の相違を明らかにした．利用者は，提供者が考えているよりも症状や床上動作の改善に向けたプログラムを実施していると認識していた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T，Tsuyama T，Nakayama T
17 健康サロンに参加する高齢女性における認知機能低下の有無と健康情報ニーズとの関連 （査読付）	共著	平成27年7月	作業療法ジャーナル 49(8)，861-867	介護予防における一次予防事業として行われているサロン参加女性を対象に，軽度認知機能低下の有無と健康情報ニーズとの関連を明らかにするための調査（自記式認知機能検査，健康情報ニーズ等）と体力測定を実施した．軽度認知機能低下の有無による健康情報ニーズの違いは認められなかった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，竹田徳則，木村大介，冨山直輝，古澤麻衣，天野圭二

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18 地域開催型ラジオ体操が高齢者の身体・心理社会面にもたらす効果 （査読付）	共著	平成27年8月	作業療法 34(4)，393-402，2015.	高齢者の身体・心理社会面にもたらす地域開催型ラジオ体操の効果を明らかにするために，3か月間の介入を行った．ラジオ体操群では下肢筋力やバランスに有意な向上を認め，体調の主観的変化を認知していた． 本人担当部分：研究結果の解釈，統計解析および論文の執筆にあたり助言した． 共著者：今井あい子，加藤芳司，竹田徳則，大浦智子，北林由紀子，山本和恵，真田樹義
19 Differences in understanding and subjective effects of home-visit rehabilitation between user families and rehabilitation providers（利用者家族と提供者間における訪問リハビリテーション内容の理解と主観的効果の違い） （査読付）	共著	平成27年12月	J. Phys. Ther. Sci. 27: 3837-3841，2015	訪問リハビリテーション利用者家族と提供者50組を対象に，主観的効果と実施プログラムの認識の相違を明らかにした．利用者家族は，提供者が考えているよりも症状や床上動作の改善に向けたプログラムやマッサージを実施していると認識しており，痛みや症状の改善を自覚していた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T，Tsuyama T，Nakayama T
20 Gaps between the subjective needs of older facility residents and how care workers understand them: a pairwise cross-sectional study （入所高齢者の主観的ニーズと介護職員が把握している程度との隔たり：ペアワイズ横断研究） （査読付）	共著	平成28年1月	BMC Res Notes 9:52，2016 (DOI 10.1186/s13104-016-1851-7)	介護老人保健施設に入所する高齢者のニーズと介護職員によるニーズの把握の程度を明らかにするために，高齢者と介護職員115組にインタビューと質問紙を用いた調査を行った．基本的日常生活と情緒的なニーズに比べ，手段的日常生活と生活環境に関するニーズのほうが，職員による把握割合が低い傾向にあった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T，Ishizaki T，Higashi T，Nakayama T
21 Evaluation of facilitative factors for preventing cognitive decline: A 3-year cohort study of community intervention （認知機能低下予防促進因子の評価：3年間の地域介入コホート研究） （査読付）	共著	平成28年2月	PSYCHOGERIATRICS (DOI: 10.1111/psyg.12182)	武豊プロジェクトの参加高齢者100名を3年間追跡し，認知機能を保つ要因を明らかにした．レジャー活動や社会的つながりの強化が，認知機能の維持に正の効果を及ぼしていることが明らかとなった． 本人担当部分：研究結果に対する解釈および論文執筆に際して助言をした． 共著者：Kimura D，Takeda T，Ohura T，Imai A

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22 Correlation of the Hand 20 with the International Classification of Functioning, Disability, and Health and comparison of the results with those of the Disability of the Arm, Shoulder and Hand （国際生活機能分類とHand20との関係とDASHスケールとの比較）（査読付）	共著	平成28年3月	Asian J Occup Ther 11: 27-33, 2016	本邦の手外科領域で多用されている患者立脚型評価Hand20の各項目について，ICF項目との関連からDASHとの比較を試みた結果，Hand20は心身機能から5項目，活動と参加から23項目，個人因子から2項目がICF項目と関連づけられた．また，Hand20は，DASHより手に特化した身体部位特異的尺度であると捉えられた． 本人担当部分：研究計画の立案に対する助言，研究の実施をともに行い，論文執筆に際して助言をした． 共著者：Iitsuka T，Ohura T，Fujita T．
23 Studies of setting care goals and understanding subjective needs in aged care facilities: care providers' and residents' view （高齢者施設におけるケア目標の設定とニーズ把握の研究：ケア提供者と入所者本人の視点）（博士論文）	単著	平成29年1月	京都大学	1）施設職員による入所高齢者へのケア目標の設定とケア目標に関連する要因，2）入所高齢者の生活上の主観的ニーズの評価法，3）入所高齢者の生活上の主観的ニーズと介護職員の把握状況，を明らかにした． A4判　全38頁（既出の学術論文9・16・23で構成）
24 作業療法士による訪問リハビリテーションの目標とプログラム訪問リハビリテーション実施計画書の記載内容（査読付）	共著	平成29年3月	作業療法ジャーナル 51: 261-265, 2017	作業療法士による訪問リハビリテーションの目標とプログラムの実態を明らかにするために，初回実施計画書の記載内容を計量的に分析し，社会参加を見据えた活動・参加の目標のもと，活動・参加と心身機能・身体構造のプログラムが多く行われていることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり指導した（責任著者）． 共著者：山内春香，佐竹美保，津山努，大浦智子
25 認知症高齢者のQOL向上に向けたADL 支援プロトコル構築のための在宅の基礎的調査（査読付）	共著	平成29年7月	日本認知症ケア学会誌 16: 461-469, 2017	認知症高齢者の主観的生活の質（QOL）の維持向上に向けた日常生活動作（ADL)支援プロトコルの構築を目指し、在宅認知症高齢者の総合的なADLの実態，主観的QOLと総合的なADL等の因子との関連を調査した.総合的ADLの障害が主観的QOLと関連があり，手段的ADLが基本的ADLに比べて自立度が低い傾向にあることが示された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり助言した． 共著者：中西康祐，大浦智子，池谷政直
26 Validity and reliability of a performance evaluation tool based on the modified Barthel Index for stroke patients (Barthel Index改変版としての遂行評価尺度の脳卒中患者における妥当性と信頼性）（査読付）	共著	平成29年8月	BMC Medical Research Methodology (2017) 17:131 DOI 10.1186/s12874-017-0409-2	脳卒中患者におけるModified BI（MBI）に基づく日本語版（performance evaluation tool of MBI: PET-MBI）の妥当性と信頼性検証を行った．PET-MBIは，BIとの基準関連妥当性と評価者間信頼性・評価者内信頼性が高いと判断した． 本人担当部分：共著者とともに研究計画を立案・実施し，論文を執筆した． 共著者：Ohura T，Hase K，Nakajima Y，Nakayama T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
27 臨床実習後作業療法学生におけるハンドセラピィに対する認識 （査読付）	共著	平成29年10月	日本ハンドセラピィ学会誌 10：43-48，2017	養成校作業療法学生の臨床実習後におけるハンドセラピィに対する認識を検討するために，学生の提出レポートをテキストマイニング手法により分析した．主題分析を用いた質的検討を踏まえると，学生はハンドセラピィを作業療法の一分野として認知はしているものの，生活や作業とは対極しており，作業療法士とは一線を画すとの認識であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文の執筆にあたり助言した． （飯塚照史，大浦智子）
28 テキストマイニング手法を用いた訪問リハビリテーションプログラムの分析 （査読付）	共著	平成29年11月	地域リハビリテーション 12：968-975，2017	訪問リハビリテーションの初回プログラム内容と，3ヶ月以内の目標達成終了者の特徴を明らかにするために，テキストマイニング手法を用いて分析し，脳血管疾患と骨関節疾患のプログラムの割合を計量した．初回のプログラムは心身機能に焦点をあてた機能訓練が多かった． 本人担当部分：研究計画を立案し，共著者とともに実施，論文執筆にあたり助言をした． 共著者：古澤麻衣，大浦智子 ，藤井啓介，津山努
29 中年世代の各ライフステージにおける趣味と思い出の傾向 （査読付）	共著	平成30年5月	臨床作業療法 5：14-19，2018	中年世代のライフステージの趣味と，その時の思い出の傾向を明らかにするために，自由回答式質問紙調査を実施した．趣味の思い出は人との思い出が最も多く，作業療法場面で趣味を活用する際には，活動としての趣味だけでなく，その趣味に含まれる意味や思い出を理解する必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画共著者とともに立案し，論文執筆にあたり助言をした（責任著者）． 共著者：榊原唯，水野里咲，村松真侑子，阿部優奈，大浦　智子
30 Occupation-based differences in shared perceptions of older resident needs within multidisciplinary care teams: a cross-sectional study of care workers, nurses, and therapists linked to older residents（入所高齢者の視点共有に関する多職種ケアチーム内における職種間の違い：入所高齢者とリンクされた介護・看護・リハビリテーション職を対象とした横断研究） （査読付）	共著	平成30年6月	J. Phys. Ther. Sci. 30：866-873，2018	介護老人保健施設で働く介護・看護・リハビリテーション職による入所高齢者のニーズ把握の程度とその共有実態を明らかにするために，高齢者と介護・看護・リハビリテーション職88組への調査結果を分析した．職員らは手段的日常生活と生活環境に関するニーズを過小評価する傾向があり、職種によってニーズの把握領域が異なっていた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：Ohura T，Higashi T，Ishizaki T，Nakayama T

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
31 関節リウマチ患者と医学生の合同グループワークで得られた患者と医学生の声 今後の医学教育に必要なこと（査読付）	共著	平成31年5月	日本ヘルスコミュニケーション学会雑誌　10(1)：31-35，2019	関節リウマチ患者と医学生の合同グループワークの取り組みを紹介し，合同グループワーク後の感想と，双方が考えている医学教育に必要なことを問うた．双方とも，グループワークの取り組みを肯定的にとらえていたのに加え，医学生は患者さんの生活を知ることの重要性を感じていた． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，小嶋雅代，荘子万能，西明博，橋本里穂，石橋茉実，山中寿，中山健夫
32 病院と訪問における作業療法士の役割と必要なスキル-学生の視点による質的研究（査読付）	共著	令和元年8月	作業療法ジャーナル 53(9)：1014-1018，2019	作業療法専攻で学ぶ大学生の視点で，作業療法士に対して病院と訪問における作業療法士の役割と必要なスキルをインタビューし，分析した．【目標の共有】と【医療・介護保険の知識】は，訪問リハに関する語りのみで抽出され，訪問リハで意識されていることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画共著者とともに立案し，論文執筆にあたり助言をした（責任著者）． 共著者：水野里咲，榊原唯，阿部優奈，村松真侑子，大浦智子
33 「作業に焦点を当てた実践」の現状と障壁（査読付）	共著	令和元年8月	日本臨床作業療法研究 6(1)：38-5，2019	作業療法士に対する質問紙調査にて，OTを提供するうえで【目標共有】，【ニーズ】，【アプローチ】等に配慮し，「意味のある作業」に焦点を当てることがOTを行う上で有用だと考えていることがわかった．作業に焦点を当てた実践を知っていると回答したOTRは限られていたが，知らないと回答したOTRの約9割が知りたいとの回答を得た． 本人担当部分：研究計画共著者とともに立案し，論文執筆にあたり助言をした（責任著者）． 共著者：林映見，林原千夏，野呂奈々穂，加藤正崇，石黒佳世，大浦智子
34 介護老人保健施設に入所する高齢者の生活満足の関連要因：ケア提供者の職種とニーズ把握を加味した検討（査読付）	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究7：63-72，2020	介護老人保健施設の入所高齢者の生活満足に入所高齢者を対象に，4領域25項目のニーズ項目と生活満足等で構成する質問紙を用いた面接調査を行った．さらに，高齢者1人につき介護職員・看護職員・リハビリテーション職員（リハビリ職員）をマッチさせ，高齢者と同様のニーズ項目とケア提供への満足度等で構成する質問紙調査を実施した．高齢者の生活満足を従属変数，高齢者の特性（性，年齢，認知機能など），職員の特性（カンファレンスの参加，ケア提供），職員による高齢者のニーズ把握数を説明変数し，有意水準を0.10未満として変数増加法を用いたロジスティック回帰分析にてオッズ比を算出した．入所高齢者は，性や年齢にかかわらず約8割が生活に満足していた．高齢者の生活満足をアウトカムとしたロジスティック回帰分析の結果，オッズ比は，介護職員がケア提供に満足している場合がしていない場合に比べて9.46（95%信頼区間[confidence interval：CI]1.04-86.02）だった． 本人担当部分：研究計画の立案と実施，論文を執筆した． 共著者：大浦智子，中山健夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
(その他) 「ガイドライン」 1 褥瘡予防・管理ガイドライン（第3版）	共著	平成24年6月	褥瘡会誌 14(2)：165-226，2012.	科学的根拠に基づく褥瘡予防・管理ガイドラインの改訂版を作成した. 本人担当部分：委員会による作成のため抽出不可能　（ガイドラインについての説明と位置づけについて概説し，褥瘡予防・管理ガイドライン第3版作成にあたり，各分野の推奨度の根拠となる文献の研究デザインおよびエビデンスレベルを判断し，ガイドラインにおける推奨度決定を支援した．） 共著者：日本褥瘡学会学術教育委員会ガイドライン改訂委員会（坪井良治，田中マキ子，門野岳史，永井弥生，古田勝経，野田康弘，関根祐介，貝谷敏子，片岡ひとみ，中川ひろみ，岩本拓，栗田昌和，木下幹雄，倉繁祐太，仲上豪二朗，柿崎祥子，日髙正巳，廣瀬秀行，杉元雅晴，宮嶋正子，野口まどか，大桑麻由美，石澤美保子，木下幸子，祖父江正代，室岡陽子，松井優子，大浦智子，紺家千津子，市岡滋，須釜淳子，田中秀子，足立香代子，中山健夫，宮地良樹）
2 JSPU Guidelines for the Prevention and Management of Pressure Ulcers (3rd Ed.) （褥瘡予防・管理ガイドライン（第3版））	共著	平成26年3月	Jpn J PU 16(1)：12-90，2014.	科学的根拠に基づく褥瘡予防・管理ガイドラインの改訂版を作成した. 本人担当部分：委員会による作成のため抽出不可能　（ガイドラインについての説明と位置づけについて概説し，褥瘡予防・管理ガイドライン第3版作成にあたり，各分野の推奨度の根拠となる文献の研究デザインおよびエビデンスレベルを判断し，ガイドラインにおける推奨度決定を支援した.） 共著者：The Japanese Society of Pressure Ulcers Guideline Revision Committee (Tsuboi R, Tanaka M, Kadono T, Nagai Y, Furuta K,Noda Y, Sekine Y, Kaitani T, Kataoka H, Nakagawa H, Iwamoto T, Kurita M, Kinoshita M, Kurashige Y, Nakagami G, Kakizaki S, Hidaka M, Hirose H, Sugimoto M, Miyajima M, Noguchi M, Okuwa M, Ishizawa M, Kinoshita Y, Sobue M, Murooka Y, Matsui Y, Ohura T, Konya C, Ichioka S, Sugama J, Tanaka H, Adachi K, Nakayama T, Miyachi Y)
「総説・解説等」 1 高齢者ケアにおけるクライエント中心のアプローチ	単著	平成24年3月	シニアフィットネスリハビリテーション 5：7-9，2012.	高齢者ケアにおけるEvidenceとNarrative，クライエントの個別性の理解と，リハビリテーションでの活用について解説した.
2 （特集）訪問リハビリテーションにおけるエビデンス構築のために：ガイドラインにつながる研究とは	単著	平成24年10月	訪問リハビリテーション 10：205-211，2012.	訪問リハビリテーションにおけるエビデンスの構築に向けて，診療ガイドラインと研究，研究デザインとエビデンスレベル，臨床研究における手続き等について解説した.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 （提言）患者中心のアプローチ（Patient-centered approach）と根拠に基づく実践（Evidence-based Practice）：より良い作業療法実践にむけて	単著	平成27年2月	OTジャーナル 49: 90-91, 2015	作業療法領域における「患者中心のアプローチ（Patient-centered approach: PCA）」，「根拠に基づく実践（Evidence-based Practice: EBP）」，「意思決定の共有（Shared-decision making: SDM）」と「説明と同意Informed Consent（IC）」を紹介した.
4 EQUATOR Networkから得られる，質の高い研究報告のための国際ルール④ PRISMA: システマティック・レビュー報告のためのツール	共著	平成27年5月	Jpn Pharmacol Ther（薬理と治療）43 suppl. 1: s44-s50, 2015.	メタアナリシスとシステマティックレビューの報告のガイダンスであるPRISMA（Preferred Reporting Items for Systematic reviews and Meta-Analyses）の概要を紹介し，今後の展望をまとめた. 本人担当部分：共著者の助言を得て，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，中山健夫
5 （特集）訪問リハビリテーション・チェックリストの開発：具体的な目標設定と明確な課題解決のプロセス	共著	平成28年3月	訪問リハビリテーション協会機関紙43: 29-34.2016	明確な目標設定に基づく効果的な訪問リハビリテーション（訪問リハ）の提供を可能とするためのアセスメントシートとチェックリストを開発した. チェックリストは4領域20項目で構成された. 本人担当部分：共著者の助言を得て研究計画を立案・実施し，論文を執筆した. 共著者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
6 養成校における訪問リハビリテーションの教育の現状と課題	単著	平成29年1月	地域リハビリテーション 12: 34-39, 2017	養成校における訪問リハビリテーションの教育の現状と課題について，報告した. 養成教育における地域関連科目と単位数，全体のなかでの訪問リハビリテーションについて説明できる時間的制約について概説する一方，近年の実習における訪問リハビリテーション見学場面の増加などについて示した.
「報告書等」				
1 精神障害と労災研究会2010受託研究	共著	平成23年3月	精神障害と災研究会平成22年度研究報告書	うつ病等精神疾患発症後の心理的負荷と自殺との関係について解明するために，国内外の発表論文を対象に構造化抄録を作成した. A4判　全64頁 代表：天笠崇 本人担当部分：研究チームによる報告のため抽出不可能 共著者：天笠崇，松浦健伸，田井健，中山健夫，福田里砂，大浦智子，熊井史，渡邉貴博，植原亮介，中谷琢，古川安之

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2 ソーシャル・キャピタルと健康に関する実証的研究	共著	平成24年3月	科学研究費補助金（新学術領域）研究報告書	「ソーシャル・キャピタルと健康に関する実証的研究」に関わる各分野から，介護予防のポピュレーション戦略としての「憩いのサロン」に関する各種報告がされた. A4判　全160頁 代表：竹田徳則 本人担当部分：「ポピュレーション戦略による「憩いのサロン」を活用した介護予防事業参加者の評価「お元気チェック」の内容と進め方」pp.55-111を共著 介護予防の一次予防事業「憩いのサロン」で1年に1回実施する「お元気チェック」の内容と進め方について，概要と手順を報告した．（研究の実施，および論文執筆にあたり助言した.） 共著者：竹田徳則，木村大介，大浦智子，今井あい子 本人担当部分：「ポピュレーション戦略による介護予防に向けた憩いのサロン事業に関する研究-参加による外出の変化と参加理由-」pp.113-119を共著 介護予防の一次予防事業として実施している「憩いのサロン」参加による外出の変化と参加理由について報告した.（研究の実施，および論文執筆にあたり助言した.） 共著者：竹田徳則，大浦智子，木村大介 本人担当部分：「「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受に関する研究」pp.121-130を共著 介護予防の一次予防事業として実施している「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受との関連，ボランティアと一般参加者の特性の違いについて調査・検討し報告した.（研究計画の立案，データ集計と結果の解釈，論文を執筆した．） 共著者：大浦智子，竹田徳則，近藤克則，木村大介，今井あい子
3 介護予防のための心理社会面に着目した包括的地域介入に関する研究	共著	平成24年3月	平成23年度元気創造研究センター年報（星城大学）	心理社会面と健康に着目し「憩いのサロン」を活用した介護予防のための地域介入によってもたらされる効果と課題について報告した. A4判　全61頁 代表：竹田徳則 本人担当部分：「介護予防のための心理社会面に着目した包括的地域介入に関する研究」pp.22-25を共著 介護予防の一次予防事業「憩いのサロン」で1年に1回実施する「お元気チェック」から，認知機能や身体能力，健康関連情報入手の実態，およびサロン参加による変化等について報告した.（研究の実施，および論文執筆にあたり助言した.） 共著者：竹田徳則，木村大介，大浦智子，今井あい子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4 在宅要介護高齢者と家族のリハビリテーションおよび介護ニ ーズの把握と，ニーズに基づいたリハビリテーション啓発リーフレット作成の試み	共著	平成24年8月	公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団2011年度「在宅医療研究への助成」一般 公募研究（前期）完了報告書	訪問リハビリテーション利用者と家族を対象に，訪問リハビリテーション利用開始のきっかけとニーズ，満足感に関する調査を実施し，利用者と家族の声に基づくリーフレットを作成した．さらに，提供者である療法士にも同様の調査を実施し，利用者や家族との認識の相違について検討した． A4版　全31頁（PDF公開） 成果物：リーフレット（A4・両面刷，1枚） 代表：大浦智子 本人担当部分：研究計画を立案し，実施と報告書を執筆した． 共著者：大浦智子，津山努
5 介護予防のための心理社会面に着目した包括的地域介入に関する研究	共著	平成25年3月	平成24年度元気創造研究センター年報（星城大学）	心理社会面と健康に着目し「憩いのサロン」を活用した介護予防のための地域介入によってもたらされる効果と課題について長期追跡によって検証した（2年目）． A4判　全52頁 代表：竹田徳則 本人担当部分：「介護予防のための心理社会面に着目した包括的地域介入に関する研究」 pp.23-24を共著 　介護予防の一次予防事業「憩いのサロン」で1年に1回実施する「お元気チェック」に参加した作業療法学専攻学生の意識と取り組みに関する調査，認知機能低下に関与するモデルの構築，サロン参加きっかけの分析結果を報告した． （研究の実施・分析，および論文執筆にあたり助言した．） 共著者：竹田徳則，木村大介，大浦智子，今井あい子
6 市民の健康に関する意識調査報告書	共著	平成26年2月	平成25年度東海市健康増進計画等の評価及び策定支援委託事業（星城大学）	東海市健康増進計画等の評価及び策定にむけた調査を集計し報告した． A4判　全158頁 本人担当部分：データ集計・結果の解釈および報告書を主となって作成し，とりまとめた． 共著者：江西一成，竹田徳則，大浦智子
7 地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用	共著	平成26年3月	平成25年度元気創造研究センター年報（星城大学）	地域における介護予防のための健康サロンに参加する高齢者の健康情報ニーズの収集方法などについて調査し，シリアスゲームを活用した健康教育活動について検討した． A4版　全44頁 代表：大浦智子 本人担当部分：「地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用」pp31-33を共著（筆頭）． 公民館サロン参加高齢者の健康関連ニーズ及び入手源について調査し，報告した． 共著者：大浦智子，竹田徳則，天野圭二，冨山直輝，木村大介

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8 介護予防のための心理社会面に着目した包括的地域介入に関する研究	共著	平成26年3月	平成25年度元気創造研究センター年報（星城大学）	心理社会面と健康に着目し「憩いのサロン」を活用した介護予防のための地域介入によってもたらされる効果と課題について長期追跡によって検証した（2年目）． A4判　全44頁 代表：竹田徳則 本人担当部分：「介護予防のための心理社会面に着目した包括的地域介入に関する研究」 pp. 34-36を共著 介護予防の一次予防事業「憩いのサロン」拠点数の増加に伴う延べ参加者の増加，一時予防事業として展開される中での二次予防事業該当者のカバー，サロン参加と回数が多いほど要介護認定発生が有意に低いことを報告した．（研究の実施および論文執筆にあたり助言した.） 共著者：竹田徳則，木村大介，大浦智子，今井あい子
9 介護予防サロン運営展開方法調査報告書	共著	平成27年1月	平成26年度東海市委託事業(星城大学)	東海市のサロン運営ボランティアへのヒアリングと質問紙調査の実施・集計と，これに基づく提案を報告した. A4判　全21頁 本人担当部分：共著者とともに質問紙を作成し，調査の実施・集計と報告書の作成を主に担った. 共著者：安倍基幸，竹田徳則，江西一成，大浦智子
10 地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用	共著	平成27年3月	平成26年度元気創造研究センター年報（星城大学）	地域における介護予防のための健康サロンに参加する高齢者の健康情報ニーズの収集方法などについて調査し，シリアスゲームを活用した健康教育活動について検討した（2年目）． A4版　全33頁 代表：大浦智子 本人担当部分：「地域居住高齢者の健康増進・介護予防プログラムとしてのシリアスゲームの活用」pp23-26を共著（筆頭）． 公民館サロン参加高齢者に対する健康増進・介護予防プログラムとして実施した健康川柳の募集，健康川柳を活用したカルタの作成とカルタの活用について報告した. 共著者：大浦智子，竹田徳則，天野圭二，冨山直輝，木村大介
11 公衆衛生モニタリング・レポート委員会平成26年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成27年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある12グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全59頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた3つの個別課題pp. 14-18を共著 （このうち，高齢者グループ個別課題②「高齢者の地域におけるリハビリテーションについて」pp. 15-17担当執筆） 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，須知雅史，多田敏子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12 小規模私立大学で運用可能な調査システムを活用した、大学生の精神健康実態調査	共著	平成28年3月	平成27年度元気創造研究センター年報（星城大学）	学年および学部別の精神健康の特徴，および進級に伴う精神健康の推移を明らかにするために，学生の精神健康について実態を調査した. A4版　全33頁 代表：羽山 順子 本人担当部分：「小規模私立大学で運用可能な調査システムを活用した、大学生の精神健康実態調査」pp25-29を共著. 学生の精神的健康とアルバイトとの関連，半年後の精神健康を予測する要因について報告した. 共著者：羽山 順子，安部 基幸，赤岡 美津子，大浦智子
13 認知症高齢者主観的QOL向上をめざすADLプログラム開発に向けた在宅生活の実態調査	共著	平成28年8月	公益財団法人在宅医療助成勇美記念財団2015年度「在宅医療研究への助成」一般公募研究（前期）完了報告書	認知症高齢者の日常生活活動プログラム構築のために，在宅で暮らす認知症高齢者の日常生活活動，主観的QOLなどを調査した．日常生活活動の障害が，認知症高齢者の主観的QOLを低下させる要因であることが示唆された．（研究の実施，および報告書作成にあたり助言した.） A4版　全13頁（PDF公開） 代表：中西康祐 本人担当部分：代表者とともに研究計画を立案し，分析・報告にあたり助言をした. 共著者：中西康祐，大浦智子，増田秀一
14 公衆衛生モニタリング・レポート委員会平成27年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成28年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全64頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた3つの個別課題pp.13-17を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，須知雅史，多田敏子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）
15 公衆衛生モニタリング・レポート委員会平成28年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成29年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全72頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた3つの個別課題pp.18-23を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，須知雅史，多田敏子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16 公衆衛生モニタリング・レポート委員会 平成29/30年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	平成30年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全83頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた2つの個別課題pp.16-20を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，島本太香子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）
17 回復期リハビリテーション病棟における退院前指導に関する実態：レセプトデータによる医科情報を用いたリハビリテーション研究の可能性	共著	平成31年3月	平成30年度元気創造研究センター年報（星城大学）	回復期リハビリテーションを担う「回復期リハビリテーション病棟」における「入院時訪問指導加算」算定の実態を明らかにすることを目的に，日本医療データセンター（JMDC）のレセプトデータを用いて分析した. 代表：大浦智子 本人担当部分：「H003-2 リハビリテーション総合計画評価料 」算定件数は増加傾向にあること，「入院時訪問指導加算」の算定割合は新規に回復期リハビリテーション病棟に入院した数に対して限定的で，月単位における増減があるものの、やや増加していることを明らかにした。. 共著者：大浦智子，飯塚　照史
18 公衆衛生モニタリング・レポート委員会 2018/2019年度公衆衛生モニタリング・レポート年次報告書	共著	令和元年10月	日本公衆衛生学会	日本公衆衛生学会危機管理モニタリングレポート委員会内にある11グループが，各領域において設定した課題について報告した. A4判　全83頁 本人担当部分：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループにおいて，重点をおいた1つの個別課題pp.13-20を共著 共著者：高齢者のQOLと介護予防，高齢者の医療と福祉グループ （石崎達郎（リーダー），安西将也，植木章三，大浦智子，大坪徹也，奥村二郎，甲斐一郎，金川克子，島本太香子，藤原佳典，矢庭さゆり，鷲尾昌一，渡辺修一郎）
「受賞報告」				
1 地域社会から求められている訪問リハビリテーションのあり方と普及に関する検討：介護支援専門員とヘルパーを対象とした質問紙調査	単著	平成24年9月	一般社団法人至誠会　女醫会　第802号（岡本糸枝学術研究助成受賞者研究発表抄録）	介護支援専門員（CM）とヘルパーを対象に訪問リハビリテーションの効果に関する質問紙調査を実施した．両者が期待していた訪問リハの効果は，身体機能の回復，動きやすさやセルフケアの改善に偏っていた．効果を期待通りとしたのは，CMでは8割以上であるのに対し，ヘルパーでは6割に満たず，3割近くが“わからない”であり，両者に対して訪問リハの幅広い役割に関する説明と啓発を行う必要性が示唆された.
「その他」				
1 研究大会レポート	単著	平成22年10月	青海社　臨床作業療法 Vol.7 No.4	平成22年5月に開催された第15回全国訪問リハビリテーション研究大会in沖縄のレポート
2 若手奨励賞を受賞して	単著	平成26年1月	日本産業衛生学会近畿地方会ニュース No.97	平成25年11月に開催された第53回近畿産業衛生学会での若手奨励賞受賞に関する報告

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 書評	単著	平成29年3月	訪問リハビリテーション協会機関紙	『新版　訪問リハビリテーション実践テキスト』の書評
「国際学会」				
1 Differences between users and providers in regard to awareness and understanding the content and subjective effects of home-visit rehabilitation (訪問リハビリテーションの内容と主観的効果に関する利用者と提供者の認識と理解の違い)	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo (Yokohama)	利用者と提供者間における訪問リハ内容・主観的効果に対する認識の相違を明らかにするための質問紙調査を行った．利用者が提供者よりも実施したと認識する内容は，筋力や体力・麻痺・床上動作・身のまわり動作・屋内移動・呼吸の改善の6項目，利用者の主観的効果(維持・向上)は転倒の危険・家族関係が最も高かった． 本人担当部分：研究の計画立案・実施と結果を集計し，報告した． 共同発表者：Ohura T, Tsuyama T, Nakayama T
2 Evaluation of the Facilitative Factors for the Prevention of Cognitive Decline in a Preventive Intervention for Dementia (認知症予防介入における認知機能低下促進因子の評価)	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo (Yokohama)	一次予防事業であるサロン参加者の認知機能低下をエンドポイントとした4年間の追跡調査と分析を行った．サロン参加者では，Social networkやLeisure activityの高い状態が長期的には，認知機能低下に保護的である可能性が考えられた． 本人担当部分：研究の計画立案・実施および報告に向けた助言をした．． 共同発表者：Kimura D, Takeda T, Ohura T, Imai A
3 Motor and psychosocial tendencies in elderly women receiving primary preventive services (一次予防事業に参加する高齢女性の運動と心理社会特性)	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists in collaboration with the 48th Japanese Occupational Therapy Congress and Expo (Yokohama)	一次予防事業参加女性における運動器関連低下の割合と健康に関連する心理社会面を，横断的に検討した．予防事業参加女性の運動器該当群は約2割で，非該当群より生活機能，外出頻度の低下，うつ得点が高いことが示唆された． 本人担当部分：研究の計画立案・実施および報告に向けた助言をした．． 共同発表者：Imai A, Takeda T, Kimura D, Ohura T
「国内学会」				
1 Modified Barthel Index日本語版作成と信頼性の検証	―	平成22年6月	第44回日本作業療法学会（宮城）	介護老人保健施設入所高齢者を対象に，翻訳したModified Bartel Indexをperformance evaluation toolとして使用した場合の信頼性を検証した．カッパ係数はいずれも高い値を示し，検査間・検者間信頼性があると判断した． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，小西建太朗，石黒里香，中西康祐，小林 珠美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2 入所要介護高齢者の生活に関する主観的ニーズと介護職員による把握の程度	－	平成22年10月	第69回日本公衆衛生学会（東京）	入所要介護高齢者の主観的ニーズと介護職員による把握の程度を明らかにするために，118組の高齢者-介護職員の質問紙調査結果を報告した．IADLや生活環境に関する領域の質問項目は，BADLや情緒的な領域の質問項目よりも職員のニーズ把握割合が低い傾向にあった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，東尚弘，石崎達郎，中山健夫
3 健保レセプトとの突合による健診「要治療」群の医療機関受診状況の検討	－	平成22年10月	第69回日本公衆衛生学会（東京）	健康保険組合の健康診断データ67,054人分を用いて，特定健診での要治療対象者の健診後の受療行動を診療報酬請求明細書で確認し，未受診の実態を把握することを目的として研究を実施した．結果，要治療に該当する人の健診後の医療機関受診率は低かった． 本人担当部分：共著者とともに研究計画を調整し，助言した． 共同発表者：小沼梨沙，木村真也，大浦智子，宮崎喜久子，石崎達郎，中山健夫
4 介護職員の離職と雇用形態，職業ストレス，抑うつ症状，バーンアウトとの関連：介護職員を対象とした1年間の追跡研究	－	平成23年1月	第21回日本疫学会（札幌）	介護職員を対象に1年間のコホート研究を実施した．常勤者は非常勤者よりもバーンアウトの情緒的消耗感（EE）が高い者の占める割合が多かったこと，EEのリスクが高い群は90日時点での離職発生割合が高かったことから，離職を防ぐためにはEEに対するサポートの必要性が示唆された． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，石崎達郎，中山健夫
5 健診「要治療群」の健診後通院状況の違いによる，脳血管疾患・心臓疾患への影響	－	平成23年1月	第21回日本疫学会（札幌）	健康診断の検査結果で「血圧」「血糖」検査数値について治療を必要とされていながら，検診受診後に一定の期間医療機関への受療が見られなかった群と受療が見られた群の，脳・心臓疾患の罹患状況を把握した． 本人担当部分：共著者とともに研究計画を調整し，助言した． 共同発表者：小沼梨沙，木村真也，辻村友香，大浦智子，仙石多美，宮崎喜久子，高橋由光，石崎達郎，中山健夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6 作業療法学科学生における身体拘束および感染管理への関心：量的・質的検討	―	平成23年6月	第45回日本作業療法学会（埼玉）	４年制専門学校４年次学生の感染管理および身体拘束への関心の程度や関心をもつきっかけ等を把握することを目的に，質問紙調査による量的検討とレポートの内容分析による質的検討を行った．臨床実習では専門知識・技術だけでなく，医療従事者としてのリスク管理関連事項の理解について学生-臨床実習指導者-学内教員間の共通認識を培う必要があることが示唆された． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，川越清次，砂川勇，中山健夫
7 介護予防「憩いのサロン事業」参加高齢者の健康関連情報入手源：武豊プロジェクト	―	平成23年10月	第70回日本公衆衛生学会（秋田）	愛知県A町での介護予防事業「憩いのサロン」のボランティア群95人と一般参加者群181人を対象に，健康関連情報の入手源を問うた．情報入手源は，テレビやラジオと病院職員，町広報が高く，これらが高齢者にとって情報を得やすい可能性が示唆された．一方，ボランティア群では新聞，知人や友人が上位だったのに対し，一般参加者群ではサロン，保健センターが多いという違いがみられた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，竹田徳則，近藤克則
8 地域支援事業一次予防事業「憩のサロン」運営ボランティアの認知機能と生活機能との関連性～共分散構造分析による検討～	―	平成24年5月	第13回認知症ケア学会（浜松）	地域支援事業一次予防事業「憩のサロン」運営ボランティアの認知機能と生活機能との因果関係を明らかにすることを目的に，ボランティア93名の生活機能・認知機能の測定指標を用いて共分散構造分析を行った．本結果では，生活機能を高く保つことが認知機能維持を規定し，生活機能でも知的活動性が認知機能に影響を与え，それは注意に反映されることが示された． 本人担当部分：研究の実施および結果の解釈について助言した． 共同発表者：木村大介，竹田徳則，大浦智子，今井あい子，能登谷晶子
9 在宅要介護高齢者におけるセルフケア能力と遂行状況の乖離	―	平成24年6月	第46回日本作業療法学会（宮崎）	在宅要介護高齢者におけるADL能力と遂行状況の乖離の有無と程度を明らかにするために，Modified Barthel Indexを測定した．ADL能力と遂行状況は概ね良好な一致と判断した．しかし，セルフケアの中でも粗大運動を含む危険が伴いやすい階段，移動，入浴等では「できるがしていない」割合が高いことが明らかとなった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，石黒里香，中西康祐，津山努，深津良太

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10 訪問リハビリテーション利用前後の利用者の困りごとの主観的変化	―	平成24年6月	第46回日本作業療法学会（宮崎）	訪問リハ利用前の困りごととサービス利用後の主観的変化を明らかにするために，39名の訪問リハビリテーション利用者に質問紙を配布し，38部が有効回答だった．体力や筋力の低下，移動や外出頻度，身のまわり動作に関する事項が困りごとの上位を占めていた．一方，困りごととして上位に挙がっていなかった項目がサービス利用後に「よくなった」と感じていることがあり，利用者が自覚していないニーズの存在が明らかとなった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告にむけて助言した． 共同発表者：津山努，大浦智子
11 ポピュレーションアプローチによる介護予防に向けた憩いのサロン事業―サロン参加要因―	―	平成24年6月	第46回日本作業療法学会（宮崎）	サロン参加理由を明らかにし参加継続を図る手がかりを得ることを目的に，サロン参加者に対して参加理由を質問紙にて問うた．サロンにほぼ毎回参加しているボラ・参加者ではその理由として，共に新しい仲間ができる，他の参加者に会える，おしゃべりができるなど人と人とのつながりに関わる内容，開催場所が近いという環境要因，健康に良い話が聞けるという情報的サポートが挙がった． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：竹田徳則，近藤克則，木村大介，大浦智子，太田崇
12 地域在住高齢者における認知機能低下の心理社会，生活機能要因の検討	―	平成24年6月	第46回日本作業療法学会（宮崎）	認知機能低下の要因を体力・認知・心理社会・生活機能の多要因で検討し認知機能低下の過程についての手がかりを得ることを目的に，地域居住高齢者を対象に3年間の追跡調査を行った．認知機能低下の予測要因として，長期データからは抑うつ状態，中期データからは知的能動性，短期データでは語想起が抽出され，抑うつ状態が知的能動性の低下に影響を与え，知的能動性の低下が前提となり語想起が低下するという認知機能低下の過程が考えられた． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：木村大介，竹田徳則，太田崇，大浦智子，今井あい子
13 地域在住高齢女性の生活機能と筋力との関連について	―	平成24年6月	第46回日本作業療法学会（宮崎）	生活機能や外出頻度，歩行時間と筋力との関連を横断的に分析，検討することを目的に，介護予防事業「憩いのサロン」参加の女性を対象にチェアスタンド（CS）と握力を測定した．下肢筋力を反映するCSは，前期高齢者では社会的役割，後期高齢者ではIADLといったいずれも自宅外での活動とより関連している可能性が示唆された．一方握力は，後期高齢者で生活機能との関連がみられた． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：今井あい子，竹田徳則，木村大介，大浦智子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14 客観的臨床能力試験（OSCE）前後の学習特性と評価実習：量的・質的分析による検討	―	平成24年10月	第17回日本作業療法教育学術集会（東京）	評価実習前OSCE前後の学習特性を明らかにし，今後の学内教育を検討することを目的に，作業療法学生を対象に質問紙調査を実施した．OSCEの事前準備は，実技試験該当検査と提示された症例の身体機能関連検査の準備割合が高かった．一方，事前に提示されたADLや画像から予測可能な高次脳機能検査や画像所見に関する事前準備は不十分だった．実習前に取り組むべき内容として，知識や評価のみならず相手に合わせた対応といった応用技術を視野に入れた準備が必要だと感じていた．
15「憩いのサロン事業」参加者の健康関連情報入手源と情報の授受：武豊プロジェクト	―	平成24年10月	第71回日本公衆衛生学会（山口）	A町での1次介護予防施策としての「憩いのサロン事業」（サロン）が情報入手源となり，情報の授受が増えているかを検討した．サロン参加者の健康関連・食・運動に関する情報の入手源は，テレビやラジオが最も多いが，高齢で情報源の数が少ない一般参加者にとってサロンは，主要な健康関連情報の授受の場になっていた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，竹田徳則，近藤克則
16 ラジオ体操活動への参加を希望する高齢者の生活状況・心理社会機能・体力の特性	―	平成24年10月	第71回日本公衆衛生学会（山口）	ラジオ体操活動がもたらす多面的効果を検討するベースライン調査として，参加希望高齢者と体力測定希望者の生活状況，心理社会機能，体力の特性を明らかにした．参加希望者は，会や組織に所属する割合が有意に高かった，他の項目では有意な差がなかった． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：今井あい子，加藤芳司，北林由紀子，山本和恵，大浦智子，竹田徳則
17 介護老人保健施設の看護・介護・リハビリテーション担当者による，入所高齢者のニーズ理解の特性	―	平成25年1月	第23回日本疫学会学術総会（大阪）	看護師（看護）・介護職員（介護）・リハビリテーション担当者（理学・作業療法士・言語聴覚士：リハ）が理解している施設入所高齢者（高齢者）のニーズと職種間相違を検討した．高齢者92名と職員による各々92部の質問紙の回答を解析した結果，高齢者の「ニーズあり」割合は，ADL（7問）69.2-92.1%，IADL（5問）51.6-63.7%，生活環境（8問）26.7-79.1%，気分（5問）86.7-93.3%だった．日常的なケアに関与するADLや気分領域では，リハに比べて看護・介護が「ニーズあり」と捉えており，ニーズ理解が職種間で異なることが示された． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，東尚弘，石崎達郎，中山健夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18 訪問リハビリテーション利用者・家族の生活目標：自由記述回答の質的分析	―	平成25年6月	第2回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（松本）	5箇所の訪問リハ事業所の利用者155名とその家族を対象に生活目標に関する質問紙調査を実施した．生活目標は，利用者では8個の二次カテゴリに，家族では17個の二次カテゴリに集約された．利用者と家族の生活目標は，歩行や外出等の移動が共通し，利用者では[自分らしい生活]，家族では[その人らしい活動]が挙げられていた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努
19 作業療法学専攻学生における“憩いのサロン事業”参加前後の学習と気づき	―	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	一次予防事業としての閉じこもり・認知症予防のための「憩いのサロン」に参加している学生を対象に，サロン参加前後のコミュニケーションや作業療法関連知識に対する質問紙調査を実施した．サロン参加によって「コミュニケーションの反省」や「改善したい態度」が意識化され，これらの課題について臨床実習前に学生が気づくには学内教育では限界があることがわかった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，竹田徳則，木村大介，今井あい子
20 脳卒中患者を対象とした作業療法介入ランダム化比較試験における評価尺度の計量的研究	―	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	2006-2010年に公表された脳卒中患者に対するOT介入RCTで使用された評価尺度を計量した．2006-2010年の5年間に公表された脳卒中患者対象のOT介入RCTは9論文(入院5，地域4)で，「活動・参加」で使用された評価尺度は基本動作やセルフケアに関するものが主であり，IADLやQOL，主観的な満足感を評価尺度として採用している研究は一部に限られていた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施を支援し、報告にむけて助言した． 共同発表者：田中理乃，大浦智子，中山健夫
21 ポピュレーションアプローチによる介護予防に向けた憩いのサロン事業-参加促進要因-	―	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	介護予防に向けたサロン参加促進の手がかりを得るために，お元気チェックにおいてサロン参加のきっかけを質問項目のひとつとして調査した．サロン参加へのきっかけは，ボランティアと参加者で「人」と「町広報誌」，参加者では「回覧板」や「老人会」を介した情報的サポートが多い反面，「家族の勧め」は少なかった． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：竹田徳則，近藤克則，大浦智子，木村大介，今井あい子
22 地域在住高齢者における自己記入式認知機能検査日本語版(Test Your Memory -J)の基準関連妥当性の検討	―	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	地域在住高齢者を対象にTest Your Memory-J（TYM-J)の基準関連妥当性を，MMSE・HDS-R・CDRを併用して検討した．地域在住高齢者の認知機能評価としてのTYM-Jの妥当性と検査適正が確認できた． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：木村大介，竹田徳則，大浦智子，今井あい子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
23 入所高齢者の主観的ニーズを把握するための質問紙の作成：内的整合性と再現性	―	平成25年10月	第72回日本公衆衛生学会（津）	施設入所の要介護高齢者における生活に関する主観的ニーズ把握のための質問紙の内的整合性と再現性を検証した．質問紙は，高齢者の主観的ニーズに関する4領域・合計25項目で構成され，質問紙の4領域の内的整合性は高く，領域や項目による信頼性の高低があった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，東尚弘，石崎達郎，中山健夫
24 高齢者施設の常勤介護職員における離職とその関連要因の検討	―	平成25年11月	第53回近畿産業衛生学会（京都）	常勤介護職員の離職と職業ストレス，バーンアウト，抑うつ等との関係を明らかにするために，調査後1年以内の離職の有無をアウトカムとした共分散構造分析を行った．常勤介護職員において，バーンアウト（BO）の情緒的消耗感には職業ストレス・BO脱人格化やBO個人的達成感・抑うつが関与しており，BO情緒的消耗感が限定的ではあるが離職の直接要因となっていた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，石崎達郎，中山健夫
25 臨床実習後の作業療法学生が目標・理想とする作業療法士	―	平成25年11月	第13回東海北陸作業療法学会（富山）	最終学年での臨床実習（8週間の総合実習2回）を終えた学生がm目指す作業療法士ををを明らかにするために，記述式質問紙調査で得た内容を質的に分析した．臨床実習を終えた学生は，目標・理想とする作業療法士の要素として【技能】や【総合的判断力】に着目していた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施を支援し、報告にむけて助言した． 共同発表者：山崎竜弥，大浦智子
26 訪問リハビリテーションの効果判定に使用されている評価指標：国内外の作業療法効果に関する文献レビュー	―	平成26年6月	第4回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（熊本）	高齢者への訪問リハビリテーションにおける作業療法介入研究の使用評価指標を明らかにした．包含基準を満たす国内外5論文の使用評価指標は対象者8種（セルフケアや転倒発生等），介護者2種（負担感等）だった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣，中山健夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
27 女性高齢者の認知機能を規定する生活機能の探索的分析	―	平成26年9月	第4回日本認知症予防学会（平成26年9月，東京）	サロンに参加する女性64名を対象に，手段的自立（以下，IADL）などを含む高次生活機能の状態が認知機能に及ぼす影響を明らかにした．見当識と視空間はIADL，語流暢性は知的能動性，遅延再生は社会的役割の状態から説明可能であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案し，実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：木村大介，古澤麻衣，大浦智子，竹田徳則，冨山直輝，天野圭二
28 健康サロン参加高齢者の健康関連情報ニーズとIT使用状況	―	平成26年11月	第73回日本公衆衛生学会（宇都宮）	健康サロン参加高齢者の健康関連情報ニーズとIT使用状況を明らかにするための質問紙調査を実施した．健康サロン参加高齢者の健康関連情報ニーズとして，認知症，物忘れ，筋力低下，骨粗鬆症の関心が高かった．携帯電話およびインターネットの使用状況が決して高いとはいえなかった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，竹田徳則
29 認知症高齢者の回復期病棟退院前後における家族介護者の負担感の特徴	―	平成27年5月	第16回認知症ケア学会（札幌）	回復期リハビリテーション病棟から自宅退院した認知症を伴う高齢者の介護者における負担感の変化と関連要因を検討した．介護者は高齢者が入院中でも何らかの介護負担を感じ，退院後に高い傾向にあった．介護者の多くは認知症の症状を理解し，サポートの受領もあったが，負担が高い群の半数はBPSDによる負担感があり，その高齢者は退院後もBPSDが出現し，ADL自立は総じて低かった． 本人担当部分：研究結果の解釈および報告にむけて助言した． 共同発表者：藤田彩花，竹田徳則，大浦智子，神田太一
30 訪問リハビリテーション・チェックリストの開発：具体的な目標設定と明確な課題解決のプロセス	―	平成27年5月	第6回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（大阪）	明確な目標設定に基づく効果的な訪問リハビリテーション（訪問リハ）の提供を可能とするためのアセスメントシートとチェックリストを開発した．チェックリストは4領域20項目で構成された． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
31 院外心停止に居あわせた市民の　心肺蘇生における心理・行動プロセスとその関連要因	―	平成27年6月	第18回　日本臨床救急医学会総会・学術集会（富山）	院外心停止に居あわせた市民の心肺蘇生における心理・行動プロセスとその関連要因を明らかにするために，インタビューを用いた質的研究を行った．助けたいという動機の存在のもと，心配停止現場に伴う負担と心肺蘇生を実施する根拠の葛藤が生じていることが明らかとなった． 本人担当部分：データの分析を共に担い，研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：島本大也，西山知佳，大浦智子，石見拓

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
32 訪問リハビリテーション実施計画書における目標とプログラムの施設間の違い	―	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	訪問リハ実施計画書（計画書）の目標とプログラムを構成するICF領域数を施設間で比較した．3施設に対象者特性の大きな違いはなかったが，目標の領域数はPTによる計画書で施設間の違いが認められた．プログラムの領域数は全体・PT・OTいずれの場合においても施設間の違いが認められた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，山内春香，佐竹美保
33 訪問リハビリテーション実施計画書の目標とプログラム	―	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	作業療法士が作成した訪問リハ実施計画書（計画書）の目標とプログラムを構成するICF領域数を計量した．目標の組み合わせは＜活動のみ＞と＜活動とその他＞をあわせて約半数を超えていたことに対し，プログラムの上位は＜心身と活動＞，＜心身と活動とその他＞，＜心身と活動と環境＞のように「心身」を含む複数領域で構成される組み合わせに広がっていた． 本人担当部分：研究計画を立案・実施し，データの分析および報告にむけて支援した． 共同発表者：山内春香，佐竹美保，津山努，大浦智子
34 介護予防「憩いのサロン」事業参加者における二次予防リスク者の特徴	―	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	一時予防事業であるサロン参加者における二次予防対策リスク者とその割合を確認し，サロンを活用した一時予防事業プログラムにつながる基礎資料を得るために，お元気チェックで得た自記式質問紙の回答を分析した．運動器と口腔機能，認知機能，うつの各リスク者，なかでも平均年齢の高い一般参加者で二次予防事業該当者が多く含まれていた． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：竹田徳則，木村大介，大浦智子，今井あい子
35 介護予防・認知症予防事業に参加している地域在住高齢者の認知機能の影響要因に関する共分散構造分析を用いた分析	―	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	認知機能に対する予防要因を明らかにし，予防要因が認知機能に与える影響のプロセスを明らかにした．認知機能に対する予防要因である潜在変数は，「生活上の役割」「社会的技能」「知的IADL」「身体機能」に集約された．認知機能予防事業には，「社会参加」を通じて認知機能を高める関節効果と４つの潜在因子が認知機能に直接影響する直接効果の両者の介入効果が包含されていた． 本人担当部分：研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：木村大介，竹田徳則，大浦智子，今井あい子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
36 前向きな障害受容は脳卒中後遺症者の主観的幸福感に関連するか？	―	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	脳卒中後遺症を有する者の主観的幸福感を高める支援に向けて，前向きな障害受容と主観的幸福感の関連を検討した．ロジスティック回帰分析の結果，主観的幸福感には，機能低下や活動制限など以上に，親しい人との交流満足感が関与しており，脳卒中後遺症を有する者の対人交流の状態やその満足感に着目する重要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案・実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：今井あい子，平野友祐，大浦智子
37 認知症高齢者の介護者に対する情報的サポート内容の検討	―	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	介護者を対象にOTから入院中に受けたサポート内容と自宅で介護をすることで入院中にあれば良かったと思うサポート内容を調査し，OTが今後提供すべきサポート内容を検討した．退院1ヵ月後の介護において入院中にあれば良かったサポートは「認知症症状の対応」と「コミュニケーション方法」，「できることを増やす方法」など高齢者の症状理解と対応方法に関する内容が多かったが，これらは入院中の提供が少ない傾向であった． 本人担当部分：結果の解釈に関する助言，および報告にむけて支援した． 共同発表者：藤田彩花，竹田徳則，大浦智子，神田太一
38 3ヶ月以内に訪問リハビリテーションの目標達成 終了に至る要因の探索	―	平成27年11月	第74回日本公衆衛生学会（長崎）	訪問リハビリテーションの初回目標/プログラムの内容と目標達成による3か月以内の終了との関連を明らかにするために，リハビリテーション実施計画書の後方視的研究を行った．セルフケアのうち，入浴を視野に入れた目標のもと，計画的に評価を行うことが，限られた期間内に目標を達成し終了に至る要因となる可能性がある． 本人担当部分：研究計画を立案・実施し，データの分析および報告にむけて助言した． 共同発表者：古澤麻衣，大浦智子，藤井啓介
39 訪問リハビリテーション内容と効果に対する利用者家族と提供者の捉え方の相違	―	平成27年11月	第74回日本公衆衛生学会（長崎）	訪問リハビリテーション利用者家族と提供者50組を対象に，主観的効果と実施プログラムの認識の相違を明らかにした．利用者家族は，提供者が考えているよりも症状や床上動作の改善に向けたプログラムやマッサージを実施していると認識しており，痛みや症状の改善を自覚していた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，中山健夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
40 訪問と回復期におけるリハビリテーション実践状況の違いー複数施設を対象とした質問紙調査ー	ー	平成28年3月	第3回臨床作業療法学会学術大会（東京）	訪問リハと回復期リハにおける実践状況の相違を明らかにした．訪問群が回復期群に比べて，環境に関する評価や専門的立場からの助言，対象者や家族の意向を反映し理解のもとに決定したプランを立案・実施していた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
41 作業療法のクリニカルリーズニングと患者満足度との関連	ー	平成28年3月	第3回臨床作業療法学会学術大会（東京）	作業療法士（OTR)のクリニカルリーズニング（CR)と作業療法内容，クライアント（CL)の満足度の関連を明らかにするために，19組の質問紙回答を分析した．約半数のOTRの経験年数が1～2 年目だったが，CRの合計は 7.3 と多くの活用が認められた．CLの満足度はどの項目においても作業療法に対して高い評価だったことに対し，OTR が予測したCLの満足度や作業療法の提供満足度は約5点と低かった． 本人担当部分：研究計画立案をともに行い，データの分析および報告にむけて助言した． 共同発表者：古澤麻衣，大浦智子，藤井啓介
42 脳卒中患者を対象としたModified Barthel Indexの信頼性	ー	平成28年6月	第53回日本リハビリテーション医学会(大阪)	日本語版performance evaluation tool of Modified Barthel Indexの信頼性を，ビデオ法を用いて検証した．合計点数の評価者間・評価者内信頼性はAlmost perfect，全項目がAlmost perfect- Substantialであったことから，信頼性があると判断した． 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，長谷公隆，中島美恵，中山健夫
43 臨床経験を有する者における訪問リハビリテーション配属期間と実践状況との関連	ー	平成28年6月	第8回日本訪問リハビリテーション協会（東京）	臨床経験が6年目以上の者における訪問リハビリテーション（訪問リハ）配属期間と実践状況との関連を明らかにした．訪問長群は訪問短群に比べてICFの活動・参加に関する評価を行い，プランの実施に対象者や家族の意向を反映していると自己評価していた．訪問長群では，対象者だけでなく家族の意向の調整を含めた総合的視点に配慮した実践に取り組んでいた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣
44 臨床経験とリハビリテーション実践との関連	ー	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（札幌）	臨床経験年数と実践状況との関連を明らかにするために，6箇所の回復期リハ病棟から得られた223名の質問紙の回答（新人群144名，経験群79名）を分析した．経験群は，全20項目において新人群に比べて実践状況が高かったことから，これらの項目の実践状況は経験年数との関連が示唆された． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，津山努，古澤麻衣

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
45 認知症高齢者のQOL向上に寄与するADL介入プロトコル構築のための予備的調査	―	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（札幌）	施設の認知症高齢者のQOL向上に寄与するADL介入プロトコルを構築するため，予備的介入調査を実施しその効果を検証した．ADL介入をとおして，QOLは主観的評価と代理評価のいずれも向上した．介入毎の意欲向上の記録や介入後の肯定的な感想から，QOLが向上した一因がうかがえた． 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告にむけて助言した． 共同発表者：中西康祐，大浦智子，矢田智恵美，浅井健一
46 医学生は、患者視点をどのように学ぶことができるのか～リウマチ患者へのインタビューを通じて～	―	平成28年9月	第8回ヘルスコミュニケーション学会（東京）	「リウマチ友の会」会員に行った質問紙調査の自由記述式の質問に対する回答結果を，医学生4名（5年生3名、6年生1名）でKJ法により分析した．患者が希望するのは『不安・不満の解消』であり，患者の持つ不安・不満は『生活上の問題』，『心理的な問題』，『社会的な問題』に大別できた。これらの不安・不満の解消を阻害する要因として『患者視点に欠ける医療体制および診療内容』が抽出された．これら2つの阻害要因について，具体的どのようなことを改善すべきなのかをインタビュー調査で明らかにした． 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告にむけて支援した． 共同発表者：荘子万能，　西明博，橋本里穂，石橋茉実，小嶋雅代，大浦智子，山中寿，中山 健夫
47 回復期リハビリテーション病棟と訪問リハビリテーション実践の制約	―	平成28年10月	第75回日本公衆衛生学会（大阪）	リハビリテーション（リハ）専門職における臨床実践上での制約を明らかにした．17箇所から得られた385名の質問紙の回答（回復期222名，訪問163名）から，回復期ではプランの提案や立案・実施に制約を感じる一方で，訪問では生活目標の共有や課題の原因特定と対象者・家族への伝達・理解に制約を感じていることがわかった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣
48 リウマチ寛解基準へのPGA導入過渡期の患者の類型化	―	平成29年8月	第49回日本医学教育学会大会（札幌）	医療に対する患者の多様性を把握するために，関節リウマチ患者を対象とした4回のフォーカスグループインタビューを用いて，段階的コーディングで語りの潜在的意味を可視化するSCAT手法により分析した.分析の結果，完治を追求する「理想志向型」、医師に提案を行う「提案型」、医師の言う通りに従う「開き直り型」、嘘をつく「医師あやつり型」の4類型に分けられ，タイプ毎の医師患者関係を明らかにした． 本人担当部分：共著者と共に研究を実施した． 共同発表者：中村里香，肥田武，小嶋雅代，末松三奈，大浦智子，安井浩樹，高橋徳幸，阿部恵子，岡崎研太郎，植村和正

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
49 関節リウマチ患者と医学生の面接によって得られた「患者の声」	―	平成29年9月	第9回ヘルスコミュニケーション学会（京都）	「（病気の）つらさ」に焦点をあて,9名（女性）の患者を対象に医学生3名（5回生）が同席のもとで非医師がフォーカスグループインタビューを行った結果，4つの大カテゴリ（【ライフイベント】【近親者による理解の有無】【周囲からの親切に対する思い】【リウマチに対する受入れの困難さ】）が抽出された．患者個人の体験としてのライフイベントや病気に対する周囲の理解に関する内容が「（病気の）つらさ」として抽出され，これらへの支援の必要性が示唆された． 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，小嶋雅代，山中寿，荘子万能，　西明博，橋本里穂，石橋茉実，中山健夫
50 関節リウマチ患者と医学生の合同グループワークの経験から：患者さんの感じたこと・医学生の学んだこと	―	平成29年9月	第9回ヘルスコミュニケーション学会（京都）	関節リウマチ（RA）患者と医学生の合同グループワークグループワーク（GW）を通して両者が感じたことと、今後の医学教育に必要と考えることを明らかにするために，質問紙調査によって面接の感想と医学教育に必要と考えることについて回答を得た．患者理解を試みる医学生に対し，患者から「伝えたい・教えたい」という思いが表出された一方，医学生は患者の生活像を理解する必要性を実感する機会となった． 本人担当部分：共著者と共に研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，小嶋雅代，山中寿，荘子万能，　西明博，橋本里穂，石橋茉実，中山健夫
51 救命処置実施への自信につながる心肺蘇生講習会の内容	―	平成30年6月	第21回　日本臨床救急医学会総会・学術集会（名古屋）	救命処置の自信に繋がる心肺蘇生講習会の内容を明らかにするために，心肺蘇生講習会に参加した18歳以上の市民を対象に質問紙調査を行い，自由記述に記載された講習会の良かった点に関して内容分析を行った．自由記述を分析した結果，自信に繋がった講習会の内容は「救命処置の体験」に関わるものが多くを占めた．救命処置を体験することで自信獲得に繋がること，質疑への対応や手技へのフィードバック，リアリティのある状況設定に応じた練習も重要であることが示唆された． 本人担当部分：データの分析を共に担い，研究の実施および報告にむけて助言した． 共同発表者：島本大也，西山知佳，大浦智子，石見拓
52 訪問リハビリテーション実践チェックリストの因子的妥当性と内的整合性	―	平成30年6月	第12回日本訪問リハビリテーション協会学術大会（北九州）	訪問リハに配属されている理学療法士，作業療法士，言語聴覚士163名を分析対象とし，訪問リハ実践チェックリストに基づいて過去1ヶ月間の実践状況（0-10の11段階）を問う無記名自記式質問紙調査結果を分析した．質問紙は基本情報のほか，長期・短期目標からなる＜目標設定：Q1-5＞，優先度の高い活動を妨げている作業工程と行為をICFで整理する＜課題の分析：Q6-10＞，解決方法（プラン）の選択肢と根拠を整理する＜プランの提案：Q11-15＞，プランの頻度と期間を決定づける＜プランの立案と実施：Q16-20＞の4領域20項目で，確証的因子分析（CFA）によるモデル適合はRMSEA=0.079，GFI=0.80，AGFI=0.74だった．クロンバックα係数は4領域すべてで0.90以上だった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣，津山努

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
53　回復期リハビリテーション病棟における実践チェックリストの因子的妥当性と内的整合性	―	平成30年9月	第52回日本作業療法学会（名古屋）	回復期リハに配属されている理学療法士，作業療法士，言語聴覚士222名を分析対象とし，実践チェックリストに基づいて過去1ヶ月間の実践状況（0-10の11段階）を問う無記名自記式質問紙調査結果を分析した．質問紙は基本情報のほか，長期・短期目標からなる＜目標設定：Q1-5＞，優先度の高い活動を妨げている作業工程と行為をICFで整理する＜課題の分析：Q6-10＞，解決方法（プラン）の選択肢と根拠を整理する＜プランの提案：Q11-15＞，プランの頻度と期間を決定づける＜プランの立案と実施：Q16-20＞の4領域20項目で，確証的因子分析（CFA）によるモデル適合はRMSEA=0.087，GFI=0.80，AGFI=0.75だった．クロンバックα係数は0.89～0.91だった． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した． 共同発表者：大浦智子，古澤麻衣，津山努
54　回復期リハビリテーション病棟における入院時指導加算に関する実態	―	令和元年10月	第78回日本公衆衛生学会（高知）	日本医療データセンター（JMDC）のレセプトデータから，所定の期間に「1度でも回復期リハビリテーション病棟入院料を算定したことのある患者」を抽出し，新規に回復期リハビリテーション病棟に入院した数を概算した．次に，新規入院患者に占める「入院時訪問指導加算」算定件数の割合を算出した．2014年度以降，H003-2算定件数は増加傾向にあり，新規に回復期リハビリテーション病棟に入院した数に対する「入院時訪問指導加算」の算定割合は限定的であるもののH003-2と同様に増加傾向がみられた． 本人担当部分：研究を計画立案・実施し、報告した．
「シンポジウム」 1「訪問リハビリテーションにおける教育のこれから～生命，生活，人生を共に歩む訪問療法士を育てる為には～」	―	平成27年5月	日本訪問リハビリテーション協会学術大会 in 大阪 シンポジウム	シンポジウム1のシンポジストとして，求められる訪問リハビリテーションのあり方，認定訪問療法士制度と教育について講演した．
2 様々な医療の場におけるSDMの試み「地域医療の立場から」	―	平成28年2月	平成27年度厚生労働科学研究費補助金(地域医療基盤開発推進研究事業)〈指定課題〉『社会的責任に応える医療の基盤となる診療ガイドラインの課題と可能性の研究』公開シンポジウム「Shared decision making〈SDM〉の今・これから：診療ガイドラインの新たな可能性を考える」	シンポジストとして，地域におけるリハビリテーション場面における情報共有の実態報告と，望まれる共有決定のあり方について講演した．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「メディア」 1 サロン参加で健康に良い情報が増えた人が8割	－	平成25年10月	日本福祉大学健康社会研究センタープレスリリース	「憩いのサロン」参加者の健康情報源と情報の授受：サロンは情報の授受の場になっているか？保健師ジャーナル 69(9)；712-719. 2013.を紹介した.
2 シリーズ講話 「健康で長生きの秘けつ」	－	平成27年9月	メディアスFM	第6回「健康にまつわるコミュニケーション」を担当し，医療や健康に関するコミュニケーションの特性や留意事項を解説した. （星城大学大学院教員によるシリーズ講話）
3 わたしの健康～ＨＡＰＰＹライフ☆～ 「健康デー」特別番組	－	平成31年1月	メディアスFM	医療・健康情報の聞き方・伝え方. （星城大学大学院教員によるシリーズ講話）

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1）長引く・頑固な・つらい痛み 薬物療法2011	共著	平成23年5月	㈱CBR	臨床医が治療に難渋する「長引く・頑固な・つらい手・足・腰・筋・関節などの痛み」に対する薬物療法の今日の治療指針について解説。最新の知見に基づいて病理、病態生理から治療のメカニズムまでを概観し、とりわけ薬物療法に関する科学的裏付けを詳細に示した。薬物は非オピオイド系から向精神薬、筋弛緩薬、抗リウマチ薬、さらには漢方薬までを網羅しており、各症候に対するベストプラクティス、薬物相互作用、Drug informationなども紹介。非専門医でも薬物治療のマネジメントができるよう解説した。 B5判・168頁 編者：米延策雄，菊池臣一，柴田政彦 共著者：柴田政彦，田口敏彦，関口美穂，紺野慎一，竹下克志，西本憲弘，史賢林，橋本淳，安田由華，大井一高ほか15名 本人担当部分： 「第2章 痛みを有する患者に対する薬の使い方」P12-35を共著 鎮痛薬投与に関する患者の痛みの評価、薬物の選択基準、その効果について解説。 共著者：柴田政彦，田口敏彦，関口美穂，紺野慎一
2）癌性疼痛 FOR PROFESSIONAL ANESTHESTOLOGIST，V	共著	平成25年7月	克誠堂出版	癌の痛みを理解する知識を全て網羅。癌性疼痛の発症機序、使用する薬物、オピオイドの使用法と副作用、鎮痛補助薬、在宅医療などの各項目を解説。WHO方式の癌性疼痛治療法や、オピオイドの副作用とその対処、オピオイドが効きにくい痛みとその治療法にも触れる。さらには鎮痛補助薬や各種代替療法、在宅医療における癌性疼痛への対処法などについても解説した。 A4判・321頁 編者：花岡一雄 共著者：柴田政彦，松田陽一，眞下節，花岡一雄，細川豊史，佐伯茂，有田英子，村川和重，小川節郎，下山直人ほか39名 本人担当部分： 「神経ブロック療法」 P203-209を共著 癌の痛みに対する各種神経ブロックの方法について，そのエビデンスと手技について解説。 共著者：柴田政彦，松田陽一，眞下節
3）運動器慢性痛診療の手引き	共著	平成25年11月	南江堂	局所の組織由来ではない運動器の慢性痛、なかでも神経経路や記憶、精神面などに影響を受ける慢性痛における診療マニュアル。、痛みを修飾するメカニズムの解明とその対策について解説。さらに整形外科医が使ってこなかった中枢系に作用する薬剤の使い方などについて、日本整形外科学会運動器疼痛対策委員会の成果をまとめた。 A4判・180頁 編者：田口敏彦，山下敏彦，牛田享宏 共著者：柴田政彦，中村雅也，関口美穂，紺野慎一，米和徳，中尾慎一，福井大輔，川上守，大鳥精司，ほか15名 本人担当部分： 「複合性局所疼痛症候群」 P168-173を単著 複合性局所疼痛症候群の疾患概念と評価、治療方針について解説。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
4) ペインクリニシャンのための新キーワード135	共著	平成26年5月	真興交易(株)医書出版部	ペインクリニック診療の現場でよく用いられる135項目のキーワードを、基礎的用語・病態および疼痛性疾患・痛みの評価法・神経ブロック・治療法(神経ブロック以外)・その他の6章分別、体系的に分かりやすく解説した。『痛みの概念が変わった 新キーワード100+α』(2008年刊)を基に、スピリチュアルペイン・無痛分娩など新たな項目を加え、最新のガイドライン・治験等を踏まえ概説した。 A4判・368頁 編者：小川節郎 共著者：柴田政彦，山田芳嗣，小川節郎，細川豊史，森本昌宏，井関雅子，三木健司，牛田享宏，川股知之，児玉謙次ほか84名 本人担当部分： 第二章 病態「CRPS」 P73-74を共著 CRPSの病院、疫学、判定指標やその注意点について解説。 共著者：住谷昌彦，柴田政彦，山田芳嗣
5) 増刊 レジデントノート あらゆる科で役立つ！ 麻酔科で学びたい技術	共著	平成25年6月	羊土社	麻酔科レジデントが、現代の麻酔の概念を理解できるように、また基本手技を習得できるように各種技術を解説。周術期管理の基本を押さえ、知っておくべき病気・病態の知識の整理ができるような構成となっている。 A4判・261頁 編者：萩平哲 共著者：柴田政彦，上山博史，森本康裕，増井健一，内田整，原真理子，柴田晶カール，車武丸，浅井隆，鈴木昭広，讃岐美智義，ほか20名 本人担当部分： 「硬膜外麻酔」 P107-112を単著 麻酔時の体位・主義・薬剤管理などから、硬膜外麻酔修得に要する技術について解説。
6) まれな疾患の麻酔 A to Z	共著	平成27年5月	文光堂	麻酔科医のために、およそ400の“まれな疾患”を取り上げて解説した。まれな疾患に遭遇した際、辞書を引くように検索でき、診療に直結する最新情報をすばやくアクセスできる構成とした。各項目の冒頭には麻酔中に「してしてよいこと」と「してはいけないこと（do or do not）」を【注意事項】として掲載、リスクマネジメント教育にも有用な構成となっている。 B5変型判・714頁 編者：高崎眞弓，河本昌志，木内恵子，白神豪太郎，萩平哲 共著者：柴田政彦，神崎理英子，瀬戸口秀一，外須美夫，重松研二，山浦健，小倉信，井手岳，又吉宏昭，ほか360名 本人担当部分： 「ハンセン病」 P479を単著 ハンセン病患者の病態生理・臨床症状と、術中麻酔時の留意事項について解説

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7）痛みScience& Practice臨床に役立つ神経障害性痛の理解	共著	平成27年5月	文光堂	近年、神経障害性痛は多くの研究者や専門医による様々な観点からの病態や治療法が探求されている。本書では痛み診療に従事する医師が最良の治療を行えるよう配慮。「痛みの機序に関する基礎は，末梢から中枢まで連続性や統一性のある解説」「神経障害性痛の正しい理解のため，その要素を一部有している疾患やその周辺疾患も含めて解説」「各疾患については，疫学，病態，治療法などを詳細に解説」これらに重点を置きつつ、実践的で分かりやすい構成で解説した。 A4判・285頁 編者：井関雅子 共著者：柴田政彦，佐々木美佳，河野達郎，大橋宣子，渡部達範，南雅文，津田誠，内田仁司，植田弘師，伊藤誠二，ほか102名 本人担当部分： 「線維筋痛症」 P238-241を単著 線維筋痛症の疫学・病態・症状と、その薬物治療について解説。
8）麻酔科学レビュー2016	共著	平成28年2月	総合医学社	研修医や若手麻酔科医に必要な麻酔科１４領域の知識を総括し、さらに２０１３～２０１４年に発表された文献の中で重要なもの１２０件を１頁１文献で紹介、開設を加えた。 AB判・300頁 編者：澄川耕二，岩崎寛 共著者：柴田政彦，川前金幸，小出康弘，神山有史，坂口嘉郎，貝沼関志，西川俊昭，原哲也，山蔭道明，浅井隆，ほか40名 本人担当部分： 「38. ペインクリニック」 P221－225を単著 ペインクリニックにおける神経ブロックやインターベンション、薬物治療に関するエビデンスについて最新のレビューを交え解説。
9）痛みの集学的診療：痛みのコアカリキュラム	共著	平成28年10月	日本疼痛学会、痛みの教育コアカリキュラム編集委員会 真興交易（株）医書出版部	慢性痛の診療を行うにあたり、医師や看護師だけでなく、多職種が集まる“集学的な診療チーム”により「生物心理社会モデル」として合理的に考えようとする取り組みが本邦でも始まっている。本書はそれらに携わる医療従事者への“教育”に必要な教科書として作成された。生物心理社会社会モデルの説明を中心に、慢性痛の分類をIASP（世界疼痛学会）の新しい分類に準拠して行い、特に重要と思われる言葉をキーワードとしてまとめた。 編者：西江宏之，北原雅樹，柴田政彦，福井聖，矢吹省司，山下敏彦 共著者：西江宏之，北原雅樹，柴田政彦，福井聖，矢吹省司，山下敏彦，小山なつ，仙波恵美子，高橋直人，笠原諭，井関雅子ほか25人 A4判・347頁 本人担当部分： 「一次性慢性痛」 P256－263を単著 １次性慢性痛の代表例として、線維筋痛症・過敏性腸症候群・慢性骨盤内疼痛について解説。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10）慢性疼痛疾患 診断と治療のABC	共著	平成28年6月	最新医学社	慢性疼痛疾患は大きく「侵害受容性疼痛」と「神経障害性疼痛」に分けられ，前者は末梢組織の障害が正常の知覚神経経路を伝達することで感じる痛み出るのに対し、後者は知覚神経伝達経路が障害されることにより生じる痛みである。痛みの原因が何であるかを診断することはその後の治療計画を立てる上でも非常に重要となる。本書では痛みの診断・評価法，薬物療法・理学療法・手術療法をはじめ、各部位からみた慢性痛の診断と治療を網羅した。さらに、また慢性疼痛に対する海外と本邦との診療体制の差とそれらの実情・課題についてもまとめた。 A4判・237頁 編者：田口敏彦 共著者：柴田政彦，井上雅之，細井昌子，二階堂琢也，松平浩，松原貴子，寒竹司，今村佳樹，福井聖，伊東勝也，ほか17名 本人担当部分： 「我が国における慢性疼痛に対する診療体制の実情と課題」」 P232－237を単著 本邦の慢性痛に対する診療の実情や問題点、集学的アプローチの可能性と課題・対策について解説。
11）慢性疼痛診療ハンドブック	共著	平成28年12月	中外医学社	「痛み」は診療における中核的な症状であり患者のQOLを著しく低下させる。なかでも特に慢性疼痛について様々な見地から解説を行う。痛みに関する科学的情報を発信するNPO法人「いたみ医学研究情報センター」の医療者教育用資料を再編集し、医師、理学・作業療法士、看護師、社会福祉士など、慢性疼痛のケアに悩むすべての方にとって役立つ内容を示した。 A5判・300頁 編者：池本竜則 共著者：柴田政彦，足立友紀，池本竜則，牛田享弘，石川理恵，井関雅子，北原雅樹，住谷昌彦，坂田尚子，西江宏行，内山徹ほか13名 本人担当部分： 「治療に難渋する慢性疼痛患者とは」 P14－26を共著 治療に難渋する慢性痛患者の特徴について、身体的要因・精神心理的要因・環境要因などの観点から解説、さらに代表的な難治性疼痛症例との関係性についても解説している。 共著者：柴田政彦，足立友紀
（学術論文） 1）The Animal Model of Spinal Cord Injury as an Experimental Pain Model. （痛みの実験モデルとしての脊髄損傷動物モデル） （査読付）	共著	平成23年3月	Journal of Biomedicine and Biotechnology2011:1-11.	痛みは脊髄損傷患者にとって重要な問題の１つである。運動・自律神経障害とともに感覚障害も脊髄損傷研究を複雑にしている。さらに様々な要因の痛みもこれに関連する。これまで多くの脊髄損傷動物モデルがその病理学的な一般メカニズムの解明に役立ってきた。しかしながら、その結果は誤解して解釈されやすいものである。よってヒトの脊髄損傷の兆候を完全に理解することは重要である。本レビューでは、動物の脊髄損傷モデルについて概説し、そのそれらの有効利用例について紹介する。 本人担当部分：論文の執筆ととりまとめをおこなった。 共著者: Nakae A, Nakai K, Yano K, Hosokawa K, Shibata M, Mashimo T

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				R, Shibata M, Mashimo T.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2) Brain imaging of mechanically induced muscle versus cutaneous pain. （脳機能画像における痛覚認知機構の解析 ： 筋由来の痛みと皮膚由来の痛みの比較検討） （査読付）	共著	平成23年5月	Neuroscience Research70(1):78-84	筋のみへの機械的刺激に反応する脳活動を機能的磁気共鳴画像法で評価し、皮膚と筋由来の痛みに反応する脳活動部位の比較を行った。皮膚への局所麻酔の有無により、「皮膚と筋への侵害圧刺激」条件、「筋のみへの侵害圧刺激」条件を比較した。皮膚由来の痛みによって第二次体性感覚野が活動しやすいことが示された一方で、筋への侵害圧刺激に特異的な脳領域はなく、代わりに特有の活動パターンがあることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: Uematsu H, Shibata M, Miyauchi S, Mashimo T.
3) Differential efficacy of electric motor cortex stimulation and lesioning of the dorsal root entry zone for continuous vs paroxysmal pain after brachial plexus avulsion （腕神経叢引き抜き損傷後の持続的な痛みと発作的な痛みに対する大脳運動野電気刺激療法・脊髄後根侵入部微小凝固術の異なる効果） （査読付）	共著	平成23年5月	Neurosurgery, vol. 68, issue 5 (2011) pp. 1252-1257	腕神経叢引き抜き損傷後の異なる二つの痛み（持続的痛み・発作的痛み）に対し、大脳運動野電気刺激療法（EMCS）および脊髄後根侵入部微小凝固術（GREZotomy）が与える影響を検証した。15名の対象に対して治療介入を行った結果、DREZotomyの方が両方の痛みをより効果的に改善できることが示唆された。 本人担当部分： 患者の担当と調査結果を麻酔科医の立場から評価し、研究統括をおこなった。 共著者: Ali M, Saitoh Y, Oshino S, Hosomi K, Kishima H, Morris S, Shibata M, Yoshimine T
4) Human brain activity associated with painful mechanical stimulation to muscle and bone （筋・骨組織に対する侵害圧刺激に関連するヒトの脳活動） （査読付）	共著	平成23年8月	Journal of Anesthesia, vol. 25, issue 4 (2011) pp. 523-530	筋組織と骨に対する侵害圧刺激を受けている際のヒトの脳活動を、機能的核磁気共鳴画像（fMRI）を用いて検証した。結果、基底核のいくつかの領域は骨よりも筋に対する刺激の際に強く活動がみられた。今回の結果は、筋の痛みの脳処理過程に被殻・尾状核が関与する可能性を示唆している。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: Maeda L, Ono M, Koyama T, Oshiro Y, Sumitani M, Mashimo T, Shibata M

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5) 催眠による認知的評価と痛みの変化に関する研究 （査読付）	共著	平成23年10月	催眠学研究 53(1)，14-22.	催眠が痛みの耐性と認知的評価に影響を及ぼすかを検証した。被験者14名に痛み刺激として電気刺激を提示し、覚醒条件と催眠条件において痛みの耐性を比較した。結果、催眠条件では覚醒条件に比べて痛みに対する「妨害性」が減少し(Z=-2.94、p<.01)、「コントロール可能性」が増加する(t(13)=-2.71、p<.05)ことが示された。また、条件による「妨害性」の変化と「コントロール可能性」の変化の間に強い負の相関が見られた(r=-.56、p<.05)。催眠による痛みの軽減は痛み刺激の解釈の仕方の変化によって説明されうることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: 安達友紀，宮田敬一，中江文，柴田政彦
6) 脳機能画像における痛覚認知機構の解析：筋由来の痛みと皮膚由来の痛みの比較検討 （査読付）	共著	平成24年5月	Journal of musculoskeletal pain research ： 日本運動器疼痛学会誌vol.3 (1) 52-62	筋のみへの機械的刺激に反応する脳活動を機能的磁気共鳴画像法で評価し、皮膚と筋由来の痛みに反応する脳活動部位の比較を行った。皮膚への局所麻酔の有無により、「皮膚と筋への侵害圧刺激」条件、「筋のみへの侵害圧刺激」条件を比較した。筋への侵害圧刺激に特異的な脳領域はなかったが、特有の活動パターンがあることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者: 植松 弘進，柴田 政彦，大城 宜哲
7) A Case of Hypogonadotropic Hypogonadism Caused by Opioid Treatment for Nonmalignant Chronic Pain. （非悪性慢性疼痛治療のためオピオイド療法によって低ゴナドトロピン性性機能低下をきたした症例） （査読付）	共著	平成24年12月	Case reports in medicine 2012:1-5.	本症例は、交通事故によって生じた慢性的な痛みの治療に対して経皮的フェンタニル治療を施行されたが、その後全般性の疲労と勃起障害を呈した。内分泌系の検査では低性腺刺激性性機能低下が示唆され、またMRI検査でも異常所見は認められなかった。このケースは、オピオイド治療における内分泌機能障害の可能性を考慮する必要性を示唆している。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者: Tabuchi Y, Yasuda T, Kaneto H, Kitamura T, Kozawa J, Otsuki M, Imagawa A, Nakae A, Matsuda Y, Uematsu H, Mashimo T, Shibata M, Shimomura I.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8) 痛みの評価尺度・日本語版 Short-Form McGill Pain Questionnaire 2 (SF-MPQ-2)の作成とその信頼性と妥当性の検討 （査読付）	共著	平成25年1月	Pain Research 28(1), 43-53.	Short-Form McGill Pain Questionnaire 2 （SFMPQ-2）の日本語版を作成した。87名の患者を対象にSFMPQ-2を回答させ、その妥当性評価のために探索的因子分析をおこなった。また信頼性の評価のためにCronbachのα係数と級内相関係数を算出した。結果、内的整合性・検査間信頼性ともに高く、その他機能的評価との相関も高かった。これらの結果は将来の臨床研究でこSFMPQ-2を使用する上での基礎となる。 本人担当部分：データの取得と、結果について麻酔科医の立場から評価をおこなった。 共著者: 圓尾知之, 中江文,前田倫,高橋香代子, Morris Shayn, 横江勝, 松崎大河, 柴田政彦, 齋藤洋一.
9) Painful Diabetic Neuropathy in Japanese Diabetic Patients Is Common but Underrecognized. （糖尿病性神経障害に伴う痛みは一般的だが過小評価されている） （査読付）	共著	平成25年10月	Pain Research and Treatment;2013:1-3.	痛みを伴う糖尿病性神経障害（PDN）の日本における疫学およびQOL・心理面への影響を調査した。298名の糖尿病患者を対象とした。結果、22.1%にPDNがみられ、QOLと精神状態に負の影響をもつことがわかった。その一方で、医師は症状のある者の36.4%しかPDNに気付いていなかった。本研究の結果は、日常の診療で医師がPDNに気付き、その進行を防ぐことの重要性を示している。 本人担当部分：結果に対して麻酔科医の立場から評価をおこない、研究総括をおこなった。 共著者: Tsuji M, Yasuda T, Kaneto H, Matsuoka T, Hirose T, Kawamori R, Iseki M, Shimomura I, Shibata M.
10) Validation of the Japanese Version of the Pain Self-Efficacy Questionnaire in Japanese Patients with Chronic Pain. （慢性痛患者に対する日本語版Pain Self Efficacy Questionnarie <PSEQ>の妥当性の検証） （査読付）	共著	平成26年8月	Pain Med;15(8):1405-1417	PSEQ日本語版の開発と、その心理物理学的特性の評価をおこなった。横断研究デザインで、複数の病院およびクリニックの患者に対しPSEQとその他痛みの心理学的評価指標を取得し、それらの関係性を検証した。結果、PSEQは充分な信頼性と妥当性を示した。階層的重回帰分析によって、PSEQで取得された自己効力感は本研究で取得された指標の変量で充分な説明が可能であることが示された。また、PSEQは社会的な活動と最も強く関連していた。 本人担当部分：患者担当とデータ測定、麻酔科医の立場から結果の評価をおこなった。 共著者: Adachi T, Nakae A, Maruo T, Shi K, Shibata M, Maeda L, Saitoh Y, Sasaki J.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11) Age-related and sex-related changes in perfusion index in response to noxious electrical stimulation in healthy subjects. （侵害電気刺激に対する灌流指標の変化に対する年齢および性別の影響） （査読付）	共著	平成26年12月	Journal of Pain Research2014;7:91.	痛みの客観的指標の開発にむけ、痛み刺激の灌流指標の変化に年齢・性別がもたらす影響を検証した。70名のボランティアに対して侵害電気刺激を与え、痛みの強度が耐性閾値に達するまで与えた。刺激前後の灌流指標と脈拍数の差を年齢・性別で比較した。結果、灌流指標は高齢の女性で刺激前後の変化が小さかった。灌流指標は高齢女性以外では痛みの客観的指標として使用できる可能性が示唆された。 本人担当部分：論文の執筆ととりまとめをおこなった。 共著者: Nakae T, Nishimura T, Shibata M, Mashimo T, Fujino Y.
12) Pain-Related Brain Activity Evoked by Active and Dynamic Arm Movement: Delayed-Onset Muscle Soreness as a Promising Model for Studying Movement-Related Pain in Humans. （動的運動によって誘発される痛みの脳活動：ヒトの遅発性筋痛モデルを用いて） （査読付）	共著	平成27年8月	Pain Medicine;16(8):1528-1539.	遅発性筋痛が「運動によって誘発される痛み」の適切なモデルとなるかを検証するため、遅発性筋痛の発生する状況下で動的な運動をおこなわせた際の脳活動を明らかにする。12名の健常成人に対して、肘のレジスタンストレーニングをおこなわせて遅発性筋痛を誘発する。運動後2日目（遅発性筋痛あり）条件と30日目（遅発性筋痛なし）条件とで機能的核磁気共鳴画像にて脳活動を比較した。結果、筋痛あり条件で対側の一次運動野、頭頂弁蓋部、両側の補足運動野により強い活動がみられた。また、Pain Matrixと呼ばれる痛み知覚時の代表的な脳領域に関しては、両条件間に差を認めなかった。この結果は、遅発性筋痛モデルがヒトの運動誘発痛研究において有効な実験モデルであることを示唆している。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者: Matsuda Y, Kan S, Uematsu H, Shibata M, Fujino Y.
13) 痛みの自己効力感とその他の認知・感情的要因が慢性痛患者の健康関連Quality of Lifeと生活障害度に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成27年12月	慢性疼痛 1(34), 1.	本研究では認知・感情的要因が健康関連QOLや生活障害といったアウトカムへ及ぼす影響を検討した。大学附属病院集学的診療外来に受診した初診患者60名に対し、健康関連QOL、生活障害度、痛みの自己効力感、破局的思考、不安・抑うつ、直近24時間の痛みの平均的な強さを測定する6つの尺度への回答を求めた。結果から、痛みの自己効力感は健康関連QOLと正の相関を、生活障害度と負の相関を示すこと、および痛みの自己効力感が健康関連QOLに対して正の影響性を有することが明らかになった。これらのことから、慢性痛の診療において適応的な認知・感情的要因を高めていくことの重要性が示唆された。 本人担当部分：研究の計画、データの取得、論文のとりまとめと研究総括をおこなった。 共著者: 安達友紀，山田恵子，西上智彦，佐々木淳，柴田政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14) Go-sha-jinki-Gan (GJG) ameliorates allodynia in chronic constriction injury model mice via suppression of TNF-α expression in the spinal cord. （牛車腎気丸がマウスの慢性絞扼性アロディニアモデルの症状を、脊髄のTNF-α発現を抑制して改善させる） （査読付）	共著	平成28年1月	Molecular Pain 12:1-16	牛車腎気丸は日本の伝統的なハーブ療法で、異常痛や麻痺の改善に用いられてきたが、その作用メカニズムは不明である。本研究では、慢性絞扼性アロディニアモデルマウスを用いて牛車腎気丸のもつ鎮痛効果の分子メカニズムを明らかにする。結果、牛車腎気丸によってマウスの痛覚過敏は初期の段階から有意に低下した。さらに、牛車腎気丸は脊髄中のIba1とTNFーαの発現を抑制していることがわかった。牛車腎気丸は、神経炎症によって誘発される痛みの治癒に有効であることが示唆された。 本人担当部分：結果について麻酔科医の立場から評価をおこない、論文のとりまとめをおこなった。 共著者: Nakanishi M, Nakae A, Kishida Y, Baba K, Sakashita N, Shibata M, Yoshikawa H, Hagihara K.
15) 第三者行為をきっかけとした神経障害性疼痛の治療反応性 （査読付）	共著	平成28年2月	ペインクリニック 372(2), 221-228.	他害的な外傷をきっかけとする慢性疼痛には複雑な心理が関与し、臨床において治療抵抗性であることを経験する。第三者行為をきっかけとする神経障害性疼痛10症例と、第三者行為がきっかけでない神経障害性疼痛11症例を対象に、治療反応性を、複数の評価尺度を用いて多面的に比較検討した。初診時、および3ヵ月後の再診時に実施した自記式質問紙の集計と、診療録の内容を後ろ向きに収集し、統計解析を行った。その結果、初診時の尺度スコア平均は2群間で有意な差を認めなかった。治療反応性については、第三者行為をきっかけとする神経障害性疼痛は、簡易痛みの質問票、不安抑うつ尺度、痛み破局化スケールの拡大視、EuroQoLのスコア改善が乏しかった。 本人担当部分: 研究の計画、データの取得、論文のとりまとめと研究総括をおこなった。 共著者: 山田恵子, 今野弘規, 磯博康, 柴田政彦
16) resting-state fMRIによる上肢CRPS患者における感覚・運動ネットワークの検討 （査読付）	共著	平成28年5月	日本運動器疼痛学会誌 vol.8(2)203-208	本研究では、複合性局所疼痛症候群(CRPS)患者における運動機能障害の中枢機序の解明を目的として、上肢CRPS患者の感覚・運動ネットワークをresting-state fMRIにより検討した。健康成人と比べ、CRPS患者では感覚・運動関連部位間の機能的結合に変化が生じていた。本研究の結果は、感覚・運動ネットワークの機能異常がCRPS患者における運動機能障害の発生に関与している可能性を示唆するものである。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: 寒重之, 大迫正一, 植松弘進, 渡邉嘉之, 田中壽, 柴田政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17) Independent Risk Factors for Positive and Negative Symptoms in Patients with Diabetic Polyneuropathy. （糖尿病性多発神経障害の陽性および陰性症状に対する独立危険因子） （査読付）	共著	平成28年6月	Journal of Pain and Palliative Care Pharmacotherapy;30(3):178-183.	糖尿病性神経障害（DPN）患者の麻痺・知覚障害の危険因子を分析した。298名の糖尿病患者を対象として、ロジスティック回帰モデルを用いて独立因子を決定した。さらに統計モデルを痛みグループ、知覚障害グループの二群に対して適用した。DPNの有無には抑うつ症状、アキレス腱反射の異常、インシュリン治療の有無などが関連していた。また痛み群と知覚障害群の差には女性であること、アキレス腱反射の異常、インシュリン治療の有無が関連していた。 本人担当部分：結果の解析と論文のとりまとめをおこなった。 共著者: Inoue R, Sumitani M, Yasuda T, Tsuji M, Nakamura M, Shimomura I, Shibata M, Yamada Y.
18) 言語的妥当性を担保した日本語版 Injustice Experience Questionnaire: IEQの作成 （査読付）	共著	平成28年8月	ペインクリニック vol.37(8)1053-1057	他害的な外傷をきっかけとする慢性痛患者は、自分に落ち度がないのに不当に慢性痛を被っているという不条理・不公平感に囚われているため、医療者が治療に難渋することを経験する。慢性痛患者が抱えるこのような不条理・不公平な扱いを受けているという感情を欧米では「perceived injustice」と表現しており、Injustice Experience Questionnaireという尺度で計量心理学的に定量化している。われわれは、尺度の他言語翻訳を行う際の推奨ガイドラインに則って日本語版Injustice Experience Questionnaireを作成した。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者: 山田 恵子, 安達 友紀, 西上 智彦, 磯 博康, 柴田 政彦
19) ペインクリニック外来患者を対象とした薬剤師外来の現状 （査読付）	共著	平成28年8月	医療薬学 vol.42(8)558-561	ペインクリニック外来患者を対象とした薬剤師外来の現状について検討した。1年間に薬剤師外来で対応した92例、実施回数347回を対象とした。現在、1日あたり約8～10例程度の患者の面談を行っている。新規患者の初回面談時に、お薬手帳を用いて服用薬剤数を調査し、平均使用薬剤品目数は7.3±4.4種類であった。薬剤師の介入内容は、鎮痛薬の効果・副作用の確認、その他の併用薬の副作用の確認、薬剤の減量(他科のものも含む)、排便や睡眠状況など副作用や生活習慣に関するアドバイス、精神的苦痛への対応など多岐にわたった。 本人担当部分：結果を麻酔科医の立場から評価し、研究総括をおこなった。 共著者: 中川左理, 岡本禎晃, 柴田政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
20) Socioeconomic value of intervention for chronic pain. （慢性痛介入の社会経済学的価値について） （査読付）	共著	平成28年8月	Journal of Anesthesia vol.30 Issue4 2016;30(4):553-561.	本研究の目的は、痛みに対する医療の費用対効果を評価することである。91名の患者を薬物治療、薬物＋ブロック治療、その他教育・リハビリテーション治療の3カテゴリに分類し、EQ-5D得点からQALY 質調整生存年を算出した。結果、見積もられた年間治療コストとQALYに基づく費用対効果の計算から、痛みに対する医療には充分な社会経済学的価値があることが示された。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆をおこなった。 共著者: Takura T, Shibata M, Inoue S, Matsuda Y, Uematsu H, Yamada K, Ushida T.
21) Arthropathy-related pain in a patient with congenital impairment of pain sensation due to hereditary sensory and autonomic neuropathy type II with a rare mutation in the WNK1/HSN2 gene: a case report. （WNK1/HSN2遺伝子の変異を伴う hereditary sensory and autonomic neuropathy type II による先天性感覚障害をもつ患者の関節痛：ケースレポート） （査読付）	共著	平成28年10月	BMC Neurology16(1):201	Hereditary sensory and autonomic neuropathy （HSAN） type IIにより先天的な感覚障害を呈した症例を経験した。本症例は手袋・靴下型の感覚脱失を呈していたが、月経や内蔵の痛みは感じることができていたが、骨髄炎による中足骨切除を施行された。腓骨神経は生研上無髄・有髄神経共に著しい損失がみられていた。さらに多数の関節で激しい痛みを訴えていたが、アセトアミノフェンによって痛みが軽減されQOLの改善に至った。本件は日本で2件目のHSAN typeⅡ症例の報告であり、アセトアミノフェンが先天性の痛覚障害を有する患者の痛みのコントロールに有効であった。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: Yamada K, Yuan J, Mano T, Takashima H, Shibata M.
22) Injustice Experience Questionnaire, Japanese Version: Cross-Cultural Factor-Structure Comparison and Demographics Associated with Perceived Injustice. （Injustice Experience Questionnaire：IEQ日本語版の作成: 「不公平感」に関連する異文化間の因子構造の比較と人口統計） （査読付）	共著	平成28年10月	Plos One;11(8)e0160567	IEQは受傷に関連する不公平感を評価するバッテリーである。本研究ではIEQの日本語版作成のため、その因子構造と妥当性、信頼性、さらにはIEQスコアを予測する要因について検証した。71名の患者を対象にとしてIEQと痛みの強さ・心理的要因の評価、基本的情報の調査をおこなった。因子分析の結果、日本語版は原典と異なり3因子（Severity / irreparability, Blame / unfairness, Perceived lack of empathy ）構造においてデータへの適合が高く、信頼性も高かった。また、「1年以上の痛みの持続」と「受傷の原因が多者にある場合」の2つが、IEQスコアへの寄与率が高かった。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析および研究総括をおこなった。 共著者: Yamada K, Adachi T, Mibu A, Nishigami T, Motoyama Y, Uematsu H, Matsuda Y, Sato H, Hayashi K, Cui R, Takao Y, Shibata M, Iso H.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
23) The Effect of Guidance regarding Home Exercise and ADL on Adolescent Females Suffering from Adverse Effects after HPV Vaccination in Japanese Multidisciplinary Pain Centers. （子宮頸がんワクチン（HPV）接種後の副反応を呈した思春期女性に対する運動とADL指導の効果；学際的痛みセンターでの取り組み） （査読付）	共著	平成28年10月	Pain Research and Management;2016:1-6.	HPV接種後の副反応を呈した若年女性は稀ながらも230名を超えている。本研究の目的は、副反応を呈した若年女性に対する認知行動療法的介入の効果を調査することである。副反応を呈した145名に対し、部分的に認知行動療法アプローチに基づいて運動と日常生活の指導をおこない、それらを後方視的に調査した。指標は痛みの強さのNRSとHADS、PCSを用いた。結果、治療プログラムを実施した80名のうち、10名は著しい改善、43名は若干の改善を示した。認知行動療法的アプローチは、HPV接種後副反応の症状減弱に有効であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文のとりまとめをおこなった。 共著者: Ushida T, Shibata M, Kitahara M, Yabuki S, Sumitani M, Murakami T, Iseki M, Hosoi M, Shiokawa H, Tetsunaga T, Nishie H, Fukui S, Kawasaki M, Inoue S, Nishihara M, Aono S, Ikemoto T, Kawai T, Arai Y-C.
24) Resting state fMRI を用いた各脳部位の相互作用の解析 （査読付）	共著	平成28年10月	バイオメディカル・ファジィ・システム学会年次大会講演論文集vol.29 161-164	Resting state fMRI(rs-fMRI)画像を用いて、各脳部相互作用を解析する新しい方法を提案した。約5分間のecho planer imaging(EPI)連続測定を行い、脳機能画像を取得した。3名を対象として脳機能画像を取得し、三つの推定パラメータを基に各脳部位の関連を示す樹形図を形成し、関係性の判別が可能となった。また、階層的クラスタリングの解析で、脳部位番号26(被殻左側)と71(中央帯状回右側)の関係性が近いことを示した。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者: 丸居 航, Alam Saadia Binte, 寒 重之, 柴田 政彦, Koh Min-Sung, 小橋 昌司
25) 慢性疼痛に対する漢方エキス剤の効果を、国際的な尺度を用いて多面的に評価し得た症例 （査読付）	共著	平成28年10月	痛みと漢方 26, 33-39	本症例は交通事故により頸椎捻挫との診断で受傷3年を経過しても痛みが改善せず、当院を受診した。降雨前に痛みが強くなる訴えを水毒と解釈し、五苓散(TJ-17)7.5g/日を投与したところ著効した。特に症状が著しく軽減した初診から3ヵ月間において、痛みの強さ7/10→5/10、Pain Disability Scale 21/60→7/60など著しい改善がみられた。国際的に妥当性・信頼性の担保された尺度を用い、医療用漢方エキス剤の効果を客観的に評価できる可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆と研究総括をおこなった。 共著者: 山田恵子, 蔭山充, 柴田政彦.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
26) 慢性痛患者への入院集学的リハの取り組み （査読付）	共著	平成28年10月	Journal of Musculoskeletal Pain Research 8巻3号 Page S125	大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでは、院内で実施困難な慢性痛に対する集学的入院治療を近隣の医療機関と連携協力して実施可能とした。就業や日常生活に支障をきたしている慢性痛患者を治療対象とし、運動療法、認知行動療法、集学的リハビリテーションの三要素を含んだ入院プログラムを作成した。結果、痛みの評価が改善し、就労した症例を経験した。また、EQ-5Dを用いて、このプログラムの費用対効果も検討した。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆研究総括をおこなった。 共著者： 高橋紀代，安達友紀，丸山 伸廣，西上智彦，柴田 政彦
27) Fear-avoidance beliefs are independently associated with the prevalence of chronic pain in Japanese workers. （恐怖回避思考は日本における労働者の慢性痛の有無と独立して関連している） （査読付）	共著	平成29年4月	Journal of Anesthesia;31(2):255-262.	恐怖回避思考と慢性痛の関係は、アジア圏では明らかにされていない。本研究の目的は、日本のホワイトカラー層における恐怖回避思考と慢性痛の関係を明らかにすることである。433名の労働者にアンケート調査を実施し、TSK、仕事関連心理因子、うつ傾向等を調査した。結果、調整済みオッズ比でも慢性痛患者は高いTSKスコアを有することがわかった。本研究の結果は、日本のホワイトカラー層においてTSKスコアと慢性痛の有無に密接な関連があることを示唆している。 本人担当部分：データ測定、結果の評価を麻酔科医の立場からおこなった。 共著者: Wakaizumi K, Yamada K, Oka H, Kosugi S, Morisaki H, Matsudaira K, Ushida T, Shibata M, Kitahara M, Yabuki S, Sumitani M, Murakami T, Iseki M, Hosoi M, Shiokawa H, Tetsunaga T, Nishie H, Fukui S, Kawasaki M, Inoue S, Nishihara M, Aono S, Ikemoto T, Kawai T, Arai Y-C.
28) 非がん性慢性疼痛のチーム医療 5.大阪大学医学部附属病院の痛み診療 （査読付）	共著	平成29年8月	ペインクリニックVol.38 No.8　P1063-1068	大阪大学疼痛医療センターで実施している集学的診療外来、外来・入院リハビリテーション、認知行動療法を紹介する。集学的診療外来やリハビリテーション、認知行動療法について、実施内容を示し、疼痛医療センターの取り組みを支えている研究や教育プログラムについて述べた。疼痛医療センターでは、諸外国で行われている集学的な慢性痛治療が、本邦でも広まることを期待しており、普及に向けた活動に取り組んでいる。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者: 榎本聖香，安達友紀，井上大輔，細越寛樹，西上智彦，高橋紀代，柴田政彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
29) 中枢機能障害性疼痛患者における脳部位間の機能的結合と背景因子との関連：安静時fMRIによる検討 (査読付)	共著	平成29年10月	PAIN RESEARCH vol.32(1)52-59	中枢機能障害性疼痛(FSS)患者を対象に、resting-state functional MRI(rs-fMRI)を用いて脳部位間の機能的結合と背景因子との関連について検討した。痛みの強さと左扁桃体-左島皮質の機能的結合の間に有意な正の相関、痛みの期間と左右前帯状回吻側部・左島皮質前部の機能的結合の間で有意な負の相関がみられた。またHADSの不安スコアは右扁桃体内の機能的結合と有意な負の相関、PCSスコアは右扁桃体-右海馬傍回・前帯状回吻側部-右視床の機能的結合と有意な正の相関を認めた。FSS患者に対するrs-fMRIによる機能的結合の評価は、慢性疼痛の病態解明に有用であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、結果の解析、論文の執筆および研究総括をおこなった。 共著者:寒重之，大迫正一，植松弘進，渡邉嘉之，田中壽，柴田政彦
30) 就労環境における慢性痛の実態調査～仕事に影響する慢性痛のリスク因子の検討：QWLICスタディ (査読付)	共著	平成29年12月	産業衛生学会誌 vol.59 (5) 125-134	就労環境における慢性痛の実態，及び慢性痛が仕事に影響する重症例でのリスク因子を明らかにすることを目的とした。計3社18施設の被雇用者を対象に，「からだの痛みに関する調査研究アンケート」を施行した。対象者の生活習慣や心理社会的因子と慢性痛有症との関連について，性年齢調整ロジスティック回帰分析を用いて分析した。結果、仕事に影響する慢性痛を有することは，肥満，喫煙習慣，不眠症，ワーカホリック度の高さ，上司・同僚からの支援の乏しさ，仕事の満足度の低さ，仕事の要求度の高さ，仕事のコントロール度の低さ，心理的ストレスの高さ，抑うつ状態と有意に関連があった。就労環境における慢性痛とそのリスク因子の実態が一部明らかとなった。 本人担当部分：データ測定、論文のとりまとめをおこなった。 共著者： 山田恵子，若泉謙太，深井恭佑，磯博康，祖父江友孝，柴田政彦，松平浩
31) Classification and characterisation of brain network changes in chronic back pain: A multicenter study.	共著	平成30年	Wellcome Open Res 3:19	共著者：Mano H, Kotecha G, Leibnitz K, Matsubara T, Nakae A, Shenker N, Shibata M, Voon V, Yoshida W, Lee M, Yanagida T, Kawato M, Rosa MJ, Seymour B

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
32)The relationships between pain catastrophizing subcomponents and multiple pain-related outcomes in Japanese outpatients with chronic pain: a cross-sectional study.	共著	平成30年5月	Pain Pract.	共著者：Adachi T, Nakae A, Maruo T, Shi K, Maeda L, Saitoh Y, Shibata M, Sasaki J
33)Reliability and validity of the Athens Insomnia Scale in chronic pain patients.	共著	平成30年	J Pain Res 11:793-801	共著者：Enomoto K, Adachi T, Yamada K, Inoue D, Nakanishi M, Nishigami T, Shibata M
34)Verbal Instruction Can Induce Extinction of Fear of Movement-Related Pain.	共著	平成30年	j.jpain.19:1063-1073	共著者：Maeda Y, Kan S, Fujino Y, Shibata M
35)Evaluating the psychometric properties of two-item and four-item short forms of the Japanese Pain Self-Efficacy Questionnaire: a cross-sectional study.	共著	平成30年		共著者：Adachi T, Enomoto K, Yamada K, Inoue D, Nakanishi M, Takahashi N, Nishigami T, Shibata M
36)Frequency of mental disorders among chronic pain patients with or without fibromyalgia in Japan.	共著	平成30年	Neuropsychopharmacol Rep 38:167-174	共著者：Miki K, Nakae A, Shi K, Yasuda Y, Yamamori H, Fujimoto M, Ikeda M, Shibata M, Yukioka M, Hashimoto R
37)Validation of the Japanese version of the life satisfaction checklist (LiSat-11) in patients with low back pain: A cross-sectional study.	共著	平成30年	J Orthop Sci 23:895-901	共著者：Mibu A, Nishigami T, Tanaka K,

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				Manfuku M, Yono S, Kajiwara S, Tanabe A, Shibata M
38)慢性疼痛領域における治療の費用対効果と社会経済的な負担	共著	平成30年	日本運動器疼痛学会誌 10(1)：88-96	田倉智之1)，柴田政彦2)，牛田享宏3) 1)東京大学大学院医学系研究科 医療経済政策学，2)奈良学園大学 保健医療学部，3)愛知医科大学 学際的痛みセンター
39)慢性疼痛に対する認知行動療法とリハビリテーションの併用効果 ： いきいきリハビリノートの治療実績を含めて	共著	平成30年	日本運動器疼痛学会誌 10(2)：205-216	大鶴直史1,2)，木村慎二2)，細井昌子3)，松原貴子4)，柴田政彦5)，水野泰行6)，西原真理7)，村上孝徳8)，大西秀明1) 1)新潟医療福祉大学 運動機能医科学研究所，2)新潟大学医歯学総合病院 リハビリテーション科，3)九州大学病院 心療内科，4)神戸学院大学 総合リハビリテーション学部 理学療法学科，5)大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，6)関西医科大学 心療内科学講座，7)愛知医科大学 医学部 学際的痛みセンター，8)札幌医科大学 リハビリテーション医学講座
40)Factors influencing outcomes among patients with whiplash-associated disorder: A population-based study in Japan.	共著	令和元年	PLoS One 14:e0216857	共著者：Hayashi K, Miki K, Ikemoto T, Ushida T, Shibata M
41)Japanese cross-cultural validation study of the Pain Stage of Change Questionnaire.	共著	令和元年	Pain Rep 4:e711	共著者：Adachi T, Sunohara M, Enomoto K, Sasaki K, Sakaue G, Fujita Y, Mizuno Y, Okamoto Y, Miki K, Yukioka M, Nitta K, Iwashita N, Kitagawa H, Shibata M, Sasaki J, Jensen MP, Fukui S
42)Association of sleep sufficiency and duration with chronic pain prevalence: A population-based cross-sectional study.	共著	令和元年	J Psychosom Res 120:74-80	共著者：Yamada K, Kubota Y, Shimizu Y, Shibata M, Morotomi N

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
43)Towards prognostic functional brain biomarkers for cervical myelopathy: A resting-state fMRI study.	共著	令和元年	Sci Rep 9:10456	共著者：Takenaka S, Kan S, Seymour B, Makino T, Sakai Y, Kushioka J, Tanaka H, Watanabe Y, Shibata M, Yoshikawa H, Kaito T
44)Smoking is associated with greater pain intensity and pain-related occupational disability in Japanese workers.	共著	令和元年	J Anesth 33:523-530	共著者：Yamada K, Wakaizumi K, Kubota Y, Matsudaira K, Shibata M
45)Evaluating the psychometric properties of two-item and four-item short forms of the Japanese Pain Self-Efficacy Questionnaire: a cross-sectional study.	共著	令和元年	J Anesth 33:58-66	共著者：Adachi T, Enomoto K, Yamada K, Inoue D, Nakanishi M, Takahashi N, Nishigami T, Shibata M
46)The Relationships Between Pain-Catastrophizing Subcomponents and Multiple Pain-Related Outcomes in Japanese Outpatients with Chronic Pain: A Cross-Sectional Study.	共著	令和元年	Pain Pract 19:27-36	共著：Adachi T, Nakae A, Maruo T, Shi K, Maeda L, Saitoh Y, Shibata M, Sasaki J
47)Pilot study of a basic individualized cognitive behavioral therapy program for chronic pain in Japan.	共著	令和2年	Biopsychosoc Med 14:6	共著者：Hosogoshi H, Iwasa K, Fukumori T, Takagishi Y, Takebayashi Y, Adachi T, Oe Y, Tairako Y, Takao Y, Nishie H, Kanie A, Kitahara M, Enomoto K, Ishii H, Shinmei I, Horikoshi M, Shibata M
48)Associations between the injustice experience questionnaire and treatment term in patients with acute Whiplash-associated disorder in Japan	共著	令和2年	PLoS One 15:e0231077	共著者：Hayashi K, Miki K, Ikemoto T, Ushida T, Shibata M

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
49)Resting-state Amplitude of Low-frequency Fluctuation is a Potentially Useful Prognostic Functional Biomarker in Cervical Myelopathy.	共著	令和2年	Clin Orthop Relat Res 478:1667-1680	共著者：Takenaka S, Kan S, Seymour B, Makino T, Sakai Y, Kushioka J, Tanaka H, Watanabe Y, Shibata M, Yoshikawa H, Kaito T
（その他） 「総説」 1) Evaluation of patients with chronic pain （慢性痛患者の評価）	共著	平成20年11月	Masui.57(11):1337-1342.	慢性痛患者の痛み行動は多くの要因によって変化する。それらの要因を評価することは痛みのマネジメント上重要なことである。多くの有効なアプローチやこれらの示唆すること、患者の評価と治療の選定など慢性痛患者のマネジメントに欠くことができない事項について解説した。 本人担当部分：原稿の執筆をおこなった。 共著者: Shibata M, Inoue T, Sumitani M, Matsumura Y, Mashimo T.
2) 複合性局所疼痛症候群の診断と治療	共著	平成23年4月	日本医事新報4539：72-78	複合性局所疼痛症候群の診断、治療に関する歴史的変遷を解説、近年用いられている判定指標や治療手段について実例を交えながら解説した。 本人担当部分：原稿の執筆および全体の構成に携わった。 共著者： 植松弘進, 柴田政彦
3) 慢性痛の問題点と今後の取り組み	共著	平成26年12月	理学療法学vol.41(8) 699-705	疫学、認知行動療法、条件付け、運動療法、脳機能画像研究、バイオフィードバックという幅広いテーマから、リハビリテーションにおける慢性痛の位置づけを詳細に解説した。 本人担当部分：原稿の執筆および全体の構成に携わった。 共同著者：柴田政彦, 山田恵子, 前田吉樹, 安達友紀, 西上智彦, 寒重之
4) 医学生教育の観点から：医学生への痛みの教育	単著	平成28年8月	ペインクリニックvol.37 No.8 P991-998	痛みは患者が訴える最も頻度の高い症状であり、医療者が患者の訴える痛みに対して適切に対応できるためには、医療者教育の早期に適切な教育を受けることが重要である。国際的にもこの問題が指摘されており、改善への取り組みが始まっている。わが国でも医学部において痛みの教育は系統的に実施されていないが、今後の取り組みによって改善していくことが望ましい。
5) Functional Pain Disorder 3. 複合性局所疼痛症候群	単著	平成28年8月	最新医学71巻8号　P116-119	四肢の外傷後に痛みが遷延し,浮腫,皮膚温の変化,発汗や発毛の異常,関節可動域制限や拘縮を伴う場合,複合性局所疼痛症候群と呼ばれる.古くから一部の患者に発症するこの病態の機序は謎に包まれていたが,近年,脳機能の変化を伴うことが明らかになってきており,末梢の炎症とともに本症候群の原因や治療と関連する重要な現象として注目されている

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6) 疼痛および鎮痛の神経メカニズム	共著	平成28年8月	The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine第53巻　8号　P591-595	痛覚の伝達経路には末梢から中枢へ向かう上行路だけでなく，下行性に痛みを抑制あるいは増強させる下行路もある．本稿では上行路（皮膚，脊髄，体性感覚野および扁桃体）と下行路（state dependent control）に分けて概説し，さらに，それぞれの経路に働きかけるリハビリテーションの臨床応用について言及する． 本人担当部分：原稿の執筆および全体の構成に携わった。 共著者： 西上智彦，柴田 政彦
7) オピオイド治療と内分泌機能異常	共著	平成28年11月	Locomotive Pain Frontier vol.5 No.2　P44-46	オピオイドの長期使用により性腺機能異常をはじめとする内分泌機能障害を併発することがある。疲労感、気分障害、体重減少など、オピオイドの適応となる慢性痛の随伴症状との鑑別が困難なため注意が必要である。特に強オピオイドを長期間若い男性に投与する場合には、投与前に内分泌機能を確認するなど、細心の注意が求められる。内分泌機能の評価の際には、内分泌専門医にコンサルトすることが望ましい。 本人担当部分：原稿執筆をおこなった。 共著者： 柴田政彦，田渕優希子，安田哲行
8) “Katakori”：a Pain Syndrome Specific to the Japanese（日本に特異的な症状"肩こり"）	共著	平成28年12月	Current Pain and Headache Reports 20(12)64-65	日本特有の痛みの訴えである「肩こり」について、その疫学と機序、評価と治療について概説した。 本人担当部分：原稿執筆をおこなった 共著者：Masaki Kitahara，Masahiko Shibata
9) さまざまな慢性痛患者の安静時fMRI研究	共著	平成28年12月	Pain Research; vol.31 No.4 P189-196	fMRIは核磁気共鳴現象を利用して脳活動を画像化する非侵襲脳活動計測法の一つで、痛みの研究に応用されてきた。様々な慢性痛患者の脳活動を健常人と比較することによってその脳内機序を探る方法として、近年安静時fMRIが注目されている。線維筋痛症、慢性腰痛、片頭痛、その他の疾患を対象とした安静時fMRIの論文を取り上げ、主な知見をまとめた。 本人担当部分：原稿執筆、資料の提供、全体の構成の総括をおこなった 共著者： 柴田政彦，寒重之，大迫正一，三木健司，柳澤琢史，助永憲比古，恒遠剛示，新田一仁，岩下成人，福井聖，黒崎弘倫，中野直樹，若泉謙太，上嶋江利，本山泰士，高雄由美子，溝渕

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				知司
10）痛みは脳をどう変えるか？-Neuroimagingからみえてきたもの	共著	平成29年3月	週刊　医学のあゆみ　別刷 vol.260 No.2 P155-160	従来の痛みの研究には大きく分けて2つの方法があった。動物を対象とした痛覚の研究と、ヒトの痛みの訴えや感情・行動を対象とした痛みの研究である。これら2つの研究の橋渡しを期待できるのが脳機能画像研究である。患者が"痛み"を医療者に伝え、医療者が患者の痛みを察知して何らかの役割を果たそうとする。ありふれた状況であるが、この状況には、無数のメカニズム、因子が寄与している。因果関係はともかく、これらの複雑な仕組みの一端が脳に刻まれていることが推察され、その情報をもとに治療に応用しようという試みがはじまっている。 本人担当部分：全体の構成の総括をおこなった 共著者： 寒重之，柴田政彦
11)運動器慢性疼痛に対する認知行動療法理論に基づいた運動促進法	共著	平成30年	The Japanese Journal of Rehabilitation Medicine 55(3): 206-214	木村慎二*1，細井昌子*2，松原貴子*3，柴田政彦*4，水野泰行*5，西原真理*6，村上孝徳*7，大鶴直史*8 *1新潟大学医歯学総合病院リハビリテーション科，*2九州大学心療内科，*3日本福祉大学健康科学部リハビリテーション学科，*4大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座，*5関西医科大学心療内科学講座，*6愛知医科大学医学部学際的痛みセンター，*7札幌医科大学リハビリテーション医学講座，*8新潟医療福祉大学医療技術学部理学療法学科
「特集」 1）慢性痛の心理アセスメント 私の診療現場から 「施す医療」からの転換私の診療に影響を与えた慢性痛の3症例	単著	平成26年12月	ペインクリニック35巻2号 Page235-240	自分自身の診療経験から、患者に対して『施す医療』から『支える医療』へ転換したいきさつについて解説した。
2）座談会 本邦における集学的痛みセンターの必要性について	共著	平成27年3月	Practice of pain management 6巻1号 Page4-11	認知行動療法など、心理的側面から意見交換をおこなった。 北原雅樹，柴田政彦，牛田享宏
3）一歩進んだ痛みの治療	共著	平成27年7月	臨床雑誌『整形外科』 66巻7号 Page671-675	整形外科疾患に伴う、痛みの薬物療法について解説した。 柴田政彦，松田陽一，植松弘進，安達友紀，西上智彦
4）我が国の痛みの集学（学際）的アプローチはどうあるべきか？当院における慢性痛に対する集学的診療	共著	平成27年10月	Anet 19巻2号 Page6-10	大阪大学医学部附属病院における集学的診療の内容を各医療者毎の役割を明確にしながら解説した。 柴田政彦，安達友紀，西上智彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5) 痛みのClinical Neuroscience(9)座談会 本邦における慢性痛対策 ： 見えてきた課題	共著	平成28年3月	最新医学 71巻3号 Page426-439	本邦における慢性痛の診療体制の構築について現状と今後の取り組みについて意見交換した。 田口敏彦，柴田政彦，北原雅樹
6) コラム・ペインコンソーシアムの設立の経緯と取り組み	単著	平成28年6月	Journal of Musculoskeletal Pain Research Vol.8 No.1 P5-6	痛み関連学会の情報共有の目的で、痛み関連の7学会が参加できるペインコンソーシアムという組織を設立し、運営してきた。
7)【慢性腰痛の診断と治療update】(Part1)基礎　神経障害性疼痛その機序と慢性腰痛との関連	共著	平成28年10月	Bone Joint Nerve 6巻4号 Page679-685	神経障害性疼痛と、慢性腰痛の関連について解説した 牧野 孝洋，三木 健司，柴田 政彦
8) 特集 慢性腰痛の診断と治療update 座談会	共著	平成28年11月	Bone Joint Nerve 6巻4号 Page811-824	整形外科領域の神経障害性疼痛についてその機序と慢性腰痛との関連を解説した 慢性腰痛の治療の一つとして、生物・社会・心理モデルに基づいたリハビリテーションや、心理的アプローチについて解説した。 紺野愼一，中村雅也，牛田享宏，柴田政彦
9) 特集「ＣＲＰＳの最新事情」によせて	単著	平成29年4月	ペインクリニックvol.38 no.4 P437-438	CRPSに関連する最新の知見について解説した。
10) 痛みの責任は誰にある?	共著	平成29年4月	日本臨床麻酔学会誌 37(7): 838-843	
11) 【神経障害】 高齢者の脊椎由来の慢性疼痛へのアプローチと薬物療法	共著	平成31年	Pharma Medica 37(1): 27-30	
12) 慢性疼痛の最新治療~集学的診療~	共著	平成31年	難病と在宅ケア 25(5): 34-38	
13) 痛みの病態・機序	単著	令和2年4月	日本医師会雑誌 (0021-4493)149巻1号 Page21-24	
「新聞」				
1) 今日のストレス明日の病気：上肢の痛み	単著	平成23年6月	夕刊フジ	ストレスと痛みについて解説
2) 名医はこの人ブラックジャックを探せ	単著	平成23年6月	夕刊フジ	原因が特定できない痛みへの対策について
3) 慢性の痛み目指す総合	単著	平成23年10月	読売新聞	慢性痛に対する集学的診療の重要性を解説

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
治療				

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4) 痛みよもやま話連載	単著	平成24年8月～平成25年4月	・京都新聞 ・下野新聞 ・福島新聞 ・信濃毎日新聞 ・日本海新聞 ・山陽新聞 ・北國新聞 ・宮崎日日新聞 ・神戸新聞 ・愛媛新聞 ・岐阜新聞 ・千葉日報	①痛みの不思議 ②痛みと錯覚 ③トウガラシなどの刺激物 ④痛がり遺伝子 ⑤プラセボ効果 ⑥プラセボ効果 ⑦やはり問診が大事 ⑧痛みと医療（前編） ⑨痛みと医療（後編） ⑩国で異なる鎮痛薬の処方 ⑪三叉神経痛 ⑫幻肢痛 ⑬養成ギブス ⑭腰痛 ⑮進歩する研究 ⑯慢性痛と深く関連 ⑰リハビリで元気に ⑱幻肢痛に大きな効果 ⑲かかとの痛みとれず ⑳手術後に長く続く痛み
「報道」 1)ガッテン！	―	平成30年5月	NHK教育テレビ 2018年5月9日（水）午後7時30分放送	痛みを“脳”で克服！“慢性痛”治療革命
「国際学会発表」 1) Fear Conditioning and Extinction Associating Voluntary Movement with Painful Stimulus: Experimental Verification of Fear Avoidance Model Using Skin Potential Response （運動と痛みの恐怖条件づけ：恐怖回避モデルの実験的検証）	―	平成26年10月	15th World Congress of International Assicuation for the Study of Pain, Buenos Aires. 2014.10.6-11	運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までを検証した。 ポスター発表 共同発表者：Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yoshitetsu Oshiro, Satoru Miyauchi, Aya Nakae, Ben Seymour, Hideki Kashioka, Masahiko Shibata 担当部分：研究計画、研究総括
2) Psychologigal characteristics related to the acquisition and extention of pain-related fear (痛みに関連する恐怖の獲得と消去に影響する心理的特性の検証)	―	平成28年9月	16th World congress on pain, Yokohama, 2016.9.26-30	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期におけるSPR振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 ポスター発表 共同発表者：Takatoshi Masaki, Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Masahiko Shibata 担当部分：研究計画、データ測定
3) Socioeconimic Value of Intervention for chronic Pain (慢性痛治療の社会経済的価値の検証)	―	平成28年9月	16th World congress on pain, Yokohama, 2016.9.26-30	本邦における集学的痛み診療の社会経済的価値を試算した。集学的診療をうけた患者91名における各疼痛バッテリーの改善値を、QUALY解析によって価値化した。結果、１QUALyあたり平均45.879＄の価値があることがわかった。 ポスター発表 共同発表者：Masahiko Shibata, Keiko Yamada, Youichi Matsuda, Hironobu Uematsu, Shinsuke

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				Inoue, Takahiro Ushida, Tomoyuki Takura 担当部分：抄録執筆、研究計画、データ測定、解析
4) Effects of exercise therapy for outpatients with chronic pain （慢性疼痛患者に対するリハビリテーション入院プログラム）	―	平成28年9月	16th World congress on pain, Yokohama, 2016.9.26-30	大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでは、院内で実施困難な慢性痛に対する集学的入院治療を近隣の医療機関と連携協力して実施可能とした。就業や日常生活に支障をきたしている慢性痛患者を治療対象とし、運動療法、認知行動療法、集学的リハビリテーションの三要素を含んだ入院プログラムを作成した。結果、痛みの評価が改善し、就労した症例を経験した。また、EQ-5Dを用いて、このプログラムの費用対効果も検討した。 本人担当部分：研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者： N. Takahashi, M. Shibata, T. Adachi, Y. Maeda, K. Yamada, T. Nishigami
5) Disabilities on work and fear avoidance beliefs in Japanese workers with chronic pain. （慢性痛患者の恐怖回避思考と就労困難との関係）	―	平成28年12月	International Congress of Behavioral Medicine 2016, Melbourne, Australia. 2016 Dec 7-10.	就労環境における慢性痛の実態，及び慢性痛が仕事に影響する重症例でのリスク因子を明らかにすることを目的とした。計3社18施設の被雇用者を対象に，「からだの痛みに関する調査研究アンケート」を施行した。対象者の生活習慣や心理社会的因子と慢性痛有症との関連について，性年齢調整ロジスティック回帰分析を用いて分析した。結果、仕事に影響する慢性痛を有することは，肥満，喫煙習慣，不眠症，ワーカホリック度の高さ，上司・同僚からの支援の乏しさ，仕事の満足度の低さ，仕事の要求度の高さ，仕事のコントロール度の低さ，心理的ストレスの高さ，抑うつ状態と有意に関連があった。就労環境における慢性痛とそのリスク因子の実態が一部明らかとなった。 ポスター発表 本人担当部分：データ測定、抄録のとりまとめをおこなった。 共同発表者：Kenta Wakaizumi, Keiko Yamada, Masahiko Shibata, Shizuko Kosugi, Hiroshi Morisaki, and Ko Matsudaira
6) An Epidemiological Study on the Association Between Job Satisfaction and Reduced Performance/ sickness Absence among Workers with Chronic Pain （慢性痛患者の職務満足度と機能低下・病欠の疫学調査）	―	平成28年12月	International Congress of Behavioral Medicine 2016, Melbourne, Australia. 2016 Dec 7-10.	就労環境における慢性痛の実態，及び慢性痛が仕事に影響する重症例でのリスク因子を明らかにすることを目的とした。計3社18施設の被雇用者を対象に，「からだの痛みに関する調査研究アンケート」を施行した。対象者の生活習慣や心理社会的因子と慢性痛有症との関連について，性年齢調整ロジスティック回帰分析を用いて分析した。結果、仕事に影響する慢性痛を有することは，肥満，喫煙習慣，不眠症，ワーカホリック度の高さ，上司・同僚からの支援の乏しさ，仕事の満足度の低さ，仕事の要求度の高さ，仕事のコントロール度の低さ，心理的ストレスの高さ，抑うつ状態と有意に関連があった。就労環境における慢性痛とそのリスク因子の実態が一部明らかとなった。 本人担当部分：データ測定，研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者： Keiko Yamada, Kenta Wakaizumi, Ko Matsudaira, Masahiko Shibata, and Hiroyasu Iso

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
「国内学会発表」 1) 慢性疼痛患者に対する リハビリテーション入 院プログラムの効果	－	平成28年6月	第53回日本リハビリテーション医学会学術集会	大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでは、院内で実施困難な慢性痛に対する集学的入院治療を近隣の医療機関と連携協力して実施可能とした。就業や日常生活に支障をきたしている慢性痛患者を治療対象とし、運動療法、認知行動療法、集学的リハビリテーションの三要素を含んだ入院プログラムを作成した。結果、痛みの評価が改善し、就労した症例を経験した。また、EQ-5Dを用いて、このプログラムの費用対効果も検討した。 本人担当部分： 研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 口述発表 共同発表者：高橋紀代，柴田政彦
2) 慢性痛患者への入院 集学的リハの取り組み	－	平成28年11月	第9回日本運動器疼痛学会、東京、2016.11.26～27	慢性痛患者に対して短期入院による集学的リハを実施したので報告する。集学的リハとして医師（講義：1h／w），臨床心理士（講義：2h／w），理学療法士（講義：1h／w），理学・作業療法士（運動療法：6日／w）がそれぞれ介入。また，上記以外の時間で自主トレの時間を午前・午後に各1時間ずつ定。アウトカムを日常生活における移動能力・ADL・情動面の改善とし，主な評価尺度として3分間歩行，5m歩行，PDAS，HADS，PCS，PSEQを入院時と退院時で比較した。結果、運動面と情動面の改善が見られた。 本人担当部分： 研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者：丸山伸廣，高橋紀代，柴田政彦
3) 慢性疼痛患者に対する 外来運動療法完遂者と ドロップアウトした者 との比較	－	平成28年11月月	第9回日本運動器疼痛学会、東京、2016.11.26～27	大阪大学附属病院疹痛医療センター（痛みセンター）と連携した3ヵ月間の外来運動療法には、プログラム途中で来院しなくなった患者も認められる。今回ドロップアウトした患者に対して後方視的に調査を行い，運動療法完遂者と比較した結果を報告する。当院外来を受診した29名のうち、計12回のプログラム参加したものを完遂群それ以前に中断したものをドロップアウト群（DO群）とした。結果、29名中20名が完遂し，9名が脱落していた。 DO群と完遂群の比較では介入前の痛みNRS，EQ－5D，PSEQに有意差を認めた。慢性痛に対する運動療法を試行する際ドロップアウトの危険性の予測に多面的評価の結果が有用となる可能性が示唆された。 本人担当部分： 研究計画、データ測定、結果の解析、研究総括をおこなった。 ポスター発表 共同発表者： 鳴尾彰人，西上智彦，高橋紀代，柴田政彦
4)飛翔 － 日本疼痛学会の新しい門出を迎えて		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	会長講演

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5)青少年における「疼痛又は運動障害を中心とする多様な症状」の受療状況に関する全国疫学調査		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	福島若葉1，原めぐみ2，柴田政彦3，喜多村祐里4，祖父江友孝4 1大阪市立大学大学院医学研究科 公衆衛生学，2佐賀大学医学部 社会医学講座 予防医学分野，3大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，4大阪大学大学院医学系研究科 社会医学講座 環境医学
6)慢性痛患者に対する集学的入院治療の長期効果と費用対効果		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	高橋紀代1,2,3，安達友紀4,5,6，柴田政彦3,4 1篤友会リハビリテーションクリニック，2医療法人篤友会 千里山病院，3大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，4大阪大学医学部附属病院 疼痛医療センター，5滋賀医科大学医学部附属病院 ペインクリニック科，6日本学術振興会
7)頸椎症性脊髄症における安静時fMRIを用いた自発脳活動および機能的結合の変化の検討		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	串岡純一1，海渡貴司1，武中章太1，牧野孝洋1，坂井勇介1，田中壽2，渡邉嘉之2，寒重之3，柴田政彦3 1大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学(整形外科)，2大阪大学大学院医学系研究科 放射線統合医学講座 放射線医学教室，3大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座
8)安静時fMRIを用いた変形性膝関節症の痛みに関わる脳機能異常の予備的研究		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	大迫正一1，寒重之2，植松弘進1，松田陽一1,4，二井数馬4，田中壽3，渡邉嘉之3，冨田哲也4，柴田政彦2，藤野裕士1 1大阪大学大学院医学系研究科 生体統御医学講座麻酔・集中治療医学教室，2大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，3大阪大学大学院医学系研究科 放射線統合医学講座 放射線医学教室，4大阪大学大学院医学系研究科 器官制御外科学
9)慢性痛患者における短縮版アテネ不眠尺度（AIS-5）の信頼性・妥当性の検討		平成29年6月	第39回日本疼痛学会、神戸、2017.6.16～17	榎本聖香1，安達友紀2,3,4，山田恵子2,5，井上大輔2,6，中西美保2,7，西上智彦2,8，柴田政彦1,2 1大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，2大阪大学医学部附属病院 疼痛医療センター，3滋賀医科大学医学部附属病院 学際的痛み治療センター，4日本学術振興会，5大阪大学大学院医学系研究科 社会医学講座 公衆衛生学，6大阪リハビリテーション専門学校 作業療法学科，7大阪大学大学院医学系研究科 漢方医学寄附講座，8甲南女子大学 看護リハビリテーション学部 理学療法学科
10)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センターでの集学的痛み治療の現況と課題		平成29年11月	第10回日本運動器疼痛学会、福島、2017.11.18～19	柴田政彦1,3)，井上大輔1,2)，西上智彦1,3,4)，安達友紀1,6)，榎本聖香1,3,6)，高橋紀代1,3,7) 1)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，2)大阪リハビリテーション専門学校作業療法学科，3)大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座，4)甲南女子大学看護リハビリテーション学部理学療法学科，5)大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座公衆衛生学，6)滋賀医科大学附属病院学際的痛み治療センター，7)篤友会千里山病院

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11)頸髄症における術前・術前後の脳機能的結合の変化：安静時fMRIによる検討		平成29年11月	第10回日本運動器疼痛学会、福島、2017.11.18～19	串岡純一1)，海渡貴司1)，武中章太1)，牧野孝洋1)，坂井勇介1)，田中壽2)，渡邉嘉之2)，寒重之3)，吉川秀樹1)，柴田政彦3) 1)大阪大学整形外科，2)大阪大学放射線統合医学講座，3)大阪大学疼痛医学寄附講座
12)入院集学的リハビリテーションの適応と入院期間の検討		平成29年11月	第10回日本運動器疼痛学会、福島、2017.11.18～19	高橋紀代1,2,3)，柴田政彦2,4) 1)千里山病院，2)大阪大学医学部付属病院疼痛医療センター，3)篤友会リハビリテーションクリニック，4)大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座
13)ICD-11への改訂に向けての慢性痛分類について		平成29年7月	日本ペインクリニック学会第51回大会、岐阜、2017.7.20～22	柴田政彦1，山田恵子2，北原雅樹3，井関雅子4，福井聖5，牛田享宏6 1大阪大学大学院医学系研究科疼痛医学寄附講座，2大阪大学大学院医学系研究科社会医学講座公衆衛生学，3東京慈恵医科大学麻酔科，4順天堂大学医学部 麻酔科学・ペインクリニック講座，5滋賀医科大学医学部附属病院ペインクリニック科，6愛知医科大学 学際的痛みセンター
14)慢性側腹部痛に集学的診療と漢方薬治療（柴芍六君子湯）が有効であった1例		平成29年7月	日本ペインクリニック学会第51回大会、岐阜、2017.7.20～22	中西美保1，山田恵子3，柴田政彦4 1大阪大学大学院医学系研究科漢方医学寄附講座，2大阪大学医学部附属病院 疼痛医療センター，3大阪大学大学院 医学系研究科 社会医学講座 公衆衛生学，4大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座
15)頚髄症患者における安静時自発脳活動のALFFおよびReHoによる検討		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	寒重之1)，串岡純一2)，武中章太2)，牧野孝洋2)，坂井勇介2)，海渡貴司2)，田中壽3)，渡邉嘉之4)，柴田政彦5) 1)大阪大学大学院医学系研究科生体統御医学講座，2)大阪大学大学院医学系研究科器官制御外科学講座，3)大阪大学大学院医学系研究科放射線統合医学講座，4)大阪大学大学院医学系研究科次世代画像診断学共同研究講座，5)奈良学園大学保健医療学部看護学科
16)慢性の痛みに関する教育プログラムの構築 – 課題解決型高度医療人材養成プログラム：慢性の痛みに関する領域		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	鈴木秀典1)，坂井孝司1)，柴田政彦2)，牛田享宏3)，福井聖4)，池田亮5)，田口敏彦6) 1)山口大学大学院医学系研究科整形外科学，2)奈良学園大学保健医療学部，3)愛知医科大学医学部学際的痛みセンター，4)滋賀医科大学医学部附属病院 ペインクリニック科，5)東京慈恵会医科大学整形外科学，6)山口労災病院
17)入院前の集学的診療が入院集学的リハビリテーションに与えた効果~入院中に関わる治療者が適応判断に加わる意義について~		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	丸山伸廣1)，中原理1)，高橋紀代1)，榎本聖香1)，柴田政彦2) 1)千里山病院，2)奈良学園大学保健医療学部
18)医療制度・診療報酬の国際比較		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	三木健司1,2,3)，柴田政彦4) 1)大阪行岡医療大学医療学部，2)早石病院疼痛医療センター，3)認定NPOいたみ医学研究情報センター，4)奈良学園大学保健医療学部

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19)慢性痛に対する入院集学的リハビリテーションの費用対効果の検討		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	高橋紀代1)，中原理1)，榎本聖香2)，田倉智之3)，柴田政彦2,4) 1)千里山病院，2)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，3)東京大学大学院医学系研究科医療経済政策学講座，4)奈良学園大学保健医療学部
20)厚生労働省慢性疼痛診療体制構築モデル事業（近畿地区）報告		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	柴田政彦1,4)，福井聖2)，水野泰行3)，榎本聖香1,2)，西上智彦1)，高橋紀代1) 1)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，2)滋賀医科大学医学部附属病院学際的痛みセンター，3)関西医科大学心療内科学講座，4)奈良学園大学保健医療学部
21)慢性痛発症の契機に他者の落ち度を感じているか否かが，痛み信念に及ぼす影響		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	榎本聖香1)，安達友紀1)，西上智彦1)，高橋紀代1)，柴田政彦1,2) 1)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，2)奈良学園大学保健医療学部
22)認知行動療法で過剰行動と回避行動を順に扱い改善がみられた一次性慢性痛の一症例		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	細越寛樹1,2)，榎本聖香2)，安達友紀2)，高橋紀代2)，西上智彦2)，柴田政彦2) 1)関西大学社会学部社会学科心理学専攻，2)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター
23)痛みの多面性が訪問リハビリテーション利用者の生活に及ぼす影響		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	鳴尾彰人1)，赤尾祥吾1)，西上智彦2)，高橋紀代1)，柴田政彦3) 1)篤友会リハビリテーションクリニック，2)甲南女子大学看護リハビリテーション学部，3)奈良学園大学保健医療学部
24)入院集学的リハビリテーションによる介入が，疼痛生活障害尺度（PDAS）の下位因子に与える影響について		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	中原理1)，高橋紀代1,2)，榎本聖香2)，柴田政彦2,3) 1)千里山病院，2)大阪大学医学部附属病院疼痛医療センター，3)奈良学園大学保健医療学部
25)いたみどめ調整入院によるフェンタニルクエン酸塩貼付剤の一時的な使用が効果的であった腰椎変形性側弯症の一例		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	西山菜々子1,2)，田村宏1)，清水憲政3)，石井良平2)，岡本禎晃2)，金井菜穂子2)，柴田政彦2,4) 1)市立芦屋病院リハビリテーション科，2)市立芦屋病院サポーティブケアチーム，3)市立芦屋病院整形外科，4)奈良学園大学保健医療学部
26)線維筋痛症・広範囲慢性疼痛の集学的診療の取り組み精神科診断について		平成30年12月	第11回日本運動器疼痛学会、大津、2018.12.1～2	三木健司1,2,4)，史賢林3)，柴田政彦5)，行岡正雄4)，橋本亮太6) 1)大阪行岡医療大学医療学部，2)早石病院整形外科・疼痛医療センター，3)てんじん整形外科リウマチ科，4)行岡病院リウマチ科，5)奈良学園大学保健医療学部，6)国立精神・神経医療研究センター精神保健研究所精神疾患病態研究部

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
27)中枢性脳卒中後疼痛の機能結合の変化			第48回日本臨床神経生理学会学術大会、東京、2018.11.9～	細見晃一1,2，清水豪士1-3，森信彦4，眞野智生1,2，渡邉嘉之5，柴田政彦6，寒重之7，Khoo Hui Ming2，谷直樹2，押野悟2，貴島晴彦2，齋藤洋一1,2 1大阪大学大学院医学系研究科脳神経機能再生学，2大阪大学大学院医学系研究科脳神経外科学，3大手前病院脳神経外科，4和歌山県立医科大学附属病院紀北分院リハビリテーション科，5大阪大学大学院医学系研究科次世代画像診断学，6奈良学園大学保健医療学部，7大阪大学大学院医学系研究科麻酔科学
28)安静時fMRIを用いた脳機能的結合解析による頚髄症の新規予後予測法の開発		平成30年4月	第47回日本脊椎脊髄病学会学術集会、神戸、2018.4.12～14	海渡貴司1，寒重之2，武中章太1，牧野孝洋1，坂井勇介1，串岡純一1，田中壽3，渡邉嘉之3，柴田政彦2，吉川秀樹1 1大阪大学整形外科，2大阪大学医学部疼痛医学講座，3大阪大学医学部放射線統合医学講座
29)痛みの行動科学		平成30年6月	第40回日本疼痛学会、長崎、2018.6.15～16	
30)中枢性脳卒中後疼痛の神経画像研究と非侵襲脳刺激療法		平成30年6月	第40回日本疼痛学会、長崎、2018.6.15～16	細見晃一1,2，清水豪士1,2,3，眞野智生1,2，森信彦4，渡邉嘉之5，柴田政彦6，貴島晴彦2，齋藤洋一1,2 1大阪大学大学院医学系研究科 脳神経機能再生学，2大阪大学大学院医学系研究科 脳神経外科学，3大手前病院 脳神経外科，4和歌山県立医科大学附属病院紀北分院 リハビリテーション科，5大阪大学大学院医学系研究科 放射線医学，6大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学
31)中枢機能障害性疼痛患者を特徴づける脳部位間機能的結合の機械学習による検討		平成30年6月	第40回日本疼痛学会、長崎、2018.6.15～16	寒重之1，大迫正一2，植松弘進2，田中壽3，渡邉嘉之4，柴田政彦1 1大阪大学大学院医学系研究科 疼痛医学寄附講座，2大阪大学大学院医学系研究科 麻酔・集中治療医学教室，3大阪大学大学院医学系研究科 放射線部，4大阪大学大学院医学系研究科 放射線統合医学講座
32)過活動の慢性痛患者への認知行動療法　入院治療における多職種連携の一事例		平成31年8月	第19回日本認知療法・認知行動療法学会、東京、2019.8.31～9.1	榎本 聖香(大阪大学 大学院人間科学研究科)，安達 友紀，佐々木 樹，津田 清香，中原 理，高橋紀代，佐々木 淳，柴田 政彦
33)安静時functional MRIを用いた頚髄症患者の脳局所活動評価における可塑性，予後予測		平成31年4月	第48回日本脊椎脊髄病学会学術集会、横浜、2019.4.18～20	武中章太1，海渡貴司1，寒重之2，牧野孝洋1，坂井勇介1，串岡純一1，田中壽3，渡邉嘉之3，柴田政彦4，吉川秀樹1 1阪大大学院整形，2阪大大学院麻酔集中医療医学，3阪大大学院放射線医学，4奈良学園大保健医療学部看護学科
34)中枢性脳卒中後疼痛のアウトカム評価		平成31年7月	第41回日本疼痛学会、名古屋、2019.7.12～13	細見晃一1,2，森信彦1,2，眞野智生1,2，柴田政彦3，貴島晴彦2，齋藤洋一1,2 1大阪大学大学院医学系研究科 脳神経機能再生学，2大阪大学大学院医学系研究科 脳神経外科学，3奈良学園大学
35)中枢性脳卒中後疼痛における中枢神経感作		平成31年7月	第41回日本疼痛学会、名古屋、2019.7.12～13	細見晃一1，森信彦1，渡邉嘉之2，柴田政彦3，貴島晴彦4，齋藤洋一1 1大阪大学大学院医学系研究科 脳神経機能再生学・脳神経外科学，2大阪大学大学院医学系研究

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				科 次世代画像診断学，3奈良学園大学 保健医療学部，4大阪大学大学院医学系研究科 脳神経外科学
36)中強度負荷を目的とした自転車エルゴメーターによる有酸素運動のプロトコル作成の検討		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	丸山伸廣1)，浦澤純一1)，中原理1)，高橋紀代1)，柴田政彦2) 1)千里山病院，2)奈良学園大学保健医療学部
37)当院の集学的痛みセンター外来における中断者の特徴について		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	中原理1)，高橋紀代1)，柴田政彦2) 1)千里山病院，2)奈良学園大学保健医療学部
38)訪問リハビリテーション利用者の転倒と疼痛の心理的側面との関連		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	赤尾祥吾1)，鳴尾彰人1)，西上智彦2)，高橋紀代1)，柴田政彦3) 1)篤友会リハビリテーションクリニック，2)甲南女子大学看護リハビリテーション学部，3)奈良学園大学保健医療学部
39)慢性痛を有する訪問リハビリテーション利用者の疼痛や生活機能の縦断的変化		平成31年11月	第12回日本運動器疼痛学会、東京、2019.11.30～12.1	鳴尾彰人1)，赤尾祥吾1)，西上智彦2)，高橋紀代1)，柴田政彦3) 1)篤友会リハビリテーションクリニック，2)甲南女子大学看護リハビリテーション学部，3)奈良学園大学保健医療学部
40)脳機能画像解析による手術6か月後の満足度の予測 －圧迫性脊髄症患者での検証		平成31年7月	日本ペインクリニック学会第53回大会、熊本、2019.7.18～20	柴田政彦1)，寒重之2) 1)奈良学園大学 保健医療学部 リハビリテーション学科，2)大阪大学大学院医学系研究科 生体統御医学講座 麻酔集中治療医学教室
41)帯状疱疹後神経痛患者における脳の可塑的変化に対する安静時機能的MRIによる検討		平成31年7月	日本ペインクリニック学会第53回大会、熊本、2019.7.18～20	恒遠剛示1,2)，寒重之3)，柴田政彦4) 1)牧整形外科病院 麻酔科・ペインクリニック科，2)兵庫医科大学病院 ペインクリニック部，3)大阪大学大学院医学系研究科 生体統御医学講座，4)奈良学園大学保健医療学部

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　辻下　守弘

研　究　分　野	研究内容のキーワード
外科系臨床医学	理学療法学、運動器リハビリテーション学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例		
２　作成した教科書，教材		
３　教育上の能力に関する大学等の評価 学生による授業評価	平成 21 年 9 月	甲南女子大学において、全教員を対象に授業科目ごとに学生による授業評価を行った。 質問内容「あなたはこの授業を受講して総合的に満足していますか?」 [理学療法概論]　5 点満点で 4.3 点 [内部障害系運動療法学]　5 点満点で 4.8 点 [脳血管障害理学療法学]　5 点満点で 4.3 点 [理学療法行動科学]　5 点満点で 4.1 点
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
５　その他 奈良学園大学社会連携センター長	平成 28 年 4 月 ～ 現在に至る	奈良学園大学社会連携センター長として、大学と地域社会との連携をスムーズにするためのコーディネーターとしての役割を果たした。具体的には、大学が立地する市町村との連携事業である公開講座の企画運営、大学シーズと地域ニーズとのマッチング、産官学連携による共同研究の推進と実施などに関して実施責任者としての活動を行った。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　資格，免許 (1)　理学療法士免許（厚生労働省）	昭和 60 年 5 月	国家資格免許である理学療法士免許を取得(第 13729 号)
(2)　認定健康心理士資格取得（日本健康心理学会）	平成 13 年 4 月 24 日	日本健康心理学会が認定する認定健康心理士資格を取得　(第 246 号)
(3)　専門健康心理士資格取得（日本健康心理学会）	平成 18 年 2 月 2 日	日本健康心理学会が認定する認定健康心理士資格の習得から 5 年間が経過し、昇格審査に合格して専門健康心理士資格を取得　(第 246 号)

(4)　専門理学療法士資格取得（日本理学療法士協会）	平成 18 年 2 月 2 日	公益社団法人日本理学療法士協会から脳卒中(第 3-102 号)、運動器(第 3-562 号)、内部障害理学療法(第 4-323 号)の 3 分野に対する専門理学療法士の資格を取得
(5)　認定理学療法士資格取得（日本理学療法士協会）	平成 18 年 2 月 2 日	公益社団法人日本理学療法士協会から神経(第 2-481 号)、運動器(第 7-79 号)、代謝(第 13-25 号)の 3 領域に対する認定理学療法士の資格を取得
(6) 専門理学療法士資格更新	平成 29 年 4 月 1 日	公益社団法人日本理学療法士協会から神経（2017S－02－000033）と運動器（2017S－03－000043）の 2 分野に対する専門理学療法士資格を更新認定を取得
2　特許等 (1)　特許申請中 「リハビリテーション用用具」	平成 12 年 3 月	本発明は、身体の動作機能を正常に発揮し得ない障害者や高齢者等に当該機能の回復と発現を容易にならしめるためのリハビリテーションに用いられる器具およびその利用プログラムに関するものである。この発明用具は、リハビリテーション医療や健康増進の場面において、音楽を利用した運動療法に使用する目的で開発された。内容としては、複数本の棒を結合させ枠を形成した構造物と片端に固着用部を持つ可撓性アームを備えた複数個の楽器からなり、該楽器を前記構造物の任意の位置、方向に取付けてなるリハビリテーション用用具である。 出願番号　特願 2000-114436
3　実務の経験を有する者についての特記事項 (1)　平成 16 年度福山市運動普及推進事業調査研究および「健康ふくやま 21」さわやか運動教室事業への参加	平成 16 年 4 月 ～ 現在に至る	福山市では、「健康ふくやま 21」の具体的活動として、福山市民の運動習慣を増進することを目的とした運動普及推進事業を展開している。平成 16 年度からは、「さわやか運動教室」を福山市内の小学校区単位で開催している。事業内容としては、小学校体育館を使用して、運動の必要性についての啓発と具体的な運動方法としてウォーキングの基本と実技指導を行っている。また、各小学校区から 10 名の希望者を集め、より具体的な運動習慣の形成とそれによる効果を検証する疫学研究も同時進行させている。福山市内の成人では、その 77%が運動不足を感じており、本事業によりその割合を 50%までに抑えることを目標にしている。事前にアンケート調査を実施し、その結果に基づいて健康心理学の知識と各種技法を用いた介入により、目標を効果的に達成するよう取り組んでいる。

(2)　厚生労働省理学療法士・作業療法士国家試験委員会委員としての活動	平成 18 年 4 月 ～	厚生労働省の理学療法士作業療法士国家試験委員会の委員として国家試験作成に従事した。
(3)　重度認知症高齢者の感情反応と行動を手がかりにした基本的生活支援技術の開発	平成18年度 ～ 平成20年度 科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究B)	重度認知症高齢者の基本的な日常生活支援技術の開発を行い、その教育・研修プログラム開発により重度認知症高齢者の QOL の向上を図ることが研究の目的である。研究の結果、①認知症高齢者へのケア場面のビデオテープ分析から固有の感情反応・行動のレベルの存在を明らかにし、その尺度を用いてケアの質が測定可能である。②重度認知症高齢者に対する小集団回想法の有効性を明らかにした。③手織りプログラムの生活活性化に与える効果を明らかにした。④重度認知症高齢者とのコミュニケーションの具体的方法を明らかにした。以上の成果からコミュニケーションの糸口を探索する方法、重度認知症高齢者のサインを読解する方法等の具体的な援助技術研修プログラムを作成し、研修を実施し、概ね良好との評価を得た。 研究代表者：臼井キミカ 共同研究者：上西洋子、辻下守弘、佐瀬美恵子、白井みどり、佐々木八千代、兼田美代、津村智恵子、後藤由美子、山本美輪、山本裕子、川井太加子、鷹居樹八子、柴田幸子 担当部分：主に③の手織りプログラムの生活活性化に与える効果について、近赤外線分光法による脳イメージングを用いた高齢者の脳機能に及ぼす影響に関する研究を担当した。
(4)　性差と加齢を考慮した労働者の睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの開発	平成24年度 ～ 平成26年度 科学研究費補助金研究成果報告書（基盤研究C)	本研究の目的は、労働者の睡眠の質における性差と加齢の影響を明確にし、性別と加齢に応じた睡眠の質改善のプログラムを開発することである。研究対象者は中規模事業場で働く 35 歳以上の男女であった。研究期間中の健康診断時期に調査を実施した。1 年目の調査結果では、男性の睡眠の質には運動習慣、女性の睡眠の質には教育歴や喫煙状況が関連していた。2 年目には、23 項目の睡眠チェックリストを作成した。3 年目には、睡眠の質改善のためのセルフケア・プログラムの効果評価を行った結果、介入群において 3 項目に改善が認められた。今後は産業保健スタッフが睡眠改善指導にどのように活用するかを検討する必要がある。 研究代表者：廣川空美 共同研究者：藤井保人、谷口敏代、辻下守弘 担当部分：男女の睡眠の質に関する睡眠チェックリストの作成と睡眠改善指導ビデオの作成および運動習慣が睡眠に及ぼす影響に関する研究を担当した。

(5)　介護老人保健施設でのパソコンを用いた介護職員指導に関する研究－行動分析学の枠組みによる移乗介助指導－	平成26年度 ～ 平成28年度 科学研究費補助金研究成果中間報告書（挑戦的萌芽研究）	介護老人保健施設において良質なサービスを提供することは入所高齢者の生活の質を高めるだけでなく、早期の在宅復帰を促す重要な事項である。本研究では、パソコンを用いたｅラーニングシステムを構築し、職場や家庭で場所を選ばずに介護職員の移乗介助指導を可能とすることとその効果について検証することである。1年目では、介護老人施設おける介護指導の実態を調査し、移乗介助指導において職員間の達成度が異なることを明らかにした。現在2年目の研究では、この結果に基づき行動分析学の枠組みを用いたｅラーニング教材の作成を行っており、現場における検証を準備している。3年目ではこのシステムの効果を検証する。 研究代表者：小林和彦 共同研究者：辻下守弘 担当部分：介護老人保健施設での介護状況を調査するとともに移乗介助指導におけるｅラーニングシステムの開発を担当した。3年目では、開発したシステムの検証も担当する予定である。
4　その他 (1)　京都市立芸術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程の博士論文審査委員	平成27年12月 ～ 現在に至る	京都市立美術大学大学院美術研究科美術専攻博士（後期）課程において、美術作品をリハビリテーション医療に活かす研究を博士論文の課題としている学生に対して、リハビリテーション医療に携わる研究者として博士論文の審査を行っている。平成28年2月には第1回の博士論文報告会があり、発表論文への試問を実施し、博士論文審査委員会において論文への評価と今後の課題について報告を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概　　要
(著書) 腰痛の理学療法	共著	平成 20 年 5 月	三輪書店	近年、医療のみならず産業面にも多大な経済負担を与え、また高齢社会到来でますます増加傾向中の腰痛は、国の財政や産業基盤をも脅かす問題となっている。このような現状を踏まえ、本書ではいまだ解決策が見出されたとはいえない「腰痛」について、その最前線で活躍する研究者および臨床家が近年明らかになった知見を中心に科学的根拠に基づいて解説した。 (編者：伊藤俊一、鶴見隆正　分担執筆者：関口美穂、内田賢一、白土修、矢吹省司、辻下守弘、甲田宗嗣、岡崎大資、他 18 名) 担当部分：第 3 章第 7 節「労働従事者における腰痛とその指導」 労働従事者に生じる職業性腰痛を定義し、その実態ついて職業別、作業姿勢別に整理した。職業性腰痛の発症リスク因子をこれまで報告されている文献をレビューしながらまとめた。リスク因子は身体・人間工学的因子と心理・社会的因子に分け、自験例も含めて解説を行った。特に、心理・社会的因子についてはタイプ A 行動という行動特性や日常苛立ち事というストレス源が腰痛発症リスク因子として重要なことを指摘した。さらに、職業性腰痛に対する理学療法として応用行動分析学と行動指向型段階的活動プログラムを紹介した。 (pp. 168～178、単著) 担当部分：第 4 章第 4 節「慢性腰痛に対する認知行動療法」腰痛における痛みの認知と痛みの行動について解説し、認知行動療法の重要性と意義について論述した。また、認知行動療法の基礎理論である応用行動分析学に基づいて慢性腰痛患者の腰痛発症メカニズムを解明した。さらに、慢性腰痛に対する認知行動療法を導入する上での評価と技法について詳細に解説し、その実際については症例を供覧した。 (pp. 234～244、共著)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の	概　　要
筋電図バイオフィードバック療法	共著	平成 22 年 6 月	金芳堂	リハビリテーション医療における筋電図バイオフィードバック療法について基礎から臨床までを解説した。本全体の編集を担当した。 (監修：エリック・ペパー、編者：辻下守弘、中川　朋　分担執筆者：エリック・ペパー、中川　朋、甲田宗嗣、平山秀和、工藤弘行、井川英明、鳥谷部太、辻下守弘、他 10 名) 担当部分：第 1 章「バイオフィードバックとは何か」 バイオフィードバック療法の歴史からリハビリテーション医療における位置づけを解説した上で、筋電図バイオフィードバック療法の応用例や普及の状況、そしてリハビリテーション医療に導入する利点などを解説した。 (pp. 1～4、単著)
バイオフィードバック入門	単著	平成23年12月	秀和システム	腰痛、頭痛などの痛み、失禁・便秘から老い、ADD、うつなどといったきわめて広い範囲の病を、薬を使わずに自己コントロールでなおす「バイオフィードバック」治療法について解説した。バイオフィードバックとは、心拍計などの医療器具を使って心拍数、血圧、呼吸数、皮膚温、筋緊張、脳波などをモニタリングし、病状や症状を初期段階で発見し、呼吸法や瞑想など適切な対応をする治療法である。本書では、バイオフィードバックの理論とその実践を基礎から解説し、頭痛や腰痛、排泄トラブル、パニック障害、うつ状態、さらには集中力向上やメンタルトレーニングの方法などを解説しています。
医療福祉学の道標	共著	平成 24 年 3 月	金芳堂	本書は、「健康と病気」という問題に社会科学の側面からアプローチした。健康は医学だけでは守ることができないため、学際科学的，統合的，総合的視野から，「医療福祉学」という新しい学問が必要となること

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				を言及した。 （編者：星野政明、高内克彦、土田耕司　分担執筆者：秋山智久、天野博之、安藤詳子、石村由利子、辻下守弘、他 43 名） 担当部分：第 8 章 B「身体障害者への医療福祉の実践と課題」 身体障害者の定義と法的根拠、その実態などを概説した上で、身体障害者および身体障害児に対する医療福祉サービスの現状と課題について論説した。 （pp. 100～104、単著）
日常生活活動学・生活環境学	共著	平成 24 年 9 月	医学書院	本書は、「日常生活活動学」と「生活環境学」の二部構成である。「日常生活活動学」は、総論で ADL の歴史、概念、評価などの基本事項を解説し、各論で疾患別の評価方法と ADL 指導を具体的に提示し、「生活環境学」では、概念や法的諸制度、住宅改修や生活支援機器について解説した。 （編者：鶴見隆正、隆島研吾　分担執筆者：秋若山佐一、林　克郎、辻下守弘、他 25 名） 担当部分：第 1 章第 4 節「ADL の運動学的分析」 運動学の基本事項を整理した上で、日常生活動作を運動学的に分析するための基礎を詳細に解説した。また、起き上がりや立ち上がりなどの動作に対する運動学的分析を具体例も上げながら論述した。 （pp. 36～51、単著）
脳卒中理学療法の理論と技術	共著	平成 25 年 6 月	メジカルビュー社	本書は、臨床の場で用いられる実践的な理学療法と、その基礎となる解剖学・生理学の知識をはじめ、病態生理の知識、理学療法評価の技術、運動処方および生活指導のための理論的背景と技術を解説した。 （編者：原　寛美、吉尾雅春　分担執筆者：渡辺雅彦、中村　元、辻下守弘、他 22 名） 担当部分：第Ⅴ章「理論と理学療法」の中の「バイオフィードバック療法」を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				バイオフィードバック理論の基礎となる学習理論を解説した上で、バイオフィードバックが使う各種モダリティーや国内の代表的な機器について紹介した。また、脳卒中片麻痺患者に対するバイオフィードバックとニューロフィードバックについても論述した。 (pp. 445～456、単著)
生活支援の基礎理論	共著	平成 27 年 4 月	光生館	本書は、地域での生活を支援する介護福祉士として必要な基礎知識を，保健，心理，栄養，居住環境，家族支援などの関連分野から体系的に学習できるように解説している。 (編者：上之園佳子、谷口敏代、鈴木聖子、分担執筆者：本名靖、太田貞司、土室修、辻下守弘、他 16 名) 担当部分：第５章「介護福祉の基礎となる心理学」の中の「学習」を担当した。 学習の定義と介護福祉領域で必要となる重要事項を解説した上で、認知心理学的な考え方と行動分析学的な考え方に分けて各理論を具体例を入れながら解説した。 (pp. 98～102、単著)
痛みのケア	共著	平成 29 年 3 月	ピラールプレス	本書は、看護現場で求められる痛みのケアについて、哲学・倫理学的理解と痛みの理論からはじまり、痛みの治療と看護ケアについて解説した上で、看護実践事例について検討されている。 (編者：守本とも子　分担執筆者：池辺寧、沖本克子、梶村郁子、辻下守弘、他 15 名) 担当部分：第Ⅱ部「痛みの理論」第５章「痛みの行動科学的理解」を担当した。 看護現場における痛みの生物医学的アプローチの問題点を指摘した上で、慢性的な痛みを行動科学的にアプローチすることの重要性について解説している。また、痛みの社会的強化により出現する痛み行動に対する理解と看護現場での具体的なケアの方法

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概　　要
				論について提案している。 (pp. 34～41、単著)
(学術論文) 疼痛を有する対象者の包括的理学療法 [筆頭論文] (査読付)	共著	平成 20 年 2 月	理学療法ジャーナル第 42 巻 平成 20 年 2 月 pp. 113～121	疼痛を有する対象に対して身体的アプローチだけでなく心理・社会的アプローチも含めた包括的理学療法を行うことの意義を論述した。まず、慢性痛の多面的理解について解説し、疼痛とパーソナル・コントロール、痛み行動と随伴性といった鍵概念を解説した上で、理学療法士が果たす役割を論述した。この中では特に応用行動分析学を用いた慢性疼痛のアプローチを紹介した。また、応用行動分析学に基づいた包括的理学療法の方法論を解説した上で、具体的なアプローチについては事例を供覧しながら説明を加えた。(9 頁) (分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣、鶴見隆正、川村博文) 担当部分：症例への介入および論文の構成と論文の大部分の執筆を担当した。
運動行動変容段階および運動態度が女性の更年期症状に及ぼす影響 (査読付)	共著	平成 20 年 3 月	甲南女子大学研究紀要 第 1 号 平成 20 年 3 月 pp. 53～60	閉経前後女性事務員335名(平均年齢51.0±8.2 歳)に対してアンケート調査を行い、運動行動変容段階(運動段階)および運動態度が更年期障害に及ぼす影響を検討した。年齢、体格、月経状態、更年期症状、運動段階、運動態度、うつ傾向の調査結果より、運動段階と運動態度が良好であれば更年期症状は軽症であり、運動の習慣化は更年期症状の発症を抑制する可能性が示唆された。また、閉経前ではうつ傾向が、閉経後では運動態度が更年期症状を強めることが判明し、多重ロジスティック回帰分析でも更年期症状を発症させる有意なリスク要因として運動態度の不良とうつ傾向ありが挙げられた。更年期症状の発症と重症化の予防には、運動段階を維持期にステップアップさせる介入や、うつ傾向の緩和と運動態度の改善を促すアプローチが必要と考えられた。(8 頁)

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				（分担執筆者：永田昌美、青田絵里、辻下守弘） 担当部分：調査票の作成と配布及び回収とデータの多変量解析を担当した。
高コレステロール血症の運動療法の効果とその阻害因子に関する検討 （査読付） 運動行動変容段階および運動態度が女性の更年期症状に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成 20 年 3 月	理学療法の臨床と研究 第 17 号 平成 20 年 3 月 pp. 25～28	空腹時血清総コレステロール値が 200mg/dl 以上の運動習慣のない中年者 40 例を対象として、運動強度 90%AT、運動頻度を週 2 回で、3 ヵ月間、有酸素運動、柔軟性運動、筋力運動を組み合わせた運動を実施し、高コレステロール血症に対する運動療法の効果を検証した。また同時に、運動療法の阻害因子についても検討した。血清総コレステロール値は、初診時に比較して 3 ヵ月後には有意な減少が認められた。運動療法の阻害因子としては、高血糖のみに有意な関連性が認められた。以上の結果により、高コレステロール血症に対する運動療法の有効性が認められたが、高血糖を合併している場合は運動療法の効果を得がたい可能性が考えられた。（4 頁） （分担執筆者：仁田靖彦、辻下守弘、藤村宜史、沼田義弘、丸橋暉） 担当部分：運動負荷試験の実施と統計処理及び論文執筆の一部を担当した。
理学療法を取り巻く「認知」の最前線	単著	平成20年10月	理学療法ジャーナル 第 42 巻第 9 号 平成 20 年 10 月 pp. 791～798 （査読あり）	脳科学が進歩し、理学療法士も「認知」という言葉をよく使うようになったが、「認知」という言葉の定義があいまいなまま使われていることも多くなっている。本論文では、認知とは何かを理学療法学の立場から定義した上で、認知領域、認知障害、認知症、認知リハビリテーション、認知療法と認知行動療法、そして認知運動療法などリハビリテーション領域で認知とつく用語を論説した。最後には、理学療法学において認知および認知的アプローチが抱える課題や方向性について論述した。（8 頁）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
骨関節疾患の理学療法とバイオメカニク日常生活動作、応用動作を中心に	共著	平成20年11月	理学療法ジャーナル 第42巻第9号 平成20年10月 pp.821～827 （査読あり）	本研究の目的は、バイオメカニクス研究に基づいて骨関節疾患に対する理学療法を検討することである。日常生活動作や応用動作におけるバイオメカニクスについて、2例の健常者を対象として炊事動作中の膝関節角度をホルター電気角度計を持ちて測定した。その結果、2例であっても動作中の膝関節角度は異なり、動作のバイオメカニクスには個人差のあることがわかった。また、高齢者を対象として、椅子からの立ち上がり動作を三次元動作解析装置で分析した結果、転倒経験によって身体重心の移動に有意な違いのあることを明らかにした。(7頁) (分担執筆者：甲田宗嗣、辻下守弘、川村博文、鶴見隆正、新小田幸一、山田直樹) 担当部分：高齢者を対象とした三次元動作解析装置での解析を担当した。
理学療法士のための行動分析学入門	単著	平成20年12月	理学療法兵庫 第14号 平成20年12月 pp.1～7	本論文では、理学療法士に必要な行動分析学の知識と技法について論述した。まず、行動分析学の理論について、スキナーが提唱した随伴性という考え方を中心に解説し、理学療法における応用可能性を言及した。さらに、臨床場面で遭遇する様々な問題を呈した患者に対する具体的な行動分析学的アプローチの有効性について、事例報告を通して検証した。最後に、行動分析学に基づく人間観についてエコロジカルな視点から論述した。(7頁)
座位作業を主体とした女性従事員の職業性腰痛と心理・社会的要因および生活習慣との関連性について （査読付）	共著	平成21年3月	甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 第2号 平成21年3月 pp.89～97	本研究の目的は、座位作業を主体とする女性従事員の職業性腰痛と生活習慣および心理・社会的なストレスとの関連を明らかにすることである。対象は、某公共遊技場にて座位作業を主体とした労務に従事する女性1326名であり、最終的には1324名(採択率99.8%)のデータを分析に用いた。多変量解析の結果、オッズ比が有意であった項目は、BMIの「肥満体重」がオッズ比1.43、頸肩腕症状の「陽性」がオッズ比6.46、日常苛立ち事の「陽性」がオッズ比1.63、そ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				して不健康な生活習慣の「(1)不規則な生活」がオッズ比 1.51、「(5)飲酒習慣」がオッズ比 1.34 であり、これらの項目が腰痛と有意に関連していることがわかった。(9 頁) (分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣、 田辺暁人) 担当部分：調査票の作成から統計処理と論文作成の全般を担当した。
特別養護老人ホーム入所者における車いす座位の問題点に関する検討 （査読付）	共著	平成 21 年 3 月	甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 第 2 号 平成 21 年 3 月 pp. 99～106	高齢者が長時間快適に座るために必要な車いすの機能を検討する目的で、車いす座位に問題のある特別養護老人ホーム入所者と 30 代女性を対象に、車いす着座中の座面および背もたれの圧力分布測定を行った。高齢者では座面において坐骨と仙尾骨に高圧力部が観察され、背もたれにおいては接触面積が狭く、胸椎、肩甲骨、腰椎、骨盤のいずれかに限局して高圧力部が観察され、高齢者特有の円背、骨盤後傾が圧力分布に大きく影響していることが分かった。これらの結果から、高齢者の車いすを検討する際には、座面における圧力分布を均等にすること、および背もたれの接触面積を広くして体幹をサポートすることに配慮する必要性が示唆された。(8 頁) (分担執筆者：永田昌美、辻下守弘、 甲田宗嗣、 吉田正樹) 担当部分：高齢者の背部座圧分布の計測とデータ処理、論文作成の一部を担当した。
リハビリテーション医療現場における BF の応用可能性について （査読付）	単著	平成21年10月	バイオフィードバック研究 第 36 巻第 2 号 平成 21 年 10 月 pp. 173～177	リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック療法の意義や位置づけを論じた上で、バイオフィードバック療法の使用実態について検討した。また、一般的に使われている筋電図バイオフィードバック療法の神経疾患や整形外科疾患に対する適用と問題点、そして最近注目されている平衡機能障害に対するバイオフィードバック療法の方法論と効果について検討した。最後に、センサーとアンプの技術革新により可能となったマルチチャンネルバイオフィ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				ードバック療法についての可能性を論じた。(5 頁)
モチベーションを高める行動分析学的アプローチについて	単著	平成21年12月	理学療法兵庫 第 15 号 平成 21 年 12 月 pp. 18～24	本論文では、理学療法士の臨床において避けることのできない患者のモチベーションに関して考察した。まず、行動分析学の立場から理学療法臨床におけるモチベーションの機能を検討した上で、患者のモチベーションを高めるため具体的な行動分析学的アプローチを提示し、実際に介入した事例の分析を通して、行動分析学的アプローチの有効性についても論述した。最後に、理学療法臨床における行動分析学的アプローチは、エコロジカル（生態学的）アプローチつまり環境調整による行動変容介入であることに言及して、今後の理学療法臨床への応用可能性を考察した。(7 頁)
女性公共遊技場従事員の腰痛発症における心理・社会的要因および生活習慣に関する縦断的研究 （査読付）	共著	平成 22 年 3 月	甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 第 4 号 平成 22 年 3 月 pp. 59～67	本研究は、女性従事員の腰痛発症における心理社会的要因および生活習慣に関する縦断研究である。対象は、某公共遊技場に勤務する女性従事員を対象として、1997 年（n=1326 名､以下基本調査)と 2001 年(n=910 名、以下追跡調査）に腰痛と頸肩痛および生活習慣に関する質問紙調査を実施した。研究の結果、頸肩痛の粗オッズ比が 1.94（95%CI 1.24-3.04)、調整オッズ比が 1.82（95%CI 1.21-3.83)、日常いらだち事の粗オッズ比が 2.39（95%CI 1.22-4.67)、調整オッズ比が 2.13（95%CI 1.13-4.32)、コーヒー等の摂取習慣の粗オッズ比が 0.59（95%CI 0.36-0.94)、調整オッズ比が 0.64（95%CI 0.42-0.96）であった。以上の結果から頸肩腕痛や日常いらだち事の存在およびコーヒー等の摂取習慣が腰痛発症のリスク要因となることがわかった。(9 頁) (分担執筆者：辻下守弘、永田昌美、甲田宗嗣) 担当部分：調査票の作成から統計処理および論文作成の全般を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
Relationship between life satisfaction and sympathovagal balance in healthy elderly males at home at night （夜間在宅における健常老年者の生活満足度と交感神経バランスとの関連性） （査読付）	共著	平成24年10月	Health Vol.4 No.11 pp.1068-1072	本研究の目的は、老年者における夜間在宅での生活満足度が交感神経バランスと関連するかを検討することであった。健常老年者39名を対象として、アクティブトレーサーにより72時間の心拍変動と身体活動量を計測した。測定の結果、生活満足度と交感神経バランスとの間には-0.47 の有意な相関関係を認めた。(5頁) (分担執筆者：吉野公三、守本とも子、板垣孝弘、池谷茂隆、永田昌美、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。
Effects of a hardness discrimination task in failed back surgery syndrome with severe low back pain and disturbed body image: case study （身体像の認知課題作業が背部の術後症候群による重度な腰痛症に対する影響：事例研究） （査読付）	共著	平成24年10月	Journal of Novel Physiotherapies 2012 Open Access	本研究では背部の術後に重度な腰痛を発症した20歳の女性に対して認知課題による疼痛緩和のアプローチを行った。初期の疼痛はNRSで10と最大の痛みを訴えていた。また、身体像の認知に障害を持っていた。介入として1日20分、週6日の認知課題のトレーニングを 4 週間にわたり行ったところ、痛みがNRSで5と半分に緩和され、歩行や日常生活動作能力も改善していた。(6頁) (分担執筆者：西上智彦、奥埜裕之、中野英樹、大村裕、清水ミッシェルアイズマン、辻下守弘、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：症例の理学的評価と訓練および論文の結果部分を担当した。
運動器疾患を有する高齢者の生活機能に対する理学療法の取り通所リハビリテーション利用者の心理・社会的側面に着目して （査読付）	共著	平成26年4月	理学療法 第31巻第4号 平成26年4月 pp.376～382	1.運動器疾患を有する高齢者の生活機能の改善には、高齢者の身体活動の開始と継続に関する要因を理解する必要があり、心理・社会的要因が大きく関連している。2.どのような治療を選択するにしても、高齢者個々の心理・社会的要因を認識し、オーダーメイドの治療を実施することが必要である。3.高齢者の心理・社会的要因を認識するための第一歩は、対象者とのコミュニケーションである。単なるコミュニケーション技法を用いるのではなく、対象者を支えている信念や認識に触れる関わり方がオ

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				ーダーメイドの治療を実施できた。(7 頁) (分担執筆者：大門恭平、米田大人、辻下守弘、川村博文) 担当部分：高齢者の運動機能に関する要因の分析と論文の一部執筆を担当した。
Central neural mechanisms of interindividual difference in discomfort during sensorimotor incongruence in healthy volunteers: an experimental study （健康対象者における感覚運動不一致による不快感が個人差に関する中枢神経メカニズムについて：実験的研究） （査読付）	共著	平成26年10月	Rheumatology 2014 Open Access	本研究の目的は、感覚運動認知の不一致に関する個人差に関して、その中枢神経メカニズムを明らかにすることである。対象は、18 名の健常若年女性であり、感覚運動認知の不一致課題を独自に作成し、その認知課題中における脳波を分析し、脳内メカニズムを LORETA 法によって解析した。その結果、不一致の個人差は前部帯状回および後部帯状回の活動状況の違いと一致していることがわかった。　(8 頁) (分担執筆者：分担執筆者：西上智彦、中野英樹、大住道弘、辻下守弘、壬生彰、牛田孝博) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果部分を担当した。
バイオフィードバックの発展に向けての日本バイオフィードバック学会企画委員会からのアンケート結果報告 （査読付）	共著	平成26年10月	バイオフィードバック研究 第 41 巻第 2 号 平成 26 年 10 月 pp. 95～102	2012年の第40回学術総合においてアンケート調査を実施した。学術総会に参加した 25 人の学会員から回答を得た。その結果、1. 医学・工学・心理学の研究面の連携に関して学会の存在意義を認める回答が多かった。2. 学会に望むことについては、次世代を担う若い研究者・学生が積極的に参加できる環境づくりを指摘する意見が目立った。3. 会員以外には、バイオフィードバックについて正しく分かりやすく理解してもらう情報提供の必要性を訴える意見が多かった。以上の結果に基づいて今後学会の方向性に関する提案を行った。(8 頁) (分担執筆者：中尾睦宏、大須賀美恵子、廣田昭久、佐久間春夫、志和資朗、竹林直紀、辻下守弘) 担当部分：アンケート調査の作成からデータ整理と統計分析および考察の一部の執筆を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
高齢者に対する視覚誘導性到達課題を用いた音楽運動療法の開発とその効果に関する研[筆頭論文] （査読付）	共著	平成 27 年 3 月	医療福祉情報行動科学研究 第 3 号 平成 27 年 3 月 pp.27～32	本研究では、視覚誘導性到達運動課題を用いた音楽運動療法を開発することとこれが高齢者のバランス能力に及ぼす影響を明らかにすることであった。対象は 70 歳以上の健常高齢者 16 名であり、実施群 8 名と対照群 8 名の 2 群に割り付けた。評価は機能的バランス尺度（BBS)、TUG、FRT および静的重心動揺計と動的姿勢制御検査とした。5 回の練習後、BBS、FRT そして動的姿勢制御検査の有意な改善を認めた。(6 頁) (分担執筆者：辻下守弘、川村博文、永田昌美、前田吉樹) 担当部分：研究全般を実施し論文全体の執筆を担当した。
Kinectセンサーを使った仮想環境が高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成 27 年 4 月	バイオフィードバック研究 第 42 巻第 1 号 平成 27 年 4 月 pp.57～62	Microsoft 社により開発された Kinect センサーを使った風船割りゲーム「キネリハシステム」を使って高齢者にゲームを定期的に行ってもらい、仮想環境が高齢者の運動機能にどのように影響を及ぼすかを検討した。デイケアに週 2 回以上通う高齢者 23 名に対しキネリハシステムを週 2 回以上 4 週間実施した。この前後に(1)10m 歩行(2)TUG(3)5StepTest を測定し 4 週間完遂した者について結果を比較した。その結果、継続してゲームを行い施行期間の最後まで継続してやり遂げ(1)～(3)を測定できた者は 7 名だった。ゲーム後の結果が(2)と(3)において有意に向上していた($p<0.05$)。(6 頁) (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
介助者による介助の経時的変化に基づいた介助評価方法の検討－認知症を有する高齢障害者への介護職員による移乗介助場面の行動論的分析－ （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学 第 30 巻第 6 号 平成 27 年 12 月 pp.933-937	車椅子からベッドへの移乗課題を用い、介助を基準に被介助者の遂行レベルを査定する評価法の妥当性を行動論の視点から検討した。対象は施設介護職員および入所中の認知症を有する高齢障害者とした。介助者の 4 段階の介助系列をもとに 6 段階の遂

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				行レベルを設定し、各単位行動が遂行されたときの介助を遂行機会ごとに図示し、介助の経時的変化を被介助者の遂行レベルの推移の視点から分析した。その結果、被介助者による遂行過程は単位行動ごとに異なった遂行レベルを推移しており，従来 ADL 評価法とは視点の異なる情報が得られた。 (分担執筆者：小林和彦、辻下守弘) 担当部分：症例の評価と介入指導および論文の結果と考察の一部の執筆を担当した。
生体センシング技術を使った仮想現実によるゲームが高齢者の運動機能に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成27年12月	理学療法科学 第30巻第6号 平成27年10月 pp.811-815	生体センシング技術を使ったゲームを高齢者に行わせ仮想現実を利用したゲームが高齢者の運動機能にどう影響を及ぼすかを予備的調査した。高齢者23名に対しゲームシステムを週2回以上4週間実施した。4週間実施前後の①10m 歩行②TUG③5StepTest の 3 つのパフォーマンステストの結果及びゲームの測定機能を利用したゲームに対する平均反応速度とゲームの成功率について比較した。その結果、②と③及び平均反応速度・成功率に於いて施行後が施行前に比べ有意に向上していた。またゲーム完遂者に運動習慣があるものが有意に多かった。 (分担執筆者：小貫睦巳、有田元英、井上悦治、辻下守弘) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の一部の執筆を担当した。
中年女性に出現する肩こりと腰痛の重複症状の実態とその関連要因に関する研究 （査読付）	共著	平成28年3月	甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 第 10 号 平成28年3月 pp.1-10	本研究では、パソコン操作を主体とした作業に従事する中年女性従業員 335 名を対象として、肩こりと腰痛の重複症状が出現する実態を明らかにするとともに、その身体的、心理的、社会的な要因との関連性について検討した。症状なし群、肩こり単独群、腰痛単独群、そして両者重複群という4群間において各要因を比較したところ、分散分析により有意な主効果を認めたのは、年齢、運動態度、食行動、K6、そしてクッパーマン指数であった。多重ロジスティック回帰分析の結果、肩こりと腰痛の両者重

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				複と関連する要因は、低い BMI、高い K6 スコア、そして高いクッパーマン指数であった。 (分担執筆者：辻下 守弘、永田 昌美、芝 寿実子、前田 吉樹、川村 博文、小貫 睦巳) 担当部分：データ収集から統計処理および論文執筆を担当した。
心身のストレスおよび作業量からみた体圧移動で座面が変化する ER チェアの健常成人女性および高齢者を対象としたプレテストの結果から （査読付）	共著	平成 28 年 3 月	甲南女子大学研究紀要(看護学・リハビリテーション学編) 第 10 号 平成 28 年 3 月 pp. 19-28	本研究は、高齢者用に開発した ER チェアと通常の椅子を比較し、対象者の心身のストレスにどのような影響をもたらすかを検証することとした。被験者は、参加条件を満たした健常成人女性 6 名と高齢者 8 名の計 14 名である。研究デザインはクロスオーバー・デザインとし、被験者には ER チェアと通常の椅子の 2 種類の椅子に座った際に５つの課題を課した。分析の結果、主観的疲労感の全身倦怠感において、被験者全体の操作実施前後の平均値は ER チェアが減少したが、通常の椅子は増加し、平均値の差の比較で統計的に有意な差が認められた(p=.04)。また、唾液アミラーゼ量において、高齢者の操作実施前後の平均値は ER チェアがやや減少し、通常の椅子が増加して統計的に有意な差が認められたが(p=.04)、交互作用が認められた。 (分担執筆者：丸尾 智実、兼田 美代、臼井キミカ、辻下 守弘、速水 裕子) 担当部分：データ収集から統計処理および論文の結果の執筆を担当した。
骨盤臓器脱術後の便失禁症状に骨盤底筋の筋電図バイオフィードバック療法が奏効した症例 （査読付）	共著	平成 28 年 4 月	バイオフィードバック研究 第 43 巻第 1 号 平成 28 年 4 月 pp. 19-26	今回、骨盤底筋の選択的筋収縮が困難であった便失禁を有する症例に対して、骨盤底筋の筋放電を確認しながら筋収縮を確認し、筋収縮を調整する筋電図バイオフィードバック療法が症状の改善に有効であったので報告した。症例は、膀胱瘤により骨盤臓器脱術を受けた 70 歳の女性である。骨盤臓器脱の症状は手術により改善したが、運動時にガス程度の便失禁が 4～5 回以上認められた。評価および介入は、Thought

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
				Technology 社製の Myotrac3 を用い、骨盤底筋と腹筋を分離して筋収縮させることを目的として実施した。10 セッション実施の結果、持続的収縮においては 8 セッションから骨盤底筋のみを収縮させることが可能となった。運動時の失禁頻度は 6 セッション時から減少した。 （分担執筆者：松谷 綾子、青田 絵里、西上 智彦、辻下 守弘、服部 耕治、木村 俊夫） 担当部分：症例の評価と治療および論文の症例報告と考察の一部の執筆を担当した。
行動分析学の枠組みを用いたコンピューターシミュレーション教材による介護老人保健施設介護職員への介助- 高齢障害者に対するベッドから車椅子への移乗介助指導効果の- （査読付）	共著	平成 28 年 8 月	行動療法研究 第 42 巻第 2 号 平成 28 年 8 月 pp. 201-213	本研究においては、行動分析学の視点から理論および介助の方法論を解説したパソコン上で作動する教材を開発し、介護職員 3 名に自己学習とセルフチェックを行ってもらい、介護老人保健施設入所者に対するベッドから車椅子への移乗介助技能への効果を、単一事例実験計画法を用いて検証した。その結果、3 名とも適切な介助の頻度が増加(平均 46.2%)し、彼らが日頃介助している入所者も、より少ない介助で移乗が行えるようになった。また、移乗介助指導の効果が同じ入所者の脱衣介助に反映されることも確認された。さらに、指導プログラムの内容や意義に関しても比較的良好な受け入れや評価が得られた。以上から、従来の指導方法によるデメリットを補完する役割を果たすことができ、本教材が介護職員指導における効果的な方法論として位置づけられる可能性が示唆された。 （分担執筆者：小林和彦、辻下守弘） 担当部分：共同研究につき本人担当部分抽出不可能。
疼痛に対する物理療法・運動療法	共著	平成 28 年 8 月	The Japan Journal of Rehabilitation Medicine 第 53 巻第 8 号 平成 28 年 8 月	本論文では、疼痛に対する治療としての物理療法、運動療法について、有効性に関わる理論的な裏付けから臨床のエビデンスを交えて検討した。その結果、急性痛と慢性痛とでは、対応が異なり、急性痛には過度な不活動を避け、原因となる組織損傷の

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
			pp.604-609	治療を下級的早期に進めることと、可能な限り疼痛を抑制し長期化を阻止することが重要であることが分かった。また、慢性痛では、感覚面に着目する以外に、情動面や認知面などの多面的、複合的な側面での特性の認識理解が不可欠であり、ADL や QOL 向上を目的として、TENS などの物理療法、運動療法、学際的集学的治療を導入することが重要であることがわかった。 (分担執筆者：川村博文、西上智彦、伊藤健一、大矢暢久、辻下守弘) 担当部分：文献収集と整理および論文の慢性疼痛に関する部分の執筆を担当した。
インタラクティブ・メトロノーム法の紹介とリハビリテーションへの応用可能性	単著	平成 28 年 9 月	奈良学園大学紀要 第 5 集 平成 28 年 9 月 pp.1-9	本論文では、運動・認知機能のリハビリテーションに欠けていた脳内時計と時間情報処理能力を高めるというコンセプトを導入した新しいトレーニング方法であるインタラクティブ・メトロノーム法（Interactive Metronome®:以下 IM と略す）について、その歴史、原理と方法、トレーニングの手順、そして科学的根拠を概説した上で、リハビリテーションへの応用可能性について解説した。IM の利点は、リズム音に手と足の動きを同調させてタイミングをとるといった非常にシンプルなトレーニングであり、2 歳程度の幼児から高齢者まで適用範囲が広く、生体への侵襲も全くないため、従来のリハビリテーションへ併用して使用可能なことである　ただし、現在の問題点は、科学的根拠を裏付ける IM の臨床研究が国際的にも不足していることや IM システムが日本における医療機器の薬事承認を得てないことであった。
バーチャルリアリティ(VR)技術を用いた高齢者のリハビリテーションに関する文献的研究	単著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要　第　7　集 pp.75-81	コンピュータサイエンスの発展によってバーチャルリアリティ（VirtualReality：VR）技術が身近になった。一方で、わが国は急速なスピードで超高齢社会が進行し、要介護状態の高齢者が急増する中で、高齢者のリハビリテ-ションが注目されている。そこ

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概　　要
				で、本論文では、VR の定義と特徴を解説した上で、主に Wii と Kinect センサーを用いた高齢者リハビリテーションへの応用に関する国内外の現状と課題を文献的に考察した。その結果、Wii と Kinect センサーを用いたトレーニングが高齢者の心身機能に及ぼす影響を明らかにした良質の無作為化比較対照試験（RCT）は少ないものの、高齢者の機能的なバランス能力を改善させる効果のあることが多くの論文で示唆されていた。VR を用いた高齢者のリハビリテーションには課題もあるが、より没入感の強いヘッドマウントディスプレイが普及することで、今後は高齢者リハビリテーションへの応用可能性が拡大すると考えられた。
タイ王国の周産期－チェンマイ大学看護学部の視察を通して－	共著	平成 29 年 9 月	奈良学園大学紀要　第　7　集 pp. 179-185	タイ王国北部にあるチェンマイ大学を視察し、タイ王国における周産期看護の現状についての現状把握を行った。共働きの家庭が多いタイ王国では、仕事を持つ母親たちの多くが授乳のための環境が整っていないために母乳で育児を行うことは困難であり、母乳育児率の低下が問題視されていた。こういった社会的背景から、母乳育児の重要性についての啓発活動と環境を改善するための王室によるプロジェクトが発足し、企業の事業所内の授乳コーナー設置や無料での母乳輸送サービスの提供などが現在では行われていた。日本においても母乳育児の利点については知られてはいるが、タイ王国のようなサービスの整備までには至っていない状況なため、タイ王国の周産期看護についての現状を把握することは、日本の周産期看護の質改善のための示唆を得ることにつながると考えられた。 （分担執筆者:田中和奈、守本とも子、辻下守弘）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
リハビリテーション医療におけるバイオフィードバック―脳卒中片麻痺に対する応用可能性について	単著	平成 29 年 9 月	バイオフィードバック研究 第 44 巻第 2 号 pp.70-75	本研究の目的は、各種の生体情報を音や光などの人間にわかりやすい情報へ変換し、その情報に基づいて自己の状態を調整するバイオフィードバック（以下 BF）に対するリハビリテーション医療（以下リハ医療）への応用可能性を検討することであった。リハ医療の特徴は、一般的な医療が手術や投薬など医療者に依存した受動的治療であるのに対して、残存機能の回復や健常機能への代償など患者自身による能動的治療が主体となることであり、患者の学習過程への介入が重要なアプローチとなる。本論文では、その効果的な介入方法としての BF に関して、その治療メカニズムについて学習理論を用いた解説を行った。また、脳卒中片麻痺に対す表面筋電図 BF について、コンパクトな BF 機器である MyoTrac の操作方法と治療手続きとその効果および臨床応用上の課題について論説した。最後に、EEG（脳波計）や HEG（近赤外線方式脳血流計）を用いたニューロフィードバックトレーニングが脳卒中だけでなく他の神経系障害および運動器障害へのリハビリテーションに応用されていく可能性を検証し、多様なモダリティを使った BF がリハ医療に応用されていく必要性について論説した。
Comparison of the pain-relieving effects of transcutaneous electrical nerve stimulation applied at the same dermatome levels as the site of pain in the wrist joint （手関節部の疼痛に対する頸部と対側手関節および両者の同一皮膚分節知覚帯への経皮的膚電気刺激が疼痛軽減に及ぼす影響の比較）	共著	平成29年11月	Journal of Physical Therapy Science Vol.29 No.11 pp.1996-1999	本研究の目的は、手関節部の疼痛に対する対側同一皮膚分節知覚帯への経皮的電気刺激(Transcutaneous Electrical Nerve Stimulation:以下 TENS)が疼痛緩和にどのような影響を及ぼすかを検討することであった。対象は 15 名の健康な成人女性（21.9±0.3 歳[21-22 歳]）であった。実験手続きは、まず 30 秒間の安静後に左手関節背側部へ47℃で60秒間の温熱刺激にて疼痛を生じさせ、その後に頸部(N)と対側手関節部(CW)および両者（CWN）への TENS（周波数:15Hz・波長:200 μs）を実施した。その結果、TENS

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概　　要
				を行わない対照群を含んだ 4 条件の分散分析では視覚的アナログ尺度（VAS）の違いに有意な主効果を認めたが、N 条件、CW 条件、CWN 条件間には有意差を認めなかった。本研究の結果、疼痛部位と同一の皮膚分節知覚帯への TENS には有意な効果があるものの、TENS 部位間での有意差は認められなかった。 （分担執筆者：川村博文、西上智彦、山本綾子、辻下守弘、伊藤健一、大矢暢久、高木峰子） 担当部分：被験者への疼痛評価と TENS の実施および統計処理と論文の結果に関する部分の執筆を担当した。
（その他） 手織りプログラムへの参加が認知機能の活性化に与える影響 ［口頭発表］	―	平成 22 年 1 月	第 14 回日本在宅ケア学会学術集会（東京） p. 94	S シルバー人材センターに登録中の 58 歳から 77 歳の女性で、手織り機を用いて作品を作成するプログラム参加者 43 人を対象に、週 1 回 1 クール 3 ヶ月間のコースを 2 回実施した結果、事象関連電位 P300 と近赤外線分光法を用いた脳イメージングによる測定で、前頭前野の左側部が有意に活性化していることが明らかとなった。 （共同研究者：臼井キミカ、中川知音、丸山麻衣、佐瀬美恵子、兼田美代、辻下守弘、山口道弘、佐々木八千代、白井みどり、上西洋子、津村智恵子） 担当部分：事象関連電位 P300 と近赤外線分光法による脳イメージング測定を担当した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
膝蓋大腿関節機能不全に対する筋電図バイオフィードバック療法の一経験 [口頭発表]	—	平成 25 年 4 月	第 41 回日本バイオフィードバック学会学術集会（神奈川） バイオフィードバック研究第 40 巻第 1 号 2013 年 p. 88	交通事故により膝蓋腱損傷を受傷し，再建術後に膝蓋大腿骨腎機能不全となった症例に対して筋電図バイオフィードバック療法（以下 BF と略す）を実施し、歩行障害の改善に著効を認めたので、その実施方法と経過について報告した。退院時には、不安定性や疹痛もなく、階段昇降やスクワット動作も問題なくスムーズ に可能となっていた。 (共同研究者：辻下守弘、西上智彦、笹田朋香、 山本昇吾、孫 康基、梶原沙央里、田辺暁人) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
高齢者に対するキネクトセンサーを用いたインタラクティブ・リハビリテーションの効果 [口頭発表]	—	平成 26 年 4 月	第 42 回日本バイオフィードバック学会学術集会（東京） バイオフィードバック研究第 41 巻第 1 号 2014 年 p. 50	本研究の目的は、高齢者を 対象としてキネリハを用いた運動トレーニングを実施し、全身の機能的身体運動能力やバランス能力に及ぼす 影響および認知脳機能に対する効果について検討することであった。対象は、認知症や中枢神経系疾患のないことが確認された健常高齢者 3 名であった。キネリハの所要時間は休息も入れて約 15 分とし，週 3 回の頻度で 2 週間継続した。キネリハの結果 3 名ともに FRT はリーチ距離が改善し、TUG は所要時間が短縮していた。ファイブ・ コグテストは手先の運動スピードと注意分割機能が 3 名とも向上していた。 (共同研究者：辻下守弘、川村博文、西上智彦、松谷綾子、井上悦治) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。
認知症患者に対するインタラクティブ・メトロノームの症例報告 [口頭発表]	—	平成 27 年 3 月	第 1 回認知症の早期発見、予防・治療研究会（東京） 抄録集 p. 14	本研究では、認知機能の改善を目的とした IM トレーニングが、高齢者の認知症に対しても同様の効果が期待できると考え応用を試みたので報告する。対象は、IM トレーニングを 3 ヶ月間継続できた認知症高齢者 2 名とし、認知症の評価には、改訂長谷川式簡易知能評価スケール（HDS-R）と IM の専

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の 名称	概　　要
				用ソフトに内蔵されているミリ秒単位でタイミング誤差を測定する評価ツールを使用した。IMは、1セッション約20分とし、提示される1分間54のテンポに対して正確にタイミングを合わせて両手、左右片手といった3種類のリズム運動を週3回､3ヶ月間実施した。被験者2名は、IMに対する意欲が3か月間維持され、トレーニング開始時に比較して、タイミング誤差が大幅に短縮し、それに伴ってHDS-Rの改善も認められた。IMは、認知症の認知機能の改善にも効果が期待できる。
タイミング誤差のフィードバックトレーニングが時間認知に及ぼす影響 [口頭発表]	—	平成27年4月	第43回日本バイオフィードバック学会学術集会（つくば） バイオフィードバック研究第42巻第1号2015年 p.85-86	本研究では、注意欠陥多動性障害（ADHD）と認 知症といった代表的な認知機能障害に対してタイミング誤差のフィードバックトレーニングを継続的に実施する機会を得た。対象は、ADHDの中学生1名とアルッハイマー型認知症の高齢者 1 名であった。トレーニングには、インタラクティブ・メトロノー ム法（IM）を用いた。IMは、1セッション約30分とし、提示されるテンポに対して正確にタイミングを合わせてリズム運動を行う課題を8週間で合計56セッション実施した。その結果、ADHD ではセッション中期以降でタイミング誤差が小さくなり、認知症ではセッション中期で急激にタイミング誤差が小さくなっていた。 (共同研究者：辻下守弘、西上智彦、松谷綾子、青田絵里) 担当部分：症例の評価から治療および論文の執筆まで研究の全般を担当した。

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名　　西川　隆

研　究　分　野	研究内容のキーワード
内科系臨床医学，神経科学	精神神経科学，神経科学一般，神経心理学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1）作業療法学専攻における精神医学の授業に参加型演習を導入	平成 22 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部作業療法学専攻学生 2 年次授業科目「精神障害論」（後に「精神医学Ⅱ」）において，毎回，前週に検討課題を与えてグループによる事前学習を行わせ，授業ではプレゼンテーション・討論・総括を行い，翌週までに総括のレポートを提出させるという今日のいわゆるアクティブ・ラーニングを実践し，課題検討能力の向上をはかった。
2）作業療法学専攻における高次脳機能障害学の授業に参加型演習を導入	平成 22 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部作業療法学専攻学生 3 年次授業科目「認知心理障害論Ⅱ」（後に「高次脳機能障害学Ⅱ」）において，毎回，前週に検討課題を与えてグループによる事前学習を行わせ，授業ではプレゼンテーション・討論・総括を行うという今日のいわゆるアクティブ・ラーニングを実践し，課題検討能力の向上をはかった。
3）大学院生に対する職域横断的学術活動の支援	平成 22 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科大学院生に対し，各自の研究テーマに応じて，作業療法士・言語聴覚士・理学療法士などの職域を超えた医学分野の学会（老年精神医学会，高次脳機能障害学会，統合失調症学会等）への加入を促し，学会報告・論文発表を指導して，職域横断的な学術活動の能力向上をはかった。 現在，医療専門職として就業している社会人大学院生が多いという事情を考慮し，週 1 回，大阪市中心部にあるサテライト教室で夜間に研究指導を行った。
2　作成した教科書，教材 精神医学マイテキスト	平成 23 年 4 月 ～ 平成 30 年 3 月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部における「精神医学」（後に「精神医学Ⅰ」）の講義に用い，理学療法学専攻および作業療法学専攻の学生に，精神医学の諸理念と歴史，症候学，精神疾患の各論的知識を習得するために活用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成 18 年 7 月	公立大学法人大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科臨床支援領域修士課程（職名：教授，講義科目：高次脳機能障害学特論 M可，研究指導：臨床支援特別演習 M○合，特別研究 M○合）の資格ありと判定
大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成 20 年 8 月	公立大学法人大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科博士後期課程（職名：教授，講義科目：高次脳機能障害学特別講義　D可，研究指導：臨床支援特別演習Ⅱ D○合，臨床支援特別演習Ⅲ D○合，特別研究Ⅱ D○合，特別研究Ⅲ D○合）の資格ありと判定
4　実務の経験を有する者についての特記事		

5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）医師免許	昭和 54 年 5 月	医師免許（第 244771 号）
2）博士（医学）	平成 13 年 11 月	大阪大学 16585
3）日本精神神経学会精神科専門医	平成 18 年 4 月	会員番号 04466
4）老年精神医学会専門医	平成 16 年 6 月	第 001676 号
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事		
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 疾病と治療Ⅲ （看護学テキスト NICE）	共著	平成 22 年 11 月	南江堂	看護師養成の基礎教育および臨床実習用のテキストシリーズのうち腎・泌尿器系，脳・神経系，精神，女性生殖器系，小児の各疾患の概念と診断・治療の知識を解説した書。 B5 版　全 438 頁 編者：松田暉，荻原俊男，難波光義，鈴木久美，林直子。 本人担当部分「失行」「失認」「遂行機能障害」の各節（227-232）。 症候の概念と病態，診断・評価法を解説した。
2 精神医学マイテキスト	共著	平成 23 年 4 月	金芳堂	精神科治療に関わるコメディカル・スタッフおよび養成課程学生の教育に資することを目的に作成された教科書 B5 版　全 214 頁 監修者：武田雅俊 編者：西川隆，中尾和久，三上章良 共著者：漆葉成彦，加藤佳也，手島愛雄，中川賀嗣，中広全延，福永知子，松浦玲子，丸山総一郎，山本晃，横井公一 本人担当部分「序論」「精神症候学」「脳局在症候」「画像検査」の項（1-38，59-62） 精神医学の重要性を健康寿命・入院者数・自殺者数の観点から説明し，精神医学の理念と方法がヒューマニズムにもとづくものであることを解説した。

3 高次脳機能障害 Q&A 症候編	共著	平成 23 年 10 月	新興医学出版社	高次脳機能障害を学ぶ上で生じる疑問を項目別に詳しく解説した書 B5 版　全 209 頁 編者：河村満 本人担当部分「消去現象と空間無視の関連」の項（74-76） 消去現象と空間無視はしばしば合併するが，両者は症候学的にも原因病巣の面でも独立した症候であることを過去の知見にもとづいて説明した。
4 意識と睡 （脳とこころのプライマリケア 5）	共著	平成 24 年 6 月	シナジー	脳とこころに関する病態を体系的に解説した全書のうち，意識と睡眠に関する分野における最近の研究知見を基礎から臨床まで詳述した書 B5 版　全 840 頁 監修：日野原重明，宮岡等 巻編者：千葉茂 本人担当部分「特殊な意識障害　解離性障害」の項（264-271） 解離性障害は防衛機制として意識の一部を自己から分離あるいは変容させることにより生じる病態である。てんかんや昏睡との鑑別を中心にその症状と病態を解説した。
5 脳血管障害と神経心理学　第 2 版	共著	平成 25 年 9 月	医学書院	脳血管障害による局在病変と各神経心理学的症候の関連を脳解剖生理学的病態理論を踏まえて総合的に解説した書 B5 版　全 550 頁 編者：平山恵造，田川皓一 本人担当部分「情動障害」の項（67-76） 脳血管障害によって現れる各種の気分・感情の障害につい知見を総説し，そ神経基盤と病態機序について解説した。
6 認知症ハンドブック	共著	平成 25 年 11 月	医学書院	認知症診療に必要な知識を全項目にわたって詳しく解説した書 A5 版　全 907 頁 編者：中島健二，天野直二，下濱俊，冨本秀和，三村將 本人担当部分「認知症の診断―問診」の項（109-115） 認知症の問診手順と技法，留意事項について解説した。
7 症例で学ぶ高次脳機能障害-病巣部位からのアプローチ-	共著	平成 26 年 9 月	中外医学社	高次脳機能障害に関する種々の実例をもとに，各症候の病巣部位と病態を解説した書 B5 版 全 274 頁 編者：鈴木匡子 本人担当部分「脳梁前部」の項（236-245） 脳梁前部症候群を呈した症例を提示しその病態と診断上の留意点および脳梁の機能解剖学的知識を解説した。

8 注意と意欲の神経機構	共著	平成 26 年 10 月	新興医学出版社	従来の認知科学では捉え難かった人間の注意と意欲の神経基盤とメカニズムについて種々の病態を通じて検討した書 A5 版 全 280 頁 編者：日本高次脳機能障害学会教育・研修委員会 本人担当部分「消去現象の病態と注意機構」の項(97－118) 消去現象とは一側刺激では感知可能な刺激が両側刺激ではその一方を感知し得ないという現象である。その病態に関する研究の知見を総括し解説した。
9 精神・心理機能評価ハン ドブック	共著	平成 27 年 6 月	中山書店	精神疾患や神経疾患でみられる精神・心理的障害および症状の評価尺度と検査法を解説した書 B5 版 全 528 頁 編者：山内俊雄，鹿島晴雄 本人担当部分「重度認知症における認知機能検査」 重度認知症の認知機能を評価しうる検査として著者らが新たに開発した評価尺度を解説した。
10 情動とトラウマ	共著	平成 29 年 4 月	朝倉書店	心的トラウマが与える精神発達への影響と精神障害発生の病態機制および治療戦略を生物学的・心理学的・社会学的側面から多面的に解説した書 A5 版 全 230 頁 編者：三村將　奥山眞紀子 本人担当部分「ストレス関連障害に対する他の精神療法」の項（216-223） ストレス関連性精神障害の精神療法のうち認知行動療法を除く他の精神療法について効果のエビデンスにもとづく推奨度を国際外傷性ストレス研究学会のガイドラインに沿って解説し，理論的背景を解説した。
21 女性のメンタルヘルス	共著	平成 29 年 11 月	南山堂	平成 26 年の女性活躍推進法の制定を受け，働く女性のメンタルヘルスの向上と不調の予防および治療について総合的に解説した書 B5 版 全 274 頁 編者：丸山総一郎 本人担当部分「女性のメンタル不調の診察」の項（71-78） 女性がメンタルヘルスの不調を呈した際の診察手順とその際に考慮すべき女性特有の生活史背景と心理的要因について解説した。
（学術論文）				

1 島根県内の老健施設における認知症の周辺症状と介護負担の実態調査 （査読付）	共著	平成 22 年 9 月	島根医学 30(3)184-191	施設利用者の周辺症状と介護負担の実態を調査し，その発生頻度と種類，原疾患，認知症の重症度，認知機能，介護負担度を調査した。入所者の多くが認知症を有し，周辺症状は多い順に，無為・無関心，うつ・不快，不安，睡眠障害，興奮，易怒性，異常行動，妄想，幻覚，脱抑制，食行動異常，多幸であり，そのうち，不安，無為・無関心の 項目は全般的なの介護負担に有意な影響を与えていた。 本人担当部分：研究計画，調査，データ分析，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：中山博識，大西久男，西川隆
2 重度認知症者のための認知機能検査 －‘Severe Cognitive Impairment Rating Scale’日本語版の臨床的有用性の検討 － （査読付）	共著	平成 25 年 10 月	老年精神医学雑誌 24(10)：1037-1046	重度認知症患者にとって既存の認知機能検査は難易度が高く，残存する認知機能を詳細に把握することが困難である．海外では，重度認知症患者の認知機能検査として，Severe Cognitive Impairment Rating Scale (SCIRS)が開発されている．本研究では，SCIRS の日本語版を作成し，臨床的有用性を検討した．その結果，既存の検査では床効果を示した患者に対しても，SCIRS を用いてより詳細に認知機能を判別できた．以上より，日本語版 SCIRS は重度認知症者の残存する認知機能を詳細に幅広く測定可能な検査であると考えられた． 本人担当部分：研究計画，調査，データ分析，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，植松正保，永田優馬，福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆
3 認知症患者における認知機能，ADL，BPSD の関連性　重度認知症患者に着目して （査読付）	共著	平成 26 年 3 月	老年精神医学雑誌 25(3)：316-323	94 人の認知症入院患者を対象に，認知機能，日常生活活動 (ADL)，周辺症状 (BPSD) の関連性を検討した。その結果，ADL が高ければ認知機能障害が軽度で，移動能力が高いほど BPSD が増悪することが明らかになった。また，重度認知症患者では，認知機能検査，ADL 検査においていくつかの検査項目で床効果を示した。そのため，重度認知症患者向けの各検査が必要であると考えられた。 本人担当部分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，植松正保，小城遼太，永田優馬，福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆
4 利き手・非利き手での到達把持動作での予測的な戦略の検討	共著	平成 26 年 3 月	四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要 平成 26 年度	高齢者の巧緻動作能力の低下における特徴を検討するために，到達運動時に見られる Pre-shaping において最大切線速度出現時点と母指・示指間最大距離出現時点を指標として若年者と比較を行った。その結果，高齢者では Pre-shaping が若年者に比べてより早期に出現することが示された。 本人担当部分：研究計画，結果の考察に関わった。 共著者：田丸佳希，内藤泰男，西川隆，松下太，杉原勝美，西田斉二，川上永子，北山淳，銀山章代，上田任克

5 ライフヒストリーカルテの作成　生活史を多職種で共有する意義 （査読付）	共著	平成26年7月	老年精神医学雑誌 25(7)801-808	医療・介護療養型病床および介護老人保健施設に入院・入所している患者のケアに資することを目的に対象者の生活史を多職種が短時間で把握できる共有ツールの作成を試みた。ケアスタッフへの意識調査により，記載すべき情報として，出身地，家族関係，　家族や友だち，遊び，仕事，結婚，人柄，印象に残っている姿，生活習慣，誇りなどが挙げられた。 本人担当部分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：田中寛之，山本祐子，小城遼太，永田優馬，日垣一男，西川隆，植松正保
6 非失語性失書を合併したタイピング障害の一例　― 失書との関連 ― （査読付）	共著	平成27年6月	高次脳機能研究 35(2)233-241	非失語性の失書を伴うタイピング障害例の病態を検討した。失書は運動覚性失書であり，タイピングの障害は打鍵位置の空間的誤りによるものであった。左中心前回，角回に病巣を有し，音韻選択や配列に関わる左中前頭回後部には及んでいなかった。タイピングは書字と神経基盤の一部を共有していることが示唆された。 本人担当部分:症例の診断，神経学的所見，画像所見，検査結果の分析と考察，論文執筆に関わった。 共著者：坂井麻里子，柏木敏宏，江口香織，西川 隆
7 Development of the Cognitive Test for Severe Dementia （重度認知症のための認知機能テストの開発） （査読付）	共著	平成27年6月	Dement Geriatr Cogn Disord 40(1-2)：94-106	中等度から重度の認知症患者に対して既存の認知機能検査は床効果を示し，特に重度認知症者に対しては残存する認知機能を測定することができない。著者らは認知機能7領域13項目からなる重度認知症患者向けの認知機能テスト(the Cognitive Test for Severe Dementia；CTSD) を開発し，信頼性と妥当性を検討した。CTSDは床効果を示さず，信頼性・妥当性も確認された。CTSDは他の認知機能検査と比較して重度認知症患者の残存する認知機能を鋭敏に測定することができる。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Uematsu M, Takebayashi T, Hanada K, Inokawa M, Fukuhara K, Ogawa Y, Haga D, Kakegawa Y, Nishikawa T

8 右前頭葉内側面損傷により漢字の純粋失書を呈した一例 (査読付)	共著	平成27年6月	神経心理学 31(3)204-212	右前頭葉内側面損傷により漢字の純粋失書を呈した 1 症例について失書の発現機序を検討した．漢字の誤り方の特徴として，無反応に次いで形態性の誤りが多かった．漢字の書字の成否は画数ではなく，構成要素数の多さと関係し，錯書の場合は構成要素が他の漢字の構成要素に置換されることが多く，そのほとんどが実在する構成要素を組み合わせていた．他の言語機能に問題がなかったことから，本例の漢字の失書は，音韻の配列や意味から文字形態を想起する過程は終盤近くまで保たれているが，最終段階における構成要素の選択と配置の誤りによって生じているものと考えられた. 本人担当部分:症例の診断,神経学的所見,画像所見,検査結果の分析と考察,論文執筆に関わった。 共著者:坂井麻里子,鈴木則夫,柏木敏宏,西川隆
9 Decline of gustatory sensitivity with the progression of Alzheimer’s disease (アルツハイマー病の進行とともに低下する味覚感度) (査読付)	共著	平成28年3月	International Psychogeriatrics 28(3)511-517	アルツハイマー病患者 32 名の甘味・塩味・酸味・苦味に関する味覚閾値をテーストディスクを用いて測定するとともに,味覚弁別,味覚同定能力を評価した。健常対照群と比較した。患者の味覚閾値は初期から低下し認知症の重症度とともに進行した。酸味・苦味は弁別はできるが同定は困難であったが,甘味だけは同定能力が保たれていたことから,アルツハイマー病患者にみられる甘味への強い嗜好性の基盤に基礎的な味覚障害が関与している可能性が示唆された。 本人担当分:研究計画,結果の考察,論文執筆を担当した。 共著者:Sakai M, Ikeda M, Kazui H, Shigenobu K, Nishikawa T
10 重度認知症に対する従　来の QOL 尺度の限界 (査読付)	共著	平成28年4月	老年精神医学雑誌 27(4): 429-437	を対象に開発された QOL 尺度が用いられてきたが,近年,その QOL 概念の枠組みは異なると示唆されている。36 人の重度認知症者を対象に,自己評点式尺度と代理評点式尺度をそれぞれ2種類従来のQOL尺度を用いて,重度認知症者に対する適応性を検討した。適応性の検定の結果,4尺度の内の1尺度内における2項目が適合基準を満たしただけであった。重度認知症者に対する従来の QOL 尺度の適応性には限界があると考えられた. 本人担当分:研究計画,結果の考察,論文執筆を担当した。 共著者:永田優馬,田中寛之,石丸大貴,植松正保,福原啓太,小川泰弘,内藤泰男,西川隆

11 右前頭葉の発話・書字への関与― 一過性の発話開始困難と持続的な漢字の純粋失書を呈した症例からの考察	共著	平成 28 年 6 月	高次脳機能研究 36(2)236-243	前補足運動野を含む右前頭葉内側面損傷により一過性の発話開始困難と持続性の漢字の失書を呈た症例を報告した。右前頭葉内側面損傷による失書は過去に報告されていない。本例の書字の成否は，漢字の画数や使用頻度に依存せず，構成要素(偏や旁など漢字を構成する要素的単位)の数が増すほど書字が困難であり，その誤りの特徴は構成要素の置換であった。右前頭葉内側面は漢字書字を実現する過程の終盤の段階で，構成要素の選択・配列に関与している可能性が示唆される。 本人担当部分：結果の考察，論文執筆を担当した 共著者：坂井麻里子，鈴木則夫，西川隆
12 線画に比べ実物や写真でより顕著な障害を認めた視覚失認の一例 (査読付)	共著	平成 28 年 6 月	高次脳機能研究 36(2)304-311	特異な視覚失認と大脳性色覚障害，失語症，前向性健忘を呈する症例を報告した。左側の舌状回・紡錘状回を含む後頭葉から側頭葉内側下部に病変を有し，一般的に視覚対象の認知は実物や写真より線画のほうが難しいと考えられているのに反して，症例では線画に比べ実物や写真の認知が不良であった。症例の視覚認知機能をさらに検討した結果，輪郭情報にもとづく対象の認知は比較的保たれていたが，陰影や奥行きの情報を統合し，立体感のある対象として認知することが困難であると考えられた。 本人担当部分：結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：竹田奈央子，渋谷静英，塚本能三，西川隆，柏木敏宏
13 脳血管障害によりフレ　ゴリの錯覚と身体パラ　フレニアを合併した 2　症例 (査読付)	共著	平成 28 年 6 月	高次脳機能研究 36(2)312-319	脳血管障害による右半球病変に伴って身体パラフレニアとフレゴリの錯覚を合併した 2 症例を報告した。Feinberg らは，身体パラフレニアを，カプグラ症候群と同型の病態構造を有していると指摘しているが，身体パラフレニアとカプグラ症候群の合併の報告はみられない。一方，身体パラフレニアにフレゴリの錯覚の合併をうかがわせる記述は少数見出された。身体パラフレニアと人物誤認症候は右半球とりわけ前頭葉病変に共通した責任病巣があるものと考えられており，これまで注目されてこなかったが，フレゴリの錯覚と身体パラフレニアはより高率に合併している可能性がある。 本人担当分：画像所見，結果の考察，文献的検討，論文執筆を担当した。 共著者：掛川泰朗，磯野理，西川隆

14 家族からのビデオレタ ーによる simulated Presence Therapy が言語的混乱行動を軽減させた認知症高齢者の一症例 (査読付)	共著	平成29年4月	作 業 療 法 36(2): 223-229	家族からの語りをオーディオ・ビデオテープに録音・録画・再生する擬似的再現療法とはことで感情を刺激し,快適さをもたらす療法を認知症高齢者の一症例に実施した結果,介入前と比較して介入後に言語的混乱行動の回数に有意な軽減を認めたが,音楽刺激では効果がみられなかった。家族からのビデオレターによる擬似的再現は症例の欲求不満を軽減する作用があると考えられた。 本人担当分:結果の考察,論文執筆を担当した。 共著者:田中寛之, 永田優馬, 石丸大貴, 小城遼太, 西川隆
15 Impaired Interpretation of Others' Behavior is Associated with Difficulties in Recognizing Pragmatic Language in Patients with Schizophrenia (統合失調症において他者の行動の理解障害は語用論的言語理解障害と関連している) (査読付)	共著	平成29年10月	Journal of Psycholinguistic Research 46(5): 1309-1318	統合失調症患者34人と健常者34人に対して,心の理論課題,比喩皮肉文課題,社会常識テストを実施した,全ての課題において,患者群は健常群よりも有意に障害されていた。また患者群内において比喩理解能力と正常行動理解能力,皮肉理解能力と異常行動理解能力の間に有意な相関がみられた。統合失調症患者の社会的認知機能障害はこれら 2 つの語用論的要因を含んでいることが示唆された。 本人担当分:研究計画,結果の考察,論文執筆を担当した。 共著者:Fukuhara K, Ogawa Y, Tanaka H, Nagata Y, Nishida S, Haga D, Nishikawa T
16 Earlier and greater hand pre-shaping in the elderly: a study based on kinetic analysis of reaching movements to grasp objects (高齢者にみられる早期のより大きな手 pre-shaping:物体把握到達運の運動学的分析に基づく研究) (査読付)	共著	平成29年11月	Psychogeriatrics 17(6): 382-388	物体把握の準備動作として到達運動期間にみられる手の形態変化を Pre-shaping という。高齢者の巧緻動作の評価とともに,高齢者群と若年対象者群の Pre-shaping を運動解析装置を用いて比較したところ,Pre-shaping の最大切線速度出現時点と母指・示指間最大距離出現時点高齢者の方が若年者に比べてより早期に出現することが示された。この結果は高齢者においては巧緻動作能力の低下を代償する方策として Pre-shaping を変化させていることを示唆している。 本人担当部分:研究計画,結果の考察,論文執筆に関わった。 共著者:Tamaru Y, Naito Y, Nishikawa T

17 Gustatory dysfunction as an early symptom of semantic dementia (意味性認知症の初期症状としての味覚障害) (査読付)	共著	平成29年11月	Dement Geriatr Cogn Dis Extra 7(3): 395-405	意味性認知症(SD)患者18名とアルツハイマー病(AD)患者18名，健常対照者に対して，味覚閾値および味覚弁別・味覚同定の能力を測定し比較した。SDとADではともに早期より健常者に比べて味覚閾値が低下しており，その傾向はSDでより目立った。この研究はSDの味覚閾値を測定した初めての研究である。SDではADと比較してより甘味への嗜好性の強いことが知られているが，その背景には基本的な味覚機能低下が関与していると考えられる。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Sakai M, Ikeda M, Kazui H, Shigenobu K,Komori K, Ikeda M, Nishikawa T
18 Development of the Japanese version of the Quality of Life in late-stage Dementia Scale (Quality of Life in late-stage Dementia Scale日本版の作成) (査読付)	共著	平成30年3月	Psychogeriatrics 18(2): 106-112	重度認知症者のQOL尺度は海外でも少数しか開発されておらず，日本ではまだ臨床に導入されていない。本研究は海外で開発され広く使用されている Quality of Life in late-stage Dementia Scale(QUALID)を原著者の許可を得て翻訳して日本版(QUALID-J)を作成し，その信頼性と妥当性を検討したものである。70人の重度認知症者に評価を施行し，十分な信頼性・妥当性を有する検査であることが確認された。今後重度認知症患者の治療や介護の効果判定に役立つことが期待される。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Nagata Y, Tanaka H, Ishimaru D, Uematsu M, Naito Y, Nishikawa T
19 Clinical Utility of the Cognitive Test for Severe Dementia: Factor Analysis, Minimal Detectable Change, and Longitudinal Changes (Cognitive Test for Severe Dementiaの臨床的有用性：因子分析，最小検出可能変化値，長期変化) (査読付)	共著	平成30年6月	Dement Geriatr Cogn Dis Extra 8(2): 214-225	著者らが開発した重度認知症患者向けの認知機能テストCTSD (the Cognitive Test for Severe Dementia) の臨床的有用性をCOSMIN checklistによって検討した。232人の認知症患者における認知機能の変化を追跡し，そのデータにもとづいて1)因子分析による構成妥当性，2)標準誤差と最小検出可能変化値による信頼性と解釈可能性，3)長期変化による反応性，を検討した。結果はCTSDが信頼しうる評価指標であることを示した。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Nishikawa T

20 Physical Activity in Severe Dementia is Associated with Agitation Rather than Cognitive Function (重度認知症の身体活動は認知機能でなく焦燥と関連している) (査読付)	共著	令和1年9月	Am J Alzheimers Dis Other Demen doi: 10.1177/1533317519871397.	重度認知症者における身体活動と認知機能・日常生活活動(ADL)・心理行動症状(BPSD)の関連を検討した。認知症患者 63 名の 1 日身体活動量をアクティウォッチで定量的に計測し，認知機能・日常生活活動・心理行動症状の各評価尺度の結果との関連を分析した。重度認知症者の身体活動は認知機能ではなく BPSD の焦燥と相関していた。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ishimaru D, Tanaka H, Nagata Y, Nishikawa T
21 Insight Into Illness and Defense Styles in Schizophrenia (統合失調症における病識と防衛様式) (査読付)	共著	令和1年9月	J Nerv Ment Dis 207(10):815-819	統合失調症者における病識と防衛機制，認知機能の関連を検討した.38 名の統合失調症患者に SAI-J（病識尺度），DSQ(防衛様式)，BACS-J（神経認知機能），BPRS（精神症状)を施行した結果，認知機能と精神症状を統制した重回帰分析によって，病識は未熟な防衛機制に関連していることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Ogawa Y, Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Nishikawa T
22 Clinical factors associated with Activities of Daily Living and their decline in patients with severe and profound dementia (重度および最重度認知症患者の日常生活活動とその低下に関連する臨床要因) (査読付)	共著	令和2年3月	Psychogeriatrics 20(3):327-336	認知症患者の ADL に影響を及ぼす因子を検討した。131 人の患者に Personal Self-Maintenance Scale (PSMS) (ADL 尺度) と CTSD(認知機能尺度)，NPI-NH と CSDD(PPSD 尺度)，MNA-FS (栄養状態)，CCI（合併疾患)等による評価の 6 か月間の変化を測定し，重回帰分析を行った結果，最重度の段階の認知症においても ADL 機能の低下を最もよく予測する因子は認知機能であることが示された。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, Fukuhara K, Nishikawa T
23 認知症における engagement 評価尺度；日本語版 Menorah Park Engagement Scale の臨床的有用性の検討 (査読付)	共著	令和2年3月	老年精神医学雑誌 31(3):304-310	engagement とは活動に取り組む主体の態度のことであり，認知症者のリハビリテーションにおいては重要な要因と考えられるが，本邦ではいまだこれに関する評価尺度は導入されていない。海外で使用されている Menorah Park Engagement Scale を原著者の許可を得て日本語に翻訳し，その信頼性と妥当性を検討した。日本語版 Menorah Park Engagement Scale は認知症者の engagement を評価する上で有用性な尺である。 本人担当分：研究計画，結果の考察，論文執筆を担当した。 共著者：石丸大貴，田中寛之，永田優馬，西川隆

（その他） 「総説」 1 意図と脳の左右：脳の中の弁証法	単著	平成23年6月	Brain Medical 23(2): 163-170	脳梁離断例で出現する拮抗失行や意図の抗争という症候においては左右の半球に異なる意図が存在することが明らかになる。健常者の場合，左右の半球は相互に矛盾する意図が生じた場合に両者を統合してより合理的な行動を創造することにより進化と個体発達が実現してきたと考えられることを論じた。
2 神経心理学からみた高齢者の認知機能低下	共著	平成24年4月	老年精神医学雑誌 23(4): 441-454	高齢者において減衰する認知機能低下に関して神経心理学的機能の各領域についてこれまでの内外の研究知見をレビューし解説を加えた。近年のこの分野の研究は社会学的認知機能に及んでおり，加齢の影響を受ける程度には多様な差があることを指摘した。 本人担当部分：資料収集，執筆 共著者：小川泰弘，西川隆
3 現象学に対する神経心理学的見地からの若干のコメント	単著	平成25年3月	神経心理学 29(1): 44-53	現象学は近代の科学的客観主義が動態的な現実を抽象的に捉えていることを批判し，主体的体験を根拠として現実をとらえようとする思想であった。このような視点は，ともすれば客観主義的な人間観を抱きがちな今日の脳科学や神経心理学に対しても重要な批判的観点であることを指摘した。
4 外来で早期に認知症を疑うコツ	単著	平成27年3月	治療 97(3): 313-316	一般的な診療において外来患者が認知症であることを治療者が疑うのはどのような所見を見出したときであるか，いくつかの経験上の要点を解説した。
5 脳梁と精神疾患	単著	平成27年3月	神経内科 82(3):297-304	脳梁離断症状は自己の単一性や同一性の障害を招くことがら，離断学説が提起されて以来，統合失調症や心因性の解離症状のモデルとされてきた。脳梁の解剖生理学的知識と症候学および精神疾患と関連する研究史の流れを解説し，今後の展望を述べた。
6 DSM-5からみた複合性注意の領域	共著	平成28年12月	神経内科 85(2):182-187	アメリカ精神医学会の精神疾患診断マニュアルDSM-ⅣからDSM-5への改訂に伴い，認知症の診断基準に含まれる認知機能が5領域から6領域に増えるとともに，領域間をまたいだ再編成が行われた。新たに設けられた「複合性注意」の概念を改訂の背景とともに開設した。 本人担当分：執筆 共著者：永田優馬，田中寛之，石丸大貴，西川隆

7 統合失調症患者における語用論的言語（比喩・皮肉）の理解能力に　ついて （査読付）	共著	平成 28 年 12 月	Journal of Rehabilitation and Health Sciences 1415-25	語用論の定義や統合失調症患者の言語使用に関する学術的背景,統合失調症患者の比喩・皮肉理解における障害についての知見を総説し,言語的観点からの統合失調症者に対する支援方法と今後の展望について指摘した。 本人担当分：執筆 共著者：福原啓太，田中寛之，小川泰弘，永田優馬，田中宏明，大西久男，西川隆
8 グローバリゼーションの負債－貧困・高齢の都市生活者に見える風景－	単著	平成 30 年 2 月	臨床精神医学 47(2):169-175，2018	グローバリゼーションやボーダーレスが進行する社会的影響について，都市の貧困・単身の高齢者の視点から最近の社会変化がどのように見えるかを救護施設での医療経験を踏まえ，素描した。
9 重度認知症者のための認知機能検査：Cognitive Test for Severe Dementia, Severe Cognitive Impairment Rating Scale	共著	平成 30 年 11 月	老年精神医学雑誌 29(11):1175-1181	重度認知症者の認知機能の変化を検出するためには残存する限られた機能を検出し,それをさらに段階づけることができるだけの感度を備えていることが必要である。現在日本で使用しうる検査のうち，著者らが開発した CTSD と同じく著者らが翻訳導入した SCIRS の 2 つの認知機能検査について，それぞれの内容と特徴を解説した。 本人担当分：執筆 共著者：田中寛之，永田優馬，石丸大貴，西川隆
「辞典」				
1 現代精神医学事典	共著	平成 23 年 1 月	弘文堂	精神医学に関する辞典 A5 版 全 1391 頁 編者：加藤敏，神庭重信，中谷陽二，武田雅俊，鹿島晴雄，狩野力八郎，市川宏伸 執筆者：570 名 本人担当部分　意識・神経心理学に関する諸項目

教　育　研　究　業　績　書

令和2年3月31日

氏名　　橋 本 雅 至

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
健康・スポーツ科学 人間医工学	スポーツ科学、運動療法、動作分析、バイオメカニクス、病態運動学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 7）実技を取り入れた実践的な講義・実習	平成25年4月 ～ 現在に至る	大阪河﨑リハビリテーション大学リハビリテーション学部　「運動器系理学療法学」「運動器系理学療法学実習」「スポーツ・リハビリテーション」において実践的な実技を中心とした講義とプレゼンテーション資料の作成、実技の復習や練習が可能な講義資料を作成した。
2　作成した教科書，教材 5）ビデオ教材の作成	平成25年4月	大阪河﨑リハビリテーション大学 リハビリテーション学部理学療法学専攻 「臨床運動学演習」の動画の自主作成症例の基本動作ビデオ、高齢者の歩行動作(約250名)の動画集
10）実践PTノート運動器傷害の理学療法（第2版）（三輪書店）	平成25年4月	大阪河﨑リハビリテーション大学 リハビリテーション学部理学療法学専攻 「運動器系理学療法学実習」のテキスト作成
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 30）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成22年5月	大阪府理学療法士会　堺市ブロック　研修会「下肢・体幹部の運動連鎖に関する基礎知識と評価・分析」
31）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成22年9月	大阪府理学療法士会　堺市ブロック　講習会「下肢・体幹部の運動連鎖を考慮したアプローチ」
32）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成23年2月	第8回生涯スポーツ研究会「足部機能と運動連鎖の観点からスポーツ障害の発生について考察する」
33）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成23年9月	行岡リハビリOB会研修会「下肢障害の理学療法～足関節疾患を中心に～」

事項	年月日	概　　要
34）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成23年10月	大阪回生リハビリテーション研究会「足部のアプローチから下肢・体幹の機能へ運動連鎖について考える」
35）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成24年3月	大阪府理学療法士会泉州ブロック特別講演会「下肢運動連鎖からみた身体運動の捉え方～仮説と検証の繰り返し～」
36）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成24年6月	大阪府理学療法士会　豊能ブロック研修会「足部・足関節の機能からみた立位・歩行観察」
37）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成25年1月	平成24年度大阪府理学療法士会生涯学習部・講習会「立位姿勢・歩容を変化させるための評価とアプローチ」
38）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成25年1月	第23回京都府理学療法士学会教育講演「運動器疾患の理学療法における臨床力」
39）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成25年5月	（公社）大阪府理学療法士会　豊能ブロック主催第1回新人教育プログラム講習会
40）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成25年9月	（公社）奈良県理学療法士会主催　第21回公開講座「アンチエイジングの秘訣　それは『脚から』」
41）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成25年12月	和歌山県高等学校体育クラブキャプテン研修会「身体の土台、足から考えてみる」
42）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年5月	大阪河﨑リハビリテーション大学同窓会（河泉会）スキルアップスキンシップ講座「下肢関節疾患（膝関節）の評価と治療」
43）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年6月	(公社)大阪府理学療法士会　大阪南ブロック　研修会 「下肢運動連鎖を考慮した観察的動作分析とアプローチ（導入編）」
44）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年9月	(公社)大阪府理学療法士会大阪南ブロック技術講習会「下肢運動連鎖を考慮した観察的動作分析とアプローチ（実技編）」
45）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年10月	大阪臨床整形外科医会療法士会研修会「膝関節障害に対する理学療法～動作解析と評価から治療～」

事項	年月日	概　　要
46）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成26年12月	あしべん主催特別講習会「立位・歩行のための体幹機能と動作のとらえ方」
47）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成27年5月	第14回　日本良導絡自律神経学会　近畿ブロック講習会「病態運動学から見たスポーツ傷害のとらえ方とアプローチ」
48）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成27年12月	あしべん主催特別講習会「身体運動連鎖の基盤となる体幹機能をどう捉えるか？」
49）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成27年5月	第14回　日本良導絡自律神経学会　近畿ブロック講習会「病態運動学から見たスポーツ傷害のとらえ方とアプローチ」
50）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成27年12月	あしべん主催特別講習会「身体運動連鎖の基盤となる体幹機能をどう捉えるか？」
51）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成28年10月	(公社)大阪府理学療法士会　堺ブロック　研修会「歩行を診る」
52）現職者対象の研修会、講習会の講師	平成28年12月	あしべん主催特別講習会「力学的観点から歩行を診る～動作分析の際、考慮すべきポイント～」
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1）理学療法士関連	昭和63年4月 平成16年12月 平成22年4月	理学療法士免許（第15840号）取得：厚生労働省 第31回理学療法士・作業療法士養成施設等教員講習会修了：厚生労働省（第3370号） 専門理学療法士（運動器3-115）認定：日本理学療法士協会
2）大学教育関連学位	平成9年9月 平成12年3月 平成17年3月	学士(社会学)取得：佛教大学第42456号 修士（体育学）取得：大阪体育大学大学院第73号 博士（スポーツ科学）取得：大阪体育大学大学院第3号
2　特許等 特になし		

事項	年月日	概　　要
3　実務の経験を有する者についての特記事項 5）医療機関での臨床実務歴	平成7年4月 ～ 現在に至る	金井整形外科医院非常勤にて外来部門を担当。週1回の診療にて外来症例の理学療法を行っている。対象症例に対して自宅リハや自主運動の立案、診療時のチェックを頻回に行った。十数年に渡り診療を継続している症例も少なくない。
8）医療機関での臨床実務歴	平成18年4月 ～ 現在に至る	宝持会池田病院リハビリテーションセンター非常勤にて、外来部門の夜間診療を担当。週1回の診療にて外来症例の理学療法を行っている。特にスポーツ選手のリハビリテーションを多く担当している。また若い理学療法士の教育的立場から臨床指導を行っている。
4　その他 1）学外研究機関などとの共同研究 (株)ワコール人間科学研究所	平成17年4月 ～ 現在に至る	運動機能に着目したアンダーウェア、スポーツウェアの開発と三次元動作解析装置を用いた効果の検証
(株)本田技術研究所四輪R&Dセンター	平成23年4月 ～ 現在に至る	自動車の乗降動作の関する動作解析 大阪電気通信大学吉田研究室との3施設の共同研究

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
(著書)				
7. 歩行を診る －観察から始める理学 療法実践－	共著	平成23年3月	(株)文光堂	歩行動作の改善を目的に臨床で経験する障害ごと、また疾患ごとに歩行動作をいかに捉え、アプローチするかを具体的に解説した。さらに理学療法効果を高めることに効果的な道具や器具、アイテムの使用についてもまとめてある。（Ａ５判　全478頁） 編者：松尾善美 ①本人担当部分： （各論28）テーピング、インソールを必要とする対象者（ｐ．390～ｐ．408）を共著。 歩行を分析、アプローチする際にテーピングやインソールパッドなどを用いて歩容の変化から理学療法の戦略を具体化していく方法を紹介し、例示しながら解説した。共著者：橋本雅至、伊佐地弘基、岡田亜美 ②本人担当部分： （各論29）スポーツウエアを必要とする対象者（ｐ．409～ｐ．426）を単著。 テーピングなどの効果を利用し、歩行などの荷重位動作の機能にアプローチする方法を紹介し、テープの効果を持続させるためのスポーツウエアの紹介や利用方法について解説した。
8. 理学療法Mook９ スポーツ傷害の理学 療法(第2版)	共著	平成23年3月	(株) 三輪書店	第1版より、さらに最新情報をふまえてスポーツ外傷・障害全般的に理学療法士の観点から発生要因や力学的ストレスなどスポーツ競技を困難にする病態運動学について解説している。またその要因をふまえて適切な理学療法について臨床の観点から紹介、解説している （Ｂ５判　全400頁） 編著者：福井勉、小柳磨毅 本人担当部分： 第3章四肢と体幹の傷害に対する理学療法4. 下肢のスポーツ障害の理学療法① （ｐ．71～ｐ．82）を共著。 下肢のスポーツ障害について発生要因とその対応策、発症後のコンディショニング、トレーニングおよび再発予防の観点から解説した。特に運動学、運動力学的側面から工夫したトレーニングの紹介や運動解析のデータからスポーツ障害の発生要因について考察を加えた。 共著者：中江徳彦、橋本雅至、田中則子
9. 実践PTノート 運動器傷害の理学療法 (第2版)	共著	平成25年4月		運動器傷害の概論と運動療法に関して実際に実践している実技内容を部位ごとに紹介した。さらに自己学習のため、その手技の動画をDVDに収録し講義外での実技練習に役立てるように工夫した。第1版から内容の見直しと追加を行い、より実践的な内容に再編した （Ａ４判　全210頁） 編著者：小柳磨毅 共著者：上野隆司、吉本陽二、橋本雅至、 淵岡聡、中江徳彦、佐藤睦美、境隆弘 共著者全員での執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10. 教科書にはない敏腕PTのテクニック −臨床実践変形性膝関節症の理学療法−	共著	平成28年5月	(株)文光堂	日常診療でよく診る変形性膝関節症について，経験豊富な敏腕理学療法士による長年の創意工夫により，臨床現場で行われている技術のコツについて解説した。 （Ｂ５判　全192頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 膝OAの外科的治療を理解し術後に活かす（ｐ．47～ｐ．59）を共著。 人工膝関節置換術を中心にその手術方法を解説し、皮膚切開から術後の理学療法の工夫や考慮のポイントを解説した。特に術後関節可動性に影響を与えやすい術創部のアプローチを具体的に紹介した。 共著者：橋本雅至、木下和昭 ②本人担当部分： 膝OA患者の術前・術後の歩容改善をねらう（ｐ．120～ｐ．134）を単著。 手術前の状態から手術後の歩容の改善を、その時期に分けて解説した。特に術後の残存する体幹機能の不具合に着目して具体的なアプローチについて紹介している。
11. 教科書にはない敏腕PTのテクニック −臨床実践足部・足関節の理学療法−	共著	平成29年5月	(株)文光堂	足部・足関節に頻発する運動器傷害を中心に評価やアプローチについて臨床で行っている実践的な内容をまとめた。運動器疾患以外にも内科的障害に起因する足部の障害についてもあわせて解説した。 （Ｂ５判　全179頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 足部・足関節機能と身体運動との関係をとらえる（ｐ．25～ｐ．38）を共著。 足部・足関節の力学的機能について解説し、身体運動時の基礎としての役割に対して必要な機能を解説した。また機能不全の場合のアプローチについて紹介を行った。 共著者：橋本雅至、木下和昭 ②本人担当部分： 扁平足障害−足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．70～ｐ．84）を共著。 臨床で経験する扁平足障害が足部にとどまらず、身体運動に影響を及ぼす関係性について解説し、その評価方法やアプローチについて紹介した。 共著者：中尾英俊、橋本雅至 ③本人担当部分： 有痛性外反母趾−足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．85～ｐ．98）を共著。 外反母趾変形でも有痛性の場合を重要視して、足部にとどまらず、身体運動に影響を及ぼす関係性について解説し、その評価方法やアプローチについて紹介した。特に靴の工夫やインソールなどについて具体的に解説した。 共著者：生島直樹、橋本雅至 ④本人担当部分： 後脛骨筋腱、腓骨筋腱の要害−足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．99～ｐ．113）を共著。 足アーチ機能を担保する筋群に加わる力学的ストレスを具体的に紹介し、その頻回な負荷が引き起こす筋腱の障害を解説した。足部機能だけではなく、身体の重心保持の機能を含めて具体的に解説した。 共著者：瓜生玲子、橋本雅至

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12. 統合と解釈がよくわかる実践！理学療法評価学	共著	平成30年3月	(株)医歯薬出版	西守隆 編著，上杉雅之監修 （Ｂ５判　全305頁） 本人担当部分： 第4章4アキレス腱断裂(手術適応例)．　（ｐ．196～ｐ．205）を共著。 アキレス腱断裂術後の理学療法を臨床上の工夫を踏まえて解説した。 共著者：橋本雅至、木下和昭
13. 教科書にはない敏腕PTのテクニック -臨床実践　肩関節の理学療法-	共著	平成30年5月	(株)文光堂	橋本雅至，村西壽祥 編集 （Ｂ５判　全194頁） ①本人担当部分：
14. 教科書にはない敏腕PTのテクニック -臨床実践体幹の理学療法-	共著	令和1年8月	(株)文光堂	橋本雅至　編集 （Ｂ５判　全179頁） ①本人担当部分：
（学術論文） [原著論文] 38. グラウンドサーフェイスの変化が大学サッカー選手のスポーツ傷害に及ぼす影響 -土グラウンドとロングパイル人工芝グラウンドとの比較- (査読付)	共著	平成22年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.18 (2) :P.256-P.263	グラウンド表面の違いがサッカー選手のスポーツ傷害の発生に与える影響を調査した。土グラウンドで練習を行った１年間とその後人工芝グラウンドで行った１年間に発生したスポーツ傷害を集計し、人工芝では土グランドと比して上肢の傷害発生が多かった。要因として下肢の易疲労による転倒の増加、スライディングなどの練習プレー内容の変化が考えられた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衛、 橋本雅至、山野仁志、岸本恵一、藤竹俊輔
39. 大学サッカー選手に対する足趾屈曲筋力トレーニングの効果 (査読付)	共著	平成22年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.19 :P.3-P.6	スポーツ傷害の発生と足趾屈曲筋力との関連から、足趾屈曲筋力を継続的にトレーニングすることが基本的なパフォーマンステストとの関連を調査し、検討を加えた。結果はトレーニング介入前後では片脚立位能力、最大1歩踏み出し能力が向上した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衛、 橋本雅至、山野仁志、岸本恵一、藤竹俊輔

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
40. Side-Bridge動作での運動条件変化に伴う体幹筋・股関節周囲筋の筋活動 （査読付）	共著	平成22年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.19 :P.40-P.52	体幹筋トレーニングにて用いられるサイドブリッジ動作に運動負荷の変化を加えることによって変化する筋活動を筋電図学的に考察した。股関節外転筋や体幹の固定に働く筋活動を効率よく高められる方法を具体的に述べた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、田頭悟志、井上直人、森洋子、新谷健
41. クラウス・ウェーバーテスト変法と体幹深部筋エクササイズにおける筋活動量について （査読付）	共著	平成22年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.19 :P.53-P.56	体幹筋機能の測定やトレーニングに用いられる動作や姿勢保持における体幹筋の活動を客観化するために内腹斜筋にワイヤー電極を用いた筋電図測定によりデータを得た。結果、サイドブリッジやクラウス・ウェーバーテスト変法の姿勢保持が筋活動を高めていることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：杉本拓也、林慈晃、池内誠、柳田育久、橋本雅至、日下昌弘、大槻伸吾、大久保衛
42. 高校サッカー選手における体幹筋トレーニングが腰痛発生予防へ与える効果 （査読付）	共著	平成22年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.18 (3) :P.504-P.510	高校サッカー選手において体幹筋機能の変化と腰痛の有無に関する 経時的変化を調査した。高校サッカー選手14名に9ヵ月間体幹筋トレーニングを継続した結果、Side Bridge testの平均点が、介入前5.3±2.7点から介入後9ヵ月で10.3±2.7点($p<0.001$)と有意に増加し、体幹筋機能が向上したと考えられる。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：井上直人、橋本雅至、田頭悟志、大槻伸吾
43. サッカー選手のボールキック動作と下肢荷重位の動作における足アーチ高率とアーチ沈降率の分析 （査読付）	共著	平成22年9月	臨床バイオメカニクス Vol.31 :P.477-P.483	サッカー選手を対象に下肢荷重位動作時の足アーチの変化を客観化し、その動作の特性を考察した。片脚スクワット、キック動作時の足アーチの低下より、片脚スクワット時の低下が大きく、床反力の方向に違いと足関節角度の違いが関与していると推察された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、田邉智、大槻伸吾、大久保衛、橋本雅至、岸本恵一、藤竹俊輔

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
44. Side-Bridge の姿勢保持における筋活動の経時的変化について （査読付）	共著	平成23年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.20 :P.5-P.8	Side-Bridge の姿勢を長時間保持させて、体幹と股関節周囲筋の筋疲労についてEMGを用いて評価した。EMG上の筋疲労を示す変化が確認され、Side-Bridge の姿勢が体幹筋の筋疲労を評価する有用性について示唆した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、田頭悟志、板矢悠佑、新谷健、宮沢将史
45. グラウンドサーフェイスの違いが大学サッカー選手のスポーツ外傷に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成23年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.20 :P.25-P.28	天然芝グランドと人工芝グランドのおけるスポーツ外傷の発生について調査した。サーフェイスの違いにより、下肢などの身体疲労部位などに違いがあり、スポーツ外傷発生に部位や種類に違いがあることが分かった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衞、橋本雅至、岸本恵一、辻信宏、田中一成、中村信之、来田晃幸、藤竹俊輔
46. 腰椎変性疾患患者における腰椎アライメントと腰痛疾患治療成績判定基準との関連について （査読付）	共著	平成23年7月	近畿理学療法学術大会誌 Vol.40	中高年期の腰椎疾患の中でも変性疾患に着目し、X線撮影にて得た腰椎のアライメントデータと治療効果判定に用いる身体機能評価項目との関連性を考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：内原由佳子、橋本雅至、中尾英俊、金沢淳則
47. 高校男子サッカー選手における体幹筋機能と運動時腰痛発生の経時的変化 （査読付）	共著	平成23年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.19 (3) :P.551-P.557	高校生サッカー選手の運動時腰痛と体幹筋機能の継続的な調査から、運動時腰痛の軽減には一定以上の筋機能が必要であり、かつそれを維持する必要があることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：河野詩織、橋本雅至、井上直人、田頭悟志、大槻伸吾
48. 下肢機能サポートウエアが荷物を持ち、おろす動作における下肢筋活動に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成23年10月	臨床バイオメカニクス Vol.32 :P.469-P.475	スポーツウエアを中心に市販されている機能的なウエアの実際の効果について客観することを目的に動作解析装置とEMGの分析から検討を行った。結果、ウエアの着用により、一定の筋活動の軽減効果が認められることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、論文執筆 共著者：橋本雅至、三谷保弘、山田隆登

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
49. 高校生男子サッカー選手に対するコンディショニングサポートが運動時腰痛に与える影響 （査読付）	共著	平成24年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.21 :P.23-P.28	高校生に対して1年間継続的に行った体幹筋トレーニングとストレッチングの指導と実施が、運動時腰痛の発生と如何に関連するかについて検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：古川博章、、石束友輝、吉川晋也、山崎岳志、橋本雅至、井上直人、木下和昭、田頭悟志、森洋子
50. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化 （査読付）	共著	平成24年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.21 :P.25-P.32	人工芝グラウンドでの練習が常態化したクラブにおけるスポーツ傷害の発生について約4年の追跡し、調査・検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、来田晃幸、藤竹俊輔、岸本恵一、橋本雅至、大久保衛
51. 大学サッカー選手の足部・足関節傷害に対する足部アーチ保持筋力トレーニングの効果 （査読付）	共著	平成24年6月	理学療法科学 Vol.27（3） :P.263-P.267	大学サッカー選手に対して足部のアーチ機能に着目して継続的にトレーニング指導した。結果、足趾把持力と片脚立位時間が増大し、足関節捻挫の発生率が低下した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛
52. リスフラン靭帯損傷に対する理学療法の経験－保存治療について （査読付）	共著	平成24年6月	PTジャーナル Vol.46（6） :P.563-P.567	観血的治療も選択されるリスフラン靭帯損傷に対して、保存的治療を選択し、理学療法や下肢全体や体幹に着目したトレーニング指導によりスポーツに復帰できた症例について報告した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：岡徹、中川拓也、奥平修三、古川泰三、橋本雅至
53. 大学サッカー選手の第5中足骨疲労骨折における発生因子の検討 （査読付）	共著	平成24年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.20（3） :P.543-P.549	サッカー選手に好発する第5中足骨の疲労骨折の発生要因を身体的特徴や練習条件から考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、仲田秀臣、大槻伸吾、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大久保衛
54. 荷物の運び下ろし動作の運動解析 －荷物の重さの違いが身体運動に及ぼす影響－ （査読付）	共著	平成24年10月	臨床バイオメカニクス Vol.32 :P.353-359	荷物を運搬し、立ち止まり、床に下ろす動作における下肢の動作分析を行った。三次元動作解析機器を用いて下肢の運動と身体重心のへ負荷を客観し、荷物の重さによる変化について検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：三谷保弘、橋本雅至

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
55. 高校サッカー選手の腰痛予防に対するコアエクササイズの効果 （査読付）	共著	平成24年11月	スポーツ傷害 Vol.17 :P.44-P.47	高校生サッカー選手に継続的に体幹筋を中心としたトレーニングを行わせ、運動時腰痛の有無を経時的に測定した。結果、体幹筋機能は向上するが、腰痛の軽減に必ずしも関係しているとは言えなかった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、論文執筆 共著者：橋本雅至、石束友輝、井上直人、 木下和昭、田頭悟志
56. 高校サッカー選手の運動時腰痛発生について股関節可動性と周囲筋タイトネスの検討 （査読付）	共著	平成25年1月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.21（1） :P.5-P.10	高校サッカー選手の腰痛発生要因として体幹筋機能の低下以外に股関節の可動性の低下が腰椎の回転負荷を増加し、腰痛発生と関係することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：井上直人、橋本雅至、河野詩織、 古川博章、田頭悟志、木下和昭、大槻伸吾
57. 大学サッカー選手の第5中足骨疲労骨折と身体的要因の関係 （査読付）	共著	平成25年3月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.33（1） :P.37-P.42	継続的のフォローしている大学サッカー部の選手の身体的特徴とサッカーに多い第5中足骨の障害との関連性について調査した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、 橋本雅至、大久保衛
58. 大学サッカー選手における足部スポーツ障害に対するインソールの治療効果 （査読付）	共著	平成25年3月	靴の医学 Vol.26（2） :P.40-P.44	大学サッカー部に所属している選手のスポーツ障害調査と障害を有する選手のインソールを使用したアプローチがもたらす効果について検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、橋本雅至、 大久保衛
59. クラウス・ウェーバーテスト変法と体幹深部筋エクササイズにおける腹横筋の筋活動量について （査読付）	共著	平成25年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.22 :P.25-P.27	体幹筋機能を向上させる目的に行われるトレーニング動作について実際の筋活動量の観点からその効果について検討した。筋活動の測定には、ワイヤー電極を用い、深部の筋活動を導出した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：杉本拓也、能登洋平、林慈晃、池内誠、 仲哲治、土井龍雄、柳田育久、田邉　智、 大槻伸吾、橋本雅至、大久保衛

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
60. デジタルカメラによる胸腰椎可動域測定法の一検討(第一報) (査読付)	共著	平成25年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.22 :P.29-P.31	デジタルカメラにて撮影した静止画を用いて条件間の角度の変化から脊柱の可動性を予測した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：福本貴典、田頭悟志、板矢悠佑、高嶋厚史、橋本雅至
61. 第5中足骨疲労骨折の既往を有する大学サッカー選手におけるターン動作時の足部圧力解析 (査読付)	共著	平成25年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.22 :P.39-P.41	サッカー選手の好発する足部第5中足骨骨折の発生要因として切り返し動作の繰り返しが考えられる。実際にターン動作にて足部の同様な力学的なストレスが加わるかを客観化し、発生要因を検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、藤竹俊輔、 来田晃幸、岸本恵一、武村政徳、辻田純三、 橋本雅至、大久保衛
62. 大学サッカー選手における足部スポーツ障害に対するインソールの有用性 (査読付)	共著	平成25年7月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.33 (3) :P.292-P.297	縦断的に調査を継続している大学サッカー選手に認められる足部スポーツ障害に対して、市販のインソールの使用がスポーツ障害発生にどのように影響を及ぼすかを検討した。結果、インソールの使用の有用性が示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、 橋本雅至、大久保衛
63. 荷物の持ち上げ動作時の下肢および体幹の運動力学的解析 (査読付)	共著	平成25年10月	理学療法科学 Vol.28 (5) :P.619-P.622	日常生活から職業動作によく見られる荷物の持ち上げ動作について動作分析を行った。三次元動作解析装置を用いて体幹、下肢の力学的負荷を客観化した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：三谷保弘、橋本雅至、北川智美、 松木明好
64. 高校男子サッカー選手における体幹筋機能と股関節可動域が運動時腰痛に及ぼす影響 (査読付)	共著	平成26年1月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 :P.59-P.66	高校生のサッカー選手を対象に体幹筋の持久性と協調性を見た機能評価と股関節の可動性と柔軟性が､スポーツ動作時の腰痛発生に及ぼす影響を考察し､その関連性を示唆した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：吉川晋矢、橋本雅至、井上直人、 古川博章、木下和昭、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
65. 高校男子サッカー選手における入学年度別の体幹筋機能と運動時腰痛発生の経時的変化 (査読付)	共著	平成26年3月	四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要 9号 :P7-P14	縦断的に調査している高校生サッカー選手が各年代の体幹機能評価の結果に特徴があることが分かり、その後トレーニング介入した結果、運動時の腰痛が一時期改善するが、その後僅かに増加する傾向があることが分かった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：石束友輝、橋本雅至、井上直人、 木下和昭、古川博章、大槻伸吾
66. 大学アメリカンフットボール選手におけるSide Bridge testと体幹筋力との関係 (査読付)	共著	平成26年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (2) :P.297-P.301	大学生の体幹機能を瞬発力の観点と筋持久力の観点から測定し、その関連性を検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、 新宮信之、廣瀬ちえ、橋本雅至、田頭悟志、 木下和昭
67. 第5中足骨疲労骨折の既往を有するサッカー選手の切り返し動作の動作解析 (査読付)	共著	平成26年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (2) :P.331-P.335	第5中足骨の骨折経験のあるサッカー選手の方向転換(切り返し)動作をハイスピードカメラにて撮影し､その足部の関節運動を健常者と比較検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、 橋本雅至、大久保衞、熊井司、田中康仁
68. 大学サッカー選手における足関節捻挫の競技復帰に影響を及ぼす要因の検討 (査読付)	共著	平成26年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.23 :P.19-P.21	縦断的に調査している大学サッカー選手の足関節捻挫についてスポーツ復帰に影響を及ぼす身体的特徴(筋力、柔軟性など)を検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大久保衞、大槻伸吾、 藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、田中康仁
69. ハンドヘルドダイナモメーターを用いた体幹機能評価方法の再現性と関連性 (査読付)	共著	平成26年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.23 :P.27-P.29	体幹筋の筋力測定にハンドヘルドダイナモメータを用いた測定に関してその再現性について級内相関係数を用いて検討を行った。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、米田勇貴、中雄太、 北西秀行、大八木博貴、橋本雅至、柴沼均

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
70. 本学学生の国家試験前後における不安の変化 （査読付）	共著	平成26年6月	リハビリテーション教育研究 19号 P.216-P.217	最終学年の学生を対象に国家試験前後の不安状態を客観化し､その変化について検討を行った。資格を取得する教育課程において最終目標となる国家試験は多くの学生において不安をもたらす要因となることが考えられた。 本人担当部分：研究指導 共著者：小杰武陛、岡健司、髙橋泰子、 橋本雅至、酒井桂太
71. 荷重による足部アーチの変化が足部スポーツ障害の発生に与える影響　大学サッカーチームの8年間の前向き研究 （査読付）	共著	平成26年7月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.34 (3) :P.307-P.311	荷重負荷による足部アーチ高の沈降率を測定し、後に足部に発生するスポーツ障害との関係性について検討を行った。アーチ高の変化が大きい選手はスポーツ障害発生に何ら影響を与える可能性が示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、橋本雅至、大槻伸吾、 大久保衞、熊井司、田中康仁
72. 大学男子サッカーチームにおける10年間の傷害発生状況 （査読付）	共著	平成26年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (3) :P.463-P.472	縦断的に関わっている大学サッカー選手のスポーツ障害発生の動向について10年間の調査結果をまとめ、検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、 岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衞、 熊井司、田中康仁
73. 股関節可動域、下肢筋タイトネスの経時的変化が運動時腰痛に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成26年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (3) :P.481-P.487	高校生サッカー選手を対象に股関節の可動性と下肢筋の硬さが、運動時腰痛との関連と関連すると考えられ、トレーニング介入によるその改善がその後の運動時腰痛にどう変化をもたらせるかを調査し検討を加えた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、 板矢悠祐、井上直人、木下和昭、大槻伸吾
74. 変形性膝関節症における体幹機能と身体機能の関連性 （査読付）	共著	平成26年12月	運動器リハビリテーション Vol.25 (4) :P.350-P.355	変形性膝関節症患者を対象にその体幹機能を評価する方法を考案した。その体幹機能と身体機能との関連を検討し、変形性関節症の発生機序について考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、米田勇貴、 中雄太、北西秀行、大八木博貴、柴沼均

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
75. 端座位での片側支持における姿勢保持とTrunk Righting Testとの関係 （査読付）	共著	平成27年4月	理学療法科学 Vol.30 (2) :P.329-P.332	体幹機能の評価方法として座位姿勢で行うテスト方法を考案した。そのテスト方法にて得られた結果と座位姿勢保持との関連性を検討し、体幹機能評価の有用性について考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、米田勇貴、中雄太、北西秀行、大八木博貴、星野祐一、柴沼均
76. 大学男子サッカーチームにおける上半身傷害の発生状況 ：10年間の傷害調査結果 （査読付）	共著	平成27年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.23 (2) :P.242-P.251	大学男子サッカーチームにおける，2003年から2012年までの10年間の上半身(上肢，体幹，頭頚部)に発生した傷害を調査した． 1年生時の発生率，ゴールキーパーの発生率が有意に高く，1部リーグに参加した年度と人工芝グラウンドに変更した年度の上肢傷害発生率の有意な増加が認められた. 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衞、熊井司、田中康仁
77. 大学サッカー選手における足趾屈曲筋力が足部スポーツ障害の発生に与える影響 （査読付）	共著	平成27年5月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.35 (2) :P.133-P.138	多種多様なフットワーク動作が必要なサッカー選手において足趾の屈曲力(把持力)がスポーツ障害発生にいかに関与するかを検討した。 本人担当部分：ータ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衞、熊井司、田中康仁
78. 足部横アーチ変化の測定方法の検討 （査読付）	共著	平成27年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.24 :P.19-P.22	外見の形状では測定が困難である足部横アーチの客観的な測定方法について考案し、その方法の有用性につて検討した。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、 岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衞、 熊井 司、田中康仁
79. Trunk Righting Testと体幹機能の関係性 （査読付）	共著	平成27年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.24 :P.31-P.34	体幹機能評価として考案したTrunk Righting Testと体幹筋の持久性と協調性を見るブリッジテストとの関連性から、体幹筋の評価方法について検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、北西秀行、 井上直人、植田篤史

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
80. A novel objective evaluation method for trunk function (体幹筋機能評価方法の検討) (査読付)	共著	平成27年6月	J. Phys. Ther. Sci. Vol.27 :P.1633-P.1636	体幹機能を客観的に評価する方法としてTrunk Righting Testを考案し、その有用性を検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Masashi Hashimoto, Kazunari Ishida, Yuki Yoneda, Yuta Naka, HidekuKi Kitanishi, Hirotaka Oyagi, Yuichi Hoshino, Nao Shibanuma
81. 人工膝関節全置換術後患者の身体機能と術前および術後の体幹機能の関連性 (査読付)	共著	平成27年6月	理学療法科学 Vol.30 (3) :P.389-P.394	体幹機能評価としてTrunk Righting Testを用いて術前後の患者を対象に調査した。結果、術後の身体機能に体幹機能が関係することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、中雄太、北西秀行、大八木博貴
82. 座位体幹荷重支持機能テストと体幹筋機能 (査読付)	共著	平成28年1月	理学療法科学 Vol.31 (1) :P.49-P.52	Trunk Righting Testにて得られた座位での荷重支持機能とブリッジ姿勢保持にて得られた体幹筋の持久性と協調性との関係性について考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、北西秀行、 米田勇貴、中雄太、大八木博貴、井上直人、植田篤史、田頭悟志、福本貴典、高嶋厚史、板矢悠佑、新谷健、星野祐一
83. 腰椎変性疾患に対する体幹伸展持久力トレーニングの効果−日本整形外科学会腰椎疾患問診票(JOABPEQ)を用いた評価− (査読付)	共著	平成28年4月	理学療法科学 Vol.31 (2) :P.275-P.279	腰部疾患患者を対象に体幹筋の持久性向上を目的にトレーニング介入し、介入の結果として疾患に関連する症状の変化を問診票を用いて調査した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：中尾英俊、稲葉孝洋、森藤武、内原由佳子、渡邊萌、金子元春、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
84. 体幹の荷重支持機能の左右差がジャンプ動作に与える影響 （査読付）	共著	平成28年6月	JOSKAS Vol.41 (3) :P.1068-P.1074	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能の左右差が各種のジャンプ動作に与える影響について調査した。結果、体幹の安定性が大きく求められるジャンプ動作では体幹機能の左右差が関与しやすいことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、井上直人、北西秀行、中雄太、大八木博貴、植田篤史、星野祐一、石田一成、柴沼均、中尾英俊、大槻伸吾
85. 成長期スポーツ障害の腰椎分離症と非特異的腰痛のX線による腰椎アライメントと可動性について （査読付）	共著	平成29年3月	大阪河﨑リハビリテーション大学紀要 11巻 :P.135-P.139	成長期のスポーツ選手に見られる腰椎分離症と非特異的腰痛者にX線撮影から腰椎のアライメントと撮影条件間の差から可動性を予測した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：中尾英俊、橋本雅至、森藤武、岡健司
86. 高校男子サッカー選手における体幹荷重支持機能とブリッジ姿勢保持の特徴～利き脚側と非利き脚側での比較～ （査読付）	共著	平成29年5月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.37 (2) :P38-P41	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能とブリッジ姿勢保持により得られた体幹筋機能の左右差と効き脚と非効き脚の関係性について調査した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、中尾英俊、大槻伸吾
87. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化　人工芝グラウンドに対するゴムチップ補充の影響 （査読付）	共著	平成29年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.25 :P53-P55	サッカー競技中に発生する外傷や障害を引き起こす要因は，選手が使用しているグラウンドサーフェイスも一要因になると報告されている。今回，長期経過した人工芝グラウンドに特殊硅砂やゴムチップを補充したことによる，スポーツ傷害発生への影響を検討した．結果、人工芝グラウンドでは年数が経過するとともに下肢捻挫発生率が増加し，ゴムチップの補充後では下肢肉離れの発生率が有意に減少した． 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衞、熊井 司、田中康仁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
88. Relationship between trunk function evaluated using the trunk righting test and physical function in patients with knee osteoarthritis (体幹筋機能テストと変形性膝関節症患者の身体特性との関連性) (査読付)	共著	平成29年6月	J. Phys. Ther. Sci. Vol.29 :P.996-P.1000	変形性膝関節症（OA）患者の運動機能評価において体幹の立ち直り運動のテスト（TRT）を用いて体幹筋機能の評価を行っている。その臨床上の有効性について検討した。結果、同側のTRTと関連する因子は、最大等尺性膝伸筋力テストおよび同側のステップテストであった。術側と、非術側TRTはTUGとかなり関連していた。下肢の運動器疾患であるが、体幹機能評価の重要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Kazunari Ishida, Masashi Hashimoto, YuKi Yoneda, Yuta NaKa, hideyuki Kitanishi, Hiroki Oyagi, Yuichi Hoshino, Masahiro Kurosaka, Nao Shibanuma
89. Side-to-side differences in range of motion, muscle strength, and medial elbow laxity in young baseball players with medial elbow injuries (内側型肘関節障害を有した成長期野球選手の関節可動域、筋力、関節弛緩性のの左右差について) (査読付)	共著	平成29年7月	J Phys Fitness Sports Med Vol.6 (4) :P.233-P.239	成長期の野球選手の肘関節の障害は投球動作に大きく影響し、また投球動作から力学的影響を受ける。今回、成長期の野球選手の関節機能の評価から検討を加えた。結果、肩外内旋、肘屈伸、前腕回内外､股関節内旋の可動域は非投球側に比べ減少していた。また僧帽筋および棘上筋の筋力、肘関節の内側不安定性は左右差を示していた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：Takeshi Morifuji, Hidetoshi Nakao, Takahiro Inaba, Kenji Kasubuchi, Masashi Hashimoto, Motoharu Kaneko
90. 野球経験年数での肩関節回旋可動域の変化 (査読付)	共著	平成29年7月	JOSKAS Vol.42 ：P.493-P.498	小中学生の野球経験年数別での肩関節可動域の変化について検討した。結果は野球経験年数の増加に伴い、両側共に肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域に有意な低下傾向が認められた。以上より、小中学生の野球選手の肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域は野球経験の増加に伴い減少していくことが考えられ、今後の投球障害治療の一助となる可能性が示された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、中川泰彰、向井章悟、佐治隆彦、薮本浩光、井上直人、伊藤春盛、橋本雅至、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
91. 投球障害肘を有する小学生野球選手の肩関節可動域の特徴 (査読付)	共著	平成29年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.25 (3) ：P.454-P.457	投球動作において，肩関節可動域の制限は，投球障害肘の発症と関連が報告されている．そのため，本研究の目的は投球障害肘を有する小学生野球選手の肩関節可動域の特徴を明らかにすることとした.結果，障害群は健常群に比して，投球側，非投球側の肩関節外転位での外旋可動域が，有意に小さかった．また，投球側の肩全回旋可動域およびGlenohumeral Internal Rotation Deficitは，2群間で統計学的に有意差はなかったが，障害群のほうが小さい傾向であった. 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：植田篤史、橋本雅至、木下和昭、小島喜義、衛門良幸、井上直人、大槻伸吾
92. Cognitive impairment associated with locomotive syndrome in community-dwelling elderly women in Japan (日本人の健常高齢者女性の運動機能評価と認知機能について) (査読付)	共著	平成29年10月	Clinical Interventions in Aging 2017 12 :P.1-P.7	日本人の健常高齢者を対象に運動機能評価と身体組成､認知機能との関連を検討した。ロコモティブシンドロームのように運動機能の低下により引き起こされるが、これは認知機能の変化や体組成の変化との関連が示唆された。 本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：Misa Nakamura, Fumie Tazaki, Kazuki Nomura, Taeko Takano, Masashi Hashimoto, Hiroshi Hashizume, Ichiro Kamei
93.体幹筋・股関節周囲筋の機能評価を目的とした難度別のcore stability testの保持時間について (査読付)	共著	平成30年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌,27: 27-30	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：高嶋厚史，田頭悟志，板矢悠佑，福本貴典，大槻伸吾，木下和昭，新谷健，橋本雅至
94.片脚立位と端座位での片側支持姿勢の腰部周囲筋の筋活動の関係 (査読付)	共著	平成30年12月	理学療法科学 33(6) p.929-p.934	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，澳昂佑，板谷悠佑，福本貴典，高嶋厚史，大槻伸吾
95.腰痛を有する高校野球選手における体幹・股関節筋力と腰椎アライメントとの関係性 (査読付)	共著	令和1年1月	日本臨床スポーツ医学会誌27巻1号 p.27-p.33	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：中尾 英俊，橋本 雅至，濱田 太朗，木下 和昭，森藤 武，大槻 伸吾
96.A Vertical Load Applied Towards the Trunk Unilaterally Increases the Bilateral Abdominal Muscle Activities (査読付)	共著	令和1年3月	J. Phys. Ther. Sci. Vol.30(3) :P.273-P.276	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Kazunari Ishida, Masashi Hashimoto, Hidetoshi Nakao, Nao Shibanuma, Masahiro Kurosaka, Shingo Otsuki

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
97.肩肘障害を発症する小学野球選手の肩関節可動域の特徴　一年間の縦断的検討（査読付）	共著	令和1年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 27巻2号 p.273-p.278	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：木下 和昭，中川 泰彰，向井 章悟，伊藤 盛春，井上 直人，橋本 雅至，大槻 伸吾
98.人工膝関節全置換術後早期のTimed up and go testの改善に関係する因子　（査読付）	共著	令和1年10月	理学療法科学　34巻5号 p.553-p.557	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：木下 和昭，橋本 雅至，大八木 博貴，石田 一成，柴沼 均，来田 宣幸

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
その他 「総説・報告書」				
14. 運動器疾患の理学療法における臨床力	単著	平成25年4月	理学療法京都 42号 ：41-46	運動器疾患の理学療法を効果的に進めるにあたり、身体の機能を如何に捉えることができるが重要である。その際、動作の観察・分析が適切に行い、機能障害を具体的にする評価が治療の成果を左右する。著者の工夫している動作の捉え方を紹介しながら、ポイントを解説した。
15. 観察的動作分析における介入効果から身体運動を捉える方法～足部・足関節の機能に着目して運動器疾患における歩行動作を考察する～	単著	平成26年6月	大阪河﨑リハビリテーション大学紀要 8巻1号 :P. 158-P. 165	身体運動の土台である足部足関節の機能を中心に運動連鎖の観点から身体全体に及ぶ姿勢制御や運動調整について解説した。特にインソール療法と運動療法の併用や荷重位トレーニングにおける考え方、観察的動作観察のポイントなどを紹介しながら説明を加えた。
16. 足部・足関節のスポーツ障害-overuse障害の克服- 理学療法によるoveruse障害への対応	共著	平成26年7月	臨床スポーツ医学 31巻7号 ：P. 674-P. 684	overuse障害の要因を関節弛緩性など関節の特性と運動連鎖における力学的ストレスの観点から解説する。具体的には運動療法の紹介とインソールなどの装具療法を併用した理学療法を解説した。 本人担当部分：論文執筆 共著者：橋本雅至、伊佐地弘基

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17. 動作解析を用いた機能的ウエア開発-ワコールとの共同開発	単著	平成29年11月	理学療法ジャーナル 51巻11号 ：P.959-P.962	特集「多分野に広がる理学療法」の1つを担当執筆。 身体運動解釈、動作分析の観点から機能的ウエアを開発する業務について紹介した。過去10年の実施の開発例を示し、理学療法の観点がどのように活用できるかを解説した。
(その他) [学会発表] (国際学会)				
1. Effects of different pedaling rates on muscle activity of lower extremity and crank torque during constant work rate pedaling. (回転速度の違う自転車のペダリング動作における下肢筋活動と関節トルクの違いについて)	—	平成22年6月	The 18 Congress of the International Society of Electrophysiology and Kinesiology (Aalborg, Denmark)	自転車ペダリング動作における運動量や仕事負荷をペダリング速度や回転トルクの調整から定量化し、筋活動様式の特性を確認した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：Iwasita Atsusi,Konisi Y, Hashimoto Masashi, Ichihasi Noriaki, Yoshida Masaki
2. Relationship between stress fracture of the 5th metatarsal and physical facters in college soccer players (大学サッカー選手の身体特性と第5中足骨骨折との関係性について)	—	平成23年11月	The 5th Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science (APCESS 2011,Shanghai)	大学サッカー選手に好発する第5中足骨の疲労骨折の発生要因を身体的特徴から考察した。特に下肢のアライメントが関連する可能性があった。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：Kohei Fujitaka, Shingo Otuki, Mamoru Okubo, Masashi Hashimoto, Keiiti Kishimoto, Shunsuke Fujitake, Teruyuki Kita
3. Risk factors of stress fracture of the fifth metatarsal bone in university soccer players. (大学サッカー選手の第5中足骨折疲労骨折の危険因子)	—	平成24年5月	American College of Sports Medicine, 16th Health & Fitness Summit & Exposition (Los Vegas)	サッカー選手に多く見られる足部傷害の一つ第5中足骨骨折の発生要因を検討した。検討項目は下肢を中心に機能評価を行い、関連する因子について考察した。膝関節アライメント(Q-angle)と足趾屈曲筋力との関連が示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：Kohei Fujitaka, Shingo Otuki, Shunsuke Fujitake, Teruyuki Kita, Keiiti Kishimoto, Masashi Hashimoto, Mamoru Okubo
4. Characteristics of human body movement when lifting loads: investigation into difference in load weight. (重量物の持ち上げ動作におけるの重さに違いが身体動作に与える特徴)	—	平成25年9月	WCPT-AWP & ACPT Congress 2013 (Taichung, Taiwan)	荷物の持ち上げ動作における運動特性について、荷物の重さを変えた時に体幹、下肢の運動負荷がどのように変化するかを検討した。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者：Yasuhiro Mitani, Masashi Hashimoto, Tomomi Kitagawa

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. Electromyography analysis in stratified core stability testing （体幹筋機能の評価テストの筋電図学的検討）	—	平成28年10月	ACPT Congress 2016 (Kuala Lumpur, Malaysia)	体幹機能評価としてブリッジ姿勢を用いた機能評価を行っている。今回、その評価姿勢における体幹の筋活動の特性を客観化し、今後の評価方法としての有用性を検討することとした。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者： Satoshi Tagashira, Masashi Hashimoto
(国内学会)				
43. 高校サッカー選手における股関節周囲筋のタイトネスと運動時腰痛発生との関連性	—	平成22年5月	第45回 日本理学療法学術大会 （岐阜）	高校サッカー選手の運動時腰痛発生に関して調査した。腰痛と関連性がある股関節周囲のタイトネスなどを他覚的に測定し、有痛者と無痛者との相違点いついて考察し、検討を加えた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：古川博章、木下和昭、橋本雅至、井上直人、大塚詩織、吉川晋也、石束友輝、福永浩明、吉野育代
44. 腰椎変性疾患における体幹筋持久力が腰痛治療成績判定基準におよぼす影響について	—	平成22年10月	第18回 日本腰痛学会 （北海道）	腰部変性疾患を有する外来患者を対象に、腰椎の可動性をX線撮影から測定し、体幹筋力を筋持久力の観点から点数化し、腰痛治療成績判定基準における各項目との関連性を検討した。結果、体幹の伸展筋持久力が日常生活動作能力との関係があることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊、橋本雅至、内原由佳子、金澤淳則
45. 荷物の持ちおろし動作における着用ウエアが下肢筋活動に及ぼす影響について	—	平成22年11月	第37回 日本臨床バイオメカニクス学会 (京都)	荷物の持ちおろし動作において、下肢筋活動の観点から、着用する普通スパッツと下肢機能サポートを考慮したスパッツとの違いを客観化した。結果、関節運動やトルクには大きな違いがないが、下肢機能サポートのスパッツ着用時に下肢抗重力筋における筋活動が低下し、ウエアのサポート効果が示唆された。
46. 高校女子バレーボール選手の運動機能とスポーツ傷害の特徴	—	平成22年11月	第21回 日本臨床スポーツ医学会 (茨城)	高校バレーボール選手の体力測定を行い、筋力、筋持久力、柔軟性などの結果とスポーツ傷害歴との関連を考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：三谷保弘、橋本雅至、森北育宏

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
47. Side-Bridge姿勢保持における筋活動の持続的変化	―	平成22年11月	第21回 日本臨床スポーツ医学会 (茨城)	サイドブリッジ姿勢保持に関して筋持久力について筋電図的考察を行った。長時間の姿勢が可能群と不可群では筋疲労が示されてからの筋出力(筋電積分値)が多くなるかどうかの違いが示された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、田頭悟志、井上直人、古川博章、河野詩織、松本彰生
48. 高校サッカー選手の運動時腰痛発生について－股関節可動性と周囲筋タイトネスの検討－	―	平成22年11月	第21回 日本臨床スポーツ医学会 (茨城)	高校サッカー選手の腰痛発生要因として体幹筋機能の低下以外に股関節の可動性の低下が腰椎の回転負荷を増加し、腰痛発生と関係することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、橋本雅至、古川博章、河野詩織、木下和昭、田頭悟志、大槻伸吾
49. 大学サッカー選手における学年別での足関節捻挫の発生状況の分析	―	平成22年11月	第21回 日本臨床スポーツ医学会 (茨城)	大学サッカー選手を計5年間調査し、足関節捻挫の発生と関係する要因を検討した。結果、1年生が他の学年よりも、発生頻度が大きかった。大学生になってサッカーの練習環境の変化などが要因であることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高 紘平、大槻 伸吾、大久保 衞、橋本雅至、岸本 恵一、藤竹 俊輔、来田 晃幸
50. 腰椎変性疾患患者における腰椎アライメントと腰痛疾患治療成績判定基準との関連について	―	平成22年11月	第50回 近畿理学療法学術大会 （和歌山）	腰椎変性疾患患者における腰椎X線所見と股関節可動域、体幹筋持久力に着目し、日常生活動作との関連を検討した。結果、体幹伸筋持久力は、腰椎前弯角との相関がなかった。しかし、JOAスコアと相関することから、姿勢保持に寄与する体幹伸展筋持久力の向上が、腰痛の軽減につながり、結果として日常生活動作能力の向上に関与することが考えられる。つまり、腰椎変性疾患における腰痛を有する患者の治療として重要な項目であると言える。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：内原由佳子、橋本雅至、中尾英俊、金澤淳則
51. 大学サッカー選手の足部・足関節スポーツ傷害に対する足部アーチ保持筋力トレーニングの効果	―	平成23年5月	第46回 日本理学療法学術大会 （宮崎）	大学生にサッカー選手の足部アーチに着目し、下肢のスポーツ傷害発生と関連性と足部に対するトレーニングの継続による傷害発生の変化を検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衞、橋本雅至、藤竹俊輔、来田晃幸

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
52. 高校男子サッカー選手における初回メディカルチェック時の体幹筋機能と腰痛発生の変化	―	平成23年5月	第46回 日本理学療法学術大会 （宮崎）	高校生男子サッカー選手の運動時腰痛に関する調査である。初回に調査時の腰痛有無と身体機能との関連性について検討した。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者：石束友輝、橋本雅至、井上直人、古川博章、山崎岳志、河野詩織、吉川晋矢、木下和昭
53. 大学サッカー選手の足部スポーツ傷害と身体的要因の関係	―	平成23年9月	第66回 日本体力医学会大会 （山口）	大学サッカー選手の足部周辺のスポーツ傷害の発生要因を身体的特徴や機能の観点から調査し、考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衞、橋本雅至、岸本恵一
54. ジョーンズ骨折を受傷したサッカー選手の特徴と靴	―	平成23年9月	第25回 日本靴医学会学術集会 （奈良）	第5中足骨骨折の受傷したサッカー選手の身体的特徴を測定し、カティング動作を動作解析した結果とあわせて骨折の発生要因を考察した。 本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共同発表者：大槻伸吾、藤高紘平、橋本雅至、大久保衞
55. 大学サッカー選手の第5中足骨疲労骨折と身体的要因の関係	―	平成23年9月	第37回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （福岡）	サッカー選手に好発する第5中足骨の疲労骨折の発生要因を身体的特徴から考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衞、橋本雅至、岸本恵一、藤竹俊輔、来田晃幸
56. 大学サッカー選手の第5中足骨疲労骨折における発生因子の分析	―	平成23年11月	第22回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （青森）	サッカー選手に好発する第5中足骨の疲労骨折の発生要因を身体的特徴や練習条件から考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衞、橋本雅至、岸本恵一、辻信宏、田中一成、中村信之、藤竹俊輔、来田晃幸
57. 高校男子サッカー選手における体幹筋機能と股関節可動域が運動時腰痛に及ぼす影響	―	平成23年11月	第22回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （青森）	高校生の男子サッカー選手の運動時腰痛と体幹筋機能、股関節可動性との関連性について考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：吉川晋也、橋本雅至、井上直人、古川博章、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
58. 高校男子サッカー選手における入学年度別の体幹筋機能と運動時腰痛発生の経時的変化	―	平成23年11月	第22回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （青森）	高校生の男子サッカー選手の運動時腰痛の発生状況を学年ごとに集約し、体幹筋トレーニングの指導後に2年間の間フォローしたデータから、体幹筋機能の変化を追跡した結果と運動時腰痛の有無との関連について考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：石束友輝、橋本雅至、井上直人、古川博章、大槻伸吾
59. 高校生男子サッカー選手の股関節可動域と筋の伸張性に対するトレーニング効果が運動時腰痛に及ぼす影響	―	平成23年11月	第22回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （青森）	運動時腰痛と股関節可動性との関連に着目し、継続的なトレーニング効果と運動時腰痛の変化について考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、板矢悠佑、井上直人、木下和昭、大槻伸吾
60. 荷物の運び下ろし動作の動作解析―荷物の重さの違いが身体運動に及ぼす影響―	―	平成23年11月	第38回 日本臨床バイオメカニクス学会 （兵庫）	荷物を運搬し、立ち止まり、床に下ろす動作における下肢の動作分析を行った。三次元動作解析機器を用いて下肢の運動と身体重心のへ負荷を客観し、荷物の重さによる変化について検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：三谷保弘、橋本雅至
61. ハンドヘルドダイナモメーターを用いた体幹機能評価方法の信頼性	―	平成24年5月	第47回 日本理学療法学術大会 （兵庫）	ハンドヘルドダイナモメーターを使い、座位姿勢にて体幹機能を測定する方法を考案した。繰り返し測定による再現性を中心に検討を行った。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、米田勇貴、中雄太、大塚靖子、鄭克真、柴沼均
62. Critical illness polyneuropathyをきたした１例に対して訪問リハビリテーション介入により復職可能となった経験	―	平成24年7月	第24回 大阪府理学療法学術大会 (大阪)	運動感覚性軸索型ポリニューロパチーを呈した症例を訪問リハビリテーションの形態にて介入し、部分的であるが復職に向けて改善が見られたことについて報告した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：廣瀬将士、池田耕二、大原佳孝、竹内章、橋本雅至

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
63. 大学サッカー選手における足部スポーツ障害予防に関するインソールの有用性	―	平成24年9月	第38回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （神奈川）	大学サッカー選手を継続的にフォローする中でスポーツ傷害の発生を調査し、足部インソール使用の有無が関連することが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、橋本雅至、大久保衛
64. 大学サッカー選手における足部スポーツ障害に対するインソールの治療効果	―	平成24年9月	第26回 日本靴医学会学術集会 （東京）	大学サッカー選手をフォローする中で足部のスポーツ傷害を発生した選手に対して、インソールを使用の有無によるスポーツ復帰の状況の違いを調査した。使用群はスポーツ復帰までの日数が有意に短く、復帰後の再発率が低かった。傷害発生後インソール使用は治療結果を良好することが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、橋本雅至、大久保衛
65. 高校男子サッカー選手における体幹筋機能とランニング能力の関係	―	平成24年11月	第23回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神奈川）	高校生サッカー選手を対象に体幹機能、特に持久性について評価し、ランニング能力との関連を考察した。結果、体幹機能の高い者はランニング速度が速く、持久走にも良好な成績を示していた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志、橋本雅至、福本貴典、板矢悠佑、木下和昭、大槻 伸吾
66. 大学アメリカンフットボール選手におけるSide bridge testと体幹筋力の関係	―	平成24年11月	第23回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神奈川）	体幹筋を同時収縮させ、その持久性を見るテストと腹筋と背筋力の瞬発力の結果との関連性を検討した。結果、腹筋と背筋力の比率が一定であると体幹筋の同時収縮の時給制が良好となることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、新宮信之、廣瀬ちえ、橋本雅至、田頭悟志、木下和昭
67. サッカー選手における第5中足骨疲労骨折の運動学的特徴と身体的特徴との関連	―	平成24年11月	第23回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神奈川）	大学サッカー選手の足部の形態、足趾筋力のとターン動作の動作解析結果から、第5中足骨疲労骨折経験者と非経験者との差異を検討した。結果、足趾筋力と動作時の足部回外運動とに関連性が示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、藤竹俊輔、岸本恵一、橋本雅至、武村政徳、辻田純三、大久保衛

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
68. サッカー選手における第5中足骨疲労骨折の動作解析	―	平成24年11月	第39回 日本臨床バイオメカニクス学会 （千葉）	サッカー選手に多い第5中足骨の疲労骨折経験者の動作解析から、その発生要因を調査した。結果、ターン動作において踏み込み脚の足関節背屈運動が少なく、足部の回外運動が有意に大きかった。これらが足部外側に力学的ストレスをもたらせることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、武村政徳、辻田純三、橋本雅至、大久保衛
69. 変形性膝関節症における体幹機能と身体機能の関連性	―	平成25年7月	第25回 日本運動器科学会 （神戸）	変形性膝関節症患者の体幹機能と下肢機能を中心とした身体動作との関連性を検討した。結果、下肢機能を必要とする身体動作には体幹機能の状況が少なからず関与することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中雄太，米田勇貴，北西秀行，大八木博貴，柴沼均
70. Trunk Righting Test（TRT）結果と片側殿部支持による座位姿勢保持との関連について重心(COP)動揺計測からの一考察	―	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	片側殿部支持の端座位（立ち直り動作）にて同側上部体幹を上方に押す力を測定するTRTを実施しており，今回，TRT時の姿勢を重心（COP）動揺から考察し，姿勢制御との関連を検討した．外周面積と単位面積軌跡長において優位側と劣位側との間で有意差が認められた． 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，米田勇貴，中雄太，北西秀行，大八木博貴，星野祐一，柴沼均
71. 体幹筋機構評価の姿勢保持における骨盤・股関節周囲筋に関する筋電図学的分析.	―	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	Side Bridge test（SB）、Front Bridge test（FB）とBack Bridge test（BB）を筋電図学的分析により、体幹筋機能評価としての有用性について検討した。測定筋は内腹斜筋、外腹斜筋、多裂筋、大殿筋、中瞥筋、大腿筋膜張筋、大腿直筋、内側ハムストリングとした。 %iEMG、MdPFともに有意な変化が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志，橋本雅至，高嶋厚史，板矢悠佑，福本貴典，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
72. 大学アメリカンフットボール選手におけるSide bridge testと体幹筋力の関係～第2報～	―	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	体幹筋機能検査として行っているSide bridge test（SB）と体幹筋力の伸展／屈曲比（E／F比）との関連について対象者数を増やしさらに検討を加えた。結果、SBと伸展筋力との間、 SBとE／F比との間に有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人，中川泰彰，向井章悟，新宮信之，伊藤盛春，廣瀬ちえ，橋本雅至
73. 超音波画像を用いた大腿骨前捻角の測定方法	―	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	大腿骨には前捻角があり股回旋ROMとの関係がある。前捻角を測定するRyder法は大転子の触診による測定であり，検者による誤差が生じる可能性が考えられる．今回，超音波画像を用いた前捻角の測定方法を試行し，その信頼性について検討した．結果、検者内ICC検者間ICCともに有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：新谷健，橋本雅至，井上直人，中川泰彰
74. 足部スポーツ障害を受傷した大学サッカー選手の足部アーチの特徴	―	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	足部スポーツ障害を受傷した大学サッカー選手の足部アーチの特徴を検討した。座位アーチ高率と立位アーチ高率を測定し，座位アーチ高率から立位アーチ高率を引いてアーチ高率変化量（アーチ変化量）を算出した．受傷群を立位アーチ高率が高い群（高アーチ群）と 低い群（低アーチ群）の2群に分けアーチ変化量の比較を行った．結果、受傷群の立位アーチ高率は非受傷群よりも有意に低く，受傷群のアーチ変化量は非受傷群よりも有意に大きかった．低アーチ群のアーチ変化量は高アーチ群よりも有意に小さかった． 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，大槻伸吾，岸本恵一，橋本雅至，大久保衛，熊井司，田中康仁
75. 人工股関節全置換術後の体幹機能と膝関節伸展筋力、歩行能力獲得の関係	―	平成26年2月	第44回 日本人工関節学会 （宜野湾）	股関節疾患による人工関節置換術後患者の体幹機能と下肢機能、身体動作との関連性について検討した。結果、下肢機能は体幹機能と関連性があり、身体運動にも影響を及ぼすことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中雄太，木下和昭，橋本雅至，北西秀行，大八木博貴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
76. 人工膝関節全置換術後患者の身体機能と術前及び術後の体幹機能の関連性	―	平成26年5月	第49回 日本理学療法学術大会 （横浜）	変形性膝関節症患者（以下，膝OA）の膝関節の炎症や変形などを主症状とする運動連鎖機能不全の一病態に至ったものであると報告されており、術後は膝関節のみでなく，病変の悪化につながる体幹および下肢の運動連鎖を考慮することが重要である。我々はその機能を客観化することを目的にTrunk Righting Test （以下，TRT）を考案し，術後の体幹機能と身体機能との関連性についても検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中雄太，北西秀行，大八木博貴
77. 大学サッカー選手における足趾把持筋力が足部スポーツ障害の発生に与える影響	―	平成26年9月	第40回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （東京）	多種多様なフットワーク動作が必要なサッカー選手において足趾の屈曲力(把持力)がスポーツ障害発生にいかに関与するかを検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衞，熊井司，田中康仁
78. 高校生サッカー選手における体幹筋機能と障害発生の関係	―	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	体幹筋機能検査として行っているSide bridge test（SB）と体幹筋力の伸展／屈曲比（E／F比）との関連について報告した．その後，対象者数を増やしさらに検討を加えた。SBと伸展筋力との間、SBとE／F比との間に有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志，橋本雅至，新谷健，福本貴典，板矢悠祐，高嶋厚史，木下和昭，大槻伸吾
79. Trunk Righting Testと体幹機能の関係性　第2報	―	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	個人内のTrunk Righting Test(以下、 TRT)の左右データの優劣かSide-Bridge test(以下、 SB)の姿勢保 持時間の優劣を反映していることを報告した。その後、対象者数を 増やしさらに検討を加えた。結果、TRTとFB・SBとの間に相関関係は認められなかった。またFB・SBともにTRTの優位側が有意に姿勢保持の時間が長かった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至,米田勇貴，中雄太，北西秀行，大八木博貴，井上直人，植田篤史，田頭悟志，福本貴典，高嶋厚史，板矢悠祐，新谷健，星野佑一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
80. Back Bridge 動作における体幹・股関節周囲筋に関する筋電図学的分析	―	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	体幹筋や股関節伸筋に着目し、Back Bridge(BB)を筋電図学的に分析し、評価としての有用性を検討した。結果、体幹伸筋、股関節伸筋の%IEMG、MdPFに有意な変化か認められ、BB姿勢保持が体幹伸筋、股関節伸筋の持久性評 価の方法としての有用性か示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史，田頭悟志，板矢悠祐，福本貴典，橋本雅至，大槻伸吾
81. 人工膝関節全置換術前後における椅子立ち上がりテストの有用性	―	平成27年6月	第50回 日本理学療法学術大会 （横浜）	スクリーニングである30秒椅子立ち上がりテスト（以下，CS-30）や5回椅子立ち上がりテスト（以下，SS-5）が、変形性膝関節症の患者（以下，膝OA）やその後，手術に至った患者に対する有用性について検討した。結果、SS-5は今回測定した他の動作テストとの関係性が確認でき，先行研究と同様に膝OAに対して使用が可能であることが示唆された。SS-5の方が短時間にて可能であり，負担が少なく，有用性の高いテストであると考えられた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中雄太、米田勇貴、北西秀行、大八木博貴
82. 体幹の荷重支持機能の左右差がジャンプ動作に与える影響	―	平成27年6月	第7回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （札幌）	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能の左右差が各種のジャンプ動作に与える影響について調査した。結果、体幹の安定性が大きく求められるジャンプ動作では体幹機能の左右差が関与しやすいことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、井上直人、北西秀行、中雄太、大八木博貴、植田篤史、星野佑一、石田一成
83. 高校男子サッカー選手の座位体幹荷重支持機能と利き脚、非利き脚との関連	―	平成27年9月	第41回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （京都）	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能とブリッジ姿勢保持により得られた体幹筋機能の左右差と効き脚と非効き脚の関係性について調査した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
84. 人工股関節全置換術前における体幹機能評価の重要性	―	平成27年10月	第42回 日本股関節学会学術集会 （大阪）	人工股関節全置換術（以下、THA）の術前の身体機能が術後の回復に影響を与えることが報告されている。THA前の体幹機能と身体機能の客観的な関連性を示した報告は少なく、我々はTHA前後の体幹機能に着目し、術前から体幹機能評価（Trunk Righting Test以下、TRT）を行っている。今回、THA前の症例を対象に、術前の体幹機能と身体機能との関係性を検討した。結果、術側TRTと術側膝関節伸展筋力、術側下肢荷重量との間にそれぞれ有意な正の相関が認められた。術側TRTと歩行時NRSとの間に有意な負の相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中雄太、木下和昭、橋本雅至、 柴沼均、林申也、橋本慎吾
85. 座位での体幹荷重支持機能テストの力学的考察	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	体幹荷重支持機能テスト（TRT）を考案し、片側の体幹の荷重支持機能が同側の連続ジャンプ動作に影響を与えることを報告した。今回、TRTを力学的に検討し、荷重動作との関係も検討した。TRTの肩で押す力と腎部で押す力は強い相関があった。またTRTの測定値は床反力値と強い相関があった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中尾英俊、 井上直人、田頭悟志、新谷健、大槻伸吾
86. 高校男子サッカー選手における競技パフォーマンスと体幹筋機能との関係	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	高校男子サッカー部に対して、体幹筋機能とサッカーに必要な競技パフォーマンスとの関係について検討した。FBはT－testと12分間走、SBはT－testと12分間走、 BBはT－testと12分間走に有意な相関が認められた。FB・SB・BBのような姿勢を一定時間保持する体幹筋機能は、T－testや12分間走と関係することが考えられた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：新谷健、橋本雅至、田頭悟志、 木下和昭、清野大輔
87. Bridge姿勢を用いた体幹筋機能評価における腹筋と背筋の不均衡についての検討	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	体幹筋機能評価としてBack Bridge test（BB）とFront Bridge test（FB）の測定値から、 BB（背筋）とFB（腹筋）の不均衡が動作テストに与える影響を検討した。結果、BB／FB高値群（BB優位）のBB＋FBは3回片足跳び、20m走、50m走、T test、12分間走との間に有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史、橋本雅至、田頭悟志、 新谷健、福本貴典、板矢悠佑、幸田康宏、 木下和昭、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
88. 体幹筋機能の左右差がランニング動作へ及ぼす影響	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	サッカー選手に対して傷害予防やパフォーマンスの向上を目的に介入し、体幹筋機能の左右差とランニング動作との関連を調査した。体幹筋機能評価はFront Bridge test（FB）、Side Bridge test（SB）を実施し、ランニング動作は50m走、Ttest、12分間走とした。体幹筋機能評価より左右差あり群と左右差なし群に群分けを行い、ランニング動作との相関を調査した。結果、体幹の安定性が必要なランニング動作では体幹機能がランニングの動作に影響を及ぼすことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志、橋本雅至、新谷健、板矢悠佑、福本貴典、高嶋厚史、幸田康宏、木下和昭、大槻伸吾
89. 成長期スポーツ障害の腰椎分離症と非特異的腰痛のX線による腰椎分節可動域の違い	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	成長期スポーツ選手の腰椎分離症と非特異的腰痛における腰椎の各椎体間の可動性について検証した。X線またはMRIにてL5片側の腰椎分離症（分離群）と診断された10名と、非器質的腰痛症（腰痛群）と診断された12名の臥位腰椎側面像のX線動態撮影により、L1－Sの各椎体間の最大伸展時の前弩角および最大屈曲時の後弩角を測定し、さらに最大伸展時と最大屈曲時の腰椎分節角を計測し、その差から各椎体間の分節可動域を算出した。結果、最大伸展時の前弩角は、分離群が腰痛群に比して高値を示し、腰椎の分節可動域は、分離群が腰痛群に比して高値を示した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊、稲葉考洋、森藤武、金子元春、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾
90. 小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testの有用性	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	小学生軟式野球選手に野球検診を実施しており、今回、小学生軟式野球選手にSBを実施し、傷害との関連を調査し、さらにSBの負荷量設定を検討した。結果、今回の条件下の調査においては、SBと投球による傷害との関連は認められなかった。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、佐治隆彦、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、廣瀬ちえ、橋本雅至、大場友裕、木下和昭、高嶋厚史、石束友輝、吉川晋矢

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
91. 器質的な投球障害肘を有する小学野球選手の肩関節・体幹可動域の特徴	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	器質的な投球障害肘を有する小学生野球選手における肩関節・体幹可動域の特徴を検討した。対象は、投球障害肘と診断された小学生野球選手（以下、障害群）と健常な小学生野球選手（以下、健常群）とした。投球側の肩関節2nd外旋は障害群が健常群に比して有意な可動域減少が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：植田篤史、橋本雅至、木下和昭、小島喜義、衛門良幸、大槻伸吾
92. 下肢筋タイトネスがボールキック動作時の骨盤前傾角度に及ぼす影響の検討	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	下肢筋タイトネスがボールキック動作時の骨盤運動や肢位に及ぼす影響を検討した。 三次元動作解析システムにて、利き脚のインステップキックを解析した。踵腎間距離（HBD）と骨盤前傾角度の最大値に有意な相関は認められなかった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、板矢悠佑、高嶋厚史、幸田康宏、木下和昭、大槻伸吾
93. 小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testと投球障害	―	平成28年5月	第51回 日本理学療法学術大会 （札幌）	軟式野球連盟に加入している小学生に対して投球障害を早期発見することを目的に野球検診を実施している。投球動作においては，上肢機能だけでなく下肢，体幹機能の重要性が報告されている。今回，体幹筋機能の検査方法を取り入れ、小学生にSide Bridgetestを実施し投球障害との関連を調査した。結果、Side Bridge testの保持時間は投球側､非投球側ともに肘障害群と障害なし群の間に有意差は認められなかった。点数の差は肘障害群が障害なし群に比べ、有意に大きい結果であった。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、佐治隆彦、藪本浩光、伊藤盛春、廣瀬ちえ、橋本雅至、木下和昭、高本晴輝

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
94. 高校男子サッカー選手におけるシンスプリント既往者の疾走動作の特徴について	―	平成28年5月	第51回 日本理学療法学術大会 （札幌）	シンスプリント（Medial Tibial Stress Syndrome　以下，MTSS）の発生要因は下腿内側筋群の伸張性低下や足部の過回内による伸張ストレスによるとの報告が多い。我々は高校男子サッカー選手に対するフィジカルチェックにて明らかな特徴が認められなかった。そこで今回、MTSS 群と MTSS 既往の無い群（以下，control 群）の動作時アライメントを比較しMTSS 群の動作的特徴を検討した。 結果、静的アライメントと ROM には有意差が認められなかったが、動的アライメントでは 足関節の回内角度と足部外転モーメントに有意差が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：幸田康宏、田頭悟志、新谷健、 福本貴典、板矢悠佑、高嶋厚史、林孝明、 春日勇磨、木下和昭、橋本雅至
95. 野球経験年数での肩関節回旋可動域の変化	―	平成28年7月	第8回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （福岡）	小中学生の野球経験年数別での肩関節可動域の変化について検討した。結果は野球経験年数の増加に伴い、両側共に肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域に有意な低下傾向が認められた。以上より、小中学生の野球選手の肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域は野球経験の増加に伴い減少していくことが考えられ、今後の投球障害治療の一助となる可能性が示された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，佐治隆彦，藪本浩光，井上直人，橋本雅至，大槻伸吾
96. 成長期野球選手の腰椎分離症における股関節屈筋群と伸筋群の筋力の検討	―	平成28年9月	第42回 日本整形外科スポーツ医学会 （札幌）	腰椎と股関節の運動時における連動について着目し、腰椎分離症による腰痛と、股関節周囲筋の筋機能との関連性について検討した。結果、分離症を有する選手の投球軸足股関節の屈曲筋力、伸展筋力ともに低く、ステップ脚の股関節屈曲筋力が有意に低かった。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊，稲葉考洋，木下和昭，濱田太朗，森藤武，橋本雅至，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
97.　ボールキック動作における体幹運動の解析	—	平成28年9月	第42回 日本整形外科スポーツ医学会 （札幌）	サッカー選手の特有なボールのキック動作では、骨盤から下肢の分析が多く、体幹の詳細な分析は少ない。今回はキック動作中の体幹運動に着目し検討した。結果、インステップキックは体幹伸展位、蹴側へ側屈させて力を貯め、インパクトに向けて骨盤と胸郭が相反する動きを伴いながら、急激に体幹を屈曲し、軸側方向へ側屈させていくことが示唆された。また水平面上では骨盤と胸郭が相反する回旋を伴いながら体軸を調整し、脊柱を一定方向へ回旋させている可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，福本貴典，大槻伸吾
98.　童期野球選手における肩肘関節障害者の肩関節可動域の特徴～健常群と障害群との比較～	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会 学術集会 （千葉）	学童期野球選手における野球経験年数別での肩、肘関節に障害を有する者の肩関節可動域の特徴について検討した。野球開始1年目から4年目の障害群では、投球側の2nd外旋と2nd全可動域が健常群に比して有意に可動域が低下していた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、井上直人、廣瀬ちえ、橋本雅至、大槻伸吾
99.　中学生と高校生野球選手における投球障害の危険因子の違い	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会 学術集会 （千葉）	投球障害（Throwing Injury、以下TI）の危険因子を年代別で調査しTIの要因となる成長に伴う身体的特徴の違いについて検討した。TIと関連性の高かった項目は小中学生では投球側elbow push testとlnitial abduction test、高校生では投球側EPTと肩関節2nd外旋可動域、股関節内旋可動域左右差であった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：衛門良幸、橋本雅至、小島喜義、植田篤史、大木毅
100.　小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testと投球障害肘との関係 ～第2報～	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会 学術集会 （千葉）	小学生野球選手に対して野球肘検診を実施しており、小学生野球選手の体幹筋機能検査として我々が用いているSide Bridge test（SB）の負荷設定の変更が必要であることを報告した。今回、SBの負荷を変更し投球障害との関連を調査した。SBの差は肘傷害群が低い傾向であったことから、SBの結果に左右差が認められることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、廣瀬ちえ、橋本雅至、木下和昭

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
101. 座位での体幹荷重支持機能評価における筋活動	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	動作の体幹機能評価として、端座位での立ち直り姿勢から鉛直方向への負荷を課した方法（体幹荷重支持機能評価）を用いている。今回は本法の筋活動を検討した。体幹荷重支持機能評価において、腹直筋、内腹斜筋、外腹斜筋、多裂筋、腹横筋が有意に高かった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中尾 英俊、板矢悠佑、福本貴典、高嶋厚史、田頭悟志、田邊智、大槻伸吾
102. 高校野球選手の腰痛症の体幹・股関節筋力と腰椎アライメントとの関係性	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	野球選手の腰痛発生頻度は高く、今回、ハンドヘルドダイナモメーター（HDD）にて野球選手の体幹と股関節の筋力を測定し、腰痛者と腰痛の既往がない者で比較した。腰痛群の筋力は股関節屈筋群が低下傾向を示し、同様に腰椎 アライメントは前湾角が小さいことが認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾
103. 階層別Core stability testにおける身体重心動揺についての検討	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	幅広い筋機能レベルの評価が可能となるように階層別Core stability test（CST）を難易度別に考案し、身体重心動揺の観点から、評価方法の難易度の設定に関する妥当性を検討した。単位軌跡長、加速度は有意に増加し、難度が高くなることにより姿勢保持における不安定性が増加することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋 厚史、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠佑、幸田康宏、木下和昭、大槻伸吾
104. 男子高校野球選手におけるSide Bridge Testと走タイムの関係性	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	男子高校硬式野球部員に対して、体幹筋機能検査としてSide Bridge Test（以下、 SB）を実施しており、テストの目標値を提示するために走タイムとの関連性を検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：板矢悠佑、橋本雅至、田頭悟志、木下和昭、新谷健、福本貴典、高嶋厚史、幸田康宏、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
105. 片側の体幹の荷重支持機能の向上が動作に与える効果	―	平成29年5月	第52回 日本理学療法学術大会 （千葉）	歩行や走行，ジャンプ動作では体幹に対して鉛直方向に荷重負荷が加わりながら，片脚で支持するような場面が求められ，その時の体幹機能の評価方法として座位での片側の体幹荷重支持機能（Trunk Righting Test，TRT）に着目している。今回、TRT の向上がどのような動作能力の向上に効果を与えるのか検討することとした。結果、pre 期と post 期の間では TRT と膝関節伸展の最大等尺性筋力，ジャンプ効率に有意な増加が認められ，side hop test には有意な低下が認められた。post 期と retraining 期の間では TRT，ジャンプ効率に有意な低下が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本 雅至，中尾 英俊田頭 悟志，大槻 伸吾
106. 小学生野球選手における肩肘関節障害発生者の肩関節可動域の特徴1年間の縦断的検討	―	平成29年6月	第９回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （札幌）	1年間に肩肘関節の障害が発生した小学生野球選手の肩関節可動域の特徴について検討した。対象は2015年度から2016年度の1年間に肩肘関節に障害を有さなかった小学生野球選手（健常群）140名と肩肘関節に障害を有した小学生野球選手（障害群）38名とした。結果、障害群は2015年度に比して2016年度の投球側の2nd外旋が有意に低下していた（$p<0.05$）。小学生野球選手において新規に発生した肩肘障害者は投球側の2nd外旋が低下していた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，佐治隆彦，藪本浩光，井上直人,伊藤盛春，橋本雅至，大槻 伸吾
107. 高等学校におけるスポーツ活動支援事業の利用状況とその意義	―	平成29年9月	第43回 日本整形外科スポーツ医学会 （宮崎）	本学では付属の高等学校に対し、スポーツ活動支援事業を実施している。本研究の目的は、その事業の利用者状況とその意義について考察する。結果、開始当初は受診率が低値であったが、継続的に活動を行うことにより増加する傾向であった。また医療機関を受診した者は、重度なスポーツ傷害と診断された利用者も存在し、医療機関への受診の重要性が示唆された。これらの結果は、学校保健内において理学療法士が顧問や保護者と良好な関係を保ちながら、継続的なスポーツ活動支援事業を実施する重要性を示唆する。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、澳昂佑、北川智美、長野聖、森永敏博、星野祐一、廣島和夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
108. 倒立姿勢保持における肘関節と肩甲骨周囲の筋活動～上肢の肢位の違いによる変化～	―	平成29年11月	第28回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	小学生女子の器械体操選手の肘関節障害に着目して、競技特性である上肢での荷重肢位における筋活動から、力学的考察を行った。特に肘関節障害の小学生に多い、肩関節回旋位に観点を置き肩甲骨から肩関節肘関節の制御する筋活動に代償運動を示す運動を示唆する筋活動が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、横田尚子、澳昂佑、来田宜幸、星野祐一
109. 姿勢保持の難度別に分けたCore stability test の筋活動につい ての検討	―	平成29年11月	第28回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	Core stability test を用いて体幹筋機能を測定するにあたり、対象者の身体特性を反映して用いる姿勢保持に難度別の条件を検討している。実際に考案した方法ごとに筋活動を測定し、難度ごとに筋活動から見た運動負荷の違いを検討した。結果、いくつかの条件間で有意差が認められ、難度別に分けることがより具体的になった。。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋 厚史、橋本雅至、田頭悟志、福本貴典、板矢悠佑、木下和昭、大槻伸吾
110. 小学生軟式野球選手における関節可動域の経年変化と投球障害肘との関係	―	平成29年11月	第28回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	小学生の野球選手に対して継続して関わり、メディカルチェックを行っている。対象の小学生の肘関節障害が、スポーツ活動を継続し、時間経過を伴ってどのように発生するかを検討している。今回は左右の関節可動域に着目して股関節の回旋可動域の減少と肘障害発生との関連性を示唆した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、橋本雅至、木下和昭
111. 器械体操に必要な倒立姿勢と身体因子との関連性	―	平成30年6月	第10回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （福岡）	本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑，来田宜幸，西澤勇一朗，星野祐一
112. 腰痛症の高校野球選手に対する股関節筋力トレーニングが腰椎前弯角に及ぼす影響	―	平成30年6月	第10回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （福岡）	本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊，木下和昭，橋本雅至，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
113.小学生軟式野球選手における投球障害肘発症時の体幹筋機能の変化	ー	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人，中川泰彰，向井章悟，横田尚子，橋本雅至，木下和昭
114.ジュニア体操競技における倒立時の疼痛調査	ー	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑，来田宣幸，西澤勇一郎，星野祐一
115.地域在住高齢者における体幹筋機能とロコモティブシンドロームとの関係について144.	ー	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史，大槻伸吾，橋本雅至，田頭悟志，新谷健
116.地域在住高齢者の園芸活動の実態 ～園芸習慣のアンケートからわかったこと～	ー	平成30年9月	第8回日本認知症予防学会学術集会（東京）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：髙野珠栄子，田崎史江，橋本雅至，野村和樹，山口隆司，中村美砂
117.ニューラルネットワークを用いたロコモ度判定に関連する因子の相対的重要度について	ー	平成30年10月	第20回骨粗鬆症学会（長崎）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：今岡真和，中尾英俊，田崎史江，髙野珠栄子，　野村和樹，橋本雅至，中村美砂
118.健康教室へ参加されている高齢者に対する体幹機能評価法が血圧・心拍数に及ぼす影響について	ー	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志，橋本雅至，高嶋厚史，福本貴典，新谷健，大槻伸吾
119.小学生軟式野球選手の肘障害に影響を与える因子　1年前の検診結果から	ー	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，伊藤盛春，井上直人，横田尚子，橋本雅至
120.Side-bridge姿勢における股関節の肢位の違いが腰部周囲筋の筋活動に及ぼす影響	ー	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：齋藤優季，木下和昭，橋本雅至，来田宣幸，大槻伸吾
121.高校男子サッカー選手におけるBridge姿勢の保持時間と筋厚との関係性	ー	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：新谷健，橋本雅至，木下和昭，田頭悟志，福本貴典，高嶋厚史，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
122.中高齢者の足部アーチ低下の身体要因について	－	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊，木下和昭，森藤武，濱田太朗，橋本雅至，大槻伸吾
123.段階づけた倒立姿勢における肩関節と肩甲骨周囲筋の筋活動の変化	－	平成30年12月	第6回日本運動器理学療法学術大会（福岡）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑
124.運動講座に参加している高齢者における体幹筋機能と下肢機能及び移動能力との関係について	－	平成30年12月	第6回日本運動器理学療法学術大会（福岡）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史，橋本雅至，田頭悟志，新谷健，福本貴典，木下和昭，大槻伸吾
125.倒立時の上肢障害予防に着目した練習方法の筋活動の検討(Muscle Activity Analysis of Exercise Methods Focusing on The Prevention of Upper Limb Disorders During a Handstand)	－	令和1年6月	第11回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下 和昭，横田 尚子，橋本 雅至，澳 昂佑，来田 宣幸，西澤 勇一郎，星野 祐一
126.コアトレーニングを効果的に進めるために、体幹(筋)機能を適切に捉える評価について	－	令和1年8月	第45回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（大阪）	特別企画「コアトレーニングの神髄」 シンポジスト
127.段階づけた倒立姿勢における肩関節と肩甲骨周囲筋の筋活動の変化		令和1年10月	第 7 回日本運動器理学療法学会学術大会（岡山）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下 和昭，橋本 雅至，横田 尚子，澳 昂佑
128.運動講座に参加している高齢者における体幹筋機能と下肢機能及び移動能力との関係について		令和1年10月	第 7 回日本運動器理学療法学会学術大会（岡山）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋 厚史，橋本 雅至，田頭 悟志，新谷 健，福本 貴典，木下 和昭，大槻 伸吾
129.ジュニア体操競技選手における段階づけた倒立練習方法の有用性		令和1年11月	第30回日本臨床スポーツ医学会学術集会（横浜）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下 和昭，横田 尚子，橋本 雅至，来田 宣幸，西澤 勇一郎，星野 祐一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
130. 上肢支持を除外したSide Bridgeの筋活動について （研究会、その他）		令和1年11月	第30回日本臨床スポーツ医学会学術集会（横浜）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭 悟志，橋本 雅至，木下 和昭，高嶋 厚史，福本 貴典，大槻 伸吾
17. Side-Bridge姿勢保持における筋活動の経時的変化について	―	平成22年6月	第20回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	サイドブリッジテストを行う際、60秒保持可能な者と不可能な者との違いを筋電図データから検討した。両群とも疲労を示す中間周波数の徐派化が認められたが、平均振幅の増加する筋の存在が保持可能の条件であると示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、田頭悟志、板矢悠佑、新谷健、宮沢将史、石川大起、森洋子、井谷友香理
18. グラウンドサーフェイスの違いが大学サッカー選手のスポーツ外傷に及ぼす影響-天然芝グラウンドと人工芝グラウンドとの比較-	―	平成22年6月	第20回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	グラウンドサーフェイスの違いがスポーツ外傷の発生に及ぼす要因について検討した。運動時間当たりの発生件数は人工芝グラウンドの方が多かったが、外傷部位がそれぞれ違いを示し、サーフェイスの特徴が外傷発生の要因に関与していることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衛、橋本雅至、岸本恵一、辻信宏、田中一成、中村信之、来田晃幸、藤竹俊輔
19. 本校の臨床実習における態度評価の分析①～臨床実習の態度評価と心理テストを用いた検討～	―	平成22年8月	第23回 教育研究大会・教員研修会 （北海道）	臨床実習における学生評価の中で、態度面の評価結果と心理テストの結果との関連性を考察し、数項目に有意な関連性が示唆された。本学の評価項目と一般的なテスト項目との関連から、一定の客観性を示すことができた。 本人担当部分：研究指導 共同発表者：岩崎仁美、山本貴啓、幸田利敬、橋本雅至、助川明、加原牧子、松本尚子、三上文枝、椎木文枝、村田幸司、武富由雄
20. 本校の臨床実習における態度評価の分析②～実習に臨む学生にとって求められる因子～	―	平成22年8月	第23回 教育研究大会・教員研修会 （北海道）	本学の態度面評価項目において心理テストと関連があった項目において、低点数を示す学生が実習を通じて実習進行に困難さを示す場合が多いことが示された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：山本貴啓、岩崎仁美、幸田利敬、橋本雅至、助川明、加原牧子、松本尚子、三上文枝、椎木文枝、村田幸司、武富由雄
21. 高校生男子サッカー選手に対するコンディショニングサポートが運動時腰痛に与える影響	―	平成23年6月	第21回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	高校生に対して行った体幹筋トレーニングの指導と実施が、運動時腰痛の発生と如何に関連するかについて検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：古川博章、橋本雅至、井上直人、木下和昭、田頭悟志、森洋子、石束友輝、吉川晋也、山崎岳志

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化	―	平成23年6月	第21回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	人工芝グラウンドでの練習が常態化したクラブにおけるスポーツ傷害の発生について約4年の追跡し、調査・検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衛、橋本雅至、岸本恵一、辻信宏、田中一成、中村信之、来田晃幸、藤竹俊輔
23. 機能回復に難渋した肩腱板不全断裂と後上方関節唇損傷術後の一例	―	平成23年6月	第21回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	肩関節可動域制限患者の1例に対して理学療法的工夫と考察により、可動域の改善に至った症例について報告した。 本人担当部分：データ分析 共同発表者：武富由雄、永富孝幸、米田稔、水野直子、中川滋人、福田明雄、椎木孝幸、橋本雅至、講武芳英、幸田利敬
24. 高校サッカー選手の腰痛予防に対するコアエクササイズの効果	―	平成24年1月	第17回 スポーツ傷害フォーラム （大阪）	高校生サッカー選手に継続的に体幹筋を中心としたトレーニングを行わせ、運動時腰痛の有無を経時的に測定した。結果、体幹筋機能は向上するが、腰痛の軽減に必ずしも関係しているとは言えなかった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究発表 共同発表者：橋本雅至、井上直人、木下和昭、田頭悟志、石束友輝
25. クラウス・ウェーバーテスト変法と体幹深部筋エクササイズにおける腹横筋の筋活動量	―	平成24年6月	第22回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	体幹筋力を評価する手技と体幹深部筋のトレーニングに有効とされる運動条件を選択し、ワイヤー電極を用いた筋活動量の評価を行った。体幹の安定性に貢献するであろう腹横筋に着目した。結果、重錘負荷をした手技とelbpw-toe姿勢、side bridge姿勢において筋活動が高値を示すことが確認され、トレーニング手技としての有効性が示唆された。 本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共同発表者：杉本拓也、能登洋平、林慈晃、池内誠、柳田育久、土井龍雄、田邉智、大槻伸吾、橋本雅至、大久保衛

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
26. デジタルカメラによる体幹可動域の測定法の一検討	―	平成24年6月	第22回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	スポーツ現場において短時間での体幹可動性評価の試案として、2次元的にデジタルカメラで撮影したデータから可動域を客観化する方法について検討した。体幹伸展運動において再現性が示唆されたが、今後方法に修正が必要であることが分かった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、板矢悠佑、高嶋厚史
27. 第5中足骨疲労骨折受傷者におけるターン動作時の足部圧力解析	―	平成24年6月	第22回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	第5中足骨疲労骨折受傷経験者に対して足底圧センサーを足底面と足部外側面に貼付して、動作時の上下方向と横方向の力を客観化した。結果は未受傷者との有意差は認められなかったが、接地時間が延長していた。これは足底面の力は大きくなくても力が加わる時間が長くなり、足部への力学的ストレスが加わることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大久保衛
28. 高校男子サッカー選手における関節弛緩性とその特徴	―	平成25年6月	第23回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	運動量が多い高校サッカー選手の関節弛緩性について調査した。成長期の高校生において関節の安定性や不安定性はスポーツ障害の要因になることが考えられ、個人差が多い成長段階にあるスポーツ選手の特徴を考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：山崎岳志，橋本雅至，井上直人，古川博章，吉川晋也，石束友輝
29. ハンドヘルドダイナモメーターを用いた体幹機能評価方法の信頼性と妥当性	―	平成25年6月	第23回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	体幹筋の筋力測定にハンドヘルドダイナモメータを用いた測定に関してその再現性について級内相関係数を用いて検討を行った。再現性のある方法として課題が残り、方法のさらなる検討を必要とする。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，米田勇貴，中雄太，北西秀行，大八木博貴，柴沼均

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
30. Trunk Righting Test と体幹機能の関係性	―	平成26年6月	第24回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	体幹機能評価として考案したTrunk Righting Testと体幹筋の持久性と協調性を見るブリッジテストとの関連性から、体幹筋の評価方法について検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，北西秀行，井上直人，植田篤志
31. 足部横アーチ変化の測定方法の検討	―	平成26年6月	第24回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	外見の形状では測定が困難である足部横アーチの客観的な測定方法について考案し、その方法の有用性につて検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，藤竹俊輔，来田晃幸，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衞，熊井司，田中康仁
32. 高校部活動に対するフィジカルサポート	―	平成27年6月	第25回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	縦断的に行っている高校サッカー選手へのフィジカルサポートについて具体的に紹介した。今まで行ってきた経験から得た課題について考察を加えた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠祐、高嶋厚史、幸田康宏、林孝明、橋本雅至
33. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化-人工芝グラウンドに対するゴムチップ補充の影響-	―	平成27年6月	第25回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	サッカー競技中に発生する外傷や障害を引き起こす要因は，選手が使用しているグラウンドサーフェイスも一要因になると報告されている。今回，長期経過した人工芝グラウンドに特殊畦砂やゴムチップを補充したことによる，スポーツ傷害発生への影響を検討した．結果、人工芝グラウンドでは年数が経過するとともに下肢捻挫発生率が増加し，ゴムチップの補充後では下肢肉離れの発生率が有意に減少した． 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，藤竹俊輔，来田晃幸，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衞，熊井司，田中康仁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
34. 腰椎分離症者のスポーツ復帰期間による腰椎前弯角と腰椎椎間可動域の違い	―	平成28年6月	第26回 関西臨床スポーツ医科学研究会（大阪）	腰椎矢状面上のアライメント評価は、分離症のストレス要因の特徴を見出すうえで重要な項目であると考えられる。今回、スポーツ復帰までの期間を急性期と亜急性期との境界である4週経過を基準とし、X線撮影による腰椎前弯角と腰椎椎間可動域について検討した。結果、腰椎（L1-S）前弯角は、最大屈曲時、4週未満群に対し、4週以上群は低値を示し、最大伸展時では、4週未満群に対し4週以上群は高値を示した。腰椎椎間可動域は、4週未満群に対し、4週以上群は低値を示した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊、稲葉孝洋、木下和昭、森藤武、橋本雅至、大槻伸吾
35. 姿勢保持の難度別に分けたCore stability testの保持時間についての検討	―	平成29年6月	第27回 関西臨床スポーツ医科学研究会（大阪）	我々は、体幹や股関節周囲筋の総合的な筋機能を反映するBridge活動を利用したSide Bridge(SB)とFront Bridge(FB)をCore stabilityの評価として用いている。客観的な指標として姿勢の保持時間を用いて評価してきたが、多様な対象者に対する評価として課題があった。そこで今回、姿勢保持の難度に着目することが必要であると考え、SBとFBの姿勢を難度に分けて階層別に評価する方法としてCore stability test(CST)を考案した。結果、SBとFBの両姿勢においてB、C、D順に姿勢保持時間が有意に長くなっていた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠佑、木下和昭、大槻伸吾

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
(著書)				
7. 歩行を診る －観察から始める理学 療法実践－	共著	平成23年3月	(株)文光堂	歩行動作の改善を目的に臨床で経験する障害ごと、また疾患ごとに歩行動作をいかに捉え、アプローチするかを具体的に解説した。さらに理学療法効果を高めることに効果的な道具や器具、アイテムの使用についてもまとめてある。（Ａ５判　全478頁） 編者：松尾善美 ①本人担当部分： （各論28）テーピング、インソールを必要とする対象者（ｐ．390～ｐ．408）を共著。 歩行を分析、アプローチする際にテーピングやインソールパッドなどを用いて歩容の変化から理学療法の戦略を具体化していく方法を紹介し、例示しながら解説した。共著者：橋本雅至、伊佐地弘基、岡田亜美 ②本人担当部分： （各論29）スポーツウエアを必要とする対象者（ｐ．409～ｐ．426）を単著。 テーピングなどの効果を利用し、歩行などの荷重位動作の機能にアプローチする方法を紹介し、テープの効果を持続させるためのスポーツウエアの紹介や利用方法について解説した。
8. 理学療法Mook９ スポーツ傷害の理学 療法(第2版)	共著	平成23年3月	(株) 三輪書店	第1版より、さらに最新情報をふまえてスポーツ外傷・障害全般的に理学療法士の観点から発生要因や力学的ストレスなどスポーツ競技を困難にする病態運動学について解説している。またその要因をふまえて適切な理学療法について臨床の観点から紹介、解説している （Ｂ５判　全400頁） 編著者：福井勉、小柳磨毅 本人担当部分： 第3章四肢と体幹の傷害に対する理学療法4. 下肢のスポーツ障害の理学療法① （ｐ．71～ｐ．82）を共著。 下肢のスポーツ障害について発生要因とその対応策、発症後のコンディショニング、トレーニングおよび再発予防の観点から解説した。特に運動学、運動力学的側面から工夫したトレーニングの紹介や運動解析のデータからスポーツ障害の発生要因について考察を加えた。 共著者：中江徳彦、橋本雅至、田中則子
9. 実践PTノート 運動器傷害の理学療法 (第2版)	共著	平成25年4月		運動器傷害の概論と運動療法に関して実際に実践している実技内容を部位ごとに紹介した。さらに自己学習のため、その手技の動画をDVDに収録し講義外での実技練習に役立てるように工夫した。第1版から内容の見直しと追加を行い、より実践的な内容に再編した （Ａ４判　全210頁） 編著者：小柳磨毅 共著者：上野隆司、吉本陽二、橋本雅至、 淵岡聡、中江徳彦、佐藤睦美、境隆弘 共著者全員での執筆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10. 教科書にはない敏腕PTのテクニック −臨床実践変形性膝関節症の理学療法−	共著	平成28年5月	(株)文光堂	日常診療でよく診る変形性膝関節症について，経験豊富な敏腕理学療法士による長年の創意工夫により，臨床現場で行われている技術のコツについて解説した。 （Ｂ５判　全192頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 膝OAの外科的治療を理解し術後に活かす（ｐ．47～ｐ．59）を共著。 人工膝関節置換術を中心にその手術方法を解説し、皮膚切開から術後の理学療法の工夫や考慮のポイントを解説した。特に術後関節可動性に影響を与えやすい術創部のアプローチを具体的に紹介した。 共著者：橋本雅至、木下和昭 ②本人担当部分： 膝OA患者の術前・術後の歩容改善をねらう（ｐ．120～ｐ．134）を単著。 手術前の状態から手術後の歩容の改善を、その時期に分けて解説した。特に術後の残存する体幹機能の不具合に着目して具体的なアプローチについて紹介している。
11. 教科書にはない敏腕PTのテクニック −臨床実践足部・足関節の理学療法−	共著	平成29年5月	(株)文光堂	足部・足関節に頻発する運動器傷害を中心に評価やアプローチについて臨床で行っている実践的な内容をまとめた。運動器疾患以外にも内科的障害に起因する足部の障害についてもあわせて解説した。 （Ｂ５判　全179頁） 編著者：橋本雅至 ①本人担当部分： 足部・足関節機能と身体運動との関係をとらえる（ｐ．25～ｐ．38）を共著。 足部・足関節の力学的機能について解説し、身体運動時の基礎としての役割に対して必要な機能を解説した。また機能不全の場合のアプローチについて紹介を行った。 共著者：橋本雅至、木下和昭 ②本人担当部分： 扁平足障害−足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．70～ｐ．84）を共著。 臨床で経験する扁平足障害が足部にとどまらず、身体運動に影響を及ぼす関係性について解説し、その評価方法やアプローチについて紹介した。 共著者：中尾英俊、橋本雅至 ③本人担当部分： 有痛性外反母趾−足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．85～ｐ．98）を共著。 外反母趾変形でも有痛性の場合を重要視して、足部にとどまらず、身体運動に影響を及ぼす関係性について解説し、その評価方法やアプローチについて紹介した。特に靴の工夫やインソールなどについて具体的に解説した。 共著者：生島直樹、橋本雅至 ④本人担当部分： 後脛骨筋腱、腓骨筋腱の要害−足部・足関節の機能的特徴をふまえ介入する（ｐ．99～ｐ．113）を共著。 足アーチ機能を担保する筋群に加わる力学的ストレスを具体的に紹介し、その頻回な負荷が引き起こす筋腱の障害を解説した。足部機能だけではなく、身体の重心保持の機能を含めて具体的に解説した。 共著者：瓜生玲子、橋本雅至

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12. 統合と解釈がよくわかる実践！理学療法評価学	共著	平成30年3月	(株)医歯薬出版	西守隆 編著，上杉雅之監修 （Ｂ５判　全305頁） 本人担当部分： 第4章4アキレス腱断裂(手術適応例)．　（ｐ．196～ｐ．205）を共著。 アキレス腱断裂術後の理学療法を臨床上の工夫を踏まえて解説した。 共著者：橋本雅至、木下和昭
13. 教科書にはない敏腕PTのテクニック -臨床実践　肩関節の理学療法-	共著	平成30年5月	(株)文光堂	橋本雅至，村西壽祥 編集 （Ｂ５判　全194頁） ①本人担当部分：
14. 教科書にはない敏腕PTのテクニック -臨床実践体幹の理学療法-	共著	令和1年8月	(株)文光堂	橋本雅至　編集 （Ｂ５判　全179頁） ①本人担当部分：
（学術論文） [原著論文] 38. グラウンドサーフェイスの変化が大学サッカー選手のスポーツ傷害に及ぼす影響 -土グラウンドとロングパイル人工芝グラウンドとの比較- (査読付)	共著	平成22年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.18 (2) :P.256-P.263	グラウンド表面の違いがサッカー選手のスポーツ傷害の発生に与える影響を調査した。土グラウンドで練習を行った１年間とその後人工芝グラウンドで行った１年間に発生したスポーツ傷害を集計し、人工芝では土グランドと比して上肢の傷害発生が多かった。要因として下肢の易疲労による転倒の増加、スライディングなどの練習プレー内容の変化が考えられた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衛、 橋本雅至、山野仁志、岸本恵一、藤竹俊輔
39. 大学サッカー選手に対する足趾屈曲筋力トレーニングの効果 (査読付)	共著	平成22年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.19 :P.3-P.6	スポーツ傷害の発生と足趾屈曲筋力との関連から、足趾屈曲筋力を継続的にトレーニングすることが基本的なパフォーマンステストとの関連を調査し、検討を加えた。結果はトレーニング介入前後では片脚立位能力、最大1歩踏み出し能力が向上した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衛、 橋本雅至、山野仁志、岸本恵一、藤竹俊輔

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
40. Side-Bridge動作での運動条件変化に伴う体幹筋・股関節周囲筋の筋活動 （査読付）	共著	平成22年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.19 :P.40-P.52	体幹筋トレーニングにて用いられるサイドブリッジ動作に運動負荷の変化を加えることによって変化する筋活動を筋電図学的に考察した。股関節外転筋や体幹の固定に働く筋活動を効率よく高められる方法を具体的に述べた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、田頭悟志、井上直人、森洋子、新谷健
41. クラウス・ウェーバーテスト変法と体幹深部筋エクササイズにおける筋活動量について （査読付）	共著	平成22年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.19 :P.53-P.56	体幹筋機能の測定やトレーニングに用いられる動作や姿勢保持における体幹筋の活動を客観化するために内腹斜筋にワイヤー電極を用いた筋電図測定によりデータを得た。結果、サイドブリッジやクラウス・ウェーバーテスト変法の姿勢保持が筋活動を高めていることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：杉本拓也、林慈晃、池内誠、柳田育久、橋本雅至、日下昌弘、大槻伸吾、大久保衛
42. 高校サッカー選手における体幹筋トレーニングが腰痛発生予防へ与える効果 （査読付）	共著	平成22年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.18 (3) :P.504-P.510	高校サッカー選手において体幹筋機能の変化と腰痛の有無に関する 経時的変化を調査した。高校サッカー選手14名に9ヵ月間体幹筋トレーニングを継続した結果、Side Bridge testの平均点が、介入前5.3±2.7点から介入後9ヵ月で10.3±2.7点($p<0.001$)と有意に増加し、体幹筋機能が向上したと考えられる。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：井上直人、橋本雅至、田頭悟志、大槻伸吾
43. サッカー選手のボールキック動作と下肢荷重位の動作における足アーチ高率とアーチ沈降率の分析 （査読付）	共著	平成22年9月	臨床バイオメカニクス Vol.31 :P.477-P.483	サッカー選手を対象に下肢荷重位動作時の足アーチの変化を客観化し、その動作の特性を考察した。片脚スクワット、キック動作時の足アーチの低下より、片脚スクワット時の低下が大きく、床反力の方向に違いと足関節角度の違いが関与していると推察された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、田邉智、大槻伸吾、大久保衛、橋本雅至、岸本恵一、藤竹俊輔

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
44. Side-Bridge の姿勢保持における筋活動の経時的変化について （査読付）	共著	平成23年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.20 :P.5-P.8	Side-Bridge の姿勢を長時間保持させて、体幹と股関節周囲筋の筋疲労についてEMGを用いて評価した。EMG上の筋疲労を示す変化が確認され、Side-Bridge の姿勢が体幹筋の筋疲労を評価する有用性について示唆した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、田頭悟志、板矢悠佑、新谷健、宮沢将史
45. グラウンドサーフェイスの違いが大学サッカー選手のスポーツ外傷に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成23年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.20 :P.25-P.28	天然芝グランドと人工芝グランドのおけるスポーツ外傷の発生について調査した。サーフェイスの違いにより、下肢などの身体疲労部位などに違いがあり、スポーツ外傷発生に部位や種類に違いがあることが分かった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衞、橋本雅至、岸本恵一、辻信宏、田中一成、中村信之、来田晃幸、藤竹俊輔
46. 腰椎変性疾患患者における腰椎アライメントと腰痛疾患治療成績判定基準との関連について （査読付）	共著	平成23年7月	近畿理学療法学術大会誌 Vol.40	中高年期の腰椎疾患の中でも変性疾患に着目し、X線撮影にて得た腰椎のアライメントデータと治療効果判定に用いる身体機能評価項目との関連性を考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：内原由佳子、橋本雅至、中尾英俊、金沢淳則
47. 高校男子サッカー選手における体幹筋機能と運動時腰痛発生の経時的変化 （査読付）	共著	平成23年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.19 (3) :P.551-P.557	高校生サッカー選手の運動時腰痛と体幹筋機能の継続的な調査から、運動時腰痛の軽減には一定以上の筋機能が必要であり、かつそれを維持する必要があることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：河野詩織、橋本雅至、井上直人、田頭悟志、大槻伸吾
48. 下肢機能サポートウエアが荷物を持ち、おろす動作における下肢筋活動に及ぼす影響について （査読付）	共著	平成23年10月	臨床バイオメカニクス Vol.32 :P.469-P.475	スポーツウエアを中心に市販されている機能的なウエアの実際の効果について客観することを目的に動作解析装置とEMGの分析から検討を行った。結果、ウエアの着用により、一定の筋活動の軽減効果が認められることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、論文執筆 共著者：橋本雅至、三谷保弘、山田隆登

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
49. 高校生男子サッカー選手に対するコンディショニングサポートが運動時腰痛に与える影響 （査読付）	共著	平成24年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.21 :P.23-P.28	高校生に対して1年間継続的に行った体幹筋トレーニングとストレッチングの指導と実施が、運動時腰痛の発生と如何に関連するかについて検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：古川博章、、石束友輝、吉川晋也、山崎岳志、橋本雅至、井上直人、木下和昭、田頭悟志、森洋子
50. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化 （査読付）	共著	平成24年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.21 :P.25-P.32	人工芝グラウンドでの練習が常態化したクラブにおけるスポーツ傷害の発生について約4年の追跡し、調査・検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、来田晃幸、藤竹俊輔、岸本恵一、橋本雅至、大久保衛
51. 大学サッカー選手の足部・足関節傷害に対する足部アーチ保持筋力トレーニングの効果 （査読付）	共著	平成24年6月	理学療法科学 Vol.27（3） :P.263-P.267	大学サッカー選手に対して足部のアーチ機能に着目して継続的にトレーニング指導した。結果、足趾把持力と片脚立位時間が増大し、足関節捻挫の発生率が低下した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衛
52. リスフラン靭帯損傷に対する理学療法の経験－保存治療について （査読付）	共著	平成24年6月	PTジャーナル Vol.46（6） :P.563-P.567	観血的治療も選択されるリスフラン靭帯損傷に対して、保存的治療を選択し、理学療法や下肢全体や体幹に着目したトレーニング指導によりスポーツに復帰できた症例について報告した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：岡徹、中川拓也、奥平修三、古川泰三、橋本雅至
53. 大学サッカー選手の第5中足骨疲労骨折における発生因子の検討 （査読付）	共著	平成24年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.20（3） :P.543-P.549	サッカー選手に好発する第5中足骨の疲労骨折の発生要因を身体的特徴や練習条件から考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、仲田秀臣、大槻伸吾、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大久保衛
54. 荷物の運び下ろし動作の運動解析 －荷物の重さの違いが身体運動に及ぼす影響－ （査読付）	共著	平成24年10月	臨床バイオメカニクス Vol.32 :P.353-359	荷物を運搬し、立ち止まり、床に下ろす動作における下肢の動作分析を行った。三次元動作解析機器を用いて下肢の運動と身体重心のへ負荷を客観し、荷物の重さによる変化について検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：三谷保弘、橋本雅至

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
55. 高校サッカー選手の腰痛予防に対するコアエクササイズの効果 （査読付）	共著	平成24年11月	スポーツ傷害 Vol.17 :P.44-P.47	高校生サッカー選手に継続的に体幹筋を中心としたトレーニングを行わせ、運動時腰痛の有無を経時的に測定した。結果、体幹筋機能は向上するが、腰痛の軽減に必ずしも関係しているとは言えなかった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、論文執筆 共著者：橋本雅至、石束友輝、井上直人、 木下和昭、田頭悟志
56. 高校サッカー選手の運動時腰痛発生について股関節可動性と周囲筋タイトネスの検討 （査読付）	共著	平成25年1月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.21（1） :P.5-P.10	高校サッカー選手の腰痛発生要因として体幹筋機能の低下以外に股関節の可動性の低下が腰椎の回転負荷を増加し、腰痛発生と関係することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：井上直人、橋本雅至、河野詩織、 古川博章、田頭悟志、木下和昭、大槻伸吾
57. 大学サッカー選手の第5中足骨疲労骨折と身体的要因の関係 （査読付）	共著	平成25年3月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.33（1） :P.37-P.42	継続的のフォローしている大学サッカー部の選手の身体的特徴とサッカーに多い第5中足骨の障害との関連性について調査した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、 橋本雅至、大久保衛
58. 大学サッカー選手における足部スポーツ障害に対するインソールの治療効果 （査読付）	共著	平成25年3月	靴の医学 Vol.26（2） :P.40-P.44	大学サッカー部に所属している選手のスポーツ障害調査と障害を有する選手のインソールを使用したアプローチがもたらす効果について検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、橋本雅至、 大久保衛
59. クラウス・ウェーバーテスト変法と体幹深部筋エクササイズにおける腹横筋の筋活動量について （査読付）	共著	平成25年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.22 :P.25-P.27	体幹筋機能を向上させる目的に行われるトレーニング動作について実際の筋活動量の観点からその効果について検討した。筋活動の測定には、ワイヤー電極を用い、深部の筋活動を導出した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：杉本拓也、能登洋平、林慈晃、池内誠、 仲哲治、土井龍雄、柳田育久、田邉　智、 大槻伸吾、橋本雅至、大久保衛

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
60. デジタルカメラによる胸腰椎可動域測定法の一検討(第一報) (査読付)	共著	平成25年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.22 :P.29-P.31	デジタルカメラにて撮影した静止画を用いて条件間の角度の変化から脊柱の可動性を予測した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：福本貴典、田頭悟志、板矢悠佑、高嶋厚史、橋本雅至
61. 第5中足骨疲労骨折の既往を有する大学サッカー選手におけるターン動作時の足部圧力解析 (査読付)	共著	平成25年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.22 :P.39-P.41	サッカー選手の好発する足部第5中足骨骨折の発生要因として切り返し動作の繰り返しが考えられる。実際にターン動作にて足部の同様な力学的なストレスが加わるかを客観化し、発生要因を検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、藤竹俊輔、 来田晃幸、岸本恵一、武村政徳、辻田純三、 橋本雅至、大久保衛
62. 大学サッカー選手における足部スポーツ障害に対するインソールの有用性 (査読付)	共著	平成25年7月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.33 (3) :P.292-P.297	縦断的に調査を継続している大学サッカー選手に認められる足部スポーツ障害に対して、市販のインソールの使用がスポーツ障害発生にどのように影響を及ぼすかを検討した。結果、インソールの使用の有用性が示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、 橋本雅至、大久保衛
63. 荷物の持ち上げ動作時の下肢および体幹の運動力学的解析 (査読付)	共著	平成25年10月	理学療法科学 Vol.28 (5) :P.619-P.622	日常生活から職業動作によく見られる荷物の持ち上げ動作について動作分析を行った。三次元動作解析装置を用いて体幹、下肢の力学的負荷を客観化した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：三谷保弘、橋本雅至、北川智美、 松木明好
64. 高校男子サッカー選手における体幹筋機能と股関節可動域が運動時腰痛に及ぼす影響 (査読付)	共著	平成26年1月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 :P.59-P.66	高校生のサッカー選手を対象に体幹筋の持久性と協調性を見た機能評価と股関節の可動性と柔軟性が、スポーツ動作時の腰痛発生に及ぼす影響を考察し、その関連性を示唆した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：吉川晋矢、橋本雅至、井上直人、 古川博章、木下和昭、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
65. 高校男子サッカー選手における入学年度別の体幹筋機能と運動時腰痛発生の経時的変化 (査読付)	共著	平成26年3月	四條畷学園大学リハビリテーション学部紀要 9号 :P7-P14	縦断的に調査している高校生サッカー選手が各年代の体幹機能評価の結果に特徴があることが分かり、その後トレーニング介入した結果、運動時の腰痛が一時期改善するが、その後僅かに増加する傾向があることが分かった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：石束友輝、橋本雅至、井上直人、 木下和昭、古川博章、大槻伸吾
66. 大学アメリカンフットボール選手におけるSide Bridge testと体幹筋力との関係 (査読付)	共著	平成26年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (2) :P.297-P.301	大学生の体幹機能を瞬発力の観点と筋持久力の観点から測定し、その関連性を検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、 新宮信之、廣瀬ちえ、橋本雅至、田頭悟志、 木下和昭
67. 第5中足骨疲労骨折の既往を有するサッカー選手の切り返し動作の動作解析 (査読付)	共著	平成26年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (2) :P.331-P.335	第5中足骨の骨折経験のあるサッカー選手の方向転換(切り返し)動作をハイスピードカメラにて撮影し､その足部の関節運動を健常者と比較検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、 橋本雅至、大久保衞、熊井司、田中康仁
68. 大学サッカー選手における足関節捻挫の競技復帰に影響を及ぼす要因の検討 (査読付)	共著	平成26年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.23 :P.19-P.21	縦断的に調査している大学サッカー選手の足関節捻挫についてスポーツ復帰に影響を及ぼす身体的特徴(筋力、柔軟性など)を検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、大久保衞、大槻伸吾、 藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、田中康仁
69. ハンドヘルドダイナモメーターを用いた体幹機能評価方法の再現性と関連性 (査読付)	共著	平成26年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.23 :P.27-P.29	体幹筋の筋力測定にハンドヘルドダイナモメータを用いた測定に関してその再現性について級内相関係数を用いて検討を行った。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、米田勇貴、中雄太、 北西秀行、大八木博貴、橋本雅至、柴沼均

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
70. 本学学生の国家試験前後における不安の変化 （査読付）	共著	平成26年6月	リハビリテーション教育研究 19号 P.216-P.217	最終学年の学生を対象に国家試験前後の不安状態を客観化し､その変化について検討を行った。資格を取得する教育課程において最終目標となる国家試験は多くの学生において不安をもたらす要因となることが考えられた。 本人担当部分：研究指導 共著者：小杰武陛、岡健司、髙橋泰子、 橋本雅至、酒井桂太
71. 荷重による足部アーチの変化が足部スポーツ障害の発生に与える影響　大学サッカーチームの8年間の前向き研究 （査読付）	共著	平成26年7月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.34 (3) :P.307-P.311	荷重負荷による足部アーチ高の沈降率を測定し、後に足部に発生するスポーツ障害との関係性について検討を行った。アーチ高の変化が大きい選手はスポーツ障害発生に何ら影響を与える可能性が示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、橋本雅至、大槻伸吾、 大久保衞、熊井司、田中康仁
72. 大学男子サッカーチームにおける10年間の傷害発生状況 （査読付）	共著	平成26年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (3) :P.463-P.472	縦断的に関わっている大学サッカー選手のスポーツ障害発生の動向について10年間の調査結果をまとめ、検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、 岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衞、 熊井司、田中康仁
73. 股関節可動域、下肢筋タイトネスの経時的変化が運動時腰痛に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成26年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.22 (3) :P.481-P.487	高校生サッカー選手を対象に股関節の可動性と下肢筋の硬さが、運動時腰痛との関連と関連すると考えられ、トレーニング介入によるその改善がその後の運動時腰痛にどう変化をもたらせるかを調査し検討を加えた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、 板矢悠祐、井上直人、木下和昭、大槻伸吾
74. 変形性膝関節症における体幹機能と身体機能の関連性 （査読付）	共著	平成26年12月	運動器リハビリテーション Vol.25 (4) :P.350-P.355	変形性膝関節症患者を対象にその体幹機能を評価する方法を考案した。その体幹機能と身体機能との関連を検討し、変形性関節症の発生機序について考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、米田勇貴、 中雄太、北西秀行、大八木博貴、柴沼均

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
75. 端座位での片側支持における姿勢保持とTrunk Righting Testとの関係 （査読付）	共著	平成27年4月	理学療法科学 Vol.30 (2) :P.329-P.332	体幹機能の評価方法として座位姿勢で行うテスト方法を考案した。そのテスト方法にて得られた結果と座位姿勢保持との関連性を検討し、体幹機能評価の有用性について考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、米田勇貴、中雄太、北西秀行、大八木博貴、星野祐一、柴沼均
76. 大学男子サッカーチームにおける上半身傷害の発生状況 ：10年間の傷害調査結果 （査読付）	共著	平成27年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.23 (2) :P.242-P.251	大学男子サッカーチームにおける，2003年から2012年までの10年間の上半身(上肢，体幹，頭頚部)に発生した傷害を調査した． 1年生時の発生率，ゴールキーパーの発生率が有意に高く，1部リーグに参加した年度と人工芝グラウンドに変更した年度の上肢傷害発生率の有意な増加が認められた. 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衞、熊井司、田中康仁
77. 大学サッカー選手における足趾屈曲筋力が足部スポーツ障害の発生に与える影響 （査読付）	共著	平成27年5月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.35 (2) :P.133-P.138	多種多様なフットワーク動作が必要なサッカー選手において足趾の屈曲力(把持力)がスポーツ障害発生にいかに関与するかを検討した。 本人担当部分：ータ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衞、熊井司、田中康仁
78. 足部横アーチ変化の測定方法の検討 （査読付）	共著	平成27年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.24 :P.19-P.22	外見の形状では測定が困難である足部横アーチの客観的な測定方法について考案し、その方法の有用性につて検討した。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、 岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衞、 熊井 司、田中康仁
79. Trunk Righting Testと体幹機能の関係性 （査読付）	共著	平成27年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.24 :P.31-P.34	体幹機能評価として考案したTrunk Righting Testと体幹筋の持久性と協調性を見るブリッジテストとの関連性から、体幹筋の評価方法について検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、北西秀行、 井上直人、植田篤史

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
80. A novel objective evaluation method for trunk function (体幹筋機能評価方法の検討) (査読付)	共著	平成27年6月	J. Phys. Ther. Sci. Vol.27 :P.1633-P.1636	体幹機能を客観的に評価する方法としてTrunk Righting Testを考案し、その有用性を検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Masashi Hashimoto, Kazunari Ishida, Yuki Yoneda, Yuta Naka, HidekuKi Kitanishi, Hirotaka Oyagi, Yuichi Hoshino, Nao Shibanuma
81. 人工膝関節全置換術後患者の身体機能と術前および術後の体幹機能の関連性 (査読付)	共著	平成27年6月	理学療法科学 Vol.30 (3) :P.389-P.394	体幹機能評価としてTrunk Righting Testを用いて術前後の患者を対象に調査した。結果、術後の身体機能に体幹機能が関係することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、中雄太、北西秀行、大八木博貴
82. 座位体幹荷重支持機能テストと体幹筋機能 (査読付)	共著	平成28年1月	理学療法科学 Vol.31 (1) :P.49-P.52	Trunk Righting Testにて得られた座位での荷重支持機能とブリッジ姿勢保持にて得られた体幹筋の持久性と協調性との関係性について考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、北西秀行、 米田勇貴、中雄太、大八木博貴、井上直人、植田篤史、田頭悟志、福本貴典、高嶋厚史、板矢悠佑、新谷健、星野祐一
83. 腰椎変性疾患に対する体幹伸展持久力トレーニングの効果−日本整形外科学会腰椎疾患問診票(JOABPEQ)を用いた評価− (査読付)	共著	平成28年4月	理学療法科学 Vol.31 (2) :P.275-P.279	腰部疾患患者を対象に体幹筋の持久性向上を目的にトレーニング介入し、介入の結果として疾患に関連する症状の変化を問診票を用いて調査した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：中尾英俊、稲葉孝洋、森藤武、内原由佳子、渡邊萌、金子元春、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
84. 体幹の荷重支持機能の左右差がジャンプ動作に与える影響 （査読付）	共著	平成28年6月	JOSKAS Vol.41 (3) :P.1068-P.1074	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能の左右差が各種のジャンプ動作に与える影響について調査した。結果、体幹の安定性が大きく求められるジャンプ動作では体幹機能の左右差が関与しやすいことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、井上直人、北西秀行、中雄太、大八木博貴、植田篤史、星野祐一、石田一成、柴沼均、中尾英俊、大槻伸吾
85. 成長期スポーツ障害の腰椎分離症と非特異的腰痛のX線による腰椎アライメントと可動性について （査読付）	共著	平成29年3月	大阪河﨑リハビリテーション大学紀要 11巻 :P.135-P.139	成長期のスポーツ選手に見られる腰椎分離症と非特異的腰痛者にX線撮影から腰椎のアライメントと撮影条件間の差から可動性を予測した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：中尾英俊、橋本雅至、森藤武、岡健司
86. 高校男子サッカー選手における体幹荷重支持機能とブリッジ姿勢保持の特徴～利き脚側と非利き脚側での比較～ （査読付）	共著	平成29年5月	日本整形外科スポーツ医学会雑誌 Vol.37 (2) :P38-P41	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能とブリッジ姿勢保持により得られた体幹筋機能の左右差と効き脚と非効き脚の関係性について調査した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、橋本雅至、中尾英俊、大槻伸吾
87. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化　人工芝グラウンドに対するゴムチップ補充の影響 （査読付）	共著	平成29年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌 Vol.25 :P53-P55	サッカー競技中に発生する外傷や障害を引き起こす要因は，選手が使用しているグラウンドサーフェイスも一要因になると報告されている。今回，長期経過した人工芝グラウンドに特殊硅砂やゴムチップを補充したことによる，スポーツ傷害発生への影響を検討した．結果、人工芝グラウンドでは年数が経過するとともに下肢捻挫発生率が増加し，ゴムチップの補充後では下肢肉離れの発生率が有意に減少した． 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：藤高紘平、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大槻伸吾、大久保衞、熊井 司、田中康仁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
88. Relationship between trunk function evaluated using the trunk righting test and physical function in patients with knee osteoarthritis (体幹筋機能テストと変形性膝関節症患者の身体特性との関連性) (査読付)	共著	平成29年6月	J. Phys. Ther. Sci. Vol.29 :P.996-P.1000	変形性膝関節症（OA）患者の運動機能評価において体幹の立ち直り運動のテスト（TRT）を用いて体幹筋機能の評価を行っている。その臨床上の有効性について検討した。結果、同側のTRTと関連する因子は、最大等尺性膝伸筋力テストおよび同側のステップテストであった。術側と、非術側TRTはTUGとかなり関連していた。下肢の運動器疾患であるが、体幹機能評価の重要性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Kazunari Ishida, Masashi Hashimoto, YuKi Yoneda, Yuta NaKa, hideyuki Kitanishi, Hiroki Oyagi, Yuichi Hoshino, Masahiro Kurosaka, Nao Shibanuma
89. Side-to-side differences in range of motion, muscle strength, and medial elbow laxity in young baseball players with medial elbow injuries (内側型肘関節障害を有した成長期野球選手の関節可動域、筋力、関節弛緩性のの左右差について) (査読付)	共著	平成29年7月	J Phys Fitness Sports Med Vol.6 (4) :P.233-P.239	成長期の野球選手の肘関節の障害は投球動作に大きく影響し、また投球動作から力学的影響を受ける。今回、成長期の野球選手の関節機能の評価から検討を加えた。結果、肩外内旋、肘屈伸、前腕回内外､股関節内旋の可動域は非投球側に比べ減少していた。また僧帽筋および棘上筋の筋力、肘関節の内側不安定性は左右差を示していた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：Takeshi Morifuji, Hidetoshi Nakao, Takahiro Inaba, Kenji Kasubuchi, Masashi Hashimoto, Motoharu Kaneko
90. 野球経験年数での肩関節回旋可動域の変化 (査読付)	共著	平成29年7月	JOSKAS Vol.42 ：P.493-P.498	小中学生の野球経験年数別での肩関節可動域の変化について検討した。結果は野球経験年数の増加に伴い、両側共に肩関節90° 外転位での外旋角度と全可動域に有意な低下傾向が認められた。以上より、小中学生の野球選手の肩関節90° 外転位での外旋角度と全可動域は野球経験の増加に伴い減少していくことが考えられ、今後の投球障害治療の一助となる可能性が示された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：木下和昭、中川泰彰、向井章悟、佐治隆彦、薮本浩光、井上直人、伊藤春盛、橋本雅至、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
91. 投球障害肘を有する小学生野球選手の肩関節可動域の特徴 (査読付)	共著	平成29年8月	日本臨床スポーツ医学会誌 Vol.25 (3) ：P.454-P.457	投球動作において，肩関節可動域の制限は，投球障害肘の発症と関連が報告されている．そのため，本研究の目的は投球障害肘を有する小学生野球選手の肩関節可動域の特徴を明らかにすることとした.結果，障害群は健常群に比して，投球側，非投球側の肩関節外転位での外旋可動域が，有意に小さかった．また，投球側の肩全回旋可動域およびGlenohumeral Internal Rotation Deficitは，2群間で統計学的に有意差はなかったが，障害群のほうが小さい傾向であった. 本人担当部分：データ分析、研究指導 共著者：植田篤史、橋本雅至、木下和昭、小島喜義、衛門良幸、井上直人、大槻伸吾
92. Cognitive impairment associated with locomotive syndrome in community-dwelling elderly women in Japan (日本人の健常高齢者女性の運動機能評価と認知機能について) (査読付)	共著	平成29年10月	Clinical Interventions in Aging 2017 12 :P.1-P.7	日本人の健常高齢者を対象に運動機能評価と身体組成､認知機能との関連を検討した。ロコモティブシンドロームのように運動機能の低下により引き起こされるが、これは認知機能の変化や体組成の変化との関連が示唆された。 本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：Misa Nakamura, Fumie Tazaki, Kazuki Nomura, Taeko Takano, Masashi Hashimoto, Hiroshi Hashizume, Ichiro Kamei
93.体幹筋・股関節周囲筋の機能評価を目的とした難度別のcore stability testの保持時間について (査読付)	共著	平成30年6月	関西臨床スポーツ医・科学研究会誌,27: 27-30	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：高嶋厚史，田頭悟志，板矢悠佑，福本貴典，大槻伸吾，木下和昭，新谷健，橋本雅至
94.片脚立位と端座位での片側支持姿勢の腰部周囲筋の筋活動の関係 (査読付)	共著	平成30年12月	理学療法科学 33(6) p.929-p.934	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，澳昂佑，板谷悠佑，福本貴典，高嶋厚史，大槻伸吾
95.腰痛を有する高校野球選手における体幹・股関節筋力と腰椎アライメントとの関係性 (査読付)	共著	令和1年1月	日本臨床スポーツ医学会誌27巻1号 p.27-p.33	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：中尾 英俊，橋本 雅至，濱田 太朗，木下 和昭，森藤 武，大槻 伸吾
96.A Vertical Load Applied Towards the Trunk Unilaterally Increases the Bilateral Abdominal Muscle Activities (査読付)	共著	令和1年3月	J. Phys. Ther. Sci. Vol.30(3) :P.273-P.276	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：Kazuaki Kinoshita, Kazunari Ishida, Masashi Hashimoto, Hidetoshi Nakao, Nao Shibanuma, Masahiro Kurosaka, Shingo Otsuki

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
97.肩肘障害を発症する小学野球選手の肩関節可動域の特徴　一年間の縦断的検討（査読付）	共著	令和1年4月	日本臨床スポーツ医学会誌 27巻2号 p.273-p.278	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：木下 和昭，中川 泰彰，向井 章悟，伊藤 盛春，井上 直人，橋本 雅至，大槻 伸吾
98.人工膝関節全置換術後早期のTimed up and go testの改善に関係する因子　（査読付）	共著	令和1年10月	理学療法科学　34巻5号 p.553-p.557	本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共著者：木下 和昭，橋本 雅至，大八木 博貴，石田 一成，柴沼 均，来田 宣幸

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
その他 「総説・報告書」				
14. 運動器疾患の理学療法における臨床力	単著	平成25年4月	理学療法京都 42号 ：41-46	運動器疾患の理学療法を効果的に進めるにあたり、身体の機能を如何に捉えることができるが重要である。その際、動作の観察・分析が適切に行い、機能障害を具体的にする評価が治療の成果を左右する。著者の工夫している動作の捉え方を紹介しながら、ポイントを解説した。
15. 観察的動作分析における介入効果から身体運動を捉える方法～足部・足関節の機能に着目して運動器疾患における歩行動作を考察する～	単著	平成26年6月	大阪河﨑リハビリテーション大学紀要 8巻1号 :P. 158-P. 165	身体運動の土台である足部足関節の機能を中心に運動連鎖の観点から身体全体に及ぶ姿勢制御や運動調整について解説した。特にインソール療法と運動療法の併用や荷重位トレーニングにおける考え方、観察的動作観察のポイントなどを紹介しながら説明を加えた。
16. 足部・足関節のスポーツ障害-overuse障害の克服- 理学療法によるoveruse障害への対応	共著	平成26年7月	臨床スポーツ医学 31巻7号 ：P. 674-P. 684	overuse障害の要因を関節弛緩性など関節の特性と運動連鎖における力学的ストレスの観点から解説する。具体的には運動療法の紹介とインソールなどの装具療法を併用した理学療法を解説した。 本人担当部分：論文執筆 共著者：橋本雅至、伊佐地弘基

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17. 動作解析を用いた機能的ウエア開発-ワコールとの共同開発	単著	平成29年11月	理学療法ジャーナル 51巻11号 ：P.959-P.962	特集「多分野に広がる理学療法」の1つを担当執筆。 身体運動解釈、動作分析の観点から機能的ウエアを開発する業務について紹介した。過去10年の実施の開発例を示し、理学療法の観点がどのように活用できるかを解説した。
(その他) [学会発表] (国際学会)				
1. Effects of different pedaling rates on muscle activity of lower extremity and crank torque during constant work rate pedaling. (回転速度の違う自転車のペダリング動作における下肢筋活動と関節トルクの違いについて)	—	平成22年6月	The 18 Congress of the International Society of Electrophysiology and Kinesiology (Aalborg, Denmark)	自転車ペダリング動作における運動量や仕事負荷をペダリング速度や回転トルクの調整から定量化し、筋活動様式の特性を確認した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：Iwasita Atsusi,Konisi Y, Hashimoto Masashi, Ichihasi Noriaki, Yoshida Masaki
2. Relationship between stress fracture of the 5th metatarsal and physical facters in college soccer players (大学サッカー選手の身体特性と第5中足骨骨折との関係性について)	—	平成23年11月	The 5th Asia-Pacific Conference on Exercise and Sports Science (APCESS 2011,Shanghai)	大学サッカー選手に好発する第5中足骨の疲労骨折の発生要因を身体的特徴から考察した。特に下肢のアライメントが関連する可能性があった。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：Kohei Fujitaka, Shingo Otuki, Mamoru Okubo, Masashi Hashimoto, Keiiti Kishimoto, Shunsuke Fujitake, Teruyuki Kita
3. Risk factors of stress fracture of the fifth metatarsal bone in university soccer players. (大学サッカー選手の第5中足骨折疲労骨折の危険因子)	—	平成24年5月	American College of Sports Medicine, 16th Health & Fitness Summit & Exposition (Los Vegas)	サッカー選手に多く見られる足部傷害の一つ第5中足骨骨折の発生要因を検討した。検討項目は下肢を中心に機能評価を行い、関連する因子について考察した。膝関節アライメント(Q-angle)と足趾屈曲筋力との関連が示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：Kohei Fujitaka, Shingo Otuki, Shunsuke Fujitake, Teruyuki Kita, Keiiti Kishimoto, Masashi Hashimoto, Mamoru Okubo
4. Characteristics of human body movement when lifting loads: investigation into difference in load weight. (重量物の持ち上げ動作におけるの重さに違いが身体動作に与える特徴)	—	平成25年9月	WCPT-AWP & ACPT Congress 2013 (Taichung, Taiwan)	荷物の持ち上げ動作における運動特性について、荷物の重さを変えた時に体幹、下肢の運動負荷がどのように変化するかを検討した。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者：Yasuhiro Mitani, Masashi Hashimoto, Tomomi Kitagawa

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. Electromyography analysis in stratified core stability testing （体幹筋機能の評価テストの筋電図学的検討）	—	平成28年10月	ACPT Congress 2016 (Kuala Lumpur, Malaysia)	体幹機能評価としてブリッジ姿勢を用いた機能評価を行っている。今回、その評価姿勢における体幹の筋活動の特性を客観化し、今後の評価方法としての有用性を検討することとした。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者： Satoshi Tagashira, Masashi Hashimoto
(国内学会)				
43. 高校サッカー選手における股関節周囲筋のタイトネスと運動時腰痛発生との関連性	—	平成22年5月	第45回 日本理学療法学術大会 （岐阜）	高校サッカー選手の運動時腰痛発生に関して調査した。腰痛と関連性がある股関節周囲のタイトネスなどを他覚的に測定し、有痛者と無痛者との相違点いついて考察し、検討を加えた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：古川博章、木下和昭、橋本雅至、井上直人、大塚詩織、吉川晋也、石束友輝、福永浩明、吉野育代
44. 腰椎変性疾患における体幹筋持久力が腰痛治療成績判定基準におよぼす影響について	—	平成22年10月	第18回 日本腰痛学会 （北海道）	腰部変性疾患を有する外来患者を対象に、腰椎の可動性をX線撮影から測定し、体幹筋力を筋持久力の観点から点数化し、腰痛治療成績判定基準における各項目との関連性を検討した。結果、体幹の伸展筋持久力が日常生活動作能力との関係があることが示唆された。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊、橋本雅至、内原由佳子、金澤淳則
45. 荷物の持ちおろし動作における着用ウエアが下肢筋活動に及ぼす影響について	—	平成22年11月	第37回 日本臨床バイオメカニクス学会 (京都)	荷物の持ちおろし動作において、下肢筋活動の観点から、着用する普通スパッツと下肢機能サポートを考慮したスパッツとの違いを客観化した。結果、関節運動やトルクには大きな違いがないが、下肢機能サポートのスパッツ着用時に下肢抗重力筋における筋活動が低下し、ウエアのサポート効果が示唆された。
46. 高校女子バレーボール選手の運動機能とスポーツ傷害の特徴	—	平成22年11月	第21回 日本臨床スポーツ医学会 (茨城)	高校バレーボール選手の体力測定を行い、筋力、筋持久力、柔軟性などの結果とスポーツ傷害歴との関連を考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：三谷保弘、橋本雅至、森北育宏

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
47. Side-Bridge姿勢保持における筋活動の持続的変化	―	平成22年11月	第21回 日本臨床スポーツ医学会 (茨城)	サイドブリッジ姿勢保持に関して筋持久力について筋電図的考察を行った。長時間の姿勢が可能群と不可群では筋疲労が示されてからの筋出力(筋電積分値)が多くなるかどうかの違いが示された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、田頭悟志、井上直人、古川博章、河野詩織、松本彰生
48. 高校サッカー選手の運動時腰痛発生について－股関節可動性と周囲筋タイトネスの検討－	―	平成22年11月	第21回 日本臨床スポーツ医学会 (茨城)	高校サッカー選手の腰痛発生要因として体幹筋機能の低下以外に股関節の可動性の低下が腰椎の回転負荷を増加し、腰痛発生と関係することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、橋本雅至、古川博章、河野詩織、木下和昭、田頭悟志、大槻伸吾
49. 大学サッカー選手における学年別での足関節捻挫の発生状況の分析	―	平成22年11月	第21回 日本臨床スポーツ医学会 (茨城)	大学サッカー選手を計5年間調査し、足関節捻挫の発生と関係する要因を検討した。結果、1年生が他の学年よりも、発生頻度が大きかった。大学生になってサッカーの練習環境の変化などが要因であることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高 紘平、大槻 伸吾、大久保 衞、橋本雅至、岸本 恵一、藤竹 俊輔、来田 晃幸
50. 腰椎変性疾患患者における腰椎アライメントと腰痛疾患治療成績判定基準との関連について	―	平成22年11月	第50回 近畿理学療法学術大会 （和歌山）	腰椎変性疾患患者における腰椎X線所見と股関節可動域、体幹筋持久力に着目し、日常生活動作との関連を検討した。結果、体幹伸筋持久力は、腰椎前弯角との相関がなかった。しかし、JOAスコアと相関することから、姿勢保持に寄与する体幹伸展筋持久力の向上が、腰痛の軽減につながり、結果として日常生活動作能力の向上に関与することが考えられる。つまり、腰椎変性疾患における腰痛を有する患者の治療として重要な項目であると言える。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：内原由佳子、橋本雅至、中尾英俊、金澤淳則
51. 大学サッカー選手の足部・足関節スポーツ傷害に対する足部アーチ保持筋力トレーニングの効果	―	平成23年5月	第46回 日本理学療法学術大会 （宮崎）	大学生にサッカー選手の足部アーチに着目し、下肢のスポーツ傷害発生と関連性と足部に対するトレーニングの継続による傷害発生の変化を検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衞、橋本雅至、藤竹俊輔、来田晃幸

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
52. 高校男子サッカー選手における初回メディカルチェック時の体幹筋機能と腰痛発生の変化	―	平成23年5月	第46回 日本理学療法学術大会 （宮崎）	高校生男子サッカー選手の運動時腰痛に関する調査である。初回に調査時の腰痛有無と身体機能との関連性について検討した。 本人担当部分：研究計画、データ分析、研究指導 共同発表者：石束友輝、橋本雅至、井上直人、古川博章、山崎岳志、河野詩織、吉川晋矢、木下和昭
53. 大学サッカー選手の足部スポーツ傷害と身体的要因の関係	―	平成23年9月	第66回 日本体力医学会大会 （山口）	大学サッカー選手の足部周辺のスポーツ傷害の発生要因を身体的特徴や機能の観点から調査し、考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衞、橋本雅至、岸本恵一
54. ジョーンズ骨折を受傷したサッカー選手の特徴と靴	―	平成23年9月	第25回 日本靴医学会学術集会 （奈良）	第5中足骨骨折の受傷したサッカー選手の身体的特徴を測定し、カティング動作を動作解析した結果とあわせて骨折の発生要因を考察した。 本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共同発表者：大槻伸吾、藤高紘平、橋本雅至、大久保衞
55. 大学サッカー選手の第5中足骨疲労骨折と身体的要因の関係	―	平成23年9月	第37回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （福岡）	サッカー選手に好発する第5中足骨の疲労骨折の発生要因を身体的特徴から考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衞、橋本雅至、岸本恵一、藤竹俊輔、来田晃幸
56. 大学サッカー選手の第5中足骨疲労骨折における発生因子の分析	―	平成23年11月	第22回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （青森）	サッカー選手に好発する第5中足骨の疲労骨折の発生要因を身体的特徴や練習条件から考察した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衞、橋本雅至、岸本恵一、辻信宏、田中一成、中村信之、藤竹俊輔、来田晃幸
57. 高校男子サッカー選手における体幹筋機能と股関節可動域が運動時腰痛に及ぼす影響	―	平成23年11月	第22回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （青森）	高校生の男子サッカー選手の運動時腰痛と体幹筋機能、股関節可動性との関連性について考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：吉川晋也、橋本雅至、井上直人、古川博章、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
58. 高校男子サッカー選手における入学年度別の体幹筋機能と運動時腰痛発生の経時的変化	―	平成23年11月	第22回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （青森）	高校生の男子サッカー選手の運動時腰痛の発生状況を学年ごとに集約し、体幹筋トレーニングの指導後に2年間の間フォローしたデータから、体幹筋機能の変化を追跡した結果と運動時腰痛の有無との関連について考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：石束友輝、橋本雅至、井上直人、古川博章、大槻伸吾
59. 高校生男子サッカー選手の股関節可動域と筋の伸張性に対するトレーニング効果が運動時腰痛に及ぼす影響	―	平成23年11月	第22回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （青森）	運動時腰痛と股関節可動性との関連に着目し、継続的なトレーニング効果と運動時腰痛の変化について考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、板矢悠佑、井上直人、木下和昭、大槻伸吾
60. 荷物の運び下ろし動作の動作解析―荷物の重さの違いが身体運動に及ぼす影響―	―	平成23年11月	第38回 日本臨床バイオメカニクス学会 （兵庫）	荷物を運搬し、立ち止まり、床に下ろす動作における下肢の動作分析を行った。三次元動作解析機器を用いて下肢の運動と身体重心のへ負荷を客観し、荷物の重さによる変化について検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：三谷保弘、橋本雅至
61. ハンドヘルドダイナモメーターを用いた体幹機能評価方法の信頼性	―	平成24年5月	第47回 日本理学療法学術大会 （兵庫）	ハンドヘルドダイナモメーターを使い、座位姿勢にて体幹機能を測定する方法を考案した。繰り返し測定による再現性を中心に検討を行った。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、米田勇貴、中雄太、大塚靖子、鄭克真、柴沼均
62. Critical illness polyneuropathyをきたした１例に対して訪問リハビリテーション介入により復職可能となった経験	―	平成24年7月	第24回 大阪府理学療法学術大会 (大阪)	運動感覚性軸索型ポリニューロパチーを呈した症例を訪問リハビリテーションの形態にて介入し、部分的であるが復職に向けて改善が見られたことについて報告した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：廣瀬将士、池田耕二、大原佳孝、竹内章、橋本雅至

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
63. 大学サッカー選手における足部スポーツ障害予防に関するインソールの有用性	―	平成24年9月	第38回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （神奈川）	大学サッカー選手を継続的にフォローする中でスポーツ傷害の発生を調査し、足部インソール使用の有無が関連することが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、橋本雅至、大久保衛
64. 大学サッカー選手における足部スポーツ障害に対するインソールの治療効果	―	平成24年9月	第26回 日本靴医学会学術集会 （東京）	大学サッカー選手をフォローする中で足部のスポーツ傷害を発生した選手に対して、インソールを使用の有無によるスポーツ復帰の状況の違いを調査した。使用群はスポーツ復帰までの日数が有意に短く、復帰後の再発率が低かった。傷害発生後インソール使用は治療結果を良好することが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、橋本雅至、大久保衛
65. 高校男子サッカー選手における体幹筋機能とランニング能力の関係	―	平成24年11月	第23回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神奈川）	高校生サッカー選手を対象に体幹機能、特に持久性について評価し、ランニング能力との関連を考察した。結果、体幹機能の高い者はランニング速度が速く、持久走にも良好な成績を示していた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志、橋本雅至、福本貴典、板矢悠佑、木下和昭、大槻 伸吾
66. 大学アメリカンフットボール選手におけるSide bridge testと体幹筋力の関係	―	平成24年11月	第23回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神奈川）	体幹筋を同時収縮させ、その持久性を見るテストと腹筋と背筋力の瞬発力の結果との関連性を検討した。結果、腹筋と背筋力の比率が一定であると体幹筋の同時収縮の時給制が良好となることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、新宮信之、廣瀬ちえ、橋本雅至、田頭悟志、木下和昭
67. サッカー選手における第5中足骨疲労骨折の運動学的特徴と身体的特徴との関連	―	平成24年11月	第23回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神奈川）	大学サッカー選手の足部の形態、足趾筋力のとターン動作の動作解析結果から、第5中足骨疲労骨折経験者と非経験者との差異を検討した。結果、足趾筋力と動作時の足部回外運動とに関連性が示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、藤竹俊輔、岸本恵一、橋本雅至、武村政徳、辻田純三、大久保衛

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
68. サッカー選手における第5中足骨疲労骨折の動作解析	―	平成24年11月	第39回 日本臨床バイオメカニクス学会 （千葉）	サッカー選手に多い第5中足骨の疲労骨折経験者の動作解析から、その発生要因を調査した。結果、ターン動作において踏み込み脚の足関節背屈運動が少なく、足部の回外運動が有意に大きかった。これらが足部外側に力学的ストレスをもたらせることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：：藤高紘平、大槻伸吾、岸本恵一、武村政徳、辻田純三、橋本雅至、大久保衛
69. 変形性膝関節症における体幹機能と身体機能の関連性	―	平成25年7月	第25回 日本運動器科学会 （神戸）	変形性膝関節症患者の体幹機能と下肢機能を中心とした身体動作との関連性を検討した。結果、下肢機能を必要とする身体動作には体幹機能の状況が少なからず関与することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中雄太，米田勇貴，北西秀行，大八木博貴，柴沼均
70. Trunk Righting Test（TRT）結果と片側殿部支持による座位姿勢保持との関連について重心(COP)動揺計測からの一考察	―	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	片側殿部支持の端座位（立ち直り動作）にて同側上部体幹を上方に押す力を測定するTRTを実施しており，今回，TRT時の姿勢を重心（COP）動揺から考察し，姿勢制御との関連を検討した．外周面積と単位面積軌跡長において優位側と劣位側との間で有意差が認められた． 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，米田勇貴，中雄太，北西秀行，大八木博貴，星野祐一，柴沼均
71. 体幹筋機構評価の姿勢保持における骨盤・股関節周囲筋に関する筋電図学的分析.	―	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	Side Bridge test（SB）、Front Bridge test（FB）とBack Bridge test（BB）を筋電図学的分析により、体幹筋機能評価としての有用性について検討した。測定筋は内腹斜筋、外腹斜筋、多裂筋、大殿筋、中瞥筋、大腿筋膜張筋、大腿直筋、内側ハムストリングとした。 %iEMG、MdPFともに有意な変化が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志，橋本雅至，高嶋厚史，板矢悠佑，福本貴典，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
72. 大学アメリカンフットボール選手におけるSide bridge testと体幹筋力の関係～第2報～	―	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	体幹筋機能検査として行っているSide bridge test（SB）と体幹筋力の伸展／屈曲比（E／F比）との関連について対象者数を増やしさらに検討を加えた。結果、SBと伸展筋力との間、 SBとE／F比との間に有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人，中川泰彰，向井章悟，新宮信之，伊藤盛春，廣瀬ちえ，橋本雅至
73. 超音波画像を用いた大腿骨前捻角の測定方法	―	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	大腿骨には前捻角があり股回旋ROMとの関係がある。前捻角を測定するRyder法は大転子の触診による測定であり，検者による誤差が生じる可能性が考えられる．今回，超音波画像を用いた前捻角の測定方法を試行し，その信頼性について検討した．結果、検者内ICC検者間ICCともに有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：新谷健，橋本雅至，井上直人，中川泰彰
74. 足部スポーツ障害を受傷した大学サッカー選手の足部アーチの特徴	―	平成25年10月	第24回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （熊本）	足部スポーツ障害を受傷した大学サッカー選手の足部アーチの特徴を検討した。座位アーチ高率と立位アーチ高率を測定し，座位アーチ高率から立位アーチ高率を引いてアーチ高率変化量（アーチ変化量）を算出した．受傷群を立位アーチ高率が高い群（高アーチ群）と 低い群（低アーチ群）の2群に分けアーチ変化量の比較を行った．結果、受傷群の立位アーチ高率は非受傷群よりも有意に低く，受傷群のアーチ変化量は非受傷群よりも有意に大きかった．低アーチ群のアーチ変化量は高アーチ群よりも有意に小さかった． 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，大槻伸吾，岸本恵一，橋本雅至，大久保衛，熊井司，田中康仁
75. 人工股関節全置換術後の体幹機能と膝関節伸展筋力、歩行能力獲得の関係	―	平成26年2月	第44回 日本人工関節学会 （宜野湾）	股関節疾患による人工関節置換術後患者の体幹機能と下肢機能、身体動作との関連性について検討した。結果、下肢機能は体幹機能と関連性があり、身体運動にも影響を及ぼすことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中雄太，木下和昭，橋本雅至，北西秀行，大八木博貴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
76. 人工膝関節全置換術後患者の身体機能と術前及び術後の体幹機能の関連性	―	平成26年5月	第49回 日本理学療法学術大会 （横浜）	変形性膝関節症患者（以下，膝OA）の膝関節の炎症や変形などを主症状とする運動連鎖機能不全の一病態に至ったものであると報告されており、術後は膝関節のみでなく，病変の悪化につながる体幹および下肢の運動連鎖を考慮することが重要である。我々はその機能を客観化することを目的にTrunk Righting Test （以下，TRT）を考案し，術後の体幹機能と身体機能との関連性についても検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中雄太，北西秀行，大八木博貴
77. 大学サッカー選手における足趾把持筋力が足部スポーツ障害の発生に与える影響	―	平成26年9月	第40回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （東京）	多種多様なフットワーク動作が必要なサッカー選手において足趾の屈曲力(把持力)がスポーツ障害発生にいかに関与するかを検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衞，熊井司，田中康仁
78. 高校生サッカー選手における体幹筋機能と障害発生の関係	―	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	体幹筋機能検査として行っているSide bridge test（SB）と体幹筋力の伸展／屈曲比（E／F比）との関連について報告した．その後，対象者数を増やしさらに検討を加えた。SBと伸展筋力との間、SBとE／F比との間に有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志，橋本雅至，新谷健，福本貴典，板矢悠祐，高嶋厚史，木下和昭，大槻伸吾
79. Trunk Righting Testと体幹機能の関係性　第2報	―	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	個人内のTrunk Righting Test(以下、 TRT)の左右データの優劣かSide-Bridge test(以下、 SB)の姿勢保 持時間の優劣を反映していることを報告した。その後、対象者数を 増やしさらに検討を加えた。結果、TRTとFB・SBとの間に相関関係は認められなかった。またFB・SBともにTRTの優位側が有意に姿勢保持の時間が長かった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至,米田勇貴，中雄太，北西秀行，大八木博貴，井上直人，植田篤史，田頭悟志，福本貴典，高嶋厚史，板矢悠祐，新谷健，星野佑一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
80. Back Bridge 動作における体幹・股関節周囲筋に関する筋電図学的分析	―	平成26年11月	第25回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	体幹筋や股関節伸筋に着目し、Back Bridge(BB)を筋電図学的に分析し、評価としての有用性を検討した。結果、体幹伸筋、股関節伸筋の%IEMG、MdPFに有意な変化か認められ、BB姿勢保持が体幹伸筋、股関節伸筋の持久性評 価の方法としての有用性か示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史，田頭悟志，板矢悠祐，福本貴典，橋本雅至，大槻伸吾
81. 人工膝関節全置換術前後における椅子立ち上がりテストの有用性	―	平成27年6月	第50回 日本理学療法学術大会 （横浜）	スクリーニングである30秒椅子立ち上がりテスト（以下，CS-30）や5回椅子立ち上がりテスト（以下，SS-5）が、変形性膝関節症の患者（以下，膝OA）やその後，手術に至った患者に対する有用性について検討した。結果、SS-5は今回測定した他の動作テストとの関係性が確認でき，先行研究と同様に膝OAに対して使用が可能であることが示唆された。SS-5の方が短時間にて可能であり，負担が少なく，有用性の高いテストであると考えられた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中雄太、米田勇貴、北西秀行、大八木博貴
82. 体幹の荷重支持機能の左右差がジャンプ動作に与える影響	―	平成27年6月	第7回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （札幌）	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能の左右差が各種のジャンプ動作に与える影響について調査した。結果、体幹の安定性が大きく求められるジャンプ動作では体幹機能の左右差が関与しやすいことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、井上直人、北西秀行、中雄太、大八木博貴、植田篤史、星野佑一、石田一成
83. 高校男子サッカー選手の座位体幹荷重支持機能と利き脚、非利き脚との関連	―	平成27年9月	第41回 日本整形外科スポーツ医学会学術集会 （京都）	Trunk Righting Testにて得られた体幹荷重機能とブリッジ姿勢保持により得られた体幹筋機能の左右差と効き脚と非効き脚の関係性について調査した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
84. 人工股関節全置換術前における体幹機能評価の重要性	―	平成27年10月	第42回 日本股関節学会学術集会 （大阪）	人工股関節全置換術（以下、THA）の術前の身体機能が術後の回復に影響を与えることが報告されている。THA前の体幹機能と身体機能の客観的な関連性を示した報告は少なく、我々はTHA前後の体幹機能に着目し、術前から体幹機能評価（Trunk Righting Test以下、TRT）を行っている。今回、THA前の症例を対象に、術前の体幹機能と身体機能との関係性を検討した。結果、術側TRTと術側膝関節伸展筋力、術側下肢荷重量との間にそれぞれ有意な正の相関が認められた。術側TRTと歩行時NRSとの間に有意な負の相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中雄太、木下和昭、橋本雅至、 柴沼均、林申也、橋本慎吾
85. 座位での体幹荷重支持機能テストの力学的考察	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	体幹荷重支持機能テスト（TRT）を考案し、片側の体幹の荷重支持機能が同側の連続ジャンプ動作に影響を与えることを報告した。今回、TRTを力学的に検討し、荷重動作との関係も検討した。TRTの肩で押す力と腎部で押す力は強い相関があった。またTRTの測定値は床反力値と強い相関があった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中尾英俊、 井上直人、田頭悟志、新谷健、大槻伸吾
86. 高校男子サッカー選手における競技パフォーマンスと体幹筋機能との関係	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	高校男子サッカー部に対して、体幹筋機能とサッカーに必要な競技パフォーマンスとの関係について検討した。FBはT－testと12分間走、SBはT－testと12分間走、 BBはT－testと12分間走に有意な相関が認められた。FB・SB・BBのような姿勢を一定時間保持する体幹筋機能は、T－testや12分間走と関係することが考えられた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：新谷健、橋本雅至、田頭悟志、 木下和昭、清野大輔
87. Bridge姿勢を用いた体幹筋機能評価における腹筋と背筋の不均衡についての検討	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	体幹筋機能評価としてBack Bridge test（BB）とFront Bridge test（FB）の測定値から、 BB（背筋）とFB（腹筋）の不均衡が動作テストに与える影響を検討した。結果、BB／FB高値群（BB優位）のBB＋FBは3回片足跳び、20m走、50m走、T test、12分間走との間に有意な相関が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史、橋本雅至、田頭悟志、 新谷健、福本貴典、板矢悠佑、幸田康宏、 木下和昭、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
88. 体幹筋機能の左右差がランニング動作へ及ぼす影響	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	サッカー選手に対して傷害予防やパフォーマンスの向上を目的に介入し、体幹筋機能の左右差とランニング動作との関連を調査した。体幹筋機能評価はFront Bridge test（FB）、Side Bridge test（SB）を実施し、ランニング動作は50m走、Ttest、12分間走とした。体幹筋機能評価より左右差あり群と左右差なし群に群分けを行い、ランニング動作との相関を調査した。結果、体幹の安定性が必要なランニング動作では体幹機能がランニングの動作に影響を及ぼすことが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志、橋本雅至、新谷健、板矢悠佑、福本貴典、高嶋厚史、幸田康宏、木下和昭、大槻伸吾
89. 成長期スポーツ障害の腰椎分離症と非特異的腰痛のX線による腰椎分節可動域の違い	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	成長期スポーツ選手の腰椎分離症と非特異的腰痛における腰椎の各椎体間の可動性について検証した。X線またはMRIにてL5片側の腰椎分離症（分離群）と診断された10名と、非器質的腰痛症（腰痛群）と診断された12名の臥位腰椎側面像のX線動態撮影により、L1－Sの各椎体間の最大伸展時の前弩角および最大屈曲時の後弩角を測定し、さらに最大伸展時と最大屈曲時の腰椎分節角を計測し、その差から各椎体間の分節可動域を算出した。結果、最大伸展時の前弩角は、分離群が腰痛群に比して高値を示し、腰椎の分節可動域は、分離群が腰痛群に比して高値を示した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊、稲葉考洋、森藤武、金子元春、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾
90. 小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testの有用性	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	小学生軟式野球選手に野球検診を実施しており、今回、小学生軟式野球選手にSBを実施し、傷害との関連を調査し、さらにSBの負荷量設定を検討した。結果、今回の条件下の調査においては、SBと投球による傷害との関連は認められなかった。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、佐治隆彦、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、廣瀬ちえ、橋本雅至、大場友裕、木下和昭、高嶋厚史、石束友輝、吉川晋矢

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
91. 器質的な投球障害肘を有する小学野球選手の肩関節・体幹可動域の特徴	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	器質的な投球障害肘を有する小学生野球選手における肩関節・体幹可動域の特徴を検討した。対象は、投球障害肘と診断された小学生野球選手（以下、障害群）と健常な小学生野球選手（以下、健常群）とした。投球側の肩関節2nd外旋は障害群が健常群に比して有意な可動域減少が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：植田篤史、橋本雅至、木下和昭、小島喜義、衛門良幸、大槻伸吾
92. 下肢筋タイトネスがボールキック動作時の骨盤前傾角度に及ぼす影響の検討	―	平成27年11月	第26回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （神戸）	下肢筋タイトネスがボールキック動作時の骨盤運動や肢位に及ぼす影響を検討した。 三次元動作解析システムにて、利き脚のインステップキックを解析した。踵腎間距離（HBD）と骨盤前傾角度の最大値に有意な相関は認められなかった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、板矢悠佑、高嶋厚史、幸田康宏、木下和昭、大槻伸吾
93. 小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testと投球障害	―	平成28年5月	第51回 日本理学療法学術大会 （札幌）	軟式野球連盟に加入している小学生に対して投球障害を早期発見することを目的に野球検診を実施している。投球動作においては，上肢機能だけでなく下肢，体幹機能の重要性が報告されている。今回，体幹筋機能の検査方法を取り入れ、小学生にSide Bridgetestを実施し投球障害との関連を調査した。結果、Side Bridge testの保持時間は投球側､非投球側ともに肘障害群と障害なし群の間に有意差は認められなかった。点数の差は肘障害群が障害なし群に比べ、有意に大きい結果であった。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、佐治隆彦、藪本浩光、伊藤盛春、廣瀬ちえ、橋本雅至、木下和昭、高本晴輝

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
94. 高校男子サッカー選手におけるシンスプリント既往者の疾走動作の特徴について	―	平成28年5月	第51回 日本理学療法学術大会 （札幌）	シンスプリント（Medial Tibial Stress Syndrome　以下，MTSS）の発生要因は下腿内側筋群の伸張性低下や足部の過回内による伸張ストレスによるとの報告が多い。我々は高校男子サッカー選手に対するフィジカルチェックにて明らかな特徴が認められなかった。そこで今回、MTSS 群と MTSS 既往の無い群（以下，control 群）の動作時アライメントを比較しMTSS 群の動作的特徴を検討した。 結果、静的アライメントと ROM には有意差が認められなかったが、動的アライメントでは 足関節の回内角度と足部外転モーメントに有意差が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：幸田康宏、田頭悟志、新谷健、 福本貴典、板矢悠佑、高嶋厚史、林孝明、 春日勇磨、木下和昭、橋本雅至
95. 野球経験年数での肩関節回旋可動域の変化	―	平成28年7月	第8回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （福岡）	小中学生の野球経験年数別での肩関節可動域の変化について検討した。結果は野球経験年数の増加に伴い、両側共に肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域に有意な低下傾向が認められた。以上より、小中学生の野球選手の肩関節90°外転位での外旋角度と全可動域は野球経験の増加に伴い減少していくことが考えられ、今後の投球障害治療の一助となる可能性が示された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，佐治隆彦，藪本浩光，井上直人，橋本雅至，大槻伸吾
96. 成長期野球選手の腰椎分離症における股関節屈筋群と伸筋群の筋力の検討	―	平成28年9月	第42回 日本整形外科スポーツ医学会 （札幌）	腰椎と股関節の運動時における連動について着目し、腰椎分離症による腰痛と、股関節周囲筋の筋機能との関連性について検討した。結果、分離症を有する選手の投球軸足股関節の屈曲筋力、伸展筋力ともに低く、ステップ脚の股関節屈曲筋力が有意に低かった。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊，稲葉考洋，木下和昭，濱田太朗，森藤武，橋本雅至，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
97.　ボールキック動作における体幹運動の解析	—	平成28年9月	第42回 日本整形外科スポーツ医学会 （札幌）	サッカー選手の特有なボールのキック動作では、骨盤から下肢の分析が多く、体幹の詳細な分析は少ない。今回はキック動作中の体幹運動に着目し検討した。結果、インステップキックは体幹伸展位、蹴側へ側屈させて力を貯め、インパクトに向けて骨盤と胸郭が相反する動きを伴いながら、急激に体幹を屈曲し、軸側方向へ側屈させていくことが示唆された。また水平面上では骨盤と胸郭が相反する回旋を伴いながら体軸を調整し、脊柱を一定方向へ回旋させている可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，中尾英俊，福本貴典，大槻伸吾
98.　童期野球選手における肩肘関節障害者の肩関節可動域の特徴～健常群と障害群との比較～	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	学童期野球選手における野球経験年数別での肩、肘関節に障害を有する者の肩関節可動域の特徴について検討した。野球開始1年目から4年目の障害群では、投球側の2nd外旋と2nd全可動域が健常群に比して有意に可動域が低下していた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、井上直人、廣瀬ちえ、橋本雅至、大槻伸吾
99.　中学生と高校生野球選手における投球障害の危険因子の違い	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	投球障害（Throwing Injury、以下TI）の危険因子を年代別で調査しTIの要因となる成長に伴う身体的特徴の違いについて検討した。TIと関連性の高かった項目は小中学生では投球側elbow push testとlnitial abduction test、高校生では投球側EPTと肩関節2nd外旋可動域、股関節内旋可動域左右差であった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：衛門良幸、橋本雅至、小島喜義、植田篤史、大木毅
100.　小学生軟式野球選手におけるSide Bridge testと投球障害肘との関係 ～第2報～	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	小学生野球選手に対して野球肘検診を実施しており、小学生野球選手の体幹筋機能検査として我々が用いているSide Bridge test（SB）の負荷設定の変更が必要であることを報告した。今回、SBの負荷を変更し投球障害との関連を調査した。SBの差は肘傷害群が低い傾向であったことから、SBの結果に左右差が認められることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、廣瀬ちえ、橋本雅至、木下和昭

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
101. 座位での体幹荷重支持機能評価における筋活動	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	動作の体幹機能評価として、端座位での立ち直り姿勢から鉛直方向への負荷を課した方法（体幹荷重支持機能評価）を用いている。今回は本法の筋活動を検討した。体幹荷重支持機能評価において、腹直筋、内腹斜筋、外腹斜筋、多裂筋、腹横筋が有意に高かった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、中尾 英俊、板矢悠佑、福本貴典、高嶋厚史、田頭悟志、田邊智、大槻伸吾
102. 高校野球選手の腰痛症の体幹・股関節筋力と腰椎アライメントとの関係性	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	野球選手の腰痛発生頻度は高く、今回、ハンドヘルドダイナモメーター（HDD）にて野球選手の体幹と股関節の筋力を測定し、腰痛者と腰痛の既往がない者で比較した。腰痛群の筋力は股関節屈筋群が低下傾向を示し、同様に腰椎 アライメントは前湾角が小さいことが認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊、木下和昭、橋本雅至、大槻伸吾
103. 階層別Core stability testにおける身体重心動揺についての検討	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	幅広い筋機能レベルの評価が可能となるように階層別Core stability test（CST）を難易度別に考案し、身体重心動揺の観点から、評価方法の難易度の設定に関する妥当性を検討した。単位軌跡長、加速度は有意に増加し、難度が高くなることにより姿勢保持における不安定性が増加することが示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋 厚史、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠佑、幸田康宏、木下和昭、大槻伸吾
104. 男子高校野球選手におけるSide Bridge Testと走タイムの関係性	—	平成28年11月	第27回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （千葉）	男子高校硬式野球部員に対して、体幹筋機能検査としてSide Bridge Test（以下、 SB）を実施しており、テストの目標値を提示するために走タイムとの関連性を検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：板矢悠佑、橋本雅至、田頭悟志、木下和昭、新谷健、福本貴典、高嶋厚史、幸田康宏、大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
105. 片側の体幹の荷重支持機能の向上が動作に与える効果	―	平成29年5月	第52回 日本理学療法学術大会 （千葉）	歩行や走行，ジャンプ動作では体幹に対して鉛直方向に荷重負荷が加わりながら，片脚で支持するような場面が求められ，その時の体幹機能の評価方法として座位での片側の体幹荷重支持機能（Trunk Righting Test，TRT）に着目している。今回、TRT の向上がどのような動作能力の向上に効果を与えるのか検討することとした。結果、pre 期と post 期の間では TRT と膝関節伸展の最大等尺性筋力，ジャンプ効率に有意な増加が認められ，side hop test には有意な低下が認められた。post 期と retraining 期の間では TRT，ジャンプ効率に有意な低下が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本 雅至，中尾 英俊田頭 悟志，大槻 伸吾
106. 小学生野球選手における肩肘関節障害発生者の肩関節可動域の特徴1年間の縦断的検討	―	平成29年6月	第９回 日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （札幌）	1年間に肩肘関節の障害が発生した小学生野球選手の肩関節可動域の特徴について検討した。対象は2015年度から2016年度の1年間に肩肘関節に障害を有さなかった小学生野球選手（健常群）140名と肩肘関節に障害を有した小学生野球選手（障害群）38名とした。結果、障害群は2015年度に比して2016年度の投球側の2nd外旋が有意に低下していた（$p<0.05$）。小学生野球選手において新規に発生した肩肘障害者は投球側の2nd外旋が低下していた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，佐治隆彦，藪本浩光，井上直人,伊藤盛春，橋本雅至，大槻 伸吾
107. 高等学校におけるスポーツ活動支援事業の利用状況とその意義	―	平成29年9月	第43回 日本整形外科スポーツ医学会 （宮崎）	本学では付属の高等学校に対し、スポーツ活動支援事業を実施している。本研究の目的は、その事業の利用者状況とその意義について考察する。結果、開始当初は受診率が低値であったが、継続的に活動を行うことにより増加する傾向であった。また医療機関を受診した者は、重度なスポーツ傷害と診断された利用者も存在し、医療機関への受診の重要性が示唆された。これらの結果は、学校保健内において理学療法士が顧問や保護者と良好な関係を保ちながら、継続的なスポーツ活動支援事業を実施する重要性を示唆する。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、澳昂佑、北川智美、長野聖、森永敏博、星野祐一、廣島和夫

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
108. 倒立姿勢保持における肘関節と肩甲骨周囲の筋活動～上肢の肢位の違いによる変化～	―	平成29年11月	第28回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	小学生女子の器械体操選手の肘関節障害に着目して、競技特性である上肢での荷重肢位における筋活動から、力学的考察を行った。特に肘関節障害の小学生に多い、肩関節回旋位に観点を置き肩甲骨から肩関節肘関節の制御する筋活動に代償運動を示す運動を示唆する筋活動が認められた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、横田尚子、澳昂佑、来田宜幸、星野祐一
109. 姿勢保持の難度別に分けたCore stability test の筋活動につい ての検討	―	平成29年11月	第28回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	Core stability test を用いて体幹筋機能を測定するにあたり、対象者の身体特性を反映して用いる姿勢保持に難度別の条件を検討している。実際に考案した方法ごとに筋活動を測定し、難度ごとに筋活動から見た運動負荷の違いを検討した。結果、いくつかの条件間で有意差が認められ、難度別に分けることがより具体的になった。。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋 厚史、橋本雅至、田頭悟志、福本貴典、板矢悠佑、木下和昭、大槻伸吾
110. 小学生軟式野球選手における関節可動域の経年変化と投球障害肘との関係	―	平成29年11月	第28回 日本臨床スポーツ医学会学術集会 （東京）	小学生の野球選手に対して継続して関わり、メディカルチェックを行っている。対象の小学生の肘関節障害が、スポーツ活動を継続し、時間経過を伴ってどのように発生するかを検討している。今回は左右の関節可動域に着目して股関節の回旋可動域の減少と肘障害発生との関連性を示唆した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人、中川泰彰、向井章悟、藪本浩光、新宮信之、伊藤盛春、橋本雅至、木下和昭
111. 器械体操に必要な倒立姿勢と身体因子との関連性	―	平成30年6月	第10回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （福岡）	本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑，来田宜幸，西澤勇一朗，星野祐一
112. 腰痛症の高校野球選手に対する股関節筋力トレーニングが腰椎前弯角に及ぼす影響	―	平成30年6月	第10回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会 （福岡）	本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊，木下和昭，橋本雅至，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
113.小学生軟式野球選手における投球障害肘発症時の体幹筋機能の変化	ー	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：井上直人，中川泰彰，向井章悟，横田尚子，橋本雅至，木下和昭
114.ジュニア体操競技における倒立時の疼痛調査	ー	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑，来田宣幸，西澤勇一郎，星野祐一
115.地域在住高齢者における体幹筋機能とロコモティブシンドロームとの関係について144.	ー	平成30年9月	第44回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（徳島）	本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史，大槻伸吾，橋本雅至，田頭悟志，新谷健
116.地域在住高齢者の園芸活動の実態 ～園芸習慣のアンケートからわかったこと～	ー	平成30年9月	第8回日本認知症予防学会学術集会（東京）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：髙野珠栄子，田崎史江，橋本雅至，野村和樹，山口隆司，中村美砂
117.ニューラルネットワークを用いたロコモ度判定に関連する因子の相対的重要度について	ー	平成30年10月	第20回骨粗鬆症学会（長崎）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：今岡真和，中尾英俊，田崎史江，髙野珠栄子，　野村和樹，橋本雅至，中村美砂
118.健康教室へ参加されている高齢者に対する体幹機能評価法が血圧・心拍数に及ぼす影響について	ー	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志，橋本雅至，高嶋厚史，福本貴典，新谷健，大槻伸吾
119.小学生軟式野球選手の肘障害に影響を与える因子　1年前の検診結果から	ー	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，中川泰彰，向井章悟，伊藤盛春，井上直人，横田尚子，橋本雅至
120.Side-bridge姿勢における股関節の肢位の違いが腰部周囲筋の筋活動に及ぼす影響	ー	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：齋藤優季，木下和昭，橋本雅至，来田宣幸，大槻伸吾
121.高校男子サッカー選手におけるBridge姿勢の保持時間と筋厚との関係性	ー	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：新谷健，橋本雅至，木下和昭，田頭悟志，福本貴典，高嶋厚史，大槻伸吾

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
122.中高齢者の足部アーチ低下の身体要因について	－	平成30年11月	第29回日本臨床スポーツ医学会学術集会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊，木下和昭，森藤武，濱田太朗，橋本雅至，大槻伸吾
123.段階づけた倒立姿勢における肩関節と肩甲骨周囲筋の筋活動の変化	－	平成30年12月	第6回日本運動器理学療法学術大会（福岡）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，横田尚子，澳昂佑
124.運動講座に参加している高齢者における体幹筋機能と下肢機能及び移動能力との関係について	－	平成30年12月	第6回日本運動器理学療法学術大会（福岡）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史，橋本雅至，田頭悟志，新谷健，福本貴典，木下和昭，大槻伸吾
125.倒立時の上肢障害予防に着目した練習方法の筋活動の検討(Muscle Activity Analysis of Exercise Methods Focusing on The Prevention of Upper Limb Disorders During a Handstand)	－	令和1年6月	第11回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会（札幌）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下 和昭，横田 尚子，橋本 雅至，澳 昂佑，来田 宣幸，西澤 勇一郎，星野 祐一
126.コアトレーニングを効果的に進めるために、体幹(筋)機能を適切に捉える評価について	－	令和1年8月	第45回日本整形外科スポーツ医学会学術集会（大阪）	特別企画「コアトレーニングの神髄」 シンポジスト
127.段階づけた倒立姿勢における肩関節と肩甲骨周囲筋の筋活動の変化		令和1年10月	第 7 回日本運動器理学療法学会学術大会（岡山）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下 和昭，橋本 雅至，横田 尚子，澳 昂佑
128.運動講座に参加している高齢者における体幹筋機能と下肢機能及び移動能力との関係について		令和1年10月	第 7 回日本運動器理学療法学会学術大会（岡山）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋 厚史，橋本 雅至，田頭 悟志，新谷 健，福本 貴典，木下 和昭，大槻 伸吾
129.ジュニア体操競技選手における段階づけた倒立練習方法の有用性		令和1年11月	第30回日本臨床スポーツ医学会学術集会（横浜）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下 和昭，横田 尚子，橋本 雅至，来田 宣幸，西澤 勇一郎，星野 祐一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
130. 上肢支持を除外したSide Bridgeの筋活動について （研究会、その他）		令和1年11月	第30回日本臨床スポーツ医学会学術集会（横浜）	本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：田頭 悟志，橋本 雅至，木下 和昭，高嶋 厚史，福本 貴典，大槻 伸吾
17. Side-Bridge姿勢保持における筋活動の経時的変化について	―	平成22年6月	第20回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	サイドブリッジテストを行う際、60秒保持可能な者と不可能な者との違いを筋電図データから検討した。両群とも疲労を示す中間周波数の徐派化が認められたが、平均振幅の増加する筋の存在が保持可能の条件であると示唆された。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭、橋本雅至、田頭悟志、板矢悠佑、新谷健、宮沢将史、石川大起、森洋子、井谷友香理
18. グラウンドサーフェイスの違いが大学サッカー選手のスポーツ外傷に及ぼす影響-天然芝グラウンドと人工芝グラウンドとの比較-	―	平成22年6月	第20回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	グラウンドサーフェイスの違いがスポーツ外傷の発生に及ぼす要因について検討した。運動時間当たりの発生件数は人工芝グラウンドの方が多かったが、外傷部位がそれぞれ違いを示し、サーフェイスの特徴が外傷発生の要因に関与していることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衛、橋本雅至、岸本恵一、辻信宏、田中一成、中村信之、来田晃幸、藤竹俊輔
19. 本校の臨床実習における態度評価の分析①～臨床実習の態度評価と心理テストを用いた検討～	―	平成22年8月	第23回 教育研究大会・教員研修会 （北海道）	臨床実習における学生評価の中で、態度面の評価結果と心理テストの結果との関連性を考察し、数項目に有意な関連性が示唆された。本学の評価項目と一般的なテスト項目との関連から、一定の客観性を示すことができた。 本人担当部分：研究指導 共同発表者：岩崎仁美、山本貴啓、幸田利敬、橋本雅至、助川明、加原牧子、松本尚子、三上文枝、椎木文枝、村田幸司、武富由雄
20. 本校の臨床実習における態度評価の分析②～実習に臨む学生にとって求められる因子～	―	平成22年8月	第23回 教育研究大会・教員研修会 （北海道）	本学の態度面評価項目において心理テストと関連があった項目において、低点数を示す学生が実習を通じて実習進行に困難さを示す場合が多いことが示された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：山本貴啓、岩崎仁美、幸田利敬、橋本雅至、助川明、加原牧子、松本尚子、三上文枝、椎木文枝、村田幸司、武富由雄
21. 高校生男子サッカー選手に対するコンディショニングサポートが運動時腰痛に与える影響	―	平成23年6月	第21回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	高校生に対して行った体幹筋トレーニングの指導と実施が、運動時腰痛の発生と如何に関連するかについて検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：古川博章、橋本雅至、井上直人、木下和昭、田頭悟志、森洋子、石束友輝、吉川晋也、山崎岳志

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化	―	平成23年6月	第21回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	人工芝グラウンドでの練習が常態化したクラブにおけるスポーツ傷害の発生について約4年の追跡し、調査・検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、大久保衛、橋本雅至、岸本恵一、辻信宏、田中一成、中村信之、来田晃幸、藤竹俊輔
23. 機能回復に難渋した肩腱板不全断裂と後上方関節唇損傷術後の一例	―	平成23年6月	第21回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	肩関節可動域制限患者の1例に対して理学療法的工夫と考察により、可動域の改善に至った症例について報告した。 本人担当部分：データ分析 共同発表者：武富由雄、永富孝幸、米田稔、水野直子、中川滋人、福田明雄、椎木孝幸、橋本雅至、講武芳英、幸田利敬
24. 高校サッカー選手の腰痛予防に対するコアエクササイズの効果	―	平成24年1月	第17回 スポーツ傷害フォーラム （大阪）	高校生サッカー選手に継続的に体幹筋を中心としたトレーニングを行わせ、運動時腰痛の有無を経時的に測定した。結果、体幹筋機能は向上するが、腰痛の軽減に必ずしも関係しているとは言えなかった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究発表 共同発表者：橋本雅至、井上直人、木下和昭、田頭悟志、石束友輝
25. クラウス・ウェーバーテスト変法と体幹深部筋エクササイズにおける腹横筋の筋活動量	―	平成24年6月	第22回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	体幹筋力を評価する手技と体幹深部筋のトレーニングに有効とされる運動条件を選択し、ワイヤー電極を用いた筋活動量の評価を行った。体幹の安定性に貢献するであろう腹横筋に着目した。結果、重錘負荷をした手技とelbpw-toe姿勢、side bridge姿勢において筋活動が高値を示すことが確認され、トレーニング手技としての有効性が示唆された。 本人担当部分：実施、データ分析、研究指導 共同発表者：杉本拓也、能登洋平、林慈晃、池内誠、柳田育久、土井龍雄、田邉智、大槻伸吾、橋本雅至、大久保衛

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
26. デジタルカメラによる体幹可動域の測定法の一検討	―	平成24年6月	第22回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	スポーツ現場において短時間での体幹可動性評価の試案として、2次元的にデジタルカメラで撮影したデータから可動域を客観化する方法について検討した。体幹伸展運動において再現性が示唆されたが、今後方法に修正が必要であることが分かった。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：福本貴典、橋本雅至、田頭悟志、板矢悠佑、高嶋厚史
27. 第5中足骨疲労骨折受傷者におけるターン動作時の足部圧力解析	―	平成24年6月	第22回 関西臨床スポーツ医・科学研究会 （大阪）	第5中足骨疲労骨折受傷経験者に対して足底圧センサーを足底面と足部外側面に貼付して、動作時の上下方向と横方向の力を客観化した。結果は未受傷者との有意差は認められなかったが、接地時間が延長していた。これは足底面の力は大きくなくても力が加わる時間が長くなり、足部への力学的ストレスが加わることが示唆された。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平、大槻伸吾、藤竹俊輔、来田晃幸、岸本恵一、橋本雅至、大久保衛
28. 高校男子サッカー選手における関節弛緩性とその特徴	―	平成25年6月	第23回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	運動量が多い高校サッカー選手の関節弛緩性について調査した。成長期の高校生において関節の安定性や不安定性はスポーツ障害の要因になることが考えられ、個人差が多い成長段階にあるスポーツ選手の特徴を考察した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：山崎岳志，橋本雅至，井上直人，古川博章，吉川晋也，石束友輝
29. ハンドヘルドダイナモメーターを用いた体幹機能評価方法の信頼性と妥当性	―	平成25年6月	第23回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	体幹筋の筋力測定にハンドヘルドダイナモメータを用いた測定に関してその再現性について級内相関係数を用いて検討を行った。再現性のある方法として課題が残り、方法のさらなる検討を必要とする。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，米田勇貴，中雄太，北西秀行，大八木博貴，柴沼均

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
30. Trunk Righting Test と体幹機能の関係性	―	平成26年6月	第24回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	体幹機能評価として考案したTrunk Righting Testと体幹筋の持久性と協調性を見るブリッジテストとの関連性から、体幹筋の評価方法について検討した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：木下和昭，橋本雅至，北西秀行，井上直人，植田篤志
31. 足部横アーチ変化の測定方法の検討	―	平成26年6月	第24回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	外見の形状では測定が困難である足部横アーチの客観的な測定方法について考案し、その方法の有用性につて検討した。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，藤竹俊輔，来田晃幸，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衞，熊井司，田中康仁
32. 高校部活動に対するフィジカルサポート	―	平成27年6月	第25回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	縦断的に行っている高校サッカー選手へのフィジカルサポートについて具体的に紹介した。今まで行ってきた経験から得た課題について考察を加えた。 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠祐、高嶋厚史、幸田康宏、林孝明、橋本雅至
33. 大学サッカー選手の人工芝グラウンドにおけるスポーツ傷害の経時的変化−人工芝グラウンドに対するゴムチップ補充の影響−	―	平成27年6月	第25回 関西臨床スポーツ医科学研究会 （大阪）	サッカー競技中に発生する外傷や障害を引き起こす要因は，選手が使用しているグラウンドサーフェイスも一要因になると報告されている。今回，長期経過した人工芝グラウンドに特殊畦砂やゴムチップを補充したことによる，スポーツ傷害発生への影響を検討した．結果、人工芝グラウンドでは年数が経過するとともに下肢捻挫発生率が増加し，ゴムチップの補充後では下肢肉離れの発生率が有意に減少した． 本人担当部分：データ分析、研究指導 共同発表者：藤高紘平，藤竹俊輔，来田晃幸，岸本恵一，橋本雅至，大槻伸吾，大久保衞，熊井司，田中康仁

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
34. 腰椎分離症者のスポーツ復帰期間による腰椎前弯角と腰椎椎間可動域の違い	―	平成28年6月	第26回 関西臨床スポーツ医科学研究会（大阪）	腰椎矢状面上のアライメント評価は、分離症のストレス要因の特徴を見出すうえで重要な項目であると考えられる。今回、スポーツ復帰までの期間を急性期と亜急性期との境界である4週経過を基準とし、X線撮影による腰椎前弯角と腰椎椎間可動域について検討した。結果、腰椎（L1-S）前弯角は、最大屈曲時、4週未満群に対し、4週以上群は低値を示し、最大伸展時では、4週未満群に対し4週以上群は高値を示した。腰椎椎間可動域は、4週未満群に対し、4週以上群は低値を示した。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：中尾英俊、稲葉孝洋、木下和昭、森藤武、橋本雅至、大槻伸吾
35. 姿勢保持の難度別に分けたCore stability testの保持時間についての検討	―	平成29年6月	第27回 関西臨床スポーツ医科学研究会（大阪）	我々は、体幹や股関節周囲筋の総合的な筋機能を反映するBridge活動を利用したSide Bridge(SB)とFront Bridge(FB)をCore stabilityの評価として用いている。客観的な指標として姿勢の保持時間を用いて評価してきたが、多様な対象者に対する評価として課題があった。そこで今回、姿勢保持の難度に着目することが必要であると考え、SBとFBの姿勢を難度に分けて階層別に評価する方法としてCore stability test(CST)を考案した。結果、SBとFBの両姿勢においてB、C、D順に姿勢保持時間が有意に長くなっていた。 本人担当部分：研究計画、実施、データ分析、研究指導 共同発表者：高嶋厚史、橋本雅至、田頭悟志、新谷健、福本貴典、板矢悠佑、木下和昭、大槻伸吾

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名　山形　力生

研　究　分　野	研究内容のキーワード
日常生活援助技術 高齢者支援 臨床教育技術	福祉用具（自助具）、住宅改造、障害と日常生活、 高齢に伴う機能低下に対する援助、生活環境への援助

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1）講義資料の作成	平成 18 年 ～ 平成 31 年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 科目名「福祉機器特論、チーム医療特論、身体障害作業療法治療学、作業療法理論特論」講義内容によって多くの専門書等から資料を集め授業資料を作成した。
2)パソコンを利用した視聴覚教材の作成	平成 18 年 ～ 平成 31 年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 科目名「福祉機器特論、チーム医療特論、身体障害作業療法治療学、作業療法理論特論」講義内容によって、できるだけイメージできるように写真スライドの作成・提示、アニメーションによる図表を多く取り入れた。
2)パソコンを利用した視聴覚教材の作成	平成 18 年 ～ 平成 31 年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 科目名「福祉機器特論、チーム医療特論、身体障害作業療法治療学、作業療法理論特論」講義内容によって、できるだけイメージできるように写真スライドの作成・提示、アニメーションによる図表を多く取り入れた。
3)演習問題の提示	平成 18 年 ～ 平成 31 年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 科目名「身体障害作業療法治療学」前期、後期のそれぞれ中期および後半の時期に演習問題を提示し、学習内容がどの程度身に付いているかを学生自ら点検してもらう機会とした。また、これにより学生が適切に学期末試験の準備ができるように配慮した。
4)学期末試験の工夫	平成 18 年 ～ 平成 31 年	姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 「身体障害作業療法治療学」出題形式を客観テストと記述試験をバランス良く作成した。客観テストでは国家試験を意識した回答方法を盛り込んだ。これにより学生が国家試験の回答方法に慣れるようにした。記述試験は、文章表現等の表現力の育成をねらいとし、作成に工夫をこらした。
5)学年担任およびチューター活動	平成 20 年 ～ 平成 31 年	現在 3 回生学生のチューターを担当している。入学より卒業までを継続して担当している。定期的に学生個人面談を行い、各学生の課題の確認と指導、学科教員への周知に努めている。担当学生が 1 回生時には、学習面に加え学校生活全般の状況把握を行い、2 回生時は学習面を重点的に指導・助言を行った。3 回生からは臨床実習時の状況把握と必要な指導を行っている。
6)臨床実習訪問指導	平成 20 年 ～ 平成 31 年	2 回生時および 3 回生時の臨床実習実施中に、実習施設に訪問し、学生の問題や今後の実習の目標について、実習指導者と協議する。毎年、各学年延べ 20 施設程度の実習訪問指導を行った。
7)臨床現場技術指導	平成 23 年 ～ 平成 31 年	卒業生を対象に週 1 回、近隣のリハビリテーションの臨床現場において技術指導を行っている。在校生の臨床実習指導を担当する指導者の養成も兼ねている。

2　作成した教科書，教材		
1)教科書「作業療法士が選ぶ自助具・生活機器」	平成 22 年 ～ 平成 31 年	臨床でよく使われる自助具・生活機器について紹介し、必要な材料、制作方法、適応事例などについて紹介した。（255 頁） 頸髄損傷などの四肢麻痺に対するコンピューター機器に対する自助具についての項を解説した。(P.124～P.126) 後に、姫路獨協大学で「福祉機器特論、身体障害作業療法学」の資料として使用した。
2)教科書「生活支援技術・介護過程」（黎明書房）	平成 22 年 ～ 平成 31 年	居住環境の整備や身じたく、移動、食事、入浴、排泄、睡眠等における実践的な介護の方法と、介護過程の意義から実例をふまえた介護の実践的展開やチームアプローチまでを、初めて学ぶ人でも分かるようイラストや図を交え解説した。 第2章 自立へ向けた居住環境の整備を担当　(P24-P40) ヘルパーを対象にした講習において教科書として使用した。
3) 教科書「老年看護学」（ピラールプレス）	平成 22 年 ～ 平成 31 年	高齢者の身体的・心理的特徴を十分把握したうえで、高齢者のQOLの向上を目指した看護実践を意識的に取り上げた、老年看護の実践に向けての質の評価への取り組みを盛り込んだ看護学生向けのテキストとして使用した。
4)教科書「介護実習入門」（黎明書房）	平成 24 年	介護福祉士の養成科目のテキストとして作成、使用した。高等教育に向けた豊かな専門性と人間性の構築という主旨を踏まえたうえで、介護の専門援助に焦点を当て、その内容・方法を具体的に示した。
5)「身体障害作業療法学実習」の補助教材	平成 22 年 ～ 平成 31 年	PBL(問題解決型学習)のために、学生の主体的なグループワークにより進められるが、その臨床症例を実際の症例から選択し、教材用に修正し作成した。学生はこの教材を基に、グループワークを行った。
6)OSCE（客観的臨床能力試験）のための模擬患者症例プロフィール資料	平成 22 年 ～ 平成 31 年	学生が受ける試験の模擬患者のプロフィールを実際の臨床例に照らし合わせ作成した。症例は、脳卒中などの内科系と骨折などの整形外科の 2 症例作成した。4 回生の総合臨床実習前の客観的臨床能力試験の学生提示資料として使用した。
7)実体験型課題「動作分析のフローシート」の作成	平成 22 年 ～ 平成 31 年	「日常生活活動学」において日常の動作の分析を学習する際に、実際の動作分析を教材として行う。初学者の学生でも動作分析が身につくように、動作分析のフローシートを作成した。このシートに書き込むことで動作の分析が段階的に学習できるように工夫した。
8)演習問題の作成	平成 22 年 ～ 平成 31 年	食事・更衣・トイレ・整容・入浴の 5 種類の動作について「日常生活活動学、身体障害作業療法学」のそれぞれの中期および後半の時期に演習問題を分野ごとに 20 問程度作成した（合計 80 問）。学習内容がどの程度身に付いているかを学生自ら点検してもらうために使用した。

9)国家試験模擬試験の作成	平成 25 年 ～ 平成 31 年	実際の国家試験の出題傾向に合せ、3 回分の模擬試験問題を作成した。4 回生時の演習の中で使用した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1)姫路獨協大学医療保健学部作業療法学科 学生による授業評価	平成 19 年 ～ 平成 28 年	科目：「福祉機器特論、チーム医療特論、身体障害作業療法学、作業療法理論特論」点検・評価の結果：長所としては、今回の調査による得点は平均を上回っており、授業目標は達成されていると理解した。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1)奈良県介護支援専門員　現職者講習　講師	平成 15 年 ～ 平成 28 年	奈良県の現職者介護支援専門員に対象に「福祉用具・住宅改修」の実際について講義指導した。平成１５年より毎年１回担当、現在に至る。
2)文部科学省教員免許更新講習　講師	平成 25 年 ～ 平成 31 年	教員免許更新講習において「障害支援（福祉機器領域）論」（平 25-30501-56332 号）講師として年 2 回担当する（1 回 6 時間）
5　その他 （講演） 1)姫路市シニアオープンカレッジ「介護に役立つ福祉用具の基礎知識」	平成 24 年 8 月 5 日～ 平成 24 年 8 月 31 日	姫路市の依頼により、姫路市民を対象にした姫路市シニアオープンカレッジ「介護に役立つ福祉用具の基礎知識」について企画した。また、5 回の講座の講師を担当した。
2)姫路市立生涯学習大学校公演「地域の活動を支える」	平成 25 年 12 月	「地域の活動を支える」の第３回として「介護に役立つ福祉用具の基礎知識」について公演する。歳を重ねても、地域で生き生きと暮らしていくために役立つ福祉用具について紹介し、介護保険制度での金銭的補助も含めて、地域生活における介護活動への利用について述べた。
3)姫路市立生涯学習大学校講座「暮らしに役立つ	平成 28 年 12 月	健康生活コースの受講生を対象に「暮らしに役立つ福祉用具について」３回の講座の講師を担当した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
看護士免許	昭和 58 年 3 月	（厚生省第 4985 号）
作業療法士免許	昭和 63 年 4 月	（厚生省第 13239 号）
福祉用具プランナー	平成 10 年 3 月	財団法人テクノエイド協会（第 9-0100 号）
認定作業療法士	平成 16 年 4 月	社団法人日本作業療法士協会
臨床実習指導者研修修了認定	平成 31 年 2 月	社団法人日本作業療法士協会（認定番号 1790）
2　特許等 特になし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 特になし		
4　その他 奈良県介護実習・普及センター　運営委員会委員	平成 21 年 4 月 ～ 現在に至る	運営委員長および学識経験者の委員として運営委員会に出席（奈良県知事より嘱託）。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項							
	著書・論文等の名称	単著・共著別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称			概　　要
	(著書)				編者・著者名	頁　数	
1	生活支援技術・介護過程	共著	2010	黎明書房	守本とも子、星野政明	24-40	(第２章　自立へ向けた居住環境の整備を担当)
2	老年看護学	共著	2012	黎明書房	川野雅資、守本とも子	258-266	(高齢者を介護する家族への援助を担当)
3	介護実習入門	共著	2012	黎明書房	守本とも子、星野政明	106-134	(第３節　整容の介助を担当)
	(学術論文)						
1	作業療法学生のOSCE の成績とコミュニケーション・スキルの関連について	共著	2014.3	兵庫県作業療法士会機関誌第 3 巻1号	◎山形力生, 梅本静香, 眞々部仁美，櫻井秀雄	10-18	作業療法学生にとって対人関係能力を含むコミュニケーション・スキル（以下CS）を獲得することは重要な課題といえる。今回、客観的臨床能力試験（以下 OSCE）の成績と CS との関連について検討を行った。作業療法学科 4 回生 50 名を対象として、臨床総合実習前に面接と検査測定の2課題の OSCE を実施した。CS の評価はコミュニケーション・スキル尺度（ENDCOREs）を用い、研究目的を説明し同意を得た上で調査を実施した. 分析は OSCE 合格群と不合格群の ENDCOREs 得点について比較検討し、ENDCOREs の下位 6 因子についても比較を行った。その結果、ENDCOREs 得点は不合格群に対して合格群が有意に高かった。面接課題では合格群が有意に高く、下位6因子得点の比較では「自己統制」と「自己主張」の因子得点に有意差がみられた。これらから「自己統制」と「自己主張」のスキルを獲得に重点を置かれた教育プログラムの必要性が考えられた。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
2	原著　実習指導内容評価スケールの検討	共著	2015.3	リハビリテーション教育研究第20号	◎山形力，櫻井秀雄、眞々部仁美	324-329	現在の大学教育では教授内容の改善や質の向上のため、学生による授業評価が行われている。しかし、実習科目については評価を受けることは少ない。特に臨床実習の指導内容に関する評価はほとんど行われていない。そこで今回、臨床実習をより良いものとするために、学生主体の実習指導内容評価スケールを検討し報告した。作業療法学科 4 年生 39 名を対象として、総合臨床実習終了後、実習指導内容を評価する質問紙を実施した。また、調査協力の得られた 32 名の実習指導者による自己評価を

							実施した。評価結果は、スケールの下位の9項目それぞれについて得点を算出し比較した。各下位の項目とも学生の評価得点が上回る傾向がみられた。さらに各項目毎の平均得点を Wilcoxon-Mann-Whitney 検定を行ったところ、④指導者・学生相互行為（p＜0.05）、⑤学生への期待・要求（p＜0.01）、⑥教員・指導者間の指導調整（p＜0.05）の3項目について、学生の評価得点が有意に高い傾向がみられた。また、全項目の合計得点について学生得点と指導者得点の相関係数を求めたところ、rs=0.40（p＜0.05）で正の相関がみられた。各下位の項目とも学生の評価得点が上回る傾向がみられた。有意な差がみとめられた下位の 3 項目は学生と指導者の指導的上の相互関係を示す項目であり、指導内容の中核をなす部分と考えられる。この項目において学生の得点が上回ったということは指導者の指導に対して概ね満足しているものと考えられ、正の相関を示したことから指導内容評価スケールは指導内容を評価するに妥当なものと考えた。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
3	原著　作業療法評価技術学実習における Student Assistant の効果−上級生の視点から−	共著	2016.3	リハビリテーション教育研究第21号	◎山形力生，石浦佑一，沼田景三	416-421	本学作業療法学科では、3年生が教員の補助（Student Assistant：以下，SA）として 2 年生の作業療法評価学実習の授業に入り、実技指導する科目を採用している。今回、SA の効果について調査、検討した。作業療法学科 3 回生 40 名を対象として、SA に関する質問紙を参考に作成し調査を実施した。内容は、授業の満足度、2 年生および教員とのコミュニケーション、授業後の学習意欲の変化、自己の知識･技術の認職度、4 年生臨床実習の準備などについて調査した．調査後、項目間の相関を調べた。尚、相関係数は5%未満を有意とした。その結果、講義を通じて学んだこととして、説明のスキル(90%)、専門知識技術の確認（75%）、CS（60%）を挙げた。授業の満足度は 92.5%と高く、知識技術は 62%が確認できたと回答した。成果として 92.5%が実習の準備となり、95%が今後の学習意欲が高まったと回答した。教科書等での事前学習も十分に行い指導に望んだ学生は、対象学生に分かりやすく説明でき、実技指導もうまくできたと評価した。SA の経験は既習技術の再確認となり、4 年生実習の準備の機会となると考えられ、さらなる学習意欲を高め、授業の満足度も高くなると

							考えられた。一方、授業準備が十分でなかった学生は、思ったよりも成果は上げられず、授業前の準備学習を確認させる工夫が今後の課題と考えられた。また、説明のスキルに関して、2年生にうまく説明しきれず、困惑する様子もみられ、状況に応じて教員が介入する必要性も考えられた。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
4	教員免許更新講習における福祉用具講習の導入について	共著	2016.3	兵庫県作業療法士会機関誌第 5 巻1号	◎山形力生, 田中優子	12-19	本学では大学地域貢献事業の一環として教員免許状更新研修を行っている。今回、この更新研修の一科目として福祉用具に関する科目を実施し、受講者に意識調査を実施した。調査の目的は、現場に従事する教員の福祉用具に関する講習の実態や効果および課題点を検討することにある。平成 26 年および平成 27 年に受講した教員 119 名を対象に、講習を選択した動機、従事する現場の詳細などの背景のほか、講習で扱った用具に対する認知度、講習の理解度、用具の現場における必要度などについて調査した. 講座選択の動機から現場での用具の必要性を主とする実践群と教養として選択した非実践群に大別された。調査の結果は、用具の種類により違いがあり、実践群か否かによっても違いがみられた。講座の理解度は高く、講習の内容の構成や難易度は概ね妥当と考えられた。また、用具の適応や判定の中で作業療法士の専門性や役割について触れ、教員の作業療法士に対する認識を高めることに寄与できたと考えられた。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
5	作業療法評価学実習において Student Assistant 導入が学生におよぼす効果	共著	2016.3	兵庫県作業療法士会機関誌第 5 巻1号	石浦佑一, ◎山形力生, 眞々部仁美 , 沼田景三	3-7	現在、本学科の2年生は作業療法評価学実習において、3年生が教員の補助 (Student Assistant：以下、SA) として 2 年生に実技指導を行う授業形態を導入している。SA 導入の目的は、3年生から指導を受けることで、評価に関する身近な自己到達目標が設定でき、学習意欲の向上を図る，評価の重要性を具体的に学ぶ、コミュニケーションスキルの向上などである。今回、2年生の作業療法評価学実習における SA 導入の効果を調査、検討した。本学科 2 年生 51 名を対象に SA に関する質問紙により実施した。質問項目は、3 年生の指導方法、3 年生との関係性、実習後の学習意欲の変化や満足度、習熟度、教員との関係性に関してであった。調査後、質問項目間の相関を

							調べた。3年生の指導方法や3年生との関係性、学習意欲の変化や満足度、習熟度、教員との関係性においてはポジティブな回答が多かった。 質問項目間の相関について、学習意欲は、3 年生の指導方法や3年生との関係性、教員とのコミュニケーションで相関を認めた。また満足度は、3年生の指導方法、3年生への声かけや相談で相関を認めた。習熟度は、3年生の指導方法、教員への相談、3年生への声かけや相談で相関を認めた。これらの結果より SA 導入は本学科 2 年生にとって有効であることが示唆された。また、学習意欲、満足度、習熟度と3年生の指導方法や3年生との関係性、教員とのコミュニケーションで相関を認めたことから、3年生と2年生との関係性をいかに良好に保つか、3年生が評価技術を適切に指導できるよう教員がどのように調整していくかが重要であり、今後の課題となった。 ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
6	原著　作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について	共著	2017.3	リハビリテーション教育研究第22号	◎山形力生, 櫻井秀雄	280-284	臨床実習は学生にとってストレス状況であり，その状況に適応し乗り越えることが要求される．ストレス状況に直面し，乗り越えるためにはレジリエンス（精神的回復力）が左右するものと考えられる．この研究の目的はレジリエンスと実習ストレスとの関連について検討をすることとした．対象および方法は，作業療法学生 4 年生 69 名を対象とし，総合臨床実習の終了時にレジリエンス尺度を実施した．また実習場面のストレスおよびストレスによる心理的落ち込みを測定し、レジリエンスとの関連を検討した．その結果，実習ストレスの内容としては，「対象者の評価・治療が上手くいかない」，「睡眠時間の減少」，「レポートが進まない」の順に得点が高かった．また，各尺度得点の相関を求めたところ，実習ストレスと落ち込み得点は正の相関を示し，レジリエンスと落ち込み得点は負の相関を示した．したがって，実習ストレスの高いものほど落ち込み得点は高い傾向にあり，レジリエンスの高いものほど落ち込み得点は低い傾向を示した．次にレジリエンスおよび実習ストレスの得点の夫々について高得点群（高群）と低得点群（低群）に分け，落ち込み得点について比較した．その結果，実習ストレスの高群において，レジリエンスの高群の落ち込み得点は，レジリエンスの低群に比べ群有意に

							低値を示した（p<.01）．したがって，レジリエンスの高い学生は同じストレスを受けてもレジリエンスの低い学生に比べ精神的立ち直りは早く，ダメージは小さいと考えられた． ［担当部分］ 研究の企画、データーの収集および分析、論文の執筆を担当した。
7	脳梗塞により apathy を呈した一例への介入 ～ADL 自立と楽しみ活動の再獲得を目指して～	共著	2017.3	兵庫県作業療法士会機関誌第 6 巻	岩﨑智子、◎山形力生	16-21	脳血管性 apathy は最近注目されてきた病態である．今回 apathy を発症し，難渋した一例に対し，“意欲には淡蒼球の活性が重要である”とする池谷の理論を参考に作業療法を行った．介入を通して，意欲の向上が見られ，ADL の自立度も向上した．ひいては，退院後継続して実施可能な楽しみ活動の再獲得に繋げることができたことは，70 歳代前半という若さで，施設に退院することが決まっている症例にとって，QOL に関わる大切な事柄であったと考える． ［担当部分］ 研究の企画，データーの収集および分析，論文の執筆を担当した．
8	手を使用する行動戦略（Transfer Package）により上肢機能が改善した頚髄症の事例	共著	2017.3	兵庫県作業療法士会機関誌第 6 巻	塩見健太，◎山形力生，和田由美子，石田茜，上田徹	27-32	頚髄症により感覚障害が著明にあり，上肢使用頻度が減少していた患者に対し，脳卒中患者に実施される Constraint-induced movement therapy （CI 療法）のコンセプトである Transfer Package(以下 TP)を行った． CI 療法で併用される TP ではあるが，今回報告する頚髄症患者では，患者自ら改善方法を探索できるように TP の手法を導入したところ，ADL での両上肢の使用頻度が向上する効果が得られた．その経過を報告するとともに頚髄症に対する TP 活用の可能性について考察した．頚髄症の患者にも有効であったことから，脳卒中以外の疾患でのリハビリテーションで併用が効果的であると推察された． ［担当部分］ 研究の企画，データーの収集および分析，論文の執筆を担当した．
9	原著　作業療法実習における学生のレジリエンスとストレスの関係について ～ストレスコーピングからの分析	共著	2018.3	リハビリテーション教育研究第24号	◎山形力生，櫻井秀雄	226-231	臨床実習は学生にとってストレス状況であり，その状況に適応し乗り越えることが要求される．学生は実習場面において様々なストレス状況にさらされることになるが，ストレス状況に直面し，乗り越えるためにはレジリエンス（精神的回復力）が左右するものと考えられる．作業療法学生４年生に対してレジリエンス尺度（小塩ら，2002）を実施し，総合臨床実習の終了時に実習場面のストレスと実習中のストレスコーピングについて調査した．調査は

							2014～2016 年において，研究内容を説明し同意を得られた 84 名（男性 32 名，女性 52 名）を分析対象とした．ストレスは，川村ら（2008）の臨床実習中のストレスに関する因子分析の結果を参考に作成した質問紙と神村ら（1995）のストレスへの対処方略尺度(以下 TAC-24）によって測定した．ストレスによる心理的落ち込みの測定には堀野ら（1991）の落ち込み尺度を用いた．レジリエンス（以下 RES）とストレスの得点（以下 STR）は負の相関を示した．落ち込みと問題回避の得点に有意な正の相関がみられた．RES と CP_F2 には負の相関がみとめられたまた，TAC-24 の 8 下位尺度の各得点ついて，クラスター分析を行った．その結果，Ⅰ型「問題回避・情動調整型」，Ⅱ型「対処少・非情動調整型」，Ⅲ型「問題解決・非問題回避型」の３つのクラスターが得られた．次に，３型について落ち込み得点およびレジリエンス得点の分散分析を行ったところ，レジリエンス得点はⅢ型が有意に高く，Ⅰ型が有意に低くかった．実習等の指導においては「問題回避・情動調整型」のコーピングを行うものの指導が重要と考えられ，問題の回避や責任転嫁をしやすい学生ととらえ指導に当たる必要があると考えた． ［担当部分］ 研究の企画，データーの収集および分析，論文の執筆を担当した．

学会等および社会における主な活動

2010 年～2012 年	奈良県広陵町福祉用具専門相談員指定講習会、講師。 「福祉用具と自助具」について講義する。年２回実施した。
2010 年～2012 年	高次脳機能障害リハビリテーション講習会を企画、運営。 （奈良県脳外傷友の会「あすか」顧問）
2012 年６月 11 日～24 日	第 32 回近畿作業療法学会、演題査読委員。
2012 年 10 月 7 日	第 32 回近畿作業療法学会、一般演題について座長を担当。
2012 年 10 月 5 日～31 日	姫路市シニアオープンカレッジ「介護に役立つ福祉用具の基礎知識」を企画。 10 月に５回の講座の講師を担当する。
2009 年～現在	奈良県介護実習・普及センター運営委員会出席。 2009年度運営委員会長（奈良県知事より嘱託）を担当。
2013 年～2018 年	教員免許更新講習、講師担当。
2014 年 9 月	兵庫県作業療法学会（姫路）、演題発表座長担当。
2015 年 4 月	日本作業療法学会、第 4 期（平成 26 年度～平成 28 年度）演題審査委員担当。
2015 年 6 月	第 49 回日本作業療法学会（神戸）、教育講演座長担当。
2016 年４月～現在	姫路市立生涯学習大学校講師（毎年 5 回）
2017 年４月～現在	奈良県社会福祉事業団評議会、評議委員（奈良県知事より嘱託）
2018 年 4 月	日本作業療法学会、第 5 期（平成 29 年度～令和元年度）演題審査委員担当。
2018 年 10 月 25 日～11 月 1 日	姫路市シニアオープンカレッジ「介護に役立つ福祉用具の基礎知識」を企画。２回の講座の講師を担当する。
2019 年 9 月 22 日	臨床実習指導者講習会（奈良県作業療法士会）講師

大学内における主な活動

2010 年 4 月～2012 年 3 月	姫路獨協大学国際交流センター運営委員
2012 年 4 月～現在	姫路獨協大学教育改善実施（ＦＤ）委員会委員
2014 年 4 月～2015 年 3 月	姫路獨協大学活性化取組施策（医療保健学部生に必要な対人コミュニケーション能力向上プログラム）企画担当，実施。
2019 年 4 月～現在	奈良学園大学保健医療学部学生生活ワーキング委員

教　育　研　究　業　績　書

令和2年3月31日

氏名　　阿波　邦彦

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
人間医工学	リハビリテーション科学・福祉工学、呼吸リハビリテーション、がんリハビリテーション

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1.呼吸機能検査や呼吸理学療法評価の実技演習および排痰手技や気道吸引実習の活用	平成27年10月 ～ 平成28年3月	京都橘大学健康科学部理学療法学科での内部障害系理学療法学応用演習で、肺および肺葉の位置、肺区域の位置などの確認を触診および座学にて演習を行った。また、呼吸器疾患に関する理学療法評価、呼吸機能検査等の評価方法や排痰手技および気道吸引の演習を行った。
2.授業における小テストの活用	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での呼吸・循環障害理学療法学および内部障害理学療法学で、座学を中心に講義している。なお、毎回、授業の初めに前回の授業内容の復習を目的とした小テストを実施している。
3.症例ビデオを視聴してADLや家庭環境をもとに、介護保険を使ったサービスなどを協議するグループワークの活用	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での地域理学療法で、学生は介護保険を使ったサービスや価格帯を予習し、症例ビデオを視聴した後、対象症例の在宅における問題点及び課題をグループワークで協議し、発表会を催す反転授業を実施している。その際、対象症例の動作や基本情報を基に介護度を予想し、その介護度ごとに異なる補助費から提供サービスを検討するよう指導している。また、授業前に前回の授業内容から小テストを実施している。
4. 症例レポートの作成のためのグループワークの活用	平成28年10月 ～ 平成31年3月	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での呼吸・循環障害理学療法学で、肺および肺葉の位置、肺区域の位置などの確認を触診で演習を行い、呼吸器疾患に関する理学療法評価、呼吸機能検査等の評価方法や排痰手技や呼吸介助などの演習を行っている。また、臨床実習や症例レポート課題を見越し、学生に慢性呼吸器疾患患者のビデオを視聴させ、性別や年齢、現病歴といった基本情報を基にグループワークで問題点や課題点を協議し、レポート作成の指導を実施している。
5.症例のレジュメをもとに、症例の問題点や課題点を探るグループワークを活用	平成28年10月 ～ 平成31年3月	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での内部障害理学療法学で、内部障害患者の症例レポートのレジュメから主な問題点や課題点、今後予想される問題などをグループワークを通し演習を起こい、各グループによる発表会を催している。

6.兵庫県立但馬長寿の郷で地域ケアに関わる座学およびグループワークの活用	平成29年7月8日 ～ 平成29年7月9日	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での地域理学療法学で、兵庫県立但馬長寿の郷で学外講習を受ける。そこでは地域ケアに関わる当該施設の理学療法士より「地域ケアに関わる基礎知識」等の座学を受け、当該施設で管理されている介護補助具や車いす等を用いてグループディスカッション並びにグループ発表を行った。 学外講習を受けるために、当該施設で協議および準備し、宿泊と食事、移動手段の手配等を準備した。
2　作成した教科書，教材		
1.講義用プリント	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻での呼吸循環障害理学療法学、内部障害理学療法学、地域理学療法学のための講義用プリントを作成し、使用している。
2.PT・OTビジュアルテキスト　内部障害理学療法学、ISBN 978-4-7581-0217-9	平成28年12月6日 発行	「【第5章　呼吸器疾患・呼吸障害の理学療法】、肺がんを含む胸部外科手術前後、症状・障害の理解、理学療法の理論と実際、p.224～231」の執筆を担当。
3.PT・OT入門 イラストでわかる内部障害、ISBN 978-4-263-26611-3	令和元年1月10日 発行	「【第2章　呼吸器疾患-知識・検査データ・治療-】、エッセンス、治療、p.19～26」の執筆を担当。
4.PT・OT入門 イラストでわかる理学療法概論、ISBN 978-4-263-26614-4	令和元年3月25日 発行	「【第15章　内部障害系理学療法（COPDの症例）】、エッセンス、内部障害とは、増加している内部障害者、高齢化と内部障害そして重複障害、内部障害とリハビリテーション対象患者、慢性閉塞性肺疾患とは、COPDの病態、全身併存症と肺合併症、COPDの問題点、呼吸リハビリテーション、症例検討、確認してみよう！・解答p.263～282」の執筆を担当。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1.大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成23年7月	学校法人京都橘学園京都橘大学健康科学部理学療法学科専任助教「内部障害系理学療法学基礎演習」「内部障害系理学療法学応用演習」資格有りと判定
2.大学設置・学校法人審議会の教員組織審査	平成25年10月	学校法人西大和学園 大和大学 保健医療学部 総合リハビリテーション学科 理学療法専攻専任講師「卒業研究Ⅰ」「内部障害理学療法学」「内部障害理学療法学演習」「呼吸・循環障害理学療法学」「呼吸・循環障害理学療法学演習」「地域理学療法学」「理学療法学臨床実習Ⅰ」「理学療法学臨床実習Ⅱ」「理学療法学臨床実習Ⅲ」「理学療法学臨床実習Ⅳ」「卒業論文」資格有りと判定
4　実務の経験を有する者についての特記事項		

1. 実習指導実績	平成21年4月 ～ 平成24年3月	敬天堂古賀病院にて スーパーバイザーとして、臨床実習、評価実習、見学実習、クリニカル・クラークシップ実習などの実習を受け入れた。対象校は西九州大学（佐賀）、医療福祉専門学校緑生館（佐賀）、福岡国際医療福祉学院（福岡）、目白大学（埼玉）、西日本リハビリテーション学院（熊本）であり、年間7名～8名の実習生を受け入れた。その際、上記以外に下記のことに留意した。 ・ 呼吸リハビリテーション専門病院として、質の高い医療を経験してもらい、考察できるように担当制とし、症例を3例ほど担当し指導した。また、他の患者に対し呼吸リハビリテーション評価を実施する際はアシスタントとして、必ず評価に参加することを徹底していた。 ・ 担当患者の症例レポート、症例発表を必須課題とし、実習終盤に症例発表を実施する。発表時は西九州大学リハビリテーション学部堀江研究室の勉強会などで多くの人の前で発表する機会を作った。 ・ 臨床実習では英文抄読を課題とし、佐賀大学大学院医学系研究科堀川研究室の抄読会で発表を実施した。 ・ 臨床実習指導者としての資質を高めるため、外部研修や関連学会への参加した（平成21年度九州ブロック研修会・臨床実習指導者研修会参加）
2. 佐賀県理学療法士会研修会での講義「排痰」	平成22年8月	今年度から理学療法士も吸引が可能となり、吸引・排痰における知識と技術が求められる。本研修会では排痰と吸引の知識と技術獲得のためである。理学療法士の立場での排痰法や排痰体位、排痰の機序などの講義を行い、排痰の技術指導や吸引指導などを行った。
3. 佐賀県理学療法士会南部地区研修会での講義 「呼吸リハビリテーションの基礎」	平成22年9月	呼吸リハビリテーションにおける基礎的な知識、臨床においての慢性呼吸不全患者に対する中止することなどを講義し、歩行トレーニングや離床の重要性を中心に講義を行った。
4. 武雄医師会研修会での講義 「呼吸リハビリテーションの基礎」	平成22年11月	看護師を中心に構成された研修会で、呼吸リハビリテーションにおける基礎的な知識やupdate BODE indexなどの新しい知見などを紹介した。
5. 佐賀包括的呼吸リハビリテーション研究会 南部地区勉強会での講義 「呼吸リハビリテーションの基礎」	平成24年2月	理学療法士、看護師を中心とした呼吸リハビリテーションに係わる勉強会で、慢性呼吸器疾患患者に対する酸素管理や運動療法、基礎的な考え方などを講義した。
6. 京都橘大学 淳芳会　健康セミナーでの講義 「あなたが知らないCOPD」	平成24年10月	京都橘大学卒業生を対象に健康セミナーとしてCOPDについて講義した。喫煙とCOPDとの関わり、COPDの病態やその対策などを講義するとともに、参加者の呼吸機能を測定した。

7. わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性期呼吸リハビリテーションの評価」	平成24年11月	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性期リハビリテーションに関する評価法の研修会を実施した。内容は運動機能に関する評価、呼吸機能に関する評価、日常生活動作や健康関連生活の質の評価などを講義した。
8. わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性呼吸器疾患の呼吸リハビリテーションの実際」	平成25年12月	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性呼吸器疾患の呼吸リハビリテーションに関する研修会を実施した。参加者は140名程度で、内容は運動療法、日常生活動作に関することを中心に講義した。
9. わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性期呼吸リハビリテーション」	平成26年10月	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性期リハビリテーションに関する評価法と運動療法を中心とした研修会で、参加者は100名程度であった。内容は運動機能に関する評価、呼吸機能に関する評価と、それらを基にした運動療法等について講義した。
10. チーム医療CE研究会九州主催、第73回 臨床セミナー、呼吸療法Brush-up! ～あなたの知識、更新してみませんか ～福岡県での講義 「呼吸リハビリテーションの基礎」	平成27年8月	チーム医療に必要な呼吸リハビリテーションに関する基礎知識とチーム医療脳方法などを講義した。
11. わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性期呼吸リハビリテーション」	平成27年11月	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性期リハビリテーションに関する評価法と運動療法を中心とした研修会で、参加者は120名程度であった。内容は運動機能に関する評価、呼吸機能に関する評価と、それらを基にした運動療法等について講義した。
12. 第56回日本呼吸器学会学術講演会および 第13回呼吸ケアカンファレンスでの講義 アシスタント 「理学療法の実習」アシスタント	平成28年4月	チーム医療のためのプラクティカルな呼吸ケアに関する講義と実践に即した実習のアシスタントを行った。
13. 兵庫県介護老人保健施設協会阪神支部 リハビリテーション部会研修会での講義 「呼吸リハビリテーションの基礎と在宅・施設への応用」	平成28年10月	理学療法士と作業療法士を中心に呼吸リハビリテーションの基礎と在宅・施設への応用について、症例を交えた座学と実技実習を用いて講義した。
14. わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性期呼吸リハビリテーション」	平成28年10月	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性期リハビリテーションに関する評価法と運動療法を中心とした研修会で、運動機能に関する評価、呼吸機能に関する評価と、それらを基にした運動療法等について講義した。
15. わかあゆ呼吸ケア勉強会での講義 「慢性期呼吸リハビリテーション」	平成29年11月2日	理学療法士と作業療法士を中心とした慢性期リハビリテーションに関する評価法と運動療法、薬物療法を中心に座学形式で講義した。参加者は80名弱であった。

16. 石川県臨床工学技士会　第11回呼吸療法セミナー 「テーマ：ベッドサイドで活かす呼吸療法」での講義「チームとして取り組む呼吸リハビリテーション」	平成29年11月26日	看護師を中心としたコメディカルに対して、急性期から慢性期にかけての呼吸リハビリテーションに関する講義を実施した。参加者は100名程度であった。
17. 鳥取県臨床工学技士会　第7回鳥取県呼吸療法セミナー 「テーマ：チームで学ぶ！呼吸ケア！」での講義「急性期から慢性期にかけたCOPD患者に対する呼吸リハビリテーション」	平成30年7月22日	看護師、理学療法士、臨床工学技士を中心としたコメディカルに対して、急性期から慢性期にかけての呼吸リハビリテーションに関する講義を実施した。参加者は222名であった。
5　その他 【研修活動】 1. 長崎呼吸器リハビリクリニックでの研修	平成19年9月1日 ～ 平成20年3月31日	毎週木曜日に長崎呼吸器リハビリクリニックにて、呼吸リハビリテーションの研修を受けた。主に呼吸リハビリテーション評価方法（フィジカルアセスメント、画像診断、呼吸機能検査、6分間歩行距離テスト、漸増シャトルウォーキングテストなど）、治療方法（全身持久力トレーニング指導、呼吸介助、薬物療法、栄養療法など）などを研修した。
2. 大阪国際がんセンターでの研修	令和元年5月30日 ～ 現在に至る	毎週金曜日に大阪国際がんセンターにて、がんリハビリテーションの研修を受け、特別研究員として評価・治療に関わる知識、技術を学んでいる。
【受賞】 1. 第18回佐賀県理学療法士会学会 優秀賞	平成22年1月	第18回佐賀県理学療法士会学会 「COPD患者におけるBODE indexを用いた身体機能とADLの関係についての検証」
2. 第19回佐賀県理学療法士会学会 優秀賞	平成23年2月	第19回佐賀県理学療法士会学会 「Update BODE indexと身体機能評価の関係」
3. 第2回日本ヘルスプロモーション理学療法学会（佐賀県）学会長賞受賞	平成24年9月	第2回日本ヘルスプロモーション理学療法学会 「COPD患者の歩行距離低下に与える身体機能的影響因子の抽出と外出制限に関する研究」
4. 第4回日本ヘルスプロモーション理学療法学会（京都府）学会長賞受賞	平成24年9月	第2回日本ヘルスプロモーション理学療法学会 「COPD患者の歩行距離低下に与える身体機能的影響因子の抽出と外出制限に関する研究」
5. 第5回日本ヘルスプロモーション理学療法学会（佐賀県）学会長賞受賞	平成27年10月	第5回日本ヘルスプロモーション理学療法学会 「下肢荷重力測定における日常生活動作自立度判定の基準訪問リハビリテーション利用者での検証」
【研究活動】		

1. 科学研究助成費 若手研究Ｂ （代表者 阿波邦彦：25750240）	平成25年4月1日 ～ 平成27年3月31日	研究代表者として「健康関連QOLに着目した、新たな肺がん葉切除術前後のがんリハビリテーションの開発」に従事した。助成額：4,290千円（直接経費：3,300千円、間接経費 ： 990千円）
2. 大阪ガス研究助成（代表者 阿波邦彦）	平成28年4月1日 ～ 平成29年3月31日	研究代表者として「高齢肺がん患者の術前後における呼吸代謝能評価スケールの開発」に従事した。助成額：700千円
3. 科学研究助成費 若手研究Ｂ （代表者 阿波邦彦：17K17456）	平成29年4月1日 ～ 現在に至る	研究代表者として「術後の健康関連QOLの早期回復を目的とした肺がん患者教育プログラムの開発」に従事している。助成額：4,160千円（直接経費 ：3,200千円、間接経費 ： 960千円）
【教育実績】		
1. 京都橘大学健康科学部理学療法学科における教育実績	平成24年4月1日 ～ 平成28年3月31日	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査を受け、専任助教として勤務する。担当科目は、内部障害系理学療法学基礎演習、内部障害系理学療法学応用演習であった。実務としては、理学療法学実習における巡回指導および実習先との連絡・調整業務、理学療法学科運営に関する業務、各種行事への参加、調査活動、広報活動、入試関連業務等に従事し、特にヘルスプロモーションコースに在籍していたため、野洲市や山科市での調査測定で学生とともに身体能力調査を行い、学生へ調査方法の指導、スケジュール管理、機器・機材運搬等を行った。ホームルームや学生が主体となっている学生学会の臨床評価研究会にて、アドバイザーとして、学生学会の一員として参加していた。また、例年行われている『全国私立大学FD研修会（浜松）』に参加し、FDについて学ぶ。一方、京都・滋賀を中心とした呼吸リハビリテーションを学ぶ会「わかあゆ呼吸ケア勉強会」をつくり、その事務局として運営に関わっている。
2. 大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法学専攻における教育実績	平成28年4月1日 ～ 平成31年3月31日	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査を受け、専任講師として勤務する。担当科目は、呼吸・循環障害理学療法学、呼吸・循環障害理学療法学演習、内部障害理学療法学、内部障害理学療法学演習、地域理学療法、健康科学概論である。平成28年度は2期生の副クラスアドバイザーとして、平成29年は4学年すべての副クラスアドバイザーとして学生指導等を日々行うとともに、国家試験対策および広報活動の責任者として業務に携わり、成績下位学生への個別指導およびグループワークにおける助言と監督業務を行っている。また、2か月に1回開催される吹田市片山地区の地域ケア会議に参加し、地域における事案について協議している。

3.奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻における教育実績	平成31年4月1日 ～ 現在に至る	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査を受け、専任准教授として勤務する。担当科目は、基礎ゼミⅡ、人体機能学Ⅱ、人体生理機能実習、運動学Ⅱ、臨床運動学、理学療法研究法、客観的臨床能力演習、理学療法卒業研究、内部障害評価法、早期体験実習、地域理学療法実習、理学療法評価実習、総合臨床実習Ⅰ、総合臨床実習Ⅱである。平成31年度は1期生のクラスアドバイザーとして学生指導等を日々行っている。大学管理運営においては、キャリアセンター運営委員会、学生生活WG委員会に所属している。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許		
(1) 理学療法士資格	平成16年4月26日	第46765号
(2) 3学会合同呼吸療法認定士	平成22年1月1日	第100732号
(3) 修士（医科学）	平成22年3月24日	佐賀大学第72号
(4) 呼吸ケア指導士	平成25年4月1日	第213313号
(5) 博士（保健学）	平成30年3月31日	大阪府立大学第27号
2　特許等 特記事項なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1.春陽会うえむら病院理学療法士	平成16年4月1日 ～ 平成19年8月31日	リハビリテーション科に勤務。 主に脳血管疾患、パーキンソン病などの特殊疾患、大腿骨頸部骨折術後、変形性関節症疾患を有する患者に対する理学療法、他部署とのカンファランス業務を中心に業務をしていた。特に循環器を中心に診療する病院であったため、循環器疾患をベースとする患者が多く、リスク管理、症状・病状の変化に十分に注意を払って理学療法を実施していた。家屋調査や訪問リハビリテーションを積極的に導入し、平成18年7月からは週3日午後から2～3件ほどの訪問リハビリテーション業務を行った。その際、担当者会議や訪問リハビリテーション会議などに参加を積極的に行った。また、地域における介護予防事業での転倒予防、筋力増強の講習会などで講師として参加し、年間2回程度定期的に行った。

2. 敬天堂古賀病院理学療法士	平成19年9月1日 ～ 平成24年3月31日	リハビリテーション部開設および勤務。 入職時はリハビリテーション機能がなく、リハビリテーション部責任者として平成19年9月にリハビリテーション部を立ち上げた。入職当初は開設業務を行いながら理学療法を実施、平成19年9月から平成20年3月末まで長崎呼吸器リハビリクリニックにて週1日の頻度で研修させてもらった。また、開設2年時は新人が入職、理学療法士2人となり、後進の指導を中心に行った。主に呼吸器疾患、運動器疾患を有する患者に対する理学療法、他部署とのカンファランス業務、リハビリテーション部の管理業務、新人職員の教育、実習生指導を中心に業務をした。特に呼吸器疾患を中心に診療する病院であるため、呼吸器疾患に対する理学療法を実施し、専門的な知識・技術を習得するため学会活動、研修会活動を積極的に行っていた。リハビリテーション対象者の5割超が呼吸器疾患であり、専門的な呼吸リハビリテーション評価を行い、客観的な運動処方を行い、定期的な評価を実践していた。また、リハビリテーション部責任者として、運営会議、病院機能評価委員会、広報・地域連携委員会、医療安全委員会リスク部会、教育委員会、リハビリテーション検討会、療法病棟検討会などに参加し、病院の運営方針、事業計画に介入していた。院内活動では呼吸ケアに関わる講義など院内研修活動に従事していた。院外活動では活動地域における呼吸器疾患に関するリハビリテーションの啓発活動、佐賀包括的呼吸リハビリテーション研修会の事務局を行いつつ、地域行事などへ参加し広報活動を行った。
3. 地域における肺機能検診	平成21年4月 ～ 平成22年4月	地域の行事（江北町馬頭観音祭り）において、健康相談ブースの設置、無料の肺機能検査などを実施し、地域における呼吸器関連、リハビリテーション関連の相談、呼吸器疾患の早期発見事業に取り組んだ。
4. 京都橘大学健康科学部理学療法学科 助教	平成24年4月1日 ～ 平成28年3月31日	担当科目は、内部障害系理学療法学基礎演習、内部障害系理学療法学応用演習であり、実技をともなう科目やその他の科目の補助として講義に参加する。ホームルームや学生が主体となっている学生学会の臨床評価研究会にて、アドバイザーとして、学生学会の一員として参加している。また、例年行われている『全国私立大学FD研修会（浜松）』に参加し、FDについて学ぶ。また、京都・滋賀を中心とした呼吸リハビリテーションを学ぶ会「わかあゆ呼吸ケア勉強会」をつくり、その事務局として運営に関わっている。また、平成25年度4月から平成28年3月まで、科学研究助成費「課題名：健康関連QOLに着目した、新たな肺がん葉切除術前後のがんリハビリテーションの開発」に携わった。

5. 大和大学保健医療学部総合リハビリテーション学科理学療法専攻 講師	平成28年4月1日 ～ 平成31年3月31日	担当科目は、呼吸・循環障害理学療法学、呼吸・循環障害理学療法学演習、内部障害理学療法学、内部障害理学療法学演習、地域理学療法学、健康科学概論である。加えて、実技をともなう科目やその他の科目の補助として講義に参加する。平成28年度は2期生の副クラスアドバイザーとして、平成29年は4学年の副クラスアドバイザーとして学生指導等を日々行うとともに、国家試験対策および広報活動の責任者として業務に携わっている。また、2か月に1回開催される吹田市片山地区の地域ケア会議に参加し、地域における事案について協議している。
6. 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科理学療法学専攻における教育実績	平成31年4月1日 ～ 現在に至る	大学設置・学校法人審議会の教員組織審査を受け、専任准教授として勤務する。担当科目は、基礎ゼミⅡ、人体機能学Ⅱ、人体生理機能実習、運動学Ⅱ、臨床運動学、理学療法研究法、客観的臨床能力演習、理学療法卒業研究、内部障害評価法、早期体験実習、地域理学療法実習、理学療法評価実習、総合臨床実習Ⅰ、総合臨床実習Ⅱである。平成31年度は1期生のクラスアドバイザーとして学生指導等を日々行っている。大学管理運営においては、キャリアセンター運営委員会、学生生活WG委員会に所属している。
4　その他 特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
（著書）				

1. 『PT・ATビジュアルテキスト内部障害理学療法学』	共著	平成28年12月	羊土社 全333頁	本書は学生がイメージしやすいよう多数の図表を掲載し、「目で見てわかる」かつ「実践的な」理解が進めやすいことを目的に企画された書籍である。その中で、「第5章　呼吸器疾患・呼吸障害の理学療法、肺がんを含む胸部外科手術前後、症状・障害の理解、理学療法の理論と実際」を担当し、症状・障害、理学療法の実際について科学的根拠と治療のポイントなどを絞って解説した。 B5版　全333頁 編者：松尾善美 共著者：角田晃啓、松尾善美、椿淳裕、高橋祐介、山科吉弘、関川清一、田畑稔、平野康之、泉唯史、高瀬広詩、堀江淳、柳澤幸夫、阿波邦彦、石井光昭、堀竜次、笹沼直樹、森田恵美子、河野健一、井坂昌明、永嶋道浩 本人担当部分：「第5章　呼吸器疾患・呼吸障害の理学療法、肺がんを含む胸部外科手術前後、症状・障害の理解、理学療法の理論と実際」（p224～231） 肺がん周術期の理学療法に焦点を当て、周術期における症状や各合併症、障害について説明し、それらに対する理学療法の理論と治療方法に関する実践的な内容について解説した。
2. 『PT・OT入門 イラストでわかる内部障害』	共著	令和元年1月	医歯薬出版株式会社 全337頁	本書は理学療法士・作業療法士養成校の学生に合った内容で、「わかりやすい」・「興味が持てる」・「ポイントを絞った」を目標に企画された書籍である。その中で、「第2章　呼吸器疾患-知識・検査データ・治療-、エッセンス、治療」を担当し、呼吸器疾患の病態・症状について科学的根拠と治療のポイントなどを絞って解説した。 B5版　全337頁 監修者：上杉雅之 編集者：堀江淳 共著者：堀江淳、阿波邦彦、江越正次郎、田平一行、野崎忠幸、木村智子、小川真人、北村匡大、下雅意崇享、笠原酉介、井澤和大、野村卓生、河野健一、河辺信秀、渡部祥輝、音部雄平、平野康之、堀田千春、堀田一樹、平木幸治、加藤祐司、鈴木昌幸、池田聖児、島雅晴、島崎寛将、谷口小百合、井出宏、森尾裕志 本人担当部分：「第2章　呼吸器疾患-知識・検査データ・治療-、エッセンス、治療」（p.19～26） 呼吸器疾患の病態・症状について説明し、その治療方法に関する実践的な内容について解説した。

3. 『PT・OT入門 イラストでわかる理学療法概論』	共著	令和元年3月	医歯薬出版株式会社 全337頁	本書は理学療法士・作業療法士養成校の学生に合った内容で、「わかりやすい」・「興味が持てる」・「ポイントを絞った」を目標に企画された書籍である。その中で、「第15章　内部障害系理学療法（COPDの症例）、エッセンス、内部障害とは、増加している内部障害者、高齢化と内部障害そして重複障害、内部障害とリハビリテーション対象患者、慢性閉塞性肺疾患とは、COPDの病態、全身併存症と肺合併症、COPDの問題点、呼吸リハビリテーション、症例検討、確認してみよう！・解答」を担当し、内部障害の概要、COPDの病態と治療、呼吸リハビリテーションについて解説した。 B5版　全337頁 監修者：上杉雅之 共著者：秋月千典、阿波邦彦、安彦鉄平、今井章人、岩瀬弘明、岡村和典、金井秀作、神里巌、小柴武、木下めぐみ、甲田宗嗣、菅原仁、武内孝祐、永井宏達、中越竜馬、中西亮介、成瀬進、西守隆、山野薫、山本克己、吉田一正、吉田勇一 本人担当部分：「第15章　内部障害系理学療法（COPDの症例）、エッセンス、内部障害とは、増加している内部障害者、高齢化と内部障害そして重複障害、内部障害とリハビリテーション対象患者、慢性閉塞性肺疾患とは、COPDの病態、全身併存症と肺合併症、COPDの問題点、呼吸リハビリテーション、症例検討、確認してみよう！・解答」（p.263～282） 内部障害の概要、COPDの病態と治療について説明し、呼吸リハビリテーションの理論と治療方法に関する実践的な内容について解説した。
（学術論文） 1. 酸素カートの異なる運搬条件が6分間歩行距離テストに及ぼす影響 （査読付）	共著	平成22年3月	西九州リハビリテーション研究 第3号 pp.17～22	本研究は、6分間歩行距離テスト（以下、6MWT）において酸素カートの異なる運搬条件（自己牽引・他者運搬）が最大歩行距離と生理学的変化、自覚症状の変化に及ぼす影響を検証することである。対象はCOPD患者16例（在宅酸素療法群8例、対照群8例）とした。6MWTは対照群では自己牽引よりも他者運搬の方が有意に高値であった。したがって、6MWTは酸素カートの運搬条件の違いが最大歩行距離に影響すると示唆された。 本人担当分：筆頭著者として報告した。 共著者：阿波邦彦、堤恵理子、堀江淳、白仁田秀一、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫

2．慢性閉塞性肺疾患患者における多次元重症度指数（BODE index）の有用性の研究 （修士論文）	単著	平成22年3月	佐賀大学	COPDは全身性疾患であり、運動耐容能の低下を呈している。Celliらによって発表された多次元重症度を評価するBODE indexはGOLD病期分類よりCOPDを機能的に評価できる。そこで、COPD患者の身体機能とBODE indexとGOLD病期分類との関係を検討した。GOLD病期分類は実際の症状よりも軽症に評価してしまう可能性が示唆され、BODE indexは身体機能を含め総合的な評価となりうると考えられた。（全23頁）
3．慢性閉塞性肺疾患患者における30秒椅子立ち上がりテストの運動耐容能評価法としての可能性 （査読付）	共著	平成22年10月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 第20巻第2号 pp.156～159	30秒椅子立ち上がりテストがCOPD患者の運動耐容能評価として応用できるかCOPD患者27例を対象に検証した。CS-30はpeak VO2predとの間に精度の高い回帰式が得られた。このことから、CS-30は運動耐容能評価法として臨床応用の可能性を有しているのではないかと考えられた。 本人担当分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：髙川晃敏、堀江淳、阿波邦彦、畠中耕志、白仁田秀一、畠中章吾、髙折和男
4．男性慢性閉塞性肺疾患患者の病期におけるバランス能力の差異に関する検討 （査読付）	共著	平成23年4月	理学療法科学　26巻2号 pp.215～219	COPD患者のバランス能力と身体機能、身体能力の関係、GOLD病期間のバランス能力の差を検証することを目的とした。男性COPD患者31例のTUGは身体機能、身体能力と有意な相関が認められ、外周面積、総軌跡長は身体能力と有意な相関が認められた。GOLD最重症ではバランス能力の低下が起こり始める可能性が高くなることが示唆された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：堀江淳、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、田中将英、林真一郎、堀川悦夫
5．A Comparison of the BODE Index and the GOLD Stage Classification of COPD Patients in the Evaluation of Physical Ability （COPD患者の身体能力評価におけるBODE指数とGOLD分類の比較） （査読付）	共著	平成23年6月	Journal of Physical Therapy Science Vol. 23 No. 3 第23巻第3号 pp.437～441	COPD患者におけるBODE indexと身体機能、身体能力の関係、BODE indexとGOLD病期分類の関係、BODE indexの軽症群と重症群との身体機能、身体能力の比較を検証することを目的とした。COPD患者48例のBODE indexは身体機能、身体能力と有意な相関が認められ、GOLD病期分類は実際の症状よりも軽症と判断されることが示唆された。これらにより、BODE indexはGOLD重症度分類よりもCOPDの身体機能を含め総合的な評価となりうると考えられた。 本人担当分：データ収集、統計処理、考察などを担当。 共著者：Anami Kunihiko、Horie Jun、Shiranita Shuichi、Imaizumi Yujiro、Ichimaru Katsuaki、Naotsuka Hiroyuki、Yamada Hozumi、Koga Yoshiyuki、Horikawa Etsuo

6. 慢性閉塞性肺疾患患者のBODE indexの重症度別におけるTimed up and go testの比較 （査読付）	共著	平成23年11月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第1巻第1号 pp.67～72	COPD患者のTimed up and go testと身体機能、身体能力の関係およびBODE indexの重症度分類に分けてTUGの差を検証することを目的とした。COPD患者48例が対象であった。TUGと各身体機能は相関化関係を認め、TUGはBODE indeの軽症群より重症群に低下が認められた。COPD患者は重症化するとTUGは低下し、転倒への危険性が増えることが示唆された。 本人担当分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫
7. 慢性閉塞性肺疾患患者の肥満が身体機能、身体能力に及ぼす影響に関する検証 （査読付）	共著	平成24年2月	体力科学 第61巻1号 pp.125～130	研究はCOPD患者の栄養状態をBMIから「痩せ」「標準」「肥満」と分類し、運動機能、運動能力が如何に影響を及ぼしているか検討した。その結果、COPD患者にとって「肥満」は、必ずしも否定される状態ではなく、むしろ肯定すべき状態である可能性が示唆された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：堀江淳、林真一郎、田中将英、阿波邦彦、堀川悦夫
8. COPD患者の重症度別5m最速歩行時間測定の意義の検討 （査読付）	共著	平成24年2月	西九州リハビリテーション研究 第5巻 pp.37～42	本研究は、COPD患者の瞬間的歩行能力として5m最速歩行時間が有用な指標となり得るか検討した。結果、運動耐容能評価精度向上のために瞬発的歩行能力測定を組み合わせることは、有用であることが示唆された。 本人担当分：データ収集、分析を担当。 共著者：栁原加奈子、堀江淳、阿波邦彦、村田伸
9. COPD患者の歩行距離低下に与える影響因子の抽出と外出制限に関する研究 （査読付）	共著	平成24年10月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第2巻第3号 pp.107～112	本研究の目的は、COPD患者の外出制限の一指標である歩行距離低下の影響因子を抽出し、そのカットオフ値を算出することである。その結果、COPD患者の外出制限に影響を及ぼす因子はmMRC息切れスケールと膝伸展筋力であった。そのカットオフ値は、mMRCがGrade2、膝伸展筋力は53.6%であった。 本人担当分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、村田伸、林真一郎、田中将英、堀川悦夫、山田穂積、古賀義行
10. 慢性閉塞性肺疾患患者の6分間歩行距離の違いにおける身体特性の比較 （査読付）	共著	平成24年10月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第2巻第3号 pp.125～130	慢性閉塞性肺疾患(COPD)患者の6分間歩行距離(6MWD)の違いにおける身体特性を比較した。対象は安定期COPD患者76名とした。COPD患者における6MWDは、呼吸機能、筋力、身体能力、ADL能力、健康関連QOLを反映した。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：江越正次朗、堀江淳、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、上田真智子、田中将英、林真一郎

11. 30秒間椅子立ち上がりテストは慢性閉塞性肺疾患患者の運動耐容能を反映するか? （査読付）	共著	平成24年10月	日本呼吸ケア・リハビリテーション学会誌 第2巻第2号 pp. 221～226	慢性閉塞性肺疾患（COPD）患者に対して、30秒間椅子立ち上がりテスト（CS-30）が運動耐容能評価法として応用できるかを検証した。対象はCOPD患者137例で、6MW peak VO2 pred=0.38×CS-30+4.42（R2=0.53）、ISWT peak VO2 pred=0.64×CS-30+1.85（R2=0.59）の有意な回帰式が得られた。CS-30の影響因子は、ISWT peak VO2 pred、TUGであった。CS-30は、在宅や狭小な施設において、客観的に運動耐容能が評価できる可能性が示唆された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：白仁田秀一、堀江淳、直塚博行、髙川晃敏、阿波邦彦、今泉潤紀、田中将英、渡辺尚、林真一郎
12. 高齢患者の最速歩行と最大低速歩行に及ぼす下肢筋の貢献度 －大腿四頭筋筋力と足把持力に着目して－ （査読付）	共著	平成25年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第2巻第4号 pp. 163～167	本研究の目的は、高齢入院患者を対象に、異なる歩行速度における下肢筋力の貢献度を明らかにすることである。足把持力は最大低速歩行時の姿勢の安定化に関与している可能性が示された。一方、大腿四頭筋筋力は、身体を前方へ進める推進力としての役割が大きいことが推察された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：岩瀬弘明、村田伸、阿波邦彦、松尾奈々、山﨑康平、米山智彦、小松直正、重田裕子、窓場勝之
13. 地域活動に参加している地域住民の閉塞性換気障害調査とCOPDスクリーニングテストの関係 －Eleven-Item Pre-Interview Questionnaire（11-Q）、IPAGによるCOPD質問票（IPAG質問票）と呼吸機能検査を用いて－ （査読付）	共著	平成25年2月	西九州リハビリテーション研究 第6巻 pp. 11～17	本調査の目的は、呼吸機能検査、11-QとIPAG質問票を地域祭事に参加している地域住民に実施し、閉塞性換気障害を疑う対象がいないか調査することである。結果、閉塞性換気障害疑いは4名（11. 8%）であった。今回の調査から、地域祭事参加者に1割強ほどの閉塞性換気障害を疑う人たちがいることが分かった。 本人担当分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、堀川悦夫、白仁田秀一、村田伸、池田秀俊、山田穂積、古賀義行
14. 疾患に関係なく簡便に評価できる下肢機能評価法の検討－座位での下肢荷重力測定法に関して－ （査読付）	共著	平成25年2月	西九州リハビリテーション研究 第6巻 pp. 45～49	本研究の目的は、様々な疾患を有する対象に、下肢荷重力測定法が下肢機能を反映する有用な評価法となるか否かについて検討することである。結果、入院中の回復過程にあり、様々な疾患を有する患者を対象とした場合、下肢荷重力測定法は下肢機能を反映する有用な評価法とは成り得ない可能性が示された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：岩瀬弘明、村田伸、阿波邦彦、松尾奈々、下平佳代、渡邉俊行、廣瀬智理、舩田雅之、原由香利、窓場勝之、宮原洋八

15. 疾患に関係なく簡便に評価できる下肢機能評価法の検討－虚弱高齢者用10秒 椅子立ち上がりテスト（Frail CS-10）を用いて－ （査読付）	共著	平成25年2月	理学療法科学 第28巻第1号 pp.27～30	様々な疾患を有する入院患者を対象に、虚弱高齢者 10秒椅子立ち上がりテスト（Frail CS-10）が下肢機能を反映する有用な評価法であるか否かについて検討した。結果、Frail CS-10 は男女ともにほぼ全ての評価項目と有意な相関あるいは、有意な相関を示す傾向が認められた。Frail CS-10 は疾患を統一せずに様々な疾患を有する患者を対象としても、下肢機能を反映する有用で簡便な評価法であることが示唆された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：岩瀬弘明、村田伸、阿波邦彦、松尾奈々、佐藤光美、原田純、今西和也、福永恵子、窓場勝之
16. 高齢患者の歩行パラメーターと下肢筋力およびADL能力との関連 －最速歩行と最大低速歩行時の比較－ （査読付）	共著	平成25年6月	理学療法科学 第28巻第3号 pp.347～350	高齢入院忠者を対象に、最速歩行と最大低速歩行の歩行パラメーターを洪1定し、条件別に下肢筋カおよびADL能力との関係を明らかにすることを目的とした。結果、最速歩行時において、歩行パラメーターはFIM-Mと、最大低速歩行時において、歩行パラメーターはFrail CS-10との間に有意な相関を示した。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：岩瀬弘明、村田伸、阿波邦彦、松尾奈々、米山智彦、山﨑康平、小松直正、重田裕子、窓場勝之
17. 慢性閉塞性肺疾患患者の抑うつに関わる因子の検討 （査読付）	共著	平成25年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究3巻2号 P.65～69	本研究の目的は、COPD患者における抑うつ状態に影響を及ぼす規定因子を不安尺度、身体機能、日常生活動作などの観点から検討することとした。対象は、COPD患者21名であった。主要項目は、抑うつ自己評価尺度（Self-rating Depression Scale；SDS）とした。結果、SDSに影響を与える項目は、STAI特性と30秒椅子立ち上がりテストであった。COPD患者における抑うつ状態は、不安感や下肢機能の低下が影響することが示唆された。これにより、チームアプローチが抑うつ状態を予防できる可能性を示唆した。 本人担当分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、北島麻美、宮副孝茂、林真一郎
18. COPD患者の予後予測評価であるupdated BODE indexとADO indexは健康関連QOLに影響しているか？ （査読付）	共著	平成25年9月	健康支援 第15巻第2号 pp.15～21	本研究の目的は、COPD患者の予後予測評価であるupdated BODE indexとADO indexが健康関連QOLの指標であるSGRQに影響しているか検証することである。updated BODE indexは、ADO indexよりも健康関連QOLに影響することが示唆された。 本人担当分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、村田伸、林真一郎、田中将英、堀川悦夫

19. 立位から背臥位までの臥床パターンの分類と身体機能の特徴 （査読付）	共著	平成25年9月	健康支援 第15巻第2号 pp. 23～29	地域在住の女性高齢者143名を対象に、立位から仰臥のパターンを類型化し、各動作パターン別に身体機能を比較し、仰臥パターンに影響を及ぼす要因を明らかにするために調査を行った。立位からの臥床パターンは、体格や動的バランス能力に影響を受ける可能性が示唆された。 本人担当分：分析、考察を担当。 共著者：岩瀬弘明、村田伸、宮崎純弥、大田尾浩、堀江淳、阿波邦彦
20. 男性間質性肺炎患者におけるCS-30と運動能力との関係 （査読付）	共著	平成25年12月	理学療法科学 第28巻第6号 pp. 757～760	本研究の目的は、慢性閉塞性肺疾患患者における抑うつ状態に影響を及ぼす規定因子を不安尺度、身体機能、日常生活動作などの観点から検討することとした。COPD患者における抑うつ状態は、不安感や下肢機能の低下が影響することが示唆された。これにより、チームアプローチが抑うつ状態を予防できる可能性を示唆した。 本人担当分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、上田真智子、白仁田秀一、田中将英、林真一郎
21. 非呼吸器疾患にて理学療法を実施している症例の呼吸機能に関する調査 （査読付）	共著	平成26年3月	神戸国際大学リハビリテーション研究 第5号 pp. 27～31	呼吸器疾患以外で理学療法を施行している26名（男7名、女19名、中央値72.0歳）を対象に、呼吸機能に関する調査を行った。結果、呼吸・換気障害疑いと判定されたのは5名で、1秒率70%未満の閉塞性換気障害疑いが1名（男）、%肺活量80%未満の拘束性換気障害疑いが4名（女）であり、身体能力や精神機能との関連は認めなかった。 本人担当分：リクルート、データ収集、分析、考察を担当。 共著者：堀江淳、阿波邦彦、今西和也、窓場勝之、中川法一、宮崎純弥、阪本良太、西川明子、森實徹、高橋健太郎、富田素子
22. 地域在住男性高齢者のブリッジ力と立位バランスならびに筋力との関連 （査読付）	共著	平成26年3月	理学療法科学 第29巻3号 pp. 405～409	本研究では、ブリッジ力測定法の有用性について、地域在住男性高齢者32名に対し、ブリッジ力と各種身体機能評価との関連性から検討した。結果、ブリッジ力と膝伸展筋力、FRT、片脚立位保持時間との間に有意な相関が認められた。さらに、ブリッジ力へ影響を及ぼす因子として、膝伸展筋力とFRTが抽出された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：政所和也、村田伸、宮崎純弥、堀江淳、阿波邦彦、上城憲司

23. 最重症COPD患者に対する運動療法中におけるモニター心電図検査の取り組み（査読付）	共著	平成26年9月	武雄杵島臨床医学誌 第20巻 pp. 7～10	運動負荷後に上室性期外収縮2連発が出現した最重症COPD患者に対し、運動療法実施時にモニター心電図を検査しながら負荷量を調節した。モニター心電図で循環動態を確認しながらの運動療法は、リスク管理や運動プログラムの作成、効果判定に有用であると考えられる。 本人担当分：考察指導を担当。 共著者：松本雄次、阿波邦彦、宮副孝茂、財津和希、北島麻美、手島由美子、山田穂積、古賀義行
24. 慢性呼吸不全患者のADL指導（査読付）	共著	平成26年10月	作業療法佐賀 第4巻第1号 pp. 31～36	慢性呼吸不全患者に対する作業療法士によるADL、IADLの獲得に向けた指導や援助は、呼吸リハにおける直近の課題である。そこで実践報告を踏まえ、ADLにおけるモニタリングや動作指導の基本、指導上の留意点について報告した。 本人担当分：文章構成および内容指導を担当。 共著者：野﨑忠幸、阿波邦彦、堀江淳、林真一郎、堀川悦夫
25. 運動負荷後における循環応答の経時的変化（査読付）	共著	平成27年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第1号 pp. 19～24	安静時の血圧や脈拍を測定する際の適切な安静時間を明らかにするため、健常者27名に対し、30秒椅子立ち上がりテスト後の脈拍や血圧の変化を終了直後から30秒ごとに5分間計測した。その繕果、血圧や脈拍の測定において、開始前の安静時間を設定する際は個々の変動パターンに合わせて安静時間を設定する必要性が示唆された。 本人担当分：データ収集、分析を担当。 共著者：小西佑磨、村田伸、窓場勝之、阪本昌志、杉森信吾、山川瑠奈、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、堀江淳
26. 虚弱高齢者を対象とした腹筋トレーニングを含む通所リハビリテーションの効果（査読付）	共著	平成27年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第1号 pp. 31～36	虚弱高齢者20名に対する腹筋トレーニングを含んだ6ヵ月間の通所リハビリテーションの効果を検証した。結果、FIM-M、片脚立位時間、5m最速歩行速度に交互作用が認められ、片脚立脚時間と5m最速歩行速度は介入群が有意な向上を認めた。一方で、FIM-Mは対照群が有意な低下を認めた。 本人担当分：データ収集、分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、北村智哉、堀江淳、伊藤健一

27．登山による大腿四頭筋の筋力および筋活動量の変化 （査読付）	共著	平成27年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第2号 pp. 65～69	本研究の目的は、登山前後における大腿四頭筋の筋疲労について、筋力および筋活動量を用いて検討することである。対象は健常成人15名であった。登山後に大腿四頭筋、特に内側広筋と外側広筋に筋疲労が生じる可能性が示された。 本人担当分：データ測定を担当。 共著者：桐野耕太、安彦鉄平、川添里菜、小澤美奈、和田真紀、白岩加代子、堀江淳、阿波邦彦、窓場勝之、村田伸
28．踵なしスリッパの着用が歩行に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成27年9月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第3号 pp. 123～127	本研究の目的は、踵なしスリッパの着用が歩行に及ぼす影響を明らかにすることである。対象は、健常成人女性14名とした。踵なしスリッパの着用は、歩幅を狭めるが素早く1歩を出すことで通常のスリッパと同じ歩行速度を保ち、大腿直筋および腓腹筋の筋活動を効果的に高める可能性が示された。 本人担当分：分析を担当。 共著者：吉田安香音、村田伸、安彦鉄平、小澤実奈、小西佑磨、阪本昌志、高橋 萌、白岩加代子、 窓場勝之、阿波邦彦、堀江淳、甲斐義浩
29．地域在住高齢者の転倒要因に関する研究身体・認知・精神機能の共分散分析による検討 （査読付）	共著	平成27年9月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻3号 pp. 139～143	地域在住高齢者の転倒と身体・認知・精神機能との関連性について総合的に明らかにするために、高齢者345名を対象に、過去1年間における転倒経験の有無別に身体・認知・精神機能について、年齢と性別を調整した共分散分析で比較した。その結果、転倒の危険因子は数多く報告されているが、年齢や性を考慮する必要性が示唆された。 本人担当分：分析を担当。 共著者：井上椋太、村田伸、桐野耕太、小澤実奈、 小西佑磨、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
30．地域在住高齢者の参加サークルの違いによる身体機能の差異 （査読付）	共著	平成28年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第4号 pp. 167～171	地域在住高齢者を対象に身体機能の評価を行い、参加しているサークルにより身体機能に差異がみられるのか検討した。年齢と性別を共変量として解析した結果、上体起こしの測定項目のみ「いきいき百歳体操」グループの方が、「マシントレーニングサークル」グループよりも低い値を示した（$p<0.01$）。このことから、「いきいき百歳体操」グループでは、体幹機能の強化に関してはさらにトレーニングを追加する必要性が示唆された。 本人担当分：データ収集、分析を担当。 共著者：白岩加代子、村田伸、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳

31．最適歩行と最速歩行中の歩行パラメーターと下肢筋活動の比較 （査読付）	共著	平成28年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第5巻第4号 pp. 179～183	最適歩行と最速歩行の歩行パラメーターと下肢筋活動を比較し、それぞれの特徴を明らかにするため、健常成人女性15名を対象に、歩行中の大腿直筋、大腿二頭筋長頭、前脛骨筋、腓腹筋内側頭の筋活動量を、表面筋電計を用いて測定した。歩行速度の増大には、歩行率の増加、立脚期の短縮が大きく関与し、また筋活動では前方への推進力としての役割が強い大腿直筋が大きく影響していることが示唆された。 本人担当分：データ分析を担当。 [執筆者]小澤実奈、村田伸、窓場勝之、小西佑磨、阪本昌志、高橋萌、吉田安香音、安彦鉄平、白岩加代子、阿波邦彦、堀江淳、甲斐義浩
32．後方歩行の歩行パラメーターと筋活動の特徴健常成人を対象とした検討 （査読付）	共著	平成28年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究5巻4号 P. 185～189	本研究の目的は後方歩行における、歩行パラメーターと筋活動の特徴を明らかにすることである。対象は健常成人女性15名とし、各筋の最大随意収縮を測定後、前方歩行と後方歩行の2条件で歩行を行った。後方歩行では距離因子、時間因子の影響により前方歩行に比べて速度、ケイデンスが低下することで安定性が高まり、1歩行周期での筋活動量においても前方歩行と相違が認められたことから、後方歩行の運動学的特徴が明らかとなった。 本人担当分：データ分析を担当。 共著者：阪本昌志、村田伸、小澤実奈、小西佑磨、高橋萌、吉田安香音、安彦鉄平、白岩加代子、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳、甲斐義浩
33．高齢者の主観的な睡眠状態と身体・認知・精神機能との関係 （査読付）	共著	平成28年2月	健康支援 第18巻第1号 pp. 9～15	健康支援事業に参加した65歳以上の男女264名にアンケートと各種評価を行い、主観的な睡眠状態と身体・認知・精神機能との関係について統計学的に検討した。主観的な睡眠状態は「等尺性膝伸展筋力」「SF-8」と有意な正の相関を示した。また、「主観的な健康感・満足感」と有意な正の相関を示し、「主観的な認知症症状」と有意な負の相関を示した。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：大杉紘徳、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳

34. 閉塞性換気障害と拘束性換気障害が疑われる地域在住高齢者の身体機能の特徴 （査読付）	共著	平成28年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第1号 pp. 17～22	地域在住高齢者における閉塞性換気障害と拘束性換気障害の有症率を明らかにし、正常群を含む3群間の身体機能を比較検証するために、地域在住高齢者128名（年齢75.5 ± 6.1歳）に対し、呼吸機能検査や身体機能を評価し、換気障害別の各測定項目を比較した。結果、換気障害の差異で身体機能に有意差は認めないが、閉塞性換気障害群は呼吸機能の低下に伴い、筋力が低下する可能性が示された。 本人担当分：データ収集、データ分析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、村田伸、岩瀬弘明、政所和也、八谷瑞紀、久保温子、伊藤健一、上城憲司、堀江淳
35. 地域在住高齢者における血圧と認知機能との関係 （査読付）	共著	平成28年6月	日本早期認知症学会誌 第9巻第1号 pp. 41～46	本研究では、地域在住高齢者の血圧と認知機能との関連について、地域在住高齢者286名を対象に収縮期血圧と拡張期血圧を自動血圧計により測定し、認知機能をMini-Mental State Examination（MMSE）で評価した。結果、非通院群でのみ、収縮期血圧とMMSEとの間に有意な低い負の相関を認めた。高齢者において、血圧と認知機能との関係は高血圧治療における降圧剤の影響をうけることが推察される。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：大杉紘徳、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
36. 地域在住の前期高齢女性と後期高齢女　性の握力および足趾把持力が身体機能に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成28年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第2号 pp. 53～57	地域在住高齢女性312名を対象に、前期高齢者と後期高齢者の2群に分類し、握力および足趾把持力が身体機能に及ぼす影響について検討した。結果、前期高齢者では足趾把持力が、後期高齢者では握力が身体機能と関連しやすいことが示された。 本人担当分：データ収集、考察の助言を担当。 共著者：二階堂素子、安彦鉄平、阿波邦彦、足立愛実、井上椋太、山川瑠奈、窓場勝之、白岩加代子、堀江淳、村田伸
37. 軽度認知機能障害に該当する高齢者の身体機能・活動能力・精神機能の特徴 （査読付）	共著	平成28年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第2号 pp. 59～64	地域在住高齢者335名を対象に、軽度の認知機能障害に該当する高齢者と認知機能の低下を認めない高齢者の身体機能、活動能力および精神機能を比較し、認知機能に及ぼす要因を検討した。軽度の認知機能を呈する高齢者では、教育歴、バランス能力および活動能力が低下していることが示された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：山川瑠奈、安彦鉄平、大杉紘徳、足立愛実、井上椋大、二階堂素子、窓場勝之、阿波邦彦、白岩加代子、堀江淳、村田伸

38. 活動的な高齢者の5m最速歩行時間と身体・認知・精神機能との関連 （査読付）	共著	平成28年9月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第3号 pp.111～116	女性高齢者351名を対象に、5m最速歩行時間と下肢筋力や立位バランスなどの身体機能の他,認知機能や精神機能を含めて調査した。重回帰分析の結果、5m最速歩行時間と独立して関連する因子は、30-second chair-stand test,身長,大腿四頭筋筋力,開眼片脚立位時間,Geriatric Depression Scale-5の5項目であった。このことから、5m最速歩行時間の測定は,活動的な高齢者であっても下肢筋力やバランス能力などの身体機能のみならず、精神機能をも反映する簡便な指標として使用できる可能性が示された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：中嶋大喜、村田伸、飯田康平、井内敏揮、鈴木景太、中島彩、中村葵、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
39. 二重課題が地域在住高齢者の歩行パラメータに及ぼす影響 （査読付）	共著	平成28年9月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第3号 pp.127～131	本研究の目的は、二重課題が地域在住高齢者の歩行パラメータに及ぼす影響を明らかにすることである。方法は女性高齢者35名を対象に、通常歩行（single-task歩行;ST歩行）と暗算課題を行いながらの歩行（dual-task歩行;DT歩行）について、それぞれの歩行パラメータを比較した。DT歩行中の歩行速度の低下には、歩行率、歩幅、ストライドの短縮、および立脚時間と両脚支持時間の増加が影響していること、特に立脚時間と両脚支持時間の増加が歩行速度低下に大きく関与していることが示唆された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：飯田康平、村田伸、井内敏揮、鈴木景太、中島彩、中嶋大喜、中村葵、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
40. ヒールの高さの違いが歩行パラメータと下肢筋活動に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成28年9月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第6巻第3号 pp.133～137	本研究は健常成人女性14名を対象に、ヒールの高さの違いが歩行パラメータと下肢筋活動に及ぼす影響について検討した。ヒール高3cm以上で歩行中の立脚時間や遊脚時間に影響を与えるが、ヒール高3cmまででであれば、歩行速度および歩幅やストライド長には影響が少ないことが示唆された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：中島彩、村田伸、飯田康平、井内敏揮、鈴木景太、中嶋大喜、中村葵、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳

41. 高齢女性における主観的な認知症症状の有無による身体・認知・精神機能の差異 （査読付）	共著	平成28年10月	保健医療学雑誌 第7巻第2号 pp. 46～53	胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）前の身体機能と健康関連QOLが、退院時にどのように変化しているかを明らかにするために、測定を完遂できた33症例の身体機能と健康関連QOLを評価した。結果、身体機能における6分間歩行距離は有意に低下し、健康関連QOLでは身体機能に関するQOLが有意に低下した。特に身体機能にかかわる健康関連QOLの低下程度は大きかった。 本人担当分：データ収集、データ分析、考察の助言を担当。 共著者：大杉紘徳、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
42. 胸腔鏡下肺葉切除術後患者に対するリハビリテーションの短期的検証 （査読付）	共著	平成28年12月	三菱京都病院医学総合雑誌 第23巻 pp. 15～20	女性高齢者189名に対し、主観的な認知症症状の自覚の有無で、身体、認知、精神機能に差異を認めるか否かを前期高齢者と後期高齢者それぞれに明らかにすることが目的である。主観的な認知症症状の有無に関わる身体、精神機能は、前期高齢者と後期高齢者では異なる傾向を示すことが明らかとなった。 本人担当分：データ収集、データ解析、考察を担当。 共著者：平山善康、太田垣あゆみ、瀬崎萌恵、出見世真人、佃陽一、田中宇大、小池初慧、山下直己、阿波邦彦、内藤紘一、堀江淳
43. 高齢者用歩行評価法「バランス歩行テスト」の開発 （査読付）	共著	平成29年2月	健康支援 第19巻第1号 pp. 1～8	歩隔を制限しながら超低速で歩行する『バランス歩行テスト』を考案し、その妥当性について一般高齢者258名を対象に検討した。結果、本テストは再現性が高く、他の身体機能や認知機能との相関も認められたことから妥当性があると考えられた。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：村田伸、甲斐義浩、安彦鉄平、岩瀬弘明、白岩加代子、窓場勝之、阿波邦彦、大杉紘徳、堀江淳
44. 地域在住女性高齢者の疼痛の部位数と身体機能および精神・心理機能との関係 （査読付）	共著	平成29年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第7巻1号 pp. 7～12	本研究目的は地域在住高齢女性を疼痛の部位数によって分類し、比較することで、疼痛を有する高齢者の特徴を明らかにすることである。対象は、186名の高齢女性とした。疼痛の部位数という側面を考慮することで、疼痛を有する高齢者の特徴をより詳細に捉えることが可能なことを明らかにした。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：安彦鉄平、村田伸、大杉紘徳、窓場勝之、阿波邦彦、白岩加代子、堀江淳

45．登山前のスクワット運動が登山後の大腿四頭筋の筋疲労に与える効果 （査読付）	共著	平成29年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第7巻第1号 pp. 13～17	登山2週間前に、登山と類似したスクワット運動を行う介入群（10名）と介入を行わないコントロール群（10名）に分類した。登山前後に最大随意収縮の50%に相当する大腿四頭筋筋力を91秒間持続させたときの中間周波数を用いて筋疲労を評価した。測定筋は内側広筋、外側広筋、大腿直筋の3筋とし、コントロール群と介入群を比較した。その結果、登山前にスクワット運動を行うことで、筋疲労が軽減する可能性が示された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：林勇樹、安彦鉄平、井上遼一、岡本雄輝、澤田貴大、村山寛和、白岩加代子、阿波邦彦、堀江淳、窓場勝之、村田伸
46．高齢肺がん患者の術前後における呼吸代謝能評価スケールの開発 （査読付）	共著	平成29年6月	大阪ガスグループ福祉財団研究報告書 第30巻 pp. 33～38	高齢肺がん患者のVATS前後において、呼吸機能と健康関連QOLは有意に低下した。また、術後健康関連QOLは術前の呼吸代謝能と有意な相関を認めたが、呼吸機能、筋力、歩行能力とは有意な相関を認めなかった。そこで、術後のQOLの大小に関するカットオフをROC曲線で解析し、活用が期待できるカットオフが算出された。 本人担当分：データ収集、データ解析、考察を担当。 共著者：阿波邦彦、堀江淳、平山善康、山下直己、大杉紘徳、伊藤健一
47．Relationship between strength asymmetry and body sway in older adults （高齢者の体力と非対称性の関係） （査読付）	共著	平成29年10月	Aging Clinical and Experimental Research Vol.16 第16巻 pp. 1～17	高齢者の膝伸展力、足の握り強さ、手の握力の非対称性を分析し、歩行中のこれらの非対称性と身体の揺れの関係を検証した。右膝伸展筋力および手握り強度の値は、左膝伸展筋力および手握り強度の値よりも有意に高かった。左右のつま先握力の間に有意差はなかった。トーグリップ強度の非対称性は、歩行中の身体の揺れと有意な正の相関を示した。膝関節と手の握力の非対称性は、身体の揺れとの有意な相関を示さなかった。トーグリップ強度の非対称性は、身体の揺れを増加させ、カットオフ値は23.5%であった。 本人担当分：統計解析を担当。 共著者：Hitoshi Koda、Yoshihiro Kai、Shin Murata、Hironori Osugi、Kunihiko Anami、Takahiko Fukumoto、Hidetaka Imagita

48. 運動習慣のある高齢者の転倒と身体・認知・精神機能との関連 （査読付）	共著	平成30年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第7巻第4号 pp. 171～175	本研究の目的は、運動習慣のある高齢者における転倒経験の有無と身体・認知・精神機能との関連について明らかにすることである。地域在住高齢者158名を対象に、過去1年間における転倒経験の有無別に身体・認知・精神機能を二元配置分散分析で比較した。結果、高齢者が運動習慣を有することは転倒の有無に関わらず身体・認知・精神機能の維持に影響し、転倒は過去の転倒経験と精神機能の低下によって予測できる可能性が示された。 本人担当分：データ収集を担当。 共著者：鈴木景太，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，阿波邦彦，窓場勝之，堀江淳
49. Natural recovery of exercise tolerance and quality of life in elderly patients with lung cancer who undewent thoracotomy via video-assisted thoracic surgery （胸腔鏡下肺葉切除術を受ける高齢肺がん患者の運動耐容能とQOLの縦断的変化に関する研究） （博士論文）	単著	平成30年3月	大阪府立大学	本研究は、入院期間にのみ理学療法を実施した患者の12週間の身体機能とQOLの経時的な変化を調査し、QOLの変化に関連する指標を明らかにすることとした。研究方法は前向き研究とし、胸腔鏡下肺葉切除術が施行された36名の肺がんサバイバーを対象とした。測定項目は呼吸機能検査や心肺運動負荷テスト、QOLの指標にはSF-36を使用した。測定時期は、術前、術後1週、術後4週、術後12週とした。呼吸機能は術後12週まで有意に低下しているが、運動耐容能を含む身体機能は4週までに術前レベルまで回復することが明らかとなった。一方、身体的側面QOLは術後4週、術後12週でも有意な低下を認めた。そして、身体機能の変化率とQOLの変化率には有意な相関は認めなかったことから、身体機能とQOLの変化は乖離していることが示された。その要因には、肺がんサバイバーが術後に身体活動レベルが低下することや、対象者の老化やがんに対する自己認識がQOLの低下や身体活動レベルの低下に影響している可能性が推察される。 （全22頁）
50. Changes in exercise tolerance and quality of life are unrelated in lung cancer survivors who undergo video-assisted thoracic surgery （胸腔鏡下肺葉切除術を受ける肺がんサバイバーの運動耐容能とQOLにおける経時的変化は無関係である） （査読付）	共著	平成30年4月	J Phys Ther Sci. vol.30（3） 第30巻第3号 pp. 467～473	胸腔鏡下肺葉切除術を受ける肺がんサバイバーの呼吸機能、運動耐容能、および生活の質の変化の関連を明らかにすることを目的に、前向き研究を行った。結果、術後の身体機能は早期回復が可能であったものの、QOLの回復と相関しているわけではなかった。QOLの回復は12週かかることが示唆された。 本人担当分：研究立案、データ収集、解析、考察を担当。 共著者：Anami Kunihiko, Horie Jun, Hirayama Yoshiyasu, Yamashita Naomi, Ito Kenichi

51.男性慢性閉塞性肺疾患患者のライフスタイル・社会背景は健康関連QOLと関連しうるか? （査読付）	共著	平成30年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第8巻第2号 pp.57～63	男性慢性閉塞性肺疾患患者の健康関連QOLに関連する因子について、ライフスタイルや社会背景に着目し検討を行った。安定期男性COPD患者53名を対象として、SGRQの結果に基づき、高QOL群と低QOL群に分類し、各測定項目の比較を行った。その結果、ライフスタイル・社会背景では、運動習慣、home oxygen therapy（HOT）の使用、家外環境においてHRQOLとの有意な関連が示唆された。 本人担当分：考察を担当。 共著者：江越正次朗、堀江淳、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、林真一郎
52.腰痛予防教室に参加した地域在住女性高齢者の慢性腰痛に影響を与える心理的因子 （査読付）	共著	平成31年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 第8巻第4号 pp.175～179	本研究は、腰痛予防教室に参加した地域在住女性高齢者の身体的および精神心理的特徴を明らかにするため、慢性腰痛に影響を及ぼす因子について検討することを目的とした。対象は、腰痛予防教室に参加した地域在住女性高齢者71名とし、腰痛既往群（13名）と腰痛群（58名）の2群に分類し、痛みの有無を目的変数とした多重ロジスティック回帰分析を用いて、慢性腰痛に影響を及ぼす因子を抽出した。結果、痛みの有無に影響を及ぼす因子は、恐怖回避思考と破局的思考であった。特異的腰痛が多いとされる地域在住女性高齢者の腰痛と心理的因子との関連が明らかになり、とくに恐怖回避思考や破局的思考への対応が必要であることが示唆された。 本人担当分：データ測定を担当。 共著者：牧野有沙、安彦鉄平、村田伸、白岩加代子、岩瀬弘明、窓場勝之、阿波邦彦、堀江淳
53.腰椎アライメントに着目した腰痛学級が腰痛者および腰痛既往者の身体機能・精神心理機能に与える効果の検証 （査読付）	共著	平成31年3月	保健の科学 第61巻3号 pp.205～211	本研究は、市町村主体の腰痛学級を開催し、腰痛者及び腰痛既往者を対象に姿勢にちゃくもくした腰痛学級効果を検証した。対象は34名であり、2週に1度約60分の腰痛学級を計6回実施した。結果、腰痛ぐうは介入前位に比べて痛みが改善した。しかし、腰痛既往群において破局的思考が高まり、腰痛群には効果的であることが示唆された。 本人担当分：データ測定を担当。 共著者：安彦鉄平、村田伸、阿波邦彦、窓場勝之、岩瀬弘明

54. Positive Effects of Yoga on Physical and Respiratory Functions in Healthy Inactive Middle-Aged People. （健康的で非活動な中年者における身体的呼吸機能に対するヨガの効果） （査読付）	共著	平成31年4月	Int J Yoga. 2019 Jan-Apr;12（1） 第12巻第1号 pp. 62～67	身体的、呼吸機能に対する異なるヨガ手法の効果検証をRCTにて実施した。参加者28名に対し、一般的なヨガグループと呼吸法を特化したヨガグループに分け8週間実施した。その結果、両群とも身体木野の改善を示し、呼吸法を特化した予後グループは最大吸気量も向上した。 本人担当分：データ測定、考察を担当。 共著者：Yamamoto-Morimoto Kuniko, Horibe Shuji, Takao Rikio, Anami Kunihiko
55. 慢性呼吸器疾患高齢患者の呼吸リハビリテーションにおけるADLトレーニング・指導 （総説・査読付）	共著	令和元年9月	臨床老年看護 第26巻第5号 pp. 53～61	呼吸リハビリテーション対象疾患であるCOPDの特徴と、それに伴う全身併存症、高齢化と重複障害について解説し、COPDに対する呼吸リハビリテーションの概要、ADL評価とトレーニングについて、最新の知見を踏まえ解説した。 共著者：阿波邦彦、松本雄次
（その他） 「学会発表」 1. COPD患者におけるBODE indexを用いた身体機能とADLの関係についての検証	－	平成22年1月	第18回佐賀県理学療法士会 （佐賀）	本研究では、COPD患者における身体機能、ADL能力がBODE indexやGOLD重症度分類にどの程度関係するのかを客観的に検証した。BODE indexは全身持久力をはじめ、各身体機能や日常生活動作にGOLD重症度分類よりも高い相関が認められ、重症度別にみても各測定項目で有意差が認められた。要因としてBODE indexは6MWTやMRCなど障害像を多次元的に捉えているためと考えられる。呼吸困難と全身持久力は呼吸リハビリテーションで介入できる項目であり、それらの改善はBODE indexに反映され、呼吸リハビリテーションの効果予測に有用と考えられる。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当。 [共同研究者]阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、堀川悦夫

2．バランス能力に着目した間質性肺炎の一考察～重心動揺計を用いて～	－	平成22年4月	第54回佐賀リハビリテーション研究会 （佐賀県）	間質性肺炎患者の呼吸リハビリテーションはまだ確立されていない。本研究の目的は、間質性肺炎患者のバランス能力について、症例を通して検証する。対象は%FVCが73%（症例A）・55%（症例B）・41%（症例C）で、それらの症例に対し重心動揺計（総軌跡長・単位軌跡長・外周面積）を用いて評価した。結果、症例A・B・Cの順により、 総軌跡長、単位軌跡長、外周面積、片脚立位時間、FRなど静的バランスの低下がみられ、%FVCの低下はバランス能力に影響していることが示唆された。今後、症例数を増やし、更なる影響因子の検証を努めていきたい。 本人担当分：データ収集、統計解析、発表指導を担当。 [共同研究者]白仁田秀一、阿波邦彦、堀江淳、山田穂積、古賀義行
3．COPD患者に対する全身持久力評価としてのCS-30の有用性の検証	－	平成22年5月	第45回日本理学療法学術大会 （岐阜）	本研究は30秒椅子立ち上がりテスト（CS-30）がCOPD患者の客観的な全身持久力評価として、有用であるのか検証することを目的とする。対象は、安定期COPD患者21名（平均年齢74.5±6.6歳）とした。結果、CS-30とMRC息切れスケール、%膝伸展筋力、TUG、ISWT、NRADL、SGRQに有意な相関が認められた。また、従属変数をISWT、独立変数をCS-30とする単回帰分析ではy=29.5x-138.5（R2=0.728）の回帰式が得られた。CS-30とISWTは高い相関を示し、有意な回帰式が得られたことで、CS-30は全身持久力を予測する方法として有用であることが示唆された。転倒や循環能のモニタリングなどリスク管理が可能になると考えられ、臨床的な全身持久力評価として提案できる有意義な研究となった。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当。 [共同研究者]阿波邦彦、髙川晃敏、堀江淳、畠中耕志、白仁田秀一、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫

4. COPD患者における新しい全身持久力評価として、CS-30への期待	-	平成22年10月	第20回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会（長崎）	CS-30とISWTとの関係、各評価項目との関係を検証し、CS-30の全身持久力評価としての有用性を検討した。対象は、安定期の男性COPD患者27名（平均年齢76.9±7.1歳）。CS-30とBMI、MRC、%MEP、 %膝伸展筋力、6MWT、ISWT、NRADL、SGRQに有意な相関が認められた。従属変数をISWT、独立変数をCS-30とする単回帰分析ではy=25.2x-55.7（R2=0.642）の回帰式が得られた。CS-30とISWTは高い相関を示し、有意な回帰式が得られた。また、CS-30は全身持久力に関係する各評価項目との相関が高く、COPD患者の全身持久力評価法として有用性が期待できる。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当。 [共同研究者]阿波邦彦、髙川 晃敏、堀江淳、白仁田秀一、畠中耕志、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫
5. COPD患者のバランス能力と%FEV1.0、身体機能、ADL、QOLの関係についての検討	-	平成22年10月	第20回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会（長崎）	バランス能力と%FEV1.0、身体機能、ADL、QOLの官益を客観的に検証した。方法は、片足立脚時間、FR、TUG、重心動揺と肺機能、身体機能との関係を分析した。COPD患者のバランス能力は、病期の進行、身体能力、ADLと関連のあることが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、作成協力を担当。 [共同研究者]市丸勝昭、堀江淳、今泉裕次郎、阿波邦彦、白仁田秀一、直塚博行、富永正樹、片渕宏輔
6. COPD患者における重症度別に見た動的バランスの検討Timed up and go testに着目して	-	平成22年10月	第52回全日本病院学会（兵庫）	COPD患者48名を対象にTUGおよび肺機能、身体機能を測定し、TUGと各測定項目との相関関係を分析し、重症度別にTUGの群間比較を実施した。結果、TUGは各身体機能と相関関係が認められ、BODE indexの軽症群と重症群との間に有意差が認められた。このことから重症COPD患者は動的バランスが低下しており、転倒のリスクがあることが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当。 [共同研究者]阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、栁原加奈子、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫

7. 侵襲的人工呼吸器装着患者の在宅への取り組みと課題	-	平成22年10月	第52回全日本病院学会 （兵庫）	IPPV管理下の患者に対する在宅復帰へ向けて呼吸ケアの取り組みに対する症例検討。60代女性で膠原病肺が主病名の患者を担当し、2型呼吸不全を呈しており、ADL、在宅へのケア、家族への指導などを行い、退院が可能となった。今後、呼吸ケアに対する取り組みが課題となった。 本人担当分：データ収集、抄録・スライド作成協力、口頭発表指導などを担当。 [共同研究者]徳本洋、阿波邦彦、堀江淳、岸川美代、蒲原美智子、小副川豊美、片渕あきな、重松敬子、山田穂積、古賀義行
8. 慢性閉塞性肺疾患患者のバランス能力は病期進行といかに関係があるか～%FEV1、身体能力、ADLの関係について～	-	平成22年11月	第32回九州理学療法士・作業療法士合同学会 （沖縄）	COPD患者17例に対して、バランス能力とGOLD病期分類の進行を検討した。重心動揺と%FEV1、身体機能との相関関係を分析し、重心動揺はそれらと相関関係を示した。これによりCOPD患者のバランス能力は、病期の進行、身体機能、ADLと関連のあることが示唆された。今後、病期の進行との関係を明確にし、理学療法プログラム、ADL指導に活用できるようにする。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、作成協力を担当。 [共同研究者]今泉裕次郎、堀江淳、阿波邦彦、白仁田秀一、市丸勝昭、直塚博行、平田晃久、三村さやか、堀邦広、小柳孝太郎、本田知行
9. Update BODE indexと身体機能評価の関係	-	平成23年2月	第19回佐賀県理学療法士会学会 （佐賀）	update BODE indexが身体機能と関係しているかを検討した。対象はCOPD患者64名であり、mMRC息切れスケールやシャトルウォーキングテスト、Timed up and go test、NRADL、SGRQなどを測定し相関関係を求めた。結果はほとんどの身体機能評価と相関関係が認められた。このことからupdate BODE indexは身体機能を反映することが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]栁原加奈子、阿波邦彦、白仁田秀一、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、山田穂積、古賀義行、堀江淳

10. update BODE indexおよびADO indexと身体機能評価との関係	-	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会 （宮崎）	2009年に発表されたupdate BODE indexとADO indexが身体機能と関係しているかを検討した。対象はCOPD患者64名であり、update BODE indexとADO indexともに呼吸困難感、筋力、全身持久力、動的バランス、ADL、QOLと有意な相関を求めた。このことからupdate BODE indexとADO indexは身体機能を反映することが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、栁原加奈子、山田穂積、古賀義行、堀川悦夫
11. 慢性閉塞性肺疾患患者における息切れ分類別にみるバランス能力の差異についての検討	-	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会 （宮崎）	COPD患者は息切れによって活動性の低下からADLやQOLを低下させる。本研究の目的は、息切れの重症度とバランス能力の関係を検証することである。結果、性的バランスと動的バランスは息切れの増加により低下していることが示唆された。COPD患者において息切れの増加による活動性の低下は廃用性症候群などによるバランス能力の低下に影響を及ぼしていると考えられる。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]白仁田秀一、堀江淳、阿波邦彦、栁原加奈子、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、山田穂積、古賀義行
12. 慢性閉塞性肺疾患患者における息切れスケール、多次元重症度指数の各クラス別にみた動的バランスの検討―Timed up and go testに着目して―	-	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会 （宮崎）	本研究の目的は、mMRC息切れスケールと多次元重症度指数（BODE index）の各クラス別に動的バランスの差異を検討することした。その結果、息切れが強くなるほど動的バランスは低下し、BODE indexでも最重症において動的バランスの有意な低下を認めた。これらのことより、重症COPD患者の転倒リスク管理、理学療法プログラムの立案などにも有益となると考える。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]今泉裕次郎、阿波邦彦、堀江淳、白仁田秀一、市丸勝昭、直塚博行、平田晃久、小柳孝太郎、本多知行

13. COPD患者のバランス能力と身体能力、ADL、QOLの関係についての検討	-	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会 （宮崎）	本研究は、COPD患者のバランス能力と、身体機能、ADL、QOLの関係を客観的に検証することである。動的バランスはほぼすべての測定項目と関係を認め、バランス能力は全身持久力とも関係を認めた。これらのことから、バランス能力の低下からADL不安定感を感じることで自発的な活動が低下し、さらに身体機能の低下を引き起こすことが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]市丸勝昭、堀江淳、今泉裕次郎、阿波邦彦、白仁田秀一、直塚博行、岩永健一郎、片渕宏輔
14. 慢性閉塞性肺疾患患者の6分間歩行距離350mの違いにおける身体特性の比較	-	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会 （宮崎）	COPD患者における6分間歩行距離が350m以上群と350m未満群で身体機能にどのような違いがあるのかを比較することとした。結果、多くの身体機能で意差を認め、350m未満群は有意な低値を認めた。このことから、6分間歩行距離が350m未満は生命予後の指標だけでなく運動能力の低下を示すことが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]江越正次朗、阿波邦彦、堀江淳、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、柳原加奈子、藤岡康彦
15. 当院における呼吸不全患者に対する呼吸リハビリテーションの短期的効果の検証	-	平成23年10月	第53回全日本病院学会 （沖縄）	運動療法を中心とした慢性呼吸不全患者に対するリハビリテーションの3ヶ月間における短期的効果を検証した。結果、3ヶ月間のリハビリ継続率は44%であり、%握力、TUG、6MWDに有意な改善が認められた。筋力、動的バランス、持久力が改善したことで、敬天堂古賀病院におけるプログラムの効果が得られたと考えられる。しかし、ADL、生活関連QOLに改善が認められなかった。また、継続率が低値を示した要因として、患者教育や患者会などが積極的に実施できていなかったことが考えられる。当院における今後の取り組みとして、病院全体で患者をフォローする体制を再構築していく必要があると思われる。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]柳原加奈子、阿波邦彦、白仁田秀一、松本雄次、財津和希、山田穂積、古賀義行、堀江淳

16. COPDにおけるBody Mass Indexが身体機能、身体能力に及ぼす影響 「痩せ型」「標準型」 「肥満型」の比較から	-	平成23年10月	第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （長野）	本研究は、COPD患者におけるBMIが身体機能、身体能力に与える影響を検討すること。結果、「肥満」は必ずしも回避するべき状態ではなく、むしろ身体機能、身体能力にとって良好な状態をもたらすものである可能性が示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析を担当した。 [共同発表者]堀江淳、阿波邦彦、白仁田秀一、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、江越正次郎、田中将英、林真一郎、堀川悦夫
17. 外科周術期における運動療法の必要性の検討	-	平成23年10月	第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （長野）	本研究の目的は術前後の呼吸機能検査を含めた理学療法評価を実施し、外科周術期における運動療法の必要性を明らかにすることである。結果、内視鏡手術後においても運動療法の必要性が示唆された。 本人担当分：抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]大野正也、今山隆士、堀江淳、金子秀雄、阿波邦彦、堀川悦夫、千住秀明、塩塚順、那須賢司、松山悟
18. 慢性閉塞性肺疾患患者の6分間歩行距離の違いにおける身体特性の比較	-	平成23年10月	第21回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （長野）	COPD患者の6MWDを350m以上群と349-250m群、249m以下群に分類し、身体特性を比較した。結果、肺機能、筋力、身体能力、ADLに有意差を認め、これらの能力低下は生存率に悪影響を及ぼす可能性があることが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]江越正次郎、堀江淳、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、田中将英、林真一郎
19. 慢性閉塞性肺疾患患者の6分間歩行距離テスト前後の脈拍の上昇率の違いにおける身体特性の比較	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	COPD患者の6MWD前後の脈拍の上昇率に着目し、上昇率の高値群と低値群で身体特性に違いがあるのかを比較検討した。結果、6MWD前後の脈拍上昇率は22．1%であった。そして、高値群と低値群との間にFVC、膝伸展筋力、片足立脚時間、6MWD、5m最速歩行速度などで有意差を認めた。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]野中賢、阿波邦彦、堀江淳、江越正次朗、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、山下義己、藤岡康彦、林真一郎

20. 慢性閉塞性肺疾患患者の6分間歩行距離と%1秒量の違いにおける身体特性の比較	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	COPD患者において、%一秒量が50%未満群と50%以上群に分け、身体特性を比較した結果、多くの身体特性に有意差を認めた。6MWDは呼吸機能よりも筋力、バランス能力、歩行能力、ADL能力により強い影響を受けることが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導を担当した。 [共同発表者]江越正次朗、堀江淳、阿波邦彦、今泉祐次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、藤岡康彦、田中將英、林真一郎
21. 男性COPD患者に対する全身持久力評価としての30秒間椅子立ち上がりテストの可能性	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	男性 COPD 患者に限定し、また、GOLD 病期分類で 1 期 2 期と 3 期 4期に分け、CS-30 と 6MWT 予測 V̇O2Peak、ISWT 予測 V̇O2Peak の関係を検証する事とした。CS－30 と 6MWT と ISWT の予測 V̇O2Peak は病期進行に関わらず有意な回帰式が得られた。 本人担当分：データ収集を担当した。 [共同発表者]白仁田秀一、堀江淳、直塚博行、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、江越正次朗、今泉潤紀、渡辺尚、田中將英、林真一郎
22. 佐賀県下での医療連携に向けた呼吸リハビリテーションの取り組み	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	平成22年より呼吸リハビリテーションの臨床連携と教育・研修活動を目的とした佐賀包括的呼吸リハビリテーション研究会を発足し、様々な取り組みを行ってきたので、これまでの活動状況を報告した。今後の課題として、未診断のCOPD患者の早期発見のため、また包括的に呼吸リハビリテーションを行っていくための地域全体・多職種への呼吸リハビリテーションの啓蒙活動や、呼吸リハビリテーション継続率を高めるための工夫、地域で継続して行うためのメディカルスタッフのスキルアップ、地域での各施設の強みを生かした連携病院の拡大など取り組んでいく必要があると考える。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]上田真智子、直塚博行、江越正次朗、 今泉裕次郎、市丸勝昭、阿波邦彦、白仁田秀一、堀江淳、田中将英、林真一郎

23. 30秒踵上げ反復テストは慢性閉塞性肺疾患患者の身体能力の一指標となり得るのか? 新たな簡易検査法としての可能性の試み	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	今回、我々は簡易検査法として30秒踵上げ反復テストを考案し、各種検査項目との関連性を検討した。今回の結果から踵上げ動作は単なる筋力評価に止まらず、バランス能力（片脚立位時間、TUG-T、5m最速歩行時間）や筋力（握力、膝伸展筋力、CS-30、MIP、MEP）や全身持久力（6MWT、ISWT）等と有意な相関が認められた。これは踵上げ反復運動は全身の運動機能的な要素が強く反映される動作であることが考えられ、COPD 患者の身体能力の一指標としての可能性が示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]兵働佳代子、今泉裕次郎、三村さやか、白仁田秀一、今泉潤紀、本多知行、小林弘美、杉原充、小柳孝太郎、阿波邦彦、八谷瑞紀、堀江淳
24. 男性COPD患者における6MWD、片脚立位時間、5m最速歩行速度はADO indexに影響していた	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	今回、ADO index に影響を与えている身体機能、身体能力を検証したので報告した。本研究により、COPD患者の生命予後、障害像に 6MWD、片脚立位時間、5m最速歩行速度が関与する可能性が示唆された。これによって、COPD 患者に対する治療プラグラムの中で、運動耐容能、バランス能力、歩行スピードの改善に向けたアプローチの効果が、生命予後、障害像にいくらかの影響を与える可能性が期待される。 本人担当分：データ収集、スライド作成の指導を担当した。 [共同発表者]神門慶子、阿波邦彦、堀江淳、市丸勝昭、今泉裕次郎、白仁田秀一、直塚博行、江越正次朗、片渕宏輔、林真一郎
25. COPD患者における外出制限指標としての体重支持力指数（WBI）の有用性	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	外出に制限が生じ始める 6 分間歩行距離 400m をもとに、大腿四頭筋筋力を体重で除した体重支持力指数（WBI）のカットオフ値を求めた。そして、そのカットオフ値で COPD 患者を 2 群に分け、身体機能、身体能力、ADL、健康関連 QOL の比較をすることでWBI のカットオフ値の有用性を検討した。COPD 患者における外出に制限が生じ始める WBI は中等度の予測能を認めた。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、長江真弥、村田伸、林真一郎、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、白仁田秀一、江越正次朗、堀川悦夫

26. COPD患者に対して「歩行速度指数」は運動耐容能評価指標となりえるか?	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	簡便で安全に持久力を評価する 6MWDに瞬発的な要素を反映する 5m最速歩行速度を掛け合わせ、6MWDの運動耐容能評価としての精度を高めることを目的とした『歩行速度指数』を考案した。COPD 患者17名のパイロットスタディーの結果として、6MWD 単独よりも歩行速度指数が ISWT と極めて強い相関が得られた。そこで今回は、症例数を増やして検証してみた。本研究により、6MWD の評価精度を高めることは困難であった。しかし、歩行速度指数は ISWT と強い相関を認めたことで、全身持久力評価として有用である可能性が示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]松本雄次、堀江淳、阿波邦彦、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、江越正次朗、白仁田秀一、山田穂積、林真一郎
27. COPD Assessment Testと呼吸機能、身体機能、身体能力、ADL能力、QOLの関係	-	平成24年4月	第47回日本理学療法学術大会 （兵庫）	CAT と呼吸機能、身体機能、身体能力、ADL能力、健康関連 QOL との関係を検証し、評価項目の相対的な指標として CAT が臨床的に有用であるかを検討することを目的とした。本研究の結果より、CATはCOPD患者の全体像を把握するツールとして活用できる可能性が示唆された。専門的な検査を行うことができない病院、施設でも、CAT を用いることで簡便に COPD 患者の身体能力や ADL 能力、QOL の相対的な状態を把握することができるのではないかと考える。また、患者教育や病態管理を行う際の指標としても用いることができ、より的確な治療やケアを提供できるのではないかと考える。 本人担当分：スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]今泉潤紀、白仁田秀一、堀江淳、阿波邦彦、渡辺尚
28. 当院における呼吸リハビリテーション継続脱落課題と今後の展望	-	平成24年9月	第54回全日本病院学会 （神奈川）	呼吸リハの継続群と脱落群の身体機能の比較、その背景を調査し、結果から今後の当院における取組を検討した。継続率は42%と低かったが男女差や身体機能の差は認められなかった。そのため、個人におけるモチベーションなどが関与したものと考えられる。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]宮副孝茂、阿波邦彦、柳原加奈子、財津和希、松本雄次、北島麻美、堀江淳、山田穂積、古賀義行

29. 佐賀県内の作業療法士における呼吸リハビリの現状	-	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	佐賀県内のOTにおける呼吸リハの現状を分析した。結果、回答率は、施設が76%、個人が84%であった。呼吸リハに興味を持つOTは多いが、施設基準や専門医の有無などOT実施には環境的要因も影響されることが示唆された。 本人担当分：統計解析、抄録・スライド作成の指導を担当した。 [共同発表者]野崎忠幸、堀江淳、阿波邦彦、市丸勝昭、林真一郎
30. 間質性肺炎患者におけるCS-30と身体機能との関係COPD患者と比較して	-	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	間質性肺炎におけるCS-30と身体機能の関係をCOPD患者と比較しながら報告した。結果、CS-30において間質性肺炎群はCOPD群より有意な低回数を認めた。また、筋力や歩行能力と強く関係した。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]上田真智子、阿波邦彦、堀江淳、田中将英、林真一郎
31. mMRC息切れスケール、CS-30、年齢を用いたCOPD患者の漸増シャトルウォーキングテストの予測式	-	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	COPD患者の漸増シャトルウォーキングテストの予測式を作成することを目的とした。結果、有効な予測式が算出され、診察室や在宅などでも簡易的に評価できることが可能になると考えられた。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、直塚博行、田中将英、林真一郎
32.男性慢性閉塞性肺疾患（COPD）患者の体重支持指数（WBI）0．6を示すCS-30のカットオフ値	-	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	COPD患者のWBIのカットオフ値を算出することを目的とした。結果、WBIが0.6に相当するCS-30のカットオフ値は16回であった。COPD患者の活動指標としてのWBIは、CS-30である程度の予測が可能であると示唆された。 本人担当分：スライド作成の指導を担当した。 [共同発表者]白仁田秀一、堀江淳、阿波邦彦、八谷瑞紀、直塚博行、今泉潤紀、田中将英、林真一郎、 渡邊尚

33. COPD患者のmMRC息切れスケール、CATに影響を与える因子の検討	-	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	COPD患者におけるドキュメント分類に基づきmMRCとCATの値で対象を2群に分け、身体特性などの比較を行った。結果、mMRCとCATは、どちらもSGRQが影響しており、ドキュメント分類の症状はHRQOLが基準になることが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]今泉潤紀、白仁田秀一、堀江淳、阿波邦彦、八谷瑞紀、渡邊尚
34. 当院における呼吸リハビリテーション継続における課題	-	平成24年10月	第22回日本呼吸ケア・リハビリテーション学術集会 （福井）	呼吸リハの継続群と脱落群の身体機能の比較、その背景を調査し、結果から今後の当院における取組を検討した。継続率は42%と低かったが男女差や身体機能の差は認められなかった。そのため、個人におけるモチベーションなどが関与したものと考えられる。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成の指導、口頭発表の指導を担当した。 [共同発表者]宮副孝茂、阿波邦彦、柳原加奈子、財津和希、松本雄次、堀江淳、山田穂積、古賀義行
35. COPD患者の歩行距離低下に与える身体機能的影響因子の抽出と外出制限に関する研究	-	平成24年10月	第2回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術集会 （佐賀）	本研究の目的は、COPD患者の外出制限の一指標である歩行距離低下の影響因子を抽出し、そのカットオフ値を算出することである。その結果、COPD患者の外出制限に影響を及ぼす因子はmMRC息切れスケールと%膝伸展筋力であった。そのカットオフ値は、mMRCがGrade2、%膝伸展筋力は53.6%であった。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、村田伸、林真一郎、田中将英、堀川悦夫、山田穂積、古賀義行
36. COPD患者において簡易的に6分間歩行距離テストを予測することは可能か？	-	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （愛知）	本研究の目的は、診察室や在宅でもCOPD患者における6MWTの予測式を作成することとした。本研究のデザインは横断研究である。有用な予測式を作成できた。これにより多忙な診療の中で 6MWT を簡便に予測することが可能となりうる、臨床還元性の高い貴重な研究であると思われる。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、直塚博行、今泉裕次郎、市丸勝昭、白仁田秀一、宮副孝茂、江越正次朗、林真一郎

37. COPD患者において簡易的に6分間歩行距離テストを予測することは可能か?	-	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （愛知）	本研究の目的は、診察室や在宅でもCOPD患者における6MWTの予測式を作成することとした。141名（年齢73.3 ± 8.1歳）を解析対象とした。結果、mMRC、CS-30、%FVC、年齢が、呼吸機能を除いた分析では、mMRC、CS-30、年齢が6MWTに影響することが明らかとなった。そして本研究の結果より、予測精度の高い6MWTの予測式を作成することが出来た。決定係数は0.5以上で適合度は高いと評価できるため、本研究による予測式は適合度が高く、男性COPD患者に対して有用な予測式となりえる。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、直塚博行、今泉裕次郎、市丸勝昭、白仁田秀一、宮副孝茂、江越正次朗、林真一郎
38. 慢性閉塞性肺疾患患者の健康関連QOLと生活背景、身体特性との関係	-	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （愛知）	COPD患者の健康関連QOLにはどのような生活背景や身体特性が関係しているのか調査することとした。対象は、研究の参加に同意が得られた安定期COPD患者142名である。生活背景の運動習慣、高血圧、HOTの使用、呼吸器での入院に有意な関連が認められたことより、COPD患者の良好なQOLを確保するためには、運動習慣を身につけ、高血圧を予防し、HOTの使用や入院に至るような呼吸器疾患の重症化を可及的に予防することの必要性が示唆された。 本人担当分：統計解析を担当した。 [共同発表者]江越正次朗、堀江淳、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、上田真智子、白仁田秀一、阿波邦彦、田中將英、林真一郎
39. ブリッジ力測定法の有用性について地域在住男性高齢者を対象に	-	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （愛知）	本研究では、ブリッジ力測定法の有用性について各種身体機能評価との関連性から検討した。対象は、要支援および要介護状態でない地域在住男性高齢者32 名（平均年齢78.6 ± 6.8 歳、平均体重59.5 ± 7.2kg）とした。ブリッジ力と下肢筋力を反映する膝伸展筋力およびバランス能力を反映する片脚立位保持時間、FRT との間に有意な相関が認められた。その他、上体起こし、TUG、長座体前屈との間には有意な相関は認められなかった。 本人担当分：データ収集を担当した。 [共同発表者]政所和也、村田伸、宮崎純也、堀江淳、阿波邦彦、上城憲司

40. 運動療法を中心とした呼吸リハビリテーションが慢性呼吸器疾患患者に及ぼす影響	-	平成25年6月	第38回日本運動療法学会（大分）	本研究は、COPD患者と間質性肺炎患者をはじめとする慢性呼吸器疾患患者群を対象に、全身持久力評価（シャトルウォーキングテスト、6分間歩行テスト）の結果から運動強度の基準を同一方法で設定した呼吸リハビリ介入効果を疾患別に比較検討し、身体機能の改善およびADLの向上などの介入効果を明らかとすることを目的とした。結果より、両群ともADLなど同じ測定項目に改善を認めた。全身持久力評価から運動強度を決定した運動処方はCOPD以外の疾患でも有用と考えられる。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、宮副孝茂、白仁田秀一
41. 閉塞性換気障害を有する地域在住高齢者の特徴	-	平成25年10月	第23回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（東京）	本研究の目的は、閉塞性換気障害を有する地域在住高齢者の身体機能や主観的健康感などから、その特徴を検証することとした。 閉塞性換気障害を有している地域在住高齢者は主観的健康感が有意に低値を示し、それ以外には有意差を認めなかった。このことより、閉塞性換気障害がある場合、身体機能の低下がなくとも、健康感に対する不安感などが早期から低下していることが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、村田伸、堀江淳、政所和也、八谷瑞紀、久保温子、江渡文、上城憲司
42. 胸腔鏡下手術（VATS）後の身体機能と健康関連QOLの低下を呈した症例を経験して	-	平成26年2月	京都府理学療法学会（京都）	胸腔鏡下手術（VATS）後の身体機能と健康関連QOL低下を呈した症例について検討した。症例1は左下葉扁平上皮癌の70歳代男、症例2は右下葉扁平上皮癌の70歳代男で、術後翌日から離床と周術期呼吸理学療法を開始した。症例1の6MWDは術後1ヵ月時には495mと著明に低下し、健康関連QOLもSF-8 PCSは44.5→36.9へ低下した。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]平山善康、阿波邦彦、佃陽一、太田垣あゆみ、山下直己、堀江淳

43. 慢性閉塞性肺疾患患者の健康関連QOLに影響を及ぼす因子の検討	-	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会 （神奈川）	安定期COPD患者57名に対し、健康関連QOLへの影響因子について生活背景や身体特性に着目し検討した。有意な関連が認められた項目を独立変数、SGRQを従属変数としてステップワイズ分析した結果、mMRC、運動習慣、呼吸器疾患での入院の有無、%FEV1.0が規定因子として抽出され、6MWDは除外された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]江越正次朗、堀江淳、今泉裕次郎、市丸勝昭、直塚博行、上田真智子、白仁田秀一、阿波邦彦、宮副孝茂、田中將英、林真一郎
44. 肺がん患者に対する胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）後の身体機　能および精神心理機能の変化に関する検証	-	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会 （神奈川）	本研究の目的は、術前の身体機能、精神心理機能が、退院時にどのように変化しているか検討し、VATS施行患者の術後経過を検証することとした。周術期呼吸理療法を実施した13名であった。結果、TUGの所要時間の延長、6MWDの有意な減少が認められた。VATSは低侵襲であるため、早期離床が容易に可能であるが、歩行時における疼痛や呼吸機能の低下が原因で、それらの能力が低下したものと考えられる。その一方、術後1週間程度では、倦怠感や不安などの精神心理機能面や健康関連QOLの改善には至っていない。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成を担当した。 [共同発表者]平山善康、阿波邦彦、佃陽一、太田垣あゆみ、松井萌恵、田中宇大、堀江淳、山下直己
45. どのような慢性閉塞性肺疾患患者が短期間で運動耐容能を改善させることができるのか?呼吸リハビリテーションベースライン特性の多次元的比較より	-	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会 （神奈川）	本研究の目的は、運動耐容能が、3か月間の呼吸リハビリで改善できた患者と改善できなかった患者の初期評価の種々の指標を比較すること。更に、その特性を多次元的、横断的に検証し、今後の呼吸リハビリプログラム導入の在り方について提言することとした。COPD患者51例（男性44例、女性7例、平均年齢74±9歳）とした。短期的な運動耐容改善効果は、予測比一秒量に有意差がなく、初期評価時の息切れ、運動耐容能、ADL、QOLの評価に差が認められていることから、それらはCOPDの病期進行に依存するものではなく、症状、運動耐容能など能力の高低に依存する可能性が示唆された。 本人担当分：統計解析を担当した。 [共同発表者]堀江淳、白仁田秀一、阿波邦彦、林真一郎

46. 慢性閉塞性肺疾患患者に対する呼吸リハビリテーションの長期効果身体活動量の高い群と低い群の効果	-	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会 （神奈川）	1年間の呼吸リハについて、身体活動量の高い群と低い群に分けて検討する事を目的とした。1年間の呼吸リハ継続において、高活動群は、mMRCスケール、%膝伸展筋力、運動耐容能の項目で有意な改善を示した。一方で低活動群は全てにおいて維持傾向を示した。両群において呼吸リハ開始当初は運動習慣に差が認められないことからも、呼吸リハ期間中に身体活動が向上させることが長期の呼吸リハにおいて重要である事が示唆された。 本人担当分：統計解析を担当した。 [共同発表者]白仁田秀一、今泉潤紀、堀江淳、阿波邦彦、林真一郎、渡辺尚
47. 胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いはあるか?	-	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会 （大阪）	本研究の目的は、胸腔鏡下肺葉切除術（以下、VATS）後1ヵ月時におけるATポイントでのMETsの差異で術前の身体機能に違いがあるか検証することとした。周術期呼吸理療法を実施した23名（男性16名、女性7名）であった。3METs以下群は有意に術前の体重比膝伸展筋力（$p<0.05$）が低値を認めたが、それ以外には有意差を認めなかった。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、宮副孝茂、白仁田一
48. 慢性閉塞性肺疾患患者における6分間歩行テスト後の息切れ優位群と下肢疲労優位群の身体機能の比較	-	平成26年9月	第4回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術大会 （京都）	6分間歩行テスト後に下肢疲労感よりも息切れ感を強く感じる群を息切れ優位群、下肢疲労感の方が強く感じる群を下肢疲労優位群とし、両軍の呼吸機能、身体機能に差があるのか検証した。結果、下肢疲労優位群は下肢筋力が低下していることが示唆された。 本人担当分：統計解析、抄録・スライド作成を担当した。 [共同発表者]松本雄次、宮副孝茂、財津和希、北島麻美、手島由美子、小野智史、山田穂積、古賀義行、阿波邦彦

49. 当院における透析中の運動療法の実際いつまでも歩ける透析患者をめざして	-	平成26年9月	第35回滋賀腎・透析研究会 （滋賀）	今回、運動療法の効果を実感できた症例を報告する。【症例】80歳代の男性。原疾患は慢性糸球体腎炎。脊椎カリエス・狭心症の既往あり。要介護2。2012 年末より活動量低下、転倒を繰り返し歩行困難となる。翌5月より透析中の下肢床上運動を開始しPTの運動機能評価と運動処方に基づき透析後の下肢ストレッチも実施している。1年後の評価で下肢筋力向上し転倒リスクが減少した。また意欲的に生活し運動を継続している。 本人担当分：抄録・スライド作成、発表準備を担当した。 [共同発表者]坂あゆみ、阿部美穂、池田友子、半田誠、安田真知子、富田耕彬、阿波邦彦、岩瀬弘明
50. 透析患者の転倒危険因子に関する調査	-	平成26年9月	第35回滋賀腎・透析研究会 （滋賀）	転倒危険因子に関して検討を行ったので報告する。 外来透析患者81名に対し、半年間の転倒歴を調査した。転倒危険因子として年齢、透析歴、転倒恐怖感、バーセルインデックス、外出頻度、日常作業頻度、透析日・非透析日の臥床時間の７項目とした。 結果、転倒群は24名、非転倒群は57名で、転倒因子として日常作業頻度が抽出された。透析患者の転倒危険因子は日常活動頻度が低下している者ほど転倒しやすいことが示唆された。 本人担当分：統計解析、スライド作成を担当。 [共同発表者]成瀬綾、辻節子、南出悦子、宮本和代、荒木陽子、岩瀬弘明、阿波邦彦、廣川隆一、 安田真知子、富田耕彬
51. COPD患者の心理面における呼吸機能、身体機能、能力、ADL、QOLの差の検討	-	平成26年10月	第24回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 （奈良）	本研究は、COPD 患者の心理的要因として HADS を用い不安・抑うつを疑診群と非疑診群に分類し、それぞれの呼吸機能、身体機能、身体能力、ADL 能力、QOL への差について検討することとした。結果、不安得点の 2 群間比較において、mMRC、SGRQ、CAT は疑診群が有意に高く、抑うつ得点の 2 群間比較においては、SGRQ、CAT、NR-ADL は疑診群が有意に高かった。また、HADS の不安における SGRQ のカットオフポイントは 50.8 点（AUC；0.82）であった。統計解析を担当した。 本人担当分：統計解析、スライド作成を担当。 [共同発表者]松枝希見子、今泉裕次郎、堀江淳、阿波邦彦、池田さやか、小池このみ、梅口仁美、河島通博、林真一郎

52. COPD患者のISWT終了時における自覚症状の違いは、身体機能に差を生じさせるか?	-	平成26年10月	第24回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 （奈良）	COPD患者の漸増 Shuttle Walking Test終了時に息切れ感が強く感じる群と下肢疲労感が強く感じる群の身体機能などの特性を比較した。結果、年齢や呼吸機能、呼吸筋力、ISWT に有意差を認めなかったが、下肢疲労感優位群は、息切れ感優位群よりも握力（p＜0.044）、体重比膝伸展筋力（p＜0.002）、Timed up and go test（p＜0.014）が有意に低下していた。 本人担当分：統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]諸富誠一、古賀秀作、阿波邦彦、堀江淳、林真一郎
53. 胸腔鏡下肺葉切除術前の高齢者がん患者における心肺機能と健康関連QOLとの関係パイロットスタディ	-	平成27年3月	第16回日本健康支援学会 （福岡）	本研究の目的は、胸腔鏡下肺葉切除術（VATS）前の肺がん患者における心肺機能と健康関連QOLとの関係を検証することとする。術前肺がん患者は、先行研究と同様に健康関連QOLは高くはなく、Peak VO2は低下していた。今回、PCSに関係しているのはPeak VO2とVE/VCO2 slopeであるが、Peak VO2はModel 2～4より、見かけ上の相関である可能性が示唆された。一方で、PCSは年齢や性別を考慮した状態でもVE/VCO2 slopeと負の相関を認めた。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、平山善康、山下直己、伊藤健一
54. 肺癌葉切除例の年齢の差異による術後身体機能と健康関連QOL変化の関係	-	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会 （東京）	本研究では、肺癌葉切除術後の身体機能と健康関連QOLについて、年齢の違いによる術前、術後、退院後の継時的変化を検討した。退院期において手術操作後の肺容量の減少による%FVCやPeakTVなどの換気量低下はあるものの、最大運動能力や最大仕事量としてのPeakVO2/Wt、PeakWRに有意な低下は認めなかった。疼痛、息切れ、歩行能力の改善に向けた治療アプローチの効果が、高齢者の健康関連QOLにいくらかの影響を与える可能性が期待される。 本人担当分：統計解析を担当した。 [共同発表者]市丸勝昭、堀江淳、阿波邦彦、林真一郎、光岡正浩

55. 肺癌葉切除例の年齢の差異による術後身体機能と健康関連QOL変化の関係	-	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会 （東京）	本研究は、VATSにて肺葉切除を実施した症例に対し、周術期リハビリテーションを実施し、身体能力、健康関連QOLが術前から術後1ヵ月にかけて、どのように変化しているか前向き研究で検証した。VATS前後から術後1ヵ月にかけて、身体能力および健康関連QOLの変化を前向きに検証した。結果、呼吸機能は低下したままだが、運動耐容能は術後1ヵ月で術前の値まで回復することが示唆された。しかしながら、健康関連QOLは1ヵ月では改善できない可能性が示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、平山善康 山下直己、堀江淳、太田垣あゆみ、松井萌恵、出見世 真人 佃陽一、伊藤健一
56. 地域在住虚弱高齢者における二重課題下歩行トレーニングが身体機能・身体能力に及ぼす効果の検証	-	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会 （東京）	本研究の目的は、虚弱高齢者に対するDT効果を身体機能，身体能力、ADLの6ヶ月間の変化から縦断的に検証することである。研究デザインは無作為化対照試験とし、研究のプロトコールは、「通常の理学療法」のみを実施した群を対照群（n＝15）、「通常の理学療法」に加え、DTを追加した群を介入群（n＝15）とした。FIM（合計）、FIM（運動）、長座位体前屈、障害物歩行、最速歩行時間は有意な期間の主効果を認めており、ADL、柔軟性、動的バランス、瞬発的歩行能力の改善にはPTプログラムは有効かもしれない。しかし、MMSE、FIM（認知）、老研式活動能力指標、上体起こし回数、握力、6MWD、%QF、TUG、FR、片脚立位時間はPTプログラムが有効でない可能性が示唆された。 本人担当分：統計解析、抄録・スライド作成を担当した。 [共同発表者]北村智哉、萩原崇、小島宏志、阿波邦彦、堀江淳
57. 下肢荷重力測定における日常生活動作自立度判定の基準　訪問リハビリテーション利用者での検証	-	平成27年9月	第5回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術大会 （佐賀）	本研究は下肢荷重力がADLの自立度判定基準として有用か否かの検証を行った。訪問リハ利用者44名を対象とした結果、カットオフは63.1%であった。AUCは0.67-0.73であった。これにより、他専門職種や利用者本人、またはその家族が、利用者のADL自立度を共通認識できると考えられる。 本人担当分：統計解析、抄録・スライド作成を担当した。 [共同発表者]窓場勝之、大杉紘徳、阿波邦彦、村田伸

58. 閉塞性換気障害あるいは拘束性換気障害を呈する地域在住高齢者の身体機能の特徴	－	平成27年9月	第5回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術大会 （佐賀）	本研究の目的は、地域在住高齢者における閉塞性換気障害と拘束性換気障害の優勝率を明らかにし、正常群を含む3軍艦の身体機能を比較検証することである。128名を対象とした結果、正常群は66.7%、閉塞性換気障害軍は11.7%、拘束性換気障害群は19.1%であった。群間比較において有意差は認めなかった。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、村田伸、堀江淳、岩瀬弘明、政所和也、八谷瑞紀、久保温子、平尾文、伊藤健一、上城憲司
59. 閉塞性換気障害ならびに拘束性換気障害を有する未診療地域在住高齢者の身体機能的特徴	－	平成27年10月	第25回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会 （東京）	本研究は、閉塞性換気障害ならびに拘束性換気障害を有する未診療地域在住高齢者の身体機能的特徴を検証することを目的とした。地域在住高齢者270名に対し、身体機能や呼吸機能などを計測し、年齢と性別を共変量とした共分散分析で検証した結果、拘束性換気障害群は身体機能の一部が低下している可能性が示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、窓場勝之、伊藤健一、堀江淳
60. 高齢者の認知機能低下に関連する身体・精神機能の検討　地域在住高齢者を対象とした1年間の縦断調査	－	平成28年3月	第17回日本健康支援学会 （愛知）	本研究の目的は、地域在住高齢者の1年後の認知機能低下にかかわる身体・精神機能を明らかにすることである。対象は123名であった。結果、1年間の追跡機関で認知機能が低下した対象は35名であり、ベースラインのTUG、足把持力の成績が悪くMMSEが高いものが経過することが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析を担当した。 [共同発表者]大杉紘徳、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、堀江淳
61. 気道閉塞別にみた地域在住高齢者の身体・認知機能の差異閉塞性換気障害群、COPDに分類できない分類不能群と正常群における比較	－	平成28年3月	第17回日本健康支援学会 （愛知）	本研究の目的は、地域在住高齢者を気道閉塞別に分類し、身体および認知機能の差異について検討することとした。対象は、体力測定会で地域在住高齢者252名とした。3群間における各測定項目の比較では、分類不能群は、予測比努力性肺活量が他2群よりも有意に低下していた。また、体脂肪量が閉塞性換気障害群よりも有意に多かった。しかし、身体および認知機能において、分類不能群は他2群と有意差は認められなかった。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、村田伸、堀江淳、安彦鉄平、大杉紘徳、白岩加代子、窓場勝之

62. 地域在住高齢女性における疼痛の部位数と身体・認知・精神心理機能の差異	－	平成28年3月	第17回日本健康支援学会（愛知）	本研究の目的は地域在住高齢女性を対象に疼痛の部位数と身体、認知、精神心理機能の関連について検討することとした。対象は241名であった。疼痛の部位数が1か所の高齢者はと通のないものと同等の身体機能を有しているものの主観的健康感が低下していることが明らかになった。そのため、身体的なアプローチだけでなく、ストレスマネジメントなども必要であると考える。 本人担当分：データ収集、統計解析を担当した。 [共同発表者]安彦鉄平、村田伸、阿波邦彦、大杉紘徳、白岩加代子、堀江淳、窓場勝之
63. 長下肢装具を作成した脳卒中患者の在宅復帰率と身体的特徴の検討	－	平成28年3月	第17回日本健康支援学会（愛知）	本研究は長下肢装具を処方された患者が、その後、短下肢装具へと移行できたか否かに着目し、移行できなかった患者の転機先を示すともに、そのリハ開始時の機能的特徴を明らかにする。結果、長下肢装具から短下肢装具へと移行できなかった群は、移行できた群よりも在宅復帰率が低く、入院時の機能障害の程度やADLが低いことが示された。 本人担当分：統計解析を担当した。 [共同発表者]窓場勝之、大杉紘徳、阿波邦彦、村田伸
64. 特異的運動耐容能を呈するCOPD患者の呼吸リハビリテーションにおける変化特性についての検証	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会（北海道）	本研究は、COPD患者の1年間の縦断的分析から、呼吸リハビリテーションにおける変化の特性を多施設共同の前向きコホート研究で明らかにすることを目的とした。COPD患者294例のうち、1年間、呼吸リハビリが継続できた49例とした。呼吸リハビリに関する1年間の効果は、特異的運動耐容能を有するCOPD患者では、多くの指標において変化に乏しく、現状維持が呼吸リハビリの目標となるのかもしれない。 本人担当分：統計解析を担当した。 [共同発表者]堀江淳、白仁田秀一、阿波邦彦、林真一郎

65. 肺がん患者の健康康関連QOLと身体能力の術後回復過程	-	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （北海道）	本研究の目的は、胸腔鏡下肺葉切除術（以下、VATS）で肺葉切除を施行された症例の術後3カ月間における身体能力、健康関連QOLの縦断的変化を明らかにすることとした。反復測定共分散分析の結果、術後1ヵ月後に有意に低下したのは、呼吸機能、握力、SF-36 PCS、SF-36 RCSであった。呼吸機能とSF-36 PCSの術後3ヵ月後は術前よりも有意に低下していた。TUG、Peak VO2、SF-36 MCSは各時点において有意差を認めなかった。また、各群におけるSF-36の変化では、運動耐容能の低い群が術後優位に低下していた。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、平山善康、山下直己、堀江淳、太田垣あゆみ、松井萌恵、出見世真人、佃陽一、伊藤健一
66. 長下肢装具のカットダウンにおける身体機能要因の検証	-	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （北海道）	本研究では、カットダウンに影響する身体機能要因を明らかにすることを目的とした。本研究は後ろ向き研究として平成21年から平成27年までにA病院に入院し、KAFOを作成した脳卒中患者43名（年齢74.2±12.2歳）の情報を調査した。入院直後のFIMに影響する身体機能要因と、カットダウンしたか否かに影響する身体機能要因は，ともにSIAS下位項目が抽出された。 本人担当分：統計解析を担当した。 [共同発表者]窓場勝之、大杉紘徳、阿波邦彦、岩瀬弘明、村上貴士、東智里
67. 血液透析患者におけるADL困難感に関連する要因の検証	-	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （北海道）	本研究は、ADL困難感を測定可能である透析患者移動動作評価表（以下、ADL評価表）を用いてADL困難感に影響を及ぼす身体機能を横断的に検討した。対象は、研究の参加の同意が得られた当院透析センター通院中の血液透析患者58名（男性38名、女性20名、平均年齢68.1±10.5歳、BMIは20.9±2.9）とした。ADL評価表は%膝伸展筋力、SPPB合計点、立位バランス、, 起立・着席、4m歩行、起立・着席時間、歩行時間と有意な相関関係が確認された。さらにADL評価表を従属変数とした重回帰分析において起立・着席時間、歩行時間、が影響因子として抽出された（R2=0.297, p＜0.001）。 本人担当分：統計解析、考察指導を担当した。 [共同発表者]田中宇大、小林光子、山田優美子、辻博子、阿波邦彦

68. 地域在住虚弱高齢者における二重課題下歩行トレーニングが身体機能・身体能力に及ぼす効果の検証	－	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （北海道）	本研究は、12ヶ月間の縦断的な検証により、要介護高齢者に対するDTの効果を認知機能、身体機能、ADLから明らかにすることを目的とした。 統計解析、考察指導を担当した。対象は通所リハビリテーションを利用し、12ヶ月間の縦断調査が可能であった要介護高齢者23名であった。老健式活動能力指標（$p<0.05$）において交互作用を認め、介入後の介入群で対照群よりも有意な高値を示した。DTは社会適応能力の改善に有用である可能性が示唆された。 本人担当分：統計解析を担当した。 [共同発表者]北村智哉、萩原崇、阿波邦彦、大杉紘徳、堀江淳
69. 肺がん患者の術前における歩行テストの臨床意義	－	平成28年10月	第6回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術集会 （広島県）	本研究の目的は、肺がん患者の術前における歩行テストの臨床意義を身体機能および健康関連QOLとの関係から検証することである。歩行テストは身体機能および健康関連QOLの身体機能に関わる領域と有意な相関を認め、影響する指標であった。加えて術後1ヵ月後の健康関連 QOL と有意な相関を認めたことにより、術前における歩行テストは健康関連QOLの観点からも臨床上意義のある評価指標であることが示唆された。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、内藤紘一、平山善康、太田垣あゆみ、松井萌恵、田中宇大、小池初慧、山下直己、伊藤健一
70. 高齢者における筋力の非対称性と身体動揺性の関係	－	平成28年10月	第6回日本ヘルスプロモーション理学療法学会学術集会 （広島県）	本研究は、地域在住高齢者を対象に、膝伸展筋力、足把持力、握力の非対称性と歩行時の身体動揺性との関係性を検討することとした。結果、足把持力の非対称性は歩行時における身体動揺性との間に有意相関を認めた。一方、膝伸展筋力および握力の非対称性は、歩行時における身体動揺性との間に有意相関を認めなかった。また、身体動揺性を増大させる足把持力の非対称性のカットオフ値は23.5%であった。 本人担当分：データ収集、統計解析を担当した。 [共同発表者]幸田仁志、甲斐義浩、村田伸、大杉紘徳、阿波邦彦、福本貴彦、今北英高

71. 地域高齢者の認知機能低下に影響する要因の検討	－	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会 （北海道）	本研究では、2年間の縦断調査から、地域高齢者の認知機能低下に影響する要因を、身体機能と抑うつ状態に着目して明らかにすることとした。対象はにMMSEが28点以上で，認知機能障害がないと判断された78名とした。低下群、維持群の2群間で各測定値を比較した結果、抑うつ傾向の有無で有意差を認め、低下群では2014年時点に抑うつ傾向を有している者の割合が有意に高かった（P＜0.05、低下群44%、維持群17%）。ロジスティック回帰分析の結果、認知機能低下の有無に関わる要因として有意であったのは抑うつ傾向の有無のみであり、オッズ比は8.89だった（95%信頼区間；1.55-51.10、P=0.014）。 本人担当分：データ収集を担当した。 [共同発表者]大杉紘徳、村田伸、白岩加代子、安彦鉄平、阿波邦彦、窓場勝之、岩瀬弘明、内藤紘一、堀江淳
72. Characteristics of Physical and Mental Function in Community Dwelling Elderly Women with Pain （痛みを伴う女性地域在住高齢者における身体的・精神的機能の特徴）	－	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会 （北海道）	本研究の目的は、地域在住高齢女性と疼痛の有無との機能的差異を調査することであった。 データ収集を担当した。対象は186名の高齢女性であった（平均年齢：72.5歳、SD：5.9）。 痛みのないグループと比較して、2つ以上の痛みを伴う領域を有するグループでは、主観的な健康の満足度が低下した。睡眠の質は、痛みのない群よりも中程度の痛みを伴う群で痛みが減っていた。 [共同発表者]Teppei Abiko、Shin Murata、Hironori Ohsugi、Katsuyuki Madoba、Kunihiko Anami、Kayoko Shiraiwa、Jun Horie
73. 肺がんサバイバーの術後QOLを予測する術前心肺運動負荷試験	－	平成30年3月	第19回日本健康支援学会学術大会 （京都）	本研究は、胸腔鏡下肺葉切除術後1カ月時に体の痛みを訴える肺がんサバイバーの心肺機能の変化や手術関連情報、併存疾患などから、その特徴を検証することを目的とした。肺がんサバイバー35名を対象に、呼吸機能、筋力、心肺運動負荷テスト、疼痛指標を測定した。結果、疼痛低下群と疼痛不変群に分け、術前データを比較したところ、両群間に有意な差は認められなかったため、術後疼痛を誘発するであろう対象者を予測することは困難であった。一方、疼痛低下群は運動耐容能の指標が有意に低下することが明らかとなった。 本人担当分：データ収集、解析、考察を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、平山善康、山下直己、伊藤健一

74. 地域高齢者の最速歩行速度と下肢筋力の非対称性との関係について	－	平成30年3月	第19回日本健康支援学会学術大会 （京都）	本研究は地域在住高齢腰痛者16名の疼痛軽減あるいは疼痛既往者9名の再発予防を目的に、腰痛の危険因子の一つである脊柱のアライメントに着目した腰痛予防・改善教育プログラムを実施し、その効果について検証した。結果、腰痛群は介入前に比べ介入後では痛みの程度を示すVASが有意に改善したが、下肢筋力は有意に減少した。一方、腰痛既往群では介入前に比べ介入後に破局的思考が有意に高まった。 本人担当分：データ収集、解析を担当した。 [共同発表者]幸田仁志、甲斐義浩、村田伸、阿波邦彦
75. 腰痛者および腰痛既往者に向けた不良姿勢に対する介入効果の検証	－	平成30年3月	第19回日本健康支援学会学術大会 （京都）	本研究は地域在住高齢者85名を対象に膝伸展筋力と足趾把持力、握力の非対応性を測定し、歩行速度との関係性について検証した。結果、歩行速度に影響する要因として、足趾把持力の非対称性、足趾把持力の最大筋力、CS-30が抽出された。地域高齢者の済足歩行速度には、足趾把持力の最大筋力のみならず、その非対称性が影響していることが示された。 本人担当分：データ収集を担当した。 [共同発表者]安彦鉄平、村田伸、岩瀬弘明、佐藤節子、 茅原太郎、窓場勝之、阿波邦彦
76. 呼吸器外科術後1ヵ月時に体の痛みを訴える肺がんサバイバーは心肺機能が低下している	－	平成30年7月	第55回日本リハビリテーション医学会学術大会 （福岡）	本研究の目的は、肺がん患者の胸腔鏡下肺葉切除術前後における心肺運動負荷試験やQOLの変化を調査し、術後QOLを術前心肺運動負荷試験から予測できるか検証することである。腔鏡下肺葉切除術を受けた35名を対象に、QOLはSF-36を用いて、呼吸代謝能は心肺運動負荷試験と呼吸機能検査を用いて測定した。結果、縦断的変化では呼吸機能とQOLは有意に低下した。心肺運動負荷試験はpeak VO2とpeak Loadが有意に減少したが効果量は小さかった。そして、術後のQOLの大小に関する心肺運動負荷試験結果をROC曲線で解析した結果、中等度以上の正確性を有するのは，peak VO2であった。 本人担当分：データ収集、解析、考察を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、堀江淳、平山善康、山下直己、大杉紘徳、伊藤健一

77. 外来COPD患者における全身持久力改善群と非改善群の特性比較	-	令和元年5月	第56回日本リハビリテーション医学会学術大会（兵庫）	外来リハビリテーションにおいてISWTが48m以上改善した群（13例）と改善しなかった群（23例）の特性を調査した結果、体重比膝伸展筋力、LSA、MNA-SFは期間の主効果を認めたが交互作用は認めなかった。交互作用を認めたのはHADS（不安）とSGRQであり、HADS（不安）では、改善群が有意な改善を認めたのに対し、非改善群は有意な変化を認めなかった。SGRQでは、改善群、非改善群ともに有意な改善を認めた。 本人担当分：解析、考察を担当した。 [共同発表者]松本雄次、阿波邦彦、宮副孝茂、山田穂積、古賀義行、林真一郎、はがくれ呼吸ケアネット
78. 肺葉切除術前の肺がんサバイバーにおけるヘルスリテラシーと健康関連QOL、身体機能との関連	-	令和2年3月	第21回日本健康支援学会年次学術大会（沖縄）	胸腔鏡下肺葉切除術を行う肺がんサバイバーの術前のHLと身体機能・健康関連QOLとの関係を検証した。腔鏡下肺葉切除術を受けた21名を対象に、FCCHL、身体機能、SF-12を測定した。結果、術前肺がんサバイバーにおいて、3つのHLおよび全体HLは健康関連QOLの尺度であるSF-12の身体機能や日常役割機能、活力などと関連することが明らかとなった。 本人担当分：データ収集、解析、考察を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、島雅晴、池田聖児、吉川正起、鈴木昌幸、伊藤公美子、木下翔太、小菅友里加、中橋玲那、田中太晶、岡見次郎、堀江淳
79. 地域在住高齢者における歩行速度とヘルスリテラシーの関連	-	令和2年3月	第21回日本健康支援学会年次学術大会（沖縄）	地域在住高齢者の歩行速度とヘルスリテラシー、年齢や身体機能との関連を検証した。対象は地域在住高齢者255名とした。結果、歩行速度に影響する要因に年齢、身長、CCHL、CS-30が抽出された。歩行速度に年齢や身長、身体機能だけでなく、ヘルスリテラシーが独立して影響することが示唆された。 本人担当分：データ収集、解析、考察を担当した。 [共同発表者]阿波邦彦、村田伸、岩瀬弘明、白岩加代子、安彦鉄、合田明生、中野英樹、野中紘士、堀江淳
「国際会議」				

1. Prediction of incremental shuttle walking test in patients with COPD （COPD患者における漸進的シャトルウォーキングテストの予測）	－	平成25年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2013 （バルセロナ）	本研究の目的は、COPD患者を対象に実施時間や限られたスペースで漸増シャトルウォーキングテスト予測式を作成することとした。対象は安定しているCOPD患者115名とした。対象は安定しているCOPD患者115名とした。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 ［共同発表者］Kunihiko Anami、Yosiyasu Hirayama、Naoki Yamashita、Naoki Yamashita、Yoichi Tsukuda、Jun Horie
2. Relationships between changes in the respiratory distress level of COPD patients undergoing a six-minute walking distance test, their physical functions, and exercise capacity （6分歩行距離試験を受けたCOPD患者の呼吸窮迫レベルの変化、その身体機能および運動能力の関係）	－	平成25年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2013 （バルセロナ）	研究の目的は、6MWD試験後の呼吸苦痛レベルの変化が、身体機能、運動能力、ADL、および健康関連QOLに及ぼす影響を調べることとした。被験者は、呼吸器リハビリテーションを受けていた安定期の181人のCOPD患者（男性167人、女性14人、平均年齢73.3±9.4歳）であった。結果、呼吸困難に影響を与える因子として6MWDのみが抽出された。 本人担当分：データ収集、統計解析を担当した。 ［共同発表者］Jun Horie、Kunihiko Anami、Masahide Tanaka、Shin-ichiro Hayashi
3. Video-assisted throracoscopic surgery decrease the physical performances of lung cancer patients: shortterm prospective study （ビデオ支援胸腔鏡手術は、肺癌患者の身体的能力を低下させる：短期前向き研究）	－	平成26年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2014 （ミュンヘン）	研究の目的は、肺癌患者における身体パフォーマンスや精神機能へのVATSの短期的効果を明らかにすることとした。18名を対象とし、術前と術後を比較した。結果、VATSは短期的には身体機能を低下させるため、術後のリハビリテーションが必要である。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 ［共同発表者］Kunihiko Anami、Yosiyasu Hirayama、 Naoki Yamashita、Naoki Yamashita、Yoichi Tsukuda、Jun Horie

4. Changes in the physical functions and health-related quality of life of elderly patients with lung cancer undergoing video-assisted thoracoscopic surgery （ビデオ支援胸腔鏡手術を受けている肺癌高齢患者の身体機能と健康関連QOLの変化）	－	平成27年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2015 （Amsterdum）	研究の目的は、肺癌を有する高齢患者における身体機能とHRQOLに対するVATSの影響を明らかにすることであった。30名を対象とし、術前と術後1ヶ月を比較した。結果、VATSは努力肺活量は低下し、Peak VO2は1ヶ月後に術前値に回復した。一方HRQOLは大幅にVATS後に減少し、有意な改善が認められなかった。 本人担当分：データ収集、統計解析、抄録・スライド作成、口頭発表を担当した。 [共同発表者]Kunihiko Anami、Yosiyasu Hirayama、Naoki Yamashita、Naoki Yamashita、Jun Horie、Kenichi Ito
5. Validity and intra- class reliability of spirometry using a mask instead of a mouthpiece （マウスピースの代わりにマスクを用いた肺活量測定の有効性とクラス内信頼性）	－	平成28年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2016 （ロンドン）	研究の目的は、マウスピースの代わりにフェイスマスクを使用して肺機能検査を行い、結果の妥当性と信頼性を検討することとした。結果、有効性と信頼性を確認し、フェイスマスクを使用することが可能であるとこを示唆した。 本人担当分：統計解析を担当した。 [共同発表者]Kenichi Ito、Koji Nonaka、Shohei Takeda、Takeshi Nishikawa、Kunihiko Anami、 Jun Horie、Morihiro Tsujishita、Hirobumi Kawamura
「科学研究費補助金取得状況」				
科学研究費補助金 若手研究B 〔研究費〕	－	平成25年4月 ～ 平成28年3月	日本学術振興会	課題名「健康関連QOLに着目した、新たな肺がん葉切除術前後のがんリハビリテーションの開発」 研究経費:3,300千円（直接経費） 研究経費:990千円（間接経費） ＜研究概要＞ 肺がん葉切除術前後の健康関連生活の質（QOL）が変化する要因を分析し、がんリハビリテーションが肺がん葉切除術後の身体機能や健康関連QOLに及ぼす効果を検討した。研究参加者は胸腔鏡下肺葉切除術が施行され、術後12週間の縦断調査が可能でった36名とした。結果、身体機能、健康関連QOLは術後1週後に有意な低下を認めたが、術後4週後から術後12週後にかけて、身体機能、健康関連QOLは有意に改善した。しかしながら、健康関連QOLは術前よりも有意に低下していた。これらの結果から、身体能力を維持・向上させるだけでは健康関連QOL対策としては不十分であることが示唆された。 （共同研究者） セッティング調整：堀江 淳 調査測定：平山 善康 リクルート協力：山下 直己 研究指導：伊藤 健一

大阪ガス研究助成	－	平成28年4月 ～ 平成29年3月	大阪ガスグループ福祉財団	課題名「高齢肺がん患者の術前後における呼吸代謝能評価スケールの開発」 助成額：700千円 ＜研究概要＞ 高齢肺がん患者のVATS前後において、呼吸機能と健康関連QOLは有意に低下した。また、術後健康関連QOLは術前の呼吸代謝能と有意な相関を認めたが、呼吸機能、筋力、歩行能力とは有意な相関を認めなかった。そこで、術後のQOLの大小に関するカットオフをROC曲線で解析し、活用が期待できるカットオフが算出された。 （共同研究者） セッティング調整：堀江 淳 調査測定：平山 善康 リクルート協力：山下 直己 データ解析：大杉 紘徳 研究指導：伊藤 健一
科学研究費補助金 若手研究B 〔研究費〕	－	平成29年4月 ～ 現在に至る	日本学術振興会	課題名「術後の健康関連QOLの早期回復を目的とした肺がん患者教育プログラムの開発」 研究経費:3,200千円（直接経費） 研究経費:960千円（間接経費） ＜研究概要＞ 我々は以前、肺がん外科的手術後の患者の健康関連QOLを術前の状況まで回復するのに3ヵ月以上を要することを明らかにした。そこで本研究は、肺がん患者の術前と術後における身体・認知・健康関連QOL・ヘルスリテラシーを客観的に評価し、健康関連QOLの回復遅延要因を明らかにし、新たな肺がん患者教育プログラムを作成することを目的としている。現在、肺がん葉切除術を受ける研究参加者の身体機能・健康関連QOL・ヘルスリテラシーを客観的に調査し、術後における健康関連QOLの回復遅延要因を前向き研究などによって検討しているところである。 （共同研究者） セッティング調整：堀江 淳 調査測定：池田 聖児、島 雅晴、鈴木 昌幸、加藤 祐司、伊藤 久美子 リクルート協力：岡見 次郎

教　育　研　究　業　績　書

令和　2年　3月　31日

氏名　藤田　信子

研究分野	研究内容のキーワード
加齢運動制御　脳血流動態　疼痛	姿勢調節　高齢者　認知機能　脳機能　線維筋痛症

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例	平成23年4月～平成25年3月 大阪行岡リハビリテーション専門学校 平成25年4月～平成31年3月 大阪行岡医療大学	「神経障害評価法」では、基礎知識の理解度を確認するために授業内で国家試験問題を用いたり、授業開始毎に復習小テストを行った。検査技術ではグループによる実技練習を行わせた後に発表形式で意見交換を実施した。授業評価は筆記試験、およびオスキーを基本とした実技テストを実施し、知識と検査技能の総合評価を行った。 「日常生活活動学」ではADL評価についての知識と実技指導の総論の講義を行った。またグループ単位で車椅子や杖などを用いた模擬生活体験を学外の環境の中で実施し、生活に必要とされる身体・認知機能と動作能力の関連性について深く考慮できるよう、グループ間で発表や討論を実施した。 「運動学」では解剖学を基盤に身体の姿勢および動作を理解することを目的に、各関節の制御機構や動きに関わる筋肉の働き、歩行分析や姿勢の分析についてエビデンスに基づき講義した。特に、歩行に必要とされる関節運動や筋収縮について興味を持ち理解を進めるため歩行カードを作成、学生同士でカードを組み合わせるアクティビティを取り入れた。 「臨床運動学」では疾患を持つ患者の異常な姿勢や動作のメカニズムを、運動学的考察に加え、運動力学的考察や姿勢反射的考察など多角的な側面から理解することを目的に、グループで行う動作観察や床反力計等を用いた測定実習を授業に取り入れた。具体的には立ち上がり動作や立位、ジャンプ動作を筋電図、床反力計等の機器で計測を行わせ、その結果と考察をレポート作成させ、学生に能動的な学習習慣を定着できるよう工夫した。 「中枢神経理学療法」では活字で理解が困難な疾患のイメージを視覚的に捉えることで理解度を高めることを目的に市販の動画教材を用いて病態の理解を深めたり、動作観察のレポート作成を行った。講座の後半ではペーパーペイシェントを用いて障害を把握するための手技やプログラムの立案をグループで行った。学生が能動的に脳血管障害患者の問題に取り組む姿勢や態度を学ぶために、学生同士の発表会や討論会も実施した。 「卒業ゼミ」では、研究の目的や方法、論文の読み方を講義し、研究手法や結果のまとめ方の実際を体験させた。担当グループの研究テーマは以下の通りである。一期生「椎間板ヘルニア症例の分析」、二期生「高齢者の転倒の内的要因と転倒予防対策に関する文献調査」、三期生「二重課題動作時の運動課題の速度の違いが前頭前野の脳血流量に及ぼす影響」、四期生「スマホ操作がステップ動作のpremotor timeに与える影響について」、五期生「n-back課題介入が疼痛抑制と脳活動に与える影響」「健常若年者に対する心的回転課題の介入が踏み出し動作反応時間に及ぼす影響」。なお、五期生の「n-back課題介入が疼痛抑制と脳活動に与える影響」は、ゼミの

		代表者が保健医療学学会第 9 回学術集会で発表を行い、学会奨励賞を受賞した。 「臨床体験実習」「臨床評価実習」「臨床総合実習Ⅰ」「臨床総合実習Ⅱ」では実習前、実習期間中、実習終了時に少なくとも 3 回以上の学生面談を実施し、常に学生の実習に対する不安や悩み、心配事の相談を受けた。また実習前、および実習中に実習指導者と少なくとも 2 回以上の面談を行い、実習の様子や学生が直面している問題など情報収集を行った。学生と実習指導者がスムーズな人間関係を形成し良好なコミュニケーションが取れるよう心がけ、学生が臨床現場で十分な知識と技術が体得し有意義な実習が実現できるよう努めた。
	平成 31 年 4 月～令和 2 年 3 月 奈良学園大学	「早期体験実習」では担当学生と実習指導者に実習前、実習後に個別に面談した。早期体験実習中は学生に随行し実習中の行動を管理するとともに、実習指導者の補助、補完を行った。 「基礎ゼミⅡ」では担当学生 5 名の興味をもったテーマ「ASD」について、病態、分類、リハビリテーション、社会的課題について文献調査し発表を行った。
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記		
5　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
理学療法士免許（厚生労働省）	昭和 60 年 4 月	第 13798 号
学士（文学）	平成 12 年 3 月	佛教大学（第 51336 号）
修士（学術）	平成 20 年 9 月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科（第 871 号）
博士（学術）	平成 24 年 3 月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科（第 981 号）
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記	平成 20 年 6 月～9 月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科　大学院 GP プロジェクト（文部科学省 Good Practice） ”七転び八起き”エクササイズ教室において、応募して下さった地元住民の方を対象に、運動指導、運動機能検査、分析を行い、検査の結果報告、発表等を行った。また、神戸大学と学術交流を行っている西オーストラリア大学の応用生理学学科との研究会では、現在行っている研究の発表を行った。
	平成 21 年 2 月～平成 23 年 3 月	神戸大学大学院人間発達環境学研究科　与謝野町役場保健課との共同プロジェクト　”足からつくる健康プロジェクト” 足趾の把持機能や靴のインソールが中高年の運動習慣や日常生活活動範囲に影響していると考えられる。そこで、3 か月間の運動習慣と適正なインソールの使用による介入の中で、介入前後の効果判定を行うために、運動機能、認知機能、生活活動範囲などの検査を行った。インソールの介入により、歩行能力、運動機能、認知機能の改善が見られたが、介入後の効果の継続については今後の課題となった。
	平成 28 年 4 月～令和 2 年 3 月	科学研究費助成事業（学術研究助成基金助成金）基盤研究 C（課題番号 16K09002）研究課題「線維筋痛症患者に対する運動療法の効果の検証：脳内ネットワークの変化を指標として」 研究代表者：藤田信子、研究概要：線維筋痛症患者に運動療法を行い、日常生活での活動量を増やすことが、鎮痛や抗うつに効果があることが注目されている。この効果についての科学的検証とメカニズム

		の検討は未だ十分でない。本研究では、線維筋痛症患者に3週間の入院による有酸素運動を中心とした運動療法を行い、日常生活活動量や睡眠の変化をモニター、また質問紙による「痛み」「うつ」「睡眠」の評価を行った。また、脳機能変化の指標として、fNIRSの計測とfMRIの撮像により脳内のネットワークの変化と運動療法の関連性を明らかにすることを目的とした。令和2年3月までに13名の患者に対して3週間の運動療法の効果を検証するために、治療介入前後において、MRI撮像、運動能力、生活QOL、fNIRSの計測、心理面でのアンケート等を実施した。研究の成果や報告については、日本ペインリハビリテーション学会、線維筋痛症学会で発表、また日本臨床と理学療法科学でも論文発表した。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 七転び八起きを目指した健康づくり	共著	平成23年5月	プレアデス出版	全ての人々が「健康寿命」を延ばし老後の生活の質をあげるアクティブ・エイジングのために、運動機能・認知機能・体操・救急処置・靴の処方等の知識を一般読者のために解説。本人担当部分：＜第3章　老化と認知機能＞本邦の認知症の状況と原因や症状についての知見、及び認知症の予防について、特にMCIに関する研究結果を紹介する。認知機能の低下と転倒との関係についての知見を紹介するとともに、現在提唱されている転倒予防法を認知機能の観点から説明した。 著者:岡田修一、**原田（藤田）信子**、根来信也、桜井寿美 掲載担当：p.34～51
（学術論文） 1. Age-d differences in stepping response when stepping onto a known soft surface under dual task（二重課題動作が高齢者の柔らかい床面へのステップ動作に与える影響） （査読付） （筆頭論文）	共著	平成22年5月	Current Gerontology and Geriatric Research Vol.2010 pp.1～6	歩行中に目の前にバランスを崩すと推測されるものがあると、高齢者は若年者とは違う転倒防御ストラテジーをとりながら歩行する。本稿では高齢者が二重課題を行いながら、目の前の柔らかいマット上をステップ動作する場合の姿勢調整ストラテジーの違いを若年者と比較検討した。 著　者　：　◎ Nobuko　Harada(Fujita), Shuichi Okada, Shinya Negoro

2. 二重課題を伴った高齢者の動的立位姿勢調整能 （査読付） （博士論文） （その他）	単著	平成 24 年 3 月	神戸大学	注意要求の増加が高齢者の動的立位姿勢調整能に及ぼす影響を解明し、高齢者の転倒の原因をバイオメカニズムの観点から明らかにすることを目的とした。論文では国内外で発表されている高齢者の注意や認知能力に関する知見、高齢者の認知機能と身体能力の関連性、転倒経験者の歩行機能に関する知見など、これまでの研究内容を精査した。高齢者の注意能力を伴う身体活動にみられる特有の戦略的姿勢制御をバイオメカニズム的手法を用いて明らかにするために、4 つの研究課題を検討した。研究では高齢者の身体機能面からだけでなく，姿勢課題の難易度や床面の安定性など環境要因の影響についても検討した。総括では、転倒予防を目標とした高齢者に対する二重課題時の動的立位姿勢調整能を向上させる具体的な方策について論じた。論文は緒言、文献研究、本研究の目的、4 つの研究課題、総括から構成されている。（A4 全 103 頁）
3.Age-related differences in postural control associated with progression from a dynamic to a static during serial stepping in dual-task condition（二重課題を伴う連続ステップ動作時の高齢者が示す動的から静的姿勢制御） （査読付） （筆頭論文）	共著	平成 26 年 3 月	大阪行岡医療大学紀要 第 1 号　pp.19～24	注意要求課題を伴って動から静への漸心的動作を行う時の高齢者の姿勢調節を若年者と比較検討した。高齢者は二重課題を課されたとき、ステップ開始し加速するときの速度が減速し、ステップ終了後には COP 総軌跡長が減少した。これらのことから、高齢者は姿勢調節がより難しくなる場面において注意の容量が増加すると、若年者とは異なるバランスの適応戦略を利用することが明らかになった。 著 者 ： ◎ Nobuko Harada(Fujita), Shuichi Okada
4. 二重課題を伴った階段降下動作が高齢者の姿勢調節に及ぼす影響 （査読付） （筆頭論文）	共著	平成 26 年 10 月	日本職業災害医学学会誌　第 62 巻　5 号	階段降下動作において二重課題動作を行う時の高齢者の立位姿勢調節を若年者と比較検討した。高齢者は二重課題動作時に階段降下時間を延長させ、また最終段の床面着地時には下腿筋の筋活動量を少なくし、共同収縮率を低くした。また、階段着地後には高齢者の COP 動揺が増加した。このことから、高齢者が階段降下動作で最も注意配分の影響を受けるのは連続動作から停止するときであることが示唆された。 著者：◎原田（藤田）信子、大澤傑、岡田修一

5. 地域在住高齢者における6か月間のウォーキングプログラムが体力と閉眼時の歩行に与える影響	共著	平成28年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究　5(4) 191-197	地域在住高齢者を対象に、継続的なウォーキングプログラムが体力と閉眼時の歩行に与える影響を検討した。結果は6か月間でSit-to-Stand testの有意な短縮を認め、閉眼時の歩行にも改善が見られた。また、ロンベルグ率の変化と両脚支持期間の変化率に有意な相関関係を認めた。6か月間のウォーキングプログラムは体力と閉眼時の歩行能力を向上させる可能性が示唆された。 著者：国宗翔、**原田（藤田）信子**、岡田修一
6. 近赤外分光法の研究動向(査読付)	共著	平成29年3月	大阪行岡医療大学　紀要　(4) 25-31	総説。近赤外分光法(NIRS)の研究動向やその原理・特性について述べるとともに、特にNIRSが医療（小児、精神科）の診断方法や治療の効果判定（リハビリテーション、循環器系）に実施されている現状について紹介するとともに、現在のNIRSの臨床上における課題についても述べている。現在進められている小型化や軽量化に伴う今後の脳神経科学の観点でのエビデンス構築の可能性を論じ、今後の発展性についてまとめた。 著者：松野悟之　**藤田信子**
7. Effect of wearing fingers rings on the behavioral and psychological symptoms of dementia: An exploratory study （認知症者のBPSDに対する指輪の効果:探索的研究)(査読付)	共著	平成29年8月	Sage Open Medicine 5 1-11	女性認知症患者の示すBPSDに対する指輪の効果を検証するため、老人ホーム入居の7名の認知症患者のBPSDの場面、指輪の関心、自己認識能、全体像を用いた。その結果、指輪自体が介護者らから引き出した魔法の言葉「綺麗ね」が、対象者の自尊心を高め、「易怒性/不安定性」を軽減させる効果が見られた。 著者：Teruo Yokoi, H Okamura, T Yamamoto, K Watanabe, S Yokoi, H Atae, M Ueda, T Kuwayama, S Sakamoto, S Tomino, H Fujii, T Honda, T Morita, T Yukawa, **Nobuko Harada(Fujita)**
8. 線維筋痛症の運動療法―その効果と奏効メカニズム	共著	平成30年6月	日本臨床　76(11)	線維筋痛症の非薬物的アプローチである運動療法の有用性について海外のガイドライン、システマティックレビューの概要を紹介。また、運動療法が奏効する脳メカニズムに関する最新の研究とニューロンを活性化し鎮痛に働くカギを握る慢性疼痛患者の生活習慣についても言及した。 著者：◎**藤田信子**　仙波恵美子
9. 高齢線維筋痛症2症例の3週間入院運動プログラムの効果について－痛みと身体・注意機能、包括的QOL、および背外側前頭前野の血流動態への影響―	共著	令和元年12月	理学療法科学　34(6)	高齢線維筋痛症患者の3週間入院運動プログラムを行い、痛み、身体・注意機能、包括的QOL、背外側前頭前野(DLPFC)の機能に与える影響の検討を行った。2症例ともに抑うつ自己効力感の改善が大きく見られ、これらが身体機能や包括的QOLの改善に関与したことが推測された。DLPFCの機能の改善は

				1症例のみに見られた。高齢者の脳機能については加齢に伴う機能異常の影響も考えられ、今後さらに検討する必要性が考えられた。 著者：◎**藤田信子**　池田耕二　高井範子　金子基史　松野悟之　三木健司　仙波恵美子
（学会発表） 1.Dynamic-to-Static Postural control during a serial stepping on dual task in elderly　（二重課題を伴う連続ステップ動作時の高齢者が示す動的から静的姿勢制御） （筆頭演者） (oral presentation)		平成22年9月	10th International Congress of Physiological Anthropology (Perth, Australia)	二重課題時における連続ステップ動作について、ステップ動作のパラメータおよび足圧中心動揺の解析により、高齢者の動的姿勢調整の特徴を明らかにした。高齢者は二重課題を課されたとき、ステップ開始し加速するときの速度が減速し、ステップ終了後にはCOP総軌跡長が減少した。これらのことから、高齢者は姿勢調節がより難しくなる場面において注意の容量が増加すると、若年者とは異なるバランスの適応戦略を利用することが明らかになった。 演者：**Nobuko Harada(Fujita)**,Shuichi Okada
2.二重課題時における連続ステップ動作から静止立位姿勢に至るまでの高齢者の姿勢調整能 （筆頭演者）		平成22年9月	第65回日本体力医学学会 (千葉県)	高齢者は動的な動作から静的な立位姿勢に移行する中で姿勢調整を行うことが困難である。本研究では二重課題時の高齢者の動的姿勢調整から静的立位姿勢に至るまでの高齢者の姿勢調整の特徴を明らかにした。高齢者は二重課題を課されたとき、ステップ開始し加速するときの速度が減速し、ステップ終了後には COP 総軌跡長が減少した。これらのことから、高齢者は姿勢調節がより難しくなる場面において注意の容量が増加すると、若年者とは異なるバランスの適応戦略を利用することが明らかになった。 演者：**原田(藤田)信子**，岡田修一
3.フットウエアに着目した転倒予防方策の検証ー京都府与謝野町における産・学・官の取り組みー		平成22年10月	第 7 回　転倒予防医学会 (東京都)	神戸大学と与謝野町保健課の産学協同”足から作る健康プロジェクト”のもとで行われた一年間の運動教室、健康指導、体力測定の結果を検討した。 演者：櫻井寿美，岡田修一，**原田(藤田)信子**，根来信也，小西隆博，柴山真美
4.Age-related differences in muscle activity on legs during stairs descending in the dual task (二重課題を伴った階段降		平成23年11月	4th Japan-Australia-China Forum on Health Science and Bioengineering: International	高齢者と若年者を対象に階段降下時に二重課題動作を行う時の下腿の筋活動を比較した。高齢者の注意を伴った階段降下動作では、最終段に着地し動的から静的に立位姿勢調整のパターンを変化させるとき、主働筋の筋活動を若

下動作が高齢者の姿勢調節に及ぼす影響) (筆頭演者) (oral presentation)			Cooperation for the 21st Century medical and Human Care (兵庫県)	年者に比べ減少させることが明かになった。 演者：Nobuko Harada(Fujita), Shuichi Okada
5.高齢者の階段降下時における二重課題動作が下肢の筋活動に及ぼす影響 (筆頭演者)		平成 24 年 1 月	日本体力医学学会 第 26 回近畿地方会 (奈良県)	高齢者と若年者を対象に階段降下時に二重課題動作を行う時の下腿の筋活動を比較した。注意を伴った階段降下動作では，高齢者は二重課題動作時に階段降下時間を延長させ、最終段に着地し動的から静的に立位姿勢調整のパターンを変化させるとき、主働筋の筋活動を若年者に比べ減少させ共同収縮率を低くした。また、階段着地後には高齢者の COP 動揺が増加した。このことから、高齢者が階段降下動作で最も注意配分の影響を受けるのは連続動作から停止するときであることが示唆された。 演者：原田(藤田)信子、岡田修一
6.Age-related differences in muscle activities during stairs descending in dual task (二重課題を伴った階段降下動作が高齢者の姿勢調節に及ぼす影響) (筆頭演者)		平成 24 年 6 月	1st Joint World Congress of ISPGR / Gait & Mental Function (Trondheim, Norway)	高齢者の注意を伴った階段降下動作では，最終段に着地し動的から静的に立位姿勢調整のパターンを変化させるとき、主働筋の筋活動を若年者に比べ減少させることが明かになった。また最終段着地時には高齢者の COP 動揺長は若年者に比べ減少するが、その後，静的姿勢を保持するまでの間 COP 動揺長が増加することが明らかになった。 演者：Nobuko Harada(Fujita), Shuichi Okada
7.Toe clearance and walking pattern on responding to unexpected surfaces in dual task; comparison between healthy and young adults (高齢者の二重課題歩行時における足底接地面の違いが Toe clearance および歩容に与える影響) (筆頭演者)		平成 25 年 6 月	2nd Joint World Congress of ISPGR / Gait & Mental Function (秋田県)	歩行時の足底接地面の状況の違いが高齢者の二重課題歩行時の姿勢調節に与える影響を若年者と比較検討した。flat surface や rugged surface 上の二重課題歩行時には高齢者の stride が短縮した。また rugged surface 上の 2 歩目の toe clearance は flat surface 上よりも高かった。これらのことから、高齢者の二重課題歩行時には床面の状況が stride や toe clearance に影響を与えることが示唆された。 演者：Nobuko Harada(Fujita), Shuichi Okada
8.Prefrontal activation during a consecutive calculation related strategies for postural control in human adults; A fNIRS Study (計算課題時の立位姿勢制御に関連する前頭前野の血流動態について：fNIRS 研究) (筆頭演者)		平成 27 年 5 月	World Confederation for Physical Therapy Congress 2015 (Singapore)	健常人の計算課題実施時における立位姿勢制御脳の前頭前野の活動にどのように影響されるのかを検証するために、NIRS を用いた PFC の脳血流動態と床反力計による COP 変位、下肢筋電図による下肢の筋活動との関連性の検討を行った。その結果、計算課題を行うと有意に対象者全員の HbO_2 が増加したが、特に立位の重心動揺が大きい対象者の方が小さい対象者に比べて HbO_2 が増加し、下肢筋の筋収縮が減少していた。これらのことから、二重課題時の立位姿勢制御は戦略的であり、そのことは前頭前野の活動に関連していることが示唆された。 演者：Nobuko Harada(Fujita), Shuichi

				Okada, Sho Kunimune, T Nishimura
9.線維筋痛症4症例に対する3週間入院運動療法プログラムの試み～運動療法介入による脳血流量の変化とQOLの改善について～（筆頭演者）		平成29年9月	第22回日本ペインリハビリテーション学会学術大会（兵庫県）	線維筋痛症患者 4 名に対して中等度負荷の運動療法を集中的に行ったところ、前頭前野の血流のバランスが良くなる傾向がNIRSの測定で明らかとなった。期間中に行った運動療法前後の注意機能テスト(TMT)では全員改善が見られたが、二重課題を伴った歩行速度の改善はばらつきが見られた。またQOL(SF8)では全員に身体的健康では改善が見られたが、精神的健康については改善が見られなかった者が一人いた。 演者：**藤田信子**、池田耕二、高井範子、松野悟之、　小泉優喜、平岡駿典、高橋紀代、三木健司、仙波恵美子
10.線維筋痛症 2 症例に対する3週間入院運動療法プログラムの試み　ー心理的側面からの検討ー		平成29年9月	第22回日本ペインリハビリテーション学会学術大会（兵庫県）	線維筋痛症の多くに見られる恐怖回避反応と過活動傾向の忍耐反応のある対極的な２例について、運動療法プログラム介入による効果判定を心理的側面から比較検討した。異なるタイプの患者ではあったが運動療法は両者とも良い効果をもたらしていた。しかし、同じ運動療法を行っても、その体験がもたらす効果は異なっていた。担当理学療法士が患者の身体的、心理的傾向を速い段階で感じ取り、その患者に応じた適切な言葉掛け・アドバイスをすることが、運動療法の効果をより高めるものとなることが示唆された。 演者：高井範子、**藤田信子**、池田耕二、丸山伸廣、栗田樹、中原理、高橋紀代、三木健司、仙波恵美子
11.線維筋痛症 2 症例に対する3週間入院運動療法プログラムの試み　ー運動が困難な患者に対する介入方法についてー		平成29年9月	第22回日本ペインリハビリテーション学会学術大会（兵庫県）	線維筋痛症患者 2 症例に 3 週間の集中的運動療法を行い、取り組みにおける難渋した点や工夫した点について紹介した。2症例とも痛みに囚われ、運動療法を開始するところに難渋したが、可能な自動運動から行い徐々に運動負荷を増加することで、退院時には 2 症例とも身体機能、痛みに改善の傾向を示した。身体の触れ方、痛みの対応、動作方法の提案の仕方、運動のペーシング、自己効力感の確認など、注意と工夫を要した。 演者：小泉優喜、平岡駿典、栗田樹、丸山伸廣、中原理、高橋紀代、**藤田信子**、三木健司、仙波恵美子
12.線維筋痛症患者に対する3週間入院プログラムの試み～中等度以上の運動負荷が可能であった症例～		平成29年10月	第 9 回日本線維筋痛症学会学術学会（大阪府）	線維筋痛症患者に中等度以上の運動療法を行うことで疼痛の軽減と運動後の爽快感を認めた例を紹介するとともに、短期集中型運動療法のリスク管理、段階的運動負荷について文献的考察を含めて報告した。 演者：高橋紀代、小泉優喜、谷山ゆりえ、丸山伸廣、中原理、池田耕二、高井範子、**藤田信子**、三木健司、仙波恵美子

13.慢性痛に対する運動療法を推進する立場から		平成29年10月	第 9 回日本線維筋痛症学会学術集シンポジウムⅠ「心理療法・運動療法の立場から考える､慢性痛の再発･再燃の乗り越え方」	運動による鎮痛(EIH: exercise-induced hypoalgesia)のメカニズムについて運動が脳報酬系の要である腹側被蓋野(VTA)におけるドーパミン産生を増やし自発運動量が多いほど産生が増え、疼痛行動が抑えられること、その他背外側被蓋核(LDT)や視床下部外側核などの関与についても紹介し、脳報酬系の活性化が鬱や QOL の改善につながることを紹介した。 演者：仙波恵美子　**藤田信子**
14.線維筋痛症高齢女性 2 症例に対する 3 週間入院運動の試み：前頭前野の血流動態の変化と疼痛､抑うつ､QOL の改善について		平成 30 年 9 月	第 23 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会	FM 高齢女性に対して 3 週間の入院運動プログラムを行い、疼痛、抑うつ、QOL、の改善と NIRS による前頭前野(PFC)の血流動態の変化について報告した。高齢女性の入院プログラムが疼痛、抑うつ、QOL の改善につながり、背側前頭前野(DLPFC)の質的、量的な脳活動変化を伴ったと考えられた。 演者：**藤田信子**　池田耕二　高井範子　松野悟之　金子基史　三木健司　行岡正雄　仙波恵美子
15.線維筋痛症高齢女性 2 症例に対する 3 週間入院運動の試み：患者の心身の変化と理学療法士の関わり方に関する検討		平成 30 年 9 月	第 23 回日本ペインリハビリテーション学会学術大会	FM 高齢女性に対して 3 週間の入院運動プログラムを行い、BDI-2、JFIQ、インタビューを行った。2 症例とも心身の回復が良好であり、面談からも PT の関わり方が非常に重要であることがわかった。特に患者の不安傾向を踏まえ、運動内容や規則正しい生活リズムをきちんと守らせていたことが功を奏していた。 演者：高井範子　**藤田信子**　池田耕二　金子基史　三木健司　行岡正雄　仙波恵美子
16.n-back 課題の疼痛抑制効果と前頭前野の脳活動との関連性		平成 30 年 12 月	保健医療学学会第 9 回学術集会	背外側前頭前野(DLPFC)の活性化が痛み刺激に対する閾値の関連性を明らかにするため、n-back 課題による疼痛抑制効果の検証を NIRS を用いて行った。その結果、3-back 時に左 DLPFC の活性化が見られ、また NRS は 3-back 時において左 DLPFC および前頭極の血流量と正の相関がみられたが、正答率との間に相関がみられなかった。これらのことから、疼痛抑制を目的に認知課題を与える場合、作業負荷量や患者の主観的難易度に着目することが疼痛抑制と脳の活性化に効果を与えることが示唆された。 演者：林英典　大槻嵐志　林弘規　木村晋太郎　田中大樹　島田大地　松野悟之　**藤田信子**
17.運動療法が痛みに効く基礎医学的機序と線維筋痛症患者に対する集中的入院運動療法の効果		令和元年 10 月	第 11 回日本線維筋痛症学会学術集会　シンポジウム「慢性の痛み政策研究事業からみた集学的診療・運動療法の実態」	運動による鎮痛(EIH: exercise-induced hypoalgesia)のメカニズムの中で、運動による脳報酬系の活性化の重要性について、神経障害性疼痛を起こしたマウスを自発運動させ、疼痛行動の著明な改善とともに脳報酬系におけるドーパミン産生の増加

				の観察について紹介。慢性疼痛患者の脳報酬系を含む mesocortico-limb system の機能不全、特に側坐核の機能低下がみられるが、運動による側坐核の活性化により側坐核に投射する扁桃体基底外側核(BLA)、内側前頭前野の活性化とともに、痛みに対する恐怖による不動や種々の自律神経反応の発現に関与する扁桃体中心核(CeA)の抑制につながり脳のネットワークの正常化と鎮痛と生活習慣の改善につながることを紹介する。臨床例として、現在、3 週間入院運動プログラムによる痛み、身体・認知機能、包括的 QOL、うつや睡眠の改善について検討し、脳の resting-state functional connectivity の解析による脳機能変化についても紹介した。 演者：仙波恵美子　**藤田信子**

教　育　研　究　業　績　書

令和２年　3月31日

氏名　　城野　靖朋

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
人間医工学、健康・スポーツ科学、神経科学	理学療法学、運動処方と運動療法、臨床神経科学

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1)確認テストによる理解度の確認と復習の支援	平成28年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動療法学」（2年次配当　2単位）において実践した。講義の要点を理解できているかを毎回の講義で確認テストを行った。また、その小テストの問題と解答を学内ネットワーク上のフォルダで閲覧可能な状態とし、自主学習を促した。
2)中間テストによる理解度の確認と、理解度の低い学生を対象とした学習支援	平成28年10月 ～ 平成29年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動療法学」（1年次配当　1単位）において実践した。本講義は1年生を対象にした専門科目であったので、専門領域の学習に難渋する学生がいることも想定された。そこで、講義内容の理解度を確認するための中間テストを実施し、学生の理解度の把握に努めた。中間テストの得点の低かった半数程度の学生を対象に誤答問題の解説作成を課題とし、個別の添削を通して指導を行った。さらに、特に得点の低かった学生（クラスの1/4程度）には授業時間以外の時間を利用して個別に指導を行った。個別指導を実施した学生の中間試験の平均点（個別指導前）はクラス全体の平均点の40%の得点だったが、終講試験（個別指導後）の平均点はクラス全体の平均点の87%の得点となった。講義内容の理解度が低い学生に対して個別性の高い指導を行うことで、専門科目の学習初期段階における学力の向上に効果的があった。
3)少人数グループでの実習指導	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門基礎科目「解剖学実習」（2年次配当　1単位）の実習で取り組んだ。学生を10人程度の少人数グループに分け、複数の教員でそれぞれが一グループを担当した。実習では体表解剖のチェック項目を設定し、それを基にを体表から骨指標や筋などの触診を指導し、テスト形式で修得度の確認を行い、学習を支援した。
4)学生による演習内容の実演を中心とした演習授業の実施	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動器障害評価法Ⅱ」（2年次配当　1単位）において実践した。学生の主体的な取り組みを支援する目的で、学生がペアで評価方法を実演する形式をとり、学生の実演する評価方法で不足している内容はその場で指導、訂正を行い、その後全学生で演習を行った。学生ペアと実演する評価内容は事前に学生に伝え、演習の事前学習を促した。実演担当の授業日までに教科書と教科書付属のDVDでの事前学習を課題とした。DVDは全学生が保有していたが、学内にも2ヶ所、学生が視聴できる場所を設けて事前学習を支援した。ほとんど毎日いずれかの学生が演習の予習、復習を行っており、教員にだけでなく学生間でも質問や指導が行われるなど、積極的に学習へ取り組む学生の姿がみられた。

5)授業理解度の聞き取り調査と補講の実施、ならびに講義スライド閲覧による自己学習支援	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門基礎科目「運動器系解剖学」（1年次配当　4単位）の担当10コマ（上下肢の筋学各論）において実践した。専門的な科目を初めて受講する講義なので、数名の学生から理解が不十分な内容について聞き取り調査を行った。また、その内容に基づいた補講を行い、学習の理解に努めた。また、講義スライドを学内のパソコンやタブレット端末で学生がいつでも閲覧できる状態にし、自主学習を促した。補講後には講義時間以外での質問が増えるなど、分からないことをそのままにしない学習姿勢が身についた。
6)臨床動画の活用	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「理学療法学総合演習Ⅰ」（3年次配当　1単位）において実践した。理学療法評価のひとつである動作分析について、その基礎的な内容を講義した後に、脳卒中後片麻痺者の理学療法（歩行練習）の動画を視聴して実際の臨床を想定した学習支援を行った。その結果、動画を視聴しながら動作の模倣を行うなど、積極的な学習の姿勢が見られた。
7)暗記カード形式のプリント配布による自己学習支援	令和元年9月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の専門基礎科目「人体構造学Ⅲ」（1年次配当　1単位）において実施した。暗記が中心となる科目なので、記憶の定着を目的に暗記カードを作成できる授業資料を作成した。授業時間外の学習ツールを提供することで反復学習が必要となる暗記学習を支援したが、学生が授業時間外で暗記している場面がみられるなど、学生に自主的な学習姿勢姿勢が見られた。
2　作成した教科書，教材 1)確認テストの作成	平成28年4月 ～ 平成28年9月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門科目「運動療法学」（2年次配当　2単位）において作成した。
2)授業時間外に復習できるスライドの作成	平成29年4月 ～ 平成30年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の専門基礎科目「運動器系解剖学」」（1年次配当　4単位）の講義スライドを学内のパソコンやタブレット端末で学生がいつでも閲覧できる状態にし、自主学習を促した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1)大阪行岡医療大学の授業評価アンケート	平成29年4月 ～ 平成29年9月	・大阪行岡医療大学の授業評価アンケート（4段階評価で「4」が最も良い）のうち、一人で担当する「運動器障害評価法Ⅱ」で回収した授業評価アンケートは概ね「4」、もしくは「3」の評価であった。

4　実務の経験を有する者についての特記事項		
1)理学療法士養成校から受け入れてた実習生に対する指導	平成20年2月 ～ 平成23年1月	複数の理学療法士養成校から臨床実習生を受け入れており、そのうちの5名の実習生にはケースバイザーとして症例レポートの作成、院内における症例発表の指導までを行った。実習生の学習を支援する目的で以下のような環境設定に取り組んだ。 ・実習指導を統括する責任者と相談し、実習生との信頼関係が構築しやすく、障害像が複雑過ぎない患者を選択し、実習が行えるよう調整 ・実習指導責任者と連携し、実習指導内容の確認や修正を行いながら実習指導を実施 ・医師や他職種からの情報収集を実習生が直接行えるように調整 ・実習の進捗状況によって、疾患の異なる複数の患者（中枢神経疾患の患者と整形外科疾患の患者など）について、理学療法プロセスが経験できるように調整 ・理学療法プロセスの模倣ができるよう、指導者による指導だけでなく、理学療法士や他の実習生の症例発表に参加できるよう調整 ・他の理学療法士や他職種にも実習生が直接指導を受けられる機会を設け、様々な意見や考えを聞けるように調整 ・実習で取り組んだこと、考えたことをまとめて発表する機会を設定（症例発表）
6)病院職員に対する体位変換に関する講習	平成25年9月	病院の職員を対象に、意識レベルが低いなどで自力での寝返りが行えない入院患者に対する体位変換について、静止画での説明と演習の実施を交えた講習を実施した。
7)移乗動作介助に関する講習	平成26年9月	病院の職員を対象に、脳卒中後の機能障害によって自力での移乗が行えない入院患者に対する移乗時の介助方法について、動画による説明と実技演習を交えた講習を実施した。
8)模擬講義の講師	平成28年8月	大阪行岡医療大学のオープンキャンパスの内容のひとつとして「腰痛講座」と題し、実演を交えた日常生活動作指導や運動療法について模擬講義を行った。
9)腰痛予防講の講師	平成30年12月	公立学校共済組合大阪支部が主催する腰痛予防講座事業の講師の一人として、参加者42名に対して講師2名で実演を交えた日常生活動作指導や運動療法について模擬講義を行った。
5　その他 1)奈良学園大学保健医療学部看護学科における教育実績	平成29年6月 ～ 平成29年9月	奈良学園大学保健医療学部看護学科における非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「ヘルスプロモーション論」 　奈良学園大学保健医療学部看護学科の非常勤講師として担当の「ヘルスプロモーション論」（選択科目、2年次配当、半期、選択2単位）において、運動学の基礎的な内容と、運動療法で用いられる運動と身体機能への効果について授業を行い、それによって、学生に運動を用いたヘルスプロモーションの方法を理解させる教育効果があった。

2)大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科における教育実績	平成28年4月 ～ 平成31年3月	大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科における専任教員（助教）として、以下のような科目を担当した。
	平成28年4月 ～ 平成29年3月	「運動療法学」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「運動療法学」（専門科目、2年次および1年次配当、半期、必須2単位）において、運動療法を適切に行うための基礎的な知識と運動器や神経系疾患、内部障害など目的に合わせた運動手技について授業を行った。それによって、学生に運動療法の目的と治療計画立案など基礎理論を理解させる教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「解剖学実習」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「解剖学実習」（専門基礎科目、2年次および1年次配当、半期、必須1単位）において、人体を体表から観察することによる肉眼的構造の理解を促す授業を行い、それによって、学生に具体的実体として人体の構造を理解させる教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「運動器系解剖学」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「運動器系解剖学」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須4単位）において、運動器を構成する筋に関する内容を担当し、その授業を通して、学生に身体運動を理解する基礎を理解させる教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「理学療法概論」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「理学療法概論」（専門科目、1年次配当、半期、必須2単位）において、理学療法における筋の知識の重要性に関する内容を担当し、その授業を通して、学生に理学療法への興味・関心を高める教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「運動器障害評価法Ⅱ」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「運動器障害評価法Ⅱ」（専門科目、2年次配当、半期、必須1単位）において、筋系障害の評価の理論と技術について授業を行い、それによって、学生に筋系の評価と位置づけ、筋力検査の意義を理解させることと、その方法を習得させることの教育効果があった。
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「理学療法学総合演習Ⅰ」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「理学療法学総合演習Ⅰ」（専門科目、4年次配当、半期、必須1単位）において、理学療法の評価過程に必要な情報収集と検査・測定技術の向上を目的に授業を行い、それによって、学生に理学療法評価を理解させることと、理学療法評価の立案と実施方法を習得させる教育効果があった。
	平成29年10月 ～ 平成31年3月	「理学療法学総合演習Ⅱ」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「理学療法学総合演習Ⅱ」（専門科目、4年次配当、半期、必須1単位）において、模擬症例やグループワークを通して理学療法プロセスを経験する授業を行い、それによって、学生に理学療法の目標と治療プログラムの立案と具体的な実施方法を理解させ、実践力を養う教育効果があった。

	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床体験実習」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床体験実習」（専門科目、2年次配当、半期、必須1単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、理学療法の見学を通して理学療法業務について学び、問診や評価を一部体験するなどの実習を行った。それによって、学生に理学療法の意義と役割の理解させるだけでなく、理学療法士として今後習得しなければならない能力を認識させる教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床評価実習」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床評価実習」（専門科目、3年次配当、半期、必須3単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、症例に応じた基本的な障害評価の方法を経験し、障害の種類や程度を具体的に把握するなどの実習を行った。それによって、学生に理学療法の基本的な評価技術を習得させる教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床総合実習Ⅰ」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床総合実習Ⅰ」（専門科目、4年次配当、半期、必須6単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、理学療法の対象となる代表的な疾患について障害評価から治療計画の立案までの過程の実施と、理学療法の治療の一部を体験するなどの実習を行った。それによって、学生に一連の理学療法プロセスを実施できる能力を向上させる教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「臨床総合実習Ⅱ」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「臨床総合実習Ⅱ」（専門科目、4年次配当、半期、必須8単位）において、学外施設の臨床実習指導者と連携して、理学療法の対象となる代表的な疾患について障害評価から治療計画の立案までの過程の実施と、理学療法の治療の一部を体験するなどの実習を行った。それによって、学生に一連の理学療法プロセスを実施できる能力を向上させる教育効果があった。
	平成28年4月 ～ 平成31年3月	「卒業研究」 大阪行岡医療大学医療学部理学療法学科の助教として担当の「卒業研究」（専門科目、4年次配当、通年、必須4単位）において、今まで学習してきたことの見直し、文献検索、研究方法の選択や論文の書き方の指導を行った。それによって、学生に具体的なテーマを選択し、自ら研究する姿勢と能力を養う教育効果があった。 ・平成29年度の卒業研究のテーマ 「閉塞性換気障害と拘束性換気障害におけるADL指導の違い」「筋緊張の分類とその特徴、そして治療法、理学療法アプローチについて」「ギラン･バレー症候群と多発性硬化症の比較」 ・平成30年度の卒業研究のテーマ 「トップアスリートへの理学療法的アプローチについて」「整形外科疾患の歩行の特徴について」 「パーキンソン病の運動症状の特徴」

3)大阪ハイテクノロジー専門学校柔道整復師学科における教育実績	平成29年4月 ～ 平成31年3月	大阪ハイテクノロジー専門学校柔道整復師学科における非常勤講師として、以下の科目を担当した。 「リハビリテーション医学」 大阪ハイテクノロジー専門学校柔道整復師学科の非常勤講師として担当の「リハビリテーション医学」（3年次配当、前期-必須1単位、後期-必須1単位）において、脳や脊髄、運動器、呼吸器などの幅広い疾患による障害と、障害をリハビリテーションの観点から治療することについて授業を行い、それによって、学生にリハビリテーションの意義とリハビリテーションに携わる職種の役割を理解させる教育効果があった。
4)奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における教育実績	平成31年4月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科における専任教員（講師）として、以下のような科目を担当した。
	平成31年9月 ～ 現在に至る	「運動学Ⅰ」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「運動学Ⅰ」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。主に運動の心身への影響と運動学習について授業を行った。それによって、学生に運動をリハビリテーションに応用するための基礎的な理論を理解させる教育効果があった。
	平成31年9月 ～ 現在に至る	「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。主に脳神経系に関する生理機能を系統的に理解できるように授業を行った。それによって、学生に理学療法士・作業療法士にとって動物性機能が必要な意味を理解させる教育効果があった。
	平成31年9月 ～ 現在に至る	「人体構造学Ⅲ（神経・運動器）」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」（専門基礎科目、1年次配当、半期、必須1単位）をオムニバス形式で5回分の授業を担当した。主に運動の発現とそれを統制・支配する脳神経系の機能解剖を説明できるように授業を行った。それによって、学生に、これらの知識を基に機能解剖や運動学との関連性、臨床面への応用について理解させる教育効果があった。
	平成31年9月 ～ 現在に至る	「基礎ゼミⅡ」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「基礎ゼミⅡ」（共通教育科目、1年次配当、半期、必須1単位）を少人数のゼミ形式で１年次生が大学の学習に慣れ、４年間の大学生活を有意義に送るための基礎を修得できるよう授業を担当した。最終的には一人一つのテーマを設定し、具体的には、講義ノートの取り方、文献資料の検索、学術的な文章の読み方などについて、ゼミ形式の演習を通じて学修し、最終的には１人１テーマで学習した内容をまとめてプレゼンテーションを行った。それによって、学生に大学における能動的な学びを理解させ、慣れさせる教育効果があった。

	平成31年9月 ～ 現在に至る	「早期体験実習(理学療法)」 奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の講師として担当の「早期体験実習(理学療法)」（専門科目、1年次配当、半期、必須1単位）を担当した。教員引率による臨地での見学実習、および学内でのセミナーを通して、理学療法の役割と位置付けを学修させ、他職種の専門性と相互の連携を理解させ、理学療法士への動機付けと学習意欲を高める効果があった。
5)Journal of Physical Therapy Scienceの査読	平成28年6月	原著論文1編の査読を担当した。
6)第9回三島ブロック新人症例発表会の査読委員	平成28年9月	大阪府理学療法士学会三島ブロックの新人症例発表の抄録の査読を2名分担当した。
	平成29年9月	大阪府理学療法士学会三島ブロックの新人症例発表の抄録の査読を3名分担当した。
7) PLOS ONEの査読	令和元年年9月	原著論文1編の査読を担当した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　資格，免許 理学療法士	平成19年5月	理学療法士免許登録（第63125号）
修士（保健福祉学）	平成25年3月	県立広島大学　第419号 題名「二重課題訓練の注意に関する指示が姿勢動揺に与える影響」
博士（保健学）	平成28年3月	大阪府立大学　第15号 題名「The effect of tonic contraction of one hand muscle on motor area of tonically contracting another hand muscle 」（訳文：手指筋緊張性収縮が緊張性に収縮する隣接運動野表象へ及ぼす影響）
2　特許等 なし		

3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)東浦平成病院理学療法士	平成21年1月 ～ 平成23年1月	回復期病棟に勤務。 回復期病棟の専従理学療法士として、回復期病棟で個別リハビリテーションを行うリハビリテーション専門職種のリーダーとして、回復期リハビリテーション病棟業務に従事した。リハビリテーションプログラムの検討、退院前の在宅訪問評価、退院先の検討など、理学療法士の視点からチーム医療に携わった。 　個別には脳血管疾患をはじめとする中枢神経疾患患者、整形外科疾患をはじめとする運動器疾患患者や肺炎後や外科的術後の廃用症候群の患者などを対象にした理学療法に従事した。
2)白須整形外科クリニック理学療法士	平成23年1月 ～ 平成25年3月	変形関節症、肩関節周囲炎、人工関節置換術後や腱板断裂術後など多くの運動器疾患患者の理学療法に従事した。また、オスグッドシュラッター病、脊椎分離症など若年者の理学療法も実施した。微弱電流治療器という新奇性のある物理療法の実施も行った。
3)大津病院理学療法士	平成25年4月 ～ 平成27年8月	療養病棟に勤務。 慢性期の整形外科疾患、呼吸器疾患、中枢神経疾患の入院患者への理学療法に従事した。 外来リハビリテーションに勤務。 脳卒中後で片麻痺のある地域在住高齢者の外来での理学療法に従事した。 在宅訪問サービス
4)ゆきおかデイケアセンター理学療法士	平成28年4月 ～ 平成31年3月	週に1回程度の頻度で、行岡病院の通所リハビリテーションで個別理学療法に従事した。対象は脳血管疾患、脊髄小脳変性症などの中枢神経疾患、変形性膝関節症、人工膝関節術後、腰椎圧迫骨折などの運動器疾患を背景に持つ地域在住の高齢者である。
4　その他 特記事項なし		

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし				
（学術論文） 1 イメージ能力の差がメンタルプラクティスによる筋力増強効果に与える影響 （査読付）	共著	平成24年11月	運動療法と物理療法 23巻3号，pp.302-307	整形外科疾患、中枢神経疾患、また、高齢や廃用症候群によって重度の筋力低下がみられる対象の運動療法の開発を目的として、健常成人を対象にメンタルプラクティスによる膝伸展筋力増強効果を検証した。メンタルプラクティスは等尺性膝伸展筋力を有意に増強させた。イメージする課題中の脳血流量を、近赤外光脳機能イメージング装置で測定したところ、前頭葉領域の脳活動賦活が確認された。したがって、メンタルプラクティスによる筋力増強効果は、脳活動を賦活させることによる神経性要因による可能性が示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈、特に脳機能に関する部分の考察について部分的に担当。 執筆者：谷出康士，金井秀作，城野靖朋，後藤拓也
2 高齢者にみられる浮き趾と足趾運動機能および姿勢制御能力について （査読付）	共著	平成25年3月	理学療法の臨床と研究 22号，pp.15-19	浮き趾と足趾運動機能、姿勢制御能力の関連について検証した。足趾が全て接地している対象と比較し、足趾の接地状態が不良な対象では、Functional reach testの距離および足趾荷重量が低値を示し、Center of foot pressure軌跡の後方偏移を認めた。また、これらの対象では足趾筋力が低値を示し、足趾屈曲が困難であった。したがって、浮き趾を有する高齢者では姿勢制御能力や足部機能が低下している可能性が示唆された。このことは、健常高齢者に限らず、リウマチなどの運動器疾患や痙縮などの中枢神経疾患による足趾変形の理学療法評価と関連する知見である。 本人担当部分：研究結果と姿勢制御能力の関係について考察するなど、考察を部分的に担当。 執筆者：長谷川正哉，金井秀作，島谷康司，城野靖朋，島田雅史，大塚彰
3 二重課題訓練の注意に関する指示が姿勢動揺に与える影響 （修士論文）	単著	平成25年3月	県立広島大学	注意機能の低下がみられる中枢神経疾患患者や高齢者の理学療法を想定し、健常成人を対象とした運動課題と認知課題の二重課題干渉効果ならびに、二重課題練習における注意に関する指示の影響を検証した。運動課題と認知課題の二重課題干渉効果によって、運動課題パフォーマンスは向上し、認知課題パフォーマンスは低下することが示唆された。また、二重課題練習時の注意に関する指示は与えず、自由に練習させることで、運動課題パフォーマンスが即時的に向上することが示唆された。 A4判　全25頁

4 運動課題と認知課題の二重課題干渉効果 （査読付）	共著	平成25年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 3巻2号，pp.47-51	運動課題にタンデム立位保持課題、認知課題にストループ干渉課題を用いて、各課題パフォーマンスが受ける二重課題干渉効果について検証した。二重課題干渉効果でタンデム立位の重心動揺面積は縮小し、ストループ干渉課題の正当数が減少した。したがって、運動課題と認知課題の二重課題干渉効果によって、運動課題のパフォーマンスは向上し、認知課題のパフォーマンスは低下することが示唆された。このことは、注意機能の低下がみられるような高齢者や中枢神経疾患患者にはより顕著に観察される可能性があり、そのような対象者の理学療法評価で二重課題の干渉を考慮する必要性を示している。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、結果の分析、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 執筆者：城野靖朋，金井秀作，後藤拓也，原田亮，藤高祐太，谷出康士，長谷川正哉，大塚彰
5 二重課題練習における注意の指示の影響 （査読付）	共著	平成25年8月	理学療法科学 28巻4号，pp.533-537	中枢神経障害や加齢の影響によって注意機能が低下している患者への理学療法では、効率的に運動学習が達成されるための注意の操作は重要な問題である。そこで健常成人を対象に、二重課題練習における注意に関する指示方略の影響を検証した。二重課題練習時に注意の指示を与えない方略による練習で、二重課題の運動課題パフォーマンス、高難易度運動課題パフォーマンスが即時的に向上した。したがって、二重課題練習時の注意に関する指示は与えず、自由に練習させることで、運動課題パフォーマンスが即時的に向上することが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、結果の分析、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 執筆者：城野靖朋，金井秀作，後藤拓也，原田亮，藤高祐太，谷出康士，長谷川正哉，大塚彰

6 Different corticospinal control between discrete and rhythmic movement of the ankle. （査読付） （足関節背屈の単発運動とリズミカル運動との間における皮質脊髄制御の違い）	共著	平成26年7月	Frontiers in Human Neuroscience Vol. 8 article.578 （訳文：フロンティアイン　ヒューマンニューロサイエンス）	中枢神経障害や運動器障害によって生じる歩行障害の理学療法では連続的な歩行練習と分節的な歩行練習とが行われる。そこでこれらの違いを神経生理学的に明らかにするため、リズミカルな足関節底背屈運動と、1回の足関節底背屈運動における皮質脊髄制御ならびに脊髄制御の違いを検証した。その結果、前脛骨筋の運動誘発電位が、リズミカルな運動の後期で有意に大きかった。このことから、リズミカルな運動の初期と後期で皮質脊髄制御が異なる可能性が示唆された。この結論は、理学療法における歩行練習が連続的もしくは分節的に行うかによって、皮質脊髄制御のレベルで違いがあることを示している。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。運動誘発電位とH反射の結果から，神経的な制御機構に関する考察を行った。 執筆者：Goto Y.（後藤夢野），Iono Y.（城野靖朋），Hatanaka R.（畑中良太），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）
7 Bimanual coordination of force enhances interhemispheric inhibition between the primary motor cortices. （査読付） （両手間force協調が一次運動野の半球間抑制を強化）	共著	平成26年10月	NeuroReport Vol. 25(15) pp.1203-1207 （訳文：ニューロレポート）	一次運動野の半球間抑制は、中枢神経障害による運動麻痺に影響を及ぼしていると考えられている。その半球間抑制が運動制御に及ぼす影響を明らかにするため、Forceの両手協調が、一次運動野の半球間抑制に与える影響を神経生理学的に検証した。左右の示指外転運動による両側間force調整が不要な課題と比較して、両側間force調整が必要な課題で半球間抑制が増大した。したがって、両側間でforceを調整する運動の協調において一次運動野の活動が抑制されることを示唆した。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察を部分的に担当。 執筆者：Hiraoka K.（平岡浩一），Ae M.（阿江実乃里），Ogura N.（小倉奈々），Sano C.（佐野千紗），Shiomi K.（塩見啓悟），Morita Y.（森田祐司），Yokoyama H.（横山遥香），Iono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujo Y.（中條雄太）

8 Asymmetry of anticipatory postural adjustment during gait initiation. （査読付） （歩行開始時の予測的姿勢制御の非対称性）	共著	平成26年10月	Journal of Human Kinetics Vol.42 pp.7-14 （訳文：ジャーナル オブ　ヒューマンキネティクス）	歩行開始時の重心移動は、まず歩行を開始する足側かつ後方へ重心が移動する。これは予測的姿勢制御を反映しているが、パーキンソン病患者の外的合図による歩行開始では、歩行開始足と反対側に最初の重心移動が生じることが多くなる（予測的姿勢制御の誤り）。そこで、歩行開始足の選択プロセスの違いが、歩行開始時の予測的姿勢制御の非対称性へ与える影響を運動学的に検証した。外的な合図による歩行開始時の重心移動は、歩行開始足が右足や自由に選択した足よりも左足の場合に有意に側方へ変移した。本研究結果は外的合図による歩行開始時の予測的姿勢制御の左右非対称性を示唆する。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。結果の解釈、考察を部分ではパーキンソン病のすくみ足に関して臨床的観点から議論を行った。 執筆者：Hiraoka K.（平岡浩一），Hatanaka R.（畑中良太），Nikaido Y.（二階堂泰隆），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujyo Y.（中條雄太）
9 The effect of tonic contraction of the finger muscle on the motor cortical representation of the contracting adjacent muscle. （査読付） （手指筋緊張性収縮が収縮中の隣接手指筋運動野表象に与える影響）	共著	平成27年4月	Somatosensory & Motor Research Vol.32(2) pp.114-121 （訳文：ソーマトセンソリー　アンド　モーターリサーチ）	中枢神経疾患の運動障害である共同運動は、活動を意図していない筋に隣接する筋活動からの影響が及んでいる。そこで、隣接筋間の活動の関係性を明らかにするため、手指筋支配運動野表象に隣接手指筋活動が与える影響を神経生理学的に観察した。隣接筋活動の影響により興奮性の重心が運動野内側へ偏移した。隣接筋運動野表象との重複表象の興奮性は変化しなかったが、非重複表象の興奮性は抑制された。非重複表象は重複表象よりも外側に位置していた。したがって、隣接筋活動は非重複表象の興奮性を抑制し、興奮性の重心を偏移させることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 執筆者：Jono Y.（城野靖朋），Chujo Y.（中條雄太），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Nikaido Y.（二階堂泰隆），Hatanaka R.（畑中良太），Hiraoka K.（平岡浩一）

10 Monaural auditory cue affects the process of choosing the initial swing leg in gait initiation. （査読付） （モノラルな音刺激が歩行開始足の選択過程に与える影響）	共著	平成27年4月	Journal of Motor Behavior Vol.47(6) pp.522-526 （訳文：ジャーナルオブ　モータービヘイバー）	すくみ足のみられるパーキンソン病患者では、歩行開始足の左右の選択にばらつきが生じる。また、音信号は歩行開始時の反応時間や歩幅、予測的姿勢制御などに影響を与えることが知られている。そこで歩行開始足の選択に音信号が与える影響を検証した。開始足に選択しにくい足側からの音信号は、開始足に選択しにくい足を開始足に選択する確率を増大させた。しかし、常時同側から音信号与える実験では、開始足に選択しにくい足を選択する確率を増大させなかった。したがって、選択しにくい足側への音信号は、それが予測できない場合に、選択しやすい足を選択する優先性を弱めることが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案部分ではパーキンソン病のすくみ足に関して臨床的観点から議論を行った。 執筆者：Hiraoka K.（平岡浩一），Ae M.（阿江実乃里），Ogura N.（小倉奈々），Sano C.（佐野千紗），Shiomi K.（塩見啓悟），Morita Y.（森田祐司），Yokoyama H.（横山遥香），Iwata Y.（岩田泰幸），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujo Y.（中條雄太）
11 不安定面での姿勢制御能力が地域在住高齢者の転倒に及ぼす影響―不安定面での重心動揺検査における検証― （査読付）	共著	平成27年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 5巻2号，pp.75-79	地域在住高齢者の不安定面での姿勢制御能力が転倒にどう影響するかを運動学的に検証した。過去1年間の転倒歴から転倒群と非転倒群とを分類し、ラバー負荷使用による姿勢制御能力を比較した。その結果、重心動揺面積ならびに軌跡長に有意な差は認められなかったが、ラバー負荷時のロンベルク率で、非転倒群で高値だった。したがって、転倒群の姿勢制御は非転倒群と比べ下肢の体性感覚への依存が少ない可能性が示唆された。このことは地域在住高齢者に対する理学療法のみならず、健康増進、予防理学療法にとって重要な知見である。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察の姿勢制御に関する議論を行い、部分的に担当。 共同発表者：藤高祐太，金井秀作，原田亮，後藤拓也，城野靖朋，田中聡，大塚彰

12 Corticospinal Excitability in the Hand Muscles is Decreased During Eye Movement with Visual Occlusion. （査読付） （視覚遮断下での眼球運動による手内在筋皮質脊髄興奮性の減少）	共著	平成28年2月	Perceptual and motor skills Vol.122(1) pp.238-255 （訳文：パーセプチャル　アンド　モータースキルス）	眼と手の協調的な運動制御を神経生理学的に明らかにするため、眼球運動命令が手指筋支配皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響を検証した。眼球運動前と比較して、眼球運動開始から終了を4分割した第3相の手指筋支配皮質脊髄路興奮性が有意に減少した。筋の違い、眼球運動方向および筋が収縮した場合の指運動方向に影響を受けなかった。したがって、眼球運動命令が手指筋への運動命令を生成しなかった。また、抑制は前腕肢位の影響を受けなかったため、視覚的フィードバックが存在しないときに前腕筋の固有受容によって抑制が影響されなかったことを示した。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 執筆者：Chujyo Y.（中條雄太），Jono Y.（城野靖朋），Tani K.（谷恵介），Nomura Y.（野村佳史），Hiraoka K.（平岡浩一）
13 Corticospinal modulations during bimanual movement with different relative phases （査読付） （異なる相対位相の両側運動中における皮質脊髄変調）	共著	平成28年3月	Frontiers in human neuroscience Vol.10 Artikle.95 （訳文：フロンティアイン　ヒューマンニューロサイエンス）	相対位相の異なる両側性運動を用いて皮質脊髄調整による運動制御への影響を神経生理学的に調べた。難易度の高い相対位相の両側性運動中の皮質脊髄興奮性が高かった。このことは、課題の難易度、半球間相互作用の関与、または運動課題を習得するために費やされる労力が大きいことに起因する可能性がある。また、難易度の高い相対位相の両側性運動中の背景筋活動に対する皮質脊髄興奮性の依存性は低かった。このことは、難易度の高い相対位相の両側性運動に対する皮質脊髄の寄与の小ささを反映し得る。この知見は、両手を用いて行う日常生活動作の難易度によって神経系の関与が異なることも示している。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 執筆者：Nomura Y.（野村佳史），Jono Y.（城野靖朋），Tani K.（谷恵介），Chujyo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）
14 The effect of tonic contraction of one hand muscle on motor area of tonically contracting another hand muscle （博士論文） （手指筋緊張性収縮が緊張性に収縮する隣接筋運動野表象へ及ぼす影響）	単著	平成28年3月	大阪府立大学	隣接する手指筋緊張性収縮が、運動野の興奮性および抑制性に及ぼす影響について検証した。第1実験では、隣接筋活動により運動野興奮性分布が運動野の内側へ偏移した。第2実験では、独立性の高い運動に関連する筋の運動野表象の外側が、独立性の低い運動に関連する筋活動によって興奮性が抑制し、抑制性は脱抑制した。したがって、隣接する手指筋緊張性収縮の影響は筋特異的かつ領域特異的であることが示唆された。このことは、中枢神経障害による運動麻痺のパターンの特徴を電気生理学的に示すことに発展する可能性がある。 A4判　全42頁

15 Time and direction preparation of the long latency stretch reflex （査読付） （長潜時反射の時間と方向の準備）	共著	平成28年6月	Human movement science Vol.47 pp.38-48 （訳文：ヒューマンムーブメント　サイエンス）	運動制御に影響を与える予測、反射、感覚情報といった因子が、外力に対して指の位置を保とうとする際の運動反応の潜時へどのような影響を与えるかを神経生理学的に検証した。長潜時の伸張反射は外力の方向に関わらず誘引されたことから、筋伸張の感覚情報だけでなく、運動方向に関係のない感覚情報によっても誘引されることが示唆された。どちらの外力方向に対しても運動反応の時間予測は長潜時伸張反射を促通した。この変調は筋の伸長に媒介されないと考えられる。また、運動反応の方向予測は、その方向に筋が伸長された場合に長潜時伸張反射と皮質脊髄興奮性を促通した。したがって、これらの変調は脊髄反射に媒介されていると考えられる. 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 執筆者：Nikaido Y.（二階堂泰隆），Hatanaka R.（畑中良太），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Tani K.（谷恵介），Chujyo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）
16 The Effect of Monaural Auditory Stimulus on Hand Selection When Reaching （査読付） （モノラルな音刺激がリーチ動作における手の選択へ及ぼす影響）	共著	平成28年8月	Motor control pp.1-23 （訳文：モーターコントロール）	標的物へのリーチ動作に左右どちらの手を選択するかの運動プロセスは、聴覚的な情報処理に関わる脳機能が関係していると推察し、モノラルな聴覚刺激が手選択に及ぼす影響について検証した。右耳への聴覚刺激は右手選択を増大させ、左耳への聴覚刺激は左手選択をわずかに増大させた。手選択が左右均等になる水平視線角度は、右聴覚入力の影響を受けて有意に左へ偏移したが、左聴覚入力の影響を受けなかった。したがって、手選択に対する右聴覚刺激が有意となる効果は、手選択の皮質活動の左右非対称性を示唆する。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 執筆者：Tani K.（谷恵介），Jono Y.（城野靖朋），Nomura Y.（野村佳史），Chujyo Y.（中條雄太），Hiraoka K.（平岡浩一）

17 Interhemispheric inhibition induced by transcranial magnetic stimulation over primary sensory cortex （査読付） （一次感覚野への経頭蓋磁器刺激による半球間抑制）	共著	平成28年8月	Frontiers in human neuroscience Vol.10 Artikle.438 （訳文：フロンティア イン　ヒューマン ニューロサイエンス）	中枢神経障害による運動麻痺に影響を及ぼしていると考えられている半球間抑制は、一次運動野だけでなく一次感覚野においても観察されている。一次感覚野を経頭蓋磁気刺激することによる長潜時半球間抑制が触覚入力によって調節されるのか、この抑制が一次運動野を刺激することによって生じる抑制と異なるのかを神経生理学的に検証した。一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、対側示指への皮膚刺激による体性感覚求心性入力が一次感覚野に到達するタイミングで促通した。一次運動野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、指刺激の影響を受けなかった。したがって、一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、体性感覚経路の活動と関連することが考えられ、また、一次運動野を刺激することによる抑制と異なることが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 執筆者：Iwata Y.（岩田恭幸），Jono Y.（城野靖朋），Mizusawa H.（水澤裕貴），Kinoshita A.（木下篤），Hiraoka K.（平岡浩一）
18　地域在住高齢者における三次元複数対象追跡課題のトレーニング効果の検証 （査読付）	共著	平成28年10月	理学療法科学 31巻5号，pp.729-732	脳卒中やパーキンソン病などの既往のある方を含む地域在住高齢者を対象に、三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果を検証した。トレーニング介入群ではTrail Making Test part Aが介入後に有意に短くなった。介入群においてTrail Making Test part AとTimed Up and Go Testの変化比率の間に有意な正の相関が認められた。地域在住高齢者に対する三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果は注意機能および動的バランス能力の向上が期待でき、新しい運動療法として可能性があるだけでなく、健康増進や転倒予防といった予防理学療法に有効であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 執筆者：城野靖朋，辻下守弘
19 Change in excitability of corticospinal pathway and GABA-Mediated inhibitory circuits of primary motor cortex induced by contraction of adjacent hand muscle （査読付） （隣接する手指筋収縮による皮質脊髄の興奮性回路とGABAが介在する抑制性回路の興奮性変化）	共著	平成28年11月	Brain Topography Vol.29(6) pp.834-846 （訳文：ブレイン　トポグラフィー）	隣接する複数の筋活動の協調性が障害されるような脳卒中後の運動障害には，運動系の興奮性や抑制性の問題が影響していると考えられる。そこで本研究では，隣接する手指筋緊張性収縮が運動野の興奮性および抑制性に及ぼす影響について神経生理学的に検証した。小指外転筋活動の影響によって、運動野外側に位置する小指外転筋の運動野表象周辺の第1背側骨間筋の運動野表象で興奮性が減少し、抑制性は脱抑制した。このことから共同的な示指と小指の運動において、独立性の高い運動に関連する筋が独立性の低い運動に関連する筋の活動の影響を受けることを示唆した。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施，論文作成，論文投稿に至るまでを中心的に担当。 執筆者：Jono Y.（城野靖朋），Iwata Y.（岩田恭幸），Mizusawa H.（水澤裕貴），Hiraoka K.（平岡浩一）

20 Processes of anticipatory postural adjustment and step movement of gait initiation（査読付） （歩行開始のステップ動作と予測的姿勢制御の調整過程）	共著	平成29年4月	Human movement science Vol.52 pp.1-16 （訳文：ヒューマンムーブメント　サイエンス）	歩行開始の予測的姿勢調整（APA）とステップ動作のプロセス間の相互作用を検証した。APAは歩行開始前の圧力中心の変移の第1相（S1）で観察した。S1は振出下肢変更あるいは歩行開始動作を中止した場合でも出現し、歩行のAPAとステップ動作は二重プロセスであることが示唆された。S1の側方振幅と持続時間が、振出下肢変更あるいは動作中止により有意に減少した。歩行開始動作の中止プロセスと振出下肢変更はAPAに対して共通の抑制メカニズムを共有している可能性がある。歩行開始の運動プロセスは、すくみ足のあるパーキンソン病患者で障害されていると考えられており、歩行開始の運動プロセスの解明は、パーキンソン病患者に限らず神経系障害患者の理学療法評価につながる知見である。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案部分ではパーキンソン病のすくみ足に関して臨床的観点から議論を行った。 執筆者：Mizusawa H.（水澤裕貴），Jono Y.（城野靖朋），Iwata Y.（岩田恭幸），Kinoshita A.（木下篤），Hiraoka K.（平岡浩一）
21 眼球運動が立位姿勢制御へ及ぼす影響 （査読付）	共著	平成29年4月	理学療法科学 32巻2号, pp.211-214	眼球運動が立位姿勢制御に及ぼす影響を運動学的に検証した。衝動性眼球運動を選択反応課題で行わせた条件の重心動揺総軌跡長は、衝動性眼球運動を単純反応課題で行わせた条件と比較して有意に小さかった。また、滑動性眼球運動を行わせた条件の重心動揺総軌跡長と外周面積は、衝動性眼球運動を選択および単純反応課題で行わせた条件よりも有意に大きかった。したがって、眼球運動による立位姿勢動揺への影響は、眼球運動の反応課題の違いよりも、眼球運動制御の違いによる影響を反映したものと考えられる. 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施，論文作成，論文投稿に至るまでを中心的に担当。 執筆者：城野靖朋，金井秀作
22 大腿四頭筋の運動錯覚を惹起する振動刺激周波数の再現性についての検討 （査読付）	共著	平成30年3月	大阪行岡医療大学紀要 5号, pp.23-27	大腿四頭筋の運動錯覚を惹起する振動刺激周波数の再現性について検証した。Visual Analog Scaleを用いて50Hz、70Hz、90Hz、120Hzのそれぞれの周波数の振動刺激による運動錯覚の程度を1週間以上の間隔をあけて2回評価した。90Hzの周波数にのみ2回の評価間に有意な正の相関がみられた。また、2回の評価間の誤差の種類はすべての周波数で偶然誤差であった。本研究結果より、90Hzの周波数による振動刺激は大腿四頭筋の運動錯覚を惹起させる方法として有用であることが明らかになった。 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 執筆者：神里巌，城野靖朋，粕渕賢志

23 異なる負荷値における足関節背屈可動域測定の信頼性 （査読付）	共著	平成30年3月	大阪行岡医療大学紀要 5号, pp.19-22	低い負荷での足関節背屈可動域測定の信頼性を明らかにする目的で、異なる負荷値における足関節背屈可動域測定の信頼性を検証した。本研究では同一検者による2回の測定を実施した。本研究で用いた25N、50N、75N、100Nすべての負荷におい誤差は偶然誤差で、誤差の範囲は2.74°から3.79°の範囲であった。本研究結果から、負荷値を統一した足関節背屈可動域測定では、低い負荷であっても4°未満の偶然誤差で評価できることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 執筆者：城野靖朋, 神里巌, 岡村和典, 金井秀作, 大塚彰
24 足部内在筋トレーニングの学習における随意運動介助型電気刺激装置の効果　内在筋および外在筋の筋活動からの検討 （査読付）	共著	平成30年10月	物理療法科学 25巻, pp.27-33	本研究ではShort Foot exercise(以下、SFex)の習得を促進する目的で随意運動介助型電気刺激装置(以下、IVES)を利用することの有効性を検討した。その結果、IVESを利用するSFexが、足部外在筋による代償を増加させることなく、従来の方法以上にSFex中の母趾外転筋の筋活動を増加させた。このことから、IVESの利用がSFexの習得の促進に有効であることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 執筆者：岡村和典, 城野靖朋, 山本征孝, 江川晃平, 金井秀作
25 The influence of muscular activities in a squat with hands on a table for ″locomotion training″ (テーブルを用いたスクワットによるロコモーショントレーニングが筋活動に与える影響) （査読付）	共著	平成31年3月	人間と科学: 県立広島大学保健福祉学部誌 (1346-3217)19巻1号 Page49-53(2019.03)	椅子上の座位からテーブルに手を添えたスクワット(HOTS)をした際の筋活動を、通常の立位スクワット(SPS)と比較した。HOTSではテーブルの高さを変えた高位HOTSと低位HOTSの2種類で測定した。その結果、大腿直筋、内側広筋および半腱様筋に関しては、SPSによる筋活動の方が高位HOTSよりも有意に大きかった。これらより、下肢筋の筋活動はテーブルを用いたスクワットが通常のスクワットより必ずしも有意に減少するわけでは無いことが明らかとなり、テーブルの高さを調節することで、効果的で安全なスクワットができることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 論文作成, 論文投稿に至るまでを中心的に担当。 執筆者：金井秀作, 池上あゆみ, 岡村和典, 城野靖朋, 大塚彰

26 前腕マッチング課題の信頼性―自作装置による予備的研究― （査読付）	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要 6号,	本研究では自作の前腕マッチング課題装置を用いた位置覚評価システムの信頼性を検討し、適切な実験プロトコルを提案することを目的とし、肘関節の屈曲課題と伸展課題においてマッチング課題の信頼性を検討した。その結果、マッチング課題には偶然誤差が認められた。信頼性が優秀となるには屈曲課題で10回、伸展課題で7回の計測が必要であることが示された。これらより、本システムによる位置覚の計測は10回以上の計測が必要であることが示された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、論文作成、論文投稿に至るまでを中心的に担当。 執筆者：城野靖朋，神里巖
（その他） 「総説」				
1 ユニバーサルデザインと福祉用具の開発研究	共著	平成25年5月	理学療法えひめ	ユニバーサルデザインの概念に基づき，福祉用具の研究・開発を行ってきた。サリドマイド薬禍障害児の電動義手，進行性筋ジストロフィー症児に対するバネ付き装具の開発に始まり，様々な義手，福祉用具の研究・開発に携わってきた。近年では障害を持つヒトの余暇の利用を支援するタンデムチェアスキーや，砂浜歩行研究に基づく砂浜裸足用5本趾履物，介助者の主観的な負担を軽減する寝返り介助用具を開発した。 本人担当部分：砂浜歩行研究に関する研究を中心的に担当。 共同発表者：大塚彰，長谷川正哉，城野靖朋，田中聡，沖貞明
2 理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けて―経験学習研究における理論的枠組みと課題―	共著	平成31年3月	大阪行岡医療大学紀要 6号, pp. 23-33	理学療法士の経験学習プロセスの解明と支援方法の開発に向けて、これまで多くの専門職の経験学習プロセスを明らかにしてきた松尾による経験学習研究の理論的枠組みを要約するとともに、それらによって解明された看護師と保健師の経験学習プロセスについて要約した。これらを踏まえ、我々が計画している理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けた研究的枠組みに関する課題を考察した。 本人担当部分：理学療法士の経験学習プロセスの解明に向けた研究的枠組みに関する課題の考察に関して、部分的に担当。 共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子

「学会発表」 ＜国際学会＞ 1 Effects of cerebral blood-flow change during muscle power enhancing training with mental practice. （訳文：メンタルプラクティスによる筋力増強訓練における脳血流量変化の影響）	－	平成25年9月	The 6th WCPT-AWP & 12th ACPT Congress 2013 （於台湾） （訳文：第6回世界理学療法アジア西太平洋地域学会および第12回アジア理学療法学会の合同学会）	メンタルプラクティスによる膝伸展筋力増強効果を検証した。2週間のメンタルプラクティスによる筋力増強効果の評価と、イメージ課題中の脳血流量を測定した。メンタルプラクティスは等尺性膝伸展筋力を有意に増強させた。イメージ課題中は、前頭葉領域の脳活動賦活が確認された。したがって、メンタルプラクティスは脳活動を賦活させることで、神経性要因による筋力増強効果を得ている可能性が示唆された。これは、整形外科疾患、中枢神経疾患、また、高齢や廃用症候群によって重度の筋力低下がみられる対象の運動療法となりうる。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：Daniide Y.（谷出康士），Kanai S.（金井秀作），Jono Y.（城野靖朋），Goto T.（後藤拓也）
2 Study of dual-task cost by manipulating the attentional demands of a cognitive and motor task. （訳文：認知課題と運動課題における注意需要量を統制した二重課題コストの研究）	－	平成25年9月	The 6th WCPT-AWP & 12th ACPT Congress 2013 （於台湾） （訳文：第6回世界理学療法アジア西太平洋地域学会および第12回アジア理学療法学会の合	二重課題によるパフォーマンスの低下（dual-task cost）は、高齢者や中枢神経疾患患者で顕著にみられ、日常生活動作能力へ影響を及ぼす重要な問題である。そこで、注意需要量を統制した運動課題下での認知的負荷によるdual-task costへの影響を検証した。難易度を注意需要量で統制した二重課題条件を設定し、単一運動課題能力の高い群と低い群とでdual-task costを比較した。両群間でdual-task costに有意な差をみとめなかった。したがって、二重課題におけるdual-task costは、単一運動課題能力に影響されない可能性が示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：Goto T.（後藤拓也），Okita K.（沖田一彦），Hasegawa M.（長谷川正哉），Tanaka S.（田中聡），Shimatani K.（島谷康司），Jono Y.（城野靖朋），Daniide Y.（谷出康士），Harada R.（原田亮），Fujitaka Y.（藤高祐太），Kanai S.（金井秀作）

＜国内学会＞ 1 メンタルプラクティスによる筋力増強効果の検討	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会 （於神戸ポートピアホテル）	イメージ課題を用いたメンタルプラクティスによる筋力増強効果を検証した。メンタルプラクティスは等尺性膝伸展筋力を有意に増強させた。等尺性膝伸展筋力測定をイメージする課題中の脳血流量を、近赤外光脳機能イメージング装置で測定したところ、前頭葉領域の脳活動賦活が確認された。したがって、メンタルプラクティスは脳活動を賦活させ、神経性要因による筋力増強効果を得ることが示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈，考察を部分的に担当。 共同発表者：谷出康士，金井秀作，城野靖朋，後藤拓也，島谷康司，長谷川正哉，大塚彰
2 変形性膝関節症に対する微弱電流の効果	－	平成20年8月	第20回日本物理療法学会学術大会 （於佛教大学）	変形性膝関節症患者を対象に，微弱電流の効果を疼痛および歩行の変化から検討した。対象は70歳代の左変形性膝関節症患者1名とし，通常の理学療法に微弱電流治療を追加した。介入一日目に，疼痛の軽減と歩行時の左下肢単脚支持期の延長がみられた。介入二日目以降，治療前後の変化は観察できなかったが，一日目の治療効果は維持できていた。本症例は微弱電流治療の介入一日目に，疼痛緩和による単脚支持期の延長が観察された。 本人担当部分：研究計画の立案から介入の実践，発表資料の作成，発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，堀内賢，岡田裕尚，百々美樹，白須健司
3 運動野表象に対する隣接筋随意収縮の影響	－	平成26年5月	第49 回日本理学療法学術大会 （於パシフィコ横浜）	試験筋随意収縮中に隣接筋を随意収縮させた時に生じる試験筋支配運動野表象分布の変化を観察し、試験筋随意収縮中の隣接筋活動の影響を神経生理学的に検証した。隣接筋活動の影響を受けて、試験筋運動野興奮性分布の重心は内側へ偏移した。試験筋随意収縮中の隣接筋活動は、試験筋運動野表象の興奮性分布を変化させることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，中條雄太，谷恵介，野村佳史，二階堂泰隆，畑中良太，平岡浩一

4 外乱予測が筋反応および反応前期の皮質脊髄興奮性に与える影響	－	平成26年5月	第49 回日本理学療法学術大会 （於パシフィコ横浜）	外乱方向および外乱タイミング予測が外乱に対する筋反応と反応前期の皮質脊髄興奮性に与える影響を神経生理学的に検証した。タイミング予測により伸展外乱時のみ反応前期皮質脊髄興奮性が増大した。タイミング予測は筋伸張を予測できないにもかかわらず伸展外乱反応前期のみで皮質脊髄興奮性増大に作用することを示唆した。したがって、タイミング予測による反応前期皮質脊髄興奮性増大に筋伸張求心性インパルスが関与することが示唆された。 本人担当部分：実験の実施、研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：二階堂泰隆，畑中良太，城野靖朋，谷恵介，野村佳史，中條雄太，平岡浩一
5 地域在住高齢者における不安定面での姿勢制御能力が転倒にどのように影響を及ぼすか―不安定面での重心動揺検査における検証―	－	平成26年5月	第49 回日本理学療法学術大会 （於パシフィコ横浜）	ラバー負荷重心動揺検査を利用して、地域在住高齢者の不安定面での姿勢制御能力が転倒にどう影響するかを運動学的に検証した。ラバー負荷使用による姿勢制御能力は、転倒と関連しなかった。ラバー負荷時のロンベルク率は、非転倒群で高値を示した。したがって、転倒群の姿勢制御は非転倒群と比べ下肢の体性感覚への依存が少ない可能性が示唆された。 本人担当部分：研究結果の解釈、考察を部分的に担当。 共同発表者：藤高祐太，金井秀作，原田亮，後藤拓也，城野靖朋，田中聡，大塚彰
6 身体軸に対する手指運動方向が手指筋運動野表象に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会 （於福岡国際会議場）	身体軸に対する運動方向の違いが手指筋運動野表象に及ぼす影響を検証した。異なる3つの上肢肢位において手指筋運動誘発電位マッピングを行った。運動方向の違いによる手指筋運動野表象の違いはみられなかった。肩関節角度と肘関節角度の違いで、hotspot内側の手指筋運動誘発電位に有意な差がみられた。したがって、中枢関節角度の影響により手指筋運動野表象内側の興奮性が変化することが示唆された。肢全体の関節に共同運動が生じてしまう中枢神経障害の運動障害と関連する知見である可能性がある。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，中條雄太，谷恵介，野村佳史，畑中良太，岩田泰幸，水澤裕貴，平岡浩一

7 両側forceの協調が皮質間抑制に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会 （於福岡国際会議場）	半球間抑制は中枢神経障害による運動障害と関係していると考えられている。そこで、両側forceの協調が半球間抑制に及ぼす影響を神経生理学的に観察した。半球間抑制は、左右示指同士を直接押し合う協調したforce出力を要する課題において、左右示指間に金属板を挟んだ協調したforce出力を要しない課題と比較して有意に大きくなった。条件刺激と試験刺激の刺激間隔時間の違いが、半球間抑制の大きさに与える影響はみとめなかった。したがって、両側forceの協調は皮質間抑制を促通することが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：平岡浩一，阿江美乃里，小倉奈菜，佐野千紗，塩見啓悟，森田祐司，横山遙香，城野靖朋，野村佳史，谷恵介，中條雄太
8 聴覚刺激が視覚標的リーチ時の手選択に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会 （於福岡国際会議場）	聴覚刺激が視覚反応リーチ課題時の手選択に及ぼす影響を検証した。右利き者のリーチ側選択が左右均等になる水平視線角度は、右聴覚入力の影響を受けて有意に左へ偏移した。左利き者の水平視線角度は、右聴覚入力の影響を受けて半数で左へ偏移したが、残りの半数では算出できなかった。したがって、右聴覚音は右利き者の視覚標的リーチ時の右手選択確率を増加させるが、左利き者において右利き者と異なる機構の存在が示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：谷恵介，城野靖朋，中條雄太，野村佳史，畑中良太，平岡浩一
9 異なる相対位相の両側リズミカル運動における運動制御	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会 （於福岡国際会議場）	相対位相の異なるリズミカルな両側性運動の運動制御を神経生理学的に検証した。難易度の高い相対位相のリズミカル運動で、運動誘発電位が有意に大きくなり、背景筋放電量に対する運動誘発電位の相関が有意に低下した。したがって、高い難易度の両側性運動では皮質脊髄路興奮性は増大するが、筋出力の皮質脊髄制御の依存は小さいことが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：野村佳史，畑中良太，城野靖朋，谷恵介，中條雄太，平岡浩一

10 視覚入力を伴わない衝動性眼球運動が手指筋皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響	－	平成26年11月	第44回日本臨床神経生理学会学術大会 （於福岡国際会議場）	視覚入力を伴わない衝動性眼球運動が、手指筋支配皮質脊髄路興奮性に及ぼす影響を神経生理学的に検証した。眼球運動前と比較して、衝動性眼球運動開始から終了を4分割した第3相の運動誘発電位が有意に減少した。前腕肢位及び筋の違いによる影響はみられなかった。衝動性眼球運動は手指筋支配皮質脊髄路の興奮性を抑制するが、その抑制に視覚、前腕固受容器、および共通経路を介した手指運動命令は関与しないことが示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：中條雄太，城野靖朋，谷恵介，野村佳史，畑中良太，平岡浩一
11 手指筋の緊張性収縮が隣接筋運動野の興奮性および抑制性回路に与える影響	－	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会 （於大阪国際会議場）	手指筋運動野表象の興奮性および抑制性回路に及ぼす隣接筋活動の影響を神経生理学的に検証した。第1背側骨間筋は，小指外転筋と重複していない運動野表象で小指外転筋活動による運動野興奮性および抑制性が抑制された。小指外転筋では第1背側骨間筋活動による運動野興奮性および抑制性は変化しなかった。したがって，隣接筋活動による運動野表象の興奮性変動は筋によって異なることが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施，発表資料の作成，発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，岩田恭幸，水澤裕貴，平岡浩一
12 単耳聴覚性歩行開始合図が振出下肢選択におよぼす影響	－	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会 （於大阪国際会議場）	単耳聴覚性歩行開始合図が振出下肢選択に及ぼす影響を検証した。聴覚合図側が予想不能なセッションで、自己ペース歩行開始動作における振出下肢に選択しにくい下肢側からの聴覚合図は、聴覚合図側の下肢を振出下肢に選択する確率を増大させた。しかし、聴覚合図側が予想可能なセッションでは、有意な変化は観察されなかった。したがって、選択しにくい振出下肢側への予測不能な聴覚合図は、聴覚合図側の下肢選択確率を増加させる。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：平岡浩一，阿江実乃里，小倉奈々，佐野千紗，塩見啓悟，森田祐司，横山遥香，岩田恭幸，城野靖朋，野村佳史，谷恵介，中條雄太

13 一次感覚野への経頭蓋磁気刺激による一次運動野半球間抑制	-	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会（於大阪国際会議場）	一次感覚野への経頭蓋磁気刺激による半球間抑制を神経生理学的に観察した。一次感覚野への経頭蓋磁器刺激により感覚減弱が生じた対象者では、刺激後20 msおよび40msで半球間抑制が観察された。このことから、一次感覚野への経頭蓋磁器刺激で長潜時の半球間抑制を誘発可能であることが示唆された。また、この抑制は感覚減弱が生じた対象者で観察されたことから、皮膚知覚経路に関連していると考えられる。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：岩田恭幸，城野靖朋，水澤裕貴，平岡浩一
14 歩行開始時予測的姿勢制御の動作変換または中止による抑制	-	平成27年11月	第45回日本臨床神経生理学会学術大会（於大阪国際会議場）	歩行開始時予測的姿勢制御における、足底移動中心軌跡のS1相に及ぼす動作変換あるいは中止の影響を運動学的に検証した。歩行開始合図により生じたS1の側方振幅とその持続時間が、振出下肢変更あるいは動作中止により有意に減少した。このことは、歩行開始時の予測的姿勢制御は、他の競合する運動プログラムから抑制フィードバックを受けることを示唆する。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：水澤裕貴，城野靖朋，岩田恭幸，平岡浩一
15 高齢者に対する3次元複数物体追跡課題を用いた視覚認知トレーニングの効果	-	平成28年6月	第44回日本バイオフィードバック学会学術集会（於日本大学文理学部百年記念館）	地域在住高齢者を対象に、三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果を検証した。トレーニング介入群ではTrail Making Test part Aが介入後に有意に短くなった。介入群においてTrail Making Test part AとTimed Up and Go Testの変化比率の間に有意な正の相関が認められた。地域在住高齢者に対する三次元複数物体追跡課題のトレーニング効果は注意機能および動的バランス能力の向上が期待でき、新しい運動療法としての可能性が示唆された。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：辻下守弘，城野靖朋

16 異なる手指運動プロセス間の協調	－	平成28年11月	第46回日本臨床神経生理学会学術大会（於ホテルハマツ）	異なる手指運動プロセス間の協調について検証した。示視屈曲時の示指支配筋単純反応時間は小指運動の影響を受けなかったが、小指屈曲時の小指支配筋反応時間は示指運動の影響を受けて有意に延長した。また、示指支配筋と小指支配筋の反応時間差の試行間標準偏差は、示指と小指の同時外転時に最も小さく、同時屈曲時に最も大きかった。したがって、独立性の高い運動を実行する示指の運動プロセスでは他の指運動プロセスとの干渉はないが、独立性の低い小指の屈曲運動プロセスでは他の指運動プロセスの干渉を受ける場合がある。また、指の外転運動は屈曲運動よりも他の指運動との共同性が高いことが示唆された。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋，岩田恭幸，木下篤，平岡浩一
17 一次感覚野経頭蓋磁気刺激による半球間抑制の体性感覚経路依存性	－	平成28年11月	第46回日本臨床神経生理学会学術大会（於ホテルハマツ）	対側示指への皮膚刺激が、経頭蓋磁気刺激によって観察される長潜時半球間抑制へ及ぼす効果を神経生理学的に観察した。一次運動野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、対側示指への皮膚刺激の影響を受けなかった。一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、一次感覚野を刺激する20ms前に対側示指へ皮膚刺激を与えると促通した。これは体性感覚求心性入力が一次感覚野に到達した時点で、一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制が促通されることを意味する。したがって、一次感覚野を刺激することによる長潜時半球間抑制は、体性感覚経路の活動と関連することが考えられた。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：岩田恭幸，城野靖朋，水澤裕貴，木下篤，平岡浩一
18 リズムフィードバック入力視野がポリリズム両側運動に及ぼす影響	－	平成28年11月	第46回日本臨床神経生理学会学術大会（郡山）	ポリリズム両手運動に対するリズム視覚フィードバックの入力側、刺激位置間距離、およびフィードバックと運動側の一致の影響を検証した。フィードバック入力側が片側の条件におけるポリリズムの周期の長い側の手運動周期が、片手運動と比較して短縮した。フィードバック入力側が両側の条件では片手運動に対する周期の差は観察されず、刺激位置間距離の違いにおいても運動周期の差は観察されなかった。したがって、フィードバックの入力側半球が同一であることに起因して、ポリリズムの周期の長い側の手運動周期が短縮することが考えられた。 本人担当部分：実験の実施を中心的に担当。研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：木下篤，城野靖朋，水澤裕貴，岩田恭幸，平岡浩一

19 上腕三頭筋腱振動刺激時の肘関節角度の違いが運動錯覚の惹起に及ぼす影響	－	令和元年10月	第27回日本物理療法学会学術大会（東京）	関節角度の違いによる筋長の変化が筋腱振動刺激による運動錯覚の惹起に及ぼす影響を明らかにすることを目的とし、左肘関節屈曲30度、60度、90度の3条件で運動錯覚を評価した。その結果、肘関節屈曲60度と90度において肘関節屈曲の運動錯覚が惹起された。したがって、筋腱振動刺激による運動錯覚の惹起には被刺激筋の長さが影響し、伸長位であることが必要だと考えられた。 本人担当部分：研究計画の立案から実験の実施、発表資料の作成、発表に至るまでを中心的に担当。 共同発表者：城野靖朋、神里巌、吉川義之、辻下守弘
20 理学療法士の経験学習プロセスの解明にむけた探索的研究―成長を促す経験と教訓―	－	令和元年11月	第8回日本理学療法教育学会学術大会・第2回日本理学療法士学会管理部門研究会（名古屋）	仕事に対する信念は専門職の経験学習に重要な役割を担い，理学療法士（以下，PT）の育成には信念の形成支援が大切となる．しかし，PTの信念の内容や形成支援方法は明らかにされていない．そこで，本研究では現場の熟達PTの信念を明らかにし，信念の形成支援方法を提案する．熟達PTからは30個の信念カテゴリーが得られたが，それらは実に多様であった．これらを要約すると、熟達PTの信念は人間関係の構築，PTのプライドや責任感，熱意と幅広い実践，治療成果による社会還元等から形成されていた． 本人担当部分：研究計画の立案から結果の解釈、考察部分を部分的に担当。 共同発表者：池田耕二，田坂厚志，粕渕賢志，城野靖朋，松田淳子

教　育　研　究　業　績　書

令和２年３月31日

氏名　　滝本　幸治

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
地域理学療法学、老年期理学療法、運動制御	歩行、転倒、認知症、健康増進、介護予防

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1）メーリングリストを利用したレポート添削による効率的な個別学習支援	平成25年10月 ～ 平成31年3月	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科 専門分野 「運動分析学（2年次）」において、姿勢・動作の観察・分析方法の指導と演習（レポート作成）を行う。学生は繰り返しレポート提出を行い、それに対して個別にフィードバックを行う必要があるため、学内メーリングリストを利用した課題の提出・返却を実施した。学生は提出期日までの間、昼夜問わずレポートを提出できる利便性があるとともに、添削の際もワープロソフトの校閲機能を用いて効率よく丁寧に実施できる。
2）チューター制度による少人数制の学生生活および学習のサポート	平成26年4月 ～ 平成31年3月	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科において、学年を問わず、履修中の科目の中で理解が不十分であったり、学生生活で悩みがあったり、将来的な不安などを抱えている学生は少なくない。そこで、学年別に少人数（6名程度）の学生を対象に放課後等の時間を活用してチューター制度を設けた。比較的共通する課題や悩みがあるなどピアとしても機能し仲間意識が高まるなど、きめ細かいフォローが学生にとって有効にはたらいていることを実感する試みである。
3）事前テストの実施による学習目標の明確化	平成27年4月 ～ 平成31年3月	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科 専門基礎分野 「人体の機能演習Ⅰ・Ⅱ」「運動学演習Ⅰ・Ⅱ」（ともに1年次）では、初めて専門的な学習を行う学生にとって難易度は高いと思われる。そこで毎回講義の最初に、当日講義で扱う内容で構成された「事前テスト」を講義冒頭で実施（5分程度）。これによりこれから何を学ぶか意識付けするとともに、講義終了後には事前テストの解答を完成させたものを提出させ、理解の確認とともに質問を受け付け、次回講義時にフィードバックするよう努めた。学生評価は非常に高いものであった。
4）臨床における理学療法士・作業療法士に対する教育	令和元年10月 ～ 現在に至る	医療機関（社会医療法人黎明会 北出病院）において、臨床経験の浅い理学療法士・作業療法士に対しては、症例の担当場面に介入して直接的な指導を実施（on the job training）。一方、中堅以上のスタッフに対しては、学術活動や後進育成のための教育・マネジメント、多職種・多事業所連携等に関する相談・指導を実施。

事項	年月日	概　　要
2　作成した教科書，教材 1）力量解析ソフトの開発	平成23年9月	研究活動において、リハビリテーションに関連が深い力量調節課題を用いる機会が多く、力制御の精度を確認するための解析ソフトが必須であった。これまで適当な解析ソフトが見当たらなかったため、ソフト開発企業と連携し解析ソフトの開発にあたった。これにより多くのデータ解析が可能となり（学生の卒業研究含む）、解析時間の大幅な短縮とともに研究の選択肢を広げることができた。
2）講義用テキスト作成	平成26年4月	土佐リハビリテーションカレッジ 理学療法学科で担当している「地域リハビリテーション学」「地域理学療法学Ⅰ」（ともに3年次）において、講義用テキストを作成した。医療・福祉・保健・介護等を取り巻く状況が目まぐるしく変遷するなか、専門職養成に必要な標準的事項は既刊のテキストで補えるが、リアルタイムにトピックス的な話題や状況を反映させるために、教材として50ページ程度のサブテキストを作成し講義で活用している。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科学生による授業評価アンケート結果における評価	平成27年4月	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科の担当科目である「人体の機能演習Ⅰ・Ⅱ」「運動学演習Ⅰ・Ⅱ」や「地域リハビリテーション学」「地域理学療法学Ⅰ」では、授業評価により得られた結果を講義に反映することで、学生が求める教授方法について再考し、必要に応じて対応した。具体例としては、配布資料に含まれる演習問題について模範解答を付すことや、テキスト掲載の図では分かりにくいものについて他の文献から理解しやすい図をスライドで示したり資料として配布したりするなど対応した。また講義資料作成時に活用した文献・資料等についてのリストも学生に紹介し、希望に応じて提供した。結果、学生の学習意欲の向上や高い満足度が得られた。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）香南市「健康を守る会」勉強会 講師	平成22年 7月1日	高知県香南市香我美町の地域在住高齢者が主体となって活動している「健康を守る会」の勉強会に、「年齢に負けない丈夫なからだをもつために」というテーマで講演とともに健康体操の実演を行った。
2）和歌山県理学療法士協会 中紀ブロック勉強会　講師	平成24年 8月11日	和歌山県理学療法士協会中紀ブロックの勉強会講師として「歩行の神経メカニズム～歩行の発現と制御機構の基本システム～」というテーマで講演。
3）島津病院 勉強会　講師	平成26年 5月1日	島津病院リハビリテーション科スタッフを対象に「臨床実習教育再考」というテーマで講演。
4）川田整形外科 勉強会 講師	平成28年 12月9日	川田整形外科リハビリテーション科スタッフを対象に「臨床実習教育について考える」というテーマで講演。
5）同窓会「未来会」勉強会 講師	平成25年 3月30日	土佐リハビリテーションカレッジ同窓会「未来会」にて、現職の理学療法士・作業療法士を対象に「周期運動の神経メカニズム―タイミングと力制御に関する研究動向とともに」というテーマで講演。
	平成27年 9月29日	土佐リハビリテーションカレッジ同窓会「未来会」にて、現職の理学療法士・作業療法士を対象に「地域包括ケアシステムにおけるリハ専門職の貢献と課題」というテーマで講演。
6）高知県香南市地域ケア会議事前研修会 講師	平成27年 2月15日	高知県香南市が平成27年4月より実施する地域ケア個別会議に先立って、事業所職員らを対象とした研修会を実施。 「運動機能アセスメント―測定目的と方法について―」と題して研修会講師を務めた。

事項	年月日	概　　要
7）高知県介護予防強化型サービス事業所育成支援事業研修会 講師	平成29年 8月24日	高知県主催の自立支援機能を強化する介護事業所スタッフの育成支援を目的とした研修会にて、「転ばぬ先の転倒予防」と題して、アセスメント方法や具体的転倒予防策等について講演。
8）高知県芸西村教育委員会スポーツ研修会 講師	平成29年 8月29日	高知県芸西村教育委員会が、競技スポーツを実施する小・中学生の保護者に対して企画した研修会にて、「成長期のスポーツとの付き合い方」というテーマで、実技を交えながら講義を実施。
9）高知県越知町介護予防事業リハ専門職派遣事業講師	平成30年 2月16日	リハ専門職が介入していない自治体を県が抽出し、リハ専門職を派遣する事業の一環。 高知県越知町にて継続されてきた介護予防事業において、参加者減少という課題や介護予防の動機づけのために地域在住高齢者を対象に「健康長寿で生きかた上手」というテーマで講演するとともに体操と体力測定を実施。
10）社医）黎明会 北出病院　勉強会講師	平成30年 8月11日	理学療法士を対象に「加速度センサを用いた歩行解析の基礎―臨床研究への展開を踏まえて」というテーマで講演。実際に歩行時加速度計測およびデータ解析を実演するとともに、これらの臨床研究への展開を想定した具体的提案を試みた。
11）高知県介護予防強化型サービス事業所育成支援事業研修会　講師	平成30年 9月6,10,13日	高知県主催の自立支援機能を強化する介護事業所スタッフの育成支援を目的とした研修会であり、「Healthy Agingを叶えるために―アセスメントに基づく介入方法を考える―」と題して、老年症候群（フレイル）の解説やアセスメント方法、アセスメント結果に基づく具体的介入方法等について講演。高知県下の中央（高知市）・西部（黒潮町）・東部（香美市）にて実施。
12）平成30年度香南市通所介護事業所連絡会　講師	平成30年 9月21日	高知県香南市で年次計画されている通所介護事業所連絡会において、通所介護事業所スタッフ向けに「転ばぬ先の転倒予防体操―老いるショックに陥らないために―」というテーマで講演。
	平成31年 3月15日	高知県香南市で年次計画されている通所介護事業所連絡会において、通所介護事業所スタッフ向けに「根拠に基づく生活支援を考える―効果検証の方法を通じて―」として、事例検討のなどの際に一助となるよう症例研究デザインやアセスメントの重要性について解説した。
13）香南市いきいきクラブ事業研修会　講師	平成30年 9月28日, 10月1日	高知県香南市で実施されている住民主体型運動教室の運営を支援する当該事業において、運動教室のリーダーを対象に「健康体操で生きかた上手―コグニサイズの方法と実践―」というテーマで講演と実技指導を実施。
14）介護予防事業実践報告研修　講師	平成31年 2月24日	高知県リハビリテーション職能三団体協議会の主催による本研修において、PT・OT・STの参加者（50名）を対象に「介護予防の機能強化を支援する活動の報告―地域リハビリテーション活動支援事業を踏まえて―」というテーマで講演した。

事項	年月日	概　　要
15）高知県越知町介護予防事業リハ専門職派遣事業 講師	平成31年 3月4日	高知県越知町のリハビリテーション活動支援事業の一環として、越知町中大平地区の住民に対し「元気よく畑仕事を続けるために―農作業がもたらす健康生活―」というテーマで講演とともに体操および体組成計側等を実施した。
16）奈良市社会福祉協議会（青和地区）講演会 講師	令和元年 10月14日	奈良市社会福祉協議会（青和地区）の主催で開催された地域住民を対象とした講演会で、「Healthy Agingを叶える街づくり―健康長寿を叶えるために―」というテーマで講演とともに参加者とともに体操を行った。
	令和2年 2月1日	奈良市社会福祉協議会の主催で、奈良市西福祉センターで開催された地域住民を対象とした講演会で、「健康長寿を叶える街づくり―人生100年時代にできること―」というテーマで講演とともに参加者とともに体操を行った。
17）和歌山県理学療法士連盟研修会 講師	令和2年 1月12日	和歌山県理学療法士連盟の主催で、和歌山国際厚生学院で開催された、リハビリテーション専門職（特に理学療法士）を対象とした講演会で「地域包括ケアに貢献する理学療法士になるために―地域共生社会の実現に向けて―」というテーマで講演を行い、一部参加者と演習を行った。
5　その他 〈教育実績〉 1)高知大学教育学部 非常勤講師	平成21年10月 ～ 平成27年3月	高知大学 教育学部 共通科目「高齢者スポーツ論」を担当。高齢社会の現状および要因分析とともに、老年医学の知見に基づいた高齢者の心身機能の特徴を概説。健康長寿に向けた生涯スポーツの位置づけや考え方、老年学・公衆衛生学・健康心理学等を踏まえた実践論について教授している。
2)高知県立室戸高校「看護基礎医学2」授業担当	平成20年7月 ～ 平成22年9月	室戸高校 生活福祉系列の２・３年生に対して「リハビリテーション医療の基礎技術について」として看護基礎医学2の授業を担当した。
3）土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科非常勤講師	平成31年4月 ～ 現在に至る	土佐リハビリテーションカレッジ理学療法学科の3年生に対して「地域リハビリテーション学」の講義を担当。
4）社会医療法人北出病院リハビリテーション科臨床指導	令和元年10月 ～ 現在に至る	北出病院リハビリテーション科スタッフ（理学療法士，作業療法士）に対して、臨床指導を実施。

事項	年月日	概　　要
職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1)専門理学療法士（生活環境支援理学療法）取得	平成22年 4月1日	登録番号5-138 （公社）日本理学療法士協会が定める制度である。自らの専門性を高め、良質なサービスを提供する臨床能力を備え、理学療法の学問的発展に寄与する研究能力を高めていくことを目的としたものである。
2)地域包括ケア推進リーダー　取得	平成27年 1月18日	（公社）日本理学療法士協会の重点施策の一つである地域包括ケアシステムに関わることのできる人材育成制度を修了。
3)介護予防推進リーダー　取得	平成27年 2月1日	（公社）日本理学療法士協会の重点施策の一つである地域包括ケアシステムに関わることのできる人材育成制度を修了。
4)博士（医学）	平成28年 5月17日	高知大学大学院総合人間自然科学研究科（甲総医博第47号） 論文題目「Comparison of timing and force control of foot tapping between elderly and young subjects」
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 （自治体事業） 1)香南市高齢者健診事業（運動啓発事業）	平成17年4月 ～ 平成29年9月	H17年度以降、現在に至るまで高知県香南市の高齢者健診事業（H26より運動啓発事業に事業名変更）を受託。毎年9~10月頃に、香南市在住の65歳以上高齢者を対象として、運動・認知機能の計測を実施し、計測データを市に提供するとともに、計測データを統計処理することにより同市の体力標準値等を算出・共有してきた。
2)香南市地域ケア会議アドバイザー	平成27年4月 ～ 平成31年3月	高知県香南市がH27年度より開始した地域ケア個別会議において、アドバイザーとして当初より参加。個別事例の課題分析および目標設定、支援内容について助言を行っている。
3)高知市介護認定審査会 委員	平成29年4月 ～ 平成31年3月	高知県高知市の介護認定審査会委員として、介護認定審査にあたる。

事項	年月日	概　　要
4)奈良市二名地区介護予防事業	令和元年10月 ～ 現在に至る	奈良市二名地域包括支援センターの管轄する地域住民を対象とした介護予防事業に講師として参画。介護予防や健康に関連する講話とともに健康体操の実践指導を実施。
（理学療法士協会関連業務） 1）公社）高知県理学療法士協会 学術部	平成18年6月 ～ 平成19年6月	（公社）高知県理学療法士協会の学術部員として、高知県理学療法学会および研修会の運営、高知県理学療法（学術誌）の編集・発刊等に携わった。
2）日本物理療法学会 選挙管理委員会 委員長	平成20年5月 ～ 現在に至る	日本物理療法学会の選挙管理委員として（H23年5月より委員長）、学会評議員の選出のための選挙を実施している。
3）公社）高知県理学療法士協会 広報部	平成20年6月 ～ 平成26年6月	（公社）高知県理学療法士協会の広報部員（後に副部長）として、主に協会ホームページの管理や会員向け会誌（県協会ニュース）や一般向け広報誌（ぱわふるとさ！）の編集・発行に携わってきた。
4)　日本理学療法学術大会 演題査読委員	平成22年11月 ～ 平成28年11月	（公社）日本理学療法士協会が毎年開催する日本理学療法学術大会の演題査読委員を務めている。
5）日本理学療法士協会グランドデザイン策定委員（予防領域）	平成24年4月 ～ 平成25年3月	（公社）日本理学療法士協会が、国民の保健福祉を支援する理学療法士グランドデザインを策定するためにチームを構成し、「予防領域」の委員としてグランドデザイン策定に携わった。
6）四国理学療法士学会　演題査読委員	平成26年7月 ～ 平成31年3月	四国理学療法士会が毎年開催する四国理学療法士学会の演題査読委員を務めている。
7）公社）高知県理学療法士協会 事務局次長	平成27年6月 ～ 平成29年6月	（公社）高知県理学療法士協会の事務局次長に就任。高知県の理学療法士の質の向上と社会貢献のための企画総括や会員管理に努めている。

事項	年月日	概　　要
8）高知県理学療法士連盟　事務局長	平成27年6月 ～ 平成31年3月	高知県理学療法士連盟の事務局長に就任。県民や理学療法士の声を受け取り、県もしくは国に届けるためのサポート（講演会の開催など）の活動している。
9）（公社）高知県理学療法士協会　総務部長	平成29年6月 ～ 平成31年3月	（公社）高知県理学療法士協会の総務部長に就任。会員管理や法人運営を担い、理事会および総会の開催・運営を行っている。
10）日本地域理学療法学会学術大会　演題査読委員	平成30年3月 ～ 現在に至る	日本地域理学療法学会学術大会の演題査読委員を務めている。
11）日本予防理学療法学会学術大会　演題査読委員	平成27年2月 ～ 現在に至る	日本予防理学療法学会学術大会の演題査読委員を務めている。
（学術大会 司会・座長）		
1)第39回四国理学療法士学会（座長）	平成22年 11月13日	第39回四国理学療法士学会にて、一般演題「調査・研究」の座長を務めた。
2)第19回日本物理療法学会学術大会（座長）	平成22年 10月16日	第19回日本物理療法学会学術大会にて、一般演題Ⅳの座長を務めた。
3)第25回高知県理学療法士協会新人発表学術集会（座長）	平成27年 3月22日	第25回高知県理学療法士協会 新人発表学術集会にて、ポスター演題「生活環境」の座長を務めた。
4)第44回四国理学療法士学会（座長）	平成27年 11月29日	第44回四国理学療法士学会にて、一般演題Ⅱ-④「運動器・基礎系」の座長を務めた。

事項	年月日	概　　要
5)第72回日本体力医学会大会（座長）	平成29年 9月18日	第72回日本体力医学会大会（愛媛）にて、一般演題「リハビリテーション，運動療法②」の座長を務めた。
6)第47回四国理学療法士（座長）	平成30年 12月2日	第47回四国理学療法士学会（高知）にて、一般演題Ⅳ-③「生活環境支援系」の座長を務めた。
7)第6回日本予防理学療法学会学術大会（座長）	令和元年 10月19日	第6回日本予防理学療法学会学術大会（広島）にて、ポスター演題8（9演題）の座長を務めた。
8)第6回日本地域理学療法学会学術大会（座長）	令和元年 12月15日	第6回日本地域理学療法学会学術大会（京都）にて、一般口述12「訪問・通所3」（6演題）の座長を務めた。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　要
（著書） なし				
（学術論文）				
1）異なるテンポによる足部タッピング運動の特徴に関する研究―外的および自己ペース運動を用いて―（査読付）	共著	平成22年12月	土佐リハビリテーションジャーナル9：pp1-9，2010.	一側足タッピング運動を異なるテンポで外的・自己ペース運動で実施した。結果、テンポ音との同期誤差およびタッピング間隔誤差は、速いテンポもしくは外的ペース運動時の方が正確であった。一方、遅いテンポでは自己相関が低く、周期的なタッピング調整が困難であることが示唆された。 著者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，井上佳和，宅間豊，宮本祥子，岡部孝生，椛秀人 担　当：論文執筆、研究計画、データ計測・解析、資料収集
2）高校運動部のコアコンディショニングの検討―Functional Movement Screen(FMS)の紹介―	共著	平成23年3月	四国理学療法士会学会誌33：pp137-138，2011	評価手法やトレーニング方法の確立が不十分なコアコンディショニングについて、FMSを用いて姿勢制御や筋力との関連について検討した。結果、FMSスコアと立位重心動揺および下肢筋力との間に相関を認めず、コアの機能は重心動揺や筋力とは異なる側面に反映することが考えられた。 著者名：薮内正樹，竹林秀晃，滝本幸治 担　当：研究計画、資料収集
3）運動イメージ想起課題の特性―心的時間測定と心的回転について―	共著	平成23年3月	四国理学療法士会学会誌33：pp17-18，2011	心的時間測定（MC）と心的回転（MR）による運動イメージ想起能力の特性について検討した。結果、最大歩行時より至適歩行時の方が実際の歩行時間とMCとの間に有意に誤差が大きかった。また、MCとMRの成績との間に相関関係は認めず、課題特性が異なることを示唆した。 著者名：橋本竜也，竹林秀晃，武田正和，竹村記和，滝本幸治，小野川ちひろ 担　当：研究計画、資料収集
4）筋出力・筋弛緩における反応時間特性―筋力調節量が与える影響―	共著	平成23年3月	四国理学療法士会学会誌33：pp15-16，2011.	筋出力および筋弛緩による反応時間特性を異なる力発揮条件下で検討した。結果、筋出力・筋弛緩による反応時間の統計学的有意差は認めなかったが、筋弛緩による反応時間が遅延する傾向にあった。 著者名：竹林秀晃，細川航，森岡周，滝本幸治，宮本謙三，井上佳和，岡部孝生，宮本祥子，宅間豊 担　当：研究計画、データ計測、資料収集
5）異なるテンポによる足部タッピング運動の特徴に関する研究―外的および自己ペース運動を用いて―	共著	平成23年3月	四国理学療法士会学会誌33：pp13-14，2011.	足タッピング運動を手掛かりとなるテンポ音がある条件とない条件とで実施し、その制御特性を検討した。結果、テンポ音を聴取しながら速いテンポでタップしているときには、タップ間隔の自己相関を認めたことから、巧みにタイミング制御が行われていることが示唆された。 著者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，椛秀人 担　当：論文執筆、研究計画、データ計測・解析、資料収集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6）理学療法分野における英語専門語彙（ESP語彙）の抽出とその特性 （査読付）	共著	平成23年10月	理学療法学38：pp421-435，2011.	理学療法士養成課程の英語教育を、特定の目的をもって学習するESP教育の下位分野と位置づけ、学術論文コーパスと教科書コーパスを構築し語彙的特性を分析した。結果、2種類のコーパス両方に専門的語彙が多用される傾向が強く、8割以上の単語がどちらのコーパスでも出現していた。 著者名：宮本祥子，五百蔵高浩，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，竹林秀晃，岡部孝生，滝本幸治 担　当：研究計画、資料収集
7）視標追従課題における求心性・遠心性収縮の制御特性	共著	平成24年3月	四国理学療法士会学会誌34：pp44-45，2012.	指標追従課題における求心性収縮と遠心性収縮の制御特性を、膝関節伸展運動により若年者を対象に検討した。結果、求心性・遠心性収縮による誤差に統計学的有意差を認めなかったが、遠心性収縮において誤差や力の変動が大きくなる傾向にあった。 著者名：竹林秀晃，滝本幸治，森岡周，宮本謙三，井上佳和，岡部孝生，宮本祥子，宅間豊 担　当：研究計画、データ計測・解析、資料収集
8）理学療法分野における英語表現-共起パターン-の特性 （査読付）	共著	平成24年4月	理学療法学 39： pp90-101，2012.	理学療法分野の英語コーパスの特性をcollocation（共起語：語と語の結びつき）の観点から分析した。結果、学術論文コーパス・教科書コーパスに共通して優先的に結びつく共起パターンが認められ、この共起パターンの学習が理学療法分野のテクストの理解を早める有効な方略になり得る。 著者名：宮本 祥子 ， 五百蔵 高浩 ， 宮本 謙三 ， 宅間 豊 ， 井上 佳和 ， 竹林 秀晃 ， 岡部 孝生 ， 滝本 幸治 担　当：研究計画、資料収集
9）理学療法専門学術書における英語表現の特徴に関する研究	共著	平成25年3月	四国理学療法士会学会誌35：pp150-151，2013.	理学療法分野の英語コーパスの特性を共起語の観点から分析し、学習者への指導方略について考察した。結果、理学療法分野にはパターン化された結びつきが存在することが考えられ、共起パターンの学習が理学療法分野の英語専門学術書の理解を早める有効な方略であることが示唆された。 著者名：宮本祥子，五百蔵高浩，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，竹林秀晃，岡部孝生，滝本幸治 担　当：研究計画、資料収集
10）運動観察が歩行動作の学習に及ぼす有効性	共著	平成25年3月	四国理学療法士会学会誌35：pp110-111，2013	脳卒中症例の運動観察による歩行動作の改善効果について検討した。結果、通常の理学療法を行った時よりも、観察学習を用いた方が歩行時左右肢の歩幅や単脚支持時間に左右均等性を認め、運動観察学習の有効性が示唆された。 著者名：池上大輝，竹林秀晃，滝本幸治，山本知弘，野田昌志 担　当：研究計画、資料収集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11）等尺性収縮による下肢タッピングの課題特性	共著	平成25年3月	四国理学療法士会学会誌 35：pp86-87，2013.	関節運動を伴わない等尺性収縮による下肢タッピング課題の特性について若年者を対象に検討した。結果、聴覚リズム刺激がなく遅いテンポ下で、タップ間隔の誤差が大きくなった。また、遅いテンポでは発揮する力が目標とする値に対して誤差が大きかった。 著者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，椛秀人 担　当：論文執筆，研究計画、データ計測・解析，資料収集
12）追従課題における関節位置調節と筋出力調節の課題特性と関連性	共著	平成25年3月	四国理学療法士会学会誌 35：pp84-85，2013.	指標追従課題を用いた膝関節運動による関節位置調節課題と筋出力調節課題を実施した。結果、関節位置調節より筋出力調節の方が精度は低く、筋弛緩の際に最も力制御が難しいことが見いだされた。 著者名：竹林秀晃，滝本幸治，森岡周，宮本謙三，井上佳和，岡部孝生，宮本祥子，宅間豊 担　当：研究計画、データ計測、資料収集
13）地域在住高齢者における複合的運動機能に対しての注意機能と身体機能の関連性について	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 36：pp106-107，2014	複合的運動機能テストであるTrail Walking Test(TWT)と他の身体機能や注意機能との関連について検討した。結果、TWTは歩行能力や膝伸展筋力、バランス能力や敏捷性、注意機能と有意な相関を認めた。したがってTWTは種々の身体機能や注意機能の総合的指標と成り得る。 著者名：榛田彩香，竹林秀晃，滝本幸治，高芝潤，川渕正敬，前田秀博，國澤雅裕 担　当：データ計測・解析、論文執筆、資料収集
14）等尺性収縮における内側広筋のトレーニング方法の検討	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 36：pp54-55，2014.	膝伸展作用を有する内側広筋の有効なトレーニング方法について筋電図を用いて検討した。結果、踵セッティングおよび立位での股内転同期セッティングでより内側広筋の活動が賦活することが確認された。 著者名：奥田教宏，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，滝本幸治 担　当：研究計画、データ計測・解析、資料収集
15）高齢者におけるMental Chronometryの特性と各種身体能力との関係	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 36：pp78-79，2014.	Mental Chronometry（心的時間）による歩行の運動イメージ想起能力と各種身体能力との関連について若年・高齢者を対象に検討した。結果、高齢者の方が実際の歩行と運動イメージとの誤差が大きく、運動イメージ想起能力（誤差）と敏捷性の間に正の相関を認めた。 著者名：竹林秀晃，小松祐貴，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 担　当：研究計画、データ計測、資料収集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16）加齢により異なる力制御の特性―足タッピング課題を用いた検討―	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 36：pp82-83，2014.	周期的な足タッピング課題を用いて、テンポ速度やテンポ音有無を操作し若年・高齢群間でその特徴を検討した。結果、両群とも遅いテンポで且つテンポ音のない条件下で足タップの精度が低下したが、若年群の精度が高齢群を下回るという興味深い知見を得た。 著者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人 担　当：研究計画、データ計測・解析、論文執筆、資料収集
17）介護予防に貢献する理学療法士の可能性を考える	共著	平成26年3月	高知県理学療法21：pp25-32，2014.	これまでの介護予防の課題を再認識するとともに、理学療法士がどのような形で介護予防に貢献し得るか事例を紹介。また、老年医学や公衆衛生学など近接領域の知見を取り入れるとともに、健康寿命延伸のためには歩行能力低下を予防する取り組みが重要であることを示した。 著者名：滝本幸治，島村千春 担　当：論文構成、論文執筆、資料収集
18）Mental Rotation課題における道具使用・物体把持の影響	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 37：pp154-155，2015.	運動イメージの評価・治療手法のひとつであるMental Rotation（MR；心的回転）課題を用いて、道具使用有無下で成績を比較した。結果、道具使用有無間でMR課題の正答率に差を認めなかったが、反応時間は道具を使用した条件下で有意に速かった。 著者名：竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 担　当：研究計画、データ計測、論文執筆、資料収集
19）足タッピング課題による加齢に伴う力制御能力の特性―異なる力発揮水準を用いた検討―	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 37：pp108-109，2015.	足タッピング課題を用いて異なる力発揮水準による力制御の特性を若年・高齢群間で比較した。その結果、小さい力発揮時に高齢群の力発揮の変動が大きかった。また、力発揮水準が大きいほど若年・高齢群の差が縮小する傾向にあった。 著者名：滝本幸治，高橋夏姫，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人 担　当：研究計画、データ計測・解析、論文執筆、資料収集
20）地域高齢者における転倒因子の検討と各年代における片脚立位時間の変化について	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 37：pp88-89，2015.	地域在住高齢者に対し、転倒と関連のある体力要素を検討した。結果、転倒歴のある高齢者は、開眼・閉眼片脚立位時間が短く膝伸展筋力が弱かった。また、加齢に伴い片脚立位時間は短縮し、転倒歴のある高齢者の方が片脚立位時間は短い傾向にあった。 著者名：奥田教宏，竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生 担　当：研究計画、データ計測、資料収集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21）加齢による歩行運動イメージの特性 ： 時空間的要素における若年者との比較	共著	平成26年3月	高知県理学療法 22：pp43-47，2015.	歩行の運動イメージ評価に心的時間計測を用いて、若年者と高齢者とを比較した。結果、実際の歩行と運動イメージとの誤差は高齢者で大きく、高齢者では歩行能力が低い者ほど運動イメージの誤差が大きくなる知見を得た。 著者名：竹林 秀晃，滝本 幸治，奥田 教宏，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生 担　当：研究計画、データ計測、資料収集
22）成人におけるなわ跳び動作の分析	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 38：pp138-139，2016	発達性協調運動障害を呈する児が縄跳びを上手に跳べない特徴を有することから、縄跳び動作の分析を実施した。結果、上手に縄跳びを跳ぶためには着地がつま先から行われていることや膝が伸展位であることが見いだされた。 著者名：森下誠也，滝本幸治 担　当：統計解析
23）複数体肢の同時動作における反応時間からみた運動制御	共著	平成26年3月	四国理学療法士会学会誌 38：pp96-97，2016.	左右上下肢の複数体肢の同時動作による反応時間特性について検討した。結果、四肢いずれか単肢および両上肢や両下肢で反応するより、同側上下肢や対側上下肢で反応する際に有意に反応時間が遅延することが分かった。 著者名：竹林秀晃，前田康介，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏 担　当：研究計画、データ計測、資料収集
24)Comparison of timing and force control of foot tapping between elderly and young subjects（足タッピングのタイミングと力の制御における高齢者と若年者の比較） （査読付）	共著	平成28年6月	Journal of Physical Therapy Science 28: pp1909-1015,2016.	足タッピング課題を用い、タイミングと力の制御における高齢者と若年者の比較を行った。結果、高齢者の方がタッピングの精度が低かったが、テンポ音に同期してタップすると精度が低くなるという若年者とは異なる新知見を得た。 著者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人 担　当：論文執筆、研究計画、データ計測・解析、資料収集
25）二重課題による認知機能評価の有用性―地域在住高齢者を対象とした検討― （査読付）	共著	平成28年12月	土佐リハビリテーションジャーナル10：pp1-8，2016.	Walking Stroop Carpet(WSC)という新しい二重課題を用いて、地域在住高齢者の認知機能低下の初期スクリーニングとして有用か検討した。結果、多変量解析によりWSCの文字条件が認知機能低下を説明する変数として抽出され、ROC曲線においても判別性能が高いことが示された。 著者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 担　当：論文執筆、研究計画、データ計測・解析，資料収集
26）上腕骨・前腕両骨骨折(floating elbow)を受傷した症例 （査読付）	共著	平成28年12月	土佐リハビリテーションジャーナル10：pp23-30，2016.	機能障害が残存しやすく治療に難渋することが多い上腕骨・前腕両骨骨折症例の理学療法効果について検討した。結果、術直後から早期に関節可動域練習と上肢全体に対するアプローチが、疼痛の消失や関節可動域の再獲得に効果をもたらした。 著者名：上堀　琢，高橋佑輔，滝本幸治 担　当：研究計画，資料収集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
27）異なる二種類の二重課題による転倒リスク評価の検討―Multitarget Stepping Taskの改良版による試み―（査読付）	共著	平成28年12月	土佐リハビリテーションジャーナル10：pp31-36, 2016.	二重課題であるMultitarget Stepping Task(MTST)は、転倒リスク評価としての有用性が知られているが、より感度よく評価するために認知機能負荷を課した改良版MTSTを考案し、高齢者を対象に転倒リスク評価を実施した。結果、改良版MTSTは従来のMTSTより感度や正診率が高く、より有効な転倒リスク評価として活用の可能性が示唆された。 著者名：門脇一弘，滝本幸治 担　当：研究計画，データ計測・統計解析，資料収集
28）心理社会的要因による痛み関連脳領域の変化―高社会性げっ歯類を用いた基礎研究―	共著	平成29年3月	四国理学療法士会学会誌39：pp112-113，2017.	社会環境の変化による痛み関連領域（ペインマトリックス）の変化についてハタネズミを用いて検討した。結果、パートナーの存在有無によりペインマトリックスの活動性が変化し、脊髄後角における痛みシグナリングを減少させていることが示唆された。 著者名：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宅間豊，宮本謙三，由利和也 担　当：統計解析
29）自己身体像の視覚外乱刺激は感覚の重みづけを変化させる―身体感覚情報との不一致が及ぼす影響―	共著	平成29年3月	四国理学療法士会学会誌39：pp110-111，2017	視覚情報を変化させることで身体感覚情報との不一致を作り、姿勢制御への影響を検討した。被験者自身の後方からの映像を回転させて見せ、立位姿勢の重心動揺を評価したところ、回転角度が大きいほど重心動揺が大きくなることが分かった。 著者名：竹林秀晃，弘井鈴乃，滝本幸治，宮本謙三，井上佳和，岡部孝生，宮本祥子，宅間豊 担　当：研究計画、データ計測、資料収集
30）Dual Taskによる歩行能力と認知機能評価の有用性―Walking Stroop Carpetによる検討―	共著	平成29年3月	四国理学療法士会学会誌39：pp56-57，2017.	地域在住高齢者を対象に、Walking Stroop Carpetを用いたDual Task歩行による転倒リスクおよび認知機能評価を試みた。結果、過去1年の転倒歴の判別適中率は79.0%、認知機能低下の判別適中率は90.5%であり、Walking Stroop Carpetの有用性が示唆された。 著者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 担　当：論文執筆、研究計画、データ計測・解析、資料収集
31）高齢者大腿骨近位部骨折術後患者の自宅退院に与える要因―回復期ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病棟によるFIMを用いた検討―	共著	平成29年3月	高知県理学療法24：pp63-67，2017.	回復期ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝ病棟に入院していた高齢大腿骨近位部骨折術後患者42例を対象に、自宅退院に影響を与える要因について検討した。結果、整容や更衣動作などのセルフケアと移動動作の自立度、認知機能の低下予防が自宅退院に必要な要因であることが考えられた。 著者名：奥田教宏，竹林秀晃，滝本幸治，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 担　当：研究計画、統計解析、資料収集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
32）Walking Stroop Carpetによる転倒リスク評価の有用性（査読付）	共著	平成29年6月	理学療法学44(3)：pp219-225，2017.	Walking Stroop Carpet（WSC)課題による転倒リスク評価の有用性について、地域在住高齢者100名を対象に検討した。結果、WSC課題（色条件）は高齢者の転倒歴を有意に説明することが示され、地域在住高齢者の転倒リスク評価ツールとして活用の可能性が示唆された。 著者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三 担　当：論文執筆、研究計画、データ計測、統計解析、資料収集
33）二重課題による認知機能低下および転倒リスク評価の有用性―Walking Stroop Carpetを用いた検討―（査読付）	共著	平成29年12月	土佐リハビリテーションジャーナル11：pp1-8，2017.	Walking Stroop Carpet（WSC)課題を用いて、地域在住高齢者113名を対象に認知機能低下とともに転倒リスク評価を実施した。多変量解析の結果、WSC課題（色条件）は高齢者の転倒歴を、WSC課題（文字条件）は認知機能低下を説明することが示された。 著者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，宮本祥子，宅間豊，井上佳和，岡部孝生，岡林遥，宮本謙三 担　当：論文執筆、研究計画、データ計測、統計解析、資料収集
34）急性期脳卒中リハビリテーション	共著	平成29年12月	土佐リハビリテーションジャーナル11：pp29-36，2017.	急性期脳卒中リハビリテーションについて、二次的な合併症の併発を予防しながら行われるリハビリテーションは、よりよい治療成績が得られることが知られている。一方で、安静臥床が身体に及ぼす影響も踏まえながら、急性期よりどのような戦略で脳卒中患者に介入すべきかを解説した。 著者名：小川真輝，滝本幸治 担　当：論文構成、資料収集
35）心理･社会的ストレスによるペインマトリックスの反応性変化―炎症性疼痛時の脳活動性―	共著	平成30年3月	四国理学療法士会学会誌40：pp98-99，2018.	高社会性げっ歯類のプレーリーハタネズミを用いて、心理･社会的要因（絆）による痛み関連脳領域（ペインマトリックス）の反応性を検討した。結果、絆を解かれたネズミは側坐核外側のFos蛋白発現が少なく内因性疼痛制御系のドーパミン経路が機能しにくくなり、島ではFos蛋白が多く嫌悪感や恐怖・不安を感じる可能性が示唆された。 著者名：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宅間豊，宮本謙三，由利和也 担　当：統計解析
36）加齢による二重課題条件下での歩行特性―体幹加速度計測による検討―	共著	平成30年3月	四国理学療法士会学会誌40：pp160-161，2018.	加齢による二重課題条件下での歩行を評価するために、若年者と高齢者を対象に体幹加速度計測を行った。結果、二重課題条件下では高齢者の歩行速度低下とともに加速度振幅の指標であるRMSが増大することが確認された。 著者名：滝本幸治，山本聖香，浅井剛，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宮本謙三 担　当：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
37）視覚外乱刺激において周辺環境の有無が姿勢制御に及ぼす影響	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌41：pp54-55，2019.	Head Mounted Displayを用いて映像を回転させることによる視覚外乱刺激を加え、姿勢制御に及ぼす影響について検討した。結果、背景があると重心動揺が増大するとともに、回転角度が大きいとより顕著に重心動揺が増大した。視覚情報が姿勢制御に与える影響が異なることから、トレーニングへの応用が期待できる。 著者名：竹林秀晃，藤田雅登，滝本幸治，奥田教宏，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三 担　当：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
38）認知機能低下が歩行パラメータに与える影響―体幹加速度計測による検討―	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌 41：pp92-93，2019.	地域在住高齢者を対象に、認知機能低下有無が各種歩行パラメータに与える影響について検討した。結果、歩行時の合成RMS（加速度振幅の大きさ）が健常群より認知機能低下群で有意に増大するとともに 、多変量解析により認知機能低下を説明する変数として抽出された（OR:1.34，95%CI:1.01-1.77，p<0.05）。 著者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，浅井剛，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林悠，宮本謙三 担　当：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
39）運動負荷による疼痛域値の変化―自転車エルゴメータ―による比較―	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌 41：pp108-109，2019.	自転車エルゴメーター駆動の運動負荷量の違いが疼痛域値に与える影響について、健常若年成人男性30名を対象に検討した。心拍数100拍／分と150拍／分の運動20分実施後、第6頚椎棘突起側方の表在感覚・圧痛域値を計測した結果、いずれの条件も運動前後で比較で、運動後に疼痛域値が上昇した。しかし、条件間では両域値に差を認めなかった。 著者名：奥田教宏，中平愛里，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，滝本幸治，渡邊家泰 担　当：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
40）視空間記憶能力と歩行能力および転倒歴との関連―視覚的ワーキングメモリスパンテストを用いた検討―	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌 41：pp212-213，2019.	視空間情報の記憶能力と高齢者の歩行能力・転倒との関連について、高齢者15名を対象に検討した。歩行能力検査（10m歩行、TUG）とともに、視覚的ワーキングメモリスパンテスト（VWMST）を実施した結果、非転倒群より転倒群で空間位置情報を記憶する能力（スペース課題）が有意に低下しており、多変量解析によりスペース課題の成績はTUGを説明する変数として抽出された。 著者名：橋詰愛里彩，谷脇弘将，山崎優，滝本幸治 担　当：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
41）外来患者に対する杖適応の判断基準の検討	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌 41：pp232-233，2019.	整形外科疾患により外来通院中の患者を対象に、杖使用を決定づける要因について検討した。結果、杖使用群と未使用群間の比較において、有意に杖使用群の10m歩行時間が遅延しており、多変量解析によって歩行時間のみが杖使用有無を決定付ける変数として抽出された。ROC曲線による判別性能はAUC:0.79であり、カットオフ値は7.8秒であった。 著者名：土居優仁，山本哲夫，山下亜乃，片岡歩，滝本幸治 担　当：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集
42）パーキンソン病症例を対象にした短期集中入院の効果	共著	平成31年3月	四国理学療法士会学会誌 41：pp254-255，2019.	パーキンソン病(PD)専用リハコースに入院するPD症例37名の効果検証を行った。リハ専門職による介入を240分／日×週5回×5週間実施したところ、入院前後比較によりUPDRSのpart1（精神機能、行動及び気分）、part2（ADL）、part（運動機能）は有意に改善したが、part4（治療の合併症）は不変であった。また、抑うつ性(SDS)は有意に低下した。 著者名：下川貴大，馬渕勝，岡本和久，武田正和，横瀬崇光，國重裕二，薮田英吾，澤田侑貴，鎌田剛，滝本幸治 担　当：論文執筆，研究計画，データ計測・解析，資料収集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
43）地域包括ケアに貢献するリハビリテーション専門職―現状と展望―	共著	平成31年3月	高知県理学療法26:pp83-90，2019.	地域包括ケアシステムの構築に向け、リハビリテーション専門職がどのように貢献し得るのかを解説した。なかでも、高知県リハビリテーション三団体協議会として取り組んできた人材育成や、地域リハビリテーション活動支援事業などへの参画例を取り上げ、具体例を含めて示した。 著者名：滝本幸治，竹林秀晃，井上佳和，萩原賢二，吉村亮子，古谷知佐子，近藤紗綾，和田譲，宮本謙三 担　当：論文執筆，情報収集，調査・事業参画
（その他） 「報告書」 1）安定した周期運動の遂行条件に関する研究	単著	平成25年4月	公益信託高知新聞・高知放送「生命（いのち）の基金」（平成23年度）実績報告書 全1頁	若年者・高齢者を対象に、足タッピングを用いて異なるテンポで目標とする力の発揮課題を実施した。結果、タイミング制御の正確さと変動はいずれの条件においても高齢者で誤差や変動が大きくなった。一方、力制御は視覚フィードバックによる条件下では若年者の方が誤差が大きく、視覚遮断下では両者に差は認めなかった。 研究代表者：滝本幸治
2）歩行動揺計を用いた認知機能検査に関する研究	単著	平成30年5月	公益信託高知新聞・高知放送「生命（いのち）の基金」（平成28年度）実績報告書 全1頁	地域在住高齢者を対象に一般的な認知機能検査とともに、10mの歩行路を快適・努力条件下での歩行を求めた。歩行時には腰部と踵部に加速度センサを貼付し、歩行時の体幹加速度を計測した。結果、認知機能が低下している者は歩行時の体幹加速度振幅(root mean square)が高値を示し、且つ歩行時の滑らかさに欠く(Harmonic ratioが低値)特徴を得た。 研究代表者：滝本幸治
（国際学会発表） 1）Interaction Interference Between Arm and Leg: Division of Attention Through Muscle Force Regulation （上・下肢間の相互干渉作用：筋力調節課題による注意の分割を利用して）	―	平成23年6月	16th International WCPT Congress 2011 in Amsterdam, Holland	上下肢を同時に力発揮することによる相互干渉作用について、上肢の筋出力制御下で検討した。結果、肘屈曲および膝伸展ともに他肢との同時力発揮により有意に筋出力が減少した。加えて上肢の筋出力水準の低下に伴い下肢の最大膝伸展力も低下を示した。 発表者名：竹林秀晃，宮本謙三，森岡周，滝本幸治，宅間豊，宮本祥子，岡部孝生
2）Effect of various information of sensory modality on the postural control（姿勢制御に対する視覚情報の影響）	―	平成25年6月	2nd Joint World Congress of ISPGR and Gait & Mental Function 2013 in Akita, Japan.（Poster Abstracts p29-30.）	リアルタイムに視覚情報を変化させることで身体感覚情報との不一致をつくり、姿勢制御への影響を検討した。結果、自身の立位姿勢をより大きく回転させた映像（135°、180°）を被験者自身に見せた際に、より大きな重心動揺（総軌跡長、矩形面積）を認めた。 発表者名：竹林秀晃，弘井鈴乃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，森岡周
3）Characteristics of force- and timing-control in aging: A study of foot-tapping（足タッピングによる加齢に伴う力とタイミング制御の特徴）	―	平成25年6月	2nd Joint World Congress of ISPGR and Gait & Mental Function 2013 in Akita, Japan.（Poster Abstracts p26-27.）	異なるテンポ速度で足タッピング課題を実施し、加齢の影響を踏まえて力とタイミングの制御について検討した。本研究の重要な結果として、筋出力の絶対誤差平均は高齢群より若年群の誤差が大きく、加齢による特徴の新たな側面を見出した。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，椛秀人

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4) Characteristics of motor coordination during concentric and eccentric contractions in the elderly（高齢者の求心性・遠心性収縮による運動制御特性）	—	平成25年9月	WCPT-AWP & ACPT Congress 2013 in Taichung, Taiwan	視標追従課題を膝伸展力発揮の求心性(CON)および遠心性(ECC)収縮により行い、若年・高齢群を対象に検討した。結果、両群ともにCONよりECCでの力制御が困難であり、高齢群でより顕著であることが見いだされた。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，森岡周
5) Characteristics of aging on control of timing and force of foot tapping（足タッピング課題を用いたタイミングと力制御の加齢特性）	—	平成25年9月	WCPT-AWP & ACPT Congress 2013 in Taichung, Taiwan	異なるテンポ速度で足タッピング課題を実施し、加齢の影響を踏まえて力とタイミングの制御について検討した。結果、テンポ音の有無にかかわらずタッピング間隔の誤差は若年者より高齢者の方が大きかった。しかしテンポ聴取下での力発揮は若年者の方が誤差は大きくなるという興味深い知見を得た。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，桃秀人
6) Usefulness of the walking stroop carpet in evaluation fall risks among the community-dwelling elderly (Walking Stroop Carpetによる地域在住高齢者の転倒リスク評価の有用性)	—	平成27年5月	World Confederation Physical Therapy Congress 2015 in Singapore	地域在住高齢者を対象にWalking Stroop Carpet(WSC)という二重課題による転倒リスク評価の有用性について検討した。その結果、一般的な歩行能力テストであるTUGとともにWSCは転倒歴を説明する変数であり、判別性能が高いことからその有用性が示された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏
7) The association between mental chronometry temporal/spatial conformity and physical ability in the elderly（高齢者の心的時間と時間・空間的適合性と身体能力との関連）	—	平成27年5月	World Confederation Physical Therapy Congress 2015 in Singapore	10m歩行による心的時間(MC)の加齢変化と、MCと身体機能との関連について検討した。結果、MCと実測時間との誤差は若年者より高齢者で高値を示した。また、その誤差は若年・高齢者ともに実測時間よりMCが延長する者が有意に多かった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏
8) EFFECTS OF AGING ON PERFORMANCE IN STATIC AND DYNAMIC COINCIDENCE TIMING TASKS: ASSOCIATION WITH FALLS（静的・動的同時タイミング課題における加齢の影響：転倒との関連）	—	令和元年5月	World Confederation Physical Therapy Congress 2019 in Geneva	加齢および転倒リスクについて、静的な反応課題は多いが動的反応課題は少ない。そこで、目前に設置されたライトの発光に対して静的（手元スイッチを押す）および動的（ジャンプする）反応課題を実施し、若年者と高齢者（転倒歴有無別）で比較・検討した。結果、若年者より高齢者の方が反応が遅延していた。また、転倒歴がない高齢者は静的・動的反応課題間で反応時間の差はなかったが、転倒歴がある高齢者では動的反応時間が有意に遅延していた。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（国内学会発表）				
1）下肢筋力調節能力の特性と立位姿勢制御能力との関係	—	平成22年5月	第45回日本理学療法学術大会in岐阜（理学療法学37. Supplement 2: P2-013）	下肢の視標追従における筋力調節能力と立位姿勢制御能力との関係性を検討した。膝関節伸展、足関節底屈運動により検討した結果、力の漸増・漸減運動時に誤差が大きかった。また足関節底屈運動の20%MVC一定保持課題と姿勢制御時の重心総軌跡長との間で有意な相関を認めた。 発表者名：竹林 秀晃，吉良 玉姫，藤本 千紘，岡部 孝生，宮本 謙三，滝本 幸治，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，森岡 周
2）脳卒中片麻痺患者における振動刺激が運動錯覚に与える影響	—	平成22年5月	第45回日本理学療法学術大会in岐阜（理学療法学37. Supplement 2: P1-092）	脳卒中患者を対象に、振動刺激が運動錯覚に与える影響について関節位置覚検査により検討した。麻痺側肘屈曲位にある上腕二頭筋に振動刺激を加えた結果、6名中4名が錯覚を経験し肘が伸展したという内省を得た。また、内省を反映するように肘伸展方向への関節位置覚の誤差を認めた。 発表者名：武田 正和，竹林 秀晃，滝本 幸治，竹村 記和，橋本 竜也
3）物理療法に関する理学療法学生のアンケート調査―臨床実習前後の意識変化に着目して―	—	平成22年5月	第45回日本理学療法学術大会in岐阜（理学療法学37. Supplement 2: P2-306）	今後の物理療法教育について検討するため、臨床実習前後の学生の物理療法に対する意識調査を実施した。結果、実習前後を問わず物理療法の種類はある程度説明できるが、その作用機序について説明できる学生が半数以上であった。有効性や興味・関心については肯定的な意見が多かった。 発表者名：滝本 幸治，岡部 孝生，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，竹林 秀晃，宮本 謙三
4）異なるテンポによる足部タッピング運動の特徴に関する研究―外的および自己ペース運動を用いて―	—	平成22年11月	第39回四国理学療法士学会in高知（プログラム・抄録集p102）	足タッピング運動を異なるテンポ速度で実施し、その制御特性を検討した。結果、テンポ音を聴取しながら速いテンポでタップしているときには、タップ間隔の自己相関を認めたことから、巧みにタイミング制御が行われていることが示唆された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，椛秀人
5）高校運動部のコアコンディショニングの検討―Functional Movement Screen(FMS)の紹介	—	平成22年11月	第39回四国理学療法士学会in高知（プログラム・抄録集p39）	体幹のコアコンディショニングについて、FMSを用いて姿勢制御や筋力との関連について検討した。結果、FMSスコアと姿勢制御能力および下肢筋力との間に相関を認めず、コアの機能は重心動揺や筋力とは異なる側面に反映することが考えられた。 発表者名：藪内正樹，竹林秀晃，滝本幸治
6）自己ペースおよび外的ペースによる足タッピングの特徴―異なるテンポを用いた若年者と高齢者の比較―	—	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会in宮崎（理学療法学38. Supplement 2: PI1-045）	一側の足タッピング課題を用いて、若年者と高齢者の比較を行いその特徴について検討した。結果、速いテンポ(2.0Hz)時にそれより遅いテンポより正確なタッピングが可能であるとともに、自己相関を認めたことよりタッピングの誤差修正を行う過程が反映されたと考えられる。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間 豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，椛 秀人

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7）理学療法英語専門学術書における専門語彙の抽出とその特性	―	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会in宮崎（理学療法学38. Supplement 2: PI1-460）	理学療法士のESP(English for Specific Purpose)教育の基礎的研究のため、背学療法分野の専門学術書に出現する語彙項目を抽出し分析した。結果、学術雑誌コーパスからは539タイプ、専門書コーパスからは529タイプが抽出され、2種類のコーパスに共通点がみられた。 発表者名：宮本 祥子 , 五百蔵 高浩 , 宮本 謙三 , 宅間 豊 , 井上 佳和 , 竹林 秀晃 , 岡部 孝生 , 滝本 幸治
8）反応時間における筋収縮と筋弛緩の特性―要求する筋力レベルの違いが与える影響―	―	平成23年5月	第67回日本体力医学会中国・四国地方会in徳島（体力科学60: p540, 2011）	筋力調節を要求し筋収縮と筋弛緩を行った場合の反応時間について検討した。肘関節屈曲の等尺性収縮による単純反応課題により検討した結果、筋収縮より筋弛緩により反応する際の反応時間が遅延した。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，岡部孝生
9）筋出力調節能における視標追従課題の特性	―	平成23年9月	第66回日本体力医学会大会in山口（体力科学60: p596, 2011.）	視標追従する筋出力調節を保持・漸増・漸減運動時の相違について、筋出力応答特性を検討した。等尺性膝伸展力発揮により検討した結果、保持運動時より筋出力の増減が求められる漸増・漸減運動において追従運動が困難であり、また漸減運動でより顕著であった 発表者名：竹林秀晃，宮本謙三，滝本幸治，岡部孝生，宅間豊，井上佳和
10）異なる条件下での足タッピング運動の特徴－異なるテンポおよびテンポ音の有無による影響－	―	平成23年9月	第66回日本体力医学会大会in山口（体力科学60: p598, 2011.）	リズムを刻むテンポ速度やテンポ音の有無が下肢の周期運動制御（足タッピング）に及ぼす影響について検討した。結果、条件によりタイミング制御の精度が異なることが分かり、遅いテンポ且つテンポ音がない条件下でよりタイミング制御が困難であることが示された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，岡部孝生，椛秀人
11）視標追従課題における求心性・遠心性収縮の制御特性	―	平成23年11月	第40回四国理学療法士学会 in愛媛（プログラム・抄録集p46）	視標追従課題における求心性・遠心性収縮の制御特性を膝関節伸展運動にて検討した。結果、求心性・遠心性収縮による誤差に差を認めなかったが、遠心性収縮において誤差や力の変動が大きくなる傾向にあった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，岡部孝生，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，森岡周
12）正確な周期運動を継続する条件についての検討―足タッピング課題を用いて―	―	平成23年11月	第40回四国理学療法士学会 in愛媛（プログラム・抄録集p44）	正確な周期運動を継続する条件について足タッピング課題により検討した。結果、足タッピングの手掛かりとなるテンポ音の付与と撤回を反復することによってタッピング間隔誤差・変動が減少する結果が得られた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，椛秀人
13）周期的な等尺性筋収縮を用いたタイミングと筋出力調節能力の検討	―	平成24年3月	第25回高知県理学療法学会in香南市（抄録集p18）	下肢の周期的な等尺性筋収縮課題（足タッピング）を用いて、異なるテンポ下での筋出力調節能力について検討した。結果、遅いテンポ(0.5Hz)にのみテンポ音のない条件下において、タッピング間隔や筋出力の誤差と標準偏差が大きくなる傾向が見いだされた。 発表者名：滝本 幸治，竹林 秀晃，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，椛秀人
14）臨床評価実習，臨床短期実習に伴う理学療法士実習生の志望動機・職業レディネス・気分状態の変化とそれらの関連性について	―	平成24年3月	第25回高知県理学療法学会in香南市（抄録集p27）	理学療法実習生の志望動機、職業レディネス、気分状態等について、実習前・中・後での変化を縦断的に検討した。結果、実習前に抑うつや気分の落ち込みがある学生は、その後職業選択への関心が低く、実習中の緊張や不安が高い傾向であった。 発表者名：山根　暁，滝本幸治，片山訓博，古口高志

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15）地域に根付いた介護予防運動教室の展開と効果検証について	—	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会in兵庫（理学療法学 39. Supplement 2: 0826）	理学療法士養成校としての職能を活かし、地域住民を主体とした介護予防運動教室の展開と効果について検証した。結果、運動教室による運動機能の向上を認めるとともに、運動教室のリーダー育成や定期的な体力測定などにより地域住民主体の継続的な活動に貢献できたと考える。 発表者名：滝本 幸治，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，竹林 秀晃，岡部 孝生，松村 千賀子
16）加齢による求心性・遠心性収縮時の関節位置制御特性	—	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会in兵庫（理学療法学 39. Supplement 2: 0885）	視標追従課題における求心性収縮(CON)と遠心性収縮(ECC)時の関節位置制御の特性を加齢の影響とともに検討した。結果、若年・高齢者ともにCONよりECC時に力発揮誤差が大きく、若年者より高齢者の方がCON・ECCともに誤差が大きかった。 発表者名：竹林 秀晃，滝本 幸治，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，森岡 周
17）求心性・遠心性収縮の関節位置制御特性	—	平成24年5月	第69回日本体力医学会中国・四国地方会in高知（体力科学61: p454, 2012）	視標追従課題の膝伸展による遠心性収縮(ECC)と求心性収縮(CON)の特性を探ることを研究目的とした。結果、視標追従の絶対誤差や力発揮の変動はECCで大きくなる傾向を認めた。一方、恒常誤差ではCONはーの、ECCは＋の誤差であり収縮様式間で有意差を認めた。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，井上佳和，岡部孝生，宅間豊，宮本祥子
18）周期的な等尺性筋収縮のタイミングと筋出力調節の特性	—	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会in兵庫（理学療法学 39. Supplement 2: 1095）	下肢の周期的な等尺性筋収縮課題を行い、異なるテンポによる筋出力調節の特性について検討した。目標とする筋出力に対する誤差は、遅いテンポのとき且つテンポ音がない条件下で有意に大きかった。一方、力発揮の変動はテンポ速度の影響を受けなかった。 発表者名：滝本 幸治，竹林 秀晃，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，椛 秀人
19）聴覚リズム刺激を用いた等尺性筋収縮のタイミングと筋出力調節の特性―練習試行と再生試行による検討―	—	平成24年9月	第67回日本体力医学会大会in岐阜（体力科学61: p569, 2012.）	聴覚リズム刺激により一側足関節の周期的な底屈力発揮課題を行い、タイミングと筋出力調節の特性について検討した。結果、テンポ間隔が大きいときに注意の分散によりタイミングや力発揮制御能力が低下したことが考えられた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，椛秀人
20）同一運動速度時の短縮性・伸張性収縮の制御特性―加齢による影響―	—	平成24年9月	第67回日本体力医学会大会in岐阜（体力科学61: p571, 2012.）	短縮性収縮(CON)と伸張性収縮(ECC)による膝関節屈伸の視標追従課題を若年・高齢群を対象に実施した。結果、目標とする膝屈伸角度との誤差は両群ともにECCで有意に大きく、群間比較では高齢群がCON/ECCともに有意に高値であり、関節運動制御能は加齢により低下することが示唆された。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，岡部孝生

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21）追従課題における関節位置調節と筋出力調節の課題特性と関連性	—	平成24年11月	第41回四国理学療法士学会in香川（プログラム・抄録集p57）	視標追従課題による膝関節運動の関節位置調節課題と筋出力調節課題を実施した。結果、関節位置調節より筋出力調節の方が精度は低く、筋弛緩の際に力制御が難しくなることが見いだされた。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，森岡周，宮本謙三，井上佳和，岡部孝生，宮本祥子，宅間豊
22）等尺性収縮による下肢タッピングの課題特性	—	平成24年11月	第41回四国理学療法士学会in香川（プログラム・抄録集p58）	等尺性収縮下での下肢タッピングの特性について若年者を対象に検討した。結果、聴覚リズム刺激がなく遅いテンポ下で、タップ間隔の誤差が大きくなった。また、遅いテンポでは発揮する力が目標とする値に対して誤差が大きかった。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，椛秀人
23）運動観察が歩行動作の学習に及ぼす有効性	—	平成24年11月	第41回四国理学療法士学会in香川（プログラム・抄録集p70）	脳卒中症例の運動観察による歩行動作の改善効果について検討した。結果、通常理学療法より観察学習を用いた方が歩行時の歩幅や単脚支持時間に左右均等性を認め、運動観察学習の有効性が示唆された。 発表者名：池上大輝，竹林秀晃，滝本幸治，山本知弘，野田昌志
24）理学療法専門学術書における英語表現の特徴に関する研究	—	平成24年11月	第41回四国理学療法士学会in香川（プログラム・抄録集p92）	理学療法分野の英語コーパスの特性を共起語の観点から分析した。結果、理学療法分野にはパターン化された結びつきが存在することが考えられ、共起パターンの学習が理学療法分野の英語専門学術書の理解を早める有効な方略であることが示唆された。 発表者名：宮本祥子，五百蔵高浩，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，竹林秀晃，岡部孝生，滝本幸治
25）加齢に伴う力とタイミングの制御特性	—	平成25年3月	第26回高知県理学療法学会in高知市（抄録集p18）	足タッピング課題を用いてテンポ音と同期（練習課題）もしくはテンポ音を消去（再生課題）した条件下でのタイミングと力制御の特徴を若年・高齢者を対象に検討した。結果、タップ間隔誤差は高齢群で大きく、力発揮やタップ間隔の変動も高齢群で大きくなる傾向を示した。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，島﨑省伍，下川貴大，椛 秀人
26）自己身体における視覚情報と身体感覚情報との不一致が姿勢制御に及ぼす影響	—	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会in名古屋（理学療法学40. Supplement 2: P-A基礎-113）	リアルタイムに視覚情報を変化させることで身体感覚情報との不一致をつくり、姿勢制御への影響を検討した。結果、自身の立位姿勢をより大きく回転させた映像（135°、180°）を被験者自身に見せた際に、より大きな重心動揺（総軌跡長、矩形面積）を認めた。 発表者名：竹林 秀晃，弘井 鈴乃，滝本 幸治，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生
27）視標追従課題を用いた下肢の筋出力調節能力の特性−漸増・保持・漸減運動による検討−	—	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会in名古屋（理学療法学40. Supplement 2: P-A基礎-115）	一側膝関節の等尺性膝伸展力発揮による視標追従課題を用いた力制御特性について検討した。結果、10%MVCより30%MVCの力発揮の方が目標筋力と発揮筋力との誤差が有意に大きかった。また、漸減運動時の方がより誤差が大きい傾向であった。 発表者名：松村 宏樹，上野山 貴士，滝本 幸治
28）加齢に伴う筋出力とタイミングの制御特性−足タッピング課題を用いた検討−	—	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会in名古屋（理学療法学40. Supplement 2: P-A基礎-194）	下肢タッピング課題により力とタイミングの制御特性を見出すとともに加齢の影響について検討した。結果、タッピング間隔誤差は高齢者で大きく、テンポが遅いほど誤差が大きかった。また、力発揮の変動は高齢者で大きかったが、力発揮誤差は若年者が大きかった。 発表者名：滝本 幸治，竹林 秀晃，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，椛 秀人

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
29）視標追従課題を用いた下肢CKC条件下における筋出力調節能力の特性-漸増・保持・漸減運動による検討-	—	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会in名古屋（理学療法学40. Supplement 2: P-A基礎-210）	下肢CKC条件下での筋出力調節課題(10/20/30% MVC)を行い、その制御特性について検討した。結果、10/30%MVC間で有意差を認め30%MVC時により誤差が大きかった。また、漸減運動時がより誤差が大きい傾向であった。 発表者名：上野山 貴士，松村 宏樹，滝本幸治
30）加齢に伴うタイミングと筋出力制御の特性―足タッピング課題を用いた検討―	—	平成25年9月	第68回日本体力医学会大会in東京（体力科学62: p590，2013）	一側足関節の周期的な足タッピング課題により、下肢周期運動の特性とともに加齢に伴う影響を検討した。結果、多くの指標においてテンポ音がない条件で且つテンポが遅いほど誤差や変動が大きかった。力制御に関しては高齢者より若年者の誤差が大きいという知見が得られた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人
31）等尺性収縮における内側広筋のトレーニング方法の検討	—	平成25年11月	第42回四国理学療法士学会in徳島（プログラム・抄録集p54）	内側広筋において肢位の違いによる筋活動の変化を検討した。結果、踵セッティングおよび立位での股内転同期セッティングでより内側広筋の活動が賦活することが確認された。 発表者名：奥田教宏，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，滝本幸治
32）高齢者におけるMental Chronometryの特性と各種身体能力との関係	—	平成25年11月	第42回四国理学療法士学会in徳島（プログラム・抄録集p68）	歩行動作の心的時間測定（MC）と、高齢者のMCと身体能力との関連性について検討した。結果、高齢者はMCと実際の歩行との誤差が大きく、MCより実際の歩行時間が延長している者が有意に多かった。 発表者名：竹林秀晃，小松祐貴，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏
33）加齢により異なる力制御の特性―足タッピング課題を用いた検討―	—	平成25年11月	第42回四国理学療法士学会in徳島（プログラム・抄録集p70）	足タッピング課題を実施し、力制御の加齢による特性について検討した。結果、筋出力値の変動は高齢者が有意に大きかったが、目標筋出力値に対する筋出力値の誤差は若年者の方が大きいという特徴的な結果を得た。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人
34）地域在住高齢者における複合的運動機能に対しての注意機能と身体機能の関連性について	—	平成25年11月	第42回四国理学療法士学会in徳島（プログラム・抄録集p86）	複合的運動機能テストであるTrail Walking Test(TWT)と身体機能や注意機能との関連について検討した。結果、TWTは歩行能力や筋力、バランスや敏捷性、注意機能と有意な相関を認め、TWTは種々の身体機能や注意機能の総合的指標と成り得る。 発表者名：榛田彩香，竹林秀晃，滝本幸治，高芝潤，川渕正敬，前田秀博，國澤雅裕

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
35）高齢者におけるMental Chronometryの時間・空間的一致性と身体能力との関係	—	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会in横浜（理学療法学 41. Supplement 2: 0100）	0m歩行による心的時間(MC)の加齢変化と、MCと身体機能との関連について検討した。結果、MCと実測時間との誤差は若年者より高齢者で有意に高値を示した。また、その誤差は若年・高齢者ともに実測時間よりMCが有意に延長する者が多かったが、若年・高齢者間で差は認めなかった。 発表者名：竹林 秀晃，滝本 幸治，奥田 教宏，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，小松祐貴
36）加齢に伴う足タッピングのタイミングと筋出力制御の特徴― 異なる目標発揮筋力による検討 ―	—	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会in横浜（理学療法学 41. Supplement 2: 0335）	足タッピング課題を用いて加齢の要因に注目し、異なる力発揮がタイミングと力制御に及ぼす影響について検討した。結果、タッピング間隔の誤差や変動は高齢者が有意に大きく、目標発揮筋力が大きくなるほどその差が縮小する傾向であった。筋出力ピーク値の変動も高齢群で有意に大きかった。 発表者名：滝本 幸治，竹林 秀晃，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，奥田 教宏，椛 秀人
37）肢位の違いによる内側広筋の筋活動特性	—	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会in横浜（理学療法学 41. Supplement 2: 1294）	肢位別による内側広筋の筋発揮量の相違について筋電図を用いて検討した。結果、立位同期settingでは筋活動量が最も低く、踵settingでは最も筋活動量が高かった。 発表者名：奥田 教宏，竹林 秀晃，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生，滝本 幸治
38）地域高齢者における転倒因子の検討と各年代における片脚立位時間の変化について	—	平成26年11月	第43回四国理学療法士学会in高知（プログラム・抄録集p80）	地域在住高齢者に対し、転倒に関連する因子を検討するとともに各年代の片脚立位時間について検討した。結果、転倒歴のある者はない者と比較して片脚立位時間や膝伸展筋力が有意に低値であり、年代が上がるにつれて片脚立位の保持時間が短縮していた。 発表者名：奥田教宏，竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生
39）足タッピング課題による加齢に伴う力制御能力の特性―異なる力発揮水準を用いた検討―	—	平成26年11月	第43回四国理学療法士学会in高知（プログラム・抄録集p90）	足タッピングを異なる力発揮水準で行い力制御の特性を若年・高齢群間で比較した。その結果、小さい力発揮時に高齢群の力発揮の変動が大きく、力発揮水準が大きいほど若年・高齢群の差が縮小する傾向にあった。 発表者名：滝本幸治，高橋夏姫，竹林秀晃，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，椛秀人
40）Mental Rotation課題における道具使用・物体把持の影響	—	平成26年11月	第43回四国理学療法士学会in高知（プログラム・抄録集p113）	運動イメージの評価法のひとつであるMental Rotation（MR；心的回転）課題を用いて、道具使用有無別に成績を比較した。結果、正答率に差を認めなかったが、反応時間は道具を使用した条件下で有意に速かった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
41）Walking Stroop Carpetによる転倒リスク評価の妥当性	―	平成27年3月	第28回高知県理学療法士学会 in高知市（抄録集p24 ）	Walking Stroop Carpet (WSC)は転倒リスク評価に用いることができるかその妥当性について検討した。結果、転倒歴の有無別群間で、WSC（色条件）の所要時間に有意差を認め、ROC曲線を用いた検討より、転倒歴の判別性能が高いことが確認された。 発表者名：滝本幸治，近森鷹希，竹林秀晃，奥田教宏，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，門田美和，古谷千佐子，宮本謙三
42）高齢者の努力歩行がMental Chronometryに及ぼす影響―転倒と運動機能との関連―	―	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会in東京（理学療法学42 Supplement 2: P2-A-0513）	高齢者の努力歩行における心的時間(MC)に着目し、転倒や運動機能との関連ついて検討した。結果、歩行の実測時間とMCとの誤差は転倒歴のある高齢者で高値を示した。また、時間一致の精度が高い者ほど運動機能が高かった。 発表者名：竹林 秀晃，滝本 幸治，奥田 教宏，宮本 謙三，宅間 豊，井上 佳和，宮本 祥子，岡部 孝生
43）Walking Stroop Carpetによる新しい転倒リスク評価の有用性	―	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会in東京（理学療法学42 Supplement 2: P3-C-1069）	Walking Stroop Carpet(WSC)という二重課題が転倒リスク者の検出に有効であるか検討した。結果、WSC（色条件）とTimed Up & Go testが転倒歴を説明する変数として抽出されたが、WSCの判別性能がより優れることが分かった。 発表者名：滝本幸治，近森鷹希，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三
44）Stroop Walking Taskを用いた転倒リスク評価の有用性	―	平成27年6月	第35回日本リハビリテーション医学会中国・四国地方会in高知（プログラム・抄録集p54-55 ）	Stroop Walking Task (SWT)という二重課題が転倒リスク者の検出に有効であるか検討した。結果、SWT遂行時のエラー数は転倒歴有無別群間で差は認めなかったが、SWT（色条件）は正診率が74.5%であり、転倒リスク者の検出に有効であることが考えられた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃
45）高齢者における歩行の運動イメージについて―自由歩行と努力歩行のMental Chronometry―	―	平成27年6月	第35回日本リハビリテーション医学会中国・四国地方会in高知（プログラム・抄録集p56 ）	転倒歴の有無別群間で、歩行の運動イメージ能力をMental Chronometry (MC)により評価し比較・検討した。結果、転倒群の運動イメージは有意に誤差が大きく、それは努力歩行においてより顕著であった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治
46）複数体肢の同時動作における反応時間からみた運動制御	―	平成27年11月	第44回四国理学療法士会学会in愛媛（プログラム・抄録集p77）	複数体肢の同時動作の組み合わせによる反応時間の特性について、健常成人を対象に検討した。結果、四肢いずれか単肢および両上肢や両下肢で反応するより、同側上下肢や対側上下肢で反応する際に有意に反応時間が遅延することが分かった。 発表者名：竹林秀晃，前田康介，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
47）自治体事業における効率的な認知機能テストの試み―Walking Stroop Carpetを用いた検討―	―	平成28年3月	第29回高知県理学療法学会in香南市（抄録集p28）	Walking Stroop Carpet(WSC)という二重課題による歩行能力評価は、集団に対する認知機能検査に有用か地域在住高齢者を対象に検討した。結果、認知機能検査(MMSE)が24点未満の者を正診率90.5%で検出できたことから、WSCの認知機能検査としての有用性が確認された。 発表者名：滝本幸治，伊東咲也香，上岡奈津美，川久保優菜，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三
48）Walking Stroop Carpetによる認知機能評価の有用性―自治体事業における地域在住高齢者を対象とした検討―	―	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会in札幌（理学療法学43. Supplement 2: O-YB-01-4）	Walking Stroop Carpet(WSC)が自治体事業等において認知機能障害のスクリーニング検査として有用であるか地域在住高齢者を対象に検討した。重回帰分析などにより検討した結果、WSCは認知機能検査として有用であることが見いだされた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三
49）加齢が下肢の視覚誘導性関節運動調節に及ぼす影響	―	平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会in札幌（理学療法学43. Supplement 2: P-KS-29-2）	加齢が下肢の視覚誘導性関節運動調節に及ぼす影響について検討した。結果、関節位置覚再現性の誤差は若年・高齢者間で差を認めなかったが、視覚誘導性関節運動では高齢者において有意に誤差が大きかった。 発表者名：竹林秀晃，田中未優，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏
50）高齢者の視覚フィードバックによる関節位置調節課題の制御特性	―	平成28年11月	第78回日本体力医学会中国・四国地方会in 山口（抄録集p36-37）	加齢が下肢の視覚フィードバックによる関節位置調節課題に及ぼす影響について検討した。結果、静的な関節位置覚再現性は高齢・若年者間で差を認めなかったが、動的な条件下では関節位置調節の誤差が高齢群で有意に大きかった。 発表者名：竹林秀晃，田中美優，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，岡部孝生，奥田教宏
51）Dual Taskによる歩行能力と認知機能評価の有用性―Walking Stroop Carpetによる検討―	―	平成28年11月	第45回四国理学療法士学会in香川（プログラム・抄録集p39）	Walking Stroop Carpet(WSC)という新しい二重課題による歩行能力評価により、転倒リスクと認知機能低下の評価を高齢者を対象に試みた。結果、WSCは転倒歴や認知機能障害の判別性能が良好であることが示された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三
52）自己身体像の視覚外乱刺激は感覚の重みづけを変化させる―身体感覚情報との不一致が及ぼす影響―	―	平成28年11月	第45回四国理学療法士学会in香川（プログラム・抄録集p67）	視覚に自己の背面像が回転する外乱刺激を加えることで身体感覚情報との不一致をつくり、立位保持時の重心動揺に与える影響を検討した。結果、回転角度が大きくなるに従い、視覚より前庭覚や体性感覚が関与することが示唆された。 発表者名：竹林秀晃，弘井鈴乃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
53）心理社会的要因による痛み関連脳領域の変化―高社会性げっ歯類を用いた基礎研究―	―	平成28年11月	第45回四国理学療法士学会in香川（プログラム・抄録集p68）	プレーレーハタネズミを用いてその社会環境を変化させ、心理･社会的要因により痛み関連脳領域の反応性がどう変化するか検討した。結果、心理･社会的要因による痛みの修飾メカニズムにドーパミンが関与している可能性が示唆された。 発表者名：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，由利和也
54）視覚フィードバック・負荷の有無が関節位置覚に及ぼす影響―若年者と高齢者の比較―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会in千葉	視覚フィードバック（FB）と負荷有無の条件下で、加齢を加味して関節運動制御特性を検討した。結果、高齢者では視覚FBがない条件下で関節位置の変動が大きく、目標関節角度に対して正の誤差が大きくなる特徴が得られた。 発表者名：竹林秀晃，津野沙也加，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生
55）痛みの社会的修飾メカニズムの一考―一夫一婦制げっ歯類を用いた基礎的研究―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会in千葉	高社会性げっ歯類（プレーリーハタネズミ）を用い、社会環境の変化による痛みの修飾メカニズムについて検討した。結果、パートナーの存在が痛刺激に対するペインマトリックスの反応性を高めることが示唆された。 発表者：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，由利和也
56）パーキンソン病の姿勢調節障害とは―表面筋電図を用いた検討―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会in千葉	パーキンソン病（PD）者の姿勢調節障害に着眼し、立位保持時の足関節周囲筋を筋電図学的に評価し検討した。結果、PDの進行に伴い立位保持時の重心動揺が大きくなり、前脛骨筋の活動が増大すること確認された。 発表者名：下川貴大，横瀬崇光，岡本和久，渡利太，武田正和，竹林秀晃，滝本幸治
57）地域在住高齢者に対する二重課題を用いた歩行能力の年代比較―Walking Stroop Carpetによる検討―	―	平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会in千葉	地域在住高齢者の年代比較をWalking Stroop Carpet（WSC）課題を用いて実施し、加齢による歩行能力の特性を検討した。結果、一般的な歩行能力テストでは検出が困難であったが、WSC課題（文字条件）は、後期高齢者（75歳～）と超高齢者（85歳～）の差異を明らかにした。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，宮本謙三
58）腱への振動刺激が筋力・筋出力調節に及ぼす影響	―	平成29年9月	第72回日本体力医学会大会in愛媛	振動刺激が筋力と筋出力調節能力に及ぼす影響を、膝伸展運動課題を用いて大腿四頭筋腱に対し振動刺激を加えた。結果、再大筋力の増加とともに、膝伸展40%，20%MVC時に筋出力調節能力の精度が向上することが分かった。 発表者名：竹林秀晃，吉川尚輝，滝本幸治，宮本謙三，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，奥田教宏，渡邊家康

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
59）新しい二重課題を用いた地域在住高齢者に対する転倒リスク評価―Walking Stroop Carpet課題による検討―	―	平成29年9月	第72回日本体力医学会大会in愛媛	地域在住高齢者を対象に、Walking Stroop Carpet（WSC）課題という二重課題による転倒リスク評価を試みた。結果、WSC課題（色条件）は他の一般的な歩行能力指標よりも転倒歴の判別性能に秀でている結果が得られた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家康，宮本謙三
60）心理･社会的ストレスによるペインマトリックスの反応性変化―炎症性疼痛時の脳活動性―	―	平成29年11月	第46回四国理学療法士学会in徳島（プログラム・抄録集p73）	高社会性げっ歯類のプレーリーハタネズミを用いて心理･社会的要因による痛み関連領域の反応性を検討した。炎症性疼痛を惹起させ脳を採取した結果、パートナーロス群では内因性疼痛抑制系であるドーパミン回路が機能しにくく、嫌悪感や不安が強かった可能性が示唆された。 発表者名：奥田教宏，大迫洋治，竹林秀晃，滝本幸治，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宅間　豊，宮本謙三，由利和也
61）加齢による二重課題条件下での歩行特性―体幹加速度計測による検討―	―	平成29年11月	第46回四国理学療法士学会in徳島（プログラム・抄録集p109）	二重課題（減算課題）歩行時の体幹加速度を計測し、加齢による歩行特性について検討した。結果、加齢とともに二重課題による影響を反映したパラメータは加速度成分(RMS)であり、高齢者のみ単純課題－二重課題間でRMSの増大を認めた。 発表者名：滝本幸治，山本聖香，浅井　剛，竹林秀晃，奥田教宏，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰，宮本謙三
62）二重課題による身体的フレイル評価の試み―Walking Stroop Carpetを用いた検討―	―	平成30年2月	第3回日本予防理学療法学会サテライト集会in東京（プログラム集p78）	Walking Stroop Carpet（WSC）という歩行による二重課題を用いて、地域在住高齢者を対象に身体的フレイルの評価を試みた。結果、一般的な歩行能力検査では検出できなかったが、WSC課題（文字条件）はプレフレイルに該当する高齢者を検出することができた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林　悠，宮本謙三
63）地域在住高齢者の認知機能と歩行能力との関連―体幹加速度計測による検討―	―	平成30年6月	第55回日本リハビリテーション医学会学術集会in福岡	地域在住高齢者を対象に、認知機能テストとともに歩行を加速度センサで計測し、認知機能と歩行機能との関連を精査した。結果、健常群より認知機能低下群の歩行速度が遅く、歩行時の加速度振幅が大きい特徴を得たが、多変量解析では有意な変数として抽出されなかった。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，浅井　剛，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林　悠，宮本謙三
64）加齢における選択反応課題のサイモン効果が及ぼす影響	―	平成30年6月	第55回日本リハビリテーション医学会学術集会in福岡	選択反応課題（ボタン押し課題）における刺激の一致・不一致が加齢とともに反応時間にどう影響するか検討した。結果、若年・高齢者ともに反応時間の遅延を認める共通項も認めたが、刺激と反対方向に反応する不一致課題では高齢者がより遅延した。 発表者名：竹林秀晃，入野哲暢，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
65）Older adult have delayed reaction times to peripheral visual stimuli during exercise 高齢者における運動中の周辺視野刺激に対する反応時間の遅延について	—	平成30年9月	第73回日本体力医学会大会in福井（JPFSM Vol.7,2018: p342）	中心及び周辺視野に提示する視覚刺激に対するステッピングの反応時間について、20代以上の成人65名を対象に検討した。結果、50歳代を境に非線形に反応時間は遅延し、反応時間のバラつきが大きくなる結論を得た。 発表者名：竹林秀晃，今西　諒，滝本幸治，奥田教宏，宮本謙三，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，渡邊家泰
66）認知機能低下が歩行に及ぼす影響―加速度計測による歩行パラメータを用いた検討―	—	平成30年10月	第5回日本予防理学療法学会学術大会in福岡（プログラム集p149）	一般的な歩行能力検査(10m歩行)時に加速度計測を行い、高齢者の認知機能が歩行パラメータのどのような側面に影響するか検討した。結果、認知機能が低下している者は歩行時の加速度振幅(RMS)が増大するとともに、歩行の円滑性の指標であるHarmonic ratio（前後成分）が低値を示したことから、円滑性に欠く歩行をしている可能性が示唆された。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，浅井　剛，奥田教宏，渡邊家泰，岡林　悠，宮本謙三
67）視覚外乱刺激において周辺環境の有無が姿勢制御に及ぼす影響	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会in高知（プログラム・抄録集p56）	Head Mounted Displayを用いて映像を回転させることによる視覚外乱刺激を加え、姿勢制御に及ぼす影響について検討した。結果、背景があると重心動揺が増大するとともに、回転角度が大きいとより顕著に重心動揺が増大した。視覚情報が姿勢制御に与える影響が異なることから、トレーニングへの応用が期待できる。 発表者名：竹林秀晃，藤田雅登，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間　豊，宮本謙三
68）認知機能低下が歩行パラメータに与える影響―体幹加速度計測による検討―	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会in高知（プログラム・抄録集p76）	地域在住高齢者を対象に、認知機能低下有無が各種歩行パラメータに与える影響について検討した。結果、歩行時の合成RMS（加速度振幅の大きさ）が健常群より認知機能低下群で有意に増大するとともに 、多変量解析により認知機能低下を説明する変数として抽出された（OR:1.34，95%CI:1.01-1.77，p<0.05）。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，浅井　剛，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，岡林　悠，宮本謙三
69）運動負荷による疼痛域値の変化―自転車エルゴメーターによる比較―	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会in高知（プログラム・抄録集p85）	自転車エルゴメーター駆動の運動負荷量の違いが疼痛域値に与える影響について、健常若年成人男性30名を対象に検討した。心拍数100拍／分と150拍／分の運動20分実施後、第6頚椎棘突起側方の表在感覚・圧痛域値を計測した結果、いずれの条件も運動前後で比較で、運動後に疼痛域値が上昇した。しかし、条件間では両域値に差を認めなかった。 発表者名：奥田教宏，中平愛里，竹林秀晃，宮本謙三，宅間　豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，滝本幸治，渡邊家泰，大迫洋治
70）視空間記憶能力と歩行能力および転倒歴との関連―視覚的ワーキングメモリスパンテストを用いた検討―	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会in高知（プログラム・抄録集p144）	視空間情報の記憶能力と高齢者の歩行能力・転倒との関連について、高齢者15名を対象に検討した。歩行能力検査（10m歩行、TUG）とともに、視覚的ワーキングメモリスパンテスト（VWMST）を実施した結果、非転倒群より転倒群で空間位置情報を記憶する能力（スペース課題）が有意に低下しており、多変量解析によりスペース課題の成績はTUGを説明する変数として抽出された。 発表者名：橋詰愛里彩，谷脇弘将，山崎　優，滝本幸治

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
71）外来患者に対する杖適応の判断基準の検討	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会in高知（プログラム・抄録集p154）	整形外科疾患により外来通院中の患者を対象に、杖使用を決定づける要因について検討した。結果、杖使用群と未使用群間の比較において、有意に杖使用群の10m歩行時間が遅延しており、多変量解析によって歩行時間のみが杖使用有無を決定付ける変数として抽出された。ROC曲線による判別性能はAUC:0.79であり、カットオフ値は7.8秒であった。 発表者名：土居優仁，山本哲夫，山下亜乃，片岡歩，中内睦郎，滝本幸治
72）パーキンソン病症例を対象にした短期集中入院の効果	—	平成30年12月	第47回四国理学療法士学会in高知（プログラム・抄録集p165）	パーキンソン病(PD)専用リハコースに入院するPD症例37名の効果検証を行った。リハ専門職による介入を240分／日×週5回×5週間実施したところ、入院前後比較によりUPDRSのpart1（精神機能、行動及び気分）、part2（ADL）、part（運動機能）は有意に改善したが、part4（治療の合併症）は不変であった。また、抑うつ性(SDS)は有意に低下した。 発表者名：下川貴大，馬渕　勝，岡本和久，武田正和，横瀬崇光，國重裕二，藪田英吾，澤田侑貴，鎌田　剛，滝本幸治，三ツ井貴夫
73）臨床実習成績の妥当性と原因帰属要因との関連―15年前との比較―	—	平成31年2月	第32回高知県理学療法学会in高知市（抄録集p27）	学生の臨床実習成績に対する認識について、過去に実施したものと同様のアンケート調査を臨床総合実習後の4年次生（91名、延べ182件）を対象に実施した。結果、過去と同様に成績の帰属要因として努力が反映していたが、今回新たに指導者との相性が最も高く反映しており、過去の報告と異なる特徴的な変化であった。 発表者名：竹林秀晃，滝本幸治，奥田教宏，岡部孝生，宮本祥子，渡邊家泰，井上佳和，宅間豊，宮本謙三
74）運動習慣を有する高齢者の骨格筋量及び歩行特性―プレフレイルに注目した検討―	—	令和元年6月	第56回日本リハビリテーション医学会学術集会in神戸	運動習慣を有する高齢者も長期的には加齢に伴い体力が低下するが、その最初の転機であるプレフレイルの特徴を検討した。高齢者37名（ロバスト18名、プレフレイル19名）を対象に四肢骨格筋量と歩行パラメータを計測し特徴を検出したところ、プレフレイル群の方が四肢骨格筋量が低値を示し、歩行時の加速度振幅（垂直方向）が有意に高値を示した。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，渡邊家泰，門脇康平，井上優輝，宅間豊，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，浅井剛，岡林遥，宮本謙三
75）早期退院が可能であった肺炎患者の特徴と要因	—	令和元年6月	第56回日本リハビリテーション医学会学術集会in神戸	患者の栄養状態に注目し、肺炎患者の早期退院に向けた取り組みを行った。肺炎の診断にて入院しその後自宅退院となった61名の高齢者を対象に、入院時の体格指数(BMI)、栄養評価(SGA)、介護度、FIMなどのを用いて評価した。結果、入院時BMIとともに、SGAが早期退院に影響していることが示された。 発表者名：谷岡寿昭，西田佳祐，蔭山美紀，小松聖偏，市川徳和，滝本幸治
76）身体的フレイルが歩行に及ぼす影響―運動習慣を有する地域在住高齢者の検討―	—	令和元年9月	第74回日本体力医学会大会inつくば	身体的フレイルの基準に歩行速度があるが、定期的な運動習慣を有する高齢者における歩行の質的な側面の特徴を検出した。運動習慣を有する高齢者40名を対象に、J-CHSに基づくフレイル判定とともに歩行評価（速度、加速度計測）を実施した。結果、歩行速度はフレイル者がそうでない者より有意に低下し，加速度解析による歩行時の円滑さの指標(harmonic ratio)gaが低値（円滑さに欠く）特徴を検出した。なお、健常者とプレフレイルとの者間で、歩行の差異は認めなかった。 発表者名：滝本幸治，門脇康平，竹林秀晃，浅井剛，宮本謙三

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
77）視標追従課題における自他由来波形操作が運動制御に与える影響	—	令和元年11月	第48回四国理学療法士学会in愛媛	運動学習において運動観察学習の有効性が知られている。本研究では、視標追従力量調節課題による自他のフィードバック(FB)情報が、力量調節の学習に与える影響を検討した。健常成人32名を対象とし、視標追従力量調節課題を実施した結果、他者の課題成績のFBでは、運動主体感の低下を招き力量調節の学習が妨げられた。また、自己の課題成績がFBされたにもかかわらず、それが他者の課題成績であると疑った場合には学習が妨げられた。 発表者名：竹林秀晃，門田涼香，滝本幸治，奥田教宏，渡邊家泰，岡部孝生，宮本祥子，井上佳和，宅間豊，宮本謙三
「その他、研究発表等」 1）異なる音刺激周期による足タッピング運動の特徴ー外的および自己ペース運動を用いてー	—	平成23年2月	第10回KMS Research Meeting in高知大学医学部（プログラム・抄録集p70）	異なる音刺激周期で外的ペース(ET)運動と自己ペース(SI)運動を行い、その特徴について若年者を対象に検討した。結果、遅いペースより速いペース運動の方が、且つSI運動よりET運動の方が正確に周期運動を遂行できた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，椛秀人
2）周期的な等尺性筋収縮のタイミングと筋出力調節の特性	—	平成24年2月	第11回KMS Research Meeting in高知大学医学部（プログラム・抄録集p63-64）	下肢の周期的な等尺性筋収縮課題を行い、異なるテンポによる筋出力調節の特性について検討した。結果、遅いテンポほどタッピング間隔誤差が大きくなり、筋出力誤差が大きくなる結果が得られた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，椛秀人
3）加齢に伴う筋出力とタイミングの制御特性	—	平成25年2月	第12回KMS Research Meeting in高知大学医学部（プログラム・抄録集p60-61.）	足タッピング課題を用いて力とタイミングの制御特性を見出すため、異なるテンポ速度を用い加齢による影響について検討した。結果、タッピング間隔の誤差や変動は若年者より高齢者で大きく、テンポ速度が遅いほど誤差が大きい結果であった。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，宮本謙三，椛秀人
4）Walking Stroop Carpetによる転倒リスク評価の有用性	—	平成27年2月	第14回KMS Research Meeting in高知大学医学部（プログラム・抄録集p72.）	Walking Stroop Carpet(WSC)課題（3条件）が転倒リスク評価として有用であるか検討した。転倒歴有無別に転倒群・非転倒群間で比較した結果、WSC（色条件）とTUG（歩行能力評価）で有意差を認め、ROC曲線によりWSCの判別性がより優れていることが見いだされた。 発表者名：滝本幸治，竹林秀晃，奥田教宏，宮本謙三，椛秀人

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5）脳卒中患者における電動四輪車の自立に関与する因子の検討	—	平成27年2月	一般社団法人回復期リハビリテーション病棟協会第25回研究大会in愛媛	今後増加が推測されている脳血管疾患に着眼し、電動車いすを使用している脳卒中患者の特性について調査した。結果、電動車いすの自立別群間で年齢、介護度、屋内移動の自立度に有意差を認め、電動車いすの自立に関わる因子として低年齢と屋外移動の自立度が抽出された。 発表者名：上堀　琢，橋田芳恵，滝本幸治
6）臨床実習成績と原因帰属要因との関連	—	平成28年8月	第29回教育研究大会in香川（プログラム・抄録集p127）	臨床実習の成績とその帰属要因について、実習終了後の学生を対象に調査した。結果、実習評定と帰属要因間について、学生の努力と学生-指導者間の相性に相関関係を認めた。 発表者名：竹林秀晃，宮本謙三，井上佳和，宮本祥子，岡部孝生，滝本幸治

教　育　研　究　業　績　書

令和 2年　3月　31日

氏名　野中　紘士

研究分野	研究内容のキーワード
人間医工学	生理学、骨格筋、物理療法

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）講義の工夫	平成26年 10月1日 ～ 平成28年 3月31日	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学I・IIの講義にはアクティブラーニングを促通する目的で反転授業を取り入れている．具体的には自主制作した e-learning 教材で自宅学習させ，講義時間は演習やディスカッションに活用している．これにより、学生の臨床場面で獲得した知識の応用を習得させる効果があった．
2）実験・実習の工夫	平成26年 10月1日 ～ 平成28年 3月31日	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学I・IIの実習ではロールプレイを導入し，臨床場面で可能な限り近い状況で演習を行っている．学生にロールプレイでプレゼンテーションを行わせ，フィードバックを通じて，必要な知識と治療技術の修得ができるよう講義を展開している．これにより，学生の臨床能力育成に効果があった．
2　作成した教科書，教材 1)寒冷療法（講義用資料）	平成23年10月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学Iで、寒冷療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し、寒冷療法を理解させ，実施する能力を習得させる効果があった．
2)水治療法（講義用資料）	平成23年11月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学Iで，水治療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し、水治療法を理解させ，実施する能力を習得させる効果があった．
3)温熱療法（講義用資料）	平成23年11月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学Iで，温熱療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し、温熱療法を理解させ，実施する能力を習得させる効果があった。

事項	年月日	概　　要
4)光線療法（講義用資料）	平成24年5月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学IIで，光線療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し，光線療法を理解させる効果があった.
5)電気刺激療法（講義用資料）	平成24年5月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学IIで，電気刺激療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し，電気刺激療法を理解させ，実施する能力を習得させる効果があった.
6)牽引療法（講義用資料）	平成24年6月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学IIで，牽引療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し，牽引療法を理解させ，実施する能力を習得させる効果があった.
7)マッサージ療法（講義用資料）	平成24年7月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部理学療法学専攻の物理療法学IIで，マッサージ療法の効果とそのメカニズムおよび適応・禁忌について要点をまとめた資料を作成し，マッサージ療法を理解させ、実施する能力を習得させる効果があった.
8)骨格筋（講義用資料）	平成24年11月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部の理学療法学専攻と作業療法学専攻の形態機能学実習で，骨格筋の構造や生理学的特性および収縮のメカニズム，筋電図などについての要点をまとめた資料を作成した．骨格筋の形態機能を理解させる効果があった.
9)呼吸（講義用資料）	平成24年11月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部の理学療法学専攻と作業療法学専攻の形態機能学実習で，呼吸器の構造や生理学的特性およびガス交換のメカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．呼吸器の形態機能を理解させる効果があった.
10)神経（講義用資料）	平成24年12月	大阪府立大学総合リハビリテーション学部の理学療法学専攻と作業療法学専攻の形態機能学実習で，神経の構造や生理学的特性およ興奮の伝導・伝達のメカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．神経の形態機能を理解させる効果があった.

事項	年月日	概　　要
11)電気刺激療法（e-learning用教材）	平成26年5月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学IIで，電気刺激療法の予習・復習用e-learning教材を作成し，電気刺激療法の基本的原理とゲートコントロール理論の講義内容を理解させる効果があった.
12)心臓（講義用資料）	平成27年10月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類の理学療法学専攻と作業療法学専攻の形態機能学実習で，心臓の構造や生理学的特性および心臓の収縮メカニズムや心電図などについての要点をまとめた資料を作成した．心臓の形態機能を理解させる効果があった.
13)寒冷療法（e-learning用教材）	平成27年12月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学Iで，寒冷療法の予習・復習用e-learning教材を作成し，寒冷療法の基本的原理と効果の講義内容を理解させる効果があった.
14）温熱療法（e-learning用教材）	平成27年12月	大阪府立大学総合リハビリテーション学類理学療法学専攻の物理療法学Iで，温熱療法の予習・復習用e-learning教材を作成し，温熱療法の基本的原理と効果の講義内容を理解させる効果があった.
15）股関節の運動学（講義資料）	平成30年6月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動学演習で，股関節の解剖と運動学などについての要点をまとめた資料を作成した．股関節の運動学を理解させる効果があった.
16）膝関節の運動学（講義資料）	平成30年6月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動学演習で，膝関節の解剖と運動学などについての要点をまとめた資料を作成した．膝関節の運動学を理解させる効果があった.
17）足関節・足部の運動学（講義資料）	平成30年6月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動学演習で，足関節・足部の解剖と運動学などについての要点をまとめた資料を作成した．足関節・足部の運動学を理解させる効果があった.
18）関節リウマチの理学療法（講義資料）	平成30年11月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，関節リウマチの理学療法についての要点をまとめた資料を作成した．関節リウマチの理学療法を理解させる効果があった.
19）上肢の骨折の理学療法（講義資料）	平成30年11月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，上肢の骨折の理学療法についての要点をまとめた資料を作成した上肢の骨折の理学療法を理解させる効果があった.

事項	年月日	概　　要
20）肩関節障害の理学療法（講義資料）	平成30年11月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，肩関節障害の理学療法についての要点をまとめた資料を作成した肩関節障害の理学療法を理解させる効果があった.
21）靭帯損傷の理学療法（講義資料）	平成30年11月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の運動器障害系理学療法基礎演習で，靭帯損傷の理学療法についての要点をまとめた資料を作成した靭帯損傷の理学療法を理解させる効果があった.
22）姿勢制御（講義資料）	平成30年12月	京都橘大学健康科学部理学療法学科の臨床運動学演習で，姿勢制御などについての要点をまとめた資料を作成した．姿勢制御の運動学を理解させる効果があった.
23)細胞の構造と膜の興奮（講義用資料）	令和元年9月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学II（動物性機能）で，細胞構造と細胞膜の興奮メカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．細胞膜の興奮のメカニズムを理解させる効果があった.
24)骨格筋の構造と収縮のメカニズム（講義用資料）	令和元年9月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学II（動物性機能）で，骨格筋の構造と収縮のメカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．骨格筋の構造と収縮のメカニズムを理解させる効果があった.
25)運動単位，神経支配比，脊髄反射（講義用資料）	令和元年9月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学II（動物性機能）で，骨格筋に関する運動単位，神経支配比，脊髄反射メカニズムなどについての要点をまとめた資料を作成した．運動単位，神経支配比，脊髄反射メカニズムを理解させる効果があった.
26)骨格筋の代謝特性とエネルギー代謝（講義用資料）	令和元年9月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学II（動物性機能）で，骨格筋の代謝特性とエネルギー代謝などについての要点をまとめた資料を作成した．骨格筋の代謝特性とエネルギー代謝を理解させる効果があった.
27)骨の構造と生理（講義用資料）	令和元年9月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体機能学II（動物性機能）で，骨の構造と生理などについての要点をまとめた資料を作成した．骨の構造と生理を理解させる効果があった.
28)体幹の解剖学（講義用資料）	令和元年10月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体構造学III（神経・運動器）で，体幹の骨，筋および神経支配や作用，靭帯，周辺の血管などについての要点をまとめた資料を作成した．体幹の解剖を理解させる効果があった.

事項	年月日	概　　要
29)下肢の解剖学（講義用資料）	令和元年10月	奈良学園大学リハビリテーション学部理学療法学・作業療法学専攻の人体構造学III（神経・運動器）で，下肢の骨，筋および神経支配や作用，靭帯，周辺の血管などについての要点をまとめた資料を作成した．体幹の解剖を理解させる効果があった．
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）大阪府立大学　総合リハビリテーション系長および総合リハビリテーション学研究科長による平成25年度教員業績評価	平成26年 12月4日	総合評価S（4段階中最高評価）
2）大阪府立大学　総合リハビリテーション系長および総合リハビリテーション学研究科長による平成26年度教員業績評価	平成27年 12月17日	総合評価S（4段階中最高評価）
3)大阪府立大学　総合リハビリテーション系長および総合リハビリテーション学研究科長による平成27年度教員業績評価	平成28年 12月22日	総合評価S（4段階中最高評価）
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1)講演について	平成24年 6月16日	いずみ健老大学　講師 「腰痛予防」 慢性腰痛について，現在考えられている発生理由とその予防・改善のための運動療法（運動方法）について講演を行った．
	平成26年 11月26日	はびきの市民大学　　講師 「腰痛予防のための運動」 慢性腰痛について，現在考えられている発生理由とその予防・改善のための運動療法（運動方法）について講演を行った．
2)高大連携　講義について	平成26年 10月30日	大阪府立鳳高等学校　模擬講義講師 「理学療法とリハビリテーション」 リハビリテーション職である理学療法士の仕事内容や社会における役割，また他の医療職とのかかわりについての講義を行った．
	平成30年 6月14日	西舞鶴高校　講師 「医療」 医療職である理学療法士，作業療法士，臨床検査技師の仕事内容について講義を行った．
	平成30年 6月20日	伊吹高校　講師 「医療技術・リハビリ」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った．

事項	年月日	概　　要
	平成30年 8月23日	花園高校　講師 「理学療法・作業療法」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った.
	平成30年 9月11日	八日市高校　講師 「医療技術・リハビリ」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った.
	平成30年 9月26日	甲西高校　講師 「医療技術（リハビリ）」 医療職である理学療法士，作業療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った.
	平成30年 9月26日	桂高校　講師 「医療技術」 医療職である理学療法士，作業療法士，臨床検査技師の仕事内容について講義を行った.
	平成30年 11月12日	長浜北高校　講師 「医療（理学療法）」 医療職である理学療法士の仕事内容や社会における役割について講義を行った.
5　その他 1)大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科学位論文(博士前期課程)審査実績	平成28年2月	博士前期課程：副査1名 「スタチン投与中の運動が骨格筋ミトコンドリアへ及ぼす影響」について学位論文（博士前期課程）の審査を行った.
2)大阪府立大学総合リハビリテーション学部および総合リハビリテーション系における教育実績	平成21年4月 ～ 平成29年3月	「理学療法早期体験実習」（平成21年度から平成28年度まで) 理学療法学専攻の1年生に講義や病院や介護老人保健施設での実習やディスカッションを行い，理学療法士の役割や業務内容を理解させる教育効果があった. 「理学療法基礎評価学II」（平成22年度から平成28年度まで) 　理学療法評価である関節可動域測定の方法について講義を行い，関節可動域測定の習得させた

事項	年月日	概　　要
		「形態機能学実習」（平成23年から平成28年度まで） 神経，骨格筋，呼吸循環の解剖生理の講義および生理機能に関する実習を行い，学生に解剖生理学の理解を深める教育効果があった． 「物理療法学I」（平成23年から平成28年度まで） 物理療法の歴史や温熱，寒冷，水治療法の生理学的効果や適応，禁忌，実施方法の講義を行い，それら知識と実施方法を習得させた． 「物理療法学II」（平成24年から平成28年度まで） 電気，牽引，マッサージ療法の生理学的効果や適応，禁忌，実施方法の講義を行い，それら知識と実施方法を習得させた． 「理学療法学総合評価演習」（平成21年度から平成28年度まで） 地域のボランティア高齢者の評価を行い，評価技術の研鑽と評価レポート作成の指導を行い，理学療法評価およびレポート作成を総合的に理解，実施できるようにした． 「理学療法学研究法II」（平成28年度） 卒業論文作成の指導を行い，論文の作成方法およびリサーチマインドを習得せせる教育効果があった． 「理学療法臨床実習I」（平成21年度から平成28年度まで） 病院で臨床現場を見学させることにより，理学療法業務の概要や役割を理解させる教育効果があった． 「理学療法臨床実習II」（平成21年度から平成28年度まで） 理学療法評価に関する実習を行い，各種検査の実施と検査結果をもとに問題点を把握し，理学療法評価技術のを習得させる教育効果があった． 「理学療法臨床実習III」（平成24年度から理学療法臨床実習III・IVに変更 ）（平成21年度から平成28年度まで） 理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった． 「理学療法臨床実習IV」（平成24年度から平成28年度まで） 臨床実習IIIと同様に理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった．

事項	年月日	概　　要
3)京都橘大学健康科学部における教育実績	平成29年4月 ～ 平成30年3月	「理学療法技術学入門演習Ⅰ」 解剖学の知識と触診技術の習得の教育効果があった.
		「理学療法技術学入門演習II」 筋の解剖学的知識と触診技術の習得の教育効果があった.
		「ヘルスプロモーション応用演習」 地域在住高齢者の体力測定を行い，高齢者の健康増進を実践するための知識や技術の習得の学習効果があった.
	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「理学療法研究法I」 研究計画の立案，研究の実施，結果のまとめ方について学習効果があった.
		「理学療法研究法II」 研究計画の立案，研究の実施，結果のまとめ方について学習効果があった.
		「キャリア開発演習」 新入生に大学での学び方や生活の心構えなどに対して教育効果があった.
	平成30年4月 ～ 平成31年3月	「運動学演習」 下肢（股関節，膝関節，足関節，足部）の運動学について教授し，理学療法士の基礎となる運動学の知識習得の教育効果があった.
		「動作分析学演習」 寝返り，立ち上がりの動作分析について教授し，理学療法士にとって重要な動作分析法の習得の教育効果があった.
		「臨床運動学演習」 力学に基づいた関節運動や動作に加え姿勢制御について教授し，理学療法士にとって重要な力学に基づいた関節運動や動作に加え姿勢制御の知識習得の教育効果があった
		「運動器障害系理学療法基礎演習」 関節リウマチ，肩関節障害，上肢の骨折，靭帯損傷の理学療法について教授し，理学療法士にとって重要な運動器障害の理学療法の習得の教育効果があった
		「総合臨床実習I」 理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった.
		「総合臨床実習II」 総合臨床実習Iと同様に理学療法の過程全般を経験させ，理学療法の全体的な業務を遂行させる能力および臨床場面で的確な理学療法を発展させる能力を習得させる教育効果があった.

事項	年月日	概　　要
4) 奈良学園大学保健医療学部における教育実績	平成31年4月 ～	「基礎ゼミⅡ」 講義ノートの取り方，文献資料の検索，学術的な文章の読み方などについて，演習を通じて大学での学習を進める上で必要となる基礎的な知識や技能，学ぶ姿勢を身につける教育効果があった． 「人体構造学Ⅲ（神経・運動器）」 体幹及び下肢の骨や骨格筋，支配神経の解剖についての講義行い，学生に解剖学の理解を深める教育効果があった． 「人体機能学Ⅱ（動物性機能）」 骨格筋，反射，骨の生理についての講義行い，学生に生理学の理解を深める教育効果があった． 「早期体験実習(理学療法)」 理学療法学専攻の1年生に講義や病院での実習、ディスカッションを行い，理学療法士の役割や業務内容を理解させる教育効果があった．

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1)理学療法士免許	平成15年5月	厚生労働省　第44332号
2)修士（保健学）	平成17年3月	吉備国際大学　修第2-14号 論文題目「骨格筋収縮様式の違いによる解糖系酵素変動の検討」
3)博士（保健学）	平成20年3月	吉備国際大学　博甲第保-4号 論文題目「遠心性収縮による持久トレーニング効果についての検討」
4)生理学エデュケーター認定	平成28年1月	日本生理学会　第160056号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)医療法人三憲会老人介護保健施設エリシウム柵原　理学療法士	平成15年4月 ～ 平成17年3月	デイケアおよび施設入所の利用者を対象に、日常生活活動や運動機能の維持・改善のための理学療法などにあたった。

事項	年月日	概　　要
2) 医療法人三憲会柵原病院　理学療法士	平成17年4月 ～ 平成20年10月	回復期から慢性期における運動器疾患および神経系疾患を発症した入院患者に対する日常生活活動動作や運動機能の改善・維持のための理学療法などにあたった。また、整形疾患や神経疾患を発症した外来患者の疼痛に対する理学療法、運動機能の維持・改善のための理学療法などにあたった。
4　その他 1)受賞歴	平成22年5月	第43回日本理学療法学術大会　優秀賞 発表者として第43回日本理学療法学術大会優秀賞を受賞した.
2)研究助成獲得実績	平成23年4月	大阪ガスグループ福祉財団 「高齢COPD患者に対する呼息時低周波電気刺激の臨床効果に関する研究―パイロットスタディ」 研究代表者：伊藤健一　研究分担者：濃添建男，奥田みゆき，野中紘士，堀江淳，川村博文
	平成24年4月	大阪ガスグループ福祉財団 「転倒のスクリーニングを目的とした加速時計による動作時の身体動揺評価法の確立に関する研究」 研究代表者：山中悠紀　研究分担者：野中紘士
	平成24年9月	大阪府立大学若手研究者シーズ育成事業 「温熱療法による糖尿病性筋萎縮の予防効果についての研究」 研究代表者：野中紘士
	平成24年9月	大阪府立大学異分野研究シーズ発掘・連携促進・融合領域創世支援事業 「リハビリ期間短縮を目指した基礎研究」 研究代表者：山地亮一　研究分担者：岩田晃，野中紘士
	平成25年4月	科学研究費　基盤研究(C) 「障がい児・者の平衡機能を促進するリハビリテーション機器の開発」 研究代表者：米津亮　研究分担者：野中紘士，片岡正教，中川智皓，新谷篤彦
	平成25年4月	科学研究費　A-Step探索試験 「障がい児の体幹-足部運動連鎖型補装具の開発のための実証的研究」 研究代表者：米津亮　研究分担者：野中紘士，小栢進也，アブドラマニ・アバス，新谷篤彦，中川智皓，草田駿介，奥田邦晴，伊藤智博
	平成26年4月	科学研究費　基盤研究(B) 「骨格筋量の性差制御因子の同定と食品成分による発現調節」 研究代表者：山地亮一　研究分担者：野中紘士

事項	年月日	概　　要
	平成26年4月	科学研究費　基盤研究(C) 「COPD患者に対する呼息時電気刺激を用いた呼吸リハビリテーションの実証的研究」 研究代表者：伊藤健一　研究分担者：野中紘士，堀江淳，河村博文
	平成27年6月	御器谷科学財団　国際交流活動 「Heat stress attenuates skeletal muscle atrophy in diabetic rats」 研究代表者：野中紘士
	平成30年4月	科学研究費　基盤研究(C) 「糖尿病による末梢神経の酸化ストレスおよび栄養血管退行に対する運動療法の効果検証」 研究代表者：野中紘士　研究分担者：秋山純一，崎田正博
	平成31年4月	理学療法士協会 大規模臨床研究助成 「地域在住高齢者の虚弱化を予防し健康寿命を延伸する介護予防プログラムの開発と効果検証」 研究代表者：中野英樹　研究分担者：村田伸，堀江淳，兒玉隆之，白岩加代子，安彦鉄平，野中紘士，合田明生
	令和元年7月	奈良学園大学保健医療学部共同研究費助成 「マウス由来C2C12筋管細胞に対する活性型ビタミンDの抗炎症作用および筋タンパク分解抑制に関する検討」 研究代表者：野中紘士　研究分担者：秋山純一，畦五月，伊藤健一
	令和元年10月	日本物理療法学会研究助成 「ヒト皮膚由来線維芽細胞における温度の違いが細胞増殖に与える影響」 研究代表者：吉川義之　研究分担者：杉本雅晴，野中紘士，滝本幸治，前重伯壮，植村弥希子
3)大阪府立大学総合リハビリテーション学部および総合リハビリテーション系における学内業務実績	平成21年4月 ～ 平成29年3月	「広報委員」 平成21年度に広報委員として，広報活動に携わった． 「高大連携教育展開委員」 平成21年度に高大連携教育委員として，地域住民向けの講座や高校生向けの講座の調整などに携わった． 「動物実験倫理委員」 平成22年度から平成28年度まで動物実験倫理委員として倫理審査などに携わった． 「予算委員」 平成27年度から平成28年度まで予算委員として理学療法学専攻の運営予算の配分や管理などに携わった． 「紀要委員」 平成22年度から平成28年度まで紀要委員として雑誌の編集などに携わった．

事項	年月日	概　　要
4)京都橘大学健康科学部における学内業務実績	平成29年4月 ～ 平成31年3月	「教育研修センター」 平成29年度から京都橘大学の卒業生を対象とした卒後教育研修の運営に携わっている.
		「学科会議運営委員」 平成29年から理学療法学科の会議運営に携わっている.
5)京良子園大子保健医療子部における子内業務実績	平成31年4月 ～	「教務ワーキンググループ」 平成31年度からリハビリテーション学科の教務関連の運営に携わっている.
		「カリキュラム検討委員」 平成31年度からリハビリテーション学科のカリキュラム検討の運営に携わっている.
	令和2年4月 ～	「卒業研究委員」 平成31年度からリハビリテーション学科の卒業研究の実施方法検討に携わっている.
6)学術論文の査読歴	平成26年4月 ～ 現在に至る	「Journal of Physical Therapy Science」 「Experimental Physiology」 「Acta Physiologica Hungarica」 「Experimental and Molecular Pathology」 「Archives of Physiology and Biochemistry」 「Current Nutrition and Food Sience」 「FACETS」 「Acta Physiologica」 「ヘルスプロモーション理学療法研究」 「Nutrients」 「保健医療学雑誌」 「Journal of Life Science Research」 「Natural Product Communications」

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし				
（学術論文） 1 骨格筋収縮様式の違いによる解糖系酵素変動に関する検討 （修士論文）	単著	平成17年3月	吉備国際大学大学院	求心性収縮と遠心性収縮の持続的負荷に対するエネルギー代謝系の1つである解糖系酵素変動について検討した．ICR雄性マウスを用い，コントロール群，上り走行（求心性収縮）群，水平走行群，下り走行（遠心性収縮）群にわけ，実験を行った．上り，下りの傾斜角度は±16°とした．4週間走行負荷を速度15m/minで行い，走行時間は1週目は20分とし，1週間ごとに10分延長した．4週目に上腕三頭筋を摘出し，解糖系酵素であるホスホフルクトキナーゼ活性，乳酸脱水素酵素活性および乳酸脱水素酵素アイソザイムの測定を行った．その結果、求心性収縮と遠心性収縮の持続的負荷により，両者間で解糖系酵素変動が異なることが明らかとなった． A4版　全26頁
2 ヒト皮膚培養線維芽細胞に対する紫外線（UVA)照射が不定期DNA合成およびCollagen合成に対する影響に関する検討ー年齢別の細胞応答	共著	平成18年5月	吉備国際大学保健科学部研究紀要 11号 P.59-P.67	光源別のヒト皮膚透過率を測定し細胞の照射条件とした．若年者と高齢者培養細胞に与えるUVA照射影響の違いを検討するため,若年者由来細胞3種と高齢者由来細胞3種の皮膚真皮より樹立し，不定期DNA合成測定試験とCollagen合成活性測定試験実験を行った．高齢者細胞に有意なDNAの合成量とCollagen合成活性の低下が見られ,UVA照射による不定期DNA合成応答も低下していた．若年者細胞には照射後に有意なCollagen合成の増加応答が見られた． 本人担当部分：形態学的視点より結果を解釈した． 共著者：秋山純一，中嶋正明，平上二九，小幡太志，野中紘士，龍田尚美，速水明香，新藤泰子
3 関節固定の解除および再固定が可能なラット膝関節創外固定法の考案 （査読付）	共著	平成20年3月	理学療法科学 23巻1号 P.73-P.77	我々は，関節固定期間中に固定の解除と再固定が自由かつ簡便にできるラット膝関節創外固定法を考案した．今回，我々は実験動物としてラットを用い，この関節創外固定法の実験的関節拘縮モデル作成法としての有用性を検証した．5週間の関節固定負荷の結果，関節固定時に特徴的とされる関節可動域の減少や組織学的所見が確認された．また，浮腫，炎症，鬱血などの副次的作用を排除することができた．この結果より，本関節創外固定法は実験的関節拘縮モデル作成法として有効であることが示された． 本人担当部分：実験の実施および組織の形態学的評価を行った． 共著者：龍田尚美，中嶋正明，秋山純一，野中紘士，祢屋俊昭
4 遠心性収縮による持久トレーニング効果についての検討 （査読付） （博士論文）	共著	平成20年4月	吉備国際大学大学院 理学療法科学 23巻2号 P.285-P.289	遠心性収縮による持久トレーニングが骨格筋の持久性改善に効果があるかを検討した．ICR雄マウスをコントロール群(CONT)，上り走行群(求心性収縮，+16°，UR)，水平走行群(0°，LR)，下り走行群(遠心性収縮，-16°，DR)に分けた．5週間の走行運動後、大腿四頭筋の解糖系酵素はCONTに比べ，UR，LRで上昇し，DRは変化しなかった．酸化系酵素はCONTに比べ，UR，LR，DRで上昇した．遠心性収縮による持久トレーニングは，嫌気的代謝に効果はないが，好気的代謝には効果があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：野中紘士，秋山純一，中嶋正明

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5 MNNG誘導胃腸発癌に対する1α(OH)D3の抑制効果発現過程における血管新生の阻害について	共著	平成21年3月	吉備国際大学保健科学部研究紀要 19号 P.11-P.15	ラットを用いてMNNG誘導胃腸癌の1α(HO)D3による抑制モデルを作製し，抑制効果発現過程における血管新生阻害の有無およびVEGFの関与について免疫組織化学的に検討した．その結果，1α(OH)D3はVEGFの発現を抑えることで血管新生を制御し，胃腸癌の発生抑制に働いていることが示唆された． 本人担当部分：実験実施，組織切片作成を行った． 共著者：川浦昭彦，谷田憲俊，泉啓介，秋山純一，水谷雅年，野中紘士，武田英二
6 固定関節に対する異なる頻度の関節可動域運動が関節可動範囲に及ぼす影響 （査読付）	共著	平成21年6月	理学療法科学 24巻3号 P.427-P.433	ラットを用いて関節固定期間中にROM ex実施頻度の違いが固定関節の関節可動範囲の減少，関節内組織の変性に与える影響を検討した．Wistar系雄ラット30匹を，(1)無処置群，(2)ROM exなし群，(3)ROM ex週1日群，(4)ROM ex週3日群，(5)ROM ex週5日群の5群に分け，関節可動範囲の経時的変化および実験終了後の組織像を評価した．ROM exの週あたりの実施頻度が多いほど，関節可動範囲の減少が抑制される傾向にあった．組織学的評価では，ROM exなし群，ROM ex週1日群で関節腔内が結合組織により充填されていた．ROM ex週3日群，ROM ex週5日群では軟骨表面に少量の結合組織の増殖像が確認された． 本人担当部分：実験の実施および組織の形態学的評価を行った． 共著者：龍田尚美，中嶋正明，秋山純一，野中紘士，齋藤圭介，川上照彦
7 Inhibitory effect of 1a-hydroxyvitamin D3 on N-nitrosobis (2-oxopropyl) amine-induced cholangiocarcinogenesis in Syrian hamsters （N-ニトロソビス (2-オキソプロピル)アミン誘導性胆管癌発生に対する1aヒドロキシビタミンD3の効果） （査読付）	共著	平成23年6月	Acta Medica Okayama vol.65(3) P.193-P.197	1α-hydorxyvitamin D3 [1α(OH)D3]のN-nitrosobis(2-oxopropyl)amine(BOP)誘発性胆管癌に対する効果を検討した．ハムスターに5週間BOPを投与し胆管癌を誘発した．BOP投与と併せて1α(OH)D3を0.04μg経口投与した．1α(OH)D3を投与したハムスターは胆管癌の発生が投与していないハムスターに比べ有意に低値を示した．本研究より，1α(OH)D3がBOP誘発性胆管癌を抑制することが示された． 本人担当部分：研究計画立案および実験実施，組織切片作成を行った． 共著者：Kawaura A, Tanida N, Akiyama J, Nonaka K, Mizutani M, Sawada K, Nakagawa K, Tsugawa N, Izumi K, Ii K, Okano T, Takeda E
8 Thermal preconditioning attenuates exercise-induced muscle injury in mice （温熱プレコンディショニングは運動誘発性筋損傷を軽減する） （査読付）	共著	平成23年6月	Journal of Physical Therapy Science vol.23(3) P.409-P.411	運動前に温熱ストレスを与えることで，その後の運動性筋損傷が予防できるかについて検討した．マウスに温浴(41.5℃)を20分間行い温熱ストレスを与え，24時間後に走行運動を行い，大腿四頭筋に損傷を惹起した．温浴にて温熱ストレスを与えたマウスは温熱ストレスを与えなかったマウスに比べ，大腿四頭筋のHeat shock protein 25の発現量が増加し，筋損傷の指標であるGlucose-6-phoshate dehydrogenase活性の上昇が抑制された．本研究結果より，運動前に温熱ストレスを与えることで，運動誘発性筋損傷が減弱することが示された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Tatsuta N, Iwata A

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9 Cool water immersion after downhill running suppresses exercise-induced muscle damage in the rat soleus muscle （下り坂走行後の冷水浴はラットヒラメ筋の運動誘発性筋損傷を軽減する） （査読付）	共著	平成24年8月	Journal of Physical Therapy Science vol.24(7) P.613-P.616	冷水浴による寒冷療法が運動誘発性筋損傷を減弱するかについて検証した．ラットにトレッドミルにてダウンヒル走行運動（傾斜;-16°，速度;16 m/min）を90分間行い，ヒラメ筋に損傷を惹起した．運動直後，冷水浴（20℃）を30分間行った．冷水浴を行ったラットは運動後のヒラメ筋の損傷筋線維が減少し，筋損傷の指標であるGlucose-6-phoshate dehydrogenase活性の上昇が抑制された．本研究より，運動後の冷水浴が運動後の骨格筋損傷を減弱することが示された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Tatsuta N, Une S
10 Carbon dioxide-rich water bathing increases mynuclear number and muscle fiber size in regenerating skeletal muscles （高濃度人工炭酸泉浴は再生骨格筋の筋核を増加させ，筋線維径を増加させる） （査読付）	共著	平成24年12月	Journal of Physical Therapy Science vol.24(12) P.1295-P.1298	炭酸泉浴が筋損傷後の再生を促進させるかどうかについて検討した．Wistar系雌ラットを用い実験を行った．ラットの左前脛骨筋にブピバカイン塩酸塩により筋損傷を惹起し，損傷の翌日より，炭酸泉（1,000 ppm）を１日に１回，37度で30分間行った．損傷２週間後，左前脛骨筋の筋核数と筋横断面積は炭酸泉浴にて回復が促進されていた．本研究より，炭酸泉は筋損傷後の再生を促進させる可能性があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Tatsuta N, Une S, Ito K, Kataoka M, Ogaya S, Iwata A, Okuda K
11 肉離れ損傷筋における基底膜の特徴－ラットを用いた基礎的研究 （査読付）	共著	平成24年12月	Journal of Rehabilitation and Health Sciences, vol.10 P.7-P.11	打撲と肉離れによる筋損傷時の筋基底膜と形質膜の形態の違いを検証した．Wistar系雄ラットを打撲群，肉離れ群，コントロール群に分け，損傷2日後に被験筋を摘出して損傷筋細胞の基底膜と形質膜を染色した．肉離れ群の筋組織に損傷筋細胞が散在性にみられ，正常筋細胞に比べ基底膜が厚く，波打つような変形を認めた．打撲群では損傷が広範囲で，筋細胞の基底膜が厚くなった部分や基底膜を認めない部分もあった．肉離れ群/コントロール群の基底膜の平均面積は 1430.9/1101.8，基底膜比(%)は60.1/37.1であり，基底膜面積と基底膜比で有意差が認められた． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施と組織切片作成・染色を行い形態学的評価を行った． 共著者：岩田晃，野中紘士，上勝也
12 Carbon dioxide water bathing enhances myogenin but not MyoD protein expression after skeletal muscle injury （人工炭酸泉浴は骨格筋損傷後のmyogeninを増加させるがMyoDは増加させない） （査読付）	共著	平成25年6月	Journal of Physical Therapy Science vol.25(6) P.709-P.711	これまでに我々は，人工炭酸泉浴が筋損傷の治癒回復を促進する可能性を見いだした．本研究はその治癒促進のメカニズムを探ることを目的に行った．筋損傷後に人工炭酸泉浴を行うと損傷筋の筋芽細胞増殖に関わるMyoDタンパクの発現に変化は見られないが，筋管形成に関わるmyogeninタンパクの発現が増加した．以上より，筋損傷後の人工炭酸泉浴は筋管形成を促進する可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Akiyama J, Tatsuta N, Une S, Ito K, Ogaya S, Kataoka M, Iwata A, Okuda K

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13 Changes in antioxidant enzymes and lipid peroxidation in extensor digitorum longus muscles of streptozotocin-diabetic rats may contribute to muscle atrophy （ストレプトゾトシン糖尿病ラット長趾伸筋の抗酸化酵素と過酸化脂質の変化は筋萎縮と関連する） （査読付）	共著	平成26年12月	Acta Physiologica Hungarica vol.101(4) P.421-P.428	糖尿病時の筋萎縮が酸化ストレスと関連があるかについて検証した．速筋線維優位である長趾伸筋は萎縮し，抗酸化酵素(カタラーゼ，グルタチオンペルオキシダーゼ，スーパーオキサイドジスムターゼ)活性の上昇とTBARSの増加が確認された．一方，赤筋線維優位であるヒラメ筋の萎縮は軽度で，カタラーゼ活性は上昇したが，それ以外の抗酸化酵素活性とTBARSに変化は認められなかった．以上より，糖尿病に伴う酸化ストレスが速筋線維の萎縮を惹起する可能性を示した． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Une S, Tatsuta N, Ito K, Akiyama J
14 Electrical stimulated ventilation feedback improve ventilation pattern in patients with COPD （電気刺激による換気フィードバックはCOPD患者の換気パターンを改善する） （査読付）	共著	平成27年2月	Journal of Physical Therapy Sciences vol.27(2) P.325-P.330	COPD患者に対する呼息時電気刺激（PESE）を用いた換気フィードバックの有効性を検証した．24名のCOPD患者を，プラセボ群とPESEを行う群に割り付けた．対象者には5分間のエルゴメータ運動を2回行ってもらい，ベースライン（BL）と各介入による換気指標を中心としたデータの測定を行った．BLに対しプラセボ群では，安静時・運動時とも明らかな変化は認められなかったが，PESE群では安静時・運動時とも有意な換気効率の改善を認め，COPD患者の換気効率改善にPESEが有効であることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに，測定データの分析を行った． 共著者：Ito K, Nozoe T, Okuda M, Nonaka K, Yamahara J, Horie J, Hayama Y, Kawamura H
15 ラット骨折モデルによる高濃度人工炭酸泉浴の骨折治癒への影響 -TGF-β1の血中濃度変化と組織学的観察による検討	共著	平成27年3月	吉備国際大学保健福祉研究所紀要 16号 P.1-P.6	炭酸泉浴の骨折治癒への影響について検討した．ラットをコントロール群(C群)，さら湯35℃温浴群(I群)，炭酸泉35℃温浴群(II群)に分けた．2週目のTGF-β濃度はII群が，I群と比べて高値を示した．その後は時間経過とともに，TGF-β濃度はII群で下降し，I群では上昇し，8週目には，I群の方が高値を示した．5週目では，II群で治癒の促進が見られた．8週目では，各群とも骨再生が進み，群間での明らかな差は見られなかった． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験を実施した． 共著者：秋山純一，高須賀純一，野中紘士，矢田智大，川浦昭彦，中嶋正明，加納良男，畦五月，龍田尚美，平上二九三
16 Heat stress attenuates skeletal muscle atrophy of extensor digitorum longus in streptozotocin-induced diabetic rats (温熱刺激はストレプトゾトシン誘発性糖尿病ラットの長趾伸筋の萎縮を減弱させる) （査読付）	共著	平成27年9月	Acta Physiologica Hungarica vol.102(3) P.293-P.300	糖尿病による骨格筋萎縮が温熱療法により予防できるかについて検討した．ストレプトゾトシンを投与し糖尿病を誘発したラットに42℃で30分間の温浴を1週間に5回，3週間行った．その結果，温熱療法を行っていないラットに比べ長趾伸筋のHeat shock protein 25，72の発現が増加し，筋線維横断面積の減少が予防された．本研究より，温熱療法が糖尿病による骨格筋萎縮を予防できることを示した． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験の実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Une S, Akiyama J

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17 健康寿命と細胞の寿命	共著	平成28年3月	吉備国際大学保健福祉研究所紀要 17号 P.11-P.14	突然変異を持つPI3K遺伝子による細胞老化の法則を調べるために，FLAG標識野生型あるいは突然変異型PI3K遺伝子をラット線維芽細胞に導入した．その結果，正常なラット線維芽細胞は約20回分裂すると老化した．しかし，突然変異型PI3K遺伝子を導入したラット線維芽細胞は約26回分裂まで長生きした．さらに我々は，突然変異型PI3K遺伝子をマウスの受精卵に導入して作成したトランスジェニックマウスの寿命を調べたところ約20%の寿命延長が観察された． 本人担当部分：動物実験を実施した． 共著者：秋山純一，平上二九三，野中紘士，川浦昭彦，元田弘敏，井上茂樹，河村顕治，加納良男
18 Surface electromyography activity of the rectus abdominis, internal oblique, and external oblique muscles during forced expiration in healthy adults （健常成人の強制呼気中の腹直筋および内腹斜筋，外腹斜筋の表面筋電活動） （査読付）	共著	平成28年4月	Journal of Electromyography and Kinesiology vol.28 P.76-P.81	呼気抵抗下（最大呼気の10%，20%，30%）での腹直筋，内・外腹斜筋の筋活動を筋電図を用いて検証することを目的に研究を行った．その結果，強制呼気の際は腹直筋よりも内・外腹斜筋の筋活動が高いことが明らかになった．また内・外腹斜筋の活動は10%，20%の抵抗に比べ30%の抵抗で高値を示した．また，本研究より，呼気筋トレーニングとしては最低30%の抵抗を必要であることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および解剖生理学的側面から考察を行った． 共著者：Ito K，Nonaka K，Ogaya S，Ogi A，Matsunaka C，Horie J
19 Electrical stimulation ventilator feedback facilitates maintenance of a prolonged expiration pattern during exercise: a proof of concept study in healthy adults （電気刺激による換気フィードバックは運動時の延長呼息パターンの維持を促進する－健常成人にたいする概念実証研究） （査読付）	共著	平成28年8月	Physiotherapy Theory and Practice vol. 32(6) P.483-P.488	本研究の目的は，運動中の呼息を促通させるために電気刺激を用いたフィードバック（ESVF）を行い，その効果と安全性を明らかにすることである．健常成人23名をESVF群と対照群に割り付けた．対象者は呼吸練習において，呼気延長の呼吸パターンを練習し，その呼吸法を運動中も維持するように指導された．運動中と運動後の呼気/吸気時間比において対照群と比較してESVF群が有意に高値を示した．また，ESVFによる副作用が認められなかったことからESVFは運動中の呼吸法を習得させるツールになり得ることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案および一部論文執筆を行った． 共著者：Yamahara J，Ito K，Nonaka K
20 Effects of hull scratching, soaking, and boiling on antinutrients in Japanese red sword bean (Canavalia gladiata) （赤なた豆の抗栄養成分に対する皮処理および浸漬，加熱の影響） （査読付）	共著	平成28年10月	Journal of Food Science vol. 81(10) P.C2398-P.C2404	ナタマメはタチナタマメに類似した学名の豆であり，抗栄養性のレクチンを含有している．餡として使用するためには，その吸水性を上昇させることと，マメに含有されるレクチンを含んだ各種の抗栄養成分の含有量を低下させることが課題となる．そこで，種皮に各種の処理を施したマメについて吸水性と，抗酸化活性，抗栄養成分(レクチン，各種プロテアーゼインヒビター，アミラーゼインヒビター量など)を測定した．その結果，種皮に穴をあけた場合にこれら物質が無処理よりも有意に低下した．餡への利用のためには，皮処置と浸漬処理，加熱の三処理が必須と考えられた． 本人担当部分：抗酸化活性のデータ測定を行った． 共著者：Une S，Nonaka K，Akiyama J

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21 Deep heating using microwave diathermy decreases muscle hardness: a randomized, placebo-controlled trial （極超短波を用いた深部加温は筋硬度を返照させる－無作為化，プラセボ対照試験） （査読付）	共著	平成28年12月	Journal of Rehabilitation and Health Sciences vol.14 P.9-P.13	深部温熱の筋硬度変化に与える影響を極超短波を用いて検証した．20名の健常大学生をマイクロウェーブ群とプラセボ群に割り付け，介入前後で筋硬度変化を測定した．介入後マイクロウェーブ群では筋硬度が低下した．一方，プラセボ群は筋硬度の変化を認めなかった．本研究より，深部温熱は筋硬度を減少させる効果を持つことが示された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Kataoka M, Ogaya S, Ito K, Akiyama J
22 Co-presence of osteophyte and effusion as a risk factor for knee pain in the community-dwelling elderly （骨棘と浮腫の共存は地域高齢者の膝関節痛のリスクファクターである） （査読付）	共著	平成29年3月	Topics in Geriatric Rehabilitation Vol. 33(1) P.57-P.61	膝の痛みに関与する要素を検討するため，超音波診断装置を用いて膝関節周囲組織の状態を調べた．その結果，関節浮腫と骨棘の両方を有する高齢者において膝の痛みを有する割合が高いことがわかった． 本人担当部分：データの解析を行った． 共著者：Ogaya S, Iwata A, Nonaka K, Higuchi Y, Fuchioka S
23 エアマットレスが臥床中の呼吸機能へ与える影響 （査読付）	共著	平成29年4月	理学療法科学 vol.32(2) P.183-P.188	臥床時の呼吸機能に対するエアマットレスの悪影響の有無を明らかにすることである．健常者群19名と胸郭コンプライアンス低下群10名に対して，エアマットレスと標準マットレスの2つの条件下で臥位にて測定された呼吸機能を比較した．測定項目は，一回換気量，分時換気量，死腔換気率，呼吸数，呼気時間，吸気時間，全呼吸時間，呼気平均流量，吸気平均流量，吸気における腹部の隆起が開始するタイミングの10項目とした．両群ともにすべての測定項目で，エアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間に有意な差は認められなかった．エアマットレス導入は呼吸機能へ悪影響を与えないことが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および考察の検討を行った． 共著者：井上貴裕，野中紘士，伊藤健一
24 女性高齢者の外反母趾に影響を及ぼす因子の検討 （査読付）	共著	平成30年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 vol.7(4) P.165-P.169	本研究の目的は，女性高齢者の外反母趾に影響を及ぼす因子について，足部の形態に着目して検討することである．高齢者健康サークルに所属し，体力測定会に参加した地域在住女性高齢者176名（平均年齢73.8±5.7歳）を対象とした．測定は，外反母趾に影響を及ぼす因子を抽出するため，対象者の年齢，身長，体重，Body Mass Index，および足部・足趾の形態（足長，足幅，母趾角，小趾角，開帳角，足底・足趾の接地状態）につて足圧分布測定器を用いて測定した．さらに，外反母趾と浮き趾の有無を判定した．ステップワイズ重回帰分析の結果，外反母趾に影響を及ぼす因子として抽出されたのは足幅のみであった．足部・足趾の健康を考える場合，足長のみならず足幅も考慮した靴のサイズ選びが重要であることが示唆された． 本人担当分：考察の一部を執筆． 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，内藤紘一，安彦鉄平，白岩加代子，野中紘士，堀江淳

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25 Heat stress prevents the decrease in succinate dehydrogenase activity in the extensor digitorum longus of streptozotocin-induced diabetic rats （温熱刺激はストレプトゾトシン誘発性糖尿病ラットの長趾伸筋のコハク酸脱水素酵素活性低下を予防する） （査読付）	共著	平成30年2月	Physiological Research vol.67(1) P.117-P.126	温熱刺激が糖尿病による骨格筋コハク酸脱水素酵素(SDH)活性低下を予防するかについて検討した．Wistar系雄ラットを対照群および温熱群，糖尿病群，糖尿病+温熱群に分け，ストレプトゾトシン投与による糖尿病誘発を確認した後，温熱刺激を3週間行った。糖尿病群と糖尿病+温熱群ではSDH活性が低下したが，糖尿病+温熱群は糖尿病群に比べ骨格筋SDH活性低下が減弱した。本研究より，温熱刺激が糖尿病による骨格筋SDH活性低下を予防することが示唆された。 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Une S, Komatsu M, Yamaji R, Akiyama J
26 Lectin isolated from Japanese red sword beans (Canavalia gladiata) as a potential cancer chemopreventive agent （日本産のナタマメから精製したレクチンはガンの化学的予防剤となる可能性がある） （査読付）	共著	平成30年3月	Journal of Food Science Vol.83(3) P.837-P.834	日本産のナタマメから精製したレクチン（RSB-L）は、アミノ酸分析や部分的なアミノ酸配列によりタチナタマメから精製されたConAと類似した構造をしていた．しかしRSB-LはConAより耐熱性があり、糖に対する特異性が後者と異なった．マイトジェン活性，NK活性は有意にRSB-Lの方が高く，同時にマウスB16メラノーマ細胞の増殖を有意にRSB-Lは抑制した．一方，中国産のナタマメから得られたレクチンとも異なった生物学的な性質をRSB-Lは示した．KSB-Lはガン予防作用を有する物質として使用の可能性が示唆された． 本人担当部分：データ測定の一部を行った．加えて，データ解析および方法と結果の一部の執筆を行った． 共著者：Une S, Nonaka K, Akiyama J
27 地域在住女性高齢者の浮き趾と身体機能との関係 （査読付）	共著	平成30年5月	地域リハビリテーション Vol.13(5) P.383-P.387	本研究の目的は，体力測定会に参加した65歳以上の女性高齢者175名（平均年齢73.8±5.7歳）を対象に浮き趾と身体機能との関係を明らかにすることである．その結果，浮き趾群では足趾把持力（p＝0.002），長座体前屈距離（p＝0.046），身長（p＝0.005）が有意に低い値を示した．その他の身体機能に有意差は認められなかった．効果量は，足趾把持力（d＝0.50）が中等度であり，身長（d＝0.44）と長座体前屈距離（d＝0.32）は小さい効果量が認められた．浮き趾がある女性高齢者は足趾把持力が有意に低下したが，歩行や立位バランスなどの身体機能に有意差は認められず，総合的な身体機能の低下として表在化しがたいことが示唆された． 本人担当部分：考察の一部を担当した． 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，内藤紘一，安彦鉄平，白岩加代子，野中紘士，堀江淳
28 Effect of skeletal muscle and fat mass on muscle strength in the elderly （高齢者の筋力に対する骨格筋と脂肪量の影響） （査読付）	共著	平成30年6月	Healthcare Vol.6 No.3 pii:E72（計6ページ）	本研究は，高齢者の筋力に対する脂肪量と骨格筋量の影響を192名の女性高齢者にてステップワイズ法を用いて検証した．その結果，上肢の脂肪量と骨格筋量のどちらも握力に影響していた．下肢は骨格筋量のみが膝伸展筋力に影響しており，脂肪量は影響していなかった．本研究より，筋力に影響する骨格筋量/脂肪量率の閾値が存在する可能性が示唆された。 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および解析を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Murata S, Shiraiwa K, Abiko T, Nakano H, Iwase H, Naito K, Horie J

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
29 大腿中央前面筋厚・脂肪厚，大腿周径，大腿前面筋硬度測定の再現性および膝伸展筋力との関連 （査読付）	共著	平成30年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.8，No.2 P.85-P.89	本研究は，大腿中央前面筋厚（以下，筋厚）・脂肪厚（以下，脂肪厚），大腿周径，大腿前面筋硬度（以下，筋硬度）測定の検者内・検者間再現性と膝伸展筋力との関連を健常成人20名の両下肢計40脚を対象として検討した．その結果，筋厚，脂肪厚，大腿周径の再現性は，男女ともに級内相関係数が0.9以上と極めて高かったが，筋硬度は検者間で男性が0.763，女性が0.787と低い値を示した．筋力との相関では，男性の大腿周径のみに有意な相関($r=0.54$，$p<0.05$)が認められた．これらの結果から，筋硬度の測定は測定値の再現性に留意すること，また男性の大腿周径は膝伸展筋力を反映するが，女性の大腿周径の測定値は脂肪厚の影響を考慮する必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに，実験結果に基づき論文作成を行った． 共著者：小林佐季，帋若あかり，野中紘士，安彦鉄平，白岩加代子，堀江淳，村田伸
30 Physical characteristics vary according to body mass index in Japanese community-dwelling elderly women （日本の地域在住高齢女性において身体的特徴はBMIに応じて変わる）	共著	平成30年11月	Geriatrics Vol.3，No.4 87(計8ページ)	本研究は，日本の地域在住高齢女性を対象にBMIに基づき低体重，過体重，肥満群と正常体重の群と身体機能と体組成の比較を行った．その結果，低体重群では正常体重群に比べ，上体起こしの回数が少なく膝伸展筋力が歩行速度と強く正相関した．過体重群では，正常体重群に比べ，骨格筋量は増加したが膝伸展筋力は増加しなかった．肥満群では正常体重群に比べ，片脚立位時間が少なかった．本研究によりBMIにより身体機能や新体組成が変化すること，高齢女性の身体機能の評価や維持・改善のプログラム作成の際，BMIが有益な情報になることを示した． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および解析を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K，Murata S，Shiraiwa K，Abiko T，Nakano H，Iwase H，Naito K，Horie J
31 高齢者における歩行調整能力の違いによる身体的特徴 （査読付）	共著	平成31年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.8，No.4 P.169-P.173	高齢者の歩行速度調整能力を検討するために，歩行速度を「普通歩行」，「やや速歩き」，「最速歩行」の3段階で実施し，主観的判断による速度変化と身体機能，注意機能，認知機能との関係性について検討した．その結果，「やや速歩き」の速度調整ができない高齢者が39.4%いた．調整可能群は，調整不良群より，やや速歩きと最速歩行が有意に速い結果を示した．群間比較において，身体機能，注意機能，認知機能には有意な違いを示さなかったことから，調整不良群は，歩行速度を調整する際に，筋力，バランス能力などの機能が十分に活用できていない可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：白岩加代子，村田伸，安彦鉄平，野中紘士，中野英樹，岩瀬弘明，内藤紘一，堀江淳

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
32 要介護高齢者における大腿四頭筋筋力と大腿前面筋厚・脂肪厚，大腿周径，大腿前面筋硬度との関連 （査読付）	共著	平成31年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.8，No.4 P.181-P.185	本研究では，要介護高齢者（男性23人，女性37人）を対象に，大腿四頭筋筋力と大腿前面筋厚（以下，筋厚）・脂肪厚，大腿周径，大腿前面筋硬度との関連を検討した．単相関解析の結果，男性では大腿周径が，女性では筋厚と大腿周径が，大腿四頭筋筋力との間に有意な相関を示した．また重回帰分析の結果，男性では大腿周径が大きいほど，女性では筋厚が厚いほど，大腿四頭筋筋力が強かった．これらのことから，要介護高齢者において，男性では大腿周径が，女性では筋厚が，大腿四頭筋筋力を反映することが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：合田明生，村田伸，谷川加奈子，藤井伶衣奈，吉岡弓佳，野中紘士，中野英樹，安福祐一，白岩加代子
33 地域在住高齢者におけるプレサルコペニアの身体・認知・心理機能特性 （査読付）	共著	平成31年2月	健康支援 Vol.21，No.1 P.11-P.17	本研究は，地域在住の女性高齢者を対象に，正常な筋肉量の高齢者と比較することで，筋肉量低下を生じたプレサルコペニア高齢者の身体・認知・心理機能の特性を明らかにすることを目的に行われた．その結果，プレサルコペニアに該当する高齢者は，筋肉量の低下に伴い四肢・体幹の筋力低下を認めることが示唆された．プレサルコペニア高齢者は，筋力以外の身体機能の低下が認められないことから，日常生活に支障をきたさず，自身の筋力低下を自覚していないことが予想された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：森耕平，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，岩瀬弘明，内藤紘一，野中紘士，中野英樹，堀江淳
34 Endurance exercise increases the protein levels of PGC-1α and respiratory chain complexes in mouse skeletal muscle during atorvastatin administration （アトルバスタチン投与中の持久的運動はマウス骨格筋のPGC-1αと呼吸差複合体タンパクを増加させる） （査読付）	共著	平成31年3月	The Journal of Physiological Sciences Vol.69，No.2 P.327-P.333	本研究は，アトルバスタチン投与中の持久的運動がマウス骨格筋のミトコンドリア順応および筋損傷を起ここすかどうかについて検討した．その結果，アトルバスタチン投与中に運動した群は，アトルバスタチン投与のみの群に比べ，大腿四頭筋のPGC-1αと呼吸差複合体I-Vのタンパクが増加した．また，アトルバスタチン投与中に運動した群の血清クレアチンキナーゼは上昇せず，組織学的にも筋損傷は認められなかった．これらの結果より，アトルバスタチン投与中の持久的運動は骨格筋のミトコンドリア順応を起こすこと，筋損傷は惹起されないことが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および統括を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K，Ozaki Y，Ito K，Sakita M,Une S，Akiyama J

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
35 幼児の重心動揺と歩行パラメータとの関連 （査読付）	共著	平成31年4月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9，No.1 P.7-P.11	本研究の目的は，幼児の重心動揺と歩行能力との関連を明らかにすることである．対象児45名（男児16名，女児29名）の重心動揺の測定と歩行分析を行った結果，重心動揺の指標とした総軌跡長と外周面積は，ともに通常歩行時の歩行率（総軌跡長r＝－0.421，外周面積r＝－0.347），立脚時間（それぞれr＝0.474，0.426），両脚支持時間（それぞれr＝0.398，0.346）の3項目と有意な相関が認められ，最速歩行時の歩行速度（それぞれr＝－0.469，－0.382），歩行率（それぞれr＝－0.388，－0.351），立脚時間（それぞれr ＝0.489，0.569），両脚支持時間（それぞれr＝0.556，0.653）の4項目と有意な相関が認められた．これらの結果から，幼児期の重心動揺と歩行は密接に関連しており，幼児に対する重心動揺計を用いた姿勢制御能の評価の重要性が示された．また，幼児の姿勢制御能を高めることで，歩行をはじめとする身体運動の発育支援が効果的に行える可能性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：村田伸，安彦鉄平，中野英樹，満丸望，久保温子，八谷瑞紀，古後晴基，野中紘士，松尾大，上城憲司
36 プレサルコペニア高齢者の歩行速度と身体機能・認知機能との関連 （査読付）	共著	令和元年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9，No.2 P.53-P.58	本研究の目的は，プレサルコペニア高齢者の歩行速度と身体機能および認知機能との関連を検討することである．対象者を正常筋肉量群（48名）とプレサルコペニア群（17名）の2群に分類し，歩行速度（通常・最速）と身体機能（膝伸展筋力，上体起こし，開眼片足立ち時間，長座体前屈距離）および認知機能（Mini-Mental State Examination，Trail making test-Part A；TMT-A）との相関分析を行った．その結果，プレサルコペニア群の通常歩行速度と中程度以上の有意な相関が認められたのは，膝伸展筋力（r=0.51）およびTMT-A（r=-0.52）であり，最速歩行速度では膝伸展筋力（r=0.74），TMT-A（r=-0.66）および開眼片足立ち時間（r=0.56）であった．一方，正常筋肉量群の歩行速度はいずれの項目とも中程度以上の有意な相関は認められなかった．これらの知見より，プレサルコペニア高齢者は正常筋肉量の高齢者に比べ努力性の高い歩行である可能性が示され，下肢筋力，バランス能力および注意機能のわずかな低下をきっかけに歩行能力低下を生じる可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：森耕平，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，岩瀬弘明，内藤紘一，野中紘士，中野英樹，堀江淳
37 地域在住女性高齢者のヘルスリテラシーと身体機能，心理機能，運動習慣との関連について－傾向スコア法による検証 （査読付）	共著	令和元年7月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9，No.2 P.59-P.63	地域在住の女性高齢者を対象にヘルスリテラシーと身体機能，心理機能および運動習慣との関連について，傾向スコア法を用いてデータベースを作成し，ロジスティック回帰分析を用いて検討した．解析の結果，ヘルスリテラシーに関連する因子として抽出されたのは，主観的健康感と運動習慣であった．これらのことから，ヘルスリテラシーを高めるためには，主観的健康感を高めるような取り組みと運動習慣を定着させるような取り組みが必要になることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：岩瀬弘明，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，内藤紘一，野中紘士，堀江淳

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
38 地域在住高齢者における主観的認知機能低下と客観的認知機能低下の関連 （査読付）	共著	令和元年7月	日本早期認知症学会誌 Vol.12, No.1 P.44-P.51	本研究は，地域在住高齢者における主観的認知機能低下（subjective cognitive decline：SCD）と客観的認知機能低下の関連を検討することを目的とした．対象は明らかな認知機能障害がない地域在住高齢者242名とした．「基本チェックリスト」の認知機能項目（Kihon-Checklist-Cognitive Function：KCL-CF）を用いて，主観的認知機能低下を測定した．また，Mini-Mental State Examination（MMSE）を用いて，客観的認知機能低下を測定した．対象者をKCL-CF得点で群分けし，MMSE得点を比較した結果，SCDを認めた対象者は，「認知症初期症状を反映するMMSE因子」の得点が有意に低かった($p<0.05$)．さらに，MMSE下位項目得点の得点別比率を比較すると，2つのKCL-CF質問項目（記憶，日付の見当識）において，SCDを認めた対象者が，主に「認知症初期症状を反映するMMSE因子」項目の得点が有意に低かった($p<0.05$)．KCL-CFで測定するSCDは，地域在住高齢者の初期認知機能低下を捉えるスクリーニングツールとして有用である可能性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：合田明生，村田伸，白岩加代子，野中紘士，中野英樹，安彦鉄平，堀江淳
39 通所介護施設を利用する高齢者の浮き趾と身体特性，身体組成および身体機能との関連 （査読付）	共著	令和元年7月	保健の科学 Vol.61, No.7 p.491-495	通所介護施設を利用する要支援・要介護認定を受けた高齢者の浮き趾（「立位時に足趾が地面に接地していない状態」）と身体特性、身体組成、身体機能との関連を明らかにすることを目的に、滋賀県の通所介護施設1施設に通所中の高齢者57名(男性24名、女性33名、平均年齢80.3±1.0歳、要支援38名、要介護19名)を対象に検討した。浮き趾群(42名)と非浮き趾群(15名)を比較した結果、浮き趾群では非浮き趾群と比べ、身長、骨格筋量、足底接地率がそれぞれ有意に低値を示した。 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，野中紘士，中野英樹，白岩加代子
40 Changes with aging in skeletal muscle mass, body fat mass, and bone mineral density in adults with cerebral palsy: A pilot cross-sectional study （成人脳性麻痺者の筋肉量，体脂肪量，骨密度の加齢に伴う変化-予備的横断研究） （査読付）	共著	令和元年10月	International Journal on Disability and Human Development Vol.19, No.2 P.139-P.144	本研究は，27名の成人脳性麻痺者を対象に，成人脳性麻痺者の骨格筋量，体脂肪量，骨密度の加齢変化を横断的に検証した．その結果，成人脳性麻痺者の年齢と骨格筋量との間に有意な相関が認められないこと，年齢と体脂肪量に有意な正相関が認められること，年齢と骨密度に有意な負の相関が認められることが確認できた．これらの結果より，成人脳性麻痺者は体脂肪の増加に注意する必要があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータの解析を行った．また，解析結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K, Iwase H, Murata S, Kubo A

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
41 要介護女性高齢者におけるロンブステストの再現性と妥当性 （査読付）	共著	令和元年10月	保健医療学雑誌 Vol.10, No.2 P.92-P.98	要介護女性高齢者において，新たな動的バランス評価であるロンブステストの再現性と妥当性を検証した．要介護女性高齢者29名を対象に，ロンブステストと4つの身体パフォーマンス指標（開眼片脚立位時間，Timed Up and Go Test［TUG］，5m最速歩行時間，30-sec chair stand test［CS-30］）を測定した．ロンブステストの再現性を検証するために，20名の対象者に対して，同一測定日に2回目の測定を実施した．その結果，ロンブステストは優れた再現性（ICC 0.96～0.97）を示し，開眼片脚立位時間，TUG，5m最速歩行時間，CS-30との間に中程度の有意な相関（r=|0.42|～|0.59|）を認めた．以上の結果から，ロンブステストは，要介護女性高齢者において，再現性と妥当性のある動的バランス評価法であるとことが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：合田明生，村田伸，礒谷光，宇野友萌子，影山瑞希，野中紘士，中野英樹，白岩加代子
42 1年後に軽度認知障害を発症した地域高齢者の身体および精神機能の特徴 （査読付）	共著	令和元年10月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9, No.3 P.119-P.125	本研究は，1年後に軽度認知障害（MCI）を発症した地域在住高齢者における，身体機能・精神機能の特徴を明らかにすることを目的とした．ベースライン時点で認知機能障害のない地域在住高齢者91名を対象とした。1年後にMMSE24－26点に低下した者をMCI 群，27点以上に保たれた者を非MCI 群に分類し，ベースライン時の身体機能および精神機能を比較した．その結果，MCI 群では，非MCI 群と比較して開眼片脚立位時間が有意に低値を示した（$p<0.05$）．以上から，開眼片脚立位時間は，地域在住高齢者の1 年後のMCI 発症を予測する評価として有用である可能性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：合田明生，村田伸，白岩加代子，野中紘士，中野英樹，安彦鉄平，堀江淳
43 小学6年生における足部および足趾に関する実態調査 （査読付）	共著	令和元年10月	体育の科学 Vol.69, No.10 P.767-P.771	本研究は，小学1年生と6年生の足部形態および足部形態以上を調査することで，現代の学童期児童の足部成長状況および浮き趾を主とした足部形態異常の実態を明らかにすることを目的とした．その結果，足部形態異常は，1年生および6年生に共通して浮き趾が認められ，約7割の児童が浮き趾であった．また，6年生では外反母趾が13.3%に認められたが，1年生では認められなかった．その他，内反小趾と回張足は1年生および6年生ともに認められなかった．結果より，1年生から6年生までの間に足部の形態が大きく変化し，靴のサイズが足部の形態に適していない可能性が推察された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，安彦鉄平，中野英樹，野中紘士，松井宏彰
44 Elongation training decreases spinal excitability in healthy human soleus muscle （エロンゲーショントレーニングは健常ヒトヒラメ筋の脊髄の興奮性を減弱させる） （査読付）	共著	令和元年11月	Journal of Asian Rehabilitation Science Vol.2 No.4 P.23-26	本研究は，健常ヒトヒラメ筋の脊髄の興奮性に対するエロンゲーショントレーニング(ELT)の効果について検証した．26名の健常若年男性を無作為にELT群（n=13)と安静対照群（n=13)に分け，介入前，介入の1と30分後にH反射とM波を測定した．その結果，介入前のH-max/M-maxは両群で同レベルであり，介入の1と30分後のH-max/M-maxはELT群のみ低下した．本研究結果より，ELTは脊髄の興奮性を低下させること，その効果は最低でも30分持続することが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案，データ解析および一部考察を行った． 共著者：Miyazaki J, Yurugi R, Ogawa H, Nonaka K, Uematsu A

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
45 要介護高齢者における踵上げ動作を用いたバランステストの再現性と妥当性 （査読付）	共著	令和元年12月	保健の科学 Vol.61，No.12 P.851-P.856	本研究の目的は，要介護高齢者において，踵上げテストの再現性と妥当性を検証することであった．要介護高齢者57名を対象に，踵上げテストと4つの身体パフォーマンス指標（Timed Up and Go Test［TUG］，30-sec chair stand test［CS-30］，開眼片脚立位テスト，Functional Reach Test［FRT］）を測定した．また踵上げテストの再現性を検証するため，同一測定日に2回目の測定を実施した．その結果，踵上げテストは優れた再現性（ICC 0.91）を示し，TUG，CS-30，開眼片脚立位テスト，FRTとの間に有意な相関（rs=|0.32|～|0.60|）を認めた．以上の結果から，踵上げテストは，要介護高齢者において，再現性と妥当性のあるバランス評価法であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定を行った． 共著者：合田明生，村田伸，髙畑咲紀，谷口緩夏，野中紘士，中野英樹，白岩加代子
46 Correlations between physical performance and muscle mass, strength, and quality in obese and normal-weight community-dwelling older Japanese women （地域在住日本人高齢女性の肥満者と標準体重者における身体パフォーマンスと骨格筋量および筋力，筋質との関連） （査読付）	共著	令和元年12月	Asian Journal of Gerontology & Geriatrics Vo.14，No.2	本研究は地域在住日本人高齢女性の肥満者と標準体重者における身体パフォーマンスと骨格筋量および筋力，筋質との関連を調べることを目的とした．170名の地域在住高齢女性を対象とし，被験者を標準体重群と肥満群に分けた．被験者の膝伸展筋力、下肢骨格筋量，筋質データ，30秒椅子立ち上がりテスト(CS-30)，timed up and go test (TUG)を記録した．膝伸展筋力/体重比と下肢骨格筋量/体重比は標準体重群に比べ肥満群で低かったが、筋質は両群で同程度だった．肥満群ではCS-30やTUGと骨格筋量/体重比との間に有意な相関を認めたが，筋質との有意な相関は認めなかった．標準体重群では，CS-30やTUGと筋質の間に有意な相関を認めた．これらの結果より，骨格筋量/体重比は肥満の地域在住高齢者の身体パフォーマンスを維持向上させるために重要な要因であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施および解析を行った．また，実験結果に基づき論文執筆を行った． 共著者：Nonaka K，Murata S，Shiraiwa K，Abiko T，Goda A，Yasufuku Y，Nakano H，Iwase H，Horie J
47 地域在住高齢者における閉じこもり調査－身体機能，身体組成，認知・精神心理機能の特徴 （査読付）	共著	令和2年1月	ヘルスプロモーション理学療法研究 Vol.9，No.4 P.195-P.200	本研究では，体力測定会に参加した地域在住高齢者245名（男性50名，女性195名）を対象に，閉じこもりの有無により，身体機能，身体組成，認知・精神機能に差異がみられるか検討した．その結果，男性では，TUG と歩行速度が閉じこもり群より，非閉じこもり群の方が有意に良好な値を示した（$p<0.05$）．身体組成は，筋肉量，体水分量，タンパク質量，骨ミネラル量，基礎代謝量が，閉じこもり群より非閉じこもり群の方が良好な値を示した（$p<0.05$）．うつ傾向を示す者が，閉じこもり群の方が非閉じこもり群より有意に多い結果を示した．女性では，身体機能は，握力，TUG，歩行速度が閉じこもり群より非閉じこもり群の方が良好な値を示した（$p<0.05$）．その他の項目には2群間に有意差は認められなかった．閉じこもりによる影響は，男性と女性では異なることが示唆された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともにデータ測定を行った． 共著者：白岩加代子，村田伸，安彦鉄平，中野英樹，合田明生，野中紘士，岩瀬弘明，堀江淳

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「総説」 1 頸椎の機能解剖学的理解の要点	共著	平成22年6月	理学療法 27巻6号 P.731-P.738	1.頸椎は，視覚のみでなく聴覚，嗅覚など，外界からの情報収集装置(=感覚器官)が集中する頭部顔面の定位のために重要な役割を担っている．2.特異な形態を持つ上位頸椎と一般的形状の下位頸椎について，その構造上の特徴を正確に理解することが必要である．3.後頭骨および頸椎間の結合に作用する靱帯および膜組織と運動の力源である筋について，構造と機能を正しく理解することが必要である．4.頸椎の運動を司る椎間関節についても，個々の関節の構造と運動の特徴を正確に理解する必要がある． 本人担当部分：資料収集を担当した． 共著者：淵岡聡，野中紘士，岩田晃
2 筋損傷に関する臨床研究の成果と今後の課題	共著	平成22年7月	理学療法 27巻7号 P.838-P.845	1.ラットの骨格筋損傷後の再生過程を，歩行動作，筋力，筋組織の3つの側面から観察した．その結果，歩行動作，筋力・筋組織の順で再生が進行する傾向を示したことから，理学療法において時間的要素を検討する必要性が示唆された．2.骨格筋のストレッチング時の構造学的変化を超音波を用いて観察した結果，筋の伸張部位は肢位により変化し，自覚的な伸張感も同様の傾向を有していることが明らかになった．3.筋損傷を予防する方法として，温熱負荷が有効である可能性が示された． 本人担当部分：3.筋損傷を予防する方法の執筆を担当した． 共著者：岩田晃，野中紘士，樋口由美，米津亮，木村大輔，上勝也
「文献抄録」 1 定期的な身体運動活動を実施している透析患者の不安と抑うつの状態－予備研究	単著	平成30年2月	理学療法ジャーナル 52巻2号 P.184	Dziubekらの論文"The level of anxiety and depression in dialysis patients undertaking regular physical exercise training: A preliminary study. Kidney Blood Press Res 41: 86-98, 2016"の文献抄録作成を行った．報告内容は以下の内容であった．透析中に末期腎不全患者が定期的な身体活動を行うことは不安感や抑うつを減弱することができる．レジスタンス運動と持久運動のどちらも抑うつを改善するが，持久運動のみ不安感も減少させる．透析中の定期的な身体運動プログラムは高齢患者や，身体運動プログラム開始時に抑うつと不安感が高い患者に対し最も効果がある．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「報告書」 1 高齢COPD患者に対する呼息時低周波電気刺激の臨床効果に関する研究 ーパイロットスタディ	共著	平成24年6月	大阪ガスグループ福祉財団　調査・研究報告集 25巻 P.9-P.14	本研究の目的は，我々が開発してきた低周波電気刺激装置を用い，呼息時に対する低周波電気刺激の効果を検証することである。対象は高齢慢性閉塞性肺疾患患者12名である。対象者はプラシーボ介入群（対照群）と呼息時低周波電気刺激介入群（介入群）に割り付けられた．これらの対象者に対し介入前後の安静時および運動時の換気機能、酸素飽和度、自覚的運動強度を測定した．介入群において換気パラメータの平均値において改善が認められた．しかし、その結果は有意差を伴うものではなかった．今回の研究では換気パラメータの有意差を伴った改善が認められなかった．しかし、平均値の改善傾向と標準偏差のばらつきが認められていることから，対象者数を増やすことで有意差を伴った改善効果が期待できるものと推察された．今回の研究結果より，呼息時低周波電気刺激の効果が示唆されたとともに，本研究の継続意義が明らかとなった。 本人担当部分：研究計画立案およびデータ解析を行った． 共著者：伊藤健一，濃添建男，奥田みゆき，野中紘士，堀江淳，川村博文
2 転倒のスクリーニングを目的とした加速度計による身体動揺評価法の確立に関する研究	共著	平成25年6月	大阪ガスグループ福祉財団　調査・研究報告集 26巻 P.93-P.97	本研究では健常男子大学生6名(年齢20.8±0.4歳)を対象として，静止立位保持および片脚着地課題における身体動揺を腰部正中後面に装着した小型9軸ワイヤレスモーションセンサーで評価し，3次元動作解析装置で測定した身体重心(COG)や床反力(GRF)と加速度波形の時間積分から推定したCOG変位(COGacc)や運動方程式から推定したGRF(GRFacc)との比較から加速度計で評価した身体動揺評価指標の特徴について分析した．その結果，静止立位では前後(AP)成分の実効値(RMS)，最大振幅(PTP)が有意に低値を示し，COG とCOGaccの振幅が異なる可能性が示されたが，非線形解析ではCOGaccはCOGと同様にカオス性を示した．着地動作ではAP成分の単位時間軌跡長(NPL)が有意に高値を示した． 本人担当部分：研究計画立案およびデータ解析を行った． 共著者：山中悠紀，野中紘士
「国際学会発表」 1 The inhibitory effect of carbon dioxide-enriched water bathing on spinal motor neuron (高濃度人工炭酸泉による脊髄運動神経抑制効果)	-	平成20年8月	10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy（千葉）	炭酸泉浴が脊髄運動ニューロンの興奮性に与える影響についてM波とH反射を測定し検証した．その結果，炭酸泉浴がH/M raitoを低下させ，脊髄運動ニューロンの興奮性を抑制することが確認された． 本人担当部分：神経生理学的実験の実施および発表を行った． 共同発表者：Nonaka K，Nakajima M，Akiyama J，Tatsuta N
2 Study of exercise-induced damage to skeletal muscle under the environment of various concentration of oxygen in rats （ラットを用いた各種酸素濃度環境下における運動誘発性筋損傷に関する研究）	-	平成20年8月	10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy（千葉）	異なる酸素濃度環境下(10%，20%，50%)での運動が運動誘発性筋損傷に及ぼす影響を検証した．その結果，酸素濃度が10%の場合に，20%，50%の場合に比べ，運動誘発性筋損傷が高くなることが確認された．本研究より，低酸素環境下では運動誘発性筋損傷が惹起されやすいことが示された． 本人担当部分：研究計画の立案および実験の実施，発表内容の検討を行った． 共同発表者：Kurata K，Nonaka K，Nakajima M，Akiyama J

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3 Primary study of optimal load condition on ROM-exercise to prevent joint contracture development by joint immobilization （不動による関節拘縮予防のためのROM運動に対する適切な負荷条件に関する予備研究）	－	平成20年8月	10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy（千葉）	1日5回の関節可動域運動を5回/週の頻度で実施した場合，関節拘縮を予防できるかについてラットを用いて検証した．その結果，関節可動域運動をしない場合に比べ，関節拘縮の進行は遅延させることができるが，完全に予防することはできないことが示された． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：Tatsuta N, Nakajima M, Akiyama J, Nonaka K, Kawakami T
4 Carbon dioxide-rich water bathing promotes cutaneous wound healing in experimental animal model （高濃度人工炭酸泉は実験動物モデルの皮膚損傷治癒を促進させる）	－	平成20年8月	10th International Congress of the Asian Confederation for Physical Therapy（千葉）	人工炭酸泉浴が創傷治癒を促進するかをラット創傷モデルにて用いて検討した．その結果，人工炭酸泉浴がラットの創傷治癒を促進することが明らかになった． 本人担当部分：実験を実施し，組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：Nakajima M, Hayamizu S, Nonaka K, Tatuta N, Akiyama J
5 A modified quadriceps femoris muscle setting with co-contraction of the hamstrings （ハムストリングスの同時収縮を伴った改良型大腿四頭筋セッティング）	－	平成20年11月	XXX World Congress of Sports Medicine（バルセロナ）	我々は大腿四頭筋セッティングの際，反対側下肢を挙上させ，ハムストリングスの同時収縮を伴う大腿四頭筋セッティング(MQS)を開発した．そこで本研究は健常人とACL損傷患者を対象に通常の大腿四頭筋セッティング(NQS)とMQSの筋活動を筋電図学的に検証した．その結果，健常人ではNQSに比べ，MQSはハムストリングスの同時収縮が確認された．また，ACL損傷患者ではNQSに比べMQSで外側広筋の高い筋活動が確認できた．本研究結果より，MQSはACL損傷患者の大腿四頭筋筋力強化に安全で有効な方法であることが示された． 本人担当部分：実験結果の解析を行った． 共同発表者：akajima M, Abeno E, Nonaka K, Tatsuta N, Akiyama J
6 The range of motion (ROM) exercise load condition required for preventing joint contracture development （関節拘縮進行予防のために必要となる関節可動域運動条件）	－	平成20年11月	XXX World Congress of Sports Medicine（バルセロナ）	1日5回の関節可動域運動を5回/週の頻度で実施した場合，関節拘縮を予防できるかについてラットを用いて検証した．その結果，関節可動域運動をしない場合に比べ，関節拘縮の進行は遅延させることができるが，完全に予防することはできないことが示された． 本人担当部分：実験の実施および組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：Tatsuta N, Nakajima M, Akiyama J, Nonaka K, Kawakami T
7 The study of functional and morphological changes on peripheral nerve in rat developed disuse atrophy （廃用性筋萎縮を起こした末梢神経の機能的、形態学的変化についての研究）	－	平成20年11月	XXX World Congress of Sports Medicine（バルセロナ）	廃用性筋萎縮モデルラットの運動神経伝導速度と神経組織の変化を検証した．その結果，廃用性筋萎縮モデルラットの運動神経伝導速度は低下することが確認された．さらに軸索の萎縮が観察された．本研究より，廃用時は筋萎縮だけでなく軸索の萎縮と運動神経伝導速度が低下することが明らかになった． 本人担当部分：実験の実施および組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：Akiyama J, Nakajima M, Nonaka K, Tatsuta N, Kurata K

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
8 The analysis of abdominal muscle activity during trunk curl up exercise based on Pilates method （ピラティスメソッドに基づいた体幹腹筋運動中の腹筋活動の解析）	－	平成20年11月	XXX World Congress of Sports Medicine（バルセロナ）	ピラティスによる体幹屈曲運動時の腹部筋活動様式の特徴を健常成人19名を対象に筋電図学的に解析した．その結果，通常の体幹屈曲運動に比べピラティスによる体幹屈曲運動では内腹斜筋の筋活動が高いことが確認された．また，ピラティスによる体幹屈曲運動は通常の体幹屈曲運動に比べ内腹斜筋/腹直筋の割合が高値を示した．本研究により，ピラティスによる体幹屈曲運動は通常の体幹屈曲運動より腹斜筋の活動の割合が大きいことが示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：Nonaka K, Nakajima M, Tatsuta N, Akiyama J
9 Carbon dioxide-rich water bathing increases myogenin protein expression in rat injured skeletal muscle （高濃度人工炭酸泉は損傷骨格筋のmyogenin蛋白発現を増加させる）	－	平成23年6月	16th International WCPT Congress（アムステルダム）	炭酸泉が筋損傷後のMyoDとmyogeninのタンパク発現に与える影響について検証した．ラットを非損傷群(NI群)，損傷群(IC群)，損傷＋淡水浴群(FW群)，損傷＋人工炭酸泉浴群(CO2群)に分け，IC群，FW群，CO2群のラット左前脛骨筋に筋損傷を誘発させた．損傷1日後からIC群，CO2群のラットは水温37℃で30分間，淡水浴または炭酸泉浴を1日1回，3日間，負荷された．その結果，CO2群ではFW群に比べ損傷筋のmyogeninタンパク量が高値を示した．結果より，炭酸泉浴は筋損傷後の再生を促進する可能性を示した． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：Nonaka K, Mori J, Tatsuta N, Akiyama J, Yonetsu R, Iwata A
10 The characteristics of sit-to stand movement in infants aged 1 year: a preliminary study （1歳児の立ち上がり動作の特徴－予備研究）	－	平成24年7月	XIXth Congress of the International Society of Electrophysiology & Kinesiology（ブリスベン）	新生児の立ち上がり動作の特徴を明らかにすることを目的に研究を行った．その結果，新生児の立ち上がりは成人に比べ，体幹の前傾が少なく，足関節の背屈が大きくなるという特徴が明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案と結果の解釈を行った． 共同発表者：Yonetsu R, Sakita H, Yamashita N, Miki Y, Nonaka K, Iwata A, Kawarai Y, Shimizu J
11 The development of a force plate focused on infants' movements: an experimental study of reliability for measuremen （小児動作に着目したフォースプレートの開発－計測信頼性の実験的検証）	－	平成24年7月	XIXth Congress of the International Society of Electrophysiology & Kinesiology（ブリスベン）	我々が新たに開発したフォースプレートの正確性を検証した．その結果，従来のフォースプレートに比べ，より小さい値からの計測ができることを確認した．この新しいフォースプレートは体重の軽い小児の動作分析に有用で可能性を示した． 本人担当部分：研究計画の立案と実験を実施した 共同発表者：Yonetsu R, Arakawa S, Shintani A, Yoshioka M, Shimizu J, Iwata A, Nonaka K, Nakagawa C

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
12 How many days per week should the range of motion exercise is performed to prevent the development of the joint contracture? （関節拘縮発生を予防するためには週に何日関節可動域訓練を実施すればよいか？）	－	平成24年9月	XXXII World Congress of Sports Medicine（ローマ）	関節可動域運動を1週間に何日行うと関節拘縮が予防できるかについて，ラットを用いて検証した．1週間に1日，3日，5日の関節可動域運動を行った結果，5日行った場合が最も関節拘縮の予防が可能であった．しかしながら，週5日の関節可動域運動では完全に関節拘縮の発生を予防することができないことが明らかになった． 本人担当部分：実験を実施した。 共同発表者：Tatsuta N, Nonaka K, Akiyama J, Nakajima M
13 The study of artificial carbon dioxide-rich water bathing effect on experimental acute arthritis （人工炭酸泉浴の実験的関節炎に対する効果についての研究）	－	平成24年9月	XXXII World Congress of Sports Medicine（ローマ）	各種温度（10℃，20℃，35℃）の人工炭酸泉浴が急性炎症に与える影響をラット関節炎モデルにて検証した．その結果10℃，20℃の人工炭酸泉浴は水道水に比べ皮膚温の上昇が低かった．また，35℃の人工炭酸泉浴は水道水での寒冷浴と同等の抗炎症効果があることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および結果の解釈を行った． 共同発表者：Akiyama J, Fujiwara Y, Tatsuta N, Nonaka K, Une S, Nakajima M
14 The effect of carbon dioxide rich water bathing on the MyoD family proteins after muscle injury （筋損傷後の高濃度人工炭酸泉浴のMyoDファミリータンパクに対する効果）	－	平成24年9月	XXXII World Congress of Sports Medicine（ローマ）	筋損傷後の人工炭酸泉浴がMyoDファミリーのタンパク質発現に及ぼす影響を検証した．その結果，筋損傷後に人工炭酸泉浴を行うと損傷4日後にmyogeninの発現が上昇することが確認できた．MyoDの発現に関しては変化がなかった．本研究結果より，人工炭酸泉が一部のMyoDファミリータンパク質発現を増加させ，筋損傷治癒を促進させている可能性を示した． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った 共同発表者：Nonaka K, Akiyama J, Tatsuta N, Une S
15 Effects of phasic electrical stimulation during expiration in elderly chronic obstructive pulmonary disease: a pilot study （高齢慢性閉塞性肺疾患患者の呼気中に同調させた電気刺激の効果についてー予備研究）	－	平成24年12月	17th Congress of the Asian Pacific Society of Respirology（香港）	24名の高齢COPD患者を対照群と呼息時低周波電気刺激群に割り付け，安静時および運動時の換気機能について，呼息時低周波電気刺激の効果を検証した．結果より呼息時低周波電気刺激は換気機能を有意に改善することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案および結果の解析を行った． 共同発表者：Ito K, Nozoe T, Okuda M, Nonaka K, Horie J, Kawamura H.
16 Role of muscle coactivation and reaction time in postural perturbation in the elderly （高齢者の姿勢動揺での筋協働活動と反応時間の役割について）	－	平成26年6-7月	2014 International Society for Posture & Gait Research World Congress（バンクーバー）	筋骨格シミュレーションモデルを用いて筋の同時収縮が外乱刺激後の姿勢制御にどのように影響するかを調べた．外乱刺激後の反応時間が遅い場合のみ，同時収縮が外乱を抑えるのに有効であることがわかった． 本人担当部分：研究結果の解析を行った． 共同発表者：Ogaya S, Nagai K, Okita Y, Nonaka K, Iwata A, Higuchi Y, Fuchioka S

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
17 A preliminary study of the effect of trunk position on strategies for lower limb function during forward reaching movements（前方リーチ動作時の下腿機能ストラテジーに対する体幹位置の効果についての予備的研究）	－	平成26年7月	The XX Congress of the International Society of Electrophysiology and Kinesiology（ローマ）	前方リーチ動作の際の体幹ポジションの違いが下肢機能に及ぼす影響について検証した．その結果，体幹ポジションの違いが床反力やハムストリングスと前脛骨筋の筋活動に影響を及ぼすことが示された． 本人担当部分：研究の立案および発表を行った． 共同発表者：Nonaka K, Yonetsu R, Taniguchi F, Ueno S, Shintani A, Nakagawa C, Kataoka M, Ito T
18 Heat stress attenuates skeletal muscle fiber atrophy in diabetic rats（温熱刺激は糖尿病ラットの骨格筋線維萎縮を減弱する）	－	平成27年6月	9th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine（ベルリン）	糖尿病による筋萎縮が温熱療法で減弱するかについて検討した．ストレプトゾトシンを投与し糖尿病を誘発したラットに温浴(42℃)を30分間，1週間に5日，3週間行った．温浴を行ったラットは温浴を行っていないラット比べ長趾伸筋の筋横断面積の減少が予防された．本研究より，温熱療法が糖尿病による筋萎縮を予防することが示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：Nonaka K, Iwata A, Une S, Akiyama J
19 Electromyography activity of the rectus abdominis, internal oblique, and external oblique muscles during forced expiration in healthy adults（健常成人の強制呼気中の腹直筋および内腹斜筋，外腹斜筋の筋活動）	－	平成27年9月	European Respiratory Society Annual Congress 2015（アムステルダム）	呼気筋の筋活動パターンを筋電図を用いて呼気抵抗別に検討した．10%PEmax，20%PEmax，30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋，外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち，最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし，その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが，生理学的な視点でみた場合，その負荷は弱すぎることが示唆された． 本人担当部分：研究の立案および解剖生理学的視点より結果の解釈をした． 共同発表者：Ito K, Nonaka K, Ogaya S, Horie J
20 Effectiveness of back school versus brain school for elderly with chronic low back pain（慢性腰痛の高齢者に対する腰背教室と脳教室の効果）	－	令和元年6月	13th World Congress of the International Society of Physical and Rehabilitation Medicine（神戸）	慢性腰痛を有する高齢者にバイオメカニクスに基づいた腰背部教室と神経科学的教育に基づいた脳教室の効果について検証した．慢性腰痛のある高齢者を対象に，腰背部教室群（n=16）と脳教室群（n=20)に分け、3か月間に6回の介入を行った．その結果，両群とも介入後に疼痛の軽減が認められた．脳教室の対象者は腰背部教室の対象者に比べ，Pain Catastrophizing Score，Fear-Avoidance Beliefs Questionnaireが有意に改善した．これらの結果より，慢性腰痛の高齢者に対して，神経科学教育に基づいた脳教室は腰背部教室に比べ効果的であること，神経科学的教育は心理面へ良好な効果があることが分かった． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：Abiko T, Iwase H, Anami K, Madoba K, Nonaka K, Murata S

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「国内学会発表」 1 股関節外旋位でのStraight Leg Raise exerciseが下肢筋活動に及ぼす影響	－	平成15年5月	第39回日本理学療法学術大会（仙台）	下肢挙上運動(SLRex)実施時における挙上下肢股関節外旋角度と大腿四頭筋活動の関係について検討した．被験者は挙上下肢股関節外旋0，20，40度でSLRexを行った．その結果，膝伸展の単関節筋である内側広筋，外側広筋の筋活動は外旋角度が拡大するにつれて低下しているが，二関節筋である大腿直筋では変化がなかった．大腿四頭筋筋力強化法としてSLRexを用いる場合，股関節を外旋させずに行うことの重要性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，中嶋正明，秋山純一，祢屋俊昭
2 走行面の傾斜角度の違いによるトレーニングがエネルギー代謝系に及ぼす影響	－	平成15年9月	第58回日本体力医学会大会（静岡）	マウスを用い持久的トレーニング時の運動肢位の違いによる，臓器等の乳酸脱水素酵素(LDH)活性の変化を検討した．その結果，筋組織では走行面の傾斜角度の違いによるLDH活性の変化がみられた．水平走行群に比べ，下り走行群で心臓に活性の低下が確認された．このことから，走行面の傾斜角度の違いにより，運動負荷量や循環動態等が変化し，LDH活性の変化に影響することが示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，秋山純一，中嶋正明，祢屋俊昭
3 人工炭酸泉浴が神経伝導速度に及ぼす影響	－	平成16年5月	第39回日本理学療法学術大会（仙台）	炭酸泉浴が神経伝導速度に及ぼす影響について検討し，深部組織酸素飽和度との関係も含めて考察した．被験者は健常成人7名とした．浴水温度は不感温度36℃とした．5分間の左大腿部の阻血を行った．神経伝導速度(MCV)測定には脛骨神経を選択し，阻血前後，入浴後に測定を行った．その結果，炭酸泉浴はさら湯に比べ深部組織酸素飽和度と神経伝導速度の回復が速かった．これらの結果から，神経機能低下が原因となる疾患への人工炭酸泉適用の可能性も示唆された． 本人担当部分：神経伝導速度の測定を行った． 共同発表者：吉田巳有紀，道菅聖子，野中紘士，秋山純一，中嶋正明，祢屋俊昭，Poffenberger Chikako Kawakami
4 人工炭酸泉浴の血管内皮細胞増殖因子濃度に及ぼす影響-ラット実験的末梢循環障害モデルを用いた検討	－	平成16年9月	第59回日本体力医学会大会（大宮）	炭酸泉浴の側副血行路形成促進効果を評価した．ラットの左大腿動脈を結紮し，末梢循環障害モデルを作成した．処置後ラットは36℃水道水と36℃炭酸泉への入浴負荷が5日間行われ，血中と筋組織中の血管内皮細胞増殖因子(VEGF)が測定された．炭酸泉浴は入浴負荷前と比べVEGFを低下させた．筋組織中のVEGFは炭酸泉浴により対照側と比べ結紮側が低値を示した．炭酸泉浴の側副血行路形成促進効果がVEGFの直接の作用とは異なる機序で作用し，VEGFに対するnegativefeedbackの存在を示唆すると考えられた． 本人担当部分：実験の実施とVEGFの測定を行った． 共同発表者：中嶋正明，秋山純一，野中紘士，祢屋俊昭

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5 トレーニング走行面の傾斜角度の違いによる筋組織中のLDH活性,PFK活性変動に関する検討	－	平成16年9月	第59回日本体力医学会大会（大宮）	角度可変型トレッドミを用いて，骨格筋の乳酸脱水素酵素(LDH)活性とホスホフルクトキナーゼ(PFK)活性について検討した．マウスをコントロール群(CONT)，上り走行群(UR群)，水平走行群(LR群)，下り走行群(DR群)に分け，4週走行負荷を行った．その結果，骨格筋のLDH活性はLR群，DR群で低下する傾向を示し，DR群がCONT，UR群と比較し有意に低下した．走行角度が上方になるほど乳酸代謝が低下し，上方になるほど解糖系代謝が増加することが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，秋山純一，中嶋正明，祢屋俊昭
6 創外固定によるラット実験的膝関節拘縮モデルの作成	－	平成17年5月	第40回日本理学療法学術大会（大阪）	関節拘縮に対する効果的な理学療法を検討していくため，ラット実験的関節拘縮モデルの作成を行い，組織学的に検討を行った．関節拘縮の作成法は，右大腿骨および脛骨の膝関節から離れた位置にそれぞれ2本のキルシュナー鋼線を前額一水平軸に沿って貫通させ，各キルシュナー鋼線を接合し膝関節を屈曲90°に固定した．その結果，伸展角度変化と組織学的検証からこのモデルが実験的関節拘縮モデルの作成法として有用であつた． 本人担当部分：実験を実施し，組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：龍田尚美，秋山純一，中嶋正明，野中紘士，祢屋俊昭
7 人工炭酸泉浴による血管内皮増殖因子と乳酸脱水素酵素変動に関する検討	－	平成17年5月	第40回日本理学療法学術大会（大阪）	炭酸泉浴による血管新生因子の1つである血管内皮増殖因子(VEGF)と乳酸脱水素酵素(LDH)活性を測定し，人工炭酸泉浴の生体反応について検討した．マウスをコントロール群，さら湯群，炭酸泉群に分けた．入浴は3週間行われた．3週間の入浴終了後，マウス血液と腓腹筋を採取し,VEGF測定に用いた．加えて，腓腹筋のLDH活性を測定した．炭酸泉群ではコントロール群，さら湯群と比べ炭酸泉群で低下傾向であった．人工炭酸泉によるLDH活性の低下は乳酸産生を抑制する効果があることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，秋山純一，中嶋正明，龍田尚美，祢屋俊昭
8 糖尿病合併症に関連したおもに閉塞性動脈硬化症に関するAmerican Sunflowerエキス有用性の検討	－	平成17年9月	第60回日本体力医学会大会（岡山）	糖尿病と閉塞性動脈硬化症に予防・治療効果のある薬用成分としAmericanSunflower(A.S.)の検討を行った．マウスまたはラットにA.S.抽出エキス溶液を経口投与し，1)糖負荷血糖値抑制効果に関する検討，2)血液動態に関する検討，3)血流阻害部位に対する皮膚温に関する検討，4)血流阻害動物の血管内皮細胞増殖因子に関する検討，5)培養細胞を用いた血管増殖因子に関する検討を行った．A.S.エキスに優れた血糖値抑制効果と閉塞性動脈硬化症の予防・治療に効果が期待できる，血流促進作用，組織血液量および酸素飽和度増加作用が見られた． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：秋山純一，中嶋正明，野中紘士，龍田尚美，速水明香，祢屋俊昭

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9 ラット膝関節運動負荷試験装置の試作	－	平成18年5月	第41回日本理学療法学術大会（群馬）	ラット膝関節創外固定モデルに対応した，屈曲伸展運動において，目標軌道の高精度な追従制御が行え，再現性があり，目標トルク抵抗を感知した時点で関節運動を停止し反対方向への関節運動を開始する関節運動負荷試験装置を製作した．製作した膝関節運動負荷試験装置はその屈曲伸展運動をコンピュータで制御したことにより様々な制御が可能であり，さらに，タイミングベルトを用いたことにより，その関節運動の制御が正確に安定して実行された． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：龍田尚美，門林義幸，西村一郎，渡辺正憲，中嶋正明，秋山純一，野中紘士，祢屋俊昭
10 ラット膝関節障害モデルを用いた大腿四頭筋機能が関節・筋組織変化に与える影響の実験的検討	－	平成18年5月	第41回日本理学療法学術大会（前橋）	ラット膝関節障害モデルを用いて，大腿四頭筋の機能不全が軟骨変性と筋組織の変化に与える影響について検討を行った．大腿四頭筋を切除したラットは関節面の評価点法であるMankin score値の有意な増加が認められた．更に術後3週から軟骨表面の不整化に加えて，細胞の集塊化や分裂像が認められた．大腿四頭筋の機能不全を伴う場合，関節軟骨の退行変性が進行しやすい可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案し，実験を実施するとともに組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：丸水ちえみ，山口博子，秋山純一，龍田尚美，野中紘士，中嶋正明
11 ラットを用いた人工炭酸泉(寒浴)の急性膝関節炎に対する効果の実験的検討	－	平成18年5月	第41回日本理学療法学術大会（前橋）	急性炎症に対して，炭酸泉の寒冷療法への適用について実験的に検討した．ラットをコントロール群，淡水浴群，炭酸泉浴群に分けた．ラットの左膝関節に関節炎を惹起させ，炭酸泉浴または淡水浴を行った．その結果，表面・深部温度ともに炭酸泉浴群の方が淡水群に比べ入浴前後の温度低下が小さい傾向が認められた．炭酸泉浴群は平均最大幅の変化率が淡水浴群に比べ小さい傾向が認められた．これらより，炭酸泉の寒浴は，急性炎症に対して有効な治療法であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案と組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：山口博子，丸水ちえみ，中嶋正明，野中紘士，龍田尚美，秋山純一
12 グルタチオン添加飼料長期投与による寿命に関するマウスを用いた実験的検討	－	平成18年9月	第61回日本体力医学会大会（神戸）	グルタチオン(GSH)の摂取が生体の寿命に関してどのように作用するか検討した．マウスをGSH添加飼料終身投与群，GSH成人期以降投与群，メチオニン減量飼料投与群および通常飼育繁殖用飼料投与群に分け，寿命について検討を加えた．その結果，GSH投与群間の比較ではGSH成人期以降投与群の雌に寿命が長い傾向がみられた．本研究結果より，GSHの寿命の延長に対する効果は確認されず，逆に働く可能性も示唆された． 本人担当部分：実験と生化学検査を実施した． 共同発表者：速水明香，秋山純一，中嶋正明，野中紘士，龍田尚美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13 関節拘縮予防のための至適関節運動負荷条件の検討	－	平成18年9月	第61回日本体力医学会大会（神戸）	ラットを用いて1日に1度,1度に5回の関節可動域運動を週に5日行うことで関節拘縮の発生が予防されるのかを実験的に検証した．関節固定群，関節運動群に分けた．関節運動群は1日に関節可動域の往復運動5回1セットを4週間負荷した．関節固定から5週間後，膝関節の関節可動域を測定した．その結果，週5日，1度に5回の関節運動を実施することで関節拘縮の発生を予防することはできないことが明らかとなった． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：龍田尚美，秋山純一，野中紘士，中嶋正明
14 人工炭酸泉浴の創傷治癒促進効果	－	平成19年5月	第42回日本理学療法学術大会（新潟）	人工炭酸泉浴の創傷治癒促進効果の基礎的検討を目的とし，人工炭酸泉浴の適用による創傷治癒の促進効果についてラット創傷モデルを作成し検討した．人工炭酸泉水は湯浴群に比べ創部の完治に要した日数が67.2%にまで短縮した．創傷面積の縮小率は人工炭酸泉浴群で有意に促進された．VEGFやbFGFなどの強力な血管新生因子の発現が促されるため難治性外傷に対してもかなりの治癒促進効果を発揮することが示唆された． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：中嶋正明，速水明香，野中紘士，龍田尚美，秋山純一
15 クーリングダウンによる運動誘発性筋損傷抑制効果の検討	－	平成19年5月	第42回日本理学療法学術大会（新潟）	運動後のクーリングダウンが運動誘発性筋損傷を抑制するかどうかを実験的に検討した．ラットにトレッドミルで下り坂走行を負荷し，筋損傷を誘発した．EX+C群は20℃の淡水に30分間浸し，クーリングダウンを行った．EX群とEX+C群の比較では，24，48，72時間後のいずれもクーリングダウン群で組織学的に筋損傷が少なくG6PD活性が低値を示した．運動後のクーリングダウンは筋損傷抑制に効果があることが示唆された． 本人担当部分：共同研究につき担当部分抽出は不可能 共同発表者：野中紘士，速水明香，秋山純一，龍田尚美，中嶋正明
16 運動前の温熱負荷が運動後の筋損傷抑制に及ぼす効果	－	平成19年5月	第42回日本理学療法学術大会（新潟）	運動前の温熱負荷が運動後のラットヒラメ筋損傷の抑制に及ぼす効果の検討を目的として，形態学的観察および酵素化学的測定により検討した．運動群と温熱負荷+運動群において，筋組織の変性と組織内に貪食細胞の出現を認め温熱負荷+運動群の方が運動群に比べ，貪食細胞の浸潤が少ないことが確認された．筋損傷のマーカーとされる筋組織内のG6PD活性は温熱負荷+運動群が運動群に比べ低下傾向がみられた．運動前の温熱負荷が運動後の筋損傷の発生を抑制することが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表内容の検討を行った． 共同発表者：上田康博，野中紘士，秋山純一，中嶋正明
17 関節拘縮予防のための関節運動負荷条件の検討	－	平成19年5月	第42回日本理学療法学術大会（新潟）	関節拘縮の予防の根拠を示す科学的研究として，1日に1度，1度に5回の関節可動域運動を週に5日行うことで，関節不動による関節拘縮の発生を予防することができるのかをラットを用いて実験的に検証した．その結果，1日に1度，1度に5回の全可動域に及ぶ関節可動域運動を週に5日行う条件では関節拘縮の発生を予防できないことが明らかとなった． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：龍田尚美，秋山純一，野中紘士，速水明香，中嶋正明

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18 ラットの骨欠損モデルを用いた低周波治療が骨再生に及ぼす影響－サイトカインの変動と組織形態学的変化による検討	－	平成19年5月	第42回日本理学療法学術大会（新潟）	低周波治療の骨折治癒への有効性をラット骨欠損モデルにて検討した．組織学的検討と血清中のTGF-β1，オステオカルシン濃度の測定した．組織形態学的な比較検討では，低周波治療には，骨芽細胞・骨細胞の出現を促進させる効果があるという結果が示された．また，サイトカインの測定の結果では，低周波治療により初期のTGF-β1濃度が高値を示し，オステオカルシン濃度も上昇する傾向がみられた．低周波治療は骨再生に有効な治療であるということが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案および組織の形態学的評価，発表内容の検討を行った． 共同発表者：吉谷睦美，秋山純一，中嶋正明，野中紘士，龍田尚美，速水明香
19 各種酸素濃度環境が皮膚欠損創治癒に与える影響の実験的検討－治癒率の測定と組織学的検討	－	平成19年5月	第42回日本理学療法学術大会（新潟）	高圧酸素療法のような大がかりな装置を用いず，常圧の各種酸素濃度環境下での難治性潰瘍の治癒促進効果について二種の動物を用いて実験を行い，臨床適用の可能性についてラットとマウスを用いて検討した．ラットでは10%群では治癒率は有意に抑制された．完治するまでの日数の比較では，30%群は通常空気群に比べて約80%に治癒期間が短縮された．しかし，マウスでは効果が見られず重当たりの換気量や酸素消費率であることに関し，抗酸化系酵素保有の違いなどが起因すると考えられた． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：速水明香，秋山純一，野中紘士，中嶋正明
20 運動前の温熱負荷による運動誘発性筋損傷予防効果についての検討	－	平成20年5月	第43回日本理学療法学術大会（福岡）	運動前の温熱負荷がマウスの運動誘発性筋損傷を予防するか，生化学的および形態学的に検討した．温熱負荷を施行したマウス大腿四頭筋にはHeat shock protein 70(HSP70)が温熱負荷しないものに比べ多くみられた．筋損傷のマーカーとされる筋組織内のG6PD活性は温熱負荷+運動群が運動群に比べ低かった．組織像において温熱負荷+運動群の方が運動群に比べ，損傷線維が少ないことが確認された．運動前の温熱負荷がHSP70を発現させ，運動誘発性筋損傷を予防することが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，秋山純一，中嶋正明，龍田尚美

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
21 低酸素，高酸素中での過運動負荷による筋損傷の変化に関する研究－組織形態学観察およびG-6-PDH活性測定による検討	－	平成20年5月	第43回日本理学療法学術大会（福岡）	通常酸素から低酸素及び高酸素チャンバー内に暴露され，運動療法またはトレーニングを実施した場合，酸素濃度によって筋損傷の発生にどのような変化が生じるかを，形態的観察および酵素化学的測定により検討した．組織学的検討では10%酸素濃度で20%酸素濃度に比べ損傷線維が少ない傾向にあった．50%酸素濃度は20%酸素濃度と比べ差はなかった．G6PDH活性は各酸素濃度間で差はなかった．本研究より，低酸素環境下で運動療法を実施した場合，筋損傷を抑制できる可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案と組織の形態学的評価，G6PDH活性の測定，発表内容の検討を行った． 共同発表者：倉田和範，中嶋正明，野中紘士，都能槙二，迎山昇平，秋山純一
22 ラット膝関節運動負荷試験装置の試作（第2報）	－	平成20年5月	第43回日本理学療法学術大会（福岡）	ラット膝関節の可動域測定，関節運動を高い再現性のもとに正確に負荷できる装置を制作した．本装置のラットの体幹および下腿の固定性は，十分に満足できるものであった．ゆえにラットの膝関節にかかる抵抗値が0.049Nmに達すると関節運動方向は反転し，スムーズな屈曲伸展運動を繰り返すことができた．本装置を使うことで様々な関節運動負荷条件の下で，すべてのラットに高い再現性の元に同条件で関節運動を負荷することが可能となった． 本人担当部分：実験を実施した． 共同発表者：中嶋正明，大久保康，龍田尚美，秋山純一，野中紘士，山本浩司
23 関節拘縮予防を目的とした温熱療法(温水負荷)の効果－ラット関節固定モデルを用いた実験的研究	－	平成20年5月	第43回日本理学療法学術大会（福岡）	温水負荷による温熱療法が関節拘縮の発生予防に効果があるのかを検討した．対照群，温熱療法群のどちらも膝関節を屈曲90°で固定し，温熱療法群は41℃の温水水で15分間温熱療法を行った． 4，6週後の関節可動域は対照群に比べ温熱療法群で大きかった．本研究で，温熱療法によって関節不動による関節可動域の減少が抑制されることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画を立案し，実験を実施した． 共同発表者：都能槙二，中嶋正明，倉田和範，迎山昇平，龍田尚美，野中紘士，秋山純一
24 関節可動域運動による関節拘縮の発生予防効果(第2報)－ラット関節拘縮モデルを用いた実験的検討	－	平成20年5月	第43回日本理学療法学術大会（福岡）	関節運動の週あたりの実施日数と関節拘縮予防効果の関連を検証した．ラットを対照群，持続関節固定群，週1日関節運動群，週3日関節運動群，週5日関節運動群の5群で実験を行った．結果として，関節可動域は関節運動実施頻度が多いほど維持された．形態学的には持続固定群と1日関節運動群の関節腔内に多量の結合組織の増殖と癒着が確認されたが，3日，5日関節運動群は関節腔内の結合組織の増殖は見られなかった．本研究より，関節可動域の実施頻度の違いによる拘縮予防効果との関連が明らかになった． 本人担当部分：実験を実施し，組織の形態学的評価を行った． 共同発表者：龍田尚美，中嶋正明，秋山純一，野中紘士，川上照彦

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25 ハムストリングスの同時収縮を伴う等尺性収縮大腿四頭筋筋力増強運動の考案－筋電図学的検証	－	平成20年5月	第43回日本理学療法学術大会（福岡）	ハムストリングスの収縮を伴う等尺性収縮を用いた大腿四頭筋筋力増強運動を考案し，筋電図学的に検証した．健常男子学生15名を対象とし，背臥位にて優位側の股関節，膝関節を90度屈曲位で固定し，等尺性収縮による各種角度で蹴り出しを行った．大腿四頭筋の筋活動は-60度から45度にかけて増加するのに対し，ハムストリングスの筋活動は減少した．ハムストリングス/大腿四頭筋割合(H/Q ratio)は-60度から45度にかけて減少した．本研究より，骨盤に対する蹴り出し方向によりH/Q ratioのコントロールが可能であることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った 共同発表者：江木翔平，　柳田恵美，　森本訓代，野中紘士，　中嶋正明
26 ピラティスによる体幹屈曲運動時の腹部筋活動様式の筋電図学的解析	－	平成20年9月	第63回日本体力医学会大会大会（大分）	ピラティスによる体幹屈曲運動時の腹部筋活動様式の特徴を筋電図学的に解析した．健常成人11名に通常の体幹屈曲運動とピラティスによる体幹屈曲運動を実施させ，右側腹直筋(RA)，内腹斜筋(IO)の積分筋電図を測定した．通常の体幹屈曲運動に比べピラティスによる体幹屈曲運動ではIOの筋活動が高いことが認められた．加えて，ピラティスによる体幹屈曲運動は通常の体幹屈曲運動に比べIO/RA ratioが高値を示した．本研究により，ピラティスによる体幹屈曲運動は通常の体幹屈曲運動よりIO活動の割合が大きいことが示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，中嶋正明，龍田尚美，秋山純一
27 床励振を受ける立位姿勢人体の筋張力に関する検討	－	平成23年3月	日本機械学会関西支部第86期定時総会講演会（京都）	立位姿勢にある人体の床励振に対する応答と安定性の基本的な現象について検討した．その結果，以下が明らかになった．　(1)若年者では足首まわりの筋肉群に負担がかかりやすく，高齢者では腰や膝まわりの筋肉群に負担がかかりやすい．(2)高齢者の重心位置の移動範囲は若年者に比べて小さくなる．(3)高齢者の方が若年者に比べ，筋肉への負担が大きい傾向にある．　(4)電車のブレーキ等の加速度外乱を受けると，高齢者では若年者の2倍の負担がかる場合もある． 本人担当部分：モーションキャプチャーによる動作解析を行った． 共同発表者：杉本太志，伊藤智博，新谷篤彦，中川智皓，奥田邦晴，野中紘士
28 ヒト立ち上がり動作支援に関する基礎検討	－	平成23年3月	日本機械学会関西支部第86期定時総会講演会（京都）	ジャイロセンサと本研究で製作した床反力計を用い，立ち上がり実験を行った．実験により，座面高さの異なる椅子から立ち上がる際のヒトの挙動を把握し，単純化したヒトの解析モデルを構築して，立ち上がり挙動を分析した．実験データから，立ち上がり動作中の角度や各速度を算出した．さらに椅子の座面高さによる立ち上がり挙動の有意な違いについて考察を行った．また，ラグランジュ方程式を用いて得られた運動方程式に，角度等の実験データを代入し，時々刻々の関節トルク等を逆解析により得た． 本人担当部分：モーションキャプチャーによる動作解析を行った． 共同発表者：高井飛鳥，伊藤智博，新谷篤彦，中川智皓，奥田邦晴，野中紘士

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
29 人工炭酸泉浴による損傷骨格筋の再生促進効果についての検討	－	平成23年5月	第46回日本理学療法学術大会（宮崎）	炭酸泉浴による損傷骨格筋の再生促進効果について検討した．ラットを非損傷群(NI)，損傷コントロール群(IC)，損傷温浴群(FW)，損傷炭酸泉群(CO2)に分け，IC群，FW群，CO2群のラット左前脛骨筋に損傷を誘発し，損傷1日後から，FW群，CO2群のラットに37℃で30分間，温浴または炭酸泉浴を1日1回，週5日行った．その結果，損傷の2週間後，炭酸泉浴により損傷前脛骨筋の筋核数と筋線維横断面積の回復が促進することがわかった． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，井東あゆみ，森潤一，龍田尚美，秋山純一，岩田晃
30 人工炭酸泉浴による損傷骨格筋の再生促進効果の可能性についての検討	－	平成23年9月	第66回体力医学会大会（山口）	本研究は，炭酸泉浴による損傷骨格筋の再生促進効果を検討した．ラットを非損傷群（NI群），損傷群（IC群），損傷＋淡水浴群（FW群），損傷＋人工炭酸泉浴群（CO2群)に分けた．IC群，FW群，CO2群のラット左前脛骨筋に筋損傷を誘発させた．筋損傷誘発の1日後からIC群，CO2群のラットは37℃で30分間のそれぞれ，淡水浴または炭酸泉浴を1日1回，3日間，負荷された．その結果，損傷筋のMyogeninおよびM-cadherinはCO2群でIC群，FW群に比べて高値を示した．結果より，人工炭酸泉浴は損傷骨格筋の再生を促進する可能性を示した． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ測定，発表を行った． 共同発表者：野中紘士，秋山純一，龍田尚美，岩田晃
31 アキレス腱損傷動物実験モデルを用いた人工炭酸泉浴の腱組織治癒に与える影響の検討	－	平成23年9月	第66回体力医学会大会（山口）	炭酸泉浴の損傷腱組織の修復に対する治癒効果について検討した．人工炭酸泉群，さら湯群，コントロール群に3群に分けアキレス腱損傷モデルを作成した．人工炭酸泉群，さら湯群のラットは35度の人工炭酸泉浴，さら湯浴を各々1日1回行った．その結果，人工炭酸泉群では，結合組織の再生亢進が観察され，加えて腱組織再生修復の亢進が観察された．本研究より，人工炭酸泉浴が腱組織の損傷治癒を促進することが確認された． 本人担当部分：研究計画の立案し，実験を実施した．また発表内容の検討を行った． 共同発表者：森潤一，秋山純一，野中紘士，龍田尚美，中嶋正明
32 立位時の足部接地位置に着目した重心可動域の基礎実測	－	平成24年3月	日本機械学会関西支部第87期定時総会講演会（吹田）	本研究では立位時の足部接地位置による重心可動域の変化について，実測データに基づき考察した．その結果，足間隔を広げると重心可動域が広がることを定量的に示した．後方よりも前方の重心可動域の方が広いことが分かった． 本人担当部分：モーションキャプチャーによる動作解析を行った． 共同発表者：中川智皓，新谷篤彦，伊藤智博，奥田邦晴，野中紘士

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
33 可搬型計量床反力系の開発	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（兵庫）	乳幼児の立ち上がりや歩行等を測定することを目的とした，g 単位の荷重を計測可能となる床反力計を開発し，その計測精度について検討した．その結果，開発した可搬式計量床反力計はg 単位の荷重の記録をより正確に計測できることが可能であった． 本人担当部分：研究計画を立案し，実験を実施した． 共同発表者：米津亮，野中紘士，清水順市，崎田博之，岩田晃，瓦井義広，山下典子，吉岡学，奥田邦晴
34 ラットの骨折モデルを用いた人工炭酸泉浴の骨折治癒に与える影響－TGF-β濃度の変動と組織形態学的変化による検討	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（兵庫）	本研究はラットを用いて脛骨骨折モデルを作成し，人工炭酸泉浴の骨折に対する治癒促進効果について検討した．その結果，人工炭酸泉浴には骨折後早期のTGF-β濃度の上昇作用と，骨芽細胞分化促進作用があり，優れた骨折治癒促進効果を有することを示した． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験を実施した． 共同発表者：高須賀純一，矢田智大，森潤一，野中紘士，龍田尚美，秋山純一
35 ラット肉離れモデルにおける筋形質膜，基底膜の組織学的検討	－	平成24年5月	第47回日本理学療法学術大会（兵庫）	本研究では打撲と肉離れという異なる筋損傷を誘発した場合の，筋形質膜，基底膜の損傷について検証した．その結果打撲では筋形質膜は破壊され，基底膜は残存していた．肉離れ損傷も打撲と同様の組織像を示した．本研究より，打撲と肉離による筋損傷は筋形質膜と基底膜の損傷の特徴が似ていることが示された． 本人担当部分：研究計画を立案するとともに実験実施と組織切片作成・染色を行い形態学的評価を行った． 共同発表者：岩田晃，野中紘士
36 運動時換気および呼吸時間に対する呼息時低周波電気刺激の効果－健常人による予備的検討	－	平成24年11月	第22回日本呼吸器ケア・リハビリテーション学会学術集会（福井）	本研究の目的は，運動中の呼息を促通させるために電気刺激を用いたフィードバック（ESVF）を行い，その効果と安全性を明らかにすることである．健常成人23名をESVF群と対照群に割り付けた．対象者は呼吸練習において，呼気延長の呼吸パターンを練習し，その呼吸法を運動中も維持するように指導された．運動中と運動後の呼気/吸気時間比において対照群と比較してESVF群が有意に高値を示した．また，ESVFによる副作用が認められなかったことからESVFは運動中の呼吸法を習得させるツールになり得ることが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容を行った。 共同発表者：山原純，野中紘士，藤川薫，小川和哉，伊藤健一
37 高齢COPD患者に対する呼息時低周波電気刺激の効果	－	平成24年11月	第22回日本呼吸器ケア・リハビリテーション学会学術集会（福井）	24名の高齢COPD患者を対照群と呼息時低周波電気刺激群に割り付け，安静時および運動時の換気機能の変化から，呼息時低周波電気刺激の効果を検証した．結果より呼息時低周波電気刺激は換気機能を有意に改善することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ解析を行った． 共同発表者：伊藤健一，野中紘士，濃添建男，奥田みゆき

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
38 赤なた豆からのレクチンの精製とその性質	－	平成25年5月	日本家政学会第65回大会（東京）	赤なた豆からレクチンを精製し，その化学的性質をConAと比較した．赤なた豆からの精製レクチンは電気泳動で均一なバンドを示した．両レクチンのこのバンドの位置は近似しており，太いバンドからなる分子量1万前後のA鎖とB鎖の2種類のレクチンで構成されていたので，A，B鎖のタンパク質配列をN末端から20配列まで分析した結果，両者は同一の配列をしていた．さらに，なた豆レクチンはConAと極めて類似したアミノ酸組成をしていた．以上の結果より，なた豆レクチンはConAと類似した化学組成を持つレクチンと推定された． 本人担当部分：電気泳動およびタンパク質配列測定の一部を担当した． 共同発表者：畦五月，野中紘士，秋山純一
39 高齢COPD患者に対する呼息時低周波電気刺激の効果	－	平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会（名古屋）	高齢COPD患者に対して呼息時低周波電気刺激（PESE）を用い，その効果を，安静時および運動時の換気機能や酸素摂取量に着目し検討した．本研究の結果よりPESEが安静時および運動時の換気効率を改善することが明らかとなった．また，その際にはPESEが仕事量増大の指標になり得るVO2／Wの増大を誘発しないことが証明された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ解析を行った． 共同発表者：伊藤健一，野中紘士，濃添建男，奥田みゆき，川村博文
40 倒立振子型車両乗車時の筋負担の定量評価に関する基礎検討	－	平成25年9月	日本機械学会2013年度次大会（岡山）	倒立振子型車両乗車時の筋負担について実験的評価を行った．乗車することで上肢の筋負担が増加していることがわかった．また，6ケ所の筋肉群に関して筋負担が大きいことがわかった．さらに，車両と人間モデルの連成モデルを構築し，実験と同様の条件で数値解析を行った．その結果，胴体の筋負担の評価についてさらなる検討が必要であることがわかった． 本人担当部分：モーションキャプチャーによる動作解析を行った． 共同発表者：山下雄人，中川智皓，野中紘士，新谷篤彦，伊藤智博
41 気相中の高濃度炭酸ガスが褥瘡治癒に与える影響－ラットを用いた難治性創傷モデルによる検討	－	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（横浜）	気相中の高濃度炭酸ガスが難治性創傷モデルに与える影響について検討した．ラットをコントロール群，0.5%CO2 群，2%CO2 群に分け，全ラットに難治性創傷を作成した．0.5%CO2 群，2%CO2 群に対し，1 日1 回40 分，週5 回の頻度で8 週間，高濃度炭酸ガス暴露を行った．その結果，2%CO2 群は治癒の促進が認められた．TGF-β1はコントロール群と比較して2%CO2 群4 日目において高値を示した．真皮結合組織形成は2% CO2 群で促進した．本研究より，気相中の高濃度炭酸ガスが難治性創傷の治癒を促進することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：前川美幸，中村友貴，矢代梓，野中紘士，森潤一，秋山純一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
42 マウスを用いたビタミンD3の経口投与による学習能力に与える影響－受動的回避試験と脳内のセロトニン濃度測定による検討	－	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（横浜）	マウスにビタミンD3 の経口投与を行い，受動的回避試験による学習効果と明暗弁別回避学習の習得や空間記憶に関与するとされる脳内セロトニン濃度の変動について検討を行った．その結果，ビタミンD3投与は 学習効果を高めた．脳内のセロトニン濃度はビタミンD3投与で高値を示した．以上より，ビタミンD3 が学習能力に有意性を与えることが確認された． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：中村友貴，前川美幸，矢代梓，野中紘士，森潤一，秋山純一
43 脳性まひ児への新しい短下肢装具の開発を目的とした異分野研究の試み	－	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（横浜）	脳性まひ児がより効率的な運動を実施できる短下肢装具の開発するため，リハビリテーション学的知見と工学的知見を融合させた異分野研究に取り組んだ．その結果，脳性まひ児の動作をコンピュータ上で再現できる人間モデルを構築することで，試作したいと考える短下肢装具の設計を容易に考案できるようになった． 本人担当部分：研究計画の立案を行った． 共同発表者：米津亮，草田俊介，中川智皓，新谷篤彦，崎田博之，三木由紀子，瓦井義広，Abbas Abdorahmani，野中紘士，谷口芙紗子，伊藤智博，奥田邦晴
44 小型3軸加速時計を用いた静止立位時の重心動揺評価	－	平成26年5月	第49回日本理学療法学術大会（横浜）	面に装着した小型3軸加速度計を用いて静止立位時の身体重心加速度（COGacc）を推定し，3次元動作解析装置で求めたCOGとの比較からその有用性を検討した．その結果，COGとCOGaccの実効値，最大振幅ML成分に有意な差は認められず，非線形解析ではカオス性が確認されたが，AP成分に有意な差が認められCOGacc とCOG で振幅が異なる可能性が示された． 本人担当部分：研究計画の立案およびデータ解析を行った． 共同発表者：山中悠紀，野中紘士，山本洋之，村上仁之，石井禎基
45 室内有酸素運動における映像の効果	－	平成26年9月	第33回日本臨床運動療法学会学術集会（大阪）	トレッドミルを用いた屋内有酸素運動中の「映像視聴」が及ぼす身体への影響について検討した．24名の健常女子大学生を映像視聴「あり」群と「なし」群の２群に割り付けトレドミル歩行を行い,疲労指標や呼吸代謝指標,換気能力指標を測定した．身体的疲労感と精神的疲労感はともに2群間で有意な差は認められなかった．一方でVO2,METS,EEについては,いずれも「あり」群が「なし」群に比べ有意に高い値を示した．本研究結果から,運動中の映像視聴は映像「なし」での運動と変わらぬ疲労感で効率の良い運動が可能となることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案し，生理学的視点から結果を解釈し，発表内容の検討を行った． 共同発表者：小西隆幸，杉山友香，谷口結子，藤井愛美，野中紘士，伊藤健一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
46 エアマットレスは臥床時の「換気」を制限するか－健常者による基礎的研究	－	平成26年10月	第24回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（奈良）	健常者を対象に，エアマットレスが臥床中の呼吸機能に与える影響を明らかにした．対象者にはエアマットレスと標準マットレス上にて臥位を取らせ，一回換気量，呼吸数などの呼吸機能を測定し比較した．エアマットレス上臥位と標準マットレス上臥位の間で呼吸機能に有意差は認められなかった．胸郭のコンプライアンスの良い者についてはエアマットレスを使用しても，呼吸機能に変化を及ぼさないことが明らかになった． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：井上貴裕，伊藤健一，野中紘士
47 各種植物レクチンのマウス脾細胞を使用したマイトジェン活性とNK活性	－	平成27年5月	日本家政学会第67回大会（岩手）	サトイモレクチン，ナタマネレクチン，キントキマメレクチンを生成し，それぞれのレクチンのマイトジェン活性とNK活性をConAレクチンと比較した．ConAと比べサトイモレクチン，ナタマメレクチンに強いマイトジェン活性を認めたが，キントキマメレクチンのそれは低かった．4種類のレクチンの羊赤血球を指標とした凝集活性は，サトイモレクチンが最も弱い結果であったこれらレクチンを加熱した場合には，凝集活性は認められるもののマイトジェン活性が消失したレクチンもあった 一部レクチンにはNK活性も認められ，一部のレクチンは免疫活性化に関与する可能性が考えられた． 本人担当部分：NK活性の測定を行った． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士
48 強制呼気筋の強度別筋活動パターンの解明－無作為割付，シングルブラインドによる検討	－	平成27年6月	第50回日本理学療法学術大会（東京）	呼吸リハビリテーションにおける呼吸筋トレーニングを効率良く実施するために，強度別筋活動パターンを検討した．10%PEmax，20%PEmax，30%PEmaxの抵抗を負荷した呼息時の腹直筋と内腹斜筋，外腹斜筋の活動量を評価した．３つの筋のうち,最も大きな活動量を示したのは内腹斜筋であった．ただし，その活動量は30%PEmaxの負荷であっても20%MVC以下であった．通常の呼吸筋トレーニングでは30%PEmax程度の負荷が推奨されるが,生理学的な視点でみた場合，その負荷は弱すぎることが示唆された． 本人担当部分：研究計画の立案および発表内容の検討を行った． 共同発表者：大木敦司，松中千明，野中紘士，伊藤健一
49 加熱による各種植物性食品中のレクチンの変性	－	平成28年5月	日本家政学会第68回大会（名古屋）	ボイルした食品からレクチンを精製し，生のレクチンとの比較を試みた．金時マメとサトイモの試料においては，生と加熱した状態では精製にあたってカラム樹脂の種類が異なった．また電気泳動によるバンドの位置から生とは異種のタンパク質に変性している可能性が推測された．また，調理条件のわずかな違いによりレクチンが熱変性していった可能性が示唆された．ブロッコリーレクチンについては，生ではマウス血球で全く活性が検出されなかったが，加熱によりHA活性を示し，その分子量は200万付近の高分子になっていた． 本人担当部分：電気泳動による測定を担当した． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
50 マスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性	-	平成28年10月	第26回日本呼吸ケア・リハビリテーション学会学術集会（横浜）	マスクを用いたスパイロメトリの妥当性と再現性を検証した．健常大学生 48名の対象者に対し，マウスピース（MS）とマスク（FS）を用いたスパイロメトリを実施した．計測項目は肺活量，一回換気量，最大吸気量，1秒量，1秒率である．今回計測した全ての項目においてMS とFSとで高い相関が認められた．同様に全ての項目の 1回目データ と 2回目データとで高い級内相関が認められた．本研究結果より，スパイロメトリの際にマウスピースの代わりにマスクを用いることが可能であることが明らかとなった． 本人担当部分：結果解析および発表内容の検討を
51 加熱調理したキントキマメレクチンのマウス細胞への影響	-	平成29年5月	一般社団法人日本家政学会第69回大会(奈良)	本研究は，加熱したキントキマメに含有されるレクチンの生体への影響を検討することを目的とした．加熱試料から得られたレクチンは，画分ごとに異なった阻害糖を示し，この糖は生試料から生成されたレクチンとは異種であった．生レクチンの耐酵素性は認められたが，加熱試料の画分ごとの耐性は異なった．生レクチンはB16細胞に対する成長阻害を示したが，同濃度で細胞に添加した加熱レクチンは増殖作用を示した． 本人担当部分：B16細胞の成長阻害効果の測定および結果の解析を行った． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士，森秀治，豊村隆男，渡邊政博，中田理恵子
52 ラット高齢期低強度運動による末梢神経の修復・再生に対する促進効果 -血清と末梢神経組織の脳由来神経栄養因子（BDNF）・BDNF受容体（NTRK2）発現量解析に着目して	-	平成30年3月	第19回日本健康支援学会年次学術大会（京都）	本研究では，高齢ラットに継続的な低強度運動を実施し，血清と末梢神経組織のBDNFおよびNTRK2発現量解析により血中から末梢神経組織への輸送が生じているかを検討した．また，末梢神経組織のBDNFおよびNTRK2量が増加した場合，有髄線維の修復促進作用によって有髄線維の形態が改善するか組織学的に検討した．その結果、高齢ラットの2週間の低強度運動実施から，血中BDNFとNTRK2の一部は末梢神経組織に輸送されることが明らかとなった．また，末梢神経組織のBDNFとNTRK2の増加によりシュワン細胞と軸索の修復シグナル伝達が促進され，有髄線維の形態を改善させることが考えられた． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：崎田正博，村上慎一郎，村田伸，野中紘士，栗山みちる，小山梨穂，斉藤彩夏，中田明里，齊藤貴文，磯部航，熊谷秋三

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
53 女性高齢者の浮き趾と身体機能との関係	－	平成30年3月	第19回日本健康支援学会年次学術大会（京都）	本研究は，足底圧分布測定器を用いて浮き趾の有無を判定し，上下肢筋力，全身柔軟性，立位バランス，歩行などの身体機能と浮き趾との関連を検討した．体力測定会に参加した65歳以上の女性高齢者199名を対象に浮き趾の有無，握力，足趾把持力，大腿四頭筋力，長座体前屈距離，開眼片脚立位時間，30秒椅子立ち上がりテスト(CS-30)，Timed Up & Go Test(TUG)，5m最速歩行時間(5MWT)を測定した．その結果，浮き趾がある女性高齢者は足趾把持力が有意に低下したが，歩行などの身体機能との関連は認められなかった．また，浮き趾群では非浮き趾群に比べ柔軟性が低下し，身長が低い結果となり，高齢者特有の姿勢異常が関与している可能性が予測された． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：弓岡まみ，村田伸，岩瀬弘明，内藤紘一，安彦鉄平，白岩加代子，野中紘士，堀江淳
54 地域在住高齢者におけるプレサルコペニアの身体・認知・心理機能特性	－	平成30年3月	第19回日本健康支援学会年次学術大会（京都）	本研究は、地域在住の女性高齢者を対象に、正常な筋肉量を有する高齢者と比較することで、筋肉量低下を生じたプレサルコペニア高齢者の身体・認知・心理機能の特性を明らかにすることを目的とした。対象とした199名の女性高齢者のうち、正常筋肉量群は142名（71.4%）、プレサルコペニア群が49名（24.6%）であった。サルコペニアの判定項目および身体機能の比較では、プレサルコペニア群でSMI（$p<0.01$）、握力（$p<0.01$）、膝伸展筋力（$p<0.01$）、上体起こし（$p<0.01$）は有意に低値を示した。一方、通常歩行速度、最速歩行速度、長座体前屈距離、開眼片足立ち時間、CS-30、TUGにおいては、両群間に有意な差を認めなかった。また、認知機能および心理機能においても、すべての項目で両群間に有意な差を認めなかった。本研究結果より、サルコペニアの予防には、高齢者の早期の筋力低下を把握することは重要であり、筋肉量の測定がその重要な指標となる可能性が示された。 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：森耕平，村田伸，白岩加代子，安彦鉄平，岩瀬弘明，内藤紘一，野中紘士，中野英樹，堀江淳
55 加熱調理したキントキマメレクチンがマウスガン及び免疫細胞へ与える影響	－	平成30年5月	第72回日本栄養・食糧学会大会（岡山）	本研究では，生及び加熱したキントキマメ試料から精製したレクチンの糖阻害，酵素耐性，さらには，生体に与える影響をマウスB16メラノーマ細胞を指標に検討した．加熱試料から得られたレクチン(加熱レクチン)は，画分ごとに異なった阻害糖を示し，この糖は生試料から精製されたレクチン(生レクチン)とは異種であった．生レクチンの耐酵素性は認められたが，加熱試料のクロマトグラフィーの画分ごとの耐性は異なった．レクチンは特定の糖鎖を認識することから，ガン細胞への特異性も示す．生レクチンはB16細胞に対し成長阻害を示したが，同濃度で細胞に添加した加熱レクチンはクロマトの画分ごとに細胞へ与える影響はことなった．この結果は，画分ごとの糖への特異性の差異がB16細胞への反応に関与するためと推察された．さらに，マウス腹腔マクロファージをレクチンで処理すると，LPS誘導による炎症反応が抑制されることが明らかとなった． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士，森秀治，豊村隆男，渡邊正博，中田理恵子

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
56 加熱調理したサトイモレクチンが免疫細胞へ与える影響	－	平成31年5月	一般社団法人日本家政学会第71回大会(徳島)	本研究では，生及び加熱したサトイモから精製した糖阻害，酵素耐性，さらには，生体に与える影響を免疫に関する遺伝子を指標に検討した．その結果，加熱試料から得られたれクチン（加熱レクチン）の阻害糖の種類は，活性のある文革では同一種類の糖であったが，その阻害濃度は分画ごとに異なった．また，生試料から精製されたレクチン（生レクチン）と加熱レクチンとは阻害糖の種類は若干異なった．また，生レクチンの耐酵素性は認められたが，加熱試料のクロマトグラフィー分画ごとのその耐性は異なった．さらに，マウス腹腔マクロファージを生レクチン，および加熱レクチンで処理した結果，LPS誘導による炎症反応が抑制されることが明らかとなった． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：畦五月，秋山純一，野中紘士，森秀治，豊村隆男，渡邊正博，中田理恵子
57 低学年の児童における運動イメージ想起能力と身体特性および運動能力との関連	－	令和2年3月	第21回日本健康支援学会年次学術大会（那覇）	本研究は，低学年の児童を対象に，運動イメージ想起能力が良好な児童と不良な児童の身体特性および運動能力を比較し，運動イメージ想起能力の運動能力への関与について検討した．その結果，メンタルローテーション課題の正答率は全体57.4±24.1%（174名），良好群89.6±7.6%（50名），不良群24.1±7.4%（43名）であった．不良群と比較して良好群では握力，上体起こし回数，体支持時間，立ち幅跳び距離が有意に高い値であり，両足飛び越し時間が有意に低い値であった．一方，月齢，身長，体重，ローレル指数，性別，骨格筋量，長座体前屈距離に有意差は認められなかった．本研究結果より，低学年では運動イメージ想起能力の高い児童は，低い児童と比較して運動体力および運動技能が高いことが示された．これらの結果から，運動イメージ想起能力は子どもの運動能力に影響する因子であることが示された． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：安彦鉄平，大野真悠，村田伸，兒玉隆之，甲斐義浩，宮﨑純弥，宮地諒，野中紘士，久保温子，満丸望，田中真一
58 地域在住高齢者における歩行速度とヘルスリテラシーの関連	－	令和2年3月	第21回日本健康支援学会年次学術大会（那覇）	本研究は，地域在住高齢者の歩行速度とヘルスリテラシー，年齢や身体機能との関連を検証することを目的に行った．歩行速度で2群に分けた結果，1.3m/sec以上群は206名，1.3m/sec未満群は49名であった。有意差を認めた指標は，年齢，身長，教育歴，CCHL，握力，体重比膝伸展筋力，足趾把持力，長座体前屈，片足立ち保持時間，CS-30であった．これらを独立変数，歩行速度を従属変数とし，ロジスティック回帰分析を実施した結果，歩行速度に影響する要因として，年齢（OR:0.940，95%CI：0.884-1.000），身長（OR：1.055，95%CI：1.004-1.109），CCHL（OR：1.174，95%CI：1.025-1.344），CS-30（OR：1.151，95%CI：1.060-1.250）が抽出され，判別的中率は83.5%であった．歩行速度に影響する要因に年齢，身長，CCHL，CS-30が抽出された．歩行速度に年齢や身長，身体機能だけでなく，ヘルスリテラシーが独立して影響することが示唆された． 本人担当部分：共同研究につき本人担当部分の抽出は不可能． 共同発表者：阿波邦彦，村田伸，岩瀬弘明，白岩加代子，安彦鉄平，合田明生，中野英樹，野中紘士，堀江淳

教　育　研　究　業　績　書

令和 2年　3月 31日

氏名　福原啓太

研　究　分　野	研　究　内　容　の　キ　ー　ワ　ー　ド
内科系臨床医学　心理学　言語学 人間医工学　リハビリテーション科学・福祉工学 精神科リハビリテーション	精神病理学　精神科リハビリテーション医学　社会的認知・感情 社会的相互作用・対人関係　音韻論 障害者就労支援　統合失調症

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例 1)作業療法士国家試験対策として自身の勉強方法の提示	平成23年5月16日	国家試験受験生である大阪府立大学総合リハビリテーション学部の4年生を対象に国家試験対策の講義をティーチングアシスタントとして実施した．国家試験の効率的な勉強方法を，実施者が実際に使用したテキストや教科書，その使い方などを伝達した．具体的には，有名参考書を2回解き，その際，設問毎に考え得る周辺知識をそのテキストに書き込む．1つの情報を他の類似する情報と紐づけることにより，知識の増大化を図り，自身で作る国家試験対策用の参考書を持つように促した．最後に，国家試験対策用のPC問題集で反復的に問題を解き，自身の苦手領域を把握し対策を取るように促した．
2)プレゼンテーションの導入	平成27年11月4日・11日 平成28年11月2日・9日 平成29年11月1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の学部生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．対象は2年生である．プレゼンテーション（Power Pointの使用）により，授業を効率的に実施することができた．学生は，準備されたプレゼンテーション資料を見ながら，必要に応じて，講義実施者の口頭説明をそれに書きこむことができ，確実に授業内容を把握することができた．また，プレゼンテーションでの提示とその資料配布により，学生の集中力低下による授業理解の遅れを是正に努めた．
3)臨床的視点の強化を目的とした自験例の提示	平成27年11月4日・11日 平成28年11月2日・9日 平成29年11月1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の学部生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．対象は2年生である．講義内で教科書的な定義や知識の理解を促すだけでは，臨床経験がほぼ皆無の学生にとって想像や理解が困難となる．そのため，できるだけ，詳細に自験例を提示し，学生に覚えてもらいたい知識を実際の患者に結びつけて理解できるように工夫している．自験例は症例レベルから臨床研究レベルまで幅広く提示している．
4)学外，臨床現場での実践的な臨床指導・教育の実践	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として大阪府立大学学部生を対象に臨床教育を実施している．これまでに，臨床講師として4年生2名，1年生4名を教育指導した。4年生には，特定の患者をケースとして持たせ，6週間評価・治療方法を教育・指導した．1年生には2日間の実習で，主に精神科患者との交流を促した．教科書からの勉強だけでは理解し得ない，生身の患者を前にして実際の臨床現場を体感してもらい，普段の患者の様子を観察・評価・治療の一連，または一部を経験できるよう促した．

事項	年月日	概　　要
5)医療分野における社会人としてのマナー教育	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として大阪府立大学学部生を対象に臨床教育を実施している．これまでに，臨床講師として4年生2名（各6週間），1年生4名（各2日間）を教育指導した。臨床現場における社会人として，患者への対応，職員への対応を教育した．学生には，「常に明るく」「笑顔で接する」「元気に挨拶」「対象者を敬う」といった基本的な接遇・マナーを具体的に伝え徹底させた．またそれが患者にとって安心につながる支援になるということも教育した．
6)臨床教育に沿った医学文献を学生に提供し，要約文・感想文を書かせることによる臨床と研究を架橋する能力の指導	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．その際，臨床現場で実際に起こる問題や疑問に対して，学術論文や著書を提供し，それを読ませ課題として要約文・感想文を提出させた．これは，臨床現場にて疑問が生じた際，迅速に適切な文献をレビューし臨床疑問を解決する能力を育むために実施した．その際，臨床疑問と提供した文献の趣旨が学生の中で一致するように具体的に「文献を読んで○○について述べよ」と課題を提示し指導した．
7)自己の臨床研究・症例報告の自験例を学生が模倣できるように指導	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．その際，臨床現場で実際に起こる患者の問題や疑問において，臨床講師の臨床研究・症例報告の自験例をまとめた文献とその実際の患者を提示した．それにより学生が，より臨床的で実践的な技術を磨くことができるよう，また臨床講師の技術を他の患者でも模倣できるよう指導した．
8)学外，病院外において，患者の生活活動範囲でのフィールドワークの導入	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．臨床教育は病院の精神科デイケア内で実施するため，患者の実生活を垣間見ることができない．そのため，積極的に，患者と学生を病院外に連れ出し，学生に患者の社会生活の実際を観察させた．例えば，患者の生活範囲や職業訓練所への順路に患者，学生，臨床講師の3者で出向き，患者の様子を観察させた．このフィールドワーク導入により，学生に精神科患者の病院外での生活の一部を把握させた。
9)他職種連携・チーム医療の実践的指導	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．臨床教育の場は病院の精神科デイケアであったため，他職種との連携が重要である．学生には，他職種の職能や実務について説明し，各職種と必要に応じた関わり方が持てるように場面設定した．具体的には，患者の情報を作業療法士以外の他職種から得るために，学生には質問事項をまとめさせ，目的となる他職種職員に学生の質問に答えてもらう時間を作ってもらった．それにより，学生が他職種連携の実践的経験を得ることができた．

事項	年月日	概　　要
10)レポート課題提出における電子媒体の利用	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．学生のレポート課題提出において，電子媒体（Word）の提出を試みた．臨床実習では，通常レポートの書き直しが頻回に起きるため，Wordでの課題提出と添削後の返却により，時間と紙代費用削減に成功した．時間的削減により，効率化が進むため，結果的に，より情報量の多い教育・指導を学生に提供することができた．また学生は紙の量が増えずにすむため，情報の整理を容易にすることができた．
11)症例報告会の実施	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として長期臨床実習（6週間）を受ける4年生2名を対象に臨床教育を実施した．学生には，6週間の症例検討から得られた臨床的経験を文書化し適切な症例報告とその報告書作成をできるようにするため，また学生レベルに留まらず臨床家としても一定レベルが確保された症例報告を実施するため，質の高い症例報告となるように教育・指導した．具体的には，患者の評価において質的評価・量的評価の重要性を説き，主観的・客観的の両側面から報告できるように教育した．
12)学生による臨床講師への指導に関する評価の活用	平成28年6月 ～ 平成31年3月	大阪府立大学地域保健学域臨床講師として大阪府立大学学部生を対象に臨床教育を実施している．これまでに，臨床講師として4年生2名，1年生4名を教育指導した． 全ての学生に，臨床実習終了後にお礼状とは別に臨床講師宛に教育方針・方法の感想を用意した書面にて記載してもらった．これにより，臨床講師は自己の教育方法を振り返ることができ，かつ，次期学生教育に役立てることができた．具体的な評価として「全ての疑問に答えてくれてありがたかった」とのポジティブ意見と「もう少し時間をかけて指導して欲しかった」などのネガティブな意見があった．これに対してはその都度教育方針の訂正ができている．
13)授業外早期体験講義の実施	令和元年6月14日	単位外（授業外）にて、学部1年生に対して、「精神科作業療法の実践」について1時間講義を実施した。学部1年生は、精神医学領域の作業療法を学ぶ経験がなく、その予備知識もない。精神科作業療法に関して学ぶのは2年生前期である。また精神医学領域という特性上、学部生にはイメージしにくい領域である。そのため、一症例の紹介を通して、精神科における作業療法の実践を早期体験講義形式で伝達した。

事項	年月日	概　　要
2　作成した教科書，教材 1)講義における配布資料の工夫	平成27年11月 4日・11日 平成28年11月 2日・9日 平成29年11月 1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の2年生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．その際に使用するレジュメ講義資料としてプレゼンテーション（Power Point）の全スライドを学生に配布している．本講義で解説している領域について，その資料だけでおおよその全体像から細部まで把握できるように，つまりハンドブック的に使用することを想定して作成している．
2)穴埋め式の教材	平成27年11月 4日・11日 平成28年11月 2日・9日 平成29年11月 1日・8日	大阪府立大学地域保健学域の2年生を対象にティーチングアシスタントとして，「精神医学Ⅱ」の科目内で「統合失調症の社会的認知の障害と支援の方策」という題で合計2日間講義を実施した．その際に配布するレジュメ講義資料（教材）は穴埋め式となるように作成している．穴埋め式にすることで，学生が授業に集中して取り組めるように工夫している．また，穴埋め式文章は，受動的な受講スタイルではなく，自ら考える時間を確保することによる能動的な受講スタイルとなるという利点もある．
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1)大阪府立大学教員（助教）による評価	平成27年 6月20日	大阪府立大学地域保健学域助教の教員による推薦で，第49回日本作業療法学会のシンポジウム7精神科作業療法がなすべきこと～作業療法の効果を示すための臨床研究～のシンポジストに選任された．
2)大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科研究科長による評価	平成27年 8月29日	大阪府立大学大学院総合リハビリテーション学研究科研究科長による推薦により、第3回全国作業療法学系大学院ゼミナール in 0sakaにおいて，研究報告会第2座の座長に選任された．4人の研究者の発表（内1名は欠席）について座長としての責務を果たした．
3)大阪府立大学教員（教授）による評価	平成27年11月 4日・11日 平成28年11月 2日・9日 平成29年11月 1日・8日	大阪府立大学地域保健学域教授の教員による推薦で，年に2日間，講義を実施している．ティーチングアシスタントとしての推薦であるが，2コマ分を完全に1人で授業を実施している．内容は，自身の研究領域である「統合失調症の社会的認知機能の障害と支援の方策」がテーマである．本講義では学生に馴染みのない精神科患者について最新の知見を交え，詳細に病態について教育している．最初の推薦以来，3年連続で推薦して頂いている．
4)大阪府立大学学長による評価	平成28年6月 ～ 平成29年3月 平成29年5月 ～ 平成30年3月 平成30年8月1日 ～ 平成31年3月31日	大阪府立大学学長より大阪府立大学地域保健学域臨床講師の称号を左記の期間付与されている．称号の付与には臨床経験，大阪府立大学学部生への臨床実習指導経験と履歴書が考慮されている．

事項	年月日	概　　要
4　実務の経験を有する者について特記事項 （実習指導） 1)大学から受け入れた実習生に対する実習指導 （作業療法臨床実習など）	平成25年 8月6日～ 平成31年3月	四条畷学園大学リハビリテーション学部の臨床実習指導者として，臨地見学実習ⅠおよびⅡにおいて四条畷学園大学作業療法学専攻学部生11名に対しそれぞれ2日間の臨床指導・教育を実施した．大阪府立大学の臨床実習指導者・臨床講師として，「作業療法臨床実習Ⅰ」および「作業療法臨床実習Ⅳ」において，大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類作業療法学専攻の学生8名に対して，28日間（うち4名は2日間）の臨床指導・教育を実施した． 受け入れに際して，以下のことに留意した． ・実際の精神科の臨床現場（精神科デイケア）において，精神科患者に対する評価・治療についてを，患者との関りを通して指導した． ・患者と関わる経験の乏しい学生に対して，指導者による患者へのコミュニケーション，評価，治療の一連を間近で観察させた． ・必要に応じて指導者・臨床講師の指導のもと学生にそれら一連を実践させた． ・学生を患者の中に放置するのではなく，患者と適切な交流が持てるように，学生と患者が自然に会話を開始できるように会話開始時には指導者が両者をつなぎあわせた． ・事前に担当教員から学生の情報を聞き，特性を踏まえて患者との関りを援助した．例えば，内気な学生には手厚く患者と話ができるようサポートした． ・事前に学生自身から自己PRを聞き，もし，特技があるなら，患者の前で披露させ，患者との関り初めが容易になるようにサポートした． ・他職種連携の経験ができるようにするため，デイケア内の作業療法士以外の職種にも相互に声をかけさせ，さらに，デイケア外の職種（医師，精神保健福祉士，訪問看護師）との関りも持てるように場面を設定した． ・学生の実習中に湧き出た疑問全てに答えられるようにするため，時間の許す限り，学生に対するフィードバックを行った． ・学生が体調不良に陥らぬよう，睡眠時間の確認とその確保，休憩の促しとその都度の課題量の調節を行った． これらにより，通常授業によって得ることのできない実践的教育指導を学生に提供することができた．
（講演依頼） 1)製薬会社からの講演依頼	平成27年 3月14日	ヤンセンファーマ株式会社主催のXeplion Patient Focus Meeting（於ホテル日航大阪）より依頼を受け講演を実施した．演題名は「ゼプリオンに対する当事者評価　デイケアスタッフ（作業療法士）からみた変化～薬物療法と非薬物療法の効果～」とし，2事例を挙げて薬物療法と非薬物療法（作業療法）の相乗的な効果についての講演を実施した． 講演にはPowerPointスライドを用い、薬物療法と非薬物療法（作業療法など）が患者の治療において両輪の関係であるというモデルを提示し、製薬会社職員、聴衆（医師、薬剤師など）に、非薬物療法の重要性について説明した。また、実際の活動中の患者の写真や動画をスライド内で用い、活動量の変化を視覚的に提示した。その時の、座長（医師）や製薬会社職員からは、患者の活動の変化を引き出したこと、スライドの説得力について好評を得た。

事項	年月日	概　　要
2)北摂四医師会からの講演依頼	平成28年 10月20日	第19回北摂四医師会神経性氏に学研究会（共催：大日本住友製薬株式会社）（於大阪医科大学）より依頼を受け演題発表を実施した．演題名は「精神科デイケアにおける，複数疾患に対するメタ認知トレーニング（MCT）の実践」とし，6名の患者（統合失調症，うつ病，強迫性障害，発達障害）を介入実施前後での比較し検討した結果を報告した．MCTは複数の疾患に対して効果があることが示唆された． 講演はPowerPointスライドを用いて実施した。多職種の聴衆（医師、看護師、臨床心理士、精神保健福祉士、作業療法士など）にわかりやすく伝えるために、患者の客観的データによる変化と一人一人の変化について細かく端的に、メタ認知トレーニングの効果を説明した．
（企業内教育） 1)病院内職員の教育・接遇・育成を図るための研修	平成27年 8月12日	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル教育接遇委員会から講師依頼を受け，全職員対象に「統合失調症の社会的認知機能障害」について講義した．精神科病院内において，統合失調症患者の奇異な行動に対し，しばしば病院職員は理解を示すことができない．それにより患者の病状を適切に解釈することができず，対応に戸惑いが生じてしまう．その様な奇異な行動が出現するメカニズムを社会的認知機能障害の観点から最新の知見を交え解説した．これにより，受講職員の統合失調症患者の行動に対する洞察力を高めることに努めた．
2)病院精神科デイケア職員に対するチーム医療・連携・相互理解を図るための研修	平成29年 2月22日	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル精神科デイケア内職員向けに，チーム医療・連携・相互理解を高めるための講義を実施した．他職種のそろう精神科デイケアは患者を多面的に支援する利点はあるが，反対に職種とその考え方の違いによる職員間・職種間の不理解がしばしば生じる．それぞれの医療に対する主義が対立するとき，各々に多大なるストレスが生じそれは間接的に患者の不利益につながる可能性がある．そこで，「方法論的自覚と多元主義」というテーマで，各職種や各個人が独自に持つ主義は無意識の間に教育と自己の経験の中で確立されたものであることを説き，自己の主義の方法論やその限界について自覚すること，さらに他職種もまた各々の中で確立されたものであることを共通認識とし，患者の問題に対し，その都度，どの主義が最もその問題に対応し得るかを話し合うことが良い，とされる多元主義の考え方について講義した．その成果として，各職員は自己の方法論について自覚を持ち始め，さらに他職種の方法論に対して興味を持ち始め相互理解が高まった．
3)病院内職員の教育・接遇・育成を図るための研修	平成29年 6月8日	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル教育接遇委員会から講師依頼を受け，全職員対象に「精神科リハビリテーションにおける作業療法」について講義した．精神科における医療は他職種による関りが多く，職能の相互理解が良好なほど患者に利益をもたらと推測される．そのため，精神科領域で作業療法士が患者に「していること」を知ってもらうことは患者にとっても，他職種にとっても，我々作業療法士にとっても意義がある．しかし，他職種らは作業療法がの目的や効果を適切に説明できる者は少ない．そのため，他職種でもわかりやすいように，身近な例から一般的な解釈，学術的な解釈などあらゆる方面から作業療法について解説・講義をした．これにより，作業療法士への他職種からの理解を高めることに努めた．

事項	年月日	概　　要
（研究員） １）大阪府立大学　客員研究員	平成30年4月 ～ 現在	大阪府立大学大学院　総合リハビリテーション学研究科において、客員研究員に任命されている。客員研究員として大阪府立大学大学院田中寛之研究室に所属し研究を継続している。
（学会活動） 1）第34回大阪府作業療法学会　座長	令和元年12月8日	第34回大阪府作業療法学会の一般演題4において3演題について、座長として学会を取り仕切った。
2）第34回大阪府作業療法学会　運営委員	令和元年12月8日	第34回大阪府作業療法学会の運営委員として、学会運営に従事した。
3）第34回大阪府作業療法学会　当日演題審査員	令和元年12月8日	第34回大阪府作業療法学会において、演題賞を選定する審査員をした。
５　その他 1)臨床現場の後輩への学術的指導	平成27年10月	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタルにおいて作業療法士後輩職員に対し，学会での学術発表を行えるように，その全般（執筆・発表）を教育・指導した．※以下の学会発表欄「人と人をつなぐことを目的としたプログラムの有効性―同性集団活動による対人関係の変化―：第20回日本デイケア学会」
2)臨床現場の後輩への学術的指導	平成27年12月	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタルにおいて作業療法士後輩職員に対し，学会での学術発表を行えるように，その全般（執筆・発表）を教育・指導した．※以下の学会発表欄「長期入院患者が街に出た！！～退院促進プログラムの取り組みより～：第23回日本精神障害者リハビリテーション学会高知大会」

事項	年月日	概要
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 作業療法士免許	平成23年 4月27日	第65193号
修士（保健学）	平成25年3月	大阪府立大学　第76号 論文題目「統合失調症における心の理論・語用論的能力と社会的行動に対する判断障害の関連」
博士（保健学）	平成30年3月	大阪府立大学　第30号 論文題目「慢性期統合失調症患者の非形式言語の理解及び表現能力に関する研究」
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1)臨床歴及び実務歴	平成23年4月 ～ 平成25年3月	医療法人達磨会東加古川病院作業療法室において作業療法臨床業務に従事 平成23年度は急性期病棟および慢性期解放病棟を担当 平成24年度は慢性期閉鎖病棟および認知症病棟を担当 各病棟において、病期・疾患に合わせた精神科作業療法を入院患者に提供。精神科作業療法内容として、創作活動、身体活動、音楽療法、レクレーション活動、映画鑑賞、外出訓練などを実施。
	平成25年4月 ～ 平成31年3月	医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタル精神科デイケアにおいて臨床業務に従事 病院運営として禁煙委員会委員長，広報委員会委員長を兼任 平成29年10月より精神科デイケア主任として臨床業務・管理業務に従事 精神科デイケア内にて、対象患者に対し、社会的認知機能訓練、神経認知機能訓練、社会技能訓練、創作活動、日常生活訓練、リラクゼーション活動、レクレーション活動、外出訓練などを提供。 委員会活動として、病院広報誌作成、精神科デイケアホームページ作成、敷地内全面禁煙活動の推進、敷地内外の巡回と清掃活動の指揮などを実施。

事項	年月日	概　　要
2)精神科OT研究会の運営	平成24年12月 ～ 現在に至る	精神科領域に勤務する作業療法士が有志で集まり，作業療法士として相互に研鑽するために精神科OT研究会を発足した．立案初期メンバーである．2ヶ月に1回の頻度で研究会の集会を執り行い，メンバーによる講義や症例報告を実施している．平成28年4月1日より運営強化を目的に常任理事を設定し，その中で副理事長に就任し，現在に至る．これまでに臨床に従事する作業療法士に向けて4回講義や症例報告をしている． 平成31年4月より現在に至るまで理事長に就任している。
3)臨床指導および臨床活動継続の実施	平成31年4月 ～ 令和元年3月	大学教員として大学に勤務する傍ら、週1日程度、前職場である医療法人美喜和会美喜和会オレンジホスピタルリハビリテーション科にて臨床指導を行った。精神科一般病棟、精神科急性期病棟、認知症治療病棟、精神科デイ・ケアにて、勤務する作業療法士に臨床指導、教育を行った。また、申請者自身も臨床活動実践を継続した。

事項	年月日	概　　要
(大学内業務) 1)実習部会【作業】評価／検査測手実習・総合臨床実習	平成31年4月 ～ 現在に至る	作業療法学専攻の学部生3年生4年生を対象とした、評価／検査測定実習・総合臨床実習について、実習の手引き（要綱）作成、実習資料の作成や実習候補地開拓を行っている。
2)実習ワーキンググループ	平成31年4月 ～ 現在に至る	保健医療学部リハビリテーション学科の１～4年生の学部生を対象にした実習全般における作業を行っている。臨床実習指導者会議における出欠状況を管理している。
3)学生生活部会　国家試験対策	平成31年4月 ～ 現在に至る	学生が受験する理学療法・作業療法国家試験の対策委員として、実働している。内容は国家試験対策用書籍の購入と管理、学生向けガイダンス、保護者向けガイダンス、模擬試験の設定、国家試験対策eラーニングソフト（スマコク）の管理、年度予算の管理をしている。
4)図書委員	平成31年4月 ～ 現在に至る	教員図書委員として、推薦図書、専攻別推薦図書の管理をしている。
5)保護者懇談会　国家試験対策委員のガイダンス	令和元年6月22日	保護者にむけて、奈良学園大学の学生向け国家試験対策についてのビジョンを説明した。
6)国家試験対策専用ソフト（スマコク）説明会	令和元年6月26日	国家試験対策ソフト（スマコク）を学生が使用できるように教員がソフトの中身を把握することを目的とした説明会に出席した。
7)奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義担	令和元年7月13日	次年度の奈良学園大学の入学希望者に向けたオープンキャンパスにて、高校生に向けて「認知機能と生活とリハビリテーションの世界」という題目でミニ講義を実施した。
8)FD・SD委員会主催研修会（シラバス・ハラスメント）出席	令和元年8月28日	シラバス作成についての注意事項、ハラスメントについてのワールドカフェ形式での研修会に出席し、シラバスとハラスメントについての知識を深めた。
9)奈良学園大学　入学試験　面接官　試験官	令和元年9月28日 令和2年1月25日 令和2年3月14日	奈良学園大学AO入試面接官をした。 奈良学園大学一般入試　試験副監督をした。 奈良学園大学一般入試　面接官をした。

事項	年月日	概　　要
10)ハラスメント相談員　就任	令和元年10月 ～ 現在に至る	奈良学園大学のハラスメント相談員に就任し、学生、教職員からのハラスメントの相談窓口を担当することになった。
11)奈良学園大学オープンキャンパス　ミニ講義担	令和元年12月22日	次年度の奈良学園大学の入学希望者に向けたオープンキャンパスにて、高校生に向けて「人の気持ちに寄り添う作業療法」という題目でミニ講義を実施した。
12)高校生対象大学ガイダンス　ミニ講義	令和2年2月15日 令和2年2月19日	高校生向けにリハビリテーション職（理学療法士・作業療法士）の職業について説明をした。

事項	年月日	概　　要
4　その他 1)日本学生支援機構理事長からの認定証の授与	平成25年 5月31日	大阪府立大学大学院博士前期課程在学中に第一種奨学金を借り受けしていたが，特に優れた成績を挙げたと認定され，奨学金の返還を一部免除された.
2)大阪府高槻市立図書館との連携	平成25年	これまで，大阪府高槻市の市立図書館では，その貸出可能利用者を高槻市に在住，在勤，在学の者，または高槻市内に入院する患者のみを対象としてきた．そこで，美喜和会オレンジホスピタルと高槻市立阿武山図書館を通して高槻市中央図書館館長と間接的に交渉することにより，高槻市外に在住する精神科デイケア利用患者も図書貸出可能という許可をもらうことができた．これにより，デイケアを利用する高槻市外在住の患者も図書館にて図書と触れ合うことができるようになり，社会生活の幅をひろげることができた.
3)研究助成	平成26年 4月1日 ～ 平成29年 3月31日	大阪府作業療法士会にて「統合失調症セルフエフィカシー研究会」の研究員として年間10万円（3年間で合計30万円）の研究助成を受けた. 研究代表者：小川泰弘 研究員：◎福原啓太，長池将太，梅田錬 平成26年度：「統合失調症者のセルフエフィカシーに関する文献レビュー」（学会報告として） 「統合失調症者セルフエフィカシー研究会活動報告」（報告書として） 平成27年度：「統合失調症者の就労に関する自己効力感尺度「Work - Related Self - Efficacy Scale」の作成」（学会報告として） 「統合失調症者セルフエフィカシー研究会平成27年度活動報告」（報告書として） 平成28年度：「就労関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale WSES日本語版の信頼性・妥当性の検討」（学会報告として） 「表題：精神障害者の就労関連自己効力感尺度日本語版（WSS-J）作成の試み」（報告書兼学術誌短報）

事項	年月日	概　　要
4)研究助成	平成28年 4月1日 ～ 平成31年 3月31日	大阪府作業療法士会にて「生体医工学的指標・生活研究会」の研究代表者として年間10万円（3年間で合計30万円）の研究助成を受けた. 研究代表者：◎福原啓太 研究員：小川泰弘，森泰祐 平成28年度：「精神疾患患者を対象とした，生体医工学技術を用いた客観的指標の検討」（学会報告として） 「精神科生体医工学的指標・生活研究会平成28年度活動報告」（報告書として） 平成29年度：「精神科生体医工学的指標・生活研究会　H29年度研究報告」（学会報告として） 「精神科生体医工学的指標・生活研究会　平成29年度　活動報告」（報告書として） 平成30年度：「：統合失調症の情動表出能力について～精神科生体医工学的指標・生活研究会　H30年度研究報告～」（学会報告として） 「精神科生体医工学的指標・生活研究会　平成30年度　活動報告」（報告書として）
5)日本学生支援機構理事長からの認定証の授与	平成28年 5月31日	大学院博士後期課程在学中に第一種奨学金を借り受けしていたが，特に優れた成績を挙げたと認定され，奨学金の返還を一部免除された.
5)科学研究費　基盤研究（C）	平成31年4月 ～ 令和5年3月	

研　　究　　業　　績　　等　　に　　関　　す　　る　　事　　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） なし				
（学術論文） 1　統合失調症における心の理論・語用論的能力と社会的行動に対する判断障害の関連 （修士論文）	単著	平成25年3月	大阪府立大学	近年，統合失調症患者の心の理論能力と共に語用論的言語の理解能力が注目されている．本研究では，地域に住む慢性期統合失調症患者28人と健常者28人を対象に比喩・皮肉理解の能力とToM能力，社会常識テストを実施した．その結果，我が国においても統合失調症患者は語用論的言語の理解能力が障害されていた．また統合失調症患者において，比喩理解能力と基本的な認知機能に関連があり，心の理論の障害や皮肉を文字通りに解釈する傾向は非社会的行動への認識の低下と関連していることが示唆された． A4判　全60頁
2　重度認知症者のための認知機能検査 － ‘Severe Cognitive Impairment Rating Scale’日本語版の臨床的有用性の検討 － （査読付）	共著	平成25年10月	「老年精神医学雑誌」 第24巻第10号 P.1037～P.1046	重度認知症患者にとって既存の認知機能検査は難易度が高く，残存する認知機能を詳細に把握することが困難である．海外では，重度認知症患者の認知機能検査として，Severe Cognitive Impairment Rating Scale（SCIRS)が開発されている．本研究では，SCIRSの日本語版を作成し，臨床的有用性を検討した．その結果，既存の検査では床効果を示した患者に対しても，SCIRSを用いてより詳細に認知機能を判別できた．以上より，日本語版SCIRSは重度認知症者の残存する認知機能を詳細に幅広く測定可能な検査であると考えられた． 共著者：田中寛之，植松正保，永田優馬，◎福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆 本人担当部分：認知機能検査の検査者としての実施，データ収集
3　認知症患者における認知機能，ADL，BPSDの関連性 重度認知症患者に着目して （査読付）	共著	平成26年3月	「老年精神医学雑誌」 第25巻第3号 P.316～P.323	認知症患者の認知機能，日常生活活動（ADL），周辺症状（BPSD）の関連性を明らかにするため，94人の入院患者を対象に認知機能検査，ADL検査そしてBPSDの検査を実施した．その結果，入院中の認知症患者において，ADLが高ければ認知機能障害が軽度であり，移動能力が高い程，BPSDが増悪していることが明らかになった．また，重度認知症患者においては，認知機能検査，ADL検査において，いくつかの床効果を示した．そのため，重度認知症患者向けの各検査が必要であると思われた． 共著者：田中寛之，植松正保，小城遼太，永田優馬，◎福原啓太，内藤泰男，大西久男，西川隆 本人担当部分：認知機能検査の検査者としての実施，データ収集

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　リハビリテーション医療系学生の抑うつ状況について：学習性無気力の観点から （査読付）	共著	平成26年3月	「四条畷学園大学リハビリテーション学部紀要」 第9号 P.27～P.34	リハビリテーション医療系学生は，授業や課題の多さ，長期実習，国家試験など多くのストレッサーが長期に継続する特徴がある．それらが学生の「学習性無気力」の状況と関連すると考え，学生の抑うつ傾向，心理的状況を調査した．その結果，抑うつ傾向・ストレス反応が高くまた自尊感情は低い状況が明らかになった．また家庭内に相談できる人物が多いこと，睡眠・休養・食事の生活リズムが確立していることが，抑うつ傾向を抑えることが示された．学生生活や精神状態について家族と情報を共有すること，また生活リズムの確立に向けた援助が，教員として必要であると考えられた． 共著者：西田斉二，橋本世奈，◎福原啓太，田丸佳希，杉原勝美，北山淳 本人担当部分：学生に関する客観的意見の提言
5　Development of the Cognitive Test for Severe Dementia （重度認知症のための認知機能テストの開発） （査読付）	共著	平成27年6月	「Dement Geriatr Cogn Disord」40(1-2) P.94～P.106	中等度から重度の認知症患者に対して既存の認知機能検査は床効果を示し，特に重度認知症者に対しては残存する認知機能を測定することができない．我々は，7つの認知機能の領域をカバーする13項目からなる重度認知症患者向けの認知機能テスト（the Cognitive Test for Severe Dementia; CTSD）を開発し，その信頼性と妥当性を検討した．CTSDは床効果を示さず，また信頼性と妥当性も確認できた．CTSDは他の認知機能検査と比較して重度認知症患者の残存する認知機能を鋭敏に測定することができた． 共著者：Tanaka H, Nagata Y, Takebayashi T, Hanada K, Inokawa M,◎Fukuhara K, Ogawa Y, Haga D, Kakegawa Y, Nishikawa T（他1名） 本人担当分：認知機能検査開発に対する提言，認知機能検査の検査者として評価，データ収集
6　重度認知症に対する従来のQOL尺度の限界 （査読付）	共著	平成28年4月	「老年精神医学雑誌」 第27巻第4号 P.429～P.437	重度認知症者のQOL（quality of life）評価には，軽度～中等度認知症用のQOL尺度が用いられてきたが，近年，そのQOL概念の枠組みは異なると示唆されている．本研究では，36人の重度認知症者を対象に，軽度～中等度認知症用のQOL尺度を用いて，重度認知症者に対する適応性を検討した．QOL評価には，自己評点式尺度と代理評点式尺度をそれぞれ2種類使用した．適応性の検定の結果，4尺度の内の1尺度内における2項目のみ適合基準を満たした．以上より，重度認知症者に対する従来のQOL尺度の適応性には限界があると考えられた． 共著者：永田優馬，田中寛之，石丸大貴，植松正保，◎福原啓太，小川泰弘，内藤泰男，西川隆 本人担当分：研究計画立案時の提言

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　リハビリテーション医療系大学1年生の日本語能力と科目成績の関連性についての検討 （査読付）	共著	平成29年8月 (accepted)	「第30回教育研究大会・教員研修会誌」 (in press)	近年，大学生の学力低下，特に「国語能力」の低下が大きな問題となっている．本研究では，医療系大学1年生28名を対象に，日本語能力（語彙・文法能力）と，主要必須科目成績との関連性について検討した．その結果，前期GPAが日本語能力を有意に説明でき，また比較的強い正の相関を示した．つまり，日本語能力が1年生前期の総合的な学力に影響することが示唆された．そのため，入学前後に語彙や文法を学習することは学生の大学における学業適応に有効であると考える． 共著者：西田斉二，◎福原啓太，田丸佳希，杉原勝美 本人担当分：研究計画立案時の提言，学生に関する客観的意見の提言
8　Impaired Interpretation of Others' Behavior is Associated with Difficulties in Recognizing Pragmatic Language in Patients with Schizophrenia （統合失調症において他者の行動の理解障害は語用論的言語理解障害と関連している） （査読付）	共著	平成29年10月	「Journal of Psycholinguistic Research」 vol.46(5) P.1309～P.1318	近年，統合失調症患者の語用論的言語理解能力が注目されている．我々は統合失調症患者34人と健常者34人に対して，心の理論課題，比喩皮肉文課題，社会常識テストを実施した．その結果，全ての課題において，患者群は健常群よりも有意に障害されていた．また患者群内において比喩理解能力と正常行動理解能力，皮肉理解能力と異常行動理解能力の間に有意な相関がみられた．統合失調症患者の社会的認知機能障害はこれら2つの語用論的要因を含んでいることが示唆された。 共著者：◎Fukuhara K, Ogawa Y, Tanaka H, Nagata Y, Nishida S, Haga D, Nishikawa T 本人担当分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
9　精神障害者の就労関連自己効力感尺度日本語版（WSS-J)作成の試み （査読付）	共著	平成30年1月	「大阪府作業療法ジャーナル」第31巻第2号 P.148～P.152	精神疾患を有する患者を対象とした課題特異的な自己効力感尺度はいくつか開発されているが，就労に関連する日本語の自己効力感尺度は見当たらない．そこで諸外国で既に用いられている就労関連自己効力感尺度（Work-related self-efficacy scaleの日本語版；WSS-J）の作成を試みた．本尺度は精神科患者自身による使用を想定しているため，文章の理解のしやすさが求められた．本研究では，プレテストの実施，文章の精度を整えた後，逆翻訳と原文との比較も実施した．今後，本尺度の信頼性・妥当性の検討が必要である． 共著者：小川泰弘，◎福原啓太，長池将太，梅田錬，西川隆 本人担当分：研究全般（研究計画，執筆補助，データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10　慢性期統合失調症患者の非形式言語の理解及び表出能力に関する研究 （博士論文）	単著	平成30年3月	大阪府立大学	近年，統合失調症の非形式的言語の理解・表出の障害が注目されている．第Ⅰ章では統合失調症患者の非形式言語の理解面に着目し，語用論的言語理解の障害があることを確認した．またその障害は社会的行動の理解障害と関連していた．第Ⅱ章ではその表出面である，プロソディと会話量をコンピュータで分析した．その結果，患者群にプロソディの一部と会話量の障害が認められ，会話量と生活機能は関連していた．第Ⅲ章では患者のプロソディと会話量の障害に対し治療介入を実施した．その結果プロソディの一部は改善が認められたが，会話量の改善は認められなかった． A4判　全79頁
11　Clinical Utility of the Cognitive Test for Severe Dementia: Factor Analysis, Minimal Detectable Change, and Longitudinal Changes. （査読付き） （重度認知症向けの認知機能検査［CTSD］の有用性について：因子分析と最小可検変化量、そして縦断的変化）	共著	平成30年6月	Dementia and geriatric cognitive disorders extra　8(2) 214-225	本研究は、COSMINのチェックリストを用いて、十分なアウトカム尺度を開発するために、Cognitive Test for Severe Dementia (CTSD)をさらに分析した。研究では、以下の方法を行った。（１）構成概念妥当性を評価するために因子分析を用いた。（２）測定誤差 (SEM)と最小化検変化量について信頼性と解釈可能性を評価した。（３）反応性を評価するために縦断的変化を評価した。その結果、CTSDの因子分析は2要因から説明され、各項目の通過率により2分化された。我々はそれぞれSEMは1.6ポイント、MDCは3.6ポイントと計算した。我々の結果は、CTSDは、重度認知症患者に対する信頼できるアウトカム指標を提供するということを示している。 Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Ogawa Y, ◎Fukuhara K, Nishikawa T 本人担当分：データ収集
12　Distraction技能獲得により不安の軽減と自己効力感ならびに社会生活活動の改善がみられた一例 : 事例報告 （査読付き）	共著	平成31年1月	大阪作業療法ジャーナル 32(2) 135-142	不安を根底にもつ強迫症/強迫性障害には、一般的に薬物療法や認知行動療法(CBT)が適用される。一方で作業療法を用いた明確な治療的介入方法はあまり見当たらない。本稿では、作業活動をCBTの一技法であるdistractionとして応用させることで、不安や強迫観念により社会生活に制限のあった患者の不安、自己効力感そして社会生活の改善が認められたため、その報告をする。最後に、Distractionは不安や認知の歪みを根本的に解決する手段というよりも、即時的に不安や強迫観念から脱却し充実した社会生活を送れるようになることの一手段として有用であるということを提唱したい。 ◎福原啓太，田中宏明，西田斉二，小川泰弘，森泰祐，西川隆 本人担当分：論文執筆、データ整理、対象者介入を含む研究の全工程

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13　Insight Into Illness and Defense Styles in Schizophrenia. （査読付き） （統合失調症の病識と防衛スタイル）	共著	令和元年10月	The Journal of Nervous and Mental Disease 207(10) 815-819	心理学的な否認のモデルは乏しい洞察（insight)は防衛機制の結果であると主張しているが、その二つの直接的な関係性は、明らかにされていない。本研究の目的は、認知機能障害を考慮しながら、洞察と防衛機制の関係性を調査することである。38人の統合失調症患者に対して、洞察、防衛機制、神経認知機能、精神症状について評価した。神経認知機能と精神症状を制御して洞察レベルの返送間分析を行ったところ、「病気の認識」が未熟な防衛スタイルと正の偏相関をして、成熟した防衛スタイルとは負の偏相関がみられた。ステップワイズの回帰分析では、「病気の認識」は有意に未熟な防衛機制を予測することが明らかになった。我々の結果は、未熟な防衛スタイルを使用する傾向にある患者は、自分自身の精神病を受け入れている傾向にあることを示唆している。 Ogawa Y, ◎Fukuhara K, Tanaka H, Nagata Y, Ishimaru D, Nishikawa T. 本人担当分：論文構成補助、データ解析補助、研究デザイン補助
14　統合失調症患者の声による情動表出能力について～予備的研究～ （査読あり）	共著	令和2年1月予	大阪作業療法ジャーナル 33(2)	近年、統合失調症の陰性症状、特に情動表出について改めて注目されている。本研究は予備的段階として、本邦の統合失調症患者の声の側面に着目し、情動表出の減少について調査した。DSM-5により統合失調症または統合失調感情障害と診断された入院患者23名と、年齢と性別をマッチさせた健常者23名に対して、声による情動表出を引き出す課題（紙芝居音読課題と4感情表出課題）を実施した。それにより得られた音声サンプルをデジタル評価ならびにアナログ評価を用いて、両群を比較した。その結果、患者群は健常群と比較して、プロソディスコアが減少しており、さらに怒りと幸せの感情について正確に表現できていなかった。今後は、より明確な知見を得るためにさらなる調査が必要である。 ◎福原啓太、小川泰弘、森泰祐、田中寛之、西川隆 本人担当分：論文執筆、データ収集、データ解析、研究デザイン立案を含む研究全般
15　Clinical factors associated with Activities of Daily Living and their decline in patients with severe dementia （査読あり） （重度認知症患者のADLとその減少に関連する臨床要因について）	共著	令和元年12月	Psychogeriatrics 20(3)	認知症患者においてベースライン時と6ヶ月後の間の変化に影響を与える臨床的要因を探索した。参加者は131名の認知症患者であった。重度認知症の参加者のベースライン時においてADL尺度であるPSMSスコアはCTSD、CCI、MNA-SF、CSDDのスコアと有意に関連していた。縦断的な分析に置いて、CTSDスコアのみが6ヶ月後のPSMSスコアと有意に関連していた。重度の認知症の参加者にとって、6ヶ月後のADLに関連する要因としてCTSDで評価される認知機能は注目に値する。 Hiroyuki Tanaka, Yuma Nagata, Daiki Ishimar2, Yasuhiro Ogawa, ◎Keita Fukuhara, Takashi Nishikawa

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「総説」 1　統合失調症患者における語用論的言語（比喩・皮肉）の理解能力について（査読付）	共著	平成28年12月	「Journal of Rehabilitation and Health Sciences」 14巻 P.15～P.25	統合失調症患者の症状は，陽性症状，陰性症状，認知機能障害の3つに大別される．そしてこれらは社会生活，社会的関係，コミュニケーション，そして言語的な理解に影響を与え，その疾患を特徴づけている．本稿では，語用論の定義や統合失調症患者の言語使用に関する学術的背景を述べた後に，統合失調症患者の比喩・皮肉理解における障害についてレビューしている．病期や類型，他の認知機能との関連，比喩と皮肉の理解プロセスの違いにも言及し，統合失調症患者の語用論的障害について詳細にまとめている．最後に，言語的観点からの支援方法や今後の展望について提言している． 共著者：◎福原啓太，田中寛之，小川泰弘，永田優馬，田中宏明，大西久男，西川隆 本人担当分：執筆，文献レビュー，分析
「依頼原稿」 1　学会・研修会印象記　第32回近畿作業療法学会	単著	平成25年1月	「作業療法ジャーナル」 47巻第1号 P.95	平成24年10月に2日間にわたり大阪国際交流センターで開催された第32回近畿作業療法学会についての印象記執筆の依頼原稿である．著者は作業療法士（臨床）および大学院生（研究者）2年目であったため，新人作業療法士としての視点から，学会発表を見聞きし，当日に参加できた者，できなかった者が学会参加の意義を再確認できるよう執筆した．文章内で高畑進一学会長の「作業療法士がより脳の機能を理解することが作業療法の幅を広げる」という言葉を代弁するする形で，作業療法の学術意義について述べている．
2　第16回WFOT大会を終えて（その1）精神科セッション	単著	平成26年7月	「日本作業療法協会誌」 第28号 P.38～P.39	平成26年6月に4日間にわたりパシフィコ横浜で開催された16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists（WFOT）における精神科セッションについての印象記執筆の依頼原稿である．過去最大級の作業療法の国際会議・学会が我が国で開催されたため，本邦での作業療法士の取り組みを概観し集団を対象にした研究から単症例を対象にした症例報告までいくつかを紹介した．一方で海外の作業療法士の研究の特徴，つまりグループ活動や行政的取り組み，啓発的取り組みが目立った様子を，読者にわかりやすく対比して執筆した．

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3　特集：0からの研究「精神科に従事する作業療法士が臨床研究に取り組むことの意義」	共著	平成28年1月	「大阪府作業療法ジャーナル」29巻2号 P. 73～P. 80	精神科領域において作業療法のエビデンスが求められている．われわれ作業療法士の実践の効果を形あるものにし，対象者，他職種，第三者が理解できるように示す必要がある．研究は，様々な形で臨床に活き，臨床を深める手段となる．しかし，精神科の作業療法領域において，研究をすることは容易ではない．本稿では精神科の社会情勢を知ることで作業慮法の社会的位置づけを確認し，そして，著者の臨床研究の経験を通して，精神科の臨床の作業療法士が臨床研究に取り組むことの意義と研究の難しさに対する対応について述べている． 共著者：◎福原啓太，西川隆 本人担当分：執筆，情報収集，分析
4　登録事例の紹介	単著	平成28年3月	「日本作業療法協会誌」 第48号 P. 42～P. 43	該当教員が同協会学術委員会事例登録班員として執筆している．日本作業療法協会の教育的活動の一環である「事例登録システム」において精神科部門で「精神障害×認知（機能）」に沿ったテーマを2事例（「楽手教材を使った統合失調症患者へのアプローチ」，「認知ﾘﾊﾋﾞﾘﾃｰｼｮﾝを実践した双極性感情障害の一例」）を紹介した．これらを通して「対象者の特性」「生活能力」「作業能力」「認知機能」などと言った評価視点の重要性を読者に説いている．
「研究報告書」 1　統合失調症者セルフエフィカシー研究会活動報告	共著	平成27年7月	「大阪作業療法ジャーナル」 第29巻第1号 P. 55	平成26年度における「統合失調症者セルフエフィカシー研究会」の大阪府作業療法士会に提出した活動報告である．統合失調症患者に対する医療では，症状や認知機能障害などの客観的指標だけでなく，「患者自身がどのように感じているのか」という主観的側面の指標が重要視されている．その中でも本研究会は統合失調症患者のセルフエフィカシーに焦点を当て，文献レビューを実施した．海外では比較対象研究や相関研究など関連性についての研究が半数を超えていた．一方で国内では介入研究やケーススタディなど実践的な報告が多かった．また本邦では，入院時から退院後の社会参加促進をターゲットとするセルフエフィカシー尺度が少ないという問題が抽出された． 共著者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，◎福原啓太 本人担当分：執筆補助，海外文献レビュー

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2　統合失調症者セルフエフィカシー研究会平成27年度活動報告	共著	平成29年1月	「大阪作業療法ジャーナル」 第30巻第2号 P.146～P.147	平成27年度における「統合失調症者セルフエフィカシー研究会」の大阪府作業療法士会に提出した活動報告である．前年度に抽出された「本邦において社会参加に関するセルフエフィカシー尺度が少ない」という問題点をカバーするために，海外で開発された「就労関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale (WSES)」の原著者に許可を得て日本語版作成を実施した．研究員4名で原文を日本の精度や文化的背景に合うように複数回議論し，修正を重ねて仮尺度へと翻訳した．専門業者にも逆翻訳を依頼し，日本語版を完成させた．今後は信頼性・妥当性の検討へと進めていく予定である． 共著者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，◎福原啓太 本人担当分：執筆補助，尺度翻訳，データ収集，データ分析
3　統合失調症者セルフエフィカシー研究会 平成28年度 活動報告	共著	平成29年7月	「大阪作業療法ジャーナル」 第31巻第1号 P.66～P.66	精神保健福祉領域において「患者自身がどのように感じているか」という主観的側面，とりわけ自己効力感が重要視されていると考えられる．本研究では，精神障害者の社会参加に関連する自己効力感尺度の作成を目的としている．そこで，就労関連自己効力感尺度（Work-related self-efficacy scale；WSS-J）の翻訳作業を原著者の許可を得て実施した．外来・入院患者併せて53名の精神障害者の協力を得ることができた．今後は，協力者を増やし，信頼性・妥当性の検証を行うこととする． 共著者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，◎福原啓太 本人担当分：執筆補助，尺度翻訳，データ収集，データ分析
4　精神科生体医工学的指標・生活研究会 平成28年度活動報告	共著	平成29年7月	「大阪作業療法ジャーナル」 第31巻第1号 P.72～P.73	統合失調症患者の感情表出障害の一つにプロソディの障害が挙げられている．さらに海外ではその評価に音声のコンピュータ分析を用いた生体医工学的指標がしばしば使用されている．本研究の目的は日本の統合失調症患者のプロソディの調査である．本報告書では，研究計画とデータ蓄積中である旨について中間報告をしている．患者群に対する評価としてプロソディの評価，精神症状評価，行動評価を実施した． 共同発表者：◎福原啓太，小川泰弘，森泰祐 本人担当分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
「学会発表」 〈国際会議〉				
1　Relationship among pragmatic function, ToM function and judgment of abnormal social behavior in patient with schizophrenia. （統合失調症患者における語用論的機能，心の理論能力および社会的異常行動に対する判断能力の関連）	―	平成26年6月	16th International Congress of the World Federation of Occupational Therapists（於パシフィコ横浜）	統合失調症患者28人，健常者28人に対し，比喩・皮肉文テスト，心の理論課題，社会常識テストを実施した．どの課題においても統合失調症群のほうに有意な成績低下を認めた．また，患者群を課題の成績順に群わけすると，皮肉理解と心の理論に障害がなければ，社会常識テストの成績は良く，皮肉理解と心の理論に障害があれば，成績が低下していることがわかり，社会的認知機能の一部は社会常識の程度にある程度影響を与えることが示唆された． 共同発表者：◎Keita Fukuhara, Yasuhiro Ogawa, Goro Nishio, Hiroyuki Tanaka, Takashi Nishikawa 本人担当分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
2　What are Effective Ways to Maintain Cognitive Abilities of People with Severe Dementia? Results of a One-Year Follow-Up Using the Cognitive Test for Severe Dementia （重度認知症の人々の認知機能を維持する効果的な方法は何か？CTSD［重度認知症患者用認知機能検査］を用いた1年間のフォローアップの結果）	―	令和元年6月	13th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress（ISPRM 2019）（於　神戸コンベンションセンター）	我々は、重度認知症患者に対し、CTSDにより1年間の得点の変化を追った。我々は、CTSD上で、意味のある最小の変化（4ポイント上昇）が見られた患者のグループを発見した。161人のデータを集めたが、1年後に再テストできたのは40人であった。その中で、我々は4人のCTSDの得点が上昇した参加者を発見した。しかし、その患者らはMMSEの得点に変化はみられなかった。彼らは、脳血管性認知症と診断されていた。この結果は、CTSDによって、評価することで、重度認知症の認知機能改善が明らかにできる群がいることを示唆した。 Hiroyuki Tanaka, Yuma Nagata, Daiki Ishimaru, ◎Keita Fukuhara, Yasuhiro Ogawa, Takashi Nishikawa 本人担当分：データ収集、研究デザイン補助
3　Comprehensive Social Cognition in Schizophrenia from the Social Common Sense Ability Perspective （統合失調症における包括的な社会的認知昨日について、社会常識的能力の観点から）	―	令和元年6月	13th International Society of Physical and Rehabilitation Medicine World Congress（ISPRM 2019）（於　神戸コンベンションセンター）	近年、多くの研究は統合失調症の社会的認知と社会的機能障害の関係について注目している。これまで社会的認知はいくつかの方法で別々に調査されてきた。したがって、統合失調症の社会的認知を包括的に評価する方法はあまりない。本研究では統合失調症の包括的な社会的認知を社会的常識能力の観点から調査した。統合失調症34人と健常者34人が研究に参加した。Dewey Stry Testを用いて社会的常識能力を評価した。正常行動と異常行動のそれぞれの合計得点について2群で優位さがみられた。本研究は、2群において、人間の行動に対する認識に差異があることを示し、また、このようなギャップが患者の社会的機能に影響を及ぼすということを示唆している。 ◎Keita Fukuhara, Hiroyuki Tanaka, Yasuhiro Ogawa, Yuma Nagata, Saiji Nishida, Taisuke Mori, Takashi Nishikawa 本人探訪分：研究全般（論文執筆、研究デザイン立案、データ収集、データ解析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
〈国内会議〉				
1　重度認知症者の認知機能検査に関する研究(第2報)-本版SMMSE，SCIRSの信頼性に関する検討-	―	平成24年6月	第27回日本老年精神医学会（於大宮ソニックシティ）	現在あるMMSE，HDS-Rなどの認知機能検査は重度認知症にとって「床効果を示す」「集中力が続かない」などの問題点が指摘されており，残存している認知機能を評価することが難しい．そこで，海外で重度認知症向けに開発されたSevere Mini Mental State Examination (SMMSE)，Severe Cognitive Impairment Rating Scale (SCIRS)の臨床的有用性を示すことを目的に検査―再検査信頼性と評価者間信頼性を検討した．その結果，SMMSEとSCIRSは既存の検査のMMSE，HDS-Rと比較して，重度認知症者の残存する認知機能をより詳細に評価でき，信頼性・妥当性にたる検査であることが示唆された． 共同発表者：田中寛之，植松正保，◎福原啓太，大西久男，西川隆 本人担当部分：検査実施を担当
2　統合失調症者における語用論的能力と社会常識理解の関連	―	平成25年4月	第8回日本統合失調症学会（於浦河町総合文化会館）	地域に住む慢性期の統合失調症患者28人に対して比喩・皮肉文テスト（metaphor and sarcasm scenario test; MSST），MMSE，社会常識テストを実施した．比喩理解能力はMMSE得点と有意な相関関係を示し，皮肉誤答回避得点（皮肉を文字通りにとらえてしまう傾向）は社会常識テストにおける社会常識総点と有意に相関していた．比喩・皮肉のような語用論的言語理解能力は，全般的知能，または他者の正常または異常の行動を理解するような高度な社会的能力と関連があることが示唆された． 共同発表者：◎福原啓太，芳賀大輔，西尾五郎，小川泰弘，内藤泰男，西川智子，大西久男，田中宏明，田中寛之，西川隆「他3名」 本人担当分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
3　統合失調症者における語用論理解障害の一側面―一症例にみられた特徴的な思考様式―	―	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（於大阪国際会議場）	日常生活で，多数の声主から命令的な幻聴に悩まされる地域に住む慢性期の統合失調症患者1人についての症例報告である．本患者は悪意ある幻聴からの命令に対しても，「自分の為を思って言ってくれている」と解釈していた．3人からの声主（幻聴）に敬意を持っている本患者は，相反する声主からの要求に耳を傾け，行動停止に陥るといった著しい行動制限に陥っていた．皮肉文テストでは成績低下を認めた．このことから悪意ある発言に対して，他者の悪意を「悪意」と捉えることへの困難さが伺われた． 共同発表者：◎福原啓太，小川泰弘，芳賀大輔，田中寛之，西川隆 本人担当分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4　精神科デイケア利用者への図書館利用の斡旋～社会生活の広がりに向けて～	—	平成25年11月	第21回日本精神障害者リハビリテーション学会沖縄大会（於沖縄コンベンションセンター）	精神科リハビリテーションのうち，社会参加の一環として，デイケア利用患者を地域の図書館へ引率するプログラムとその前後に実施したアンケート調査について報告した．精神科患者は，地域の図書館に興味はありつつも，多くの患者は利用していなかった．実際に図書館へ引率し，図書館の利用方法を患者とともに経験するなかで，参加した患者らは地域の行き場所として図書館の利用を始めた．精神疾患患者を地域の社会資源に結び付けるには，支援者が共に経験することで不安や抵抗感を消失させることが有効であると考えられる． 共同発表者：◎福原啓太，小川泰弘，西川隆 本人担当分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
5　プログラム「図書館ツアー」により生活の認識や行動に変化が見られた一症例	—	平成26年3月	第9回日本統合失調症学会（於京都テルサ）	精神科デイケア利用患者である統合失調症患者1人についての事例報告である．以前より，生活するグループホームの世話人から図書館の利用を促されていたが，一度も行くことのなかった患者を図書館へ引率した．そこで，本患者は趣味である音楽関連のCDや本を借りることができると知り，毎週末に図書館を利用するようになった．支援者と共に図書館を利用することで初めて本患者は図書館の利用価値を知ることができた．言葉による促しのみではなく，実際の体験があったからこそ，その人が利用価値を見出せ日常生活に汎化したものと考えられる． 共同発表者：◎福原啓太，小川泰弘，田中寛之，永田優馬，多和田卓也，石井幾子，園田むつみ，西川隆 本人担当分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
6　デイケア喫茶での役割を持つことで日常的な行動に変化が見られた，後期高齢の統合失調症患者の一症例	—	平成26年11月	第22回日本精神障害者リハビリテーション学会いわて大会（於いわて県民情報交流センターアイーナ）	認知症を伴わない高齢の精神疾患患者は，自宅生活科デイケアなどの施設に通所することが多く，このような患者は今後増加すると予測される．そこで，働きたいという希望を持ち，またそれが現実検討できていない状態として評価される後期高齢の地域在住の統合失調症患者一事例に対し，デイケアでの喫茶活動のマスターという役割を仕事実技プログラムの一環として提供したと．その結果，精神症状（意欲向上，自閉の消失，情動表出の改善），活動面（活動量の増加），社会的交流面（会話量の増加）に変化が認められた． 共同発表者：◎福原啓太，小川泰弘，西川隆 本人担当分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7　統合失調症者のセルフエフィカシーに関する文献レビュー	—	平成26年11月	第29回大阪府作業療法学会（於大阪保健医療大学）	統合失調症とセルフエフィカシー（自己効力感）に関する文献を国内外問わず，レビューし，これまでの研究動向を調査した．結果は，海外の文献数のほうが多く，海外は比較対照研究・介入研究の評価として使用されることが多かった．国内では介入研究・ケーススタディが主に多かった．セルフエフィカシー研究の文献レビューにより，今後は，社会参加に向けた自己効力感の尺度に注目した研究やその尺度開発が必要であることがわかった． 共同発表者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，◎福原啓太 本人担当分：英語文献のレビューとそのまとめ作業
8　退院後の地域包括的支援が成功した要因の検討～長期入院後の高齢統合失調症患者一事例を通して～	—	平成27年3月	第10回日本統合失調症学会（於都市センターホテル）	長期入院を経た，高齢の統合失調症患者一事例が地域包括的支援により社会生活が安定した要因について検討した事例報告である．対象者は，退院後夫と二人暮らしになったが，外来通院に加え，デイケアと訪問看護によるチームアプローチにより，精神症状の安定，活動量の増加，対人交流の増加，QOLの向上が認められた．地域で生活することをチームで支えることで，精神症状が活発な患者であっても十分に地域生活できるケースが確認された． 共同発表者：◎福原啓太，藤林幸代，山西亜弥，前川公祐，小川泰弘，西川隆 本人担当分：本人担当分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
9　統合失調症を発症したジャズドラマーが発症前の自分を取り戻すまでの道のり	—	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（於神戸ポートピアホテル）	20年もの間，無為自閉で自宅生活を送っていた，元プロのジャズドラマーにおける事例報告である．対象者は本人が希望したデイケアでのバンド活動（作業療法）を通して，精神症状の安定，活動量の増加，対人交流の増加，QOLの向上が認められた．対象者のニーズを引き出すことで，本人が希望としたバンド活動が目的にも手段にもなり，社会生活が改善した．本人は，「昔の自分に戻れた」「意欲が出てきた」と発言し，リカバリーが達成された． 共同発表者：◎福原啓太，大尾充剛，森葉子，小川泰弘，西川隆 本人担当分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
10　人と人をつなぐことを目的としたプログラムの有効性―同性集団活動による対人関係の変化―	―	平成27年10月	第20回日本デイケア学会（於大阪府立国際会議場）	対人交流を活性化し，上手な人付き合い，仲間作りを目的にした介入についての実践報告である．デイケアプログラムの治療的効果の一つに，作業を共にすることによる「友人作り」が挙げられる．また同質グループはメンバー相互の共感が得られやすく集団としての凝集性も高くなりやすいといわれている．今回デイケアで実施した，同性（特に女性）同士のみで構成されたプログラムは，日常の男女混合のプログラムにはない凝集性が生まれやすくなることが確認された． 共同発表者：山西亜弥，山﨑勢津子,和田卓也,◎福原啓太 本人担当分：研究計画指導，執筆指導，発表指導，データ収集，データ分析指導
11　統合失調症者の就労に関する自己効力感尺度「Work - Related Self - Efficacy Scale」の作成	―	平成27年11月	第30回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	就労に関する自己効力感尺度（Work - Related Self - Efficacy Scale; WSES）は海外で作成された評価尺度である．しかし，このような就労における自己効力感に関する評価尺度は本邦では見当たらない．そこで，WSES作成者に連絡をとり，日本語版WSESを作成の許可を得た．日本語翻訳をしたWSESを精神疾患を有する患者28人に対し実施し，日本語の分かりにくい箇所を指摘してもらった．さらにそれを修正した．今後はバックトランスレーション研究に移行していく予定である． 共同発表者：梅田錬．小川泰弘．長池将太，◎福原啓太 本人担当分：研究計画，データ収集，データ分析，執筆指導，発表指導
12　長期入院患者が街に出た！！～退院促進プログラムの取り組みより～	―	平成27年12月	第23回日本精神障害者リハビリテーション学会高知大会（於高知市文化プラザかるぽーと）	長期入院中で病棟からの外出を拒否する統合失調症患者に退院促進プログラムとして，外出プログラムを導入した．自己効力感の先行要因（成功体験，代理体験，言語的説得，生理的情緒的高揚）に基づき，介入した結果，対象者は1人で，または病棟の友人と外出し買い物をするようになった．依然退院には結びついていないものの，退院促進プログラムによって，病院外への外出回数が増加し，社会生活における行動範囲の拡大が認められた． 共同発表者：前川公祐，◎福原啓太 本人担当分：研究計画指導，執筆指導，発表指導

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
13　統合失調症の軽症事例に対するデイケア治療のみによる変化-事例報告 -	—	平成28年3月	第11回日本統合失調症学会（於ベイシア文化ホール）	統合失調症と診断された20代の対象者が，効果を実感できなかった薬物療法を拒否したため，デイケア治療のみで対応したところ，デイケアプログラムによる問題解決能力向上訓練を通して，他者交流が増加し，慢性的に持続していた対人面の不安感が消失した．また安心感の獲得により不安感や病的体験の減少が認められた．このような薬物療法がうまく適合しないケースでもデイケアのような心理社会的治療により社会機能が改善することが確認された． 共同発表者：◎福原啓太，藤林幸代，山西亜弥，西川隆 本人担当分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
14　強迫性障害患者の不安に対するdistraction技能獲得のための支援―事例報告―	—	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（於ロイトン札幌）	不安を根底に持つ神経性障害には，一般的に薬物療法や認知行動療法などが適用される．認知行動療法の中でも，行動を伴う注意の転換（distraction）は強迫観念や不安の抑制に効果がある．事例報告では，20代女性，強迫性障害の患者に対し，distractionを支援した．具体的には，不安が増大する場面に対して本人がしうる対処行動をリスト化した．不安場面で，そのリストを見ることにより落ち着いて不安への対処行動を実行していくよう支援した．その結果，対処行動の強化，不安の軽減，地域生活に対する自己効力感の向上，社会生活の改善が認められた． 共同発表者：◎福原啓太，田中宏明，西川隆 本人担当分：研究全般（研究計画，介入，執筆，データ収集・分析）
15　統合失調症における病識と神経認知機能の関連	—	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（於ロイトン札幌）	病識の低下は統合失調症の主要な特徴のひとつであり，治療コンプライアンスや再入院率などの因子と関連が示されていることから，臨床的にも重要な指標である．また病識の低下は，神経認知機能障害と関連していることが報告されている．本研究では，「狭義の病識」，「障害認識」と神経認知機能の関連について調査した．その結果，「狭義の病識」の低下には認知機能障害が影響している可能性が示唆された．一方「障害認識」は神経認知機能に依存していない可能性が示唆された． 共同発表者：小川泰弘，◎福原啓太，梅田錬，西川隆 本人担当分：研究計画への提言，考察部分への提言，発表方法への提言

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
16　精神疾患患者を対象とした，生体医工学技術を用いた客観的指標の検討	—	平成28年10月	第31回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	2013年にDSM-5が公表された．統合失調症の診断基準では，DSM-Ⅳ-TRで“affective flattening”とあった記載が，この改定で，“diminished emotional expression”へと変更された．これは，必ずしも統合失調症患者が感情体験に障害があるのではなく，むしろ表出にのみ障害が生じる場合があることを示したものである．本研究では，その感情表出のうち声の抑揚（prosody）の客観的評価に注目している．具体的な評価方法は主観的バイアスを排除したもので，被験者の声をデジタル録音し，コンピュータ分析により客観的評価として非常に精度の高いものとなっている．本報告では，本研究の有用性と研究経過について報告した． 共同発表者：◎福原啓太，小川泰弘，森泰祐 本人担当分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
17　就労関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale WSES 日本語版の信頼性・妥当性の検討	—	平成28年10月	第31回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	指針疾患患者に対する評価では，客観的指標だけでなく，「患者自身がどのように感じているか」という主観的側面の評価が重要視されている．主観的側面における評価指標の一つとしてセルフエフィカシーがある．本研究では，諸外国で用いられている「仕事関連自己効力感尺度 Work-related self-efficacy scale（WSES）」の原著者に許可を得て，日本語版を作成し，その信頼性・妥当性を検討している．WSESは就労についての患者の主観的側面を評価できることから，治療計画立案のための指標としてだけではなく，介入の効果指標としても有効であると思われる． 共同発表者：小川泰弘，梅田錬，長池将太，◎福原啓太 本人担当分：研究全般（研究計画，執筆援助，データ収集・データ分析）
18　就労意欲が表面化していない精神科デイケア患者に対する短期就労体験プログラムの効果	—	平成29年9月	第51回日本作業療法学会（於東京国際フォーラム）	精神障害者の就職件数はこの10年で増加の一途をたどっているが，就労意欲が表面化しづらく就労へのニーズが潜在化している患者に対しては十分な支援が行き届いていない．そこでわれわれは，そのような患者8名に対し意欲を引き出すことを目的に病院内での短期就労体験プログラムを実施した．その結果，就労の継続を希望した者，ハローワークに通いだした者が認められた．たとえ対象者の就労意欲が表面化していなくとも，潜在的にそれを有している可能性があることが示唆された． 共同発表者：小川泰弘，田口功，高結花，◎福原啓太，西川隆 本人担当分：研究計画，執筆補助，結果の解釈への提言

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19　精神科生体医工学的指標・生活研究会H29年度研究報告	―	平成29年12月	第32回大阪府作業療法学会（於大阪国際交流センター）	統合失調症の症状は陽性症状，陰性症状，認知機能障害が主に挙げられるが，バイオマーカーのような客観的かつ定量的に評価されることは稀である．本研究では，陰性症状のうち情動表出の減少をプロソディと会話量の観点からコンピュータをもちいて分析した．また陽性・陰性症状，日常生活活動も評価し，それらとの関連性を検討した．その結果，一部のプロソディと会話量は統合失調症患者において障害が確認され，会話量は陰性症状と日常生活活動と関連した．会話量は他者との関りにおいて重要であることが示唆される． 共同発表者：◎福原啓太，小川泰弘，森泰祐 本人担当分：研究全般（研究計画，執筆，データ収集・分析）
20　統合失調症における会話量と精神症状，活動量との関連について	ー	平成30年7月	第38回近畿作業療法学会（於大阪国際交流センター）	統合失調症の言語表出能力が注目されている。その中でも本研究は会話量に着目した。統合失調症患者の会話量と精神症状、行動評価に関して関連性を分析したところ、ポジティブな刺激に対する発話時間と陰性症状は有意な負の相関を示し、ニュートラルな刺激に対する発話時間においても陰性症状と有意な負の相関を示し、そして行動評価とも有意な負の相関を示した。ネガティブな刺激に対する発話時間は陰性症状と有意な負の相関を示し、また行動評価とも有意な負の相関を示した。一方で、インタビュー時の発話時間は陽性症状と正の相関を示した。統合失調症の発話量は課題設定や状況により、異なるタイプの精神症状や行動と関連することが明らかとなった。 ◎福原啓太、大尾充剛、森泰祐、小川泰弘、西川隆 本人担当分：研究全般（研究計画、執筆、データ収集・分析）
21　統合失調症の情動表出能力について～精神科生体医工学的指標・生活研究会H30年度研究報告～	ー	平成30年12月	第33回大阪府作業療法学会（於藍野大学）	統合失調症の「情動表出の減少」が注目されている。平成30年度は統合失調症と健常者を対象として、情動表出について評価者の耳による判断を用いて評価した。評価方法はPutnam(2007)の方法を採用している。研究進捗について、本学会で結果と考察を交え発表した。 ◎福原啓太、　小川泰弘、森泰祐 本人担当分：研究全般（研究計画、執筆、データ収集・分析）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22　引換券を用いることで予測障害を減少させ、活動範囲の拡大に至った慢性期統合失調症の患者について一事例報告一	一	平成30年12月	日本精神障害者リハビリテーション学会　第26回東京大会（於早稲田大学国際会議場）	将来のことに対して予測することが困難となり、活動の範囲が狭小化していた慢性期病棟に入院している統合失調症患者に対し、将来の活動を示した紙（引換券）を用いて、プログラム活動へ誘導した結果、次の行動（活動）に対して予測が可能となり、活動範囲の拡大に至った事例について報告した。 森泰祐、李真吾、稲富宏之、◎福原啓太、日垣一男 本人担当分：執筆補助、介入補助、対象者評価
23　病院内売店実習と尺度を用いた振り返りにより就労への自己効力感が向上・適正化した事例について就労関連自己効力感尺度を用いて	一	令和元年9月	第53回日本作業療法学会（於福岡国際会議場）	我々の研究グループが海外から輸入し、日本語版について作成した就労関連自己効力感尺度を持ちて、就労支援を実施した。対象者には売店実習（店員補助）を活動として提供し、その振り返りを就労関連事故効力感尺度を用いて実施した結果、対象者は、自身の弱点を振り返ることがでい、支援者に指摘されるのではなく、能動的に自身の弱点を克服するための行動をとることができた事例について報告した。 ◎福原啓太，小川泰弘，長池将太，梅田錬，田中寛之 本人担当分：研究全般（研究計画、執筆、データ収集・分析）
24　複数の精神科デイケアを巡回式に利用する事の可能性についての一考察　一事例報告一	一	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	問題行動を起こしてしまう精神科デイケアに通所する対象者に対し、複数の精神科デイケアが協同して、対象者を巡回式に支援した。その結果、対象者は適度な緊張感を保ちながら、問題行動を起こすことなく、各精神科デイケアで過ごすことができた。この画期的な方法について事例報告を行った。 森岡知久、谷上美奈子、◎福原啓太 本人担当分：執筆補助、介入、データ整理補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
25　就労関連自己効力感 Work-related self-efficacy scale日本語版（WSS-J）の作成　～信頼性・妥当性の検討～	ー	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	我々の研究グループは海外から就労関連自己効力感尺度を輸入し、日本語版を作製した。本研究では、本尺度の日本語版について、信頼性と妥当性を検討した結果、十分な信頼性と妥当性が示された。 梅田錬、長池将太、小川泰弘、◎福原啓太 本人担当分：研究計画、執筆補助、データ収集、データ解析
26　精神科デイケアにおける多元主義の応用について	ー	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	精神医学において、現在、多元主義を用いた考え方が推奨されている。精神科デイケアにおいても多元主義の考え方は非常に有用である。その有用性について、事例を交えて報告した。 ◎福原啓太、田中寛之、小川泰弘、西川隆 本人担当分：執筆、事例介入
27　就労訓練によって自己効力感に変化の見られた一事例　～WSS-JとGSESの比較～	ー	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	精神科デイケアでの支援においては，「患者自身がどのように感じているか」という主観的側面，とりわけ自己効力感が重要な指標のひとつと考えられる．自己効力感には，具体的な課題や状況に依存せず，個人が日常生活の中で示す「一般性自己効力感」と，具体的な課題や領域に対する「課題特異的自己効力感」の2つの水準があることが知られている．今回の発表では，病院内就労体験と就労移行支援通所によって自己効力感に変化のみられた症例を報告し，就労に関連する課題特異的自己効力感尺度を臨床で使用する意義について述べることを目的として発表した． 小川泰弘、長池将太、◎福原啓太、梅田錬、西川隆 本人担当分：執筆補助

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
28　精神障がい者の就労に関する自己効力感尺度 Work-Related Self-efficacy Scale日本語版作成の試み　～因子構造の検討～	ー	令和元年9月	日本デイケア学会第24回年次大会札幌大会（於北星学園大学）	我々の研究グループは海外から就労関連自己効力感尺度を輸入し、日本語版を作製した。本研究では、本尺度の日本語版について、因子構造について検討した。119人の精神障害者を対象に就労関連自己効力感尺度を実施し、因子分析を行った。その結果、原版と同様に日本語版も4因子であることが確認された。 長池将太、◎福原啓太、梅田錬、小川泰弘 本人担当分：研究計画、執筆補助、データ収集、データ解析
「シンポジウム」 1　臨床に従事する精神科OTが研究することの意義	―	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（於神戸ポートピアホテル）	臨床に従事しながらの研究は，労力と時間がかかり決して楽ではない．作業療法士が特に精神科領域において研究を続ける際，多くの困難と向き合う必要がある．発表者自身の臨床研究の経験を通し，臨床で芽生えた疑問を研究疑問に発展させ，臨床研究に結びつける過程を聴衆（臨床家）に対して教育的観点からわかりやすく説明している．エビデンスに基づいた評価・治療を患者に提供できるよう，全国学会の場で，精神科領域に従事する作業療法士に呼び掛けている．
2　「作業療法って何？」を伝える．考える．精神分野の作業療法士の役割	―	平成27年11月	第4回大阪府立大学作業療法大会（於大阪府立大学）	大阪府立大学学部生を対象に，精神分野における作業療法士の役割について教育的，学術的，臨床的観点から講演した．臨床現場に触れる機会が少ない学部生に精神障害をわかりやすく伝え，精神障害者の困難を社会機能の観点から解説し，演者が経験した症例を挙げ，臨床現場における作業療法士の役割，支援方法を提示した．その際，患者の生活と学生自身の生活を対比させ，患者が求める，あるいは社会的に求められる生活に向けたリハビリテーション・作業療法を提言した．

別記様式第４号（その２）

（用紙　日本工業規格Ａ４縦型）

教　育　研　究　業　績　書

令和　2年　6月　30日

氏名　吉川　義之　　印

研究分野	研究内容のキーワード
1　リハビリテーション科学 2　応用健康科学 3　福祉工学	リハビリテーション医学、理学療法学、障害学、老年学 ヘルスプロモーション

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）運動学Ⅰ（総論）	令和1年～現在	運動学Ⅰ（総論）の講義は幅広く、教科書を読むだけでは学生へは伝わりにくい。そのため、教科書の中から比較的重要度の高い項目を抜き出し、ワークブックを作成した。そうすることで、学生の学習意欲意欲を高めることができた。
2　作成した教科書，教材 2）実習の手引	令和1年～現在	早期体験実習、地域実習用の実習の手引を作成した。地域実習においては、学生が地域実習を円滑に行えるようにするため、経験項目シートを作成し、大学教員と臨床実習指導者が学生に実習してほしい項目に差が出ないようにする取り組みを行った。
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）臨床実習教育	平成18年 ～ 平成30年	5つの大学からの臨床実習指導を担当した。年間約10名の学生に対して、理学療法評価・理学療法実施方法について指導し、レポート作成および症例報告会を実施した。特に物理療法と地域理学療法に関しては大学で学んでいる学生が少なかったため、上記二点を中心に指導した。その結果、実習生は物理療法の効果については特に興味を抱いていた。
2）国家試験対策	平成24年 ～ 平成26年	母校にて国家試験対策の講義を担当した。担当科目は内部障害理学療法と物理療法学であった。内部障害理学療法は心電図の診かたと心疾患の理学療法について国家試験問題を解きながら解説した。物理療法学は概論と物理療法の基礎、実施方法について国家試験問題を解きながら解説した。
3）専門学校記念式典の特別講演	平成27年10月	専門学校卒業生として学生・教員・卒業生を対象に15周年記念式典での講演した。講演内容は「セラピストが褥瘡対策チームで発揮できる技術」とし、局所治療としての物理療法と、予防としてのポジショニングの有効性について講演した。
4）地域セミナー 1．明石市介護保険事業所連絡協議会	平成24年10月	明石市介護保険事業所連絡協議会主催のセミナーにて「介護予防の為の運動療法」についての講演
2．加古川市地域セミナー	平成27年11月	加古川市の地域在住高齢者について「認知症予防と運動療法」について講演

事項	年月日	概　　要
3. 明石市大久保町在宅介護支援センター	平成28年7月	明石市大久保町の老人クラブにて「認知症予防と運動療法の必要性」についての講演と自宅でできる運動を実施。
4. 兵庫県健康保険事務所主催「筋萎縮性側索硬化症（ALS）　医療相談会・交流会	平成29年10月	ALS患者・患者家族に対して、神経内科医が「ALSの病態と治療について」、理学療法士が「ALSのリハビリテーション」の講演を行った。その後交流会に参加し、日常生活上で困っている事などについて助言を行った。
5　その他		
1）日本理学療法士協会認定理学療法必須研修会資料作成	平成25年 ～ 令和1年	褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会で指導するための教材を作成した。内容は「褥瘡の創面評価、リスク評価について」「褥瘡・創傷ケアに対する電気刺激療法の実際」の資料を作成した。
2）日本理学療法士協会褥瘡・創傷ケア認定理学療法士認定試験問題作成	平成25年 ～ 令和1年	褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の認定試験問題を作成した。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
1）理学療法士免許	平成15年4月30日	免許番号第47993号
2）3学会合同呼吸療法認定士	平成20年1月1日	登録番号第080806号（日本胸部外科・呼吸器・麻酔科学会）
4）修士（保健学）	平成23年3月	修第八八号(神戸大学大学院)
5）日本褥瘡学会　認定褥瘡理学療法士	平成23年9月1日	登録番号第417号（日本褥瘡学会）
6）認定理学療法士（介護予防）	平成24年4月1日	登録番号16-120（日本理学療法士協会）
7）認定理学療法士（褥瘡・創傷ケア）	平成25年4月1日	登録番号19-6（日本理学療法士協会）
8）専門理学療法士（物理療法）	平成25年4月1日	登録番号2016S-06-000005（日本理学療法士協会）
9）専門理学療法士（生活環境支援系）	平成25年4月1日	登録番号2016S-05-000039（日本理学療法士協会）
10）博士（医療リハビリテーション学）	平成29年3月	医リ博甲第四号（神戸大学大学院）
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）河上整形外科	平成16年4月 ～ 平成17年8月	整形外科の術後理学療法および外来理学療法を中心に理学療法業務に従事した。木・土曜日は午後が休診であったため、訪問リハビリテーションで維持期の脳梗塞後遺症患者の理学療法を実施していた。
2）中山外科	平成17年9月 ～ 平成24年8月	有床診療所の理学療法士として、心疾患患者や呼吸器疾患患者の理学療法を実施した。呼吸療法認定師や心臓リハビリテーション指導士の取得はこの時期に取得し、ケースレポート等もまとめた。また、寝たきり高齢者の理学療法も実施し、褥瘡治療および褥瘡予防のポジショニング等を実施していた。褥瘡の理学療法に関する臨床研究はこの時期に実施していた。平成22年4月より介護保険領域の部署の異動となり、主任として通所リハビリテーションと訪問リハビリテーション業務に従事した。理学療法業務に加え、職員管理、利用者契約などの業務も担当した。

事項	年月日	概　　要
3）株式会社アバンサール	平成24年9月～	平成24年11月に通所介護施設を開設し、機能訓練指導員として理学療法業務を実施した。平成27年4月に訪問看護ステーションを開設し、それ以降は訪問リハビリテーション業務に従事している。現在は地域で認められた通所介護施設と訪問看護ステーションとなり、明石市介護保険サービス事業者連絡協議会や在宅介護支援センター、兵庫県健康保険事務所より講演依頼をいただき、理学療法業務に加え講演等の職務も実施している。最近では地域の神経内科医と共に神経難病患者（ALS、多系統萎縮症、脊髄小脳変性症等）を担当することが多く、褥瘡予防をはじめ、褥瘡治療、理学療法業務を遂行している。また、取締役として、会社の管理運営を実施している。経理・総務は部門分けをし、他の役員が担当しているため、私は執行役員として運営部門を中心に理学療法士として従事している。
4　その他 （査読） 1）第48回日本理学療法学術大会	平成24年11月	一般演題査読
2）第26回兵庫県理学療法学術大会	平成26年4月	一般演題査読
3）第54回近畿理学療法学術大会	平成26年7月	一般演題査読
4）第50回日本理学療法学術大会	平成26年11月	一般演題査読
5）第27回兵庫県理学療法学術大会	平成27年4月	一般演題査読
6）第55回近畿理学療法学術大会	平成27年7月	一般演題査読
7）第51回日本理学療法学術大会	平成27年11月	一般演題査読
8）Journal of Wound Care	平成28年4月20日	投稿論文査読
9）第24回日本物理療法学会学術大会	平成28年7月	一般演題査読
10）第56回近畿理学療法学術大会	平成28年7月	一般演題査読
11）第52回日本理学療法学術大会	平成28年11月	一般演題査読

事項	年月日	概　　要
12）第29回兵庫県理学療法学術大会	平成29年4月	一般演題査読
13）第25回日本物理療法学会学術大会	平成29年7月	一般演題査読
14）第57回近畿理学療法学術大会	平成29年7月	一般演題査読
15）第26回日本物理療法学会学術大会	平成30年7月	一般演題査読
16）第27回日本物理療法学会学術大会	令和1年7月	一般演題査読
（一般演題座長）		
17）第54回近畿理学療法学術大会	平成26年11月3日	第17 セッション 生活環境支援系2 の座長
18）第30回兵庫県理学療法学術大会	平成30年7月1日	第9 セッション の座長
19）第58回近畿理学療法学術大会	平成31年1月20日	第3 セッション 生活環境1　の座長
20）第21回日本褥瘡学会学術集会	令和1年8月23日	リハビリテーション２／機器・用具　の座長
21）第28回日本物理療法学会学術大会	令和1年10月20日	一般口述演題Ⅴ　神経・筋制御の座長
（シンポジウム・パネルディスカッション）		
21）職種別サテライトシンポジウム （理学療法士） テーマ：新人から見た褥瘡の魅力.	平成23年9月	褥瘡予防・管理に理学療法士としてどのように関わっているのか褥瘡に関わりだした新人セラピストとして、理学療法士が関わる魅力についてシンポジストとして発言した。（第13回日本褥瘡学会）
22）直流微弱電流刺激療法の効果と実践. テーマ：最先端のエビデンスUpdate 褥瘡ケアへの理学療法士の参画.	平成24年5月	臨床で実施している電気刺激療法の実際をシンポジストとして発言した。また、海外で発表されている先行研究との比較も行い、電気刺激療法の必要性について提言した。（第47回日本理学療法学術大会）
23）褥瘡局所治療（down stream)における 理学療法技術. テーマ：褥瘡対策チームで発揮できる 理学療法技術.	平成26年5月	褥瘡局所治療として電気刺激療法と超音波療法の有効性について、実施している方法と臨床データについてシンポジストとして発言した。（第49回日本理学療法学術大会）
24）日本褥瘡学会認定師によるチーム医療 の今後の方向性について	平成27年9月	認定褥瘡理学療法士として褥瘡予防・管理における理学療法士の必要性と可能性についてシンポジストとして発言した。（第17回日本褥瘡学会学術集会）
25）褥瘡ケアにおける多職種協働の取り組み ～地域連携の実際.	平成28年3月	褥瘡ケアにおける多職種協働の取り組みを在宅ケアに関わる理学療法士の立場からパネリストとして発言した。（第13回 日本褥瘡学会近畿地方会学術集会）
（研修会講師）		
26）認定理学療法士必須研修会講師	平成25年9月29日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。

事項	年月日	概　　要
27）認定理学療法士必須研修会講師	平成26年6月22日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
28）ハンズオンセミナー講師	平成27年10月24日	第23回日本物理療法学会学術大会にて、褥瘡・創傷ケアの物理療法について実際に物理療法機器を使用してハンズオンセミナーを実施した。
29）認定理学療法士必須研修会講師	平成27年12月6日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
30）第51回日本理学療法士協会全国学術研修大会講師	平成28年10月7日	沖縄県で開催された日本理学療法士協会全国学術研修大会において「褥瘡ケアで理学療法士だからできること～病院・施設・在宅ケア～」のテーマで講演した。
31）認定理学療法士必須研修会講師	平成28年10月30日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
32）兵庫県在宅褥瘡セミナー講師	平成28年12月11日	日本褥瘡学会主催の兵庫県在宅褥瘡セミナーのリハビリテーション分野で講師として、看護師・介護士理学療法士・作業療法士を対象に講義した。
33）富山県理学療法士会研修会講師	平成29年8月20日	褥瘡・創傷ケアの理学療法に関する内容で理学療法士・作業療法士・看護師を対象とした講演を実施した。
34）認定理学療法士必須研修会講師	平成29年10月15日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
35）認定理学療法士必須研修会講師	平成30年9月16日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。
36）姿勢・活動ケア研究会「褥瘡セミナー」講師	平成30年12月1日	姿勢・活動ケア研究会主催の褥瘡セミナーにて「褥瘡の評価と物理療法」のテーマで講義した。
37）姿勢・活動ケア研究会「褥瘡セミナー」講師	令和1年5月18日	姿勢・活動ケア研究会主催の褥瘡セミナーにて「褥瘡の評価と物理療法」のテーマで講義した。
38）第21回日本褥瘡学会学術集会　教育講演11	令和1年8月24日	教育講演11（褥瘡患者のリハビリテーション医療）のテーマで講演した。なお、この教育講演は皮膚科領域講習1単位に該当する講演である。
39）認定理学療法士必須研修会講師	令和1年9月7日	日本理学療法士協会主催の褥瘡・創傷ケア認定理学療法士の必須研修会にて「褥瘡の評価と物理療法の実際」のテーマで講義した。

事項	年月日	概　　要
（学会運営） 36）第6回日本褥瘡学会近畿地方会学術集会 準備委員	平成21年3月8日	日本褥瘡学会近畿地方会学術集会準備委員として開催1年前より運営準備に従事した。
37）第11回日本褥瘡学会近畿地方会学術集会 準備委員	平成26年3月2日	日本褥瘡学会近畿地方会学術集会準備委員として開催1年半前より運営準備に従事した。
38）第23回日本物理療法学会学術大会 準備委員	平成26年10月 24・25日	日本物理療法学会学術大会準備委員として開催1年半前より運営準備に従事した。主に演題担当として、演題の査読振り分け、プログラム作成に従事した。
39）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	平成28年5月13日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
40）日本褥瘡学会実態調査委員　協力者	平成28年10月1日	4年に1度の日本褥瘡学会褥瘡患者実態調査の調査委員の協力者として、兵庫県内の病院・施設などに調査依頼を行った。
41）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	平成29年5月12日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
42）日本物理療法学会　法人化担当委員	平成29年8月21日	任意団体であった日本物理療法学会を一般社団法人として法人化するための担当委員として勤めた。8月21日に一般社団法人として認可され、設立時社員として登記された。
43）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	平成30年5月12日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。
44）日本褥瘡学会近畿地方会学術大会準備委員長	平成30年3月～ 令和2年3月	日本褥瘡学会近畿地方会の学術大会において準備委員長を拝命された。
45）日本褥瘡学会認定師委員会 認定師審査（新規・更新）	令和2年6月10日	日本褥瘡学会認定師委員会の認定師審査委員として、新規申請者および資格更新者の採点を行った。

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1.創傷のすべて	共著	平成24年9月	克誠堂	創傷に対する外科療法・保存療法・看護ケア・リハビリテーションの内容をまとめた書籍である。 B5判 総頁数403頁 監修：市岡滋編集：安部正敏，溝上祐子，寺師浩人 共著者名：市岡滋、安部正敏，溝上祐子，寺師浩人、杉元雅晴，吉川義之、他39名本人担当部分：第Ⅳ章：創傷に対する治療選択：5. 物理療法 電気刺激療法　pp320，　321（共著；杉元雅晴，吉川義之） 創傷に対する電気刺激療法の実施方法および効果についてまとめた。
2.理学療法から診る廃用症候群	共著	平成26年5月	文光堂	廃用症候群の特徴，発症のメカニズム、経過など，前提となる基礎知識を症状ごとに簡潔に解説した。また、実際の臨床でどう対応すべきか、主な疾患に特有な廃用症候群を想定し、その予防と臨床的介入について具体的に解説した。B5判　総頁数264頁 編集：奈良勲，神戸晃男，山崎俊明，木林勉共著者名：奈良勲，神戸晃男，山崎俊明，木林勉、杉元雅晴，吉川義之，前重伯壮、他23名 本人担当部分：第Ⅱ章：廃用症候群のメカニズム：A局所性廃用症候群のメカニズム 05褥瘡）pp73-85（共著；杉元雅晴，吉川義之，前重伯壮） 廃用症候群に合併する褥瘡について評価と治療について解説した。
3.理学療法士のための在宅療養者の診かた	共著	平成27年5月	文光堂	症例を通して、在宅療養者に対する理学療法の評価からプログラムの立案まで、実際の流れに沿って解説した実践書で、臨床の現場で役立つヒントや工夫はクリニカルヒントとしてまとめた。B5判 総頁数190頁 編集：杉元雅晴 共著者名：（杉元雅晴，吉尾雅春，望月久，岩崎洋，山川友康，平野康之，井澤和大，宮川哲夫，小嶋功，吉川義之，横井輝夫，前重伯壮，舘村卓，田村佳奈美，野口まどか，渡邊光子，松田崇 本人担当分：骨折－糖尿病を合併した下肢骨折 pp 96-102（単著） 糖尿病を合併した下肢骨折の症例を提示し、評価・理学療法プログラムの立案・実施について、リスク管理も含めて解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4.理学療法を活かす褥瘡ケア	共著	平成28年8月	文光堂	理学療法士が褥瘡対策チームの一員として行う理学療法技術（運動療法・物理療法・日常生活活動練習）を豊富な図表を用い平易に解説した。専門職種共通の創の病態評価から予防や局所治療プログラムなど必要な知識が幅広く網羅されている。B5判 総頁数153頁 編集：杉元雅晴共著者名：杉元雅晴，吉川義之，前重伯壮，植村弥希子，井上里英子，西山友貴，岩﨑洋，日髙正巳 本人担当部分：第Ⅱ章：褥瘡患者の評価；2．褥瘡の手段．第Ⅲ章：褥瘡の局所治療－物理療法；3．電気刺激療法．第Ⅳ章：予防―姿勢管理・運動療法；1．臥位姿勢．pp20-34，41-48，62-67（単著） 褥瘡の評価、局所治療（電気刺激療法）、ベッド上のポジショニングについて研究から得られた知見と臨床現場から得た知識を組み合わせて解説した。
5.PT・OT・STのための診療ガイドライン活用法	共著	平成29年5月	医歯薬出版	診療ガイドラインについて理解し、臨床現場での意志決定に活用できる力を身につけることを目的としており、ガイドラインの作成過程や基礎知識、ベースとなるエビデンスへの批判的吟味の方法、実践適用ケースまでをわかりやすく解説している。B5判 総頁数170頁 監修：中山健夫編集：日髙正巳、藤本修平 共著者名：荒木浩二郎・有明陽佑・稲富宏之・大浦智子・大寺祥佑・尾川達也・紙谷司・小久保徹・小向佳奈子・今法子・酒井克也・佐々木祥・杉田翔・竹林崇・田中宏明・坪内優太・中村学・芳賀大輔・福岡達之・福谷直人・廣江貴則・吉川義之 本人担当部分：第4章：診療ガイドラインの活用法；3　エビデンスと診療ガイドラインの活用の実際．褥瘡　pp152-155（単著） 日本褥瘡学会のガイドラインから、理学療法士が実施すべき内容について症例を提示して解説した。
6.イラストでわかる物理療法	共著	令和1年6月	医歯薬出版	物理療法の基礎知識から臨床応用までを分かりやすくまとめた教科書である。B5判　総頁数231頁 監修：上杉雅之　編集：杉元雅晴、菅原仁　共著者名：安孫子幸子・植村弥希子・大矢暢久・金原一宏・斎藤弘・髙木峰子・中西亮介・平賀篤・太箸俊宏・吉川義之 本人担当部分：第4章：温熱療法（３）超音波療法　pp41-51（単著）、超音波の理論と治療方法・目的および留意点について説明し、疾患別に使用方法などを解説している。 第7章：水治療法　pp77-87（単著）、水の特性、力学的・生理学的作用および治療目的を解説し、実際の臨床場面での使用方法について説明している。
（学術論文）				
1.音叉を用いた振動覚検査による転倒予測の有用性-地域在住高齢者を対象とした前向き研究による検討- （査読付）	共著	平成22年7月	理学療法学 37：470-476	音叉を用いた振動覚検査による転倒予測を前向き研究により実施した。また、音叉の検者内・検者間信頼性も検討した。その結果、後ろ向き研究と同様の結果が得られた。カットオフ値についても後ろ向き研究と同程度の値であり、他のパフォーマンステストと同程度の検査精度があった。検者内・検者間信頼性も高い値であった。上記の結果から音叉を用いた振動覚検査は転倒予測において有用な検査であることが確認された。 担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者名：吉川義之，福林秀幸，高尾篤，竹内真，松田一浩，安川達哉，梶田博之，杉元 雅晴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. Evaluation of the optimum electrical stimulation intensity for galvanotaxis in human fibroblast(ヒト皮膚線維芽細胞における直流微弱電流の最適電流強度の検討) (査読付)	共著	平成23年1月	Wound Repair and Regeneration 19(1)	培養線維芽細胞の電気走性と電流強度を検討した。線維芽細胞は陽極帯電しているため陰極側へ遊走することが報告されている。本研究結果も先行研究と同様の結果となった。また、電流強度に関しては50μA群でも陰極側への遊走が確認され、100μA群ではコントロール群と有意差がみられた。上記の結果から微弱な電流でも線維芽細胞が遊走することが確認された。 担当部分：細胞培養、実験、解析、まとめ 共同演者名：Sugimoto M, Terashi H, Maeshige N, Honda H, Yoshikawa Y)
3.側臥位における大転子部の体圧分散を配慮したポジショニングの検証 (修士論文)	単著	平成23年3月	神戸大学大学院	健常成人と高齢者に対して30度側臥位時の体圧分散可能な肢位と安楽度について検討した。30度側臥位時は股関節を内旋させることにより、より広い殿筋面で圧を分散できるように考慮した。その結果、健常者も高齢者も体圧分散が可能になり有用な体位であることが示唆された。この殿筋面の広さについては健常者の骨盤周囲部をCTスキャンを用いて確認した。また安楽度にも問題なく臨床的にも問題ないことが示唆された。（全11頁）
4.股関節運動と骨盤傾斜角度が仙骨部褥瘡の形状変化に及ぼす影響 (査読付)	共著	平成23年6月	褥瘡会誌 13：157-161	仙骨部の褥瘡は股関節運動および骨盤の傾斜角度により面積に影響を与えることが考えられる。そのため、股関節運動および骨盤傾斜角度が仙骨部褥瘡の面積にどのような影響を与えるのかを確認した。結果は股関節を屈曲すると短径および創面積が拡大し、伸展すると創面積は縮小した。また、股関節を屈曲する際は反対側の股関節を伸展することで面積の拡大を予防できた。この結果から仙骨部褥瘡患者に股関節の関節可動域運動を行う際は反対側の股関節を伸展する必要性が示唆された。 担当部分：解析、考察、まとめ 共著者名：前重伯壮，本田寛人，吉川義之，山本将之，寺師浩人，杉元雅晴
5.直流微弱電流刺激療法がポケットを有する褥瘡に与える効果 （査読付）	共著	平成24年1月	日本物理療法学会会誌 19，82-86	褥瘡の中でもポケットを有する褥瘡は難治性であり、治癒までに時間がかかると言われている。そのため、ポケットを有する褥瘡に対する治療は緊急の課題である。そこで、ポケットを有する褥瘡に対して電気刺激療法を実施した結果、治癒が促進された。この結果から、ポケットを有する褥瘡に対して電気刺激療法を実施する事でポケット面積の縮小が促進されることが示唆された。 担当部分：治療実施、解析、論文まとめ 共著者名：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，松田一浩

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6.転倒リスク評価における振動覚検査の重要性 （査読付）	共著	平成24年1月	理学療法科学27：55-59	これまで転倒予測に音叉を用いた振動覚検査が有用であることを報告してきた。本研究では振動覚検査は自覚症状に乏しいため、筋力低下などのように自覚せずに転倒するのではないかと考え自覚症状との関連性を検討した。その結果、振動覚の低下は転倒恐怖心などに影響を及ぼさず、低下していることを自覚している高齢者が少ないことを確認した。そのため、振動覚検査が低下している高齢者に対してはフィードバックする必要性があると考えられる。 担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者名：吉川義之，松田一浩，竹内真，福林秀幸，高尾篤，安川達哉，井上由里，梶田博之，杉元雅晴
7.Optimum microcurrent stimulation intensity for galvanotaxis of human dermal fibroblasts （ヒト皮膚線維芽細胞の直流電流に最適な微弱電流刺激強度） （査読付）	共著	平成24年1月	Journal of Wound Care 21：5-10	培養線維芽細胞を用いて電気走性と最適電流強度についての実験を行った。電気刺激は50μAと100μAの微弱な電流強度で実施した。その結果、50μAでも陰極方向への遊走が確認され、100μAではコントロール群に比べ有意に陰極方向へ遊走していることが確認された。この実験により線維芽細胞が陰極方向へ遊走しやすいことが再確認され、100μAという微弱な電流でも遊走することが確認された。 担当部分：細胞培養、実験、統計解析、考察、まとめ 共著者名：Sugimoto M, Maeshige N, Honda H, Yoshikawa Y, Uemura M, Yamamoto M, Terashi H
8.30°側臥位の快適さの検証 （査読付）	共著	平成24年3月	関西総合リハビリテーション専門学校紀要 4：31-34	褥瘡予防におけるポジショニングに30度側臥位が推奨されている。しかし、30度側臥位は不安定な体位であるため快適さが疑問視されている。そのため体幹の捻じれに配慮した30度側臥位をとることで自律神経系に与える影響を調査した。その結果、体幹に捻じれのない30度側臥位は背臥位と同程度の快適さであり、苦痛な姿勢ではないことが確認された。それゆえに臨床で30度側臥位を実施する際は体幹の捻じれに配慮する必要性がある。 担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者名：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，三嶋一規，谷川大地，山本将之
9.高齢者の年齢階層別における転倒恐怖感消失要因の検証 （査読付）	共著	平成24年3月	神戸国際大学リハビリテーション研究 3：9-17	転倒恐怖感は年齢が高くなるほど抱きやすいといわれているため、高齢者の転倒恐怖感の関連要因を明らかにすることを目的とした。対象者を低年齢高齢者と高年齢高齢者の2群に分けて比較した。その結果、低年齢高齢者の転倒自己効力感はクリニカルパス4週目に向上が認められたが、高年齢高齢者の転倒自己効力感に変化はみられなかった。そのため、高年齢高齢者の転倒恐怖感の消失要因は運動機能だけではなく、社会的要因などが考えられた。 担当部分：考察、まとめ 共著者名：小枝允耶，柿花宏信，植村弥希子，長尾徹，田川雄一，吉川義之，小枝英輝，武政誠一，山下拓，久綱正勇

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
10. 絵画教室の利用者が受講生に与える影響 （査読付）	共著	平成24年3月	神戸学院総合リハビリテーション研究　7：139-145	絵画教室における絵画作業が受講生の気分および生活にどのように影響を与えるかについて調査し、高齢者に対する介護予防や生きがい作りとしての有効性について検討した。その結果、絵画教室の利用は絵画技術の向上だけではなく、ストレス発散や余暇時間の有効利用、他者交流の促進などの役割を担っていた。この結果により絵画教室の利用は高齢者に対する介護予防や生きがい作りとしても有効である可能性が示された。 担当部分：解析、考察、まとめ 共著者名：梶田博之，大瀧誠，中前智通，森川孝子，吉川義之，田伏勉
11. 仙骨部と大転子部の体圧分散を配慮したポジショニングと安楽度の検証－股関節回旋角度と体幹の回旋に着目して－ （査読付）	共著	平成25年1月	褥瘡会誌15：1-7	健常成人に対して30度側臥位時の体圧分散可能な肢位と安楽度について検討した。30度側臥位時は股関節を内旋させることにより、より広い殿筋面で圧を分散できるように考慮した。その結果、体圧分散が可能になり有用な体位であることが示唆された。この殿筋面の広さについてはCTスキャンを用いて確認した。また安楽度にも問題なく臨床的にも問題ないことが示唆された。 担当部分：研究計画、実施、解析、論文のまとめ 共著者名：吉川義之，杉元雅晴，寺師浩人，前重伯壮，野口まどか
12. 運動機能別にみた高齢者の転倒関連因子の比較－ロジスティック回帰分析による検討－ （査読付）	共著	平成25年3月	身体教育医学研究 14：9-16	高齢者の転倒因子は多くの因子があるため把握することが困難な状況である。そのため、高齢者を運動機能の高い者と低い者に分け、それぞれの因子を検討した。その結果、運動機能の高い高齢者は振動覚の低下が転倒因子としてあがり、運動機能の低い高齢者は筋力低下やバランス能力の低下など多様な因子が関わっていたことが確認された。 担当部分：研究計画、実施、統計、論文のまとめ 共著者名：吉川義之，梶田博之，松田一浩，高尾篤，井上由里，杉元雅晴
13. 通所リハビリテーションにおける内部障害の罹患率と課題 （査読付）	共著	平成25年3月	理学療法兵庫 18：7-9	介護保険領域でのリハビリテーションが増加している中、情報提供が乏しい現状にある。その中でも内部障害の既往をもった高齢者が多くいるにも関わらず、情報が乏しいことは運動中のリスク管理が不十分となることが考えられる。そのため、服薬状況や既往歴を利用者・利用者家族・ケアマネージャーに確認し情報の整理を行った。その結果、循環器疾患の既往や治療を行っている高齢者が多く確認された。 担当部分：研究計画、解析、考察、まとめ 共著者名：松田一浩，吉川義之，竹内真，高尾篤，福林秀幸，安川達哉，杉元雅晴，梶田博之

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
14. 週1回のバランス練習を実施した脊髄小脳変性症の一例～移動能力の変化に着目して （査読付）	共著	平成25年3月	神戸国際大学リハビリテーション研究 4: 35-39	進行性疾患である脊髄小脳変性症患者に対してバランス練習を中心とした理学療法を実施した症例報告である。立位および膝立立位、四つ這い肢位でバランス練習を工夫して理学療法を実施した結果、日常生活活動の指標であるFIMの合計点数が改善した。進行性疾患ではあるが、廃用性による運動制限が出現していたために理学療法を実施する事でADLが改善した症例であった。 担当部分：プログラムの立案、考察、まとめ 共著者名：小枝允耶，吉川義之，植村弥希子，梶田博之，小枝英輝
15. 個人情報記録における認知症原因疾患の記載状況について （査読付）	共著	平成25年3月	神戸学院総合リハビリテーション研　8:139-144	介護保健施設利用者の多くは高齢であるため認知症を呈した割合も多い。そこで、介護保険施設の利用者の個人情報記録における認知症原因疾患の記載状況について調査した。対象は192名であった。その結果、認知症とのみ記載があったのが95件であった。認知症は疾患により適切な治療やケアが異なるため、今後はこれらの情報整理が必要である結果となった。 担当部分：情報整理、解析、まとめ 共著者名：梶田博之，大瀧誠，中島綾，中前智通，森川孝子，久保田摩紀，松本謙，吉川義之
16. 褥瘡部を陰極とした微弱直流電流刺激療法による創の縮小効果 （査読付）	共著	平成25年6月	理学療法学 40：200-206	細胞培養実験にて得られた電気刺激条件を臨床研究にて確認した。刺激条件は褥瘡部を陰極とし、強度を80μAで1時間、週5回通電した。その結果、全症例の創の縮小が加速し、統計学的にも有意な結果となった。また、過去に行われた先行研究よりも週治癒率が高く、褥瘡に対する低強度の電気刺激療法は創の縮小に有用であることが確認された。 担当部分：研究計画、実施、統計解析、論文のまとめ 共著者名：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，植村弥希子，高尾篤，松田一浩，寺師浩人
17. 仙骨部褥瘡患者に対する直流微弱電流刺激療法の試み （査読付）	共著	平成25年10月	褥瘡会誌 14：582-586	仙骨部褥瘡に対して電気刺激療法を実施し、創の縮小効果について検討した。刺激条件は基礎研究のデータを用いて、褥瘡部を陰極、強度80μA、周波数0.1Hz、時間40分、頻度週5回とした。その結果、電気刺激療法の介入後に創の縮小が加速し最終的に治癒に至った。本結果より標準治療に電気刺激療法を併用することにより創の加速的治癒が期待できる。 担当部分：研究計画、実施、解析、論文のまとめ 共著者名：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，寺師浩人

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
18. Critical Point Of Direct Microcurrent Stimulation Intensity To Promote Galvanotaxis For Human Dermal Fibroblasts （ヒト真皮線維芽細胞の電気走性を促進する直流微弱電流刺激強度の重要なポイント） （査読付）	共著	平成26年1月	Wound Repair and Regeneration 22(1): A19	陽極帯電している線維芽細胞の電気走性を促進するため、直流微弱電流刺激を実施した。その結果、コントロール群に比べ200 μA群で線維芽細胞の遊走は促進され、300 μA群で抑制されることが解明された。この結果により、臨床現場で褥瘡治癒を促進するための線維芽細胞遊走に期待する強度は200 μAであることが示唆された。 担当部分：解析、論文のまとめ 共著者名：Uemura M, Maeshige N, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Takata S, Sugimoto M
19. NST対象患者の褥瘡発生に関わる危険因子の検討 （査読付）	共著	平成26年10月	褥瘡会誌　16：520-527	NST対象患者において、褥瘡ハイリスク患者ケア加算判定項目およびK式スケール判定項目と褥瘡発生の関連性を調査し、NST対象患者特有の褥瘡発生因子の解明を目的とした。その結果、褥瘡発生例では「必要カロリーを摂取していない」「褥瘡に関する危険因子があってすでに褥瘡を有するもの」「自力体位変換できない」「病的な骨突出」が有意に高かった。そのためこれらに注意する必要性が示唆された。 担当部分：解析、考察、まとめ 共著者名：前重伯壮，野口まどか，今井秀人，沖佳祐，吉川義之，寺師浩人，宇佐美眞
20. 立ち上がり可能な座面の高さと日常生活活動の関連性について －通所利用者の立ち上がりによる検討－ （査読付）	共著	平成27年3月	神戸学院総合リハビリテーション研究 10：121-127	立ち上がり可能な座面の高さの違いによって日常生活活動との関連性があるかの検討を、通所リハ利用者を対象として実施した。その結果、30㎝の高さから立ち上がれる高齢者は日常生活が自立していることが確認された。また、その他のパフォーマンステストとも関連性があり有用な検査であることが確認された。そのため、30㎝をカットオフ値する事や30㎝からの立ち上がりを目標とする必要性が示唆された。 担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者名：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，門條宏宣，小枝允耶，柿花宏信，梶田博之，春藤久人
21. Positioning bedridden patients to reduce interface pressures over the sacrum and great trochanter （寝たきり高齢者の仙骨部と大転子部の体圧分散を配慮したポジショニング） （査読付）	共著	平成27年7月	Journal of Wound Care 4: 319-325	特別養護老人ホームに入所中の高齢者17名を対象に体圧分散可能なポジショニングの検討を行った。方法は30度40度側臥位時にベッドと接する側の股関節を自然位にした場合と内旋位した場合との比較検討を行った。その結果、ベッドと接する側の下肢を内旋位にした方が広い殿筋面で体圧を分散することができ、有用なポジショニングであることが確認された。この結果により、仙骨部および大転子部の褥瘡予防および褥瘡患者の治癒促進に期待できる。 担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者名：Yoshikawa Y, Maeshige N, Sugimoto M, Uemura M, Noguchi M, Terashi H

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
22. Monophasic pulsed microcurrent of 1-8 Hz increases the number of human dermal fibroblasts.（1-8Hzの直流パルス電流はヒト皮膚線維芽細胞数を増加させる。）（査読付）	共著	平成28年10月	Progress in Rehabilitation Medicine 1, 20160005	培養線維芽細胞を用いて電気刺激周波数の違いによる細胞増殖を確認した。褥瘡の治癒には線維芽細胞の遊走・増殖・分化が必要であり、本実験では増殖に着目して実験を行った。その結果、強度200μA，1-8Hzの周波数で線維芽細胞の増殖が確認された。中でも周波数2Hzにおいて増殖が大きかった。本研究結果から褥瘡に対して電気刺激療法を実施する場合は周波数を2Hz前後で設定する必要性が示唆された。 担当部分：研究計画、実施、論文のまとめ 共著者名：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Uemura M, Matsuo M, Maeshige N, Niba ET, Shuntoh H
23. Monophasic pulsed microcurrent of 1-8 Hz increases the number of human dermal fibroblasts.（1-8Hzの直流パルス電流はヒト皮膚線維芽細胞数を増加させる。）（博士論文）（査読付）	単著	平成29年3月	神戸学院大学総合リハビリテーション学研究科	培養線維芽細胞を用いて電気刺激周波数の違いによる細胞増殖を確認した。褥瘡の治癒には線維芽細胞の遊走・増殖・分化が必要であり、本実験では増殖に着目して実験を行った。その結果、強度200μA，1-8Hzの周波数で線維芽細胞の増殖が確認された。中でも周波数2Hzにおいて増殖が大きかった。本研究結果から褥瘡に対して電気刺激療法を実施する場合は周波数を2Hz前後で設定する必要性が示唆された。 （全21頁）
24. 直流パルス電流の刺激周波数が線維芽細胞の遊走およびFocal adhesion kinaseに与える影響（査読付）	共著	平成29年9月	物理療法科学 24: 26-31	培養線維芽細胞の遊走に関する電気刺激の最適周波数を検討した。スクラッチ法にて線維芽細胞の遊走に最適な周波数を求めた結果、2Hz群がコントロール群や10Hz群に比べ有意に遊走していることが確認された。 担当部分：細胞培養、実施、まとめ 共著者名：植村弥希子，前重伯壮，井上岳人，古賀由華，杉元雅晴，吉川義之，宇佐美眞
25. Weight-bearing stretching of the triceps surae muscle increases the range of motion on ankle dorsiflexion in diabetic patients: an approach to reduce the risk of diabetic foot ulcer development（糖尿病患者に対する自重負荷による下腿三頭筋ストレッチングは足関節背屈可動域を増加させる。：糖尿病性足潰瘍発生リスクを減らすためのアプローチ）（査読付）	共著	平成30年5月	J Jap.WOCM 22(3) 281-286	糖尿病患者に対して自重負荷による下腿三頭筋ストレッチングを実施することで、足関節背屈可動域の増加が確認された。足関節背屈可動域の低下は足底圧が上昇することにより足潰瘍の要因とされている為、本研究結果より糖尿病患者の足潰瘍発生リスクを減らすためのアプローチ方法確立の一助となる。担当部分：研究計画、考察、まとめ。共著者名：Maeshige N, Hirasawa Y, Moriguchi M, Yoshikawa Y, Maruo K, Noguchi M, Terashi H, Fujino H
26. Modulation of plantar pressure and gastrocnemius activity during gait using electrical stimulation of the tibialis anterior in healthy adults（健常成人における前脛骨筋への電気刺激が歩行中の足底圧および腓腹筋活動に及ぼす影響について）（査読付）	共著	平成30年11月	PLoS One 10 e0195309	健常成人の前脛骨筋に電気刺激療法を実施することで拮抗筋である腓腹筋が相反神経抑制され、足底圧が減少する傾向が確認された。今後はこの方法を用いて足底圧が上昇することにより足潰瘍が発生しやすい糖尿病患者に対して実施し、足壊死や切断患者の予防に努めていく。担当部分：研究計画、考察、まとめ。共著者名：Moriguchi M, Maeshige N, Ueno M, Yoshikawa Y, Terashi H, Fujino H.

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
27. Taking a sitting position within 13 days of subarachnoid hemorrhage onset prevents decline in the ability to perform activities of daily living and shortens hospitalization duration（クモ膜下出血の発症から13日以内に座位をとることは、日常生活の活動能力の低下を防ぎ、入院期間を短縮する） （査読付）	共著	平成30年12月	Int J Disabil Hum Dev 14(4) 517-524	くも膜下出血患者を対象として早期に座位をとった症例と座位をとらなかった症例の日常生活活動レベルと入院期間を検討した。その結果、13日以内に座位をとった群は入院期間が短縮した。そのため、くも膜下出血患者は病状を把握し、神経学的兆候を確認しながら早期に歩行練習する必要性が示唆された。担当部分：計画、考察、まとめ 共著者名：Uemura M, Inoue T, Kuwata S, Yoshikawa Y, Matsumoto H, Hirata Y
28. 車椅子乗車時の戸の開閉操作が坐骨結節部へ与える影響	共著	令和2年3月	医療福祉情報行動科学研究 7 25-35	車椅子乗車時における褥瘡好発部位である坐骨結節部位のずれ力と圧力の移動を検討した。平地走行ではなく、日常生活で必要となるドアの開閉動作時に坐骨結節部のずれ力と圧力を測定している。その結果、開き戸に比べ引き戸は前後のずれ力が少ない結果となった。しかし、前左右方向については開き戸も引き戸もずれ力に差がなかった。そのため、坐骨結節に褥瘡発生リスクがある対象者にはドアの開閉操作は極力避けるように促し、必要な場合は引き戸を勧めることが示唆された。担当部分：計画、考察、まとめ　共著者名：吉川義之，杉元雅晴，植村弥希子，松下友貴，松本流音
（その他） 「総説・依頼原稿」 1. 物理療法技術の継承、こう考える - 臨床の立場から	共著	平成22年7月	日本物理療法学会誌 17:　21 -22	臨床の立場から物理療法技術を継承について教育現場・メーカーへの提言をまとめた。 担当部分：まとめ 共著者名：前重伯壮，藤原秀太郎，本田寛人，吉川義之，杉元 雅晴
2.最先端のエビデンス Update ： 褥瘡ケアへの理学療法士の参画	共著	平成25年2月	理学療法学 40: 56-58	褥瘡ケアへの理学療法士の参画を促すため，医師から理学療法士に期待する事をまとめていただき、理学療法士の立場から運動療法について、物理療法についての内容を記載した。また、褥瘡・予防ガイドラインの作成委員会からリハビリテーション分野のガイドラインについて解説した。 担当部分：電気刺激療法、まとめ 共著者名：杉元雅晴，日高正巳，寺師浩人，吉川義之，前重伯壮，廣瀬秀行
3.慢性創傷に対する理学療法	共著	平成25年4月	理学療法　30(4)：402-41	慢性創傷に対する電気刺激療法と超音波療法の使用方法と研究結果のまとめを総説論文としてまとめた。 担当部分：まとめ 共著者名：杉元雅晴，前重伯壮，吉川義之
4. 褥瘡対策チームで発揮できる理学療法技術	共著	平成26年12月	理学療法学第41: 690 - 698	褥瘡対策チームで理学療法士が発揮できる技術について解説した。理学療法士は褥瘡を評価し、さらに動作を評価することにより適切なポジショニングを実施することができる。また、褥瘡部を評価することにより物理療法を用いて治療に参加することもできる。これらの技術で褥瘡対策チームで活躍する事に期待できる。 担当部分：電気刺激療法、まとめ 共著者名：前重伯壮，杉元雅晴，吉川義之，植村弥希子，井上里英子，日高正巳
5. 褥瘡に対する物理療法の実践②：直流微弱電流刺激療法	単著	平成27年3月	理学療法magazine 2(3): 54-58	褥瘡に対する物理療法として電気刺激療法の使用方法を解説した。これまでの臨床研究の結果に加え基礎研究で得られたデータも提示し、より治癒効果の高い電気刺激療法を実施して頂けるように解説した総説論文である。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6. 褥瘡ケアで理学療法士だからできること	単著	平成28年	理学療法学 44(1)：47-51	褥瘡・創傷ケアについて理学療法士の必要性を解説した。予防や環境調整などのポジショニングだけではなく、物理療法を用いて治療にも関われることを示し、理学療法士が褥瘡・創傷ケアに関わっていくべきという内容を解説した総説論文である。
7. 理学療法士からみた褥瘡予防の問題点とその対応策	共著	平成30年4月	WOC Nursing 6(4)：63-72	理学療法士の視点から褥瘡予防の問題点を解説した。移乗や移動時の注意点、ベッド上のポジショニングや車椅子駆動時における問題点などを他職種にもわかりやすく解説している。担当部分：体位変換・姿勢保持、基本動作における注意点。共著者名：杉元雅晴，吉川義之，植村弥希子
8. 発生と悪化を防ぐための褥瘡予防	単著	令和1年12月	訪問リハビリテーション 9：352-358	褥瘡の発生予防と悪化予防を解説した。褥瘡の発生機序からリハビリテーションが褥瘡に与える影響などを説明し、理学療法や作業療法を実施する際の注意点をまとめた総説論文である。
9. 褥瘡患者のリハビリテーション医療 －褥瘡ケアの理学療法－	単著	令和1年12月	褥瘡会誌22（1）：19-25	これまで理学療法士が褥瘡患者に関わる際にポジショニングやシーティングを中心として関わってきたが、それ以外にも物理療法を用いて治療に参画できることを伝えた。しかし、その際は医師や看護師などの多職種協働が必要であり、褥瘡創面評価の必要性なども含めて解説した。
「国際学会」				
1. Effect of the combined use of ultrasound irradiation and wound dressing on pressure ulcers (褥瘡に対する創傷被覆材と超音波照射の併用効果)	―	平成22年9月	Asian Confederation for Physical Therapy（インドネシア）	褥瘡に対する超音波療法の効果について検討した。近年の褥瘡治療は創傷被覆材を使用しているため、補完療法として実施する際には創傷被覆材の上から超音波療法を実施する必要がある。そのため創傷被覆材の超音波透過率を調査し、超音波療法を実施した。その結果、褥瘡面積が縮小し加速的な治癒が認められた。 担当部分：解析、まとめ 共同演者名：Maeshige N, Fujiwara H, Honda H, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Sugimoto M)
2. A new proposal of a better positioning for a bedridden patient. (寝たきり高齢者に対する新しいポジショニングの提案)	―	平成24年9月	World Union of Wound Healing Societies（神奈川県）	褥瘡ハイリスク者である日常生活自立度Cランクの高齢者を対象に新しいポジショニングを検討した。ポジショニングは30度側臥位を実施した際にベッドと接する側の股関節を内旋させ、殿筋面を広げて体圧分散を試みた。その結果、体圧は分散される結果となった。上記の結果から、30度側臥位を実施する際はベッドと接する側の股関節を内旋させる必要性が示唆された。 担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者名：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Maeshige N, Honda H, Madoka Noguchi, Terashi H
3. Clinical Effects of Galvanic Micro-Current Stimulation for Pressure Ulcers (褥瘡に対する直流微弱電流刺激の臨床効果)	―	平成24年9月	World Union of Wound Healing Societies（神奈川県）	褥瘡を有する高齢者に対して電気刺激療法を実施し、効果を確認した。電気刺激療法は滲出液を吸収したドレッシング材に棒状電極を挿入し、ドレッシング材を関電極として使用した。不関電極は10㎝程度離れた健常皮膚部位に貼付した。電流強度は80μAとして、周波数2Hz，極性は褥瘡部陰極として40分，週5日実施した。その結果、前例において創が治癒した。上記の結果から、褥瘡に対する電気刺激療法は褥瘡治癒を促進させる可能性がある。 担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者名：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Maeshige N, Honda H, Terashi H

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
4. Examination of risk factor for falls among the elderly with high physical activity （活動性の高い高齢者の転倒危険因子の検討）	―	平成25年9月	Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	TUG が11秒以下で身体能力が高いとされる高齢者を対象として転倒因子を検討した。その結果、転倒群と非転倒群において筋力に差はみられなかったが、振動覚の低下と片脚立位時間の低下が転倒因子として有意であった。この結果から、身体能力が高い高齢者に対しては振動覚検査と片脚立位時間で転倒予測を行う必要性がある事が示唆された。 担当部分：研究計画、解析、考察、まとめ、発表 共同演者名：Yoshikawa Y, Kajita H, Matsuda K, Uemura M, Koeda M, Sugimoto M, Shuntoh H
5. Case report on wound healing promotion of an intractable pressure ulcer by long irradiation of low-intensity pulse mode ultrasound （低出力超音波の長時間照射によって難治性褥瘡が治癒促進した症例）	―	平成25年9月	Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	褥瘡に対する超音波療法の効果について検討した。超音波は固定式の超音波装置を用いて、褥瘡の洗浄時にフィルムドレッシングの上から照射した。その結果、コントロール期間に比べ有意に創の縮小が確認された。上記の結果から、褥瘡に対する固定式超音波療法は褥瘡の創治癒を促進させる可能性があるため、臨床での積極的に使用する必要性がある。 担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者名：Maeshige N, Fujiwara H, Honda H, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Sugimoto M
6. Greater influence of pain than motor function on the fear of falling （有痛性症例の転倒は運動機能よりも影響が大きい）	―	平成25年9月	Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	大腿骨近位部骨折患者は転倒リスクが高いことが示されている。最近の研究では運動機能が低下することで恐怖感が出現することを報告している。しかし、これらの研究は疼痛との関連性は検討していない。そのため、本研究では疼痛と運動機能が恐怖感に及ぼす影響を調査した。その結果、疼痛が運動機能よりも大きく影響を及ぼしていることが確認された。それゆえに、疼痛の緩和が優先されることが示唆された。 担当部分：考察、まとめ 共同演者名：Kakihana H, Koeda M, Yamashita T Uemura M, Yoshikawa Y
7. Critical point of direct microcurrent stimulation intensity to promote galvanotaxis for in human dermal fibroblasts （ヒト皮膚線維芽細胞の遊走を促進する刺激強度の重要なポイント）	―	平成25年9月	Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	培養線維芽細胞の電気走性について検討した。これまで、コントロール群よりも100μAで陰極方向へ遊走することを確認してきたが、それ以上の強度について検討していない。本研究は100μA以上の強度を確認することが目的である。その結果、遊走は200μAで最大となり300μAで抑制されることが確認された。そのため、臨床で褥瘡に電気刺激療法を実施する際には200μA前後が望ましいことが推測される。 担当部分：細胞培養、実施、考察、まとめ 共同演者名：Uemura M, Maeshige N, Yoshikawa Y, Terashi H, Usami M, Takata S, Sugimoto M
8. Effect of living at home on falls self-efficacy to patients with hip fracture （股関節骨折患者の自宅生活における自己効力感低下の影響）	―	平成25年9月	Asian Confederation for Physical Therapy（台湾）	自己効力感は大腿骨近位部骨折患者の転倒恐怖心と関連している。本研究は大腿骨近位部骨折患者の自己効力感に関する研究を実施した。対象を入院訓練群と退院訓練群に分け、比較検討した。その結果、転倒に対する自己効力感は退院訓練群において改善し、入院訓練群では変化がみられなかった。そのため、早期に退院し自宅で理学療法を行うことで自己効力感が改善する可能性が確認された。 担当部分：考察、まとめ 共同演者名：Koeda M, Kakihana H, Uemura M, Yoshikawa Y, Kajita H, Bishu N

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. The effects of direct micro-current stimulation on proliferation of human dermal fibroblasts（ヒト皮膚線維芽細胞の増殖に対する直流微弱電流刺激の効果）	―	平成27年5月	World Confederation for Physical Therapy（シンガポール）	培養線維芽細胞に対して周波数を変更した電気刺激療法を実施し、細胞増殖について検討した。その結果、2Hz群で細胞増殖が確認された。また64Hzについては細胞増殖が抑制される結果となった。そのため、臨床で電気刺激療法を実施する際は2Hzで実施するすることで創の治癒が促進される可能性が示唆され、周波数の設定の必要性が示唆された。 担当部分：研究計画、細胞培養、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者名：Yoshikawa Y, Sugimoto M, Uemura M, Matsuo M, Maeshige N, Shuntoh H
10. Early ambulation improves activities of daily living and reduces hospitalization in aneurysmal subarachnoid hemorrhage patients（くも膜下出血後の早期歩行開始は日常生活活動を改善し、入院期間を減少させる）	―	平成27年5月	World Confederation for Physical Therapy（シンガポール）	脳卒中専門の急性期病院に救急搬送された初発くも膜下出血患者の早期離床とその予後について検討した。その結果、早期離床を促せた患者ほど転帰がよく、早期離床が遅れるほど転帰が悪かったという結果が得られた。そのため、可能な限り早期離床を促してリハビリテーション介入する必要性が示唆された。 担当部分：考察、まとめ 共同演者名：Uemura M, Kuwata S, Yoshikawa Y, Maeshige N, Inoue T, Natsume S, Yoshida Y, Matsumoto H
（国内発表）				
1. 転倒リスク評価における振動覚検査の重要性	―	平成22年5月	日本理学療法学術大会（岐阜県）	転倒因子として振動覚の低下が考えられているが、振動覚の低下は自覚症状に乏しいことが指摘されている。そのため、振動覚と転倒恐怖心との関連性を確認した。その結果、運動機能の低下は転倒恐怖心に影響を及ぼすが、振動覚の低下は転倒恐怖心に影響を与えないことが確認された。そのため、振動覚のみが低下している活動性の高い高齢者は転倒に注意が必要であることが示唆された。 担当部分：研究計画、実施、発表 共同演者：吉川義之，松田一浩，竹内真，福林秀幸，高尾篤，安川達哉，井上由里，梶田博之，杉元雅晴
2. 身体能力及び活動性の高い高齢者の転倒因子の検討	―	平成22年7月	兵庫県理学療法士学会（兵庫県朝来市）	身体能力が高く活動性の高い高齢者の転倒因子を検討した。上記の高齢者は身体能力が高いため、筋力低下や歩行能力は低下していなかったが、振動覚と片脚立位のみ低下していた。そのため、身体能力が高く活動性の高い高齢やの転倒因子を検討する際は振動覚と片脚立位時間を計測する必要性が示唆された。 担当部分：研究計画、実施、発表 共同演者：吉川義之，松田一浩，福林秀幸，竹内真，高尾篤，梶田博之，杉元雅晴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. 通所リハビリテーションにおける内部障害の罹患率と課題	―	平成22年7月	兵庫県理学療法士学会（兵庫県朝来市）	通所リハビリテーション利用者には内部障害を合併した高齢者が多くいるにも関わらず情報が乏しい。そのため、服薬状況や本人・家族への問診により内部障害の罹患率を検討した。その結果、循環器疾患の罹患率が多くみられた。これは運動中のリスク管理が重要となってくるため、今後の情報提供の際に注意していく必要性が示唆された。 担当部分：研究計画、解析、考察、まとめ 共同演者：松田一浩，吉川義之，福林秀幸，竹内真，高尾篤
4. 仙骨部褥瘡患者に対する直流微弱電流刺激療法の試み	―	平成23年5月	日本理学療法学術大会（宮崎県）	仙骨部褥瘡患者に対して標準治療の補完療法として電気刺激療法を実施した。刺激条件は褥瘡部陰極、周波数0.1Hz、強度100μA、時間40分、週5回とした。その結果、停滞していた創面積が縮小しはじめ最終的に治癒に至った。 担当部分：実施、解析、発表 共同演者：吉川義之，高尾篤，前重伯壮，杉元雅晴
5. 30°側臥位の快適さの検証	―	平成23年7月	兵庫県理学療法士学会（兵庫県姫路市）	30度側臥位は褥瘡予防のポジショニングで最も頻繁に用いられる体位である。しかし、30度側臥位は快適性に欠けるとの報告がある。そこで、体幹の捻じれに配慮して快適性について検討した。その結果、体幹に捻じれがない30度側臥位は背臥位と同程度の快適性がある事がLF/HFの結果から確認された。そのため、30度側臥位を実施する際は体幹の捻じれに注意する必要性がある。 担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者：吉川義之，松田一浩，高尾篤，杉元雅晴
6. 運動機能と活動性により群分けした転倒因子の検討	―	平成23年7月	兵庫県理学療法士学会（兵庫県姫路市）	高齢者の転倒因子を運動機能の高い高齢者と低い高齢者に群分けして検討した。その結果、運動機能の高い高齢者は振動覚検査と片脚立位時間が転倒因子として有意であった。運動機能の低い高齢者は筋力やバランス能力・歩行スピードなど多種多様な原因が考えられた。そのため、転倒予測を行う際は運動機能により群分けして行うことで、より徹底したリスク管理が可能になることが示唆された。 担当部分；研究計画、解析、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，高尾篤，松田一浩，福林秀幸，竹内真，杉元雅晴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. 直流微弱電流刺激療法の臨床効果	―	平成23年9月	日本褥瘡学会（福岡県）	褥瘡患者3症例に対して電気刺激療法を実施し、創の縮小について検討した。電気刺激療法を実施する際は標準治療の補完療法として実施した。その結果、3症例とも創の縮小が促進され、最終的に治癒に至った。その他、副作用などは見られなかった。これらの結果から、褥瘡治療の補完療法として電気刺激療法を実施する事は早期治癒につながることが示唆される。 担当部分：計画、実施、解析、発表 （吉川義之，前重伯壮，寺師浩人，杉元雅晴）
8. 直流微弱電流刺激療法がポケットを有する褥瘡に与える効果	―	平成23年10月	日本物理療法学会（徳島県）	ポケットを有する仙骨部褥瘡患者に対して、標準治療の補完療法として電気刺激療法を実施した。ポケットを有する褥瘡は治癒に時間がかかり、難渋することが多い。そのため、加速的な治癒を目的に電気刺激療法を併用した。その結果、電気刺激療法によりポケットが6週間で閉鎖した。これまでポケットに対する物理療法は陰圧閉鎖療法のみであったが、電気刺激療法がポケットに対する物理療法として効果がある可能性を示唆する結果となった。 担当部分：計画、実施、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，松田一浩
9. 立ち上がり可能な高さと日常生活活動の関連性について	―	平成23年11月	近畿理学療法士学術集会（滋賀県）	立ち上がり可能な高さと日常生活活動との関連性を検討した。対象を通所リハビリテーション利用者とした。その結果、30㎝からの立ち上がりが可能な高齢者は日常生活が自立している方が多く、30㎝から立ち上がりができない高齢者は日常生活に介助を有する方が多いという結果になった。そのため、30㎝からの立ち上がりをひとつの目安になることが示唆された。 担当部分：研究計画、実施、解析、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，鈴木昌幸，高尾篤，福林秀幸，竹内真，松田一浩，杉元雅晴
10. 糖尿病性神経障害における振動覚検査のカットオフ値と検査精度	―	平成24年5月	日本糖尿病学会（神奈川県）	糖尿病性神経障害患者を対象として音叉を用いた振動覚検査について検討した。音叉を用いた振動覚検査は足関節内果もしくは母趾MP関節で実施する。本研究では検査精度とカットオフ値について検討した。その結果、糖尿病性神経障害患者は内果で検査をするよりも母趾MP関節で検査を実施する方が検査精度が高く、有用であることが示唆された。 担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者：吉川義之，松本大輔，松田一浩，高尾篤，梶田博之

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11. 加齢による振動覚の変化と糖尿病性神経障害患者の特異性	―	平成24年5月	日本理学療法学術大会（兵庫県神戸市）	振動覚は加齢により低下すると言われているが、それらを検討した報告は散見される程度である。そのため、健常成人、健常高齢者、糖尿病性神経障害患者の3群で比較検討した。その結果、健常成人に比べ健常高齢者の振動覚閾値は有意に高く、また健常高齢者に比べ糖尿病性神経障害患者の振動覚閾値は有意に高かった。 担当部分：研究計画、実施、解析、発表 共同演者：吉川義之，松本大輔，松田一浩，高尾篤，梶田博之，杉元雅晴
12. 腰痛患者の腹部筋群の筋厚と筋力に関する検討	―	平成24年5月	日本理学療法学術大会（兵庫県神戸市）	腰痛患者の腹筋筋力の低下は従来から指摘されている。本研究では超音波診断装置を用いて、腹直筋、腹斜筋ならびに腹横筋腹横筋の筋厚を測定し、筋力との関連性を検討した。その結果、筋厚と筋力には有意な相関があった。そのため、腰痛が増悪している患者で筋力が測定できない場合は、超音波診断装置を用いて筋厚を測定することが有用であると思われる。 担当部分：研究計画、データ採取、考察、まとめ 共同演者：高尾篤，福林秀幸，竹内真，吉川義之，松田一浩，加納和佳，杉元雅晴，中山潤一
13. 脳卒中片麻痺患者における膝伸展筋力対称性とバランス能力およびADLとの関連性	―	平成24年5月	日本理学療法学術大会（兵庫県神戸市）	脳卒中片麻痺患者の膝伸展筋力とバランス能力およびADLの関連性について検討した。その結果、脳卒中片麻痺患者は膝伸展筋力の非対称性が強い方ほどバランス能力が悪く、ADLにおいて介助を必要としていた。そのため、脳卒中片麻痺患者の理学療法を実施する際には膝伸展筋力の非対称性を改善させる必要性がある事が示唆された。 担当部分：研究計画、解析、まとめ（鈴木昌幸，吉川義之，藤原正盛，吉川絵美，梶田博之，夏目重厚）
14. 大腿骨近位部骨折術後患者における自宅生活経験による転倒自己効力感の向上について	―	平成24年5月	日本理学療法学術大会（兵庫県神戸市）	大腿骨近位部骨折患者を対象として、転倒自己効力感の変化について検討した。その結果、入院期間中は運動機能の改善はみられたが、転倒自己効力感については変化がみられなかった。その後、自宅退院した後には運動機能の改善はみられなかったが、転倒自己効力感は改善した。上記の結果から、自宅への生活に合わせた介入が必要であり、早期に外泊訓練する必要性が示唆された。 担当部分：考察、まとめ 共同演者：小枝允耶，植村弥希子，長尾徹，吉川義之，柿花宏信，山下拓，田川雄一，武政誠一

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
15. 股関節運動に伴う大転子部皮膚ずれ量測定の試み	―	平成24年8月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会（兵庫県神戸市）	股関節運動は大転子の骨突出部を移動される。これは大転子部褥瘡患者にとってはポケットを形成する原因となる。そのため，どの程度の運動でどの程度の骨突出の移動があるかを確認する必要がある。その結果、股関節70度以上の屈曲でずれ量の増大が確認された。上記の結果から、大転子部の褥瘡を保有する患者に対しては股関節屈曲70度までにすることが必要である。 担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：前重伯壮，上山徹，吉川義之，寺師浩人，杉元雅晴
16. 車いす駆動方法と坐骨部ずれの関連性についての検証	―	平成24年9月	日本褥瘡学会（神奈川県）	車椅子駆動時の坐骨部に加わるずれについて検討した。車椅子駆動時には体幹の動きがあるため、坐骨部へずれが加わっていた。その際に、バックレストから背中を離さずに駆動することでずれは減少した。また、電動車いすは全くずれが出現しなった。上記の結果から、坐骨部褥瘡の術後の患者さんへのADL指導は、電動車椅子、自走車椅子の順にしていく事が望ましいことが示唆された。 担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：植村弥希子，杉元雅晴，山本将之，前重伯壮，吉川義之，寺師浩人
17. 大腿外側部へのポリウレタンフィルムの貼付が大転子部皮膚のずれに対して与える抑制効果	―	平成24年9月	日本褥瘡学会（神奈川県）	大転子部褥瘡患者は股関節屈曲動作に伴い、ポケットを形成する可能性がある。そのため、ずれ量を最小限する必要性がある。そこでポリウレタンフィルムの貼付によるずれの抑制効果について検討した。その結果、貼付することで45%の抑制が確認された。 担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：上山徹，前重伯壮，吉川義之，植村弥希子，寺師浩人，杉元雅晴
18. ヒト皮膚線維芽細胞の電気走性を促進させる直流微弱電流刺激強度の臨界点	―	平成24年12月	日本創傷治癒学会（神奈川県）	培養線維芽細胞に直流パルス電流刺激を実施し、線維芽細胞の電気走性を確認した。線維芽細胞は微弱な電流でも遊走が促進され、200μA群でコントロール群と有意な差が認められた。また、この電気走性は300μAでは抑制される結果となった。 本研究の結果から、褥瘡患者に対して電流刺激療法を実施する際は200μA以下で実施する事が望ましいことが示唆された。 担当部分：細胞培養、実験、解析、まとめ 共同演者：植村弥希子，前重伯壮，吉川義之，寺師浩人，宇佐美眞，高田哲，杉元雅晴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
19. 寝たきり患者に対するポジショニング評価方法の検討および評価に基づいた指導による改善 - 第２報 -	―	平成25年7月	日本褥瘡学会（兵庫県神戸市）	褥瘡対策委員会で実施したポジショニングが病棟でどの程度把握し、実施できているかの検討を行った。その結果、胸郭・骨盤の角度設定不足、体圧分散不足、四肢の圧迫管理不足、マットレス管理不足などの問題点があげられた。この結果より、今回不足であった項目に対して再度チェックリストを作成し、より徹底したポジショニング管理ができるように試みる。 担当部分：考察、まとめ 共同演者：前重伯壮，上山徹，山本智恵子，大橋郁乃，尾上真俊，橋本弘子，植村弥希子，吉川義之，杉元雅晴，寺師浩人
20. 低出力パルスモード超音波の長時間照射により治癒の停滞が改善した一症例	―	平成25年7月	日本褥瘡学会（兵庫県神戸市）	褥瘡に対する超音波療法を検討した症例報告である。基礎研究で得られた結果を臨床適応させた方法である。低出力パルスモードでSATP強度0.1W/cm2の20％パルスモードで実施した。その結果、停滞していた創収縮が改善され、創の加速的治癒につながった。本研究の結果より、低出力パルス超音波は創の縮小に効果があることを証明した。 担当部分：解析、方法、考察、まとめ 共同演者：前重伯壮，上山徹，山本智恵子，大橋郁乃，尾上真俊，吉川義之，植村弥希子，寺師浩人，杉元雅晴
21. シーティングにより、ズレによる圧迫及び食事時のムセが改善された１症例	―	平成25年7月	日本褥瘡学会（兵庫県神戸市）	適切なシーティングを実施する事により嚥下がスムーズとなり活動性が向上しQOLが向上した症例を経験した。理学療法士が介入するまでは普通型車椅子を使用していたが、シーティングが不十分であったため、ティルト・リクライニング型車椅子を導入し適切なシーティングを行うこと改善した症例である。 担当部分：研究計画、実施、考察、まとめ 共同演者：原田浩樹，吉川義之
22. 車いす駆動にて戸の開閉時にかかる坐骨部への負担の検証	―	平成26年9月	日本褥瘡学会（愛知県）	車椅子乗車時に戸の開閉動作を実施する事は多くみられる。しかし、その際に坐骨部に加わるずれ力や圧を検討した研究はない現状である。本研究では戸の開閉時に坐骨部に加わるずれ力と圧力について検討した。その結果、引き戸ではずれ力が少なく、開き戸ではずれ力が高くなることが確認された。そのためADL練習を実施する際は開き戸の使用は注意する必要がある。 担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：西山友貴，杉元雅晴，松本流音，藤島里英子，吉川義之

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
23. ヒト皮膚線維芽細胞増殖における電気刺激周波数の関連性	―	平成26年9月	日本褥瘡学会（愛知県）	褥瘡治癒に必要な線維芽細胞を培養し、電気刺激を実施することでの変化を検討した。異なった周波数で電気刺激を行った結果、64Hzで細胞増殖が抑制され2Hzで細胞増殖が確認された。そのため、褥瘡患者に対いて電気刺激を実施する際は周波数64Hzを使用することは勧められず、2Hzを使用することが望ましいと考えられる。 担当部分：研究計画、細胞培養、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，杉元雅晴，前重伯壮，植村弥希子，藤島里英子，寺師浩人，春藤久人
24. 平地および坂道での車いす駆動が坐骨部のずれに与える影響	―	平成26年3月	日本褥瘡学会近畿地方会学術集会（兵庫県神戸市）	車椅子を自操で駆動する際の坐骨部へ加わるずれ力について検討した。健常成人を対象として、平地走行と坂道走行を実施した。その結果、坂道走行は平地走行に比べ有意にずれ力が発生した。理由としては体幹の前屈動作が平地走行に比べ大きくなることが考えられた。そのため、車椅子走行を実施する際は体幹の前屈動作に注意する必要性が示唆された。 担当部分：研究計画、解析、考察、まとめ 共同演者：山本将之，杉元雅晴，前重伯壮，吉川義之，植村弥希子，桑田真吾，小野くみ子，高田哲，寺師浩人
25. ストレッチングボードを用いた足関節底屈筋群の持続伸張が糖尿病患者の足関節背屈可動域に与える影響と足底圧変化の関連性	―	平成27年5月	日本創傷・オストミー・失禁管理学会（千葉県）	糖尿病性神経障害患者の多くは足関節背屈可動域制限が出現し、足底圧の上昇が確認される。この足底圧上昇は糖尿病性足潰瘍の原因となるため、足関節背屈可動域の維持・拡大が必要である。そのため、ストレッチングボードを用いた持続伸張が背屈可動域改善に効果があるかを検討した。その結果、ストレッチングボードによる持続伸張は背屈可動域を拡大させ、足底の局所圧を低下することが示唆された。 担当部分：解析、考察、まとめ 共同演者：前重伯壮、平沢良和、守口舞輝、吉川義之、丸尾郁、寺師浩人、藤野英己
26. 線維芽細胞の電気走性における直流微弱電流刺激強度と integrin α2β1発現の関連性	―	平成27年9月	日本褥瘡学会（宮城県）	培養線維芽細胞に対して電気刺激を実施し、細胞の電気走性について検討した。線維芽細胞は陰極方向に200μAで遊走が促進され、300μAで抑制されることが確認された。また細胞接着因子であるintegrin α2β1が電気刺激側へ移動していることが確認され、200μAの刺激により線維芽細胞が陰極側へ遊走することが確認された。この結果から臨床で実施する場合は強度を200μAで実施することで治癒効果が促進されることが示唆された。 担当部分：細胞培養、解析、考察、まとめ 共同演者：植村弥希子，前重伯壮，古賀由華，吉川義之，藤島里英子，杉元雅晴，青山（石川）倫子，三好真琴，寺師浩人，宇佐美眞

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
27. 直流パルス電流の刺激周波数が線維芽細胞の遊走およびFocal adhesion kinaseに与える影響	―	平成28年10月	日本物理療法学会（宮城県）	培養線維芽細胞に異なった周波数の電気刺激を実施して、細胞遊走の活性化マーカーであるFAKに与える影響について検討した。その結果、コントロールと10Hz群に比べ2Hz群でFAKが活性化し、2Hz群ではスクラッチ法でも細胞の遊走が確認された。そのため、遊走においても周波数が影響することが示唆され、2Hzが有用であること確認された。 担当部分：細胞培養、実施、考察、まとめ 共同演者：植村弥希子，前重伯壮，井上岳人，古賀由華，杉元雅晴，吉川義之，宇佐美眞
28. 直流パルス電流刺激の周波数の違いにより筋線維芽細胞への分化に与える効果	―	平成28年12月	日本創傷治癒学会（東京都）	培養線維芽細胞の遊走に関する電気刺激の最適周波数を検討した。スクラッチ法にて線維芽細胞の遊走に最適な周波数を求めた結果、2Hz群がコントロール群や10Hz群に比べ有意に遊走していることが確認された。 担当部分：細胞培養、実施、まとめ 共同演者：植村弥希子，杉元雅晴，吉川義之
29. ヒト皮膚由来線維芽細胞の電気走性における放電操作の有効性	―	平成28年12月	日本創傷治癒学会（東京都）	培養線維芽細胞に直流微弱電流刺激を実施し、放電操作の必要性について検証した。直流電流刺激では蓄電効果により、そのままにしておくと逆向き電流が発生するため、放電操作が必要と仮説を立てて実施した。その結果、放電操作をすれば陰極側へ遊走し、放電操作をしなければ線維芽細胞が逆向き（陽極）に遊走した。 担当部分：細胞培養、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，井上里英子，杉元雅晴，植村弥希子
30. 糖尿病患者に対する足関節底屈筋群のストレッチングによる歩行時足底圧の減少	―	平成28年12月	日本創傷治癒学会（東京都）	糖尿病患者は足底圧の上昇により胼胝が形成され、それが足潰瘍になることが示されている。そこで、本研究ではストレッチングをする事で歩行時の足底圧に影響を及ぼすかを検討した。その結果、ストレッチングは歩行時の集中的な足底圧を分散し、圧を減少させることが確認された。 担当部分：方法、考察、まとめ 共同演者：前重伯壮，平沢良和，守口 舞輝，吉川義之，寺師 浩人，藤野 英己

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
31. 糖尿病神経障害患者の胼胝および創傷発生に対する振動覚検査の有用性～3年間の追跡調査による検討～	―	平成29年5月	日本下肢救済・足病学会学術集会（福岡県）	糖尿病神経障害患者の胼胝形成に関与する理学療法評価の調査と3年間追跡調査し、創傷発生者と非発生者を比較検討した。その結果、振動覚の低下、触圧覚閾値の上昇、足関節背屈・母趾伸展可動域の低下などが胼胝形成に影響を及ぼしていた。また、創傷発生者は振動覚の低下が著しく、振動覚の低下は創傷発生の予測因子として有償である事が示唆された。 担当部分：計画、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之，前重伯壮，渡邊佑，守口舞輝
32. 歩行時足底圧を減少させる経皮的電気刺激療法の至適条件および機序の検討	―	平成29年8月	日本褥瘡学会（岩手県）	糖尿病性神経障害患者は足関節背屈可動域により足底圧が上昇するといわれている。そのため、電気刺激を使用し相反抑制を用いて背屈可動域の改善および筋の伸張性が増加すると考えた。まず、健常成人に対して基礎的研究を実施し、糖尿病性神経障害患者に適応するのが望ましいため、健常成人を対象とした研究を実施した。その結果、電気刺激により相反抑制が働き、H波が有意に抑制され、足底圧の低下が確認された。 担当部分：研究計画、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、守口舞輝、前重伯壮、寺師浩人、藤野英己
33. 疼痛の増悪によりADL制限を呈した関節リウマチ患者に対する振動・温熱・磁気刺激療法の効果	―	平成29年10月	日本物理療法学会（奈良）	疼痛により日常生活活動が低下し、歩行困難となった3症例に対して、温熱・振動・磁気刺激を実施し、疼痛の緩和を試みた。その結果、薬剤や電気刺激療法では疼痛の緩和が図れなかった3症例の疼痛が緩和し、日常生活活動レベルが改善した。その内容をまとめ、学会発表した。 担当部分：計画、実施、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、門條宏宣
34. 褥瘡部の洗浄頻度と創治癒期間の関連性	―	平成29年10月	日本物理療法学会（奈良）	理学療法士は水治療法として褥瘡部の洗浄を実施する事が可能であるが実施されていない現状にある。そのため、訪問リハビリテーション実施中に看護師と共に創部の洗浄を実施した7症例と訪問看護師のみが洗浄を実施した5例を比較検討した。その結果、理学療法士が訪問リハビリテーション中に洗浄を実施した群が有意に治癒日数が早かった。これは単純に洗浄回数が多かったことが要因と考えられた。そのため、理学療法士も洗浄を実施する必要がある事が示唆された。 担当部分：計画、実施、評価、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、杉元雅晴、植村弥希子、前重伯壮、平松輝隆
35. 褥瘡基礎研究の最先端：異分野融合 周波数と通電率による線維芽細胞への影響 褥瘡の加速的治癒を促す電気刺激療法の確立を目指して	―	平成30年9月	日本褥瘡学会（神奈川）	皮膚由来線維芽細胞に対して電気刺激を実施し、周波数依存ではなく通電率による線維芽細胞への影響を検討した。その結果、通電率が高すぎる場合は細胞生存率が低下し、低すぎる場合には細胞遊走や増殖能が低下した結果となり、50%の通電率が最適であることが確認された。 担当部分：計画、細胞培養、考察、まとめ 共同演者：植村弥希子、杉元雅晴、吉川義之、平松輝隆

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
36．ストレッチングと電気刺激療法の併用が糖尿病患者における歩行時の足底圧異常に対して与える是正効果	一	令和1年6月	日本下肢救済・足病学会学術集会（神戸）	糖尿病患者の足潰瘍は足関節可動域制限による前足部の足底圧の上昇が知られている。これまで我々は健常者に対して、下腿三頭筋へのストレッチングと前脛骨筋に対して電気刺激を実施することで前足部の足底圧を減少させることを確認した。本研究は糖尿病患者に対して実施し、健常者と同様の結果であるかを確認した。その結果、糖尿病患者においても同様の結果が得られ、下腿三頭筋へのストレッチングと前脛骨筋への電気刺激療法は足底圧を減少させることが確認された。 担当部分：実施、評価、まとめ　　共同演者：守口舞輝、前重伯壮、藤井美樹、金沢星慶、吉川義之、北村和也、奥野史也、細見雅史、原賢太、寺師浩人、藤野英己
37．膝OA一症例に対する経皮的電気刺激治療の鎮痛効果が日常生活と精神活動に及ぼす影響	一	令和1年9月	日本物理療法学会（東京）	変形性膝関節症に対する経皮的電気刺激療法（TENS）は鎮痛効果が示されている。本研究は、1症例に対して日常生活上でも装着できる電気刺激治療器を用いて鎮痛効果を検証するとともに日常生活と精神活動を検証した。その結果、鎮痛効果が得られ、日常生活と精神活動にも良い影響を与えていることが示唆された。今後は症例数を増やして検討していく予定である。 担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：徳田光紀、庄本康治、吉川義之、瀧口述弘、山口智史
38．上腕三頭筋腱振動刺激時の肘関節角度の違いが運動錯覚の惹起に及ぼす影響	一	令和1年9月	日本物理療法学会（東京）	振動刺激は運動錯覚を起こすことが明らかとされている。この運動錯覚は筋紡錘への刺激により起こるものとされているため、振動刺激による運動錯覚は筋緊張制御に期待できる物理療法手段である。本研究では上腕三頭筋に対して振動刺激を加えることにより肘関節角度に影響を及ぼすかを検討した。その結果、上腕三頭筋への振動刺激は肘関節角度に影響を及ぼし運動錯覚が確認された。今後は脳卒中片麻痺患者の痙性筋に対して実施していくことで臨床応用に期待できる。 担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：城野靖朋、神里巌、吉川義之、辻下守弘
39．肉眼的には判別困難な深部損傷褥瘡を超音波検査により確認できた褥瘡の一症例	一	令和1年9月	日本物理療法学会（東京）	褥瘡は圧迫とずれ力により発生するといわれているが、深い褥瘡については骨側から発生することが知られている。中でも皮膚損傷のない深部褥瘡（DTI)については早期判別が困難であり、皮膚損傷が確認された時には骨まで至る難治性潰瘍となっていることがある。本研究ではDTIの疑いのある紫斑形成された褥瘡に対して超音波画像診断装置を用いて早期よりDTIを確認した。その結果、DTIが確認され早期より介入できたことで皮膚損傷が発生する前に治癒となった症例を経験した。今後は症例数を増やすことで早期介入の効果を検証したいと考えている。　　担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：植村弥希子、北村瑠玲、杉元雅晴、吉川義之、平松輝隆、山浦生也、寺師浩人
40．直流パルス微弱電流刺激療法の電極改良により治癒が促進された症例	一	令和1年9月	日本物理療法学会（東京）	褥瘡に対する電気刺激療法は治癒促進効果が示されている。しかし、創が小さくなるにつれて創部に適切に電流刺激をすることが難しくなる。そこで本研究は改良電極を用いて創の周囲から創部に対して適切に電流刺激が実施できるように実施した。その結果、小さくなった褥瘡に対しても変わらず電流刺激ができ、治癒速度を落とすことなく電気刺激療法が実施できた。今後は症例数を増やして検討していく必要がある。 担当部分：実施、評価、まとめ 共同演者：出口太紀、杉元雅晴、植村弥希子、吉川義之、平松輝隆、巻渕弘治

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
「研究大会」				
1. 温熱・振動・磁気刺激により疼痛が緩和した一症例	―	平成28年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会（茨城）	坐骨神経痛によりADLが低下した症例に対して温熱・振動・磁気刺激の3つの要素がある物理療法機器を使用した。坐骨神経痛に対して薬物療法や電気刺激療法を実施したが疼痛が緩和しなかったため、温熱・振動・磁気刺激が可能な物理療法機器で緩和を試みた。その結果、疼痛が緩和しADLが改善したため報告した。 担当部分：計画、実施、解析、考察、まとめ、発表 共同演者：吉川義之、小枝允耶、小枝美由紀
2. 通所介護利用者における2型糖尿病罹患の有無が身体機能に及ぼす影響に関する調査―後ろ向き調査研究―	―	平成29年10月	リハビリテーション・ケア合同研究大会（福岡）	近年、糖尿病は筋力低下の原因や日常生活活動低下の原因とされている。そのため、当通所施設利用中の方を対象を糖尿病群と非糖尿群に分け、過去6ヶ月の身体機能を後ろ向きに調査した。その結果、非糖尿病群は身体機能が向上していたにも関わらず、糖尿病群は能力の維持もしくは低下していた。そのため、糖尿病患者に対する運動療法をより吟味する必要性が示唆された。 担当部分：計画、解析、考察、まとめ 共同演者：松本洋平、吉川義之、門條宏宣、吉川絵美、小枝允耶、菅原史帆、岩城一孝、松田美佳、長谷川千紗、小倉敬史、水岡崇、藤井勇太、千田日向子

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3月 31 日
氏名　笹野 弘美

研　究　分　野	研 究 内 容 の キ ー ワ ー ド
総合領域分野・応用健康科学分科	ヘルスプロモーション、介護予防、地域保健、理学療法、フラダンス

教 育 上 の 能 力 に 関 す る 事 項

事　項	年月日	概　要
1　教育方法の実践例		
1）高齢者の体力測定実施	平成 26年4月 ～ 平成 30年3月	高齢者の体力とヘルスプロモーションについて学習し、地域在住高齢者に対し体力測定の企画及び実施、結果のフィードバックを行うことで、高齢者の問題点について考える。体力測定に必要な知識とその結果が意味することを理解し、また、対象者に適切なフィードバックをする必要性を理解することができた。
2）小規模多機能型居宅介護施設でのレクリエーション実習の実施	平成 26年4月 ～ 平成 30年3月	小規模多機能型居宅介護施設におけるレクリエーションの企画、実施し、理学療法士が行うレクリエーションについて学習する。理学療法士がレクリエーションを行う意義、同じ内容であっても対象者の状態に応じた対応の必要性を理解できた。
3）高齢者へ運動指導を実施	平成 26年4月 ～ 平成 30年3月	地域在住高齢者に対し身体的精神的機能の維持を目的とした運動指導を行い、運動習慣をつけていただく方法を検討する。地域で生活する高齢者の特性について理解し、状態に応じて適切な運動を選択し指導する必要性を理解した。
4）医学部・薬学部・看護学部とともに行事を企画する	平成 26年4月 ～ 平成 30年3月	医学部・薬学部・看護学部の学生とともに地域住民に対し健康に関する行事を企画、実施。各学部の特色、使用する用語の違いなどを理解し、協働で 1 つの事に対応する必要性と困難さを理解した。
5）地域在住高齢者宅へ訪問を実施	平成 26年4月 ～ 平成 30年3月	医学部・薬学部・看護学部の学生とともに地域在住高齢者宅へ訪問し閉じこもりがちな高齢者を見つけ参加を促すとともに健康面・生活面での問題点を見つけ解決策を検討する。地域在住高齢者の現状を知るとともに、多職種で関わることの必要性を理解した。
6）地域で予防活動に関わる理学療法士の見学及び体験の企画、実施	平成 28年1月 ～ 平成 28年3月	地域で体操教室等の予防活動に関わる理学療法士に同行し見学及び体験をすることで、理学療法士が予防に関わる意義について学習する。理学療法士が予防に関わることの難しさと地域で求められている事について理解した。
7）行政と共同で地域住民の予防活動を企画運営	平成 29年4月 ～ 平成 30年3月	行政の依頼による地域住民の予防活動を企画運営することで、理学療法士と行政との関わり、理学療法士が行政から求められている事について学習するとともに、理学療法士ができる予防活動について検討する。行政、地域在住高齢者それぞれが理学療法士に求めている事、さらに理学療法士が予防活動に関わる必要性について理解した。
8）オンライン講義の実施	令和 2 年 5 月 ～ 現在	オンライン講義を実施するにあたり図の多い講義資料を作成した。また適宜小休憩を入れるなど、学生が集中して受講できるようした。さらに講義後に講義の内容に沿った課題を出すことで学習効果を高めた。
2　作成した教科書，教材		
1）スライド作成	平成 26年4月 ～ 平成 30年3月	地域理学療法・ヘルスプロモーション論・地域リハビリテーション演習等において、パワーポイントにてスライドを作成し、講義資料として使用。
2）予防理学療法要論	平成 29年1月	予防理学療法を体系化し基礎から応用までを網羅した教科書
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
1）学生による授業評価	平成 26年7月	ヘルスプロモーション論（履修者 12 名回答率 100%） 満足度：そう思う 100%

	平成 27 年 7 月	ヘルスプロモーション（履修者 17 名回答率 94.1%） 満足度：そう思う＋ややそう思う 100%
	平成 27 年 12 月	地域リハビリテーション演習（履修者 76 名回答率 98.7%） 満足度：そう思う＋ややそう思う 73.4%
	平成 28 年 7 月	ヘルスプロモーション論（履修者 80 名回答率 91.3%） 満足度：そう思う＋ややそう思う 71.2%
	平成 28 年 12 月	地域リハビリテーション演習（履修者 66 名、回答率 80.3%） 満足度：そう思う＋ややそう思う 66.1%
4　実務の経験を有する者についての特記事項 「シンポジウム」 1）AIP 社会の実現に向けて 【リハビリテーション領域】	平成 26 年 11 月	一般の方々に対し、理学療法士について及び AIP（Aging in Place）と理学療法士が AIP に関わる目的について講演
2）学生の地域参加による AIP コミュニティづくり【リハビリテーション関連事業】	平成 27 年 2 月	一般の方々に対し、なごやかモデルにおける当大学リハビリテーション学部の活動報告と今後の課題について講演
3）フラダンスによるロコモティブシンドロームの予防	平成 28 年 2 月	一般の方々に対し、ロコモティブシンドローム及びロコモティブシンドロームとメタボリックシンドローム・認知症とのかかわりについての講演、及び、フラダンス教室の紹介
4）なごやかモデルにおける活動報告	平成 29 年 12 月	なごやかモデルにおける名古屋学院大学の取り組みと成果報告について発表
「講演会」 1）腰痛の予防と改善ワンポイントアドバイス	平成 26 年 12 月	地域住民に対し、腰痛の発生機序と予防・痛みの改善について講演
2）レッツ！タオルを使って健康体操	平成 27 年 5 月	地域住民に対し、タオルを利用して簡単にできるストレッチ及び筋力トレーニングを指導
3）予防理学療法の基本と実践	平成 29 年 7 月	理学療法士に対し、健康・AIP（Aging in Place）・予防理学療法の概要についての講演、及び、介護予防の実践例としてフラダンス教室の紹介
「講座・研修等」 1）安全な介助のために	平成 26 年 3 月	飲食店を開店するにあたり必要な身体的精神的障害者の知識と安全な介助について研修を実施
2）日常での運動機能維持及び低下防止について	平成 27 年 5 月	一般の方々に対し、老化に伴う身体的・精神的変化についての講演、及び、日常生活でできる筋力トレーニングと複合課題を指導
3）AIP について（なごやかモデルの紹介）	平成 27 年 5 月	リハビリテーションスタッフに対し、AIP（Aging in Place）と理学療法士が AIP に関わる目的、及び「なごやかモデル」での AIP への取り組みについて講演
4）痛みとその対処法について	平成 28 年 1 月	フラダンスの講師に対し、レッスン時に問題となる肩・腰・膝の痛みについて、出現の原因と疾患、その対処法について講演
5）簡単筋トレで老化防止	平成 28 年 3 月	地域住民に対し、老化に伴う身体機能の低下について講演、及び、日常生活でできる筋力トレーニングを指導
6）障害者の介助方法について	平成 28 年 8 月	視覚障害者に対する知識の習得と安全な介助方法について研修を実施
7）予防理学療法研修会（基礎編）	平成 29 年 1 月 ～ 平成 29 年 2 月	予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義
8）日常生活で予防しようフレイルと MCI	平成 29 年 3 月	地域住民に対し、フレイルと MCI について概要と予防法について講演、及び、予防のためのストレッチ・筋力トレーニング・複

		合課題について指導
9）いつまでも住み慣れた街で暮らすために ～AIP の実現のための予防理学療法～	平成 29年9月	中部リハビリテーション専門学校同窓会のナイトセミナーにおいて、予防理学療法の基礎と理学療法士の関わり方について講演
10）予防理学療法研修会（基礎編）	平成 29年 12月 ～ 平成 30年2月〃	予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義
11）予防理学療法研修会（基礎編）	平成 30年7月	予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義
12）フラダンスで健康に！	平成 30年8月	NHK 名古屋放送局の情報番組「さらさらサラダ」にてフラダンスの運動効果について解説
13）予防理学療法研修会（総論）	令和 1年 11月	予防理学療法を教授できる理学療法士を養成するため、予防理学療法の基礎について講義
5　その他 1）第 35 回理学療法士・作業療法士養成施設等教員講習会修了	平成 21年2月	厚生労働省と（財）医療研究推進団との共催。理学療法士・作業療法士養成施設の教員の養成確保を図るため、より高度な知識及び技術を習得させ、合わせてリハビリテーション医療の普及及び向上に資することを目的とする研修
2）多職種連携教育	平成 26年4月 ～ 平成 30年3月	名古屋市立大学医学部・薬学部・看護学部、名古屋工業大学大学院医療工学との多職種連携教育を担当
3）名古屋石田学園専門学校星城大学 リハビリテーション学院における教育実績	平成 16年4月 ～ 平成 26年3月	「生活環境学」 日本の家屋構造と地域特性および風習、各疾患の特性と生活上の問題について講義、疾患を想定した住宅改修図面作成 「地域理学療法学」 地域理学療法概論、介護保険法の概要とサービスについて講義、福祉用具概論と実技練習、介護実習センターでの学外授業の企画実施 「理学療法評価学」 関節可動域測定の講義と実技、失調症の講義と検査の実技、脳神経の講義と検査の実技 「リハビリテーション機器」 福祉用具および自助具の講義及び実技練習、ポジショニングの講義及び実技練習 「理学療法概論」 理学療法の歴史、定義、法律、理学療法の内容について講義 「レクリエーション特論」 レクリエーションについての講義、企画、実習
4）名古屋学院大学における教育実績	平成 26年4月 ～ 平成 30年3月	「ヘルスプロモーション論」 ヘルスプロモーションについての講義、体力測定項目の講義と実技、地域高齢者への体力測定 「地域リハビリテーション演習」 体力測定項目の講義と実技、地域高齢者への体力測定、レクリエーションについての講義と企画、小規模多機能型居宅介護施設でのレクリエーション実習、自宅訪問についての講義、地域高齢者宅への訪問実習 「多職種連携教育担当」 名古屋市立大学との合同講義の調整、担当グループの活動の指導
5）奈良学園大学における教育実績	平成 31年4月 ～ 現在	「基礎ゼミⅡ」 学生が文献検索をして発表できるようになるまでの流れの講義と実践 「地域理学療法学」 地域理学療法概論、介護保険法の概要とサービス、福祉用具概論についての講義 「日常生活動作学」 基本的動作総論・各論、福祉用具各論、住環境整備、疾患別日常生活動作についての講義

		「保健医療学概論」 ヘルスプロモーション概論、国内外の全人間的ケアの状況とヘルスプロモーションについての講義
職 務 上 の 実 績 に 関 す る 事 項		
事　　項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
・理学療法士免許	平成 1 年 5 月	登録 第 17016 号
・福祉用具プランナー	平成 17 年 2 月	登録 第 16－30007 号
・住宅改修アドバイザー研修会　修了	平成 18 年 1 月	日本理学療法士協会
・学士（人間科学）	平成 18 年 3 月	人間総合科学大学
・福祉住環境コーディネーター2 級	平成 18 年 7 月	東京商工会議所　登録 第 16－2－03666 号
・専門理学療法士（生活環境支援）	平成 21 年 3 月	日本理学療法士協会　登録　第 5－60 号
・修士（医療リハビリテーション学）	平成 24 年 3 月	神戸学院大学　神戸学院大学医修四号
・認定理学療法士（学校教育）	平成 28 年 3 月	日本理学療法士協会　　登録　第 23－35 号
・博士（医療リハビリテーション学）	平成 31 年 3 月	神戸学院大学　神戸学院大学医リ博甲第六号
2　特許等 特になし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項		
1）研究指導	平成 24 年 4 月 ～ 平成 31 年 3 月	介護老人保健施設あんずにおいて法人内の施設で実施している研究発表会に向け、リハビリテーション科における研究のアドバイザーとして指導
2）人材育成	平成 24 年 4 月 ～ 平成 31 年 3 月	介護老人保健施設あんずにおいて若手スタッフの教育および相談業務を担当
4　その他 【学会および社会活動】 「学会活動」		
公益社団法人　日本理学療法士協会	平成 1 年 5 月	入会（現在に至る）
一般社団法人愛知県理学療法会	平成 1 年 5 月	入会（平成 20 年愛知県理学療法士会より名称変更） （平成 31 年 3 月まで）
特定非営利活動法人(NPO)愛知県理学療法学会	平成 20 年 4 月	継続（愛知県理学療法士会より移行）（平成 31 年 3 月まで）
日本ノーリフト協会	平成 23 年　月	入会（現在に至る）
一般社団法人 日本リハビリテーション工学協会	平成 24 年　月	入会（現在に至る）
理学療法科学学会	平成 24 年　月	入会（現在に至る）
日本理学療法士学会	平成 25 年 7 月	入会（現在に至る）
日本予防理学療法学会	平成 25 年 7 月	入会（現在に至る）
日本理学療法教育学会	平成 25 年 7 月	入会（現在に至る）
日本地域理学療法学会	平成 25 年 7 月	入会（現在に至る）
日本支援工学理学療法学会	平成 25 年 7 月	入会（現在に至る）
日本予防理学療法学会	平成 26 年 2 月	常任運営幹事（現在に至る）
日本理学療法士学会　ガイドライン・用語策定委員会	平成 26 年 3 月 平成 26 年　月	委員（現在に至る） 入会（現在に至る）
一般社団法人　全国大学理学療法学教育学会	平成 26 年 12 月	入会（現在に至る）
一般社団法人　日本老医学会	平成 28 年 4 月	準備委員長（平成 29 年 2 月まで）
第 1 回予防理学療法研修会（基礎編）	平成 28 年 4 月	準備委員（平成 29 年 3 月まで）
第 1 回日本理学療法予防学会サテライト集会	平成 29 年 3 月	集会長
第 2 回日本理学療法予防学会サテライト集会	平成 29 年 4 月	準備委員長（平成 30 年 3 月まで）
第 2 回予防理学療法学会研修会（基礎編）	平成 30 年 4 月	準備委員長（平成 31 年 3 月まで）
第 3 回予防理学療法学会研修会（基礎編）	平成 30 年 4 月	準備委員長（平成 31 年 3 月まで）
第 1 回予防理学療法学会研修会（応用編）	平成 31 年 4 月	準備委員長（現在に至る）
第 4 回予防理学療法学会研修会（総論）	平成 31 年 4 月	準備委員長（現在に至る）
第 2 回予防理学療法学会研修会（各論）	平成 31 年 4 月	入会（現在に至る）
公益社団法人　奈良県理学療法士協会	令和 1 年 5 月	入会（現在に至る）
日本運動器理学療法学会	令和 1 年 5 月	入会（現在に至る）
日本スポーツ理学療法学会		
「社会活動」	平成 16 年 4 月	審査員（平成 21 年 3 月まで）
名古屋市中川区介護認定審査会	平成 26 年 6 月	専門委員（平成 28 年 3 月まで）
名古屋市緑区在宅医療・介護連携部会	平成 26 年 6 月	準備委員（平成 28 年 3 月まで）
名古屋市緑区在宅医療推進多職種連携研修会		
「公的研究活動」	平成 26 年 6 月	名古屋市緑区
「平成 26 年度　在宅医療と介護の連携に関する		研究経費：平成 26 年度　725 千円　研究代表者：稲葉静代

調査」				研究分担者：姜琪鎬，佐藤貴久，小森敦夫，山口一丸，永田康子，赤津裕康，◎笹野弘美　他

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書、学術論文等の名称	単著、共著の別	発行又は、発表の年月	発行所、発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1)予防理学療法要論	共著	平成29年1月	医歯薬出版株式会社	概要：初めての予防理学療法分野の書籍であり、予防理学療法を体系化し、予防理学療法の定義、領域、制度、研究法、予防理学療法の役割などの基礎から栄養学や瀬人間の成長との関わり、メタボリックシンドローム、認知症、スポーツ障害の予防や各疾患の再発予防などの応用までを網羅した教本 全239頁 共著者：大渕修一、井上和久、浦辺幸夫、小松泰喜、笹野弘美他32名 担当部分：学童期の予防 57～62頁 担当部分概要：青年期以降の健康に影響を及ぼす学童期の肥満・メタボリックシンドローム、脊柱変形について発生と評価及び予防について執筆 Ⅱ章共著者：伊藤智子、樋口満、金子文成、藤本修平、中山健夫、柴喜崇、笹野弘美、小松泰喜
2)地域包括ケアと口腔ケア	共著	平成29年8月	(一財)口腔保健協会	概要：歯科医及び歯科衛生士向けの書籍であり、地域包括ケアの基礎知識や医療計画に盛り込むべき5疾病における口腔ケアを解説するとともに、他職種が歯科に望むこと、また歯科が他職種とどのように連携していけばよいかについて、連携に関わる10職種が解説 全192頁 共著者：渋谷恭之、田村清美、赤津裕康、大原弘隆、笹野弘美他25名 担当部分：脳卒中－口腔ケアの実例　36～37頁 多職種におけるそれぞれの役割と相互理解－理学療法士140～144頁 担当部分概要：脳卒中患者の口腔ケアにおける体位の確保と介助方法、多職種連携における理学療法士の役割について執筆
（学術論文） 1)介護老人保健施設職員の移乗関連用具に関する認識及び利用方法に関する研究（修士論文）	単著	平成24年3月	神戸学院大学大学院	東海地区の介護老人保健施設3施設の全職員に、移乗関連用具の認知・使用の有無とその理由、腰痛についての調査を実施した。調査結果より、移乗関連用具の使用目的及びメリット・デメリットを正しく理解できていない可能性が考えられた。また、腰痛が出現している職員は多いが、腰痛予防教育を受けている職員は少なかった。研修会など移乗関連用具の正しい知識を得る機会を増やすことで、職員の腰痛予防、軽減が可能となると考えられる。 A4版全10頁
2)介護老人保健施設職員の移乗関連用具に対する認識及び腰痛との関連	単著	平成25年6月	理学療法科学28巻3号 P.329-P.334	東海地区の介護老人保健施設3施設の全職員に、移乗関連用具の認知・使用の有無とその理由、腰痛についての調査を実施した。調査結果より、腰痛の出現の有無と移乗関連用具の使用の有無と及び使用方法の理解度に関連があると考えられた。職員の卒前及び卒後教育により移乗関連用具の正しい知識について教育することで、職員の腰痛予防、軽減が可能となると考えられる。
3)フラダンスは介護予防プログラムとして有効か	単著	平成28年3月	名古屋学院大学論集医学・健康科学・スポーツ科学篇第4巻2号 P.15-P.22	フラダンス未経験の地域在住高齢女性7名に対し、3か月間（計12回）、1回60分のフラダンスレッスンを実施し、実施前後の運動機能・動作能力、E-SAS（Elderly Status Assessment Set）、HDS-R（改定長谷川式簡易知能評価スケール）を比較した。対象者数が少なく全てにおいて統計学的有意差は認められなかったが、運動機能・動作能力6項目中4項目及びE-SAS5項目中3項目に実数として改善傾向が見られた。また3か月で欠席及

				び辞退者は無かった。介護予防には継続的な運動が重要であり、さらに 3 か月の実施で改善傾向が見られている事より、フラダンスは有効な手段と考える。今後はさらに対象者を増やし検証していく必要があると考える。
4)地域在住高齢者の筋力と骨格筋量及び身体機能との関連性	共著	平成28年3月	名古屋学院大学論集 医学・健康科学・スポーツ科学篇第 4 巻 2 号 P.23-P.33	地域在住高齢者 52 名を対象に身体機能検査、体組成測定、E-SAS（Elderly Status Assessment Set）、MMSE（Mini Mental State Examination）を実施し、筋力と骨格筋量及び身体機能の関連性について検討した。筋力及び骨格筋量は男性に比べ女性に低値であり、骨格筋量は加齢に伴い低下する傾向にあった。筋力と骨格筋量は有意な相関関係にあり特に下肢筋力に比べ握力で相関が強かった。運動機能は筋力との相関を認めたが、骨格筋量との相関は認められなかった。認知機能と筋力及び骨格筋量に相関は認めなかった。今後も同地区にて継続的に測定を実施する予定であり、経年的な経過を検証しながら運動機能向上及び健康増進を目指した地域での取り組みに活かしていきたいと考える。 本人担当部分：研究計画、検査実施、考察 共著者：平野孝行、笹野弘美
5)多職種連携教育 –なごやかモデルの紹介と学生の満足度–	単著	平成29年3月	名古屋学院大学論集 医学・健康科学・スポーツ科学篇第 4 巻 2 号 P.3-P.47	「文部科学省　未来医療研究人材養成拠点形成事業　なごやかモデル」で実施している、高齢化率 44。1%の団地をフィールドにした 3 大学協同での IPE（Interprofessional Education）の紹介と、IPE に参加した学生の満足度調査について報告及び課題の検討を実施した。本調査では現在実施している IPE については概ね満足しているも、3 大学それぞれ独自のカリキュラムがあり、またキャンパスも離れている事より授業内に合同で活動することが困難であった。また単年度参加より複数年度参加した学生の方が肯定的な意見が多いことより、e ラーニングや SNS などの活用により学生同士がより密に連絡を取り合いお互いを理解し共通認識を持つことが必要である。また、各大学でも学生がより学びやすくなるよう時間割の調整や休日利用の検討も必要である。
6)フラダンスの運動効果の検証と介護予防プログラムとしての有効性の検討(第 1 報)	単著	平成30年3月	名古屋学院大学論集 医学・健康科学・スポーツ科学篇第 6 巻 2 号 P.21-P.27	フラダンス未経験の地域在住高齢女性 18 名に対し、週 1 回 60 分のフラダンスレッスンを実施し、レッスン開始前・レッスン開始 3 か月及び 6 か月後の運動機能・動作能力等を比較し、Functional Reach Test、立ち上がりに統計学的有意差が認められた。また有意差は認められなかったが、実数として長座体前屈、片足立ち、反応時間においては半数以上、股外転筋力、Timed Up&Go Test においては 7 割以上の対象者に改善が認められた。さらに希望者 14 名とインストラクターに対し三次元動作解析システムによる動作解析を実施し、レッスン開始後 12 カ月で徐々にインストラクターの動きに近づいてきた。これらより、フラダンスは体幹・股関節周囲筋を多く使い、またステップに応じ個々の筋を選択的に使うため体幹・股関節周囲筋の筋力維持・強化に有効であり。フラダンスは介護予防の有効な手段であると言える。
7)介護予防におけるフラダンスの有効性の検討　(兼:博士論文)	単著	平成31年3月	地域リハビリテーション第 14 巻 1 号 P.80-P.85 神戸学院大学大学院	介護予防におけるフラダンス（以下、フラ）の有効性の検証を目的とした。60・70 歳代のフラ未経験女性 18 名に対し、週 1 回 60 分のフラレッスンを実施し、最後まで継続できた 14 名を対象に、レッスン開始前・レッスン開始から 3 か月毎に 36 か月間の運動機能・動作機能・能力を比較し、立ち上がり、FR に統計的有意差が認められた（$p<0.05$）。また、有意差は認められなかったが、片足立ちにおいて改善傾向が見られた。さらに BMI、握力、股外転筋力、TUG、反応時間、つぎ足、E-SAS、MMSE の平均値においては介入前から介入後 36 カ月ま

				で大きな低下は見られなかった。これらより、フラは体幹・股関節周囲筋の筋力維持・強化に有効であり、介護予防に有効な手段であると考える。さらに、介護予防には運動の継続が重要であるが､18 名中 14 名が 36 か月継続できていることからもフラは介護予防の有効な手段であると考える。
（その他） 「学会発表」 1)フラダンスは介護予防プログラムに利用できるのか！		平成25年5月	第48回日本理学療法学術大会 （名古屋国際会議場）	60 歳代・70 歳代のフラ未経験女性 8 名（平均年齢 66。1 歳）を対象に、3 か月間（週 1 回、計 12 回）のフラレッスンを実施し、実施前後の運動機能・動作能力等を比較した。12 回のフラレッスンにより、半数以上に筋力、バランス能力、柔軟性、歩行能力の改善が認められたことは特筆すべきことである。また E-SAS においても 5 項目中 3 項目に改善が認められたことにより、フラは介護予防に有用な手段となり得ると考える。フラは楽しく実施でき、その「楽しさ」が「運動の継続」に繋がると考える。さらに、人前でダンスを披露することの「満足感・達成感」が、さらなる「運動の継続」に繋がると考える。介護予防には、定期的な、そして継続的な運動が重要であり、フラはその有効な手段であると考える。
2)多職種連携教育とAIP（Aging in Place）コミュニティ作りについての報告		平成27年3月	第24回愛知県理学療法学術集会 （ウインクあいち）	「文部科学省　未来医療研究人材養成拠点形成事業　なごやかモデル」における多職種連携教育の取り組みと同事業において進めている「学生と住民と協働して AIP（Aging in　Place）コミュニティ作り」について報告した。学生がグループで企画運営をする事で職種毎に偏りがちな考え方を知り、お互いに話し合うことで最善の方法を見出すという「チーム」を学内教育で体験する事は重要であり、多くの医療系養成校で取り入れていく必要がある。しかしながら現事業で連携している 3 大学のうち当大学のみキャンパスが離れており、グループでの活動に参加しづらい状況となっている。また、多大学で実施する場合はカリキュラムの調整が難しく、テレビ会議システム等を利用した遠隔及び時間差での受講、e ラーニング等の検討も必要であると考える。
3)在宅医療・地域包括体制構築に向けた行政、地域、大学連携による調査		平成27年6月	第57回日本老年医学会学術集会 (パシフィコ横浜)	名古屋市緑区で在宅医療及び介護施設の利用者本人とその家族、各 20 名、サービスを提供する医師・歯科医師・薬剤師・訪問看護ステーション看護師・療法士・ケアマネージャー（計 279 名）に対し、地域における在宅、高齢者医療、介護体制の問題点と課題を明確化することを目的に在宅医療､施設利用者の声を拾い上げるとともに、サービスを提供する側の意識に関するアンケート調査を行った。利用者に対するアンケートは学生実習の一環として医学部学生による聞き取り調査として実施した。詳細な内容の解析は本会までにはまとめて報告する予定であるが、提供者側の回答率が率直に現在の問題点を反映している可能性が推察される。今回は特に利用者側をある程度抽出した形で進めたが今回の解析を踏まえ、さらに緑区、さらには名古屋市全体の現状・意識調査の展開により在宅医療・地域包括体制構築の糧としたい。 本人担当分：研究計画、調査、データ分析 共同研究者：赤津裕康、姜 琪鎬、笹野弘美、大原弘隆
4)介護予防におけるフラダンスの効果について－運動機能・運動能力に着目して－		平成28年5月	第51回日本理学療法学術大会 （札幌コンベンションセンター）	60・70 歳代の女性 18 名(平均 71.4 歳)を対象に週 1 回のフラレッスンを行い、介入前後の、運動機能・能力について比較した。週 1 回のレッスンにより、10 項目のうち 3 項目において統計学的有意差が認められ、またそれ以外の 5 項目においても改善傾向が認められた事より、フ

				ラは運動機能・能力の維持改善に有用な手段であると考える。また、6 か月間の実施において入院による 1 名を除く 17 名全員が継続できていることも特筆すべきである。フラは楽しく実施でき、人前で披露することの「満足感・達成感」や普段とは違う化粧による「高揚感」が「運動の継続」に繋がると考える。介護予防には定期的・継続的な運動が重要であり、本研究によりフラはその有効な手段であると考える。今後も経時的変化を追うとともに、その他の検査項目との関連性についても検討したい。
5)多職種連携教育－なごやかモデルの紹介と学生の満足度－		平成 28 年 11 月	第 4 回日本理学療法教育学会学術集会（国際医療福祉学院ももちホール）	「文部科学省　未来医療研究人材養成拠点形成事業　なごやかモデル」における多職種連携教育の取り組みと参加した当大学リハビリテーション学部 4 年生 21 名に実施した満足度調査について報告した。ほぼ 6 割の学生が満足したと回答したが、他職種の理解ができたと回答したのは 3 割強であった。このプログラムで連携している 3 大学のうち当大学のみキャンパスが離れており、グループ活動に参加しづらい状況であるため、これが、他の職種を理解できない要因の 1 つとなっていると考える。
6)介護予防におけるフラダンスの効果について－フラ基本ステップの動作に着目して－		平成29年5月	第52回日本理学療法学術大会 第 4 回日本予防理学療法学会学術大会 （幕張メッセ）	研究目的に賛同を得られたインストラクター(48 歳)に対し VICON による動作解析を実施した。また同じく賛同を得られた 60・70 歳代の女性 18 名(平均 71.4 歳)を対象に週 1 回のフラレッスンを行い、14 名(平均 72.4 歳)の希望者に対し動作解析を実施した。ステップはカオ・カホロの 2 種とし、フラの独特の動きである骨盤の傾斜に着目した。インストラクターはどのステップでも肩をほぼ水平に保ったまま骨盤を左右に傾斜させているが、高齢者は介入前には肩と骨盤が同じように傾斜し体が傾いた状態であった。介入後 6 か月では徐々に肩を水平に保つことができるようになり、インストラクターの動きに近づいてきた。フラは体幹・股関節周囲筋を多く使い、またステップに応じて個々に筋を使う。肩をほぼ水平に保ったまま骨盤を左右に傾斜させる場合、これらの筋を必要に応じて個々にコントロールしており、体幹及び体幹・股関節周囲筋の筋力維持・強化に有効であると考える。
7)フラダンスを活用した介護予防プログラムの有効性の検討		令和1年10月	第 6 回日本予防理学療法学会学術大会 第54回日本理学療法学術大会 （広島国際会議場）	60・70 歳代のフラ未経験女性 18 名（平均年齢 71.4±5.1 歳）のうち研究期間中継続できた 14 名（平均年齢 70.9±5.2 歳）を対象に、週 1 回のフラレッスンを 36 か月間実施し、介入前及び介入後 3 か月毎に身体機能・運動機能・能力を検査し比較した。立ち上がり、FR に統計学的に有意な上昇が認められ、片脚立ちに改善傾向が見られた。BMI、握力、股外転筋力、TUG、反応時間、つぎ足、E-SAS、MMSE の平均値・中央値に大きな変化は見られなかった。フラは常に股関節・膝関節屈曲位で体幹を正中位に保持したまま骨盤の回旋・傾斜運動を反復的に行うため、体幹・股関節周囲筋の筋力強化に有効であり、立ち上がり及び FR に改善が認められ、片脚立ちに改善傾向が見られた。また、加齢と共に低下が予測される握力等に大きな変化が見られなかった事から、維持的な効果があると考える。更にフラは、音楽に合わせ、歌詞の意味を理解しハンドモーションで相手に伝え、幾つかの基本ステップを組み合わせて踊るため、認知面に対する効果も期待できる。これらよりフラを用いた介護予防プログラムには個人の身体的要素の一部に短期的効果を期待できる可能性がある。また、18 名中 14 名が 36 か月に渡り週 1 回という頻度で参加の継続ができた事も、プログラムの有用性の一端を示していると考える。

「研修報告書」 1)アメリカサンシティ研修報告		平成27年3月	名古屋学院大学論集 医学・健康科学・スポーツ科学篇第 3 巻 2 号 P.23-P.26	2014 年 10 月、アメリカ・アリゾナ州にあるサンシティへの「文部科学省　未来医療人研究人材養成拠点形成事業『なごやかモデル』」の研修に参加したため報告した。この研修を通して、楽しんで生活をする事の大切さ、人から必要とされることの大切さなど「高齢者の街づくり」に関する多くのヒントを得た。今回得られた知識、情報を『なごやかモデル』の目指す『Aging In Place』に役立てたい。
2)平成 26 年度在宅医療と介護の連携に関する調査報告書		平成 27 年 10 月	緑区地域包括ケア推進会議在宅医療・連携部会 緑区在宅医療・介護連携支援センター	平成 26 年度における在宅医療と介護の現状把握と、課題を抽出し今後の方策を検討するために、医療や介護の受給者および提供者の双方に対する調査を実施した結果の報告書。 本人担当分：研究計画、調査、データ分析 共著者：稲葉静代、姜琪鎬、佐藤貴久、小森敦夫、山口一丸、永田康子、赤津裕康、笹野弘美　他

教　育　研　究　業　績　書

令和２年　３月３１日

氏名　　坪内　善仁

研究分野	研究内容のキーワード
作業療法に関する実務	身体障がい実務、老年期、認知症、介護予防実務、地域

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 1）大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類　「在宅リハビリテーション論」ティーチング・アシスタントとして事例（仮想）を通じた具体的指導の実践	平成29年1月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類3年次のティーチング・アシスタントとして「在宅リハビリテーション論」において、より実践を意識した実技教育とするために、臨床での経験上頻出する事例と困難点・工夫を例示し、直接教示した。そのことで、学生からの自主的な質問数は増加し、総合臨床実習に向けた予習の促進や学生の不安軽減につながる可能性が示唆された。
2）大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類　身体障害作業療法学実習「呼吸器の作業療法」講師	平成29年10月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類3年次の学生20名に対し身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「呼吸器の作業療法」と題して、3時間の授業を行った。講義では、授業カリキュラムに則り、はじめに呼吸器の解剖学・生理学の基本的知識を教示した。次に、医学的情報として、臨床で必要な血液ガスやレントゲンの読み取り方を伝えるとともに、フィジカルアセスメントについて実際の臨床につながるように、実技を交えて学習した。最後に、具体的な症例をグループで検討し、目的を持って学習方法、知識と技術の融合を目指した。学生は、机上の勉強だけでは伝わらない部分も、実技や症例、動画を交えることで具体的にイメージできたとの感想が多くきかれた。
3）大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類　身体障害作業療法学実習「代謝性疾患の作業療法」講師	平成29年11月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類3年次の学生20名に対し身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「代謝性疾患の作業療法」と題して、3時間の授業を行う。講義では、授業カリキュラムに則り、糖尿病および骨粗鬆症の病態生理から説明を行い、解剖学・生理学の基本的知識を教示する。次に、医学的情報として、臨床で必要な血液検査の読み取り方を伝えるとともに、グループワークを用いて日常生活指導の方法、低血糖への対応方法、セルフトレーニングの指導方法について実践形式で学習する。最後には症例検討を行い、次年度の臨床実習で評価・治療につながるように教示する。加えて、吸引技術についても、マニュアルを作成し伝達するとともに、デモンストレーションを行い、全員が模擬的に経験する。

事項	年月日	概　　要
4) 大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類身体障害作業療法学実習 「循環器疾患の作業療法」講師	平成30年1月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類3年次の学生20名に対し身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「循環器疾患の作業療法」と題して、3時間の授業を行う。講義では、授業カリキュラムに則り、心不全、心筋梗塞、弁膜症、狭心症など心疾患の病態生理について学ぶ。さらに、心電図の理解と、実際の読み取り方について、質疑応答形式で具体的に教示する。ロールプレイとして、心臓の図形模写や日常生活動作の指導・介助方法を行うとともに、患者・家族とのコミュニケーション・情報収集手段について実践を通じて学習する。また、評価から運動療法（有酸素運動・筋力増強訓練・家事動作訓練など）症例検討では、具体的入院事例1例、在宅事例1例を提示し、学生が評価からプログラムを立案する方法を学ぶ。
5) 大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類身体障害作業療法学実習 「呼吸器の作業療法」授業用教材	平成29年10月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類3年次　身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「呼吸器の作業療法」で使用する教材として、スライド220枚をオリジナルで作成し、全員に配布した。構成は身体機能作業療法学第2版(医学書院)の流れを参考に、病態生理、解剖の図・表を多く（写真含む）示し、実際のレントゲン画像や血液データを挿入して作成した。また、視診・触診評価では、デモンストレーション動画、臨床の動画集を作成・挿入し、スライド内で提供した。
6) 大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類身体障害作業療法学実習 「代謝性疾患の作業療法」授業用教材	平成29年11月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類3年次　身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「代謝性疾患の作業療法」で使用する教材として、スライド120枚をオリジナルで作成し、全員に配布する。構成は、身体機能作業療法学第2版(医学書院)を参考に、糖尿病の病態・運動療法・薬物療法・家族指導について、近年の論文から得られる知見を含み、より実践で重要なポイントを伝達する。吸引実技では、デモンストレーション動画を作成・挿入し、スライド内で提供する。
7) 大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類身体障害作業療法学実習 「循環器疾患の作業療法」授業用教材	平成30年1月	大阪府立大学地域保健学域総合リハビリテーション学類3年次　身体障害作業療法学実習(専門科目、3年次配当、半期、1単位・45時間)の「循環器疾患の作業療法」で使用する教材として、スライド110枚をオリジナルで作成し、全員に配布する。構成は、身体機能作業療法学第2版(医学書院)の流れに沿って、図・表、写真を多く用いて具体的にイメージできるように工夫した。また、作業療法実践に際し、より新しい知見が得られるように、近年の論文をレビューして引用した。臨床場面で遭遇するチアノーゼや頸動脈怒張の視診、具体的評価方法については、実際の動画を挿入し、提供する。

事項	年月日	概　　要
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）所属長による評価	平成29年7月	医療法人鴻池会秋津鴻池病院の作業療法士（身体障がい部門）として12年間勤務し、係長として日々の臨床実践に加えて、現場マネジャーや単位の管理、後輩・学生教育など幅広く活躍している。学生教育では豊富な経験から個別性を重視し、それぞれの能力や理解力、性格など個々に合わせた指導法を実践しており、直接指導した学生や後輩だけではなく、他職種、患者とその家族からの信頼も厚い。学生は、総合臨床実習の前後で表情や発言の変化が明確で、学生自身の充実感から、当該職員の卒後教育を求めて入職することも多い。近年は、社会活動や研究活動で得た知識を教育場面で活用し、より学生にとって良い指導となるように研鑽を重ねている。臨床と研究、教育の実務経験からも、教育上の能力を有しているものと評価する。
4　実務の経験を有する者についての特記事項 （院内教育） 1）卒後教育体制構築（スーパーバイザー制度）	平成19年4月 ～ 平成31年3月	秋津鴻池病院では卒後1～3年目の職員ごとにスーパーバイザーを設定しており、平成19年から1年目の職員について、年1名・合計7名の直接指導を行った。指導内容は、訓練同行による実技（評価・治療）指導、住環境整備・福祉用具指導に加えて、自己研鑽方法指導、年2回の症例報告会のレジュメ作成指導、年1回のリハビリテーション部研究発表会の発表指導（研究計画・発表資料作成）、ストレス対処・体調管理指導を行った。2年目の職員について、継続した臨床指導に加えて、奈良県作業療法士会主催の事例報告会、奈良県作業療法学会での発表指導を4名行った。3年目の職員について、臨床の指導・相談に加えて、後輩指導を行えるように指導方法について指導した。また、外部の学会発表や日本作業療法協会の事例登録制度への登録指導を5名実施した。これら卒後の継続指導では、常に相談ができる安心感を得るとともに各世代での目標をバイザーと共有することで、研鑽意欲を保持する点に留意している。 平成23年6月からは、係長として現場マネジャーを担い、各職員の臨床能力・業務処理状況について把握に努めた。また、状況を上司に報告・相談し、担当対象者数、役割、フォローアップについて個別に考慮した。これらは、年1回全職員と個別面談を行い、相違が生じないように留意した。4年目以降の職員を対象としたバイザーミーティングを年3回開催し、情報共有と抱え込みの予防にも留意した指導を実践している。

事項	年月日	概　　要
2) リハビリテーション部研究発表会 学会発表指導	平成19年10月 ～ 平成31年3月	医療法人鴻池会秋津鴻池病院リハビリテーション部研究発表会において、平成19年10月から指導を務めた。第12回「関わることの難しさを経験した一事例～“かわいそうな私”を表出する症例を通して学んだこと～（平成20年1月）」 第12回「自ら求める感覚刺激に着目した働きかけ（平成20年2月）」 第14回「自宅復帰を目指した家族との協力～お互いの想いを知ることから～（平成22年2月）」 第15回「安全な在宅生活環境の自己選択に至った一事例～「直接的な経験」を考慮して～（平成23年2月）」 第17回「対象者の意思を考慮した排泄動作訓練～転倒リスク軽減を目指して～（平成25年2月）」 第18回「園芸を通して内発的動機づけが向上した事例（平成26年1月）」 第20回「MIにより排泄動作学習が困難となっていた一事例～視覚提示を用いた作業療法介入～（平成27年2月）」 第21回「退院後施設での居場所を獲得した一事例～認知症高齢者の役割感に着目して～（平成28年1月）」 第22回「作業の体験を重視した臨床実習指導～自己効力感向上を認めた学生を通して～（平成29年1月）」の計9演題の指導を行った。 学会発表では、平成21年4月から、 第3回奈良県作業療法学会「自分らしい生活の再構築を目指したアプローチ～作業バランスの視点から～（平成21年5月）」 第7回奈良県作業療法学会「洗濯物たたみ動作への介入～ワーキングメモリーに着目して～（平成26年6月）」 第8回奈良県作業療法学会「閉じこもりがちな病棟生活が変容した一事例～他者との関わりがもたらす自己有用感の獲得～（平成27年6月）」 第17回日本認知症ケア学会大会「退院後施設での居場所を獲得した一事例～認知症高齢者の役割に着目して～（平成28年6月）」 第32回日本老年精神医学会「認知症高齢者の転帰先に影響する要因の探索的調査（平成29年6月）」 第37回近畿作業療法学会「作業の体験を重視した臨床実習指導（平成29年10月）」の計6演題の共同演者として指導を行った。

事項	年月日	概　　要
3）臨床実習指導：日本作業療法士協会臨床実習指導者研修全課程修了（認定番号298号）	平成21年4月 ～ 平成31年3月	身体障がい領域の臨床実習スーパーバイザーとして、星城大学4年生（8週間）3名（平成21年4月～5月、平成25年6月～8月、平成26年4月～5月）、神戸学院大学4年生（9週間）1名（平成21年8月～10月）、大阪河﨑リハビリテーション大学4年生（9週間）1名（平成22年6月～8月）、関西学研医療福祉学院3年生（7週間）1名（平成24年7月～9月）、関西福祉科学大学3年生（5週間）1名（平成25年9月～11月）、藍野大学4年生（8週間）2名（平成26年6月～8月、平成27年4月～6月）、藍野大学3年生（3週間）2名（平成26年9月～10月、平成27年9月～10月）、大阪府立大学4年生（6週間）2名（平成28年4月～6月、平成29年4月～6月）、計13名の指導を実施した。また、ケースバイザーとして、神戸学院大学4年生（9週間）1名（平成22年8月～10月）、星城大学4年生（8週間）1名（平成23年4月～5月）、四條畷学園大学4年生（8週間）1名（平成28年8月～9月）、計3名の指導を行った。 　平成28年2月には、日本作業療法士協会臨床実習指導者研修全課程修了（認定番号298号）の認定を受けた。 　指導に際しては、以下のことに留意した。 ・実習開始時には、必ず学生自身で目標立案を行い、実習指導者、責任教員と共有し実現を支援する。 ・責任教員と積極的に連絡を取り合い、実習開始前の課題提示と実習の進め方、実習終了後のフォローアップを含めて学生の教育に関して連携を強化する。 ・対象者に実習の目的や方法を説明し、学生・対象者ともに主体的に取り組めるよう関係を構築する。 ・評価・治療ともに①見る、②模倣する、③実践する、④助言により修正する流れを徹底し、不安軽減と学習につなげる。 ・期間中に医師・看護師・介護士・理学療法士・言語聴覚士・管理栄養士・医療相談員と情報共有する場を設定し、他職種協業を理解する。 ・始業・終業時間を順守し、自宅での学習時間を確保する。 ・会議や管理業務を含めて、実際の業務により多く触れ、時間管理など経験から学ぶことを促進する。 ・リスク管理しながらも、極力学生が役割を担うことで責任能力を養う。 ・スーパーバイザー・サブバイザー制度により、偏った指導を抑制し、コーチング・ティーチングを場面によって使い分け、学生行動の理由付けを強化する。 ・作業療法の魅力を感じられるように、対象者と学生に作業を通じた交流を設定する。 ・バイザーの業務量に配慮し、指導に専念できる環境を整える。

事項	年月日	概　　要
4）リハビリテーション部新人研修会講師	平成25年4月 ～ 平成31年3月	秋津鴻池病院では、リハビリテーション部の新入職の職員（作業療法士・理学療法士・言語聴覚士）を対象に週1回・通年で研修カリキュラムを実施している。その中で、「認知症のひとの理解」（平成26年まで）、「患者心理について」（平成27年以降）の講座を担当し年1回の講義を計5回行った。 両担当講座で重点指導事項として、はじめにひとを対象とした職種であることの理解を促した。研修の具体的内容は、①「倫理的配慮の遵守」として接遇の徹底、個人情報保護、安全管理に触れ、疾患特異性を考慮した関わり（特に意思の表出が困難な対象者との関わり）について説明を行った。次に、②「科学的根拠のある治療の必要性」について、なぜ常に自己研鑽・知識のアップデートが必要かを中心に著書や論文における理論の変遷を提示し、経験に基づく対象者のニーズ（より良い治療方法選択の権利）を合わせて説明を行った。③「対象者の思い」について、経験に基づく具体的事例を提示し、神経心理学的評価の結果と合わせて説明を行った。同時に、グループワークを実施し、自身の推察と他者の考えを比較し、違いを体験することで、対象者主体の考え方について学習する機会とした。
5）看護師卒後3年研修講師	平成29年11月	看護師の卒後教育の一環として、他職種協業を目指した「リハビリテーション専門職の役割」に関する講義を行った。 講義内容は、①「リハビリテーション・看護の定義」について、日本理学療法士協会・日本作業療法士協会・日本言語聴覚士協会・看護協会の定義をICFの図を用いて共通する領域および専門性の強い領域について事例提示を用いて説明を行った。次に、②「作業療法士が臨床で使用する評価法」について、当院で日常的に使用する身体機能評価（関節可動域、筋力、感覚など）・神経心理学的評価（認知機能、自己効力感や満足度、うつ度など）の評価目的と結果の解釈方法、目標や治療設定との関連について説明を行った。③「リハビリテーション職と看護師の連携」について、①②の内容から専門性の理解を促した上で、対象者を主体とした目標設定・共有の方法、対象者の強みを日常生活に導入する方法について、どのような工夫が必要か・可能かについてグループワークを行い、実践で活かせるように留意した。
（院外での講演） 6）奈良県作業療法士会主催　現職者共通研修 「作業療法における協業・後輩育成」講師	平成27年8月 ～ 平成28年11月	本研修会は日本作業療法士協会の定める生涯教育制度にある基礎研修で、若手作業療法士の育成を目的とした研修である。平成27年から年1回計2回講座を担当した。
7）第20回星城大学リハビリテーション研究会 「10年間の軌跡」シンポジスト	平成28年3月	星城大学リハビリテーション学部の学生および卒業生を主体として構成される研究会において、「10年間の軌跡」の題目でシンポジストを務めた。作業療法士として臨床で従事し、10年が経過した今感じることをテーマに、これまでの経験を振り返り、特に病院から地域への働きかけの重要性を語った。また、経験的根拠に基づく福祉機器・自助具の選定から、神経難病患者への評価ポイントなど教科書や論文にあまり述べられていない事項に留意して、若手作業療法士に取り組みを紹介した。

事項	年月日	概　　要
8）医療法人弘仁会南和病院看護師研修 「認知症をもつ人の支援」講師	平成28年7月	医療法人弘仁会南和病院看護師研修会において、講師を務めた。療養病院である南和病院では、入院患者の大半を高齢者が占め、認知症をもつ人も少なからず存在する。そんな現場で働く看護師の困りごととして、抜針や介護拒否、徘徊など認知症の行動・心理症状への対応が挙げられ、行動観察法の紹介から具体的な対応方法について作業療法士の視点から考え方を説明した。講義内容は、①出来ないことだけではなく出来ること（強み）の把握、②行動の捉え方・評価方法、③変性・進行疾患の特徴を中心に、前半は講義、後半は事例を用いたグループワークを行った。認知症の支援ではなく、認知症をもつ人の支援であることを強調し、生活歴の解釈や、意味ある作業の支援方法、抑制ではなく共同するための心理コントロールについて説明した結果、グループワークでは、強み（作業）を活かしたケア実践につながる考えや意見が多くみられた。
9）奈良県吉野郡大淀町介護予防教室 「いきいきふれあい教室」講師	平成28年8月	奈良県吉野郡大淀町の地域住民を対象に、2ヶ所の介護予防教室で「認知症・高齢期うつ病の理解と予防」の題目で講師を務めた。認知症や高齢期うつ病の啓発を目的に、①加齢と認知症の違い、②予防のための生活習慣、③早期診断・早期治療の重要性について教授した。同時に、地域で見守りを強化し、気付いたら相談することを依頼し、相談方法と相談場所の確認を役場職員とともに行った。
10）奈良県御所市介護予防講座 「認知症の理解と予防」講師	平成28年9月	奈良県御所市の地域住民を対象とした介護予防講座において講師を務めた。市内では、認知症カフェやサロンが行われているが、参加者数が少なく周知出来ていない現状があった。そのため、あらためて認知症の理解と予防の重要性について啓発することを目的とした。具体的な内容は、①認知症と加齢性もの忘れの違い、②早期診断・早期治療の重要性、③日常生活で実践できる予防方法、④地域での取り組み紹介とした。理解につながるように、説明時の言葉選びに配慮し、予防に重要な運動や活動を体験しながら学習を図った。一緒に参加した保健師からも、講座後に参加者から地域の取り組みについて問い合わせがあった旨が伝えられ、一時的にでも関心が高まっているとの報告を受けた。
11）奈良県吉野郡大淀町介護予防リーダー 養成講座「レクリエーションの考え方」 講義資料提供	平成28年10月	奈良県吉野郡大淀町介護予防リーダー養成講座において、講義資料提供を行った。講座内容は、①全員が楽しむ方法、②二重課題・多重課題の導入ポイント、③集団場面の注意点を中心に、レクリエーション考案・進行を介護予防リーダーが実践できるよう配慮した。前半は講座、後半はレクリエーション計画のグループワークを設定し、他参加者に披露することで学習強化を図った。

事項	年月日	概　　要
12）奈良県吉野郡大淀町地域住民への認知症啓発事業「やすらぎカフェ」講師ファシリテーター	平成28年11月	奈良県吉野郡大淀町の地域住民および認知症家族を対象に、「やすらぎカフェ」をいう名前の認知症啓発事業を実施し、講師・ファシリテーターを務めた。講座では、認知症をもつ人とその家族を地域で支えるをテーマに、実際に介護を経験した家族介護者による講演の後に①認知症は特別な病気ではないこと、②家族介護者を支援するためのコミュニケーション方法、③気付いた時の相談窓口について教授した。その後、カフェタイムにはグループワークで認知症介護の困りごとと支援方法について話し合い、様々な意見が出るように各グループにファシリテーターを配置したことで、活発な意見交換が行われた。
13）奈良県吉野郡吉野町サロン交流会「認知症の理解と予防」講師	平成29年2月	奈良県吉野郡吉野町のサロン（地域住民主体の取り組み）の各リーダーが集まり、年1回開催される交流会において、講師を務めた。目的は、それぞれのサロン活動報告への助言と、認知症予防を町全体で実現していく為には、各サロン活動に予防の考えを取り入れる必要がある事を教授した。具体的には、認知的アプローチの説明と実践効果について説明し、特別なことではなく日常のサロン活動を工夫することが重要であると説明した。後半はグループワークで、サロン活動の困りごとと目標（1年）を考え共有を図った。また、平成29年度に認知症予防として作業療法士の支援を希望するサロンを募集し（3サロン）、月1回・1年間の支援したい旨を伝えた。
14）奈良県作業療法士会主催　現職者共通研修「事例検討・事例報告」講師	平成29年2月	奈良県作業療法士会主催の事例報告会において、講師を務めた。県内施設の作業療法士3名から、それぞれ1事例・合計3事例（身体領域2事例、精神領域1事例）について発表があり、ファシリテーターとして進行を行うとともに、各事例の評価や経過、考察について確認とアドバイスを行った。若手作業療法士が多く受講することから、病態生理とCT・MRI画像所見の解釈、事例の全体像の整理方法について詳細に説明を行った。また、作業療法の視点を重要視し、①作業療法評価方法の確認と効果判定の適切さ、②作業目標を対象者と共有出来ているか、③退院・退所後の生活が想定されているかを確認した。「人・環境・作業モデル」を柱に、より早期より作業療法士としての専門性を意識した取り組みが出来るよう留意した。多くの質疑応答があり、発表者・受講者ともに充実したという感想も多くみられた。
15）奈良県橿原市認知症予防講座「運動を取り入れた認知症予防と認知症初期集中支援事業について」講師	平成29年10月～令和2年2月	奈良県橿原市の地域住民主体サロンで年3-4ヶ所「運動を取り入れた認知症予防と認知症初期集中支援事業について」の題目で講師を務めた。住民主体の介護予防活動が推進される中で、多くのサロンでは運動やレクリエーションなど既成のプログラムが継続して行われ、参加者も減少傾向になるなど、慣れによる参加率低下が問題となっていた。そこで、習慣化された運動の中に楽しみの要素と多重課題による認知症予防方法を重点的かつ具体的に教示した。また、難易度調整の考え方を同時に伝えることで、慣れによる参加者数低下予防を図った。次に、認知症早期診断・早期対応のために、近隣住民だから出来ることとして、気付きから認知症初期集中支援事業に至るまでの相談窓口と具体例を提示し、理解と協力を依頼した。行政・専門職だけ、住民だけではなく、互いに協力し合う街づくりの実現に向けて積極的に協力していく旨の感想が聞かれた。

事項	年月日	概　　要
16）奈良県立大淀高等学校医療・看護コース 「認知症サポーター養成講座」講師 ファシリテーター	平成29年11月 平成30年11月 令和1年11月	奈良県立大淀高校　医療・看護コースの1年生40名を対象に、「認知症サポーター養成講座」を実施し、講師およびグループワークのファシリテーターを務めた。認知症サポーター養成講座のカリキュラムに則って解説を行うとともに、地域の高校生が認知症に関する知識をもち、積極的に地域活動に参加することの意味について教示する。また、グループワークを通じて認知症をもつ人への支援方法を検討し、主体的な取り組みにつながるように配慮する。
17）奈良県作業療法士会主催　現職者共通研修 「実践のための作業療法研究」講師	平成30年10月 令和1年9月	本研修会は日本作業療法士協会の定める生涯教育制度にある基礎研修で、若手作業療法士の育成を目的とした研修である。平成30年から年1回計2回講座を担当した。
18）堺ブロックPetit学会2019 「認知症をもつ人の作業療法：食事・排泄の評価 と支援」講師	令和1年6月	大阪府作業療法士会堺ブロック学会にて、教育講演の講師を務めた。参加者は大阪府作業療法学会に所属する作業療法士であった。講演では、認知症のある高齢患者の排泄と食事に焦点をあて、評価から支援の実際について経験と研究をもとに報告した。協力頂いたスタッフからも、理解が深まった旨の感想がきかれた。
19）認知症の人と家族の会　奈良県支部　特別講演 「知ってほしい、作業療法士の仕事」講師	令和1年10月	平成30年度から認知症の人と家族の会との連携が開始され、認知症の当事者と家族に対し、作業療法士の視点からお手伝いできること、一緒に取り組めることをテーマに講演を行った。
20）奈良県作業療法士会　事業部研修会 「排泄機能障害の作業療法」講師	令和1年11月	奈良県作業療法士会の会員約30名に対し、作業療法士の専門である日常生活動作、特に排泄に特化し、評価から支援について講演を行った。
21）奈良県作業療法士会　現職者選択研修 「老年期のトピックス」講師	令和1年12月	奈良県作業療法士会の会員約40名に対し、認知症や呼吸器・循環器疾患を中心に老年期の疾患特性やその評価、支援方法について講演を行った。
22）奈良県作業療法士会主催　臨床実習指導者講習 講師	令和2年1月	本研修は厚生労働省が定める臨床実習指導の要件となる研修であり、近畿圏の作業療法会員約70名に対して、臨床実習に関する理論と実践を座学およびグループワークの講師を務めた。
5　その他 なし		

事項	年月日	概要
職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1　資格，免許 ①作業療法士免許 ②認定作業療法士取得 ③修士（保健学）	 平成18年4月 平成26年3月 平成29年3月	 第39301号 認定番号1790 大阪府立大学第145号 論文題目「地域在住高齢者における計画を重視した集団調理介入の効果」
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 （院内業務） 1）医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部作業療法士	 平成18年3月 ～ 平成22年5月	 内科（亜急性期病棟、回復期リハビリテーション病棟、療養病棟）、精神科（一般棟）に勤務。 脳卒中、大腿骨骨折、肺炎など中枢疾患や整形疾患、内科疾患を中心に身体障害領域の作業療法に従事した。亜急性期から回復期では自宅・施設ともに退院先で必要なADL・IADL獲得に向けて身体機能訓練・生活機能訓練を中心に支援を行った。特に、退院先の環境調査・調整を積極的に実施し、退院後の生活を想起した訓練を早期より病棟生活に導入できるよう、医師、看護師、介護職員との連携を重点的に行った。療養病棟では、看取りに関わることも多く、終末期の作業療法について研修会等に積極的に参加し、支援を行った。また、当院では精神科一般棟においても、上記身体疾患に伴い必要に応じた作業療法を実施している。そのため、認知症や統合失調症を有す対象者の、身体機能とともに精神機能・認知機能を考慮した支援の実践を行った。院内では、月2回症例検討会が開催されており、平成18-22年度の間に年1-3回、合計10回の症例報告を実施した。

事項	年月日	概　　要
2) 医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部研究発表会演題発表	平成19年2月 平成21年2月 平成25年2月	毎年1月～2月に3日間の日程で行われるリハビリテーション研究発表会において、3演題発表を行った。 第11回「療養棟におけるチームコミュニケーション　病棟別検討会議を通じて（平成19年2月）」では、療養棟の看護師とリハ職で月1回の会議を開始し、問題点や工夫点について話し合った。本会議の実施前後において病棟スタッフ23名にアンケート調査を行った結果、リハ職とのコミュニケーションが図りやすくなったと約80%が答えた。しかし、約30%は検討会議の内容理解が難しいことがあると答えた。他職種会議を積極的に行う上で相互理解可能な表現・内容に留意する必要がある。 第13回「超高齢者の閉じこもり生活からの脱却を目指した症例（平成21年2月）」では、高齢者の役割獲得が活動量に与える影響を明らかにすることを目的とした。100歳代の慢性心不全を有し、自宅で閉じこもり生活を送っていた高齢者に対し、役割獲得モデルを用いて病院内・デイサービス・自宅での役割再獲得を目指した。結果、長老・大黒柱など役割の認識的側面に変化が生じ、閉じこもり生活からの脱却を図れた。年齢・環境に応じた役割を対象者・家族・サービススタッフが認識・共有して支援することで、高齢者においても活動量は向上すると考えられた。 第17回「MSA患者への注意機能を中心とした治療介入の経験～脳神経ネットワークに着目して～（平成25年2月）」では、MSAを有す患者の認知機能と身体図式の歪みを捉えることと、介入による変化を捉えることであった。注意機能や身体後方の運動イメージに歪みが生じていた事例に、視覚・体性感覚情報の顕在化を図り、段階的に口頭指示や代償を減らし潜在化を図った結果、身体描画など質的評価が変化し、便座や車椅子への移乗動作は介助量が軽減した。このことから、MSAをもつ対象者にも認知機能に着目した訓練を行うことは重要であったと考えられた。
3) 医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部レクリエーション委員会委員長	平成21年4月 ～ 平成25年3月	総勢約100名のリハビリテーション部の歓・送迎会や忘年会、スポーツ大会、季節ごとのイベント、他職種との交流会を主催・運営し、スタッフ間交流を促すとともに、心理的ケアを目的にイベント開催を担い、企画・運営・広報・全体の統括を行った。
4) 医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部主任	平成22年6月 ～ 平成23年5月	主任として1年間、内科の亜急性期病棟、療養病棟の現場統括を担った。特に、療養病棟において、除圧や関節可動域、身体活動量の維持に向け、職種間で介助方法における相違を減らすようにデモンストレーションの方法を看護師、介護職員と連携してマニュアル化した。

事項	年月日	概　　要
5）医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部係長	平成23年6月 ～ 平成31年3月	係長として6年間、精神科における身体障害合併症におけるリハビリテーション（作業療法・理学療法・言語療法）を統括した。他院や他施設にて対応が難しいと判断され、行動・心理症状の軽減と身体機能向上の双方を目指す必要があり、認知機能低下を有す際の身体機能向上過程に生じる転倒リスクへの対応、活動制限の軽減に取り組んだ。 また、精神科医や精神科看護師に対し、勉強会を行い早期より身体機能訓練の必要性を啓発した。 また、認知症を有す場合には、自宅への退院が困難となるケースも多く、家族へ個別での介護方法指導や負担感の傾聴、出来ることへの理解を促し、可能な限り住み慣れた自宅への退院促進に取り組んだ。 内科、精神科に関わらず、身体リハビリテーションが実施されている全対象者で、必ず月1度・各対象者10分程度、医師・看護師・理学療法士・作業療法士・言語聴覚士・医療相談員・管理栄養士が集まりカンファレンスを実施している。このカンファレンスの総括を担い、各部門の現状報告に加えて、身体機能やADL、生活の予後予測における客観性の確保、目標の確認と円滑な退院促進に向けた連携指導・情報の整理に努めた。同様に、地域包括ケア病棟（旧亜急性期病棟）の入院時カンファレンスや各病棟の退院前カンファレンスでは司会を務め、当事者、家族、介護保険サービス（ケアマネジャー、施設スタッフ）が相互に意見を出し合う雰囲気作りと情報の整理に努めた。 当法人では、住宅改修・福祉機器導入に際し、病院・介護老人保健施設のスタッフが集まる環境調整カンファレンスで必ず承認を受ける必要がある。平成24年度より当カンファレンスでの総括を担い、①対象者・家族の意向を反映しているか、②動作と処方案が合致しているか、③実用性・将来性が確保されているかを吟味し判断を行った。 また、家族や医師への説明において、理解が得られにくい場合や業者・ケアマネジャーへの処方案説明において、責任者として同行し追加説明を行った。
6）医療法人鴻池会秋津鴻池病院 リハビリテーション部研究発表会実行委員長	平成25年3月 ～ 平成27年2月	当院では、年1回リハビリテーション部主催で、他職種合同による研究発表会を開催している。当研究発表会の実行委員長として、2年間企画・広報・抄録作成・予算管理・運営・司会業務にあたるとともに、実行委員長として全体の統括を行った。
7）医療法人鴻池会秋津鴻池病院新規事業企画会議「できること検討委員会」委員	平成28年4月 ～ 平成31年3月	当院における新規事業を考え、企画書を作成し、委員長（リハビリテーション部部長）が理事会にて提案を行う。具体的内容は、①医療・介護連携の取り組み、②地域連携の取り組み、③利用しやすい病院作り、④働きやすい環境の整備を中心に新規事業の検討・立案を行った。会議は1～2月に1度行われ、現在までに院内デジタルサイネージ・リーフレットの設置や介護相談教室の開催、フットサルコートの建設企画を行った。
（院外活動） 8）奈良県作業療法士会教育部部員活動	平成19年4月 ～ 平成25年5月	奈良県作業療法士会教育部の活動として、約6年間部員を務めた。主に、奈良県内の作業療法士を対象とした現職者共通研修・教育部研修会の年間スケジュール立案、講師依頼、会場調整、案内文の作成、広報、受講者管理、司会を担い、期間中スケジュール通りに研修の運営が行えていた。

事項	年月日	概　　要
9）奈良県作業療法士会主催症例発表交流会	平成23年6月	奈良県作業療法士会が主催する、症例発表会において「Pusher syndromを呈した症例～失禁ゼロを目指して～」の題で発表を行った。左被殻出血後の後遺症として、Pusher syndromと注意障害を呈し回復期リハビリテーション病棟に入院した症例に対して、身体図式再構築を目的とした感覚促通訓練に加えて、実際の環境にて視覚的cueを用いた立位姿勢の安定、病棟連携による定時での排泄リズム確立を図った。結果、排泄は軽介助となり、失禁は消失したという内容の発表であった。
10）日本作業療法士協会「事例報告登録システム」事 例登録	平成23年10月 ～ 平成25年12月	日本作業療法士協会が作業療法の質担保を目的に推進する事例報告・登録制度において、「回復期リハ病棟における超高齢事例への「参加」に対する働きかけ～役割獲得に着目して～」、「園芸を通じ内発的動機づけの向上を認めた一事例」の2事例が審査の結果合格し、事例集として公開された。
11）第31回近畿作業療法学会学会運営委員	平成23年10月	奈良県で開催された近畿6県の作業療法士を対象とした第31回近畿作業療法士学会において、3回の運営委員会議と当日の運営スタッフを担った。当日の役割として、受付業務の管理を担い、円滑な受付運営に努めた。金銭管理・時間管理など大きな問題はなく終えることが出来た。
12）奈良県作業療法士会事業部副部長	平成25年6月 ～ 現在に至る	奈良県作業療法士会事業部の活動として、約4年間副部長を務めた。年度始めには、年間12本の事業部スキルアップセミナーと年間3本の事業部研修会を企画し、日程・講師の選定・打診（連絡は部長が実施）、会場予約、各講師への依頼文作成、宿泊・懇親会設定、講師料の準備、ホームページ更新と他府県への案内依頼、参加者の管理を行った。また、当日は司会と参加者案内、総括を担った。企画では、参加者が興味を持ち、積極的に参加したいと思える内容に留意し、毎回50名程度の参加者に研修会希望を聴取し、出来るだけ奈良県作業療法士会員の意見を集約し、開催した。 研修以外で、パーキンソン病やALSなど奈良県内で在宅支援が不十分であると考えられたため、パーキンソン病家族の会や奈良県神経難病支援センターに直接作業療法士の活動内容を説明に伺い、同意のもと支援体制の構築に努めた。結果、地域保健師および家族会より徐々に依頼があり、在宅支援の一員として活動の実施に至った。特に、作業療法士はその専門性が周知されていないことが多く、専門性を伝えられるよう努力した。その結果であると考えられた。

事項	年月日	概　　要
13）奈良県吉野郡下北山村への在宅アウトリーチ支援	平成25年6月	奈良県作業療法士会事業部として、吉野保健所の依頼を受けて奈良県吉野郡下北山村への在宅アウトリーチ支援を3事例実施した。訪問の目的は、①生活機能評価、②福祉機器・環境調整支援、③身体機能維持訓練の指導、④家族への介助指導とした。訪問した地域は、山間部にあり、在宅サービスが整備されていない状況であった。具体的な支援では、内服状況の確認と自主訓練の指導、オーバーフレームのリース、緊急警報ベルの紹介、園芸環境の整備など多岐であった。共通点として、対象者が望む生活の継続支援に向けた助言で、評価結果と支援内容は紙面とともに保健師、主治医へ報告を行った。
14）NPO法人SMILECHAIN主催セミナー「中枢神経系障害の捉え方」講師	平成25年7月 平成25年8月 平成25年11月 平成25年12月 平成26年3月	作業療法士・理学療法士・言語聴覚士向けの研修会を主催・運営するSMILECHAINの研修依頼を受け、「中枢神経系障害の捉え方」について講師を務めた。名古屋、大阪、東京、福岡で計5回開催され、受講者は約50～80名であった。講義内容は、脳画像所見の解釈から脳機能解剖および病態生理の説明を中心に実施した。詳細には、立位姿勢制御と感覚処理、筋緊張亢進と錐体外路系の制御機構、姿勢反射障害のメカニズム、大脳皮質－基底核ループについて、歩行実行系に必要な神経ネットワーク・CPGの関与について説明した。また、高次脳機能障害では、症状のみを捉えたアプローチではなく、中枢神経障害として機能局在と神経ネットワークを捉えて根拠に基づく予後予測・治療、ADL環境の調整につなげることを重点的に説明した。講座の中では、治療動画や画像・事例を用いて、臨床場面で活かせるように留意した。研修後は、同名性半盲事例への評価方法や姿勢調整障害の捉え方について質問を受け、アンケートでは「実例が多く含まれていたことで理解しやすかった」との意見があった。
15）奈良県作業療法士会認知症支援委員会委員	平成26年3月 ～ 現在に至る	奈良県作業療法士会認知症支援委員として、約3年間支援委員の統括役と積極的な実践に務めた。具体的には、各市町村の認知症予防教室への参画や啓発事業、認知症カフェの企画支援、認知症サポーター養成講座の支援、認知症家族教室のアドバイザーとして依頼を受けて実施した。また、奈良県内の各市町村と作業療法士の協業体制について情報を集約し、広報誌への掲載を年3回実施した。平成30年度から多くの市町村で開始される認知症初期集中支援チームへの作業療法士参画を目的に役場を訪問し、作業療法士の専門性について啓発・説明を行った。現在、南和地域では5市町村で連携を図っており、今後さらに拡大していくように啓発に努める。同時に、奈良県作業療法士会員の認知症支援技術向上を目的に企画を検討していく。
16）第7回奈良県作業療法学会運営委員	平成26年3月 ～ 平成26年6月	本学会の運営委員を担い、平成26年3月から3回の会議に参加し、当日は受付業務を担当した。受付係の配置と会場設営に配慮し、学会では大きな問題なく無事に終えることができた。

事項	年月日	概　　要
17）第7回奈良県作業療法学会ランチョンセミナー「認知症初期集中支援チームの概要」講師	平成26年6月	第7回奈良県作業療法学会のランチョンセミナーにおいて、講師を務めた。講演内容は、①認知症初期集中支援チームとは、②支援チームにおける作業療法士の役割、③啓発活動の重要性であった。認知症初期集中支援チームは、自律生活のサポートを行うことが目的であり、チーム員が優先度を判断し初回訪問から6ヶ月の介入支援を行う点を説明した。また、評価ではエピソードや経過の他にMMSE、DASCやDBD13、Zarit8、身体機能・ADL評価を行うこと（各評価の概要とともに）を説明した。作業療法士は、評価の解釈をもとに医療・介護の専門職間における伝達役でもあり、生活機能を調整する中核的役割を担うことを強調した。加えて、支援の実際では、信頼関係の構築が不可欠であり疾患の特性からも難しさがあることも申し添えた。
18）奈良県作業療法士会事業部研修会「認知症における作業療法実践」講師	平成26年8月 平成27年6月 平成28年1月	奈良県作業療法士会主催の事業部研修会において平成26年から3年間継続して「認知症における作業療法実践」の講師を務めた。研修内容は、①認知症の病態生理、②認知症の行動心理症状の捉え方、③事例紹介、④認知症に関する最新の知見紹介を中心に紹介した。特に認知症は脳の変性であると同時に、日常生活で遭遇する症状が中枢症状か環境・個人因子に伴う症状か、つまり可塑性があるか否かについて、客観的評価と解釈の方法を示した。また、早期に病態を捉え、生活におけるADL・福祉機器の工夫、環境調整、強みの理解と家族支援を実施することの重要性を客観的根拠を示しながら説明した。平成27年度の講座からは、認知症における終末期の捉え方を含めて、病院から在宅で働く作業療法士が予防から終末期まで包括的に認知症をもつ人の支援を実践できるよう配慮した。
19）奈良県神経難病患者アウトリーチ支援	平成26年10月	奈良県作業療法士会事業部として、奈良県香芝市の保健師からの依頼を受けて、ALS患者1事例への在宅アウトリーチ支援を実施した。訪問の目的は、①コミュニケーション評価と残存機能で活用可能なツールの紹介、②排泄動作環境・福祉機器の評価、③家族支援（介助指導含む）であった。事例のディマンドはパソコンを使用したメール・コミュニケーションの継続であり、手指の筋力・巧緻性低下がみられたものの、スイッチ操作は可能であったことからスイッチの適応評価と伝の心やハーティラダーなどツールの紹介を行った。また、下肢機能の残存を評価し、車いす操作やトイレ内介助方法について実際に家族指導を行った。保健師とともに、妻の思いの聴取と、吸引機など必要となる医療機器について説明した。特に注意した点として、対象者の認識と客観的状況に乖離が生じていたため、心理面には十分に配慮した。これら評価と支援した内容については、紙面とともに主治医への報告を実施し、地域の訪問看護スタッフへ継続フォローを依頼した。
20）日本作業療法士協会主催第55回作業療法全国研修会奈良会場運営委員	平成26年12月	本研修会において、当日の受付業務を担った。全国から受講者が参加する大規模な研修であったため、事前登録を含め会計の不一致が生じないよう留意した。大きな問題はなく、受付業務を終えることが出来た。

事項	年月日	概　　要
21）第8回奈良県作業療法学会座長	平成27年6月	学会では、身体障がい領域の発表4演題の座長を務た。座長業務の中では、発表者の意図と目的の理解に努めるとともに、聴講者特に若手作業療法士が内容を理解し、質問がしやすいように配慮した。結果、受講者から積極的な質問があり、発表者にとってもさらに研究を進展させる一助になった。
22）第11回日本作業療法研究学会学術大会 運営委員	平成28年5月 ～ 平成29年7月	学会では、近畿圏内の各施設・大学で働く作業療法士が実行委員として参加したため、5回の会議の他、情報共有にDropBoxを用いて、効率化を図った。役割として、会計および受付業務、備品準備、生涯教育基礎ポイント管理、特別講演・教育講演講師との連絡係を担い、想定した予算内で学会の全工程を終了することが出来た。また、受付においても大きな混乱なく、円滑に終えることが出来た。少数スタッフでの運営であったが、頻回な会議による交通費・会議費の増加を抑えたことで、予算内で効率的に実施出来、滞りない運営に至った。
23）日本作業療法士協会認知症推進委員	平成28年8月 ～ 令和1年3月	奈良県作業療法士会会長の推薦により、日本作業療法士協会の認知症推進委員に奈良県作業療法士会を代表して参加した。平成28年11月に開催された年1回の都道府県推進委員会会議の出席と、会議で得た情報の奈良県作業療法士会員への伝達、奈良県内における認知症支援状況の集約と日本作業療法士協会への報告がこれまでの主な役割として実施した。
24）日本作業療法士協会・奈良県作業療法士 会共催「認知症アップデート研修会」講師	平成29年2月	日本作業療法士協会・奈良県作業療法士会共催で、認知症支援においてすべての領域の作業療法士が参画出来るように人材育成を目的とした研修会の講師を担った。講義内容は、①日本・世界の認知症、②認知症の病態生理、③認知症の行動・心理症状、④認知症をもつ人の生活支援の実際、⑤事例のまとめ方、⑥奈良県の認知症施策であった。座学を中心に、平成28年度は51名の参加があり、研修会後には認知症支援委員として新たに11名が支援委員への参画を希望した。平成29年度以降も継続し、全会員の受講を目指していく方針とした。
25）ウェルネスコンシェルジュ協会主催研修会 「認知症をもつ人の支援」講師	平成29年2月	株式会社ケアプラスに所属する訪問医療マッサージ師30名を対象に、「認知症をもつ人の支援」の講師を務めた。講座内容は、①認知症の病態生理、②認知症の行動・心理症状の捉え方、③認知症をもつ人の理解であった。特に、受講者は在宅医療領域が中心であったため、在宅生活での評価のポイントとして身体機能・認知機能を含めて、出来ている事と難しくなった事の整理、家族の思いの傾聴方法について説明した。また、進行や症状変化のポイントをまとめ、変化を認めた際の相談・報告・連携の方法について確認した。研修会後は、徘徊や被害妄想時の対応方法、その人らしさを大切にするためのポイントについて質問があった。

事項	年月日	概　　要
26）奈良県作業療法士会事業部研修会 「肩関節機能障害へのアプローチ」講師	平成29年3月	奈良県作業療法士会主催の事業部研修会において「肩関節機能障害へのアプローチ」の講師を務めた。本研修会では、作業療法士にとって重点的に行われる肩関節の評価・治療に着目し、講座前半では①肩関節の解剖・基礎知識、②肩関節機能障害の評価（中枢疾患・整形疾患）、③肩関節機能障害へのアプローチについて座学にて説明し、後半では受講者2名ずつデモンストレーションを行いながら個別に実技指導を実施した。特に、肩関節の評価では、同一の筋であっても姿位によって作用が異なる点の理解に留意し、視診・触診から基本評価方法と解釈・アプローチへの一連の流れを教授した。講座後は多くの質問があり、日頃の臨床で実技を学ぶ場の少なさと継続教育の必要性が示された。
27）バリアフリー2017作業療法ブース担当	平成29年4月	バリアフリー2017の作業療法ブースにて、相談業務・福祉用具・支援機器の展示説明（身体障がい者用）を担当した。相談業務では、グループホーム入所者への生活機能維持方法や運動麻痺の軽減・介助方法について相談を受けた。また、機器展示では、食具選定に関する質問や使用方法、洗体補助具の作成方法について質問があった。
28）第15回IT機器レンタル事業 「作業療法士が行うIT活用支援説明会」 日本作業療法士協会・奈良県作業療法士会共催研修会運営スタッフ	平成29年5月	研修は、日本作業療法士協会と奈良県作業療法士会の共催であり、運営スタッフとして受付、会場設営、昼食手配、懇親会設定、会場案内を務めた。参加者数は24名で、受付および会場運営において問題なく終えた。
29）第37回近畿作業療法学会運営委員	平成29年10月	第37回近畿作業療法学会の運営スタッフとして受付、会場誘導係を務めた。参加者数は460名で、受付および会場運営において問題なく終えた。
4　その他 なし		

事項			年月日	概要
研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし				
（学術論文） 1「地域在住高齢者における計画を重視した集団調理介入の効果」 （修士論文）	単　著	平成29年3月	大阪府立大学	本研究の目的は，調理計画を重視した集団調理介入が地域在住高齢者の認知機能に及ぼす効果と在宅生活に汎化し調理頻度が増加するかについて調査することであった．対象は地域在住高齢者54名で，調理計画群23名(計画を重視した集団調理プログラム)，調理実施群18名(調理実践プログラム)，対照群13名(調理以外のプログラム)に週1回6ヶ月間プログラムを実施し，介入前後での認知機能，心理機能，社会行動の効果について比較検討した．結果，調理計画群は介入によって認知機能が有意に改善し，介入後は他群に比べ抑うつ傾向が低く，交流頻度が多い結果であった．これらのことから，調理計画を重視した集団調理介入は，対象者の認知機能を高め，認知症予防の一助になり得ると考えられた．また，対象者同士のコミュニケーションや主体的な役割遂行が促され，抑うつ傾向改善の可能性が示唆された．（頁数：A4 29枚）
2.「認知症作業療法における家族介護者の思いを重視した終末期ケアプログラムの実践」 （査読付）	共　著	平成30年2月	作業療法ジャーナル 第52巻2号p190-p194	本報告では，家族介護者の思いを重視した終末期ケアプログラムを実践し，終末期の認知症の人（A氏）と家族（妻）への支援のあり方について考察することを目的とした．作業療法では，①身体機能の維持，②馴染みのある作業の継続を行い，多職種連携にて③妻の身体的ケア参加，④自宅への外出を支援した．結果，A氏は入院16週目に死亡退院となったが，妻は希望であった身体的ケア参加や自宅への外出を果たした．また，終末期ケア移行期，病棟ケア参加期，自宅への外出期の妻への評価では，介護負担感尺度は，57点，53点，42点と，幸福感尺度は，1点，3点，8点と，うつ尺度は，3点，3点，1点と改善傾向を示した．今回，認知症の終末期ケアにおいて，家族介護者の語りを促し，その思いに沿った支援が家族の心残りと不全感を軽減した．このことは，後に家族が前向きな生活を再獲得する一助になり得たと考えられた． ◎坪内善仁，東條秀則
3.「身体合併症を有す重度認知症患者の死亡転帰に関連する入院時情報の特徴；作業療法評価を含めた探索的調査」 （査読付）	共　著	平成30年3月	老年精神医学雑誌 第29巻3号p301-p309	本研究では，当院精神科病床に入院した身体合併症を有す重度認知症患者について，入院時情報から死亡転帰に関連する要因を探索的に調査した．調査項目は，基本情報，医学的情報，作業療法評価情報に分け，自宅または施設退院患者73名(生存退院群)と死亡退院患者39名(死亡退院群)の間で,各変数について単変量解析，ロジスティック回帰分析を行った．結果，嚥下障害の有無，認知症の重症度，併存疾患指数，認知機能評価，認知症分類が死亡転帰の主な影響要因であることが示された．このことから，他職種が連携し，入院時から幅広く評価情報を共有し，早期から個別性を重視した支援に取り組む必要があると考えた． ◎坪内善仁，宝田イオリ，石橋雄介，大西和弘，東條秀則，洪基朝

事項			年月日	概　　要
4.「身体合併症を有す認知症患者の地域退院に関連する入院時情報の特徴」 (査読付)	共　著	平成30年7月	日本認知症ケア学会誌 第17巻2号p423-p430	本研究の目的は，身体合併症を有し精神科病床に入院する認知症患者の自宅または施設退院(地域退院)に関連する入院時情報の特徴を明らかにすることとした．方法は，地域退院患者73名(地域退院群)と入院継続患者87名(入院継続群)の基本情報，医学的情報，作業療法評価情報について，単変量解析，多変量解析で比較・分析した．結果，入院前の生活場所，家族介護者の有無，Barthel Indexの合計・移乗・食事・排尿・排便コントロールで有意差を認め，地域退院の主な関連要因として家族介護者あり，排尿コントロールが良好であることが示された．結果から，身体合併症を有す認知症患者の地域退院支援において，OTは他職種・家族と連携し入院後早期に環境情報やADLを把握するとともに，個別性を考慮した排泄形態・介助方法を検討し排泄機能改善に取り組む必要がある． ◎坪内善仁，宝田イオリ，石橋雄介，大西和弘，東條秀則
5.「住民自主運営による認知症予防プログラム実践を目指した2年間の効果：作業療法士と介護職員，異なるファシリテーター2職種による介入効果への影響」 (査読付)	共　著	平成30年11月	Journal of Rehabilitation and Health Science 第15巻p17-p24	本研究では，計画・実行・振り返りを重視した認知症予防プログラムを週に1回・2年間実践し，専門職から住民運営に移行した後の効果を検証するとともに，ファシリテーター(職種)の違いがもたらす効果と特徴を明らかにすることを目的とした．結果は，集団式松井単語記憶検査の即時再生1回目(p=0.021)，2回目(p=0.013)，山口漢字符号変換テスト(p=0.020)，交流頻度(p<0.001)，認知症予防を意識した行動(p<0.001)で改善を認め，住民自主運営への移行後も効果は持続した．また，ファシリテーターの違いによって，集団式松井単語記憶検査の即時再生1回目(p=0.033)，外出頻度(p=0.040)，認知症発症への不安(p=0.020)で差を認めた．このことから，認知症予防における地域住民・他職種との連携では，認知症の危険因子を共有し，認知機能，心理機能，生活習慣の総合評価をもとに支援を実践する必要がある． ◎坪内善仁，山中美里，安田圭志，東條秀則，内藤泰男
6.「身体疾患を合併する精神疾患患者の自宅退院に関連する因子の検討」 (査読付)	共　著	平成30年10月	理学療法学 第45巻6号p366-p372	本研究は，身体疾患を合併した精神科入院患者において，自宅退院が可能であった患者の特徴を明らかにすることを目的とした．2012年1月～2016年6月の間に理学療法(以下，PT)を実施した統合失調症および気分障害を有す患者108例を対象に，PT終了時の転帰を自宅群と非自宅群に群分けし，自宅退院に影響を及ぼす因子を検討した．結果，自宅退院に影響を及ぼす因子として，身体疾患発症時の生活場所が自宅，終了時のBarthel Index65点以上，終了時のGlobal Assessment Functioning51点以上，同居家族ありが抽出された． ◎石橋雄介，林久恵，坪内善仁，福田浩巳，洪基朝，西田宗幹
7.「地域在住女性高齢者の献立立案から取り組む集団調理プログラムの効果」 (査読付)	共　著	平成31年4月	作業療法 第38巻2号p187-p196	本研究の目的は，献立立案から取り組む集団調理プログラムが地域在住女性高齢者の認知機能と自宅での調理頻度に及ぼす効果を調査することであった．対象は地域在住女性高齢者39名で，献立立案-調理群20名，調理実施群19名に週1度・6ヶ月間プログラムを実施し，介入前後で認知機能，心理機能，社会的活動量の変化を比較検討した．結果，認知機能項目で測定時期による主効果を認めたが，交互作用はなかった．また，調理頻度の変化も両群で有意差は示されなかった． 今回の結果から，調理活動自体の認知機能改善への効果は示唆されたが，献立立案課題単独の認知機能・調理頻度への効果は乏しく，介入手法についてさらなる検討が必要である． ◎坪内善仁，安田圭志，山中美里，東條秀則，内藤泰男

事項			年月日	概要
（その他） 「学会発表」 1「一般社団法人奈良県作業療法士会による認知症予防サロンへの取り組み報告」	―	平成27年11月	日本プライマリ・ケア連合学会第29回近畿地方会（於奈良県社会福祉総合センター）	当学会では、奈良県作業療法士会の推薦により、認知症施策に関する作業療法士活動状況を他職種に共有することを目的とした。奈良県吉野郡吉野町在住の高齢者地域サロンの参加者を対象に、認知的手法を用いた介入を週1回1年間実施した。結果、注意機能やうつ傾向の有意な改善、交流頻度の増加を認めた。しかし、他地域で報告されている記憶の自己効力感では有意な変化はなかった。このことから、認知的手法を用いた介入は、認知症予防に影響する可能性があるが、自己効力感向上にはプログラム設定に検討が必要と考えられた。また、認知症の当事者および家族を対象としたカフェでは、参加者が集まらず、開催が困難であった。このことは、地域特性を考慮し、参加しやすい場の設定を再検討する必要があると考えられた。
2「認知症高齢者の最期の外出支援－“家”に込めた妻の想い－」	―	平成28年6月	第17回日本認知症ケア学会大会（於神戸国際展示場）	精神科一般棟においても高齢化が著名であり、従来の身体的治療・認知的ケアに加えて、終末期ケアが重視されている。本報告では、脳血管性認知症を有し、脳梗塞後に重度意識障害・嚥下障害を呈し終末期と告知された対象者とその家族に対し、配偶者のケア参加と自宅への外出を他職種で支援した。結果、家族の介護負担感や抑うつ傾向は軽減し、対象者の死後も配偶者は前向きな生活を再獲得できた。職人であった対象者にとって、家は自ら建て家族が集える大切な居場所であり、配偶者は家に連れて帰れなかった後悔の思いを強く感じていた。この点から、対象者の思いを実現することは、対象者への支援であると同時に家族介護者にとっても重要な支援であると考えられた。
3「認知症予防サロン（介護予防普及啓発事業）における他職種連携を目指した取り組み－作業療法士と介護職員による介入効果の比較から－」	―	平成28年9月	第50回日本作業療法学会（於札幌市教育文化会館）	奈良県吉野郡吉野町において、認知症予防サロン“スマイルくらぶ”の活動支援を実施した。スマイルくらぶは週2回水曜日と金曜日に開催され、参加者は水曜日・金曜日のどちらかを自主選択（曜日は1年間固定）した。内容と進行は両曜日とも同じとなるよう徹底し、毎回担当者間で進行状況を確認した。認知的手法を柱に、調理・創作・講話・回想法・体操を行った。本報告では、同一プログラムを6ヶ月間作業療法士（水曜日）・介護職員（金曜日）が分担し参画した結果、ファシリテーターの違いによって、効果に差異が生じるかを明らかにすることとした。結果は、両群間で開始時・6ヶ月後で有意差は認めず、健康意識行動の増加を認めた。この結果から、プログラム内容や目的を共有することで、地域における認知症予防活動は他職種連携が可能であると考えられた。
4「地域高齢者の“計画・実行・振り返り”を重視した集団での調理プログラムの効果」	―	平成30年9月	第52回日本作業療法学会（於名古屋国際会議場）	地域在住高齢者58名を対象に、計画・実行・振り返りを重要視したプログラムの認知機能・生活機能への介入効果を検証した。検証では、調理計画群24名、調理実施群19名、非介入群15名の3群で6ヶ月間の前後で群間比較を行った。結果、記憶機能や注意機能で調理計画群のみ有意な改善を認めた。このことから、計画・実行・振り返りを意識した調理活動は、認知症予防の一助になると考えられた。

事項			年月日	概要
5「せん妄再発への不安軽減により自宅退院を実現した1事例：認知症高齢者のエンパワーメントを目指した取り組み」	―	令和1年5月	第20回日本認知症ケア学会大会（於国立京都国際会館）	感染症により精神科一般棟に入院し、せん妄と抑うつを呈した認知症高齢患者において、エンパワメント促進を目標に日常生活場面で自己選択・自己決定を支援した。その結果、せん妄の消失に加え、せん妄再発や退院後の生活への不安が軽減し、自律した生活の再獲得に至った。このことから、認知症のある高齢患者においても、自己選択・自己決定を重要視し、本人らしい生活再獲得に向けた作業療法支援が重要であると考えられた。
6「回復期リハビリテーション病棟から自宅退院した大腿骨近位部骨折患者の特徴 ：認知症合併の有無に着目して 」	―	令和1年9月	第53回日本作業療法学会（於福岡国際会議場）	近年、回復期リハビリテーション病院の入院患者においても認知症を合併する割合が増加している。そこで、回復期リハビリテーション病棟に入院した大腿骨頸部骨折患者148名を対象に、認知症合併の有無が転帰や日常生活動作の回復に影響するかについて検証を行った。結果、認知症を合併した患者の特徴として、高齢で入院日数が長く、主介護者は子供の割合が高かった。また、日常生活動作は入院時・退院時ともに有意な低下を示した。以上より、自宅退院を目指した支援では、日常生活動作に加えて、主介護者など環境への配慮・支援が重要である。

教　育　研　究　業　績　書

令和2年3月31日

氏名　中島　大貴

研究分野	研究内容のキーワード
地域在住高齢者の健康増進	身体活動量，身体および精神心理機能

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例 なし		
2　作成した教科書，教材 なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 1）東海記念病院リハビリテーション部 作業療法科 係長による評価	平成29年12月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において約6年勤務し，回復期リハビリテーション，認知症サポート委員，がんリハビリテーション委員，介護予防事業等多岐にわたる分野で活躍をしていた.各領域に関する知識等はその都度自身で積極的に学習し，患者様への還元が行えていた.また，そのような姿勢が部内の後輩の模範となるだけでなく，多職種からも信頼されており院内勉強会や医師会での講師や発表の経験も豊富である.研究活動に関しては自身の研究活動以外に後輩の研究活動へのアドバイザーとして協力しており部内の教育活動にも貢献していた.臨床・研究・教育のいずれの観点からみても教育上の能力を十分に有していると評価する.
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（半日見学）	平成24年8月 ～ （毎年）	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科1年生の病院見学の引率を行った.
2）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成25年6月 ～ 平成25年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（ケースバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である.
3）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成26年7月 ～ 平成26年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，名古屋大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（ケースバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である.
4）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成27年6月 ～ 平成27年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（スーパーバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である.

事項	年月日	概　　要
5）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成28年6月 ～ 平成28年8月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，星城大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った（スーパーバイザー）．内容は症例に対する評価・治療に関する助言やレポートの指導である．
6）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成29年1月 ～ 平成29年2月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，日本福祉大学作業療法学科4年生の臨床実習指導を行った． （スーパーバイザー），内容は症例に対する評価に関しての助言やレポートの指導である．
7）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成29年9月 ～ 平成29年10月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，平成医療短期大学作業療法学科3年生の臨床実習指導を行った（ケースバイザー）．内容は症例の評価・治療に関する助言やレポートの指導である．
8）東海記念病院リハビリテーション部 臨床実習指導（総合実習）	平成29年9月	医療法人社団喜峰会東海記念病院リハビリテーション部において，中部大学作業療法学科2年生の見学実習の引率とレポート指導を行った．
9）地域在住高齢者（サロン参加者）に対しての 認知症予防に関する講演 （岐阜県下呂市社会福祉協議会下呂支部）	平成28年4月 ～ 平成28年12月	岐阜県下呂市社会福祉協議会が運営する「いきいきサロン」に講師として参加．地域在住高齢者を対象に認知症予防に関する講演を行った．講演は9ヶ所で実施した．
10）地域在住高齢者に対しての認知症ケアに 関する講演（岐阜県下呂市　本光坊）	平成28年6月	岐阜県下呂市にある寺院本光坊が主催する高齢者の集いに講師として参加．地域在住高齢者を対象に認知症予防に関する講演を行った．
11）認知症患者の介護者に対しての認知症ケア に関する講演 （岐阜県下呂市社会福祉協議会下呂支部）	平成28年7月	岐阜県下呂市社会福祉協議会が主催する「認知症介護者の集い」に講師として参加．認知症患者の介護者を対象に認知症ケアに関する講演を行った．
12）地域在住の中高齢者に対しての認知症ケア に関する講話 （愛知県春日井市一次予防事業）	平成28年8月	愛知県春日井市にある医療法人社団喜峰会東海記念病院において実施されている，介護予防事業「さぼてんクラブ」が主催している健康講話の講師として参加．地域在住の中高齢者に対して，自宅での認知症ケアに関して講話を行った．
13）地域在住の男性高齢者に対しての健康講話 と運動指導	平成29年9月	愛知県海部郡大治町の保健センターが主催する一次介護予防事業である「じぃじ体操クラブ」に講師として参加．地域在住の男性高齢者に対して，健康講話と運動指導を行った．

事項	年月日	概　　要
14) 登美ヶ丘カレッジ	平成30年10月	奈良学園大学が主催する市民公開講座「登美ヶ丘カレッジ」において，「住み慣れた環境で安心・安全で暮らすために」というテーマで講演を行った．加えて新設されるリハビリテーション学科や作業療法士の説明をした．
15) 地域在住高齢者に対する健康講話	平成31年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」において，認知症予防に関する健康講話と運動指導を行った．
16) 地域在住高齢者に対する運動指導	平成31年3月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ローレル会健康体操」において，認知症予防の運動「マットス」を紹介し，指導及び実施をした．
17) 地域在住高齢者に対する健康講話	平成31年4月	アップル学園前およびローレル会が主催する高齢者を対象にした勉強会において，「認知症と身体活動」というテーマで講演および運動指導を行った．
18) 自立支援型地域ケア会議への出席	平成31年4月～	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「自立支援型地域ケア会議」に出席し，作業療法士の視点からケアプランへの助言を行っている．
19) 社会福祉協議会職員および地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年6月	登美ヶ丘地区社会福祉協議会が主催する登美ヶ丘地区社会福祉協議会総会において，「介護予防-いつまでも元気でいられるように今から心掛けておくこと-」という内容で講演を行った．
20) 地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年6月	（公財）奈良市生涯学習財団登美ヶ丘公民館が主催する「ひとみ学級」において，「健康寿命を延ばすために」という内容で講演を行った．
21) 地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年7月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「元気アップなら講座」において，「認知症と身体活動」というテーマで講演を行った．
22) 地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年7月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ちょこっとサロン」において，「認知症と身体活動」というテーマで講演を行った．

事項	年月日	概　　要
23）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年8月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「登美ヶ丘地区元気いきいき講座」において，「認知症予防における身体活動・運動の重要性」というテーマで健康講話と運動指導を行った.
24）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年9月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」において，「認知症と身体活動」というテーマで健康講話と運動指導を行った.
25）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年9月	東登美ヶ丘地区民生児童委員および登美ヶ丘地区社会福祉協議会が主催する「とみの里ふれあいサロン」において，「介護予防と運動について」というテーマで健康講話と運動指導を行った.
26）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年10月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ふれあい広場」において，「運動の大切さについて」というテーマで健康講話と運動指導を行った.
27）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年10月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」の参加者を対象に，大学内見学および交流会を実施した.
28）地域在住高齢者に対する健康講話	令和1年10月～	奈良市二名包括支援センターが主催する「奈良市一般介護予防事業」において，介護予防に関する講話と運動指導を行っている.
29）地域在住の若年者から高齢者に対する講演	令和1年12月	（公財）奈良市生涯学習財団登美ヶ丘南公民館が主催する「登美ヶ丘南公民館まつり」において，「楽しい健康づくり・コグニサイズ入門」というテーマで講演を行った.
30）地域在住高齢者に対する健康講話	令和2年1月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「POUTO」において，「腰痛予防」というテーマで健康講話と運動指導を行った.
31）地域在住高齢者に対する健康講話	令和2年2月	奈良市登美ヶ丘地域包括支援センターが主催する「ローレル会健康体操」において，「膝関節痛の予防」というテーマで健康講話と運動指導を行った.

事項	年月日	概　　要
5　その他 1）星城大学リハビリテーション研究会の企画と運営	平成24年4月 ～ 平成27年3月	学校法人石田学園星城大学リハビリテーション学部卒業生を対象に，卒後教育，自己研鑽となることを目的とし，年2回の研究会をしている．これらのことにより，経験年数の短い後輩の新人セラピストに対し教員および経験年数の長い先輩のセラピストが指導する場となり，臨床現場への意欲の維持・向上を目的として、臨床現場の問題点に関するディスカッションや問題の明確化を行った．

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許		
作業療法士免許	平成24年4月	作業療法士名簿登録番号　第68464号
認知症対応向上研修　修了	平成26年7月	第14-363号
がんのリハビリテーション研修　修了	平成26年11月	厚後援26年5-124号
修士（リハビリテーション学）	平成30年3月	中部大学 論文題目「季節変動が寒冷地域在住高齢者の身体活動量に及ぼす影響」
マットスインストラクター	平成31年	I000096
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1）身体障害領域，老年期障害領域・地域領域における臨床業務 （医療法人社団喜峰会東海記念病院）	平成24年4月 ～ 平成29年12月	医療法人社団喜峰会 東海記念病院において，身体障害・老年期障害領域（一般病棟，外来リハビリ，地域包括ケア病棟，回復期病棟）の臨床を行った．また，作業療法科リーダーとして，病棟でのカンファレンス，がんリハビリテーションチームや認知症対応チームでの活動にも参加した．
2）奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の申請準備	平成30年1月 ～ 現在に至る	奈良学園大学保健医療学部リハビリテーション学科の申請に向けて，病院訪問や書類作成業務を行った．
4　その他 1）病院の認知症対応力向上事業での取り組み報告	平成27年2月 ～ 平成29年2月	愛知県が取り組んでいる「病院の認知症対応向上事業」の活動報告会において，東海記念病院認知症サポートチームの取り組み状況を報告した．
2）第23回愛知県作業療法学会運営委員	平成27年5月	一般社団法人愛知県作業療法学会が主催の学術大会に運営スタッフとして参加し，学術大会の準備・運営業務に従事した．

研究業績等に関する事項				
著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） なし				
（学術論文）				
1. Factors affecting the discharge destination on hip fracture patients who live alone and have been admitted to an impatient rehabilitation unit （独居の大腿骨近位部骨折患者の転帰先に影響を及ぼす要因） （査読付）	共著	平成28年4月	Journal of Physical Therapy Science, 28 (4) p.1228-p.1232	本研究の目的は，機能的評価と退院先との関係，大腿骨頸部骨折患者のリハビリ後の自宅退院におけるカットオフポイントの特定であった．多重ロジスティック回帰分析の結果，FIMの認知スコアが退院先に影響する重要な変数であった．また，ROC曲線分析において，認知スコア23.5点が自宅退院のカットオフポイントであることが明らかになった． 本人担当部分：調査データの収集 共著者：Hayashi Hiroyuki, Iwai Midori, Matsuoka Hiroka, ◎Nakashima Daiki, Nakamura Shugo, Kubo Ayumi, Tomiyama Naoki
2. Exploring the factor on sensory motor function of upper limb associated with executive function in community-dwelling older adults （地域在宅高齢者の遂行機能に関連する上肢の感覚運動機能） （査読付）	共著	平成28年8月	Nagoya Journal of Medical Science, 78 (3) p.285-p.291	本研究では，地域在住高齢者における上肢の感覚・運動機能と遂行機能の関連性を評価することを目的とした．重回帰分析の結果，非利き手の手指巧緻性が遂行機能と関連付けていることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集 共著者：Hayashi Hiroyuki, ◎Nakashima Daiki, Matsuoka Hiroka, Iwai Midori, Nakamura Shugo, Kubo Ayumi, Tomiyama Naoki
3. ボールローリングエクササイズは非利き手の手指巧緻動作と箸操作困難感を改善する：健常若年者を対象とした実験研究 （査読付）	共著	平成28年10月	日本作業療法士協会学術誌「作業療法」，35 (5) p.462-p.469	本研究では，健常若年者を対象にボールローリングエクササイズを行い，上肢機能やADL動作への効果を明らかにした．その結果，ボールローリングエクササイズが手指巧緻動作と箸操作困難感の改善に寄与することが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文添削 共著者：中村守吾，◎中島大貴，川浦真未子，林浩之
4. 大腿骨近位部骨折患者における精神心理機能に関する研究：地域在住高齢者との比較 （査読付）	共著	平成29年4月	日本作業療法士協会学術誌「作業療法」，36 (1) p.35-p.41	本研究では，大腿骨頸部骨折患者の精神心理機能を明らかにするために，地域在住高齢者と比較した．大腿骨頸部骨折患者群は，MMSE，WHO-5が有意に低く，GDS-15は有意に高く，Delta TMTは異常値を示した． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文添削 共著者：岩井緑，林浩之，◎中島大貴，中村守吾，松岡紘佳，窪優太，久保歩，冨山直輝

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
5. 活動遂行における母指指節間関節と示指および中指近位指節間関節の可動域 （査読付）	共著	平成29年6月	日本作業療法士協会学術誌「作業療法」，36（3） p.291-p.298	本研究は，健常者若年者を対象に母指IP関節と示指・中指PIP関節の機能的可動域を明らかにした．その結果，活動遂行に要する角度は，母指IP関節が44°/13°，示指PIP関節が74°/-3°，中指PIP関節が78°/-12°であった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文執筆 共著者：◎中島大貴，中村守吾，川浦真未子，林浩之
6. Upper-limb motor and sensory function in patients with hip fracture: Comparison with community-dwelling adults （股関節骨折患者における上肢運動および感覚機能：地域在住高齢者との比較） （査読付）	共著	平成29年6月	Journal of Back and Musculoskeletal Rehabilitation，30（6） p.1231-p.1236	本研究では，股関節骨折患者32名と地域在住高齢者32名の上肢機能を比較し，股関節骨折患者の上肢機能を評価することを目的とした．その結果，股関節骨折患者は握力，ピンチ力，手指巧緻性，包括的な手機能が著名に低下していることが明らかになった． 本人担当部分：調査データの収集 共著者：Hayashi Hiroyuki，◎Nakashima Daiki，Matsuoka Hiroka，Iwai Midori，Nakamura Shugo，Kubo Ayumi，Tomiyama Naoki
7. 回復期リハビリテーション病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の効果 （査読付）	共著	平成29年8月	日本老年精神医学会学術誌「老年精神医学雑誌」，28（8） p.899-p.903	本研究では，認知症高齢者の抑うつ・アパシー改善を目的に集団での料理活動を実施した．介入の結果，対照群と比較して介入群では介入期間中に抑うつの有意な改善が認められたが，介入終了後の持続効果はなかった．一方，アパシー，QOLは有意な改善は認められなかった． 本人担当部分：研究計画，介入，論文添削 共著者：窪優太，中澤僚一，各務真菜，加藤美樹，◎中島大貴，岡村英俊，長谷川慧，竹田徳則
8. 季節変動が寒冷地域在住高齢者の身体活動量に及ぼす影響 （修士論文）	単著	平成30年3月	中部大学大学院	本研究では，寒冷地域在住高齢者を対象に，①季節による身体活動量の変動と②季節による生活活動内容の変化を検討した．多重比較検定の結果，Lifecorderで測定した歩数や低強度の活動時間は冬季に減少し，春季や夏季に増加することが明らかになった．一方で総エネルギー消費量や中強度以上の活動時間に季節変動は認められなかった．Physical activity scale for the elderlyを用いて評価した生活活動は，「屋外での園芸」のみ冬季に減少することが明らかとなった．（全58頁）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
9. 心理的介入により脳卒中後のapathyに改善を認め，ADLの回復へと繋がった一例 （査読付）	共著	令和1年6月	「脳神経内科」，90（6） p.701-p.704	本研究では，脳血管障害後のApathyを呈した症例に対して，認知症のApathyで有効とされる心理的アプローチを実施し，その効果を報告した．心理的介入を継続的に実施した結果，Apathyは改善し，ADLの改善に繋がった．そのため，心理的介入は脳血管障害後のApathyに対して有効であることが考えられた． 本人担当部分：研究計画，介入への助言，論文添削 共著者：舩戸敦，◎中島大貴，窪優太
10. Influence of seasonal variations on physical activity in older people living in mountainous agricultural areas	共著	令和1年11月	「Journal of Rural Medicine」，14（2） p.165-p.175	本研究では，地域在住高齢者を対象に，①季節による身体活動量の変動と②季節による生活活動内容の変化を検討した．多重比較検定の結果，加速度計で測定した歩数や低強度の活動時間は冬季に減少し，春季や夏季に増加することが明らかになった．Physical activity scale for the elderlyを用いて評価した生活活動は，「屋外での園芸」のみ冬季に減少することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，論文執筆 共著者：◎Nakashima Daiki，Kimura Daisuke，Watanabe Hidehiro，Goto Fumihiko，Kato Miki，Fujii Keisuke，Kasuya Eri，Tomiyama Naoki，Hasegawa Ryuichi
（その他）				
「国際学会」				
1. Ball Rolling Exercise Improves Finger Dexterity and Chopstick Operability of the Non-Dominant Hand in Healthy Young Adults （ボールローリングエクササイズは非利き手の手指巧緻動作と箸操作困難感を改善する）	－	平成26年6月	第16回世界作業療法士連盟大会 第48回日本作業療法学会（横浜）	本研究では，健常若年者を対象にボールローリングエクササイズを行い，上肢機能やADL動作への効果を明らかにした．その結果，ボールローリングエクササイズが手指巧緻動作と箸操作困難感の改善に寄与することが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料添削 共同発表者：中村守吾，◎中島大貴，川浦真未子，林浩之
2. Physical, psychological, and cognitive factors that have higher influences on physical activity in community-dwelling oldest-old women （地域在住高齢者における身体活動量に影響を与える身体的，精神的，認知的要因）	－	平成29年7月	Occupational Therapy Australia 27th National Conference and Exhibition 2017 （Australia，Perth Convention and Exhibition Center）	本研究では，超高齢女性（85歳以上）の身体活動量に影響を与える要因を明らかにすることを目的とした．重回帰分析の結果，GDS-15のスコア（抑うつ）が，超高齢女性の身体活動量に影響を与える可能性が示唆された． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：◎Nakashima Daiki，Watanabe Hidehiro，Goto Fumihiko,Kimura Daisuke，Tomiyama Naoki，Islam Mohammod Monirul

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. Effects of group-based resistance exercise on social networking and mental depression in older adults (集団で行う抵抗運動が高齢者のソーシャルネットワークと抑うつ状態に及ぼす影響)	-	平成29年7月	Occupational Therapy Australia 27th National Conference and Exhibition 2017 (Australia, Perth Convention and Exhibition Center)	本研究では，地域で高齢者の集団に運動介入を行い，地域交流のある高齢者群と地域交流のない高齢者群で，ソーシャルネットワークと精神機能にどのような効果を示すか明らかにした．介入の結果，地域交流のない群の方がソーシャルネットワークと精神機能が有意に拡大した． 本人担当部分：発表資料添削 共同発表者：Goto Fumihiko, Watanabe Hidehiro, ◎Nakashima Daiki, Mohammod Monirul Islam, Hasegawa Ryuichi
4. Effects of elastic band-based resistance exercises on impaired cognition in community-dwelling older adults having mild cognitive impairment (軽度認知障害を有する地域在住高齢者における認知障害に対するゴムバンド運動の効果)	-	平成29年7月	Occupational Therapy Australia 27th National Conference and Exhibition 2017 (Australia, Perth Convention and Exhibition Center)	本研究は，地域在住の軽度認知症高齢者を対象に，認知機能に対するゴムバンド運動の効果を明らかにした．ゴムバンド運動の介入前後で，The Japanese version of Montreal Cognitive Assesmentの得点が有意に改善することが明らかになった． 本人担当部分：調査データの収集，発表資料添削 共同発表者：Watanabe Hidehiro, Goto Fumihiko, ◎Nakashima Daiki, Mohammod Monirul Islam, Hasegawa Ryuichi
「国内学会」				
1. 活動遂行における母指指節間関節と示指および中指近位指節間関節の可動域	-	平成25年6月	第47回日本作業療法学会（大阪）	本研究は，健常者若年者を対象に母指IP関節と示指・中指PIP関節の機能的可動域を明らかにした．その結果，活動遂行に要する角度は，母指IP関節が44°/13°，示指PIP関節が74°/-3°，中指PIP関節が78°/-12°であった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：◎中島大貴，中村守吾，川浦真未子，林浩之
2. 地域在住高齢者の注意機能に関連する上肢機能の探索的研究	-	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	本研究では，地域在住高齢者における上肢の感覚・運動機能と遂行機能の関連性を評価することを目的とした．重回帰分析の結果，非利き手の手指巧緻性が遂行機能と関連付けていることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：◎中島大貴，林浩之，金田（松岡）紘佳，市川（久保）歩，冨山直樹

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
3. 大腿骨近位部骨折患者における精神心理機能に関する研究：地域在住高齢者との比較	-	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	本研究では，大腿骨頸部骨折患者の精神心理機能を明らかすることを目的に，地域在住高齢者との比較行った．大腿骨頸部骨折患者群は，MMSE，WHO-5が有意に低く，GDS-15は有意に高く，Delta TMTは異常値を示した． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料添削 共同発表者：岩井緑，林浩之，◎中島大貴，中村守吾，金田（松岡）紘佳
4. 大腿骨近位部骨折患者の上肢機能に関する基礎的研究：地域在住高齢者との比較	-	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	本研究は，大腿骨近位部骨折患者の上肢機能が地域在住高齢者と比較し，どの程度であるかを把握するために行った．その結果，大腿骨近位部骨折患者は，筋力，Jebsen-Taylor Hand function testのスコア，知覚機能が有意に低下していることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集 共同発表者：中村守吾，林浩之，◎中島大貴，金田（松岡）紘佳，岩井緑
5. 独居の大腿骨近位部骨折患者の転帰先を分けるFIM得点に関するパイロットスタディ	-	平成27年6月	第49回日本作業療法学会（神戸）	本研究の目的は，大腿骨頸部骨折患者のリハビリ後の自宅退院におけるカットオフポイントの特定であった．多重ロジスティック回帰分析の結果，FIMの認知スコアが退院先に影響する重要な変数であった．また，ROC曲線分析において，認知スコア23.5点が自宅退院のカットオフポイントであることが明らかになった． 本人担当部分：調査データの収集 共同発表者：林浩之，岩井緑，金田（松岡）紘佳，◎中島大貴，市川（久保）歩
6. 地域在住高齢者の生活機能に影響を及ぼす上肢機能に関する予備的研究	-	平成27年11月	第74回日本公衆衛生学会（長崎）	本研究の目的は，高次生活機能に影響を与える上肢機能を明らかにすることであった．共分散構造分析の結果，手指巧緻性と知覚機能が高次生活機能に影響を及ぼす要因であることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 発表者：中島大貴

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
7. 抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の効果の検討-回復期リハビリテーション病棟における取り組み 第一報-	-	平成28年4月	第17回日本認知症ケア学会大会 （神戸）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟入院中の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対して実施した，集団料理活動の効果の検討を目的とした．その結果，介入群は抑うつ・アパシー・QOLの改善が認められた．集団での活動を通じた受容体験と賞賛による自己効力感の向上が抑うつ・アパシー・QOLの改善につながったと考えられた． 本人担当部分：研究計画，介入 共同発表者：窪優太，加藤美樹，◎中島大貴，岡村英俊，中澤僚一，長谷川慧，各務真奈，竹田徳則
8. 回復期リハビリテーション病棟入院の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に対する集団料理活動の持続効果の検討	-	平成28年9月	第6回日本認知症予防学会学術集会 （仙台）	本研究では，回復期リハビリテーション病棟に入院中の抑うつ・アパシーを呈する認知症高齢者に集団料理活動を実施し，その持続効果を検討することを目的とした．その結果，料理活動後の持続効果は一部認められたが，抑うつには改善の持続は認められず，活動終了後のフォローアップの必要性が示唆された． 本人担当部分：研究計画，介入 共同発表者：窪優太，加藤美樹，◎中島大貴，岡村英俊，中澤僚一，長谷川慧，各務真奈，竹田徳則
9. 地域在住高齢者におけるPhysical activity scale for the elderlyと加速度計からみた身体活動量の関連	-	平成29年10月	第66回日本農村医学会 （沖縄）	本研究の目的は，Physical activity scale for the elderly（PASE）と加速度計を用いて高齢者の身体活動量を測定し，その関連を検討することとした。その結果，PASEと総エネルギー消費量の間に有意な相関が認められたが，中高強度の活動時間との間には関連を認めなかった。 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 発表者：中島大貴
10. 集団によるゴムバンド運動が軽度認知障害者の認知機能に与える効果	-	平成29年11月	第76回日本公衆衛生学会 （鹿児島）	本研究は，集団ゴムバンド運動実施群（介入群）と対照群を設定し，集団ゴムバンド運動の認知機能への効果を検討した．二元配置分散分析の結果，交互作用は認めなかった．しかし，The Japanese version of Montreal Cognitive Assesmentの得点がカット値以上に改善した者の割合は，介入群で有意に多いことが明らかになった．． 本人担当部分：調査データの収集 共同発表者：渡邉英弘，◎中島大貴，藤井啓介

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
11. 季節変動が寒冷地域在住高齢者の身体活動量に及ぼす影響	－	平成30年9月	第73回日本体力医学会（アオッサ・ハピリン）	本研究では，地域在住高齢者を対象に，①季節による身体活動量の変動と②季節による生活活動内容の変化を検討した．多重比較検定の結果，Lifecorderで測定した歩数や低強度の活動時間は冬季に減少し，春季や夏季に増加することが明らかになった．一方で総エネルギー消費量や中強度以上の活動時間に季節変動は認められなかった．Physical activity scale for the elderlyを用いて評価した生活活動は，「屋外での園芸」のみ冬季に減少することが明らかとなった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：◎中島大貴，渡邉英弘，後藤文彦，加藤美樹，木村大介，冨山直輝，長谷川龍一
12. 入院超高齢患者の抑うつの有無による栄養状態，体組成，認知機能，日常生活動作能力の比較．	－	平成31年2月	回復期リハビリテーション病棟協会第33回研究大会 in 舞浜・千葉（千葉）	本研究では，入院超高齢患者の抑うつの有無による栄養状態，体組成，認知機能，ADL能力について比較し，抑うつを有する入院超高齢患者の特徴を明らかにすることとした．その結果，抑うつ群は，チャールソン併存疾患指数が有意に高く，ADL能力の評価指標であるFunctional Independence Measure得点は有意に低かった．その他の項目は，いずれも統計的有意差を認めなかった． 本人担当部分：研究計画，発表資料作成 共同発表者：窪優太，則竹賢人，◎中島大貴，山田和政
13. 高齢骨折患者におけるPhase angleを用いた栄養状態の評価．	－	令和1年11月	第3回日本リハビリテーション医学会秋季学術集会（静岡）	本研究では，高齢骨折患者におけるPhase angle（以下，PA）と栄養状態の関係を調査し，PAにおける栄養状態のカットオフ値を算出することを目的とした．研究の結果，PAは栄養障害と有意に関連し（OR: 2.73，95%CI: 1.31-5.67），PAにおける栄養障害のカットオフ値は3.74度（AUC: 0.69，p = 0.004）であった． 本人担当分：研究計画，発表資料作成 共同発表者：窪優太，則竹賢人，◎中島大貴，藤井啓介，山田和政
「研究会」				
1. 回復期リハビリテーション病棟における認知症を伴う高齢者を対象とした集団活動に関する効果の検討	－	平成27年11月	第12回東海記念病院リハビリテーション研究会	本研究では，回復期リハビリテーション病棟入院中の抑うつ・アパシーを呈した認知症高齢者に対する，集団作業活動の紹介と効果を検討した．集団活動実施群（介入群）と集団活動非実施群（対照群）で比較した結果，介入群に抑うつ・アパシーに対する即時的改善が認められたが，持続効果に一定した見解は得られなかった． 本人担当部分：研究計画，介入 共同発表者：窪優太，加藤美樹，◎中島大貴，岡村英俊，中澤僚一，長谷川慧，各務真菜，竹田徳則

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2. 院内デイケアの活動内容と結果報告	－	平成28年11月	第13回東海記念病院リハビリテーション研究会	本研究では，東海記念病院で実施されている認知症高齢者を対象にした院内デイケアが，参加者の認知機能に与える影響を明らかにした．介入前後の比較を行った結果，Neuropsychiatric Inventoryに有意な改善が認められ，Mini-Mental State Examinationが維持されていたことから，認知機能の維持，BPSDの改善に有用であることが示唆された． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成，発表 共同発表者：◎中島大貴，窪優太，土屋智歩，船戸敦，岡村英俊，加藤美樹
3. 脳血管疾患患者に対する上肢機能訓練について	－	平成29年10月	第14回東海記念病院リハビリテーション研究会	本研究では，脳建艦疾患患者の上肢機能訓練に関して最新の知見を文献レビューした．また，東海記念病院で実施されている上肢機能訓練の効果を運動麻痺や上肢筋力の改善から検討した．文献レビューの結果，Bio feedback，電気刺激，課題指向型訓練などが有用であり，これらを取り入れた東海記念病院における介入でも上肢機能訓練が有意に改善していることが明らかになった． 本人担当部分：研究計画，調査データの収集，発表資料作成 共同発表者：神村美帆，酒井美幸，長谷川慧，◎中島大貴

教　育　研　究　業　績　書

2020年　3月　31日

氏名　　野田優希

研究分野	研究内容のキーワード
スポーツリハビリテーション、運動器系理学療法	スポーツリハビリテーション、足関節、競技復帰

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例	2019年4月1日～現在	講義では可能な限りイラストや実際の患者さんの写真またはビデオを多用し，分かりやすいように工夫している．また専門的な言葉や表現については分かりやすいよう説明を加え、学生の理解の向上に努めている． 教科書的な内容を実際の症例に重ね合わせ，机上での勉強と臨床でのギャップを極力少なくするように努めている．
2　作成した教科書，教材 (1)頭蓋療法を含むファンクショナルポジショナルリリースと促通位リリースのアプローチ（翻訳）（ポジショナルリリーステクニック）	2018年9月25日	野田優希 翻訳にあたって、できるだけ原文に忠実に翻訳した。また専門的な表現や特殊な言い回し、分かりにくい表現の場合は、可能な限り読者に伝わりやすいよう言葉を選び翻訳した。
3　教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 1）富士通９人制バレーボールチームトレーナー	2009年7月～現在	富士通9人制バレーボールチームのトレーナーとして、週１回練習に帯同し、全国大会・近畿大会などの試合は計100回以上帯同した。選手のテーピングやウォーミングアップ、トレーニング指導およびアスレティックリハビリテーションを担当した。
2）実習指導実績	2009年4月1日～2018年3月31日	藤田整形外科スポーツクリニック・リハビリテーション部において、毎年２～３名の専門学校生や大学生の評価実習・長期実習指導を担当した。患者さんとのコミュニケーションをとることを積極的に促し、机上の知識と臨床での現象をいかに分かりやすく結びつけるかを重要視して指導を行った。
5　その他 なし		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許 1）理学療法士免許	2007年5月10日～現在	第65175号：厚生労働省
2）認定理学療法士（スポーツ理学療法）	2015年4月1日～2020年3月31日	第9-80号：日本理学療法士協会
3）認定理学療法士（スポーツ理学療法）更新	2020年4月1日～現在	第9-560号：日本理学療法士協会
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 なし		
4　その他 JWBAウェイクボード全日本選手権 in 芦屋　コンディショニングスタッフ	2019年11月3日	大会に、コンディショニングスタッフとして参加し、選手のパフォーマンス向上および傷害予防を目的にコンディショニングの指導を行った。

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　要
（著書） 頭蓋療法を含むファンクショナルポジショナルリリースと促通位リリースのアプローチ（翻訳） （ポジショナルリリーステクニック）	共著	2018年9月25日	ガイアブックス	監訳者　森　彩子、小幡太志 翻訳者　酒井孝文、松尾慎、中川貴雄、中川達雄、横山茂樹、野田優希、弓岡まみ、小原教孝、坂本竜司、篠原　博、福永裕也、弓岡光徳 翻訳にあたって、できるだけ原文に忠実に翻訳した。また専門的な表現や特殊な言い回し、分かりにくい表現の場合は、可能な限り読者に伝わりやすいよう言葉を選び翻訳した。
（学術論文） 1）当院における有痛性分裂膝蓋骨の治療成績とスポーツ復帰について	共著	2012年1月	「スポーツ傷害」第17巻 P.8-P.10	2007～2011年に有痛性分裂膝蓋骨と診断した症例のうち当院で継続的な治療を行った63例81膝について報告した．外側広筋リリース+ドリリング施行群の治療成績は，全例で骨癒合が得られ，癒合までの期間は平均8.6±4.2週であった．また，走行開始までの期間は平均7.5±3.8週，競技復帰までの期間は平均10.7±5.0週であった．骨片切除術施行群の治療成績は，走行開始までの期間が平均5.8±2.1週，競技復帰までの期間が平均11.3±5.3週であった．保存的治療施行群では，走行開始までの期間が平均0.3±0.8週，競技復帰までの期間が平均1.0±2.4週であった． 共著者：古川 裕之，福岡 ゆかり，松本 晋太朗，野田 優希，小松 稔，内田 智也，藤田 健司，大久保 吏司（担当部分：対象者の治療とデータ分析）

2) コンディショニング実施とスポーツ傷害発生の検討　高校アメリカンフットボールおよび女子バスケットボール選手へのアンケート調査から（査読付）	共著	2012年3月	「神戸学院総合リハビリテーション研究」第7巻第2号 P.121-P.129	兵庫県内19校の高等学校に対し，質問紙による調査を実施した．傷害経験とコンディショニングの有無との関係に対しクロス集計を用い，χ二乗独立性の検定を用いた．ウォームアップに比べ，クールダウンの実施率は明らかに低く実施時間も短いという結果が得られた．またスポーツ傷害の有無とコンディショニングの有無との間に有意な関連性が認められ，スポーツ傷害の非経験群には個人でウォームアップもクールダウンも実施する者の割合が高かった．スポーツ傷害とコンディショニング間に有意な関連性が認められたことから，コンディショニングの有無はスポーツ傷害の発生に十分関与しているものと考えられた． 共著者：大久保 吏司，中野 有貴，古川 裕之，福岡 ゆかり，松本 晋太郎，野田 優希，小松 稔，内田 智也，藤田 健司 （担当部分：対象者の治療とデータ分析）
3) 中学野球選手におけるFunctional Movement Screenと投球障害の関係（査読付）	共著	2016年4月	「体力科学」第65巻第2号 P.237-P.242	兵庫県内の中学生に対し，Functional Movement Screenを実施し，そのScoreと投球障害の関係を分析した．投球障害を経験している者はScoreが低く，投球障害の経験のない者はScoreが高い結果となった． 共著者：内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，中山 良太，武田 雄大，平川 理映子，武藤 貢平，大久保 吏司，古川 裕之，藤田 健司 （担当部分：測定とデータ分析）
4) Single Leg Up Down テストと体重支持指数(Weight Bearing Index)の関連（査読付）	共著	2016年12月	「理学療法科学」第31巻第6号 P.791-P.794	中学野球選手202名に我々が考案したSingle Leg Up Down テスト(以下SLUDテスト)と体重支持指数(以下WBI)の関連について検討した．20cm台からのSLUDテスト遂行の可否が下肢筋力のスクリーニングテストとして有用であることが示された． 共著者：内田 智也，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，大久保 吏司，藤田 [illegible]

5) 足関節内反捻挫受傷後の初診時における片脚負荷テストと圧痛部位，スポーツ復帰時期の関連性（査読付）	共著	2017年1月	「日本臨床スポーツ医学会誌」第25巻第1号 P.59-P.63	足関節捻挫後の復帰時期を予測するために片脚負荷テスト(OLLT)を実施した．OLLTは片脚立ち，片脚カーフレイズ，片脚ホップを実施した．受傷後早期にどの動作が可能かによって復帰時期に有意な差がみられた．OLLTのレベルによりスポーツ復帰時期を予測できることが分かった． 共著者：野田 優希，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，横山 茂樹，藤田 健司（担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
6) 性差によるバレーボールの傷害発生の特徴（査読付）	共著	2017年1月	「日本ヘルスプロモーション理学療法」第6巻第4号 P.197-P.200	バレーボールの傷害調査を行い，男女間の傷害発生の傾向を分析した．バレーボールでは足部，腰部，肩関節，下腿において発生する傷害が男女で異なっており，コンディショニング指導の際は性差による傷害発生の特徴を考慮する必要性が示された． 共著者：野田 優希，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，藤田 健司（担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
7) 投球動作のEarly Cocking期における軸足股関節の運動学・運動力学的特徴（査読付）	共著	2017年1月	「日本臨床スポーツ医学会誌」第25巻第1号 P.16-P.23	中学野球選手51名を対象に，良好なEarly Cocking期の体重移動における軸足下肢運動の運動学的及び運動力学的な特徴を明らかにすることを目的とした．Early Cocking期の良好な体重移動を遂行するには軸足股関節屈曲位を保持するべく股関節伸展筋群の活動を意識することが重要だと考えられた． 共著者：内田 智也，大久保 吏司，松本 晋太朗，小松 稔，野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，藤田 健司（担当部分：測定）

8) 中学野球選手の投球動作におけるEarly Cocking期の下肢関節・体幹動作の不良と上肢関節トルクの関係 (査読付)	共著	2017年8月	「日本臨床スポーツ医学会誌」第25巻第3号 P.333-P.338	良好な投球動作を遂行するには, Early Cocking期 (以下, E.C.期) の良好な下肢関節・体幹動作が重要とされる. そこで本研究はE.C.期の下肢関節・体幹動作の良否が上肢関節トルクに及ぼす影響を検討した. E.C.期の下肢関節・体幹動作の不良は, 上肢関節へのストレスを増大させる一因になると考えられ, 運動力学的にも障害発生リスクの高い投球動作であることが示唆された. 共著者:内田 智也, 大久保 吏司, 古川 裕之, 松本 晋太朗, 小松 稔, 野田 優希, 石田 美弥, 佃美 智留, 藤田 健司 (担当部分:対象の測定)
9) 投球動作におけるフットコンタクト時の軸足股関節屈曲角度と骨盤回旋の関係 (査読付)	共著	2017年8月	「日本臨床スポーツ医学会誌」第25巻第3号 P.339-P.345	不良な投球動作の一つに「投球方向への早期の骨盤回旋」が挙げられ, その動作はFoot Contact(FC)での軸足股関節屈曲角度と関係があると考えられている. そこで, 本研究はFCの軸足股関節屈曲角度と骨盤回旋との関係を検討することを目的とした. 不良な投球動作の典型例である投球方向への骨盤の早期回旋を修正するにはFCにおける軸足股関節屈曲角度に着目することが重要であると考えられた. 共著者:内田 智也, 大久保 吏司, 古川 裕之, 松本 晋太朗, 小松 稔, 野田 優希, 石田 美弥, 佃 美智留, 藤田 健司 (担当部分:対象の測定)
10) 女性バレーボール競技者の ポジションによる 傷害発生の特徴 ―スパイカー,セッター,レシーバーの3つのポジションによる検討― (査読付)	共著	2017年10月	「理学療法科学」第32巻第5号 (in press)	30歳未満の女性バレーボール競技者 290 人 638 件を対象にバレーボールの ポジションによる傷害発生の特徴を明らかにし,傷害予防やコンテイショニング指導の一助とすることを目的とした.疾患はポジションにより特徴がみられた.傷害予防やコンディショニング指導の際には,ポジションによる傷害発 生の特徴を考慮する必要性が示唆された. 共著者:野田 優希, 古川 裕之, 松本 晋太朗, 小松 稔, 内田 智也, 石田 美弥, 佃 美智留, 藤田 健司 (担当部

11) 足関節内がえし捻挫受傷後の圧痛部位を考慮した片脚負荷テストとスポーツ動作開始時期の関連性（査読付）	共著	2018年1月	「日本臨床スポーツ医学会誌」第26巻第1号(in press)	足関節外側靭帯損傷と診断され，練習完全復帰までフォロー可能であった202名を対象に，圧痛部位を考慮した片脚負荷テスト（以下，OLL-Test）とスポーツ動作開始時期との関連性を検証した．圧痛部位を考慮したOLL-Testにより，足関節の荷重機能の障害度とスポーツ動作開始時期の関連性をより詳細に把握できる可能性を示唆した． 共著者：野田 優希，古川裕之，松本晋太朗，小松 稔，内田智也，石田美弥，佃美智留，横山茂樹，藤田健司（担当部分：データ収集，結果分析，論文作成を行った）
（その他） （解説） 1) 慢性足関節不安定性(Chronic Ankle Instability; CAI)に対する固有感覚トレーニングの有効性とその課題	共著	2016年9月	「Sportsmedicine」第183巻 P.9-P.14	慢性足関節不安定症について固有感覚に対する文献のレビューおよびその課題について述べた．また臨床で実践可能な評価トレーニングについても記載した． 共著者：野田 優希，竹之下秀樹，横山茂樹(担当部分：本文作成，資料収集)
2) 動作・運動計測機器の活用法　下肢荷重検査	共著	2018年4月	医療と検査機器・試薬	下肢荷重検査の臨床における活用法について説明した．重心と足圧中心の違いについて説明した．また，実際の患者を症例として提示し，身体機能評価と重心動揺・足圧分布から患者の機能低下を推察する臨床思考について述べた． 共著者：野田 優希，瀬戸川大(担当部分：本文作成，資料収集)

（国内学会発表） 1）着地後の運動方向が異なる際の前足部、中足部、後足部の動きの特徴	―	2011年4月	第46回日本理学療法学術大会	着地動作とその後の運動方向の違いにおける足部の詳細な動作解析を行うこと，さらに，動作の違いによる足部の動きの特徴を見つけ出し，今後の障害予防の一助とすることを目的とした．今回の研究から，着地後の動作中の各足部の動態が明らかとなった．特に，横方向への動作時にかかる中足部，前足部の運動パターンの違いを考慮したリハビリテーションの必要性が示唆された．具体的には，中足部，前足部の回内/回外可動性の確保と，回旋ストレスがかかった際にそれを保持する足部短筋群の強化が必要と考えられた． 発表者：古川 裕之，大久保 吏司，内田 智也，福岡 ゆかり，松本 晋太朗，野田 優希，小松 稔，藤田 健司，嶋田 智明（担当部分：データ分析）
2）小学生野球選手の内側上顆骨端線障害に対するインターバルスローイングプログラムを用いた競技復帰成績	―	2011年4月	第46回日本理学療法学術大会	本研究では少年用ITプログラム運用開始前後の競技復帰状況を比較し，このプログラムの効果を検討することを目的とした．今回プログラム運用前後で競技復帰成績を比較したところ，新IT群では旧IT群に比べて約2週競技復帰に要する期間が短かった．しかし，再発率はどちらも約10%と有意差が認められなかった．復帰までの期間が短縮したことを鑑みると早期復帰を望む少年野球選手に応じたプログラムとして適切だったのではないかと考えられる． 発表者：小松 稔，松本 晋太朗，内田 智也，野田 優希，福岡 ゆかり，古川 裕之，藤田 健司（担当部分：対象の治療，データ分析）
3）バレーボール競技者の傷害調査(第2報)傷害発生率と性差について	―	2013年5月	第48回日本理学療法学術大会	2007年4月から2011年10月までに当院を受診したバレーボール競技者の傷害調査を行い，男女間で傷害発生部位が異なるか否か，また各部位ごとの発生傷害に違いがみられるかについて傷害発生率をもとに検討した．肩関節，腰部，足部において男女間で違いがみられた．試合の流れの違いが，今回の疾患別傷害発生率に男女間の違いとなって表れたのではないかと考えられた． 発表者：野田 優希，古川 裕之，福岡 ゆかり，松本 晋太朗，小松 稔，内田 智也，藤田 健司（担当部分：データ分析，学会発表）

4) 当院における足関節靭帯損傷の復帰傾向　初診時の足関節機能テストからジョグ開始時期・練習完全復帰時期は予測可能か	—	2014年5月	第49回日本理学療法学術大会	当院で行っている初診時の足関節機能テスト（Ankle Functional Test：AFT）とジョグ開始時期,練習完全復帰時期の関係,およびAFTにおけるレベル別のジョグ開始時期と練習完全復帰時期の相関関係を分析した．足関節捻挫後にAFTを実施することである程度の復帰時期を予測できることが示された． 発表者：野田 優希，内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，藤田 健司（担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
5) SLUDテストと体重支持指数(Weight Bearing Index)の関連について	—	2014年10月	第25回日本臨床スポーツ医学会学術集会	投球動作は運動連鎖に基づく全身運動であり，下肢筋力不足による投球フォームの乱れは投球障害発生の一因となる．下肢筋力の評価法としてSLUDテストを考案した．SLUDテストが競技特性を踏まえた投球障害のスクリーニングテストとなる可能が示唆された． 発表者：内田 智也，小松 稔，松本 晋太朗，野田 優希，石田 美弥，大久保 吏司，古川 裕之，藤田 健司（担当部分：測定）
6) 当院における足関節靭帯損傷後の復帰傾向	—	2014年10月	第25回日本臨床スポーツ医学会学術集会	足関節靭帯損傷後，内側に圧痛を認める選手は外側のみの選手よりも重症であり復帰が遅れる印象がある．受傷後早期の足関節機能と圧痛部位から復帰時期を分析した．ジョグ開始時期，練習復帰時期は全ての群間で有意な差があり受傷後早期の足関節機能により復帰時期に差が生じることが示された．圧痛部位では復帰時期に有意な差がなかったことから，復帰時期を考える際足関節機能が重要であることが示唆された． 発表者：野田 優希，内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，石田 美弥，佃美知留，古川 裕之，藤田 健司（担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
7) Early cocking期の動作不良がその後の投球動作に及ぼす運動力学的影響	—	2015年10月	第26回日本臨床スポーツ医学会学術集会）	良好な投球動作を遂行するためにはEalry cocking期（E.C期）の軸足股関節を使った体重移動が重要となる．体重移動の可否により対象を良好群と不良群に分けた．不良群は球速の増大に伴い肩関節内旋トルク及び肘関節内反トルクが増大した．よって，E.C期の体重移動において股関節屈曲を意識させることが重要だと考えられた． 発表者：内田 智也，小松 稔，松本 晋太朗，野田 優希，石田 美弥，古川 裕之，大久保 吏司，藤田 健司（担当部分：測定）

8) 当院における肩関節前方脱臼に対する治療成績	—	2015年10月	第26回日本臨床スポーツ医学会学術集会	肩関節前方脱臼に対して鏡視下Bankart法と鏡視下Bankart & open Bristow法を行った症例の治療経過，競技復帰について術式による違いを検討した．両術式ともに同様の回復過程を示し，競技復帰時期に術式の違いは認められなかった． 発表者：古川 裕之，松本 晋太朗，野田 優希，小松 稔，内田 智也，石田 美弥，佃 美智留，藤田 健司（担当部分：対象の治療，測定）
9) 投球動作におけるステップ側の下肢筋力と膝関節動作及び肩関節・肘関節トルクとの関係	—	2016年5月	第51回日本理学療法学術大会	投球動作は軸足による並進運動及びステップ足を軸とした回転運動によって構成され，良好な投球動作を獲 得するためには,安定した下肢・体幹動作が重要となる．投球動作におけるステップ側の下肢筋力と膝関節 動作及び肩関節・肘関節トルクの関係を検討した．ステップ足の膝伸展筋力の筋力不足はフットプラント以降のスムーズな膝関節屈曲動作を阻害し,上肢に過剰なストレスを与える投球動作に繋がることが示唆された． 発表者：内田　智也，松本 晋太朗，小松 稔，野田 優希，石田　美弥，佃　美智留，古川　裕之，大久保　吏司，藤田　健司（担当部分：測定）
10) 当院における上腕骨小頭OCDに対するMosaicplastyの治療成績	—	2016年10月	第27回日本臨床スポーツ医学会学術集会	OCDの診断を受けMosaicplastyを施行し練習復帰までフォロー可能だった男性20例を対象とした． Mosaicplasty後の練習復帰は，諸家の報告と比べ早期に可能だった．また，今回の結果では特に屈曲可動域について有意な改善が見られた．術後急性期は愛護的な可動域訓練を行うが，術後3ヶ月までに積極的な可動域訓練を行うことで改善が可能だったと考えられる． 発表者：小松 稔，松本 晋太朗，内田 智也，野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，藤田 健司（担当部分：対象者の治療とデータ入力）

11) 足関節内反捻挫受傷後における初診時の片脚負荷テストとスポーツ復帰時期の関連性	—	2017年1月	第22回スポーツ傷害フォーラム	当院で行っている初診時の片脚負荷テスト(One Leg Loading Test: OLL-Test)とジョギング開始時期,スポーツ復帰時期の関係を分析した．OLL-Testは足関節障害の重症度とスポーツ動作再開時期の関連性を把握できる有用なテストであることが示唆された. 発表者：野田 優希，内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，石田 美弥，佃美知留，古川 裕之，藤田 健司（担当部分：対象の治療，データ分析，学会発表）
12) 投球動作におけるステップ側下肢筋力と身体重心速度および肩関節内旋トルクの関係	—	2017年1月	第22回スポーツ傷害フォーラム	上肢優位の不良な投球動作の一例に「膝の縦割れ」というステップ動作が挙げられ，大腿四頭筋の筋力不足はその一因であると考えられる．そこで，本研究はその根拠を示すべく，ステップ側下肢筋力と身体重心加速度および肩関節内旋トルク（SIRT）との関係を定量的に検討した．ステップ側下肢筋力不足は「膝の縦割れ」と表現される投球動作に繋がり，投球障害のリスクファクターになり得ることが示された. 発表者：内田 智也，古川 裕
13) 投球動作における“体の開き”の評価基準の検討	—	2017年5月	第52回日本理学療法学術大会	早期に骨盤・体幹の回転運動が開始する動作，いわゆる“体の開き”は不良な投球動作であるが統一した基準はない．そこで，本研究はその評価基準を統一化する一助となるべく，いわゆる“体の開き”に関連があるとされるEarly Cocking期（E.C.期）の軸足動作と骨盤回旋のタイミング（TPR）との関連を検討した．軸足股関節屈曲角度と骨盤回旋のタイミングを評価することで“体の開き”を評価することが出来る可能性があ示唆された. 発表者：内田 智也，松本 晋太朗，小松 稔，野田 優希，石田 美弥，佃 美智留，古川 裕之，大久保 吏司，藤田 健司（担当部分：対象の測定）

14) 投球動作におけるステップ脚膝関節の力学的仕事量と肩関節トルクの関係	―	2017年5月	第9回日本関節鏡・膝・スポーツ整形外科学会	投球中の肩関節ストレスの軽減には，良好な下肢関節動作が重要となる．そこで，本研究はFoot Contact(FC)以降のステップ脚膝関節の力学的仕事量と肩関節トルクの関係について検討した．ステップ脚膝関節伸展筋力は良好な投球動作獲得に寄与し，FC以降の不十分な大腿四頭筋の遠心性筋発揮は肩関節ストレスを増大すると考えられた． 発表者：内田 智也，古川 裕之，松本 晋太朗，小松 稔，野田 優希，藤田 健司（担当部分：対象の測定）
15)足関節捻挫受傷後に実施した片脚負荷テストの妥当性の検証	―	2019年10月	第30回日本臨床スポーツ医学会学術集会	我々は、足関節捻挫症例に対し、独自の機能テスト（以下、片脚負荷テスト）を実施し、スポーツ復帰時期の目安としている。本テストと靭帯損傷の程度および他のスコアリングスケールとの関連性について検討した。片脚負荷テストは、靭帯損傷の程度および他のスコアリングスケールと有意な相関を認め、足関節捻挫後の状態を簡便に調べる機能テストとして使用可能であることが示唆された。 発表者：野田 優希,藤田 健司,古川 裕之,松本 晋太朗,小松 稔,内田 智也,佃 美智留,土定 寛之,平松 久仁彦,堀部 秀二
（外部資金等の獲得状況） なし				

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　前田　吉樹

研　究　分　野	研究内容のキーワード
人間医工学　境界医学　脳科学	疼痛　恐怖条件付け　リハビリテーション

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例 1)実験形式の授業とレポートの提出・添削	平成 22 年 4 月～現在に至る	ハーベスト医療福祉専門学校　理学療法学科 「生理学実習」 血圧・スパイロメータ・筋電図・心電図・コキガス分析装置・感覚検査・バイオフィードバック・誘発電位などを用いた実験の指導と、実験レポートの作成法を指導。1 グループ 4-5 名のグループに分かれ実験し、その内容をレポートとして提出させた。レポートについては個別に添削をおこない、授業中盤で実例を交えながらレポート作成時の注意点を再度説明した。
2)プレゼンテーションの導入、小テスト形式	平成 27 年 1 月～平成 28 年 3 月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「内部障害学Ⅱ」 内臓疾患、内分泌・代謝疾患の講義を担当。該当する箇所について定期試験を作成・実施した。テスト対策として国家試験の問題を改変して小テストを作成・実施し、理解力向上の一助とした。
	平成 27 年 1 月～平成 28 年 3 月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「理学療法総合演習」 国家試験対策として、「内分泌・代謝疾患」、「バイオメカニクス」「統計学・研究法」の分野に対し講義を実施。小テスト形式で添削をおこない回答力の向上を図った。
	平成 27 年 1 月～平成 28 年 3 月	甲南女子大学　教養科目「現実をみる G」 他学部の学生を対象とした、健康科学関連の教養科目を担当。「痛みを知り痛みと向き合う」「女性が抱える痛みについて」「リハビリテーションの実際（脳卒中）」の 3 回を担当し、講義をおこなった。授業の終わりには理解確認のための小テストをこない、成績評価の一部とした。

3)プレゼンテーションの導入、小テスト形式、実践・体験型学習・実技試験	平成 27 年 1 月～平成 28 年 3 月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科　「筋骨格理学療法学Ⅰ」 「下肢の骨折（1）」、「脊椎疾患（1）」を担当。疾患の基礎知識の復讐として講義を行った後、実技形式でストレッチ・筋力増強運動の手技や各種治療機器の使用方法について説明、学生どうしで模倣・練習させ、適宜個別指導によって指導した。その次の授業では小テストをおこない、理解力向上の一助とした。定期考査では筆記試験の他、実技試験も実施した。
	平成 27 年 1 月～平成 28 年 3 月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「運動機能障害診断学Ⅰ」 整形外科学的検査手技についての説明と、実技指導をおこなった。模擬患者を想定し、どのような検査が適当かを考えさせるグループワークもおこなった。定期考査として実技試験をおこなった。
4）模擬患者を用いた実習、ビデオ撮影による振り返り、実践・体験型学習、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成 27 年 1 月～平成 28 年 3 月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「理学療法計画論」 「中枢疾患に対する理学療法評価」の実習を担当。1 グループ 3 名で模擬患者の理学療法評価をおこない、症例レポートを作成させる。レポートは個別で添削をおこなう。その後発表レジュメを作成させ、5～6 名のグループで症例発表をさせる。最後に、模擬患者評価の模様をビデオ撮影したものを編集し、患者に対応する上での危険な場面、失礼に値する行動がなかったかを指摘、講義を行った。
5）実験形式、マニュアルによる自己学習、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成 27 年 1 月～平成 28 年 3 月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「運動学演習」 「筋力と関節角度や角速度の関係」に関する実習項目を担当した。バイオデックスを用いた筋力の測定実習に対してレポートを作成させた。実習は機器の使用方法を記載したマニュアルを読ませることで、学生自身で問題を解決させながら進めるよう実施した。レポートはグループにつき１つを提出するようにし、添削もグループ単位でおこなった。実習の終わりには、実験した内容についての発表会を行わせた。
6)動物を用いた実験、グループワーク、レポートの活用、プレゼン形式	平成 27 年 1 月～平成 28 年 3 月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「人体の生理機能演習Ⅱ」（補助） ウシガエルを用いた動物実験で、機器の使用法や結果の解釈の仕方などを学生に指導した。実験は 1 グループ５～６名でおこない、事前学習によって実験の結果予測したものを発表させ、入念に実験方法を学習させてから解剖を行わせた。
7)ゼミ活動	平成 27 年 1 月～平成 28 年 3 月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「基礎ゼミⅠ・Ⅱ」 1 年次学生を対象としたゼミで、勉強の仕方やプレゼンテーションのまとめ方など、学生の基礎スキル向上を目的とした指導をおこなった。

	平成 27 年 1 月～平成 28 年 3 月	甲南女子大学　看護リハビリテーション学部 理学療法学科「卒業研究」 配属された学生（3 年・4 年次生）に対して、研究計画の立て方や、データを解釈し論文にまとめるまでの過程を指導。ゼミ内での論文抄読や予備実験、実験スケジュールの作成など行わせた。指導した卒論テーマは「運動誘発性鎮痛と身体感覚不一致感の関連についての研究」、「4 肢位のマンスリービクス実施による月経随伴症状軽減効果の違いについての研究」であった。
2　作成した教科書，教材 なし		
3　教育上の能力に関する大学等の評価 なし		
4　実務の経験を有する者についての特記事項 「勉強会・研修会」 1) Human brain mechanisms of muscle pain: Combining fMRI study and Psychophysics （筋痛に対するヒトの脳内機構：f MRI 研究と心理物理学を組み合わせた研究）	平成 23 年 2 月	大阪大学グローバル COE プログラム「認知脳理解に基づく機械工学創成」第 29 回創成塾
2)「痛みの研究とリハビリテーション: ヒトの痛みをどう捉え、検証するか」	平成 24 年 11 月	兵庫県理学療法士協会 中播磨・西播磨ブロック合同研修会
3)「高齢者の慢性疼痛管理」	平成 29 年 12 月	奈良学園大学公開講座 登美ヶ丘カレッジ「最新の痛みのリハビリテーション　～痛みの病態に応じたケアを考える～」
4)「臨床実習指導と臨床研究指導」	平成 21 年 4 月～平成 25 年 1 月	石川病院の理学療法士として、理学療法士養成校からの実習生を受け入れ、臨床実習教育に従事した。主に神戸大学、吉備国際大学、大阪リハビリテーション学院の実習生を指導した.また、研究面では院内理学療法士の研究・症例発表において指導をおこない、若手スタッフの研究発表の奨励に努めた。
5　その他 大阪大学 グローバル COE プログラム 「認知脳理解に基づく機械工学創成」　リサーチ・アシスタント	平成 22 年 4 月～平成 26 年 3 月	大阪大学の実施する GCOE プログラムで、医学・工学・人間科学の学生・研究者が集まり、学際的な融合研究の創成を目指すプログラムで RA となり、セミナーやシンポジウムで討論や発表をおこなった。

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 理学療法士免許取得	平成 16 年 4 月	登録番号:第 48466

修士号（医科学）	平成 21 年 3 月	神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程 第 439 号
2　特許等 なし		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 石川病院　理学療法士	平成 16 年 3 月～平成 25 年 1 月	回復期リハビリテーション病棟、一般病棟、療養病棟、外来部門の患者に対して理学療法を実施。術後含めた骨関節疾患、および脳血疾患や神経難病含めた症例を一日につき 6～10 名ほど担当。また、院内委員会や部門内係の業務も実施。
4　その他 なし		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1）痛みのケア	共著	平成 29 年 3 月	ピラールプレス	本書は看護職が患者への最善の痛みケアを提供できるよう，第Ⅰ部で「痛みと人間」をテーマに「痛みと性」，「痛みの意味」，「痛みと倫理」「痛みと医療」について述べ，人間と痛みの関係を理解する。そして第Ⅱ部 5 章～８章で「痛み理論」を紹介し，痛みに関する理論をもとに痛みについての理解を深める・第Ⅲ部では「痛みと看護」をテーマに「高齢者の慢性的な痛みの治療と看護」，「検査に伴う痛みの看護」，「治療に伴う痛みの看護」「ターミナルケアと緩和医療」といった臨床の場面を想定した痛みのケアを学ぶ。そして，第Ⅳ部では「痛みケアにおける看護実践例」として，術後疼痛，癌性疼痛，急性・慢性疼痛，出産に関連した痛みの看護，小児に関連した痛みの看護といった主な疾患や状況における痛みケアの展開事例を紹介する。 B5 版・全 180 貢 編者：守本とも子 共著者：守本とも子，池辺寧，辻下守弘，前田吉樹，篠原百合子，棚橋千弥子，田中登美，梶村郁子，立川茂樹，新谷奈苗，小池恵理子，澤田京子，横山美菜，室津史子，高垣麻衣 本人担当部分：

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				「第 7 章　痛みの心理と情動」 P48－P57 を単著 痛みに深く関わる「心理」として不安・抑うつ，「情動」として社会的痛み，痛みの恐怖について解説。非侵襲的脳機能計測の発達により，目に見えない心を情動として観察し，その働きを推察することが少しずつ可能になってきている。情動から心理への因果関係や，それらのベースとなる共通の神経機構を理解することは，痛みの心理的・情動的側面を分析するうえでの一助となる。
2) 高齢者のための疼痛ケア	共著	平成 30 年 3 月	三恵社	科学研究費助成事業「高齢者入居施設における疼痛管理教育プログラムの開発」の一環として、高齢者入居施設に勤務する看護職対象の疼痛管理教育テキストを作成した。「高齢者入居施設に勤務する看護職が受講したいと考えている教育内容」のアンケートに基づき、内容を構成した。 B5 版・全 33 貢 編者：田中和奈 共著者：田中和奈，百瀬由美子，溝尾朗，前田吉樹，高橋晶 本人担当部分： 「第 1 章 高齢者の痛みとその特徴」 P2-P10 を共著 痛みの定義や種類の説明、さらには高齢者の抱える疼痛の問題点について概説した。 共著者：田中和奈，百瀬由美子，高橋晶，前田吉樹 「第 3 章　理学療法的観点からの疼痛管理」　P25-27 を単著 理学療法士の立場から、高齢者の痛みのマネジメントに重要な点と、効果的な運動療法の実施方法を中心に解説した。

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
（学術論文） 1）立位リーチ動作反復による学習の汎化について：三次元動作解析器を用いた検討 （修士論文） （査読付）	共著	平成 21 年 1 月	神戸大学大学院医学系研究科保健学専攻博士前期課程	臨床上頻繁に用いられるファンクショナルリーチテストにおいて、リーチ動作練習の反復によって動作の汎化がおこるかどうかを三次元動作解析装置を用いて検証した。中枢におけるリーチ動作の運動プログラムは、手の前後方向の速度がピークに達したときに終了するとされているが、リーチ動作練習は手のピーク速度がより早期に出現するようにファンクショナルリーチ動作に対して汎化した。 （A4 12 ページ） 共著者：◎前田吉樹，安藤啓司 担当部分：研究計画、データの計測・解析、論文の執筆
2）低侵襲腰椎後方椎体間固定術後 1 年の能力障害を予測する術前および術後早期の心理的要因の検討 （査読付）	共著	平成 29 年 9 月	日本運動器疼痛学会誌 No.9(2)，　2017 pp308-313	腰椎後方椎体間固定術は脊柱管狭窄症や腰椎すべり症に対して有効である一方、改善の乏しい症例も報告されている。そこで術前・術後の破局的思考・運動恐怖とが術後の能力障害に与える影響を検証した。結果、術前ではなく術後早期の運動恐怖が術後の長期的な能力障害に影響を及ぼすことが明らかとなった。 共著者：◎田村典子，西上智彦，前田吉樹，加賀威浩，和田治，田所浩 担当部分：論文の執筆、データの解析
3）局所皮下麻酔と圧刺激による筋の痛みの心理物理学 （査読付）	共著	平成 30 年 2 月	医療福祉情報行動科学研究 vol.5，2018 pp19-25	麻酔薬の皮下注により皮膚の痛みを除去し、筋のみに持続的な機械的痛み刺激を与える方法を用いて、被験者の主観的な痛みの強さと刺激圧と関係性を回帰モデルにあてはめた。健常成人 13 名を対象とし全員に「麻酔なし」と「麻酔あり」条件で、デジタル圧痛計による圧刺激を与え、痛みの強さを NRS で報告させた。結果、麻酔の有無にかかわらず線形

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				モデルよりも非線形モデルの方が決定係数が高くなった。先行研究では熱刺激による皮膚の痛みの回帰モデルがべき関数で表されることが報告されているが、圧刺激による筋の痛みも同様に回帰できることを示している。 共著者：◎前田吉樹，大城宜哲，小山哲男，植松弘進，柴田政彦 担当部分：研究計画、データの計測・解析、論文執筆
4) Verbal instruction can induce extinction of fear of movement-related pain （教示は運動への痛み関連恐怖の消去を促す） （査読付） （博士論文）	共著	平成 30 年 4 月	The Journal of Pain, Epub ahead of print	「動かしたら痛い」という患者の恐怖（運動恐怖）が形成される過程と、その治療に繋がる心理過程を実験的に検証した基礎研究。運動時に痛み刺激が提示される過程を繰り返すことによって運動恐怖を形成し（恐怖条件付け）、その後の条件付けの消去の手続き（痛み刺激が伴わない運動の反復）によって運動恐怖が消失するかを検証した。さらに患者を安心させる声かけのように「動かしても痛み刺激がこない」という教示が条件付けの消去に影響するかを併せて検証した。結果、教示を与えて消去の手続きをおこなった群は恐怖を反映した皮膚電気活動が即座に消失し、教示を与えなかった群は皮膚電気活動の有意な減少がみられなかった。運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までと、自身の研究テーマである「運動と痛みの恐怖条件付け」の集大成として発表した。 （共同発表者：Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yuji Fujino, Masahiko Shibata） 担当部分：研究計画、データ測定・解析、論文の執筆

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（その他） 「総説」 1）痛みの恐怖条件付け （筆頭著者）	共著	平成 26 年 11 月	Monthly Book Medical Rehabilitation No. 177 （11 月号） pp25～30	痛みの慢性化には、「動かすと痛い」という一種の恐怖条件付けが重要な基礎として機能する。この考え方を支持する臨床研究、基礎研究を紹介しながら、恐怖を中心とした痛みの認知面の変化に基づき、痛みの慢性化の病態とその治療の考え方を概説している。 共著者：前田吉樹，柴田政彦 担当部分：全体の構成、本文執筆
2）慢性痛の問題点と今後の取り組み	共著	平成 26 年 12 月	理学療法学 No. 41(8) pp699～705	疫学、認知行動療法、条件付け、運動療法、脳機能画像研究、バイオフィードバックという幅広いテーマから、リハビリテーションにおける慢性痛の位置づけを詳細に解説した。 共著者：柴田政彦，山田恵子，前田吉樹，安達友紀，西上智彦，寒重之 担当部分：全体の構成、本文執筆
「学会発表」 国際学会 1）Fear Conditioning and Extinction Associating Voluntary Movement with Painful Stimulus: Experimental Verification of Fear Avoidance Model Using Skin Potential Response （運動と痛みの恐怖条件づけ：恐怖回避モデルの実験的検証）	―	平成 26 年 10 月	15th World Congress of International Assicuation for the Study of Pain, Buenos Aires. 2014.10.6-11	運動と痛みの恐怖が結びつくという現象の証明から、その消去、さらには教示が与える影響までを検証した。 共同発表者：◎Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Yoshitetsu Oshiro, Satoru Miyauchi, Aya Nakae, Ben Seymour, Hideki Kashioka, Masahiko Shibata 担当部分: 研究計画、研究総括 ポスター発表

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
2) Psychologigal characteristics related to the acquisition and extention of pain-related fear (痛みに関連する恐怖の獲得と消去に影響する心理的特性の検証)	—	平成 28 年 9 月	16t h World Congress of International Assicuation for the Study of Pain, Yokohama, 2016.9.26-30	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期における SPR 振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 共同発表者：◎Takatoshi Masaki, Yoshiki Maeda, Shigeyuki Kan, Masahiko Shibata 担当部分: 研究計画、データ測定 ポスター発表
国内学会 1) 道順イメージングにおける脳賦活部位 fMRI による検討	—	平成 22 年 3 月	第 11 回 兵庫県リハビリテーションケア研究大会 （兵庫県）	右頭頂葉の障害は地誌見当識障害の責任病巣とされているが、実際に道順をイメージしたときに活動するのかは明らかでない。本研究では、健常成人によく知っている場所から別の場所への道順をイメージさせ、その際の脳活動を fMRI を用いて調べた。結果、道順イメージ中は右の頭頂下小葉や頭頂-後頭連合野の活動を示し、道順の想起に右頭頂葉が関与するという仮説を支持した。 共同発表者：◎間嶋亜由美,三角幸子, 馬瀬麗子, 徳沢勝也,前田吉樹, 柳田真希,大城宜哲 担当部分: データ収集, データ解析 （口述発表）
2) 動的な痛みと静的な痛みの脳機能画像:二次体性感覚野の機能分布について	—	平成 22 年 7 月	日本ペインクリニック学会 第 44 回大会 （京都府）	動く痛みと動かない痛みの脳内処理機構を fMRI を用いて実験的に検証した。トゲのついたローラーで足を刺激したときと、トゲのついたプレートで刺激したときの脳活動を比較すると、同じ痛みの強度でも前者の方が広範な活動を示した。特に、二次体性感覚野はローラー刺激のみ下内側部の活動を認め、当部位の機能分布を反映していると考えられた。 共同発表者：◎前田吉樹, 岩倉健夫, 大城宜哲, 柴田政彦

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				担当部分：データ解析，抄録執筆 （ポスター発表）
3）左右逆転めがねと fMRI で幻視を視る	—	平成 22 年 7 月	日本ペインクリニック学会 第 44 回大会 （京都府）	左右の世界が逆転して見える「逆転めがね」を幻視痛患者にかけ、幻視を動かさせたときの脳活動を検証した。幻視を動かしたときに対応する運動野に信号変化がみられ、同側の頭頂野にも強い信号がみられた。後に後根進入部遮断術によって幻視痛が改善したあとは、頭頂野の信号変化は消失していた。頭頂葉が幻視痛の機序に何らかの役割をもつ可能性が示唆された。 共同発表者：◎大城宜哲，宮内哲，前田吉樹，柴田政彦 担当部分：資料収集 （ポスター発表）
4）局所皮下麻酔と持続的な圧刺激によって誘発される筋の痛みの心理物理学	—	平成 23 年 7 月	第 33 回日本疼痛学会 （愛媛県）	機械的な圧刺激で生じる筋の痛みは、皮膚の痛みとの区別が困難である。そこで麻酔薬の皮下注入によって筋だけに圧刺激を与える方法を用いて、与える圧と筋の痛みの強さの関係を心理物理学的手法でモデル化した。結果、皮膚の麻酔の有無に関わらず、圧と痛みの強さの関係は線形回帰できることがわかった。 共同発表者：◎前田吉樹，植松弘進，大城宜哲，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 （口述発表）
5）慢性期失語症患者の訓練経過 当院外来失語症患者を対象に	—	平成 24 月 3 月	第 13 回兵庫県リハビリ テーションケア研究大会 （兵庫県）	発症から半年以上経過した脳卒中後の失語症患者を対象に、外来言語療法の訓練効果について検討した。SLTA の「聞く」項目と「話す」項目に分けて解析した平均 1 年程度の通院の結果、いずれの項目も有意に増加し、慢性期における言語訓練の必要性を支持する結果となった。 共同発表者：◎溝口仁，金山ひとみ，前田吉樹 担当部分：データ解析，抄録執筆 （口述発表）

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概　　要
6) 当院回復期病棟における摂食嚥下障害患者の動向	—	平成 24 年 8 月	第 17・18 回日本摂食・嚥下リハビリテーション学会学術大会（北海道）	摂食嚥下機能が自宅復帰率に与える影響を検証した。FIM と食形態を独立変数とした名義ロジスティック回帰の結果、食形態は有意な変数として採択されなかった。これは摂食嚥下機能が低いまま自宅退院している患者が少なからず存在することを示唆しており、今後は外来や訪問におけるフォローアップを積極的におこなう必要がある。 共同発表者：◎前田佳恵，徳沢勝也，前田吉樹担当部分：データ解析，抄録執筆 （ポスター発表）
7) Conditioning of fear to voluntary movement paired with painful heat stimulus: Experimental verification of fear avoidance model using skin potential response 運動と痛みの恐怖条件づけ：恐怖回避モデルの実験的検証	—	平成 24 年 11 月	第 42 回日本臨床神経生理学会学術大会（東京都）	運動と痛みの恐怖が結びつく「条件付け」を心理実験の手続きを用いて再現した。手関節の運動をおこなうと痛み刺激が提示されるシステムを構築し、運動に結びつけられた恐怖を皮膚電気活動によって評価した。結果、痛み刺激を伴わない運動でも、痛み刺激がある場合と同程度の皮膚電気活動を認め、運動に痛みの恐怖が条件付けられることを示した。 共同発表者：◎前田吉樹，寒重之，大城宜哲，宮内哲，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 （ポスター発表）
8) 皮膚電位反応を用いた運動と痛みの恐怖条件付けとその消去の検証	—	平成 25 年 12 月	第 6 回日本運動器疼痛学会（兵庫県）	恐怖条件付けによって結びついた運動と痛みの恐怖を、条件付けの消去によって軽減できるかを実験的に検証した。消去の手続きによって運動に痛み刺激が伴わないことを学習すると、恐怖を反映して出現する皮膚電気活動が減少することを示した。しかし全体としては最後まで皮膚電気活動が出現し続ける傾向にあり、運動に結びついた痛みの恐怖が容易には取り去ることができないことを示唆した。 共同発表者：◎前田吉樹，寒重之，大城宜哲，宮内哲，圓尾知之，齋藤洋一，

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 （口述発表）
9）教示は運動に伴う痛みの恐怖条件付けの消去に強く影響する	—	平成 26 年 6 月	第 36 回日本疼痛学会 （大阪府）	患者を安心させる教示の有効性が条件付けの消去に基づくものかを検証するために、「運動に結びついた痛みの恐怖」の消去に「動かしても刺激がこない」という教示が影響するかを実験的に検証した。結果、教示と経験による消去をおこなった群は恐怖を反映した皮膚電気活動が即座に消失し、経験だけで消去をおこなった群は最後まで皮膚電気活動の有意な減少がみられなかった。 共同発表者：◎前田吉樹，寒重之，大城宜哲，宮内哲，中江文，Ben Seymour，柏岡秀紀，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定・解析、抄録執筆 （口述発表）
10）運動への恐怖条件付けに関連する心理尺度	—	平成 27 年 11 月	第 8 回 日本運動器疼痛学会 （愛知県）	運動への恐怖条件づけの獲得、消去における個人差に着目し、各個人の心理特性との関連性を探索的に検討した。消去期における SPR 振幅値と各心理指標との相関がみられた。本研究の結果は、疼痛の慢性化に性格傾向等の心理要因が関与する可能性を示唆している。 共同発表者：◎柾木隆寿,前田吉樹，寒重之，柴田政彦 担当部分：研究計画、データ測定 （口述発表）
11）肩甲下筋テスト時の肩関節周囲筋の筋活動の検討	—	平成 28 年 11 月	第 56 回 近畿理学療法学術大会 （和歌山県）	肩甲下筋のテストである Lift off test として Belly press test と Belly off sign が挙げられる。これら二つのテストの肩関節周囲筋の筋活動の違いを筋電図を用いて明らかにすることを目的とした。結果、BP は BO に比べ大胸筋、大円筋の働きが抑えられ肩甲下筋、三角筋の働きが大きくなることがわかった。

著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
				共同発表者：◎吉村拓実、春名匡史、立花 孝、土山耕南、西川 仁史、前田吉樹 担当部分：研究計画、準備 （口述発表）
依頼原稿 1）「プラセボ効果とはどのようなものですか？」	—	平成 26 年 10 月	Locomotive Pain Frontier vol. 3 (2) pp42～43	プラセボ効果は、医学研究、とりわけ試薬の研究において本来の治療効果とは異なる「取り去るべき」ものとして捉えられてきた。しかしながら、近年痛みの臨床においてはプラセボ効果も治療の一つとして取り入れようという流れがある。それらプラセボ効果に関する認識の変遷を、具体的な研究報告とともに解説した。 （2 頁） （分担執筆者：前田吉樹,柴田政彦）
研究助成金 1）日本損害保険協会　交通事故医療特定課題研究助成		平成 23 年 ～平成 25 年	日本損害保険協会	研究題名：③新しい運動療法の開発： 脳機能画像を応用し、外傷後の「痛みの慢性化」に対して有効な運動療法を開発する 【平成 23 年度～25 年度】 研究助成金：5,000 千円 共同研究者：柴田政彦，寒重行，前田吉樹，大城宜哲，中江文
2）奈良学園大学保健医療学部共同研究費		平成 29 年度	奈良学園大学	研究題名：痛みと運動知覚の恐怖条件付け研究 【平成 29 年度採択課題】 研究助成金：500 千円 共同研究者：前田吉樹，辻下守弘，守本とも子

教　育　研　究　業　績　書

令和２年 ３月 31 日

氏名　岩崎　智子

研　究　分　野	研究内容のキーワード
脳血管疾患　高次脳機能障害	

教　育　上　の　能　力　に　関　す　る　事　項

事項	年月日	概　要
１　教育方法の実践例		
２　作成した教科書，教材		
３　教育上の能力に関する大学等の評価		
４　実務の経験を有する者についての特記事項		
・院内学会「認知症患者に対する作業療法～関わり方を通して～」	平成 25 年 5 月	医療法人社団みどりの会酒井病院において，院内学会で他職種向けに，認知症の概要と評価，基本的な関わり方と作業療法について発表した． ［担当部分］ 発表の企画，構成，プレゼンテーションの作成
・臨床実習指導	平成 26 年 9 月 ～11 月	臨床実習（長期実習）において，8 週間，作業療法士学生のケースバイザーとして指導を行った．
・院内勉強会「作業は人を元気にする」	平成 27 年 2 月	院内勉強会にて，“作業は人を元気にする”をテーマに，院内で行っている作業療法を通して，治療効果が表れ，元気になった症例を介するとともに，人にとって大切で意味のある作業，元気になれる作業とは何かを考え．院内の他職種に向けて，作業療法を啓発した． [担当部分]発表の企画，構成，プレゼンテーションの作成，ムービーの作成
・障害支援（福祉機器領域）論	平成 27 年 8 月 平成 28 年 8 月 平成 29 年 8 月 平成 30 年 8 月	平成 27 年より，姫路獨協大学教員免許状更新講習において，現職の教員向けに障害支援についての講議を行った．福祉用具概論，車椅子と移動・・移乗用具，住宅改修，自助具等について解説した． [担当部分] 車椅子と移動・移乗用具，車椅子の基礎知識・シーティングについての講義 ［共同発表者］山形力生
・院内リハビリテーション課勉強会「生活行為向上マネジメント（MTDLP）」	平成 28 年 10 月	医療法人社団六心会恒生病院にて、理学療法・作業療法勉強会で、生活行為向上マネジメント（MTDLP）について発表した．概要の説明，演習シートを使用したグループワーク，事例発表を通して MTDLP の考え方を啓発した． [担当部分] 発表の企画，構成，プレゼンテーションの作成
・臨床実習指導	平成 30 年 1 月 ～2 月	臨床実習（評価実習）において，5 週間，作業療法士学生のスーパーバイザーとして指導を行った．
・臨床実習指導	平成 30 年 9 月 ～10 月	臨床実習（長期実習）において，8 週間，作業療法士学生のケースバイザーとして指導を行った．
５　その他		

職　務　上　の　実　績　に　関　す　る　事　項		
事項	年月日	概　　要
1　資格，免許 1.教育　学士 2.高等学校教諭一種免許状（美術） 3.高等学校教諭一種免許状（工芸） 4.高等学校教諭一種免許状（工芸） 5.医療保健学　学士 6.作業療法士免許状 6.作業療法士臨床実習指導者研修 修了 7.生活行為向上マネジメント研修 修了	 平成13年3月 平成13年3月 平成13年3月 平成13年3月 平成23年3月 平成23年4月 平成28年3月 平成31年9月	 高知大学　8678号 平12高1第475号 平12高1第476号 平12中1第285号 姫路獨協大学 医第10064号 64784 認定番号169号 NO.4948
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記事項 1.医療法人内海慈仁会　姫路北病院 作業療法士 2.医療法人社団みどりの会　酒井病院 作業療法士 3.医療法人社団　六心会　恒生病院　作業療法士 4.医療法人 博愛会 松倉病院 作業療法士	 平成23年4月～平成24年3月 平成24年4月～平成27年 10月 平成28年4月～平成31年3月 令和元年9月～現在に至る	 精神科病院（急性期・一般・療養・認知症）の療養病棟を担当。統合失調症などの精神障害、躁うつ病などの気分障害、認知症などの患者様を対象に、手工芸、コーラス、料理などの集団作業療法を通して精神面の安定と回復を支援した。 一般病院（急性期・回復期・療養・外来のケアミックス型）の病院に勤務。身体障害領域（脳血管疾患、整形疾は回復期の専従として、在宅復帰や社会復帰に向けて患者様の支援を行うとともに、セラピスト・他職種間の連携の中心を担う役割をした。また回復期リハビリテーション病棟としての質の向上を図るため、地域のシームレス会議に参加し、取り組みの発表や他院との意見交換等を行った。 脳神経外科、整形外科疾患を中心とした急性期・回復期病院にて、回復期リハビリテーション病棟に勤務。在宅復帰に向けて上肢機能や高次脳機能、ADL、IADL等にアプローチするとともに、社会復帰に向けて職業練習を実施するなど、患者様のデマンドに応じた作業療法を実施した。 整形外科疾患を中心とした回復期リハビリテーション病棟に勤務し、ADLやIADLを中心にした作業療法を実施。若年セラピストの指導も実施している。
4　その他		

研　究　業　績　等　に　関　す　る　事　項				
著書，学術論文等の名称	単著・ 共著の別	発行又は 発表の年月	発行所，発表雑誌等 又は発表学会等の名称	概　　要
（著書） 1 :				
（学術論文）				

1脳梗塞によりapathyを呈した一例への介入 ～ADL自立と楽しみ活動の再獲得を目指して～	共著	平成29年3月	兵庫県作業療法士会機関誌・第6巻 p16～p21	脳血管性apathyは最近注目されてきた病態であり,リハビリテーションにおける阻害因子となることが挙げられているものの,治療に関する報告は少ない.今回apathyを発症し,難渋した一例に対し,“意欲には淡蒼球の活性が重要である”とする池谷の理論を参考に作業療法を行った.介入を通して,意欲の向上が見られ,ADLの自立度も向上した.ひいては,退院後継続して実施可能な楽しみ活動の再獲得に繋げることができた. 尚, 本報告は第49回日本作業療法学会における演題発表をもとに加筆し,再構成したものである. ［共著者］ 岩﨑智子（筆頭）,山形力生
（その他）学会発表				
1.「右手で上手にご飯を食べたい」 ～Demandsに添えるOTとは～	共著	平成25年9月	第33近畿作業療法学会（兵庫） ポスター発表	脳梗塞により右片麻痺を呈した症例を担当した.上下肢の麻痺は顕著な回復を見せている反面,手指の麻痺と感覚障害は残存し,利き手である右手の実用手としての使用は難しい状態であった.高齢者向け住宅にて集団で食事をする症例にとって,「右手で上手にご飯を食べる」ことは,自身のプライドと尊厳に関わる重要な問題であると考え,Demandsに沿えるよう作業療法を行った.介入を通し麻痺側使用による箸操作が可能となり,症例にとって納得ができる結果が得られた. Demandsに添うOTとは,患者自身にとって,そのdemandsがどういう意味を持つか考え,患者自身から内発的動機が生まれるよう支援することが重要であることをあらためて感じた. ［共同発表者］ 岩﨑智子（筆頭）,山形力生
2.脳梗塞によりapathyを呈した一例への介入 ～ADL自立と楽しみ活動の再獲得を目指して～	共著	平成27年6月	第49日本作業療法学会（兵庫） ポスター発表	アテローム血栓性脳梗塞によりapathyを呈した症例を担当した.病棟生活では無気力で臥床し,全ADLに介助を要する状態であった.今後の退院先が施設となる症例にとって,自立して行えるADLを1つでも増やし,他者に依存した生活ではなく,意欲と自信・楽しいと思える生活を取り戻すことが重要であると考え,作業療法を行った.介入方法として, “意欲には淡蒼球の活性が重要である”とする池谷の理論を参考に意欲向上訓練を取り入れ実施した.介入を通して,意欲・発動性の向上が見られ,ADL能力の向上,楽しみ活動の再獲得が成された. ［共同発表者］ 岩﨑智子（筆頭）,山形力生

3.臨床に従事する作業療法士のコミュニケーション・スキルについて	共著	平成 28 年 9 月	第 50 日本作業療法学会（北海道） ポスター発表	作業療法学生(OTS)にとって対人関係能力を含む社会的スキルを獲得することは重要といえる. OTS の目標と考えられる臨床家の作業療法士を対象にコミュニケーション･スキル尺度（ENDCOREs）を用いて検討を行った.また,臨床現場での他職種との関係を測定するために,鈴木らの臨床活動での質を測定する尺度（以下 QOE）を改変し用いた.臨床経験群間の比較では,臨床経験とともにコミュニケーション･スキル(以下 CS)が成長し充実していく傾向にあることが示唆された.QOE_F3（他の職員と関係を維持する行動）は ENDCOREs の得点と相関したことから,CS が現場における仕事上のコミュニケーション活動全般の要素となっていることを示唆すると考えた.経験年数に伴う CS の充実には,END_F2(表現力)や END_F4(自己主張)の因子が影響するものと考えられた.これら 2 因子のスキルの成長が CS や臨床活動の基盤になっている可能性が考えられた. ［共同発表者］ 岩﨑智子,山形力生,櫻井秀雄
4.作業療法士の職業経験とその質について	共著	平成 29 年 9 月	第 51 日本作業療法学会（東京）ポスター発表	臨床に従事する作業療法士は,様々な経験を重ね,臨床実践に関わる能力を獲得し,キャリアを成長させることが期待されている.今回,現場に従事する作業療法士を対象に職業経験の質の一側面を調査するとともにどのような傾向があるのかについて分析した.方法として,鈴木らの臨床活動での質を測定する尺度（以下 QOE）を改変し用い,また自己効力感（以下 SE）についても合わせて調べた.臨床経験毎の比較では,QOE 合計得点は上昇する傾向にあり,臨床経験とともにその職業経験の質は充実していく傾向にあることが示唆された.さらに職業経験の質の高さは自己効力感の高さにも影響すると考えられた.一方経験年数の浅い G1 群において,自己効力感の高低によって職業経験の質に差があることが確認された. 特に QOE_F（実践力を獲得し,多様な役割を果たす行動）に差がみられたことから, 役割を意識できることが重要と考えられ, 新人 OTR に対する卒後教育などでは留意すべき点と考えた. ［共同発表者］ 岩﨑智子,山形力生

5.作業を通して士気と自信の回復を図り,畑仕事の再開を目指した脳梗塞の一例	単著	平成 31 年 9 月	第 53 日本作業療法学会（福岡） ポスター発表	本人の趣味と仕事に関わる作業（水彩画・畑仕事）を取り入れ,士気と自信の回復を図り,デマンドである畑仕事の再開に繋げた経過と考察を報告した。水彩画を通して,徐々に上手く描けるようになったことや,他者から認められる機会が増えたこと,フロー体験が積み重ねらたことで,不安や落ち込みの軽減が図られたと考えた.ひいては病棟 ADL への意欲の一助となったと考える.畑仕事では,病前のようには難しいとしても,どのようにすれば継続していくことが可能か,MTDLP を実践することで現実的に考え,他職種や家族とともに実現を目指していくことができた.院内の畑での成功体験を積み重ね,家族の協力を得て実際に自宅で行ったことで,課題や目標が明確となり,意欲を向上させたと考える.また援助を得ながらでも,実際に現地で実施できたことは,本人にとって自信となり,士気を再獲得する最大の要因となったと考える.

教　育　研　究　業　績　書

令和 2 年 3 月 31 日

氏名

研究分野	研究内容のキーワード
健康科学	介護予防、健康増進

教育上の能力に関する事項

事項	年月日	概要
1　教育方法の実践例		
2　作成した教科書，教材		
3　教育上の能力に関する大学等の評価		
4　実務の経験を有する者についての特記		
5　その他		

職務上の実績に関する事項

事項	年月日	概要
1　資格，免許 理学療法士	2016 年 3 月	
2　特許等		
3　実務の経験を有する者についての特記		
4　その他		
大阪市立鶴見区老人福祉センター主催事業「いきいき百歳体操」への講話と評価	2019 年 9 月～12 月	地域在住の高齢者に健康体操の指導、体力測定、健康講座などを行った。
奈良市登美ヶ丘公民館主催事業「ひだまり体操」の講師	2019 年 7 月	地域在住の高齢者に健康体操の指導を行った。
NPO 法人ワンネスでの社会活動	2017 年 3 月～2020 年 12 月	地域生活者の生活支援とコミュニティ作りに関する企画運営を行った。
NPO 法人ひとしごと館での社会活動	2017 年～2020 年 12 月	地域で働く人々に対する支援として健康体操の指導や健康教室の開催などを企画運営した。

研究業績等に関する事項

著書，学術論文等の名称	単著・共著の別	発行又は発表の年月	発行所，発表雑誌等又は発表学会等の名称	概要
（著書） 1 2 3 ：				
（学術論文） 1 高齢者の人生の目的が生きがい、前向きな態度および QOL に及ぼす影響	共著	2020 年 3 月	奈良学園大学紀要	大阪府 A 区に居住する 65 歳以上の高齢者に対して、人生の目的、生きがい、前向きな態度および健康関連 QOL に関する質問紙調査を行った。人生の目的が高い者は、健康的な行動を促進し、健康に対する肯定的な意識が高いと示唆された。
2				

3 ：				
（その他） 1 インタラクティブ･メトロノーム(IM)がアルツハイマー型認知症の認知機能に及ぼす効果について 2 自己効力感の向上により活動量が拡大した一症例	共著 共著	2019 年 6 月 2016 年 6 月	日本バイオフィードバック学会学術総会 大阪府理学療法士会新人症例発表会	インタラクティブ・メトロノーム（IM）は、基準となるリズム音に対して身体運動のタイミングを合わせる簡単なトレーニングであり、それを聴覚的・視覚的にリアルタイムでフィードバックさせることが特徴である。本研究では、アルツハイマー型認知症の高齢者を対象として、IM トレーニングを実施し、認知機能の向上が認められた。 左視床出血後の 60 歳代男性で自己効力感が低く治療に積極的でない患者を対象として、行動療法を用いることで自己効力感を高めることで、早期の退院を実現させることができた。